
生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい

のの原 兎太

HinaProject Inc.

注意事項

このPDFファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をPDF化したものです。

このPDFファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】

生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい

【Nコード】

N4764DU

【作者名】

のの原 兎太

【あらすじ】

コミックス「輪環の魔法薬3巻」2024/4/1発売です
外伝その2：帝都編を連載中

エンダルジア王国は、「魔の森」のスタンピードによって滅びた。錬金術師のマリエラは、『仮死の魔法陣』のおかげで難を逃れるが、ちよつとしたうっかりから、目覚めたのは200年後の錬金術師が死に絶えた世界だった。

スタンピードで出現した迷宮と、魔の森を管理するために王国跡に作られた迷宮都市には、ポーシヨンは数十年前から保管されている

劣化した物しかなく、超供給不足で値段は高騰。

ポーションを作る都市で唯一の錬金術師になってしまったマリエラが、こっそりポーションを販売したり、迷宮都市での暮らしをのんびり楽しんだりするお話です。

小説全6巻、コミックス第一弾全2巻、第二弾1〜2巻も

発売中

TVCMをyoutubeにUP頂いております

ので、よろしければご覧ください。第1弾マリエラverはコチラ

<https://youtu.be/ipp30XatO6I8>

第2段 ジークverはコチラ <https://youtu.be/QLXE8LgvYCs>

e/QLXE8LgvYCs

目覚め(前書き)

初投稿です。よろしくお願ひします。

目覚め

ドクン

止まっていた心臓が動き出す。

凍っていた血液がとけてめぐり、肺が酸素を求め。

ヒュウ、と息を吸えば口の中に、大量の埃が舞い込んだ。

ゲホツ、ゴホツゴホ、カハツ

息がくるしい、酸素が足りなくて頭がガンガン痛む。空気、新鮮な空気が欲しい。

《換気》

喉はカラカラで、唇も舌もひりついて声なんて出なかったけれど、詠唱を明確に意識すれば、無詠唱でも魔法は発動する。

なんとか生活魔法で空気を入れ換えて、まともに呼吸ができるようになった。

なんで、こんなことになってるんだっけ？

酸欠で朦朧とした頭で考える。周囲を窺いたくても、目の焦点が合わず、ぼんやりと天井から差し込む光を感じるばかり。

随分と永く眠っていたらしい。起き上がるうとすると、固まった関節が悲鳴をあげる。バキボキと嫌な音をたてる関節と、割れそうな

頭痛に顔を顰めながら、なんとか起き上がり、力の入らない手を器の形に合わせる。

《命の雫》

手のひらに白く光をはなつ水が満たされる。指の隙間から零れた水は、腕を伝い、肘から流れ、けれど服を濡らすことなく大気に解けて消えていく。これは命の雫。この地の地脈から汲み上げた、大地の恵そのものだ。

大半を零しながらも口に運ぶと、渴ききつた身体に染み渡る。ひび割れそうだった喉は潤い、関節は滑らかに、血の巡りが良くなり、頭痛は溶けるように消えていく。細胞の一つ一つが活性化していく。見る者が居れば、まさに奇跡の水と目を見張ったろう。

錬金術のスキルを持つ『錬金術師』だけが扱える命の水のお陰で、マリエラは漸く状況を思い出した。

「スタンビート魔物の暴走が起こったんだっ」

マリエラが住むエンダルジア王国は、魔の森と険しい山々に囲まれた小国だった。魔の森のモンスターに気をつける必要はあったけれど、国土を囲む山々は天然の要塞として国を護り、さらには豊かな鉱物資源をもたらした。国土は狭く開拓の余地も少なかったけれど、大地は豊穡で国民に十分な恵をくれた。

魔の森を抑えて余りある、列強の小国として、エンダルジア王国は栄えた。

一旗挙げたい下級貴族の末子や、食い詰めた貧村の三男、腕に覚えのある冒険者、彼らを相手にする商売人がエンダルジア王国に集まった。エンダルジア王国は魔の森の魔物を間引く冒険者を常に欲していたし、彼らを養うだけの豊かさがあった。

喰うに困ったらエンダルジアに行け。

いつしかエンダルジア王国は、外壁の中で安寧を貪る王国民と、魔の森のほとりで魔物と戦う冒険者の国になっていった。

冒険者といつても、要は流民で十分な後ろ盾の無い者ばかり。その日暮しから抜けられないまま命を散らす者も少なくなかったが、強かにのし上がり一代で財を成したものもいた。

豊かな国土がもたらす食材と多国の調理法に食文化は花開き、魔の森に対するために磨きあげられた武器工芸の技術は、魔の森からもたらされる希少な素材によって一層高められた。市場には様々な品々が溢れ、刹那的な冒険者を客とする、酒場、賭博、娼館が外壁の外に建ち並んだ。

いつしかそこは防衛都市と呼ばれる街となり、人が物が溢れ、熟れ落ちる果実の様な熱気に満ち満ちた。

マリエラはそんな防衛都市の孤児だった。

両親の記憶はない。他の孤児達の多くがそうであるように、冒険者の子を身ごもった娼婦が、生まれて間も無い赤子を孤児院に捨てたのだろう。

自分の境遇を不幸だとは、思わない。

そんな子供はたくさんいたし、何より母は「マリエラ」という名を産着に書きつけてくれた。血縁者から貰った名は真名であり、世界の力を借りてスキルを行使するのに必要だった。

真名があつたお陰で、錬金術の師匠に引き取られ、錬金術師として身を立てることができた。

錬金術のスキルは珍しいものではなかったし、ポーションは回復魔法にくらべて使い勝手が悪い。

錬金術師は儲からない職業だったけれど、師匠が残してくれた魔の森の外れの小屋で、細々と暮らす位は出来た。

豊かではなかったけれど、様々なポーションを作るのは面白かったし、人付き合いが苦手なマリエラにとって、静かな森での暮らしは性に合っていた。

ずっと続くと思っていたささやかな暮らしは、ある日突然終わりを迎えた。

何故、スタンピード魔物の暴走が起こったのか、しがない錬金術師のマリエラには分からなかった。

逃げ惑う人々の叫び声から、スタンピード魔物の暴走が起こったことを知った時には、エンダルジア王国の外門は固く閉ざされていた。津波のように押し寄せる魔物の群れに、防衛都市は混乱を極めた。

冒険者達は、若者から引退したもので、武器を手にたちあがり、我らの街を守るのだ、今こそ我が名を示す時、と勇ましい闘いの声をあげた。

戦えない者が避難する列は街から山脈までの狭い街道を埋めつくし、家に立てこもってやり過ぎそうとする者は、戸を固く閉ざした。

マリエラは師匠が残してくれた小屋へと急いだ。

避難が間に合うとは思えなかったし、街に逃げ込む場所もなかった。

壁の薄い木の小屋など、魔物の群れの前には紙切れのように脆い。魔物は人の魔力に反応する。

暴走した魔物は鋭く、魔物避けも効果をなさないと、昔、師匠が教えてくれた。

だから、もし、魔の森が溢れたら。

師匠の教えに従い、小屋の地下室に駆け込み、ぴつちりと扉を閉める。

極力魔力を感知されないよう、照明魔法でなくオイルランタンを灯して、大きな羊皮紙を取り出す。

ランタンの薄明かりの中、1メートルはある巨大な羊皮紙を床に広げ描かれた魔法陣に欠けが無いか確認する。

これは奥の手。師匠に言われしづぶ作ったとっておきの魔法陣。魔物からとられた巨大な羊皮紙は一ヶ月の稼ぎに相当したし、魔法陣を描いたインクは魔石を溶かした特別製で羊皮紙よりも高かった。描かれた魔法陣も緻密で難しく、高価な材料を無駄にしないよう、何ヶ月もかけて描いた物だ。

卒業試験にこれを言われた時は、なんて無駄な、と思っただけれど、作っておいて良かった。

この地下室は、貧相な小屋に似合わない石積みものしつかりした造りで、魔物が踏んでも壊れないけれど、中に人が居ると感づかれたらあつという間に掘り起こされてしまう。

スタンレド
魔物の暴走は、魔物を殺し尽くすか、その地の人間が死に絶えるまで止まらない。

地響きが聞こえる。魔物の群れが迫っている。
魔法陣の上に横になる。

怖い。狭くて暗い地下室の中、オイルランタンの炎が頼りなげに揺れている。

怖い。どれほどの魔物が迫っているのか、地鳴りのような音が迫ってくる。

怖い。怖いよ。誰か、誰か。

魔法陣が上手く起動しなかったら、この地下室が魔物の重みに耐えられなかったら、

私は、このまま……

ハッハッと呼吸は浅く早く、心臓の音がうるさい。

地響きはさらに大きく、ランタンが揺れ、炎がチカチカと舞う。

こわい。こわい。こわい。

こんなところで、ひとりぼっちで、しにたくない。

恐怖に飲まれそうになりながら、マリエラは、仮死の魔法陣を起動した。

氾濫の跡

そうだ、地下室へにげこみ、仮死の魔法陣を起動したのだった。

「生き残れたのね」

仮死の魔法は死の危険が過ぎると解かれる仕組みだった。

命の雫のおかげで視力もだいぶ回復した。

足元奥にある天井の入り口から、外の光が射し込んでいる。

下に扉が落ちていているから、壊れて開いたようだった。風雨が吹き込んだ様子はないから、比較的最近壊れたのかもしれない。

外に出ようと近づくと、木製の梯子が朽ちていた。魔物の暴走スタンピートの地響きで緩んだのだろう、壁の石組みが緩んでいたのを足場にしてなんとか這い出る。

「えーと」

小屋があつたはずのそこは、森に飲まれていた。

「百歩譲って、小屋が跡形もないのはいいとしましょう。スタンピートに飲まれたんだしね」

足元に生い茂る草を1束引き抜く。

「うちの薬草園で育ててた薬草よねえ……」

「なんで、一面生い繁ってんのー！ー！ー！ー！ー！」

どう見ても数十年放置したような有様に、マリエラは頭を抱える。

蘇生した時から何かおかしいと思っていた。
身体はガチガチに固まっていたし、梯子は朽ちていた。

「仮死の魔法陣が壊れてた？」

そんなはずはない。使う前に確認した。

ユラユラと頼りないランタンの明かりだったけれど、隅々まで見たはずだ。

あのランタンの炎は、ついさっきまで見ていたように覚えている。

「ん？ランタンの……火？」

あー、、、と情けない悲鳴をあげて、マリエラはしゃがみ込む。

いつもは照明魔法だから忘れていた。密室で火を灯したら酸素がなくなるじゃないか。

スタンピードが去っても、蘇生できずに眠り続けていたんだ。入口の扉が朽ちるまでずっと。

「どんだけねてたのー……」

マリエラの嘆きは虚しく森に響いた。

落ち込むこと10分。

マリエラはブチブチと薬草を引きちぎっていた。

《乾燥、乾燥、かーんーそーうー。》

「あーもー、鞆ないから超不便。両手は空けときたいし、縛って腰

に吊るしちやえ。

それにしても、やつすい薬草ばかり繁茂しちやつて。

これじゃ、魔物避けと低級傷薬しかできないじゃない。」

ぶつくさ言いながら採取した薬草を錬金術で乾燥させては、腰に吊るしていく。

あつという間に枯れ草を腰ミノ状に巻きつけた、原住民ルックの出来上がり。

もともと癒し系……？の地味な顔立ちである。

腰ミノがダサさを引き立て、とても年頃の娘には見えない。

「ふっふふー。これだけ魔除け草を巻いたら、低級の魔物は寄ってこないよねー。魔除けのスカートー」

ふりふりと腰を振りつつ、薬草を物色し、さらに数束引き抜くと、腰のポーチから空の小瓶を5本取り出す。

《乾燥、粉碎、命の雫、薬効抽出、残渣分離、濃縮、薬効固定、封入》

続けざまに実行された錬金術によって、あつという間に低級ポーションが出来上がる。

同じ工程で魔物避けポーションも作製し、ポーチにしまう。これで街まで行けるといいのだが。

ポーションとは、簡単に言うと、命の雫によって薬効を極限にまで高めた魔法薬である。

例えば低級ポーションに使ったキュルリケ草は、そのまますり潰し

て患部に塗っても殺菌、止血、裂傷の回復促進と言った効果があり、多少の傷なら数日で治すことができるが、服用しても効果はない。この薬効を命の雫に溶かし込むことで、患部にかければ直ちに傷を塞ぎ、服用すれば、外傷を治すだけでなく体力も回復する魔法薬となる。

回復魔法でも同様の即時回復が可能だが、回復魔法は患者自身の治癒力を上げるものなので、大きな傷を治すほど回復後に反動がくるし、体力の少ない患者の場合は、その分効果が薄くなる。

その点、ポーシオンは命の雫の力を使うので反動などない。瀕死の怪我でも効果を發揮する。

ただし、命の雫は本来地脈を流れ、植物を育み、動物に力を与えやがて大気に溶けて再び地脈に戻る、形のないエネルギーを錬金術で具現化したものだから、「薬効固定」で固定化しても、一年もしないうちに抜けてなくなり、ただの薬草水になってしまう。

さらに使い勝手が悪いところは、命の雫を汲み上げた地脈から遠ざかると、見る間に命の雫が失われるところだろう。

工程が多い分、低級ポーシオンを作るより回復魔法で治したほうが魔力も少なくて済むし、材料費もかからないぶん、施術費も安い。防衛都市の街頭には、回復魔法で小銭を稼ぐ者も多くいたから、低級ポーシオンの値段もつられて安かった。

特殊な効果をもつ各種高級ポーシオンは高価だが、買う者の職種に限られ専門の錬金術師が専属していて、マリエラのような伝手のない錬金術師の入り込む隙はない。

錬金術のスキル自体、珍しいものではないのだ。防衛都市の錬金術師は、パン屋の数より多かった。

戦えないマリエラが、専業で食扶持を稼げるだけでもありがたいのだ。

「お、スキーピラ草」

大事な収入源が生き残っていた。

スキーピラ草は、避妊薬の原料となる。これをベースに数種の薬草を配合したマリエラ特製避妊ポーションは、避妊に性病の予防と娼婦御用達の品だ。独立したての頃などは、これのおかげで食いつなげたものだった。

よく見ると、他にも希少な薬草が生き残っていた。

「なんとか、立て直せそうね。」

まずは、街で情報を集めないと。薬瓶を買って、腰の薬草をポーションにすれば、今日の宿代くらいにはなるだろう。ずっと地下室の石畳で寝ていたのだ。体も拭きたいし、できれば柔らかいベッドで寝たい。

「ポーションの値段が、下がっていませんように」

マリエラは、防衛都市を目指して歩き出した。

乾燥させた薬草を腰回りにぐるりと括り付けた、腰ミノ姿で。

氾濫の跡（後書き）

マリエラは、色々ザンネんな女の子です。

装甲馬車

デイジスは魔の森に生息する蔦状の植物で、葉や蔦の繊維から大気に漂う魔力を吸収して成長する。

プロモミンテラは魔物避けとして有名で、人には感じられないが、魔物の嫌う匂いをだす。

魔物は人の魔力に反応するから、この二つを配合して作られた魔物除けのポーションを使うと、魔物からすれば人の気配がない、単にくさいだけの状態になるらしい。

家の屋根や垣根をデイジスで覆ってプロモミンテラを垣根の周りに植えることで、魔の森でも暮らしていけるのだと、お師匠さまが教えてくれた。師匠から受け継いだマリエラの小屋もこの造りになっていて、スタンピードが起こるまでは、魔物に進入されることなく、静かに暮らしていられた。もっとも、スタンピードがおこると魔物は狂乱状態になるので、プロモミンテラの臭いなど殆ど意に介さないし、人間の気配に敏感になるので、小屋は跡形もなくなっていたけれど。

新たに作った魔物除けのポーションを体に振りかけて、マリエラは出発することにした。

魔物除けのポーションさえ振りかけておけば、種族によって効きやすさに差はあるものの、魔物のほうが避けてくれるから、魔の森の浅い層ならよほど音を立てない限り、魔物に会わずに移動できる。時間は正午を回ったころだろうか、太陽はまだ高い位置にあるが、なるべく早く街にたどり着きたい。

半刻ばかり森を進んで、馬車が通れる街道にでた。いつも使って

いた獣道がなくなっていたり、木々の並びが違っていたりと、森の様子は変わっていたが、ここまでは記憶の通りにたどり着けた。

エンダルジア王国は、周りを険しい山々と魔の森に囲まれているから、他国へ行くには山脈を抜けるか、山裾と魔の森の隙間を縫うように開かれた街道を通るしかない。

この街道もその一つで、街道を挟んだ魔の森の反対側には、豊かな穀倉地帯が広がっていたはずだった。

「森に飲まれちゃってる……」

エンダルジア王国は、防衛都市はどうなったのか。

穀倉地帯は無くなっていたが、この街道は残っている。使われた形跡もあるから人の住みかが無くなったりはしていないはずだ。とにかく防衛都市に向かおう。

街道を進もうとしたその時、近くで戦闘する音が聞こえた。

マリエラは戦えない。戦闘スキルは持っていないし、それ以前に鈍臭い。

普段であれば、とつとと逃げ出し、近寄ったりしないのだが、目覚めてから立て続いた異変に、感覚が麻痺していた。わからないことが起こりすぎて、現状を理解したいという好奇心が、音のした方に足を向けさせた。魔の森と街道の合間を隠れながら進み、木の陰から様子を窺う。

（フォレストウルフと、あれは……馬車？）

襲われていたのは馭者台まで鉄で覆われた3台の馬車だった。

馬車には操縦のためのわずかな窓と、ボウガンの射出孔以外は窓らしい物もなく、無骨な鉄板で覆われている。よく見ると鉄板は幾度も継接ぎがしてあり、魔物の爪や牙の跡があちこちに残っている。何度も死線を潜ったことがうかがえた。

装甲馬車に2頭ずつ繋がれているのはラプトルと呼ばれる二足歩行の肉食獣で、獰猛な性格と硬い表皮を持っているため低級の魔物などはものともしないが、調教が難しく防衛都市ではあまり見かけたことがなかった。そもそもこんな重装備の馬車などマリエラは見ることがない。

ラプトルに騎乗した二人の護衛が一人は槍、もう一人は剣で応戦しているが、防御重視の重装備をまとっているため動きは遅く、フォレストウルフの牙は防げるが、攻撃も当たらずといった調子で、素早いフォレストウルフに苦戦しているようだ。

(それにしても、フォレストウルフ、だよな?)

フォレストウルフは群れで行動し、鋭い牙と素早い動きで波状攻撃を仕掛けてくるため、闘うには厄介な魔物だ。しかし。

(そーれ!)

魔物避けのポーションを投げ込む。

「ギャウンギャウン!」

一斉に逃げ出すフォレストウルフたち。

所詮は狼。鼻が鋭いのだ。魔物避けのポーションで逃げ出すほどに。

だから、魔物避けのポーションさえ振りかけておけば、出会っ

とはないし、簡単に追い払える。

そもそも街道を行く時は、魔物避けのポーションを使うのが通例で、魔の森の出口にある国境で安価で販売されている。銅貨5枚という安いポーションを使っていれば、街道どころか魔の森の浅い層なら魔物に遭わずに行動できる。

（子供だって知ってることなのになー？買い忘れかしら？まさか知らないなんてことはないよね？）

フォレストウルフが去つたのを確認してから、マリエラは街道へと歩みでた。

フォレストウルフと対峙していた装甲馬車の騎兵の2人は、唾然とした様子でフォレストウルフの去つた方角と、ポーション瓶を見た後、一人がマリエラに向かって問いかけた。

「今のは魔物避けのポーションか？」

（なんだ知ってるんじゃない。）

とにかく、目覚めて振りの人間だ。いろいろ情報が欲しい。ついでに助けたお礼とか貰えたら超嬉しい。

フレンドリーにっこり笑って返事をする。

「はい。必要ないかとも思いましたが、お手伝いできればと思いついて。」

身丈の大きいほうの騎兵は、ラプトルから降りると、兜を外して数歩こちらに歩み寄ってきた。

上級の冒険者を思わせる引き締まった顔立ちで、年の頃は30歳くらいだろうか。熟練の冒険者にありがちな油断のない目が、焦茶

色の太い眉の下から覗いている。この人が装甲馬車のリーダーのようだ。年齢の割には威厳のある風貌をしている。

「いや、助かった。フォレストウルフどもを引き連れて街に行くわけにもいかず、難儀しておったのだ。

私は黒鉄輸送隊の隊長でディックという。もしや御身は、森の精霊殿か？」

丁寧に挨拶されたのはいいけれど、おかしな誤解をされてしまった。せめて腰の薬草コンジュを外してから出てくるんだった。どう返事をしたのか。

『森の精霊』とは名のとおり森に住まう精霊で、獣の姿をしたものや木のような姿のもの、人に近い姿をしたものなど、さまざまな目撃談がある。精霊たちは、魔物と違って人を襲わず、むしろ助けしてくれる。病の母のために薬草を取りに来た子供に薬草を与えたあと出口まで案内したり、遭難して倒れかけた狩人を泉に案内したりといった話は、この魔の森でもよく聞く話だ。

火や水の精霊といった4大精霊と違って、特定のスキルや魔法を使うときに力を貸してくれるわけではなく、呼び出す方法が知られていないが、他の精霊と同様に実体を持たず、輪郭がおぼろげな姿をしていることと、人に対する善性から、身近で親しみのある精霊として『森の精霊』と呼ばれている。

「やだなー、団長。森の精霊はこんなにハッキリ見えないですよ。どう見たって女の子じゃないですか。」

どう返事をしようかと思っていたら、冷静な突っ込みが入った。

助かった。

鉄塊の様な馬車から亜麻色の髪的青年が降りてくる。歳の頃は16、7歳くらいか。マリエラと同じくらいに見える。青年が人懐っこそうに笑うと、細い目がさらに糸目になる。

「いや、珍しい格好をしているのでな。」

(むう、やはり薬草スカートは、最先端すぎたか?)

「魔物避けのスカートです。」

とりあえず、薬草スカートの機能性をアピールしてみたが、

「それはともかく、迷宮都市の者か?」

と、ディック隊長にさくつとスルーされた。

会話が成立する人間だとわかったからか、急に話し方がフランクになった。ディックと名乗った男は、厳つい大男であるため、なんだか威圧されているように感じる。

「ねえ、ねえ、さっきの、魔物避けのポーションだよね?まだあんの?」

返事をする前に、糸目の青年がディック隊長の話に割り込んできた。

(糸目君は、フレンドリー過ぎない?隊長さんの話に割り込んでいいの?というか、迷宮都市?)

ちらとディック隊長を見ると、どこか探るような目つきでマリエラを見ていた。

（あ、これ、獲物を見る目ってやつだね。糸目君の対応もわざとかなあ。

魔物避けのポーションを使わずに、装甲馬車で魔の森の街道を移動する輸送隊でしょ。

迷宮都市？なんていう知らない街。寝ている間に何が起こったんだろ？出てきたのは迂闊だったかな。）

「ポーションは、あとこれだけ。お金が入用になりました、売りに行く途中です。」

マリエラは、人恋しさに飛び出したことを後悔しながら、ポーチを開いて中を見せ、慎重に答えた。嘘ではないし、余計な事も言っていないはずだ。

「へえ、魔物避けが3本と、低級ポーションが5本かあ。貴重なのを使わせちゃったね。」

糸目の青年は近づきもしないで小さなポーチの中身を把握した。

（10歩以上距離あるよね、てか、一瞬糸目が開いたよ。キラリと光ってたよ！）

『貴重な』辺りでディック隊長が糸目君を一瞥し、マリエラの方に1歩近づいて話を引き継いだ。

「ふむ。我々だけでも切り抜けられたとはいえ、助けられたのは事実。どうだろう、先程の分も合わせ、そのポーション、買い取らせては貰えないだろうか。」

(断つたら力づくで取り上げて、私も売られちゃう流れですね。わかります。てか、なんでこんな安いポジションでこんなことになってるのか、わけがわかりません。あと、こっちは来ないでください、怖いから。)

なんてことはもちろん言えるはずがない。

「はい。これも何かのご縁ですから。」
「うかつな行動を盛大に後悔しながら、マリエラは作り笑いで答えた。

「そうか、助かる。」

ディック隊長は、少しほっとしたように答えた。

ポジションが手に入って助かるなのか、力づくにならなくて助かるのかは分からない。後者だったら、そんなに悪い人ではないのかもしれない。お金を払ってくれるなら、お客様だ。

(もちろん、油断はしないけどね。)

盛大に後悔したばかりなのに、『お客様』などと思っているあたり、マリエラの『油断しない』はあてにならないのだが。

「代金だが……そうだな」

これまで状況を静観していたもう一人の騎兵が、ディック隊長に近づいて何やら耳うちする。

(心臓に悪いからやめて下さい。もう一回止まったらどうしてくれる。)

何を話しているのだろうか。やはりポジションは取り上げられるの

か。マリエラが緊張していると、ディック隊長が値段を告げた。

「9本で大銀貨5枚でどうだ？」

「……………は？」

びっくりしすぎて、固まった。というか、ちょっと心臓止まった気がする。

（えーと、落ち着け私。）

たしか、魔物避けのポーションも低級ポーションもどっちも銅貨5枚程度だったはずだ。

森の中ということ、ボツタクリ価格だとしても、銅貨10枚がいいところだろう。

それが9本、お礼込みでも銅貨100枚⇨銀貨1枚貰えればラッキーなのに。

（大銀貨って言ったよね？それも5枚って。

銀貨10枚で大銀貨1枚だから、50倍！？

物価が超インフレしちゃってるわけ？パン1個で銅貨50枚とかしちゃうとか？）

マリエラが驚きの余り固まっているのをどう受け取ったのか、ディック隊長が少し慌てた様子で言い直した。

「いや、そうだな、効果が確かなのは、先ほどのフォレストウルフで明らかだったな。まるで作りたての様な保存状態だ。うむ、金貨1枚でどうだろうか。」

(固まっていたら、さらに値段が上がりました。いきなり倍。てか、
いつもの200倍？
ええー、どうなってるの!?!)

装甲馬車（後書き）

魔物除けポーション・・・ワンコ系魔物に効果が絶大。人間はあまり臭いを感じない。

お値段は、銅貨5枚＝500円くらい。

マリエラ：「500円のポーションを1000円位でポツタケれないかなーと思ったら、10万円て言われた。」

凋落の都

低級ポーションや魔物除けポーションに、なぜ200倍もの値段がついたのかわからないが、どのみちポーションを売るつもりでいたから、売り先を探す手間が省けたともいえる。

結局、マリエラがフォレストウルフにつかっただ分とあわせて、9本のポーションをディック隊長の言い値通り金貨1枚で売ることでは話が付いた。ポーチから魔物避けポーションを3本と低級ポーション5本を取り出して渡すと、長期保管用の魔法陣が描かれた専用の箱に厳重に仕舞われていた。

（あれって、上級ポーションを保管するやつだよ。何年も命の雫が抜けなくて効果が続く魔道具。

私、錬金術師だけど持ってないんだよね。高いし、保存に魔石使うし。）

ポーションは作られた地域、正確には命の雫を汲み上げた地脈の範囲を離れると、あつという間に命の雫が抜けてただの薬水になってしまう。この保管箱に入れておけば地脈の範囲を離れてもポーションの劣化が抑えられるから、複数の地域を移動しているであろう黒鉄輸送隊が保管箱を所持していること自体おかしいことではない。ただ、保管に必要な魔石のコストを考えれば、本来安価であるはずの低級ポーションを入れるのにふさわしいものではない。もっとも、1本大銀貨1枚となれば話は別なのだが。

代金は、価格交渉の際にディック隊長に耳打ちしてた人が払ってくれた。

厳ついディック隊長とは対照的に細身で優雅な人だ。ゆるくウエ

ーブのかかった金髪を後ろに束ねており、エメラルドのような緑の瞳をしている。振る舞いもどこか品があり、貴族のようにも見える。マルロー副隊長と言うらしい。ちなみに糸目君は、リンクス君。そう言えば名乗っていなかった。改めて挨拶すると、

「マリエラさんですか。所で他のポジションを手放されるご予定は？」

とにこやかに聞かれた。もちろん目は笑っていない。売るならば自分たちに売ってくれ、ということだろう。腹の探りあいのようなやり取りは苦手だ。

「入り用な物がそろわなければ、またお願いします。」

とぼかしておく。状況が読めなくてやりづらいつたらないな、とマリエラは思った。

28

黒鉄輸送隊が迷宮都市まで乗せて行ってくれることになった。馭者台を勧められたけど、窓もほとんどない鉄の箱の中なんて怖いし、スタンピードの後、外の様子がどう変化しているのか確認しなかった。「街まですぐだから」と、装甲馬車の背面にある昇降用のタラップに座らせてもらった。ちなみに乾燥薬草（コシノ）は外して鉄馬車に吊るしている。

「んじや、俺も。」

隣にリンクスが座る。広めのタラップだが2人で座るときゆうぎゆうだ。

(包囲網が形成されてるのかもしれないけど。)

自然な様子で距離を縮めてくるリンクスに、不快感は感じなかった。

街道を鉄の馬車が進む。速度は大して出ていないが、がたごとと結構ゆれる。マリエラは馬車に乗るのは初めてだが、長く乗るとおしりが痛くなりそうだな、と思った。ゆっくり走ってこの揺れならば、速度を出したらどんなことになるんだろう。目が回ってタラップから転がり落ちてしまいそうだ。

そんなことをリンクスに話すと、これだけ街が近づけば魔物にもあまり出くわさないし、日はまだ高い。このままゆっくり行くから大丈夫だと言われた。フォレストウルフもこの辺で出くわすことはまずなくて、もっと離れた場所から追いかけてきたそうだ。街に引き連れていくわけにも行かず、このあたりで追い払うのは良くあることだと言っていた。

「それよりさ、マリエラはどこに住んでんの？」

「森の中に住んでただけけど、ちょっと住めなくなっちゃって……」

身の上を探るように話しかけてくるリンクスをしどろもどろにかわしながら周囲を見回す。

そろそろ防衛都市のはずだ。

防衛都市が近づくにつれ、そわそわと落ち着かない様子を見せるマリエラに、リンクスが声をかける。

「大丈夫だって。まだ昼間だし、ゾンビもレイスも出やしないって。

まあ、何回通っても慣れないっつーか、気持ちのいい場所じゃねーけどさ。」

馬車が、防衛都市だった場所に入った。

そうじゃないかとは思っていた。『迷宮都市』と言っていたから。

でも、マリエラはスタンピードを、ほんの昨日の出来事のように感じていた。

防衛都市のひしめき合うように立ち並んだ建物も、品物が溢れ返った商店や、空腹を誘う露店の匂いも、威勢のいい冒険者達が織りなす喧騒も、ありありと思い出せる。

なのに、

寄りかかるように増改築を繰り返して蟻塚のようだった建物は跡形もなく、

あらゆる品を扱った大店さえ、僅かに石積みを残すばかりだった。異国の料理や甘味さえ楽しめた露店からのたまらない匂いは樹々の匂いに変わり、

人々の熱気に満ちた喧騒も聞こえてはこなかった。

「帝都より栄えたって街が一晩で消えたとか、おっかねえよなー。って、大丈夫か？顔、真っ青だぞ？」

人付き合いは苦手だったが、親切にしてくれた人達だったのだ。

「生き残った人達はいたのかな……逃げ延びた人とか……」

不自然な言動をしている自覚はあったが、マリエラは聞かずにはいられなかった。

「あ？そりゃ、迷宮都市にいんだろ？生き残りっつーか、その子孫だけだよ。」

よかった。生き残った人達もいたんだ。

マリエラの安堵の息は、しかし吐く前に呑み込まれた。

「まー、200年も前の話だからなー。おとぎ話みたいなもんだよな。」

200年

そんなにも長い間眠っていたのか。
途方もない時間に唾然とする。

リンクスは話続けていたけれど、マリエラの耳に入ってはこなかった。

「おーい、マリエラ！」

防衛都市の変わり果てた有様と、200年も眠っていたという事実に呆然としていたマリエラは、リンクスに肩をつかまれて、漸く正気に戻った。

「う、ごめん。疲れちゃったみたいで。」

「魔の森を一人で歩いてたんだもんな。そりゃ、疲れるよな。でもほれ、着いたぜ。迷宮都市だ。」

いつの間にか装甲馬車は停止していた。マルロー副団長が開門要請をしているようだ。

タラップから降りて見回すと、見覚えのある外壁が見えた。

迷宮都市と呼ばれたそこは、かつてのエンダルジア王国だった。

見覚えのある外壁は、かつてエンダルジアの都を囲んでいた白壁だ。

スタンピードで破られたのだろう。

一面白く保たれていた外壁は、大きく崩れたあと、補修された跡があったし、大気に漏れる魔力を吸って魔物から存在を隠してくれるデイジスの蔦が一面を覆っていた。

外壁の周囲の森は広く切り拓かれ、魔物避けの薬草であるプロモミンテラが一面に植えられている。

どちらも魔の森で暮らすマリエラの小屋にも植えていたもので、魔物の領域で人が暮らしていくために必要な植物だった。しかし、うねうねと曲がりくねって壁に張り付くデイジスの蔦は、白壁を蝕む血管のようだし、赤紫をしたプロモミンテラが一面を覆う様は、どこか恐ろしく、美しいエンダルジアの白壁に似合うものではなかった。

2000年の時間は、エンダルジア王国の栄光をおとぎ話にかえてしまった。

有事を除き開かれていたエンダルジア外壁の大門は、今では固く閉ざされ、1人が通れる程度の勝手口に衛兵が詰めているようだった。ディック隊長と衛兵は知り合いらしく、挨拶を交わしてしばらくすると、大門が重厚な音を立てて開かれた。マリエラを乗せて装甲馬車は大門をくぐり、迷宮都市に入る。

大門の中も変わり果てた光景が広がっていた。

流民の街だった防衛都市と異なり、エンダルジアの都は石造りのつくりのしつかりした建物ばかりだったから、更地どころか森に変わっていた防衛都市よりは建物が倒壊せずに残っていた。

それでも、瀟洒な邸宅は半分以上が倒壊し、残った建物には機能性ばかりを追求した暗い色の石や木材で継接ぎツキハギのような修復がなされている。装飾の施されたエンダルジア建設とのつぺりと石や木を並べただけの修繕部分がなんとも歪で、芸術作品に泥を塗りたくったような、落ち着かない気分させる。

目の揃った石畳が敷き詰められ、脇には花が咲き乱れていた大通りは、修復に使ったのか石畳があちこち剥ぎ取られ土が露出していて、僅かに残った石畳は細かくひび割れている。四季折々の花々の代わりに、ポツリポツリと建物にへばりつくように露店のテントが張られていた。

行き交う人は、中級以上と思われる物々しい冒険者や衛兵たちばかりで、細い路地には、仕事にあぶれたのだろうか、どこかを怪我した役夫がしゃがみ込んでいる。

栄華を極めた美しい都の凋落ぶりを、見る人が見れば涙しただろうが、マリエラには防衛都市の時ほどの動揺はなかった。

ここはエンダルジア王国民のための都で、マリエラや防衛都市に

住まう流民達の居場所はなかったからだ。

開かれた大門は、都の栄華を見せつけるためのもので、マリエラ達を迎え入れなかった。マリエラが大門の中に入ったのは、師匠に連れられ錬金術師になる儀式に訪れた、たった一回きりだった。

大門の中の変貌は、マリエラにとってどこか他人事のように思え、冷静さを取り戻すことができた。

「なー、マリエラ。今日の宿、決まってないんだろ？俺たちの定宿に来いよ。」

この辺とか、あんまり治安よくねーんだ。迷宮都市もイロイロでさ。

先に荷を降ろしちまわないといけないんだけど、大して時間もかかんねえし、一緒に行こうぜ。」

街に着いても解放してはくれないらしい。

出会って以来、ポーシヨン狙いなのがバレバレである。わかりやすすぎて、ちゃんと商談できているのか心配になってくるくらいだ。

(でも、ホントに心配してくれてるみたい…)

ポーシヨンの代金は払ってくれたし、人目につかない森の中で半刻ほども一緒にいたのに、脅すことも拘束することもしてこない。まだ信用できる程、知り合えた訳ではないが、右も左も分からないまま放り出されるより、よほど安全かもしれない。

「ありがとう。助かるよ。」

正直にお礼を言うと、リンクスはニカツと笑った。

検品される人々

エンダルジアの都は、中心部に王城が位置しており、王城の周りをぐるりと城壁が囲んでいた。城壁の周囲は大通り並みに幅の広い道路が整備され、王城を中心に十字に4本の大通りが、大通りの間に複数の中小の通りが放射線状に施工された、計画的に整備された都市だった。街並みは変わってしまったが、道路はそのまま使用されているらしい。

エンダルジアの王都の何処からでも見る事ができた王城は跡形も無く、今では迷宮の入り口が口を開けているらしい。かつて王族を護った城壁は修復され、今では迷宮から溢れる魔物から住民を護っているようだ。

穀倉地帯に面していた迷宮都市の北西部は、魔の森の侵食によって規模が縮小されたとはいえ、今でも穀倉地帯が広がっており、迷宮都市内部の北西部地区は一般の市民が多く住んでいる地区になっている。ちなみにスタンピードの被害が最も大きかったのはこの北西地域で、魔物の進行を阻むものがない広大な穀倉地帯は、あつという間に魔物の群れに飲まれ、外壁が最初に壊された。王都内部の建築物もことごとく壊されたようだ。

反対側の南東部は、エンダルジア王国時代と変わらず貴族街で、迷宮都市を治める辺境伯家の城も建立されているようだ。南西部は山脈との距離が最も近い。山脈を抜ける峠道は険しく大人数での通行や、商隊の往来には向かないが、距離が短いため、万一の場合に逃げ延びやすい区域である。

黒鉄輸送隊の装甲馬車は、都市の南西に位置する防衛都市跡地側の大門を抜け、大通りを王城跡地へと進んだ後、王城前的大通りを西側に回って北東部の山脈側に抜ける。

北東部も山脈に面した区画だ。こちらの山脈からは豊富な鉱山資源が産出される。山脈を抜ける街道は、やはり険しく、馬車での通行はできないが、南東部の峠道よりは安全に通行できるため、魔物にあわずに他国へ渡れる街道として最も利用されているそうだ。

おかげで、迷宮や鉱山からの産出品を扱う商人が集まり、迷宮都市で最も栄えているそうだ。半壊したエンダルジア様式の建物は取り壊され、都市の外周側、山脈に近い方には大型の倉庫を備えた商會が建ち並んでいる。中央部の迷宮側には様々な商店や飲食店、宿泊施設や冒険者ギルドといった、冒険者を相手とする商業施設で賑わっている。

どの建物も、スタンピード以降に建て直されたのだろう、どれも防御性を重視した砦の様な造りで物々しい。

積荷の届け先は、迷宮近くの比較的立地の良い場所にあるらしく、1本裏の通りから裏口に回った。裏口と言っても正面よりも門扉が広く、2重の門扉のなかは3台の馬車が十分に入って荷降ろしできる程度の中庭になっている。

中庭の前面には商会らしき建物が、左右には壁を隔てて獣舎と馬車の置き場、洗い場などがあるようだ。

3台の装甲馬車ごと中に案内され、横並びに止める。

商会の裏口から、責任者らしき、身なりも肉付きも良い男が、2人の部下と数名の下男や警備の男を従えて出てきて、ディック隊長とマルロー副隊長が、帳面を片手に何やら話し始めた。

黒鉄輸送隊の御者台から5人の男達が降りてきて、ラプトルを馬

車から外している。中でも年若い少年が隊長の乗っていたラプトルの轡をとると、ヒュイと、口笛のような音をだし、獣舎の方へ歩き出す。

気性が荒いはずのラプトルは、大人しく少年に引かれて行き、馬車から解放された他のラプトルもその後をゾロゾロと付いて行った。

「ユーリケは調教師なんだ。すごいだろ。俺らも行くこうぜ。」

リンクスに連れられて、ラプトルの後をついていくと、やはり獣舎になっていて、商会の世話係と思われる男が餌や水を準備して待っていた。魔の森を不眠不休で走り抜けたラプトルに、餌や水を接待してくれるのだとリンクスが教えてくれた。

「餌まで用意してくれるところは少ないけどな。レイモンドさんは気前がいいぜ。」

客用の獣舎で他の騎獣はいなかった。ユーリケはなれた様子でラプトルを獣舎に繋いでいくと、準備されていた肉と水を与えていった。

逆に世話係の男はおっかなびっくりと言った様子で、餌箱を遠くから押しやるようにして与えている。

『ゲギヤギヤ』

「ひいっ」

水を零されたラプトルが文句を言うように吠え、世話係の男が悲鳴をあげる。

「よしよし、そう怒んなー？おかわり入れてやつからー？
そのアンタ、水たんねーよ？」

ラプトルの鼻ヅラを撫でつつ、ちよつと訛のある喋りで、ユーリケが言うと、ラプトルは途端に大人しくなる。水を要求された世話係の男は慌てて桶に手をかざした。

《ウォーター》

生活魔法で桶になみなみと水が注がれる。どうせなら、ラプトルの水桶に注いでくれたらいいのに。そんな不満は口に出さず、ユーリケは桶を運んでラプトルの水桶に水を足す。

「リンクス兄も、手伝ってくれよー？」

「ほいよ」

ユーリケは14、5歳、リンクスは16、7歳位だろうか。歳が近い2人は仲が良いらしい。リンクスも、まだ餌にあり付いていないラプトルに肉を配っていく。

「マリエラもやってみる？ガッツいてるけど、噛んだりしないぜ」

「当然だし？僕の躰はカンペキだし？」

おっかない肉食獣だけれど、ひたむきに肉を喰らう様子は愛嬌があるし、仲良くなったらつやつやつやした皮を撫でさせてくれるかもしれない。

(世話係の人も使ってたし、生活魔法は使っても問題なさそうね)

まだ水を貰っていないラプトルの水桶に手をかざす。ラプトルは手の動きを目で追うだけで、大人しいものだ。本当にきちんと躡られている。

《ウォーター》

水を注いでやると、ガフガフと一気に飲んでくれた。

「そんなに喉が渴いてたの？」

問いかけると、

『グギヤ』

と返事が返ってきた。

「おかわりってさー？アンタの魔力美味いつてさ？」

ちよつと嬉しくなっておかわりを注ぐと、

『グギヤ』 『グギヤ』 『グギヤ』

我も我もと要求された。

水と餌が行き渡ると、ユーリケとリンクスはラプトルの身体を拭き始める。

マリエラが拭くと『グギユ』とそっぽを向かれた。ユーリケの通訳によると、

「ふにゃふにゃこそばいつて?」

お気に召さなかったようだ。代わりに頭は撫でさせてくれた。思ったよりもさらさらとした手触りで気持ち良かった。

それにしても、ラプトルはよく喋る。

何を言っているのかは、ユーリケにしかわからないが、そこがかゆいのだ、この餌は新鮮じゃないのだ、ユーリケの水が一番うまいがマリエラの水もなかなかいけるのだと、口々に騒いでいるらしい。こんなに愛嬌がある生き物だとは思わなかった。

「宿に着いたらたっぷり寝させてやっからなー?もうちょっと頑張れー?」

リンクスとユーリケはせっせとラプトルを拭いており、世話係の男も怖くないと分かったのか、洗い水を替えたり、鞍や鐙を磨いたり忙しく動き回っている。

やる事が無くなってしまった。そろそろ荷下しは済んだらうか。何気なく中庭を覗くと、

(え……)

鉄馬車の横に、たくさん人間が並んでいた。

黒鉄輸送隊の荷物は人間だった。

二台の馬車を挟んでこちら側に男性が、反対には女性が並んでいる。

男達は腰布だけ、女達は貫頭衣だけの姿で、両手は前で縛られている。

(奴隷だ……)

防衛都市にも奴隷はいたし、マリエラが避妊薬を卸していた娼館の娼婦達は皆、借金奴隷か、奴隷上がりの女達だった。

商店の丁稚や冒険者の荷運び人、掃除夫、魔物の解体業など、なり手の少ない重労働に、借金の金額に応じた期間従事するのがマリエラの知る借金奴隷で、身体が資本の仕事に従事させる為、最低限の衣食住を保証することが義務付けられていたし、任期が開けた時のために、小遣い程度の額ではあったが、賃金の積み立て制度さえあった。

マリエラの知る奴隷とはそういうもので、身なりで奴隷とわかるほど、ひどい仕打ちを受けてはいなかったのだが……

そこに並ぶ男達は、皆痩せ細っており、髪も髭も伸び放題で、身体はひどく汚れていた。

商会の下男らしき者が、順番に生活魔法で水をかけ、その場で身体を洗わせ、洗浄が済んだ者を帳面を携えた店員が、家畜を検品するかのようチェックしていく。

それも、汚い物に触れるように、手指を使わず棒でつつくのだ。

反抗的な者は後ろに控えた警備員が容赦なく引き倒す。

僅かでも反抗したなら、数人がかりで押さえつけ、一層屈辱的な体勢で念入りにチェックをし、終わってから背中側で手足を縛って、海老反り状態で転がされていた。

それを見た者たちは、口の中に棒を突っ込まれようと、腰布の中を締められようと、皆おとなしく、なすがままとなっていた。

最後尾の男など、怪我をしているのか、立っているだけでフラフラと覚束なく、棒で突かれた反動で前のめりに倒れていた。警備員は、容赦なく髪を掴んで顔を上げさせ、半ば倒れた体勢のまま、全身を棒で小突き回している。

「ひどい……」

思わず声が出る。

「犯罪奴隷や終身奴隷を見るのははじめてかい？」

リンクスに声をかけられてビクリとする。

近付かれたことにも気がつかなかった。

「迷宮都市に送られて、生きて出られる奴隷はいないからな。

輸送中に馬車ごと魔物に殺られる事だつてある。

「ここはいつだって人手不足だけど、借金奴隷の権利は守られてから、まっとうな奴隷は連れてこれねーよ。」

犯罪奴隷は殺人や強盗など重罪を犯した者に科せられる刑罰で、終身奴隷は死ぬまで働いても返せないほどの負債を抱えた者となる。どちらも人権など無いようなもので、討伐隊の最前列、いわゆる肉壁や、鉱山労働などの、非常に危険で過酷な労働を科せられると聞いた事がある。

「あなた達は、奴隷商人なの？」

思わず聞いてしまった。気にする風もなくリンクスは、

「俺たちは注文を受ければ何だって運ぶぜ。」

今回は奴隷だったけど、酒やタバコ、砂糖や香辛料の時もあるし、布地や本、楽器なんかを運んだ事もあったな。迷宮都市はいろんな物が足りてない。騎士隊の定期便か山脈経由のヤグーの商隊だけじゃ、運びきれねーからな。」

と答えた。

「僕は奴隷を運ぶのは一番嫌いだな？」

「アイツら臭いから、ラプトル達も嫌がるし？」

「垂れ流したもんな。荷台掃除する身にもなれっつーの。」

まるで家畜を運ぶような感覚の2人に、マリエラは軽く目眩を覚えた。

検品される人々（後書き）

窃盗などの軽犯罪は、損害賠償額を借金奴隷になって返します。金額が年齢毎に設定された金額を超えると、終身奴隷となります。盗賊など命を脅かす犯罪者は切り捨てて当然の世界なので、「荷物」と割り切る方が普通です。

隷属契約

(犯罪奴隷、終身奴隷……でも、人間だよな?)

防衛都市でも、『盗賊を退治した』といった話はよく聞かれる話だった。退治した、とは殺害したという意味だというのは理解している。自分の命を、財産を武力で持って脅かす輩に武力で持って防衛することは、むしろ推奨されていた。見逃せば、被害者が増えるだけだからだ。

頭では分かっているのに、家畜のように扱われる人々に、マリエラはどうしても違和感を感じてしまう。

(危険が身近じゃなかったただけだ。)

盗賊に狙われる人は、狙うだけの資産があり、盗賊の縄張りを通行する者たちだ。

虚栄心が強く身の丈に合わない名誉や富を求める者が犯罪に染まりやすく、そういったものの周りには犯罪が起こりやすい。

マリエラは食べていくのに精一杯で財産などなかったし、危険な場所へは近づかなかった。虚栄心などなく魔の森で静かに暮らすことを望んでいた。貧しく平穏で安全な生活が、マリエラの日常だった。だから、目の前で検品される奴隷を見て、当然の扱いなのだと頭で分かっているても理解できない。

この『理解できない』状況が、危険であるとマリエラは感じた。

(ポーション……)

迷宮都市の露店商で売られる品々は、防衛都市と比べて高いようではあったが、200倍も値が釣り上がっていなかった。なにより、ポーション自体まったく見かけず、代わりに『薬』が売られていた。ポーションが貴重であることは間違いがない。そんなものを、マリエラは安易に使用し、また販売してしまったのだ。

（情報が欲しい。裏切らない味方が必要だわ。）

街の様子から予想は付いているのだ。ただ、確証がない。マリエラはここにきて漸く、強い焦りを感じた。

そうしている間にも、商品の検品ドレイが終わったようだ。

検品台帳を受け取った商会の代表らしき男、彼がレイモンドだろう、と、ディック隊長が商談を始めたようだ。

何やら折り合いが付かなかったようで、男性奴隷の最後尾へ移動する。

「大銀貨2は無いだろう、10は貰わないと採算がとれん。」

生活魔法の 聞耳 をコツソリ唱えて会話を拾う。

街中で噂話を聞いたり、森の中で獣のたてる音などを拾ってくれる風属性のこの魔法は、有効範囲が狭いうえに壁などの遮蔽物があると遮られてしまう、所詮は生活魔法といった効果しか無いものだけれど、ディック隊長とレイモンドの会話を上手く拾ってくれた。

「そうは申されましてもねえ、右手も左足も動かないようで御座いますから、買い手が付きませぬのでねえ」

先ほどの、髪を掴まれ小突き回されていた男の事で揉めているらしい。

「迷宮の肉壁や、鉾山でも、使えばよかるう」

「この足では、冒険者様について行くことも出来ませんし、この手ではツルハシもふるえませんよ。」

「片目はあれだが、なかなか整った顔立ちをしておる。こついった者を好むものもおるだろう？」

「男娼でございますか？確かに畸形の躰を好む好事家もおられますが、20歳をとうに超えておりますからねえ。トウが立ちすぎでございますよ」

肉壁、鉾山、欠損の男娼：およそ考えうる最悪の選択さえ無理だと言われ、男はガクガクと震えている。

他の誰よりも痩せこけた身体は、濡れたまま倒れたせいで土にまみれているし、薄暗い灰色の髪はべたりと顔に張り付いて、みずばらしく、哀れだ。

「こちらは其方の紹介状を持参して、買い付けて来たのだ」

「確かに注文通り五体は揃っておりますが、動かないでは商品として欠陥でございますしょう？」

申し上げにくいのですが、動かないことを隠して上手く売りつけられたのではございませんか？」

「……かと言って、大銀2はあるまい。せめて5……」

「こちらも、わざわざ運んでいただいておりますから、本来でしたら買い取り致しかねるところを、頑張らせていただいているのです。買い手が付かず損となるやもしれない商品でございますから。」

(ディック隊長、交渉弱い！)

コワモテのディック隊長が、威圧的かつかなり非道な交渉をしているのに、ドレイ商のレイモンドはまるで取り合っていない。

マルロー副隊長は、慣れているのか、あーあといった表情している。

(っっていうか、これってチャンスじゃない？)

どんな奴隷も主人の命に従う。隷属魔法で縛るからだ。

隷属魔法の強さは強制力の強さで、借金額や罪の重さで変わると聞く。

(あの人は、犯罪奴隷か永久奴隷。

死ぬまで味方でいてくれる。死ぬまで……。)

普段であれば、味方を金で贖うなんて、なんて下衆な考えだと思っただろう。犯罪奴隷や終身奴隷に落ちるような人間を、まともでないと敬遠したかもしれない。弱りはて、絶望的な状況にいる男をかわいそうだと思ったが、この感情を憐れむと同時に優越感を感じ、無力な男をすくい上げる万能感に酔っているのだと、自嘲したに違いない。人一人養うどころか、自らの進退すら危ういくせにと。

しかし、マリエラにとってスタンピードの、迫り来る死の恐怖は昨日の事のように思い出されたし、目覚めてからの嘔み合わないやり取りや、街の変貌は冷静な思考を奪っていた。何よりポーシヨン

価格の高騰がマリエラに強い焦りを感じさせていた。

「私が大銀貨5枚で買います！」

気がついたら叫んでいた。ディック隊長もマルロー副隊長も、レイモンドや店員達、列をなす奴隷達まで驚いてこちらを見ている。視線が集まり、顔がカアと熱くなる。

しまった、どうしよう、そんな感情がぐるぐる回るけれど、ディック隊長の向こう側で、灰色の髪の毛の男がこちらを見ているのに気付いた。顔の右半分は髪に隠れて見えなかったが、左目は深い蒼色をしていた。

「奴隷が必要だったんです。手持ちが少なくても大銀貨5枚ならあります！」

なんか、もう、勢いしかなかった。交渉のこの字も無い。

「ぶ」

沈黙を破ったのは、マルロー副隊長だった。

(あれ？なんか笑われた！？なんで？)

「では、彼はマリエラさんに大銀貨2枚でお売りしましょう。」

「え………？」

ディック隊長が驚いて声を上げる。

ディック隊長も、奴隷商のレイモンドも、口をぽかんと開けて、

いきなり交渉に乱入してきたマリエルとその交渉に応じたマルロー副隊長を驚いた表情で見ている。固まったままの2人を尻目に、マルロー副隊長は、

「先ほど、損になるやもしれないと仰っていましたね。それをこちらのお嬢さんが引き受けてくださるのです。どうぞ、契約費用はサービスということでは。」

などと、いけしゃあしゃあと持ちかけた。見知らぬ小娘にタダで仕事をしてやれと言われて、再起動しかけたレイモンドに、マルロー副隊長はすつと近づくと、

「彼女とはおそらく、長い付き合いになると思いますよ。」

と囁いた。それを聞いたレイモンドは、暫く瞑目した後に、営業スマイルをたたえると、

「お見苦しいところをお見せして申し訳ございません。」

お嬢様のご提案、私どもにとりましても、有難いかぎりでございますので、契約につきましては、マルロー副隊長様の仰せのまま、サービスさせていただきます。」

と答えた。

「え？大銀？……？」

置いてけぼりで固まったままのディック隊長から、マルロー副隊長が見積もりと思しき書類を取り上げ一瞥すると、

「あとは……、ええ、この額で結構です。これでよろしいですね？

隊長？」

と、さつさと商談をまとめてしまった。

漸く再起動したディック隊長は、帳簿係が準備した書類にサインし、支払い方法についての話し合いを始めた。話に乱入した拳句、勝手に商談をまとめたマルロー副隊長に怒る様子もない。

マリエラが大銀貨2枚をマルロー副隊長に払い終えると、「契約の準備が整いましたよ」と声をかけられた。

いつの間にか机と、何本か火かき棒のような物が入った火鉢が用意されており、取引が終わった奴隷達が火鉢が見える位置に整列されていた。

レイモンドが、帳簿をめくり、内容を読み上げる。

「さて、その男、名はジークムントですか。借金奴隷時代に主人の子息に怪我を負わせ、犯罪奴隷に堕ちたとありますね。」

火鉢の前に引き立てられた灰色の髪の子、ジークムントはビクリと身体を揺らし、

「ち……ちが……」

と初めて言葉を漏らした。

「皆さんそう仰いますよ。特にこれを見るとね」

火鉢の前に控えた店員らしき男が、一本の火箸を持ち上げる。

それは、火箸ではなく細かい模様が彫り込まれた焼印で、大きさ

はマリエラの手のひらほどもあった。

ヒュッ

息を飲むジークムントに、いや他の奴隷達にも見せつけるように、焼印をゆっくりと動かす。

「従順な奴隷ならば、これ程大きな印は必要ないのですがねえ……借金返済さず！借金奴隷の身にありながら！仕えるべき主人の命に代えても護るべき大切なご子息に！怪我を負わせるなど！」

レイモンドは一言毎に語気を強め、ジークムントは唇を噛み締める。

「そのような心根の者が、心優しいお嬢様に満足にお仕えできないがないのですよ。」

契約の力でもって強く矯正して、漸く、お側に侍ることができるとは。それでも小さいくらいだと、私は思うのですがねえ？」

(洗脳教育中に悪いんだけど……)

奴隷商人の後ろから、マリエラはトトトと火鉢に近づき、

「これがいいです。」

と、一番小さい焼印を指定した。サイズは親指と人差し指で円を作ったくらい。丁度大銀貨位の大きさだ。

くるりと振り向いたレイモンドの顔が笑っていなくて怖い。

(タダでやってやるんだから、これ位協力しろって顔ねー)

「目も、手も足も不自由なんだもの。これ位でいいと思うの。」

マリエラは、精一杯笑ってみせる。

ジークムントは既に弱っているのだ。死に体といった状態で、あんな大きい焼印を押されたら、それだけでショック死してしまうかもしれない。そもそも、現状を教えてくれて、後はマリエラの秘密さえ守ってくれればいいわけで、あんな大きな、強い契約で縛らなければいけないほど、ジークムントが嫌がる命令をするつもりはない。

ジークムントはレイモンドでも焼印でもなく、マリエラを見つめている。あの深い蒼い目は嫌いじゃない。ジークムントがどんな人かは分からないけれど、あんな大きな焼印は絶対に押させないぞと、マリエラはレイモンドを見つめる。

「おお、なんと慈悲深い！」

レイモンドは、ジークムント、いや奴隷達に向き直り、押し問答は無意味とばかりに続ける。

「慈悲深い主人に常に感謝を！命令に従える喜びを！」

貴様らなど、血肉の一滴まで捧げ尽くしても、この恩に報いるには足りないぞと知れ！」

レイモンドは声を張り上げて詠唱を開始する。

《その身は土より価値はなく！》

マリエラの示した焼印に土属性の魔力が宿って鈍く光る。

《血潮は主人のために流れり！》

机上に置かれた杯に水属性が集まり、杯から水が溢れて机からも滴り落ちる。

《献身の思いは主人の為に吹き荒れ》

火鉢の周りに風属性魔力が集まり、螺旋状に渦を巻き、

《命は主人が為に燃ゆると知れ！》

火鉢に火属性の魔力が加わり、ゴウと一気に火柱が上がった。

いずれも、精霊の力を借りるような強い魔力ではないけれど、詠唱を演劇のような言い回しに組み込み、視覚的な効果を合わせることで、実に荘厳な雰囲気醸し出している。心理的にも訴えて術で縛りやすい形に思考を誘導することで、術式の効果を高めているのだ。

レイモンドの手練手管はかなりのもので、人心と術式の理解も確かなやり手のようだ。

レイモンドは見る間に赤熱した焼印を掴むと、ジークムントの前に立つ。

まるで宗教儀式的一幕のようだ。

商館の下男らが、ジークムントの両腕を掴み、膝をつく形で座らせる。

ジークムントは抵抗せず、焼印を見上げている。

《汝、ジークムントよ！魂から服従せよ！》

あばらの浮いた胸に、焼印が押し付けられる。
ジユウ、と音がして、肉を焼く嫌な臭いが漂う。

ジークムントは歯を食いしばり、呻き声も漏らさない。

側に控える店員に促され、机上の杯にマリエラの血を垂らす。
杯には先ほどの詠唱で湧き出た水のようなものが入っており、スツと血が混じり合う。

レイモンドが杯を受け取ると、ジークムントを押さえていた下男の1人が口を開けさせた。

《汝の主をその身にきざめ!》

杯の中身を口の中に注ぎ込む。顎を掴み一滴も零すことも許さず飲み込ませる。

4属性の魔力がジークムントの体内で合わさり、術式が結ばれる。押された焼印の魔法陣が薄っすらと光り、隷属魔法がジークムントの全身に刻み込まれた。

《契約はここに成されり!》

詠唱が終了し、隷属契約が完了する。術の影響か、ジークムントの蒼い目が茫然とした様子でマリエラを見つめていた。

「そんじゃ、宿に行こうぜ」

契約を行っている間に、リンクスとユーリケがラプトルを連れて

待っていた。

6頭のラプトルたちは既に鉄馬車に繋がれており、ユーリケは2頭の手綱をディック隊長と、マルロー副隊長に渡した後、先頭の装甲馬車の馭者台に乗り込む。

「そいつは、荷台に積んどくから。さ、乗った乗った。」

他の隊員がジークムントを先頭の荷台に乗せて、扉を閉めた。

マリエラは、商談に割り込んだ謝罪と隷属契約のお礼をレイモンドに言っつて、ジークムントの乗っている装甲馬車のタラップに乗り込む。

「いえいえ、実に良いタイミングでした。」

着くなり契約儀式を見学できた他の奴隷達も、良い主人に仕えたいと頑張ってくれるでしょう。

またのお越しをお待ちしております。」

と、レイモンドは機嫌よく見送ってくれた。

黒鉄輸送隊は3日間、昼夜を徹して魔の森を走り抜ける。その間、小さな換気窓しかない暗い荷台にぎゅうぎゅう詰めに押し込まれ、十分な食事を与えられることも、横になることもできない。途中何度も魔物に襲われる。荷台の暗がりの中、絶えず聞こえる魔物の遠吠え。魔物の攻撃に馬車は揺れ、牙や爪を受けた装甲はギャリギャリと音を立てたろう。

死の恐怖と激しく揺れる荷台の中で、彼らは精神も体力も限界まで消耗していたことだろう。商館にたどり着き恐怖から解放された安堵感と、睡眠も栄養も足りていない、極限状態である儀式めいた契約を見れば、主への恭順は深く意識に刷り込まれたことだろう。

犯罪奴隷や終身奴隷の価値は低い。生命の保障さえない劣悪な環境に居続けることが確定した身の上だ。皆人生に悲観しきっており、気力や意欲といったものがない。命令に最低限従うだけで、主の利益となるよう動くことなどない。買い手からすれば、遣いつぶす以外に使い道がない者たちといえる。

この儀式を目にし、多少なりとも主に従順になつてくれたなら、良い商品としてレイモンドに利益をもたらしてくれらるだろう。

(マルロー様は食べないお方だ。あの娘と長い付き合いになるといふのは、良く分かりませんが・・・)

今回の商品の様子を後で報告するように部下たちに指示すると、レイモンドは店に向かって歩き出した。

ヤグーの跳ね橋

黒鉄輸送隊の定宿は、奴隷商館があつた大通りを山脈側に少し進んだところにあつた。

宿を示す看板に『ヤグーの跳ね橋』と書いてある。

ヤグーとは、この辺りの山脈に生息するロバくらいの大きさのヤギで、山脈の街道を往来するには必須の家畜だ。山脈の街道は、道幅が細くて馬車は通行できないから、何十頭ものヤグーに荷を背負わせて、隊列を組んで往来するのだ。荷役用だけでなく、粗食に耐え、気性も穏やかで乳も肉も取れるから、防衛都市でも多く飼育されてきた。

ヤグーには山岳ヤギの特徴らしく、絶壁に登りたがる特徴がある。切り立った岩山のとっぺんから、別の岩山のとっぺんに飛び移っては、けろりとした様子で崖を降りたりし、見る者を驚かせる。

この絶壁を飛び越える様子は、『ヤグーの跳ね橋』と呼ばれ、絶体絶命のピンチから生還する、という意味合いで防衛都市でも使われていた。

『ヤグーの跳ね橋亭』もこの地区の他の建物と同じく石積みのできる堅牢な建物だったが、他の建物に比べて間口が広く、両開きの扉が開かれて客を迎え入れていた。

ディック隊長とマルロー副隊長はラプトルから降りて、入り口に向かう。マリエラとリンクスも馬車を降りてついて行く。ジークムントを早く出してあげたかったが、まずは裏で洗ってから、と荷台に乗せたまま、裏側に連れて行かれた。

扉の中は食堂兼酒場になっていて、店の右手奥に2階に続く階段がある。

昼をゆうにまわった、けれど夕暮れには早い時間のため、中は閑散としており、カウンターで燃えるような赤毛の女性が店番をしていた。

「ディック！今日は早かったじゃないか！」

赤毛の女性が声をかけ、親しい様子でディック隊長の側に駆け寄る。

気の強そうな美人で、しかも巨乳だ。

「なに、犬っころの始末が早くついてな」

なぜか胸を張ってディック隊長が答える。どことなく嬉しそうだ。

「いつもの部屋が空いてるよ。さあ、その鎧を外してきとくれ。食事の支度をしておくからさ。」

と、そちらのお嬢さんは、見ない顔だね？」

「初めまして。マリエラと言います。2人部屋をお願いしたいのですが」

赤毛美人の視線がマルロー副隊長に行く。

「旅の途中で知り合いました。彼女の連れは、我々の『荷』だったのですが、2階の奥ならば、問題ないのでは？」

「そうかい。ようこそ、ヤグーの跳ね橋亭へ！アタシはアンバー。」

わからないことがあったらなんでも聞いてくれ。」

マルロー副隊長の紹介を聞き、愛想よく接客するアンバー。とりあえず3日分の宿代を払い、鍵を受け取る。2人部屋が1泊30銅貨。朝食は1人5銅貨。

安い。防衛都市の相場から見れば、駆け出しの冒険者が泊まるよ
うな、安宿くらいの値段だ。『ヤグーの跳ね橋亭』は立地もいいし、
建物も立派で食堂も付いている。中級以上の良い宿に見えるのだが、
宿泊費用が安すぎる。

「え……安す……」

思わず声がでた。

「ああ、迷宮都市の宿は、お国から補助金が出るからね。何しろ
こんな辺鄙なトコだろ？」

迷宮があるつてのに、ここまでくるのがたいへんで、なかなか人
が集まらないんだよ。

最低限の生活は安くでできるように、辺境伯様のご配慮下さって
るってわけさ。

「マリエラちゃんも、ゆっくりしてっとくれね。」

迷宮都市の物価はイマイチわからないが、ポジションを売ったお
金がまだ6大銀貨以上ある。

しばらくは暮らしていけそうだ。

（それにしても……）

マリエラはそっと胸に手を当てる。

(アンバーさん、胸おっきい……)

胸を大きくするポジションはないものかと、マリエラはため息をついた。

ディック隊長達、マルロー副隊長はそのまま2階の部屋に上がっていった。

リンクスは残りのメンバーに鍵を渡しに行くと言うので、マリエラも一緒に向かう。

裏口から出ると、トイレらしき建物と水場、さらに奥には車庫と獣舎が見えた。水場では自由に洗濯が出来るようで、貸し出し用の洗濯板や桶が置いてある。水場の隅には布で隔てた水浴びスペースもあった。

「おい、ユーリケ、先に飯にしようぜー」

リンクスが声をかけると、黒鉄輸送隊の4人が車庫から出てきた。

「ユーリケは、ラプトルを世話してから来るそつだ。」

鍵を受け取りつつ、黒鉄輸送隊の1人が答える。

「あいつ、ほんとラプトル好きだよなー。鍵渡してくる。先行つてて。」

そつ言つと、リンクスは獣舎の方へ走っていった。

ジークムントはどこだろう、と辺りを見渡すと、水浴び場から慌てた様子でジークムントが出てきた。

急いで出てきたらしく、髪が濡れて寒そうだ。巻き直したらしい腰布が濡れてへばりついている。

(腰布ソレで拭いたのね……)

マリエラ自身、着替えも何も持っていない。

今着ている外套は、デイジスの繊維で織ったもので、着用者や大気中の魔力を吸って自動修復されるため、特に劣化は見られないが、中に着ている衣服は200年も経てばボロボロになっているだろう。ポーチや靴の皮はあちこちパリパリとひび割れて、破れそうになっている。

(ジークムントの様子をみたら、まずは買い物ね)

生活魔法の 乾燥 でジークムントを乾かした後、部屋に向かう。付いてくるように言うと、ジークムントは大人しくついてきた。

ふくらはぎが腫上がって変色した左足を、引きずるようにして歩いている。右手にはマリエラの腰ミノ……もとい薬草の束を抱えている。右腕はまったく動かないわけではないようだが、薬草の束をもつではなく、不器用そうに抱えていることから、右腕も不自由なようだ。後は右目。ずっと髪で隠している。顔色は悪く、ハツハと呼吸は浅く短い。

マリエラがあてがわれた2階の奥の部屋はそれなりに広く、部屋の両端に2台のベッド、間に机と椅子が2脚あった。ドアと部屋の間には荷物や鎧を置けるクローゼットと、なんと小さいながらも風呂場が設えてある。

風呂と言っても人がギリギリ入れる程度の深型の桶と排水穴があ

るだけで、給水設備はついていない。魔法か魔道具で水を張って沸かさなければいけないのだが、風呂付きの部屋が有るのは、少なくともマリエラの知る防衛都市では、高級な宿屋に限られた。

（お風呂！うれしい、後でゆっくりはいろつ。）

お湯で拭くくらいしかできないと思っていたから、お風呂に入るのはとてもありがたい。

思いの外良い部屋だが、寝室は湿っぽくカビの臭いがする。窓が小さい上、日当たりが悪いのしろつ。シーツは清潔だが藁のマットには虫がいるかもしれない。

（不衛生な奴隷を入れてもいい部屋ってわけね。仕方ないか。）

水浴びは済ませたようだが、ジークムントからはすえたような臭いがするし、髪やひげは土や埃やよくわからないものが絡み付いて団子のようになっている。部屋に入れてくれただけでもありがたい。

生活魔法で換気をしたのち、窓を閉める。部屋の扉を閉め、門をかける。寝室前の内扉も閉めたから、声が外に漏れることはないしろつ。部屋の照明に多めに魔力をこめたから、窓を閉めても部屋は十分に明るく、診察するのに問題ない。薬草を受け取って確認する。馬車に揺られて端が欠けたりしているが、なくなっているものはない。応急処置には十分対応できる。

「そこに座って」

椅子を指差すと、なぜかジークムントは椅子横の床に座った。左足が腫れてうまく曲がらないのか、左足だけ横に曲げて、正座を崩

したような格好で座る。顔は上げず、マリエラの足の辺りを見ているようだ。

(なぜ、床に……。まあいいや。)

マリエラはジークムントの向かいに椅子を動かして座ると問いかけた。

「私は、マリエラと言います。貴方のことはジークとよんでいいかしら？」

隷属契約で貴方は私の命令に逆らえない。これはあっている？」

「はい。好きにお呼びください。ご主人様。

この様な不具の身を拾って頂いたご恩は決して忘れません。どの様なご命令にも背きません。何なりとお命じください。」

そう言うとジークは床に額を擦り付けて土下座した。

(うわぁ……)

ドン引きだ。大の男が土下座とか。あと、言ってるセリフも。

レイモンドとかいう奴隷商人は、何か精神魔法でも使ったのかもしれない。

ともかく、今はわからないことだらけだ。裏切らない情報源は重要だし、暮らして行くにも男手があるのは心強い。ジークの言動はおいおい改めてもらうとして、まずは治療をしなければ。錬金術師のマリエラには、ジークが怪我だけでなく体力的にも限界であることが分かっていた。

「マリエラと呼んで。顔をあげてよく見せて。」

ジークが顔をあげ、へばりついた髪を掻き上げる。

痩せて頬がこけているが、整った顔立ちだ。一つしかない深い蒼の瞳が美しい。髭を剃り身なりを整えれば人目をひくナイスミドルになりそうだ。

マリエラが右目を診ようと手を上げると、ジークはビクリと身体を硬くした。こういう反応をする子供を、マリエラは知っていた。孤児院に保護された子で、日常的に親に殴られていた子だった。ジークも常態的に暴力を受けていたのだろう、全身に小さな傷跡がいくつも残っている。

先ほど、自分より年下の娘に対して躊躇なく土下座をしたことといい、ジークはどのような扱いを受けてきたのだろうか。マリエラは胸が痛くなった。

ジークを怯えさせないようにゆっくりと手を動かして顔に触れる。熱い。やはり熱がある。顔の右半分には魔物の爪跡だろう、3本の大きな傷が残っている。このキズは古いもので、すっかりふさがっているのだが、右眼は眼球が潰れてしまっていた。

（これはエリクサーが眼球特化型の特級ポーションが必要ね。）

エリクサーは奇跡の霊薬。生きてさえいればどんな怪我也病も治し、部位欠損さえ瞬時に修復する。

希少で高価な材料を複雑な手順で錬成して得られる、錬金術の最高峰で、もちろんマリエラは作れない。というか、防衛都市でも伝説の霊薬という扱いで、パン屋の数より錬金術師は多くいたのに、作れるどころかレシピを知っている人さえ聞いたことがなかった。

代わりに欠損修復薬として流通していたのが、『特化型ポーション』と呼ばれるもので、高レベルの錬金術師が作れる特級ポーションをベースに欠損部位に応じた材料を錬成して作られる。一流の錬金術師達が材料やレシピを研究し、開発されたオリジナルレシピは秘匿されるため、マリエラは作り方を知らない。

そもそもマリエラの錬金術のスキルレベルでは、ベースの特級ポーションの下の、上級ポーションがなんとか作れる程度だ。

(右眼は無理ね……)

次は右腕を診察する。前腕部に魔物に噛まれた痕がある。聞くと半月ほど前に黒狼にやられたという。

黒狼は、瘴気狼とも呼ばれ、フォレストウルフに比べると小型だが、牙に傷の治りを遅らせる毒を持つ。一頭毎の攻撃力は弱いですが、群れで行動するため、狙われた獲物は血を流しながら執拗に追い回され、衰弱してやがて喰われる。

腕の傷は完治しておらず噛み跡の肉が変色してへこんでいる。魔物に噛まれた後、ろくに治療もせず放っておいたのだろう。牙に含まれる魔物の毒が傷口に入って完治を遅らせているようだ。手に力が入らず思うように動かないが、指先の感覚はあるらしいから、神経は切れていないようだ。

最後に左脚。こちら黒狼にやられたそうなので、ふくらはぎの肉が一部かじり取られていている。

止血するために焼いたらしく、火傷痕が治りきっていないどころか、垂れ流しの不衛生な環境で輸送されたせいで、雑菌が入り炎症を起こしている。傍目からわかるほど肉が変色して腫れ上がっている。

る。

(まずはこの炎症を何とかしないと。

腕は中級ポーションでもなんとかなりそうだけど、脚は上級の特化型ポーションが欲しいわね。

それにしても、平気そうにしてるけど、この傷、激痛なんじゃないの?)

押されたばかりの焼印は赤黒く、刻印部分は一部茶色に変色しているうえに、こちらも炎症を起こしかけている。

特級ポーションがあれば、全てを瞬時に治せるのだろうが、作れないものは仕方がない。より低位のポーションで治療するには、ある程度段階を踏んで治療をする必要がある。

「まずは、傷口の洗浄をします。」

マリエラは、治療を始めることにした。

治療と契約

激痛を顔に出せば、使えないと捨てられる。倒れてしまえば、捨て置かれて野たれ死ぬ。

大銀貨2枚というのはその程度の金額だ。

こんな状況になってなお、ジークムントは死にたくないと思った。こんな状況だからこそかも知れないが。

マリエラには知る由もなかったが、ジークムントは気力だけで平静を装っていた。

ジークを椅子に座らせると、マリエラは備え付けの水差しと、一本だけ残った薬瓶をもって風呂場に向かう。錬金術で水差しと薬瓶を洗浄、殺菌、乾燥した後、風呂場の桶も併せてもって戻る。

「今からすることを決して口外しないで。これは《命令》です。」

「はい。」

ジークの蒼い目は熱のためか虚ろで、返事は機械的だが、胸の焼印に僅かな魔力反応があったのが確認できた。

桶を机の上に置き、右腕を傷が上になるように出させる。

《浄水・命の雫・固定化》

水差しの中に洗浄水が出来上がる。

炎症を起こした傷口には薬草を使った殺菌作用のある水より、命の雫の力を宿した洗浄水がいい、というのは、マリエラの師匠の持

論で、マリエラもそれに倣う。

たっぷりと傷跡にかけて綺麗にする。黒狼の瘴気が命の雫の効果で洗い流されていく。

次に脚。ふくらはぎの傷が上を向くよう椅子の上に膝立ちさせ、こちらは一層丁寧に洗浄する。

なんども錬成しては、洗浄し桶の水を捨てる。

拭き取る布がなかったので、シーツを剥がして傷跡以外を拭う。傷跡には命の雫をそのままかける。命の雫は水や薬に固定化しないとすぐに消えてしまうので、錬成した錬金術師以外はそのまま摂取できない。傷跡にかけるとすっと消えてしまうのだが、傷口を乾かしてくれるので便利だとマリエラは思っている。洗ってあるとはいえ殺菌していないシーツでぬぐったり、かび臭い部屋の風を当てて乾かすよりは、よほど衛生的だ。

最後に胸の焼印。仰け反るように椅子に座らせ、焼印の下にシーツを当てて洗浄する。こちらは低級ポーションで問題ないだろうが、火傷は冷やしたほうが良いという。洗浄してからのほうが、効果は高まるだろう。こちらもシーツがグショグショになるまで何度も洗った。

最後にポーション。

乾燥薬草の束からキュルリケ草とキャルゴランという滋養強壮効果のある根、ペシリニオンという、キュルリケ草の種子部が丸まって青くなっている物を取り出す。

ペシリニオンは、日陰のジメジメしたとこに生えているキュルリケ草から稀に見つかる珍しい物で、不衛生な環境で傷が悪化したり、長く治らない熱などに効果がある。キュルリケ草は日当たりの良い

場所を好むから、ペシリニオンが見つかるような環境では、種をつけるまでまず成長しないので、それなりに稀少なものだ。

ある時、マリエラが種用に鉢で管理していたキュルリケ草を、すっかり日陰に放置していたら、ペシリニオンができていた。しかもペシリニオンができかけの種からキュルリケ草を育てたところ、日陰でも生育し、ペシリニオンができ易い品種になったのだ。以来、マリエラの薬草園ではペシリニオンが一定量取れるようになっていた。目覚めた後の薬草園で生き残っていたので、売るつもりで持ってきて正解だった。

キュルリケ草とキヤルゴラン、ペシリニオンを少量使って一本だけポーションを錬成する。低級に分類される簡単なポーションだが、これも特化型に分類される。ジークの症状には中級並みの効果を発揮するはずだ。

「飲んで」

ポーションを差し出すと、ジークが啞然とした表情でマリエラを見ていた。あぐりと口まで開いている。

固まったままなので開いた口にポーション瓶を突っ込むと、むせながらも飲んでくれた。

「れ……錬金術師？」

はじめてジークから話しかけてくれた。洗淨水を作っているときから、まさか、といった表情だったが、ポーションを錬成してようやく確信したらしい。

「うん。この街にはもう、錬金術師はいないの？」
ジークから空き瓶を受け取り尋ねると、

「錬金術師は、おりません。ずっと前から。ここは、魔物の領地ですから。」
と返事があった。

（そっか。そうなんだ。『迷宫都市』だもんね。200年も経つてたら、そうなるよね）

「だからね、《命令》。『私が錬金術師だということは、決して口外しないで。』」

もう一度、ジークに念をおす。隷属の《命令》は具体的であるほど効果を発揮する。

「そのこのベッドで寝なよ。汚れた腰布が気持ち悪いでしょ、とっていいから。」

起きたら熱も下がって楽になってるよ。私は買い物とかしてくるから、目が覚めても大人しく寝ててね。」

ジークをシートがある方のベッドに促し、濡れたシートと薬瓶を桶に入れ風呂場へ向かう。

シートを風呂桶に入れ軽く洗ったあと、生活魔法の《乾燥》で乾かす。

部屋に戻ると限界だったのかジークはベッドで眠っていた。

腰布らしきボロ布が側の椅子にかけてある。これは自分で洗濯してもらおう。ばっちりし。

（あ、ベッドに虫とかいるかも）

虫除けポーションを錬成して、薬瓶の蓋を開けた状態で部屋の隅

に置いておく。

安眠効果のあるベンダンの花も混ぜておいたから、カビの臭いが消えてほんのりいい香りがする。

きつとぐっすり眠れるだろう。

水差しに浄水を入れて備え付けのコップと一緒に机の上に置き、部屋の照明は一つだけ残して消してから、マリエラは静かに部屋を出た。

廊下に出ると、マルロー副隊長が廊下の自室の前で待っていた。

マリエラの部屋は2階の奥。黒鉄輸送隊の部屋の奥にある。

マルロー副隊長は穏やかに話しかける。

「欲しい情報は得られましたか？」

「聞いてたんですか？」

マリエラが質問に質問で返すと、マルロー副隊長は「まさか」と肩を竦めてみせた。本当に喰えない人だ。

きつと最初から気付いていたに違いない。

促されるまま、隣のマルロー副隊長の部屋に入る。

部屋の広さと入り口付近に設置された風呂場やクローゼット等は、マリエラの部屋と変わらなかったが、ベッドは一つしかなく、代わりに長椅子とテーブルが置いてある。ベッドと応接セットの間は間仕切りが置かれており、簡単な会合ができるようになっていた。

勧められるまま長椅子に座ると、マルロー副隊長が対面に座った。

「マリエラさんとは、是非ともお取引をお願いしたいと思っているのです。」

「ポーションですね？」

話が早くて助かります。とマルロー副隊長はにこやかに答えた。

- 2000年前、スタンピードが起こり、かつて王城だった場所に迷宮が現れた。

人の領域だったエンダルジア王国は亡び、魔物の領域となった。迷宮都市に人は暮らしているが、それは魔の森にマリエラが暮らしていたのと同じことで、迷宮都市は人ではなく、魔物の領域だ。

ポーションを魔法薬たらしめる『命の雫』を地脈から汲みあげる『ライン』は、その地の精霊を介して結ばれる。

契約の儀式は、錬金術師とその地の精霊が真名を交わして執り行われるが、精霊は領域を支配するものの言葉を話すのだ。

かつてのエンダルジア王国は、精霊の加護を受けたエンダルジア王族が代々治める人の領域だった。エンダルジア王国に現れる精霊達は皆、人の言葉を話していたが、魔の森に住まう精霊は同じ地脈から生まれているのに、魔物の言葉を話していた。

つまり、言葉が通じないのだ。

マリエラがたった一度エンダルジア王国の外壁内に入ったのは、精霊と契約を結ぶためだった。

一度『ライン』ができてしまえば、錬金術自体に精霊は関与しないから、魔物の領域であっても地脈の範囲内ならば、どこでも問題

なく『命の雫』は汲みあげられる。錬金術師になってしまえば、問題なく『命の雫』を汲み上げ、錬金術を行使できる。

しかし、2000年もの間、新たな錬金術師が誕生しなかったら。

『命の雫』を直接体内に取り込める錬金術師は、老化が遅く総じて長命だったが、2000年も生きられる訳ではない。一般の人が80年も生きれば長寿だといわれる中で、120歳まで生きるものが稀にいた、と語られる程度だ。

マリエラが眠っていた2000年の間、新たな錬金術師は誕生せず、スタンピードを生き残った錬金術師達は皆亡くなってしまったのだろう。

迷宮都市、いやこの地脈の範囲には、保管庫に厳重に収められたもの以外、ポーションが無いのだ。

「お売り頂いた低級ポーションを伝手の商人に鑑定して頂いたところ、まるで作りたてのような保存状態だと言っていました。市場に稀に出回る中級ポーション並みの効果だね。」

どこで手に入れたのかと、それはしつこく聞かれましたよ。

ああ、もちろん、話してはいませんが。この街の誰もが欲しいものですからね。

こんな可憐なお嬢さんがお持ちだと知れば、無理にでも手に入れようとするものが現れるでしょうから。」

マルロー副隊長は、ゆっくりと、穏やかに話しかける。言いたい

事がわかりますか？と問いかけるように。

「あなた方ならば、安全に売りさばけると？」

そう答えると、マルロー副隊長は満足げに微笑んで、「もちろんです。」と答えた。

（まあ、どこかでポジションを売らなきゃいけないわけだし。中抜きされたとしても、防衛都市よりはマシな値段になるだろうし。）

マリエラにはポジションを売る以外に生活する術がない。

戦う術も、後ろ盾も、何ももっていない者が搾取されることは当然だ。防衛都市でポジションを売っていた時だって、中抜きされることは当たり前だった。ある程度の不条理を飲み込めば、最低限の利益は与えられることをマリエラは知っていた。

それでも、どうしても譲れないことはある。ポジションを売るに当たって、マリエラはいくつか条件をつけた。

「まず、特級以上のポジションや、対人用の毒薬はお売りできません。また、上級以下でも所謂特化型のポジションはお売りできないものがあります。ですので、品目の決定権は私に頂きたい。」

マリエラが作れないポジションは売りようが無いし、犯罪の片棒を担ぐのはごめんだ。自分の作ったポジションで人が死ぬことだけは絶対に避けたい。

「次に、これもポジションによりますが、対価の一部を先に品物でいただく場合があります。」

材料がなくても作れないから、これも飲んでもらうしか無い。マリエラの薬草園は半壊状態なのだ。迷宮都市の品揃えは分からないが、手に入らない材料は入手してもらいたい。

「後は、秘密の厳守です。私が供給源である事は決して漏らさず、悟られないようにして下さい。

これには、有事の際に保護して頂くことも含まれます。

以上について、魔法で契約して頂けるならば、ポーションをお売りします。」

(魔法で契約までは盛りすぎたかな。)

条件を言ってからマリエラは、内心冷や汗をかく。どれも譲れないものだけれど、もっと言い方があったかもしれない。

マルロー副隊長は、マリエラの条件を一つ一つ咀嚼するように繰り返すと、

「特級ポーションがお売り頂けないのは残念ですが、条件に関しましては理解しました。

して、代金の方ですが、相場の2……いや、3割……

(う……条件盛りすぎたからキツイのは仕方ないけど、材料の薬草を買わなきゃいけない場合、3割で利益出るかな？
薬草値上がってないと良いんだけど……)

を、手数料として我々が頂くというのは？」

「はい？」

あれ、なんか逆じゃね？と、マリエラは聞き返す。

「売るポーションの種類、私が決めて良いんですよね？」

「はい。在庫の都合もあるでしょうし、当然でしょう」

「先に品物貰ってもいいんですよ？」

「我々は仕入れも行う輸送隊ですし、信用頂いて取引頂くのですから、その程度のサービスはさせていただきますよ。」

「秘密が漏れたら、助けてくれる？」

「元よりリスクのあるお取引を持ちかけているのです。アフターケアは必須でしょう。」

「で、手数料3割って、安すぎませんか？」

「え？」

「え？」

2人して首をかしげた。

影法師

結局、マリエラが相場の6割貰うことで話がついた。

1割分は秘密保持の徹底と万一情報が漏れた際のフォローに上乘せした。

6割も貰えるなんてかなり良心的な契約だとマリエラはホクホクだ。

因みに納品は3日後で、上級と中級ポーションを10本ずつ、解毒ポーションは上級、中級を5本ずつ、魔物避けと低級ポーション、低級解毒ポーションは各20本買い取ってくれることになった。

契約書は明日用意します、とマルロー副隊長はにこにこしている。

(なんか、噛み合っていない気がするんだけど……、ま、いつか)

この人の含みのない笑顔は初めて見るかもしれない。

魔の森を抜けてきて疲れているんだから、契約書は遅くなってもいいのでゆっくり休んで欲しい。

先に貰う品物については、街の商店を見てからと答えておいた。

ちなみに、低級ポーションと魔物避けのポーションは、先ほど売った大銀貨1枚程度が相場らしい。ドイツ隊長に「銀5から交渉で大銀1が相場」だと言ったら、銀5の後いきなり相場の大銀1に上げるものだから、と苦笑していた。

奴隷商のレイモンドさんとの交渉のときも思ったけれど、ドイツ隊長は交渉ごとに向いていないと思う。そう言つと、

「何事も経験ですからね。それに、大切な交渉はこうして私がしていますし。」

と返された。どちらが隊長かわからないな、とマリエラは思った。

良い話ができたとはいえ、思わぬ時間を食ってしまった。日が暮れる前に日用品やジークの服を買いに行きたい。

食堂兼酒場に降りると黒鉄輸送隊のメンバーが食事をしていた。

まだ日が高いのにお酒も飲んでる。

ディック隊長は、両側に胸の大きなお姉さんを2人もはべらせてご機嫌だ。他の隊員にも1人ずつ横に座って酌をしている。

お姉さん達は皆、露出の多い結構セクシーな格好で、目のやり場に困る。

「マリエラちゃん、遅かったね。今食事を持ってくるわね」

アンバーさんだ。接客用に替えてきたのか、赤い髪に赤いドレスがよく似合う。

というか、おっぱい溢れ落ちそうだ。

(肩紐が限界に挑んでませんか？肩紐、頑張れ！)

「おう、アンバー、早くこっちへこいよ。なあ。」

ディック隊長は駄目な大人の代表みたいになっている。

この宿屋はどうやら人間の三大欲求全てを満たせる所らしい。
え？三大欲求って何って？

そりゃ、食欲、睡眠欲、海水浴ダヨー！

(マルロー副隊長が商談してる間に、この人ときたら……)

アンバーさんにうまくあしらわれているディック隊長をみて、マルロー副隊長にちよっぴり同情した。

先に買い物をすると言って宿を出ようとする、

「案内してやるよ！」

とリンクスがついてきてくれた。風呂に入ったのかサツパリとして、軽装に着替えている。

自分とジークの服が欲しいというと、裏道を抜けて北西区画近くの通りに連れて行ってくれた。

「北東区画の大通りは迷宮で稼げる冒険者向けだから、ちよっと高いんだ。

日用品とか普段着なんかはこの通りが手頃で質もいいぜ」

『ヤグーの跳ね橋亭』も上の下くらいの宿で、宿代や夕食代などは国の補助金で手頃だが、お酒やおつまみは高いらしい。お酌をしてくれるお姉さんの飲食費も加算されるシステムで、仲良くなればさらに『サービス』してくれるとか。もちろん有料だが。

迷宮都市は人口も少なく、訪れる冒険者の数も少ない。人口を増やすための政策として、生活に必要な最低限の物は物価を抑えるよう、また冒険者を誘致するような政策が取られているらしい。店側も懐が暖かいお客になるべく多くのお金を落としてももらえるよう、色々とおプションを考えているそうだ。

「ディック隊長がアンバー姉さんに入れ込んでさ」

身請けしようと思張っているらしい。アンバーさんにうまくあしらわれていたけれど、可能性はあるんだろうか。

案内してくれた店に売っていた服は、シンプルなデザインばかりで種類も少なく選びがいがなかった。

針子の数も足りていないのだろう。皆、個人で手を入れて着ているらしい。店の奥には種類は少ないが、布地や刺繍糸、針や鋏と言った裁縫道具も置いてある。刺繍でも入れればかわいらしくなるだろう。今日はあまり時間がないから、今度ゆっくり見に来ようと思った。

とりあえず、今日の着替えが必要だ。下着とインナーシャツを3着と、チュニックにズボンを選ぶ。

ジークの分はサイズが分からなかったので、リンクスに見立ててもらい、大き目のシャツとズボンに下着を3着。ボサボサの髪を切るための鋏を購入した。

デザインの割に値段は高めで銀貨12枚もした。

次は雑貨屋。

手拭いを1束、石鹸2個に歯ブラシ2本、ブラシと、これらを入れる背負い袋だけで大体銀貨2枚。

生活に必要なものばかりだから、都市が孤立した状態なのに、防衛都市と変わらない物価だと思った。

まだ所持金に余裕はあるけれど、必要なものはたくさんある。住むところだって確保したい。

明日は、注文されたポーションに必要な薬草を買わないといけない。生活雑貨の物価は変わりなかったが、薬草の相場はどうなっているだろう。

(頑張つて稼ごう。ジークにお腹いっぱいご飯を食べさせてあげたいし。)

成り行きで手に入れた奴隷だったが、マリエラは思いのほかジークのことを気に入っているらしい。たくさん食べてゆっくり眠ってはやく元気になって欲しいと思う。借金奴隷の時に主人の息子に怪我をさせて犯罪奴隷落ちしたと、レイモンドは言っていたけれど、手を顔に近づけただけで怯えるほど、日常的に暴力を受けていたのだ。極悪人とは思えない。何よりも。

(あの、ひとつしかない蒼い瞳はきれいだわ。)

店をでると、外はもう、夕暮れ時が迫っていた。

街は随分と様変わりしていたけれど、夕陽に染まった山並みは200年前と変わらない。

スタンピードだって生き延びたのだ。静かに暮らしていくくらい、きつと出来るはずだ。

「腹減った」

夕餉の支度だろう、漂ってくる美味しそうな匂いに、リンクスがお腹をさすっている。

「さっきまで、食べてたじゃない」

「肉は別腹って言うだろー。成長期なめんなー。」

「なにそれ、あはは」

夕陽に影が長くなる。

「ははっ、脚なっげー。俺、ディック隊長みたく、でかくなるんだ。」

リンクスの影が足を広げて大またで歩く。

「私も、まだ背伸びるかな？」

「マリエラは、背より胸のほう心配じゃね？」

「なにそれ、酷い。あとでアンバーさんに方法教えてもらうもん。」

2人の影法師が仲良く並びながら帰路を急いだ。

『ヤグーの跳ね橋亭』に戻ると、ディック隊長が酔いつぶれていた。

テーブルの上に置かれたクッションを抱えるように突っ伏して、寝言を言っている。「アンバーあ」などと呟きながら、クッションを掴む手を、モニュモニュと動かしている。手付きがなんだかいやらしい。

やっぱり、駄目な大人だ。

黒鉄輸送隊の面々は慣れているのか、ディック隊長をほったらかして、めいめいお姉さん達と会話や食事を楽しんでいる。

他にも冒険者らしき団体や、数人の騎士が食事を始めていて、アンバーさんは忙しそうに接客してまわっている。アンバーさんは売れっ子らしい。

マリエラとリンクスがカウンターに座ると、もと冒険者といった風体の店主らしき男が注文を聞いてきた。今日のおすすめメニューはオーク肉のカツレツか、ヤグーの乳のシチューだそうだ。

「俺、両方。マリエラは？」

成長期の胃袋には、空間魔法でもかかっているのか。どちらを選ぼうか悩まなくて済むのは、羨ましくもある。

ヤグーの乳のシチューと、ジークに何か消化に良いものを持って上がりたいと頼む。

料理が出てくるまでの間に、リンクスが黒鉄輸送隊のメンバーを紹介してくれた。

黒鉄輸送隊は、ディック隊長とマルロー副隊長が始めた輸送隊で、斥候担当のリンクスと調教師のユーリケ、装甲馬車のメンテナンスが得意なドニーノ、回復魔法が使えるフランツ、双剣使いのエドガンに、タンクのグランドルの8人と、8頭のラプトルで構成されている。

ドニーノ、フランツ、エドガン、グランドルと自己紹介をかわす。4人とも30代前後の個性的な男達だ。

マリエラの知る冒険者には、荒くれ者よろしく、食事を食い散らかしては、大声で話し、女性店員をいやらしく撫で回した拳句、店から蹴り出される様な者もいたが、彼らにそんな下品さはなく、節度のある楽しみ方ができる、大人な人達だった。

「アンバーあ……」

ひとり駄目な大人がいた。出会ってすぐの威厳ある姿はどこへいった。そういえば、こういう時に頼りになりそうなマルロー副隊長が見当たらない。あとユーリケも。

「ユーリケは魔の森でほとんど寝てねえから、もう寝てるよ。副隊長は、家に帰った。」

なんと、マルロー副隊長は妻子持ちで迷宮都市に家があるらしい。

そうこうしている間に、料理が運ばれてきた。

ヤグーの乳のシチューには、鶏肉と野菜がたっぷり入っていて、とても美味しかった。鶏肉も野菜もよく煮込まれていて、口の中でホクホクととろける。ヤグーの乳は少し獣くさいのだが、複数のハーブを上手にブレンドしていて獣くさがなく、具材の旨みが凝縮されて、深みのあるスープになっている。

付け合せのパンは、もっちりとした白パンで、サラダにはとろりと濃厚なドレッシングと、芋の細切りを油でカリッと揚げたものにかけてある。

「美味しい……」

目が覚めてから、いろんなことがあって気が付かなかったけれど、すごく空腹だったようだ。

あつという間に、食べ終わってしまった。

「なあ、明日どうすんの？」

随分とがつついて食べたのに、リンクスの方が先に食べ終わっていた。2人前あったのに。

薬草を買いに行きたいと言うと、休みだから案内すると言ってくれた。

魔の森を走り続けて、リンクス達も疲れているだろう。マリエラも、200年ぶりのベッドだ。明日くらい寝過ごしたっていいだろう。昏前に出かける約束をした。

タイミングを見計らったかのように、店主がトレイを持って来てくれた。ヤグーの乳のリゾットだそうだ。チーズがとろりと溶けている。シチューがあんなに美味しかったのだ。リゾットも美味しいに違いない。

「うわ、うまそう……」

「リンクス、お前さっきあんだけ食ったろう……」

店主にまで呆れられていた。

店の女達もクスクスと笑っている。マリエラも一緒になって笑った。リンクスのおかげで、今日はたくさん笑った。明日もきっと楽しいだろう。

「じゃあ、また明日な！」

照れくさそうに頭をかいて、リンクスは黒鉄輸送隊のテーブルに向かって行った。

視線がお姉さんの胸元でも、お酒のグラスでもなく、ツマミに向いているのは、気のせいではないだろう。

「おやすみなさい」

挨拶をすると、皆がおやすみと返してくれた。
なんだか暖かい気持ちになる。

ほかほかと湯気をあげるトレーを持って、マリエラは部屋に向かった。

温かい食事

買ったばかりの背負い袋と、リゾットのトレイを持って、部屋に入る。

ドアを開ける音で起こしてしまったのか、ジークがベッドから起き上がるうとしていた。

一つしかない深い蒼い瞳が忙しなくさまよっている。少し混乱しているのかもしれない。

「ジークムント」

名前を呼ぶと、蒼い瞳がマリエラを捉え……湯気をあげるリゾットに釘づけになった。

（おまえもか……）

腹ペコさんがここにもいた。

「起きれる？」

トレイを机の上に置くと、ジークは誘われるようにベッドから起き出して、腰布を巻いていない事に気づく。

二人の視線が一点に集まる。

（バッチリ見ちゃった。）

「と、とりあえずシーツ巻いたら？」

娼館にポーシオンを卸していたとはいえ、マリエラ自身は未経験者だ。

子供の頃に錬金術の師匠に引き取られて以来、魔の森の小屋で修行ばかりしていたし、独立してからは、食べていくのに必死で遊ぶ余裕などなかった。何とか暮らしが成り立つようになってからも、ポーシオンを売りに行くとき以外は森で一人で暮らしていた。治療のときならいざ知らず、脚丸出しの腰布ルックは目のやり場に困る。とりあえず布面積の多いシーツを巻いてもらいたい。

ジークもばつが悪そうにささっとシーツを腰にまく。

「椅子に座ってね。」

椅子に座るのを躊躇するのは、ずっと床に座らされていたからだろうか。

椅子に座っても、ゴクリ、と生唾を飲み込みながらリゾットを見つめるだけで、なかなか手をつけようとしない。

「食べていいよ。熱いから気をつけてね。」

それを聞いてジークは、ようやく匙に手を伸ばす。右手は指先に力がいらないらしく、柄を握るように左手で持ちなおし、リゾットをすくう。匙に顔を近づけるようにして、一口。

ジークの蒼い目が見開かれる。一口、もう一口。

よほど空腹だったのだろう。うまく動かない右腕で皿を抱え込むようにし、左手で握った匙に食いつくように、ガツガツと食べ始めた。

「はい、お水。」

リゾットは良く煮込まれて具材は柔らかくなっているけれど、すごい勢いで食べている。喉を詰まらせてはいけないと、コップに水を注いで、机に置こうとして気が付いた。

(ジーク、泣いてる。)

ジークムントは、ぼろぼろと涙を流しながらリゾットを食べていた。

(舌を嚙んだとか、口をやけどしたとかじゃ、ないよね。やっぱ。)

一粒も残さずそれこそ舐めるようにきれいにリゾットを完食し、水を飲みながら、声を殺すようにして涙を流している。

「えっと、これで拭いて、ね?」

とりあえず買ってきた手ぬぐいを一枚取り出し、左手に握らず。ジークは手渡された新しい手ぬぐいを見ると、

「ヴウ……」

さらに泣き出してしまった。

(うわぁ、どうしよう……)

「大丈夫、大丈夫だよ。」

そっと、ジークが怯えないようにゆっくりと手を近づけて頭をな

でる。

「怖かったね、痛かったんだよね。でも、もう大丈夫。腫れも引いてるし、明日には熱も下がってるよ。」

小さい子供をあやすようにジークの頭を抱き寄せて、よしよしとなでる。

黒狼に手足を噛まれてからずっと痛かったんだろう。いや、その前からずっと酷い目にあっていたのかもしれない。狭くて暗い馬車に押し込められて、魔の森を抜ける間、ずっとずっと怖かったろう。迷宮都市についてからも、すぐに死ぬような目にあうんじゃないかと不安だったに違いない。

温かい食事を食べて安心したんだろう、とマリエラは思った。

マリエラがジークに与えた治療や食事は、マリエラの想像よりはるかに強くジークの心を揺さぶっていた。

ずっと人間扱いされてこなかったのだ。家畜より酷い扱いを受けていて、それが当然だとさえ思っていた。手足の傷だけでなく、炎症を起こした身体も頭も痛くて痛くて、頭も身体もまともに動かない。こんなに痛くて辛くて、体力はどんどん奪われて、長くはないと自分でもわかっていているのに、死ぬのは嫌だと思ってしまう。近づいてくる死が怖くて怖くて仕方がない。

そんな痛みを、苦しみを、マリエラはあつという間に取り去つたのだ。汚れた傷口をすすぎ、薬と暖かい寝床を与えた。熱に浮かされて夢を見たのかと、ジークは思った。夢ではないと分かったのは、温かい食事を口にしたときだ。

温かい食事などいつ振りだろう。

椅子に座って、食事を取るなど。スプーンの使い方さえ忘れていたのに。

リゾットは温かった。肉や野菜、穀物、ヤグーの乳。こんなにいろいろなものが入った料理を最後に食べたのはいつだったか。

椅子に座って料理を食べる、そんな当たり前で人間らしい時が自分にもあったのだと、ジークはリゾットを食べるうちに思い出していた。

なぜ、なぜ、なぜ…。

恨み続け、いつしか考えることもなくなっていた、自らの境遇を思い出す。

ここまで落ちた人生だ。自分に非がなかったとは思わない。けれど、理不尽に奪われ貶められたことも事実だった。

そして、今、マリエラと名乗ったこの少女は、失ったぬくもりを、尊厳を、無条件で与えてくれた。

たった大銀貨2枚の、汚れて異臭を放つ惨めな男を当たり前のように手ずから癒し、当たり前のように温かな食事を与えた。

みつともなく泣き出した自分に、真新しい手ぬぐいを差し出す。

まるで、人間にするように。

それがジークにとってどれほど得がたいことか、この少女^{マリエラ}には分からないだろう。

今だって、戸惑ったようにジークを抱き寄せてあやしている。

全てを失った自分^{ジーク}に、全てを与えた少女^{マリエラ}を、ジークムントは一生守ろうと誓った。

「まだ、ちょっと熱があるから、今日はもう寝ようね。」

ようやく泣き止んだジークの顔を別の手ぬぐいで拭いてやり、ベッドに寝かしつける。

ジークの左手は、渡した手ぬぐいを握ったままだ。

(そっぴゃ、孤児院にも決まった手ぬぐいを離さない子がいたな！
ジークもそっぴゃいう系？)

机をジークのベッド脇に押しやり、夜中に飲めるように水差しに水を足しておく。

「私はおふるはいるから、ちょっとつるさいかもだけど、ちゃんと寝るんだよー。」

ジークをベッドに寝かしつけると、マリエラは背負い袋を持って浴室へ向かった。

(200年ぶりの！お風呂だー！！！)

ジークが寝ているので声は出さないが、マリエラのテンションはマックスだ。

(まだ魔力に余裕がありそうだし、今日は贅沢に！)

《ウォーター》 《命の雫・固定化》 《加熱》

生活魔法で風呂桶にためた水にたっぷり命の雫を加えて沸かす。命の雫を汲み上げるにはそれなりに魔力を消費するので、普段はこんな贅沢な使い方はできないが、なんだか今日は魔力があまり減

っていない。命の雫風呂は疲労も回復するし、お肌もぷりぷりになるのだ。

外套を脱ぐと、中に着ていた服はぼろぼろになっていた。特に縫い目が酷く、半分以上ほつれている。デジスの繊維で織った自動修復機能のある外套と違って、中は普通の綿だから仕方がない。移動の途中で脱げなかっただけ運が良かったと思おう。

服を脱ぎ捨てて湯を浴びる。仮死の魔法で眠っていたから、汗や垢が溜まっているわけではないが、埃がすごい。何度も湯ですすいだ後、石けんでしっかりと洗う。特に髪は念入りに。石けんだけだと洗った後、髪がキシキシになるのだが、今日は命の雫の効果で髪までツヤサラだ。

隅々まできれいに洗った後は、もう一度お湯を張りなおしてゆっくりつかる。

（は、生き返る。いや、今日生き返ったばかりだけど。）

本当に、長い一日だった。
色んな人にも出会った。

（そういえば、リンクスが失礼なこと言ってたな。）

お湯に浮かびようがない、すつきりとした胸元を見る。折角の命の雫風呂だ。乳神様アンバーさんにお祈りしよう。マッサージするのいいとか、娯館のお姉さんたちが昔言ってたし。ご利益がありますように。むにむに。

明日は、ジークの髪を切って、薬草を買いに行つて、街のお店を見て回ろう。ジークの着替えと靴も買いたい。

風呂から上がって、買ったばかりのシャツに着替える。
余裕があればパジャマもほしいな。

髪を乾かしてブラシで梳る。歯を磨いたら、寝るだけだ。

「ジーク、おやすみ」

自分のベッドにもぐりこんで挨拶をする。ジークはもう眠っているのか返事はない。

挨拶をする人がいるのは、いいものだな。

そんなことを思いながら、マリエラは眠りに就いた。

散髪

キィ、パタン。

ドアを閉める音で、マリエラは目を覚ました。音のしたほうを見ると、見慣れない男が半裸で水差しを持っている。

半裸というか、腰布しか身につけていないから、面積的にはほとんど全部見えている。

(これがうわさで聞く不審者というヤツ?)

いや違う、ジークだ。ジークムント。

「おはようございます、マリエラ様」

おお、挨拶してくれた。昨日はほとんどしゃべらなかったのに、泣いて落ち着いたんだらうか。

「おはよう、ジーク。マリエラでいいよ。」

そういうわけにはいきせん、と言いながら、手にもった水差しからコップに水を注いで、

「水を、汲んできました。よろしければ。」
と、おずおずと差し出してきた。

折角なので頂く。ごく僅かだけ命の雫が混じっている。

「井戸水？ジークは生活魔法が使えないの？」

「少しは使えますが、井戸水のほうが、身体に良いと、聞きましたので。」

地下水には地脈の力である命の雫が溶け込んでいる。ごくごく僅かなので、効果が実感できるほどではないが、常飲すれば「井戸水を飲んだほうが丈夫な子に育つ」等といわれる程度には効果がある。わざわざ汲んできてくれたのか。その格好で。

「ありがとう」

お礼を言っただけで飲み干す。ジークはドアの近くに立って控えている。ずいぶん丁寧な口調でしゃべるけれど、その格好はただだけない。

ジークに部屋の外に出てもらい、急いで昨日買ったチュニツクとズボンを着る。シンプルだけれど、動きやすくて着心地がいい。

ジークを部屋に入れて怪我の状態を診る。熱はすっかり下がっていて、右手はちゃんと動くようだ。まだ右手の握力は半分くらいしか戻っておらず、腕も引きつったような感覚があるが、すぐに元に戻ります、とジークが手をグーパーしながら言っている。

胸の焼印の痕も、跡形もなく、とはいかないけれど薄く印が残る程度に落ち着いている。

重症だった脚の腫れも治まっている。変色したやけどのあともピンク色になっていて薄皮が張った状態になっている。齧り取られた肉は戻っていないから、普通には歩けないが、とりあえずは一安心だ。

「足も、すぐに、走れるくらいに、治します」

ジークは昨日と違って変わってやる気満々だ。

(ジークってば峠を越えて、躁状態？まー、手足の傷は上級ポーション作って治すけどね。その前に！)

背負い袋を持ってジークと裏庭に行く。背負い袋はジークが持つてくれた。気がきくね。

獣舎から踏み台を借りてきて、ジークを座らせて宣言する。

「今から、髪の毛を切ります。髪の毛が目にはいるかもしれないので、目を閉じていてください。」

「はい……お願いします。」

昨日のジークは手を顔に近づけるだけで怯えていたから、鋏を怖がるかと心配していたけれど、ジークはキュツと目を閉じておとなしくしてくれた。

そつとジークの髪に触れる。

(どうなってるんだ……)

固まっている。土とか埃とかが絡んでるんだろうけれど、髪の毛とは思えないくらい重たいし、ブラシが入らない。野生のヤグーの毛とか、こんな感じでダメになっているが、そんな感じだ。仕方がないので、塊をジャキンと切り落とす。

あちこちの毛玉を切り落とす。ブラシが入るようになってから整えよう、とジャキンジャキンと景気よく切っていたら、

(やばい……切りすぎた……)

3センチくらいしか髪の毛が残ってなかった。

マリエラは作れないが、髪の毛が生えるポーション、というものがあると聞いたことがある。

なんでも特化型の特級ポーションで、髪の毛の薄い貴族の間で秘密裏に取引されているらしいが……

(まあ、じきに伸びてくるでしょ！)

切り残した前髪部分だけは長めにおいておき、後は短めに切りそろえておく。

前髪だけ残ってれば、それっぽく見えるんじゃない？という姑息な考えだったが、意外と格好良い髪形になった。

あとは髭だが……

(ヒゲの切り方とかわからん！あと剃刀とかナイフもってない！)

鍬を渡して自分で切ってもらったらいいだろうか、と考えていると、

「なになに、髪切ってるの？へーうまいじゃん、俺も切つてよ。」

とリンクスが起きてきた。ナイスタイミングだ。

「いいよー。その前にさ、ヒゲってどうしたら良いの？」

「あ？んなもん、自分で剃らせりゃいいじゃん。ってナイフねーのか。ほれ、俺の貸してやんよ。」

さすがリンクス。気がきく。

「ジーク、終わったよ。リンクスがナイフ貸してくれるから、ヒゲそってきて。後、ここに石けんと歯ブラシと着替えと手ぬぐい入ってるから、お風呂入ってくるといいよ。」

そう言っつて、ジークに背負い袋を渡すと、「かーちゃんかよ」とリンクスに笑われた。

「お客さん、どんな髪型にしますかー？」

マリエラがリンクスに聞くと、

「なんか、かつこよく？」

とよくわからない返事をされた。

「えー？むり？」

「ひでえ」

そんなやり取りをしながら、リンクスの髪を切る。リンクスは伸びた分だけ揃えてほしいらしく、全体的に3センチほど切って出来上がり。

「はいー。男前いっちょあがりー」

「やいー。」

《ウィンド》

リンクスが風魔法で切った髪の毛を吹き飛ばす。攻撃魔法のはずなのに、威力を調節して、土も巻き上げずに服についていた髪の毛だけを飛ばしている。実に器用だ。

「リンクス、風魔法使えるんだ。」

「おー。黒鉄輸送隊はみんな結構魔法使えるぜ。昨日は魔力殆ど残ってなかったから、使わなかったけどな」

攻撃魔法を生活魔法レベルに弱めるのは難しいと聞く。若いリンクスが使いこなすのだから、黒鉄輸送隊は優秀な人間の集まりなのだろう。それなのに、魔力切れ寸前になるとは、やはり、魔の森を抜けるのは大変なようだ。

話をしながら待っていると、ジークが帰ってきた。

「え……、ジーク？」

ヒゲを剃って全身をきれいに洗い、新しいシャツとズボンに着替えたジークは、20代後半に見えた。

灰色に見えた髪は銀髪で、深い蒼い瞳とよくあっている。

全体的にやせこけているけれど、すつと通った鼻筋といい、ぷくりとした唇といい、かなりの美形だ。髪を切ってあらわになった、右目の傷が痛々しいが、かえって左半分の美しさを引き立てている。切りすぎた髪を隠すために残したチヨロリと長い前髪が、変に色っぽい。

(おっさんだと思ってた……)

ジークが丁寧にお礼を言って、リンクスにナイフを返す。なぜかリンクスは面白くなさそうな顔をしていた。

(半裸のおっさんが、裸足の男前に進化したわけですが。)
マリエラ的には、どうでもよかった。

「朝ごはん、食べよっか。」

三人で朝食に向かった。

食堂には10歳くらいの娘さんが働いていた。初めて見る顔だ。

「エミリー、朝飯ー」

「あー、リンクスだー。おそようございますー」

エミリーちゃんというらしい。店主の一人娘で、朝食は彼女の担当らしい。

「つつーても、マスターが作った料理を温めるだけなんだけどなー」

「リンクスしつれー。焦がさないように温めるのも大変なんだからー!はい、お待ちどうぞー!」

エミリーちゃんが3人分の朝食が乗ったワゴンを押してもってくる。

朝食は手のひら2個分くらいある大きなパンとスープ、大きなソーセージにスクランブルエッグとサラダだった。

朝から結構なボリュームだ。

「かー、うまそうー!」

リンクスは皿を出されるなり、がつがつと食べ始める。

隣に座った（座らせた）ジークもマリエラが「どうぞ」と皿を渡すなり、昨日ほどではないが、掻きこんでいる。

マリエラはパンを三等分にすると、1切れずつリンクスとジークの皿に入れた。

「ふぁりがとう」「ございます」

「飲み込んでからしゃべって。」

結局ソーセージも1/3ずつ二人にわけて、仲良く遅めの朝食が終わった。

「マリエラ、薬草買いに行くんだろ？今からいかね？」

黒鉄輸送隊の皆はまだ寝ているから、先に買い物に行くことになった。先にジークの靴を買いたい。

「うーん、靴かー。どこがあったっけ？」

「あー、この前、エルバの靴屋で買って貰った！」

エミリーちゃんのおすすめは、エルバ靴店というらしい。買ってもらったという靴でくると回ってくれた。かわいらしい。まずはエルバ靴店に向かった。

エルバ靴店は、一般市民から中級冒険者をターゲットにした比較的安価な既成靴を売る店で、店内には所狭しと、様々な靴が積んであった。

「いらつしゃい。どんな靴をお探しで？」

「彼の靴です。オーク革のブーツがいいんですが。」

オーク肉は食肉として一般的で、革の流通量も多い。柔らかくて加工しやすいため、見習いの職人の製品も多く、掘り出し物も多い。ただし、戦闘に耐えうる強度はなく、また、『オーク』のイメージの悪さから、平民の日常履きがせいぜいで良い革という認識はされていない。

靴は革細工のスキルで作られるとはいえ、一つ一つ手作りで安いものではないから、すぐに足が大きくなる子供靴にはオーク革が多用されるが、金銭に余裕がある大人はもう少し良い革の製品を選ぶことが多い。

店員、恐らく彼がエルバだろう。は、裸足のジークと、マリエラのボロボロの靴をちらりと見ると、何も言わずに店の奥から何足かブーツを持ってきた。

「オーク革だと、この辺だな。」

「靴底の素材は？」

「この二つはオーク皮、こっちは木で、あの3足はクリーパー。クリーパーっても、子株だからすぐにヘタっちまうけどな。」

クリーパーは、湿地帯に棲息する蔓植物の魔物で、棘の毒で獲物

を麻痺させたあと、巻きついて血を吸う。獲物を素早く捕獲する蔓は、長さが数メートルもあり、太さは大人の腕まわり程もある。鋭利な刃物で蔓を切ると、中からドロリとした高粘度の液体が溢れ出す。これを原料に作られるのが、クリーパーゴムで、高級タイヤや鎧の内張り、靴底などに幅広く利用されている。

クリーパーは足場の悪い湿地帯に棲息する上、蔓の動きは素早いし、毒まで持っている為、討伐は難しく、クリーパーゴムは高級素材である。

クリーパーの安価な代替品として出回っているのが、クリーパーの子株で、森の日当たりの悪い場所には、だいたい生えている。子株にも弱い毒があるが毒針がなく、蔓の動きも極めて緩慢。うっかり蔓を齧った小動物が痺れている間に巻き付いて、わずかばかりの血を吸う。

蔓は親指位の太さがあるが、ぶよぶよと柔らかく、ウサギなどでも引きちぎれるほど脆い。こちらは手袋さえしていれば子供でも採取できるから、安価で流通量も多いのだが、性能は全て親株より大幅に劣り、使い捨ての品に使われやすい。

「あれ、このクリーパーゴム、何か混ぜってる？」

「そいつは、俺の試作品でね。スライムを混ぜてるんだ。クリーパーの子株から、もちつとマシなゴムができねーか試したヤツだ。滑りにくいし疲れにくい結構いいデキなんだが、耐久性がどうにもね。よそなら修復ポーションでだましましたまし使えるんだが、迷宮都市じやあオーク革の寿命とどっこいさ。」

エルバが作ったというゴム底の靴は、どれも良い出来で値段も大銀貨1枚と手頃だったので、ジークの足に合うものを選んでもらう。

「まいど。コイツはサービスだ。ちゃんと手入れすりゃ、4〜5年は長持ちするだろうぜ。」

おまけに手入れ用のワックスまで貰った。親切な靴屋だ。今度は自分の靴を買いに来たい。

マリエラが支払いを済ませて外に出ると、ジークは靴を大事そうに抱きかかえていた。

「ジーク？履かないの？」

足を引きずっている今の状態で履くと、靴が傷むからちゃんと歩けるようになってから履くそうだ。

素足で足を引きずって歩くと、足が痛いと思うのだが。

「んー、まあ、気持ちはわかるっつーか？」

リンクスがジークに同意するので、そのまま薬草店へ向かうことにした。

ガーク薬草店

薬草を買いに北東区画の裏路地へ向かう。

迷宮では薬草も取れるため、迷宮都市には薬草を扱う店も多いらしい。規模の大きい商会や専門店まである。

何でも迷宮の中は階層によって環境が異なり、雪山の様だったり、砂漠だったり、南国だったり、世界中の環境が揃っていて、あらゆる薬草が採取出来るらしい。もちろん魔物が出るから、戦えないマリエラには潜れないが、薬草専門の冒険者もいるそうだ。

採取された薬草は、冒険者ギルドか専門店に持ち込まれる。ここで買い取られた薬草は、迷宮都市内で小売されるか、専門店や商会の担当者が乾燥などの保存処理をして、迷宮都市の外に運搬される。

この辺りの流れは他の素材も同じで、様々な素材の殆どが迷宮都市で処理された後、ヤグーに積み山脈を越えて運ばれる。

迷宮都市は、もはや独立した国でなく、エンダルジア王国に隣接していた帝国の辺境伯領となっている。道理で帝国貨が使われているはずだ。

迷宮も魔の森も魔物を間引いて管理しなければ、200年前のようにスタンピードが起こり甚大な被害を及ぼすから、迷宮都市には対魔物の軍が常駐し、冒険者の誘致にも積極的だ。その為の費用は、迷宮から得られる素材や財宝にかかる税で賄われている。税率は他の迷宮と変わらないが、大量輸送可能な安全なルートがない。ヤグーを使う山岳ルートは運送コストが高いから、他の迷宮都市より買取価格が安くなる。

その分迷宮都市内での税率を下げ、冒険者が探索に遣うコストを下げることでバランスをとってはいるが、冒険者や商人にとって魅力があるとは言い難い。

マリエラ達は知らぬことだが、迷宮都市の運営は歴代の辺境伯にとって頭の痛い問題だった。

リンクスに黒鉄輸送隊と取り引きがあるという、薬草専門店に案内してもらおう。薬草店は、薬草を買い取って都市外へ運べるように乾燥などの処理を請け負うほか、薬草のまま、あるいは薬に加工して、住人への小売も行う。

ポジション程の効果はないが、薬草から様々な薬を作る、薬師という職業があり、錬金術のスキルを持つ者が薬師をしながら薬草店を営むことが多い。

リンクスが黒鉄輸送隊と取引のある薬草専門屋に案内してくれた。規模は小さめだが、扱う薬草の種類が多く、質も良いそうだ。

薄暗い店の中では、瓶底みたいな眼鏡をかけた、偏屈そうな老人が薬草の検品をしていた。

「ガーク爺さん、生きてつか！」

「リン坊か。女連れで買出したア、いいご身分じゃねえか。」

「うっせえ。今日のお客はこっちなもの！ちーとは愛想よくしろよな。」

随分と仲がいい。

店内にはキュルリケやキャルゴランといった見馴れた物から、特級ポーシヨンや特化型ポーシヨンの原料になる珍しい物まで、多種多様な薬草が乾燥状態で所狭しと並んでいる。

ただ、残念なことに、処理の仕方が悪い。薬草は、薬効毎に適した処理の仕方があるのだが、どれも少しづつ温度や圧力条件など細かな条件を外している。しかも、乾燥させてから随分時間が経っており、だいぶ薬効が飛んでしまっているものもある。

(これじゃ、効果は半減ね。)

必要な薬草をあげ、未乾燥の物は無いかと聞くと、

「そこにあんだる。薬草の乾燥は素人にできるもんじゃねえんだ。まったく、新人程、変な所にこだわりやがる。」
とぶっきらぼうに言われた。ちよつとカチンと来たので、

「こつちのフィオルカスの花びらは花粉を取らずに乾かしてるし、そつちのルナマギアは乾燥温度が高すぎじゃない。しかも結構前のものでしょ。いらないわよ」
と言い返した。ガーク爺は眼鏡を外してまじまじとマリエラを見ると、

「鑑定持ちか？一目で見抜くタア良い目してやがるぜ。待つてな」と言つて奥から、未乾燥の薬草を持ってきた。どれも採取したてのように状態が良い。

鑑定は、^{アカシックレコード}世界の記憶にアクセスすることで人や物の情報を得るスキルで、10人に1人位は所有者がいる。但し、鑑定と言つても、人限定だったり、植物や魔物、武器などに対象が限定されているこ

とが大半で、かなりレベルが上がりにくい。世界の記憶アカシクレコードなどという、人智の外の情報は並みの努力や才能では利用できないのだろう。

鑑定スキルを持っている者は珍しくないが、鑑定スキル持ちの殆どが、記憶力の良い人止まりという微妙なもので、鑑定持ちの商人は多いがそれだけで食べていけるものではない。

ちなみにマリエラは鑑定スキルを持っていない。薬草の状態が分かっていたのは、錬金術スキルによるものだ。

料理人が舌で料理につかわれた素材や調味料を知ることが出来るように、錬金術師は素材の状態を『錬金術スキルによって』知ることが出来る。レベルがあがれば全く知らないものの情報を得られる鑑定スキルと違って、対象はある程度の知識がある錬金術の素材や練成物に限られるが、錬金術スキルはポーションを作ることによって上がることが出来るし、錬金術の素材は植物に限らず、鉱物や動物・魔物の素材など多岐にわたるため、利便性が高い。

もつとも、迷宮都市では錬金術スキルを持っていても、地脈と契約できない＝ポーションが作れないから、錬金術スキルを上げられない。どれほど素材を知っていても、マリエラのように一目で状態を見抜くことは困難だろう。

「アプリオレの実はアク抜き済のがこんだけだ。ルンドの葉柄は今日はねえ。足りねえ分は明日で良いなら取ってきてやる。」

なんとガーク爺自ら迷宮に潜るらしい。

アプリオレの実は完璧だが、量が少し足りない。

マルロー副隊長の納期を考えると、自分でアク抜きしたほうが良さそうだ、アク抜きに必要なトローナ鉱石も一緒に頼むと、

「新米薬師かと思ってたが、素材の処理からできんのか。薬草を混ぜるしか能のネエ、その辺の薬師とはえれえ違いだ。ほかに入用なものはあるか？全部揃えて来てやるよ。」

と言ってくれた。どうやら、お眼鏡に適ったらしい。

「ニギルの新芽はありますか？葉が開いてないやつ。凍らせたものでも構いません。あと、寄生蛭の毒腺。できれば油漬にしたものが欲しいんですが。」

「あるぜ。コイツでどうだ？」

ニギルは雪の下で芽吹く球根植物で、芽吹いた直後の新芽の空気に触れていない部分が、筋組織を再生する特化型ポーションの原料になる。

魔物にちよつと齧られちゃった冒険者に需要があるので、防衛都市ではニギルを専門で栽培する農家もあつたくらいだ。

ガーク爺が見せてくれたニギルの新芽は、ベストな時期に採取、凍結しており、ニギル栽培農家に劣らぬ品だった。

寄生蛭は動物なら人でも獣でも魔物でもかまわず噛み付いてくる蛭で、大きさは大人の親指くらい。毒腺から麻酔作用のある毒を出すので、背中など見えないところに噛み付かれると、気が付かずにくっつけたまま血を吸われ続けることになることから『寄生蛭』と呼ばれている。この蛭の毒は造血作用もあるため、吸血されても貧血にならない。なんとも気持ちの悪い生き物なので、寄生蛭を何匹も背中にくっつけたゴブリンなど、寄生されているゴブリンより、見つけた冒険者の方が精神的ダメージをうける。

麻痺毒は水に、造血作用のある成分は油に溶けるので、造血成分

の抽出は簡単だが、見た目がグロいので、できれば触りたくない。こちらもきちんと処理をされ、原型がわからない形で油漬にしていた。ガーク爺さんありがとう。

これならジークの脚を治すポーションが作れる。

マルロー副隊長への納品分とジーク用のポーション分を合わせて必要量を注文し、金額を確認する。

「予約分も合わせて22銀貨だな」

防衛都市より2〜4割安かった。

「そりゃ、全部迷宮で採取できつから、輸送賃はいらねえし、この街ン中じゃ税金はただみてえなもんだしな。」

「税金は街から出るときに取られるんだよ。つつても、よそと税率は変わらないって、マルロー副隊長が言ってたっけ。」

ガーク爺の説明をリンクスが補足してくれた。防衛都市の政策のおかげで安く買えたらしい。残金の半分程度でそろえることができた。

「ポ……薬瓶はありますか？」

「薬草以外のモンは、そつちの隅にあるだけだ。」

指し示された店の隅には、薬瓶やら岩塩、水晶の欠片や小さな魔石といった薬草以外の錬金術の材料が乱雑に陳列されており、足元にはガラクタが詰まった木箱が無造作に置いてある。中を見ると錬

金術で使う、というか、他では使いようのない変わった器具や、紙やインク、ペンなどの雑貨、袋や瓶に入った中身が不明で使いさしの素材などが放り込まれている。どれも中古品で埃をかぶっている。

（やっぱりポーション瓶はないのね。）

一口にポーションと言っても、材料も効能もバラバラで、日の光に弱いものや、温いと変質しやすい物、空気に長く触れるとダメになってしまうものなど、ポーションによって管理方法が異なり、そのままでは不安定な物が多い。

ポーションを作る錬金術師からすれば、飲んだり傷に掛けたら直ちに効果が出るのだから変質しやすくても当たり前なのだが、使う方からすれば、いちいちポーション毎に保管方法を変えるなど、面倒過ぎる。

だからポーションは、錬金術スキルで作ったポーション瓶に入られる。ポーション瓶は魔石や命の雫を練り込んだ特殊なガラスで作られていて、ポーションの劣化を緩和してくれる。高価なポーションや、特に劣化しやすいポーションは、瓶に魔法陣を刻んだり、魔法陣の描かれた封紙やラベルを貼るものだ。

ポーション瓶は使い回しがきくから、どこの街でも空き瓶の買取りと販売は行われているのだが。

（ポーションがないのに、瓶が売ってるわけじゃないよね。しゃーない、作るか。）

ポーション瓶の作成は手間のかかる作業で、瓶作成を専門とする錬金術師がいるくらいだ。マリエラの師匠は厳しい人で、瓶の作り

方から仕込まれたから、作ることはできるのだが。

(めんどくさい……)

材料を取りに行くところから始めなければいけない。明日は瓶作りで潰れそうだ。

瓶は無かったが、何か役に立つものはないかと、埃まみれの木箱を漁っていると、「興味があるなら箱ごと持っていけ」と、タダで譲ってくれた。

何でも昔、外から迷宮都市にやって来た錬金術師が、迷宮都市を出る際に無理やり売り付けて行ったものらしい。使えそうな物はすでに買い漁られた後で、捨てるのが面倒だったから丁度いいと言われた。

確かにポーションを作れないなら、要らないものばかり残っている。ラベルのない、得体の知れない粉や粒も、鑑定できない者にとっては捨てるのにも困る代物だろう。しかし、マリエラには必要で、しかも買うと高価なものも入っていて有り難かった。もちろん明らかにゴミも入っていたが。

折角なので、薬瓶や岩塩、魔石や予備の薬草など、入用な物を3銀貨分追加で買い、大銀貨2枚と銀貨5枚を払って店を出た。

ガーク爺は、

「予約分は明日の夕方には揃ってるだろ。薬草が入用になったらいつでも来な。」と、見送ってくれた。

「マリエラ、すげーな。」

店を出るなり、リンクスが感心した様子で言った。

「ガーク爺はヘンクツでさ、店には失敗した薬草しか置かねーんだ。見る目のねーやつは、これで十分だとか言ってる。

俺、一発で見抜いたやつ初めて見たぜ。

いつでも来なとか、よっぽど気に入られたんだな！」

ガラクタ箱も貰えたし、薬草の種類が多く質も良い。ガーク爺にも気に入られたようでよかった。師匠の厳しい指導のお陰だ。感謝しなくては。

昼もすっかり回ってしまった。朝食が遅かったとはいえ、お腹がすいた。迷宮周辺には冒険者相手の屋台がでていて、薬草店に近い一角だけでも、干した果物やパン、串焼きなどが売っている。鬼棗と杏の干果と、オリーブの実の小瓶、あと案内のお礼も兼ねて、串焼きを買い3人で食べながら『ヤグーの跳ね橋亭』に戻った。

特化型上級ポーション

『ヤグーの跳ね橋亭』ではユーリケが待ち構えていた。

「リンクス兄、馬車掃除さぼるな？」

「サボンねーよ。でもさ、昼飯食ってからにしようぜ？」

「食後にあの臭いは吐くし？」

装甲馬車の荷台掃除を後回しにしようとするリンクスは、抵抗むなしく連行されて行った。

さつき食べた串焼きは昼食ではないのか？という突っ込みはあえてしない。マリエラはにこやかに手を振ってリンクスを見送った。

材料は後ひとつ。食堂兼酒場のカウンターで、店主にボル力を一瓶頼む。

ボル力は、火が付くほどアルコールがきつい安酒だ。そんなものをどうするんだと、店主の顔に描いてあるので、「傷の消毒に使う」と言えば納得したように奥から出してきてくれた。

これで、材料は揃った。ジークの薬が作れる。

ガラクタ箱の埃をざっと払って、ジークと2人で部屋に運ぶ。

部屋に入ると、ガラクタ箱から必要な器具を取り出して、ジークに風呂場で洗って来てもらう。埃を落とすだけなので生活魔法で水を出して洗うだけでいい。ジークが洗っている間に、材料の処理を始める。

上級ポーションは、ルナマギアをベースに錬成する。ルナマギア

は冬でも凍りつくことの無い地底湖の畔に育つ草で、中でも月光石と呼ばれる淡く光る魔石の光を浴びて育った物だけが、上級ポーションの原料になる。

まずは、ルナマギアを乾燥させる。乾燥温度は10〜11。ルナマギアの棲息環境の温度で、これより高くても低くても薬効が減ってしまう。

《錬成空間作成、温度調整10、減圧、破碎、乾燥》

錬金術スキルで『錬成空間』と呼ばれる不可視の容器を創り出し、温度を10に調整する。10という低い温度で短時間で乾燥させるために、錬成空間の内部圧力を下げ、さらに内部の空気を乾燥させる。乾燥した空気を渦状に動かし、ルナマギアを乾かしながら破碎していく。

マリエラはサクサクと処理を行っているが、錬成空間の維持、温度制御、圧力制御、空気の乾燥と流速制御と5つの操作を同時に行っている。スキルレベルが上がればよりたくさんは錬金術スキルを同時に制御できるが、温度管理がくせ者で、±1の制御ができる者は、僅かな熟練者に限られる。『10』といっても、温度計があるわけではなく感覚頼りで、乾燥中の空気の流れによって温度ムラもできるから、結局は素材の状態を見ながら操作することになる。スキル任せでは成り立たない、職人技の世界である。

そんな難易度の高い温度制御は、マリエラの得意技だった。狙った温度にぴたりと合わせることができるし、乾燥ムラなく一定温度で乾燥することができる。もちろん、マリエラの師匠の仕込みだ。マリエラの師匠は『レインボーフラワー』という、乾燥温度によって色が変わる花を買ってきては、マリエラに乾燥させた。

『レインボーフラワー』は花びらの数によって、最適な乾燥温度が変わる。最適温度にぴたりとあわせて乾燥させれば、名のとおり虹色の色彩を放つ美しいドライフラワーになる。

失敗すれば食事抜きになったし、成功すればおかずが増えた。食べ物に釣られたこともあるが、虹色に仕上げたレインボーフラワーの美しさに、幼いマリエラは夢中になった。薬草園の薬草から、魔の森の雑草まで、毎日毎日魔力が尽きるまで乾燥させ、気が付けば超一流の技術が身についていた。

部屋一面、虹色の花で埋め尽くされた美しい光景を、マリエラはよく覚えている。

『薬草を乾燥させる仕事』なんてものは防衛都市にはなかったから、どれほど高い技術を持っているのか、マリエラは自分では理解していないのだが。

ジークから洗った器具を受け取る。

《浄水、洗浄、排水、乾燥、殺菌》

予洗いの済んだ器具を、錬金術スキルで仕上げる。

他のガラス器具も洗って欲しかったのだが、ジークが興味深そうに見ているので、邪魔にならないよう、ベッドに座って見学してもらった。

次はルナマギアの薬効成分の抽出だ。洗浄済の円筒状のガラス器具で金属製の三脚が付いていて縦に立たせる。ルナマギアの抽出によく使われる器具で、円筒の直径は親指と小指を広げたくらい。10本分の抽出が出来る、小型の抽出器だ。

円筒の下部は漏斗状に細まっていて、コックを開閉して中の液体を取り出せる。下に注ぎ口ヒーカーのついたコップをセットしコックを閉じる。

円筒上部もすばまっており、中央に活栓で蓋ができる穴が、端にはコック付きの空気抜き穴が開いている。活栓にはノズルが付いていて、タンクと送風機を繋いで上部から液体を噴霧できるつくりだ。円筒容器とタンクには温度調整用の魔法具が付いていたようだが、こちらは買われてしまったようだ。送風機も付いていなかったが、温度管理や送風は錬金術スキルで何とでもなる。容器さえ残っていれば十分だ。

薬草を入れずに動かしてみる。円筒容器は氷点下より僅かに下、タンク及び中の水は凍らないギリギリの温度にして噴霧する。ノズル内で凍らないようにノズルの温度管理が重要だ。シューッと吹き出た霧は容器の中央あたりで凍って細かい雪の結晶に変わる。容器内部の気体を制御して中央から上下に渦を作ってくるくと回すと、雪の結晶も流れに乗ってくるくと舞う。

「うまくいきそうね」

ルナマギアの薬効成分は、氷点下以下の水に溶ける。だから、氷点で凍らないように塩を溶かした水か、氷と接触させて抽出する。固体と接触させて抽出するわけだから、接触面積がなるべく大きくなるように、噴霧した水を凍らせて微細な氷を作ったのち、容器内で攪拌して反応させる。

円筒容器の中は、粉雪がきらきら、くるくると綺麗なものだが、マリエラは円筒容器、噴霧水タンク、ノズルの温度管理と、噴霧用の気体の制御、容器内の雰囲気及び気流制御を同時に行っている。大半の錬金術師は、3箇所の温度管理と噴霧用の気体制御は魔法具で行い、容器内の雰囲気及び気流制御だけ自分で行うことから考えて、マリエラの錬金術スキルは、決して低いものではないが、この制御がマリエラの実力の上限いっぱいだった。抽出容器が手に入らなかつたら、塩水で抽出しなければいけなかつた。塩水で抽出

すると、効き目が薄い仕上がりになるから、本当に助かった。

容器内にルナマギアをいれ、タンクの水を命の雫を溶かしたものに替える。ポーシヨン1本分の噴霧を終えたら、容器内の温度と気流の制御に集中する。この工程が、上級ポーシヨン作成の一番のキモだ。気が抜けない。

どうやらうまく行った様で、白い雪の結晶が、黄色みを帯びた月光石の光を放つ。

容器内の制御をとめて、コックを空けて、下の容器に抽出液を集める。後は放置して室温に戻すのだが、今回はジークのえぐれた肉を修復する特化型ポーシヨンだ。凍ったままのニギルの新芽を剥いていく。

ニギルは雪解けが迫ると、一夜にして雪を割って芽を出す。その芽吹く直前の新芽の部分を取り出すと、指先で押しつぶして、まだ冷たいルナマギアの抽出液に加える。これで、液温が室温まであがる間に、薬効成分が溶け出してくれる。

一番難しい処理は終わったけれど、まだ面倒な工程が残っている。中級や上級のポーシヨンは効果が大きく、急激な回復をもたらす。このため、全身を調整し反動を抑える成分として、中級ポーシヨンでは『鬼棗』^{おにじょうめ}、上級ポーシヨンでは『エントの実』を配合する。『鬼棗』はドライフルーツでも売っているありふれたものだが、『エントの実』は珍しい素材だ。ガーク薬草店ならば取り扱っている。だが、上級ポーシヨンの材料としてあまりに有名で、薬効から考えても『薬師』が買い求めるとは思えない。

自ら『薬師』だと名乗ったわけではないが、ガーク爺はマリエラを『薬師』だと思ったようだったし、『薬師』として行動したほう

が都合が良い気がする。

なので、今回は『エントの実』を買わずに、中級ポーシオンで使う『鬼棗』と薬草で代替品を作る。

作り方は、マンドラゴラとその亜種の根3種、葉3種、茎2種、種1種、花卉1種、茸2種、木の皮1種の合計13種類の原料をそれぞれ適切な温度で乾燥した後、所定の分量ずつ配合する。13種の原料を『練成空間』内で、空気に触れさせないように、小麦粉よりも細かく粉碎したら、オリーブから絞ったばかりの油に混ぜ込む。これを密閉した暗室で1年以上寝かせればでき上がり、という、極めて手間も時間もかかって難易度も高い方法だ。

上級ポーシオンを買ってくれる固定客がいるような、余裕のある錬金術師は、『エントの実』を買う。こんな面倒な方法は取らない。しかしマリエラには、そんな上客はいなかったし、売れるかわからない上級ポーシオンのために『エントの実』なんて高い材料を買う余裕はなかったから、もっぱらこの方法で練成していた。何しろこちらの代替法の材料は、全てマリエラの薬草園で揃うのだ。材料がタダってすばらしい。

代替薬に必要な13種の薬草類は持つてきている。先ほど買ったオリーブから、コップ半分くらいのオリーブオイルが得られた。上級ポーシオン30本分くらい作れそうだ。

《錬成空間作成、雰囲気制御、計量：マンドラゴラ、計量……》

『練成空間』の中は不活性ガスで満たしている。乾燥した薬草を微粉末にして混ぜ合わせるから、空気中だと爆発してしまうからだ。薬草を配合し終わると、粉碎し、オリーブオイルを加えて混ぜ合わせる。

《練成空間強化、温度制御40、加圧》

1年も待ってられないから、圧力をかけて時間を短縮する。圧力を上げると温度も上がってしまうが、40を超えるといくつかの成分が壊れてしまうから、温度を40に保ちつつ、圧力を上げていく。

《温度固定、圧力固定》

うまくコントロールできた。これで1時間もすれば完成する。

代替薬を寝かせているうちに、片手間でできる処理をしてしまう。何しろ高圧状態で練成空間を維持するのだ。魔力はどんどん消費していくし、ややこしい処理はできない。

まずは、アラウネの処理。根に鎮痛成分、葉に消炎成分がある。乾燥せず生のままでも抽出できるが毒がある。毒は80以上で分解するから100の命の雫を含んだ湯で煮出す。煮汁の粗熱がとれたら、冷め切る前に寄生蛭の毒腺をつけた油を一滴たらず。油なのに、アラウネの煮汁には分離せず解けるから不思議だ。

低級、中級、上級全てのポーションの原料となるキュルリケに、鬼棗、マンドラゴラを加えて粉碎し、一緒に抽出する。マンドラゴラは代替薬に使う場合は油に溶かすが、こちらは水溶成分を命の雫を練成した浄水で抽出する。

あとは、食堂兼酒場で買ったボルカ。蒸留してアルコール成分だけ瓶に戻す。

代替薬ができるまで、中級ポーションや解毒ポーションの材料も処理しておく。処理した薬草は油紙に包むか、薬瓶に入れておく。これで、1ヶ月くらいは問題ない。

代替薬が仕上がった。温度が室温より下がり過ぎないように制御しながら、圧力をゆっくり下げる。油が琥珀色に仕上がっていて良い出来だ。匙1杯分を掬い取り、命の雫を溶かしたアルコールに溶かす。

作成した4種類の抽出液は、固形物（残渣）をのぞいた後、慎重に混ぜ合わせる。混ぜる順序、一度に混ぜてよい量もあるから、最後まで気を抜けない。

《薬効固定》

特化型の上級ポーションがようやく完成した。

自由な体躯

「かーんせーい！ー！はくしゅー！」

「おお………？」

マリエラの練成をまじまじと見ていたジークは、いきなり話を振られて戸惑いながらも、ぱちぱちと手をたたいてくれた。

疲れた。一本だけとは思えないほど疲れた。

いつもだったら、代替薬は作り置き of 物を使うし、材料も処理しておいてあるから、いつもよりたいへんだった。

早速効果を確かめよう。

「はいつ。ジーク右腕出して。」

「は、はい。」

ジークは、よく分かっていない様子で手のひらを上にして右腕を出す。

「逆、逆。」

マリエラはジークの腕をつかみ、くるりと手を回して、黒狼に噛まれた跡を上に向け、ぱたりぱたりとできたばかりのポーションをかけた。

「うん。成功。」

黒狼に噛まれて陥没したままの傷跡は、薄く光を放ちながら見る間に盛り上がり、あっという間に傷跡さえなくなった。

「グーパーしてみてもちゃんと動く？あ、動くね。」

今朝の段階で、力が入らず、ゆっくりと動くだけだった右腕は、滑らかに動いていた。

「あ……、うご……、動きます……」

「うんうん。じゃー膝立ちになって、後ろ向いて、ズボン上げて左脚の脹脛みせてー」

感動を言葉にしようとするジークをせかして、本命の左脚の傷を出させる。

こちらは、黒狼に食いちぎられた後、止血目的で焼いた傷だ。治癒魔法で最低限の治療をしてあるが、薄皮が張っているだけ。迷宮都市への運送途中で雑菌が入って悪化していた。

炎症は昨日のポーションで治まったが、内部組織はいまだに酷い有様だ。

こちらにはたっぷりとかける。えぐれた肉が再生されていく。薄皮の下で筋組織が一本一本再生して盛り上がっていくのが見て取れる。

「っ……」

ジークが左足の指をひくりと動かす。鎮痛成分も配合してあるから、痛みはないはずだ。

急激に組織が再生される違和感に声が漏れたのだろう。

あつという間にやけどの跡も消えてなくなる。
流星は作りたて。効果は抜群だ。

足を治しても、まだ1/3ほど上級ポーションが残っていた。

「はい、ジーク、これ飲んで。さ、ぐぐっと。一気一気。」

足の様子を見ようと振り返ったジークに、ポーションの入った容器を押し付ける。

今朝の散髪の際に気が付いたけれど、ジークは体中に傷跡があった。鞭で打たれた痕かもしれない。

ジークは言われるままに、上級ポーションを飲み干すと、ぶるつと身体を震わせた。

体のあちこちがふわりと光ったから、体中に残ったダメージが一気に癒されたのだろう。

ジークは、自由に動く右手を見、えぐれていた筈の左足を見ると、ベッドから静かに下りて立ち上がった。

そのまま左足を踏み出す。一步、一步。違和感なく歩く。

両手を上げて伸びをし、軽く飛び跳ねる。腕を回し、腰をひねる。体の調子を確認するように動かしていく。うつむきがちだった背筋もちゃんと伸びていて、背が高く若返ったように見える。

「動く、動く。脚が、腕が……。肩も回らなかったのに、腰も痛くない。腹も引きつらない……。」

(どんだけ怪我にまみれてたんですか、ジークさん……。 てか、上級ポーシヨン効き過ぎじゃない？ 迷宮素材すごいわー)

泣き出しそうな表情で、喜んでいいるジークを見ながら、錬金術師になつてよかったとマリエラは思う。

怪我から、病から回復した人が喜ぶ顔を見るのは、何よりのご褒美だ。

体の調子を確かめ終わったジークは、くるりとマリエラを振り返り、片足を床について座った。

また土下座か！？と一瞬身構えたが、今度は片足を立てている。まるで騎士が誓いを捧げるようなポーズだ。

「マリエラ様、ありがとうございます。こんな……、こんなに自由に動く身体に戻れる日が来るとは……夢にも思いませんでした。本当に、この気持ちを、感謝を、うまく言葉にできなくて、もどかしい……。昨日から、貴女に救っていただいてからずっと……俺、俺は……どんなことでもします。貴女の、マリエラ様のためなら、どんなことでも……」

感極まった様子で、ジークが言葉を綴る。ひとつしかない蒼い瞳は潤みきつていて、熱に浮かされたように途切れ途切れに語る言葉に、感謝の気持ち伝わってくる。

(本当に、綺麗な瞳……)

「目、治せなくてごめんね。特級ポーシヨンが作れるようになるまで、我慢してね」

「そんな……、十分です。俺は、死ぬんだと思っていたのに、こう

して、もう、どこも痛くない。

本当に、俺、何だっつて、何だっつてやります……」

ジークのテンションが変な方向に上がってきた。

「ねえ、ジーク、お願いがあるの。」

(何でもしますとか、簡単に言っちゃ駄目なんだよ。)

「っ！はい！」

「あそこの、ガラス器具、洗っついて。」

「！！！！？？？」

後片付けはジークに任せて、夕食時まで昼寝した。

マリエラが昼寝をしている間に、ジークはガラス器機を洗って乾かし、散らかしていた薬草は机の上に整頓し、ガラクタ箱の中身も埃を綺麗に払って、見やすいように床に並べてくれていた。

昼寝からおきたマリエラはというと、

「それは、ごみー」

「はい」

「それは、明日もってくから袋にいれて。」

「はい」

「それは、使えるけど、袋に戻して部屋の隅っこにおいてー。」

「はい」

ベッドに寝そべりながら、ジークをあごで使っていた。

（ああ、楽チンだ。師匠つてば、こんな感じだったのね。）

このまま寝転がった状態でご飯が食べれたら最高なのに。などと考えていると、マリエラ達の部屋のドアがノックされた。

「はい」

「マルローです。契約書類が揃いましたので、部屋に来ていただけますか？」

夕食前の一仕事がやってきた。

ジークと2人でマルロー副隊長の部屋に入ると、ディック隊長が待っていた。ジークをみて、驚いた顔をする。昨日のジークは死に掛けのゴブリンより酷い有様だった。今は痩せすぎだが男前で同一人物とは思えないから、驚く気持ちはよくわかる。マリエラだってビックリだ。しかし、輸送隊隊長がこんなに顔に出しているのか。相変わらず分かりやすい人だ。大丈夫か。

反対にまったく顔に出さないマルロー副隊長に勧められるまま、マリエラは長椅子に座る。ジークは背後に控えている。

「本件の機密性を考え、隊長のディックと、私マルロー以外は、情報を伝えておりません。」

「こちらが、契約書になります。確認を。」

マルロー副隊長が、複数の書類を渡してきた。一番上の契約書を見ると昨日マリエラが要望した事が、全て書かれている。守秘に関

してはもちろんのこと、万一情報が漏れてマリエラが危険にさらされた場合は、黒鉄輸送隊が問題の解決に当たり、状況によっては逃亡までを幫助する、と明記してある。

マリエラは契約書を見るのは初めてだ。今までは、店に持ち込んで買ってもらうか、広場のバザールで売るか、娼館等の客先に直接もって行くか、何れも商品と代金をその場で交換するやり取りばかりで、契約書など結んだことはなかった。マルロー副隊長に渡された契約書は、商業ギルド発行の魔法効力のある物で、とてもきちんと作られているように思える。

「あの、『個々の取引に関しては、都度、売買契約を締結するものとする。』と有りますが？」

代金について書かれていないので、マリエラが聞いてみると、

「『相場』という、変動しやすい指標を魔法契約に盛り込むことはできないのですよ。物の価格は都度変動するものですから。こういった基本契約とは別に、別途単価契約書を締結するか、商談ごとに売買契約を締結するものなのです。こちらが、今回の売買契約書になります。」

流暢にマルロー副隊長が答え、下にあった書類を指差した。そちらが今回の売買契約書らしい。昨日注文されたポジションの種類と個数、マリエラに支払われる単価が書かれている。

単価は低級ポジション、低級解毒ポジション、魔物除けポジションがそれぞれ銀貨6枚、中級ポジション、中級解毒ポジションは大銀貨6枚とびっくりするような値段が書かれているが、上級ポジションと上級解毒ポジションは記載がなく、合計金額も空欄となっている。

「あの、上級のところが空欄なんですけど。」

「それなのだがな……」

マリエラが質問すると、今まで黙っていたディック隊長が、ようやく口を開いた。

「上級ランクのポジションは10年以上、取引されていないのだ。」

市場に出回らないので『相場』がわからないそうだ。

「迷宮都市のポジションは、辺境伯や各家が保管しているものを除けば、アグウイナス家からしか流通がなくてな。辺境伯との取り決めに従い、軍に一定量の供給があるのだが、ここ十数年は低級、中級しか出回っておらんらしいのだ。」

迷宮都市のポジション事情をさらっと説明してくれた。アグウイナス家という家名は聞いたことがある。200年前、エンダルジア王国の筆頭錬金術師だった家系だ。スタンピードを生き残り、家まで存続していたらしい。王国が滅びたというのに、200年たった今でもポジション販売の実権を握っているとはすごい一族だ。

「上級ランクについては、売値に基づいて金額を決定したいのだが、相場がわからん以上、買い叩かれる可能性もある。これ以下では売れんという最低金額を決めてもらってもいいし、我々が信用できないのであれば、取引に同席してもらってもかまわんが、どうだろうか。」

腕組みして、威風堂々というポーズで椅子にどっかりと座っているディック隊長ではあるが、顔を見ると太い眉毛がへによりと下が

っている。見た目と中身にギャップのある人だ。悪いことをする人には見えないから、信用できないとは思わないが、買い叩かれることはありえそうだな。まあ、その時はマルロー副隊長が出てくるのだろうか。

「可能であれば、教えてほしいんですが。」

「む、なんだ？」

「ポーシオンは何処へ売るんでしょうか？」

「迷宮討伐軍だ。もうじき定例の遠征があるからな。魔物除けと低級ランクの一部は我々も買い取らせてもらうがな。」

取引先を覚えてくれるとは思わなかった。こんなにあっさり教えてくれていいんだろうか。ちらと、マルロー副隊長を見ると、いつものすまし顔だが目が笑っていて、なんだか少し楽しそうだな。

「アグウイナス家ではなくて？」

「アグウイナス家に売れば、討伐軍に渡るかわからんだろう。ただでさえ、ポーシオンの質も量も下がっているのに、最近は『新薬』などという粗悪品を流していると聞く。討伐軍の被害は増える一方だというのに。」

今度は露骨に嫌そうな顔をする。アグウイナス家にいい感情を持っていないようだ。というか、軍に知り合いでもいるのだろうか。

「分かりました。値段は安くなってもかまいません。私も使ってもらったほうが嬉しいので。」

ポーシヨンは怪我を治すものだ。利ざやを稼ぐ道具に使われるのは嫌だから、利用者に直接渡るほうがいい。低級、中級ポーシヨンの値段で、利益は十分以上に出ているのだから、討伐軍の被害が少しでも減ってくれば、マリエラも嬉しい。

「そうか！ありがたい！連中もきつと喜ぶ」

ディック隊長はとても嬉しそうに握手を求めてきた。握る力が強くて、ちよつと痛かったけれど、分厚くて大きな手のひらはとても温かった。

マルロー副隊長が、商売にまるで向いていないディック隊長とどうして一緒にいるのか、なんとなくわかった気がした。

よし、打ち上げだ！と立ち上がるうとしたディック隊長の襟首を、マルロー副隊長が引っつかむと、もう一度椅子に座らせた。早業だ。喉が絞まって、ディック隊長がむせている。

「契約がまだです。それと、打ち上げなどしたら、秘密にならないでしょう。分かっているのですか。」

さらさらとペンを動かし、売買契約書を完成させながらマルロー副隊長がたしなめる。

「マリエラさん、代わりとっては何ですが、滞在中の飲食等はこちらで負担させていただきます。宿泊も1週間延長して有りますし、マスターに話はしてありますので、何でも注文してくださいね。ああ、あと事前に入用なものを提供するという件ですが、何を準備しましょうか？」

これが接待というヤツだろうか。ジークも一緒にいいんだらうか？

「今回は、特にないです。あの、ジークの分もですか？」

小市民臭く聞いてしまった。「もちろんです。」とにこやかに返事してくれた。なんて太っ腹なんだらう！

「あ、ディック隊長は自腹でお願いしますね。経費で落ちませんか
ら。」

笑顔でマルロー副隊長に言われて、ディック隊長はがっくりとうなだれていた。

初めての乾杯

完成した契約書にサインをする。血をたらしたインクでサインすることで、魔法契約が締結される。

黒鉄輸送隊は、ディック隊長とマルロー副隊長の連名でサインしてくれた。

ポーシヨンの引渡しは明後日の同じ時間にこの部屋で行うことになった。

マリエラとジークは部屋を出ると、そのまま1階の食堂に向かう。一緒に食堂に行こうとしたディック隊長は、マルロー副隊長に捕獲されていた。「一緒に行つてどうするんですか。時間をずらしなさい。」だそうだ。そのまま「お話」が始まりそうだったので、ささと部屋を出る。

ようやく晩御飯だ。今日の献立は何だろう。

日が落ちたばかりの時間で、夕食時にはまだ少し早い。食堂には昨日と同じく、ちらほらと客がいるだけで、黒鉄輸送隊のメンバーは誰も来ていなかった。

アンバーさんがやってきて、マリエラとジークをカウンターに案内してくれた。夜の時間には早いせいか、赤いドレスの上にストールを羽織っていて、暴力的な谷間は隠されている。

今日のメニューは牛系魔物のビーフシチューか肉団子と野菜のデミソースがけらしい。何の肉団子なのか聞くと、「うふふ」と返された。なんの肉だろう。気になる。シチューの方も牛肉じゃなくて牛系魔物だし。

マリエラはビーフシチューを、ジークは肉団子をそれぞれ注文する。

別に謎肉を強要したわけではない。

「ジークは何にする？好きな頼んでいいんだよ？」

といたら、しばらく考えて肉団子を注文したのだ。チャレンジヤーだな。

「お兄さん、ジークさんていうのね。元気になったみたいで良かったわ。どう？快気祝いに一杯。」

アンバーさんが腕を組みながらジークにお酒を勧める。腕を組むと二つの肉団子が持ち上がってストールがずれそうになる。何てことだ！ストールがあるぶん余計に目を引くじゃないか。いい仕事しやがって。

「いえ、結構です。」

ジークがアンバーさんの誘惑をさらりと躲わして、マリエラの方を見る。

（あーれー？アンバーボンバーをさらつと躲わしちゃって、ジーク我慢してる？）

「えっと、ジーク、一杯くらいなら飲んでも大丈夫だよ？私も頼むし乾杯しよう。」

怪我は治ったけれどジークの体力は十分ではない。でも、一杯くらいは問題ないし、回復を祝って乾杯するのはいいアイデアだと思う。

「マリエラ様、俺は奴隷です。本当は席に座ることも、許されない。どうか、どうか、これ以上お気を遣わないでください……。」

ジークは少し困った顔をして、途切れ途切れにそういった。

そういえば、ジークは滑らかにしゃべらない。たぶん、長い間話をすることがなかったんだと思う。

(こつこついうところ、どうにかしたいな……)

マリエラがジークを買ったのは、まあ殆ど勢いだっただが、一応は、眠っていた200年間の情報を得るためと、味方になってくれる人を得るためだ。ご主人様ぶりたいわけではないし、そういうタイプではないから、かきずかれると落ち着かない。

(隷属契約があるんだもん、完全に友達みたいってワケには行かないんだろっけどさ。)

少しずつ仲良くなって、少しでも気心の知れた仲になればいいな、と思った。そのためにも乾杯というのはいいアイデアだと思う。遠慮するジークはほうっておいて、アンバーさんに乾杯用のお酒をお願いする。

「2人の初めての乾杯ね。どれがいいかしら？」

アンバーさんがカウンターの向こうから何本かボトルを取り出す。

(うん。まったくわからない。)

師匠は飲んでいたようだが、マリエラはお酒を飲んだことがない。

「ジークはどれが良い？」

ジークに投げてから気が付いた。

（しまった。無茶振りだったかも。借金奴隷から犯罪奴隷になった人だもん、お酒の銘柄とか知らないよね。）

「マリエラ様は、お酒は、飲まれますか？」

しかし、ジークは落ち着いた様子でマリエラに聞いてきた。

「え？ええと……飲んだことありません……」

「でしたら、そちらのフェリスか、メロウのモスカートが、甘口で飲みやすいかと。」

「ジークはどっちが好き？」

そう聞くと、ジークは困った顔をして、「フェリス、でしょうか」と答えた。

「へえ！兄さん詳しいね！さんざ、泣かしてきたクチかい？」

アンバーさんが茶化してくれて助かった。ジークの新たな一面を発見してしまった。いや、気心の知れた仲になりたいか思ったばかりだけれど、なんか、カツコイイ一面だったせいで、ちょっとドキッとしてしまった。いかんいかん。

フェリスとやらをお願いする。アンバーさんがボトルを開けてくれて、グラスに注いでくれる。

薄い桃色をしたお酒で、しゅわしゅわと泡が出ていて綺麗だ。

「お、乾杯か？俺達も参加しよう！な、マルロー！」

いざ乾杯という段階で、ディック隊長が合流してきた。マルロー副隊長を強引に引き込んでいる。「しようがないですね」、と苦笑しながらマルロー副隊長もグラスを受け取る。

4人にグラスが行き渡ると、3人の視線がマリエラに集まる。乾杯の音頭というヤツだ。

「ジークの回復を祝って！あと、この出会いに！」
マリエラの音頭にあわせて「乾杯！」と3人が続け、チンとグラスが合わさった。

初めて飲むお酒は、甘くて飲みやすかった。ほんのりと野いちごの香りがする。乾杯の後、すぐに料理が運ばれてきた。マスターからのお祝いらしく、料理が山盛りになっていた。

ジークはグラスを見つめると、ゆっくりと口に含んだ。すぐには飲み込まず、転がすように味わう。昨日も今朝もがつと食べていたのに、料理も動くようになった右手でフォークを使って、一口一口綺麗に食べている。

「旨い……」

ジークがポツリとつぶやく。お酒の銘柄を知っていて、綺麗に食事をするジーク。彼はどんな人物なんだろう、とマリエラは思った。ちょっと胸がドキドキして顔がぼわわと熱いのは、きっとお酒のせいだろう。

(それにしても、気になるな……)

「その肉団子、何のお肉？おいしいの？」

思わず疑問が口に出た。これもお酒のせいに違いない。お酒は人を素直にさせるのだと師匠も言っていた。

ディック隊長は、「そのストールも似合うな！」などといった、アンバーさんのストールをめくろうとして、手の甲をつねられている。彼もお酒で素直になったのか。いや、アンバーボンバーの影響か。

「あー、なに、宴会始めて！ずりー！俺らさっきまで荷馬車掃除してたのに！」

リンクスたちがやってきた。

夕食のビーフシチューと、肉団子と野菜のデミソースを見て、「うげ、黒々としてる……」と言っている。

何かを想像しているようだ。詳しくは聞かないでおこう。

一緒に掃除をしていたユーリケと、傍で装甲馬車の修理をしていたらしいドニーノとフランツもげんなりした顔をしている。

「うわー、食欲わかねーわー」

等と言いながら、リンクスは昨日同様、両方を注文していた。

ちなみに肉団子は、牛系魔物とオーク肉の合い挽きで、肉汁がじゅわっと染み出ておいしかった。

ジークが一個分けてくれたので、ビーフシチューの牛系魔物肉をお返しにお皿に入れてあげた。シチューのお肉はとても軟らかく煮込んであって、臭みもなくておいしかったのだけれど、牛系魔物って何だろう。こちらの方が謎肉だったかもしれない。

宴会はとても楽しかった。

ディック隊長はアンバーさんのストールを被ってその辺に伸びていたし、マルロー副隊長はマスターと楽しげに話しこんでいた。リンクスとユーリケは文句を言いながら、料理を完食していたし、ドニーノさんやフランツさんも装甲馬車について語らっていた。ジークがマリエラを見つめて微笑んでいたことは、ちゃんと覚えている。

いつ部屋に戻ったのかは、覚えてないけど。

チュニツクとズボンを脱いで、ベッドでちゃんと寝ていたから、まあ、大丈夫なんじゃないかな！

(頭いたい……)

かなり早い時間に目が覚めてしまった。

低級解毒ポーションを作っていると、ジークが目を目を覚ました。

「起こしちゃった？ジークも解毒ポーションいる？二日酔いの専門薬じゃないけど、多少は効くよ。」

「いえ、大して飲んでいませんので。」

ジークはまったく平気そうだ。多めに薬草を買っておいて本当に良かった。こんな使い方をするとは思わなかった。ちゃっちゃとポーションを作って飲む。解毒ポーションでも効くもので、頭痛は水に溶けるように消えたけれど、今度はトイレに行きたくなった。

「ちよつとトイレいつてくるね」

綺麗にたたまれたチュニツクとズボンを穿いて急いでトイレに行く。

用を済ませてから、部屋に戻ろうと階段をあがっていると、ディック隊長の部屋のドアが音もなく開いて、中からアンバーさんが出てきた。

アンバーさんは、部屋の中の、おそらく眠っているであろうディック隊長をじっと見つめている。小さな窓から差し込む薄明かりでよく見えないけれど、アンバーさんの口元は優しげに微笑んでいて、その表情はとても、いとおしげに見えた。部屋の中を見つめていた時間はほんの数秒だったのだろうが、マリエラには時間が止まったように感じられた。なんだかとても切なくて、胸がきゅうとする。

ディック隊長を起こさないように、静かに、ゆっくりとアンバーさんはドアを閉めて、マリエラに気が付いたようだ。

にっこりと微笑んで、「まだ早いわ、もう少し寝られるわ」とすれ違いざまに囁いて、階段を降りていった。

(な……何が早いのかしら……)

なんだかドキドキしてしまうマリエラだった。

部屋に戻ると、ジークが起き出していた。服も着替え、ベッドも整えている。

「まだ早いよ。もう少し寝れるよ」

アンバーさんに言われた台詞を言ってみる。

「目が覚めましたので」

にっこりと微笑んで答えられた。あーねー？

とりあえず、お風呂に入ってスッキリしたい。ジークは昨日、ちゃんと済ませて寝たそうさ。えらいな。

「飲み物でも頂いてきます」

お風呂にはいつている間、席を外してくれるらしい。紳士か。折角なので、宿の人がいたら、お弁当の準備と、スコップとナタを借りれないか聞いてきてもらう。今日は採取に出かけるのだ。

ジークを待たせてはいけないので、大急ぎでお風呂に入る。

お風呂から上がると、ジークは部屋にはいらずに廊下に立って待っていた。明日の取引が終わってお金が入ったら、部屋を分けたほうがいいかもしれない。いっそのこと、どこかに家でも借りようか。

ジークがもってきてくれたお茶を飲みながら、今日の予定を話す。マスターはまだ寝ていなくて、朝食と昼食はお弁当にしてカウンタ―に置いておいてくれるそうさ。スコップとナタも裏の物置から勝手にもって行っていいらしい。これなら、貸しヤグー屋が開くと同時に出発できる。

昨日のうちに準備した背負い袋はジークが持ってくれた。ガラクタ箱に入っていたいくつかの素材に岩塩や魔石、薬草をくるんでいた麻袋、手ぬぐい、部屋の木製コップも借りて入れてある。マリエラのポーチにはお金とガラクタ箱に入っていた紙片、あとは手ぬぐい。念のために魔物除けのポーションを作ってかければ準備は完了だ。

空が明るくなってきた。弁当を受け取って、スコップとナタを借りて出かける。

今日は、ポーション瓶の材料を採取するのだ。

初めての乾杯（後書き）

奴隷は3日間、装甲馬車に閉じ込めたまま運ばれます。その間、垂れ流しですので、馬車の中は大変な有様です。掃除係りは『当分、カレー食べねえ』みたいなことになります。世界的にカレーが合わないので、シチューと肉団子のデミソースにしてみました。

魔法陣

夜が明けたばかりの町を、北へ向かう。

北の通りは、商業区画と農民や畜産業に就く人々が住まう区画の境に当たり、北門付近には貸しヤグー屋があつて誰でもヤグーを借りられる。貸しヤグー屋は畜産農家が兼業で行っている場合が多く、朝早くからでもヤグーを借りることができる。

「すいませーん、2人で乗れる強い子を1日お借りしたいんですがー。」
マリエラが訪ねると、

「みない顔じゃのう。こいつは強いけん、細っこい兄ちゃんとかっこい嬢ちゃんなら、問題なか。」
と、立派なおスを貸してくれた。

貸し賃は餌袋代込みで1日銀貨1枚。それとは別に保証金が大銀貨2枚で、これは返却時に返してくれる。

餌袋から野菜を与えると、すぐに懐いてくれたようだ。賢い子だ。敷地内で軽く騎乗の練習をする。マリエラも乗れるのだが、ジークの方が圧倒的に上手い。これが運動神経の差か。ヤグーも機嫌よく走っていて足並みも軽やかだ。保証金の都合で1頭しか借りられなかったのだが、2頭借りていたらマリエラは付いていけなかったかもしれない。

マリエラを前にのせ、二人乗りで北門に向かう。迷宮都市には8個の門があるが、東西南北の4門は何れも小さく、門の幅はヤグー

1頭通るのでギリギリといった小門だ。迷宮都市の住人が畑に向かったり、周辺での採取や狩猟に出かけるための通用門で、大型の魔物が通れず、小型の魔物の進入も防ぎやすいように、小さく設えられている。通行するには不便であるが、交易を目的としていないから検問は簡単に済まされる。

見ない顔だと止められはしたが、背負い袋を開いて見せて、採取に行くのだと伝えると、「魔の森から遠くても魔物が出るから気をつけるように」と送り出してくれた。親切な衛兵だ。

北門を抜けてやや北西寄りにヤグーを走らせる。迷宮都市の北側は川が少なく低木が多い、放牧に適した土地だ。北西側には山脈から流れる川が何本も通っており、農業地帯が広がっている。川沿いに北上すると森にたどり着く。魔の森に比べるとずっと浅い普通の森だが、低レベルの魔物が稀に出るので注意が必要だ。

もっともマリエラたちは魔物除けポジションを使っているから、この程度の森であれば、安全に行動できるのだが。

「マリエラ様」

ジークが、ちらと後ろを振り返ってマリエラに声をかける。

「あー、やっぱり、付いてきちゃったか。」

たぶんリンクスだと思う。大きな取引の前だ。逃げないように監視が付いてもおかしくはない。

（今日行くところは、あんまり人に知られたくないんだよね。ごめんね。）

ヤグーを止め、ポーチから紙片を数枚取り出し、3枚を餌と一緒にヤグーに食べさせる。残りはジークに渡す。昨日、昼寝の後に描いておいたものだ。

「これに魔力こめて。良いと言つまで握っていてね。」

再びヤグーを走らせる。

2人を乗せたヤグーは森の中をすいすいと進む。まるで森の木々が除けているように。2人と1頭の姿は、森の気配に溶けるようにおぼろげで、気配もほとんど薄く森にまぎれていく。

すい、すい、と木々を除ける。いや、木々が除けているのか。そのたびに、鷹より鋭いはずの目は、彼らの姿を見失う。すい、すい、気配はとうに消え失せている。すい、と木の陰に彼らの姿が隠れ、そして、全く見えなくなつた。

「うつわ、見失つた。マジか。ジークすげえな。いや、マリエラがなんかしたのか？」

森の中にリンクスの影が浮かび上がる。彼は黒鉄輸送隊の斥候で、その能力は魔の森でも十分に通用する。まさか森の中でマリエラたちを見失うと思わなかつた彼は、頭をぼりぼりとかいた。

「マルロー副隊長に怒られっかなー。でもまー、あれなら無事に帰つて来れると思うんだよなー。」

あー、こんなことなら、ジークにナイフ貸したままにしとくんだったぜ。」

リンクスはマリエラ達の護衛について来たのだが、見失つては仕方がない。リンクスを撒ける腕があるのだ。武器の類がスコップと

ナタだけなのは、少々心配だが、このあたりの森ならば問題はないだろう。魔の森をうろついていただけあって、マリエラもあ見えてそれなりにできるといっわけだ。

森の中に浮かんだリンクスの影はふっと消え去り、迷宮都市へと戻っていった。

リンクスを撒いた後、そのまま森を抜け、川を何本か渡って、小一時間ほど走ったろうか。

マリエラたちは1本の川べりを遡り、滝の近くにたどり着いた。

「流石にもう大丈夫でしょ。ついてきてないよね？」

マリエラには探索能力などないから、あてずっぽうである。

「はい、とくに撒いたようですが、これは？」

ジークが手綱とともに握っていた手のひらを開いて、くしゃくしゃになった紙片を伸ばす。

手汗で湿気てにじんでいるが、紙片にはなにやら図形のようなものが描かれていた。

「あーそれね、森招きと気配遮断と惑わせの魔法陣だよ」

『森招き』は森での移動を楽にするもので、木の枝や藪に足を取られず進むことができる。『気配遮断』は文字通り、気配や魔力を遮断して姿をくramsすもので、これに『惑わせ』を併用することで、たいていの追っ手や魔物から簡単に逃げることができる。どれも熟練の狩人などが身に着けている、スキルともいえない技術だ。

いくら魔物除けのポジションを使っても、効きにくい魔物もいるし、見つかってしまう場合もある。街の中にも、身寄りのない若い娘に手を出そうとする悪人はいる。そういった危険から身を守り、上手く逃げおおせるために、マリエラの外套にはこの手の魔法陣が複数縫いこんである。

こういつた魔法陣は、古代文明の遺産と言われ、200年前でも大半が失伝している。効果によって材料の質を選ぶものの、魔石の粉を溶かしたインクで描くだけで誰でも効果が得られる便利なものだ。ただし、図形が完璧でないと発動せず、円が歪んだだけでもまともな効果は得られない。

どれほど上手く描いたとしても、所詮は人の手、どこかしら歪んでしまい本来の効果は得られない。発動して本来の半分も効果が出れば御の字という代物である。まして、それを写した物など通常は発動すらしない。本は人の手で書き写す『写本』でしか増刷するすべがないから、マリエラが使ったような、他のスキルや魔法で補えたり、訓練しだいで何とかなる程度の魔法陣が受け継がれなかったのは仕方がないだろう。

オリジナルの
アカシックレコード
完璧な魔法陣は、世界の記憶に記録されているのみである。

現在でも人づてに受け継がれているのは、ポジション瓶に刻まれる劣化防止の魔法陣や、ジークが押された焼印の隷属契約の魔法陣などごく僅かで、それすら魔法陣が完璧でないから、『劣化防止』は遅延効果を付与するに過ぎないし、『隷属契約』は契約スキルと併用することで効果を発揮している。隷属魔法などという使い方によつては危険な代物が、片方だけでは満足な効果が得られない、というのはある意味僥倖だったかもしれない。

そのかわり、魔法陣に刻まれた図形の研究が古くから行われてい

て、魔工技師と呼ばれる人達が魔法陣の解析結果から様々な魔道具を作りだしている。人の歩みは止まる事がなく、失われたものがあれば、創られるものもあるのだろう。

「魔法陣……。失伝したと、聞きました。」

滝のほとりの開けたところにヤグーをつないで、包んでもらった朝食を食べる。

ハムと野菜をバゲットに挟んだサンドイッチで、おいしそうだ。

「師匠がね、高レベルの鑑定持ちでさ。いくつか頭に焼き付けられたんだ。」

マリエラの師匠はすごい人だった。アカシックレコード世界の記憶から情報を引き出せるほどの高レベルの鑑定スキルに加え、魔法も使えた。もちろん錬金術のスキルも持っている。

天才どころか超人の域である。その分、常識というか、人格や行動も突き抜けていて、並よりもどんくさいマリエラは何度も死にそうなる目にあつた。戦闘行為など一切していないのに、だ。

魔の森の小屋で、マリエラのような錬金術スキルしか持たない平凡な子供を、弟子にするような人物ではなかったが、それも含めて突拍子もない行動の一環だったのかもしれない。

魔法陣も師匠が気まぐれに覚えさせたものだ。

曰く、「どんくさ過ぎて死にそうだから、便利そうなのを教えてやるよ。」

おいでおいでと呼ばれて近づくと、頭に手をおかれた。撫でてくれるのかと、子供心に期待したら、「《転写》！」と叫んで、脳に直接焼き付けられた。転写は短時間だったけれど、ものすごく痛かった。

それから、師匠の『なでなで』を十分警戒するようになったが、「おお。できたか、マリエラ。すごいな。えらいぞ」と満面の笑みでほめて、ぐわしぐわしと頭を撫でてくれた次の瞬間に、「隙あり！《転写》！」とかやるものだから、結構な数の魔法陣を憶えさせられた。あれ、半分遊んでた。「ぎいやあ」と叫んで転げまわるマリエラを指差してゲラゲラ笑ってたし。

一番酷かったのは『仮死の魔法陣』で、凶形が複雑な分、頭が焼ききれるかと思った。珍しく、というか初めて師匠が《転写》する前に、神妙な顔で説明をしてくれた。

「今まで、多くの魔法陣を刻んで耐性も付いただろうが、多少痛みは増すだろう。」

とかなんとか。今までの転写は遊んでたんじゃなかったのか。いや、転写してもらった魔法陣はどれも貴重で、たいへん有難いものなのだが。「この魔法陣の作成を以って、卒業としたい」なんて言われたら、「畏まりました」と答えるしかないじゃないか。

『仮死の魔法陣』を転写した時の激痛は、思い出したくもない。多少どころの騒ぎではなく、3日ほど寝込んでいたらしい。ベッドの周りにポーション瓶がいくつも転がっていたから、死に掛けてたんだと思う。師匠は「寝すぎだぞ」とか言っていたけど、目の下に隈ができていたから、寝ずに看病してくれたんだと思う。そういうところを、見せる人ではなかったけれど、長い付き合いだ。それくらいわかる。

魔法陣は覚えただけでは使えない。オリジナル通り、完璧に描かなければ発動しないから、後は地道な努力に地道な作業を繰り返すだけだ。マリエラに特別な才能はないけれど、地道に頑張ることは得意といえた。それでも『仮死の魔法陣』はたいへんだった。材料

費が高いだけでなく、複雑で大きい。忙しい日々の合間を縫ってちまちまと描き続け、ようやく卒業課題の2枚分を描き上げた。

師匠は課題の魔法陣を検分すると、「卒業だ。よく頑張ったな。」とほめてくれた。

感動して思わず泣いてしまった。「あじがどうござびばず〜」と泣くマリエラを、小さい子供にするように、師匠はよしよしと撫でてくれた。

よしよし、なでなで、ぐわしぐわし。「油断大敵!《転写》!」「へ!?!?」

「くそ師匠……」

師匠の思い出話をしていたら、なんだか腹が立ってきた。むっしむっしとバケツトサンドに齧りつく。

「最後の《転写》も強烈でさ、1日位かな、意識を失ったんだけど、目が覚めたら師匠いなくてね。」

師匠は手紙を残して消えていた。「仮死の魔法陣」は1枚貰っていく、最後の転写は代金代わりだ。この小屋は卒業祝いにくれてやるから、達者で暮らせ。地下に「仮死の魔法陣」を置いておくのを忘れるな。そのようなことを汚い字で書いたメモが残されていた。

「スタンピードを生き残れたのだから、師匠のおかげだし、というか、今まで生きてこれた全ての知識は、師匠のおかげで、感謝してるんだけど。けどねー、なんていうかな、なんかむかつく」

めちやくちやな人だったけれど、師匠との思い出はどれもこれも笑えるものばかりで、感謝だってもものすごくしているのに、急にいなくなるなんて。

「きっと、伝わっていますよ。」

ジークがとても優しい顔をしてそう言った。

「そっか。そうだね。あの師匠だもんね。」

ずっと伝えたいと思っていた感謝の気持ち。言葉にして伝えられなかったけれど、あの師匠が気づいていないはずはない。師匠はすごい人なのだから。

「マリエラ様は、スタンピードを、生き残った、錬金術師様、だったのですね。」

「うん。秘密だよ。」

「もちろんです。」

特に、ランタンの火のせいで、酸欠で200年も眠り続けたところは。

恥ずかしいから、秘密にしておいてもらいたい。

ポーション瓶

朝ごはんも食べ終わったことだし、早速作業を開始しよう。

周辺の石を拾って小さな竈を組み上げる。上部に段をつけてあり、容器を入れて下から加熱できる形だ。

竈のサイズのわりに厚みは分厚く組んでいく。石の隙間は森から泥を取ってきて、埋めてはスキルで《乾燥》させていく。上段にはガラクタ箱から持ってきた坩堝を、手前側に傾けて斜めに置く。坩堝の上も周りも、取り出し口以外はぐるりと囲った竈で、どちらかというと炉に近い。取り出し口の反対側には材料の投入口を開けてある。

2人で作業すればあっという間だ。竈ができたので、ジークにはヤグーをつれて薪を取ってきてもらう。

マリエラはというと、外套と靴、ポーチを脱ぎ捨て、麻袋とスコップを持って滝口へと向かった。

滝は大きく、大柄なディック隊長が5人縦に並んだくらいの高さがある。離れてみると1段に見えるが、この滝は2段になっていて、ディック隊長が万歳したくらいの位置に、ちよつと開けた段差がある。

ディック隊長が万歳している様子を想像して、マリエラは思わず笑ってしまった。

滝口は大岩がごろごろと重なった形をして入り組んでいる。

「まだあった。良かった」

滝のすぐ横に崩れ落ちたように立っている大岩と、滝のある岩山の間には、マリエラがギリギリ入り込めるくらいの細い隙間がある。入り込むと中は少し広くなっていて、入り口から奥に向かって上り坂になっている。最奥の壁面は、ゴツゴツ出っ張っていて、出っ張りを足場にすれば滝の段差に登ることができる。

この小さな割れ目は、滝の段差で撥ねた水滴が降り注ぎ、足元も壁面も苔がびっしりと生えていた。

「うっちはあー！大漁！さすが200年ぶり。すっごい茂ってる。」

プラナーダという苔で、先がほんのり桃色になっている。清浄な水と僅かな日照によって生育する苔で、成長速度が極めて遅く希少なものだ。身体に蓄積された疲労を回復し、縮まった寿命を戻すといわれている。取引価格は高額だが、滅多に市場に出回らないものだから、この場所も秘密だし、採取した苔も使う分以外は、大切に保管しておくつもりだ。

手の届く範囲の苔を採取して麻袋に入れると、隙間から外に押し出す。

苔を取り去った岩肌は、マリエラでも何とか登れる段差と高さになっている。

足を滑らせないように慎重に上ると、滝の段差部分に出た。

「おお、こつちも大量！」

下から見ると分らないが、段差部分は奥に広い空間があって、足元には大量の白い砂がたまっている。

この砂がポーシヨン瓶の原料に最適なのだ。

防衛都市時代からマリエラがいる川の下流はポーシヨン瓶用の砂

の採砂場で、良質な砂が採取されていた。良質といっても、天然物である以上、いくらかの不純物が含まれる。採取された砂は、専用の設備で不純物をより分け、溶融する際も様々な副原料を添加して、不純物を取り除いてポーシヨン瓶用のガラスに精錬される。

錬金術のスキルがあれば、マリエラが造ったような簡易の竈でもガラスを作り出すことはできるが、よほど良質な原料を使わない限り、品質の低いガラスになってしまう。

その、最高品質の原料がこの砂で、プラナーダ苔を採取しに来てこの場所を見つけたときは、苔も砂も手に入る宝箱のようなこの場所に、小躍りして喜んだものだ。どういう理屈かは知らないが、上の滝から流れてきた石や砂のうち、特にポーシヨン瓶に適した砂ばかりがこの段差に溜まるのだ。

200年ぶりの砂溜まりには、採砂場としては量が少なすぎるが、マリエラ個人が使用するには十分すぎる量が溜まっていた。

滝から離れてはいるが、水しぶきがすごい。髪も服もあつという間にびしょびしょで、身体に張り付いて気持ちが悪い。あと、水しぶきにまぎれて、たまに砂粒が飛んできて痛い。ポーシヨン瓶のためだ。がまん、がまん。

ざつくざつくとスコップですくっては、麻袋に入れていく。担いで降りられるくらい集めたら、口を縛って背負う。

「う……重。ちょっと入れすぎた」

「マリエラ様」

いいタイミングでジークが来た。てか、どうやって？いくら痩せていても骨格が違う。ジークに通れる隙間ではないけれど。

「あれ？ヤグーまで？どうやって？」

振り向くとヤグーに乗ったジークがいる。

プラナーダ苔の入った袋が落ちていて、上から音が聞こえたので、ヤグーに乗って登ったのだそうだ。

結構な絶壁で、登れる足がかりなどなかったと思うのだけど。

そっぴや、ヤグーは絶壁大好きな生き物だった。

もっと上まで登りたそうにしているヤグーをなだめて、砂袋を竈まで運んでもらう。

ヤグーは砂袋とジークを乗せたまま、タタンと一回壁を蹴っただけで降りてしまった。ヤグーもすごいが操るジークもすごいな。

すぐに戻ってきて、今度はマリエラを乗せて降りる。段差自体は『ディック隊長が万歳したくらいの高さ』で、たいして高くはないけれど、ヤグーの高さが加わるとなかなか怖い。「ぎゃあ」とか叫んでヤグーにしがみつく。ヤグーから降りると、ヤグーに「ふんつ」と鼻で笑われてしまった。

「砂は、採って来ますから、服を、乾かして、ください。」

竈の横には薪が山盛りになっていて、魔法で乾燥までしてあった。竈の中にはすでに火が燃えている。

砂を竈横の平たい石の上に広げると、ジークは空の麻袋を持って再び砂溜めに登っていった。

「《乾燥》そして《乾燥》」

マリエラは自分と砂を乾かして、脱ぎ捨てた外套と靴を履く。

ジークが置いていった背負い袋から、素材をいくつか取り出す。

ガーク薬草店で購入したトローナ鉱石と、ガラクタ箱に入っていた、半分以上固まった白い粉、あとは金属らしき小さな粒。粉にした魔

石。

白い粉はラム石で、長らく放置されていたため、空気中の成分と反応してこのままでは使えない。

《練成空間、粉碎、加熱》

水が湯になるよりはるかに高く、けれど蠟燭の炎よりは低い温度に加熱する。

トローナ鉱石もラム石に合わせて必要量を削りだし、同じように加熱処理する。

次は砂。

《練成空間、粉碎、命の雫、固定、混合》

乾かした砂を粉碎し命の雫をしみこませた後、処理したラム石とトローナ鉱石、魔石の粉も配合する。これで原料は完成だ。

準備はできた。ここからは休みなしになるから、ちょっと早いけれど昼食にしよう。

ジークはすぐに戻ってきた。砂でパンパンに膨らんだ麻袋を2個もヤグーに積んでいる。原料調整中も運んできてくれたから、全部で5袋弱。ラム石が足りなくなるくらい量の量だ。

昼ごはんはオーク肉のカツのサンドイッチだった。マスタードをたっぷり練りこんだソースがピリツとしておいしい。今日が良い天気でよかった。滝のほとりで鳥の囀りを聞きながらお弁当を食べるなんて、なんて気持ちいいだろう。お弁当を食べた後はゆつくりとお昼寝がしたいところだが、そういうわけにはいかない。夕方までに瓶を作ってしまったわなければ。

ジークが採ってきてくれた砂も乾燥させ、配合までの処理を済ませる。ラム石が全部なくなってしまう。こんなに大量に処理できるだろうか。

「ここからは、ずっと練成になるから、ジークはすきに休んでいてね。」

ジークは今回も見学するようだ。離れたところでこちらを見ている。なぜかヤグーも一緒に見学している。水でも飲んでりやいのに。

竈の材料投入口から、坩堝に一回分の原料を入れる。熱気が集中してここから出ているから、当然手で入れずに、練成空間を利用して挿入する。

竈では、薪が良い火力で燃えているが、もちろんこんな温度では砂は溶けない。もっと温度を上げる必要があるが、錬金術スキルで上げられる温度は、ろうそくの炎程度で、砂を溶かすほどの高温に上げることはできない。

ガラクタ箱に入っていた金属の小粒を取り出して火に入れる。

《火花》

空気中のものを燃やす成分と魔力を吹き込んで、スキルの力で金属の小粒を燃やすと、パチパチと音を立てて、赤やオレンジ、緑といった様々な光を放つ。

《来たれ、炎の精霊》

魔法陣が書かれた紙片を火にくべる。精霊魔術のスキルや、精霊

の力を借りるスキルをもっていれば、詠唱だけでも精霊を呼べるのだけれど、どちらももっていないマリエラは、魔法陣と、『炎』と『火花』の供物で精霊を招く。もつとも、こんな小さな火や火花では大した精霊は呼べないのだけれど。

炎がぐるりと揺らめいて、小さなトカゲの形をとる。

サラマンダーだ。なんて珍しい。

サラマンダーは有名な火の精霊で、本来こんな小さな火に宿ることなどない。高名なドワーフが契約したり、大きな炉に宿ったりする。こんな小さな炎では、ウィスプが来てくれれば御の字なのに。

ぱくり、ぱくりとサラマンダーが火花を食べる。

《火花》

おいしそうに見えるので、金属粒を足して火花を追加してやると、しっぽを振りながらぱくり、ぱくりと残さず食べる。

「ねえ、サラマンダーさん、力を貸してくれる？」

言葉は通じないのだが、こんなちっぽけな火花で力を貸してくれるか不安だったので聞いてみると、ゴウと火力が強くなった。どうやら力を貸してくれるらしい。

坩堝の中のガラスがどんどん溶けていく。

《練成空間、取り出し、冷却、加工・ポーション瓶、冷却》

《練成空間、材料投入、攪拌》

《火花》

溶けたガラスを取り出しては、次の材料を投入して攪拌、溶ける

までの間にポーション瓶に加工。

流石はサラマンダー、すごい火力だ。こちらに熱気が来ないように結界まで張ってくれて、作業はしやすいのだが、溶ける速度がウイスプとは段違いで、ものすごく忙しい。

しかも燃費が悪いらしく、こまめに火花を追加しないといけない。火花が足りないと、火力が下がるし、サラマンダーが小さなしつぱを、びたんびたんと縦に振るのだ。火花は金属粒の個数よりこめる魔力の量が重要らしく、多く魔力をこめるほど、しつぱを横にふりふり良い仕事をしてくれる。

ああ、薪が燃え尽きそうだ。慌てていると、ジークが薪を足してくれた。ナイスフォロー。サラマンダーもくるりと回って喜んでい

る。

下級、中級、上級の各種ポーション瓶をある程度作った後は、成型まで行わず、瓶1個分のガラス塊の状態で冷やしていく。忙しすぎてとてもじゃないが瓶まで成型できない。成型だけなら、ここまでの火力は要らないから、ちょっと魔力を食うけれど練成スキルだけでもなんとかなる。持ち運びにも邪魔になるから後回しだ。

材料を入れる、火花、溶かす、薪を足す、取り出す、火花、材料を入れる、火花、溶かす、薪を足す、取り出す、火花、材料を入れる、火花、溶かす、薪を足す、取り出す、火花……………

気が付くと、原料は全て無くなっていた。

まだ日は高い、そんなに時間は経っていないようだ。

「サラマンダーさん、ありがとう」

お礼を言って、残りの金属粒にたっぷり魔力をこめて火花を起こす。

サラマンダーは「もう終わり？」とばかりに首をかしげた後、ばくんと全ての火花を平らげた。

「すごいね。あっという間に終わったよ。ほんと助かった。」

ここが、人の領域だったら、このサラマンダーとも言葉が通じたのだろうか。獣っぽいから、通じないのかもしれないが、動作がなかなか愛らしい。

チリン

サラマンダーは「ぷっ」と、口から何かを吐き出すと、来たとき同様にぐるりと火を揺らめかせて消えていった。

「…………指輪？」

サラマンダーが吐き出したのは、虹色に輝くシンプルな指輪だった。火花に使った金属粒を固めて造ったのだろうか、どうすればこんな色合いになるのか。さすがは精霊。不思議なことをする。これをはめていれば、次も来てくれるだろうか。

指輪は右手の中指にびたりとはまった。なかなか綺麗だ。ありがたく貰っておこうと思う。

そこらじゅうに固めては並べたポーション瓶とガラス塊は、冷めたものからジークが麻袋につめてくれた。

すごい量だ。麻袋2個がパンパンになった。全部で300個分以上あるんじゃないか。

それにしても魔力があまり減っていない。あれだけ景気よく火花に魔力をこめたのに。サラマンダーよりずっと燃費の良いウィスプでも、これだけの量を造れたことはなかった。眠っている間に、魔力がずいぶん増えた気がする。今度、鑑定紙を買ってきて確認したほうがいいかもしれない。

日はまだ高かったけれど、想像以上に荷物が増えた。ヤグーの背にはガラスが詰め込まれた麻袋が2個と、プラナーダ苔が入った麻袋が縛り付けてある。いくら力持ちのヤグーでも、さらに2人の人を乗せるのは無理だろう。

採取をしながら、ゆっくりと帰ることにする。

このあたりの森は、人が入っていないようで、茸や薬草、木の実などが豊富に実っていた。採取しながら帰っていたら、ヤグーの背には蔓で縛った薬草や素材が山盛りになっていて、迷宮都市に着くころには日がくれかけていた。北門の衛兵さんは、マリエラ達のことを覚えていたようで、「大量だな！遅いから心配したぞ」と言ってくれた。

ジークとマリエラは『ヤグーの跳ね橋亭』の近くで別れた。ジークには荷物を降ろした後、ヤグーを返しに行ってもらった。マリエラは注文の薬草を受け取りに、『ガーク薬草店』に向かった。

通りには迷宮帰りの冒険者達が歩いていて、それなりに賑わっていた。『ガーク薬草店』もまだ開いており、ガーク爺さんが採れたての薬草を渡してくれた。袖で隠してはいたけれど、腕に擦り傷があった。採取の時の傷かもしれない。今度、よく効く傷薬でももってきてあげよう。

お礼を言っ店を出る。

冒険者らしき一団が、おいしそうな匂いをさせている料理屋に吸

い込まれていく。

彼らの中には回復職もいるのだろう。通りに大怪我を負った人は見られないが、ガーク爺のように小さな傷を負った人もいるだろうし、病気の民間人など『よく効く薬』が必要な人もいると思う。

(薬屋さんでも開こうかしら?)

そんなことを考えながら、マリエラは『ヤグーの跳ね橋亭』に帰った。

ポーション瓶（後書き）

スコップ担いで、びしょぬれになる作業に突進するのが、マリエラクオリティー。

ジークでなくヤグーにしがみつくのもマリエラクオリティー。

安定のヒドインぷりです。

注文と納品と（前書き）

重い感じのお話と、ポジションを作っているだけなので、面倒な方は読み飛ばし推奨です。

注文と納品と

『ヤグーの跳ね橋亭』には、ジークより先についた。採取した荷物は部屋に入れてあったから、ヤグーを返却してじきに戻ってくるだろう。食堂のカウンターで待っていると、店の女性がやってきた。

「ねえ、アンタ、薬師なんだろ？薬売ってくんないかい」

年のころはマリエラと同じか少し上程度。アンバーさんほどではないが、マリエラとは比べようがないほど色っぽいお姉さんである。

「もうすぐ迷宮遠征があるだろ、遠征後は繁盛するんだよ、アタシたち。だから準備しときたいんだけど、どこも品薄らしくってさ」

どうやら避妊薬をお求めのようだ。オツケーませとけ！得意分野だ！と言いたいところだが、マリエラが造れるのはポーションだ。たぶん効き目が強すぎる。今までどんなものを使っていたのか聞いてみる。

「え？ナントカって薬草の粉末だろ？あれを飲むか、煎じて洗浄液にしてただけど……」

思った以上に酷かった。そんなんじゃない、たいして防げないんじゃないかと聞くと、その時はその時と笑って言われた。何でも人口が伸び悩む迷宮都市の政策で、奴隷が妊娠した場合、産前産後の一定期間は仕事を免れ孤児院で過ごすらしい。生まれた子供は一般市民として孤児院で育てられる。母親は主の下に戻されるが、休みがもらえた場合には会うこともできるし、借金奴隷の場合、任期が終わ

れば引き取って一緒に暮らすこともできるそうだ。

マリエラも孤児院で育った。母には会ったことがない。母親に会える可能性がある分、迷宮都市の孤児たちは幸せなのだろうか。子供と暮らせる日を頼りに生きる母親もいるだろう。でも、そもそも望まぬ子ではないのか？過酷な日々の中、血のつながりにすぎるしかない者もいるだろう。

マリエラはなんともいえない気持ちになった。良いことなのか悪いことなのか、残酷なのか慈悲があるのか。

「どうしたんだい？」

マリエラが黙りこくっていると、アンバーさんがやってきた。

「や、なんかごめん。ムリ言っちゃったみたいでさ。」
薬を頼んだお姉さんが、アンバーさんに事情を話す。

「もう。マルローさんから、よろしく頼まれているお客さんなんだからね。」

マリエラちゃん、この子が変なこと頼んじやったみたいでごめんね。気にしないでいてくれるかい？」

「いえ、私こそごめんなさい。お薬作ります。効果は100%とはいかないけれど」

「そりゃ助かるよ。」「ありがとね、マリエラちゃん」

マリエラにできることは少ない。善悪の判断だって満足に行かない。

でも、今よりマシな避妊薬は作れる。ポーションではないから100%とはいかないけれど。(注1)

子がほしいなら飲まなければいい。

何事もままならない彼女らに、僅かに残された自由だと思う。

(錬金術師だつてばれない範囲で、なるべく効く薬を作ろう。)

マリエラはそう思った。

「ただいま、戻りました。」

ジークが帰ってきた。保証金の銀貨2枚をマリエラに差し出す。マリエラは1枚だけ受け取って、1枚をジークの手に残した。

「それはジークが持つてて。何か必要なものがあつたら使つて。あ、着替えとか日用品なんかは、別に買うから。明後日になつちゃうけど、それまで我慢してね。」

ジークはとても困つた顔をしている。そりやそうだろう。銀貨で買えるものは知れているけれど、安い金額でもない。好きに使つていいと言われても、ジークはおいそれと使える身の上ではないのだ。これはマリエラの自己満足だ。自分でも分かっている。それでも何かジークに自由になるものをあげたかつた。

「持つてて」

もう一度繰り返し返して、銀貨を持つジークの手を握らせた。

夕食を済ませると、マリエラはジークを残して先に部屋に上がった。お風呂に入るから、半刻ほどしてから上がって欲しいと伝えている。

なんだか辛気臭い気分になってしまった。こういう時はお風呂に限る。魔力に余裕があるから、今日も命の雫をたっぷり溶かしたお湯に浸かるう。

お風呂から上がって髪を乾かす。風呂桶には新しいお湯を張っている。

部屋にジークは戻っておらず、もしやと思って、ドアを開けたら、案の定、廊下に立って待っていた。

「……入っていいから。」

「はい」

はい、と返事をしたけれど、明日も廊下で待ってるんだろくな、とマリエラは思った。

とりあえず、ジークを風呂に放り込む。命の雫が溶かしてあって身体にいいから、しっかり浸かるように言い含める。風呂に入ったのを確認したら、すばやく服を回収する。

洗濯だ。ジークは着替えを持っていない。下着はあるがシャツもズボンも2日間着たきりだ。今日はヤグーで出かけて汗もかいている。洗わねば！

自分の分も洗濯物を抱えて、裏庭にダッシュする。水場の桶に放り込み、生活魔法の水を入れる。石けんでごしごし洗ったら、水を替えて濯ぐ。

《練成空間、遠心分離・超弱め》

錬金術をこっそり使って脱水しては、濯ぐのを繰り返す。

《乾燥》

生活魔法で乾燥する。生活魔法に『洗濯』や『濯ぎ』もあるのだが、どれも桶が必要で、水場の桶では少し小さい。『練成空間』の

ような不可視の容器を作り出すのは、それなりに魔力が必要で生活魔法の使用魔力量を超えてしまう。

洗い立ての洗濯物をもって部屋に戻ると、ジークが風呂場から顔をのぞかせた。

「はい、着替え。洗ってきたよ。置いてくね」

と手の届くところに置いて、寝室に戻る。着替えて部屋に戻ったジークは、ものすごく申し訳なさそうな顔をしていた。

「あの、すいません……」

やっぱりパンツを洗われるのは嫌だったのか。でも洗濯はまとめてしたほうが効率がいいし、何より、ジークにパンツを洗ってもらうのはマリエラのほうが恥ずかしい。次からはパンツは各自で洗うことにしよう。

2人で暮らしていくのは色々たいへんだな、とマリエラは思った。

寝る前に、今日入手した素材の処理をしまおう。

まずはアプリオレの灰汁抜き。錬金術スキルで時短もできるけれど、半日くらいじっくり灰汁を抜いたほうが良いものに仕上がる。

アプリオレは硬い殻に包まれた木の実で、殻の中身が中級クラスのポーションの基材になる。ただし、灰汁が物凄く、灰汁が残った分だけ効力が弱まる。処理に手間隙がかかる素材だ。中級クラスの基材に使える素材は他にもあるのだが、アプリオレが一番安価だ。しかも処理さえきちんとすれば、効果は他の素材よりも高くなるため、マリエラはいつもアプリオレを使用していた。

《練成空間、粗破碎、風力分離》

アプリオレを砕いて、風の力で軽い殻を分離する。

ガラクタ箱に入っていたガラス容器から、比較的大きなものを取

り出して、湯を入れる。トローナ鉱石を一滴みとアプリオレの実を入れて、温度が下がり過ぎないように加熱しながらつけておく。湯が黒くなってきたら、冷まして水洗いし、もう一度トローナ鉱石を溶かした湯につける。これを湯に色が着かなくなるまで繰り返す。

待ち時間の長い地道な作業だ。合間に他の素材の処理も行う。

次はルンドの葉柄。これは上級毒消しポーションの材料になる高価な素材だ。ガーグ薬草店でポーション1本分が銅貨60枚。迷宮都市以外なら銀貨1枚はするだろう。今回マリエラが購入した薬草の中では、ジークの脚の欠損修復に用いたニギルの新芽に次いで高価な素材だ。ニギルの新芽は1株からポーション1本分しか取れないが、ルンドの葉柄は1株からポーション20〜25本分取れるから、1株捕まえば大銀貨は堅い。

ルンドは毒沼に生息する植物型の魔物で、葉柄部分が浮きのようになっている。毒沼に浮かんで生息している。ルンド自体の戦闘力は低い。代わりに沼の毒を利用して近づく獲物を捕らえて、毒沼に引き込んで栄養にする。ルンドの表皮は毒沼の毒によって常に毒状態だが、葉柄にさまざまな毒を解毒できる中和組織を持っている。この中和組織のおかげで、ルンドは様々なタイプの毒沼に生息できる。

触れば毒を受ける沼地から、どうやってルンドを捕獲するのかが、一ク爺に聞いた所、なんと釣り上げるのだそう。安全な場所から竿をふり、引つ掛けては釣り上げる。すぐに浄水で洗ったあと、浄水につけておけば、ルンド自身の中和組織によってすっかり毒は消えるのだそう。驚いた。

ルンドの葉柄は皮をむいて、中の組織だけの状態で凍らせてある。温度を上げると痛むから、このまま低温を保った状態で乾燥させる。

《練成空間、温度制御、粉碎、減圧》

低温を保ったまま減圧すれば水分だけが昇華して少しずつ乾燥していく。

残りは今日採取した素材。プラナーダ苔は土を洗い流さないといけない。これは明日裏庭でやろう。

他の森で採取した素材をそれぞれ処理して、その日は休むことにした。

明けて翌日。今日はポーシヨンの納品日だ。張り切ってポーシヨンを作成していこう。

朝食を済ませ、部屋に引きこもって練成三昧！と思ったら、ジークがそわそわしている。

「なにか、お手伝いを……」

手伝えること、ないわ。どうしよう。遊んでいいよ、というところですがキョドって「洗濯を……」とか言い出した。いや、昨日洗ったばかりで汚れてないし。

ジークは仕事がないと落ち着かないらしい。ああ、そうだ。昨日採取したプラナーダ苔がそのままだった。

苔の処理をお願いします。

「生活魔法の水ではなくて、井戸水を使って土をキレイに洗ってね。根っこにも栄養があるから、なるべく干切らないように丁寧に。貴重なものだから、細かい破片もなるべく流さないでね。」

本当に貴重なものだから、自分で処理しようと思っていたけれど、苔の麻袋と適当な道具を渡すと、うれしそうにうなずいていたので、まあいいや。

さて、まずは低級クラスのパーション作成。デイジスとプロモミンテラから、魔物除けパーションを、キュルリケから低級パーションを、ジブキーの葉とタマムギの種から低級解毒パーションを作成する。低級クラスは作るのも簡単。材料もタマムギの種以外は、全て魔の森の小屋の畑から持ってきたもの。タマムギの種も畑で育てられるし、川べりでも採取できるものだけど、収穫時期が秋なので今は少し時期が早い。仕方がないのでガーク薬草店で購入したものを使った。

次いで中級。昨日から灰汁抜きをしているアプリオレの実を使う。いい具合に灰汁が抜けたので、中級パーションと中級解毒パーションの分を乾燥して粉にしたあと、命の雫を溶かした酒精で抽出する。

鬼棗の乾燥粉末も酒精で抽出。残渣を除いた後、ウロルの花の蕾を漬けて花の色が移ったら蕾を取り除く。漬ける時間が長すぎると失敗してしまうから、見逃さないように要注意。

キュルリケとキャルゴランは命の雫を溶かした水で抽出。この3種の薬液を混ぜて濃縮すれば中級パーションが出来上がる。

中級解毒パーションは、この3種の薬液にジブキーの葉、タマムギの種、フィオルカスの花の抽出液を加える。ただし3液の比率と混合手順が異なるから仕上げは別に。

一度に少しずつ色々なパーションを作るのって、時間もかかるしめんどろくさい。どばーっと同じのを大量に作ったほうが楽なんだ

よね。

最後に上級ランクのポーション。手順は一昨日ジークのために作ったのと大体同じ。と、その前に。上級ランクのポーションはポーション瓶に刻印が必要だった。

ガラクタ箱からルミネ石と魔石の粉を探す。後は昨日採取したスライムの酸とクリーパーの子株。予備のポーション瓶をクリーパーの粘液でコーティングして乾燥させたら、ルミネ石をほんの一欠けらとスライムの酸をちよびつと入れて振り混ぜる。魔石の粉を加えたらガラス用インクの出来上がり。これは危険なインクだから、瓶ごと練成空間で覆って必要な分しか作らない。表面に溝が彫ってあるガラスペンをクリーパーの粘液でコーティングして、インクをつけて上級ポーション用の瓶に『劣化防止』の魔法陣を描いていく。しばらく経つとインクの部分のガラスが溶けて溝に魔石の粉が残るから、最後に錬金術スキルで魔法陣の溝を周囲のガラスで埋めれば完成。

それじゃ上級ポーションを作りますか、と器具を取り出していたら、ジークが戻ってきた。プラナーダ苔を洗い終えたそうだ。大きな洗い桶を抱えている。苔はとても丁寧に洗ってあった。さぞや時間がかかったろう、と思って気が付いた。

お昼をとつくに過ぎていた。

注文と納品と（後書き）

注1）作中の避妊薬及びポーションは、実在する薬品等とは効果が異なるものです。本作はフィクションで、登場する薬品の効能は現実とは異なりますので、ご注意ください。

ジークムント：愚かさの代償

「ごめん、ジーク、おなかすいたよね？」

ポーションを作るのに夢中になって、昼ごはんを忘れていた。マリエラにとっては良くあることだが、忘れられたほうはつらいだろう。

「大丈夫です。三食、食べるなど、なかったですから。」

ジークが悲しいことを言う。おなかいっぱい食べていいんだよ。頬だってこけたまんまじゃないか、とジークの顔を見る。

「あれ？ヒゲ剃った？」

まだ、ナイフを買っていないので、今朝はジークのおヒゲがちよびちよびと生えていたのに、すつきりフェイスに戻っている。というか、表情がすつきりしている。なんかあった？

「はい。リンクスに、会いまして。しばらく、短剣を、貸してください。」

（おう、気が利かなくてごめんよ。そしてリンクスありがとう。）

食堂にリンクスの姿はなかった。昼食だけ食べにきて、仕事に戻ったのだそうだ。後でお礼を言わないと。

昼食は3色のパプリカと生ハムがたっぷり入ったオムレツに、カリカリのバゲットだった。具沢山のオムレツなので、結構どっし

りしている。生ハムのしょっぱさが卵の甘みと良くあっておいしかった。

遅めの昼食の後は、上級クラスのポジション作成が残っている。ジークに頼める仕事はもうない。午前の、仕事がなくてそわそわと落ち着かないジークの様子を思い出す。

「ジーク、昼からは、お願いしたいことがないの。身体も本調子じゃないだろうし、休んでいてほしいんだけど……」

「身体は、平気です。訓練を、しています。御用がありましたら、すぐに行きます。」

驚いた。朝は汚れ物もないのに「洗濯」とか言っていたのに。本当に何があったんだろう。良い変化には違いないので、「無理しないでね」と告げてマリエラは部屋に戻った。

マリエラ様の
(この恩に、報いるために……)

ジークムントは、リンクスから貸し与えられた短剣をぎゅっと握り締めた。

ジークムントは、魔の森に程近いとある辺境の村で生まれた。父は腕の良い狩人で、母は物心付いたときには他界していた。彼の一族には時折『精霊眼』と呼ばれる魔眼持ちが生まれた。『精霊眼』の加護は、遠見と遠距離攻撃の命中率増加、そして精霊視。精霊視は、精霊たちが望めば、微弱な精霊までも見ることができるといっておまけのようなものだった。父にも祖父にも現れなかった『精霊眼』は、ジークムントの右目に宿った。

『精霊眼』による遠見と遠距離攻撃の命中率増加の加護はすさまじく、ジークムントも歴代の『精霊眼』持ちと変わらず、放った矢は獲物の急所に必中し、若くして弓の名手として名を馳せた。

「『精霊眼』に恥じぬ人物となるように。」

ジークムントの父は、多くはない稼ぎから教師を雇い、ジークムントに教育を施した。その甲斐あって、ジークムントは村には珍しく読み書きや計算、礼儀作法を身につけた青年に育ったが、『精霊眼』と村人としては『特別な教育』は、ジークムントを驕った性格にしてしまった。

自分は、『『精霊眼』に相応しい、特別な人間』であると。

ジークムントの父がその思い上がり気づくことなく、狩りの最中に魔物に襲われ世界したことは、ジークムントの不幸の始まりだったかもしれない。

いつの時代も、若く才能に溢れた青年にとって何も無い辺鄙な村は退屈でしかない。父亡き後、ジークムントは村を出て、町で冒険者になった。

年の近い仲間とパーティーを組み、多くの魔物を討伐した。『精霊眼』を持つジークムントにとって、初級の冒険者が挑む魔物など敵ではなく、彼らは急激にランクを上げていった。

弓を引くほどに高まる名声、舞い込む金、群がる女たち。

自分が『精霊眼』に相応しい特別な人間であるという思いは、ジークムントの中で絶対の確信に変わっていった。

「誰のおかげで、Bランクになれたと思っている？」

事実、そんな台詞に仲間の誰もが反論できないほど、ジークムントは強かった。彼の矢に貫かれない魔物はなかったのだ。Bランクになるまでは。

ジークムント達パーティーの人間関係は対等なものではなく、強^ク者と下僕といった様相を呈していた。それは人間関係においてだけでなく、メンバーの強さにおいても当てはまる、歪なパーティーだった。

個々の戦力で見れば、Aランクに手が届くかというジークムントと、Cランク下位の仲間たち。才能の差は歴然で、戦えば戦うほどジークムントはより強く、より傲慢になっていった。暴君さながらのジークムントに、仲間の我慢はとうに限界を超えていた。

ワイバーンは尾に毒を持つ小型の亜竜で、Bランクの冒険者であれば問題のない魔物だった。盾役が注意を引き付けている間に、ジークムントが飛膜を破って機動力を殺げば、あとは地を這うトカゲと同じ。距離をとりつつ攻撃すれば容易に倒せる。ジークムントはそう考えていた。

「ひっ、ひいい……」

Cランク下位程度の実力しかないパーティーの盾役はしり込みし、ワイバーンを留めておけない。メンバーの連携もばらばらで、矢を射る邪魔になる始末。拳句にワイバーンは最も装備の薄いジークムントに狙いを定めた。

ワイバーンの装甲は厚く、ジークムントの矢は迫り来るワイバーンに致命傷を与えられない。ジークムントがワイバーンを倒し得たのは、食い殺そうと開かれた顎の奥に、たまたま矢を当てることのできた、それだけのことだった。

運が良かったのかはわからない。代償に、ジークムントは『精霊

眼』を失った。

『精霊眼』を失ったジークムントに、手を差し伸べるものはいなかった。彼のおかげでBランクパーティーとしての恩恵を受けたであろう仲間たちもジークムントの下を去っていった。名声はかつての仲間が流した悪評に変わり、稼げないジークムントに寄り添う女はいなかった。

享乐的にすごしたジークムントに十分な財などあるはずはなく、ワイバーンの素材を売って得たいくばくかの金を持って、ジークムントは帝都に赴いた。

帝都にいけば部位欠損を治すポーションが手に入る。

情報屋に金を払い、眼球の欠損を治す特化型の特級ポーションを作れるという錬金術師にたどり着いた。先払いだという代金は、金貨10枚。弓を、防具を質草としても到底足りない金額だ。しかし、『精霊眼』さえ取り戻せれば、稼ぎ出せない額ではない。ポーション代は借金をして工面した。

白いひげを蓄えた老齢の錬金術師は、金を受け取ると、弟子たちとともにポーションを作成して見せた。初めて見る複雑で高価そうな魔道具をあやつり、弟子たちがいくつもの練成を行う。老齢の錬金術師は、一つ一つに指示を出し、出来上がった薬品を混ぜ合わせ、完成のための魔法を行使する。

出来上がったポーションを受け取る。これでようやく『精霊眼』を取り戻せる。しばらくは金の工面に追われるだろうが、なに、少しの辛抱だ。俺にかかれば造作もない。

ジークムントはポーションを飲み干した。

『精霊眼』は戻らなかった。

「だましたのか！」

怒りに震え、飛び掛ろうとするジークムントを警備の兵が取り押さえた。老齢の錬金術師は不思議そうにジークムントの失われたままの右目を見ると、

「もしや、魔眼じゃったかの」と問うた。

「『精霊眼』は文字通り精霊が与えたもうた魔眼。その精霊の属する地脈から作られたポーションでなければ、治すことは不可能じゃ。そんなことも知らなんだか。」

「俺は『精霊眼』に選ばれたBランクの冒険者だぞ、こんなことが許されると思うのか！」

「ほっほ。Bランクの冒険者がこの帝都に何人いると思うておる。100人は下らんわ。」

ちなみに、Sランクは3名、Aランクは12名じゃったかの。知っておるか？ 特級ポーションを作れる錬金術師もこの帝都にはわしを含めて3名しかおらん。こやつらのように上級ポーションを作れる錬金術師は10名程度じゃ。丁度、Sランク、Aランクの冒険者と同じ数じゃの。で、そのBランク冒険者が何を言うておるのかのうっ。」

金を返せとわめくジークムントに、老齢の錬金術師はあざ笑うように答えた。同じBランクだという警備の兵に部屋から連れ出される際に、老齢の錬金術師はこう言った。

「『精霊眼』などという稀有な加護に恵まれながら、Bランクにしかねれなんだとは、愚かよの。」

ジークムントは魔の森のほとりの村で生まれた。200年前にエングルジア王国が滅びて以来、かの地脈に錬金術師は誕生していない。失われた『精霊眼』は二度と元には戻らない。

そのことをようやく理解したのは、酒に女に溺れ果て、借金の力に『借金奴隷』に落とされた後だった。

ジークムントを買ったのは、非道なやり口で財を成した^{せむし}僇儻の商人だった。商人は残忍な性格の持ち主で、ジークムントのような思上がった若者を痛めつけ、屈服させることに喜びを感じる異常者だった。

ジークムントの歪な自尊心など、半年も経たぬうちに跡形もなくなった。厳しい労働と、絶え間ない暴力、屈辱と飢餓の中で、生命をつなぐのが精一杯だった。任期を終えれば生き延びられる、ただそれだけの日々があと少しで終わるといふ時に、それはやってきた。

「迷宮都市と商売を行う」

ここ数年のうちに有名になった黒鉄輸送隊のうわさを聞きつけたのだろう、商人の息子が魔の森を抜けると言い出したのだ。僇儻^{せむし}の商人が止めるのもきかず、多少頑丈な馬車と、満足な武器も与えぬ奴隷達を従えて、商人の息子は魔の森に向かった。

数時間も経たずに黒狼の群れに襲われたのは、むしろ幸運だったかもしれない。重い足取りでジークムントは最後尾を歩いていた。古い短剣ひとつでどうやって魔物と対峙するのだ。

何かと呼ばれたような気がして顔を上げると、薄ぼんやりと光る何ものかが見えた。

(森の精霊か……?)

父から話を聞いたことがある。魔物と違って精霊は人を愛し、助けてくれる存在だと。幼い頃は森に溢れるほどの精霊が見えていたのに、そういえば久しぶりに見た気がする。

森の精霊はジークに向かって手招きをしているように見えた。思わず隊列をはずれ、森の精霊に招かれるまま森へと踏み込む。その時だった。黒狼の群れが商隊に襲い掛かった。

戦闘訓練もされていない奴隷達など、魔物の前では盾にもならない。奴隷達は見る間にのど笛を噛み切られ、食い殺されていく。馬車は破られ、商人の息子が黒狼に引きずりだされる。自分だけは重装備を着込んでいるおかげで、致命傷は避けられているが、執拗な攻撃に腕や脚の防具はひしゃげてはがれ、血が流れている。なにやら叫びながらじたばたとあがいているが、長くは持つまい。

逃げなければ。ジークムントは周囲を見渡す。森の精霊の招きに従い、隊列から外れたおかげで黒狼の初撃は逃れた。黒狼たちは倒した奴隷や商人の息子に貪りつくのに忙しいが、やせ細った奴隷達だ。じきに食い終り見つかってしまうだろう。

すつ、と森の精霊が腕を上げ、一方向を指し示す。指された先には、まだ傷の浅いラプトルが馬車につながれて逃げられずにいた。駆け寄って短剣でくびきを断ち切り、ラプトルに騎乗する。すれ違いざまに商人の息子を引き上げる。

ジークムント一人戻っても命はないだろう。だが商人の息子を助ければ。商人の息子を助けたのはそんな打算からだった。

獲物を奪われた黒狼が追ってくる。鞍も手綱もないラプトルにしがみつき、出口に向けてラプトルを駆る。飛び掛る黒狼を切り捨て

ようと短剣を振るうが、剣の心得もなく、不安定な騎乗状態だ。当てることもできず、逆に噛み付かれる。

落としそうになる短剣を何とか左手でつかみ取り、右腕に噛み付いた黒狼につきたてる。

「ギャウツ」

一匹は振り落とせたが、まだ何匹も追ってくる。口から泡を吹きながらラプトルが駆ける。かまれた右腕に力が入らない。体ごとラプトルにしがみつく。流れる景色に目をやると、淡い光が道からそれた右のほうを指差す。

「ままよ」とばかりに、森の精霊の指し示す方にラプトルを進める。黒狼の距離はますます近くなり、左方向から迫ってきた黒狼は左脚のふくらはぎに喰らい付く。振りほどこうと脚を振り回すと、そのまま肉を噛み千切られた。

「ぐあぁっ!」

焼け付くような痛みを意識を手放しそうになる。傷口から滴る血潮に黒狼が狂乱する。止血をする暇などない。

《ファイヤ》

自らの脚を焼く。普段は魔法さえ自由に使うことを禁じられている。僣^{せむせ}の商人の利益のために、全ての魔力を使うためだ。肉を焼く臭いと、壮絶な痛みに視界が真っ白になる。

再び飛び掛る黒狼。これまでかと諦めかけたその時、黒狼との距離がすっと広くなった。

(聖樹?)

魔の森に不釣り合いな、若々しい苗木が芽吹いていた。

聖樹とは、魔物を寄せ付けない神聖な木で、世界のいずこかにある世界樹の苗木とも言われている。他の樹木に比べて成長が遅い上人の手で植樹すると枯れてしまう。どのようにして増えるのか分か

つてはいないが、魔の森のような瘴気の濃い場所でも、人知れず生えていたりする。この木の袂で休めば魔物に襲われることはなく、旅人に一時の安寧を与えてくれる。

黒狼は苗木を遠巻きにしながら追ってくる。三たび浮かび上がった森の精霊が、別の場所を指し示す。間違いない。助かる道を示している。精霊の指し示すまま夢中でラプトルを駆る。黒狼のうなり声が近づいては遠ざかる。どれくらい経ったろうか。

ジークムントと商人の息子を乗せたラプトルは、魔の森を抜けていた。

商人の息子を助け、何とか生き残ったジークムントだったが、商人の息子のために呼ばれた回復術師に、表面だけの軽い回復魔法をかけられただけで、そのまま馬小屋よりも不衛生な奴隷小屋に放り込まれた。黒狼の牙には瘴気毒がある。回復魔法で表皮がふさがっても、皮下では傷が癒えることなく、じくじくと痛み続ける。痛みと高熱に意識は混濁する。

目を覚ますと、自分が商人の奴隷小屋と違う場所もといたところにいることに気づいた。水と食料を与えられる。家畜の餌のような雑穀で、冷え切ってはいたが、死なないために食えるものは何でも食べる。高熱で弱った体が食べ物を受け付けず、吐いては食べ、食べては吐く。

「なんと卑しい。」

身なりの整った、見慣れない男がゴミを見るような目でジークムントを見ていた。

「回復術師から、虐待を受けている借金奴隷がいると聞いて保護し

てみたものの、これではまるで野良犬以下だ。人の言葉が分かるとも思えんが、告知義務があるのでな。よく聞けよ、犬。お前の元主偏悽の商人はお前を訴えたぞ。息子を守らず怪我をさせて逃げおおせたと。この罪により、お前は犯罪奴隷になった。」

熱で頭が働かない。何を言われているのかわからない。まだ生きてはいるけれど、助かったわけではないのだと、ジークムントはうつろな頭で理解した。

ジークムント：短剣（前書き）

残酷な描写、不衛生な表現があります。ゲロ注意。

ジークムント：短剣

死にたくなければ、『ふつう』に振舞え。

奴隷商人らしき男の命令に従い、ジークムントは何とか立っていた。

大柄の男がなにやら商人と話をし、ジークムントを含め何人もの奴隷を購入していった。

腰布だけの姿にされ、両手を前で縛られたまま、男女別に鉄板を張り巡らした馬車に積み込まれる。「黒鉄輸送隊だ。迷宮都市に連れて行かれるんだ。」誰かがそう言っていた。

帝都を離れ、最初の4日は日に一度馬車から出してもらえた。その時に用を足し、水魔法で洗浄され、食事代わりにヤギの乳を与えられた。ヤギの乳には豆や穀物を砕いたものが入っていて、うまいものではなかったが、ジークムントはわずかに体力を取り戻すことができた。

5日目に魔の森に入ったらしい。装甲馬車は激しく揺れた。昼となく夜となく、魔物が襲いかかる。走行を邪魔する魔物だけ排除しているのだろう。馬車は一度も止まることなく走り続けた。日に一度、ほんの僅かな時間だけ馬車が止められ、皮袋に入ったヤギの乳を飲まされる。用を足す時間は与えられない。装甲馬車の床はすのこ状になっており、皆そこに垂れ流す。激しい揺れと饅えた臭いに吐き戻す者が後を絶たず、すのこの下に溜まったモノが馬車が揺れた弾みで飛び散り、頭から降りかかる。

真つ暗な馬車の中、常に聞こえる魔物の声、戦闘を思わせる馬車

の揺れに、魔物の牙や爪が装甲馬車につきたてられる衝撃。恐怖と、余りにも不快な環境の中、怪我と高熱で朦朧とする意識。気がふれそうになるたびに、森の精霊の姿を思い出す。姿といってもあやふやな、輪郭だけの淡い光の存在。あの光がジークムントをかるうじて正気に留めた。

荷台の扉が開けられる。「出る」と命じられ、馬車から降りる。

3日ぶりに降り立ったそこは、牢を思わせる石の扉に囲まれた場所だった。

一列に並ばされ、水をかけられ、「洗え」と命じられる。水は少なく、汚れを落とすというより、臭いを抑える程度の役割しか果たさないが、それでもありがたい。次いでやってきた男に状態を確認される。脚を棒で突かれ、激痛の余り前のめりに倒れる。見ると、黒狼に噛まれ、焼いて血止めた左脚は黒く変色し、倍近いサイズに腫上がっていた。

別の男が髪をつかんで引き立てる。逆らう体力もない。体のあちこちにある傷や傷跡を、棒で突いては確認されていく。あまりの痛みにつめくことしかできない。

確認が終わったのか、しばらくすると大柄な男と腹の出た男が話を始める。

肉壁、鉦山、欠損の男娼、そんなものにすら、なれないのだと男たちは話し合う。

(死にたくない……しにたくないしにたくないしにたくない)

がくがくと体が震える。

これほどいたいおもいをして、これほどくるしいおもいをして、これほどおそろしいおもいをして、それでもしななかつたのに、しにたくない。しぬのはいやだ。

この恐怖を、混乱を、真つ暗な絶望を、救ってくれたのは一人の少女だった。

少女のものとなった隷属しゆじの焼印を刻まれたあと、再び馬車に乗せられて運ばれる。

「着いたぞ、降りろ」

ジークムントを馬車から出した男が、「お前の主人の持ち物だ」と言つて、枯れ草の束を手渡し、「その水場で身体を洗え。」と水場を指し示した。

言われたとおり、水場に向かう。清潔な井戸水が汲めるようだがぶがぶと腹が膨れるまで飲む。たとえ泥水でも飲む時に飲まなければ、次にいつ水を口にできるかわからない。桶に水を汲み、頭から被る。身体を洗うなど何日ぶりだろう。熱のせいか身体は酷く寒いのに、脚や腕の傷は焼けるように熱い。痛みをこらえて急いで洗う。

足音と話し声が聞こえて、水場の陰からのぞくと、『ご主人様』となつた少女が見えた。あわてて腰布で身体を拭いて、枯れ草の束を持って向かう。

前の『ご主人様』だつた僇せむしの商人は、待たされると酷く怒り、何度も鞭を振るつた。言われるままに体を洗い、勝手に水まで飲んだのだが、少女に命じられたわけではない。勝手なことを怒られるかと思つたが、少女は何も言わず付いて来るように言つた。

少女に伴われて建物の中にはいる。どうやら宿屋らしい。そのまま部屋まで連れて行かれる。歩きたびに左脚に引きちぎれるような痛みが走る。熱のせいだろうか、呼吸が苦しく意識が飛びそうにな

るが、左脚の痛みで正気に戻る。

まだだ。まだ駄目だ。倒れてはいけない。大丈夫だと、使い物になると思ってもらわなければ。俺は大銀貨2枚だと言っていた。大銀貨2枚など、まともな武器すら買えない値段だ。そんなもの、壊れてしまえば修理などせず捨ててしまっただろう。

部屋に入ると座れと言われたが、左脚が腫れてきちんと座れない。僣僂せむしの商人ならば「座ることすらできんのか」と鞭打たれたのだろうが、この少女は何も言わず、何とか座るまで待つてくれた。

「私は、マリエラと言います。貴方のことはジークとよんでいいかしら？」

隷属契約で貴方は私の命令に逆らえない。これはあっている？」

新しい『ご主人様』は『マリエラ』様と言うらしい。

「はい。好きにお呼びください。ご主人様。

この様な不具の身を拾って頂いたご恩は決して忘れません。

どの様なご命令にも背きません。何なりとお命じください。」

前の『ご主人様』だった僣僂せむしの商人に何度も言わされた台詞を述べ、額を床に擦り付ける。

「犬」「豚」「ゴミ」「屑」。どのように呼ばれようとも、「はい。」と答え、「好きにお呼びください。ご主人様。」と付け加える。

家畜より酷い、僅かな食事エサを与えられるたびに、「片目の無い、不具の身を拾って頂き、ありがとうございます」「ご恩は決して忘れません。」と繰り返す。

倒れるまで、いや倒れても繰り返される命令は、「どの様なご命令にも背きません。何なりとお命じください。」と「ありがたく承る。」

顔を上げてはいけない。額を地面に擦り付け、『ご主人様』が去るまで動いてはいけない。

立つこともできないほど鞭打たれたくなければ、せむし 僂人の下で、嫌というほど思い知らされた。なのに。

「マリエラと呼んで。顔をあげてよく見せて。」

新しい『ご主人様』は、顔を見せろという。おそろおそろ顔を上げる。髪がべたりと顔に張り付く。これでは顔が見えないから、あわてて髪をかき上げる。

新しい『ご主人様』の手が上がる。殴られる、と反射的に体がこわばれる。今まで振り上げられた手がそのまま下ろされたことなどなかったから。しかしその手は、ゆっくりと、本当にゆっくりと動かされ、ふわりと、ジークムントの顔に触れた。

(やわらかい。ひんやりとして、きもちがいい……)
『精霊眼』があった右目に触れ、残された傷跡をなぞる。

その手は、未だに熱を持ち、うずき続ける右腕に触れる。何にやられたのかと問われたので、黒狼と答える。そういえば、傷に触れてくれたのも、ジークムントの怪我の原因を聞いてくれたのも、新しい『ご主人様』が初めてだ。醜く変色し、腫上がった脚も丁寧に見た後、

「まずは、傷口の洗浄をします。」と言った。

新しい『ご主人様』が作り出した薄く光る水がかかるたび、うず

き続けた傷から痛みや熱が消えていった。腕も脚も。あれほどの激痛がうそのように消えていく。この不思議な水が放つ光は見たことがある。

彼女は、迷宮都市には絶えて存在しないはずの、『錬金術師』だった。

エンダルジア王国滅亡の物語は、御伽噺のように語り継がれている。栄華を極めた王国に迫り来る魔物の群れと、立ち向かう英雄達の悲劇の物語として。立ち向かう勇者たちを、王国の民を平らげ、さらには魔物同士で喰らいあい、最後の残った一体は、地脈の精霊を飲み干して、後には迷宮が生まれたと言われている。王国から逃げ延びた人々は、再びエンダルジアに集ったが、その地で精霊の声を聞くことはできなかった。

最後の錬金術師が亡くなってからおよそ100年、この地に錬金術師は現れていない。彼女を除いては。

まるで奇跡の物語のようだとジークムントは思った。そして、彼女にとって彼女は、まさに奇跡のような存在だった。

蔑まれ、汚物のように扱われ続けた身体を、その手で清め、ポーションを与えた。温かい食事を与え、感極まって泣き出したジークムントをやさしく抱き寄せた。獣のようだった姿を整え、人間らしい衣服を与えた。奇跡の御業で、喰われた脚を、積み重なった古傷を癒した。

全てを失った己であったが、素晴らしい主を得た。慈悲深い、奇跡の体現者だ。

（俺がのろまなせいで、洗濯までさせてしまった。雑用など、俺が

するべきだった。けれどお怒りにならず、仕事を与えてくださった。貴重な素材だとおっしゃった。大切に洗わねば。」

「よう、ジーク。昨日ぶり。」

「リンクス、様」

プラナーダ苔を洗うジークムントの前に、リンクスが現れた。いつの間に近づかれたのか、気がつかなかった。

「リンクスでいいって。柄じゃねえ。それよりさ、脚治ったんだ。良かったじゃん。」

リンクスの糸のような目がすつと開いて、続ける。

「特化型の上級ポーション。」

「なっ。」

マリエラ様と黒鉄輸送隊の商談に、リンクスはいなかった。内容はディック隊長とマルロー副隊長以外知らされていないはず。なぜ、リンクスが。

「ジーク、お前何やってんの？」

動揺を見せるジークムントに、リンクスが鋭い視線を投げかける。「カマかけたんだよ、馬鹿が。さっきだって、ぼへつと暢気に洗い物か？今なら簡単にマリエラを攫えんぞ。」

「あ……」

ジークムントは慌ててマリエラのいる2階の隅の部屋を見上げ、探知魔法でマリエラの魔力を探る。大丈夫だ。ちゃんという。周囲に不審な反応も無い。

「やればできんじゃない。お前戦えるんだろ？」

「目……、目を失って、弓が……。」

しどろもどろと、言い訳をするジークムント。リンクスは、「はあ」と大きくため息をついた後、ジークムントの胸倉をつかみ、まくし立てた。

「お前、何様？」

マリエラ、変わった術を使うみてえだけど、お前、アイツがそんな特別に見えんの？隙だらけじゃん。あんなもん持ってるのに、危機感ゼロなんじゃね？危なっかしくて見てらんねーってのによ、お前まで氣イ抜きやがって。

ナニ？お前にゃアイツが女神様かなんかに見えんの？命を救ってくださった救世主様とかよ？その一個しかねえ、目ン玉でよく見てみるよ。ただの、どんくせえ女じゃねえか。

しょうもねーカマ掛けに簡単に引っかかりやがって。秘密が漏れて厄介なのに狙われたらどうすんだ。また救世主様が助けてくれるってか？違^{ちが}うだろ。お前の仕事なんだよ。

何が目が一個じゃ弓が射れませんだ。ボケ。弓なんざはなっから護衛の役にやたたねえよ。別の武器使^{エモ}やいいだろうが。もう、動くんだろ？その右手。どんだけ貴重なモン使^{エモ}って貰^{エモ}ったと思^{エモ}ってやがる。」

ドン、とジークムントの胸にリンクスがこぶしを突きつける。その手には一振りの短剣が握られていた。

「貸しといてやる。使えねえとかめかすなよ。使えるまで練習しやがれ。」

この街に、ソレがホーシヨウ無くして死んでいったヤツがどれだけいると思っ
てやがる。そいつらの分も血反吐はいてモノにしる。甘えんな！」

ジークムントに無理やり短剣を渡すと、リンクスは裏口に消えて
いった。

(俺は……、俺は、また間違うところだった……。)

素晴らしい主だ、奇跡の体現者などと、マリエラを『特別な主』
だと思おうとした。いや、『特別な主に出会えた、特別な自分』だ
と思いたかったのだ。マリエラは、特別な力を持った、しかし、平
凡な少女だ。

愚かさの代償をあれ程払ったというのに、ちっとも成長できてい
ない。

(だが、気づけた。リンクスが教えてくれた。)

預けられた短剣をぎゅっと握りしめる。今後こそ間違うまい。全
てを与えてくれたマリエラを守りたいという気持ちに偽りは無い。

ジークムントは漸く前を向いて歩き出した。

2人の関係

「かんせーい！」

うーん、とマリエラは伸びをする。昼食の後、上級ポーションと上級解毒ポーション、いくつか自分用のポーションや試作品を作成し、密閉と劣化防止の魔法陣を刻んだスタンプを作った。なんだかノッてきたので、ポーション類のラベル用のスタンプまで作ってしまい、たった今、全部のラベルを貼り終えたところだ。夢中になり過ぎるのはマリエラの悪い癖だ。時間いっぱいまで作業してしまっ

た。

「疲れたときの一本！改良型！おいしいポーション！」

ただの下級ポーションに甘味を加えてみたものを、ぐいーっと飲み干す。

「ぐえっ、げほっ、げほっ。まつず！！！」

甘くて飲みやすいポーションをと、屋台で買った乾燥杏や、昨日森で採取した甘みの強い果実のペーストを混ぜてみたのだが、さらりとした果汁の甘い飲み口の後、果実類のアクや渋みと薬草の苦味が口に広がり、ねっとり喉に絡みつく。ポーションの回復量を上回る不味さだ。

「どござ。」

いつの間にか戻ってきたジークがお茶を差し出してくれた。こち

らはおいしい。今回の『おいしいポーション』は失敗だったが、次こそは。懲りないマリエラが、ちびりちびりとお茶を飲んでいる間に、ジークはマスターに貰ったというワイン箱に、ポーションを収納し、材料やら、機材やらを片付けてくれた。

マルロー副隊長達が到着していると聞き、ポーションを収めたワイン箱を（ジークが）持って、マルロー副隊長の部屋に向かう。中にはディック隊長とマルロー副隊長が待っていて、ポーションの入った箱を渡すと、ポーション鑑定用の魔道具で中身を確認し始めた。ポーションは時間とともに劣化するので、こういった鑑定用の魔道具はポーションを販売している道具屋などによく設置されている。大まかな種類と劣化度が分かる程度の簡易なもので、さほど高価な道具ではない。

「これは素晴らしい。まるで作りたてのような劣化の低さだ。」
マルロー副隊長が感嘆の声を上げる。

（そうでしょうとも。さつき完成したばかりですから。）
全てのポーションを確認した後、マルロー副隊長はトレイに代金と書面を数枚乗せて持ってきた。

「中級ランク以下の代金と、受領書及び領収書、上級ランクの預かり書です。」

中級ランク以下の代金で、金貨が12枚と大銀貨が6枚。マリエラにとってはとんでもない大金だ。書類の指示されたところに署名する。というか、こういった書類はマリエラが用意するものではないのだろうか。きちんとした取引の仕組みが分からないので、作れ

といわれても困ってしまうのだが。「お気になさらず」と言ってくれたので、ありがたく甘えておくことにする。

「上級ランクの代金は、先方から受領したのちにお渡しします。ところで、本当に、安く譲ってもいいのですか？」

マルロー副隊長が念を押してくる。中級ランク以下でこの価格だ。10年も市場に出ていない上級ランクなど、売り先や売り方によっては、とんでもない値段がつくのだろう。

「ちゃんと使ってくれるなら、かまいません。また買って下さいとお伝えください。」

マリエラとしては中級ランクと同額でもまったく問題が無い。余り高額だと、良心が痛んでしまう。ちょっと高め位のお値段でいいから、たくさん買ってくれると有難い。

「また、ですか。いかほどお譲りいただけるのやら。」

「じゃんじゃん作るよ！」と答えそうになったが、おりこうぶって、「たくさんです。」とにこやかに答える。いや、これでも十分バカっぽいのだが。

瓶を作るのは面倒くさいが、ポーシヨンの材料は手に入りやすい。ガーク薬草店のように、多種多様な材料が棚に満載された工房を構えて、練成三昧してみたい。想像しただけでわくわくする。

表立ってポーシヨン店を開くことはできないだろうが、今日受け取った金貨を元手に、薬屋を開くというのも楽しそうだ。

これからどうするのか、というマルロー副隊長の問いに、「薬屋を開きたい」と答えた。

「それならば、商人ギルドに行くの良いでしょう。薬師として住民登録すれば、店舗や住宅を斡旋してもらえます。」

良い情報を聞いた。明日早速行ってみよう。

「良い取引だった。早速かんぱ…」ポーションを届けに行きますよ。
「…、今度な！」

(ディック隊長、漸く口を開いたと思つたら、ソレですか。)

大柄なディック隊長は、ポーションの入った箱を抱えて、マルロ
ー副隊長の後をてくてく付いて出て行った。

「ジークさんに、オハナシがあります。」

夕食を済ませ、部屋に戻ったマリエラは、ジークを椅子に座らせて話を切り出した。

「迷宮都市は奴隷の人が他の街よりもたくさんいますが、やっぱり、私のような平凡な小娘が連れているのは珍しいそうです。」

迷宮都市は、険しい山脈と魔の森に阻まれた陸の孤島。一般人の往来は極めて少ない。迷宮の氾濫を防ぐために、定期的な討伐が行われ、その度に少なくない命が失われる。

娼婦や奴隷の出産が奨励され、生まれた子供は孤児院で育てられ

るが、後ろ盾の無い彼らの殆どは、成人後に冒険者が兵士として生計を立てる。どちらを選んでも、魔の森や迷宮からの魔物の氾濫をスタンピード防ぐ討伐要員となる。

迷宮都市を管轄する辺境伯からも軍隊が派遣される他、帝国の冒険者ギルドから上級冒険者の強制派遣もされているが、これらをおわせても迷宮と魔の森を抑えるには戦闘職の数が足りない。

食料の確保も重要で、城壁内だけでは必要量を生産できないから、魔物が現れる城壁の外にも穀倉地帯が広がっている。衛兵が定期見回りを行い魔物の駆除を行ってはいるが、そんな危険な場所で農業を行おうという一般市民はいない。

こういった人手不足を補うために、迷宮都市には帝国中から奴隷達を送り込まれる。奴隷の占める比率は帝国内、いや近隣諸国のどの町よりも多いが、死ぬ確率が極めて高い場所であるため、奴隷の多くは犯罪奴隷や終身奴隷といった「人権の無い」者たちだ。

当然彼らの意識や品性は低く、一般市民には御しきれない。彼らはまとめて管理監督に長けた「スキル持ち専門職」の指揮下で、スキル持ち「食料生産局」や「討伐軍」、「鉱山」といった、官営の職務に就く場合がほとんどだ。

ごく一部の更生可能な「優良」な者たちは、民間で「取引」されるが、「スキル持ち専門職」とまで行かなくても監督者が必要であるため、複数の労働力を必要とする大商店等や、「夜の相手」をするお店、「娯楽」として奴隷を収集する貴族の屋敷が大半で、中小規模の店舗では監視の目が無くても業務を全うしてくれる一般市民を雇用する個人で奴隷を所有しているのは、上級冒険者が荷物持ちとして連れられているくらいのもので、あまり見かけるものではない。

マリエラのような、何処にでもいそうな娘が奴隷を連れてくるこ

とは、まず無い。

アンバーさん曰く、

「迷宮都市の外から女の子が来たってだけでも珍しいのに、ジークは結構イイ男じゃないか。」

そんな男にかしずかれて、二人で暮らすなんて。どんな関係か気になっちゃうわね。」

だそうだ。

ポーシヨンが創れるという秘密があるのに、目立つのはとても困る。

「と、言うことで、ジークには今から普通に接してもらいたいと思います。あと、二人の設定も決めようと思います。」

ずびし！と宣言するマリエラ。異論は認めないのだ。

「設定ですか……」

「はい！言ったそばから。敬語禁止！

私のこともマリエラで！『様』とかつけちゃ駄目だから！

魔の森のほとりにある小さな村の出身で、兄妹とかどうかな？」

「兄妹……、似てませんよね？」

「う……。きよ、兄妹同然の幼馴染とか？」

「一緒に暮らす幼馴染ですか……」「ジーク、敬語きんしー」…それって、

恋人同士ではないのか。マリエラ？」

「ぐはっ！」

なっ、ななななにをおっしやるんですかな、ジークさんや？この
タイミングで呼びすて？

言い出したジークの口元が緩んでいる。

かつ、からかってるな！ちよつと年上だと思って！

「兄弟同然の幼馴染ですー！わかった？ジーク！」

真っ赤になつたマリエラが言い返すと、ジークはにやりと笑って、

「わかったよ、マ・リ・エ・ラ」

と言った。なんで、名前マリエラ強調するかなー。

ジークが魔の森のほとりの辺鄙な村出身ということで、マリエラ
も同じ村の出身者だということにした。

「グレて奴隷落ちした幼馴染を追いかけて、迷宮都市までやってく
るとは、ワタクシ、マリエラ、マジいいやつ！」

なんか、主人公ばいよね！冒険が始まったりしそつ！戦えないけ
ど。」

ナイスな設定だと思ってそう言つと、ジークが「ぶはっ」と吹き
だした。

ジークが笑うところを初めて見た。楽しそつで何より。

なんか腑に落ちないというか、むかつくので、「お風呂に入るか
ら、食堂に行つてて！」と追い出した。幼馴染なんだから、お風呂
に入るときは席をはずして当然だ。うん。おかしくないよね。

翌朝。

「おはよう、マリエラ」「おはよう、ジーク」

ナチュラルな挨拶で一日が始まった。

食堂に下りてエミリーちゃんに朝食を頼む。今日のエミリーちゃんは髪を二つに分けて、頭の高い位置でくくっている。自分で結んだのだろう、髪がくしゃっとなっているし、左右で結び目の高さが微妙にずれている。結びなおしてあげると、「ありがとー！お礼にいつぱいよそつてくるね！」と言ってくれた。

宿のマスター
お父さんは、アンバーさんたちの仕事が終わる夜明け前まで起きているので、エミリーちゃんは朝早く一人で起きて、宿泊客の朝食を準備するのだそうだ。10歳だというのに、なんて賢い。

「悪いお客さんもいるから、みんなのお仕事が終わるまで、父ちゃん起きてるんだって。父ちゃんのおかげで、みんな安心だって言ってた！だから、エミリーもがんばるの！」

髪はまだ上手に結べないんだけどね。そう言って、厨房へ走っていった。

なんて偉い子だ。と感心していたら、リンクスが起きてきた。頭が寝癖でぼさぼさだ。

「エミリー、俺もメシー。大盛りでー。」
厨房にそう叫んで、マリエラたちの席に座る。大あくびをしながらお腹をぼりぼり掻いている。いい年なんだから、キミはもうちょっとちゃんとしなさい。

「昨日、隊長たちに付き合ってたら、遅くなつてさー。」

ポーション運搬の護衛をしていたのだろう。

朝食を食べながら、黒鉄輸送隊が迷宮都市にいる間、何をしているのか聞いてみる。

到着翌日は基本休日で、装甲馬車の修理や自分たちやラプトルたちの休養に当てるが、2、3日目は2組に分かれて帝都に運ぶ品の仕入れと、次に積んでくる品物の商談を行っていたそうだ。4日目となる今日は、食料などの買い付けや出発の準備を行い、明日の早朝に、再び帝都へ出立するのだという。

魔の森を3日かけて走りぬけ、森を抜けてから帝都まで4日。帝都でも4日かけて休息と仕入れを行ったら、また魔の森を抜けて迷宮都市へ。戻ってくるのは18日後の日暮れ時だろうか。

「大変だね。無事に戻ってきてね。」

「おう。でもさ、今回は『秘密兵器』があるから、うまく行けば16日後の日暮れ時に戻ってこれるさ。」

周りに聞こえないように、小声でリンクスが教えてくれた。マリエラたちが『薬屋』を開くつもりだと話すと、

「帰ったら、遊びに行くから。待ってて。」

そう言って笑っていた。

別れ際、なぜかリンクスはジークの胸の辺りに、『ドン』と拳を当てていた。ジークはリンクスを見て、うなずいていた。なーに。なんなの？これが『どんな関係か気になっちゃっわ。』ってヤツですか？マリエラは、むむむと首をかしげた。

2人の関係（後書き）

迷宮や魔の森で再びスタンビートが起こると、帝国も周辺諸国も大打撃を受けます。

メンドウを辺境伯に押し付けている自覚があるので、周辺は結構協力的で、犯罪奴隷や終身奴隷くらい気前よく送り込んでくれます。厄介なところに厄介なものを放り込んでいるだけとも言えますが。

薬師試験

「また、未許可の薬師によるトラブルですか。」

商人ギルドの薬草部門長室で、エルメラ・シールはため息をついた。茶色の髪の毛を前髪まで後ろでひとまとめにひつつめて、細いめがねをかけた30代前半の女性だ。首元までしっかりと覆ったその長い紺色のワンピースを着込んでおり、僅かにのぞく脚はブーツで隠されている。手も手袋で覆われていて、露出しているのは顔くらいのものだ。

化粧も申し訳程度に引いた口紅だけで、髪の色も服の色も落ち着いた色合いのため、女性らしい華やかさは感じられない。

お堅く優秀そうな雰囲気と、若くして薬草部門長となった実力から、彼女を敬遠するものも多い。迷宮都市で薬草を取り扱う大商会「シール家」の長女であるから、『嫁の貰い手の無い彼女をそれなりの地位に就けたのだ』、と陰口を言うものもいる。

「やっぱり試験が難しすぎるんですよー、エルメラさん。難易度下げて薬師を増やしましょうよー。」

「何を言っているのですか、リエンドロさん。ただでさえ迷宮都市にはポジションが無いのです。質の低い薬師を増やしてどうします。薬の質を向上させなければ、死亡率は上がりません。大体、あの試験問題は、中級ランクのポジションが作れる錬金術師なら合格できる難易度です。」

「中級ランクって、冒険者ランクに当てたらBランクでしょー。」

冒険者はFランクから始めるものなんですよ。それを、Bランクの知識がないと薬師させませんとか鬼ですかー。

錬金術師は居ませんけどね、錬金術スキルをもっている人は居るんです。レベル低いままでも乾燥と粉碎くらいは使えるの知ってるでしょー。そういう人に薬師になってもらつて、徐々に勉強してもらつたらいいじゃないですかー。」

「勉強ならば、薬師にならなくても出来ます。商人ギルドの図書室では、『薬草薬効大辞典』をはじめ我々、薬草部門が総力を挙げて編集した薬草に関する書物が無料で閲覧できるのです。薬師を目指す若者のために、講習会だつて定期的に開いていますし、働く必要があるのならば、商人ギルドの認可した薬草店に弟子入りし、薬草の知識を得ながら働くことだつて出来ます。」

「『薬草薬効大辞典』で、薬草の特徴やら薬効やら抽出法やらがちつさい字でページいっぱいにみっちり書いてあるやつですよ。あんなの読んだら、3分で寝ちゃいますよ。ちなみに僕の最短記録30秒です。『薬師やるっかな』つてフンワリ考えてる若者が読むわけ無いじゃないですか。エルメラさんみたいに頭いい人ばつかじゃないんですつてー。ゆっくり育成していきましようよー」

リエンドロと呼ばれた30代後半の男性は、エルメラの部下の人だ。自分より年下の女性の上司だが、彼を始め、薬草部門の人員にエルメラに対する不満は無い。エルメラの実力が本物であることを、分かってるからだ。

丁寧な言動と絵に描いたようなキツチリとした外見が、取っ付き難い印象を与えるが、付き合つて見れば、気さくで付きやすい人物でもある。まじめ過ぎるところもあるが、率直に意見を言え、それに耳を傾ける度量もある。みんなで頑張つていこう、と思える上司は多くない。

「まずは、リエンドロさんが育ってください。そうでないと、いつまで経っても私が辞めれないじゃないですか。子供たちのかわいい盛りと一緒に居られないなんて。」

『嫁の貰い手が無い』等と陰口を叩かれている彼女であるが、夫と二人の息子がいる。結婚を機に、商人ギルドを退職したいと希望したが、部署全員で止めたのだ。エルメラがいないと回らないから、もう少し部下たちが育つまで待つて欲しい、と。

「いい加減諦めましょうよ、エルメラさん。僕らに代わりは無理ですってー。」

特定の人間が居なければ回らない部署、というのは組織として失格であることはリエンドロも理解している。自分たちも成長しているし、万一エルメラが辞めても10人くらい増員すれば何とか回していけるだろう。しかし、迷宮都市の薬事情を改善しようと、懸命に取り組むエルメラと一緒に働くのは、なかなかやりがいがある面白いのだ。

「ともかく、薬師の質の向上は必要ですよー。講習会を計画しましょう。『傷薬の作り方』とか簡単なヤツ。講師はエルメラさん、お願いしますねー。」

「あああ、子供たちと遊ぶ時間がー。」

エルメラの背筋がぐにやりと折れる。いつもは棒でも入っているのでは、というほどピンと伸びているのに。

あまり負担をかけても可哀想だ。エルメラの仕事をいくつか他所に振り分けよう。スケジュールをどうしようか、とリエンドロが考

えている時、薬草部門長室のドアがノックされた。

「薬師に登録希望の方が来ました。すぐに試験を受けられるそうです。問題用紙を取りに来ました。」

「私が試験を行います。1階の会議室へお連れして。」

問題用紙を取りに来た受付の女性に、復活したエルメラが指示し、すちゃっと立ち上がった。

（うわー、運悪いな。こういう時のエルメラさんは、情熱が空回りちゃうんだよな。）

これはフォローが必要だ、トリエンドロはエルメラの後を追った。

「マリエラです、よろしくお願いします。」

マルロー副隊長のアドバイスに従って、商人ギルドに来て驚いた。とても大きな建物で、入ってすぐの受付で「薬師として住民登録したい」と告げると、「薬草部門」とやらへ案内された。薬師になるには試験が必要らしい。試験とやらは初めてだが、落ちても何回でも受けられるらしい。とりあえず受けてみようと思う。

しばらくすると、奥の部屋に通された。入って間もなく、ビシリとした感じの女の人とふにゃんとした感じの男の人が部屋に入ってきた。

「試験官のエルメラ・シールです。」

「リエンドロ・カッファです。落ちても講習会とかあるし、気楽に

ね。」

机の上にペンとインクが用意されていたから、紙に書くのかと思っただら、エルメラさんの質問に答えるだけでいいらしい。

「エルメラさん、それ、難易度下がってないですから。むしろ上がってますって。」

リエンドロが困った顔をして言うが、かまわずエルメラが質問を始めた。

「アプリオレの実の処理方法と、薬効を教えてください。」

「殻を剥いたあと、トローナ鉱石の粉末を溶かした湯でよく抜きをします。トローナ鉱石の分量は……………」

他の質問も、ベンダンの花、ジブキの葉、タマムギの種、鬼棗、ウロルの花の蕾と言った、ありふれた薬草の薬効や処理方法で、マリエラの馴染み深いものばかりだった。すらすらと答えていくと、途中からルナマギアの抽出方法や、アラウネの根や葉の毒抜き方法、寄生蛭の毒腺の処理方法等、と言った上級ランクの素材の処理方法に質問のレベルが上がっていたが、マリエラは特に気にすることなく答えていく。

自分の専門分野のことを話すのは楽しい。エルメラが、ふむふむ、うんうんと聞いてくれるので、マリエラもつい夢中になって説明してしまった。

「すばらしい……………！どなたに師事したのかしら。いえ、立ち入ったことを聞いては駄目ですね。合格です！」

無事、薬師になれたらしい。あんなに簡単でいいのだろうか。質問は上級ランクの素材にも及んだが、内容としては基礎的なものば

かりだった。

「えと、薬師として薬を売ってもいいんでしょうか？薬師ランクと
かあって、作れる種類が限定されてませんか？」

「いいえ？迷宮都市内でしたら、制限などございませんよ。何か疑
問でもございますか？」

「基礎的な質問ばかりだったので。」

「まあ！聞きましたか、リエンドロさん！やはり、きちんと勉強さ
れている方はいらっしやるのですよー！」

疑問を促されるまま口になると、エルメラが興奮しだした。話を
振られたリエンドロは、困ってしまう。

（この娘もエルメラさんと同類だ。難易度分かってないよー。）

「はあ……。マリエラさんだっけ？君、その歳でよくそれだけ勉強
したね。外から来た元錬金術師だって、それだけ回答できないよー！」

「え？外から来たってことは、他所でポーションを作ってたんです
よね？」

「錬金術師には『ライブラリ』がありますでしょ？『ライブラリ』
頼りで自分の頭で覚えていない錬金術師ばかりですよ。」

『ライブラリ』とは練成素材の処理方法から各種ポーションの作
成方法にいたるまで、錬金術スキルで創造し得るあらゆる情報を登
録、閲覧できる情報庫のことだ。地脈から離れると閲覧できなくな

ることから、その情報は地脈に保存されていると言われている。地脈とラインを結んだ後に接続できるが、閲覧できるのは同じ『流派』の情報のみである。

錬金術師の『流派』については、定義が定かでないが、マリエラは、師匠や兄弟弟子、師匠の師匠位のレシピを見れるから、なんとなく近い師弟関係者のことだと理解している。

「『ライブラリ』って完全に覚えないと、次の情報を閲覧できないですよね？」

「そんな『設定』、普通しないですよ……」

すばらしい師匠ですね！と言いたげに顔を輝かせるエルメラと対照的に、リエンドロはげんがりしている。

『ライブラリ』の情報開示条件は、師匠となる者が『設定』出来るらしい。たとえば、ポジションの作成レシピなら、作成可能なレベルになってから開示される場合もあれば、作れないランクのものまで最初から開示されている場合もある。逆に危険なレシピや独占したいレシピなどは、『後継者以外閲覧不可』にすることも出来る。素材の薬効や調整方法などは、数が極めて多いこともあり、最初から開示されている場合が殆どだという。

(くそ師匠。 けち師匠。 いけず師匠。)

マリエラの場合、開示済みのすべてのポジションを、道具を使わず錬金術スキルのみで創造できるまで、新しいポジションの作成レシピは閲覧できないし、素材情報も完璧に記憶して処理できるようになるまでは、新しい情報が開示されない。立ち入ったことは聞かれなかったが、リエンドロの言動から察するに、かなり厳しい条件のようだ。

そういう物だと思っていたから、特に気にせず覚えてきたが、よく考えたら、『錬金術スキルを応用したおいしい料理レシピ』だとか『暮らしを便利にする練成品』、『奥様錬金術師の家事テクニク』なんていう、ポジションに関係のない情報は、はじめから閲覧し放題だった。誰だよ、こんなの登録したのは。

まあ『料理レシピ』にはお世話になった。何せ師匠は料理なんて出来なかったから、師匠が持ち込んだ食材を加工するのも幼い頃からマリエラの仕事だった。『料理レシピ』の通り錬金術で作った料理は、すばらしくおいしくて、師匠もマリエラも大満足だった。食べ物に釣られて、こういったレシピだけ閲覧できることを、全くおかしいと思わなかった。

「マリエラさんは、迷宮都市で薬屋をなさるのですよね。何処にお店を構えるおつもりですか？冒険者ギルド内の店舗に薬を卸すのでしたら、紹介いたしますよ。」

「えっと、住む所が決まっていなかったので、住民登録をして、お店を開ける家を紹介して貰えると聞いて来たんです。」

師匠が絡むとすぐに思考が脱線してしまふ。エルメラの問いかけに、マリエラは本来の目的を思いだした。

「まあ！リエンドロさん、住居管理部門へお連れして。良い物件を紹介するよう、念を押して下さいね。薬師の認可状と住民登録の手配も忘れずに。マリエラさん、落ち着いたら、是非、薬を持っていらしてね。そうそう、合格の記念にこちらを差し上げます。ご存知の内容ばかりかも知れませんが、『薬草薬効大辞典』と言いまして、迷宮都市で確認された薬草についてまとめてありますの。」

エルメラさんは、見た目と違って熱血な人なのだろうか。ずいぶ

ん歓迎されてしまった。

別れ際にもらった『薬草薬効大辞典』は、立派な装丁の分厚い本で、とても高価そうなものだった。こんな高価なものを貰っても良いのかと聞くと、「薬草部門に配属された新人が、写本したものですから遠慮なさらず！」とのことだった。ページをめくると所々に涙の跡が滲んでいる。リエンドロが「浄化魔法かけてあるから。汚くないから。」と言っていたから、涙じゃなくて涎かも知れないけど。

『薬草薬効大辞典』にはマリエラの知らない薬草も載っていたし、知っている薬草でも迷宮で採取できる階層や時期と言った採取情報が載っていてとても有益だ。とても有難い。

エルメラにお礼を言って部屋を出る。エルメラさんは満面の笑みで送りだしてくれた。

廊下で待っていたジークと合流し、リエンドロさんに連れられて、住居管理部門へ向かう。

「キミ、すごいね……」

エルメラさんと別れた後、リエンドロさんに、感心されてしまった。ナゼだ。

それを聞いたジークが、得意げな顔をしていた。ナゼだ。

薬師試験（後書き）

料理フラグを立ててみました。

空き家

リエンドロに、住居管理部門とやらに案内される。住居管理部門は住民登録と迷宮都市内部の住居管理、斡旋と言った官営業務を辺境伯から委託されて行う部門だそうだ。

「これは、リエンドロ副部門長。わざわざご足労頂きまして。」
住居斡旋の担当者がリエンドロに丁寧に挨拶する。

(この人、偉い人だったんだな。)

「こちらのマリエラさんに『良い物件』を紹介するよう、エルメラ部門長の要請です。」

(エルメラさんはもっと偉い人だった。薬草マニアかと思ってた。)

物件の要望を聞かれたので、「薬草園を作れる庭があつて、店舗スペースのある家」をお願いする。それを聞いた住居斡旋担当者さんは、「薬草園ですか……」と困った顔をして、区画ごとに整理された『空物件ファイル』をめくっていく。

「空き店舗くらい、いっぱいあるでしょ?」
とリエンドロさん。

「空店舗はあるんですが、薬草園というのが……。農地面積がある住宅は何処も埋まっております。安全に食料を生産できる物件は人気なんですよ。」

立地の良い商店はいくつかあるんですが、庭が狭い上に馬車置き場として石畳になっております。」

リエンドロさんと住居斡旋担当者は額をつき合わせて、ファイルをめくっていく。

「あの、薬草園は迷宮都市の外に作るの……」

と、妥協案を出そうとしたら、「とんでもない!」「そんな、危険な!」と反対されてしまった。あーでもない、こーでもないという人が物件を探す様子を、住居管理部門のお姉さんが出してくれたお茶を飲みながら眺める。あ、このお茶おいしい。商人ギルドの売店でも売ってる?買って帰ろう。

「ここは!?!」

リエンドロさんが見つけたとはかりに声を上げる。しかし、住居斡旋担当者は浮かない顔で、

「そこは、真ん中に木が生えてて、収量が少ないらしいんですよ。木の伐採許可が出ないらしくて。しかも、店舗スペースが手抜き増築で、劣化が酷くて。」

「あー、あそこかあ。なんというか中途半端な元邸宅。」

「ええ。区画整理や住人による増改築で、なんというか、個性的な物件です。面積が広いのでそれなりにしますが、値段の割に使いづらいということもあって、空き家のままなんです。」

気になったので書類を覗き込む。物件の地図と見取り図、概要が記載されている。場所は北西区画の北門通りからすこし奥まった、迷宮都市の中心部に近い場所。北西区画は一般市民が多く住む区画で、マリエラやジークの服を買ったお店や雑貨屋等も立ち並んでいるし、迷宮に近いから冒険者の来店も見込める。個人が店を開くには、なかなかいい立地だ。

(あれ、この場所、精霊公園じゃない?)

『精霊公園』は文字通り聖樹が何本も生えた、精霊がわんさか居た公園で、『精霊と契約』する時に師匠に連れて行ってもらった場所だ。

「遊んできな。名前を覚えてくれる友達がきたら、連れてくるんだよ。」

師匠に言われて公園内を遊びまわり、仲良くなった精霊と契約して地脈と『ライン』を結ぶことができた。折角友達になれたのに、その後『精霊公園』に行くことが無かったので、その精霊とはそれきりだ。また遊ぼうね、と言ったのに。もう一度会いたくて、師匠に場所を教えてもらったから間違いない。

「その物件を見せてください。」

2000年も経ってしまったけど、『精霊公園』には行ってみたい。

リエンドロさんにお礼を言って、担当者と現地に向かうことにした。

担当者の情報によると、北西区画はスタンビートの被害が最も酷く、ほとんど更地になったので、復興初期はこのあたりから住居の建造が行なわれたそうだ。この物件もそのひとつで、もともとは小規模ながら貴族の邸宅だったらしい。家の外壁はしっかりとした石造りで、100年以上経過した今でも迷宮都市の建築基準を満足している。

復興に伴い、南東地区にある貴族街も復興をとげ、ここの住人は貴族街の相応しい住居に移り住んでいた。残った住居は民間に払い下げられたけれど、迷宮都市の区画整理、要は道路整備に伴い外

壁の位置が変更され、裏庭が1/3ほど削られて代わりに正面側に庭が出来た。

迷宮都市の住宅は、表庭は無いがあっても採光用の狭い空間程度で、裏庭の面積が広く取られる。庭は景観に配慮したものでなく、馬車置き場や騎獣小屋を設けたり、農作物を育てたりと、実用的な使われ方をするため、人目に付かない裏側にまとめて面積を取るほうが合理的だからだ。

この住居は区画整理によって正面側に10m程の庭が出来ているから、迷宮都市の住人からすると、中途半端なつくりに感じるようだ。

さらに、住宅のすぐ脇に生えた木の成長を邪魔しないように、家の一部、台所だった場所が取り壊されている。普通は木のほうを切り倒すのだが、伐採許可が下りず、家の一部を改築して対応するよう指示がでたのだ、と担当者は書類を見ながら説明してくれた。

最後の住人は親子2世帯でレストランを経営していたそうで、取り壊された台所に代わって、表通りの庭に住居と外壁の間に屋根を渡す形で厨房と食堂を増築した。増築と言っても、予算の都合かきちんとした建物になっているのは厨房部分だけで、店舗側はタープを渡す程度のものらしい。建物内にあるリビングと、タープを渡したテラス席もどきで雰囲気の良い店だったらしいのだが。

「冬、寒いですよね。テラス席って。あと敷地面積が大きいので、賃料が高いんです。」

賃料は年に金貨3枚。店舗面積と立地条件が同程度の物件がおよそ金貨2枚なので金貨1枚分余分に払うことになるし、冬場は客足が遠のく。前の住人は別の物件が空くのを待って、引っ越してしまっただ。

説明を受けている間に現地に着した。

「聖樹ね。」「聖樹だ。」

マリエラとジークの声が被った。敷地の中央よりやや東より一本の大木がそびえていた。樹高は2階建ての屋根よりも高く、正面玄関から見上げると手前にある建物をこえて姿が見える。

伐採許可が下りないはずだ。聖樹は魔物から人を守ってくれる聖なる樹だ。本来ならば、そばに家が建つこと自体ありえない。聖樹を独り占めしようと困り込んでみると、枯れてしまうこともあると言ふ。曰く『聖樹の精霊が他の樹に移る』のだそうだ。

ここは2000年前『精霊公園』だった場所だが、今は見る影もない。本当に更地になってしまったのだろう。聖樹の大きさから言つて『精霊公園』に生えていた聖樹の苗木か、種子が育つたのだと思ふ。

マリエラの友達になってくれた精霊は何処に行ってしまったのか。あれだけ出現していた精霊は1体も見当たらず、聖樹もこの1本きりしか生えていない。

家を素通りして樹に近づく。周囲の土地が乾いている。余り管理されていないらしい。

《ウォーター》

いつもよりたくさんの魔力をこめて聖樹の周りに水を撒く。マリエラを地脈に導いてくれた精霊も魔力のこもった水をおいしいと喜んでくれたから、この聖樹も気に入ってくれるに違いない。

幹にそつと触れる。

「こんにちは。私はマリエラ。ここに住んでもいいかしら？」

聖樹には精霊が宿っているという。この樹にも居るのだろうか。居たとしても言葉は通じないだろうけれど。

ひらり、と聖樹の葉がマリエラの手のひらに落ちてきた。マリエラの手のひらくらいの平たい葉っぱで、ポーションの素材としても貴重なものだ。見た目は落葉樹なのだが冬でも葉を落とさない。無理にむしると端から萎れて枯れてしまうので、必要な場合は『お願いして分けてもらう』のだという。

（住んでもいいよってことかしら？）

ジークもマリエラのまねをして聖樹に水を与えて、葉っぱを貰っていた。なぜか十枚くらい貰っている。めっちゃ歓迎されてるな。モテモテか？

聖樹は問題なさそうだ。庭も土地は痩せているようだが薬草園に十分な面積がある。というか20m角ほどの庭一面、やけくそのようにプロモミンテラが生い茂っている。魔物除けポーションの作成が捗るな。

薬草は土地が痩せていても、魔素が濃ければ問題なく育つ。魔物の領域になってしまった迷宮都市は魔素が濃いから問題はないだろう。

担当者に案内されて建物内を見て回る。迷宮都市には建築基準があつて、その内容は魔物が街に溢れた場合に立てこもれる強度があることだ。

まず、敷地の外周を人の背よりも高い石壁で覆っていること。石

壁の厚みも指定があり、人の幅くらいの堅硬な物だ。住宅の外壁も同様に分厚い石積みで、1階の窓には魔物の進入を防止するため鉄製の格子をはめ込む必要がある。それに地下室。万一の場合、1週間は立てこもれるよう備えるのだそうだ。

建築基準に明記はされていないが、外壁や建物には魔物に感知されないため、魔力を吸うデイジスの蔦が這わされ、中に住まう人間の魔力が外に漏れるのを防いでいる。花壇には色とりどりの花の代わりに、赤紫の葉っぱがおどろおどろしいプロモモンテラが植えられて、魔物が嫌う臭いを放っている。

監獄のような重苦しい雰囲気や和らげようと、民家の窓枠の鉄格子は蔦や花を模した凝った造詣をしているし、屋上から外壁まで色とりどりの布をタープのようにたらしめてみたり、店舗の看板をかねた大きな垂れ幕を外壁にかけたりしている。異国情緒溢れる町並みと、重厚な石壁を飾る生活の息吹が合わさっていて、こういう街も悪くないな、とマリエラは思った。

建物は元邸宅ということもあり、しっかりと造りで強度に問題はなさそうだった。1階に大きなリビングと、奥にシガールームだったのだろう、リビングの1/3程度の小部屋がある。レストラんで使っていた机や椅子がいくつか奥の小部屋に残されていた。

廊下をはさんだリビングの向かい側には、トイレや風呂場、物置がある。この物置は聖樹に面した壁面にあって、壁の材料が新しいから、元は台所だったと思われる。裏口のドアも新しい壁面にあわせて奥まった場所に設置してある。裏口ドアから入ってすぐの場所には階段があり、2階と地下へ通じている。地下室も何室かに分かれているようで、2人ならば十分すぎるスペースがある。

2階には物置のほかには部屋が4室。聖樹をよけるためにずらした

壁面には小さなバルコニーがしつらえてあって、屋上へ上る階段がある。この辺りの家は屋上で洗濯物を干しているから、そのためだろう。

この建物は水周りだけ専門家に確認してもらえば、掃除をするだけで直ぐに使うことができそうだ。予算次第だが、壁紙を変えたり絨毯やカーテンを設えて、居心地の良い空間にしてもいい。

建物の南側、正門と玄関の間にある、奥行き10m程度の庭だった場所に、建物の壁と外壁を利用して厨房とレストランの客室が增设されていた。と言っても、屋根まで葺いてあるのは厨房部分だけで、客室部分はデッキ床にタイルの天井。外壁には採光用の窓が無いから、採光を考えてタイルの天井にしたのかもしれないが、経年劣化でタイルは破れてデッキ床も風雨に吹かれて傷んでいる。内壁も建物内らしさを強調するためか、色の薄い壁材で塗装されているが、あちこちはげてみすばらしい。建物側に作り付けのカウンターがあつて、かろうじて店舗の雰囲気を残している。

（お店にするならここなんだろうけど、だいぶ手を入れないといけないわね。）

「建物に手を入れてもいいんですよ。大工さんは紹介してもらえますか？」

マリエラが聞くと、担当者は驚いたように、

「勿論、建築基準の範囲なら問題ありませんし、基準を理解した大工を紹介できます。ただ、この状態ですから金額の方がそれなりに掛かるかと。」

担当者さんが迷宮都市の住宅事情について説明してくれた。まず、土地の所有権は全て辺境伯にあって土地は全て賃貸。建物面積と総面積、区画の単価から計算される賃料が税金を兼ねて毎年課せられ

る。迷宮都市では住人がいつ亡くなるかわからないし、魔物が溢れて住宅が崩壊することも起こりうる。毎年、賃料を徴収することで住人の生存確認ができるし、万一宅地が崩壊した場合は辺境伯命での復興が可能となっている。土地が辺境伯の持ち物だから、持ち主が不明で復興できない、ということが無い。

何事も無く暮らしていて賃貸契約が更新されないとか、急に住居を追われるということはありませんので、安心してください。詳しくは、迷宮都市特別法の住居管理規定の云々のほにやららといったので、続きの説明を求めらる。

「ようは、宅地の賃貸契約で、住民の登録と生存確認と税金徴収、有事の際の備えまであわせて行っているわけですね。」

建物部分は買い取りか賃貸の2種類あって、この建物は買い取りだそう。中に残されている物品や庭の植生も好きにしていらい。ただし『聖樹の伐採は不可』など、物件ごとに条件がある場合もあるらしいが。

「この物件の建物価格ですが、本館が古くて減価償却が済んでいることと、増設部分の劣化が激しいことから、金貨3枚となってます。土地の賃料は年間で金貨3枚。すでに年が2/3ほど過ぎていきますから、今年の分は金貨1枚程度ですね。詳細は戻って計算させていただきますが、契約時に金貨4枚、次年度以降も毎年金貨3枚が必要となる物件です。しかも、本館内に台所がありませんし、増設部分の厨房もこの有様。店舗部分も修繕するとなると、結構なお値段になってしまふと思われます。」

なるほど、確かに微妙な物件だと思う。一般庶民には高すぎて、農業スキルを持っていても農作物の収量が少なく採算が取れない。

大商人が住むには住居面積が少ないし、貴族街とも離れている。

「ここがいいです。契約お願いします。」

しかし錬金術師には垂涎の物件だ。聖樹が庭にあるなんて、素晴らしすぎる。ポーションさえ売れば、賃料も問題ないだろう。

商人ギルドに戻って即日契約し、金貨4枚を支払う。契約書と鍵を受け取ると念願の城を手に入れた実感でにまにましてしまう。

「大工は手配しておきます。直ぐに施工に掛かれる方を、こちらで選んでよろしいですか？エルメラ部門長のご紹介ですから、腕の良い大工を派遣させていただきますので。」

修繕計画や費用に関しては直接相談なさってください。明日の昼過ぎに現地集合で連絡しておきます。」

とんとん拍子で話が進んだ。担当者さんが言うには、今日から入居してもかまわないが、通常は清掃業者に掃除してもらったり、改装を完了させてから入居するものらしい。その辺りの手配も大工がしてくれると言っていた。荷物があると作業の邪魔になるし、盗難の恐れもあるそうだ。

それにしてもわくわくする。2階には部屋が4つもあった。何処に工房を構えようか。お店はどんな風にしようかな。必要な家具やらもチェックしなくては。

商業ギルドの売店で、パンと瓶に入った飲み物を購入する。事務所で出してもらったお茶の葉も忘れずに買って、ジークと再び家に向かう。聖樹の下でお昼を食べて、どんな改装をしようか話し合うのだ。

空き家（後書き）

ジークが空気過ぎる……

メルル薬味草店

「この辺からずらーっと棚を並べて、こことここに作業台を置くの！立派な工房でしょ？」

「いいね。寝室は？」

「作業台の隣！疲れたらすぐ寝れるでしょ！」

「マリエラの寝室は、工房の、隣の部屋、な。」

「えー、移動するのメンドウ。」

「大丈夫。俺が、運ぶから。」

「荷物か。ジークの部屋は？」

「マリエラの、隣。」

「階段上がってすぐの部屋のほうが広いよ？」

「客室に、したらいい。ベッドが、二つ置けるから、客室向きだ。」

そんな会話をしながら部屋割りをしていく。

2階の部屋割りはすぐに決まった。一番奥、東側の広い部屋を工房にして、工房から西にマリエラの寝室、ジークの寝室、客間という割り振りになった。

逆に1階のリビングと奥のシガールームについては良い案が出ない。リビングはドアから見て幅6m×奥行14mと横長で突き当たりに暖炉がある。お貴族様はこういった部屋に細長い机を並べて、ずらーっと座って食事をする事聞いたことがあるが、マリエラはジークと2人暮らした。こんなに広いリビングは要らない。

ただ、暖炉はステキだと思う。冬になったら暖炉の前で甘いココアでも飲んでぬくぬくしたい。

「こんなに広いんじゃ、暖炉焚いてもぬくもらないよね。」

「部屋を、区切っても、いいかも、しれん」

「区切った部屋は何に使うの？」

「客室？」

「2階にも客室あるじゃん。誰が来るのよ……」

2人して碌なアイデアが出ない。厨房も店舗も小屋に住んでいたマリエラには縁遠すぎてイメージが湧かない。ジークも似たようなものらしい。買うべき物もたくさん出てきたけれど、ありすぎて何処から手をつけるべきか、何処で手配したらいいか分からない。

「大工さんに相談しよう」

と、しよっぱなから丸投げムードの2人だった。

とりあえず、今日明日に必要なものを買いに行き、色んなお店を見ることにする。

ジークの着替えや外套も必要だし、マリエラだってチュニツクとズボンは1枚ずつしかない。靴も鞆もぼろぼろだから、エルバ靴店で新調しよう。採取用や調理に使えるナイフに裁縫道具、必要なものはたくさんある。

新居付近の店舗を中心に見て回る。買物の途中で「メルル薬味草店」という看板を見かけた。

メルルというのは看板娘の名前だろうか。「ヤグーの跳ね橋亭」のエミリーちゃんみたいな可愛い女の子を想像しつつ中を覗く。どうやら香辛料やお茶を扱うお店らしい。見たことも無い香辛料が大量に並んでいる。

「うわあ、珍しい！」

「おや、見ない顔だね。外から来た人かい？」

樽のような体形の、愛想の良い中年女性が接客してくれた。大半

が迷宮で取れたものらしい。薬草もそうだが、迷宮は階層ごとに気候が異なるから世界中の植物が手に入る。こういった薬効の低い香辛料は浅い階層に生えているらしく、薬草採取と併せて新人冒険者の小遣い稼ぎに丁度いいらしい。おかげで迷宮都市では香辛料が流通していて、露店の串焼きでも塩胡椒がきいていておいしい。

「砂糖はちよつと高いんだ……。」

「砂糖かぶらを加工するのが手間だからね。料理に使うんだったら、こつちの『粗漉し糖』で十分だよ。あたしゃお茶でも粗漉し糖だけどね。」

『砂糖かぶら』はこの辺りで栽培されている農作物で、煮汁から砂糖が作られる。煮出した砂糖かぶらの粕は家畜の餌に、煮汁からは少量の砂糖と『粗漉し糖』がとれる。処理技術が未発達なため、砂糖の精製量は少なく値段も高い。粗漉し糖は不純物と糖分が含まれていて、味にクセがあるから料理用など用途を選ぶが安価な庶民の味として親しまれている。2000年前に比べて砂糖の精製技術は進んでいるようだが、まだまだ粗漉し糖に含まれる糖分は多い。

ちなみに砂糖かぶらはオークの好物で、収穫期には臭いをかぎつけてやってくる。当然畑の周りには罾が仕掛けられ、衛兵や冒険者がオーク狩りを行なう。砂糖かぶらの収穫期にはオーク肉が大量に出回り、冬の備蓄食料として迷宮都市を潤してくれる。

「オバちゃん、粗漉し糖食べすぎだよ、だからオークみたいになっちゃうんだよ」

店員らしき少年が、樽体型の中年女性を揶揄する。

「うるさいね。店じゃメルルさんと呼んどくれ。ホラ、さつさと配達に行つてきな。」

樽女性がメルルさんだった。時間の流れは残酷だ。

粗漉し糖を2kgほど買って店を出た。

『ヤグーの跳ね橋亭』に帰る前に『ガーク薬草店』に立ち寄る。店は開いているのに誰も居ない。無用心だな。

「こんにちはー。ガーク爺さんいませんかー」

「おるぞー、裏じゃー。まわってこーい」

まだ3回目なのに裏庭に呼ばれた。行ってみると巨大な豆の莢を吊るした下で、鍋で湯を沸かしている。横には同じような莢が5つほど積んである。

「これって、クリーパーの種子じゃないですか！」

「おう、大漁だろ。もうじき迷宮の遠征だからな。便乗する冒険者連中のために採って来たんだ」

クリーパーは蔓をもつ吸血植物の魔物で、蔓内部の粘液からクリーパーゴムという高級ゴムが作られる。弱くて安価な子株から作られた使い捨てのクリーパーゴムは迷宮都市に広く出回る商品だ。

このクリーパーが成熟して実った種子がこの莢に詰まっているのだが、種子をつけるまでに成熟したクリーパーの討伐は親株から粘液を取るよりはるかに難易度が高い。

なにしろ種を実らせたクリーパーには、知能があるのだ。植物の分際で。クリーパーの種子は、遠くに播種するため莢から飛びだす。莢の先端から石つぶてのようにダダダダと。クリーパーの親株は、

この種を飛び道具のように獲物に撃ち放つ。種子1粒1粒の攻撃は小石をぶつける程度だが、莢には100~200粒の種が入っているから、連射されればたまらない。種の連射で誘導されて蔓の毒棘に捕まって麻痺、吸血されてクリーパーの餌になる、という悪魔のコンボが炸裂する。

しかしこの種、薬効も栄養価もすこぶる高い。本来の回復力を格段に上げて継続的回復効果をもたらす『リジエネポーション』の原料になるだけでなく、そのまま食べれば1粒で1食の栄養がまかなえる完全栄養食である。

「どうやって、こんなに……」

「種もちのクリーパーは知恵がまわんだろ？だから酒も回るんだ。」

睡眠薬を混ぜたアルコールを根元にかけて、寝込んだスキに莢ごと切り落とすのだそうだ。

「そんな方法が。」

目から鱗である。まだまだ知らないことが多い。今までクリーパーの生息地帯周辺に落ちている種をちまちまと拾い集めていたのはなんだったのか。

「いちち……。今回はちいとばかり、しくじっちゃってな。まったく、草っころのクセに大酒のみが居やがった。」

被弾の痕だろう、左腕の防具の継ぎ目辺りに赤黒く内出血している。見えたのは服の隙間からちよこつとだが、あちこち被弾したに違いない。

「たいへん！早く治療しなきゃ！ポ……薬、薬」

「これくれえ、どうってこたねえ。ただの打ち身だ。薬もあるから心配すんな。それよか種を乾かしちまわねえとな。」
「なに言ってるんですか！治療が先でしょう！乾燥は私がやっときますから！」

慌てふためくマリエラに、「おう、そうか？」と折れるガーク爺。意外と押しに弱いようだ。

「種が割れちまわねえように、莢ごと湿気た空気で乾かすんだ。湯をさらさねえように、そのまま見ててくれや。」

そう言って、家の中に入っていった。

マリエラとジークは言われたとおり、しばらくの間、鍋を眺めていたのだが。

（まどろっこしい。こうしてる間にも他の莢が劣化していく。もったくない。）

「ジーク、人目があるか、わかる？」

「ない。だが、」

《練成空間、湿度調整60%、温度調整40度、乾燥》

ジークが「止めたほうがいい」というより早く、横にある5つの莢に錬金術スキルを使う。

見る間に乾いていく莢を見て、ジークは頭を抱えてた。

「はあ、何をやって、いるんだ……」

「『命の雫』使ってないし。これくらいなら外から来た錬金術師ならできるもん。」

5つの莢が乾燥し、鍋の上に吊ってある莢も乾かそうかという頃にガーク爺さんが戻ってきた。乾燥した莢と、中の種がひとつも

割れること無く芯まで乾燥しているのを見て、

「この短時間で、何しやがった……」

とつぶやいた。

「乾かしといたよ」

えへつと笑ってごまかすマリエラに、ゴツンとガーク爺の拳骨が落ちる。

「いったあー」

涙目になるマリエラ。

「ばかやろう、人前でこんなマネ絶対すんじゃねえぞ。イテエじゃすまねえ場合だってあんだ。分かったか。オイ、その兄イちゃん、このバカしつかり見張つとけ！」

ガーク爺の剣幕に、しょんぼりとうなだれるマリエラ。

「じ、ごめんなさい……」

調子に乗って怒られてしまった。ジークも呆れているだろう。

すぐすぐと帰ろうとするマリエラに、ガーク爺は乾いた莢をひとつ押し付けた。

「おう、手間賃だ。とつとけ。その、なんだ……。まあ、助かった。また来いや」

ぶっきらぼうに、そう言ってくれた。

「ガーク爺に怒られちゃったね。」

帰り道でマリエラがジークに話しかける。

「俺も、怒ってる。不用意、すぎる。」

「うん。ごめんね。心配してくれて、ありがとう。」

ゲンコツを貰ったのに、うれしくなってしまった。弾む足取りにあわせて、乾いた茨の中でたくさんのが弾んでシャラシャラと鈴のような音を立てた。

「丁度良かった、マリエラさん」

『ヤグーの跳ね橋亭』に戻り、自分の部屋に入ろうとするマリエラをマルロー副隊長が呼び止めた。そういや、マルロー副隊長は隣の部屋だった。迷宮都市内に自宅があるのに、ずっと部屋を押さえられているらしい。金持ちか。

一旦部屋に荷物を置いてから、ジークと二人でマルロー副隊長の部屋に向かう。部屋の長椅子にはいつものようにディック隊長が座っていた。

「すまん」

いつも最後までしゃべらないディック隊長が、しよっぱなから声を出したと思ったら開口一番謝った。マルロー副隊長も申し訳なさ

そんな表情で、トレイに金貨の小山と書類を載せて持ってきた。一体何事か。

「迷宮討伐軍への領収書の写しです。」

そんな物を見てもいいのかと驚いたが、どうぞと差し出されたので手にとって読む。低級ランク3種各10本は、黒鉄輸送隊が買い取ったそうで、残りの明細と本数が書かれている。金額は下にまとめて『以上、一式 金貨70枚也』。

「遠征予算の都合ということ。こちらも粘り強く交渉したのですが、將軍の個人資産からも捻出して頂いて、これ以上はどうしても。」

「俺が、『多少の値引きにも応じる』等と、うかつなことを言ったばかりに。」

ディック隊長がうっかりさんなのは分かったというか、知ってたけど。

『買い叩かれてごめんなさい』ということだろうか。安くてもいいと言っただけだ。

「ええと、中級以下の契約価格を差っぴくと、上級ランク15本で金貨52枚、1本当たり3枚半くらいですか？」

マリエラがたずねると、

「申し訳ない」とディック隊長に続けて、マルロー副隊長が、

「一旦、話を白紙にとも思ったのですが、強硬手段をとると言われて致し方なく。あのような方ではなかったのですが……。」「と説明してくれる。平謝りされてしまった。

「かまいませんよ。頭を上げてください。」

え？いいの？という表情で顔を上げるディック隊長と、何をたくらんでいるのでしょうかという表情のマルロー副隊長。

「将軍様が、自腹を切つてまで買ってくれたんですよ。遠征にポーションが必要だから。今度はもっと沢山用意しますね。」
「マリエラは思つたままを口にした。」

「マリエラさん、本気で言っているのですか？あのポーションにどれほどの価値があるか、分かっているのですか。」
「マルロー副隊長の目に剣呑な光が宿る。初めて見る真剣な表情かもしれない。」

「ポーションは薬で、消耗品です。少量を高く売るものじゃないです。お金が必要なら、たくさん売ればいいんです。」

これはマリエラのポリシーでも有る。師匠はマリエラに『お前はポーションをたくさん作れ』と言っていた。師匠の真意は分からなかったが。200年前はポーションなどありふれていて、マリエラはポーションは赤字ぎりぎりの安値で買い叩かれていた。独立してからは魔の森で一人ポーションを作り、防衛都市で売りさばく毎日。マリエラのポーションのおかげで助かった、とごく稀に掛けられる感謝の言葉に、何度も支えられていた。『お金が必要な分だけ、たくさんポーションを作る』のは、マリエラにとって当たり前前で、自分のポーションで助かる人がいることが、彼女の行動を動機付けていた。

「ポーションは資産だ。子孫に残すこともできる。」

マルロー副隊長が、真意を探るようにマリエラの目を見る。

（たしかに。私に何かあったらジークが路頭に迷っちゃう。）
「残された人が困らない程度の資産を、家やお金で残せばいいのでは？」

今日は家を契約した。上級ポジションの売上をあわせても10年ほどしか住めないが、まだ、たった100本ほどしかポジションを売っていない。何万本でも作って売ればいい。

「欲の無い人だ。」

納得しかねる、と言った表情で、マルロー副隊長はつぶやいた。

出立と見送りと

金貨52枚のうちマリエラの取り分、金貨31枚と大銀貨2枚を受け取り、書類にサインする。これで今回の取引は完了だ。今朝、リンクスにも聞いたが、黒鉄輸送隊は明日の早朝に帝都に向かって出立し、再び戻ってくるのは16日後の夕暮れの予定だそうだ。

それまで『ヤグーの跳ね橋亭』のマリエラ達の部屋を押さえておくというマルロー副隊長に、居所を定めたことを話した。

「そうですか。では無事戻れましたら、リンクスを使いに行きましょう。」

次の取引まで16日もあるとはいえ、引越しもあれば新居の改築もあって忙しい。ポーションの大量生産はできないだろう。今回の取引量に関しては、今回以上でできるだけ、という口約束に留めた。種類に関しては今回をベースに特化型の高級薬も、とジークをちらと見てマルロー副隊長が要望を告げた。

後半、静かにしていたディック隊長は、空気を読んだのか話が終わっても『乾杯』などとは言い出さなかった。

ジークと二人で食堂に降りると、リンクスやユーリケ、他の黒鉄輸送隊のメンバーが食事をしていた。今日のメニューは赤身の魚らしく、『ステーキ』か『フライ』かと聞かれた。どちらも同じ魚をマリネにしたサラダが付くらしい。

両方食べてみたいので、ジークがステーキ、マリエラがフライを頼む。誘われるままに同じテーブルで食事をする。ステーキは臭みも無く、魚とは思えないほど脂が乗っている。柑橘類の果汁とツン

とした刺激の香辛料が合わさった、さっぱりとしたソースが食後に脂濃さを残さない。フライの方には、ざっくりと切ったトマトの果肉が残るソースが掛けられている。フライの衣が魚肉の脂を閉じ込めて濃厚な味わいだ。

こんなに美味しい料理だというのに、黒鉄輸送隊の面々は皆黙々と食事をしている。明日から魔の森を抜けるため、気を引き締めているのかもしれない。マリエラには分からないが、きっと危険な旅なのだろう。しみりとした気分で食事を味わった。

静かな食事を終え、食後のお茶が運ばれる。

「マリエラも、ジークも、全部食ったな？」

急にリンクスが話し始める。

「今日の魚、何だと思う？」

「え？川魚じゃないの？赤身とか珍しいけど。」

「海の、魚？」

「答えはー、サハギンです！！！」

お茶吹きかけた。てかちょっと鼻に入った。

「わっかんねーだろー、わっかんねーよなー。うまいと思って食っちまうよなー」

「高級魚？だし？マスターの心遣いだし？」

「まーな、すげえ、栄養あるらしいけどなー！にしてもさー、食えると思わねーよな。アレ」

サハギン。まあ、二足歩行する魚だ。グロくて「ギョー」とか言いそうな感じの。等身が人間に近いから、食べたいと、いや、食べ物だと思っただけは無かった。

(すごく美味しかったけど。美味しかったけど！)
うーとばかりに顔をしかめるマリエラの反応に、満足そうに爆笑するリンクスたち。

「はー、笑ったー。俺ら、明日早いから、今日はもう寝るわ。
じゃーな、マリエラ。またな。」

マリエラの顔をじっと見つめた後、リンクスは部屋に戻っていった。

部屋に戻ったマリエラは荷物を整理しながら考えていた。

初めは警戒していたけれど、黒鉄輸送隊は皆いい人達だ。まだ会って5日しか経っていないのに、無事に戻ってきて欲しいと思う。マルロー副隊長のことだから必要なポジションは確保しているのだろう。それでも何か助けになりたい。

分厚い本に触れる。『薬草薬効大辞典』。そういえば今日は『ライブラリ』の話聞いた。師匠の閲覧制限は厳しいけれど、無制限情報に何かいいものは無いものか。

《ライブラリ接続》

久しぶりにライブラリに接続する。閲覧自由な便利情報の一覧を探す。

『錬金術スキルを応用したおいしい料理レシピ』、『暮らしを便利にする練成品』、『奥様錬金術師の家事テクニク』……この辺り

は一通り読んでいる。『アルケミック・スイーツ錬金術菓子』。これは悲しい気分になる。高価な砂糖をたっぷり使ったお菓子なんて、とても作れなかったから。

(あ、今日、『粗漉し糖』買ったんだっただ。)

今なら作れるんじゃないかと、閲覧を開始する。ひどく遠まわしな言い方で前書きが書かれているが、どうやらポーション効果の有るお菓子を作れるレシピ集らしい。なにそれすごい。ああ、でも、効果は1割程度まで下がるとか。うーん、微妙。でも苦いポーションを子供も美味しく食べられるなら、いいことかもしれない。

マリエラもポーションの味の改良には取り組んでいて、『美味しいポーション』なるものを度々作っては失敗している。いつか薬効を落とさずに味が美味しいポーションを完成させて、ライブラリに登録したいものだ。

いくつかレシピをめくっていく。『持続力抜群、リジエネキャンデー』とか、『朝まで襲って。野獣な夜のバーサクチョコレート』だとか、良くわからないレシピ名と、もっと良くわからない説明文が書いてある。

不審げな表情のマリエラに「どうした？」とジークが聞いてくるのでレシピについて話したら、「作るのか？」と怪訝そうに聞かれた。やっぱりおかしな名前なんだろう。

病で弱った子供に継続的に体力回復を促す飴や、魔物に囲まれた状況なら狂戦士化チョコレートで栄養補給と起死回生を図れるだろうから、アイデアとしては素晴らしいと思うのだがどうしてこんな変な説明文を入れるんだらうね、とマリエラが言つと、ジークは気まずそうに目を逸らした。

「あ、これ。」

『元気が漲るはじまりのクッキー。』

まだ始まっていないアナタへ。お礼や挨拶にかこつけて、このクッキーを差し入れましょう。地脈外でも効果抜群！漲る元気にアナタのことが気になるハズ。準備万端整えて、獲物が巢に掛かるよう、じっくり糸を手繰ってね！』

このレシピの作者は蜘蛛かなにかだろうか。人外の兄弟弟子が居たとは驚きだ。説明文は良くわからないけれど、材料とレシピから推測するにクリーパーの種を練りこんだクッキーで、命の雫の代わりに術者の魔力で薬効を高めるようだ。クリーパーの種の薬効は疲労回復。種子自体も栄養価が高いから、そのまま食べれば1粒で1食分の栄養がまかなえる。種を粉にして混ぜればややクセの有る味に仕上がるが、香り付けのためか茶葉を砕いて配合している。茶葉には弱い興奮作用があるから、過酷な移動中の栄養補給には最適だろう。

命の雫を使わないから、普通の菓子よりほんの少し効果が高い程度だろうけれど、地脈の外でも効果は失われない。うん、これを作ってみよう。

ガーク爺やアンバーさん達にもおすす分けしたい。勿論ジークもだ。人数分の材料分、クリーパーの種を粉にする。茶葉は商人ギルドの売店で買ったものが使える。後は小麦粉と、卵、バター。砂糖は粗漉し糖を分離して作成済みだ。

食堂に下りてマスターに食材を売ってもらえないか交渉する。快く分けてくれて、「厨房、使うか？」とまで聞いてくれたが、厨房のほうは丁寧に断る。『錬金術菓子^{アルケミック・スイーツ}』は、ポーシオン要素が少ないくせに妙に錬金術スキルにこだわっていて、道具やオーブンを使わ

ずに全工程を錬金術スキルでまかなう。
ほんと、誰だよこの作者。変な人だ。

それはさて置き、練成？開始。

《練成空間、温度制御、バター溶解、魔力混練、砂糖投入、魔力混練、温度制御、卵投入、魔力強混練、小麦粉、種粉、茶葉粉分散投入、魔力混練、成型、圧力制御、過熱、保持、冷却》

レシピの通り工程を進める。簡単だ。温度制御もお湯くらいとか、気温くらいとかの緩い指定で、素材を加えるたびに魔力を練りこんで混ぜるだけ。途中の圧力制御は急減圧で生地の中の気泡を膨らませることで、さくさくに仕上がるのだそうだ。成型は「ハートがオススメ」とか書いてあったが、そんな充填率の悪い形状は非効率で嫌なので全部正方形にした。

形状についてジークに話すと、「ハート、食べたい」というので一個だけハートにしてみる。ちょっと難しい。左右非対称で、デイズの葉っぱみたいになった。面白いのでラプトルも作ってみる。

「サハギン？」

違うよ、ジーク。ラプトルだけど、うん。サハギンに見えるね。
これはリンクスにあげよう。

まとめて練成空間に並べて一気に焼き上げる。レシピ通りの時間でほんのり狐色に焼きあがる。冷却して出来上がり。練成空間から出すと、バターのいいにおいがした。

「一個だけ食べよう。味見。味見。」

ジークはデイズ、じゃなくてハート型、マリエラは四角いクッキーを齧る。

さくり。

口の中に広がるバターの香りの後に、ふんわりと茶葉のおいが鼻に抜ける。クリーパーの種のクセの有る味わいが、卵とあいまって独特の風味に変わっている。

「うまい」

「うわあ、おいしい！」

ジークにも好評なようだ。ちびちびと齧っているので、もう一枚勧めたが、食事もとったし今日はこれでいいと言う。おりこうさんめ。おかわりしづらいじゃないか。

今日購入した布を切ってクッキーを包んでいく。サハギンは割れないように別にして。

明日渡せるように、もう寝よう。寝過ぎしそうなら起こして欲しいとジークに頼む。

寝る前にトイレに行こうすると、ジークに止められた。窓から裏庭を指差す。二人の人影が見えた。

ディック隊長とアンバーさんだ。

二人はひしと抱き合うと、見つめあい、名残惜しそうに宿の中に戻っていった。

食堂に下りるとアンバーさんはいつも通りに接客していて、ディック隊長は部屋に戻ったのか、姿が見えなかった。

その夜は結局寝付けなかった。

『元気が漲るはじまりのクッキー』の効果だと思いたい。

夜が明ける前に黒鉄輸送隊は装甲馬車に向かう。寝れなかったけれど、ちゃんと見送ることができた。

「マリエラ、まだ夜だぜ。寝てろよー」

リンクスがいつもの調子で話してくる。

「これ、作ったの。元気が出るからみんなで食べて。あ、こっちはリンクスが食べてね。」

クッキーの包みと、サハギンクッキーの包みをリンクスに渡す。

「うっそ、マジ？すげえ、うれしい。こっち、開けていい？」

暗くて表情は見えないけれど、喜んでくれたみたいだ。サハギンクッキーの包みを開ける。

「……ナニコレ？」

「何でしょう。」

「ラプトル？」

「答えはー、サハギンでーす！ー！！」

「マ・ジ・カ」

ほんとはラプトルだけだね。当てるとはすごいね。

リンクスは、サハギンクッキーをカプリと齧ると、

「お、うめ。サンキューな。なんか土産買ってくるわ。」
そう言って、旅立っていった。

「行っちゃったね。」

黒鉄輸送隊を見送って、今はジークと二人だ。

「まだ、早い。寝るといい。」

ジークに誘われるままベッドに入る。ジークが首元まで布団を掛けてくれる。

「ジークは寝ないの？」

「俺は、平気。」

ジークの手が戸惑うように伸ばされ、そっと頭をなでてくれた。

「お休み、マリエラ」

そう言ってジークムントは部屋を出た。

「俺が、いるよ。」

扉を閉めて、小さく、そう呟いた。

卸売市場

「おはよう、マリエラ」

ジークに起こされ目が覚める。

「お茶、飲む？」

ベッドから起き上がると、ベッドの端に腰掛けたジークがお茶を差し出してくれた。

やさしく起こされ、ベッドの中で目覚めのお茶を頂く。ジークは柔らかに微笑んでいる。

(ナニコレ、これじゃまるで……)

「お貴族様ごっつん？」

ジークの口角がピシリと上がる。気づかず、ふうふうとお茶を飲むマリエラ。ジークはめげずに話しかける。

「美味しい？」

「うん。ありがとう」

「明日から、毎日、淹れるよ」

「んー、うれしいけど、いいよ。」

ジークの申し出を、マリエラはやんわりと断る。

「一緒に飲んだほうが、美味しいよ。」

そう言って、マリエラは顔を上げた。なぜかジークに目を逸らされた。逸らした顔はほんのり赤い気がした。

寝すぎたかと思ったが、いつもより一刻ほど遅いくらいの時間だった。ジークも朝食がまだだそうので一緒に食堂に向かう。

「おはよー。今日はとろもこしのスープだよ。エミリーのお気に入りの！」

看板娘のエミリーちゃんだ。今日も髪を結んであげて、昨日作ったクッキーの包みを渡す。

「うわあ、クッキーだ！」

しっかりしていても、10歳児。包みを開いたとたん、顔が輝いた。大喜びで早速ほおばる。

「おいしー！」

「栄養たっぷりで元気が出るから、疲れた時に食べるといいよ。」

そう説明すると、2個目を食べようと伸ばした手がぴたりと止まる。

口をきゅっと結んで、伸ばした手をふるふると震わせた後、きゅっと包みを閉じた。

「父ちゃん、たいへんだから。疲れてるから。これ、父ちゃんにあげるね。」

食べたくて仕方ないだろうに、決死の覚悟で我慢してお父さんにクッキーをあげるといふ。『我慢』が表情ににじみ出ている。

宿のマスター

(かわいいい！エミリーちゃん！いい子過ぎる！)

心の中で悶えるマリエラ。

「お父さんマスターの分はここにあるから、それはエミリーちゃんが食べていいんだよ。」

そう言っつて、もうひとつ包みを渡した。

「ばあ、と顔を輝かせるエミリーちゃん。眼福だ。」

「父ちゃんにあげてくる！マリ姉ちゃん、ありがとう！」

満面の笑みで、両手にクッキーの包みを持って駆けていくエミリーちゃん。

エミリーちゃんのリアクションを見たくて、お父さん宿のマスターの分をわざと後出したのは内緒だ。マリ姉ちゃんは悪い姉ちゃんなのだった。

アンバーさん達はまだ寝ているので、帰ってから渡そうと思う。頼まれた薬も作らなければ。欲しい素材も有る。昨日サハギン料理がでてきたから探せば見つかると思う。

朝食を終えてジークとガーク薬草店へ向かう。ガーク爺は今日は店でおとなしくしているようだった。

「ガーク爺さん。これ、昨日貰ったクリーパーの種で作ったんだ。おすそ分け。」

「おめえ、懲りねえやつだな……。」

なんだか呆れられた。まあまあ、食べて食べてと勧めてみる。打ち身に効くかは分からないが、体力回復の助けになると思う。

ガーク爺はじつくりと味わうように一枚食べると、体の調子を確

認し、店の奥から何やら魔道具を持ち出してきた。マリエラのクッキーを魔道具にかけて調べている。

(それ、食べ物なんですけど。)

「魔力を練りこんでクリーパーの種の効果を上げてんのか。おめえ、これ売る気じゃねえだろうな。」

ぎろりとにらまれた。善意のクッキーなのに、酷い。

お世話になったお礼に配っているのだと話すと、配布先まで確認された。

「まあ、そんなくらいならいいだろ。いいか、これは売るなよ。こんなもん売ったら、魔力が干からびちまうまで作らされるぞ。まったく、見かけによらずとんでもねえ嬢ちゃんだ。ちったあ、自重しろ。」

「これで駄目なら、どんな薬売ればいいのか」

しょんぼりするマリエラ。

「何作るつもりだよ。おめえ……。いいか、薬つくったら売る前に俺んともってこい。試してやつから。おい、兄ちゃん、ちゃんと連れてこいよ。必ずだぞ！」

「分かりました。」

神秘的な顔でうなづくジーク。まあ、売る前に確認してもらえるのはありがたい。薬造りは素人だ。マリエラは前向きに考えようと、うんうんとうなずいた。

「あ、そうだ、ガーク爺さん、お化け貝とか喰い付き貝とか売ってないかな？」

「おめえ、さっきの話聞いてたか……？」

頭を抱えるガーク爺を、売り物じゃないからへーきへーきだいいじよーぶーとなだめるマリエラ。ガーク爺の視線が鋭い。そろそろゲンコツが飛んできそうだ。

「その手の魔物食材は冒険者ギルドの横にある卸売市場に行きゃ手に入る。」

「ライナス麦もそこで手に入るかな？あとジニアクリームと軟膏缶も欲しいんだけど。」

「漸くまともな質問だな。この辺でとれる食材はたいてい扱ってるからライナス麦もあるだろうよ。あとはジニアクリームと軟膏缶が小口なら商人ギルドの売店に売ってんだろ。『シール商会』が作ってたから大口なら商会へ行け。俺の紹介だつたら、いくら融通してくれんだろ。」

ガーク爺は、なんだかんだで面倒見がいい。

「ありがとう！ガーク爺さん。今度お薬持ってくるね！」

そう言っって手を振るマリエラに、ガーク爺は、

「商人ギルドの図書館行って、勉強してこい！」

しっし、と手を振りながらそういった。反対の手でクッキーをつまむとポイと口に放り込んだのを、マリエラは見逃さなかった。

ガーク爺に教えてもらった卸売市場に行く。

冒険者ギルドは迷宮を囲む塀の北東出口を出て直ぐのところに入り、卸売市場も冒険者ギルドの隣に迷宮に面するように立地していた。

冒険者達は迷宮でた素材を冒険者ギルドや専門店に持ち込む。卸売市場は食材の専門店街で、冒険者たちが持ち込んだ食材を買い取り、解体し、食材によっては熟成、加工して販売する。

迷宮産の食材が集まるこの市場には、迷宮都市で生産された野菜や穀物、周囲の森で狩られた獣の肉なども集まっています、まさに迷宮都市の台所となっている。

卸売市場の巨大な外壁の中には、中小規模の店舗がひしめき合っていて、魔物の肉や、魚介を扱う店、この辺りでとれる獣の肉を扱う店、ウインナーやハムなどの加工食品を扱う店、乾物を扱う店、穀物や野菜を扱う店、乳製品を扱う店など、あらゆる食材店が軒を連ねていた。

今は冒険者たちは迷宮にもぐっている時間で、食材を買い付けに来た市民たちで市場はとても賑わっていた。食材とあわせて調理した料理も売っていて、いいにおいが漂っている。

「うわぁ、すごいー！」

「今日の目玉はコカトリスだ！見てよこのモモ肉！嬢ちゃんみたいにぷりっぷりだ！この串焼きなんか脂が滴り落ちそうだ！」

「りんご〜、採れたてりんごだよ〜、迷宮2階からの直送だよ。こっちはパインだ。一切れたったの2銅貨だ。」

「安いよ、安いよ。今日はオークとミノタウロスの合い挽きミンチが特価だよー。」

「焼きたてオークウインナーはいかがー。皮がパリッとはじけるよ。ホットドッグも売ってるよ！」

景気の良い呼び声に楽しそうに見て回るマリエラ。両手には串に刺さったパインやら、串焼きやらホットドッグの包みやらを持っていて、行儀悪く食べながらあちこち見てまわっている。

目的の乾物屋にたどり着くまで、ずいぶんと時間がかかった。海鮮を中心にした乾物屋らしく、一食で食べきれる程度の小ぶりの魚の乾物や、海草、貝柱などが、所狭しと並んでいる。サハギンのような大物の干物は無いようだ。あっても困るけど。

「らっしやい、なんにするね」

「お化け貝か、喰い付き貝の貝柱ありますか？」

「喰い付き貝ならこれだな。いい出汁でるぜ。いくつにする？」

こぶしくらいの大きな貝柱の干物が箆に積んで置いてあった。魔の森に海は無いから、マリエラが見るのは初めてだ。

(1個で10回くらいは練習できそうね。)

初めて扱う素材だからまだ抽出方法を会得していない。マリエラの《ライブラリ》は、新しい素材調整方法を閲覧したら完全に覚えるか《リセット》して忘れない限りは、新しい素材調整方法を閲覧できない。素材を見るに、手間の掛かる方法ではなさそうだ。100回も抽出すれば会得することができるだろう。10個買って銀貨2枚を払う。

後は穀物を扱うお店。これは市場の一番奥、北通り近くにあった。ライナス麦が無いが聞く。

「今年はライナス麦が良く売れてな。悪いが在庫はこれだけだ。あと1月もすれば新しいのが収穫できるから、それまで待っておくんな。」

ライナス小麦は迷宮都市の穀倉地帯を流れる川の中州辺りの湿地帯で育つ麦で、栄養価が高い。病人に食べさせると良いとされる穀物だ。こういった植物は他にもあって、例えば、砂糖楓の古木からとれる樹蜜や、芋の根と言われる摩り下ろすと粘りを生じる根っこ、主用途は食用ではないがジニアクリームなどがそうだ。

これらは単に栄養価が高いだけでなく『滋味に富んだ』味がする。ようは命の雫を多く含んだ食材だ。命の雫は地脈を流れる大地の恵み。その地に生きる全ての生き物、植物や獣、人だけでなく魔物にさえも微量ずつ含まれる。薬草によって蓄える成分が異なるように、命の雫を蓄えやすい植物というのがいくつもあり、マリエラが探しているライナス小麦やジニアクリームもそのひとつだ。

「はやり病でもあったの？」

ライナス小麦の在庫は2キロル^{kg}ほどしかなかった。マリエラの目的には十分足りる量だが、売り切れるような災いでもあったのか。

「いや、アグウィナス家が買い占めてな。」

意外な名前が出た。エンダルジア王国の筆頭錬金術師だった家系だ。今は迷宮都市のポーションの流通を牛耳っている。錬金術師の家系なのに、病人が大量発生でもしたのだろうか。

穀物店の店員は詳しいことは知らないようで、在庫のライナス小麦2キロル^{kg}を購入して店を出た。

「マリエラ、そろそろ」

貝柱とライナス麦を買っただけなのにもう昼時だ。あと1刻ほどで大工との約束の時間になる。珍しくてのんびり見物しすぎた。

「ジーク、お昼ご飯は？」

「家で、食べるよ」

マリエラは買い食いするたび、ジークの分も買っている。ジークはその場で直ぐに食べきるか、包んでもらって背負い袋にしまっていて両手を空けた状態である。市場におかしな連中はいなかったが、念のための警護体制である。

（食べ歩きしないとか、お行儀いいな。）

そうとは気づかず暢気に構えるマリエラだった。

卸売市場を出て新居に向かう。卸売市場の北通り側出口から近く、半刻と経たずに到着する。やはり、なかなか立地の良い場所だ。ジークが昼食を済ませた頃、約束の時間よりやや早く大工と思しき二人連れの男がやってきた。

「あんたがマリエラさんかい、ワシは大工のゴードン。見ての通りのドワーフじゃ。」

「僕は建築家のヨハンです。ドワーフと人間のハーフです。」

ゴードンはこれぞドワーフと言った様相の、ヒゲも眉毛も体形も太く短い男だった。

対してヨハンは、小柄でがっしりとした体形ではあるがゴードンより背は高く、ヒゲをそり、髪は勿論、眉毛まで整えた、洒落た感じの男だった。

「何が建築家だ。大工の倅らしく、もちつと技術を磨きやがれ」
「快適な住まいを提案するのが、これからの家作りには必要だと思
うね、親父。」

どうやら2人は親子らしい。会うなりいきなり親子喧嘩を始める
のかと思ったが、二人にとっては挨拶のようなものらしい。「」で、
どんな改築をご希望で？」と声を合わせて聞いてきた。

店舗スペースを直して薬草店を開きたいこと、二人で暮らせるよ
うに家具も併せて修繕してほしいこと、細かいところは決まってお
らず、色々教えて欲しいことを伝えると、まずは家を見せて欲しい
といわれた。どうぞ、と通すと、ゴードンは建物、ヨハンは増築部
分をチェックし始めた。

「こっちの建物は問題ない。配管の劣化もないな。住むには問題な
いが、床や壁が傷んどる。予算次第だが、洗い（清掃作業）をした
後に、床や壁石の研磨をしたほうがいいだろうな。」

ヨハンは、必要そうな家具も合わせて、内装見積つてくれ。」

「厨房の魔道具は魔石が切れてるだけでまだ使えるね。建物自体も
問題ないけど、屋根は手入れが必要かな。全体的に脂汚れが酷いか
ら、木壁は張り替えたほうがいいな。」

店舗部分は酷いな。床も柱も朽ちかけだ。ここに店舗を構えるな
ら作り直したほうが安く済む。カウンターテーブルや作り付けの棚
の傷みはガワだけだから、削って再生できそうだな。問題は採光かな。
親父、建て直して見積もつてよ。厨房の屋根もあわせてね。」

マリエラとジークがあっけに取られて見ている間に、2人は入れ
替わり立ち替わり、修繕案を作成していった。

大工と建築家

1刻もしないうちに、ゴードン、ヨハン親子の改築案がまとまった。

住居部分は、洗い（清掃）作業の後、壁や床石を軽く削って磨き、傷や凹みをきれいにする。迷宮都市付近では資材が貴重なため、床に板やタイルを敷いたり壁紙を張ったりするのは貴族の邸宅に限られるそうだ。

引越しの際に、大型の家具は売るか置いていく場合が多く、この家に残されていた家具は、運搬賃も怪しいような古い物ばかりらしいが、木材が朽ちていないものは修理を請け負ってくれるそうだ。足りない家具も、棚や机などの装飾性の低い物は、あわせて作ってもらえるし、作り付けの棚の蝶番が緩んでいたり、扉の建てつけが悪いといった建具の劣化も修理する。

1階の広すぎるリビングは、元は2部屋に分かれていたようで、壁を取り払ってレストランの客室にしたのだらうと言っていた。元の位置に壁を作ったほうが、使い勝手はいいらしい。リビングに置く家具は、客の目に触れるものだから、見目の良いものを買うべきだと勧められた。

迷宮遠征が終わって2ヶ月ほどすると、中古の良品家具が出回りやすいらしい。遠征で得た素材をヤグー商隊が運び、往復2ヶ月ほどかけて、帝都の製品を運んでくる。迷宮都市では作られていない、高級家具の部材や絨毯なども運ばれて来るから、買い換えた貴族の屋敷から払い下げられた品が出回ると教えてくれた。

油のにおいが染み付いた元厨房は、スキル持ちが洗い作業を行なった後、石材の磨き、壁板の張替えを行う。屋根の瓦も割れているものをいくつか取り替える。

ここまでは、あまり資材を使わないので、金貨1枚と大銀貨7枚の見積もり。

問題なのは店舗部分で、ほとんど作り直して、金貨5枚。以前はタープを屋根代わりにしていたが、木造で屋根まで施工する見積もりだ。壁は以前と同様に、外壁を流用して、新たに作らない。

外壁の高さが高いため、内側に新たに壁を作ったとしても、窓からは壁しか見えない。店舗スペースが狭くなるうえ、建材費用が高くなるだけ、というのが迷宮都市の増築の感覚らしい。

あわせて金貨7枚弱だが、どこを削る？と聞かれた。住宅部分の買い取り価格が金貨3枚だったから、倍以上の金額だ。大金だからだろう、内訳までヨハンが丁寧に説明してくれた。ゴリ押ししないスタンスで、好感が持てる。

マリエラは、店舗部分の採光が気になると話す。薬を置くカウンターの後ろの棚は日陰でもいいが、外壁を壁にした場合、窓ひとつ無いお店になってしまう。陰気で息が詰まりそうだ。

「板ガラスが手に入ればいいんだけどなあ」と、ヨハン。

「迷宮都市の外から持ってくるのか？手に入らんだろ」とゴードン。

（板ガラスなら、作れるんだけど。）

「板ガラスがあったら、どどういう店舗が作れるんですか？」

後学のために、と言った様相でマリエラが聞くと、

「ガラスがふんだんにあつたら、天井の半分をガラス張りにするね。勿論強度が必要だから、四角く格子状に窓枠を切つて、正方形のガラスを、こつ、斜めにかけるんだ。」

「建築家様は発想が貧困だな。ワシなら正三角形をつないで、カーブをつけるわい」

「なんだと、親父……。」

それは素敵じゃないか！」

ガラス天井の構想に盛り上がる二人から、ガラスのサイズは一辺がどれくらいで、厚みと個数がこれくらいで、というところまで、さりげなく話を聞く。

「店舗部分に関しては、2、3日時間をもらえますか？」

先に住居部分を、見積もりの案でお願いします。何日くらいかかりますか？」

その間に、ガラスを用意しておこう。それっぽい理由も考えておかないと。『ヤグーの跳ね橋亭』は今晚もあわせてあと5日押さえてあるから、入居できる日程も聞いておきたい。

「5日もあれば住居部分は十分間に合う。物は相談なんだがな、洗い作業にスラムの連中を使わせてもらえねえか？料金はスキル持ちにやらせるのと同額で賄う。勿論、ウチのスキル持ちに監督させて、キッチリ仕上げさせてもらう。ちよつと時間が多めに掛かっちゃうが、アイツラに仕事をやってもらえないか？」

ゴードンが聞いてきた。スラムとは、迷宮都市の南西門、魔の森に面した区画にある、エンダルジアの半壊した建築物に継ぎ接ぎの修繕を施した一角だろう。迷宮都市に着いたとき、リンクスが「この辺は治安が悪い」と言っていた。

「スラムには、怪我や病気で冒険者を続けられなくなった人たちが集まっているんです。まじめな人も多い。お願いできませんか？」

ヨハンが説明してくれた。

「後日、盗みに入る、可能性は？」

これまでマリエラに任せていたジークが、話に参加してきた。

「人を選んで連れて来ます。日雇いですが、『得た情報を私的に使わない』旨、きちんと魔法契約を交わします。」

ジークは、雇ったスラムの住人が、仕事に乗じて下見をし、後日盗みに入られることを警戒したようだ。

（その可能性は、考えてなかった……。それにしても魔法契約してまで雇いたいんだ。）

「悪いやつばかりじゃねえ、チャンスをやってくれないか。」

自分の左手首を握って、ゴードンはそういった。ゴードンさんの左手には大きな傷跡があった。

「ゴードンさん、その左手。」

「昔、冒険者をしてたときにな。冒険者は続けられなくなったが、俺は、大工としてやってこれた。」

マリエラの問いに、ゴードンが答えた。ゴードンはチャンスを買えたんだろう。だから、後進に恩を返そうとしているのだと思う。

「分かりました。よろしくお願いします。」

ジークは、もの言いたげな表情だ。マリエラ自身も軽率だったかも知れないと思う。でも、なんとなく、『そうするもの』だと思った。200年前の防衛都市の広場で、ポジションを売りながらお腹を鳴らしたマリエラに、自分の昼食を半分分けてくれた人がいたな、と思い出した。

(あの昼食を返せたのなら、いいんじゃないかな)
マリエラは、漠然と、そんな風に思った。

手付けとして金貨1枚を支払う。明日、契約を交わしてから仕事を始めるので、朝のうちに来て欲しいと言われた。合鍵を渡すのも契約後で良いそうだ。

ゴードンさんに、「一緒に木材を選びに行くか」と誘われたが、お任せしますと断った。木材の良し悪しなど分からないし、どんな仕上がりになるのか、想像も付かない。

「居心地のいい感じで。」という条件に、「わかった」とゴードン、ヨハン親子はうなずいた。

夕暮れまで、まだ2刻ほどある。商人ギルド 薬草部門長のエルメラは、冒険者ギルドの売店に薬が売っていると聞いていた。ちょ

っと市場調査していこう。

卸売市場を来た時と逆に抜けて、迷宮北東出口のそばの冒険者ギルドに向かう。板ガラスを作るなら、いくつか準備するものがある。ついでに買い足しておく。

『冒険者ギルド』というだけで、なんだか少しおつかない。入った途端に、怖いおじさんに「子供の来るところじゃねえんだぞ」とか恫喝されそうだ。

恐る恐る中に入る。商人ギルドよりロビーが広く、受付カウンタ―が複数並んでいる。あちこちに大きな看板が下がっていて、『素材買取所』、『依頼受付』、『掲示板』、『売店』等と、絵つきで表示してある親切設計だ。

まだ迷宮から戻っていないのだろう、冒険者らしき人影はまばらで、端に置かれた椅子に座ってだべっているか、掲示板を見ているか。マリエラたちには見向きもしない。

絡まねなくて良かったと、安堵しかけたその時、中年の冒険者らしき男性が近寄ってきた。

「どうした、嬢ちゃん、依頼だったらこっちだぜ！」

ニカッと笑うと白い歯が光る。ついでにつるりとした頭も光る。

（そうだよなー、依頼する側に見えるよねー。）

新米冒険者と思われるかもしれない、なんて、厚かましい。どう見ても『依頼者お客さん』だ。「売店を見に来た。」と答えると、「それなら、あつちだぜ！」とずびしと指し示された。ただのおせっかいさんだった様だ。お礼を言って売店に向かう。

売店には初心者向けの武器や防具、ロープやランタン、携帯食等

が置かれていた。薬も3棚分ほど陳列されており、上に大きく分類が、こちらにも絵付きで書いてある。『傷薬』、『血止め』、『飲み薬、その他』。実に、雑な分類だ。

傷薬だけでも複数種類があるのかと思ったら、製作者が違うようだ。成分などは書いていないが、製作者によって材料も効果も違うのだろうか。傷薬や血止めのほとんどが軟膏らしく、軟膏缶に入れて売られていた。

飲み薬は、毒消しや気付け薬、解熱薬、下痢止めと言った、一般家庭の常備薬らしきものまでおいてあった。ポーションのような液状の薬は少なく、丸薬が多いようだ。薬の種類と価格帯を確認しておく。

「何をお探ですか？」

売店の店員さんに声を掛けられた。やさしそうな美人のお姉さんだ。ちらと見た受付嬢もそうだったが、きれいな人が多い。冒険者は血気盛んな男性が多いから、すんなりやり取りができるよう、見目の良い女性をそろえているのか。よく見ると、一定の距離を保って敵つい男性職員が待機している。トラブルが起こったら、出張ってくるのだろうか。

「傷薬は、どれが一番よく効きますか？」

「この辺りが、人気の商品ですね。」

薦められたのは、高級そうなパッケージで、傷薬の中では単価の高いものだった。『高くて高価そう』なイメージで売れている気がしないでもない。値段は、銅貨50枚。200年前の防衛都市の物価で、低級ポーション10本分だ。軟膏だから、薄く塗れば手のひら10個分くらいの面積にぬれそうだから、妥当な値段なのかもし

れない。

ひとつ購入して売店を出る。

掲示板の前を通り過ぎると、ジークが一枚の掲示物を見つめていた。

『実技講習のご案内』

コースごとに分かれた講習会らしく、迷宮の浅い層を探索しながら、採取や魔物について学ぶコースや、武器の種類毎に訓練を行うコース、初級魔法のコースや、探索者に多いスキルについてのコースが箇条書きにされている。どれも冒険者ギルド指定のインストラクターがマンツーマンで実技指導をしてくれるらしい。

半日の指導が隔日で計5回行なわれて、お値段はどれも大銀貨1枚。プロのマンツーマン指導付きならば、安いんじゃないだろうか。

「マリエラに、もらった、大銀貨で、これを受けても、いいだろうか」

ジークは剣の使い方を学びたいらしい。

「俺は、弓しか、使えない。弓は、もう。」

ジークの右目はつぶれて見えない。今のマリエラには治すこともできない。

『利き目』が無く単眼であれば、照準が狂い距離感がつかみにくなるのだろう。

だから、新しく戦い方を学びたいという、ジークの希望を止める理由などない。

受付に申し込みに行くジークの後を、マリエラは付いていった。必要なものがあっても、ジークは遠慮して言い出さないかもしれない。一緒に聞いておきたい。

受付で、実技講習を受けたいと話すと、

「おお、実技講習の受講者か！俺が講師のハーゲイだぜ！」

つるりとした頭に西日が反射してまぶしい。ハゲ、いやハーゲイと名乗ったのは、さっき売店に案内してくれた中年男性だった。名前が憶えやすい。

おせっかいさんではなく、冒険者ギルドの職員だったようだ。いづから講習を受けられるのか聞くと、

「生憎と、遠征が始まるまでは予約がいっぱいだ。4日後以降なら空いてるぜ！」

エモノは用意してるから、動きやすい服で来てくれや！」

と、二カつと白い歯を出して言った。

「遠征に行くのは、迷宮討伐軍ですよね？」

どうして遠征前に、冒険者が実技講習を受けるのか。

「そりゃ、稼ぎ時だからな！いつもより深いところに潜るから、鍛えたいヤツはたくさんいるのさ！」

迷宮討伐軍は、迷宮の最深部を目指して遠征する。迷宮討伐軍を迎え撃つため、最深部の魔物が増え、浅い層ではその分、魔物の湧く数が減る。群れで襲われるリスクが減るので、冒険者たちはいつ

もより深い階層まで潜るのだという。戦闘力のない生産職までも、冒険者を雇って迷宮に潜り、採取活動を行なったりする。

人間が一所に集まりすぎると、稀に通常より強い魔物が湧き出るから、冒険者ギルドでは、これを倒すための上級冒険者を派遣する。上級冒険者の活躍を観戦できる機会も多く、新人や、下級冒険者達の楽しみでもある。

遠征期間中は迷宮都市全体が、祭りのような活気に包まれるそう
だ。

「4日後の朝に、北東の大通りを迷宮討伐軍がパレードしながら迷宮へ向かうから、見てから訓練を受けに来るといいぜ！」

ニカッと笑って、ハーゲイが教えてくれた。

練る

商人ギルドに着いたのは、日が暮れる直前だった。急いで売店に向かう。

商人ギルドの売店には、商人や職人に入用なものが揃えてあって、薬師コーナーにはマリエラが探していたジニアクリームの小売缶、と言ってもコップに5杯分くらいの量がある缶や、作成した薬をつめる軟膏缶が2サイズほど置いてあった。薬瓶や薬包紙もガーク薬草店より種類が豊富で、ラベル用の紙なども置いてあったので、いくつか購入しておく。

珍しいところでは、乳鉢のようなありふれた器具から、見たことも無い機械が掲載されたカタログもある。絵つきで説明が載っていて、粉末を圧縮して錠剤を作る手動の機械や、丸薬を作成する回転円盤状の機械だそうだ。こんなもの初めて見た。技術の進歩を感じてしまい、時間を忘れて見入ってしまいそうだ。

いかんいかん。売店のお兄さんが閉店したそうに、こちらをちらちらと見ている。

あわてて鍛冶コーナーに向かう。売店のお兄さんが早く買物を終わらせて欲しそうに近寄ってきたので、トローナ鉱石5キログムと、ラム石10キログム、金属の小粒3キログムを頼む。

「金属の小粒ですか？精錬や鍛造中に飛び散る？奥にあったかな。」

古いものですが処分品ですのでお安くします、と探して持ってきて

てくれた。

会計を済ませて商人ギルドを後にする。ラム石は全部で300キログラムほど必要でこの量では全く足りないが、マリエラの目論見通りならば現地で入手できるはずだ。逆に目論見が外れれば、ガラス張りの天井自体を諦めることになる。

何しろゴードン、ヨハン親子がいう、ガラス天井を実現するには2,000キログラムのガラスが必要だ。20頭のヤグーが積んでくる量だ。お貴族様のお屋敷でもあるまいし、そんな目立つ物を作るつもりは無い。『偶然見つけた』ことにして1/3か1/4の板ガラスを渡そうとマリエラは考えていた。

その量にしたって、ポーション瓶を作ったような小さい増埒では埒が明かない。

明日、目的地に行ってみて、アテが外れていたらほんの小さな窓をいくつかつけてもらえばいい。

『ヤグーの跳ね橋亭』に戻る。日が暮れたばかりの客足がまだ少ないうちに、アンバーさんにクッキーを渡す。アンバーさんは、いつもより元気が無いように見える。

「これがエミリーちゃんが言ってたクッキーね。とっても元気がでるっていう。」

クッキーは『ヤグーの跳ね橋亭』の女性たちに好評で、瞬く間になくなつた。アンバーさんも喜んでくれたけれど、アンバーさんに必要な元気は体力回復とは違うんだろうな、とマリエラは思った。

わいわいとクッキーを囲む声を聞きつけて、エミリーちゃんが、トタタと走ってきた。

「マリエラ姉ちゃん、ジーク兄ちゃん、おかえりなさい！」

あのね、クッキー食べたら、父ちゃんすっごい元気になってね。
一緒におろしにいったんだよ！
卸売市場迷子になるからって、肩車してくれてね、すっごく高くてね！」

ほっぺをピンクにして一生懸命話してくれる。
宿のマスターお父さんに構ってもらって、とても楽しかったようだ。

「エミリー、風呂入って寝る時間だぞ。」

厨房から宿のマスターが出てきて、エミリーちゃんに部屋に戻るように促す。

「まだ、眠くないよー」

エミリーちゃんが口を尖らすと、

「明日も、マリエラ姉ちゃんに髪結んでもらうんだろ？寝過ごしたらどうする？」

宿のマスターがやさしく諭した。エミリーちゃんは、

「そうだね！明日もちゃんと早起きして、朝ごはんの準備するね。」

明日も髪結んでね！」

と、言って部屋に戻っていった。聞き分けのよい子だ。明日の髪形はかわいく編みこみにしてあげよう。

「クッキーありがとな、いつもより、エミリーと一緒に居てやれた。」

宿のマスターはそう言うと、2種類の料理が載ったトレイを出し

てくれた。今日のメニューが全て楽しめるスペシャルプレートのよ
うだ。マスターなりのお礼らしい。

美味しく頂いて、夜の時間が始まる前に部屋に戻った。

「はい。今日は『ジェネラルオイル』を作りたいと思います。作成
は、ワタクシ、マリエラと、助手のジークムントさんです！」

「……、よろしく、おねがいします?」

(おお、ジークがのってきた。)

マリエラの無茶振りにジークが答える。ジークとだいぶ仲良くな
れたようで、マリエラはちょっとうれしくなる。

机に向かい合って座り、材料と道具を並べる。

まず、すり鉢にスリコギ。オークのラードにオークキングのラ
ード。オークキングの肉はたいそう美味で高価だが、肉より大量に採
れるラードは、こぶし大の大きさが銅貨数枚と安価で買える。オー
クのラードはオマケで貰ってきたものだ。どちらも新鮮で僅かに魔
物の魔力が残っている。

マリエラのすり鉢にはオークのラードをこぶし1個分、ジークの
すり鉢にはオークキングのラードをこぶし2個分入れる。

「はい、ラードを練ってください。あ、魔力はこめないでね。」

練り練り練り練り。

ねりねりねりねり。

ラードがペースト状に伸びたら、『命の雫』を込めた水を少しずつ加えて、また練る。

『ジエネラルオイル』はラードに残ったオークとオークキングの魔力が必要だから、作成は手作業で行う。どうしても必要な『命の雫』以外はスキルも魔法も使わない。スキルや魔力を使うと一時的に素材に使用者の魔力が移ってしまい、素材に残る微弱な魔力を消してしまうからだ。

練り練り練り練り練り練り練り練り。
ねりねりねりねりねりねりねりねり。

「ねえ、ジーク。ジークは魔の森の辺の村で生まれたんだよね？やっぱりポーションじゃなくて、薬を使ったの？どんな薬があったの？」

「村に、ポーションは、無かった。薬師の、ばあ様がいて、薬を作っていた。」

ねりねりしながら、薬の事情を聞いていく。

どんな小さな村にも治癒魔法の使い手は数名いて、怪我の治療などはたいてい治癒魔法で行う。わざわざ治癒魔法を使うまでも無い小さな傷や、治癒魔法師に見せるまでの応急処置として傷薬や血止めと言った薬を使うのが一般的らしい。

病気の場合は『病魔まで回復する』場合があるため、薬を使う場合が多い。特に患者が体力の少ない子供の場合は回復した病魔に子供が負けて亡くなってしまいう場合もあるらしく、治癒魔法師が施術を嫌がることも多い。

帝都まで行けばポーションがあるから、薬の代わりに低級ランクのポーションが使われていると、ジークが説明してくれた。

「帝都では何処でポーションを売ってるの？いくらぐらい？」

話が帝都に向いたのは有り難い。ジークが『買い付け』られて来た場所なので、マリエラは聞きづらかったのだ。

「中級ランク以下は、雑貨屋、でも売っている。上級ランクは、ポーションの、専門店で買う。」

ポーションの専門店は、上級ランク以上のポーションを作れる錬金術師が開いている。帝都には上級ランクを作れる錬金術師は12人、特級ポーションになると、たったの3人しかいない。ポーションの値段についても、ジークムントは自分の知る範囲で詳しく説明する。

「上級ランクが、たった12人！」

「200年前は、もっと、多かつたのか？」

ジークに聞かれて、マリエラは気付く。

200年前、錬金術スキルを持つ者はパン屋の数よりたくさんいたが、特級ランクや上級ランクを作る錬金術師が、何人いたのかマリエラは知らない。

「防衛都市でも、上級ランクはポーションの専門店でしか扱ってなかったよ。王国内で専門店がどれくらいあったか分からないけど、防衛都市には3軒しかなかった……。」

マリエラが上級ランクを作れるようになったとき、上級ポーションを店に置いて貰えないか交渉して回った。しかし、どの店でも『うそをつくな』と門前払いされた。錬金術スキル持ちがたくさんいたから、上級ランクを作る錬金術師もたくさんいて、競争が激しいから追い払われたのだと思っていたが、違ったのだろうか。

(いけない、手が止まっちゃった。)

ラードを練る手が止まってしまった。『命の雫』を込めた水を加えて再び練る。ラードの脂肪分が乳化して気泡を含んだ白いクリーム状になって浮いてくる。

練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り。ねりねりねりねりねりねりねりねりねりねりねりねりねりねりねり。

低級、中級ランクのポジションの値段は、200年前の防衛都市の相場とさほど変わらない。やはり、迷宮都市だけ異常に高いようだ。

「外から見た迷宮都市ってどんなんところ?」

「迷宮の中の休憩場所、安全地帯という、イメージかな。魔の森と迷宮を、ひっくるめて、魔物の徘徊する迷宮のような場所、と考えていて、その中で、寝泊りができる程度に安全な場所という感じが永住する場所とは、思われていない。

俺は、Bランクの冒険者だったから、Aランクに上がるときに、来るつもりだった。」

ジークが自分の過去の話をしてくれるとは思わなかった。

(Bランクの冒険者だったんだ……)

なんでも冒険者のランクは、ランク毎に決められた難易度の依頼を所定の件数達成することで昇格できるらしい。BランクからAランクに上がるには、Bランク以下より遥かに多い依頼をこなす必要があるらしく、その大半が迷宮都市に集中している。迷宮都市で依頼を受けたほうが効率よくAランクに昇格できる。

迷宮都市は高ランクの冒険者を切望しているから、迷宮都市行きを希望するBランク冒険者を、迷宮都市所属のAランク冒険者が迷宮都市まで連れて来るサービスまであるそうだ。ちなみに、帰りは自力で送ってはもらえない。

魔の森を単騎で抜けうる実力の目安は、Aランク相当。

Bランクであれば、Aランクに引率されれば抜けてこられるが、Cランク以下や荷物が多い場合は、黒鉄輸送隊のように魔物の攻撃を防ぎうる装甲馬車で、不眠不休で駆け抜けなければいけない。

迷宮都市に来たBランク冒険者は、Aランクの実力をつけて自力で魔の森を抜けるか、あるいはヤグー商隊に同行して1月掛けて山脈を抜けるか、黒鉄輸送隊のような私設の輸送隊に金を払い、荷物として運んでもらう以外、迷宮都市から出る方法は無い。

そんな話をリードを練りながら、ジークはマリエラに語った。

練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り。

ねりねりねりねりねりねりねりねりねりねりねりねりねりねりねり。

ラードの乳化はどんどん進み、ホイップクリームのようにふわふわになって盛り上がっている。

「うん、いい感じ。」

マリエラは新しいすり鉢にオークのホイップを上部2/3だけ掬って移す。下の部分には脂肪以外の不純物が混じっているので使えない。ジークが練ったオークキングのホイップを受け取ると、オークのホイップの半分くらいの量掬って、オークのホイップが入ったすり鉢に入れ、ジークに渡す。

「はい、練って」

練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り。

ジークが練っているホイップのすり鉢に、マリエラが少しずつオークキングのホイップを加えていく。この分量が難しい。オークキングのホイップが少なければ効果が弱まるし、多すぎると分離してしまう。

練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り練り。

「これくらいかなー？じゃー、これを湯煎にかけまーす。」

オークのホイップと、およそ倍量のオークキングのホイップがきれいに混ざったら、すり鉢ごと湯を張った1回り大きな容器に入れて、ゆっくりかき混ぜる。

しばらくすると、ホイップは溶けて脂と水に分離する。本来は混

ざり合わないオークとオークキングの脂が均一に混ぜて1層になっている。この油脂が『ジエネラルオイル』。

マリエラの『ライブラリ』の、『暮らしを便利にする練成品』にある、上級者向けレシピだ。

「ジエネラルオイルかんせーい。今度は、完成したジエネラルオイルを使って、オーク革のお手入れクリームを作りまーす。」

上に浮いている脂が『ジエネラルオイル』。オークとオークキングのラードを練っていたすり鉢は、湯煎中に洗って乾かしている。そのひとつに商人ギルドの売店で購入した『ジニアクリーム』をこぶし3つ分くらい入れる。

「はい、ジーク、練って練って。」

ジークがまだ練るのか、という顔をした。助手のジークさん、がんばってください。

滑らかに

練り練り練り練り練り練り練り。

ジークが文句も言わずジニアクリームを練り練りと練る。

うん、助手便利。一人で練ると翌日は筋肉痛で腕が上がらなくなってしまう。

ジニアクリームは『ジニアの実』という果実の種からとれる植物性の油脂で、常温では固形だが体温で溶けて肌に浸透する。『命の雫』を多く含む天然素材で、塗れば組織の治癒力を高めてくれるから、マリエラが生まれるより遙か昔からそのまま塗って肌荒れや保湿用のクリームとしたり、軟膏の基材や石鹸の材料などに多用されている。

ジニアの種は果実に対して大きく、果肉は薄くしかついでいないが栄養価は高く食べられる。味はアクが強くて癖があり、大量に食べたものではないが、刻んだりペースト状にしてハムと一緒にパンにはさんだり、サラダに混ぜるとコクの有る味わいになる。ちなみにジニアクリーム自体も食べられるが、美味しくないので食品としては扱われていない。

ジニアの実のクセの有る味が良いのか、熟して落ちた実をゴブリンが好んで食べる。ジニアの木は迷宮や魔の森の浅い層に生えているから、護衛付きでなら一般市民も採取できる。夜明け前にシール商会に勤める女性たちが、護衛付きで迷宮に拾いに行つてジニアクリームに加工するまでの流れが、ジニアクリームの缶のラベルに絵付きで紹介されていた。ラベル絵の女性は中年から老婆の姿で描か

れていたから、年季の明けた娼婦たちを支援する事業なのかもしれない。

ジニアクリームの品質は良く、これならばマリエラが作る必要も無い。これからは是非活用させていただきたい。

ジークが練っているジニアクリームに、まだ固まっていない『ジエネラルオイル』を少しずつ加える。

練り練り練り練り練り練り練り。

ジニアクリームに水分は加えていないから、ホイップ状にはならずにはやわらかいクリームになっていく。ジニアクリームとジエネラルオイルが均一に混ぜたら完成。

「ジークお疲れさま。オーク革のお手入れクリーム完成したよ。」

このクリームで、昨日買ったオーク革のズボンとかジャケットとか磨いてね。靴と鞆も。あ、1刻もしたら分離しちゃうから、大急ぎで。」

マリエラも布巾にクリームをつけると、新調した靴やかばん、採取用の革の服に塗りこんで磨いていく。

「何だ、このクリームは。」

ジークが驚く。クリームを塗りこんだオーク革の質が見る間に向かしていく。しなやかなのに強度が有る。ゴブリンの一撃をかわらして防げるか、という程度のオーク革がこれではまるで。

「オークジエネラルの革みたいになったでしょー」

通常、皮革の手入れクリームは同じ魔物の脂が配合される。同種の脂を補うことで多少の組織修復が行われ、皮革製品が長持ちする。勿論、オーク革にオークキングの脂を塗っても強度が上がることはない。同じオーク族でもランクが違うから、組織修復の効果さえ得られずにジニアクリームだけ塗ったのと変わらない効果になる。

マリエラが作った手入れクリームは、オークの脂とオークキングの脂を『命の雫』で繋ぎ合わせオーク革にオークキング革の修復効果をもたらすものだ。オークキング革レベルまでは上がらないが、オークジェネラル並の性能に皮革を強化してくれる。

手入れクリーム自体は1刻ほどで分離して使い物にならなくなるが、強化されたオーク革は見た目はオーク革のまま性能だけジェネラルクラスで固定される。

「これで磨けば、オーク革製品がずっと長く長持ちするんだよー」

マリエラは暢気にジェネラルオイルの説明をする。

オークの防御力は分厚い脂肪あつてのもので、革自体の素材価値は低い。

オークジェネラルといっても、E級ランクの冒険者が使う程度のちょっと良い革製品ではないから、ワイバーンどころかミノタウロスの革製品にも劣る素材だ。

「いや、これは、大変なものじゃないのか？ワイバーン革を竜革並に強化することも……。」

「あー、それはむり。これオーク限定なの。何でも『オークの真髄は、肉と脂に宿る！』とか、レシピに書いてあった。オークの脂だからできるみたい。」

マリエラも他の素材で試したことがあったが、どれもうまく行かなかった。

ちなみに『ジエネラルオイル』の真価はオーク肉にこそ発揮される。

「ジエネラルオイルでオーク肉を焼くと、なんと、オークキング肉の味になるの！」

マリエラは、本日一番のドヤ顔をする。

「オークジエネラルじゃ無くて、オークキングのお肉だよ！」と、繰り返して強調することも忘れない。

このオーク革お手入れクリームは、ジエネラルオイルの応用レシピ。

ジエネラルオイルは『暮らしを便利にする練成品』に載っていて、上級ポーシオンを作れるようになったときに、ひっそりと増えていた隠しレシピだ。

レシピの説明に、

『上級ポーシオンを作れるようになって、オークキング肉が食べれない不憫な後輩へ。』
（ 販売禁止。禁呪扱いでよろしく ）
と書いてあった。

マリエラが初めてジエネラルオイルで焼いたオーク肉を食べたとき、余りの美味しさに涙が出てしまった。ラードを練りまくった腕の痛さも忘れてしまう美味しさだった。レシピを開発した先輩に心から感謝した。

ジークもリゾットを食べたときに泣いていたから、オークキング肉にも食いつくだらうと、マリエラはせっせと説明したのだが、ジ

ークは目を細めてマリエラを見ている。

「言いたいことは、たくさんあるが……。マリエラはオークキングの肉を食べたことがあるのか？このオイルを使ったもの以外で。」

「ないよ？」

「これ、オークジェネラル肉の味になるんじゃないのか？名前はジエネラルオイルだろ？」

「！！！！」

たしかに、『オークキング肉が食べれない不憫な後輩へ』と書いてあったが『オークキング肉になる』とは書いてなかった。

「……まあ、ジエネラルクラスなら、質のいいオーク革製品で通せなくも無いな。」

そついいながら、ジークは次々とオーク革を磨いていく。磨耗しやすい裾や関節部分は特に念入りに塗りこんでいて、マリエラもそれに習って革を磨いた。

1刻などあつという間で、何とか全て磨いたころにはジエネラルオイルもお手入れクリームも分離して、使えなくなっていた。

オークジェネラルの味でも、たいへん美味しい肉になるのだ。できればお肉も食べたかった。

残念そうに脂を片付けるマリエラに、

「今度、本物のオークキングの肉、食べような。今のマリエラなら、買えるだろう？」

と、ジークが声を掛ける。

「そうだね、ポーシヨン、高値で買ってもらえたもんね。オークキングのお肉だつて買えるよ……ね。」

「……あれ？もしかして、私、オークジェネラルとか、オークキングの革製品、買えちゃう？ジェネラルオイルとか作る必要、なかった？」

「……。買えるだろうな。身なりをやつすために、わざとオーク革にしたんじゃないのか……。」

ジークが不憫な子を見るように言う。

「うーあーと奇声を上げながら、マリエラはベッドに倒れこむ。」

「あんなに、ねりねり練る必要なかったあー」

「まあ、無駄じゃないだろ。安価なオーク革製品のほうが、人目は引かないからな。」

ジークが慰めてくれた。

（そうだね、あの練り練りは無駄じゃないよね。）

ジーク、普通にしゃべれるようになったもん。）

ねりねり練り練りしながら、たくさん会話をするうちに、ジークは言葉に詰まらなくなった。途切れ途切れにしゃべっていたのに、いつの間にか滑らかに話をしている。

「ジークー、かわいそうな私のために片付け頼まれてー」

「仕方ないな。風呂でも入ってきたらいい。」

会話も自然になってきた。やっぱり、あの練り練りは無駄じゃない。

（殆どジークが練ったんだけどね。）

磨いてぴかぴかになった靴を履いて、マリエラは風呂場に向かった。

翌日は朝早くから新居に向かう。ゴードン&ヨハン親子はすでに玄関前で待っていた。待たせて申し訳ないと謝ると、

「新米の」「年寄りの」「朝は早いんだ。」「

と、二人の声が被り、「なにおう」「とこれまた声が被る。

これで、すんなり仕事の話に移行するのだから不思議だ。

住居部分の施工契約書とスラムの人と結ぶ雇用契約書を渡されて、ジークと二人で確認する。店舗部分は案が固まってからの契約になるそうだ。

黒鉄輸送隊と結んだ契約書よりは簡単なものだったが、ちゃんと魔法契約書になっていて、『本契約の施工において知り得たいかなる機密情報も、これを保持する』等と書いてある。

「大げさなんじゃ？」と、マリエラが思わず声に出すと、

「当たり前のことだ。

それにな、あれは聖樹だろ？

コイツは長年のカンってヤツだが、ああいうモンが生えている場所ってのは、良かれ悪しかれ何かしら起こりやすいものでな。こう

やって、魔法契約でもって秘密を漏らせなくしておけば、万一なんかあった場合、ワシらの方も安全ってわけよ」

なるほどと、マリエラは感心した。家の間取りなどを漏らされてマリエラたちが困らない為だけでなく、ゴードン&ヨハン親子が情報によこせと脅されないためにも、きちんと魔法契約を結ぶのだ。

契約内容に問題が無いことを確認し、施工契約書にサインする。合鍵を渡すと早速今日から作業に入るといつてくれた。残金は施工が終わってからでいいらしい。

「店舗部分の計画についても、2、3日中にまとめてください」というヨハンの要望に、「わかりました」と返事をして、ジークと新居を後にした。

素敵なお店のためにも、ガラスの目処を立てなければ。

そのため、今日は磨いたばかりのオーク革の採取用の服を着て、弁当も持ってきた。

ジークと二人で3日前にヤグーを借りた店に行く。

今日は2頭借りたいというと、前回のヤグーと少しおとなしげなヤグーを貸してくれた。ヤグーの群れは上下関係がはっきりしていて、下位のは上位のものあとを追う習性がある。ヤグーが隊列をなして山脈を越えるのに利用されやすい習性の一つだ。

おとなしい方にマリエラが乗って走らせるのだが。

「うわ、ちょ、はい、はいー。おちるー。」

ジークを乗せてノリノリで走るヤグーの後を、とつとこと追いかけるマリエラのヤグー。マリエラは乗せられているどころか、落ちないようしがみつくだけで必死だ。

結局、前回同様ジークのヤグーに二人乗りして、後ろのヤグーには荷物を積んだ。

「折角、2頭借りたのに。」

マリエラが腑に落ちないとむくれるが、この方が早く進めるのだから仕方ない。

2人と2頭は3日前に砂を採取した川を前回とは逆に下流に下つていく。

川沿いの穀倉地帯は小麦の種まきが大方終わったところで、きれいに耕された畑が広がっている。使役されている農奴たちは、種まきの済んでいない遠くの畑に向いているか、迷宮遠征の準備をしているのだろう。この辺りは閑散としている。

川べりにはタマムギが自生していて、あと1週間もすれば収穫時だ。タマムギは中級ランク以下の解毒ポーションの材料になる。前はガーク薬草店で購入したが、できれば採取しておきたい。ここは穀倉地帯だから、勝手に採っていいものなのか後でガーク爺に確認しておこう。

川沿いに下り穀倉地帯の終わりにたどり着く。乱杭が打たれ、デイスとプロモミンテラ、魔物を除ける植物が植えられている。

ここが切り開かれ人の手に取り戻された穀倉地帯の終着点で、杭

の向こうは魔の森だ。乱杭は穀倉地帯から魔の森に向けて幅広く打たれていて、穀倉地帯と魔の森の境に延々と広がっている。

その広大さが魔の森を恐れる人々の心理を表しているようで、魔物除けポーションを使っているのに、マリエラは少し恐ろしく感じた。

マリエラの記憶よりもずっと魔の森は広がっていた。ここは魔の森を切り開き、取り戻してきた場所だと分かっているにもかかわらず、魔の森が押し寄せているような感覚に陥る。

念のためもう一度魔物除けのポーションを使い、マリエラたちは魔の森へと歩みを進めた。

ガラス工房

川沿いに魔の森を進む。

川下になるにつれ川幅は広く、しかし水量は減っていて、大量の砂と細い水流が特徴的な地形となる。この辺りの土壌は深くまで砂質で、川は地下水脈へと流入しているのだそうだ。もっと川下に進むと、川は完全に地下に潜って消えてなくなる。

水流に運ばれて流されてきた川砂はこの辺りに堆積し、良質の採砂場となっている。

ぼつぼつと石造りの建物跡が見えてきた。

ここが今日の目的地。200年前はガラス工房が立ち並んでいた場所だった。

崩れずに残った工房を、ジークと二人で覗いていく。ヤゲーも当然のように付いてくる。ジークをボスと思っているのか。

1軒目、片側の壁しか残っていないかった。

2軒目、建物は半分ほど残っていたが、中はクリーパーがみつしりと生えていた。床だけでなく壁にも生えている。群生していて栄養が足りないのか子株ばかりだが、一面うによるうによると蠢いていて、ものすごく気持ちが悪い。ここは見なかったことにする。

3軒目、4軒目と見て回るが、どこもこんな調子で、設備が使えないような建物が残っていない。この辺りは水場の近くということもあってクリーパーが多い。幸い成長していない子株ばかりで、オーク革のブーツのおかげで毒針で刺される心配はないし、踏めば倒せる

程度のものだ。

ジークが先頭を歩き踏み均した後をマリエラが続く。マリエラを挟んで左右に続く2頭のヤグーも、タツタカと軽快な足踏みで絡み付こうとするクリーパーを踏み潰している。草食動物なのになんとも頼もしい。

川を離れて工房跡地を奥に進むが、稀に廃墟があるばかりで、やはり駄目かと引き返そうとしたとき見慣れた植物を見かけた。

デイスとプロモミンテラ。

かつては錬金術師が工房を構えていたのだろう。天井はなく、壁も半分崩れているが、デイスの蔦が壁を這いプロモミンテラが木々に埋もれるのを防いでいる廃墟があった。

ここならば、とマリエラが期待をこめて中を覗いた瞬間、ジークに強く引っ張られた。

ダダダダダ

マリエラが覗いた場所に、石つぶてが飛んでくる。よく見ると、石ではなくて見たことのある種だ。

「うわー、クリーパーの親株だー。」

しかも種がある。知能がある厄介なタイプだ。

デイスとプロモミンテラのおかげでクリーパーの群生は免れたものの、奇跡的に成長した1体が大きく成長したようだ。

ちらと中を見た限り奥に炉らしきものが残っていて、ここならガ

ラスが作れそうなのだが。

「どうする？」

ジークがマリエラに聞く。いくらジェネラルオーク革レベルに強化したといえ、二人の装備は革の服だからクリーパーの石つぶてならぬ種つぶては凌げない。

そういえばガーク爺が言っていた。種もちのクリーパーは酒も回る、と。

（お酒かー、今は秋だしあるかも。）

「木の虚でさ、甘い臭いがするやつ。探したいんだけど。」

「猿の秘酒か？」

「それでもいいんだけど、猿招きのほうがいいかな。」

『猿の秘酒』は、猿や小動物が木の虚などに隠した果実が発酵して酒になったもので、ごく稀に見つかっては富を招くと珍重される。『猿招き』の方も木の虚に溜まった酒だが、こちらは樹蜜が発酵したもので毒が有る。

『猿招き』が見つかる季節は決まって秋なので、酒の甘い臭いで獲物をおびき寄せ、毒で殺して冬場の栄養にする、と考えられている。

今から酒を買って戻る時間はない。明日になるなら駄目もとで周囲を探索してみたい。

「俺に探索スキルがあれば良かったんだが。」

冒険者時代のジークは探索などしたことが無かった。仲間に命じて獲物を連れて来させ、それを射殺すだけだった。使える武器も弓だけで、今はたいした戦力にならない。クリーパーの親株など、Bランク冒険者であれば難なく倒せる魔物であるのに、役に立てない自分が歯がゆい。

（狩人だった父さんは、どうやって獲物を探していたんだ？）

子供のころ、熱を出したジークに父が蜂蜜を採ってきたことがあった。どうやって見つけたのかと聞いたとき、父は確かこう言っていた。

「精霊にお願いしたんだよ。熱を出したジークのために、蜂蜜のありかを教えてくださいって。」

熱が下がってから、ジークも蜂蜜が欲しいとお願いしたが、何の変化も現れなかった。

「精霊はね、誰かのために何かをしたいっていう、人の気持ちが好きなんだ。自分の望みは自分で努力しないとね。」

なんて役に立たないと、あの頃のジークは思っていた。そういえば、あの頃からだ。精霊たちの姿が消えて行ったのは。ジークが利己的になればなるほど、精霊たちは離れていった。精霊に嫌われてしまったのだと、今頃になって漸く気付いた。

（森の精霊たち、お願いだ。マリエラが『猿招き』を欲しがっている。どうか、力を貸してくれまいか。）

ジークは心の中で精霊に願ひ、ふと、自嘲した。自分はなんて都

合がいいのかと。父の言葉を信じたわけでもないのに、精霊に祈っている。クリーパーさえ倒せない、剣だって素人程度でマリエラを守ることも難しい。その上探索まで、他人任せか。

マリエラはきよろきよろと森を見回して、懸命に『猿招き』を探している。祈っている暇があれば自分も探そう。鼻も利くし、目だって一つ残っている。

ジークは森の匂いを嗅ぎ、一本一本木々を確認しながら森を進んだ。勿論魔物に会わないよう注意も怠らない。マリエラを危険にさらしたくない。マリエラの望みを叶えたい。

ふわり、と風が甘い匂いを運んできた。

「！マリエラこっちだ。」

匂いのしたほうへ進むと、芳香を放つ一本の木が生えていた。

「ジーク！あつたよ、すごい！」

マリエラが大喜びで木に駆け寄る。クリーパーの子株を引っこ抜いて作った使い捨てのゴムの袋に、『猿招き』をせっせとつめる。

「折角だから、茸もいれちゃえ。」

『猿招き』の周囲に生えた毒々しい色の茸を、摘んでは練成して『猿招き』に加えていく。

「マリエラ、その茸なんだ？」

また変なことしてるんだらうと、ジークが聞く。

「こつちは、食べるとクラクラして意識を失う毒キノコ。これは食べて眠ったら三日は目が覚めない茸で、そつちはお酒と一緒に食べると、あつという間にお酒が回っちゃう茸。この辺すごいね、永眠させる気満々だね。」

マリエラ特製の睡眠ポーション入りの『猿招き』を小分けにしてゴム袋につめる。全て片手で握れるサイズにしてある。

種持ちクリーパーの場所に戻って、討伐を開始する。

作戦は簡単で、『猿招き』の入ったゴム袋をクリーパーにぶつけて割るだけ。地面に染みた『猿招き』をクリーパーが吸って、眠ったらジークが接敵して倒す。

マリエラとヤグー二頭は撤退係。万一ジークがクリーパーにつかまったら、ジークの腰に結んだロープを引っ張って離脱する。

実に雑な作戦だ。特に撤退の辺り。ヤグーとクリーパーでジークを綱引きか。

ジークはクリーパーにつかまる気など無いのだから、マリエラ達にロープの端を渡すと、崩れずに残った壁の間から『猿招き』のボールを投げる。

投げては、種を避け、種を避けては、ボールを投げる。

なかなかの身のこなしで、まったく被弾していない。しかも全弾クリーパー付近に着弾している。マリエラは、おお、と感心してジ

ークを応援していて、2頭のヤグーは安全地帯に転がってきたクリーパーの種をもぐもぐと食んでいる。そういえば、そろそろお昼時だ。今日のお弁当は何だろう。

緊張感の無いことをマリエラが考えている間に、クリーパーは酒が回ってきたらしい。念のため残りの『猿招き』を全てクリーパーにぶつけて、反応が無いのを確かめた後、ジークは小剣を片手にクリーパーに駆け寄った。

撤退係もスタンバイだ。マリエラとヤグーも壁の隙間からジークを見守る。

まずは種の詰まった莢を切り落とし、次に毒針を持つ触手を根元から断つ。クリーパーは完全に寝入っているのか、ピクリともしない。

全ての触手を切り落とした後、ジークの一刀が中心部分の茎を切り裂く。太さは人の首ぐらい。先端には人頭大の蕾のようなものが付いている。

ビクビクとクリーパーの葉が揺れる。攻撃できる触手も種の詰まった莢も、もうない。

残されたクリーパーの葉は、見る間に茶変して萎れてしまった。どうやら無事に倒れたらしい。危なげない討伐で本当によかった。

「やった！ジーク、すごい、おめでとう！」

マリエラが歓声を上げる。ヤグーたちと一緒にジークの元へ駆け寄る。ジークは照れくさそうに笑うと、「うまく行ってよかった」と言った。

勝利を祝って食べた昼食は、いつもよりずっと美味しいとジークは思った。

昼食後、まずはクリーパーの素材を処理する。マリエラが莢を乾燥させている間に、触手の粘液がこぼれないようジークが切り口を焼いて縛っていく。クリーパーがばら撒いた種は、ヤグーたちが食べて片付けた。人頭大の蕾の中には、こぶし大くらいの魔石が入っていて大収穫だ。

肝心の工房には、ガラスの溶融炉がほぼ原型のまま残されていた。耐火物のはがれていたが、炉の周囲に元耐火物の土山があるし、ガラスの原料である砂や、副原料のラム石、トローナ石の置き場もある。真つ白に劣化して砕けたガラスもあって、昨日商人ギルドで買った分も合わせると材料の量は十分だ。

原料も副原料も、長年風雨にさらされて変質してしまっているが、どれも加熱すれば元に戻すことができる。マリエラは原料を乾かし、副原料を加熱し、使える状態に戻していった。炉の耐火物も粉になっってしまったものを、粘土のように塗り固めては乾燥させて成型していく。

準備は整った。

炉に薪をくべ、金属の小粒に魔力をこめて火花を起こす。

《来たれ、炎の精霊、サラマンダー》

右手をかざして詠唱すると、中指にはめた指輪がきらりと光る。

ポーシヨン瓶を作ったときに顕現したサラマンダーがくれた指輪だ。

炎がぐるりと揺らめいて、小さなトカゲの形をとる。

あのサラマンダーだ。やっぱりまた来てくれた。

「サラマンダーさん、力を貸して。今日は景気良くいきたいの。」

サラマンダーは自分が呼ばれた炉をぐるりと見渡すと、マリエラが起こした火花をばくばくばくと飲み込んだ。

ゴウ、と一気に火力が強くなる。

この火力なら一気にいける。砂100に対して、ラム石を15、トローナ鉱石を0.2。劣化したガラスの破片も混ぜ込んで、錬金術スキルを使って炉に投入していく。

火花をよこせと尻尾を縦に振るサラマンダーに、たつぷりと火花をあたえる。サラマンダーの火力は溶融物にまで影響するのか、溶けたガラスはゆっくりと渦を描き、均一な液体に代わる。後は固めるだけだが、ここが一番難しい。

ガラス細工のレシピがあるのはポーシヨン瓶だけで、板ガラスの作り方は聞きかじった程度にしか知らない。ガラスは粘度が高いから、吹いて膨らませるポーシヨン瓶とは勝手が違う。工房に残っている設備は炉だけで、ガラスの引き上げ装置は朽ちて跡形も無いから、錬金術スキルでなんとか工夫するしかない。

「サラマンダーさん、ありがとう。もうちょっとお願いしたいけど、先にお礼をしておくね。」

マリエラは、サラマンダーにたくさん火花を与えると、炉の開口部に目を向ける。サラマンダーに言葉は伝わらないけれど、やりたいたいはわかるのだらう、ぱくりぱくりと火花を食べると、首をかしげるようにマリエラを見た。

《練成空間、圧力制御・真空》

人差し指ほどの厚みで、腕の長さほどの長方形の練成空間を作り、溶けたガラス面につけると、中の空気を抜く。ちゅるりとガラスが吸いあがる。

(うわ、練成空間壊れる。)

高温すぎて練成空間がもたない。あわてて同じ長さのロール状の練成空間を二つ形成し、吸い上げたガラスを挟み込んで巻き上げる。

高温のガラスに接触した練成空間が壊れる速度とロールの回る速度はほぼ同じ。ガラスと接触した練成空間は端から端から壊れるが、壊れる直前にロールが回転するからガラスは上に引き上げられていく。壊れた練成空間は、再度ガラスに接触する前に修復していく。

引き上げられたガラスは軟らかいうちに一定の長さに切断し、ジークが製品置き場に重ねていく。引き上げた端から急激に冷えて固まってしまうのは、サラマンダーがやっているのだらう。マリエラにそこまでの余裕は無い。サラマンダーが助けてくれなかったら、折角引き上げた板ガラスは、ぐねぐね曲がって長いまま固まってしまうのだらう。

(きつっ！)

マリエラは声もでない。魔力の減りようは前回の比ではない。まるで体の芯に穴が開いて、そこから流れ落ちていくようだ。ロール状の練成空間を再生成する速度が速すぎる。ガラスを早く引き上げなければ、はやく、はやく。魔力が切れてしまう前に。

なんとか、炉内のガラスを全て引き上げたあと、マリエラはその場で意識を失った。

ガラス工房（後書き）

ジークは魔力を感知する「探知魔法」（「ジークムント：短剣」）は使えますが、目的の獲物を探す「探索スキル」は持っていません。紛らわしいので念のため。

ジークムント：思考の迷宮

「誰か、治癒魔法使いを呼んでくれ！マリエラが、マリエラが！」

『ヤグーの跳ね橋亭』にマリエラを抱えたジークムントが駆け込む。マリエラは青ざめた顔色で意識が無い。

余りの動揺ぶりに、治癒魔法使いらしき客の一人がマリエラを診察してくれた。

「ああこれ、魔力切れだね。そんなに心配しなくても、明日の朝になったら目が覚めるよ。」

はあ、と安堵のため息をつくジークに、「部屋で寝かせてやれ」と宿のマスターが促す。店の女がマリエラを着替えさせている間に、ジークはヤグーを返しに行った。

『ヤグーの跳ね橋亭』に戻ると、宿のマスターが夕食を聞いてくる。

(主を差し置いて食事など……)

席に付くのを躊躇うジークムントに、「食うのも仕事のうちだ」とマスターが料理を差し出した。出された食事を黙って平らげ、ジークムントは部屋に戻る。

マリエラはベッドの中で、静かに寝入っていた。

静かに椅子を引き、マリエラのベッドの横に座る。こつやってみる彼女は年齢よりも幼く見える。

（あのスキルは、凄まじかった。）

ジークムントは、ガラスを製造するマリエラを思い出す。高温でまぶしい光を放つ溶融炉から、ガラスが次々と浮かびあがっては、切断され、見る間に冷えて、ジークムントの手に渡る。速度はほとんど速くなり、まるで壮大な魔術の行使を見ているようだった。

なんとという魔力量だと、ジークムントは感動に震えた。

けれど。最後の一枚を引き上げた後、マリエラはぱたりとその場に倒れた。

息が止まるかと思った。心臓がバクバクと早鐘を打ち、胃がキョウと引き攣れる。転がるようにマリエラに駆け寄り抱き上げると、真っ青な顔をしてはいたが、息はあった。

マリエラを抱えて全速力でヤグーを駆る。

手綱を握る手がぶるぶると震える。不安で押しつぶされそうで、息が苦しい。胃に石でも入っているようだ。

急がなければ、急いで治癒魔法師にマリエラを見せなければ。俺は、おれは。

『この主に、死なれては困るのだ。』

ジークムントは両手で顔を覆った。

（あの時、俺は確かに、そう考えた……。）

マリエラに死なれては、『俺が困る』と。

マリエラには感謝をしている。恩を感じている。死ぬほどの苦しみから救ってくれた。人として扱ってくれた。日に三度の食事を、清潔な服を、新しい靴を、暖かな寝床を、毎日の風呂を、朝晩の挨拶を、何気ない会話を、全部全部与えてくれた。どれも少し前の俺には無かったものだ。

なのに、まだたったの1週間しか経っていないのに。

すべて慣れて当たり前ものになってしまった。

勿論頭では分かっている。俺は犯罪奴隷で、こんな生活を与えてくれる主など、マリエラ以外ありえない。

マリエラは迷宮都市でおそらく唯一の錬金術師で、その希少性を差し置いても錬金術の腕前は確かだ。けれど、錬金術を除いてみると、マリエラ自身は酷く普通で、平凡な、年齢よりも幼げな少女に過ぎない。

リンクスにも言われた。「ただの、どんくせえ女だ」と。

その通りだと思った。だから、守りたい、守ろうと思った。リンクスがいない間に、俺がいるのだと思わせたかった。錬金術を除けば、ただの田舎くさい女だ。普通に接して欲しいとは好都合だ。うんと優しく微笑んで、令嬢のように甘やかせば、きっと俺を気に入るはずだ。今までの女達だってそうだった。マリエラは大切だ、命の恩人だ、他の女など目に入らない。彼女がいい、彼女だけでいい。替えの利かない『うつつつけの主』だから。

俺はマリエラの特別になりたい。マリエラの中に居場所が欲しい。もう二度と失いたくない。彼女の笑顔を、交わす挨拶を、ともに楽しむ食事を、暖かで、温かで、安定した生活を。

ああ、なんて、俺は、利己的な人間だ。

マリエラのためだと思っていた。マリエラのためにと思っていた。己の気持ちにすら気付かなかった。己すら謀っていた。

全部、自分のためじゃないか。

そう、マリエラに癒されてからずっと。俺は新しい主を観察していた。どんな人柄か、何を好み、何を嫌がるのか。聞かれたこと以外はしゃべらない。余計なことを言っただけはいけない。機嫌を損ねるくらいなら、黙っていたほうがいい。

屋敷の整備にスラムの人間を雇うのだった。本当は反対だった。どんなトラブルを招くか分からない。けれど言えなかった。いや、言わなかった。マリエラは死に掛けた俺を買おうようなお人好しだ。無理に止めて、冷たい男だと思われるくらいなら、マリエラの思うようにしたほうがいい。万一何かあったなら、全力で守るだけだ。そうすればきつと、彼女は俺に感謝する。

こんな思いを、感情を、明確に意識していたわけではない。殆ど無意識だ。「主のために」「マリエラのために」と誤魔化していたから。

ポケットから手拭を取り出す。端に小さく『ジーク』と名前が刺繍してある。出会った日に渡されたものだ。嬉しくて有り難くてずっと手放さずにいたら、「ほかのと区別が付かなくなっちゃうから印をつけてあげる」とマリエラが刺してくれたものだ。

今着ている服も、靴も、下着も、この体さえも、俺のものではないというのに、自分の持ち物ができたようで、とてもとても嬉しかった。

マリエラの親切には、他意がない。

眠っているマリエラの頭を優しく撫でる。

「んう……、ししよお……。ごはん……。」

彼女はこんな寝言を良く漏らす。

きつと寂しいのだと思う。幼い頃に師に引き取られて育てられた。親代わりの師匠について話すマリエラの表情は、どんな話の時でも親愛に満ちている。10代半ばに独立して、ずっと一人で魔の森で暮らしてきたという。

魔の森から魔物スタンピーのが溢れた時も、きつと一人で逃げて、一人で魔法陣を起動し、たった一人で200年後の世界で目覚めたのだろう。

仮死がどういふものかは分からないが、長い眠りのようなものならば、一夜で国を滅ぼした大災の恐怖が残っていても不思議ではない。変わり果てた世界で、知る人も無くただ一人、どれほど不安だったろう。

ジークムント 俺を買ったのだから、情報源、護衛、労働力、いくらでも用途は考えられるけれど、寂しさから子供が道端の捨て犬を拾うように、手を差し伸べただけに思える。

それほどに、ベッドで眠るマリエラは、普通の少女に見えるのだから。

ジークムントはベッドで眠るマリエラを見つめる。

盗賊に攫われた娘が、盗賊に恋することがあると言う。自らの命を握るものに好意的な感情を寄せることで、生き残る可能性が上がるのだ。

(俺の、マリエラを想う気持ちは。)

どれだけ考えても思考はループするばかりで、答えにはたどり着けない。

(俺は、これからどうすれば。)

誰のためかを差し置けば、守りたい気持ちに偽りは無い。守るためには進言だつて必要だ。けれど、彼女に好かれない、悪く思われたくない、反対意見を言いたくない。

こんな愚かしい気持ちは、決して、マリエラに知られたくない。知られてしまうのが、とてつもなく、恐ろしい。

ジークムントを思考の迷宮に残したまま、夜は更け、そして明けていった。

「ジーク、おはよう?」

たいへん良く眠りました、といわんばかりのスッキリ顔で、マリエラが目を覚ます。

ベッドの横で椅子に腰掛けて、マリエラを見つめるジークに少し驚いた様子だ。

「おはよう、マリエラ……」

ジークはとても憔悴した様子で、挨拶にも元気が無い。どうした

んだろう、とマリエラは首をかしげた。

(あー、そういえば、昨日、魔力切れで倒れたんだった。)

心配させてしまったのだろう。良く見ると、お気に入りの手拭をぎゅっと握り締めているではないか。

マリエラは起き上がると、ジークと向かい合わせになるように、ベッドの縁に腰掛けた。ジークはうなだれていて、顔を覗き込むマリエラと視線が合わない。

「ごめんね、ジーク。心配かけちゃったね。」

「はい……。」

「吃驚したよね。魔力切れになるかも知れないこと、言っておけばよかったね。」

「はい……。」

「私に何かあったら、またジーク、嫌な目にあうかも知れないのに、不安にさせちゃって、本当に、ごめんね。」

びくりとジークが震え、マリエラを見た。

「マリエラ……、俺。」

ジークの口が、はくはくと空気を吸う。

マリエラは、知っていたのか、気付いていたのか、知られたいか、いと、あんなにも恐れていたのに。

「俺、マリエラに取り入ろうとした。おれ、もどりたくなくて、なくしたくなくて。」

「じぶんのために。おれ、たすけてもらったのに、なのに……」

「うん。知ってる。大丈夫だよ、ジーク。どんなジークでも大好きだから、大丈夫。」

マリエラの『大好き』に、恋愛感情は無い。それくらい、ジークムントにもわかる。

ぼろぼろと涙をこぼすジークムントの頭を、あやすようにマリエラが撫でる。

自分の気持ちも思いも理解できない、卑怯で矮小な自分でも、マリエラの傍にいて良いのだと、ジークムントはこの日漸く理解した。

ジークムント：思考の迷宮（後書き）

21～30話のジークの内面でした。

命を助けてもらったジークは、深い感謝やらは勿論すると思います
が、次は生活の安定を本能的に求めると思っんですよ。
転職したてのリーマンが、上司の人柄をうかがって取り入ろうとする
様子を思い描きながら、21～30話を書いていました。ここに
こと感じはいいのに、本音が見えないスッキリしない感じがでてい
ればいいのですが。

転職リーマンは色恋営業なんて仕掛けませんが、ジークの場合は死
にかけスタートなのでナイチンゲール症候群が、命を握られている
奴隷身分なのでストックホルム症候群も入っています。

理由が何であれ、マリエラが落とされてくれれば、二人して幸せに
なれたのですが、それでは話が変わってしまいますから。マリ
エラの残念設定の本領発揮です。

実技講習

迷宮に向かう街道に何百人もの兵士が行進する。

身に纏うのは見栄えのする豪華な鎧ではなく使いこまれた品々で、素材も魔法金属の物、魔物素材の物とバラバラだ。武器はハルバードや槍と言った長ものが多いが、こちらも兵士によって異なっている。全員が揃っているのは身に纏った漆黒のマントだけ。しかし全員が一糸乱れず行進していく。

彼らは迷宮討伐軍。何度も迷宮の最下層に挑み、生き残ってきた迷宮都市最強の軍隊だ。

街道には、彼らの姿を一目見ようと多くの冒険者や市民が集まっていて、まるでお祭りのようだ。

歓声が一際大きくなる。

「金獅子將軍だ。」

「將軍ー！」

金の髪をたなびかせた獅子を思わせる雄々しい男が、鱗のはえた竜馬に跨り人々の歓声に応える。

「金獅子將軍が居れば、兵は一騎当千らしいな！」

「本人もすげえ強さだったよ」

「歴代最強の將軍様だ。そろそろ迷宮も年貢の納め時かもな」

熱気に満ちた声援は、遠征軍が迷宮に消えていくまで続いた。

2週間に渡る、迷宮都市の遠征期間が始まった。

「右ががら空きだぜ！」

「立ち止まってどうする！弓使ってんじゃねえんだ！」

「振りがおせえよ！」

ハーゲイの檄が飛ぶ度、ジークが地面に転がされる。控えめに言ってもボコボコだ。

迷宮討伐軍の行進を見物した後、マリエラとジークは冒険者ギルドに向かった。

今日から、ジークは冒険者ギルドの実技講習だ。マリエラも見学についてきた。

ジークとハーゲイは鑑定紙で適性を確認した後、戦闘方針を話し合い、片手剣と盾の戦闘スタイルを選んだようだ。初日の時間のほとんども素振りに費やした後、今は手合わせを行っている。

クリーパーの種を全部避けたジークの打ち込みは、ハーゲイにカスリもしない。切りかかる度、ハーゲイの持つ剣代わりの棒の先が、トトンとジークのスキをつく。その1手は強いものには見えないのに、その度にジークは大きくバランスを崩して地面に転がされる。

（このハゲ、なかなかやりおる……。）

と、分かった風にナレーションを入れるマリエラだったが、見ても正直良くわからない。ジークはとっくに限界で、ふらふらして見えるのに、何度転がされても立ち上がっては懸命に喰らい付い

ていく。その表情に、なんとなく『大丈夫だ』と思ったマリエラは、持ってきた『薬草薬効大辞典』に目を落とした。

ガラスの製造で魔力切れを起こした翌日から、ジークは少し変わったとマリエラは思う。

マリエラが目を覚ますと、なんだかうにやうに言い出したので、孤児院の先生直伝の『分かってる、大丈夫、大好き、大好き。』

暗い顔して、良くわかんないことを言い出す子がいたら、そう言っただけ抱きしめてあげてね』をやってみたら、見事に復活した。

「取り入ろうとした」とか「じぶんのため」とか言っていたけれど、そんなの当たり前だとマリエラは思う。別にマリエラに迷惑をかけているわけではない。『猿招き』だって懸命に探してくれたし、『ジークのため』と『マリエラのため』が両立するなら、それでいいじゃないか。

マリエラが目を覚ました後、作ったガラスは『クリーパー』が守っていた、どこぞの商隊の落し物（設定）』としてジークが新居に運んでくれた。

魔力切れの翌日はジークに宿で休むようオネガイされ、薬やポーションを作ったので、新居に顔を出したのはガラスを運んだ翌日だった。新居に着いてみると、なぜかドワーフが一人増えていた。

店舗スペースでドワーフとドワーフハーフが3人してガラスを囲んで議論していて、周りには設計図らしき紙片が散乱していた。寝

ていないのか3人とも目の下にクマがあった。

「おはようございます?」

マリエラが挨拶すると、3人目のドワーフが、

「ワシはルダン、コイツらと同じ工務店のガラス職人じゃ。ワシも設計に加わるからの。」

と挨拶してきた。

ルダンの説明によると、迷宮都市では魔の森や迷宮から魔物が溢れることを想定して、ガラスを大きのまま使用する事は無いのだそう。小さなパーツにカットして、金属の窓枠にはめて使う。多少割れてもガラス細工のスキル持ちなら直せるから、庶民の家は割れガラスを修理した品を工夫して使っている。だから、ガラス自体珍しいものではないが。

「創作意欲が湧くんじゃ。」「おかしくない範囲に仕上げますから。」

「やらせてくれんか。」

ドワーフ3人組の熱意に負けて、『悪目立ちしない範囲で』という条件の下、仕事をお願いすることにした。

契約を済ませ、住居の残金と店舗増築代を支払う。前払いした金額とあわせて金貨7枚。当初の見積もりと比べれば端数が切り上がっているが、増えた窓枠分を考えると、どう考えても安い。

聞くとスラムから連れて来た3人が思いのほか良く働いたので、店舗の増築にも起用することで調整すること。

「その3人にも会っておきたい。」

ジークの申し出に、仕事にかかわる全員と挨拶をすることになっ

た。

スラムから来たという3人は、怪我で休まざるを得なくなつた若い冒険者達で、少し痩せてはいるが落ちぶれた印象はなく、言われなければスラムの住人と分からなかつた。

「回復するまでの糊口さえ稼げれば、スラムから抜け出せそうな人を選んでいきます。私達も仕事ですから、流石にスラムに根付いてしまった人を雇うことは難しいので。」

と、ヨハンが説明してくれた。本人達も遠征さえ始まれば怪我が治りきつていなくても迷宮の浅い層で採取ができるし、この仕事のおかげで武器を手放すことも、借金をすることもせずに済んだと話してくれた。ジークは思うところがあるのか、彼らの話をじつと聞いていた。

マリエラは3人に怪我の調子を聞いて、昨日作ったばかりの薬を試供品だと言つて渡した。『薬草薬効大辞典』巻末の『薬の作り方 - 初級編 -』を参考に作った普通の薬で、ガーク爺のお墨付きも貰つてある。ポーシオンではないから直ぐに治ることは無いけれど、毎日塗り込めば回復も早まるだろう。「冒険者に戻れたら買いに来る」と嬉しそうに受け取ってくれた。

3人の嬉しそうな顔に、マリエラはポーシオンを渡せないことを申し訳なく思った。

その日は薬の材料を買い込んで『ヤグーの跳ね橋亭』に帰り、薬を作って過ごしたけれど、もつと役に立てる方法があるんじゃないかとマリエラは悩ましく思った。

side ジーク：

「目が足りネエなら魔力で補え！」

「左手が遊んでるぜ！ガードはどうした！」

「遅い遅い！」

ハーゲイの怒号とともに、剣に見立てた棒がジークムントの間を突く。決して強い突きではないのに、真剣であれば命を奪ったであろう一撃は酷く重くて、その度に死を錯覚した体が地に伏せる。転んでは立ち上がり、立ち上がったのは転がされる。

痛みには慣れている。立ち上がれないほど疲れた身体を無理に動かすことも、奴隷になって身体に刻んだ。

筋が、肉が、骨があげる悲鳴を黙らせて、ジークムントは何度も立ち上がる。

ハーゲイの一撃は速く重いが的確で、転がされるたび少しずつ正しい動きを身体が覚える。ジークムントは良い師を得たようだ。限られた時間の中、少しでも多く学び取るうと訓練用の剣に手を伸ばす。指の一本も動かなくなるまで、訓練は続けられた。

「言いたいことはたくさんあるが、そのガッツは悪くネエぜ！」

動かなくなったジークに、ハーゲイが話しかける。

「嬢ちゃんの前で転がされて恥ずかしいか？」

(マリ…エ…ラ…)

酸素が足りず頭が朦朧とする。顔を動かすこともできないから、ジークはマリエラを見ることができない。

「安心しな！本に夢中で見てないぜ！」

ずびし！とハーゲイがサムズアップする。ニカッと笑った笑顔がにくい。

ジークムントはそのまま意識を手放した。

side マリエラ：

「嬢ちゃん、今日は終わったぜ！奥に水場があるから、起きたら洗って帰るといいぜ！」

『薬草薬効大辞典』を読んでいる間に、ジークの訓練が終わったよ
うだ。

さんざんジークを転がせ回ったハゲ……ハーゲイは、ニカッと白い歯を光らせて、冒険者ギルドの建屋に戻っていった。後頭部に反射する日差しがまぶしい。

「ジーク、おきてー。」

名前を呼んでもジークは起きない。マリエラがちょっと魔力切れを起こしただけで大騒ぎして、一日宿から出してくれなかったのに、自分は意識を失うまで訓練するとは。

「ごそごそとマリエラはカバンから緑の丸薬が30粒入った瓶を取り出す。宿でおとなしくしている間に作った、上級ランクの魔法薬、

再生
リジエネ薬だ。

深い癒しを与える魔法薬で、1月ほど飲み続ければ過酷な暮らしの結果、縮んでしまった寿命さえ元に戻す。訓練とあわせて服用すれば、短期間で筋力の増加が見込める便利な丸薬だ。過酷な日々を過ごしたジークには必要な魔法薬だから、1月分に当たる3本の瓶を渡してある。

普通のポーションでも訓練の疲労を癒すことは可能だが、訓練前の状態まで癒されてしまうので意味が無い。その点、このリジエネ薬は体の治癒力を高めて治すので、訓練の成果が最高の効率で発揮される。

材料は、卸売市場で買った喰いつき貝に聖樹の葉、クリーパーの種子、プラナーダ苔。苔が希少であり市場に出回らないポーションだが、ポーション瓶を作った川原でたくさん採取してある。喰新いいつき貝素材の処理も簡単で、直ぐに覚えることができたし、リジエネ薬の作り方も、慣れれば難しいものではない。

きらきらと深緑に透けて輝く小粒は一見すると美味しそうに見えるが、実際はものすごく苦い。スライムとクリーパーを煮詰めたらこんな味になるのかもしれないという、青苦い味が口いっぱい広がってなかなか消えないものだから、ゼラチン液で薄くコーティングしてある。

瓶から一粒取り出して、爪でゼラチンを少しはがして、
「えい。」

ジークの口に放り込んだ。

「ゴツホ、ウガ……」

おお、ジークが起きた。流石はリジエネ薬。こっかばつぐんだ！

魔力切れから目覚めてからの5日間、マリエラは新居で使う雑貨を買い揃えたり、店で扱う薬を作ったり、ジークの実技講習を見学して過ごした。

ジークは実技講習以外でも、早朝やマリエラが部屋にこもって薬を作っている間に訓練をしていたようだ。リジエネ薬の効果もあつてか、こけた頬も戻ってきた。

予定の日付に『ヤグーの跳ね橋亭』を離れて新居に移ったが、エミリーちゃんに会いに、時折早めの夕食を食べに行っている。夜が更けると『ヤグーの跳ね橋亭』は冒険者で溢れて、アンバーさん達は大忙しだ。頼まれていた薬は試供品避好薬として渡してある。開店したら買いに行くからと言ってくれた。

マリエラの薬屋を、お客の冒険者達に紹介してくれるというので、店の開店日と地図を描いたピラと一緒に傷薬の試供品をたくさん渡してある。開店したら、何かお礼をしなくては。

昼食は殆ど毎日卸売り市場へ行く。冒険者達が持ち帰った素材が流通しているのだろう。いつもより商品の品数が多く、人通りも多い。

薬やポーションの素材を見つけては買い漁っていて、マリエラの工房に設えた壁一面の棚には処理した素材の瓶や袋が並んでいる。早く棚をいっぱいにしたい。

明日は店舗部分が完成する。商品をお店に並べたり、開店の準備をしなくては。

マリエラは、新しい生活に胸を躍らせていた。

実技講習（後書き）

特級のリジエネーションは上級と別物で、ゲームであるような継続回復効果を与えるので、回復量以下のダメージであればバンパイアのような超回復戦闘が可能、という設定を書いたのですが、説明が長くなりすぎたのでカットしました。

木漏れ日

「店舗の建て直し、完成だ」

ゴードン、ヨハン、ルダンのドワーフトリオが満面の笑みで、マリエラとジークを出迎える。

店舗の工事期間中は、正面玄関は使用禁止でも見せてもらえなかった。

窓や屋上から覗くこともできたけれど、「完成してからの楽しみ」として、見ないでおいた。

漸く完成した店舗に、正面玄関から入る。

「おおー、明るい」

マリエラが貧困なボキャブラリで驚く。天井にはガラスの窓がいくつか設置してある。

一つ一つは大きくは無いが、かわいらしい木の枝葉を模した格子に大小のガラスがはめ込まれていて、床に落ちる格子の影が、まるで木陰にいるようだ。

「これは、聖樹？」

「そうとも、折角聖樹の植わっている家じゃからな。ここまで聖樹の枝はきとらんが、こうすりゃ聖樹の下で守られとる気分じゃる。」
と、ガラス職人のルダン。

「しかもですね、この窓、一見普通のように見えますが、実は立体的な構造をしてみました、日がでている間は常に光が差し込むように設計してあるのです。しかも差し込んだ光が店舗内に広がるように細工してあります。」
と、建築家のヨハン。

すごい。窓のサイズだけ見ると、他の店より少し大きい程度で違和感が無いのに、店舗の薬を置くスペース以外は、光が差し込んで陽だまりのようだ。しかも聖樹の木陰にいるような安心感まである。

「それで。このテーブルと椅子は何なのでしょう？」

マリエラの質問に、陽だまりの真ん中におかれたテーブルを囲んで座る最後のドワーフ、ゴードンが答える。

「ワシ、ここに通う。」

答えになってないよ。

店舗の中には、マリエラが依頼したとおり、カウンターとカウンターの奥に店員専用の棚、店舗の奥に自由に商品を見られる陳列棚が設置してある。これらとは別に、なぜか6人がけのテーブルが陽だまりの中央に鎮座ましまし、入り口側の壁面にも5人がけのカウンターテーブルがある。勿論各テーブルには椅子も並んでいる。前の店舗を解体した廃材を利用して作ったらしいのだが、店舗の雰囲気にはぴったりと合う造形をしていて、これではまるで、

「喫茶店？」

「一番目当たりのいい席に、ゴードン、ヨハン、ルダンのドワーフトリオがたむろする。」

「あー、ここ最高」

「創作意欲が湧きますー」

「ええのうー」

ジークがお茶を振舞うと、ドワーフトリオは本格的にくつろぎだした。

ドワーフトリオの説明によると。

マリエラたちが来る前日、完成した天井窓の下で出来栄を確認する3人は。

「いい出来だ。」

「うむ。広々しすぎて、ちと殺風景な店舗じゃがの。」

「この陽だまりを楽しめないのはもったいないですね」

「廃材があつたら、椅子でも作るか」

トントンカンテン

「机も欲しいの、こんくらいの」

トントンカンテン

「こんな無骨な造形ではこの場所に合いませんよ」

トントンカンテン トントンカンテン

「とまあ、こんな具合じゃわい。」

どんな具合だと思わなくも無かったが、怪我や病気のお客さんがくつろげるスペースというのも悪くない。サービスということであまりがたく貰っておくことにした。

「おう、マリ嬢、店完成したみてえだな。」

4人目のドワーフ、いや違う、ガーク爺がやってきた。

「おお？こりゃ、ぬくくて気持ちいいな。」

なぜか、ガーク爺までドワーフたちの輪に加わる。顔見知りと言った様子でもないのに、まったく違和感が無い。

「マリ嬢、兄ちゃんでもいいや、ワシにも茶。」

くつろぎスペースはあるけれど、ここは薬屋さんなんですけど。喫茶店じゃないんですけど。いやまて落ち着け、棚に薬を並べたら、薬屋らしくなるはずだ、と考えるマリエラにジークが声をかける。

「マリエラ、店の名前はどつする？」

ジークの入れてくれたお茶を飲みながら、日向ぼっこを楽しむおっさんたちを眺める。

あつという間に、おっさん4人。入れ食い状態だ。

「うーん、『おっさんホイホイ』？」

お店の名前は、『木漏れ日』にした。

これだけじゃ何のお店が分からないけれど、入ってみてもよく分からないままだから、これでいいと思う。

ひとしきり日向ぼっこを楽しんだ後、ガーク爺は帰っていった。何でも明後日の夜に採取に連れて行ってくれるらしい。初迷宮だ。楽しみすぎる。

ガーク爺が帰った後、ドワーフ3人も再起動したようで、店舗や厨房を案内してくれた。

先ず、店舗横の台所。元厨房だけあってそれなりの面積があつて、新しく食卓を置いたから2、3人ならここで食事が出る。ドアを開けると扉が間仕切りとなつて、店舗側から台所の中が見えなくなる親切設計。というか、喫茶店設計？狙つて作つてないか、これ。

驚いたのは魔道具で、薪も着火も火力調節までボタン一つで出来る。薪は何処に入れるのか聞いたら、ジークが

「俺たちの村は、ど田舎だったからな。薪はいらないんだよ。」

と、実演してくれた。ドワーフトリオの前だったから助かったけど、幼なじみ設定がこんなところで役立つとは思わなかった。

水の魔道具も台所、風呂、トイレ、洗面所に付いていて、各部屋には換気の魔道具と換気口が天井部分に設置してあるそうだ。

迷宮都市の家は窓が小さく湿っぽそうだと思つていたけど、こんなに便利な仕組みになつていたのか。

後でジークに聞いた所によると、生活魔法は大体が魔道具化されているらしい。迷宮都市の人手不足を補うために、歴代の辺境伯が

推進してきた政策のひとつで、迷宮都市では補助金もあるから庶民の家にも設置されている。

ただ、魔力の消費量が生活魔法の数倍多いらしく、魔道具を持つていても生活魔法で済まず場合も多いとか。特に食材の保管庫や空調といった長時間稼働する魔道具は、魔石で動かすタイプだから魔石代が馬鹿にならない。

洗濯や暖房、床の埃を除いてくれる魔道具もあるらしいが、人力で作業しやすい魔道具程、高価になるため、この辺りはマリエラ達の新居にもついていない。

維持費も合わせると、家事のために人を雇ったり借金奴隷を買うよりは安上がり、といった物らしい。

それにしても、すごい進歩だとマリエラは驚いた。

薬の質はイマイチだけど、ポーションに替わるものも、そのうち出てくるんじゃないか。

2日前から住んでいるから、住居部分は大いたい分かる。資材置き場として使っていたリビングも、今はキレイに片付いている。前の住人が置いていった椅子やテーブル以外は、敷物も家具もなくガランとして寂しいが、おいおい揃えていきたい。マリエラたちの部屋も修理してもらったベッドに箆笥程度の家具しかなく、寝具を揃えただけだから宿屋かと思うほど殺風景だ。

どんな家具を入れようかと、マリエラが考えていたら、

「おう、忘れるところだった。」

と、ゴードンに地下室に連れて行かれた。

地下室は3部屋が直列に繋がっていて、一つ目の部屋にはジークが倒したクリーパーの素材が保管してあって倉庫として使う予定だ。二つ目の部屋には『迷宮都市特別法 住居管理規定の云々のほにゃらら』とやらに定められた量の非常食や避難道具が備えてあって、2人なら充分避難出来る。

三つ目の部屋には、なにやら木箱が置いてあったのだが。

「ここん所な、大穴空いてたぜ。聖樹の根っこが地下の大水道まで伸びちまって、崩れたみてえだ。潜って確認しといたが、大水道まで続いとった。いやあ、話には聞いとったが大水道とは珍しいモン見れたわ。ああ、排水に影響はねえし、壁もこの通り埋めてある。聖樹の真下だから魔物は上がってこねえだろうが、大水道にはスライムが大量にいるらしいから、念のためにデイジスを詰めた木箱をおいてあったんだな。」

ゴードンは、一番重要な事を最後にさらりと説明して帰って行った。

(ここが売れ残ってたの、そのせいじゃないの?)

地下大水道はエンダルジア王国時代から残っている下水道で、200年経った今でも迷宮都市の下水道として機能している。下水と言っても各住居には、スライム槽と呼ばれる排水処理槽が設置してあり、調教師がタイム後に調整した汚水処理専用のスライムが入れている。汚水処理スライムが浄化した、綺麗な水が地下大水道に流されるから伝染病の発生源になることは無い。

ただ、地下大水道には野生化したスライムが大繁殖しているらしい。

スライムは不定形の粘液状の魔物で知能はない。核を潰せば消滅する弱い魔物で、余程成長しない限りは核を踏みつければ倒せる。また、外殻を持たないため魔力吸収にめっぽう弱く、魔法を吸収するデイジスには近づかない。大水道に繋がる配管の周辺にデイジスを植えておくだけで、大水道からスライムが侵入してくるのを防ぐ事が出来る。

スライムは魔力の残る死骸を好むものの、大体の有機物や物によつては無機物まで分解することができるので、し尿や生ゴミの処理用に活用されている。野生のスライムは、分解した成分で溶解液を生成して攻撃して来るが、調整済みのスライムは分解途中の土塊を吐き出す。この土塊は肥料として専用の業者が定期的に回収してくれる。

……、
このようにスライムは、生活に密着した馴染み深い魔物であるが

(粘液状スライムの蠢く魔物がたっぷり棲んでる地下大水道と繋がってるのか、気持ちいいもんじゃないよね。)

聖樹が無くても乾燥させたデイジスを置いておくだけで、スライムの侵入を阻むことができるだろうが、理屈ではわかっていても気分のいいものではない。石積みの壁面の目地から、うによりと染み出て来るんじゃないかと想像してしまう。

(後で、デイジスの繊維で目地埋めしよう。あと、聖樹が枯れないようにちゃんと水やりしよう。)

とりあえず、3つ目の部屋は開かずの間にしておこうと、ジークとマリエラは頷きあった。

最後に思わぬ大穴（物理的）が待ち受けていたけれど、素敵なお店に素敵な家が完成してよかった。お祝いをしなくては。

オークキングの肉を買ってきて、ステーキにして二人でお祝いをした。余りの美味しさに、マリエラはちよつと泣いてしまった。やっぱり、ジエネラルオイルで焼いたお肉はオークジエネラルの味で、オークキングではなかった。

オークキング美味しい。オークキングやばい。二足歩行して特に女性を好んで襲い掛かってくる下品な魔物だけれど、もう、肉にしか見えない。

「ジークうう、すつごく強くなつて、オフキングたぶん倒しへねえー。」

「幾らでも倒せるようになるから、食べるか泣くか喋るかどれか一つにしような。」

お店は1週間後に開店予定だ。生活雑貨の買出しに商品の作成、迷宮都市の外でタムムギや様々な茸の収穫もしなければ。今の時期に収穫できる素材は多い。マリエラが住んでいた小屋に戻って、生き残った薬草の植え替えもしたい。

明後日は、ガーク爺が迷宮に採取に連れて行ってくれると言っていた。何を採取するんだろう。取り留めの無い会話は、夜遅くまで続いた。

千夜月花

「香は絶やさず焚いとけよ。」

ガーク爺を先頭に、マリエラ、ジークが迷宮に入る。戦えないマリエラが、魔除けの香を焚く係だ。魔除けの香は、プロモミンテラの乾燥粉末から作られたもので、魔除けポーション程ではないが、弱い魔物はよって来ない。作り方も簡単で、材料のプロモミンテラは迷宮都市の中にも外にもたくさん植えてあるから、自作する者が大半だ。迷宮が賑わう遠征期間中は、孤児院の子らが作った香を籠に入れ、迷宮の入口付近で売り歩く姿も見られる。

時間は深夜に近く、迷宮の外に子供の姿は見られないが、魔物が活発化する時間にも関わらずポツポツと迷宮に出入りする冒険者がいるのは、遠征期間ならではだろう。

迷宮の入り口には見張りの兵が2名いるだけで、遊びで入り込もうとする子供を除けば、入退場は制限されない。見張りの兵は有事の際の連絡係が主な職務なのだという。

ジークの説明によると、迷宮都市以外の迷宮では迷宮の入場料が必要だったり、退出するときも得た素材や魔石の一部を税として納める必要があるそうだ。迷宮都市では、都市から出る時に持ち出す品に税金が掛かる仕組みになっていて、迷宮都市内で使用する分には税が掛からない。ちなみに迷宮都市に持ち込む品も税は掛からないのだが、迷宮都市への往来が困難なため、迷宮都市で自給できない品々は慢性的に品薄だ。

外は月もなく真つ暗なのに、迷宮のなかは薄らと明るい。洞窟を思わせる岩壁のあちこちに、月光石と呼ばれるぼんやりと光る岩があつて灯なしでも辛うじて進むことは出来る。とはいえ、視界は悪く魔物との戦闘や薬草採取には不十分なので、ガーク爺は暗視のゴーグルを、マリエラにはジークが暗視魔法ダークサイトを掛けている。

たまに現れるゴブリンやスライム、レイスと言つた匂いに鈍い疎い魔物を、ダブルアックスでなぎ倒しながら、ガーク爺はどんどん迷宮を降りて行く。背後からの敵もいつの間にかジークが倒しているので、マリエラは持ち手のついた香炉に魔除けの香を足しながら、迷宮を観察する。

迷宮の階層をまたぐ階段は迷宮の中心部分に集中していて、階層の移動は容易だ。この階段は、各階層の何処かにいるという、階層主を倒すと現れるという。

得体の知れない迷宮の主が、下僕たる階層主を産み落しながら、下へ下へと真つ直ぐ地下を喰い進む様子を思い浮かべ、マリエラは少しゾツとした。

「この先だ。眠り玉を使うから、マスクをしとけ。」

ガーク爺の指示に従い、マリエラとジークは中和剤をしみこませたマスクをする。ガーク爺は、岩の隙間に火をつけた眠り玉を投げ入れた。薄く光る月光石が絶妙なバランスで位置しているため、一見するとそこは岩のつなぎ目に見えるのだが、近寄ると大人が通れるほどの隙間がある。狭いのは入口だけで、中は迷宮の通路と変わらない広さの通路になっていた。

ガーク爺の後に続いて、中に入ったマリエラはぎよっとした。

(蛇だらけ……)

魔物としては小さいが、腕くらいはある蛇が、寝こけてそこら中に落ちていた。

「随分増えたな、少し間引いてくか。」

ガーク爺はそういうと、蛇を間引きながら奥へと進んでいった。小さい蛇は頭を踏み潰し、大きい蛇はアックスで首を落とす。迷宮の魔物の大半は死んで暫くすると、輪郭がぼやけて姿が薄くなり、溶けるように骸が消えてしまう。

魔力が固まって発生し、まだ受肉していないからだという。

長く生きると魔力が凝縮して魔石を宿していたり、体の一部が受肉していて、倒すと素材として手に入る。

ここの蛇はまだ若く魔物としても弱いから、殆どが何も残さず消えてしまうが、大きめの個体は稀に爪の先ほどの小さい魔石や牙を残した。牙はひと袋いくらの安価な物だが、痛み止めの効果がある。ガーク爺が進路の蛇を倒し、マリエラが魔石と牙を拾う。ジークはマリエラを警護しながらめぼしい蛇を切りすていく。

蛇の通路はS字に折れ曲がっていて、入口からは行き止まりに見るのだが、一つ目の角を曲がると薄らと光が差し込む出口が見えた。蛇はこの光が苦手らしく、出口に近づくにつれて数が少なくなっていた。

蛇の通路の先は、明るく拓けた場所だった。走れば十秒もかからず端にたどり着けそうなさして広くもない空間で、天井は吹き抜けるように高い。壁や天井には月光石が幾つもあり、まるで星空のようだ。

足元は一面膝丈位の草が生い茂っていて、優しい光を放つ蕾をたくさん付けている。

1000日に一度花を付ける、千夜月花だ。

足元いっぱい広がる千夜月花の蕾が放つ光で、まるで満月に降り立ったかのような。

「そろそろだな」

ガーク爺の声を待っていたかのように、千夜月花が花開く。ぼんと弾けるように蕾が開いて、中から光の粒が舞い踊る。

ぼん、ぼん、ぼん。

次々に花開いては、舞い上がる光の粒子は羽もないのに天井までゆらゆらと舞い上がって、幻想的な美しさだ。

「なんて、きれい。」

うっとり見つめるマリエラに、

「さっさと摘まねえと、枯れちまうぞ」

と、ガーク爺が声をかける。

千夜月花の花は、蕾のままでは効果がなく、開くとたちまち枯れ

てしまう。この美しい光景を楽しめ無いのは残念だが、千日に一度しか手に入らない貴重な素材だ。3人は花開いた瞬間に花びらを摘んでは、袋に入れていった。

半分程も摘んだらどうか。千夜月花はまだたくさん残っているのに、ガーク爺に急いで出るぞと声を掛けられた。走って蛇の通路に駆け込んだその時。

バラツ、バラバラバラツ

大量の小石が広場に降り注いだ。

「おー、ギリギリだったな。」

ガーク爺が愉快そうに笑う。舞い上がった光の粒が空で受粉し、種に変わって降ってきたのだ。種は迷宮の硬い地面に刺さるよう、尖った形をしているそうで、ぼんやりと採取を続けていたら、苗床にされるところだった。

「あの部屋に入れるのは、千夜月花が咲く夜だけだ。それ以外は蛇の巣窟だからな。」

通路の蛇は、千夜月花の種から逃げていたのかも知れない。流石は迷宮植物。とても綺麗だったけれど、おっかないなとマリエラは思った。

マリエラ達は、採取した千夜月花の半分をガーク爺に渡そうとしたが、「てめえの分はてめえで採取するもんだ」と固辞されてしまった。何それかっこいい。

「また店に顔出すから、茶でも出してくれや。」

蛇の魔石も牙も受け取らずに、手を上げて帰って行くガーク爺の背中をみながら、

「うちは、喫茶店じゃないんですけどー！」

と、マリエラは手を振った。

開店

いよいよ今日は薬屋『木漏れ日』の開店日だ。

陳列棚には、様々な軟膏や飲み薬と言った一般的な薬のほか、洗濯用、食器用、お風呂用と用途ごとに粉にしたり液体にした石鹸や化粧品などの雑貨類、魔除けの香、虫除けの香、煙玉に眠り玉と言った迷宮探索に使われる消耗品なども取り揃えた。どれだけ売れるか分からないけれど、在庫もリビングにたくさん置いてある。

来てくれたお客さんがくつろげるように、様々な効能のあるハーブティーを中心に、メルル薬味草店で茶葉もたくさん買い揃えた。喫茶店じゃないけれど、コップの数も十分だ。

ジークが店の外壁に、薬屋を示す垂れ幕をかけ、開店を表す立て看板を出す。

アンバーさん達『ヤグーの跳ね橋亭』の皆がチラシと試供品を配ってくれたおかげで、冒険者らしき人たちがやってきて、傷薬が良く効いたと、薬や香、煙玉等をたくさん買っていった。アンバーさんやガーグ爺もやってきては、日当たりの良いテーブルでお茶を楽しんでから、薬を買って帰っていった。ゴードン、ヨハン、ルダンのドワーフ3人組も入れ替わり立ち代り様子を見に来ては、いつもの席でまったりしてから何かしら買っていく。

大盛況で大忙しとは行かないけれど、お客が切れない和やかな雰囲気のお店になった。

素敵なお店になったとニコニコ笑うマリエラの傍には、ジークが

控えている。その腰には、新しい片手剣が吊るしてあった。

5回の実技講習の最終日に、マリエラがプレゼントしたものだ。

ジークはとても良くがんばったと思う。2日に一度ハゲ：ハーゲイに師事し、立てなくなるまで打ち合う。最初はかすりもしなかったのに、最後は1本とるまでに成長していた。ガリガリだった身体も、リジエ^{再生}ネ薬の効果もあってか肉がついて、出会った頃とは別人のようだ。

日々、筋肉をつけて逞しくなっていくジークを見ながら、ゴリマツチヨになっただらどうしよう、重すぎてヤグーに乗れなくなるかもと、内心配したマリエラだったが、ジークの成長は程よいところで止まってくれた。

後で話すと、「筋肉をつけすぎたら速度が落ちる。戦闘スタイルに適した体型がある」と説明してくれた。なるほど合理的だ。

ジークはリンクスから借りた短剣しか武器を持っていなかったから、実技講習の最終日に片手剣を用意した。

5日間の実技講習を終え、深く頭を下げて礼を言うジークに、ハーゲイはいくつかアドバイスを与えた後、

「ナイスガッツだったぜ！精進すりゃ、まだまだ伸びるぜ！

嬢ちゃんから卒業記念があるそうだ！そいつでキッチリ守ってるんだぜ！」

と、講習の修了を伝えた。

「ジーク、講習会お疲れ様。記念に用意したの。使って。」

マリエラがこっそりと用意しておいた片手剣をジークに手渡す。

「マリエラ……。これはミスリルか？こんな良いものを俺に。手にしっくりくる。まるで専用に設えたみたいだ。マリエラが俺に選んでくれた剣だ。大切にする。本当にありがとう。」

ジークは感動した様子で恭しく剣を受け取ると、その刀身を見つめ、跪いてマリエラに剣を捧げる。

「俺の剣は、貴女のために。」

まるで物語のワンシーンのようだ。ジークはマリエラが選んでくれた剣を手に、忠誠を誓う。昂揚したように頬を染め、決意に潤む青い瞳を見てマリエラは、

（言えない……。その剣、ハーゲイに選んでもらったって、言えないよー！）

あいまいに笑って誤魔化した。

剣自体は良いものだ。と言ってもハーゲイの受け売りなのだが、Bランクでもなかなか持てない代物らしい。3回目の講習でいつものようにジークが意識を失った後に、マリエラはハーゲイに相談していた。

マリエラに万ーのことがあった場合、奴隷のジークが身を立てるにはどうすればいいか、何か残せるものは無いのだろうか、と。

ハーゲイは講習の最初に鑑定紙でジークの身分を知っているから、

相談するには丁度よかった。暑苦しい外見と性格で分かりづらいが、3回の講習を見る限り、只者ではないように思える。

ハーゲイは歯を光らせずに、穏やかにマリエラを、気絶して動けないジークを見ると、しばらく瞑目した後、

「戦闘力のある奴隷は、迷宮都市じゃ貴重だぜ！何か残してやるんなら、武器を与えてやればいい。手に馴染んだ武器ってのは、奴隷とセットで扱われるもんさ。アイツは立ち振る舞いも悪くねえから、取り上げられることもねえだろうぜ！」

いつもの調子で、ニカッと笑ってそう言った。

どんな武器がいか分らないと言うマリエラに、いくつか心当たりがあるとハーゲイが答えた。マリエラが全財産の約半分にあたる金貨10枚を提示すると、

「……ジークも苦労するな。嬢ちゃん、そんな大金、ほいほい出すモンじゃねえぜ。」

と呆れながらも、ジークがずっと使い続けられる物を見つけてくると約束してくれた。ハーゲイは、思ったとおりの親切な男だった。

ジークが手にした剣はミスリル製。鑑定紙の結果、ジークには様々な武器、魔法の才能があった。先天的なスキルは弓だが、戦闘を続けていけば剣術スキルも身につくだろう。ただし片目であること、戦えないマリエラの護衛を主とすることから、身体強化を中心とした、魔法を併用する戦闘スタイルで訓練を行ってきたらしい。

「ミスリルは魔力の伝導が良い金属だから、ジークの戦闘スタイル

にあっているぜ。しかもコイツは一度魔力を流したら、他人の魔力は流せない。ジーク専用の装備になるぜ。」

ジークに渡したミスリルの剣はハーゲイ一押しの一品だ。手入れをしてくれる鍛冶師も紹介してくれた。至れり尽くせりだ。

マリエラと向かい合い、ミスリルの剣を押し頂くジークの背後で、ハーゲイがずびし！とサムズアップをかましてくる。ニカッと笑って去っていく眩しいハゲ…いやハーゲイ。眩しいのは笑顔だけじゃないんだぜ。

冒険者ギルドの建物に戻ったハーゲイに、一人のギルド職員が近づく。

「ずいぶんとご機嫌ですね。」

「おう、久々に骨のある生徒だったぜ。初め見たときは、あれだけの才能でこの体たらくとは、どんだけぬるい野郎かと思ったが。丁寧に撫でてやってもちゃんと喰らいついてきやがった。きつと嬢ちやんの羨がいんだぜ。」

「はあ。新人教育もいいですが、我々に仕事を投げすぎでは？」

「お前らだけでもやれてるぜ？ 新人育成、戦力増強。ここじゃ一番大事だぜ。」

「我々もずいぶんと丁寧に『撫でて』頂きましたからね。でも今回は迷宮討伐軍からの救援要請ですよ。ギルドマスター」

ハーゲイの眉がピクリと上がる。迷宮討伐軍から救援要請？迷宮都市の最強戦力から？まさか。

「直ぐに出る。お前らも準備しろ。留守の守りは『雷帝エルシー』」

に依頼しろ。」

コイツは厄介なことになりそうだが、と冒険者ギルドのギルドマスター『破限のハーゲイ』はつぶやいた。

ジークとマリエラは、冒険者ギルドの売店で鑑定紙を買って帰った。5日間の実技講習でのジークの成長ぶり、マリエラが200年眠っていた影響を確認しておきたい。

鑑定紙は、決まった項目が薄い魔法のインクで書かれた用紙で、血を垂らして発動させると、対応した項目のインクの色が変わって、対象者の状態を示してくれる。

鑑定可能な能力は、体力、魔力、力、賢さ、器用さ、素早さ、運の7項目で、評価は5段階。体力が1なら、薄いインクでかかれた5個のの一つが黒い になる。上限を超えると、最後のは赤くなる、という簡易的なものだ。

スキル一覧に関しても、保有者の多いスキル名が羅列しており、適性があれば黒く、スキルを保有していれば赤くスキル名が変わる。掲載されていないスキルや才能を持っている場合は、『その他』の覧が変色する。

鑑定紙を超える情報は、人物鑑定のスキル保有者に大金を払ってみてもらう必要があるが、職業選択や成長戦略の指針として使うには、鑑定紙で十分だ。

マリエラの魔力は5段階目を振り切っていた。魔力や体力はある程度成長が止まるとあまり変動しない値で、成長が止まると生死の境を乗り越えた時などにいくらか上昇する程度だ。

200年も仮死状態だった結果だろう。目覚めて以来、魔力が増

加した自覚はあったが、4段階だった魔力は鑑定紙の上限を超えていた。正確な値は分からないが、板ガラスを作ったときの魔力切れで大体の感覚はつかめている。地味に嬉しいのは、1段階しかなかった体力が2段階目上がったことだ。一撃即死から一撃瀕死に成長している。やったね。

しかし他の項目に変化は無かった。スキルも錬金術一つだけであらうじて生活魔法に適正があるだけだ。

ジークはマリエラの魔力を見て驚いてくれたが、マリエラのほうにはジークの鑑定紙を見てはるかに驚いた。

ジークは全項目が3段階か4段階だった。5段階評価だが3段階目が平均というわけではない。1段階目が日常生活レベルで、3段階まであればその特性を利用した職業に就くことができる。マリエラは力と素早さが1段階しかなく、錬金術師でありながら賢さと器用さは3段階目だ。なぜか運だけ4段階で唯一ジークより勝っていたが。

錬金術師なのに、ジークのほうが賢いってどういうことだ。

マリエラはこそこそっと自分の鑑定紙を折りたたむと、寝室の箆笥の奥にしまいこんだ。

開店（後書き）

ハゲだけど、ハゲンのハーゲイ。
語呂だけで決めました。スキルとか、
戦闘スタイルとかは決めてま
せん。

人狼

ガラガラと車輪の音が魔の森に響く。

2騎の騎兵と3台の装甲馬車が森を行く。

黒鉄輸送隊の装甲馬車だ。

彼らにとっては何度も往来した道だ。

迫る魔物を振り切り、走行の邪魔になる魔物だけ切り捨てて、騎馬と馬車は魔の道を往く。

それが何時ものやり方だった。

しかし、今回は。

「いやー、魔物除けポーションの効果、マジすげーわ！ほっとんど魔物こねーのな。」

ラプトルを駆るリンクスが声を上げる。今回は魔物除けポーションを使用している。もともと迷宮都市と帝都を結ぶ街道には、さほど強い魔物が出てこない。フォレストウルフや黒狼、ゴブリン、稀にオークやオークジェネラル辺りが出るくらいだ。どの魔物も数体であれば、Bランク冒険者ならば問題なく対処できる。しかし数が多く昼夜を問わず襲ってくるから、単身で抜けるのであればAランク冒険者程度の実力が必要になる。

黒鉄輸送隊の場合は2騎の騎兵が露払いをし、分厚い装甲で押し通るから、脚の遅いゴブリンやオークは問題にならない。

逆に面倒なのが、フォレストウルフや黒狼で、大群で押し寄せてはラプトルの装甲が無い露出した脚や、馬車の装甲の薄いところを狙って、何度も攻撃を仕掛けてくる。

しかし魔物除けのポジションを使ってみると、臭いに弱い狼系の魔物は寄っても来ない。

稀に臭いに疎いゴブリンが街道にまるびでて、馬車に跳ね飛ばされているくらいだ。

狼系の魔物の襲撃を受けるたび、馬車の走行速度を落として追い払っていたため、魔の森を抜けるのに片道で2日半掛かっていた行程が、2日掛からず済んでしまった。これならばここまで厚い装甲と、重装備での騎乗は必要ないと、復路は馬車の装甲を薄くし、装備も軽量化している。軽量化により隊の進行速度はますます速く、この調子ならば1日半で迷宮都市に到着できそうだ。

「油断するなよ、リンクス。魔物除けポジションが効くのは雑魚だけだ。Bランクくらいになると犬コロにだってきかねえぞ。」

リンクスにもう一人の騎兵、双剣使いのエドガンが声をかける。

「わーってるよ、エドガン兄。そんなこと言うからさ、ほれ、丁度めっずらしいのがでてきやがった。」

リンクスとエドガン、2騎の騎兵は速度を上げ、前方から飛び出してきた3体の赤黒い塊に切りかかる。エドガンへ2体、リンクスへ1体。

エドガンの双剣は喰らい付こうと牙をむく魔物の口をそのまま捉え、口蓋の奥からそのまま後頭部までを切り裂く。右手の剣を振りぬきざまにもう1体へ突き刺すが、2体目は切り裂かれた1体目の体躯を足場に背後へ飛び退る。

リンクスに向かった1体も、リンクスが投擲した5本の短剣のう

ち3本を躲し、4本目に齧りつく。5本目が身体を掠ったが、べつたりと表皮をまとう赤黒い瘡気に阻まれ、致命傷になりきらない。

「うへー、あれ避けちゃう？」

リンクスは、ラプトルから降りて魔物と対峙する。こっちのほう
が、戦いやすい。ラプトルは素早く装甲馬車の元へ駆け戻る。

「さあ、こいよ、犬っころ。楽にしてやるからさ。」

ぐうるるると、うなり声を上げる魔物。

見た目は大型の狼だが、その体表面はまるで血糊に浸したように赤黒く滴る瘡気で覆われている。ぼたり、ぼたりと滴った瘡気は、大地に触れると、まるで小八工が生じて湧き立つように、不気味に蠢いて消えていく。眼光は血走っていて、眼球はビクビクと震えるように動き回り何処を見ているのかわからない。体に比べると異様に大きく裂けた口には、何列にも渡って鋭い牙が生えていて、口からも血のような唾液を垂らしている。

黒死狼

黒狼が人を喰らって進化した姿だ。

そういえば、1月ほど前、帝都の愚かな商人がろくな装備もなしに魔の森に立ち入り、壊滅したと聞いた。兵の代わりに何人もの奴隷を連れて行ったと。

彼らの死肉を喰らったか。

リンクスの挑発に3頭の中で最も大きな黒死狼が牙をむく。ラプトルから降りたリンクスに向かって、疾風の如く迫り来る。

ばくん

黒死狼の巨大の口が、リンクスの頭部から左肩までを一口で噛み千切り、そしてリンクスの身体はその瞬間に、黒死狼の影に飲まれて消えた。

「ギャン」

リンクスを喰らったはずの黒死狼は、一声鳴くとぶるりと身を震わせる。腹から背に向け、小剣を無数に生やして。

痙攣しつつ地に倒れた黒死狼の影からリンクスが立ち上がる。

「おつかれ、リンクス。腕上げたな。」

もう一体の黒死狼を危なげなく始末して、エドガンが声をかける。

「まだまだだよ、エドガン兄。スキル使わずに剣術だけで倒したいんだけどさ。って、っ！」

気安く答えたリンクスは、次の瞬間2メートルほど後ろに跳び退る。

エドガンも同時に後退している。

「うっへ、あんなの出て来ちゃう？流石にあれは無理なんだけど。エドガン兄いける？」

「あれは俺も無理。死ぬ。」

^{ワウルフ}二人の前に現れたのは、熊ほど大ききがある、二足歩行する狼人狼。Aランクの魔物だ。

しかも、黒死狼から進化したものらしく、立ち上る瘴気に全身が赤黒くかすんで見える。

「アッアッアッアッ……」

狼よりも人に近い声帯を持っていながら、上げる声はまるで火の中でのたうつ獣のようだ。

「どんだけ人間喰ったらあなるの？」

「知るかよ。共食いでましたんじゃね、ほれ、今も喰ってる。」

軽口を叩く二人だったが、じつとりと冷や汗が背を伝い、脚は縫い付けられたように動かない。切り捨てられた黒死狼を喰らう人狼から目が逸らせない。アイツがこちらを獲物と捉えれば、Bランクの自分たちなど一溜りも無いだろう。

「エドガン兄、ちょっとだけでも闘ってみる？」

「パス。即死する。」

「だよな、しゃーねえな。」

「「たいちよー、出番だぜー」」

装甲馬車のドアが開く。馬車を降りる動きに、恐れも動揺も見受けられない。

「まかせろ。」

一声応え、黒鉄輸送隊の最強戦力、Aランク冒険者のディック隊長が、装甲馬車から降り立った。

ディックは1本の黒い槍を手に人狼へと歩み寄る。装備は急所を覆うだけの軽鎧で、従来身に纏っていた重鎧ではない。

あんなもの重鎧では闘えない。向かってくる雑魚を跳ね飛ばすのに使えるくらいだ。

黒鉄輸送隊の仕事は稼ぎがいい。商人に向く己らではないが、黒鉄輸送隊は運賃で稼ぐ。ヤグー商隊では賄いきれない商品の運搬を高値で請け負う。どんなものを運んだって、馬車1台で幾らの仕事だ。危険の多い仕事だから、荷を受け取った段階で代金を肩代わりして支払うが、荷の買い付け先と売り先で話が付いている場合が殆どだ。

3日掛けて交替でラプトルを駆り、雑魚ばかりを相手にしながら、休まず魔の森を抜けるのに、少々退屈していたところだ。

にやり、とディックは笑うと槍先を人狼に向ける。

「食事中に悪いんだがな、こっちは急ぐ道行きなんだ。続きはあの世で味わってくれや」

ヒュオ

先ほどまで四足で獣のように黒死狼の屍骸を喰らっていた人狼の姿が消えたかと思うと、ディックの目の前に現れ鋭い爪先が振り下ろされる。

「おせえ」

しかし、人狼の振り下ろされた爪は、ディックの槍先で刎ね飛ば

される。何度も何度も振り下ろされる人狼の両腕はディックの1本の槍先に尽くはじかれ、爪はディックに届かない。

ガンッとディックの蹴りが人狼の腹ワウルフに入る。後ろによるめく人狼。

「犬っころがいつまでも立ってんじゃねえよ。」

「ヴウウ、ア、ア、ア、ア、ア、ア……」

ディックの挑発に、人狼の毛が逆立つ。両手を地につけ、ヴルヴルと震わせる体からは、渦を巻くように瘴気が立ち上がる。ぐぐぐと口の端が裂け、まるで上半身が口になったかのようなおぞましい姿だ。裂けた口の端から新たな牙が肉を突き破って幾重にも生えてくる。血とも瘴気とも付かない赤黒い液体が裂けた口から滴り落ちる。

ワウルフ
人狼がドツと地を蹴る。瞬きよりも短い時間で人狼の牙は、ディックの左肩に喰らい付こうと迫るが、ディックは左足を半歩ひいて身を躲し、すれ違いざまに人狼の右腕を切り落とす。

「ヴヴヴルルウ……」

人狼に痛覚は無いのか、腕を切り落とされた痛みにもだえる様子も見せず、地に脚をつけるや否や、再びディックに飛び掛る。切り落とされた切り口は、見る間に肉が盛り上がり、その傷口さえも口咽のように裂けて、ディックに喰らい付かんばかりだ。

人狼の口が、今度はディックを正面に捉える。大柄なディックを一口で食いちぎれるほどの大きな口咽には、鋭い牙が全面に生えていて、どのような刃物でも食い止めるに違いない。どこか一部を貫いたとして、人狼の残った左腕が、口のように裂けた右腕が、ディ

ツクに襲い掛かるだろう。

けれど。人狼の口咽をディックの槍が突く。1本しかないディックの槍が、まるで槍袵のように人狼の口咽を、胴を、左腕を、脚を次々と『同時に』貫く。その速度は人狼の回復速度を遙かに超え、たちまちのうちに人狼をぐずぐずとした肉塊に変えていく。そして、最後に心臓を一突き貫くと、まるで雑用でもこなしたかのように、「終わったぞ」とリンクスタちへ声を掛けた。

「さすが隊長」

お世辞ではなく、リンクスが賛辞を送る。

「この姿を見せれば、アンバーさんもほれるのに。」
最後の一言は余計だが。

「アンバーは分かっている、はずだ。」

変なところで言葉を切るディック隊長。

「まっさか、夜も『俺の槍働きを御覧じろ』とか言ってるじゃねえよな？」

「む…う…?」

「うっわ、マジ？マジそんなこと言っちゃってんの？」

「ないわー、隊長マジないわー。」そんな風にからかいながら、リンクスは倒れた人狼から素早く素材を回収する。リンクスにとってディックは憧れの隊長だ。からかつてはいるけれど、こんな揶揄を受け入れてくれるところも含め、頼もしいと思う。今日は久しぶりに闘う隊長を見られた。人狼を軽くあしらって沈めるあの槍さばき。

黒鉄輸送隊の隊員であることに誇りを感じる。

人狼からは、それなりに大きな魔石が取れた。Aランクの魔物の割に小さいのは、進化して間もないからだろう。3匹の黒死狼も魔石を持っていて、リンクスが倒した黒死狼からはとある素材が得られた。

「お、『地脈の欠片』だ。余所ならそれなりの値がつくけど、ここじゃなあ。」

『地脈の欠片』は同種の中でも比較的強力な魔物が稀に宿している、薄い黄金色をした爪の先ほどの透き通った欠片で、特級ポーションの原料として高値で取引されている。地脈の外に持ち出すと、たちまち小さくなって消えてしまうことから、『地脈の欠片』と呼ばれているらしい。この地脈に錬金術師はいないから、研究材料として迷宮都市のアグウィナス家が安値で買い取るくらいで、ここでは余り価値の無いものだ。

アグウィナス家に買い叩かれるくらいなら、『きれいな石』だと喜んでくれる者にあげるほうがいいだろう。

「これも、マリエラの土産にすつか。」

迷宮都市まであと少し。

人狼と黒死狼の骸を焼いて処分し、黒鉄輸送隊は再び迷宮都市に向けて走り出した。

マルロー：魔の森の少女

私は、マルロー。黒鉄輸送隊の副隊長をしている。

ある日魔の森で、おかしな少女に出会った。

腰周りに枯れ草を蓑のように吊るしており、ディックが「森の精霊か？」などと惚けた質問をしたが、問題はそこではない。

マリエラと名乗った彼女は、魔物除けポーションを使ったのだ。

色々でありえない。

まず、ポーションの希少性。

迷宮都市一帯の地脈は、魔の森からの魔物の氾濫スタンピード以来、魔物の領域となっており錬金術師が地脈とラインを結ぶことができない。

これに伴うポーションの不足は、魔の森からの魔物の氾濫スタンピード後の復興における懸念事項の一つで、迷宮都市の管理を任された辺境伯は魔道具開発でもって、この問題に対応した。

生き残った錬金術師に可能な限り大量のポーションを作らせ、巨大な保管設備で管理する。

迷宮を滅ぼすことができれば、迷宮都市は人の領域として再び人の手に戻る。錬金術師達は再び地脈とラインを結ぶことができるようになり、ポーションの供給も再開されるだろう。

建造された保管庫には、当時の学者達が迷宮を滅ぼすまでの間に必要だと試算した、大量のポーションが蓄えられたという。

我々も持っている長期保管用の魔道具をベースに、数十年掛けて

開発された魔道具だと聞いている。

従来のポーション保管用の魔道具は、刻まれた魔法陣の働きによってポーションの劣化を遅らせるもので、蓋さえ開けなければ地脈の外へ持ち出しても数日間ならば劣化を防げる。魔法陣が刻まれている関係上、少々値は張るが裕福な家庭ならば『薬箱代わり』に所
有しているものだ。当然、100年を超える期間、ポーションの性能を維持できるものではない。

対して、迷宮都市で開発された保管設備は、数多くの魔道具が組み込まれた代物らしい。

ポーションの魔法効果の源である命の雫をポーション内で対流させ、錬金術師がポーション作成の最終固定で付与する『薬効固定』に似た効果を常時付与することで、ポーションの劣化を抑えるそう
だ。当然、保管に要する魔石の量は膨大で、個人が所有できるものではない。

迷宮都市のポーションの管理は、エンダルジア王国の筆頭錬金術師であったアグウイナス家が受け持っている。高額な保管設備の維持費を賄うため、定期的に軍へ提供されるポーションは極めて高額だ。

アグウイナス家以外も、迷宮都市内部に居を構える辺境伯家や有力な貴族家でも、小規模ながらポーションの保管設備を保有しているとの噂がある。

それを除くと、『魔の森に埋まっている』という噂。

こちらは子供向けの都市伝説のようなものだ。100年以上前、必要量のポーションを作り終えた錬金術師達は何処へか姿を消した。エンダルジア王国時代には、魔の森で暮らす変わり者もいたそうだ

から、迷宮都市のポーション利権に嫌気が差し、魔の森へ落ち延びたのだと言う者もある。彼らは魔の森で暮らしながら、迷宮都市のものと同等のポーション保管設備を建造し、ポーションを後世に残したのだ、と。

「魔の森にはお宝が埋まっている」とは、なんとも子供心をくすぐる話ではないか。錬金術師が魔の森で暮らしていたとして、保管設備を維持する魔石はどうするのだろうか。都市レベルで管理しなければ維持できない代物なのに。

しかし、この『都市伝説』がまことしやかに囁かれ続けた背景には、一定の周期で迷宮都市に売りに出されるポーションの種類や量が増える、という現象があった。

そして、今、希少なはずのポーションをマリエラさんは使った。

「お金が入用になりました、売りに行く途中です」と、彼女は言う。

（売り物をなぜ使った？我々に買い取らすためか？）

ポーションをなぜ持っているのか、なぜわざわざ我々に見せ付けるように使って見せたのか。

ディックが買取を持ちかけると、あっさりと承諾した。着ている物もぼろぼろで埃じみているし、顔立ちや言動もその辺の娘と大差ない。『魔の森のお宝』を偶然見つけたとでも言うのか。

ディックが相場の半値で話を持ちかけると、
「……………は？」

と、価格に難色を示したから、相場を知らぬわけでは無いようだ。

ポーシヨンの買取を済ませた後、リンクスに情報を収集させる。

迷宮都市の市民というわけではないらしい。『森の中に住んでいた』
という。滅んだ街の廃墟を見て、青ざめる様子を見ても、初めて迷
宮都市を訪れたように思える。

100年以上前、厭世的な錬金術師達が、魔の森に落ち延びたと
いうのは本当だったのか。マリエラさんは、その子孫かもしれない。
魔の森で最後を迎えた錬金術師が残したポーシヨンを、どのような
方法でかは知らないが、受け継ぎ管理してきた一族の末裔かもしれ
ない。

それならば、他にもポーシヨンを持っているに違いない。

年齢の近いリンクスに、見張っておくよう指示を出す。

普通に見えても魔の森に暮らしていた娘だ。どのような能力を持
っているかも分からないし、我々にポーシヨンを売るツテがあるこ
とを分かった上で接触してきたのかもしれない。

などと、深読みをしたのだが。

「私が大銀貨5枚で買います！」

マリエラさんは、ポーシヨンの代金の半分で死にかけの奴隷を買
うと言い出した。どう見ても低級ポーシヨンごときで治せる状態で
はない。情報源か。だとしても、余りに行動が短絡的ではないか。

まるでディックを見ているようで、面白い。

権謀術策が渦巻くやり取りは見飽きている。相手の真意を図り、うまく躲すことにさして面白みは無い。ただただ醜い人となりが浮き彫りになり、むなしさばかりを感じてしまふ。しかしディックには、そういったところが無い。単純で、短絡的で、平たく言えば愚かだ。小賢しさなどディックには無い。純粹な武力と、まっすぐな志、己の分をわきまえるだけの分別を備えた彼の言動は、人とはかくあるべきかと思わせてくれる。

単純に見ていて飽きない、ということもあるが。人生を楽しめる仲間というのは得がたいものだ。

マリエラさんも、ディックと同類なのかもしれない。ディックが高い武力を持つように、彼女にも何かとりえはあるのだろうが。これは面白いことが起きそうだ。

マリエラさんと彼女の奴隷を再び乗せると、装甲馬車は音を立てて宿に向けて走り出した。

「欲しい情報は得られましたか？」

部屋から出てきたマリエラさんに声を掛ける。

奴隷から情報収集でもしていたのだろう。聞いていたのかと問われたが、私はそこまで下世話な人間ではない。

部屋に呼び、ポーションの取引を持ちかける。やはり、我々と取引をするつもりだったのか、話はとんとん拍子に進んだ。

保管設備のありかを吐かせ、全て取り上げることできるのだ、狙っているものも多いのだと、匂わせる事も忘れない。

「あなた方ならば、安全に売りさばけると？」

伝わったようで何よりだ。我々は盗賊ではない。力づくで取り上げた物ならば、より大きな力を持つものに取り上げられても不思議ではない。ポーションとはそれほど価値のある物だ。『良い取引相手』になれば十分な利ざやが稼げる。

マリエラさんは、いくつか取引に条件をつけてきた。

一つ、販売するポーションの種類をマリエラさんが決めること。
在庫が無いものは売りようが無い。当然だろう。

一つ、代金の一部をマリエラさんの望む物品で賄うこと。
身一つで森から出てきたのだ。必要なものも多いだろう。魔の森で暮らしていたのだ。多少特殊な品が入用なのかもしれない。他で入手しづらい物品を提供し、代わりにポーションを引き受ける。我々の取引関係はより強固になるだろう。むしろ望ましい。

一つ、秘密漏洩時のサポート
これができない相手とは、そもそもポーションの取引などできないだろう。

どれも、当たり前の内容に思える。むしろ、価格交渉を最初にしてこないことのほうに違和感を感じる。

「で、手数料3割って、安すぎませんか？」

「え？」

ところがマリエラさんは、値引きを申し出た。

秘密保持の徹底と万一情報が漏れた際のフォローに上乗せして欲

しいという。慎重な性格のようだ。いや、袖の下、ということもある。この取引に『今後』があるということだ。

装甲馬車に荷を積んで、トロトロと時間をかけて荷を運ぶ暮らしにも少し飽きてきた。魔物除けポーションがあれば短時間で森を抜けられるだろうし、新たな展開も考えることができる。何れにせよ、面白くなりそうだ。

いけない、顔が緩んでしまう。まあ、たまにはいいだろうか。

マルロー：石化の呪

黒鉄輸送隊は、帝都での取引を終え再び迷宮都市へたどり着いた。

道中、魔物除けポーションの効果は抜群だった。途中、人狼ワウルフに出くわすハブニングがあったものの、帝都で馬車や騎馬の装甲を薄く改造したこともあり、何時もより丸一日早い夕暮れ時に迷宮都市に着く事ができた。

何時もの様に、迷宮都市の南西門で開門申請を行っていると、かつて部下だった迷宮討伐軍の兵がマルローとディックを迎えるために待機していた。

「マルロー様、将軍がお呼びです。ディック様と至急屋敷へお越しくださいますように。」

ポーションの件だろうか。衛兵は到着次第、我々を連れてくるように言い付かっているらしい。

黒鉄輸送隊のグランドルとフランツに荷物の納品を頼むと、マルローとディックは金獅子将軍レオンハルト・シューゼンワルドの屋敷へとラプトルを走らせた。

黒鉄輸送隊のメンバーは、年若いリンクスと帝都で出会ったフランツ、ユーリケ以外は元は迷宮討伐軍に所属していた。軍を辞めた、いわゆる訳有り達にマルローが声を掛け黒鉄輸送隊は結成された。

金獅子将軍ことレオンハルト・シューゼンワルドは、部下からの信頼の厚い人物で、身分の差が有るにもかかわらず、年の近いマル

ローヤディックを友人のように遇してくれた。部隊長であったマルローやディックが軍を抜けざるを得なかった時も助力を惜しまず、黒鉄輸送隊の結成に手助けさえしてくれた。マルローやディックが軍を離れても、レオンハルトとの縁は切れることなく、黒鉄輸送隊は迷宮討伐軍からの依頼があれば、他を差し置いてでも請け負っている。

レオンハルトはシューゼンワルド辺境伯の第1子で、弟のウェイスハルトとともに、迷宮都市の管理と迷宮の討伐に尽力していた。迷宮の討伐こそを悲願とするシューゼンワルド辺境伯家の者は継承権の高低に依らず、武力ある者は迷宮を討伐し、知力ある者は都市の安定に力を尽くした。迷宮や魔の森という死の恐怖の傍で生まれ育ったがゆえに、継承争いなどという無駄な労力を割くこと無く、200年に渡ってこの地を治めてこられたのだろう。

レオンハルトは歴代のシューゼンワルド辺境伯家の者の中でも、特に武力に優れ、人望厚い將軍だった。レオンハルトは幾度と無く迷宮の討伐に挑み、知力に長けた弟のウェイスハルトは兄をよく支えた。迷宮の討伐階数はじきに50階層へ至るだろう。200年前の魔の森の氾濫スタンビードの被害状況から学者達が想定した迷宮の最終階層だ。

40階層を超えると迷宮の難易度は跳ね上がる。恐ろしい魔物が溢れ、討伐は困難を極めるだろうが、金獅子將軍レオンハルトならばやれるのではないか。彼の時代に迷宮は滅ばされ、迷宮都市は新たな時代を迎えるのではないか。

迷宮討伐軍の、いや迷宮都市に住む人々は皆、そう思っていた。

「こちらでございます。」

品の良い白髪の老人が、マルローとディックを案内する。ここは、迷宮都市に建てられた辺境伯の屋敷。本来であれば何日も風呂に入っていない旅装束のまま、入ってよい場所ではない。しかし、彼らを止めるものは誰もおらず、レオンハルトの寝所に通された。

「マルロー、ディック、よく来たな。」

マルローとディックは目を見張る。まさか、まさかこんなことが。

金獅子將軍レオンハルトは、半身を石化させ、ベッドに横たわっていた。

「なぜ……、貴方ほどの人が。」

バジリスクにやられたのだと、そばに控える弟のウェイスハルトが語る。バジリスクは難敵だ。分厚い鱗、強靱な爪、恐ろしい石化の呪を持っている。石化の呪は強力で、バジリスクが死んだ後も石化は止まることが無い。ただの石化であれば治癒魔法によって治すことが可能だが、呪を解くためには『解呪』に特化した上級ポーションを用いるか、生まれた地で精霊の力を借りた解呪の儀式を行う必要がある。レオンハルトはこの地脈の生まれであるから、精霊と言葉を交わすことができない現状では、解呪の儀式は使えない。解呪のポーションを使うしか救う手立ては無い。

レオンハルトの石化速度が緩やかなのは、傍でウェイスハルトや治癒魔法の使い手たちが治癒魔法を掛け続けているからで、魔法をとめれば直ちに石像と化してしまうだろう。

「直ぐに、帝都へ向かいますよ。」

マルローが進言する。帝都までたどり着けば、解呪に特化したポーションが手に入る。

「無駄だよ、マルロー。通信魔法で確認したが、材料が足りないぞうだ。それにこの体、治癒魔法を掛け続けたとしても、あと1日と保つかどうかだ。」

レオンハルトの言葉に、ウェイスハルトが齒を食いしぼる。

「そんな顔をするな、ウェイス。迷宮を討伐しておるのだ。こういつたことも想定して、準備は済ませてあるはずだ。後は、お前が引き継ぐのだ。」

ディック、アンバーのことは気がかりだろうが、討伐軍へ戻って来い。Aランクの戦力を遊ばせておく余裕はもうない。マルロー、お前もだ。家のことはウェイスから手を回させる。」

悲痛な顔をするマルロー、ディックに、レオンハルトはこう続けた。

「よく聞け。今の迷宮討伐階数は、52階層だ。あの迷宮は50階を越える魔窟だった。」

まさか。

マルローとディックは驚愕に目を見開く。50階層を超える迷宮は存在しない。存在させてはいけないものだ。迷宮は深くなればなるほど、魔物も最奥に棲まう迷宮の主も強大になっていく。人が管

理しうる迷宮の深さは50階層と言われている。これを超える迷宮の主は人の手に余る化物だ。だから、どんな迷宮も主の居場所を確認し、迷宮によっては封印して迷宮が育ちすぎないように管理する。そして50階層まで成長する前に、迷宮の主を討伐し、迷宮を滅ぼすのだ。

そもそも50階層を超える迷宮自体、歴史上稀に見る巨大なものだ。エンダルジア王国の被害規模から、学者達が最大規模の迷宮として推定した階層だった。

それが、50階層を超えているなんて。

「お前達もたらしてくれたポーシオンは僥倖だった。

おかげで全滅を免れ得た。しかし、功をあせる余り、バジリスクごときに遅れをとってしまったがな。

マルロー、ディック。ポーシオンを軍へ持ち帰れ。我がシューゼンワルド辺境伯家にも、他家にもポーシオンの在庫は殆ど残っておらん。アグウイナス家からの納入品も新薬とやらの粗悪品ばかりだ。おそらくアグウイナスの保管設備にもロクに残っておらんのだろう。50階層を超える想定など、誰もしておらんからな。対価として十分とはいかんだろうが、ポーシオンの持ち主には恩賞を与えるよう取り計らおう。」

「お待ちください、將軍。」

レオンハルトの話が終わるのを待ち、ディックが口を開いた。

「解呪のポーシオンが有るやもしれません。」

「まさか」とウェイスハルト。

解呪のポーシオンは特殊な原料を必要とする。特殊な環境で育った希少な苔であるとか、1000日に1夜だけ花開く花弁であると

か。

どちらも希少な材料で、特に苔などはこの迷宮都市でさえ出回っていない。材料を揃えて魔の森を駆け抜ければ兄は助かるのではないか、そんな希望に掛けて必死になって探したのだ。

迷宮都市のポーション保管設備にさえ、僅かに十数本あったただけだ。それさえ何十年も前に使ってしまった。そんなものが残っているとしても。

「期待をさせてしまっただけかもしれませんが、ですが、私はこのまま諦めたくはありません。どうか、明日まで時間を頂きたい。」

ディックが深々と頭を下げる。

レオンハルトは少しだけ困った顔をして、

「返事は、明日聞かせてくれ。」
と答えた。

(リンクス、聞こえますか?)

マルローがリンクスに念話を送る。事前に登録を行なった相手に情報を伝達するスキルで、つながれば双方方向の対話が可能だが発信はマルローからしかできない若干不便な代物だが、軍においてその有用性は高い。マルローが持つ念話スキルは所有者の少ないレアスキルだ。

(聞こえてるぜ、副隊長。)

(今からマリエラさんのところに向かいます。おそらく尾行がついているでしょうから、攪乱を。)

(了解。マリエラは北西地区中心側の、聖樹が植わってる家にいる

つてよ。)

マルローとディックが乗ったラプトルは、シューゼンワールド边境伯家を出て迷宮都市を南西に向かう。月の無い夜だ。2騎の姿はラプトルまでも黒く、影のようだ。魔の森に続く南西門はすでに固く閉ざされている。2騎は門の前で少し速度を落とすと、そのまま西門へ向かう。こちらは小さい門だ。ここから出ようというのか。

後を付けるものは、徒歩でありながらラプトルの進行速度に遅れをとらず、ぴたりと後ろをつけていく。西門にたどり着いた2騎は、そのまま、北西門、北門、北東門と回り、そのまま黒鉄輸送隊の定宿である『ヤグーの跳ね橋亭』に入ってしまった。店の明かりに照らされた2頭のラプトルの背には、何者も騎乗してはいなかった。

ラプトルと尾行者が迷宮都市をぐるりと周回している間に、マルローとディックは、徒歩でマリエラの店にたどり着いた。

とつくに閉店時間であるが、店舗のある正面ドアをノックする。

「こんな夜半に何用だ」

中から、見違えるほどに遅くなったジークムントが現れた。

「急用です。マリエラさんに取次ぎ願いたい。」

ジークは、二人を店舗の喫茶コーナーに通すと、マリエラを連れて戻ってきた。

「お帰りなさい、ディック隊長、マルロー副隊長。」

マリエラは、相変わらず暢気な様子で、にこにここと挨拶をする。

「マリエラさん、実は。」

「レオンハルト将軍が、バジリスクの石化の呪を受けて死に掛けている。ことは緊急を要する。解呪のポジションを譲ってもらえないか。」

状況を説明しようとしたマルローより先に、ディックが簡潔に用件を伝える。

それを聞いたマリエラは、

「んー、上級特化の解呪か。いいですよ。ちょっと待っててくださいね。ジーク、ちょっと手伝って！」

そう言って、店の奥へと引っ込んで行った。

(まさか、解呪まで持っているとは……。)

マルローは驚く。どれほどの保管設備を持っているのかと。

魔の森にあるポジションの保管設備に、解呪のポジションを取りに行くために装備を着替えにいったのだろう。幾ら魔物除けポジションがあるとと言っても既に日は落ちていて。あの奴隷一人では護衛ジークムントは不足するだろう。ディックと二人で護衛に加われば、保管設備の場所も知れるかもしれない。

(それにしても、遅い。着替えるだけにしては時間がかかりすぎている。まさか！)

保管設備の場所を知られないよう、我々を置いて出かけたのか。まさか逃げたのではあるまいか。

あわてたマルロー副隊長は、椅子を倒さんばかりの勢いで立ち上がり、マリエラの消えた店の奥へ駆け出す。

「お、おい、マルロー」

ディック隊長が後に続く。

住居に続く店の奥の扉を開けると廊下があり、突き当たりは裏庭へ続くドア、向かって左には2階へ続く階段がある。急いで裏庭への扉へ駆け寄り、2階から気配がすることに気付く。

(間に合ったのか?)

足音を殺して、しかし急いで2階へ駆け上がる。

2階の廊下の突き当たりにある一室から声が聞こえる。

レオンハルト將軍の命が掛かっているのだ。逃げられるわけには行かない。

我を忘れて、マルローはその扉を開ける。

「《薬効固定、封入》。かーんせー」

マルローの眼前で、迷宮都市で行える者がいるはずの無い、ポーションの練成が行われていた。

「……………!!!??ええ!??」

「うわ、マルローさん、下で待っててって言ったじゃないですか。散らかってるんだから、勝手に入ってこないでくださいよー」

もー、と怒るマリエラ。

脱ぎ散らかされたマリエラの着替えやら、置きっぱなしのコップやら、使ったままの器具類をせっせと片付けていたジークが、無断で入ってきたマルローを部屋の外に追い出しに掛かる。

「あー、待って待って。」

マルローさん、もうちょっとで終わるから。」

そう言っただけでマリエラは、ペタリとラベルを貼り付けると、白い液体の小さなポリシオン瓶をマルローに手渡した。

マルロー：石化の呪（後書き）

ハーゲイの指名依頼は、レオンハルトの救出です。

マルロー：されど面白き日々

ジークムントに連れられて、マルローとディックは1階の店舗に戻った。

出されたお茶を飲みながら、マルローは考える。

(会話がかみ合わないとは思っていましたが……)

最初の違和感は、自ら値引きを申し出たところ。その後も、「値段は安くなっても、使ってもらったほうが嬉しい」、「ポーションは消耗品。お金が必要なら、たくさん売ればいい」などと、まるで欲の無い発言を繰り返していた。

迷宮都市にあるポーションは、100年以上前に作られ保管されているものだけで、数が限られている。だからこそ希少で、財産足りうる価値がある。

それが、幾らでも作れるとしたら？

マルローはマリエラが魔の森のどこかに大量のポーションを保管した保管設備を持っているのだと思っていた。そもそも、そんなものなど無かったのだ。なるほど、ポーションでなく家やお金で財産を残そう等という発言も出ようものだ。

ポーションを作れるのだから。

希少で価値があるのは、ポーションでなく、彼女自身。^{マリエラ}

ポーション代を値引きしてでも、秘密の保持と身の安全を手厚くするはずだ。

ポーションを持っているだけならば、最悪そのポーションを手放せばいい。価値があるのはポーションで所有者ではないのだから、どこかに逃げおおせればそれで身の安全は確保できる。

しかし、迷宮都市でポーションが作れる錬金術師だとしたら？ その価値は計り知れない。知られてしまえば、何処までも追われることになる。

「契約の内容は憶えておいでですね？」

ジークがマルローに声を掛ける。

「ああ、憶えているとも。」

『守秘に関してはもちろんのこと、万一情報が漏れてマリエラが危険にさらされた場合は、黒鉄輸送隊が問題の解決に当たり、状況によつては逃亡までを幫助する。』

確かにそう契約したと、マルローは思い出す。

（なんてことだ。たった1割の手数料増で割りにあう条件ではない。迷宮都市の錬金術師など、レオンハルト将軍に引き合わせるべき人材ではないか。）

しかし、魔法契約は結ばれてしまった。彼女が錬金術師であることは、決して知られてはならない。万一知られてしまったら、黒鉄輸送隊^{れわれ}だけで解決できるような問題ではないし、逃がすとしても何処へ逃がせばいいと言つのか。

（まんまとやられた、というわけでしょうか……）

冷えたお茶を飲み干し、マルローはディックを見る。

「ディック、彼女は……」

「ん？やっぱり錬金術師だったな。」

「は？気付いていたんですか？」

「いや、そいつ、ジークだっけか？錬金術師でもなければ助けられんだろ？」

そうだ。彼は、^{ジーク}迷宮都市で死ぬために連れてこられた奴隷だった。一緒に連れてこられた犯罪奴隷達の前で惨めに死んでいき、『こんなふう死にたくない』と思わせるための、エサだった。奴隷商のレイモンドと取り決められていたことだ。奴隷達の前で交わされた価格交渉も織り込み済みの演技に過ぎない。

安価なポーシオンだけでは治しきれない深い傷に、治癒魔法が効かないほど弱りきった身体。かかる治療費はいかほどか。犯罪奴隷にそれだけの治療を施すものはまずいない。新しく購入するほうがよほど安あがりだ。錬金術師が時間をかけて何度も治療を施さなければ、ここまで回復するはずがない。

(ディックでも気付いていたというのに、まったく私は。)

マリエラが小さな包みを持って、店舗に入ってきた。

「さっき渡した白いポーシオンが上級特化型の『解呪』ポーシオンです。あと、これが解毒ポーシオン。上級ランクだから解呪の後に飲めば石化も治るはずです。これは上級ランクの^{再生}リジエネ薬。石化時間が長いと戻った後も負担が残っているので、飲んでもらってください。3日分です。苦いから嚙まないで飲み込むように言ってくださいね。」

そう言って、貴重なポーションを紙袋に入れて手渡してくる。

「ちゃんと御代貰ってくださいね！結構貴重なヤツですから。」

（やはり、金額は言わないのですね。）

きつと、金貨数枚しか支払われなかったとしても、マリエラは文句を言わないのだろうか、とマルローは思う。よほど不当な値をつけられない限り、ポーションを売ってくれるのだろうか。自分の価値を、この街でのポーションの価値を知らないのではなく、理解してなお、普通の値段で売ってくれるのだろうか。

マルローはディックをちらと見て考える。

（ディックと同類なのでしょうね。面白いと喜ぶべきでしょうか）

「マリエラさん、レオンハルト将軍がポーションをお望みです。」

「何を何本ですか？」

「きつと、大量に望まれるでしょう。」

「材料足りるかなあ……」

「材料をそろえれば、幾らでも作っていただけますか？」

「魔力の続く範囲でなら作りますよ。あ、ポーション瓶が足りないかも。」

「お値段は安くなるかもしれませんが。帝都の売値と変わらないかもしれません。」

「それぐらいなら構いませんよ。」

「マリエラさん」

静かに会話を続けていたマルローは、マリエラの名を呼ぶと一瞬間を空け、マリエラを見つめた。

「レオンハルト将軍の下へ、一緒に来ては頂けませんか。」

レオンハルトは次期辺境伯で、迷宮都市の最高権力者だ。彼に保護される以上に安全なことは無い。しかし、マリエラはしばらく考えて、こう返事をした。

「私は、街で静かに暮らしたいです。ここで、暮らしながらポーシオンを提供する方法を一緒に考えて欲しいです。」

迷宮都市に来て、まだ1月も経っていないけれど、たくさんの知り合いができた。毎日のように（日向ぼっこをしに）通ってくれるお客さんだっている。迷宮や魔の森に素材採取にも行ってみたい。ガーク爺に連れられてみた千夜月花は本当にきれいだった。市場で珍しい食べ物を見つけ、ジークと二人で料理して食べるのも楽しい。

レオンハルト将軍に保護されれば、錬金術師であることを隠す必要はなくなるのかもしれない。安全な、檻のような場所で、毎日ポーシオンを作って過ごすのだろう。

マリエラは魔の森の小屋を思い出していた。一人で過ごしたのは数年間だけだったけれど、誰もいない部屋で、一人黙々とポーシオンを作る。それ自体は嫌いではない。もともとのめりこむタイプだ。ただ、稀に思うのだ。作業を終えてすっかり暗くなった部屋で、ふと、ああ、一人なんだな、と。部屋が散らかっていても、誰も片付けてくれない、誰も怒ってくれない。散らかしたまま、もそもそと適当に食事を取り、乱れたままのベッドにもぐりこむ。なんだかとても寒く感じて丸くなって眠るのだ。

レオンハルト将軍の下で待っている暮らしは、そういうものではないのかと、マリエラは想像した。

今の暮らしがいい。

最近ジークはちよっぴり厳しくて、部屋を散らかしていると落ちているものを拾っては、「燃えるゴミ？スライム槽のゴミ？どっち？」なんて、2択になつてないゴミ1択を迫ってきたりするけれど、そんなことも含めて毎日がぽかぽかと暖かい。

マリエラの返事にマルローはしばらく瞑目して考えると、「分かりました。何か良い方法を考えましょう」と答えた。

マルローは心の中で笑う。半分やけで、半分が本心からだ。きっとこの先、面倒で、厄介で、困難で、そして面白いことが待っているのだろう。

マルロー…なれど面白き日々（後書き）

マルロー副隊長の勘違いネタは早めに小出しにするか悩みましたが、
まとめて掲載するためココになりました。

平穏な日々

「うう、サムい……」

マリエラはいつものように目を覚ます。重ねた毛布が床に落ちていて、1枚しか掛かっていない。寒いはずだ。

着替えを済ませ、裏庭の薬草園に向かう。ジークはとつくに起き出して、朝の訓練を済ませたところだ。2人で薬草を刈り取り水を撒く。一般的な薬草は、魔素が濃いほど繁殖しやすいと言われ、人の領域には生えず魔の森や迷宮に生育する。こういった魔の領域では、季節を選ばず採取出来る品種などは、株間がススカになるほど採取しても数日でもとに戻ってしまう。マリエラの新しい薬草園でも薬草の生育は早く、育てている品種に関しては薬やポーションの原料に困ることはなさそうだ。有り難い反面、迷宮都市は人が住んでいても魔物の領域なのだ、と思う。

聖樹には命の雫が入った水を与える。勿論人目につかないよう、建物の中で如雨露しゅうりゅうに準備したものだ。魔力入りの水を喜んでいたようだから、もしかしてと思って与えてみたら、ばっさばっさと葉を落としてくれた。最初は「枯れる！ハゲる！」とあわてたが、幹も葉も心なしか艶やかになったので、それ以降は、命の雫入りの水を撒いて、お礼の葉っぱを頂いている。

薬草園の手入れが終わったら、朝食。その後、二人で手分けをして掃除、洗濯、商品の陳列を済ませて開店。

緊急を要する怪我や病気は治癒魔法使いの所へ行くものだし、冒

険者が非常用に持ち歩く傷薬や煙玉などの消耗品は冒険者ギルドの売店にも置かせてもらっている。マリエラのお店に来るのは買い置き薬を求める市民や、休日の冒険者、後は日向ぼっこ目当ての常連達で、開店中は人が絶えることは無いけれど、のんびりしたものだ。お客たちのお茶や会話を楽しみながら、軟膏缶にラベルを貼ったり、丸薬を包んで袋にしまったりして過ごす。

ちなみに、『開店祝い』と称してマルロー副隊長にティーセットを頂いた。添えられたカードには「勝手に部屋に乱入し、申し訳ありません」という旨のコメントが添えられていた。別に気にしてないのに。2人暮らしに送るには、やたらとカップが多いティーセットで、どう見ても業務用に見える。

だから、喫茶店じゃないんだってば。部屋に入ってきたことよりも、こっちのほうを問いただしたい。

お昼前まではメルル薬味草店のメルルさんが、配達のついでにお茶を飲んでいた。メルル薬味草店には配達をしてくれる店員がいるのに、なぜか本人がやってくる。

「マリエラちゃんがウチのお茶を出してくれるお陰で、ウチも売上伸びちゃって。あ、これ新商品。美容にいい茶葉も扱ってみることにしてね」

「美容！？マリエラちゃん、私もこれ飲んでみたいわ」

薬を買いに来たアンバーさんも会話に加わり、新たな女子（？）コミュニティが形成されている。

メルルさんはこの界隈の奥様たちの顔役らしく、口コミで来てくれるお客さんも増えてきている。マリエラのお店はそれなりに流行っている薬屋だから、あちこちから薬草や錬金術の原料が納品されても違和感はない。

お昼時には、リンクスが遊びに来た。というか、お店が開いている日は殆ど毎日市場で買った食料を抱えてやってきて、マリエラの

お店『木漏れ日』で昼食を食べて帰っていく。

マルロー副隊長達に石化を解呪する上級ランクポジションを渡した後、黒鉄輸送隊は迷宮都市に拠点を築いた。迷宮都市の西門付近の外壁に面した場所で、魔の森に面しているため一般市民には人気がなく土地の賃料は安い。駆け出しの冒険者が多く住んでいる区画だ。黒鉄輸送隊の面々はみな戦えるから問題ないが、余り治安の良い場所でないため、マリエラは来ると言われていた。

マリエラから供給される魔除けのポジションがあれば、馬車の装甲も薄くできるし、騎馬による護衛も必要ない。もちろん、ポジションを使っていることがバレないように、装甲の軽量化は見たために分からないようにしているし、輸送隊の編成も従来の8人による2騎と装甲馬車3台から変えていない。

魔物除けのポジションで戦力を減らせるようになったぶん、馬車の操縦が出来る奴隷を3人買い入れて、黒鉄輸送隊の3名が迷宮都市の拠点に常駐している。

迷宮都市に残る3人は都度変更するそうだが、今回はマルロー副隊長とリンクス、双剣使いのエドガンが残留組だそうだ。輸送組が出かけている間に、残留組が次の荷を拠点の倉庫に集めておくことで、往復周期を短くでき稼ぎも増える、というのが表向きの理由だ。新しい奴隷を除く黒鉄輸送隊のメンバー全員とポジションに関する守秘契約を結びなおしている。マリエラが錬金術師であるということとは明言はしていないが、リンクス辺りは気付いている様子だ。

「うちは、喫茶店じゃないんです。しかも持込とか。お客さん困ります。」

マリエラが文句を言うと、

「かたいこというなよ、マリエラ。ほれ、今日はコカトリスの卵

のガレット買って来たんだ。一緒に食べようぜ。」

と、お土産の入った包みを渡してくる。

「仕方ないな。ジーク、ガレット貰った。ちょっと早いけどお昼にしよう。あ、リンクス、これ新製品の石鹸。持って帰ってね。」

「ソーセージも焼こうか。飲み物は果実水でいいか？」

「お、ソーセージいいね。サンキューな、ジーク」

流石に他のお客さんもいるお店で食事はできないので、店舗に隣接した台所のテーブルで3人で食事を取る。ここなら、お客さんが来ても直ぐに対応できるから、元レストランという間取りも悪くない。ガレットの包み紙はスライム槽へ捨てる。食べ物のカスや脂のついた紙などは、スライムが跡形も無く消化してくれる。便利なものだ。

「あ、そうだ。これお土産。戻ってきてからバタバタしてたからな、渡すの忘れてたわ。」

そう言っただリンクスがポケットからなにやら取り出した。

「ジークは眼帯な。ちょっとカッチョイイだろ？」

マリエラはこれ。細工物になってて、ここをこうしてこうすると、ほれ、ロケットが開くんだ。」

リンクスはクッキーのお礼に帝都でお土産を買ってきてくれたらしい。ジークに眼帯、マリエラに細工仕掛けのロケットペンダントを渡した。

「え？これどうなってるの？ぜんぜん開けられないんだけど……」

マリエラが貰ったロケットペンダントは、細かい細工が施された零型のもので、いくつかのパーツを立体パズルのように動かすこと

で開く仕組みになっている。開けると中に球形の空洞が開いている。「だから、ここをこうして、こうやって、な？開いたる？」

むう、わからんと頭をかしげるマリエラに、リンクスがもう一つ爪の先ほどの小石を取り出した。

「こいつはオマケ。きれいだろ」

「これって、『地脈の欠片』！？特級ポーションの材料じゃない！」

リンクスがオマケとして渡したのは、黒鉄輸送隊が迷宮都市に戻る途中に出会った黒死狼から得られた『地脈の欠片』だ。リンクスが倒した一番大きい黒死狼が宿していた。

「うわあ、すごい」と目を輝かすマリエラに、リンクスは少し悪戯心が湧いてしまう。

「『地脈の欠片』を、ロケットに入れて、ほい。封印。がんばって開けてみな」

「えーっ。ちよっ、まだ、ちゃんと見てないのに！や、開かないし！もー、リンクスー！」

「ははっ、まあがんばれ。ジーク、手を貸したら駄目だぞー」

マリエラの首に栗型の細工ロケットを掛けると、石鹼を懐に入れてリンクスは楽しげに笑って帰っていった。

その日の閉店時間まで、マリエラは接客そっちのけでロケットの細工と格闘していた。『地脈の欠片』をじっくりたっぷり見てみたかったけれど、結局ロケットは開けられなかった。どの道まだ特級ポーションは作れない。そのままでも可愛いので中身のことはすっぱり諦めて忘れることにした。

午後のお茶を終えた辺りで閉店。ジークと二人で冒険者ギルドに納品しに行ったり、必要な材料の買い付けを行なう。卸売市場にも何か面白い出物が無いか確認しに行く。

迷宮討伐部隊の遠征は1週間ほど前に終わってしまったけれど、まだまだ珍しい食材やポーションの素材が出てくるから見逃せない。

夕食の材料を購入して帰宅。夕食はマリエラが作る。《ライブラリ》のレシピはどれも絶品で、『ヤグーの跳ね橋亭』のマスターにも負けていない。夕食を終えるとマリエラは工房に籠って薬やポーションを作り、ジークは訓練を行う。

そろそろ時間だ。

ジークと二人、地下室に向かう。

3部屋が直列につながった地下室の真ん中の部屋で待っていると、地下深くから小さな音が聞こえてくる。

『コーン、コーン、コーン』

遠くで石を叩くような小さい音だ。

『カン、カン、カカン』

決まったリズムで金属製のドアを叩いて返す。

しばらくすると、行き止まりのはずの3室目からドアをノックする音が聞こえる。ノックのリズムが決められた合図の通りであることを確認して、ジークが3室目につながる扉のかんぬきを開ける。

「よお、マリエラ、ジークこんにちは。」

「今日の品物はこちらですか？」

誰もいないはずの地下室3室目には、リンクスとマルロー副隊長が立っていた。

クラークの解体ショー

「それにしても、よくこんな大穴開いてたな。」

リンクスが感心したような、呆れたような口調で言う。マリエラ達の家の地下3室目には、大工のゴードンが埋めた壁が再び取り壊され、地下大水道につながる道が開いていた。

ポーシヨンの出所がマリエラだと悟られぬよう、考え出された取引方法だった。

ポーシヨンを作るには薬草がいる。薬草園で取れるものは種類が限られていて、様々な大量のポーシヨンを作るには、どうしても材料を大量にしかも珍しいものを含めて購入せざるを得ない。薬師が購入してもおかしくない物に関しては複数の業者から少しずつ購入し、薬屋の営業時間中に運び込んでもらう。配達に来た人たちは大抵お茶を楽しんで帰るから、はたから見るとなにをしに来たのか分かりづらい。

珍しい薬草や原料は黒鉄輸送隊が買い集めて、拠点の倉庫に集める。次回の荷物を集めておくための倉庫だから、珍しくて高価な材料が集まっても不思議ではない。集められた材料は夜間に地下大水道を経由してマリエラの地下室へ運び込まれ、代わりにポーシヨンが持ち出される。

必要なポーシヨンや材料については、地下室で落ち合ったときに直接話しか、リンクスが買ってきた昼食の紙袋にメモを忍ばせる。メモはスライム槽に捨てるとスライムに分解されるから証拠は残らない。ポーシヨンの準備ができて取引を行う合図が、マリエラがり

ンクスに渡した『石鹼』。石鹼の包みを模しているが、中身は中級ランクの魔物除けポーションだ。

地下大水道には大量のスライムが湧いている。スライムは脆弱な魔物だが、臭いを感じないので魔除けの香や低級の魔物除けポーションは効き目がない。スライムが多少湧いている程度であれば踏み潰しながら進めばよいが、地下大水道のスライムは異常に繁殖していて溶解液の中を進むような状態になってしまう。スライムどころかオークやリザードマンさえ近寄らせない中級ランクの魔物除けポーションがなければ、地下大水道を進むことはできないだろう。

中級ランクの魔物除けポーションの材料は、プロモミンテラ、デイジス、聖樹の葉。全てマリエラの薬草園で手に入る。

マリエラの店は、開店中は常に誰かしら客がいるし、閉店してからもジークと二人で街を出歩くだけ。迷宮都市の門が閉まる夜更けには二人とも家から外に出ない。ポーションを何処かの保管庫から持ってきていると考える者は勿論、マリエラの家荷物の出入りを注意する者がいたとしても、不自然な物の出入りが無いためマリエラ達を怪しいと思う可能性は低い。

「こちらが、ご依頼のポーンナイトの骨です。これで骨折を治す特化型の上級ポーションが作れますね？」

マルロー副隊長が人骨が大量に入った木箱を下ろす。カシャンと骨が乾いた音を立てて人骨が跳ねる。勝手に組み上がって襲ってこないだろうか。

「作れますけど、骨折特化はオススメしませんよ？下手に使うと曲

がったままくつついちゃうし。」

マリエラがジークの背に隠れるように、骨を見ながら答える。骨、おっかない。

「そこは大丈夫です。迷宮討伐軍には、治療技師がいますからね。」

治療技師。また新しい単語が出てきた。説明を聞くのが面倒くさそうなマリエラに、マルローが簡単に説明する。

「魔力もポジションも有限ですから、効率よく治癒魔法やポジションを使えるように管理する治療部隊の責任者です。人体を熟知していて簡易の治療を施してから、最小限の治癒魔法やポジションを使うんですよ。」

なるほど。マルロー副隊長もマリエラのことを熟知して、最小限の説明で済ませてくれた。有り難い。

注文を受けていた筋肉の欠損を癒す特化型の上級ポジション100本を渡し、代金と空のポジション瓶、注文していた素材を受け取る。

「じゃ、また明日な。マリエラ、ジーク。」

リンクスとマルロー副隊長は、上級ポジションの入った箱を担ぐと地下大水道へ消えていった。

マリエラ達が、地下大水道のルートを見つけたのは、ちょっとし

た偶然からだった。

10日ほど前のことだ。マリエラはジークと開店の挨拶をするために商人ギルドに顔を出した。薬草部門長のエルメラさんは席をはずしているとのことで、副部門長のリエンドロさんが応対してくれた。

「いやあー、いい感じのお店に仕上がったらしいねー。エルメラさんが行きたがっちゃってね。僕も今度寄らせてもらおうよー。あ、これ冒険者ギルドの売店への紹介状。エルメラさんから預かってたやつ。」

手土産とお店の商品のサンプルの詰め合わせを持っていくと、その場で冒険者ギルドの売店への紹介状を渡された。有り難いけれど、とんとん拍子過ぎていいのかなと思ってしまふ。

「エルメラさんが遊びに行ったら、お茶でも飲みながら薬草談義してあげてー。」

なぜかリエンドロさんのところにまで、喫茶店情報が流れていた。いいけどさ。

商人ギルドを出て卸売市場に寄ると、ものすごい人ごみだった。何事かと寄っていったら『クラーケンの解体ショー』なるものをやっていた。

馬車ほどもある巨大な軟体動物が何匹も水揚げされていて、それを巨大な刃物を持った市場の男たちが端から端から捌いては、串焼きにして焼いていた。お値段なんと1串1銅貨。これは買わざるを得まい。今日の晩御飯はこれで決まりだ。

生のまま購入していく者、串焼きを何本も買う者、解体ショーを眺める者と、市場は人・人・人の大賑わいだっただ。

「すげえな、こんだけのクラーケンどこに湧いたんだ？」

「何でも、30階層に大量に湧いたらしいぜ。」

「クラーケンで40階層位の魔物じゃね？」

「ほれ、討伐中だからさ、丁度30階に冒険者が集まってたらしくてな。」

「つか、誰が倒したんだ？肉を受肉残したやつがこれだけいるってことは、とんでもない湧きだったんじゃないかねえか？」

「雷帝が出たらしいぜ。」

「ほんとか？うわ、俺見たかった！」

「はっはっは、俺見たぜ、雷帝エルシー。遠くからだけどな。」

「くそ、うらやましいな。噂どおりのいい女だったか。」

「遠くからだからな。ピカッと光ったくらいしかわからなかった。」

「何だよ、それ。」

マリエラとジークもクラーケンの串焼きの列に並びながら、周りの人に話を聞く。

雷帝エルシーというのは、迷宮都市所属のAランク冒険者で、雷神の加護により強力な雷魔法を使う妙齡の女性らしい。スラリとした肢体を特殊素材の全身スーツで覆い、青白く帯電した長い髪はたなびくように広がっている。ぴたりとしたスーツと帯電し光を放つてたなびく髪、目を保護するためのカラーグラスで顔は分からないが、楽しげに上がる口角を彩る赤い口紅が艶かしい。一見たおやかにも見える肢体から繰り出される強力な電撃は、まさに『雷帝』。めったに人前に現れず、正体不明というところが彼女の魅力に拍車を掛けている。「俺も、電撃で痺れたい」というファンも多いらしい。

迷宮都市ではAランク冒険者は憧れの対象でもある。Sランクな

んで伝説の勇者扱いだ。

「すごいね、ジーク。私も会ってみたいなー。」

「ここは狭い街だし、いつか会えるかもな。」

流石は遠征期間中。面白いことがたくさん起きる。

串焼きを買ったあとは、解体ショーの裏側に向かう。欲しいものがあるのだ。

「すいませーん、クラーケンの内臓がちょっと欲しいんですけど。」

「嬢ちゃん、そんなもんどうすんだ？切り身ならあっちで安くで売ってるぞ？」

いぶかしげな顔をする店主に、「これはこれで使い道が……。」としどろもどろに説明するマリエラ。

「……………、旨いのか？それ。」

神妙な顔つきで聞いてくる店主に、「えへへ」と笑って誤魔化して、必要な内臓を取り分けてもらう。

ゴムの袋に入れてもらったクラーケンの内臓を持ってそそくさと帰るマリエラたちの後ろで、店主が内臓をつまんで口にいれ、盛大に嘔き出していた。

「マリエラ、その内臓、食うわけじゃないよな？」

家に帰ったマリエラがクラーケンの内臓を粉碎し、どろっどろの粘液に変えたところで、ジークが恐る恐る聞いてきた。

「これはイイモノなのですよ。こんな新鮮な、しかもクラーケンの

「臍物なんてそうそう手に入らないのですよ。むっふっふ。」

マリエラはジークに見せ付けるように、どろおーりと臍物粘液を小瓶に分けていく。わざわざ低い位置にある小瓶に、高い位置から注いでいくので、部屋がちよっぴり塩からくなる。本人は若い女性に人気の喫茶店で、ウェイターが高い位置からお茶を注ぐのをまねているつもりなのだが、どう見ても真似のしどころを間違えている。

クラーケンの臍物粘液を10個ばかりの小瓶に分けたあと、マリエラとジークは地下室の奥の部屋に向かった。なかなか珍妙な格好をして。

クリーパーゴムの大きな袋を1枚はズボンのように履き、1枚は顔部分だけ穴を開けて頭から被って、それぞれウエストのところを適当な紐で縛っている。露出した顔にはてかてかになるまで脂をぬって、目にはゴーグル、口元もマスクをしている。ゴーグルとマスクは冒険者ギルドの売店で買った駆け出しの冒険者が使う安物だから、機能重視見た目無視のデザイン性が低いものだから、二人の奇妙さに磨きをかけている。

「で？」

「いい加減説明してくれと、同じくおかしな格好をしたジークがせつつく。手にはつるはしを握らされている。」

「今から、地下大水道でスライムを捕獲します。それでは、壁の破壊をオネガイします。」

『瓶の中のスライム』合成生物 製造作戦開始である。

瓶の中のスライム

『瓶の中のスライム』^{合成生物}は、錬金術師向けの素材を売る店などで稀に見かける合成生物だ。

クラーケンの体液はリジエ^{再生}ネ薬の原料の一つである、お化け貝や喰いつき貝よりも上位の素材で、これらの代わりにも使えるし特級ポーションの材料にもなる高級品だ。卸売市場のクラーケンも体液は既に抜かれていて、クラーケン自体そうそうお目にかかれる魔物ではないから、手に入りにくい素材でもある。

錬金術の素材の中には、魔物の体内でのみ生成されるものがある。お化け貝や喰い付き貝などは比較的簡単に手に入るが、稀少な素材になるほどクラーケンの様な強力で珍しい魔物からしか取れないから、安定供給が難しい。

こついつた問題を解決するために考え出されたのが、スライムとの合成だった。

合成と言っても複雑な魔術式で練成するわけではない。スライム自体の回復能力を利用した方法で、魔物の血溜まりに落ちたスライムの核が、周りの魔物の血を取り込んで再生するところを偶然見かけた錬金術師が考案したとされている。

作り方は簡単。野生のスライムから核を取り出し、従属の魔法陣を刻んだあと目的の魔物の体組織から作った粘液に移して再生を待つだけ。

再生したスライムは素材の特性をあわせ持ち元よりも強化されるから、安全に飼うために従属の魔法陣は必須だ。魔法陣を刻んだ跡

に主の血を垂らしておけば、主を攻撃することはないし、主の魔力を与えないと数日で衰弱して死んでしまうから万一逃げられても問題になる恐れは少ない。

飼い方も簡単で、下部にスライムの分泌液を取り出す活栓が付いたガラス瓶で飼う。この容器は分泌物だけ底に溜まるように内部に3本足の台が設置してあって、分泌液は台と容器の隙間から瓶の底に溜まり、スライムは台の上に載っている形だ。スライムは粘液状の魔物だが内部の核は固く、核が通らない場所は通り抜けられない。外殻も粘液状で魔力吸収に極端に弱いから、魔力を吸う素材であるデイジスのツタで編んだ網で瓶の蓋や活栓付近を覆っておけば、瓶の中央付近でおとなしくしている。

スライム自体は排水や汚物の分解浄化用に街中でも多用されているが、スライムが分泌する溶解液の用途も広く、特定のエサを与えることで品質を安定化させたスライム溶解液は、魔物への攻撃手段に使われたり、様々な製品の製造工程で使われたり、薄く水に溶かして衣類や食器の染み抜きに使われたりと、実に幅広い用途で使われている。スライム飼育を専用に行う業者もいて、こういったスライムの飼育容器は市販されている。

もちろん誰でも購入できるといわけではないが、商人ギルドで発行してもらった薬師の認可状を見せたらあっさりと売ってくれた。

他の魔物の体組織と合成したスライムも個体数は少ないものの、大きな町では溶解液を製造するスライムと似たような扱いになる。

核に刻まれた従属の魔法陣自体はシンプルなもので、上級ポーションの瓶に刻む魔法陣と難易度的には差は無いから、技術としては難しいものではない。

ただし、成功率が非常に低い。

スライムの核を取り出した時点でおよそ70%のスライムが死ぬ。取り出した核に従属の魔法陣を刻んだ段階で核が砕けて、そこからさらに80%程度のスライムが死ぬ。刻んだ魔法陣に主人となる人間の血液を垂らすと、これまたさらに半分が拒絶反応を起こして死ぬ。

うまく魔法陣が刻めたスライムの核を融合させたい生物の粘液に移しても、スライムとして再生できるのは10分の1以下の確率だ。

数百匹のスライムを集める事が『瓶の中のスライム』の作成に於いて最も大変なのだが、マリエラ達の家の下にはうつつつけの場所があった。

地下大水道

修繕した地下の壁を壊してジークと2人で地下に降りる。地下室と聖樹の根の境に人が一人通れるほどの隙間が急勾配で続いている。聖樹の根とその間に残った土を足場に下つていくと、地下大水道の天井と思われる石積みが崩れ、人が通れるほどの穴がぼかりと開いていた。聖樹の根は地下大水道の中まで伸びていて、それをロープ代わりに中へ降りる。明かりの魔法で照らすと支流のひとつなのだろうが、大水道と呼ぶにはいささか狭い水道で、メンテナンス用なのか、水堀の横には人が通れる道も付いていた。ところどころ歩道が崩れていたり、壁に亀裂が入っていたりと、この地下大水道が古い建造物であることが窺い知れる。

地下大水道の家の真下に当たる範囲は、聖樹の影響がスライムは影も形も見えなかった。崩落で落ちたと思われる土砂も、大工のゴードンが片付けたのだらう、残骸が端に寄せられていて、水流が滞っていることも無い。

マリエラ達が下流に向かって進んでいくと、家数件分ほど離れた辺りで聖樹の守護範囲を離れたのか、まるで線を引いたようにある位置より先にスライムがひしめき合っていた。マリエラ達生物の反応に惹かれて寄ってきたのだろう。床だけでなく壁にも天井にも、勿論水堀の中にもどんどん集まってきて、気持ちが悪い。

幾ら核を踏めば死ぬような最弱の魔物であっても数が多すぎる。こんなところに入り込んだら、あっという間に全身スライムに取り付かれて圧死か窒息死しそうだ。幾ら防御服を着けていても防御服の隙間から進入されて、骨も残さず溶かされてしまうだろう。

ジークは聖樹の守護範囲から出ないように境界ギリギリに位置取ると、クリーパーゴムの袋を手袋のようにはめた手でスライムを捕まえる。そして、スライムの軟体に手を突っ込んで核を引きずり出し、後ろにいるマリエラに渡していった。

ジークに溶解液を吹きかけてくるスライムもいるが、ゴムの防御服に阻まれて影響はないし、定期的に水魔法で洗い流しながら作業していて問題はなさそうだ。聖樹の守護範囲から飛び出した手足を狙って飛び掛ってくるスライムは、空中で核を抜き取られて軟体を地面に落とし、仲間の餌となっている。もくもくとスライムから核を筆り取るジーク。

（熟練のスライム核抜き職人みたいな手際によさね！クラーケンの解体ショーの市場の人みたい。）

すごいと感心しながら核を確認していくマリエラ。無論、スライム核抜き職人なんて職業はない。

「死んでる、これも駄目、あ、生きてる……」と思ったら、刻印した

ら割れちゃった。」

死んだ核は、スライムのほうへ放り投げる。超密集状態なのでど
んくさいマリエラが投げてもスライムに当たって、ぷしつと溶解液
を噴出したりするからちよつと楽しい。

273匹目で『瓶の中のスライム』が成功したのはラッキーだっ
たが、聖樹の守護範囲の外に集まったスライムは減るところか増え
ているようにも見える。

「マリエラ、スライムとはいえ、こんなに集まるのは問題じゃない
のか？」

「う、確かに。」

地下大水道にはよほど餌がないのだろう、大量のスライムを集め
てしまったようだ。幾ら弱い魔物とはいえ、ほうっておくのは良く
ないだろう。

「ちよつともつたいない気もするけど。」

と、マリエラはカバンから数本のポーション瓶を取り出すと、1
本を水堀へ注ぎ入れた。

ぶるりと水堀の水全体が震えたかと思うと、水堀に潜んでいたス
ライムが一気に死んで下流へ流されていく。

「うわ、中級魔除けポーションでスライムにこんなに効くの!？」

残りの中級魔除けポーションをジークが風魔法で噴霧状にして散
布すると、壁天井のスライムたちは水分を吐き出して枯れたよう
にしぼんでは、ばたばたと落ちて死んでいく。

中級魔除けポーションはオークやリザードマンを寄せ付けられないのだから、スライムを散らすくらいはできるだろうと散布したのだが、粘膜状の外皮を持つスライムは中級の魔除けポーションを体内に吸収してしまうのだろう、スライムに抜群の効果を発揮した。生き残ったスライムたちも、あつという間に散り散りに逃げていき、地下水道はスッキリとした状態に戻った。

あれだけのスライムを集めてしまったのだから、何かあつてはいけないし、スライムの屍骸をそのまましておくのも良くない。壁や床だつて洗つておいた方がいいだろう。成功した『瓶の中のスライム』を飼育容器に入れて家の地下室に一旦置いてから、マリエラとジークは中級魔除けポーションを振りかけて、二人で地下大水道の点検と清掃に向かった。

家の地下の水道はやはり支流だつたらしく、しばらく下流に進むと分岐して地下大水道の名に相応しい、広大な水溝につながっていた。まるで地下水脈のような大きさで、とつくに流されてしまったのだろう、人が通れる道も無い。

迷宮都市中の下水や雨水はおそらく大半がこの巨大水溝に流入しているのだろう。

集まった水が何処に行くのか、光が届く範囲に果ては見えない。

「マリエラ、これ以上はいけない。」

身を乗り出して覗き込もうとするマリエラをジークが制する。これ以上は、好奇心で覗いて良い領域ではないと。

「そうだね。」

「ごうごうと水音を立てる巨大水溝を後にして、二人は支流の分岐点に戻った。支流に流れる水のは半分は巨大水溝に流れるように設計されていたが、雨水などで増水したときの水路なのか、支流自体はまだ下流へと続いていた。念のために支流の方を下流に向かって調査していく。支流には家々からの排水の流入経路と巨大水溝へ流れる分岐が一定間隔で繰り返されていた。時折他の支流から巨大水溝へ流れる水路が交差していて、地下大水道の広大さを感じさせる。

マリエラ達が辿った支流は、構造や劣化度合いに着目すれば何処も大して代わり映えが無く、中級魔除けポーションを振りかけた二人によってくる魔物もない。さっきはスライムを大量に集めてしまったけれど、特に問題もなさそうだ。この辺で引き返そうかと思つたその時、水路の先に薄明かりが見えた。

水路の出口だ。

「ここ防衛都市のはずれだつたところだ。あと、あそこ。迷宮都市の西門じゃない？」

水路は迷宮都市の西門から少し魔の森側へ進んだ場所まで伸びていた。元は防衛都市が広がっていた場所で、今は魔の森に飲まれていた。水路の出口の格子は半分ほど朽ちてしまっていて、人間がすり抜けられる孔も開いているが、水路の出口にはデイジスとブロモミンテラが繁茂していて魔物の進入を防いでいるようだ。

地下大水道にはマリエラ達が辿った支流のほかにも排水経路があるようだった。排水の殆どは、巨大水溝へと通じているがここのように、迷宮都市の外につながっている水路もあるのだろう。

魔の森に面し、中心に迷宮を持つ。足元にはスライムが蠢く大水道が通っていて、しかも魔の森に通じている。

迷宮都市には沢山の人が暮らしているけれど、魔の森で暮らすのと大差ないのかもしれない。とマリエラは思った。

瓶の中のスライム（後書き）

スライムの溶解液つて、溶かしたものに含まれる塩素とか硫黄とか窒素から作った塩酸、硫酸、硝酸なんじゃないのかな、と思っ
ます。

治療技師

マリエラから上級ポーションを受け取ったマルロー副隊長とリンクスは、地下大水道を下流へと進む。

中級魔除けポーションの効果は抜群で、一匹のスライムにも出くわさない。人が通行できる通路は古く所々崩れている上に水にぬれて滑りやすいが、彼らにとってはどうという事もない。背負ったポーションが割れないようにだけ注意して、一気に出口へ駆け抜ける。

（エドガン、周囲の状況は？）

（問題なしです。マルロー副隊長。）

マルローの念話に双剣使いのエドガンが応じ、開かれた西門からマルローとリンクスがするりと入り込む。魔の森に隣接した西門を使う者はいない。常時封鎖されていて、定期的に見回りの兵が巡回する程度だ。その時間さえ避ければ、出入りはさして難しくない。門を抜ければ拠点は直ぐそこだ。

拠点にたどり着いたマルローとリンクスは、木箱の中に申し訳程度の緩衝材とともに雑に詰め込まれたポーションを、高価な携帯用のポーションケースに移しかえ、さらにケースごと木箱につめる。迷宮都市内の足として新たに購入したラプトルにポーションの入った箱を積み込むと、迷宮討伐軍の基地へと向かった。

うまい方法を見つけたものだ。

マルローは地下大水道を思い出す。地下大水道自体は知られたも

のだ。スライムが大繁殖していることも含めて。稀少な中級ポーションを消費してまで通行しているなどは誰も思わないだろうし、万一つけられたとしても中級魔除けポーションなしで通り抜けられる場所ではない。地下大水道から迷宮都市の西門までは短距離とはいえ魔の森を抜ける必要がある。魔除けポーションも無しに安易に尾行できる場所ではない。

黒鉄輸送隊がポーションを持ち込んでいることは、じきに突き止められるだろうが、何処からかは分かるまい。装甲馬車で運んでいると狙うものがいたとして、魔の森の中を尾行し続けられるものでもない。万一反つてきたとして、装甲馬車にはディックがいる。そう簡単に斃される男ではない。

拠点の守りは薄いが入り込まれたとしても、ここには普通の商品しかない。ポーションは入手後直ちに迷宮討伐隊に納品しているし、証拠となる書類も拠点には置いていない。隅々まで探られたとして、商品の中継地点という以外は普通の家と変わらない。

そもそもポーションの納入先は迷宮討伐軍だ。表立って黒鉄輸送隊に手を出す愚かものはいないだろうし、裏で動いてきたとしても荒事には慣れてる。しつぽをつかんで迷宮討伐軍へ突き出せば、あとはうまく処理してくれるだろう。マリエラさえ押さえられなければ幾らだってやりようはあるのだ。

マルローとリンクスは迷宮の南東壁側にある迷宮討伐隊の基地にたどり着く。表向きは帝都から運んできた物品の納品。拠点から軍の上層部向けの嗜好品などを少量ずつ納品しているのだという話が通っている。ポーションの納品は既に数度行われているから、なれた様子で地下倉庫に通される。

「待つていたぞ。今日は筋組織特化型の上級だったな」
中には無精ひげを生やした黒髪の眼光鋭い男が待つていた。歳のころは40歳位か。マルローやディックも世話になった先輩で今でも頭が上がらない。

「ジャック・ニーレンバーグ治療技師。本日の納品分です。確認を。」

マルローが渡したポーションをニーレンバーグが受け取り、周りの部下たちが検品を行う。

「明日の骨折特化があれば大勢の兵士を治療できる。だが、よくこのタイミングでこれだけのポーションが手に入ったものだ。」

ニーレンバーグがつぶやく。これで、先日の遠征で出た迷宮討伐隊の負傷者も治せると。

レオンハルトがバジリスクに石化の呪いを受けた時、迷宮討伐隊は壊滅の危機に瀕した。迷宮討伐隊の前線は53階層。Sランクの魔物が棲む魔境だ。幾ら数百の軍で挑むとはいえ、兵の大半がBランクで構成された迷宮討伐軍に太刀打ちできる相手ではない。迷宮討伐軍の進軍を可能としているのは、金獅子將軍レオンハルトの持つ固有スキル『獅子咆哮』の効果によるところが大きい。

レオンハルトの率いる軍は、『獅子咆哮』の効果によって全能力が50%増加する。このため、彼の率いる軍はAランク相当の軍勢にまで能力が引き上げられ、Sランクの魔物が棲む階層での進軍が可能となっていた。

そのレオンハルトが倒れたのだ。

レオンハルトの体軀は見る間に石化していき、スキルの効果で上昇していた軍の兵力は低下する。こんな速度の石化など治癒魔法で対処できない。レオンハルトを助けたのは、遠征直前にもちこまれた上級解毒ポーションだった。上級解毒ポーションをかけた場所は石化が解け、飲ませることで進行が遅れた。バジリスクの石化は呪いだから状態異常を幾ら除いても、再び石化は進行する。何とかバジリスクを斃し石化の進行は弱まったものの、呪が解けることは無い。

治癒魔法で石化の進行を遅らせ、石化が進行しすぎれば上級解毒ポーションを使う。そうやってじりじりと遠征軍を後退させていった。

どれだけの兵が倒れただろう。

冒険者ギルドのギルドマスター、ハーゲイのパーティーが駆けつけるまで持ちこたえられたのは、レオンハルトの弟、ウエイスハルトの的確な指示と、兵たちの研鑽の日々があつてこそだろう。混戦の中、ニーレンバーグら治療部隊の必死の治療は続いた。兵を死なせてはならない。Ｂランクまで成長し、連携の取れた戦闘をこなせる兵は貴重だ。足がもげようが、手が千切れようが、拾っておきさえすれば後で繋げることができる。

治癒魔法師の魔力はレオンハルトの石化解除に必要な。兵の治療には僅かしか使えない。死なない最低限の治療をポーションで。アグウィナス家から提供された新薬を惜しげもなく使う。中級だという赤いポーションは効き目が弱く、上級を冠する闇色のポーションは効果にばらつきが大きかった。

事前に用意していたアグウィナス家のポーションだけではとても

足りなかった。マルローたちが持ち込んだ60本のポーションでぎりぎり急場をしのぐことができた。あのポーションは驚くほどによく効いた。上級、中級ポーションが尽き、すぎるような気持ちで使った低級ポーションで一命を取り留めた兵さえいる。低級魔除けポーションで魔物の追撃の手は明らかに緩まった。本当に驚くほどの効果だった。まるで作りたてのポーションのような。

あれだけの被害を受け、死者が数名で済んだのは奇跡だったとニーレンバーグ治療技師は考える。手や足のもげたもの、骨が折れ、肉がえぐれ、内臓が破裂したものは大勢いるが、かろうじてまだ生きている。もげた手足も腐らないようごく僅かだけ繋いである。

治療に必要なポーションも、必要なだけマルローたちが運んで来るといふ。骨折の治療を治癒魔法で行う場合、治癒魔法の魔力消費量が多くて一日で捌ける患者の数が少ないが、明日骨折特化の上級ポーションが届けば問題ない。多くの負傷者を治療することができらるだろう。

さて、届いたばかりの筋組織特化型で治療を始めようか。

ニーレンバーグ治療技師はにやりと笑う。まずは腹に穴を開けられたアイツから。傷ついた内臓は治癒魔法で治したが、本人の体力が足らず肉は裂けたまま、上っ面を無理やり閉じただけだ。もう一度開いて中を洗浄し、特化型を使えば少ないポーションで効率よく治せるだろう。若い治癒魔法使いには閉じた傷口を切り開くことを厭う者も多いから、しっかりと見せておかなければ。治癒魔法に使う魔力やポーションがいつも潤沢にあるわけではない。これからの戦いに備え、経験を つんでもらわねば困る。

ニーレンバーグ治療技師はこれから行う治療の様子を思い描いて、くつくつくと低く笑った。

「マルローお前たちが持ち込んだポーションのお陰で多くの兵が助かった。

だからな、十分に気をつける。」

そう言うと、ニーレンバーグ治療技師は患者の下へと去っていった。

「なー、マルロー副隊長、俺どころも悪くないのに、ちょーっと腹が痛い気がした。」

「大丈夫ですよ、リンクス。私もです。」

マルローもディックも、従軍時代は散々世話になったのだ。

度重なる怪我にもかかわらず2人とも五体満足で後遺症も無いのは、ニーレンバーグ治療技師のお陰なのだが、にやりと笑いながら治療を施す姿は兵達の恐怖の対象でもある。彼の前では未だに背筋が伸びてしまう。ディックなどは、迷宮都市の拠点に残れば毎日アンバーに会えるというのに、ニーレンバーグ治療技師にもほぼ毎日顔を合わせると聞いて、輸送部隊に同行することを即決したくらいだ。

ニーレンバーグ治療技師の部下たちも同意するようにつんつんとうなずくと、ポーションを抱えてニーレンバーグ治療技師の後を追った。

ユニコーンの檻

迷宮討伐軍の基地から去っていくマルロー副隊長とリンクスを、基地の部屋から眺めるものがいた。

金獅子將軍レオンハルトとその弟ウエイスハルトだ。

「あれでよかったのか、ウエイス。」

レオンハルトは弟に問う。

レオンハルトがマルロー、ディックと面会した翌日、彼らは解呪の上級ポーションを携えてレオンハルトの元を訪れた。石化を治す上級の解毒ポーションと帝都でもなかなか手に入らない上級のリジエネ薬^生まで持って。

一命を取り留めたレオンハルトに、マルローとディックは伝えた。軍には戻らない。ポーションの持ち主は迷宮討伐軍に協力的な人物だが、必要な量を秘密裏に供給することを望んでいる、魔法契約を結んでいるため提供者については口外できないと。

どれだけの種類と量のポーションがあるのかと聞くと、ランクは上級以下で種類と量は膨大だと答える。

協力的ならば全てこちらに運び込めという、ポーション瓶を提示されればその数に応じて瓶に移して持つてくると言う。

瓶ではなくタンクで保管しているのならば、それごと持って来れば良いといえ、持ち運べるものではないのだと話す。

マルローの漠然として全体像がつかめない説明に、何をばかな、ポーションの希少性を分かっているのかと、声を荒らげようとしたレオンハルトを、弟ウエイスハルトが制した。

「構わないではありませんか。兄上の命の恩人でもあるのです。マルロー、その者はポーションの提供に協力的だと言ったな、ポーション瓶さえ渡せば可能な限り中身を籠めて提供すると。相違ないな？」

相違ございませんと答えるマルローに、ウエイズハルトは、「必要なものがあれば、兵だろが物資だろが申すが良い。助力は惜しまぬ。ただし、ポーションは帝都と同額で買い取らせてもらう。黒鉄輸送隊にも運送費と持ち主の護衛代として同額を支払おう。それと、在庫が半分を切ったならその旨を伝えよ。」と言った。これに驚いたレオンハルトだったが、顔には出さずマルローとディックの顔を見る。二人は価格の安さに驚く様子も無く、「ご理解賜り、有難う御座います」と答えた。

レオンハルトの石化の呪が解かれ一命を取り留めた翌日から、ウエイズハルトは軍内に保管された空のポーション瓶を集めさせ、治療部隊長のジャック・ニーレンバーグ治療技師に先の遠征で負傷した兵を速やかに回復させるために必要なポーション目録の作成を命じた。入手可能性や採算は度外視で、必要なものを必要なだけ計上しろと。

空のポーション瓶は数千本保管されていた。アグウィナス家ではポーションをタンクで管理しているらしく、空き瓶と引き換えのポーション提供を求められることがあったからだ。ポーション瓶は、製造工程において命の雫を使うため、地脈の外から持ち込むことはできない。瓶自体はポーションと違って劣化が極めて遅いため特別な管理は不要で、割れてしまってもガラスの破片を集めてガラス細

工師が作り直すこともできる。しかしポーション瓶のガラスは錬金術師がいなければ作り出せないから貴重品には違いない。

ニーレンバーグ治療技師から提出されたポーションリストを優先に並び替え、本数を100本単位に切り上げて、ウエイスハルトはマルローたちに手渡した。ある物だけ上から順に持つてくるようにと。

この取引を知る者は限られる。レオンハルトとウエイスハルト、予算を管理する腹心、ニーレンバーグ治療技師と治療に当たるその部下たち。腹心以下部下たちには守秘を誓約させている。勿論魔法拘束力のある誓約だ。

ポーションの代金は予算管理者から取引ごとに直接支払われる。ウエイスハルトとの取り決め通り帝都の販売価格から計算された金額で、黒鉄輸送隊にも同額が支払われる。

ポーションの本数が多いため支払われる総額は少なくは無い。このペースで購入していけば軍費の見直しも必要になりそうだ。

しかし、稀少なポーションの対価として相応しい価格ではない。ウエイスハルトは声を荒らげかけたレオンハルトに対して「命の恩人なのだから」と言ったが、恩人に対してこの価格でこれほどの本数を要求するなど、礼を失する行いではないのか。

埋蔵されたポーションが発見されたならば、希少性、戦略性を考えても全量を討伐軍で管理すべきだ。勿論持ち主には相応の褒章を与える。ポーションの希少性を考えると、一度に全額を支払うことは困難だろうが、地位と名誉を与えた上に代々の恩給でもって遇すれば良い。

「兄上、ポーションの持ち主がポーションの在処を示し、全量を差し出してきたら、そのポーションをどうされますか？」

ウエイズハルトの問いに、レオンハルトが答える。

「まずは、兵達の治療だ。長年苦楽を共にし戦闘技術を練り上げてきたつわもの達だ。失うわけにはいかん。」

「兵の治療が終わったら？」

「当然、我らのポーション庫を満たす。協力的な貴族家にまわしてやってもよい。ポーションを出し惜しみせず使えるのならば、迷宮攻略の大きな一手となろう。」

「今まさに我々が行っていることではありませんか。」

「そういうことではないだろう。」

言葉遊びをする気は無いと、レオンハルトはウエイズハルトを見やる。

「兄上、現状をお考えください。我々はこの地に生き残るために迷宮を斃さなければならぬ。そして迷宮を斃しうるのはこの100年で最も武に優れた兄上がおられる今しかない。」

けれど、今なお迷宮の最深部へは到達できない。階層主を倒すために出し惜しみなどできる状況では御座いません。ポーションの在庫に限りがあったとして、在庫に応じて出し惜しみして賄える戦況ではない。」

現在の迷宮討伐軍の体制を構築したのはウエイズハルトだ。迷宮の階層が深くなるにつれ、魔物は強く負傷者は絶えない。魔物に依りて迷宮討伐軍の攻撃力が上がっていくわけではない。死なず、生き残り、戦い続けることでしか迷宮討伐軍の戦力は向上しえないのだ。兵が死傷し戦線を離脱すれば、経験の浅い2軍の兵に替えなければならぬ。当然個としても、集団としても戦闘力は低下する。

限られた戦力でより強い魔物と相対するには、死なないことに重

きを置き、長時間攻撃を続ける必要があった。格上の魔物の攻撃を防ぎつつ、僅かずつ生命力を殺いでいく。

兵達の実力を上回る魔物と長時間相対するのだ。負傷者は増える一方で、治癒魔法の使い手だけでは魔力が続かない。長時間化する戦闘で兵自体の体力も減っていき、治癒魔法の効果が十分でないこともある。また、治癒魔法の使い手が負傷しては目も当てられない。

ウエイスハルトはこれらの問題を、治療魔法の使い手と『治療技師』からなる治療部隊を編成することで解決した。『治療技師』は人体の探査を行い怪我の状況を把握して、治癒魔法の使い手に最も効率の良い治療を指示する。ポーションの使用許可は治療技師に与えられており、魔力を使わずに行える処置を施した後に、必要に応じて、薬、ポーション、治癒魔法で治療を行う。

治癒魔法の効率化を図ることで、迷宮討伐軍の継続戦闘可能時間は向上し、迷宮討伐階数の大幅な更新をなしえた。

しかし、ここまでだ。この方法で至れるのは。今のままでは53階層は突破できない。

火力も、防御力も、何もかも足りないが、どれも容易に手に入るものではない。武器も防具も手に入るものはとっくに組み入れて漸くここまで来たのだ。

今でなければならぬのだ。兄、レオンハルトのスキル『獅子咆哮』は強力だ。個人としての武力もカリスマも申し分ない。武に優れたシューゼンワルド家においても過去100年現れなかった逸材だ。兵達の錬度も高い。何年もかけて育ててきたのだ。

人の最盛期は短い。石化の呪いから逃れることは叶ったが、今の戦力が維持できるのはあと10年か20年か。

その間に迷宮を斃しえなければ、迷宮や魔の森から魔物があふれ出す^ト日を恐れ、魔物を殺し、殺されるために迷宮に兵を送り続ける日々が訪れるだろう。

「兄上がお倒れになった時、我らの命運もはやこれまでかと思いました。」

しかし救いはもたらされた。遠征直前に持ち込まれたポーションで奇跡的に多くの命が救われ、石化の呪いすら癒された。彼らの命運は絶える事はなかった。

「手詰まりだった我らに、ポーションが与えられるのならば、それを用いて可能な限り前へ進むしかありません。ポーションの持ち主の功に報いるのは迷宮を倒したあとでいい。」

「だからこそ、手中に収めておくべきではないのか。」

埋蔵されていたポーションの全てを。その持ち主もともに。レオンハルトの問いにウェイスハルトはこう応じた。

「兄上、第7代帝国皇帝が絶滅の危機に瀕したユニコーンをどのように保護したかご存知ですか？」

ユニコーンの角は特級の解毒薬の材料にもなる極めて稀少な秘薬だ。そのためともと生息数の少なかったユニコーンは乱獲され、第7代帝国皇帝の時代に絶滅の危機に瀕していた。

「む……。生息する森ごと囲ったのではなかったか？」

唐突に話題を変えた弟を訝しみつつも、レオンハルトは答えた。

「その通りです。」

ユニコーンは心優しい乙女でなければ近寄れないとされるほどデリケートな生き物で、保護のために獣舎に囲われた個体は全て死んでしまったという。どれほど立派で広大な獣舎を設けてもユニコーンを救うことはできなかった。そこで第7代帝国皇帝は、ユニコーンの生息地である森を丸ごと囲い込み、密猟者やユニコーンを害する魔物から守った。

ユニコーンの保護に費やされた費用は莫大であったが、その甲斐あってユニコーンは徐々に個体数を増やし、定期的に生え変わる角だけで十分需要を賄えるようになった。

もともと特級の解毒ポーションを作れる錬金術師は帝国においても数少ない。材料であるユニコーンの角が一定量出回れば、特級解毒ポーションの希少性は、材料のユニコーンの角でなく錬金術師のほうへ移る。

今でもユニコーンの殺害や角の不法所持は厳罰に処されるが、リスクに見合う希少性を失ったユニコーンを狙う者は激減し、ユニコーンたちは生息地の森で伸びやかに暮らしているという。

「稀有なものを囲うには、相応しい環境が必要だという例えとしても使われておりますね。」

ウェイスハルトの言に、レオンハルトは一つの考えに至った。

「まさか、お前は……。ありえん。だが……。そう考えると符合する。」

マルローたちのはつきりしない言い様も、帝都並みの価格で大量

に納品されるポーションも、『そうであるならば』納得がいく。

だが、推測の通りならばマルロー達の手中にあるのは問題ではないのか。

レオンハルトの疑念を察したかのように、ウェイスハルトは答えた。

「マルローとディックは、解呪のポーションを持って兄上の下を訪れた。それが答えではありませんか。彼らは迷宮討伐軍を離れても、兄上の兵達なのですよ。」

そうか。とレオンハルトは納得する。

ユニコーンの檻が必要ならばくれてやるわ。

我と共に往くというなら、それに応えてやるだけだと。

ユニコーンの檻（後書き）

マリエラはワーク・ライフバランスの取れた職場環境を手に入れた！

キャロライン・アグウィナス

「ジーク、ジーク、どうしよう!？」

マルローから受け取ったポーションの代金が入った袋を覗いて、マリエラがうろたえる。

「金貨がいっぱい!毎日!毎日金貨がざくざくだよ!」

うーん、どうしようこの娘。と言いたげな表情でジークがマリエラを見る。

マリエラが受け取るポーションの代金は、帝都での売値と変わらない。迷宮都市での希少性を考えると安値で買い叩かれているともいえるのだが、そもそも上級ポーションは安いものではない。帝都の流通価格は、通常の上級ポーションで大銀貨1枚、上級解毒ポーションは大銀貨1枚と銀貨2枚、特化型になると材料の希少性や値段によって価格は変わるが大銀貨2〜3枚の値が付く。それを毎日100本だ。ポーションの材料費は全て購入したとして3割程度。マリエラの場合は手間はかかるが安価な代用品を使うので3割を切る。

通常ならば材料費のほかに、流通に掛かる費用や、店舗や店員に払う費用、税金などが加算されるが、迷宮都市では税金は住居の賃料として一定額だし、もろもろの費用はこの取引では必要ない。

1家族が1〜2年暮らせる金貨が毎日入ってくる状態に、マリエラはうろたえていた。

「錬金術が使えるって、実はすごいやばいんじゃないの？」
「今更か!？」

10日ほど前、マルローとディックが夜中に訪ねてきた時、ジークは『厄介なことになる』と思った。解呪の特化型上級ポーションなどという珍しいものが、タイミングよく出てくるはずがない。しかも相手は迷宮討伐軍の将軍。マリエラの所在などじきに知れてしまっただろう。

ジークムントは考えた。マリエラにとっての最善は何か。どうすれば彼女を守れるのか。

軍を相手に個人の武力など意味がない。味方は多いほうがいい。だから、マリエラが錬金術師だと気付いていないマルローをあえてマリエラの工房に入れた。今までのやり取りで、マルローがマリエラを錬金術師だと気付いていないことは分かっていた。このまま、ポーションを持たせて迷宮討伐軍へ行かせてはならない。マルローに自らが錬金術師であるマリエラを守る立場にあることを認識させねばならない。

彼らは『魔法契約』で縛られている。そして迷宮討伐軍に、いや將軍自身にもツテがある。

マリエラはポーションを作ること自体に否は無いのだ。マルローは愚かではない。そこに落とし所があることに、きっと気付くはずだ。

はたして、ジークムントの思惑は効果を奏し、マリエラは今までの通りのんびりと暮らしながらポーションを供給できるようになった。

それ自体は良かったのだが。

「うわー、ポーションナイトの骨の処理ってスライム溶解液がいるわー。

お金もあるし、思い切って溶解液専用スライム全種類揃えちゃおっかな。」

「生き物をむやみに飼ってはいけません。必要な分だけにしとこうな。」

さつき垣間見せた危機感は何処へやった。

マリエラののんびり具合に呆れてため息をつきながらジークは聞く。

「マリエラ。もし、迷宮討伐軍が店にやって来て一緒に来いといったらどうするんだ？」

「ん？行くよ。」

マリエラのことなげな返事にジークは息を呑む。

「……逃げないのか？」

「なんで？無理でしょ、軍隊だもん。それに私、錬金術師だからポーション作らなきゃいけないし。」

でも、まー、暗い部屋に閉じ込められて、ずーっとただ働きでポーション作りっぱなしとかは嫌だったから、ここで作れるようになってよかったよ。お金もいっぱい払って貰えるし。マルローさん達が何て言ってくれたかは知らないけど感謝だね。」

マリエラが逃げるというなら何処までも一緒に行こうと思っていたのに、その時はその時だとはばかりのマリエラの返事に、ジークは困惑する。

「大丈夫だよ、ジーク。ジークはもう十分強いし専用の剣もあるから、前みたいなの酷いことにはならないよ。」

ジークの困った顔を見てマリエラは、にっこり笑ってそう言った。

(マリエラは、自分の置かれた状況を分かった上で、俺にこの剣をくれたのか。自分の身に起こりうることを理解した上で、何があっても俺が困ることが無いように……。)

マリエラの言葉にジークの胸が詰まる。

「俺は、マリエラの剣だよ。だからずっと傍にいるよ。」

漸くそう返すと、マリエラは嬉しそうに笑って、有難うと答えた。

「じゃー早速ポーンナイトの骨砕いちゃおっか。」

「もう遅いから、明日にしような。」

ポーンナイトの骨は重くてマリエラには運べない。

ジークが運んでくれないので、今日は諦めてマリエラは寝室に引っ込んだ。

ぐつぐつぐつぐつ

台所の大なべでアプリオレの実を煮てアクを抜く。錬金術スキルでも行えるが時間がかかる処理なので、開店時間中に台所で処理している。

店舗では常連客たちとだべりながらアプリオレの実の選別。このアプリオレは孤児院の子供達が集めてきたもので、薬草店で買うよりだいぶ安い。虫が食っていたり腐っていたりする実も混じっている。代金は孤児院の運営に回されるというのでマリエラは大量に購入している。お店が手すきの時に仕分けをすれば丁度いい。

うまくアクを抜いたアプリオレはポーシヨンの材料にもなるし、クッキーに練りこんでもこりこりした歯ごたえがして美味しい。あく抜き時間は少し増えるけれどお菓子の材料にも使えるように、今日は粗く砕いた状態でアク抜きをしている。

「こんにちは、マリエラさん。」

昼過ぎに商人ギルドのエルメラさんがやって来た。エルメラさんはマリエラの店の石鹸を愛用してくれていて、忙しい仕事の合間に時々買いに来てくれる。今日はお連れの方がいるようだ。

「貴方がマリエラさんですか？」

いかにもお嬢様と言った様子の、マリエラと同じ位の歳の女の子が立っていた。意志の強そうなパツチリした瞳に筋の通った鼻、ぷくりとした唇がなんとも愛らしい、人形のような美少女だ。どちら様だろう。

「はじめまして、マリエラです。ええと、エルメラさん、この方は？」

「マリエラさんと同じ薬師です。お店は構えていませんが冒険者ギルドの売店では一番売れている薬師です。年頃も近いですし、知り合いになられたらと思ひましてお連れしました。」

エルメラさんが紹介すると、美少女はきれいなカー^{お辞儀}テシーをして、こう名乗った。

「わたくし、キャロライン・アグウィナスと申しますの。よろしく

お願いいたしますわ。」

(どづしてこうなった……。)

「ここは、ばかばかとして気持ちがいいですわね。」

「まあ美容に良いお茶？メルル薬味草店の新製品ですか、買って帰らなくては。」

キャロライン嬢とエルメラさんが店舗の喫茶コーナーでにこにことお茶を飲んでいる。女性が多いとお店もいつもより華やかだ。おっさんがたむろしているのもほほえましいが、美少女にはやはり敵わない。

いや違う。美少女どうのじゃない。アグウィナスですよ、アグウィナス。

こんな珍しい名前、そうそうないよね？同姓の他人とかじゃないよね？

迷宮都市でポーションの管理を行っている、あのアグウィナス家だよな？

そこのご令嬢がどうしてウチのお店でお茶を飲んでいるのでしょうか。真っ向から敵情視察的なアレで来られたのでしょうか。分かりません。

混乱するマリエラにキャロラインは話しかける。

「マリエラさん、それはアプリオレですか？悪い実が混じっているようですが。」

「あ、これは孤児院の子供達が集めたものなんです。分別が手間ですけど代金が孤児院の運営に回されるそうなので、なるべく使おうと思って。」

「まあ、素晴らしいですね。慈善活動に興味がおありなのね。そういえば、エルメラさんのお父様のシール商会もジニアクリームの製造で女性の就業支援をなさっているとか。当家も何かやればよいのに、お兄様と来たら……。」

キャロライン嬢のたおやかな指先が、上品な菓子でも摘むように虫食いのアプリオレの実をつまみ、ポイとゴミ入れに捨てる。

「アグウィナス家は代々ポーシヨンの研究をなさっているのですよね。素晴らしいことでは御座いませんか。」

エルメラさんも手袋をしたまま、アプリオレの実を摘んで、「これは大丈夫ね」等といったつつ、選別済みの容器に入れる。

「代々研究して成果が出ていないのです。ポーシヨンにこだわらず、より良い薬を開発したほうが、よほど迷宮討伐の助けになると思いますのに。」

ほう、とため息をついてお茶を飲み、茶菓子、でなくアプリオレの実に手を伸ばす。選別容器、ごみ箱、選別容器と手際よくばいばいと分けていく。

「それでキャロライン様は、薬の製作に取り組んでらっしゃいますのね。」

ポポポポポイポイポイ

エルメラさんの選別速度がものすごい。プロか。

「ええ。でも一人ではどうしても行き詰ってしまってますから、歳の近い女性の薬師がお店を開かれたと聞きました、是非お話をと思いましたの。」

ぽいちよ、ぽいちよとアプリオレを選別しながら二人の会話を聞いていたマリエラの方を、キャロライン嬢の美少女フェイスが見やる。

ピンチだ、どうしよう。助けてジークー。

ジークはというと、完全に気配を消しつつ、未選別のアプリオレが減ると新しいものを足し、ゴミや選別済みの容器を取り替えては、すっと台所へ消えていった。

そうか、そうだよ。ジークはマリエラの剣だけど盾じゃないもんね。ていうか意識してないと、いつの間にアプリオレ足したり容器変えたりしたのか気が付かない。それ、身体強化とか魔法とか併用してるよね？ハーゲイに習った技術フル活用だよ。

「ええと、私でよければ、幾らでも？」

助けは来ない。諦めたマリエラがそう答えるとキャロライン嬢は、

「うれしいですわ。お友達になってくださいますね。」

とにっこりと微笑んだ。

「まあ、この傷薬は薬草をそのままでは無く、薬草から抽出した成分を配合していますのね？」

「そうです。キャロライン様。薬草そのままだと、治りを阻害するものも含まれていますので。」

「キヤルとお呼びになって。あと敬語も不要ですわ。お友達ですもの私達。」

「そうは言われましても……。」

押し問答の末、キヤル様という敬称と愛称がごっちゃになった呼び名で落ち着いた。他に貴族がない場合は敬語もなしで普通に話すということになった。いいの。よくない気がするのなるべく丁寧に話すようにしよう。上手く敬語が使えなくても大丈夫ぐらいに思っておいた方が無難だと思う。

そもそも、貴族のご令嬢が庶民の店に一人で来て、だべっついていいのかと心配になったが、お付の人は店の外で待たせているらしい。どうりでお客さんが来ないと思った。次からは一緒にお店に入っ来てくれるようにお願いした。

「もう、こんな時間ですね。」

お茶の時間を過ぎたころ、エルメラさんとキヤル様は名残惜しそうに帰っていった。

ポーシヨンのことを探りに来たのかと思ったが、最後まで薬の話しかなかった。

アグウィナス家のご令嬢が何しに来たんだと思わなくも無かったけれど、歳の近いキヤル様とお喋りは結構楽しくて、二人を見送るマリエラもとても名残惜しい気分になった。

「よければ、また来てください。」
「マリエラがそう言う」と、

「ええ、是非伺いますわ！」
キヤル様は笑顔で答えた。

こうして、常連がまた一人増えた。
どうでもいいが、アプリオレの選別作業は物凄く捗った。

キャロライン・アグウィナス（後書き）

この作品、年頃の美少女が一人もいないんですよ。マリエラも同じ歳の友達欲しいだろうし。これはいかんと登場させたらこうなりました。

キンデル建材部門長

その日、商人ギルド薬草部門長のエルメラさんはたいそう荒ぶっていた。

「『喧嘩を売つとるのカネツ』なんてばかげた台詞を、本当に言う人がいるなんて思わなかつたわ。」

エルメラさんのご機嫌斜めつぷりに、ゴードンらドワーフ3人組は一番日当たりの良い席を譲り、薬味草店のメルルおばさんは、気持を楽にする取っておきの茶葉を選んでくれた。ジークなど表の立て看板をそつと「CLOSED」に替える始末だ。

彼らが気を利かせて席を外してくれた後、マリエラはすっかり常連となったキャル様と一緒に薬草茶を囲んでエルメラさんの話を聞いた。

程よく冷めた薬草茶をごくごくと飲み干したエルメラさんがおつしやるには。

昼過ぎに約束も無く、エルメラの執務室を建材部門長のキンデルという男が訪れたのだそうだ。都市防衛隊へ薬草の加工品を、すぐに大量に納品してくれという案件で。

「ご説明しましたとおり、都市防衛隊への納品量はお約束の量を既に超過しております。」

「コレは都市防衛隊のテルーテル大佐直々のご依頼なのダゾツ。」

「なぜ、都市防衛隊からの依頼を建材部門長が持つてくるのですしょうか。」

「ワシはテルーテル大佐と同じ学院を卒業した先輩後輩の仲だから

「ダッ。」

「都市防衛隊からの正式なご依頼には既に返答しています。」

「キミはワシに喧嘩を売つとるのカネツ!？」

「建材部門長が他組織の依頼を持つてくるほうがおかしいのでは？」

「ワシは忙しい!話しかけるナツ!」

こんな会話が繰り返され、忙しいエルメラさんの時間を割いたキンデル建材部門長は、喚き散らして帰って行ったそうだ。

えーと、うーん、突っ込みどころが満載過ぎて何処から聞いてい
いものか分からない。

キヤル様も「まあ、それは」等と言葉に詰まっている。キヤル様の護衛の人たちなど「何も聞いておりません」と言った表情で背景に溶け込んでいる。

マリエラはとりあえず、一緒に選別したアプリオレの実を練り込んだクツキーを出す。魔力を練りこんでいない、ごく普通のクツキーだ。ぽりぽりとリスのようにクツキーを齧るエルメラさんの横で、エルメラさんを迎えに来た副部門長のリエンドロさんが説明してくれた。

都市防衛隊は迷宮都市の外に広がる穀倉地帯の警護と、魔の森を伐採し穀倉地帯の拡大を任務とする部隊で、迷宮討伐軍に比べると遙かに危険性が少ない部隊であることから、家柄がよく戦力に劣る兵が多く所属する部隊だそうだ。その代名詞が部隊長のボーズ・テルーテル大佐。

彼が都市防衛隊を率いるようになってから、魔の森の伐採は進んでおらず、穀倉地帯も増えないままだ。迷宮都市の木材は魔の森を伐採したものが大半を占めるから、伐採量が少なければ建材の価格は上がる。

その辺りをうまく帳尻合わせしているのが、先ほどの話に出たキンデル建材部門長だ。キンデル建材部門長も評判が悪い男で、50歳を超えるまで商人ギルドの様々な部署を転々としてきた。常時開いた口元からは並びの悪い歯が覗いていて、迷宮都市では珍しいほど筋肉の付いていない痩せぎすの体型をしている。

歯の隙間から空気が抜けるような独特のイントネーションで、早口かつ感情的に自分の用件をまくし立てる男だ。今の地位に付けたのも、自らが言ったように「テルーテル大佐と同じ学院を卒業した先輩後輩の仲だから」だと、まことしやかにささやかれている。

テルーテル大佐はというと、キンデル建材部門長と対照的にたっぷりとした腹回りをしている。腐っても都市防衛隊に所属しているので一般的に見ると太すぎるといっわけではないが、身長が低いので余計に丸く見える。毎日良いものを食べていますといわんばかりの腹回りと、脂が滲み出たように艶光る頭頂部の持ち主だ。側頭部に残った髪を強引にかぶせている所が未練がましい。

自分の財布を開くときにはけちなくせに、隊の物品は大盤振る舞いな男だと有名で、今回のことも無計画に魔物除けの香やデイジスで作った縄を使用した結果だろう。もうすぐ砂糖かぶらの収穫期で、砂糖かぶらを狙ってオークが大量にやってくるというのに、在庫が足りないから追加納入を、と言ってきたのだ。

魔物除けの香の原料となるプロモミンテラもデイジスも安価な薬草で、迷宮都市のいたるところに生えているけれど、それを採取、加工する人手は有限だ。安価な製品なので、採取したり加工する人材を確保するほうが困難だ。

都市防衛隊への納入量は年間契約しており、商人ギルドは納入量を生産者に割り振って生産を依頼し、計画量以上の製品を納品してある。既に契約の範疇を超えている上に、今は様々な薬草の収穫時期で方々に問い合わせても、とても確保できる状態でない。

この状況は、契約量を超えた段階できちんと話をしてある。きちんと管理して使用すれば、十分賄える量を追加納入してあるというのに。

「それで、泣き付かれた建材部門長がしゃしゃりでて来たんだろうねー。」

のんびりと話すリエンドロさん。そんな内情を話していいんだらうか。

「てことで、マリエラさん、1週間で魔除けの香とデイジスの縄、どれくらい作れそうかなー？」

リエンドロさんはのんびりした喋りに反してちゃっかりしていた。

プロモミンテラは裏庭に大量に生えていたから、乾燥粉末は地下室に大量にある。香に加工するのは簡単だ。デイジスも縄は作れないけれど乾燥させたものなら提供できる。

「いやー、助かるよー。幾ら契約に無いからって、オークの襲撃のときに準備しないわけにはいかないからねー。デイジスの方は明日にでも人をやつて取りにこさせるよー。香はできるだけいいからよろしくねー。さー、エルメラさん、お仕事が溜まってますよー、帰りましょう。」

お茶とお菓子で落ち着いたエルメラさんを連れて、リエンドロさんは商人ギルドへ帰っていった。アプリオレのクッキーを沢山包んで渡してある。エルメラさん、がんばれ。マリエラは心からエールを送った。

エルメラさんが薬草部門長席に戻ると、待つてましたとばかりに仕事か舞い込んできた。

「バンダール商会から、ヤグー便に積み込むエントの実が足りないので急ぎ手配して欲しいそうです。」

「わかりました。至急行つて片付けましょう。今日こそは定時に上がりますよ。」

お土産のクッキーを齧つて「よし、頑張りましょうか」とエルメラさんが気合十分に復活したその頃、キンデル建材部門長は都市防衛隊テルーテル大佐の部屋にいた。

「申し訳御座いませんツ、テルーテル大佐。あの石頭女、大佐のご依頼だというのにまったく聞こうとしませんデッ。」

「彼女にも困つたものだね。見た目通り硬くて細かい。よく部門長が務まるものだ。」

それで、どうするのかね？キンデル建材部門長。今の在庫量ではオークの襲撃に耐えられないだろう。代案はあるのだろうか？

「ハッ、ハイッ。冒険者ギルドに依頼してみるのはいかがかトツ。」

「冒険者ギルドか。いいね、破限のハーゲイ殿をお招きして、是非前回の武勇伝をお聞きしたいね。」

不機嫌さを隠そうともせずエルメラ部門長をなじつていたテルーテル大佐は、話題がハーゲイになるやとたんに機嫌が良くなり、艶やかな頭部ごと身を乗り出した。50台半ばを超えたこの男は、歳相応の薄い頭髪と歳不相応な冒険者好きの趣味を持っていた。

自身の弱さ故の憧れもあるのだろう、老若男女を問わず高ランクの冒険者が大好きで、二つ名持ちであればSランクからBランクまで帝国内の冒険者を残らず記憶しているフリークぶりだ。

用もないのに冒険者を呼びつけるほど非常識ではないが、用があるなら大喜びで会いに行く。普段はとてめケチなのに、冒険者に関

してだけは、彼の財布の紐はゆるゆるだ。

ちなみに彼の神推しは『雷帝エルシー』。正体不明の女性Aランカーだ。死ぬまでに一度会ってみたいと思っっているらしい。

「そつ、それは、まぶしい会談になりそうですナツ……………」

キンデル建材部門長はテルーテルの頭部をちらちらと見ながらそう答えた。自身の頭部も荒廃しているというのに。

「……………何処を見て言っているのかね？」

「いつ、いえ、お二人のオーラを思いうかべますと目がくらむ思いでありますテツ」

ちなみに、まぶしい会談は叶わなかった。

用件を伝えたキンデル建材部門長に、ハーゲイの部下である副ギルドマスターが、

「この金額で、この量を、この納期ですか？無理です。」と断じ、「無理だそうだぜ！」

と、ハーゲイがずびしと断ったからだ。

ぐぬぬ。と、分かりやすい歯噛みをするキンデル建材部門長。

このままでは、また怒られてしまうではないか。

そもそも、都市防衛隊の物資調達など、彼の仕事ではないのだが。本来の自分の仕事を投げ出したまま、何か良いアイデアは無いものかと、キンデル建材部門長は自らの執務室内をぐるぐるとうろつきまわった。

キンデル建材部門長（後書き）

ヘイトキャラを出してみました。この人達ちゃんとヘイト稼げるんでしょっか……。

風に舞う

その日は風が強かった。

迷宮都市を吹き抜ける風は冷たく、冬がそこまで迫っていることを感じさせる。

道行く人もヤグーの毛から作られた厚手の衣類に衣替えをしている。

マリエラのお店『木漏れ日』はこんな日でもぼかぼかと暖かく、常連客たちで賑わっていた。

台所ではジークとリンクスが遅めの昼食を食べていて、先に食事を済ませたマリエラが店番をしながらキャル嬢と一緒にライナス麦を使った飲み薬を作っていた。

「マリエラさんの飲み薬は、ライナス麦で効果を高めていますのね。そういえば、お兄様もライナス麦を買い求めて何やら研究をなさっておいででしたわ。」

マリエラの飲み薬は殻を剥いたライナス麦を炊いた後、潰して糊状にしたものに粉にした薬草や薬草から抽出した薬効成分を練り混ぜることで、ライナス麦に含まれる命の雫の効果で薬草の効果をかさ上げしている。初めて卸売市場に行った時、アグウィナス家がライナス麦を買い漁って在庫が殆ど無かったけれど、キャル様のお兄さんが買っていたのか。

ちなみに今使っているのは最近収穫された新物だ。アグウィナス家の大量買いを期待して大量に仕入れたのに、今回は買いに来なか

ったそうだ。在庫をかかえて困っていたそうで、マリエラのまとめ買いを歓迎してくれた。

ライナス麦を炊かずに粉のまま混ぜたり、命の雫が多く宿る胚芽の部分だけ使ってみたり、茹でたり、炊いたり、煮込んでみたり、温度も低温から高温まで色々試してみたけれど、普通に料理をするように炊いたものが一番効果が高かった。

あと、ライナス麦も潰した後、薬草や薬草から抽出した成分とせつせと練り合わせないといけない。混ぜただけではライナス麦に含まれる命の雫と馴染まないのは理解できるが、そんなに練り練りさせたいのか。

閉店後に作る場合は、錬金術スキルでちゃっちゃと練り混ぜるのだが、最近はお店のカウンターでキヤル様と一緒に作ることもある。その時は当然すり鉢とスリコギで練らないといけない。

オークとオークキングの脂を練りまくって作る、ジェネラルオイルを思い出す気の長くなる作業だ。

二の腕が逞しくなったらどうしてくれる。マリエラがふんぬと力瘤を作って見せると、リンクスが台所からひよっこり顔を出して、マリエラの二の腕をぶにりと摘んで「ハハッ」と笑って台所に戻っていた。

なんなの？と思っていると、ジークにもぶにりとやられる。

「くっ……」笑ったよね、今笑ったよね。

台所に消えるジークにじっとりとした視線を送っていると、後ろからキヤル様にまでぶにりとされた。

「うふっ」

美少女スマイルかわいい。

陽だまりでたむろするドワーフ3人組と一緒に、キヤル様の美少女スマイルに癒されていると、メルル薬味草店のメルルさんが駆け

込んできた。

「マリエラちゃん、洗濯物とんでたよ。物干し綱が外れたんじゃないかい？だいぶん舞ってるよ。」

そう言って、メルルさんがマリエラに渡したのはマリエラのパンツだった。

「うええっ。ジジジ、ジークたいへん！急いで！緊急事態が大至急だよ！」

大慌てで風に舞い散る洗濯物を拾いに行くマリエラとジーク。マリエラのパンツはメルルさんが救出してくれたけれど、ジークのパンツは行方不明だ。

ぱたぱたと洗濯物を拾いに出て行くマリエラとジークを、キャロラインが見つめる。

「あの2人、一緒に暮らしていますのよね。恋人同士……なのかしら？」

ぼつりとつぶやくキャロラインにメルルさんが食いつく。メルルさんはこの界隈の奥様方の顔役。噂センサーの精度は並ではない。メルル薬味草店で取り扱っている薬味草やお茶の葉以上に得意分野だ。

「なんでもね、同じ村の出身で幼馴染らしいよ。ジークが冒険者になって村を出てってから、ちょっとばかりヤンチャしたらしくてね。迷宮都市へ送られるハメになったところを、マリエラちゃんが追っかけてきて助けたんだって。」

「まあ。」

上品に口元に手をやるキャロライン。メルルさんの漠然とした言い回しが想像を掻き立てる。

「マリエラちゃんは幼馴染だって言ってるけどあの年の差だろ？それで、迷宮都市まで追っかけてくるとかねえ。この家だってキャル様からすりゃ庶民の家だろうけど、なかなか住めるもんじゃない。

マリエラちゃんは他に家族もないようだし、きつと親御さんから受け継いだもの一切合財つぎ込んで、こうして暮らしてるんだろうさ。」

「んまあ、んまあっ。」

令嬢とはいえキャロラインも年頃の娘。この手の話題は好物だ。ジークは常にマリエラを警護するような位置にいて、初めは護衛かと思っていた。キャロラインにも小さい頃から護衛は付いている。単なる護衛ではないと気付いたのは、マリエラを見つめるジークのまなざし。護衛が護衛対象から目を離さないのは当然だが、自分の護衛とは視線に宿る熱が違うと思った。

キャロラインから見て、マリエラのジークに対する態度は自然で家族に対する様だと思ふ。むしろ、リンクスのほうが仲がよさげに見える。三人の関係が気になってしまふ。

きつと2人は幼馴染以上で恋人未満。リンクスの入り込む余地もあるのかもしれない。そんな想像に、きやつきやと盛り上がるキャロライン。

キャロラインには帝都に錬金術師の婚約者がいる。相手と会ったことは一度も無い。年齢は20歳も上だという。ずいぶん年上だが、上級ポーシオンを作れ、弟子を幾人か持つ高位の錬金術師だと聞いている。

アグウィナス家は代々ポーションの研究を行なっている。迷宮都市では地脈とラインを結べない以上、錬金術師と同じ方法ではポーションを作れない。命の雫を用いずに高い効果を発揮する魔法薬を開発するためには、錬金術師に《ライブラリ》として引き継がれる薬草の処理方法やポーションの作成手順、そして秘匿された特殊な魔法薬の情報が必要だ。

これらの情報や知識を得るため、アグウィナス家は代々嫡子以外の子供を帝都の様々な錬金術師の元へ弟子入りさせたり、婚姻関係を結んでつながりを作ってきた。

キャロラインの婚約もその一環。正妻としての輿入れだが、適齢期のキャロラインに対して相手は20歳も年上で再婚らしい。前妻とは死別、子供はいないと聞いているが一体どんな人物なのか。キャロラインも貴族の子女だ。政略結婚は当然のことと受け入れてはいるが、親と子ほど差のある相手というのは珍しい。ただでさえ帝都から山脈や魔の森で物理的に隔離された迷宮都市で育ってきたのだ。帝都へ嫁ぐと言うだけでも不安があるのに、この年の差を思うと不安は尽きない。数年後、迷宮都市を離れて帝都に嫁ぐことを思うと、キャロラインの心は風に舞う木の葉のように不安に揺れる。

貴族の娘であるキャロラインが薬師をして冒険者ギルドに商品を卸したり、庶民であるマリエラの元に毎日通ってこられるのは、迷宮都市が閉鎖的な場所だからというだけではない。彼女が自由に暮らせるのは、おそらくは迷宮都市にいる間だけ。婚姻前の最後のわがままとして黙認されているのだ。

（わたくしも未来の旦那様と、あんなふうに睦まじく暮らせませすかしら……。）

洗濯物を抱えて、「全部見つかってよかったねー」などと話し合

いながら帰ってくるマリエラとジークを、キャロラインは見つめる。マリエラとジークの年齢を聞いてはいないが、10歳近く離れているように見受けられる。2人の間に流れる穏やかな空気に、キャロラインは自分と婚約者にも幸せな未来が訪れることを願った。

「まあ、マリエラちゃんはあるな感じだからね、ジークの押しに掛かっているとあたしや思うんだけどね。」

噂話は始まったばかりで、燃え上がるには燃料が足りない。あんなたち、なんかネタはないのかい？この店の改修をしたんだろ？とばかりにドワーフ3人に視線を送るメルルさん。獲物を狙う魔物のような視線が恐い。

「さあて仕事に戻るかのー。」

「この閃きを図面にまとめなければ。」

「窓の修理依頼を忘れとったわー。」

居心地の悪くなったドワーフ三人組は立ち上がると、店の前まで戻ってきたマリエラ達に声を掛けて店を出て行った。いつも通り傷薬を1缶ずつ買ってくれている。お茶代替わりなのだろうが、毎日薬を買っては、スラムで雇った怪我をして休業中の冒険者に渡しているらしい。

「ま、がんばれや」「頑張ってください」「ファイトじゃわい」

すれ違いざまに、ジークにエールを送るドワーフ3人。

ドワーフ達の謎の激励にきょとんとしながら店に戻ったマリエラとジークは、ギラギラとしたメルルさんの視線にたじたじになった。

「さーってと、俺も帰っかな。マリエラー、俺2、3日来ねーから。昼飯は自分で食うんだぞ。じゃーな、ジーク。ガンバレよ。」

リンクスも台所から出てそう言つと、ぐしゃぐしゃとマリエラの頭を撫でて帰っていった。

「うん、わかったー。っってお昼ぐらい自分で食べれますー。」

洗濯物を両手に抱えて頭を防御できないマリエラは口を尖らせてそう言う。頭の上にはリンクスの手が乗っかっていて、リンクスの顔が見えていない。

リンクスの視線は、ジークを捉え、そしてキャロラインとその護衛を示すように動く。リンクスの「ガンバレ」がドワーフ三人組とは違う意味であることにジークは気付いている。

「ああ、気を付けてな。」

そう答えると、ジークとマリエラはリンクスと入れ替わりに店に戻って行った。

（アグウィナスの嬢ちゃんも護衛も、マリエラやジークが店を離れてもおおかしな動きはしなかったけどな。）

マリエラの店を遠目に見ながらリンクスは考える。

マリエラがポーシオンを大量納入し始めたタイミングでマリエラの店に現れたアグウィナス家の令嬢。マリエラのポーシオンは負傷した兵の治療と迷宮討伐軍の在庫確保に当てられていて、他の貴族家にはまだ流出していない。

迷宮討伐に関する情報は何年も前から秘匿されていて、現在の到達階層だけでなくレオンハルトの負傷や迷宮討伐隊が壊滅しかけたことさえも情報操作されている。迷宮が50階層を超えているなど

という情報は、民間に流せるものではない。人々は遠征に向かうレオンハルト率いる迷宮討伐隊の勇壮な行進を見物し、遠征と共に活発化する冒険者達の活躍や、迷宮からもたらされる様々な素材に沸き立つが、兵達がいつ帰還したのかその姿は意識されていない。

アグウィナス家は200年に渡りポーションの管理を行ってきた錬金術師の家系で、代々ポーションの作成に血道を上げていることは、一部の人間の間では知られていることだが、その力は全て錬金術に注がれており、特に高い諜報力を有するであるとか、強力な武力を有しているといった情報は聞かれていない。

マリエラの存在に気付かれるには早すぎる、とリンクスは思う。

(まあ、万が一ってこともあるしな。)

キャロラインが現れてからも、マリエラの店周辺に怪しい気配は感知されなかった。キャロラインやその護衛にも怪しい動きは見られない。

もう少し深く調べてみるか。リンクスの影は路地裏へと消えていった。

迷案

『それ』は、地下大水道に棲んでいた。

いつ生じたのかは分からない。

『それ』に知能らしきものは無く本能にしたがって彷徨^{さまよ}う儚いものだったからだ。

地下大水道に流れ込む排水は栄養の無いものばかりで、『それ』の同胞はあまり大きくなれないまま、生じては消え、消えては生じてゆつくりと数を増やしていった。『それ』が大きくなれたのは偶然ではない。

『それ』の縄張りにはとっておきの餌場があった。

卸売市場から流れる排水はスライム槽で処理して排水されていたが、迷宮討伐隊の遠征時など大量の食材が搬入される時は、スライム槽で処理しきれない排水がそのまま地下大水道へ流れ込んでいた。

魔力をたつぷり含んだ魔物の残骸は『それ』にとってはご馳走だ。

ご馳走はいつでも流れてくるわけではない。流れてこなくなったら

『それ』は別の餌場に移る。

ちよつと、この餌場のご馳走を食べ終わったところだ。

『それ』はゆつくりと次の餌場へと移動を開始した。

餌を求めて徘徊する、本能のままに。

「テルーテル大佐どのツ、名案が浮かんだのでありますッ。」

キンデル建材部門長は今日も自分の仕事をほったらかして、都市防衛隊のテルーテル大佐のご機嫌を伺う。それこそ、テルーテル大

佐の靴から頭まで磨き上げそうな勢いだ。

「破限のハーゲイ殿とお会いするより良い案なのかね。」

冒険者フリークのテルーテル大佐は、すっかりハーゲイと懇親会をする気でいたようだ。むすつとした表情でキンデル建材部門長を睨む。本来の目的をすっかり忘れてしまっている。いくら二つ名持ちの冒険者とはいえハゲた親父にここまで執着できるとは、テルーテル大佐は賞賛すべき冒険者好きと言えるかもしれない。勿論彼の神推しは『雷帝 エルシー』。男性冒険者だけを好んでいるわけではない。ここは重要だ。試験に出るかもしれない。

「ハッ、いやっ、そノツ。ハーゲイ殿とはお仕事を抜きでお会いしたほうが宜しいかと思いましてですネツ。」

キンデル建材部門長のその場しのぎの言い訳に、「それもそうだね、予約をたのむよ」などと乗っかるテルーテル大佐。

「で、薬草なのですガッ。」

汗を拭きつつ話題を戻すキンデル建材部門長。

「スラムの人間を動員して、スラム中のプロモミンテラとデイジスを刈り取ればよいのでスッ。」

「流石にそれは不味くないかね。」

キンデル建材部門長の提案に、難色を示すテルーテル大佐。都市防衛隊を預かるだけはあるということか、最低限の良識はあるようだ。

「まさかまさか。この迷宮都市には、鉄壁の守りがあるではないですカッ。あの堅牢な城壁ッ、周りを取り囲む魔除け薬草の園ッ、何

より我らがテルーテル大佐率いる都市防衛隊がおりますればッ、まさに無敵ッ。かの伝説のSランク冒険者『隔虚』の如き鉄壁さではございませんカツ。」

「か、『隔虚』かね？」

「そうですとモッ。『隔虚』の如き、いや、この広大な迷宮都市の守護者でありますれバツ、『隔虚』以上と言っても過言ではありません。そのテルーテル大佐が護っておられるのでスッ。スラムの薬草の一つや二つ抜いたところでどうということもありませんまいッ。」

「そうかね？そういえば、そんな気もしておったのだがね。」

「そうですとモッ。その通りでございますとモッ。」

「そうだね。その通りだね。はっはっは。」

「そうでございましょうとモ！まっひヤッひヤッひヤッ。」

冒険者好きのテルーテル大佐の申し訳程度の良識は、Sランク以上とおだてられたことで、あっさりと崩壊した。何が楽しいのか爆笑する二人。

「それでは、そのように進めますのデッ、兵をお貸し頂けれバツ。」

「そのように取り計らってくれたまえ。だが指揮はわしがするからな。」

具体的なことは何も決まっていないうちに見えるのに、どうやら話がまとまったようだ。以心伝心か。命令系統やら承認体制やらは一体どうなっているのか。

あらゆる常識的な判断基準をまるっと無視して、翌日からスラムでの薬草採取作戦は開始された。

「これハツ、偉大なる都市防衛隊の作戦行動に関わる動員なのであるッ。」

スラムの街頭で叫び声をあげるキンデル建材部門長。

その後ろにはテルーテル大佐と数名の部下がつっ立っている。

なぜキンデルが声を張り上げているのか。ここに参加したテルーテル大佐の部下たちは、そんな疑問ももたないか、疑問をもっても逃げられない要領の悪い者達ばかりでみんなやる気がなさそうにぼんやりと宙を見ている。

「なんだあれ。」

そんな彼らに冷ややかな視線を送る3人組。

マリエラの家の改築に参加した冒険者達だ。マリエラの指示通り毎日薬を塗りこみ、傷がふさがった後もマツサージを欠かさなかったお陰か、すっかり傷は癒え冒険者家業を再開することができた。

今はまだ以前より浅い階層で仕事をしているが、じきにカンを取り戻して元の階層に戻るだろう。僅かずつではあるが蓄えもできてきた。寝泊りしているスラムの安宿から抜け出せるのも時間の問題だ。

「薬草採取？いくらプロモミンテラとデイジスだからって安すぎるだろ。」

スラム住民の動員自体は珍しい物ではない。迷宮で怪我を負い冒険者を辞めざるを得なかった冒険者崩れがここには沢山掃き溜まっている。定期的に炊き出しが行なわれ、死なない程度の食料が配給

されている。

スラム住民の雇用は推奨されることであり、手や足が不自由であってもこなせる日雇い労働は、公共、民間を問わず頻繁に行なわれている。払われる賃金は安く、一度スラムに馴染んでしまえば抜け出すことは容易ではないが、スラムでならば生活していける仕組みがあった。

キンデル建材部門長がキンキン声で説明する薬草の引き取り価格は、1抱えほどの量で銅貨1枚。それを乾燥させて粉碎するのに銅貨1枚。通常の価格の十分の一程度の値段だ。さらにそれを魔除けの香や縄に加工するのも似たような価格設定で募集している。

プロモミンテラとデイジスは迷宮都市のいたるところに生えている。他の街であれば花が植えられているようなスペースにはプロモミンテラの赤紫の葉が生い茂り、都市の建物や外壁には残らずデイジスの蔦が這っている。それはスラムであっても貴族の屋敷でさえも例外でない。そこら中に生えている薬草を採取して持って来るだけならば、請け負うものもいるだろうというキンデル建材部門長の発案だ。

迷宮都市の法にプロモミンテラやデイジスの育成を明記したものは無い。けれど、何処の家も一軒の例外なくこれらの薬草が植えられている。育てやすく繁茂しすぎたものは加工して小銭が稼げるという利点もある。けれど見た目の悪いこれらの植物を積極的に育てる理由にはならない。迷宮都市の人々がこれらを育てる理由は一つだけ。

恐いのだ。

迷宮都市の外周は高い防壁で覆われている。防壁は見上げるほど

に高く石積みは高さに見合って分厚い、これを超える防壁は帝都にもあるかどうかというほどのものだ。

しかし、200年前、魔の森の魔物達はこの壁を破りエンダルジア王国を攻め滅ぼした。

迷宮都市の中心部には200年間成長を続ける迷宮。

定期的に迷宮討伐軍が遠征に赴き、迷宮の魔物を屠ることで勢力を弱めてはいるが、管理を怠った迷宮から魔物が溢れ出し、村や町が滅んだという話は枚挙に暇が無い。

内に迷宮、外に魔の森。

まるで魔物の住処の中に暮らしているようだ。

かつて、街を避け魔の森に暮らす者達がいたという。彼らは住処をデイジスの蔦で覆い周囲をプロモミンテラで囲うことで魔物の進入を防ぎ、ひっそりと暮らしていたと。

迷宮都市はそれを真似て作られた。魔物が嫌う薬草を植えればそれらは良く繁茂した。人の領域では成育しない薬草が繁茂することこそが、この都市が魔物の領域だと人々に知らしめる。

この200年、様々なトラブルはあったものの、迷宮都市は存続して来られた。けれどもやはり恐ろしい。

だから家の周囲に高い外壁を築く。扉は大型の魔物が入って来られないように小さく、馬車を入れる大門は薬草を茂らせた裏庭に建物自体も石造りで窓には鉄枠をはめる。立てこもるための地下室も義務付けられている。万一迷宮都市に魔物が入ってきても良いように。

外見の優美さや日当たり、風通しと言った機能面は二の次だ。魔物の進入に耐えうる事のみが、この都市では求められていた。

そんな決まりに異議を唱えるものはいなかった。定められていなくとも陰気な見た目の薬草を自宅に栽培した。人と魔物はおおもとが異なるもの。相容れないもの。魔物に対する本能的な恐れがこの都市の根幹に根付いている。

「プロモミンテラもデイズも、その辺にはえておるだロツ、千切って持って来ればよいだけだろうガツ」

わめき散らす、キンデル建材部門長に冷たい視線を送る冒険者3人組。

「行こうぜ」

今日も迷宮でしっかり稼ごう。貰った薬はもうすぐなくなる。だから自分たちの稼ぎで買いに行こう。あんなのを相手にしている暇は無い。

3人が立ち去ったあとも、キンデル建材部門長は声を張り上げ続けたが、はした金で自らの住居を荒らそうとする者などいるはずも無く、スラムの住人はこの迷惑な侵入者を建物の陰から胡散臭げな視線を投げるだけだった。

「テルーテル大佐とその部下たちまで『急用』を思い出して帰っていく始末。」

「おのれ、ワシの言うことが聞けんのカッ」
地団駄を踏むキンデル建材部門長。

「不法居住者の癖ニツ、不法居住者の癖ニツ、ン？不法居住者？」

「どうやら、また余計なことを思いついたらしい。もつと生産的な思いつきでもって本業に貢献したらいいのに。キンデル建材部門長はにやりと笑うと、商人ギルドへ帰って行った。」

勿論自室ではない。彼が向かったのは住居管理部門。迷宮都市の住居と住人を管理する部門だった。

赤と黒の魔法薬

「スラーケンおはよう。」

いつものように目覚めたマリエラ。最近はずーくより先に朝の挨拶をする相手が出来た。クラーケンの内臓とスライムの核から作った『瓶の中のスライム』合成生物こと、スラーケンだ。

クラーケンとの合成とはいえスラーケンに知能は無い。マリエラの言葉を認識はしていないし、マリエラを主だと認識しているかさえ怪しい。

瓶の中でうによりと蠢く軟体生物にかわいらしいところなど無いのだけれど、マリエラはスラーケンを気に入っていて、眠る時は工房から寝室の机の上にスラーケンの瓶を移動させている。

核に従属の刻印を刻んでいるとはいえ、所詮はスライム。本能のままに餌を求めて這いずりまわるもので、ペットのように交流や意思の疎通が図れるものではない。マリエラもそれは分かっているから、飼育瓶から出したりはしていないが、たいそうなかわいがり様だといえる。

スラーケンを工房の棚に戻すと、いつもの様に薬草園へ。乾燥させたデイジスとブロモモンテラを大量に商人ギルドに卸してしまつたから、多めに刈り取って予備を作っておかなければ。

薬草園に掛かりきりなマリエラに変わり、ズーくが聖樹に水をやってくれた。マリエラが如雨露ジョウロに準備した、命の雫入りの水だ。ズーくは聖樹に好かれているようで、マリエラが撒いたときよりも沢山の葉っぱをズーくに落とす。

（くっ、悔しくなんか無いもんね。私にはスラーケンがいるもんね！）

謎の敵対心を燃やしつつ、マリエラはジークと薬草園の手入れを終える。大量のデイズとプロモミンテラを地下室に運び込んだら、錬金術スキルで《乾燥》させると朝食の時間。採取量が多かったから、いつもより遅くなってしまった。

ばたばたと家事や開店準備を済ませる2人。

開店と同時くらいに、大きな袋を抱えた子供たちがやってきた。

「おはようございまーす。アプリオレ持って来たよー。」

「おはよう。今日もたくさん採れたね。有難う。怪我は無い？」

孤児院の子供たちだ。アプリオレはスライムくらいしか出ないような迷宮の浅い層や、迷宮都市の外の普通の森にも生えていて、子供たちでも比較的安全に採取できる場所がいくつもある。

子供たちの内、年長の者が護衛を務めながら実を拾い集めては、こうして運んできてくれる。

子供が拾うものだから、虫が食ったものや腐った実も混じっていて分別に手間が掛かる。値段はその分安いものの分別を嫌って買わない店も多いが、マリエラは子供たちから買うようにしている。

「へいきー。今日はスライムも出なかったよ。」

「朝早くから拾いに行ったから、いつもよりたくさん採れたんだ。」

エへへと笑う子供たちにマリエラは、アプリオレの実を練りこんだクッキーの包みを用意する。

安価な粗漉し糖やヤグーのバターを使った、特別な効果などない

普通のクッキーだ。けれど、毎日食べられるほど甘い菓子は安くはないから子供たちは大喜びだ。

「ありがとー！姉ちゃん大好き！」

大喜びしてマリエラに群がる子供たち。マリエラはモテモテだ。モテ期到来でバブル状態だ。

「全員分あるから押さないでー。はい、どうぞ。」

クッキーを受け取った子供たちは、口々にお礼を言うと大喜びで帰っていった。

マリエラのモテバブルは短かった。泡のようにはかなく消えていく子供たちを見送りながら、マリエラは氣付いた。

「あの子たち、アプリオレの代金忘れて帰っちゃった……。」

今日はリンクスも来ないことだし、お昼に一旦店を閉めてジークと孤児院まで代金を届けに行こう。久しぶりに『ヤグーの跳ね橋亭』でお昼ご飯を食べてもいい。卸売市場で買い食いするのも捨てがたい。

そんなことを話し合いながら、マリエラとジークはアプリオレの実を台所のテーブルに運んで、いつも通り仕事を開始した。

「待たせたな。それでは治療を始めよう。」

ニーレンバーグ治療技師が治療中の兵士に向かって薄く笑ってそう告げる。

「いやいやいや、待ってないですよと答えたいところだが、その兵士

の脚はおかしな方向を向いて繋がっていて、『つなぎ目』もそれとわかるほどに歪な形をしている。まるで食いちぎられたものを無理やり繋げたようだ。このままでは一生歩けないだろう。

「ままま、待ってくれセンセイ。治療に赤いヤツとか黒いヤツ、使うのか？」

「む、新薬のことを言っているのか？新薬がどうかしたか？」

ニーレンバーグの恐怖の治療を前にして、兵士が尋ねる。

アグウィナス家が納品する『新薬』と呼ばれるポーションは、中級が赤色を、上級が黒色をしている。

「いや、オレ、赤いヤツしか使ってもらったことネエんだけどさ、あれ、嫌なんだよ。貴重で高価なモンってのは分かっているけど、使われるとなんつーか寒いんだ。

傷口の痛みって、どっちかって言うとな熱いって感じだろ？なのにアレ使われると骨の髄から冷えて、寒くて寒くて仕方なくなる。肉が再生するときもさ、ぞわぞわってなんだか自分の体とは違うものが再生してるみたいつつつか。」

「フム……。」

興味深そうに話を聞くニーレンバーグに兵士は話を続ける。

「黒いヤツは、これは聞いた話なんだが、変な夢を見るらしい。

黒いヤツって上級なんだろ？アレを使うってことは負傷者は大抵意識を失ってるらしいんだけど、そんな時にさ、水ん中で漂ってるよくな夢を見るんだと。」

体の感覚は無くして熱いとか寒いとかも感じない水の中に居て、指一本動かせネエらしい。目も何かで覆われていて、覆いの隙間から

チラツと体が見えるんだけどさ。体のあちこちがぐずぐずって崩れていくんだと。水に血がぶわーっと広がってさ。それも1箇所じゃねーんだ。何箇所も何箇所も。痛みとか感覚はねえはずなのに、だんだん寒くなってきた、見えてたはずの視界もかすんできて、ああ、死ぬんだなって、そんな夢。

気持ち悪いことに、同じ夢見たやつが何人もいるって。しかも全員が目覚めたときに思うんだとよ。

『自分の体に帰って来れた』って。」

ニーレンバーグの治療に対する恐怖もあるのだろう、饒舌に話す兵士に、

「安心したまえ、新薬は使わんよ。」
と告げ、兵士の胸元辺りにカーテンのように布覆いを掛けた。

施術の痛みで患者が暴れると手元が狂う。そのため、迷宮討伐隊の基地で痛みを伴う治療を行う場合は患部の痛みを遮断して行う。それでも自分の体が切り裂かれ、血しぶきが舞うのを見るのは戦いに慣れた兵士であっても気分の良いものではない。

前回の遠征以降、ニーレンバーグは大掛かりな治療を施す際、兵士に患部や施術が見えないように布で仕切りを引くようになった。しかも今までは患部の痛みを遮断するだけで、意識があるまま治療されていたから、何をされているか分かったものだが、今では眠りの魔法まで使ってくれるから眠っている間に施術が終わる。ポーションをふんだんに使っていることを兵士たちに知られないための対策なのだが、それを知るのには治療に当たるニーレンバーグ達だけだ。事実を知らない兵士たちの間で、ニーレンバーグが優しくなったと激震が走ったものだ。

兵士が眠りに落ちたのを確認し、ニーレンバーグがスキルを発動する。

この兵士の脚は魔物に喰われてもげている。魔物を斃し喰い干切られた足を回収して、腐らないように何とか繋いでいるけれど、元の足より肉も骨も幾分か長さが足りない。治癒魔法だけでは到底治せない深い傷だ。ニーレンバーグの部下がポーションの保存箱を開ける。中には特化型の高級ポーションが何種類も入っている。本音を言えば特級クラスが欲しい傷ではあるが、何種類もの高級特化型ポーションと優秀な治癒魔法使いがいれば、元に戻すことも可能だろう。

「治療を始めよう。」

ニーレンバーグの声に部下の治療魔法使いたちは頷き、兵士の施術を開始した。

治療が終わり部屋を移されてすぐに兵士は目を覚ました。不快感はない。恐ろしい夢も見なかった。下半身を見ると見慣れた自分の脚が正しい向きについていて、違和感を感じられなかった。

「感覚があるか確認する。痛かったら言いたまえ。」

ニーレンバーグは兵士の足に手を伸ばすと、足裏の一点をぐりつと人差し指の第二関節で圧迫した。

「うえいつてー！ー！ー！！！」

絶叫する兵士。

「そうか、痛いかな。良かったな、ちゃんと治っている。だが、少々酒の飲みすぎではないか？これを機に控えたまえ。」

にやりと笑うニーレンバーグ。なんだかとても楽しそうに見える。ニーレンバーグが優しくなったなんて嘘だと兵士は悶絶した。

ともあれ、兵士の脚は治った。これで自分の足で歩ける。

「どうせなら、もうちょっと脚長くしてくれても良かったのによ！治療の際に、患部を砕いて延ばしていることを知らない兵士は、ニーレンバーグにお礼と共に軽口をいう。」

「両足が千切れたときは検討しよう。」

まじめに請け負うニーレンバーグ。施術内容を知っているニーレンバーグの部下たちは少し青い顔をする。

「ニーレンバーグ治療技師、お嬢さんがお見えです。部屋にお通ししています。」

診察が終わり、部屋を出ようとするニーレンバーグに部下が知らせに来た。「そうか」と答えて部屋へ向かうニーレンバーグ。

「シエリーちゃん来たんだー。あの子がニーレンバーグ先生の娘だつてのが、迷宮以上の謎だよな。」

そう言つと、よいしょとベッドから起き上がる兵士。さて、軽く体を慣らしますかと、兵士は長らく世話になった病室を後にした。

「パパー、お弁当忘れてたから届けに来たの。」

ジャック・ニーレンバーグ治療技師の部屋には、12歳くらいの女の子が座っていた。

ジャックの愛娘、シェリーだ。

目つきの悪いジャック・ニーレンバーグとは違って変わってパツチリとした瞳の少女で、親子揃って黒髪だという以外は、親子だと思えないほど愛らしい。

将来は確実に美人になるだろう。

どこかの薬師のようにクッキーを餌にしなくてもモテまくるだろう未来が垣間見える。

いや、今でもその片鱗は発揮されている。シェリーが来るたび、ニーレンバーグの部屋から迷宮討伐軍の基地の門に続く通路をうるつく兵の数が増えるのは、偶然ではないはずだ。シェリーも心配だが、12歳の少女を眺めに集まってくる兵士のほうも心配だ。ジャック・ニーレンバーグの治療の腕も冴え渡ろうというものだ。

シェリーの母は数年前に亡くなっていて、忙しい父ジャックに代わり、ニーレンバーグ家の家事はシェリーが取り仕切っている。無論手伝いの家政婦は雇っているが、12歳にしてシェリーの料理の腕はなかなかのものだと、ジャックは思っている。

「パパと一緒に食べようと思って、私の分も作ってきちゃった。」

一緒に食べれて良かったと、にっこりと笑う愛娘と一緒にジャック・ニーレンバーグは昼食を取る。

シェリーの料理は妻の味付けに何処となく似ている。愛らしい面差しも、だんだんと妻に似てきた。愛娘の未来が明るく幸せなものになることを、ジャック・ニーレンバーグは祈らずにいられない。

そのためにも、迷宮を斃さなければ。

弁当を食べ終わると、シェリーは家に帰っていった。基地の門まで見送るジャック・ニーレンバーグ。

「スラムは危ない。遠回りでも町の北側を通って帰るんだぞ。」
「パパって心配性！まだお昼じゃない、大丈夫よ！」

迷宮討伐軍の基地の中では、ジャック・ニーレンバーグの人が殺せるほどの強烈な視線のお陰で、シェリーに近づくものはいないが基地の外では分からない。親ばかりかもしれないが、なるべく安全な道を通るように念を押す。

「それより早く帰って来てね。」そう言って父の心配を受け流したシェリーは、父の頬にキスをして手を振ってから家に帰っていった。

父、ジャック・ニーレンバーグの言いつけを守らず、近道であるスラム側の道を通って。

溢れるモノ

迷宮都市の南西部、都市の住人からスラムと呼ばれている場所。

ここに建ち並ぶ家々に、定められた住人はいない。

家もなく宿代も払えない人々が集まってきて、屋根の残る廃墟に住み着いている。

当然きちんと排水処理をしていない家々もある。

食うや食わずの家々から流れ出る排水の魔力は薄く、ご馳走とは言いがたかったが、『それ』に旨い不味いといった味覚など無い。

エサを求めて徘徊し、吸収し、分解する。それだけだ。

『それ』の仲間は一定の成長を遂げたのちに分裂する個体が多いのだが、『それ』は分裂せずにそのまま大きくなった。

餌場を独占し生き残るために、『それ』が獲得した進化だったのかもしれない。

とっておきの餌場から移動してきた『それ』はゆっくりと食事を開始した。

「もたもたするなーッ、ほれっ、ありがたく銅貨を受け取るがよいッ。」

スラムにキンデル建材部門長のキンキン声がこだまする。

「いかがですかナツ、テルーテル大佐ッ。」

「ほおほお、なかなかの集まり具合じゃいのかね。」

「あんな口ばかりの石頭女よりよほどお役にたてますでしょうッ。」

「そうだね。キミは誰かと違って優秀な部門長だね。」

テルーテル大佐の前には、スラム中からデイジスとプロモミンテラが集められていて、ちよつとした小山になっている。それをスラムの住人と思しきやせ細った老人が数名がかりで、スキルで《乾燥》させている。とつくに魔力が底を付いているのか、ふらふらとおぼつかない足取りで、魔力を回復させるために何度も休憩してはキンデルにさっさとしろと怒鳴られている。

薬草を運び込むスラムの住人たちも、不快そうな表情ではあるが、文句を言うことなく薬草を運び、銅貨を受け取っては帰っていく。

「なんだネツ、その目ハツ、何か文句でもあるのかツ。文句を言いたいのはこつちのほうだゾツ。忘れてるわけじゃ、あるまいナツ」

キンデル建材部門長が書類の束をちらつかせると、スラムの住人たちは顔を背け黙って薬草を置いて立ち去っていった。

キンデル建材部門長が手にした書類の束は、住居管理部門から半ば強引に借り出したスラム街の空家リストだ。彼は朝からテルーテル大佐に都市防衛隊の隊員を2名ばかり『護衛』として借り受けると、スラムの家々をまわってこつ言つたのだ。

この家は空き家のはずだ。不法居住者め。追い出されなくなかつたら、敷地の薬草を採取して大通りまで持つて来いと。

スラムには迷宮都市の他の住居のように外壁が備わっていない家が多い。壁もエンダルジア王国の廃墟に、板切れや布で補強をした心もとないものばかりだ。魔物から身を守るための薬草が都市の何処よりも必要な家々なのに、全て刈り取りかき集めるとキンデル建材部門長は怒鳴りつける。ここは、お前たちの住居ではないだろうと。

スラムの住人の大半は元冒険者。怪我で冒険者家業を辞めざるを得なくなつた者達だ。冒険者時代に十分な金を貯め、引退後別の商売で身を立てる者や、戦闘以外の技能を有して新たな職を得られるものはごく僅かで、回復の見込みの無い大怪我を負つた冒険者の多くは、全てを失いスラムへと流れてくる。

誰も望んでスラムに住んでいるわけではないのだ。

それを分かっているからこそ、住居管理部門はスラムに無断で住み着く住人たちを改めたりしないし、迷宮都市を管理するシューゼンワルド家も黙認し、かつ定期的な炊き出しを行なつたり、スラムからの雇用を奨励している。

それを、何の権限があつてこの男はこのような暴挙に出るのか。

キンデル建材部門長の後ろに控える二人の兵士は冷ややかな目でキンデル建材部門長を見る。彼らの任務はキンデル建材部門長の護衛。不快極まりない状況を耐えつつ、じつと後ろに控える。

彼らは孤児院出身で、家柄もなければ迷宮討伐隊に入れるほどの武力も、文官になれるほどの頭脳も、冒険者を志すほどの野心も持ち合わせていなかった。ただ、堅実に生活の安定のために任務に従う。家柄が良く武力も知力も劣る者達が集まる都市防衛隊には、彼らのような『便利な』人材が必要だった。感情を殺し、ただただ言われるままに動く。いつものことだ。

表情には出さずギリりと奥歯を噛み締める。声をあげ意見するのは簡単だ。その結果、職を失う覚悟があるなら。しかし彼らにも守るべき家族がいる。自分さえ耐えれば子供たちはもっとマシな人生が送れるかもしれない。

そんな彼らであつたが、キンデル建材部門長の後ろに立っている

だけで護衛として十分な働きをしていた。元冒険者とはいえ、満足な食事にありつけず、身体はどこかに欠損を持ち、満足な武器も防具ももたないスラムの住人にとっては、五体満足で武装した兵士は怒りに任せて手を出せる相手ではなかったのだ。

こうしてキンデル建材部門長の思惑通り、スラム街の薬草は次々と刈り取られていった。

「そこにもデイジスが残っているだろうガッ」

薬草を置いて返っていかうとするスラムの住人を引き止めて、キンデル建材部門長が大通りの隅の一角を指差す。

「あそこは雨水枡でして。地下大水道に繋がっているとの噂が。」

スラムの住人がキンデル建材部門長に答える。

自分より格下のスラムの住人ごときが、自分に意見をする。自分の意見に従わない。そのことがキンデル建材部門長を激昂させる。

「だっ、誰に向かって口をきいているのかネッ、ワシの命令がきけないのかッ。」

顔を真っ赤にしてわめき散らすキンデル建材部門長。

しかしスラムの住人は自分の仕事は済んだとばかりに、キンデルを無視してスラムの奥へと去っていった。

「ぐぎぎぎぎ、クソッ、クソッ、こんなもノッ、こんなもノッ。」

怒りに任せて雨水枡周辺のデイジスを根こそぎ引っこ抜くキンデル建材部門長。

彼はまったく気が付いていなかった。

薬草を刈り取って持ってきたスラムの住人が、数日あれば自然に復元できるように根は残し、薬草自体もいくつかまばらに残した状態で刈り取っていたことを。

枯れたデイジスの蔦や根であつても効果が見込めることを分かった上で、目立つ若い蔓だけを切り取って持ってきていることを。

地下に通じる排水路周辺のデイジスにはまったく手をつけておらず、魔除けの機能を最低限だけ残せるように苦心していることを。

そんな全てにまったく気付かず、地下大水道に何が潜んでいるかさえ理解することなく、キンデル建材部門長は大通り横の雨水枡周辺のデイジスを根っこからきれいサツパリ抜き去っていった。

ばかりとあながあいた。

地下を這いずる『それ』は頭上の変化をそのように感じた。

『それ』の餌は生物やその残骸に宿る魔力。魔力を摂取する過程で様々なものと溶解するが、それはあくまで餌を取るための手段ではない。

『それ』の殻はぶよぶよと頼りなく、デイジスの蔦や根に触れると容易に魔力を吸われてしまう。じりじりと魔力が漏れ出る感覚を『それ』は本能的に恐れた。

『それ』は長年をかけて蓄積した溶解液を持っていた。石や土といった物理的な隔たりは、『それ』にとっては重大な隔たりと認識されない。『核』が通らない障害ならば溶かして進めばよいからだ。ただ、頭上に張り巡らされたデイジスの根が、蔦が、網の目のよう

に張り巡らされて『それ』を妨げていた。
その網に、あながあいた。

あなの先には沢山の餌がいる。今まで食べたことの無い極上の餌だ。

ずるり

『それ』は、あなを抜けようと地下大水道の天井に張り付く。
あなを通る配水管はとても細くて、『それ』の核は通らない。

ぶしゅう、ぶしゅうと『それ』は溶解液を吐き出す。溶けて広がっ
ていく配水管。新しい餌場はすぐそこだ。

顔を真っ赤にしてふうふうと肩で息をするキンデル建材部門長の
眼前で、雨水枡周辺の地面がぐずりと抜け落ち、地下大水道から巨
大なスライムが溢れ出した。

逃走劇

「ヒツ、ひえああああ!？」

突如眼前に現れた巨大な巨大スライムに腰を抜かすキンデル建材部門長。

本来スライムは卵の黄身ほどの核をもつ両手の平を合わせたくらいの魔物だ。

しかし、キンデル建材部門長の前に現れたのは核だけでも人の頭ほどある巨大なものだった。

陥没するように溶け落ちた雨水枡付近の穴から、しゅうしゅうと煙をあげて軟体がごぶりと溢れ出す。見上げるほどの高さにせり上がった軟体中に、巨大な核がどろんと蠢き目玉のようにも見える。まるでスライムとは異質な魔物のようで見える者に威圧と不安を感じさせる。

「ごぶごぶごぼりと粘度の高い液体のような体の大半が穴から地上に這い上がると、馬車ほどもある巨大スライムは近くににいる餌を捕食するため体をせり上がらせ、キンデル建材部門長と近くにいたスラムの住人に覆いかぶさるように襲い掛かってきた。

「危ない!」

叫んだのは、朝からキンデル建材部門長の護衛としてスラムを回っていた都市防衛隊の兵士。名をカイトという。

彼はとっさに《シールド》のスキルを使い、自ら盾を構えて巨大スライムの前に立ちはだかった。

カイトのシールドスキルは装備した盾の性能を短時間だけ向上させるもの。例えば木製の盾であれば火炎に弱く、金属であれば酸に溶ける。そういった材質の弱点さえ補い盾の面積以上の攻撃をこく短時間だけ防ぐものだ。勿論、強い攻撃は防ぎきれない。迷宮討伐隊の盾職には及びも付かない弱い能力だった。

しかし彼は飛び出した。いくら巨大であろうと相手はスライム。スライムの溶解液であれば自分のスキルでも防ぐことができる。

カイトが繰り出したシールドバツシュは獲物を飲み込もうとする巨大スライムの攻撃をはじき返し、吹きかけられる溶解液すら防ぎきった。

「大丈夫か、今のうちに早く行け！」

「あつ、ありがとう」

カイトに助けられ、感謝の言葉を述べて走り去るスラムの住人。

カイトは朝からずっと耐えてきた。スラムにあっても懸命に暮らす人々が虐げられる様を見続けて、それでも何もできない自分が齒がゆく、悔しく、惨めに思えた。良かった。一人でも助けられることができる。

カイトは盾を構えなおすと、仲間に向かって住人の避難を呼びかけつつ、部隊に合流するため走っていった。

「ひよつ、ひよんなあゝ、あば、あばば、とけつ、とけう」

カイトはスラムの住人を守った。彼のスキルで守れるのはせいぜい一人だけ。

彼は全力を尽くしたのだ。

スラムの住人より、ほんのちょっと遠い位置にいたキンデル建材部門長が巨大スライムに飲まれてしまったのは仕方がない。

力が及ばなかったのだ。悲劇だったと嘆く以外ないだろう。
彼は全力を尽くしたのだから。

巨大スライムの中で、見る間に溶けていくキンデル建材部門長を目の当たりにして、スラム街の大通りはパニックに陥った。蜘蛛の子を散らすように逃げ出すスラムの住人たち。彼らも元は冒険者だ。安全な部署でのうのと過ごしてきた都市防衛隊より、よほど危険予知に優れている。あれは巨大だがスライム。目も耳も鼻もない。獲物の魔力を察知して襲い掛かってくるものだ。だから感知されないよう魔力を潜め、一箇所にかたまらないようばらばらに逃げる。

スラムの住人の判断は的確だった。巨大スライムからすれば、折角餌が豊富にある場所に来たのに、餌場に着くなり獲物が方々に散ってしまった状態だ。獲物が逃げるならば逃げられないように攻撃するのは魔物の本能。巨大スライムは空気を吸い込みその体を倍ほども膨らませると、その圧力で溶解液を四方に大量に吹きだした。巨大スライムの溶解液を避けられたのは、とつさに建物に隠れた者とシールドスキルをもつ僅かな兵士だけで、スラムの大通りは阿鼻叫喚に包まれた。

「きゃああああっ」

「つつぎゃー」

「あああっ、あつい、あついっ」

肉が溶ける痛みを灼熱感として訴える人々。溶解液の射程は長く、騒ぎを遠く覗き見る迷宮に近い環状道路にさえ被害が及ぶ。

「水だっ。大量の水で洗い流せっ。急げっ。」

盾使いのキイトが声をあげる。本来現場の指揮を執るべきテール

テル大佐は、啞然として離れた場所に突っ立っており役に立たない。仲間達もおろおろと指示を待つばかりだ。

「しつかりしろ！相手はたかがスライムだ。俺たちは都市防衛隊だろ。」

カイトの声になすべきことを思い出した兵達が動き出す。

「住人の避難を。負傷者は優先的に。」

「伝達兵は迷宮討伐隊に応援要請を。ここからならば迷宮討伐隊の治療所も近い。重傷者を運び込め。」

「盾持ちは巨大スライムの溶解液を防げ。他の者は集められたデイズでバリケードを築け。巨大でもスライムならば来ないはずだ。攻撃魔法が使えるものは打ち込んでけん制しろ。」

互いに声を掛けあい、動き出す都市防衛隊の兵達。

折角地上まで登ってきたのに、獲物は散り散りになって残った餌も酷く食べづらくなってしまった。

それでも巨大スライムは捕食をやめない。それなりの魔力をもった餌が、近い場所に無防備に突っ立っている。

巨大スライムは未だ啞然としているテルーテル大佐に襲い掛かった。

「なっ、なぜだね？なんでなんだねー！？」

はひはひと息をきらしながら逃げ出すテルーテル大佐。地面を溶かしながらずるずると追いかける巨大スライム。

多数の負傷者を出し、危機的状况だったスラムの大通りから、巨大スライムは離れていく。

どうする？そんな空気が都市防衛隊の中で流れたその時、

「テルーテル大佐が身をもって巨大スライムを引き付けてくださった！この間に、負傷者の救助と住民の避難を急ぐぞ！」

「またもや盾使いのカイトが叫んだ。」

流石はテルーテル大佐！隊を預かるだけはある。俺たちは貴方の雄姿を忘れないかどうかは分からないが、都市防衛隊の大多数は負傷者の救助に向かい、いつもテルーテル大佐にへばり付いていた家柄組の数名が、救助に向かうような素振りですっきりとテルーテル大佐の後を追っていった。

「ジーク、なんか騒がしいね。お祭りかな？」

昼食を済ませ、孤児院にアプリオレの代金を届けたマリエラとジークは迷宮のスラム側の出入り口に向かっていた。孤児院は迷宮都市の西側、スラムと住宅街の境目にある。迷宮を囲う防壁は冒険者ギルドのある北東側と、スラムのある南西側の2箇所に入入り口があるから、孤児院から卸売市場に行くには、迷宮の囲いの中を突っ切るのが一番早い。折角外に出たのだから、夕食の買出しを済ませて帰るつもりだ。

「少しだけスラムを抜ける必要があるが、迷宮に近い場所はさほど治安も悪くない。こんな昼間なら子供でも出歩いている。まして2人は気配や魔力を潜めているから、おかしな者に出会う可能性は低い。」

「そう思ってスラムの路地を歩いていったマリエラとジークのところ
に、巨大スライムを引きつれたテルーテル大佐が駆け込んできた。」

「わっ、わしを助けてくれ！」

「えええええ！？」

慌てるマリエラと、状況を瞬時に把握するやマリエラを肩に担いで走り出すジーク。

「ままま、まってくれえ」

なぜかジークに追いつがるテルーテル大佐。意外と俊足だ。

ジークは左肩にマリエラをうつぶせになるように担ぐと、マリエラの足を左手で抱えて大腿で走っていく。マリエラが両手両足をぶらんとさせながら追ってくるテルーテル大佐と巨大スライムを眺めていなければ、人攫いに見えなくもない。

巨大スライムの弱点は核だが、分厚い粘液が邪魔をして、剣では攻撃が通らない。逆に巨大スライムの溶解液で剣が溶けてしまうだろう。相対するにもここではマリエラを巻き込んでしまう。飛んでくる溶解液をマリエラが避けられるとは思えない。

スラムの細い路地を右へ左へ。ジークはマリエラを担いで、巨大スライムが時折飛ばす溶解液を躲しながら駆け抜ける。前ぶれもなく方向を変えているのに、まるで示し合わせたようにテルーテル大佐は付いてくる。

「バラバラに逃げた方が良いと思うのだが。」

巨大スライムがジークとマリエラの方に来たとしても、人目さえ無ければ魔物除けポーションでなんとでも出来る。巨大スライムがテルーテル大佐を追いかければ、それもまた良しだ。ジークにとつてマリエラの身の安全は何物にも勝る。このまま3人で逃げていたのでは埒が明かないと、ジークはテルーテル大佐に提案する。

「わっ、わしのスキル《同調》がっ、勝手にっ、働いとるんだ」

テルーテル大佐のスキル、《同調》は、相手の思考の内、自分にとって有利に働く内容に関してなんとなく同調するという、戦闘ではあまり役に立たないが、処世では抜群の効果を発揮するものだ。

彼がこのスキルに目覚めたのは、十年以上も前、テルーテル大佐がまだ中堅だった頃だ。例年よりも大規模なオークの襲撃があり、迷宮討伐軍と都市防衛隊が合同でオークの鎮圧に当たった事があった。

金獅子將軍レオンハルトは、迷宮討伐軍の將軍として既に頭角を現していた。個としての戦力はもちろんのこと、レオンハルトの闘いの声に、兵の士気は見る間に上がり、先陣を切ってオークを薙ぎ払う様に、テルーテルの心は震えた。

作戦会議の席に同席出来た時は、少しでもレオンハルトの目に止まる席に付けないものかとウロウロしたものだ。

けれど既に有能な將軍であり、辺境伯の後継者でもあったレオンハルトを取り巻く者は数多く、テルーテルは近寄ることさえ叶わなかった。それでも同じ場に居られて嬉しいと、キラキラした目で見つめるテルーテルにチャンスが訪れた。

「物資の在庫量は如何程か？」

レオンハルトがテルーテルに尋ねたのだ。物資管理はテルーテルの管轄だ。正確に報告しなくては。

テルーテルは胸ポケットから手帳を取り出して在庫量を報告した。その時。

トントン

レオンハルトの側をまんまと陣取ったセコイアスという同僚が自らのこめかみあたりをつつき、テルーテルに向けて兜を示す仕草をして見せた。

（かつ、兜が汚れているのかつ。）

焦ったテルーテルは、慌てて兜を脱ぐとハンカチでせつせと磨き始めた。

「テルーテル君、違うよ。兜が汚れているんじゃない。それ位、頭に入れておいたらどうかと言ったんだ。」

ニヤリと笑うセコイアス。作戦会議の場にどつと笑いが起こる。レオンハルトの前で笑い者にされ、火が出る程に赤面するテルーテル。

「くだらん事を言うな、セコイアス。ご苦労だったな、テルーテル。」

レオンハルトはそう言っ取り成してくれたが、憧れの將軍の前で恥をかかされたこの事件は、テルーテルの心に深い傷を残した。レオンハルト近くの席をまんまと射止め、大勢の前で自分を貶めたセコイアス。家柄も武力も知力も大して変わらないのに、処世術の差でこのような恥をかいた。

悔しい。悔しい。悔しい。

その思いがテルーテル大佐に《同調》のスキルを芽生えさせた。

同調スキルとその後セコイアスが失脚した事も相まって、テルーテルは大佐にまで昇進することが出来た。

巨大スライムに追われる今も、ジークの反射的な逃走の判断に同

調し、巨大スライムが飛ばす溶解液を避け、足元の障害物を飛び越し、急カーブを曲がり、自らの運動能力を遙かに超える逃走を繰り返して延びていく。

事実、ジークとマリエラは魔力を抑えていたから、テルーテル大佐が2人と離れたならば巨大スライムはテルーテル大佐を追いかけた。テルーテル大佐本来の運動能力で、ここまで逃げ延びれたかは定かではない。

けれどそんな逃走劇は唐突に終わりを迎える。

「いつ、行き止まり……。」

3人が辿り着いた先は、スラムの路地の突き当たりだった。

巨大スライムは直ぐそこまで迫っている。じきに角を曲がって姿を見せるだろう。

テルーテル大佐は、眼前にそびえる壁を見上げる。壁は酷く高く見え、テルーテル大佐が手を伸ばしても頂きには届かないだろう。

(ここまでか……。)

少女を護りながらここまで一緒に逃げてきた男にテルーテル大佐は話しかける。

「巻き込んで済まなかったね。わしが時間を稼ぐから、出来れば逃げ延びてくれ。」

マリエラを守りたいというジークの思いに同調したのか、テルーテル大佐はジークに背を向けると、すぐに姿を現すであろう巨大スライムに向けて炎の魔法を繰り返すべく右手に魔力をこめた。

雷帝

迫り来る巨大スライムに一矢報いてやらんと炎の魔法を構えるテルーテル大佐。

テルーテル大佐の脳裏に浮かぶのは、オーク討伐でみたレオンハルト將軍の勇姿。

大地を覆い尽くさんばかりに（テルーテル大佐の脳内補正有り）、魔の森から溢れ来る醜悪な魔物に向かいレオンハルト將軍は右手を前へ伸ばすと、

《ファイヤーストーム》

と唱えた。レオンハルト將軍の右腕から螺旋を描いて吹き荒れる炎は嵐のごとく吹き荒れ（テルーテル大佐の脳内補正有り）、オーク共を蹂躪していく。

「ああ、オーク肉の可食部が……。」

ウエイスハルト副將軍の咳きを合図に抜刀するレオンハルト將軍。彼を守護する軍神はその剣にこそ宿ると言うべきか、テルーテルの眼前で一方的な掃討が繰り広げられた。

今、まさにあの日の將軍のごとく、テルーテル大佐は右手を前へ伸ばす。

角を曲がり、自らへと押し寄せる巨大スライムに向けて、テルーテル大佐は炎の呪文を唱える。

《ファイヤーボール》

テルーテル大佐にファイヤーストームは使えない。けれど渾身の魔力をこめた火の玉だ。それは大きく燃えあがり、巨大スライムの核にも匹敵する大きさだ。

「食らええええ!!」

テルーテル大佐の放ったファイヤーボールは、巨大スライムの核目掛けて勢いよく飛んでいき……

ぶしゅん

そして、着弾と同時に儂く消えた。

(ええええええ!!??)

マリエラの叫びはジークの気配りの口封じによってかき消された。もうもじ。

「こつちへ。」

啞然とするテルーテル大佐に手を伸ばすジーク。

テルーテル大佐がファイヤーボールを唱えている間に、ジークはマリエラを担いだままひよいひよいと壁を登り、頂きに腰を掛けていた。

テルーテル大佐が絶望を感じた壁は、さしたる障害では無かったようだ。

「待ってくれ」

と、壁の下でぴよぴよこ飛び跳ねるテルーテル大佐。

テルーテル大佐のコミカルさとは裏腹に、巨大スライムは津波のように押し寄せ、今にもテルーテル大佐を飲み込みそうだ。

巨大スライムに飲まれそうなテルーテル大佐を見たマリエラは、魔物除けのポーションを使おうと決意する。材料なら揃っている。ブロモミンテラもデイジスもジークに担がれて逃げている間にむしつてある。聖樹の葉も今朝の分を乾かさずに持っている。今朝は朝からはたばたしていたから、処理せず持ったままなのだ。

錬金術師だとばれる危険もあるけれど、逃げると巨大スライムに立ちほだかったこの人を見殺しにはできない。

意を決したマリエラ。

《錬成く……《サンダーボルト》》

ドガラビツシャー……

マリエラが錬金術スキルを行使しようとした、まさにその時、天から雷が降り注いだ。

たった一撃の雷の鉄槌。

それだけで、巨大スライムの核は焼き切れ、粘液状の体は形を失う。ただの溶解液と変わった巨大スライムの体がしゅっしゅっとう煙を上げて大地を溶かす中、1人の女性が舞い降りた。

帯電して広がる茶色の髪は放電の火花で金にも銀にも見える光を放つ。

全身を包む特殊な魔物革のスーツは、彼女から流れる電流を光に換えたかのように節々に幾何学の光の筋を浮かび上がらせては消えていく。

噂に違わず目を保護するためのカラーグラスで目元を覆っていて、化粧らしきものは口元を彩る口紅だけ。

その風貌はまさしく。

「ら、らららら雷帝!?!」

テルーテル大佐が目を見開いて叫ぶ。信じられない。彼が一目まみえることを夢にまで見た、Aランク冒険者、『雷帝エルシー』その人だ。雷帝エルシーの唇が言葉をつむぐ。

「ご無事で何よりです、マリエラさん。で、どうして、テルーテル大佐までいるのかしら?」

「エ、エルメラさん!?!」

『雷帝エルシー』、本名 エルメラ・シール。

一撃の下に巨大スライムを葬り去ったのは、商人ギルド 薬草部門長 エルメラ・シールその人だった。

ジークに担がれたまま壁を降り、漸く地面に下ろしてもらえたマリエラは、口をあんぐり開けたまま固まっているテルーテル大佐をほうつておいてジークと一緒に話を聞いた。

簡単な水魔法で周囲を溶かす溶解液を洗い流したエルメラさんがおっしゃるには。

「冒険者が持ち込む薬草だけではどうしても過不足が出てしまいますから、冒険者に依頼しても尚不足してしまう薬草の採取も、薬草部門の仕事なんです。」

その関係上、採取専門の冒険者として登録したんですけれど、生まれつき『雷神の加護』なんてものを持っているものですから、少々有名になってしまいました。

え？普段の服装？『雷神の加護』の影響で、静電気がそれはもう酷くて。

肌に触れるだけで『ぱちっ』ってなりますのよ。だから全身を覆う服装で、手袋も手放せなくて。

髪もこんなに広がってしまうの。でも、マリエラさんの髪用石鹸を使うようになってから、ずいぶん調子が宜しいのよ。

え？今髪を下ろしている理由？髪を結んだまま雷魔法を使うと、焼け焦げてしまうの。それに目だって、雷撃の光のせいで悪くなってしまう。闘うときは魔法で視力調節できるんですけど、普段それをするとき帯電してしまって、服を着ていても『ぱちっ』ってなりますのよ。本当に困った体質なんです。」

えーと、うーん、突っ込みどころが満載過ぎて此処まで話を聞いたけれどもよく分からない。

しかし、テルーテル大佐は漸く復活したようで、

「ええええるしーどー！！！！？？？」

と叫びながら、ばたばたと両手両足を駆使してエルメラさんに駆け寄った。

「まつまさか、商人ギルドの才媛、エルメラ女史がかの名高き雷の美女であられましたとはっ！」

口ばかりで無能で困った石頭女ではなかったのか。きらっきらと目を輝かせてエルメラさんに擦り寄るテルーテル大佐に、エルメラ

さんは冷ややかな視線を向けると、

「私が『雷帝エルシー』であることは秘密事項です。これ以上仕事が増えたら、ますます定時に帰れなくなりますから。ですから、余計なことを話しそうな方には記憶を失って頂くことにしています。」

そう言って、右手の親指と人差し指をL字に開くと、間近まで接近してきたテルーテル大佐の眼前で、『バチイッ』と放電して見せた。

「お分かり頂けますかしら、テルーテル大佐？」

にっこりと笑うエルメラさん、いや『雷帝エルシー』に、テルーテル大佐は首がもげるかというほど激しく頭を上下に振った。

「建材部門長のキンデルが住居管理部門の空家リストを強引に持ち出した件で、商人ギルドのギルドマスターの指示でこちらに来たんです。この巨大スライムの件で迷宮討伐軍も出てきているようですね。どういふことが、レオンハルト將軍閣下の下でじっくりとお聞かせ願えますかしら？」

逃走劇で疲れ果て敗残兵落ち武者のように草臥れてしまったテルーテル大佐を連れて、エルメラさんは迷宮討伐軍の基地へと向かっていった。頂垂れながらエルメラさんに連れられていくテルーテル大佐の背中
はなんだか煤けているように見えた。

マリエラとジークは単に巻き込まれただけで、むしろ説明して欲しい位だったから、そのまま帰っていいらしい。「後日、説明に伺いますから」とエルメラさんが言っていた。

ちなみに、なんでそんな体型も露わなレザースーツを着ているのかと聞くと、

「これ、雷竜の革なんです。結婚前に主人がくれて。雷撃ととても相性が良い素材なのにとても丈夫なの。『君の身体に傷でも付いたらいけない』からってっ。きやあっ。」

と、両手で頬を押さえてくねくねしていた。ご主人の趣味ですか。仲がいいんですね、ご馳走様です。きつとその辺の話も次来るときにたっぷりと話してくれるんだろう。

それにしても危なかったな、とマリエラは思う。

何しろ昼食後すぐの事件だったのだ。いきなり巨大スライムに出くわして、ジークに担がれてスラム中を走り回った。

もう、揺れるのなんの。実に危険な状態だった。

スラム中に巨大スライムの餌を撒き散らしながら移動するハメにならなくて本当に良かった。

名前がマリエラから『撒き餌ラ』になるところだった。うえっぶ。

晩御飯は、何かサツパリしたものにしよう。そんな話をしながら今度こそ卸売市場で買物をして、2人は家に帰っていった。

ジャック・ニールンバーグ治療技師は数名の部下を伴いスラムの大通りで治療を行っていた。迷宮討伐軍の診療所へ運び込まれてくる重篤な症状の者もいるから、半数の部下と共に右腕として申し分の無い治癒魔法使いを残してきている。

連絡を受けて彼が直ちにやってきたのは、戦闘能力を有するがゆ

えだ。治療魔法の使い手を集めて治療部隊を結成したとき、ニーレンバークが隊長に選ばれたのは豊富な知識と生体探査のスキルを持つからだけではない。彼は治療魔法が使えない代わりに、Bランク相当の戦闘技術も有していた。

戦闘技術に乏しい治療魔法使いを護ることもまた彼の責務であった。彼の戦闘技術は巨大スライムと相性のいい能力ではないが、巨大スライム程度斃せないわけではない。迷宮討伐軍から兵が派遣されるまで時間を稼ぎつつ治療を行う程度、造作も無いことだ。

けれどニーレンバークがスラムの大通りに到着した時には、既に巨大スライムの姿は無く幾人ものけが人がいるだけだった。都市防衛隊のテルーテル大佐が自ら囿となって、巨大スライムを人気の無い場所へ誘導したらしい。怪我人は多かったが、死者は1名だけだという。巨大スライムの溶解液は直ちに大量の水で洗浄されていて、応急処置が良かったことも有り、治療魔法や通常の薬で十分回復する被害状況だった。

巨大スライムの溶解液で溶かされた傷跡は、火傷のような傷跡が残る。治療魔法は人体の治療能力を引き出して短時間で傷を修復するものだから、治療魔法で治療をしても傷跡は残ってしまう。

けれど治療を施されたスラムの住人たちは、都市防衛隊をはじめとした兵士達に思う所もあるだろうに、直ちに駆けつけたニーレンバークたち治療部隊に口々に礼を言ってスラムへと帰っていった。

(こういう仕事も悪くない。)

ニーレンバークはにやりと笑う。巨大スライムは商人ギルドから派遣された『雷帝』がしとめたらしい。雷帝はテルーテル大佐ほか数名の都市防衛隊の兵を連れてレオンハルト將軍の下へ向かったそ

うだ。今頃、事情聴取が行われているだろう。迷宮討伐軍の兵は残った都市防衛隊と共にスラムの復旧を行っている。

負傷者の治療を終えたニーレンバーグは、部下を引き連れ診療所へと戻っていった。

「ニーレンバーグ治療技師。」

診療所で治療に当たっていたニーレンバーグの部下の一人が、ニーレンバーグの下へ駆けつける。

「お嬢さんが……。」

部下の示した病室に駆け込むニーレンバーグ。

「パパ……。ごめんなさい……。」

そこには、顔に包帯を巻かれた愛娘シェリーの姿があった。

雷帝（後書き）

シェリーちゃんの顔の怪我がエイプリルフールの嘘なら良かったの
に。

物静かな男

「へえ、そんなことがあったのか。」

『ヤグーの跳ね橋』亭で、マリエラとジークは巨大スライム事件の一部始終をリンクスに話して聞かせていた。無論、雷帝エルシーの正体は伏せている。記憶を消されたくはないので。

エルメラさんは「『ぱちっ』ってするんですよ」と言っていたが、静電気から雷撃まで全てを『ぱちっ』という擬音で表現されると逆にこわい。『バヂイッ』って音してたし。あんなの浴びたら絶対記憶以外の大事なものも飛んで行くと思う。

エルメラさんから聞いた話によると、キンデル建材部門長が私的理由で職権を乱用し、ついでに越権行為をしまくった挙句の果てに、スラムに巨大スライムを呼び込んでしまったのだそうだ。本人は巨大スライムに飲まれて死亡したけれど、遺された財産は全て没収され災害の復興に充てられるとのこと。

「残されたキンデル建材部門長の家族が、かわいそうな気もするな。」

とマリエラが言うと、傍で話を聞いていた薬味草店のメルルさんが「あそこの奥さん、『カワイソウなアテクシと一緒に帝都の実家に来ておくれ〜』とか言いながら、嬉しそうに若い下男にしな垂れかかってたよ。こんなふうには。」

とエルメラさんを相手に実演しながら教えてくれた。

エルメラさんもノリノリで、

「奥様〜」

とか言いながら、メルルさんのオークのような豊満バディーを受け止めている。

流石はAランク冒険者。メルルさんにもびくともしない。

というか、なんでメルルさんがそんなことまで知っているんだろう。奥様ネットワーク恐るべし。

キンデル建材部門長から没収した財産は、スラムの住居を住みやすく修繕するために使われるのだと、エルメラさんはウインクしながら教えてくれた。

テルーテル大佐はというと、都市防衛隊を預かる身でありながら戦略物資でもある薬草管理の不備を起こし、さらにはキンデル建材部門長の犯罪を助助した責任は重いが、巨大スライム出現後、身を呈して住人を護った事を考慮され、現職役職を剥奪の上、相談役として都市防衛隊に残ることになったそうだ。

後任は事務方出身の人らしく詳しい話は聞いていない。全く目立たない人で、テルーテル大佐の陰でこつこつと仕事をしてきた人らしい。これからもこつこつと仕事をしていくのだろうといていた。今回、事態の收拾に尽力したカイトという平民出身の人は隊長に昇進したらしい。エルメラさん曰く、『まじめなのにとても面白い人』らしい。テルーテル相談役は新しい大佐やカイト隊長の相談に乗るのではなく、身分をかさに来て命令を聞かない隊員と『ご相談するのが仕事なのだそうだ。』

そんな話をしながら、皆で夕食を食べる。

今日は黒鉄輸送隊が迷宮都市に戻って来た日で、無事の帰還を祝う席でもあるから料理も豪華だ。『ヤグーの跳ね橋』亭に黒鉄輸送隊の面々が集まっていて、いつも通りディック隊長がアンバーさん

にチョツカイをかけては上手く躲わされ、クツションを相手に「アンバー」コールを連発している。

新しく入ったという奴隷の3人も店の隅っこで食事をしていて、マリエラが挨拶するとペコリと頭を下げてきた。

「マリエラ、そろそろ子供は寝る時間だぜ。」

新人さんの名前も聞いていないのに、リンクスがそんな事を言う。自分だつて同じくらいの歳じゃない。

むうとむくれるマリエラに、ジークが「スラーケンの餌の時間だろう」と囁く。おお、そうだった。簡単に気を取り直したマリエラはジークと一緒に店をでた。

「それにしても無口な人達だね、新人さんたち。」

店の前まで見送りにきたリンクスにマリエラが言う。

「そうだな。」

とだけ答えてじゃあまたなと手をふるリンクス。

「喉を潰してあるからな。」

リンクスが続けた言葉は、去っていくマリエラの耳には届かなかった。

ポーションを扱う黒鉄輸送隊の仕事は秘密が多い。長く死線を共にした仲間達と、金で贖われた奴隷を同じ扱いはできない。《命令》だけでは上手く誘導され秘密が知られる恐れもある。

マリエラ達の秘密を守るため、奴隷達は喉は潰され声が出ないよ

うにされていた。永久奴隷や犯罪奴隷というものは、本来そんな事さえ許されるモノなのだ。

(次の荷も奴隷ですが……)

マルロー副隊長とディック隊長は念話で会話を交わす。表面上はマルロー副隊長は静かにグラスを傾けていて、ディック隊長は「アンバー、アンバー」言いながら、クツションに顔を埋め、もにゆもにゆと揉みしだいているのだが。

前もその前の荷も、奴隷商レイモンドが依頼した奴隷だった。迷宮討伐の遠征も、麦の種まきも終わっている。これから季節は冬を迎える。迷宮の中では季節は関係ないけれど、迷宮討伐は暫くは小規模なものになる。人手が入り用な時期ではない。そもそも、迷宮都市に運び込まれる人や物資はヤグー便が主流だ。ヤグーの定期便で賄い切れない物資の移動を、割高な運賃で請け負うのが黒鉄輸送隊の仕事だ。奴隷ばかりが不足するとは一体なにがおこっているのか。

(リンクス、マリエラさんの周辺はどうですか?)

ディック隊長との念話を終えたマルロー副隊長は、今度はリンクスと情報を交換する。念話を終えたディック隊長は変わらずクツションをもにゆっているから、カモフラージュと言うより、もにゆりたいただけかもしれない。嘆かわしい。

(マリエラ周辺は異常なし。アグウィナス嬢もシロだな。今んとこアグウィナスも他の貴族もマリエラにや気付いてねえみたいだ。そ

ういや、アグウィナス家の離れにレイモンドさんが出入りしてたぜ？)

奴隷達の行先はアグウィナス家か。ポーションの管理と研究を行っている錬金術師の家系が、奴隷を何に使うというのか。

きな臭いな。

マルロー副隊長はグラスの中身を空けると夜の街へと消えていった。

「さーて、ヌイ、ニコ、ジャ、飯が済んだら拠点にもどんぞ。」

リンクスが3人の奴隷に声を掛ける。

リンクスの声に、がっがつと残りの食べ物を口に詰め込み、大慌てで駆け寄ってきたのはヌイ。ヌーイールという名の男。

後ろに続く猫背の男がニコライ、ニコと呼ばれている。

付かず離れず、ひっそりと従いつつも、目だけはきよるきよると周りを窺っているのがジャイコブ。ジャである。

前回の荷も奴隷だったのに、レイモンドに荷を引き渡して数日後、黒鉄輸送隊が奴隷を買いに行った時には良い奴隷はみな売れてしまっていた。かろうじて御者が務まりそうだったのがこの3人で、ジャだけは20歳半だが残る2人は30歳を超えている。魔力も少なくロクな戦闘技術もない犯罪奴隷達で、小心者であるくせに弱いものを狙っては強盗まがいの犯罪を重ねてきた小ずるい男たちだ。

リンクスの後に続いて黒鉄輸送隊の拠点へと向かう3人。

（若造が偉そうに。俺はジャイコブだ。ジャなんて軽々しく呼ぶんじゃねえ。）

心のうちを顔に出さず、一番後ろを歩くジャが心の中で毒づく。

（自分らばかり女と楽しみやがってよ。俺らを帰したあとにたっぷりとお楽しみなんだろうさ。ちくしょう、うらやましいぜ。

そういやあ、さっきの娘っ子、見たことあるな。ああ、死にぞこないを買ってつた貧乏娘か。ずいぶんと立派な野郎を連れてやがったが……、まさかな。

あの死にかけ奴隷が生きてるはずは、ねえもんな。迷宮都市の冒険者でも落としたんだろうぜ。ほんつといいご身分だね、小娘の分際で。それにしても小娘のツレ、いい武器（エモ）持ってやがったな。俺にもあんなエモノがありやあ、もっと上手くやれたらうによ。）

ジャがマリエラを見かけたのは、レイモンド商会の客用の獣舎の中。マリエラが目覚め、黒鉄輸送隊と共にレイモンド商会に行ったときだ。ジャは抜け目のない男で、レイモンド商会で騎獣の世話役を自らかってでていた。買われていくまでの間、ただ飯を食らうのは申し訳ないからと。

別に騎獣が好きな訳でも世話が得意だったわけでもない。奴隷商館を訪れる客の多くが馬車に乗ってやってくるからだ。馬車で来る客というのは大抵が鉱山だったり、普段は農奴で閑散期に迷宮討伐隊の荷物持ちや戦奴として借り出されるような、危険な重労働に従事する奴隷を求めてやってくる。

そんなところはごめんだ。商会の雑用のような楽な仕事につきた

い。いやいつそのこと、売れ残って奴隷商館で雑用をしながら暮らしたい。

騎獣の世話をしていれば、客からは奴隷商館に所属していると思われるし、商談の間は商品部屋にいらなくて済む。客の目に商品として映らなければ、うまく売れ残ることができるだろう。

そうしてジヤはレイモンド商会では異例の長さで売れ残ってこられた。

黒鉄輸送隊に買われたのだから、他に御者が務まりそうな者がいなかったからだ。奴隷商のレイモンドさえ、ニコとヌイの2人では足りず、他に誰かいないのかと問われて漸く「そういえば、あれがいたな」と思い出したほどだ。

買われた先が魔の森を往来する黒鉄輸送隊だというだけでもジヤにとっては不幸だったのに、買われてすぐに喉を潰されてしまった。治癒魔法にこんな使い方があってなんて思わなかった。フランスという黒鉄輸送隊の治癒魔法使いめ、一生恨んでやる。

喉を潰す際に痛みは無かったが、ジヤの喉は「あー」とも「うー」とも音を出すことはできなくなった。

黒鉄輸送隊の待遇は犯罪奴隷に対するものとしては、決して悪いものではない。

衣食住を与え、今日のように旨い食事を与えることもある。魔の森を抜けるのだから、魔物と相対する黒鉄輸送隊のメンバーに比べれば、よほど安全といえる。

女子供や老人などの弱い者を狙って襲い、金品を奪い、犯し、時に殺してきた男に対して、十分すぎる境遇といえる。

しかしジヤの心は不満で満ちる。

あいつらは俺たちが寝床で薄い毛布に包まれている間も、たらふ

く酒や肉を食い続け、女達とたっぷりと楽しむのdarou。

うらやましい、うらやましい、うらやましい。

そんなジヤの不满は、声をなくした口から漏れ出ることは無かつた。

闖入者たち

「これと同じ傷薬ありますか？」
「煙玉まとめ買いたいんだけど。」
「少女美少女の薬屋はここですか？」

最近なんだか忙しいな、接客しながらマリエラは考える。

あと、最後の人、「美」の文字が一字足りないんじゃないでしょうかね？

そうボヤくと、今日もうちの台所で勝手に昼ごはんを食べているリンクスが、「え？微少女？」などと聞き返してきた。

これこれ、リンクスさん、ジークさん、なんで視線が胸元に来るのかね？

『少女美少女』のお客さんが「微少女と美少女……、深い。」などと呟いている。変な常連さんが増えそうで困る。

常連さんと言えば。

ドワーフ三人組は、毎日のようにやってきてはお茶休憩をして、傷薬を買ってくれる。たまに買ってくれるなら、お茶だけ飲みに来てもいいよと言うと、怪我を抱えてスラムでうずくまっている冒険者にあげているんだそう。

マリエラのお店『木漏れ日』の増築を手伝ってくれたスラムの3人は、すっかり傷も治って冒険者に戻れたらしい。この前、傷薬を買いに来てくれた。冒険者として稼いだお金で買えるようになったからって。

とても嬉しかったので、魔除けや眠りの薬草を混ぜ込んだ煙玉を

オマケしたら、結構な効果が有ったようで、口コミが広がって大口注文が入るようになってしまった。別にポーションでもなんでもない普通の品なだけけれど、細かい調整の仕方では効果が変わるのだからかなんとか。

薬味草店のメルルさんの口コミもすごい。

マリエラの店では、何種類もの『石鹸』を扱っている。これもポーションでもなんでもない普通の品なのだが、マリエラの『ライブラリ』に登録されている『暮らしを便利にする練成品』のレシピで、洗濯用の粉石鹸に、食器を洗う用の液体石鹸、体を洗うものでも髪用の液体石鹸に体用の固形石鹸、顔用のクリーム石鹸があつてしかも効能だけでも、しっとり、さっぱりのも2種類。あと良い香りのする石鹸も各種取り揃えている。

本当は「スツキリ」やら「ゴツソリ」など、もつとたくさん種類があるのだが、錬金術スキルがまったく上がっていない状態で使用できる『乾燥』、『粉碎』と生活魔法の組み合わせで作れる物だけ売っている。

他のお店との兼ね合いも考えて迷宮都市の石鹸の相場より少し高めの値段にしたのに、奥様連中が入れ替わり立ち替わり買いに来る。

アンバーさんはアンバーさんで、

「マリエラちゃんのお薬、とっても良く効いたから同業者に勧めたわ。あと、お客さんたちにも傷薬をオススメしてあるの。引っかけ傷なんて一晩で治っちゃうから、残念がっちゃうお客さんもいるくらいなのよ。うふふ。」

と笑って教えてくれた。引っかけ傷に突っ込むべきか悩ましい。

常連さんの口コミのお陰でお客さんが増えたのは有り難い事なのだけれども。

「オイオイオイ、モグリの薬屋、ここの薬使ったら腕がこんなに腫れちまったぜ、どうしてくれるんだ!？」

「そうだそうだ!俺たちや冒険者だぞ!迷宮に潜れなくなったらどうしてくれるんではない!」

最近はおかしな難癖をつけてくるお客さんが増えた。

むしろどうやって入れたのか聞きたい位でつかい虫が入っていたというお客さんや、とても元気に喚いているのに薬を飲んでからお腹が痛いというお客さん、傷薬を買ったのに中身が別の薬だったと、余所の軟膏缶に『木漏れ日』のラベルを貼って持ってきたお客さん。

どの人もお店に初めて来る人ばかりで、いかにもチンピラですと言った風体の人達だ。今日の人たちもなかなか分かりやすいチンピラたちで、優雅なお茶のひと時を邪魔された常連さん達の鋭い眼光にたじろいで逆上し、暴れだしたところを、さっくりジークが取り押さえ、カウンターの隅に常備しているロープでぐるぐる巻きにされていた。そのまま都市防衛隊の詰め所に連れて行ってもいいのだけれど、念のため腫れたという患部をマリエラとキャル様で診察する。

「あー、これ、ダイドラマイマイの粘液だねー。」

取り押さえられた男の赤くかぶれた腕を見て、マリエラがいう。

さつき塗りつけたばかりなのだろう、かぶれた腕には粘液が残っていて、てらてらしている。

ダイドラマイマイは迷宮のジトジトした階層に生息しているでっ

かいカタツムリで、殻だけでも大人の拳二つ分くらいある。魔物ではないから倒せば身が丸ごと手に入る。表面は粘液でねっとりしていて、素手で触ると赤くかぶれて痒くなるが、きれいな水で洗って搔かずにそつとしておけば、翌朝には綺麗に治っている。

因みに食用。昨日、卸売市場に大量に出回っていたから、それを使ったんだろう。マリエラも買っていて、食べきれなかった分が食料保管の魔道具に入れてある。

「だから、お前んトコの薬でこうなったっつってんだろ!!!」

イチャモンを継続するチンピラを無視して、おもむろにダイダラマイマイを取り出すマリエラ。キヤル様は初めて見たのか、「まあ」と驚きつつも興味深々といった表情で見ている。

安くてキモくてまあまあ美味しい庶民の味だから、貴族であるアグウィナス家の食卓には上らないだろう。スープにすると良い出汁が出るし、肉はコリコリしていて癖がなく、野菜と相性がいいのでスープに炒め物にと幅広く使える食材なのだが。

「こちらが、ダイダラマイマイです。表面のかぶれる粘液はさつと湯通しして水洗いすれば問題がありません。ですが。」

ガツンとハンマーでダイダラマイマイの殻を割る。

デロリとこぼれる内臓の中から黄緑がかかった袋を取り出すと小皿に載せ、袋を切り開いて中の黄色がかかった液体を取り出す。それをスプーンの腹につけると、皆に見えるように掲げてみせる。

「ダイダラマイマイの粘液に、この毒液を加えるとデスネー。」

ちょ、何するやめると喚くチンピラを無視して、マリエラは黄色の液体をチンピラのかぶれた患部に塗り付ける。

すると、患部に豆粒ぐらいの丸っこい吹き出物が隙間なくビッシリと盛り上がってきた。しかも根元の方から突端に向けて、緑、黄色、白、青とカラフルな色合いをしていて、上から見ると魚の目がビッシリ生えたようだ。

「ヒエッ」

チンピラ2人の顔色は一気に青ざめ、言葉をなくす。

キヤル様は「気持ち悪い……。」「と言いつつも、瞬きせずにぶつぶつをガン見している。うん、気持ち悪いものって、じっくり見たくなるよね。わかる。

「ほら、やっぱりダイダラマイマイだった。あーあ。初めからダイダラマイマイだって言ってくればこんな危ないことしなくてすんだのになー。こんなふうになっちゃってー。たいへんだなー。すっごい色してるしー。」

「……………治して欲しいです?」

脅しにかかるマリエラ。セリフが棒読みだ。主演女優賞はあげられない。しかし、ブツブツのインパクトに飲まれたチンピラには充分だったようだ。

マリエラの言葉に、ブンブンと頭を上下に振るチンピラ。

後は簡単だった。ジークの質問に泣きそうな顔で素直に答えてくれた。

因みに、ダイダラマイマイの内臓の液体は毒ではない。毒と言ったのは単なる脅しだ。意外と知られていないけれど、ダイダラマイマイは、体表の粘液の上にこの液体を分泌し、表面にカラフルなブ

ツブツを作り出して餌をおびき寄せるのだそうだ。中身は気泡だから、有害でもなんでもなくて、水で洗えばすぐに落ちる。

かぶれて痒いところに塗ると水洗いするより早く治るくらいだ。

(このブツブツ、久しぶりを見た。)

マリエラは、中級の解毒ポーションを作れるかどうかという場合に、師匠が顔やら首やらにこのブツブツを大量にくっつけて、

「マツ、マリエラア、助けてっ、解毒のポーションを早くっ、下級じゃダメだっ、中級をっ。」

と、迫真の演技を見せたのを思い出した。

すっかりだまされたマリエラは、師匠が死んじゃうと泣きながら必死で解毒ポーションを作った。

因みに、中級解毒ポーションでは、ブツブツは治らない。毒でも病気でもなくて、表皮にくっ付いているだけだから治るはずがない。

「なっ治らないよう〜」

と、泣きながら何本も解毒ポーションを作ったお陰で、作り方をマスター出来たけど、ネタばらしの時に「ナンチャッテ」と笑った師匠の顔は忘れられない。

3日間、ダイダラマイマイ尽くしの食事にしてやった。

師匠を思い出して、ちよっぴり腹が立ったので、チンピラのブツブツを針でプチプチ潰していくマリエラ。ただの気泡で痛くないはずなのに、完全にデキモノだと思っているのか、チンピラ2人は

「ごべんださい、もうじばせん。」

と泣きながら謝っていた。

完全に危ない毒だと思い込んでいる。チンピラ2人の泣きっぷりに悪戯心がおこったマリエラは、陶器の水差しに水を入れヤグーの

乳でほんのり白く色づけすると、《ライト》の生活魔法で水差しの中に光をともした。

「正直に話してくれたので、今からとっておきのお薬で治療をします。」

そうやって、水差しの水の中に光源があることが分からないように、高い位置からかけていく。水差しの中から《ライト》で照らしているせいで、白く濁った水が光っているように見える。ポーシヨンや命の雫はこんな光り方はしないのだが、これはこれで細工としては面白い。

カラフルなブツブツの気泡は、光っているだけのただの水で簡単に洗い流されてぼろぼろと取れていく。『すごい薬』だと思い込んでいるチンピラ二人は平身低頭で謝罪と感謝をして、メルルさんが呼んでくれた衛兵に連行されていった。

「今回も同業の薬屋かー。」

マリエラはため息をつく。マリエラの薬は良く効くと評判で、口コミでどんどんお客さんが増えている。さらに冒険者ギルドの売店で一番人気だったキヤル様までやってきて、今ではいくつかの薬はキヤル様との共同制作作品だ。開店して間もないというのに、薬と言えば『木漏れ日』というほど売れ行きを伸ばしている。

マリエラ達の薬が売れば売れるほど、薬の売れ行きが落ちた薬師達からの嫌がらせが酷くなっている。初めは風評被害だけだったのだが、これはメルルさん達奥様ネットワークがもみ消し……というか返り討ちにしてしまった。奥様恐い。情報戦の達人か？奥様諜報部隊かなんかか。

そこで、チンピラを雇うという暴挙に出たらしい。今のところはマリエラの丁寧な『ご説明』で納得して雇い主が誰か話してくれているけれど、このままにしておくわけにはいかない。

困ったな。対策を相談しようと思えば、キヤル様は楽しそうにダイダラマイマイの粘液と黄色の分泌液を混ぜ合わせて、カラフルな気泡を発生させて遊んでいらっしやう。好奇心旺盛すぎる。

マリエラの視線に気付いたキヤル様は、

「マリエラさん、先ほどの光る水はどのようなになりましたの？」

と聞いてきた。目がキラキラしている。とても相談できるテンションではない。

からくりを話すと嬉々として水差しやらティーポットで光る液体を注ぎ始めた。常連客や様子を見ていた買い物客まで順繰りに光る水やら光るお茶やらをカップに注いでいく。

ちなみにこの『光る魔法の水』遊びは、カツコイイ注ぎ方のポーズと一緒に大流行し、調子に乗って床を水浸しにした子供やお父さん連中が、奥様に大目玉を食らった話が零した時のポーズと共にしばらく話題を独占した。

マリエラの『木漏れ日』でも、常連客の熱い要望に応え、ヤカンを乗せた卓上型の火の魔道具と数種類のお茶っ葉、ティーセットを置くコーナーを店の隅に設けてお茶のセルフサービスを始めた。

近くには掃除道具も置いてあるからこぼした人は掃除までしてくれる。

そのかいあってか、日々スタイリッシュなポーズで光るお茶が淹れられていて、ますますなんの店か分からなくなってしまうた。

漸くキヤル様に、同業者の嫌がらせについて相談できたのは数日後だった。

キヤル様は、嫌がらせなど全く気にしていない様子で、

「まあ……。他の薬師さん達も、マリエラさんのように良いお薬を作れば宜しいのに。」
と首をかしげていた。

「その通りなんですけどね。作り方とか……。あー、そうか。そう
だ。」

ちょっと閃いちゃった。その日はいつもより少し早めにお店を閉めて、マリエラとジークはエルメラさんの元へ向かった。

講習会の起案

「薬の作り方を教えてくださいませんか？」

商人ギルド 薬草部門長のエルメラさんが聞き返す。副部門長のリエンドロさんも意外そうな顔をしている。

「はい。勿論、全部ではないですが、傷薬とか痛み止め、煙玉といった、よく売れている薬の作り方をお話ししようかなと。」

あ、キヤル様の了解は貰ってますよ。」

同業者の薬師の嫌がらせの相談をするため、マリエラとジークはエルメラさんを訪ねて商人ギルドを訪れていた。

「ですが、どれも売れ筋商品じゃありませんか。」

「そうですね、どれも簡単な物ですし。傷薬みたいな基本的な物で売り上げに差が出るのって、拙くありません？」

マリエラの疑問は迷宮都市の薬事情の的を射ている。この街の薬師のレベルは低く基本さえ満足に押さえられていない者が多いのだ。迷宮からもたらされる質の高い材料のお陰で、それなりの効果が出ているに過ぎない。事実、薬のトラブルは少なくなくて、薬師のレベルアップはエルメラにとっても頭の痛い問題だった。

薬草部門では、薬草の効果や処理方法をまとめた大作『薬草薬効大辞典』を始め、基礎的な薬の作り方を載せた各種書籍を発行し、講習会に認定制度にと地道な活動を続けているが、エルメラ薬草部

門長が求めるレベルと薬師達のレベルに差がありすぎることもあって、なかなか成果が上がっていなかった。

薬師達とていい加減な作り方をしている者ばかりではない。『薬草効大辞典』や他の薬に関する書籍の情報は彼らの研鑽の証でもある。それでも、迷宮都市の薬事情が向上しないのは、彼らの錬金術スキルの低さにあった。

マリエラは上級ポーションが作れる上に素材の処理といった基礎がしっかりと出来ている。だからこそ、素材や中間処理品を見ただけでそれが何でどういう状態なのか知る事が出来る。腕の良い料理人が料理を食べただけで、材料の処理方法や使われた調味料を知るように、錬金術スキルによって五感では感じられない情報を容易く知ることが出来るのだ。

アグウイナス家が抱えている帝都から来た錬金術師であれば同じことが可能であろうが、彼らは市井には姿を現さない。帝国や周辺諸国の錬金術師が来てくれれば良いのだが、それなりの知識と技術をもつ者ならば、地脈とラインを結んだ場所で生計を立てることが可能で、わざわざ錬金術の使えない迷宮都市などへはやってこない。

薬草店を営むガーク爺は素材鑑定スキルを持っていて、若い頃から鑑定スキルを使い続けた甲斐あって今ではスキルレベルも高い。薬のように素材が混ぜ合わさった物でも専用の魔道具と鑑定スキルで情報を得る事が出来る。

けれど、レベルをあげることが困難だといわれる鑑定スキルをここまで上げられる者は稀であり、スキル取得者は厄介ごとを避けるため秘匿することが常である。ガーク爺が鑑定スキル持ちであることを知っている者は限られていて、彼の店の店頭に劣化した2流の商品が並んでいるのは、並の薬草屋であるとカモフラージュする意味もある。

迷宮都市で薬草の状態や薬の出来を正確に知ることが出来る者はごく僅かしかないのだ。

使う材料の良し悪しや、作った薬のできがはつきりと解らない。新たな製品を作っても、多大な治験を重ねなければ良し悪しは分からない。公共の支援があれば状況は変わっていたのだろうが、戦闘中であろうと瞬時に傷を癒しうる治癒魔法とそのデメリットを埋めうるポジションに比べると、薬の効果は大きく隔たりがある。

商人ギルドの薬草部門が薬の品質向上に注力しだしたのもエルメラが部門長に就任してからで、本来は薬草の都市外への出荷調整を担う部門で、高価な薬草の値を下げないために適切な処理の推進を行うことを職責としていた。

余力などない状況で迷宮討伐に注力せざるを得ない迷宮都市において、薬の発展が遅々として進まないのは致し方のないことといえた。

そんな状況でマリエラが作り方を教えると言った薬は、兄弟子達がライブラリに残した技術と素材の処理技術を組み合わせただけから、この街の薬のレベルを上回るものである。

傷薬は基本的な薬であるが、作り方のノウハウが基本的とは言いがたい。大切なメシの種を商売敵に教えるなど、そうある事ではない。

情報を開示すると提案してきたマリエラに、エルメラが困惑するのも無理はない話だった。

もっともマリエラもキャル様も、作り方を教えて困ることは無い。最近は大口注文が増えて、商品の制作が間に合わない。傷薬や痛み止め、煙玉が売れなくなっても、キャル様は後遺症の緩和薬に力を入れてるし、マリエラは様々な薬が作れる。因みにマリエラは甘くて飲みやすい薬を作りたいと頑張っているが、こちらはサッパリ

上手くいつていない。

二人とも口には出さないが、薬の販売で生計を立てている訳ではないと言った事情もある。人を雇えば面倒ことも増える。偏った知識しかない16、7歳の少女の手に負えるものでないことを、マリエラ達は分かっていた。ましてマリエラには錬金術師であるという秘密もある。下手な相手に取り込まれる訳には行かない。規模を拡張して独占するよりは、ある程度情報を提供して、数多くの薬師たちの中に埋もれてしまう方が都合がいい。

「ん、作り方の権利は持ったままでさ、契約時に情報料を一時金で貰って、あとは製品の売り上げの一部を貰ったらどうかな。」

「帝都で行われている特許制度ですか。」薬」というカテゴリは存在しません。」

リエンドロ副部門長の提案に、エルメラさんが困惑する。勿論制度は知っている。迷宮都市も帝国の一部だから制度が適用される地域でもある。

新技術を保護する制度だが、帝国の特許制度はカテゴリが限定される。最も出願が盛んなカテゴリは”魔道具”。逆にポーションなどの錬成品のカテゴリは存在しない。錬金術師には《ライブラリ》があり師から認められたものだけが情報を知ることができるため、特許による保護はむしろ妨げになるからだ。

鍛冶技術も対象とならない。通常の鉄の製造は技術の進歩に伴い大規模化が図られてきたが、ミスリルやアダマントタイトと言った魔法金属に関しては、精錬にせよ鍛造にせよ鍛冶師のスキルレベルが足りなければ製造できないからだ。腕のある者しか作れない製品の権利化に関しては慎重論が根強かった。

逆に迷宮都市の発展に伴い急成長を遂げた”魔道具”技術は、特定のスキルを必要とせず、情報によって開発者の利益が阻害される可能性が高い。帝国の特許制度は”魔道具”の発達に伴って進展したといっても過言ではない。

帝国においてポーションが作れない地域は迷宮都市のある地脈一帯だけだから、薬があるのも迷宮都市だけで特許制度に”薬”というカテゴリは存在しない。したがって特許を申請したければカテゴリの作成から依頼をしなければいけないのだが、薬の市場規模を考えると可能性は低いのではないかとエルメラさんは考えていた。

「カテゴリ申請が……」などつぶやくエルメラさんに、リエンドロさんが提案する。

「エルメラさん、”薬”のカテゴリ申請しても通らないんじゃないかとか考えてるでしょー。通らなくてもいいじゃないですかー。通ればラッキーくらいで。どうせ申請したって結果が出るのに年単位で時間が掛かるんですからー。とりあえず申請だけとして、当面は『講習会費』の名目で情報料払ってもらって、ついでに使用料の契約もしちゃえばいいじゃないですかー。」

さすがリエンドロさん。考え方が柔軟だ。

「なるほど。そうですね。マリエラさんのお店『木漏れ日』にちよっかいをかけた薬師は強制参加にしましょう。」

「じゃー、手の空いてそんな部下に特許権料に基づいて計画書作らせますんでー。エルメラさんギルマスに話しといて下さいねー。マリエラさん、講師おねがいますねー。」

そういつとリエンドロさんはひらひらと手を振って、仕事を丸投げできそうな手空きの部下を探しに行った。リエンドロさんが計画書作るんじゃないんだね。

「すっごい面白い仕事があるんだよー。一緒にやらない？僕が見てあげるからさー。（見てるだけだけどさー。）」とか言いながら部下の人を上手く操る姿が見えるようだ。

「マリエラさん、私も職員として参加して、無礼な薬師には『ぱちっ』ってお見舞いしますから、よろしくお願いしますね。ああ、これで迷宮都市の薬師のレベルも上がるというものです。」

うっきうきのエルメラさん。雷帝だというのは秘密ではなかったのか。『ぱちっ』ってやつちゃ駄目なんじゃないだろうか。折角教えた薬の作り方を忘れてしまう気がする。

リエンドロさんに計画書を丸投げされた部下の人は1日で計画書を作り、翌日にはエルメラさんが冒険者ギルドのギルドマスターの承認を得てしまったらしい。契約料と使用料の説明を受けて二週間ほどの告知期間の後、講習会が開催された。

ちなみに契約料や使用料は提供する薬の情報によって異なる。今回予定している傷薬、痛み止め、煙玉の契約料はそれぞれ大銀貨1枚。これがそのまま講習会費となる。使用料は売上の2%を年払い。こちらは講習会前に魔法契約を交わしてあるから、支払い時に虚偽の申告はできない。習った作り方を元に大幅な改善を加え、明らかに上位あるいは異なる効果が得られた場合は別の製品と見做されて契約の範囲から外れる。

講習会を機にマリエラのお店への嫌がらせはぴたりとやんだ。

嫌がらせをしている間に、他の同業者の薬のレベルが上がってしまつから、我先にと講習会を受けに来る。おかげさまで講習会は大盛況で、毎週の定期開催になってしまった。

嫌がらせを指示して捕まった薬師の人たちは、会場の隅っこで黙って話を聞いている。しかも翌週も参加してきた。講習会費は契約料をかねているので2回貰うのは二重取りになってしまつから、どうしたことかと聞いてみると、気まずそうな顔をしながら、

「教わつたとおりに作つてみたんだが、どうもうまくいかないんだ。

と話してくれた。どうやら乾燥したキュルリケの葉脈や茎まで使つていたらしい。

マリエラやエルメラからすると当たり前すぎて、薬草の何処に薬効成分が集まつているか知らない人がいると分らなかった。なるほどそうかと、講習会に実技演習を取り入れてみたり、講習会とは別に受講者を対象とした勉強会を定期的に開催した。

何度か薬師達と交流を重ねるうちに、病状に合わせた薬の選び方や、良い薬草を置いている店、薬師でも採取しやすい穴場の採取場などマリエラの知らない情報を教えてもらえるようになった。

こうしてマリエラは、迷宮都市の薬師の仲間入りを果たすことができたのだつた。

肉肉祭り

毎年恒例オーク祭りがやってきた。

砂糖かぶらの収穫時期になると、オークが魔の森からわんさか砂糖かぶらを狙ってやってくる。斃されたオーク肉が大量且つ安価に市場に出回って、冬場の迷宮都市の食料事情を潤すから、街の人達は「襲撃」や「討伐」といわずに「祭り」と呼んで楽しみにしている。

今年はテルーテル元大佐が魔物除けの香やらデイジスの縄の在庫を切らして、スラム街でスライム騒動を起こしたりしたけれど、マリエラをはじめ商人ギルドが懇意にしている商人が提供したりスラム街でかき集めた薬草のお陰で、必要な物資は何とかそろえることができたらしい。

オーク祭りの主戦力は都市防衛隊だが、冒険者達も多数参加する。斃したオークの尻尾を提出すると、尻尾の本数に応じてオーク肉が分配されるし、尻尾が得られなくても事前に渡される参加証明書を提出すれば、一週間の討伐期間終了後に開かれるオーク肉の焼肉パーティーに参加できる。

毎年恒例のオーク祭りであるが魔物討伐でもあるため危険が無いというわけではない。しかし、単独でオークを狩るよりよほど効率の良いオーク狩りができるし、万々オークキングなどの中位の魔物が出てきても、冒険者ギルドから派遣されてきた上級の冒険者が斃してくれるから、若手冒険者や冒険者を引退したおじいさんまでこそって参加する。

オークは雄のみで構成される種族で他種族の雌を犯して子をなす繁殖力旺盛な種族だ。誕生時は雌雄同数いるが、成長する前に幼い雌がくびり殺されるため雄のみで構成されているのだと言う学者もいるが、真偽は定かではない。

何れにせよ、女性の方が狙われるリスクが高い為、女性はランク以上の冒険者しか参加できない。その代わり討伐期間完了後の焼肉パーティーへの参加は自由。若い男女の出会いの場にもなるため、フリーの女性は討伐よりもおめかしや、かなり離れた場所からの応援に精をだす。

討伐の様子は遠見のスキルでも持つていない限り、応援する女性たちからは見えないのだが、少しでも良いところを見せようと頑張る独り身の男性冒険者や都市防衛隊の隊員も多い。

参加資格のある女性冒険者でも、醜悪なオークを狩るよりは、遠目に見学しながらガールズトークに花を咲かせるほうがよほど楽しいものだから、参加する者はまずいない。

すなわち、オーク祭りは迷宮都市において最もおとこくさい祭りである。

筋肉とオークがぶつかりあう肉肉祭りが、今幕を開けた。

「ジーク、リンクス、がんばって！」

マリエラがかつてない熱いまなざしをジークとリンクスに送る。ハーレム展開ではない。その瞳にはまだ見ぬ「肉」しか映っていない。いや、「王肉」かもしれない。オーク祭りには高確率でオークキングが現れるというから。

マリエラはエルメラさんと見学だ。エルメラさんの旦那さんは参加していないが、商人ギルド薬草部門の若手職員が数名参加してい

る。商人ギルドとはいえ、不足した薬草の採取を行うこともあるから、それなりの戦闘力が必要なのだそうだ。

さつきから、「今年はどんな戦いが繰り広げられるのかしら。」などとわくわくしているので、エルメラさんが見学するために若手職員は参加させられたのかもしれない。

Aランク冒険者でもあるエルメラさんの側ならば安全なので、ジークとリンクスはマリエラの「オークキング肉食べたい」という無言の圧力に屈して、オーク祭りに参加している。

今回のオーク祭りは新しく都市防衛隊を率いることになったカイト隊長の晴れ舞台でもある。手柄を立てようとさぞかし意気込んでいると思ったら、

「お集まりの冒険者のみなさん、今回の指揮を執らせて頂きますカイトです。」

私もこのオーク祭りで妻と出会ったのですが、上手くいったのは5回目の参加でした。最初の2回は軽い怪我を負ったため仲間に診療所に押し込まれてパーティに出られず、3回目は血塗れになってしまい着替えている間に出遅れました。今度こそと意気込んだ4回目に出会った美女に討伐証明部位である尻尾を巻き上げられました。5回目も熾烈な争いが繰り広げられましたが、見事妻を射止めることが出来ました。

お分かりでしょうか、みなさん。オークなど前哨戦に過ぎません。ただの準備運動です。オークの尻尾など女性に捧げる花のようなものです。真の戦いはこの後です。気負わず無理せず計画通りオークを狩りつくし立派な尾の束をつくりましょう！」

と、集まった面々に挨拶した。とても闘いを前にした挨拶とは思

えない。しかし、経験者の言葉は重みが違つのか、皆うつんと頷いている。一部「バカヤロー、俺は7回目だー！」と叫ぶ者もいたが、作戦は真剣に聞いていた。迷宮都市に於いて最も無駄に怪我人がでる行事でもあるので、焼肉パーティーに向けて上滑りしている独身男性のやる気を上手くコントロールできたようだ。

作戦は簡単。砂糖かぶらの畑に近い魔の森の境で、砂糖かぶらの皮などの屑を煮る。

立ち昇る甘い匂いを風魔法で魔の森に向かって送ると、冬を前に餌を求めて迷宮都市近くまでやってきたオークどもがフゴフゴと鼻を鳴らしながら森から出てくる。

余計な畑を荒らされないように、戦場の予定地以外の魔の森の境では、乱杭にデイジスを混ぜてなった縄をジグザグに這わせて簡易の柵にしているし、魔除けの香を焚いて風魔法で魔の森に匂いを送っているから出現場所もおおよそ戦場予定地周辺に定まっている。

オークキングが率いていればオークどももそれなりに統制のとれた動きをするが、数匹の群れで出てくることがほとんどで、この場合は列に並んだ冒険者が順番に倒していく。

毎年同じ作戦なのだが、これで問題無く多量のオークが釣れるのだから不思議だ。学習能力はないのか。いや、カイト隊長でさえ、4回もオーク祭りに敗れていたのだからオークどもと大した差はないのかもしれない。

砂糖かぶらの匂いにつられて3匹のオークが早速出てきたようだ。早朝から並んで一番槍を手に入れた若い冒険者チームが、うおおと叫びながら駆け出していく。気がやりすぎだ。魔の森との境近くでオークを倒した若者達に後続の冒険者達からヤジが飛ぶ。

「もっと引きつけるイ。運ぶのが大変じゃねーか！」

「焦る男はモテねーぜ！」

「うるせー。おっさんのヤキモチは見苦しいぜ！」

などと、返しながら討伐証明部位である尻尾を切り取ると、若者達は運搬要員として駆り出された農奴達を護衛しながら倒したオークと共に隊列の背後に戻り最後尾に並び直す。

「最後尾はこちらです。はい、焦らないでー、オークはどんどん出てきますからー」

立て看板をもった都市防衛隊員が人員整理に当たっていることもあり、冒険者達は口は悪いが行儀がいい。

因みに魔の森の境と隊列の中央地点には線が引いてあり、その線を超えてきたオークは次の冒険者が仕留めてもいいので、自信のない冒険者は線の近くで戦って勝ち目がないと思ったら逃げて助けを求めるときも出来る。

ばらばらに、けれど途切れること無く現れるオークを順番に倒していく冒険者達。倒されたオークは隊列付近に用意されている荷車に載せられて迷宮都市へと運ばれ、冒険者ギルドの解体職や卸売市場の肉屋が総出で血抜き、解体し、氷魔法の使い手が凍らせていく。荷車を引くヤグーも雄ばかりで鬨の雰囲気当てられたのか、立派な角を高々と振りかざして、意気揚々と荷車を引いてくる。マリエラ達がお世話になったヤグーもいるようだ。タツタカとひずめを踏み鳴らして血塗れのオークを運んでくる。本当に草食動物か。血気盛んすぎる。

そうこうしているうちに、ジークとリンクスの順番が来たようだ。二人は中央線付近に自然なポーズで陣取っている。

「オイオイオ、初っ端から逃げ出すつもりかー？」
「尻尾も無しにパーティー出たってモテねーぜー」

一斉に擲擧する冒険者達と、迫り来る4匹のオーク。

中央線まであと少しという所で、ジークが飛び出し、リンクスが一步踏み出してシュッとナイフを投げる。リンクスのナイフは2匹のオークの眼孔を脳まで貫き、ドツと2匹のオークが転がる。

飛び出したジークはオークが振り上げた棍棒を振り下ろすより早く1匹目の首を掻き切り、2匹目の一撃を紙一重で躲して懐に入り込むと心臓を一突きにする。こちらもあるという間にカタがついた。どよめきと共に冒険者達から湧き上がるブーイング。

「立ってるだけで女が寄ってくる上級冒険者様が出てくるんじゃないかええええ！」

「お前らなんか、性悪女に力もられちまえ！」

キヤーキヤーと黄色い声を上げているのはテルーテル相談役だけだ。

「彼はあの時のっ！彼らは何者かねっ！ランクは？二つ名はあるのかねっ！」

大興奮だ。大佐という重責から解放されたテルーテル相談役は、冒険者達の活躍を心置きなく堪能し、今一番輝いていた。仕事しろ。ちなみに参加時に名前の登録などはないから、ジークもリンクスもテルーテル相談役に名前を知られることはない。新たな物語は始まらないので安心していただきたい。

冒険者達のブーイングを片手を上げてスマートにかわし、イケメン風に列の最後尾に戻って行くジークにリンクス。闘いの様子も含め、その勇姿は遠すぎてマリエラには見えていない。

はるか離れた迷宮都市の門前に設けられた応援コーナーでは、エルメラさんが楽しそうに実況中継していた。

「まあ、マリエラさんの所の二人、なかなかやりますね。オークを二匹ずつゲットです。これで冬場のお肉には事欠きませぬわ。幾らかソーセージで受け取っておくと良いですよ。ポトフにするととても美味しいの。」

詳細を話してくれるエルメラさん。絶対に魔法で視力を調整している。さつきから手が触れそうになる度、『ぱちっ』と静電気が飛んできて痛い。

二人を送り出したマリエラはというと、正直少し飽きていた。

戦場は遠くて何をやっているのか見えないし、周りではうら若き乙女達が、

「今年の新人には原石がないわね。」

「ねえ、好みじゃない人から尻尾だけもらったら面倒な事になるかしら?」

「あの人? 別れたらしいわよ。でも付きまとわれているんですって。」

などと肉食系の話をしている。マリエラも食品嗜好の上では肉食系女子だが、今日の獲物はオークキング肉なので興味の持てる話題は聞こえてこない。

薬草薬効大辞典を持って来ればよかつたと、心底思っただけボンヤリしていると、一人の女性が声をかけてきた。

「あなた、薬屋さんの人よね。」

はいそうですと答えながら、マリエラは女性を見る。二十歳くらいで町娘風の服装をしているが、佇まいには隙がなく無駄な贅肉の少ない引き締まった体つきをしている。おそらく冒険者の人だろう。

「この火傷の跡を薄くする薬ってないかな。」

女性がちらりとめくって見せた袖の下には魔物にやられたのか、火傷跡が広がっていた。

「火傷自体はウチの治療魔法使いが治してくれたんだけど、跡が残っちゃって。アタシはあんまり気にしてないんだけどさ、ツレが見るたびに申し訳なさそうな顔するんだよね。」

ツレという同じパーティーの人をかばって受けた傷らしい。オーク祭りの会場をやさしげなまなざしで見つめているから恋人なのかもしれない。

女性の問いかけにマリエラは言葉を詰まらせる。

「ごめんなさい。美白系のクリームを塗り込めば少しは薄くなるんですけど……。」

マリエラの扱う薬では火傷跡を治すことはできない。上級ポーションを使えば簡単に治せるのに。

目を伏せるマリエラに女性冒険者は、

「そっか。美白のクリームね。貴女のお店でも売ってるの？」

とにつこり笑って聞いてくれた。作っておくと答えると、女性冒険者は必ず買いに行くからと言って去っていった。

ちなみに美白クリームは話を聞いていたエルメラさんにも注文された。周囲の女性たちも話を聞いていたようで、大量に注文を受けてしまった。忙しいのはいいことだね。そんなふうに思っている

と、オーク祭り会場の方から、あわただしい空気が伝わってきた。

あちらも急に忙しくなったようだ。

王肉祭り

「オークキングがでたぞー！！！」

盛り上がるオーク祭り会場の男たち。

オークキングは数体のオークジェネラルと数百体のオークを従えてやってくる。かつてレオンハルト将軍が討伐に参加した際は、冒険者の起用をしていなかった上に、7体ものオークキングが同時に襲ってきたが、今回はオークキング2体にジェネラル5体、オーク500体程度の小規模なものだ。

オーク祭り開始直後のため、妥当な出現率とも言える。

オークキング単体の強さはCランクの下位で、Cランクの冒険者であれば1対1ならば勝つことができる。都市防衛隊の兵のレベルは冒険者レベルに換算してDからEで、Cランク以上の戦力は迷宮討伐軍に配属されるため致し方ないとはいえ、中級〜下級の戦力しかない。それでも指揮命令系統さえ機能していれば、オークキング1、2体が率いるオークどもならば討伐が可能である。

しかも、冒険者達まで集まっている。ちなみに冒険者の起用はテルーテル相談役の後任となった現大佐が考案しテルーテルが推進した。テルーテルが大佐に就任する前のことである。

「冒険者の活躍を間近で見られますし、討伐終了後にパーティーを開けば交流も図れますよ。」

と申し添えて提案すると、テルーテルは未だかつてない頑張りを見揮していくつもの難関を潜り抜け案を通してしまった。テルーテル

が自らのスキル《同調》を使いこなせたのは後にも先にもこの1回だけだったかもしれない。

結果は大当たりで、安価な戦力確保とそれに伴う安全性の向上のみならず、市民への娯楽の提供、官民交流の促進と都市防衛隊の評価の向上など様々な副次効果を生み、テルーテルを大佐へと昇進させたのだから、好きが高じて身を助けるとは良く言ったものだ。単に運が高いただけかもしれないが。

オーク祭りに参加した冒険者の多くは都市防衛隊と同様にDランク以下ではあるが、中には奥さんに肉をせがまれて参加している上級冒険者も紛れ込んでいる。

上級冒険者であればオークキング肉などいくらでも買える稼ぎがあるのだが、『お得』『安い』『お隣のご主人も参加している』と言った奥様センサーをビシバシ刺激するオーク祭りに、強制参加させられる旦那様も少なくない。

即ち、壮絶なオークキング肉争奪戦が幕を開けたのだった。

「ジーク、あつちはBランカーが狙ってる。こっちのキングを狙うぜ！」

「分かった！」

走り出すリンクスとジーク。無論周りの冒険者達も一斉に列から飛び出し駆け出している。

オークキングの出現は乱戦開始の合図でもある。

迫り来るオークをなぎ倒し、すり抜けてオークキングを目指して走る。

隣のオークキングは複数の冒険者が狙っているようだ。空に幾本

もの氷の槍が浮かんだかと思うと、オークキングめがけて突き刺さる。それをなぎ払う風の刃。

「てめえっ、邪魔すんじゃねえっ！」

「うるせえ、俺の獲物だ、てめーこそ引っ込んでろ！」

『無駄な怪我人』を量産する醜い争いを始めるBランカーたち。今がチャンスと駆け出す大剣使いは、どこかに潜む土魔法使いに文字通り足元を掬われて、もんどり打ってすっ転び、ぶつかつた衝撃で何匹ものオークをあの世に送っている。

乱戦だ。遠く離れた応援会場ではエルメラさんが大興奮で実況中継している。身振り手振りで話すたび、静電気が『ぱちっ』と飛んでたいへん痛い。この人『雷帝』を隠す気あるのか。

本人に聞くと、「ただの雷魔法使いです。」とにっこり笑ってウインクしていた。まつげの端から『ぱちっ』と火花が散っていたから、「そうですね」としか返事のしようがない。

ジークやリンクスは、足元に飛んでくるしようもない妨害魔法を躲しつつオークキングめがけてひた走る。

後続の男たちの中から全身をマントで覆った男が空高くジャンプし、人とは思えぬ跳躍力で二人の前に飛び降りる。

場を圧倒する存在感。着地地点周辺のオークが怯えて後ずさる。風を受けマントの裾は魔鳥の翼の如くはためき、隠されていた顔が露わになった。

「キングは俺が貰ったぜ！」

ずびし！と宣言する今日もまぶしい謎の男。

なんであんたがいるんだハーゲイ。明らかに過剰戦力じゃないか。

脱力しそうになる冒険者達の心の声が漏れる前に、ハーゲイの着地地点からぶわりと不可視の網が広がりハーゲイを捕獲する。

「うおっと、まだまだ甘いぜ！」

ハーゲイは腕を振るい網を引き千切ろうとする。

けれどハーゲイが網から抜け出すより早く、何処からともなく現れた数名の影がハーゲイに肉薄し、あつという間に取り囲む。

「ギルマス、帰りますよ。皆さんに迷惑です。」

「仕事してください。最近遊びすぎです。」

「行動が分かりやす過ぎて罾が張りやすかったです。」

「はっ、離すんだぜ！話せばわかるというだろう！キング狩って帰らないとワイフにつ、ワイフにつ！」

事務服をピシリと着こなした冒険者ギルドの幹部たちが、暴れるハーゲイを簀巻きにし、神輿のように担いで去っていく。攻撃の手が見えないのに進路をふさぐオークがなぎ倒されていき、彼らの強さをうかがい知れるのだが、幹部たちよりハーゲイの方がランクは上だ。格上の相手であっても作戦と連携によって仕留めうるのだという良いお手本を、若手冒険者諸氏に示したともいえる。

「ふっ、ふおおおおおおおおお！！！！チーム・ハーゲイじゃないかねっ！すごいっ、すごいよー！」

大興奮のテルーテル相談役。周りにいる兵達は、「よかったね」としか言いようがない顔で生暖かく見守っている。

ちなみに、『チーム・ハーゲイ』などという正式名称はない。あくまで俗称である。ハーゲイが手ずから育てた幹部たちで、状況に応じて適したメンバーが入れ替る。別に幹部たちが「ギルマスと一緒のチームは嫌だ」とチームを名乗ることを拒んでいるわけではない。と思う。

ハーゲイ
最大の敵が排除された隙に、オークキングに肉薄するジークと複数の冒険者達。

「フゴオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！」

オークキングが雄たけびをあげる。身の丈は大の男よりさらに大きく、その重量は大の男数人分はあるだろう。キングを名乗るに相応しい体躯から、地響きのように響く威圧感溢れる声が冒険者達を威嚇する。しかし、ここまでたどり着いた戦士たちを止めることなどではしない。

オークキングが大人の胴ほどもある巨大な棍棒を振りまわす。起る風圧で周囲のオークが吹きとばされるが、ある者は受けた風圧を剣に宿して咽元めがけて飛ばし返し、ある者は棍棒を足場にオークキングの頭めがけて飛び掛る。ジークもまた棍棒をくぐるように躲すと、そのまま足のばねを利用して弾丸のように飛びかかりオークキングの心臓にミスリルの剣を突き刺した。

頭を、咽を、心臓を同時に攻撃されたオークキングは一溜りもなく倒れ付す。

やった。オークキングを倒した。しかし誰が？同時なのか？肉は一体誰の手に？

「ナイスファイト、ジーク。さ、行こうぜ！『ヤグーの跳ね橋亭』で打ち上げだ。」

いつの間にかジークの傍に立っていたリンクスがジークに声を掛ける。ジークは無言でこぶしを握ると、リンクスとゴツンと拳同士をぶつけ合った。

拳を握るリンクスの指には普通のオークとは明らかに異なる立派な尻尾が巻きつけられていた。

「いつやー、まさかハーゲイが出てくるとは思わなかったよなー。」

『ヤグーの跳ね橋亭』で、オークキング肉にかぶりつきながらリンクスが戦いの一部始終を面白おかしく語って聞かせる。ジークが冒険者達の目を引き付けつつオークキングに挑みかかる隙に、リンクスが後ろに回り込んでオークキングの尻尾を切り取る所など、知る者の少ないレアシーンなのだが、マリエラと看板娘のエミリーちゃんは二人してオークキング肉に夢中であり聞いていない。

オークキング肉は尻尾を持ち帰ったリンクスに15kg^{キロル}、ジークを含め止めを刺した3人に10kg^{キロル}ずつ分配された。オークキングやオークジェネラルと言った高級肉に関しては、尻尾を持ち帰らなくても討伐に貢献した者にも分配された。そのために都市防衛隊の高級肉種担当者は必死で戦況を見守っている。何しろ高級肉を目当てで上級冒険者を集めているのだ。万が一にも分配に不備があつてはならない。食べ物への恨みは恐ろしいのだ。

貰ったオークキング肉25kg^{キロル}のうち、5kg^{キロル}を『ヤグーの跳ね橋亭』に持ち込んで料理してもらい打ち上げをしている。残りは、

10kgキログはマリエラが貰い、10kgキログは黒鉄輸送隊のために『ヤグーの跳ね橋亭』で保管している。

打ち上げと言っても参加者は、リンクス、ジーク、マリエラに『ヤグーの跳ね橋亭』のエミリーちゃん。あとは、マスターやアンバーさんたちが接客の合間に入れ替わり立ち替わり空いている席に座ってはお肉を摘んでいくくらいだ。

エルメラさんも誘ったのだけれど、夕食は家族でと断られてしまった。

宴会大好きな黒鉄輸送隊のディック隊長は今頃帝都の空の下だし、迷宮都市に残ったマルロー副隊長達も仕事があるため、日が暮れてすぐの時間には『ヤグーの跳ね橋亭』には来られない。

「ディック隊長がいたら、絶対参加してただろうね！」

「ぜってー参加してたな。だから俺、オーク祭りのこと黙ってたもん。」

マリエラの質問にリンクスが答える。今回も空気を読まないどころのギルドマスターが乱入してきたが、ディック隊長ならアンバーさんにオークキング肉を貢ぐために間違いない参加していただろう。そのアンバーさんはマリエラの隣で美味しそうにオークキング肉をほおばっている。

「おいしいわあ。」

「口の中でとろけちゃう。」

「おいひいね。父ちゃんも早く食べなよ。んぐんぐ。」

「んっう。」

ジークとリンクスの周りは幼女に少女に美女複数のより取り見取りなハーレム状態なのに、幼女と少女による台無し感が物凄い。なんとも幸せそうな顔をしてオークキング肉をほおばっていて、膨ら

んだほつぺたがもぐもぐと動いている。

ジークとリンクスは顔を見合せると、ははっと笑って自分の肉にかじりついた。

オーク祭りで得られた肉のうち約半分は参加者に分配され、肉が不要ならば現金で受け取ることもできる。オークキングやオークジエネラルと言った高級肉は山分けだ。残りの可食部は卸売市場を通じて民間に安値で販売される。オークキングやオークジエネラルの肉が入荷した肉屋は何処も大盛況で、ここでも奥様たちの熾烈な戦いが繰り広げられる。

初日に冬場のオーク肉とオークキング肉まで手に入れられたのは、幸運だったろう。マリエラではとても熾烈な安売り商戦を潜り抜けられなかっただろうから。

解体費用や、戦場やパーティー会場の設営費用ももろの経費をあわせると僅かに赤字がでるのだが、そもそもこれは砂糖かぶらを狙ってくるオークの討伐なので、都市防衛隊だけで討伐を請け負うことを考えると破格の収支といえる。

オーク祭りは砂糖かぶらの収穫が終わるまで1週間ほど続く。

夜間は戦場周辺も魔除けの香をたいて都市防衛隊が見回りをし、うまく昼間にオークが集中するように調整している。リンクスとジークの戦いは、オークキング肉を手に入れたことで終わりを迎えたが、最終日の焼肉パーティーまで悲しき男たちの戦いは終わることはない。

冒険者ギルドのギルドマスター、ハーゲイの食卓にオークキング肉が並ぶ日が来たのかは、定かではない。

ガラスの棺

魔の森を鉄皮で覆われた黒い装甲の馬車が行く。

先導する騎兵の後を馬車は一定の速度で進んでいく。

今回も予定通り夕刻前に迷宮都市にたどり着けそうだ。ラプトルに乗る護衛の男、ドニーノは順調な旅路に安堵する。ドニーノは装甲馬車のメンテナンスも担当している。こうして護衛をしているくらいだから戦闘の心得はあるものの、魔物と相対するよりは装甲馬車を弄繰り回すほうが性にあっているという男だ。

幾度も往復した街道だけれど、3日もの間、絶えず襲い来る魔物どもを振り払いつつ進んでいくのは骨が折れた。ゴブリンやフォレストウルフなどの弱い魔物とはいえ、数というものは侮れない。特に狼どもは厄介で、引き剥がしても引き剥がしても馬車に喰らい付いてくる。

それがどうだ。低級の魔除けポーション数本で襲ってくるどころか逃げ出す有様ではないか。これならば、馬車の装甲をもっと薄くして速度を稼ぐ改造も可能かもしれない。

迷宮都市に拠点を構えるようになってから、帝都に運ぶ商品は迷宮都市残留組が準備するようになった。だから迷宮都市に着いたあとは、休息とメンテナンスさえ完了すればすぐさま帝都に出発できる。今は以前と変わらず迷宮都市で4日のインターバルを設けているからメンテナンスに割ける時間は多い。

拠点を構えることで、装甲馬車を整備するための大掛かりな道具類を設置することも可能になった。

今までの装甲馬車は攻撃を受けることを前提とした、頑丈なばかりの走る箱だった。乗り心地も悪ければ速度もたいして出はしない。攻撃に耐えて何とか魔の森を抜けたときには、自重によって車軸周りにガタが来る。実に難儀な代物だったが、この調子ならば大掛かりな改造をしても問題はなさそうだ。

ドニーノは、油断なく進路を警戒しながらも装甲馬車の改造案を模索していた。

そんなドニーノの背を眺めながら、ジャと呼ばれている男、ジャイコブは装甲馬車の手綱を握っていた。ジャイコブは迷宮都市の奴隷商レイモンドの下で騎獣の世話などをしていた奴隷で、1月少し前に黒鉄輸送隊に買われてきた。

魔の森を抜けるのはこれで2往復目となる。

最初はとても恐ろしかった。ジャイコブはヤグー商隊に連れられて迷宮都市にやってきたため、魔の森を抜けたことは無かったが、魔の森を抜けてレイモンド商会にやってきた奴隷達の話を聞くにつけ、そこが人の往来できる場所でないことを知っていたからだ。

《命令》され戦々恐々手綱を握る。夜間の御者を任された時などは、恐怖のあまり御者台内で吐いてしまった。「汚ねえ、洗って来い」と御者台から蹴り出された時は、そのまま魔物に食われてしまいかと半狂乱で自分をけりだした足にすがり付いてみっともなくも泣き叫んだものだ。

しかし、ジャイコブが、いや黒鉄輸送隊が魔物に襲われ命を失うことは無かった。

出会うとしても、たまたま進路が重なった魔物と出くわすといっ

た会い方で、まるで魔物が除けるとさえ思える。装甲馬車の上部には魔除けの香を炊きつける台が設けてあるのだが、魔除けの香とはこれほどの効果がある物だっただろうか。

(どづいうこった……。)

ジャイコブの目はぎよろりと油断なく周囲を観察していた。ジャイコブの喉は潰されている。読み書きだって出来はしないから情報は自らの耳と目で仕入れる他はない。目立たず気付かれず彼は情報を探り続けた。

その後も、街道にふらりとゴ布林数匹が現れた程度で、装甲馬車は予定通り迷宮都市にたどり着いた。装甲馬車は南西の門を潜り大通りを進んで一軒の商会へ消えていく。

ジャイコブが見知った商会だ。

「お待ちしておりました。」

黒鉄輸送隊を奴隷商レイモンドが出迎える。今回の積荷も奴隷。

2台の装甲馬車から『荷物』が降ろされいつもの様に検品される。けれど少々様子がおかしい。片目の無い者、指が揃っていない者、腕や足のない者まで幾人も混じっている。五体満足なものの中には、重罪人と思しき面構えの男が幾人かおり、両手を拘束され猿轡を噛まされた状態で引き立てられている。

迷宮都市に送られてくる奴隷は犯罪奴隷や終身奴隷ばかりではあるが、求められる用途は労働力なので、身体に欠損があつて満足に働けないものや、他の奴隷とうまく折り合えず、使い勝手も悪そうな重罪人はいくらか買値が安くても避けられる傾向にある。

これらの奴隷は黒鉄輸送隊が見繕ったものではない。奴隷商レイモンドの要求によるものだ。

「商品、確かに受け取りました。代金はいつもの様に。」

レイモンドの表情から真意の程は読み取れない。長年人の売り買いを生業としてきた者だ。何時もと同じ様にまるで家畜の売り買いでも行うように、いやそれよりもっとなんの情動ももたずに取引を終える。黒鉄輸送隊も『荷物』を届けることが生業。表立って客の注文を詮索などしない。

取引を終えた黒鉄輸送隊を見送った後、奴隷商レイモンドは、奴隷達を牢へ引き立てる部下の一人を呼び止めた。

「オーク肉がたくさんあったでしょう。今日の連中に振舞っておやりなさい。明日には出荷なのです。そうすれば、もう……。」

レイモンドの言葉はそこで止まる。言い付かった部下は黙って頭を下げると、奴隷達と共に建物の中に消えていった。

「まったく、歳は取りたくないものですね。感傷など余計なものだというのに。」

さて、入荷の連絡をしましょうか。」

誰にともなくそう呟くと、レイモンドは館の中へと入っていった。

迷宮都市の南東部、外壁に程近い貴族街の中心部からやや外れた場所にアグウィナス家の屋敷はあった。エンダルジア王国時代から受け継がれる敷地は迷宮都市においても広大で、高い壁に覆われて

おり外から中を窺い知ることにはできない。

200年前に魔の森から魔物が溢れた時、アグウイナス家の当主は国外に出かけており難を逃れたのだという。その後、幾人もの兵を率いて滅びた国に真つ先に駆けつけたアグウイナス家の当主は、魔物除けのポーシヨンと魔物を除ける薬草を駆使して安全地帯を確保し、生き残った錬金術師達を集めて復興に尽力した。彼らの作ったポーシヨンは生き残った国民や、救助に駆けつけた帝国兵に行き渡り、迷宮都市に人の住処を築くに至ったという。

その功あつてアグウイナス家は迷宮都市においても取り立てられ、錬金術師達が残した大量のポーシヨンを管理してきた。アグウイナス家からのポーシヨン供給は200年の永きに渡り、迷宮討伐に貢献し続けてきたといえる。

アグウイナス家の現当主ロバート・アグウイナスは屋敷の離れの隠し階段を地下へと降る。

年の頃は20代前半、幼い頃から神童と持て囃された英才である。母親は妹キャロラインが幼い頃に他界しており、父親が数年前に実験の失敗で下半身不随となって以降、彼が家督を継いでいる。

アグウイナス家の離れはこの街が迷宮都市として復旧した頃からの古い建物で、何十年も前に敷地内の離れた場所に建てられた本館が別にある。

本館が新築された後も、離れはポーシヨンの研究施設として使われていて、出入り出来るのは、当主と後継の他はごく限られた協力者だけだった。

妹のキャロラインでさえ、離れに立ち入ったことは無い。

離れには広大な地下室があり、迷宮攻略を支える大量のポーションが貯蔵されていた。ロバートが下っているのは貯蔵庫へ続く階段とは別の、歴代の当主しか知りえない隠し通路だ。

薄暗い廊下を奥へと進む。当主のみが鍵を持つ扉を抜けてたどり着いた先は、墓所を思わせる空間だった。

部屋の両側には古びた棺が幾つも並んでいる。あわせて10は超えるだろう棺はどれも蓋が開いており何者も入っていないことが部屋の入り口からでも見て取れる。

幾つもの棺が並ぶ部屋の最奥は一段高くなっており、そこには一基のガラスの棺が据えられていた。

ガラスの棺の周囲には幾つもの照明の魔道具が設置され、ガラスの棺を明るく照らしている。棺の下半分には精緻な薔薇の刺繍が施された掛け布がかけられてあり、棺の上から床にまで広がる様はまるで薔薇園の中にいるようだ。

物資の乏しい迷宮都市において、ふんだんに刺繍が施された布などかなり高価な贅沢品でこのような人目に付かない場所で使うものではない。贈り主の棺の主に対する思いが如実に表れているようだ。ロバートはガラスの棺に歩み寄る。

ガラスの棺の中に、彼女は眠っていた。

とても、とても美しい女性だった。

光り輝く銀の髪は緩くウェーブを描いて流れ落ち、雪のように白く陶器のように肌理の細かい肌に掛かる。筋の通った愛らしい鼻に、小さな赤い唇がまるで夢見るように微笑むように弧を描いている。華奢な肢体を覆う柔らかな薔薇色のドレスが彼女の美しさを引き立てる。

まぶたを飾る長いまつげが今にも震えてその瞳が開かれそうだ。

彼女の瞳は何色なのだろうか。

蜜に濡れた様に艶めくその唇が動くとき、
鈴の鳴るような声で我が名前を呼んでくれるだろうか。

「おお、美しきエスターリア。我が始まりの錬金術師よ。」

ロバート・アグウイナスは棺の前に跪く。

ロバートが眠り続ける彼女に出会ったのは、正式に跡継ぎに定められた10歳の頃。彼女をはじめてみた時の衝撃は今なお彼の心を支配している。

ロバートの知る最も美しい女性。200年間眠り続けるエンダルジア王国最後の錬金術師。

「エスターリア、貴女はこの迷宮都市の始まりの錬金術師となるのです。その日まで貴女の眠りを妨げさせはしません。」

迷宮が斃され、この地が人の手に戻ったとき、錬金術師達は地脈とラインを結び再びこの地に溢れるだろう。けれどラインの締結には、『錬金術師』が必要なのだ。これは弟子をもちうる錬金術師にしか知らされていない情報で、錬金術師であっても知らないものが多い。

《ライブラリ》によって、師匠が不在であっても新たな錬金術の術を取得しうる錬金術師にあつて、師弟関係が何より重要視される理由がここにある。

師匠を得ない者は錬金術師にはなれない。

精霊によって地脈へと潜り、ラインを繋いだのち、師の技によって現世へと戻る。

だから、迷宮都市に錬金術師を復活させるためには、『エスターリア彼女』が

必要なのだ。

彼女は迷宮都市すべての錬金術師の師となり、永遠にその名を残すのだ。

ロバートは棺に眠るエスターリアを見つめる。その瞳に宿るのは、恋情か、崇拜か、狂気か。

「安心してお眠りください、エスターリア。迷宮が滅び、この地に新たな夜明けが訪れるその日まで。古からの約定に従い、貴女はその時目覚めるのです。」

それまでは、私の新薬が迷宮を滅ぼす助けとなりましょう。」

ロバートは眠るエスターリアに語りかける。幾度と無く繰り返したその言葉、その決意。

彼は薔薇の刺繍の掛け布をほんの少しだけ棺の上部まで引き上げると、いたわるように棺を撫でて、地下室を後にした。

バジリスク

「53階層階層主、識別名称『呪い蛇の王』の討伐を開始する。雪辱を果たすぞ！」

「オオ！」

迷宮討伐軍より選別された百余名の精鋭が、金獅子將軍レオンハルトに応じる。

迷宮53階層は現在の討伐最前線。先の遠征でレオンハルトがバジリスクの石化の呪いを受けたため撤退を余儀なくされた因縁の階層だ。

通常種のバジリスクを斃しつつ通路を奥に進むと、人工物を思わせる石柱が建ち並ぶ広大な空間に出る。そこが呪い蛇の王、キングバジリスクの住処だ。

バジリスクは蛇を思わせる頭と尾をもつ魔物で、腹の辺りはトカゲのように横に広く膨らんで4本の短い足が生えている。バジリスクの瞳は石化の邪眼であると言われ、睨まれた者に解毒では癒しきれない石化の呪いをもたらす。ただし、石化の呪いの発症率はさほど高くは無い。万一発動したとしても、『聖なる護り』という呪いを防ぎアンデッドを退ける守護の魔法を掛けていれば防ぐことは可能だ。

鏡によって反射させることも可能で、盾職に鏡のように磨きこまれた盾を持たせておく事で、安定してバジリスクの呪いを防ぐことが可能となる。ちなみにバジリスクが自身の呪いを受けて石化する

ことはない。

バジリスクは牙や爪、尾にも石化の毒を持っており、こちらの毒は恐ろしく強力だ。受けたら必ず石化が発動する。けれど呪いは孕んでいないから、解毒の魔法やポーションで治すことができる。

長い尾や頭から繰り出される攻撃は強力なSランクの魔物であるが、レオンハルト率いる迷宮討伐軍であれば斃しうる相手だ。

問題は広間の中央で鎌首をもたげている呪い蛇キングバジリスクの王。通常種の数倍の体長を持ち口は人をたやすく丸呑みできるほどに大きい。その頭上には王冠を思わせる角のような突起が何本も歪に生えている。まるで喰らった獲物の肋骨が頭蓋を突き破って生えてきたようだ。

緑青色の鱗に覆われた体躯はあちこちに錆のような澱が浮かんでいる。その澱はまるで孵化する直前の繭のように蠢動し、時折はじけて大気に溶けては、迷宮の淀みに溶け合って新たなバジリスクを生じさせている。

通常種の倍、8本もの足が生えた腹が邪魔をして石柱が乱立した広間の端や通路には入ってこないが、戦いに入ったならば何匹もの通常種のバジリスクを生み出して、四方から石化の呪いを浴びせかけ、石像と化した者を飲み込み喰らっていくことだろう。

レオンハルトでさえ逃れられなかったのだ。一度に複数生じたバジリスクたちによって戦線は乱れ、撤退を余儀なくされた。レオンハルトを將と見定めたバジリスクから浴びせられた石化の呪いは、幾度も唱えられた『聖なる護り』の隙を縫ってレオンハルトに届いてしまったのだ。

けれど恐れることはない。

「聖水を。」

ウエイスハルトの号令に従い、全兵士が聖水を被る。続けて掛けられる『聖なる護り』。

聖水にも『聖なる護り』と同じく呪いを防ぐ効果がある。しかもバジリスクの石化毒の耐性も向上する。『聖なる護り』は重複して掛けられないが、聖水ならば重複可能だ。『聖なる護り』が切れてから掛けなおすまで、呪いを防ぐことができる。

「武器を清め、弾を箆めよ。」

今度は武器に聖水を掛ける。呪いにまみれたキングバジリスクへの攻撃力も増加しうる。

魔術師たちは詠唱を始め、聖水を核とした氷の槍を幾本も作り出す。

弓兵達は薄い金属の金型に聖水を流し込みシャフトを挿すと、氷魔法を使える者が急速に冷却し聖水の矢尻を製造していく。

何度も何度も挑んでは、敗れ続けた強敵だ。何人の仲間が餌食となったことだろう。けれど兵達の面差しに強敵に対する怯えの色は見られない。

この作戦ならば、必ず勝てる。副将軍を務めるウエイスハルトは確信する。

何しろ聖水を『樽で』準備したのだ。ポーション瓶にしておよそ800本。

日々100本の上級に加え、僅か2週間足らずでこれだけの聖水を用意するとは、恐るべき錬金術師であることよ。

ウエイスハルトは、兵達は、金獅子將軍レオンハルトの号令を待

ちわびる。

あの日の雪辱を令こそ。

レオンハルトの号令に、キングバジリスクの討伐は今、幕をあけた。

話は2週間ほど遡る。

「えー、無理ですよ。上級特化型の解呪ポーション100本とか。材料足りませんよ。苔ですよ、プラナーダ苔。プラナーダ苔ってなんで迷宮で採れないんですかね？ガーク爺も扱ってないんですよ。無理です。」

珍しくマリエラがポーションの依頼にNOを出す。プラナーダ苔はポーション瓶を作った川原の岩陰で採取したものが残っているが100本にはとても足りない。生えていた苔もあらかた採取してきたから、100本分を追加で回収することもできない。購入したくともガーク爺すら「しらん」と言う物入手できる見込みはない。迷宮のあらゆる薬草を網羅している（エルメラ薬草部門長談）『薬草薬効大辞典』にすら載ってないのだから、プラナーダ苔の稀少さがわかるうというものだ。

「大体、呪いを使う相手なら、聖水を準備しとけばいいじゃないですかー。」

何気なく漏らしたマリエラの一言が、キングバジリスク討伐作戦に大きく影響を及ぼし、マリエラが毎朝早起するハメになるうとは、その時は思いもしなかった。聖水の注文がマリエラが入れそうなサイズの樽単位で入った時は、何度も聞き返したものだ。

「マリエラ、おはよう。朝だぞ。」

今日もジークは早起きだ。あまり寝なくても平気だとかうらやましすぎる。マリエラは眠い目をこすりながら何とかベッドから這い出す。外はまだ暗くて、朝日はまだ昇っていない。それもこれも、どっかの將軍様だか副將軍様だかが聖水を1樽とかわけのわからない注文をするせいだ。ポーション瓶800本分だ。ランク的には中級で難しいものではないけれど、材料を集めるのが面倒すぎる。言い出したのはマリエラだけれども、聖水の代金には盛大に色をつけてもらおう。時間外労働なんだから割増料金を請求するのだ。

「ううー、さぶいー。」

季節は秋から冬に移ろうかという頃。日の出前の時間はとても冷え込み、手足がかじかむ。こんな時間に水撒きとかなんの罰ゲームだ。いや、仕事だけれども。

ジークが準備してくれた如雨露ジュウロや桶に命の雫を籠めた水を溜め、二人して屋上へ上がる。マリエラの家ですぐ脇には聖樹が生えているから、屋上に上ると聖樹の上端近くに手が届く。聖樹の天辺は屋上に登ったマリエラの背よりも高いけれど、ここからならば問題はない。

屋上から聖樹に向けて如雨露で水を撒く。聖樹の葉全てにしずくが掛かるようにジークが風魔法で水滴を軽く吹き飛ばしながら、二人して満遍なくたつぷりと水を撒いていく。

たまに悪戯な風が、如雨露からこぼれる雫をマリエラの方に吹き飛ばしてきて冷たいったらないのだが、夜明け前に全部撒ききらな

いといけないからじっと我慢だ。

水を撒き終わると今度は1階まで降りて、たらいやら桶やら鉢やら皿やら家中の水を溜められそうなものを片っ端から聖樹の根元においていく。先ほど撒いた余分な水滴がぼたぼた梢から滴ってきて、これまた寒い。首に掛かるとひやっと叫んでしまう。

容器を置き終わったなら、あとは、日が昇るのを待つだけ。

聖水の材料は『聖樹の朝露』。朝の光をたっぷり浴びた雫に聖樹の恵みが溶け込んで、邪を払う聖なる力が宿るらしい。大切なのは朝の光と聖樹の恵みで、別に結露でできた水でなくても、雨水でも散水でも水であればなんでもいい。命の雫を溶かした水なら効果も上がるし尚のことよし、ということ、手っ取り早く日の出の前に朝露を準備したというわけだ。

ほかほかと湯気をあげる砂糖がたっぷり入ったココアを飲みながら、暖炉の前で日の出を待つ。

ドワーフトリオが教えてくれた『家具市』で揃えるつもりだったので、暖炉がステキなりビングに家具は揃っていないけれど、ふかふかの白い毛皮のラグが敷いてある。イエティーという雪猿の毛皮らしい。

迷宮都市には職人が不足しているから、毛織物等は手に入りづらいが、魔物の毛皮などは沢山出回っている。これもその一つで白くて毛足の長い温かな毛皮だ。一本一本の毛は見た目よりしっかりしていて、パンくずなどを食べこぼしても毛皮と一緒にダメになりにくく、しかも家で洗える、というご家庭向きの事情もあって人気のある商品だ。

朝から暖炉の前で、ふかふかの毛皮の上に座って寛ぐなんて、何

て贅沢なんだろう。

家具がないからテーブル代わりに木箱をおいているのがなんとも貧乏くさいのだが、マリエラとしてはむしる落ち着く。

「この木箱を越えるテーブルが売ってるといいね。」

「この木箱以下のテーブルが売っているのか？」

等といったもの調子で雑談をしている間に日が昇る。

朝日の中で聖樹がきらきらと煌いている。葉にたつぷりと蓄えた雫が朝日を受けているのだが、朝日と聖樹の恵みをたつぷり受けた雫は何処と無く神々しい。こういう姿を見るとやはり特別な樹なのだと思える。

ジークが軽く風の魔法で梢を揺らすと、葉に蓄えられた雫は小雨のように下に並んだ容器に落ちる。

トン、トトン、タン、タタン

精霊たちがもしもこの場にいたのなら、きっと音にあわせて踊っていたろう。きらきら光る朝露が奏でる音色を堪能し、マリエラとジークは朝露を樽に集めて行った。

こんな地道な作業を毎日毎日繰り返し、2週間ほど掛けて漸く1樽分の朝露が集まった。

。 残る材料は、『精霊の炎で焼き清められた塩』と『乙女の髪の毛』

『精霊の炎で焼き清められた塩』は久しぶりにサラマンダーさんに来てもらって焼いてもらう。『焼き清められた』とあるけれど、『溶けて固まった』と言う方が正しいと思う。

最後の『乙女の髪の毛』は清らかな女の子の髪の毛。ほんのちよつとでいいのだけれど、なるべく若い方が効果が高いらしい。かといつて赤ちゃんは駄目。性別意識に目覚めていないといけならしい。

丁度良いタイミングで、『ヤグーの跳ね橋亭』の看板娘エミリーちゃんが「父ちゃんが髪ぎざぎざに切ったー！」と泣きながらやって来て、揃えてあげたことがあったので、その時の髪の毛を使う。10歳だし、物凄く効果が高いと思う。自分の分のクッキーをお父さんにあげようとする位やさしい子だしね。

この作戦とやらが凄くうまくいったなら、隠れた貢献者はエミリーちゃんの髪をぎざぎざに切ってしまった『ヤグーの跳ね橋亭』のマスターだろう。

こうしてできた1樽分の聖水を元に、キングバジリスク討伐作戦は幕を開けた。

材料費が塩以外タダじゃないか、等といつてはいけない。マリエラの至福のお寝坊タイムとエミリーちゃんの髪の毛はプライスレスなのだ。

呪い蛇の王

「ホーリーシールド！」

6人ほどのチームに配属された盾職が次々と聖なる守りの盾を發動する。鏡のように磨き上げられ、呪いを跳ね返すミラーシールドとあわせて使うことで、バジリスクの石化の呪いを難なく受け流していく。

盾職と前衛、『聖なる護り』が使える付与術師に回復職で構成された6人のチームは、キングバジリスクが生み出した通常種のバジリスクをうまくいなし、押さえ込んでいく。

今はまだ、通常種こまじゅのバジリスクを倒してはいけない。

数が減れば、キングバジリスクは新たな蛇バジリスクのしもべを創りだす。蛇のしもべが発生する場所は予測が付かないから、キングバジリスクに挑む戦力が狙われると戦線は一気に乱れる。

そのために、8のチームに蛇のしもべを押さえ込む責務を与えられていた。

邪魔を排した主力部隊は、キングバジリスクに相対する。

「つがえ矢！放て！」

ウェイスハルトの合図に従い、弓兵達は聖水を凍らせて作り出した矢を放つ。鏃やじりは流線型をしていて通常の矢尻よりも10倍以上も大きい。鉄の比重を考えてもキングバジリスクに到達しうるギリギリのサイズに作ってある。当然通常の矢よりも速度は出さず貫通力は

期待できない。

何本もの矢が放物線を描き、雨霰のようにキングバジリスクに降り注ぐ。

急冷した矢尻は内部まで凍っておらず、キングバジリスクの堅い鱗に当たって脆くも崩れ去る。

内部に籠められた聖水をキングバジリスクの表皮に撒き散らしながら。

「シャアアアアアアアアアアアッ」

胴の長さと不釣合いに長い尾や頭部で氷の矢を振り払うキングバジリスク。弓兵たちの聖水の矢はキングバジリスクを傷つけることは叶わない。けれど鱗を覆う錆のような呪いの瘴気は聖水によってたちどころに浄化され、キングバジリスクは不快げに体を震わせる。

今だ。

「全軍、かかれ！」

レオンハルトの咆哮に、遅れをとるなと兵達が続く。

向かい来るレオンハルトを喰らいつくさんと、キングバジリスクは鎌首をもたげ、蛇の顎をくわつと開く。その頭部へ向けて、魔術師たちが聖水を核とした氷を槍の如く叩き込む。

聖水の氷の槍はキングバジリスクの頭部を強かに打ちつけ、強靱な鱗を何枚も傷つける。大きく開いた口の中にも突き刺さる。呪いを纏うキングバジリスクにとって聖水は毒のようなもの。氷の槍を噛み砕かんと閉じた口元にレオンハルトら抜刀した兵達が切りかかる。

忌々しい。そのような感情が、この魔物にあるのだろうか。キングバジリスクからすればレオンハルトなど小さく脆弱な生き物だろう。石と化し糧と成れ、と石化の邪眼で睨め付けるけれど、『聖なる護り』が邪魔をして呪いはレオンハルトに届かない。幾度『聖なる護り』が破られようと、後ろに控える付与魔術師が絶え間なく『聖なる護り』を掛け続け、僅かな切れ間も二重の守りを与える聖水の加護が切れることはない。

ならば踏み潰すまでと、キングバジリスクは8本の巨大な足を踏み鳴らし、レオンハルト達に挑み来る。

「散開！」

号令一声で四方に陣形を移す迷宮討伐軍。移動の僅かな隙を、キングバジリスクの長い蛇の尾が、歪に伸びたその首が鞭のように振るわれる。吹き飛ばされ、石柱に叩きつけられる兵士たち。高速で振るわれた尾から打ち出される衝撃波が、兵士の手足を切り飛ばす。たった一撃で致命傷になりかねない強撃だが、前線に配属された治癒魔法使い達が間髪いれず放つ治癒魔法によって即死だけは防がれる。

治癒魔法使い達の前線への投入は今回からの試みだ。今までは彼らの魔力を温存し、長期戦に堪えうることを第一としてきた。回復職を前線に投入することで、キングバジリスクに対しても、盾職の前線投入を最小としレオンハルトら攻撃重視の作戦に切り替えることができた。

治癒魔法では即時回復が難しい負傷者は、直ちに戦線を離れ二レンバーク率いる治癒部隊へと運ばれる。治癒部隊に残る治癒魔法使いは、前線に不向きな僅かな人数しかない。今までであれば治療が間に合う人数ではない。しかし。

「ポーションを惜しむな。赤、黒を優先的に使え。黒は効果にばらつきがある。足りなければ中級、上級を使ってい。兵士の体力を優先しろ、治癒魔法で体力を消耗させるな。」

治癒部隊にニールンバークの指示が飛ぶ。

前回の負傷者達をニールンバークと共に治療してきた治癒部隊だ。内臓が破裂していようが、手足がおかしな方向を向いていようが、いや、取れてしまっていたとして、今更動じることもない。

「スパツと切れていると治しやすいですね！」

「次は、取れた手足は自分で拾ってきてくださいね！」

そんなことを言う余裕さえある。

治癒された兵士はすぐさま戦線に戻っていく。肉体を、精神を削りあうような、消耗戦の最中へと。

アグウィナスの屋敷へ奴隷商レイモンドの馬車が入って行ったのは、レオンハルトら迷宮討伐軍がキングバジリスクに挑むほんの数時間前のことだった。

「『ご依頼の『商品』をお届けに参りました。』

慇懃に振舞うレイモンドにアグウィナス家の家令は代金の入った袋を手渡す。

「……。確かに。」

レイモンドは代金を受け取ると、一礼して屋敷を後にした。「次の注文は」などとは尋ねない。レイモンドは奴隷商。注文を受ければそれに応じる。客の選り好みはしないし、詮索も、秘密を漏らすことも決してしない。取引に私情は挟まない。それは彼ら奴隷商に課せられた《制約》の一つでもある。

けれど、この客は『消耗が早すぎる』。

人の売買を行う奴隷商は世間一般に忌避される職業だ。けれど彼らには刑務官や執行官としての側面もあり、国家による保護と監視を受ける職種でもある。レイモンドら奴隷商がもつ《隷属契約》のスキルは使い方によっては非常に危険なスキルだ。罪なき者を強制的に隷属させることもできる。

このような国家にとって重要度が高く保有者の少ないスキルは、鑑定紙の『その他』の項目に分類され、鑑定紙では知ることができない。『その他』スキルを保有する者は、専門の機関に集められ特殊鑑定紙によって鑑定が行なわれる。その能力は国家によって見出され取り立てられていく。

《隷属契約》のスキル保有者は幼い頃から専門の思想教育が施され、数多くの《制約》を受けた後に奴隷商として身を立てる。

人の売買を繰り返すうち、レイモンドの心はずいぶん磨り減ってさざめくこともなくなってしまうたけれど、彼は本来公正で善悪をわきまえた人間だ。《隷属契約》のスキルを見出されて以来、そうあるように、教育されてきた。

例え犯罪を犯したものであっても、この世界に彼らを十分更生さ

せつる余力が無く、犯罪奴隷とするしかなかるうとも、たやすく『消費』してよい』もの』でないことを、レイモンドは理解している。

こんな客に会う度に、自分が部品か何かのように思える。数多の《制約》に縛られ奴隷商をやめることはできない。『商品』が『消費』されると分かっていても、売らないことはできない。

いつそ本当に部品のように、何も感じなければいい。もう、ずいぶんと心動くことはなくなってきたけれど。

奴隷達を乗せてきた2台の馬車を先に帰し、レイモンドは街をゆっくり走って帰るよう御者に命ずる。ゆっくりと流れる街の景色を、馬車の窓からぼんやりと眺める。

転んだ子供をあやす母親、追いかけあいながら駆けていく子供たち、夕食の食材を売りさばく威勢の良い店主。

そんなありふれた情景を眺めるのが、レイモンドは好きだった。

彼の眼に、ふと若い男女の姿が映る。

「ジークモリンクスも、どうしてオーク祭りのバーベキューパーティー連れてつてくんなかったのよー。」

「マリエラは、恋人を募集していたのか？」

「ちちち、違うよつ。お肉つ。お肉だよ。折角のタダ肉チャンスがもつたじゃないじゃないつ。……違うからね？」

「ははは。まあ、参加していたら俺やリンクスがモテ過ぎて、マリエラ一人で肉を食べるハメになったろうな。」

「ぬーつ。そんなことないですうー。私だってモテモテでモテモテでお肉どころじゃなかったハズですうー。」

「じゃあ、いいじゃないか。どうせ肉食べれなかったんだしな。折角だから、今日はミノタウルスでも食べようか？オークばかりで飽きただろつ。」

「ミノ肉！ハンバーグがいい。捏ね捏ねして大きいの作ろう！」
「……、マリエラは、ほんっと、練ったり捏ねたりするの、好きだな。」

あの少女には見覚えがある。死に掛けた奴隷を買った娘だ。隣の男はまさか。

自ら掛けた隷属契約の残滓を感じる。間違いない。生きていたのか。

少女の隣で死に掛けていた奴隷は柔らかく笑っている。その表情はとても自然で穏やかだ。けれど油断無く周りに気を配り、少女を護っていることがわかる。

（よかった。）

レイモンドは思う。良い主に出会ってくれて、本当に良かったと。

死に掛けていたあの奴隷がどのようにして助かったのか、そんな詮索をしはしない。幸運に恵まれた『商品』がいたと知れただけで十分だ。

客の選り好みも、詮索も、秘密を漏らすことも決してしない。それは彼ら奴隷商に課せられた《制約》の一つだから。

レイモンドを乗せた馬車はマリエラたちとすれ違い、ゆっくりと奴隷商館へ帰っていった。

呪い蛇の王（後書き）

場面切り替えにラインを入れてみました。

材料

おかしなこともあるもんだ。

アグウィナス家に運ばれてきた奴隷の一人は、目の前に配られた、温かなスープを見て思う。

隷属の焼印を押されて尚、足には鎖がつけられ手は体の前で枷をつけられている。

彼は帝都でも有名な盗賊団の一員で何人も人を殺めてきた重罪人だ。アジトがばれて頭や抵抗した仲間が殺された。運良くというべきか、鈍器で殴られ失神したこの盗賊と弟分は捕らえられ、取調べが終わるなり犯罪奴隷に落とされた。

奴隷になってさして日は経っていないが碌な物を食べていない。与えられるパンはどれも古くなった廃棄直前のものばかりで、乾燥して堅かったり、腐り掛けですっぱい臭いや味がしたり、カビが中にまで生えていたり。

黒鉄輸送隊の馬車で揺られている間は、雑穀が混じった獣くさい乳で、腹に溜まりもしなかった。

それが奴隷商館に着いた昨日は、夕食にオーク肉が出された。薄く切られて量も少なく僅かな塩で味付けされただけのものではあったが、久しぶりの肉だ。

昨夜の寝床としてあてがわれた地下の牢屋での食事だ。監視の目を盗んで喧嘩をし、『商品価値』を下げないようという配慮だろう、おとなしそうな者は数名まとめて大部屋に、重罪人の盗賊は個室に入れられた。監視がしやすいようにだろうか、廊下に面した壁面は

鉄格子で他の牢が良く見える。

監視の者が出て行った後、盗賊は自分の肉を食べながら大きな声でこういった。

「俺たちやア、同じトコへ売られるらしいなア、ってこたあこれから仲良くやっていく、ご同輩ってわけだ。そうだろう？弟よ。」

「そうですね、兄ィ。お前らもそこところ、よーつく分かつてるよなア」

「それにしても、腹が減ったなア、これっぽっちの肉じゃあ、足りやしねえ。」

そう言つて、他の牢屋の奴隷達の顔を、一人一人じっくりとねめつけていく。

同じ場所に売られた後、目をつけられてはかなわない。その眼力に耐えかねた一人が、自分の肉を差し出すと、周りの奴隷達もその皿に肉を乗せていき、盗賊の下に大量の肉が集まった。

集まった肉の量は多く、盗賊二人で食べきれなかったので、今朝も腹いっぱい食べている。

だから腹は減っていない。肉を取り上げられた他の奴隷達は、アグウィナス家で供された肉の欠片の入ったスープをがつがつと食べているが、盗賊二人はスープの肉だけ食べた後、監視の目を盗んで近くの奴隷の皿に自分のスープを流し込んだ。

（おかしなこともあるもんだ、扱いが良すぎやしねえか？）

運ばれた先では肉が与えられ、売られた先でも温かい肉の入ったスープが出される。

歓迎されたと考えるような甘っちょろい考えは盗賊にはない。自分たちがそういう上等なモノでないことを知っているからだ。空のスープ皿を抱えてじっくりと辺りをうかがう。

ここの館の人間はいつもヒョロイ男どもだ。隷属紋さえ発動しなければ、例え手足を枷で拘束されていようと、簡単に倒すことができそうだ。隷属紋の焼印を押されたときに、『主』となる男は現れなかった。瓶に入れられた血液で契約がなされたから、誰が自分たちに《命令》できる『主』かはわからない。

(どいつだ……?)

『主』がいなければ、逃げ出すこともできそうだ。

「う……。」

ごとり、とスープを注いでやった隣の奴隷が皿をひっくり反して倒れる。盗賊が注いだスープは食べ切れなかったのか器からこぼれて盗賊にかかる。

「きたねえな」そう文句を言おうとして、盗賊はうまく口が動かないことに気付く。

(毒……、いや痺れ薬か?)

わざわざ買った奴隷を殺す意味はないだろう。素早く周囲を見回すと、連れてこられた奴隷は皆倒れ伏している。さっと弟分に目配せをする。『合わせろ』と。弟分もいくらか薬は回っているが、意識を失ってはいないようだ。

アジトを襲われた時もそうだった。こういうものには時機ってものがある。闇雲に暴れるのはあほうのやることだ。

(碌でもねえことを企んでやがんだらうが。あのひよるモヤシども、恐らくたいして鬩えねえな。)

手足の自由を鎖で奪い、隷属紋を刻まれた奴隷に薬まで盛る連中だ。暴れられたら困るから、薬を盛つたに違いない。幸いたいしてスープは食べていない。意識を失ったフリをして、痺れが取れた隙に暴れて《命令》される前に逃げだそう。『主』が分かれば成功率は跳ね上がる。倒れたふりをしていけば、じきに姿を見せるだらう。なあと、道は覚えている。ここは古い屋敷の地下室だ。一本道で迷いようもない。

盗賊は倒れたふりをして、辺りの様子をじつと窺う。運び込まれた奴隷達が皆動かなくなつてようやく、奥の扉が開いて数人の男たちが出てきた。人が乗れる大きさの車輪が付いた台車に、薬で痺れた奴隷達を一人ずつ乗せて、奥の部屋へと運んでいるようだ。

一人の男が台に乗せられた奴隷を検分すると、「そいつは赤の間へ。コイツは準備室だな。」などと指示を出している。どうやら部位欠損のある物は「赤」の部屋へ、五体満足の者は「準備室」へと振り分けられるようだ。

(マズいな。アイツはとつ捕ま^{弟分}つた時に腕を一本持つてかれてる。このままじゃあ、別の部屋に入れられちまう。

逃げるにも、仲間が多いほうがいい。恐らく赤だの準備室だのと偉そうに指示を出しているあのヤロウが『主』だらうが、なかなかこの場を離れやがらねえ。)

次々に運ばれていく奴隷たち。自分たちの順番はすぐそこまで迫っている。じりじりと焦れる盗賊。弟分も同じ気持ちなのだらう。

さつきからせわしなく視線を盗賊に送ってきている。
手足の痺れもずいぶんましになってきた。いつそ一か八か賭けに出ようか。

盗賊の辛抱が限界に達そうとしたその時、奥の部屋でなにやら動きがあったようだ。指示を出していた『主』と思しき男が、部屋の奥へと引つ込む。

（今だ！）

弟分へ目配せするや、盗賊たちはぱつと立ち上がり、入ってきた扉へ向けて踏み出した。

その時。

「《動くな》。残念だったね。ここから逃げることはできませんよ。」

いつの間に、いつから其処にいたのか。盗賊達の後ろから声がした。

恐らく若い男だろう。顔は見えない。《動くな》と命じられてしまったから。

「台をこちらへ。拘束具も忘れずに。薬を除ける知恵もありますよ、油断しないように。」

隷属契約の《命令》は魔力を消費する。効果は命ずる側の魔力と命令の内容、受ける側の意識によって大きく変わる。『今からお前を殺すから、そこから一步も動くな』と命じられた場合の効果時間はいかほどか。

さして長くはないだろうその《命令》の効果時間に、盗賊たちは

台に縛り付けられる。ご丁寧に猿轡まで噛まされてしまったから、わめき散らすこともできない。大声で暴れば薬で眠った他の奴隷が起き出して、その混乱に乗じることができたかもしれないのに。
(ちくしょう、ツイてねえ……。)

台に縛り付けられた盗賊は『準備室』へ、ふごふごと何か言おうとする弟分は『赤の間』へ、二人は台に縛られ運ばれていった。

「残った者の移動と拘束を、早く済ませてしまいなさい。そろそろ薬が切れる頃です。」

その目は既に、決死の脱出を試みた盗賊たちを見てはいない。いや、連れてこられた奴隷達など最初から個々の人として見てなどいないのだ。

「先ほどの二人は体力がありそうだ。長持ちしてくれると良いのですがね。」

残る奴隷達の移動を見届けると、ロバートも奴隷達が運ばれた奥の部屋へと向かう。先ほど「赤の間」でなにやら騒ぎがあったようだ。どうせ目覚めた奴隷が暴れたのだろう。主任が向かったから、既に事態は収まっているだろうが。

前回の遠征からおよそ一月半。そろそろポーションの注文が来る頃合だ。製造を急がねばなるまい。ロバートの作った新薬は画期的だ。錬金術師が作り出すポーションに比べればその効果は及ぶべくもないが、『魔法薬』と言って差し障りない効果を発揮する。ポーションの替わりとして必ずや迷宮攻略の助けとなるだろう。

ロバートは歩みを止めない。200年の永きに渡り、アグウィナス家が歩んできた道の先を進んでいるのだ。錬金術師が絶えたとして、どうして歩みを止められようか。どのような手段を取ろうと必

ずやたどり着く。必ずやエスターリアを連れて行く。
迷宮が滅びた後の、約束の世界へと。

魔力の媒体

「それにしても、マリエラさんの薬は練ってばっかだな。」

いててと肩を廻しながら薬師の1人が話しかける。

商人ギルドの会議室は、薬の作り方の講習会が終わった後も賑わっている。

講習会は作り方の情報料も含まれているから一人一回限りだが、講習会の後に開かれるこの勉強会には受講者ならば何度でも参加できる。参加費も作る薬の材料費とお茶代位で安価だから、技術を習得しても情報交換の場として毎回通う薬師も多い。

今日は痛み止めのおさらいで、20人程の薬師達が炊いたライナス麦をすり鉢で練り練りしている。

練り練りする薬師達の間をキヤル様が歩き回っては、「もう少しですわ、頑張ってくださいまし」等とアドバイスをしている。

キヤル様はアグウィナス家のご令嬢。厄介ごとに巻き込んではいけないと、初めは遠慮して貰っていたのだが、参加する薬師達は皆勤勉でおかしな人はいないので、本人の希望もあって助手として参加している。

人を雇ってまで嫌がらせをしてきた人もいるのだから、もっと面倒なことが起こるかと思っていたのに拍子抜けだ。面と向かってきついことを言われたら、マリエラだって落ち込んでしまうから、協力的な人ばかりで助かったのだけれど。そのような話を勉強会の合間にリエンドロさんと話すと、

「そりゃー、こんなに貴重な情報を提供してくれるんだからー。参

加者には僕とエルメラさんできちんと『お話』してあるよー。商人ギルドの義務でしょー。」
とにこにこ話していた。

平和な講習会はエルメラさん達が裏で働いてくれたお陰らしい。感謝しなければ。ちなみに、参加者に髪の毛がチリチリになっている人はいなかったから、『お話』とやらは口頭で行われたようだ。良かった。

「ちゃんと練らないと、薬効成分とライナス麦に含まれる命の雫が馴染まないですよね。」

マリエラはねりねりしながら、返事をする。練り混ぜ地獄から卒業する何か良い手はないものか。

「命の雫が汲み出せないなら、命の雫を多く含む材料を使って薬効を上げりゃいいってのは、俺らだって考えなくもなかったが、上手く馴染ませる方法を見つけないのは大変な労力だったろうに。」

マリエラが教えた薬の作り方は、様々な応用が利く。アイデア自体は思いついても、何十もの試行錯誤と数々の検証を経なければ辿り着けない価値あるものだ。事実、集まった薬師達も着想はあったものの、方法の確立には至らなかったのだから。

邪魔だと嫌がらせをしたマリエラが、有償とはいえこのような貴重な手法を教えてくれたことに、薬師達は感謝していた。何もエルメラさんたちの『お話』で心を入れ替えただけではない。『お話』の効果が絶大だったことは間違いないのだが。

《ライブラリ》のレシピと錬金術スキルのお陰で、わりとすんなり作り方を見つけてしまったマリエラは、薬師達の感謝に気づくことなく、ノンビリと話を続ける。

「あー、やっぱり思いつきますよね。」

ねりねりねり。ねっちねっちねっちりねちよーんとライナス麦を引き伸ばすマリエラ。どう見ても、ねりねりに飽きている。

「なあ、なんで魔法使って混ぜないんだ？あ、魔力が移ると不味いのか？」

「ん？魔力移っても構いませんよ。ちょっとだけ効果も上がりますし。」

練り混ぜる方法ならば、錬金術スキル以外でもいくつがある。

マリエラが手練りするのには、錬金術スキル以外でうまく混ぜる方法を持っていないだけなのだが、薬師達は手練りに意味があると思っただけらしい。マリエラの答えを聞くとその薬師は意外そうに聞き返した。

「魔力でも効果があがるのか!？」

この問いに部屋は静まり返り、薬師の視線がマリエラに集まる。ねちよーんねちよーんとライナス麦の粘りで遊んでいるマリエラは視線に気付かず、

「あがりますよー。でも魔力は一週間位で抜けちゃうんですよね。」
とあっさりと答えた。

かつてマリエラがリンクス達黒鉄輸送隊に差し入れた、魔力を練り込んだクッキーは1週間で普通のクッキーに戻っていた。なんとなくそうじゃないかと思っただけから、マリエラとしてはクッキーから魔力が抜けたことよりも、1週間もジークがクッキーを食べず

に大事に取っておいたことの方が驚いたのだが。

どうもジークはくだらないものを溜め込む癖があるようだ。長い奴隷生活で私物を持ってなかった反動なのかもしれないが、マリエラが渡した買出しメモなどもこそっとポケットにしまいこんでいるし、二人で飲んだワインはラベルがはがしてあつたりする。

マリエラが部屋を散らかすと、容赦なく捨てに掛かるくせに。

ぷみよんぷみよんとライナス麦を練ったものを丸めてつく。つくたびにふるると揺れてこれはこれで楽しい。というか、ちょっと美味しそうだ。晩御飯は何にしようか。

遊んでいるマリエラに今度はキヤル様が問いかける。

「ポーションは命の雫で薬効を上げるのですよね。薬効の抽出段階でも命の雫を使って薬効そのものを引き上げる。中級以上は命の雫を込める事ができるアプリオレヤルナマギアを配合することで、さらにその効果を高めると聞きました。」

「俺たちはアプリオレヤルナマギアを薬に使ってたけど、これらは命の雫の『器』にはなるが、命の雫自体はたいして含んでいない。だから使っても効果は上がらなかった。ライナス麦やジニアクリームみたいな命の雫を多く含む天然の植物を使うほうが効果が上がる。そうだよな?」

「はい、そうですね。」

真剣なキヤル様と薬師達の様子に、マリエラはようやくライナス麦で遊ぶのを止めて顔を上げると、薬師達とキヤル様が真剣な顔をして話し合っていた。

「命の雫はここでは汲み上げれない。でも、魔力でも効果が上がる

んなら、魔力を使えばいいんじゃないのか？」

「魔力も素材によって箆められる量に差があるんじゃないのか？命の雫と同じ様に『器』になる素材を使えばそれなりの期間効果が維持できるんじゃない？」

「魔力の『器』ってなんだよ？」

「……魔石か？」

「それは、禁忌ですわ。帝都で魔石を体内に取り込む研究がなされたそうです。一時的に魔力量をあげることができたそうですが、被験者は皆、魔石に蝕まれて亡くなってしまったとか。」

議論を繰り広げる薬師達とキヤル様。ライナス表で遊ぶのを止めたマリエラが入り込む隙がない。

仕方がないので、ねりねりを再開する、今日は練ったライナス表が良く伸びる水の量を探してみよう。

「他に魔力を箆めやすい、魔力の媒体は無いのか……。」
その間に、恐らくは皆が考えたであろう答えを、一人の薬師が口にする。

「血……はどうだ？」

「やはり、血しか無いのですよ。」

アグウィナス家の離れの地下にある『赤の間』と呼ばれる部屋で、ロバート・アグウィナスは呟く。

今までどれほどの研究を行なったことか。

井戸水に含まれる僅かな命の雫を濃縮する方法、ライナス麦やジニアクリームなど命の雫を多く含む植物を使う方法、自然から抽出した命の雫をポーシヨンの材料であるアプリオレの実やルナマギアに籠める方法。どれもうまくいかなかった。

研究を進めれば進めるほどに、命の雫という物は人の手に余る代物だと思える。錬金術師が地脈と結ぶ『ライン』というものは、命の雫を汲み上げるパイプではなくて、自らの精神の一部を地脈と繋げることだという。命の雫というエネルギーを扱う権利や権限を、精神の一部を地脈とつながることで手に入れる。つまりポーシヨンは地脈の力を使って作り出されるとも考えられる。

ならば人の手で操れるエネルギーは何か。ロバートは魔力による魔法薬の製造に傾注した。

多くの魔力を含み、あるいは宿すことができ、人との親和性が良い。

誰もがたやすく思いつくであろう『人間の血液』という魔力の媒体は、同時に進められた他の代替品より遥かに高い効果を示した。

「血液採取用の奴隷の手配を。」

その命令が、ロバート・アグウィナスという男の人生の分岐点だった。

「うーっ、ふーっ、ふはーっ。」

猿轡を噛まされた盗賊の弟分が身をよじる。目は血走り、拘束具を引きちぎろうと暴れている。

彼が運び込まれた『赤の間』には、彼が横たわっているのと同じ台車が幾つも並べられている。台車に寝かされた人々は皆、足と頭を高くするように体を軽くVの字になるように拘束されていて、鼻腕、恐らく下半身だろう場所から細い管が伸びている。鼻に通された管は胃まで到達しているのだろう。鼻から伸びた管は台の上部に取り付けられた袋から、栄養と薬が混ぜ合わさった液体を少しずつ送っている。とすれば下半身の管は尿管だろう。腕から伸びる赤い管は言うまでもない。

どれほどの時間、ここに繋がれているのだろう。部屋の奥の台車に固定された人間の筋肉は衰え、手や足の指は丸く曲がった状態で固まってしまっている。

台車の間を行き来するこの館の男たちは、赤い管がつながれた魔道具を時折チェックしては、手に持った帳面になにやら書き付けている。

「ロバート様、28番ですが3日前より魔力値が規定値を満たしておりません。」

「魔力値を70に引き上げなさい。」

「ですが……。」

「寿命ですよ。魔力値が規定値を超えたら、全て抜ききりなさい。」

ロバートに指示された男は、28番と呼ばれた台車の男に近寄ると、鼻に通された管の袋を別の物に取り替える。新しい袋の液体を流し込まれた28番は、骨と皮ばかりの体をぶるぶると震わせはじめた。

「かつ、かはつ。」

28番は、咽をのけぞらせ、大きく口を開けて舌を突き出す。ひっひつと短い呼吸を繰り返しながら痙攣を続ける。長期にわたる拘束の末に筋肉は萎え、関節が固まってしまっているのだろう。僅かな力も残されていないらしい28番の末期の発作は、暴れる、と表現できるほど力強いものではない。けれど、だからこそ、見るものに恐ろしさを感じさせる。

「魔力量、規定値に達しました。吸引開始します。」

「はじめなさい。」

ロボットの指示を受け、男は魔道具を起動する。見る間に萎び、枯れ果てて行く人間だったもの。

どれほどの期間、血を、魔力を、生命を、その身のうちを搾り取られてきたのだろうか。そしてその末期にさえ、残さず搾り取るかどうか。

これから俺は、どれほどの期間、同じ目に遭わされるのだろう。

盗賊の弟分は、渾身の力で拘束を振りほどこうと身をよじり、暴れる。その目は恐怖で血走り、猿轡をかまされた口の端から唾液が泡になってこぼれる。

《眠れ》

ロボットの《命令》が盗賊の弟分に下される。《眠れ》《眠れ》《眠れ》。

(いやだ、いやだ、いやだ、二度と目覚めない眠りになんて、つき

たかねえ、助けてくれよ、兄イ！)

嫌だ、助けてと請う人々をあざ笑いながら切り捨ててきた代償か。これは見合つた報いなのか。

ロバートの《命令》に、盗賊の弟分はついに意識を手放した。

「血……はどうだ？」

冒険者ギルド薬草部門の会議室で、薬師の一人が繰り返す。薬の効果を魔力であげる媒体として、血液はどうだろうか。それは、ここに集まる皆が考えた答えだったろう。

「血か。確かに契約術式でも使うしな。魔力を多く含むし、籠めることもできる……。でもなあ……。」

「ろくでもねえな。」

「ああ。人を癒す技じゃねえ。」

たどり着いた答えに、薬師達はため息をつく。そんなおぞましい物は薬とは言わないだろう。黙りこむ薬師達の中で、マリエラはみよいーんみよいーんとライナス麦を練り伸ばす。すごい伸びだ。新記録だ。薬の効き目は変わらないけれど。

「痛い痛いのとんでけーって魔力を籠めるといいですよ。魔力はすぐに飛んじゃうけど、魔力に籠めた思いはきつと残りますから。」

せつせと練り混ぜるマリエラに、薬師達は苦笑する。マリエラの薬は良く効きそうだ。痛んだ体だけでなく、心も癒してくれそうだと。

「まあ、魔力の件は置いとくとして、マリエラさんよ、攪拌機使ったら駄目かい？」

「へ？攪拌機？なんですか、ソレ。」

二度目の沈黙が会議室に訪れた。

「マリエラ……。俺たちの村は、田舎だったからな。魔道具はほとんど無かったから。こういうものを混ぜる魔道具が有るんだよ。菓子屋で生地を練るのにも使われているんだ。」

マリエラの後ろで護衛に徹していたジークが、こっそりとマリエラに教える。2000年のタイムラグを埋めてくれる便利な幼馴染設定が炸裂だ。

「ふえ、ふえええええええ！？そんな便利なものがっ！！？」

「……、マリエラさんは練るのが好きなんだと思っていたよ。」
「痛みが飛ぶように願いを掛けるなんて、ステキだと思いますわ。」

薬師達やキャル様の思いやりが、混ぜ混ぜしすぎて疲れた二の腕に染み渡る。

その後、薬師達と魔工技師の協力により、薬製造に特化した混練パターンと攪拌羽がついた専用の攪拌機が製造され、第1号機がマリエラの店『木漏れ日』に寄贈された。

マリエラを練り混ぜ地獄から解放した攪拌機は、薬の製造だけで

なく、大量のクッキー作成にも活用され、『木漏れ日』をますます何の店か分からない状態にしたのだが、迷宮都市のいくつかの薬の品質が高水準で安定したことに比べれば、どうでもよいことだっただろう。

378分のゼロ

「オオオオオ」

金獅子將軍と呼ばれる男の咆哮が擦り切れそうな兵士の心を奮い立たせる。何度打ち倒されようと、レオンハルトは立ち上がる。

200年前のエンダルジア王国滅亡を一人の王妃が逃げ延びた。

王妃はその身に姫君を宿していたという。当時のシューゼンワルド辺境伯は、王妃を助けたアグウィナス筆頭錬金術師に兵を貸し与え、迷宮都市復興に尽力した。

王妃の生んだ姫君はシューゼンワルド家に輿入れし、シューゼンワルド家に迷宮都市を治める正当な権利を与えた。その血を引くシューゼンワルド家次期頭首、レオンハルトには迷宮都市の王たる正当な資格がある。

無論帝国に対する謀反の意があるわけではない。帝国は領地内の亡国の末裔による領地の支配と自治をある程度認めている。皇帝は歴代のシューゼンワルド家頭首に申し伝えてきた。

「シューゼンワルドよ、汝らの土地をその手に取り戻せ。」

そう。迷宮都市はシューゼンワルド家の領地。魔物の統べる土地ではない。

「迷宮を打ち倒し、この地を再び我らの手に。」

シューゼンワルド家の悲願は、呪いのようにレオンハルトを縛り

付ける。

戦って、戦って、戦って、死ぬ。

運良く生き残れた者がその血を繋ぎ、志を継ぐ。

シューゼンワルド家の悲願の元、レオンハルトの旗の下で、一体どれだけの同胞が死んでいったことだろう。

どれほど傷つき打ち砕かれようと、立ち止まれるはずがない。倒れ伏すわけには行かない。

レオンハルトの命は、未だ潰えていないのだから。

レオンハルトは呪い蛇キングバジリスクの王に切りかかる。後ろに続く同胞達。

彼ら主力が切りつけ、離脱した隙を、弓が、魔法が援護する。勿ね飛ばされ重症を負った兵達は、すぐさま癒され戦線に舞い戻る。

どれ程の時間、この戦いを繰り返しただろう。

何人もの同胞を石化し飲み込んできた呪わしき蛇の王は、生者全てを呪い尽くすかのようなおぞましい声をあげた後、ついに大地に倒れ付した。

「ウオオオオオオオオ!!!」

レオンハルトは剣を握った拳を突き上げる。それに続く兵士達。

幾度も敗退し続けた呪い蛇の王の討伐は、今ここに成った。

感極まって言葉にならない勝鬨をあげるレオンハルトを見やりながら、ジャック・ニーレンバーグ治療技師は安堵の息を吐く。辛く

も勝利した、という感が拭えない。彼も治療部隊の面々も魔力は枯渇寸前だ。それは誰もが同じだろう。魔力も物資も底を付き、それでも勝ち得なかった今までを思えば、価値ある勝利であることは間違いない。ポーションが潤沢にあるということは、これほど戦果に影響するものなのか。

「ポーションの使用本数を報告しろ。上級の総数だけでいい。」
「はっ。378本です。」

通常の遠征の10倍以上の本数だ。しかも中級ランクに該当する聖水が樽で準備されている。ポーション瓶換算で800本だ。確かに惜しむなと命じはしたし、今回の選抜軍全員に、遠征中のいかなる情報も漏らさないよう、いつもより強い《誓約》を行わせている。

（だとしても、ずいぶんと思い切った作戦に出たものだ。……、いや、他に手立てなど無かったろうがな。）

ジャック・ニーレンバーグは思う。まるで碁盤の升目が塗りつぶされる寸前に、天から一石が投じられたようだと。

盤面が塗り変わる、その節目が今であるような、そんな感覚をジャック・ニーレンバーグは感じていた。

「おめでとうございます、兄上。」

ウェイスハルトが満身創痍の兄を言祝ぐ。かくいうウェイスハルトも魔力の枯渇寸前で、立っているのもつらい状況なのだが。

「良く戦ってくれた、ウェイス。皆もだ。この一戦は大きいぞ。し

て、次の階層への階段は？」

「はい。確認されました。今、斥候部隊を調査に向かわせております。じきに状況が知れるでしょう。ですが、大層お疲れのご様子。一度基地へお戻り下さい。」

「構うな、ウエイズ。ここまで来たのだ、第一報だけでも聞かずに戻れようか。」

迷宮53階層を突破し、54階層への道が開いた。この迷宮が何階まで続くのかは誰にも分からない。もしかしたら、54階層こそがこの迷宮の最深部かもしれない。

最深部には迷宮の主がいるという。迷宮の主は他の階層主と全く異なるモノだと言われる。姿かたちがではなく、その存在が。迷宮討伐を行ってきたものならば、それが迷宮の主であると一目でわかると言い伝えられている。

だから、もしかしたら、最深部到達の知らせを携えた斥候が戻ってくるかもしれない。

それは、ここにいる誰もが思ったことだろう。だからぼろぼろで立っていられず地に座り込んだまま、階層の境の安全地帯でレオンハルトは斥候の帰りを待っていた。

彼が待ちわびた知らせは、思いのほか早くにもたらされた。

斥候の困惑げな表情に、レオンハルトは状況を悟る。最深部ではなかったのだと。

けれどもたされた報告は、彼の思いをさらに裏切るものだった。

「ご報告申し上げます。第54階層は……、水没しておりました。」

第54階層は、果てしなく広がる海の階層だと、その斥候は報告をした。

レオンハルトが何度も血を吐き死に掛けて、ようやく超えたその先は、更なる障壁が待ち受けていた。

ジャック・ニーレンバーグが自宅に帰り着いたのは、呪い蛇の王討伐の翌日の昼過ぎだった。

遠征部隊は50階層に設置した転移陣から2階層の隠し部屋の転移陣まで転移した後、地下通路を通って迷宮討伐軍の拠点に戻った。

転移陣は極めて高価な魔道具で、緯度と経度が同じ座標間の瞬間移動を可能とする。つまり、高さ方向しか移動できない。しかも対になる魔法陣が魔力的に接触していなければならぬという制約がある。

迷宮は迷宮の主の支配する領域でその魔力によって構成されているものだから、転移陣の設置は可能であるが、迷宮の主が倒れた迷宮では転移陣は機能しなくなる。ようは、生きている迷宮の魔力を利用した人工のバイパス路と言わなければならない物だ。

転移陣は20階層以降、10階層毎に設置されている。20、30、40階層への転移陣は迷宮1階に設置されていて一般開放されているから、起動に必要な魔力か魔石を準備する必要はあるが、誰でも利用することができる。

この迷宮が50階層を超える魔窟であることは、関係者以外には秘匿されている。だから50階層に設置された転移陣の対は、2階層の隠し部屋に設置され、一般には知られていない。2階層ははじめとした洞窟の階層で、スライム程度しか魔物がおらず苔や薬草

と言った植生もスライムに食われてしまっているから、採取すべき資源もない。その一角を表向きには迷宮討伐軍の迷宮内駐屯地として確保してある。

実際は、駐屯地として確保された区画の中に50階層への転移陣があり、さらにその奥は地下大水道へと繋がっている。地下大水道には大量のスライムが繁殖していて通常であれば通路として利用できない。迷宮討伐軍は何年も掛けて、迷宮2階層と迷宮討伐軍の基地を繋ぐ水道を魔力を吸収するレイジスの繊維で舗装してスライムを遮断し、迷宮への直通路として整備していた。

迷宮討伐軍が都市内で勇壮なパレードを行い、大々的に迷宮に進軍していくのは定期的に行なわれる遠征の時だけで、実際は市民が目にするより遥かに多い回数遠征が行われている。

レオンハルトが石化の呪いを受けた際も、この経路で搬送されたからこそ、レオンハルトの負傷も討伐軍の大敗も市民に知られることは無かった。

キングバジリス
呪い蛇の王を倒し雪辱を晴らした勝利の帰還であったが、レオンハルトの足取りは重かった。

54階層へ続く螺旋階段は途中で海水に水没していたという。そこから見える景色は何処までも続く海と空。360度広がる水平線階層階段の上部だけ、取ってつけたように53階層への孔が開いて見えたという。

青い海と青い空の世界で陸地などは確認できない。ただ一点、遠くに柱のようなものが確認されている。

今頃は専門の斥候部隊がその柱を中心に階層の探索に当たっているのだろう。

呪い蛇の王討伐に当たった部隊は皆、満身創痍。治療部隊も魔力切れだから、迷宮内では十分な治療も行えない。基地に戻って十分な治療と休息を取る必要がある。レオンハルトは自らの落胆を顔には出さず、兵士たちをねぎらい、亡き同胞たちに勝利を捧げた。歩みをとめないレオンハルトの背を見つめ、兵士は再び前へと歩みを進めた。

ジャック・ニーレンバーグは基地に戻った後も、兵士たちの治療に当たり、漸く家よつやに帰り着いた頃には、日付はとっくに変わって、時刻は昼を過ぎていた。

「パパ、お帰りなさい。」
「シエリー、ただいま。」

昼だというのに愛娘シエリーの部屋はカーテンが引かれ明かりも消されて薄暗い。ジャック・ニーレンバーグは愛娘を抱きしめると、包帯を巻かれた頭をそっとなぜる。

シエリーの顔には未だ包帯が巻かれたままだ。

巨大スライムの溶解液で受けた傷が治っていないのではない。
傷は治癒魔法によって癒されている。

醜く、溶け爛れた傷跡を残して。

眼球が無事だったことを不幸中の幸いだったと喜べようか。あれほど愛らしかったシエリーの顔は左半分から側頭部に掛けて巨大スライムの溶解液によって溶かされていた。まぶたは溶けた状態でくつついていて、半分閉じた状態で繋がっている。治癒魔法で再生した皮膚は赤黒くでこぼこと歪に盛り上がり、側頭部の毛根は機能を失いまばらにしか髪が生えていない。

無事だった右半分の白い肌、整った顔立ち、黒く顔を彩る艶髪が、ただれた左半分の醜さを余計に引き立たせている。だから包帯を巻いている。包帯を巻いていたほうが、よほど彼女は美しいから。

あの日から3週間。シェリーは一步も家から出ていない。昼も夜もカーテンで光をさえぎった部屋の中で、ずっとこうして過ごしている。

「パパ、お昼はもう食べた？」

「そういえば、昨日から何も食べていないな。」

「良かった。豆とオーク肉のトマトシチューを作ったの。」

いつもの様に笑ってみせるシェリー。

家政婦がこんなに大きなオーク肉の塊を買ってきたから、自分で捌いたのだと話しながら、二人で食卓を囲む。

彼女になんの罪があったというのか。ジャック・ニーレンバーグは砂を噛むような気持ちを押し殺し、愛娘シェリーに微笑みかけ。確かにスラムを通るなどは言った。けれどそれは『悪い虫が付かないように』という程度のもので、迷宮付近の大通りをしかも昼間に歩くなど、本来なんの危険も無いことだ。街中の子供が通る近道をシェリーが通ったとしてどうして責められようか。

巨大スライムを街中に呼び込んだ愚か者キन्दルを八つ裂きにしたくとも、巨大スライムに骨も残さず溶かされ喰われてしまった。間接的に事件を起こした都市防衛隊のテルーテルは、物資の管理を怠りキन्दルの暴走を許した失態も、その身をもって巨大スライムを大通りから引き離れた功績も、一切の申し開きをすることなく、深く頭を下げて処分を受け入れたという。

ジャック・ニーレンバーグの怒りは行き場を失い、心は悲しみに満たされる。

たった一本、上級ポーションがあればシェリーの傷は癒されるのに。

帝都にさえ行けば、シェリーを治すことができるのだ。それは最も確実で、そして直ぐには叶わない問題だった。ジャック・ニーレンバーグには身寄りが無い。妻をなくして以来、シェリーと二人きりで暮らしてきた。シェリーはしっかりと生きていてもまだ12歳。例えヤグー商隊に同行できたとしても、帝都までの過酷な道のりを一人で往けるはずは無い。シェリーを帝都で治すとしても、父であるジャックの同行は必須だろう。けれどジャック・ニーレンバーグには迷宮討伐の任がある。彼は治癒部隊の責任者で、ポーションの手がかりを知る数少ない人間だ。休暇や除隊を願い出たとして、やすやすと認められるとは思えない。

ジャック・ニーレンバーグがシェリーを帝都に連れて行けるまで、あるいはシェリーが一人で帝都へ行けるようになるまで、どれだけの時間、彼女はこの薄暗い家の中で過ごすのだろうか。

若く、希望に満ちたこの時間を、どれだけ失うことになるのか。いつか治るのだからと割り切ることなど、ジャック・ニーレンバーグにはできはしなかった。

378本。

呪い蛇の王討伐で使用した上級ポーションの本数だ。

これらは全て迷宮討伐軍の物。軍の物資たるポーションの私的利用や窃盗は重罪。

その使用権限をジャック・ニーレンバーグが保有しているようにも、
どれほどの本数を兵士たちに使おうと、たった一本さえ、愛娘に使
うことは許されない。

「パパ、どうしたの？ 怖い顔。」

思いつめるジャック・ニーレンバーグをシェリーが見つめる。

「少し疲れただけだ。なんでもないよ。」

そう答えると、ジャック・ニーレンバーグは残ったシチューを飲
み干した。

ロバートの不信感

「今月のポーシヨンの売渡請求はこれだけなのですか？」

ロバート・アグウィナスは年老いた家令に尋ねる。

「はい。ロバート様。先日の値下げ要求の際、ご指示通り従来価格でのお取引をお願いしましたところ、このような本数に。なにやら予算の削減が有ったようでございます。」

迷宮討伐軍が提示してきたポーシヨンの売渡請求は従来のお半分に満たない本数だった。

「おかしいですね。迷宮討伐軍は先の遠征で多数の負傷者を出しているはず。ポーシヨンに余裕があるはずはないのですが。」

アグウィナス家はポーシヨンの管理と研究に重きを置く家柄だが、情報収集を全く行っていないわけではない。市井に出回っていない情報であっても、迷宮討伐軍の診療所内に多数の負傷者が収容されていた程度の情報ならば把握している。他にもアグウィナス家が提供した上級ポーシヨンの残数を把握する術はあるのだが。何れにせよ、先の遠征は苦戦を強いられたようだ。遠征から一月半、負傷者の治療が完了し小規模遠征の開始も確認されている。小規模遠征前に用立てたポーシヨンも殆ど使い切っているはずだから、多量の売渡請求がある物だと思っていたが。

「買い控えて値引きを誘う算段でしょうか。それにしても時期が遅い。今から駆け引きをするなど。小規模遠征は既に始まっている

「は、はずですから。」

ロバートの思案に家令が答える。

「情報屋の話では、埋蔵されたポーションが見つかったのではとのことでした。」

「それは『ありえない』。爺だつて分かっているでしょう。ですが、『その噂』の通り新たなポーションが見つかったのなら……。」

まさか。ロバートは考える。

埋蔵されたポーションが見つかることなどありえない。

なぜならば、アグウィナス家に設置された最高のポーション保管設備でさえ、100年ほどしか命の雫の効果を維持できない代物なのだから。

2000年前の魔の森スタンビートの氾濫の後、ポーション保管設備の開発で魔道具技術は飛躍的に向上した。帝都で最高の頭脳を誇った学者達が考案した保管設備は、ポーションの魔法効果の源である命の雫をポーション内で対流させ、錬金術師がポーション作成の最終工程で付与する《薬効固定》に似た効果を常時与えることで、ポーションの劣化を抑えることに成功した。

その効果は『理論上は』2000年。

これまでの保管容器に比べれば例え途中で劣化が始まろうと、1000年もの間ポーションの保存を可能にした保管設備は賞賛すべきものだったのだろう。けれど1000年スタンビート。魔の森の氾濫直後に作られたポーションが残っているはずはないのだ。勿論この情報は秘匿されている。迷宮討伐軍やシューゼンワルド边境伯家を初めとする各家が保有するポーション保管設備内のポーションは、アグウィナス

家からの定期的なポーション供給によつて古いポーションの入れ替えが行われているから、彼らも真実には気付いてはいないはずだ。ポーション保管設備の保管可能年数と共にアグウィナス家の秘密は秘匿され続けている。

だから、新たなポーションが世に出たならば、それは、アグウィナス家の地下に眠る者と『同じ者』が目覚めたということ。

ありえない話ではない。同じ手段を持つものが居ないと言い切れるものではない。

しかしにわかには信じがたい。

スタンピード魔の森の氾濫後の状況は詳細に語り継がれているのだから。迷宮都市の復興に携わった錬金術師たちは一人残らずアグウィナス家が把握している。

(一体、何者ですか?)

ロバートは家令に命ずる。

「探し出すのです。錬金術師であるならば、わが家に迎え入れねばなりません。」

家令は深々と頭を下げ、部屋を後にする。彼もまた、アグウィナス家に連なるもの。家令は信の置ける部下に命ずる。情報屋に連絡を。ポーションの運搬人を洗い出せ。運搬人の通う先も忘れずに、風潰しに調べよと。

「ご報告いたします。」

レオンハルト、ウェイスハルトの元に、迷宮54階層を調査していた斥候からの報告が届く。

その調査内容によると、54階層に広がる水は実在の海と殆ど変わらない海水であり、深さは不明であるとのこと。階下へ繋がる階段は深度200m付近まで継続していたがそれ以降は斥候の潜水能力の限界を越えたため確認できていない。深さに関しては音使いの調査によると水中探索限度の1000mを超えるという。

「つまり、果ても、底も見えず、無限の広さを有する可能性があるということか。」

「54階層自体を空間操作しているのでしょ。して、魔物は？」
「はつ。魔物ですが、空中には一体も確認されませんでした。海中も音使いの探索範囲には小魚一匹見えなかったとのこと。魔力が感じられるのは、例の柱だけだとのこと。」

斥候の報告に、レオンハルトとウェイスハルトは顔を見合わせる。広大な海原にぼつんと立つ一本の柱。
怪しくないと思う者などいないだろう。

「それで、その柱は？」

ウェイスハルトに促され、斥候は現在の調査状況を報告する。

柱の海上部分は3階建ての建物よりも高く、太さは城壁の尖塔よ

りも太い。

柱の上端には頭部らしきものが4つ付いており、それぞれ直角に違う方向を見据えていて360度死角はない。頭部の形状は竜を思わせる形だが、眼は通常の位置と額の三箇所があり、どれも異様に大きく飛び出している。口は上下に開くあごの代わりに筒状に飛び出している。海中部分が何処まで伸びているのか見当が付かないが、波にあわせて極僅かに上下に動くことがあるため、浮遊体である可能性が高い。

蟲使いが羽のある魔蟲を向かわせたところ、塔からおよそ1kmの地点で頭上部の筒状に伸びた口から光線が発射され、魔蟲は1匹残らず蒸発した。光線が発射条件を検証したところ、塔の頭頂部を中心とした半径1kmの球が射程範囲で海面であることが、空中であることが侵入した物体に対して光線が発射されるということ。光線が発射されてから次の発射までの時間は5分とかわからない。例えば陸上であっても光線の待機時間中に接近することは困難だろうに、光線の待機時間中には高圧の水撃が発射されるという。水撃は連続発射が可能で何発まで連続発射が可能かは、蟲使いの消耗が激しく計測ができていない。

蟲使いは卵から孵した特殊な魔蟲を操り、感覚を共有することで遠隔から安全に情報を得ることができる。どんな危険が潜んでいるか分からない迷宫の新たな階層の探索には欠かせない存在だが、魔蟲が殺されるとその感覚のフィードバックも受けるため、スキルの稀少さもあって運用は慎重に行なわれる。今回は何匹もの魔蟲を殺されながらも、だいたが無理をして何とか海上部分の検証は終わらせたようだ。

蟲使いに十分な休息を取らせるように申し伝えた後、レオンハルトは報告のあった遠距離攻撃について質問する。

「光魔法の一種か。ミラーシールドで反射できんのか？」

「はい。ミラーシールドを固定した筏いかたを射程範囲に進入させましたところ、光線によって盾ごと瞬時に蒸発いたしました。」

「どうやら塔が放つ光線は、一撃必殺の魔法らしい。水撃も強力で筏は大破、直撃を受けたミラーシールドはへこんだ状態で吹き飛ばされたという。これでは海上から正攻法で攻めるのは困難だろう。」

「次に海中部分ですが、光線の射程ぎりぎり外に筏いかたを浮かべ、水魔法で話を射出して検証いたしましたところ、水深10m以深では光線が発射されないことが確認されました。現段階における検証結果は以上です。」

斥候の報告に、再び顔を見合わせるレオンハルトとウエイズハルト。

斥候の退室後、ウエイズハルトが話し始める。

「潜りますか、兄上。」

「1kmを息継ぎなしでか？」

「重石をつけた空気袋でも準備しますか？長い送気管の方が良いですか？」

「それで近づけたとして、どのように塔を破壊するのだ？」

「そうですね。詳細な調査結果を待ちましょう。水中行動を可能にするポーションが無いかわ調べさせましょう。」

「ポーションか。そういうえばあの聖水は素晴らしい効き目だったな。」

「聖水は材料によって効果が大きく異なるといいますから、よほど良い材料を使ったのでしょうか。」

「材料？何だ？」

「乙女の髪らしいですよ。若く清らかな娘の髪ほど強い効果を発揮

するとか。
「何!？」

がたりとレオンハルトが立ち上がる。乙女の髪。うら若き娘が迷宮討伐の為とはいえ、その髪を切り落としたというのか。

レオンハルトはキャロライン嬢のような若く美しい乙女が、その長い髪をばつさり切り落とす様を想像していた。実際は、『ヤグーの跳ね橋亭』の看板娘エミリーちゃん10歳の揃えた髪がちよっぴり使われているだけなのだ。

(その献身に報いるためにも、必ずや迷宮を斃して見せる。)

決意を新たにするレオンハルト。乙女の髪のことを聞き、空気袋を背負おうが、長い送気管を啜えることになろうが、海中を塔へと進む気構えができたようだ。

「マリねーちゃん、父ちゃんが髪ぎざぎざに切ってごめんってすっごいキレイなりボンくれたー。」

呪い蛇の王討伐の影の功労者のエミリーちゃんは、『ヤグーの跳ね橋亭』のマスターにもらった新しいリボンで髪を結わえて『木漏れ日』に遊びに来る。自分で結んでいるのか、髪をくくる高さが左右で違っていたり、リボンが縦結びになっているのもいつものことだ。

マリエラやキャロラインがきれいに結びなおしてやり、一緒におやつを食べる。何時もの平和な情景だ。

エミリーちゃんのリボンは聖水の代金と共に届けられた布地で作

られている。布地を言付かったマルロー副隊長の説明によると、『聖水の材料のお礼にレオンハルト將軍から賜った』とのことだった。迷宮都市ではなかなか手に入らない立派な布地だ。レオンハルト將軍が何を何処まで知っているのかは分からないけれど、たぶんエミリーちゃんへのプレゼントだろうから、マルロー副隊長経由で『ヤグーの跳ね橋亭』のマスターに渡してもらった。

高価な品だから理由にとっても困ったけれど、『水濡れ品で売れない』布地で『黒鉄輸送隊の定宿で迷惑を掛けているから』と理由をつけて受け取ってもらった。マスターは布地をじっと見つめると、『しんみりした様子で「エミリーの花嫁衣裳に……」などと言っていたそうだ。気が早すぎる。』

結局、すぐにエミリーちゃんに渡されたのは、布地の端で作ったリボンだけだったけれど、エミリーちゃんは超ご機嫌だ。

ちなみにマリエラの至福のお寝坊タイムには、なんのボーナスも付いてこなかった。そう言ってみくれると、ジークがココアにマシユマロを三つも入れてくれた。

迷宮都市はもうじき冬を迎える。冷え込む夜に暖炉の前でココアを飲みながらジークと寛ぐ時間はプライスレスだとマリエラは思った。

オーロラの氷果

「もう、冬ですよ?」

マリエラが黒鉄輸送隊のマルロー副隊長に聞き返す。まるで馬鹿なものを見る目だ。普段すつとぼけているマリエラにこんな顔をされるとは。

マルローは「ふー」と深呼吸して、冷静さを取り戻してから再度マリエラに尋ねる。

「それで、水中活動を可能にするポーシオンはあるのでしょうか。」

マリエラは「寒いのに……」等と呟きながらもあごに人差し指を当てて「んー」と考える。

「魚人系のポリモーフ薬変身ならいけるとは思いますけど、材料手に入るかな?」

オーロラの氷果とか、人魚の涙……は無理としても魚人の鰓石エラとか、凄く貴重だし。」

ポリモーフ薬とはいわゆる「変身薬」。誰もが一度は試したいと願う夢の薬だ。

特定の誰かそっくりに変身できれば、組織的な犯罪から個人的なイタズラまであんなことやこんなことができてしまうだろう。

だが、残念。ポリモーフ薬はそこまで都合の良い薬ではない。自分をベースに体の一部を変身したい他種族の身体器官に変化させる程度のものだ。

例えば今回の魚人系であれば、上級ランクのポリモーフ薬を使えば呼吸器系が変化する。エラができて水中の呼吸が可能となり、手や足の指には水かきが生える。まぶたが無くなり眼球が魚眼に変わる。ポーシヨンのできが良ければ体毛の一部が鱗に変わってより魚人らしく見えたりもする。

しかし上級ランクでは体格などは変化しないし、人肌や髪の毛も残っていて面影は残る。魚人系の魔物そっくりになるわけではなく、魚人とも人とも付かない微妙に混じった生物に変身する。

完全に魚人に変身したい場合は特級のポリモーフ薬が必要だが、こちらは材料の入手難易度も、ポーシヨン製造の困難さや作成に要する期間も他の特級ポーシヨンとは一線を画す困難さだ。

ポリモーフ薬を望む者の多くは、鳥人系のポリモーフ薬で空を飛びたいと願う。上級ではハーピーのように腕が翼に変化するが、翼を得ることができても人間の体重と筋力では飛ぶことが叶わなかったという逸話は童話などでも語られている。

それから考えると、魚人系のポーシヨンは水中呼吸を可能とする分、ポリモーフ薬の中では実用性が高いといえる。

「オーロラの氷果と魚人の鰓石ですね。分かりました。手配しましょう。」

まじめな顔をして頷くマルロー副隊長につられるように、マリエラはきりりとした表情で聞いてみた。

「寒中水泳ですか？」

「違います。」

『迷宮討伐軍、ガチムチ寒中水泳大会』といった催しは行われない
そうだ。残念だ。

いつも通り地下大水道を通り抜け、マリエラの店『木漏れ日』か
ら戻ったマルロー達は拠点で仕事の割り振りを行なっていた。

「魚人の鰓石って……どうするんスカ、副隊長。」

双剣使いのエドガンが尋ねる。

魚人の鰓石は文字通り魚人のエラにできる石のようなもので、エ
ラに挟まった石や異物が長い時間を掛けてエラが出す分泌物でコー
ティングされた真珠のようなものだ。形は歪で真珠に近い色艶をし
ているが、真珠と違ってほんの少し弾力がある。天然真珠より流通
量が多いことと、魚人のエラでできることなどから、貴族の間では
真珠ほどは珍重されておらず、庶民の真珠として売買されている。
とはいえ、養殖できるようなものではないため流通量は少なく、宝
飾店に行けばいつでも手に入るようなものではない。

人魚の涙はさらに稀少だ。人魚が流す涙が真珠のような宝石にな
る、というのは伝説などではない。人魚の涙は真珠のような光沢を
持ちつつも薄く透けていて、海の底から海面に映る月を眺めるよう
な不思議な光を湛えているという。当然庶民が手にするどころか目
にする機会さえない。王侯貴族が僅かに所有している、と言った逸
品だ。

それに比べれば魚人の鰓石のほうがよほど難易度は低いのだが。

「じゃ、俺オーロラの氷果探してきます。」「あ、俺も。」

もつと難易度の低そうなオーロラの氷果探しに立候補するリンクスとエドガン。

「はあ、仕方ないですね。しっかりと頼みますよ。」

若い二人に宝飾品の入手は向いていないかもしれないと、マルロは二人にオーロラの氷果を依頼した。

(やりい！)

楽な方を回して貰えたと喜んだ二人が後悔するのは数日後のことだった。

「オーロラの氷果？また珍しいもんを」

薬草のことならばガーク爺が何とかしてくれるだろうと、薬草店を訪れたリンクスとエドガンにガーク爺が難色を示す。店にはおいてないらしい。

「ガーク爺なら採れる場所知ってんだろ？採ってきてくれよー。」
気軽に頼むリンクスに、

「年寄りをコキ使うもんじゃねえ。最近暇そうにしてんじゃねえか。場所を教えてやっから自分達で採ってこい。Bランカーが2、3人いりゃ楽勝だろ。あそこは老体には堪えんだ。」

ガーク爺はそう言うと、紙にザックリとした地図を描き付けてリ

リンクスに渡し店から追い出してしまった。まだ昼過ぎだというのに店を閉めて「じゃあな。」出かけるガーク爺。

ガーク薬草店の扉には、「ご用の方は“木漏れ日”まで」と書かれた札が掛けられていた。

「こんなモンまで作ってるよ、ガーク爺。」

「どんだけ通ってたよ。」

掛札を見て啞然とするリンクスとエドガンを放置して『木漏れ日』に着いたガーク爺は、マリエラに注文の薬草を渡すと、まるで自分の家のようにセルフコーナーでお茶を淹れ、日当たりの良い席で寛ぐ。

「ここは極楽だわい。」

隣の席は最近馴染みになった薬師で、攪拌機の調子を見たり新しい攪拌羽の感想を聞くという名目で、ちよくちよく通ってきてくれる。お陰でクッキー生地専用の攪拌羽など薬に関係の無いオプションパーツが充実してしまった。ポウルの方も塗り薬用、飲み薬用に加え菓子用が複数ある。今ではサクサククッキーが大量作成できるから、お茶請けまで置いてある。本当に何屋なんだ『木漏れ日』は。

「お、ガークさん、ルンドの葉柄入ってねえかな。急ぎはしないんだが。」

薬師の質問に、

「おお、あるぞ。明日、このくらいの時間でいいならここにもってくるが。」

とガーク爺。最近は『木漏れ日』で商品の受け渡しを始める始末。行商か？店もちなのにな。

「歳をとると寒さが堪えるわい。アレは若いモンに任せるさ。」
ぷはーとお茶を飲んだガーク爺のカップに、薬師がスタイリッシュ
ユなしぐさでおかわりを注ぐ。

ガーク爺は暖かな陽だまりで寒さに縮こまった手足を「うーん」
と伸ばすと、薬師と世間話に興じるのだった。

その数日後、オーロラの氷果採取を任されてしまったリンクスと
エドガンは、ジークを強引に巻き込んで迷宮32階層、氷雪の階層
を訪れた。

「うっべー、ざっびー。」

もっこもこの毛皮の防寒服を着込んだ3人の男が雪原^{雪原}に行く。「
あー」とか「ざっびー」と叫びつつ進む3人はまるでイエティ^{雪原}の
ようだ。

マリエラは講習会と勉強会で商人ギルドだ。今日はエルメラさん
が終日商人ギルドにいるそうだから、マリエラのことにはリンクスが
頼んでしまっている。

マリエラも「ジークもたまには息抜きしてくるといいよ。勉強会
が終わった後も薬草部門で待たせてもらうから大丈夫だよ。」とジ
ークを送り出したのだが、ジークの方は早く帰りたいといった様子
でそわそわと落ち着かない。

(マリエラのことだ、夕食までに戻らなければお腹を空かせて一人
で帰りがねない。いや、食べ物につられて知らない人についていく
かもしれない……。)

ジークの中でマリエラはどういう扱いになっているのか。マリエラもそこまでのうっかりさんではないはずなのだが。たぶん。

ジークの心配を余所にリンクスは、寒い寒いといいながらも、「エド兄、みてみて。《ウォーター》。すっげ、即効で凍んの。オレ氷魔法使いみてー。」
等と言ってはしゃいでいる。

低級の魔除けポーションを使っているお陰で、雪狼や雪熊などの獣系の魔物は襲ってこないが、イエティやフロストールという意思をもった冷気の塊のような魔物が時折襲ってくる。

《ウィンドエッジ》

ジークがミスリルブレードに宿した風の刃がフロストールを切り裂き、リンクスが《ウォーター》から作り出した氷の短剣をイエティに向けて何本も飛ばしていく。

この階層では魔物よりも寒さのほうが難敵だ。手足が凍えて思うように体が動かない。時折強い風が氷雪を巻き上げて吹き荒れては、体の熱を奪っていく。

ビヨオと、また風が吹き始めたようだ。

風に耐えつつしばらく歩くと、エドガンが指し示す方向に洞窟が見えた。ここで休憩を取ろうというのだろう。洞窟に入った三人は火を起こして暖をとる。はちみつで固めたナッツを齧り、酒精の強い酒で体を温める。

「なー、ジーク。あんたマリエラちゃんと一緒に暮らしてるんだろ？」

話しかけるエドガンの顔が少し赤い。

「でさー、どうなの？二人何処までいつちゃってんの？」

「ちょ、エド兄、もう酔ってんの？酒弱すぎじゃね？てかジーク、……違うよな？」

リンクスの糸目が開いてジークをじっとりと見ている。

「いや、俺達は、まだ……。」

「まだ！？まだって言った？」

「オイ、ジーク、テメー幾つ歳離れてっと思って……。」

「まーまー、リンクス。で？で？どうなんさ？ラッキーでポロリなイベントとかねーの？」

あるよな？風呂入つてるときにうつかり入っちゃったとか！入っちゃうよな？うつかり！二人暮らしたもんな、しっかりうつかり入らないわけにや、いかねーよな！？」

酔っ払っておかしなテンションに突入するエドガン、24歳。彼女募集集中。

クールな男のほうがモテると思っ込んでるエドガンは、『ヤグーの跳ね橋亭』やら女性のいる場所では「フツ」とか言いつつ、さも女性に興味ありません、という態度を貫いているが、実際はエドトークが大好きな軽い男だ。年下のリンクスともよく気が合う。

リンクスは、「また始まった」とばかりにエロガン、違ったエドガンをなだめつつも、

「で？あんの？ラッキーなうつかり。」

とジークに問いかける。リンクスの糸目はさっきから開いたままだ。白目がちの眼がちよっぴり怖い。

「わざと踏み込んだりなど……しない。」

目を合わせずにジークが答える。

「今、わざとは無い、ツつたな？言つたよな？じゃあ、うっかりはあるんだな！？どんなん、どんな感じなんだよお、話せつてー。」

ジークの言葉尻にガツツリと食いつくエドガン。リンクスも興味があるのかエドガンを止めない。

「いや……、あの……、マリエラが風呂で眠って溺れたらしく……。隷属紋で、主が危険になると痛むんだな……。」

仕方なく、ジークは説明する。隷属紋が知らせるマリエラの危機に慌てて風呂に飛び込んだら、マリエラが湯船に沈んでいたのだとブクブクと。

「……、あいつ、風呂で死に掛けたのか……。」

「マリエラちゃんらしいな……。」

「俺、隷属の焼印を押されて良かったと初めて思った……。隷属紋が知らせなかったらマリエラは……。」

疲れたように額をつき合わす三人の男たち。丸まった背中がイエ雪猿テイーのようだ。だが同じ猿でもエドガンはめげない猿だ。

「それで？どんなんだつたよ？」

目をらんらんと輝かせてジークに続きをせかす。

射抜くような二人の視線が続きを促す。逃げることは許されないと。

けれど主の尊厳が掛かっているのだ。ジークムントは考える。マリエラの良さを、素晴らしさを、色欲を交えずに伝えねばならない。賢さ4の頭脳を駆使し考え抜いたジークは二人の男に視線を返し、

ゆっくりとこう語った。

「素材の味が活きている？」

「そ・ぎ・い！薄味か！」

「旨いのか！？さっぱり味か？それともサツパリ！？」

大うけする二人。マリエラの名誉は守られたようだ。たぶん。

笑い声に集まってきたイエティーを倒して体が温まった三人は、再びオーロラの氷果の探索に向かった。ガーク爺の地図によれば、もうすぐ到着するはずだ。

薄暗い極夜の雪原を三人は行く。風はずいぶん凪いでいてさほど時間を掛けず目的地にたどり着いた。

ガーク爺の示したとおり、低い丘の頂にオーロラ草は生えていた。

草というよりは苔を思わせる、氷土に這う様に生える肉厚の植物で、先端にオーロラを思わせる青から赤紫の小さな果実をつけていた。白夜の期間に育ち結んだ実は、極夜の間氷の下で熟して色を変える。

三人は表面を覆う薄氷を砕いて小さな実を摘んでいった。豆粒の半分ほどしかない小さな実は、あるだけ全部採取しても両手の平に擦り切れるほどしか集まらなかった。

手袋をしていてもかじかむ手で、凍てつく大地に膝を付いてようやく集め終わった頃には、酒でぬくもった体は芯から冷え切っていた。

ガーク爺が嫌がるはずだ。

「さて、帰るか。」

先ほどのテンションは何処へやら。目的を果たした三人の男たちは、とぼとぼと、しかし来た時よりもずいぶんと気心の知れた様子で氷雪の階層を後にした。

「みんなおかえりー。ひゃー、ほっぺ真っ赤。寒かったでしょ！今日はポトフにしようか。」

商人ギルドで大人しく三人の帰りを待っていたマリエラは、ジークの防寒具をモフモフともふりながら、晩御飯の話をする。

外は初冬で寒いだけけれど、氷雪の階層から出てきた三人には暖かいくらいだ。防寒具を脱いで歩く三人に、

「リンクスたちもポトフ食べてく？素材の味がしみしみで美味しいよ。」

と声を掛けたマリエラ。

「ぶっは、素材の味！」

「サツパリ系旨み出汁！」

なぜか噴出すリンクスとエドガンに首をかしげるマリエラ。

「おー。食う食う。もー、腹ぺっこぺこ。さ、早く行こうぜ、マリエラ！」

リンクスはマリエラの手を取ると、笑いながら走りだした。

「ちょ、ちよつと、待ってよ。リンクス。早いよー。」

引つ張られながら走るマリエラの後を、ジークとエドガンが追いかけていった。

時騙しの花蜜

「これでオーロラの氷果と魚人の鰓石が揃いましたね。」

リンクス達がオーロラの氷果を採取した数日後に、マルロー副隊長がオーロラの氷果に見合った数の魚人の鰓石を届けにきた。魚人の鰓石は宝飾品なのにこんなにあっさり手に入れるなんてと、マリエラが驚いていると、

「魚人の鰓石はマーマンやサハギンから手に入りますからね。入手した冒険者が何処へ持ち込むか考えればたやすいものです。」
と種明かしをしてくれた。

なんと、娼館を周ったらしい。市価よりも高い買取価格を提示すると、娼婦達は客から貢がれた魚人の鰓石を我先に売ってくれたという。

「オーロラの氷果が安価で入手できたぶん、魚人の鰓石に予算を回せて助かりましたよ。」

と笑うマルロー副隊長の後ろでリンクスが、「ずりい、ずりい。すっげー寒かったのに。」とぶつくさ言っていた。

余談ではあるが、数日後、双剣使いのエドガンがジークを訪ねてきたと思ったら、

『『ヤグーの跳ね橋亭』のベリーサちゃんがさ、オレがあげた魚人の鰓石のペンダントつけてないんだ……。いっつもオレが行くと着けてくれるのにさ。』

と店の隅っこの一番日当たりの悪い場所でジークに零していた。

「きつと失くしたんだろう。そのうち見つかるんじゃないかな。」
きのこが生えそうなエドガンを慰めにかかるジーク。

「お前、イヤツだな……。」「
オーロラの氷果を採取しに行つて以来、ジークはエドガンとも仲良くなつたらしい。

さらに数日後、

「ベリーサちゃん、魚人の鰓石着けてたよ！やっぱ、失くしてたんだな。」「

とエドガンがジークに報告に来たのだが。

「ネックレスのチエーンが切れたみたいでさ。チエーンが変わつてたよ。なーんか魚人の鰓石の形も違う気がするんだけど、魚人の鰓石は柔らかいから形も変わるんだな。」「
と言っていたとか。

「あ……、ああ、そうだな。魚人の鰓石だし、色や形や大きさくらい変わるよな。」「

とジークが無理のあるフォローをする。それを見たリンクスは、
「マリエラは、オレの土産のペンダント、いつも着けてくれてるよな！」「

とエドガンとジークを見ながら余計なことを言っていた。オーロラの氷果を採取しに行つて、3人の仲は深まつたんだと思う。たぶん。

魚人の因子を有する鰓石に、変身を促すオーロラの氷果は手に入つた。変形に伴う身体機能の調整をしてくれるクラーケンの粘液は、マリエラのペットのスラーケンが毎日だばだばと分泌してくれてい

るし、基材となるルナマギアは上級ポーションに必須だから大量に常備してある。あとは変身の効果を維持するための『時騙しの花蜜』だけ。

時騙しの花蜜を入手すべく、マリエラはジークと二人、地下大水道を抜けてマリエラが住んでいた魔の森の小屋の跡地に向かった。

「この辺に埋めたハズなんだよね。」

すっかり低級薬草に埋もれてしまった小屋の跡地の片隅を、マリエラはせっせと掘り起こす。

「あつたあつた。結構駄目になっちゃってるけど、これだけ残ってれば何とかなりそう。」

マリエラが掘り返した穴には、両手で持てるくらいの蓋の付いた陶器の壺が埋めてあつた。中には小さなガラス瓶が緩衝用の布に包んで幾つも収められている。壺は割れてしまっていてガラス瓶も3割くらいは割れている。瓶からこぼれた内容物はすっかり劣化して土に還ってしまっているが、無事なガラス瓶に収められた植物の種は2000年の時を経て尚、形を保っている。

マリエラはゴム手袋をした手で無事な瓶を慎重に取り出していく。1つ1つ中身を確認しては、使えるものは新しい壺に移し変えていく。割れてしまったり、中身が駄目になった種はまとめて燃やして

処分する。

ここに納められている種は、どれも毒性が強く常植できない危険なものだ。土に落ちて芽が出るのではなく、生物の亡骸を、あるいは生きたままの生物を苗床にして生育するものばかりを集めてある。こうして土の中に埋めておけば、万一瓶が割れて種がこぼれても、長い時を経て土に還るから倉庫などで保管するより余程安全な保管方法だ。

こういつた生物を苗床にする種子は、苗床となる生物が訪れるまで長期間耐えるよう、厚い表皮の中で休眠している。さすがに土の湿気や微生物の腐食作用に200年耐えることはできなかつたように、瓶が割れてしまった種は朽ちてしまっていたが、瓶の中で密封していたものうち、1割くらいは発芽できそうだ。

マリエラは生き残った種子の中から目当ての種を見つけると、道中でジークが倒したゴブリンの死体の傷口にいくつか植え付けた。

パキヨリ

ゴブリンの血を吸った種は表面に血管のような筋を浮かびあがらせると、分厚い皮を割り広げて伸びた根が、たちまちゴブリンの体内へと広がっていく。

余分な種を新しい瓶に移したり、繁茂しすぎた低級薬草を刈り取って乾燥させたりしながら1刻ほどすると、ゴブリンの死体を苗床にした『時騙し草』はマリエラの膝丈くらいまで成長していた。

時騙し草の葉をいくつか摘み取ると、指で潰して団子を2つ作る。

「ジーク、これ、奥歯に噛んでおいて。急に空腹を感じたら強く噛んでね。解毒剤になるから。」

マリエラは自分も葉の団子を奥歯に噛むと、口元を布で覆う。時騙し草は既に蕾をつけ始めている。

もってきたクリーパーゴムの袋に水を入れると、時騙し草の蕾一つ一つにかぶせ、蕾を包むように口を縛る。水の重さで茎が折れないように縛った紐の端を立てておいた支柱に結びつける。

時騙し花は1苗に付き2〜3個。1つも見逃すわけには行かない。全ての蕾に袋を取り付け見逃しが無いか何度も確認を終えた頃、時騙しの花が開いた。

種をまいてからたった2刻程度の時間で開花したとは思えない、多重の花弁を持つ赤みがかつたオレンジ色の花は、熟れた果実のようにも見える。開花した瞬間に飛び散った花粉も花の匂いも袋にさえぎられて外に漏れることは無いけれど、もしも袋をつけていなかったら、花弁が放つたまらない甘い匂いは森の生き物を引き寄せただろうし、飛び散る花粉を吸ったなら花粉に含まれる毒の効果で、耐え難い空腹感を感じただろう。そして目の前の甘い果実を思わせる花弁にかじりつき、花蜜の毒で眠りに就くのだ。花弁にまぎれて既に成熟している種子を体に取り込んで。

時騙し草は生物の血と魔力で生育する。眠りに就いた生物の体を突き破り、時騙しの花は美しく咲き乱れる。苗床が生きている方が長く繁殖できる。そのためだろうか、時騙しの花蜜で眠りに就いた生物は時が止まったかのように、血と魔力が尽きるまで老いることも劣化することも無いという。

この花に『時騙し』と名がつけられた由縁でもある。

この花蜜から眠りの毒を取り除いた蜜の配合量でポリモーフ薬の変身時間を最大1時間まで調整できる。

花がすっかり咲ききると、マリエラは花にかぶせた水袋をしゃばしゃばと振って蜜を水に溶かした。蜜と花粉とこぼれた種子が混ざった洗い水を錬金術スキルの《練成空間》に移し変えると、その場で無毒な蜜に精製する。ついでに採取した種は、乾かした後、瓶に密閉して他の種と共に壺に入れ地中に埋め直しておく。

得られた時騙しの花蜜は大匙さじに1杯程度。他の材料にあわせた最小量だ。

時騙しの花蜜は高値で売れる蜜だけれど、苗床になり血を吸われて萎びてしまったゴブリンを見ると必要以上に作るうとはマリエラは思えない。マリエラとジークは時騙しの草ごとゴブリンの亡骸を燃やして埋めると、地下大水道を通って家へと帰っていった。

「師匠にね、言われたんだ。」

帰り道、マリエラはジークに話す。

「時騙しの花蜜は貴重で高価なものだけど、必要以上に作っちゃ駄目だって。狩人が必要な分だけ獲物を狩るのと同じだって。それでね……、」

いいかげんな師匠だったが、《ライブラリ》の知識だけで取り扱うには危険な植物の取扱いについては、きちんと指導をしてくれた。ポリモーフ薬は作ったことが無いが、時騙しの花蜜の作り方を教わっていて助かった。

マリエラの口から、『師匠』のきちんとした面を聞くのは初めてかもしれない。続きを口ごもるマリエラをジークは見つめ、続きを促す。

「それでね、必要以上に作ると、おへそから時騙し草が生えてくるって言うんだけど、ホントかな!？」

「生えてくるかもしれないな。」

マリエラの師匠の安定っぷりに安堵しつつも、師匠の嘘に乗っかるジーク。

マリエラは、おへその辺りをぎゅっと両手で押さえている。嘘だと分かっていても、こういう話をするとお腹が痛い気がしてくる。

その日の晩御飯に、うっかり豆のスープを作ってしまったマリエラは、

「豆も種だよね……。」

といいながら、何時もよりもぐもぐ沢山咀嚼してスープを食べていた。

別に豆を丸呑みしてもおへそから芽は出てこないのに。

「今日はもう寝る。」

そう言って早くに部屋に上がっていったマリエラは、寝室に消えるまでおへそを押さえていたという。

時騙しの花蜜（後書き）

クリスマスなどの後にオークションサイトでアクセサリーが大量に出回るのはなぜなのでしょうか。

あと、西瓜の種を飲み込むと、へそから芽が出るってお母さん言っていた。

キヤルの友人

「ポーションの運び人は黒鉄輸送隊か」

ロバート・アグウィナスは年老いた家令の報告を聞いていた。

「それで、彼らの行きつけで怪しいと思われる場所は？」

家令はロバートの質問に手に持った書類をめくり順に名前と特徴を挙げていく。

黒鉄輸送隊が定宿にしていたという『ヤグーの跳ね橋亭』、武器の整備を任せている武器屋、帝都に運ぶ素材を仕入れる幾つもの商會に、各メンバーがひいきにしている食堂。家令の報告は店舗の概要だけでなく、店員の経歴まで仔細に及んでいた。

「爺の説明では、その『木漏れ日』という薬屋が最も怪しいではないですか。黒鉄輸送隊がポーションを取扱い始めたのと前後して迷宮都市に外からやってきたなどと……」

家令の報告を一通り聞いたロバートは、あからさまとも思える新しい住人について意見を述べる。

「それが、ロバート様。その店はキャラライン様が懇意にしておりますして……」

「は？キヤルが？」

思いも付かぬ展開にロバートはしばらく瞑目してから、家令に命じた。

「少し、キヤルと話をしてみましよう。お茶の用意をしてください」

食堂にお茶の準備が整った場合に、妹キヤロラインがやってきた。昔はこの食堂で家族で夕食を取ったものだが、家督を継いで以来ロバートは食事も自室か研究室に運ばせて済ませているから、お茶とは言え妹と食卓を囲むのはずいぶんと久しぶりだ。

キヤロラインも同じように感じていたらしい。

「お兄様と、こうしてご一緒するなんて嬉しいですね。最近は夕食にもいらしてくださいから」と、にこにここと微笑んでいる。

「研究が忙しくてね。だが息災な様で何よりだ。そういえば、最近市井に気に入りの店ができたとか？」

「まあ、お兄様、お耳が早いですわ」

兄の思惑など知る由も無く、キヤロラインは楽しみにマリエラの店について語って聞かせた。

「……、それで私、マリエラさんと共同でお薬を作っておりますの。マリエラさんのお薬はライナス麦の効果を使っておりますのよ。昔お兄様も着目なさっていたでしょう。しかも、その作り方を街の薬師さんに教えて差し上げて、今では皆さん前よりもずっと効果の高い様々なお薬を作ってらっしゃるのよ」

嬉しそうに話すキヤロライン。ロバートは妹の話を笑顔で聞きつつ考える。

（優秀な薬師のようだが、錬金術師だとすれば納得はできる。だが、キヤルと同じ年頃？若すぎる。最年少だったエスターリア眠る錬金術師よりも若

いなど……)

「キヤル、ずいぶんと優秀なお友達のようにだが、迷宮都市の外から来た方だ、何か隠し事があったりはしないのかな。ああ、彼女がとても良い人だということは十分に分かっているよ。だが彼女の知り合いまでは分からなくてね。君は婚約者のいる令嬢なのだ、兄として心配なのだよ」

妹の感情を損ねることなく、それとなく聞き出そうとするロバート。

「マリエラさんの周りの、隠し事、ですか？……、ありますわ！お兄様！マリエラさんをめぐる、ジークさんとリンクスさんの秘めた思いと友情が！ああ、でも駄目ですわお兄様。いくらお兄様でも、こんなお話をするなんて、そんなはしたないことできませんわ！私、マリエラさんのお友達ですもの。マリエラさんのお気持ちを一番に考えなくてはいけませんもの」

けれど、キャロラインの思考はロバートの思惑とはかけ離れたところへ突っ走って行ったようだ。やはりマリエラと意気投合するだけはある。似たもの因子をもっているに違いない。

「えー……、こほん、キヤル？み、皆良い方のようにだね。安心したよ。そういえば、最近不思議なうわさを耳にするのだけれど、その店で何か見慣れぬ物は見なかったのかい？」

ロバートのキヤルに対する質問が不自然だ。久しぶりにあった妹の暴走振りに気圧けあつされてしまったのかもしれない。キヤルはと言うと、兄の質問の不自然さよりも、その内容に食いついてしまった。

「まあ、お兄様。お兄様もお聞きになつておりましたのね。ご安心下さいまし、お兄様。私、ちゃあんと習得して参りましたのよ。これが、ポーシヨンのような神秘に満ちた、光るお茶ですわ！」

キャロラインはすつくと立ち上がるとティーポットを右手につかむ。親指で蓋を押さえ、中指と薬指で持ち手をもつ。人差し指と小指はぴんと伸ばしているからなかなかの握力だ。伊達に毎日マリエラと一緒に練り練り薬を練っていない。

左手にソーサーごとカップをもつと、ポット内部を《ライト》で光らせたお茶が、つとーつとカップに注がれる。お茶がこぼれないようポットをもつ右手を高く上げ、光るお茶をロバートに見せ付けるようにカップに注ぐ。光るお茶はまるで神秘の滝のようだ。

ダンスの素養もあるキャロラインの姿勢は良く、優雅な姿勢が素晴らしい。満点だ。

お茶がこぼれないようにこっそり水魔法で調整までしているところ、キャロラインの上級者っぷりをうかがわせるのだが、スタイリッシュ・ティーパーティーを知らないロバートは複数の魔法を駆使して視覚効果だけ充実させて注がれるお茶と、『いかがでして、お兄様！』とばかりに自慢げな妹の顔を、あぐりと口をあけて交互に見た。

「さあ、どうぞ。お兄様」

高い位置から注いだせいで、微妙に冷めて飲みやすくなったお茶を受け取ったロバートは、

「毎日楽しく過ごしているようだね」

と妹に向けてにっこりと笑った。妹の淹れたお茶は、なかなか

美味しかった。

キャロラインとのお茶会を終えたロバートは、自室で一人考える。

（『木漏れ日』はシロだな……）

マリエラの無自覚なずれっぷりは、賢さを誇るロバートの頭脳さえ欺いてしまったようだ。そうと知らないロバートは考える。

冷静に考えれば分かりそうなことだと。黒鉄輸送隊がポジションを扱いだしたタイミングで迷宮都市に現れるなど、あからさま過ぎる。黒鉄輸送隊は迷宮討伐軍の元兵士らからなる輸送隊だ。その程度の頭が回らないはずはない、彼らがフェイクとして用意したと考えるのが妥当だろう。マリエラという少女はおそらくは迷宮都市の外から呼ばれた錬金術師。そう考えれば納得がいく。喫茶店を思わせる店舗を構え常に人目につくことで、フェイクと気付かぬ愚か者の手が伸びる危険を減らしているのだろう。薬の製法を広げたのだから、安全を買うためと思えば納得がいく。知り合いが増え、重用されるほど、生半可に手を出しづらくなるものだから。

そもそも、迷宮都市の錬金術師が未だ市井にいるなどという考えのほうがどうかしていた。

黒鉄輸送隊のポジション輸送自体が『埋蔵品を運び込んで』と思わせるためのフェイクだろう。

肝心の錬金術師は、とうに確保されているに違いない。場所は、迷宮討伐軍の基地か、シューゼンワールド辺境伯邸か。

（なんとということだ。錬金術師を確保されてしまうとは。

我がアグウィナス家こそが彼らを保護しなければならぬのに。取り戻さなければ。助け出さなければ。手遅れになる前に。この土地の未来のためにも、必要なのだ。

だがどうする……。）

ロバート・アグウィナスは思案する。

迷宮討伐軍やシューゼンワルド辺境伯家にどうやって入り込むべきか。

情報が必要だ。

ロバートは迷宮討伐軍の近況に関する報告書を紐解いた。

その中に、『スラム街における巨大スライム被害状況報告書』があった。

「これは？」

「はい。先の巨大スライム騒動の被害者リストが添付されております。新しい『材料』の入手先としても活用できるかと準備させていただきますました」

ロバートに老いた家令が答える。

2週間ほど前の小遠征では『黒の新薬』の使い方が荒かった。今までは時間を空けて1本ずつ使っていたのに、まるで安い薬を使うかのように立て続けに使用していた。お陰でずいぶんと損耗してしまった。今ある材料で次回の分は賄えるが、いくら質の低い『材料』だとはいえ、安いものではない。

より安価な材料の調達方法として、家令が手配したらしい。

巨大スライム騒動の被害者は、迷宮討伐軍の治療部隊が治療を施

しているが、溶解液で溶かされた傷跡は深い火傷のように引き攣れているから、負傷の酷い者は一度の治療で従来通りまで回復したりはしないだろう。ロバートにとっては幸いというべきか、負傷者の大半はスラムの住人で治癒魔法使いに掛かるところか薬を買う金も満足にもたない、しかも身寄りのないものばかりだ。治療と偽り連れ出すことはたやすいだろう。

「これは……」

ロバートは負傷者リストから一人の名前を見つけ出した。

『シェリー・ニーレンバーグ 12歳 女性』

ニーレンバーグ、それは迷宮討伐軍の治療部隊長の名ではなかったか。

シェリー・ニーレンバーグの負傷部位は左顔面から側頭部とある。12歳の少女にはむごい傷跡が残されたことがうかがえる。

「ふっ、ふふふ……」

ロバートは笑う。迷宮討伐軍に隠されてしまった錬金術師への手がかりを見つけたと。口の端を大きくゆがめるように笑うと、ロバートは老いた家令に計画を命ずるのだった。

海に浮ぶ柱

「これが魚人のポリモーフ薬か。」

マルローから受け取った30本のポリモーフ薬をレオンハルトとウェイスハルトが見つめる。彼らもポリモーフ薬の現物を見るのは初めてだ。

「は。効果時間はご要望通り最長の1時間に調整しております。」

今回集まったオーロラの氷果で作成できたポリモーフ薬は30本。オーロラの氷果を採取した32階層では100日毎に白夜と極夜が入れ替わるからこれ以上の本数を望むならばあと200日待つ必要がある。

素材の宝庫である迷宮であっても、この量しか作成できなかったのだ。ポリモーフ薬の貴重さがうかがえる。

ポリモーフ薬で水中散歩を楽しんだ、等というのは好事家の貴族でさえ長らく自慢話とするほどだ。それが30本。

53階層の呪い蛇キングバジリスクの王は100人以上で戦いに望んだが、今回は更に人数を絞る必要がある。しかし、3週間にも及ぶ斥候の調査結果から得られた情報と30本というポリモーフ薬の本数は、レオンハルトとウェイスハルトに勝算有りと告げていた。

「54階層階層主、識別名称『海に浮ぶ柱』の討伐を開始する！
ポリモーフ薬摂取の上、順次入水せよ！」

54階層の海上、海に浮ぶ柱から1.2kmの位置に複数浮かべられた小型船上でウエイズハルトが指示をだす。果ての見えない海洋上だというのに波は穏やかで迷宮内に持ち込める程度の小型船でも柱から1km付近まで接近することが可能だった。

迷宮の外は冬だというのに、54階層の空は青く、気候は暖かでも水中に飛び込むことに躊躇は無い。絶好の海水浴日和だ。迷宮討伐軍には女性もいるのだが、今回の動員条件から外れている者ばかりでこの場に男性しかいないのが悔やまれる。

どこかの錬金術師が言った『ガチムチ水泳大会』が図らずも実現してしまった形だ。せめて、黄色い声をあげてくれる観客がいればよかったのだが、船上に待機して水に濡れる男たちに向けられるのは、ニーレンバークら治療部隊の凍てつくような視線だけだ。ただただむさ苦しいだけの水泳大会だ。いや違う、階層主の討伐だった。戦闘が始まる前から敵を見誤るところだった。何たる畏だ。危ない危ない。

今回の討伐に選ばれたメンバーは水中戦闘での優位性を考慮して槍使いを中心に、盾戦士、無詠唱が可能な魔法使い、治癒魔法使い、そして水中での索敵及び伝令役として音使いが参加している。みな泳ぎの達人なものばかりだ。

全員水の抵抗の少ないピタリとした革のズボンに、脛や腕、胸部や額といった限られた部分だけバジリスクの革で急造された防具を身に纏っている。盾使いのもつ盾も通常のシールドではなく、流線型をした突撃槍を短くしたような海中専用装備に持ち替えている。

槍使いたちも、トライデントを装備するものや、幾本もの鉾を背負うものと水中戦に合わせて調整を行って来ている。その中に黒い槍をもつ大男が一人。

「良く来てくれた、ディック。」

レオンハルトの呼びかけに、黒鉄輸送隊のディック隊長が力強く頷く。

迷宮都市にディック以上の槍使いは存在しない。傭兵として作戦に参加して欲しいというレオンハルトの要請に、ディックは二も無く頷いた。そんなディックを彼の古巣は暖かく迎えた。親交のある者は再び共に戦えて嬉しいと言い、若い者達は憧れのまなざしをディックに向けた。

ディックは渡されたポリモーフ薬をぐいと呷る。

胸の中身が動いたような感覚に襲われる。腹を下したときに下腹の中がぐるりと動くあの感覚に似ているそれが胸部で起こる。腹を壊したときのような痛みは伴わないものの、急に息苦しさを感じて本能的に水へと飛び込むと、肋骨の隙間からひやりと水が体内に流れ込んだ。思わぬ感覚に、手を肋骨の辺りへあてがうと、肋骨の間に複数の切れ込みがはいつており、魚のエラが何枚もできていた。

どうなっているのかと覗き込むが、焦点が合いづらい。代わりに視野が広くなり、普段ならば見えないはずの後ろ側まで見えている。遠くは見えづらくなっているが、その分動体視力は上がっているようだ。これが魚人の視界か。

手に違和感を感じて持ち上げてみると、指の間に水かきができていた。手の甲には鱗も生えているし、触覚も異なるのか水の冷たさも感じない。

魚人に変身した兵達は皆、軽く水に潜ったりして体の動きを確かめている。水に浸かっているだけで全く息苦しさを感じないし、陸上にいるように体を自由に動かせる。海上に顔を出しているよりも水中にもぐっているときのほうが目も良く見えるようだ。

「イイイイイイイイイイ、ウ、ウウウウウウウウ」

音使いが音波調整をする音を聴き、兵達は水中に整列する。
レオンハルトの号令を受けるために。

まるで宙に浮ぶように兵達の前、水中に立つレオンハルト。

その髪は、水中でたなびき獅子の鬣たてがみのようだ。

厚く肉感的な唇はその存在感を増し、良く通る声を発する口も横に大きく伸びていて、瞳はより大きくまぶたがない分丸い眼球が際立っている。眼球は広い視野を確保するため少し飛び出しているようだ。

うん。魚っぽい。

デッキや兵達は慣れてきた視界で周囲をうかがう。先ほどまでは水中で自由に動く体に夢中で気付かなかったが、みんな魚っぽい顔になっている。魚なのにレオンハルトとわかるくらいには面影が残っている所がなんととも言えずコミカルだ。美丈夫と誉れ高いレオンハルトでさえこの微妙さなのだから自分の顔はどうなのだろう、という点は考えないようにしているようだ。この作戦に女性が一人も参加していないのは、ウエイスハルトの配慮なのかもしれないとウエイスハルトの深謀に感心する兵もいるほどだ。まあ、女性が参加していないのは単なる偶然なのだが。

少なくとも好きなあの娘には飲ませたくない薬ではある。あの娘のこんな魚顔はあまり見たくないものだ。金持ちになっても魚人系

ポリモーフ薬で水中デートはしないでおこつと兵達は考えたことだろう。

何れにせよ今は作戦行動中だ。ポリモーフ薬の効果時間は1時間。変身した体に慣れる僅かな時間さえ惜しまねばなるまい。

兵達は広い視野のお陰で嫌でも目にはいる、面白おかしく変化した同僚の顔を見つつも、強い自制心でレオンハルトを見つめる。

作戦は既に頭に叩き込んである。あとはレオンハルトの号令を待つばかりだ。

兵達をぐるりと見渡したレオンハルトは皆に力強く頷くと、最後の檄を飛ばすため口を開いた。

「ぱく、ぱく。」

どうやら魚人の声帯は人とは勝手が違うらしい。

釣り上げられた魚のように口をぱくぱくさせるレオンハルトに、兵達のエラからぶぼつと気泡が舞い上がった。

『作戦を開始します』

音使いのアナウンスで迷宮討伐軍が柱に向かって泳ぎだす。

光線を避けるため深度は20mを維持している。

柱までの距離があと500mというところまで進んだ頃、音使いが深海から急速に浮上してくる複数の物体を感知した。

(やはり現れたか。)

レオンハルトの合図により、迷宮討伐軍は迎撃体制を取る。

海上の鉄壁さに対し海中10m以深は安全すぎる。

確かに海中10mでの活動を可能とする方法は僅かしかなく、ポリモーフ薬の希少性を考えれば十分高いハードルではあるが、海中の障壁が深度10m以深にないと考えられるほど、ウェイスハルトらは安直ではない。

今までの迷宮討伐はどれも容易なものではなかったのだ。

深海からの敵は迷宮討伐軍が迎撃体制を整えている間に、その姿を目視で判別できるまでに至った。

遠くから見る姿は青い輝き。

近づくにつれその輪郭が露わになる。

薄暗い海の最中で眩いほどの青い髪がたなびいている。青白い肌、魚の尾をもつそれは、人魚と呼ばれる種族ではないのか。

顔は髪に隠れて良く見えないが、髪の間からのぞく大きな瞳、人と同じ位置に唇が確認できる。胸元の豊かなふくらみは人魚が女性であることを思わせ、下半身側に広げて伸ばした両腕には手首に向かって扇状に広がるドレスの袖のようなものがたなびいている。

海水を受けて広がる袖は恐らく胸ビレの様なものなのだろうが、髪と同じく金属を思わせる美しい青で、水中を舞い飛ぶように進む姿は熱帯に生息するという宝石のような青い蝶のようにも思える。

魚の尾びれは水を打つたび、広がりはためき、青い輝きは様々に色を変える。まるで情熱的なダンスに揺らめくドレスのすそのよう

で、夜会で人々の目を奪う美姫さながらだ。

人魚とはこれほど美しい生き物なのか。

むさ苦しい半魚人を歓迎するかのよう^{迷宮討伐軍}に、泳ぎ寄ってくる美しい人魚たち。その数は20を超える。その口元は皆微笑んでいるようにも見える。

美しいものをもつと良く見たいと願う人の本能なのか、迷宮討伐軍の武器を握る手の力が弱まる。近づく人魚は皆手を下げたままで、武器らしきものも持っていないし、魔法を練っている様子も見受けられない。

遠距離攻撃の射程圏内へと侵入してくる人魚たち。人に近い姿で攻撃態勢を取らない彼女らに、交流を試みようかと迷宮討伐軍の兵達^兵が考えたその時。

《槍龍撃！》

一本の黒槍から繰り出された槍撃が、竜巻のように渦を巻きつつ先頭の人魚へと襲い掛かった。

海に浮ぶ柱（後書き）

識別仮名『茶柱』

そしてここで「明日お休みです」発動です。

人魚

（惑わされるな！ それは、ニセチチだ！）

ディックの叫びは魚人の声帯と海水に阻まれ、幸か不幸か迷宮討伐軍の兵士たちには届かない。

けれどディックの放った一撃は、先頭の人魚を貫き海中を血に染める。容赦の無い一撃に仲間を討たれた人魚達は、討たれた仲間を気遣うでもなく、友好を踏みじられたと怒るでもなく、静かにその口を開いた。

ぐぼりと。

人魚の口は、口と思われた場所からその胸元まで裂けるように開いていた。

（胸、顎かよ！！！！）

迷宮討伐軍の兵達の何名が心の中で叫んだらうか。

正確には下顎の顎関節下の出っ張った骨なのだが、胸じゃないならたいした差ではないだろう。

開いた口の中には、鋭い歯列が幾重にも生えていて、その巨大な口は人の胸を食いちぎれるほどに開いている。

人魚、いや巨大魚は武器をもっていなかったのではない。その口こそが武器であり、既に臨戦態勢にあったのだ。

噛み付かれるほど近くに接近を許して漸くその全貌が見て取れる。

首やウエスト、胸の谷間と思われた場所には色の暗い鱗が生えていて、実際はくびれてなどいなかった。袖を纏った腕はトビウオのように発達した胸鰭で、手の位置には刃物のような骨が露出している。髪と思われたものは歪に発達した背びれや深海魚がえさを引き寄せ誘引突起のようなものだろう。

< i 2 3 9 4 5 2 — 2 1 0 6 4 >

一度間近で全貌を把握してしまえば、けばけばしい色彩のグロテスクな魚にしか見えない。なぜこれを美しい人魚だなどと思っていたのか。

いくらポリモーフ薬で魚人に近い体になっても、水中で魚の速度に勝てるものではない。大口をあけて迫り来る巨大魚の口めがけて槍を放ち、喰らいつこうとする口に盾使いが盾を噛ませて致命傷を避ける。胸鰭から突き出た骨の剣先が兵士たちの腕に、足に深い切り傷を負わせる。

海水中に漂う血は兵のものか魚のものか。

乱戦の最中、レオンハルトはウェイスハルトに合図を送る。

ウェイスハルトは頷くと、ディックと音使い、数名の魔法使いからなる遊撃部隊を伴って戦線を離れ、柱に向かって全速力で泳ぎだした。

ウェイスハルトを追おうとする巨大魚に銛を放つレオンハルト。

(お前の相手は俺たちだ。)

次々に繰り出される槍使いや魔法使いの攻撃は巨大魚を引き付けることに成功したようだ。レオンハルトら迷宮討伐軍の周りをぐる

ぐると旋回しながら、僅かな隙に食いかかる巨大魚たち。

なれない水中で、決死の戦闘を繰り広げるレオンハルト達から離れ、ウエイズハルトら遊撃部隊は柱を目指した。

『海に浮ぶ柱』は直径およそ5m、長さは海上に20m、水中は100m以上と目される巨大な柱で、上部に光線及び水弾を発射する竜のような頭部が四つ、それぞれ直角についている。柱の索敵範囲は海上部は竜の頭部より1kmで、盾すら瞬時に蒸発させる極めて高出力の光線を防ぐ方法は無い。

光線のインターバルタイムには強烈な水弾が連射され、海上からの敵の接近を許さない。

階層主である『海に浮ぶ柱』の海上での攻撃力は、これまでの階層主の比ではない。

もう一つ、この階層の特徴として、その広大さが挙げられる。360度水平線が広がり、水深は1000mを超える。恐らく柱の強力な攻撃に耐えるために空間制御が行われているのだろうが、光線にせよ、空間制御にせよ、今までの階層と比べると使われる魔力量が大きすぎるのだ。

“光線と空間制御にこの階層の魔力の大半を使っている。”

それが斥候部隊の情報を元にウエイズハルトが出した結論だった。

通常の階層では階層主を守るための魔物が発生しているが、この階層には見られない。勿論、柱は敵味方の別なく射程に入った敵を攻撃するから同士討ちを防ぐ目的もあるのだろうが、魔物の発生に割り振れる魔力すらないと考えるべきだろう。

海中の備えが最も手薄なはずだというウェイスハルトの思惑は、彼らを追う新たな巨大魚が現れないことからも当たっていたといふべきか。ならば、もう一つの推測もまた。

ウェイスハルトらは柱に急ぐ。

巨大魚達は恐らくバジリスクほどは強くない。しかし海中で楽に斃せる相手でもない。今回は兵士全員に上級ポーションを数本ずつ持たせている。ガラス瓶の口先を膠で固めたもので、飲むときは口の中で膠を噛み切れればのめるし、ポリモーフ薬の効果時間である1時間程度ならば、海中でも蓋の役割を果たしてくれるはずだ。治癒魔法使いが傷を癒し、間に合わないときは各自の判断でポーションを使う。

これでどれだけの時間稼げるか。

柱にたどり着いたウェイスハルトたち。音使いが柱に触れて内部の様子を探り、ウェイスハルトらに伝える。「推測通り」だと。

勝利を確信し、目を輝かせるウェイスハルト。

柱から最も遠い位置にいる盾使いが、盾に喰らい付いた巨大魚を力づくで水面へと押し上げる。水深10mより海面に近づいた時、ジュオツつと水を蒸発させて光線が発射され、巨大魚を盾ごと蒸発させる。

(ぐあ、あつっ。)

光線の熱量に海水は蒸発し、海面で水柱が吹き上がる。高温の蒸気と熱水が水中をかき回し、迷宮討伐軍と巨大魚を散り散りにかき

乱す。盾使いは盾スキルで身を守っていても尚、全身に深い火傷を負ってしまいが、すぐさまポーシオンを飲み干してその傷を癒す。

隊列の乱れた迷宮討伐軍を深海へ引き込もうと巨大魚が食いかかるが、これもまた想定の内。迷宮討伐軍は互いに援護しあい、再び迎撃体制を組みなおす。

柱の光線は合図なのだ。

合図を受けたウエイスハルトと魔法使いたちは、柱の一点に魔力を注ぐ。炎でなく熱量を。ガラスを溶かすように、鉄を溶かすように。温度をあげるのに酸素は必要ない。海中であっても正しく温度を上昇させうる魔法の使い手は多くは無い。その限られた数名は、柱のただ一点を加熱し続ける。

ぼくぼくぼくぼくぼく

湧き上がる気泡。それは、海水からのみ生じるものではない。柱からさえ気泡が上がっているではないか。

まさに、ウエイスハルトの推測が証明された瞬間だった。

柱の構造と材質、それは『海に浮ぶ柱』討伐において必須の情報だった。

柱の構造は想像に難くない。どれほど巨大であろうと1本の柱が縦に海に浮んでいるのだ。恐らく柱全体が浮力体、柱の中身は空洞で、下部に重石が搭載されているのだろう。重心を低くすることで、柱全体の安定性を確保しているものと考えられる。

では材質は。

あれほどの高出力の光線に耐えうる材質なのだろうか。

斥候の報告によると、『海に浮ぶ柱』は光線を放った後、射程圏内に標的が侵入しなくとも一定弾数の水弾を放出したという。幾度かの試みののち、水弾の水を入手することができたのは僥倖だった。54階層の海水とあわせてガーク薬草店に秘密裏に持ち込まれたそれらから、柱の材質を知ることが叶った。

ガークの鑑定によると、水弾として放出された水にはある成分が足りないそうだ。

それは貝殻を構築する成分で、海水中に多量に含まれている。

『海に浮ぶ柱』は貝と同じ成分で構築されていて、光線を放つたびに海水からその成分を吸い上げて光線で劣化した内部を修復しているのだろう。

貝を高温で焼成するとガスを生じてラム石と同じ成分となる。その際に体積は変化する。

どれほど柱が分厚かろうが、他の成分で補強が施されているようが、熱分解され体積が変化したその一点に強力な打撃が加えられたら。

《槍龍撃！》

ディックの槍が魔法使い達が作った柱の歪みに穿たれる。

ビシリ

柱に生じた亀裂は、水圧に押されて見る間に広がっていく。ウエ

イスハルトの合図で柱から離脱する遊撃部隊。兵達が一定の距離を取ったことを確認し、トドメとばかりもう一撃を加えるとディックも柱から離脱していった。

音使いの確認によれば柱の中身は想定通りの空洞で、穿たれた孔は水圧に押され見る間に広がり、巨大な内部を水で満たしていく。

巨柱が沈没していく激流に巻き込まれないよう、ウェイスハルトら遊撃部隊はレオンハルトらの下へ退避する。『海に浮ぶ柱』は最後の最後に迷宮討伐軍を巻き込もうと水弾を発射するが、海水に阻まれ効果は薄く、むしろウェイスハルトらを遠方に逃がす役割しか果たさない。

『海に浮ぶ柱』の主砲である光線は、先ほど発射したばかりでまだ撃てるようになっていないのだ。

レオンハルトらはやはりというか傷だらけだが、誰も欠けてはいないようだ。

対する巨大魚は半数ほどに数を減らしている。巨大魚との戦闘はウェイスハルトやディックの加勢で優位に傾く。

迷宮討伐軍が巨大魚を相手取っている間にも、『海に浮ぶ柱』は果ての無い海底へと沈んでいく。水圧に柱が耐えられなくなるのが先か、気泡や破片を敵と認識した柱が次の光線を放つのが先か。

柱が沈んだ辺りから、ぼこぼこ気泡が浮かび上がった。

恐らく光線を放つたのだろう。光線の熱で急激に過熱された海水が水蒸気となった時の差圧で柱の竜頭が吹き飛ばされたのか、それとも周囲の水圧によって温度に変換された光線のエネルギーが竜頭周囲の水温を超高温まで昇温し熱と圧力により竜頭を分解してしまつたのか、レオンハルトたちには確認できない。しかし、その瞬間、

あれほど広大だった54階層は急激に面積を狭めた。より有利になった環境で迷宮討伐軍が巨大魚を殲滅した時には、54階層は通常の階層程度の大きさの、海岸洞窟を思わせる階層に変化していた。

54階層『海に浮ぶ柱』の討伐は、自らの能力が招いた自壊によって幕を閉じた。

階層間の階段がある場所は砂浜が広がっており、階下への階段も確認された。本作戦に新規階層を探索する斥候部隊は同行させていないから、探索は明日以降となるだろう。

斃された巨大魚を陸揚げしてみると、あの美しい青色は何処にも確認されず、僅かに青みがかってはいるが色あせた赤紫の鱗と茶けた肌をもつ口の大きいグロテスクな魚になっていた。首やウエストに見えた辺りは赤いうろこが生えている。

「海の深いところでは、赤は見えにくくなるそうですから。」

ウェイスハルトの説明を、レオンハルトは興味深げに聞いていた。美女と思えた人魚がこれとは。

「しかし、こいつらが人魚でないと良く分かったな……」

感心したようにディックに語りかけるレオンハルト。

レオンハルトの目にはこの巨大魚たちは麗しく友好的な人魚たちに映っていた。

ディックは巨大魚の下顎を一瞥すると、悟りを開いたような澄んだ目で、レオンハルトを見た。

「まったく揺れておりませんでしたから」

伊達にアンバーの胸部ばかりを眺めていない。彼は真のモニュリストなのだ。いや違う、ディックがもにゅっているのは主にクツシヨンだ。クツシヨンをもにゅらざるを得なかった悲しき日々が彼に真実を見抜く慧眼を与えたといえなくも無い。

「そ……、そうか。なんにせよ大手柄だ。……だが、どうやって見抜いたのかは、彼らには伏せたほうが良からうな」

レオンハルトが視線を向けた先で、若い槍使い達がディックとレオンハルトを遠巻きに見ていた。

トン、とディックの肩を叩くと、レオンハルトはウエイスハルトの方へと去っていく。若い槍使いにディックと話す時間を与えたのだ。

巨大魚の擬態を見抜き、柱を沈めた功労者で、Aランクの槍使い。若い槍使い達は憧れに満ちた目で、ディックの傍に駆け寄っていた。

ちなみに巨大魚からはたくさんの「魚人の鱗石」がとれた。ポリモーフ薬の代金を支払っても十二分におつりが出るだろう。これで53階層の呪い蛇キングバジリスクの王の皮で防具を調えたり、『海に浮ぶ柱』の残骸から回収した材料で、あの光線魔法を再現する魔道具が開発できるかもしれない。

ウエイスハルトは今後の展望に胸を膨らませていた。

本作戦に参加した兵士たちは、巨大魚から「人魚の涙」が出なかったことに胸をなでおろしていた。アレは人魚じゃなかったんだ。美しい人魚は他にいるんだと。

どこから光が差し込んでいるのか、海岸洞窟と化した54階層は青い光に満ちていて、美しい人魚に見えた巨大魚を思わせた。

人魚（後書き）

擬態を見破るためだけに、ディック隊長を登場させました。

あと、人魚？の正体を知った兵士のガツカリが伝わればいいなと思
い、へたくそですが挿絵入れました。

鱗や鰭の色はモルフォ蝶の美しさに脳内変換願います。

キヤルの工房

(だ……大発見だ！)

その夜、マリエラは台所の魔道具の前でぶるぶると震えていた。

「どうした？マリエラ」

マリエラの様子にジークが魔道具を覗き込む。

マリエラが扉を開け放して覗き込んでいるのは、冷凍の魔道具。オーク肉などの食材を凍らせて長期保存を可能とする、マリエラにとっては画期的なものだ。マリエラが引越してくる前からあったものだから業務用の巨大な冷凍魔道具で、中はいくつかの部屋に分かれていて部屋ごとに温度調節機能までついている。

マリエラはこんな便利な道具を知らなかった。2000年間の進歩というのは凄いものだ。マリエラは改めて感じていた。

なにしろ、『オーロラの氷果』の栽培ができてしまったのだから。

オーロラの氷果はポリモー^{変身}フ薬の材料の一つで、白夜の間に成長し極夜の間に実を熟させる薬草だ。オーロラの氷果と名が付けた理由は、オーロラの下で良く見つかること、変身の機能がたなびき姿が定まらないオーロラを思わせること、その実がオーロラのような色合いであること等諸説あるらしい。マリエラの愛読書『薬草薬効大辞典』に書いてあった。

迷宮ならば32階層で採取できるそうだ。

ジークらが迷宮32階層でオーロラの氷果を採取してきた日、みなでホクホクのポトフを食べながら、どれほど32階層が寒かったのかリンクスが熱弁をふるってくれた。オーロラの氷果が取れる場所だから、きつとオーロラがでていてきれいな場所なんだろうと思っていたのに、オーロラは見えなかったらしい。

「迷宮の空って、空に見えても違うもんだろ？」

オーロラなんて見えるわけ無いというリンクスの言い分を聞いて、マリエラは閃いてしまったのだ。

“オーロラの氷果の生育にオーロラ関係ないんじゃないかね？”と。

32階層の空については、ガーク爺に聞けば簡単に知ることができた。

白夜の間は照明石と呼ばれる石が光り、極夜の間は月光石が光っているらしい。

照明石は一般家庭の照明の魔道具に使われている魔力で光る石で、月光石は魔力の割に明るさが低いから一般家庭用に出回ってはいないが、帝都のルナマギア栽培農家などで需要があるから簡単に手に入れることができた。

32階層の白夜と同じ温度に設定した冷蔵魔道庫内に照明石を、極夜と同じ温度設定にした冷凍魔道庫内に月光石を設置して栽培環境を整える。

オーロラの氷果の種はポリモーフ薬を作ったときにより分けてあるから、土を薄く敷いたトレイに撒いてまずは冷蔵魔道庫内においておく。

すると、たった5日で実をつけてしまった。その後トレイを冷凍

魔道庫に移して5日間。冷凍魔道庫のなかでしつかりと熟したオーロラの氷果が実っていた。

ポリモーフ薬1本分で銀貨2枚の高級薬草がご家庭でこんなに簡単に。

冷凍魔道庫の前でえらいこっちゃとぶるぶるしているマリエラと、マリエラの手元にあるオーロラの氷果を見て驚くジーク。

「ジーク、オーロラの氷果が栽培できちゃったよ……」

「ということは、次からは採取しに行かなくていいんだな」

オーロラの氷果の採取はよほどきつかったらしい。ジークは珍しくぐつと拳を握り締めている。

今回は材料の都合でポリモーフ薬を30本しか納品できなかった。もしかしたら、追加で注文が来るかもしれない。そのためにもオーロラの氷果を沢山栽培しておこう。

マリエラは、有り余る財源でもって大型の冷蔵、冷凍の魔道庫を買い求め、地下室でオーロラの氷果を大量栽培した。

残念なことにポリモーフ薬の追加注文は来ず、オーロラの氷果はそのまま冷凍魔道庫の肥やしになってしまったのだが、大容量の冷凍魔道庫のお陰で『木漏れ日』は夏場に冷たい飲み物と氷菓子を提供することができ、ますます茶のみ客で賑わったので、よしとしよう。

(それにしても、魔道具って凄く便利……)

2000年の間の進歩にマリエラは付いていけない。

魔道具が無くても昔ながらの手動や錬金術スキルで何とかできてしまっから、魔道具を偶然見つけるか「どうして魔道具を使わないのか？」と提案されるまで便利な魔道具があることに気が付かないのだ。

きっとマリエラが知らないだけで、薬を作るのに便利な魔道具が沢山有るのだろう。魔道具だけではなくて、2000年の間に新たに作られた技術や道具があるに違いない。

美白クリームを自動で練り混ぜる攪拌機を眺めながら、ある日マリエラはキヤル様に聞いてみた。

「私、辺鄙な村で育ったから、こんな便利なもの有るって知らなくて。他にどんな魔道具があるんですかねえ？」

「まあ、マリエラさん。それならば、一度私の工房へいらっしやいませんか？屋敷の一室を改装したものでなんですけれど、必要な道具は一通りそろえてありますよ。それがいいですわ。是非遊びに来てくださいますし。いつもお邪魔してばかりで心苦しく思っていますの」

にこにこ提案してくるキヤロライン嬢。

物凄く断りづらい雰囲気だ。

キヤル様の押しの強さに「それじゃあ、今度」などとあいまいな返事をしなければ、マリエラは何も知らないまま、今まで通り暮らしていったのかも知れない。

その日、急に降り出した雨は街行く人を近くの店へと誘った。

冬の曇天の下、風に吹かれて叩きつけられる雨はみぞれ混じりで酷く冷たい。

急な雨に傘を持たない人々は、屋根のある近くの店で雨が降り止むのを待っていた。

マリエラとジークもそんな人々の中にいた。ジニアクリームをまとめ買いするために迷宮都市の北東部、外壁付近にあるシール商会へ出かけていたのだ。

シール商会に駆け込んだ頃には、マリエラもジークも雨に濡れ冷え切っていた。

生活魔法の《乾燥》で服を乾かしはしたものの、冷えたからだはなかなか温まらない。

注文を済ませ、ふるふると震えながら雨止みを待つマリエラ。しかし雨脚は強くなる一方で、いつ帰れるかも分からない。

そこへ一台の馬車が通りかかる。

「マリエラさんじゃありませんの」

これは天の配剤か、はたまた日ごころの行いか。偶然通りかかったキャル嬢がマリエラを見つけて馬車を止めてくれたのだ。

「どうぞ、乗って行ってくださいまし」

マリエラの手を取り馬車へいざなうキャル嬢は、マリエラの手が冷え切っていることに気がつくど、

「まあ、こんなに冷え切って。このままではお風邪を召してしまいますわ。ここからでしたら私の屋敷の方が近いですわね。どうぞ温

まっっていって下さいまし」
と、アグウィナス家へと誘うのだった。

アグウィナス家は迷宮都市でポーシヨンの管理を行なう家柄。
そしてマリエラは、迷宮都市で恐らく唯一ポーシヨンを作成できる錬金術師。

キャロライン嬢に悪意ある意図が無いことは分かっているが、そんな危険がある場所にやすやすと出向くわけには行かない。

急にお邪魔するのは悪いから、自分は庶民で礼儀作法も分からないからと、マリエラは断ろうとするのだが。

「ですが、風邪を引いてもいけませんし。それに、以前工房へお招きするとお約束いたしましたわ。工房でしたら一緒にお仕事をしておりますもの、気兼ねなくおいでいただけますわ」

貴族の令嬢と庶民の娘。二人の会話に何事かと集まる視線もあいまって、ついに断る口実を失ったマリエラは、ジークと二人キャロラインの馬車に乗り込み、アグウィナス家の屋敷へと連れられていくのだった。

雨はますます酷くなり、ジャック・ニーレンバーグのコートを濡らす。

『海に浮ぶ柱』の討伐で重傷者は出なかったから、ここ数日は早くに帰ることができている。

今にも降り出しそうな空模様に、いつもよりさらに早く家路を急いだニーレンバーグだったが、彼が家にたどり着くより先に、雨は降り出してしまった。

こんな雨は好きではない。服の隙間から忍び込む冷たい雨に体温を奪われていく様は、治療が間に合わず冷たく熱を失っていった同胞たちを思い出させる。

ニーレンバーグに治癒魔法の才はない。彼ができるのは、生物の体内を探查することと、生物を捌くこと。あとは鍛え上げられた体術があるだけだ。どちらかと言うと対人向け、暗殺者向けの能力だ。人と大差ないサイズの魔物であるならば、弱点を探查しその一点を攻撃することで一撃で葬ることも可能だろう。

ニーレンバーグの手はいつも彼が葬ってきた敵の血に濡れていた。どれほどの命をその手で刈り取ってきたか分からない。数えることなどとうに辞めてしまった。

けれど、ウェイスハルトにその能力を見出され、治療技師に任命されてからは、仲間の血に濡れている。

ニーレンバーグの手が仲間の血に濡れるほど、彼の仲間は一命を取り留めた。どれほどの命を彼の両手が助けてきたのか、彼は数えていない。

一つだけニーレンバーグが自覚していることは、愛娘シエリーに触れることを躊躇わなくなったということだ。愛娘が生まれたとき、彼は娘を抱くことを躊躇った。血塗られた手で穢してしまうのではないか、自らの業罪で汚してしまうのではないかと。

頭を撫でられたシエリーが、「パパの手は大きいね、温かいね」と微笑む度に、ジャック・ニーレンバーグは治療技師としての職務を与えてくれたレオンハルトら兄弟に感謝する。

自らの手荒い治療に文句と殺意を抱きながらも、先生、先生と慕ってくれる兵士たちに自らも迷宮討伐軍の一員であると仲間としての意識を覚える。

誰一人失うことなく、迷宮の最深部へたどり着きたいと強く願う。

「ああ、嫌な雨だ……」

ジャック・ニーレンバーグはポツリとつぶやく。柄にも無いことを考えてしまう。衣服もずいぶん濡れてしまった。さっさと帰って着替えなければ。

雨が、彼の熱を奪い去る前に。

彼が家にたどり着いたとき、家に人影は無く、愛娘シェリーは奪い去られた後だった。

2000年の真実

雨は降り止むことも無く、迷宮都市の石壁を黒く塗り込めていた。

みぞれ交じりの冷たい雨の中、出歩く人影は少なく、貴族街の外れにあるアグウイナス家の屋敷に一人の男が訪れるのをみとがめるものはいなかった。

「ようこそおいでくださいました、ジャック・ニーレンバーグ様」

慇懃な礼をするアグウイナス家の年老いた家令はジャック・ニーレンバーグをアグウイナス家の離れへと案内した。

2000年前の魔の森スタンビードの氾濫後しばらくして建造されたこの建物は、柱や梁の形状や間口の広さ等、築年数に見合った年代を感じさせる造りをしているが、補強や修繕と言った手入れが行き届いていて今尚使用に耐えている。

その館の奥の部屋で、アグウイナス家の現頭首口バート・アグウイナスはニーレンバーグを出迎えた。

「シェリーは何処だ」

「奥で眠っておりますよ。実に愛らしいお嬢さんだ。あのような傷跡が残るなど、なんとも痛ましいことです。ニーレンバーグ治療技師殿はポーシヨンの使用権限をお持ちのはずだ。ご令嬢にただの一本も使用することは叶わないのですか？」

射殺せんばかりに睨み付けるニーレンバーグに、ロバートは語りかける。

「今、迷宮討伐軍ではいくらでもポーションが使えるのに」

ロバートの見透かすような物言いに、ニーレンバーグは目を眇める。アグウィナス家は何処まで情報をつかんでいるのか。

「ポーションは戦略物資だ。私的に流用するわけにはいかん。一例たりと特例を設けるわけにはいかんだろう」

「忠義篤い方だ。迷宮を斃すために全てを捧げると？」

「当然だ。ならばどうだというんだ」

「その言葉に偽りが無いのならば、真に迷宮を斃したいならば、我がアグウィナス家にこそ協力すべきなのですよ」

ロバートは語り始める。200年に渡る迷宮都市の真実を。

「当家のポーション保管設備をもつてしても、ポーションは1000年ほどしか保管が効かない。それがどういふことか分かりますか？」

「1000年だと？ それでは、まさか……」

「そのまさかです。我がアグウィナス家は代々作り続けていたのですよ、ポーションを。魔の森スタンビートの氾濫を生き残った錬金術師たちと共に」

2000年前、魔の森から溢れた魔物が防衛都市を襲う間に、山脈へ逃げ延びた人々がいた。偶然エンダルジア王国を離れ難を逃れた

者もいた。^{スタンビート}魔の森の氾濫の夜を十数人の錬金術師が生き残っていたのだ。

「仮死の魔法陣というものを知っていますか？」

ロバートの口からでた聞きなれない単語にニーレンバークは顔をしかめる。この場所への招待状を残してシェリーを連れ去った時点で、アグウィナス家の要求はおおよそ察しが付いていた。この二ヶ月ほどの間に迷宮討伐軍に運び込まれたポーションの出所を探ろうというのだらう。ニーレンバークの様子に意を得たりとばかりにロバートは話を続けた。

「仮死の魔法陣とは文字通り使用した者に仮死の眠りを与える物です。仮死の眠りに就いた者は、再生に足りる条件が整うまで眠り続けるのです」

仮死状態にするだけで十分複雑な術式のはずだ。その上、生体機能を停止した肉体を長期間保持することの困難さはいかほどか。それだけの魔術をたった一枚の魔法陣で成すなどと、どれほど複雑な魔法陣になるのだらうか。治療部隊を率いるニーレンバークには、その難易度が十分すぎるほどに理解できた。

「2000年間、^{スタンビート}魔の森の氾濫が起こるより前に、我がアグウィナス家の当代頭首ロブロイ・アグウィナスは仮死の魔法陣のオリジナルを借り受ける機会を得たといえます」

仮死の魔法陣を借り受けたロブロイ・アグウィナスは、細密な複製を作成したのだという。

「先ほどもお話しましたが、ポーションの保管設備が2000年もた

ない可能性については、復興を終えた錬金術師達の間で指摘されておりました。ポーション不足により迷宮討伐が行き詰る可能性を憂いた彼らは、仮死の魔法陣を複製し自らの意思で眠りについたのです」

錬金術師たちの懸念は現実のものとなったが、ポーションが枯渇するたび、劣化するたびに錬金術師達を目覚めさせ、新たにポーションを作り直すことで事態は解決するかに思えた。

「最大の誤算は、複製された仮死の魔法陣が完全で無かったことでしょう」

ロバートはニーレンバーグを見る。しかしその視線はニーレンバーグでなく、どこか遠くを見つめるように焦点が定まらない。

「眠りに就いた錬金術師の半数は蘇生すること無く眠ったまま塩と化して崩れ去りました。蘇生した者達も恐ろしく短命で、ある者は魔力が枯渇し倒れたまま目覚めず、またある者は一年と経たずに血を吐き死んでいきました」

目覚めることが出来た錬金術師達は自らの運命を知ってなお、最後の瞬間までポーションを作り続けたという。

「貴方がたが使ってきたポーションがどういうものかお分かりになりましたか？」

鷹揚に両手を上げてロバートはニーレンバーグに問いかける。

「では、あの新薬とやらはなんなのだ。錬金術師が生き残っているというならば、新薬など必要あるまい」

ロバートは口の端をつり上げてまるで狂人のようににやりと笑うと、ニーレンバーグの疑問に答えた。

「ポーシヨンの作り手はもはや残っていないのですよ。貴方がたが確保した錬金術師がどれ程の精度の仮死の魔法陣で眠りに就いていたのかは分かりませんが、我がアグウイナス家ですら借り受けるだけでオリジナルを手に入れることが叶わなかったのです。その錬金術師がオリジナルを使用したはずなど無いでしょう。見た目通りに寿命があるなどとは思わないほうがいい。仮死の魔法陣は複雑だ。どれほど緻密に作るうと、我が祖先ロブroy・アグウイナスですらオリジナルに及ぶことは叶わなかった。歪んだ魔法陣が歪んだ効果をもたらすことは貴方もご存知のはずだ。

可能な限りポーシヨンを作らせ、それでも錬金術師の寿命があるのなら再び眠って頂かなければなりません。迷宮を倒すその日まで、使い潰してはいけません。どんな手段を取っても、錬金術師をもたせなければならぬ。長きに渡り迷宮討伐軍で治療に当たっていた貴方がたならば分かるはずだ。どれほどポーシヨンが重要か。どれほどポーシヨンが必要か。わかっていなければならぬのです。

だからこそ、私は、我らアグウイナス家は新薬まで作り出したのです。志半ばで倒れて行ったわが同胞たちのためにも。迷宮が斃され、この地が人の手に戻る日まで、我らは、私は繋がねばならないのですよ。ポーシヨンを。

そのために！そのために！錬金術師は管理されねばならない！

お分かりでしょう？ポーシヨンを使い続けるために、ポーシヨンを作らせて、作らせて、それでも尚、その錬金術師が生き残ってい

るならば、命が残っているならば、再び眠らせて、次の世代に引き継がねばならないということ。」

倒錯の、狂乱の只中で、ロバート・アグウィナスの脳裏に父の、祖父の、彼が幼いころに血を吐き溶けるように崩れ死んで行った錬金術師の言葉が蘇る。

ロバートはニーレンバーグの方を向いてはいるが、その瞳は彼を映してはいない。

この200年間蘇っては死んでいった同胞たちの無念と願いがまるで眼前で直接託されたかのように、ロバートには思い出されていた。

200年の真実（後書き）

マリエラは血を吐いて死んだりしませんのでご安心を。

エスターリア

彼女を目覚めさせてはならない。

仮死の眠りから覚めた錬金術師達は、皆口をそろえて言い残した。「新たな世界の錬金術師を誕生させるためには彼女が必要だ」エスターリア

その言葉に嘘偽りはない。けれどエスターリアが『最初の錬金術師』に選ばれた理由はその若さゆえだったのだろう。

エスターリアが錬金術師となったのは、魔スタンビートの森の氾濫の直前。当時まだ6歳の幼子であったという。師である錬金術師に抱かれ、ヤグーの背に乗り山脈へ逃げ延びた彼女を待っていたのは、過酷な復興の日々だった。

満足な食べ物も無く、温かな寝床もない。薄い板壁の向こうに魔物の息遣いを感じながら、息を殺して夜を過ごす。昼は魔物の目をかいくぐりながら薬草を集め、ただひたすらにポーションを練成し続ける日々。

エスターリアは幼子らしく遊ぶことも甘えることさえ知らずに育ち、少女らしく笑いさざめくこともなかった。

エスターリアが美しく成長すればするほど、食べるものの粗末さに、身に纏う衣装つまの儉しさに、その境遇の哀れさに人々は心を痛めたという。

これほど美しい女性なのだ。生まれた時代が異なれば、いや、帝都にさえ生まれていれば、どれほど美しい衣装に身を包み、皆に愛されて豊かで幸福な人生が送れたことだろうと。

けれどそんな彼女にも幸福な時間が訪れた。愛する人ができたの

だ。厳しい暮らしの最中であって、幸福そうに微笑む彼女に人々は明るい未来を描いた。この娘が幸せになれたのならば、迷宮都市の未来もきつと明るいだろうと。

けれどそれをあざ笑うかのごとく、エスターリアの愛する人は魔物に襲われあつけなく世を去った。

失意に沈むエスターリア。けれど彼女はポーションを作る手を止めない。毎日毎日魔力が尽きるまでポーションを作り続ける。

この地を再び人の手に。

愛した男の志を継いだエスターリアができることは、ポーションを作ることだけ。

魔スタンピードの森の氾濫から十数年の時が過ぎた頃、迷宮都市はかろうじて町としての機能を取り戻した。帝都で最も優秀な研究者たちは、迷宮の規模と討伐に要する期間を、魔スタンピードの森の氾濫からおよそ200年で最大50階層に到達するだろうと予測した。また別の研究者たちは、200年に渡ってポーションの保管が可能な保管設備の計画を打ち出した。

彼らは口々にこう言った。「理論上は可能です」と。

その理論に従って、アグウィナス家の地下には巨大な保管設備が建造され、錬金術師たちは保管設備に収められた巨大なポーションタンクを満たすべく、魔力の限りポーションを作った。

迷宮都市を治めることとなったシューゼンワールド辺境伯家を始め、志を同じくこの魔物の大地に生きることを決意した貴族の家々にも、小規模ながらポーションの保管設備は建造され、全ての保管設備にポーションが満たされた。

けれどアグウィナスを初めとした錬金術師達の懸念は消えない。

もし、2000年で迷宮の討伐が叶わなかったら？

もし、迷宮の規模が50階層を超えていたら？

もし、途中でポーションを使い切ってしまったら？

もし、ポーション保管設備が2000年もたなかったら？

永遠に続くと思われた栄光のエンダルジア王国が一夜にして滅んだのだ。

どれほど優秀な学者であろうと、帝都から一步も出てきていない者の「理論上は」などという言葉を用いるほど、彼らは暗愚ではなかった。

何よりも、錬金術師が地脈とラインを結ぶ儀式には錬金術師の『師』となる者が必要だ。

だから生き残った錬金術師たちはアグウィナスが持ち出した一枚の魔法陣に全てをゆだねた。

アグウィナスがかつて何処かから借り受けた『仮死の魔法陣』の精密模写。^{レプリカ}

錬金術師たちは『仮死の魔法陣』を複製した。『仮死の魔法陣』は複雑で作業は困難を極めたが、それでも複製の複製。おそらくオリジナルほどの効果は得られまい。

目覚めたとして元通りの身体機能を維持できるか分からないし、眠ったきり二度と目覚めないかもしれない。

けれど彼らは未来に賭けた。

建造された全てのポーション保管設備は何処も満杯で、彼らがやれることはもうない。

『アグウィナス家がポーション保管設備とは別に秘密裏に建造したもう一つの地下室で、仮死の魔法陣によって眠りにつこう。仮死の魔法陣が正しく機能したならば、棺を密閉し酸素を絶っておけば、棺が開くその日まで目を覚ますことはないだろう。』

決意した錬金術師たちは、全ての準備を整えたその日、アグウィナス家の地下室で最後の言葉を交わした。

「この地を再び人の手に」

「新たな大地に錬金術師の誕生を」

その中にエスターリアもいた。

身に纏う薔薇色のドレスは錬金術師達からの心づくしの贈り物だ。美しく化粧を施されたかんばせはエンダルジアの美妃と謳われた王妃殿下にも劣りはしないだろう。

初めて袖を通す美しい衣装、初めて施された化粧、初めて女性らしく着飾ったその場が、仮死の眠りに就く棺の前であったとは。

錬金術師たちはガラスの棺に横たわるエスターリアに告げる。

「次に目覚めたときは、新しい世界が待っているよ。その装いに相応しい、その美しさに相応しい、輝かしい幸運な世界が。新たな世界で幸せにおなり、エスターリア」

彼らにとってエスターリアは娘も同じ。

過酷な生活の中、ポーションを作り続ける幼い姿にどれほど励ま

されたことだろう。

その境遇にどれほど心を痛めただろう。

『不憫な愛しい我等が娘よ。きつと我々が新たな人の世界までポーションを繋いで見せるから、だから、目覚めたその時こそは、幸せになつておくれ』

エスターリアは錬金術師たちに答える。

「ありがとう、お父様たち。私は幸せでした。お父様たちに出会えて。あの人と共に生きることができて」

エスターリアが眠りに着くのを見守つた後、錬金術師達も棺の中で眠りに付いた。

一人残つたアグウィナスは彼らの志を継ぐ。子へ、その子へと。時折目覚める錬金術師と共に、彼らの棺を守り、ポーションを守り続ける。

エスターリアを、始まりの錬金術師を新たな世界へ届けるために。

ロバート・アグウィナスが胸中を支配する狂気のままに熱弁をふるっていたまさにその時、アグウィナス家の母屋をマリエラとジークが訪れていた。

「こっつ、これはっ」

「丸薬を作るペレタイザーですわ。程よく湿らせた材料を入れてこちらの円盤を回転させると、ペレタイジングできますの」

「おおお！手で丸めなくていいんだ。じゃっ、じゃあこれはっ？」

「ふるい振とう機ですわ。専用の網をセットしてこちらのボタンを押せば、設定時間の間震えて篩い分けてくれますの」

「べっ、べんり！腕痛くならない！じゃっ、これっ、これはっ!？」

「減圧蒸発機です。こちらから水を流すと、こちらから吸引してくれますの。こちらの湯浴は温度設定ができますから、好きな温度で乾燥させられますのよ」

キャロラインの工房にはマリエラが見たことの無い試験設備がひしめいていた。

マリエラの錬金術スキルであればどの設備も必要が無いもののだが、それとこれとは話が別だ。こういった器具や設備には夢やらロマンやらが詰まっているとマリエラは思っている。

キャロラインと二人、1つ1つ使い方を確認しては、キヤーキヤーと騒ぐ。

マリエラとキャロラインの二人が手に持つものが、花や菓子、ア

クセサリーであるのならは年相応の華やかさなのだろうが、乾燥した薬草やガラスの器具を手に、なにがそんなに楽しいのかと見るものに疑問をもたせそうな光景ではある。

キャーキャー、ワーワー、スゴイスゴイとかましい二人にキャロライン専属のメイドが「咽が渴きましたでしょう、お茶の準備が整いました」と休憩を促す。

お茶を注ぐその姿は、勿論スタイリッシュだ。当たり前のようにお茶が光っている。貴族家のメイドがこんな作法でよいのか。

二人して工房の端に設えられたテーブルでお茶を飲む。ジークは護衛に徹するようで、マリエラの後ろに控えている。

お茶で一息ついたとき、キャロラインがおずおずとマリエラに尋ねてきた。

「噂をお聞きしたのですけれど……、マリエラさんは帝都の地脈と契約なされた錬金術師なのでしょう？地脈との契約って、どのようなものかお聞きしても宜しいかしら」

アグウイナス家の令嬢であるキャロラインは錬金術スキルを有している。けれど迷宮都市で地脈とラインを結ぶことはできないから、キャロラインは錬金術師になることも、錬金術スキルの熟練度をあげることもできない。しかし、アグウイナス家は古くより続く錬金術師の家系だ。錬金術に対してキャロラインは強い憧れを抱いていた。

アグウイナス家には代々の婚姻の代償に帝都から招きいれた錬金術師らが数名駐在しているらしいが、彼らは離れから出てこようとせず、キャロラインは挨拶程度しか交わしたことが無い。錬金術

に関する話を聞く機会は今まで無かったのだ。

「普通は幼い頃に契約を交わすのですよね。私ではもう遅いのかも知れませんが、帝都に嫁いだ後、できれば私も契約を交わしたいと思っております。どのような物なのかしら……」

不安げに、しかし僅かな希望を失わず尋ねるキャロラインに、マリエラは場所や時間をぼやかしながら自分が契約を行った時のことを語って聞かせた。

あれはマリエラが8歳の頃、師匠に引き取られて暫らくしてからのことだった。

魔の森の氾濫から200年経った現在マリエラが住んでいる場所スタンヒートは、その頃は『精霊公園』と呼ばれる聖樹がたくさん植わっている公園だった。

師匠に連れられて公園に入った時のことは、今でもしっかりと覚えてる。

ふわふわと淡く光る綿帽子の様なものがあちこちに舞っていて、とても幻想的だった。よく見るとその綿帽子は蝶のようだったり、小鳥の形をしていたり、人の体に羽が生えた姿だったりする。大きさも様々で、花の花卉に寝そべっていたり、木々の梢を揺らしていたり、現れたり、消えたりと、遊んでいるようにも見えた。

「マリエラ、ここで待っているから遊んでおいで。友達ができたら連れて来るんだよ」

師匠はそう言うと、公園の端にあるベンチに寝そべり昼寝を始めた。

マリエラは物心付いた時から孤児院で手伝いや年下の子の面倒を見ていたから、遊べと言われてもどうしていいか分からなかった。仕方なく公園内を散策すると、他にも錬金術師の卵と思しき子供たちが師匠に連れられて園内で光る綿帽子になにやら話しかけていた。普通は師匠が手助けしてくれるものらしい。マリエラの師匠はすっかり夢の中で眠りこけているけれど。

どうにも居心地が悪くなって、公園の奥の方へ進んでいくマリエラ。

ふわりと顔の横を掠めて飛んでいく綿帽子を追いかけて背丈ほどの梢を掻き分けて進んだ先で、マリエラは同じくらいの年恰好の子供に出会った。その子も一人で師匠らしき大人はいない。その子は少し開けたその場所 でなにやら探しているらしい。地面にしゃがみこんで両手をついて草を一つ一つ確認している。

「こ……、こんにちは。何か探しているの？」

おずおずとマリエラは声を掛ける。

「七枚花卉のお花を探しているの」

その子は緑色の髪と黒眼がちな緑の瞳をしていて、なんだかうすぼんやりと光っているように見えた。

変わった子だなとマリエラは思ったけれど、特にすることも無い

のだし「手伝うよ」と言っで一緒に探し始めた。

「しー、じー、ろく、これちがうね」

マリエラが花弁の数が違う花を千切ろうとすると、その子は「ちぎっちゃだめだよ。要るぶんだけにしないとだめなの。お花がかわいそうだよ」と言っ。

やさしい子らしい。マリエラはすっかりその子が気に入って、一生懸命七枚の花弁をもつ花を探した。

「みつけた！ななだよ、ほら、ななまい」

「うわあ、ありがとうー！」

「これ、どうするの？」

「これでね、お水を飲んだよ」

そう言っとその子は両手で花を包み込むように包むとゆっくりと持ち上げた。

不思議なことに持ち上げられた花は根元からぷつりと切れて、その子の手のひらの中で陶器のような器に変わっていた。

「のどが渴いたでしょ。飲んでいいよ」

その子が差し出した七枚花弁のコップには薄く光る水がたたえられていた。

「そういえばのどが渴いた。」

「ありがとう」

マリエラは七枚花弁のコップを受け取るとごくごくと光る水を飲み干した。その水はほのかに甘く、体に染み渡るような優しい味でした。

「美味しいね！《ウォーター》、はい、どうぞ」

マリエラも唯一使える生活魔法で七枚花弁のコップに水をいれ、その子に渡す。その子もマリエラの入れた水をごくごくのんで、「

おいしい！」と笑ってくれた。

「マリエラー」

遠くで師匠の音がする。そういえば師匠に友達を連れて来いといわれていたっけ。

「私、マリエラ。私とおともだちになっってくれる？」
「うん、いいよ。私は*****」

あの時その子が何と名乗ったのか、憶えていたはずなのに思い出せない。その子と手を繋いで師匠の下へ走っていくマリエラ。

他の錬金術師の卵たちはとくに契約を済ませて帰ってしまったのか、園内は閑散としていてマリエラの師匠だけがさっきのベンチに座って、帰って来たマリエラに「おかえり」と言ってくれた。

「ししよー、ししよー。おともだち連れて来ました」

マリエラのともだちを見た師匠は「へえ」と一声だけあげると、「そんじゃあ、とつとと契約すっか！」といったもの調子でマリエラに笑いかけた。

師匠はマリエラのともだちに、
「マリエラを深いところまで連れて行ってやってくれ」
と言っ。

「いいの？」
とその子が尋ねると、師匠は「大丈夫」と笑って答えていた。

「マリエラ」

師匠に呼ばれてマリエラが振り向くと、師匠はきゅっとマリエラを抱きしめる。

「ししよー、くすぐりたい。あと、あつい」

師匠に抱きしめられて、もだもだと身もたえするマリエラ。マリエラには誰かに抱きしめてもらった記憶など殆ど無い。なんだかとてもこそばゆくて、暖かい。

「うん、マリエラ。覚えておいで。ここがお前の居場所だからね。だから呼んだらちゃんと還って来るんだよ。」

「はい、ししよー」

なんだか良く分からないけれど、師匠に引き取られた時、森の小屋で師匠は言った。

「今日からここがお前の家だよ。おかえり」

師匠は何でも知っているすごい人なのに、家の中はぐちゃぐちゃで、掃除も洗濯も料理も何もできなくて、マリエラは何て駄目な大人だと驚いてしまった。けれど、師匠の所に来てからは毎日「おかえり」と言ってもらえる。師匠はホントはすごい人なので、師匠が居場所だと言うならそうなんだろう。

「マリエラちゃん、いこい」

その子がマリエラの両手を握る。

「うん」と答えるマリエラ。何処へ行くのかは分からないけれど、師匠に向かって「いってきます」と手を振った。

ライン

とぶん

地面の上に立っていた筈なのに、マリエラとその子は薄暗い場所にいた。なんだか水の中に似ているけれど、ちっとも息は苦しくない。

上を見ると師匠が地面の上に立っている。ここは地面の中らしい。

その子はマリエラの手をしっかりと握ってくれていて、大丈夫だよと言いたげに微笑んでいる。この子は精霊だったのかと、マリエラはようやく気がついた。こんなに不思議な場所なのに、ちっとも恐くない。きつと足元の深いところにやさしい光が見えるからだと思う。

夜空に浮ぶ星の川に似ているとマリエラは思った。でも光はずっと沢山あって、大きな川のようにも見える。ふわふわとそこから幾筋もの光が立ち上っては消えていき、時折上からさらさらと光の粒が光の川に流れ込んでいく。とてもきれいだな、とマリエラは思った。

その子に連れられて光の川のほうへ降りていく。上から見るとまるで光る水のように見えたのに、近くに寄ると光る細かい粒子のようにも思える。

すでに光の川に入っているのに水に入る時の様に境目がない。ただ足元は酷く明るく暖かく、上に行くほど光が弱くなる。その子に手を引かれるままに、どんどん奥へと進んで行くうちに周りはもう、上も下も光がたくさん満ちていて自分と光の境界さえあやふやに感

じてくる。それでもその子がしつかりと手を握ってくれているから、自分とその子と光は別々のものだとちゃんとわかる。光がとても大きい存在”だとわかる。

「マリエラちゃん、ここが地脈の中心だよ。地脈に真名を教えてあげて。そうしたら、地脈も真名を教えてくれる。地脈と繋がることができるよ」

ほんの少し、心配そうな顔をしてその子は言う。でもこれが師匠の言っていた”地脈とラインを結ぶ”ということなんだろう。マリエラは光に向かって真名を名乗る。

「私、マリエラ。あなたはだあれ？」

「*****」

それは声だったのだろうか。その瞬間、マリエラは地脈と繋がった。

なんて、なんて暖かい。マリエラはすべてが満たされているように感じた。

今までずっと一人だった。マリエラは特に器量が良いわけでも、すごい才能があるわけでも、スキルに恵まれているわけでもない。錬金術のスキル持ちはたくさんいたし、錬金術スキルに加え他の便利なスキルをもっている子供のほうが多かった。

器量の良い子、才能やスキルに恵まれた子、労働力になりやすい男の子は早くに貰い手が見つかり、孤児院を後にしていった。マリエラはいつも選ばれなかった。幼心に自分が価値のない子供だとわかっていた。だからいい子になった。

お手伝いをたくさんした。下の子供の面倒を一生懸命にみた。

「いい子ね」、「助かるわ」、「ありがとう」

孤児院の先生たちはそう言ってくれた。けれど、マリエラを迎えてくれる人はいなかった。

寂しいと、孤独だと、そんな気持ちは物心付いた時から常にマリエラと共にあった。それが地脈と繋がったとたん、溶けるように消えていた。

いや違う、この寂しさは、孤独は、もっと昔から、この世にたった一人で生まれた瞬間から感じていたものだ。それが癒された。還ってきたんだと本能的に察した。地脈が命の源なんだと。地脈から自分は生まれ、そして還っていく場所なんだと。自分もようやく一つに戻れたと。

あつたかいな、ゆるゆるとした微睡みの中でとろけて混じってしま
いそうだ。

「マリエラ

」

とおくでこえがする。だれかが、わたしをよんでいる。

「マリエラ

」

このこえは、ししょーだ。

「この子がいい」誰にも選ばれなかったマリエラを師匠は選んでくれた。他に選択肢が無かったのではない。錬金術スキルを持つている子は他にもたくさんいたのに、師匠は他の誰でもなくマリエラを選んでくれた。ぎゅっと抱きしめてくれた。

地脈は命の源で、還る場所で、世界と隔てる肉のくびきから解き

放たれ、癒され、満たされ、一つに還ることができる場所だ。

でも、自分はまだ『マリエラ』だ。マリエラの魂に根付いた錬金術のスキルを確かに感じる。錬金術のスキルが師匠に繋がっているのだと『マリエラ』にはわかる。

「いくの？」

その子が聞く。ずっと手を握ってくれていた。その手のぬくもりが、存在が、マリエラがまだ地脈に還っていないのだとずっと教えてくれていた。

「うん。ししよーが呼んでるから、帰んなきゃ。ししよーは一人じやなんにもできないからね。私がないと部屋が物凄いことになるんだよ。」

マリエラは笑う。ここはとても居心地がいいけれど、マリエラが帰る場所は別にある。

「じゃあね」と、その子は言う。

「また遊ぼうね」とマリエラが答えると、その子は嬉しそうに笑って、

「またね」と言った。

帰らなきゃ。そう思うと不思議なことにマリエラはぐんぐん上へと昇っていった。地上に近づくにつれ、何か流れ込んでくるのがわかる。何かに引き上げられているのを感じる。マリエラの錬金術のスキルに師匠の錬金術の経験値が流れ込んでいるんだと気づいた時、マリエラは自分の体の中にいた。

ずっと手を握ってくれていたあの子は何処にもいなくて、代わり

に師匠がマリエラの手を握っている。

まるで世界に溶け混んでしまったように、あんなに自分が曖昧でひどく満たされていたというのに、肉の体に戻ったとたんにすっかり切り離されてしまった。個ひとに戻ってしまった。

けれどあの場所を覚えている。心の奥底でつながっているのがわかる。錬金術のスキルが地脈に繋げてくれている。自分が世界の一部であると、今では理解できる。

「ぶはー、お前どんだけ深く潜ってんだよ。帰ってこれねーかと焦ったわ！錬金術の経験、根こそぎもってかれるところだったわ。」

師匠が怒ったような、安心したような顔をして、最後に一言こう言った。

「おかえり、マリエラ」
「ただいま、ししよー」

「私の時は、地脈とのライン契約はこんな感じでした。

錬金術師は、精霊の導きで肉体を捨て精神体となって地脈へ潜ります。そこで地脈と真名を交換することでラインは形成される。肉の体をもたない状態で地脈と繋がる行為は大変な危険を伴うそうです。心地いいんです。地脈はこの地に生きる生命の大元で大いなる流れ。その一部に戻る喜びは、個として生まれたときから付きまとう孤独を取り払う抗いがたい衝動なんです。

よほど現世に強い思いを持つ者でない限り、それを振り切つて一人で肉体へ戻ることはできません。だから師が立ち会います。師匠は自らの錬金術の経験の一部を犠牲にして弟子に帰り道を指し示すんです。現世に帰るべき場所が、自分の居場所があるんだと。

子供のころに契約が行なわれるのは、子供のころの方が希望に満ちていて地脈にとらわれにくいからだそうです。」

精霊に連れられて地脈へ潜つた弟子たちは、師匠の導きで現世へ戻る。その工程は再誕にも似る。だからこそ、錬金術師の師弟の絆は深い。

この儀式で使われた師匠の錬金術の経験値は弟子に移り、師から受け継いだ経験でもって弟子は地脈から命の雫をくみ出すことが可能となる。師弟間の経験値譲渡の際にできたつながりで《ライブラリ》が共有されるといわれている。

「地脈とのライン契約はこんな感じなんで、錬金術師の師弟の絆は血よりも濃いとか言われますが、ラインさえできちゃえば《ライブラリ》がありますからね、あとは独学でも何とかなるわけで、5年ほど師匠に面倒見てもらったのか、世話させられたのかわかんない感じで師匠と暮らしていたんですけど、いきなりどっか行っちゃうんだから、ウチのアホ師匠はもう」

マリエラはせつせと師匠を罵ってみる。何しろマリエラの向かいでは大きな瞳に涙を一杯に溜めてキャロライン嬢がマリエラを見つめているのだ。

「マリエラさんっ」

がばりとマリエラに抱きつくキャル様。

「感動しましたわっ。わたくしも、わたくしも居りますわっ。マリエラさんは一人じゃありませんことよ」

うん、あったかい。ついでに柔らかい。

それはマリエラの二の腕とかお腹辺りも同じなのだが。ぷにぷに。

キヤル様や、なぜか両手を微妙に広げてわきわきさせているジークを見ながら、ここはとても暖かいな、とマリエラは思った。

館の外はすっかり冷え込んで、雨は雪に変わっていた。

ライン（後書き）

明日はお休みでやんす。

マリエラ（ロリエラ？） 成分補給後の次回はロバート劇場再開です。

ロバート・アグウイナス

「いるのでしょうか？貴方は気付いているはずだ。迷宮討伐軍が錬金術師を捕えていることに！」

ロバート・アグウイナスはジャック・ニーレンバーグに言い放つ。

自らが錬金術師の管理者だと信じて疑わないロバートの言動は、もはや狂人のそれに近い。

「助け出すのです。アグウイナス家へと連れ戻すのです。この地脈の新たな世界のために！」

迷宮討伐軍に置いて何になるというのです。これほど忠誠を誓った貴方のために、何の罪も無い貴方の娘の為に、たった一本のポーションも与えない！私ならば救えます。貴方を！貴方の娘を！」

新たな世界へ共に行きましょう！仮死の魔法陣はまだあるのです。何度も！何度でも！眠らせればいい！たった一度で消費してはいけないのですよ、その錬金術師は！」

わかるでしょうか？理解できるはずだ。迷宮攻略にいかにもーションが必要か！今までだって我々の新薬でどれ程の兵士が助かったことか！貴方ならば！何人も兵士を助けた貴方ならば！」

「話にならん。シェリーを返せ」

ニーレンバーグが冷たく言い放つ。

「なぜだ？なぜだなぜだなぜだ！？」

必要でしょうか？不可欠でしょうか？だから使ってきたのでしょうか？

私の新薬を！赤と黒の魔法薬を！

あなたは！使ったのだ！あれを、だからっ、だから同罪なのだ！あなたは、私と共に行かねばならないのだ！……！

狂乱のただ中で目を見開き声を張り上げるロバート。付き合いきれないとばかりにニーレンバーグはロバートを拘束しようと動く。

その時。

「おっと、そこまでだ」

下卑た声がニーレンバーグを制した。

「お嬢ちゃんがどうなってもいいのかい？ハンブンだけでもキレイな方がいいんじゃないかねえか？」

いかにも盗賊と言った風貌の男が、顔に包帯を巻きつけた黒髪の少女にカットラスを突きつけて奥の部屋から出てきた。

「パパア……」

その顔はまさしく。

「シエリー……」

動きをとめるジャック・ニーレンバーグ。

「貴方は、我々と共に行くしか無いのですよ」

誘うようにジャック・ニーレンバーグの方へ手を伸ばし、ロバートは言う。何ももっていないはずのロバートの手のひらから、黒いナニカが滴り落ちると、部屋中が薄暗く、温度が数度下がったよう

な感覚に襲われた。

ジャック・ニーレンバーグの足元の絨毯に、ぐちぐちと黒い染みが湧き上がる。

包帯を替えても替えても傷口から染み出す血膿のように、黒い染みは床から湧き上がるように絨毯を黒く汚し、錆のような澱が毛足の短い敷物の上にわだかまる。

この澱をニーレンバーグは見たことがある。『呪い蛇の王』の体に浮んでいた『呪い』だ。

『呪術系魔術』の行使に特定のスキルは必要が無い。またその特性上、使用だけでなく研究すらも帝国の法律によって禁止されている。ジャック・ニーレンバーグの周囲に湧き出た呪いは、まるで生きているもののようにうごごごと蠢動していた。

「う、動くなよ、娘がどうなってもしらねえぜ」

シエリーにカッタラスを突きつけ脅す盗賊の声は、しかし何かに怯えるように震えていて、視線はちらちらとロバートを見ている。

「恐れることはありませんよ。少しだけ『つながり』を作るだけです。この離れで働く者たちと同じですから」

くふふふふ、と笑いながらロバートは呪いを練り上げる。

呪いの澱は、切り落とされたトカゲの尻尾のように、あるいは潰されて尚息絶えぬ虫の手足のようにのたくって、ジャック・ニーレンバーグへとその輪を狭めていった。

「違法な呪術系魔術の行使を確認。しかも強制支配系で当然、奴隷商人資格も契約術者資格もなし。少女誘拐、恐喝に、迷宮討伐軍への背信行為と。こんくらい揃えば十分だろうヨ。な、パパア？」

「シエリーの顔で、間延びした気持ち悪い呼び方をするんじゃない」

カットラスを突きつけられていた可憐な少女の豹変に、盗賊はとっさに少女の首を掻き切ろうと右手に力を込め、カットラスを握っていた右手の手首から先が無いことに気が付いた。

「ヒッ、ヒエアアアアアア、手ッ、手がアッ！」

痛みすらなく自分の右手首を切断されたことに気付いた盗賊は、無様に叫び声を上げる。

盗賊がもっていたはずのカットラスは、包帯を巻いた少女の手にあった。

「よっ」と

カットラスの柄を盗賊の腹にめり込ませる少女。盗賊は右手首をつかんだままの体勢で「ぐう」と呻くと、前のめりに倒れ気を失った。

「なっ、なっ、なっ」

ジャック・ニーレンバーグを取り囲んでいた呪いも、鋭い蹴りで霧散している。カットラスを片手にすんとニーレンバーグの隣に着地する包帯の少女。

「まったく、貴族相手ってのは面倒だね。ま、こんだけ証拠があり

「や十分だヨ」

「ごそごそと少女（？）がポケットから記録の魔道具を取り出す。会話は勿論発動した魔力と術式の種類まで記録可能な魔道具だ。」

状況を悟ったロバートは、じりじりと盗賊の入ってきた離れの奥の間に続く扉の方へにじり寄る。

「諦める。この屋敷は既に包囲されている」

冷たく言い放つニーレンバーグ。

「こんな……、こんなところで……」

ロバートはぎりりと歯噛みをすると、右手首を抱えるようにうつ伏せで倒れる盗賊にありつたけの魔力を籠めて叫んだ。

「《起きろ、そしてアイツラを殺せ！！！》」

その瞬間、盗賊はクワツと目を剥き、床に伏した状態から四足の獣のようにニーレンバーグらに飛び掛った。

「アアアアアア！」

白眼をむいたまま、四足の獣さながらに飛び掛る盗賊を、ニーレンバーグは蹴りの一撃で地面に叩きつける。今度こそ血泡を吹いて動かなくなった盗賊を見て、少女（？）は言う。

「酷い隷属紋の使い方するよね。起きたとき、元どおりに体が動くといいんだけど」

盗賊は少女(?)に暫らくは起き上がれないように打ち倒されていたのに、ロバートの《命令》で無理やり起こされ、身体機能の限界を超える動きを強いられた。血泡を吹いて倒れる盗賊の四肢は時折びくびくと痙攣をしている。盗賊が目覚めたとき、その体ははたして元通りの機能を有しているのだろうか。

使い潰すような盗賊の攻撃の合間に、ロバートは離れの奥の間に逃げ延びたようだ。

「ボクは外にいる副將軍サマに報告して帰るヨ。これ以上は契約外だからね」

「ああ、ご苦労さん。……、いつまでシェリーの顔でいるつもりだ?」

「ふふ……、じゃあね、パパア」

ジャック・ニールンバークのじつとりとした視線をさらりと躲すと包帯を巻いた少女(?)は、離れの入り口へと歩いていった。

離れは既に迷宮討伐軍によって取り囲まれていて、アグウイナス家の家令も捕えられている様だ。

入り口付近で待機していたウェイスハルトに少女(?)は記録の魔道具を渡すと、何事かを報告しそのままアグウイナス家の屋敷を後にした。

雪の降るアグウイナス家の広大な庭をぐるぐると包帯を外しながら少女(?)は歩く。包帯の下から現れた顔には、確かにむごい傷跡が残っていたはずなのに、木々の合間を曲がったときには傷はき

れいに消えていた。それどころか面立ちが違う。重厚な門扉にたどり着いたときにはさすが長めのワンピースは脱いで丸めて鞆に入れられていて、ズボンをはいた少年が立っていた。

門を守護する兵士に印を見せて屋敷を出ると、少年は商業地区へと帰っていった。

雪の夜道を商業区へ急ぐ少年は、どこかの商店の配達員だろう。彼をいぶかしむものはいない。少年は自分の店へと帰り着く。

「ただいま、オバちゃん。配達終わったヨ」

いつものように少年が言うと、店主もいつもの調子で返事を返す。

「店じゃメルルさんて呼んどくれって言ってるだろ。で、どうだったんだい？」

「オバちゃん、粗漉し糖だけじゃなくて噂も好きだよね。オークみたいな貪欲さだよ」

「顔しか変えられないひよっ子が生意気言っんじゃないよ！」

特定の誰かそっくりに変身し、あんなことやこんなことができてしまうポーションはないけれど、特定の誰かそっくりに変身できるスキルは存在する。極めて稀少なそのスキルを持つ者が、どんな職に就くのかは想像に難くない。

貴族や豊かな商人が好む高級茶葉や白砂糖、珍しい香辛料などの高級品から、庶民にも手が出る手頃な茶葉や粗漉し糖まで取り扱う薬味草店の気のいい女店主は、奥様たちの顔役で、シューゼンワルド辺境伯家専属の情報部隊の一員でもある。

昇給や荒稼ぎを狙う冒険者ならばまだしも、迷宮都市の外からやってきた非力な娘が広い住居に高い改築費を費やして住まうなど、

迷宮都市でそうあることではない。訳有りの人物の監視と調査も彼女らの仕事であった。後に『帝都辺りの錬金術師』で『幼馴染を助けるためにやって来た』という、聞こえがよく今までの言動から違和感が無いうわさを流し、マリエラ達を違和感の無い住人として街に溶け込ませたのも彼女らの手腕だ。もちろん黒鉄輸送隊のなじみであるということから、ウェイスハルトが命じた情報操作であるのだが。

明日もまたメルルはウェイスハルトを訪ねるのだろう。新しい茶葉を納品し『代金』を清算するために。今日手に入れたばかりの街中の情報を携えて。

ロバート・アグウィナス（後書き）

ウェイスハルトが錬金術師の情報さえ押さええていないはずは無いと思うんですよ。魔の手が伸びる前に対処出来るようにしている筈だと。そんな彼も、まさか今アグウィナス家にマリエラがいるとは思いません。

アグウィナス家の闇：ロイス・アグウィナス

みなさんこんにちは、マリエラです。

今キヤル様のお屋敷の応接室にいます。応接室であっているんでしょうか、この部屋は。ものすごく広いんですが。立派な長椅子に彫刻まみれのテーブル。暖炉もありますがこちらにも彫刻まみれです。絵も飾ってあります。お花や風景の絵が多いですが、一枚果物の絵もあります。なんとという果物でしょうか、初めて見る果物ですがおいしそうです。

床に敷かれた絨毯も立派です。織物なのに複雑な模様が描かれています。きつとお高いんでしょう。土足で入って良かったんでしょうか。皆さん土足ですが。

部屋の隅っこに椅子を用意してもらって座っておりますが、こちらの椅子もフカフカです。すごいクッションです。座面でぽよんぽよんと跳ねていたら、背後に立つジークに肩に手をおかれて、「静かに」と叱られてしまいました。ごめんなさい。

部屋の真ん中ではキヤル様が金髪碧眼の王子様っぽい人とお話をしています。二人とも絵にかいたような美男美女で貴族の恋愛物語を見ているようです。王子さまっぽい人はにこやかにお話をしますが、キヤル様はとても険しいお顔をしています。そこだけ見れば絡まった愛憎劇に見えなくもないですが。険しい顔になっちゃうのも仕方ないですね。

だってこの部屋、武装した兵隊さんでいっぱいですから。

暇を持て余したマリエラは心の中でしようもない解説を垂れ流しながら、部屋の隅っこの椅子に座って足をぶらぶらさせていた。マリエラの後ろには護衛のジークが控えており、キャロラインの後ろにも専属メイドと護衛が控えているのだが、二人の周囲には迷宮討伐軍の精鋭が幾人も立っている。ジークやキャルの護衛など『護衛の同席を許した』という建前程度のものだろう。

応接室へ移動したのはつい先ほどのことだ。キャロラインの工房で歓談を楽しんでいたマリエラたちは、部屋の外が騒がしいことに気が付いた。メイドの一人がたいそう慌てた様子でキャロラインに知らせにやってきた。内容を聞いたキャル様はとても困惑した表情でマリエラに説明してくれた。

「シューゼンワルド辺境伯家のウェイスハルト様がお越しになられたそうです。何やら調査に来られたそうです……。辺境伯家に叛意なき者は家人から客人、下男に至るまで集まるようにと仰せです。」

キャロラインの後に続いて部屋の外に出ると、屋敷のエントランスに金髪碧眼の王子様っぽい人が何人も兵士を連れて立っていた。この人がウェイスハルトだろう。

なんとなく、キャロラインに続いてエントランス付近まで歩いていくマリエラを見咎めた兵士が、「家人か？それとも商人か？お前はこっちだ」と別の部屋に連れて行くこうとする。

「その方はわたくしの客人です。当家に何をなさりに来たかは存じませんが、関係のない方です。手荒な真似は許しません。」

マリエラをかばうキャロラインに、「客人？」とウェイスハルトがマリエラをいぶかしげに見る。それは仕方あるまい。マリエラは服装も顔立ちも庶民らしさに満ち溢れていて、アグウィナス家の客人にはとても見えない。服装だって召使のお仕着せの方が衣装とし

ては上質かもしれない。薬草を届けに来た配達の少女と言えば納得がいったに違いない。

ウエイスハルトのそばにいた一人の兵が何やら耳打ちをする。ウエイスハルトは僅かばかり眉をひそめると、「もしや、キャロライン様が懇意にしている薬屋の娘か？」と聞いてきた。

「そうですね。マリエラさんは商人ギルド薬草部門公認の薬師。身元は当家とエルメラ部門長が保証してくださいます」

迷宮討伐軍の、しかもシューゼンワルド辺境伯の前で庶民の権利などひどくもろいものだ。マリエラを必死に守ろうとするキャロライン。

「キャロライン様のご友人であれば無礙にはいたしますまい。お前たち丁重にな。失礼があつてはならんぞ」

キャロラインの願いにこたえ、マリエラを丁重に扱うように指示をするウエイスハルトの瞳には動揺の色が浮かんでいたのだが、ウエイスハルトは自らの心内を言動に表わすことはなく、誰一人彼の動揺に気が付くことはなかった。

家人は別の部屋に集められているようだったが、「キャロライン様のお客人ならば」というウエイスハルトのよくわからない気配りによつて、マリエラは応接室の隅に置かれた椅子にちよこんと腰かけていた。護衛であるジークの同席も帯剣さえも許されているから、特別待遇というやつなのだろう。もつとも迷宮討伐軍の精鋭に囲まれているから、万一ジークやキャロラインの護衛が暴れたとしてもすぐに鎮圧されてしまうのだろうか。

キャロラインとウエイスハルトの会話は何らかの阻害魔法で聞こえてこない。《聞き耳》の魔法を使えば盗み聞きできるのかもしれないが、マリエラもそこまで空気を読まない真似はしない。状況が

わからないまま時間が過ぎてマリエラはお腹がすいてきた。もう晩御飯の時間だ。今日の分のポーションを作らないと夜の納品に間に合わない。というか、納品時間までに帰れるんだろうか。リンクスたちに心配をかけそうだ。

ぐうゝ

マリエラのお腹が鳴った。二人の会話は聞こえてこないのにお腹の音は聞こえたらしく、近くの兵士がポケットをごそごと探るとでっかいクッキーのようなものをマリエラにくれた。ジークにも分けようとしたけれどいらぬらしい。なぜかジークは「うちの子がスイマセン」とばかりに兵士に会釈をしている。

貰ったクッキーは木の実と干し果実、蜂蜜がたっぷり入っていてとてもおいしいのだけれど、保存食なのかちよっぴり硬くてぱさぱさしている。

部屋の隅っこで両手でクッキーを持って、カリカリとちよつとずつかじるマリエラを見て、部屋の真ん中で険しい顔をしていたキャララインは「ふふ……」と表情を柔らかくした。

「そういえば、お茶もお出ししておりませんでしたわ」

キャララインは少し余裕を取り戻したのか、令嬢らしく微笑むと後ろに控えるメイドにお茶を入れるよう指示をした。

けれど残念なことに、お茶が運ばれてくるより先に、ウェイスマルトの元に知らせが届いた。

「離れの地下に新薬製造の工房は発見できましたが、現当主ロバート・アグウィナスの姿は見当たりません。屋敷から逃走した形跡はないのですが」と。

「キャラライン様、この屋敷に秘密の抜け道や隠れ場所は有りませんか？」

質問するウエイスハルトにキャロラインは、少し考えた後こう答えた。

「秘密の地下室があると聞いたことがございますが、場所は代々の当主しか知らされておりませんの」

「ふむ、では先代はご存知なのでは？」

「父、ロイスは……、まともに会話が出来ますかどうか……」

「お会いすることは出来ますか？」

「……、どうぞ」

キャロラインとウエイスハルトが席を立ち、暫らくして戻ってくるまでにマリエラは大きなクッキーを食べ終わってしまった。クッキーのお陰でお腹は膨れたのだけれど、保存食のクッキーは乾燥していて口の中がぱさぱさだ。

戻ってきたキャル様は泣いた後のように目元が少し赤い。ウエイスハルトも困惑したような面持ちで、左手をあごに当てて応接室をうろつろと歩いていた。

なにがあつたんだろうとマリエラがウエイスハルトとキャロラインを眺めていると、ふとウエイスハルトと目があつた。じつとマリエラを見るウエイスハルト。

なんだろう、クッキーの食べかすでも付いているのかしらと、口元をこしこしとこするマリエラの所に、ウエイスハルトが歩み寄る。

「君は確かマリエラと言ったね。キャロライン様のご友人ということとで、君の事は少し調べさせてもらっているよ。帝都辺りの錬金術師で、優れた薬師でもあるそうだね。少し君の知恵を借りたいのだが」

ド平民のマリエラにウエイスハルトのキラキラしい貴公子オーラ

は心臓が悪い。

「は、ははははい。マリエラです。えっと、あの……」

ぴよこんと立ち上がると、スカートをぎゅっと握ってお辞儀をするマリエラ。カーテシーのつもりか。

「そんなに緊張しなくてもいいよ。何、たいしたことじゃない。キヤロライン様のお父がお心を病んでいるようだね。治す手立てが無いものか知恵を借りたいのだよ」

(キヤル様のお父さんが……、だからさっき目が赤かったんだ……)

キヤロラインは友達だ。さっきだってかばってくれた。心の病を治す方法など見当も付かないけれど、治せるものなら治してあげたい。

「お役に立てるかは分かりませんが」

自信なさげに答えるマリエラと護衛のジークを伴って、ウェイスハルトは再びキヤロラインの父の寝室へと向かった。

そこは、薄暗い部屋だった。窓には分厚いカーテンが引かれ、寝台横の台に小さな灯りが点っているほかは月明かりさえ入ってこない。大きな天蓋つきのベッドに一人の男が横たわっていた。

部屋のすぐ外に兵士に伴われて立っている老人はこの家の家令だろうか。

マリエラが部屋にはいると、寝台に横たわるキヤロラインの父口イスが口を開いた。

「ひか……ひ……かり……だ」「い……い……い……だ……い……い……」

廊下から差し込む光に手を伸ばすように、そして同時に逃れるようにロイスは身もたえする。枯れ枝のようにやせ細った腕は左右別々に違う動きをしながら中をさまよう。部屋の薄明かりではよく見えないが、ロイスの顔は左右でまるで別人のように見える。

同じ顔なのに、左右がまるで別の人生を歩んできたような。

ロイスを見たマリエラは、部屋の入り口で立ち尽くしていた。その顔は驚愕に染まっている。

「どうして……、どうして、二人もいるの？」

マリエラが思わずそう呟いたとき、ぐりんつとロイスの顔が持ち上がり、左右異なる表情でマリエラを見つめた。

口の中がぱさぱさなのは、さっき食べたクッキーのせいではない。マリエラは喉の渴きを覚えて生唾を飲み込んだ。

アグウィナス家の闇：ロイス・アグウィナス（後書き）

ウェイスハルトさん、めっちゃ動揺したはず。いろんな意味で。

アグウィナス家の闇：ルイス・アグウィナス

「た……たす……け……て」「おレ……の、カラダ……だ」

「二人？ 何か分かったのか？」

マリエラが思わず漏らした言葉にウェイスハルトが反応する。部屋の入り口で立ち尽くしたマリエラの肩に、気遣うようにジークの手がそつと重ねられる。マリエラはジークの手に自分の手を重ねると。小さく呼吸を整えてウェイスハルトにこういった。

「この人に、眠りの魔法を使ってもいいですか？」

ウェイスハルトの許可を取ったマリエラは、ジークにキャロラインの父、ロイス・アグウィナスに眠りの魔法を使うよう頼んだ。

「大丈夫ですから、少しだけ眠っててください」

ジークと共にロイスの横たわるベッドに近づいたマリエラの言葉は、誰に対するものなのか。

マリエラを見つめた後、軽くうなずいたロイスは目蓋を閉じて、そして開いた。

傍から見れば、ゆっくりとまばたきをしたように見えただろう。

「……、眠りの魔法が効かぬようだ」

「いえ、効いているんです。貴方は、貴方は誰なんですか？」

マリエラの質問に、ベッドに横たわるロイスはこう答えた。

「うおれハ、るイス。ルイス・あぐウィナス。この、イエの、トお

シユ、ダ」

「ルイス？」

「この方は、先代の兄上でございます」

部屋のすぐ外で兵士に伴われて立つてた年老いた家令が答えた。

「お久しぶりでございます。ルイス様」

「オ……お、ひサ、しい、ナあ」

ルイスと名乗った男は答える。けれど正気に思えたのはそのひと時だけで、すぐにその目は宙を見て正気とは思えない言葉を叫ぶ。

「もうすぐだア！モウすぐ、これハあ……、ア、アイダいい、二えのミガあ、まダア……」

痛みを訴えのたうつルイスを見て、わが身の痛みを感じたかのように老いた執事は顔を曇らせ、静かに語り始めた。

「先代は双子でございました。兄君のルイス様と弟君のロイス様。ルイス様が養子として引き取られましたのは『贄の一族』でございました」

「贄の一族だと？」

ウエイスハルトは眉をひそめて聞き返す。贄の一族。噂にならば聞いたことがある。

皇帝を守るために生贄となる一族だと。

皇帝のような高位の人物に悪意を寄せる人間は多い。皇帝がどのような人物かは恐らくは問題ではないのだろう。意識的にせよ無意識的にせよ、頂点に立つその人物を、恨み、妬み、憎しみ、嘲り、自らの不運の原因を理由を短絡的に向けることで、自己を肯定する人間は地を這う蟻のように数多い。

いくら呪術を禁じようと、魔力を伴う悪意ある意識が幾千と合わされば、それは確かな呪いとなって皇帝に届くだろう。こういった不確かな悪意の集合体だけではない。中には明確な意思をもって物理的な攻撃力を伴って皇帝へと刃を向ける者もいる。

こついつた有形無形のあらゆる悪意を、皇帝の代わりにその身に受ける『贄の一族』なる者がいるのだと。

「噂に過ぎぬと思っていたが……」

ウエイスハルトの呟きに、老いた執事が話を続ける。

「アグウイナス家はポーションに代わる魔法薬を作り出すため、家督を継がぬお子様方を帝都の錬金術師や治癒魔法の権威の下へと送り出してまいりました。本来ならば先代をお継ぎになるのは兄君のルイス様で、弟君のロイス様が贄の一族へと養子に行かれるご予定でした」

ロバートに良く似た賢く優秀な兄ルイスと、キャロラインに良く似た優しい弟ロイス。二人はとても仲が良く、養子に行くロイスとの別れを惜しんだルイスは帝都まで弟を見送りに行ったという。そこで運命が狂ったのだ。ルイスに贄としての強い適正を見出した贄の一族は、ロイスではなくルイスを養子に望んだのだ。

望むだけの知識を与えることと引き換えにルイスは贄の一族の養子となった。

「贄の一族に養子にいかれたルイス様に何があつたのか、誰も知ることは叶いませんでした。ただ、数年前に、ルイス様から便りが届いたので」

ルイスからの便りはたまたまアグウイナス家が研究のために取り寄せていた、ユニコーンの角の中に仕込まれていたと言う。小指ほどの小さな瓶に赤黒く、けれど白い光を放っている不思議な色合いの液体が入っていて、瓶を包んでいた小さな紙片からルイスが弟ロイスに宛てたものと判明した。

紙片にはその不思議な液体をロイスが飲むことで、ルイスが贄の一族で得た知識を伝えることができるとあった。丁度その頃、アグウィナス家に宛てた送付物が次々と紛失する事件が多発していた。ルイスは幾通りもの方法でこの液体をロイスに送り、そしてこの一本を除くすべてが阻止されてしまったのだらう。

兄を慕っていたロイスは周囲がとめるのも聞かず、その不思議な液体を飲み干したという。

「それからでございます。ロイス様にルイス様が混じられるようになったのは」

はじめはロイスが眠っている間の僅かな時間だけだった。ルイスの現れる僅かな時間を惜しむようにロバートとルイスは離れの工房に引きこもり『贄』の秘術をロバートに伝えたのだという。

けれど時間が経つにつれルイスは苦しみを訴えるようになり、まるで苦しみから逃れようとするかのごとく現れる時間は長くなっていった。ついにロイスが起きている時にさえルイスが現れ、二人は混濁するかのようにならなくなって行った。水と油をどれほどか混ぜたとしても消して溶け合うことが無いように、ルイスとロイスは別の人間のままだに、意識や思考は細かくほぐれ分散して混ざり合ってしまった。

「どうか、ルイス様を、ロイス様を楽にして差し上げてください」
年老いた家令はウエイズハルトに懇願する。

こんなものは病などではない。それはこの場にいる誰もがわかっていることだ。

「何か、手立てはないのか。解呪のポーションは……」
尋ねるウェイスハルトにマリエラは首を振る。

きつとルイスにとってこの肉体が一番『近い』のだろう。今ではもう、ルイスの本当の肉体よりも。

マリエラは錬金術師だ。錬金術スキルが高ければ素材の状態を錬金術スキルで知ることができる。

植物に、動物に、あらゆる生命に宿る命の雫の有りようを感じ取ることができてしまう。

だからこそ分かったのだ。ロイスの体に二種類の命の雫が宿っていることに。一つの体に二人の人間が生きるなど、それはとても不自然なことで、だから二人は正気をなくしてしまっただろう。

けれど二人の命の雫の状態は悪霊に取り憑かれたような黒く穢れたものではないのだ。二つの異質な、けれど根源を同じくするモノが絡み合い交じり合いながらも別個の個として存在し一つとなっている。ただただ歪でそしてどちらもこの肉体に合致する。マリエラにはそのように感じられた。

眠りの魔法に引きずられなかったこの人は、^{ルイス}確かにこの肉体の主ではないのだけれど。

「元の体へ戻れないんですか？」
マリエラが問う。

「お……レのダ……、ア……イダイ……、コレ、オレ……の、あ……あ……あ……あ……い……い……ダ……ウ、モウす、グ、こノ……イ
ダみ……カラアああアアあ……あ……」

「呪いで無いならば悪霊の類か？神官や被魔師には見せたのか？」
「勿論お見せいたしました……」

ルイスを悪霊のように被い清めることはできなかったという家令に、「何とかならんのか」とウエイスハルトは眉をひそめる。それは苦しむ者を捨て置けないというシューゼンワルド家の者としての思いでもあるし、今尚離れの地下室に隠れ潜むロバートを捕らえねばならぬという迷宮討伐軍副将軍としての使命でもある。しかし先代ロイスがこの状態では秘密の地下室への入り口など聞き出せまい。いつそ離れを解体するか、とウエイスハルトが考え始めたとき、おずおずとマリエラが声を掛けてきた。

「あの、少しだけこの人と二人で話をしてもいいですか」

「いいだろう」

いぶかしげな表情の家令に扉を指し示し、自らも退出するウエイスハルト。

「ジークも出てて。大丈夫だから」

マリエラに言われ、最後にジークが退出した後、静かに扉が閉ざされた。

廊下の灯りが遮断され、ベッド脇の小さな灯し火だけの寝室は酷く薄暗い。長く窓を閉ざしたままの重苦しい部屋の空気が深い穴倉の中を思わせる。

「うゝ ああ……、いだい……ああ……」

痛みを訴え身をよじるルイスにマリエラが問う。

「あなたの本当の体が痛いんですね」

「ああ……あしは……もう、おレノじゃ……」

「戻れないんですね。戻りたくても、もう、繋がっていないんですね」

ロイスの瞳がマリエラを見る。その目は痛みを曇らせていたけれど、マリエラには狂人のそれには見えなかった。

「でもこの体はあなたのものじゃない。ロイスさんがいなくなっても、あなただけになっても、きっとその痛みは消えないでしょう」

苦しみもだえる人を見るのは誰だって辛い。それが実の父ならなおさらだろう。

正気を失い苦しみ続ける父を見るたび、キャロラインはどれほど辛く悲しかったろう。

苦しみ続けるこの人も、この人と共にロイスさんも、それを見守るしかなかった老いた家令も、みんなみんな助けたい。

家令の「楽にしてほしい」という言葉は軽々しく口にできるものではないとマリエラは思っている。

「た……すけ……」

ロイスの体でロイスが希う。こしねが助けて欲しいと、この苦しみから逃れたいのだと。

「自分の体に帰れないのなら、還る場所は一つしかありません」

マリエラは錬金術を発動し、《練成空間》でロイスの体を包み込む。

《命の雫》

それは、雫と言うには余りに多い光景だった。まるで泉が湧き昇るように白く光る水がロイスの周りに湧き上がる。暗い部屋の中、まるで星の河の中にも見える。

「お……、お……、お……」

あたたかくやさしい光を放つ命の雫は、ロイスの体に触れるとすぐに実体を失って消えてしまう。

なんて、なんてもどかしい。この身はこれほど飢えて乾いているというのに。これほどまでにこの身を包み溢れるこの水を、触れて感じることはできないのか。

こんなにも、さむいのに。

こんなにも、いたいのに。

こんなにも、つらくて、かなしくて、さみしいというのに。

こんなにも、一つに還ってしまいたいのに。

「命の雫の流れ落ちる先に、あなたが、いえ、みんなが還る場所地脈があります。」

マリエラが伝える。あそこは恐ろしい場所ではないと。全てから、“自分”というカタチからさえ解き放たれて還っていける場所なんだと。

地脈のとても深い場所で契約を交わしたマリエラのラインは、本人も知らぬことではあるが、誰よりも太く強い。あんなに地脈の深い場所でマリエラが“自分”を失わなかったのは、抱きしめられた師匠のぬくもりが心の底まで染み込んでいたから。そして友人になった精霊がマリエラの手を握り締め必死に護っていたからだ。

その誰より強いライン糸から、大量の魔力を惜しげなく使って命の雫を汲み上げ続ける。

どれほど汲み上げ続けても、底の無い桶に注ぐかのようにロイス

の体に触れた端から命の雫は、解^{ほど}けて消える。板ガラスを作ったときのような激しい魔力の消費にめまいを覚えながら、それでもマリエラは命の雫を注ぐことを止めない。

ルイスがどのようにしてロイスの体にはいつたのかは分からない。地脈とラインを結ぶときマリエラを肉体から連れ出したのは精霊で、マリエラにルイスを体から出す方法などは分からない。マリエラにできるのは、肉体を離れた先に還る場所があるのだと示して見せることだけだ。

「あ、あ、あ」

ルイスが光に手を伸ばす。触れることの叶わない命の雫を求めるところに。

（ああ、誰か。この人を導いて……）

マリエラの魔力は残り少ない。この人に希望を見せてしまったのに、また痛みの中生きる苦痛を感じさせてしまうのか。

（だれか）

「……エ……リア……？」

ルイスが口にしたのは誰の名前だったのだろうか。

その瞬間、ルイス・アグウィナスは光に溶けて地脈へと還っていた。

アグウィナス家の闇：ルイス・アグウィナス（後書き）

マリエラが主人公らしい仕事した！

ロイスとルイスが混じってるイメージはエッシャーの「婚姻の絆」、
「二重の小惑星」辺りを眺めながら考えました。

隠された部屋

「ふあー！」

気の抜けた声をマリエラが上げる。

魔力の使いすぎだ。今回は気を失わなかったけれど、目がぐるんぐるんまわる。こんなのお酒を飲んだ時以来だ。

ふわふわして体が軽い。ダイエツト成功か？

よろめいたはずみで、マリエラは椅子を倒してしまった。

「マリエラ！大丈夫か！」

扉のすぐ向こうでジークの声が聞こえてきた。

「らいじょーぶ。入っていいよー」

いつも通りのマリエラの気楽な声に、バンと勢い良く扉をあけてジークが駆け込み、マリエラの傍に駆け寄ってくる。マリエラの顔を体を見回して何処もなんとも無いことを確認してようやく、ジークは大きく安堵の息を漏らした。

「どうなった？」

続いてウエイスハルトが入室し、ロイスが眠っていることを確認するとマリエラに尋ねた。

「何をしたのだ？」

「ええと、地脈のことをオハナシしました。還りたくなる感じで。そしたら還ってくれたみたいで。今はもうロイスさん一人です」

「だ……だんな様」

老いた家令がロイスの傍に駆け寄って眠るロイスを揺り動かす。死んでしまったと思っただのかもしれない。二人が混じったあの状態できっと何年も目覚め続けていただろうから。

「ム……」

家令に揺すられ目覚めたロイスは、酷く疲れ果てた、けれど理性の灯った瞳でこう言った。

「ロイスは……還れたのだな……」

「だんなさま！つうー！」

ロイスの無事をロイスの最期を知り、泣き崩れる老いた家令。こういうのは美少女のキャル様の役目ではないのだろうか。

なんとなくコレジャナイ感を味わいながら、マリエラとジークは部外者よろしくそつと部屋から退出した。ウェイスハルトは何か言いたそうにしていたけれど、本来の目的である『秘密の地下室』について聞くためにロイスの方へ近づいていった。

「お父様！」

「心配をかけたね、キャル」

車椅子に乘せられ運ばれてきたロイスにキャロラインが駆け寄る。なみだなみだの感動のシーンだ。やはりこういうシーンは美少女がやるべきだ。

うん、うんと応接室の隅っこの指定席に座って頷くマリエラ。

どうでもいいが階段を降りるとき、迷宮討伐軍の人が車椅子を両脇から軽々と持ち上げていた。すごいパワーだ。

「すごい力持ちだね。流石は迷宮都市最強の兵隊さんだね」とマリエラが感心していると、ジークがマリエラの座る椅子の背もたれをもって、十秒くらいだけひよいと持ち上げてくれた。

もっと、とばかりに目をキラキラさせるマリエラ。涙でキラキラしているキヤル様とすごい違いだ。これが微少女と美少女の少女格差か。何て残酷な格差社会か。

椅子一つで満足げなマリエラとは対照的に、応接室の中央ではおよその話をウエイスハルトから聞いたロイスがウエイスハルトやキヤロラインと深刻げに話をしていた。

「秘密の地下室にご案内いたしましょう。キヤル、お前もおいで。アグウイナス家の一員として知っておく必要がある」

キヤロラインが頷くと、ロイスはマリエラの方に向きなおる。

「お嬢さん、貴女にもおいで頂きたい。ルイスを解放してくれた貴女にも」

「はひ？」

部屋の隅っこで自分の仕事は終わったとばかりにくつろいでいたマリエラはロイスの無茶振りにヒヤッと姿勢を正す。

ウエイスハルトもキヤロラインも、迷宮討伐軍の兵達もみんなマリエラの方を向いている。なんだろう、この展開は。

アグウイナス家の応接室に迷宮討伐軍の兵士がいること自体緊急事態だというのに、重要ごとの顛末に一介の薬師が立ち会っているのか。それとも庶民代表か。第三者的立場からご意見番の庶民マリエラさんが呼ばれたとも言つのか。

そんなことあるわけないしと困ってしまったマリエラは救いを求

めてキャロラインを見る。キャロラインはと言うと自分が呼ばれた時点で「どうしましょう」という顔をしている。マリエラと同類か。いやマリエラと比べると十二分に当事者なのだけれど。

キャロラインの横に並ぶロイスとウエイズハルトは、なにやら「わかってるから」的な顔をしている。ルイスを解放したあの時、ロイスは眠っていたしウエイズハルトは扉の外にいて、命の雫を使ったことは気づかれていないはずだが。

「時間が惜しい。いくぞ」

ウエイズハルトの号令でロイスとキャロライン、数名の兵士が離れに向かって動き出す。マリエラにクツキーをくれた兵士が、どうぞと言いつぐさでマリエラを促す。ちらりとジークを見上げると、ジークも頷いていて参加しないわけにはいかないらしい。仕方なくマリエラは皆の後ろをついていった。

離れの周囲は何人もの兵が警備をしていて、まさに猫の子一匹通さないといった具合だった。

マリエラ達がアグウィナス家に来たときは冷たい雨が降っていたのに、今では雪に変わっている。このまま降り続けば明日の朝には積もっていきそうだ。

大喜びで広い庭を駆け回りたいのだけれども駄目だろうか。駄目だろうな。マリエラは大人しく一行の後ろをついていった。

「まずは二階の書齋へ」

ロイスの案内にしたがって二階に上がる一行。

ロバートがニーレンバーグに演説を行なった部屋の奥に、二階に続く石造りの階段があった。階段を上った先にある部屋が書齋らしい。今ではロバートが使っているらしいこの部屋は、多くの書類や書籍が整然と並んでいて、ロバートの几帳面な性格が窺えた。

年代物の書棚の前でロイスは車椅子を止め、中ほどの段の左端にある本を手にとって一つ上の段の同じ場所に並べなおした。

『カチリ』

とても小さい音がした。どうやらこれがスイッチらしい。よく見ると本棚の右横の床には同じくらしいの奥行きの重たいものを引きずったような跡がついている。

（すごい。キヤル様が話してくれた物語の秘密基地の入り口みたい！）

兵士に囲まれた物々しい雰囲気につきかり慣れてしまったマリエラは、書棚の仕掛に興奮してキヤル様をチラ見する。キヤル様も同じことを考えていたようで、少し頬を赤くしてマリエラのほうを見ていた。

二人は頷き合つと書棚へと歩み出て、書棚を右側へ動かすために力を籠めた。

「ふんぬ。アレ？」

「動きませんわ？」

日々の練り練りで鍛え上げたのに、少女たちの力では書棚は僅か

も動かない。

ロバートも戦士ではないのだから、練り上げた二人の少女パワーは勝るとも劣らないはずなのだが。

「あー……、この部屋にあるのはスイッチだけなんだ」

ロイスが申し訳なさそうに言う。

「でしたら、あの床の擦り傷は？」

「初めて仕掛けを見た者は、皆同じ反応をするのでな。先々代あたりがつけたらしくてな……。ようは、フェイクだ」

狐につままれたような顔で、マリエラとキャロラインは顔を見合わせた。

「で、入り口は？」

冷静なウェイスハルトに「下でございます」と答えるロイス。

車椅子ごと持ち上げられて一階へと運ばれていくロイスの後を、顔を見合わせたままトコトコと付いて行くマリエラとキャロライン。

「……騙されましたわ」

「キヤル様のご先祖様は、お茶目さんだね」

部分的に和んだ雰囲気の中、一行は一階の階段の裏側へと向かった。

階段の裏側には床まで届く立派なレースのテーブルクロスを掛けた花台の上に、大きな花瓶が置いてあった。花台近くの階段裏の壁をよく見ると、石のひとつが少しだけ飛び出していた。

今度こそここが入り口だろう。きつと階段裏のこの壁が扉のように開いて秘密の地下室への通路が顔を出すに違いない。花瓶が置いてあるからスライドして開くのかも知れない。先ほどのトリックのお陰でふんべつのある大人たちは皆、壁裏を遠巻きにして視線が合

わなないようにしている。薬の講習会するとき受講者が、質問が当たらないようにする反応にとても似ている。

「キヤル、お嬢さん、その出っ張りを引っ張ってくれるかな」

マリエラ達が当てられてしまった。二人して飛び出た石を引っ張ると、滑らかな動きで少しだけ前に動いて『カコン』と門が外れるような音がした。

さて、今度は壁だ。引くのか押すのかずらすのか。

「その花台の下です」

ロイスの指示で兵士がテーブルクロスをめくると花台の下の床が足のくるぶしくらいまで沈み込んでいた。

（そ・こ・か……！ 壁、関係ないのか！）

この場にいた全員心が一つになった瞬間だった。

邪魔な花台をのけると、長く使われていたせいかへこんだ石材の四隅が丸く欠けていて、花台のテーブルクロスで上手に隠れていただけで、十分な光の中では一見してわかる程度に違和感があった。テーブルクロスはドレープが美しいレースのもので、いくら中が透けて見える。迷宮討伐軍の兵士がテーブルクロスをめくって確認したときは微妙な陰影の加減で気づかなかったというから、うまい偽装と言えるのだろうけれど本棚の隠しスイッチの入り口がこれだとは、折角の秘密基地感が台無しである。

心優しいキヤル様も残念なものを見る目をしている。こういう眼差しはもう少し先まで取っておいて欲しいのだが。

「それにしても、兵が踏み込むまでの僅かな間に、二階の書斎に上がって入り口を開き、再びここへ戻って地下へと逃げおおせるとは、中々の素早さだ。皆、気を抜くな」

ウエイズハルトが兵士達の気を引き締めようと声を掛けるのだが……。

「あの、恐らくは開けっ放しだったのだと……」

ロイスの一言が台無し感をさらに強める。なんとという空気の読めなさ。やはりロイスと混ざっていた影響が抜けきれていないのかもしれない。

へこんだ床は簡単にスライドして開いた。練り練りパワーも友情パワーも必要ないほど簡単だった。

2 mほどの垂直な壁面を壁のはしごを使って降りると、緩やかな下りの通路になっていた。ロイスは兵士に背負われて、他の者達も一列になって順次地下へと降りていく。

通路の奥から漏れる明りが、2000年に渡る錬金術師たちの物語の終わりを伝えようとしていた。

**の眠り

「エスターリア、エスターリア、エスターリア」

盗賊を使ってニールンバークから逃れたロバートは、エスターリアの眠る地下室へと逃れた。

エスターリアの棺にとりすぎるロバート。

200年に渡る錬金術師たちの思いを裏切って、ガラスの棺を開け放ちエスターリアを目覚めさせようと言うのか。

けれどロバートは棺に縋って彼女を見つめ、その名を繰り返し呼ぶばかりで棺を開けようとはしなかった。

この地下室への入り口は一つしかない。

この部屋は行き止まりで、目覚めた錬金術師たちの出発地点で、エスターリアに全てを捧げたロバートの終着地点でもあった。

「エスターリア……」

ロバートは彼女の名を呼び見つめ続けるだけだ。時が凍ったようなこの地下室でどれほど時間が経ったのだろうか。

この部屋へ続く秘密の扉を開け放ち、何人もの人間が降りてくる足音に、ロバートはゆっくりと顔を上げた。

「ようこそ、亡国の錬金術師たちの墓場へ。」

ロバートはまるで幽鬼のように立ち上がり、ウエイズハルトたち

を迎えた。

「ロバート・アグウィナス。罪状は分かっているな。一緒に来てもらおう」

ウエイズハルトが言い放つ。

「ロバート……」

「お兄様」

「キャル……、父上？ 正気に戻られたのですか？ どうやって……」

ロバートの目が父ロイスを捉える。ロイスの状態は誰よりロバートが分かっていた。正気を取り戻すなど、もはやありえないことを。

「そうか……、錬金術師！ やはり、やはり目覚めていた！ どこだ！ 何処にいる！？」

気が狂ったように叫びだすロバート。

「お兄様、もうやめて！ きちんと話せばシューゼンワルド辺境伯様は分かってくださいます！」

「わかる？ 何をだ？ 話す？ 今さらだ！ いつも要求ばかりしておいて！」

200年前から皆がどれ程の覚悟で！ どれ程の思いでポーシオンを作ってきたことが！

何がわかる！ どうしてわかる！ 彼らはお前たちのためにポーシオンを作ってきたのではない！

エスターリアの！ エスターリアのために！ わかると言うならば、錬金術師をこちらへよこすんだ！

必要なのだ、彼女の、エスターリアのために！ エスターリアが目覚めるために！！ 彼女を、新しい世界に連れて行くために！！

「！」

エスターリアの棺を後ろ手に庇うように立ちはだかるロバート。その身からは黒い呪いが滴り落ちてガラスの棺を守るかの様に渦を巻く。

けれどどれほどロバートが呪いを練り上げようと、戦闘職でもない彼の強制従属に特化した呪いなど呪い蛇キングバジリスタの王を下した迷宮討伐軍の精鋭の前には見戯に等しく、ウェイスハルトの目配せ一つで飛び出した兵士の一撃で呪いは霧散し、ロバートは両の腕を後ろにねじりあげられ地に倒された。

「離せ離せ離せ離せ！ 彼女に！ 彼女に触れるなああああああああああ！」

彼女は目覚めるんだ！ 新しい世界でっ！ 皆が願い、夢に思い描いたとおりに！……！」

「無理だよ……！」

小さく漏らしたマリエラの呟きは、ロバートに届いたのだろうか。傍にいたウェイスハルトが「どうということだ」と問いかける。

マリエラは酷く悲しそうな顔でエスターリアを見つめていた。

「だって、その人はもう……！」

マリエラの言葉の意味に気づき、ウェイスハルトは、つかつかとガラスの棺に歩み寄り、棺に掛けられた精緻な薔薇刺繍が施された掛け布に手をかける。

「やめる……！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！……！！」

ロバートの叫びが地下室にこだまする。

取り払われた掛け布の下、ガラスの棺に眠るエスターリアの、
下半身は崩れ去り、

平らに広がる薔薇色のドレスの裾からは、
さらさらと塩がこぼれ落ちていた。

この部屋は行き止まり。
エスターリアの物語が終わった場所だった。

ロバートがエスターリアの死をいつから認識していたのか、マリ
エラには分からない。エスターリアが既に『還って』しまっている
ことを、どんな魔法薬を秘術を使ってももはや戻ってこないことを
理解しているのかも。

認識していたとしても、理解していたとしても、受け入れること
はできなかつたのだと思う。
受け入れてしまったなら、きつと立ち止まってしまっから。

この地下室には封の空いた棺が幾つも転がっている。
ガラスの棺で永久とわの眠りに就くエスターリアを見て、何をしたの

か分からないほどマリエラは愚かではない。

不完全な仮死の眠りの魔法陣がどういった結果をもたらすのかも。

だから師匠はマリエラが幼い頃から何度も簡単な魔法陣の『転写』を行って耐性をつけてまで、仮死の眠りの魔法陣を直接脳に焼き付けたのだし、マリエラは1mもある魔法陣をまるで点描で描くかのように精密に書き上げたのだ。僅かなゆがみが、ずれが、点の大きさや線の角度や長さの違いが不幸な結果を招くことを知っていたから。

きっと棺に眠っていた錬金術師たちも自らの運命を分かっていたのだろう。

彼女を新しい世界に連れて行くために。

ロバートのその言葉は棺に眠る錬金術師たちの思いに違いない。エスターリアの眠るガラスの棺を見ればよくわかる。ガラスは劣化するのだ。マリエラが板ガラスを作った廃工場のガラスは、真っ白に劣化して粉々になっていた。日の当たらない地下室とはいえ照明の光にさらされながら200年の時を耐えるなど、このガラスの棺はどれほどまでに質の良い材料を使い高度な技術で作られたものだろうか。

きっと、もう一度彼女に会いたいと願ったのだろう。

眠る彼女と言葉を交わすことができなくても、目覚めることができたら、一目まみえたいと祈るが如く思ったのだろう。

そのための、ガラスの棺なのだろう。

エスターリアの目覚めと新たな世界での幸福を信じて、後何日生きられるかもわからない運命に殉じていった錬金術師たちの記録は、アグウィナス家の当主に代々受け継がれていた。

目覚めることができた錬金術師はただの一人もその身の運命を嘆くことなく、命潰えるその時までポーシオンを作り続けていたと。

その思いをどうして途絶えさせられようか。

エスターリアを新たな世界に連れて行く。例え目覚めることが無かったとしても。それだけを支えにアグウィナス家は200年の時を越えてきたのだ。

ポーシオンが無いのならば、禁忌に手を染めてでも。それで迷宮が葬れるのならば。

「だがなロバートよ、目覚めた錬金術師の思いは、命は、その者のものだ。お前が新薬の犠牲にしてきた者達も。お前が弄んで良いものではない。」

ウェイスハルトの言葉にロバートは顔を歪めるように笑う。そんなことは、とうにわかっているのだと、彼の表情は告げている。ロバートは言う。

「錬金術師がいなければ、貴方たちは『材料』を知って尚、新薬を使い続けたらうに。」

迷宮討伐軍に引き立てられるロバートを見送った後、一人の兵士がガラスの棺をどうするのかウェイスハルトに指示を仰いだ。

「このままにしておけ。新しい世界が来るまでは確りと管理を頼んだぞ」

新しい世界で埋葬せよとのウェイスハルトの酌量にロイスは深く頭をたれていた。

ロイスからことの顛末を聞かされたキャロラインは、永久の眠りに就くエスターリアをじっと見つめていた。マリエラはキャロラインの手をきゅっと握った。

「大丈夫だよ、あの人はちゃんと地脈に還れたから。大切な人たちとも、きつと逢えたよ」

ロイスはロイスの体を離れるときに言ったのだ。「エスターリア」と。

アグウィナス家の思いはちゃんとエスターリアに伝わっていて、ロイスを迎えに来てくれたんだとマリエラは思っている。そして、この迷宮都市でポーシヨンを作れる錬金術師は、本当に自分ひとりなんだとぐつと奥歯を噛み締めた。

握り返してくれたキャロラインの手の平だけが、冷え切った地下室の中で唯一マリエラにぬくもりを与えてくれていた。

迷宮都市に降る雪は、音も景色も飲み込んで、全てを塗りつぶすかのようにしんしんと降り続いた。

**の眠り（後書き）

E t e r n a l S l e e p i n g T a l l i a Ⅱ エスターリア

彼女は登場時からこの世の人ではありませんでした。エスターリアに絡むロバートの台詞は、彼の不安定さが演出できればと、どれも大げさで演劇臭く描いてあります。彼の心情を色々想像していただきながら、明後日（小声）の更新をお待ち下さいませ。

ロバート劇場は一旦閉幕となりますが、黒の新薬のお話が残っておりますので。

ロバートったら、マリエラが地下室まで来たのにスルーとか（笑）

黒（前書き）

残酷な描写があります。苦手な方はあとがきのあらすじをどうぞ。

黒

アグウイナス家の離れの地下室、かつては大量のポーシヨンが保管されていた一室に巨大なガラスのタンクが幾つも並んでいた。

「これが『黒の新薬』か……」
ジャック・ニーレンバーグは不快そうにつぶやく。

部屋の隅には新薬製造に携わっていたアグウイナス家の技術者たちが捕縛されている。彼らの顔はずっと感情を押し殺して生きてきた者特有の、目が落ち窪み張りの無い疲れきったものだったが、僅かに読み取れる感情の残骸は、やっと解放されると安堵しているようにも見えた。

正気を取り戻したアグウイナス家先代当主、ロイス・アグウイナスは迷宮討伐軍の取調べに対して協力的であった。ロイスの供述から本件が極秘事項を多く含むことを理解したウェイスハルトは、彼と信のおける腹心のみで事情聴取に臨んだ。ロイスやアグウイナス家の技術者たちの供述に基づく『黒の新薬』に関する報告書は、以下の一文より始まっていたという。

『黒の新薬』は『贄の一族』の秘術を応用したダメージ転移の呪術薬である。

贄の一族とは、皇帝など極めて高位の人物に降りかかる災厄の身代わりとなる一族である。

『呪い』あるいはそれに至る前の『厄』を代わりに受けるというのは、古来では人の形を模した形代カタシロの役割だったという。呪いには至らない邪念や穢れが集まった『厄』であるならば血肉を持たない形代でもよく、贄の一族という集団が形成された古い時代においては、厄を紙や木、土で作った形代に移し浄化することが一族の生業であった。

しかし人の世が移り変わり、小国が帝国にまで成長し、同時に魔術や技術が発達するにつれ、人の邪念はより複雑に、より大量に凝り固まっていき、それを払う一族の術もより実効性が高く、醜悪なものへと変じていった。

形代に人間を使うようになったのだ。

身代わりとなる人間は誰でも良いわけではない。まず護衛対象である被術者との相性がある。災厄を受けるのが、一瞬あるいは一定期間であるならばその瞬間に術を発動させればよい。しかし沼地の空気が常に澱んで湿気ているが如く、被術者の周りに常に漂い蓄積し、運命を悪しき方へ掛け違えさせようとする形のない悪意や邪念を、常時身替わり続けるには生まれ持つての相性が必要とされた。

形代になりうる人間が限定されるがゆえに、形代以外の一族には形代が受けた邪念を晴らす術も求められた。相性が合う人間など一人の被術者に対して何十人もいるものではないのだから、形代となる人間を長く保たせる必要があるからだ。

歴代の皇帝は皆、贄の一族の里を訪れて、時間を掛けて調整され

た形代たちと『贄の契約』を結び、以降は皇帝に向けられる怨念の災厄の全てを形代たちが受け持った。時には篡奪を企てる賊の凶刃さえも形代が身代わったという。贄の一族は災厄に苛まれる形代を癒し、護り、災厄の浄化に努めることで、影から皇帝を、帝国を支えてきたのだ。

ここまででは、ウェイスハルト達のような限られた上位貴族であれば聞き及んでいる話だった。

レオンハルトのスキルが明らかになった時も贄の一族を宛がう話が出たのだから。レオンハルトが『贄の契約』を結ばなかったのは、迷宮討伐で受ける物理ダメージが多いため、呪に特化した形代では相性が悪く、保たない可能性が高かったことと、本人が「遺志を次代が継いでいく」というシューゼンワルド家の教えに基づき強く反対したからだ。

贄の一族の秘術のおぞましい真相は形代にあった。

形代に選ばれた子供は幼い頃から被術者との相性を高めるために薬や魔術で体を作り変えられる。血液を全て入れ替えるなどは序の口で、何回にも分けて体を開かれ骨に直接呪術紋を刻みつけられる。前回は右腕、今回は左脚と場所ごとに腑分けされては、肉を、皮を、脂肪を、神経を特殊な魔法液に漬け込まれて変質させてから再び治癒魔法で元の形に作り直される。

被術者との相性が悪い者は培養された人工の組織に取り替えたりもするらしい。

こうして作りかえられた肉体は被術者が受けた災厄を高効率で引き受けることができるのだという。

けれどこんな邪法で作り返えられた肉体で普通に暮らせるはずが無い。作り変えられた肉体は持ち主の思うようには動いてくれず、光に、空気に触れるだけで痛みを伴うようになる。人工の組織に取

り替えられたものなどは、薬液槽から出ることすら叶わなくなる。けれどそんなことは贄の一族には問題ではないのだ。

なぜなら形代の肉体は、形代となった者のものではなく、被術者となる護衛対象の別身だから。

形代は一方的に被術者の災厄を受け取るだけ。形代が感じる痛みも苦しみも、被術者には伝わることは無い。形代がどれほど苦しみもがこうが、それも形代として完成するまでの一時的なものなのだから。

被術者と形代を繋ぐ贄の一族の秘術をルイスは学んだ。贄の一族は彼を迎えるときの約束のとおりに全てをルイスに開示した。秘術の解読と応用術の開発にルイスは全霊をかけて取り組んだ。

形代として完成した時、自分がどうなるかわかっていたから。

形代は古来、人の形をした人形意思の無いものが当てられた。

形代は被術者のもう一つの身体。そこに形代の意思は必要ないのだ。

ルイスの肉体が形代として完成するよりもほんの僅かだけ早く、ルイスの研究が完成したのは僥倖だった。彼は考えうるあらゆる方法を用いて作成した呪術薬を双子の弟、ロイス・アグウイナスに宛てて送った。

贄の一族の妨害は予想のうちだった。彼らは秘術を外へ漏らすつもりは最初から無い。ルイスが形代になってしまえば何もできなくなるのがわかっていたからルイスに秘術を開示したのだ。形代になりかけたルイスは里を出ることはできない。どれほどルイスが贄の一族の秘術を体得しようとも、手紙や送付物の検閲さえ行っていれば秘術が外に知られることは無い。

ルイスは秘術を書面にしたためたりはしなかった。そんな高張る方法ではとてもロイスに届けられない。

ルイスが送った百を超える魔法薬のうち、たった1本でもロイスに届き、そしてロイスが飲んでくれたならルイスの勝ちだった。ルイスとロイスは元を同じくする双子。相性としてこれ以上のものはない。何の術的処置をしなくともロイスの元へならばいける筈だとルイスは賭けた。

はたしてルイスは賭けに勝ち、形代としての完成と共に自我を壊される直前にルイスはロイスの肉体へと宿ることが叶った。形代の契約を応用し、被術者から形代へ災厄を一方的に送る代わりに、形代であるルイスの魂を呪術薬を用いた術の発動で被術者に当たるロイスへと移したのだ。

書面など嵩張り目立つものでは伝えられなかったから、小指の先ほどの小さな瓶に己を籠めて、ロイスやロバートに直接伝える方法をルイスは選んだ。ルイスはロイスの意識が無い間に現れて、ロバートに一族の秘術を直接伝授したという。

ルイスの唯一の誤算は、本来の肉体を奪われて尚、肉体が受ける苦痛を感じ続けたことだろう。

皇帝に向けられた憎悪や悪意に満ちた念は、形代となったルイスの肉体を酷く苛み、ロイスの体にあつてなおルイスに痛みや苦しみを与え続けた。

痛みから逃れようとするたびに、ルイスはロイスを侵食する。ロイスの肉体はルイスにとつて仮初のもの^{かりそめ}。もしもロイスがルイスを強く拒んだならば、ルイスの侵食を止めることができたかもしれない。けれど、本来ならば自分が養子に行くはずだったのだ。ルイスの痛みや苦しみは自分が受けるはずだったものだ。

ロイスはルイスを受け入れることを選び、ルイスと共に苦しんで少しずつ正気を失っていった。

ルイスが伝えた秘術を元に作られた魔法薬が「黒の新薬」。

使用した者のダメージを形代に移す呪いの薬。

形代の条件は三つ。

一つ、形代としての資質。相性の良し悪しは災厄を常時肩代わりするのでなければ大幅な緩和が可能だ。成人した肉体を改造した汎用型の形代で対応できるくらいには。

二つ、被術者と形代を結ぶ契約。これはルイスの応用研究により達成された。形代の肉体の一部を被術者が取り込むことで、一時的に契約状態を作り出せる。ルイスとロイスのようによほど相性がい場合は、繋がった状態がずっと保たれるのだろうが、成人した人間を作り変えた汎用型の形代では、ダメージを移す僅かな時間で切れてしまう。ポーションの代替利用としてのロバートの目的からすればむしろ好都合といえた。

そして三つ目。意識を持たない肉人形であること。

「ひっ、ひえああ！　なんだ、なんだよ、ソイツラは！　嫌だ、助けてくれよ。何でも、何でもするからよ！」

キングハジリスク

迷宮討伐軍が呪い蛇の王を討伐していたまさにその時、アグウイナス家に運び込まれた犯罪奴隷の一人、ロバートの眠りの《命令》から目覚めた盗賊は、タンクに眠る形代たちを見てそう叫んだ。ロバートの命令でジャック・ニーレンバーグに飛び掛ってきた盗賊である。

「なんでも？　そうですね、我が家には荒事に向く人材が足りていません。うまく計画を成しおおせたら、材料にはしないであげましよう」

ロバートの提案に天の助けとばかりに盗賊はすがりつく。

黒の部屋に並ぶ巨大なタンクには、体じゅうに模様を描かれ、幾本ものチューブを生やした人間、いや肉人形が浮んでいた。その者達の頭部は脳が露出している。頭蓋を外すためなのだろう。果物の皮のように剥かれた頭皮がべろりと眼前に垂れ下がっていて、目隠しのように顔を覆っている。

何人も人を殺めてきた盗賊は人間の頭の中がどうなっているのか見たことがあった。だからわかる。水槽に浮ぶ頭蓋の無い肉人形からは脳の一部が取り去られていた。

ゴボリとタンクの肉人形が血泡を吐き、身震いをする。

肉人形は次の瞬間、何の攻撃も受けてはいないはずなのに、腹が割け、腕が足がベキバキと音を立ててひしゃげた。

黒の部屋はとたんに慌しくなつて治癒魔法使いらしき人間が肉人形を治療し、他の技術者たちは傍の魔道具を操作してチューブを通して何かを肉人形に送ったり水槽の薬液の調整をしている。

「ばかな、使い方が荒すぎる。これではもたない」

ロバートが呟いた次の瞬間、技術者たちの努力もむなしく肉人形の体は黒く変色し、ただれて腐った肉片のようにぼろぼろと崩れていった。

ウェイスハルトの報告を聞き、レオンハルトは深いため息をついた。

「我々が使っていた物はそういうものだったのか……」

唾棄すべき邪法であるとは思う。けれど新薬が無ければ53階層までたどり着けなかったこともまた事実。

「それで材料として集められた者達は？」

「目覚めたのは『赤』の半数だけでした」

残りの半数はチューブを外すとそのまま息を引き取った。残り僅かな生命を無理やり繋ぎとめて血に変えるような薬を飲まされ続けていたのだろう。

「目覚めた者の中でも魔石の投与量が多い者は何らかの障害が残るか。全員、身元は犯罪奴隷や終身奴隷です。身体に欠損がある者が優先的に『赤』の材料にまわされたようで、五体満足な者は少なく治療後の取り扱いが難しいところです」

迷宮都市は常時人手不足ではあるが、障害や欠損のある奴隷などにもできる仕事は多くはない。新薬の販売という収入源を失ったアグウィナス家の資産を食いつぶすだけの重荷になりかねない。

「『黒』は？」

レオンハルトの間に、ウェイスハルトは静かに首を横に振る。

「ニーレンバーグ治療技師が始末をつけてくれました」

「そうか……。また、嫌な仕事をさせてしまったな……」

アグウィナス家をめぐる騒動は、ウエイスハルトの思惑通りに進行し損害を出すことなく終結したといえる。けれど明るみに出た事実は、シューゼンワルド家の兄弟の心にしこりを残した。

ロバートが最後に言った「錬金術師がいなければ、貴方たちは『材料』を知って尚、新薬を使い続けただろう」という言葉を否定することは、彼らにはできなかつたのだから。

さくさくと新雪を踏みしめてニールンバーグは家路を急ぐ。

あらかたの仕事を終え、アグウィナス家に到着した後続の部下たちに仕事を指示し終えた頃には夜はすっかり明けてしまっていた。雪はいつの間にかやんでいて、すっかり白く染まった街は、どこか知らない場所のようにも思える。

家に近づくと、雪玉が一つ飛んできた。

犯人は分かっている。さっと隠れた曲がり角の石壁から黒い髪がちらりと見えている。避けずに軽く手で受ける。

「お帰りなさい、パパ！遅いから雪だるまこんなに作っちゃったのよ」

角を家の方角に曲がると、毛糸の帽子を目深く被ったシェリーが雪だるまの並んだ軒先を指差す。

彼女の肌は右も左も雪のように白く美しい。

黒髪は焼け落ちてまだ生え揃ってはいないけれど、季節は丁度冬

だから帽子で十分隠せるし、すぐに伸びて彼女の顔を引き立たせる
だろう。

降り積もった雪は朝日を反射してキラキラと煌いていて、ニール
ンバークに新しい日々の訪れを告げていた。

黒（後書き）

活動報告にも描きましたが、更新頻度落とします。次回はたぶん明後日です。

【残酷描写回避された方用のあらすじ】

『黒の新薬』は『贄の一族』の秘術を応用したダメージ転移の呪術薬だった。

シエリーちゃんの傷跡はすっかり回復した。

ウエイズハルト：予測と誤算と

アグウイナス家の一件以降、ウエイズハルトは悩んでいた。

アグウイナス家が代々錬金術師を擁しているのでは、という疑問は**ずいぶん前**から抱いていた。

きっかけは偶然屋敷の書庫で見つけたポーション保管設備の試算報告書だった。ウエイズハルトは魔道具の専門家ではないが、試算に用いられた根拠がどれも甘く200年後の現状とかけ離れていることは容易にわかった。

これでは200年もつはずがない。

その結論に至ったとき、この200年の間、定期的に保管庫を有する各家に鮮度の高いポーションが提供されてきた理由が腑に落ちた。アグウイナス家は鮮度の高さを新たなタンクを開封したためと説明していたが、そのタイミングで錬金術師がいたのなら。

だからこそ黒鉄輸送隊がポーションを持ち込んできたとき、この地の地脈と契約した錬金術師が現れたのだと気づくことができた。

同時にその存在を知ったアグウイナス家がどう動くかも簡単に予測できた。錬金術師マシエラの身の安全のために策を講じるのは当然といえた。ポーションの買い取り量を半減し、アグウイナス家の出方をうかがった。彼らは錬金術師の存在を公にせず、高額なポーションの代金を要求してきたが、帝国や辺境伯家が作り上げたポーション保管庫の欠点を補って、200年に渡りポーションを提供し続けてきた功績は評価されるべきものだ。

正面から話し合いを求め、それが人道的かつ迷宮討伐において妥

当なものであったならば、応じる用意はあったのだ。

ニーレンバーグの娘がスライム事件の被害者であったことは偶然ではあったが、都合が良くもあった。アグウイナス家に対する困として最適だったと言うこともあるが、職務に忠実なニーレンバーグは自分だけが特例となることを拒み、ポジションを受け取るうとはしなかったからだ。黒鉄輸送隊にシェリーを託し、帝都で治療を受けさせるつもりだったらしい。地脈契約コントラクトの錬金術師が現れ、何百というポジションを迷宮討伐に使用できる現状において、貢献度の高い側近にポジションを提供しない理由は無かったから、特殊任務に対する手当として上級ポジションを受け取らせることもできた。

被害者リストを流し、ニーレンバーグの娘シェリーを諜報員と入替え、家政婦を早く帰して犯行が行いやすいように整える。

娘は身の安全を確保するため、ポジションで治療をした後、シューゼンワルドの屋敷で保護していたのだが、娘の姿をした諜報員と暮らすニーレンバーグの機嫌が日ごとに悪くなっていき、迷宮討伐軍の兵達が心底おびえ始めた以外は思惑通りにことが進んだといえた。

拍子抜けするほどあっさりと、ロバート・アグウイナスは錬金術師の情報を得るためシェリー・ニーレンバーグの誘拐に及んだ。彼の精神はとうに擦り切れていたのだろう。地下室から見つかった赤と黒の魔法薬はそれほどにおぞましいものだった。そしてアグウイナス家が代々見守ってきた錬金術師達。

彼らの悲運と、死の淵に佇んで尚ポジションを供給し続けてきた隠された歴史を思うと、とてもアグウイナス家の所業を一方的に責めることはできなかつた。彼らを含めたアグウイナス家の処遇をどうするか、頭の痛い問題だ。

ウェイスハルトはため息を一つつくと、サイドボードからグラスを取り出し魔法で氷を作って入れると気に入りのブランデーを注いだ。

氷で薄まっていない注いだままのブランデーを軽く口に含み、あの夜のことを思い出していた。

(あの鍊金術師は、どうしてあそこにいたんだ……)

ウェイスハルトの頭脳をもってしても、それだけは理解できなかった。

キャロライン・アグウィナスとの接点は、『木漏れ日』内に限られており、その内容も友好的なものだった。万一、キャロラインが店からマリエラを連れ出そうとしたならば、直ちにメルル諜報員に連絡が行き、自然に阻止する手はずになっていた。諜報員達の目の届かない街中で、偶然に出会ってアグウィナス家までやってきたとでも言うのか。

ウェイスハルトは、深謀術策に長け感情の一切を隠すことができる。表情筋を自らの意思で完璧に制御できるのだ。視界は広く、別の場所を見ているフリをしながら周囲の状況を観察することも可能だ。そうでなければ、あの場に居合わせた全員がマリエラに注目しただろう。

誰に悟られることも無かつたけれど、ウェイスハルトはかつて無いほど驚愕し、マリエラを凝視していたのだから。

初めて廊下で会ったとき、どこかの商店の配達員だと思った。黒鉄輸送隊と親交があり最近街に現れた人物など何人もいないから、謀報部員メルルを貼り付け、行動だけでなく外見に關しても報告は受けていたのだが。

(普通すぎる……、ユニコーンというよりは、その辺の森にいる小動物というか……)

若いとは聞いていたが、コントラクターの地脈と契約した錬金術師は若く見えると聞くから、見た目は若くとも相応の落ち着きや滲み出す知性によって、気高く只者ではない雰囲気醸し出しているものだと思っていた。しかし、彼女は街ですれ違った十人中九人は振り返らないくらいには只者だった。

事情を知らない兵士が無礼を働かないように、ウェイスハルトの目の届く応接室に席を設けて座らせたまでは良かったが。

(なぜ、跳ねる……。2000年前の儀式か何か？ いや、そんな話は聞いたことがないぞ)

落ち着きなく椅子の上でぼよぼよと飛び跳ねて後ろの護衛に止められていたし、知性の代わりに残念な雰囲気滲み出していて、年齢よりも若く見えた。

メリエラ彼女が見た目通りの年齢だとすると、なぜ上級ポーションが作れるのか。しかも一日百本も。ウェイスハルトは百本単位で注文はしたが、納品されたら次の注文をする流れで指示をしていただけで、毎日納品されるとは思っていなかった。

上級ポーションを作れるようになるには中級ポーションを十万本

以上作る必要があると聞く。ポーション製造のネックは魔力量。上級ポーションを作れるようになるために、常人では数十年の歳月が必要とされる。そして上級ポーションを百本という量。魔力が上限の5あっても作れるかどうかだ。

だから、てつきり、若い女性の姿をした得体の知れない錬金術師なのだと想像していた。百本もの上級ポーションが連日納品されていると知ったときは、その驚異的な魔力量に友好的な関係を結べてよかったと、ひそかに冷や汗を流したものだ。

魔力の上限を上げる方法は分かっている。十歳に満たない幼少の頃から毎日魔力が枯渇するまで使い続ければいい。口で言うのは簡単で、魔力枯渇がもたらす苦痛は肉体の痛みにも勝る。体の内側に満たされた魔力が消えうせ意識ごと反転するようなあの感覚。

肉体を鍛え上げる時に意識を失うまで打ちのめされることはよくある話だ。けれど、意識を失うまで走り続けると言われて、出来る人間がどれだけいるだろうか。

魔力が枯渇するまで使い続けるというのはそういうことで、意識を失うほどの精神的消耗を、苦痛を伴う行為だ。それを十歳に満たない子供が毎日行う。

ウェイスハルトや一流の魔道師達のように、幼い頃に才能スキルを見出され、高い志を持つように教え込まれた者達であつても、容易にこなせるものではなかったのだ。

幼い頃から過酷な修練を耐え、唯ひたすらにポーションを作り続ける。ごく僅かな者だけが漸くたどり着くことの出来る頂は、一つの境地とも言えるだろう。

若くしてそこへ至った少女がどうしてあんなに普通に見えるのか。メルルたち諜報員のように擬態しているのだろうか。

幼い頃のマリエラは、師匠に与えられた『レインボーフラワー』を綺麗に乾燥させる『遊び』に夢中で、辺りの薬草から雑草から洗い立ての洗濯物まで目に付くものは片っ端から乾燥させまくっていただけで、過酷だとか修練だとか考えたこともなかったのだが。

師匠は師匠で、「頭をかばって上手に倒れる方法」だとか「安全な場所ですまく隠れて倒れる方法」を冗談交じりに教えては、魔力枯渇による気絶にかくれんぼ要素を盛り込んでマリエラを煽っていた。上手に気絶しては師匠に見つかってベッドの上で目が覚め、「またみつかっちゃった」と言いながら、師匠にくすぐられて笑い転げているうちに、魔力枯渇による気絶は、遊びつかれて寝てしまふようなものになっていた。

そんなことなど露も知らないウエイスマルトは、キャロラインに状況を説明しながらも、只者で無いハズのマリエラの一挙一動を観察する。

マリエラの傍に配置した兵士は無礼な行いをしないように子供好きの気のいい男を選んだのだが、それがあだになったようだ。兵士は何やらポケットを探ると、保存食のクッキーを取り出してマリエラに与えてしまったのだ。齧りかけのものではないが、封を開けてしまっているから、人によっては『食べ残し』と怒るものもあるだろう。しかも高級な菓子ではなくて作戦行動用の保存食。その辺の子供に与えるならば喜ばれようが、高貴な者に渡してよい代物ではない。

(……………なぜ、食べる……………)

深刻な話題で静まり返った応接室に、カリカリコリコリとナッツの入ったクッキーを齧る音が聞こえる。こちらの会話は魔法で届いてはいないが、マリエラの咀嚼音は筒抜けだ。余りに場違いな様子に、キャロラインは「ふふ……………」と笑うと、「そういえば、お茶

もお出ししておりませんでしたわ」と表情を柔らかくした。

(あの保存食は喉が渴くからな……)

人間混乱すると、良くわからないことを考えるのだな、とウエイ
スハルトはあの日のことを思い出しながらブランデーのグラスを傾
けた。

「お前が飲むとは珍しいな」

「兄上。アグウィナス家の事件について考えておりました」

軽いノックをして、レオンハルトがやってきた。ウイスキーを好
む彼は、好みの酒をグラスに注ぐとウエイスハルトの傍に腰掛ける。

「で、どうするつもりだ？」

「ロバートの行いは禁忌ではありませんが、罪状としては違法呪術系
魔術による強制支配と誘拐、恐喝、迷宮討伐軍への背信行為ですか
らね。しかも贄の一族の秘術が絡むとなると公には出来ません。『
病による廃嫡』辺りが妥当かと。ずいぶん疲れているようですし、
ゆっくりと静養させる必要もあるでしょう。」

アグウィナス家は今までの貢献を鑑みてもキャロラインを後継に
すえて適当な婿を迎えることになるうかと。

あの新薬を使った兵士に何らかの影響がないか調べる必要もあり
ますし、新薬製造に携わっていたアグウィナス家の技術者や、生き
残った奴隷達の処遇も決めねばなりません。迷宮討伐もあると言っ

のに頭の痛い限りです」

「錬金術師はどうするつもりだ？ 会ったのだろうか？」
アグウィナス家の処遇など、仕事量が多いだけで解決しうる問題だ。

けれど、錬金術師マニエラについてはそうは行かない。アグウィナス家に眠っていた錬金術師たちは、目覚めることなく、あるいは目覚めることが出来たとしても血を吐き、塩と化して僅かな時間で死んでいったのだ。マリエラがそうならない保証は無い。

迷宮討伐におけるポーションの有用性は先の『呪い蛇の王』、『海に浮ぶ柱』で実証された。階層によって、必要となるポーションがあるということも。

ありとあらゆるポーションを無限に作らせるなど、無理な話だ。そんなことをして寿命を縮めたらどうするのだ。協力的な現状を損なう愚策を取るわけに行かない。

珍しく悩み黙り込むウエイスハルトに、レオンハルトが声を掛けた。

「昔、父上に伺った話を思い出した。何でも古の賢者の言葉だそう
だ。」

『命の雫は地脈を、その地に住まう全ての命を廻めぐっている。だから
本当に必要な時には全てが整うように出来ている』

だったかな。メルルの監視を抜けてあの場に居合わせたことさえ、
地脈の導きだったのやもしれん。」

レオンハルトの言葉は漠然としたもので、何の根拠も確証もないものだったけれど、ウエイスハルトの心にすんと落ちた。

矮小な人の身でやれる事など限られている。ならば人事を尽くす
のみ。

「そうですね。とりあえず護衛を強化しましょうか。今回の一件でいらぬちよっかいをかけようとする愚か者がでるかも知れませんが、彼女はなんだか危なっかしい」

ウェイスハルトはグラスを回して氷をカラリと揺らすと、ブランデーに口をつける。多少の酒で酔えるような体質ではないけれど、氷が少しずつ溶けるに従い味わいの変わっていく様を楽しむのは気に入っている。話し込んでいるうちに、グラスの氷はだいぶ小さくなってブランデーは好みより薄まってしまっていたけれど、これはこれで悪くないとウェイスハルトは残りの酒を飲み干した。

登場人物紹介（81話段階。バレあり。81話読了後推奨）

マリエラ

< i 2 5 5 0 1 8 — 2 1 0 6 4 >

・・・ 錬金術師の残念系主人公。美少女でなく微少女。お米様抱っこされ撒き餌ラに改名しかける。「素材の味が活きている」と評される身体の持ち主。

設定を盛り込みすぎた主人公だが、髪の色や服装と言った設定は決まっていない。

ジークムント

< i 2 5 5 9 2 1 — 2 1 0 6 4 >

・・・ マリエラの保護者兼護衛。

精霊眼というチートを持っていたが、調子に乗りすぎて失い奴隷にまで落ちる。死に掛けたところをマリエラに救ってもらったため、マリエラの信者ようになっていく。

繊細というかメンヘラ気質な性格だが、ボケっぱなしのマリエラの傍に居るうちに改善してきた様子。子育ては人を成長させるのかもしれない。身分は犯罪奴隷だが、マリエラさんちの家計を握っている、マリエラにお小遣いを渡しているのではないかと作者は思っている。

黒鉄輸送隊

ディック

・・・ 黒鉄輸送隊の隊長。元迷宮討伐軍の隊長でAランクの槍使い。2mくらいの大男で生粋の脳筋にしてモニユリスト。アンバーさんが好き。

マルロー

・・・ 黒鉄輸送隊の副隊長。元迷宮討伐軍の隊長で通信スキル持ち。迷宮都市に妻子がいる。ディック隊長を面白いなあと思いがらツルんでいる。

リンクス

< i 2 5 6 9 1 5 — 2 1 0 6 4 >

・・・ 黒鉄輸送隊の斥候で影使い。糸目。面倒見のいい性格で、護衛対象として以上にマリエラが気になっている。蓼食う虫も好き好き。最近はジークとも仲がいい。

ユーリケ

・・・ 黒鉄輸送隊の調教師。訛った喋り方をする。人間よりもラプトルのほうが好き。

エドガン

・・・ 黒鉄輸送隊の双剣使い。かつこつけるがモテない。

フランツ . . . 黒鉄輸送隊の治癒魔法使い。

ドニーノ . . . 黒鉄輸送隊の装甲馬車のメンテ担当。

グランドル . . . 黒鉄輸送隊の盾戦士。

ジャ (ジャイコブ)

・・・ 黒鉄輸送隊の奴隷。咽をつぶされている。
5話でラプトルに水をやっていました人。

ヌイ (ヌーイール)

・・・ 黒鉄輸送隊の奴隷。咽をつぶされている。

ニコ（ニコライ）

・・・ 黒鉄輸送隊の奴隷。咽をつぶされている。

商人ギルド、冒険者ギルド

エルメラ（エルメラ・シール）

・・・ 商人ギルド 薬草部門長にして生粋の薬草オタク。
お堅そうな外見をしているが、静電気防止のため。
定時に仕事を終えて旦那と二人の息子が待つ家に帰りたいと日々思っている。実はAランク冒険者の雷帝エルシー。

リエンドロ（リエンドロ・カツファ）

・・・ 商人ギルド 薬草部門の副部門長。

間延びした喋り方をする。人に仕事をやらせるのがものすごく上手。

キンデル

・・・ 嫌な社会人エッセンスを盛り込みすぎて、ヘイトより笑いを稼いでしまった。トラブルメーカー。スライムに溶かされて退場する。

ハーゲイ

・・・ 冒険者ギルドのギルドマスター。『破限』の二つ名を持つAランカーでもあるが、彼の真価は人材育成能力にある。冒険者ギルドはハーゲイが育てた幹部だけで運営が可能なので、ハーゲイは新人冒険者の育成などをして遊んで……働いている。
部下達の信頼は厚いが、いちいち歯や頭をキラリと光らせては、ずびし！とサムズアップをかます暑苦しい性格なので、表向きは非常に冷たくあしらわれている。
ワイフ（妻）に頭が上がらない。

迷宮都市の人たち

ガーク

・・・ ガーク薬草店の薬草屋。偏屈そうだが、マリエラのことをかわいがっている。最近の趣味は年寄りらしく『木漏れ日』で日向ぼっこ。

レイモンド

・・・ 奴隷商人。常識人なので仕事に精神的疲労を感じている。ストレス太り。

メルル

・・・ メルル薬味草店の店主。地域のボスママにして噂と甘味が好きな奥様諜報部隊。実は本物の諜報部員。

少年

・・・ メルル薬味草店の配達員にてメルル配下の諜報部員。顔を換えられるスキルがある。

エルバ・・・ エルバ靴店の靴屋。

ゴードン

・・・ ドワーフの大工。いかにもドワーフ！という外見をしている。頑固な職人風だが、『木漏れ日』での日向ぼっこを気に入っているなどかわいらしい一面がある。

ヨハン

・・・ ドワーフ・ハーフの建築家。ゴードンの息子。職人肌の父親とは得意分野や考え方が異なり、口げんかが絶えないが息はぴったり。

ルダン・・・ドワーフのガラス職人

マスター

・・・ヤグーの跳ね橋亭の主、エミリーの父。元冒険者。結構登場しているのに名前がない。

アンバー

・・・ヤグーの跳ね橋亭の娼婦で借金奴隷。実はディックが好き。無敵の胸部装甲を誇る。

エミリー

・・・ヤグーの跳ね橋亭の看板娘。10歳。
父ちゃんのお手伝いもするし、髪も自分で結ぶおりこうさん。
ただし上手に結べないので、左右の高さが違っていたりする。
とうもろこしをとうもろこしというので、書いていてとうもろこしがゲシュタルト崩壊しそうになった。

迷宮討伐軍

レオンハルト（レオンハルト・シューゼンワルド）

・・・迷宮討伐軍の将軍。

迷宮討伐に適したチートスキルを持っており、幼い頃から迷宮討伐を第一に育てられた。

ウェイスハルト（ウェイスハルト・シューゼンワルド）

・・・迷宮討伐軍の副将軍。

レオンハルトの弟。知力で兄を補佐する。ブラコンなのでお家騒動は起こらない。

ニーレンバーグ（ジャック・ニーレンバーグ）

・・・迷宮討伐軍の治療技師。DS。

シエリーに対しては親ばか。名前がカツコイイので、作中フルネームで書かれる事が多い。

シエリー（シエリー・ニーレンバーグ）

・・・ ジャックの娘。

黒髪以外父と似ていないと評される美少女。迷宮討伐軍のお兄さんたちの中にファンがいるので、ジャックは心配している。

テルーテル（ボーズ・テルーテル）

・・・ 都市防衛隊の元大佐。

現在は相談役をしている。冒険者オタク。

カイト

・・・ 都市防衛隊の隊長。盾使い。まじめな性格がシユールな笑いを誘う。

錬金術師の一族

ロバート（ロバート・アグウイナス）

・・・ アグウイナス家の当主、キヤルの兄。

エスターリアに片思いをしている。頭脳明晰だが、疲れてる。

キヤル様（キャロライン・アグウイナス）

・・・ ロバートの妹。マリエラの類友。天然系美少女薬師。

ロイス（ロイス・アグウイナス）

・・・ ロバートの父、ロイスの双子の弟。

ルイス（ルイス・アグウイナス）

・・・ ロバートの伯父、ロイスの双子の兄。

贄の一族の秘術をロイスに伝え、そのままロイスの体に憑依する。

ロブロイ（ロブロイ・アグウィナス）

・・・ アグウィナス家の200年前の当主

エスターリア

・・・ 200年間アグウィナス家の地下で眠り続けていた美女。

既にこの世を去っている。ロバートの思い人。

以下裏設定だが、ルイスの思い人でもある。

そんなアグウィナス家の男性を虜にしてきた彼女だが好みの男性のタイプはハーゲイ。

あの時、あの場所で

あの日、キャロラインに魔道具の相談をしなければ。

あの時、キャロラインの馬車に乗り込まなければ。

マリエラは、何も知らないままで、ジークと二人静かに暮らしていられたのかもしれない。

「うつ、ぐあつ……」

夜も明け切らぬ薄暗がりの中、ジークの呻き声が静寂を破る。

「よく、この程度で護衛だなどと言えたものだ。」
立ち上がれなくなったジークを見下ろす男の目は、底冷えするほどに冷たい。

的確に人体の急所を狙う攻撃は、じりじりとジークムントの体力を殺いでいき、もはや立ち上がる力さえ残されてはいない。それでも、凍りついた大地に爪を立てるように何とか立ち上がるうともがくジークに、男は「ほう……」と感嘆とも取れる声を漏らした。

「もう……、もう止めてください。ジーク……、ニーレンバーグさん……」

震える声でマリエラが二人の戦いを制止する。吐く息は白く、この地の寒さを物語っている。うつすらとその身が震えているのは、外套もまとわぬ薄着のせいで凍えているからだろうか。

「もう、終わりにしてください。朝ごはんできましたから」

「む、もうそんな時間か。ジーク、続きは閉店後にな」

「はい、有難うございました。ニーレンバーグ先生」

「ジーク、寒かったでしょ。お風呂沸かしてるから、ぬくもってから来てね」

「うわー、外さむーい。パパ、スープは私が作ったのよ!」

「む、そうか」

「ほんと寒いねー。声震えちゃうよ。シェリーちゃん、早く中に入ろう」

ぞろぞろと『木漏れ日』の店内へと入っていくマリエラ及びニーレンバーグ親子。そしてよろよろと付いていくジーク。

アグウィナス家の一件以来、なぜか『木漏れ日』に新メンバーが増えてしまった。

あの時、アグウィナス家あの場所にいたせいで、マリエラの暮らしはますますにぎやかになっていた。

ジャック・ニーレンバーグが『木漏れ日』に来た理由はキャロラインの虫除けなのだ。マリエラは理解している。

アグウィナス家事件の数日後に、ウエイスハルト副將軍閣下自らがニーレンバーグと側近らしき一名だけ引き連れて、お忍びで『木漏れ日』にやってきてマリエラは心底驚いた。

閉店後の時間だったから、他にお客さんはいなかったけれど、つい数時間前までドワーフのゴードンが座っていた、ぼかばかおっさんコーナーにキラキラしい王子様が座っているのだ。日は落ちていてそこは陽だまりではなくなっているのに、他より明るく見えるのだから不思議だ。

お付きの人の説明によると、キャロラインの兄、ロバートは長期療養が必要で、アグウィナス家はキャロラインが継ぐのだと言う。もちろん帝都の20歳年上の錬金術師との婚約は破棄。アグウィナス家を存続させるために相応しい相手をシューゼンワルド辺境伯家が探してくれるのだそう。キャロライン本人はこの決定に異論は無いらしいが、今後も薬師としての活動を続けたいと希望しているそう。

ポーシオンも新薬も提供できないけれど、薬師として貢献したいとは、実にキャロラインらしい願いだとリエラは思った。

一つ問題なのは、ポーシオンに関する一件は表ざたにされないから、アグウィナス家が持つポーシオン利権や家督を狙って、フリーになったキャロラインにちょっかいをかけてくる貴族がいるかもしれないということらしい。アグウィナスの屋敷や公の場ではシューゼンワルド辺境伯家が目を光らせているから、よほどのことは起きないだろうが、庶民の店である『木漏れ日』はそうも行かない。

キャロライン自身、例の一件にリエラを巻き込んでしまったことを後悔していて、あれ以来『木漏れ日』に姿を見せていなかった。

「気にしなくてもいいのに」

それはリエラの本心であったけれど、それを口にするのはできなかつた。

事件の詳細は知らされていない。地下室で沢山の空の棺とガラスの棺に眠っている女性を見て、この200年ポーションを供給し続けてこられた理由を察しはしたものの、結局新薬というのがどういうものだったのかは教えてはもらえなかった。

もつとも、キャロラインの父を助けた時点で、とても良くない物に手を出していたのではという予感があったから、聞き出そうともしなかったけれど。「他言無用に願いたい」という迷宮討伐軍からの要請は、魔法契約を伴わない単なる口頭のものだったけれど、マリエラは誰かに話す気持ちは無かった。

あの日は結局、アグウィナス家に泊めてもらって、解放されたのは翌朝だった。マリエラとジークが『木漏れ日』に帰るや否ややってきたリンクスは安堵の表情を浮かべていた。

「別のトコから、情報は入ってたんだけどさ、やっぱり顔みねえと、落ち着かねーや。」

昨日の納品ができなかったことには一切触れず、ただマリエラたちの無事を喜んでくれたリンクスを見て、とても心配させてしまったのだとマリエラは理解した。

だから、「キャロラインとこれからも『木漏れ日』と一緒に薬を作りたい」とは言えなかった。何の権力もない自分のせい、今度はキャロラインにまで迷惑をかけてしまうかもしれない。

黙り込んだマリエラを見て、ウェイスハルトはゆっくりとこう切り出した。

「マリエラさんを巻き込んでしまったことは、申し訳なく思っている。しかし君とキャロライン嬢の仲は一部では知られた事実。キャロライン嬢が今後ここへ通おうが通うまいが、強硬な手段を取ろうという輩は現れるだろう。そこで提案があるのだが。」

折角『木漏れ日』に帰ってこられたのに、迷宮討伐軍へ連れて行かれるのかと焦ったマリエラに、ウェイスハルトが出した提案はとも意外なものだった。

「ニーレンバーグ治療技師の出張診療所を『木漏れ日』に開かせてもらえないか？」

「はい？」

かしげたマリエラの首がまっすぐに戻すより先に、ウェイスハルトの猛烈なニーレンバーグ・プッシュが始まった。

「ニーレンバーグは迷宮討伐軍の治療部隊の隊長でね、レオンハルト將軍の腹心でもあるから、顔も知れているし、凡庸な貴族よりはよほど立場が上だ。迷宮都市に住まう貴族連中の男子は、よほどの事情がない限り軍役経験が義務付けられているから、大抵の者は彼の顔を見ただけで背筋が伸びるはずさ。しかも、戦闘能力も高くてね、特に対人能力が素晴らしい。護衛として彼ほど頼りになる男はいないと請け負うよ。しかも本職は治療技師だから人体に詳しい。加減という物を誰よりわかってるから、過去に彼にちよっかいをかけた輩は彼がここにいるというだけで、はだして逃げ出すに違いない。そうそう、その彼、マリエラさんの護衛だね。失礼だが少し戦闘能力に不安があるのではないかな？ 折角の機会だから、

ニーレンバーグに鍛えてもらおうといい。ニーレンバーグが駐在している間は、護衛の任から離れて迷宮に潜るなり鍛錬の時間も増やせるだろう。マリエラさんの防衛力強化という面でも良い話だと思うのだよ。え？ ニーレンバーグの顔が怖い？ 大丈夫、これで女性には優しい男でね。とても可愛らしい娘さんもいるんだ。今回の件で標的となつてね。彼女の護衛も強化する必要があるのだが、折角だから昼間は『木漏れ日』に来てもらってはどうかと思うんだ。

とても気の利く御嬢さんだから、店の手伝いも捗ると思うよ。ニーレンバーグが診療所を開くことで集客も見込めるだろうし。ニーレ

ンバーグの給与は今まで通り迷宮討伐軍が出すし、診療報酬は『木漏れ日』の利益にしてもらって構わない。ああ、話がうま過ぎると警戒してしまうかな。実はこちらも頼みたいことがあってね。マリエラさんは“帝都の”地脈と契約した錬金術師なのだろう？ だから、ロイス殿にロイス殿が憑依していることに気が付いたのだと私は思っているのだがね。もちろんそれを公にするつもりはないさ。

“帝都の”地脈と契約した錬金術師がわざわざ“ポジションが作れない”ほかの地脈に来るなど、何かしら訳があるのだろうから、詮索など無粋なことをするつもりはないよ。ただ、その力を少しだけ我々に貸してほしいのだ。なに、大したことではなくてね。ロイス殿にロイス殿が混じっていたことを見抜いたように、迷宮討伐軍の兵士に何か混じっていないか見てほしいんだ。兵士たちはニーレンバーグの診察を受けにここに来るから、マリエラさんは今まで通りキャロライン嬢との薬作りや常連客との会話を楽しみながら、ちらと見てくれるだけでいい。もちろん診察費用は支払うつもりなのがどうだろうか”

マリエラのかしげた首がそのまま肩にくっつきそうになった。反対側の首の筋が伸びる。首のストレッチが痛気持ちいい。

いつもなら、ジークが倒れた首をまっすぐに直してくれるのだが、さすがに迷宮討伐軍の副將軍の前なので、マリエラの後ろでおとなしく控えているようだ。仕方がないので、自分で首を起こしたマリエラは今の怒涛の説明について考えた。

(いっぱい言われすぎてよくわからない……)

ニーレンバーグの顔が恐いなんて言っていないのは確かなのだが。

ウェイスハルトをみると、感情の読めない穏やかな笑みをたたえている。隣の側近の人も同じような表情で、ニーレンバーグは……

顔が恐かった。

口に出して言っていないからセーフだと思いつつ、視線をウェイ
スハルトに戻すマリエラ。

どうにも、「はい？」^{パドシマ}「だとか『もう一度』^{ワンモア}だとか言える雰囲気
はない。

「ええと、今まで通りキャル様と『木漏れ日』^{こぼれひ}で働けると言うこと
でしょうか……」

「その通りです」
押し負けた感が半端なかったが、一番大切な『木漏れ日』^{こぼれひ}で今
まで通り暮らせるならば、まあいいかと思ったマリエラは、「わかり
ました」と返事をした。

すると翌日、いつものドワーフ三人組が仕事道具を抱えてやって
来て、物置と化していた食堂をニールンバークの診療所に改装した
り、2階や地下室に部外者が立ち入らないように大層な鍵のついた
内扉をつけたり、空いていた物置を収納力抜群の商品倉庫に改造し
てしまった。

代金は迷宮討伐軍から貰っているらしい。あつという間の早業で
その日の夕方には診療所の準備が整ってしまった。

ウェイスハルトの話をおんまりわかっていなかったマリエラは、
次の日からおんぐり口を開けるハメになるのだが、マリエラがほ
かんと口を開けるたびに、ニールンバークの娘、シエリーちゃんが、
「マリエラ姉さま、またお口あいてる」と可愛らしく笑って、あ
いた口に飴玉を入れてくれるので、マリエラのあいた口はすぐにふさ
がったのだった。

匂い立つ貴人

「何とか提案を呑んで貰えたようだ」

『木漏れ日』を後にしたウェイスハルトは珍しく達成感のようなものを感じていた。

迷宮都市唯一の地脈契約者コントラクターの錬金術師に失礼が無い様、ウェイスハルト自ら足を運んだのだ。勿論マリエラという少女の人となりはこの目で確かめたかったということもある。

再びまみえたマリエラは、やはり普通の少女に見えた。

「どうみる？」

ウェイスハルトの問に側近は、「私には平凡な少女に見えました
が……」と困惑気味に答えた。

「だろうな。だが、彼女は店を訪れた私を見て、面白いものを見るかのように笑ったのだぞ」

ウェイスハルトは確かに見たのだ。店内の椅子に腰掛ける自分を見たマリエラの表情を。ウェイスハルトは自分が他者からどのように見えるのかを熟知している。交渉を行う上でそれは重要な武器となりうる。人数を抑え身なりをやつしていたとはいえ、唯の庶民が、前触れも無く訪問された直後に、ウェイスハルト達のような身分とそれに見合った雰囲気を持つ者達を、まるで愉快な見物のように笑うなどありえるものではない。

ウェイスハルトは交渉の一部始終を思い出していた。

(やはり、見た目通りとは行かぬのか)

うつすらと笑うマリエラを見たウエイズハルトは表情には決して出さず、相手の出方を窺っていた。彼が座ったその席は、ほんの数時間前までドワーフのゴードンが座っていた席だとも知らずに。

キャロラインが来なくなり、何処と無く元気の無いマリエラを元気付けようとしたのだろう。

「この席はワシのじゃー。ワシは明日も来るからのー。臭いつけちゃおうかのー」

などとチラツチラツとマリエラを見ながら椅子に付けた尻を左右にふりふり動かし、マリエラに「やーめーてー！ よこれるー！ くさくなるー！」と腐ったアプリオレの実を投げつけられていた。

そのゴードン臭がたつぷりマーキングされた席に、キラキラしいウエイズハルトが王子様スマイルで座ったのだ。

(ゴードン臭が！ ゴードン臭が！ ウエイズハルト様に移るー！) しかも尻の臭いだ。マリエラの緊張が一気にほぐれたのもいたし方ないことだったろう。

それでもウエイズハルトの側近が話した、キャロラインがもう『木漏れ日』に出来ない可能性はマリエラの気持ちをしませた。

(いかん、腹を探るような下らぬマネに機嫌を損ねたか)

これは不味いとウエイズハルトは交渉を自ら引継ぎ、矢継ぎ早に用件を伝えた。

ウエイズハルトが言葉をつむぐたび、マリエラのかしげた首はど

んどん角度を深めて肩の方へと倒れていく。

かつて、暴君と名高い第9代皇帝は、臣下の弁明に対し首をかしげるような態度を示したと言う。臣下の弁明が納得できるものならば頭はもとの位置に戻ったが、納得がいかない場合にはかしげた首を切るようなしぐさを示し、臣下の首は胴と別れを告げたのだと。第9代皇帝の目には理性の光は宿っておらず、まるで混沌を見つめるようであったと。

まさにこのような瞳ではなかったのか。まるで何も分かっていないかのようなうつろなまなざしに、ウエイスハルトはかつて習った史実を思い出していた。矢継ぎ早に提案を述べる自分はまるで道化のようではあったが、この交渉を失敗するわけには行かない。

この錬金術師マリエラにどれ程の武力があるかは分からない。しかし彼女の武力の如何に関わらず、迷宮討伐軍は愚かな者達から彼女を護らなければならぬ。この錬金術師マリエラの武力が低ければ愚か者の手に落ちる可能性があるし、逆に高い武を誇るのならば彼女の怒りはこの迷宮都市さえ脅かすであろうから。

ニーレンバークを駐在させると言うのは、苦肉の策ではあったけれども、同時に最良の一手とも言えた。街での暮らしを望むマリエラと、彼女を街にとどめておきたいウエイスハルトの思惑は一致しているのだ。ニーレンバークを『木漏れ日』に置くことで、マリエラが迷宮討伐軍に連なる者であると知らしめることが出来るし、より近くに入り込むことで表からも裏からも守ることが容易になる。

ニーレンバークの診察を受けるため、という名目で兵士を派遣する理由とも出来るし、同時に黒の新薬の副作用が残る兵士の判定と治療も可能になるかも知れない。何より迷宮討伐のためには、マリエラと友好的な関係を築く必要があった。

実力面でニーレンバーグを上回る適任者はいない。ただ、性格面で若干不安があるのだが……。

肩につきそうなほど傾げられたマリエラの首が元の位置に戻った。

「ええと、今まで通りキャル様と『木漏れ日』で働けるということでしょうか……」

「その通りです」

ウエイスハルトは即答した。マリエラは一見すると話が分かっているような表情だが、だまされはすまい。あれほどのポーシオンを作りうる錬金術師だ。諜報員が集めた情報によると、あのエルメラ薬草部門長の質問にライブラリを見る様子も見せず即答したと言うではないか。それほどの英知を持つものが先の話を理解できぬなどありはすまい。

つまりは「今まで通り暮らせるよう、邪魔者を排せ」ということだ。“帝都の”地脈契約者コソトクダとわざわざ念押しした甲斐があったということか。互いの利益は一致したようだ。早速大工を手配して『木漏れ日』の一角を改装し診療所を開設させよう。ポーシオンの製造、搬出の機密性を今まで以上に高められるよう、高位の魔術錠をつけた内扉も必要かもしれぬ。

ニーレンバーグの出張診療所の開設から数日後、「シエリーがマリエラの口に飴玉を放り込んでいる」という報告を受けたウエイスハルトは、膝から崩れ落ちそうになったが、マリエラがキャロラインやシエリーと共ににこにここと楽しそうにしているという追加報告で何とか足の力を取り戻した。

その後、『木漏れ日』には薬味草店のメルルから茶葉のついでに

様々な菓子が『試供品』として届くようになるのだが、その理由をマリエラは知らない。

ディックとアンバー

「こんにちは、マリエラさ……」

木漏れ日の扉をあけたのは黒鉄輸送隊のマルロー副隊長だった。

「あ、マルローさん、珍しい。いら……」

いらっしやい、とマリエラが言うより早くマルローは店の中に入らずそのまま扉をパタンと閉めた。

「ちょ、マルローさん!？」

慌てて外に出るマリエラ。

「な、ななななんでニーレンバーク先生が!？」

ナイスリアクションだ。ウェイスハルトの説明通りニーレンバーク先生の番犬効果は抜群だ。悪人どころか味方までも逃げ出してしまうのだけれど。

「マルローか、入れ」

まるで自分の店のように指示するニーレンバーク。

「リンクスめ……」

リンクスから報告を受けていなかったのか、ニーレンバークに聞こえない小声でぶつくさ言いながら『木漏れ日』の中へ連行されていくマルロー。

ちなみにニーレンバークを恐がっているのは、キャロラインに要らぬ手出しをしようと目論む人たちと迷宮討伐軍の兵士だけで、ニーレンバークが配慮していることもあるのだから『木漏れ日』のお客さん達はあつと言う間に馴染んでしまった。

「腰がのー」

「フム、この薬を湯上りに塗れば治まるだろう」

「先生、うちの子が」

「む、唯の風邪だ。咳がつからそうだから、熱さましに加えてこの薬を飲ませるといい」

『木漏れ日』の少女たちが普通に接しているの、恐いのは顔だけなのだ。判断したのかもしれないが、ニーレンバーグの顔を見て泣き出す子供に、「大丈夫よー、見た目と違ってやさしい先生よ」などとあやす母親は命知らずすぎやしないか。

ニーレンバーグは怪我だけでなく、病気や老化による不調にも詳しいから、マリエラやキャロラインはとても勉強になっている。キャロラインなど、「こういう薬があればと思うのですけれど」と積極的に相談し、新しい薬をどんどん作っている。

ウェイスハルトが言った通り、キャロラインが婚約を解消してしばらくは、面倒臭い貴族や商人たちが『木漏れ日』にやってきていた。

「こんな小汚い店で……エエエ!？」

「これはこれはキャロラ……アアア!？」

薬を求めてやってくるお客さんと違って、キャロラインに手を出そうとする人はニーレンバーグについても知っている情報通の人ばかりなので、『木漏れ日』の扉をあけてニーレンバーグを見るや、皆面白い奇声をあげて帰っていった。

裏から手を回してマリエラやキャロラインに強硬手段を取ろうとする者達もいたが、ウェイスハルトの指揮のもと諜報部隊や黒鉄輸送隊の活躍で片っ端から肅清されている。迷宮都市の風通しが少し

良くなったのだけれど、それはマリエラ達の知らないことだった。

「あの、ニーレンバーグ先生、私はマリエラさんに用事がありました」

「私に用事ですか、マルローさん。なんでしょう？」

いつもは夜のポーション引渡しの時か、リンクスが買ってくる昼食の包みに用件を忍ばせてくるのに直接用事とは珍しい。

「実は、ディックとアンバーが結婚することになりました」

なんと。ディック隊長によやく春が訪れるのだそうだ。プロポーズを成功させ、ウッキウキで帝都に仕事に出かけているディックに代わってマリエラ達を招待しに来てくれたらしい。

「この仕事が終わったら、俺、結婚するんだ」なんて浮き足だっているときは、高確率でトラブルが発生し、非情な運命に飲まれてしまうものだけれど、マルロー副隊長の情報によると、いつもよりも早いペースで魔の森の街道を爆走し、ラプトルが疲れるとユーリケを怒らせているらしい。安全運転をお願いしたい。アンバーさんは逃げないんだから。たぶん。

「ほう、その内容で私は関係無いというのか？」

「い、いえいえ勿論先生も！先生も是非お越し下さい！」

「まあ、結婚式ですよ？」

「わあ、私も見たいわ。いいでしょ、パパ」

美少女二人はどんなドレスだろうなどと年頃の娘らしく盛り上がっている。

（どんなご馳走が出るのかな！？）

なんて考えてしまった微少女も「た、たのしみだネー」などと、取って付けたような台詞で会話に混じっていった。

「ア、アアアンバー、この槍をやる！」

「いらぬわよ、そんな棒ツ切れ」

「たいちよーはさー、このプロポーズの台詞寝ずに考えたらしいんだけどさー」

いつもよりいい服を着て、髪をパリッと撫で付けたリンクスが、身振り手振りでディック隊長のプロポーズの様子を話してくれる。リンクスは『影使い』のスキルと黒鉄輸送隊で磨いた斥候能力を駆使して、ディック隊長のプロポーズシーンに潜入したらしい。能力の無駄遣いか。

「これからは！ 俺がこの槍でお前を護るから！」

何度も死線を共にした半身とも呼べる槍を要らないと断られたディック隊長は、ちよっぴり泣きそうになりながらも、めげずにアンバーさんに食いついたそうだ。

「何言ってるのよ。今までだつてずっと護ってくれてたじゃない。

アタシは槍よりアンタがいいよ」

そう言つてディック隊長の槍を持たない左手をアンバーさんは取つたそうだ。

Aランクの槍使いでなくても、例え戦えなくたってディック隊長がいい。そんなアンバーの返事に、ディック隊長はまるでプロポーズされた乙女のように目を潤ませたそうだ。身の丈2mの厳ついおっさんの癖して、心はピュアな少年か。

「アンバーさん、男前ですわね」

「アンバーさんが、カッコイイわ」

「さすがアンバーさん」

意気投合する3人のピ少女。知り合いだけの小さなパーティーと

いうこともあり、三人とも普段よりは余所行きのワンピースといった服装だ。髪も綺麗にセットしているので、美少女度がいつもより数割アップしている。勿論、微少女も含めてだ。酒の勢いが手伝えれば、美少女三人組といえなくも無い。

けれど、今日の主役には美少女三人も遠く及ばないだろう。いつもの扇情的な赤のドレスではなく、首元までを肌を覆った白のドレスに身を包んだアンバーさんは誰よりも綺麗で幸せそうに見えた。いや、もっと幸せそうな人がいた。もう一人の主役、ディック隊長だ。花嫁姿のアンバーさんを見るや、両手で口元を覆い、そしてこっそり涙を拭いていた。

(なに、その乙女みたいな反応……)

会場の全員が思ったに違いない。

あとはひたすらデレデレにやにや、デレデレにやにや、見ているほうが、「ごちそうさま」を言いたくなるような幸せオーラを振りまいていた。

『ヤグーの跳ね橋亭』で開いた来るもの拒まずのラフなパーティーなので、話を聞きつけた元同僚だと言う迷宮討伐軍の人たちや、黒鉄輸送隊の取引先の人たちが次々とやってきて、いつしか大宴会になってしまった。

迷宮都市の庶民の結婚式は、たいていが人前式で多くの人に祝ってもらうほど幸せになれるとされているから、キャロラインやシェリーのように『木漏れ日』でアンバーと知り合った人たちも祝いの品を片手に大勢詰め掛けている。

幸せそうな新郎新婦にあやかって、会場でひとときわ目を引く美少女三人組に声を掛けようとする者はいない。三人の背後にはニールンバークを初めジークやキャロラインの護衛が目を光らせているからなのだが。お陰で、迷宮討伐軍が持ってきた迷宮産の口の大きな

怪魚料理を堪能できたのだから、マリエラとしては大満足だっただろう。

凍てつく冬の只中で、心から暖かくなるような宴はマリエラ達が帰った後も夜が明けるまで続いていた。

「迷宮討伐軍に戻ってもいいのですよ。必要な金額は貯まったのでしよう、ディック。貴方はそのために迷宮討伐軍を抜けたのですから」

ディックがアンバーにプロポーズする前、マルローはディックと話をしていた。

「そうだな……。迷宮討伐軍を抜けて、もう十年近くたつのか……。ディックは過ぎ去った日のことを懐かしく思い返していた。

ディックが初めてアンバーを意識したのは二人がまだ十代の少年少女だった頃だと思う。

「やーい、牛女ー」

「うっさい、はったおすよ！」

「ぎゃー、蹴ってからいうなよ！」

「あああ、アンバーをいじめるなー!!」

「わ、ちよっとディック、やりすぎー！」

よくある話だ。ディックとアンバーは同じ孤児院で育った。アンバーはディックより一つ年上で、気が強くて面倒見が良いアンバーと力任せなディックとは姉弟のように仲がよかった。歳不相応なス

タイルを誇るアンバーがいじめっ子にからかわれる度に、ディックは何処からか駆けつけた。大抵はディックが乱入する前に、アンバーが自力で解決していたのだが。その頃からだ。ディックはなぜだかアンバーをからかう者を見過ごせなくなっていた。

孤児院を巣立った後、低レベルながら人物鑑定のスキルを持つアンバーは商店へ、槍のスキルを持つディックは迷宮討伐軍へとそれぞれ就職した。アンバーの人物鑑定スキルはレベルが低く、相手のスキルなどを見抜くことなど到底出来はしなかったが、相手の性格や好み、考えなどはなんとなくわかったから、アンバーの接客によって商店はどんどん売上を伸ばし彼女も頭角を現していった。

同時にディックも槍の才能を評価され、平民の若造でありながらレオンハルトという理解ある上司の下、迷宮討伐軍の隊長にまで昇進していった。

忙しい合間を縫って二人は逢瀬を重ねていった。口下手でいつまでも手がかかるディックの世話を焼くアンバー。姉弟のようだった二人の空気は次第に様相を変えていった。

商才も美貌も咲き誇る花のように満ちていくアンバーに、帝都から来た評判の悪い貴族が目をつけるなど、ありふれた話なのだろう。セコイアスというその貴族が、都市防衛隊の新しい大佐で、ディックよりも身分も立場も上であったことも。

商談と偽り、アンバーを都市防衛隊の私室へ招き入れたことも、それを聞きつけたディックが間一髪その部屋へ駆けつけたことも、物語や芝居で幾度と無く繰り返された、ありふれた話だった。

ディックがセコイアスの私室に飛び込んだ時には既に、床には割れた花瓶の破片が散らばっていて、アンバーの近くにはセコイアスが無様に気絶していたことを除けば。

アンバーは昔からちよつぴり気性が荒かった。大抵はディックが乱入する前に、自力で解決していたのだ。

邪な行為に及ぼうとするセコイアスに対し、記録の魔道具でキツチリ証拠を押さえた上で、自己防衛よろしく蹴り倒したらしい。

「花瓶はもみ合つてるときに落ちて割れたんだよ。こんなんで殴つたりしないさ」

証拠もちゃんと押さえてある。レオンハルト將軍の差配でセコイアスの罪は暴かれ、全ては笑い話で終わるはずだった。セコイアスが迷宮都市を去った後、代理人だと言う男が割れた花瓶の賠償を請求してきたのだ。

「あの花瓶が金貨100枚だつて？」

どの部屋にも備えてあるような安物の花瓶だったはずだ。だから割れた花瓶はそのままにしてしまっていた。けれど、記録の魔道具で音声は残されている。『花瓶が割れた』という証拠はあるのだ。

セコイアスが立てた代理人は、「金貨100枚の値打ちがある花瓶の破片を見た」と宣言魔法で証言していた。「その破片を見せてくれ。自分が割つた花瓶かどうか証言するから」というアンバーの申し出は叶わなかった。

職を追われたセコイアスは、後始末を代理人に託すや迷宮都市を去り、帝都に向かう山脈沿いの街道でヤグーごと谷底に転落して世を去ってしまったからだ。

問題のある人物であつたとはいえ、後継者を失つた貴族家と平民の娘。花瓶の代金金貨100枚をアンバーが払えば、これ以上問題にしないと言う代理人の言い分はアンバーにとって穏当な落とし所

に思えた。

レオンハルトが仲裁に当たってくれたのは、ディックが迷宮討伐軍の隊長だからだ。姉弟のように育ったけれど、アンバーとディックに血のつながりは無い。何よりも、孤児から迷宮討伐軍の隊長にまで昇進したディックの将来を潰したくはなかった。

「これ以上迷惑はかけられないよね」

アンバーはディックに相談することなく、その身をもって金貨100枚を工面した。

よくある話だ。いくら若く美しいとはいえ、金貨100枚など返せる額ではない。アンバーは終身奴隷に落ちるはずだった。アンバーは忘れていたのだ。アンバーの危機には何処からとも無くディックが駆けつけるということを。

「俺が必ず払う」

アンバーが終身奴隷に落ちる寸前に現れたディックは、奴隷商人相手にゴネにゴネ、利子相当を払うことで借金奴隷に留めることに成功した。

しかし、迷宮討伐軍の隊長の給料ではその利子にさえ足りはしない。困りきったディックの前に、「良い話があるのですよ」とマルローが黒鉄輸送隊の話を持ちかけたのだ。

「マルロー。お前のお陰だ」

「いえ、マリエラさんが現れなければ、これほどの額をこの短期間に稼ぐことなど出来なかったでしょう」

アグウィナス家の一件以来、キャロラインだけでなくマリエラについて探ろうと暗躍するものが増えた。その粛清も含めて黒鉄輸送隊が受け取ってきた報酬は彼らの働きに見合うものだったけれど、対価として妥当かという以前に、これだけの機会に恵まれたのはマリエラがいたからだ。感謝しても仕切れないとディックは思っている。

マリエラが黒鉄輸送隊の前に現れなければ、ポジションの売買を任せてくれなければ、きつと死ぬまでアンバーを自由にしてやれなかっただろう。

「これからどうします?」

黒鉄輸送隊がマリエラと結んだ守秘の契約は破られていないけれど、マリエラの存在はウェイスハルトの知るところとなった。不穏なやからの粛清も一段落ついた。これからもマリエラはどんどんポジションを作るだろう。魔物除けのポジションが流通するようになれば、2000年前のように黒鉄輸送隊が使っている魔の森の街道が流通の主流となり、人や物の往来も活発になっていくだろう。

状況はこれから大きく変わっていくに違いない。

「何れにせよ、もう少し先の話だ。まだ、あの街道には人狼ワウルフなんぞが稀に出る。アイツラだけに任せてはおけんだろう」

「ふ、そうですね。まだプロポーズも成功させていないわけですか」
「ら」

「……、不吉なこと言つなよ」

結婚式の会場で、マルローはディックを祝福する。

「おめでとうディック。ようこそ既婚者こちら側へ」
「……、だから、不吉っぽく言うなよ」

交わす言葉は少なくとも、通じるものがあるのだろう。

友と酌み交わしたその日の酒は、今までのどの酒よりも旨かった。絶える事無い祝い客に注がれるままに酒を飲み、ディックは心行くまで酔いしれた。

花嫁をほっぽって。

宴会場でいつもの様に酔いつぶれ、かつて無いレベルで醜態を晒しまくったディックは、次に迷宮都市に帰ってくるまでアンバーに新居に入れてもらえなかったと言う。

「マルローが不吉なことを言うからだ……」
完全に責任転嫁してぶーたれるディックに、マルローは爆笑しながら仲直りの秘訣を教示するのだった。

冬の楽園

「はい、いらっしやい！いつもの薬ね、今日はニーレンバーグ先生いるから診てもらったら？」

「らっしやい。オススメのお茶はとうろもこしのお茶だよ」

『木漏れ日』に美女と幼女が増えた。

「だって、デイクはほとんどこっちにいないだろ？暇でさー。アタシこっに見えても経理とか得意だから！」

新婚なのにいいのかと聞くと、押しかけ従業員の美女は、胸を張って答えた。ちなみに、大渓谷はハイネックのセーターに隠されてもはや見ることは出来ない。セーターの編み目が胸部辺りで広がっているので、山を愛する登山家の心を揺さぶるのだろうが。

「シエリーちゃんあそばー」

歳の近いお友達ができて嬉しいエミリーちゃんも足繁く通っていく。『ヤグーの跳ね橋亭』でのお手伝いが終わってすぐに寒い中走って来たのだろう。ほっぺも耳も赤くしたエミリーちゃんは、お客さんにとろもこしのお茶を薦めたあと、シエリーのほうへトトトと走りよる。

「もう、エミリーちゃんたら、また髪ゆがんでる。わー。ほっぺつめたーい」

面倒見が良いシエリーちゃんがエミリーちゃんのほっぺを両手で包んで暖めた後、髪の毛を結びなおしてあげている。

なんとも心温まる光景だ。これには登山家も山より身近な暮らしを求めざるを得まい。

「新しい魔道具が届きましたのよ」

「フォー、何コレ、何コレ！どうなってるのー！」
薬の腕ではもはやマリエラを追い越す勢いのキヤル様いつもの
平民女子。

より取り見取りだ。ハーレムだ。王様はどこだ。

ガチャリ

「アンバー！俺が悪か……」

ぱたん。

アンバーさんを迎えに来たらしいディック隊長は、『木漏れ日』
の奥に鎮座ましましているニールンバークを見るや否や扉を閉めた。
木漏れ日ハーレムに王様登場かと思っただら違ったようだ。

この反応も見慣れてきた。キヤル様にちよっかいをかけようとす
る貴族から、悪いことをしていないはずのマルロー副隊長、診察を
受けに来たはずの迷宮討伐軍の兵隊さんまで一旦扉を閉めるのだ。
外の冷気が入ってくるから出入りは一度にしてほしいのだが。

今、『木漏れ日』にいるのは年齢様々なビ女子と、植物のように
日光をむさぼる常連さんと、魔よけの像ニールンバークだけだった。折角のハーレ
ムなのにビ女達にあれやこれや指図する者は誰もいない。ハーレム
と言うよりは楽園パラダイスと言ったほうが正確かもしれない。

そう、今『木漏れ日』にジークやリンクスはいないのだ。

「あ、ディックさん、寒いのに何で外に立ってるんスか？」

またお客さんが来たようだ。診察に来た迷宮討伐軍の兵らしい。

がちやり、ぱたん。

(だからなぜ一旦閉める……………)

魔よけの像にお参りする作法が何かだろうか。聖樹は生えているけれど、聖地というわけじゃないのだけれど。

「お、おじゃまします」

今度こそ迷宮討伐軍の兵隊さんが入ってきた。後ろにこそそこそとディック隊長がついてきているが、体が大きいので全く隠れていない。アンバーさんがため息をついて、「ディックはこっち。重たい荷物があんのよ」とディック隊長を荷物運びに連れて行った。「まかせろ」とカッコつけてアンバーさんの後ろをついて行くディック隊長はかつこよくは見えなかったけれど、とても嬉しそうに見える。

「診察室は奥だ」

アンバーさんに連れて行かれたディック隊長は天国行きの切符を手に入れたような顔だったのに、ニーレンバーグに連行される兵隊さんは地獄へ飲まれるような顔をしていた。

ニーレンバーグ先生の診察は普通の触診だとマリエラは思っている。マリエラも診てもらったことがある。体の凝っていたり流れが滞っている部分を押しして、調子を整えてくれるのだ。ジークは呻いていたけれど、マリエラはちっとも痛くなかった。水を汲みに行くのが面倒という理由で日々命の雫をがぶ飲みしているマリエラの体は、どこにも凝りも停滞も無く、全身ふにゃふにゃのぷにぷにだからなのだ、本人は全く気付いていない。

(あー、あの人……………)

しばらくして診察の終わったニールンバーグが兵士のカルテをマリエラに渡す。マリエラはカルテに書かれた薬を袋に詰め、最後に何か書き足した。

診察された兵士はちよつとふら付きながら店内に戻ってきて、薬を受け取るとお茶を飲んでから帰って行った。

エミリーちゃんが「とうろもこしもろのお茶だよ」といって渡したお茶を嬉しそうに飲んでいたら、彼の辞書から「とうもろこし」が消え、「とうろもこし」に書き換えられたことだろう。

数日後、その兵士に辞令が下った。

『アーリマン温泉での一週間の療養を命ず
彼は（地獄の）雪国温泉旅行の（日帰り）招待券を手に入れたのだ。』

アーリマン温泉。

迷宮都市北西部にそびえる山脈の一つアーリマン山に湧き出る温泉で、命の含有量が多いことで知られる。アーリマン山は勾配のきつい山ではあるが、迷宮都市から近くアーリマン温泉は日帰り可能な温泉地としてエンダルジア王国時代は栄えていた。

魔スタンピードの森の氾濫以降、湯量は半減したうえ、ニードルエイプと呼ばれる金属の針のような毛を持つ猿の魔物の住処となつてしまった。特に冬場は温泉を好んでニードルエイプが大量に集まってくるため、誰も近寄ろうとはしない。ニードルエイプは B ランクの魔物で、森林地帯は彼らがもつとも得意とするフィールド。しかも冬場は雪による寒さと足場の悪さが加わる悪環境だ。そんな中、大量のニードルエイプと戦おうなど誰が望むだろうか。そんなことを命ずるなど、どこの鬼畜生の所業だろう。

「な……、なんで、俺まで……」

「いい加減あきらめろよな、エド兄」

「……マリエラ……」

エドガン、リンクス、ジークムント。この三人は雪国によほど縁があるらしい。

大量のニードルエイプに囲まれている現状は、マリエラの何気ない一言で始まった。

「え？ 何かが混じっちゃってる人の治療ですか？ 温泉とかいいと思いますよ」

温泉には地下水よりもたくさんの命の雫が混じっているし、体内の水の流れを良くして悪いものを出してくれるのだと師匠も言っていた。肌がぷりつやになるのだと。マリエラは行ったことはないけれど、師匠がアーリマン温泉のことを、緑と美食と湯煙あふれる湯池肉（食べる方）林の楽園パラダイスだと話していたから、大分曲解した形で懂れていた。

「私もいきたい」と駄々をこねるマリエラを、「アーリマン温泉は猿の楽園だから」「雪山登山は危ないから」となだめすかして諦めさせたまではよかったのだが。

「ニードルエイプか。ちょうどいい相手かもしれん」

アーリマン温泉は、『木漏れ日』の魔除けニードルバグの鬼畜生のツボだかスイッチだかを押ししてしまったようだった。

「冬の間にはニードルエイプを駆除できれば、春には温泉旅行に行けるかもしれない」

ニードルバグの一言に、温泉に行きたいマリエラと、マリエラと温泉に行きたいジークの思惑が重なり、運悪くその場に居合わせたりリンクスとエドガンを巻き込んだ冬のニードルエイプ討伐と相成

った。リンクスとエドガンの抗議を聞いた黒鉄輸送隊のディックとマルローは、ニーレンバーグの「よろこべ、戦力増強だ」の一言に、もろ手を挙げて送り出していた。残念なことに、助けは現れないよ
うだ。

とはいえ3人の中で純粋な戦闘力だけでBランクに到達しているのは双剣使いのエドガンだけで、リンクスは『影使い』という斥候に向いた能力込でBランクだし、精霊眼を失ったジークに至ってはCランクだから、3人だけでBランクのニードルエイプを、しかも冬の山で大量に相手取るのは自殺行為だ。今回は修練が目的だから、魔物除けポーシオンなども使えない。

あつという間に囲まれて、四方から絶え間ない攻撃を浴びる。ニードルエイプはその名の通り金属の針のように強靱な毛皮を持つから、下手な攻撃は通らない。下手な装甲など槍で簡単に貫いてしま
うディックや、ハンマーを武器にするドニーノのようなパワータイ
プであったなら、毛皮ごと強撃して叩きのめすこともできるのだろ
うが、3人の得物は短剣、双剣、長剣と長さこそ違えど何れも刃物
で、力より技で敵を倒すタイプだ。ニードルエイプを倒すには毛の
流れに沿うように刃を刺し通すか、毛皮の薄い顔面などを狙うしか
ない。

「だーっ、もう、ちょこまかと！ ジーク！ 弓使えよ、お前ほん
とは弓使いだろ！」

「精霊眼頼りだったから！ あたらないんだ！ というか、護衛に
弓は向かんって、リンクスが言ったんだろ！？」

「あー、あのサル、雌だから殺すとか無理ー」

「エド兄ー！ 手え抜くなー」

「エドガン！ 混浴だ！ ベリーサちゃんと混浴が待ってるぞ！」

「まじで？ フウ、俺の湯トピア」

ちなみにエロガンエロ本の愛読書には露天風呂や混浴など異国情緒溢れるエキンチッな樂園でのアレヤコレヤが描かれているが、シューゼンワルド辺境伯領にそのような文化は無い。アーリマン温泉を再開発できたとしても、身分のあるものは貸切の個室、庶民は男女別の大風呂になるだろう。勿論、屋内風呂で露店風呂ではない。魔物が徘徊する地で、丸腰で露天風呂につかる等、不可能な話なのだ。

「待っていてくれよ、ヨアンナちゃん！」

「ベリーサちゃんじゃなかったのか？」

「あー、それ前の前」

鯉石のプレゼント虚しくエドガンに春は訪れなかったようだ。不屈の男エドガンは尽きぬ闘志をとりあえず眼前のニードルエイプに向けて双剣を振るう。友の雄姿に励まされるように、ジークとリンクスもニードルエイプの群れに果敢に立ち向かっていく。

ニードルエイプは道具を使う。と言っても石を拾って投げたり、枝を手折って武器にしたりという程度だ。大地が雪に埋もれたせいで石が露出しておらず、投石してこないのは不幸中の幸いだっかかもしれない。そうでなければジークたちはもつと早くに倒れていただろうから。

しかし、同格以上のニードルエイプの物量を前に、不利な立地で根性論だけで何とかなるものではない。雪に足を取られ、飛び掛つてくるニードルエイプを除けつつ太刀を浴びせるしかない三人と、木の枝から飛び降りては攻撃を仕掛けてくるニードルエイプ。

三人の体力が尽き、サルの牙がリンクスの喉笛を、エドガンのはらわたを、ジークのたった一つ残る左目をかみ砕こうとしたその時。

「今日はこの辺で終いだぜ！」

ニードルエイプのボス猿がしゃべった。

いや違う、毛皮をまとったハーゲイだ。頭まで毛皮のフードで覆っているから、一瞬誰かわからなかった。

別に頭部で認識しているわけではない。フカフカのフードをかぶるハーゲイがいつもより 1 割ほど男前に見えたのは、危機的状況に現れたいわゆる雪山効果という物だろう。フードを被ったほうが男前だとか、そんなことはありはしない。雪山が見せた幻に違いないのだ。

今にも力尽きそうな三人の前に現れたハーゲイは、マシラもかくやという動きで木々の間を飛び回り、ニードルエイプを片っ端から蹴り飛ばしていった。木の側面すら足場にするその動きはニードルエイプさえも追隨することはできず、羊飼いに追われる羊のように山奥へと撤退を余儀なくされていく。ハーゲイに蹴り飛ばされたニードルエイプはやわらかい雪の上を狙って落とされているので、すぐに意識を取り戻して撤退する群れについていく。

ニードルエイプは賢い。敵わない強敵が来たとわかるのだ。殺さないように蹴り飛ばされた優しさが伝わったのかもしれない。さすがはハーゲイ、いやボス猿だ。メスのニードルエイプがちらちらと熱い視線を送りながら、名残惜しそうに撤退している。

「どうせなら、間引いてくれたらいいのに、何で倒さないかなー」
「お前らがたっぷり修行できるように、細心の注意を払ってるんだぜー」

ジークたちが3人掛かりで苦戦どころか逆に討伐されかけたニードルエイプ。それを一人で追い払った非常識な戦闘力からは思いもよらない常識的な回答だ。修行をかねてニードルエイプ討伐を言い

渡されたジークたちだが、何のサポートもされないわけではなかった。

ウェイスハルトは冒険者ギルドにジークたちの支援を依頼してくれていた。冒険者ギルドのギルマス、ハーゲイが育て上げた幹部たちを数人派遣できるだけの依頼料が支払われているのだが。

「なんで、ギルドマスターが出張ってきてんだよー」

「はっはっは。冒険者ギルドの職員は優秀なんだぜ！ 2、3人も抜けると業務に差し障りがでるんだぜ！」

「ギルマスは抜けても問題ないのかよー」

「それは言わない約束だぜ！」

「ずびし！ いつものように歯を光らせてサムズアップをカマスハーゲイだったが、いつもよりちよっぴり元気が足りない。この依頼を受けたとき、冒険者ギルドの職員一同が「ギルマスが適任です」以外の言葉を発してくれなかったせいかもしれない。

「誰か一緒にいこうぜ！」

「ギルマスが適任です」

「講習会があるんだぜ？」

「ギルマスが適任です」

「今日の昼飯は……」

「ギルマスが適任です」

「アーリマン山の引率は、俺が行くぜ」

「お気をつけて！ ギルマス！」

こうなったら、是が非でもアーリマン温泉を復活させて、冒険者^チギルドの幹部達で慰安旅行に来ようとハーゲイは心に誓うのだった。

楽園争奪戦

アーリマン山には複数の温泉が湧いており、彼らが拠点にしているのは比較的迷宮都市から近く、湯量の多い場所だ。二百年前に温泉を利用した保養所が設けられていた場所でもある。この一帯は魔^スの森の氾濫の被害を受けていないが、長らく放棄されていたため、かつて保養施設だった建物は温泉から噴き出るガスによって劣化が進み、雪の重みで押しつぶされたり屋根が抜けてしまっていた。

今、ジークたちは仮設のテントで寝泊まりしている。

来てすぐの頃は大変だった。目標の温泉に“迷宮討伐軍が”準備したという魔物除けのポーションの小樽を放り込み、湯でくつろぐニードルエイプを追い出したまではよかった。低級ランクの魔物除けポーションは人間にとっては無臭だが、魔物にとっては耐え難い悪臭に感じられる。ニードルエイプからしてみたら、いつも通り温泉で寛いでいたところに、悪臭放つ汚水をぶちまけられたようなものだ。

自分たちの楽園が一瞬のうちに悪臭を放つ汚水溜まりに変わり果てる。立ち上る湯気に混じって周囲は臭いにおいに満ち満ちて近寄ることもできない。温泉に溶け込んだ汚水は毛皮の芯までしみこんで、体中から立ち上る悪臭はなかなか消えなかったに違いない。

「いいお湯だ、素晴らしい打たせ湯だ」と寛ぎながら振り返ると、酔っぱらったおっさんの粗相が打たせ湯の正体だった、というくらい衝撃だったろう。もし、そんな仕打ちを受けたとしたら。

「ブチクロス」

ニードルエイプの猛攻を受けたとしても不思議はないだろう。

ニードルエイプは賢い。自分たちの楽園を臭気漂う悪夢の沼に変えたのが、ジークたち三人だとわかっているのだ。目を血走らせ狂乱の叫びを上げながら迫り来るニードルエイプに、戦う前から逃げ出したくなった三人だったが、ニードルエイプとニーレンバーグなラ後者のほうがもつと恐ろしい。

ぐつと踏みとどまり、地獄と化したアーリマン温泉で三人とニードルエイプの死闘は繰り返された。

昼間は雪国温泉出張（日帰り）を引き当てた迷宮討伐軍の兵士たちがやってきて、温泉の周りに柵をめぐらしプロモミンテラやデイズを植えつけて温泉一帯を魔物が侵入しない状態に作り変えていく。ニードルエイプは昼夜を問わずジークたちに襲い掛かるから、来てすぐの頃三人がゆっくり休めたのは迷宮討伐軍の兵士が来たときだけだった。迷宮討伐軍の治癒魔法使いに治療をしてもらい、彼らが運んだ食事を取ったあと泥のように眠る。マリエラが持たせた^{再生}リジエネ薬をこっそりと飲んでいるから、三人の成長速度は異常に早いのだがそんなことに気がつく余裕も無いほどに過酷な日々だった。

迷宮討伐軍の兵士たちは皆日帰りで、一日の作業が終わったあとは温泉につかっただけから雪山を下山していく。アーリマン温泉を復興するための資材を背負って登山し、ジーク達が斃したニードルエイプの素材を担いで下山する連日の日帰り温泉出張は、迷宮で鍛えた彼らであっても楽なものではない。

『温泉で療養』とはなんだったのか。

数十分の温泉のために朝から晩まで雪山で活動している。温泉と言えば、湯煙の向こうの柔肌を想像するものだが、この地にいる女性^{ニードルエイプ}は猿ばかりではないか。しかも雌猿は皆ハーゲイに夢中ときたものだ。

『温泉療養(?)』の間は日が昇る前に迷宮都市を出立し、深夜に戻ってくる有様なので、かわいいウエイトレスが給仕してくれるレストランで食事を取ることさえ出来ない。三度の食事を雪山温泉出張のむさ苦しいメンバーで、顔をつき合わせて、しかも旨くもない保存食を食べるのだ。それでも夜は自分の部屋のベッドで眠れるだけでした。

ニードルエイプと戦わされている三人は何の罪を犯したというのだろうか。落ち着いて眠れるのは迷宮討伐軍の兵士がいる僅かな間だけで、あとは昼と無く、夜と無く闘い続けている。彼らに向けられる温かなまなざしはハーゲイのものだけだ。ズタボロになりながらハーゲイに幼子を見るような慈しみに満ちたまなざしを向けられる。自らに置き換えて想像すると、なんとムカつく光景だろう。雌猿のジェラシーまでも降りかかる三人を思うと、迷宮討伐軍の兵士たちは自分たちはまだましな方だと思うのだった。

迷宮討伐軍の兵士たちから、アーリマン温泉ヒエラルキーの最底辺に認定されてしまった三人はというと。

「なー、ジークー、他にワクドキ同居生活な話ないの?」

「黙ってメシ食え、エドガン」

「だってよー。いっつも同じ保存食じゃん。調味料代わりになんか話せよー」

「メシつつつたら、マリエラ結構料理うまいよな」

「ああ。だが、マリエラがうまく作れるのはレシピのある料理だけだぞ。リンクス」

「え? アレンジ料理とか駄目なの?」

「駄目とか言う次元じゃないな……。あれは先月のことだったか。マリエラに差し入れを持ってきた冒険者がいてな。マリエラはああ

見えて、意外とモテるんだ……」
「なにっ!？」

食いつくりンクスにジークは話を続ける。

冒険者達にとって薬や煙玉と言った消耗品は身近なものだ。

迷宮都市の薬師のレベルが上がって、薬師による品質の差がほとんどなくなってからは、迷宮の入り口付近に建つ冒険者ギルドの売店で、同一量同一料金で気軽に買えるようになっていく。だから普段冒険者達は、迷宮探索の帰りに得られた素材を売却するついでに売店で消耗品を購入する。しかし『木漏れ日』の人気は根強く、製品をあるいは癒しを求めて『木漏れ日』に休日訪れる冒険者は少なくない。

薬師という安定した職を持ち、いつもほんわかにここにこしている^{マリエラ}少女は、『手が届きそう』な平凡さも相まって実は人気が高かった。

街の情報発信基地、薬味草店のメルルさんによって、『本命はジークかりンクスか!？ 未だどちらにも脈はなし! 今日もおークキング肉の一人勝ちだ!』という噂が流されているにも関わらず、『我こそはおークキング肉を打倒する者』と名乗りを挙げる若者もたまーにだが存在する。

「マリエラちゃん、良かったらこれ食べて」

「わー、珍しい! 稲妻鹿の肉ですか?」

おーク^{メシヤ}キング肉に勝つのに、稲妻^{レア}鹿肉を持ち出したらしい。自分の魅力で勝負しない辺り彼に目は無いのだが。

「マリエラ、折角だから稲妻鹿の肉で夕食をご馳走したらどうだ?」

「そうだね、ジーク。鹿肉だったら赤ワイン煮込みかなー?」

「いいの? マリエラちゃん! 手料理なんて嬉しいな! ジークさんも有難う?」

既にジークの策中にはまっているとも知らず、マリエラの手料理

を喜び、いぶかしみつつだがジークに礼まで言う若者。

「おい、ヨハン。ワシ、パン買ってくるからお前赤ワインな」

「わかったぜ、親父。俺、軟らかいパンな」

「じゃー、わしはサラダ用の野菜でも買ってくるかのー。あ、パンは堅めで」

「ついでに煮込みに使う根菜類も買ってきてくれ！ あたしや臭み抜きハーブを取ってくるからね。マリエラちゃん、トマトのペーストも持ってくるから待っていておくれね。アタシのパンは粗漉し糖の甘いやつにしとくれね」

ガタガタツと席をたち、動き始めるゴードン、ヨハン、ルダンのドワーフ三人組にメルルさん。

なぜ当然のように参加するのか。

料理が出来上がった頃に、話を聞きつけオーク肉のハムの塊持参でやってきたガーク爺も交えて夕食会場と化す『木漏れ日』。流石に貴族の令嬢が庶民宅で夕食を食べるわけに行かないのか、キャロラインだけが残念そうに帰っていく中、閉店後の店内にマリエラの手料理が並べられた。

「美味しいよ！ マリエラちゃん！」

大喜びの若者。常連達も満足げに大皿から料理を取り分けては食べている。レシピ通りにハーブをすり込み、筋切りをして軟らかく煮込んだ鹿肉の煮込みは獣独特の臭みがなく、噛むほどに深い味わいがある。

こんな料理を作れるなんて、マリエラと暮らせる男は幸せだろう。そんな幻想を抱きながら若者が料理を堪能する間にも料理はどんどん無くなっていく。当然のように参加している常連達の辞書に遠慮などという文字は無い。

マリエラの分はキッチンジークが取り分けているし、ジーク自身

にもぬかりは無いから食いつぱぐれたのは最初に少量取り分けて、感慨に浸っていた若者だけだ。

「あ……、あれ？ パンしか残ってない」

皿に残った煮込み料理の汁をおかずにパンを齧る若者。パンはゴードンが買ってきた既製品だ。ゴードン行きつけのドワーフ親父の手作りパンだ。

「デザートもあるよー。今日は新作だよー」

お腹一杯食べたマリエラが、冷蔵の魔道具からタルト生地の上に3層のババロアが乗ったケーキを出してくる。色合いからすると柑橘類だろうか。

「新作？ 新しいレシピかい？」

メルルさんの抜かりない質問に、

「んーん。私が考えたのー。今回は自信があるんだ！」
と答えるマリエラ。

その瞬間。『木漏れ日』の店内が静まり返り、かつてない緊張感が走ったことに、若者とマリエラだけが気付かなかった。

「どうぞ」

常連達が固唾を呑んで見守る中、マリエラが笑顔で差し出すケーキの皿を若者は大喜びで受け取り、「いただきます」と一口食べた。

「うおえっぶ……」

やっぱりか。吐き出さなかっただけ、今日の若者はイヤツだ。常連達の見守る中、ぐびぐびと水を飲んでマリエラの新作ケーキを飲み込む若者。

「今日のケーキも美味しいな。この白い層は舌ざわりが独特だ」

その横で顔色一つ変えずにケーキを食べるジークムント。長い劣悪な奴隷生活のお陰で、どんな料理も食べることが出来る特技をジークは身につけていた。

「ほんと？ どれどれ……、うおえつぶ……」

ジークの笑顔にケーキに齧りつくマリエラは次の瞬間、ケーキを水で流し込んでいた。

「また失敗しちゃった……。おかしいな。この柑橘類の皮と実の間の白いもわもわは、栄養たっぷりなんだよ。甘みを加えて苦味を消したつもりなんだけど」

「甘みと苦味が引き立ってあって、味が染み込んだもわもわが口の隅々まで行き渡って長く味わえるな」

「うう……。甘味を多めに入れたから酸味を引き立てたつもりだったのに」

「目に染みるような、突き刺す爽快感が斬新だな」

「味をまとめるためにヤグーのミルクの層も入れたんだけどなー」

「驚くほど獣くさが引き立っているな。鹿肉の処理が完璧だっただけに思わぬサプライズだったよ。タルト層が口の水分を奪ってくれるからダイレクトに攻めてくる感じだ」

「ジーク、お兄さんもごめんね、変なもの食べさせて……」

しょんぼりとするマリエラ。

「マリエラの作る料理はどれも美味しいよ」

そう言って、残りのケーキを全て平らげたジーク。勇者である。

ドヤ顔である。「ふふん」と言いたげな表情で若者を見ている。

「くっ……」

完敗を喫した若者は、「ご馳走様、楽しかったよ……」と挨拶をした後、すごすごと帰って行った。

「マリエラのオリジナルの料理を出してやると喜ぶんじゃないかな」と、ジークがマリエラをそそのかしたことなど露も知らずに。

「マリエラの料理は素材の効果を引き立てるからな。味も引き立ててしまっんだが。お陰で俺は翌日から暫らく透きとおる様な美肌を手に入れてしまった」

「ジークの美肌とか誰得だよ？」

「つーか、案外黒いよな、ジーク」

仲間に入りたそうにうろろろしているハーゲイを尻目に、ジークたち三人は意外に仲良くやっていた。

「はあ、マリエラの料理が食べたいな……」

「オレもくいてー」

「俺も！俺も！」

「オリジナルのケーキも食べよ」

「それは断る」

「いや、レシピ通りに作ったらいんじゃないかね？」

ジークの話にちよっぴりホームシックになる三人だった。

楽園の覇者

ニードルエイプは諦めない。

アーリマン温泉
猿たちの楽園を不当に追われた復讐かもしれない。

アーリマン温泉
猿たちの楽園に魔物除けポーションを放り込まれ、悪臭漂う沼地に変えられた怨恨かも知れない。

メスザル
麗しの女性がハーゲイに心を奪われた腹いせもあるだろう。

けれどニードルエイプは魔物なのだ。魔物は人と相容れない。どんな魔物であろうとも、その身に宿る魔石穢れた石が人を襲えと囁くのだと。帝都の学者は提唱している。この世の穢れと魔力が凝り固まって魔石となるのだと。だから魔石を身に宿した魔物ケモノは人を恨むのだ。魔石に宿る穢れは人から生じたものだから。

人間の悪意が憎悪が嫉妬が恐怖が憤怒が欲望が。ありとあらゆる邪悪な思念が『穢れ』となって世界に漂う。餓え乾き満たされることとの無い『穢れ』は凝り固まって、魔力を無限に求める。ゆえに魔石が顕現するのだと学者たちは考えている。だからそんな物を身の中心に宿してしまった魔物たちは、人が憎くて仕方が無い。穢れがこれ以上世界に満ちてしまわぬように、人を滅ぼそうとするのだと。

真意の程はわからない。ただ、魔物と人が決して相容れないことだけは確かで、その関係は殺すか殺されるか以外にありえない。

だから、アーリマン温泉が200年前はエンダルジア王国の保養所だったとか、今はニードルエイプの楽園でそれを迷宮都市が奪い返しただとか、そういった善悪の判断で折り合いをつけることはありえない。

ジーク達人間がアーリマン温泉に陣取っている限り、ニードルエイプはジークたちを殲滅するほかに選択の余地は無い。

冬のアーリマン山で、ジークたちはその事実を嫌と言うほど思い知った。

「ナターシャちゃん、そんなに歯をむき出してムキになっちゃってかーわいい」

「エド兄、落ち着け、そいつはニードルエイプだ！」

「差別はいけないぞー、リンクスー。愛は種族を超えるんだぞー」

「あああ、もう！ジークも何か言っちゃれよ！」

「マリエラ……」

ニードルエイプに愛を囁き始めたエドガンに、「マリエラ」としかなわなくなってしまったジークムント。それでもジークはニードルエイプを斃しているだけまだました。エドガンなどは、ニードルエイプの尻を追いかけまわしているのだから。

ジーク達が冬のアーリマン山に籠り始めてもうすぐ1ヶ月。

アーリマン温泉を囲う柵は魔物を寄せ付けないしっかりとしたものになって、寝泊りできる小屋も完成していた。アーリマン山の温泉に片っ端から魔除けのポーション樽を放り込んで、ジークたちの匂いのついた手拭や靴下などを置いていったハーゲイのせいで、アーリマン山中のニードルエイプに目をつけられるハメになったジークたち三人だったが、その実力は否応無く高められていった。Cランクの実力しかなかったジークはBランクとして申し分ない実力を得ていたし、リンクスは『影使い』のスキルを使わずともBランクのニードルエイプを倒せるほどに成長していた。エドガンの成長は二人よりも遅かったけれど、それは雌猿の尻を追い掛け回していたので仕方が無いことといえた。

「お前たちもずいぶん成長したもんだぜ！ ニードルエイプもこれだけ減れば問題ないだろうし、温泉のほうも開発の拠点は完成した。明日には下山するといひぜ！」

なんと、ハーゲイの許可が下りた。

「ホントかよ、ハーゲイ！ やった！ 帰れる！」

「ヨアンナちゃん？ ヨアンナちゃんにやっと会える！ 待っててくれ！ ヨアンナちゃん！」

「マリエラ！」

迷宮討伐軍が運んできたマリエラの手紙を握り締めて喜ぶジーク。ちなみにリンクスとエドガンにもマリエラは手紙を書いている。

ジーク達を哀れに思った迷宮討伐軍の兵士がマリエラに手紙を書いてやってくれないかと持ちかけたのだ。やさしい世界だ。

快諾したマリエラは『元気がでるクッキー』などに添えて小まめに手紙を書いた。その内容は、今日は何を食べた、昨日はこれが美味しかった等、ほとんど食べ物のことばかりだった。ちなみに内容は三人とも一緒だったのでありがたがっていたのはジークだけだった。

「マリエラ……（食事のことを手紙に書いていたから、きちんと食べているようだけれど、元気にしているだろうか）」

「うんうん、そうだなジーク。あいつに限って寂しくて食事が咽に通らないなんて無いよな」

「ヨアンナちゃんはテレ屋さんだから、手紙くれなかったんだろうな」

「エド兄、ニードルエイプのナターシャちゃんはいいのかよ？」

「ナターシャちゃんは繊細なオレにはちょっとワイルドすぎるっていうか？」

「マリエラ……（最近、迷宮討伐軍の兵士がこの辺りで取れる鉱石を持って帰っているが、新しいポーシオンだろうか。無理をして魔力切れなど起こしてないだろうか）」

「そうだよな、ジーク。マリエラちよつと押しに弱いところがあるから心配だよな」

「ヨアンナちゃんにお土産なんにしよう。ニードルエイプの毛皮しかないけど気に入ってくれるかな」

「エド兄、ナターシャちゃんの毛皮プレゼントすんのかよ、ひどくね？」

この状態で会話が成立している事実がすごい。リンクスは何か新しいスキルでも身につけたのだろうか。

帰れると舞い上がる三人は忘れていた。

魔物と人は相容れない。ニードルエイプは決して諦めはしないのだ。

その夜、三人が帰ることを知り示し合わせたかのように、生き残ったニードルエイプがアーリマン温泉を襲撃した。

明日帰るからと、ヒゲをそり、髪を整えた三人の切り落とした髪の毛を、ハーゲイがアーリマン山にばら撒きまくったせいなのだが、勿論三人は気付いていない。ハーゲイとの実力差はまだまだ埋まっていないのだ。

三人が温泉に放り込んだ魔物除けのポーシオンは湧き出る湯に薄まって流されていき、ニードルエイプにとって耐えられない悪臭ではなくなっていた。温泉周囲は高い柵が築かれていて、魔物除けのブロモミンテラとデイジスも植えられているが、殺意によって乗り越えられない障害ではない。

ニードルエイプは知っているのだ。自分たちを追い出し、滅ぼそうとする人間がここで眠っていることを。

魔物と人の関係は、殺すか殺されるか以外にありえない。
だから、ニードルエイプたちは生き残った仲間を集めて最後の戦いに臨んだのだろう。

魔物除けの施された柵を乗り越えて、ジーク達の眠る小屋に押し寄せるニードルエイプ。漸く建てられた小屋はあっという間に破られてしまった。

「くっ、なんだ!? まさかニードルエイプ!?」

「ナターシャちゃん! 夜這いだなんて積極的だな」

「マリエラ!」

飛び起きる三人。引率のハーゲイはとくに起きて高みの見物だ。
「気づくのが遅いんだぜ! ここがめちゃくちやになったら、帰宅は再建するまで延期だぜ!」

「なんだって!?!」

「ナターシャちゃん、ごめんよオレ帰らなきゃ!」

「マッ、マリエラッ!」

ここまでできてお預けを喰らうわけには行かない。三人の闘志は燃え上がり、ニードルエイプと決着をつけるべく外へ飛び出した。

温泉の熱によって雪は解け、温泉の周囲は地面が露出している。
ニードルエイプは石や壊した小屋の破片を拾うと、投石器かという勢いでジークたちに投げつける。

アーリマン温泉に着いたばかりの頃であれば一溜まりも無かっただろう。それほどの速度だ。コントロールもよく頭や足を的確に狙ってくる。それを紙一重で躲し、飛び掛るニードルエイプを次々に倒す三人。

リンクスの放つ短剣は、その弾道を追うことが難しいほどの速度

で飛んでいき、ニードルエイプの眉間を貫く。ジークムントの剣は金属の針のようなニードルエイプの毛皮を容易に切り裂く。来たばかりの頃はジークの剣などニードルエイプの毛皮にたやすくはじかれていたと言うのに、剣に流す魔力をニードルエイプに接触する僅かな瞬間だけ研ぎ澄まし、その切れ味を何倍にも押し上げているのだ。

「ナターシャちゃん、歯をむき出しにしちゃ、チューできないだろ」
相変わらずに見えたエドガンも、すれ違いさまにニードルエイプの毛並みに沿って双剣を突き立てている。ニードルエイプはじっとしているわけではない。金属針の鎧のような毛並みは動きに添って揺れ動き、一瞬たりとも動きをとめるわけではないのに、何と言う技巧だろうか。テクニシャンか。

ちなみに、ばったばったとニードルエイプを切り裂いていくエドガンだったが、雌全員にナターシャちゃんと囁いている。どうやら個体の区別はついていないらしい。

ハーゲイに焚き付けられたニードルエイプとの最終決戦は夜が明け
けるまで続けられた。

死屍累々たる戦場に、最後に立っていたのは、三人の男たち。

彼らには帰るべき場所が、待っている人がいるのだ。

その思いの差が、勝敗を決したのかもしれない。

「単なる実力差だけだな！」

ずびし！ 朝日にきらめきながら、湯煙を超えて現れたハーゲイは、いつもより暑苦しく見えた。

「ハーゲイ、俺たち帰るぜ！」

「ヨアンナちゃんが待ってるからな！」

「マリエラ！」

三人にハーゲイを構っている暇など無い。1ヶ月もの間寝食を共

にしたと言つのに、実にあっさりと挨拶を交わすと、ハーゲイが再建だとか延期だとか言い出す前に迷宮都市に向けて走り出した。

マリエラに会える。ようやく、やっと。この日をどんなに待ち望んだことか。

マリエラ、マリエラ、マリエラ　　。

襲い来る魔物をなぎ倒し、わき目も振らず迷宮都市を目指すジークムント。

早く会いたいと願う気持ちを微塵も隠すことなく迷宮都市へ急ぐジークの様子を、何処かまぶしく感じながらもリンクスは負けじと足を早めた。

転がるように山を下り、風のように平野を走る。

一ヶ月もの間ニードルエイプと死闘を繰り広げた成果か体が軽い。流れる景色の速さから、自分たちがどれ程の速度で走っているのかわかる。

かなたに迷宮都市が小さく見えるなり、三人の走りは一層早くなる。

迷宮都市の門が見えてきた。あれは北門だろうか。

迷宮討伐軍の兵士から連絡が行っていたのか、野生の獣のように目がギラつきワイルドさが増した三人だったが、すんなりと迷宮都市の中へ入ることが出来た。北門の大通りを街の中心部に向かって走る。迷宮の手前の筋を曲がれば『木漏れ日』はすぐそこだ。

ああ、聖樹が見える。見慣れた景色が、見慣れた看板が、帰ってきたのだと教えてくれる。

ああ、マリエラ。ようやく、ようやく会える。

バタン！

息せき切って競うように『木漏れ日』の中に転がり込む三人。

「あー、おかえりー！。ジーク、リンクスー。あとエドガンさんも！」
夢にまで見た声が、いつもの様に迎えてくれる。

むっちりぽよん。

おかえりと声を掛けた笑顔は、いつもよりちょーっと横に広がっていた。

なんだか服もぴちぴちしている。

服を押し上げているものはどこぞの^{アンバーさん}霊峰のように山あり谷ありの神々しいものではない。

どっちかと言うと、なだらかな丘だろうか。谷はない。

「太ってんじゃねー！！！！」

「マリエラアー！！！！」

『木漏れ日』という名の楽園に放し飼いになったマリエラは、むっちむちに太っていた。

ちなみに、最近のエドガンのお気に入り、ヨアンナちゃんは待ってなかった。

常夜の湖畔

「オウオウオウ、ニーレンバーグ先生よう、コレはどういう了見だ？」

リンクスがオラついている。

コレと言つて指差されたのは練り終わったライナス妻のようにもつちりぷよんと椅子に腰掛けているマリエラだ。椅子に座ると太ももが横に広がつてむつちり感がやばい。ある意味、仮死の眠りから目覚めて以来の危機的状況と言えなくも無い。

リンクス達3人はアーリマン温泉でニードルエイブ相手に地獄の一ヶ月を過ごし、全員がBランクとして十分なほどに成長していた。レベルアップと言つてもいい。そして漸く帰つてきたと思つたら、マリエラまでもがまさかの急成長だ。レベルアップどころかクラスチェンジの次元だ。こんな成長は求めていない。予想外すぎてリンクスは威圧だか因縁だかのチンピラスキルに目覚めてしまいそうだ。

「む……、注意はしたのだがな……」

珍しいことにニーレンバーグが目を逸らしている。迷宮討伐軍の兵士たちが見たら驚きの余り目を見張つて三度見ぐらいしたに違いない。アーリマン温泉カースト最下層だったリンクスが、あのニーレンバーグを圧倒していると。

「もー、リンクスひどいー。私の食生活ならちゃんと手紙に書いたじゃない」

「ああ？ あの何処その菓子かうまいだの、ナントカってーケーキを食つただの書いてたやつか？」

「うん、おやつごはん」

にへらと笑う餅エラ。いや、マリエラ。

おやつごはんとは此れ如何に。意味はわかる。わかるのだが。

「おやつはおやつ！ ごはんはごはんだろうがー！！ 変な造語で正当化するなー！」

「俺たちの村は田舎で菓子など手に入らなかったからな。つい食べ過ぎたんだよな」

「そうなの、ジーク」

「そうなの、じゃねーよ！ ジーク、お前甘やかしすぎだろ。そういうのドイツのタメになんねえの！」

「マッ、マリエラのタメ！？」

このタイミングで言う必要の無い幼馴染設定を持ち出して、マリエラを庇うジークにまで切れるリンクス。「マリエラ」以外の言葉を発したと思ったらコレか。リンクスはガシガシと頭をかきむしると、ビシッとマリエラを指差して宣言した。

「マリエラ！ いや、元に戻るまではマルエラだ！ 迷宮に素材採取にいくぞ！ ダイエットだ！」

「おお！？ 迷宮？ 素材採取！ いくー」

この日から、マルエラの迷宮探索は始まった。

リンクスの「マリエラのタメ」という台詞がジークのスイッチを押したらしく、鬼教官は二人に増えた。ちなみに迷宮探索の運動とジークのおやつ制限によって体形はすぐにもとに戻って、マルエラはマリエラに帰ることが出来た。危機的状况はマリエラの努力と仲間間の協力によって回避されたのだった。

《乾燥、乾燥、カーンーそうつ》

マリエラの暢気な声が迷宮内にこだまする。ここは迷宮第23階層の『常夜の湖畔』。ルナマギアの群生地だ。

迷宮討伐軍の依頼に基づいて上級ポジションを大量に作成していたせいで、迷宮都市のルナマギアが品薄になってきたから、マリエラのダイエツトをかねての採取にはもってこいと言えた。

ルナマギアは迷宮の19階層から23階層に生育していて、20階層で採取する冒険者が大半だ。この迷宮では20階層まではDランク、21階層からはCランクの魔物が出現する。Cランク以上の冒険者にとつて、19階層から23階層に出現する魔物はうまみのある物ではない。ルナマギアを入れても別の階層のほうがよほど効率の良い狩ができる。

だからルナマギアの採取を生業とする冒険者はDランクばかりで、必然的に採取場所もDランクの魔物がでる19、20階層に限定される。

マリエラ達のいる23階層はガーク爺のオススメの場所で、ルナマギアの群生地が幾つもあるし現れる魔物は21、22階層よりも強いが大型で数が少なく、護衛の戦力が十分であれば非戦闘員を連れて安全に採取できる場所だ。

この階層は『常夜の湖畔』と呼ばれるだけあって、常に満月の夜のように薄暗い。満月を思わせる明るさは、階層の天井や壁、地面や湖の中にさえ散らばる月光石の光によるものだ。湖畔の名が示すとおり小ささまざまな湖が連なっていて、木々の合間を縫って流れ出すせせらぎが美しい。遠くから水音が聞こえてくるから、どこか

に滝があるのかもしれない。

水音のする方角には大きな湖があると言う。滝の音色、せせらぎの囁き。水音の響く夜の湖畔は美しくも、どこか探検心をくすぐられる。木々を掻き分け水音に誘われるまま進んでみたい衝動に駆られるが、そこに待っているのは魔物の巣だ。

「シギヤアアア」

「シャツシャウツシャゲエ」

ここはリザードマンの巣窟でもあるからだ。

ルナマギアの生育地帯と被るように、19階層からトカゲの魔物が現れるのだが、階層を増すごとにトカゲの魔物は大きくなり、21階層ではラプトルのような前かがみの二足歩行をするリザードマンに変わる。22階層では完全に二足歩行をして手も長くなり、木を尖らせた槍を手に大量に襲ってくる。まるで、トカゲの進化を見ているようだ。

ここ23階層になるとリザードマンの出現数は減るが個体の体は大きくなり、身長は2〜3m、尻尾まで入れた体長はさらに1mは長い。鱗も堅く鎧をまとうているようだからメイルリザードマンと呼ばれるている。多少の知恵もあるようで、23階層の個体は「シギヤア」と言葉らしき鳴き声でオークのように仲間同士である程度の意味疎通を図っているようだ。

タフで知恵が回るから、Cランク冒険者ならば斃すのに時間がかかる魔物だが、得られる素材は皮か肉で魔石の出現率は他の魔物より低い。革は重くてかさばるし肉は臭くばさばさして食用に向かない。ルナマギアを入れてもCランク冒険者には割に合わない狩場だから、今はマリエラ達の貸しきり状態だ。

もちろん23階層のメイルリザードマンなどアーリマン温泉で鍛

え抜かれたジーク、リンクスの敵ではない。マリエラがあつちろろ、こつちろろしながらルナマギアを千切っては暢気な声で《乾燥》させてもまったく問題ないわけだ。

「シギヤーシユキヤシヤジャラア」

「グギヤギャツギヤグツギヤー」

荷運びにつれてきたラプトルがメイルリザードマンを挑発している。爬虫類でもこんなに憎たらしい表情ができるとは驚きだ。

迷宮の階層を繋ぐ階段付近は安全地帯といわれていて、なぜか魔物は入ってこない。一般的に魔物の知性は低く、深い階層の魔物が浅い階層の魔物を捕食することが確認されている。魔物が自由に階層間の移動を行うと、上位種による下位種の捕食が起こり、人間を排除するという迷宮の機能が損なわれるから、迷宮が魔物の移動を制限しているのだと考えられている。

迷宮に思考能力があるのかは議論の別れる所であるが、迷宮の都合で魔物の移動が制限されているのだから、迷宮側の条件が整えば移動制限が取り払われて魔物が迷宮から溢れ出ることも起こる。迷宮の氾濫だ。^{スタンビート}迷宮には軍隊や冒険者が入って魔物を倒し、力を殺ぐ必要があるとされている。

このような場所だから、階層移動は安全だといってもヤグーのよくな比較のおとなしい動物は迷宮内に入りたがらない。荷運びは人間が行うかラプトルのような獰猛な騎獣が必要になる。

さつきからメイルリザードマンを挑発しているラプトルだが、メイルリザードマンより強いわけではない。リンクスの後ろからリザードマンを挑発しているだけなのだ。隙あらば噛み付こうと牙をむき出しにしている好戦的すぎる。ラプトルの様子にイラついたのかリンクスは、もう一人の荷運びに連れてきた者に声を掛けた。

「オイ、ジャ。ちゃんとラプトル見とけよな」

リンクスに言われ、のろのろとメイルリザードマンが落とした皮や魔石を拾っていた黒鉄輸送隊の奴隷、ジャがラプトルの方へ寄っていく。

ユーリケによってきちんとしつけられているラプトルではあるが、人によって態度を変える所がある。リンクスやジークのように自分より強いものにはおとなしく従うが、弱い者の命令には従いにくく舐めた態度をとるのだ。ユーリケがいる場合には調教スキルの支配が行き届いているから誰に対しても従順ない子になるのだが、今ユーリケを含む黒鉄輸送隊のメンバーは帝都に出かけていて、迷宮都市にいるのはリンクスと新婚のディック、そして奴隷のジャだけだ。

アーリマン温泉の修行でエドガンの戦力が強化され、迷宮都市に残れるようになったディックだったが、黒鉄輸送隊の最強戦力を残すためには戦力面でマルローの同行が必要だった。あぶれた最弱の奴隷三人のうち、たまたま目に留まったジャが今回迷宮都市に残留したと言っわけだ。

当然ラプトルの世話などの雑用はジャの仕事になるのだが。

「グッ、キャッ」

「！」

ラプトルは自分より弱いジャの言うことなど聞きはしない。ラプトルに噛み付くそぶりを見せられて尻餅をつくジャ。あちこちにせせらぎがあるから地面は何処も湿っていて、ジャのスポンは見る間に湿って尻に無様な汚れをつける。

「かー、なさけねえ」

ジャはリンクスの声に僅かに顔を赤くするも、転んだ拍子にぶちまけた素材を黙って拾い集める。もっとも、ジャの咽は潰されていって文句一つ言うことは出来ないのだけだ。

「ラプトルー、おいでー」

「ギャツ、ギャツ」

マリエラと呼ばれ、尻尾をふりふり駆け寄るラプトル。ジャどころではなく最弱のはずのマリエラではあるが、その身に宿る魔力は膨大だ。普段は人に悟られないよう抑えているのだけれど、魔力の籠った水を貰っているラプトルにはそれがわかっていて、ユーリケの次くらいにマリエラの言うことを聞く。また魔力入りの水が欲しいという期待のこもったものだから、リンクスたちには餌付けだからかわれているのだが。

マリエラは乾燥させたルナマギアの束をこれでもかどラプトルの背に乗せる。たった2頭で装甲馬車を引くラプトルにとって乾いた薬草など荷物のうちに入らないらしく、マリエラに「のる？」とばかりに背を見せる。実に働き者の良い子だと両手の平から水を与えてやりながら、「自分で歩くよ」と断るマリエラ。

マリエラが楽をしようとするリンクスが両手を顔の位置でわきわきさせながら、「ムダ肉もぐぞー！」と追いかけて回すからなのだが。

(ほら、今もリンクスの目が開いてるし！)

リンクスに追いかけられながら、迷宮23階層から地上まで走って上がらされたマルエラ時代を思い出してマリエラはぶるぶる身震いするのだった。

ちなみにジークはマルエラに併走しながら、「もうすぐだ！」だとか「運動後の食事はうまいぞ！」だとか「今日はココアにマッシュマロを3つ入れよう」などと全力で応援してくれていた。

階段ダッシュの翌朝、膝がくがくのマルエラに、「マッルエツラちゃん、迷宮いこー」と誘いに来たリンクスのいい笑顔をマリエ

ラは決して忘れない。リジエ^{再生}ネ薬で筋肉痛を癒せなければ恐るべき地獄が待っていただろう。ヤツ^{リンクス}の目は本気だった。リジエ^{再生}ネ薬のありがたみを体感したマリエラだった。

疑念の芽

冬の夕暮れは早い。マリエラ一行は夕食に十分間に合うように『常夜の湖畔』を発ったのに、外はすっかり日が暮れていて街には明かりが灯っていた。

「うう、寒つぶ」

「ギヤ」

ルナマギアの生息域である『常夜の湖畔』はひんやりと寒い場所だったが、日の暮れた迷宮都市は底冷えするように寒い。

大量の乾燥薬草を積んだラプトルが同意するかのように鳴いてマリエラの後に続く。ほとんど荷物を持たない身軽な格好のマリエラ、ジーク、リンクスの三人の後を、大量のメイリザードマンの皮を背負ってふらふらと追うジヤ。積載重量に余裕のあるラプトルだったが、ジヤが荷物を載せようとすると「ギヤギヤッ」と威嚇して載せてくれなかったため、自分で背負って歩いている。

道行く人はラプトルを珍しいなと見ることはあっても、非戦闘員のマリエラや大量に荷物を背負うジヤに目を向けることはない。

錬金術スキルを持つものは地脈契約者コントラクターでなくとも《乾燥》ホくらいは使えるし、乾燥させたほうが大量に持ち運びが出来るから、錬金術ルタースキル持ちの同行は珍しくない。たいていの薬草は生育環境の温度や湿度で乾燥させたほうが、状態が良いから尚のことだ。

ジヤにしたって、装備や物腰から高位の冒険者だとわかるリンクスやジークが連れているのだ。冒険者集団の荷運び奴隷だと思っただけだ。人によってはまともな服を着せられたジヤを見て、待遇の良い主なのだと好感すら持つだろう。

荷運びの奴隷が大量の荷物を運ぶことは当たり前で、連れ歩く者

達が身軽なのも当たり前のことだった。

冒険者ギルドでリザードマンの皮と魔石を売ったリンクスは、端数の銅貨20枚ちよつとをジャに渡すとラプトルを連れて拠点に帰るよう命じた。ジャは夕食代の銅貨を嬉しそうに受け取ると、マリエラに水を飲ませてもらって何とか言うことを聞くようになったラプトルを連れ拠点へ帰っていった。

夕食代に銅貨を20枚以上くれるなんて、何て気前のいい主だろ
う。

(こりゃ、酒が飲めるな。折角、安全な迷宮都市に残れたつてえのにこき使われて散々な1日だったが、酒が飲めるんならマシってモンだ。今日はやけに冷えやがる。とつと帰って一杯やるか)

ジャは一番安い酒を買いだけ買い込むと、黒鉄輸送隊の拠点へと向かう。拠点にはラプトルの餌としてオーク肉が保管してある。多少食べてもバレはしない。

拠点についたジャはラプトルに水と肉を与え、降ろした乾燥薬草を倉庫に適当に放り込むと、オーク肉を肴に安酒をあおるのであった。

「今日はリザードマンの皮と魔石で銀貨5枚つてとこかな。ヤグーの跳ね橋亭でパーツと騒ごうぜ」

「リンクスのパーツとつて何人前？」

「3人前はカルイな」

「なんで太らないのよう」

わいわいといつもの様に騒ぎながら『ヤグーの跳ね橋亭』へ向かい、大量の料理を注文する3人。

料理はたくさんあるのにマリエラの皿から肉を奪っていくリンク

スと、マリエラの皿に野菜を載せるジーク。

「もー、リンクス！　なんで私のお皿からお肉盗るのよー。ジークのお皿にもお肉あるじゃない！」

「ジークの皿からも盗ってるぜー。動きが速すぎてマリエラの目に見えないだけだ」

「え？　そうなの」

「ほら、マリエラ。野菜が減ってないぞ」

「あれ？　さつき食べたと思っただけど……」

目に止まらない高速で動いているのはマリエラの皿に野菜を取り分けるジークであって、リンクスはマリエラの皿からしか肉を盗っていない。もはやマルエラではないと言うのに、酷い仕打ちだ。いやリバウンド防止の深い計算あつてのことかもしれない。

「あ！　また盗った！」

「ふはは、残念だったな。残像だ。もぐもぐ」

高い身体能力を駆使して全力でマリエラをからかうリンクスと、その際にこれまた高い身体能力を駆使してマリエラの皿に野菜を足し、肉を脂身の少ないものに摩り替えるジーク。恐るべき連携だ。阿吽の呼吸だ。流石はアーリマン山中のニードルエイプを葬った戦士達と言える。

散々食べて笑って楽しんだ後、それでも残った稼ぎはリンクスとジークで山分けする。

「リンクスとジークで稼いだお金じゃない」

当たり前のように辞退するマリエラ。マリエラの家ではポーシヨンの代金を含めて二人の稼ぎはジークが管理している。マリエラに任せていると、各種スライムを揃えようとしていたり、必要の無い魔道具を衝動買いしそうになったり、毎日の食事がオーキング肉になつたりする。だから話し合いの結果、一定額の生活費と小遣いを決めて毎月ジークが渡すことになった。勿論マリエラと同額の小遣い

をジークも受け取っている。

二人の小遣いはBランク冒険者としても上級ポーションが作れる錬金術師としても多い額ではないが、武器や防具、仕事や暮らしに必要なものは別に購入しているから不自由はない。マリエラなどは小遣いをもらうたびに財布を握り締めて出かけては、無駄遣いをしてジークを悩ませている。

マリエラにとって自分とジークの小遣いが同額なのは当たり前前で、リンクスを含め周囲の人は『マリエラを甘やかすすぎだ』という事以外は、ジークの身の上を知って尚、ジークの有り様に違和感を感じていない。今日だって狩の分け前をジークが受け取ることをおかしいと指摘する者はいない。『奴隷の稼ぎは主のもの』という、社会通念があるにも関わらずだ。

5ヶ月ほど前、ジークとジャはレイモンドの奴隷商館の裏庭に、共に奴隷として立っていた。死にかけのジークをジャはラプトルの世話をしながら眺めていた。

今なお、ジークとジャの身分は、共に犯罪奴隷のままだ。けれど、今のジークを奴隷だと思つる者はいまい。ミスリルの剣を佩き、黒鉄輸送隊経由で入手したバジリスク革の革鎧を身につけるジーク。マリエラの守護者たらんとするその立ち振る舞いは身に纏う装備以上に彼を立派な人物に見せている。

まともな衣服を与えられていても、尻の汚れを払うことも髪を梳くしけずることもしないジャ。背筋を曲げ、目だけはキョロキョロと周囲を窺う。口元は愛想を振り撒くように笑っているのに、その卑屈な様は見る者を不快な気持ちにさせる。まともな衣服を着けていても奴隷に違いないと思わせる。

ジークとジャ。奴隷商館の裏庭に共に在った二人は今日、共に迷宮に潜った。

ジークはマリエラ、リンクスと食事を楽しみ、声を出して笑っていた。皆で囲む食卓には料理のほかに質の良い酒が並ぶ。けれどジークもリンクスもたしなむ程度にしか飲まず、決して酔うようなマネはしない。かつて酒に溺れ享楽に身を持ち崩した愚かさは、今では微塵も見えはしない。彼には護るべき人がいるのだから。

ジャは安酒をあまり、久々の酒だと潰された咽で声も無く笑っていた。安く酔えればそれでいい。何の手間もかけず塩で焼いただけのオーク肉と酒精ばかり強い酒でジャは早々に酔いつぶれる。リンクスが帰ってきて酒を取り上げられては敵わない。そんな卑しい思考から一気に酒をとおったせいだ。空になった酒瓶を大切そうに抱きしめて、黒鉄輸送隊の拠点の寢床で丸くなる。彼にとって我が身以外に大切だと思えるものは存在しなかった。

ジークが木漏れ日の自室で目覚め、いつもの様にニールンバークの稽古を受けていたところ、ジャも二日酔いの痛みを目を覚ましていた。水を飲みに行った帰り、倉庫をのぞいたジャは昨日放り込んだはずのルナマギアが無いことに気がついた。

(昨日採取した薬草、何処いった?)

黒鉄輸送隊の拠点に運び込まれた錬金術の素材は、人の寝静まった夜更けに地下大水道を通って木漏れ日の地下へと運び込まれる。

昨日採取したルナマギアも、ジャが酔いつぶれて眠っている間にリンクスが運び込んであった。

（そついやあ、納品された薬草はいつの間にやらなくなってるよな。こりゃあ、どういうこつた？）

ジャの疑念は世話になつてゐる黒鉄輸送隊の役に立ちたいという殊勝なものではない。そもそもジャはまともな服を、十分な食事を与えてくれる黒鉄輸送隊に対して何の恩義も感じていない。罪を犯したが故に奴隷に落とされた身の上であるのに、自分を奴隷として扱う周囲に対し無差別に悪意と敵意を撒き散らすだけだ。何か不正があるのなら、何か弱みを握れるのなら。そんな感情で消えた薬草について考える。

ジャの咽は潰されていて疑問を口にすることは出来ない。字の読めない彼には書類を漁つて情報を得るといふ手段も無い。ジャにできるのは、目を光らせ耳をそばだてて状況を探ることだけだ。

（薬草がなくなるのは大抵夜だ。こつも再々無くなつてんだ。よそ者の仕業つてわけじゃあねえ。新婚の旦那はあの色つぺえ嫁とよろしくやつてんだらうから、持ち出したのは糸目だな。）

ジャは二日酔いで痛む頭で考える。黒鉄輸送隊のメンバーが薬草を横流ししているのならジャにとつて都合がいい。うまく弱みを握れれば、旨い目を見ることが出来るだらう。

（んん？ おかしくねえか？ 隊の金で買った薬草を流して稼ぐつてーならわからあ。だが昨日の薬草は糸目どもが採取してきたもんじゃねえか。なんで堂々と売りはらわねえ？ 隠してえのは黒鉄輸送隊の拠点から持ち出すことじゃあなくて、持ち込む先つてことか？ いつてえ、ドコに薬草を持ち込んでるつてんだ？）

ひくひくとジャの小鼻が膨らむ。金のおいを嗅ぎつけたのだ。

この先にうまい話が転がっている。そういうネタを嗅ぎ付けるのがジヤは大層得意だった。久しぶりの感覚だ。これはデカイ儲けに繋がっている。

ジヤに芽吹いた疑念は、はたしてジークを、マリエラを捉える日が来るのだろうか。

あの日、奴隷商館の裏庭で分かたれたジークとジヤの運命は、再びみえる日が来るのだろうか。

季節は春にはまだ遠く、夜は長く朝日はなかなか街を照らさない。薄暗がりの迷宮都市でジヤの目だけがぎよろりと光った。

黒い悪魔（前書き）

【後半注意】 黒い悪魔がカサカサゴソゴソ大ハッスルです。

黒い悪魔

「マリエラ、地下室は冷える。休憩にしよう」

地下室で作業するマリエラをジークが呼びに来る。小さな暖房の魔道具の横で作業に没頭していたマリエラの手はかじかんで、指は赤くぶつくりとしもやけになっている。

暖炉の前でこすこすと手をすり合わせて温めるマリエラ。

ココアを飲む前にジークが地下から持ってきた低級ポーシオンを手にとつて指先に塗り合わせると、しもやけはたちどころに治ってしまう。残ったポーシオンを手にとると顔にも塗りつける。

「下から上にー、下から上にー、リフトアップ」

帝都などポーシオンが安く手に入る地域では良く見かける光景だ。

ポーシオンは怪我を治す。肌荒れも軽微な肌の損傷だから低級ポーシオンで治すことができる。生活に困らない程度であれば、子供がちよつとした怪我をしたら低級ポーシオンで治してやって、残ったポーシオンを母親が顔に塗るといった光景はよく見受けられる。

勿論毎日使えるほど庶民の暮らしは楽ではないから、普段使う化粧品といったものも出回っている。低級ポーシオンはいわゆるスペシャルケアというやつだ。

「はい、ジークも。顔の傷跡、なかなか消えないねえ」

そんなことを言いながらジークの手にも低級ポーシオンを垂らすマリエラ。

「この傷が消えたら不自然だろう。むしろ残っていて良かったと思
うよ」

そう答えながらジークはニーレンバーグの稽古でついた擦り傷に
ポーシヨンを伸ばしたあと、ココアの入ったコップをマリエラに渡
した。

低級ポーシヨンを塗ってつやつやになったマリエラがほかほかと
湯気を上げるコップに顔を近づける。

ほかほかつるん。

まるで剥きたてのゆで卵みたいだ。今日もマリエラは素材の味が
活きている。

暖炉のある居間には長椅子と対になった一人がけの椅子、テーブ
ルにいくつかの家具が置いてあった。ジーク達がアーマン温泉に
出かけてすぐに開かれた家具市で購入したものだ。どの家具もマリ
エラが見つけた、シェリーがデザインをチェックしてキャロラインが
品質を見定め、アンバーが値切った一品だ。余りにピンポイントで
よい品ばかりをハントするので四人セットで家具商に就職しないか
と持ちかけられたくらいだ。

どれも貴族家から払い下げられた品だけれど、落ち着いたどこか
かわいらしいデザインのものばかりで、『木漏れ日』の居間にとて
も良くあっている。お役ごめんになった机代わりの木箱は、地下室
で箱としての職務を全うしている。

「ちょっと家具市で使いすぎちゃってね。ジークが出かけている間
に使っていいって言った分、ほとんどなくなっちゃってさー」

ジークがいない間、冷凍の魔道具にしまわれたオーク肉と薬草園
の薬草、メルルさんから届けられる『試供品』のお菓子を食べて暮
らしていたらしい。

「マリエラのお金なんだから、臨機応変にすればいいのに」
「そうなんだけどね。それよりこの椅子、キャル様の家の椅子みたいにふかふかだよー」

嬉しそうに笑いながら長椅子の上で跳ねてみせるマリエラ。

ジークは知らない。この長椅子でマリエラがこんなに跳ねるのは、今日が初めてだということ。

ぼよんぼよんぼよんしょぼん

跳ねても誰も何も言ってくれない『木漏れ日』は、一人で暮らすには広すぎる。

「スラーケン」、聞いてよ」

ジーク達がアールリマン温泉に出かけている間、お客やニーレンバークが帰った後のマリエラは、お菓子の箱を掴んで工房に籠り、瓶の中のスライムことスラーケン合成生物に話しかけながらお菓子を齧りポーションを作っていた。

家具市で使いすぎてしまったけれど、お金が無かったわけではない。一人で作って食べる食事が寂しかったのか、単に億劫だったのか。そんな話をマリエラはしない。けれど、「ジークのココアは美味しいね。マシユマロもう一個お代わり」とねだれば、「……甘やかしすぎか……？ 今日だけだぞ？」などとぶつぶつ言いつつもマシユマロを足してくれるジークと過ごす時間はとても暖かい。帰ってきた日常をマリエラは噛みしめていた。

「で、今回は何を作っていたんだ？」

「うん。殺虫特化型のポーションが大量にいるんだって」

マリエラはジーク達がアーリマン温泉に出かけていた間のことを語って聞かせる。

ジークの訓練が無くともニーレンバークは朝早くからやって来て、開店までの短い時間にマリエラにポーシオンについて質問したり、マリエラの体調を確認したりしていた。

「虫を殺せるポーシオンはないか？」

「虫除けも殺虫もありますよ。でも虫の種類によって材料が違うんです。代表的な殺虫ポーシオンなら5種類くらいかな。あとよく効くやつでも中級だから魔物にどこまで効くかどうかわからないです」
「む。そうか」

そんな会話をした後、ニーレンバークは何やら書状をしたためると診察に来た兵士に書状を渡す。そして夜にポーシオンを引取りにやってきたマルローが「マリエラさん、次は殺虫ポーシオンを5種類各10本お願いしたいのですが」と注文してくる。

黒鉄輸送隊に守秘契約を求めたのはマリエラだから文句は言えないのだが、実に回りくどくてまどろっこしい。未だに「帝都の錬金術師」を強調するニーレンバークに、（もしかして、本当に帝都の錬金術師だと思われるのかも）などと考えながら、マリエラは5種類の殺虫特化型ポーシオンを作成していった。

マリエラが殺虫ポーシオンを納めた数日後、そのうちの1種類のポーシオンの大量注文が入った。

（よりによってこれ！？ うわ、最悪！）

ポーシオンが良く効いたらしいと話すマルローに、ポーシオンが効くならまだましと自分に言い聞かせながらもマリエラはこれだけの量のポーシオンが必要な状況に顔を青くした。

昆虫と人が共生できるのは昆虫が小さいからだと言っていたマリエラは思っ

ている。

(だって、よく見るとキモチワルイんだもん)

学術的な理由ではなく完全に個人の嗜好だ。眼がいつぱいあったり、脚が何本も生えていたり。逆に目や手足が何処にあるかわからないイモ虫みたいなものもある。どうなっているのかじっくりと観察したいのに、やたらと動きが素早くて確認することが出来ないか、じっくり見てもわからないままだったりする。しかも潰すと汁が出る。

虫からすると「動物のほぅがよっぼど汁っばいだろ！」と思うのかもれないが。確かに動物や食肉できる魔物を解体すると大量に血が出る。気持ちのいいものではないけれど、それは痛そうだから残酷だとかいう気持ちの悪さで、虫から出る汁の気持ち悪さとは違うとマリエラはある昆虫を思い浮かべながら考えていた。

七つの罪源というものがある。「暴食」「色欲」「強欲」「憤怒」「傲慢」「嫉妬」「怠惰」が人間を罪に導くのだと。ならば奴らは最も罪から遠いと言えるはずだ。

なぜなら奴らは暴食はせず、節制を知っている。僅かな食べ残しや、食べ物とさえ呼べないゴミでさえ食事とすることが出来る。しかも驚くほどに少量の食料で命を繋ぐことが出来るのだから。

なぜなら奴らは色欲が薄く純潔でさえある。雌が3匹以上存在すれば自ら子を成す事が可能な生き物が色欲で身を滅ぼす愚行など起しはすまい。

なぜなら奴らは強欲ではない。ほんの僅かなぬくもり、温かさを望む謙虚なものだ。温かなぬくもりはきっと救恤しあうに違いない。なぜなら奴らは憤怒に任せ、人を襲うことをしない。稀に向かつてくるときは生き残りをかけた知略に満ちた冒険だと言われている。病を媒介するモノ達に比べればよほど慈悲深い生き物と言えよう。

なぜなら奴らは怠惰ではない。夜を通して働き続け、糧を得る勤勉さを知っている。

なぜなら奴らは嫉妬から遠い。喪服を思わせるシンプルな黒の衣を身にまとい、しぶとく生きる様は忍耐の化身とも言えよう。

なぜなら奴らは傲慢な人間のすぐ傍でひっそりと生を繋いでいる。望まれないと知っているのか人目を避け、日陰の身をよしとする生き様は謙譲の美德と言っても過言ではない。

「これほどの美德を備えた奴らであるというのに、人は奴らを時に「黒い悪魔」と呼んで蔑むのだ。」

「ぎいやああ、でたー!!!」
出たもなにもここは彼らの住処だ。闖入者は迷宮討伐軍の方だと主張したいに違いない。サーチ&デストロイを運命付けられた奴らの無念がそうさせたのか、迷宮第5階層の『黒い悪魔』^{ゴキブリ}は酷くでかく、タフで凶悪だった。

「うつつああああ！ こないでー！ ファイヤーウォール！」

錯乱した魔道師兵の放った火魔法は黒い悪魔に燃え移る。ぬらぬらと脂で照り光った表面に着火した炎は見る間に燃え上がり、火達

磨になった黒い悪魔は何のダメージも受けていないかのように着火したまま力サカサと走り回る。

体長1mを超える黒い悪魔が燃え盛りながら走り回る様は、否が応にも目を引くものだ。ムダにサイズが大きいせいで翅の質感や脚の動き、生えた毛までも鮮明だ。迷宮討伐軍の兵士たちは皆身体能力が高く、動体視力も発達しているから、細かい動きまでこれでもかと把握できたことだろう。

「あ、とんだ」

ブブブブ

「退却！ たいきゃーく！！」

着火したまま走り回っていた黒い悪魔は、ついに飛翔個体に進化した。

アイキャンフライ。我こそがこの大森林の王なり。

迷宮第55階層の大森林を縦横無尽に飛び回るバーニングな黒い悪魔によって、大森林はあつという間に火の海に変わる。

ウェイスハルトがくたりと倒れているのは、煙に巻かれたためか、それとも黒い悪魔の視覚効果か。迷宮討伐軍全員が上の階層に逃げ延びたときには第55階層は炎に包まれていた。

「急ぎ点呼をとれ！ 負傷者の治療、いや精神状態を含め安否確認を急げ」

レオンハルトの呼びかけに各隊に配属された治癒魔法使いが続々と報告に集まる。

「身体損傷は全て回復済み。問題ありません。ただ……」

「コワイコワイコワイコワイコワイコワイ……」

「飛ぶとか……、飛ぶとか有りかよ……」

頭を、膝を抱えてうずくまり、ブツブツつばやく複数の兵士たち。

「またか……」

この階層に来てからと言うもの、休養を必要とする兵が増えていた。

海に浮ぶ柱討伐から一ヶ月は優に経過していて、黒の新薬の影響が残る兵士達の治療は順調に進んでいる。

しかし55階層の攻略は難航し、迷宮討伐軍に深刻なダメージは出ていないものの解決の糸口は未だ見えない。日に日に憔悴していく弟ウエイスハルトにレオンハルトの焦りは募る。昔からこの弟は虫が大嫌いだっただの。

アグウイナス家の地下で眠っていた錬金術師たちは仮死の眠りから覚めた者でも極めて短命で、魔力切れや過労と思われる状況で塩と化して亡くなったと聞く。最後の地脈契約コントラクトの錬金術師がそうならない保証は無い。あの一件以来、怪我の度合いに応じたポジションの使い分けを徹底させ、下級、中級のポジションを注文することで、地脈契約コントラクトの錬金術師の負担低減に努めてきたし、ニーレンバーグに魔力の乱れを確認させて異常が無いか見させたり、栄養価の高い菓子を頻繁に差し入れてきた。その甲斐あってかずいぶんと血色が良くなってきたと聞く。

余り負担をかけてはならぬと迷宮討伐軍だけで討伐できぬか模索を続けてきたが、そろそろ限界かもしれない。2000年かけて52階層までしかたどり着けなかったことを思えばこの数ヶ月の攻略速度は異常と言って良いほどだ。けれど慢心できる状況でもない。

「ニーレンバーグに連絡を」

そう命じたレオンハルトの元に、数日後に届けられた5種類の殺虫特化型中級ポーションのうち、1種類が驚くべき効果を発揮した

ことで、ウェイスハルトは奇跡の復活を遂げた。若干まなざしが恐
いから斜め上に成長したのかもしれない。進化したウェイスハルト
によって、迷宮第5階層の討伐は迷宮都市を潤す大掛かりな作戦
へと発展するのだった。

再生する森と主（前書き）

ゴキ注意。グロ注意

あと、ジーク達がアーリマン温泉に出かけていたときの話です。念のため。

再生する森と主

第54階層、海に浮ぶ柱の討伐を終え、55階層の探索を終えた斥候の報告はこうだった。

「第55階層は温暖で緑豊かな大森林で、攻撃的な魔物は発見されませんでした」

そんな馬鹿なといぶかしみつつも55階層に降立った先発メンバーだったが、そこは斥候の報告に相違なく緑豊かな常夏の大森林だった。そこかしこにカラフルな花が咲き乱れ、木々には甘い香りを放つ果実が実っている。ここが魔の森であつたならすぐに魔物が大量に押し寄せてくると言うのに、蝶が舞い飛び虫が樹蜜をすするばかりで、魔物は出ては来なかった。

迷宮の外は冬。暖かく実り豊かな55階層の自然に警戒がほぐれた兵士が、傍に実る木の実に手を伸ばした。迷宮都市の卸売市場でも見かける少々高価な果物だ。艶やかに色づいてよく熟れている。薄い皮の向こうには黄金色の甘い果実がたっぷりの果汁と共に詰まっているのだろう。

迷宮には魔物が出るが階層毎の気候に適した植物が育ち、実をつけている。食用できる植物は階層が深いほど美味だから、この果実はさぞかしうまいに違いない。

「おい、作戦行動中だぞ。やめとけよ」

仲間が注意するより早く、果実をもちだ兵士は皮もむかずにがぶりと果実に喰らいついた。

ズゾゾゾゾベババババ

果実の中にもぐりこみ黄金色の果肉をむさぼっていたモノが大量に溢れ出た。

「へあつ、おえつ、げつ、ゲツ……、ひつ、ひあああああああああああ……」

齧った果実を吐き出す兵士。吐き出した果肉からは何匹もの黒い豆物のような虫がこぼれだし、かさかさと草むらの陰へと消えていく。果実を持っていた手にも、齧った口の周りにさえも奴らはへばりついていて、首を胴を服や鎧の中を伝って外へ逃れようとガサガサと動く。

「ッ………、ヒッイーイイイ………」

白眼をむいてその場で気絶する兵士。

彼が第55階層の脱落者第1号だった。肉体に損傷は無かったものの彼の治療は長期に渡り、戦線に復帰した後も55階層に立ち入ることは勿論、果物を一切食べられなくなってしまったと言う。宜なるかなと言うには余りに悲劇的な悪夢の幕開けだっただろう。

第55階層は『黒い悪魔の森』だった。

探索を続けるにつれ、次第に明らかになる全貌。何匹も見つかる1m級の黒い悪魔。

兵士が喰らってしまったモノは黒い悪魔の幼生体に違いない。

斥候の報告に偽りは無く、ここに攻撃的な魔物はいない。1m級の黒い悪魔は魔物ではあるが人を襲ってこないのだ。非常にゴキブリらしくカサカサと動き回り、平たい体を草木や岩の隙間に滑り込ませて何処かへと消えていく。如何に体が大きかろうとその習性は変わらない。奴らは第55階層で果物や落ち葉を食べ日陰に潜んで静かに暮らしているだけだ。栄養豊富なこの森だから1mもの大きさにまで成長できたのかもしれない。

そしてウエイスハルトの見立てでは、奴らこそが第5階層の階層主。一匹残さず絶滅させるまで下階層への扉は開かない。

黒い悪魔一体一体の攻撃力はさして強いものではない。恐るべきはその防御力と体力。あらゆる魔法に耐性を持ち、他の魔物であればとうに倒れているだろう攻撃を受けても死ぬことが無い。頭を潰しても暫らく活動を続けるとは一体どういう生物か。斥候部隊の蟲使いが「脳と心臓が複数あるのですよ」と嬉しそうに語っていたが聞かされた迷宮討伐軍の兵士たちはみんな大層嫌そうな顔をしていた。

それでも単体の強さを見れば、隔離された部屋で時間さえかければランク冒険者でも1：1で倒すことが可能ではある。

金獅子將軍レオンハルト率いる迷宮討伐軍ならば倒すことは可能なのだ。

黒い悪魔が逃げさえしなければ。

うんざりするほど湧き出では襲い掛かってくる魔の森の魔物が可愛くみえる。黒い悪魔はあれほどに眼を惹く色、フォルム、動きで視覚を攻撃し、カサカサという音で聴覚を攻撃してくる。魔法などというくりに捕らわれない深淵かつ高度な精神攻撃に違いない。だと言うのになぜ逃げるのか。ヒットアンドアウェイ戦法か。当て逃げがごとき悪辣さだとウエイスハルトは会議室で言葉の限りに罵っていたが、現状を打破する名案は浮ばなかった。

タフさが強化された黒い悪魔に熱湯は効かなかったし、洗剤液が効くという女性兵士のアイデアに従って石鹼水の雨を降らせた作戦も、大森林の木々が遮って木の葉の隙間に逃れた黒い悪魔には効果が無かった。風に吹かれてシャボン玉が舞い踊るファンシーな景色の中、勝ち誇ったように黒い悪魔が天空を飛翔するカオスな光景が見られただけだった。『木漏れ日』をはじめとする石鹼を扱う店は

少しだけ儲かったが、迷宮討伐軍は精神的に大損害だ。

業を煮やしたウエイスハルト率いる魔道師兵達によって階層全てを焼き尽くしたこともあった。燃え盛る大火の前で高笑いするウエイスハルトがメチャクチャ恐ろしく、「どちらが悪魔かわからない」とレオンハルトは心中呟いたものだったが、驚いたことに翌日には森林は元通りに再生していた。勿論黒い悪魔もだ。いや、完全に元通りではなかったのだろう。森林に果実は実っておらず黒い悪魔は一回りサイズが小さい個体ばかりだった。餌が不足したのか黒い悪魔どもは、再生した大森林を前に啞然と呆ける迷宮討伐軍の隙をついて兵糧を食い漁っていたのだから。

「恐らく火災を逃れた卵から孵った個体が急成長したのでしょう。なんとと言う生命力。素晴らしい」

心から賞賛する蟲使い。兵糧をむさぼる黒い悪魔に気付いたウエイスハルトが、無言で蟲使いごと黒い悪魔に火魔法を叩き込みだしたため、その日は撤退を余儀なくされたのだった。

(今回も全焼か。今回は兵糧の管理に気をつけねばな……)

レオンハルトは迷宮討伐軍基地の自室で疲れたように目を押しさえる。『海に浮ぶ柱』もそうだったが、迷宮討伐軍を殲滅するといふよりは攻略させず時間を稼ごうとするような階層が続いている。特に黒い悪魔はタフな上に逃げ回るし、今日のように階層に火を放つても翌日には再生してしまっている。酸欠で兵が倒れないのは有難いが、それ以上に今回はウエイスハルトの様子が不味い。大嫌いな虫、しかも黒い悪魔を相手に無理をしているのだろう。別人のようになつて来ている。

マルローが錬金術師アルケミストの殺虫特化ポーションを持ってきたときなど、「待ちかねたぞ、マルロー！ それがヤツを殺る薬か！」とギラギ

ラした目で詰め寄っていた。

「はい。こちらがオススメの使い方だそうぞ」

ウエイスハルトの余りの剣幕に思わず一步下がったマルローは、ポーションと共にマリエラがしたためた説明書きを差し出す。

「フ、フフフフ……、これなら……。直ちに準備しろ！ 材料は基地内で揃うはずだ！ 明日の討伐に間に合わせよ！ 夜明けまではまだ6刻もあるぞ！」

ポーションの説明書きを舐めるように読んだ後、さも当然のように徹夜作業を命じるウエイスハルト。

「はっ」

側近も側近で説明書きとポーションを受け取ると、この緊急案件に対応すべくきびすを返した。黒い悪魔相手に消耗し殺気さえ放つウエイスハルトを思えば、徹夜くらいどうということもない。目の下のくつきり黒いクマを見れば、誰よりも眠れていないのは明白だ。

『俺らも頑張るから、少しは寝てください』

そんな兵士達の願いが届いたのか、単にポーションの効き目が良かったのか、5種類のうち1種類のポーションを練り込んだ餌を食べた黒い悪魔は十ほど数える間に動かなくなり、卵も残さず消えうせたとの報告がもたらされた。

「量産だ！！ 第5階層の面積からやつらの最大生息数を試算しろ！ 殲滅するぞ！」

目の下にくつきりと隈の浮んだ顔で「殲滅だ、掃討だ、一匹たりと生かしておかぬ」と叫ぶウエイスハルトは狂った独裁者のようである。ヤツらを全滅させなければ5階層は攻略できないから仕方が無いのだし、何より相手は黒い悪魔だから、酷く適切な表現では

あるのだが。

「ウエイスハルト、少し寝ろ」

弟の余りの様子に、心配したレオンハルトは將軍命令を発動して
おにいちゃん
ウエイスハルトを寝かしつけた。

(階層主でさえなければ、黒い悪魔といえど攻撃をしてこぬ者を毒
殺などしたくは無いのだがな)

黒い悪魔の見た目をどうとも思わないレオンハルトは、見たくも
毛嫌いされる黒い悪魔を少しだけ哀れに思うのだった。

「えー、またそんな一杯。ジークいないし無理ですよー」

「出来ない言い訳よりやれる方法を考えましょう」

ムリムリとゴネるマリエラにキリツと正論で答えるマルロー。出
来る上司のごとき発言だがマリエラに効果はない。マリエラが求め
ているのは、疲れたときに淹れてくれるココアだったり、一緒に作
って食べるご飯だったり、馬鹿なことをしたときに諫めてくれる声
なのだ。

要するにボケに対する突っ込みな訳で、相方不在で一人天然ボケ
を垂れ流し続けていたマリエラは大層ご機嫌ナナメだった。最早、
ムリムリ言いたいだけのマリエラだ。

「サソラル石をスライムの酸とかで処理したやつが原料の一つなん
ですけど、ポーシヨンに必要な成分を得るのに五倍から十倍のサソ
ラル石がいるんです。そんな重たいの、一人じゃ無理です。あと喰

い付きのいいお団子の見本もいるんですか？ お団子とか、うっかり食べちゃったらどうするんですかー」

ここで「いや、食うなよ」というような一言があればマリエラの機嫌も多少は良くなったのだろうが、マルローは「人間にも毒なのですか……」と呟くばかり。

「それでは、サソラル石の処理は命の雫を用いませぬから、外注処理しましょう。餌の配合についても提案のみという形で、ご提案に基づいて外注で検討して頂きましょう」

マルローはマリエラの負担軽減と、日に日に壊れていくウェイスハルトを助けたい一心で合理的に仕事を押し進める。

「外注費を除いた今回のお見積もりは明日お持ちします」

などと最後までお仕事モードでマリエラにトドメを刺してしまっただが、彼に悪意は微塵も無いのだ。お陰で、翌日キャロラインたちとお菓子を食べながらおしゃべりを楽しむまではマリエラの口はへの字のままだった。

「錬金術師^{マリエラ}ご機嫌ナナメ」の急報を聞きつけたウェイスハルトは『木漏れ日』にお菓子を追加投入するし、「機嫌をとれ」と最も不得意な命令を受けてしまったニーレンバーグは、マリエラがお菓子をむさぼるのをとめることが出来なかった。マリエラのごネ得が通ってしまつとは、迷宮討伐軍の管理体制の弱さが浮き彫りだ。

ムクれているのかムクんでいるのか判らなくなってきたマルエラは、ジーク達が帰ってくるまで一人おやつを貪りながらポーシヨンを作り続けた。

始まりの音

スラム街の端、外壁近くのとある廃墟に大規模な工房が開かれた。工房と言っても急造されたもので、板張りの壁に床は土間のまま。迷宮都市の建築基準を満足していないから、人が居住することは出来ない。スラム街でも外壁近くの魔の森に近い場所は誰も住みたがらないから、広い敷地面積を確保するにはうつつつけだった。

その工房には迷宮討伐軍がアーリマン温泉周辺から採掘したサソラル石やスライム溶解液、いくつもの薬品、そして匂いの強い食材が運び込まれていた。運び込まれた材料を処理する係が決まっているらしく、ある者は座ってサソラル石を槌で細かく砕いて桶にいれ、ある者は桶を決められた場所に運んでいた。運ばれたサソラル石の粉をスライム溶解液の入ったタンクに慎重に投入している者もいれば、冷却魔法でタンクの冷却を行っている者もいる。

一口にスライム溶解液と言っても、野生のスライムが吐く溶解液は様々な成分の混ざり合ったものだ。調教されたスライムに決まった餌を与えることで純度の高い単一な溶解液を得ることが出来る。この工房に運びこまれているのは、卵や臭いの強い野菜、温泉で取れる黄色い粉を与えたスライムの溶解液で、水に溶かすと発熱する性質がある。サソラル石は一見乾いた鉱物だけれどスライムの酸で溶かすと水が出るし、溶かすときにも発熱する。放っておくとタンクが加熱して危険な状態になるから、冷却魔法で冷やしながら作業を行っている。

溶かした後の液体も、欲しい成分といらぬ成分が混ざっていて、濾したあと温度差を利用して分離するという傍目では何をしている

のかわからない作業が必要になる。高レベルな錬金術スキルがあれば魔力量に依じていくらでも量産できるものだけれど、スキルを使わないとなると複雑な作業と多くの設備や人手が必要となる。

こういった複雑な作業を監督し、指揮している者達はアグウイナス家で新薬の製造に携わっていた技術者たちだ。彼らの多くは帝都でそれなりに経験を つんだ錬金術師だから、迷宮都市でポーションを作ることは出来なくても知識の面で役に立つことが出来る。そして働いている人たちの半数は赤の新薬の『原料』から生き延びた人たちだった。

工房の片隅ではキャロラインと父ロイスが魔工技師と作業の効率化が図れる魔道具が無いか相談を行っている。魔工技師は『薬製造用の練混機』の開発でお世話になった人だから、キャロラインとも顔見知りです。親身に話を聞いてくれてる。生き生きと仕事をするキャロラインの様子をマリエラは少し離れた場所で眺めていた。

マリエラがごねたために外注となったサソラル石の処理と食いつきの良い団子の開発は、アグウイナス家が受け負うことになった。マリエラが初めてその話を聞いたとき、自分の我がままのせいでキヤル様に迷惑をかけてしまったのかとあせったのだが、キャロラインは少し安心したような笑顔で「ウェイスハルト様がこのお話を持ちかけてくださって、正直助かりましたの」と話した。

アグウイナス家の一件以来、新薬の製造は中止された。ポーションや新薬の販売以外の事業を行ってこなかったアグウイナス家は、収入の大半を失うこととなった。

それでもキャロライン親子と僅かな家人が生活する程度の収入はあったのだが、新薬製造に携わっていた帝都の錬金術師たちや赤の新薬の『原料』から生き延びた奴隷達を食べさせていくには、財産を切り崩していくほか無かった。帝都の錬金術師は新薬、特に贄の

一族の情報を知りすぎていて、帝都に帰すほうがよほど危険だったし、赤の新薬の『原料』には体の一部が欠損した者が優先的にまわされ、長らく寝たきりを強いられて肉体が衰えきっていた。そんな奴隷達に買い手などつかなかったのだ。

キャロラインは薬の収益で彼らを養おうと頑張っていたのだが、彼女一人の労働力で賄えるものではなかった。

だから迷宮討伐軍から『ゴキブリ駆除団子』の製造を受注できたのはありがたかった。迷宮討伐軍からの注文は一時的なものだが、迷宮都市にもゴキブリはいるからこの仕事が終わった後でも一定の収入が見込める。『殺虫特化』のポーションが無くとも、魔物ではない唯の害虫であればサソラル石から抽出した成分で十分効果が見込めるし、『ゴキブリ駆除団子』の製造には比較的高価なサソラル石の処理設備が必要だから迷宮都市に競争相手はいなかった。迷宮討伐軍の注文分で初期費用を賄えば、帝都の錬金術師や奴隷達を養うことも出来るだろう。

家の都合で二十歳も年上の男と婚約させられ、兄の失態から婚約破棄、収入の激減した状態で家督と帝都の錬金術師や奴隷達を養うハメになったキャロライン。それでも前向きに頑張る彼女に思うところがあったのか、被害者であるはずの帝都の錬金術師や奴隷達は皆前向きに協力していた。

「駆除団子の製造は順調ですか？」

キャロラインたちのところへ迷宮討伐軍の副将軍、ウェイスハルトが視察に訪れた。

「これはウェイスハルト様。ようこそお越しくださいました。サソラル石の処理は予定通りに進んでおります。団子の方も満足のいく出来に仕上がっております。キャル、ご案内して差し上げなさい」

ロイスはウエイスハルトに挨拶すると、キャロラインに案内を任せる。マリエラの活躍によって憑依していた兄ルイスと別れ、回復しつつあるロイスだったが長年にわたる寝たきり生活のため、まだ車椅子での移動を余儀なくされおり、あちこちに道具や材料が散乱している工房内での移動はいささか不自由だった。

「ウエイスハルトさま、こちらへ」

案内を任されたキャロラインはウエイスハルトに工房内を案内する。生産能力に関するウエイスハルトの質問にもよどみなく答える様子から、彼女がこの工房を取り仕切っていることが見て取れる。

最後にキャロラインは工房内に設けられた小さな実験室へとウエイスハルトを案内した。ここで黒い悪魔が喜んで食べる団子を研究している。

「帝都の錬金術師にも協力いただいて調整を行って参りました」

マリエラを招き説明するキャロライン。身分は違えどマリエラはキャロラインの友人で、共に薬を製造販売する仲間だ。食い付きの良い団子の開発もずいぶん協力してもらっている。マリエラからすると仕事を押し付けてしまった上に《ライブラリ》の情報を提供しているだけなのだが、キャロラインはアグウイナス家の窮地に尽力してくれた友人にとても感謝をしていた。今回も、マリエラの手柄をウエイスハルトに正しく報告するために、キャロラインはマリエラを招き入れたのだ。

キャロラインに呼ばれてのすのすのやって来たマリエラに、ウエイスハルトは「協力に感謝を」と謝意を示す。工房内には多数の人間の目がある。迷宮討伐軍の副将軍が民間の協力者に示せる謝意としてはこれでも過ぎた部類だ。平静を装うウエイスハルトだったが心中では、迷宮都市の錬金術師に感服していた。

（サソラル石の処理と団子の作成を他でと聞いたときは、意図を汲みかねたが……。流石は200年の時を超えし明敏なる錬金術師。何たる慧眼か。殺虫特化型ポーションの製造の一部をもってアグウイナス家の技術者や材料とされていた奴隷達を救済するとは。この事業ならば殺虫特化型ポーションが無くとも家庭用の殺虫団子として事業が成立する。彼らは十分に生活していくことが可能だ。いや、彼らだけではない。この事業ならば、販路さえ確保できればスラムの住人を受け入れることすら可能かもしれない。）

ウエイスハルトは迷宮討伐にはかり気をとられアグウイナス家への配慮に欠けていた自らを恥ずかしく思った。この工房で働く人の多くは身体に欠損を抱えているが、それぞれが出来る作業を分担してサソラル石の処理を行っている。迷宮都市は魔道具の普及率が高く、魔道具を用いた製品製造も行われている。それでも”スキルによる生産”が主流だから、スキルの無い者がしかも分業して製品を製造するという工房は余り見られないものだった。

（この製造工程すら迷宮都市の錬金術師の発案とは……）
新しい生産方式を目の当たりにして、迷宮都市の錬金術師の深慮に震えるウエイスハルト。勿論、マリエラはそんな大層なことを考えていたわけではない。

「片手の無い方では石を割れませんわ」
そう言って相談してきたキャロラインに、「割れる人に割ってもらうか、魔道具でいんじゃないですか？片手の無い人は別のことすれば」と適当に言ったただけだ。

「……、そうですね。そういたしましょう！」
分業という概念が無いにもかかわらず、適当なマリエラの意見からこの工程図を引いたキャロラインは才媛と言っただけだろうか。

(そーいやー、ジエネラルオイルはほとんどジークに練ってもらったな。自分で練るとしんどいから。今じゃ攪拌魔道具ですぐだけど。今晚は久しぶりにジエネラルオイルでお肉食べようかな。)
キャロラインの横でオーク肉のことを考えていたマリエラもちよつとは貢献したのかもしれない。

そんなことなど露知らぬウェイスハルトの勘違いは止まらない。
(前回お会いしたときより、ずいぶんと、その、恰幅が良くなっておられるが……。これも何か深い考えあつてのことに違いあるまい)「うむ」と、何に対してかわからない返事をするウェイスハルトにキャロラインが殺虫団子の説明を続ける。

「お団子のサンプルも出来上がっております。頂いた作り方を元に改良を加えました。通常の種類でしたら間違いなくこれが一番かと」「ふむ、開けてみても？」

キャロラインが渡した広口の瓶には人間が一口で食べられそうなサイズの団子が幾つも入っていた。開けてみるとツンと刺激のある臭いが部屋中に広がる。人間が美味しそうだと感じる臭いではない。甘酸っぱくて少しすえた、ウェイスハルトやキャロラインのように身の回りの一切をメイドが行う人間に馴染みの無い臭いだった。

「サイズの割にずいぶんと臭いが強いですね」

「はい。その臭いに誘われてやつてくるのですわ」

かさかさかさ。

キャロラインの説明を裏付けるかのように、早速招かれざる客が来たようだ。55階層に住まう1mサイズのモノではない、ごくごく普通のありふれたヤツだ。当然その音はかすかなものだ。

けれど迷宮討伐軍の副將軍を務めるウェイスハルトの優れた聴覚

がその音を聞き逃すはずはない。日々繰り返された55階層の悪夢がウエイスハルトの脳裏によぎる。てらてらと光る忌まわしい光沢が目に見えよう。表情筋の一切を動かさず、ピシリと固まったウエイスハルトに気付くものはいない。

(ヤツはいる。ナナメ後ろの壁面だ。音から推測するに高さは地上からおおよそ1.5m。視界に入るまでの時間はおよそ3……、2……)

ペチコーン

ヤツがウエイスハルトの視界に入るよりほんの少し早く、キャロラインが動いた。手にはよくしなる乗馬鞭のようなものを持っている。乗馬鞭にしてはチップの部分が広く大きい。

貴族の令嬢とも思えぬ素早い一撃ではあったが、キャロラインはか弱い。その一撃はヤツを潰すことなく、僅かに動きをとめたにすぎない。

《アイス》

続けさまに氷の魔法を唱えるキャロライン。その威力は小さいがヤツを氷の粒の中に閉じ込めるには十分だった。

「お見苦しいところをお見せいたしました、ウエイスハルト様」
氷で閉じ込めたヤツを鞭の先で器用に搦うと、ぱいとスライム処理槽へ捨てるキャロライン。澱みない動きは優雅であり、どこか頼もしくもある。ヤツを片付けたあとウエイスハルトから団子の瓶を受け取ると、これ以上呼び寄せないように蓋を閉める。瓶を受け取る際に僅かに触れ合う指先、にこりと微笑むキャロライン。

きゅん

ウエイスハルトの中で、何かが始まる音がした。

(なっ、なんだ、これは……!?)

どきどきと高鳴る鼓動にうるたえるウエイスハルト。幼い頃から兄を補佐し迷宮を倒すことこそ全てと教育されてきた彼だ。こんな感情を彼は未だ経験したことが無かった。

兄レオンハルトは『獅子咆哮』という行軍に特化したスキルを持っている。こういった特殊なスキルは傍系より直系のほうが出現しやすいから、シューゼンワルド辺境伯家はレオンハルトの子供が受け継ぐ。ウエイスハルトにとってもそれは当たり前のこと、叛意など微塵も持つてはいなかったが、跡目争いが万に一つも起きないよう、レオンハルトの嫡子が成長するまでウエイスハルトは婚約すらも許されていない。レオンハルトの嫡子が成長し正式に跡目と定められた後、政略上都合の良い他家へ婿に出されるのだろうと漠然と考えていた。

「どっかなさいまして？」

様子のおかしいウエイスハルトを心配そうに覗き込むキャロライン。

(かつ、かわいい……)

ウエイスハルトは思わず奥歯を噛み締める。どんなときでも完璧に制御できた表情筋が言うことを聞かない。顔が紅潮しているのがわかる。キャロラインはこれほど愛らしい人だったろうか。

(いかん。落ち着け。一時の気の迷いに過ぎん！ 他と比べて落ち着くん！ 彼女が特別な訳ではないはずだ！)

工房に来て以降見た光景を、人の顔を思い出すウエイスハルト。工房では沢山の者が働いていたはずだ。「研究が好きです！」と

言い出しそうな陰気な技師に、「チンケなワルでございます！」と言った風貌の犯罪奴隷。少し前まで気が触れていたロイス・アグウイナス。

（やはり、キャロラインは愛らし……ちがう！ 男と比べてどうする！）

顔を上げればキャロラインの後ろにいないか。もう一人女性が……十人中九人は振り返らなそうな、いや、今は膨れ上がった体型から二、三人は振り返りそうな団子のような錬金術師が……。（やはり！ やはり！ キャロラインは愛らしい……！！！！）

なんと言う対比、なんと言う計略。まさかここまで計算のうちなのか。この為に菓子を食らって肥大化までしたと言うのか。迷宮都市唯一の錬金術師の策謀はこの迷宮よりも深くうかがい知ることさえできぬと言うのか。

「あの、顔色が優れませんわ。やはりどこかお加減が……」心配そうに近寄るキャロラインにウエイスハルトは何か「きよ、今日はこれでお暇する……！」とだけ伝えようと、供の兵士を引き連れてそそくさと退散して行った。

キャロラインの元を去ってもウエイスハルトの心臓はどきどきとうるさい。工房内をかさかさとい回り回るヤツの足音も、もはやウエイスハルトの耳には届かなかった。

始まりの音（後書き）

黒い悪魔のつり橋効果？

黒い悪魔の群

「でねー、ジークがいない間にキヤル様が害虫駆除団子の工房を立ち上げたの。んで、処理されたサソラル石が地下から運ばれて来て、ここで殺虫特化型中級ポーションにして、迷宮討伐軍経由でキヤル様の工房に運ばれるの」

暖炉の前でココアを飲みながら、ジーク達がアーリマン温泉に行っている間の出来事を話して聞かせるマリエラ。長い回想話にマルエラの幻影が見えそうになったのか、ジークは少し目頭を押さえている。

「それで、ウェイスハルト様が『木漏れ日』においでになるのか……?」

ウェイスハルトの視察に立ち会ったマリエラだったが、彼の胸中で何かが始まったことにはまったく気付いていない。ただ「ウェイスハルト様の前でキヤル様が華麗にゴキブリをやっつけた」話をジークにしただけだ。ジークにしてもマリエラの説明で全てを理解したわけではないだろう。リンクスのように「マリエラ」の呟きだけで相手の意図を読み取るような特殊能力は備わっていないのだ。

ただ、あの日以来、キャロラインが『木漏れ日』にいる時間を狙って、迷宮討伐軍の兵士の格好をしたウェイスハルトが『木漏れ日』を訪れる。

「こんにちは、キヤル様。今日もお美しい。ニーレンバーグはいるかな?」

「まあ、ウェイス様。お上手ですこと。先生ならそちらに」

いるも何もニーレンバーグは魔除けの像としての責務を全うすべく『木漏れ日』の入り口からよく見える場所に鎮座ましまして。だというのに、ウエイスハルトの目にはキャロラインしか見えていないらしい。『木漏れ日』の主にして迷宮都市唯一の錬金術師ことマリエラに至ってはもはや空気と言っている。名前もいつの間にかマリエラに倣って「キャル様」呼びだし、自分のことも「ウエイス」と呼ばせている。王子様スマイルも2割ほどマシマシで菓子やら花やらを持っては足繁く通ってきているというのに、肝心のキャロラインはウエイスハルトの好意にまったく気がついていない様子だ。

ウエイスハルトが贈った花は『木漏れ日』に飾られ常連客の目を楽しませているし、菓子も大半が常連客の胃袋へと消えていつている。今日だって「お仕事のお話でしたら、奥の診察室が空いておりますわ」と自分に会いに来たウエイスハルトを追いやるうとしてい

る。これには鬼と名高いニーレンバーグも助け舟を出さざるを得ない。

「いつもの用件ならここでいいだろう」

そう言って部屋の隅に移動する二人。いつもはここで差しさわりの無い情報交換を行っている。

「ところで、『菓子』はいつ揃う？」

「2、3日といったところだな。『配達』に人手がいる。ニーレンバーグ、お前も来てくれ」

「了解した」

昨日マリエラが作成した分で、殺虫特化型中級ポーションは必要量が揃っている。今はキャルの団子工房で大量の団子を作成中だ。薬用の攪拌魔道具を大型化し大量の攪拌が可能となっていて、出来た団子は順次迷宮討伐軍の基地へと運び込まれている。工房の立ち上げからそれなりの時間がかかってしまったが、団子の量と作成の手間を考えれば、マリエラ一人で作るより短期間で仕上げるこ

できた。

ゴキブリ駆除団子は、麦、芋、玉ねぎ、砂糖蕪の搾りかす、オー
クの脂、ライナス麦の果皮と種皮、その他にも卸売市場から出た魔
物の脂や髓、果実や野菜の皮や屑といった廃棄部位を粉にしたり細
かく刻んでポーシヨンと混ぜ合わせて作られる。材料量は膨大で刻
んだり粉にするだけでも大仕事だ。練り混ぜた材料を人手で丸め、
乾かした後に容器に入れて虫が来ないように密閉していく。昼夜を
徹した人海戦術と魔道具の効率の良い作業によって短期間での増産
が可能となったと言える。

連日、作業者の入れ替えの時間に工房へ赴くキャロラインに、工
房で働くものの意欲は少しずつ高まっていった。迷宮討伐軍への最
後の出荷が終わったとき、かつては『材料』と『管理する者』だっ
た奴隷達と技術者たちの間には、ほんの僅かではあったが連帯感が
芽生えていたし、「このままこの工房で働きたい」という声すら聞
こえてきたことは、嬉しい誤算であつたらう。

数日後、全ての団子を受け取った迷宮討伐軍は黒い悪魔との最終
決戦へと赴いた。

「」武運を」

団子と共にキャロラインから激励の言葉を受け取ったウエイズハ
ルトに、もはや恐れる気持ちは無い。

いや、相変わらず虫は嫌いなままだつたが、黒い悪魔を思い出す

たびに「ぺちこーん」とヤツらをやっつけるキャロラインの雄姿が浮んで平静を取り戻せるのだ。

「火魔法も宜しいですが、氷魔法のほうが効きますのよ」

キャロラインの教えに従い氷魔法の錬度も上げた。もはや無秩序に火魔法を放つ失態は犯さない。かざりと音がした瞬間にヤツを氷漬けにする様子に、『氷の貴公子』の二つ名が付きそつだ。

第55階層『黒い悪魔の群』討伐の概要はシンプルだ。まず魔道師を中心とした少数の部隊が55階層に火を放つ。55階層には定期的に54階層の底に穴でも開いたのかと言うほどの雨が降るから、放火のタイミングは降水の合間、木々が乾燥した頃合だ。階層が全焼したとしても定期的な降水で鎮火し、物凄い速度で森が再生する。同時に焼け死んだ黒い悪魔が残した卵が孵り、森の恵みを糧に急速に成長する。黒い悪魔を含め森が復元するのにおよそ一晩。団子を散布するのはこのタイミングだ。いつもは迷宮討伐軍から逃げ回るのがこのときだけは兵糧を狙ってやってくるのだ。急激に成長した黒い悪魔は栄養が不足しているだろう。このタイミングで団子を撒けば一匹残らず喰らいつくに相違ない。

団子の散布は急を要する。ぼやぼやしていると次の雨が降ってきて、団子の臭いが飛んでしまっし、ポーションが流れ出てしまっかもしれない。だから今回は迷宮討伐軍総出の作戦だ。レオンハルトの竜馬や迷宮討伐軍のラプトルたちも参加していて、人も騎獣も団子を大量に背負っているからまるで大規模商隊の様でもある。

昨日大森林に放った火がちょうど鎮火した頃合に、一行は第54階層にたどり着いた。この迷宮では階層主は復活しないから『海に浮ぶ柱』を討伐して以降、ここは安全地帯と化していた。『海に浮ぶ柱』討伐後の54階層は遠浅の海の洞窟になっていて、人魚と見間違えた怪魚も本来は深海に棲むものなのか見かけることは無かつ

た。階層を繋ぐ階段付近は迷宮討伐軍が駐屯できる程度の陸地になつていて、今は55階層になだれ込むべく迷宮討伐軍の兵士が待機している。

「第55階層 『黒い悪魔の群』討伐作戦を開始する！ 全軍、かかれ！」

レオンハルトの号令に従い、次々と階段を駆け下りていく兵士たち。あれほど嫌そうにしていた55階層に嬉々として飛び込んでいく。

「この団子喰つたら、ひっくり返つてあつという間に消えるらしいぜ」

「まじで？ すげえ！ みてみたい」

作戦開始前、ひそひそと囁く兵士たち。生き物が物を食べるシーンというのは動物昆虫問わず興味深いものだ。昆虫という良く分からない口の形をしたものでさえ、食事シーンを観察したいと思わせる。目で見てわかる劇的な効果というものもまた然り。

黒い悪魔に毒餌を与えろというこの作戦は、兵士達の好奇心と子供じみた残虐性をがっちりつかみ、戦闘可能性の低さも相まって遠足のような雰囲気をも少し出していた。

「気を抜くな！ 基地に戻るまでが作戦だぞ！」

あのニーレンバーグでさえ、どこか気の抜けた声を発している。

「家に帰るまでが遠足です」と説教する先生のような。おやつは無いが代わりにポーションを3本ずつ配布してある。日々暢気な『木漏れ日』の雰囲気当てられでもしたのか。自分の発言の気の抜けた具合に気がついたのか、ニーレンバーグは少し眉をひそめ、無精に伸びた顎ヒゲを少し撫でると、団子の散布を行うべく自らも階層階段へと進んでいった。

階層階段に近づくと、むわりとした熱気が立ち昇っている。55階層は常夏の階層で、たつぷりと降った雨が蒸発して第54階層（54階層）にまで昇ってきているのだらう。魔物は階層を移動しないのに空気の移動はあるようだ。

ひんやりとした海岸洞窟から常夏の森林へ。55階層へ降立って数歩進めば54階層の涼しさは感じられない。階層主を倒しても階層毎の気候環境は維持されるが、階層主がいる階層のほうは気候を維持する力が強いようだ。55階層など何度も全焼しているのに、酸素が無くなることが無い。

ニーレンバーグは割り振られた隊を引き連れ、担当する区画へと走り出す。湿気を孕んだ熱帯の空気にじっとりとした汗ばむのがわかる。再生したばかりの森は緑がまだ薄く、葉を透けて差し込む光に輝いている。作り出されたばかりの空気と新緑の香りにこちらまで生き返るような気分がする。かさこそとあちらこちらで黒い悪魔の影が見えなければ、ゆっくりと散策したいくらいだ。

担当区画につくや、団子を散布し始めるニーレンバーグ達。彼の通った後をささっと横切る黒い影。影が通った後には撒いたはずの団子は無い。気付かないフリをしながらニーレンバーグは黙々と団子を散布する。黒い悪魔に苦手意識は無いものの、凝視したいものでもないらしい。

（空気の入れ替えが無ければヤツらも窒息したろうに、面倒なことだ）

そんなことを考えながら団子を撒き終わると、来た道を戻る。ふと見た草陰に黒い悪魔がひっくり返っていて、不気味な足を引くつかせている。

（確かに、興味深くはある）

見る間に動きが遅くなり、やがて差し込む光に影が消えるように実体を失う黒い悪魔たち。卵から孵った個体だろうが、生まれて間もない黒い悪魔は受肉してはいないようで跡形も無く消え去っていく。もっとも卵など残されては敵わないのだが。

(この階層は暑いな)

雨後は特に地面から立ち上る熱気がたまらない。まるで下から蒸されているようだ。奴らにとっては丁度いいのかもしれないが、人間にとってはいささか不快な気候ではある。

(ああ、そうか。ヤツら向けの気候と言うわけか)

階層階段前の集合地点へと向かいながら、ニーレンバーグは考える。迷宮の気候は階層に住まう魔物に適した状態に調整されているのだろう。だから55階層が全焼しても酸素が無くなる事が無い。酸素が無ければ魔物まで死滅してしまうから。この階層の魔物には高い攻撃力はないけれど、高い繁殖力と再生能力がある。

集合場所には既に半数ほどの兵士が戻ってきていた。二軍の者は報告後撤退して良いと言うのに隅に固まって整列している。階層主が倒され新たな階層の扉が開く瞬間に立ち会いたいのだろう。

(今回くらいはいいだろう)

二軍兵が階層主攻略に立ち会える機会は少ない。だらけて立っている訳ではないし、経験により得られる成長は得がたいものだ。レオンハルト達も同じ考えなのか、整列する二軍兵に帰還を命じたりはしていない。

「だがお前は駄目だ」

「いてえ！」

ニーレンバーグは見慣れた兵士にゲンコツを落とす。優秀な一軍の兵士ではあるが、隠れた場所で石に腰掛けて休んでいたのだ。

「やー、先生。ここさ、ケツがぬくいんだぜ？ 先生も座ってみよ。あつつい中ぬくもるつつーのもオツなもんだぜ」

へへへと笑う兵士。

「作戦行動中だ。気を抜くな」

「先生は硬えなー。もうすぐカタつくんだろ？」

ぶーたれる兵士に列に戻れと命じるニーレンバーグ。遠方に団子を撒きに行った兵達が戻ってきたのか遠くから草木を踏み分ける音が近づいてくる。

あれほど黒い悪魔に苦しめられたというのに、なんともあつけない幕切れだ。

レオンハルト達の元へ移動しながら、どこか長閑な迷宮討伐軍の様子を眺める。眉をひそめ顎の無精ヒゲを指でなぞるニーレンバーグ。

(む……、なんだ？ なにかひつかかる……)

「ご苦労だったな、ニーレンバーグ。もうじきか」

戻ってくる兵達をねぎらうレオンハルトの目は階層階段の辺りを見つめている。作戦がうまくいき、最後の黒い悪魔が倒れば新たな階段が出現するのだろう。

「次はいかなる階層か……」

誰にとも無くつぶやくレオンハルト。

そう、この階層は暑かった。雨後などは下から蒸されるようではまらない。先ほどの兵士も石がぬくいと言っていた。

「ここは暑かったですからね」

散々火を放ちまくって55階層をさらに熱したウエイズハルトが雑談に応じる。

黒い悪魔に酸素が必要なれば攻略はさらに難航しただろう。

(もし)

ニーレンバーグの脳裏に一つの仮説が組み上がる。

(もし、酸素を必要としない魔物が棲まう階層だったら?)

酸素がなくなったとして、空気の入れ替えが起こるのだろうか。

(もし、この階層が下から熱されているのなら?)

しゃがみこみ地面に手を当てるニーレンバーグ。その目が大きく見開かれる。

丁度その時だ。最後の黒い悪魔が死に絶えたのだろう、第54階層へ続く階段のすぐ傍の大地が薄くなり、ぐぐぐと盛り上がった。いった。

地面は不自然なほどに熱く、僅かに震えて湧き上がる大気の圧力をニーレンバーグに伝えていた。

「逃げる！」

ニーレンバーグが叫ぶのが早かったか、56階層へ続く階段が開くのが早かったのか。

臭気を孕む高温のガスが56階層から吹き上がり、階層階段の周囲は死地と化した。

不可視の攻防

地面を、階層間を隔てる殻を振るわせて、高温のガスが吹き上がる。

シュゴゴゴゴオと鳴り響く重低音よりも、その温度、そして成分こそが凶器であつたらう。

砂塵をはらんで56階層からもうもうと吹き上がる灰色の煙はたちどころに55階層の天井に到達し、渦を巻いて周囲に拡散していく。

はなれた場所に立つニーレンバーグに届く異臭。これはと思い至つたニーレンバーグが天から噴出口に視線を移せば、そこには幾人もの兵士たちが倒れ伏していた。

地響きとともに突如として噴出したガス、充滿する悪臭、ばたばたと倒れていく仲間たち。その有様に下階からの攻撃かと混乱する兵士たち。

「階段から離れる」と叫ぶニーレンバーグの声は、喧騒と噴出音にまぎれて兵達には届かない。倒れた仲間を助けようと駆け寄つた一団が、仲間にとり着くより先に倒れ伏していく。

急速に魔の手を伸ばす毒ガスに迷宮討伐軍はなすすべもなく、ここで滅びてしまうのか。

《全軍、我に続け！》

その時、強制力にも似た強い意志が迷宮討伐軍を貫いた。

声が聞こえたわけではない。具体的な指示が伝えられたわけではない。けれど迷宮討伐軍全員が、“後に続け”と思つたのだ。

金獅子將軍レオンハルト。彼のスキル『獅子咆哮』は、配下の能力を向上させ、一個の意志を持つ集団として機能せしめる。強烈なカリスマにも似た彼のスキルによって、活路は今見出された。瞬時に混乱は収まり、全軍の意志はレオンハルトに集まる。

「ウエイズ、塞げ。短時間でいい。ニーレンバーグ、対処はあるか」

レオンハルトの一言で成すべきことを理解したウエイズハルトは巨大な氷の柱を作りだし、ガスの噴き出す階層階段へ叩き込む。魔力の大半を籠めた円錐形の氷柱は尖塔の先のような巨大さで、切っ先を階下に向けまるで魔物に止めを刺すかのごとく階層階段に突き刺さる。ウエイズハルト配下の魔術師たちも補強するように氷魔法を繰り出して、氷柱を固定していく。

「このガスは水に溶ける。布を濡らして口をふさげ。空気より重いから高台へ避難を」

ニーレンバーグの端的な説明にレオンハルトがうなずくと、階層階段周辺に倒れる兵士に目を向け「兵を頼む」とニーレンバーグに短く告げた。

「濡れた布でマスクを！治癒魔法使い及び騎兵は負傷兵の救出に向かえ！魔術師兵は風魔法で援護を！残りは我に続け！」

声にスキルの支配力を載せ全軍に到達するレオンハルト。彼の声に、『全員で助かるぞ』という伝わる思いに冷静さを取り戻した兵士たちは、すぐさま手拭いやマントを生活魔法の『ウォーター』で濡らして口元に巻きつける。特にアーリマン温泉ツアーに行かされていた兵士やアーリマン温泉採取作業を命じられた二軍兵たちは手際がいい。彼らは平静さを取り戻すと同時に思い出したのだ。この臭いは温泉付近で湧き出るガスの臭いだ。

彼らがアーリマン温泉から持ち帰っていた鉱物は二つ。一つはサソラル石、もう一つは黄色い土塊だった。どちらも殺虫特化ポーションの材料に必要なもので、黄色い土塊の方は溶解液を作るスライムの餌に混ぜられる。この土塊が取れるあたりには無色の毒ガスが噴出していて、においを感じなくなつた時にはもう手遅れだと散々言い聞かされていた。採取に当たつての教育も十分に行われていて、ガスの特性や万一の時の対処方法も教わっていた。

手際よく自分や周囲にマスクを施し、退避行動に移る兵達。風魔法が使える者は救援に向かうニーレンバーグたちの背を押すように風魔法を送り、毒ガスから救援部隊を掩護する。救援部隊は害虫駆除団子を運んできたラプトルたちの背に負傷兵を回収し、回復魔法で応急処置をしていく。

「急げ！ 猶予はないぞ」

排出口を塞ぐ氷柱は噴き出そうとするガスの熱で見る間に溶けているのだらう。排出口と氷柱の隙間を抜けてガスが噴き出し、甲高い音を響かせている。ニーレンバーグら救援部隊が何とか全員を救出し、退避する一団に合流したまさにその時、ドオンという音と共に氷柱が吹き飛ばされ、再びガスが噴き出した。

「走れ！ 走れ！ 走れ！」

先駆けた精鋭のハルバードの一閃が行く手を遮る木々を切り倒し、森林に退路を切り開く。草をかき分け道を踏み固めて迷宮討伐軍はひた走る。向かう先はこの階層で唯一小高い丘。走っても走っても臭気は薄くなるどころかますます濃く、見えない魔の手が差し迫っていることがわかる。

走れ、走れ、走れ。臭いが感じられるうちはまだ大丈夫だ。一兵

たりとも脱落者を出してはならぬ。誰ともなく励ましあつて目的地の丘を駆け上がる。頂上に続く切り開かれた道の途中には、弓兵が万一の備えで常備している対アンデッド用の銀の矢を打ち込んである。このガスは銀を腐食し黒変させるから目印だ。

「点呼を！ 目鼻や呼気の辛いものはポーションを使え！」

ウエイスハルトの指示に従い丘の上に整列する迷宮討伐軍。彼らは低級と中級ではあるが全員ポーションを携帯している。意識を失わず丘にたどり着いた兵の多くも毒ガスによる不調を訴えていて、治癒魔法使いだだけではとても手が足りない。ニールンバークと治癒魔法使いたちは高濃度のガスを吸い込み意識を失った兵士たちの治療にあたっている。意識はないが幸いにも命はまだ潰えていない。

助かった、何とか丘にたどり着いた。そう考える兵士たちと裏腹に、レオンハルトやウエイスハルト、ニールンバークの緊張は解けない。

じわり。丘の裾に穿った銀の矢が黒変する。じわり、じわり。次々と色を変える銀の矢にあふれたガスがひたひたと丘を登り周囲に充満しているのがわかる。

（まだか……）

この階層に逃げられる場所などほかにない。上の階層に続く階段は噴出口のすぐそばで、最も死地に近いのだ。

（まだか……）

レオンハルトは祈るように天を仰ぐ。見上げた先に空はなく、灰色の迷宮の天井を日光石が照らすばかりだ。彼の祈りは迷宮の天井に阻まれ天に届くことはないのだろうか。

最後の銀の矢の色が変わる。

見えぬ魔の手はすぐ足元まで迫っているのだろう。あれほど感じられた臭気ももはや感じ取ることはいできない。

(ここまでか……)

レオンハルトがあきらめかけたその時。

タッタタッタタッタツ。

大粒の雨が降ってきた。

仰ぎ見る頭上には迷宮の天井が広がるばかりで雨雲は見当たらない。けれど天井から染み出たかのように、土砂降りの雨が降り注ぐ。上の階層は海水で満ちているのに雨に塩の香りはない。どういう仕組みになっているのか、そんなことはレオンハルトにはわからない。ただひとつわかることは。

(助かった、のか……)

このガスは水にとてもよく溶けるといふ。害虫駆除団子の散布は雨間を縫って行われるから、降雨を見込んでここへ来たのだ。

土砂降りの中、ぬれねずみになりながら、レオンハルトは深い息を吐く。

(助かりはしたが……、下階はいかなる階層か……)

迷宮に降る雨は、臭気と共に迷宮討伐軍から笑顔さえも洗い流して行った。

迷宮討伐軍が辛くも死地を脱し、55階層から撤退した3日後、3人の男と思しき人影が再び55階層を訪れた。3人は背丈や歩き方から男性と思われるだけで、全身は芋虫を思わせるぶかぶかした魔物革の防御服をまとっているし、顔もマスクとゴーグルが一体となったフルフェイスの保護面を付け何者かはわからない。

54階層の海底洞窟には毒ガスは届いていないようで、いつもと変わらぬ穏やかな安全地帯であったのだが、かつて緑豊かな大森林が広がっていた55階層の階層階段付近は灰が降り積もり、草木は枯れ荒廃した大地が広がっていた。それでも数百mも離れれば灰に汚れくすんではいるものの緑の森が広がっているから、階層主を斃し衰えたとはいえ通常の森にあるまじき再生力の高さと言えた。

55階層に降立った3人は針の代わりに細いガラスの管がついたシリンジで周囲の空気を吸い取ったり、液体の入った瓶にゴム球でシュコシュコと空気を送り込んだりしては、ガラス管の内容物の色の変わり具合や、液体の様子を確認している。3人の中で最も背の低い男がリーダーなのかガラス管や瓶を受け取って確認しては、何やら帳面に書き付け、持ち帰るためにしまわせる。

何箇所かで同じ作業を繰り返した3人は、56階層への階段、ガスの噴出口へと近づいた。

階層主が斃されたときに勢いよく噴出していたガスは勢いを弱め、今ではもわもわと蒸気が立ち昇っているだけに見えるが、温度は非常に高温で、有害な成分も変わらず含まれている。高温の気体というものはそれだけでも十分に脅威となりうる。有害な成分がない唯一の水蒸気でさえも200 程度の温度の物に一瞬触れただけで酷い水ぶくれを生じるほどの火傷を負ってしまうのだ。

男は決して高温のガスに触れぬように噴出口に近づくと、中に幾

つもの鉋物や瓶、金属片を結びつけたロープを投げ入れる。暫らくしてから引き上げるとすぐさま噴出口を離れ、引き上げられた鉋物や金属片の変色具合や瓶の内容物を確認していく。得られた情報に納得したのか、男は帳面に再び記録をすると残る二人に帰るぞと上階への階段を指し示した。

地下大水道を経由して迷宮討伐軍の基地に戻った3人は、マスクや芋虫のような分厚い防御服を脱いだあと、レオンハルトらの待つ会議室へと通された。会議室ではレオンハルト、ウエイズハルト、ニールンバークに加え、数名の側近が険しい顔で待ち受けていた。

3人のうち一人は迷宮討伐軍の斥候らしき若者で、残り二人、先ほどのリーダーとその助手らしき眼鏡の男が今回調査のために招聘されているようだ。

「ご苦労だったな、ガーク。して状況は？」

「ガス自体は良くある火山ガスだ。マスクさえ揃えりゃ、何とかなるだろうよ。それよりも温度のほうが問題だ。冷まさねえと話にならねえ」

レオンハルトの間に調査リーダーことガーク爺が応える。迷宮で単身採取活動を行える彼は、素材鑑定のスキルと併せて迷宮都市でも屈指の調査能力を誇る。特に魔物より環境面での調査を要する局面で並ぶ者はない。その能力を見込まれて今回の調査を依頼されたのだ。助手らしき男はガークの知り合いだろうか、平均よりは長身だが大柄と言うほどの体格でなく、穏やかそうな表情に眼鏡をかけた学者か教師を思わせる男だった。助手の男はガークのメモを受け取るとウエイズハルトの側近に手渡している。

側近から受け取ったガークのメモに目をやりながら、今度はウエイズハルトが質問する。

「毒ガスはマスクで無害化できるとして、酸素は、呼吸は出来るの

か？」

「息ができるかは冷やしてみねえと確かな事はいえねえが……、ガスの割合がちいと気になってな。開いた時に爆発しなかったってえのと合わせても恐らく息はできるだろうよ。息はな」

ウェイスハルトの問に応えつつ、含みを持たせた言い方をするガークにニールンバークが尋ねる。

「酸素がある、いや、供給されているということか。つまり、あの環境で呼吸をするモノがいると？」

「ああ……、厄介なのがいそうだぜ」

55階層でニールンバークが立てた仮説をガーク爺が肯定する。

『迷宮の気候は、毒ガスや空気の有無さえもその階層に生息する魔物に合わせて整えられている』。

現状わかつている範囲だけでも、56階層は人が活動できないほどの高温で、有毒な火山ガスが充満し、しかも56階層への階段が開通するまでは通常よりも高圧な条件だった。そんな環境で活動できる、酸素が必要な生き物とは一体……。

「ともかく、やれる事を実行しよう」

重苦しい雰囲気を破るように、レオンハルトが声を上げる。

「54階層、海岸洞窟の海水を引いて冷却できんか？」

「海に浮ぶ柱の残骸で水撃を再現してみましよう。送水くらいは出来るかと」

「あとはマスクか。ガーク、どのようなマスクが必要か？」

「亜竜の肺で十分だろう。ワイバーンだな。ゴーグルもあったほうがいい。ガラスじゃ強度が心許ねえな。どうせワイバーンを狩るんだ。翼膜をなめして貼りゃあいいモンに仕上がるだろうぜ」

「ワイバーンか、魔の森だな。ギルドに依頼を。迷宮討伐軍のブラントクの訓練にも丁度いい。合同討伐を組め。ニールンバークは引き

続き重傷者の介護を頼む」

レオンハルトの指示を受け、一同は各々の責務を果たすべく席を立つ。56階層の全貌は不明なままで、現状では立ち入る事さえも叶わない。それでも、呪い蛇キングバジリスクの王に何年も挑み続けた事を思えば、やれることがある今はよほどましな状況と言えた。

「それじゃあ、俺はコイツを仕込んだら帰らせてもらうぜ。56階層が冷えたらまた呼んでくれや。……いや、下さい、だな」

口が悪くていけねえやと、頭を掻きつつ迷宮討伐軍の斥候の若者を指し示すガーク。

「いや、構わんよ。引退したと言うのに世話をかけるな、ガーク爺」
どこか懐かしさを孕んだ声でガーク『爺』と呼ぶレオンハルト。

「それこそかまわねえ話だ、レオンハルト將軍。將軍てーのは、何でもかんでも背負わされるもんだろ？ 手下にくれえ、《命令》すりゃあいいんだよ」

そう言つて、会議室を後にするガーク爺を見送りながら、レオンハルトは小さく感謝の言葉をつぶやいた。

恩赦

「おい、ジーク。ワイバーン狩りいこうぜー」
遊びに誘うような気安さで、リンクスがジークを誘いに来た。

「ワイバーンで……」

ジークの右目を潰した魔物だ。そう思っ言葉を決まらせたマリエラは、ジークのほうを見る。

ジークも表情をなくした顔で返事に窮している。

マリエラとジークが暮らして、半年が過ぎようとしていた。その間に、ジークが目をなくした原因も奴隷に落ちた経緯も聞いている。

黙り込む二人の様子に気付いているのかいないのか、リンクスは話を続ける。

「ほら、ニードルエイプ討伐もBランク依頼の達成判定もらったじゃん？ 折角だしさ、Aランク目指そうぜ」

「だが、マリエラの護衛が……それに、俺にAランクなど……」

言葉を濁すジーク。ニーレンバーグや迷宮討伐軍の兵士が診察と称して駐在している現状は、マリエラの護衛が目的なのは明らかで、ジーク一人ではマリエラの護衛が勤まらないと言われているのに等しい。アーリマン温泉から帰ってから毎朝ニーレンバーグの特訓は続いていて、ジークは毎日のようにいいようにあしらわれ続けている。自らの力量不足を痛感しながらも教えを請い続けているのは、マリエラの護衛としてあり続けたいとジーク自身が願っているからだ。

マリエラはやさしい。例えジークが護衛として力不足でも傍に居場所を、安定した生活を与えてくれるのだろう。けれど今のジークには、それだけでは足りなかった。自らの力量でマリエラの護衛として認められたいと、この役割を誰にも取られたくない、そう思っていた。

” 精霊眼さえあれば ”

己の無力さに打ちひしがれるたび、失った精霊眼を惜しむ気持ちが湧き上がる。精霊眼があればAランクにも成れただろう。其れほどまでにあの目の加護は強力だった。

アーリマン温泉から帰った後、練習用の弓矢を購入して、一度だけ引いてみたのだ。あの衝撃は忘れられない。的に当たらないどころか、どうやって狙いをつけたらいいのかわからなかった。幼少から親しんだ弓も矢も体は覚えているのに、まるで初めて扱う武器のようだった。言葉は覚えているのに声の出し方がわからない、そんな不自然な違和感を耐えて何とか放った矢は、狙いを大きく外れて薬草園の茂みに落ちた。精霊眼を持っていた頃の自分が見たら「才能が無い、やめたほうがいい」と断じただろう無様さに、ジークは弓矢を部屋の棚へとしまいこんだ。

（精霊眼を失った自分は弱い。自分よりもはるかに若いリンクスにさえ及びはしない。強くなりたい。けれど、ワイバーンにはあのときでさえ及ばなかったのだ。今の自分にAランクなど……）

顔を曇らせたジークが断りの言葉をこぼす前に、リンクスはこう続けた。

「ハーゲイに聞いたんだ。迷宮都市でAランクに昇格できたら、恩赦が貰えて奴隷から解放されるって」

「ほんとに！？　すごいよ、ジーク！」

一瞬の沈黙の後に声を上げるマリエラ。ジークは一つしかない目を見開いて、リンクスを、そしてマリエラをじっと見つめている。

「つつても、主人の許可と誰かAランクの推薦が必要な上にAランクになる前に審査とかあるらしいし、解放されても十年くらいは迷宮討伐軍か迷宮都市専属の冒険者として登録しなきゃならねーとか、その間の稼ぎの半分を主人だったヤツに払わねーといけねーとか色々メンドーな決まりがあるらしいんだけどさ。なんかハーゲイ推薦してくれるつつつてたし、隊長もあれでAランクだから頼んでもいいしさ。やってみようぜ」

「本当に……？」

漸く口を開いたジークに、『木漏れ日』のいつもの席で静かにお茶を飲んでいたガーク爺が「ほんとうだぜ」と声を掛けた。

「迷宮都市にとっちゃ、Aランクの戦力ってだけで恩赦に値するんだよ。勿論殺人鬼を自由にするわけにやいかねえから、審査はあるんだけどな。兄ちゃんなら問題ねえだろ。」

「ガーク爺、Aランクになって解放された人って沢山いるの？」

「俺の知ってる限りじゃ、一人だけだな。Aランクつつーのは、そう簡単になれるもんじゃねえんだよ。稀になれる実力があるヤツもいるが、主人が手放したからねえんだ。十年も稼ぎの半分をよこすつつーのに、奴隷の幸せが許せねえって主人はいるもんだぜ」

吐き捨てるように話すガーク爺。彼は何を見てきたのか。けれどガーク爺はそれ以上語らず、ジークの眼をじっと見ると、「兄ちゃんよ、チャンスってのは何時でもあるわけじゃねえんだぜ？」とだけ行っつて、自分の店へと帰っていった。

「ジーク、私推薦するよ！　ジークなら絶対できるよ！」

ガーク爺の忠告と、マリエラの応援を受け、ジークは暫らくマリエラをじっと見つめると、「やってみます」と敬語で答えた。

「決まりっ。そんなじゃ、早速冒険者ギルドに申し込みに行こうぜ！」
リンクスにせかさね『木漏れ日』を後にする二人にマリエラは「行ってらっしゃい」とにこやかに手を振る。二人が出て行った後の『木漏れ日』の扉をじっと見つめるマリエラ。

(自由になっても、この家に帰ってきてくれる?)

そんな思いを、マリエラは口に出すことが出来なかった。

二人が出ていった『木漏れ日』の扉は、マリエラに師匠が出ていった後の魔の森の小屋の扉を思い出させた。

ワイバーンの住処は迷宮都市の南方の切り立った岩山にある。迷宮都市の北から東の遠方をぐるりと囲むようにそびえる山脈は迷宮都市の南方で魔の森にぶつかる。魔の森と山脈の接点は、まるで切り取られたように山脈がここで途切れ、草木の生えぬ巨岩が幾つもそびえるような地形になっている。切り立った山のような巨岩の谷間には迷宮都市の地下を流れる水脈が合流しているのだらう、流れの激しい河川が流れていて、切り立った岩山と谷底を流れる激流によって魔の森の魔物が山脈になだれ込むのを防いでいる。

巨岩によって地形の入り組んだこの辺りの魔の森にはオークやゴブリンと言った群をなす魔物の巣が多くあり、これらを餌にする中、大型の魔物も多く生息している。切り立った岩山にはハーピーも巣を作っていて、同じく絶壁を住処に好むワイバーンが餌の豊富なこ

の場所に古くから住み着いていた。

ワイバーンの住処まではヤグーの足で3時間といったところで迷宮都市から比較的近いから、200年前は人気のある狩場として道も整備されていた。魔物除けのポーションが出回らなくなつてからは、ワイバーンだけでなくゴブリンのような雑魚まで大量に出てくる効率の悪い狩場に訪れる者はいなくなり、道も森に埋もれてしまつた。

かつて道だつた場所を再び切り開きながら、何組もの冒険者達がワイバーンの住処を目指して進んでいた。寒さは緩み始めていて、魔の森に雪は残っていない。日が落ちる時間も遅くなつてきているから、早朝からワイバーンの住処に出かけて日暮れまでに迷宮都市に戻つても、十分狩の時間が取れる。

冒険者ギルドからの依頼はBランク限定で、倒した数に応じてAランク昇格のポイントが加算される。報奨金やワイバーンの買い取り価格はそれなりだが、今回の依頼では現地買取を行つてくれる。自分たちでエモノを運ばなくていいから、狩場に入り浸つて討伐に集中できるというわけだ。これならば迷宮に潜るよりもよほど効率の良い狩が出来るだろう。しかも南門で申告すれば迷宮討伐軍の担当者が魔除けポーションまで振りかけてくれるからワイバーンの住処まで雑魚敵に煩わされることも無い。実に至れり尽くせりの案件だつた。

ワイバーンの買取は百体の上限があるから、Aランクを目指すBランク冒険者達は我先にと参加していた。

「だからさー、なんで俺までー？」

「Aランカーはもてるぜ、エド兄」

「エドガンの奪い合いが始まるな！」

「まじで〜?」

勿論うそだ。

彼らの身近なAランカー、ディックやハーゲイを見ればわかるうというものだが。いやハーゲイはニードルエイプにもてていたし、どちらも既婚者でエドガンと比べれば十分モテ男といえるだろう。

黒鉄輸送隊一のチャラ男にしてチヨロ男のエドガンをいつもの様に巻き込んだリンクスとジークも三人で参加している。ちなみに黒鉄輸送隊は迷宮討伐軍からワイバーンの輸送業務を依頼されていて、迷宮都市に滞在している。

ワイバーンの住処までの道は木々を切り倒して急造したもので、切り株を除けてもいないし地面を締め固めてもないから装甲馬車は通ることが出来ない。回収したワイバーンの素材はその場で解体を済ませ、ラプトルやヤグーの背に積み、魔の森の魔物から護衛しながら迷宮都市に運搬する。常ならば美味しいご飯のお通りだと狼系の魔物が大挙して押し寄せてくるのだが、魔物除けポジションを使っているお陰で寄っては来ないし、ごく稀に現れるA、Bランクの魔物さえ倒せばあとは楽な道のりだ。

黒鉄輸送隊からはラプトルやヤグーを御すために調教師のユーリケと、護衛にディックが参加して1日2往復の運搬をこなしている。他の者は長めの休日を思い思いに過ごしているらしい。

「うひょー、いるいるー」

到着した岩山にはワイバーンが飛び交っているのが、少し離れた場所からでも見てわかる。索敵の必要も無いどころか、早速一匹が三人に気付いて飛び掛ってきた。

ワイバーンは二本の脚と一对の翼、長い尻尾を持つトカゲで亜竜種に分類される。竜種と亜竜種の違いは学派によって多少の相違が

あるのだが、魔法使用の有無は同意されている分類方法の一つだ。例えば飛行可能な竜種の場合、翼と体重の釣り合いが取れていない場合が多い。翼竜は魔法で飛行しているというのが学者たちの見解で、これに対してワイバーンなどの亜竜種は翼を使って飛行する。

翼や尻尾を除いた体長は馬よりも幾分大きいけど、その体を飛行させる翼は大きく、長い尻尾を加えるとなかなか大きい印象を与えられる。しかし体重は馬よりも軽いくらいで、重量不足による攻撃力の低下を補うためか尻尾には毒があるとげを持つ。

翼がある事を除けばトカゲのような見た目で、前足が翼になっているのか翼部分に鉤爪がついていて、手のように物をつかんだりすることが出来る。顔もトカゲに似ているが口元だけはくちばしのようになっていて、しかし口を開くと鋭い牙が並んでいる。

ワイバーンの縦に長い瞳孔がジークたちを捉える。この200年ほどここを訪れる人はいなかっただろうから、ゴブリンかオーガでも来たと思ったのだろうか。どちらにせよ彼らにとっては餌となる魔物だ。

「ケキヨキヨキヨキヨ」

どこか鳥を思わせる声で鳴くとジークたちに向かって一匹のワイバーンが急降下してきた。

「まずはジークな。雪辱戦、行ってこいよ」

リンクスに背中を押されたジークは、数歩前が出る。

「落ち着いていけば問題ねーって。なんかあつたら助けに入るから！」

エドガンの気楽な声を聞きながら、ジークはミスリルの剣を鞘から抜いた。

ジークとワイバーンの間には、遮る物は何も無い。

（あれから、もう、6年か……）

ジークは迫りくるワイバーンに、精霊眼を失った日の事を思い出していた。

ワイバーン

「6年前Bランクになれたのは精霊眼の加護のおかげだ」
ジークムントはそう思っている。

あの頃は、矢をつがえれば魔物の急所に必中していた。それまで倒してきた比較的表皮の柔らかい低級な魔物に対するような甘い感覚で、当時共に狩をしていたパーティーとワイバーンを狩りに森へ向かった。

狩りの場所は、ワイバーンの生息地から距離が有る、飛翔しにくい森の中が選ばれた。自分たちに有利な地形まで、斥候は苦労して一匹だけワイバーンを連れてきたのに、盾職の男にはワイバーンを留める力量がなかった。いや、他のメンバーたちもそうだ。散り散りに逃げ惑うメンバーたち。

混乱の最中、ジークムントを獲物と定めて襲い掛かるワイバーンを1人で倒す力量は、当時のジークムントには備わってはいなかった。

ドツドツドツと心臓が早鐘を打つ。自らの血で視界が赤く染まったあの日の事を、あの時の痛みをジークムントは思い出していた。

あの時と同様に、ジークとワイバーンの間には、ワイバーンの攻撃を遮るものは何も無い。

ワイバーンが高所から急降下し、数mの距離に迫ってくる。毒針を食らわし上空へ急旋回しようというのだろう。振りかぶる尾の動き、旋回に備えて収縮する翼の筋肉の動きが見て取れる。

(見える……)

あの時はワイバーンの接近を許したと思ったときには尾で吹き飛ばされ毒を喰らっていたのに。あの時見えなかった振りかぶる尾の動きが、軌道が、翼の僅かな動きさえも見て取れる。振りぬかれた毒の尾を僅かな動きで躲すと、ミスリルの剣で切り捨てる。

(あの時は武器に魔力を通すことさえ知らなかった……)

ごく普通の鉄の矢が刺さる魔物しか倒してこなかった。そんな狩りばかりしていたから、体もロクに鍛えてはいなかったし、今思えば体の使い方さえわかっていなかった。射た矢はワイバーンの表皮にはじかれて傷を与える事は叶わなかったのに、魔力を纏ったミスリルの剣はまるで縄でも切るかのようにワイバーンの尾を断ち切った。

「ゲキョギヤッ」

痛みと怒りの声を上げるワイバーンは、尾をなくして崩れたバランスをたちどころに修正して、再び飛翔に移ろうと翼をはためかせる。

《ウィンド・エッジ》

けれどその翼膜をジークの風の刃が切り裂く。揚力を失ったワイバーンの翼は空を掻き、体は浮き上がることなく地に落ちる。

「ギョキョキョキョキヤッ」

怒りの声を上げるワイバーン。二本の後ろ足で立ち上がると、ラプトルのように二足で走って向かってくる。主に岩山や火口などの高所、絶壁で暮らすワイバーンだが脚の筋力は発達していて、ラプトルに劣らぬ速さで向かってくる。翼の鉤爪でジークの頭をつかみ、首筋に噛み付こうと爪を、牙を剥く。

(あの時と同じだ……)

あの時、ワイバーンの鉤爪はジークの右頭部を掴んで精霊眼を潰し、頭を引きちぎらんばかりの勢いで右へと引き裂き顔に深い傷を残した。むき出しになった左の首筋にワイバーンがかぶりつこうと大口を開けたその時に、つがえたままだった矢が偶然口内に突き刺さったのだ。口内から脳髄に達した矢によってワイバーンを倒すことが出来たのは、単に幸運だっただけだ。

あの時をなぞるかのように、つかみかかろうと伸ばされる鉤爪を、ジークはミスリルの剣で受け、力任せに跳ね除ける。あの時、力任せに翻弄されたのはジークの方だったが、今はワイバーンの翼手ごと鉤爪を打ち返すことが出来る。鉤爪を跳ね除けたあと、そのまま開いたワイバーンの口へと剣を横に打ち込んで、後頭部まで振りぬく。口から頭蓋へと剣戟が走り、頭部を切り飛ばされたワイバーンはズシンと音を立ててそのまま大地に倒れ伏した。

(あっけない……)

苦戦することなく、あっさりワイバーンを倒した先ほどの戦闘はまるで他人事のように実感が薄かった。ワイバーン狩りの話を聞いたときは、倒せないと思っていたのに。

ミスリルの剣を掲げて刀身に映る顔を見る。

(これは誰だ?)

6年前のあの日、ジークムントは精霊眼のもたらす強さに酔いしれ、自らの強さを信じきっていた。

刀身に映る男は精霊眼など持つてはいない。精霊眼を持つ男が苦戦したワイバーンをたやすく葬り去った片目の男は、毎日毎日訓練の度に地べたを這いずり、主人を護るための力が足りぬと、己の弱さと向き合っている。

(これは誰だ?)

精霊眼を持つていた男は言い寄る女の多さに、自分の顔立ちにすら自信を持つて毎朝鏡に向かっていた。記憶に残るその顔は、鼻持ちならぬ高慢さがにじみ出た厭らしいものだった。

精霊眼を失い、奴隷に落ちたそのあとは、水鏡に映る姿を見る余裕さえ無くしてしまっただけで、僅かな糧を得るために地べたに額を擦り付ける事に何の躊躇も無くなった顔は、酷く虚ろで醜く、しかしそれに心を動かされることすら無くなっていった。

今刀身に映る男は、ジークが覚えているどの自分とも違っていった。迷宮都市に来てからは身だしなみを整える目的以外で鏡をじっくり見る事などなくなっていた。もつとずつと見ていたい、目がはなせない人が出来たからだ。

毎朝鏡に向かって髪を梳り、『かんぺき』と心の声が聞こえそうな表情で頷いた後頭部は、見事な寝癖が残っている、そんな人だ。

誰からも相手にされない、汚物のような奴隷の膿爛れた傷跡から目を逸らさず癒し清め、異臭を放つ髪に触れて整えてくれたのに、少し髪を切りすぎただけで気まずそうにちよっぴり目を逸らしてしまっ、そんな人だ。

すさまじい魔力量を誇り、日に百本もの上級ポーシオンを涼しい顔で作るのに、段差の無い石畳で躓いて転びそうになる、そんな主を見守ってきた男の顔は、知らない誰かのように思えた。

刀身に映る男は精霊眼などもってはいない。

けれど、刀身に映るその男ならば、ジークムントが心に秘めた思いを、願いを叶えられる、そんな気がした。

(これは……、これは、俺だ)

ジークムントはミスリルの剣を握り締める。迷宮都市に来たばかり

りの頃、まだ生活の目処も十分立っていないというのに、財産の半分をつぎ込んでマリエラが準備した剣だ。主であるマリエラの身に何かあってもジークが困らないように、という気持ちもそうだが、自分の生活すら定まらない時に全財産の半分を惜しげもなく費やされたその剣は、ジークにとって金額以上の価値がある無二の宝だ。この剣はジークの魔力に良く馴染み、籠める魔力の冴えに合わせて切れ味を増していた。

刀身に映る男は、この剣にきつと相応しい。今はまだ届かなくとも、きつと辿り着けるはずだ。ジークムントにはそう思えた。

「おい、ジークムントさんやーい、帰ってこいよー」

「リンクスー、もうちょつと浸らせてやるうぜー」

剣を見つめて立ち尽くすジークにリンクスが声を掛ける。エドガはその辺の石に腰掛けて完全に見学モードだ。「第一章 ジークの雪辱戦、第二章 勝利の感慨」などと、タイトルまで付けて実況中継をしている。

「ああ、すまん。考え事をしていた」

リンクスの声に我に返り、二人のほうを振り返るジーク。

「いいけどさ。な、ワイバーン、やれたろ？ オレらならAランクも目指せるだろ？」

「そうだな。コイツを輸送部隊に渡したら、どんどん倒していこう」
剣を鞘に収めるとリンクス達の元に歩いてくるジーク。悩みが晴れたような、すっきりとした表情だ。目標に向かって前向きに進んで行こうという強い意志すら感じられる。

「おう、なんか吹っ切れたみたいで良かったよ。でさ、オレ先に言っつくことがあるんだわ」

リンクスがジークに向かって話しかける。ジークは酷く穏やかな表情だ。今ならどんな話でも心静かに受け入れられる、そんな気持ちでいるのだろう。「ん？　なんだ？」とばかりにリンクスに続きを促す。

「オレさ、Aランクになったら、マリエラに告るわ」

ジークムントはその場でピシリと固まった。

「うわぁーお。第三章　強敵、現る？」

エドガンのナレーションが新しい章の開幕を告げた。

凍り付いているのはジークムントだけで、ぶわりと吹き抜けた風に冬の厳しさは感じられない。

「いや、『春、来たれり』じゃね？」

エドガンが付けた章タイトルを修正すると、リンクスはまるで風を追うように吹きぬけた森の奥へと目を向けた。風が揺らした木々の先には、まだ硬いながらも蕾が育っているのがわかる。よく見ると足元には下草を割って新芽も顔を出している。耳を澄ませば風が草木を揺らす音に、冬眠から覚めた森の動物たちの息吹が混じる。

迷宮都市に、春が訪れようとしていた。

ワイバーン（後書き）

こんな引きですが、ラブ旋風は吹き荒れません。
次回は誰得なジヤ回です。

三人の奴隷

ワイバーン狩りが入れ食い状態で容易たやすかったのは最初の1日だけだった。

初めて見る人間をゴブリンやオークのようにすぐに倒せる餌だと思つて飛び掛つてきたワイバーンたちも、次々に仲間を倒されて冒険者たちが強敵であると理解したのだらう。安易に襲い掛かつてきたりせず岩山の上からじつと様子を窺うようになってしまった。

こうなると岩山をよじ登つて倒しに行つたり、餌でおびき寄せたりと冒険者達も趣向を凝らさなれないといけない。中にはオークの皮を被つたり、ゴブリンのように顔を緑に塗るものまで現れて、冒険者達とワイバーンの知恵比べは迷宮討伐軍の買取上限である百体に到達するまで一週間ほど続いた。

その間、ジークたち三人は毎朝夜が明ける前に迷宮都市を発ち、夕食時には『木漏れ日』に帰ってくる生活を続けていた。ジークに対し宣戦布告とも取れる爆弾発言をかましたリンクスだったが、その後はそのことに触れることも、変わったそぶりを見せることも無く、いつもの様にジークとマリエラに接し、ジークやエドガンと一緒に「ただいま」と『木漏れ日』に帰ってきては夕食を食べて帰っていく。

ちなみに夕食はシェリーちゃんやアンバーさんと一緒にマリエラが作つて、ニーレンバーグ親子も食べて帰る。新婚のアンバーさんは流石に新居でディック隊長と食べるのだが、メニユーは同じで料理を器に入れて持つて帰っている。アンバーさんも作っているから手料理には違いない。アンバーさんは「食事はずっとマスターにお世話になつてたから助かるわぁ」とほくほくしているが、手抜きな

どでは断じてないのだ。

大人数で食べるにぎやかな夕食にマリエラは嬉しそうにほっぺたにソースを付けていて、隣に座るジークはこの席に座れない日が来ることを想像することが出来なかった。

ワイバーンの輸送依頼を受けた黒鉄輸送隊だが、装甲馬車の出番はない。ラプトルとレンタルしたヤグーに荷を積んで往復するだけなので、駆り出されたのはユーリケとディックだけだ。迷宮討伐軍上層部と今後の対応について協議していたマルローは別として、ドニーノ、グランドル、フランツと三人の奴隷達は迷宮都市の拠点でゆったりとした時間を過ごしていた。

「おい、ニコ、スパナ」

接続詞を一切使わず単語だけで話すドニーノ。

装甲馬車の下にもぐりこんで車輪周りの改造を行っているドニーノにニコと呼ばれた奴隷はスパナを渡す。黒鉄輸送隊に買われた当初はおどおどと一塊でいることの多かった奴隷達だが、すっかり隊に慣れたのかそれぞれの個性や特技が見え始めていた。

ドニーノにスパナを渡したニコは装甲馬車に興味があるらしく、ドニーノが馬車をいじっていると傍によって何かしら手伝う。三人に共通することだが、もともとチンケな強盗だから手癖が悪いし善悪の判断も曖昧だ。武器のようなものを持ちたがるのか、ニコは装甲馬車のメンテナンス用の工具をしょっちゅうちよるまかしては、ポケットなどに入れている。勿論ドニーノはそれに気づいてそんなに工具が持ちたいのならばと工具をぶら下げられる職人用の工具ベルトを買い与え、工具を全部持たせている。ニコは武器にもなりうる鉄製の工具を沢山持たてて強くなった気がするのかご満悦で、ドニーノも歩く工具箱が出来たと喜んでる。

ちなみに工具を大量に持たせてもらっているニコだが、ドニーノを始め黒鉄輸送隊のメンバーには絶対服従で工具で襲い掛かるようなマネは決してしない。

魔の森で休憩のため下車していた時に、たまたまゴブリンが襲い掛かってきたことがある。ニコは隠し持って居たスパナで応戦したのだが、ゴブリンにスパナを奪われ返り討ちにあいそうになった。

「工具を粗末にすんじえねえ！」

怒鳴ったドニーノの怒りの鉄拳が、振り下ろされるスパナごとゴブリンを打ち負かした。そう、スパナもドニーノのステゴロに打ち負かされて折れ曲がっていた。工具を粗末にしているのは誰なのか、そんな疑問以前にドニーノの、いや黒鉄輸送隊の強さにニコは小悪党らしく服従を誓ったと言うわけだ。

今日もニコは武器をまとつた冒険者よろしく工具を大量に身につけて、強者の子分になった気分でドニーノにくつついて装甲馬車のメンテナンスを手伝っている。もともと猫背なニコが重い工具を身につけると、重さに負けているようで殊更弱そうに見えるのだが、その事にニコは気付いていない。

もう一人、ヌイと呼ばれる猫背の奴隷はというと、拠点の台所で保存食作りに精を出していた。黒鉄輸送隊は月の半分以上を移動に費やす。魔の森ではゆっくり野営などしないのだが、魔の森を抜けた後帝国までの間は野営して食事も簡単なものを作って食べる。当然料理は奴隷達の仕事になるのだが、三人の中でヌイが一番上手に料理を作った。以来料理はヌイの仕事で、野営の食事は勿論、拠点にいる間は自分たちの食事だけでなく保存食も作成する。黒鉄輸送隊のメンバーは街にいる間は食を外食で済ます者がほとんどなのだが、ヌイが料理をするようになって朝食や昼食を拠点で取るものも増えてきた。

そんなヌイではあるがやはり手癖の悪さは直らないもので、料理途中のつまみ食いが大層多い。人より多く食べたいという意地汚さなのか、満足に食べて来られなかったせいかはわからないが、野菜の皮をわざと分厚くむいては綺麗に洗って干したり油で揚げておやつをこしらえ、人目を盗んでこそそこそと食べている。当然黒鉄輸送隊のメンバーにはばれているのだが、体が資本の職業でお腹一杯食べる事をとやかく言う者はおらず好きにさせている。

「生煮えの野菜なんかを盗み食いするより、完成した料理をお代わりすればいいの？」

「ユーリケなどはそういうのだが、治癒魔法師のフランチによると、盗み食いをした、という達成感も味わっているんだろう」

ということ、皆見ないフリをしている。おかげで出汁をとるとか下ごしらえをするといった料理の基本すら知らないヌイの創作料理はおかしな進化を始めていた。

盾戦士のグランドルなどはヌイの食への執着をむしる感心していて、様々な調味料を買い与えたりしている。

「ヌイ、いきますぞ」

グランドルに呼ばれてヌイは慌てて駆けつける。手には洗濯してあるエプロンと料理用のナイフ。

「『ヤグーの跳ね橋亭』のマスターの言うことをきちんと聞くのですぞ」

グランドルの言葉にこくこくと頷くヌイ。グランドルの取り計らいにより、今日から『ヤグーの跳ね橋亭』に手伝いに行くのだ。短時間だが下働きをしながらマスターに料理を教えて貰う。身長は高いが細身で綺麗に巻いた傘をステッキよろしく持つグランドルは、とても盾職には見えない。カイゼル髭を整え休日だと言うのにかつちりとした服装の紳士然としたグランドルの後に続くヌイは、何処から見ても主人と丁稚、あるいは弟子といったところだろう。

又イ本人は元盗賊らしく、『うまく取り入って、旨さの秘訣を盗み取ってやる』などと思っているのだが、その発想はもはや唯の弟子である。娘のエミリーちゃんが『木漏れ日』に入り浸るようになってちよっぴり寂しいマスターにたっぷりと仕込まれる毎日は、見た目も心意気も料理人の弟子になった又イにとってそれなりに充実したものといえた。

そして、最後の奴隷、ジヤはと言つと。

「ひゅひいひい、ふうううううううう」

ラプトルたちが出払った獣舎の隅で、音の出ない潰された咽で悲鳴をあげ、フランツの仕置きを受けていた。

「ラプトルの餌のオーク肉をつまみ食いするくらいは見逃すけどね、腐りかけの粗悪品に摩り替えて差額を盗むのは感心せんな」

フランツは治癒魔法使い、と言つには体格に恵まれた男だが、常にフードを目深に被り鼻より上は仮面を付けて顔を隠している。火傷の痕のように治癒魔法では跡が残る傷跡もあるし、迷宮都市にはポーシヨンがないから顔を隠すことはさして珍しくはない。

ジヤを怯えさせたのは、仮面から覗くフランツの縦に伸びた瞳孔と、ジヤの顎をつかんで開かせる鋼のような指だった。

(こつ、この亜人野郎め……)

ジヤの顎を片手でつかみ口を大きく開かせている手は、人間の物としてはいささか大きく、文字通り歯が立たないほど硬い。指の先端全部が爪になった手は人間の其れではない。

海を越えた先にある大陸には、亜人と呼ばれる種族が住んでいるらしい。人よりはるかに長寿であったり、獣の姿をしていたり。は

るか昔に国交を断つて、今尚親交があるのはドワーフだけだ。けれど過去に交流があった証か、帝都には亜人の特徴を備えた人間が稀に生まれる。彼らが闇に潜み、人目を避けて暮らさざるを得ない現実が国交断絶に至った経緯を物語っている。

「痛んでいる歯があるな。丁度いい」

ギツ、ギリギリ、ギシ、ミシ。

「っふうー！ー！ー！！！」

頭蓋がみしみしと立てる音と絶えがたい激痛にジヤは必死に抵抗するが、片手だけでジヤの顎をつかんで引き倒すフランツの豪腕に、ジヤ如きの抵抗が通じるはずも無い。

ぶちり

何かがか切れる音がしたとき、ジヤは意識を手放した。

じよるじよると流れ出す黄色い水がズボンにシミを作り、獣舎の床を汚していく。

「……この歳で漏らしたやつは初めてだな」

汚いものでも捨てるようにジヤの溶けかけた歯を投げ捨てると、フランツは円錐型をした青黒い粘土のようなものを取り出して特殊な治癒魔法を唱える。「これを使うのは久しぶりだな」そんな事を呟きながらフランツは、抜いたばかりのジヤの抜歯跡に円錐形の先端を突き入れた。再びジヤを襲う激痛。痛みに覚醒したのか開いた目は白眼をむいていて、体はビクビクと飛び跳ねる。死に掛けて動かない魚に刃物を突き入れたような、そんな痙攣をした後に再びジヤは意識を手放した。

フランツがジヤの抜歯後に突き刺した青黒い差し歯は、抜歯した

歯の代わりに骨に食いつき神経と接続し、形も歯列やかみ合わせに合わせて変化する便利なものだが、『呪い歯』と呼ばれる呪具でもある。

違法すれすれの品物で真つ当な治療魔法師は取り扱わないが、フランスが帝都のスラムで治療院を開いていたときは、犯罪奴隷や終身奴隷に対してよく施術を頼まれた。

効果は単純で『痛みを与える』だけなのだが、歯の神経と繋がっているのだ。先ほどジャが味わった抜歯の強烈な痛みを特定の条件下で与えることが出来る。フランスがジャに施した『呪い歯』の発動条件は隷属の焼印と連動してある。隷属紋を強化すると言えばわかりやすいだろう。

そもそも、奴隷が施される隷属の焼印も、宣誓魔法も、魔法契約も被術者の心理に働きかけるという点において同一の魔法体系に分類される。

最もありふれているのが魔法契約で、術が施された専用の用紙に血を垂らしたインクでサインすることで成立する。効果はランクによって異なっていて、最も低ランクの物は結ばれた契約が破られたとき、正確には契約者が『破ったと認識した』時に、対象者の血の混じったインクの色が変わり不正を示す証拠となる。

ランクの高い魔法契約になると、契約条項は契約者の深層心理に刻まれて意図せずとも契約を破ろうとした時に、頭痛や呼吸困難と言った“警告症状”が現れる。警告症状は耐えられないものではないが、“意図的に契約を破った”という事実は契約破棄の罪をより重いものにする。

何れの魔法契約も契約が破られた事を証明する『証拠』であって、魔法契約自体に契約を守らせる強制力は無い。契約を守らせたり罰を下すのは司法の仕事になる。

守秘に特化した魔法契約になると、情報を漏らさないように一時的な記憶喪失を招くものも有るが、民間で出回っている魔法契約書の強制力は何れも《約束を破ってしまった》という意識によって発動する効果の限定されたものだ。

宣誓魔法も同様で《偽りを言った》という意識によって警告症状を起こすものだ。

この、《約束を破った》、《偽りを言った》という警告症状を起こす《鍵》を自由に変更できるのが、終身奴隷や犯罪奴隷に施される隷属紋だ。本人の同意無く行動を制限する隷属紋は人権を保障されている借金奴隷には施されない。借金奴隷は借金の金額に見合った期間強制労働を強いられるものだから、施される隷属契約も焼印を伴わない術だけで、内容も《主人の命令に従う、逃げない、危害を加えない》といった当たり前のものだ。漠然とした内容であるから”主の命令”に違反したときの警告症状も弱い。

けれど焼印と術式で刻まれた隷属契約は、命令を個別に指定できる分より強い強制力を与えることが出来る。一番大きい焼印で刻まれた場合は、かつてロバート・アグウィナスが盗賊の男に命じたように、僅かな時間であれば本人の意識を無視して体を操る事さえ出来るてしまう。

それでも《命令》に籠められた魔力は減衰するし、警告症状を押しさえ込むほどに嫌がる内容であれば効果は薄まる。だから無茶な《命令》を強制しようとする者は『呪い歯』などを植えつけて警告症状を苛烈にしようとするわけだ。

(自分が『呪い歯』を使う日が来るとはね……)

フランクはビクビクと痙攣しながら気絶するジヤを冷たい目で見下ろす。

彼が帝都のスラムで違法すれすれの行為も辞さない治療院を開いていたとき、『呪い歯』を植えつけた奴隷達の多くは自らの無実を訴えていた。恐らく真実なのだろう。彼らの主は皆、加虐趣味の異常者ばかりだったから。そんな仕事に嫌気がさして、養い子のユーリケと共に黒鉄輸送隊の誘いに乗ったというのに。

フランツはジヤの倫理感の低さに呆れ果てる。ラプトルの肉を腐りかけの安価品とすり替え利ざやを稼ぐ事が、『主に害を与える』事だと思っていないのだ。思っても弱い警告症状しか起こらないほど意識が低い。恐らく奴隷商のレイモンドのところに行った頃からの常習犯なのだろう。

不愉快な過去を思い出させた愚かな男を一瞥すると、フランツはジヤを獣舎に転がしたまま、もうじき午前の輸送を終えて迷宮都市へと戻ってくるユーリケと昼食を取るため、黒鉄輸送隊の拠点の後にした。

三人の奴隷（後書き）

歯科治療の恐怖をジャに。

嫉妬の蛇（前書き）

ジヤ回。嫌いな人は読み飛ばし推奨。あとがきにあらすじ書いておきます。

嫉妬の蛇

『呪い齒』の施術で気を失ったジヤが目を覚ましたのは、昼をとつくに回った頃合だった。

ズキズキと頭に響く痛みはまだ続いていて、その痛みが目覚めたようなものだ。自らの小便で汚れたズボンが気持ち悪い。汚した獣舎も掃除しておかなければ。また仕置きをされては敵わないとジヤはのろのろと立ち上がると、生活魔法の《ウォーター》で床の汚れを雑に洗い流し、汚れた服を着替えて洗濯物の籠へと放り込んだ。

(腹へった……)

昼前に気絶したからまだ昼食を食べていない。痛む頬を押さえながら食堂に向かうと一人分のパンとスープ、わずかばかりの肉が取り分けておいてあった。

黒鉄輸送隊は旅の空を屋根とする男所帯だ。細やかな気配りなど望めるはずもなく、パンもスープも上に布も蓋もかけてはいないから、パンは乾燥して硬くなり、スープは冷え切ってうっすらと膜が張っていた。肉も残り物なのだろう。脂の多い切れ端ばかりで乾燥してゴムのようになっていいる。それでもジヤの食事を取っておいただけでも上等な配慮といえるだろう。

(起こしてくれてもいいのによう)

心の中で文句を言いながら肉を摘んで口の中に放り込む。いつも調子で咀嚼した瞬間。

(あつ、ぐあつ！)

呪い齒の辺りをハンマーで殴られたような痛みが走った。

(いてえ、いてえ、いてえよ！)
痛みは歯を突き抜けて、頬骨辺りが激しく痛い。

(どうなってる、どうなっちまったんだよう！ いてえよ！)
呪い歯という新しい歯と繋がった神経が過敏になっただけで、暫らくすれば治まるのだがそんな事を知らないジヤは頬を押さえて絶望する。

(オレあ、こんな満足に飯も食べねえ体になっちまったのか。畜生。たかが獣のエサくれえでよ！)

ラプトルとジヤのような犯罪奴隷ではラプトルのほうがよほど貴重だ。犯罪奴隷に三食、しかも昼から肉を食べさせる主などそういうものではない。借金奴隷の頃のジークなどは家畜の餌より酷い物を食べて生き延びてきたと言っのに。

自らの行いを省みるでなく、唯ひたすらに怨嗟の呻きを上げるジヤに、べたりと湿った臭う布が投げつけられた。

(なにしゃがる！)

怒りに振り返った先には工具袋をぶら下げたニコが、ジヤをにらみつけていた。

投げられた布は先ほど洗濯物籠に放り込んだ、自分の小便が染みこんだズボンだ。漏らした服をすぎもせず洗濯当番のニコに洗わせようとしたのだ。先に入っていた洗濯物もジヤの粗相で汚れてしまった。ニコの怒りは尤もで、何時でも工具で打ちのめしてやると言いたげな様子でジヤを睨み付けている。

ジヤは(畜生め)と心の中で毒づいて、自分の汚れた衣類を拾って洗いに行った。

(ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう)

黒鉄輸送隊の裏庭の洗い場で汚れた洗濯物を踏みつけながら洗う
ジャ。替えの服は一枚しかないから洗濯しないわけにも行かない。

(なんでニコの野郎は工具持たせてもらってんだよ！ 又いだって
料理ナイフ持ってるしよお！ なんで、アイツラだけ！)

ずるい、ずるい、うらやましい。

ニコは工具を預けられ、それで言われた通りにメンテナンスを手
伝っている。

又イは料理ナイフを与えられ、それで言われた通りに料理をこし
らえている。

ジャはお金を渡されて、言いつけと違う粗悪品を購入して差額を
懐に入れている。

こんなわかり易いことがジャには理解できない。

(ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう。そもそも、
リンクスが紛らわしい事をすっからじゃねえか！)

怒りに任せてぐじゃぐじゃとズポンを踏みつけながらジャは、リ
ンクスにルナマギアの採取に連れ出された日の事を思い出していた。

黒鉄輸送隊が薬草を何処かへ秘密裏に運んでいる事に気付いた翌
日、ジャはリンクスの後をつけようとした。倉庫へとリンクスが入
るのを見届け、出てくるのをじっと待った。

(おせえな……？)

入り口は一つしかないのに、リンクスは待てど暮らせど出てこな
い。いい加減おかしいと中を覗こうとしたその時、「何してんだ？
ジャ」とリンクスがジャの背後、倉庫の外から声を掛けた。

(いつ、いつの間に……)

ジャに黒鉄輸送隊の斥候を勤めるリンクスを尾行するなど、そもそも無理な話なのだ。

「ジーヤー、《夜は部屋で大人しくしてろ》、な？」

全てを見抜いていたように、細い目をさらに細くして笑うリンクスの《命令》にジャは部屋へ引き下がるしかなかった。

もっとも万に一つの可能性でリンクスの跡を尾行できたとしても、地下大水道の入り口にたどり着く前に魔の森の魔物に食い殺されていただろうし、奇跡的な確率で地下大水道にたどり着けたとしてもスライムの餌になる未来しかなかったのだが。

(ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう)

そうとも知らないジャが大人しく引き下がるはずも無い。

(何を運んでるかわかれば運び先の目処がつくかも知れねえ)

ジャはスライム槽ごみ箱の途中に粘着性の糸を仕込んで、破り捨てられた書類を拾い集めて繋ぎ合わせると、買出しに出かけると見せかけてスラムにあるなじみの食材屋へと足を運んだ。

「ジャイコブじゃねえか。まだおっ死んでなかったのか」

店主らしき小柄な中年の男が、片足を引き摺りながら奥から出てきて声を掛ける。昼間から飲んでいるのかまばらにしか残っていない黄色い歯の隙間から酒の臭いが漂ってくる。何日も洗っていないような茶色く汚れた服をまとう姿は、食品を扱う店の者にはとても見えない。奴隷のジャのほうがよほど清潔なナリをしている。

スライム槽ごみ箱から回収した書類を押し付け身振り手振りで用件を伝えようとするジャに「なんだあ？ オメー声が出ねえのかよ。ヒヤ

八八、こら傑作だ。くだらねえネタさえ金に換えようとしてたオメエがよお」と店主は下品に笑った。

「で？ コイツを読めって？」

店主の下卑た笑いに不快そうに顔をしかめながらも、こくこくと頷くジヤ。

「大銀1。あんだろ？ オメエ、今、黒鉄輸送隊にいるんだってなあ。ラプトルの餌の買出し、オメエの仕事なンだろ？」

店の奥の冷凍の魔道具から茶色く変色した肉の塊を取り出す店主。肉の量だけ見れば大銀貨1枚は妥当な値段なのだろうが、痛んで廃棄する肉だ。

(今日のはいつもよりヒデエじゃねえか)

じろりと店主を睨むジヤ。

「オメエが来ねえから少々古くなっちまったんだ。わーったよ。これならどうだ？」

そう言って店主は安酒の瓶を一本追加する。

ジヤはレイモンドの奴隷商館にいる間から、客の騎獣の餌の買出しを担当していた。金の無いスラムの人間が買うような鮮度の落ちた食材を買っては差額を着服していたのだ。「この餌は新鮮じゃない」とラプトルが文句を言っても理解できるのはユーリケのような調教師だけで、わかったとしてもよほど状態が悪くない限りサーピスで出された餌に文句をつける事は無い。だから今まではれることなく旨い汁をすすってこられたのだ。

出された酒を見てべろりと上唇を舐めたジヤは大銀貨を払うと、早速酒を飲みながら書類を読めと店主にせつついた。

「んー、こりや納税証明書だな。いいのか？ 持って来ちまって。ルナマギア、エントの実、ボーンナイトの骨にこっちはニギルの新芽か。なんだ？ 黒鉄輸送隊は錬金術師と取引でも始めたのか？ 魔の森を抜ける連中にしちゃあ、しよっぺえ商いだなあ」

（ハア？ 錬金術師なあ？ そんなものいる筈がねえ。ここは迷宮都市だぞ）

もつとちゃんと見ると他のくしゃくしゃになった紙屑まで広げて読ませるジヤ。けれど返ってきたのはポーシヨンの材料ばかりだとの内容だった。

（そんな、まさか）

酒を飲み干し、腐りかけの肉と持ってきた紙束をつかんで立ち去ろうとするジヤを見て、アテが外れたのだと思った店主は「へハハ、残念だったなジヤイコブよう。ま、肉はまた買いにきてくれよう」と声を掛けた。

アテが外れたのは確かだ。

迷宮都市は大門を出る時に持ち出す商品に税金がかかる。門でいちいち計算していたのではいつまで経っても出発できないから、大抵の輸送隊は商店で代金と合わせて税金も支払い納税証明書を受け取る。商品の箱には証明書と対になった書類が貼られ封がされるから、大門での確認を簡易化できる。

稀に脱税する者は、納税済みの商品の箱の間に未納税の商品を紛れ込ませたり、馬車の床下に隠したり、事前に門の外に持ち出して隠しておいたりする。尤も衛兵も慣れたもので、大抵見つかって高い罰金を徴収されてしまうのだが。

ジヤは黒鉄輸送隊も税金を誤魔化すために夜毎商品を運んでいる

と当たりをつけたのだ。けれどジャが拾った紙は納税を示す書類だ。それが捨ててあったということは、運び出された商品は迷宮都市のどこかへ運ばれたということ。街の中で使う分には本来かからない税金をわざわざ払って、街の外に持ち出すと見せかけてまで運んでいるのだ。そして荷物の中身は……。

(いるってえのかよ、この迷宮都市に。錬金術師がよお)
金の臭いがするはずだ。

(コイツはとんでもなくデカイ山だ。デカ過ぎて手なんて出せやしねえ……)

迷宮都市で作られたポーションは、迷宮都市の地脈でしか効果がない。これだけの材料を運び込んでいるのだ。相当量のポーションが作られたはずなのに、街には流通していない。一体何処へ消えたというのか。

(そりゃあ、迷宮討伐軍の兵士がちよくちよくツラだすはずだぜ)

黒鉄輸送隊が秘密裏に行っているのは、迷宮討伐軍の仕事だ。後ろ暗い小さい儲け話であったなら、手の出しようもあつたのだろうが、この案件はやばい。うっかり手でも出そうものなら、ジャが消されてスライム槽へ放り込まれてしまう。

(畜生め。金にもなんねえ話に、大銀貨使っちゃった……)
餌代として預かった金であるのに、ジャは自分の金を盗まれたような気持ちになって憤る。

腐りかけた肉を、捨てるでも新鮮な肉と混ぜるでもなく、そのままラプトルに食べさせたジャは、ラプトルの「肉が古い」という文句を聞きつけたユーリケとフランツによって『呪い齒』の罰を受ける事になった。

スライムの餌にしてやると怒るユーリケを宥め、『呪い歯』の罰で済ませたのは一度だけチャンスをやろうというフ란ツの善意でさえあったのに。

(ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう)

ジヤは自らが汚したズボンを蹴りつける様に踏み洗う。思い出しただけでも腹が立つ。

苦勞して紙切れを拾い集めたのに何の役にも立たなかった。金を巻き上げすぐにバレる様な腐りかけの肉をよこした店主に腹が立つ。(アイツは今頃オレから巻き上げた金でうめえ酒でも飲んでるにちげえねえ！)

工具に手をかけ汚れた服を洗えとスゴんできたニコが恨めしい。(今日の洗濯はニコの仕事じゃねえか！仕事を人に押し付けやがって！)

『ヤグーの跳ね橋亭』に手伝いに行ったヌイが羨ましい。(今頃ヌイはウメエもんたらふく食ってるにちげえねえんだ！)

自分の歯を抜いたフ란ツが、黒鉄輸送隊が妬ましい。

(金も！カも！持ってるくせに、こまけえことで痛めつけやがって！オレにもあんだけの力があつたらよう！)

ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう。恨めしい、妬ましい、羨ましい。

怨嗟の思いを撒き散らしながらジヤは最低限の仕事をこなす。獣舎の掃除もギリギリ文句を言われない程度だ。植えつけられた呪い歯はそんなジヤの心根に反応してかズキズキと頭痛のような痛みをもたらす。

ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう。恨めしい、妬ましい、羨ましい。

そんな気持ちで一日を終え、与えられた寝床に潜り込む。けれど僅かに痛み続ける呪い歯に、昂ぶる気持ちにジヤは眠ることが出来ない。

(こんな体で生きてかねえといけねえのかよ。いてえ、歯がいてえよ。声もでねえよ。ああ、畜生め。なんで、なんでオレがこんな目に)

この声を聞くものがいたならば、何て大げさなのかと呆れ果てただろう。

呪い歯はジヤが正しくあれば痛む事はなく、今尚続く痛みは治療後の神経が過敏になっているだけだ。しかも耐えられない痛みではないのだ。声だっってほかの二人は出ないなりに自らの道を見つけているではないか。

工具でも料理ナイフでもなく『金』を預けられ、其れを使い込んで尚『呪い歯』の仕置きで済ませてもらった温情をジヤは理解できない。Ｂランクの力がありながら死に掛けるほどに落ちぶれた男ジークが生き残り、立ち直り、恐らく奴隷に落ちる前より真つ当な人間に成長する様を見てきた黒鉄輸送隊のメンバーが、ジヤたち三人の奴隷にもチャンスを与えている事に、気が付きはしない。

ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう。

何もかもが妬ましい、誰も彼もが羨ましい、この世の全てが恨め

しい。

自分を取り巻くありとあらゆる事物が気に入らないとジヤは自らの運命を呪う。

彼が最も気に入らないのは、自分自身である事に、気がつく事が出来ないままに。

嫉妬の蛇（後書き）

読み飛ばし用あらすじ・自業自得のジヤは、この世のすべてが恨めしいと鬱憤をためる。

水煙管（前書き）

100話記念（人物紹介込みですが）なので、原点復帰の練成回です。

水煙管

「うん、いい感じに溶けてるね」

昼下がりの工房でマリエラは広口の大きな瓶を覗き込む。

『木漏れ日』はアンバーさんが店番をしてくれているし、薬の処方
はニーレンバーグがやってくれるからマリエラがいなくても問題な
い。キャロラインは害虫駆除団子の工房が忙しくて『木漏れ日』に
並べる薬の製造まで手が回らないから、最近では傷薬などの製造はマ
リエラが受け持っている。もっとも人目がなければ錬金術を使って
薬を作ってしまうから、空いた時間でこうしてポーシヨンの製造ま
で行える。

ジークたちは朝早くからワイバーン狩りに出かけているから、ジ
ークに薬草園の手入れや家事を手伝う時間は無いけれど、ニーレン
バーグの娘、シェリーちゃんや暇をもてあましているアンバーさん
が手伝ってくれるので不自由は無い。

瓶の中には液体に細長い草が漬け込んである。マリエラは瓶にス
ライムの溶解液をわずかばかり加えて腐食性の処理をした後、よい
しよと瓶を持ち上げて、工房に備え付けた流しにおいた箆に瓶の中
身を空けた。ざあざあと水を草にかけると、葉肉がぐずりとはがれ
て葉脈だけが残る。

瓶の中身はスライム溶解液の一種で、苛性、つまり動植物に対す
る腐食性が強い。雷属性を持つ『瓶の中のスライム^{合成生物}』が塩を食べて
作り出すものだ。このスライムは苛性の溶解液を吐き出すときに、
ぶしゅーぶしゅーと金属を錆びさせるガスを一緒に吐き出すから通
常のスライムよりも管理がたいへんで、スライムの溶解液を取り扱

う専門店でしかお目にかかれない。専用の特殊な容器で飼育され、吹き出すガスは水に良く溶けるから、飼育容器から伸びるガラス管を通って幾つもの液層を通して溶解液として回収される。水槽中に通されたガラス管の口からぼこぼこと気泡が上がる様子も、複雑なガラス機器が並ぶ様も、最後の出口に付けられたフィルターも、どれこれもマリエラの心をくすぐるもので溶解液を買いに行く度に、スライムのようにへばりついて眺めている。

大金が入るようになった初めてのころは、金に飽かせて購入しそうになったのだが、ジークに止められ諦めた。

「毎日溶解液が必要な訳じゃないだろう？ それにもしガラスの容器が割れたらどうするんだ。折角作ってもらった世界樹の窓枠がさびてしまうぞ。フィルターも溶液も毎日きちんと点検しなければいけないし、何より生き物なんだから欲しいだけで買ったらだめだろう？」

「でっ、でもね。買ったなら毎日眺めれるんだよ？ すごくない？」

ちつともすぐくない。全く購入理由にならないメリットを挙げて抵抗するマリエラに、スライム溶解液専門店の店員が「好きなら見て行っていいからねー。見学だけでも構わないから」と言ってくれたお陰で購入せずに済んでいる。その後スラーケンというクラークンとの合成スライムを手に入れたマリエラはすっかり満足したらしく、用も無いのにスライム溶解液のお店に出かける事は無くなった。スラーケンの粘液は高価な素材であるけれど触っても皮膚が爛れたりしないので、マリエラのようなおっちょこちょいが飼育するには最適な『瓶の中のスライム^{合成生物}』と言える。

（久しぶりに見た苛性溶解液のスライム、面白かったなー）

この処理のために苛性溶解液を買いに行ったときの事を思い出しながら、葉肉を溶かした草を洗っていく。この細長い草は『竜馬の

蠶』と呼ばれる草でしんなりとした見た目と異なり中に太い葉脈が走っている。筋と言ってもいいかもしれない。この葉脈に包まれた中の髄がポーシヨンの材料になる。逆に葉肉は害になるからこうして溶かして洗い流す処理が必要になる。

《乾燥》、《粉碎》

綺麗に洗った竜馬の蠶を錬金術で乾かして、戸棚から取り出した様々な木の実や乾燥させた葉っぱと合わせて《粉碎》する。薬草の粉を厚みのある陶器に入れると、さきほどメルル薬味草店から届いたばかりのマテルゴ油を注ぎ入れ、均一に混ぜ合わせた後加熱の魔道具で湯煎にかける。

マテルゴは砂粒のように小さい種子から取った香りの強い油で、食用にでき体にも良いが癖のある味から調味油として使われる。今回は抽出溶媒として使うから、鍋に入れる前に命の雫を溶かし込んでいる。竜馬の蠶の成分が油に溶けると油の粘度が上がって固まっていから、加熱して油を液体状に保ったまま暫らく置いて抽出する。今までならば錬金術で賄っていたことが魔道具で出来るとは便利な世の中になったものだ。マリエラは感心しながら別の作業に移る。次の作業は他の作業と平行して出来ないから、魔道具のお陰で随分と効率よく作業できるようになった。

《練成空間、粉碎》

この前ジークたちと採取したルナマギアを練成空間内で粉碎し、そのまま練成空間内の温度や気流制御を行う。別に作成した練成空間には命の雫を溶かした水が冷やしてあって、噴霧用のノズルの温度管理と気体の制御を行いながら、ルナマギアの粉末に吹きかけていく。

迷宮都市に来たばかりの頃はガーク爺に貰った円筒容器がなければ作れなかったのに、この半年毎日の様に上級ポーシヨンを百本も

作っていたお陰で同時に行使できる錬金術の工程が増えてきて、今ではノズル以外は錬金術だけでまかなうことが出来る。円筒容器のサイズは小さく一度に百本分も作ることができなかつたから作成時間が短縮できてマリエラは大助かりだ。

暫らく練成空間の中で小さな氷の結晶とルナマギアの粉末を接触させていると、氷の結晶が黄色みを帯びて光り始める。ルナマギアの抽出は固体接触。いわゆる固溶というもので、ルナマギアと氷が接触する面積が大きいほど短時間で処理が進行する。ようはルナマギアも氷も小さいほうが良いのだ。ルナマギアのほうは練成空間から出したとたんに発火してしまうほど細かく粉碎しているから、氷の粒ももつと細かくしたいところなのだが、こちらはノズルのサイズによって制限されてしまう。

（もうちょっと練習すればノズルも錬金術で何とかなりそうなんだけど……）

そんなことを考えながらマリエラはルナマギアの抽出を行った。

あとはアラウネの花弁、千夜月花の花弁、ルンドの葉柄。どれも処理をして保管してあるから抽出作業も簡単だ。ルナマギアの抽出液と混ぜ合わせた紫色の液体を、果実酒を漬けるような大きなガラス瓶に注ぐと仕上げに乾燥させていない聖樹の葉を一枚入れて封をする。

「竜馬の鬘の方は……、うん、いいかな」

寝かせておいた油のほうもいいようで、薬草の成分が溶け出して濃い琥珀色に変わり、湯煎にかけて温めているのになつとりと飴のようになっている。容器から《練成空間》に取り出して、仕上げにキラービーのはちみつを油と同量加えて錬金術スキルで《混練》する。これだけ粘度が高い物を均一に混ぜ合わせるとは、攪拌の魔法道具では力不足なのだが錬金術スキルを使えばあつという間だ。練

成空間内の気圧を下げてはちみつに含まれる水分を飛ばしながら、温度を変えることなく練り混ぜる。

混ぜ合わせた琥珀色の塊は白濁し固まりかけの飴のようになっていた。これを片手に乗るくらいのサイズに八等分すると練成空間内で紐に繋がった球を振り回すように《高速回転》する。仕上がった塊は遠心力で薬草の残渣が多い茶色い部分と、澄んだ琥珀色の部分に分かれた楕円状になっていた。室温まで温度を下げるとどちらの部分も固まっついていて、強く押すと変形しそうな弾力性が蠟の様でもある。この塊を一つずつ澄んだ琥珀色の部分を上にして瓶に入れていく。

「肺特化の魔法薬、出来上がりー」

マリエラは作り終えた液体の瓶と塊の瓶を箱に入れると、部屋の片づけを始めた。

「肺特化のポーション、液体じゃないから魔法薬かな。ちょっと変わってるんですよ」

いつもの如く開店前の早朝に「帝国の錬金術師」マリエラがニールンバークの質問に答える。

「水煙草って言うんですか？ 燃やした煙を水に通して吸うやつ。あんな感じで固体の魔法薬を燃やした煙を液体の魔法薬に通して吸うんです。煙が液体を通ったときに完成するっていうのかな。すぐ吸わないと駄目なんですけど、直接肺に入れるから良く効くらしい

ですよ」

56階層から噴出したガスを吸い、倒れた兵士たちはニーレンバ―グら治療部隊によって一命は取り留めたものの、慢性的な肺の病を患っていた。その治療薬として作成したのがこの肺特化の魔法薬だ。

「固体の方は透き通った部分を削ってくべるんですけど、保管するときはその透き通ったほうを上にして置いておくと、ゆっくりだけど時間と共に透明な薬のところと滓のところが分離するそうですよ。逆だと混ざっちゃうので注意です。あ、あと滓のところを吸っちゃうと、気持ちよくなつていい夢が見れるらしいです」

普通のポーシヨンならば残渣のところは捨てるのだが、この肺特化の魔法薬は残渣部分もまとめて販売するものらしい。マリエラは知らぬことだが、「いい夢が見られる」この残渣部分は『幻睡香』という俗称でよばれ、結構な値段で取引されている。「いい夢が見られる」煙を吸うなど、実に退廃的なイメージであるが、副作用も中毒性も無いかわいらしいものだ。弊害と言えばよくわからない寝言を言うくらいだろうか。

水煙管を使わずに、幻睡香だけ香として焚き染めると夢は見ないが、短時間で心身に深い眠りをもたらす。

どちらの使い方でも、目覚めたときにはスッキリとした気分になれるから、疲れた大人や眠る間もない忙しい大人に大人気の商品だ。幻睡香欲しさに肺特化の魔法薬を求める者もいるほどだ。

肺特化の魔法薬のお陰で肺を患った兵士たちは快癒したし、黒い悪魔の幻影に悩まされた離脱者たちにとって、「いい夢が見られる」残渣部分は戦線への復帰の助けになった。レオンハルト、ウェイスハルト兄弟の寝室から面白愉快的な寝言が聞こえたかどうかは定か

ではないが、今尚立ち入る事さえできない56階層を前に迷宮討伐軍の士気を維持する役には立ったと思われる。

「錬金術師は全てお見通しであったか！」

顔には出さないがマリエラの評価を更に積み上げているであろうウエイスハルト。最近マリエラのことかわかってきたニールンバークは、真実を伝えるべきか少し思案した挙句、ウエイスハルトに”いい夢が見られる”水煙草をもう一服勧めて『木漏れ日』へ戻っていった。

火の山（前書き）

迷宮調査回。あとがきにあらすじがあります。

火の山

「ガーク殿、本日はよろしくお願ひします！　こちらが十日分の調査結果になります！」

迷宮討伐軍の若い斥候、ギプサムは憧れの人物に対するような様子で調査結果の書かれた資料をガーク爺に手渡す。前回の調査から十日経ち、何とか56階層に立ち入れそうだと連絡を受け、ガーク爺は再び迷宮討伐軍へと赴いていた。今回も穏やかそうな顔の眼鏡の男が助手として付き添っている。

手渡された調査結果を見ながら、机の上に並べられた採取サンプルと照らし合わせ、調査結果に何やら書き込んでいくガーク。

机上のサンプルはガークに教えられた方法でギプサムが採取したものだ。十日前ガークたちはシリンジで吸引したりガスを液体に通したり、様々な鉱物や金属を56階層に放り込んで回収していたが、どれも特定のガスと反応したり、一定の温度域で変質するものだ。濃度や量を示す目盛りなどはないが、変化した状態を《素材鑑定》として状況を把握する。

ガークほどのレベルには達していないがギプサムにも《素材鑑定》のスキルがあつて、身体能力も高いから迷宮討伐軍の斥候部隊に配属されている。

素材鑑定のスキルを迷宮探索に応用するやり方はガークが開発してきたもので、情報は冒険者ギルドを通じて開示されているが、直接教わるのとは大違いだ。ガークのチェックを身を硬くして待つギプサムにガークはチェック済みの調査結果を手渡す。

「悪かねえが、もうちょっと精度上げるや」

「あ、有難う御座います！ 伝説の斥候にご指導いただけるなんて！」

キラキラした瞳で喜ぶギプサムに、「こんな老いぼれ見てる暇があつたら、素材眺めて鑑定上げるや」とツレなく手を振るガーク。

「いいなあ、義理祖父おじいさん、ボクにも何か教えてくださいよ」

助手の男が声を掛ける。高すぎず低すぎず、落ち着く声色ではあるが、言っているほどつらやましそうには聞こえない。

「おめーは鑑定もってねえし、そもそもこんな知識いらねえだろうがよえ」

呆れたように応えるガーク爺に、助手は変わらぬ穏やかさで「ひどいなあ」と答えた。

「あの、そちらの方は、ガークさんのお弟子さんではないのですか？」

そもそも迷宮討伐軍に部外者が立ち入る事は出来ないはずで、つきり鑑定持ちの弟子だと思っただけだ。

「そいつあ、勝手にくつついて来ただけだ」

「ヴオイドと申します。ガーク爺さんの孫の夫です。おじいさんに何かあると、妻が悲しみますからね」

よく言えば人畜無害そう、悪く言えば全く戦力にならなそうな男だが、何の役にも立たないならガークが連れてくるはずも無い。腑に落ちないながらもギプサムは納得して、「では、いきましようかと二人に声を掛ける。

再び防護服に着替えた三人は、迷宮討伐軍の地下を經由して迷宮の最深部へと向かった。

第54階層の海岸洞窟には『海に浮ぶ柱』の魔石と残骸から作られた大型のポンプが据えられていて、海水を汲み上げては56階層へ送っている。54階層から56階層まで繋がる配管は小型の動物ならば中を通り抜けられるような口径の金属性のものだ。この手の管の内部を一度水で満たしてしまえば、あとはサイフォンの原理で中に空気が入るまで低い方の出口に水を送り続けるものなのだが、階層の気候や環境を保つ迷宮の不思議な作用のせいなのか、56階層の境目で水が止まってしまつて、ポンプで押し出さなければ水を下層へ送ることが出来ない。

配管だけならばもつと何本も通すことが出来るのに、ポンプは1基しかなく、その能力が56階層の冷却速度を律速していた。もつとも迷宮の気候や環境を保つ作用のお陰で54階層の海水はどれだけ汲み出してもなくなる事はなかったのだが。

緑豊かだった55階層は十日程の冷却作業によつてすっかり様相を変えていた。54階層から送られた水は56階層を冷やして水蒸気になり、空気中に含まれる毒素を溶かし込んで55階層に昇ってくる。55階層に吹き上がった水蒸気は冷やされて弱い溶解液のような雨に変わつて降り注ぎ、55階層の緑を尽く破壊していた。十日も水を送り続けたお陰で56階層は漸く人が立ち入れるレベルまで冷えたらしく、今では階層階段から立ち昇る水蒸気は僅かしかない。55階層の大気成分も安定しているからじきに元の緑豊かな階層に変わるのだろうか。

「なんで水はポンプで押し込まないと入らないのに、水蒸気は出てくるんでしょうかね」

ヴォイドが細く立ち昇る蒸気を見てを呟く声に、「水を嫌うヤツが棲んでんだろ」とガークが短く応えた。

前回同様、階層階段の上から56階層の状況を調べて問題が無い

事を確認したのち、三人はまだ誰も踏み入った事のない迷宮の最深部へと潜って行った。

むわりとした湿度の高い空気に三人のフルフェイスのゴーグルが曇る。56階層の空気は薄まったとはいえ依然として毒を孕んでいて、マスクを手放すことが出来ない。息苦しく感じるのはマスク越しに吸う空気中の酸素が薄いからだけではなく、蒸気が濃いせいもあるのだろう。ワイバーンの肺から作られたマスクのフィルターは毒を浄化し、水蒸気も取り除く高性能さだが、水蒸気の処理に面積を取られて息苦しさを感じるようだ。

蒸気の通り道避けて視界を確保する。やはり、と言うべきかそこは溶岩が固まった大地が広がる火山の階層だった。階層階段は途中から溶岩が冷え固まった岩石に埋もれていて緩やかな下りの洞窟になっている。

洞窟は三人が横に広がって歩いても十分な広さがあり天井も蒸気がはるか頭上を通るほどに高い。所々で道が狭くなったり崩れた岩石によって分岐したりしているが、一つの広い場所へと通じていることが三人にはわかった。

ガスの成分や温度を定期的に測りながら慎重に進む。

階層を埋め尽くす岩石は、山や川で見かけるような滑らかな形状をしておらず、黒くでこぼことして小さな穴が幾つも開いている。水が蒸気になると体積がおよそ千倍に膨れると言うから、その衝撃で崩れたのだろう。

床面は飛び散ったような岩石で歩きづらいし、あちこち崩れて大小の岩石が小山になっていて三人の進行を阻む。

時折、ズーンともドーンともつかない地響きが起こり、積みあがった岩石がばらばらと崩れ落ちる。こういった岩石が積み重なって

いる場所も注意が必要だ。地響きのタイミングで倒壊するかもしれないし、内部が熱いままの場合もある。三人は水が通ったと思われる冷えた場所を選んで進んでいるが、水で余り冷えていない奥のほうが無だに赤く、丸めて投げた紙くずが触れるや燃え上がるほどの高温だ。

毒ガス、高温の蒸気に、割れて飛び散る岩石。それだけでも地獄のような有様ではあったが、この階層に立ち入って、未だに魔物には出くわしていない。勿論、彼らは斥候だからそういったものに気付かれないように注意を払っているのだが、そもそも魔物がいないのだ。

(ゴーレム辺りが出てきてくれりゃあ、良かったんだがな)

ガーク爺が心の中でごちる。雑魚が多ければその分魔力を振り分けられるから、階層主やその守護者が弱体化する傾向にある。けれど三人は魔物に襲われるどころか、その痕跡すら見つける事は出来なかった。

今尚シューシューと蒸気を噴出し、時折ボンツとはぜる岩石を避けて奥へ進むほどに、周りの温度は高くなっていく。防護服の耐熱温度も限界に近い。迷宮討伐軍が進軍するにはもう少し階層を冷やすか何らかの手だてが必要だろう。

この階層が開いたとき、火山ガスが噴出した。締め切られた56階層の内圧が高くなっていったのだろう。高温高压の火山ガス。本来ならば階層を埋め尽くす溶岩などに消費され、酸素などあるはずがない。けれどここには高山程度の薄さではあるが酸素があって、三人は呼吸をすることが出来る。

呼吸をする魔物がいる証拠だ。

高温に耐え、高圧をもものともせず、毒ガスに侵されない。
そんな魔物は。

ズシーン。

また地響きだ。

これ以上の高温には耐えられそうに無いと引き返そうとしたとき、
ヴォイドがすつと手を挙げて、岩陰から奥の様子を窺った。

それに続く二人。通路の向こうは未だに熱いままの溶岩地帯が広がっていて、地面は何処も赤く光を放っている。所々から目を焼く強い光が漏れているのは溶岩溜まりなのだろう。

《鷹の目》

迷宮討伐軍の斥候、ギプサムが遠視スキルの一種を発動する。本来ならば障害物で見えない先を見通すスキルだ。ガークとヴォイドも遠視の魔道具で先をうかがう。鷹の目ほどの効果はないが、これらも肉眼では確認できないいくつか曲がった先の光景を運んでくれる。

三人の潜む岩陰の先に広がっていたのは、外に出たのかと思うほどの広大な空間と、そして。

ズシーン。再び響く地響き。

ああ、この地響きはあれが原因だったのか。自らの目で確認し理解できたのはそれだけだった。

地響きを響かせながら八本か、もっと多くあるかもしれない脚で、
酷くゆっくりと歩いている。

それはわかる。歩いている事はわかるが、アレは。

「火山、か？」

脚を生やした火山がゆっくり広大な階層を進んでいた。

「ギヤオオオオツオオ」

空気を響かせて、その山頂から何かが飛び立つ。

「やつぱりいやがったか。ドラゴンが」

人が立ち入れるほどに温度も圧力も下がった階層を、快適だと感じているのか不快に思っているのか。はるか遠い岩陰からその顔は判別できない。ただ、溶岩を思わせる赤黒い鱗を持つ竜は翼を広げて56階層の空を悠々と旋回していた。

「やはりいたか」

ガークらの報告を受けレオンハルトは眉をひそめる。ドラゴンの存在は会議室に集うみなが予想はしていたことだった。高温も、高圧も、毒ガスさえも物ともしない頑強な生命体。その難易度も言わずもがな。最強に分類される魔物である。

「しかし、動く火山だと？」

動く火山には頭部らしきものが無い。半刻もあれば一周回れるほどの小山ではあるが、やや楕円に近い円形の山で、山頂には火口が有り腕を伏せたような形をしている。山の底は大地から離れ八本以上の太く短い脚で支えられている。その脚で酷くゆっくりと歩いているのだ。

脚の形状や歩みの遅さを見れば、亀に近いのかもしれない。けれ

ど、目も鼻も口もない。それどころか頭も無い山だからおよそ生物には見えないのだが、山頂よりもうもうと煙を吐き出しながら歩いている。目指す先はそこに湧き出ている溶岩溜まりで、溶岩溜まりにたどり着くとそのまま入っていく。脚を数本付けてしばらくすると溶岩は吸い上げられて、ただの窪みに変わっているというから、恐らく溶岩を餌として動き回っているのだろう。

食事、と言うよりは補給と言ったほうが正確かもしれないが、溶岩を取り入れた後の火山は少しだけ動きが活発化してゲップをするようにボフィンとガスを噴出したり、岩石の噴出を伴う小さな噴火が見られると言う。

火山の守護者と思われるドラゴンは、火山を寝床としているのか、噴火口から現れて暫らく辺りを旋回すると再び火口へと舞い戻るそうだ。

「ともかく、もう少し情報が集まらなければ作戦の立てようも無い。ウェイスハルト」

「はい。幸い下げた気温は戻ってはいない様子。空気の組成もです。気温の高低や空気は56階層の住人にとって重要ではないのでしょう。まずは冷却と空気の入れ替えを進めてわれわれが活動しやすい状態にするべきでしょう。並行して斥候部隊には火山とドラゴンの調査を進めさせましょう。攻略の助けになるポジションについてはニールンバーグが情報収集を」

例えそこに絶望しなくなるとも。やれることがあるうちは。

レオンハルトはゆっくりと席から立ち上がった。

火の山（後書き）

あらすじ：56階層は火山階だった。なんか火山が歩いてた。あとドラゴンもいた。

丁寧に書けば書くほど攻略できない気がして、ハルト兄弟も作者も困惑気味。

晚餐

「マリエラ、明日の討伐終わったらメシ行こうぜ！ いい店見つけたんだ」

夕食に行こうと誘うリンクスにゴチソウだ！ と喜ぶマリエラ。ワイバーンの討伐で、行き倒れた冒険者のフリをして相当数のワイバーンを狩った三人だったが、まだAランクには至っていない。ワイバーン討伐の後も、三人は迷宮に潜って依頼をこなしている。

ワイバーン討伐が終了したあと黒鉄輸送隊は通常業務に戻って再び帝都へと出発した。今回迷宮都市に残っているのはマルロー、エドガン、リンクスの三人。副隊長のマルローは魔物除けポーションが市場に流通した後の方針を模索していて、そのためにも伸び代のあるエドガン、リンクスの戦力強化は望ましいことだった。

「あれ？ ジークとエドガンさんは？」

「二人は別件だったさ。二人でいこーぜ」

てつきり皆で行くと思っていたマリエラは、翌日の討伐終了後、『木漏れ日』にたった一人で迎えに来たリンクスに首をかしげる。

ジークが迷宮都市にいるのに別々にご飯を食べるなんて初めてかもしれない。マリエラだってジーク達が討伐に出かけている間、キヤロラインやエルメラさん、他の皆と昼ごはんやお茶を楽しんでいるのだし、ジークにも付き合いたいというものがあるだろう。そうわかっていても、マリエラはなんだか不思議な感じがしてしまう。

「リンクスと二人で出かけるのって、私がこの街に来た日以来だね」
「おー、そうだな。あれから半年も経ったんだな」
思い出話が出来るほどにリンクスとマリエラの仲も深まった。

「ついたぜ、帝都で働いた事のある料理人がやってる店だったさ」
いつも外で食事をするときには『ヤグーの跳ね橋亭』に行くのに、リンクスが連れてきてくれた店は随分と洒落たお店だった。服装の制限がある上流階級が行くような店ではないけれど、酒に酔って大声を上げるような下品な客は一人もいない。お客さんは男女の二人組が多くて、女性は少し着飾っている。

料理も綺麗に盛り付けられたものが少しずつ載った皿が、順番に出てくるスタイルだ。どの料理もはじめて食べるものばかりで、とても美味しかったのだけれど、いつも二人分以上平らげるリンクスには物足りないんじゃないかな、とマリエラは思った。

「ごちそうさま！ すっごい美味しかったよ」

お金を払おうとするマリエラに、「もう払ってあるから」とリンクスが答える。

店を出た後も、あれが美味しかった、これが美味しかったと話すマリエラを見ながら、リンクスは「しくじったかな」と内心思っていた。

若い女性に人気だと聞いて予約をした店だったが、静かに話しながら料理を少しずつ食べるスタイルはどうにも自分には似合わない。マリエラも初めてのかしこまった空間に恐縮しているのか、いつもより口数が少ないし、声も小さかった。何より料理の量が少なく、ちっとも食べた気がしない。

折角エドガンに頼み込んで、ジークを引き離してもらったと言うのに、距離が縮まるどころかマリエラに居心地の悪い思いをさせて

しまったかもしれない。

「ねえ、リンクス」

考え事をするリンクスにマリエラが声を掛ける。

「あのさ、『ヤグーの跳ね橋亭』に行ってみない？ 私ちよつと食べ足りないんだ。今度は私が出すからさ」

（ははっ、コイツ）

マリエラが満腹な事ぐらいお見通しだ。食べ足りないリンクスを気遣って提案してくれたのだろう。あの店を居心地悪く感じていた事も気付いていたのかもしれない。

「まあた、まん丸くなるぞー、マルエラー」

「もう丸くないし！ マリエラだし！」

ふうと膨れながらも笑うマリエラ。その胸元にはリンクスが贈ったペンダントが揺れている。

日はすっかり暮れて肌寒くはあるけれど、刺すような冬の寒さは感じられない。通りにはまばらではあるが人影が見られて、時々歌を歌いながら酔っ払いが歩いていたりする。

「ああいうのって、春だなあっていうの？」

「頭んなかは、春なんだろうなあ」

くすくすと小声でそんな話をしながら『ヤグーの跳ね橋亭』に向かい、いつものように料理を頼む。討伐の話や『木漏れ日』の常連客の話。二人の会話は他愛の無いものだったけれど、途切れることなく盛り上がる。

（こついうトコが良いんだよな……）

さりげなく相手を気遣うところ、洒落た店に気後れするところ、

さして高価でもない贈り物を大切にしてくれるところ、くだらない、けれど盛り上がる会話。

どれもこれも『普通』の事で、それがリンクスにとってはとても居心地の良い、素敵なものに思えた。

「俺が言うのもなんだけどさ、二人で行かせちゃってよかったん？
ジーク」

マリエラとリンクスが二人で食事を楽しんでいたところ、ジークとエドガンはエドガンの行きつけの酒場で飲んでいた。

「俺は毎日マリエラと二人の時間があるしな」
グラスの酒を眺めながらそう応えるジーク。

「余裕つてやつ？ リンクスごときには負けねえぜつて？ お前からそんなに進んでんの？」
他人の恋バナに耳をひくつかせるエドガン。本当に耳がびくびくと動いている。

「そんなんじゃないさ」
そう。マリエラと自分はそんな関係ではないとジークはグラスを見つめる。親子か兄弟か。マリエラが求めているのはそういう関係で、だからジークムントは保護者としてマリエラに接している。

「まー、リンクスのほうが歳は近いしなー。趣味とか価値観？ まーほぼ食いモンだろうけど合ってる感じするし？」

チラツチラ、チラツチラ、ジークを見ながらエドガンが言う。

「マリエラちゃん、いい子だな。オリジナルじゃなけりやメシも旨いし。ああいう、ちょっとドン臭そうで普通っぽい、スレて無い子ってリンクスの好みなんだよな」

「うっ……」

ジークは地味にダメージを受けていたようだ。ぐびぐびと酒をああおって、まだ二十台半ばだと言うのにおっさん臭く頂垂れる。

「俺はリンクスがうらやましい……」

「泣き言キター！」

いつも、あっちこっちの女の子に振られてはジークに慰めてもらっているのに、頂垂れるジークを見てエドガンが嬉しそうだ。

「やっぱ歳の差か？ そうだよなー、やっぱ歳の差ってでかいよなー。他は合わせられても歳の差だけはな！ 俺がジエニファーちゃんにごめんなさいって言われたのも、きつとそのせいだと思うんだ！」

そして、自分の話をしだすエドガン。ジークをかわいそうに思ったのか、酒場のマスターが高い酒を注いで「エドガンからだ」と言っつてジークに渡す。

「えー、いつの間に俺の奢りー？ マスターそりやないってー」

「うるせえ。お前もジエニファーちゃんとやらの別れの記念に飲めやいいだろう。自腹で」

「そうするー。おー、これいい酒じゃん。良くこんな^{「」}の迷宮都市で手に入ったな」

「黒鉄輸送隊^{オクエウ}が運んできたんじゃないか……」

ちなみにこの店に女性の従業員はいない。マスター一人で回せる

程度の席数しかない酒場で、良い酒を飲ませる迷宮都市の隠れた名店でもある。エドガンがこんな店の常連であるとは驚きである。今日はいつもより空いていて、客は隅のテーブルでフードを被ったまま一人静かに酒を飲む男がいるくらいだ。

「んで、んで？ ジークはどうすんの？ Aランクになって自由になったら。それとも自由になるのやめて、奴隷のまんまでマリエラちゃんの傍にいとくって手もあるよな？」

エドガンが意地の悪い質問を続ける。うつむいて酒を飲むジークには見えないが、エドガンの目は酒に酔った男のものではない。黒鉄輸送隊の一員として、警護対象の護衛を見極めようとしているのかもしれない。まあ、下種な好奇心もあるに違いないのだが。

「どうもしない。Aランクになって、自由になってもマリエラの護衛を続ける」

「えー？ それってリンクスがマリエラちゃんとうまくいってもってこと？」

「そうだ」

「なんでー？ 折角自由になれるのに？ しかもAランクだぜ？

富も名誉も女も全部手に入るじゃん。そんな茨の道みたいなマネ必要ねーじゃん。人生短いんだしさー、楽しもうぜ」

うつむいて酒を飲んでいたジークは顔を上げてエドガンを見る。

「それが、命を救われるということだろう？」

エドガンを見るジークの蒼い瞳は何処までも深く、真っ直ぐだ。

その言葉に、どれだけの想いが籠められているのだろうか。

リンクスが羨ましいとジークは思う。

マリエラと年が近い事も、自分よりも強い事も。

マリエラとリンクスが並ぶ姿はとても自然で、似合いで、自分よりも釣り合いが取れているとも思う。

マリエラが望むように、マリエラに合うように、ジークはずっと努力をしてきた。けれどリンクスは出会ったときからマリエラと自然に意気投合していて、楽しげに会話をしていた。

そんなところも、どうしようもなく羨ましい。

例え奴隷から解放されたとしても、得られるものではないのだから。

けれど、それが何だというのか。

死に掛けた自分にマリエラがどれ程のものを与えてくれたのか、ジークは何一つ忘れてはいない。

治らないはずの傷を癒し、人としての尊厳を与えてくれただけではない。

剣や防具、衣食住の安定といった物質的なものだけでもない。

精霊眼を持たない身でワイバーンを倒したときに気付いたのだ。

高慢で愚かで矮小だったジークムントという人間が丸ごと救われていた事に。

これからの人生も含めた自分の命そのものを、マリエラは救ってくれたのだ。

だから、奴隷であるか自由であるかは関係が無い。リンクスを羨ましいと嫉妬する気持ちも、マリエラが欲しいと渴望する思いも、全て抱えたままマリエラに仕えていこうとジークムントは思っている。

そんな胸のうちを、ジークは言葉にはしていないけれど、エドガンの顔から軽薄な笑いは消え失せて、ジークの思いの丈を測るかのように一つしかない蒼い瞳を覗き込んでいた。

「虚を突かれた思いがした」

エドガンは小さい声で漸くそれだけ応えた。

「まあ、それほど悲観しているわけじゃないんだ」

似合わないシリアスをかもし出すエドガンを、失意のはずのジークが励ます。

(なんでエドガンが励まされてんだよ。逆じゃねえのか。)
という酒場のマスターの心の声は誰にも聞こえない。

「マリエラはかなり手強いからな。ちょっとやさつとじゃ気付きもしないだろうし。若いリンクスが何処まで我慢できるかな」

「おお？ 何？ ジーク強気じゃん！ またなんか面白エピソードあつたん？」

「何もないけどな。何もなさ過ぎて、最近、俺が風呂に入れてもマリエラは『楽ちん』』とか言いそうだと思いは始めている」

「それって、介護的な意味じゃね？」
「介護的な意味だな！」

夜の大人の社交場を、沈黙が支配する。

ジークもエドガンも黙って酒を酌み交わしている。辛さを酒で流し込むのも大人の嗜みであろう。

もうその辺にしておけといつもなら止めるであろう酒場のマスターも、「今夜は夜が明けるまで営業するさ」と取って置き酒を棚に並べる。もちろんエドガンの奢りだが。

店の隅のテーブルで一人酒を飲んでいた男が静かに席を立つ。若者たちの邪魔をすまいという心遣いなのだろう。席を立った男が店

を出ると、雲間から半月が顔を出していた。

満ちては欠け、欠けては満ちる月は揺れ動く若者たちの心のようだ。

あの月はこれから満ちるのだろうか、それとも欠けていくのだろうか。

（若者たちの未来のために、月よ、満ちてくれ……！）

吹き抜ける春の風が男のフードを取り払い、満月のように光る頭が顔を出す。

「ずびし！」

誰も見てはいないのにサムズアップをぶちかまし、男は次の店へと消えていった。

晚餐（後書き）

シリアス続くとハーゲイが出てくるの法則。

あらすじ・雲間から満月現る。「月が綺麗だぜ!」ずびし!

停滞

調べれば調べるほどに56階層 火の山の階層の攻略方法が見つからない。

ウェイスハルトは未だかつて無いほどの、壁に突き当たっていた。

ワイバーンの素材を使ってマスクや防護服は準備した。階層階段から広場までの広い通路を冷やし、岩石を取り除いて行軍しやすい環境も整えた。

しかしそれだけだ。

『歩く火の山』がいる広場は広大で、全て冷やすことなどできない。

何より通路から広場へと出て散水を始めると、ドラゴンが飛んできてプレスを放ってくるのだ。しかも広場にはあちこちに溶岩溜まりが湧き出しているから、散水や氷魔法を駆使して何とか広場の一部を冷やしても、あつという間に戻ってしまう。まさに焼け石に水といった有様だった。

高温環境で活動できるポーションは無いものかとニールンバークが錬金術師マシエラに問い合わせたところ、『氷精の加護』という薄い氷の皮膜を生じて熱気を防ぐポーションと、『竜人薬』という過酷な環境下でも活動できる竜人という種族に近い体に変身できるポリモーフ薬身の一種があるという回答が得られた。けれど、『氷精の加護』は特級ポーションで錬金術師マシエラは作れないし、『竜人薬』は上級ポーションではあるが材料に赤竜の鱗が必要だ。赤竜とはまさしく56階層に住み着いているドラゴンで、うろこが手に入った時には、『竜人薬』は必要がなくなっているだろう。つまりどちらも使えない。

丁度帝都に到着した黒鉄輸送隊に連絡を取って、赤竜の鱗の情報収集を依頼しているが、Sランクの魔物の素材など、そう出回るものではないから望みは薄いだろう。

今しがたウエイスハルトの執務室を出て行った斥候部隊の報告も芳しいものではなかった。

灼熱の空間は蟲使いの蟲を焼き殺してしまうし、音使いの調査も目視結果を裏付ける程度の情報しか得られていない。新たにわかった事と言えば、溶岩の広場全域が赤竜の索敵範囲らしく、階層階段の通路から『歩く火の山』がいる広場に出たとたん、赤竜がすっ飛んでくるということだけだ。

56階層の気温を下げたのが気に入らないのか、ちょこまかと動く人間にイラついているのか、通路に向かって吐き出されたプレスによって、通路の整備作業を行っていた奴隷十数名が焼け死に、斥候及び工兵部隊にも甚大な被害がたとの報告さえあった。甚大な被害とは、『上級ポーションでは回復できない身体欠損』である。

被害の状況から見て、赤竜はSランクでも上位の個体と見て間違いないだろう。

(この半年が順調すぎたのだ。迷宮攻略で人的被害が出るなど、当然の事ではないか。バジリスクどもにどれ程の兵が喰われたことか) そのように考えても、割り切れるものではない。

(やはり、S、Aランク戦力を当てるしか……。しかし) ウエイスハルトは帝国の上位冒険者の資料を取り出す。閲覧が厳しく制限された秘密資料である。

そのような機密書類にも関わらず、確認されているSランク冒険者3名のうち所在が明確なのは一人だけ。

金獅子将軍 レオンハルト・シューゼンワルド。

単騎での戦力はAランクだが、チームの能力を引き上げる『獅子咆哮』のスキルを加味して辛うじてSランクの判定を受けている、ウエイズハルトの兄だ。

残る二人のうち、『隔虚』は十年以上前に姿を消して以来消息がつかめないし、もう一人の『剣聖』は弟子達と共に帝都の北の果ての険しい山に居るらしいが、生死は不明。生きていたら100歳をとうに超えている。

Sランカーが姿を消したり、並の人間では立ち入れない秘境に身を置く理由は言わずもなだらう。現実の迷宮討伐軍では為す術もない赤竜であるが、『隔虚』であればそのブレスを防ぎうるだろうし、全盛期の『剣聖』の剣戟は、天を往く赤竜を地に落とし息の根さえも止め得ただろう。そのような人外の力を持つ個人が平穩に暮らせるはずはないのだ。取り込もうとする権力者、取り入ろうとする野心家は後を絶つまい。

レオンハルトでさえ、辺境伯家、迷宮討伐軍將軍という立場にある公人であり、迷宮に縛られているからこそ、ある程度の自由があるにすぎない。

迷宮都市にいるAランクの戦力は迷宮討伐軍にウエイズハルトを含め数名と、黒鉄輸送隊のディック、冒険者ギルドマスター破限のハーゲイ、雷帝エルシー……。

最強戦力を当てるということは、万が一失敗すれば迷宮攻略が停止するどころか、迷宮都市自体に甚大な影響を及ぼしかねない、ということだ。赤竜に対する有効な攻撃方法があれば別なのだが、遠距離からブレスを吐いて来る赤竜に有効な攻撃は、自分の魔法がエルシーの雷撃くらいだろう。それで果たしてやつを大地に引きずり下ろせるだろうか……。

「失礼します。迷宮都市の次期の予算書をお持ちいたしました」

思案するウエイスハルトに側近が書類を届けに来る。迷宮都市の内政を取り仕切るのもウエイスハルトの仕事だ。手渡された資料を手早く可決と否決に分けていくウエイスハルト。

「ん？ これは」

「不備がございましたか？」

ウエイスハルトの負担を減らすため、書類上の不備はあらかじめチェックされているのだが、抜けがあつたかと側近が尋ねる。

「いや、不備ではない。孤児院の予算だが、例年に比べ少なくともないか？」

「はい。それが出産予定者の数が減少しております。なんでも、市井の薬の質が向上したとかで」

「な……、その薬の出所は？」

「アグウイナス家のご令嬢が共催している薬屋が発祥のようですが、今では大抵の薬屋で入手できるようで……、あの、販売停止命令を発令しますか？」

アグウイナス。その名を聞いたウエイスハルトは激しい頭痛に襲われたようにこめかみを押さえた。

（販売停止命令など、出せるわけが無い……）

マリエラが公開した薬の作り方、開催した勉強会の高い成果を上げていた。僅か半年足らずの期間ではあったが薬の質は向上し、薬の製法を応用した種々の効果の高い薬も売り出されるようになった。製造を助ける魔道具が幾つも開発されたことも大きかっただろう。

新たな製品の成長初期というのは開発しろが大きい分、脚を引っ張り合うよりも他者が手がけていない分野に手を伸ばしたほうがよほど儲けが大きい。それまでは効果が低いと余り使われなかった傷

薬や飲み薬、魔物に効果のある煙玉といった製品は、効果が高くなつた事で下級冒険者達の必須アイテムとなつて消費量が増加し、良いものを作れば儲かるという理想的な図式が出来上がっていた。

迷宮都市の市民の薬に対する理解もうなぎのぼりで、病気による子供の死亡率も低下していたのだが、それ以上に顕著であつたのは、出生率の低下だつた。

娼婦たちが薬によつて自衛するようになったのだ。

それ自体は望ましいことなのだが、人口の増加に悩む迷宮都市においてそれは長期的に見ると死活問題といえた。このところ迷宮討伐軍の迷宮討伐における死亡率は低下しているが、迷宮都市全体で見ると迷宮で命を落とす者は多いのだ。生きて迷宮から戻れたとしても怪我を負い、二度と迷宮に潜れない体になる者も少なくない。だからこそ、倫理的に問題があるうと人口増加対策を推し進めて来たというのに。

（キャルに避妊薬の製造をやめるなどと、いえるはずが無い……！）
昨日だつて、「まあ、ウエイヌ様はお優しいですわ！ そんなところも、私……」ともじもじと上目遣いで微笑みかけてくれたのだ。ほんのりと紅に染まつた頬、潤んだ瞳のなんと愛らしかったことか！

（いや、あれは、幻睡香で見た夢だつた……！）
兄レオンハルトや部下達が自分の分の幻睡香をこつそりくれるものだから、つい毎日使っているけれど、あの水煙草は危険かもしれない。本物のキャララインにおかしな言動をとる前に使うのをやめるべきか。

そんな小さな悩みが増えたウエイヌハルトだったが、この案件に關しては、取れる手だてが残されている。赤竜討伐よりよほど容易な解決法だ。

「庶民向けの学校の整備を。読み書き算数と戦闘の初歩は全員必須で。若年冒険者の負傷率、死亡率を半減できるよう、会議体を設けて検討を。初めは見切り発車で構わん。1カ月後には試験的にでも開校できるように至急進めよ」

人口が増えないのならば、死亡率を下げるしかない。

今までならば予算が足りずとも手が回らなかつたが、帝都並みの価格でポーションが手に入るようになったお陰で、安定してバジリスクの革をはじめ迷宮深層の高価な素材が得られるようになり、少しばかりの経済的な余裕も出来た。戦闘系スキルを持たない人間でも、闘い方を習っていればゴブリンの1体くらいは倒せるものだし、階層毎の生態系と正しい対処方法を知っていれば採取なども行える。今までは、迷宮都市に住んでいても迷宮に潜つた事のない市民は大勢いたが、そう言った人々が浅い層であっても迷宮に潜るようになっていけば、迷宮都市はもっと豊かになるかもしれない。

残る書類を次々処理していくウエイズハルト。かつて頭を悩ませた迷宮都市の内政に関する諸問題は、今ではすらすらと対処方法がわかる。けれど赤竜の攻略方法だけは、糸口さえつかめなかつた。

今日もウエイズハルトの寝室からは、愉快的寝言が漏れ出して、側近たちは迷宮やらポーション以外に守らねばならない秘密が増えるのかもしれない。

停滞（後書き）

火山階層の攻略に悩むウエイズに出生率が下がったとの追加連絡が。迷宮での死亡率を下げるため学校の開設を指示する。あとウエイズハルトの夢の中身が明らかに！

シール夫妻

「パロワ！ エリオ！ 母さまが！ 母さまが迎えにきましたよ！」

『木漏れ日』にやたらめったら嬉しそうな様子でエルメラさんが飛び込んできた。

「パロワ、エリオ！ んっっ！」

お店の隅でエミリーちゃんやシエリーちゃんと、本を読んだりして大人しく遊んでいた二人の少年に抱きついて、ほっぺにムッチュとキスをするエルメラさん。

エルメラ女史の素顔を知っているマリエラは特に驚きもしなかったが、素肌を一切見せない紺のロングワンピースに手袋、ブーツ、髪はびっちり束ねて眼鏡をかけた、いかにもお堅そうなエルメラのデレツデレなこの有様を、知らぬ人が見たら啞然とするに違いない。現にお店でお茶を飲んでいた薬師の一人は口に含んだお茶を力ツプにリバーズしている。汚い。たった今、『木漏れ日』に『使ったコップは自分で洗う』というルールが誕生してしまった。

パロワと呼ばれた13歳の少年は少しうつとおしそうな表情で「母さん、人前でやめるよ」と言っていて、エリオと呼ばれた9歳の少年は「かーさま」と嬉しそうににこにこしている。

照れくさそうに、嬉しそうにする二人の少年以上に幸せ一杯なのがエルメラさんだ。いつも仕事で子供の世話は夫に任せきりである。母親らしい事をした願望が強いエルメラは、『子供のお迎え』イベントにテンションダダ上がりである。仕事中也余りにソワソワソワソワしているので、いつもは人に仕事をやらせてばかりの副部門

長リエンドロが、「あとは僕たちがやっておきますから」と申し出たくらいだ。

尤もリエンドロの事だから、エルメラがやり残した仕事は誰か若手に丸投げするのだろうか。

「マリエラさん、子供たちを見てくれてどうもありがとうございます。これ、良かったら皆さんで」

ひとしきり子供たちを抱擁したあとエルメラさんは、マリエラに大きな包みを渡した。『木漏れ日』が託児所事業にまで始めたわけではない。夫婦揃って仕事の日に預かっているのだ。『木漏れ日』にはシェリーもエミリーもいるし、常連客も皆子供好きだ。店の隅で大人しく遊んでいられる子供達はたいして手もかからないし、むしろ手のかかる常連客の相手をしてくれて助かるくらいだ。

エルメラが「今日、仕事のついでに捕って来まして」と道端の草でも摘んだような口ぶりで渡した中身は、プラスチック・ロブスター。

両手のひらからこぼれるほど大きな海老である。『突風、爆風』の名がつくように、巨大な鉋から繰り出される遠距離攻撃は大人が石を投げつけるほどの威力があるし、その攻撃を避けて近づいたり捕まえたりしたら自爆して捕食者を攻撃するなんとも命知らずな海老である。自爆によって捕食者を排除した環境で子孫を残すことで、魔物という強者が跋扈する環境で生き延びてきたのだと言われている。

そういう特攻気質の海老なので、当然採取は極めて難しい。そして味は絶品の高級食材である。それが20尾ほども入っている。

「じっくり。」

マリエラの咽がなる。食材を見て咽を鳴らすなど年頃の娘とは思えないが、プラスチック・ロブスターは卸売市場でも見た事が無い珍しい海老だ。流石は雷帝。こんなものをホイホイ捕まえてくるなんて

「王様のエビフライにしよう。丸ごと揚げるやつ……。皆も食べてくよね？」

マリエラの提案に顔を輝かせるパロワとエリオ。アンバーさんとニーレンバーグ親子は異論なしといった表情だし、エミリーちゃんに至ってはよだれを垂らしてしまっている。

「まあ、お礼にと捕ってきたのに。いいのかしら……？」

と人差し指を顎に当てて思索するエルメラに、マリエラはこう提案した。

「旦那さん、まだ戻って来てませんし、パロワくん、エリオくんと一緒に作って食べさせてあげたらどうでしょうか」

『子供と料理』イベントである。しかも『お父さんに感謝をこめて』イベントでもある。エルメラが乗らないはずが無い。父親に食べさせたいのはエミリー、シェリーも同じで、お客が帰り店を閉めたあと、マリエラ、エルメラと子供たち4人による巨大エビフライ作りが始まった。

「ふえ、えびさんのあしが動いた……」

「あー、ちよつと電撃流れちゃったんだよ。生きてないから大丈夫だよ、エリオ」

弟のエリオはエルメラの血が強く出て、電関連のスキルを持っているようだ。幼いせいで力をうまく制御できないのか、雨合羽のようなゴムの服を着ている。人を電撃で傷つけるのを恐れているのか、兄パロワの後ろに隠れていて、エミリーやシェリーともなかなか打ち解けずにいた。兄パロワはエリオの電撃がなんとも無いのか、よく面倒をみている。いいお兄ちゃんだ。

「この海老は、背中の子三番目のつなぎ目から殻をはがすと、ほら、

簡単に殻がむけるのよ」

「シェリーちゃんすごいねー」

こちらはシェリーとエミリー。シェリーは解体スキルを持っていてるらしい。実に手早くブラスト・ロブスターの殻をむいている。

迷宮都市、特に卸売市場で売られている食材は、食べやすいように小分けになどしていいない。家族で食べきれる程度の鳥ならば一匹丸ごと売られているし、大物であっても骨付きの塊でドカツと売られている。各家庭で捌くことが多いから、解体スキルもちの女性は嫁の貰い手に困らないと言われるほどだ。

(さっすが、シェリーちゃん)

剥かれたブラスト・ロブスターのワタを取り除き、引き締まった肉を筋きりしながらマリエラは、シェリーの女子力の高さに慄いていた。ちなみに普段全く料理をしないエルメラは子供たちの奮闘を眺めてキャツキャと喜びながら、堅いパンをすごい勢いで摩り下ろしパン粉を大量生産している。アンバーが何やら計算しながらパンを取り出しているから、この機にパン粉を量産するつもりだろう。

「きゃっ」

「ご、ごめ、ごめんなさ……」

ブラスト・ロブスターの殻がうまく剥けないエリオに、シェリーが教えようと手を触れたとき、強めの静電気が当たったらしい。

「大丈夫よ、びっくりしただけだから」

そう言って慰めるシェリーだったが、エリオの方は大きな瞳に涙を一杯に浮かべている。

「ごめ、なさ。ぼく……。おねちゃ、きらいにならないで……」

今までちよつとした接触で静電気を飛ばしてしまい、友達をなくしてきたのだろう。今にも泣き出しそうなエリオを見てシェリーは。

「……、かわいい……」

(……シエリーちゃんは、紛れもなくニーレンバーグ先生の娘だわ……)
マリエラは、このときシエリーとニーレンバーグの共通点が黒髪だけではないことを確信したのだった。

多少のハプニングはあったものの、エリオが小麦粉、卵、パン粉を順に付けて自分の手まで揚げる前のフライみたいになっている間にシエリーがスープを作り、パン粉の大量作成が完了したエルメラがシュビビビと音がしそうな勢いで葉野菜を空中でみじん切りにしていた。アンバーがサラダを盛り付け終わった頃に、プラスチック・ロブスターを一匹丸ごとフライにした「王様のエビフライ」は完成した。

パンの大半がパン粉に変わってしまったので、ピラフも炊いて大きな器に載せてある。Aランク冒険者フードプロセッサーというのは実に便利だ。みじん切りがあつという間で、凄く短時間で出来た。

料理の完成を見計らったように、エルメラさんの旦那さんが『木漏れ日』を訪れた。エルメラさんとお似合いの、とても優しくそんな人で眼鏡をかけているところまでおそろいだ。なぜかガーク爺まで一緒にいる。

どうしたのかとマリエラが声を掛けようとしたとき、エルメラさんが嬉しそうにこう言った。

「あなた！ お爺ちやま、お帰りなさい！ お爺ちやまも一緒に夕食飯をいただきますよ！」

驚きだ。いや、言われてみればものすごく納得がいくのだが。エルメラさんはガーク爺の孫娘らしい。薬草マニアはガーク爺譲りか。

そして、なによりも。

「お爺ちゃま!?!」

「……うるせえ。エル、オメーもいい加減その呼び方ヤメロ」

噴出しそうなマリエラをじつとりと見ながら自分の店に帰ろうとするガーク爺に、二つの影が飛び掛る。

「じーちゃん!」

「じいじー!!」

「うわ、パロワ、エリオ! エリオはその手で抱きつくんじゃねえ」

大混乱の『木漏れ日』にジークとリンクス、エドガンも帰ってきて、嵐のような夕食になった。

大勢ででっかいエビフライに齧り付く。いや齧りついているのはリンクスと二人の少年くらいのもので、あとは一口サイズに切り分けて食べている。

ブラスト・ロブスターは肉の味が濃くたいそう美味だが、そのまま揚げると身が引き締まりすぎて少々堅くなる。レシピ通り筋切りをしたお陰で、程よい噛み応えを残したまま口の中でほろほるとほどけて、衣に包まれて濃縮された旨みを存分に味わうことが出来る。ブラスト・ロブスターは美味しい。とんでもなく美味しいはずなのだが。

「この人ったら、いつつも私がいないと退屈だ、退屈だって言うの」「キミはいつだって刺激的だからね」

「いちゃいちゃいちゃいちゃ」

(なんだろう、半分も食べてないのに胸焼けが……)

人目を憚らずいちゃこらし、「アナタ、はい。あーん」だとか「ソースがついてるよ。ペろり」だとかやり出すシール夫妻。

マリエラは目のやり場に困ってもつちやもつちやとエビをいつまでも噛み続けているし、リンクスはいつもより早い速度で食い散らかして、すでに三匹目に突入している。ジークはマリエラの口元にソースがついていないかチラチラ見るが、今日のマリエラはお行儀よく食べていてソースはついていないから、仕方なく自分の口元にソースをつけて、全員にスルーされている。

エドガンに至っては、堅すぎて普通は残すエビの尻尾をバリバリと噛み砕いていて、口の中はきつと血だらけだろう。「爆せろブラスト、爆せろブラスト」とブツブツいついてちよつと恐い。

「マリエラさんは優秀な薬師でね」などとエルメラは夫ヴォイドにマリエラを紹介しているのだが、二人の世界過ぎて入り込めない。二人の息子は慣れているのか子供だけで盛り上がっている。

「エドガンさんは双剣、リンクスさんは短剣、ジークさんは片手剣で今は38階層でサイクロプスを狩っているんですって」

エルメラの話をつんつんと聞いていたヴォイドだったが、ジークの話で少しだけ止まる。

「ん？ 片手剣？ 弓を使っているように見えるが……」
そうポツリともらした。

なぜわかるのか。急な指摘に僅かに体をこわばらせるジーク。

「いや、僕も昔は少しだけ冒険者をしていてね。身のこなしや筋肉のつき方、雰囲気からその人の武器を当てるのが得意なんだよ」

少しだけ気まぎれになった空気を払拭するように、ヴォイドはこやかに答えた。

「君は左右で腕の筋肉のつき方が違うからね。勿論片手剣だからと
いうのもあるのだろうけれど、弓特有の肉付きがあつてね」

「利き目をやられまして、剣に変更を」

ヴォイドの説明を遮るようにジークが説明する。

「ン？ 片目でも狙えるだろう？ 利き目を変えるのに手こずりはするだろうが、体はそう忘れるものでもあるまい。一から剣術を身につけるよりはよほど容易いのではないかな」

言いたいことを察したジークが視線を逸らすのをみて、ヴォイドは、

「いや、高位の冒険者に余計な詮索をしてしまったね。気を悪くしたなら謝るよ」

とだけ言うと、再びエルメラとの他愛の無い会話に戻っていった。

その夜、ジークはしまいこんでいた練習用の弓矢を取り出し、自室で一人眺めていた。

ヴォイドが何を言いたかったのか、ジークは理解している。

「弓を使えないのではなく、使わない」のだと、そう言われたのだ。

(あの頃のことは、思い出したくない……)

精霊眼という強い加護に頼りきっていた自分。弓以外の闘い方を、魔力で体や武器を強化するやり方さえも知らなかった。誰かに頭を下げ、教えを請うということが耐え難かった。誰に師事しなくとも、獣相手の弓矢で十分魔物は倒せていたのだ。

「そんな普通の武器でよく魔物に挑めるな」

そんな事を言われるたびに、自分の力量が優れているのだと受け取って、気をよくした。今ならばわかる。対する魔物に見合った武器や防具を揃えるべきだと忠告されていたのだと。

稼いだ金はあつという間に消えていった。良い武器や防具の代わりに戦いの役には立たない洒落た服や靴を買い、贅沢な酒や料理につき込み、派手に遊ぶ。

精霊眼を持つ選ばれた自分、優れた自分が魔の森の辺の辺鄙な村の出身だと、田舎者だと思われたくなくて、流行と聞けば惜しげもなく金をつぎ込んだ。

精霊眼を失った後の事はさらに思い出したくもない。

依頼数さえこなせばAランクに届く。そう思っていたのに、精霊眼無しのの自分はCランクでさえ怪しかったのだ。Bランクだと逆上のせ上がって虐げてきた仲間たちよりも弱いなどと、認めたくは無かった。

だから「精霊眼が無いから弓は使えない」そう思い込んだのだ。

(けれど今は)

ジークは弓矢を再び棚にしまいこみ、ミスリルの剣を鞘に納めたまま掲げる。

身体強化も使えるし、武器に魔力を流す事だつて出来るようになった。肉体の運動能力だつてあの頃よりはるかに向上している。弓を使わなくとも、Aランクに届くのだ。

精霊眼など無くとも、あの時の自分を越えたのだ。あの時の愚かで駄目な自分ではもうないのだと、だから弓が使えなくても良いのだと、ジークはそう考える。

その日ジークは刀身に映る自分を見ることなく、剣を鞘から抜くことなく眠りについた。

今刀身に映る自分を見てしまったら、きっと気付いてしまうから。それが未練で。逃避で。今尚自分が情弱なままであることに。

シール夫妻（後書き）

今回のあらすじ：ジーク、3歩進んで2歩さがる

春霞（前書き）

ジヤ注意。後書きにあらすじあります。

春霞

空は青いものだと思っていた。

霧が出ているわけではなく、ただ薄い雲が辺り一面に白く垂れ込めていて、近くの景色ははっきりと見えるのに遠くの山々だけが霞むように滲んで見える。

春霞にけぶる遠景はまるで幻のようで、どれほど竜馬を駆り走らせてもたどり着く事は出来ないように思える。

まるで、「お前は何処にも行く事などできないのだ」と、「迷宮から逃れる事はできないのだ」と、そう言われているような気分させられる。

春霞にけぶる空を見上げて、レオンハルトはふとそういう風に思った。ずっと迷宮にばかり籠っていたせいだ。空を仰ぐなど、ついでなかつたことだ。

レオンハルトの手元には黒鉄輸送隊が届けた一通の書状があった。彼の息子からの私信だ。特に秘する事のない子が父に宛てた手紙には、誕生祝に贈った剣への礼や、早く迷宮都市に来て父上と共に迷宮を倒したいといった内容が書かれていた。レオンハルトは長らく会っていない息子の事を想う。

自分の子供の頃にそっくりな顔立ちのわが子は、レオンハルトのスキル『獅子咆哮』を発現してはいなかった。もとよりレアなものだから、レオンハルトの父も祖父も持つてはいなかったし、息子に発現しなくても不思議は無い。この手のスキルは直系に受け継がれやすいから、レオンハルトが引退した後のシューゼンワルド辺境伯家は息子が継ぐことが決まっている。それはつまり、迷宮討伐を

も受け継ぐと言うことだ。

それが、レオンハルトには酷に思える。

『獅子咆哮』の有無以前に、彼の息子は戦闘に向いていないと思うからだ。

決して弱いわけではない。レオンハルト同様に身体能力は高く魔法の才能も持っている。現在は迷宮都市を離れ、レオンハルトの父の指導の下、勉学と訓練に励んでいて、このまま順調に行けばAランクほどの戦力に育ちうるだろう。けれど、定期的に届く報告書を見る限り、彼の本当の才能は内政にこそ発揮されると思うのだ。迷宮などなければよい領主になっただろうと思えるだけに、惜しいと思ってしまうのだ。

シューゼンワルド辺境伯家にとって、民の暮らしを守ること、皇帝の臣として帝国に仕えること、迷宮を滅ぼすことはすべて同義で使命であると認識している。特にレオンハルトは『獅子咆哮』を持って生まれた事もあり、幼い頃から迷宮を滅ぼすことに特化した教育がなされた。それになんら思うところは無い。それが当然だと育てられてきたからだ。

幼少の頃婚約した相手と婚姻して血を残すことも、課せられた使命、仕事の一環のように感じていた。

息子をその手に抱くまでは。

ふにふにと軟らかく力の無い体。頭蓋さえ軟らかく、首が据わっていないという脆弱さはレオンハルトの理解の範疇を超えていた。弱すぎて怖いという未知の感覚に赤子を乗せられた腕を微動だにできなかつたほどだ。言葉など通じないし、すぐに泣く。折角乳を飲ませたのに、げっぷをさせるとすこし吐く。飲んだ分は驚くほどの速度で排泄する。いや、大の大人であっても酒を飲みすぎたときは吐く者もいるし、飲んだと思ったら廁へ向かうから、そこは理解で

きなくもないのだが。

けれど、ひどくあたたかい。

熱いと思えるほどの体温に、産着を通して伝わる熱量に、物凄いエネルギーを、可能性を感じる。

「すごい」と、純粹にそう思った。これが命かと。生きる力がこの小さな体の中で燃えているのだとそう感じた。

生まれたばかりの我が子に、より良い世界を残してやりたいと強く思ったのだ。

あの時感じた熱量は、未だにレオンハルトの体の芯に残っている。「迷宮をこの手で」

その呟きの前に、“叶うならば”と付けそうになって、レオンハルトはしばし瞑目する。そんな弱い気持ちでどうするのだと。

「叶えてみせる」
そう呟いて拳を握るレオンハルト。

春霞の空は何処までも白く、先が見えない。

はつきりと見えるのは、歩いていけるような近い景色ばかりだ。

(けれど立ち止まるわけにはいかぬのだ)

レオンハルトは、ウェイスハルトが立案した作戦を認可して、召集令状にサインをしたためた。

「破限、雷帝、よくきてくれた。助力感謝する」

迷宮討伐軍の召集に応じて現れた、『破限』こと冒険者ギルドマ

スターのハーゲイ、『雷帝』エルシーこと商人ギルド薬草部門長のエルメラと堅く握手を交わし、レオンハルトは深い謝意を伝える。迷宮討伐軍の会議室には、先に到着していたディックを入れて3人の協力者が集まっている。結局Aランク以上の迷宮都市の最強戦力であたる以外、方策は見つからなかったのだ。

チームの戦力を上げるレオンハルトの『獅子咆哮』には発動条件があつて、自分以上のランクには能力を強化できない。レオンハルトはSランクとして登録されているが、其れは『獅子咆哮』あつての事で個人の戦力としてはAランク。

今回のターゲットは歩く火山の守護者である赤竜。恐らくはSランクの上位に位置するであろう、空飛ぶ魔物と溶岩大地という不利なフィールドで、レオンハルトと8名のAランカーらが、かさ上げ無しの自分の戦力で戦うことになる。

階層階段付近の安全地帯でニレンバークら治癒部隊が控えているし、上級の各種ポーションも取り揃えてはいるが、けが人が出たとして赤竜の攻撃をかいくぐって救助を行える可能性があるのはニレンバークくらいのもだろう。

勝算は低く、死人が出る確率のほうが高い。それでも彼らは集まってくれた。

「こつという時のために、あいつ等だけでギルドを回せる様に育ててきたんだぜ？」

「家族が平穩に暮らせる街にしたいですもの」

そう応えるハーゲイとエルメラ。ディックは黙って頷いている。

「それでは、赤竜及び階層に関する情報と、作戦について説明しよう」

ウェイスハルトが資料を広げ、作戦会議が始まった。

赤竜との戦いは明後日。

ここに集まったAランカーたちは、明日1日をいつもと変わらず過ごすのだろう。決戦日の早朝、家族にはいつもの様に迷宮に仕事があると思わせるはずだ。

口外するなと命じられたわけではない。

迷宮のある街で、戦いを生業としているのだ。

万一のことが起こることさえ、迷宮都市での暮らしの一部だ。

だから、明日はいつもより少し日常を大切に過ごして、決戦に備える。

ギルドの幹部らは十分育ってる。もう卒業だぜと、ハーゲイは思
う。

俺に何かあったら……、怒り狂うワイフの姿が思い浮かんで二カ
ツと笑う。

夫と子供たちの姿をエルメラは思い浮かべる。

ずっと一緒に居たいけれど、それ以上に自由な未来を用意するの
が務めだと雷帝の顔で決意する。

アンバーを解放出来てよかったと、ディックは思う。

いつの間にか『木漏れ日』の従業員に納まっている彼女だ。一人
でもきつとやっていける。あんなに胸部装甲ばかり見ていたのに、
こんなときに思い浮かぶのは彼女の笑顔ばかりだ。

三人は、それぞれの思いを胸に、最後の1日になるかもしれない
大切な日常へと帰っていった。

(眠れねエ)

帝都へ向かった黒鉄輸送隊は一昨日の夕刻に迷宮都市に到着した。輸送組に入れられたジヤの仕事は、昨日は最低限のラプトルの小屋掃除だけで後は休日をもらって寝こけていた。今日も仕事をサボっては居眠りばかりしていたから、腹いっぱい夕食を掻き込んだ後も眠くなつては来なかった。

今日の夕食は塩分が多めで、食べたときは旨かったのだが、後になると咽が渴いてきた。水でも飲もうと寢床から這い出すジヤ。

拠点の大部屋では黒鉄輸送隊のメンバーが集まっているのか話し声が漏れ聞こえてきた。

「たいちよー、ジークがAランクになったらさ、奴隷解放の保証人になつてくんね？」

「ジーク？ ああ、あいつか。構わんが、Aランクか。死に掛けてたあいつがなあ」

頼んでもいないのにハーゲイが保証人になると言い出して、チームハーゲイに入れられるんじゃないかと困惑しているだとか、Aランクの条件を満たしたら祝ってやるから連れて来いだとか、拠点で交わされているのは、そんな大した価値も無い雑談ばかりだ。

しかし、ジヤにとっては。

(奴隷解放？ ジーク？ 死に掛け？)

拾い聞いた噂話に、退屈していたジヤの思考は加速する。

(何だ何の話だ？ ジーク？ 知ってる。アイツだ。リンクスと小娘と一緒にいる片目のヤツだ。いいエモノ武器を持つてるアイツがドレイ？ シニカケ？)

ぐるぐると聞いた言葉がジヤの頭の中を駆け巡る。その時思い出したのだ。

汝、ジークムントよ！ 魂から服従せよ！

レイモンドの奴隷商館の裏庭でラプトルの世話の合間に見た隷属契約の儀式を。

（あ！ あ！ あ！ ア！ アアアアアアアアアア！！！！

アイツ、アイツだ。アイツだったんだ。死んだと思ってた。いや死ぬはずのヤツだ。そういうのを仕入れてんだよ、レイモンドの旦那は！ 見せしめのために！ だから生きてるはずがネーんだ。治癒魔法も効かねーくれえ弱っちまった死にぞこないなんだから！ なんだだ、なん……ア、アアアアアア！ いるじゃねえかよ！ 錬金術師が、この街にも！ あいつがだ！ 死にかけを買いやがった、あの小娘が！！！！）

ジヤはさして賢い男ではない。物事を網羅的に考える論理的な思考の持ち主ではない。断片的に聞きかじった情報を一つにまとめて結論付けたりなど、賢い者であればしはしないだろう。

けれどジヤは愚かで、短絡的で、だからこそ暴論ともいえる理屈で結論付けてしまったのだ。

マリエラが錬金術師だと。

そしてそれは、図らずも真実であったのだ。

（あんどき、あの小娘が、死に掛け野郎じゃなくオレを選んでりや、野郎のエモノも境遇も全部オレのモンだったのに……）

妬ましい、恨めしい、羨ましい。

ジヤの怨嗟の思いは尽きず、自らの不運の元凶を妬ましく恨みや

すい他者に押し付ける。

(アイツが……、あの小娘がオレを選ばなかったせいで、オレは……!!!!)

春の空は、曇天が続く。雲が重く重く立ち込める空模様からは、
雨の香りが漂ってきた。

春霞（後書き）

今回のあらすじ：Aランク集めて赤竜対峙することだ。あと、ジヤ
がマリエラが錬金術師だと気付いた。

雨の日に

ざあざあと、外は雨が降っていた。けれど迷宮の天気は外の天候に左右などされない。

23階層『常夜の湖畔』はルナマギアの生息地で、大小さまざまな湖と木々の隙間を縫うせせらぎの階層に雨は降らない。

さらさらと岩の隙間から流れる水、岩を伝うように落ちるこの水に、降りしきる雨は流れ込んでいるのだろうか。水中一面に生えた水苔のせいで深さの推し量れない水面に落ちないように気をつけながらマリエラは、十分月光石の光を貯えたルナマギアを採取していた。

「忙しいのにごめんね」

「気にすんなよ」

「マリエラの護衛が最優先に決まっている」

申し訳なさそうに謝るマリエラに、気にするなと手を振るリンクスとジーク。

アグウィナス家の騒動からしばらく減少していた上級ポーションの注文だったが、日々ケロリとしてポーションを作り続けるマリエラの様子に、『仮死の魔法陣の影響で急逝する予兆は今のところ無し』とニールンバークは報告をし、日に百本の買取が再開されている。

攻略済みの階層に蔓延^はる魔物を討伐することも迷宮の力を殺ぐ方法だから、最深部の攻略に参加できない迷宮討伐軍の兵団はそれぞれ能力に見合った階層で日々魔物の討伐にいそしんでいる。当然

ポーションは消費されていくので、上級ポーションの注文量を抑えた状態では迷宮討伐軍のポーション備蓄量は横ばいだった。

もともと迷宮都市に残されたポーション瓶の在庫量は5千本を上回る程度で、この半年の間にほとんどがポーションで満たされて空き瓶の残数は残り少ない。最近では、アグウィナス家の地下にあるポーション保管設備を再稼働させ、樽に収められた上級ポーションが運び込まれては、保管設備の巨大タンクへと移し替えられている。

ちなみに運搬容器に使われている樽はポーションが100本分入る程度のサイズで、ポーション瓶同様に劣化防止の魔法陣が刻まれているのだが、数日という酷く短時間しか効果が続かない。時間が経つと刻まれた魔法陣が消えてしまい、更に時間が経つと枝や根が生えてくるのだ。

再びポーションの管理者としての務めを得たアグウィナス家であったが、任されているのは管理だけでポーションの所有権は迷宮討伐軍にある。保管設備の稼働に必要な魔石も迷宮討伐軍から提供されるため、場所を貸しているといったほうが正確な状況だ。この状況を知っているのはキャロラインの父ロイスと老いた家令だけで、ポーションの出所の詮索をしないことも含めた強い誓約魔法を課せられている。何れキャロラインが夫を迎えアグウィナス家を継いだ後は、秘密と誓約をも継ぐのだろうが、せめてそれまではこれ以上余計な重責を負わせたくないというロイスの親心でもあった。

そういつた事情はマリエラには知らされていないし、1日100本の上級ポーションの納品は強制事項ではない。唯一人の錬金術師に万が一があつては困る、という本音もあるのだろうが『無理の無い範囲で』と口を酸っぱくして言われている。それでもマリエラは毎日100本の上級ポーションを作る。それも100本まとめてではなくて、1本ずつ100回。アンバーやニーレンバーグ親子が『木漏れ日』に常駐する事で空いた時間を使って何回も何回も同じ作

業を繰り返す。

お金が欲しいわけではない。今まで受け取ったポーションの代金は既にマリエラの理解の範疇を超えていて『いっぱい』すぎて数えられない。

もう少しの気がするのだ。もう少しで、道具を一切使わずに上級ポーションを作れるようになる。

マリエラの『ライブラリ』の解放条件は『道具を使わず錬金術スキルのみでポーションを作成する事』。

特級ポーションが作れるようになれば、ジークの眼だつて治せるかもしれない。Aランクになって自由の身になるお祝いにこれ以上の物は無いだろう。

だからマリエラは時間も魔力もかかるけれど1本ずつ繰り返し上級ポーションを作りまくっていた。

しかし残念な事に、1万本近い上級ポーションを作ってきたせいで、迷宮都市のルナマギアが品薄になってしまった。前回リンクス達と採取したルナマギアなどとうに無い。

マルローに依頼して掻き集めてもらってはいるけれど、次の納品は三日後で、手持ち無沙汰になってしまう。だから、討伐の合間にもとリンクスとジークに頼んでみたところ、二つ返事で引き受けてくれたのだ。

依頼料を払うといったのに「リザードマンの素材あるしなー。んじゃ、晩飯オゴリな」という気前の良さだ。丁度、黒鉄輸送隊が迷宮都市に戻ってきているらしく、今回もラプトルと荷物持ちまで連れてきてくれた。

荷物持ちの男、ジヤにもお礼を言おうとしたマリエラだったが、濁り腐ったどぶの澱みのような青い目でジロジロとマリエラを見るジヤに、声を掛けることが出来なかった。

（あの人……、ジークと会った日にレイモンドさんの奴隷商館でラプトルのお世話をしていた人だよな？）

ジークの瞳は綺麗で見ているとなんだか懐かしい気持ち湧き出てくると言うのに、ジヤの目はあまり見ていたくない。ほとんど接点は無いはずなのに、ひどく恨まれていたような気がして、マリエラはジヤから離れ、ラプトルを連れてルナマギアの群生場所へと進んでいった。

マリエラの事をぶしつけな目で観察していたジヤだったが、マリエラに対して何かしたり、近寄ろうとさえしなかった。彼女が何もので、手を出せばどうなるか理解しているからだ。

「おい、ジヤ、こっち」

リンクスに言われるまま、前回同様のろのろとリザードマンが落とした魔石や皮を拾い、少し離れた場所でマリエラはルナマギアを採取しては乾燥させてラプトルの背に積んでいる。

「ゲギヤー」

水頂戴と甘えた声を出すラプトルにマリエラは「少しだけだよ」と両手を器の形に合わせて水を与える。この階層は何処もかしこも水ばかりなのに、マリエラの水がいらいらしい。このラプトルは迷宮都市での脚として飼われていて、リンクスと一緒に『木漏れ日』にやってきては裏庭で寛いでいる。いつも魔力の籠った水をあげているせいか、マリエラにとても良く懐いている。

さらさらと流れる水の音、遠くに聞こえる滝の音、時折リンクスやジークが倒したりザードマンの断末魔が聞こえる以外は会話もない。

空気が冷えている事もあるのだろう。この前来た時は外よりもこの階層のほうに暖かく感じられたのだが、春が来て今ではこの階層のほうが薄ら寒い。

(冷えてきちゃった。あと少しだけ回収したら帰ろう)

かじかむ手のひらを擦り合わせてマリエラは採取を再開する。

そして、気付いた。静かだと。

リザードマンの声が聞こえてこない。

「ジーク、リンクス」

二人に声を掛けようとした丁度その時、近くのせせらぎの水が迫り上がるようにして、それらは現れた。

「では、行くか」

レオンハルトが集まった冒険者と、迷宮討伐軍の精鋭達に声を掛ける。

マリエラ達が23階層でルナマギアの採取を始めて暫らくした頃のことだ。

熱に弱い装備の物はバジリスク革の装備に換装しているが、ここに集まる者の多くは、身に馴染んだ高価な装備を持っているから、普段の装備に追加されたのはワイバーンの肺をフィルターに使ったマスクだけだ。

高温からはウェイスハルトの氷魔法で防御する予定で、サポートに徹するウェイスハルトには迷宮討伐軍のAランクの盾戦士が付く。

火山の歩みは遅い。遠方に移動しているタイミングで突入すれば、すっ飛んできた赤竜だけを相手に出来るはずだ。溶岩地帯というフ

イールドの悪さを氷魔法のサポートで緩和しつつ、先に赤竜1体を相手取る作戦だ。火山が十分遠くに移動したのを確認し、突入の合図を出す。

《アイス・フィールド》

ウェイスハルトが全員に弱い氷魔法をかける。対象を冷気で包み込みゆつくりと凍りつかせる魔法であるが、今は灼熱の大地から皆を護っている。勿論高速で動き回る10人の戦士達に切れ間なくかけ続けなければいけないからウェイスハルトには攻撃に参加する余裕などは無い。

「ギヤオアアア」

自らのテリトリーに侵入してきたムシケラを踏み潰そうと赤竜が火山の噴火口から飛び出し、恐ろしい勢いで飛んでくる。

竜種の特徴の一つに、個体差が大きいことが挙げられる。

人にしろヤグーにしろ他の魔物にしても、体の大きい小さいや体色の差という物は当然ある。しかしある程度の範囲があつて、平均と呼べるサイズや色形がある。しかし竜種に限ってはまるで別の種族かと思えるほどに形も大きさも能力にも差が大きい。個体の総数が少ないためまとめて竜種とされているだけで、戦闘能力に関しても個体差が大きいことが特徴だ。

そしてこの赤竜、形状こそは2枚の翼を持った飛竜であるが、サイズはワイバーンなどとは比べ物にならないほどに大きい。ワイバーンは馬より大きい程度であるが、そのワイバーンすら一口で食せそうなほどの巨体である。表皮は熱を持った溶岩のように赤黒く、見るからに分厚く強靱だ。恐らく重量も相当にあるのだろう。2枚の翼を広げると体長よりも長く、風を受けて翼膜が張っている。小さくはない翼だがこれだけの重量を支えられるとも思えないし、細

かく羽ばたく様子も見られないから魔法と翼を併用して飛翔するタイプなのだろう。

竜種の中には千年もの時間を生きる個体もいるそうだが、この赤竜は200年も生きてはいない、若い個体と言えるかもしれない。けれどこれだけのサイズに成長しているのは、迷宮に満ちている魔力のなせる業かもしれない。

「クッ」

相対する事で実感する強者の威圧に誰とはなしに声が漏れる。けれど立ちすくむわけにはいかない。

高速で飛翔し高所から放たれるブレスに向けて、ディックが何本も背負った槍の1本を放つ。愛用の黒槍ではない。この戦いのために作られたミスリル製の槍だ。

《飛龍昇槍》

《ウインド・ストーム》

ディックが槍のスキルで放った一撃に、レオンハルトほか風魔法が使えるものが魔法を載せる。魔法と相性の良いミスリルの槍を中心に激しく渦巻く風は竜巻のようで、この槍撃に触れた者はミスリルの槍に届くより先に風の刃でずたずたに切り裂かれるに違いない。けれどその強力な槍撃も赤竜のブレスには及ばないのだ。ブレスから僅かにそれる軌道で放たれた槍撃はブレスを削り、その熱でミスリルの槍が溶け切る前にその軌道を討伐隊から大きく逸らした。

ズ、ズズーンと、地響きを立てて56階層の大地に着弾すると共に吹き荒れる熱風。

赤竜は高度を変えず、巨体に似合わぬ急旋回を繰り返しながらに2発目、3発目のブレスを吐き、ディックの投槍がその全てを逸らしていく。

武器だけでなく魔法にも射程距離が存在していて赤竜はその射程に入っていない。赤竜のブレスはディックの槍で直撃しないが、槍も含めて赤竜に届く攻撃方法が存在しない。

「折角来てやったんだ、恥ずかしがらずに降りてきていいんだぜ！」
ハーゲイや迷宮討伐軍の戦士達は、盾に剣の鞘をぶつけてガンガンと音を出し、挑発するくらいしかすることが無い。

「つーか、前時代的な作戦なんだぜ？ 絵本なんかに出てきそうだぜ」

最初こそ、強敵の気配に息を呑んだハーゲイだったが、赤竜は頭上を旋回しながらブレスを飛ばしてくるばかり。そのブレスもレオンハルトと魔道師の風魔法を乗せたディックの槍が軌道を逸らすから当たりはしないし、溶岩台地のダメージはウェイスハルトの氷魔法が防いでくれる。

赤竜が地上に降りてから仕事が始まるハーゲイや二人の戦士職は手もち無沙汰もいところで、赤竜の挑発に勤しんでいるところだ。はるか昔の幼い日、戦士が盾を打ち鳴らしてドラゴンを挑発する物語を読んだことがあるんだぜ、などと暢気なことを考え始めたとしても仕方がない。

もちろん、言葉を理解しているかわからない赤竜に「やーい、羽虫。お前の母ちゃん、超短足！」なんて罵倒を言い出さないだけの緊張感は残っているのだが。

挑発されている事に気がついたのか、ハーゲイらの様子に隙ありと見たのか、それとも光物を集める習性があるのかはわからないが、赤竜はもう一発ブレスを吐くと、ハーゲイらめがけて急降下を始めた。

赤竜は巨大で翼も大きい。急降下後一撃を加えて再上昇するつも

りなのか、それとも地に下りて闘うつもりなのかはわからないが、あの巨体が接近しただけで風圧で吹き飛ばされそうだ。

風に飛ばされないようにするためだろうか、ハーゲイは腰の予備の大剣を抜くと地面に突き刺し、そして叫んだ。

「雷帝！ いけるぜ！」

《天雷》

赤竜が雷帝エルシーの射程圏内に入るや、ハーゲイほか戦士達は大きく跳び退り、この階層に降り立って以来詠唱を続けていた雷帝エルシーの大技、《天雷》が赤竜の体を貫いた。

遮るもの

「こんにちは。ほら、エリオも挨拶しな」

「こ、こんにちは」

「おや、かわいいお客さんだね。雨の中お使いかい？」

『木漏れ日』にエルメラの息子パロワとエリオがやってきた。薬味草店のメルルさんに声を掛けられて、内気なエリオはもじもじと兄パロワの後ろに隠れてしまう。

二人をみてシエリーが、

「あら、いらつしやい。今日は何の本、読もうか？」

と声を掛けるとエリオは嬉しそうにコクコクと頷いてシエリーのいる店の隅へと走っていった。

「エリオが遊びに来たといっていうから」

買物でも無いのにお店に来た事を申し訳なく思っているのか少し小声で話すパロワに、

「アタシだって、用も無いのに来てるからね！ ほれ、遊ぶ前に『乾燥』！ お菓子でもあげようかね」

とメルルは勝手知ったる『木漏れ日』でお茶とお菓子を準備するのだった。

「今日は、お父さん一緒じゃないの？」

「うん、とーさま、急にお仕事だった」

「私のパパもよ。あと、マリエラ姉さまもジークさんも留守なの。そんな話をする二人。静電気を飛ばしてしまったのに、避けるどころか一層可愛がってくれるシエリーと遊びたいとエリオが駄々をこねたのだ、とメルルさんに入れてもらったお茶を飲みながら話す

パロワ。

話を聞くメルル、アンバー、キャロラインの瞳がらんと輝いている事に、いたいけな少年は気付かない。

「そういえば、この前リンクスがマリエラちゃんと二人で夕食にいつたらしいじゃないかい」

「そうよ、『ヤグーの跳ね橋亭』で働いてた頃お客に連れてって貰った、私のオススメのお店なの」

「まあーあ！ ついにリンクスさんが動きましたのね！」

「そういうキャル様はどうなのさ、ウェイスハルト様と」

「ウェイス様？ いつも部下の体調を心配なさる優しいかたですわね」

「……、この子達って……」

女性三人の会話に参加しないほうがいいと本能的に察したパロワは、「お姫様の出てくるお話がいい」とブーたれているエミリーの相手をするべくそっと席を離れた。

外は雨が降っていて、通りの石畳や天窓を打つ雨の音はひときわ大きい。

いつもと変わらない『木漏れ日』の中にだけ、外界から切り離された穏やかな空間が広がっていた。

迷宮第56階層の溶岩台地は、雷帝エルシーが電撃を放った瞬間、真っ白に染まった。

余りの放電量に瞼を閉じていて尚、視界が烧けるようだ。

鼓膜を破るほどの轟音。ハーゲイが付き立てた避雷針代わりの大剣に落ちた《天雷》は、大地を揺らし地響きを立てる。揺れる大地がこの技のすさまじさを物語っている。

《天雷》を受けた赤竜は体のあちこちから煙を噴出しながら体勢を崩し、大地めがけて落下していった。

「やったか!？」

問う兵士にレオンハルトの指示が飛ぶ。

「まだだ! 火山に住まう竜だぞ。痺れて動けん今のうちに止めを刺すぞ!」

地響きを立てて落下した赤竜めがけて駆け出す一同。レオンハルトの言葉通り、赤竜の落下でダメージを受けているのは赤竜を受け止めた大地ばかりで、赤竜自身は所々焼け焦げ煙を上げて他は、外傷らしきものも見えない。ヒクヒクと動いているのは痺れて筋肉が引きつっているのだろうか。

雷帝の天雷がどれほどの時間赤竜の動きを封じていられるのかはわからないが、地に落ちている間に翼だけでも切り落とし、飛行能力を奪わなければ。

この赤竜にどれ程の知能があるかは知れないが、竜種の知能は総じて高い。人間との戦闘がはじめてであったから、盾を打ち鳴らす挑発からの雷撃が有効だっただけで、二度目があるとは思えない。

圧倒的な強さを誇る赤竜ではあるが、斥候や整備部隊への攻撃はブレスのみの単調なものだ。この階層には動きはするが頭すらない火山以外の魔物はいないから、赤竜は知的刺激を受けることなく過ごしてきた。戦闘経験のなさにこそ付け入る隙があるだろう。

この階層が開いたとき、いきなり噴出したガスに迷宮討伐軍が被害をこうむったように、初見だからこそ有効な手というものもある。

「急げ！ このまま倒しきるぞ！」

レオンハルトの叫びと皆の思惑は一致している。この赤竜が学習し複雑な攻撃を仕掛けてくる前に倒しきらねば。

だから、忘れていたのだ。

この階層には『歩く火の山』が存在している事を。

ド、ド、ド、ド、ド、ド、オツ。

何の前触れもなく、一度にそこらじゅうの溶岩溜まりから溶岩が吹き上がる。

こちらに向かってくる『歩く火の山』の歩みは遅く、距離はまだ遠い。けれどこの階層自体が『歩く火の山』の体の一部だということがある。

直撃を避けられたのは、Aランクの身体能力あつての事だろう。

急激に上昇した気温にウエイスハルトが施した氷の皮膜は瞬時に溶ける。

「グアツ」

運悪く大きく息を吸い込んだ戦士の肺を灼熱の空気が焼く。他の者も氷の皮膜が薄い手足にダメージを負っているのだろう。手綱や手袋で覆われた手足は地肌が見えず、焼けて爛れる様を見て取ることは出来ないが、ギリと奥歯を噛み締める表情が、皮膚が焼ける痛みを物語っている。

「《アイス・フィールド》、兄上！ ポーションを！」

「これしきの傷、後だ！ 先にやつを！」

再び氷の護りを得るや、一同は再び走り出す。周囲の溶岩溜まりからはマグマが間欠泉のように立ち昇り、溶岩石の雨が降る。高温のそれを防ぐほどの効力はアイス・フィールドには無く触れた場所

に深い火傷を負うけれど、そんな事に構ってはいられない。

魔法の射程に入った雷帝エルシーや魔術師は同時攻撃に向けて魔力を練り上げる。ディックも黒槍を掴み槍撃の構えをとり、レオンハルトやハーゲイは剣を手に飛び掛るために脚に力を籠める。

もう少しで、赤竜が近接攻撃の範囲にはいる。

もう少し、あと少し、そんな距離だったのに。『歩く火の山』による噴火がなければ届いていたはずなのに。

そんなタイミングで赤竜が目覚めるのは、迷宮の主の悪意によるものなのだろうか。

ブワツサと、ばい煙と熱気を迫りくる矮小なる敵に向けて放ちながら、赤竜は再び空へと舞い上がった。

《サンダー・ボルト》

《ストーン・ランス》

完全に射程から離れる前に、雷帝エルシーと迷宮討伐軍の魔道師が雷撃を、石の槍を赤竜に放つ。けれど十分に練り上げられていない攻撃は二人掛かりであっても先ほどの《天雷》と比べるべくもなく、地に落とされて怒り狂う赤竜の逆鱗に触れるだけだった。

赤竜の巨大な罅あひが開かれる。赤竜が飛翔する高度はまだ低く、こんな至近距離からではブレスを逸らすことなど出来ない。

「うおおおおっ！」

「とどけええっ！」

どンドン射程から離れていく赤竜にむけ、届けと剣撃を槍撃を放つ面々。せめてブレスの軌道だけでも変えられるものならばと。

けれど、彼らの一撃は赤竜に届くことなく、赤竜のブレスは雷帝エルシーを捉えて放たれた。

「雷帝！」

雷帝エルシーを護ろうとウェイスハルトがとっさに放った氷の壁は炎の前に紙切れのようにあっけなく消え去る。狙われた雷帝エルシーも当然退避行動に移っているが、着弾までに移動できる距離はブレスの範囲を超えるものではなかった。

（あなた、パロワ、エリオ……）

家族の幸せな未来を願って参加した雷帝エルシー、いやエルメラは何を思うのか。赤竜が放つ灼熱のブレスを前に彼女は何を見るのか。

ズズガアアアアアン。

至近距離で放たれたブレスはわずかばかりも勢いを失することなく、雷帝エルシーに着弾する。階層を揺るがすほどのエネルギーを持ったそれが至近距離で着弾するのだ。周囲の大地は吹き飛び、爆風が辺りを支配する。比較的近くにいた魔道師だけでなく、赤竜に飛び掛っていたレオンハルトやハーゲイ、ディックらの氷の護りは瞬時に消え去り、全身を熱風に焼かれながら吹き飛ばされる。

これほどの火力だ。万一直撃したならば人間など消し炭すら残るまい。

勝ち誇ったように咆哮を上げながら、更に高度を上げる赤竜。巨大な翼がはためく度に暴風のような風が吹き荒れ、着弾時の粉塵をかき消していく。

（雷帝……！！！！）

氷の守りを失い、吸い込んだ灼熱の空気に咽だけでなく肺の腑まで焼かれたレオンハルトやハーゲイ、ディックは血を吐くばかりで声など出ない。

それでも、雷帝エルシーの生存に一縷の望みをかけて、灼熱の大地を這い進む。

クレーターのようにへこんだブレスの着弾地点。

赤竜の翼が巻き起こす風で露わになったその地には、雷帝エルシーに覆いかぶさり護るように一人の男が立っていた。

背丈は平均よりは高い程度。服装はごくありふれた庶民が纏うもので、とても迷宮の最深部に見合うものではない。しかも手足の部分は焼け焦げて体幹部分しか残っていない。服は焼けてしまっているのに、手足には傷一つなく、そしてその肉付きは決して戦士の其れではない。そして何よりも。氷の護りも無いと言うのに、灼熱の大地のなか素足で経つ男には火傷一つなく、露わになった手足には日焼けほどの熱傷すら見受けられないのだ。

ひどく穏やかそうな面立ちの男は、ガラスが割れて歪んだフレームしか残っていない眼鏡の奥から、少し不思議そうに自らが庇った雷帝エルシーを見つめると、

「エルメ……ラ？」

と、あやふやな記憶を探るかのようについた。

「あなたっ！」

バリバリバツチーン。

最愛の夫、ヴォイドの首にかじりつく雷帝エルシー、いやもはや愛妻エルメラだろうか。昂ぶった感情のせいで電撃の制御が甘いのだろう。特大の「パチッ」が間髪入れずに襲った夫を襲う。

「……！！ ああ、思い出したよ。エルメラ。やはり、君は刺激的だね」

それは、物理的に痺れているだけですよね、と突っ込みを入れら

れる余裕のある者は誰一人いない。

赤竜のブレスは確かにエルメラを襲い、ヴォイドが助けた。しかしどうやって？ なぜこの男はこの階層で火傷一つ負わずにいられる？

そんな疑問に支配されるウェイスハルトにヴォイドが声を掛ける。

「アイス・フィールドを展開したほうがいい」

その指摘に我に返るや、全員に氷の守護を施すウェイスハルト。全員満身創痍ではあったが、素早くマスクを外して上級ポーシヨンを飲み干すと、何とか動けるようにはなった。

そうしている間にも赤竜はどんどん高度を上げ、もはや《天雷》すら届かない。

「ギイヤアアアオオオオッ」

その咆哮は苛立ちを孕んでいるようにさえ聞こえる。

自らを大地に落とした報復に、ブレスで消し炭に変えたはずなのに、誰一人殺せてはいないのだから。

ドウツ、ドウツ、ドウツ。

と、ブレスを乱射する赤竜。連射する分1撃の威力は小さいが、Aランカーを焼き殺すには十分すぎる火力だ。

《飛龍昇槍》

ディックの槍撃がブレスを逸らすが、ミスリルの槍は残り少ない。

《ウィンド・ストーム》

《アイスシールド》

魔道師の風魔法では十分な威力を得られず、多少威力をそがれたブレスを盾戦士が斜めに受けて逸らす。

たったそれだけの攻防で盾を握る左腕は酷い熱傷に見舞われる。

次弾をお見舞いしようと再び開かれる赤竜の罅^{アキト}。次は避けきれぬだろうか。

「撤退するならば援護しよう」

ヴォイドの声は爆音響く中、レオンハルトの耳に届いた。

（作戦は失敗だ）

レオンハルトは逡巡する。赤竜は再び天を舞い、降り注ぐ火炎の弾は以前と異なり細かく我々を狙っている。再び射程圏内に降下してくる可能性は低く、降りてきたとして、《天雷》の魔力を練り上げる余裕は無いだろう。

（しかし、ここで退けば……）

赤竜はこの戦闘で得た経験を元に更に強化されるだろう。再び挑み《天雷》を食らわせられたとして、耐性を付けているやもしれない。

ズシューーン、ズシューーンと火の山が近づいている。長期戦になれば、火の山さえも相手取らなければならぬ。

命を掛けて参戦してくれたハーゲイを、今まさに死に掛けた雷帝エルシーを、残り少ないミスリルの槍を握り締めるディックを見る。共に闘ってきたウェイスハルトを、迷宮討伐軍の兵士たちを見る。全員が戦況を解っている。このまま戦ったとしても、赤竜に届く攻撃が無い事を。

全員が解っている。ここで退けばどうなるのかを。

だからこそ、誰も諦めてはいない。ここで命尽きようと、倒せる可能性があるのならば闘い続けよう。

だからこそ、レオンハルトは命令を下す。

「撤退だ」

我々は、ここで、潰えるわけにはいかないのだ。

蛇の毒牙は（前書き）

鬱展開注意

蛇の毒牙は

「賢明だ」

撤退を指示したレオンハルトだけに、ヴォイドの声が届いた。階層階段に向けて走り出す一団を、逃すまいと赤竜のブレスが襲う。殿を務めるのは盾戦士とディック。赤竜のブレスを逸らし、はじいて護ろうと言うのだ。

赤竜が連続して吐き出すブレスは、慣れてきたのかどんどん間隔を狭め精度を上げている。ディックのミスリルの槍が尽き、盾戦士の盾が溶けて用をなさなくなったとき、すつとヴォイドが赤竜の前に出た。

「お、おい、アンタ」

思わずディックが声を掛ける。先ほど雷帝エルシーを助けた事は理解している。しかしどうやったのかはわからない。こんな階層を火傷一つなく素足で歩くこの男が、普通の市民のはずは無い。

だが、強者独特の雰囲気や、魔道師から感じる魔力のゆらめきをこの男からは感じない。

(どうしたって、一般市民としか……)

ぞわり。そう思った瞬間、全身が総毛だった。これほど熱い階層で。アイス・フィールドをかけられて尚、熱いと感じていたのに。

《虚ろなる隔たり》

ヴォイドの動きはまるで羽虫を追い払うようだと、ディックは思った。

彼が振った手の先に『何か』がすつと広がって、その範囲のブレは掻き消すように消えていた。

色でたとえるならば白と黒だろうか。純粋な白と純粋な黒。この二つが同時に現れるなど、自然界では余り見られないことで、そして相克の2色が小さな細切れモザイクのように同時にあるというのも、違和感しか感じなかった。

そして何より、見ているだけで墮ちていくような、一步も動いていないのに飲み込まれてしまうような、自分の肉体が裏返ってしまうような、不安で落ち着かない気分になる。

熱量も質量も厚みすら感じさせないその『何か』　これが《虚るなる隔たり》なのだろうが、其れに触れたとたんにプレスの質量も熱量も無かったように消えたのだ。

「さあ、早くいこう。余りここにいと、忘れてしまっそうだから何事も無かったようにヴォイドはディックをせかす。

《天雷》の爆音から漸く回復したディックの聴力は、その時ようやく、じゅう、じゅうと何かが焼ける音をヴォイドの足元から拾った。

(回復しているのか……)

ヴォイドはこの灼熱の階層にダメージを受けていないわけではない。受けた端から物凄い勢いで回復しているのだ。

(この能力……)

そこまで考えてディックは思考を放棄した。

ヴォイドと目があったのだ。ひどく穏やかそうな顔の男の、いつもは眼鏡に隠されたその瞳は、まるで《虚ろなる隔たり》そのものように見えたのだ。

「あなた、あなた！ どうして。平穩に暮らしたいって、だから私……」
赤竜のブレスを逃れ、階層階段付近の安全地帯に退避する一行。
ヴォイドに抱きついて泣きじゃくるエルメラにヴォイドは優しく語り掛ける。

「君のいない人生なんて、退屈で何の価値もないからね。それより、今日はもう帰ったほうがいい」
何処までも迷宮の最深部には似つかわしくない様子のヴォイド。
エルメラの、自分たちの窮地を救った男に声を掛けようとしたウエイスハルトをレオンハルトが制する。安易に声を掛けて良い相手ではないと。

「退避だ。拠点に戻るぞ」
階層階段付近は赤竜が飛んだまま入っては来られない程度には天井が低い。けれど獲物に逃げられ怒り狂った赤竜は先ほどから低空飛行を繰り返して、階層階段のある洞窟入り口にブレスを叩き込んでいる。

『歩く火の山』も近づいていて、何が起ころるか未だ予断は許さない。断腸の思いで撤退を決めたのだ。こんなところで被害を出すわけにはいかない。

一行は最低限の治療だけ行くと、転移魔法陣、地下大水道を經由して基地へと撤退していった。

最下層に集結した迷宮都市の最強戦力が、階層主どころか守護者さえ倒せないまま撤退する。

まるで、レオンハルトが石化の呪いを受けたときのように。

56階層を離れても赤竜の咆哮が聞こえるようだ。逃がさぬと。ここで葬ってくれようと。再びこの地を、迷宮を脅かすことが無い

ように。

其れは迷宮では良くある現象だ。弱り逃げ出す獲物に追い討ちをかけるように、強い冒険者がいたり冒険者が集まっている階層に通常よりも強い個体が出現するのは。

レオンハルトが石化の呪いを受けたときは、通常はCランクの魔物しか出ない30階層に、Bランクのクラーケンが異常なほど大量に湧いたのだ。冒険者はCランクばかりで人数は数十人ほどもいた。これらを倒しうる魔物として1ランク上のクラーケンが大量に湧いたのだらうと、対処に当たった雷帝エルシーは思っている。丁度海水の階層で、雷魔法との相性は最高だったから簡単にカタがつき、卸売市場はひどく賑わった。

そして今回は。

23階層 常夜の階層にAランクに届こうとする冒険者2名と、強力な魔力を持った錬金術師が偶然にも居合わせていた。

何が現れたのか、マリエラの目では捉えることが出来なかった。ただ、そこそこにある沢の水がせり上がってマリエラが見上げるほどに大きい何かは何体も出現した事だけはわかった。そして、最も近くに現れたモノがマリエラに向けて腕らしきものを振り下ろそうとした事も。

パン。

強く跳ね除けるような音がした。

ラプトルだ。体を回転させマリエラに振るわれた腕を跳ね除けたラプトルの尾は、ズタズタに裂けていた。ダメージを受けたのはラプトルだけで、ソレは跳ね除けられた腕をもう一度マリエラめがけて振り下ろそうと動き出す。

「ギャツ、ギャツ」

ラプトルは頭を低くして全く状況についていけないマリエラを掬い上げるように背に乗せると、リンクス達の方へ全速力で駆け出した。

「きゃっ、あうっ」

短距離とはいえ派手に揺れるラプトルの背にうつ伏せでくの字に乗せられたマリエラが振り落とされなかったのは、大量に積み上げたルナマギアの薬草にうまく埋もれたからだろう。追撃する爪がラプトルの尾を半ばから切り落すだけで済んだのは、飛び散る薬草が目くらましとなったからだろう。駆けつけたリンクスとジークの迎撃によって、マリエラは無事二人と合流することが出来た。

「マリエラ無事か!？」

「くそっ、何でこんな浅い場所にデス・リザードが湧くんだよ!」
リンクス、ジークの元にたどり着くなりラプトルからずり落ちるマリエラを、急いでジークが確認する。何処も怪我はしていないようだ。代わりにマリエラを助けたラプトルの尾は半ばから失われ、数秒の短い逃走にも関わらず限界を超えた疲労状態にある。

当然だ。デス・リザードはAランクの魔物だ。生じてすぐの意識があやふやな状態とはいえ、Cランクのリザードマンにすら及ばないラプトルが太刀打ちできる相手ではないのだ。けれどラプトルはマリエラに向けて振るわれたデス・リザードの腕を弾き飛ばし、マリエラを乗せて逃げ延びて見せた。

沢から次々と這い上がるデス・リザード。

リザードマンの上位個体であるはずなのに、退化したようにその背は丸まっていて、手足はひよろりと長い。けれど腕の数は4本もあり、関節は人も爬虫類とも異なっているのか四つんばいになって這い上がる様は蜘蛛か何かを思わせる。指は分かれておらず手足の先は鎌か槍の穂先のようにとがっているところが一層おぞましさを感じさせる。

顔は話に聞くワニという動物のように口先が長いが、その巨大な口は三つ以上に裂けていて、グアツと裂けるように上下二つに開いたかと思うと、何かを掴むように上下のどちらか、あるいは両方が左右に裂ける。個体によっては六つに裂けているものいて、何かをつかもうとするかのように閉じたり開いたりしている。それが手ではなく頭であると思えるのは、普通ならば耳があるであろう場所に瞳孔が3つも4つもある目が蠢いているからだろ。体色はどの個体も真っ白で、常夜の階層の月光石の光を受けて青白く見える。裂けた口や手足の先は出血しているかのように赤く濡れ光っていて、体の中心に向けて侵食するように白いからだの中を血管が走っているのが見える。

陸に上がったデス・リザードは二本の脚で立ち上がると4本の刃物のような腕をぎらつかせる。この爪が触れただけでラプトルの尾をズタズタにするほど鋭い事を、リンクスとジークは知っている。

「マリエラ、俺らが抑えてる間に階段を目指せ」

リンクスの指示に黙って頷くマリエラ。

自分が役に立たないどころか足手まといだとわかっているから大人しく指示に従う。ラプトルもマリエラを先導するように階段へと進み、その後をジヤも付いていく。

狩るに容易いエモノを逃すまいと飛び掛るデス・リザード。けれ

どその体を何本もの影の刃が串刺しにし、別の個体はジークの剣がその手足を切り落とす。

「行かせねーよ」

挑発するリンクスに、黙って剣を構えるジーク。相手がBランクのニードルエイプやワイバーンであったなら、このまま倒せ切れたのだろう。けれどデス・リザードはAランクの強敵で、影の刃に串刺しにされた個体はビチビチと縫いとめられた肉を引きちぎりながら立ち上がり、手足を切られた個体からは、ズブズブと骨のようなものが延びて切り飛ばされた手足の代わりになっている。

「ハアッ」

デス・リザードが次の攻撃に移る前に切りかかるジーク。一撃、また一撃。打ち込む刃はデス・リザードの刃物のような爪に阻まれて致命傷を与えられない。リンクスも先ほどの個体に再び影の刃をつきたて動きを封じると、そのまま飛び掛って短剣で首を掻き切る。4本腕の攻撃と魔力を乗せた剣で打ち合っていたジークも、再生したばかりのひよる長い脚へ風の魔法を叩き込み生じた隙を逃さずデス・リザードの息の根をとめる。

1体ずつ2体倒した。Aランクの魔物を倒せたのだ。けれど戦っている間にも湧き出るようにデス・リザードが現れて二人を取り囲む。互いの背を護りあうように背中合わせになってデス・リザードの攻撃を防ぐリンクスとジーク。一対一では倒せても多勢に無勢。二人の剣はデス・リザードを削ってはいるけれど、反撃によって手も脚も無数の傷がついている。このままでは埒が明かず、すべてのデス・リザードを倒すことなどできはしまい。

けれど其れで構わないのだ。マリエラさえ逃げおおせれば。

たとえデス・リザードに囲まれていても、リンクスとジーク二人だけならば離脱するくらいは出来る。それがわかっているのか、ラ

ブトルにせかされながら、マリエラは懸命に走っている。

階層階段まではあと少し。そうあと少しだったのだ。
階段近くの梢の先に小さい沢さえ無かったならば。

「マリエラ！！！」

その叫びはリンクスのものだったのか、それともジークのものだったのか。

ガザガザと6本の手足でマリエラに迫るデス・リザードの動きは、リンクスとジークにははつきりと捉えられるけれど、マリエラには避ける事は叶わない。マリエラとの距離は開いていて、走って駆けつけられる距離でもない。

デス・リザードの鋭い爪の切っ先でマリエラが貫かれる未来しか見えない。

だから、リンクスは、渾身の魔力を籠めて命じたのだ。

《ジャ、前が出る》と。

その命令の意味をジャは瞬時に理解した。

『身代わりに死ね』

そういわれているのだと。

(コイツはオレを選ばなかった！ だからオレはこれほど辛い思いをしているのに！ この痛みは！ 理不尽は！ すべてコイツのせいなのに！ なのに！ なのに！ 身代わりになって死ねってえのか！！！！)

心の中で、どれほど泣こうと叫ぼうと、ジャに命令に抗う術はな

い。リンクスの渾身の魔力は、死に抗い立ち止まろうとするジヤの脚を、意思を、完全にねじ伏せている。ジヤの脚はまるで激しくつった時のように酷い痛みを伴いながら意思に反して前にでる。

(ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう)
愚かで哀れで脆弱なジヤに何ができただろう。死ねという命令に逆らうことも出来ず、逆恨みにも等しい恨みを、妬みを垂れ流すしかないこの男に。

(死にたくねえ、コイツのせいで！ コイツの！ 全部コイツのせいだつてのに！ ちくしょう！ 死ぬんなら、コイツのせいで死ぬんなら！ だったらコイツも……！！！！)

ジヤという男に出来たのは。

何の力も持たないマリエラという非力な少女の腕をつかんで、自分より前に突き飛ばすことだけだった。《命令》には逆らっていない。けれどズギリと『呪い歯』が痛む。腹の底から湧き上がる愉悦にも似た黒い気持ちは『呪い歯』の痛みを塗りつぶすようにジヤの精神を塗りこめる。

腕をつかまれ前へと突き飛ばされた瞬間、マリエラは、ジヤの声を聞いた気がした。

「オマエノセイダ」

リンクス(前書き)

鬱展開注意、グロ注意

しかし、マリエラに死の刃が突き刺さる直前、影が、マリエラを庇うように伸び上がった。

「ぐ……っふっ……」

「リ……ンク……ス？」

間一髪マリエラを庇ったリンクスの腹からは、デス・リザードの爪が生えていた。

「行け……」

口から血を流しながらマリエラに逃げると言うリンクス。

「や……、リンクス、リンクス、血が……」

「ラプトル！」

動揺に震えるマリエラの外套をラプトルが啜え階段の方へ引き摺っていく。

《影裂》

リンクスが発動したスキルによって、腹を突き刺したデス・リザードの影が縦半分に裂ける。まるで影に倣うかのように、デス・リザードの体も裂けていく。

「ぐっ……」

デス・リザードを倒し終わると、前に一步踏み出して腹を貫いた爪を引き抜くリンクス。

「リンクス、無事か！」

「無事……、じゃねー……。ポーション……ねえ？」

「マリエラが持っている。ここは俺が。マリエラのところへ」

「バカ言っただけじゃ、ねえよ……」

ゴフツと血を吐き出しながらリンクスは短剣を構える。刺された

腹からはとめどなく血が流れ落ち、リンクスの衣服を腹からズボンまで赤く染め上げる。

（はは、やべえ……）

重要な臓器に損傷を受けていることを、リンクスは自覚している。だからと言って引き下がるわけにはいかない。こうしている間にも血の匂いを嗅ぎつけたデス・リザードがリンクスの周りに集まって来る。

これだけの敵を引き連れて、マリエラの元へなどいける筈が無い。それにこれだけの数だ。ジーク一人でしのげるとも思えない。

（しくじったな……）

リンクスを庇い、あちこちに傷を負いながらも闘い続けるジークを視界の端に捉えながら、リンクスは影使いのスキルを使ってデス・リザードの足止めをする。

（マリエラを盾にしゃがるとは……）

この窮地の原因となったジャは、リンクスの《命令》のままに《前に出》続けている。一步、また一步。

「ひ、ひ、ひ、ひ、ひっ」

潰された咽が裂けるほどに悲鳴を上げているのだろう。息をし、飲食物を飲み込む機能しか持たないジャの咽は引き絞るような音を立てている。それは、笑みか悲鳴か。

一步、また一步。

進む脚は、地面についてはいない。

沢から現れたデス・リザードは1匹ではないのだ。後続のデス・リザードはとうの昔にジャを捕らえて、貧相なジャの体を貫いてい

る。

「ひっ、ひっ、ひっ、ひっ、ひっ、ひっ、ひっ、ひっ、ひっ、ひっ、ひっ、ひっ、ひっ、ひっ」

こぶこぶと口からこぼれる赤い血に、デス・リザードがにたりと笑う。

ずぶり。

二本目の爪が下腹部に刺さる。

ずぶり。

別の個体の爪が左肺を貫く。

ずぶり、ずぶり、ずぶり、ずぶり、ぎち、ぎち、みち、びち、びち、びち
やあ。

数体のデス・リザードは、引き裂かれた肉片を掲げると、その口をずぶりとしついに、4つに、あるいは6つに裂き開く。その口は、およそ知りうる真つ当な生き物のそれではないと言うのに、陰惨な狂気に笑っているように見えた。

がぶり。

ジャの意識が何処まであったのか、最後に何を思ったのか。其れは誰にもわからない。ジャだったモノは既に肉片すらなく、デス・リザードの口元を赤く汚し、地面に滴る液体だけが、その名残をとどめていた。

リンクスの、黒鉄輸送隊のジャに対する評価はひどく低かった。共に行動してきたのだから何の情報も得ていないとは思わない。だから咽を潰していても返品など出来ないし、積極的に殺さないと言う程度の価値しか見出していなかった。

そんな男がマリエラの傍にいたのだ。身代わりに使おうと考えた

として不思議はない。

まさか、マリエラを突き飛ばして盾にするなどと、考えもしなかった。

(油断……だよな。くそ)

霞む視界でリンクスは影の刃をデス・リザードに振るう。出血が多くて体が思うように動かない。影使いのスキルは魔力の消耗が激しくて長期戦には向かないが、出し惜しみなどしてられない。それに、もう。

デス・リザードの攻撃がコマ送りに見える。いや、意識が散逸してきているのだ。ちかちかと、切り替わる景色にデス・リザードの爪が迫っていることが見て取れた。

(次は、ねえな……)

どこか他人事のように、自らの体を貫こうとする爪を眺めるリンクス。

その瞬間、大きく視界が揺れ動き、体が宙に浮んだ。

「リンクス、行くぞ！」

ジークは体当たりするようにリンクスに突っ込み、自らの体ごとデス・リザードの攻撃を躲すと、そのままリンクスを肩に抱えて走り出す。

(ああ、マリエラが、脱出できたのか……)

よかったと、おぼろげな意識でリンクスは思う。

(良かった。マリエラが、あの『ふつうの女の子』が助かって……)

リンクスの脳裏に幼い頃からの思い出が蘇る。まるで時の流れを

廻り、早回しで見ているようだ。

ああ、あれは、幼い頃だ。おとぎばなしなんてものを楽しみにしていた、そんなころだ。

「そんな女いるわけねーじゃん」

ませた事をいうリンクスに、孤児院の先生は少し困った顔をした。一緒に絵本を読んでもらっていた女の子たちは凶暴な顔で文句を言っている。

(ほら、凶暴じゃん。よわっちくって、やさしくて、対価もなしに親切にしてくれる、そんな『ふつうの女の子』なんていやしない)

迷宮都市で生まれ、孤児院で育ったリンクスの周りには、肉体的に強い^{したたか}か、精神的に強い女の子がいなかった。そしてどちらもた^{したたか}いそう強かだ。

それは仕方が無いことだ。ここは迷宮都市で、肉体的に強い者は皆冒険者か迷宮討伐軍に入って迷宮に潜り、そして大半が死ぬか大怪我をおってスラムに落ちる。

冒険者として成り上がっても、明日はスラムか魔物の餌か。

安定した稼ぎが有るのは、店を持ったり農業をしている町人で、十分暮らせる安定した稼ぎを冒険者あがり^{あがり}が得られるなど、ごく一部の成功者に限られた。安全で安定した生活を得ているのは、代々続く比較的裕福な人達だ。適したスキルを持っていて、雇ってもらえたとしても便利に使われるのがオチで、孤児院育ちの女の子から

すると玉の輿を狙う様なものだ。

リンクスの周りの女の子達は、いや、迷宮都市の女性の多くがそうなのだが、稼ぎの良い男を捕まえて養って貰おうなんて考えない。現実的な彼女達は、幼い頃からいつ居なくなるか分からない収入源に頼らずに、自力で稼ぐ方法を模索する。

それ自体は悪いことではないのだが、虫を捕まえては戦わせたり、ボロ布を丸めたボールを日が暮れて見えなくなるまで延々追いかけて回している少年達には、些か強かすぎたのだ。

先生の読んでくれるおとぎ話に出てくるような、頼りなくて優しくて、なんの見返りもなく一緒に居てくれる、『ふつうの女の子』の方が、幼いリンクスにはよっぽどおとぎ話に思えた。

その思いは大きくなるほどに現実味を増していった。

黒槍使いとして名高いディックに憧れて、押しかけるように黒鉄輸送隊に入隊した後はなおさらだった。いくつかの定宿で一時の安らぎを得る男所帯だ。出会う女性とさえも、愛情を売り物にする商売女ばかり。優しい笑顔さえも売り物なんだと理解はしても、17歳の青年は純粋な気持ちを捨てきれないでいた。

だから、マリエラに初めて出合った時は驚いたのだ。

まずダサイ。なんで腰にミノなんて巻いてんの？ 折角若い女だっというのに台無しだと思った。

それに言動。物慣れない田舎娘に違いないし、金銭に余裕もなさそうなのに、媚びるような厭らしさは微塵も感じられない。

迷宮都市で購入した服に着替えてみたら、意外とかわいい。ドン臭そうな肉付きの脚だとか、わかってなさそうなきよんとした表情だとか。

そのくせ頭が悪いわけではなくて、ガーク爺に気に入られるほど葉草の知識が豊富だし、森で自分を撒くほどの不思議な業も使える。伸びた髪を切ってくれて、食べきれない料理を分けてくれる。その様子に対価を求めようという意図は見えない。自分に向けられる笑顔も、楽しい会話も、さりげない優しさも気配りも、マリエラにとっては当たり前のことなんだと気づいた時には胸が高鳴った。

クッキーを貰った時は、純粹に心配してくれる気持ちに気付いて物凄く嬉しかった。土産に買った細工物のペンダントは帝都の露店商で偶然見つけたもので、そう高いものではないけれど、いつも身に着けてくれている。

迷宮都市でポーシオンを作れる地脈契約コントラクターの錬金術師だということを除けば、マリエラは『ふつうの女の子』そのものだとリンクスは思った。

マリエラといると楽しかった。マリエラは暢気なくせして、笑ったり、怒ったり、ふくれたり、体積的に膨れたりと忙しくて目が離せない。腕だの足だのほっぺだの、余計なところばかりに肉を付けるマリエラがかわいくて仕方が無い。

『木漏れ日』で皆とふつうの時間を過ごすマリエラはとても幸せそうで、『ふつうの女の子』らしいと思う。夜の地下室でポーシオンについて説明するマリエラはとても楽しそうで錬金術が好きなのだとわかる。

迷宮都市のただ一人の錬金術師なんて、マリエラにはきつと重荷で、『ふつうの女の子』には似合わない。その重荷にマリエラが笑えなくなる日があるんじゃないかと、日々ポーシオンを運びながらリンクスは考えていた。

(迷宮が滅びればいいんだ)

リンクスは最近そう考えるようになっていた。マリエラが錬金術師だと知れ渡る前に迷宮を滅ぼして、地脈を人の手に取り戻す。そうすれば錬金術師が何人も増えて、マリエラは『ふつうの錬金術師』になれるだろう。『木漏れ日』で今まで通り笑って暮らせるはずだと。

(笑ってて、欲しいんだ……)

なのに、どうして。

霞む視線の先で、マリエラは泣いているのだろう。

「リンクスう……！　しっかり！　しっかりしてえ！　どうして、どうしてポジションが……！」

ぼろぼろと涙を零しながら、悲痛な叫びを上げるマリエラ。

「マ……リエ……」

泣くなど言ってやりたいのに、笑顔が見たいと伝えたいのに。

どうして、声が……。

慟哭

ラフトルに引き摺られるように階層階段へと移動するマリエラを、視界の端に捉えながらジークムントは剣を振るう。

マリエラに向かうデス・リザードを引き付けるために、派手な魔法を打ち込んで自分に注意を引き付ける。

マリエラを庇って腹を刺されたリンクスが、死に体の身をおして影使いのスキルでデス・リザードの動きを封じてくれるお陰で、何とか死なずに済んでいる、そんな状態だった。

デス・リザードの爪を左腕のバジリスクの革鎧の部分で受け流す。デス・リザードより格上のSランクのバジリスク革の鎧を買い与えられていなかったら、とつくに肉片と化していただろう。バジリスク革の鎧はデス・リザードの爪の刺突を数センチ程度の深さに留め、何度も同じ場所を狙われない限り引き裂かれたりはしなかった。けれど鎧で覆われていない左上腕は何箇所も肉が削げているし、重要な臓器を傷つけてはいないけれど、腹にも背にも幾つも穴を空けられている。

脚だけは逃げる時のために傷付き過ぎないように気をつけてはいるが、満身創痍以外に相応しい表現が無い状態ではあった。

(まだか……！)

まるびつつも進むマリエラは、あと数歩で階層階段のあるフロアにたどり着く。

リンクスを狙うデス・リザードに切りかかり、左2本の腕を切り落としながら、右腕の斬撃を左腕で受ける。ザグッとデス・リザード

ドの爪が鎧を突き破って腕に刺さる。これは骨まで行っただろう。叫びだしそうな激痛を無視して、デス・リザードの右腕も切り裂き首を刎ね飛ばす。1体を葬っている間に別の二体の爪が背中に刺さる。

(まだか……！)

「ぐっ……ぶ……」

口の中にこみ上げてくる血液を無理に飲み下す。吐きなどすればその隙に更に多くの攻撃を受けるハメになる。

(まだか……！)

マリエラが安全圏へ退避するまでの僅か数秒の時間が、永遠のように長く感じる。

まだかまだかと待ちながら、まだだ、まだ大丈夫だとジークムントは自らに言い聞かせる。

迷宮都市に来た時は、マリエラに出会ってすぐのあの頃は、もっと酷い有様だった。あの状態には至っていない。だから、まだ自分は死にはしないと。自分が死なない限り、デス・リザードを引き付けていられる限り、マリエラは死ぬ事はないと、そう言い聞かせて気力を奮い立たせる。

リンクスの動きがいよいよ怪しくなる。限界だ。そう思った瞬間、ラプトルの叫び声が聞こえ、マリエラが安全圏に逃げ延びた事を確認できた。

(リンクス！ 今助ける！)

左腕は千切れてはいないけれど、指一本も動かない。剣を離すわけにはいかないし、リンクスに迫るデス・リザードを倒す余力は既に無い。

（ままよ！）とリンクスを突き飛ばす勢いで体ごと突っ込んで、左肩に掬い上げる。すり抜けざまにデス・リザードの一撃が右足を襲い、肉がいくらか持っついていかれる。

けれど、まだ動く。まだ走れる。

走れ！ 走れ！ 走れ！

きつと間に合うから。

マリエラが逃げ延びられたように、マリエラを助けてくれたリンクスも、きつときつと助かるから。

マリエラを、自分の唯一の居場所を奪うかもしれない男を命がけで助けるなんて、半年前のジークならば考えもしなかっただろう。けれど、今ジークムントは心の底からリンクスに助かって欲しいと願っていた。

マリエラに救われて素晴らしい主に出会えたと、耽溺にも似た思いに捕らわれた自分を叱責してくれた。怪我を治してもらっても、やせ細り心身ともに脆弱な奴隷風情に『マリエラの護衛』として接してくれた。

リンクスがジークムントを『マリエラの守護者』に導いた。

そしてなにより、アーマン温泉での修行以降、何度も背を預けあつて戦ううちに、ジークはリンクスの事を親友だと思うようになっていた。

「マリエラ！ リンクスにポジションを！」

倒れこむように安全地帯に駆け込んだジークとリンクス。

「リンクス！」

マリエラは震える手で腰のポーチから上級ポーションを取り出して、リンクスの大穴の開いた腹部に振り掛ける。リンクスの顔色は死人のように真っ白で、血を失いすぎた体は無慈悲な迷宮の石壁のように冷たい。

（おかしい。ひからない。なおらない。きずぐちがふさがらない。リンクスが、目を、開けない。

何時もなら、薄く光って傷口がふさがり、リンクスは目を開いてくれるのに）

マリエラの心臓がバクバクと嫌な音を立てる。

「リンクスう……！ しっかり！ しっかりしてえ！ どうして、どうしてポーションが……！」

きっとポーションが足りないんだ。

そう思ったマリエラはもう一本取り出すと、今度はリンクスの口に注ぎ込む。ポーションは嚙下しなくとも、染み込むように体に取り込まれるものなのに、注いだポーションはそのままだらりと口からこぼれる。

（おかしい、おかしい、おかしい、おかしい。どうして、なんで、リンクスは目を覚まさないの）
ぐるぐると回る思考にめまいがする。

「リンクス、リンクス、ねえ、リンクスってば。起きてよ、ねえ。お願い。ねえってば。リンクス！」

何本も、何本もポーションをかけてはリンクスを揺さぶるマリエラ。

「ねえ、リンクス！　ねえ、聞こえてるんでしょう？　ねえ、やだ、やだよ。いやぁ……………」

ぼろぼろとこぼれるマリエラの涙がリンクスの頬をぬらす。

マリエラの声が、願いが届いたのか。その時リンクスの目が薄く開いて、小さな声で呟いた。

「マ……………リエ……………、迷きゅ……………、た……………お……………、笑っ……………」

「リンクス？　リンクス！　リンクス、リンクス、リンクス！」

リンクスに取りすがり、狂ったように名を呼ぶマリエラをジークがそっと制する。

「ジーク？　どうして？　今、リンクス目を覚ましたじゃない。声だって……………」

「マリエラ、リンクスは、もう……………」

「いや……………、いや、いやぁ。いやだよ、ジーク。どうして、どうしてリンクスがあ……………」

ポーションは魔法薬。どれほど体力を失っていても、その傷をたちどころに治す。

けれど、死者を蘇らせることは出来ない。

ポーションさえ効かない命潰えるその瞬間に、リンクスが目を覚まし言葉を紡ぐことが出来たのは、大量に投与された上級ポーションの効果だったのだろうか。

それとも、単に、最後に一目会いたいと、マリエラの顔が見たいと願ったリンクスの想いがなした奇跡だったのか。

「……………っ……………！！！！！！！！……………」

泣き叫ぶマリエラの慟哭が、迷宮第23階層 常夜の湖畔に、悲しみを刻むように響き渡った。

ジークムントは一本だけ残っていた上級ポジションで動ける程度に自らの傷を治し、ラプトルの尾の止血をすると、リンクスの亡骸をラプトルの背に乗せ、泣き続けるマリエラを左腕に抱きかかえるようにして迷宮を脱出した。

迷宮の入り口で警鐘の任務に当たっていた兵士は、アーリマン温泉で顔を合わせたことのある者で、リンクスの状況を知るや、簡単な聞き取りだけでジーク達を解放し、黒鉄輸送隊に連絡するから、リンクスを連れて『木漏れ日』に帰るように言ってくれた。

兵士の取り計らいにジークは深く頭を垂れると、未だ呆然と涙を流すマリエラを連れて、降りしきる雨の中『木漏れ日』へと歩みを進めた。

（雨が降っていて良かった）

土砂降りの雨はヴェールのようにジーク達を覆い、その表情を隠してくれる。

『木漏れ日』に帰り着き、裏口から入ったジークたちに最初に気付いたのはアンバーだった。

リンクスの亡骸を見、ジークから黒鉄輸送隊への連絡が迷宮討伐軍経由でなされている事だけ聞き出すと、一切を顔に出さず全てを差配してくれた。

「急用があつたのよ。申し訳ないけど、今日は閉店させてもらつわ
そう言つて常連客を帰して店を閉め、迎えの馬車が来たキャロラ
インに子供たちを送つてくれるように頼む。そうして『木漏れ日』
から人がいなくなつた後、ジークには着替えと怪我の手当てをする
ように言い、未だ魂が抜けたようなマリエラを風呂に入れて着替え
をさせた。

居間の一部を改築したニールンバークの診察台に横たえられたリ
ンクスの顔は、少し困つたようで、けれど安心して笑っているよう
に見えた。

ディックを除く黒鉄輸送隊のメンバーはジークが着替えてすぐに
『木漏れ日』に到着した。変わり果てたリンクスの亡骸を前に言葉
を失くす一同。

副隊長のマルローは治癒魔法使いのフランツと調教師のユーリケ
に素早く目配せをすると、無抵抗なジークに掴みかかるエドガンを
鋭く制した。

フランツはリンクスの亡骸の傷を検め、ユーリケはラプトルから
情報を得ているのだろう。ジークに掴みかかったエドガンは、ジークの表情を見て振り上げた拳をジークに打ち付ける事も、そのまま下ろすことも出来ずにいた。

「どう、なつてんだよ……」

吐き捨てるようにジークに問うエドガン。マルローも「マリエラ
さんは？ 無事なんでしょうね」と厳しい口調で問い詰める。

「マリエラは無事ですが、とても話せる状況ではありません。『幻

『睡香』をそのまま焚いて眠らせています。替わりに俺が、何があったかご説明します」

ジークが状況を説明する。迷宮23階層にルナマギアの採取に行った事、突如現れたデス・リザード、ジヤの行動、そしてリンクスの。

すぐに戻ってきたフランツとユーリケがジークの証言が真実であるとうと口添える。

ラプトルはデス・リザードもジヤがマリエラを突き飛ばすところもちゃんと見ていて、その様子をユーリケに伝えていた。伝えると言っても言語で説明するほどの頭脳は無い。散逸的な画像イメージの集合体として、起こった状況をユーリケに伝えたに過ぎない。ユーリケが読み取ったラプトルの感情は、デス・リザードに対する恐怖と、ジヤに対する強い怒り、そして悲しい気持ちに満ちていた。

リンクスが死んで悲しい。マリエラが泣いているのが悲しい。

ラプトルが伝えた情報と、リンクスの傷の状態がジークの話を裏付けた。

「やっぱり、あの時殺しとくべきだったし？」

吐き捨てるようにもらすユーリケ。

遅れて駆けつけたディックはマルローから話を聞き、『デス・リザードが現れた』という辺りでギリリと奥歯を噛み締めて、血が出るほどに拳を握り締めていた。赤竜を倒せず撤退した影響だと気がついたからだ。

「今日のところは、リンクスを連れて帰ります。ジーク、あなたも疲弊しているでしょうが、自分の務めはわかっていますね？ マリエラさんのフォローをなさい」

「はい」

マリエラのフォローを申し付けるマルローにジークは深く頭を下げる。リンクスを助けられなかった、ふがない自分にまだマリエラの守護を任せてくれる、信頼にも似たその配慮に深い感謝を感じて。

二人の夜

黒鉄輸送隊が立ち去った『木漏れ日』は、薄暗くとても静かだった。いつの間にか夜の帳が下りていて、天窓からは薄く月明かりが差し込んでいた。どうやら雨は止んだらしい。

二階の扉が開く音が聞こえて、ジークは急いで階段を昇る。

「起きたのか、マリエラ……」

『幻睡香』は薬液を通して水煙管で吸えば良い夢が見られるが、そのまま香のように焚けば短時間の深い眠りを与える。香の効果が切れたのだろう。起き出したマリエラが廊下に立っていて、ジークをぼんやりと眺めていた。

「ジーク、リンクスは……？」

「ディック隊長達が連れて帰ったよ」

「そう……」

幽鬼のように佇むマリエラは、暫らくジークのほうを見つめた後、屋上に続く扉へとゆっくり歩いていった。

「雨、止んだんだね」

ふらりと屋上へ向かうマリエラの後を、ジークは毛布を抱えて追いかける。

ビヨオ、と春の風が吹きぬける。

上空ではもっと強い風が吹いているのか、あれほどの雨を降らせた雨雲は、散り散りに吹き飛ばされている。先ほど『木漏れ日』の

店内に降り注いでいた月光は、月が雲間に隠れたせいでほとんど見えない。

ひどく暗い夜の屋上に、ジークはマリエラが夜に連れ去られてしまふような、そんな気持ちになってマリエラの傍に歩み寄った。

「マリエラ、まだ夜は冷えるから」

そう言っつて、手に持った毛布をマリエラを包み込むように掛ける。ジークを見上げるマリエラの顔は暗くてはつきりとは見えないけれど、痛々しい表情をしている事がわかって、ジークの胸を締め付ける。

「ジーク、私……」

マリエラが口を開く。こういう時は話を聞いてやるのがいい。全部吐き出させたほうがいい。そんな事はわかってるのに、マリエラが言おうとする言葉をふさいでしまいたいとジークは思う。マリエラが、ひどく自分自身を傷つける言葉を言おうとしているのがわかったからだ。

「わたしのせいだね」

「そんな事、あるわけが無い」

リンクスの死がマリエラのせいなどで、あるわけが無い。マリエラだって殺されかけたではないか。

「わたしが、自分の身も守れないのに薬草採取に行きたいなんて言っただから」

「違う。Bランクが二人もいたんだ。23階層なら過剰な戦力だ。前回だって難なく帰ってこられた。こんな異常な湧きが起こるなんて、誰にも予想つくはずが無い」

マリエラの自責を遮るように、ジークは言葉を尽くす。

「わたしのせいだよ。ポーシヨンだって渡してなかった。私が持つても直ぐに使うことも出来ないのに」

「必要ないと判断したのは俺たちだ。俺たちの判断ミスで、マリエラは何も悪くない」

客観的にみてもマリエラは悪くないのだ。ジークたちは護衛で、マリエラは依頼主。非があるのはマリエラを危険にさらしたジークたちで、マリエラはむしろ被害者だ。

けれど、マリエラはうつむいて、ふるふると頭を振る。

「ちがう、ちがうよ、ジーク。わたし、わたし……」

マリエラは顔を上げてジークを見つめる。その双眸にこぼれそうなほど涙を湛えながら。

「わたしが、街で静かに暮らしたいなんて、望んだから」

溢れた涙をぼろぼろと零しながら、マリエラは続ける。リンクスを失った強い喪失感、全てを失った200年前の魔の森の氾濫スタンビートのの日の事を思い出させていた。

「魔の森スタンビートのが氾れた時、わたし、一人で逃げた。魔物から誰かを助けるなんて出来ないし、誰も助けくれなかったから。ううん、違う。みんな、逃がしてくれただ。防衛都市に残っても助からないってわかってたから。わたし、一人で逃げて、わたし一人助かったんだよ……」

あの時も、季節は春だった。

魔の森でたった一人過ごす冬は、心まで凍てつきそうなほど寒くて寒くて、ようやく春がやってきたと思ったのに、魔の森の氾濫スタンビートのが全てを奪ってしまった。

仮死の眠りという凍てついた時間の果てに目覚めてみれば、20

0年もの時が経っていて、何も残ってはいなかった。きつと、たくさん、たくさん死んでしまった。

わずかばかりいた知り合いも、防衛都市に確かにあった自分の居場所なかりも、師匠が残してくれた魔の森の小屋さえも、全部時の流れに押し流されてしまった。

やっと冬が終わったと思っていたのに、季節は秋で、また冬がやってくる。

けれどマリエラは一人にはならなかった。

リンクスが一人にしないでいてくれた。

偶然魔の森で出会ってから、ずっと隣にいてくれた。迷宮都市についてからも『ヤグーの跳ね橋亭』を、街を案内してくれた。自分の知り合いを何人も紹介してくれて、くだらない話をしてはたくさんマリエラを笑わせてくれた。

街の人たちもみんな、みんな優しくかった。よそ者のマリエラを迎え入れてくれた。『木漏れ日』に毎日のように通ってきてくれる常連さんだっている。薬を買いに来してくれるのは嬉しいけれど「顔を見に来た」と言ってくれるのはもっと嬉しかった。

初めは意地悪だった薬師達だって、今ではマリエラを仲間扱いしてくれる。「世話になったから」と貴重な情報を教えてくれる。マリエラのほうがずっとお世話になっているくらいだ。

友達だって出来た。キヤル様にエルメラさんやアンバーさん、シエリーちゃんにエミリーちゃん。お姉さんみたいな人から妹みたいな子達まで、みんなみんな大好きだ。女の子同士のおしゃべりや、一緒に作る食事があんなに楽しいものだなんて、マリエラは知らなかった。

そしてジーク。

ずっと傍にいてくれる。ずっと気に掛けてくれている。

一緒にいるのが当たり前すぎて、アーリマン温泉に行ってしまった時は、ジークがいる事に慣れきっていた自分に驚いたくらいだ。

「毎日が楽しくて、嬉しくて。

だから考えたりしなかった。わかっていて、目を逸らしてた。何とかなるんじゃないかって、そんな風に考えてた。『木漏れ日』の工事を手伝ってくれた怪我をした冒険者達みたいに、ポーションが無くて困っている人がいるのをわかって、名乗り出なかった……」

アグウィナス家の地下に並んだ棺に、200年前魔の森の氾濫を生き残った錬金術師たちが何をしたのか、気付いていたのに。

命を賭して、ポーションを作り続けて来た事を知ってしまったのに。それでも『木漏れ日』での生活を手放せなかった。

「迷宮討伐軍にポーションを卸しても、民間には出回っていないんだよ。迷宮都市にはポーションを必要とする人がたくさんいるのに。毎日上級ポーションを100本作っても、魔力はまだ残っているのに！」

『木漏れ日』で過ごす時間の全てをポーション作りに費やすべきだったのに！」

自分だけ、魔の森スタンビートの氾濫をのうのうと生き延びて、迷宮都市でもまた自分だけ楽しく暮らしてしまった。

「あの人、あの時、私に言ったんだよ。『オマエノセイダ』って。きつとわたしが錬金術師だって気付いていた。わたしが自分の事ばかりで、助けられる人も助けてないって、知ってたんだ」

だから、きつとこれは罰なんだと思う。自分が受けるべき罰をリンクスに肩代わりさせてしまったんだと、マリエラはそう思う。

「だから、これは……。リンクスが、死んでしまったのは……。きつと、わたしのせいなんだよ」

悲鳴のような独白に、ジークは思わずマリエラを抱きしめる。

「違う。違う。違う！ マリエラのせいじゃない。マリエラは悪くない。」

マリエラは俺を助けてくれたじゃないか！ あの冒険者達だって、怪我が治って迷宮に戻ってる。マリエラの薬で助かった人だってたくさんいるんだ！

あんなヤツの言うことなんて真に受けなくてくれ。自分の弱さを、不幸の原因を誰かに押し付けたいだけの、そんな人間の言うことなんて聞く必要は無いんだ。

マリエラ。俺たちは、リンクスは、マリエラが錬金術師だから助けただけじゃない。

リンクスは、マリエラだから助けたんだよ。

俺だって、ポーシオンなんて無かったって、怪我が治っていなくて、生きてさえいねば変わらずマリエラに仕えてた。マリエラが治したのは体の傷だけじゃないんだ。

だから、マリエラ。そんな風に言わないでくれ。自分を責めたりしないでくれ。

リンクスの想いを無駄にしないでくれ。俺は、俺達は……」

その言葉の続きを、ジークは伝えることが出来ない。

Aランクになったらマリエラに告白すると言ったリンクスが、その想いを伝える日はもう永遠に来ないのだから。

「ジーク……」

泣き続けるマリエラを、ジークムントはただ抱きしめ続ける。

「ジーク、わたし」

意を決したように、マリエラは言葉を紡ぐ。

「わたし、迷宮を斃したい」

迷宮を斃せ、リンクスは最後にそう言った。それがリンクスの望みなら叶えたい。迷宮は200年前にエンダルジア王国を、防衛都市を、マリエラの居場所を奪った魔の森スタンビードの氾濫の成れの果てで、リンクスを奪った敵かたきなのだ。

「そのためにポーションを作るよ。わたしは闘えないから、迷宮討伐軍に名乗り出て、ポーションを作る。もう、誰もなくしたくないから」

例え二度と『木漏れ日』に戻ってこられなくても。持てる全てを費やして、それで迷宮が斃せるのなら。それは誓いにも似た強い決意だった。

それでも。それほど強く心を決めても尚、マリエラは一人にはなりたくなかった。ただ一人迫りくる死の恐怖の中、仮死の魔法陣を起動したあの時のように、たった一人で暗い墓穴のような場所に行くのはひどく恐ろしかった。

だから。

「ジーク、お願い。わたしを、わたしを一人にしないで……」

振り絞るようなマリエラの懇願は、ジークを甘く縛り付ける。

「もちろんだ、マリエラ。俺は、俺のすべては、貴女のものだ……」

マリエラの懇願は隷属の《命令》などではない。そこにはわずかばかりの魔力も籠められてはいない。

マリエラがジークにした《命令》は一つだけ。『錬金術師だと言わないで』くれというたったそれだけ。

ジークの命を魂ごと救っておいて、彼女は何も望まなかった。穏やかな日常に、家族のような愛情に満足し、ジークの自由を心から願ってくれた。

そんな彼女をどれほど渴望した事だろう。どれほど望まれたいと祈ったことだろう。

マリエラが望む情がどのようなものかは関係が無い。

例え深く傷つき、一時の癒しを求めてこの手の中に堕ちて来ただけであっても、今確かに感じているこの腕のぬくもりを離さず、済むのならば、なんだって構いはしなかった。

弱く震えて泣き続けるマリエラを、ジークムントは抱きしめる。

雲間から覗く月は、欠けていたのか満ちていたのか。

風が雲を送り、僅かな月明かりさえ失われた暗闇の中、二人の夜は静かに更けていった。

二人の夜（後書き）

シリアスさんが過労死寸前。

二人がこのまま一線を越えたと思われる方、シリアスエンドが
いい方は、次話飛ばして「登場人物紹介」へ。
シリアスお腹一杯な方は、「現れた月は」へどうぞ。

現れた月は（前書き）

本話は“オチ”です。ご注意ください。

現れた月は

(まさか……、な……)

ジークムントは、腕の中で穏やかな寝息をたてるマリエラを抱きしめながら、傍に置いた手拭を眺める。『ジーク』と刺繍の刺されたそれは、マリエラと出会った日に渡してくれた手拭で、今尚彼の宝物でもある。

折れそうな心を支えてくれるその手拭を、今日のような日に懐に入れたのは不思議ではないだろう。

その手拭はベツチャベチャに湿って無造作に屋上の床に置かれている。

マリエラの鼻水だ。

仕方が無いじゃないか。

あれだけ泣いたのだ。鼻水だって出るだろう。

どれほど大切な宝物でも、マリエラには代えられない。

涙も鼻水も、拭ってやらねばならないだろう。

「わたしを一人にしないで」

そんな告白にも似た願いの後で、マリエラは泣いて泣いて、これ

また泣いて、わんわかわんわか大洪水で、干からびるんじゃないかと水を飲ませたら、追加はいりましたとばかりに更に泣いて、一生分泣いたんじゃないかと思うほどに泣くだけ泣いたら泣きつかれたのか、ジークの腕の中でそのまま眠ってしまったのだ。

そりゃあ、もう、ぐっすりだ。

ジークはリンクスを親友だと思っている。その死が辛くないわけではない。

今だって、リンクスを失った悲しみがギリギリと胸を締め付けている。

彼の死をきっかけにマリエラが自分を求めたとして、良心の呵責を感じないわけではない。

けれど、まあ、ちょっとイイ雰囲気だったはずなのにな、くらいは思ってしまう。

奴隷に落ちる前は、一通りの遊びはこなしてきたジークだ。下種野郎だった分、弱った女性と事を成した経験だってそれなりにあった。だからこそ、まさかと思ってしまう。

まさかあの雰囲気から、ギャン泣き、鼻かみ、爆睡のコンボがキマルとは、と。

普通、年頃の女性は泣いたとしても目を擦ったりはしない。腫れて酷い顔になってしまうからだ。低級ポーションで治るとしても、泣き顔は狙った相手以外に見せるものではないし、泣いた事実を悟られぬようにするものだ。

しかしジークの腕の中ですいすいよと眠るマリエラの目はパンパンに腫れ上がり、目だけでなく鼻まで真っ赤になっている。ちょっぴりニードルエイプに見えなくも無くて、なんともいえない気持

ちになつてしまつ。

(……、とりあえず、部屋で寝かすか……)

毛布で包くるんでいるとはいえ夜は冷える。風邪でもひいてはいけない。

ジークはマリエラを抱き上げると、階段を下り屋上を後にした。

雲間から顔を出した月は、弓のように細い三日月で、どこかの満月男の願いむなく満ちてはいなかった。

ちなみに、お気に入りの手拭は、綺麗に洗って引き出しの奥にしまいなおした。

現れた月は（後書き）

マリエラですから……

登場人物紹介（バレあり。 3章読了後推奨）

マリエラ

< i 2 5 5 0 1 8 — 2 1 0 6 4 >

・・・ 錬金術師の残念系主人公。16歳。ジークとリンクス不在に際し、おやつご飯を敢行し太って『マルエラ』という進化形態を獲得してしまう。ジークとリンクスの二人に思いを寄せられモテ期が到来するが、気付かず春は過ぎ去った。

ちなみに、リンクスに走馬灯で「意外とかわいい」と褒められた矢先に「ドン臭そうな肉付きの脚」とディスられている。

ジークムント

< i 2 5 5 9 2 1 — 2 1 0 6 4 >

・・・ マリエラの保護者兼護衛。25歳。精霊眼というチートを持っていたが、調子に乗りすぎて失い奴隷にまで落ちる。リンクス、エドガンと一緒にアーリマン温泉に修行に行ったり、ワイバーンを倒しているうちに心身ともに成長するも、未だ過去は乗り越えられていない。また、3章終了時にメンヘラ気質が再びチラリと見えるなど人間なかなか変わらない感じがする男。ちなみにギャグのセンスはイマイチで、エビフライのソースを口元に付けたりするも見事にスベる。

黒鉄輸送隊

ディック

・・・ 黒鉄輸送隊の隊長。元迷宮討伐軍の隊長でAランクの槍使い。

2mくらいの大男で生粋の脳筋。念願かなってアンバーさんと結婚するも、酔いつぶれて花嫁を放置してしまい、新婚早々お預けを喰

らう。酒は飲んでも飲まれるな。

マルロー

・・・ 黒鉄輸送隊の副隊長。元迷宮討伐軍の隊長で通信スキル持ち。迷宮都市に妻子がいる。ディック隊長を面白いなあと思いがらツルんでいる。最近影が薄い。

リンクス

<i256915—21064>

・・・ 黒鉄輸送隊の斥候で影使い。

「オレさ、Aランクになったら、マリエラに告るわ」とわかり易いフラグを立てて、マリエラをかばって死亡する。彼の死は本作開始時から定められていたことだが、マリエラ周辺に常識人がほぼいないという思いも寄らぬ状況の中でのロストと相成る。変人・変態の巢窟の中、マリエラの今後が心配すぎてなかなか地脈に還れないのではないだろうか。

ユーリケ

・・・ 黒鉄輸送隊の調教師。訛った喋り方をする。人間よりもラプトルのほうが好き。

エドガン

・・・ 黒鉄輸送隊の双剣使い。結婚を機にエロキャラを引退したディックの後任にしてジークの友人キャラとして変態度が急上昇。彼が何処へ向かうのかは作者にもわからない。

フランツ

・・・ 黒鉄輸送隊の拷問系治癒魔法使い。ユーリケの育ての親。亜人設定がいつの間にか追加される。

ドニーノ

・・・ 黒鉄輸送隊の装甲馬車のメンテ担当。

グランドル

・・・ 黒鉄輸送隊の盾戦士。スリムな紳士設定がいつの間にか追加される。

ジャ

・・・ 黒鉄輸送隊の奴隷。嫉妬の蛇。無能な人間の鬱積した悪意が大勢を脅かすことって、意外とある。ヘイトを稼ぎまくる。

ヌイ

・・・ 黒鉄輸送隊の奴隷。食いしん坊が長じて料理人の弟子っぽくなる。

ニコ

・・・ 黒鉄輸送隊の奴隷。歩く工具箱として大活躍。

ギルド、街の人

エルメラ・シール

・・・ 商人ギルド 薬草部門長にして生粋の薬草オタク。実はAランク冒険者の雷帝エルシー。

実はガーク爺の孫だとか、設定盛りだくさんな人。旦那と子供が大好き。人目を気にせずいちゃつく派。

ヴォイド・シール

・・・ エルメラさんの旦那さん。おだやかそうな専業主夫。だと思ったら……キサマ、ナニモノダー！

口癖は「退屈」。エルメラに対しては「キミは刺激的だ」とめろめろな様子だが、たぶん電撃でシビレているところもあると思う。

パロワ、エリオ・・・ シール夫妻の息子たち。面倒見のいい兄がパロワで内気で泣き虫な弟がエリオ。

リエンドロ・カツファ

・・・ 商人ギルド 薬草部門の副部門長。間延びした喋り方をする。人に仕事をやらせるのがものすごく上手。

ハーゲイ

・・・ 冒険者ギルドのギルドマスター。『破限』の二つ名を持つアラランカーだぜ、ずびし！ シリアスが続くと登場する。

ガーク

・・・ ガーク薬草店の薬草屋。偏屈そうだが、マリエラのことをかわいがっている。若かりし頃、迷宮討伐軍で斥候をしていた。エルメラの祖父で「お爺ちやま」と呼ばれている。

アンバー

・・・ 無敵の胸部装甲を誇るディックの奥さん。旦那が留守がちで暇なので『木漏れ日』に押しかけて働いている。

レイモンド

・・・ ストレス太りの奴隷商人。奴隷者でレイモンドスレイブもんという名前になった。

メルル

・・・ メルル薬味草店の店主。地域のボスママにして噂と甘味が好きな奥様諜報部隊。実は本物の諜報部員でウェイスハルトの指示のもと、『木漏れ日』にお菓子を届けたりする。ニーレンバーグ不在時に『木漏れ日』の出現率が高い。

ゴードン

・・・ ドワーフの大工。『木漏れ日』の常連。彼が尻を擦り付けた椅子にウエイスハルトが座ったために、ウエイスハルトがゴードン臭くなる。実際に臭くなったのかは不明。

ヨハン、ルダン

・・・ ドワーフトリオの残り二人。4章では出番があるはず。

エミリー

・・・ ヤグーの跳ね橋亭の看板娘。10歳。
ほとんど毎日『木漏れ日』にシェリーちゃんと遊ぶためにやってくるので、父ちゃんは寂しがっている。

迷宮討伐軍

レオンハルト・シューゼンワルド

・・・ 迷宮討伐軍の将軍。迷宮討伐に適したチートスキルを持っており、幼い頃から迷宮討伐を第一に育てられた。

ウエイスハルト・シューゼンワルド

・・・ 迷宮討伐軍の副将軍、レオンハルトの弟。知力で兄を補佐する。

深読みの達人。虫が嫌いでGを華麗に倒したキャロラインに恋に落ちる。

ジャック・ニーレンバーグ

・・・ 迷宮討伐軍の治療技師。DS。シェリーに対しては親ばか。
『木漏れ日』の魔除けの像として大活躍している。

シェリー・ニーレンバーグ

・・・ ジャックの娘。黒髪以外父と似ていないと評される美少女だが、実は性格もよく似ている。

ギプサム

・・・ 斥候の青年。チョイ役。斥候 石膏で名前がついた。

セコイアス

・・・ 都市防衛隊の元大佐。テルーテルをいじめたり、アンバーにちよっかいを出したりとろくなことをしていない。転落死した。

ロイス・アグウィナス

・・・ キャロラインの父。アグウィナス家の当主に仮復帰中。たまに出ってくる。

キヤル様 (キャロライン・アグウィナス)

・・・ アグウィナス家の天然系美少女薬師。

ウェイスハルトのアプローチにまったく気付かず日々害虫駆除団子の製作に没頭する。そのせいでキャロラインの周りには臭いに誘われたGが絶えないことに、ウェイスハルトは気付いていない。

葬列

リンクスの亡骸は、迷宮都市の東北東にある丘に運ばれて火葬によつて送られた。

迷宮都市は魔の森に面していて、内に迷宮を抱えている。遺体を土葬すると、魔物に食われるか、迷宮に取り込まれるか、死してなお魔物から逃れることができなくなる。だから、炎の魔法で骨も残さずに燃やし尽くすのだ。

迷宮都市では燃料は貴重で、一般家庭が料理に使う火力さえ魔法具が生活魔法で賄われる。茶毘でさえも炎の魔法で行われるから薪は不要なのだが、薪を積み上げ天に届くほどの炎と共に送りだすほど、死者の魂は現世の穢れから解き放たれて天へと高く昇り、より良い世界の地脈へ還れると信じられていた。

この丘には故人を送り出すための祭壇が設けられていて、リンクスを送りだすために多くの人が集まっていた。この街では茶毘に付せるだけでも幸せだ。体の一部さえ戻らない者の方が多いのだから。

「献炎」

式を取り仕切るディックの合図で参列者が薪に炎を献じる。火魔法が使えなければ生活魔法でも構わない。黒鉄輸送隊と参列者たちが集めた薪はうず高く積み上げられ、送り火は重く垂れこめる雲を焦がすほど高く高く炎の柱を打ち立てた。

良い葬列だったと、こんな風に送られる故人は幸せだったと、参

列者が語る言葉は、自分たち自身に向けたものだろう。空いた心の穴を埋めるために。地脈に還る故人を高く高く天へと送るのだから、死してなお、少しでも長くともに有りたいと願う気持ちの表れかもしれない。

炎の勢いが弱まって、参列者が一人、また一人と帰路についても、マリエラとジークは祭壇のそばに立ち尽くしていた。黒鉄輸送隊の面々もだ。あのラプトルですら、騒ぐことなく遠くからリンクスを送っている。やがて薪が燃え尽きて、風が残った灰すらも遠くへ運び去って行った。マリエラは、リンクスにもらった細工もののペンダントをきゅっと握りしめていた。

「マリエラさん、行きましようか」

マルローの呼びかけにマリエラがうなずく。マリエラとジークはフードを目深に被り、ディックとマルローに警護されるようにして装甲馬車に乗り込むと、シューゼンワルド辺境伯の屋敷へと向かっていった。

マリエラは空高く上っていく煙を眺める。最後に見た、リンクスの表情を思い出す。

毎日の様に『木漏れ日』にやって来ては交わされた軽口が、もう聞けないなんて未だに信じる事が出来ない。

(リンクス、私、迷宮を斃すよ……)

マリエラはリンクスが贈ったペンダントを握り締めながら、決意を胸に刻む。

『迷宮を斃せ』

リンクスが残したその言葉は、マリエラに普通の女の子として笑って暮らして欲しいという、そんな願いに基づくもので、今の状況を望むものではない。

今のマリエラの表情をみて、決して喜びなどしないのだ。

けれど、リンクスにはそれを伝える事はもはや出来ない。

マリエラとジークを乗せた装甲馬車は、シューゼンワルド边境伯家の門扉を潜り、その高く重苦しい門扉は鈍い音を立てて堅く閉ざされた。

マリエラとジークを乗せた装甲馬車がこの扉を再び潜り『木漏れ日』へ戻る日は、二度と来はしなかった。

「私をレオンハルト將軍閣下の下へ連れて行ってください」

マリエラとジークが黒鉄輸送隊の下を訪れたのは、あの夜が明けた昼下がりだった。

手には黒鉄輸送隊と交わした魔法契約書が握られている。魔法契約書は対となる控えと合わせて所定の手順で燃やすことで契約を破棄することができる。マリエラは黒鉄輸送隊を介してポーシヨンの取引を行っていて、その対価の一部として黒鉄輸送隊に守秘を中心とした庇護を受けている。

マリエラがレオンハルトの傘下に入り、直接取引をするのならばこの契約は破棄する必要があるだろう。ポーシヨンの取引が無くなることで黒鉄輸送隊に発生する損失は、『錬金術師を連れてきた』ことで補えればいいし、それで足りないのならば、今までためた金貨で支払うつもりであった。

最後にもう一度、リンクスに会っておきたかったこともある。

マリエラの話を知ったらディックとマルローは、「ならば、共に」と答えた。

ディックやマルローにとってリンクスは隊の仲間以上のものだった。幾度も魔の森を共に駆け抜けてきた仲間だ。情報収集や斥候に長けた部下であり、「たいちよー、ふくたいちよー」と慕ってくれる可愛い弟分であり、家族だった。

デス・リザードが湧いたのは、赤竜の討伐を失敗したからだ、ディックにはわかっていた。

リンクスの死に顔は大切な人を守れた満足と、別れを惜しむ寂寥の笑みだとマルローはわかっていた。

薬草採取に行きたいと望んだマリエラを、リンクスを守りきれなかったジークを、ひたすらに愚かだったジヤを責めることは、心の安寧を得るための責任転嫁に過ぎないことをディックもマルローも理解している。

ディックは赤竜を倒しきれなかったのだし、他にいなかったといえジヤのような奴隷を黒鉄輸送隊に迎え入れたのはマルローだ。彼らは自らの愚を責めるより他に、成すべき事をわかっていた。

迷宮を、リンクスの仇を討つ。

二人は迷宮討伐軍へ復職する旨を伝えに出かけるところだった。

共に行くとは言っても、迷宮都市唯一の錬金術師を前触れも無く迷宮討伐軍へ連れて行くわけにはいかない。話し合いの末、リンクスを送った後に場を設ける事で話がついた。

マリエラ達がシューゼンワルド辺境伯家を訪れると、賓客をもてなすような扱いで応接室へ通されて、待ち受けていたレオンハルト将軍とウエイスハルト副将軍に歓迎された。

「ようこそ錬金術師殿。私が迷宮討伐軍の将軍レオンハルトだ」

「はっ、ハイ。はじめまして、マリエラです」

「リンクスの事は残念だったが、その無念、共に晴らそう！」

「あの、ウエイスハルト様は、やっぱり、私が帝都じゃなくて、迷宮都市の錬金術師だと知って？」

「ああ。勿論だ。特に前回は危険な状態だったと聞く。不徳の致すところだ。今後は今まで以上に御身の保護に努めよう。だが、こうして直接相談できるというのは実に有り難い！ これからよろしくお願いしたい」

「ええ、ハイ。よろしくお願いします？」

「話したいことは数多いが、まずは共に迷宮に対する者として友誼を深めようではないか」

レオンハルトはそういうと、一同を立派な食堂へと案内した。

食堂にはマリエラが見た事もないご馳走が並んでいて、一緒に来たディックやマルローだけでなく、身分の上、入室を禁じられる事さえあるジークまで席へと案内された。

「気楽に楽しんでくれ」

にこやかにレオンハルトが言い、短い乾杯を済ませると、給仕の女性がマリエラに食べたい料理を取り分けてくれる。普通ならば少しずつ盛り付けられた料理が出てくるものだが、ビュッフェ形式にしてるのは少しでも気兼ねなく楽しめるようにという配慮だろうか。

「そういえば、魔の森には未だ草木の生えぬ焦土があると聞く。魔スの森スタンビードの氾濫のときに、『炎災の賢者』が魔物を屠って出来たものと聞くが、マリエラ殿はご存知か？」

「いえ。あまり迷宮都市の外には出ないので。昔の情勢も、疎くて……」

「私とディックは見たことがあります。黒鉄輸送隊の設立資金を稼ぐためにあの辺りへ分け入ったことがあります」

「恐ろしいものでした。大地が溶けて固まるなど」

「うむ。だがそのような賢者殿がおられたからこそ、魔スタンビードの森の氾濫から逃れ、生き延びた者達がいたのだらう。今の迷宮都市があるのもそのお陰と言えよう」

「はい、兄上。今の我々にもマリエラ殿という賢者がおります。きつと迷宮を倒し未来を切り開くことが叶いましょう」

料理はどれも素晴らしく、会話だってマリエラが知っていきそうな話題を振ってくれる。うまく応えられなくても盛り下がらないよう、ディックやマルローが参加して穏やかな会話が続く。けれどマリエラの表情は晴れない。どれほど周りが慰め気遣ってくれようと、もっと早くここへ来ていればリンクスは死ななかつたかもしれないという思いから逃れることが出来ない。

「詳細は明日にでも話し合おう。今日はゆっくり休んでくれ」

晚餐が終わると、マリエラ達はウェイスハルトに屋敷の奥へと連れられていった。

シューゼンワールド辺境伯の屋敷は時代の趨勢に応じて増改築を繰り返して来たようで、屋敷の中心の最も古い部分は築1000年は経過していると思われた。奥に進むにつれ綺麗な壁紙に彩られた内装は、マリエラの家のような重厚な石積みの壁へと変わって行き、いくつもの扉を抜けた先には地下へと続く階段があった。

(やっぱり、地下室か……)

マリエラの気持ちはほんの少し沈んでしまう。

予想はしていたことだ。この街に一人きりの錬金術師だ。魔物から、人から隠して守るには、地下に閉じ込めるのが一番確実だ。太陽の暖かさも月光の優しさも感じることなく、薄暗い地下室でポーションだけを作り続ける。

二度と、『木漏れ日』に戻れなくても、迷宮を斃せるのならば。

そんな決死の気持ちでレオンハルト將軍の下を訪れたのだ。今更ひるむなんて、そんな事、自分に許されるはずもない。

マリエラはウエイズハルトの後に続く。

シューゼンワルド辺境伯家の地下室は広大で、廊下の両端に小部屋が設けられていた。

廊下自体も魔物の侵入に対する防壁としてだろう、幾つも扉が設けられている。廊下の扉は開け放たれてマリエラ達の通行を阻んではないいけれど、中に入ってしまったら、堅く閉ざされてしまうだろう。

まるで、逃げ出すことの出来ない牢屋のように、マリエラには思えた。

一歩一歩奥へと進む。前にはウエイズハルト。マリエラとジークを挟むように後ろにディックとマルロー。

一行が最奥の部屋にたどり着く。

「ここだ」

扉の前には迷宮討伐軍と思われる兵士が一人立っていて、マリエラに頭を下げた。

「取次ぎは彼が行う」
ウエイスハルトの紹介に、マリエラは軽く頭を下げる。見張りはこの人一人だけだろうか。
取次ぎの兵士は緊張した様子で頭を下げると、「準備は出来ております。どうぞ中へ」と扉をあけた。

案内された部屋にマリエラは啞然とする。

「準備……？ なんの……」

5人が入ると少し狭く感じてしまうほどの小部屋には、ベッドも棚も、机や椅子さえも用意されてはいなかった。床には一枚の敷き布も無く、壁には何の装飾も施されていない粗野な照明がついているだけ。

人が暮らせるどころか、魔物の襲撃に逃げ込む準備さえ、その部屋には整えられていない。

そして、何より。

「グギャギャツ」

床面に開いた下り階段の穴から、マリエラを助けて尻尾の半分をなくしたラプトルが「おそいよー」とばかりに顔を出していた。

まさか、シューゼンワルド辺境伯家の地下も、地下大水道に繋がっていたなんて思わなかった。

いや、貴人の屋敷に複数の退避経路があるのは当然なんだろうけれど。

「地下大水道にスライムが大繁殖して以来、使用できなくなっていたんだが、中級魔除けポーションとは凄いものだ。中級魔除けポーションを持つものだけが使える退避路とは安全この上ない。兄上な

どは迷宮討伐軍の基地に行くのも地下を使おうと仰せでね。恐らくは地下を通ったほうが近いからあのような事を言っておられるのだろうが」

はっはっはとさわやかに笑うウェイスハルト。

「『木漏れ日』の地下への経路も確認してあります。迷宮討伐軍の基地の地下と迷宮2階も地下大水道に繋がっていますので、気付かれることなく基地へもこの屋敷へも移動できますよ」
にこやかに中級魔物除けポジションを差し出すマルロー。

ディックは無言のまま中級魔物除けポジションを振り掛けると、安全経路を確保するためにさっさと地下へと降りていった。

「えー？」

顔を見合わせるマリエラとジーク。

こうして、迷宮討伐軍と迷宮討伐を目指す『木漏れ日』での生活が、あんまり代わり映えのしない感じで始まった。

葬列（後書き）

ぞっくりあらずじ…木漏れ日の地下からいけるところが増えた。

茸栽培コンビ

しとすと、止むことなく雨が降っていた。

もう何日も晴天など見てはいない。晴れぬ雲間に細く降り続く雨は、街の中心に迷宮を、外に魔の森を臨む迷宮都市という場所を、更に陰鬱なものにしていた。

濡れそぼった町の壁はその薄暗い色合いを一層際立たせて、街全体が喪に服しているようだ。

「マリエラさん、部屋干し用の新しい洗剤、とても好評ですわ！嫌な臭いがしないと皆さんおっしゃっています。梅雨時にこんな悩みがあるなんて、わたくし、存じませんでしたわ！」

キャロラインがいつもより明るい口調を心がけてマリエラに話しかける。

「うん……、ちょっとでも役に立てて、よかったよ……」

じめじめじめ。頂垂れたまま小声で応えるマリエラ。

「マリエラちゃん！ 新しいお菓子だよ！ これは凄いわ。ヤグーじゃなくて牛の乳のチーズを使ってるんだ。だから癖が無くてコクがある。しかも舌触りがとろけるようだね。こんなの食べたなら、口まで蕩けちまうよ」

薬味草店のメルルさんが、牛の乳を固めた菓子を持ってくる。牛の乳など迷宮都市では高級品だ。畜産を行える十分な土地が無いから、粗食に耐え、騎乗も荷運びもでき、肉も乳も取れるヤグーは多く見かけるが、食用のためだけに飼育される家畜の数は極めて少なく、貴族の食卓にしか上らない。

これも、シューゼンワルド家から送られてきた特注の菓子だ。

「あ……、太つたら困るから……。もう、迷宮でダイエットとか、出来ないし……」

じめじめじめじめ。上着の裾をきゅくと握るマリエラ。

リンクスに追いかけられて、迷宮の階層階段を駆け上がった事を思い出して目がうるうるしている。

（しまった！ アンタ何とかしてくれよ！）という顔をしたメルルさんの目配せを受けたゴードンが、指定の椅子の上でフリフリと尻フリダンスを始める。

「マツ、マリ嬢！ ほれほれ〜。こういう湿気の多い日にこうするとな〜、ほうれ、椅子がびっかびかになるんじゃ〜！」

かなり無理がある話の転換だ。そして椅子の座面だけびっかびかにしてどうするのだ。

ウェイスハルトのために磨いているのか。キャロラインとの仲は進展していないウェイスハルトだが、ゴードンとは既にお尻会いなのか。会話をしたことも無い身分違いの二人なのに。

「……、ゴードンさん、椅子、拭いて帰ってね」

じめじめじめじめ、じめじめじめじめ。

マリエラのじめじめ度が上がったようだ。黙って掃除用の雑巾を指し示している。

「マリエラ……、荷物が届いた……」

じめじめじめ。マリエラ以上の湿度を保つジークが住居部分に繋がる扉から顔を出し、マリエラに声を掛ける。ジークはマリエラよりも繊細な性質だ。本来のウェットな性格にリンクスの一件が上乘せられて、一層じつとりとした雰囲気をかもし出している。

「うん。今行くよ、ジーク……。ごめんなさい、アンバーさんお店

お願いします……」

じめじめじめ、じめじめじめ。

「わかったわ、いい香りの石鹸でも作れば、きっと気分も変わるわよ」

そう言って工房へ向かうマリエラを見送るアンバーさん。

マリエラとジークの二人が消えた『木漏れ日』は、心なしか湿度が下がった気がする。

「マリエラさん、お辛いですね。おいたわしい。でも……」

悲しげに二人の去った扉を見つめるキャロライン。

「ええ。辛いのはわかるのだけど。でもなんていうか……」

「じめじめして、茸生えそう」

「うん」

誰かが発言した茸生えそう発言に同意する一同。

迷宮都市では死は隣合せで、リンクスのように若くして世を去る事も珍しくはない。

それはとても痛ましいことではあるが、皆それを心に刻んで生きていくのだ。共に過ごした時間に託し、託されたものがある。生き残った者が其れを成すことこそが追悼であると、迷宮都市に住まう者は考えている。

勿論、リンクスの死後、マリエラとジークがそれぞれが己に出来る事を始めた事は知っている。それが何かはわからないけれど、二人が必死の努力を行っていることは伝わってくる。

けれど、何時までも悲しみに浸って、二人で傷を舐めあうように自らを酷使するようなその有り様は、些か悲劇の主人公を見ているような気持ちにさせられた。

ありていに言えば、うつとおしい茸栽培コンビが誕生してしまったのだ。

「ジーク、材料はこれだけなの？ 私、まだまだ作れるよ。魔力まだ残っているもの！」

「マリエラ、無理はいけない。昨日だって上級ポーションと特化型の上級ポーションあわせて200本も作ったじゃないか！ マリエラにもしものことがあったら、俺はっ……」

じめじめじめ、じつとりじめじめ。

二人きりの工房は換気の魔道具が全開で動いているのに、たいそうウエットだ。

だばだばと粘液を吐き出す、ほぼ水分で構成された合成スライムのスラーケンよりしっとりしている。

本気で茸が生えてきそうだ。

いつものマリエラならば、「わー、新種の茸だー。タダで材料ゲットだよ！」などと言いつい出しそうなのに、今茸が生えてきたとしても、「材料だつ。ポーションつくらなきゃ、わたし、わたしっ！」
「マリエラッ」などとさらに茸が増産しそうな会話が繰り返り広がられるのだろう。

これにはウェイスハルトも若干の戸惑いを感じていた。

先の赤竜討伐失敗の余波によって、錬金術師が危険にさらされた事は聞き及んでいる。迷宮討伐軍基地の地下から常時迷宮攻略が行われていることは一般には開示されておらず、敗退の際に浅い階層に強敵が出現する可能性があるとしても、万に備えて迷宮を立ち入り禁止にするような措置は行われない。けれども錬金術師の重要

性を考えれば、無理やり理由を付けてでも分隊程度の兵士を常時同行させるべきだった。少なくとも、不確定要素の多い討伐日に迷宮に立ち入らせないよう、行動を把握して採取日を変更させるくらいは出来たはずだ。

平時は二ーレンバークを付けているし、Aランク間際の冒険者2名が張り付いているから戦力の上では問題が無いと考えていた。自分たちの赤竜戦に意識を割かれ錬金術師の行動を見逃した自分の失策だとウエイスハルトは考えている。

その結果、錬金術師^{マリエラ}を助ける為に黒鉄輸送隊の若き精鋭を一人失ってしまった。ディックやマルローはもともと迷宮討伐軍の一員で、任務の最中に仲間を失う経験は少なからずあった。大切な仲間を失うことに慣れる事はないけれど、その死を受け止め、原因を理解し前に進んでいく方法を身につけている。レオンハルトやウエイスハルトはそれ以上で、だから錬金術師^{マリエラ}も同じであると思いきや、こんでいたのだ。

屋敷に招いたのだから、赤竜討伐の現状を伝え非を詫びて、共に進んでいく決意を新たにする壮行会であったのに、現れた錬金術師^{マリエラ}は憔悴しきった様子で、リンクスという青年の死を乗り越えられているようには見えなかった。

赤竜討伐の失敗がリンクスの死に繋がったのだと、その可能性を伝えず迷宮に立ち入らせた自分^{ウエイスハルト}に責があるのだと伝え、全ての責を負うことは容易い。けれどそれがリンクスという青年の死を乗り越えることに繋がらないことを、ウエイスハルトはわかっていた。

これからも迷宮討伐は続く。参加を表明してくれたディックやマルローが討ち死にする事もあるかもしれないし、共に攻略を進めるうちに錬金術師^{マリエラ}が親交を深めた迷宮討伐軍の人間が亡くなるかもしれない。その度に自分を責めて憔悴していたのではこれからの戦いを耐える事など出来ないだろう。

マリエラたちを『木漏れ日』に帰したのは、単に『木漏れ日』の警備体制が既に十分整っているからだけではない。劣悪な環境で四六時中ポーションを作ることが生産性に繋がらないからだ。錬金術^{マジエ}師に期待しているのは、ポーションを増産する労働力だけではなく、深い知識やそれに基づく思いつきから導かれる、階層攻略の糸口でもある。

攻略に使えるような特級ポーションの『氷精の加護』はまだ作れないし、過酷な環境下でも活動できる竜人という種族に近い体に変身できるポリモー^{変身}フ薬の一種、『竜人薬』に必要な赤竜の鱗は手に入っていない。

今はまだ、マリエラはリンクスの死を消化しきれておらず、鬱々とポーション作成を行うばかり。最初、迷宮討伐軍に採取させた大量のルナマギアを持ち込んだら、ルナマギアがなくなるまで、魔力切れで倒れる生活を繰り返していた。自らをただ酷使するような有りさまで、故人が浮ばれるものではないのだ。

（見た目通りの少女、ということか……。時間が必要だな）
そう見定めたレオンハルトとウェイスハルトは、晚餐の席であえて他愛ない会話を心がける。まずは笑顔を取り戻すこと。気持ちの整理がついたならばきっと彼女は歩き出してくれるだろうから。

（さて、どうしたものか……。）
ウェイスハルトは思案に暮れる。上級ポーションであれば今までの納品分で十分な在庫は確保できている。しかし、対赤竜の妙案が無い。

赤竜のプレスを無力化して見せたエルメラの夫ヴォイドに活路を見出したいところではあったが、それとなく助力を求めたところ、守りは出来ても赤竜を地に下ろし倒しうる攻撃手段が無い事を理由に断られている。

目下のところ、迷宮討伐軍が取りうる手段は、迷宮の各階層に兵士を送り出し少しでも迷宮の成長を妨げるために力を殺ぐ事だけだった。

よつは、膠着状態にあったのだ。

土が、石が、溶けて固まった草木も生えぬ大地。

迷宮討伐軍を阻む迷宮56階層を思わせる、そんな場所が魔の森の奥深くにもあった。

200年前の魔の森の氾濫の激戦地の一つだ。スタンビート

Aランクの魔物が徘徊する魔の森の深淵に降立った『炎災の賢者が振るった炎の猛威は、天を焼き、大地を溶かし、数多の魔物を葬り去った。そのお陰でエンダルジア王国を襲う魔物の勢いは大きく削がれ、僅かながらに人々が生き残ることが出来たとも、魔の森の氾濫の直後に救援に訪れたシューゼンワルド家の軍勢が何とか人の住まう領域を確保できたとも言われている。』スタンビート

その戦いの名残は未だに残されていて、焦土の面積は随分縮小したとはいえ、未だに草木の生えぬ死の大地が残されている。この辺りには200年前と変わらずAランクの地竜が生息しているから、この場所を訪れたことがあるのはディックなど上位の冒険者に限られる。

しとしとと降り続く雨は、魔の森にも余さず降り注ぐ。

不毛の大地は木々などさえぎるものが無い分、降り注ぐ雨に溶けて固まった大地が少しずつ削られていく。

水は大地の弱いところを削り、岩石はひび割れ、風に、水によって風化して少しずつ普通の大地に変わっていくのだろう。

森に近いところは降り積もった落ち葉が腐って土になり、落ちた種子が芽吹いて森が広がってきている。中には背の高い樹木も育っていて、その一本に突如落雷があった。

燃えながら裂けて倒れる樹木。落雷の衝撃も、樹木が倒れる地響きも、さほど珍しいことではない。雨の中飛び立つことのできない小鳥が木陰で身を寄せ合う以外に、落雷の衝撃に騒ぎ立てるものはなかった。

だから、魔の森に棲まう何者も、倒木の衝撃で焦土の一角に穴が開いたことに気がつきはしなかった。

ドクン

止まっていた心臓が動き出す。凍っていた血液がとけてめぐり、肺が酸素を求める。

ヒュウ、と息を吸えば口の中に、大量の埃が舞い込んだ。

「ゲホツ、ゴホツゴホ、カハツ」

息がくるしい、酸素が足りなくて頭がガンガン痛む。空気、新鮮な空気が欲しい。

《換気》

口を開けた穴の底で目覚めた者は《換気》の魔法で新鮮な空気を取り込むと、酸欠で朦朧とした頭で考える。

(なんで、こんなことになってるんだっけ?)

《命の雫》

目覚めた者は手を器の形に合わせると、白く光をはなつ水を汲みだしてあおるように飲み干す。次第に明瞭になる思考、細胞の一つ一つが目覚め、体が力を取りもどす。

天井に開いた穴を爆炎の魔法で吹き飛ばすように広げると、目覚めた者は軽やかにジャンプして地下の穴倉から飛び出した。周囲は魔の森と焦土。この死の大地には見覚えがある。

「結構森に飲まれてんなー。この感じ、だいぶ長く寝てたみたいだけど……」

ぼりぼりと頭を掻いて積もった埃を振り払っていると、人の魔力を嗅ぎつけた地竜が木々をなぎ倒しながら現れた。

ズシン、ズシンと押し寄せる地竜。背丈は3mは越えるだろう。見た目はラプトルを大きくした様な、長い尾を持つ竜だが違いは4本の足で歩くことだろうか。脚は何れも太く短く俊敏ではないけれど、圧倒的な質量と鋼の装甲のような表皮を持つ。

ここは魔の森で、魔物はすべて受肉しているから倒しても亡骸が消える事はない。もしも堅硬な地竜の素材を手に出ることが出来たのなら、十分な富を得られるだろう。事実、黒鉄輸送隊設立前にディックとマルローはこの地で地竜に挑み、得られた素材で黒鉄輸送隊を立ち上げたのだから。

当然、ランクに見合った強敵で、ディックであっても複数と同時に相手取る事は不可能だ。マルローがうまく誘導、連絡し、一対一の状況を作り出しての狩だった。

そんな地竜が3匹。

つまそうな餌だと涎をたらしながら、目覚めた者を取り囲む。

「あー、そうそう。こいつらがいたんだっけ。もっと、うじゃうじやいたけど」

暢気に呟く目覚めた者。地竜の一匹の目がその者を捉えて薄く光ると、大地から無数の石の槍が飛び出す。

《ストーンランス》。

地竜が操る大地の魔法だ。地竜の動きは俊敏ではないけれど、大地の魔法を操って獲物を捕らえ、貪り喰らう。その守りは強固でダメージが通りにくいから倒しにくい上に魔法攻撃が早い難敵だ。

けれど、その者は穴から出たときのように軽やかにジャンプしてストーンランスの先端に降立つと、不愉快そうに一言もらした。

「うっせ」

あの時も、ビシビシバシバシ地面から槍を生やしてくれたんだっけ。だから面倒くさくなって、全部まとめて『溶かし』てやったんだった。

「炎よ、我が眷属よ、共に謳い、舞い踊れ。《炎舞招来》」

その者の、『炎災の賢者』の呼びかけに大気中の熱量が凝縮したかのように空中に炎が幾つも巻き起こり、地面から生えた石の槍も、地竜ももろともに巻き込んで炎の柱が渦を巻くように踊り狂う。いくら堅硬な表皮を誇ろうと、渦巻く炎に空気を奪われ、高熱で焼かれて無事でいられるはずはない。肺の腑から搾り出すような断末魔を響かせて地に倒れ付す地竜を眺めながら、炎災の賢者は炎の只中でくるりと回る。

踊るように、指揮を執るようにその腕が振られると、この場を支配していた炎の柱は掻き消すように消えてなくなり、そこにはぶすぶすと煙を上げる地竜だけが残った。

「うーん。焼きすぎだ。これじゃ食えん」

スタンピード 魔の森の氾濫の時は、人のアジトに踏み込んできた地竜にキレてうっかり全力で魔法を放ってしまった。地竜どころか大地も、自分の家まで焼いてしまったけれど、地下室は丈夫に作ってあるから無事だった。あの地下室はなかなかの出来栄えだった。流石は自分だと炎災の賢者は自画自賛して気分を良くする。地下室を作ったのは大工で、炎災の賢者ではないのだが。

あの時は、ちょっと火力を上げ過ぎて、魔力が枯渇しそうになったから慌てて地下室に駆け込んだのだった。今日は十分弱火にしたはずなのに、火加減というのは難しいものだ。折角の良い肉なのに、これでは食べられそうにない。

ランタンのような小さな火というのは、自分には存外に難しい。だから、地下室には仮死の魔法陣と一緒に燃料がたっぷり入るランタンをすえつけてある。カンペキだ。

「ん？ランタンの……火？」

あー、、、と情けない悲鳴をあげて、炎災の賢者はしゃがみ込む。

いつもは外でぶちかますから忘れていた。密室で火を灯したら酸素がなくなるじゃないか。

スタンピードが去っても、蘇生できずに眠り続けていたんだ。溶かして固めた入口が開くまでずっと。

「どんだけねてたんだー……」

炎災の賢者の嘆きは虚しく森に響いた。

落ち込むこと10秒。どこかの錬金術師と違って復活が早い。

「ま、いつか。たぶんアイツも目覚めてんだろ。腹減ったし、久しぶりに帰ってやるか！」

道端の花でも摘むように三匹の地竜から魔石と使える素材の一部を剥ぎ取ると、炎災の賢者は迷宮都市に向かって歩き出した。

雨は何時しか止んでいて、雲間に光が差し込んでいた。

草栽培コンピ（後書き）

ざっくりあらすじ：誰かさんとソックリな感じで、やばいのが目覚めた。

魔の森のたたかい

『あたし炎災。今、焦土にいるの』

3匹の地竜を倒したと思ったら、別の地竜が現れた。うつつしいたりやありやしない。とりあえず開けた口の中に爆炎魔法をぶち込んで頭を吹っ飛ばす。

これはうまくいった。首から下は肉が焼けずに生のまま残っている。獲物は倒したら血抜きをしないといけないのだが、面倒くさいのでそのまま運ぼう。

うん。運ぼうと思ったのに、でかいから重たい。無理だ。一番美味い背中の部分だけ風の刃で切り裂いて、その辺の葉っぱで包んで持っていく。

残りはもつたないが焼却処分だ。魔物は地竜のような強い魔物の肉を食うと進化することがあるから、亡骸は燃やし尽くして魔力ごと地脈に還すのがマナーというものだ。

食べる分だけ頂いて、残りは地脈にリリースだ。

模範的な行動と自画自賛したものだ、どうやらこれがいけなかったようだ。

うまい焼肉の臭いに誘われて、わんさか魔の森の雑魚どもがやってきた。

なにこれ、増えすぎじゃね？ 最近、狩りサボってんの？

「我、糧を与える。我に齒向かう数多の敵を、喰らいて燃えよ。《火柱乱生》」

ファイヤー！

向かってきた雑魚どもが片っ端から発火して火柱を吹き上げる。
おー、燃える燃える。魔物モイクらしいモン食ってんだな。脂アブラが乗って
るから良く燃えるわー。
こっだけ火柱上げたんだから、誰かお迎えにきてくんねーかな。
歩くのめんどくさいわ。

「申し上げます！ 魔の森南西部およそ10km地点に強い魔力を
確認！」

城壁守護の兵士の報告を受けた都市防衛隊の隊長カイトが、上司
である大佐に報告する。

「何者だ？ 本日出立した冒険者か！？」

「いえ。本日出立したBランク以上の冒険者はありません！」

カイト隊長が門を入りしした冒険者について報告している間に、
別の伝令が飛び込んできた。

「申し上げます！ 魔の森南西部およそ9km地点に再び強い魔力
反応を確認いたしました！」

「なんだと！ 近づいてきていると言うのか……。観測を続ける。

私は迷宮討伐軍へ報告に行く。カイト隊長は南西門の守りを固めた
まえ」

「はっ」

ピシッと敬礼をして、部下を引き連れ南西門へと向かうカイト隊
長。

迷宮都市の戦力は迷宮討伐軍に集約されていて、都市防衛隊の戦
力は弱い。迷宮都市をぐるりと覆う外壁の維持・管理、門の警備、
魔の森の開拓と農地に侵入した弱い魔物の撃退、街中の警邏けいらや犯罪

行為の取り締まりなどが主な業務だ。比較的安全な仕事が多いので、家柄がよく戦力に欠ける者が多く集められているが、“弱いから都市防衛隊”という構図が明確になると配属者の意欲もモラルも低下してしまうから“品性と知性が要求される部隊”という位置づけになっている。

『ものは言いよう』と言えば聞こえが悪いが、“品性と知性が要求される”というのはある意味真実だ。テルーテルの後任である現大佐は『市民の盾たれ』という方針を打ち出していて、平民や冒険者に対しても丁寧で模範的な行動を徹底させた。すると、驚くほど都市防衛隊の人气が上がってしまった。

もともと、大規模遠征のパレードや大事が起きたときしか民衆の前に現れず、あとは人知れず地下から迷宮に潜りっぱなしの迷宮討伐軍に比べて都市防衛隊は民衆との接点が多い。読み書きもままならない者が多い中、育ちが良い都市防衛隊の隊員が礼儀正しく接してくれるのだ。人气が出ないはずはない。

特に若い娘さん連中は気がついてしまったのだ。迷宮討伐軍に比べれば給料は安い、危険が少ない分、安定している。誓約まみれ秘密まみれで会話にすら困る迷宮討伐軍に比べて話題も豊富で紳士的。すごいお買い得物件ではないかと。若い娘の人气が集まれば話は早い。人気の秘訣が紳士の振る舞いならばそれに磨きがかかろうというものだ。

迷宮都市へと近づいてくる正体不明の強力な魔力によって、都市防衛隊の詰め所は常にない緊急事態に騒然となったが、それも一時の事。意識高い系紳士集団に変貌を遂げた都市防衛隊は、今回の有事にも市民の盾として活躍すべくカイト隊長の指揮の下、南西門の守りを固め、近づいてくる何者かの動向を逐次逃さず観測するのであつた。

それに対して、テルーテル相談役はというと。

「迷宮討伐軍？ レオンハルト將軍閣下のところかねっ？ ワツ、ワシも連れてつてくれ！」

「……テルーテル相談役、非常事態ですがお分かりですか？」

憧れの金獅子將軍に会えるチャンスに食いつくテルーテル相談役。テルーテルの強者好きはこんな時にも健在だ。あまりの空気の読まなさに、一周まわって冷静さを取り戻した都市防衛隊の大佐は、テルーテル相談役を伴って迷宮討伐軍の基地へと向かっていった。

『あたし炎災。今、川にでたの』

この川は見覚えがある。エンダルジア王国の地下大水道の支流の一つで、南側の河川へと流れ込んでいる。確か橋があったはずだが綺麗サツパリ見当たらない。

どうやらこの辺に人は入っていないようだ。何たる怠慢。この辺で取れる果物はものすごく美味しい酒になると言うのに、採取しに来る人はいないらしい。うまい酒を放棄するなんて！ ムカついたので、近くの大木を数本切り倒して橋代わりにかけておく。倒してから気付いたが、この辺川の向こうとこっちで魔物の強さが違うんだ。強い魔物が川向こうのエンダルジア王国側に流れちゃうかもしれないけれど、ま、いつか。うまい酒になる果物が採取できるほうがきつと大事だろう。

うまい酒とうまい肴。アイツの作るアテはなかなかだ。と思ったところで気がついた。

強い魔物がエンダルジア王国側に流れてきたら、アイツ、めっっちゃ怒る。人に迷惑かけちゃいけませんとか、ケツの青いガキの頃か

ら言っただし。

またカタツムリもどきの肉オンリーでメシ作られたらどうしよう。あれはあれで旨かったけど、3食ダイダラマイマイを連日おみマイマイされたら、てんてこマイマイだ。

あの時は、このギャグで許してもらったけど。次はなさそうだし。

そんな事を考えていたら、またもや魔物が集まってきた。焦土よりもだいぶ弱い魔物だけれど、Bランクが結構いるな。フレンジーグリズリーとか。肝臓とかいい素材になるんだけど一匹ずつ倒すとか時間かかるし、土産は地竜の肉があるしな。うん。まとめて焼いとこう。

《火柱乱生》

ファイヤー！

そろそろ王国からでも火柱見えると思うんだけどなー。お迎えまだかなー。

「都市防衛隊、相談役のテルーテルです。急ぎ申し上げたい儀あり、非公式ながら大佐と共に参上いたしました。將軍閣下にお取次ぎ願いたい！」

迷宮討伐軍の基地で声を張り上げるテルーテル相談役。何時から報告係りになったのだろうか。彼のスキル《同調》がまた勝手に働いているのか、緊急感が出ているからよしとしよう。

直ちに会議室へと通された大佐とテルーテルは現れたレオンハルト、ウエイスハルトに報告する。

「正体不明のものが高度な魔法を乱発しながら迷宮都市へ向かって

いると？」

「はっ。正体につきましては現在観測を続けているところでした」

都市防衛隊大佐が報告をしている最中、カイト配下の伝令兵が進捗の報告に訪れた。

「申し上げます！ 魔の森の高魔力反応が迷宮都市南西5km地点の河川付近で確認されました！ また防壁上部の見張り台から河川付近で大量の火柱が立ち上るのが確認されました！」

「大量とはどれほどだ？」

「それが、数え切れないほどです。数十は下らないかと」

通常、複数の敵を魔法で攻撃するには、火魔法であればファイヤー・ウォールのように攻撃範囲を線で指定するか、ファイヤー・ストームのように面で指定し空間に魔法を放つ。そうでなければ当たらないからだ。

動物的に石を投げて、同時に幾つ当てられるかと考えるとわかりやすい。勿論範囲が広くなるほど多くの魔力を必要とするし、対象以外の余計なものも燃やしてしまうから、魔力に対して攻撃力は低くなる。森で使えば木々を燃やして被害を大きくするともいえる。

だから敵だけをピンポイントで攻撃するというのは模範的な攻撃方法といえるのだが。

「数十の火柱を同時だと！？」

ウェイスハルトは驚愕する。同時に数十の魔物に石を投げつけられる冒険者がいたとして、そのランクはいかほどか。まして使ったのは火柱だ。ファイヤー・ボールであっても火という事象を具現化して放出する分、石を投げるよりはよほど難易度が高いのに『火柱』。火力ははるかに高く、しかも座標を固定して発動する必要があるはずなのだ。

それを同時に数十。

たった一人の仕業であるとするれば、Aランクで済む能力ではない。しかし、炎を操るSランカーなど、帝国はおるか周辺諸国でも聞いた事のない話だった。

「何者だ……、そもそも、人なのか……」

恐るべき力を持った何者かが迷宮都市に向かってきている事だけは間違いない。

「まだ敵と決まったわけではない。蟲使いを呼べ。蟲ならば気取られずに正体を探れよう。迷宮討伐軍を南西門に集めよ。万一に備えてだ。気配を完璧に消して潜伏させておけ。南西門には都市防衛隊の詰め所の方が近い。我々も移動するぞ」

レオンハルトの命令に即座に動き出す迷宮討伐軍。流石の対応と見えよう。

都市防衛隊の拠点は南門傍にあり、迷宮討伐軍の基地よりも南西門に近い。レオンハルトのスキル《獅子咆哮》による兵力の増強効果を考慮してもレオンハルトの前線への移動は必要なものだ。

それは、レオンハルトが常に危険に身をさらすということに他ならないのであるが。

將軍の来訪の報を伝えるため、先に帰ろうとする伝令をテルーテルが捕まえる。

「部屋の整理整頓は出来ているかねっ？ トイレや手洗いもチエックしておきたまえよ！ あと、いい臭いがするように花も飾って！ それからそれから……、！ わしの部屋に取って置きの茶があるから、それを準備しておきたまえっ！」

「……、了解でアリマス」

彼氏を初めて部屋に呼ぶ女子か。そんな心の声をひた隠しにして伝令兵は駆け足で都市防衛隊の詰め所へと戻っていった。

『あたし炎災。今、城壁が見えたの』

こんだけ歩いてきたのに、お迎えどころか冒険者にすら出会わない。どうなってるの？ と思ってたら防壁を見て納得した。魔の森スタンの氾濫で滅んでんじゃない。エンダルジア王国。

キレイな白亜の壁はその辺の石材で補修されてるし、デイジスの薫がうじゃうじゃしてるし。

まあ、見ためばつかこだわった白壁よりこっちのほうが人間が生きてるって感じがしていいと思うけどね。

そんな事を考えていたら、ぷいーんと羽虫がこっちに飛んできた。

魔蟲だ。

こんな目と鼻の先まで来てようやくお迎えが来たと思ったら、魔蟲。

ナメてんの？ いくらなんでも失礼だろ？ ちょっと焼き殺してやるつかとも思ったけど、ここは大人の対応だ。平常心、平常心。

敵だと思われて防壁の中に入れてもらえなくなったら困る。

たぶんアイツはあの中にいるだろうから。

防壁くらい吹き飛ばせるけど、その後がめんどーだし、早いところ地竜の肉を渡さないと晩飯に間に合わなくなるし。あいつどんくせーから、腕はあるのに搾取されまくりの貧乏暮らしでスッゴイ貧相なメシ食ってるかもしれん。肉食いてー。

だから、魔蟲だろうがお迎えには友好的に挨拶だ。フレンドリーを総動員してにつこり笑って、蟲風情に話しかけてやる。

「お迎え頂き恐縮だ。さあ、案内頂こう」

だと言うのに、魔蟲はぷいーんと再び天高く飛び立ってしまった。

ぐう、何たる無礼！ 範囲一体火の海に変えて焼き殺してやるうかと周囲をみると、フォレストウルフが大集結していた。わんわん。あー、だからかー。

つーか、街からこんなに近いつつーのに、なんでワンコでてくるかねー？ 定期的に魔除けポーション撒いとけよ。アイツ仕事サボってんじゃね？ オシオキだ、オシオキ。

とりあえず、ワンコがワンワンうるさいので焼いておく。

《火柱乱生》

ファイヤー！

さーて。街まであとちょっとだ。

「つー！！」

「蟲使いよ、どうした」

冷や汗をたらし、びくりと体を硬直させる蟲使いにウェイスハルトが尋ねる。

「気取られました……」

「なんだと？」

蟲使いの放った魔蟲は魔物が蠢く迷宮の探索に用いられるもの。

一見すると普通の虫のようだし、羽音は僅かで周囲の景観に溶け込んで行動できる隠密性に優れたものだ。そうでなければ50階層を超える迷宮の探索などできはしない。それが初見で見破られたなどと……。

「気のせいではないのか？」

「恐れながら……、私の蟲に向かって案内せよと言っておりました

ので間違いないかと」

「して、どのような者なのだ？」

まさかといぶかしみながら問うウェイスハルトに蟲使いは、「直
接せきごらんになったほうが早いかと」と応えた。

魔の森のたたかい（後書き）

ぞっくりあらずじ…あたし炎災。今、
にいるの。ファイヤー！

あなたの後ろに

『あたし炎災。今、門の前にいるの』

てくてく歩いて漸くたどり着いたと言うのに、門はピツタリと閉まっている。

しかも、兵士らしき連中が中にうじゃうじゃ集まっている。

（それで隠れてるつもりか？ 火柱くらい珍しいモンでもないだろうに、ナニコレ？ ちょーっと本数多かったかもしれないけど）

閉ざされた門を間近に眺めながら、そんな事を考えていた炎災の賢者の元に、門の小扉を空けて一人の兵士が進み出た。

「私はカイトと申します。都市防衛隊の隊長をしております。高名な冒険者とお見受けいたしますが、お名前と来訪の目的をお聞かせ願いたい」

流石はカイト隊長、貧乏くじだ。相手は敵か味方かもわからない、ウエイスハルト曰く人かすら怪しいレベルの強者だという。蟲使いが言うには言葉は通じるそうだが、魔の森に火柱を生やしなからずんずん近づいてくる得体の知れない者とのファーストコンタクトだ。未知との遭遇だ。

敵でなかった場合、失礼があつては後々に差し障るから、それなりの立場のある者が応対する必要があるが、敵だった場合は一触即発且つ即死が約束されたも同然だ。そんな状況において、カイト隊長が落ち着いた対応を見せることが出来たのは、巨大スライムに對峙して度胸がついたこともあるだろう。彼が勇敢である事に間違い

はない。

しかし、それ以上に。

迷宮都市の南西大門を見上げるその人影の容姿に、彼の気持ちが大きくほぐされたことは間違いない。

迷宮第54階層で人魚もどきと闘った迷宮討伐軍の兵士であれば、見た目で判断する事は無かったのだろうが、カイトは都市防衛隊。まだまだ青いと言って良いだろう。

「あたしは、フレイジージャ。弟子を訪ねて来たんだよ。中に入れてくれるかい？」

澁刺とはちきれそうな肢体から、年のころは二十台半ばに見える。気の強そうなつり眼がちの金の瞳にニツと口角の上がった赤い唇。長くたなびく髪は光を受けて金のようにも赤毛のようにも見える。いや、揺らめく炎のように赤やオレンジ、黄色と言った色合いが混ざり合っているのだろう。

フレイジージャと名乗った者は、炎が現し身を得たような美女であつた。

「弟子というのはどなたでしょうか？」

「まどろっこしいのは嫌いなんだけどね。いれる気が無いかい？」
ギラリと肉食獣のような光を放つ金の瞳に、カイトの背筋に冷や汗が流れる。

「とつ、とんでもないことです。ですが、貴殿は相当高位の冒険者とお見受けいたします。ここ迷宮都市は高位の冒険者を歓迎いたしません。失礼が無いよう、全力でご歓待すべくお伺いしているわけですから……」

カイトの言い分に嘘はない。迷宮都市は高位の冒険者ほど厚く遇

する風潮がある。犯罪奴隷であってもAランクになれば解放されるくらいだ。フレイジージャと名乗った女性が迷宮で活動してくれると言つのならば、これほどありがたい事はない。

カイトの発言に嘘が無い事を見抜いたのか、フレイジージャの瞳からは剣呑な光が消え、こつ答えた。

「この街に危害を加える気はないよ。弟子の名前は『マリエラ』というんだ」

「なつ、錬金術師だど!？」

カイト隊長とフレイジージャの会話は《聞き耳》の魔法と《念話》によつて、即時レオンハルトとウエイスハルトに伝えられていた。

恐るべき火柱を上げながら迷宮都市にやってきたフレイジージャと名乗る魔道師は、会話に応じるだけの理性が有り、短気ではあるが敵対する気は無いらしい。そこまでは良かったのだが。

「同名の別人と言うこともありえます」

「……、ウエイス、本当にそう思ふのか？」

レオンハルトとウエイスハルトの会話は防音の魔法によつて二人以外には聞こえていない。部屋の隅では冒険者大好きテルーテルが「フレイジージャ? 初めて聞く名前ですな!。遠い異国の冒険者ですかな!」等と独り言を言っている。テルーテルが知らないのであれば、間違いはない。

帝国の周辺諸国にはフレイジージャなどと言うAランク以上の冒険者は存在しなかったのだ。少なくとも現時点までは。

突如として出現した高位の魔道師が、迷宮都市にいないはずの地脈契約ソトラクタの錬金術師マリエラを弟子と呼ぶ。

この二人に何の接点も無いと考えるほうが不自然だろう。

「錬金術師殿は？」

「本日は、『木漏れ日』におります」

「閉店し、店から一步も出ないよう伝える。フレイジージャ殿は一番良い宿へ案内して歓待を。弟子を捜して連れてくると言って詳細を聞き出せ」

「ハッ」

レオンハルトの命令は直ちにカイトに届けられ、迷宮都市の南西大門はフレイジージャに開かれた。

「フレイジージャ殿。迷宮都市は広うございます。街で一番の宿をご用意いたしましたのでそちらでおくつろぎ下さい。最高の料理でおもてなし致します。弟子のマリエラ殿は我々が探し出してお連れ致しますよう」

深々と頭を下げるカイト隊長。

「有り難いけど、遠慮しとくよ。今日はマリエラの飯が食いたいたいんだ。場所なら調べがつくからさ」

けれどフレイジージャは門の中に入るなり、カイト隊長の申し出を断って聞きなれない呪文を唱えた。

「我、汝を捜し求めり。魂の同胞よ。我が呼びかけに応えよ。《魂の呼応》」

聞いた事のない呪文だ。カイト隊長は盾職で魔法に詳しいわけで

はない。けれどこんな詠唱は初めて聞く。なにより、特定の人物の居場所を探る魔法などと聞いたことが無かった。

「みつけた。やっぱり目覚めてんじゃん」
くすりと笑ったフレイジージャは、変わり果てた街の様子を見物しながら、目的地へ向けて迷うことなく歩き出した。

これに慌てたのはレオンハルトらだ。
機嫌を損ねぬように接待をして、錬金術師マシエラに害なすものか見定めようとしていたのに。

「兄上、私が参ります。魔道師ならば私の方が相性が良い」
急ぎ立ち上がり、部下の魔道師数名を伴って『木漏れ日』へ急ぐウェイスハルト。そして、なぜかその後をくつついていくテルーテル。新たに現れた高位冒険者を一目みたいという浅慮な行動であるのだが、あまりの緊急事態ゆえ、テルーテルを意識する者はいない。

なにやら唄を口遊くちやうみながら迷宮都市の大通りを滑るように進むフレイジージャ。その歩みはゆっくりと物見をするような脚運びであるのに、カイト隊長は小走りで付いてゆくのがやつとだ。そしてその後方を大急ぎで追いかけるウェイスハルト。都市防衛隊の詰め所に移動したのは間違いだった。迷宮討伐軍の基地であれば地下を通って先回りできただろうに。

『あたし炎災。今、ドアの前にいるの』

そんなウェイスハルトらの焦りを余所に、マリエラとジークはい

つもの如く、じめじめじつとりと茸栽培を続けていた。いや、農家に転職した訳ではないのだが。

鍵をかけようと扉に近づいたマリエラは、鍵を閉める前にジークを振り返るとうるうるした様子で話しかける。

「ジーク……、メルルさんのお陰で自然にお店を閉められたけど、急にお店を閉めてここから出るなだなんて、何があっただろう……。また、悪い事かな……」

「マリエラ、大丈夫だ。何があっても俺が護るから」

じつとりじとじと、じめじめじつとり。

雨季は終わったというのにこの湿っぱさ。茸が生えてくるのも時間の問題だろう。

きっと何かの菌が繁殖しているに違いない。じめじめ菌とか。消毒が必要だ。

汚物は燃え盛る炎で消毒しなければなるまい。

ばぁん！

鍵をかけ忘れた『木漏れ日』の扉が勢い良く開かれる。

扉を背に立つマリエラ。そしてその背後には……。

「マツリエラっ！」

「ふっ、ふええええええええっ!??」

いきなり背後から抱きつかれ慌てふためくマリエラと、状況を判断できずおろおろするジーク。

「マリエラ、超久しぶりー。何年ぶり？ ちょっとでっかくなっ
た？」

「ふえつ、ま、まさかつ？」

「ちよ、貴女はいつたい!?」

マリエラに後ろから抱きついてぐりぐり頼ずりする謎の女性を慌てて引き剥がすジーク。漸く解放されて振り向いたマリエラは、目も口もあんぐりと開いていた。

「しっ、ししよう!!!???? なんぞっ!?!」

「あっはー、寝過ぎしちゃった。そういうマリエラもだろー? ことの、オツチヨコチヨイ!」

はっはーと全快の笑顔で笑う師匠。そして開いた口がふさがらないマリエラ。

(ほ、本当の師匠だったのか……。ということは、二人目の……。!?
? しかし、あの攻撃力は……。)

建物の陰から一部始終を見ていたウェイスハルトは錬金術師マリエラに危険が無い事を悟って安堵すると共に、事態を飲み込めずこれまた混乱の中にいた。

「っーか、マリエラ、お前身長伸びたけど他はあんま成長してないな。って、胸じゃなーよ。錬金術だよばーか。まー、積る話は後でするとして、とりあえず、これお土産。腹減った。料理してー」

あんぐりと口を開けたまま、胸元と師匠の顔を見るマリエラに師匠は葉っぱで包んだ地竜の肉を渡す。

「こっ、これ、地竜の肉!? っ、血抜きもしないで常温でおいとくとか何考えてるんですか! もつたない。えーと、こういう肉をおいしくいただく方法は……。っ。あつたあつた。あつたけど、ハーブが足りないや。ジーク、お使い行って来てー」

高級食材に即時に再起動するマリエラ。地竜の肉など卸売市場にも売ってない超のつく高級食材だ。せめて凍らせてくれていたらも

つと良い調理法があつたのに、師匠の杜撰さが悔やまれてならない。

「あ、ああ、わかった」

急にしゃんとしたマリエラに、あつけに取られながらも頷くジーク。例え師匠がいたとしても、マリエラの護衛として傍を離れるわけにはいかないのだが思わず返事をしてしまふ。そんなジークに気付いた師匠は、ジークムントを足の先から頭の天辺までじっくりと見定めた後、にやりと嬉しそうに笑うとマリエラに問いかける。

「んー、なーにー、コイツ、マリエラの男？ ヤダわー、色気づいちやって」

「そ、そそそ、そんなんじゃ、師匠っ」

「いやー、最近の若い子怖いわー、こんな百戦錬磨で真っ黒っぽい選んじやうとか、ほんつと若い子怖いわー」

「なっ、なに言ってるんですか、マリエラのお師匠様」

「そうだよ、師匠。ジークは繊細なだけで腹黒くなんかないよ」

「そういう意味じゃねーよ。ってか、あー、マリエラが相変わらずで安心したー」

わかつてるジークとわかってないマリエラ。二人の様子を見てこれまたわかつたような笑顔を見せる師匠。

「お師匠様、マリエラに変な事を教えなくて下さい……」

この人は危険人物だ。直感的に察知したジークは師匠をけん制しようとするやんわりとたしなめるのだが。

「あ？ なに言っちゃってんのかな？ 真っ黒ジークくんは。あたし、マリエラの師匠。錬金術師の師匠は親も同じ。この意味わかるー？ わかつたらさっさと買出しに行くー」

「はっ！ はいっ！ 義母上。行って参ります！」

護衛はどうした。実際は『木漏れ日』周囲には護衛が待機していて、少々ジークが店を離れても問題はないのだが。ちなみにマリエラに店を閉めるよう伝えた後、いつもより厚い警備体制が敷かれていたのだが、師匠はその全てをすり抜けてしまった。一般の通行人が通るのを見過ごすような感覚で、気がつけば通り過ぎた後だったのだ。師匠の口遊む唄によるものだと思付いた者は誰もいない。

そんな事は露知らず、会って数分で師匠につかまれてしまったジークはメルル薬味草店にダッシュで買出しに行くのであった。

「血抜きしてないから、今日は煮込みにしますね、師匠。でも、ホントは焼くのが一番おいしいんですって。だから今度は、ちゃんと血抜きして凍らせて持って来て下さいね」

「えー、めんどいからマリエラも一緒にいこー？」

「……、軽く死ぬるから遠慮します」

高級食材をおいしく頂くために、魔力もスキルも惜しみなく使いまくって完成した煮込み料理は、ほつぺたが落ちそうなほどにおいしかった。まさに絶品。シューゼンワルド边境伯家で頂いた料理よりもおいしかったかもしれない。無言でがつつく三人と更けて行く夜。

(二人目の錬金術師にしてマリエラ殿の師匠、しかも高位の魔道師……。彼女の助力が得られればあるいは……)

『木漏れ日』近くの街頭で思索にふけて動かないウエイスハルトにテルーテルが声を掛ける。

「あのおう、ウエイスハルト副將軍閣下、フレイジージャ殿にご挨拶には行かないのですかな？」

「む、テルーテルか、なぜここに……。まあ、良い。フレイジー
ヤ殿は再会の喜びを分かち合っている最中だ。彼女が誠に迷宮都市
ゆかりのお方であったと確認できたのだ。邪魔は無粋であるう。撤
退するぞ」

「はっ、はい……。それにしましても、フレイジーヤとは、童話
に出てくる『炎災の賢者』と名前もみわざも同じですなあ。はっは
っは」

テルーテルが何気なく発した一言は、ウエイスハルトの中でかち
りとはまった。

(まさか……………)

数日前、^{マリエラ}錬金術師との懇親会での話題を思い出す。200年前の
^{スタンベード}魔の森の氾濫で多くの魔物を屠ったとされる『炎災の賢者』。同一
人物だとも言うのか。アグウイナス家の地下で仮死の魔法陣によ
って眠り続けた錬金術師たちがいたのだ。ありえないと断ずる事は
出来ない。

しかし、『炎災の賢者 フレイジーヤ』の名前はそれより古い
童話の中にも語られているのだ。

(考えすぎだ。後の世の者が^{スタンベード}魔の森の氾濫の英雄の名を当てはめた
だけだろう……………)

そう自分に言い聞かせるウエイスハルト。けれど、心の奥底から
湧き上がるような根拠の無い考えを打ち消すことは出来なかった。
ただ一つ確かな事は、エルメラの夫、ヴォイドにせよ、マリエラの
師匠、フレイジーヤにせよ、おろそかにしてよい相手ではないと
いう事だけだろう。

ちなみに、「フレイジーヤ殿にご挨拶を！」とわくわくしてい
たテルーテルは迷宮討伐軍の基地に帰るや『フレイジーヤと木漏
れ日に近づかず、知りえた情報を文書を含むあらゆる方法で口外し
ない』という誓約を結ばされてしまい、フレイジーヤはおるか偶

然居場所が判明した巨大スライム事件の恩人ジークにさえ近づくことが出来なくなってしまうた。

その分だけ『木漏れ日』でのマリエラたちの生活は静かなものになったのだが、爆弾のような師匠が巻き起こす騒動に比べれば些細なことであつた。

あなたの後ろに（後書き）

ぜひっくりあらずじしししょーのお陰でみんなパニック

時を越え明かされる事実

「師匠もランタン消し忘れ!? ランタン万能?」

「そういうマリエラも? どんくせーな!。あっはっは」

自分だっとうっかり200年も眠っていたくせに、マリエラをど
んくさいと爆笑する師匠。

マリエラが「なんたる理不尽!」と口を尖らせると、師匠はさら
に笑い転げる。

ジーク秘蔵の『エドガンが泣き付いてきた時用の酒』は、既に何
本もカラッポだ。もちろん師匠が「うーん、これぞ命の雫うー」と
言いながら一人で空けたのだ。酒を命の雫に例えるなど錬金術師
の風上にもおけないが、酒飲みとしては正しい例えなのだろう。

『木漏れ日』の家計を預かるジークは、みるみる無くなっていく酒
に、『師匠費』という予算枠を計上しようかと真剣に考えながら、
倉庫から新しい酒瓶を運び出している。

マリエラを魔の森の小屋に残して師匠が出て行ってから200年
と少し。

何の前触れもなくやってきた師匠は、自分の家に帰ってきたかの
ように寛いでマリエラにおながが空いたと夕食をねだった。師匠が
土産に持ち込んだ地竜の肉は絶品で、生き別れた師弟の奇跡の再会
だと言うのに、料理が出来るなり無言で料理にかじりついてしまっ
た。

『仮死の魔法陣』で眠っていた200年を差っぴいても数年は会っ
ていないのだ。積る話はたくさんあるのに、数日振りにふらっと帰

つてきたような師匠の様子に、2000年の時を埋める二人の会話は井戸端会議のようなとりとめの無いものになっていた。

本来ならば目覚めてからの事を時系列で話していくべき所だが、師匠のインパクトが強すぎる。

「なんで2000年も経ってるのに師匠が!？」

地竜の煮込みをお腹がはちきれそうになるまで食べた後、胴回りだけマルエラになりかけたマリエラが、漸く真つ当な質問をした。

「えー、2000年も経ってんだー? エンダルジア王国滅びてるっぼいけど、ここ、何処の国?」

「反応軽っ!」

「帝国のシューゼンワールド边境伯領で迷宮都市という街です」

師匠のすつとぼけぶりに、地竜の煮込みで一旦塞がったマリエラの口が再び開いてしまったので、師匠の質問にはジークが答える。

「あー、そうだったんだ。迷宮都市ねー」

へーはーほーふーんと、ジークの説明だけで納得したような師匠。

「ちよーつとまった! 師匠っ! 大体なんで師匠は2000年も眠ってたんですか。卒業とか言って勝手にいなくなっつて、ぜんぜん帰って来なかったのに、いきなり来るとか! ていうか、よく居場所がわかりましたよね。魔の森の小屋、跡形もなくなっつたのに」

「えー? ランタン消し忘れて寝過ごしたから?」

こうして冒頭の会話へと繋がるマリエラと師匠。

寝過ごして待ち合わせに遅れたかのような軽い師匠は、なぜなげなんでどうなってるの!? と問い質すマリエラを愉快そうに眺めている。

「相変わらずマリエラは甘えん坊だなー。マリエラが起きてるなら近くの街にいますと思っただよな。」

魔の森の小屋は魔の森スタンビートの氾濫で壊れただろーし。近くまで来りゃ、調べられるし」

師匠はまっすぐに迷宮都市にやって来たらしい。マリエラが目覚めていなかったら、それ以前に既に寿命が尽きた後だっただろう。たのたろう。どれだけ考えをめぐらせても師匠が途方にくれる様子がマリエラには思い浮かばなかった。

（なんか、もういいや。師匠だし……。もう一回会えたから、それでいいや……）

師匠はこういう人だった。これだけ思いも寄らないことが起きて、ほんの少しの説明で全部わかったように納得して、こっちはサッパリ訳がわからないままになるのだ。

師匠に会えて嬉しくて、師匠が相変わらずで安心して、2000年前と変わらないマイペースさにちよっぴり腑に落ちない気分になる。紛れもなくこの人はマリエラの師匠だ。

だからマリエラは、師匠が出て行く前と変わらない様子で、ちよっぴり本音を漏らしてしまう。

「もう、師匠に会えないと思ってちよっとは落ち込んだんですよ？」

「うわ、なにそれ、カワイーイ！」
ぎゅーっと抱きついてくる師匠。

「しっ、師匠、苦しい。あと、あつい」

師匠は体温が高いから冬以外は抱きつかれると暑いのだ。

（そっぴや、最近、雨降らなくなったな……。もうすぐ夏なんだ。そんな事も気付かなかった……）

師匠を引き剥がしながら、雨季が終わっていた事に漸く気がつくマリエラ。なんだかリンクスがいなくなってから、周りが見えなくなっていた気がする。思い出したように辺りを見回すと、見慣れた

はずの『木漏れ日』の店内にさえ懐かしさに似た発見がある。

(すみっこの大きなガラス瓶、いろんな石鹸をいれたらかわいいと思っ買って買った。煙玉の見分けがつきやすいように買った色紙も丸めたままになってるや)

そして、ずっと傍にいてくれたジーク。師匠に続けと抱きつく隙を窺っていた彼は、マリエラの無垢な視線にさらされてバツが悪そうに視線をさまよわせている。

「ふふ……」

とても自然に笑顔がこぼれた。

リンクスが死んでしまつて、悲しくて、寂しくて、自分のせいに違いなくて、二度と笑える日なんて来ないと思っていたのに。もう二度とリンクスには会えなくて、リンクスは楽しいとか、嬉しいとか感じる事も、笑うことも出来ないのに、こんな風に笑えてしまう自分がとても酷い者のようにマリエラは感じてしまう。

「師匠……、あのね……」

「どした？ マリエラ」

泣き笑いのような顔をしてマリエラはリンクスの事を師匠に話す。半年ほど前に仮死の眠りから目覚めて、魔の森で出会ってから的事を。師匠はいい加減で、普段は人の話なんてほとんど聞いちゃいないのに、こんな時はちゃんと最後まで聞いてくれるのだ。どんなに言葉に詰まっても、優しく続きを促して心に刺さった棘が抜けるまで付き合ってくれる。

「だからね……、ヒック、わだじ、迷宮をたおじだくでね……。うつく……、わだじのせいだからね……」

再びぐじぐじと泣きながら、その辺の台拭きを握り締めて師匠にリンクスの死を語る。

「そっかー。そんなことがあったか。で、マリエラは自分のせいでリンクスが死んだと思ってるんだな？」

よしよしと、幼子にするようにマリエラの頭を撫でつつ優しく問いかける師匠。ジークは綺麗な手拭を手に持って仲間に入りたそうにそわそわしている。

「うん。だつて、わだじが……」

「んな訳あるか！ 《転写》！」

「ぎゃー！！！」

二百年ぶりの《転写》だ。超痛い。急に奇声を上げたマリエラに、ジークはおろおろしている。

「しつ、師匠！？ ちょ、なに？ 転写とか。しかも、これ、『地脈契約した弟子を呼び戻す方法』！？ ありがた……くないよ？

特級作れるようになったら《ライブラリ》に開示される内容出てくるよ？ ムダじゃない？ もうすぐなのに、今《転写》とか！

ムダ《転写》じゃない。痛いのもムダじゃないですかー！ もー、師匠！！！」

ジーク以上にあわあわオタつくマリエラ。あまりの衝撃に涙はすっかり引っ込んでしまった。

「まだ特級作れるようになってない、オマエが悪い！ あとは、200年たつて迷宮が倒せてないココの連中が悪い！ みんなちよつとずつ悪いんだよ。取り返しのつかないことっていうのは、大抵そういう風に出てんだ。だからな、誰が悪いってもんじゃねーの。わかった？ 自分が悪いとかっていじけてる暇があるなら、リンクスってやつに分まで前向いて歩きな！ オマエはもう、十分悲しんだんだよ」

ニイと笑いながら、マリエラの瞳をじっと見て師匠は言う。師匠の断言にマリエラの目はアプリオレの実のようにまん丸になっている。

「師匠、ほんとうに……?」

「ああ。あたしを誰だと思ってるんだ?」

「……ししょお」

マリエラが小さい声で応えようと、師匠はとても満足そうに「な？
ホントだろ?」と笑った。

マリエラの心に刺さっていた棘は、師匠の《転写》の衝撃で抜けるどころか跡形もなく消し飛んでしまったらしい。師匠はすごい人だから、師匠が言うならそうなんだろう。

「師匠、私、リンクスの分も頑張るよ」

マリエラにとってリンクスはとても大切な人で、リンクスを失った事はとても悲しい。でもリンクスと過ごした時間がなくなるわけではないのだ。全部憶えている。きつと、何時までもよくよするマリエラをリンクスは喜ばない。漸くそう思えたマリエラ。その口元は決意に引き結ばれ、瞳はまっすぐに師匠を見つめている。

「いい子だ、マリエラ。じゃー、今までサボってたぶん、ビシバシいくから覚悟しとけな!」

「へ!!!???」

にっばーと笑う師匠。いい笑顔だ。こんな笑顔の師匠は碌な事を考えていない。

(そうだった……、師匠はこういう人だった……)

すっかり平常運転に戻ってしまったマリエラは、師匠がどっから見つけてくる難題を思うと、《転写》されたように頭が痛くなるのだった。

「はー。覚悟しときますー。あー、そうだ。ついでにこれも聞きたかったんですよー。どうして、卒業試験に仮死の魔法陣を選んだん

ですか？」

それはマリエラの心にずっと引っかかっていたことだった。仮死の魔法陣がありふれたものでないことはマリエラにもわかる。あれが無ければ魔の森スタンレドの氾濫を生き残れはしなかった。だからこそ思っ
てしまう。なぜ、『仮死の魔法陣』を憶えさせたのか、と。しかし
師匠の回答はこれまた思いも寄らぬものだった。

「えー？ だって、アレ、自分で描くのめんどいじゃん」
「は？」

マリエラに『仮死の魔法陣』を《転写》したのは師匠だ。だから、
師匠が『仮死の魔法陣』を描けないはずはない。

めんどくさいから弟子に描かせた。

師匠らしいと言えば師匠らしいのだが、そのために幼い頃から幾
つもの魔法陣を《転写》され続けてきたと言うのか。

「マリエラ得意だろ？ ああいう細かいの」
「いや、そうですけど……、本当に面倒くさいから私に描かせたと
？」
「そうだけど？」
あっさりと答える師匠。

「何たる理不尽……」
膝から崩れ落ち落ちそうになるマリエラに師匠は追い討ちをかけ
る。

「つーか、よく考えりゃわかるじゃん。魔法陣なんて、錬金術と関
係ないじゃん」
「！！！！！！」

2000年の時を経て明かされる衝撃の事実。

あまりの衝撃に凍りついたまま動けなくなったマリエラを見て、ゲラゲラ笑いながら師匠は、ジークに注がせた秘蔵の酒をあおるのだった。

「もう、いいや……」

師匠をまじめに相手にした自分が馬鹿だった。師匠はこういう人だったのだ。

師匠が出て行ってから魔の森で一人暮らした数年の間に、どうやら師匠を美化しすぎていたようだ。

(一滴もお酒を飲んでいないのに頭がクラクラしてきた)

頭を抱えるマリエラに師匠が明るく止めを刺す。

「てことで、上の客間、あたしの部屋な！ いやー、まつさかマリエラがこんな立派な家に住んでると思わなかったわー。あ、ジーク、後で部屋に酒運んどいて。あと風呂沸いたら呼んで」

「かしこまりました。義母上」

「師匠ここに住むの！？ あと、ジーク、何その呼び方!？」

結局その日は、ジークの義母上呼びをやめさせるのが精一杯だった。

「えー、いいじゃん。マリエラ、あたしの娘みたいなものだし」

「だから！ なんで私が娘だったらジークが息子になるんですか!」

「うっわー、ちよっぴりジーク応援したくなってきたわ……」

「よろしくお願いします。義母上」

結局、師匠はジークに「フレイ様と呼ばしてやろう」とエラソーに言っていて、「師匠、偉そう」というマリエラの苦言には、「えー? あたしエライもん」と応えていた。

すっかり元の元気を取り戻したマリエラを見てジークの心の内に

安堵と喪失感がせめぎ合う。それは共に悲しみの淵に沈んでいたいという怠惰な気持ちで、未だに歩き出せない自分を置いて前を向いて歩き出したマリエラがどこか遠くに行ってしまうそうだと焦る気持ちであった。

師匠、フレイジージャの黄金の瞳は、炎のように揺らめきながら、愛弟子とその護衛の青年のありようを心のうちまで見透かすようにただ映していた。

時を越え明かされる事実（後書き）

ぜじくくしあらすじ…師匠はめんどくそがり

更なる衝撃

その夜は眠ることが出来なかった。

ジークムントの眠りは浅い。長い奴隷生活の名残でわずかな物音でも目が覚めてしまうのだと、彼はそう思っていた。彼を長らく虐げた僮僕せむしの商人は、重労働で疲れ果てていようと主の前で眠る奴隷の無防備な体をこれでもかと傷つけたからだ。

夜の明け切らぬ寝室は沈みかけた月明かりだけでは薄暗く、ジークの隻眼では少ない家具の輪郭が判別できるくらいだ。ベッドの上で壁にもたれかかるように片膝を抱えて座るジークは、身動き一つせずに夜明けの音を聴いていた。

夜は無音ではない。『木漏れ日』のある一角は治安の悪い場所ではないけれど、真夜中に歩出く者はほとんどおらず、夜はとても静かで暮らしやすい。それでも風が吹けば木々の、葉の揺れる音が聞こえるし、虫の鳴き声や夜目の聞く鳥の羽音も聞こえてくる。

夜明けが近づくと早起きな鳥や小動物が動き出す。どこか遠くで窓や扉をあける音。朝食の時間に合うようにパン屋が仕込みをはじめているのだろうか。

自分の心臓の音さえ聞こえそうなほどに息をひそめて耳をそばだてていれば、街が眠りから覚めていく様子が音となって聞こえてくる。

遠くで鳥の囀りたんざつ。

(あの鳴き声はモルゲナか……)

夜明けより早く活動を始める鳥だ。モルゲナの囀りは夜明けが近い事を教えてくれる。

(これは、父さんが教えてくれたんだっ)

ジークの父は狩人だ。彼は狩人の血筋。弓矢を背負い獲物を追って何日も森で狩りをするのだ。今まさにジークがしているように座ったまま森の中で体を休め、息を潜めて夜を過ごす。場合によっては目を開けたまま眠る者も先祖にはいたらしい。

父に連れられ狩りに出て初めて森で夜を明かしたとき、父が教えてくれた全てのことは、ひどく簡単に身に付けることが出来た。あの頃は学の無い父の教えは簡単なものばかりで、教師に教わった学問や礼儀作法の方がよほど難しいのだと思っていたが、そうではない。今ならばわかる。父の教えた全てはジークムントに流れる血に脈々と受け継がれていたもので、だからこそ高度な技術にも関わらず容易に習得出来たのだ。

ジークの眠りが浅い事だって、本当は奴隷生活の、傴僂の商人のせいではなく、生まれ持つての資質に近い。

(わかっている……)

ジークは脇に置かれた弓を抱える。

空手で膝を抱えるよりも、ミスリルの剣を抱えるよりも、弓が一番しっくりくる。

これが、本来の自分のエモノなのだ。

弓を抱え、森の樹を洞窟の壁を背に夜を過ごす。今は部屋の壁に背を預け、こうして夜明けを待っている。

けれど、あの時は。マリエラを逃がすためリンクスと二人デス・リザードを引き付けて闘ったあの時は、リンクスがジークの背を守っていた。

誰かに背中を預けるなんて、誰かの背を守り、守られ戦うなんて、ジークにとっては初めての経験だった。敵は前面に現れるものだけ。

命をかけて戦っているのに、背後に何の不安も無い。そんな経験は初めてで、変わりたいと、なりたいたいと願ったものになれた気がした。

(あの時、弓が使えていれば……)

弓さえ使えていれば、リンクスは死ななかつたに違いない。一撃でデス・リザードを射殺することが出来なくとも、わずかにひるませることが出来たなら、そのわずかな時間の猶予はリンクスにデス・リザードの凶刃を受けるのではなく跳ね返す余裕を与えたに違いないのだから。

いや、使い始めてたった半年程度の剣がこれほど使える様になったのだ。もっと早く弓と向き合っていたなら、自分の力でマリエラを守れたかもしれない。

あの日を思い返すたび、後悔は尽きない。

迷宮討伐軍の治療技師でもあるニールンバーグが不在の日だったのだ。迷宮で何かあると考えるほうが無難だろう。そんな日に迷宮に潜らなければ。

どれほど安全な階層であっても、ポーションを手元に持っていれば。

ज्याなどという忠心の無い荷運び奴隷を連れ歩かなければ。

そんな、もしもの話をしたところで、過去を、その延長にある現在を変える事などできはしないと、過酷な奴隷生活を生き延びたジークムントは誰よりも良く分かっていた。

「もしも、あの時」そんな後悔をどれほど繰り返したか知れないのだ。

けれどそのすべては全く無意味で、死の淵にまで転がり落ちたジークムントを救ったのは、偶然に出会ったマリエラだった。

だからこそ、二度と間違うことがないように、間違いだらけだった過去の自分と決別してしまいたかったのに。

過去の自分は既になく、マリエラに助けられた新しい自分として、マリエラに与えられたこの剣で生きていこうと思っていたのに。

マリエラを守る事すら出来はしなかった。

マリエラを守ったのはリンクスで、背を預けられる大切な仲間が親友だったのに、そんな彼さえ失ってしまった。新しい自分になどなれはしなかったのだ。

薄っすらと東の空が白んできた。これならば、裏庭の壁に取り付けた的が何とか見える。ジークムントは練習用の矢筒を背負うと弓を片手に立ち上がる。

もしもあの時。どれほど後悔しても過去を変える事は出来はしない。憂うだけ無駄というものだ。フレイジージャの言うように、誰か一人だけが悪いというものでもないことも理解している。

けれど、『弓を使えていれば』という思いだけはどうしても打ち消すことが出来なかった。

ジークムントは、マリエラと出会ってからのこの半年を思い返す。「だーっ、もう、ちょこまかと！ ジーク！ 弓使えよ、お前ほんとは弓使いだろ！」

冬のアーリマン温泉で、ニードルエイプを相手取りながら、リンクスがそう言った。

ワイバーン狩りの時だって、冒険者と距離をとり襲ってこないワイバーンに弓があればと思わなかったわけではない。

エルメラの夫、ヴォイドにだって指摘されていたではないか。

その全てに言い訳をして、弓を、過去の自分を遠ざけてきた。

(失う訳にはいかない。マリエラだけは、絶対に……)

ジークの腰にはマリエラに貰ったミスリルの剣。そして、リンクスから借りたままの短剣がある。

『マリエラを守れ』という、リンクスの思いごと預かった短剣だ。もう、返すことは出来ないのならば、何処までも抱いていけばいい。どうせ変われなかったのだ。大銀貨2枚の価値しかなかったこの身だ。錬金術師マリエラに相応しい護衛でありたいなどと、出来すぎた願いだっただの。

わずかでもマリエラの助けになれるなら。師と再会し、再び前を向いて歩き出した彼女のそばに少しでも長くいられるのならば。

ジークムントは静かに裏庭へでて、朝もやにけぶる的へと弓を引き絞るのだった。

「ふいふ、めまぐるしい一週間だったね、ジーク」

「ああ……」

暖炉のある居間でぐったりとつぶすマリエラとジーク。

「めまぐるしいって、目がぐるぐるしそうな時に言う言葉なんだって始めて実感したよ……」

師匠の襲来から1週間。あの師匠が来たのだ。忙しくならないはずはない。

わかっていただけれど、この一週間は本当に忙しかった。

まずは、『木漏れ日』の常連さん達への紹介。

これはスムーズに行った。少なくともマリエラはそう思っていた。師匠はマリエラの『帝都の錬金術師』設定にも乗っかってくれたし、少なくともいたいそうにこやかにみんなと挨拶を交わしていた。

一通り挨拶を終えた後、「結構、バラエティーに富んでいいじゃん」とにんまりと笑う師匠にちよっぴり寒気を憶えたけれど、少なくともこの段階ではマリエラの平和はまだ保たれていた。

問題はレオンハルト、ウェイスハルトらシューゼンワールド辺境伯家に招かれてからだった。

師匠が来た翌日に、ウェイスハルト自ら『木漏れ日』にやってきて、師匠と丁寧な挨拶を交わした後、夕食へと招待してくれたのだ。師匠、マリエラ、ジークの3人が地下大水道を通ってシューゼンワールド辺境伯の屋敷へ到着すると、以前よりも更に豪華な食事に高級な酒が用意されていて、レオンハルト、ウェイスハルトの迷宮都市のツートップが自ら歓待してくれた。迷宮都市の成り立ちや迷宮討伐の話など、遠方からの貴人に対してするような話を織り交ぜながら懇親を図る二人。

二度目であっても恐縮するマリエラとは対照的に、師匠ことフレイジージャは遠慮の欠片も見せず大いに食べて、高い酒をこれでもかと飲みまくっていた。

「フレイジージャ殿。そのお名前は聞いたことがある。現れた方角といい、マリエラさんの師であることといい、貴殿は200年前の魔の森の氾濫の際に、魔の森から溢れる高位魔物を焼き滅ぼし、一帯を焦土に変えたという炎災の賢者 フレイジージャ殿ではございませんか？」

師匠に酒がたっぷりと回った頃合を見計らって、ウェイスハルト

が師匠に尋ねる。

「へえ、あたしの名前、伝わってんだ」

あっさりと200年前の人物であり、炎災の賢者である事を肯定するフレイジージャ。

「！……やはり！ これぞ天の導きやもしれん。フレイジージャ殿、迷宮討伐のためそのお力を我ら迷宮討伐軍にお貸しいただきたい！」

ウエイスハルトと顔を見合わせたレオンハルトは、フレイジージャに助力を請う。しかし。

「無理だね。あんたたちの望むような助けにはなれんよ」

まるでレオンハルトらの申し出を見透かしていたように応えるフレイジージャ。

「我々の望む助けになれないとは、どういうことでしょうか？」

フレイジージャの無礼とも取れる発言に、機嫌を損ねた様子もなくウエイスハルトが聞き返す。

「戦力にはなれないって事。あんた、ウエイス様だっけ？ あたしの人探しの呪文、聞いてたろ？ 気付かないか？」

師匠の物言いにウエイスハルトの瞳がほんの少しだけ揺らぐ。無礼な物言いに気を悪くしたのではない。カイト隊長とフレイジージャのやり取りをスキルや魔法で聞いていたのは事実だが、気付かれているとは思わなかった。

会話を盗み聞くなど貴族の社交では良くあることで、だからこそ盗聴ありきで防御を行うものだし、盗聴自体ばれないように幾重にも隠匿するものだ。昨日使ったスキルや魔術もそういう物で、やすやすと見破られるような術ではなかった。それに気付いた上で、カ

イト隊長の前で術を使ったということは、わざと聞かせたということだ。フレイジージャが唱えた呪文は正しくウェイスハルトの耳に届いている。

「……、不埒なまねをしました。謝罪を。あれは初めて聞く呪文でした」

フレイジージャの金の瞳を見つめ、ウェイスハルトが謝罪する。この相手に虚偽や下手な言い訳は悪手だろう。

「別に聞き耳を咎めている訳じゃない。当然の対応だろ。あの呪文はね、精霊魔法だ」

気にした風もなく、師匠は応える。けれどそれを聞いたウェイスハルトの表情は大きく揺らぐ。

「精霊魔法！？ まさか……。失伝したはずでは……。だが、そうか。だからこそあれだけの数の火柱を同時に……」

初めて驚愕の表情を浮かべたウェイスハルトをみたフレイジージャは、楽しそうに笑う。

「もともと使えるヤツが少ないからね。でも問題はそこじゃない。精霊魔法は精霊の力を借りる。だから、精霊の力が弱まる迷宮の中じゃ、大して威力は出ないんだ。ウェイス様の方が戦力になるだろうよ」

精霊魔法。聞きなれない単語だ。師匠がそんな物を使えたなんて、マリエラはちつとも知らなかった。

突如として形成されたシリアス空間に、マリエラとジークはシールドではじかれたように入れない。もつとも入りたくなかったが。晚餐のテーブルはレオンハルト、ウェイスハルトの対面に師匠とマリエラが座っている。料理は前回同様、気軽に楽しめるようにビッフェスタイルになっていて、ジークの席も用意されていたのだが、

護衛だからと辞退している。シューゼンワールド辺境伯家としてもマリエラの意向を尊重して席を用意していた様で、ジークの辞退はそんなに通ってジークはマリエラの後ろに控えて立っている。

つまり、話についていけないマリエラは、ジークと目配せする事も出来ず、ただひたすらにデザートを貪るしかなかった訳だ。

感情を見せないウエイズハルトが驚きを露わにしている事からも精霊魔法が使えるということは軽く流せる事ではないのだろう。けれどその事実を開示した上で戦力にはなれないとフレイジージャが言っているのだ。『協力する気はない』と暗に断っているのだろうかとレオンハルトは考える。

（ならば、なぜ精霊魔法などという切り札を見せる？ いや、そもそも炎災の賢者と呼ばれた御仁だ。思惑を凶ることこそ無礼やもしれん。）

レオンハルトらの前に座るフレイジージャという女性が、Sランクに相当する能力を持つものならば、そもそもたった一度歓待したくらいで助力が得られるはずもない。Sランクというのは一人で大隊規模とも師団規模とも言われる戦力なのだ。推定戦力に大きな開きが見られるのはSランカーの多くが世に出ることなく隠遁を選ん で、その実力が噂の域を越えないからだ。そんな人物が錬金術師マリエラの師として現れた。レオンハルトはその事実にも似た運命を感じずにはいらなかった。

（今は何らかの形で繋がりを得られるだけでも十分な成果といえよう）

そう考えたレオンハルトは、黙々とデザートを口に運ぶマリエラを見た後、フレイジージャに尋ねる。

「戦力にならぬと言われるが、御身はマリエラの師匠であると聞く。ならば、錬金術師としてご助力いただけぬものか」

レオンハルトにチラ見されて、デザートを食べ過ぎたかと焦ったマリエラは、口の中に広がるクリームの甘さを飲み込もうと紅茶を口に含む。

「あー、それなんだけどね。あたし、中級ポーションまでしか作れないから」

「ぶっは！ 師匠！？」

衝撃の事実によりエラは見事に紅茶を嘔きだした。

レオンハルト、ウェイスハルトも石化の呪いにかかった様にピシリと固まって動かない。給仕がわたたと布巾を持ち出して、ジークがマリエラの口元を、給仕がテーブルを拭っている。

そんな事も構わずにマリエラは続ける。シリアス空間は師匠の衝撃の告白で脆くも崩れ去ったらしい。偉い人と会話中に口を挟んではいけないだとか、そんなマリエラの常識さえも崩壊させる破壊力だ。

「ええ！？ ほんとに？ 中級って師匠、なんで？ 師匠なのに！？」

そりゃ驚くだろう。確かに師匠は今まで重要な事からどうでもいいことまで何でもかんでも教えてくれたけれど、中級までしか作れないなんて初耳だ。確かに説明は口頭で、目の前で実演してくれた事はなかったけれど、まさかそんなことが。

「あれー？ 言ってなかったっけ？ ま、作れなくても教えられるんだから問題ないだろ？」

「そっ、そういう問題じゃ無いでしょう？ あ、まさか私が地脈と契約した時？」

マリエラが地脈と契約したとき、師匠のスキルをだいぶ使わせてしまった事を思い出したマリエラは自分のせいかと慌てる。

「いんやゝ。もとから。だつてさゝ、錬金術つてちまちまちまちないんだよね。だからあんま上げてない」

「はあああああ!??」

信じられない。まさかそんな理由とは。いや、この上なく師匠らしくはあるのだが。

開いた口が塞がらないマリエラと、同じく石化が解けないシューゼンワルド兄弟。二人の口もちよっぴり開いたままになっていて、整った顔立ちが台無しだ。特にウェイスハルトは普段のポーカーフエイスは何処へやら、見た事のない間抜けな表情をしている。大惨事だ。

間抜け面をさらす三人を面白そうに眺めた師匠は、グラスの酒を飲み干すと、

「あたしも辺境伯に話があるんだ」とにんまり笑ってそう言った。

更なる衝撃（後書き）

ざっくりあらずじ…シリアスさんも、茶も嘖く勢い

焰の契約

師匠とシューゼンワルド家の会食から1週間後。迷宮都市の商人ギルドの住居管理部門には街中の人が詰めかけて長蛇の列を作っていて、住居管理部門だけでなく商人ギルドが総出で対応に追われていた。

「引換券は全戸分用意してありますから、押さなくてくださーい。そこー、喧嘩は外でお願いしまーす」

「はい、次の30名さま、第4会議室へお願いしまーす」

一般住民相手の説明会ではあるが、ここは冒険者の多い迷宮都市。男女を問わず気性の荒い者ばかりで、やれ割り込んだのだの、押したのだの、足を踏んだのだのと列に並んでいる間も小競り合いが耐えない。

「一体いつまで待たせるつもりだ！俺は朝から並んでんだぞ。さつさと家に帰らせろ！」

「だいたい、本当にポーシオンなんて手にはいんのかよ！だったら引換券なんて紙切れじゃなくて本物をよこせや！」

「そーだそーだ！」

朝から並んでいるといつても、まだ数刻しか経っていないのだが、気が短くて手の早い連中は既に我慢の限界らしい。そして、我慢の限界に達してたいそう気性が荒くなっている女性がここにも一人。

「私は！もう何日も！家に帰っていないんですよー！！」
バチバチバチッ！

「他におとなしく並べない人はっ！？」

バチバチと体中を帯電させながら、雷帝モードのエルメラが暴れる住人を強制的に静かにさせる。

「おお〜」

「いいぞ、もつとやれ〜」

パチパチと拍手と歓声が巻き起こる。Aランク冒険者『雷帝 エルシー』を間近で見れるなんて、なかなかない機会だ。どさくさに紛れに、握手をしようと手を伸ばした男が強烈な静電気にやられて悲鳴を上げている。

初めのうちはいつものひつつめ髪に紺のワンピースの薬草部門長、エルメラ・シールとして応援作業に当たっていたエルメラだったが、朝から夕方まで説明会の人員整理、夕方以降は書類整理に引換券の作成と、やってもやっても仕事が終わらない。商人ギルド総出で働いているのだ。

なにせ書類の偽造や揉め事が想定以上に多いのだ。諫めても宿めても大声で小競り合いを続ける連中のせいで、残業どころか家にすら帰れなくなったエルメラは、2日目にして雷帝モードを発動し、行儀の悪い住人を武力で黙らせる英断にでた。毎日、夫のヴォイドが子供達と共に着替えと差し入れを持って来てくれているので、まだ手加減できる程度の荒れ狂いようなのだが、滅多に人前に姿を現さない『雷帝』に痺れさせてもらいたい冒険者などがわざと小競り合いを起こしているから、一定時間毎にショータイムが開催されるありさまだ。

小競り合いを收拾するまでの時間は圧倒的に短くなったが、揉め事自体は増えたのか減ったのかわからない。いずれにせよ『雷帝エルシー』のお仕置きは、並ぶのに飽きた住人達のたった一つの娯楽となっている。エルメラにとっては不幸なことだが、商人ギルドの説明会はあと1週間は終わらないだろう。

なにしろ説明会の内容は、『ポーション販売の開始と引換券の配布について』なのだから。

「ごねたり暴れたり書類を偽造して、人より多く手に入れようとするものは、しばらく後を絶たないに違いない。」

マリエラの師匠がレオンハルト、ウエイスハルトにしたオハナシとはマリエラが今の4〜5倍はポーションが作れる、というぶつちやけ話だった。

迷宮都市が抱える問題のいくつかは、実はシンプルなものなのだ。迷宮を倒す。階層の更新が出来なくても人が入って魔物を倒せば成長を抑制できる。

本来はこれだけだ。

但し、50階層を超える魔窟であるから圧倒的に人手が足りない。迷宮討伐軍が全力で討伐を続けても成長を止められているか疑問なほどだ。迷宮都市自体、人手が不足しているのだ。迷宮に送り込みたくても数は限られてしまう。

そして迷宮都市の人口、特に冒険者不足の原因は、迷宮に入った冒険者達の死亡あるいは重傷率の高さと、迷宮都市と帝都を繋ぐ街道の不便さにある。

この二つの問題は、ポーションによって大きく緩和できるのだ。

ポーションが帝都並みの価格で市販されれば冒険者達の死亡率は大きく下がるし、魔物除けポーションさえあれば魔の森を抜けて帝都と行き来する事も容易になる。これはいずれもマリエラのポーションを使ってきた迷宮討伐軍や黒鉄輸送隊が証明してきた事でもあった。

今までマリエラが迷宮討伐軍に納めてきたポーションは上級換算で日に100本。迷宮討伐軍が迷宮の成長を抑えるために討伐を行っても余剰がでる本数だ。勿論、貴重なものとして最低限の使用に留めてきたからでもあるが、マリエラのポーション作成能力は、迷宮討伐軍の使用量をすでに上回っている。それが、さらに何倍もの余力があるのだと師匠が言うのだ。

「こんなカードがあるんだ。どう切る？」

マリエラをカードに例え、にやりと笑って問いかける師匠とシューゼンワルド兄弟の視線が絡む。

レオンハルト、ウエイスハルトの表情は先ほどまでの友好的なものでなく、迷宮都市を預かる権力者のそれになっている。

マリエラに全力でポーションを作らせれば、迷宮討伐軍だけでなく民間にもポーションを供給することができる。それによって冒険者の負傷率は下がり迷宮探索は活発化する。迷宮の力をより多く殺ぐことができるだろう。

それに魔物除けポーションを市販できれば、魔の森の街道を抜けて帝都との交易を行うことができるようになる。フォレスト・ウルフのように弱いがしつこい魔物が大量に襲ってくる心配がなくなるから、万一強い魔物がきたときのために、数名の護衛さえ付けておけば、通常の商隊でも魔の森を抜けることができるようになる。

迷宮の素材を安く帝都に運べるようになるから迷宮都市の経済状況は良好化するし、何より迷宮で一旗上げようと目論む低く中級の冒険者を迷宮都市に呼び込むことができるだろう。

迷宮都市を治めるシューゼンワルド辺境伯家として、この情報を聞いてポーションを市販しないという選択肢はありえない。「カードをどう切るか」と問われれば、「ポーションを大量製造し民間へ

供給する』と答えるのが普通だろう。咽から手が出るほどに欲しいカードに違いない。

けれどレオンハルトは、じっくりと考えを巡らせた後、こう答えた。

「確かに、状況を大きく動かせるカードだが、そのカードは我々のものではない」

レオンハルトの答えを聞いた師匠は、満足そうに口角を上げた。「合格だ。うん、悪くない。特別に貸してやつてもいいだろう」

(やはり、か……)

レオンハルトは正しい答えを導けたことに安堵する。

眼前に座る炎災の賢者と呼ばれる女性は、精霊魔法が使えるだとか、迷宮内では戦力になれないだとか、錬金術師マリエラの師匠であるのに中級までしかポーションが作れないだとか、酷く迂闊な言動を繰り返している。短慮そうな若い見た目にその言動はひどく似合っていて、対峙した者の気持ちを気安いものに、悪く言えば侮るような気分にさせる。

(おそらく試されていたのだろうか)

フレイジージャにとつてマリエラは弟子で自らに属する者であるが、シューゼンワールド辺境伯家は主従でもなんでもない。辺境伯の威光など、いや、皇帝の威光であってもSランカーにとつては伏すべきものでないのだ。レオンハルト以外のSランカーが身を隠し、隠遁を決めていることが良い証拠だ。

権力者として錬金術師マリエラを物のように扱うことは許さない。暗にそう言っているのだと、レオンハルトは理解した。

もし、レオンハルトがマリエラを辺境伯家の、迷宮討伐軍のカー

ドとして扱ったならば、炎災の賢者はマリエラをどこかレオンハルトらの手が届かない場所へ連れ去ってしまったかも知れない。

レオンハルトには、眼前の人物が人の姿をした焰のように思えた。手を伸ばせば熱くこの身を焼き尽くすのに、掴むことなどできない。燃え盛る炎は、薪炭しんたんを喰らい尽くせばたちまちいずこかへ消え失せる。薪炭対価を差し出す以外に、この焰をこの地に留めることはできないだろう。

「対価は？」

フレイジージャが言った「貸してやる」は「マリエラを通じて力を貸してやる」ということだろう。思わぬありがたい申し出だ。気まぐれな焰が燃え移る先を変えてしまう前に、望む対価を差し出そうと、レオンハルトが対価を尋ねる。

「さつき話したマリエラの秘密だよ」

「承知した。我が名にかけて守ると誓おう」

契約は交わされた。何らかの契約術式を介した物ではないけれど、決して破ることは許されない。これはそういった類のものだとレオンハルトは感じていた。

「なるほど……。それならば、経済もむしろ活性化が見込めるか……」

兄レオンハルトとフレイジージャの契約が成立するまで控えていたウェイスハルトが、師匠が提示した『対価』に深く納得する。

シューゼンワールド辺境伯家に属さない錬金術師としてマリエラが大量にポーションを作った場合、当然対価が発生する。現在ですら今までのポーション代金として大量の金貨が『木漏れ日』の地下に眠っているのだ。金というのは皆が使ってこそ街全体が潤うのであって、埋蔵しては経済の停滞を招いてしまう。

フレイジージャはこれから錬成されるであろう大量のポーションの対価に、金銭ではなく、マリエラが普通の錬金術師ではありえないほどの魔力を、ポーションの生産能力を持つという秘密を守り、彼女を保護し続けることを挙げたのだ。最初にマリエラの秘密を明らかにした事だって、レオンハルトらの人品を見極めさえすれば力を貸してくれるつもりだったのだろう。

（流石は『賢者』を冠する方だ……。だが、我々に都合が良すぎはしないか？）

ウエイスハルトは心中で頭を垂れつつも、わずかばかりの疑念を抱く。無論、兄レオンハルトの決定に異論がある訳ではない。ウエイスハルトであっても同じ答えをしただろうし、他に選択肢などは無かった。

（炎災の賢者の目的はなんだ？）

目の前で酒を楽しむ女性からは、言葉以上の意図は読み取れない。

（今は借りる以外に道はなしか……。ならば、最良の道を探すまで）
ウエイスハルトは錬金術師^{マリエラ}の負担を最小に、かつポーションを最大限製造する方法を模索する。錬金術師^{マリエラ}をただ働きさせるつもりはないが、ポーションの対価に一本幾らの代金が不要ならば、迷宮都市の住人に可能な限り分業させて住人達にも対価を支払えばよい。民間にポーションを流通させ、得られた代金を材料や中間処理を受け持つ多くの住人を通じて迷宮都市に還元する。街の中で金貨は巡り経済も活性化するというものだ。

「流石は炎災の賢者殿。御見それした」

師匠を褒め称えるシューゼンワルド兄弟と、たいそう気分良さげに高いお酒をおかわりする師匠。

三人の間には何やら合意が形成されつつあるが、何の話をしてい

るのか、マリエラだけがちつとも分かっていなかった。
見事なまでに蚊帳の外である。

（私の話だって事と、ろくでもない話だって事だけは分かるけどね
！）

そこだけわかっていれば、マリエラとしては問題ない。いつもの
事という奴だ。表情だけはわかってるカオでマリエラも「あいわか
った」とばかりに頷いた。

こうして渦中のマリエラが話の内容を理解しないまま、ポーシヨ
ンの大量生産計画が決定されたのだった。

焰の契約（後書き）

ざっくりあらすじ：みんなでポーション作って売ろう作戦開始

それぞれの1週間　～薬師たち

ポーションを市販するための障害をウェイスハルトは次々と潰していった。

いくらマリエラが非常識な量のポーションを製造できるといっても、迷宮都市全体にポーションを供給するのだ。ほかの人間が代われる作業は割り振らなければ、とてもではないがポーションを民間に販売することなどできない。

薬草にポーション瓶、材料の運搬と製造工程の振り分け、製品の流通と販売方法、そして何よりも錬金術師マリエラの身の安全。書類はそれこそ山のように積みあがったが、ウェイスハルトの辣腕らつわんぶりに見る間に消化されていった。

「ポーションの製造は迷宮討伐軍基地の地下に工房を設けます。あそこならば外からの護りも固く、地下大水道を使えば錬金術師も安全に移動できる。完成したポーションは商人ギルドを通じて販売を肝心の錬金術師ですが、アグウィナス家がポーションの製造方法を確立したと噂を流します。ロバートが当主の座を退いて姿を隠しているから丁度いい。皆我々の都合の良いように解釈してくれるでしょう」

決裁の書類を渡しつつ、レオンハルトに説明するウェイスハルト。『木漏れ日』の警備は既に増員済みである。迷宮都市の不穏分子はこの半年であらかた潰してあるのだが、フレイジージャというたいそう目立つ冒険者の来訪で、身の程をわきまえない輩がちりほらりと湧いている。もっともマリエラと違ってフレイジージャは大層気配に敏感な上に強烈な魔法使いであるから、フレイジージャや『

木漏れ日』の人間を守るためというよりは、キレたフレイジージャに街中で火柱ファイヤーさせないための措置である。

どうやっているのかは分からないが、迷宮討伐軍の諜報部隊より先に不穏分子を見つけけては、外套の端やら髪の毛やらを少しずつ燃やすものだから、市民に紛れたり患者のフリをして『木漏れ日』の警備に当たる兵達も気が抜けない。

「師匠サマは、ほんつとんでもないお人だよ！ 気が抜けないったらありやしない。お陰でこんなほつそり綺麗になつちまったよ。人目を引く美女じゃあ諜報活動に支障が出ちまうよ」

とは奥様諜報部員のメルルさんの言だ。ちなみにレオンハルトにもウエイスハルトにさえも、どの辺りがほつそりしたのか全く分からない。人目の引き具合も以前と全く変わらないから活動に支障はなさそうだ。

もちろんデキル上司のシューゼンワルド兄弟はそんな事はおくびにも出さず、

「ご苦労だった。特注の菓子を届けさせよう」

とポーナスを提示して、メルルをねぎらうのだが。

極めて多忙な数日だったが、ウエイスハルトは書類の山をやっつけてポーシヨン製造の目処を立てた。

「『歩く火の山』もこれくらい容易に倒されてくれればよいものを

……」

同じ山でもずいぶんと差があるところぼしながら決裁書類を持ってくるウエイスハルトに、レオンハルトは書類にサインする手を止めて尋ねる。

「アグウイナス家の令嬢には話をしたのか？」

「キ……キヤル様とはまだ……」

弟をじつと見つめるレオンハルト。ウェイスハルトとは視線が合わない。

「お前らしくもない。この案でもっとも危険にさらされるのはキャロライン殿だろう。やはり私から話をしよう」

「お待ち下さい、兄上。彼女には政策上の事だと誤解されたくないのです。急ぎの案件が片付き次第、必ず話をしますから、それまで猶予願いたい」

冷静で理知的で自らの感情すらも目的のために完璧に御してきた弟の、人間らしい一面にレオンハルトは思わず微笑む。

「急げよ」

ウェイスハルトに芽生えた気持ちが育つまでゆっくり待ちたいところだが、そんな時間はないだろう。「急げよ」とレオンハルトは弟に言う。思わぬ悪意が忍び寄り、蕾を摘み取ってしまう前にと。春に咲く花は思わぬ雨に散り流されてしまうものなのだから。

兄の思いを知ってか知らずか、ウェイスハルトは「はい」と静かに頷いた。

はじめに手配されたのは薬草だった。今まで欲しくとも入手できなかったポーシオンを販売するのだ。混乱は予想されるし、迷宮都市の全員に行き渡らせる必要がある。だから最初に販売するのは少ない魔力で大量に作れて、かつ材料が入手しやすい魔物除けポーシオンと低級ポーシオンの2種類に限定することとした。

魔除けポーションは低級のもので、魔の森の街道に行くには有効だけれど、スライムには効果がないから、マリエラたちが利用する地下大水道では使えない。その点においても有利な選択といえた。

必要な薬草は、キュルリケ、プロモミンテラ、デイジス。どれも迷宮都市のあちこちに生えていて、栽培も容易なものばかりだ。まばらに残して刈り取れば2、3日で元通りに生えそろう繁殖力の旺盛な薬草ばかりだから、買取価格を倍に上げれば、スラムの住人や小遣いの欲しい子供達がいくらでも集めて来てくれた。

ドサクサにまぎれて関係のない雑草を混ぜて持つてくる慮外者もいるくらいだ。りよがいもの

薬草を集めるよりも、その後の処理と品質管理の方が問題といえた。どれも特徴的な植物ではあるけれど、雑草を混ぜられると素人には判別しにくい。その後の処理に当たって、プロモミンテラは根っこや花を、キュルリケは茎を除かないと効果が低くなるという。デイジスは葉も蔓も使えるが、繊維の長い蔓の部分は縄にして別の用途に回したい。

錬金術のスキル保有者であれば、《乾燥》と《粉碎》は使えるけれど、薬草によって処理を変え、雑草や異物を取り除くような仕事がこの街の薬師たち出来るだろうか。

それに、ポーションが回収れば薬は売れなくなるかもしれない。ウェイスハルトが提示した通常の倍ほどの処理価格と量は、薬の売れ行きが落ちる保障としても十分なものだったが、苦心して作り上げた薬が売れなくなること、反発が起ることも予想されていた。

そのような懸念を抱きつつも商人ギルド薬草部門長を呼び出したウェイスハルトであったが、返ってきたのは「薬師の皆さんに任せおけば、何の問題もありません」というエルメラの太鼓判だった。

薬師たちの反応は、概ねエルメラの予想通りといえた。いつもの勉強会の席で話を聞いた薬師たちは、渡された薬草の処理方法が書かれた書類を見た後、ひそひそと話を始めた。

「薬草の処理方法は、今までの傷薬用や香の処理とまったく一緒じゃねえか」

「おいらは昔、よその錬金術師に聞いたことがあるんだがよ、よそじゃ、魔物除けみたいな安いポーシヨンのために、わざわざプロモミンテラの花まで除けたりしないらしい。普通の薬は効き目が弱いから分けてるんだと思っただがな。こんな細かい作業をすんのは、嬢ちゃんだけだと思っただぜ」

「おい、お前、気が利かねえ男だっっていわれねえか？ だからモテねえんだよ」

「あ？ 気が利かねえとかなんの話だよ」

「だからよ、嬢ちゃんの話だよ」

何事かに気づいた薬師たちが目配せをし合う。

「おれはやるぜ」

「おいらもだ」

口々に薬草の処理を引き受けると頷きあう薬師たち。集まっているのは迷宮都市の主要な薬師たちで、リンクスが死んで以降はマリエラは姿を見せていないし、キャロラインも害虫駆除団子の製造を開始して以来多忙で、この日も来てはいなかった。マリエラの友人であるリンクスという青年が迷宮で亡くなって以降マリエラが塞ぎこんでいることは薬師たちも知っていて、何とか元気付けたいと皆が思っていたのだ。

集まった薬師は、薬草の処理を引き受けすることに全員異論はないようだ。

「文句があるヤツはいるか？ いたら知り合いが店までハナシをしに行くぜ？」

「ダイダラマイマイの汁つけてかよ？ 懲りないヤツだな」

「って、あれ、お前んとこの仕業だったんか？」

「おう、恥ずかしがらな」

「おお、お前がスタイリッシュ・ティー・パーティーの陰の立役者だったのかよ！」

「ははは、俺のおかげともいえるな。褒めていいぜ」

「褒めねえよ、どあほ」

そんな軽口が交わされる。薬師たちの思いは一つにまとまったようだ。

「それにしても、嬢ちゃんがなあ……」

「だからお前、一言余計なんだよ。フラれるときに言われねえか？ 俺らは何も知らねんだよ」

「え？ でも、おいら知って……」

「だから、黙れって。余計なことぬかしたら、お前んとこの薬瓶にでっかい虫を詰め込むぞ！」

「そうだぞ。余計なことをしゃべる野郎は、ラベルを泥入れた軟膏缶に貼り替えてやるからな！」

「ダイダラマイマイのぶつぶつ付けたチンピラを店にけしかけてやるからな！」

過去の悪行暴露大会になりかける会議室を静かにさせたのは、エルメラだった。

「何のお話かはワカリマセンが、根も葉もない噂をする方とは、オハナシさせていただきますから、ご了承くださいね」

「ハイ。スンマセン」

にっこり笑うエルメラ薬草部門長。その指先に一瞬電光が走っ

たように見えて、薬師たちはいつせいに背筋を伸ばした。

いずれにせよ、薬師たちは事情を聞かず依頼を受ける決断をした。街中から集められた3種類の薬草を通常の倍の値段で買い取って、正しく処理して商人ギルド薬草部門へ納品する。集められた乾燥、粉碎された薬草は、薬草部門で検品された後、迷宮討伐軍基地に新しく作られた倉庫へと運ばれる。

薬師たちの錬金術スキルは低いままで、スキルによって薬草を見分けたりうまく処理することなどではしない。けれど、自分たちの目で見、匂いを嗅ぎ分け、指で触って薬草を正しく処理してきたのだ。スキルが足りない部分は専用の魔道具を作って補ってきた。彼らには薬草に関する正しい知識が備わっている。

こんな程度の初級の薬草など、混ぜものをされれば一目でわかるし、薬草のどの部分が効果があつて、何処が邪魔になるのかも、全員がきちんと理解していた。

ウェイスハルトの心配が徒勞に終わるほど、迷宮都市の薬師たちは知識も技術も磨いていたのだ。

すべてこの半年で身に付けてきたものだ。『帝都からやって来た』錬金術師の少女が教えてくれたことだった。

「痛い痛いのとんでけーって魔力を込めるといいですよ」

そんなことを言いながら、ねりねりねりねりずーっと薬を練り混ぜるマリエラという女の子。薬を練っているだけなのに、なんだかとても楽しそうで、見ているこっちも楽しくなる。彼女の薬を使った者も楽しい気持ちになるに違いない、そんな少女だ。

ひどい嫌がらせをしたというのに、薬の作り方を教えてくれて、自分達の仲間になってくれた。薬の作り方を教えてくれたのは、薬師たちを助ける目的もあつたのだろうが、彼女一人で迷宮都市全体

の薬を賄いきれないこともあったろう。

いずれにせよ、迷宮都市の冒険者や市民達を怪我や病から救ってくれたのだ。

そして、今度もきつと。

確証はない。思い違いかもしれない。けれど、薬師たちはみな「そうじゃないか」と思ってしまう。彼女の力になりたいと、少しでも楽をさせてやりたいと、マリエラと共に勉強会で学びあった薬師たちはそう思っていた。

薬師たちの中には、もしも思った通りだったとしたら、ここで協力しておけば迷宮が倒された後、錬金術師にしてもらえるかもという打算的な考えの者も居るだろう。

善意であっても打算であっても、迷宮都市の方針に従い協力する事に違いはない。薬師達の利害は一致していたから、雷帝の出番はないままに薬草の供給体制は整っていった。

それぞれの1週間　く薬師たち（後書き）

ざっくりあらすじ：薬師たち「どっかの錬金術師のために協力しち
やおっかな」

それぞれの1週間　く拓かれる道

ポーション瓶に関しては。

新たな瓶の製造は不可欠だった。問題となるのは材料の入手先で、マリエラのとっておきの滝の採砂場では砂の量が不足する。

採砂場の確保とガラス工場の建造は、必須の課題に挙げられた。

「レオンハルト將軍閣下より、貴重な魔物除けポーションを賜ったのだよ！　これは重要な任務である！　今こそ我ら都市防衛隊の真価を見せるときだよ！　魔の森を切り開き、魔の森の氾濫に奪われし採砂場を奪還するのだよ！」

テルーテルがノリノリだ。彼の役職は相談役で、演説を行う立場にはないのだが。テルーテルの発言は従うべき命令として聞くと色々問題があるのだが、雑談として聞くとなんだかほっこりしてくるので、実害がないあいだは皆好きにさせている。

かつてマリエラとジークが板ガラスを作ったガラス工房跡地付近は、河川が地下水脈に流れ込む場所で、今尚大量の砂が流れ着く優良な採砂場だ。魔の森に吞まれているとはいえ、ヤグーの脚で数刻と迷宮都市からの距離も近い。魔の森の開拓は食糧生産を主眼に行われてきたから、採砂場の情報は忘れ去られていたけれど、マリエラとジークから話を聞いたウェイスハルトが実現性ありと計画を立案した。

採砂場までの開拓は、レオンハルト自らが都市防衛隊に命令を通達した。現大佐やカイト隊長にくつついて命令を受け取りに行ったテルーテルは、レオンハルトの「これは重要な任務だ。迷宮都市の未来はこの作戦の成否にかかっていると」言っても過言ではない。可かきゆゆつつききずずみ

及的速やかにガラス工房跡地まで開墾したまえ」という言葉に、心が震えるほどの感動を覚えた。

重要な任務だというのは偽りではあるまい。魔物除けポジションが樽で幾つも提供されるのだ。ポジションの希少性を考えると、その重要度は計り知れない。そんな任務を与えてくれた信頼に、是が非でも応えなければ。テルーテルの顔は初めて剣を与えられた少年のように紅潮していた。

しかも、今回の開墾事業には護衛として一人の冒険者が派遣されていたのだ。

かつて、テルーテルを巨大スライムから助けた隻眼の青年だ。

「ふおおおおおお！ キミはっ！ あの時のっ！ ありがとう！
ありがとう！ また助けにきてくれたのだネッ！」

大喜びのテルーテル。ジークの手を握り締めてぶんぶんと振り回している。緊張と興奮のあまり手汗がすごい。ジークの手はじつと濡れて、未だにうまく扱えない弓矢が滑って更にへたくそになりそうだった。

こんな状況でも作り笑顔を絶やさないジークムント。さすがは師匠に『黒い』と評される男だ。大人の対応といえよう。人脈というのは冒険者のような自らの武力しか頼れない者にとっては特に有益なのだ。しかもジークは未だ奴隷の身。その辺りを理解して、テルーテルの手汗まみれの両手を笑顔でぎゅっと握り返すジークムントは、マリエラが思っているよりはちよっぴり腹黒いのかも知れない。

ジークの派遣はフレイジージャの決定だ。裏庭で弓の練習をするジークを見かけたフレイジージャは、

「あゝ？ 動かねー的相手になにやってんの？ ちよっどいいや。遊んでる暇があるんだったら、開墾作業の護衛にいつてきな。あ、

飯は現地調達な。開墾終わるまで帰ってくんよ」

と言って、ジークを家から蹴り出してしまったのだ。しかも、マリエラに貰ったミスリルの剣は取り上げられていて、迷宮討伐軍から支給された弓と大量の矢、リンクスの短剣しか武器がない。

「マリエラの警護が……」

「あたしが見とくから問題ない。マリエラー、ジークがオークキングの肉狩りに行くつてよー」

取り付く島を探そうとするジークをフレイジージャが突き落とす。師匠に呼ばれたマリエラが奥からとととやってくる。ちよっぴり目がキラキラしている。

「わー、ジーク、オークキング狩ってきてくれるの！？ 丁度、お肉なくなってたんだよね！ 楽しみー！」

満面の笑顔である。マリエラが大事に取っておいた最後のオークキング肉は師匠に食べられてしまったから尚更だろう。

「ついでに、都市防衛隊の護衛もするらしいから、しばらく留守にするみたいだけど構わないよな、マリエラ？ 場所は魔の森の浅い所だし都市防衛隊も一緒だから特に危ない事なんてねーからな」

「うん！ ジーク、気をつけてね！ あ、ポーシオンたくさん持って行ってね！」

流石は師匠だ。マリエラのツボを心得ている。それにジークのポイントも掴んでいるようだ。久々に見たマリエラのイイ笑顔に、ジークが嫌と言えるはずがない。

「ああ、マリエラ。必ずオークキング肉を持って帰るからな！」

こうして、未だ上手く扱えない弓と短剣という装備で魔の森に赴き、開墾作業にあたる一団の警護をしつつ、自分と都市防衛隊、開

墾作業に参加している農奴たちに肉を供給するというハードなミッションが開始された。開墾作業の参加者の食事は当然用意されているが、特に農奴は粗末な食事ばかりでどうしたって栄養が足りない。少しでも頑張ってもらうには肉を食べさせる必要があるのだ。

マリエラには笑顔を向けて出立したとはいえ、ジークムントの気は重い。

アーリマン温泉の悪夢再び。急に訪れたマリエラのいない修練の日々だ。

しかし今度は1ヶ月も時間をかけるわけにはいかない。師であるフレイジージャが付いているとはいえ、あの性格だ。マリエラの面倒を見るよりもマリエラに面倒をかけるほうが多そうだ。マリエラが再びマルエラになる前に『木漏れ日』に帰らなければならぬ。

ジークムントがうじうじぐだぐだ悩んでいる間にも、マリエラに菓子という魔の手が忍び寄っているに違いないし、『木漏れ日』が酒瓶で溢れかえってしまうかもしれない。錬金術師師弟にとってはパラダイスかもしれないが、外から見れば地獄絵図。『木漏れ日』がそんな状態になる前になんとしても帰るのだ。

アーリマン温泉ではリンクスとエドガンが共にいた。気の合う仲間と親交を深めたあの日々はジークにとって輝かしくも懐かしい思い出だ。しかし、リンクスは今はなく、エドガンは帝都から戻っていない。ジークのそばには隙あらば仲良くしようとしてくるテルーテルしかいないのだ。

テルーテルも憎めないというか、悪い男ではないのだが、友達になるにはいささか年代が上すぎて話が合わない。リンクスから託された短剣を見る度に、ジークは亡き友と過ごした時間を懐かしむ気持ちに駆られてしまう。

(1週間だ！ 何としてでも、1週間で俺は帰るぞ！)

ついに目覚めたジークムント。今まで、いろいろとややこしいことを考えていたのはなんだったのか。

開墾作業に勤しむ一群の周囲を警護しつつ、食べられる魔物を中心に狩って狩って狩りまくる。弓はうまく当たらない。外れたり掠ったり。そのたびに激昂した魔物が襲ってくるが、外れたならまた射ればいい。近くに来れば短剣もあるし、矢を手で直接突き立てたって倒せるのならそれでいい。幸いポジションだけは大量に持たされているし、バジリスク革の防具も持って来られた。この辺りの魔物の攻撃など通らないし、多少の怪我を気にする必要もない。

弓が命中しないと、上手い下手などどうでもいい。魔物除けポジションのせいで魔物はあまり寄ってこないから、弓が外れたとしても魔物がこちらに向かってくるだけでもうけものだ。とにかく量が必要なのだ。満足に肉を食べていない農奴たちにたらふく肉を食わせて、力を付けてもらわねば。

余計な事は一切考えず、ただひたすらに獲物を追い求める狩人と化したジークムント。開墾部隊のみんなから『肉の兄さん』と呼ばれるようになったころ、ジークの弓はそれなりに獲物を倒せるようになっていた。

そして、憧れのレオンハルト將軍から、直接ではないにせよ貴重なポジションと共に重要な任務を与えられ、恩人で高位の冒険者と再会できたテルーテルは。

恩人たるジークと共に、偉大なる事業に携わる歓びに、胸中に熱い思いを燃え上がらせていた。

迷宮都市において魔物除けポジションは最早稀少なものではなくて、ポジションその物の錬成よりも薬草を準備するほうが大変だっ

たくらいなのだが、そんな事は彼は知らない。いや、知っていたとしても、テルーテルのことだから、かまわず使命感に燃えたに違いない。

テルーテルを支配する熱い思い。強い志。彼は今、非常に社会的に有益な方向で光り輝いていた。

なぜか物理的に。

頭がではない。なんだか後光が射すような様相で、周囲の者に強い《共感》を与えてしまったのだ。

「おおおおお！」

実に都合の良いタイミングで進化したテルーテルのスキルによって使命に燃え上がる都市防衛隊の隊員たち。都市防衛隊の隊員と開墾作業に借り出された農奴や雇われたスラムの住人たちは、皆異様なハイテンションで、かつてマリエラとジークが板ガラスを作った工房跡地へと魔の森を切り開いていくのだった。

「我らには魔物除けポーションがある！ 魔の森の魔物など、恐れるものか！」

「魔物除けポーションを振りかけていれば魔物は現れん。我らの前に広がる魔の森はただの森と変わらない！」

口々に強気な言葉を叫ぶ都市防衛隊の隊員達。魔の森は広く、深い層へいけば魔物除けポーションなど効かない強い魔物がうようよいるのだが、知らぬが華とはこのことか。

テルーテルがかなり過大評価してジークの強さを語ったことも、彼らの強気に拍車をかける。無敵の気分で木々を切り倒し、その場で枝を払って粗雑な杭に加工しては開いた道の両端に突き立てる。デイジスで作った縄を巻きつけ、杭の回りにデイジスとプロモミン

テラを植えて行く。切り株や大きな石は土魔法を使えるものが地面をやわらかくし、農奴とヤグーが協力して掘り起こす。

土は粒子が細かくて、いくら均して固めても荷車が通れば流動して轍わだちが出来てしまう。だから大きな石を大小の砂利のサイズに砕いてから地面に混ぜて締め固める。

いくら魔法が使えるとはいえ、都市防衛隊は3軍以下の集まりだ。ヤグーの足で数時間の道のりといえども道を開くのは楽な作業ではない。まれに出てくる魔物を倒し、魔力が切れれば交代し、全員が汗だくになりながら働き続ける。

疲労が一定値を超えているのに全員なぜかイイ笑顔なのが、テルーテルの《共感》の恐ろしさよ。

毎日お腹いっぱい食べられる肉がうまい。体が栄養を求めているから尚のことだろう。たくさん働き、たくさん食べる。テルーテルの熱い使命感と人間の根源的な食と労働の喜びに支配された一同は、なんと1週間という短期間で、ガラス工房跡地の採砂場まで道を開墾し、砂を迷宮都市に運び込むことに成功してしまった。

ちなみに。実に都合よく進化を見せたテルーテルのスキルであったが、進化したにもかかわらずやっぱり自分の意思で発動のコントロールができなかったし、本人も含め進化した事すら誰も気付いていなかった。テルーテルのスキルは各人の能力に影響するものではなかったから、実際はテルーテルの共感のお陰でたいそう気分良く仕事に取り組めた程度の効果しかなかった。けれど、自分たちの力で大仕事をやり遂げたという達成感、都市防衛隊や開墾に参加した農奴たちに大きな自信をもたらした。

そして、ご機嫌で魔の森に向かっていく都市防衛隊一行を見た迷宮都市の人々は、彼らの勇猛さを褒め称え都市防衛隊の人気をかさ

上げたらしい。実利の少ない効果であったが、後日都市防衛隊はレオンハルト將軍閣下よりお褒めの言葉を賜ったから、テルーテルらしいスキルの開花だったのかもしれない。

それぞれの1週間　く拓かれる道（後書き）

ざっくりあらすじ：ジークの帰巢本能目覚める。テルーテル光って
探砂ライン開通。

それぞれの1週間　〜師弟

「うっわー、コレ全部薬草？　わ、全部粉碎までしてあるよ！　すごい、かんぺき！」

「お。あたしの分もちゃんと用意してあんな。感心感心」

迷宮討伐軍基地の地下室に設けられた錬金術工房で、マリエラと師匠はそれぞれ感嘆の声を上げる。

迷宮討伐軍の基地も地下大水道に通じていて、基地の地下と迷宮の第2階層はデイスの繊維で舗装されたスライムを寄せ付けない秘密通路になっている。もちろん舗装されていないだけで、地下大水道全体にも通じているから、マリエラが名乗り出るまではここを通って黒鉄輸送隊がポーションを運び込んだものだった。

地下大水道の出入口近くの一番広い地下室を、迷宮討伐軍はマリエラの仮設工房として整備してくれた。もともと非常食などを保管していた倉庫だった場所で、食糧が詰め込まれていた棚には今は処理済みの薬草が大量に詰め込まれているし、部屋の隅のほうには仮保管用の刻印済み木樽がいくつも積んでおいてある。

部屋の中央には華美ではないが造りの良い長いすとテーブルが置いてあって、横には木箱や樽が置いてある。

いささか殺風景な工房ではあるが、掃除は行き届いているし、何より薬草の量が数日分とは思えないほど大量だ。会食から数日で準備したにしては上出来といえるだろう。

「薬草や樽の運搬は我々にお任せください、錬金術師様方。皆、お二方に関する事は詮索も情報漏えいも決して行わないよう、誓約

済みでございます。すべてお二方の指示に従うよう申し付けております」

部屋に待機していた3名の迷宮討伐軍の若者たち。雑用係として就けられた者たちだから戦力としては2軍以下の兵士だが、品行の良い若者が選ばれている。マリエラや師匠に配慮してのことか、3人のうち1人に女性を配する気配りだ。

「じゃー、マリエラ、ポジションは任せた。えーと、そのキミ。くりくり頭の若い方。キミはあたしの相手を頼むわ」

要望が満たされていることを確認すると、師匠は長いすにどっかと腰を下ろしてかわいらしい顔立ちの栗色の癖毛の青年をそばに招いて……、テーブル横の木箱や樽から酒瓶を取り出すと、早速一杯やり出した。

師匠曰くの「あたしの分」である。呼ばれた青年は若干引きつりながらも、かいがいしく酌をしている。

「いやー、その慣れない感じ、初々しくていいねー。酌をするときはラベルを見せるようにつぐんだよ。ああ、グラスに当てちゃいけない。ふふ、お姉さんがおしえてあげよう」

師匠はご機嫌だ。見た目は妙齡の女性だが、言動が完璧におっさんだ。

ジークの心配を他所に、マリエラは師匠の酒量をちゃんと管理していて、1日に酒瓶1本しか飲ませていない。それでも師匠はマリエラが酒に疎いことをいいことに、ウイスキーやブランデーと言った酒精の強い酒ばかり選ぶから、一本と言っても決して少ない量ではないのだが。普段飲ませてもらっていないように、迷宮討伐軍の基地で若い兵士を相手にかぱかぱと杯を空ける師匠の醜態に、マリエラはひどくご機嫌斜めだ。こんな駄目な大人が師匠だなんて、なんだかとても恥ずかしい。

「師匠、サイテー。とつとつとポーション作って家に連れて帰ってやる。すいません、そこからあそこまでのキュルリケ、全部持つてきてください。あ、もう少し下がって、袋の口を開けてください。」

こうなったら全力でポーションを作って、師匠から酒瓶を取り上げるのだ。残る二人の兵士に頼んで薬草の大袋を並べてもらう。

《錬成空間》

風呂桶よりも容量が大きい縦型の楕円形の錬成空間を構築するマリエラ。この地下室は広いけれど、棚やら樽やら師匠やらが邪魔でこれ以上大きな空間は構築できない。それでも常識はずれなサイズには違いないのだが、「普通のサイズ」を知らないマリエラはかまわず中に《命の雫》を満たす。何もなければの空間に噴出すように淡く光る水が湧き出る様に、目を見張る兵士たち。《命の雫》は水と合わさっても淡い輝きを失うことなく光を放っている。

「薬草を中に入れてください。あ、そこ《錬成空間》あるからもう少し上から。そう、全部どばーっと。入れ終わったら樽をそこに並べてくださいね」

マリエラの指示に従って、薬草を投入して行く二人の兵士。

《薬効抽出》

初級ポーションの抽出は少量の場合は振とう抽出が普通だ。密閉した《錬成空間》内でカクテルを作るようにしゃしゃかしゃか振り混ぜるのだ。飲み物に砂糖を溶かすようにステアするよりも攪拌エネルギーが大きい短時間で成分が溶け出してくれる。

けれど風呂桶サイズの《錬成空間》をじゃっぼんじゃっぼん振り

混ぜるのはスペース的にも魔力的にも無理のある話だから、量が多い場合は溶媒、つまり《命の雫》を動かす。錬金術スキル《薬効抽出》の効果は薬草から成分が溶けやすくするもので、振り混ぜたり掻き混ぜたりという《錬成空間》の動かし方はスキル使用者のイメージによるところが大きい。

今回マリエラが思い浮かべたのは、容器の真ん中にいくつも攪拌羽が付いた棒を入れて回し、中の液体を混ぜるイメージ。薬師たちと作った攪拌容器の一つだ。

攪拌羽の形状がポイントで、中の液体を上下に渦をまくように回してくれる。この攪拌羽を作るのにいくつも試作を重ねたのだと薬師と魔工技師たちが熱弁してくれた。羽根の形状までは覚えていないけれど、混ぜられた液体の動きは良く覚えている。そのイメージで《命の雫》のこもった水と薬草を混ぜて行く。はやく、はやく。もっと強い水流で。

大量の液体を混ぜるのだ。容器に当たる《錬成空間》もそれなりの強度が必要だけれど、楕円という形は内側からの圧力に強いものだし、熱いガラスを作った事を思えば比較にならないほどに簡単だ。マリエラはやけくそのようにじゃじゃばぐるぐる《命の雫》の込もった水を掻き混ぜる。ちらと師匠を見ると、「お！これ、オターレの10年ものか！とりあえずコレ。ロックで」なんていつている。マリエラの錬成もハードさを増そうというものだ。

《薬効抽出》が終われば薬草の滓かすを分離する《残渣分離》だ。これも低級ポーションの場合はろ過でいい。漏斗にろ紙をしいて、上から滓の混じった液体を流し込む方法だ。簡単で再現しやすいけれど、ある程度滓が溜まると勝手に分離速度が落ちてしまう。

(圧力かければいいんだよ)

《錬成空間》を密閉し、容器の下部から薬草の滓を掬い上げるように下から上にフィルターフィルターの膜を移動させる。これも《錬成空間》

のように魔力で作られたものだから、容器のサイズに合わせて大きさを調整できる。透明なフィルターが透明な容器の下から上へ滓を濾し取りながら移動する。マリエラのサポートをする二人の兵士からすればはじめてみる神秘的な光景だ。

「ええええええい！」

ふん、ぬー！ とばかり、マリエラが手を挙げる動作に追従するように、ろ過面が空間の上部にぎゅぎゅぎゅーんと持ち上がる。いつも省スペースな感じでちみちみと練ったり混ぜたりしているマリエラからは想像が付かないダイナミックな動きだ。その力強い動きによって薬草かすもぎゅぎゅつと絞られて小さくまとまって行くように見える。

「おお。力を込めることで、錬金術も効果をますのですね」

感心したように呟く二人の兵士。

「んー、ポーズに意味は無いんだけどね。なんとなく」

てへつと笑って返すマリエラ。二人の兵士はちよっぴり口をあけたまま、マリエラを見、そして師匠をチラ見する。

(あの師にしてこの弟子か……)

そんなことを思っているのだろうが、マリエラはちっとも気が付かない。体を動かすとちよっぴり気分が良くなった。たまには無駄遣い気味に魔力を使って、おりゃー、とりゃーと錬成するのも楽しいかもしれない。

あとは《濃縮、薬効固定》。

錬成空間の内部を薬効が飛ばない程度に温めながら圧力を抜いて行く。湯が沸くよりも遥かに低い温度だけれど、沸騰したお湯のように中から気泡が湧き出してどんどん量が減って行く。そして最後に薬効を固定すれば完成。

量は多いが所詮は初級ポーション。大量作成した分魔力は喰うけれど、作成自体たいしたことはない。あっという間に錬成を終えて樽へとポーションを流し込む。

師匠をちらと見ると、すでに1本酒瓶が空いていた。

（ぐぬぬ。師匠ペースはやい！）

酔っ払った師匠が、くりくり頭の兵士に酒を飲ませようと絡んでいる。仕事なのに。

「つぎ！ 残りのプロモミンテラとデイジスをこっちに、キュルリケはこっちにお願ひします！」

コツは掴んだ。大量でも問題ない。こうなったら同時進行だ。これ以上師匠に酒を飲ませてなるものか。

張り切るマリエラと薬草袋やら樽を抱えて走り回る二人の兵士。くりくり頭の兵士も手伝いたいのか、師匠から逃げたいのかこちらをちらちら見ているのに、師匠に絡まれ逃げられない。

（待ってて、くりくり頭さん。すぐに師匠を連れて帰るからね！）

完全に目的を履き違えたマリエラは、驚異的なスピードで低級魔物除けポーションと低級ポーションを作り上げると、魔力が切れかけてふらふらした足取りでようやく師匠を捕獲するのだった。

「マリエラ、すごいぞー。こんなに早く終わるとは思わなかった！ 成長したな！」

「うう、ししう……」

頭に手を伸ばす師匠の手を振り払いながら、マリエラは師匠と微妙な距離をとる。《転写》除けだ。褒めてくれるのは嬉しいけれど《転写》は勘弁してもらいたい。あんなに張り切って錬成したのに、師匠は3本も酒瓶を空けてしまった。すっかり出来上がってご機嫌になっている。

「じゃー、また明日なー。ミツチエル君だっけ？ 明日も来いよ！」
マリエラが距離をとったのをいいことに、師匠は木箱から2本ばかりお酒の瓶を取り出すと、マリエラを連れて『木漏れ日』へと帰っていった。

(くそ。明日こそ、師匠のお酒を減らしてやる！)

惨敗だ。今日は完璧な敗北だった。師匠の飲酒ペースは速すぎるけれど、このまま負けてはられない。帰ったら一人反省会をしなければ。参謀ジークの不在が悔やまれる。

マリエラはご機嫌で地下大水道を歩いては、溝にはまりそうになる師匠の手を引っ張る。

このまま地下水脈を流れていつてしまえ！ と思わなくも無いがこの師匠のことだ。絶対無事に帰ってくるし、びしょぬれの服の洗濯分マリエラの仕事が増えるだけだろう。

ただでさえ師匠は飲みすぎると顔も洗わずその辺で寝たり、靴下の右と左が家の端っこと端っこに落ちているような激しい服の脱ぎ散らかし方をしたり、だらしなさに磨きがかかるのだ。唯でさえジークが不在で家事分担が重いのに、片付けた端から散らかされてはかなわない。

しかも、絡み酒。

何とか無事に『木漏れ日』に帰ったはいいが、まだ日が高いのに出来上がった師匠は、事もあろうかニーレンバーグに絡み始めた。

「センサーってば、すっごい眉間の皺しわ。谷間じゃん、谷間。ケツデコ？」

けらけら笑いながらニーレンバーグの眉間に手を伸ばす師匠。
恐れを知らぬ振る舞いに、『木漏れ日』で診察という名の警備に

付いている迷宮討伐軍の兵士がぶるぶると慄く。ニーレンバーグはウエイスハルト辺りから、師匠に対して決して失礼の無いようにと厳命されているのか、眉間の皺をさらに深くしながらも、「昼間から飲みすぎではないですか」と大人の対応だ。

そんなニーレンバーグの忍耐虚しく、師匠は楊枝を取り出して「とうっ！」と掛け声一発。

「見るよ、マリエラー！ センセーの眉間に楊枝が挟まったー！ すっげ、手を離しても落ちないんだぜー！」

とオオハシヤギだ。サイテーだ。

「師匠？ 人に迷惑かけちゃダメって言ってますよね？ 言ってますよね？」

「やーん、マリエラこわいー」

「こわいー、じゃありません！ 今すぐ水かぶって正気に戻らないとご飯抜き！」

師匠は怒ったマリエラに風呂場に連行されて、水風呂に放り込まれてようやくシラフに戻ったのだった。キレたマリエラは、服のまま師匠を水風呂に放り込んだから、結局洗濯物が増えてしまった。

（酔っ払い師匠、手がかかる！）

200年前、師匠が帰ってこない日がたびたびあったが、どこで迷惑の限りを尽くしていたのだろうか。

「明日はお手伝いの兵隊さんを増やしてください！」

事情を知っているニーレンバーグを経由して、増員要請をするマリエラ。薬草を棚から運んで《錬成空間》に入れたり、樽に詰める人手が多ければ、もっと短時間でポーションを完成できるだろう。

（明日こそ、師匠を酔っ払わせないから！）

固く決意するマリエラ。

マリエラの要望通り、翌日はくりくり頭のミツチエル君＋4人の兵士が配備された。低級用の3種の薬草はさすがに量が減っていたけれど、その分上級ポーション用の材料と道具が準備されていた。

「マリエラ、上級は1本ずつな」

「じゃあ、師匠はこのちっさいコップ使ってください」

「器が小さくなったって、ペースが落ちると思うなよ」

「それはこちらの台詞です」

にやりと笑い会う師弟。因縁の師弟対決だ。

「さーて、ミツチエル君、飲もつか。あ、そっちのキミもかわいいね。こっちでお姉さんの相手をしなさい」

早速豪遊モードに入った師匠たち。ミツチエル君は2日目にして悟りを開いたような顔をしている。

ぐぬぬ。マリエラは師匠をひと睨みすると、今日も魔力が切れるか切れる寸前まで全力でポーション作成を行うのだった。

それぞれの1週間 く師弟(後書き)

ざっくりあらすじ : 弟子ポジションにつくる、師匠酒飲む。

育つ人、 来たる人

マリエラと兵士たちの努力虚しく、師匠がタダ酒をカツ食らう日々は続いた。

ジークは一週間でオークキングを倒して無事に帰ってきたのだが、マリエラと二人暖炉のある居間で一息ついたのはほんのひと時のことだった。

ジークは師匠の晩御飯のリクエストを叶えるために、昨日は魔の森、今日は迷宮と毎日毎日出かけっぱなしだ。師匠が発行する晩御飯クエストは難易度が結構高いらしくて、大怪我をすることは無いにしろジークは毎日ぼろぼろで、その日のうちに帰ってこられればラッキーといった有様だ。

マリエラの方も師匠の火消しで手一杯で、ジークをフォローする余裕など無い。

今日も今日とてジーさんは森に魔物狩りに、マーさんは地下大水道を通ってポーシオンを製造しに行った。

「酒におぼれた師匠なんて、大水道に落ちてどんぶらこっこと流れていけばいいのに！」

マリエラの心の声はにゅっと尖らせた口から駄々漏れだ。

師匠が流れて行ったなら、うまいこと迷宮最深部に流れ着いて迷宮を討伐しちやいそいな気がする。師匠が大事そうに抱えているのは酒瓶だから、誰もお供してくれなさそうで無理かもしれないのだが。

そんな妄想はさておいて、師匠は酒をタダで準備させるためにシューゼンワルド兄弟と取引をしたに違いない。

(難しそうな話をするから、わかんなかった！ まんまと師匠の策中に！)

今日も酔っぱらった師匠を連れて『木漏れ日』に帰ってきたマリエラは、くう、と無念の表情をする。

「どうしたの、マリエラ姉さま。なにか酸っぱい物でも召し上がったの？」

そつと甘いお茶を差し出すニーレンバーグの娘、シェリーちゃん。マリエラの無念がにじみ出る表情は、酸っぱい物を食べちゃった顔に見えるらしい。シェリーの評価こそ無念に思うべきなのだが、淹れてもらった甘いお茶にすっかり懐柔されてしまふマリエラだった。

「明日こそは！ 明日こそは！ 師匠に飲み足りないと言わせてみせる！」

ぎゅうつと拳を握り締めるマリエラの手を、シェリーはそつと取ると、

「がんばる姉さまには一番大きいキャンディーをどうぞ」

と、棒つきのキャンディーを握らせるのだった。

「あーっ、マリ姉ちゃん、いいなー。エミリーもお勉強がんばってるんだよ！」

マリエラの棒つきキャンディーをみて『ヤグーの跳ね橋亭』の娘、エミリーが声を上げる。

「エミリーちゃんの分もあるよ。パロワとエリオの分も。食べながら一緒に宿題やっちゃおう」

「ぼく、たべるー」

「エリオ、先に手を洗うんだぞ」

『木漏れ日』には今日も子供たちが集まっている。エルメラの息子たちも参加して、本日も学童保育が絶賛営業中だ。

迷宮都市はポーション販売に沸き立っていて話題に上がることは少ないが、ポーション販売の告知と前後して迷宮都市で学校が開設されていた。

迷宮都市の学校は帝都にある教育機関をモデルとしているが、貴族や富裕層などの上流階級を対象とした帝都の学園と違って中流以下を対象としている。

設立の目的が、将来冒険者あるいは兵士になって迷宮に潜る若者たちの死亡率の低下だから、教える内容は基本的な読み書き算数以外は、魔物の特徴や弱点だったり、薬草を始めとした各種素材の採取方法や扱い方といった実用的なカリキュラムが組まれている。武器の扱い方や身の護り方といった実技訓練まである。

開かれた学校は3校で、冒険者ギルド管轄の戦闘に適性のある子供を対象にした戦士課学校、商人ギルド管轄の生産あるいは商業に適性のある子供を対象にした生産・商業課学校、そしてシューゼンワールド辺境伯家が管轄する富裕層の家庭教師経験者を教師に迎えたバランス型の中級学校だ。

学校ごとに実技や座学の内容と配分に違いがあるが、生産・商業課学校といっても戦闘訓練があるのが迷宮都市らしい。迷宮都市の全員が武器を手にゴブリン程度は倒せるように。脳筋寄りの思想に基づいた教育方針である。

バランス型の中級学校はどっち付かずな印象を受けるが、実際は中流家庭向けの学校で、家庭教師付でなくとも、読み書き算数くらいは教えられている家の子供により高度な教育を施すことが目的だ。勿論、他の2校の生徒であつても才能を見出されたものは転校することが出来る。

自らの才能のみを頼りに生活のすべてを一から築かねばならない子供たちと、親から引き継いだ物を活かして発展させて行くべき子供

たちでは身に付けるべき技術が異なるし、才能豊かな子供を引き上げて手厚い教育を施すことは、迷宮都市の人材不足を解消する最善の方法だった。

何れの学校も、開校時間は午前中だけと短い。迷宮都市では幼くして働く子供も多いから、短時間で必要な教育を施す必要があるからだ。こういった事情も視野に入れた専門性重視の学校編成だったと言える。

シェリーたちは4人とも中級学校へ通っていた。ニーレンバーグの娘であるシェリーには家庭教師が付いていたし、エルメラの息子たちはエルメラとヴォイドが十二分な教育を施していたから、中級学校であっても行く必要は無いのだが、同年代の子供たちとの交流によって学ぶことも多かろうと通学している。

エミリーの父親は元冒険者だが、母親に似たエミリーに戦闘系の才能は無く能力的には平凡な街娘に過ぎない。しかし、本人は将来『ヤグーの跳ね橋亭』を継ぐものだと思いついて、幼いころからアンバーやなじみの客から読み書きや計算を習っているから、入学できる程度の学力はあったのだ。

『とうもろこし』を『とうろもこし』と間違っことを除けば、将来有望な10歳児だろう。

仲良く宿題をする4人の子供たちと、判らない所が必要な情報と不要な情報と高度な情報を入り混ぜて教えてくれる酒臭い賢者。師匠は子供好きなのか、単に精神年齢が似通っているのか判らないが、結構楽しそうに教えている。

(師匠の面倒を見てくれてありがとう！)

シェリーたち4人に心から感謝するマリエラ。子供たちがどんな成長を遂げるのか、楽しみよりも若干心配が勝るのだけれど、『木

漏れ日』の薬の補充もしないといけない。自分の時間は必要だ。

『木漏れ日』から薬を取ってしまったら、セルフサービスの喫茶店兼、ニーレンバーグの診療所兼、学童保育所になってしまう。マリエラがいる必要が無いではないか。大家さんになるのもいいが、マリエラはすでに十分お金持ちだから、不労所得は必要ないのだ。

「傷薬に、痛み止めに、熱さましに、お腹痛の薬。あとは煙玉に、石けんは3種類つと！」

人目の無い2階の工房で、複数同時の錬金術で商品を製造して行くマリエラ。

以前では考えられない製造速度なのだが、師匠の面倒を見るのに忙しいマリエラはそんなことにさえ気が付いてはいなかった。

「やっと、やっと帰れますー!!!」

商人ギルドでエルメラが歓声を上げる。

ポーシオン販売の説明会が始まってから10日目くらいのことだろうか。

少しでも多くポーシオンを確保するために、書類の偽造も辞さない連中との応酬は、住居を持たない冒険者向けの販売方法を開示することであっさりとカタが付いた。

「迷宮の入り口で整理券をもらって、迷宮の20階層に行けばポーシオンが買える」

ポーシオン瓶製造の目処が立ったからこそ公開できた情報だ。

当面の間は低級ポーシオンと低級魔物除けポーシオン1本ずつの制約があるけれど、犯罪に手を染めるリスクに比べれば余程割のい

い話だ。迷宮の20階層には魔石のコストがかかるが転移陣で移動できるし、徒歩で往復できない距離でもない。どっかの食べすぎ錬金術師がダイエツトのために駆け上がりされた距離だから、迷宮都市のたいていの人間は問題なく往復できるだろう。

書類の偽造や強奪などとして捕まっている間に、何本でもポーションが買えるのだから、迷宮に行くほうが余程割がいい。階段を往復するか転移陣で回数を稼ぐか。折角20階層まで行くのだから、薬草を採取するのもしひとつの手だ。ちょうどそこで採れるルナマギアの買い取り価格が上がっているから、ポーションが高値で売れなかった場合に備えて、薬草採取も行つてリスクを分散するべきか。

上級ポーションの原料であるルナマギア不足を解消するため、ウェイスハルトが考え出したこの方法は思いのほかうまくいった。

迷宮の階段付近は安全地帯で魔物は来ない。20階層では戦えないが階段を往復するくらいなら出来る者はたくさんいるのだ。20階層まで来てポーション2本ではいささか割りに合わないが、薬草や素材の運搬を請け負えば小遣い稼ぎにちょうどいい。

ルナマギアの採取を行う冒険者や薬師たちも、荷を運ぶ手間が省ける上に今は買い取り価格が高いから割の良い仕事とこぞつて20階層付近でルナマギア採取に勤しんでいる。

ちなみに魔物除けポーションだけならば、迷宮都市の南西門と魔の森の出口でも販売している。但しこちらは使い切り用の普通の瓶に入ったもので保存が利かない。完全に魔の森を抜けて帝都と迷宮都市を行き来する隊商向けの販売だ。

魔の森の帝都側の出口には魔物除けポーションを販売する売店が建造されていて、迷宮討伐軍の2軍兵が常駐してポーションの販売を行っている。この売店への魔物除けポーション運搬は黒鉄輸送隊が請け負っている。

「ちいーす、まいど。魔物除けポーシヨンの追加だよー」

「エドガンさん、ちょうど良かった。バンダール商会が迷宮都市への護衛を頼みたいそうです。ヴァントーアの村で待機してますから受けてあげてくれませんか？ お客さんと一緒にいいそうですから」
「オツケー。って、客いるんだ？」

「ええ、バンダール商会の口利きみたいですよ」

「へえ、バンダールさん頑張ってるなー」

エドガンが兵たちと情報交換をしている間に、ヌイとニコという二人の奴隷が荷卸しを済ませる。3台の馬車に積まれた魔物除けポーシヨンの樽は二人で下すにはいささか量が多い。初夏の蒸し暑さも手伝って、二人の奴隷はぼたぼたと滝のような汗を流す。見かねた常駐兵たちが荷卸しを手伝ってくれている。

リンクスを失って以来、黒鉄輸送隊も大きな変化を迎えていた。

黒鉄輸送隊の隊長、副隊長を務めていたディックとマルローは共に迷宮討伐軍に復帰して黒鉄輸送隊はエドガンが引き継いだ。

もつともディックはアンバーの借金を返済して黒鉄輸送隊を続ける理由がなくなっていたし、この半年の間にマリエラの警備体制は強化され、ポーシヨンを安全に製造・販売できる体制が整っていたから、黒鉄輸送隊は遅かれ早かれ現在のような状態になっていたのかもしれない。

今いるメンバーは、調教師のユーリケと治癒魔法使いのフランツ、装甲馬車のメンテナンスを行うドニーノに、盾戦士とは思えない細身のグランドル。そして奴隷のヌイとニコの合計7人だ。

フランツは亜人の血が濃くてた外見のため普段は仮面で顔を隠しているし、ユーリケだって帝都や迷宮都市では珍しい訛りや肌の

色をしている。どちらも定住より輸送隊の旅暮らしを望んでいた。
ドニーノやグランドルはもともと迷宮討伐軍に所属していたが、
迷宮討伐に向く能力ではなかったため黒鉄輸送隊に参加したのだ。
迷宮に潜るばかりがリンクスの敵をとる方法ではない。黒鉄輸送隊
として迷宮都市に利益をもたらす道を彼らは選んだ。ヌイとニコの
二人には進退を決める権限などなかったが、自分たちをひいきにし
てくれるドニーノとグランドルについて来られたことを喜んでいる
ようだ。

そしてエドガンは。

「俺がいねえと、戦力不足だろ」

しかたねえなと隊長を引き継いだのだが。

「グランドル？ エド兄はなんで迷宮討伐軍をやめたし？」

「ユーリケ、良い質問ですぞ。エドガンは迷宮討伐軍にいられなくなつたのです。女性兵士を片っ端から口説きましてね。いやあ、あの時は大変でした」

兵士にするには惜しい美貌の女性から、女オークかトロールかと噂される屈強な女性まで、分け隔てなく同時に愛をささやいた恋の旅人エドガンは、困難な旅路の末に安住の地を失ってしまったらしい。

紳士なグランドルはユーリケに詩的に語って聞かせるが、同時に何股もかけた拳句、野営の最中に刺されるような修羅場に入るとかしないとか。

「迷宮討伐軍に俺の運命の人がいなかったただけサ。俺の運命のハニ
ーは帝都にいるかもしれないと、黒鉄輸送隊に参加したんだよ」

「帝都にもいなかったし？ いまだにエドガンは流離人だし？」

役者のような大げさな身振りでユーリケとグランドルの話に参加

するエドガンを、ユーリケが冷たくあしらう。

「流離人……。俺にふさわしい響きだ。そう！俺は愛の流離人なのだ！」

「迷子のように見えませぬ。さて準備はできたようです。日暮れ前にヴァントーア村まで迷わず行ってしまえますぞ」

「おうよ、グランドルさん。俺は愛の迷子だけどな、道には迷わねえからな！」

「夏の暑さでやられたし？ エドガンはずっと迷ってるといいし？ ラプトルたちが迷わず連れてってくれるし？」

魔の森を抜けて魔物除けポーションを届けたら、ヴァントーア村で一泊して折り返す。帰りの積み荷は迷宮都市を目指す人たち……、とシューゼンワルド辺境伯家が注文した大量の酒。今、迷宮都市には中級以下の冒険者どころか全く戦えないものでもやれる仕事があるという。しかも魔物除けポーションが売りに出されて今までよりずっと安全にたどり着くことができる。

しかも黒鉄輸送隊が乗り合い馬車を始めている。この噂を聞きつけた食い詰め者たちが、これから馬車の出発地点であるヴァントーア村に集まるようになるだろう。

バンダール商会を始めとした、ヤグー商隊で山脈を超えて交易をしてきた商会が魔の森を抜けて帝都にやってきたことも、噂の信ぴょう性を高めている。

とはいえ、魔物除けポーションの販売は始まったばかり。いち早く魔の森経由の商売を始めたバンダール商会が初めての取引を終えて今から迷宮都市に戻るところだ。魔物除けポーションの効果は理解しているが、やはり魔の森は恐ろしい。帰りは黒鉄輸送隊と一緒に魔の森を抜きたいのだろう。

黒鉄輸送隊は今日も魔の森を往復する。魔物除けポーションを運び、帰りには新しい住人たちを運んでいく。今までとは異なる、奴隷ではない帝都の住人だ。ポーションが売り出され様相を変える迷宮都市に、さらに新たな住人が増える。

強い日差しにあぶられて迷宮都市の防壁は熱く熱を持ち、吹き込む熱を帯びた風は住む人の思考を鈍らせるかもしれない。

迷宮都市に来る人が、そして市井に出回るポーションがもたらすものは果たして良い風ばかりだろうか。

ラプトルに騎乗して装甲馬車を先導するエドガンは、迷宮都市にいる人物のことを思い出す。ベリーサちゃんでもヨアンナちゃんでもニードルエイプのナターシャちゃんでもない。ジークだ。

ジークとはリンクスを亡くして以来顔を合わせていない。ジークが悪いわけではない。そんなことはわかっていているけれど、なんとなく顔を合わせづらかったのだ。

(ジーク、ちゃんと立ち直れてっかな。また今度、顔でも見に行くか)

魔の森を黒鉄の馬車が行く。迷宮都市に向かう新たな人と、新たな販路を開拓した隊商とともに。強い夏の日差しはうっそうと茂る木々に遮られ、濃い影を落としていた。

育つ人、 来たる人（後書き）

ぬくもりあらずじ : エドガンの夏は日陰の予感。

精霊の神殿と宝物

「おやつさん！ 手伝いに来たぜ！」

迷宮都市の西側、200年前は防衛都市と呼ばれた街があった場所で、ゴードンを始めとする大工たちが突貫工事を行っていた。場所は迷宮都市の外壁の外で魔の森との距離も近い。今までならばそんな場所での仕事など発注する者も受注する者もいなかっただろう。

建造しているのは特殊な神殿だ。

神殿を突貫工事で建てていいのか、という点はさておいて、採砂場への道の整備で伐採した木材を利用して、十数台の馬車が入る巨大な神殿が急ピッチで建造されていた。

現場の指揮を執るのはドワーフのゴードンで、息子のヨハンとガラス職人のルダンがサポートに入っている。もちろん迷宮都市じゅうの大工が掻き集められているけれど、堅牢な石造りの家を修繕しながら長期にわたって住み続けるのが迷宮都市の住宅事情だから、大工の数は多くはない。費用は惜しまないが、1週間であらかた完成させよというシューゼンワルド辺境伯家の無理な注文に応えるには人手がまったく足りなかった。

ゴードンが困っていると聞きつけてやってきたのは、かつてゴードンに助けてもらった冒険者たちだった。冒険者といっても実入りの良い者ばかりではない。ちょっとした怪我で日々の糊口こくちさえままならなくなる者も多い。

かつて冒険者をしていたゴードンは、怪我で引退を余儀なくされた。食うに困ったゴードンに大工の仕事を仕込んでくれた親方がい

たお陰で、ゴードンは大工として身を立てることが出来ている。

恩人に返せない恩義を後進に。そんな想いからのだろう。ゴードンは怪我をした冒険者たちに声をかけては大工の仕事を斡旋したり、『木漏れ日』で購入した傷薬を渡して面倒を見てきたのだ。

その数はいかほどだったろう。何十人も冒険者たちが声を掛け合いゴードンの元に駆けつけたのだ。1週間という工期を満足できるほどの人員がそろったことは有難い。

駆けつけてくれた者たちは、皆冒険者なのだ。怪我が治って再び危険な冒険者家業に戻った者がこれだけ五体満足でいてくれたことが嬉しい。

あの頃と変わらず、「おやっさん」と呼んでくれることに、目頭が熱くなる。

「お！ おやっさん、泣いてんのかよ。年寄りには涙もろくていけねーな！」

「泣いとらんわい！ こりゃ汗だ。くだらんこと言っとらんと、さつさと作業にかかりやがれ！」

からかう冒険者たちを一喝すると、尻ポケットに突っ込んでいた手ぬぐいで目の辺りをごしごしとこするゴードン。

「うわっ、何だこの手ぬぐい、目えいてえ！ 染みる！」

「ん、親父、それ、『木漏れ日』の布巾だぞ。間違えて持ってきたんだな」

「なにい!?!」

何処となく玉ねぎくさい手ぬぐいで目をこすったせいで、本当に涙がこぼれ始めたゴードンを指差して、ぎゃははと大笑いする冒険者たち。

建設現場付近の安全は迷宮討伐軍から派遣された兵士が警備しているし、魔物除けポーシヨンも提供されているから、魔の森のほと

りだというのに、こんなに大声で笑いながら作業が出来る。ずっと高い壁の中にいたせいか、開放的な気分になって作業もずいぶんはかどるといふものだ。

運ばれた木々は大工スキルによって乾かされ、柱や板に加工されて行く。床は木の根や大きな石を取り除いて締め固められた土間のまま。馬車ごと出入する設計だから床を敷く必要は無いのだ。

「なあ、おやつさん。この建物ってなんの建物なんだ？」

ようやく涙の止まったゴードンに、凶面を見ていた一人の冒険者が尋ねる。外壁の外、魔の森に面したこんな場所に建てるだけでもない。おかしいのに、この建物には出入口が二つと、天井に窓が一つしかない。しかも迷宮都市側の扉は馬車が出入できるほど大きいのに、もう一つの扉は魔の森側に付いていて、普通の家の扉よりもはるかに小さいのだ。

女性や子供であればかがんで出入できるだろうが、がたいの良い冒険者であれば体を横にしてかがんでも肩がつつかえてしまいそうだ。

天窓のつくりも変わっていて、大の大人三人が両手を延ばして囲んだほどの巨大な円形の二重窓になっている。空に行く魔物が侵入しないように、鉄格子の窓枠にガラスがはめ込まれた窓ではあるが、その鉄格子の模様が魔法陣を構成している。それも上段と下段で異なるもので、下側の窓格子にはなにかを設置できるような台座が取り付けられている。2重の窓の間に何かを設置する構造だ。

「これはな、精霊の神殿なんだとよ」

「精霊の神殿？」

噂話の好きそうな冒険者がゴードンの話に食いつく。

「わしも詳しい話は聞かされとらんのだがな、ポーションが販売されるっつー話はお前らも聞いたるだろ？」

「ああ、何でもアグウィナス家が製造方法を考案したとかつて話だる？」

「おう、それだ。ポーシオンてのは、容器も特別製らしくてな。《命の雫》つつーポーシオンの元みてえな地脈の力を込めた砂でないと作れねえらしい」

ポーシオンの販売は冒険者の間でもここ一番の関心事だ。ゴードンの元に駆けつけたから商人ギルド主催の説明会にはいけていないが、酒場で仲間からおおよその話は聞いている。もっとも、尾びれ背びれに胸びれまで付いて勝手に泳ぎだした魚のような噂話なのだけだ。

話を聞こうと集まってくる冒険者たちに、ガラス職人のルダンが続きの話を語って聞かせる。

「帝都じゃポーシオン瓶を買い取る場所はぎょうさんあるで常識じやがの。迷宮都市にあるのはお前らみてえのが飲み散らかした酒瓶ばっかりじゃ。これじゃ、折角ポーシオンがこさえられても入れるもんがありやしねえ」

「普通の瓶に入れたらダメなのかよ？」

「普通の瓶じゃ、じきに唯の薬水になっちまうんじゃ」

「なんだよ、ポーシオンで腐るのかよ。めんどくせえな」

「腐るのとはまた違うらしいがの。名剣は相応しい鞘が必要じゃろう。そんな感じじゃ」

剣を用いたルダンの例え話は、うまくまとめているようで、全く意味がわからないのだが、もともと冒険者というやつは詳しい仕組みに興味は無い。ポーシオンは専用の容器でないと腐ってしまう、そんなあやふやな理解で十分なのだ。

「で？ その容器とこの神殿にどんな関係があるんだよ」

答えをせかず冒険者に、今度はヨハンが話を引き継ぐ。

「まあ、落ち着いてください。ポーシオン瓶のガラスは《命の雫》

を込めたガラスでないとダメなんですよ。つまりガラスも本来は錬金術師が作るんです」

「つてえと、アグウィナス家サマはガラスの製法もこしらえたってわけか？」

「違います」

「何だよ、使えねえな」

「がやがやとヨハンの話に野次を飛ばす冒険者。実に気が短い。」

「だーから！ その砂を精霊に作ってもらったための神殿なんですよ！」

「気の短い冒険者のために一気に結論を言うヨハン。」

「なんだってー！」

「どうやって！？」

「精霊が作れんのかよ？ 言葉も通じねえのに？」

「がやがやとうるさい冒険者たち。こんな突拍子も無い話だ。仕方無い反応だろう。」

「それがの、シューゼンワルド辺境伯様の家から200年以上前の古い書物と宝物がみつかったの。この神殿はその書物に基づいて建てられているんじゃない！」

「なんだってー！」

「お宝つて！？ はっ！ あの天窓だろ！？ そうだろ！？ あそこの台座に取り付けるんだろ！？」

「さすがは冒険者。『宝物』という言葉に対する食いつきぶりが半端ない。」

「宝物と言いましても、良い物ではないんです。特殊な呪いがかかった呪物です」

「は！？ 呪い！？」

「そうです。なんでも、夜に呪いが活性化する呪物らしくて、ああ

やって設置しておくで夜中に精霊たちが集まってきた、解呪しよう
と《命の雫》を使うのだとか。ですから窓の下にポーション瓶に使
う砂をおいておくと、解呪のために精霊が汲み上げた《命の雫》が
振りかかってポーション瓶用の砂になるのだそうです」

真剣な顔をして『呪われた宝物』に付いて説明するヨハン。冒険
者たちは皆真剣な顔で話しに聞き入っている。

「で？ 何の呪いなんだ？」

「それは……。私の口からはとても言えません。あんな恐ろしい…
…」

恐ろしげに目をそむけるヨハン。

「気になるじゃねーか、ルダンの爺さん、教えてくれよ！」

「嫌じゃわい。口にするだけで呪われそうじゃもん」

ぷいとルダンも横を向く。

「おやっさん！ 教えてくれ！ 出ないとオレ、今日寝ねーよ！」

「やめとけ、若造が。聞いちまったら寝しよんべんちびつちまうぞ」

「親父ちよつとちびりましたもんね」

「だ、だだだだれがっ！ ワシはちびつちやいねーわ！」

「そうじゃー、ゴードンのはタダの尿漏れじゃー」

「ちがうわ！ キレはわりいが、まだ漏れる歳じゃねーわあ！」

顔を真っ赤にして怒りだすゴードンに、散り散りになって作業に
戻る冒険者たち。いったいどんな呪いが掛けられているというのか
そしてゴードンは本当にちびつたのか。それともマサカの尿漏れか。
何れにしても明日のわが身を思うと薄ら寒い恐ろしさを感じる冒
険者たちだった。

精霊の神殿と宝物（後書き）

「
ぬじりあらすじ…ゴードン」せいれいのしんでんをたてるぞ（棒）

神殿と精霊の怒り

冒険者たちの協力によつて1週間という短納期で壁と天井だけの『精霊の神殿』は完成した。後は周囲にデイジスとプロモミンテラをまばらに植えておけば勝手に繁茂してくれる。

神殿建造の最終日、全員の見守る中、迷宮討伐軍に物々しく警備された『呪われた宝物』が運び込まれた。

何人もの兵士に護られるようにして、ローブの男の後ろを一抱えもありそうな箱を持つて二人の兵士が入ってくる。箱にはいくつもの封印らしき紙や紐がかけられていて、その嚴重さから収められたものの恐ろしさが滲み出している。ローブの男は、フードを目深にかぶつて顔は見えないが、その装いからおそらく呪術に詳しい者なのだろう。

神殿の窓は外側の1枚だけがはめられていて、内側の台座が設けられた窓は神殿の中央の床面に下ろされている。四隅には縄がかけられていて、縄の先は天井その他に取り付けられた幾つかの滑車を通じて巻き取り機につながっている。冒険者たちが巻き取り機を回して縄を手繰れば、窓枠が引き上げられる仕組みだ。

台座近くに歩み寄る呪術師と兵士たち。

ローブの呪術師がすつと手を上げると、『呪われた宝物』の収められた箱は地面に下ろされ、運んできた二人の兵士が数歩下がる。窓枠の台座周辺にはかがり火が円形に設置されていて、中には薪と共に乾燥させた聖樹の葉が入れている。二人の兵士は、うつすらと光を放つ水がかがり火に沿つて台座を囲むように円形に撒いた後、かがり火に点火する。

おそらく光る水は聖水で聖樹の葉を入れたかがり火とあわせることで簡易の境界を張ったのだろう。呪術師はなにやら呪文を唱えるのと、一つ一つ封印を解いていく。

ゴクリ。

見守る冒険者たちが息をのむ。ついに封印はとかれ、箱の蓋が開いたのだ。

ずぞぞぞと、箱のふちからあふれる黒いモノ。錆のようにも、黒い小さな蟲の集合体のようにも見える、本能的に怖気を覚える不気味な物体。

冒険者の何人かは、それを見たことがあった。

「呪いだ……。本当に呪いの宝物だったんだ……」
誰かが漏らした呟きに、神殿の中は静まり返る。

呪術師は不気味な黒いモノで満たされた箱に、恐れることなく手を入れると中から一抱えもありそうなガラスの杯を取り出した。

ガラスといっても透き通った美しいものではない。緑や茶色といった暗い色合いのガラスを混ぜ合わせたような、黒に近い緑の杯だ。中から湧き出る黒い呪いのせいで、ことさら黒く濁って見える。

形はとても不恰好で、子供が作った器のようだ。呪いの力でゆがんでしまったのかもしれない。呪いの元凶がこの器を作成した子供だとも考えられる。不安定な器に不安定に蠢く呪いは、見るものに様々な想像を抱かせ、そして不安な気持ち搔き立てる。

「おそろしい……。いったいどんな呪いが掛けられているんだ……」
冒険者や迷宮討伐軍の兵たちが遠巻きに見守る呪術師は、その呪われた杯を台座に載せ、倒れないよう金具で固定する。金具の中央には何やら紋章のようなものが刻まれた呪術道具が付けられている。呪いが溢れ過ぎないようにする封印具だろうか。

杯を設置し終わった呪術師はそばに控えるゴードンの方を向く。重々しく頷くゴードン。

二人の兵士に頭から聖水を振り掛けられたゴードンは結界をくぐり、台座の横、窓枠の上に乗る。

「上げてくれ」

ゴードンの指示により巻き取り機が巻かれ、ゴードンと『呪われた宝物』を載せた窓枠が天井へと引き上げられる。

いくら『呪われた宝物』が設置されていたようと、窓枠を固定するのは大工の仕事。これはこの仕事を任された棟梁ゴードンの仕事なのだ。

「おやっさん……」

「おやっさん、頑張れ！」

思わず声援を送る冒険者たち。天井からぼたりぼたりと落ちてくるのはゴードンに掛けられた聖水のしずくだろう。まさかビビッて漏らしたりはしていない。

天井付近にたどり着くと、ゴードンは設けられた足場に移り、窓枠を手早く固定して行く。固定した後は、封印と思しき紙を張る。完成だ。

魔法陣のような格子の二重窓に光が差し込む。二重の格子を通った光は複雑な魔法陣の影を形成して神殿の内部に差し込んでくる。この窓枠は一つ一つが『呪いの宝物』を封じるもので、二つ重なる影にはなにか特別な効果があるに違いあるまい。

窓枠に結ばれていた縄を解き、一つを腰に結びつけると、ゴードンはゆっくりと地面に下りた。

「完成じゃ」

重々しく宣言するゴードン。呪術師は頷くと、迷宮討伐軍の護衛と共に静かに神殿を後にした。

湧き上がる冒険者たちの歓声。

「おやつさん！ アンタ本当にすげえよ！」

「ああ、さすがは俺らのおやつさんだ！」

「あんな恐ろしい呪いの宝物をちやあんと設置すんだからよ！」

そつだそつだと盛り上がる冒険者たち。『あんなに恐ろしい』と言つてはいるが、どんなに恐ろしいのか実は誰も知らない。けれど知らぬほうが良い事なのだ。知るだけで尿漏れ野郎になる以上の災いが降りかかるに違いない。好奇心が身を滅ぼすことを彼らは本能的に理解している。

宝物の呪いは夜に活性化すると言う。この場所に夜近づいてはならないのだ。そう、決して。

そんな話を交わしながら、精霊の神殿建造に携わった冒険者たちは、神殿の完成を祝つて飲み明かすのだった。

神殿が完成した数日後から、採砂場の砂を積載した荷車が何台も神殿に運び込まれた。採砂場の砂は質のよいものだけれど、ポーション瓶に使うにはまだ不純物が残っている。だから、ルダンたち迷宮都市のガラス職人と魔工技師たちが作り上げた選別機でより分けを行った後に、神殿へと運びこまれてくる。

馬車ごと神殿に運び込んだら、荷車だけ残して荷役の騎獣は連れてかえる。迷宮都市側の大扉には間違つて入り込み呪いを受ける者が出ないように、きつちりと鍵を掛ける。けれど魔の森側の小扉には鍵は掛けない。ここは精霊が出入する扉だからだ。

一晩明けて神殿へ行くと、荷車の砂は《命の雫》が込められて薄く光を放っている。シューゼンワルド边境伯家の古い書物が伝えたとおり、精霊たちが呪いを解こうと訪れたに違いない。

稀に砂に変化が無い日もあるのが、気まぐれな精霊の仕事なのだと運搬に関わる者に確信させる。

精霊は女の子に違いない。そんな事を言う者もいる。肝試しに訪れて、中から「《命のしーずーくつ》」と唱える声を聞いたのだと言う。ならば姿を見たのかと問えば、急に現れた火の玉に襲われて命からがら逃げたのだそうだ。

「きつと、精霊と呪いが戦っているのだ」

噂が噂を呼んで、精霊の神殿にはお供え物をする者まで現れる始末。恐ろしい『呪いの宝物』の話は建設に携わった冒険者の目撃談もあつて迷宮都市の誰もが信じたし、迷宮討伐軍が警邏を強化したことで、夜間に精霊の神殿に近づくものは無くなった。

《命の雫》が込められた砂はルダンたちガラス職人がポーシヨン瓶に加工する。急に増えた需要によってガラス職人の需要は一気に増えて、薬草の特需に加えて多くの雇用をもたらした。

「わしは大変なんじゃがの」

忙しすぎると文句を言うルダンを手伝いながらゴードンとヨハンがニヤニヤ笑う。

「それにしても、ウェイスハルト様の計画通りになりましたね」

「ワシの演技、サイコーじゃったろ？」

「まあ、小道具もめっちゃめっちゃ凝っておったからのー」

「親父も漏らしたかいがあったな」

「漏らしとらんわー！！！！」

『精霊の神殿』なんて、実は全くの嘘っぱちなのだ。

『呪われた宝物』はどこぞの飲んだくれ賢者が酒瓶を捨てるのが面倒で適当に溶かして作ったおもちゃに過ぎない。そりゃあ、子供が作ったような歪で下手な器のはずだ。

精霊の神殿から魔の森に少し入った場所には、地下大水道の出口がある。

ゴードンらドワーフ三人組には『精霊の神殿』なるものを建てるということ以外、詳細は知らされていない。魔法陣の窓枠も、魔よけの魔法陣を模したものはあるけれど、鉄の細工のように歪みが出やすい物で効果が出るはずが無いのだ。

細かいところを追求すれば『精霊の神殿』自体が偽りであることが知れてしまうから、ゴードンたちには『精霊の正体』以外は真実が知らされ、協力が要請されていた。

「でもまー、ワシらに仕事が来た時点でのー？」

「そうですね。ばればれですよね」

「本当に手の掛かる嬢ちゃんだわい」

ああ、のどが渴いた。『木漏れ日』でお茶が飲みたい。ポーション瓶の作成の疲れを吹っ飛ばしてくれる、スタイリッシュなお茶が。三人の思いはおそらく同じなのだろう。

「わし、ちよつと休憩してくる」

「根の詰め過ぎは作業効率を悪化させます」

「ワシの指定席、ウエイズハルト様に取りられんように、臭いつけとかんと」

三人のドワーフたちは、ポーション瓶作りを中断して、いそいそと『木漏れ日』に向かうのだった。

夜の地下大水道をマリエラとジーク、そして師匠が魔の森に向かう。ついに夜逃げだ。師匠が酒代をツケにしすぎたからだ。

そういう状況も200年前ならあったのかもしれないが、今の迷宮都市は作れば作るほどポーションが売れるから、どれだけ師匠が酒を飲もうとお代わりし放題の飲み放題だ。帝都の良い酒も黒鉄輸送隊がどんどん運んできているそうだから、マリエラが逃げ出したくても師匠が逃がしてくれないだろう。

一同は地下大水道を抜け、魔の森を掻き分けて『精霊の神殿』の裏口へとたどり着く。

「うん、今日も人はいないな。念のためにあたしは表の大扉を見ているから、ジークはここで警護な。マリエラ、とっとと済ませてきな」

「はい」

「はい」

今日も今日とて、朝からポーションを作り、店の品物を補充したり師匠の面倒を見た後、夜にはポーション瓶用の砂の処理である。尤も一番疲れる師匠の相手はシェリーたち4人がいくらか引き受けてくれているし、『木漏れ日』はアンバーさんが回してくれている。だから、打倒師匠に燃えるマリエラは日々全力で錬成を行って、キヤル様が話してくれた『病弱系ヒロイン』とやらも真っ青な頻度でパタパタパタンパツタリコと魔力切れでぶっ倒れたりしているのだが。

師匠仕込みの『上手な倒れ方』が身につけているマリエラは、準備されているクッションに向かってふんわりぽふんと倒れて、そのまま1刻ほど眠るので、配属された兵士たちにはお昼寝タイムと認識されている。マリエラには病弱だとか薄幸だとかのイメージは難易度が高いのかもしれない。

「錬金術師様は今日もお健やかに過ごしております」
などという報告を受けたウェイスマルトは、事実を知れば悲鳴を上げて止めたであろう過酷な錬成特訓が行われていることなど露知らず、師匠が荒唐無稽なレベルでザックリ伝えた『精霊の神殿』計画やその他の案を実現可能な計画に作り直す仕事に追われていた。

『精霊の神殿』の小さな裏扉をくぐって中に入る。この扉は主にマリエラ用で、ジークが入るには少々狭くできている。裏扉をくぐってすぐのところは複数の照明の魔道具に魔力を供給する装置が設置してある。『精霊』が暗くて転んだことを聞きつけたゴードンたち3人が、慌てて付け足した『精霊用』だ。愛情に満ちた贈り物といえる。ちなみに宝物の『呪い』はただのエフェクトで、実際は何の害もないものだ。

明るくなつた『神殿』の中には白い砂をたつぷりと積んだ十数台の馬車が所狭しと並んでいる。

一台一台馬車を回って『命の雫』を固定化していくマリエラ。

(荷車の隙間を縫って移動するの、面倒くさいな。まとめて全部できたらいいのに)

この神殿の内側全部を巨大な『錬成空間』で覆ってしまえば砂を一気に把握できる。自分の手足が伸びてたくさんあるように、目が後ろにもついているように。把握出来たらあとはいつもと同じ要領で一度に全部『命の雫』を込めるのだ。

「『錬成空間、命の雫、固定』」

ポロリと口からこぼれるように、思いついたままのイメージをスキルに乗せる。

「できた……」

これだけの量の砂を一気に。今までなら、絶対にできなかったことだ。

(私、成長してる……?)

師匠に対抗すべく、日々必死でポーションをつくっていた成果だろっか。

(師匠はお酒を飲んで遊んでたんじゃなくて、私に全力でポーションをつくらせるために……?)

マリエラは師のありがたさを感じた気がした。

もっと師匠を敬って、やさしくしないといけない。今日なんて、マリエラが掃除をする先々に現れては、絶妙に邪魔な位置で立ち止まるものだから、そのまま幕で掃きだしてしまったのだ。

「師匠、じゃま、じゃま、じゃま」

そう言いながら箒をぶつけるマリエラに、師匠はキャツキヤと笑っていたから喜んでいたのかもしれないけれど。酔っぱらいの言動はマリエラにはよくわからない。

マリエラが『精霊の神殿』を出るとジークだけが待っていた。

「随分早かったな」

「うん。上達したみたいで一気にできた。師匠を迎えに行こう」

ジークと二人、神殿の外周を迂回して、表の大門へ向かうマリエラ。

そこで彼女が見たものは。

「うーん、結構いい酒備えてあんじゃん。火の玉に追われたら、良い酒備えて許しを請えって噂流して大正解！ あ、つまみもある！ 気が利くー！」

どうやらマリエラが感じたありがたさは気のせいだったらしい。

「師匠！ 何してるんですか！ 嘘の神殿でもお供え物に手を付けるとか！ 信じらんない」

「マ、マリエラ！？ 早くないか？」

「シヨーノオカゲデスウー。さ、ジーク帰ろう。でもって、罰当たりな人が入ってこないように鍵かけちゃおう！」
「マリエラ、まっつて〜」

『精霊の神殿』に供えた酒が減っていたという話は、しばらく冒険者たちの間で噂になったが、酒が減っていたのは最初のうちだけで、すぐに酒は減らなくなった。

「精霊の怒りが解けたのだ」

そういつて酒を供えた冒険者は安堵したのだが、『精霊の神殿』で『命の雫』を振りまいている『精霊』代理は今日も箒で火の玉発生器を追い回していることだろう。

神殿と精霊の怒り（後書き）

ゴードン「せいれいさんのおかげでポーション瓶用の砂ができたぞ
」
（棒）

第3部隊

迷宮第53階層

そこは、迷宮討伐軍の1軍の修練の場であり、素材を得るうえで重要な狩り場でもあった。

迷宮の魔物は倒された後、亡骸を一部しか残さない。魔力が固まって発生し、受肉していないからというのが通説だ。生じてから時を経るにつれ種族の特性を最もよく表す部位から順に受肉していく。攻撃力を誇る魔物であれば牙や爪であるし、防御を誇る魔物ならば皮といった具合だ。

迷宮の魔物が外に出てこないのは、全身が受肉していないからだという説もある。この説を提唱した学者は論文で、『ゴブリンやオークといった弱い魔物をとらえて迷宮の外に連れ出すと、迷宮中で魔物を倒した後、亡骸が消えるのと同じ現象で生きたまま消えていき、受肉した部分だけが残った』と報告している。けれど、『階層間の移動ができない魔物を別の階層に無理やり移動させても同じ現象が確認できた』という報告例もあり、『階層移動を含む魔物の移動は迷宮の意思に支配されている』と提唱する学派と対立しているのだという。

もともと、迷宮第53階層でバジリスクと相対するディックに比べては、迷宮の魔物の受肉や移動の法則などは全くどうでもいいことだ。大切なのは、バジリスクの皮という貴重な素材を回収できる討伐時期がいつかということだけだ。

バジリスクの皮は現状で迷宮討伐軍が入手できる皮素材の中では抜群の性能を誇る。斬撃や衝撃への耐性はドワーフの匠が鍛えた魔法金属製の鎧エラに譲るものの、軽量で魔法耐性が高い。ジークは錬金

術師の護衛ということ、資金調達のために一部市場に出回ったものを優先的に購入できたが、迷宮討伐軍でさえ未だ全員に行き渡ってはおらず、軽鎧をまとう遠距離攻撃型や速度・スキル重視の斥候などの職に就くものが、自分の番を待ちわびている。

「しとめるぞ！ 最後まで気を抜くな！ 《槍龍撃》」
「おお！」

数時間のバジリスクとの戦闘ののち、ディックが止めの一撃に入る。後に続くのはディックに配属された迷宮討伐軍 第3部隊の12名だ。迷宮討伐軍はレオンハルト、ウエイスハルトの身辺警護や特殊任務にあたる別動部隊を除くと、強さの順に1軍、2軍および訓練兵部隊からなる。

このうち迷宮に入るのは1軍および2軍で、1軍およびその補充軍である2軍混成の8つの部隊で構成される。スキルの練度や適性によつて個人の戦闘能力には大きな隔たりがあるから、特に強力な魔物と対する場合は必ずしも数〃力とはならない。2軍兵が1軍兵について53階層に来たとしても足手まといなだけだから、平時は1軍と2軍はそれぞれのレベルに応じた狩場で戦闘を行っている。しかし、死傷により補充の速度は速いから、連携がとりやすいように強さ順に縦割りの組織体制になっている。所属が変更になつても、かつての仲間と同じチームになりやすい、そういう組織体制だ。

ディックは復職と同時に第3隊の隊長に就任した。年齢のため前線を辞したいというかつての先輩の後釜で、同じ部隊にはディックにあこがれる槍使いの若者が副隊長をしていたから、あつけないほどすんなりと隊に馴染むことができた。

人魚のニセチチを見抜いたディックの慧眼けいがんに、部隊の皆が感服したのだろうか。ディックが就任して以来、第3部隊の宴会頻度が跳ね上がったことも功を奏したのだろう。迷宮討伐軍きつての脳筋部隊であるから、飲ミニケーションは有効だったようだ。

アンバーさんは今日も元気に『木漏れ日』を切り盛りしていて、手のかかる師匠が増えたうえにマリエラの不在時間が増えたというのに、ますます生き活きと働いている。旦那ディックが帰って来ようが来なかるうが、無事ならどうでもいいと言わんばかりだ。亭主元気で何とやらか。アンバーさんが構ってくれないからディックの飲み会率が高いわけではないと思いたい。なにせ苦難を乗り越えて一緒になった新婚夫婦なのだから。

そんな、どうでもいい事情を背負った第3部隊の攻撃が見事バジリスクの息の根を止め、勝利の余韻とともにディックたちにバジリスクの皮と魔石、地脈の欠片をもたらした。この階層のバジリスクはたいていこれらを落とすのだ。長く生きた個体になると、皮に加えて牙や爪を落とすし、魔石のサイズも大きくなるのだが、地脈の欠片は落とさなくなる。

53階層の呪い蛇キングバジリスクの王の討伐には多大な時間を費やしたけれど、その甲斐あってというべきか、バジリスクが発生してからの期間からほぼ確実に素材をコントロールすることができている。

「次はあいつにするか」

しばらく休憩をしたのち、ディックは兵が見つけてきた別のバジリスクに狙いを定める。一旦階層階段まで戻れば斥候部隊がお勧めの個体を教えてくれるのだが、折角近くに見つけたのだ。面倒くさいしこれでいいだろう。

「《飛龍しよー……》」

(その個体は沸いたばかりですよ)

遠距離攻撃で初撃を加えようとしたその時に、頭の中に聞きなれた声が響く。

「マルローか……」

「どうせ、階段まで戻るのが面倒くさいとかそういう理由で選んだ

のでしょうが。何のために雑務用の奴隷兵を与えられているか考えなさい」

攻撃を取りやめたディックのもとにマルローが数名の斥候兵を伴って現れる。ディックとともに復帰したマルローは斥候部隊の副隊長に就任している。斥候部隊や諜報部隊はウエイスハルト直属の部隊で、その特殊性から人員や組織体制は明らかにされていない。迷宮の討伐階層が進んだことにより斥候能力だけでなく戦闘能力の向上も望まれているから、かつてはディックと同じ1軍の隊長で、Bランク上位の戦闘能力と念話スキルを併せ持つマルローは望ましい人材だったといえる。

「久しぶりだな。赤竜の偵察か？ ヤツはどうしている？」

「久しぶりとはご挨拶ですね。昨日、酔って貴方が宅前の路上で寝ていたのを、家に運んだのは誰だと思っっているのです。ヤグーに蹴られたらどうするのです。ヤグーが怪我してしまうでしょう。器物損壊です。赤竜も相変わらずですよ。貴方と同じで良くも悪くも変わりありません」

懐かしい人物を見るように話しかけるディックにマルローが冷たく言い返す。

「む……。今朝は玄関で寝ていたはずだが……」

記憶にない。そんな顔で答えるディック。ディック不在の間にアンバーが一人で困らないように、奥さん同士で助け合えるようにとディックはマルローの家の近くに居を構えたのだが、助けられているのはもっぱらディックだけらしい。

昨日も、ディック宅前の路地で寝ているところをマルローに発見されて、家まで運び込んでもらったのだ。夜中にたたき起こされたアンバーはドアを開けてディックを家に入れてはくれたものの、玄関に放置したようだ。

「あなたのことだ。大通りまで従卒に送らせたのに、アンバーさんを見せたくないとかそういう理由で、脇道あたりで『ここでもいい』などと言って別れたのでしょうか。まったく。昨夜はアンバーさん、相当怒っていましたよ」

見てきたようなマルローの発言に、その通りだと頷くディックの従卒。ディックは心当たりがあるようで、むうと考え込んだ後、

「大丈夫だ、今日も弁当を用意してくれた」と自分に言い聞かせるように答えた。

「弁当の中身は？」

「……パンだ」

「パンだけ？」

「そうだ」

「……怒ってますね」

「……」

そんな他愛ない会話の裏で、二人の念話は続いていた。

(ディック、どうせ貴方のことです。リンクスやジャとかいう奴隷のことを考えて雑務用の奴隷兵を扱いにくく感じているのでしょうか?)

1軍の隊長、副隊長には従卒と雑務用の奴隷兵が1名ずつ付けられる。従卒は2軍兵の中でも戦力としてはCランクがせいぜいだが頭脳明晰な者が選ばれる補佐役で、それとは別に荷運びや雑用を請け負う奴隷兵が専属で与えられる。雑務用の奴隷兵といっても前線に付き従うのだから、戦力はCランク以上で品行方正な者が多い。

雑務用の奴隷は上位職につけられる限られた職務であるから、迷宮都市に送られてくる犯罪奴隷の中で最も質の良い者たちであり待遇もよい。ジークのように衣食住どころか武器・防具の装着も認められているし、個室や小遣い程だが給与も与えられている。

けれど、身分は犯罪奴隷。ジャと同じなのである。

(……、一人で行かせて、バジリスクに行くわけば助からんかもしれん)

ディックの答えにマルローは『ディックらしい』と自嘲する。

『犯罪奴隷などに情けをかけるのではなかった。正しく罪人として扱うべきだった』

そんな思いに囚われていたのは、自分だけだったのかと。

ディックの従卒は、「次回はご自宅の扉の前までお送りします。遠くから中に入られるまで見守らせていただきます。奥様にはお会いしませんからご安心ください！」などと言っているし、奴隷兵も「すぐにバジリスクの居場所を聞いてまいります！」と走り出したところを「まあ待て」とほかの兵士に止められている。まだ若い、そばかす顔の青年だ。朴訥とした顔つきは似つきもしいが、ディックにいいところを見せようと気を逸よらせる様子のごとくなく黒鉄輸送隊に来たばかりのリンクスを思い出させる。

周囲の兵たちは路上で寝ていたというディックの話を楽しそうに聞いていて、従卒も奴隷兵も兵士たちも、みんな生氣のあふれた顔をしている。

治癒魔法師と前衛の戦士では役割が違う。それと同じことで、与えられた役務が異なるだけだと、ディックは奴隷兵でさえも等しく自分の部下として扱っているのだろう。

(あんなことがあったというのに、奴隷を部下として扱えるのですね)

(まあ、いろんな奴がいるからな)

マルローは自分の奴隷を振り返る。いざというときはマルローの盾となるようにと就けられた、Bランクの屈強な大男だ。いかにも犯罪者という醜悪な面構えのマルローの奴隷兵は、マルローの冷た

い対応に何もしゃべらず黙って命令に従うようになっていた。

「ディック、バジリスクならあちらを右の壁沿いに進んだところに、受肉状態の良い個体がありますよ。レト、タロス行きますよ」

そういつて立ち去るマルロー。マルローの従卒のレトは「はい」と返事をし、初めて名前を呼ばれた奴隷兵のタロスはわずかに驚いた顔をした後に、黙って頷きマルローの後についていった。

（赤竜は相変わらずですが、街が少々きな臭いですね。ディック、飲酒はほどほどにしたほうがよさそうですね）

（わかった。お前も気をつけるよ）

最後に交わされた念話。これを伝えるためにマルローはディックの元を訪れたのだろう。相変わらずの友人に心の中で礼を言うディック。

「右にいくぞ。もう一匹しとめる！」

「オレ、斥候やります！」

「出すぎて見つかるなよ」

「はい！ 任せてください！」

ちょこまかと第3部隊の前に行く奴隷兵を見守りながら、ディックたちは迷宮を進んでいくのだった。

「ちょっと、聞いてよフレイさん。うちのディックったら路上で寝てたのをご近所のマルローさんに拾って帰ってもらったのよ！」

「あはは、旦那落ちてたんだ？」

「そうよ！ ちょっと強いからって気を抜きすぎだわ！ 最近帝都から新しい人たちだつて来てるのに」

「心配なんだ」

「そつ……、そうよ！ 心配だわ！」

「いいね！ アンバーのそういうところ気に入ってる。次やったらオシオキすればいいんじゃない？」

「どうするの？ 大抵のことなら喜んじゃうわよ、あの人」

「ははっ。そうだね、カラツカラになるまで干しちゃいな」

「どうやって？ 弁当をパンだけにしても喜ぶのよ、あの人」

「確か槍使いだろ？ 大事な槍に手足括り付けて物干し台に乗つけるの。狩りの獲物みたいに。下から火であぶっても面白いかも。あたしも手伝うよ！」

師匠とアンバーさんが何やらよからぬ話をしている。師匠の髪色は黄色やら赤やらが混じった複雑な髪色だけれど、アンバーさんと同じ赤毛には違いないから、「キャラが被る」などと言ってソリが合わないのかもしれない。世話を焼かれる方と焼く方、愚痴を聞く方と聞かせる方と、うまく住み分けができているようで仲がいい。

この調子で、アンバーさんの旦那さんディックを焼く方と焼かれる方というのが加わらないことを願うばかりだ。

(ディック隊長逃げてー！)

マリエラは心の中で願うだけだ。せつかくアンバーさんが師匠の相手をしてくれているのだ。マリエラもつかの間の平和を満喫したい。何しろ今日はジークまで狩りを済ませて『木漏れ日』にいるのだ。珍しいことこの上ない。

のんびりとジークとお茶を飲みつつ店内を見回すと、見た目は美女の師匠とアンバーさんが「オシオキ」だの「喜んじゃう」だの話しているときは、興味津々といった顔で聞き耳を立てていた数名の兵士が、「弁当がパン」だの「物干し台に乗せてあぶる」だのといった話になったとたん、露骨に残念そうな顔をしていた。

それを見た師匠が何も言わないはずがなく、兵士たちを指さすにやり笑って一言。

「ギルティー」

罪を宣告された兵士たちは気まずそうに顔をそらしていた。

（意味が分からない……）

一人首をかしげるマリエラ。ジークの方を振り向くと、すごくイイ作り笑顔を返されたけれど視線が合わなかったから、意味が分かっていないのはやはりマリエラだけらしい。

師匠があれだけ楽しそうにしているのだ。ろくでもないことに違いない。

「ギルティー……」

ぼつりとおまけで罪の宣告をするマリエラ。後ろでジークがお茶をこぼしそうになっていたから、やっぱりろくでもないことだろうと確信するマリエラだった。

第3部隊（後書き）

ぞっくりあらずじ…みんなギルティー

でんせつのもつじや

思考は巡る。

同じところをぐるぐると。

それが螺旋であったなら、少しづつでも前へと進んでいくのだから、この部屋に前進を促すものは何も無い。

石の壁と天井と締め切られた扉で構成された箱のようなこの部屋は、換気の魔道具が常時適温の空気を送り込み続けているし、日に三度変わり映えのしない、けれど過不足のない食事が小さな搬入口から運び込まれる。食事を届ける者の顔はわからず、話しかけても返事などは得られない。

窓のないこの部屋は寝室と居間とトイレ、浴室から構成されていて、生活に必要なものは一通り備えられている。けれどあるのはそれだけで、稀に届けられる家族からの手紙や本を除けば、彼の無聊ぶりようを慰めてくれるものさえありはしなかった。

検閲の墨で塗りつぶされた手紙や、穏やかで無難な書物の類は、彼にとつては物足りないもので、わずかな時間だけ慰めを与えてはくれても、すぐに彼を無限に切れることのない思考の輪の中に引き戻してしまふ。

気温も変わらず景色も見えない、日に三度の食事を除けば、時の移ろいを知ることさえかなわない、この時が止まったようなこの部屋で、彼にあるのは取り戻せない過去の思い出ばかりだった。

もしもあの時、もしもあいつが、もしもあれを、もしも、もしも、

もしも……

繰り返し過去に思いを馳せながら、起こりえなかった未来を想像することに、何の意味があるのだろうか。

「石目を数えることと、変わりありませんね」

石でさえなぞり続ければ擦り減り形を変えていくのだ。ぐるぐると回り続けた思考の円は、果たして同じ形を描いたろうか。

「呪術師のまねごとをする人物が必要だ」

そんな依頼がもたらされたのは、男がそこへ幽閉されてどれほど時間がたった時だったか。

「わかりました」と従順に応じる男の思考のかたちは、いかなる物であったのか。

それを知ることが誰にもできはしない。

けれど役目を果たした男が、再びこの部屋に戻ることはなく、男の失踪を聞いたウエイズハルトが知らされたのは、『男に届けられた家族からの手紙は、内容がわからぬほどに墨で塗られていた。しかし、男にとつてそんな検閲は何の意味もないもので、家族が伝えた迷宮都市の現状を男はすべて理解していた可能性が高い』という諜報部からの報告だった。

「奴隷の分際で道の真ん中を歩くんじゃない！」

急に響いた怒号に、マリエラはびくりと体を強張らせる。アンバ

ーに店番を、シェリーたちに師匠の面倒をお願いしたマリエラはメルルさんと夕食の買い出しをした帰りだ。一見、おばちゃんと娘っ子の二人連れに見えるのだけれど、周囲には私服の兵士が警備にあたっていているからチンピラ冒険者が騒いだところでマリエラに危険はない。

「やれやれ、ここんとこあいう輩が増えていやだね」

ついさっきまでマリエラのとおりでぺちゃくちゃと卸売市場の買い得商品について熱く語っていたメルルさんは、いつの間にもマリエラの前に立ちふさがっている。メルルさんは縦にも横にも大きいから、マリエラはメルルさんの陰に完全に隠されてしまっていて、マリエラからは何が起こっているか全く見えない。

「あんなの見たっていいことないよ。さ、とつとと帰って夕飯の支度だ！」

マリエラの肩をつかんでくるりと回れ右をさせるメルルさん。早業だ。ひょい、くるりで半回転だ。物騒な怒号が聞こえてこなければ、「ワンモア！ おかわり！ もう一回！」とアンコールを送っていただろう。

魔物除けポーションのおかげで新しい人たちが帝都からやって来るようになったのはよいことなのだけれど、少し治安が悪くなった気がする。師匠が来た頃からキヤル様は忙しいようで『木漏れ日』に姿を見せていない。キヤル様はアグウィナス家の令嬢だから小さいころから護衛もついているし、危ないことなどないのだろうが、こんな騒ぎがある度にマリエラは少し心配になってしまう。

否が応でも耳に入る大声から、どこかの奴隷が絡まれ暴行を受けていることがわかる。道の真ん中を歩いていたという、たったそれだけの理由で。

「メルルさん、衛兵さんに連絡を……」

マリエラは自分の弱さを理解しているし、変に首を突っ込めば周りの人間に迷惑をかけることを理解している。リンクスのことはいやというほど骨身に染み込んだ。けれど罪のない人がつらい思いをしているのに、何もせず逃げることに抵抗を感じてしまう。

そんなマリエラにメルルさんにはっこり笑うと、「大丈夫、もう連絡が行ってるさね。じきにすっ飛んでくるよ」と言っていて、軽くマリエラの背中を押した。

メルルさんの言葉に安心したマリエラが、その場を離れようとしたその時。

「道は誰の前にも開かれているものですよ」

なんだか哲学的な言葉が聞こえた。

「なんだ、ためー。そんなひよろいナリでやり合おうってのか？
傘なんぞ持ちやがってチャンバラごっここのつもりかよ」

「おや、面白いことになってきたね。マリエラちゃん、その陰からちよつとだけ見ていこうか」

先ほどまでの逃げの一手はどこへやら、メルルさんは露天商の陰にマリエラを押し込むと、隙間から騒動の見物を始めてしまった。

「あれって、グランドルさん!？」

メルルさんと露天商の隙間からマリエラが見たものは、黒鉄輸送隊の盾戦士ことグランドルと彼の後ろに引っ付いて回る奴隷のヌイだった。配達を終えて迷宮都市にもどってきているのだろう。ヌイが抱えた包みからは大きなバケツが何本も飛び出しているから彼らも買物の帰りなのかもしれない。ヌイはグランドルの後ろに隠れるようにしておるおろと様子をうかがっているが、グランドルは若木のようなスリムな体形なので丸見えなのだ。

(グランドルさんの横幅がメルルさん位あったらすっかり隠れられたのに！)

心の中で失礼なことをつぶやくマリエラ。自分だっただけはマリエラの名を欲しいままにしたというのに、喉元過ぎれば何とやらとはこのことである。

燕尾服テイルコートのようなシュツとしたスーツにシルクハット、キュツと細く巻いた傘を携えたカイゼル髭のスリムな紳士、グランドルさんは、「どうやら貴方は道に迷われているようですな」などと、右手で髭を触りつつチンピラ冒険者に話しかけている。

後ろでちよろつくヌイは何かあったらグランドルさんを担いで逃げるくらいに気構えはあるのか、ぶるつきながらも「腹を決めたぜ」と言いたげな顔をしている。ぶるついているのは武者震いという奴だろう。自分だっただけ立派なごろつきなのだから、チンピラ冒険者相手にビビったりはしていないはずだ。たぶん。

そんな一見愉快な二人組を、たやすい相手だと見なしたチンピラ冒険者は、連れの4人に目配せすると、蹴りつけていたどこかの商店の奴隷から離れてグランドルを取り囲んだ。

「そうだが、俺らは道に迷って金がねえんだ。わざわざ帝都から来てやったのによ。だから、おっさん、有り金全部おいてけや！」

「ふむ、罪もなく武器も持たない奴隷に絡んでいるかと思えば、騒ぎを起こして主人から小銭をせしめるつもりですか。そんな手口がこの街で通用すると思っっているとは、ずいぶん残念な頭ですぞ」
ふう、やれやれ。そんな言葉が聞こえてきそうな顔で両手をW字に広げるグランドル。長い足を曲げてクロスしているところが、小ばかにしている感じを強く演出している。

これだけわかりやすいポーズなのだ。『馬鹿にされている』とバ

力でもわかるうというものだ。

「こっ、こっ、こっ、こによやろっ！！！」

「こによにゃによにゅ？」

怒りのあまり思わず噛んでしまったチンピラ冒険者をさらに煽るグランドル。常に真面目そうな表情なのだが、にゃ行の五段活用になるほど、チンピラ冒険者は噛みまくってはいいない。早口言葉か。紳士な外見に似合わず意地悪な性格とよく回る口を持っているようだ。

「そんなに噛んでねえー！！！」

チンピラらしく極めて短時間でブチ切れたチンピラ冒険者がグランドルに殴り掛かる。しかし。

「ほいですぞ」

雨傘どうぞ貸しますぞ、と言わんばかりに傘を持った左手をグランドルが突き出すと、チンピラ冒険者は跳ね飛ばされたように反対方向へと飛んで行った。

「なっ、何しやがった！？」

チンピラ冒険者の仲間はやっぱりチンピラ冒険者で、お決まりの台詞の後に「まとめてやっちまえ」だとか言いながら武器を抜いてグランドルに切りかかる。

「危ない！ グランドルさん！」

叫びそうになるマリエラの口をメルルさんがウィンクしながらそっと抑える。

「危なくないよ、マリエラちゃん。それにしても。わかりやすい展開だねー。チンピラの世界にはマニュアルでも出回ってるのかね」

いったいどんなマニュアルだ。わかりやすい絡み方、正しいチンピラ語、人目に付かず退場する作法などが書かれたハウ・ツー本か。ビジネス書を購読する類の人間には見えないが。

メルルさんがそんなことを言い終わるより先に、グランドルさんが留め具を外して傘を開く。

「《シールドバツシュ》ですぞ」

まさか、そんなことが。

マリエラの目は真ん丸だ。

グランドルさんが傘を開いて軽く前に押し出されると、傘の風圧に押されたかのように、冒険者たちがまとめて吹っ飛ばされていった。

「ぐわあー！」

などと、わかりやすい悲鳴を上げて、その辺に倒れてピクリとも動かない。どうやら気絶したようだ。ご都合主義か。

「まさか……、『傘・シールドバツシュ』……」

『傘・シールドバツシュ』。それは子供たちのあこがれ、伝説の必殺技ではなかったのか。ということは最初にチンピラ冒険者を倒した技は、『でんせつのゆうしゃやく』のみ使えるというアンブレラ・ソードに違いあるまい。いや、『さすらいのけんしゃく』が持っている妖刀・傘詐欺カササギという線も捨てがたい。

「しゅごい、しゅごいよグランドルさん！」

興奮のあまりマリエラまで噛み噛みだ。露天商とメルルさんの陰から飛び出してグランドルの方へ駆け出すけれど、危険はもう去ったからメルルさんは生暖かい目で見守るばかりだ。

「グランドルさん！ しゅごいー！」

マリエラと同じ気持ちで飛び出してきたその辺の子供たちと一緒に

にグランドルを取り囲み、『ゆうしゃぐらんどる』に熱い眼差しを向けるマリエラ。

「ほっほ。おや、マリエラさん。しょうでしゆかにや？」

につこり微笑んでマリエラに話しかけるグランドル。

いくら盾スキルをもっているとはいえ、その強さは盾の防御力に依存する。盾職のスキルは纏う装備にも影響を及ぼすから、前衛として苛烈な攻撃を受け止める盾職はみな金属の重装な鎧を纏い、防御力の高い盾を装備するのだ。

たとえ魔物の糸で編まれた布であっても、しよせんは布。ハサミで切断できる材質ではない。特殊な傘であつてもしよせんは傘で、雨粒か、もしかしたら雹^{ひょう}くらいならば防げるかもしれない程度だ。それを盾に使つたとして、仮にも冒険者をしている男たちの武器攻撃を跳ね返すことなど、普通の盾職にできるものではない。

だから、マリエラとその辺の子供たちが尊敬のまなざしで見つめること自体、おかしいことではないのだが。

「ちよいとアンタ、傘・シールドバツシュに幼児語ににゃんこ言葉は、ちよいとばかり盛り過ぎじゃあないかい？」

一人冷静なメルルさんの突っ込みに、ようやく我に返つたグランドルはほんの少し恥ずかしそうに髭を引っ張ると、「ほっほ」と笑つてウインクを返した。

盾紳士グランドル。やたら高位の盾スキルを持つくせに、胃腸が弱く肉や脂が苦手な筋力薄弱。重装な鎧どころか盾職が持つ巨大な盾など重くて装備できない。装備をしたら動けない。だから彼の『盾鎧』には車輪がついていて、ラプトルたちが引っ張ってくれる。

グランドルの盾スキルに守られた装甲馬車は、昔から黒鉄輸送隊の最後尾で追いつがる魔物たちから輸送隊を守ってきた。

そして多分これからも。適材適所というやつである。

でんせいのゆづしや (後書き)

ざっくりあらずじ：必殺技！ 傘・シールドバツシユ！！！！

(傘盾、みんなやったことある……はず。この技のために
グランドルのキャラを決めました。)

雲行き

「あなたのご無事を祈って、眠れぬ夜を過ごしております」
帝都に住まう正妻からのそんな手紙を、マルローは「しらじらしいものだ」と破り捨てた。

自らの姓を名乗らず「マルロー」として過ごす彼は、帝都と魔の森の境に領地を持つ下級貴族の三男として生まれた。領地は狭く三男であるマルローに継げるものなど何もない。マルローは、もって生まれた《念話》のスキルを頼りに迷宮討伐軍へと志願し、若くして隊長に昇りつめることができた。

実家にベラート伯爵家からの縁談が持ち込まれたのもその頃だ。実家の爵位とエンダルジア王国の系譜である家柄を考えれば、帝国の古い家柄で伯爵家でもあるベラート家からの、婿に欲しいという縁談はあり得ないものだった。この縁談を可能にしたのは、若くして迷宮討伐軍の隊長に任ぜられた功績によるものらしい。婿入り先は迷宮都市と帝都を往復するヤグー隊商の宿営地を領地に持つ家で、マルローの領地はその宿場町を経由して帝都や迷宮都市の食料や鉄、様々な物資を得ていた。だからこの縁談を断ることはできなかった。

たとえ、マルローに将来を誓い合った相手がいたのだとしても。

縁談先であるベラート伯爵家は、マルローのことを調べたうえで縁談を申し込んできたらしい。迷宮都市から出さないことを条件に愛人と子をなすことさえ認める条件を提示してきた。

「二人で異国へ逃げよう」

恋人の手を取り告げるマルローに、別れを切り出しベラート家と

の縁談を勧めたのは他でもない恋人だった。彼女のお腹には既に命が宿っていて、その時すでにどこへ逃げることもできなかつたのだと、マルローはずっと後になってから知った。

地位も名誉も財産さえも持つてはいないマルローの恋人は、その全てを持つベラート伯爵家に婿入りすることがマルローの幸せだと信じて疑わなかつたのだ。

自らの実力で軍の隊長へと出世した、けれど身分の低い男を夫に望む女性当主。

『愛人を認める』などという条件を出す相手に疑念を抱いてはいたけれど、マルローの幸せを心から望む恋人には、相手の女性も自分と同じ気持ちに違いないと信じるほかなかつたのかもしれない。

迷宮討伐軍を辞し、ベラート伯爵家へ婿入りしたマルローを迎えたのは、妻である女性当主とその横に親しげに佇む男性執事だった。執事の黒髪が染めたものだということはすぐに知れた。執事の実際の髪と瞳の色は、少し鮮やかではあるがマルローと同じ金髪碧眼。マルローは自分と同じ色を持つ執事に、この婚姻の事情をすべて理解した。

執事は平民の出身で、どれほど功績を積み上げようと女性当主の夫にはなれなかつたのだ。

(これではどちらが愛人なのか分かりませんね)

そんなマルローの思惑通り、形ばかりの妻からは髪と瞳の色以外自分と似つかぬ子供が生まれたし、執事と妻は一層仲睦まじく、入り婿として立場の弱いマルローの居場所はどこにも無くなつていった。

そんなマルローがかつての恋人を懐かしく思ったとして、誰も責められはしないだろう。嫌い合つて別れたわけではなかつたし、別

れて以来忘れた日などなかったのだから。

Aランク冒険者を雇い入れ、迷宮都市にたどり着いたマルローを待っていたのは、マルローの娘を苦勞して育てるかつての恋人の姿だった。

幼い娘は自分と全く同じ金髪碧眼。ベラート伯爵家の輝くような金髪の子と違い、マルローと同じくすんだような金の、柔らかなウェーブの髪の子供だ。

「眠ったときに、足の指をぎゅっと丸めるへんな癖があるのよ、あなたと一緒にね」

そんな風に話すかつての恋人は、「生活の面倒をみさせて欲しい」というマルローの申し出を、「ありがたいけれど、女伯爵のお金は要りません」と断った。

それならば。

マルローは丁度アンバーのために大金を必要としたディックや、迷宮討伐軍とあわず勤め先を探していたエドガン、ドニーノ、グランドルに声を掛け、黒鉄輸送隊を立ち上げた。

マルローが立ち上げた輸送隊ではあつたけれども、隊長をディックにしたのは黒鉄輸送隊にベラート伯爵家から要らぬ圧力をかけられぬための配慮でもあった。

ベラート伯爵家は、マルローの決断に多少の難色を示したものはるかに格上のシューゼンワルド辺境伯家からの口利きもあって、月に1度は帝都に顔を出すことを条件にマルローが黒鉄輸送隊に参加することを許可した。

この時も妻は、「ベラート伯爵家の夫が帝都に月に1日もいないというのは問題である」だとか、「心配なので顔を出してほしい」などといった、白々しい麗句を並べたのだが、実際は執事との間に

第2子ができたときの言い訳であるとか、頻繁に魔の森を行き来して死んでくれれば好都合だとも考えたのだからと、マルローは思っている。

妻ベラート伯爵側にどんな思惑があったにせよ、マルロー達黒鉄輸送隊はなんとか魔の森を渡って来られたし、もっと困難が多かったけれど、かつての恋人と娘に父親だと名乗り、迷宮都市にいる短い間だけ共に暮らすことを許された。

今回、迷宮討伐軍への復職がなかったのも、シューゼンワルド辺境伯家からまとまった金額の『謝礼』という強い後押しがあったからに過ぎない。

ベラート伯爵家は執事が手掛けた事業が失敗し資金繰りが悪化していると聞く。マルローが黒鉄輸送隊にいたときから金の無心は幾度もあつて、事業の見直しを条件に支払ってはきたが、負債を積み上げるばかりで事業は一度も見直されていない。黒鉄輸送隊はうまく軌道に乗っていたから、隊長をディックにしていなかったら、とうに事業ごと取り上げられていたに違いない。

今回の『謝礼』は、事情を熟知したウェイスハルトと共にマルローが計画したもので、迷宮討伐軍に復帰以降は、機密を含む職務に就くことから任を解かれるまではベラート家に帰れない《魔法契約》にしている。迷宮都市にいる間はベラート伯爵家の事業とは一切かわりを持たないし、債務を含む一切の権益から除外されることを帝都の司法機関を通して《誓約》してある。事実上の離縁に等しい契約だからついでに離縁も申し出たのだが、そちらは受け入れては貰えなかった。

「離れていまして、愛しておりますもの」

そんな薄ら寒い台詞を笑顔で述べたと聞いたとき、マルローは背

筋の寒くなる思いがしたものだ。

そんなさなかでの、帝都のベラート伯爵からの便りである。

（検閲が入ることを予想してこんな文章を送ってきたのでしょうか、目的は一体……？）

帝都から多くの人間が迷宮都市を目指し集まっていて、すでにあちこちで小競り合いも起こっている。自分たち迷宮斥候部隊まで諜報任務に駆り出されるくらいだ。

見上げた夏の空は厚い雲が広がっていて、湿度の高いむっとした熱気にいら立ちが募る。

（せめて抜けるような青空であればいいものを）
見通しの利かない空模様には、マルローは深くため息を吐いた。

でんせつのゆうしや一行は『木漏れ日』にむけて迷宮都市を凱旋していた。

メンバーは聖剣兼聖盾・アンブレラを持つでんせつのゆうしやグランドルと元盗賊のヌイ、薬草店の商人メルル、そして薬師のマリエラだ。でんせつのゆうしやのパーティーなのだ。錬金術師がアルケミストいてもおかしくはないのであるが、あえて薬師を名乗るあたりマリエラも注意深くなったと言えよう。

（このパーティー、ちょっと火力が足りないよね）

火力と言えば師匠だろう。時も場所も選ばずに常に強火でファイヤード。料理の火力は大は小を兼ねないと教えてやりたい。

剣士か戦士がいればもつといい。ジークは狩りから帰っていない

から、他に『木漏れ日』で強そうな人は……。
(ニーレンバーグ先生、参加してくれないかなあ……)

師匠なら確実に参加してくれるだろうが、ニーレンバーグは無理だろう。氷点下の眼差しが今から突き刺さるようである。

(どこかに剣士余ってないかな)

ゆうしゃごつこの抜けないマリエラは『木漏れ日』へ向かう。ゆうしゃパーティーのメンバーが足りないのだ。酒場で探すのが常套手段だろう。『木漏れ日』は酒場ではないけれど、日々師匠が飲んだくれているから大して違いはないだろうし、お茶も飲める。似たようなものだ。

かくして、「『木漏れ日』でお茶はいかがですか？」というマリエラの誘いにグランドルが乗ってゆうしゃの凱旋と相成ったのだ。

「ここが『木漏れ日』です」

マリエラの案内で扉を開けたその先には。

「オレは真実の愛に目覚めた！ 燃え盛るこの胸の内を伝えたい！
美しい人、ぜひお名前を……！」

「あはは、ファイヤー？」

「ファイヤー！ それがお名前か！」

「ちがう。ファイヤー！」

「ファイヤー！」

「ファイヤー！」

愛の彷徨い人エドガンが、酔っぱらった師匠に恋に堕ちていた。

この壊れよう。恋に落ちるなどという落差の小さいものではない。底なしの奈落へ墮ちるかのようだ。完全に人生に迷っていて、戻っ

て来れそうもない。

師匠は「ファイヤー！ ファイヤー！」言っているけれど発火はしていないから、まだ理性が残っているようだ。けれど大層ご機嫌で、ものすごく危険な感じがする。

店の奥ではニールンバーグ先生が、冬のアーリマン温泉よりも氷雪の階層よりも冷たい眼差しをエドガンに送っているけれど、このいずれをも乗り越えたエドガンにはさして効き目はないらしい。

ジークはもう少し友達を選んだ方がいいかもしれない。もっとも、リンクスとエドガンくらいしか友達らしき人間がいないから、リンクス亡き後、毎日魔の森や迷宮に一人で狩りに行かされているジークには、ほかに選択肢も新しい友達を作っている時間もないのだが。

（魔法使いを仲間にしたら、剣士もついてきそうだけど……、いらないや）

急に我に返ったマリエラは、師匠たちを無視するとグランドルたちにお茶を出し、そのまま夕食の支度にかかるのだった。

「今回ののはただのバカだったけど、だいぶ入ってきてるねえ」

黒鉄輸送隊が運んできた帝都のお茶と茶器の外商を装い、薬味草店のメルルはウェイスハルトを訪ねていた。彼女が扱う品は茶などの形あるものだけではない。

彼女は諜報部員。真に扱うのは情報だ。

「そうか。外の貴族家がらみか？」

「まあね。あとは、利に敏い商人がちらほら。だいたい想定通りだけれどね。それにしても迷宮都市の貴族達は随分協力的じゃないかい？ ポーシヨンの市販で資産価値が暴落したつてのにさ」

「アグウィナスの一件の前後に街の『掃除』は済ませてある。残りの連中にも十分な対価を約束しているからな」

「いいのかい？ ちよいと小耳に挟んでるけどさ、あんな約束……。賢者サマが黙ってないんじゃないかい？」

「その賢者サマの提案なのだ」

「……、それならいいけどさ。あの賢者サマの提案で聞くと不安が残るね。それはさておき、当面の問題は外の連中だろうさね」

迷宮都市はシューゼンワールド辺境伯家の領地であるが、そこに居を構える貴族家はシューゼンワールド家だけではない。迷宮都市の官職に就く貴族家の多くが代々居を構え、暮らしている。

シューゼンワールド辺境伯家も迷宮都市に住まう他の貴族家も、等しく帝国の臣である。しかし、帝国自体、魔の森を始め、蛮族、亜人、戦争の絶えない小規模国家群、宗教国家といった相容れない周辺国家に相対するために帝国の体裁を維持してきた面があるから、これら争乱地帯との境の守護を任された辺境伯たちは、その任を全うする範囲において多くの裁量権や自治権を与えられている。

迷宮都市に住まう貴族家は、実態においてはシューゼンワールド辺境伯家の臣下に近いのだ。

彼らの多くは200年前はエンダルジア王国に仕えた貴族のうち、スタンピード魔の森の氾濫のあと故郷を捨てず復興に尽くした者たちで、迷宮都市が帝国の領土となった後も、その貢献を評価され爵位と魔の森の外周部に中小の領地を与えられてきた。

彼らがかつて所有していた迷宮都市周囲の領地は、魔物に奪われ森に吞まれて取り戻すことなどかなわなかった。だから新たに領地さえ与えられたのだが、その場所は魔の森の警備を担えと言われて

いるも同義で、小さな規模の領地では収穫期のゴブリンやオークの襲撃に対応することも困難だった。

生き残るために協力し合ったり、強者の庇護を求めることは当然の成り行きだったろう。しかし協力し合っても、領地から得られる税から領地を守るための費用を差し引くと手元にはほとんど利益は残らない。帝国から支給されるわずかばかりの年給を合わせてもまともな生活などではしないから、200年が経過したころには、代官の派遣から生産など各種技術の供与、納税に至る土地の管理をシューゼンワールド辺境伯家に委託し、自分たちはシューゼンワールド辺境伯家の領都か迷宮都市で官職に就いて、年金やら官職の手当て委託している領地の運用益を合わせて暮らす貴族が大半を占めるようになっていた。

人手という助けが必要なのはシューゼンワールド辺境伯家とと同じことだったから、官職を求める協力的な貴族家は実力と家柄のバランスを取りながら、迷宮討伐軍と都市防衛隊という二つの組織を使い分けて適切な処遇を心掛けてきた。

それでも、実力にそぐわぬ自尊心から、無謀な野心を抱く者は幾人かいたが、これらの度し難い貴族たちはアグウィナス家の騒動の前後に肅清し、『療養休暇』中である。

残りのまっとうな貴族家であつても、迷宮討伐軍で上位職に取り立てられた協力者の家でない限り、ポジションの市販による資産価値の低下や、目まぐるしく変化する状況に不安を覚え、怒りにも似た感情をシューゼンワールド辺境伯家に向けるのが道理だ。しかし、事前にシューゼンワールド辺境伯家から提示された『とある約束』によって、迷宮を倒すまでの間、協力的な体制が築かれていた。

だから、問題となるのは迷宮都市に居住せず、魔の森の外周に領

地を持つ貴族たちだろう。彼らの多くは、中規模以上の領地を有していたり、資源やヤグー隊商の宿営地を領地に持っていたりと、自領地だけで防衛を含む運営が行える豊かな貴族たちだった。

彼らは、「我らは等しく皇帝の臣であり辺境伯の臣ではない」との主張の元、防衛に関しては一定の協力体制をとるものの、シューゼンワルド辺境伯家の官職を求めてはこなかった。

高いプライドが邪魔したわけでも、ましてや主張のとおり皇帝への忠心からの行動ではない。単に、損得を秤にかけた結果に過ぎない。彼らの領地の税率が例外なくシューゼンワルド辺境伯家の領地より高いことがそれを物語っている。

シューゼンワルド辺境伯家とともに民が十分暮らせるよう税を下げ、兵士として迷宮の討伐を行い、魔の森と帝都の警護に努める方が、よほど貴族としても皇帝の臣下としても正しい有り様なのである。

自らの利を優先するような貴族たちだ。迷宮都市でポーションが市販されるようになって、行動を起こさないとはいはない。迷宮というものは流通経路さえ問題なければ、多額の富を生むものなのだ。

誰が何を考え、どう行動するのか。

大きく変動する迷宮都市で、ウェイスハルトは難しい対応を迫られていた。

雲行き（後書き）

そこそこあらずじ：マルロー嫁&間男執事がやなかんじ。

迷宮都市にちよつかいかけてきそうなのは、魔
の森の外の貴族たち。

迷子のエドガン、ラブファイヤー！

せめて眠りは安らかに

アグウィナス家の地下室で、キャロラインは永遠の眠りにつくエスターリアに祈りを捧げる。

エスターリアに祈っても、なんの加護も効力も得られはしないとキャロラインは理解している。

ガラスの棺の中で眠るエスターリアの表情は穏やかで、眠っているようにしか見えないけれど、彼女はとつくに地脈に還っている。自由に動く肉体を持ち、身分に応じた権威を持って指示を出せる、生きてここにいるキャロラインの方が、よほどこの世の中に働きかけ、願いをかなえる力を持っている。

だから、エスターリアに祈るこの行為はきつと、決意を新たにする儀式なのだ。

ロバートが『療養』の身となり、キャロラインがアグウィナス家の後継に決まって以来、彼女はアグウィナス家が伝えてきた錬金術師たちの記録を紐解いて来た。そこに綴られた錬金術師たちの滅私めっしに近い献身は、迷宮都市という過酷な環境にあっても衣食住満ち足りた生活を送ってきた彼女に理解できるものではない。

キャロラインを突き動かすものは、アグウィナス家の娘として生まれ、育つにつれて醸成した矜持のようなものだった。

キャロラインには迷宮都市の住人程度の情報しか知らされていない。けれど、過去から今に至るアグウィナス家の歴史を知り、ポーションの市販が開始されると聞けば、状況は自ずと理解ができた。

アグウィナス家は、ポーションの、錬金術師を守り新たな世界に

届ける箱舟だ。死者と呪いと空の棺で埋め尽くされた箱舟は、目的の地に着く前に暗礁に乗り上げてしまったけれど、おかげで呪いは解き放たれて、本来の乗客を乗せることができた。

この地下室で、兄ロバートが求め叫んだ『目覚めた錬金術師』。兄の推測は正しかったのだろう。『目覚めた錬金術師』が迷宮討伐軍を助け、ポーションを作り、迷宮都市を新しい世界へと導こうとしている。伯父ルイスを呪いから解き放ち、父ルイスを救ったマリエラこそがそうなのだ、キャロラインは思っていた。

ロバートが新薬を作らせていた帝都の錬金術師たちと話をするようになって、わかったのだ。帝都の錬金術師は多くの魔道具を使ってポーションを作成する。マリエラが何所の誰に師事したのかは知らないし、迷宮都市にある魔道具は薬用の物ばかりで錬金術師が使う魔道具とは異なるけれど、今の時世の錬金術師がキャロラインが持っている魔道具のすべてを知らないなどあり得ない。

マリエラが『目覚めた錬金術師』だというのなら。キャロラインはエスターリアに祈る。

(どうか、私に、目覚めた錬金術師を守らせてください)

彼女はキャロラインの友人で、一緒に薬を作ったり街の薬師と交流しては、迷宮都市に貢献してきた。

貴族の令嬢として生まれたキャロラインには、市井で自由に過ごせる時間はとても少ない。その時間がこれほど豊かで楽しかったのは、彼女のおかげに違いない。

兄ロバートが退いた今、キャロラインはアグウィナス家の者として生きる以外に道はないのだけれど、友人と共に進めるならば、これほど望ましいことはない、とキャロラインは思っている。

(それにしても、お兄様だったら意外と迂闊でいらっしやるのね。あ

の時、この地下室には、マリエラさんもいらっしやっただのに)

ふふふと笑うキャロライン。かつてロバートがマリエラを疑い、キャロラインに探りをいれてきた時に、スタイリッシュな光るお茶で見事にはぐらかして見せたことは記憶に残っていないらしい。

「キャル、ここにいたのか」

「お父様」

祈りを終えたキャロラインの後ろに、父ロイスが立っていた。寝たきりだったロイスは随分と回復をして、杖は必要だけれど一人で歩くことができる。

「キャル、しばらく屋敷で過ごしてはどうか。街の外から来た連中が、昨日も騒ぎを起こしたそう。ウエイズハルト様が警護をつけて下さるとはいえ、出歩けばそれだけ危険は高まるものだ」

ポーシヨンの出所はアグウィナス家。迷宮都市ではそう噂されている。『何らかの方法』を使って錬金術師を作り出したのではないかと。前当主のロイスが若いロバートに家督を譲ったことも、多くの奴隷を購入していたことも情報の早い者には知られたことで、『何らかの方法』に関係しているのだと考えられている。

『アグウィナス家の誰が錬金術師なのか』

『迷宮都市中にポーシヨンを供給するのだ。一人ということはあるまい』

『多くの奴隷を消費したと聞く。危険な邪法やもしれん』

飛び交う様々な憶測の目は、跡目を継ぐことになったキャロラインに向いている。

『彼女が錬金術師なのか。違っていても何も知らぬはずはない』と。

「いいえ、お父様。出かけますわ。わたくしが注目を集めている間

は、錬金術師様は自由に動けますもの」

自ら囿になるというキャラライン。意思を曲げない頑固さは兄口バートと通じるものがある。そんな娘の様子に、父ロイスは無事を祈るほかなかった。

《錬成空間、回転》

迷宮討伐軍基地の地下に設けられた仮設工房で、マリエラは円盤状に構築した錬成空間を超高速で回転させていた。

師匠はというと、ふつかふかの長椅子にカワイイ系からインテリ眼鏡まで4人の兵士をはべらせて、今日も今日とて宴会中だ。殺風景だった地下室は、日々運び込まれる家具や毛皮の敷物のおかげで非常に快適な空間が広がっている。もちろん宴会コーナーのところだけ。

マリエラの周囲は相変わらず殺風景なままで、薬草の袋を運んだり、ポーションを樽に詰めては運び出す兵士たちが、労役に就く懲罰兵のようだ。同じ部屋なのにこの待遇差。天国と地獄か。

働けど働けど師匠の飲酒を阻止できないマリエラは、とうとうグしてしまったのか。何の目的かはわからないが、一人何やらぶつくさ言いながら錬成空間を回転させている。

「《温度制御》、あとは上から《ウォーター》」

高速回転する円盤の中心に水を垂らす。落とされた水は円盤の上を滑り、遠心力によって小さく分散されながら外周へと飛び出していく。周囲の温度を下げているから細かく吹き飛ばされた液粒は凍

って微細な氷の粒になる。

「うーん、制御が楽だから一気にたくさん作れるけど、ちょっと水滴が大きいんだよね……」

上級ポーシオンをすべて錬金術スキルで行うには、ルナマギアの抽出がどうしてもネックになる。凍らせた水に溶かしだす固溶の速度はとても遅いものだから、どうやって微細な水滴を作るかが重要なのだ。

グランドルがくるくる回す傘のふちから、水滴が飛び散る様子を見てこの方法を思いつき、早速試してみたのだが。

「これでも作れなくはないんだけどなあ、なんか違う気がするんだよね」

この方法でも、上級ポーシオンは作れると思う。ほんの少し薄い仕上がりになるだろうけれど、『スキルだけで上級ポーシオンを作る』という条件は達成できるだろう。

でも、何か大切なことを理解できていない。なんとなくそんな気がする。

「んー、やっぱりノズル使う方向でもう少し考えてみよう」

そう思いなおしたマリエラは、使い慣れたノズルを取り出すと、今日も上級ポーシオンを1本分ずつ魔力の限界まで作成し、魔力切れというお昼寝タイムに突入するのだった。

「今日は、ここまでえ〜」

ふんにやりパタンと、魔力を切らせて倒れるマリエラを、いつのまにかそばに来ていた師匠が抱き止める。

「お疲れ、マリエラ。それに気づけたらもう少しだ」

師匠のねぎらいは、魔力切れで意識のないマリエラには聞こえない。師匠は軽々とマリエラを抱き上げるとマリエラをふかふかの長椅子に横たえる。

宴会コーナーにはべつていた兵士たちは皆立ち上がって扉の近くに整列していて、長椅子の近くにはマリエラのサポートを行っていた兵士のうち腕の立つ2名が控えている。

師匠はマリエラの手をお腹の上で右手が上に来るように重ね合わせると、何かを唱えながらマリエラの右手の中指にはめられた虹色の指輪にそつと触れた。

ぼう、と指輪から引き出されるように手のひらほどの炎が浮かび上がる。

マリエラに指輪を与えたサラマンダーだ。

炎はたちまち小さなトカゲの形をとって、自らを呼び出した師匠と、師匠が指し示すマリエラを交互にみつめる。

師匠がサラマンダーの鼻先に手を近づける。指先に浮かび上がったのは青白い炎で、マッチの先ほどの小さなそれをサラマンダーはばくと食べる。一瞬全身を振るわせて青白い炎をほとばしらせた後、すべての炎をかき消したサラマンダーは、小さな赤いトカゲになってマリエラの手の上に体を丸めて寝そべった。

「しばらくお守りをたのむ」

「はっ」

当然のように4人のホスト……、いや兵士を伴って部屋を出ていく師匠の指示に、椅子に控える2名の兵士が応じる。

マリエラが倒れたあと、師匠がこの小さな精霊を呼び出してどこかへ出かけるのはいつものことで、このサラマンダーも見慣れたものだ。初めて見たときは本当に驚いたものだが、見慣れてしまうと

愛嬌のある赤つばいトカゲに見える。

炎の精霊の体は炎そのもので、こんな風に人の手の上に寝そべったりはできないと思っていたのだが、この炎色のトカゲはわずかに透けてはいるものの、よく見なければただのトカゲと変わらない。

（他の兵士は出来上がったポーションを箱に詰めて運んだり、薬草の搾りかすを処分するのに忙しい。炎災の賢者が戻ってくるまでは、自分たち二人の兵士がこの小さなトカゲと一緒に錬金術師マリエラを守るのだ）

大任を果たすべく背筋を正し、神経を研ぎ澄ます二人の兵士たち。

彼らは知らない。

仮初とはいえ、受肉するほどの魔力を与えられたサラマンダーの実力を。

この小さい火トカゲがマリエラ以外を基地ごと吹き飛ばす発火装置であることを。

ふあ、とあくびをするように口を開けたサラマンダーをみて、にこりと動物好きの兵士が微笑む。この小さいトカゲがのんきに寝ていられるように、きっちり警備を行おう。そんなことを考えながら、真に『お守り』を頼まれたサラマンダーは、マリエラの手の甲の据わりのいい位置を探して顎を乗つけると、気持ちよさそうに瞳を閉じた。

大層危険な『お守り』を残した師匠は、4人の兵士を引き連れて次の会場へと向かっていた。2次会会場だ。まっ昼間からお持ち帰りでお楽しみのサーブスコースではないようだ。

「ご機嫌な酔っぱらいよろしく唄を口遊みながら、迷宮討伐軍の基地を進んでいく師匠を見とがめる者はいない。もちろんウエイズハルトから『炎災の賢者』に関する指令は出されているから、師匠が基地を勝手に歩き回っても何も問題はない。けれど見慣れない部外者に誰も見向きもしないのは、その存在をおぼろげにしか意識できないからだ。」

そんな様子に初めは驚いた4人の兵士も、今ではすっかり慣れてしまった。そもそも、錬金術師メジエラにつけられた兵士の中から、ウエイズハルトの側近や諜報部員だけを選んで呼びつけた時点で、炎災の賢者の底知れなさに頭を垂れるよりほかなかった。身分をやつして潜り込んだというのに炎災の賢者の前では何の意味もなさなかったのだ。

そして到着した二次会会場は。

迷宮討伐軍に食料や物資を納入する通用門から入ってすぐの、一棟の倉庫だった。倉庫の外に並ぶ馬車には、小さなガラスの瓶が大量に積まれている。倉庫の入り口には数名の兵士が在中していて、馬車から数本の瓶を抜き取ると、サイズや重さを測ったり、何やら魔道具にかけた後、書類を渡して馬車の持ち主に倉庫への搬入の指示をしている。

ポーション瓶だ。

復興された採砂場から運ばれた砂は、分級設備にかけられてポーション瓶に適した砂がより分けられる。そのうち『精霊の神殿』に運ばれておよそ一晩放置することで『命の雫』が込められる。ここまでは迷宮都市の官営事業の範疇だ。事業は採砂、運搬、砂の分画にガラス工房への砂の販売と、複数の業務に分割して発注され、受

注した貴族家や商人に一定の利権が発生しているが、砂の質と価格は発注時の取り決めに従い維持されている。

《命の雫》がこめられたポーション瓶用の砂は、迷宮都市の各ガラス工房が買い取ってポーション瓶に成形し、この倉庫に納品される。

ポーション瓶用の原料は手間暇かけた貴重な砂だ。ポーション瓶が必要なこの時期に、普通の窓ガラスや酒瓶などに加工されてはかなわないし、いずれ業務自体を民営化しても成り立つように普通の砂より高価な価格が設定してある。もちろんポーション瓶の方も、必要以上にガラスがケチられないように容量や重さ、その他品質規格があつて、原料代に工賃、利益を乗せた価格が設定してある。

倉庫の入り口で検査を行う兵士たちは、ポーション瓶が規格を満足しているか抜き取り検査を行っているわけだ。使っている魔道具は、帝都でも中古ガラス瓶の買い取り時に使われるものでガラスに含まれる《命の雫》や魔石の含有量を測定する魔道具らしい。

何しろ砂も高価なら魔石も使う、原料代の高い瓶なのだ。買い取り価格が高いから、より多くの儲けを出そうと、つまらないことを考える者も現れる。

「ミッチェルくん」

がばりと師匠がミッチェル君の肩を抱く。酔っぱらいだ。顔が近い。

最初の頃ならドギマギしていたミッチェル君だったが、最近は慣れたもので「危ないですよ」などと言っている。師匠は面白くないのか、ちよっぴり口を尖らすと、ミッチェル君の耳に口を寄せてひそひそと何かを囁いた。

師匠の存在は、不思議な術によって周りに強く意識されないけれど、見えなくなるわけではない。当然師匠とミッチェル君がいちゃこらしている様子は見られているのだけれど、なぜ真昼間の迷宮討

伐軍基地で男女が肩を組んでいるのかと、不思議に思う者はない。そして視線をそらした次の瞬間には、八百屋の親父の顔を忘れるように意味のない情報として記憶の隅に押しやられてしまう。

師匠はその金の瞳で、検査を待つ馬車を眺めた後、三次会へと出かけて行った。師匠に従う兵士は3人。ミツチエル君だけ2次会で解散だ。師匠にフラれてしまったのか。

ミツチエル君はくりくりした髪をシュツとかき上げ、師匠のそばにいた時とは別人のような厳しい顔つきになると、検査をしている兵士の元へと歩いて行った。

「次の馬車と、その二つ後ろ、全数検査だ。逃げられんように搬入門は閉めておけ。特に後ろの馬車は要注意だ。工房を査察しろ。数日前に砂の盗難があったろう。関係があるやもしれん」
「はっ」

ミツチエルの指示に直ちに従う兵士たち。

ポーシヨン瓶の材料も買い取り価格も高いのだ。検査が抜き取りで行われるならば普通のガラス瓶を荷台の中心に仕込んで嵩増ししようと考えたり、より質の悪い者ならば、原料を盗んだりもするだろう。『精霊の神殿』から砂の荷台が運び出されるより朝早くに馬車ごと盗んで魔の森にかくし、後日、農作物や採取品でカモフラージュして迷宮都市に運び込むのだ。

《命の雫》を込めただけで溶かしてガラスにしている砂なんて、数日もたてば《命の雫》がすっかり抜けてただの砂と変わらなくなってしまう。迷宮都市の住人は長らくポーシヨンに触れてこなかったからそんなことも知りはない。ただの砂で薄まったポーシヨン瓶など検査をすればすぐわかる。

(よくこれだけ、下らないことを思いつくものだ)

全数検査が行われると知るや、急に帰ろうとする後ろの馬車を抑えにかかる兵士たち。炎災の賢者が囁いた通りの有様だ。

(これは、今日中に終わらないかもな)

ミツチエルの不満気な表情に、これは大事だと一層キビキビと動く兵士たち。

3次会に連れて行って貰えないのが不満なのか、仕事が長引きそうで嫌なのか。それとも、ポーションの市販という大事に際して下らない真似をする者たちに怒っているのか。

検査の兵士はすぐさま増員されて、その日のうちにすべての調査が完了したけれど、ミツチエル君が仕事から解放されたときには師匠はマリエラだけをお持ち帰りして『木漏れ日』に帰った後だった。

せめて眠りは安らかに（後書き）

へん。はたらく。うま。じし。じし。すらすら。へん。ひ

闇夜の灯

「キャル様、今日もお変わりなくお過ごしか。お疲れだろう、お茶にしよう」

迷宮討伐軍基地の薬草保管庫で、薬草の確認を行うキャロラインをウェイスハルトがねぎらう。

ポーシヨンの市販が決定されて以来、キャロラインは午前には敷敷を出て、害虫駆除団子の工場を視察した後、迷宮討伐軍で薬草の品質管理を行う毎日だ。

『木漏れ日』には、もうずっと顔を出していない。

ポーシヨンに関する迷宮都市内外の注意を引き付ける役目なのだ。マリエラに会いに行けるはずがない。

マリエラの様子はウェイスハルトから聞いている。

リンクスを失って以来ひどく落ち込んでいたマリエラだったが、師匠という人が訪れたお陰で元氣を取り戻したのだという。

マリエラが錬金術師だという情報をウェイスハルトは漏らさないけれど、キャロラインには立ち直ったマリエラが、迷宮都市のために一人で限界までポーシヨンを作り続けているのだと思えた。ならば少しでも手伝いたい。かつて一緒に薬を練り練りしていた時のように。

そんな思いから、薬草の品質管理を名乗り出たのだ。

ポーシヨンと材料を保管する敷地面積があり、最も安全な場所として、迷宮討伐軍の基地がポーシヨンの製造保管施設として選ばれている。迷宮都市の薬師たちが買い取り、乾燥などの加工をした後

に商人ギルドに納めた薬草は迷宮討伐軍に運び込まれる。この時点で薬草の品質は一定以上に保たれているが、迷宮討伐軍には薬草の品質管理に詳しいものがないのだ。折角の薬草を日光に当てたり温度や湿度が不適切な場所で管理しては、すぐにダメになってしまう。

そういつた品質上の特性から在庫の量や保管期間の管理までをキャララインが行っていて、迷宮討伐軍としてもこれ以上ないほどに助かってはいたのだが。

「今日のお茶も美味しいですね。まあ、このケーキ、みずみずしい果実をこんなに使って」

にこりと微笑みながらお茶を楽しむキャララインを、ウエイズハルトは複雑な気持ちで見つめる。

『本日もお変わりないか』、『本日もご機嫌麗しく』、そんな常套句を挨拶以上の意味を込めて口にする日が来るなどと、思いもしなかった。

恋しい人に今日もあえて嬉しい。そんな単純な気持ちでは最早いられない。ウエイズハルトはキャララインの無事をこの目で確認するために、毎日この部屋を訪れているのだ。

錬金術師リマから街内外の視線をそらすため、アグウイナス家を使うというのは、検討の余地がないほどに確定した事項だった。情報を操作するまでもなく、迷宮都市の住人も街の外の貴族や商人も、長らくポーションの管理と研究を重ねてきたアグウイナス家に目を向けていたのだから。

しかし、ウエイズハルトにはキャララインを囿に使うつもりなど毛頭なかった。ちょうどロバートが『療養』という名目で隔離されていたのだ。彼を中心に情報を操作する予定だった。

まさか、キャロライン自らが名乗りを上げてくるなんて。

「アグウィナス家の者が迷宮討伐軍へ出入りしなければ、怪しむ者も現れましょう」

キャロラインの言い分は正しい。彼女が街で自由に行動し、迷宮討伐軍に出入りしなければ、迷宮討伐軍が錬金術師を監禁し、ポーション作りを強制していると勘繰るものもただろ。迷宮都市によけいな抗争を招くことは、外から人を招こうとするこの時期に、望ましいことではなかった。

だから、キャロラインの選択は迷宮都市の運営上望ましく、戦略上正しいことだ。けれど。

（今日も無事でよかった）

こんな気持ちでキャロラインのもとを訪れることになろうとは。

キャロラインがみずみずしいと評した菓子の果実も、ウェイスハルトには、水っぽいばかりに感じられるし、紅茶の香りも心を落ち着かせてはくれない。

キャロラインには何人も護衛を張り付け、何重もの警備体制を敷いている。それでも絶対に安全などとは言い切れない。

今すぐこんな危険なことはやめて、屋敷に籠れと伝えたい。自分のそばに匿ってしまいたい。

けれどそんなことをウェイスハルトは言い出せなかった。

きっと、キャロラインは自分が危険であることも、誰を守っているのかも、分かった上でここにいるのだ。

「私は、アグウィナス家の娘です」

そう言ったキャロラインの気高さに、ウェイスハルトの心は強く捕らえられてしまったのだ。その決意を、矜持をどうして踏みにじれようか。

(必ず守る。そして……)

ウエイスハルトは自らの決意も思いも口にはしない。

今はまだ、その時ではないのだ。

なぜならば、炎災の賢者の点けた灯ともしびは、魔の森の闇を貫き迷宮都市を望む街々へと届いてしまったのだから。

闇夜の灯火に導かれるように、羽虫のごとく有象無象が迷宮都市を目指し、辿り着かんとしているのだから。

「パ、パパ。やつやつとと、つ、ついた。め、めめ迷宮と、都市だ」
「おお、そうだな、そうだ。よく、頑張ったな。頑張ったんだ、息子よ」

夕暮れ前、魔の森を抜け、迷宮都市に辿り着いたとある商人一行の様子に、迷宮都市の南西門を守る衛兵は顔を顰しかめた。

隊商の主らしき小柄な男は、背骨が弓なりに曲がっていてまるで背中に荷物でも背負っているようにも見える。顔立ちのよく似た息子の方は、小柄ではあるけれど背筋はしゃんと伸びているのだが、過去に大けがでも負ったのか表情が常に何かに怯えているようで、キョロキョロとひっきりなしにあたりを見回しては、びくびくと痙攣するように顔の筋肉を引きつらせている。

もつとも、迷宮都市では大けがを負ったものなど珍しくもなかったから、衛兵の顔を顰めさせたのは、二人の外見上の特徴ではない。傷一つない真新しい甲冑や高価そうな外套を纏い、媚びるように開門を要請する商人親子が引き連れてきたのは、雇った冒険者らし

き護衛を除くと靴も履いていないボロボロの服を纏った男たちで、
瘦せて汚れた体や伸び放題の髪や髭からまともな扱いを受けていな
いことは明らかだった。

商人親子の甲冑は傷どころか汚れさえ付いてはいないのに、廃棄
寸前の安物の武器を与えられた奴隷たちは、防具どころか靴さえ与
えられてはいないから、魔の森で傷つけてしまったのかあちこちに
切り傷を作って血を滲ませている。こんな状態で魔の森を抜けられ
たのは、入り口の詰め所で魔除けポーションを販売する迷宮都市の
兵士が、同情してたつぷり魔除けポーションを使ってくれたおかげ
だろう。

これほど酷い扱いは、迷宮都市でそう見るものではない。犯罪奴
隷かと思いきや、裂けたシャツの胸元に隷属の焼き印は確認できな
いのだ。

(借金奴隷にこの扱いかよ……)

魔物除けポーションの販売を開始して以来、迷宮都市で一攫千金
を狙うおかしな連中が増えたと衛兵は思う。けれど今回の一行は、
特にひどい。

開門の手続きを同僚に任せた衛兵は、上司に報告を行うため都市
防衛隊の詰め所へと向かっていった。

「虐待の可能性がある多数の奴隷を連れた商人親子と、護衛の冒険
者ですか」

「は。冒険者のレベルはCランク程度かと。後は彼らに同行したと
思われる、文官風の男です」

衛兵の報告を聞くカイト隊長と、冒険者がCランクと聞いて一気

に興味を無くして爪を切り始めるテルーテル相談役。テルーテルは採砂場の奪還作戦を乗り越えて以来、堅苦しい貴族らしさが抜けてフランクになったというか、おおらかになったというか、単なるだらしなおっさんぽさが増している。人前で靴下を脱いで足の爪を切り始めるのも時間の問題だろう。

「文官風の男？ 特殊なスキル持ちか？」

「スキルまではわかりませんが、黒髪で緑の瞳の20代後半の男性です。少し見た限りでは戦闘経験のある身のこなしには見えませんでした」

商人や冒険者、職人の需要は多いけれど、今の迷宮都市に伝手のない文官の働き口はない。

訝しむカイト隊長に、衛兵が特徴を伝える。

「貴重な戦闘スキル持ちの冒険者が、この時期に来る理由はないんじゃないかね」

ふーっと、やすりで削った爪のカスを吹き飛ばしながら言うテルーテル。恐ろしくやる気も興味もない様子だが、こういう時の方が的を射たことを言っていたりする。

「念のため、上に報告しておこう」

報・連・相をきっちり守る男、カイト隊長は上司の大佐に報告すべく席を立ち、「レオンハルト將軍のところに行くなら、わしも行くー」とテルーテルがその後について大佐の部屋へと向かうのだった。

迷宮都市の大門の中へ消える商人一行に、魔の森の木陰から鋭い視線を送る男がいた。大門が再び閉ざされたのち、男はようやく木

陰から姿を現して大門横の通用門へと近づいていった。通用門に詰める都市防衛隊の衛兵は男と知り合いらしく、男が大量に背負った何羽もの鳥を見ながら気さくな様子で声をかけた。

「あ、ニークさん、お久しぶりつす。今日も大量ですな」

「今日は雨乞鳥レイニーパードですか。すげえ高いトコに住んでる鳥でしょ？ 流石つすね。ニーク兄さん」

「……、獲れ過ぎたから分けようかと寄ったんだがな」
「サーセンした、ジークムントさん」

ジークが採砂場への道を拓く都市防衛隊に同行し、「肉の兄さん」として活躍したのは1週間という短期間だったが、雖に餌を運ぶ親鳥のごとく日々獲物を捕ってはみんなに食べさせていたおかげで、未だに都市防衛隊の面々はジークを見ると「食べ物をくれるんじゃないか？」と思う様子だ。完全に刷り込みが完了している。言動から「肉の兄さん、肉食べたいです」という気持ち滲み出ている。

ジークの方も獲物を喜んでくれる衛兵たちの様子にまんざらでもないようで、必要以上に獲物が獲れた時などは、こうして大門までやってきて、肉をお裾分けしている。都市防衛隊の若者も寄宿舎住まいだったり、交代勤務の食事を寄宿舎で取る者が多いから、ジークの差し入れは寄宿舎の食堂に持ち込まれ、運のいい兵士諸氏の胃袋に収まる。

年の近い男性兵士を餌付けしてどうしようというのか。友達作るう運動の一環か。

『木漏れ日』にやってきては、いままで散々フラれた愚痴を聞いて来た友人ジークを放っておいて、ファイヤーファイヤー言っているエドガンに、ついに見切りをつけたのか。だとしたらエドガンが絶体絶命の大ピンチかもしれない。奴にも友達と呼べる男はジークしかいな

いだらうから。

昨日からエドガン始め黒鉄輸送隊のメンバーが『木漏れ日』に入り浸っていて食い扶持が増えているというのに、ジークは気前よく丸々と太った雨乞鳥を5羽も衛兵に手渡した。やっぱり、エドガンのことはジークの辞書から削除されてしまったのだろうか。

「うっは、こんなにいいんスか？ 獲物半分になっちまいますよ」
「これだけあればウチは足りるからな」

「でも、雨乞鳥って高級鳥っしょ？ しかもこんな丸々太った上物……」

衛兵は口では遠慮しているが、手はガッツリと雨乞鳥の脚を握って放そうとしない。雨乞鳥の肉は柔らかく臭みも癖も少なくて美味なのだ。一般に、味が同水準であれば、魔物の肉に比べて獣の肉の方が高価な値段が付けられる。ちなみに最も価格水準が低いのは二足歩行の人型の魔物肉だ。食肉用の家畜を飼う土地がない迷宮都市では、魔物肉も立派な食料とみなされるけれど、どこか人間を想像させる魔物の肉は、食料が豊かな帝都などでは忌避されて一般市民もあまり食べない。オーク肉を常食する迷宮都市では、雨乞鳥など高級品で下級兵士の食卓に上るものではない。

「……、寄宿舍の厨房にもって行ってみんなで食べるよ？」
「はい！ ごちになります！ あー、早く見張り終わんねーかなー」
「おい、みんなでだぞ！ 報告に行ったやつが帰ってきてからだからなー！」

外壁の門から魔の森を見ていなければいけない衛兵たちは、もはや肉しか見ていない。

「そんなことより、さっき通ったのは、帝都から来た商人か？」

「はい、ニーク兄さん、じゃないやジークさん」

「ジークさんも見たでしょ？ あの商人、自分らだけ金ぴかの鎧着込んで、安全な馬車の中だったのに！ あんな鎧買う金があるんだったら、周りの連中に靴の一足でも買ってやりゃあいいのに！」

「あいつら、借金奴隷つすよね？ 服破れてるやつにも刻印見えなかつたし。借金奴隷にあんな扱い、アリなんすか？」

衛兵たちも奴隷を酷使していた先ほどの商人一行に良い印象を抱いてはいないようだった。

「街でトラブルを起こしそうだな。『木漏れ日』の皆に注意するよう話しておくよ。あの商人はどこに向かったんだ？」

「ええ、気を付けてくださいね。一応上に報告はしてるんですけど、面倒ごとには近づかない方が良いでしょう。えーと……」

さりげなく、商人の情報を聞き出すジーク。肉の効果は抜群だ。ニーク兄さんとまで呼ばれるほど肉を食わせた甲斐があったというものだ。

閉鎖的な迷宮都市では身内意識は比較的強い。だからトラブルの原因となりそうなよそ者の個人情報が見られるのは致し方ない。

お礼にと、雨乞鳥を更に1羽追加して、ジークは小門をくぐって『木漏れ日』にむかう。

「ごちそうさまです。お気をつけて」

そう言っただけで送る衛兵たちは、ジークの瞳が仄暗く陰っていることに気が付きはしなかった。

闇夜の灯（後書き）

ぞっくりあらずじ…なんか来た

不条理の指先

マリエラと師匠の待つ『木漏れ日』にジークが帰り着いたときには、日はとつくに落ちていた。

「ジーク、おかえりー。わあ、トリニクいっぱい」

「ただいま、マリエラ。今日はたくさん獲れたから衛兵に分けてきたよ」

「今日の晩御飯はもう作つてあるから、明日料理するね。リクエストある？」

「えー、マリエラ。あたし今日食べたいー。一羽捌いて揚げようぜー」

「もー、師匠。さつき食べたでしょー。ボケたんですかー」
ちなみに師匠はボケてない。ボケは振りまいているが、痴呆になるにはまだ早い。

「えー、みんなないから、錬金術でパパつとつくりゃいいじゃん」
ジークは何時に帰つて来るか分からないから、『木漏れ日』ではジークを待たずに夕食を済ませる。今日は、みんな家に帰つた後なのだ。

「師匠わがまま」

師匠の我儘にむにゅと口を尖らせるマリエラと、尖らせた口先をつまもつと手を伸ばす師匠。マリエラは自分が眠っている間に師匠が四方に目を行き届かせているなんて知らないし、サラマンダーだってマリエラが目覚める前、師匠が戻つた時点で還つてしまっているから、ただの酒飲みな師匠だとしか思っていない。だから、遠慮なんてみじんもなくて、伸ばされた師匠の人差し指と親指を両手

で握って、ぎゅーと引っ張っている。

「ぎゃー、マリエラ、手え裂けるー」などと言いつつげらげら笑う師匠とマリエラのやり取りを見ていたジークは、少し笑うと手伝いを申し出る。

「手伝おう」

「んじゃ、あたしも」

「師匠は邪魔だからおとなしく座っててください」

つれないマリエラの発言に、むにゅうと口を尖らせる師匠を放置してマリエラとジークは台所へと入っていった。マリエラが調味料や油を準備している間に、ジークが雨乞鳥の解体を始める。もも肉だけでいいというマリエラに、肉にナイフを突き刺し、ぐきりと関節を逆向きに折ってもも肉を取り外すジーク。その手つきがいつもより少しだけ荒いことにジーク自身は気づいていない。

「ありがとう」

もも肉を受け取ったマリエラは、一口大に切り分けると、調味料と一緒に《錬成空間》に放り込み、軽く混ぜると「ちよい《加圧》。時間短縮、味しみしみ」などと言っている。

雨乞鳥は人の頭よりも大きいくらいの中型の鳥だ。高木に巣を掛け特徴的な鳴き声で鳴く。丸々と太った姿は飛翔に適さず、飛んでいるところを見たものもないから、霞を食べているのではないかとさえ言われている。鳴いた後には大抵雨が降ることからこの名前が付けられた。

けれどその実態は、人々が噂するほど美しいものではなく、その生態は蟻や蜂のようでもある。卵を産める女王鳥とそのつがい以外は未分化で性別を持たず、餌を集めて巣に運ぶ。特徴的な声色で鳴くのは、雨を呼んでいるのではなく、雨や外敵から身を守るために

兵隊である鳥たちを呼んでいるのだ。

飛び立てないほどに肥え太った女王鳥とは異なって、兵隊の鳥たちははやせ細った手のひらサイズの小鳥に過ぎず、とても同じ種族には思えない。

ざくり。

奴隷労働の頂点で肥え太った肉に、ジークムントは刃を突き立てる。マリエラが1羽を料理している間に、残りの鳥も調理しやすいように捌いているのだ。

腹を裂いてテラテラと脂ののった内臓を取り出す。部位ごとに解体し、部位によっては骨から肉をそぎ落とす。

薄桃色の肉を断つざくりとした触感、骨につながる筋を剥がすときの肉が千切れ裂ける有り様、関節を逆に折り曲げるごりっとした感触に肉を破って飛び出す骨の白い色。

ざくりとナイフを突き立てて、ぶつり、ぶつりと肉を切り分ける。黙々と雨乞鳥を捌いていくジークムントの一つしかない蒼い瞳は、何を映しているのだろうか。

「ジーク？ できたよ」

マリエラに声をかけられて、ようやくジークは我に返る。

雨乞鳥は全て捌き終わっていて、いくつかは食べやすい大きさにまで切り分けられていた。

「これだけ切ってくれたら調理も楽だよ。ありがとう」

そう言っつて、雨乞鳥の肉を容器に入れて冷凍、冷蔵の魔道具にしまっつていくマリエラ。

台所の机の上にはジークの分の夕食と、雨乞鳥のから揚げが並んでいて、いつの間にもやらから揚げの大皿の真ん前に酒瓶を抱えた師

匠が座ってスタンバイしている。流石は賢者だ。料理の仕上がる時間の把握は完璧だ。

から揚げは鍋を使わず《錬成空間》で揚げている。マリエラにとって《錬成空間》の温度管理はお手の物だから、普通に調理機器を使うよりもよっぽど上手にできている。外はさっくり、中はジューシー。『ヤグーの跳ね橋亭』のマスターにも負けない出来栄えだ。上手にできた証拠に、師匠がぱくぱくとすごい勢いで食べている。師匠は口の中もファイヤー仕様なのか、熱いものでも平気でぱくぱく食べるから、出来立て熱々料理争奪戦にはめっぽう強い。このままでは全部師匠に食べられてしまう。

「師匠、食べすぎ。リモン投下〜」

「こっ、こら！ マリエラ！ リモンは取り皿でかけなきゃダメだろ！」

「師匠は十分食べたからいいんです。私とジークはリモン掛ける派なんですー」

リモン掛けない派の師匠を牽制するため、ぶしゅーとリモンを絞って大皿にかけるマリエラ。これも一つの対ファイヤー消火活動と言えよう。

「美味しいな」

そんな師弟劇場を眺めながら、ぽつりとつぶやくジーク。珍しくお酒を飲みながら夕食を取っている。一口一口噛み締めるように、じっくり味わうように食事をするジークの様子は、初めて乾杯をした日を思い出させる。そんなジークをマリエラはじっと見つめたあと、

「ジーク、髪伸びたね。後で散髪しよっか」と声をかけた。

『木漏れ日』の洗面所には鏡も照明の魔道具もついているから、夜に髪を切るときはだいたいここを使っている。首にシーツを巻かれたジークは、鏡を向かって椅子に座り、ぼんやりと鏡を眺めていた。ふよふよと頼りない手がジークの髪を触っている。髪をつまんで、はちヨキリ、指で梳いてはまたちヨキリと、マリエラがジークの髪を切っている。

髪を触る柔らかい感触から、マリエラの握力の弱さが感じ取れる。ジークが自分で髪を洗ったり梳かしたりする時には、いくら髪が指に絡まり引つ張られたりもするのだが、自分で触れる時よりもはるかにやさしい触れ方で、髪が引つ張られることもない。

もふもふとした小動物が毛づくろいをする感触は、こんな感じではなからうか。

鏡に映るマリエラは、ただの散髪だというのに真剣な表情で、より目がちになった眼が時折くわつと大きく開く。「しまった！」と言いたそうに口も縦に開いていて、その後、鏡越しにジークをちらちら見ながら鋏を動かし、「ふう、なんとかなったかな」と目をきよるきよるさせたりしている。もちろんジークは吹き出しそうになりながらも気付いていないフリを通してしている。

迷宮都市にも髪を切ってくれる理髪店はあって、見た目にこだわるエドガンなどは理髪店で髪を切っている。マリエラも手先は器用な方だけれど、本職の方がずっと上手に切ってくれるから、マリエラはジークに「髪切りに行ったらいいのに」と勧めているのだが、ジークは何かと理由をつけてはマリエラに切ってもらっている。

柔らかくて暖かい、この時間が大切だからだ。

「ねえ、ジーク。なんかあった？」

ちヨキリ、ちヨキリと鋏を動かしながら、マリエラがジークに尋ねる。

（お見通しか……）

マリエラはいつも暢気に笑っているのに、ジークが思い悩んでいる時に限って、やたらと鋭いのだ。

「ちよっと、昔を思い出すことがあってな」

見間違うはずがない。あれはジークの主だったせむし僮僕せむしの商人だ。

ジークは、かつて自分を虐げた商人が迷宮都市に來たのだなどと馬鹿正直に話したりはしない。警護の面から話すのはニーレンバークが適任だ。マリエラに話したとして、きっと悲しい気持ちにさせてしまっただろうし、何ができるといふこともない。

ジークが犯罪奴隷に墮とされたのは、僮僕せむしの商人親子の虚偽の訴訟によるものだけれど、自分が無実だという証拠をジークムントは持つてはいない。

何より、師匠の無理難題のおかげもあって、弓にも随分慣れてきて、百発百中とはいかないまでも当たるようになってきたのだ。Aランクに昇格し解放される日が確実に近づいているというのに、今もめ事を起こすのは得策ではない。

関わらずにおくのが一番だ。万一街で出会ったとしても、あの頃とは見た目からして違っている。僮僕せむしの商人親子がジークを見ても誰であったか分からないだろう。それ以前に、あの親子がジークという個人を覚えているかさえ怪しいと思う。

だから、何も気にすることはないのだ。

自らの、心のうちに湧き上がる、どす黒い思いを除いては。

雨乞鳥を捌きながら、ジークムントは何を考えていたのか。

商人親子を見た瞬間、度重なる理不尽に鬱積した感情が、抑えの利かない怒りに変わった。あの場では何とか抑え込んだものの、腹の中に蠢きのたくる黒い蛇は、商人親子だけでなく自らをあの境遇

へと追いやった世界その物が憎い、恨めしいとどぐるを巻いて、今
なお無差別に吹き出しそうだった。

今ならどれほど自分が不当な扱いをされてきたのか分かる。商人
親子が連れてきた借金奴隷たち。かつてのジークと同様にむごい仕
打ちを受け、心が死んでしまったような彼らを見ると、幾度も打た
れた体の痛みが、投げつけられた暴言に悲鳴を上げた心の声が、す
り潰されるように消されていった自分自身が、火山の噴火のごとく
激しく脳裏によみがえる。マグマのように溢れ出る、燃え盛り煮え
たぎる制御の利かない感情に、理性は燃え尽き支配されてしまいそ
うだ。

あの親子がどんな理由でジークを陥れ犯罪奴隷にしたのかは分か
らないが、恐らくは借金奴隷の虐待を隠すためだとか、行商の失敗
の原因を擦り付け^{なす}るためであるといった、ひどく身勝手^なで不当な理
由に違いない。あの商人に買われなければ、あんな酷い扱いを受け
ることなどなかっただろう。

いやそれ以前に、かつて仲間だったパーティーにしても、精霊眼
を失うなりジークムントを見捨てたのだ。確かにジークは高慢だっ
たが、一緒にいることで良い目だって見てきたはずなのに。

あいつが悪い、いやあいつも。そんな取り留めのない思考に、胸
中の黒い思いが膨らんで、なりふり構わず叫びだしたくなる。そん
な時。

ぽふぽふぽふん。

マリエラの手がジークの髪を触る。

「この辺、毛の量が多いかなー」

ふにふにとジークの髪をつまみでは、鋏を縦にしてシヨキシヨキ
と毛を梳く。

柔らかい手、やさしい指先。

初めて出会ったその日から、ずっと変わらない温かい場所。

ジークムントは鏡に映るマリエラを見つめる。

ジークの視線に気づいたマリエラが、鏡越しににっこりと笑いかける。

ジークが受けた不条理は、相手にとってはひどく下衆で下らないながらも幾何かの意味や価値があったのだろう。

見下して、痛めつけて、相対的に自分に価値があると錯覚するよ
うな、下卑た娯楽のために、ジークが受けた痛みは、悲しみは、屈辱は、不条理以外の何物でもない。

マリエラが与えてくれる慈しみは、マリエラの小さな寂しさを埋める意味や価値があるのだろう。

そばにいて、守り守られて、支え合う。幼げな彼女との暮らしは人によつては家族ごつこのように映るかもしれない。けれどジークが受ける愛情は、無償の物にほかならない。

「前髪もちよつと切ろっか」

その微笑みに、眼差しに、温かな指先に触れるだけで、ジークの胸中を染め上げる黒い思いは消えていく。代わりに込み上げてくるこの感情は何色だろうか。憎しみを黒だとするならば、複雑で一層御しがたいこの想いは、たくさんの輝きと少しの翳りを伴っている。この感情が何なのか、ジークムントは分かっているけれど、もうしばらくこのまま抱えていようと思っている。ただただ穏やかで暖かなこの場所に、もう少しまどろんでいたいから。

(ゆっくり成長すればいい)

そんな風に思えるから。

この場所は、ジークムントが碌でもない人生の中で得た最良のものだ。

犯罪奴隷に墮とされなければ、僣倮の商人に買われなければ、仲間に見捨てられなければ、精霊眼を失わなければ、得ることが叶わなかった場所なのだ。

精霊眼とマリエラと、どちらを取るかと問われたとしても、僅かな迷いもないだろう。

精霊眼を失わず、あのまま冒険者を続けていたとして、こんな気持ちになる日など来はしなかっただろうから。

ジークムントの前髪を切ろうと、マリエラの手がジークの失った右眼の上へと伸ばされる。初めて出会ったあの時も、そして今なおジークを救い続ける優しいその手が、掛け替えのないものに思われて、溢れる気持ちを抑えきれずに、ジークムントは思わずその手を掴んでしまった。

ジャツキン。

「あっ！」

マリエラが大口を開けて固まった。

ジークムントの前髪は、バツサリ短くなっていた。

「ジジジジークが急に動くから〜！ もう、もう、髪切らないっ。外で切ってきて〜！」

涙目になりながら、あわあわと怒るマリエラ。

「すまん。マリエラ！ いや、この方がすっきりしていいんじゃないな

いか！ うん、いいと思う！ ほら、すごくいい！ 流石だ、マリエラ！ ありがとう！」

なぜか前髪をバツサリ切られたジークが平謝りのフォロー祭りだ。マリエラは完全に逆切れだ。なぜジークが怒られなければならぬのか。多少の原因はジークにあったかもしれないが、まったくもって理不尽だ。

「……ほんとう？」

「ああ！ だからまた切ってくれ！」

甘いお菓子や珍しい果物、オークキングを獲ってくる約束で何とかマリエラの涙目への字口を回避したジークムント。ヘアカット代は随分と高かついてしまった。

なんて『ばかばかしくて不条理』な世界だ。

けれど、ジークの胸中に黒い思いはもはや欠片も見当たらない。僵儻の商人に再び出会ったとしても、過去に囚われることはないだろう。

どんな不条理があったとしても、こんな『ばかばかしい不条理』ほどの価値はないのだから。

マリエラのご機嫌を取るために、リモンのはちみつ漬けを飲もうと誘うジーク。はちみつは高級品だから、貧乏性の抜けないマリエラの『とっておき』だ。

途端にわくわく顔で「早く、早く」と、ジークをせかすマリエラ。

居間にも台所にも店内にも師匠の姿は見えなくて、『飲んでくるの書置きだけが残されていた。マリエラは「むきー、師匠、またかー！」と怒っていたけれど、ジークは短くなった前髪を軽く指先でいじった後、久しぶりのマリエラと二人きりの時間を楽しんだ。

今日は雨乞鳥がたくさん獲れた。雨を予知して声の限りに鳴いていたのだ。

夜の帳に隠されて雲の流れは見えないけれど、上空で強い風が吹いている。

きっと、もうすぐ嵐がやって来る。

不条理の指先（後書き）

ぞっくりあらずじ…ニークなジークのダークサイドがちっぴりりりく

夜遊びと火遊びと火傷の跡と

その夜。

マリエラとジークがはちみつリモンで乾杯し、それぞれお風呂に入って歯を磨いて、薬を作ったり狩りの準備を整えて、明日も早いからお休みなさいと健全極まりない時間を過ごして眠りについたその頃。

愛の迷子エドガンが『ヤグーの跳ね橋亭』で一人寂しく枕を涙で濡らしていたその頃。

不健全なフレイジージャ師匠は酒場で行きずりの男と飲んでいた。

「あははは！ わかってるね、ズビツシー。弟子は育てんのが師匠の仕事！」

「ずび……？ ま、いいんだぜ！ 任せてやらせてしくじった時にケツ拭いてやりゃあいんだぜ！」

指導方針が一致したのか、すっかり意気投合して出来上がった。二人ともフードを被って顔を隠し、名前さえ名乗り合っていないのに、中の人が誰なのか、特徴的な言動で丸わかりだ。

「んじゃ、行くぜ！ ファイヤー！」

「おう！ 出動だ！ ズビツシー！」

意気投合した男女二人が夜の街へと出動だ。既婚者ハ……ズビツシーの家庭の危機というわけではない。二人から醸し出される雰囲気は暑苦しくもよからぬ感じの指導熱だ。

熱血な指導者二人によってたった今結成された『夜遊び火遊び撲滅隊』の出動なのだ。

夜遊びや火遊びをしてるのはお前らだろうと突っ込んではいけない。二人は溢れる指導愛によって夜に迷う子羊ちゃんを救済しようと思気込んでいるのだ。

『夜遊び火遊び撲滅隊』の二人は、あつちの酒場で「魔物肉なんて食えるか！ オラア！」と荒ぶる外から来た冒険者を蹴り飛ばしては一杯ひっかけ、こつちの酒場で「俺は帝都じゃあ名の知れた冒険者なんだぜ！ もっとサービスしろや、コラア！」とタカるチンピラを殴り倒しては一杯ひっかけ、そつちの酒場で「か、かか金ならある、おま、お前と、お前、へ、へへ部屋にこ、来い」と嫌がるお姉さんに無理を通そうとしたり、「奴隷のメシ代なんて払えるか！ 払うわけがない。残飯で十分だ、十分なんだ」などと言っては宿の主を困らせる商人親子を軽く火あぶりにしては一杯ひっかけて、教育的指導を繰り返していた。

『夜遊び火遊び撲滅隊』の二人は迷える子羊ちゃんたちと肉体言語でしかオハナシしていないから、会話は全く成立していない。こんなことで更生するとは思えないけれど、戦闘力だけは迷宮都市トックラスの二人組だ。見せしめの意味もあつて街はちよっぴり平和になった。シューゼンワルド辺境伯も飲み代を肩代わりした甲斐があつたというものだ。

何しろ酔っぱらつてもAランクと推定Sランク。普通に雇うとめちやくちや高い。

「ナイス、コミュニケーションだぜ！ ファイヤー」

「熱く語ったな！ ズビツシー！」

ずびし！ ずびし！

交わされるサムズアップと鬱陶しすぎる二人のノリに、チンピラどころか衛兵さえも逃げ出す始末だ。

そんな二人がふらりと入り込んだ路地裏に、一人の男がうずくまっていた。

路地裏に置かれた空き瓶の入った木箱やごみ箱は、薄暗くても闇に慣れた目に判別がつくのには、男の容姿は黒く塗りつぶされたように判断がつかない。男のところだけ影になっているからではない。黒い、錆のような物体に塗りこめられているからだ。男の全身を覆うその黒い物体は、よく見ると小さく震えるように蠢動蠢動している。

「こりゃ、呪いだぜ。この状態、呪われたんじゃないやあなく、使い過ぎた反動が術師に返ってきたんだぜ」

眉をひそめるズビツシー。呪いが禁じられている理由の一つがこの反動だ。様々な魔法と異なり、呪いだけはスキルがなくとも使うことができる。

人を弱らせ狂わせる、術者の思念と魔力で練られた呪いは対人術として汎用性は高いけれど、しかし必ず術者に返る。だから呪術を使う者は呪術に対する備えを身に付けている。もちろん、返ってきた呪いをそらし、浄化し、あるいは受け止められる許容量は人によって異なる。許容量を超えたなら、この男のように全身を自らの呪いで焼かれ蝕まれてしまうのだ。

我が身が朽ち果てたとしても、邪法に身を委ねたとしても、遂げたい思いを持つものはいつの世も絶えない。

「んー、この呪い、目くらましとか、倦怠感とか、害の少ない呪いが大量に返ってきてるね」

男を一瞥しただけで、呪いを見抜くファイヤーに、ズビツシーが「わかるのか？」と問いかける。

「まあね。どうやらこいつ、古い知り合いの血縁みたい。すまない

けどズビツシー、見なかったことにして、今日は帰ってもらえないか？」

先ほどまでの酩酊^{めいてい}ぶりはどこへやら。澄んだ金の瞳でズビツシーを見つめるファイヤー。

「そりゃあ、ツれない話だぜ。これも何かの縁ってヤツだ。見なかったことにして、見届けることにするぜ」

ずびし！ サムズアップと共にキラリと白い歯が光る。光の差し込まぬ路地裏だというのに、いったい光源はどこなのだろう。

ズビツシーの男前な返事に、ファイヤーもにやり、ずびし！と返事をした後、呪われた男に向かって右手をかざし、何やら小声で唱え始めた。ズビツシーは職業柄、呪いの解呪に立ち会ったこともある。けれど、ファイヤーと名乗ったこの女性が唱えている呪文は、はつきりと聞き取れないけれど、そのどれとも異なるようだ。

こんな呪文は聞いたことがない。けれど効果はあるようで、男の全身を覆う黒く蠢く鎊のような呪いは断末魔の叫びをあげるかのよううにびくびくと動いている。

（だが、この呪い、半端な量じゃあねえ。夜中だがウチの連中を呼んだ方がよさそうだぜ）

そうズビツシーが考えた矢先。

「ファイヤー！」

通称ファイヤーの掛け声とともに、男は炎に包まれた。
「なっ!?!」

結構な火力だ。イライラして男ごと燃やしたとでもいうのだろうか。

しかし次の瞬間、男を包んでいた炎はかき消すように消えて、そこには男がうずくまっていた。あれほどの炎に包まれたというのに、

男には火傷などなく服に焦げ目さえ付いてはいない。

「う……」

呻きながら目を開けこちらを見上げる男。

「こいつぁ……」

街で噂になっっている療養しているはずの男、ロバート・アグウィナスがそこにいた。

「ハイ、ロブ。ロブでいいだろ？ お前らだいたいそんな感じの名前なんだ。」

「う……、貴女は？」

「あたしは、昔のロブの知り合いだ。ほんと、ソックリだねお前。あん時はさんざん奢ってもらったからな、一つお前の願いを叶えてやろう」

ロバートをのぞき込むファイヤー、いや炎災の賢者の金の瞳が妖しく揺らめく。取り込まれそうなその光に抵抗するかの如く、ロバートは目を眇め、小さくつぶやく。

「話に聞く悪魔という種族でしょうか……」

「だーれーが！ 悪魔かつ！ このあほう！」

ビシビシビシビシ。炎災の賢者のデコピン攻撃。

「あつ。痛っ！ 痛い痛い痛い痛い、痛いですって、ゴメンナサイ」
ビシビシビシビシ、ビシバシビシビシ。ロバートが痛がって謝っているのにデコピン攻撃は止むことを知らない。猛攻撃だ。滅多打ちだ。やっぱり悪魔か何かかもしれない。

「オ、オイ、ファイヤー、その辺で……」

見かねたズビツシーの仲裁で、ようやく攻撃が止まったころには、ロバートのおでこは真っ赤になっていて、いい年した男が涙目になっている。

「ひっ、ひい、はあ……」

「今度、下んねえこと言ったら、ケツが四つに割れるまで蹴っ飛ばすからな。ほんつと、しょーもないとこまでそっくりだな、お前」
「はっ、はひ、スイマセン……」

流石は炎の教育者。錬金術スキルは低いのに、師匠をメインジョブにするだけのことはある。初対面のファイヤーと呼ばれる女性がよくわからない威圧によって、叱られた子供のようにおとなしくなるロバート。『夜遊び火遊び撲滅隊』が初めて指導らしいことをした瞬間かもしれない。

「で？ 逃げて来たんだろ？ こっそり家に帰る方法を探してるんじゃないか？」

「！！ どうしてそれを！」

監禁されていたロバートは、『精霊の神殿』の『宝物』に偽りの呪いを仕込むために一時的に迷宮都市へと連れ出されたのだ。仕事が終わった帰り際、監視の迷宮討伐軍の緊張がほぐれた瞬間を狙って目くらましや倦怠といった、有害性は低いが抵抗されにくい呪いを振りまいて何とかここまで逃げてきた。けれど流石は迷宮討伐軍というところか、逃げおおせるのに要した呪いはロバートの限界を超えていて、その反動でここで動けなくなっていたのだ。

あれほどの呪いをあっさり浄化して見せたこの女性は何者か。悪魔ではないにせよ、只者ではあり得ない。そもそもロバートは『療養中』ということにされているし、『精霊の神殿』に関しても極秘事項だ。逃げてきたことだけでなく、その目的さえ見透かして見せる金の瞳。

これは魔性の契約か。ならば乗らぬわけにはいかない。目的を果たすためならば、たとえこの身焼かれようとも。呪いに、邪道の魔法薬に手を出した瞬間から、決めていたことではないか。

「どうかお願いいたします。私に力をお授けください」
ロバートは眼前に揺らめく『炎の災』に頭を垂れる。

「いいだろう。これは痛みを伴うが、人知れずお前を目的地に導くだろう」

ぶわりと音を立てて熱気を孕む風が吹きあがり、炎災の賢者のフードを払う。中から現れる炎彩の髪が暗闇の中、本物の炎のように光って巻き起こる炎のようだ。

「我、印を与える。彼方から此方へ うたかたの英知を。《刻印炎授》」

炎災の賢者の眼前に浮かび上がったのは炎でかたどられた魔法陣だった。それはくるりと半回転すると、手のひらほどのサイズに縮んでロバートの左手の手の甲に焼き付いた。

「ぐあぁっ」

肉の焼ける嫌なにおいと、激痛に顔をゆがめるロバート。

「安心しな。その火傷は1週間ほどで跡形もなく消える。刻まれた効力と共にね。ああ、ズビツシー、悪いんだけど金貸してくんない？」

「あ？ ああ、銀貨5枚くらいしかないが、かまわんぜ？」

驚愕するズビツシー、いや冒険者ギルドのギルドマスター、ハーゲイから財布を受け取る炎災の賢者。

(職業柄、様々な不思議を目の当たりにしてきたが、こいつは桁違いかもしれないぜ……)

驚きのあまり財布ごと差し出したハーゲイと、中身を遠慮なく持つていく炎災の賢者。

「ほれ、ロブ。どうせオケラ金持っていないなんだろ？ 貸しといてやる。夜遊びが高くつくこと、ちゃあんと覚えときな」

ハーゲイから借りた金だというのに、偉そうに銀貨を授ける炎災ファイヤーの賢者。

ロバートは炎災の賢者から銀貨を受け取ると深々と下げ、数歩後ろに下がる。たった数歩、路地裏の暗がりへ。それだけの動作であったというのに、ロバートの姿は路地裏の闇に溶けるかのごとく消え去っていった。

「気配まで消えたぜ。あの刻印の効果なんだぜ？」

「まあね。でも、刻まれてすぐに使いこなすとは、器用なところまでそっくりだ」

くすくすと笑う炎災の賢者。冒険者ギルドのギルドマスターとして彼女の話は聞いている。シューゼンワールド边境伯と協力体制にあることと、その実力の底知れなさ、そして決して敵対しないようにという注意と共に。

しかし、先ほどの行いは。『療養中』のロバート・アグウィナスの逃亡を助けるなど、シューゼンワールド边境伯に、いやこの迷宮都市に敵対する行為ではないのか。

「なぜ、あんな刻印を？」

ハーゲイはこの街の冒険者ギルドのギルドマスター。この街に害意があるのならば、見過ごすわけにはいかない。

「家出した迷子をちゃんと家に帰してやるのも、指導者の務めだろ？」

にやり。すべてを悟ったように笑う炎災の賢者。

（ロバート・アグウィナスを真に更生させる為だというのが？）

笑う炎の真意は読めない。けれど害意も敵意も感じられはしない。

「信じてるぜ、ファイヤー」

「まかせときな、ズビツシー」

ずびし！ ずびし！

別れの挨拶を交わした二人は、それぞれの家へと帰っていった。

翌日。

「うちの師匠がお金を借りたそうで、本当にスイマセン！ しつかり叱っておきましたから！」

平謝りのマリエラが冒険者ギルドに手土産持参で借りたお金を返してきた。後ろには昨日の相棒、ファイヤーがひらひらと手を振っていて、振り返ったマリエラに「師匠！ 何してんですか！」と叱られている。

有り金全部貸してしまったハーゲイは、家で追加予算を申請したけれど、財務大臣ライフが申請を却下してしまったから本当に助かった。

かくいうハーゲイもあちこちの飲み屋での大活躍が部下たちの耳に入って、今日は朝からデスクワークで部屋から出してもらえない。DEATH苦ワークで死にそうだ。

『怒られちゃった、てへ』とばかりに笑っている炎災の賢者を見ると、本当に信じて大丈夫なのかと不安な気持ちになってしまう。

かくいうハーゲイも、部下たちに「飲み歩いてる時間があるなら、もっと仕事しましょうね！」と捕獲されている状態だ。

ハーゲイは知らない。炎災の賢者が詳しい事情など全く知らず、ロバートのことを『こじらせた大人が家出して帰りにくくなっている』程度に思っていることを。周りの誰にも気づかれず、こっそり家に帰ってから『えー？ 別に家出とかしてないし？』といった顔をすりゃいいんじゃない？ という浅慮によって、高度な刻印を与えてしまっていることを。

マリエラはマリエラで、師匠が「お金借りちゃったんだぜ！ ずびし！ どの誰かわかんないんだぜ！」とサムズアップをかましただけで、ハーゲイにたどり着けただけで、師匠が夜中にどこをほつつき歩いて何をしているかなんて、これっぽっちも分かっていない。

そして、人目を欺く刻印を与えられたロバートは。

「この刻印が消える前に、この命が尽きる前に、何としても……」
命を対価に奇跡を得たと、最後の目的を達成するために迷宮都市の暗がりを縫うように進んでいった。

夜遊びと火遊びと火傷の跡と（後書き）

ざっくりあらすじ：夜遊び火遊び撲滅隊の教育的指導

危機感

『人を動かすには危機感を抱かせればよい』

人を指揮する立場の者ならば、幼少より習い聞かされていることだ。

『危機感』という人の心を揺さぶる感情を、迷宮都市や周辺領地の統率にうまく利用してきたシューゼンワルド辺境伯家は、その効果を十分理解している。迷宮という帝国全土に影響を及ぼすかもしれない危険に関して、立場や権力に応じてうまく情報共有すること、意思を統率し強固な協力体制を築いてこられたと言えよう。

人は満ち足りた環境では変化を望まない。それは人の本能と言ってよいかもしれない。

だから、満ち足りた人間は、迷宮都市でポジションが市販され魔の森を行き来できる可能性が高まったとしても、状況の不明確な初期段階で行動を起こす可能性は低いだろう。いつでも動き出せるように身構えながらも、状況を観察するに違いない。

だから今、迷宮都市を訪れている有象無象は、何らかの理由でひっ迫した状況にある者ばかりだろう。経済的にか、精神的にか、その他の理由によるものか。彼らを駆り立てるものはそれぞれ異なるだろうけれど、ポジションという名の橋が架かったとはいえ、それは崖にかかる一本の木橋のようなもの。何らかの理由で追い立てられ橋を渡ろうとするものに、冷静さがあるとは限らない。

ポジションという名の橋を求める者たちは迷宮都市の内外に数多いが、何をしでかすかわからないのは、我先にと木橋に群がるよう

な彼らで、逆に言えば彼らさえしのでしまえば、一定の秩序に基づいた運営が可能となってくる。

夜の灯火に群がる羽虫のように、ポジションを求める有象無象は、キャロライン・アグウイナスの周囲を今日も飛び回る。何匹も何匹も。はやく、はやくしなければ。誰かに先を越される前にと。

朝、アグウイナス家の屋敷を出て害虫駆除団子の工房に行き、その後、迷宮討伐軍の基地へ。夕刻に屋敷へ帰宅する。それはキャロラインの日々の行動パターンで、何日か張り込みを行えば容易に入手できる情報だ。

彼女を狙う有象無象は互いに互いを牽制し合い、あるいは協力し合って様子を窺っているのだろう。それすらも盤上の駒のごとく、ウエイスハルトはこらえ性のない一匹が灯火に飛び込むのを、今か今かと待ち構えていた。

「申し上げます！ アグウイナス家の害虫駆除団子の製造工房が襲撃されました」

ウエイスハルトにもたらされたその一報は、重く立ち込めた積乱雲から雷鳴が轟く轟くがごとく、衝撃的なものではあつたけれど、ずっと空模様を見続けていたウエイスハルトにとっては、予測しつくされた、驚くに値しないものだった。

しかし、この一報が届いた瞬間を、まるで豪雨の前の落雷のようであつたと、ウエイスハルトは後に思いだすことになる。

「状況は」

「は。襲撃者はDランカーらしき3人組。居合わせた商人および護衛の冒険者4人も共に捕縛したとのこと。マルロー副隊長の報告によりますと、単独あるいは末端の雇われだろうとのことです。尋問

に奴隷商レイモンド氏の招へいを要請しています」
「招へいを許可する。尋問に移れ」

報告を終えて部屋を出ていく兵士を一瞥しただけで、手元の書類に視線を移すウェイスハルトの表情は、常と変わらぬポーカーフェイスでわざわざばかりの動揺も見受けられない。害虫駆除団子の工房周辺を数日前からうろつく者がいることは把握していた。そろそろだろうと予想していたのだ。予想通りの襲撃に予定通りの鎮圧だ。驚くには値しない。力を見せつけ派手にやる様、マルローには指示をしている。これではらくは、工房周囲は静かになるう。

しかし、紅茶のカップに手を伸ばしたウェイスハルトのしばしの休憩は、香りすら楽しむ間もなく中断された。

「申し上げます！ アグウェイナス家の護衛隊より連絡！ 先ほどアグウェイナス家を覆面姿の一団が襲撃。既に制圧し全員捕縛したとのことです。」

「工房の襲撃は陽動か？ 少々手荒でも構わん。すべて吐かせろ」

「は！ ニーレンバーグ先生をお呼び致しましょうか？」

「好きにしる」

カップを手に持ったまま氷の視線を投げかけるウェイスハルトの表情は、立て続けに届けられた2報目の報告を受けてもいつもと変わりはしなかった。しかし、長く仕えた部下たちはわずかに漏れる彼の怒りを感じ取って、確実な尋問手段を提案し、許可を得るなり部屋を飛び出した。

（組織的な誘拐も予測のうちだ。生きたまま全員捕らえたのだ。じきに主犯が知れるだろう）

ウェイスハルトは紅茶を口にもすることもなく、そのまま皿ごとカップを机上に戻す。

兵士とのやり取りにキャロラインの安否は含まれていない。報告するまでもなく無事であると分かっているからだ。

そうであってもウエイスハルトの心は強く掻き毟られる。キャロラインが無事であったとしても、彼女を狙う何者かが襲撃を仕掛けてきたというその事実は、闇を切り裂き耳をつんざく稲光のごとくウエイスハルトを打ち据えた。

ウエイスハルトは、口もつけずに冷めていく紅茶の面を一瞥すると、従者の一人に別のふれを命じた。

「先ぶれを」

「は！」

ウエイスハルトの一言に、どこへ向かうか察した従者は、主の来訪を知らせるために目的の場所へと走っていく。向かう先は迷宮討伐軍の基地の敷地内。高官用の宿舍や迎賓施設として建てられた、基地の中で唯一それなりの品位を備えた建物だ。基地の正門近くに建てられた館は、兵士の往来が多くて静かであるとは言い難いけれど、その分安全でウエイスハルトの執務室からも臨めるほどの距離にある。

ウエイスハルトが軽く髪を整えている間に、先ぶれに行った従者が戻ってきたようだ。バタバタと廊下を走る音が聞こえてくる。

（そこまで急ぐ必要はあるまいに。このところ、感情を読まれ過ぎだな……）

そんな風に考えて、ウエイスハルトが襟元をただした丁度その時、ノックもせずに従者が部屋に飛び込んできた。

「げ……、迎賓館、襲撃されておりました！」

「なんだと！ キャル……、キャロライン様は！？」

「それが、お姿、確認できず……！！！」

ガタン！ と大きな音を立てて椅子が倒れるより早く、迎賓館へと駆け出すウエイスハルト。その顔には、長く彼に仕えた者たちが一度も見たことのない表情が浮かんでいた。

「基地の門を封鎖し、侵入者を調べあげよ！ 迷宮都市の門もだ！ 誰も街の外に出すな！ 迷宮に潜っている諜報部隊を呼び戻し、街の捜索に当たらせる！ とらえた襲撃者の尋問を急げ！ 迷宮討伐軍基地への侵入者だ！ 決して逃がすな！」

迷宮討伐軍に矢継ぎ早やに指示をだすのは、騒ぎを聞きつけてやってきたレオンハルトだった。とらえた襲撃者たちに拷問をしてでも情報を聞き出さんばかりの弟ウエイスハルトを、

「少し落ち着け、お前らしくもない。冷静に考えを巡らせる」

とたしなめたレオンハルトは、唇をかみしめ、血がでるほどに拳を握りしめた弟の肩をたたくと、迷宮都市に厳戒態勢を敷くよう命令した。

（だれだ……、一体だれが！？）

ウエイスハルトはポーション市販後に迷宮都市を訪れた人間を思い返す。

このところ、ガラの悪いCランク以下の冒険者たちがたくさん迷宮都市にやってきていた。彼らが起こしたトラブルの報告書は、日々ウエイスハルトの元へも届けられている。

帝都や近隣の町から商人たちも何組も訪れているという。魔除けポーションがあるといてもやはり恐ろしいのだろう。魔の森をぬけるために、何人もの護衛を従えた商人たちだ。

ガラス職人を筆頭に生産スキルを有した職人たちも、黒鉄輸送隊などの私設の輸送隊や商人たちに同行し迷宮都市に入っているという。

新たな住人たちの数は多くて、とても全員の素行を調べることなどできないけれど、アグウイナス家の周辺をうろつく連中の調査は万全を期してきたはずだ。だから、今日の工房の襲撃も、アグウイナス邸の襲撃も予測し問題なく鎮圧できたのだ。万一に備え、迷宮討伐軍の基地内にある迎賓館にキャロラインと彼女の父、ロイスも数日前からかくまっていた。

（まさか、迷宮都市内部の犯行か？）

そもそも、キャロラインが迎賓館にいること自体、限られた者しか知らぬのだ。彼女をかくまっていた数日間も、いつもの時間にアグウイナス家から工房へ、そして基地へとキャロラインの身代わりをのせた馬車は走っている。よほど迷宮都市に熟知した住人でもない限り、気づかれるはずはないのだ。

（迷宮都市内のめばしい貴族家にはちゃんと餌をばらまいたはずだ。このタイミングで離反して利益があるとも思えん……）

やはり、脱獄したロバートか？　しかし、奴は脱獄の際に使った呪いの反動で身動きもかなわぬはず。よしんば呪いを回避したとして、妹を攫う意味などあるまい……）

一体誰が。

まとまらぬ思考に定まらぬ容疑者。

がむしゃらに迷宮都市を走り回ったとして、キャロラインが見つかる道理はない。

しかし、キャロラインは貴族令嬢。狼藉者に誘拐されたという事実だけでも名に傷がつくのだ。

既に迷宮討伐軍の兵士が迷宮都市の門へと走り、事態を解決すべく人員の召集を行っているが、誘拐の事実を知るものは少数に限られる。

何とか噂が広まる前に、キャロラインを救出せねばならない。

過ぎる時間の1秒さえももどかしい。焦るウェイスハルトにもたらされたのは、場をさらなる混乱へと導く伝令だった。

「申し上げます！ ロック・ウィール自治区よりクンツ・マロック殿が面会したいと。すでに領を出立し、明後日には到着する予定とのことです！」

「マロックだと？ なぜこのタイミングで……、いや、今だからこそか」

ロック・ウィール自治区は、迷宮都市の北西に位置するドワーフたちの街で、迷宮都市のヤグー隊商が険しい山を越えて最初にたどり着く街でもある。

迷宮都市からヤグーで険しい山道を抜けて1週間、帝都からは3週間でも1週間は馬車の通れぬ山道を行かねばならない辺鄙な土地だ。こんな場所にドワーフたちが集まった理由は豊かな鉱脈。オリハルコンなどの希少な金属は産出しないが、鉄だけでなくミスリルもふんだんに採れるし、他の金属の種類も豊富で水も豊か。しかもこの辺りには魔物もあまり現れない。

土地が痩せているせいで、食べ物と言えば獣の肉かイモばかり、迷宮都市以上に娯楽の薄い場所で、普通の者ならば3日ともたずに

飛び出したくなるような場所だけれど、酒が飲めて鉄が打てればそれなりに幸せだというドワーフ連中からすると、快適な場所であったのだ。

ロック・ウィール自治区は、長く険しい山道を抜けてようやくたどり着いた者が、安価で名剣を手に入れられる場所と、若く貧しい冒険者たちの口の端に上った場所でもあった。

しかし、ロック・ウィール自治区が貧しかったのも、名剣を安価で入手できたのも、すべては遙か昔の話。今では豊かな鉱物と希少な魔物素材で作られた優れた武器防具の産地として栄えている。

ロック・ウィール自治区の繁栄は、一つは定期的に訪れる迷宮都市のヤグー隊商によるものだろう。ヤグー隊商によって迷宮の素材や帝都の品々もたらされ、ドワーフたちの生活は見違えるように向上した。

そしてもう一つ。ロック・ウィール自治区の繁栄を決定づけたのは、ロック・ウィール自治区を治め、ドワーフの工芸品の売買を管理する、ドワーフ・ハーフの歴代領主たちだった。

ドワーフという種族は、こんな辺鄙な場所に住むことからわかるように、物を作ることに喜びを感じる職人気質な性格をしている。良い品を、最高傑作を作りたい。その途中でできてしまった失敗作に興味はないから、ツブして原料に戻してしまったり、欲しいと望む者がいれば二束三文で売ってしまう。

それが、帝都では高値で売れる良品であったとしても、酒代以外は金にさえ頓着しない人たちなのだ。もちろん商売など、とんと向かない。

いくら職人氣質といつても頭が悪いわけではないから、帝都から商人がやってきては安酒と引き換えに失敗作を持っていき、帝都で高値で売っていることを気づいていないわけではないわけではなかった。

「もう少し、いい酒が飲みてえ」

そんな些細な交渉さえも、丸め込まれてうまくできない。ドワーフたちの感性は独特で、モノづくりに関しては極めて尖っているのだけれど、交渉や商売などは全くもって向かないのだ。そう、生粋のドワーフならば。

そんな彼らを救ったのは、一人のドワーフ・ハーフの男だった。ドワーフの気質と商売のセンスを併せ持ったその男は、ドワーフたちをまとめ上げ、失敗作を適切な価格で取引し、やがて自治区の領主となった。不思議なことにドワーフの血が薄まり過ぎるとドワーフたちと考えが合わず、人の血が薄まり過ぎると政治も商売も上手くいかなかったから、ロック・ウィール自治区の領主は世襲ではなくて、最もバランスの良い者が選ばれてきた。

その筆頭が現在の領主、クンツ・マロックで、その老獪ろうかくいさは歴代随一の男である。

ロック・ウィール自治区から迷宮都市に来るには1週間の時間がかかる。先ぶれが知らされた到着予定は明後日。先ぶれも出さずですでに出立しているということだ。

ロック・ウィール自治区は200年にわたりヤグー隊商の宿营地として交流があった。出立前ならいざ知らず、迷宮都市を訪れてレオンハルトやウェイスハルトが面会しないわけにはいかない。

なぜ、このタイミングで。

それは、分かり切ったことだろう。

魔物除けポーションで魔の森を通行できるようになれば、ロック・

ウィール自治区を通るヤグー隊商は激減する。

ロック・ウィール自治区のドワーフたちにとって、ポーションの市販開始は看過できない状況なのだ。

危機感（後書き）

ざっくりあらすじ：犯人だーれだ？

焦燥感

（まさか、ロック・ウィールが？ そんなはずはない。マロック公は腹の内の読めぬ男だが、彼の手勢はドワーフばかり。外見に特徴があり過ぎるし、何より小賢しい真似をする者たちではない……）

焦る弟の肩に再び兄レオンハルトの手が置かれる。

「焦るな、ウエイス。誘拐には目的があるはずだ。キャロライン嬢に直ちに危害が及ぶわけではない。順を追って状況を整理しよう」
そういうとレオンハルトは、伝令に詳細を報告するよう求めた。

工房が襲撃されたのは、アグウイナス家の馬車が工房に到着した朝方のことだった。工房は敷地面積の大半を製造用の建物や材料置き場に使っているから、2台分しか馬車を止める場所がない。いつもはアグウイナス家の馬車と護衛に付けられた迷宮討伐軍の兵士の馬車と2台で移動するのだが、その日はたまたま急な来客があった。アグウイナス家の馬車1台しか工房の裏庭へ入ることができなかった。

アグウイナス家の馬車は裏庭に入れるが、護衛兵の馬車は裏通りの邪魔にならない場所で待機することになる。もちろん乗り込んだ兵士は馬車から降りて工房へと徒歩で向かうのだが、兵士たちが裏庭の門をくぐるより先に、工房敷地内の物陰から飛び出した襲撃者たちによって、裏庭の扉は閉ざされた。

襲撃者は3人。廃棄寸前の安物の武器や防具を纏ったやせ細った男たちで、身のこなしからDランク程度の冒険者たちと思われた。

工房の裏庭に潜んでいた彼らは、アグウイナス家の馬車が入場す

るや裏門を閉ざし、馬車へと群がる。

キャロラインを人質に何らかの要求を突きつけようというのだから。

「賊を倒せ、倒すのだ！」

「おうよ、たつぷりはずんでくれよ、商人さんよ！」

襲撃者たちがアグウィナス家の馬車に手をかけるより早く、声を上げた者がいた。

自らの護衛に場の制圧を命じたのは、工房の裏門を破ろうと苦闘する兵士でも、アグウィナス家の御者でもなく、たまたま面会を求めてやってきていた、とある商人だった。商人の馬車から飛び出した装備の良い護衛の数は4人。体格もよく、一目で襲撃者より強いと見て取れる者たちだ。

彼らは剣を抜くと、手加減する気も取り押さえる気も全くない様子で、襲撃者たちに切りかかった。ランクの違いというのは、明確な攻撃力の差として現れる。瘦せて碌な装備もないDランク程度の襲撃者に対し、護衛たちは体格も装備もよくランクもC程度。襲撃者を殺さなくとも十分無力化できる戦力差である。

けれど品性の下劣さが顔にまで現れた護衛たちは、殺せばすべてカタが付くとばかりに、剣を振りかざす。

「ひっ、ひい、そんな」

「うるせえ、黙って死んでろよ」

襲撃者に振り下ろされる下卑た護衛の剣は、襲撃者の剣をたやすくたたき折る。そしてそのまま襲撃者を袈裟切りにしようと振り上げ、けれど振り下ろされるよりも、アグウィナス家の馬車の扉が開かれる方が数秒だけ早かった。

馬車の扉が開かれてからのほんのわずかな間の出来事を、正しく認識できた者が何人いたかはわからない。

馬車の扉が開かれると同時に飛び出してきた人影は、襲撃者たちが知覚できないほどの高速で接敵すると、抜刀していた全員をサーベルの鞘で端から打倒していった。

もっとも遠い、裏門近くにいた襲撃者は、遠くで打撃音を聞いたと思っただら、襲撃者も護衛も区別なく金髪をなびかせた緑の衣装の人物に打ち倒されるのを見た。そして次の瞬間にはその人物が自分の眼前に現れ、そして意識を刈り取られていた。

「た……たすかった……」

意識を失う直前の襲撃者のつぶやきに、その場をたった一人で制圧した金髪の男、マルローは眉を顰めた。

「マルロー様、お疲れ様です」

アグウィナス家の馬車に同乗していたマルローの従卒、レトがマルローの指示を仰ぐべくそばへ駆け寄る。奴隷兵のタロスは裏門を開場し、もう一台の馬車に乗り込んでいた兵士たちを裏庭へ案内している。

交流のない商人が来ていることも、襲撃者が潜伏している情報も、事前に入手していたのだ。アグウィナス家の馬車は囷で、キャロラインではなくマルローたちが乗っており、何の苦も無く鎮圧が済んだ。あまりに稚拙な犯行で、わざわざマルローが出向く必要もなかったほどだ。

「レト、全員に事情聴取を。商人と護衛たちもです。襲撃者3人の尋問はレイモンド氏に協力を要請しなさい。手荒な真似は控えるように」

マルローの指示に倒れた襲撃者、冒険者と商人たちを拘束に向か

う兵士たち。

「なっ、わしらは無関係だぞ、関係などあるものか」

「て、てて帝都、に、もど、戻らないと、いいいいけないんだ」

馬車を降りると命じられた背筋の曲がった商人と息子と思われる男の二人は、商談にたまたま工房を訪れていたただだと解放を要求したが、「迷宮討伐軍にご協力を」の一言であっけなく留置場へと送られていった。

「以上がマルロー副隊長からの報告になります！ 尚、マルロー副隊長の所感では、単独あるいは末端であろうとのことですよ！」

知る限りの情報を余さず伝えようと、微に入り細に入り報告をする伝令兵。たつぷり時間をかけて、ハズレ情報を聞かされたウエイスハルトの周囲は温度が下がって、夏だというのに大層涼しい状態になっている。

「次！ 要点を簡潔に述べよ！」

報告し慣れない新人兵士に上司が言うようなセリフを言い始めるウエイスハルト。そんな弟の常でない様子にレオンハルトは含みのある視線を一瞬だけ向けると、黙って報告を聞いていた。

「は！ アグウイナス邸襲撃の要点を申し上げます！ アグウイナス邸の襲撃者はB\Cランクと思われる者たちで、統率のとれた動きを見せたこと、幹部らしき数名が自害を図ったことからプロの犯罪者集団と思われまます！ こちらも潜伏していた第3および第7部隊の混成部隊によって鎮圧済みで、全員捕縛してあります！ 現在、両隊長による尋問からは黒幕に関する情報は得られておりません！

尋問のため、ニーレンバーグ先生をお呼びしてよろしいでしょうか？」

迷宮討伐軍 第3部隊はディックが、第7部隊はAランクの魔導士が隊長を務める部隊だ。アグウィナス家を襲撃した一団はそれにりに手練れの連中であつたようだが、Aランカーが二人もいたのだ。問題なく鎮圧がなされた。

実際は、ウエイスハルト周辺の気温が真冬並みに低下しそうなほど、ばかげた捕り物劇が繰り広げられていたのだが、空気を読んだ伝令兵は余計な部分はさつくり割愛して、“簡潔に！”、“要点だけ！”報告した。指示通りの模範的回答と言えよう。

「ニーレンバーグに尋問に当たらせる。ポーションの使用も許可する！ 洗いざらい吐かせる」

「は！」

ポーションを使う尋問。それは拷問というのではなからうか。そんな疑念を顔に出さず、伝令兵はニーレンバーグを呼ぶために走ってその場を後にした。

「次！ 基地の迎賓館の状況を報告せよ！」

この命令には、第一発見者であるウエイスハルトの従者が答えた。「は！ 私が迎賓館に到着したときには、屋敷内の全員が昏睡しておりました！ 行方不明1名を除き全員が無傷で、現在は全員回復しておりロイス様もご無事です。迎賓館内部に荒らされた形跡はありません！ 午前のお茶の後、強い睡魔に襲われたとのことで、飲み物に睡眠薬を仕込まれた可能性について斥候部隊に鑑定を依頼中です！」

「他に犯人の手掛かりはないのか！？」

「は！ 残念ながら。魔力探査でも反応がなく……」

「なんの手掛かりもないというのか！」
バン！ と机に拳をたたきつけるウエイスハルト。

初めて聞く彼の怒号に顔を曇らせる兵士たち。彼らは迷宮討伐軍の精鋭だ。怒号など聞きなれている。罵詈雑言を浴びせられたとて動揺するようなか弱い精神はしていないし、人の発する大声など、耳をつんざく魔物の咆哮に比べればそよ風がごとき小ささだ。

兵士たちの顔を曇らせたのはウエイスハルトの怒号そのものではなくて、いつも感情を表さぬウエイスハルトをこれほど激昂させた、自分たちの不甲斐なさへの憤りだろう。

「おちつけ、ウエイス。しばらく部屋に下がっておれ」

「しかし、兄上……」

「命令だ」

「はい……」

平静を失った弟にレオンハルトが静かに命じる。弟の気持ちはよくわかる。すべての感情を制御し部下の生き死にさえも呑み下してきた弟のこういった変化は、兄としては喜ばしいものとさえ思えるけれど、今はいけない。兵たちの前で見せてはならない。

レオンハルトの、ウエイスハルトの一声で命を散らす兵士がいるのだ。今までも、そしてこれからも。

帝国のため、シューゼンワルド辺境伯領のため、迷宮都市のため、迷宮都市に住まう人々のため、兵士一人一人の大切な人のため。

どれほどの大義名分を掲げようと、どれほど勇ましくも崇高な言葉で装飾しようとも、自分たちは兵に対して「命を賭して戦え」と命令する者なのだ。

兵士の一人一人に人生があり、大切な人がいて、胸中を満たし溢れる想いがある。そのすべてを投げうてと命じる者が、自らの感情

のままに兵を動かしてよいはずがない。迷宮討伐軍の奴隷を除く誰しもが、志願して兵士となったのだ。選べる職の少ない迷宮都市ではあるけれど、強制されて迷宮討伐軍にいるわけではない。兵士たちは、自らの人生を、『命の使い方』を選んでここにいる。

その掛け替えのない一つ一つを託された責務が、レオンハルトと彼を補佐するウエイスハルトにはある。

「ウエイス、我らに託されたものの重みを忘れるな」

レオンハルトの思いはウエイスハルトに届いただろうか。

ウエイスハルトはぐつと奥歯をかみしめると、次の瞬間いつも通りの表情に戻り、静かに執務室へと下がっていった。

「引き続き搜索を。都市内部の不審者情報も余さず洗い出せ」

レオンハルトの命を受けた兵たち、言葉少ない兄弟のやり取りを見ていた兵士たちは、誰しもが迷宮最下層の難敵に挑むがごとき表情で、それぞれの持ち場へと走っていった。

「ファイヤー！ あっちもファイヤー！ そんでもってこっちもファイヤー！」

基地内が騒然としている最中においても、フレイジージャは『炎の賢者』の名にふさわしい物騒さで、基地内の不審者を『御用だ！ ファイヤー！』していた。

「今日はどーなってんだ？ ミツチエルくん。地下まで侵入されるとか、思わず強火で焼きかけたぞ」

「フレイジージャ様、どうぞご容赦を。侵入者は全員捕縛し雇い主を吐かせますゆえ」

慇懃にくりくり頭を下げるミツチエルくんであるが、先ほどから冷や汗が止まらない。

錬金術師マリエラがポーシオンを作りまくった後お昼寝タイムに突入し、フレイジージャが酒をのみまくった後お散歩タイムに突入するまではいつもと同じだったのだ。

しかし、基地内の地下に設けられた飯の工房を出て地下通路をしばらく行くと、完成したポーシオンを運びだす兵士に向かって、フレイジージャはいきなり炎の魔法を行使したのだ。

「なっ！ 何を！？」

「よく見る。知った顔か？ 侵入者だ。すぐに目を覚ますぞ。捕縛しろ」

侵入者を包んだ火柱はすぐに消え、中から現れたのはフレイジージャが言った通り見たことのない兵士だった。激しい炎に包まれたと見たのに、服や髪が少し焦げ、口から煙を吐いてはいるが命に別状はないようだ。どうやったのかは知らないが、火柱で包み込み窒息させて意識を刈り取ったのだらう。

（この場所は限られた者にしか知らされていないはず。しかもこの制服は迷宮討伐軍のもの……）

ミツチエルは駆け付けた二軍兵に侵入者の拘束と、ポーシオン運搬を中止し錬金術師マリエラの警護を固めるように命令すると、フレイジージャと共に行動していた一人に状況の報告と情報の収集に行かせた。

「ミツチエルくん。狩りは好きかい？」

にっこりと笑うフレイジージャ。まばゆい美女の笑顔であるが、ミツチエルには獲物を前にした肉食獣の笑顔に見えた。

マン・ハントという悪趣味な例えを試してみせたフレイジージャではあったが、猟奇的な趣向は持ち合わせていないらしく、工房と薬草倉庫周辺にいた3名の侵入者を全員生け捕りにしてみせた。最後の一人など、諜報部員であるミツチエルさえ気が付かないほど巧妙に隠れ潜んでいたというのに、フレイジージャにかかれば「そんなもって」のおまけ扱いだ。

いつもの彼女であるならば、興が乗ったとばかりに、基地中の侵入者を狩り立てそうに思えたが、工房周囲の安全だけを確認したフレイジージャはマリエラの眠る工房へと踵を返した。

焦燥感（後書き）

ぬいぐりあらすじ…襲撃者目白押し

悲壮感

マリエラが目を覚ましたのは、『木漏れ日』の暖炉がある居間の長椅子の上だった。

（あれ？ いつの間に帰ってきたんだろ）

居間の長椅子はふかふかしていて寝心地がいい。使い果たした魔力はすっかりもとに戻ったけれど、しばらくこのまま寝ころんでいたい。

この家にはものすごく奮発して換気の魔道具に空気を冷やす魔道具を取り付けているから、夏だというのに涼しくてとっても快適だ。魔石の消費が激しい魔道具だけれど、今のマリエラは金貨がざくざく状態だから全く気にする必要がない。というか、ジークが狩りで回収してくる魔石で十分賄っていて、金貨はさほど減っていない。

（セレブさいこー）

流石はマリエラ。セレブの使い方が間違っている。そして、生活満足度の水準が低い。夕食に冷えたビールとツマミが添えられただけで、「一日の疲れが吹っ飛んじゃうぜ！」などと言っているところかのギルドマスターのようだ。

（そういえばこの前、迷宮近くのサンドイッチのお店でエールとパンを食べてる冒険者いたなー）

昼食なのだろう、サンドイッチが有名な店なのに、ハムも野菜も挟んでいないただの安パンをチーズもバターも付けずに齧りながら、ビールを飲んでいる冒険者のおじさんがいたのだ。ビールが買えるなら肉やハムが挟まったパンやスープも買えるのに、なぜか安パン

にビールの組み合わせ。

（パンをつまみにビール飲んだのかな、それともビールがおかずなのかな。液体だからスーパの代わりだったのかも？　すごくバランスの悪いお昼ごはんだったなー）

酒好きの思考はよくわからないな、などともどうでもいい事を考えながらまどろむ至福のひと時。

マリエラの優雅でリッチなお昼寝タイムを終わらせたのは、廊下から聞こえてきた師匠とミツチエルの話し声だった。迷宮都市の建物は窓が小さく通気性が悪い。だからどこの家も換気の魔道具が備えてあって、通風管が天井裏を走っている。『木漏れ日』の場合、空気を冷やす魔道具を店と居間だけで使っていると、なぜか廊下の声が居間まで聞こえてくるのだ。

「で？　どうなってんだ、ミツチエルくん」

「はい。アグウィナス家の令嬢が攫われたとのこと……」

「！！　アグウィナス家の令嬢って、キヤル様のこと！？」

飛び起きたマリエラが、思わず廊下に走り出てミツチエルくんに聞き返す。

「これは……、お目覚めでしたか。現在、死力を尽くして捜索中です。どうぞ、ご内密に」

「ミツチエル、帰れ」

飛び出してきたマリエラに驚いた顔をした後、丁寧に頭を下げるミツチエルに、師匠は冷たく言い放った。

マリエラが目を覚ましていることは師匠も気付いてはいなかったから、ミツチエルが気付いていたはずはない。

ミツチエルは基地では師匠のそばに侍^はっているけれど、ウェイスハルトの側近の一人で、ウェイスハルトのためにキャロラインを救出したいという思いが強い。“キャロラインが攫われた”という極秘情報を漏らしたのは、あわよくば師匠の助力を得たいという思惑あつてのことだろう。錬金術師^{マリエラ}に『師匠』と呼ばれるこの女性の錬金術師らしいところは見たことがないけれど、優秀な諜報部員である自分が気付かないほど高度に潜んだ侵入者をたちどころに見つけたり、大量のポーションの中心部分に仕込まれた普通の瓶を見抜いたり、垣間見せる実力はミツチエルの能力をはるかに凌駕している。そして、恐らく戦闘能力も。

ミツチエルに助力を請う権限は与えられていないけれど、目の前に協力的な実力者がいて、しかも状況説明を求められたのだ。「あわよくば」と期待しない方がどうかしている。

けれどそれはフレイジージャに限つてのことで、錬金術師^{マリエラ}の戦力が皆無であることは、任務に就いた短い期間で十二分に理解していた。だからミツチエルもマリエラに聞かせるつもりはなかったのだろう。知らせればマリエラを危険にさらすことに繋がりがねない。

いつもならば、「ファイヤー、ファイヤー」と侵入者狩りを楽しむだろうフレイジージャが、眠るマリエラを背負つて『木漏れ日』に帰ってきたことがよい証拠だ。

いつもいい加減で、昼間から酒とマリエラを煽りまくっているフレイジージャではあるが、マリエラの意識のない間の行動を見れば察しがつく。彼女はマリエラの安全が最優先で、キャロラインを助けるつもりも、マリエラを関わらせるつもりもないのだ。

静かに頭を下げて、地下大水道から基地へと帰っていくミツチエルに、少し忌々しそうな視線を向けると、「マリエラは自分の身を最優先で考える」とフレイジージャは師匠の顔でマリエラに告げた。

「待つて、師匠！ ねえ、どういうこと！？ ねえってば！」

「話してやるから、中で待つてろ」

必死で追いつがるマリエラを押しやるように居間に戻すと、『木漏れ日』の店内へと向かう師匠。

「アンバー、今日は閉店だ。すまないが、みんなも帰ってくれ」

「そっぴゃ、雲行きが怪しいわね、きゃっ、凄い雷。大雨になる前に帰った方がよさそうね。みんなも、ずぶぬれになる前に急いで家に帰んなね！」

師匠の目配せに何事かを察したアンバーは、ちょうど光った稲妻をつまみ理由に仕立て上げ、店を閉めると自分も家へと帰っていった。

基地の仮設工房は地下室で、居間にも窓がないから気が付かなかつたけれど、まだ昼だというのに立ち込めた分厚い雲のせいで外は薄暗い。時折光る稲妻が聖樹を模した天窓から差し込んで、薄暗い魔の森で過ごす嵐の夜を思わせた。

ぽつ、ぽつと大粒の雨が乾いた石畳にくつきりと跡を残したかと思つと、バケツをひっくり返したかのように、強い雨が降り出した。「ふう、なんとか間に合つた」

ジークムントが『木漏れ日』に帰りついたのは、アンバーたちが帰つてしばらく後のことだった。

今日は魔の森にマリエラと約束した珍しい果物を採取しに行ったのだ。周囲には夕食になりそうな獲物の気配もあつたけれど、天候が怪しくなってきたので約束の果実を採取しただけで急いで戻り、本降りになる前に『木漏れ日』に帰りつくことができた。

大雨に備えてのことだろうか、まだ閉店には早い時間だというのに、『木漏れ日』は閉まっていて、いつもならば常連客がたむろしている『木漏れ日』の店内は閑散としていた。

居間の方からマリエラの魔力が感じられたから、無事であることは分かっているけれど、いつもならば「おかえりー」と飛び出してくるマリエラの声は聞こえず、雨音だけがやけにうるさい。

「マリエラ、ただいま。約束の果物をとってきたぞ」

そう言っただけ居間に続く扉を開けるジーク。かつて大きな一部屋だった居間は、入居時の改築で、奥側の暖炉のある居間と手前側の食堂に仕切りなおした。食堂は今はニールンバーグの診療所として使われていて、今日はニールンバーグのかわりに師匠が仏頂面で酒を飲んでた。

どうしたことかといぶかしんだジークだったが、マリエラのところへ行くと無言で促す師匠の様子に、奥の扉を開けて居間へ入る。

マリエラはお気に入り長椅子の上で膝を抱えてうずくまっていた。

「どうした、マリエラ」

慌ててそばへ寄ったジークがマリエラの顔を覗き込む。ジークの声によやく膝から顔を上げたマリエラは、下唇をキュッと噛み締め、今にも泣きだしそうな顔をしていた。

「ジーク……」

その表情から読み取れる感情は単なる悲しみだけではない。不安、恐怖、焦り、憤り。そんな複雑な感情がまじりあった表情に、ジークはマリエラの前に膝をついて視線を合わせると、もう一度「どうしたんだ」と尋ねた。

マリエラの結ばれた口がふるふると動く。声に出したら、話したら、涙がこぼれてしまいそうなのだ。

「大丈夫だ、マリエラ。大丈夫だから。話してくれ」

そういって、やさしくマリエラに話しかけるジークに、マリエラは話そうと口を開きかけ、少しだけ眉を寄せると、再び口を閉ざし、顔を膝に埋めてしまった。

「マリエラ……」

困惑するジークに事情を説明したのは、いつの間にか今の入り口に立っていた師匠だった。

「友達令嬢が攫われたんだとさ」

「令嬢……、キャロライン様か？」

「わっ……私と、錬金術師と間違えられてっ……」

膝に顔を埋めたまま、くぐもった声を漏らすマリエラ。

「錬金術師の役は、本人が買って出たことだ。覚悟の上なんだよ」

「でもっ……、でも、助けたいっ」

「だから、お前が出て行ってどうする。何ができる。戦闘力皆無のお前が出て行ったって、状況をややこしくするだけだろう。金を買って出た嬢ちゃんの気持ちまで無駄にする気か？ お前を守るために危険にさらされるヤツが増えるだけだろう」

「そう……だけど……」

「フレイ様、どうかそれ以上は」

更に言葉を続けようとする師匠をジークが制する。マリエラは顔を埋めて膝を抱えたまま小さく震えて、きつと涙を流している。

マリエラの頭をやさしく撫でながら、ジークは師匠に静かに語りかける。マリエラの代わりに。

「マリエラは、ちゃんと分かっているんです。フレイ様のおっしゃったことは全て。」

だから、さつきも俺に話したいのに、言葉を飲み込んだんです。自分のせいでこれ以上傷つく者が出てはいけません。

マリエラは自分が無力であることも、自分が表に出ることが状況を悪化させるだけだということも全部わかっていて、それでも、自分のせいで友人を無くしたくないと、どうしようもないほどに、願っているのです」

「……、分かっているよ、そんなことは」

すこしだけばつが悪そうに、師匠が答える。

「しっ……、師匠、ここっ、来るとき……、わたっ、私……、探した……！」

マリエラがしゃっくりを上げながら言う。キャロラインを見つける方法があるのではないのかと。

「あれは、精霊魔法だ。マリエラには使えないし、あたしはキャル様とやらを知らないから見つけられない」

少し小さい声でマリエラに告げる師匠。

「でもっ、わたしっ……、もう、もう……、だれもっ、無くしたくないよう……！」

ふうーっと思いを吐き切るように、小さくかすれる声を引き絞るように、マリエラの咽が叫びを漏らす。

リンクスを亡くした日のことを思い出しているのだろう。マリエラの悲痛な声がジークに突き刺さる。

「マリエラ、俺が探しに行くよ。何日かけても探して見せる。そし

て絶対に連れて帰って来るから。だから、泣くな」

そういつて慰めるジークに、キャロラインを探し出す有効な手立てなどはない。迷宮討伐軍という組織でもない、人を探し出す特殊なスキルも持つてはいないただの個人だ。けれど他にジークに何が出来るだろう。マリエラのために何を言ってやれるだろうか。

膝を抱えるマリエラの手にジークはそっと自分の手を重ねる。哀しみに打ちひしがれる小さな手は、幾度もジークを癒し救ってきた暖かなその手は、今は震えて氷のように冷たい。

「じーく……」

消え入りそうなマリエラの声。そんな二人の様子を見ていたフレイジーは、

「……一つだけ方法がある。今なら使えるかもしれない」と、静かな声で伝えた。

悲壮感（後書き）

ざっくりあらすじ：マリエラの泣き落とし攻撃！

昔、牛井屋で白米とビールでお昼を食べているおじさんを見かけました。

白米をアテにビールを飲んでいたのか、それともビールがおかずなのか。

未だ謎は解けません。

しずく

「しししょう、ほんとう?」

師匠の言葉に顔を上げたマリエラ。

涙でぐしょぐしょのマリエラを見る師匠の表情は、いつになく険しい。

「ああ。だがな、マリエラ。お前をここに繋ぎ止めるものが弱ければ、帰って来れなくなるかもしれん」

師匠の言葉を聞いたマリエラは、自分の手を握るジークを見つめ、何かを思い出すようにしばらく瞳を閉じた後、もう一度ジークを見つめたまま「大丈夫です」と力強く答えた。

そんなマリエラの様子を見ていたジークは、マリエラに頷くと二人して立ち上がり、

「どうか、マリエラに友人を助けさせて下さい」

と、フレイジージャに頭を下げた。

手を繋いだままで頭を下げるマリエラとジークに、師匠はほんの少し困ったような寂しいような表情を見せると、「付いてきな」と二人を大雨の降りしきる裏庭へと連れ出した。

「命の雫は万物に宿り、世界をめぐり地脈に還る。だから地脈に聞くんだよ」

聖樹の梢が大雨を遮る下で、炎災の賢者が伝えた方法は、そんな途方もないものだった。

「マリエラ、お前の《ライン》は誰より太い。それは誰より強く世界の根源につながっているということだ」

景色がけぶって見えるほど、激しい雨が降る中で、師匠の声は雨音にかき消されることなく伝わってくる。

「私の《ライン》……」

雨の中、瞼を閉じたマリエラは、自分自身に問うてみる。

《ライン》、それはスキルに紐つくものだ。自分の根幹に根付くものだ。自分を自分たらしめるものを探って、マリエラはちっほけな自分の体の中の、内へ内へと目を向ける。

「つながっているのがわかるだろう。いつも《命の雫》を汲み上げるつながりを辿るんだ。根源へ。」

《命の雫》そのものへ」

雨が降る。

たたたたた、と激しく雨は降っている。

いつもなら、自分のからだと世界の境界をはっきり認識できるのに、大雨の中傘もささずに立つ今は、髪も服も体もどこもかしこもびしょ濡れで、次から次へと落ちて来る雨粒のせいで世界と自分の境界があやふやに思える。

波間に揺蕩たゆたう海藻に世界と自己とを認識するすべがあったのならば、このように感じるのではなからうか。いや、空を漂う雲の方が空と混ざって境界があいまいかもしれない。

ぼつり。

落ちる雨粒の一滴を感じる。

ぽつ、ぽつと大粒の水滴がマリエラにふりそそぎ、髪を肌を服を伝って地面に滴たり落ちていく。空から、あるいはマリエラから滴り落ちた水滴は大地に染み込み大地の奥へ奥へと潜り込んでいく。まるで、《命の雫》が地脈に還っていくように。

マリエラ、その雨はどこからきた？

雨音が支配する世界で、師匠の声が聞こえてくる。

そら。

嵩の高い部厚い雲から。

ああ、地面から見るとあの雲は、ふわふわと飛び込みたいほど柔らかくて、愉^{たの}しいものに見えるのに、近くになると違うのね。零れ落ちそうなほどたくさんさんの雨粒と、猛り狂う雷を抱え込んだ雷雨の巣箱だったのね。

そうだよ、マリエラ。あれは海からやって来たんだ。気まぐれな風に吹きあげられて、たくさんたくさん水を抱えて、ほら、もう持ちきれない。

底が抜けたように、どんどん雨を降らせるよ。

わかるだろう？ マリエラ。

雲にも雨にもほんの僅かずつだけど、《命の雫》は混じっているから。

この街の外にも中にも降り落ちる雨の一粒一粒が、とても近くに感じるはずだ。

うん師匠。

雨粒、丸いね、まん丸い。

くるんとまるまってるのに、雨粒って風におされてふにって広がっちゃうんだね。

ああ、山が遙か下に見える。地面がとても近くに見える。

街の屋根に当たって、木々の葉っぱで弾んで、雨粒がそこにもここにも、とてもいっぱいあるよ。

マリエラは『木漏れ日』の裏庭にいたのに、街の中に、外に降りしきる雨の中にも広く薄くいるように思える。雨は激しく大地には雨水の膜が張って低いところに流れ出しているし、空気中もけぶる様な雨の具合で、陸の上だというのに水の中にいるようだ。今ならば、魚も空を飛んでいけそうだ。

マリエラ、お前の友達はどこにいる？

キヤル様、キヤル様はどこ？

どんなに街が雨で満たされていても、《命の雫》はほんとうに薄くて、《命の雫》をたどるマリエラはどこにでもいるのに、ここにしかないようにも思える。

街中を広く近くに感じるのに、どこもはつきりと見ることができない。

マリエラ、お前の友達はどんなヤツだ？

キヤル様は、やさしいよ。綺麗なお姫様みたいで、でも強い。いろんな薬を作って、たくさんの人を助けたいと思ってる。いろんな薬と一緒に作ったの。

錬金術スキルで？

うん。ラインは繋がっていないけど、キヤル様は錬金術師なんだと思う。

だから、きつと地脈もキヤル様に繋がりたいと思ってる。
ポーシオンをつくって欲しいって。

ああ、そうか、そうだ。キヤル様だ。

それがキヤル様だ。

キヤル様、どこ？

ラインを通じて逆流するマリエラの魔力。

それは、《命の雫》とからみあい、混じり合い、溶け合って、あまなく街を包む雨粒に広がっていく。

ぼぼん

地に落ちるその前に、はじけ飛ぶ雨粒。

何かを、誰かを探すように、小さく小さく広がって、大地に落ちて地脈に還る。

水滴が踊るようにはじける様に気づいた者がいただろうか。そんなわずかな変化は、激しく打ち付ける雨に紛れて、きつと誰も気づかない。

気付いたのは、きつと雨粒自身だけだろう。

「みつけた」

ふわふわと、体はここに確かにあるのに、まるで中身がここにはいない。そんな様子で、マリエラは呟いた。

キャロラインが目を覚ましたのは、石造りの薄暗い部屋だった。取り巻く空気はひんやりしていて、夏の暑さに慣れた体には少し肌寒い。キャロラインが寝かされていた石の台も、近くの石壁もしっとり濡れている。遠くで雨音が聞こえるから雨水のせいかもしれない。

「目覚めたかい、キャル」

体を起こしたキャロラインに声をかけたのは、彼女の良く知る人物だった。

「お兄様……」

狭い石造りの部屋の隅に腰掛けるロバートにキャロラインは尋ねる。

「お兄様、説明をお願いいたしますわ」

「随分と冷静だね、キャル。命を狙われていたというのに」

ロバートが告げる衝撃的な台詞をさして気にする風もなく、キャロラインは自分のいる場所を見回した。古い石組みの部屋だ。石材の様子からエスターリアが眠っていた屋敷と同じ頃に作られたのかもしれない。キャロラインが寝かされていた石の台は、何か荷物を載せる台なのだろう。キャロラインが寝ころべるほどに横に長いけれど奥行きは浅く、寝返りを打てば転がり落ちてしまいそうだ。

隅の床には頑丈なつくりの箱が無造作に置いてあって、その一つにロバートが腰掛けている。キャロラインが横たえられていた石の台は、あの箱を置く場所なのかもしれない。

この部屋は秘密の倉庫か何かだろうか。

明かりは照明の魔道具だけで窓はなく、ロバートの背後には勾配の急な階段が見えるから、地下室なのかもしれない。

「我が家にこんな秘密の地下室がありましたのね」

「ルイス伯父上から直接教わった場所だからね。父上はご存じないよ」

助けは来ないと伝えたいのか、キャロラインの言葉を肯定するロバートの返答に、キャロラインはほんのすこし安堵する。

（ここがアグウィナス家所縁ゆかりの、お兄様の秘密の場所だということなら、他に人はいないはずだわ）

兄の性格を把握しているキャロラインはそう推察する。

ロバートは優秀ではあるのだが、いささかこだわりが強いというか、面倒な性格をしているのだ。例えば、彼はアグウィナス家が代々守ってきた錬金術師に関する事柄に、強く執着していてそこに部外者を立ち入らせることを嫌う。

新薬の開発にしても、帝都から呼び寄せた錬金術師たちに手伝わせてはいたのだが、全員を呪術で縛る有様だった。

アグウィナス家を守ってきた錬金術に関する場所は、ロバートにとってパーソナルスペースと言ってよく、彼の完璧な理解者が完全に支配できる者しか立ち入らせたくない。

この地下室は父ロイスさえ知らない場所だと言っていた。ここがロバートにとって大切な場所であるならば、本当はキャロラインさえ匿かくまいたくはなかったはずだ。逆に考えれば、他に場所のあてがなく、頼れる協力者もないということだ。

（昔から、お兄様はお友達がいまませんでしたから……）

兄が聞いたならば顔を真っ赤にして小一時間ほど小難しい理屈を早口でまくしたてそうなことをキャロラインは考える。

キャロラインは兄の性格を十分把握しているのだ。兄がとても優秀で、それゆえ導き出した解答に疑いなく突き進む性格を。他者と話し合ったなら違う視点も開けるだろうに、それができない不器用さを。プライドが高くて面倒くさいけれど、実はとても優しいことを。

「お兄様は、わたくしを助けてくださいましたのね」

「おま……、お前がまんまと乗せられるのが悪いのだ」

妹になじられると身構えていたのだろう。穏やかに微笑むキャロラインの言葉に、ロバートは口ごもりながら返事を返す。

「迷宮討伐軍がおさえた錬金術師のために、身代わりになるなどと……。しかもポーションを市販するなど。シューゼンワルド辺境伯家はなにを考えているのだ！」

「まあ、お兄様。わたくしのお手紙を読んでくださっていましたのね」

憤る兄の様子を微笑ましいもののように見つめながら、おつとりと返すキャロライン。そんな妹に「何を暢気な！ わかっているのか」とロバートは続ける。

「市販が可能なほど大量のポーションを錬金術師に作らせるなど、酷使のし過ぎにもほどがあるう！ 軍は錬金術師を物か何かと勘違いしているのではないか！？」

そもそも市販を始めるにしても早急すぎる。生産、販売体制が整えばよいというものではない。ヤグー隊商のもたらしってきた利権構造を変革しようというのだぞ。それをわかつているのか！

これだから軍属というやつは、話にならんだ！」

肝心の錬金術師^{マシエラ}本人は、ポーションのあり得ない大量生産を繰り返してはいるけれど、ポーションの作製自体に疑問すら感じてはいないし、毎日、師匠に怒ったりジークや『木漏れ日』の仲間と笑ったりして大層健やかな暮らしをしているから、ロバートの話は彼の妄想が多々含まれている。

けれど、市販に関する問題は、長くポーションを管理してきた一族の後継としてふさわしい、的を射たものだった。

この2000年、迷宮都市は山脈を越えてヤグー隊商にあらゆる物品の運送を託しており、そのコストは甚大だ。それは、隊商の行路にあるいくつもの領地に、多額の利益をもたらしてきた。

街道沿いの村々は宿場町として栄えただけでなく、整備された街道を使って領地間の交易が盛んになった。迷宮都市と帝都、小規模国家群へ続く街道の分岐点に位置するベラート伯爵領地等は、迷宮都市と帝都の交易だけでなく、小規模国家群の戦火から帝国を護る壁として位置する帝国边境伯領へ、ロック・ウィール自治区の高品質な武器防具を運ぶ経路地としても栄えた。

街道はすでに整備されているし、迷宮都市から一番近い、すなわち帝都から最も遠くて辺鄙だったドワーフたちのロック・ウィール自治区と、ベラート伯爵領を経由する商流にポーションは影響しないけれど、迷宮都市の隊商がこの山岳街道を経由せず、魔の森を抜けるようになれば、彼らの利益は大きく減少するだろう。

ポーションの市販というのは、従来の商流がもたらしてきた利権構造を塗り替える物だから、迷宮都市にとって利益しかない改革であっても、利権を失う者たちが黙ってはいようはずがない。

「ヤグー隊商の利権にまみれた者にとっては、錬金術師は邪魔な存在なんだよ、キャル。奴らにとっては、迷宮が倒されることも、この地に再び錬金術師が生まれることも、どうでもいいことなんだ」

言葉を選ぶロバートを、優しい人だなとキャロラインは思う。ロバートはひどく怒っているけれど、その怒りはロバートに関係のないものだ。錬金術師やキャロラインが危険にさらされていることに彼は憤っているのだから。

「ええ。承知しておりますわ。お兄様」

微笑みを絶やさず返事を返す妹に、ロバートは言いにくそうに言葉を繋ぐ。

「錬金術師を守ろうというのだね、キャル。その心意気はアグウィナス家の者として正しく、兄として誇らしい。けれどね、お前が身を挺して守っているのは、錬金術師ではなくて迷宮討伐軍の名誉と体裁なのだよ」

迷宮討伐軍が錬金術師を掌握しているのならば、どんな刺客が放たれようと、守り通して見せるのだろう。結果として錬金術師を高い塔や深い穴倉へ閉じ込めることになったとしても。けれどそんなことをすれば、非人道的な扱いと後の世にシューゼンワルド辺境伯家や迷宮討伐軍は汚名を残す可能性がある。

だからこそ、『錬金術師』の役目を担うキャロラインが自由に行動し、自発的に迷宮討伐軍に協力していることを都市の内外に知らしめる必要がある。

キャロラインの“錬金術師を守りたい”という思いは、錬金術師ではなく迷宮討伐軍の名誉を守るために利用されている。

それが、ロバートには何よりも許せなかったのだ。

「心配してくださって、ありがとうございます、お兄様。それでもわたくし、

この勤めを果たしたいと思えますのよ」

ここまで言ってもキャロラインは表情も、意思も何一つ変えない。穏やかでたおやかな美しい令嬢であるというのに、この頑固さは誰に似たのか。

「キャル、お前が命を懸ける価値などないのだよ」

何とか妹を止めようと言葉を探すロバート。けれどキャロラインは強い意思の宿った瞳で兄を見つめると、こう続けた。

「お兄様。アグウィナス家は錬金術師を庇護する家系。矢面に立つのは当然でしょう。わたくしが衆目を集め、いつか迷宮が倒され錬金術師が溢れる街に戻ったならば、魔の森スタンビートの氾濫を生き残った錬金術師は、ただの錬金術師として新たな世界で生きていけます」

そう。それがキャロラインの願い。

いつか再び『木漏れ日』で、マリエラと二人ポジションを売りたい。

唯一で特別な店でなくていい。他にたくさんあるポジション屋の一軒でいい。

どれだけライバル店があつたって、マリエラと自分が作るポジションならば他の誰にも負けはしない。あの暖かな陽だまりに人が絶える日など来はしない。

マリエラは貴重な錬金術師であるけれど、身分はただの庶民に過ぎない。祭りあげられ衆目を集め、政治の道具にされてしまえば、自由に生きることなどできないだろう。

錬金術師を守るのは、アグウィナス家の、キャロラインの使命であるのだ。

「キヤル、お前は……」

ロバートはこの時初めてキャロラインを理解した。キャロラインが様々な魔道具や薬草を集めて薬を作っているのは知っていた。幼いころは「兄さま兄さま」と後を追ってきた妹だ。自分のまねごとをしているのだと思っていた。

けれど違った。彼女にはアグウィナス家の血が流れ、そして正しく“錬金術師”だったのだ。

むろん地脈と契約は交わしていない。スキルを保有しているだけでポーションなど作れはしない。けれどスキルとは魂と肉体の有り様を指し示すもの。

ポーションがないならば、人を癒しうる薬を。

それは錬金術スキルを有する者にとって、とても自然なことだったのだらう。

“錬金術師”たる妹の“アグウィナス”たる決断を、どうして否定できようか。

「……わかったよ、キヤル。ならば、アグウィナスに連なるものとして、お前を助けよう」

「ありがとう！ お兄様」

心から嬉しそうなキャロライン。

（私の命も後わずか。けれど、せめてキヤルだけは守らせてくれ。）
炎の刻印が刻まれた左手首を握り祈るロバート。火遊び賢者の気まぐれ刻印は期間限定の便利なアイテムではあるけれど、命も寿命も減らしはしない。

キヤルの思いは知ることができた。二人の溝は埋まったと言えよう。2000年の長きに渡りポーションを、錬金術師をつかさどって

きたアグウィナス家の総力を結集する時が来たのだ。

ただ一つ残念なことに、ロボートの盛大な勘違いは、あと一つだけ残されたままだった。

しずく(後書き)

ぎっくりあらすじ・ダブルヒロインパワー炸裂。兄はチヨロかった
.....。

恐怖感

「お兄様、ところでここはどこですか？」

「迷宮都市の東の森にある、我が家の隠し倉庫だよ」

雨は激しく降り続け、止む様子も見えなかったけれど、日が暮れる前に無事を知らせるべきだという、キャロラインの主張に従いロバートとキャロラインは地下室を這い出していた。

地下室の急こう配の階段を上がった先は、古い竈の中のような、黒くすすけた場所になっていて、半ば崩れた材料の投入口から外に出てみると、どうやら放棄された炭焼き場のような場所だった。

山裾の斜面を利用して作られた、石と土で作られた炭焼きの窯が3基ほど並んでいて、一番右の窯の中が、隠し倉庫に繋がっていた。どの窯も大層古く、煙突は崩れてふさがっている。迷宮都市では日常生活で炭など使わないけれど、昔はドワーフの鍛冶師が鋼を作る工程で炭を使っていたから、森の中に炭焼きの窯の跡が残っているのも不思議ではない。

（それにしても、当家の地下室への隠し扉といい、この隠し倉庫といい、ご先祖様はこういった仕掛けを好みますのね。マリエラさんに見せてさしあげたいわ）

これほど凝った隠し倉庫だというのに、中に収められていたのはロバートが椅子代わりにしていた箱が幾つかあるだけだった。無造作に床に置き、尻に敷いていたくらいだから、大して貴重なものは保管されていないのかもしれない。

そんなことを考えながら、キャララインは兄の後を付いて獣道を進んでいった。

ロバートが拝借してきた迷宮討伐軍の外套は雨を通すこともなく、キャララインを大雨から守ってくれていたけれど、雨水でぬかるんだ道は、靴底が薄くかかとのあるキャララインの靴ではたいそう歩きにくかった。

ロバートは背負うと言ってくれたけれど、意識のない時ならばいざ知らず、いい歳の令嬢が兄に背負われるなど恥ずかしくてとても頼めるものではない。

(そういえば、お茶を頂いた後、とても眠くなったのでしたわ……) 目覚めて兄を見つけて以降、兄を説得するのに必死で誘拐された時のことを思い出す余裕はなかった。

(わたくしはこうして無事ですのでし、お兄さまのなさったことでもあります、お父さまや護衛の方たちも無事でいらっしやると思いますけれど)

悪路を進む疲れから、ついキャララインはロバートに悪態をついてしまう。

「お兄様はお人が悪いですわ。眠り薬など盛らなくとも、こうしてお話すれば済むことでしたのに……」

けれどロバートの返事はキャララインの予想もしないものだった。

「私は眠り薬など盛ってはいないよ。確かにお前を探して基地に忍び込みはしたが、迎賓館に着いた時には、護衛も父上も皆眠らされていたのだよ」

「え……」

「私がキヤルを連れ出せたのは、この刻印の力と、わずかだけ賊よ

り早く部屋に辿り着けた運あつてのことだろう」

「お兄様、お父様は、お父様はご無事なのですか!？」

「確認したわけではないが、恐らくご無事だと思う。お連れする時間はなかったが、父上の周りには多くの護衛が付いていたし、異変に気付きやすいよう迎賓館の扉は開けておいたから」

人質としても見せしめに無残な死を与えるにしても、年老いた男性よりもうら若い娘の方が効果が高い。だからこそ、ロバートはわずかしかない時間の中で、キャロラインの身柄の確保を優先したのだ。

ロバートに索敵の能力などないけれど、きっとあの時すぐ近くにキャロラインを誘拐しようと目論む敵がいたのだろう。ロバートの左手に刻まれた刻印は高性能で、魔力を込めることによつて気配も魔力も姿さえも完璧にくらませてくれる。透明になるわけではないのだろうが、路傍の石ころのように相手にとつて意味のないものと思わせる効果がある様だ。何度か検証してみた結果、意識のないものを抱えていれば、同じ効果が得られるけれど、意識あるものを抱えた場合、効果はいくらか薄くなる。

キャロラインが薬を盛られて眠らされていたことは、ロバートにとつてもキャロラインにとつても幸運だったと言えるのだろう。薬で眠らせてキャロラインを誘拐しようとしたくらむ何者かの裏をかくことができたのだから。

ロバートでない何者かに、薬を盛られ、攫われかけた。その情報にキャロラインは急に恐怖に襲われた。目が覚めた時、そばにいたのがロバートだったから、驚き混乱したけれど、どこか安堵もしていたのだ。道に外れた邪法を行った兄であつたが、キャロラインにとつては優しい兄に変わりないのだ。話せばわかり合うことができ、キャロラインを助けてくれる。その認識に間違いはなく、ロバートはキャロラインが本物の悪漢に襲われる前に救出し匿ってくれてい

ただ。

覚悟はしていたはずだ。頭では理解をしていたはずだ。

しかし、自分が誰ともわからぬ襲撃者に襲われかけていたのだという事実は、キャロラインの心臓を強い恐怖で締め付けた。

「ジーク、マリエラを呼び戻せ」

フレイジージャの鋭い声が、雨の降りしきる『木漏れ日』の裏庭にひびく。ジークはマリエラのそばに駆け寄ると、彼女の肩に手をかけて「マリエラ！」と名を呼んだ。

名前を呼ばれたマリエラは聞こえているのかいないのか、ふわふわと頼りなげな動きでジークの方へ顔を向ける。

「マリエラ、戻ってこい。見つけたんだろう、もう、戻って来るんだ！」

呼びかけるジークの声に、明確な反応は見られない。ぼんやりとジークを見つめるマリエラの瞳。

ジークはこの時初めて意識した。

いつも見ている筈のマリエラの瞳の色は、フレイジージャと同じ金眼なのだ。

そこに、マリエラの瞳をのぞき込むジークの顔は映っておらず、代わりにふわりふわりと湧き立つような淡く儂い光が灯る。

（これは、《命の雫》の光？ いや、これはマリエラが言っていた

地脈の色ではないのか!?)

見慣れたマリエラの瞳の色はいつもと変わりはないのに、ジークも周りの景色も映っていない。マリエラはここにいるのに、彼女の心はどこか遠い場所にいる。

「マリエラ! 帰ってこい! マリエラ! 聞こえてるんだろ!?’
離すまい、行かせはすまいと、マリエラの肩をつかむジークの手に力が籠る。ここにいるのに、どこか遠くに行ってしまうようなマリエラに強く強く呼びかける。

けれど、マリエラの金の瞳は、どこか知らない光の大河を映すばかりで、ジークの声が届いているのかさえも分からない。

「マリエラっ……! 約束したじゃないか! 果物も、菓子も、オークキング肉も! まだそろってないんだ! マリエラ! マリエラ!……!」

ジークはマリエラの瞳の中に、自分の知る彼女を探す。声の限りに呼びかける。マリエラ、マリエラ、マリエラと。その叫びが、求める想いが、大気を、雨を伝ってこの辺り一面に広く溶け込みそうになったマリエラに届いたのだろうか。

「……おにく?’

「マリエラ!?’

それとも、肉のお兄さんニークムントの日ごろの行いか、ジークの良く知るマリエラが金の瞳に肉、いやジークを映してえへへと笑って立っていた。

「……とりあえず、風呂入って果物な」

「おにくは?’

「今度な」

「約束したのにー！」

「ああ、約束は守るよ。今度、必ず獲って来る。だから今は……お
かえり、マリエラ」

「うん……。待ってる。ただいま、ジーク」

そんな会話を交わしながら、家の中へと入っていくマリエラとジーク。いつもよりほんの少しだけ距離の近い二人に暖かな眼差しを向けた後、フレイジージャは「じゃー、今日はジェネラルオイルで焼き肉な！」と二人の後に続いて家へと入っていった。

「眠り薬の成分が判明しました！」

すぐに判明すると思われていた眠り薬の鑑定は、予想と反し数刻を要した。眠りの毒を持つ素材は何種類もあるのだけれど、眠らされた兵やロイスの容態、残されたお茶の状態を見れば、ある程度まで絞り込むことが可能だ。

あとは、候補に合わせて順に試験をしていけば眠り薬の種類が判別し、そこから手掛かりがつかめるはずだった。さほど時間のかかる作業ではない。迷宮都市で採れる素材ならば。

ガーク爺を招へいしてようやく判明した眠り薬は、迷宮都市で採れるものではなく、それ故、重要な手がかりを得ることができた。

「これは小規模国家群で多用されている眠り薬です」

不眠を解消するためでなく、人を陥れるために調合された眠り薬

は水によく溶け色もなく、無味無臭で時間がたてば分解されて消えてしまう。ポーシオンではないから眠りに落ちるまでの時間がやや長く、眠る時間も短いが、繰り返し服用を続ければ重篤な後遺症を残しうる、謀略の為の薬だ。

今回も、ガーク爺の鑑定があと少し遅ければ、眠り薬は残らず分解されて何の薬が使われたのか知ることができないところだったという。

その回答に、会議室に小さなどよめきが起こる。

戦乱の絶えない小規模国家群のどこか一国、あるいは小規模国家群と取引のある帝国の領が、迷宮都市でのポーシオン市販を阻害する。

それは、何のためか。

街道を通じて運ばれる、何がなくなると困るといつのか。

その答えに気づいたウェイスハルトは、マルローを呼び寄せると何やら小声で指示を出した。マルローは黙って頷くと会議室を後にした。

一方で、『腑に落ちた』という表情を見せたのは尋問に当たっていたニーレンバーグだった。この日、アグウイナス家の襲撃は3回あって、尋問の結果、それらは全く別の集団であることが確認されていた。もつとも捕縛した段階から、工房、アグウイナス邸、基地を襲った集団のレベルには明らかな開きがあったから、先の二つの襲撃は単独犯か雇われた陽動部隊と推測されていたのだが。

まず最初に工房を襲った3人の痩せた襲撃者は、居合わせた商人の奴隷たちだった。いわゆる自作自演というやつで、『悪漢に襲われたところを助けて恩を売り、ポーシオン利権に食い込もう』と考えたらしい。襲撃者役をさせられた3人の奴隷は、脅かして逃げる

だけの簡単な芝居をするだけで、うまく事をなし終えたなら自由の身にしてやると言われていたらしい。もちろん商人側には生き証人を残すようなつもりは全くなくて、初めから3人の奴隷をガラの悪い護衛たちに殺させるつもりでいたのだが。

襲撃者が意識を失う前の様子に違和感を感じたマルローが、尋問役に奴隷商人のレイモンドを指名したことで、襲撃者の3人は商人の《命令》の拘束力から逃れて自供することができたのだ。

商人親子の尋問は簡単で、ニーレンバーグがやさしく質問しただけで、洗いざらい話をしてくれて供述にも偽りはないようだ。ただ一つ不明であったのは、襲撃の日が重なったという事実。商人も商人の護衛たちも、襲撃日は自分たちで決めたと言っていたし、この街に彼らを助ける知り合いはいない。商人達は単独犯で他の襲撃に関わってはいないし、誰にも雇われてはいないという。

次に、アグウィナス邸を襲撃した集団は、帝都で活動している窃盗団らしかった。

窃盗団と言っても、誘拐のプロ集団というわけではない。少し上等な盗賊団といったところで、多少痛みを強く強情ではあつたけれど、ポーションのない迷宮都市でなごらく治療技師をしてきたニーレンバーグに言わせると、「迷宮討伐軍の兵士のほうが余程骨がある」という程度らしかった。

ニーレンバーグは人体を熟知しているからの確に痛みを与えることができるし、何よりも怪我というのは治療魔法やポーションで治すというのが常識だと思っている者にしてみれば、獣でも捌くような顔をして生きた人体を切り開いて腑分けするニーレンバーグは、この世に現出した悪魔のように思えたのだろう。

襲撃者たちはすぐに素直になつて、話をしてくれたのだけれど、彼らは人を仲介して雇われただけで、雇い主のことなど知らされて

はいなかった。ちなみに命じられたのは、キャロラインの誘拐。交渉は帝都で行われ、細かい指示は決行前夜に迷宮都市の宿に手紙が届けられたのだという。身柄を拘束するはずの空き家はもぬけの殻で、依頼主に通じる情報は何も得られなかった。

ハズレが二つ続いたけれど、フレイジージャが捕まえた基地の侵入者は本命だと思われた。フレイジージャが失神させて捕縛した3人のうち、2人は目覚めるなり仕込んだ毒で自害して果て、残る1人の自害は阻止できたものの、ニーレンバーグの尋問にも何一つ語るうとはしなかった。ニーレンバーグの尋問に、である。痛みに慣らされた一流の隠密部隊というわけだ。

小規模国家群からやってきたのであれば、納得がいくというものだ。

あの地域は、常に紛争が絶えない。戦争を生業にする集団が巢食っていて、紛争が終わらないよう調整しているのだと囁かれている。眠り薬にプロの間諜。基地にしび込んだのだ。相当の手練れ、つまり高価な人員だとみていいだろう。

マルローに指示を出し、レオンハルトとなにやら囁き合うウェイサルトを見る限り、真相にあらかた目星がついたのだろうと、ニーレンバーグは考える。

けれど、ウェイサルトの表情は曇ったままで、迷宮討伐軍に出動の命令も下らない。基地へ忍び込んだのは、工房付近で捕縛された3人だけではないのだ。迎賓館で薬を盛り、キャロラインを連れ去ったものは捕まっていない。基地の扉は閉ざされており、内部はくまなく搜索されたが、キャロラインも侵入者らしき人影も見つけることはできなかった。

既に基地の外に移動したとみていいだろう。
一体どこに。

マルローが派遣された先に、手掛かりがあるのだろうか。

重苦しい雰囲気は続く。

(やはり、尋問では手ぬるいか……)

これ以上は、ポーションがあつたとしても元に戻らなくなるかもしれない。そこまで苛烈な尋問は指示されていないが、こうしている間にも時間は刻一刻と過ぎていく。今しがた手に入った眠り薬の情報で揺さぶりながら、何とか聞き出してみよう。

ニーレンバークは、ふつと浮かんだ愛娘シエリーの顔を、意図的に心の奥底に封じ込めると、とらえた問者に情報を吐かせるために席を立った。

その時。

「申し上げます！ 錬金術師から伝令が。令嬢の行方が分かったと
！」
ディスクがジークを連れてやってきた。

恐怖感（後書き）

ざっくりあらすじ・犯人わかって居場所わからず

射貫くもの

雨の中を騎兵の一団が駆け抜けていた。

鬼気迫るその勢いに、叩き付けるように降りしきる雨は除け、風も騎兵の進行を阻むことはできない。天候までをも味方につけたかのような一団ではあったが、風雨が彼らを避けているのは先頭を行くウエイズハルトが風の魔法で大気を切り裂いているからだ。

雨などに、風などに、これ以上邪魔などさせるものかと。

「ウエイズ、第3隊を連れていけ」

ジークがもたらした情報を聞いたレオンハルトは、ウエイズハルトにディックの隊を率いてキャロラインの救出に向かうように命じた。

「必ず助けよと主に命じられました。どうぞ私もお連れ下さい」
そう言って同行を申し出たジークも一団の最後尾に加わっている。

鍊金術師^{マシエラ}が告げたキャロラインの居場所は迷宮都市の東の森。近くに朽ちた炭焼き窯が見えたらしい。朽ちた炭焼き場自体は東の森に幾つもあるものだけれど、山裾の斜面に沿って建てられているということから、およその目星を付けることができた。

迷宮都市からさほど遠い場所ではない。森の入り口で騎獣から降りて徒歩で進んだとしても、浅い森だ。一刻もたたずに辿り着ける。

しかし、運命はどこまでウエイズハルトの行く手を阻むのか。彼らが炭焼き場に辿り着いたとき、キャロラインは移動してしまった

後で、ぬかるんだ地面に残されたまだ新しい足跡は、途中までは何もの道にそって続いていたものの、途中から森の中へと消えていた。

「別れて搜索する！ 遠くには行っていないはずだ！ 追われているぞ！ 急げ！」

ウエイスハルトの指示に、3人ずつのチームに分かれて迷宮討伐軍の兵たちは森へと分け入っていった。

「ミツケタ」

そんな声をキャロラインが聞いたのは、ウエイスハルトが炭焼き場へたどり着いた頃だった。他国の訛りのあるその声に、最初に反応したのはロバートで、目くらましの呪いを周囲にばらまくや、キャロラインの手を掴んで森の中へと走りだした。

激しい雨が降り続いていたら、逃げる二人をわずかながらも包み隠してくれただろうに、いつの間にか雨は止んでいて、けれど変わらずぬかるんだ足元が、キャロラインの歩みをさらに困難なものにしていた。ドレスはすっかり水を吸って重く、草木が引っかかってはその場に捕らえおくように、キャロラインとロバートの邪魔をする。

「ムダダ、呪術師」

ゆっくりと、力の差を見せつけるように、呪いを蹴散らしキャロラインたちのもとへ歩みを進める黒衣の男。迎賓館で薬を盛った者だろう。間諜を生業にしているのだと言わんばかりに顔を隠し、身軽な黒づくめの衣装の男は、木々に紛れてしまうことだって容易に

できるだろうに、あえて姿をさらしながら二人との距離を縮める。

「くっ」

ロバートは少しでも間諜の足止めをしようと呪いを練り、同時に左手の刻印に魔力を送って気配を消そうと躍起になる。キャララインが意識を失っていたならば、わずかな隙について身を隠すこともできただろう。一度はこの間諜の眼をすり抜けてキャララインを迎賓館から連れ出せたのだから。けれど、キャララインの意識があれば、いかに高度な刻印であっても、薄く気配が滲み出てしまう。

「見事ナ身隠シ。ソノ情報、価値アル。アグウィナスノ後継ヨ」

ロバートの刻印を見抜いたのか、それともスキルか魔法だと思っただのか。間諜はロバートを獲物と見定めたようだ。

「事情力ワツタ。二人、連レテイケヌ。ダカラ」

「逃げろ！ キャル！」

事情を察したロバートがキャララインを森の奥へと押しやって、自らは立ちふさがるように間諜の前へ躍り出る。

「無駄ダト言ツタ」

「お兄様！」

とびかかるロバートをするりと躲した間諜は、わずか数歩でキャララインに近づくと、いつのまに抜いたのか、白刃をキャララインめがけてふりかざした。

「キャラルッ！」

ロバートが妹の名を呼ぶ。キャララインに向かって手を伸ばす。錬金術師たちから託された夢も、恋焦がれたエスターリアの命さえも掴めなかったその手を伸ばす。罪に染まったこの手はもはや、妹

さえも助けることがかなわないのか。

これは、呪いに手を染めた報いだらうか。

伸ばした左手には、炎の刻印。

ロバートの脳裏に刻印を与えた炎の化身の姿がよぎる。あれは、きつと、この世ならぬものに違いない。これ以上の奇跡を望めば、平穏な生どころか穏やかなる死も差し出さねばなるまい。

(構うものか)

何も掴めず、己の無力をただ嘆くだけならば、生も死すらも意味はない。

この命も魂も、残らず全てくれてやる。だから、どうか、どうか、妹だけは。

邪法に手を染め、家督を外され、閉じ込められたあの場所で、止まってしまった時間の中で、それでもキャロラインの手紙だけは、自分の時間を動かしてくれていたのだから。

こうして会えた後でも、「兄さま」と変わらず接してくれたのだから。

ひゅっ。

その時、1本の矢が、放たれた。

ジークムントがキャロラインたちを見つけられたのは、半分は偶然なのだろう。酒が切れたとかつまみが欲しいとか、トイレの紙が

なくなったとか、ひどくどうでもいい雑用がある度に、呼び鈴代わりにジークに向けて放たれる指向性のあるフレイジージャの魔力を感じ取った気がしたのだ。

ちなみにマリエラは魔力に鈍感で、フレイジージャがいくら魔力を放つても全く気づきはしないから、マリエラを呼ぶときは声、声が届く範囲にマリエラがいないときはジークと使い分けがなされている。

これとて、容易な魔力操作ではない。まったくもって無駄なことに高度な技術を多用する賢者様である。そのハイスペックさを發揮してトイレの紙を確認してから入ることを是非とも覚えてほしいものである。

残り半分は日々師匠の命令で魔の森に放り込まれていたからで、自分でも気づかぬうちに、ジークは狩人としての自分を取り戻していた。だから魔力を感じた方向に意識を向けるなり、随分距離があったというのに、キャロラインたちを見つけることができたのだ。

キャロラインに迫る間諜を見たとき、ジークは迷わず弓をつがえた。

再び弓を手にして以来、弓をつがえる度、精霊眼があつた頃の『射』が脳裏によぎつた。あの頃は、どこを狙えばいいか、どうつがえればいいのか、見えぬ手に導かれるがごとく、いつも最高の一射が撃てた。

「あの頃のように、的に当てたい」

「あの頃のように、あの頃より上手く」

そんな風に考える度、正しい構えが、正しい動作が分からなくなる。何がいけないのかどんどんわからなくなっていく。

師匠に命じられて森に入ってから、当たる当たらない、上手い

下手など考えている余裕はなかった。石を投げ、素手で殴り倒しても肉を確保し、マリエラのもとへ帰れた。何も思わず考えず草陰に潜み、木の陰に隠れては獲物に弓を放っていたのが良かったのかもしれない。

精霊眼があつた頃、何度も繰り返した正しい動作を、正しい姿勢を、体が思い出していた。

精霊眼は強力だ。獲物の弱点を指し示し、正しい所作を体に教え、放った弓の軌道も威力も正し、強化してくれる。己の中の弱さも迷いもすべてフォローしてしまう。

けれど、精霊眼などなくなつて。

何度も迷い、間違つて、弱さをさらしてきたけれど、すべてジークは乗り越えてきたのだ。

(マリエラの大切なものを、これ以上奪わせはしない！)

ジークムントは弓をつがえる。正しい姿勢が、正しい所作が、彼の『射』を的へと導く。

正射必中。

ジークムントの放った弓は、魔法も届かぬ長距離をもともせず、に間諜の腕を貫いた。

「ガアアツ、何所カラ!?」

感知できぬほど遠くから放たれた矢に貫かれ、剣を落とした間諜

は周囲を見回す。

ここは木々の生い茂る森の中で、その合間を縫って矢が届きうる隙間があった事実がすでに奇跡なのだ。ましてそこを狙うなど。まるで、木々がよけて矢を通したようではないか。

けれど二度目はあるまい。矢を通しうる経路はそうあるものではないのだ。

一射目も上手く木が盾になり急所を隠してくれたようだ。射貫かれたのは右腕で、一撃で倒されなかったこちらの勝ちだ。まだ、左腕は残っているし、令嬢を殺して呪術師を連れ去る時間はある。

瞬時にそう判断した間諜は、別の武器を取り出そうとして、体が動かないことに気が付いた。

(凍って……!?)

「……黒い害虫め」

間諜にウエイズハルトの声は届いたろうか。

次の瞬間には間諜は芯まで完全に凍り付いていて、氷の像と化していた。間諜に凍てつく視線を投げつけると、木々の間から姿を現したウエイズハルトは、キャロラインのもとへと駆け寄った。

「無事か！ キャル！」

「ウエイズ様……」

慣れない森を移動し、足元の悪い獣道を逃げ、白刃にさらされたキャロラインは、ウエイズハルトの顔を見てようやく助かったのだと理解したのだろう。急に足の力が抜けたようにその場に崩れそうになる。

「危ない！ キャル」

慌ててウェイスハルトが手を差し伸べ、抱き寄せるようにキャロラインを支える。

「あ、あの、ウェイス様。ごめんなさい、わたくし、お見苦しいところを……」

もじもじと、視線を逸らすキャロライン。外套が雨を避けてくれていたとはいえ、今日は散々だったのだ。薬で眠らされ、森の隠れ家まで連れ去られ、ついさっきまで雨の中森のけもの道を移動していた。髪の手からは雨の雫が滴っているし、薄く施した化粧など、つくに剥げてしまっている。靴もドレスの裾も雨と泥でひどい有様だ。顔にさえ泥がついているかもしれない。

まつ毛の上がり具合だとか、前髪の長さやカールの具合、そばかす一つに一喜一憂するような、うら若い少女がさらしたい姿ではないだろう。

けれどウェイスハルトからすれば、化粧に隠されてはいないきめの細かいキャロラインの肌は、恐怖の為か青ざめてますます白さが際立って見えたし、長いマツゲや前髪に滴る水滴は、どんな宝石よりも美しくきらめくように思えた。キャロラインを支える腕に添えられたキャロラインの手は、熱を失い少し震えている。迷宮都市に暮らすといえど、日々魔物と対峙し死を身近に感じている己とは違う。未来を輝かしいものと感じる年ごろの少女にとって、死を覚悟する体験はどれほど恐ろしかったことだろう。

その証拠にキャロラインの顔からは血の気が引いて、手は震え、足には力が入らない。助かった安堵から、ウェイスハルトに縋り付いて泣き叫んでもおかしくはない状態だ。けれど彼女は、涙を見せることも無様に取り乱すこともなく、震える脚に力を籠める。

(なんと、強く美しい……)

誰にもすがらず一人で立とうとするその姿に、ウエイズハルトは心を打たれた。

「キヤル、貴女一人で立たなくていい。貴女一人で背負わなくていいんだ。私が共に背負うから。貴女のそばに共にあるから」

「ウエイズ、様……？」

キヤロラインを支えるようにその両手をしっかりと握り、ウエイズハルトはぬかるむ大地に膝をつく。

「キヤロライン。私が貴女の支えとなろう。この命ある限り二人で。私は貴女と共にありたい」

「ウエイズハルト様……」

降るような星空の下でもなければ、美しい薔薇の庭園でもない。

雨は止んでいるけれど、地面はぬかるんだ森の腐葉土で苔むした木々に囲まれている。近くにあるのは美しい大理石の石像ではなくて、暗殺者の氷漬け。

ロマンチックとはいいいがたい風景の中だけれど、二人の瞳にはお互いの姿しか映ってはいない。だから、場所などどこでもいいのだらう。

「はい……。はい！ ウエイズハルト様。わたくしも……」

ウエイズハルトのプロポーズを、頬を薔薇色に染めながら受けるキヤロライン。

アグウイナス家を継ぐことが決まってから、シューゼンワルド辺境伯家に所縁の者を婿に迎えるのだらうと思っていた。アグウイナス家は古い家柄で、ポーシヨン関連の利権も持つてはいたけれど、ポーシヨンが枯渴した今となっては土地もなければ大した収入もない、政策上いくらか価値があるだけの家柄となり果てた。それに兄の失態もある。

どんな相手と娶めあわせられようと、文句を言える立場にはない。けれど、『木漏れ日』に菓子や花束を持ったウェイスハルトが訪れる度、『こんな方ならいいのに』とキャララインは思っていた。

女性に人気の高いウェイスハルトの見目麗しさは、キャララインにとつては彼が軍人であることで相殺されてしまう程度のものだ。長く薬師をしてきたキャララインにとつて、軍人というのは冒険者以上に頭が固くて、治癒魔法とポジションの使い分けもできない、なんでも根性論で解決しようとする人種に思えていたからだ。けれどウェイスハルトは、ポジションに全く及ばない薬という物の、場所を選ばないという利点を理解してくれたし、薬にもできることがあるはずだというキャララインの考えに賛同してくれた。

それに兄を支え、迷宮を倒したいという強い使命感を持つ人で、彼の目指す迷宮を倒した後の世界は、キャララインの願いと同じものだと思えた。

ウェイスハルトはキャララインにとつて、道を同じくし、尊敬できる人なのだ。そんな人に伴侶に望まれるなんて、これほどありがたいことはない。

「一緒に、錬金術師様を御守りしましょう！ ウェイス様！」

満面の笑みで、プロポーズを受けるキャララインと、その返事の内容に表情は変えずに心の中で崩れ落ちるウェイスハルト。

(…………、そう、そうだな。キャラにとつては、所詮は政略結婚に過ぎぬのだ。錬金術師を守るため、ポジションを守るための施策と思われたとて致し方ない…………)

迷宮都市、いや、帝都のご婦人たちをも騒がせたウェイスハルトの美男子ぶりをもってしても、天然の城壁は落ちることを知らぬのか。落胆のあまり、地の底からはるか高き頂を眺めるような気分

なったウエイスハルトは、ちらとキャロラインが向けた視線の先、矢を受け氷漬けになった暗殺者に目を向ける。

あの矢。あの一矢が時間を稼がなければ、ウエイスハルトは果たして間に合っただろうか。

その矢の射手とその主に思いを馳せる。

(まあ、彼らよりは、私とキヤルの中は進展している。邪魔は排したのだ。気長にいくさ)

流石は迷宮討伐軍の副将軍。幾多の苦難を乗り越えてきた彼の精神は鋼のごとく、すぐさま立ち直ったウエイスハルトはぬかるんだ大地から立ち上がると、キャロラインに手をさしのべた。

「さあ、キヤル様。いや、もうキヤルと呼んで構わないかな？ 迷宮都市へ戻ろう」

にこりと微笑みかけるウエイスハルトはいつにもまして煌いている。そんなウエイスハルトに少し戸惑うように、キャロラインはもじもじと話しかけた。

「あの、ウエイス様」

「どうした？ キヤル」

「あの……、お兄様はわたくしを助けてくれましたの。逃亡の罪はあるのかもしれませんが……、お兄様がわたくしを助けて下さらなければ、きっとこうして、ウエイス様に再びお会いすることもできませんでしたわ」

「おお、そうであつたか、キヤル。すべてはキヤルを助けるためだったのだな」

「ですから、ウエイス様。

そこで氷漬けになっているお兄様を、解放してはいただけませんか？」

暗殺者の少し後ろ、『妹を手にかけるなら私を先に殺せ!』とばかりのポーシングで、ロバートも氷の石像と化していた。

しかも非常に微妙な位置だ。妹を助きたい気持ちが出ているポーズとは裏腹に、ロバートの身体能力は暗殺者を遮るには全く足りておらず、ちっとも壁になれていない。

これまた氷漬けになった暗殺者との位置関係を見ればよくわかる。だいぶ手前で凍り付いている。

そしてさらに最悪なことに。

ウエイスハルトは二人を氷漬けにはしたけれど、それは動きを封じるため、事情聴取の必要性から殺したりはしていないのだ。特に戦闘力の低いロバートの凍結は表面だけで、動けぬ自分の後ろ側で繰り広げられた妹がプロポーズされるシーンを、大層無様なポーズのまま彼はばっちり聞いていたのだ。

(なんたる、なんたる生き地獄!!!)

ロバートの心の声はこの場の誰にも聞こえない。彼はただ一人心中で泣くのみである。

これが炎の悪魔と取引をした代償か。平穏な生も穏やかなる死もすべて差し出した結果なのだろうか。確かに妹は助かった。しかし、しかし……!!!

ウエイスハルトによって凍結を解除され、駆け付けたディックたちに連行されたロバートは、終始うつむき黙り込んだまま、まるで魂を抜き取られたようだったという。

「森の外に馬車を呼んである。そこまで歩けるか?」

「はい。ウエイス様」

ウェイスハルトに手を引かれ、ゆつくりと森を行くキャロライン。

「ウェイス様……」

「ん？ どうした、キャル。少し早かったか？」

「いえ、いえ。なんでもございませんわ」

振り返るウェイスハルトの顔が見られずにキャロラインは思わず視線をそらしてしまう。

（わたくし、どうしたのかしら）

氷魔法の使い手だというのに、キャロラインの手を握るウェイスハルトの手はとても大きく温かい。つないだ手ばかり気になって、心臓の音がときどきとくるさい。

（ウェイス様は、政略の相手としてわたくしを……。でも、わたくし……）

ウェイスハルトの背中を見つめるキャロラインの熱を帯びた眼差しに、彼女の心臓が早鐘を打っていることに、ウェイスハルトが気づくのは一体いつのことだろう。

射貫くもの（後書き）

ざっくりあらずじ：いろいろ射貫かれてだいたいハッピー。

悪魔に魂を売ったロバートはシリアスの神に見捨てられたのだ……。

はかりごと

「ようこそおいで下さった、クンツ・マロツク殿」

ドワーフたちの街、ロツク・ウィール自治区を治めるクンツ・マロツクは先づれの伝えた通り、キャロラインが誘拐された日の丁度二日後に迷宮都市に到着した。マロツクを迎え入れたレオンハルトは、堅苦しいことは苦手だというマロツクと二人の酒席を用意した。

「急な来訪にも関わらず、お時間を頂き誠にかたじけない。ドワーフというものはものづくり以外はとんと気が回らぬものでしてな。先づれを出しておらぬことに気づいたのがつい先日のことです。いやはや、まこと面目ない。」

「いや、ロツク・ウィール自治区は200年を超える友誼がある。その領主たるマロツク殿がおいで下されたのだ。心より歓待しよう。酒は十分用意した。大いに楽しんでいってください」

「では、お言葉にあまえて。わしは半分しかドワーフの血を引いておらぬのですが、この半分が厄介だ。うまい酒には目がないのですよ。いやはや、まことお恥ずかしい。おおこれは、帝都で売りに出されたばかりの8年物ですな。もう手にされておるとは、魔の森の街道経由の隊商は、たいそう好調であるようだ」

様相を崩し、酒を手に取るマロツク。「お恥ずかしい」などと言つてはいるが、彼の所作には媚びる様子も卑屈な様子もみじんもなく、実に堂々としたものだ。マロツクは半分ドワーフの血を引いているから、がっしりとして背は低く、髭も眉も濃いドワーフの特徴

を備えている。平均的なドワーフよりは少しばかり身長は高いけれど、それでも一目でドワーフとわかるくらいにはドワーフらしい50代の男である。けれど彼は通常のドワーフであれば誇示するがごとく伸ばしている髭を短く切り揃えていて、眉毛さえも整えている。当然髪型もさつぱりとして、清潔感にあふれた紳士然とした様相だ。

話す口調も穏やかで卒がなく、相対する者には商いに長けた貴族といった印象を与える。何より対する人々に貴族らしさを感じさせるのは、彼の大きな瞳だろう。楽しそうに笑い、うまそうに酒を飲むマロツクの瞳を観察する者がいたならば、そこにマロツクの本心がないことが感じられただろうから。

腹のうちが読めないハーフ・ドワーフの領主。それがクンツ・マロツクという男だった。

「帝都の酒は上物揃いだ。山岳街道に行く隊商には酒を運ばせるよう手配いたそう」

優雅な様子で杯を空けるマロツクにレオンハルトが話を切り出す。魔の森の街道を使うようになった後も、山岳街道経由の隊商がなくなるわけではないのだと、話を切り出したというわけだ。マロツクがこの時期に迷宮都市を訪れる理由は、ポーションの市販によって魔の森の街道を通れるようになったこと以外にあり得ないのだから。

「それはありがたいお話だ」

マロツクは変わらぬ笑顔で返事を返す。

「ですが、お気持ちだけで十分。いや、それは酒を送っていただくお話に限ったことですが。いやはや、酒とは大変魅力的なご提案まこと、心が揺れて本来の目的を忘れるところでございますな。これはわしが参った理由でもあるのですがな、頂きたいのは別のもの

だというわけです」

(思ったよりも話が早い。直球でくるとは、事の顛末は了解済ということか……)

マロツクの考えの読めぬ大きな目を見ながら、レオンハルトも顔色を変えず続きを促す。

「ほう、では何をご所望か？」

「なに、大したことではございません。帝都にあまねく商人が行っておること。我らロツク・ウィール自治区も商会を立ち上げることにはいたしましたのです。いつまでも人様に物資の運搬を甘えるわけにもいきません。自分たちで帝都へ運び、品を売ろうというわけです。いやはや、ドワーフが商売などと、見戯に等しいと申しましようか、ドワーフの手習いとお笑ください」

「いやいや。ご謙遜を。バンダール商会と共同出資の商会だ。抜かりなどありません。」「

にやり、にやり。

眼は全く笑っておらず、口元だけがスマイリー。

「いやはや、流石は名高き將軍殿だ。まこと、お耳が早くていらっしやる。それで、支店を迷宮都市にと。構いませんでしょうな」

「もちろんですとも、マロツク殿。場所はすでにバンダール商会の方で用意してあるのでしょうか？」

にやり、にやり。

「ポーシヨンの市販とは迷宮都市の革命的な転機と言って良いでしょうな。いやはや、歴史的瞬間に立ち会えたこと、この身に余る榮譽でしょう。これから多くの人が押し寄せて、職人の手がいくらあっても足りません。ロツク・ウィールも助力は惜しまぬ所存です。

従来の販路を変えて迷宮都市を経由するのもその証拠。ですが、我ら商いに不慣れなドワーフ。何らかの助けがなければ立ちいくものではありません。」

「何をおっしゃるマロツク殿。ロツク・ウィール自治区から迷宮都市まで1週間、そして迷宮都市から帝都まで慣れた者なら6日で着こう。ロツク・ウィール自治区から山岳街道を抜けて帝都に行くには3週かかるからこちらの方がよほど近道。経由地でもひと稼ぎとはマロツク殿のご慧眼には脱帽するしかありませんまい」

はっはっは。はっはっは。

乾いた笑い声が部屋に響く。欠片も楽しい話はなされていないのに、大人の笑いは乾いていていけない。これでは咽も乾こうという物だ。

マロツクは、ぐびりと杯を飲み干すと、「いやあ、実にうまい酒ですな」とレオンハルトに笑ってみせた。

結局のところ、マロツクは従来よりも近道な魔の森経由で帝都へ行けるなら、自分たちも使わせてくれと言っているに過ぎない。もちろん断られることがないように、迷宮都市に根をはった商会を間に挟む周到さだ。できれば優遇措置が欲しいなどと厚かましい願いを持ち出してはいるが、断られるのはもとより承知のうちだろう。迷宮都市でも仕事をしたいという提案を断られなかったのだから、「うまい酒」に落ち着いたというわけだ。

もっともこの交渉はレオンハルトとしても想定していたシナリオの一つに過ぎない。それも、想定の中では最も穏当なシナリオだ。

ロツク・ウィール自治区は帝都から遠く規模も迷宮都市よりはるかに小さい。住人はものづくりに傾倒したドワーフばかりだということに、彼は帝都で売りに出されたばかりの酒の情報さえつかんでい

るのだ。

3日前迷宮都市でおこったアグウィナス家令嬢誘拐事件に關与したとの情報は一切得られなかったけれど、このタイミングで迷宮都市を訪れたマロックが何の情報もつかんでいないとは考え難い。

彼らはドワーフ。言葉も通じ、血さえ交えることができるけれど、人とは異なる種族なのだ。ものづくりにこそ意義を見出す彼らは、その途中で作製されたあまたの習作がどこに行こうと、誰の手に渡ろうとそこに意味は見出さない。自分たちの武器が帝国と敵対する国に同時に流れていたとして、意に介することはないのだ。彼らは異なる倫理で動いている。互いに違ふということを理解してこそ、共存する道がある。

だからレオンハルトはこう告げる。代々の当主より受け継がれてきた魔法の言葉、友好の呪文だ。

「我々も、ロック・ウィールが“至高の一振り”に辿り着く日を心待ちにしています。その時は、ぜひとも一振り願いたい」

“至高の一振り”。それはロック・ウィール自治区のドワーフたちの求める唯一。オリハルコンの産出しないロック・ウィールでそれを超える鋼を鑄込み、至高の一振りを鍛えたい。

そのためにどれほど多くの職人と、時間と、そして開発費用が必要か。

マロックがドワーフの武器・防具を売りさばくのは、このために他ならない。

マロックは類稀なる優れた領主だ。商才も政治の才にも恵まれている。そしてドワーフとして「至高の一振りを打ちたい」という根源的な欲求も持ち合わせている。けれどドワーフの血が半分しか流れていないマロックには、“至高の一振り”に至る鍛冶の才能が備

わっていない。そのことさえも理解しているマロツクの欲求は、執着にも似た感情となつて“至高の一振り”を渴望させる。

ドワーフの理想を理解しそれに沿う。良き隣人たんとするレオンハルトの一言に、マロツクの瞳は初めてレオンハルトをとらえた。それまでの、“たくさんの人間の一人”を見る目ではなく、“レオンハルト”に目を向けた。

「そういえば、弟君のウェイスハルト殿のご婚約が成つたとか。いやはや、まことめでたいですな。至高にはまだまだ至りませんが、次回こちらに来るときは、当代最高の一振りを祝いに献上いたしましよう」

(あの事件からまだ2日だぞ。本当に食えん男だ……)

レオンハルトはマロツクの情報の速さに舌を巻く。迷宮都市の貴族でさえも知らぬものが多い情報だ。けれどこの回答は悪くない。

「至高の一振りに」

「迷宮都市の繁栄に」

グラスを交え飲み干す酒は、交わす二人の男にとっては悪くない味がした。

キャロライン誘拐の首謀者は、商人一味からたどり着くことができた。商人一味は単独犯で誰の指示も受けていない。そんな彼らの犯行日時がどうして知れたのか、という疑問に端を発したのだ。商人たちの犯行は稚拙で素人臭いものだから、彼らの目論見に気づい

た者がいれば盗み聞くのはたやすいだろう。ではだれが。

金にがめつい商人親子は、迷宮都市行きを望む人間から金を受け取り、同乗させて街へ来ていた。もつとも隊商が空いたスペースで人や物を運ぶのはよくあることだったし、迷宮都市の門ではそこまで厳しい検問をしていない。誰がやってきたのか把握はしていないし、街の中に入ってしまったえば、どこに行ったかもわかりはしない。よほど怪しいものを除いてはマークが付くものではない。

「貴重な戦闘スキル持ちの冒険者が、この時期に来る理由はないんじゃないかね」

テルーテルが爪を切りつつそう評した、黒髪で緑の瞳の20代後半の文官風の男性。通常であれば見逃されていたはずのその男の情報は、テルーテルの一言で注意すべき人物として迷宮討伐軍に認識されたのだ。

そして、迷宮討伐軍の基地を襲撃した者たちが小規模国家群の間諜であるという事実から、浮上したいくつかの領地。そのうちの一つをよく知るマルローは、“黒髪で緑の瞳の20代後半の文官風の男性”に心当たりがあったのだ。

「久しぶりだね、妻は元気かい？ 執事君」
ウエイスハルトがキャロライン救出のために東の森に向かっていった丁度そのころ、マルローは数名の部下を伴い、“文官風の男”が滞在している部屋を訪れていた。

「だ……、旦那様。お久しぶりでございます。すぐにご挨拶に伺おうとは思っていたのですが……」

「白々しい真似はいい。小規模国家群への武器の密輸はさぞや儲か

つたのだろうか？ あれだけの人材を雇えたのだから」

「な、なんのこと……」

「基地に忍び込んだ間諜はとらえた。じきにすべて話すだろう」

「く、くそ、お前さえ、お前さえ魔の森で野垂れ死んでいれば……」

「……！ お前に、子供に父と名乗れぬ俺の気持ちかわかるか！」

随分勝手な言い草だと、マルローは剣を抜きやけくそで切りかかって来るベラート伯爵家の執事を眺める。この執事は主であるベラート女伯爵と道ならぬ関係となり、それをカモフラージュするため自分と同じ金髪碧眼のマルローをベラート伯爵家へ婿入りさせたのだ。彼の黒髪はカモフラージュのために染めているに過ぎない。

そんな愚かな奸計に巻き込まれさえしなければ、マルローは迷宮都市で平穩に暮らせていたかもしれないのに。

（ゆっくりとした剣だ）

戦闘能力のない執事の剣は、マルローにとっては兇戯にも等しい。このまま避けずに受けたとしても、中に着込んだ装甲が受け止め、大した傷にはならないだろう。あまりに愚かで哀れな男に、一撃くらい受けてやってもいいかもしれないと、マルローは思った。

「いけません」

「タロス……」

そんなマルローの前に立ちはだかつて、執事の剣を受け止めたのはマルローの奴隷兵のタロスだった。執事の剣を固い拳でたたき折ると、そのまま執事を床へと押さえ込んだ。

「はなせ、はなせえっ！」

口の端から唾を飛ばしつつ叫ぶ執事。

（父と名乗れぬ気持ちか……）

それだけは、マルローにも理解はできる。もつとも、自分が受けてきた仕打ちを思えば同情してやる必要はないのだけれど。

「ポーシヨンの市販阻止だけが目的ならば、お前が迷宮都市に来る必要はなかったはずだ。そんなにも、お前は私になり替わりたかったのか」

マルローの静かな問いに執事が黙る。

「ならば、それだけは、かなえてやってもいいでしょう」

マルローの静かな声を最後に、髪を黒く染め、自らを偽り続けた執事は意識を失った。

はかりごと(後書き)

ぬいぐるみあらすじ…ドワーフはグレー、マルローの嫁&間男が黒

顛末

事の顛末は分かってしまえば酷く単純なものだった。

無謀な政策の末、経済難に陥ったベラート伯爵家を建て直すため、執事はロック・ウィール自治区から運ばれてくる武器を買い取り、紛争地帯である小規模国家群へ密輸していたのだ。ベラート伯爵家の領地はロック・ウィール自治区から帝都への街道にあるだけでなく、小規模国家群への分岐点でもあったから、物理的には可能であった。ただし小規模国家群は帝国と敵対する地帯。シューゼンワルド辺境伯家が魔の森から帝国を護る壁であると同じように、小規模国家群と帝国の間にも別の辺境伯家が存在している。ベラート伯爵家が小規模国家群に流したドワーフ製の武器によって、辺境伯家は損害を被っただろうし、ベラート伯爵家が行ったことは帝国への逆行行為に他ならない。

ベラート伯爵家としてもそれは分かっていることだから、なるべく早く領政を立て直して密輸をやめるつもりではあったのだろう。

けれど、ベラート伯爵領が持ち直すより早く、迷宮都市でポーシヨンの市販が始まってしまった。

ヤグー隊商は激減し、隊商がもたらす利益は失われてしまう。ロック・ウィール自治区も輸送コストの安い迷宮都市経由で武器の輸送を行うだろうし、そんな中で密輸の為の武器の買い付けを隠れて行うことは難しいだろう。

だから小規模国家群の間諜を雇い入れ、ポーシヨンの市販を阻止しようと思ったのだ。小規模国家群の間諜は腕は立つが、万一の場合に首謀者が割り出されやすい。商人の襲撃は偶然であったのだが、

帝都の盗賊を雇ったのはカモフラージュもあつたわけだ。

小規模国家群の高価な間諜を雇ったのだ。ベラート伯爵家の執事が迷宮都市にしようといまいと、作戦の成否は変わらなかつただろう。

けれど執事は迷宮都市へやつてきた。

「あわよくば、マルローになり替わりたかつた」

厳しい尋問の末に、執事はそう語つた。マルローが迷宮討伐軍を続けられないほどの大怪我を負つたならば、ベラート伯爵家に連れ戻すことができるのだ。もちろん連れ戻した後でマルローとして生きるのは、染めた髪をもとの金髪に戻した執事。愛情深い妻を演じるために、ベラート伯爵夫人はマルローに手紙さえ送つたのだ。検閲の為に複数の人目に触れることすら期待して。

軍を続けられないほどの怪我なのだ。顔や声、記憶に異常があつたとして誰もいぶかしがりはずまい。

アグウィナス家襲撃事件から数週間後、ベラート伯爵家に2組の来客があつた。

1組目は“重傷を負つた”というマルローを運んできた迷宮討伐軍の兵士たち。まばらに残つた頭髮と緑の瞳である以外、判別がつかないほどに損傷し、醜く崩れたマルローは、何度も損傷と治癒魔法やポーションによる回復を繰り返した為に、これ以上は迷宮都市で治せる見込みは無いという。

一人では歩くどころか話すことも食事さえ満足に摂れない体のマルローを見て、ベラート女伯爵はこれは自分の夫ではないと言い張つた。けれど、同行した兵士は懐から一本のポーションを取り出す

と、マルローとベラート伯爵家の子息に使い二人に血縁関係があることを証明してみせた。それは今までこの地脈では存在しなかった、不実を暴く血縁のポーシヨン。

「父上？ 本当に父上なのですか？」

長く家を離れていたとはいえ、幼い子息にとっては父親という物は慕わしい存在なのだろう。涙ながらに変わり果てた父を労わる幼い息子と、すべてを悟ったベラート伯爵夫人を残して、「特級ポーシヨンを数本使えば、多少の回復は見込めるかもしれませんが」と言い残し、迷宮討伐軍の兵士は去っていった。

そして2組目の来訪者は。

「ベラート女伯、小規模国家群への武器密輸に関してお話を伺いたい」

帝国からやってきた、審問団だった。

「ベラート伯爵家は取り潰されたが、死刑は免れたそうだ。マルローが密輸にかかわっていなかったことは明らかだったからな。実家ともどもおとがめは無し。今はマルローに支払われる年金で親子3人細々と暮らしているらしい」

「へえ、そうですか」

全く興味なさそうな金髪碧眼の男にディックは話しかける。

「帝国への反逆罪にも関わらず、不随になった夫への愛情深さに心打たれた皇帝が温情を下されたと、巷では評判だぞ、マルロー」

「温情ねえ……」

“息子に父と呼ばれない”

執事の願いは確かになかった。

けれど、醜い姿となり果てた満足に体の動かぬ男を抱えた貧しい

暮らしは、贅沢になれた母子にとって幸福だろうか。そんな妻子と暮らすあの男はどんな思いでいることだろう。

マルローに与えられる年金は年金貨3枚。ドレスを新調するどころか食べるだけで精いっぱい金額だ。そして、迷宮討伐軍の兵士が言い残した、「特級ポーションを数本使えば多少の回復が見込める」という言葉。

可能性がないならばあきらめもついただろうに。けれど働くことなど知らず、わずかな年金を食いつぶすだけの妻子がマルローの為に特級ポーションを用意する日はくるのだろうか。

妻子がマルローをどれだけ厭い邪険にしても、年金はマルローに支払われるのだ。妻子はマルローを手放すことはないだろう。

「私には質の悪い懲罰にしか思えません」

そう言つて、ただの平民となつたマルローは、ディックと別れ家へと向かった。

ウェイスハルトの諜報部隊として働くのならば、存在を抹消することはいづれ必要となつたことだから、マルローという存在をくれてやったことに未練などない。執事からはたつぷりと情報を引き出して帝都へ提出してあるから、その功あつてマルローの実家には何の咎めもない。マルローにとっては悪くない幕引きだ。

皇帝がベラート伯爵家に下した裁定は、彼らの犯してきた罪を思えば甘い処罰とさえ言える。

けれど。

「おかえりなさい、あなた」、「おかりなさい、お父さま」

夕暮れの迷宮都市に温かな灯りがもれる。暖かな食事と、妻と娘が待つ家だ。夫の稼ぎは良く妻子の身なりは華美ではないが整つていて、手の込んだ料理と掃除の行き届いた快適な家だ。そんな家に優しく立派な仕事をしている尊敬できる夫、父としてマルローは迎

え入れられる。

それはマルローが築き上げてきたもので、当然享受しうるものである。

(けれど、もし)

ふと浮かんだ考えを、マルローは封じ込める。これ以上は、貧しい中一人で娘を産み育てた妻への侮辱に当たるだろう。

「ただいま」

マルローはそう言って、家の扉を静かに閉めた。

「気がついちゃった」

雨の降りしきる裏庭でキャロラインの行方を捜した後、マリエラは師匠にそう呟いていた。

ジークが迷宮討伐軍にキャロラインの居場所を伝えに行っていて、今はマリエラと師匠二人きりだ。

「何に気づいたんだ？」

師匠がいつもより穏やかな口調で聞いてくる。

「うん。いろんなこと。でも一番はさ、《命の雫》かな」

そういうとマリエラは師匠と共に『木漏れ日』2階にある自分の工房へと上がっていった。

取り出したのは乾燥させたルナマギア。後はキュルリケにマンドラゴラに鬼棗、いつもの見慣れた材料だ。

《錬成空間、ウォーター、命の雫》

声も出さずにマリエラは《錬成空間》を展開し、魔法で生成した水に《命の雫》を溶かし込む。同時に別の《錬成空間》を展開し、水の入った《錬成空間》と細い管で結合する。

「ノズルはさ、簡単なのでいいんだよ」

上級ポジションをつくるために、いくつもノズルを取り寄せた。水だけを噴出するタイプで一番簡単なものは管の先端に小さな穴が開いたもので、穴の形に特徴がある。少し複雑になると、水の経路がジグザグしていて吹き出し口の直前に水だまりが作ってあったり、水の経路が複数あって、流速の異なる水が水だまりで渦を作ったりもする。水と空気を一緒に飛ばすタイプもいろいろあって、真ん中に水の管が、周囲に空気の管が通っていた。

なんとなく真似をして《錬成空間》でノズルを作って再現してみたけれど、分かったのは水同士があるいは水が空気にかき回されてノズルの出口付近で散り散りになっているようだという事だった。だから、水や空気の流れを変えて、ノズル出口を乱してやれば、噴霧の粒はもつと小さくなるのだろう。

けれど、それはあまりにも制御の数が多すぎた。

その日マリエラが《錬成空間》で作ったのは、水と空気を適当に送るだけの単純で使い慣れたノズルだった。水を自由落下させながら、空気で適当に吹き飛ばす。これならば吹き飛ばされた水滴を凍らせながらルナマギアの粉末とかきまぜるくらい簡単だ。けれど、水滴が大きすぎて、このままでは薄い抽出液になってしまう。

「別に、外側からだけ働きかける必要、なかったんだよね」

そう呟いたマリエラは、水に溶かした《命の雫》に魔力を込める。

《命の雫》は魔力を使って汲み上げるのだ。汲み上げた後だつて働きかけられないはずはない。どうしてこんなことに気が付かなかったのか。

ぱん、とノズルから噴出された水滴がはじけ飛び、霧より細かく分散する。とても小さい粒だから、はじけ飛んでも聞こえるほどの音量ではない。けれどマリエラの意識は水滴一つ一つの近くにあって、はじける小さな水音が、まるで鈴の音のように賑やかに聞こえた。

ぱん、ぱん、ぱん。しゃん、しゃん、しゃしゃん。

マリエラの作成した《錬成空間》の容器の中は、あっという間に霧が立ち込めたようになって、それが冷やされかき回されて、粘度の高い液体の中を細かい粉が動いているような、霧が意思を持って集まり動いているような、そんな様子に見える。そして真っ白だったその霧はルナマギアの微粉と触れてほんのり黄色に色づくとも霧雨のように容器の底へと集まっていた。

「……できた。こんな、簡単なことだったんだ」

今までは思いつかなかった、できもしなかったことなのに、何故できなかったのか不思議なほどに、マリエラはルナマギアの抽出を終えていた。

「マリエラ。最後まで終わらせてしまいな」

「はい。師匠」

上級ポーションの難関は、ルナマギアの抽出。これさえできればあとは簡単。複数の処理を同時に行い、マリエラは、錬金術スキルのみで上級ポーションを完成させた。

ライブラリが開かれる。

それは、ずっと閉ざされていたドアが、気がついたら開いていたような感覚だ。

白黒だった景色に新たな色が加わったようだという人もいる。青のない世界では青字で書かれた文字は読めないのだろうか。

新たに開示された知識をたどり、マリエラはたった一つ、求めるポーションを探そうとする。

「焦るな、マリエラ。まずは基本から。普通の特級ポーションからだ」

眼球特化型を探すマリエラに師匠が釘をさす。

「……はい」

特級ポーションの作り方はわかる。たった今わかるようになったけれど眼球特化型の特級ポーションの作り方は、おぼろげには分かるのに、はつきり読もうとしてみると途端にぼやけてあいまいになる。師匠の言う通り、基本の特級ポーションをつくれるようになるのが先決なのだろう。

「あ、師匠、材料」

「ああ、明日にでも迷宮討伐軍に用意させよう。何せ使うやつがいなかったんだ。100年分くらいはたつぷりため込まれているだろうよ。マリエラ、今日はとても頑張ったな。他にも気づいたことがあるんだろ？ それはとても大切なことだ。特級ポーションは明日からでいいじゃないか。どうせすぐに作れるようにはならないさ。だから今日くらい、ゆっくりしたらいいんだよ」

いつになく優しい師匠の様子に、マリエラはやっぱり師匠はすごい人だなと思う。

マリエラがやっと気づいた心の中まで、
師匠は見透かしていたの
だから。

顛末（後書き）

ざっくりあらすじ：特級ポーション、解禁

解放

アグウィナス邸襲撃から数日後、ジークは晴れて自由の身となった。

冒険者としての功績と、今回のキャロライン救出の功が認められてのことだった。ジークはめでたく解放されて、同時にAランク冒険者になったのだ。

主が錬金術師マジュエラだったこともあり、ジークの解放には引き続きマリエラの護衛を務めることなどいくつか条件が追加されたけれど、どれもジークの望むことだったので、手続きは何の問題もなく行われた。

ジークが自由の身になる『契約解除』の儀式の日、マリエラは朝からずっとそわそわしていて、奴隷商レイモンドの商館に行くだけだというのに、シャツから下着まで新しいものを下ろしてジークに着替えさせてみたり、靴や鎧をピカピカに磨いてみたり、忘れ物はないだろうかと鞆の中身を出したりしまったりおやつを入れて「いい袋にたっぷり詰めては、危険はないから」とジークに断られたりしていた。

当然ポーシオン作成などできたものではないから、今日のポーシオン作成はお休みだ。眼球特化型の特級ポーシオンどころか普通の特級ポーシオンもまだ作れるようになっていなくて、マリエラは何度もジークに「間に合わなくて、ゴメンね」と謝っている。

これほど落ち着かない様子でジークの解放を心待ちにしていたというのに、奴隷解放の儀式はびっくりするほど簡単だった。

「ああ、これはほとんど解けかけていますね。《契約解除》。はい、完了です」

「え？ 終わり？」

「……、特に変化はないのですが……」

契約をした時のように、炎舞い、風が渦を成して土を巻き上げ、杯から水が滴ったりするなか、「汝の血肉は汝のものなりー！」などと叫ぶものだと思っていたのに、奴隷商のレイモンドが、隷属刻印が押されたジークの胸元を、シャツの上からぼちっと触ってハイ終わりだった。

特にギャラリーなどもなく、ジークと付き添いのマリエラ二人が応接室らしき部屋に通され、書類にサインをした後、判子でも押すような気軽さでぼちっと解除である。

レイモンドにやる気がないのかと言えばそうではない。レイモンドは見たことがないほどにこにこと嬉しそうな表情でマリエラとジークを交互にみていた。

「変化がないのは、隷属契約が解けかけていたからでしょう。ジークムントさんの隷属紋にはマリエラさんの魔力がほとんど感じられません。ほとんど《命令》をしてこなかったのではありませんか？」

「え、ええ、はい」

そう言えば、ジークに命令したのは「錬金術師だと言わないで」という最初の一つだけだったなとマリエラは思い出す。マリエラとジークの暮らしには、《命令》なんて必要なかったのだ。それはマリエラにとって当たり前のことだったのだけれど、レイモンドにと

っても一般的な事例においてもとても珍しいことだったようだ。

「おお。それは素晴らしい。隷属紋は人工的に付与したものの。自然の形ではありません。ですから、定期的に主の魔力を流さないと効力が薄く、弱くなっていくのです。耳飾りを付けるために耳に穴をあけたとしても、飾りを付けずに放っておけばやがてふさがってしまうでしょう？ それと同じです」

隷属契約ってそんな簡単なものでいいんだろうか。《命令》しなければ薄くなるなら、勝手に解放されていたり逃げ出したりと、運用上問題が生じるのではなからうか。

そんなマリエラの疑問に答えるようにレイモンドが話をつづけた。

「隷属契約の拘束力というのは、主が意識的に魔力を込めた《命令》だけに働くものではないのです。普段話す言葉には少しだけですが魔力が宿っているのです。相手を従わせよう、言うことを聞かせようと放った言葉は隷属紋を通じて奴隷の言動を縛ります。それが奴隷の意にそぐわないものであればあるほど強力に。そして隷属契約も深く根強くなっていく。」

これは私の持論ですが、命令という物は言動を縛るだけではない。意思を捻じ曲げ行動を強制することで、その人の人となり、心のあり様を少しずつ歪めてしまふものだと思っています」

レイモンドの口調は穏やかだけれど、その言葉には強い思いが込められているとマリエラには感じられた。これが込められた魔力なのかもしれない。ちらと隣に座るジークを見ると、思うところがあるのだろう、レイモンドの言葉に熱心に耳を傾けていた。

「けれどジークムントさんにはそれが無い。失礼ながら私が隷属契約を施させて頂いたときは、前の主の影響が随分と歪いびつに感じられた

のですが、それすら今は感じられない。あなた方の関係がお互いへの愛情で満ちていたからなのでしょう。な。

隷属契約よりずっと強い絆で結ばれているならば、隷属契約など何の意味もなさないものです」

レイモンドは奴隷商などやってはいるが、根はとてもいい人なのだろう。隷属契約よりも強い関係を目の当たりにしたと大層嬉しうである。愛情で満ちているなんて言われてしまって、マリエラはなんだかとても恥ずかしいのに、ジークまで「はい。俺はこれからマリエラを守り続けます」なんて真顔で答えているから、マリエラは耳まで真っ赤になってうつつむいてしまった。

そんなマリエラに優しい視線を向けた後、レイモンドは「ところで」と表情を引き締めてジークに向かい合った。

「こちらを。ジークムントさんの以前の主であった商人の罪状記録の写しです」

差し出された書類をジークムントは受け取ると、さっと目を通し始めた。

ジークの前の主であった商人親子は、迷宮都市でアグウィナス家の工房を襲撃し、捕縛された。それだけ見ても重罪だ。しかも、彼らが連れていた借金奴隷の状態から虐待その他余罪を追及した結果、多くの犯罪が明るみに出た。

その中に、商人の息子を救出した奴隷に、魔の森を抜ける隊商計画失敗の責任をかぶせ、商人の息子を危険にさらしたと虚偽の訴えを起こした件も明記されていた。

人権が保障された借金奴隷を多数死なせた、ポーションもなしに魔の森を抜ける隊商計画は、商人の立場を危ういものにしてきたのだ。

「自分たちは一人の奴隷に騙されたのだ。自分たちも被害者だ。その奴隷のせいで息子まで大怪我を負ってしまった」

そんな無謀な言い分は、多額の金を積むことでまかり通った。死んだ奴隷に罪をねつ造するのは、いささか無理があつたのだろうが、幸い一人生き残り、さらに都合よいことに高熱で意識が不明瞭な者がいたのだから。

そう、ジークムントだ。

「あなたの冤罪は証明されました。商人親子の私財から賠償金が支払われるでしょうが、この隊商計画の失敗以降随分と資金繰りが悪化しているようでして、今回迷宮都市に赴いたのも一攫千金を狙つてのことだったようです。他にも今回の襲撃を強制され殺されかけた奴隷など被害者は多くいますから、賠償金の額は期待できないでしょうな」

レイモンドが伝えたかったのは「冤罪が証明された」ということだけだろう。Aランカーの冒険者の稼ぎは良い。逆にその名譽は、多少の賠償金などで贖^{あがな}えるものではない。

「賠償金は結構です。その殺されかけた奴隷たちで分けてください。冤罪が証明されただけで十分だ」

ジークは静かにそう答える。その回答を試すかの如く、レイモンドはこう続けた。

「そうですか。ところでその商人親子ですがね、犯罪奴隷に墮とされまして、今この商館にいるのです」

「買いますか？ 復讐できますよ。貴方の受けた屈辱を、恐怖を、時折その身を支配する御し難い憤怒をすべて晴らすことができますよ？

レイモンドはそう尋ねているのだ。

商人親子の罪状記録がこの場に用意されたことも、商人親子の売買を持ちかけたことも、いや商人親子の余罪を追及しジークの冤罪を晴らしたことからして、キャロラインを助けたジークに対するウエイズハルトの計らいなのかもしれない。

けれど、ジークはわずかに躊躇ためらうこともなく、きっぱりと答えた。「いいえ。俺は今まで時間を無駄にしすぎた。もう、そんなことに構っていただくはありません」

「そうですね。これは出すぎた提案を。また人手が要りようになられましたら、ぜひとも当商館にご用命ください」

奴隷商レイモンドは慇懃に頭を垂れる。ジークはすでに奴隷ではない。Aランカーの身分を持つ冒険者で、奴隷商の顧客足りうる人物だ。

「帰ろう、マリエラ」

「うん！」

奴隷ではなくなってしまうたジークの、変わらない「帰ろう」という呼びかけに、嬉しそうにマリエラが答える。

「ああ、でもちよつと寄るところがあるんだな」

そして、なんだかちらちら、ジークを見たりしている。さりげなさを全力で装っていて実に不自然だ。

「『ヤグーの跳ね橋亭』か？」

「う、うん。そうだけど……？」

もごもごと下手糞なごまかし方をするマリエラ。『ヤグーの跳ね橋亭』でジークの解放記念のサプライズパーティーを計画している

ことなど、ジークにはバレバレだ。決定的だったのは、いつもマリエラにくつついている師匠が、「先行ってるから、早くな！」などと言いながらウキウキ顔で出かけた点だ。ばれない方がどうかしている。

来た時と同じ距離感で帰っていく二人を温かく見守りながらレイモンドは、「またのお越しをお待ちしております」といつもの台詞で見送った。

『ヤグーの跳ね橋亭』へと向かう道すがら、ジークはマリエラにぼつりと話した。サプライズパーティーに合わせて家を出てきたから日は沈みかけていて路上には二人の影が長く伸びている。

「マリエラ……、リンクスな……」

「うん……」

ゆっくりと二人並んで歩きながら、マリエラは長く伸びる影を見つめる。まるで、迷宮都市に初めて来た日、リンクスと二人歩いた時のようだ。

「リンクスは、マリエラのことを好きだったよ」

「うん……」

リンクスはAランカーになったら、マリエラに気持ちを伝えるんだと言っていた。だから、これは残された自分が、今伝えるべき言葉だとジークは思っていた。

マリエラは、じつと足元の影を見つめていて、どんな顔をしているのかはわからない。

「マリエラ。俺も、マリエラが好きだよ」

そしてこの気持ちも。きっと、今伝えなければいけないのだろう。

「ジーク……、あのね。キヤル様をさがして、《命の雫》をたどったあの日ね……」

意を決したジークの告白に、マリエラはぽつりぽつりと言葉を繋ぐ。

「一生懸命キヤル様をさがして、どうにか見つけたあとね、私、雨粒と一緒に地面に落ちていったんだ」

目的のキヤル様はみつけたのだから、何度も空にもどる必要はない。そのまま雨粒と一緒に降り注ぎ、大地へ浸み込んでいったのだ。まるで、《命の雫》が地脈に還るように。

「その時、ちょっと思っっちゃったの。地脈に行けばリンクスに会えるかなって」

マリエラのその言葉にジークは静かに息を呑む。

「……会えたのか？」

失った大切な人に再び会える。それはなんと甘美なことだろうか。

「ううん。会えなかった。でも、会えるかなって思ったら、どんどん、どんどん地脈の方へ沈んで行ったの」

薄く広がったマリエラの自我はとても希薄なものになっていて、記憶も感情もひどく不確かなものだった。このまま行ったら戻れないとか、キヤル様を助けないととか、そういった明確な意思や思考は肉体に置いてきてしまったかのようにおぼろげでうまく認識することができない。ふわりふわりと眠りから覚める前のまどろみのような穏やかさだけが、深く沈み込むほどにマリエラを満たしていたのだ。

「でもね、その時、聞こえたよ」

ジークのマリエラを呼ぶ声が。

「帰りたたって、思ったよ」

それが、今のマリエラの精いっぱいの答えなのだろう。

あの時は、なんだかとおつても気恥ずかしくて、「おにく」なんて言ってしまったけれど。

マリエラは気付いてしまったのだ。

けれど、だからどうしたいかなんて、まだマリエラにはわからない。

影を見ていたはずのマリエラは、いつの間にかジークの方を向いていた。照れくさそうに微笑む顔は、夕日に照らされて紅く輝いて見える。

「そうか」

「うん」

そんなマリエラの返事でさえも、ジークには満足な物だったのか、二人は再び『ヤグーの跳ね橋亭』へと歩を進めた。

そんな二人を夕日が温かく照らしていた。

しばらくしてから。

いつもと全く変わらぬ様子で『木漏れ日』で暮らすジークのもとに、一つの情報が寄せられた。どうやらこの街には、ジークを気に掛けるおせっかいが何人もいるらしい。

情報はアグウィナス家の工房を襲撃した商人親子のものだった。奴隷に落ちた親子を買ったのは、商人の奴隷だった男だという。アグウィナス家の工房襲撃を命令されたその男は、商人の奸計によって本来の期間より長く奴隷の身分に据え置かれていた。商人の罪が明るみに出たことにより、解放された一人だという。

「俺にはもう、何も残されてはいないのだ」

奴隷商館を去る際にそう言い残した男に、一体何があったのか、知るものは誰もいない。

男は購入した商人親子を連れて迷宮へと入っていったという。そして、その後、商人親子とその男を見た者は、ただの一人もいなかったという。

解放（後書き）

ざっくりあらすじ：：1巻発売日にまさかのハッピーエンド！？
ではありません。まだ続きます。

*****の物語 その1

~~~~~の物語 その1

むかしむかし。

この地に人間の国が出来るよりもずっとむかし。

とある深い森の奥に、森の精霊の女王様が、魔物や動物たちと一緒に暮らしていました。

森はとても豊かで、動物たちはとても優しく、魔物もほかの土地よりもよっぽど穏やかです。

森の精霊の女王は木々の間を獣や魔物と駆け回ったり、鳥たちと一緒に歌ったり、精霊の子供たちとお花畑で踊ったりして、静かに楽しく暮らしていました。

あるとき、精霊の子供たちに呼ばれて精霊の女王がお花畑に向かうと、そこに一人のにんげんが倒れていました。

そのにんげんは弓で獣を捕まえて暮らす狩人で、魔物に深い傷を負わされてここまで逃げてきたようでした。

森では小さな獣は木の実や虫を食べますし、大きな獣は小さな獣を食べて生きています。

だから魔物がにんげんを食べるのだって、森の営みの一つです。

「ニンゲン、タベル。オレノ、エサ」

そう言って狩人を食べようとする魔物に向かって、精霊の女王は言いました。

「私にちょうだい。ちょうど人手が必要だったのよ」

精霊の女王はうつすらと開いた狩人の蒼い瞳をみて、一目で気に入ってしまったのです。だから、精霊の女王は狩人の傷を治してあげました。

精霊の女王は知らなかったのです。にんげんという生き物が、森のどの生き物よりも賢く、優しく、感情豊かである事を。

「ああ、なんてきれいなひとなんだ」

目覚めた狩人は、精霊の女王を見て言いました。精霊の女王を見つめるその瞳は深い、深い蒼。空よりも湖よりも深くて綺麗な瞳には精霊の女王が映っています。

「まあ、なんて綺麗な瞳。なんて素敵なのでしょう。」

狩人の美しい蒼い瞳に、楽しそうに話す笑顔に、くるくると変わる感情に、彼女をいたわる優しさに、様々なことを考え付く賢さに、精霊の女王は夢中になります。

こんなに繊細で豊かないきものを精霊の女王は知りませんでした。気がついたときには、精霊の女王は狩人のことが大好きになっていました。

それは狩人も同じ事。

二人は恋に落ち、深い森の中で仲良く一緒に暮らしました。

\*\*\*\*\*

「あら、エミリーちゃん、本読んでるの？」

「うん。シェリーちゃん。エミリー、このお話だーいすきー！」

「英雄の話にしようぜー。ドラゴンやつつけるヤツ」

「ほく、つづき聞きたいー」

今日も『木漏れ日』には子供たちがたむろしていかましい。みんなそれぞれ言いたいことを喋っていて、会話は微妙に噛み合っていないのだが、そこはどうでもいい事らしい。話がそれぞれ別方向に向かつて言っても、なぜか同じタイミングで笑い合っていて実に楽しそうだ。語学力とコミュニケーション能力は別物であるという良い例だろう。

エミリーたちの通っている学校には、小さいながら図書室があった。シューゼンワルド辺境伯家をはじめとする貴族家や裕福な商家から寄贈された本を借りることができる。学校で少し難しい字を覚えてエミリーは、図書室の隅っこにあった古びた児童書を借りてきて、読み聞かせを行っているようだ。

こういう場になると、どこからともなく湧いてきてうんちくを垂れ流す我らが師匠は、話が一段落した今も、『木漏れ日』の店内に姿を見せない。

師匠は今、取り込み中なのだ。

何しろ、<sup>からか</sup>揶揄いがいもシゴキがいもある愛弟子が、2階の工房で絶賛悪戦苦闘中なのだから。

「うぬーっ！！！」

「ほれ、マリエラ。もう一息！ がんばれ！」

何日もお通じが来ていないようなうめき声をあげるマリエラと、適当な声援を送る師匠。師匠はもう一息などと言っているが、一息どころか百も千も足りていない。それでもマリエラはふんぬふんぬと顔を真っ赤にして《命の雫》と地脈の欠片が入った《錬成空間》をぎゅっぎゅっとうと圧縮している。

「ぬーつつつ！！！！！！」

声を上げたり顔が真っ赤になるほど力んでも、《錬成空間》の操作にはあまり関係ないのだが、声を出さずにはいられない。何しろちよつとやそつとの圧力ではないのだ。

ボンツ。

《錬成空間》のほんの少し薄い場所が裂けて、中の《命の雫》と地脈の欠片がはじけ飛ぶ。

カカカカンツ

《錬成空間》の中は高压だったから、《錬成空間》のはじけた衝撃は爆発のようだ。《命の雫》自体は《錬成空間》から吹き出すと同時に大気に解けて消え、体積が無くなってしまつから爆風自体は大したことはないのだけれど、勢いよく飛び出した地脈の欠片は弾丸のように飛び散つて、人の体くらい簡単に貫通する勢いだ。

だから、マリエラが操作していた《錬成空間》の外側には、師匠が《錬成空間》で壁を構築してくれている。師匠が構築した見えないう壁に跳ね返されて、激しく跳ねまわつた地脈の欠片は《命の雫》にいくらか溶けていたせい、じきにぽすんと割れて解けるように消えてしまった。

マリエラの《錬成空間》では絶対に防げない弾丸のような地脈の欠片を師匠の《錬成空間》はどうしてたやすく弾くのか。そもそも師匠の作つた壁は、本当に《錬成空間》なのか。一度尋ねてみただれど、「さあ？」と真顔で首を傾げられたから、師匠にとっては無意識でマリエラには使えない何かなのかもしれない。

「また失敗……」

「はっはー。残念！ まあ、めげるな！ 材料は一杯あるんだ。次行ってみよー！」

「むう、師匠！ 何かアドバイスクださいよー！ 地脈の欠片、一

杯あるけど高いんですから！」

本日何回目の失敗だろう。マリエラの工房には小指の先くらいの小さな地脈の欠片がバケツに何杯分も置いてある。すべてアグウイナス家から買い取ったものだ。

アグウイナス家は調査・研究目的でこの200年間ずっと地脈の欠片の買い取りを行ってきた。アグウイナス家の地下で目覚めた錬金術師の中には特級ポーションが錬成できる者もいたのだが、全員がそんな高位の錬金術師だったわけではない。特にこの100年ほどは、特級ポーションがつかれる錬金術師は一人も目覚めていなかった。

けれど、アグウイナス家には幾つか妙な家訓があつて、その一つに『地脈の欠片はすべて買い取り保管せよ』とあつたので、変に律儀な一族は代々地脈の欠片を買い取っては冬眠前のリスのようにせつせと穴倉にため込み続けていた。

そう、ロバートがキャロラインを匿っていた、東の森の隠し部屋である。

ロバートが椅子代わりに腰掛けていた箱は、地脈の欠片がたつぷりと詰まった宝箱だったのだ。

キャロラインの誘拐事件は、表向きにはロバートが家督を引き継いだキャロラインにこの隠し財産を引き継ぐために秘密裏に連れ出したのだと記録された。キャロラインは誘拐されたのではなく、自分の意思で出かけたが、連絡の不行き届きで少し騒ぎになってしまった、という訳だ。

引き継がれた地脈の欠片は、アグウイナス家が買い取ってきた価格に多少の利益を乗せて迷宮討伐軍とマリエラがその大半を買い取った。地脈の欠片は帝都では1粒大銀貨1枚で取引される高価な品

だ。1粒で上級ポーションが買えてしまう。けれど錬金術師がいなかった迷宮都市ではただの綺麗な石ころだったから、買取価格は十分の一の銀貨1枚。討伐の苦勞に見合う額ではないが、使い道のない石ころにしてはマシな値段で引き取られていた。

それが迷宮を擁する街のおよそ100年分なのだ。何万という数の地脈の欠片が貯め込まれていて、マリエラが使い道もなくなため込んでいた金貨を半分近く費やしても、その半分も買うことはできなかった。

逆にアグウイナス家はマリエラと迷宮討伐軍の購入で、思わぬ臨時収入を得ることができた。アグウイナス家はキャロラインとウエイスハルトの婚約が決定していて、主筋にあたるウエイスハルトを婿に迎えるため、少なからぬ出費が見込まれていたから、渡りに船の収入だった。

魔物除けポーションによって魔の森が通行できるようになったのだ。シューゼンワルド边境伯の領都や帝都に挨拶に行く必要があるし、そうになると迷宮都市内でお披露目のようにドレス数枚仕立てれば済むというものではない。主役のウエイスハルト、キャロラインだけでなく同行する家人の装いから、乗り込む馬車や持参する持ち物に至るまで、家格にふさわしいものを用意する必要がある。

結婚後だって今までのようにポーションの収入があるわけではないのだから、土地を得るにせよ、事業を始めるにせよふさわしい暮らしが成り立つように、投資の元手は必要だった。

そんなこんなで、師匠に言われるがまま景気よく金貨を費やして地脈の欠片を買い込んだマリエラは、師匠に煽られるがまま特級ポーションの練習に励んでいた。

毎日、百近い地脈の欠片を消費しているのだ。大変な浪費っぷりである。

失敗した地脈の欠片は泡か煙のように消えてしまうから、バブル

がはじけたという方が正確かもしれない。

金貨がはじけ飛んでいくような有様に、毎日肉を採ってきてくれるジークのありがたみがマリエラのなかでダダ上がりである。こちらもバブルなのかもしれない。泡と消えないことを祈りたい。

「うあー！ また失敗ー！」

ジークの価値が泡と消える前に、新しくマリエラが溶かそうとした地脈の欠片がまた一つ泡と消えた。

上級ポーシヨンで一番難しい工程が、ベースとなるルナマギアの抽出だったのと同じように、特級ポーシヨンでも地脈の欠片を《命の雫》に溶かす工程が一番難しいのだ。

であるのにも関わらず、師匠の「じゃー、やってみよー」という間の抜けた呼びかけで、そういう物かと疑問も持たずにスキルだけで錬成を始めたマリエラ。

幼いころからの習性とは恐ろしいもので、師匠が「できる」といえば、できるものだと思ってしまう。

《命の雫》は《錬成空間》以外で物質に触れると煙のように解けて消えてしまうのだが、《錬成空間》内で取り扱うとその性質は水にも油にも溶けることを除けばほとんど水と変わらない。

水を高温高压にするとある温度と圧力を境に気体とも液体ともつかない状態になって、普通では水に溶けたりしない物でも溶かし、分解してしまうのだけれど、《命の雫》をこの状態にしたものに地脈の欠片は溶けるのだ。

もつとも、ここまで温度や圧力を上げなくとも、時間を掛ければ砂だって水で溶けて固まり硬質な石に姿を変えるように、いくらか低い温度や圧力でも地脈の欠片は少しずつ《命の雫》に溶ける。この少し溶けた状態の地脈の欠片を《命の雫》の外に出してしまうと、



ぷすんと弾けて消えてしまうのだ。ちなみに、地脈の欠片をたたき割ると、全体が細かい粒に弾け割れ、次の瞬間にはこれまた大気に解けてしまう。だから細かく粉碎して溶けやすくする方法もとれなくて、マリエラはこのところ毎日、地脈の欠片をいれた《命の雫》をぎゅーぎゅー圧縮しているわけだ。

《命の雫》を圧縮するだけなら地脈の欠片を入れなくてもいいと思うのだけれど、なぜか師匠は許してくれない。

「あああああ！ 難しい！」

「……あたりまえだ」

マリエラの叫びに、思わず突っ込みを入れているのは、師匠の後ろで召し使いよろしく立たされていたロバートであった。

「そもそも……」

「ローブー、マリエラの邪魔すんなー」

ビシビシビシビシ、ビシバシビシビシ。すかさず師匠のデコピン攻撃が炸裂する。

「あつ。痛っ！ 痛い痛い痛い痛いー、痛いですって、ゴメンナサイー！」

「お前さー、金返すまで下僕って言ったろ？ わかってるー？」

「ヒイ、ハア。ですから、お金なら爺が……」

「それは、家の金だろ？ つまりキヤルちゃんの金。もうお前の金じゃねーの。自分の借金、妹に返さすなんて恥ずかしい真似しねえよなあ？」

「で、ですが、一体いつまで……」

「ああん？ お前、借金には利子が付くって知らねえの？ 細けえこと言ってるよ、燃やすぞ？」

「スッ、スイマセン……」

師匠とロバートのやり取りを呆れたように眺めるマリエラ。  
キャロラインの誘拐事件の数日後、なぜか師匠がロバートを連れ  
てきたのだ。

「貸した金の分、働かせる」  
とか何とか言っ

そもそも師匠がロバートに貸したお金はハーゲイに借りたものだ  
し、ハーゲイにお金を返したのはマリエラだ。師匠は一銅貨さえ出  
してはいないはずなのだ……。

初めて連れてこられた日のロバートは以前地下室で見かけた時よ  
り顔色が悪く、目の下に隈ができていて、どこか一点を見つめては  
ぶつぶつ何かつぶやいている、少し気持ちの悪い人だった。呪いの  
コントロールがもはや上手くできないのか、ふとした拍子に目が据  
わって、所かまわずマーキングする犬か何かのように、あっちぼろ  
ぼろこつちぼろぼろ呪いをこぼしていた。

その度に、師匠の「ファイヤー！」やらデコピン攻撃が炸裂して  
叱り飛ばされていたのだから、騒がしくてかなわなかった。

ちなみに師匠の「ファイヤー！」が炸裂するたびに、ロバートは  
火柱に包まれるのだが、なぜか火傷もしないし、髪もチリチリにな  
ったりしない。たまに炎に舐められ軽く肌が赤くなったり、洋服は  
少し焦げたりするだけだ。別に袖や裾が焦げていたってかまわない  
とマリエラは思うのだけれど、ロバートは我慢ができないのかその  
たびに新しい、まったく同じデザインの服に着替えていて、師匠に  
「借金に加算しとくからな！」と言われている。利子も乗るから雪  
だるま式だ。

ロバートは毎日、アグウイナス家に帰っていて、家督を継がない  
以外はアグウイナス家の人間であることに変わりはないし、ロバー  
トの服はアグウイナス家が準備しているから、本当はタダなのに師  
匠のヤクザっぷりは大したものだ。

けれど、師匠が「ファイヤー！」するたびに、ロバートが呪いをこぼす頻度は減ってきていて、なんだか気持ちの悪い感じも薄まってきたから、マリエラも『木漏れ日』の常連たちも師匠の好きにさせている。

なによりも。

「えい！ あ、ゴミ箱入んなかった。ロブ、入れといて」

ゴミ箱にゴミを放り込み、外すどころかゴミ箱をひっくり返しては中身を捨わせるような、師匠の理不尽に付き合わなくて済むのは大変ありがたい。

(さーて、師匠はロバートさんに任せて、もう少しがんばるかー！) 面倒くさくて手のかかる師匠の相手を任せられただけで満足して、マリエラは地脈の欠片を溶かす工程を再開する。

ロバートが言いかけ、師匠が遮った情報にマリエラは気が付かない。

帝都では、地脈の欠片を《命の雫》に溶かす工程を、《錬成空間》だけで行ったりはしないのだ。なぜなら圧力が高すぎるから。《錬成空間》は分厚い金属の容器の内側に張り巡らせるだけで、それすら錬金術師が一人以上張り付く。指が一本入る程度の穴を金属の塊に開けたような金属容器に《命の雫》と地脈の欠片を10個入れて、上からぴったり同じ内径の金属製のピストンを押し込み、上から数百キロの荷重をかける。そして金属製の容器を外側から加熱するのだ。

マリエラが眠っていた200年の間に、容器の材質や加圧方法、加熱方法など多くの進歩が見られたけれど、容器を使い、機械的に

圧力を掛けるといふ方式自体は変わっていない。

そして200年の進歩によっても、地脈の欠片を完全に溶かせる温度と圧力に《命の雫》を制御することはできていない。だから、理論上では1粒で足りる地脈の欠片を10粒も使って何とか1本分の地脈の欠片を溶かしだす。

それほどの難易度なのに、師匠はマリエラにスキルだけで地脈の欠片を完全に溶かせと指示しているのだ。

（なんだろなー、ルナマギア抽出液の時もそうだったんだけど、単に外から押さえればいいってものじゃない気がする……）

こつん、と指先で地脈の欠片をはじくマリエラ。キラキラしてとてもきれいだ。よく見ると一つ一つ形も大きさも色や光具合も少しずつ違う。まるでラプトルやヤグーみたいだ。はじめはどれも同じに見えたけれど、仲良くなってみると個体ごとに見分けがつくようになってくる。

（ああ、そうか……）

なんとなく、ヒントを掴んだ気がしたマリエラは、地脈の欠片を一粒手にとり包み込むように取り握りしめた。

\*\*\*\*\*の物語 その1（後書き）

ざっくりあらすじ：特級チャレンジ。ロバート、師匠にじつけられる。

\*\*\*\*\*の物語 その2

\*\*\*\*\*の物語 その2

やがて、森の精霊の女王と狩人が住まう森に、狩人の家族や友達、その家族やさらに友達が集まって、小さな村ができました。狩人の家族や友達も、みんな優しくいい人ばかり。

森の魔物のように噛み付いたりはしませんし、森の獣よりもよく働いて快適なすみかをつくります。

鳥たちよりもたぐさんの歌を精霊の女王に教えてくれて、精霊の女王だけでなく友好的な森の動物たちや精霊たちとも仲良く一緒に暮らしていました。

村に住む精霊も動物たちも、にんげんたちが大好きで、みんなが力を合わせて楽園のような村が出来上がりました。

たぐさんの仲間たちに囲まれて暮らす、精霊の女王と狩人はかわい男の赤ちゃんにまで恵まれて、二人は幸せいっぱい。

しかし、そんな幸せは長くは続きません。

とてもとても残念な事に、魔物とにんげんは相容れないものなのです。

今までは精霊の女王たちと楽しく暮らしていたのに。

魔物達は精霊の女王たちと楽しく暮らすにんげんが憎くてたまりません。

今までは森の一部で、自由に駆け回っていた場所は、今では村に

なっていて魔物が入ることができません。

村は広い森のほんの一部だけれど、自分たちの場所を奪われた魔物たちは、にんげんが憎くてたまりません。

怒った魔物達は、ある日、自分たちの居場所を取り戻そうと襲ってきたのです。

\*\*\*\*\*

「村はどうなっちゃったのかなー？」

「村？」

「うん。精霊の村。魔物に襲われたの」

「今日、エミリーが森の精霊の女王が出てくる本を読んでもくれたんだよ。母さん」

「まあ。あのお話ね。じゃあ、続きは母様がお話してあげましょうか？」

「んーん。いい。また明日ねって約束したから」

眠る前の他愛のない親子の会話。そんな時間を楽しんだ後、エルメラは夫ヴォイドのいる居間へと戻っていった。

「子供たちは？」

「眠ったわ」

寄り添うようにヴォイドの隣に座るエルメラ。机上にはそれぞれに向けた令状が置かれていた。迷宮討伐軍からの2度目の赤竜討伐への参加を要請するものだ。前回はエルメラにだけ届けられた令状が今回は2通。ヴォイドの分も加わっている。

「令状にはなんて？」

「前回と同じさ。迷宮都市の未来のために助力を請うと書いてある。持参した兵士も丁寧なもので、脅しも強制もしなかったよ」

エルメラの問いにヴォイドが書状の中身を掻い摘んで答える。

前回の赤竜討伐は失敗に終わった。駆け付けたヴォイドとレオンハルトの英断によって死者を出すことはなかったが、空を飛ぶ相手に対して手も足も出ない状態だった。あれから1月以上経過したけれど、赤竜を大地に引き摺り下ろす方法は見つけられてはいない。

赤竜は魔法の射程をあらかじめ理解したようで、射程内には入ってこない。けれど赤竜のブレスは重力に従って降下するから魔法よりはるかに射程が長い。帝都からバリスタを取り寄せたりもしたけれど、赤竜の階層の出口が1か所に限定されることと素早い移動ができないことから、赤竜に狙いを定めるより先に、赤竜のブレスで焼き尽くされる有様だった。

「今回は僕が行こう」

「駄目よ、あなた！ そんなことをしたら……」  
参戦を表明するヴォイドをエルメラが止める。

「大丈夫だよ、エルメラ。僕は君を忘れたりなどしないから。君と過ごした時間は、出会った時から、ちゃんと覚えているからね」

エルメラの肩を抱き、優しく語りかけるヴォイドにエルメラは体重を預ける。その顔はほんの少しの不安に揺れていた。

\*\*\*\*\*



エルメラがヴォイドに出会ったのは、この街の迷宮の深い階層だった。魔物が蠢く危険な階層で岩に腰掛けボンヤリと佇む男に、エルメラが声をかけたのだ。

「そんなところで、じつとしていると危ないわよ」

声をかけてから、エルメラは随分と間抜けな声のかけ方だと思っただ。ここは迷宮の深部で、安全地帯である階層階段からも遠いから、力のない者なら生きてたどり着ける場所ではない。

危険を承知し立ち向かう力のある者に、かける台詞ではないだろう。

けれど男は「そうだね、君も早く帰るといいよ」と夕暮れの公園で子供に掛けるような言葉を返した。

翌日も、その次の日も男は同じ場所に腰掛けていた。エルメラの方もなんだか男が気になって毎日様子を見に来ていたのだ。

「ねえ、いつまでそこにいるつもり？」

そう尋ねるエルメラに「すべて消えてなくなるまでかな」と男は答える。

エルメラが名前を尋ねると、少し考えるしぐさをした後「ヴォイド」と答える。

名前を問われて考える仕草から、「偽名かしら」とエルメラは思った。しかも瞳はとつても虚ろで、まるで死ぬために迷宮深くに座っている様に思えた。だから心配で様子を見に来ているのに、毎日変わらぬ様子で佇んでいる。

ヴォイドと名乗った男は、魔物が蠢く迷宮に全く似合わないほど

物静かで、けれどもなぜか会話がかみ合わなかった。昨日も会ったというのに、いつも初めて会うような、そんな顔をして話すのだ。けれど、ヴォイドの穏やかな雰囲気、エルメラはほとんど好きになっていった。迷宮の深部だというのに、ヴォイドのそばにいただけでなんだかとても安心できるのだ。

『雷神の加護』に恵まれたエルメラは、常に薄く電気を纏っていて、素肌に触れば強い静電気がはしる。彼女に気にせず触られるのは、静電気にすっかり慣れた家族くらいのものだった。だから幼いころから戦闘時以外は素肌を見せない格好で、周囲の人間に不快な思いをさせないように常に気を使って生きてきた。

けれどヴォイドはエルメラの静電気さえ全く気にならない様子で、エルメラを迎えてくれる。

そんなヴォイドの秘密が明らかになるのに、さほど時間はかからなかった。

ここは迷宮の深い層。常に強い魔物が徘徊している。そして時には常時より強い魔物が湧くこともある。

危機に陥ったエルメラをヴォイドが文字通り身を挺してかばってくれた。そのまま魔物を倒したヴォイドの傷は致命傷に見えたのに、瞬く間にふさがって消えてしまった。襲い来る魔物のあらゆる攻撃は、ヴォイドのスキル《虚ろなる隔たり》によってすべてかき消されてしまう。

こともなげに魔物を倒したヴォイドは、エルメラを振り返って穏やかに笑うと、

「大丈夫かい？ お嬢さん」  
と声を掛けた。

ヴォイドは、エルメラのことも、エルメラと過ごした数日もすっ

かり忘れ去っていた。

『隔虚』と呼ばれるSランク冒険者について、エルメラは聞いたことがあった。鉄壁の防御と超人的な回復力を誇る無敵の盾であるという。

「体が回復するたびにね、記憶が消えていくんだよ。言葉や社会規範みたいなのは忘れないんだけどね……」

問い詰めるエルメラに、ヴォイドはいつもと変わらず穏やかに答えてくれた。彼の手には一冊の本が握られていて、中には小さな字でぎっしりと文字がつづられていた。彼の日記だ。便宜上「忘れる」と表現しているが、記憶は忘れるのではなくて消えてしまうから、思い出したりすることはない。

少しでも大切に感じたことを残そうと書き始めたという日記の新しいページにはエルメラのことがびっしりと書き綴られていた。

「まさか、自分の名前も忘れるなんてね」

自分の名前を失うなんて思わなかったから、日記のどこにも書いていなくてね。そう言って笑うヴォイド。

「帝都には、僕の親兄弟だと名乗る人間が、とてもたくさんいるらしい」

印のつけられたページには、そんなことが書かれていた。

騙されて、騙されて、騙されて。

騙されたことさえ忘れ去って、自分の名前さえ思い出せない。

無敵で鉄壁、至高の盾ともてはやされても、そのすべてを覚えていない。

敵の攻撃すべてを飲み込む《虚ろなる隔たり》の向こう側に、思

いも記憶も自分を自分たらしめる全てが吞まれてしまったようだ。

それならば、すべて吞まれてしまえばいい。そう思って迷宮こくに座っているのだと、日記のページに記してあった。言葉も戦い方も自分が人であったことさえ、すべて無くしてしまうまで。

「泣かないで、エルメラ。僕は平気なんだから」

はらはらと涙をこぼして泣くエルメラにヴォイドは優しく声を掛ける。

「それは、喜びも悲しみも、全部忘れてしまったからだわ」

優しい人だとエルメラは思う。彼の日記からは幾度も騙され傷ついた記録が読み取れるのに、それでも傷ついたのが自分だけで良かったと、そう思える人なのだ。

「泣かないで、エルメラ。君たちは僕ほど治りが早くない。体も、心もね。だからそんなに悲しまないで」

それは違つとエルメラは思う。傷ついた記憶さえ無くしてしまうのは、きつと傷つくことより悲しいことだ。だから、この人はこんな迷宮の奥底で一人座っているのじゃないか。

「それは違つわー!」

感極まつてヴォイドに抱き着くエルメラ。ヴォイドが悲しまないことが、彼女にとって何より悲しい。

感受性豊かな若い娘が涙を流すほどに感情を高ぶらせているのだ。そりゃあ、雷のコントロールも甘くなるろう。

ババババリバリバリイッ!

「あつ! ご、ごめんなさい!」

ごめんなさいで済む電圧ではない。相手がヴォイドであつたから、

一瞬煙を吐き出しただけですぐに元に戻ったけれど、通常であれば治癒魔法師の元に駆け込まなければいけない惨事だ。こんなことにならないように、幼少の頃から人と距離をとって制御に努めていたというのに。

「いや、平気だよ。君はなかなか刺激的だね、エルメラ」

けれど、ヴォイドはけろりとしたもので、にこにこ笑って許してくれた。

「え？ 私の名前、憶えて？」

「あれ？」

後は、言わずもがなの展開で、ヴォイドはエルメラと共に迷宮を後にし、素性を偽って共に暮らしてきた。エルメラは薬草部門長としても『雷帝』としても目立つ存在だったから、主夫をするヴォイドは人目を引かず誰にも訝しがられることなく今まで静かに暮らしてこられたし、エルメラと過ごした時間を忘れることもなかった。

後日話を聞いたガーク爺は、

「言葉は忘れねえんだろ？ 電撃のおかげで同じように記憶されちゃったんじゃないか？」

とロマンのないことを言っていたけれど、うら若き日のエルメラは、いや恐らくは2児をもうけた今ですら、愛の奇跡だと考えている。

根拠はないし、検証など恐ろしくてできはしない。ヴォイドと2人で、やがて3人、4人と増えた家族で過ごした時間を彼が失ってしまうなんて、エルメラは考えたくもない。ヴォイドがいつから生きているのか、そんなことすらわからないのだ。エルメラが集めた情報に依れば、常識的な年数しか生きていないと思われる。けれど、ヴォイドの能力が彼の老いさえ癒さないとも限らない。一緒に暮ら

すようになり、ヴォイドの眼もとに薄く刻まれたしわだとか、髪にほんの少し混じった白髪などを見つucker度に、エルメラは嬉しく思う。

ヴォイドは今まで、さんざん誰かのために戦ってきたのだ。だから、あとは自分が戦えばいいと思う。ヴォイドは静かに平穩に、人生を過ごしてほしいと思う。

エルメラは、先の赤竜討伐を思い出す。ヴォイドには知らせずに出かけたのに、どうやって知ったのかエルメラの危機にヴォイドは駆け付けてきてくれた。そのおかげでエルメラは一命を取り留めたのだけれど、あの時ヴォイドはエルメラを少し不思議そうな顔で見たのだ。

まるで誰だか忘れてしまったように。

あの時は、どうにか思い出してくれたけれど、次は本当に記憶を無くしてしまうかもしれない。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ、エルメラ。策もなく攻撃を無力化してくれというならば僕も断る。でもね、この書状には赤竜に届く攻撃手段が見つかったと書いてあるんだ」

愛妻を安心させるように引き寄せるヴォイド。

「僕だって、君と子どもたちとの刺激的な日々も記憶も、失いたくはないからね」

エルメラが見上げた夫の瞳は、かつて虚ろだったそれではなくて、確かな未来が映って見えた。

\*\*\*\*\*の物語 その2（後書き）

ざっくりあらすじ：エルメラ夫妻はSランク防御とAランク攻撃の最強夫婦

\*\*\*\*\*の物語 その3

魔物というのはとてもとても強い生き物です。  
森の獣など相手にはなりません。

狩人たち村の人々は、仲間の獣や精霊と一緒にあって村を護るために一生懸命に戦います。

手先の器用なにんげんは魔物の侵入を阻む柵をつくります。  
ある精霊は魔物から人間を隠すツタに変身し、ある精霊は魔物が嫌う臭いをだす草に変身して、村を護ります。

戦えるにんげんは武器を手に魔物に立ち向かいます。

動物たちも一緒になって柵の木材を運んだり、にんげんをのせて走り回ったり、一緒に闘って大活躍。

精霊だつて負けてはいません。にんげんの魔法を手伝います。

こころやさしい精霊の女王は、魔物に森に帰るように説得します。  
魔物はちよつぱり凶暴で、すぐに森の獣や精霊をいじめたりするけれど、それでも森に暮らす仲間です。

精霊の女王は魔物と闘いたくありません。

にんげんも、獣も、精霊も、そして魔物も傷ついて欲しくないのです。

にんげんが暮らすのは、森の中の一部だけ。ここでだけ静かに暮らせればいいのです。

森はまだまだ広いのだから、どうか、森に帰って欲しいと一生懸命お願いします。



ああ、けれどけれど。

そうやって、獣や精霊がにんげんの味方をすればするほど、魔物達は怒り狂います。

だって、今までこの場所で、精霊の女王たちと一緒に暮らしてきたのは、魔物たちのほうですから。

\*\*\*\*\*

### 《錬成空間》

本を読む子供たちの声が聞こえてくる。距離は遠くて何を言っているかはわからないけれど、きつと『木漏れ日』の店の一角で額を寄せ合って1冊の本を読み合っているのだろう。

マリエラの手にある地脈の欠片もとはそういうものだった。どんな魔物だったのか、詳細までは分からないけれど、群れで暮らしていたように、包み込む手のひらから感じ取れる。

だから、《命の雫》といっしょに《錬成空間》に入れた後は、温度より先にゆっくり圧力を上げていく。圧力を上げるといふよりは、《命の雫》を近づけていくという方が正確かもしれない。ぎゅぎゅっと押しくらまんじゅうだ。

師匠の《錬成空間》はやたら丈夫でちょっとした攻撃くらい受け止められそうだけれど、《錬成空間》というのは本来そういうものではない。

戦闘スキルではないのだ。一点を強く打たれるだけでたやすく壊れてしまうし、マリエラの魔力量を持ってしても地脈の欠片を溶か

せるような、指先ほどの面積で何百キロもの重量を支える強度など持たせようがない。

だから、《錬成空間》で押し込めるのではなくて、《命の雫》を近づける。《錬成空間》を温めるのではなくて、地脈の欠片近くの《命の雫》を温める。《錬成空間》は空気とふれて《命の雫》が地脈に還ってしまわないように添えているだけだ。

地脈の欠片は魔物に宿る《命の雫》の結晶体。この世に具現化したエネルギーそのもので、魔力の結晶が魔石なら、こちらは生命力の結晶ともいえる。

もっとも魔物の体内で形成されたものだから、魔物の意識の残渣が感じ取れる。それは明確な意思のようなものではなくて、集まりたいとか、走りたいとか、高いところが好きだとか、どんな気温が好ましいとかそういった漠然としたもので、そこを合わせてやることで、近くにある《命の雫》と容易に馴染んでくれるようだ。

そんなことに気づいてからは、簡単にはいかないけれど、何とか10回に1回くらいは地脈の欠片の抽出を成功させることができるようになった。

《命の雫》ととけあった地脈の欠片は、《錬成空間》から取り出して液体の状態を保っていて、《命の雫》よりも強く、けれど儂い光を放っている。

「次は、キュルリケ」

今までならば粉碎して《命の雫》をとかした水でしゃばしゃば抽出していたけれど、いまではもっと簡単に抽出できる。裏庭で摘んできたばかりのキュルリケに《命の雫》を行き渡らせれば、葉の、葉脈の間に薬効成分が集まっていることが感じられる。

その成分に《命の雫》を溶かし込んで《分離》するのだ。

癒しの成分に直接《命の雫》を込める。

薬草が持つ癒しの力に大地の慈愛を感じる。人間に対してだけでなく、森に生きる鳥も動物も健やかたれと世界が願っているのだと思う。

その願いに、ありように、寄り添うように《命の雫》を込めてやれば、キュルリケの葉肉はさらさらと、細かい砂のような、淡い光の粒子のような物に代わって葉脈を残して流れ出す。

### 《薬晶化》

流れ出した癒しの力はとても小さくて、どんなに指の間を閉じていても手で受けるとさらさらと指の間を通り抜けて零れ落ちてしまう。《命の雫》と違ってたしかに存在する物なのに、廻るという《命の雫》の性質が強いのだろうか、瓶に移してもいつの間にかなくなってしまつて、どうやっても留めておくことができない。だから、粒子と粒子を魔力で繋ぎ、同時にこの世に固定する。

この一連の工程を《薬晶化》というらしい。

使えるようになったのは、キャル様を探して世界に溶け込みそうになった後だ。《ライブラリ》にはいつの間にか《薬晶化》という名前と、『材料のもつ力を結晶化する方法』という簡単な説明だけが追加されていた。

得られた薬晶は魔力で繋ぎ止めているせいなのか、作った錬金術師しか使えないが、ポーション瓶に入れておけば乾燥薬草より長持ちする。何より砂粒ほどの1粒でポーションが1本できて、とてもコンパクトだ。

しかもキラキラしている。素材ごとに色が違って、瓶に入れて棚に並べるととても綺麗だ。嬉しくなつて今まで貯めた素材から、新

たに買い付けた素材まで片っ端から《薬晶化》したら、工房も地下室も随分すつきり片付いてしまった。

綺麗になった部屋をみてジークはうんうんと頷いていたけれど、ごちゃごちゃとした部屋に慣れてしまったマリエラはちよっぴり落ち着かない気分になった。もっとも、部屋の開いたスペースは、師匠がしょっちゅう何やら持ち込んで片付けずに帰って行くから、すぐにごちゃごちゃした部屋に戻ったのだが。

「こんなに便利なんだから、《ライブラリ》にもっと詳しく説明載せればいいのに」

マリエラがそう言うと、師匠は、

「説明されたって、使えるようになるんねーだろ？」

と返された。なるほどそうだ。薬草の、素材のありように寄り添うなんて言われても、分かるものではない。

「あとは、『竜骸茸』に、『竜の血』でしょー、スラーケンの粘液はもう薬晶化してあるし……」

流石は特級ポーションとすべきか、材料も豪華絢爛だ。

竜骸茸というのは、文字通りドラゴンの死骸に生える茸。死骸といても血肉を栄養にするのではなくて、皮や骨に宿った魔力を糧に育つものらしい。竜種であればいらしく、ちよっぴり湿っぽい時期の終わりにどこの賢者が地竜を大量にファイヤーしてほいたらかしにしていたから、丁度良い苗床になっていた。

勿論、あたりの地竜が根絶やしになっただけではないから、竜の血の回収もかねて、迷宮討伐軍と冒険者ギルド混成部隊の『Bランク以上限定強化合宿』が催された。特級ポーションの材料はこれから幾らでも必要となるから、兵士や上級冒険者のレベルアップを兼ねて定期開催されるらしい。

当然のようにジークも狩り出されていて、そして場所を知ってい

るはずの師匠は当然のように不参加だ。

残る材料は『人面樹の実』と『熱砂蠍の毒』。

こちらは迷宮都市に保管されていた物が手に入った。どちらも迷宮で採れる素材で、難易度は地竜ほど高くはないから、今後は買取価格を引き上げて採取を推奨するらしい。

このあたりの素材はまだ《薬晶化》できない。なんども処理をして十分理解した素材でないと無理なようだ。

《薬晶化》というのは、ポーションを作るのに必須の技術ではなくて、簡単に抽出してコンパクトに長期間保管できる便利技なのかもしれないと、マリエラは考えている。

竜骸茸は生木さえ燃え上がるような高温で乾燥させた後、細かく砕いて氷より冷たい温度の水で抽出する。竜の血には毒があるから、溶ける温度の異なる3種類の油と振り混ぜては分離させる作業を繰り返して、丁寧に毒を抜く。

人面樹は、人の顔を持ち動き回る大樹。

人の顔を持つ樹木の魔物は複数種確認されているが、人面樹もその1種だ。迷宮で確認されている中で、最もアクティブな樹木の魔物で、根っこを器用に動かして自分で歩かし、幹に現れた顔に表情がある。

何より特徴的なのが、不定期に実る果実で、この実は熟れると赤子の顔のような切れ目ができる。木に生っている時は眠っているような穏やかな表情なのに、もぐと目や口を見開くし、乾燥させると苦悶の表情を浮かべた老人のようになる気持の悪い木の実だ。熟れた果実も薬効があるのだけれど、特級ポーションで使うのは熟れる前の青い実で、こちらは顔は浮かんでいない。薄くて固い果肉の下に大きな殻に包まれた種があって、種の中身が材料だ。

熟れる前の青い実の種の中身は液体で、穴をあけて中身を取り出す。

この液体には人面樹が栄養にした様々な生物の魔力が封じ込められているから、デイジスの繊維をスポンジのように丸めた物と一緒に漬けて込んで、余分な魔力を抜いておく。

熱砂蠍の毒はいかに不純物を取り除くかが調整の肝だ。砂漠の階層の熱砂の中から襲い掛かるこの蠍の強さはBランクで、群れで行動しないことから討伐自体は比較的容易ではあるが、採取できる毒の量が少なく、しかも空気に触れると劣化が進む。

届けられた時には大半が分解していて使える物はほんの数滴、ということも多い。しかも、段階的に分解が進むから、分離するための材料も手間がかかる。

迷宮都市で手にはいる材料では、ドワーフたちが鋼を鍛えるのに使う石炭の灰が適していて、それを苛性スライムの溶解液とスラリー状に混ぜた後、高温高压で数時間養生する。この時間と温度が重要で、分解されていない熱蠍の毒だけが入り込むサイズの微細な穴を灰の粒子に作ることができる。

どの材料も入手どころか処理方法も煩雑で、難易度が高い。流石は特級ポーションということだろう。

揃えるだけでも時間がかかる材料だが、マリエラがポーションを作れば作るほど迷宮討伐軍も迷宮都市も助かるのだから、必要な材料は最優先で揃えて貰える。

処理の難易度にしても、地脈の欠片の処理に比べれば、他の素材など楽なものだ。手順は複雑だが、手順通りに行うだけで出来上がるのだ。何回も復唱し、繰り返し処理をして覚えればいいだけだ。

努力で乗り越えられる課題を、マリエラは障害だと認識していな

い。

新しい知識を得るたびに、自分の世界が広がる思いがして、楽しくて飽きることもない。特に《薬晶化》が使えるようになってからは、今までよりずっと深く素材のことが分かるのだ。

今まで点と点であった情報がつながって、体系的に整理されていく感覚に、夢中で作業を繰り返していた。

おかげで特級ポーションは1月とかからず作れるようになってしまった。まだ成功率は100%とはいかないけれど、マリエラは特化型のポーションによろやく手が届いたのだ。

「そして最後に、ゲイザーの水晶体」

マリエラは濡れた布で嚴重にくるまれ、氷と共に大きな瓶に入れられたゲイザーの水晶体を取り出す。

ゲイザー。観察者とも呼ばれる、目玉の魔物。

浮遊し、高度な魔法攻撃を繰り出す巨大な眼球の魔物の水晶体は、目的とする特化型ポーションの材料として、実にイメージ通りと言えた。

マリエラの両手のひらくらいの巨大なレンズは、透明で光を通すのに、触るとふにりと柔らかい。

マリエラはナイフを取り出すと、ゲイザーの水晶体をなるべく薄くスライスしてから、一つ一つ丁寧に《乾燥》させていく。温度を上げても圧力を変化させても変質してしまつから、薄くしてから乾燥させて細かく砕いて粉にする。できた粉はあらかじめ準備しておいた特製のビネガーと混ぜて置いておく。

ゲイザーの水晶体の処理は、水晶体自身よりこのビネガーの調整が難しい。ライナス麦をベースに数種の穀物や果実、木の実を数十

種類配合して作ったビネガーで黒茶色をしている。ちなみに味は極めてとげとげしくて食べられたものではない。特にマリエラが使っているのはできたばかりのビネガーだから酸味がきつくて蓋を開けただけでも目が痛くて涙が出てきそうになる。

このビネガーは容器に詰めて十年ほど熟成させると、極めて美味しい高級品になるらしい。その代わり、ゲイザーの水晶体の処理に必要な性質は消えてしまって、ポーションの材料にはならないらしいが。マリエラもかなり多めに作って地下室に保管している。十年後が楽しみだ。

このビネガーの作り方も《ライブラリ》に載っていたけれど、食品の扱いで材料全てを覚える必要はなかった。いくらマリエラでも数十種類ものビネガーの材料を覚えるのは大変だったから助かった。処理の済んだ材料を決められた順に、決められた量、決められた温度で配合する。最後まで気は抜けない。これは、ずっと作りたかったものだから。

「……できた」

ジークムントに出会って、およそ1年。

マリエラは、眼球特化型の特級ポーションを、ととと作り上げたのだ。



\*\*\*\*\*の物語 その3 (後書き)

ざっくりあらすじ：眼球特化型の特級ポーション完成！

\*\*\*\*\*の物語 その4

「ジークまだかな、ジークまだかな」

念願の眼球特化型の特級ポーションを完成させたマリエラは、『木漏れ日』の店内をウロウロ、ウロウロ落ち着きなく歩き回っていた。

夕食にはまだ早い時間だけれど、食事の支度もとくに済ませてある。

人目を忍んで錬金術スキルを活用し、たくさんご馳走を用意した。だつてジークの眼が治るのだ。特化型の特級ポーションなんてまだまだ市場に出回らないから、しばらくは眼帯を付けたまま秘密にしないといけないけれど、身内だけでもお祝いするのだ。

今日は師匠が羽目を外して、ストックしたお酒を飲みほしたって、広い心で許せるとマリエラは思っていた。

なのに、こんな日に限つてジークは地竜討伐に駆り出されていて、夕方まで帰つてこない。帰ってきたらすぐにでもポーションを飲んでもらいたいのに、師匠が珍しくまっとうな意見で邪魔をする。

「特化型の特級ポーションの初使用なんだから、しかるべきメンツの前で飲むべきだ」

確かにもつともだ。戦闘中に眼をやられた時など、どれくらいの時間で回復するのかだとかが分かっていたら、運用しやすいだろう。このポーションは安いものでも簡単に作れるものでもないのだから、貴重な機会というわけだ。

全くもつてその通りだけれど、どうしてこんな時だけまともなこ

とを師匠は言うのか。ジークがやっと眼を取り戻せるって時くらい、後先考えなくてもいいだろうに。

不満気に口を尖らすマリエラを尻目に、師匠は何やら紙に書きつける、

「センセ、これ將軍兄弟に渡してきて」

と、ニールンバークをパシリに使った。師匠は相変わらず無敵すぎる。

ヒエラルキーの頂点を極める師匠に文句を言うのを諦めたマリエラに、部屋の隅に集まっていた子供たちが声を掛ける。

「マリねーちゃん、一緒に本読もう？ エミリーが読んであげるよー！」

優しい子だ。爪の垢を煎じて師匠に吞ませてやりたいくらいだ。

そんなポーシオンはないのだろうか。そんなことを考えながら、マリエラはエミリーたちのそばに行く。

「ありがとう、エミリーちゃん。何の本読んでるの？」

「『エンダルジアの物語』っていうんだよ。途中からだけど読むね！」

そう言っつて、エミリーちゃんは簡単にあらすじを説明した後、手に持った本を読み始めた。

\*\*\*\*\*

倒しても倒しても押し寄せてくる魔物たちとの戦いで、ついに狩人は命を落としてしまいます。

なんとということでしょう。

呼んでも泣いても叫んでも、狩人はあの綺麗な蒼い瞳で精霊の女

王を見つめてはくれません。  
悲嘆にくれる精霊の女王。

けれど泣いてばかりはいられません。

精霊の女王にはかわいい息子がいるのです。

大好きな狩人と同じ蒼い瞳を持つ、最愛の息子が。

生まれたばかりのわが子を守らなければいけません。

精霊の女王は狩人の妹に赤ん坊を預けるとこういいました。

「私は今から地脈と一体化します。地脈の力を借りれば、この地を魔物から護れるでしょう。私がこの地を護っている限り、この地が魔物に襲われることは無いでしょう。」

精霊の女王はかわいいわが子を抱き締めたあと、狩人の妹に預けます。

「いつまでも見守っていますよ。私のかわいい子」

それだけ告げると精霊の女王は大地に消えていきました。

一体どんな奇跡を使ったのでしょうか。

精霊の女王が消えると同時に、魔物達はまるで見えない手で追いつてられるように森のほうへ帰っていきました。

精霊の女王と狩人の子供や、一緒に暮らしていたにんげんたちは、すんでのところで助かったのです。

それ以来、精霊の女王が言ったとおり、狩人たちの村は不思議な力に守られて、魔物達が近づくことはありませんでした。

魔物の来ない、安全で豊かな大地には人間がたくさんやってきて、やがて村は町に、町は国へと成長しました。

人々は、精霊の女王にとてもとても感謝して、精霊の女王と狩人の子供を大切に育てました。

やがて、精霊の女王と狩人の血を引く男の子が王様となったその国は、精霊の女王の名前をとって『エンダルジア王国』と呼ばれるようになりました。

森の精霊の女王の名前は、エンダルジアといったのです。

こうして、エンダルジア王国は長く長く栄え、狩人の子孫たちは幸せに暮らしましたとき。

「めでたし、めでたし」

エミリーは児童書を読み終わると、1冊読み終えた達成感に、むふーと満足そうに本を閉じた。

それを見ていた師匠は「上手に読めたな」とエミリーの頭を撫でた後、「でも、真実はね、その話とちよっと違うんだ」とエミリーの本をパラパラめくって言った。

「どう違うの？」

不思議そうに聞き返すエミリー。周りの子供たちも知りたそうにしている。

流石師匠。子供心を掴むのが上手い。

師匠は、子供たちを見回すと、いつもとは違う、静かな口調で話して聞かせた。

「森の精霊の女王は狩人の妹に赤ん坊を預けるとこう言ったんだよ。

『私は今から地脈と一体化します。地脈の力を借りれば、この地を魔物から守れるでしょう。守りの力を発揮するにはよりしろが必要。だから、私の右目をこの子に与えます。この“精霊眼”がこの地にある限り、この地が魔物に襲われることは無いでしょう。』

後は本とおんなじさ。エンダルジアの力によって、村は守られやがて人間の国になった。

エンダルジアの精霊眼を受け継いだ男の子の右目は森の木々のように深い緑で、そして狩人の血を引く左目は美しい蒼色だったそうだよ。

そして、男の子が亡くなったあとも、エンダルジア王国では緑色の精霊眼と蒼い左目をもつ男の子が必ず一人だけ現れて、精霊の女王エンダルジアは王国を護り続けたそうだ」

「へええ！ そっちのお話の方が面白いね！」

眼を輝かせるエミリーに、うんうんと頷くエルメラの息子エリオ。兄のパロワは少し考えた後、「でもさ、精霊が護ってるんだつたら、どうしてエンダルジア王国は亡びたんですか？」と師匠に尋ねた。

「そりゃ、精霊の護りが無くなったからさ」

師匠は見てきたようにそう言うと、「さーて、暗くなる前に子供は家に帰る時間だ」と子どもたち4人を家に帰した。

「師匠、さっきの話……」

エミリーちゃんが読んでいた『エンダルジアの物語』を読み返しながら、マリエラがつぶやく。初めて聞く話だったけれど、200年前にエンダルジア王国の輝くような王城を遠目に見た時、師匠は

「精霊が祝福しているから輝いている」のだと話してくれた。  
だからマリエラには今の師匠の話が作り話だとは思えない。

つまり、エンダルジアの王様は、精霊の血と護りを引き継ぐ者で、  
精霊の力の拠り所こそが。

「ただいま。ん？ どうした、マリエラ。深刻そうな顔をして。ほ  
ら、今日は地竜の肉を分けてもらっただ」

「おかえり、ジーク！ わあ、地竜のお肉だ！ 果物まであるよ、  
大獵だね」

マリエラの思考は、帰ってきたジークによって遮られた。正確に  
は土産の肉だ。

ジークは肉さえ与えておけばマリエラが喜ぶと思っているのでは  
ないだろうか。マリエラとて年ごろの娘なのだが。しかし、花を渡  
しても素材になるかならないかで喜びようが変わるのだから、確実  
に喜ぶ肉を与える判断は、あながち間違っていないだろう。

「晩御飯いっぱいあるけど、ちょっとだけ焼こうかな」

などと言いながらウキウキと肉を持って台所に向かうマリエラ。

師匠はジークに汗を流してくるように言い、屋敷へ帰ろうとする  
ロバートを引き止めて『木漏れ日』中の窓を閉めるように伝えた。

肉を調理しやすいサイズに切り分けて冷凍の魔道具にしまい終わ  
ったマリエラが、作った料理を温めなおして夕食の支度をするより  
早く、師匠にお使いを頼まれたニールンバーグがもどってきた。夕  
食はしばらくお預けになりそうだ。

「お二人とも来られるそうだ。地下を開けさせてもらおうぞ」

そう言ってニールンバーグは地下に降りると、間もなくレオンハルトとウエイズハルトをつれて『木漏れ日』の店内に戻ってきた。

「え？ レオンハルト様まで？」

ここにきてようやくいつもと違う様子だとマリエラは気が付く。汗を流して戻ってきたジークもどうしたことかと訝しんでいる。

「眼球特化型の特級ポーションができたそうだね」

「は、はい」

ウエイズハルトに問われてマリエラが頷く。師匠は『然るべきメソンの前で』と言っていたけれど、レオンハルトまで来るなんて。外から覗かれないように天窓以外のすべての窓を閉め切った『木漏れ日』の店内には、マリエラ、ジーク、師匠の他に、ロバート、ニールンバーグ、そして迷宮討伐軍の將軍と副將軍であるレオンハルトとウエイズハルトが立っていた。

この二人を呼びつけるなど、師匠は何を考えているのか。ジークがポーションを飲むところを見せる必要があるなら、こちらから出向くべきだろう。

なんて恐れ多いとマリエラはレオンハルトたちを見るのだが、二人は機嫌を損ねた様子も見せない。

一人状況の分からないジークだけがどうしたことかと訝しみつつも、護衛としての定位置であるマリエラの方へ歩み寄った。

「始めたまえ」

レオンハルトがマリエラに促し、皆の視線がジークに集まる。マリエラはレオンハルトに頷くと、困惑げなジークに1本のポーション瓶を差し出した。



「えと、あのね。ジーク、これ、眼球特化型の特級ポーション。ようやくできたの。随分待たせてごめんね。皆さんは、ジークの眼が治るところを見るためにお越しになったの」

眼球特化型の特級ポーション。

マリエラのその一言に、ジークの動きがぴたりと止まる。残された左目が大きく見開かれ、マリエラが差し出す瓶を凝視する。

(どうして、今なのだろう)

マリエラが差し出すポーション瓶を見つめながらジークムントは考える。

これは、このポーションはジークが切望してきたものだ。精霊眼を失ってから、坂を転がり落ちるが如く、足元が崩れ去るかの如く転落していくただ中で、渴望し続けた物なのだ。

切望し、渴望し、その望みがやがて絶望に変わり果て、この街に流れ着いたのだ。

マリエラに救われてからだって、精霊眼があればと何度思ったことか知れない。

マリエラは迷宮都市の地脈コントリクターのと契約した錬金術師で、いつか取り戻せるかもしれないと、わずかな希望に縋った日もある。

けれどそんな一縷の望みは、いつしか忘れ去っていた。

今日だって、遠くから地竜の眼を弓で射貫き、マリエラからもらったミスリルの剣で止めを刺してきた。チームを組んだ迷宮討伐軍のメンツと力を合わせて強敵を倒し、拳を合わせて勝利を祝った。

もう、誰に囚われる身分でもなく、自分の意思で帰りたいと願う家がある。

少々、手はかかるけれど、掛け替えのない笑顔が迎えてくれる。

ジークムントは今、この上なく満たされているのだ。

彼にとって意味があり、価値のあるすべては、既に得られている。いつしか心のどこかで、精霊眼を失ったことは、今あるすべての対価であると、そんな風にさえ感じていたのに。

（どうして今なのか）

眼球特化型の特級ポーションが手に入ったなら、長年の望みが叶うと、積年の苦節が実ると感極まって受け取るものだと思っていた。けれどジークの胸中には不思議なほどに凧いである。

むしろ感極まって嬉しそうにしているのは、目の前でポーションを差し出すマリエラの方だ。

「ありがとう」

そういつてジークはマリエラからポーションを受け取る。

マリエラが期待に満ちた顔でジークを見ている。

彼女の気持ちはシンプルだ。怪我が治るのはいい事だ、嬉しいことだという、それだけだ。

美味しい料理を食べさせたいと願うような、慈愛に満ちた感情だ。

隻眼で見るこの表情を、今日の日の情景を目に焼き付けておこうとジークは『木漏れ日』の店内を見渡す。

狭くはない店内だけれど、7人も人間が入り口側の半分が集ま

っている。

レオンハルトらの来訪は急なもので、マリエラも予測していなかったのだろう。すっかり日の暮れた『木漏れ日』の店内は、みなが集まっているこちら側の半分しか明かりが灯っていないから少し薄暗い。いつもは日の光が差し込んで陽だまりを作っている辺りには、月の光が差し込んでいる。

月の光が店内に広がる様子は幻想的ともいえるのに、皆の視線はジークに向いていて、早くポーションを飲んで見せると忙しない。

ジークは皆によく見えるように眼帯を外すと、マリエラから受け取ったポーションのふたをきゅぽんと開けた。

（マリエラが初めてポーションを作ってくれた時、瓶ごと口に突っ込まれたな……）

驚きのあまりぼかんと口を開けて呆けていたら、「えい」とばかりに突っ込まれたのだ。普段はどんくさいくせに、人にポーションを飲ませるときだけ抜群のコントロールを見せるのだ。そんな事さえ懐かしく、ジークは眼球特化型の特級ポーションを飲み干した。

とても不思議な感覚だった。

力と言うほど強いものではなく、光と言うほどまばゆいものではない、形がなく、存在がなく、けれど自分の中にも存在し、手を、足を、筋肉を動かし、血を巡らせている源が、膨らみ溢れかえりそうになる。

肉体という、決まった質量に行き渡り、体躯の境目を超えて外へと噴き出しそうな奔流は、けれど渦を巻くように、定められた体の流れに沿うように、ジークムントの体を循環しながら一点へと集っていく。

まるで、巨大な湖沼の底に穴が開いたように、満天の星空に穿たれた暗黒の空間のように、ジークの体を満たしていた源は、彼の右眼に吸い込まれていく。

どんどん、どんどん。

まるで底のない穴に落ちていくが如く。

不思議なことに、ジークという存在の内側は、根源的な何かに繋がっているかのようで、どれだけ右眼に流れ込んでも、彼を満たす源は尽きることなく、ただ一点を満たしていくのだ。

どんどん、どんどん。

集った光が確かな密度をもって現出するが如く。

「ジーク？」

心配そうなマリエラの声に、ジークムントは閉じていた両目を開く。

その瞳は、深い蒼と森の緑。

「ジーク、良かった！」

「ふむ、これほど早く修復されるのか」

「これが、精霊眼というものか……」

嬉しそうなマリエラの声、ポーションの効果を確認するニーレンバーグの声に、ジークの瞳に驚くウェイスハルトの声。そして。

「ああ……」

ジークムントの唇を割って漏れる、感嘆の声。

「ああ、世界は、こんなにも、精霊の光に満ちていたのか……」

それは、幼い頃に見た光景。

まだ何ものにもなれてはいない、弱い、弱い光の粒が、そこかしこに満ちている。

マリエラが大切そうに磨いていたカウンターに、常連客が憩う椅子に。

スタイリッシュな光る茶を淹れた茶器など、真似をしているのか、たくさんの光が集まってまばゆいばかりだ。

あれほど薄暗かった『木漏れ日』は、昼日中の客で賑わう店内さながらに明るく温かい光に満ち溢れている。

楽しいのだと、嬉しいのだと、居心地がいいのだと精霊たちの喜ぶ気持ち伝わって来るようだ。

ジークが傲慢になるにつれ、失われていった鮮やかな世界が、今、彼の周りに広がっていた。

戻ってきてくれたのだ、そばにいてくれたのだ。

マリエラが築いた温かな陽だまりは、精霊たちにとっても温かな場所だったのだ。

ジークムントは込み上げる涙を抑えることができなかった。

つられて涙ぐむマリエラの笑顔と精霊の光が、まつ毛を濡らす涙に乱反射して夢の世界のように美しい。

そんな、美しい世界の真ん中に。

聖樹の梢を抜けて天窓から注ぎ込む月光の中心に。

緑の髪と緑の瞳の、一人の少女が立っていた。



\*\*\*\*\*の物語 その4（後書き）

ざっくりまとめ：精霊眼の持ち主とは……！

## 地脈の主

まるで月の光と共に舞い下りたかのように、緑の少女は佇んでいた。

驚きと共に少女を凝視するジークの視線に、一同はジークから眼を放して後ろを振り返り、ようやく『木漏れ日』の店内の異変に気が付いた様子だ。

「何者だ……？」

「この光は……？」

長く迷宮で魔物と対峙してきたレオンハルトたちには、月光の中佇む少女が悪しき者でないことが分かる様子で、正体を訝しみながらも、小さな光が舞飛ぶ店内を見回している。

店内の様子に眼もくれず、月光の中の少女を見つめていたマリエラは、少女の方へ一歩踏み出すと小さな声でつぶやいた。

「イルミナリア……？」

イルミナリア。それは200年前マリエラを地脈へと連れて行ってくれた精霊の名前だ。どうして今まで忘れていたのか。そして彼女は今までどこにいて、どうして今ここにやってきたのか。

聞きたいことはたくさんあるのに、状況を整理しかねた周囲の「何者か」という問いかけに、マリエラはうまく話を続けられない。

月光の中に立つ少女、精霊イルミナリアは名を呼んだマリエラを



見つめ、嬉しそうにっこり笑ってみせたけれど、言葉を発しようという様子も、レオンハルトらの問いかけを理解している様子も見られない。

ただ彼女は、胸元で握っていた両手をそつと前に差し出すと、大事に抱えていたものをマリエラに見せた。それは、花を模した器のようなもので、けれど花びらの先はことごとく欠け、砕けないのが不思議なほどの亀裂が幾つも走っていた。

「それ、あの時の七枚花弁のお花の器……？」

マリエラはその器に見覚えがあった。地脈と契約をするために精霊公園へ行ったとき、イルミナリアと一緒に探した花だ。マリエラが見つけたときは確かに植物だったのに、イルミナリアが両手で包み込むようにして持ち上げると、花の形の器になっていた。

マリエラが問いかけるけれど、イルミナリアはマリエラの言葉さえ分からない様子だ。

「マリエラ、言葉は通じないよ。恐らくあの器のおかげで魔の森の氾濫イドを生き残れたんだろう。発芽したての苗だったから、器の中に隠れることができたんだ」

師匠が代わりに説明してくれる。七枚花弁の花の器が精霊にとつてどういうものかマリエラは分からないが、そのおかげでイルミナリアが助かったのなら、一緒に探してよかったと思う。イルミナリアにとって七枚花弁の花の器は、ボロボロにひび割れていても大切な物なのか、もう一度大切そうに両手で包み込んだ後、マリエラたちに向かって両手を広げた。

ふわりと、タンポポの綿毛が舞うように、七枚花弁の花の器は光の粒子となってイルミナリアの手から部屋中に広がった。

広がった光の粒は、光る雪が舞うようにふわふわとゆっくり下に

降りていく。

マリエラたちは『木漏れ日』の店内にいた筈なのに、いつの間にか夜の海の中のような暗い場所に浮かんでいた。

「ここ、地脈に向かう時の……」

200年前マリエラがイルミナリアに連れられて肉体を離れて潜った場所だ。

遙か遠くの深い場所に、地脈の光が見えている。

けれど、あの時とは違って、マリエラたちは地脈へと潜ってはいかないし、何より全員そろった状態で自分の肉体の中にいる。

「これ、イルミナリアが見ているものだ……」

マリエラの呟きに、状況を察したジークやレオンハルトらは、冷静に周囲を見回している。

何度見ても綺麗な場所だと、マリエラもあたりを見渡す。今もさらさらと光の粒子が地脈から立ち上ったり、還って行ったり。

遙か足元には、幼い日のマリエラを包み込むように迎えてくれた優しい光。

(……あれ？ なんだろう、なんだか少し居心地が悪いような……)  
小さな違和感を感じたマリエラ。ここは、誰もかれもを分け隔てなく迎え入れてくれるような、温かい場所だったはずだ。なのに、なんだか疎外感を感じる。遠巻きにして仲間外れにされているような、どうにも居心地の悪い雰囲気だ。

どういうことだろうとイルミナリアを見つめると、緑の髪の精霊は、地脈の深いところを指さしていた。

(あそこ、地脈と契約したところだよ)

マリエラは光の方に眼を凝らす。ジークたちもまんじりともせず

地脈の一点を見つめている。幼い日、イルミナリアに連れられてあそこ奥深くに行ったのだ。周りじゅう豊かな光に包まれて、そこでマリエラは会ったのだ。

あれは、地脈そのものではなくて、地脈と地上を橋渡しする管理者のような者だと思う。だって地脈はエネルギーそのもので、そこに心は存在しない。

けれどマリエラに名前を覚えてくれたあの人は、にんげんも動物も世界のすべてを愛しいと思っていた。地脈とラインを繋いだ時に、温かい思いが流れ込んできたのだ。

マリエラはあの時、教えてもらった名前を思い出していた。

少し前、エミリーたちが読んでいた物語を思い出していた。

あそこにいるのが何者なのか、マリエラはようやく理解した。

そうなのだと分かってしまうと不思議なことに、今までただの光にしか見えなかったそこに、彼女の姿が見える気がした。

あの人だ。

強く意識をするほどに、その姿が光の中で像を結ぶ。けれど、美しいはずのその姿は。

「なんで……、どうして……。エンダルジアが……」

彼女の名前を呼んだ時、マリエラたちは『木漏れ日』の店内に立っていた。

いつの間にか月の光は雲に隠れて、まばらについた照明の魔道具と、形も持たない小さな精霊たちの光以外は、『木漏れ日』の店内を照らすものはない。さつきまで確かにいたイルミナリアの姿も消えてしまって、集まった時と変わらず7人だけが、黙ってその場に立っていた。

「あれを見せるために我々を呼んだのだな、炎災の賢者よ。だが、あれは……。どういうことか説明願おう」

沈黙を破ったのはレオンハルトだった。

聞きたいことはたくさんあった。この不思議な現象を呼び寄せた精霊眼とは何なのか、部屋に舞飛ぶ精霊は。イルミナリアという精霊は何者でどこへ消えてしまったのか。

けれどそれは何れも些事で、聞くべきことは他にある。

迷宮都市の統治者として、迷宮を倒す一族として、知っておかねばならないことだ。

師匠は静かに微笑むと、ジークに向かって話しかける。

「ジーク、お前の眼ならばよく見えただろう。その目を持つお前なら、彼女が何者かわかっただろう。説明しておやり」

話を振られたジークは、一気に理解してしまった情報の多さに、少し青ざめながらもマリエラを見、そしてレオンハルトに向かいあう。

「あれは……。地脈にいたのは恐らく精霊エンダルジアです。そして彼女は……」

続きを口にするのが恐ろしいというようにジークは言葉を切る。

話の続きを聞くのが怖いというようにマリエラがジークの手を握る。耳を傾けるレオンハルトもウェイスハルトも、さっきから沈黙を貫くニーレンバークやロバートでさえ、エンダルジアの状態をその目で見てきたのだ。ジークが言葉を続けなくとも、その結末は分かっている。

けれど、受け入れたくはなかったのだ。

「彼女は、エンダルジアは、喰われかけておりました」  
あれは、エンダルジアを呑みこんでその存在ごと地脈の主になり替わろうとしていたものは、恐らく迷宮の主だろう。

200年前の魔の森の氾濫の日、エンダルジア王国の民を平らげた魔物たちは互いに喰らいあい、最後に残った一体が地脈の精霊を呑み干して、跡に迷宮が生まれたと、王国滅亡のおとぎ話に語られている。あれは、作り話ではなかったのだ。

エンダルジアは精霊で、しかも地脈の主である。だから、弱い人間のように魔物に食らいつかれたからと言って、すぐにその存在を消したりしない。エンダルジアに食らいつき、迷宮の主となった魔物は、200年の時間をかけて迷宮を地下へ地下へと喰い進めていった。

迷宮が成長するというのは、恐らく物理的に階層が増すというだけではなくて、前の地脈の主であった存在を取り込んで、主に成り替わらんと地脈に向かって侵食していく工程なのだ。

エンダルジアはまだ消えてはいなかった。一つしかない左の瞳で、じっとジークを見つめていた。消え失せそうな今であっても慈愛に満ちた優しい顔で、いとし子の成長を喜んでいるかのようだった。

けれど、彼女が完全に迷宮の主に呑まれたならば……。

「迷宮が50階層を超えらるとは、そういうことだったのか……」  
ウエイスハルトが言葉を無くす。

「迷宮の主が地脈の主になり替わったなら……」  
エンダルジアは人も動物も魔物でさえも、あらゆる命を等しく愛した。

けれどマリエラたちが感じた居心地の悪さは、人間に対する憎しみの残渣だ。

魔物はひとと相容れないのだ。あんなものが地脈を統べたら、きつと。

「この地に、人は住めなくなるね」

誰も口にできなかつた一言を、炎災の賢者が静かに告げた。

エンダルジアは喰われかけ、その存在は風前の灯だった。

レオンハルトたち、迷宮都市に住む人々に、もはや時間は残されていない。

その事實は、先ほどレオンハルトらが体験した、どんな奇跡をも塗りつぶし、重く、重くのしかかった。

地脈の主(後書き)

ざっくりまとめ：迷宮都市、亡びかけてた

## 王国の落日

「一つ、昔話をしてやるう」

言葉を失う一同に向かって、炎災の賢者が語りだす。

それは、レオンハルトたち迷宮都市に生きる者には昔々の物語で、1年ほど前にこの時代に目覚めたマリエラにとっては、長く過ぎた世界の、けれどここにいる誰よりも縁遠い人たちの話だった。

### エンダルジア王国。

精霊が護るその国は、魔の森のほとりにあっても決して魔物を寄せ付けず、栄耀えいようえい栄華を極めていた。特に王城で日々繰り広げられる様相は、熟れた果実のごとくであったという。

熟れ墮ちる前の果実と、腐りかけた果実の境界は一体どこにあるのだろう。

長い平和な世の果てに、人々は慢心し、奇跡を忘れ、感謝を忘れた。

煌びやかな王宮に集う人がかきずき持て囃すのは、家柄に付随した権威であり、財である。そのすべては長きに渡り作り上げられた国という仕組みによって、代々受け継がれてきた権益だ。それは貴族であろうと王族であろうと同じことで、家柄や血筋というものを除いてしまえば、当時のエンダルジア王国の栄華をほしいままにした彼ら一人一人は、怠惰に肥え太った凡百でしかなかった。

けれど人とは愚かしくも傲慢で、他者に頭を垂れさせるたび思い上がってしまうのだ。自分は選ばれた血統で、特別な能力を持つ者



なのだ。

だから、血統上は第一王位継承権を有して生まれながらも森の精霊の女王エンダルジアの瞳とされる『精霊眼』を持たないゆえに王座を弟に明け渡し、宰相の地位を余儀なくされた男は、“たかが色の違う瞳”くらいで王座を失った事実には納得などできなかつた。

ずっと自分が王座に就くと思っていた。しかし精霊眼を持っていた祖父が崩御した翌日に、精霊眼が右眼に宿り新たに王位についたのは、第一王子として生まれながらずっと王の補佐に甘んじ続けた宰相の父でも、その第一子たる自分でもなくて、年の離れた弟だつた。

王位を信じていた宰相に「弟を支え国を守る」ことなど、いくら父の命令であっても承服できるものではない。

弟は優しく狩や歌に秀でたが、ただそれだけの愚かで凡庸な人間で、彼の美点とされる性格も能力も国を治めるには不要な物だつた。

「カビ臭い言い伝えなど時代遅れもいいところ。

能力のあるものが、国を統べればよいではないか」

宰相が幼い頃から皆はかすき頭を垂れた。それは第一王位継承権を持つ彼の立場に対するもので、彼の能力にひれ伏したわけではないのに、額づかれるのが当然だつた宰相にはそんなこともわからなかつた。

自分が王になるために、宰相は時間をかけて準備した。

かび臭い言い伝えが邪魔をするなら、それ自体を歴史の中から消せばいい。

「精霊の眼だなどと、王の権威を貶めるもの。エンダルジア王国は精霊に愛されし“王”によって栄える国である。王にこそ栄光あれ」  
宰相は、王の権威を高らかにうたい、歴史から、子供たちが読むおとぎ話からさえも『精霊眼』の存在を消し去っていった。

ゆっくりと着実に。宰相は人々の記憶を塗り替える。永い平和に人々はエンダルジア王国建国の物語を、ただの童話、作り話と認識していたから、あらゆる記録を塗り替えてしまえば、あとは時を待つだけだった。

幸いにも父は精霊眼を得られなかったショックと過労で間もなく世を去った。

精霊眼を持つ愚かで優しい若い王に国政を担う能力は乏しく、宰相は弟である王をよく助け、王は兄である宰相を頼ったという。人々は仲の良い兄弟であると褒めたたえ、王国の繁栄は約束されたものとばかりに栄華に酔いしれた。

すべて宰相の計画で、宰相が弟である王の命ごと王座を狙っていると知らずに。

若い王が、帝都で一番とうたわれた美姫を王妃にと望んだ時も、宰相は親身で協力的なそぶりを見せて、若く熱心な一人の貴族に縁を取り持てと命じて話を押し付けた。

「美姫を妻に望むものは多く、けれど姫はそのすべてに首を振らない。しかるべき仲人を立てるよりは、熱意ある若者に王の気持ちを伝えさせるのが良いだろう」

「なるほど、流石は兄上だ。姫はドレスも宝石も飽きるほどに持つていて、今更送ったとして見向きもすまい」

無茶な話だ。誰もかれもが妻にと望む美貌の姫の関心を、ふさわしい立場も豪華な贈り物も持たない若い貴族がどうにかできるはずはない。

宰相にとって王の子供など邪魔以外の何者でもない。縁談を失敗させるべく仕組んだだけだ。たまたま目についた真面目で正義感のある若い貴族を不愉快に感じただけに過ぎない。

けれど、浅慮な思い付きが裏目にすることもある。若い貴族は見事、美姫と王の中を取り持ったのだ。

「あれほど貴重な虹の花を部屋いっぱい到下さるなんて。あの感動、あの美しさ。どんな宝石より尊いものでございました。王のお気持ちありがたく承りましたわ」

宰相の眼にたまたま止まったその貴族は錬金術師でもあって、その伝手とやらを使い、1本でさえ貴重なレインボーフラワーという虹の花を部屋いっぱい美姫に贈ったのだという。

仲人を務めた若き貴族、ロブロイ・アグウイナスはエンダルジア王国の筆頭錬金術師に取り立てられ、5年という婚約期間が過ぎた秋の日に、めでたく美姫はエンダルジア王国に輿入れを果たした。

「婚約の引き延ばしもこれまでか。穏当に失脚させた後にと考えていたが、世継ぎができては厄介だ」

ついに宰相は決意する。美姫を射止めた喜びに宰相に感謝する王の気持ちさえも疎ましい。

宰相の企みは誰に気付かれることもなく、若い王と美しい王妃の結婚に国中が湧きたった。エンダルジアの冬の日は熱狂の内に過ぎ去って、未だ喜び冷めやらぬ、ある春の日の夜、王妃は不思議な夢を見た。

片目しかない緑の瞳の精霊が、すぐさまこの地を離れよと王妃に言うのだ。

もう直ぐ、魔の森から魔物が押し寄せてくるからと。

夢に現れた精霊も、精霊が見せた滅びの様子も現実のように鮮明で、王妃にはそれがただの夢とは思えなかった。これは精霊のお告げだとどれほど王に進言しても、平和に染まり切った王は一笑にふすばかり。

夢は日に日に鮮明になって、王妃の不安は日増しに募る。

王妃の話を取り合ってくれたのは、王との仲を取り持った筆頭錬金術師だけだった。

「ロブロイ様。どうかわたくしを魔の森のそとへ連れ出して下さいまし」

輿入れ間もない王妃をそこまで駆り立てたのは、精霊の告げた一言だった。

『どうか、その身に宿る新たな王を守ってください』

精霊の言葉に我が身に命が宿っていることに気付いた王妃は、“病床に伏した母を秘密裏に見舞う”という偽りの理由をでっちあげて、錬金術師ロブロイと輿入れの時に連れて来たわずかな供だけ引き連れて、まるで王国から逃げ出すようにエンダルジア王国を後にした。

王妃が魔の森を抜けたその日、宰相による篡奪はなされた。

精霊眼を持つ王の命が潰えた瞬間、長きに渡りエンダルジア王国を守り続けた精霊の加護は消え失せて、魔の森から魔物が押し寄せた。

「これが200年前の魔の森の氾濫の真相さ。後はあたしも眠ってたからね、歴史が伝えて来たことなら、あんたの方が詳しいだろう」

言葉を切った師匠。

彼女の語った内容は、歴史に語られることのない、レオンハルトたちさえ知らない魔の森の氾濫の経緯だった。しかもその内容には、恐ろしく重要な内容が含まれている。

場違いさに居心地悪そうにしていたロバートも、話の中で語られたアグウィナス家の成り立ちに、驚いた様子で師匠を見ている。

今語られた内容と、先ほど見た地脈の様子と、目の前に立つ精霊眼を持つ青年。

レオンハルトはしばらく思索したのち、師匠に問う。

「それが魔の森の氾濫の真相だとして、腑に落ちんことがある」

レオンハルトの疑問はウェイスハルトの疑問でもあったようで、ウェイスハルトは兄の言葉を継ぐと、魔の森の氾濫直後の歴史を話し始めた。

エンダルジア王国を呑み込んだ魔の森の氾濫の規模は大きく、王国の民を喰らいつくした魔物が迷宮を生み出すことは確かだった。迷宮を放置しておけば、やがて人の手に負えない規模まで成長し、溢れた魔物は魔の森の魔物と共に帝都にまで押し寄せる。

これまでは、帝国からみたエンダルジア王国は、魔の森に隔てられた立地によって、攻めがたく、けれど攻撃される恐れの極めて少

ない、豊かで友好的な隣国だった。地脈が異なるという点も互いの独立を強固なものとしていた。戦争という人間同士の争いは、治癒魔法やポーシヨンという強力な回復手段がある場合、消耗戦になりやすい。相手の地脈に攻め入る側は相手方の地脈の錬金術師を相当数取り込まない限り、相当な苦戦を強いられる。

しかも帝国とエンダルジア王国の間には魔の森があったから、いくら魔物除けポーシヨンを使用したとしても、なにもない平地ほど進軍はたやすいものではない。

更にエンダルジア王国側の特殊事情として、エンダルジア王国だけは精霊の加護によって魔物を寄せ付けず安全であるという事情もあった。エンダルジア王国は小国だが、土地は肥沃で作物が豊かに実り、周囲の山々からは鉱物資源が、魔の森からは魔物の素材が得られるたいそう豊かな国だったから、多大な犠牲を払ってまで魔の森を越えて領土を広げようという考えはなかった。

だから帝国はエンダルジア王国から馬車で1週間程度という近い距離に都を築いた。周囲を敵国に囲まれた帝国にとって最も安全な場所と言えたからだ。

しかし、エンダルジア王国は魔の森スタンビードの氾濫に吞まれ、魔物の支配する地となった。

生じた迷宮を滅ぼし、国を取り戻したくとも、かつては両国間に程よい距離感をもたらした魔の森と地脈の違いという障壁が、難攻不落の城塞のごとく立ちはだかる。

せめて迷宮の周囲に討伐拠点を設けなければ、迷宮の攻略に着手することすらかなわない。

迷宮を攻略せず、万が一にも魔の森や迷宮から魔物スタンビードがおりが溢れでもしたら、帝都どころか帝国の存亡すらも危ういだろう。

こういった事情もあって、魔の森の守護を務めるシューゼンワル

ド边境伯は、逃げ延びてきたエンダルジア王妃を保護し、王妃を連れて来たエンダルジア王国の筆頭錬金術師の嘆願を受け入れ魔物から王国を取り戻すべく兵を挙げた。

不休で魔の森を駆け抜けたシューゼンワルド边境伯の一団がたどり着いたそこは、白亜の防壁麗しく、王城煌びやかな都ではなくて、魔物たちが死肉を漁る、おびただしい死に食い荒らされた、人の住みえぬ場所だった。

崩壊した防壁が、倒壊した建造物が、踏み荒らされ割れて露出した舗道の有様が、雪崩のように魔物が押し寄せたであろうことを物語っていた。偶然に他国へ、あるいは山脈へ逃げ延びて魔の森の氾濫スタンピーを生き残れた人々がいたことが奇跡に思えるほど、亡びた国は荒廃していた。

魔の森から押し寄せた魔物は、逃げ遅れて王国内に隠れていた人々をことごとく喰い殺した後、魔物同士で互いに喰らいあつたとされる。最後に生き残った一体が大地に潜り迷宮が生まれたのだという伝承だ。それが真とされるのは、シューゼンワルド边境伯軍が王国跡地に到着した時、そこには魔の森の中と同じ程度しか魔物がおらず、王城跡には迷宮が生じていたからだ。

これだけの災害を引き起こした魔物だ。埋め尽くさんばかりにいてもおかしくはなかったのに。

しかし、魔の森と同程度の魔物の量でも、人が住める場所を確保するのに、相当の時間が必要だった。

そして迷宮の存在。

魔の森の氾濫スタンピーの犠牲者の規模と生じた迷宮の規模には相関があるというのは、帝都の学者が提唱していた内容で、その推定に基づけば王国跡地の迷宮は稀に見る大規模なものだと考えられた。

再び魔の森スタンビートの氾濫をおこさぬために、帝国の人々が生きていくために、この迷宮は倒さねばならない。いつか、この地を人の手に取り戻すため、迷宮の周囲に迷宮を討伐するための拠点が築かれ、やがて人が住む街ができた。

「こうして迷宮都市は作られた。魔の森スタンビートの氾濫から200年経った今でも迷宮を倒せていないことから明らかなように、決して容易な道のりではなかった。

案件が案件ゆえに、皇帝も助力を惜しまなかったというのに。

『エンダルジア王国を取り戻す』などという、弱い理由付けで続けられる事業ではなかった。もっと確かな大義名分が、悲願とも呼べる理由付けが必要だった。

だから、皇帝は亡国の王女を、我がシューゼンワールド辺境伯家に輿入れさせたのだ」

魔の森スタンビートの氾濫の直前に、エンダルジア王国から逃げ延びた王妃は子を身ごもっていた。生まれた姫を迎え入れることで、帝国はエンダルジア王国跡地を辺境伯領に組み入れる名分を、シューゼンワールド辺境伯家は『祖国奪還』という命題を得た。

精霊の加護を失った迷宮都市は、食料すら満足に賄えない、魔物の闊歩する危険な土地で、たとえ亡国の領地を丸ごと手に入れたとしても、管理するための犠牲に見合う場所ではなくなっていた。シューゼンワールド辺境伯家も再び魔の森スタンビートの氾濫がおれば真っ先に犠牲になる場所に領地があるから受け入れたのだし、万一の場合に甚大な被害を被るであろう周辺諸国も同意を示した。

シューゼンワールド辺境伯家は、エンダルジア王国の血を引く正当なる後継だ。



だからこそ『祖国奪還』の悲願の下に、2000年間血を流し、迷宮に挑み続けてこられたのだ。

しかし、そうであるならば、なぜ、王たる証は現れないのか。

シューゼンワルド辺境伯家には、この2000年、精霊眼を持つ者はただの一人も現れてはいないのだ。

王国の落日（後書き）

ざっくりまとめ：エンダルジア王国滅亡秘話。シューゼンワルド家、  
どうして精霊眼持ち生まれてこないん？

## 両の眼に映る景色は

「王家の血を引く姫君は、わがシューゼンワルド家へ輿入れした。精霊エンダルジアの血は我がシューゼンワルド家に受け継がれている」

ウエイスハルトは断言する。それは事実を断定する物であり、同時に真実を問いたただすものであった。彼の問いは炎災の賢者フレイジージャに向けられたもので、同時にジークムントに向けられたものでもある。

なぜ、ジークムントが精霊眼を持っているのかと。

「エンダルジア王家の血は、確かにシューゼンワルドに流れているよ」

見通すようなフレイジージャの黄金の瞳。

彼女の瞳は、レオンハルト、ウエイスハルトに流れている血潮を見通し判定しているかのようにさえ思える。古の賢者の名を名乗る得体のしれない彼女の断言は、数多の貴族の臨席の下に下された皇帝の裁定よりも強く脳裏に刻まれて、彼らの疑念を確定たらしめる。

「でもね、精霊エンダルジアが瞳を与えた我が子は、男の子だったのよ」

フレイジージャの視線につられ、一同の視線がジークに集まる。

「……男系継承か」

それは、つぶやいたレオンハルトが持つ『獅子咆哮』にもある特性だ。

スキルとは不思議なもので、一般的には血統で継承されやすいとされるが、男系しか受け継がれないもの、女系しか受け継がれないものもある。また『加護』と呼ばれるものの中には、時代に一人しか発現しないものもあれば、特定の条件を満たした者だけが発現するものもある。

先ほどのフレイジージャの話が真実なら、ジークの持つ精霊眼もそういうものなのだろう。

男系の子孫にのみスキル因子が受け継がれ、先代の保有者が亡くなれば、条件を満たす因子保有者から一人だけが選ばれる。

姫君を娶ったシューゼンワルド家には、エンダルジア王家の血が流れていても、精霊眼のスキル因子は受け継がれていない。

そして、この200年の歴史において、精霊眼を持つ者がジークを含め複数確認されているということは。

「先ほどの話、精霊は『新たな王を守れ』と言っていたな。つまりは、亡国の王妃の子供は双子であったということか……」

有り得ない話ではない。先の見えない迷宮討伐に多大な犠牲を投じようという時に、亡国の王子など妨げにしなければならない。

国も民も資金もない者に、犠牲に見合う対価など払えるはずがないのだから。

始めから姫一人しか生まれていないことにされたのか、殺されかけたところを運よく誰かに連れ出されたのか。その答えを知る者はいない。

『精霊眼』を持つ意味はすでに失われていたから、珍しい眼を持つ者として魔の森のほとりの辺境に埋もれながら、その血を繋いできたのだらう。国を滅ぼした宰相の奸計は、図らずも王子を生き永ら

えさせたことになる。

「親からなにか、聞いていたか？」

ウエイスハルトにそう問われたジークは、言葉を失いつつも首を振る。

「『精霊眼』に恥じぬ人物になるようにと、育てられました」

ジークが答えられたのは、亡き父に言われた言葉だけだ。

恐らくは父も知らぬ事だったのだろう。その言葉が指し示す意味さえ知らず、『精霊眼』という加護を尊び、“ふさわしくあれ”と伝えてきたのだ。

『エンダルジアの王として、恥じぬ人物となるように』

「ふーっ」

レオンハルトが深く息を吐く。これは、看過できぬ問題だ。亡国の正当な後継者など……。

けれど、その懸念はフレイジージャに吹き飛ばされた。

「そこは悩むところじゃない。

エンダルジア王国はとっくに滅んでんだ。

国ってというのは土地のことか？ 地脈のことか？

2000年という時間は短いものじゃないだろう。

そんだけの間、お前たちが戦い守ってきたものは、金か？ 土地か？

ここに住まう、人じゃないのか？

何なら、ここに住んでる連中に聞いてみりゃいい。『ここはどっだ』って。

ここはとっくに迷宮都市で、シューゼンワールドが治める場所だ。

こいつの『精霊眼』は確かにエンダルジアの眼玉だけどね、そもそも精霊に王様だとか国だとか人間が作った仕組みなんて、わかりやしないんだ。

人間どもが『精霊眼』の持ち主をどんな地位に据えようと、それは人間同士の勝手な都合で、精霊にとつちやどうでもいい事なんだよ」

静かにジークの手を握っていたマリエラは、ジークの周りに浮かぶ光の粒を見回す。幼い頃に精霊公園に行ったときは、もっとサイズが大きかったし、蝶や鳥、人の形をしたものもいたのに、今いる精霊たちは形も見えないとても弱弱いものばかりだ。

けれど、どの光も『木漏れ日』の店内で遊んではジークのそばに寄って来るような動きを繰り返していて、なんだかとても嬉しそうに見える。

「精霊たちはジークのことが大好きで、ジークが楽しくて幸せだったらそれで十分なんだろうね」

ぽつりと漏らしたマリエラの言葉に、フレイジージャが笑って頷く。

「そうだよ、マリエラ。正確には、この世に現出した精霊王の瞳に自分たちの王、エンダルジアを感じているんだろうがね。」

精霊眼は精霊の力を強める触媒だ。だからこんな形も取れない弱い精霊さえもこの世に姿を現せる。

こいつらは単純だからね、ここが気持ちのいい場所で、精霊眼の持ち主がいいヤツだったらそれで十分嬉しいんだよ。

とつくに滅びた王国なんて、精霊たちにとつちやどうでもいい事なんだ。」

「つまり、先ほど言った重要なことというのは、精霊エンダルジアが完全に喰われる前に迷宮を倒すということか」

ウエイスハルトはため息が出そうになるのをこらえながら、分かり切った事実を告げる。言葉にするのは簡単だ。だがこれまでどれほどの時間と労力をかけて、ようやくここまでたどり着いたことか。

「そゆこと。あと、時間はあんまりない」

「賢者殿は随分と簡単に言われるが……」

フレイジージャの軽い口調に、今まで口を慎んでいたニーレンバーグが苦言を呈す。眉間のしわは今までよりも随分深い。

「あーらら、センス、ケツでこやばい。大丈夫だって。しくみはだいたいわかってんだろ？ ポーションがまわって外から人が来るようになったんだ。じゃんじゃん迷宮にいれりゃいい。たとえゴブリン一匹だって、ちりも積もれば迷宮は弱る。街中みんな迷宮に放り込めばいい」

「確かにその通りだが、外から来る人間だけではとても足りまい。この街の人間は怪我をして迷宮に潜れぬものも大勢いるのだ」

気軽なフレイジージャに慎重なニーレンバーグ。この二人は正反対だ。フレイジージャは気にしていないようだが、ニーレンバーグの毒舌はフレイジージャの前では随分鈍る。

「だからさ、あるじゃん。特級ポーション」

「だが、特化型はまだ眼球しかできておらんし、腕や足を丸々失ったものの場合、いかに特化型があろうと、飲めば足が生えるというものでもあるまい」

修復可能な体積があるし、欠損してから時間が経ちすぎていれば、体が健全な状態を忘れてしまってうまく治らないこともあるという。

そんな懸念をフレイジージャは一笑に付す。

「なに言ってるの。できるだろ？ 特級がないと厳しいけがを、上級ポーシヨンで治してきたじゃん。技術も知識もあるはずだ。センサーに足りない知識はロブが持つてる」

こんな風に言われてしまうと、ニーレンバークは何も言えない。非道な者と恐れられ、血に濡れた手と忌避される。そんな視線には慣れてるのに、そんなすべてを意にも介さず、こうして面と向かって実力を、成果を認められるとどうしていいかわからない。

再び黙り込んだニーレンバークからロバートに視線を移したフレイジージャ。

「ローブー、聞いてたな。仕事だ。センセと一緒にスラムの連中全員治療だ。」

お前も、散々やかしてきたんだから、特級ポーシヨンがありや、大抵のことはできんだろ？

あ、治療費はちゃんとしてくれたんだから、全員治療が終わったら、お前の借金もチャラにしてやる」

「ええー……」

「ローブー」

ビシビシビシビシ、ビシバシビシビシ。不満そうなロバートに師匠のデコピン攻撃が炸裂する。

「またあつ。痛っ！ 痛い痛い痛い痛いー、ソレ痛いんですって、ワカリマシタアアア！」

師匠も師匠だが、ロバートもちっとも学ばない。師匠のデコピン攻撃に喜んでる様にすら見える。折角の雰囲気台無しだ。

「はあ……。我がアグウイナス家の栄光の歴史を伝えるために呼ばれたわけじゃなかったんですね……」



頂垂れながら、師匠のそばを離れニーレンバーグのほうへあゆみよるロバートにニーレンバーグは、

「あの賢者殿相手にそんな幻想を抱く方が驚きだ」と追い打ちをかけるように呟いていた。

「センセとロブは正反対だけど、相性はいいんじゃないね？」

迷宮討伐軍にマッドな治療コンビが誕生した瞬間だ。性格というか、嗜好に相違のある二人だがどちらも世の常識などどこ吹く風の手法をとれる逸材だ。

フレイジーの一言に、迷宮討伐軍、いや迷宮都市の未来の一部を垣間見たレオンハルトは、かるく眩暈をおぼえつつも、なすべきことを口にする。

「まずは赤竜をくださねばな」

「はい、兄上。精霊眼が戻ったのです。エンダルジアの加護を置いても弓の精度、威力を向上させる魔眼と聞き及んでいます」

レオンハルトに答えたウェイスハルトは、ジークの方を向き直ると「ジークムントよ、力を貸してもらえるな？」と問うた。

「もちろんです」

力強くうなづくジーク。

“なぜ今、精霊眼が戻ったのか”

その答えを彼は得た。

この『精霊眼』は人々の平和と幸福を願う精霊エンダルジアの祈り。

ジークの瞳に宿っていても、私的に使うべきものでない。

“この街でのんびり楽しく暮らしたい”というありふれた少女の、ありふれた願いを叶えるものだ。そんな少女が暮らす世界を、丸ごと守るために与えられた精霊の加護だ。

『木漏れ日』に集った一同の、思いと目的は一致した。

「詳細は明日にでも」

今から作戦を練るのだろうか、レオンハルト、ウエイスハルトは来た時同様地下から帰り、ニーレンバーグもロバートを連れて、馬車で基地へと帰って行った。

皆が帰って静まり返った『木漏れ日』の店内で、ジークはマリエラに聞いてみた。

「マリエラは、あんまり驚かなかったな」

「うん、なんか、納得しちゃって。」

ジークと河原でポーション瓶作ったことあったでしょ？ あの時さ、あんなに小さい竈だったのに、サラマンダーが来てくれたじゃない。最後に指輪までくれてさ。

あれって、ジークがいたからなんだなって。薪が燃え尽きそうになった時、ジークが薪足してくれたじゃない？ 普通の薪を足しただけなのに、サラマンダーだったらくるりと回って喜んでたし。精霊たちにはちゃんとわかってたんだね」

「それにね」、と続けてマリエラは裏庭にでる。

いつもと変わらず佇む聖樹は、何日も水をあげていないように、葉が垂れ下がって疲れて見える。

「イルミナリアだったんだね」

その根元に、《命の雫》いりの水をたっぷり撒きながらマリエラは聖樹に話しかける。

「さっきので、ため込んでいた力を使い切ったみたいだからな、しばらくは現出できんだろ」

師匠の言葉にうなずきながら、マリエラは聖樹の幹をやさしく撫でる。

「イルミナリア、また会えてよかったよ」

イルミナリアは聖樹の精だ。自分が何者か伝えるために、聖樹を模した天窓から月光と共に『木漏れ日』の店内に現れたのだろう。

「でもさ、友達の私より、ジークにたくさん葉っぱをあげるの、ちよつとひどいと思うんだけど？」

イルミナリアもサラマンダーと同じで、ジークが何者かわかっていたのだろう。マリエラが水をやるよりもジークが与えた方が、たくさん葉っぱを落としていたから。

えこひいきだよ、と笑いながら話しかけるマリエラ。その声が聞こえてもその言葉は通じない。けれど、聖樹がひらりと落ちた一枚の葉っぱは、ぼふんと撫でるようにマリエラの頭上に落ちた。

「あ、そーだ、師匠。師匠にも聞きたいことがあったんですよー」

お腹がすいた、夕食にしようとするさい師匠に、作っておいたご馳走を並べつつ尋ねるマリエラ。

想定外の出来事に、お祝い気分はしおれてしまったけれど、ジークの眼が治ったことには違いない。幸い師匠はどんな時でもパーティー気分の人だから、3人だけのお祝いだ。

「んー？」

焼きたての地竜の肉を頬張る師匠。

「さっきの話で、アグウイナス家の先祖が王妃様にレインボーフラワーを贈ったって言ってたじゃないですか。あれって……」

「おー、あれな、マリエラが小っこいころ散々作ったヤツ。いやー、

助かったわアレ。ロブ、あ、200年前のロブな。ロブに出世払いの分割払いの高利回りで売りつけたから、5年くらいは食い扶持も酒代も困らんかったな！」

「やっぱり……」

小さい頃は意識したことがなかったけれど、『木漏れ日』で師匠と一緒に暮らすようになって気になっていたのだ。

師匠が働くとか、想像できない。生活費はどうしてたんだろうと。

「まあ、悪いことしてなくてよかったよ。あ、師匠、今日もお酒は1本だけですからね！」

そう言うとマリエラは、師匠がうつきうきで持って来た2本目の酒瓶を没収し、代わりにグラスに水を注いだ。

ジークムントはそんなありふれた日常の光景を、揃った両目で穏やかに見つめていた。

両の眼に映る景色は（後書き）

ざっくりまとめ：200年前のマリエラたちの生活費、アグウィナ  
ス家が払ってた！  
4章終わりです。活動報告更新してます。

## 登場人物紹介（バレあり。4章読了後推奨）

### 迷宮都市

< i 2 6 7 4 2 0 — 2 1 0 6 4 >

・・・ 外周をぐるつと高い防壁で囲まれた街。  
描かれている以外にも、細かい通路はたくさんある。

### マリエラ

< i 2 5 5 0 1 8 — 2 1 0 6 4 >

・・・ 錬金術師の残念系主人公。4章終了時点で17歳。  
ハイスペック系主人公のはずなのに、能力を上回る残念さの為か、  
痩せて戻った今でも『マルエラ』の呼び声が高い。  
師匠と戯れている間に特級ポーションが作れるようになる。帝都に  
3人しかいないほど高位の錬金術師となったのに、相変わらず只者  
感が半端ない。  
好きなものは肉とニーク、じゃなくてジーク。

### ジークムント

< i 2 5 5 9 2 1 — 2 1 0 6 4 >

・・・ マリエラの保護者兼護衛。心身ともに成長し、精霊眼も取  
り戻す。

精霊眼の復活により、実はエンダルジア王国の王位継承者だった！  
というトンデモ設定が飛び出すも、既に国は滅びているので、精霊  
に好かれるチート眼保有者程度の扱い。

「この設定、チート過ぎ。ないわー」ということで、死に掛け奴隷  
スタートというハンデを作者に負わされる。

無事に成長し、マリエラにも好かれたようで何より。

フレイジージャ

・・・ マリエラの師匠にして、炎災の賢者と呼ばれた謎多き女性。スペックもとんでもないが性格もとんでもない。

迷宮討伐軍 …… 迷宮討伐を目的とした軍。精鋭ぞろい。

レオンハルト・シューゼンワールド

・・・ 迷宮討伐軍の将軍。迷宮討伐に適したレアスキル『獅子咆哮』を持っており、幼い頃から迷宮討伐を第一に育てられた。

ウエイスハルト・シューゼンワールド

・・・ 迷宮討伐軍の副将軍、レオンハルトの弟。知力で兄を補佐する。

意中のキャロラインを見事射止め、成婚を果たす。

ジャック・ニーレンバーク

・・・ 迷宮討伐軍の治療技師。DS。シエリーに対しては親ばかり。

ディック

< i 2 5 8 8 3 0 — 2 1 0 6 4 >

・・・ 元黒鉄輸送隊の隊長。

リンクスの死後、迷宮を倒し仇をとるべく迷宮討伐軍に復帰する。

幼馴染の巨乳嫁をゲットした勝ち組。

特級ポーションが作れるようになったことだし、ちょっともげたらいいんじゃないかな。

第3部隊の隊長として、部下にも慕われている様子。

マルロー

< i 2 5 9 8 6 5 — 2 1 0 6 4 >

・・・ 元黒鉄輸送隊の副隊長。

ディック同様、リンクスの死を機に迷宮討伐軍に復帰し斥候部隊の副隊長に就任する。

下級貴族の3男として生まれ、ベラート伯爵家に策略によって婿入りする。マルローは、身分的に結婚できない執事の身代わりで形だけの夫だった。

アグウイナス家襲撃事件の処遇に際し、自らの社会的存在を執事に与え、迷宮都市でウエイズハルトの斥候、諜報員として家族と共に生きていく道を選ぶ。

都市防衛隊 . . . 迷宮都市の治安維持、魔の森の開墾などを行う部隊。

ボーズ・テルーテル

. . . 都市防衛隊の相談役をしている。冒険者オタク。手がかかって使えない人物に見えるが、責任のない立場で好き勝手させておくと、まれに優れた働きをすることがある。

カイト

. . . 都市防衛隊の隊長。盾使い。まじめな性格がシニールな笑いを誘う苦勞人。

黒鉄輸送隊 . . . 魔の森を抜け迷宮都市 - 帝都間の運送を行う私設部隊。

リンクス

< i256915—21064 >

. . . 黒鉄輸送隊の斥候で影使い。

「オレさ、Aランクになったら、マリエラに告るわ」とわかり易いフラグを立て、マリエラをかばって死ぬ。

彼の思いはジークによってマリエラに伝えられた。



贈られたペンダントをマリエラは今でも大切に身に着けているが、中身が何だったのかはすっかり忘れている様子。開けられないから仕方ない。

エドガン

・・・ 黒鉄輸送隊の双剣使い。  
ディックらが抜けた後、隊長に就任する。  
ジークの友人キャラとして変態度が急上昇。現在、師匠に一目ぼれ中。

いろんな意味で黒鉄輸送隊の今後が心配される。

ユーリケ

・・・ 黒鉄輸送隊の調教師。訛った喋り方をする。人間よりモラブルのほうが好き。

フランツ

・・・ 黒鉄輸送隊の拷問系治癒魔法使い。ユーリケの育ての親。  
亜人設定がいつの間にか追加される。

ドニーノ

・・・ 黒鉄輸送隊の装甲馬車のメンテ担当。

グランドル

・・・ 黒鉄輸送隊の盾戦士。傘を携えたスリムな紳士にして、必殺技 傘・シールドバッシュを使いこなす、でんせつのゆうしゃ。

ヌイ

・・・ 黒鉄輸送隊の奴隷。食いしん坊が長じて料理人の弟子っぽくなる。

ニコ

・・・ 黒鉄輸送隊の奴隷。歩く工具箱として大活躍。

迷宮都市の人々

エルメラ・シール

< i 2 6 2 0 8 9 — 2 1 0 6 4 >

・・・ 商人ギルド 薬草部門長にして生粋の薬草オタク。  
実はAランク冒険者の雷帝エルシー。ガーク爺の孫。人前でいちゃつく派。

ヴォイド・シール

・・・ エルメラさんの旦那さん。

おだやかそうな専業主夫、だと思ったらSランク冒険者の『隔虚』。  
今日も妻エルメラの電撃に物理的にしびれている。

リエンドロ・カツファ

・・・ 商人ギルド 薬草部門の副部門長。間延びした喋り方をする。

人に仕事をやらせるのがものすごく上手。

ハーゲイ

< i 2 6 3 2 3 7 — 2 1 0 6 4 >

・・・ 冒険者ギルドのギルドマスター。『破限』の二つ名を持つAランカー。

財布の中身は銀貨5枚（5万円程度）であることが判明。  
全額フレイジージャにもつていかれたあとも補充はなされず、社会的な立場のわりに厳しい小遣い制であることがつかえる。

ガーク

<i260978—21064>

・・・ ガーク薬草店の薬草屋。

若かりし頃、迷宮討伐軍で斥候をしていた。

上位の鑑定能力を持ち、知識も豊富であるため、今なお迷宮討伐軍から要請がある。

偏屈だが面倒見がよく、『木漏れ日』の常連。

エルメラのおじいさんで「お爺ちやま」と呼ばれている。

アンバー

・・・ デイツクの奥さん。

旦那が迷宮討伐軍に復職し、毎日帰って来るようになったが相変わらず『木漏れ日』で働いている頼れる姉さん。

怒らせると愛妻弁当がパンだけになるが、「お弁当」を準備するだけでデイツクは喜ぶので効果が薄い。

レイモンド

・・・ ストレス太りの奴隷商人。

スレイブもん 奴隷者でレイモンドという名前になった。ジークの奴隷解放を心底喜んだ一人。

メルル

・・・ メルル薬味草店の店主。

地域のボスママにして噂と甘味が好きな奥様諜報部隊。実は本物の諜報部員。

ゴードン

・・・ ドワーフの大工。『木漏れ日』の常連。

意外と芸達者なおやつさんで、『精霊の神殿』の竣工式には迫真の演技を見せる。尿漏れ疑惑がある。

ヨハン、ルダン

・・・ ドワーフトリオの残り二人。最近はポーション瓶づくりに忙しい。

エミリー

・・・ ヤグーの跳ね橋亭の看板娘。

シエリーらと学校に通い、放課後は仲良し4人組で『木漏れ日』で遊ぶリア充娘。

シエリー・ニーレンバーク

・・・ ジャックの娘。黒髪以外父と似ていないと評される美少女だが、実は性格も似ている。

子供たち4人の中では一番お姉さんで師匠の面倒も見てくれるので、マリエラは助かっている。

パロワ・シール

・・・ ヴォイド、エルメラ夫妻の長男。しっかりしていて弟の面倒をよく見ている。

エリオ・シール

・・・ ヴォイド、エルメラ夫妻の次男。泣き虫。エルメラの血が色濃く出ているようで、静電気がすごい。

#### 迷宮都市以外の住人

クンツ・マロック

・・・ ロック・ウィール自治区を治めるハーフ・ドワーフ。ドワーフたちの願である“至高の一振り”を渴望しており、そのために持ち合わせた商才、政治の才を振るう辣腕の領主。

ベラート女伯

・・・ マルローの形だけの妻。執事と恋仲にあり、子供も執事との間に生まれた子。その事実を隠すために執事と同じ金髪碧眼のマルローを夫に迎えた。

ベラート伯爵家の執事

・・・ ベラート女伯の事実上の夫だが、身分上結婚できず、子供にも名乗れていない。事業失敗の穴を埋めるために、ロック・ウィールから仕入れた武器を敵国に密輸していた。その販路がポーシヨン市販化によって閉ざされそうになったため、錬金術師の誘拐を企てる。あわよくばマルローに重傷を負わせ、領地に連れ帰ったのちに殺してなり替わろうと企み、迷宮都市まできたために、犯行が明るみにでる。髪は黒く染めていた。

僇<sup>せむし</sup>の商人親子

・・・ ジークの元主。迷宮都市でポーシヨンを商い、一発当てようとやって来る。キャロライン誘拐、救出劇を自作自演しようとして失敗。他の悪行も明るみに出て、犯罪奴隷に墮とされる。元奴隷の一人に買われ、迷宮に潜っていった彼らはそれきり戻っては来なかった。

アグウィナス家

・・・ エンダルジア王国の筆頭錬金術師にして、<sup>スタンピート</sup>魔の森の氾濫以降も迷宮都市でポーシヨンの管理をおこなってきた一族。

キャロライン・アグウィナス

・・・ アグウィナス家の天然系美少女薬師。誘拐事件の末、ウエイヌハルトに助け出され、恋に落ちてプロポーズされ、とお姫様展開を繰り広げる。そばに氷の石像と化した兄がいなければ完璧だったのだが、マリエラの友達なので多少の残念さ

は致し方ない。

ロイス・アグウイナス

・・・ キャロラインの父。たまに出てくる。

ロバート・アグウイナス

・・・ キャロラインの兄。

新薬の一件以来、療養名目で幽閉されていたが、ポーションの市販によって危険にさらされるだろう妹を助けるべく脱走する。

炎災の賢者に貸し与えられた魔法陣の力を借りてキャロラインを助けるも、健闘むなしく……。

かわいいい妹キャロラインが駆け付けたウェイスハルトに救出され、プロポーズされるシーンを氷の像と化した状態で見せつけられる。

以降も炎災の賢者にファイヤーされたりデコピンされたり、扱いがひどい。

ロブロイ・アグウイナス

・・・ 200年前のアグウイナス家の当主。

炎災の賢者に売りつけられたレインボーフラワーがきっかけで、美姫とエンダルジア王の仲を取り持ったり、筆頭錬金術師になったり、王妃を助け出したり、魔の森スタンプレイトの氾濫後のエンダルジア王国にシューゼンワルド辺境伯の兵を連れて駆け付け復興に尽力したりと、八面六臂の大活躍をした人物。……だが、レインボーフラワーの代金を出世払いの分割払いの高利回りで5年間も炎災の賢者に支払っていたことから、炎災の賢者からロバートの扱いは思われる。

## 悪魔に魂をとられなかった男

「ふむ、この患者の脚は魔物に喰われて一度ちぎれたのですね。千切れた箇所はつぶれて飛散し、回収した段階でもとより短くなっていたと。それを上級の特化型で……」

ふむ、とロバートは興味深そうに迷宮討伐軍の治療部隊の診療記録を読んでいた。

ニーレンバーグが上級特化型のポジションを複数使って治療した兵士の治療記録だ。あの時は負傷者が非常に多かったから、この兵士のちぎれた脚の治療は後回しにせざるを得なかった。腐らないように最低限繋いで、後日治療を行ったのだ。それでも兵士のちぎれた脚は、だいぶん痛んでしまっていたから、上級ポジションを掛けたら飲ませたりするだけではとても治せない状態だった。

そもそもポジションはランクによって、回復量が決まっている。欠損の場合は体積や重量と言い換えればいいだろうか。一般的に特級ポジションであれば欠損も治せるといわれているが、腕を無くした兵士に、特級ポジションを飲ませたとして、新しい腕がにゅると生えてくるわけではない。ちぎれた腕を押し付けた状態で傷口に掛ければ多少の欠損組織を補ってくつつけることができる、というものだ。

傷口が剣でスパツと切られたように滑らかであれば、上級ポジションでもつなげることはできるだろうが、魔物に喰い千切られた傷口は、そう綺麗な物ではない。切断面の皮膚や筋組織はスタスタに裂け、牙で押しつぶされ、噛み砕かれているし、骨も筋も縦に裂けたり粉ごなに砕けたりで、元の形をしてなどいない。綺麗に二つに

分かれたわけではなく、傷口付近は細かくちぎれていて、腕や足を回収しても欠片はすでに魔物の腹の中から迷宮の土と化してしまっているか。だからくつつけると言っても実際は、つぶれた組織を修復してつなぎ合わせることになるから、相当量の回復能力が必要になる。

では、腕を無くして数年たった者に特級ポーションを飲ますとどうなるのかというと、多少腕は生えてきはするが、傷口が盛り上がりリーセンチほど長くなったかというレベルでしかない。

これでは手足を失った者を回復させるために、何本特級ポーションが必要になるか分かったものではない。しかも、怪我をしてから時間が経つほど、回復量は低くなる。これは肉体が健全な状態を忘れてしまうからだと言われている。

では、特化型はどうかというと、上級ランクであっても筋組織特化型であれば、えぐれた筋肉を再生してくれるし、骨の特化型であれば複雑に折れた骨、部分的にかけた骨も修復してくれる。上級でもこの効果なのだから、特化型の特級ポーションを組み合わせれば、ませれば、腕や足の欠損も治すことは可能ではあるだろう。ただし、今度は材料が容易には手に入らない。

特化型の特級ポーションの1本金貨10枚という値段は、その材料を考えれば特段暴利というものでもないのだ。

錬金術師リヒスマはこれらの特化型の特級ポーションもすぐに作れるようになるだろうが、迷宮都市には手や足を無くしたものが一体何人いるだろう。彼ら全員に行き渡るだけの特化型特級ポーションの材料を揃えるよりも、迷宮の主が地脈を支配し迷宮都市が滅びる方がよほど早いに違いない。

だから、炎災の賢者がニーレンバーグとロバートに命じた「スラムの連中全員治療」というのは、一見無茶な注文なのだ。



しかし。

「あえて、砕いて潰して特化型を使うことで、欠損を補うように回復させたわけですか。なるほど。特化型が組織を回復させるメカニズムが実に明確に示されている」

先ほどからロバートとニーレンバーグを中心に治療部隊は熱心に議論を行っていた。

「これが可能だというならば、体の健康な部分から必要なものを半分ほど取り出して、増やしてから戻してやればよいのでは？」

「だがどうやって増やす？ 切り開いたまま置いておけば、じきに腐ってしまうだろう」

「……健康な部分を切るんですか？」

「……増やすって……」

いや熱心に議論をしているのは、ニーレンバーグとロバートだけで、他の治療部隊は完全に引いている。怪我をすれば治癒魔法で治すか、ポーションで治す。それが彼らの常識で、健康な体を切り開いてわざわざ傷を広げるなどと、狂気の沙汰にしか思えないのだ。

「形代を……、いえ、体を開いたままで長らえさせる薬液ならありますよ。あれを応用すれば、特級ポーションの回復効果と上級特化型の修復効果を使って組織を増やせるでしょう」

「なるほど、あれか。確かにあれならば……」

やばい二人が出会ってしまった。

嬉々として兵士の傷を開き、治療を行うニーレンバーグだけでも恐ろしかったのに、ロバートはそのニーレンバーグの方法を補い上乘せする案を出す。シナジー効果だ。ダークなコラボレーションに、迷宮都市の治療技術は龍と呼ばれる伝説の生き物が天に昇っていく

かのごとく、スパイラルアップ間違いなしだ。

きつと効果も素晴らしいのだろうが、普通の治療技師たちには、とてもじゃないが付いて行けない。彼らのパラダイムがシフトする前に、パラダイム自体が崩壊してしまいそうだ。

うつすらと笑いながら議論を深めるニールンバークとロバートを、他の治療技師たちは愕然としながら見守っていた。

「悪魔の所業だ。できるわけがない……」

小さく漏れ聞こえてくる悪態を、ロバートはナンセンスだと聞き流す。

（悪魔というのは、こんなものではないですよ。もっともあの方は悪魔より余程タチの悪いものでしたが）

できない理由を探す無意味さを、ロバートは炎災の賢者にこき使われていた短い期間でいやというほど思い知らされていた。

\*\*\*\*\*

初めて見たときは、己の眼を疑ったものだ。

「だから、ノズルでだいたい細かくして、後は水の粒に弾けてもらいますよ。あ、ついでに凍ってもらえばもっと楽かも。冷やして凍らせるんじゃないかと、冷えて凍ってもらおう感じで」

「うおー、新テク発見ー」などと言いながら、何の道具も使わずにルナマギアの抽出を行う少女は、ロバートの妹キャロラインが仲良くしているという薬屋の娘だった。ちなみにこの娘が何を言っているのか、ロバートには言葉は理解できるのに意味は全く理解できな

い。

『木漏れ日』はシロだな、などと言ったのはどこの誰だったのだろうかと、ロバートは眩暈を覚えたが、もし疑問をいだいてマリエラの姿を確認しても、その時点でシロだと判断しただろう。

何しろマリエラという少女は、凡庸が服を着て歩いているようなごくごく普通の娘だったのだから。

ちなみにキャロラインにそれとなく確認したところ、ロバートが捕縛された時、エスターリアの眠る地下室にマリエラもいたのだという。

あの時確かロバートは「どこだ！ どこにいる！？」だとか、「錬金術師をこちらへよこすんだ！」などと声の限りに叫んだのだが、まさにあの場にいたのだそつだ。

(全く気づきませんでした……)

なんたる恥辱。思い出すだけで居た堪れない気持ちに苛まれる。

もう一度、幽閉されていたあの部屋に戻してはくれないものか。

(ですが、私は炎の悪魔に魂を売った身。永劫の苦しみに身を焼く定め……)

であれば、多少はましだったのだろう。けれど実際は。

「ロブ、氷無くなった。ポーっとしてないでちゃっっちゃと作る！

お前、借金した分、ちゃんと働けー」

炎の悪魔だと思った女性は、炎災の賢者と名乗る錬金術師の師匠らしい。

左手の手の甲に焼き付けられた《刻印炎授》という奇跡のおかげで、ロバートはキャロラインを誰に悟られることなく連れ出し、結果として命を救うことができたのだけれど、その奇跡の代償に、命

も魂も取られなかった。

というか、この刻印は先祖がオゴったお返しで、これほど希少なものだというのに何と無償なのだそうだ。

命を失うものだと思っていたし、あの時は余裕などなかったから、書き写したり、記録に残したりしなかったのだけれど、刻印が消えてもロバートは死ぬこともなく、間抜けなポーズの氷の像状態で妹キャラインがプロポーズされるといって赤っ恥をさらしたまま、今も元気に生きている。

(せめて、刻印を記録しておくのだった……)

それなりに複雑な刻印だったから、写しではオリジナルほどの効果は見込めないだろうけれど、時折恥ずかしい記憶がフラッシュバックしたときに、人目を忍ぶことくらいはできたに違いない。

「ローブー、氷まだー？」

チンチンと炎災の賢者がグラスの縁をマドラーで叩いて氷を催促している。

黙っていれば人目を惹く見目麗しい女性だというのに、昼間っから飲んだくれているし、グラスを叩いて音を出すなど、なんて下品なのだろう。

こんな人物に『刻印の代償』としてこき使われるのであればまだ納得がいくというのに、理由は『銀貨5枚の借金と利子』だ。そんなはした金、家令に申し付けて返すというのに、それは妹キャラインの金だから働いて返せと言って聞かないのだ。

(悪魔でもなく、刻印の対価でもなく借金のカタに働かされるとは……。鬱だ。消えたい)

そんなことを考えながら、アイスペールに氷魔法で氷を入れる。

憂鬱な気持ちで入れていたせいか、身に染み込んだ呪いの残渣がぼろぼろと溢れ出て氷と一緒にアイスペールに入る。

「あーっ、おま、ソコにいれる！？ ファイヤー！」

(うう、今日も燃やされてしまった……)

デコピン攻撃も嫌だが、ファイヤーも嫌だ。

何年も染みついた汚れを無理やり綺麗にされるような、人前で裸にひん剥かれて体中洗われるような、なんとも落ち着かない気持ちにされる。

「ロバートさん、グッジョブです！ さ、師匠。今日の分は終わりましたから、帰りますよ」

ロバートがもたもたしているうちに、マリエラは上級ポーションを作り終えたらしい。今日はいつもより師匠の飲酒量が少ないと、にこにこしながらサムズアップをかましている。

「えー、マリエラまだ魔力残ってるじゃん」

「魔力はありますが、材料がないですー。さ、帰って特級の練習ですよー！」

勝ち誇った顔のマリエラと、酒瓶にしがみつく炎災の賢者。周りの兵士は、「今日はお昼寝はいいんですか？」などとにこやかに話しかけながら、完成した上級ポーションを大型のポーション瓶に取り分けて運び出している。

その上級ポーションの量たるや。

(どうして誰も驚かんのだ……!!)

この仮設の工房で、錬金術師マリエラが行っていることは、何もかもが規

格外だ。

道具を使わず上級ポーションをつくることも、その桁違いの魔力量も、今日は倒れなかったけれど、毎日のように魔力を使い切り倒れているということだってそうだろう。

幼い子供は全力で遊んで体力が尽きると、食事中だろうがいきなり眠ってしまうもので、そのことに疑問も苦痛も感じはしないが、このマリエラという少女はまるで幼い子供のように限界を超えて錬金術を使い続ける。

ポーションの市販が始まるとキャロラインの手紙で知った時には、錬金術師は複数いるのだと考えていた。事実、錬金術師は師匠と弟子の二人いたけれど、実際にポーションをつくっているのは弟子だけで、師匠は弟子をからかいあおんでいるだけだ。

特級ポーションの修行にしたって無茶だった。

散々、凡庸だなどとマリエラを評したロバートだったが、マリエラの錬成を一度見てしまえば、その評価は180度覆った。これほどの魔力量と技術を誇るのだ。帝都から特級ポーションの製造に使う魔道具を取り寄せればすぐにも特級ポーションがつかれるようになるだろう。いや、帝都の最新式の物でなくとも、アグウィナス家の倉庫に眠る古い魔道具を使っても、製造できるに違いない。

けれどそれをマリエラに伝えようとすれば、すぐさま炎災の賢者のデコピン攻撃が飛んできて、ロバートの口は封じられてしまう。マリエラの居ないところで炎災の賢者に問うても、意味ありげに笑ってはぐらかすばかりだ。

たった一つ得られた意味のありそうな答えといえば。

「人間つてのはとても自由で、同時にとても不自由だ。どこにだって行けるし、何にだってなれるのに、居場所も自分の限界も、全部

自分で決めちゃう。だからね、ロブ。

難しいとか、できないとか、自分はこれくらいなんだとか、そんな自分の限界を自分で定めちゃいけないよ。

覚えておきな、ロブ。できると思ってたやってみりゃ、意外と何とかなるもんさ」

ロバートは、その言葉で炎災の賢者の言動に、少しだけ納得がいった。

彼女がマリエラに何をさせたいのかは、考えも及ばないけれど、そうでもしなければとても辿り着けないところに、炎災の賢者の目的があるのだろう。

僅か数日ばかりの時間で、何の道具も使わずに地脈の欠片を処理してみせた錬金術師マリエラを見てロバートは思う。

（この炎災の賢者は、悪魔などよりタチが悪い……）

地脈の欠片をスキルだけで《命の雫》に溶かすなど、ロバートの常識からしてみれば、もはや人間技ではないのだ。ついでやってみせた《薬晶化》など、古い文献に見るばかり。おとぎ話のように信ぴょう性のない作り話だと思っていたのだ。

本人は「できちゃった！ きれいー」と得意げで、女兒がビーズ何かを集めるように運び込まれた材料を片っ端から《薬晶化》しては瓶にいれ、棚に並べてにまにましているが、できちゃったところの騒ぎではないのだ。

ロバートのマリエラへの評価はさらに180度回転し、最初と合わせて360度、一周廻ってありふれたものに戻ってしまった。

いろいろと、真面目に考えるのがばからしい。

できない理由を探す無意味さを身を持って知ったロバートは、今

ある技術とポーションで迷宮都市中の怪我人を治せる方法を模索する。

勿論、呪いや禁忌に触れる邪悪な方法は使わない。もしそんな物を使ったら、すぐさま炎の災いが二本足でやってきて、ファイヤーからのデコピン連打を加えるに違いないから。

「迷宮討伐軍にいけば、無くした手足すら治してくれるらしい。ただし、その分働かないといけならしいが」

そんな噂が迷宮都市じゅうに流れるのに、さして時間はかからなかった。

諦めきっていた怪我を治してもらい、再び迷宮に潜る者が出始めると、我もと追隨する者が増える。

「いつかスラムから出たい」

ずっと昔に諦めて、忘れるしかなかった気持ちを、無くした手足と共に取り戻した住人は、その手に再び剣をとり、迷宮へと向かっていった。



悪魔に魂をとられなかった男（後書き）

ぞっくりまとめ…ロバート「マリエラ、すげえ！」

## 氷海にて

「だからさー、なーんでっ、また雪原にきてんだよーっ!!」

エドガンの叫びがただっ広い氷の原に木霊する。

「フツーはさ、『エドガン、付き合っつて』って言ったら、アレじゃん？ 秋の実りを二人であーんとかしあっちゃって、肌寒い夜は温め合ったりしちゃうんじゃない？ なー、ジークううう!!」

「大丈夫だ、エドガン。たくさん釣れば頼りになると思われるさ」  
いつものごとく叫ぶエドガンと、根拠なく慰めるジーク。二度あることは三度あるというけれど、まさか本当に極寒の地を三度訪れることになるうとは。

事の起こりは単純で、ジークが迷宮に採取という名のお使いを頼まれたまさにその時、『木漏れ日』のドアをバァーンと開けてエドガンが飛び込んできたのだ。

「麗しのマイラブ！ 貴女の哀れな恋のしもべが今！ 迷宮都市に戻って参りましたあ！」

とかなんとか世迷いごとを叫びながら。

流石は恋の迷子だ。見事に迷走しているが、そんな滑りっぷりが師匠に通じるはずもない。

「おー、久しぶり！ えーと、えーと、えーと、あ！ エドガン！ ちょうどいいや、ちよつと付き合え！」

いろいろ酷い。名前を呼ぶ前の不自然な間はなんだ。師匠の黄金の瞳がいつになく輝いていて、視線は目の前にいるエドガンの方を

向いてはいるが、どこかエドガンを透かして見ているようにも見える。

「師匠、アカシックレコード世界の記憶見てるんじゃない」

「まさか……、たかが名前ごときで、そんな超絶スキルをつかうなんて……、さすがに……」

師匠を見ていたマリエラが呆れたようにつぶやき、ジークが否定しようとして否定しきれずに困っている。マリエラが「常識も人格も行動も突き抜けている」と評した師匠の性格をジークはすでに把握している。名前忘れちゃったとか、どうでもいい事にこそ全力で力を使いそうだから始末に負えない。

しかし、恐らく名前を忘れられた可哀そうなエドガンは、師匠の「付き合え」の一言を、調子よく脳内変換して舞い上がっていた。

「はい！ 貴女とならばどこまでも！」

「あ、一緒に行くのはジークだから。じゃー、頼んだ」ファミ・ファタール

「なんてツレナイ！ そんな貴女はまさにオレの運命の人！！」

帝都で覚えてきたそれっぽい言葉を師匠に捧げるエドガンなのが。

「ねー、ジーク、ファミ・ファタールってなーに？」

「ファミ・ファタールとは運命の女という意味だが、破滅を呼ぶ魔性の女というニュアンスが強いな」

「そっかー。師匠はエドガンさんにツレないけど、エドガンさんは師匠に釣られてるから、だいたいあってるね」

「そうだな。じゃ、マリエラ行ってくる」

私うまいこと言っちゃったかも、とにまにましているマリエラに別れを告げて、ジークはエドガンに向き直る。

「さ、エドガン、行くぞ」

「つて、どこへー？」  
「釣りだ」

こうして、エドガンはジークのお使いに巻き込まれ、雪と氷の迷宮へやってきていた。

しかも、今回は黒鉄輸送隊の面々も強制参加させられている。もちろん新隊長エドガンの一声で、迷宮都市で過ごすはずの休日だ。横暴だ。黒鉄輸送隊はブラック職場に成り下がってしまったのか。

「エドガン、うるさい。獲物が逃げる」

「そうですね、釣りは静かにするものですぞ」  
吹きすさぶ風より冷たいメンバーの対応も領けようというものだ。

ここは、迷宮第33階層。『流水の海』と呼ばれる場所だ。

以前、オーロラの氷果を採取するために訪れた32階層の1つ下の階層も極寒の地で、さらに海の階層でもあった。とはいえ、巨大な流水が幾つも浮いているから足場には困らない。

流水と言っても攻略済みの閉鎖空間に浮かぶ氷だ。海流など無いに等しいから水面の氷はほとんどん発達してしまう。魔物と冒険者の戦いで流水は幾度となく割れ、隆起し、そして再び凍りついたのだろう。人よりは大きい山というには小さい氷塊が流水から飛び出すように突き出して、浮かぶ流水は平らな物ばかりではない。逆に一見平らで一枚の氷に見える今の足場も厚みは場所によってまちまちだ。

黒鉄輸送隊の面々はこの流水の薄いところに穴をあけ、あるいは流水の縁から釣竿を垂らして、思い思いに過ごしている。一見レジャーのように見えなくもない。時折、ダーツのような形状の魚、エペルフィッシュが弾丸のように飛び出して来ることさえも、この階

層ではスポーツフィッシングの範疇だ。

「はいですぞ」

飛び出してきたエペルフィッシュは、グランドルがごとごとく手に持った鍋のふたで受け流し、ヌイが流氷の上でビチビチ跳ねるエペルフィッシュを手際よく捌いていく。水中から陸上の動物めがけて突き刺さり、肉を削り喰らおうという獰猛な魚であるが魔物ではない。だから魚肉はまるごと残る。

調理ナイフ程度の大きさのエペルフィッシュは皮が厚くて可食部が少ないが、少ない可食部は極めて美味な高級魚だ。脂の乗った白身であるが、生で食べると脂が多すぎて人によってはしつこく感じ、煮たり焼いたりすれば脂が流れ出てしまい、折角の旨味が逃げてしまう。お勧めの調理法はフリッター。素揚げの場合は油の温度と揚げ時間を加減して、魚肉の脂が流れ過ぎず残り過ぎない、丁度いい加減に仕上げるのが難しいが、衣をつけて揚げればヌイのような料理人見習いにも、上手に仕上げるができる。

美食家のグランドルと、食いしん坊のヌイがそんな魚を見逃すはずがなく、二人は先ほどからせつせとエペルフィッシュの捕獲にいそしんでいる。

もう一人の奴隷、ニコはというと、氷に穴をあけるために購入した回転切削魔道具が大層お気に召したようで、氷の薄そうなところを探してはせつせと穴を開けまくっている。筒状のノコギリと支えからなる魔道具で、穴を開けたい場所に支えを固定して始動させれば、筒状のノコ歯が高速回転しながら氷の中に沈んでいく。最下面まで届いたら瓶の栓を抜くように、氷がスコンと抜けるのだ。

のんびり釣り糸を垂らしているのは治癒魔法使いのフランツとメテナンス担当のドニーノで、ユーリケが運んでくる温かいお茶をすすりながら釣りを楽しんでいる。

ちなみに今日の釣りの目的はエペルフィッシュではない。フィロロイルカスの幼生体という、透き通ったクラゲと魚のあいこのような生き物だ。透き通った体で傘の裾が広がり、短い触手が揺れるところはクラゲのようであるのだが、傘の中ほどから上はくびれて盛り上がっていて、スカートを翻す妖精のように見えなくもない。ふわふわと漂う姿は美しいものだが、その生態は解明されていない。名前に幼生体とついているのは、この生き物を捕獲して飼育したところ、傘が細長く伸びていき魚か蛇のような形状になったため、成長過程の一段階だと分かったためだ。

ちなみに細長く成長した段階で、餌が変化するらしく、飼育していた幼生体は死んでしまったからこの先の形態は調査中とされている。フィロロイルカスの幼生体は口も消化器官も持っておらず、体表面から魔力を直接摂取する。だから、流水に空けた穴から魔石を餌に釣り糸を垂らせば、包み込むように魔石にへばりついたフィロロイルカスを釣りあげることができるのだ。

もっともそんな悠長なことをしているのは、釣りというスタイルを楽しんでいるフ란ツとドニーノだけで、ジークは魔石に寄ってきたフィロロイルカスの幼生体を穴や流水の縁からひも付きの矢で狙い撃ちしている。

水による光の屈折や水流、水の抵抗はあるけれどゆっくり波間を移動する生き物など、眼帯で精霊眼を隠してもたやすく射貫くことができる。1射で数匹打ち抜いていて、かなりのオーバーキルではあるが、真面目にフィロロイルカスを捕まえているのはジーク一人だから釣りを楽しむ暇はない。

ちなみにエドガンは叫んでばかりで役に立たない。攻撃的なエペルフィッシュはエドガンの声に反応して、ドシユドシユと海面から飛び出して突き刺しにかかっているが、折角魔石に喰いついたフィロロイルカスの幼生体はびっくりして逃げてしまう。

完全に邪魔だ。いつそエペルフイツシュの尖った口先が刺さって、エドガンの口を縫い付けてくれれば静かになっていいのだが、伊達にAランク目前でないということか、エドガンをねらったエペルフイツシュは綺麗に三枚におろされて、氷の上に置かれた皿にひらひらと落ちている。

ちなみに今回は中級の魔物除けポーションを使っているから、この階層に出没する魔物たちは寄ってこない。完全に休日のレジャー状態だ。

「これくらいで足りるか」

エドガンが一匹も捕まえていないうちに、ジークが必要量のフィロロイルカスの幼生体を捕まえたようだ。この幼生体は、特級ポーション『氷精の加護』の材料の一つだ。『氷精の加護』は薄い氷の皮膜を生じて熱気を防ぐポーションで、第56階層の赤竜退治のために必要なポーションだ。

ジークとヴォイドの参戦で遠距離攻撃とブレスの防御が可能になって、赤竜退治の勝算が見えてきたものの、あの階層には階層主である歩く火山も控えている。前回はマリエラが特級ポーションを作れずにウェイスハルトの魔法で熱気を防いだが、一定時間確実に熱気を防いでくれる『氷精の加護』があるに越したことはない。

ジークは捕まえたフィロロイルカスの幼生体を砕いた氷と共に大きな瓶に詰め、布でぐるぐる巻きにしてから袋にしまう。結局ほとんどジークの一人作業だ。

いや、ニコが穴を開けまくってくれたおかげで、フィロロイルカスの幼生体に射かける場所が増えたし、氷を回収できた。グランドルたちがエペルフイツシュを処理してくれたから、フィロロイルカスの幼生体に集中できたし、「おつかね？」と熱いお茶を差し入れてくれるユーリケもありがたい。だからこれは分業だ。チームワー

クなのだ。

さっきから、クソ寒い雪原で愛を叫んでいるエドガンを除いては。

「おい、エドガン。こっちは終わったぞ。エペルフィッシュも大量だ。そろそろ帰ろう」

声を掛けるジークにエドガンが振り向く。寒さのせいか鼻が赤いが、それ以上に顔も赤い。

「ジークよおお、なーんかしばらく見ないうちにマリエラちゃんと仲良くなつてね？　しかもあの二人と一つ屋根の下とかよー」

「ユーリケ、エドガンに酒飲ませたか？」

「そいつに飲ます酒も、茶もないし？」

エドガンは酒が弱いのだ。すぐに酔うし顔にも態度にも出てしまう。酔っぱらったエドガンを見てジークが尋ねると、ユーリケは撤収の準備をしながら面倒くさそうに答えた。

「こーれっはッ！　愛しのハニーのプレゼントなんでーっす！　いいだろー、やんねーぞ！」

どうやらエドガンが抱えている小さな酒瓶は、師匠の飲みさしらしい。ここまできると、うっとおしいを通り越して可哀そうに思えてくるから不思議だ。

何と声を掛けようか困惑げなジークと、気にせずさっさと撤収準備を始める黒鉄輸送隊の面々。

「そーだ！　百年氷！　でっかい氷で俺の愛を表現するぜ！」

そう叫ぶや、少し離れたところにある丘くらいの小ぶりな氷山めがけて双剣を抜いて走り出すエドガン。でっかい氷で喜ぶ女性がどこにいるというのだろう。とりあえず素材だったら喜んでしまう、どこぞの錬金術師の弟子の方は、既にジークに売約済だ。



「だああああ！」

一点に衝撃を集中させ、そこを起点に氷塊を割ろうというのだらう。盛り上がった氷塊の中ほどに剣戟をたたき込み二本の剣が紙一重の距離に並んで突き刺さる。

ビシリ。

エドガンの攻撃によってひび割れたのは、攻撃をたたき込んだ氷塊ではなくて、その氷塊周囲の氷の足場、流水だった。

「エドガン、逃げる！ そいつは……！！！」

ジークの叫びは、バキバキと音を立てて割れて盛り上がる氷の破壊音にかき消される。

撤収を始めていた黒鉄輸送隊はすでに階層階段にほど近い安全な場所にいるから特に被害はないけれど、エドガンと黒鉄輸送隊のなかほどにいるジークが立っている流水はシケの小舟のように揺れていて、立っているのがやつとの状態だ。

まして、エドガンなどは氷塊に突き刺した剣を掴んでいなければ、とつくに極寒の海へ投げ落とされて、凍てつく寒さに命を奪われてしまっていただろう。

「っ、はっ！」

エドガンは上下にうねるように動いて、氷の海に潜らんとする氷塊から双剣を抜き取ると、そのまま氷塊を蹴ってジークの方へと跳躍した。濡れて滑り、さらには揺れる流水の足場の悪さをものともせず、ざざつとわずかに滑っただけで着地したエドガンは、両手の双剣を構えたまま氷塊が沈んだ海をにらみつける。

見よ、その海面から再びせりあがってくるものを。

はるか遠くから見れば、それは蛇のようだと思えただろう。けれどその太さは、大の男が数人がかりで囲んだとて囲いきれないほど

に太く、海面からもたげた鎌首は見上げるほどに巨大であった。

何よりその頭部。

眼らしき器官も顎らしき盛り上がりもない、のっぺりとした先端は、ミミズの口先がっんと尖ったようである。

得体のしれないその頭部が、ぶちぶちと皮膚を裂くように、内側からめくれ上がるように開いて、目の前の獲物を飲み込もうと狙いを定めていた。

氷海にて（後書き）

ぞっくりまとめ…シレナイ師匠に釣られたエドガン、一本釣り

## フィロロイルカス

「チツ、氷じゃなくてワームだったってワケかよ！」

氷塊からせりあがり鎌首をもたげたそれは、蛇というよりワームと呼ぶべき生物だった。

氷塊を割ろうとしたエドガンの剣戟を受けて眠りから目覚めたのだろう、体のあちこちはまだ凍ったままのようで、動きが緩慢であったことが救いだらうか。

完全に復活するために、熱い血潮を持つ獲物を求めているのだろう。エドガンを飲み込もうと遙か頭上より下降してくるその口を軽く躲したエドガンは、後ろに飛び退る直前に双剣でワームに切りつける。

「くそ、手ごたえがねえ！」

切りつけたワームの体は、薄い皮らしきものの下は、すべて細かい氷が流動状態にあるような、半凍結の状態になっていて、肉や脂肪はおろか、骨や体液らしきものも確認できない。全身が凍りかけのゼリーのようなものだから、切り裂くのもたやすければ再びくつつくのも抵抗がない。傷を塞ぐように体を擦った次の瞬間には、ぐずりとした傷口が凍り付いてふさがっている。

エドガンに躲されたことも、切りつけられたことさえ認識できていないように、ワームは先ほどまでエドガンが立っていた流水に突っ込んで、ベキベキと音を立てながら厚い氷を割りながら再び海へ潜っていく。

「ヤツの狙いはオレだ！ みんなは今のうちに逃げるんだ！」

普段は大層チャラくても、黒鉄輸送隊の隊長の任務と共に引き継いだ思いが、矜持があるのだろう。仲間を守るため、仲間を逃がすために、得体のしれない氷のワームと再び対峙せんと剣を握る手に力を籠めるエドガン。

その雄姿を見た黒鉄輸送隊の面々は。

「言われなくてもそうしてるし？」

「ほっほ。ではお先にですぞ。ヌイ、エペルフィッシュの料理、期待していますぞ」

「コクコク」

「夕飯までにはもどれや。おせーと先に始めちまうぞ。ニコ、荷物を拠点に置いたら『ヤグーの跳ね橋亭』で打ち上げだ」

「コクコク」

「エドガン、他の冒険者の迷惑にならないように、きっちり片付けてから帰ってきたまえ」

「えええええ！？ みんなヒドクね！？」

ワームなど全く意にも介さず撤収していく黒鉄輸送隊の一行と、叫ぶエドガン。そして、黒鉄輸送隊と一緒に帰るべきか、エドガンを待つべきか戸惑うジーク。

「ジーーーーークツ！ 帰るな！ お前は帰るなよおおお！ 友達だろ！？」

「……分かった。さっさとあのデカ物を片付けろ、エドガン。後ろから来てるぞ」

「わかっ、てる、けどよ！ こいつ、手ごたえが、ねーんだ、よつと！」

ワームは巨大で、エドガンがひよいひよいと流氷を飛び移りながら攻撃しても、さほどダメージを受けていないように思える。

「ヘイ！ ジーク！ レッツ サポート！ ちょっとぴりオレを助けようぜー！」

再び海中から現れて、氷原にそびえる大樹のように鎌首をもたげた氷のワームに取りすがり、ひよひよーいと昇りつつ攻撃を加えているエドガンがジークを誘う。身軽だ。まるで猿のようだ。新種のイエティーか。

「目でもあれば弓で狙い撃って援護の一つもするんだかなー」

ジークの方も暢気なもので、どうしたもんかと言いたげにエドガンの木登り……、ではなく戦闘を眺めている。

帰ってしまった黒鉄輸送隊もふくめた皆の反応からも明らかのように、この氷のワームはエドガン一人で倒せないような魔物ではない。やたらと大きくて、攻撃が通りにくいがそれだけだ。もちろんサイズが大きいであるとか、多少の攻撃に動じないというのは強者の特徴であるから、駆け出しの冒険者が倒せるような相手ではない。ランクで言えばBランクか、流水の浮いていない海という環境的な条件が加わればAランクにもなるだろう。

この階層は足場に困らないほどの流水があるし、Bランク上位のエドガンからしてみれば、ワームの動きは緩慢で攻撃手段は物理だけ。

逃げようと思えばいつでも逃げられるのだが、こんなでか物を放置するのは迷宮といえど迷惑だ。キャッチした魔物はきちんと地脈にリリースするのがマナーというものだろう。折角凍って眠っていたワームを、エドガンが剣を突き刺して起こしてしまったのだから、エドガンがきっちり倒すべきだ。もちろん、苦戦しているのなら共闘するのだけれど、エドガンはどう見たって本気を出していないのだ。

「ジーク！　ヘイ！　カモン！」

黒鉄輸送隊の仲間においていかれて寂しん坊モードを発症してしまつたエドガンは、攻撃そつちのけで一生懸命にジークを誘っている。このままでは、ワームを倒すのにどれだけ時間がかかるかわからない。

エドガンがワームを倒せないとは思わないが、エドガンがぐずぐずしている間に、『ヤグーの跳ね橋亭』で予定されているエペルフイッシュ料理のパーティーが終わってしまう。いつもマリエラとジークの手を煩わせまくっている師匠の相手をエドガンに押し付けて、いや、エドガンなら大喜びで買って出るのだから、マリエラと二人仲良くエペルフイッシュ料理に舌鼓を打つというジークの計画が台無しになってしまう。

「仕方ない」

ジークは弓を構えると、眼帯の下に隠れた精霊眼に意識を集中させる。このワームに精霊眼による攻撃力増加の効果は必要がない。そもそも倒すのはエドガンだ。ただ、弱点でも分かれば、討伐時間は短くなるだろう。

「あそこか。だから目覚めたのか」

精霊眼で弱点を探すと言っても、視覚的に印が見えるわけではない。ただ何となくどこかが分かるのだ。暗い夜道を進んだ先の分かれ道で、なんとなくこの道は危険だと感じるような感覚だ。恐らくあのあたりに、ワームの核というべきものがあるのだろう。ジークがそう感じた場所は、氷の中で眠っていたワームにエドガンが剣を突き刺したまさにその場所だった。

「エドガン、さっきの場所が急所だ！　だから凍っていたのに目覚めたんだ！」

「そんなこと言ってもよー。こいつ動くしー。オレの双剣じゃーち

びつとばかり長さがさー」

せつかくジークが弱点を教えたというのに、寂しんぼうモードのエドガンはデモデモダツテとジークをチラ見しながら、あっちチクチクこつちチクチクと、効いているのか分からない攻撃を繰り返すばかり。いい年をした男のデモデモダツテは少々鬱陶しくもある。

「むう」

これは困った。ジークは思案する。これではパーティーが終わってしまう。

氷のワーム程度、精霊眼を使わなくとも腰のミスリルの剣で倒すことは可能なのだが、エドガンのデモデモダツテのおかげで参戦する気が全く起きない。もはや腰の剣は飾りの役しか果たしていない。これは何とかしなければ。賢さ4の頭脳で一生懸命考えたジークはエドガンに向かってこう叫んだ。

「エドガン！ フレイ様が帰ってきたら一緒にあったまろうと言っていたぞ！」

もちろん、酒でだが。

しかし、酒に酔い、恋に溺れたエロガンの脳内はピンクなネオンのお花畑、いや愛の花園、楽園へヴンでくんずほぐれつ、おしくらまんじゅう状態だ。

「なんだと！ なんだとおおおおおおおオレ！ 今すぐ！ 行きまー！ すー！」

息継ぎなしで叫びきって駆け出すエドガン。双眼がギランギランに輝いて、やる気がみなぎっている。

「こんな氷の塊程度、すぐに葬り去ってやる！」



《我が左腕は焰ほむの座、我が右腕は雷いかづちの座 宿れ 双属性剣デュアル・エレメンツ・ソード》！  
「な……！！ 2属性を同時に!?」

覚醒した主人公よろしく左の剣に炎を右の剣に雷を宿らせたエドガンが、ほぼ垂直に屹立した氷のワームを駆けあがる。

武器に魔力を纏わせること自体はそう難しい事ではないし、その応用で魔法を乗せることも中級以上の冒険者ならば行いうる芸当だ。しかし、同時に2属性を操るといのはそう簡単なことではない。持ち前の器用さに相当な集中力、高い技術あってようやく成し得る技だろう。おお、とジークが驚くほどに、エドガンの技能は高いと言えた。

「だあ！」

最初に剣を突き刺した場所、頭部よりやや下の、蛇であれば首か咽だと思われる位置に、初撃と寸分たがわぬ正確さで左手の炎の剣を深々とたたき込む。氷の塊のようなワームに突き刺さってなおも熱量の衰えない炎の剣は、ジワリとワームの肉を溶かしつつ根元まで穿たれる。けれどワームのその巨体の前では、針が刺さったようなものだろう。炎の切っ先の先にある、ワームの核に届くことはかなわない。しかし。

「これで、とどめだ！」

左手の炎の剣を離れたエドガンは、体をひねり1回転して勢いをつける。右手の雷の剣を炎の剣の柄へと叩き付けた。

エドガンの雷の剣によって先に穿たれた炎の剣は更に深くへ突き刺さり、雷の剣から放たれた電撃は炎の刀身を伝わってワームの核を焼き切った。

核を破壊されたワームは、断末魔に身を振る。天を食もつとす  
るように、空気を求めるかのように、真つ直ぐ上に向けて開かれた口  
先は、内側から4つに裂けてめくれあがっていて、離れた場所から  
見るジークの目にはどこか花を思わせた。

ワームは小さく震えると、そのまま根元から枯れるように、氷海  
へと倒れていった。

「さあ、行こうぜ、ジーク。フレイジージャさんがオレを待つてる」  
ワームが倒れた衝撃で、けぶるように吹き上がる水しぶきを背景  
にエドガンが氷の世界から現れる。双剣を静かに鞘に納め、先ほど  
の戦闘の余韻すら感じさせずに、フツ、と笑うその姿はこのイケ  
メンだと思わなくもない。やたらめったら速足なのはこの際指摘し  
ないでおこう。

「あ、ああ。帰ろう。それにしてもあのワーム、一体何だったんだ  
ろうな」

エドガンと合流し、階層階段へと歩き出すジーク。

「あれが、フィロロイルカスの成体だよ」

「!!!! フレイジージャさん！ もしやオレを迎えに!？」

見ていたようなタイミングで、階層階段から現れた師匠ことフレ  
イジージャがワームの正体を説明してくれた。後ろには、なぜかマ  
リエラまでついてきている。

「オレの冷え切った心と体を温めてください」と駆け寄ったエド  
ガンは、師匠の「ん？ 寒いのか？ ホレ、ファイヤー」で燃やされ

て、心が灰になっていた。

可哀そうなエドガンをその場に残したまま、師匠はマリエラとジークを連れて流氷の上に倒れたワーム、フィロロイルカスの成体の骸の方へと歩いていく。

「フィロロイルカスは変わった生き物でね。何兆という孢子体から成体になれるのは1体いるかどうかなんだ。幼生体の段階では魔力を吸収するだけで早期成体になって初めてエサを捕食する。その後は何十年もかけて中期成体、後期成体、成熟成体と成長していき、それに合わせてどんどん深海へと潜って行って、再び海面近くに姿を現すのは産卵の時だけだから、この姿を知る者は少ないだろうね。産卵についても単一生殖だから孢子体という方が近いだろうがね。実際の海では深海からの移動と産卵で力尽きて死んじまうんだが、ここは迷宮だからそこまで海は深くもないし、死ぬ前に凍り付いて仮死状態で生き残っていたんだな。」

「うんちくを垂れ流す師匠の後を、「ふえー、さむい」と言いつつ不慣れた様子でトコトコと付いて行くマリエラ。

「もこもこの防寒着で着ぶくれた様子は、太っていたマルエラ時代が思い出されて、これはこれで可愛い。ジークはマルエラが転ばないように気を配りながら、二人に付いて歩いている。」

「ほれ、マリエラ。こいつの体液、《薬晶化》しちまいな」

「師匠に促されて、おっかなびっくりフィロロイルカスに触れてみるマリエラ。」

「でも、この素材初めて……、あれ？ これって……。でも、薄く薄い」

「そつだ。こいつ、これでも竜の端くれなんだよ。竜の因子を獲得し得た個体だけが、何兆分の1っていう生存率を生き残れるんだろ

うな。

つつても下の下もいいところだから、下位種の地竜の血より千倍くらい薄いだろ？

こんだけデカくてほとんど中身は水分だから量だけはたとあるけど、普通に生成してたんじゃ途中で飛んで無くなっちゃう。《薬晶化》でようやく『水竜の血』の薬晶が得られるんだ。水竜の血がこれだけ簡単に手に入る機会はないだろうから、マリエラさっさとやっちまいな。地竜の血と同じ感覚でやれるはずだよ」

「はい、師匠」

マリエラの《薬晶化》によって竜の因子を取り除かれたフィロロイルカスの亡骸は、小さな氷の粒に代わって、さらさらと氷の海へと流れていった。

暗い海へと落ちていく欠片は、海の中で見たならば降り注ぐ粉雪のように見えたかもしれない。フィロロイルカスの亡骸に宿る魔力を取り入れようと、フィロロイルカスの幼生体がふわふわと海の浅い層に漂っていて、まるで海の妖精の群舞のようで綺麗だった。

きつと本当の海であっても、産卵を終えて力尽きたフィロロイルカスは、海の小さな命たちの糧になっていたんだろう。

「さあ、さっさと帰ってあったまるぞ！ ほら、エドガンも！」

マリエラの《薬晶化》が終るなり、長居は無用とマリエラたちを急ぎ立てる師匠。早く戻らないと、エペルフィッシュのフリッターが食べつくされてしまうのだ。

巨大なフィロロイルカスからは、地竜1頭分よりも少ない量の『水竜の血』の薬晶が得られた。マリエラはこの階層の流水を思わせる薄水色の欠片を眺めたあと、大切そうに腰のポーチに瓶をしまった。

「あ、そうだ。ここ、まだまだフィロロイルカス眠ってるから、全

部退治しといてな。明日からでいいから。フィロロイルカスの急所をうまく突いて起こせるヤツって、そうそういないんだよ。頼むな、エドガン」

無慈悲な師匠の依頼によって、黒鉄輸送隊は迷宮都市での休日を、エドガンは身も心も凍てつくような修練の日々が確定した。エドガンに泣きつかれたジークももちろん参加だ。

下の下であっても竜種に当たるフィロロイルカスを起こしまくり倒しまくったエドガンは、その功績が認められ、無事Aランクへと昇進した。

「オレ、Aランクより、愛がほしいよ……」

そう呟いたエドガンを、「Aランカーはモテるらしいぞ!」とジークが根拠なく慰めた。

フィロロイルカス（後書き）

ざっくりまとめ：マリエラは、『水竜の血』を手に入れた！

## 氷精の加護

「さあて、『氷精の加護』作りますか！」

『木漏れ日』2階の工房で、マリエラは朝から錬成を始める。『氷精の加護』の錬成は時間がかかるらしく、今日は迷宮討伐軍基地でのポーシヨン作りはお休みだ。いつも師匠に振り回されているミツチエル君たちは、久々の心休まる休日かもしれない。

もつともお休みなのはミツチエル君たちだけで、ジークとエドガンは今日も迷宮33階層で凍り付いたフィロロイルカスをたたき起こしては永眠させているのだが。

『木漏れ日』2階のマリエラの工房には、大きな桶が二つ置いてあって片方にはフィロロイルカスの幼生体が、もう片方には迷宮33階層でついでに採取してきた百年氷が入っている。他にも皿にオーロラの氷果や氷魔の魔石、地脈の欠片まで載せて並べてあるし、ガラスで作られた漏斗のような器材もあるから、今から料理でもするのかという状態だ。フィロロイルカスの幼生体から漂う磯の香りに、師匠がお酒を飲みたそうにそわそわしている。

そんな師匠はいつものごとくスルーして、マリエラは材料に向き直る。いつもなら地脈の欠片の処理を先に済ませるのだが、今回の材料は冷凍の魔道具から取り出すと、溶けたり痛んだりするものが多い。だからこちらの処理から先に済ませてしまおうと思う。

ちなみに今回はガラス製の器材を使う。何でもかんでも全部錬金術スキルで実行させたがる師匠が、珍しく手配したものだ。深さがある漏斗を二段重ねにしたような器材で、縦につなげて使う。外気

に触れる側面は中空の二重構造になっていて、中の温度が変わりにくくなっているそうだ。

師匠が言うには、物によって熱の伝わり方が違って、間に何層も空間を挟むと冷めにくい構造になるんだとか。

漏斗の絞り口には、材料が落ちないように綿を軽く詰めて、下の段に凍らせたまま粗く砕いたオーロラの氷果を、真ん中の段にはこれまた荒く砕いた氷魔の魔石を入れる。一番上が百年氷だ。こちらは器材に入る程度に粗割しただけで、細かく砕いてはいけならしい。

ぼた、ぼたん。

ゆっくりと解けた百年氷の雫が氷魔の魔石の粉の層へ落ち、浸透して広がってから下のオーロラの氷果の層へ落ちる。解けたばかりの冷たい雫はオーロラの氷果をゆっくり解かしながら果汁と交じって下に置かれた容器に落ちる。

ぼた、ぼたん。

実に気の長くなる作業だ。作業といっても、材料をセットしてしまえば後は百年氷を定期的に足すくらいで、のんびり眺めるくらいなのだが。

「師匠、ゆっくり解かすんだったら、錬成空間の中で温度制御すればよかつたんじゃ？　っていうか、ゆっくり溶かす必要ってあるんですか？　抽出する温度とかスピードならわからなくもないけど」「先に溶けるか後で解けるかの違いで、氷の解ける速さは変わらないうのに、ってか？　わかってねーな、マリエラは。この氷は百年以上凍ってたんだぞ。百年の時間が氷の結晶の中に溶け込んでる。だからこうやって、ゆっくり自然に解かしてやるんだよ」



カランとグラスの中の氷を回しながら師匠は答える。

「え？ 時間って氷に溶けるんですか!？」

「いや、物の例えだよ。ロマンがねーな、マリエラは」

ちびちびとグラスを傾けつつ、百年氷がゆっくり解けては魔石に、オーロラの氷果に染み込んでいく様を眺める師匠。

「って、何飲んでるんですかー！ いつの間に!」

「ほれ、よそ見しているとフィロロイルカスの幼生体が解けるぞ」

まったく油断も隙も無い。

ちびちびと氷の解けるさまを眺めながらお酒を飲む師匠は放っておいて、マリエラはフィロロイルカスの幼生体の入った桶に向き合う。そうなのだ。この幼生体、温かいところに置いておくと、言葉の通りに解けてどろりとした液体になるのだ。

フィロロイルカスの幼生体の体のうち、『氷精の加護』の材料になるのは中の薄桃色に色づいた部分だけ。幼生体の体はどうなっているのか中に骨も筋も内臓もなく、全体が均一でゼリーのようにぷにぷにしている。それでも体の真ん中だけはほんのり色がついていて、触ってみるとそこだけほんの少し硬さが違う。この部分がフィロロイルカスの核になるのかもしれない。

マリエラは手早くフィロロイルカスの幼生体を捌いては核を別の容器に移していく。

半分凍っているフィロロイルカスの幼生体はとても冷たくて、捌ききった時にはマリエラの手はしもやけのように赤くなってしまった。

「冷た……」

はぁーっと手に息を吹きかけてこすり合わせるマリエラ。

「しもやけでしやすいの、変わんねーのな。貸してみ」

懐かしそうにいつて、師匠がおいでおいでをする。

師匠のそばに近づいたマリエラが手を差し出すと、師匠はマリエラの手を両手で包むと血行が悪くなってぷくぷくに膨れたマリエラの指をむにむにともんでくれた。

「師匠の手は相変わらず温かいですねー」

幼い頃、マリエラがまだ孤児院にいた頃は、冬になるとしもやけが割れて水仕事がとでもつらかった。師匠はマリエラの手がしもやけでパンパンになる度に、こうしてむにむにと揉んでくれた。ぷくぷくに膨れた子供の手を触りたかっただけなのかもしれないけれど、師匠の手はとても温かいから、こうして揉まれると不思議としもやけは良くなった。

もつとも、しもやけなんて低級ポーションであつという間に治るのだけだ。

(そういうことじゃ、ないんだよなー)

師匠のおかげで温かくなった手を見ながらマリエラは思う。横では百年氷がぼたぼたとひどくゆっくり解けていて、なんとなく、師匠がスキルでちゃっちやと百年氷を処理させなかった理由が分かった気がした。

フィロロイルカスの幼生体の核を《錬成空間》のなかでゆっくりと温めると、まるで温めたゼリーがとろけるように、とろりと蕩けて液体になった。これに《命の雫》を込めた水を半分くらい加えると、常温でも液体のままになる。

後は地脈の欠片を処理した基材と百年氷で抽出した液体を混ぜるだけなのだけれど、百年氷が解けきるまでにはまだまだ時間がかかりそうだ。

「ジークたち、寒いだろうな。今日は時間のかかる煮込み料理にしよう」

じっくり煮込んだお肉が口の中でほろほろととろけるスープは、きつと冷えた体に染み込むだろう。

マリエラは1階の厨房で煮込み料理を仕込んだり、地下の氷の魔道具から百年氷やオーロラの氷果を取り出しては工房で補充をしたり、『木漏れ日』にすこし顔を出したりしながら、昼までの時間をゆっくりと過ごした。

(『氷精の加護』って、特級の割には作りやすいかも)

ぼたぼたと解けて滴る水滴を眺めながらマリエラは思う。

オーロラの氷果はポリモー<sup>変身</sup>フ薬を作るのにも必要な材料で、前は32階層で採取したが、今回は『木漏れ日』の地下に設置した冷凍の魔道具で栽培したものが使える。ポリモーフ薬より使用量が多いけれど、調子に乗って大量に作ってあるから問題はない。

百年氷は文字通り100年間凍ったままの氷のことで、発生してから200年経過したこの迷宮の氷なら条件を満たしている。フィロイルカスの幼生体のついでに採取してきたものだ。

氷魔の魔石とは、32, 33階層に現れるフロストールという意思をもった冷気の塊のような魔物の魔石が使えるから、こちらは冒険者ギルドに依頼して簡単に集めることができた。

地脈の欠片を使うため特級ランクになっているが、他の材料の入手難易度はポーシヨンのランクのわりに低い。聖水も中級ランクに

しては作りやすいポーションだったから、回復でなく付与魔術的な効果を示すポーションはランクのわりに作りやすいものなのかもしれない。

ジークは、このポーションを使って次の迷宮討伐軍の討伐に参加するのだという。

ジークたちが向かう迷宮都市第56階層は火山の階層で、炎を吐く赤いドラゴンが住んでいるのだと。

(このポーションが、ジークを守ってくれますように)  
マリエラはぼたりぼたりと滴る水滴に祈りを込める。

ぼた、ぼたん。

日はまだ高く、百年氷はまだまだ解けない。フィロロイルカスから『水竜の血』を《薬晶化》するために迷宮に向かう時間もまだ先だ。

ぼた、ぼたん。

師匠は百年氷が解けるさまを見るのに飽きたのか、『木漏れ日』の店内で学校から戻ってきた子供たちに何やら要らないことを教えているようだ。

マリエラは工房の隅から大きめの魔物の皮といくつかの魔石や鉱物を取り出す。

魔物の皮は羊皮紙のように文字が書けるように加工されたもので、魔石や鉱物は砕いてインクに混ぜて使う。

祈りも願いも届かなければ意味がない。

マリエラがどんなに心で思っても、ジークの助けには少し足

りない。

だから、せめてこの魔法陣を。  
願を想いを魔力に込めて、現世に顕現させるために。

特製のインクを入れた皿に、マリエラの血を垂らす。血を足すことで魔法陣自体にも魔力を込めることができるけれど、発動させるのも血の持ち主に限定されてしまう。

けれどそれは、この魔法陣に関してはさして問題とはならないだろう。

この魔法陣の起動に要する魔力は膨大で、マリエラほどのばかげた魔力量がなければ起動すらさせられないものだから。

赤竜討伐の作戦は、マリエラにも伝えられていた。空を飛ぶ赤竜のプレスをかくぐり、ジークの弓で赤竜の翼を射貫くのだという。迷宮第56階層は溶岩があちこちに噴き出す灼熱の階層。

前回の討伐以降、赤竜は常に入入り口を見張り続けていて、赤竜を目視できる範囲に立ち入るなりプレスを吐きかけてくるのだという。うまく初撃を避けて、赤竜の射程圏内に入りこめたとしても、そこは溶岩だまりがあちこちにある、足場の悪い場所らしい。移動するのは困難で、隠れる場所はほとんどない。

いくら『氷精の加護』があつたとしてもそんな環境で、赤竜のプレスをよけつつ弓を射れるのだろうか。Aランク冒険者の身体能力はとても高くて、走る速さもマリエラなどとは比べ物にならないが、それでも空を行く竜の速度にかなうものではない。

だから、せめてこの魔法陣を。

200年と少し前、仮死の魔法陣を完成させたマリエラに、師匠が残した置き土産。あの時は「こんな魔法陣、いつ使うのよ！ 絶対気絶させるために転写したんだ！ むきー」と怒ったものだけ

ど、きつとこれは、この日の為に転写してくれたのだと思う。

（師匠に聞いたって、はぐらかすんだらうけど）

ぼた、ぼたん。

（ジークが無事に帰ってきますように）

その思いを祈りを、確かな形にするために。

百年氷が溶けて滴る音を聞きながら、マリエラはゆっくりと正確にその魔法陣を描いていった。

## 氷精の加護（後書き）

ざっくりあらすじ：ジークは特典アイテムを手に入れた！

なんと！ マリエラが……！！

11/7より『オーバーロード』再放送枠にてTVCM放送開始！  
YouTubeにも上げて頂きました。

コチラ <https://youtu.be/1p30XatO6>

↓ 8 よろしければご覧ください。

## いつもの朝・遠景

それは、いつもと何も変わらない迷宮都市の朝だった。

静謐せいひつな朝の空気に、パン屋から立ち昇るパンを焼く匂いが混じりだし、家々からは人が起き出す気配が溢れる。

ヤグーや家畜を飼っている区画ではもっと早くから動物たちが起き出して、餌はまだかと鳴いているのだろう。

人々が多く住む区画では、鳥がさざめく程度で朝は静かなものだけれど、それでも多くの人間が起きて活動しているだけで、街の息づくさまが感じられるものである。

空気を入れ替えようと開けた窓からは、朝食か、それとも弁当を作っているのか肉を焼く香ばしい匂いやコーヒーの香り。

少しずつ日が昇るにしたがって、街の朝は少しずつ騒がしさを増していく。

少しでも多く稼ごうと意気込む冒険者たちは、一抱えもありそんな大きなパンを齧りながら迷宮へと急ぎ足で向かっていき、そんな冒険者たちを相手に煙玉や魔除けの香、携帯食を売る露天商がぼつぼつと開いている。中には低級ポーションを扱う店もあるから、迷宮討伐軍の警備兵がポーション販売を始めるより早い時間でも、低級ポーションを持って迷宮に潜ることができる。

低級ポーションの小売りは初回の販売が完了してしばらくしてから開始された。低級ポーションを取り扱うのは、商人ギルドと契約し、ポーションの材料として一定量以上の薬草を納品している薬師たちだ。ポーションの卸値も売値も販売数量も、現段階では一律に定められてはいるから、薬師たちからすると定額の儲けにしかなら



ないけれど、今まで利用していた薬屋で低級ポーションが買えるという状況は、街の人々にポーションがいつでも買えるという安心感をもたらしたし、薬屋からしてみても今までの客を失わずに済んだ上、ポーションのついでに煙玉や香を売ることもできた。

ほとんどの露天商が開店した頃には、安定した稼ぎを出せる中堅以上の冒険者たちが迷宮に向かう。彼らのお目当ては迷宮の中で販売している中級ポーション。彼らの大半は治癒魔法の使い手を仲間に入れていけるけれど、中級ポーションがあれば今までよりずっと安定した狩りができる。

しかし、今日はいつもよりほんの少しだけ、迷宮の入り口付近が騒々しかった。

「おい、ほんとうかよ。上級ポーションが手に入るって？」

「先着順で一人一本限りだそうだが」

「値段は？」

「大銀1だつてよ。ちつ。手持ちがねえ、急いで取りに帰らねえと」

表向きは『試験販売』の名目だ。けれど実際は。

万一赤竜討伐に失敗したときの死傷者を最小限に抑えるために、考え出された措置だった。

\*\*\*\*\*

「ジーク……、無事に帰ってきてね」

「もちろんだ。マリエラ、この眼帯を預かっていてくれ」

マリエラはジークから眼帯を受け取ると、大事そうに鞆へとしま  
う。これはリンクスがジークに贈ったもので、リンクスから借りた  
まま返すことができなかつた短剣と共に、ジークがとても大切にし  
ているものだ。

ここは迷宮第54階層。かつて『海に浮かぶ柱』が続べていた海  
の洞窟の階層だ。

ジークが眼帯を取って精霊眼であたりを見回したというのに、こ  
くごく小さく弱い精霊の光がふわと稀に立ち上るだけで、『木漏れ  
日』で見たようにたくさん精霊が現れたりはしなかつた。

「精霊は地脈からあふれる力を糧にしている。迷宮はそれすら喰い  
荒らすから、精霊にとつちや居心地が悪いんだ。迷宮のあるこの街  
は、精霊の力が弱くて数も少ない」

近くの光を指ですくい上げながら、誰とはなしに話す師匠。師匠  
は前に「迷宮の中では精霊の力が弱まるから使えない」と言ってい  
たが、精霊眼に触れてなお弱々しい精霊たちの有様は、その説明を  
裏付けるものだった。

もつとも、精霊魔法が使えなくとも『炎災の賢者』の二つ名が今  
なお聞こえる師匠フレイジージャが、迷宮の中で無力な女性になり  
果てたとは考え難い。というか、そんな師匠はイメージできない。

レオンハルトらから協力を請われた時、「ウェイスハルトの方が  
役に立つ」と言っていたのだ。つまりそれは、精霊魔法抜きでもウ  
エイスハルト程度の魔法は使えるということなのだろう。

その師匠がマリエラを守り、マリエラ自身にどうしても必要だと  
望まれれば、レオンハルト、ウェイスハルトも迷宮第54階層への  
マリエラの同行を認めないわけにはいかなかった。

ここにいるのはマリエラたち3人の他は、レオンハルト、ウェイ

スハルトとミツチエルらマリエラが錬金術師だと知る数名の護衛だけで、赤竜討伐の他のメンバーは先に55階層で待機している。

マリエラとてジークを見送るためにだけ、こんな迷宮深くまで来たわけではない。

マリエラは『氷精の加護』と共に描き上げた一枚の魔法陣を取り出して、ジークの前に開いて見せる。

(どうか、ジークを守って)

マリエラはその魔法陣にありつただけの魔力を込める。

これは、精霊を受肉させ、込めた魔力が尽きるまでこの世に顕現せしめる魔法陣。

200年前マリエラが仮死の魔法陣を完成させた後に、師匠が《転写》したものだ。

精霊という存在に仮死とはいえ肉体を与える魔法陣は、仮死の魔法陣ほどでないにせよかなり高度なものだ。けれど魔法陣そのものの難易度以上に難点があつて、この魔法陣を起動させるには受肉に足りうる膨大な魔力を流し込まなければいけないし、上手く起動し精霊を召喚できたとしても、その時間は込めた魔力の続く限りだ。魔法陣を描く時と起動する時の二度にわたって、マリエラの魔力をつぎ込んだとしても1刻もつかどうかだろう。

マリエラがこの階層まで来た理由はこの時間制限にあつた。

それにどんな精霊でも顕現できるわけではない。魔法陣を起動する者に縁のある精霊、普段から呼べば力を貸してくれるような相手でなければ応じてはくれない。

マリエラには、いつでも気軽に助けてくれる、そんな精霊が一体

だけいた。マリエラに、というよりはジークと一緒にいたから指輪までくれたのだろっけれど、だからこそジークを助けてくれるだろっ。

「マリエラ、何をさせたいのか、どんな姿にしたいのか思い浮かべるんだ」

師匠がマリエラを補助するように声を掛ける。

ジークを助けてあげて欲しい。これから向かう場所には怖いドラゴンが飛んでいて、空からブレスを飛ばして来るから。だから危なくなったらジークを乗せて逃げてほしい。

前に、恐ろしいデス・リザードに立ち向かって、私を乗せて逃げてくれた、あのラプトルのように。

そのイメージが固まった時、魔法陣という扉を開くカギが、かちりとはまったような、そんな気がした。

マリエラはありったけの魔力を惜しげもなく魔法陣に流し込み、そしていつものように精霊を招く。

《来たれ、炎の精霊、サラマンダー》

マリエラの中指にはめた指輪がきらめいて、魔法陣が燃え上がる。大きく、大きく、見上げるほどの火柱はとても強い光を放っていて、外周は黄色や赤のよく見る炎の色彩をしているのに中央はただ白くまばゆい光が凝集している。そこに恐ろしいほどのエネルギーが集まっているに違いない。一体どれほどの温度を有しているのだろうか。

けれどその熱量は、身を焼くような激しさではなく、夜の森で魔物や獣から人々を守るような温かさに満ちている。

吹き上がった火柱はその熱量を変えることなく、人が軽く見上げ

るほどまで縮まると、そこには千度を超える高温に熱した鋼のように白みがかつた黄色に光る一頭のラプトルが立っていた。

よく見ると色だけでなく目元や爪先、尻尾の先などの形や模様がラプトルと異なっていて、ラプトルに化けたサラマンダーのようにも見える。

普通のラプトルよりも一回りほど大きいそれは、マリエラから見ると強そうだ。術が上手くいった喜びに、根こそぎ魔力をつぎ込んで、意識を保つのがやっとに近いマリエラは、なんとか笑顔をつくってジークとサラマンダーを見る。

「サラマンダーさん、来てくれてありがとう！ ジークを守つ……」  
「グギャー！ ギャツギャツギャツ！」

マリエラが言い終わるより早く、サラマンダーがジークにすり寄る。尻尾をぶんぶん犬か何かのように振り回して、それはもうご機嫌だ。尻尾が長いものだからその遠心力に引きずられて頭までくるくる回っている。

「どうどう、落ち着け、どうどうどう」

ジークになだめられて、ようやく大人しくはなったものの、尻尾の先っぽはまだご機嫌に揺れていてジークに乗ってもらえるのが大層嬉しいといった様子だ。

鞍を付けようと迷宮討伐軍の一人が近づくと、「ギャウツ」と齒をむいて威嚇していて、随分しつけがなっていない。

ジークに叱られて多少大人しくなったものの、ジーク以外に触らせようとしないので、鞍はジークが着けていた。

「賢者殿、あれは一体？」

サラマンダーの召喚を離れて見ていたウエイスハルトが師匠に尋

ねる。

「あー、あたしが描いた精霊を一定時間だけ受肉させる魔法陣なんだけどね、あのサイズにするにはべらぼうな魔力を食うくせに所縁のある精霊しか呼べないし、呼んだ術者に威圧感とか支配力が無いと、あんな感じになるんだよ」

「なるほど……」

炎の中から登場した騎獣に最初は目を輝かせたレオンハルト、ウエイスハルト兄弟だったが、サラマンダーの駄馬ならぬ駄獣ぶりにその顔には見る間に落胆の色が浮かんでいった。もつともウエイスハルトは表情には出していないのだが、レオンハルトと並んでいると、兄弟そろって同じことを考えているんだらうな、と思われてウエイスハルトの無表情ぶりがかえって面白い。

“あたしが魔法陣を描いた”という所以外、師匠の説明は本当だ。精霊は本来自由気ままなものだから、きちんと躡られた騎獣のように振舞うなんてことはできない。肉の体など得ようものなら、術者の強い支配をうけない限り、気分のままにはしゃいでしまう。

世界の何もかもが物珍しく楽しいと、全力で遊ぶ子猫や子犬のようなものだ。それを訓練された成犬の状態で呼べるかどうかは、術者の資質に寄るわけだ。

かつて盲目的にマリエラに従っていたジークにさえも、欠片の支配力も発揮できなかったマリエラに精霊の支配などできようはずがない。だからサラマンダーは本来あるがままの伸びやかな状態でこの世に顕現してしまったのだ。

ジークは精霊眼を持っていて、無条件に精霊に愛されるから、こんな野生のままのサラマンダーでも問題はないのだらうが、普通の人間には制御できないお荷物だらう。

「賢者殿、私にその魔法陣は使えますか？」  
ウエイスハルトの質問に、師匠は「馴染みの精霊ができれば教えてやるよ」と答える。

それは、魔法陣の作者を偽った理由と大本は同じ答えだ。魔法陣を、つまりは受肉した精霊を、道具のように使おうとする者に、精霊は力を貸したりしない。

その答えの真意を理解したウエイスハルトは、再び「なるほど」と残念そうにならずいた。

いつもの朝・遠景（後書き）

ぞっくろりまじめ…ママリハラはサラムンダーを呼び出した！



## いつもの朝・近景

「ちょっと、サラマンダーさん！　ちゃんとジークを守るんですよ！」

「グギヤ！　グギヤ！」

「ハイは、一回！」

「グギヤ！」

言葉は通じないはずなのに、サラマンダーと会話するマリエラ。ちゃんと通じていそうだから不思議だ。まあ、“ジークを守って”というマリエラの願いは、顕現するための魔力にたつぷりこもっていたから、サラマンダーもイメージとして伝わっているだろうが。

「じゃあ、いって来る」

「うん、行ってらっしゃい！」

笑って手を振るマリエラと、それに答えるジーク。ジークについて歩くサラマンダーも、バイバイとばかりに尻尾の先を振っている。

（笑顔で見送れてよかった……）

階段を下り、死地へと赴くジークらに手を振りながらマリエラは思う。さっきまでは、ほんとは泣きそうだったのだ。今だってジークのことが心配でいてもたってもいられない。今から戦う赤竜はあのデス・リザードより何十倍も強いのだ。

リンクスを失ったあの日を思うと、とても怖くてどうしたって泣きそうになるのに。

「グーギヤ、グーギヤ」

えっちらおっちらと左右に体を揺らしながらサラマンダーが階段を下りる。ラプトルという獣は後ろ脚の二足が発達しているけれど前足は短いのだ。速度を出して走る場合は、尾を上げ頭を下げて、つまり前のめりな体勢で走る。そんな体勢で階段を下りたりしたなら……。

「ギャーウー！」

「ごろごろりんどーん。」

「転がり落ちても仕方あるまい。」

「……ジークたち、本当に大丈夫かな」

「へーきへーき」

マリエラの心配は、サラマンダーの間抜けな有様のおかげですっかり別の心配に置き換わってしまった。

「さーて、マリエラ。『木漏れ日』に帰るぞ。その方が、ジークたちも安心して戦えんだろ」

「はい、師匠」

ミッチェル君たち少数の護衛を伴って階層階段を上っていくマリエラと師匠。そして、階段を転がり落ちたサラマンダーを慌てて追いかけるジーク。

そんな二人のしばしの別れは、サラマンダーのお陰もあってまるでいつもの狩りに出かけるような、そんな雰囲気醸し出していた。

他の討伐メンバーが待つ5階層まで転がり落ちたサラマンダーは、この階層に降り立ったばかりのレオンハルトの隣に滑り込むという、スライディングな着地をきめた。

慌てて追いかけたジークは、サラマンダーを見つめるレオンハルトと目が合って、ひどく居心地悪く感じてしまう。

なにしろ今回の討伐で、騎乗するのはジーク一人だ。レオンハルトの竜馬であっても、56階層の灼熱の大地には耐えられない。今回の討伐では、ジークは身分の上でも冒険者のランクとしても恐らくは最下位であろう。犯罪奴隷は冤罪が証明されたけれど、借金奴隷であったのは間違いのない事実であるし、Aランクになれたのもつい最近のことなのだ。

居並ぶ上位者諸氏を差し置いて騎乗する気まずさに、ジークはレオンハルトにサラマンダーを指し示す。

「將軍閣下。よろしければ、サラマンダーに騎乗ください」

「いや、それは君が乗りたまえ。作戦上必要なことだ。変な気遣いは無用。何より随分と君に懐いているようだ」

「グギャーン」

転んじやったーとばかりにジークの手に自分の頭をぐりぐり押し付けて来るサラマンダーをちらと見ながら、レオンハルトがジークの提案を穏やかに断る。

「は。ありがとうございます」

なんと寛大な方だろう。そんな風に思いながら、ジークはお前も頭を下げるとサラマンダーの頭を押しながら自らも頭を垂れる。もつとも、サラマンダーは頭をなでてもらっていると思っっているのか、「グギャグギャ」と嬉しそうにしているのだが。

「……兄上、精霊を具現化する魔法陣ですが」

ウェイスハルトが、レオンハルトの隣を歩きながら周りに聞こえない小声で兄に話しかける。

「不要だ。軍には向かん」

「同意です」

階段から転がり落ちるサラマンダーの醜態を見たせいか、それとも支配力が皆無に近いマリエラが呼び出したおかげで、奔放な有りのままの精霊の姿を見たせいかは分からないが、レオンハルトがこの魔法陣に下した結論は、ウエイスハルトと同じものだった。

この結論で救われたのは、魔法陣を描きうるマリエラだったのか、それともレオンハルトら自身だったのか。

精霊魔法というものが世界から失われた事実を見れば、その答えは明らかだったかもしれない。

「グツギヤギヤ」

集合している討伐部隊の方へ歩くレオンハルトらの後ろを、ジークとサラマンダーは付いて行く。あれだけ派手にこけたのに、サラマンダーはけろりとした様子だから、仮初の肉体とはいえ、随分と丈夫にできているらしい。

新参者だというのにサラマンダーが階層階段から転がり飛び出すという登場を飾ってしまったせいで、ジークは少しづつが悪そうに討伐メンバーに挨拶をする。

メンバーは以前と同じレオンハルト、ウエイスハルトと迷宮討伐軍に籍を移したディック、同じく迷宮討伐軍のAランカーが5名。

そして冒険者ギルドのギルドマスター『破限』のハーゲイに、『雷帝エルシー』ことエルメラ。

それにエルメラの夫ヴォイドとジークが加わり総勢12名での討伐となる。

「紹介しよう。新たにAランカーとなったジークムント。『精霊眼』を持つ弓使いだ。そしてこちらが、『隔虚』ヴォイド殿だ」

隔虚。その名を知らぬ者のないSランカー。

エルメラが雷帝であることは知っていたジークだったが、その夫のヴォイドがかの隔虚であったとは。この階層に降り立った時は、マリエラ同様エルメラの見送りに来たのだとばかり思っていたジークは今や眼帯で隠していない両目でヴォイドを驚きのままに見つめる。

「やあ。やはり弓を使う方が君にはあっているようだ」

けれどヴォイドの方はというと、両目の揃ったジークも不思議なラプトルさえも気にはしていない様子で、街で会うのと変わらぬ様子で穏やかに声を掛けると、戦いの前だとは思えぬ穏やかさでエルメラの隣で微笑んでいた。

エルメラもヴォイドと顔を見合わせて微笑みながら「よろしくお願ひしますね」と声を掛けてくれる。いつもはひつつめた髪をほどき、ぴたりとした魔獣革のスーツを身にまとったエルメラの方が、ヴォイドより余程インパクトがある。

「よお、ジーク。すっかり頼むぜ」

そう言つて声を掛けてきたのはディックやほかの隊長たちだ。迷宮討伐軍とは地竜の討伐で何度か顔を合わせているから、皆顔見知りだ。

「随分立派に育つたもんだぜ！」

「はい。ご指導のおかげです」

「よせやい、弓は教えてないぜ！」

「グギョウ!?」

キラ、ピカーン。いつも通りのサムズアップでハーゲイが声を掛け、後光さす彼の頭部にサラマンダーが反応している。

誰もジークの右眼が治り、それが精霊眼であることを指摘したり、ヴォイドが長らく行方不明であったSランカー、隔虚であることに

むやみに反応したりしない。この55階層以下で知り得た討伐隊員の情報は最重要機密として決して口外しないことは全員が《誓約》している。隔虚の正体ほどセンサーシヨナルなものはないだろうが、Aランカーともなればスキルや技など隠しておきたいことは誰しもあるのだ。

いや、《誓約》などしていなくても、そんな無粋な話など、誰もしたりはしないだろう。

ここにいる人間は、全員がこの街屈指の強者で、けれどこの階層を下に降りたら誰が死んでもおかしくはない。前回全員生きて戻れたことだけでも、奇跡のようであったのだ。

今ここに再び全員集えた代償に、リンクスという若い命が迷宮に奪われた。生きていたなら、きつとここに共に集ったであろう、仲間となったに違いない者だ。

誰かを犠牲にしても自分が生き残れてよかったなどと、思う輩はこの場にはいない。そんな者はこの決戦の場に来たりはしない。

ここに集った理由は様々。戦う理由は様々あれど、『迷宮を斃す』という意志を、共に託し繋いでいく仲間であるのだ。

レオンハルトがこの場に集った全員の目を一人一人見ながら語り掛ける。

『迷宮を斃す』。この意志を諸君らに託す。

『迷宮を斃す』。諸君らの意志を我らは受け継ぐ。

例え我が命潰えようと、この意志は消して潰えぬ。

ここは我らが生き、そして我らの子らが生きる土地。

その命の灯を断じて絶やすわけにはいかぬ。

空の霸王が邪魔するならば、その翼を打ち落とし、

山がそびえたつならば、砕いて先に進むまでだ。

我らは決して歩みを止めぬ。

行こう、諸君。

赤竜を、歩く火の山を打ち倒しに！」

「おおー！」

『迷宮を斃す』その目的はみな同じ。

この場を集った者どもは、一斉にレオンハルトに応じると決戦の場、迷宮第56階層へと歩みを進めていった。

遙か頭上の迷宮都市は、いつもとかわらぬ朝を迎える。

そろそろ子供たちが学校へ出かける頃だろうか。

いつもはヴォイドの見送りで「いつてきます」と出かけるパロワとエリオは、留守を頼まれた曾祖父ガークの見送りで学校に出かける。

いつも朝一番に焼きたてのパンを買いに来るアンバーは、今日はパン屋には顔を出さなくて、昨日作り過ぎた料理の残りで軽く朝食を済ませると『木漏れ日』の开店準備のためにいつもより少し早く家を出る。

アグウィナスの屋敷では、「今日はウェイス様にお会いできるかしら」と呟くキャロラインの髪を侍女が綺麗に結い上げていて、最近口を開けば「ウェイス様」と言っている妹に少し居た堪れない気持ちになっている兄ロバートは、いつも通り早い時間に屋敷を出てニールンバークの診療所へ向かう。

冒険者ギルドには黙ってそこにいるだけなのに、邪魔だ暑苦しい働きと邪険にされるギルドマスターの姿が今朝は見られない。街の

どこかでサボ……治安維持に努めている時は、つかの間の静寂に集中できると業務に勤しむ職員たちも、どこかピリピリとした雰囲気の仕事の準備を始めている。

それは商人ギルドも同じことで、いつもは遅刻ギリギリにやって来るリエンドロが、いつもより半刻も早くやってきて今日の仕事の割り振りをしている。

迷宮討伐軍は、各部隊2名の副隊長がいつも通り朝の訓練を指揮するけれど、いつもならば必ず顔を出しに来る隊長たちは8部隊の内6部隊が不在だ。隊長同士の懇親会でもあったのだろうかと兵士たちは噂しながら訓練に汗を流す。

どれも、誤差のないいつもの違い。

離れて見ると完成した一枚絵のような朝の情景は、近くで見ると幾つかパズルのピースが足りない。

欠けたピースはここ、迷宮の中に集っている。

再び朝の情景に、そのピースのはまり込む日は、果たして来るのだろうか。





## 赤竜

幾つもの魔力を持つ生き物が侵入してくる反応に、赤い翼をもつ竜は寢床である『歩く火の山』の火口から飛び立った。

家に虫が侵入してきたら、誰でも駆逐しようとするだろう。

赤竜のその反応はそういったもので、恐らくその力関係すらも人と虫がごときであったのだろう。

けれど虫を侮るなかれ。

ある者は病を媒介し、あるものは毒の針を持つ。大群で押し寄せ、後には獣の骨しか残らない、そのような虫も存在するのだ。

単に小さき者だと言って、必ずしも弱者だとは限らないのだ。

迷宮第56階層の、階層階段から赤竜の居る広間へ抜ける洞窟の出口は一つしかない。

何度も赤竜のプレスを受けた衝撃で、埋まるどころかむしろ溶けて広がりつつあるその出口から、弾丸のように何者かが飛び出した。

赤竜のプレスが着弾するより早く出口から離れたそれは、真つ直ぐに赤竜でなく『歩く火の山』の方へと向かってくるのではないか。

生じて以来この階層で暮らしてきた赤竜が、この生き物を見たのはこれが二回目だ。

前回と比べ物にならない速度で動くこの生き物は、初めて見る獣に乗っているようだ。

赤竜はその場にとどまるように翼をはためかせると、ぐわと口を開いて小さいブレスを幾つも吐き出す。この方が当たりやすいと前回で学習したのだ。この生き物は脆弱で溶岩溜まりには入れないから、溶岩溜まりへ追い立てるようにブレスを吐けば簡単に当てることができるだろう。

『歩く火の山』は赤竜が守るべきものだ。このような小さいものにどうにかできるとも思えないが、近づくことは許せない。

恐らく赤竜は、そのような思考でサラマンダーを駆るジークにブレスを吐いたのだろう。一直線に『歩く火の山』に向かっていたジークは、降り注ぐブレスに進路変更を余儀なくされる。

何度も『歩く火の山』を指しサラマンダーを駆り立てるも、その先々に赤竜は回り込みゆく手を遮るようにブレスを吐く。

今もまた。人からすれば巨大な溶岩溜まりを避けるように、ジークは大きく迂回をしながら『歩く火の山』を指す。そうはさせないと赤竜は大きく旋回しながらも、『歩く火の山』への近道にブレスを落としてその進路を妨害する。

この広間に飛び出した時は、『歩く火の山』へと真っ直ぐ向かっていたのに、度重なる赤竜のブレスと溶岩溜まりを避けるうちに進路は大きく蛇行して、『歩く火の山』への距離は近づくどころか遠ざかり、むしろ洞窟へと近づいてしまっている。

意のままに獲物を駆り立てる強者の行為に、赤竜は愉悦を感じただろうか。

逃げ惑うばかりで攻撃をしてこない不自然さに赤竜が気づきもしなかったのは、自らを強者と奢る赤竜の慢心ではなかるうか。

赤竜が獲物を追い立てた先には迷宮の壁。赤竜も旋回せねばぶつ

かっけしまうが、その手前には池のような大きさの溶岩溜まりが広がっている。

逃げ場のない一本道に獲物を追い入れて、出てきたところに特大のプレスで止めを刺すつもりだろうか。

赤竜はサラマンダーを駆るジークを溶岩池への一本道へ追い立てるようにプレスを吐くと、尾を曲げ翼を傾けて、壁への激突を避けるため何度目かになる旋回を行った。

もしこの赤竜が老獺ろうたけいで、息の根を止めるまで獲物から眼をそらしたりしなければ、この先の展開をその目で見ることはできたかもしれない。

ジークを乗せたサラマンダーは溶岩池を気にすることなく、まるで陸地を走るが如くその上を進んでいった。溶岩はサラマンダーの足が付くより先に冷えて固まり、足場となってサラマンダーの足元を支える。

サラマンダーは炎の精霊。熱も炎も彼の支配するもので、たとえ迷宮の支配下にあってもその体が触れる熱程度、制御できぬものではないのだ。

そしてもし、赤竜が冷静で、獲物を駆り立てる愉悦に冷静さを失っていないければ、きつと気付いていただろう。前回、雷帝の雷で地を這う屈辱を味わって以来、弓でさえ届くことが困難な高度を保ち続けていたというのに、度重なる旋回で徐々に高度を下げている。

悠々と、見せつけるが如く広げた翼は、回り込み狙い定めるジークにとっては格好的ではない。

ギリリと弓を引き絞る。

つがえた矢はミスリル製。

弓に矢に魔力を込めて狙いを定める。  
いつもの動作、いつもの狙いを精霊眼が補強する。

竜の翼はそのサイズには不釣り合いなほど小さく、その飛翔は魔力によって補佐される。

赤竜の体表に薄く張られた魔力障壁が、飛翔動作によってわずかに歪むその隙間が、今のジークには見て取れる。

「そこだ」

一射、二射。立て続けに放たれた5本もの矢は、露になった赤竜の左翼に一矢も外れることなく突き刺さる。

竜の翼に比べれば矢など針のごとき細さであるが、魔力をまとい精霊眼で強化されたその矢は、風圧を受ける翼膜には十分すぎる破壊の拠点となりえた。

特に赤竜は、左翼に一杯風を受け旋回をしていたのだ。その風圧に耐えかねて、矢を受けた翼膜は裂け、赤竜は大きくバランスを崩した。

ここでようやく事態を察した赤竜は、その首をねじるように曲げるとジークをねめつける。

その視線の先にあるのは、赤竜の顔面目掛けて鋼鉄の矢をつがえる精霊眼の男。

そんなちやちな矢など、噛み砕いてくれよう。

射かけられた鋼鉄の矢を、赤竜がその顎に捉えたその時、天を突き、雷が降り注いだ。

## 《天雷》

空間を白く染め上げる膨大な雷のエネルギーは、たった1点、ジ

イクが放ち、赤竜の顎に捉えられた鋼鉄の矢めがけて突き刺さる。その衝撃、そのエネルギー！

白煙を上げて落下する赤竜の意識はすでになく、風を受け落下の衝撃を弱めるはずの左の翼膜は、裂けて風を掴むことは叶わない。

最早、巨大な肉塊と化した赤竜は、重力に引かれるままに速度を増して落下する。

もしこの赤竜が、小さな獲物を追うことに夢中にならず、周囲に注意を払っていたなら、自らが獲物を追い立てているのではなく、誘い込まれていたのだと気付くことができただろう。

けれど外界と隔たれたこの階層で、物言わぬ『歩く火の山』とともにただ生きてきただけのこの竜には、小さな獲物が飛び出した穴から何人も人間が飛び出して、ここに潜んでいたことにさえ気づくことはできなかった。

ズズーンと階層を揺るがすほどの地響きを立てて、赤竜が地に落ちる。

「急げ！ 恐らくすぐに目覚めるぞ！」

レオンハルトの号令で、潜んでいた岩陰から飛び出した戦士たちが赤竜めがけて走り出す。灼熱の階層の中、有毒なガスを避けるためマスクまで付けているのだ。息が苦しくないわけではない。けれどそれは、『氷精の加護』という特級ポーションの効果によって、ひりつくほどに暑い夏の日という程度のもので、溶岩の輻射熱は『氷精の加護』によって体表に張られた冷気のヴェールに阻まれて、皮膚を焼くことはないし、吸い込んだ熱風も肺を焦がしたりしない。

前回より、よほど素早く赤竜へと駆け寄ったレオンハルトらであったが、地に落ちたとて敵は上位の竜。前回の戦闘で《天雷》への

抵抗が付いたのだろう。レオンハルトらが一撃加えるより早く、目を覚まし翼膜の裂けた左翼を薙ぎ払うかの如くレオンハルトらに打ち付けた。

「《破限斬》！！」

迎え撃つのはハーゲイの剣戟。しかし、赤竜の左翼を打ち返すように振りかぶられた剣の軌道は、どう見ても剣の長さが赤竜の攻撃軌道に対して足りない。

しかし。

ハーゲイの剣の先、何もないはずの空間が赤竜の左翼と打ち合い、ぎりぎりぎりぎりぎり取り取るようにその身を削ると、見事左翼の軌道をそらしてレオンハルトらへの直撃をそらした。

「ふーっ、流石に硬いぜ！ まともに剣で撃ち合ったら、剣の方が負けちまう！」

ハーゲイの二つ名、『破限』の由来となったのがこの剣技だ。手に持つ武器の長さの『限り』を超えて、攻撃を放つことができる。使う武器は何でもよいが、目視で測れる武器の長さと実際の攻撃が異なるというのは、相対する者にとって実にやりにくい物である。

これが魔力によるものか、いくつかの魔法を組み合わせているのかは、実は本人もよくわかっておらず、「気合いだぜ！」の一言で片づけられている。

事実、使う際の気合いの度合いで強度やサイズが変わって来るから、あながち間違いではないのだろう。

ちなみにハーゲイ曰くであるが、丸めた紙やスリッパで素早く動く黒い影をズビツズバツシとやっつける奥様連中も、『破限斬』の素養があるらしい。「オレもワイフには勝てないんだぜ！」とハ

「ゲイはイイ笑顔で言っていた。事の真偽はさて置いて、勝てるかどうかより、勝たないことが夫婦円満の秘訣と思われるから、ハーゲイには家庭の中ではこのまま負け続けていて頂きたい。あと、奥様連中が《破限斬》に目覚めたら、黒いアイツが出る度に迷宮都市の家屋が倒壊してしまうから、その素養は眠らせておく方が良いでしょう。」

赤竜の左翼を迎撃したハーゲイがサムズアップをかますより早く、今度は赤竜の右翼が振りかざされる。こちらの翼膜は無傷なままで、振りかざされる動きと共に魔法で集められた風圧がレオンハルトらを襲う。けれどその隙を逃すジークではない。

両翼揃っていたならば飛び立てるほどの風圧を受けた右翼に再びジークの矢が突き刺さる。そして追い打ちをかけるように突き刺さる一本の槍。

「《飛龍昇槍》」

デイクの槍とジークの矢を受け、ついに赤竜は空を行く翼をすべて失った。

「グオアアアア！」

大地を揺るがす咆哮に、赤竜の怒りが物理的な圧力となってレオンハルトらを襲う。

「くっ」

地に剣を刺し、耐える一同。まるで赤竜の怒りに呼応するかのよう、この階層が震えだす。

火山が、活動を開始したのだ。

ドドドドドドオッ、と吹き上がる溶岩に周囲の温度はさらに増し、『氷精の加護』に守られていても、その熱は刺すような痛みとして



身を苛む。何より溶岩によって奪われた酸素と、噴き出すガスがマスクで何とか保たれる呼吸を一層苦しいものにする。

ズシューーン、ズシューーン。

遠くで響く火山の足音。こちらへと近づいて来るのだろうか。

見えるだけでも8本の足を、亀のように動かして頭らしきものもない丘ほどの小山は頭頂部より火山の煙を吹き出しながら、ゆっくりと、けれど留まることなくその歩を進めている。

その中腹に、ウエイスハルト率いる5名の兵を張り付けながら。

「喰らえ！」

「うおらあつ！」

山頂から三分の一ほどの場所に4人の部隊長たちが次々に巨大な鋼製のパイルを打ち込んでいく。その重量もさることながら、それを人力で打ち込むその技量こそ彼らの強さを裏付けるものであるのだが。

「なんつで、俺らが工兵みてーなマネしてんだろーね」

「しゃーねーだろ、つと。青年の仇討も兼ねてんだ。ディックに譲つてやるうぜ」

「それにあいつ、魔法よえーしな」

「無事帰ったらディックのおごりで祝杯だ！」

背負えるだけのパイルを全て打ち込み終わった4人の部隊長たちは、火口へと駆け上がる。そこにはウエイスハルトと魔法を得意とする5人目の部隊長が二人がかりで、大掛かりな魔法を練り上げて

いた。

「手伝います！」

合流した4人の部隊長も、魔力を注ぎ補助をする。練り上げているのはこの階層に満ちたあるものを大質量で集める術式だ。

いくらパイルを打ち込もうと、『歩く火の山』は意にも介さず歩みを変えない。ただ噴火の時を待つように、溶岩をその足から吸い上げつつ淡々と赤竜の方へと歩くだけだ。

そんな階層主を斃しうるのは、相当量の質量あるものだろう。

ズシューーン、ズシューーン。

地響きを立てて歩く火の山。倒しうるチャンスは恐らくは一度きりで、そのためには今しばしの時間が必要だった。

赤竜（後書き）

ざっくりまとめ…赤竜、地に落つ

## 守りし日常

竜というのは高価な素材だ。

それが高位の竜であるならば、その革や牙だけでなく、鱗の一枚からそれこそ血の一滴に至るまで、貴重な素材であり霊薬の材料となりうる。

死した亡骸でさえそうなのだ。

生きて動いている竜が、たとえ翼を失ったとて、どうして弱いと言えようか。

吹き上がる溶岩に、勢いを取り戻したかのように赤竜は2本の足で立ち上がる。その身丈は見上げるほどに大きく、振られる尾は強力だ。

赤竜の尾を躲し得たのは、電撃によって身体能力を強化した雷帝エルメラと、ヴォイドの二人だけだった。

尾の軌道上にいたハーゲイは《破限斬》で尾の攻撃を受け直撃を避けたものの、10メートルほどの距離を吹き飛ばされ、同じくデイクも《槍龍撃》を竜尾の衝突するタイミングに合わせて当てるという器用な方法で、衝撃を殺して吹き飛ばされる程度の衝撃でやり過ぎた。やり過ぎたというのは適切さに欠けた表現かもしれない。したたかに体を打ち付けたハーゲイは「ごほっ」と血を吐き、うまく衝撃を打ち消したとはいえ、槍撃を放った腕で竜尾を受けたデイクの両腕はあらぬ方向に曲がっている。

それでも溶岩溜まりに落ちなかっただけ、二人は強運だったのだらう。

同じく剣で衝撃をそらしたレオンハルトは溶岩溜まりへと吹き飛ばされて、間一髪のところを駆け付けたジークに受け止められていた。受け止められると言っても大の男が吹き飛ばされたのだ。騎乗したジークが体勢を崩さず受け止められる勢いではなく、打ち付けられるように吹き飛ばされたレオンハルトを受け止めたジークは、もろともに溶岩溜まりに墜落しそうになっていた。

「ギャギャー！」

二人が多少の骨折と火傷程度の負傷で済んだのは、サラマンダーがジークと溶岩の間に滑り込み周囲の溶岩を固めてくれたおかげだろう。

「助かった」

「いえ、俺も」

「グキヤ！」

気にすんな！ と言いたげなサラマンダーに思わず苦笑する二人。これほどの強敵だというのに、不思議と絶望は感じない。

「念のため『氷精の加護』を使っておけ。また来るぞ」

「はい」

たつぷり持たされた特級ポーションと『氷精の加護』を使い直ちに戦線に復帰する二人。

特級ポーションのお陰でハーゲイの内臓に受けたであろうダメージも、ディックの折れた腕もすぐさま完治し全員が赤竜への攻撃を再開する。

潰した虫が再び動き出す不愉快さにか、赤竜はその顎を開けると、歯向かう虫を焼き尽くさんとブレスを吐く。

《虚ろなる隔たり》

しかしその絶対の火力さえ、ヴォイドの前に展開した空間に呑まれ、一人も焼き尽くすことはできない。

「グルオオオオオ！」

ならばいつそ喰らってくれよう。ヴォイドめがけて迫る巨大な顎は、光と闇の相克が小さな細切れモザイクのように同時に広がる空間、《虚ろなる隔たり》に阻まれヴォイドに届くことはない。

ガチガチと歯を噛み鳴らす赤竜の頭蓋にエルメラの雷撃が、その左眼にはジークの矢が射かけられる。雷撃の閃光に一瞬反応の遅れた赤竜の左眼にジークの矢は見事突き刺さり、痛みへのけぞる赤竜の喉に、腹に、レオンハルトの、ディックの、ハーゲイの刃が次々と繰り出される。

どれほど尾で振り払っても、あるものは避け、飛ばされ血を吐く者たちもすぐさま戻ってやって来る。プレスは消され、左眼はつぶされ、少しずつ身を刻まれていく。

度重なる攻撃に、大地に前足をついた赤竜は一体何を思ったか。ゆっくりと、しかし着実にこちらへ歩を進める『歩く火の山』に救いを、希望を求めたか。

しかし、赤竜の守護すべき火の山は、まさにこの時、赤竜の眼前で最後の時を迎えようとしていた。

「完成だ。いくぞ」

ウェイスハルトの合図と同時に、大量の魔力で集められ、形成された氷塊が火口へ向けて落下する。

それはただの氷の魔法。正確には凍っているのは表面だけで、内

部は水のままである。

この階層を冷やすため、二つ上の第54階層、海の洞窟の階層から送られ続けた水分、水蒸気を集めて作った水の塊。

その体積はいかほどか。

ウエイスハルトの合図の元、一斉に退避する部隊長たちの背後で、ゆっくりと火口へ下っていく巨大な水塊。その大きさは、『歩く火の山』の三分の一にも及ぶのではないか。

火山の恐るべき爆発の一つに、紛れ込んだ水が起こす水蒸気爆発というものがある。その爆発の程度というのは、溶岩に対する水の割合で決まると言われ、火山をこよなく愛する帝都のとある学者の説によれば、溶岩の割合に対して3割から同量程度の水分量が最も激しい爆発を招くのだという。

まさに、ウエイスハルトらがかき集め、火口に落とした水量だ。

その音を何と表現するべきか。吹き荒れる爆風と轟音に、とうに鼓膜は破れてしまつて、熱風と共に飛んでくる石礫の衝撃ばかりが体に伝わる。

爆発の衝撃をレオンハルトらの反対側に逃がすため、『歩く火の山』の片面にはパイルを打ち込み、爆発の方向をそらしてはいるのだが、それでも距離が近すぎる。

山頂の火口からの爆風だけでも、無事に済む衝撃ではない。盾戦士である部隊長は盾スキルを展開し、装甲の薄いウエイスハルトと魔導士を守りながらも一塊で吹き飛ばされる。『氷精の加護』はとうに吹き飛ばされ、鎧の下は恐らく酷い火傷だろう。他の部隊長も変わらぬ有様で、したたかに地面にたたきつけられピクリとも動かない。

「しっかりしろ！ まだ息はあるな!？」

辛うじて体の動くウェイスハルトと魔導士は自らの折れた手足も顧みず、すぐさま特級ポーシヨンや『氷精の加護』を使って、最も被害の大きい盾戦士から順に回復させていく。

「っ、はっ。今までで一番きつい」

「それだけ話せば十分だ。火山はどうなった!？」

「って、前見えませんよ」

火山からもうもうと立ち上る粉塵に、あたりは少し先まで見えないう状態だ。火山の居た場所が赤く光って燃えているのは、砕けた火山から溶岩が流れ出しているのだろうか。

けれどもう、大地を揺るがし火山が歩く地響きは聞こえてこない。

「ゲルオオオオオ！」

不明瞭な視界の中、悲しむように、怒り狂うように吠える赤竜の声が聞こえる。

「火山は倒した。兄上の元へ向かうぞ！」

その赤竜の咆哮が、火山の死を告げているのだと、ウェイスハルトにはなぜか確信に似た感情をいだいた。

ウェイスハルトらに壊滅するほどのダメージを与えた火山の爆発であったが、レオンハルトらは赤竜の陰にいたお陰で、むしろ少ないダメージで済んだ。弓を使ったため赤竜から少し離れた場所にいたジークが吹き飛ばされ、溶岩溜まりに落ちる寸前で再びサラマングーに助けられた程度で、いずれも負傷の度合いは特級ポーシオンを使うまでもないものだった。

眼前で守るべき『歩く火の山』を倒された赤竜は、しばし呆然としたように見えた。



「グルオオオオオ！」

その咆哮は、怒りだろうか、哀しみだろうか。

「すまんな」

レオンハルトの口から洩れたその言葉は、何に対するものなのだろうか。

赤竜のわずかな隙を見逃さず、その懐に潜り込んだレオンハルトは、自らの剣にありつたけの魔力を込めて、赤竜の心臓を貫いた。

火山から噴出した水蒸気と灰は、迷宮第56階層を白く白く染め上げた。

灰にけぶる空間の中、溶岩だまりが放つ光が灰に反射して、恐ろしくも美しい。

遠くを見通せない白い世界は、ここに限られた迷宮の階層でなく、どこまでも続く死後の世界のようにも思える。

そんな白い世界の中で、黒くそびえる赤竜の影は大地に倒れ伏し、そして二度と動かなかった。

「おーいー！」

「皆の者、ここだ。無事か!？」

呼び合う声に呼応するように、一人、また一人と白濁した世界に人影が浮かび上がる。

レオンハルトのもとに集った人影は全部で12人。  
今回も全員何とか生還できたらしい。

生還し、再びまみえた喜びに、拳をぶつけ肩をたたいて健闘をたたえ合う。

けれど彼らに『敵』を倒した歓喜はない。

『歩く火の山』を失った赤竜の叫びを聞いたからだろうか。

赤竜を倒し得た勝因を、生還できた要因を挙げればキリがないだろう。

赤竜をうまく誘導し左翼を封じたことに始まり、完全に地に落とした天雷だつてそうだろう。たとえ火山を倒した隙があつたとしても、左眼をつぶしていなければ赤竜の懐にレオンハルトがめぐりこめはしなかつたらうし、そもそも、まともに当たれば一撃である世に送られたらう攻撃を辛うじて躲しては攻撃を加え、ダメージを蓄積していなければ、赤竜が大地に膝をつくことはなく、レオンハルトの剣は赤竜の心臓に届かなかつたらう。

皆で勝ち取った勝利であることに、間違いはない。

けれど、赤竜の咆哮を聞いたレオンハルトらは、『自分たちは守るべきものを守れ、赤竜は守れなかつた』のだと、そんな風に感じていた。

迷宮第56階層に降りしきる灰は、まるで声なき火山の断末魔のように、階層階段に続く洞窟の中まで白く白く染め上げた。

「ギヤウギヤウ」

一体どうしてわかるのか、視界の悪い中、サラマンダーの先導で何とか上層へ上がる階段まではたどり着けたけれど、新たな階層へ続く階段を探すのは視界が落ち着いてからになりそうだ。

「今日は撤収しよう」

レオンハルトの号令で全員が階層階段を上り始めたとき、最後尾に続くジークの右頬を、べろりとサラマンダーが舐めた。

「ギヤウ！」

最後に一声そう鳴くと、ぼふんと幾つもの炎となってサラマンダーは還って行った。丁度魔力が切れたのだろう。

「あいつにも、ずいぶん助けられたな」

鳴き声に振り返ったレオンハルトがねぎらいの言葉を掛ける。

「はい」

赤竜をうまく誘導できただけではない。溶岩溜まりに落ちかけたところを何度も助けてもらったのだ。サラマンダーが、そして、マリエラが守ってくれたのだ。

（あの『歩く火の山』は真っ直ぐこっちへ向かってきていた。赤竜を守ろうとしたのだろうか……）

そんな思いを振り払うように、ジークは軽く頭を振る。

たとえそうだったとしても、倒さないわけにはいかない。

この迷宮の最奥に待つ『迷宮の主』を斃さなければ、この土地にジークたちの生き残る未来はない。ただ喰い殺される日待つことだけは、ジークたちにはできないのだから。

階層階段を上がり、転送陣を通り、地下大水道を経由して、迷宮討伐軍の拠点に戻った時には、日はすでに高くとうに昼を過ぎていた。

灰にまみれた汚れを基地の水場で落とし、ニールンバークの診察を受けた後、ようやく帰宅が許される。

火山ガスを防ぐためにマスクを着用していた者は灰を吸い込んではいないけれど、運悪くポーションを飲むために外したままで、大量の灰を吸ってしまった者は治療に少し時間がかかるらしい。少し歩き方のおかしかった盾戦士は、足が歪んでくっついていたらしく、

「そのままにしておくつもりか？　すぐに治してやる」と笑顔の二レンバークに拉致されて、赤竜に挑む前よりも悲痛な表情を浮かべていた。

待合室代わりに準備された基地の個室には、マリエラとアンバー、付き添いの師匠が待っていた。迷宮討伐軍が気を利かせて呼んでくれたらしい。

「おかえり！　ジーク、怪我はない？　はい、眼帯」

「ただいま。マリエラのお陰で無事に帰って来れた」

「お疲れさん。ジーク飯まだだろ？　『ヤグーの跳ね橋亭』でくつてこーぜ」

師匠が絡んでくるせいで、いつも通りいい雰囲気になり切れないジークとマリエラの横では、ディックとアンバー夫妻がこれまた微妙な距離感で生還を喜び合っている。こちらは大人で新婚なのだから、人目をはばからずイチャイチャしてもいいのだが、どうやらアンバーは人前でイチャイチャしない派らしい。

「とりあえず、『ヤグーの跳ね橋亭』で昼飯でも食うか！　ジーク、お前らも来い！」

このまま仕事に戻る気はないのだろう。本当はアンバーと二人で行きたいだろうに、断られそうだと思ったのか全員での昼食を提案するディック。

その提案にのって基地を出た一同の前を、ヴォイド、エルメラのシール夫妻が通り過ぎる。

「あら、お先に」

「お疲れ様」

酷く簡素な挨拶をして通り過ぎる二人は、いつも通り髪をまとめた眼鏡のエルメラさんと、同じく眼鏡の穏やかそうなヴォイドさんなのだが、二人は人前はばからず腕を組んで仲良くぴったりくっつ

いている。

「ねえ、あなた。子供たちが帰ってくる前に、デートしましょう」

「いいね。ちょうど君と行きたいお店があったんだ」

『木漏れ日』でエビフライを食べたときから分かっていたことだけれど、シール夫妻は人前でイチャイチャする派らしい。

目の前で仲良しぶりを見せつけられたディック隊長は、左手を腰に当ててアンバーさんをチラ見してアピールしていたが、アンバーさんに肘を掴まれて「さ、いこっか」とせかさされていた。

マリエラは、右手でジーク、左手で師匠と手を繋ぎ、二人の後を追いかけていった。

そして、『ヤグーの跳ね橋亭』では。

「隊長！ オレ、Aランクになったんすよ！ 赤竜は間接的とはいえリンクスの敵！ オレも討伐に参加するっす！」

偶然出くわしたエドガンに捕まったディック隊長が、「今倒してきた」と言い出せなくて、困った顔で目を泳がせていた。

噴き出しそうな師匠と、「そういや、エドガンもAランクになったんだっただ……」という顔のジークを連れて、マリエラはそっと『ヤグーの跳ね橋亭』を後にした。

昼食を食いつぱぐれたジークだったけれど、いつもと変わらぬ迷宮都市の喧騒は、赤竜との戦いが意味あるものであったことをジークに実感させていた。

守りし日々(後書き)

じっくりまとめ…討伐完了。そして変わらぬ日々。エドガンも。

## 鍛えよ剣を

むにり。

マリエラの両手がジークの顔を掴む。

初めはちゅーでもしてくれなのかとドキドキしていたジークだったが、どうやらそうではないらしい。

マリエラはちよっぴり深刻そうな顔をして、ジークの蒼い左目と緑の右目を交互にじーっと見つめているのだ。

「どうした？ マリエラ」

ひとしきりジークの目を眺めた後に、「なるほどわかったぞ」とばかりにうんうんと頷いたマリエラにジークが聞いてみる。

どうせ、碌なことではないのだろうけれど。

「うん、あのね。ジークに会ったばかりの頃ね、私、ジークの蒼い目がすごく気になってたんだ。綺麗だなんて。でも、それって、ラインから流れ込んできたエンダルジアの気持ちだったんだよね。」

「それは……」

ジークの思惑に反して、マリエラの回答はある種深刻なものだった。

それはつまり……。マリエラがジークに良くしてくれたのは、エンダルジアの気持ちに引きずられてのことだというのだろうか。つまり、マリエラのジークに対する感情は……。

「でも、今見ると、蒼い目も緑の目もどっちも綺麗だし、別に何色でもジークはジークかなって思った」

「！ つまり、それは……」

つまりそれは、今のマリエラはエンダルジアの気持ちに影響されていなくて、今のマリエラの気持ち、それはつまり。

落とされたり上がったたり、ジークの気持ちは乱高下して、その両手は自分の頬を触るマリエラの両手に重ねようか、それともマリエラ自身を抱き寄せようかと宙を搔く。

「マリエラ、買い出しいくぞー」

「はい、師匠。すぐ行きますー」

絶妙のタイミングで入る師匠の妨害。そして、ジークから手を離しするとジークの腕から逃れるマリエラ。Aランカーの攻撃を躲すとは恐るべき反射神経だが、マリエラにはもちろん自覚はない。完全に偶然だ。

師匠は『木漏れ日』の店内にいて、ジークとマリエラは暖炉のある居間にいるのに、どうして見ているようなタイミングで邪魔をするのか。

これが『炎災の賢者』の二つ名の由縁か。

(わざとじゃないのか……)

そんな疑念をいだきつつ、マリエラの後をついて『木漏れ日』の店内に向かうジークであったが、マリエラの話聞いたその顔は、いつもよりちよっぴりにやけていた。

そんなつかの間の日常を楽しむ『木漏れ日』とは打って変わって、迷宮討伐軍は多忙極まる日々を送っていた。

最初に取り掛かったのは、先日討伐した赤竜の解体である。これほど高位の竜なのだ。血の一滴も無駄にできないし、時間をかけて劣化させるわけにもいかない。師匠フレイジージャにも指示を仰ぎつつ、錬金術に必要な素材や、武器・防具に加工する部位、そして



肉に解体していく作業は夜を徹して行われた。

ちなみに赤竜の肉であるが、超が付く高級食材だ。

魔物除けポーションによって魔の森を通行できるようになったことで、迷宮都市には多くの物資や人が集まり、また迷宮から産出される様々な素材が迷宮都市の外、主に帝都へと運ばれていった。それ自体は迷宮都市にも帝都にも利益をもたらすことではあったのだが、急激な変化というのは管理を行う者に、難しいかじ取りを要求することになる。

迷宮討伐に専念するレオンハルトらにかわり、めんどろな貴族同士の社交を受け持ったのは領都にいる現シューゼンワルド辺境伯であるレオンハルトの父や妻だ。いくら戦に長けた辺境伯とて、幾重ものからめ手を講じる貴族たちを相手に空手ではいささか分が悪い。そんな貴族たちとの交渉において、赤竜の肉は大いに役に立ってくれた。

赤竜の肉など希少なものは、金を積みれば手に入るものではない。皇帝への献上はもちろんのこと、皇帝も口にした赤竜の肉を求める貴族は多いのだ。

「父上らが、貴族どもの介入に対して時間を稼いでくださったお陰で、今しばらくは時間も資源も迷宮攻略に費やすことができる」

「はい、兄上。しかし、あまり猶予はございません」

「わかっている。そのために、マロツクを呼んだのだ」

二人が向かった会議室には、ドワーフたちの自治領、ロツク・ウィールを治めるクンツ・マロツクが机上に置かれた白い布で覆われた塊の前に、渋い表情で整えられた髭の端をいじっていた。

布の中身がなんであるのか、おおよそ把握しているのだろう。彼はドワーフと人間のハーフでドワーフの血は半分しか流れていないから、物を作る才覚は生粋のドワーフに及ばない。しかしその分目

は確かなのだ。人も物も物事も、ヴェールの向こうの真実を見極める目を持っている。

「お待たせしてしまっただかな、マロツク殿」

にこやかに、友好的に握手を求めるレオンハルト。その様子は自らが見せつけるように置かせたはずの、布で覆われた塊など見えていないかのようで、そのあからさまな態度がわずかにマロツクを苛立たせる。その感情は、うまい酒を前にして長々とあいさつをされる時のそれに似ている。

「お呼びだてしたのには訳がある。鑑定してほしい鉱石がありましたな」

鑑定してほしいなどと、そんな言葉通りに受け取るマロツクではない。迷宮都市は素材の宝庫。鉱石鑑定をマロツクに頼まなければならぬほど、人材は不足していない。

「あれですな」

「ええ。マロツク殿にお見せせよ」

控える兵士に合図を出して布覆いを外させるレオンハルト。マロツクの目に晒されたそれは、固まった溶岩と金属光沢を放つ鉱石がかみ合った塊だった。

「……アダマントタイトですな。はてさて、この程度お分かりにならぬ將軍ではありませんまいに。単刀直入にお聞きしたい。これをどうせよと？」

片眉をあげ、目玉だけを動かしてマロツクはレオンハルトに視線を投げる。

迷宮都市周辺の山々は鉱物資源の宝庫でもある。鉄を始め多様な金属資源を産出するが、魔法金属は小規模なミスリル鉱床があるだけでアダマントタイトは産出しない。

それにこの鉱石の周りについているのは土ではなくて溶岩で、鉱山から産出したものとは考え難い。迷宮から得たと考えるのが妥当だろう。

マロツクの見立て通り、この鉱石は『歩く火の山』から採れたものだ。比重の重いこの金属は、爆発で残った『歩く火の山』の底部から産出された。

アダマンタイトの融点は高い。並の鍛冶師に精錬できるものではない。また極めて硬い鉱物ではあるが、それは同時に脆いという性質にもつながる。硬いが壊れやすいのだ。

勿論、程度の問題はあるから、普通の鋼の武器と数度打ち合うくらいならば壊れたりはいししないし、鋼の武器さえ斬り裂くだろう。けれど、鋼の武器を持つ敵と数人で戦うくらいの状況では質の良い鋼の武器があれば十分で、高価なアダマンタイト製の武器など必要としない。

アダマンタイトの武器が必要な戦いというのは、一人で何百何千の敵と斬り合うような戦いであるとか、鋼の武器では歯が立たないような強力な魔物と対する場合だ。

だから、長時間の戦いでも壊れることがないように、いくつかの金属と混ぜ合わせてアダマンタイト合金にして、その特性に応じた処理を行って武器に鍛え上げる。

武器の形に成形する技術の高さだけではない。その合金の配合比率や熱処理の温度、時間は極めて高位の鍛冶師でなければ調整することができないし、その次元に辿り着くにはアダマンタイトのような高度な金属の処理が必要だった。

アダマンタイトという高度な金属にふれ、その精錬に携わるだけでロツク・ウィールのドワーフたちの鍛冶スキルは大きく向上し、

彼らの念願とする「至高の一振り」に近づけることを、マロツクは理解していた。

そして、これを自分に見せたということは、レオンハルトはロツク・ウィールのドワーフにアダマタイトを扱わせる気があるということだ。

「武器を20日で100。明細はこれだ」

マロツクの要求にレオンハルトが目的だけを簡潔に伝える。

「無茶を言つな。アダマタイトだぞ。何度で処理すると思つてい  
る。ロツク・ウィールの炉を改造するだけで20日など過ぎてしま  
うわ」

レオンハルトの飾らない要求に、マロツクも社交の仮面を外し、  
ドワーフ然とした歯に衣着せぬ物言いでレオンハルトの要求に否を  
出す。そこにはもう、駆け引きだの交渉だのという言葉の裏を読み  
合う様子は見られない。

「精錬は迷宮都市でもらう。炉材に赤竜の鱗を提供しよう。武  
器100程度ならばそれでもつはずだ」

淡々と答えるレオンハルトに、マロツクが噛みつくような視線を  
向ける。

「正気か？」

「時間がないのだ」

アダマタイトの融点は高い。並の炉では溶けてしまう。確かに  
赤竜の鱗を炉材として内張すれば、武器100個分のインゴットを  
作る間くらいは、炉をもたせることはできるだろう。耐火性能に優  
れた赤竜の鱗という、貴重で高価な素材を使い捨てにするなどとい  
う、ばかげた選択をすれば、である。

本心を覆い隠すようなマロツクの笑顔は今ほみじんも見られない。

赤竜の鱗を炉材にしてでも20日で武器をそろえたいというレオンハルトの意図に思考を巡らせているのだろう。

（迷宮はそれほど危うい状況か。万が一があつたとして、被害はロツク・ウィールまで及ぶに違いあるまい。かの地と共に滅びるもまた我ららしくもあるのだがな）

大地から鉱物を掘り出して、溶かし、不純物を取り除き、合金を加えて固める。固めた金属を成形し、炎で赤めて冷まして鍛える。

ドワーフは様々な物を作り出すけれど、その中でも鋼を鍛えるその工程こそ、最もマロツクの血を沸き立たせる。ロツク・ウィールに集まるドワーフたちは皆、似たようなものだろう。資源豊かなロツク・ウィールを離れて命だけ助かったとして、生を実感できる者たちではない。万一迷宮から魔物が溢れロツク・ウィールに至っても、ロツク・ウィールと運命を共にしようとする者ばかりに違いない。

そんなことを考えつつも、マロツクはアダマントイトに触れる。

（こいつを出された時から、答えは決まってるんだがな）

ホレた弱みというべきか、ドワーフという種族のさかというべきか。

「わかった。だが鍛冶場は俺たちの聖域だ。たとえ迷宮都市の工房だつて変わりません。好きにやらせてもらつぜ」

「感謝する」

「なに、感謝はコレで。楽しみにしておりますわい」

右手を上げて酒を飲む仕草をしたマロツクは、にやりと笑って退出していった。

いつも冷静な彼らしくもなく、速足で迷宮都市に構えた商館に戻るや通信の魔道具に向かつてがなり立てる。

「野郎ども！ 今すぐ迷宮都市に集合だ！ 極上のアダマタイトが待ってるぜ！ 純度の高い極上の逸品だ。今すぐ打って形をくれと言わんばかりの鉱石だ。早いもん勝ちだぜ？ 別嬪さんは待ってちゃくれねえ。眠らず5日で駆け付けろ！」

らしくない。マロックは自分が興奮していることを自覚しながら魔道具の向こうの仲間に向かって声を上げる。まるで初めて赤熱した鋼を打った日のようだ。

『アダマタイトじゃと！？ うおお、すぐ行く！ 今すぐじゃー』

『おおい、皆に知らせんと！ マロック！ 寢床なんぞ要らんから酒だけはたっぷり用意しといてくれよ！』

『アダマタイトはどんぐらいある？ 配合するコペルのインゴットを忘れるな！』

魔道具の向こう、ロック・ウィールで知らせを聞いたドワーフたちは、マロック以上の興奮振りで、通信などそっちのけでバタバタと走り回る音や、支度を急ぐあまり棚をひっくり返す音まで聞こえてくる。

「この様子じゃ4日で到着しそうだな」

仕事道具は忘れないだろうが、道中飲まず食わず休みもせずでヤグーを走らせる阿呆はいそつだ。

「酒と食い物を積んだ迎えのヤグーを差し向ける。迷宮都市にあるドワーフ街の鍛冶工房全部貸し切れ。交渉はわしが行く。一番いい炉を中心に改造を始めるぞ。ついでにいい酒も買い占めじゃあ！ 代金は全部シューゼンワールド边境伯家持ちだ。遠慮はいらんぞ！」

がっはっは。景気よく笑いながら、マロツクはこぎれいな上着を脱ぎ棄てる。今からドワーフ街の鍛冶工房に赴いて直接交渉を行うのだ。こぎれいな上着もピカピカの靴も、鍛冶場じゃ邪魔になるだけだ。

彼はしまい込んだ荷物袋から、着慣れた作業着を取り出して着替え始める。

綿の長袖のシャツと足首まであるズボン下は、ごわごわと服を盛り上げ、スマートさの欠片もない。けれど、肌をちりちり焼く輻射熱で焼けも縮みもせず、汗をよく吸ってくれるこれらは火に向かつて働く者には必須の下着だ。さらに耐火性の強い革のツナギに履きなれた鋼板入りの革のブーツ。どれもガサツで、品の良いマロツクのイメージとかけ離れた衣服といえる。

けれどそれらを着込んでみると、どれもひどくしっくりときた。

「あんな極上のアダマタイト鉱石を見せられて、ケツまくれるやつあ、ドワーフじゃねーわな」

一つの街の代表として街の護りを固めるだとか、街を捨て逃げる算段を行うだとか、他にやるべきことはあつたのかもしれない。

(でも、それじゃあ、ロツク・ウィールは治められんわ)

逃げるなら、アダマタイトを打ち終えてから。それがドワーフというものだろう。

なによりも、マロツク自身がアダマタイトの鍛造に立ち会いたくて仕方ない。

(まったく、ドワーフとは難儀なものだわ)

そんな風に頭の隅で考えながらも、もはやただのドワーフにしか見えないマロツクはウキウキとドワーフ街へと出かけて行った。

迷宮の第57階層に挑むため、必要な物は武器だけではない。得

られた赤竜の素材も時間と人手の許す限り武器や防具に加工し、迷宮討伐軍は準備を続ける。

鍛えられた人と、彼らが纏う武器防具。

そして、もう一つ。

最後の準備を整えるため、迷宮都市の錬金術師は街を抜け険しい山へと向かっていった。



鍛えよ剣を（後書き）

ざっくりまとめ：アダマントタイトはマジカルな超鋼（タンゲステン  
の合金）のイメージ

## ウィグラーツィル

迷宮都市の南東には険しい山々が広がっている。

山並みは南に行くほど切り立っていて、途中まで登ることはできても人の足では越えることなどできはしない。

ごつごつとした岩ばかりの山並みは、勾配がいくらかましな東の山でも変わりばえはないが、東の山には切り立った山頂の手前に山の一部がずれて崩れたような、巨岩が積み重なっている場所がある。

その場所に辿り着くには、山間を縫うように迂回して、比較的勾配の緩やかな、しかし足場の悪い山道を進んでいくほかはない。

もともと人の立ち入らぬ岩山だ。道が整備されているはずはなく、進路にマリエラの背ほどの段差があるなど、しょっちゅうだ。

こんな場所に好きこのんで生息するなど、ヤグーくらいのものだろう。

ひよいひよいと山道をご機嫌で進むヤグーと対照的に、その背にしがみつくマリエラはさっきから半泣きだ。

「高いっ、怖いっ、師匠ーっ、帰りたいー!!」

「ダイジョーブ、ダイジョーブ。もうすぐ、もうすぐ」

「さっきからそればっかリー!!」

ヤグーの前に乗って立派な角をむんずと掴んで振り落とされないように必死なマリエラと、マリエラの後ろに横据わりして、唄を口ずさみながら景色を楽しむ師匠。

そして後続のヤグーに一人騎乗して、「解せぬ」という顔をしな

がら付いて来るジーク。

山道をいく一行を見れば、疑問は幾つも浮かびあがるだろう。

例えば、師匠とマリエラの乗るヤグーは、ジークの乗るヤグーより一回り小さいのに、まるで誰も乗せていないように、疲れも知らぬ軽やかな様子で岩山を走り回っていて、ジークを乗せた迷宮都市で一番強いヤグーが付いて行くのがやっとであることだとか、激しく揺れるヤグーの背にあって、横座りをした師匠が落ちる様子も見せないことだとか。

もっと言えば、マリエラのようにどんくさい娘が、長時間しがみついていられるはずのない道行きなのだ。

もっとも、だいぶ師匠に慣らされてしまったジークにとっては、何故自分とマリエラが同じヤグーでないのか、という点が一番解せないようである。

「今日はこの辺で野営だな」

「ええ、師匠、もうすぐって言ったのに」

比較的開けた場所で一行はヤグーを止める。師匠が魔法を使っていたおかげで、ヤグーの背でも振動は少なく、ぼんやり座っていたとしても転がり落ちることはなかったのだが、そんなことは知らないマリエラは全力でヤグーにしがみついていたものだから体中ががくがくだ。ヤグーの背からジークにおろしてもらった後も、両足で立つこともできずに生まれたてのヤグーのように両手をついてプルプルしている。

「リ……、リジエネ薬<sup>再生</sup>」

腰のポーチから持って来たリジエネ薬を取り出して飲み込むマリエラ。師匠に言われて持ってきたのが役に立った。こんなことに使っているなんて、日々訓練に勤しむ迷宮討伐軍がみたら血の涙を流

すのかもしれないが、そこは時間があれば筋肉を蓄えているお兄さんと、時間があればポーシヨンをつくっているマリエラの差だ。折角のマリエラ強化月間なのだ。大目に見て頂きたい。

「マリエラは休んでいるといい」

「ありがと、ジーク」

「悪いなー」

休んでいると言われていない師匠まで、野営の準備をジークに任せてその辺に寝転がる。野営の準備と言ってもテントを張るわけではない。比較的平らな地面に持って来た分厚い魔物の毛皮を敷いてその上で毛布に包まって寝るだけだ。

周囲に魔物除けポーシヨンを撒いておけば、弱い魔物は寄ってこないし、強い魔物はこの辺りには棲んでいない。むしろ獣の方が危険だろうが、こちらは火を焚いておけば寄ってこないだろう。

夕食の為に、薪を探しに行こうとするジークを師匠が止める。

「マリエラ、指輪に魔力こめな。たっぷりな」

「え？ 魔法陣ないですよ？」

「あたしが呼ぶから平気。マリエラが呼んだらサラマンダー働かないだろ？」

サラマンダーだって、ほとんど働かない師匠に言われたくはないだろう。赤竜討伐の際は、最初こそラプトルの体に慣れずにこけてしまったり、ちよっぴりはしゃいでしまったけれど、ジークを助けて大活躍だったのに。

師匠はサラマンダーの指輪をはめたマリエラの右手に手を重ねると、何やら呪文を唱えて手のひらサイズのサラマンダーを呼び出した。

今日は、マリエラが今まで呼び出していたような、炎をまとった

トカゲの姿だ。

「ちっさい……」

「いいんだよ。朝まで番をしてもらっただけなんだから。大きけりゃ朝までもたないだろ？」

サラマンダーはサイズに見合わない光量と熱量で、いるだけではかぼかと温かい。この辺りは標高が高くて日が出ている今でもひんやりと寒いから、朝までいてくれるのならありがたい。

サラマンダーはあたりを見回してジークを見つけると、嬉しそうに尻尾をパタパタと振っている。

「あの時は世話になったな」

そう言いながら、ジークがその辺の石を積み上げて簡易の竈を作ると、おうちを作ってもらった！ とばかりにのそのそと竈の中へ入っていった。番犬ならぬ番サラマンダーだ。今は肉体があつて、精霊として呼んだ時よりもずっと自由に行動できるから、夜中に全員が寝てしまっても獣や魔物から一同を守ってくれる。

ヤグーに積んできた食材で簡単な食事を作っていると、沈む夕日を追うように空をウイグラーツイルが隊列を組んで飛んでいった。

「あれが最初の渡りかな」

ウイグラーツイルの渡りは一番最初に迷宮都市に秋の訪れを告げる。

迷宮都市ではこの時期に空の高くを渡っていく姿を見るだけで、どこに棲んでいるのかはわかっていないが、ウイグラーツイルが渡った後には日が短く、気温も寒くなって木々が色づき始めるから、秋の先づれとして知られている。

隊列を組み、長い飾り羽をなびかせて飛んでいく様は、遠目に見ても美しいものだ。

ぼんやりと空を眺めるマリエラに、ジークが

「もう直ぐ、マリエラとであって1年だな」

と声を掛けるより早く、師匠がジークに明日の予定を告げる。

「ジークは明日ここでウィグラーツィル狩りな。ここなら矢が届くから」

予定は未定というけれど、師匠が言うこれは確定事項だ。

「え？」

「ええ？」

ジークとマリエラの初のお泊り遠足（保護者付き）二日目は、どうやら別行動となる様だ。

翌日、師匠と共にヤグーに乗り込んだマリエラが、昨日より一段と険しい山道に、「高いっ、怖いっ、師匠っ」と悲鳴を挙げ、師匠が根拠のない「ダイジョウブっ」を繰り返していた頃、一人別行動を申し渡されたジークは、ヤグーを全速で走らせながら、足場の悪い山道を逃げていた。

「くっ、まさかウィグラーツィルがあればほど攻撃的とは……」

わずかな直線に入るや、振り向きざまに弓を構えるジーク。

揺れるヤグーの背から空を飛ぶウィグラーツィルを射貫くなど高度な射撃であるのだが、精霊眼の助けがあればさほど難しい事ではない。

ターン。

固く薄い装甲を射貫くような音を立てて、先頭のウィグラーツィルが地に落ちる。けれど後続のウィグラーツィルは怯むどころかますます速度を増してジークめがけて飛んでくる。

この調子では、最後の一匹になるまで攻撃をやめはしないだろう。

ただの渡り鳥だと侮って、大きな群れの先頭に矢を射かけたのが失敗だった。気づかれぬよう最後尾を打ち落とすべき種族だったのだ。

仲間を失ったウイグラーツイルの群れは、仇を討とうと急旋回してジークに襲い掛かってきた。

(こうなることを分かって、この場所を指定したのか……)

昨日野営をしたこの場所は、崩れた岩山で谷が埋まったような地形をしていて、足場は悪いものの谷に転落する恐れはない。また、すこし進むと巨岩が積み重なってトンネルのようになっていたり、岩陰が多くあつて弾丸のように飛び込んでくるウイグラーツイルの群れを躲しやすい場所だった。

ヤグーにへばりつく様に体を低くして岩の隙間に飛び込んで、そこまで迫ったウイグラーツイルの群れをやりすこす。ジークが飛び込んだ場所は洞窟ではなくただの岩の隙間であるから、すぐに岩を回り込んだウイグラーツイルの群れがおそってくるのだが、それでもいくらか距離は稼げる。

(何！？ 前から)

ウイグラーツイルはどうやら頭がいいらしい。この隙間をたった数回通っただけで、ジークの行動パターンを覚え、前後で回り込んできた。

(くっ。前方の左、2、いや3匹を落とせば抜けられる！)

ウイグラーツイルの軌道を瞬間的に把握して弓を放つジーク。今で何匹倒しただろう。後何匹残っているのだろう。

翼で風に乗る、あるいは翼をはためかせて飛ぶ鳥では不可能な速度で低空を飛び、高度を変え、旋回してみせるウイグラーツイル。

小型の渡り鳥と変わらぬサイズのこの生き物は、羽毛に覆われた翼を持ち、頭部と尾には美しい飾り羽を持っているけれど、その顔にくちばしはない。鳥と見えなくもないスッと尖った口先を開くと、小さく鋭い歯が生えていて、その自在な飛行のたびに、魔力の発動が感じられる。

（まさか、ウイグラーツィルが竜種だとは……）

小さな体に見合った生命力しか持たないことだけが救いだろうか。弓の一撃で倒せなければ、この数相手に全く勝機は見えなかっただろうから。

ジークは精霊眼を見開いて、ウイグラーツィルの動きを探る。右から、左から、後ろから、頭上から。

縦横無尽に揺れるヤグーの背から進路を確保し、距離を稼ぎながらも射かける隙を窺う。

（精霊眼を使う練習というわけか……）

それにしてもスパルタだ。遠足だと思っていたら一人強化合宿だった。

（マリエラが帰ってくる前に倒さないとな）

あの師匠のことだから、マリエラがウイグラーツィルに襲われるような状況は避けるのだろうか、この場所ごと迂回して、ジークを放って帰りがねない。

大量のウイグラーツィルをヤグーに積んで、一人歩いて帰る自分を想像したジークは、その想像を振り払うように身震いすると、意を決したように弓をつがえた。





## ウィグラーツィル（後書き）

ざっくりまとめ：ジーク、遠足風強化合宿でポツチ。

師匠「二人一組な」。あ、あたしマリエラと組む  
し」

## 水晶窟の夜

「到着」

「うっう、お尻痛い……」

ひらりとヤグーの背から降りる師匠と、ずり落ちるように降りるマリエラ。

師匠に連れられ辿り着いたのは、崩れたような岩山に穿たれた、亀裂のような洞窟の入り口だった。

「《ライト》」

灯りの呪文を唱えて洞窟に入っていく師匠の後を、蟹股になりながら付いて行くと、洞窟の内部はキラキラと光る水晶が壁や床のそこかしこから飛び出た鉦脈だった。四半刻ほど登っていくと奥の方からは光が差し込んでいて、足元を照らす明かりは必要なくなった。

「ここが水晶窟だよ」

壁面に埋まつているのは純度の高い水晶らしい。採掘したらお金持ちになれるんじゃないかな。そんなことを考えるマリエラの前に、透明度の高い水晶ばかりを磨いて並べたような、マリエラの背ほどもある水晶が乱立する広間が現れた。

まるで水晶の博物館だ。こんなに立派な水晶が並んでいるのに、広間の天井部分、洞窟の天辺は吹き抜けるように穴が開いていて、夕日が差し込んでいる。日は地平に沈みかけているから天井から入る夕日は水晶を赤く染める程度しかないが、真昼間に真上から日が差し込めばどれだけまぶしい事だろう。

光をあまり受けていない今でさえ、不思議な力にあふれていて、

淡く光って見えるのに。

「2000年の間、誰も来なかったみたいだな」  
ぐるりと回りを見回した師匠がつぶやく。

「師匠、ここって有名な場所だったんですか？」  
「いいや。あたしの秘密の場所ってやつさ。月の魔力を集められる場所はそう何カ所もないからね。マリエラも秘密にしておくんだよ。まあ、今日は根こそぎ持っていくから、次にまとまった量が取れるのは数十年先だろうけど」

師匠はとっておきの場所をマリエラに教えてくれたらしいのだが、こんな岩山の果ての場所にマリエラが一人で来られはしないし、数十年先に覚えている自信もない。

月の魔力を使ってマリエラが作るうとしているポーションは、飛び切り高価でとても有名なポーションだ。だから、こんな山奥で、しかも数十年に一度しか採取できない場所以外に、安定供給できる方法があるんじゃないかとマリエラは思っている。帝都の方ではルナマギアを栽培する方法が確立されているというし、オーロラの氷果も冷凍の魔道具で栽培できたのだから。

そんなことを考えながら、マリエラは師匠と二人で夕食をとりつつ、月が空の中心に昇るのを待った。

移動につかれたマリエラがうとうとと眠っているうちに、月は空の一番高くに昇ったようだ。

師匠に起こされて目を開けると、洞窟の天井に空いた穴から綺麗な満月が顔を出していた。雲一つかかっていない真ん丸な月からは、ひたひたと滴るような月光が降り注いでいる。そんな月の光を受けて、水晶柱が乱立した洞窟の中は、水晶の放つ光と反射する月の光が静かに静かにあふれるようだ。

月の光に熱はない。光る水晶に触れてもそれは岩と同じひやりとした冷たさを伝えるだけだ。熱もまぶしさもない、ただただ静かな月の光には、何ものにも属さない力が宿っているのを感じる。

これが、月の魔力なのだろう。

「マリエラ、始めな」

「はい、師匠」

マリエラは腰のポーチから片手の平に乗るほどの、透明な球を取り出す。

師匠に「時間がない割には及第点の真球度だ」と言わしめたその球は、迷宮第54階層の『海に浮ぶ柱』の竜頭から採取したものだ。光線を収束するレンズの一部だったらしい。

元は抱えるほどの大きさだったと推測されるが、回収できた物の中で一番大きい欠片でこれなのだから、崩壊の激しさがうかがえる。

小さくなってしまうについても、材質としては一級品だ。特に魔力を収束し蓄積するという性質は、通常の水晶の数千倍にも匹敵するからマリエラたちの目的にとても適している。

マリエラは水晶玉を両手に持つと、広間の真ん中に歩み出る。

天井から差し込む月光も、水晶柱から放たれる光も、まるで水晶に吸い込まれるようにマリエラの手に持つ水晶球に収束していく。

それは水が高さから低きに流れるような現象で、反射や屈折という現象とは全く異なるものなのだけれど、当たり前のように集まって来る月の光に、はたから様子を見る者がいれば、そこが光の収束地点であると思わせるだろう。

月の魔力は何色でもなく、何者の物でもない。だから、ポーション

ンとして加工してやれば、飲んだ誰かに魔力を与えることができる。月の魔力は、魔力を回復する秘薬、マナポーシヨンの原料なのだ。

何年も何十年もかけて水晶に降り注ぎ、蓄えられた魔力を移せるのは月の光を浴びている間だけ。月が天辺から動いてしまえば、月の光が弱まってしまえば、途端に水晶から取り出せなくなってしまう。

「《命の雫》」

マリエラが水晶球を持たない右手を上げて、手のひらを天に向ける。

「《ウィンド》」

《命の雫》を風に乗せて、広間一杯に送り届ける。霧より小さな粒子に変えて、風と共に水晶にふりかけ、そのまま風で引き戻す。水晶に残る月の魔力を洗い出して集めるように。

師匠が言った通り、根こそぎ水晶中の魔力を移した水晶球は、中に光る水でも入っているかのような揺らめく月光を放っていた。

「今日はここで休んで、明日はジークを迎えに行こうか」

この洞窟は安全なのだと、広げた毛皮の上で無防備に寝転がる師匠のそばに、マリエラも毛皮を広げて寝転がる。

「師匠、洞窟ってちょっと寒いですね」

「本当は気温の変化が少なく、冬になると温いんだけどな。ここは天井が開いてるからな。でも月も星も見えるから、景色としては悪くない」

酒があれば完璧なのにと笑う師匠にマリエラはすり寄る。

こんなに近くで一緒に寝るのは、師匠に引き取られた幼い日以来

のことだ。

「ねえ、師匠」

「ん？ なんだ」

「こんな風に二人で過ごすの、久しぶりですね」

「そうか？ ジークはしょっちゅう狩りに出て留守にしているから、久しぶりってわけじゃないだろ」

「うーん、そうなんですけど。いつもは、街に人がいるから」

「ああ、周りに人がいないってのは、久しぶりかもな」

昔は人の気配など全く分からなかったのに、錬金術が熟練するにしたがって迷宮都市にたくさんの人が暮らしていることが、感覚として分かるようになってきた。ラインを介して自分と地脈に流れる《命の雫》のあり様も、周囲に宿りたゆたう《命の雫》も、本当になんとなくではあるけれど、感じ取れるようになってきた。だから

「ねえ、師匠」

「なんだよ？」

「私が1年前に目覚めたのって、起こされたんだなって思うんですよ。それでね、師匠はどうなのかなって」

「どうなんだろうな」

マリエラが予想していた通り、師匠はそうだとも違うとも言うてはくれない。

「ねえ、師匠」

「なーにー？」

「ウィグラーツィルって、風属性の竜種ですよね」

「あたり」

「地属性の地竜、火属性の赤竜、水属性のフィロロイルカス、そして風属性のウィグラーツィル。揃っちゃいましたね」

「そーだな」

この4種類の竜の血も、マナポーシオンとは別の効果の高いポーシオンの原料だ。フィロロイルカスモウイグラーツィルも竜種と知られてはいなかったから、師匠がいなければ揃うのに非常に時間を要しただろう。

師匠は何の説明もしてくれないけれど、マリエラには何となくわかっていった。

用事は全て済んだのだ。必要な物は、恐らくすべて揃ってしまっただ。

「全部、揃っちゃったんだ……」

ぼつりとつぶやくマリエラの背中に、師匠はそつと腕を回して子供を寝かしつけるようにぽんぽんとゆっくり叩く。

「もう少しだけ、時間はあるよ。仮死の魔法陣を作るくらいは」

いつもと違って、師匠の声は幼子を慈しむようにとても優しい。

けれどマリエラは、静かに頭を振ってこたえた。

「みんなを置いて、一人助かるなんてできないよ」

2000年前、マリエラに親切にしてくれる人はいたけれど、その付き合いは浅いもので、魔の森スタンヒードの氾濫から一人仮死の魔法陣で逃げ出すことに迷いなどはなかった。

唯一の例外は師匠だったけれど、師匠は3年も前に魔の森の小屋を出ていったきり、どこにいるかもわからなかったから、マリエラはためらいなく仮死の魔法陣を使うことができた。

でも今は。

「大事なものがたくさんできて良かったな」

「うん……」



師匠の高い体温と、とんとんと背中をあやしてくれる手に、マリエラはとても眠くなってきた。

「……ねえ、ししよー」

「んー？」

「今度は、急にいなくなったり、しないで……」

少し困った顔をした師匠の返事を、眠りに落ちたマリエラは聞くことはできなかった。

翌朝早くに水晶窟をでたマリエラと師匠がジークに合流したのは、昼を回った頃だった。

何十匹ものウイグラーツィルをつみかさねた横に、ジークとヤグーはへたりこんでいて、ポーションを使ったおかげが目立った傷はないけれど、ひどく疲れているようだった。

「へえ、上出来」

珍しく師匠に褒められたジークだったが、

「精霊眼を使いこなせず、最後は剣で倒してしまいました」としよぼくれていた。

どうやらジークは、治療や休憩をはさみながらも幾つもの群れと戦っていたようだ。

「あー、別にいいんじゃないか？ 倒せたんなら。ほれ、気付けに一本飲んどきな」

師匠はジークに中級のポーションをわたすと、マリエラにウイグラーツィルの血液を《薬晶化》するように言った。

「おお！？　こんなにちつちやいのに、結構竜の血が濃いかも」  
「竜種の強さは、単に体の大きさや攻撃力だけじゃないからな。こいつらはやたらと長寿なんだよ。まあ、長く生きてるって言っても、知能は渡り鳥と変わらなくて、延々と風を追って飛ぶだけなんだがね」  
「へー」

よくわからないなど、生返事をしながらマリエラは、矢や剣で倒されたウイグラーツイルの山に手をかざして《薬晶化》を試みる。  
フィロロイルカスはあれほど大きかったのに、ちよっぴりしか竜の血の薬晶が取れなくて、瓶を一杯にするために何度も迷宮に通ったのに、小山ほどのウイグラーツイルからは瓶一本分の薬晶が得られた。血液を全て薬晶に変えられたウイグラーツイルの亡骸は、みるまに枯葉のような、脱皮した殻のような乾いた物に変わっていく。  
マリエラが驚いてみると、急に岩間を縫うように強い風が吹き込んで、ウイグラーツイルの亡骸は落ち葉のように空へと千切れ飛んでいった。  
くるくると風に遊ばれ回りながら空へと上がっていったそれは、小さな鳥の姿に変わって、チーチーと鳴き声を上げながら群れを成して西の空へと羽ばたいていった。

「……、生き返った！」  
「そ。あいつらは風が具現化したようなもんだから、ちよつとやそつとじゃ死なないんだ。竜の血をもらったから、しばらくは小さいまんまだろうがね」  
「へえー」

感心するマリエラに、師匠は「これで、用事はおしまいだ」と告げる。

昨日の夜の会話が思い出されて、マリエラは少しだけ寂しい気持ち

ちになってしまふ。

「うん。師匠、ジーク、帰ろう」

「ああ、急げば今日中に迷宮都市に帰れるな」

「うええ、もつと揺れるの怖い……」

ウイグラーツィルと戦って疲れているはずなのに、ジークは早く帰りたいらしい。師匠の乗るヤグーに乗り込むマリエラに、ジークがとても残念そうな顔をしていたけれど、たぶんジークのヤグーにはこれから何度も乗る機会があるとマリエラは思っている。

（起こされたのは、たぶん私だけじゃないと思う）

昨日の夜の師匠との会話を思い出しながら、マリエラは考える。

何の根拠もないけれど、師匠のヤグーに揺られる時間はそう長くはないことを、マリエラはおぼろげに理解していた。

水晶窟の夜（後書き）

ざっくりまとめ：シリアスさんがアップを始めたようです

## におい

「君、臭いな。外の浴場で風呂に入って出直してきたまえ」

「へへっ、若センサー、すまねえな」

診察室に座る若い貴族の男の不快感な表情を意にも介さず、中年の男は黄ばんだ歯を見せて嬉しげに笑うと、足を引き摺りながら診察室を出ていった。そのまま診療所の受付に向かい、「風呂に入れってさ」と告げると受付の女性は風呂屋の入浴券を男に渡す。男は杖をついていない手で券を受け取ると、汚れた上着のポケットに入浴券をねじ込む。

その袖口は擦り切れていて、しばらく洗っていないから服も随分と汚れていて、自分でも分かるほどに臭う。

(ついでに洗濯もすっか)

最近の迷宮都市は景気がよくて日雇いの仕事が絶えずあるから、少々懐が温かいのだ。

風呂屋には洗い場もついている。洗濯の道具を借りて自分で洗ってもいいのだが、銅貨数枚支払えば風呂に入っている間に洗濯をしてくれるサービスもある。

風呂上がりのさっぱりとした体で、洗い立てのぴしっと畳まれた服を着るのは、それが着慣れた自分の襦袢であっても随分と気持ちの良い物だ。

長く一人で暮らしてきた男にとっては、誰かの手で洗われ整えられた衣服に袖を通すということは、ひどく真っ当で、上等なことのように思える。

風呂の代金も銅貨数枚程度だが、風呂代に洗濯代、飯代に宿代と重なれば結構な額になってしまう。だからここで入浴券をもらえるのはありがたい。

診療所で治療を行っている若い男は、見るからに貴族といった外見をしている。見た目どころか横柄な言動も、汚いもののように自分たちを見る目も、思い描いた貴族そのものだった。その態度に最初こそ腹を立てた男だったが、後ろには護衛の兵士が控えているし、実際、服も体も汚れているので「風呂入ってねえし、實際きたねえんだからしょうがない」と開き直っていると、いつの間にもやら診療所の近くに風呂屋が建てられ、入浴券をくれるようになった。

どうやらこの若い貴族は、態度や性格ほど悪いヤツではないらしい。

今では、診療所に行くときは、入浴券を貰えるように極力汚れた格好で行くようにしているくらいだ。これは男だけの裏技だと思っていたのだが、同じように考えている者は自分だけではないようで、診療所に通っている他のスラムの住人も、同じ方法で入浴券を貰っている。

風呂屋の入り口で入浴券を渡すと、引き換えに小さな石けんと手ぬぐいをくれる。

石けん、手ぬぐい無しの銅貨2枚安い券もあるのだが、さすがは貴族だ。気前よく、いい入浴券をくれるものだ。石鹸も手ぬぐいも1回の入浴で使い切ったりしないから、持って帰って普段に使うことができる。

以前より清潔な暮らしをするようになったせいか、それともまともに見えるようになったためかは分からないが、最近は以前に比べて体調もいい。

「随分と脚、生えてきたじゃねえか」

「おう、おめえか。ご覧のとおりよ」

汚れを落とし、足を引き摺りながら湯船に向かう男に、声を掛ける者がいた。スラムで見知った顔だ。

「前は、引き摺るほどなかったもんなあ」

「そういうおめえは、最近どうよ」

「おお。調子いいぜ。すっかり元通りだ」

指が5本揃った利き手を広げて見せる様子に、「いいなあ」と男は思う。

確かこの手には、魔物に食いちぎられて薬指と小指がなかったはずだ。残る3本の指ではうまく剣を握れずに、荷運びなどで食いつないでいたのだと記憶している。

男は片脚を太ももの中ほどから失っていたから、ここまで治るのに時間がかかったけれど、こいつは指2本だけだったから、すぐに治って迷宮に潜っている。

「うらやましいぜ」

とても素直な気持ちで、そんな言葉が出た。

「なに言ってるんだよ。お前だってもう直ぐじゃねえか。お前、魔法だって使えるし、脚さえ治れば俺より強ええじゃねえか。そうだ、脚が治ったらよ、一緒に迷宮に潜ろうぜ」

「おう。ありがとうよ」

うらやましい。そんな風に思えるのは、手を伸ばせば届きそうだと思っっているからだ。少々無理をするだとか、何かを我慢するだとかすれば手に入りそうな、近くに見えるものだからこそ、うらやましいと思うのだ。

大金持ちになって豪邸に住むだとか、Sランカーになって名を馳

せるなどという、何の実感も伴わない夢物語は、楽しい想像として  
思い浮かべても、うらやましいと感じたりしない。

手を取り戻したこの男のように、自分ももう直ぐ自分の両足で歩  
いて迷宮に潜れる日が来ると実感できるからこそ、これほど素直に  
“うらやましい” と思えたのだと、男は漠然と考えていた。

「冬が来る前に、迷宮に潜りてえな」

ぼつりと男はつぶやく。スラムでは食料の炊き出しもあつたから、  
飢えて死ぬことはなかったけれど冬の寒さはつらかった。雪など降  
るものなら穴の開いた靴から冷たい水がしみ込んで足が凍えて切  
るように痛い。とつくに失ってしまった脚さえも寒さを訴えるかの  
ように痛んで骨身に染みるのだ。

「大丈夫だろ。でも、治つてすぐの単独行動はやめとけよな。冒険  
者ギルドで俺らみたいのを集めて職員が付き添つて迷宮潜つてくれ  
るのがあつからさ、それ利用するといひぜ」

「へえ、そりゃいい。そうすらあ」

そう答えた男は、少々のぼせてしまつたと湯船から出る。この脚  
が治つたら、毎日風呂に入つて今よりましな食事と寝床が得られる  
だろう。

今までは、冬が早く終わることをただ願う以外になかつたし、先  
の不安ばかりが脳裏をよぎり何かに使えそうなゴミクズを集めるよ  
うな生活だったけれど、今はその心根のあり方さえも変わつてきた  
と感じている。脚を失う前の、あれが欲しい、こうなりたいと希望  
に満ちていた時の気持ちをほんの少しだけ思い出せる。

食べ物、服、家。そんな物も必要だけれど、欲しい、叶えたいと  
思う気持ちもまた必要なもののだと、失われた脚を抱えて冬を過  
ごした男は思う。



「死なねえことと、生きてることは一緒じゃねえよな」

「ああ。ちがいなえ。こいつは、忘れちゃなんねえな」

脚を失った男の一言に、指を失っていた男は同意する。

賢くはない自分たちだが、何か大切なことに気が付いた気がするのだ。

スラムの住人たちに、生きる希望や意欲を与えているなど知りもせず、診療所の若い貴族、ロバート・アグウィナスは静かに溜息をついていた。

迷宮の南西側に作られたこの診療所は、迷宮都市のポーション販売で作られたものだ。怪我で戦えなくなつてスラム街に暮らす住人を治療するために建てられた診療所だが、迷宮で怪我を負った者もやって来る。そんな中でもロバートが担当するのは手や足を無くした重症の者たちだ。

特級ポーションは階層主の討伐に欠かせない。材料となる『地脈の欠片』は魔物から稀に採れる物だから、アグウィナス家が100年ほどかけて貯めてきた物があるとはいえ、通院治療可能な者においそれと使うわけにはいかない。

だから、上級クラスのポーションと彼がかつて製造していた『黒の新薬』の技術を応用して、欠損した部位を少しずつ再生する治療をおこなっている。

ロバートがここで治療を始めたばかりの頃は、スラムの人間の汚らしさに辟易したものだ。あまりの不衛生さに、夕食時について妹キヤロラインに愚痴をこぼすと、

「まあ、不衛生な環境は疫病を招きますわ！　そういえば帝都では公衆の浴場なる物があると聞きました」

と言い出して、あつという間に浴場を作ってしまった。

貴族の女性が好む慈善事業かと思いきや、魔の森外周部の村から手ぬぐいを安く仕入れたり、害虫駆除団子の工場のノウハウを利用して浴場で販売する石けん工房を作ったり、迷宮でついた酷い汚れも落としてくれる洗濯サービスを始めたりと、関連業務を手広く広げたお陰で結構儲かっているらしい。

（人間の臭いは落ち着かない）

ロバートの心を落ち着けてくれるのは、本がたつぷりと並べられた書庫の匂いや、湿気てほんの少しかび臭い地下室の匂いだ。

新薬の製造をしていた時も、多くの『材料』と接してきたけれど、彼の鼻孔を刺激するのは、むせ返る血の匂いや、独特の刺激のある薬品の匂いで、彼のいる診療所を訪れるスラムの人間や冒険者たちから漂ってくるものではなかった。

少しすっぱいようなあの臭いは汗の匂いなのだろうか。

診察の為にいやいや触れる彼らの体は熱く、どくどくと脈打っている。

患者の多くは、治療のついでにロバートに治療と関係のない話を聞かせる。

今日、何を倒したとか、どこそこの料理がおいしかったとか、どこかの店に可愛い娘がいるのだとか。

怪我がよくなってくるにつれ、彼らはみな饒舌になる。

怪我が治ったら迷宮に潜って、たくさん稼ぐのだと。

たくさん稼いで、旨いものを食べるだとか、可愛いあの子に声を掛けるだとか、たくさん金を貯めて、いつか所帯を構えるだとか。家が欲しい、商売がしたい、親を呼んで楽をさせたい。そんな、似たような話を繰り返して聞かせるのだ。

どれもこれも実にくだらない話だと、ロバートは思う。

どれもこれもありふれた、どこにでもあるささやかな願いだ。

スタンビード

魔の森の氾濫から200年、アグウィナス家と錬金術師たちが願  
い、つないできたのとおなじ、どこにでもあるささやかな願いだ。

怪我の治った者たちは、みんなこぞって迷宮に潜る。

稼ぎの2割は治療費として冒険者ギルド経由で支払われるから、  
診療所に個別に支払う必要などないのに、治してもらったお礼だと  
感謝の気持ちなのだと言物や採取物の一部を持つてくる。貴族であ  
るロバートが口にはしない魔物の肉だとか、得体のしれない果物だ  
とか、錬金術師ではないロバートには使えない薬草だとか。

（不要だと言っているのに。それでも五体満足で顔を出す者はまだ  
マシですが）

折角治してやったというのに彼らのうちの何人かは、大怪我を負  
って戻って来るし、帰ってこない者さえもいた。

「また迷宮に潜るのですか？」

再び怪我を治してやった冒険者にそう聞くと、「おうよ」と当た  
り前のように答える。

「心配すんなって、治療費完済するまでは死なねーからよ」

「そんなことを言っているんじゃないのですよ」

この診療所の治療費はどれほど高額だったとしても、稼ぎの2割  
を完済するまで支払う決まりだ。つまり、死ねば踏み倒せる。診療  
所の運営費用は、市販されたポーションの利益で賄われているから、  
ロバート個人にとっては踏み倒されても困ることはない。

なぜ自分がこれほど苛つかねばならないのかと、ロバートは薄い  
下唇をかみしめる。

こいつらは、怪我をしてスラムにまで墮ちたのに、どいつもこいつも迷宮に向かう。

魔物と相對するのは恐ろしかろうに、怪我を負うのは痛いだろうに、それでも迷宮へと潜っていく。

「だってよ、他にねえもんよ。オレ頭わりいし、不器用だしよ」  
そんなことを言いながら。

(わかつているんだ……)

スタンピード  
魔の森の氾濫後の200年、錬金術師たちが、語り伝えたささやかな願い。ロバートや歴代のアグウィナス家主が叶えたいと願ったそれは、ロバートが治療している人々のそれとなんら変わりがないことを。

(わかつていたんだ……)

ロバートが『材料』にし、殺めてきた者たちも、罪を犯した身の上であっても、彼らと同じ人間なのだ。

今日一日、治療に当たった人々の、人間の匂いがロバートの体に染みついて取れない。

何年も、殺め続けた人々の、血と薬液の臭いがロバートの体に染みついて取れない。

ロバートに癒された人々は、迷宮へと挑み続ける。

その瞳は希望に満ち、失った夢をかなえるチャンスに輝いている。人生を取り戻したものの強かさで、かつて自分たちから全てを奪った迷宮から、富を、幸福を勝ち取るのだと挑み続ける。

ロバートは、そんな彼らを癒し続ける。

周囲は人間の匂いに満ちていて、喧騒が絶えず彼の心は鎮まらない。過去を振り返ることを許さず、未来を臨むいとまを与えない。

まるで砂の楼閣だ。崩れるために築くが如くだ。  
高く高く高く高く。天へ至れるはずもないのに、築いては崩れ波  
にさらわれて彼の下から失われていく。

（五体満足でなくていい。必ず治して見せるから、生きて戻ってき  
てくれまいか）

診療所へ来なければロバートには手を施しようがない。己の無力  
さを嘆くロバートが、いつしかそんな気持ちをいだくようになった  
時、迷宮に潜る冒険者の数は迷宮討伐軍の数をはるかにこえ、魔の  
森の氾濫以来、最大に達しようとしていた。

何度も怪我をしながら生き残り、痛い目を見て学んだ彼らは、皆  
一様に慎重で、それぞれの能力に応じた魔物を確実に倒し、富を得  
るすべを身に付けていた。

におい（後書き）

ざっくりまとめ：スラムの名もなき人々は人生を取り戻し、ロバー  
トは静かに贖罪の日々を送る

## 二本目の脚

第57階層に降り立ったマルローたち斥候部隊が初めてそれらを目にした時、「金属でできた巨大な杭のようだ」と、そのように思った。

その柱がどこまで伸びているのかと天を仰いだその後は、「首も尾もない馬のようだ」と評する者もいれば、「前へと歩く蟹のようだ」、「脚を下へ伸ばした蜘蛛のようだ」と評する者もいた。

結局、その魔物を『<sup>けもの</sup>獣』と表現するに落ち着いたのは、蟹や蜘蛛の脚が曲がった状態を定常とするのに対し、その魔物の脚がはるか上空に望む胴体から真っ直ぐ伸びて立っていたからだろう。

魔物の脚は黒い鋼の毛が、ワイヤーが絡まったように生えていて、所々に覗く地肌は金属光沢を持つ暗い緑や紫で、磨いた金属が焼け付いて変色したようにも、元からそのような色であったようにも思える。

1本の脚の太さは、人の背が届く先端部分で一抱えほどだろうか。実際に抱えて測ることなどはしえない。わずかに弧を描く先端は尖っており、巨大な鎌のように研ぎ澄まされた刃のようになっていくから、巨大さに似合わぬ素早い動きに、人間などすぐさま真っ二つにされてしまうだろうからだ。

『刃脚獣』と仮称されたこの魔物は、刃の脚を左右に4本ずつ、合わせて8本持つくせに、頭もなければ尾も持ち合わせていない。

この迷宮第57階層は、落ち切らぬ雨を抱えたような灰色の雲が

低く立ち込めた階層で、霧と呼ぶにはいささか薄い湿気を含んだ空気に空と雲の境がいまいで、遠くはけづつて見通せない。刃脚獣は足の長さだけで10メートルを超えるから、側面からその全貌を把握できる距離では、霧もやに覆われ視認できない。近づいて下から仰ぎ見てようやく、馬のような楕円の胴から刃脚だけが生えているのだと分かるのだ。

こんな魔物は見たことも聞いたこともありはしない。だから、刃脚獣と便宜上名をつけたのに、この階層にはこの刃脚獣がうじゃうじゃいるのだ。

ザクツ、ザザツ、ザクツ、ザザツ。

馬の駆け足くらいのもので動き回る刃脚獣の刃の脚が、砂と砂利が入り混じった迷宮の地面に突き刺さる。元は岩場だったのかも知れないが、突き刺し斬り裂く刃脚によつて、砂と小石に砕かれた足元は、人間が進むにはしまりが悪く脚を取られて歩きづらい。

「先の階層も火山が歩いていて、この階層もおかしな脚の魔物とは。迷宮の主は脚に何やら思い入れでもあるというのか」

迷宮討伐軍を率いて第57階層に降り立ったレオンハルトが、独り言のように漏らした苦言に、同行していた炎災の賢者ことフレイジージャが返事をする。

「そりゃ、脚が二本あるからだろうさ。人間だって同じだろ。右足か左足かは知らないけどね、片足ずつ使ったってことだろう」

「それは随分と、ぞつとしない話だ。いや、もう直ぐだと喜ぶべきか」

フレイジージャの言わんとすることを察したレオンハルトは、軽



く肩をすくめてみせる。確かに、『歩く火の山』には少なからず違和感を覚えていたのだ。

それまでの階層主は、どれも全うではないにしろ、理解のできる形をしていた。けれど歩く火の山は火山というただそこにあるべきものに無理やり足をくつつけたような、目も口もない異形と呼べるものだった。

『歩く火の山』や刃脚獣を生み出したこの階層主が、迷宮の主の脚から作り出されたというのなら、この『両脚』の先に一体何が待ち受けるのか。そのおぞましい想像に身を震わせる時間も、これらと戦わないという選択肢も、レオンハルトらは持ち合わせてはいはない。むしろ、これらが両足だというのなら、ここからさほど遠くない階層で『本体』とまみえることができる。闘志を奮い立たせるべきだ。

それにしても、この刃脚獣の目や口は一体どこにあるというのか。ただの、楕円の岩の塊のような胴体に刃の脚を生やした獣は、どうやって知覚しているのかは理解できないが、迷宮討伐軍に気付いた数体がこちらに向かって走ってきている。

「第2、第3部隊、前へ」

巨大な斧を備えたハルバードを持つ第2部隊の隊長と第3部隊長のディックを筆頭に、長柄の武器を得意とする兵士で構成された二つの部隊が刃脚獣へと向かっていく。こういった得体のしれない巨大な魔物と相対するには、やはり長柄の武器というのは使い勝手がいい。

「どつりゃあー！」

並の剣など叩き折る速度と技量で打ち出されたハルバードの切っ

先は、ロック・ウィールのドワーフたちが鍛えたアダマントイト製。いくら一抱えもある金属の塊だとて、斬り裂けぬものではない。

ギイン、と脳に伝わる金属音を響かせて第2部隊長の放った一撃は見事、刃脚獣の脚を切り裂いた。

それはディックとて同じこと。彼の黒槍もアダマントイトで打ち直されていて、突きの一撃が破壊の起点となって刃脚獣の脚をへし折っている。

けれど、それだけだ。

10メートルある脚の1本が1メートルほど短くなっただけだ。

それも8本あるうちの1本だけ。

刃脚獣に痛みなどはないのだろう。

複数ある関節を少しだけ折り曲げて脚の長さを調節すると、まわりつく様に攻撃してくる第1、第2部隊の兵士を串刺しにしようと巨大な刃の脚を振り下ろした。

「あぶねっ」

頭上から振り下ろされる切っ先を躲しながら、砂利に刺さった刃脚獣の脚にきりつける兵士たち。鋼の塊のような脚を一撃で切り落とせるのは、Aランクの強さを誇る両隊長くらいのもので、他の兵士のハルバードは刃脚の表面に生えるワイヤーのような金属の毛に衝撃を吸収されて、数撃喰らわせなければ切り落とすことさえ叶わない。

「こつやって少しづつ脚短くしていくのか!？」

「ディック、お前作戦忘れちまったのかよ？ そんなにのんびりもしてられんでしょ」

ディックの問いに、第2部隊の隊長が答える。

砂利の砂地はサクサクとしていて、突き刺さる刃脚獣の脚を支えて動きを阻害しないが、兵士にとって踏ん張りやすい地盤ではない。まだ戦闘が始まったばかりだから体力にも余裕があるが、長丁場になるほど不利になるに違いない。

そもそも、刃脚獣一体に時間を掛けられるほど、魔物の数が少ないわけではない。

迷宮討伐軍がこの階層に来たばかりだというのに、この数体の他にも十体以上の刃脚獣がこちらにむかってくる影が、霞む景色の中でも見て取れる。

「脚は報告通り、っと。じゃあ、胴はどうかな」

「どうは……どうって、余裕あるな！」

第2部隊の隊長の呟きに、今度はディックが言い返す。ディックの方も随分余裕がありそうだ。

「余裕はあるけど、ギャグじゃねえよ！ 《戦斧烈破》！」

「むう。《昇槍烈破》！」

それぞれが、相対している刃脚獣の胴体に向かって、遠距離攻撃を打ち出す。どちらも武器にまとわせた魔力を飛ばして攻撃する技で、武器そのものを飛ばすわけではないから攻撃力はやや落ちるし、必要な魔力量も少なくない、肉弾戦を得意とする彼らにとってはあまり使いたくない技だ。

ドゴオ。

岩に鈍器をぶち当てたような音を響かせ着弾したディックらの攻撃は、刃脚獣の胴を3分の1ほど抉り、息の根を止めたようだ。

もっともこの表現が適切かは分からない。活動を停止した刃脚獣は、関節部分が外れるようにはらばらになって、落下してきたのだから。とても命ある生き物の最後とは思えない。

落下してきた胴体も、それまでは金属の巨大な刃のようだった脚さえも、岩の塊のような色合いに変わって、倒壊の衝撃で幾つかに割れてあたりに散らばっている。

「遠距離攻撃確定だな。2、3人1組で当たれ。上空からの攻撃と倒した後の落下物に注意しろ」

「そういうことだ。かかれ！」

的確に指示を出す第2部隊の隊長と、適当に指示を出す第3部隊隊長のディック。どちらの隊員も慣れたもので、一度の攻撃で刃脚獣を倒しうるメンバーに分かれて攻撃を始めた。

「階層主の居場所は分かったか？」

後方の本隊ではウエイズハルトが諜報部隊の報告を待つ。

この階層にかかる靄は階層主の魔力が含まれているせいなのか、蟲使いの蟲も音使いの音でも離れた場所を探ることができない。だから素早く回避能力に優れた者が刃脚獣の攻撃を避けながら階層中を走り回って、肉眼で階層主を探すしかない。しかもさらに厄介なことに、目を離すと刃脚獣より歩みは遅いとはいえ階層主は動き続けているから、どこかに移動してしまう。刃脚獣とちがって積極的に攻撃してこない階層主を倒すには、諜報部隊が張り付いて逐次場所を本隊へと知らせる必要がある。

「確認しました。前方およそ2時の方向。念話が遠い。距離は2、いや3キロメートル程かと」

「行くしかあるまい。全軍、続け！」

マルローの報告を聞いたレオンハルトは、全軍に進軍を告げる。  
1軍全員と2軍の魔術師部隊からなる、200名にも及ぶ集団だ。

全8部隊からなる1軍の内、2部隊が進行方向の刃脚獣を倒して道を切り開き、その後を軍の中心を守るような陣形で進軍していく。2、3キロメートルの道のりなど、精鋭の部隊長だけで進めば10分とかからずたどり着けるだろう。けれどそれでは階層主は倒せない。行く手を阻む刃脚獣を倒すだけで魔力が枯渇してしまう。それほどに、この階層の刃脚獣の数は多く、倒しても倒しても灰色の霧の向こうからとめどなく湧くように現れてくるのだ。

前方を切り開く2部隊だけでなく、本陣の側面にも背面にも霧の向こうから現れた刃脚獣が襲い掛かる。200名の集団というのは、迷宮討伐軍の討伐規模からすると『呪い蛇の王』討伐以上の大部隊なのだが、10メートルを超える脚ならば容易に中央を狙える規模だ。

固まった集団に向けて振り下ろされる巨大な切っ先を、本陣に配備された盾戦士が防ぎ、魔術師の魔法が弱点である胴体を薙ぎ払う。

「怪我をした者、魔力が切れた者は中央の治癒部隊へ！ もうじき第2、第3部隊の魔力が切れる。第4、第5部隊は、出撃準備を！ 交代だ！」

ウェイスハルトの統制で一団は途切れることなく目的地へと進んでいく。魔力切れにより戦況が崩れる前に交代の部隊と入れ替わった第2、3部隊は、吸い込まれるように本陣の中心へと戻っていく。

「ぐあー、魔力切れでクラクラする……」

普段肉弾戦ばかりしている兵士たちには、魔力切れの感覚が不快

なのだろう。魔力量や遠距離攻撃の攻撃力だけ見れば魔導士部隊の方が高いのだが、刃脚獣へと飛び込んで道を切り開くのは攻守ともにバランスの取れた彼らの方が適任だ。

とはいえ、ここは戦場でしかも彼らは1軍の精鋭だ。開戦して間もなく大怪我を負ったわけでもないというのに、少々“俺たちタイヘンなんだぜ”感を出し過ぎではないだろうか。

そんな兵士たちに、少女の手がポーションを差し出す。

「お疲れ様です。はい。マナポーションです」

「ありがとー、マリエラちゃん」

「俺も、俺も。って、ジークは護衛に徹してるよ。マリエラちゃんから貰ってーんだよ」

「マリエラはポーション作りに忙しい。寄るな、触るな、見たら減る！」

「減らないし！」

プーと膨れながらも、両手で地脈の欠片を月の魔力と共に《命の雫》に溶かしては、マナポーションを作っていくマリエラ。同時並行だ。実に器用だ。こんなに要領の良い作業なんてマリエラらしくない。調子に乗った瞬間にすっころぶ未来しか見えない。

そんな周囲の心配をよそに、次々とマナポーションを完成させていくマリエラと、マリエラに延ばされる手を振り払いながらせつせとマナポーションを配っていくジーク。

マナポーションの製造工程はシンプルだ。地脈の欠片を《命の雫》に溶かす時に、月の魔力も一緒に混ぜるだけでいい。そうすれば月の魔力と地脈の力が絡まり合って、月の魔力を摂取した者の体に馴染ませて回復させるマナポーションになる。

飲むだけで魔力を回復してくれる希少なポーション。これさえあれば常に全力で戦い続けることができよう。魔法だろうがスキルだろうが、最大威力で打ち放題だ。

こんな戦況を大きく変える奇跡の技に、欠点がないはずがない。

まず原料が希少であること。誰の物にもなっていない月の魔力でなければならぬ。魔物や人、誰かの魔力を使っても摂取した者の魔力を回復することはできない。

最も馴染みやすい月の魔力であっても、地脈の欠片と《命の雫》という高濃度のエネルギーを媒介にしてようやく吸収できる形になるのだ。

マナポーションの製造過程で余計なものを加えたり、作業を付け加えたりすれば月の魔力は変質して、マナポーションは失敗してしまう。

つまり、マナポーションは《薬効固定》さえもできないのだ。

月の魔力を貯められる特殊な水晶から取り出した瞬間から、月の魔力は失われていく。それはマナポーションになった後もだ。

マナポーションは強力だけれど作りたてを飲まなければ意味がない。

マナポーションが必要な戦場というのは、もれなく激戦が予想される地で、そんな場所に戦えない錬金術師がやって来る。それも、特級ポーションが作れる数少ない高位の錬金術師だ。

高位の錬金術師であってもマリエラのようにスキルだけで地脈の欠片の処理ができる者などそういるものでないから、馬車などに設えた簡易の工房を伴って戦場に赴くことになる。当然狙われるリスクはその戦場で最も高い。

そんなことを分かっている、それでもマナポーションを供給するため錬金術師が戦場に赴く。それだけの理由があるからだ。

古来より、マナポーションが歴史に記される戦いというのは、街の、国の、そこに住まう人々の存亡をかけた、文字通り決戦と呼べる戦いだった。



二 本目の脚（後書き）

ざっくりまとめ：マリエラ、最前線で少々モテる

## 蟻の行軍

地を這う虫に、木の枝を突き刺したことはあるだろうか。

芋虫のような愚鈍で大きいのであれば、突き刺すのは容易たやすかろうが、それが蟻でならどうだろう。

行軍する蟻の隊列を乱すことは容易だろうが、先の尖った木の枝で一匹ずつ蟻を仕留めるのは思いのほか難しいものだ。

蟻とは存外によく動き回るものだから、体の中心を狙ったつもりでも、脚の1本しか奪えないこともあるだろう。

迷宮討伐軍の行軍は、彼らを潰そうと集まって来る刃脚獣からみれば、まさにその蟻のごとくであったかもしれない。

刃脚獣とのサイズの差を鑑みれば、爪半分ほどの大きい蟻を尖らせた爪で潰すようなものだろう。

蟻を潰す鋭い爪先は、強者の愉悦を感じたか。

隊を成して進軍する迷宮討伐軍に群がるように、刃脚獣は霞む景色の向こうから次々と湧き出るように現れては、迷宮討伐軍へとその爪先を振り下ろす。

ザグザグと湿気て柔らかくなった大地はその爪先を深く受け入れ、耕されて、迷宮討伐軍の進む足元を踏ん張りの利かない不安定なものに変えていく。

攻撃を受ける者がただの蟻であったとしても、自分たちに攻撃を加える者に反撃しないわけではない。

特に、この集団は蟻ではなく人の精鋭の群れなのだ。迷宮討伐軍の兵士たちは天より降り降ろされるかのような刃脚獣の爪先に、時に穿たれ四肢をもがれつつも、比較的柔らかい刃脚獣の胴に向かって、魔法や武器による遠距離攻撃を絶えず仕掛けてくるのだ。

爪の先ほどの小さな虫の攻撃に屈するなど、受け入れがたい屈辱であると、立場が逆であったならそう思う者もいるだろう。

楕円の胴に8本の脚が生えただけの、生物かさえ定かでない刃脚獣にそのような思考があるかはわからないが、刃脚獣は行軍する迷宮討伐軍を1匹残らず潰そうと、倒しても倒しても湧き出るように迷宮討伐軍に襲い掛かっていった。

迷宮討伐軍の遠距離攻撃に、群がる刃脚獣は何体も倒れ、崩れ去る。けれど同時に迷宮討伐軍も、傷つき損なわれていく。両者の勢力が変わらないように見えるのは、傷付いた迷宮討伐軍が直ちに癒されて戦線に復帰し、彼らを攻める刃脚獣もつぎつぎと新手が現れているからだろう。

人の脚から見れば迅速とも呼べる速度で進む迷宮討伐軍が戦い切り開いていく行軍は、それを蟻の行列のごとく見下ろすものからすれば随分と緩慢な速度で、ゆっくりとこの階層を統べるものの下へと進んでいった。

ちょこまかと動き回る小さな生き物の群れを上から狙うならば、どこが当てやすいだろうか。迷宮討伐軍の近くまで接敵できた刃脚獣が軍の中心付近を狙うのは自明だろう。

《シールドバッシュ！》

上空からの鉄槌を文字通り弾き返せる実力者など、迷宮都市にも  
そういるものではない。迷宮討伐軍の第6部隊の隊長でもあるAラ  
ンカーの盾戦士は、いつもはウエイズハルトの守護に就くことが多  
いのだけれど、今日はマリエラの護衛を命じられている。

「あ、ありがとうございます……」

戦いの衝撃にへなへなと腰砕けそうになりながら、マリエラはお  
礼を言う。

足の長さどころか筋肉も足りていないマリエラに迷宮討伐軍の行  
軍に合わせる脚力はないから、マリエラだけはラプトルの背に揺ら  
れながらの行軍だ。マリエラを乗せているのは、デスリザードの攻  
撃からマリエラを守り、尻尾を失ったあのラプトルだ。

自らの意志でマリエラを守ったラプトルは、騎乗技術の足りない  
マリエラを乗せるのに最適というわけだ。マリエラの騎乗技術より  
ラプトルの能力が評価された結果の抜擢だというのは、マリエラが  
聞いたらいじけそうなものだけれど、最高のパフォーマンスを発揮  
できるように、という配慮から騎獣でありながら特級ポーションで  
尻尾を再生してもらったので、マリエラのどんくささもたまには役  
に立つというものだ。

クーと名付けられたラプトルは、刃脚獣の攻撃に臆する様子もな  
く、攻撃地点をひよいと避けて変わらぬペースで進軍している。ビ  
ビっているのはマリエラだけだ。

「いや、問題ない。お嬢ちゃんこそ怖かったろう。絶対に守るから  
安心してポーションをつくってくれ」

かっこいい台詞だ。言葉だけでなくこの盾戦士はマリエラの目の  
前で、実際に天からすごい勢いで振り下ろされた刃脚を盾で受け止  
めてはじき返して見せたのだ。

そこからの「絶対に守る」発言だから、この盾戦士がマリエラと  
年の近い独身男性であったなら、マリエラもクラクラしてしまった

かもしれない。

事実マリエラは頬を少し赤らめて、伝説の勇者に出会ったような憧れめいた表情で頷いている。黒鉄輸送隊のスマートな盾紳士グランドルもでんせつのゆうしゃではあったのだけれど。こちらは本当の意味で最強の戦士の一人だ。マリエラが積極的に話しかけてしまうのも仕方がないかもしれない。

「それにしても、私みたいなのが錬金術師だって知って、びっくりしませんでしたか？」

「皆、なんとなく、そうじゃないかと思っていたさ。ニーレンバーク先生がただの薬屋に診療所を設けるなんて、普通はないからな」

「普通は薬屋が呼ばれますもんね」

「あー、俺、アグウイナスのご令嬢を守ってるんだと思ってたー」

「俺は、マリエラちゃんみたいな素朴な感じの娘の方がタイプだぜ」

「お前の好みは聞いてねえよ」

マリエラの周囲を固める迷宮討伐軍の面々も話に加わり場を和ませる。マリエラを安心させようという優しい心遣いだ。怪我人はマリエラから離れた場所で治療され、戦闘に慣れていないマリエラに恐ろしい思いをさせないように配慮されているのだが、それでも襲い来る刃脚獣の姿も魔法や遠距離攻撃で迎撃する様子もマリエラの目に入る。さつきだつて近くまで攻撃の手、いや脚が近くまで迫っていて、錬金術の能力以外はただの街娘と変わらないマリエラは、慣れない戦場に落ち着かない様子でいたからだ。

マリエラの護衛の任に就いているのは、『木漏れ日』に治療に来たことがある、マリエラやジークの顔見知りの中から防御力重視で選ばれていたようで、マリエラが錬金術師であることも比較的すんなりと受け入れてくれたようだ。

迷宮討伐軍の一軍で戦う彼らは、ポーシヨンの希少性も錬金術師の重要性も十二分に理解はしているから、命を賭してでもマリエラを守る意志はある。けれど、戦闘スキルに恵まれたため、幼少のころから戦闘に明け暮れていた彼らは、錬金術というものに触れたことがなく、知識自体ほとんど持ち合わせていない。

だから、マリエラが何の道具も使わずに、次々とマナポーシヨンを作り出す様子を見ても、それが帝都の老練の錬金術師にも成し得ない高度な技などと、思いもしていない。

人は立ち振る舞いや言動も含めて、見た目でその人物を判断しがちだ。特に短期的な人間関係においては、真に崇高であったり賢い人物でなく、言動ばかりが偉そうなだけの人物の方を偉い者だと判断する場合が多い。

マリエラはその最たる例なのだろう。彼女の作製するポーシヨンや駆使用する技術は希少ではあるけれど高度さにおいてはありふれた少女並の物だと認識されてしまっていて、「珍しい能力を持っているために巻き込まれてしまったその辺のお嬢ちゃん」扱いされている。

平たく言えばフレンドリーで、近所のお嬢ちゃんを守ってあげようというノリだ。

マリエラとしては、そういった扱いのほうがありがたいので、強くて優しい兵士たちとの会話に緊張をほぐしながら、せつせとポーシヨンを作っているわけだ。

しかし、大変面白くなさそうにしている男が約一名。

ギリギリギリ。

別にハンカチを噛み締めているわけではない。多分にジエラシーが溢れ出しているが、ギリギリと音を立てているのはジークの歯ではなくて引き絞られた弓だ。

ヒュツと空を震わす音を立てて、靄でかすむ空を切り裂きジークの放った矢が刃脚獣の胴体突き刺さる。

その精度も飛距離も流石の一言に尽きるのだけれど、いかんせん狙う胴体は岩の塊のようなもので、急所足りうる臓器や場所というものが見当たらない。倒すには一定の体積を削るしかないのだから、少々穴を開けたくらいでは致命傷にはならないし、いくら魔力を乗せたからと言って細い矢が削れる体積は知れたものなのだ。

近距離攻撃では剣を、遠距離攻撃では弓を使いこなすジークだけれど、盾スキルは持っていないし、必殺の弓さえ敵との相性が悪く赤竜戦程の効果を發揮できない。

落ち着かない様子でマリエラをチラ見しながらビシビシと弓を射るジークに、師匠が声を掛ける。

「ジークよー、嫉妬しすぎー。他の男にマリエラを守ると言われるなんてーとか思ってる？ でもそんなんじゃ、『精霊眼』は真価を發揮できないんだなー」

「フレイ様、俺は……」

「一人で戦ってるんじゃないんだよ？ お前にはお前の役割があるんだ」

「分かつては、いるんです」

赤竜戦に参加した時から、いやワイバーン狩りや地竜狩りで黒鉄輸送隊や迷宮討伐軍と行動を共にする度に感じていたことだ。

この迷宮都市には強者が多い。ジークと同じAランカーでさえ10人以上もいるのだ。成長し過ぎた迷宮という最大級の危険を有しているが故に帝国の半数近い高位戦力がこの狭い迷宮都市に集っている。同じAランクと言っても、持っている能力が違つから、単純に優劣がつけがたい。弓であればもはやジークに及ぶ者はいないの

だけれど、剣を持つてはレオンハルトやハーゲイに劣り、魔法ではウエイズハルトやエルメラに、槍ではディックに、防御では今マリエラを守っている盾戦士に敵わない。

人によつて得手不得手が異なることは当然で、それぞれの特性を把握したうえで作戦を立て、補い合つて階層主に挑むのは、迷宮討伐軍では当たり前のことであるのだけれど、幼い頃からワンマン行動や少人数での行動しかしてこなかったジークにとっては、自分が及ばない能力を持つ者がたくさんいるという事実は、自分を役に立たない、弱者であるように思わせていた。

むろん、適材適所ということも、自分の能力にも十二分に価値があることも、頭では分かっているのだ。けれど、気持ち追いついてこない。

「分かつてないよ。お前のその悩みはさ、何かの能力で誰かに負けるからじゃないんだよ。って、これは言っても仕方がないね。ちよつと早いけど丁度いいや。おいで、『精霊眼』の使い方を教えてやるう。あんまり時間もなしことだしね」

そう言つて、マリエラの師匠にして炎災の賢者フレイジージャはにやりと笑つて、おいでおいでとジークムントを手招きした。



蟻の行軍（後書き）

ぢしんくろまじめぎしぎしぎし。

## 精霊眼

「『精霊眼』はね、こっやって使うんだよ」

がっしとジークの顔の右半分をフレイジージャの左手がつかむ。フレイジージャの指の間からジークの『精霊眼』が覗いているから、右目も左目も視界を遮られてはいない。

「あたしの魔力で強引に使うから、ちよつと痛いけど我慢な」  
フレイジージャがそう言った瞬間。

「がああっ！」

眼球を焼かれるような痛みがジークを襲った。

ジークはフレイジージャの手を引きはがそうと腕をつかむが、細い女性の腕だというのにまるで鋼か何かのようにフレイジージャの腕はびくともしない。

ギチギチと眼球と脳を繋ぐ線まで侵食してくる灼熱感に、さらに暴れそうになるジークに、フレイジージャが静かに声を掛ける。

「落ち着け。本来の持ち主と少しだけ繋がただけだ。あたしの魔力との質の差で焼けて感じているだけだ。体はどこも焼けてない。ほら、マリエラも感じた世界が見えるだろ？」

『マリエラも感じた世界』という単語に反応したのか、ほんの少し冷静さを取り戻したジークは、『精霊眼』を襲う痛みよりもその視界に意識を集中する。左の蒼い瞳に映る景色に変わりはない。行軍は続いていて、襲い来る刃脚獣との応酬に一瞬足を止めただけのジークに気付く者もない。

けれど右の『精霊眼』は、左目が映し出す世界と重なり合うよう

に、命の光を映し出していた。一人一人にその人となりを表すような命の光が宿って見える。命のきらめきは人だけにあるものではなくて、その光をかき消さんと攻撃を続ける刃脚獣にも宿っているし、生命ですらないこの階層の霞かかる空気にも、地面にも薄く薄く存在していることがわかる。

この光は地脈から湧き上がり世界を満たしているのだろう。

少し離れた場所で一際強い光を放つのはマリエラが汲み上げた《命の雫》だ。

優しい光を放つ《命の雫》は、誰のものでもない純粋なエネルギーだから、その力を込めたポーシオンは、人が飲めば人を、魔物が飲めば魔物を癒す。

「わかつたらう、ジーク。精霊は地脈から湧きだし世界に満ちる力を糧に存在している。人の、人を愛するものが統べる地脈では人の言葉を、魔物の領域では魔物の言葉を精霊が話すのは、その地域に溢れる力に地脈の管理者の力が及んでいるからだ。

地脈と契約した錬金術師は地脈の管理者をすっ飛ばしてラインから《命の雫》を汲みだせるから、《命の雫》は誰の力も及んでいない純粋な力なだけだね。

肉の体を持たない精霊は不確かな存在で、地脈から直接力を得ることなんてできないんだ。世界に溢れて広がる力を糧に存在しているんだよ。

その意味じゃ、迷宮も似たようなもんでね。地脈の力を喰らって魔物を生み出している。迷宮都市にはほとんど精霊がいないだろう？ 『木漏れ日』の聖樹の精霊イルミナリアだって、お前たちが与えた《命の雫》や魔力を貯めて、わずかな時間現れるのがやっとだった。

迷宮に喰われて精霊が食える力が少ないんだよ。

特に迷宮の中は酷い。迷宮の主の支配下だから、地脈から得られ

る力は全部魔物の為に使われてる。精霊は存在すらできないんだよ」

フレイジージャの説明を、ジークは視覚情報として理解した。そしてもう一つ。

「『精霊眼』の《精霊視》という能力は、精霊を見る力ではなく……」

「そう。それは今も辛うじてこの地脈を管理しているエンダルジアの瞳。地脈の力を精霊たちに分け与える慈悲の眼だ。弱い精霊が見えるようになったんじゃない。その瞳に照らされた精霊はエンダルジアから分け与えられた力によって、顕現できる力を得たんだ」

説明をするフレイジージャがにこりと笑う。

その金の瞳は爆ぜる火の粉のようにきらめいている。

彼女の周りに小さな炎の精霊が幾つも浮かんでいるのが見える。精霊というものは生死があるものではないのだろう。その地脈の命の力があれば無からでも現れて、力を失えば消えてしまう。いや、マリエラが召喚するサラマンダーを見る限り、ここであってここではない世界に普段は住んでいるのかもしれない。

「さあ、ジーク。わが眷属にもっと力を。お前を助ける同胞にさらなる恵みを」

『精霊眼』がギリギリと痛む。フレイジージャがしていることは、手を添えて剣の振り方を教えるようなものなのだけけど、森の精霊であるエンダルジアの瞳と炎のようなフレイジージャの魔力はよほど相性が悪いのだろう。今まで経験したことのない、眼球からその奥に焼け串を通されるような痛み、ジークは目を押さえてのたち回りたいほどなのに、フレイジージャの手はジークの右の顔を離さず、ジークは目を閉じることさえできない。

フレイジージャの周囲には他の人間にはまだ見えないほどの微弱な炎の精霊が、周囲を埋め尽くすほど大量に顕現していて、ジークの目には炎の海にように見える。

同質の炎の精霊ばかりだからだろうか、精霊たちは融合したり別れたり、個という概念すらないかのように遷ろう炎さながらの様子を見せている。

これが、肉の体を持たないということだろうか。なんと自由な存在だろう。それに比べて肉の体を持つ我々の、なんと不自由で不完全なことだろうか。

痛みのあまり意識が霞みゆくジークをよそに、フレイジージャが謡うように詠唱をはじめめる。

「炎よ、我が眷属よ、共に謳い、舞い踊れ。《炎舞招来》」

刃脚獣の胴体が地上10mの高みにあって幸いだった。そうでなければ、迷宮討伐軍すらも骨も残さず灰と化していただろうから。

フレイジージャの招いた炎は竜巻のように迷宮討伐軍を取り囲む刃脚獣を呑み込むように荒れ狂い、ほんのわずかな時間の間に周囲の刃脚獣を倒していった。

あまりの火力に周囲の迷宮討伐軍は攻撃の手を止め、皆の視線がフレイジージャに集まる。

「炎災の賢者殿！ 今のは一体！？」

師匠係のミッチェル君が慌てて駆け付けて来る始末だ。肝心の師匠はというと、酒も飲んでいないのに頬を紅潮させ、目を輝かせて笑っている。その手はジークの顔を掴んだままだ。

「アッハア……、すっごい火力」

師匠の目つきが少々危険だ。魔の森で地竜相手に行った《炎舞招

来』を超える火力に少々トランス状態にある様だ。その目が、いや顔ごとぐるりと迷宮討伐軍の進行方向を向くと、ひどく嬉しそうに笑って言った。

「ふふふ、階層主、みつけ。あと一撃くらいはいけるよなあ？ ジーク？」

口角を上げ、実に楽しそうに笑う師匠。ジークの『精霊眼』から強引に引き出した力によって、数多の炎の精霊は力を得、フレイジーは精霊魔法を放ちえたのだろう。

一撃では足りないとした先には、たった今フレイジーが焼き捨てた刃脚獣の倍ほどもある巨大な影が靄の向こうに浮かび上がっていた。

「階層主、『多脚の刃獣』を確認！ 魔導士部隊は前に！」

先陣を切るレオンハルトの号令が、迷宮討伐軍の中ほどにいるフレイジーたちにも聞こえてくる。

決戦が近いのだ。全力でもって階層主に立ち向かう戦いだ。今回は特級ポーシオンだけでなくマナポーシオンまであるのだ。万全の態勢で挑める環境にある。

だというのに、フレイジーに頭を掴まれたジークが白目を剥いて気を失っているのは一体どうしたらよいのだろう。フレイジーを遠巻きにする迷宮討伐軍の兵士やミツチエル君は、困惑げに顔を見合わせている。

「ハアア……」

師匠が少し顎を上げ、息を吐きだす。  
体が熱い、血が滾る。

言葉で語られるそんな現象が実際に体内で起こっているかのよう

に、フレイジージャの吐き出す息は熱気を孕む塵気楼のように揺らめいているし、炎を思わせる長い髪は風もないのに広がり揺らめいていて、今にも発火してしまいそうだ。

明らかに暴走状態だ。自制が全く利いていないことだけは、彼女を取り囲む周りの人間にも見て取れる。

『炎災の賢者』と二つ名が付いただけはある。フレイジージャは味方の筈だが、ジークを救出した方がいいのではなからうか。先ほどの攻撃を再び放ってくれるとしても、こんな状態でちゃんと階層主へあててくれるだろうか。

フレイジージャのただならぬ様子に、ミツチエル君はじめ周囲の人間が階層主並の危機感を抱いたとき、天の助けのような恵みの雨がフレイジージャに降り注いだ。

「《ウオーター》!! 師匠ー! 何やってんですかーっ!」  
バケツをひっくり返したような水をフレイジージャの頭上にぶちまけて、叱りつけたのはラプトルから飛び降りて駆け付けてきたマリエラだった。

「まっ、マリエラ!?!」

マリエラに頭から水をぶっ掛けられて、ようやく正気に戻ったフレイジージャは、マリエラの顔をみた途端に青ざめる。

「マリエラ、めっちゃ怒ってる……」  
ビビる師匠なんて、これほど珍しいものはないのだけれど、それも仕方ないだろう。マリエラはこの上なく怒っているのだから。いつもはぽへーっと下がった眉は、キュキューっと勇ましく吊り上がり、口はへの字に引き結ばれている。

「私、言いましたよね！ 人にめいわくかけちゃダメだって！ 悪ふざけとか絶対ダメだって！」

「ごごご、ゴメン、マリエラ。つい、うっかり……」

「ほんつとーに師匠は！ いつまでたつても！ って、あああ、ジーク！ 白目剥いてるー！！！」

オカシイ。師匠はどっちだったろうか。

フレイジージャの手からジークを解放すると、慌ててポーチの上級ポーションをジークの口に突っ込むマリエラ。師匠に対する怒りが収まらないからか、なかなか手荒い治療法だ。年ごろの娘の介抱とは思えないが、ここは戦場で、しかも臨戦態勢だ。これくらいで丁度いいだろう。

「ゴツホ……、う……」

「ジーク、気が付いた！？ 大丈夫、どこかおかしいところはない？」

「マ……マリエラ？」

上級ポーションが効いたのか、単に液体にむせただけなのかは分からないが、目を覚ましたジークは『精霊眼』を確かめる。ひどく目を酷使した後のような鈍い痛みと疲労を感じはするものの、特に異常はないようだ。ちゃんと心配そうなマリエラの顔が見えるし、マリエラを追いかけてきたラプトルがマリエラと同じ方向、同じ角度で首をかしげているのも見える。

少々ひどい目に遭いはしたが、おかげで『精霊眼』の使い方が理解できたから、相応の授業料だったのだろう。

「ああ、マリエラ、問題ない。戦える」

マリエラを心配させないように笑うジークを見て、

「ホラ、大丈夫だって。ちょっと教えたただけだって。メイワクかけてないって」

と師匠が言い訳を始めた。



「師匠？ そんな言い訳が通用すると思ってるんですかー！ そんな元気があるんだったら、師匠もちょっとは魔物を倒してきてください！ 皆さんに迷惑かけないように！ そうしたら、ご飯抜きは勘弁してあげます！」

「さっきので精霊の力使い切っちゃって。ジークもう一回……」

「しーしーうー！」

「わ、わかったよう……」

振り返った瞬間に再びキュキューと眉毛を釣り上げて怒るマリエラに、叱られた子供のようにしょぼくれて先頭の対階層主戦の集団の方へと歩いていくフレイジージャとぶんすか怒るマリエラを交互に見ながら、ジークは「マリエラは強いな」と呟いた。

列強の迷宮討伐軍ですら声をかけるのをはばかれたフレイジージャに水を掛け、叱り飛ばしたからではない。

マリエラは肉の体を持つ人間の中でもとびきりの弱さを誇るのだ。錬金術の腕はぴか一だけれど“強い”と評せる要素など欠片も持ち合わせてはいない。長所と短所のなんと開きの大きい事だろう。彼女ほど肉の体の不完全さを体現した人物もいないだろう。

けれど、ジークにとっては掛け替えのない人だ。とても大切な人間だ。それはフレイジージャにとっても同じなのだろう。だからこそ、水を掛けるような暴挙が許され、あの暴走状態から正気に戻すことができるのだろうか。

それはマリエラの魅力ゆえで、長所ゆえで、つまり強さではないのか。

ジークは先ほどの、嫉妬に駆られて刃脚獣に矢をいにかけていた自分を思い出した。

フレイジージャが「お前のその悩みはさ、何かの能力で誰かに負けるからじゃないんだよ」と言った意味を理解した。

（俺は、マリエラの一番になれないと、勝手に不安になっていたんだな）

確かにこれは「言っても仕方のない事」だ。違つと他人に擁護されてとしても、解決する内容ではない。自分で自分に負けていたのだから。

ジークはマリエラをラプトルの背に乗せなおすと、「マリエラの護衛をお願いします」と盾戦士に頭を下げた。

「任せときな。お前の姫さんはちゃんと守ってやるからな。お前の弓には期待してるぜ」

笑顔で返す盾戦士のなんと頼もしい事だろう。

「マリエラを襲う攻撃は、俺が全て打ち落とす」

「うん。でも、気を付けてね、ジーク」

何を不安に思うことがあるのか。こんな戦地の最中でもマリエラは自分の危機に駆け付けて、心配までしてくれたではないか。盾が使えずとも、魔法や剣で人に後れを取ろうとも、自分にはマリエラの為にやれることがある。

「ギヤウー！」

「あはは、クーも守ってくれるの？　じゃあ、頑張つてしがみついとくよ」

マリエラを乗せるラプトルは、マリエラが魔法陣を使って呼び出したサラマンダーにとてもよく似ている。おそらくこのラプトルのイメージがベースになっていたのだろう。赤竜相手に何度もジークを救ったサラマンダーと通じるものがあるのなら、これほど頼れる仲間もいまい。

自分にできることを全力で。

弓を握る手に力を籠めるジークの周りには、彼を助けようと集まる精霊たちの光が点滅して見えた。

そんな二人を遠巻きにしながら、兵士たちの囁き合う声が聞こえる。『炎災の賢者』の暴走を止めたマリエラに護衛する兵士の評価が改まったのだろうか、マリエラを賞賛している様子だ。

「すげえ、『炎災の賢者』の暴走を止めたぜ。見事な『火消し』ぶり」

「いや、『炎災使い』の方がびつたりじえねえ？」

「それだと炎を使うみたいだからな、『放水少女』とかどうよ」

「それは、漏らしたみたいでちよっとカワイソウだろ。『火消し』の方がましだろうが」

どうやらマリエラの二つ名について相談しているようだ。驚くほどにかっこ悪い単語が並んでいる。今の最有力候補は『火消しのマリエラ』らしい。錬金術にかすりもしていない。

（私、錬金術師なんですけど！ しかも迷宮都市に師匠と二人しかいないんですけど！ 特級ポーション作れる、ちよっとスゴイ錬金術師なのに、なんで錬金術関係ない名前！？）

師匠にはあんなに強くできるのに、迷宮討伐軍の兵士たちには不満を口に出せずに心の中で叫ぶマリエラ。

（全部師匠のせいなんだからー！）

マナポーションを作るマリエラと、彼女を守るジークにラプトル。そして火消しの二つ名を議論する迷宮討伐軍の十数メートル前方で、迷宮第57階層の階層主の討伐が幕を開けようとしていた。



**精霊眼（後書き）**

びびりまじめ・激おこママのHラの影で、ジークニッソーレブル  
ア  
ッ  
プ

## 多脚の刃獣

「うようよいるな」

「これは、『炎災の賢者』殿」

「どれほど数がいようとあたしの敵じゃないけどね」、等と言い出しそんな余裕の表情を浮かべて、突撃の合図を出そうとするレオンハルトらの下にフレイジージャがやってくる。

マリエラに叱られて前線まで追い立てられてきた一部始終を知っているミツチエル君は、何とも言えない表情でその後ろをついてきている。

「露払いくらい、手伝おうじゃないか」

フレイジージャの申し出に、レオンハルトとウエイスハルトは視線を交わして頷く。

迷宮討伐軍に群がる刃脚獣を焼き滅ぼした先ほどの一撃は、前線からでもよく見えた。あれのお陰で縦に伸び分断されかねない状態だった陣形は整えられたし、周囲の刃脚獣を倒せたから僅かばかりとはいえ時間が稼げた。

もう直ぐ遭遇するであろう階層主は、今は靄の向こうで影しか見えないけれど大量の刃脚獣を引き連れてこちらに向かってきているから、先ほどの火力で少しでも数を減らして貰えるならばありがたい。

「では先ほどの一撃を……」

「あ、あれは打ち止め。フツの火魔法力ナー……」

明後日の方向を向きながら言うフレイジージャ。ミツチエル君の

耳打ちで一部始終を把握したレオンハルトらは、それでも「ご助力感謝する」と大人な対応を試みさせた。

「んじゃ、早速。《ファイヤー・ストーム》」

ありふれた炎の魔法を靄に霞む刃脚獣たちいきなり放つフレイジージャ。

「おお……」

レオンハルトや迷宮討伐軍からおこったどよめきは、お世辞などではない。命のやり取りをする迷宮討伐に、『接待討伐』なんてものはあり得ない。

フレイジージャの放った炎の魔法は、感嘆するにふさわしい、まさに炎の嵐と呼ぶべきものだった。前方一面を決壊した川からあふれる濁流がごとき炎が吹き荒れ、大地を、前列に並ぶ刃脚獣を呑み込んでいく。精霊魔法ほどの威力はないけれど、ただの炎の魔法でこれほどの威力とは。ウエイスハルトが全魔力を込めて放ったとしても及ぶかどうかの火力であろう。

ぐびぐびぐび。

炎は魔物を呑み干したのだが、フレイジージャもマリエラのところから持ってきた出来立てのManaポーションを飲み干していた。それも2本も。

「ぶはー。酒だったらいくらでも飲めるのに、ポーションは腹にたまるなあ」

腰に左手を当ててポーションを呷るフレイジージャ。

「一撃に、全魔力をつぎ込んだのか……」

「Manaポーションで腹一杯になったら打ち止めでしょう。後、3……いや2発か」

ひそひそと冷静に師匠観察結果を分析し合うレオンハルトとウエイスハルト。

戦力の分析は重要ではあるのだが、階層主を控えていささか悠長な彼らの前で、フレイジージャの放った魔法の火力によって、靄で湿気た大地は乾き、瞬時に蒸気と化した水分が上昇気流となってこの階層をけづらせていた靄さえも払ってしまった。

晴れた視界に現れたこの巨大な魔物こそ、この階層の主『多脚の刃獣』。

偵察部隊が名付けたその名が示す通り、巨大なその体からは、一目で数えきれないほどの脚が所狭しと生えている。

(これは、まずいな……)

ウエイスハルトは『多脚の刃獣』の姿を目視し、己の作戦が最適でなかったと眉を顰める。

靄の向こうに見えた多脚も、刃脚獣より2割ほど高いその体躯も、事前に受けた報告と相違ない。しかしこの『多脚の刃獣』は、晴れた視界に「これならば遠くもよく見える」とばかりに曲げていた足をすつくと延ばし、20メートルを超える高さに至ろうとしていた。

(これでは、錬金術師マシエラに届いてしまう……!!)

現状の隊列は10メートルの脚を持つ刃脚獣に相對するためにも組まれたものだ。刃脚を受け流しつつの遠距離攻撃。数対数の物量作戦だ。

けれど射程が20メートルともなれば、攻撃できる人数が随分と絞られてしまう。

絶え間ない弾幕で階層主の動きを牽制し、こちらは回復を挟みつつ交代で削っていく作戦であったのに、弾数が少なければ倒すのに



時間がかかるばかりか、動きを牽制することもできない。その長く幾本もひしめく脚の一本でも錬金術師マリエラにあたってしまったら、この作戦だけでなく今後の迷宮攻略すらも危うい。

「第1、第2、第3部隊は前へ。部隊ごとに『多脚の刃獣』を引き付けつつ攻撃。第4、第5部隊は周囲の刃脚獣を押さえながら遊撃せよ。第7魔術師部隊は本陣の前面から『多脚の刃獣』を攻撃。距離を詰めさせるな。第6、第8部隊は本陣を守りつつ距離を取れ」

即座に作戦を変更し、矢継ぎ早に命令を下すウエイスハルト。下された命令に迷宮討伐軍はピリリと引き締まる。

予め伝えられていた作戦は一つではない。状況に応じて幾つものパターンが想定されている。このパターンはその中でも最悪に近い本陣、すなわち錬金術師マリエラを死守しつつ撤退を想定した陣形だ。

その作戦が階層主に出会うなり発令されるなど……。

「シケたツラするな！ ちいとデカくてキモイだけだ。脚が多かるうが狙うのは胴だ。的がデカイ分、下手糞でもよくあたる！ おお！ 《昇槍烈破》」  
「デイツク隊長に続け！」

仲間を、そして自らを鼓舞するためか、それとも常に全力投球なフレイジージャの《ファイヤー・ストーム》にあてられたのか、デイツクが吠えて『多脚の刃獣』に挑みかかる。彼に続く第3部隊の仲間たち。距離と威力を優先し、ペース配分など考えずに力いっぱい投じた彼らの攻撃は、はるか上空の『多脚の刃獣』の胴をとらえることはできるのだけれど、湿気た空気の抵抗と、万物を大地へ引き落とそうとする引力によって威力は随分弱められ、岩を針で突くかのようなダメージしか与えられない。

「問題ない！ 削れているぞ！ いつかは倒せる！」

迷宮討伐軍のメンタリティーは、この程度で折れるほど柔ではない。一体どれだけの敗戦を喫し、一体どれだけの死地をくぐりぬけてきたことか。

これはまだ、可能性のある戦いなのだ。

3つの部隊が『多脚の刃獣』の周囲をまわり、引き付けつつもじりじりと削る。本陣の前方には魔導士部隊が控えていて、射程に入るなり集中砲火を浴びせかけ『多脚の刃獣』を牽制しつつ攻撃を加える。彼方から次々と湧いて出て来る刃脚獣は遊撃部隊が押さえ、数が増え過ぎたならフレイジージャやウェイスハルト、第7部隊長であるAランク魔導士が全魔力で屠る。

どこか1部隊が消耗したなら遊撃隊がその場を代わり、その隙に本陣で治癒、回復を行うのだ。

当初の予定よりも本陣との距離が開いてしまった分、補給のたびに戦線は乱れ危うい状態に陥るのだけれど、そんな状況すら迷宮討伐軍にとっては慣れたものだ。生きてさえいたならば怪我も魔力も回復できる戦いだ。見上げるほどの敵であろうと攻めの姿勢を崩しはしない。

上空へと昇る幾筋もの攻撃、宙を染める魔法の輝き。

この戦いを遠く離れて見ていたならば、光舞飛ぶ美しいものに見えるかもしれない。まるでいつまでも終わらない花火のような。

上空から見たならば、後方に流れ、力を取り戻して再び押し寄せる人の流れに一定の規則性を見出しただろう。断続的に『多脚の刃獣』を削る攻撃の波は、ある一点を起点にしていることに、すべてを見下ろす上空からはたやすく気付くことができるだろうから。

ギギギアと、金属が軋むような音を立て関節が曲がり、『多脚の刃獣』は迷宮討伐軍に相対する側の脚をまとめて持ち上げる。打ち出される攻撃や魔法は、金属の刃のようなその脚に阻まれ、あるいは掻い潜って『多脚の刃獣』の腹にも当たる。

高く脚を持ち上げた『多脚の刃獣』は、そんな攻撃の一切を顧みず、その脚を前方、迷宮討伐軍の本陣へ向けて振り下ろし、ザクザクと大地を削りつつ移動を始めた。

「いかん！ 魔導士部隊、全力で迎え撃て！ 本陣は後退だ！」

本陣を指揮していたレオンハルトが叫び、魔導士部隊が全力で魔法を打ち込むも、『多脚の刃獣』は体躯が傷つき削れゆくことも厭わずに、砲撃の最中へと突き進んできた。

幾本もの刃脚が大地を貫く。

まるで鍬がそこに埋まる小石も根っこも構わずに大地を耕していくように。

ザクザク、ザクザクと、そこにいる迷宮討伐軍の兵士もろともに、大地を貫き突き進んでくる。

錬金術師マリエラを守る一団をめがけて。

うじゃうじゃと岩から足が生えたような魔物ではあるけれど、見えているのだろう。わかっているのだろう。その鋭い切っ先は真っ直ぐマリエラをとらえ、はるか上空から振り下ろされようとしていた。

マリエラの警護を任された盾戦士一同は、たとえその身を穿たれようとこの先は一寸たりと凶刃をとおさじとばかりに盾を構える。その一団の前に躍り出て、『多脚の刃獣』へと弓を引き絞るジークムント。

「精霊よ、俺に力を！」

空を裂いて『多脚の刃獣』へと放たれた矢には、不思議な光が螺旋を描いて周り、さかのぼる流星のようであった。最大限引き絞られた弓から放たれた矢は、まるでそこに風の抜け道があるかのような確かな軌道で持つて、『多脚の刃獣』の1本の脚の付け根に命中した。

ドガアン。

まるで投石でもあたったかのような音を立てて突き刺さったジークの矢は、『多脚の刃獣』の付け根を完全に破壊して、マリエラを狙っていた1本の脚は付け根から外れて落下していった。

2本、3本。『多脚の刃獣』がマリエラを獲物と定めるその度に放たれたジークの矢は、確実に『多脚の刃獣』の脚をもいでいく。数本脚をもがれたとして、何十もの脚を持つ『多脚の刃獣』の致命傷になるわけではない。

けれど、迷宮討伐軍を蹂躪していく脚が、まるで櫛の歯が欠けるように折れていけば、それだけ助かる者も増えるし、錬金術師マリエラが刃脚の餌食にならないというだけで、どれほど攻撃がしやすくなるだろうか。

「やるねえ！」

マリエラの前に立ちはだかり、迫りくる『多脚の刃獣』に動じることなく弓を射続けるジークの勇姿は、なかなか格好の良いものだろう。最大の盾スキルで迎え撃とうと身構えていた盾戦士さえ、様相を崩して褒めるほどだ。

こんな勇姿を間近で見たら、世の女性はもれなくハートを射貫かれるに違いあるまい。

昔は鳥を射落とすようなたやすい射撃で、黄色い悲鳴をかつさら

ったものだ。

ジークはほんの少しだけ、マリエラの黄色い悲鳴を期待して後ろをちらりと振り返ったのだが。

「地脈の欠片と月の魔力を《錬成空間》で《命の雫》でいろいろ制御でハイ完成！　でもって次、次！」

「ギャウー？」

マリエラは自分が標的になっていたことすら気付かずに、次々にやって来るオーダーに対応するため、3本同時進行でマナポーシヨンを作りまくっていた。

当然ジークの勇姿など目に入っではない。ジークはちゃっちゃとポーシヨンを高速作成するマリエラの勇姿に、「どんくさそうに見えて、実は器用だったんだな……」と、マリエラの器用さが3あったことをぼんやり思い出した。

「本陣は問題ない！　攻撃を続けられたし！」

伝令がレオンハルトの元に届けられる。

戦いは終わらない。

先ほどの『多脚の刃獣』の突進でどれだけの負傷者が出、どれだけの兵士が死んだのか。これからどれ程の血が流れるのか。

ニーレンバークと治療部隊は負傷者を癒し、レオンハルトは戦える者をかき集め、『多脚の刃獣』へといどみかかる。

削れているのだ。かの怪物の生命を。

進んでいるのだ。この迷宮討伐は。

束ねよ、小さき者の力を。合わせよ、その矛先を。

「我に続け！」

レオンハルトが獅子の声で吠える。

彼の《獅子咆哮》は迷宮討伐軍を一個の獣に変貌せしめる。

一つの強い力へと進化させることができる。

いや、真に強靱だったのは、真に打ち碎かれないものは、彼らの心だったかもしれない。

何度目かの応酬の後だったのだろうか。

ついに『多脚の刃獣』は、ただの巨岩となり果てて、迷宮第57階層の湿気た大地に落下した。

多脚の刃獣（後書き）

びびりまじめ…回社落ちるままりエラ落ちず

## 討伐の後

階層主が倒されて、戦いは終局を迎えた。

迷宮討伐軍にとってそれは、何度も経験したことだった。

階層主の討伐を幾度も成し得るなどということは、兵士や冒険者といった戦いを生業とする者にとってひどく名誉なことだと世間では評される。

果たしてこれがそうなのだろうか。

レオンハルトは彼のいる本陣へと集まって来る兵士たちを見て思う。

手を失ったものがある。脚を失い仲間に関を借りる者がいる。それでも生きているだけましなのだ。これほど深い階層で、見上げてもまだ足りないほどの巨大な魔物に蹴散らされ、全滅せず倒しおおせた。これは、兵士一人一人の戦力がかつてないほど高まっていたからだろうし、各部隊ごとが一個の生物のように連携の取れた動きができた成果であろう。もちろん、討伐に参加した全兵士に十分なポーションをもたせることができたことも大きいと思う。大怪我を負い、体を欠損しても即死さえしなければポーションと治癒魔法で簡易の治療が施せたのだから。

それでも、仲間を背負いニールンバークら治癒部隊に駆け込んで、「こいつを助けてくれ」と泣いて請う者がいる。いくら熟練の治癒部隊でも、いくらポーションがあろうとも、死人を生き返らせることなどできはしないのに。耳を澄ませば失った仲間を惜しみ、すすり泣く声が聞こえてくる。

錬金術師マシエリの周囲は四方を垂れ幕で囲ませて、迷宮討伐軍の兵士で



も決められた者以外立ち入らせないよう命令をしている。

年若い錬金術師マジュエラにこの惨状を見せないためと、錬金術師マジュエラの奇跡にすぎらうとする者を遠ざけるためだ。

ポーションは万能の薬ではない。死人を蘇らせることなどできない。

そんなことは、長らくポーションに馴染みのなかった迷宮討伐軍の兵士たちにも分かり切ったことだ。けれど頭で理解していても感情が追隨しないことはある。人は心で動くのだから。

この迷宮都市に錬金術師が現れたこと自体、奇跡のようだと全員が感じているはずだ。そんな奇跡的な存在ならば、もしかしたらと思ったとして何の不思議もないだろう。

事実、レオンハルトでさえ錬金術師マジュエラの奇跡によって失われた兵士たちを取り戻せるのではと思ってしまうているのだから。

ピイイイ、と空気の甲高い笛の音が、散り散りになった迷宮討伐軍の兵士に撤退を知らせる。笛の音を聞きつけた仲間たちの内、動ける者は音を合図に集まって来るだろうし、動けぬ者は笛で合図を送って来るはずだ。この階層の刃脚獣はどうやって迷宮討伐軍の位置を把握しているのかはわからないが、この笛の音に反応しないことは確認済だ。階層に立ち込める靄こそが、感覚器官なのかもしれない。

その刃脚獣たちは、階層主である『多脚の刃獣』を倒した後は、階層をさ迷うように移動していて、偶然出くわさない限り襲ってくることは無くなっていた。『多脚の刃獣』が階層全体の感覚器官や司令塔の役割を果たしていたのかもしれない。

とはいえ、この階層の晴れぬ靄の向こうに、数多の刃脚獣が蠢いていることに変わりはない。

なるべく早くこの階層から脱出するに越したことは無いのだが、

傷ついた兵士はなるべく戦闘可能な状態に回復させる必要がある。

隊列を整える迷宮討伐軍の中心付近では、ニーレンバークら治療部隊が兵士たちの手足を応急的に繋いだり、骨を繋ぎ、筋や臓器を再生し、兵士たちを何とか自力で動ける程度に治療していく。ポーションは行軍に支障のない最大限の量を持ち込んでいるし、マナポーションもあるから、魔力を気にせず治療ができる。足りない種類のポーションも、たいていのものならば垂れ幕の向こうの錬金術師マリエラがその場で作ってくれるのだ。

（《薬晶化》というらしいが……。これは兵士たちに口外せぬよう誓約させねば）

兵士や物資の状況をまとめるウエイズハルトは、その場で様々なポーションを作り続けるマリエラをみて、警戒を強めるべきだと襟元を正す。

薬晶という砂粒のような小さい粒子に材料を変換するなど、戦略上の優位性は計り知れない。一番かさばる材料は、小指の先ほどの大きさの地脈の欠片で、ポーション何百分もの量でも背負い袋のような容量にたやすく積み込めてしまう。

ポーション瓶さえ割らずに使い回しをすれば、マリエラ一人連れ歩くだけで、何百本ものポーションを持ち歩かなくて済む。作製に必要な魔力さえ、マナポーションで補充できるのだ。

その能力、有用性に対して、彼女のなんと脆弱なことが。矢の一本ですら命を失いかねないし、その精神のあり様は見た目と変わらぬありふれた少女のそれなのだ。

そのことを決して忘れず十二分に配慮せねばとウエイズハルトは考える。それは、マリエラという一人の民を守ることでもあるし、迷宮討伐だけでなく兄レオンハルトが統べる迷宮都市の利益に繋がることなのだ。

ニーレンバークたち治療部隊があらかた治療を終える頃には、兵士はあらかた集合を済ませ、運搬してきた物を中心にポーシヨンの補給も終えていた。

「帰還する」

号令をくだすレオンハルト。彼の率いる軍勢はこの階層に降り立った時より2割ほども減っていた。かつて『キングハジリスク呪い蛇の王』と相対し、失い続けてきた人数に比べれば少ない犠牲と喜ぶべきなのだろう。あれほどの敵に対して、よくここまで犠牲を抑えたと生き残った兵士たちを鼓舞し、殉じた兵士の奮闘をたたえるべきなのだろう。けれどそのような演説をこの場でする気にレオンハルトはなれなかった。

（このところ、兵を失っていなかったからだ……）  
だから、兵を、民を、共に戦ってきた仲間を失う痛みを、これほどまでにつらく感じるのだ。

それは帰路に着く兵士たちも同じ気持ちなのだろう。  
仲間を失った混乱から何とか立ち直り、今は皆、喪失の悲しみに静かに帰路を進んでいる。錬金術師マシエラに奇跡をせがむ者は、ひとまずはいないだろうと判断されて、マリエラも垂れ幕から出て第6部隊やジークに護衛されつつ静かに帰路に着いている。

階層主を倒したというのに、迷宮討伐軍の行軍はまるで葬列のよう  
うで、晴れぬ階層の靄のなかに重く沈んでいきそつだ。

そんな凱旋とも思えない静かな道行の先に、靄の向こうからこちらへ近づくと人影が見えた。

「生き残りがいたのか？」

ひよこひよここと左右に揺れてゆっくり歩く人影は一つや二つではない。その不自然な歩き方に怪我をした仲間が合流したのかと皆が思った。

ピイイ、ピッ、ピッ、ピー。

味方であることを知らしめる合図の笛を鳴らしても、近づいて来る人影から応答は来ない。あれほどの人数で全員が笛を失い、あるいは吹けない状態になる物だろうか。

「申し上げます！ 前方から敵多数接近！ 敵は死人です！ ただいまマルロー副隊長らが交戦中。至急交戦準備を整えられたし！」  
「死人だと！？ この階層にそんな魔物はいなかったはずだ。階層主は倒した。新たな種の魔物が発生するはずはない。一体どこから……」

「第58階層、下階に続く階層階段からです！ どんどん、どんどん溢れてきます！」

レオンハルトの疑問に対する斥候の答えは、極めて重要な一つの事実を告げるものだった。

「な……、魔物が階層を移動しているだと！？ それは……！！！」

『それは、<sup>スタンピード</sup>迷宮の氾濫ではないのか』と、その言葉をレオンハルトは口にする事ができなかった。

「第6、7、8部隊および治療部隊は防御優先！ 残る全軍は我に続け！ 目標は前方の死人の群れ！ 数は不明！ 決して、決して地上へ出さな……！！！」

再び抜刀するレオンハルト。その気迫は、迷宮討伐軍の悲しみを吹き飛ばし、己らの戦う意味を、存在する意義を知らしめる。

『多脚の刃獣』の討伐に疲弊した心身に、再び力が、闘志が宿る。

人は心で動くのだから。

「我らの街を守るのだ、今こそ我が名を示す時」  
勇ましく上がる鬨の声。

立ち込める霧の向こうから雪崩のように押し寄せて来る死人の群れに、武器を手に取り立ち向かう迷宮討伐軍。

その姿は、後方から事態を見つめるマリエラの目には、2000年前の魔の森の氾濫を思い出させた。  
スタンビート

(あの時と同じだ……)

マリエラは、自分の体が恐怖で芯から冷えていくのを感じていた。2000年前の魔の森の氾濫の日、マリエラは逃げることにできなかった。今だって、頼まれるままポーションを作りはしたけれど、多くの人が傷ついて、何十人も命が失われた。マリエラの目に触れないよう、配慮してもらっていても多くの命が失われたことをマリエラは分かっていた。

2000年前のあの日も、何人もの人たちが「さつさと行け」とマリエラが気兼ねなく逃げられるよう、背中を押してくれた。

今ならば、助けてくれたのだと理解できる。

口が悪くて乱暴で、その裏に隠された優しさに、心からの感謝を送れる。

だから、進軍する迷宮討伐軍が巻き起こす風に晴れた霧の向こうから、迫りくる死人の姿を目視した時、マリエラは声にならない叫びを漏らした。

今まさに、迷宮討伐軍と激突せんとする死人たちは、もげた脚の代わりに何者かの腕が、ちぎれた腹の下に魔物の胴がくっついた、

歪でおぞましい姿をしてはいたけれど、彼らは紛れもなく、200  
年前の魔の森スタンピードの氾濫に立ち向かい、呑み込まれた防衛都市の、エン  
ダルジア王国の人々だった。

討伐の後（後書き）

ざっくりまとめ：地獄の釜の蓋が、今開いた。

## スタンピード（前書き）

新春早々ですがグロ注意です。



## スタンビード

「なんだ、こいつらは！ 魔物と混ざっているぞ！」

うずうずと湧き出て来る死人の群れに、兵士たちが混乱の声を上げる。

死人たちは、でたらめに継ぎ合わされた体に慣れていないのか、動きがどこかぎこちない。中には生前高位の冒険者であったろう身のこなしの死人も混ざっているのだけれど、切れのある動きを見せるのは自分の体の部分だけで、重心のずれや足の長さの違いなど、継ぎ合わされた体が邪魔をして実力を出し切れていない様子だ。

虚ろな彼らの表情からは、理性らしきものを読み取ることができないから、己の体が出たらめにつなぎ合わされていることに、気づいていないのかもしれない。

それを「幸いなことに」と評するべきは、骸を弄ばれた死人たちにとってだろうか、それとも迎え撃つ迷宮討伐軍にとってだろうか。少なくとも、尽きることなく溢れ、迫り湧き出る死人の群れに、200名を割り込んだ迷宮討伐軍で対応できているのは、彼らの歪な体ゆえではあつたらう。

剣を振るい死人の首を、手足を切り落とし、槍はその体幹に大穴を開ける。ハルバードは胴を真つ二つにし、矢は雨のように降り注ぎ、魔法が死人を呑み込んでいく。

虐殺にも似た圧倒的な進軍だ。

レオンハルト率いる迷宮討伐軍は集団として最強に近い強さを誇る。

そうであるのに、死人は何故ひるまないのか。

死人故に、恐怖も痛みも感じないのだろうが、体幹に穴が開こうが省みず、脚が無ければ腕で這い、腕が無ければ口で武器を噛み締めて、倒せど倒せど迷宮討伐軍へといどみかかる様子には、どこか信念にも似た決死の思いが感じ取れる。

それはまるで、迷宮に、死地へと赴く迷宮討伐軍の同胞たちが抱いているような。

「我らの街を守るのだ、今こそ我が名を示す時」

そんな思いがマリエラに伝わる。それはどちらの想いだろうか。

200年前、いやマリエラからすればたった1年程前の出来事なのだ。魔の森スタンヒートの氾濫の混乱の最中に、彼女が耳にし感じ取った防衛都市の、エンダルジア王国の人々の思いが、200年の時間に風化することも許されずに、今ここに満ちている。

その想いに終止符を打つ術など一介の錬金術師であるマリエラにはない。マリエラは、ただラプトルの背にしがみ付き、死人の群れを薙ぎ払いつつ進む一軍と共に、過ぎさりし時間を駆け抜けていた。

「我らの街を守るのだ、今こそ我が名を示す時」

自分はここで潰えようとも、大切な誰かが生き残れるなら。そんな願いが、交わされる剣から伝わって来る。レオンハルトは死人たちから伝わって来るそんな気持ちに覚えがあつた。

「あいつらは、未だ夢を見ているのさ。二百年前の終わらない悪夢を」

第58階層に続く階層階段までたどり着いたレオンハルトに、フレイジージャがそう伝える。

「彼らは、200年前の魔の森スタンヒートの氾濫の犠牲者なのだな」

レオンハルトの問いに頷き答えるフレイジージャ。死人たちは未

だ魔の森の氾濫の悪夢のなかで、レオンハルトらが襲い来る魔物か  
スタンビート  
何かに見えているのだろう。だからあんなになってまで、戦い続け  
ようとするのだろう。

「つまりこの下にはエンダルジア王国1国分の死人が待っている  
というですね」

「それと、死んだ魔物たちもな」

「なぜ魔物たちまで？」

ウエイスハルトとフレイジージャのやりとりをおぼろげに聞きな  
がら、マリエラはかつてジークから聞いたエンダルジア王国滅亡の  
物語を思い出していた。

ジークは200年前の魔の森の氾濫はおとぎ話のように語り継が  
スタンビート  
れていると言っていた。王国に、防衛都市へと押し寄せた魔物の群  
れは、立ち向かう勇者たちを、王国の民を平らげ、さらには魔物同  
士で喰らいあい、最後に残った一体が地脈の精霊を呑み干して、後  
には迷宮が生まれたと言われていると。

フレイジージャの答えは端的で、そしておぞましいものだった。

「このこと一つ上の階層は迷宮の主の『脚』だっただろ？ 足の上に  
は何があるんだ？」

「腹……、か」

つまり下の階層は、200年前喰われ喰い合い喰い腹に溜まった  
ものたちの成れの果てが集まっているということなのだ。

この階層に溢れ出てきているのは、そのほんの少しだけなのだろ  
う。ばかりと開いた階層階段からは、死人が積み重なるように溢れ  
出てきてはいるけれど、階層階段自体の断面積が律速して、一度に  
出てこれる数が決まっている。

今は階層階段前に陣取った精鋭たちが、技をたたき込みながら死  
人を燃やし、あるいは肉片に変えて、これ以上の進行を押しとどめ

ている。

「賢者殿は、何故死人が階層を超えられたとお考えか？」  
今度はレオンハルトが意見を求める。

その問いは、本来意味のないもので、楽観的な意見に安堵を覚えたいだけのものだっただろう。けれどそれを切って捨てるかの如く、フレイジージャは、

「死人だけだと思っかい？」  
と質問を返した。

死人に階層を超える能力があるのではなくて、第58階層の解放と同時に魔物の階層間の移動が解禁されたのだと、レオンハルトが懸念した通り、迷宮スタンビードの氾濫が起こりつつあるのだと。

それを聞いたレオンハルトは、僅かに躊躇ためらうこともなく、弟に命じた。

「ウェイス、お前は斥候および第4、第5部隊を連れて地上へ戻れ」  
「しかし、兄上！」

「案ずるな。迷宮ヤンの主も脚を失い窮状きゆうじょうに喘いでいるのだ。この機を逃すわけにはいかん。迷宮を斃し、この街に、我らが領民に未来をもたらすことこそが、このレオンハルトの宿願だ。

だがな、この街の、我らが領地の未来というのは、民あつてのものなのだ。民なくして何が領主か。民を守るも我らが務めだ。だからこの任、お前に託す。

行け！ ウェイスハルト。皆を頼むぞ！」

そう言つて、弟の肩を強くたたきレオンハルト。  
すれ違いざまに、「行け、お前の姫を守つてやれ」と言い添えて。

ウェイスハルトはぐつと齒を食いしぱり、強く手を握りしめた後、託された斥候および第4、第5部隊に矢継ぎ早に指示を出した。

「一気に駆け抜ける。遅れずについてこい！ 斥候は迷宮内の冒険者に知らせて帰還を命じる！ 階層周辺の魔物の移動状況についても可能な限り情報を集めよ！」

第2階層は地下大水道に通じている。ここを通られると厄介だ。直ちに封鎖する必要がある。迷宮都市中心の迷宮を囲む防壁は封鎖し、迎え撃てるよう整えなければ。同時に戦えない者たちに避難の指示も必要だ。犠牲を最小限に止めるためには、魔物の進軍より早く地上へ帰還する必要がある。

(ディック、私は地上へ向かいます。生きて再び会いましょう)

地上へ向かうマルローがディックに別れの念話を送る。マルローの念話は迷宮の最深部から地上ほどの距離を伝達できるものではないが、混乱を極めるだろう地上で必ず役に立つだろう。

(ああ、お前の念話が必要だ。死ぬなよ)

短く応じるディック。気負いも恐れもない返事はひどく彼らしいものだった。

「マリエラ、ちょっとばかり怖いかもしれないからね、目をつぶってラプトルにしがみついといで。サラマンダー、《おいで》。マリエラの行く先を照らすんだよ」

フレイジージャは『師匠』の顔でそう言うと、マリエラの頭をやさしく撫でて、手を取り手綱を握らせた。

どこか見覚えのある死人の群れに、震えることしかできないマリエラの手は、冷たく冷えて震えている。そんなマリエラの右手を両手で包み込むように握りしめた後、中指にはめた指輪に触れて、手のひらほどの小さなサラマンダーを召喚すると、クーの頭にさせて笑ってみせた。

「キャウ！」

「ギャウツ！？ ギャウ！！」

小さなサラマンダーが何事かを伝えると、クーが「任せとけ」とばかりに返事をする。

「じゃあ、ジーク。頼んだよ」

そう言っつて、酒瓶を取りに行くような何気なさでマリエラの元を離れ、レオンハルトのいる前線へと歩いていくフレイジージャ。

「しっ、しっしょう……」

マリエラの呼ぶ声に振り返り、手を振って応えるフレイジージャの姿にマリエラは、師匠に二度と会えないような、そんな不安を覚えてしまった。

呼び止めたい。けれど、きつと呼び止めてはいけないとマリエラは思う。

師匠は為すべきことがあったから、200年後のこの時代に目覚めたのだと思うから。

師匠は為すべきことを知っていて、こうして出かけていくのだから。

そして、師匠が行けと言っつのなら、辿り着いた先にマリエラの為すべきことがあるのだから。

マリエラは、リンクスを失った時のように、せめて足手まといにはならないようにと、ラプトルの手綱を強く強く握りしめた。

「さーて、將軍閣下。行きますか」

「これは、炎災の賢者殿。ご助力いただけるとは心強い。何か良い作戦が？」

全てを知り尽くしたようなフレイジージャにレオンハルトが声を掛ける。死者の大地を前にして、恐れを見せないレオンハルトの様子は金獅子の二つ名にふさわしい堂々としたものだった。

「作戦でほどじゃないけどね、あいつらはデタラメに作られたものだから、素材のわりに実力が低い。だけど数だけが多いし、下は迷宮の主の腹の中だ。」

この階層じゃ、きざめば動きは止まるけど、下なら大まかに切り分けたくらいじゃ、じきに作り直されるだろうね。全員が100人切りをやったって、追っつかないだろうよ。」

だから気にせず駆け抜けな。階層移動の制限が解かれたんだ。下への道はすでに開いてるはずだ。」

幸い腹の中ってやつは、分岐のない一本道だ。蹴散らし真っ直ぐ走っていけば、必ず辿り着けるだろうよ。」

「だが、それでは死人が上へ溢れてしまう。」

「ここは、あたしが食い止める。」

「賢者殿……」

「気にする必要はないよ。このくらい、200年前の魔の森スタンピードの氾濫で魔物を間引いたことに比べれば、随分と楽な仕事だよ。」

それに、あいつらは200年前の連中だ。200年前からやってきたあたしが還してやるのが筋つてもんだ。そうだろ？」

大丈夫、心配はいらない。あたしはとても長生きなんだ。」

引き際だつて心得ている。こんなところであつたばりゃしないさ。」

にいつと笑つたフレイジージャの笑顔によつて、二人の会話は締めくくられた。

決断を戸惑う時間は最早ない。作戦は定められたのだ。

レオンハルトは全軍に手持ちの魔物除けポーションを使うよう指示を出した後、作戦開始の号令を下した。

「魔導士部隊前へ！ 全力で叩き込んだ後、全軍我に続け！ 全力で駆け抜ける！」

「うおおおお！」

迷宮が震えるような雄叫びは、一体誰のものだろう。

魔導士たちが放った大出力の火炎にそのまま突っ込むように、レオンハルトが先陣を切る。その後を、ぴたりと従う兵士たち。

人が焼け、魔物が燃え、呑まれた街が灰燼と帰す臭気すら吹き飛ばすように、誰も彼もが皆叫ぶ。

誰も彼もが武器を振るい、魔法を技を放って活路を開く。

まるで突進する一個の獣のようだ。

まるで押し寄せる魔物のようだ。

まるで、魔の森の氾濫スタンビートのあの日のようだ。

迷宮第58階層は、赤黒い腸のような洞窟で、そこに空などありはしないのに赤黒い壁は炎上する街のごとくで、赤黒い床は血に染まる滅びし国を思わせた。

過ぎし悪夢を振り払うように、覚めぬ悪夢を置き去りにしたまま、迷宮討伐軍は絶る死人を振り払い、文字通りその身を切り刻まれながら、悪夢の中を駆け抜けていった。

剣を取れ、弓を構えよ。おのれ、魔物め。よくも、よくも。

それは、誰の想いだろうか。

誰に向けての想いだろうか。

「全部終わったことなんだよ」

レオンハルトらの遙か後方、迷宮第58階層、尽きぬ悪夢の入り口でフレイジージャは静かに佇む。

彼女の周りには炎が幾重にも壁となり、死人が上の階層になだれ込むのを防いでいた。

「我が眷属おまえたちよ、出番だよ。200年ぶりの大舞台だ。過去に囚われ



た哀れな迷子を連れて還る仕事だよ。さあ、今まで喰らった供物の分だけ、きつちり働いてもらおうじゃないか」

炎に焼かれ炭と化しても、積み重なるように押し寄せて来る死人の群れにフレイジージャを囲む炎の防壁は少しずつ小さくなる。時折飛んでくる槍や魔法をするりと躲しながら、上階への階段を死守するフレイジージャは美しい炎舞を演じているようだ。

その舞は彼女の独演ではなくて、彼女を囲むように次々と浮かび上がって来る炎の精霊たちによる群舞であった。

フレイジージャは舞いつつ謡う。

精霊たちに捧げる唄を、眷属たちに命じる唄を。

いやそれは、死人に捧ぐ鎮魂歌であったのかもしれない。

「火多火多と、火多火多と来たれ。真炎よ、深焰よ、其は原始の血。熱せよ、滅せよ、爆せて発せよ。《爆炎招来》」

その瞬間、死者の悪夢の階層は轟音と爆風と圧倒的な熱量で、悪夢は灰と化し消えた。

死人は200年の悪夢から覚めて、死者はただ死者として還るべき場所へと旅立った。

スタンピード（後書き）

ざっくりまとめ：師匠の酒、燃料だった

## 分水嶺

迷宮を揺るがす爆風を遙か下方に感じながら、ウエイスハルトは迷宮を貫く階層階段を駆け上がった。

56階層の赤竜は未だ復活しておらず、続く55、54階層は階層主である『黒い悪魔』、『海に浮かぶ柱』以外の魔物は存在しない階層だ。ウエイスハルトは53階層まで駆け上がったようやく、魔物が異なる階層に移動している状況をその目で観測することができた。

(……喰らいあっている?)

住処である52階層を離れ、51階層に進行してきたバジリスクは、51階層に巣くう獣の魔物に襲い掛かかり、まるで魔の森に住まう魔物が食事をするかの如く貪り喰らっていた。

迷宮の魔物は人を喰らう。けれど人が訪れなかったとして、魔物同士喰らい合うという話も、飢えて死を迎えるという話も聞いたことがない。迷宮に充満する魔力によってその肉体を維持しているからだと考えられていたのだが、種族が変われば捕食の対象になりうるということだろうか。

「何れにせよ、こぞって地上を目指すわけではないようだ。これならば……。今のうちに地上へ急ぐぞ！」

ウエイスハルトは50階層まで駆け上がり、転移陣で2階層まで一気に戻った。

「魔物に転移陣を起動できるとも思えんが、念のため見張りを付け

ておけ！ おかしな転移が確認されたら直ちに破壊するように！」  
レオンハルトらの帰路を思えば、この転移陣は残しておきたい。  
けれど、50階層付近の強力な魔物が2階層へいきなり現れる危険  
を看過できない。

「地下大水道へ続く2階層の出入り口は封鎖せよ！ 地下から魔物  
を侵入させるな！ 第5部隊は10階層、第6部隊は迷宮入り口に  
て防衛に付け！ 冒険者は見つけ次第地上へ帰還させよ。マルロー  
は斥候部隊半数を率いて10階層より上層の状況を調査し報告。残  
りは各所へ連絡を！ 緊急招集だ！」  
「はっ！」

ウェイスハルトの指示のもと、直ちに行動に移る兵士たち。

階層を移動した魔物たちが浅い魔物を喰うわずかな間に態勢を整  
えなければならぬだろう。

事は一刻を争う。

200年前の魔スタンピードの森の氾濫の惨劇を、再びこの地に起こすわけに  
はいかないのだ。

\*\*\*\*\*

最初に地上に現れた迷宮の魔物は、数体のゴブリンであったとい  
う。

冒険者を志すものならば、若き日に相対する醜悪だが倒すに易い  
人型の魔物だ。

緑褐色という人ではおよそ生じえない肌の色、子供のような小柄  
な体軀をしているが、二足で歩き人に近い様相は、魔物と相対し屠  
り続けていく冒険者という生き方を選ぼうという者たちに、一種の

覚悟めいた感覚を抱かせる。

打ち倒されたその姿に、自らの行く末を感じる者も多くはないであろうから。

そのような、ある種のなじみ深ささえ与える魔物ではあるのだが、初めて迷宮から外へ這い出たそれらは、一種異様な様子をしていた。

肌は通常のコブリンよりも黒く淀み、目は血走って口元は血潮に濡れそぼり、血混じりの涎が垂れて胸元までを汚している。手には迷宮で拾ったものか、哀れな犠牲者から取り上げたのか、安物の剣が握られていて、その刀身は血脂がこびりついている。

魔の森においてもこういういった異常を示す魔物というのは存在している。

例えば、かつて黒鉄輸送隊がぐわした、黒死狼や人狼などだ。人を喰らい、魔力に狂い、魔物同士が喰い合って、より凶悪な個体に至る。同族同士すら喰らい合うその変貌はおよそまともな生物のそれではないが、もとより穢れた魔力が凝り固まって生じたものには相応しい進化であると言えるかもしれない。

その場に居合わせた見張りの兵によって倒されたゴブリンたちは、並の個体よりはるかに強力で、迷宮で生じたにも関わらず倒してもその屍が消え失せることは無かったという。

「全身受肉していたのか」

冒険者ギルドの会議室でこの報告を受けたウェイスハルトは、彼が目撃した魔物同士の共食いの理由に思い至った。

「肉体を得るために喰らい合っているわけか。して、迷宮内の魔物

の発生状況は？」

迷宮は深い階層ほど迷宮の主の魔力が濃厚に漂う。魔力の淀みよ  
り生じた迷宮の魔物のうち、特に受肉していない個体は、一定の魔  
力が無ければ存在できないのだろう。だから魔力を補給し受肉を果  
たすために、魔物同士喰らい合う。

魔物同士喰らい合っているならば、より強力な魔物に進化するの  
だろうが、個体数は減少するだろう。迷宮中の魔物が雪崩のように  
溢れて来るわけではないのならば、抑え込み、時間を稼ぐことは可  
能かもしれない。

「は。10階層を防衛している第5部隊の報告によりますと、浅い  
階層では魔物の発生数は倍増、中に1ランク上の魔物が1割程度混  
じっているそうです。その個体が周囲の魔物を喰らって地上を目指  
して移動しているとか。10階層以降の魔物の進行は第5部隊が阻  
止していますが、少しずつその強さを増しているとのことです！」

新たな魔物が次々と発生し、地上を目指して移動してくる。それ  
は絶望的な状況とも思える。しかし、ウェイスハルトには、その報  
告にこそわずかな希望を見出した。

迷宮に最も近い冒険者ギルドに本部を設けてまだ1刻と経過して  
いない。

これからが本番というところだろう。

「それで副將軍閣下、俺らはどう迎え撃つんだぜ？」

冒険者ギルドのギルドマスター、ハーゲイが問う。この場に集ま  
っているのは迷宮討伐軍だけではない。商人ギルドからはギルドマ  
スターとエルメラ他、戦闘力の高い部門長が招集されているし、迷  
宮都市の警護を担う都市防衛隊だって当然出席している。大佐やカ  
イト隊長が出席しているのは分かるのだが、テルーテル相談役は余

計ではなからうか。

テルーテルはあこがれの『雷帝エルシー』を前にしてもいつものワクテカ顔ではなく、キリリと至極まじめな表情で状況を注視しているから、都市防衛隊での長いキャリアを發揮すべくこの場にはせ参じたのかもしれないが。

「迷宮北東側の門は閉鎖し、出入りは南西側に。迷宮都市の南西大門、西門、南門は閉鎖。都市防衛隊は防壁の警護を継続しつつ、戦えぬ住人に避難を呼び掛ける。訓練通り避難は北東大門から山岳街道を使う」

迷宮の周囲には、かつてエンダルジアの王城を囲んでいた城壁を利用した防壁が張り巡らされている。万一迷宮から魔物が溢れたときに堰き止めるためのものだ。この200年間、迷宮から魔物が現れたことは無く、この城壁は迷宮都市に住まう人々に安心感を与えるためだけのものではあったが、修繕を怠らずにいたお陰で今回の最終防衛線として役立つってくれるだろう。

出入り口は北東側と南西側の2箇所あって、住人の多い北東側は閉鎖する。迷宮都市を出て北東側に進むと山岳街道を経てドワーフたちの自治領、ロック・ウィールに辿り着けるから避難する時間を稼ぐ目的もある。

魔物除けのポーションを使用して魔の森を抜ける経路もあるが、迷宮と連動して魔の森の魔物たちが活性化する可能性もある。有事の際の避難経路として周知されている山岳街道を使用する方が安全だろう。

「冒険者ギルドは冒険者たちを組織して迷宮で魔物の討伐を。10、20、30階層に防衛線を張り奴らの進行を食い止めつつ可能な限り殲滅する。商人ギルドには援軍と物資の提供、輸送をお願いしたい。ロイス殿、アグウィナス家にはポーションの解放を依頼する。」

費用は全てシューゼンワールド辺境伯家が受け持つ」

「もとよりそのつもりだが、いつまで戦うつもりだぜ？」

ハーゲイが冒険者たちのまとめ役、ギルドマスターとしてウエイスハルトに問う。

自分たちが行けと命じる戦いが、住人の命を助ける時間稼ぎなのか、それとも被害が帝都に及ばぬように、死に絶えるまで捨て駒になる戦いなのか。

冒険者とは兵士に比べてずっと自由なものなのだ。義務が少ない代わりに保証もない。もちろんギルドに所属している者たちは、ギルドから得られる権利の代わりに一定の義務も生じるものだから、強制依頼で動員することは可能ではある。

詳細を話さず死地へと送り込むことだってできなくはない。

けれど、ギルドマスターの職にありながら、若手冒険者たちに講習会を開き、長く戦い方を教示してきたハーゲイだ。冒険者たちの育成を、生きて帰ってくることを望み続けた彼には、そんな真似はできはしなかった。

「俺は、奴らになんて言っただけで送り出せばいいんだぜ？」

ハーゲイの瞳は真剣だ。シューゼンワールド辺境伯家という権力を前にしても決してひるむことは無い。

内に迷宮、外に魔の森。

人の領域から隔絶されたこの地で長く冒険者を束ねる男は、彼らの守護者でもあった。

「兄上が、迷宮を斃すまでだ。ハーゲイ」

ハーゲイの視線を真っ向から受け止めて、ウエイスハルトがそう答える。



レオンハルトは未だ戦い続けているのだ。死者の悪夢をかいくぐり、彼の切っ先は必ずや迷宮の主に届くだろう。

「新たな魔物が生み出され、喰らい合って受肉している。

それは、長く存在し、地上への侵攻に耐えるほどに受肉した魔物が少ないということだ。

迷宮討伐軍や冒険者たちが長年迷宮に潜り続け、その力をそぎ続けたことは、決して無駄ではなかったのだ。

我らの費やした時間は、犠牲は、その血の一滴、肉の一片に至るまで、すべてに価値があったのだ。

そして今、受肉した魔物が蓄えられておらず魔物の氾濫スタンビートの準備が万全ではないのに、迷宮内の魔物の移動制限が解除されたのだ。迷宮には、我らの憎き宿敵には、もうあとがないに違いない。

兄上は、金獅子將軍レオンハルトは必ずや迷宮を斃す。

それまでだ、ハーゲイ。

それまで我々は、迷宮都市を、この街に住まう人々を守り、魔物を倒し迷宮の力をそぐ。

皆も聞け。これは、終わりの見えぬ守りの戦いではない。

我らの街を、この土地を、魔物から人の手に取り戻す戦いだ。

ここが分水嶺ぶんすいれいと心得よ。

我々が築き、享受する当たり前の日々を、そして明日を確かに勝ち取り、真に我らの大地で迎えるのか、それともそんな日々も、命さえ奪われ喰りつくされるのか。

兄上は、金獅子將軍レオンハルトは迷宮を斃し、必ずこの地に戻

られる。

それまでは、共にこの地を守るのだ」

ウエイスハルトの瞳に絶望はない。そこにあるのは確信で、民を守るという信念だ。

それはシューゼンワルド辺境伯家に生まれた責務で、悲願で、彼の存在する意義だ。

「そうか。金獅子將軍は未だ戦っておられるのか……。ならば剣を預けよう、ウエイスハルト副將軍。我ら冒険者ギルド一同は、迷宮討伐軍とともに戦うぜ！」

ずびし！ いい笑顔でハーゲイが答える。

シューゼンワルド兄弟が戦いを諦めていないのならば、この街は、迷宮を斃すために作られたこの迷宮都市はその目的を果たすだけだ。今がまさにその時だというのならば、剣を取らぬは冒険者でさえないだろう。

「いくぜ、野郎ども！ 冒険者たちを招集だ！ ここ一番の踏ん張りどころだ！ 一世一代の稼ぎ時だぜ。馬鹿野郎どもがおつ死んじまわねえように、しっかりサポート忘れるな！ いくぜ！ チーム・ハーゲイの出番だぜ！」

こんな状況だからこそ、血が騒ぐのは冒険者の性さがだろうか。冒険者ギルドの幹部たちはずびしと指示するハーゲイに、この場に集まった幹部たちは口々に応じた。

「ギルマス一人で行ってください」

「冒険者たちの力量に合わせた振り分けに状況の掌握、人手はいくらあっても足りないというのに、まったく」

「あ、ギルマスの手は要りませんから、前線行って暴れてきてください」

「それと、チーム・ハーゲイなんて組織名称、誰も承認してませんから」

「お、おまえたちいい!？」

折角ずびし! と決めたのに、いつもの通り台無しだ。

緊急事態にも関わらず、冒険者ギルド職員の鋼のメンタルはビクともしないで、いつもと変わらず通常運転だ。実に安心感がある。それもこれもハーゲイの日々の薫陶くんとうのお陰だろう。

ウエイスハルトの指示に従い、早速冒険者たちを招集すべく会議室を後にする冒険者ギルドの幹部たち。随分と余裕な様子で、無駄口をたたく余裕さえある。

「前々からチーム・ハーゲイの呼び名には異論があっただですよね」

「せめてチーム・破限くらいにして欲しいものです。恥ずかしい」

「いや、チーム・ハゲンではギルマスが入れないのでは? 入っていただく必要はないのですが」

「おまえたち? 俺のコレは剃ってるんだぜ?」

「む……、積極的な喪失ですか。それはなかなか新しい解釈だ。確かにハゲンと言えなくもない」

軽口を叩き合いながらもテキパキと仕事を分担していくギルド職員たちを眺めながら、ウエイスハルトは「彼らは何の話をしているんだ?」と美しい金髪を揺らしながら小首をかしげた。

その場で成り行きを見守っていたテルーテル相談役は、

「剃って……。実に潔し!」

と、何事かにひどく感銘を受けていた。



分水嶺（後書き）

ざっくりまとめ：迷宮対迷宮都市、体力勝負の始まり始まり

## 穴の底

迷宮の深淵に向かう階段は、炎災の賢者の言う通り悪夢を紡ぐ回廊の終点に開いていた。

死人たちを何とか振り切り、爆風に押されるように降り立った迷宮第59階層は真つ暗で、何が潜んでいるのかレオンハルトの目ではとらえることができない。

58階層の死人たちは、駆け抜けていった迷宮討伐軍には興味を失い、上の階層に向かって移動しているようだ。外に這い出ようとしているのか、それとも58階層中を爆風が吹き荒れるほどの大魔法にも関わらず、フレイジージャが健在で彼女の炎に惹かれているのか。レオンハルトには知る由もない。

この階層に続く階段は、これまでは階層階段と表現するのにふさわしい、一定の段が形成された人工的な物であったのに、岩や土くれが積み重なった坂道に変わっていて、階段と呼べるほど作りの良い物ではなくなっていた。

階層の天井は高く、数十メートルはあるだろうから、斜度のきつい丘と言ってもいいだろう。

足元も石や岩が混じった土壌で、草の一本も生えていない様子が、この場所を掘られたばかりの穴倉のように思わせる。砂質ではなく粘土質の土壌のようで、地下水はしつとりと冷たく地面を湿らせる程度だ。粘土質といってもぐずぐずと足元のおぼつかない緩んだ状態ではなくて、細かい粒子が固まった柔らかい岩という感触である。

「《ライト》。これでは何も見えん。明かりを灯し、被害状況を確認

「認せよ」

レオンハルトの命令で、兵士たちは次々に明かりを灯して隊列を整える。

通常、迷宮には照明石や月光石と呼ばれる、光る石が壁面や天井に埋め込まれていて、昼間と変わらぬ明るさであったり、薄暗い階層であっても暗視魔法ダークサイトを使うことで十分な視野が確保できるのだが、この階層には照明石も月光石もなくて、まさに深淵と呼ぶべき暗い穴の底であった。

光もなければ音もない、しんと静まり返った階層に、点呼の声と迷宮討伐軍の灯す明かりだけが生命の存在を主張している。

被害状況の確認は驚くほどに迅速だが、点呼の声も報告も囁くような静けさだ。

この階層に魔物がいないなどと、誰も考えてはいない。声を潜めるのは、近づいて来るであろう魔物の足音に耳を澄ませるためだろう。

この階層の魔物たちはこの明かりを導しるに、今もこちらに向かっているのかもしれない。

この暗がりでも明かりを灯すなど、魔物に位置を知らせるようなものではあるのだが、真っ暗では魔物に近づかれても感知することはできないし、何よりも本能的な恐れがレオンハルトらに照明の魔法を使わせていた。

(200年前の魔スタンビードの森の氾濫の悪夢の後に、こんな穴の底に着くなんて……)

マリエラは、死の恐怖に怯えながら仮死の魔法陣を使った、魔の森の小屋の地下室を思い出していた。

(あの時は、一人ですごくすごく怖くて……。こんな所で一人ぼっちで死にたくないって思ったんだっけ……)

マリエラの不安を感じ取ったのか、ラプトルの頭の上に乗った小さなサラマンダーがマリエラを振り返って「キュウ？」と小首を傾げる。このサラマンダーは師匠の魔力で受肉し実体があるのだが、発火し炎を出して光っている。けれど熱くはないようで、ラプトルも頭に乗せたままだ。ゆらゆらと揺らめく炎が、あの日のランタンの灯りを思わせる。

魔の森の氾濫スタンピードのあの日は、すっかり消し忘れたランタンの炎がマリエラを200年後の世界に導いた。そして今、サラマンダーの燈火とともはマリエラをどこへ導くのだろうか。

「マリエラ、大丈夫だ。俺が必ず守るから」  
きつと不安げな表情をしていたのだろう。ラプトルの手綱を取るジークがマリエラを安心させようと声を掛ける。

「うん、ありがとう。怖かったし、今も不安だけど、でも大丈夫」  
マリエラは何とか笑顔を作ってジークに伝える。  
200年前のあの日は、一人で魔の森を駆け抜けて逃げたのだった。けれど今は、一人ではない。迷宮討伐軍が、何よりジークがマリエラの隣で一緒に走ってくれている。

だから、きつと大丈夫だ。  
ここは一人で逃げ込んだ地下室ではなくて、皆で辿り着いた場所なのだ。

改めて見渡すと、ここは随分と広い階層だ。  
階層の暗さが、果ての見通せない暗黒がこの階層を実物よりも広く、得体の知れないものに感じさせているのかもしれない。

照明に照らされた範囲には、土くれを握ったような巨大な土塊が



ぼつぼつと立ち並んでいる。土塊と言っても数メートルの物から十メートルを超えるものまでさまざまで、どれもこれも人間に比較するとひどく大きい。これを岩と表現しなかったのは、どれもこれもが子供が土遊びで作り出したような、歪な形をしているからだ。

サイズもバラバラ、形も粘土を適当に握って並べたような不格好さだ。

マリエラがあたりをぐるりと見渡している間に、被害状況の報告が終わったようだ。

階層階段から少し奥へ入った場所で、レオンハルトと彼を守るように立つ各部隊長を前にして、部隊ごとに整列している。ニーレンバークら治療部隊とマリエラと彼女を守る第6部隊は隊列の中央部だ。

迷宮に潜った時は200名ほどもいた迷宮討伐軍は、『多脚の刃獣』の討伐で損耗し、ウェイスハルトらと共に地上を目指すために分かれた悪夢にさらに削られて、100名ほどに減っていた。減少した人数の半分ほどは地上へと帰還しているのだが、“随分減ってしまった”という印象をぬぐえない。

それは誰もが感じていることだろう。『多脚の刃獣』との戦いは、戦力も物資もありつたけをつぎ込んだ総力戦で、その後も死者の群れを身を削りながら駆け抜けた。錬金術師マリエラは健在でポーションはまだ尽きてはいないけれど、半減した戦力で十分な対策もなされないまま、この階層を抜けることができるのか。

果ての見えない恐ろしい暗闇は、この階層だけでなくここにある迷宮討伐軍の心さえ呑み込んでしまいそうだ。

右手十数メートル先にある巨大な土塊が、行く手を遮る壁の高さを思わせる。

「キャウツ！」

ラプトルの頭上に鎮座しているサラマンダーが一声鋭く鳴き、それに応じるようにラプトルが、手綱を握るジークや周囲の兵士たちごと押しやるように左方向へ大きく飛んだ。

「きゃつ、クー!?!」

「うわっ、おい!」

急に動いたラプトルにマリエラやジークは声を上げ、隊列を乱された兵士たちの視線が集まる。

「何事か」

そんな当然上がりうる声がかげられるより早く、マリエラたちがいた場所より右手方向の兵士たちが、何ものかの巨大な一撃によって、木っ端のごとく吹き飛ばされた。

\*\*\*\*\*

迷宮都市は騒然とした空気に包まれていた。

迷宮から魔物が地上へ向かっているとの情報が流れているのだ。無理もないだろう。

冒険者ギルドの周辺は、迷宮のそばに立地していることもあって、冒険者たちが続々と集結していて熱気に満ちている。魔物が襲撃してくると聞いて、逃げ出すような人間はそもそも冒険者などになっ  
てはいない。稼ぎ時、名を売るチャンスと飛びつくような者どもばかりなのだ。

勿論、生き残り、金と名誉を手に入れるためには何より情報が必要で、無鉄砲に迷宮に突入するのが得策でないと分かっているから、皆、冒険者ギルドに詰めかけている。冒険者ギルドの職員たちは総出で現状の魔物の発生状況と、階層ごとの適性ランクを開示したり、ポーションなどの援助物資の配布場所を案内したりと対応に追われている。

そんな人の流れに逆らうように、エルメラは『木漏れ日』へと急いでいた。商人ギルドに任された仕事の内、物資の運搬・供給に関する職務は自分よりリエンドロの方が適任だ。彼ならばうまく仕事を振り分けて、滞りなく万事進行してくれるだろう。

この火急の状況でエルメラがなすべきは『雷帝』として迷宮の30階層以深に潜り、少しでも魔物を間引くことだ。魔物を一体でも多く倒せば迷宮の体力を削ぐことができるし、強力な魔物の進行を妨ぐことが、戦えない人々が逃げるための時間を稼ぐことにもつながる。

そのための準備を整えるために、エルメラは『木漏れ日』へと向かっていた。

彼女が戦うのは、子供たちの為である。

まだ幼い子供らが、無事に逃げおおせるために、彼女は戦地に赴くのだ。

だから、彼女は子供らが確実に脱出できるように、手はずを整えなければならぬ。

彼女の大切な子供たちは、ヴォイドやガーク爺と共に『木漏れ日』の入り口で母が来るまで待っていてくれたようだ。

「やあ、エルメラ。ここで待っていれば会えると思って待っていたよ」

迷子と合流できたような口調で、エルメラの夫、ヴォイドがこ

やかに声を掛ける。その横には二人の息子、パロワとエリオ、そして祖父のガークが立っている。

「あなた。それにパロワ、エリオ、お爺ちゃままで……」

エルメラが困惑したのはパロワとエリオの出で立ちだ。二人とも学校で戦闘訓練をするときの防具をまとって、避難するための荷物などは持っていない。エリオは魔法で戦うタイプだから武器がないのはいいとして、パロワが持つ盾と剣は実戦用の本物だ。

付き添うガーク爺も使い慣れたダブルアックスを担いでいて、老人とは思えぬ覇気を放っている。

「かーさま！ ほくも迷宮に行くの！」

年相応の可愛らしい仕草でエルメラに抱き着くエリオは、年不相応な物騒な発言をしている。

「まあ、何を言っているの、エリオ？ 魔物は母さまに任せて、あなたたちはお爺ちゃまと避難するのよ」

母親として当たり前のことを言うエルメラ。本当ならば自分が子供たちを連れて避難したいのだが、そういうわけにはいかない。

「母さん、衛兵さんたちは言ってたよ。『戦える者は迷宮へ、戦えぬ者は避難せよ』って。だから僕たち、迷宮に行かなきゃ。学校で戦い方は習ったんだ」

自分たちは戦えるのだと主張するパロワにエルメラは困ってしまふ。確かにエルメラとヴォイドの血を引く二人なら、戦士としての資質は十二分にあるだろう。けれど彼らはまだまだ子供ではないか。

「深入りはしないよ。危なくなったら絶対に逃げる。それが一番難しいことだって、師匠先生に習ったから。母さんたちと一緒にいきたいなんて我儘は言わない。自分たちに見合った場所でちゃんと戦

う。戦えるんだ、僕たちは。だから信じて。母さん」

師匠先生とはフレイジージャのことだ。いつも子供たちと一緒に遊んでいるようだったが、大切なことを教えてくれていたらしい。

それでも戸惑うエルメラに、ヴォイドがそつと寄り添い声を掛ける。

「行かせてあげよう。大丈夫、僕たちの子だ。お爺さんも付いて下さるし、この子たちの立ち向かおうという気持ちを、僕は大切にしたい」

「あなた……、分かったわ」

頷くエルメラに優しく微笑みかけるヴォイド。

丁度、そこへ待ち合わせをしていたシエリーとエミリー、『木漏れ日』の戸締りを終えたアンバーが集まって来る。全員が軽装ながらも急所を覆った防具を身に着け、アンバーは箒ほどの長さの棒を、シエリーは調理刀を二本腰に差している。エミリーが背負っているのは、魔除けや眠り、目隠し等様々な効果を持った煙玉だろう。

彼女らも迷宮に行くつもりなのだろう。長らく酔っぱらった冒険者たちを客としてきたアンバーが弱いただの女性である方が不自然であるし、迷宮都市が開いた学校では子供たちに戦い方を教えているから、子供たちも協力すればゴブリン程度は倒せるほどには戦い方が身についていた。

宿屋の娘であるエミリーまでもが当たり前のように迷宮に向かうとしているのだから、迷宮都市の子供たちの大半が、“戦える者は迷宮へ”という衛兵の指示に従って、迷宮に向かおうとしているのだろう。

その様子を見たヴォイドは、しゃがんでパロワと目線を合わせると、その手を取ってこう言った。

「パロワ、君がみんなを守るんだよ」

「うん、任せて父さん。力の使い方なら師匠先生に教えてもらったんだ。」

父さんは吸収した攻撃の力で傷を治しているけど、僕に特別な回復能力はないから“虚ろな世界”に呑み込ませなくていいって。

大切なものを傷つける力だけ、“隔絶”すればいいんだって」

力強く答えるパロワの返事に、ヴォイドは少し目を見開いて、

「そうか……、そうなのか」

と、フレイジージャがパロワに伝えた秘密に、真実を得たとばかりに頷いた。

「私もフレイ先生に教わりました。解体のスキルは鍛えれば生きてままの魔物も“解体”できるって。」

そんなこと、学校の先生も教えてくれなかったのに。

危なくなった時以外、話しても使っても駄目だと言われていましたけれど、今なら使っても怒られないわ」

「ぼくもならったー！」

「エミリーもー！」

どうやらフレイジージャ師匠は『木漏れ日』で子供たちと戯れながら、いろいろ仕込んでいたらしい。特にシエリーの発言が怖い。生きたまま解体するとかどういうことか。これほど愛らしい少女であるのに、ニーレンバーグの血、というより性格をすっかりばっちり引き継いだ上、さらなる進化を遂げようというのか。

『余計なことを教えないで下さい』と保護者会からフレイジージャに苦情が上がりそうなものだが、ここはそんな知識さえ役に立つ迷宮都市だ。未だこの事実を知らないニーレンバーグや『ヤグーの跳ね橋亭』のマスターも、ちびっ子殺戮戦隊の結成をエルメラ同様微妙な表情で祝福してやるのだろうか。

「まあ、ガキどもは任せとけ。老いばれたとは言え、オレも元はAランカーだ。きつちり面倒みとくからよ」

そう言つて、異常な頼もしさを醸し出すガーク爺。七十歳。迷宮都市はいつから百歳現役の街になつたのか。

「お爺ちやま、年を考えて無理はなさないでね」

「お爺さん、お願いします」

そう言つて揃つて頭を下げるヴォイド・エルメラ夫妻の横を、

「おー、ガーク爺、先いくぞーい！」

と、これまた老齡の域に差し掛かつたゴードン、ルダンが元気はつらつ武器を担いで迷宮に向かつて駆け抜けて行き、その後をゴードンの息子ヨハンが、遅れ気味に追いかけていった。

「僕らも行くつか、エルメラ」

「まあ、あなたも来て下さるの？」

世界と隔たり虚ろを渡つたSランカー、ヴォイドもまた妻エルメラと共に迷宮に向かうことを選んだようだ。子供たちを信じると決めた二人の意識は切り替わり、既に迷宮の深き場所に向いている。

「君の全力をフォローできるのは、僕くらいのものだからね。じゃじゃ馬なお嬢さん」

「あなたと二人で迷宮なんて、出会つた時以来かしら。久しぶりの迷宮デートね」

彼の背負つてきた運命、そして彼らの向かう先とは程遠い仲良しぶりを発揮しながら腕を組んで歩きだす二人。

いつもの調子で二人の世界に入りながら、迷宮に向かつていく両親を見送りながら、「妹か弟が増えるかも。次は妹がいいな」などと、おませなパロワは考えた。





穴の底（後書き）

ざっくりまとめ…家族がふえるよ!! やったねにいちちゃん！（違）

## 栄光と衰退の秘薬

マリエラの眼前で迷宮討伐軍を吹き飛ばしたのは、右手にそびえる巨大な土塊であった。

“であった”というのは断定を示すものでなく、過去の形態を示している。

土塊であったものは、今はただの土の塊ではなくて、強大な魔物の形を模しているのだから。

兵士たちを眼前で吹き飛ばされたレオンハルトの視線が、土塊であった魔物の姿をとらえる。

「また貴様か。幾度我が道に立ちふさがるのか」

それは心の底から湧き上がるような、怒りにも似た思いであった。レオンハルトの兵士たちを強大な尾で吹き飛ばし、その力を誇示するように翼を広げて雄叫びを上げるその姿は、ドラゴン。迷宮第56階層でレオンハルトらを一時は敗退せしめ、何とか下した2戦目も苦戦を強いられた魔物であった。

形を変えた土塊は、右手にあつた一つだけではなくて、視界に映るすべての土塊の表面に不均一な螺旋の亀裂が走るや、歪な造形はもともとこのように変形することを想定して、計算の上で作られていたのかと思えるように広がって、魔物の形に変わっていった。

ドラゴンの姿に。あるいはバジリスク、マンティコア、一つ目の巨人もいる。

どれもこれも巨大で強大で凶悪な魔物ばかりだ。

「ジーク！ 翼を狙え！ 者ども我に続け！」

レオンハルトの指示から数舜も遅れることなく、ジークの矢が放たれる。

フレイジージャの導きにより真価を發揮した『精霊眼』によって、形も得られぬ微弱な精霊がいくつもいくつも集まって、ジークの矢をまるで彗星のごとく取り巻く。

強力な魔法のように、渦巻き取り巻き光輝く矢によって、ドラゴンの翼、翼膜は射貫かれ破られる。

「ギャオアア！」

誇示するように開いた翼に穴を開けられ、空を制する翼をもがれたドラゴンは、怒りのままにブレスを吐こうと口を開いた。

「させん！ 《飛龍昇槍》！」

レオンハルトらがドラゴンに辿り着くより前に放たれたブレスは、ディックの放った槍撃により逸らされて迷宮の大地に大穴を開けるばかりだ。

ドラゴンのもとに辿り着いたレオンハルトが、彼が率いる兵士たちの一撃が、次々にドラゴンに襲い掛かる。

「こいつらは生じたばかりの若い個体だ！ 恐るるに足らん！」

剣と共に繰り出されるレオンハルトの喚呼は、兵士たちを鼓舞するための偽りではない。

ここは溶岩の階層ではなく、迷宮討伐軍は自由に動くことができ、天井もあの溶岩の階層に比べればずっと低い。この土塊から生じたドラゴンも赤竜に比べればずっと弱い個体と言える。

事実、隙をつかれて吹き飛ばされた兵士たちは、大怪我を負い、したものの即死を免れていて、手持ちのポーションを飲み干すや、

隊列を整えドラゴンに挑みかかっている。

そう、レオンハルトの言う通り、恐れるには足りないのだ。このドラゴンが一体だけであるのなら。

この階層に幾つも存在する土塊すべてが魔物に変じ、こちらに向かってきていないなら。

倒せない相手ではないが、一撃で下せるような相手でもない。この1体を倒している間に、数多の魔物に囲まれて、今度は迷宮討伐軍が餌食となってしまうだろう。

ここまでやってきたのは、こんな穴倉の底に墓標を築くためではない。

だからレオンハルトは、一つの決断を兵士たちに下した。

「再生の秘薬の使用を許す！ 今こそ竜の力を我らに！ この地に辿り着きしつわものどもよ！ 我が誇らしき同胞たちよ！ 真の英雄として、歴史に、迷宮都市の未来にその名を刻め！」

レオンハルトは赤く輝くポーションを取り出すと、皆の前でそれを呷あおった。

途端に全身が輝いて、負った傷は見る間に癒え、攻撃力も防御力もその身体機能ごと大きく増加した。まるでランクが一つ上がったかのような、急激な変貌ぶりだ。

これが、マナポーションとともに錬金術師マジュエラがもたらした、もう一つの奇跡。

特級のリジエネ薬再生の効果であった。

地属性の地竜、火属性の赤竜、水属性のフィロロイルカス、そし

て風属性のウイグラーツイル。4属性の竜の血から作られたこのポーションは、《命の雫》と地脈の欠片によってその力を更に高められ、回復力だけでなく、摂取した者のあらゆる能力を一定期間飛躍的に引き上げる奇跡の力を発揮した。

竜の血とは、竜種に相応しい能力を獲得した個体に宿るもの。

竜の血により竜は力を得るのではなくて、竜に相応しい力があるからこそ、その血は竜の血足りうるのだ。

これほどの効果をもたらすポーションが、たとえポーションと名の付く奇跡の薬であったとしても、矮小なる人の身に害をなさない訳がない。

強すぎる薬なのだ。同時に毒となるほどに。

この奇跡の代償として服用した者が支払うのは、鍛え上げた筋力や魔力の劣化であったり、反射神経や感覚器官の鈍化であったり、時に寿命の一部でさえあった。人によって何を失うのかは異なり分らないけれど、服用するのが1本きりならば、後の人生で取り戻せないものではないという。けれどこの秘薬に頼り過ぎ、幾本も服用を繰り返せば、その深刻な副作用は服用者の未来をも奪うだろう。

すさまじき戦果を上げ、英雄として名を刻んだ代償に、輝かしい未来は訪れ得ない。

けれど。

「大切な者たちを守り、未来を切り開いた果てに、穏やかで幸福な未来が訪れるのならば！

それを与えてやれるのならば！

腕を失い二度と剣を取れずとも、前に進む脚を失おうとも、いささかの迷いもあるものか！

我が剣は、我が身は、我が命は、我が民の為にある！」

そして、彼の志を継ぎ未来を担う子らの為に。

次々と秘薬をあり、ドラゴンへ、その先に待ち受ける魔物どもへと立ち向かっていく迷宮討伐軍の兵士たち。

彼らの戦いは、未だ終わることはない。

\*\*\*\*\*

魔物の進行を食い止める、迷宮討伐軍と冒険者たちの共同戦線は、それなりの秩序を持って機能していた。

冒険者たちは、訓練され集団行動になれた迷宮討伐軍とは違う。

烏合の衆に近い者たちであるから、他者に先んじ抜け駆けをしようとする者が後を絶たないのは、仕方のない事と言えた。

この作戦の中枢に冒険者ギルドを参加させたのは、そんな冒険者たちの特性を十二分に把握し、最適な配置ができるようにというウエイズハルトの考えによるものだ。

現在の迷宮は、彼らが慣れ親しんだそれと異なり、通常より多くの魔物が湧き、その中に何体か1ランク上の魔物が混じっている状態だ。冒険者たちにはそれぞれ慣れた狩場があるから、魔物の湧きが早くともそこを中心に活動するのが最も効率が良くはある。けれどもそこに湧く1ランク上の魔物は対処ができない。

そこで投じられるのが、冒険者ギルドの職員や商人ギルドの職員の内、戦える者たちだ。彼らが階層内を巡回し、1ランク上の魔物

を倒したり、体勢を崩した冒険者集団のサポートをして回ること、冒険者たちの継続戦闘を可能にしていた。

特に10階層までの浅い階層は、子供や老人、店を営む街の住人といった少し前の迷宮都市ならば戦力に見なされなかつた者たちが大勢詰めかけていて、ゴブリンやオーク、リザードマンといった魔物たちを数人がかりのチームプレイで倒している。

『エルバ靴店』のエルバや皮革製品を扱う店主たちが、魔物の皮の状態を品評しながらタコ殴りにしていたり、卸売市場の肉屋たちが肉切り包丁で魔物を刻んでいるのだ。ここは屠殺場か何かだろうか。

特に子供たちは、落ち着いて囲まれないように集団で戦うことを、学校で習った通りに実践しているから、それを見た大人や老人たちも無様な真似は見せられないと、この異常事態に冷静さを失わずにあたることができている。

特に、『木漏れ日』自慢のちびっ子戦隊の活躍はなかなかのもので、飛び掛かってきた魔物をパロワの盾がいなし、エミリーが魔物の弱点に応じた魔法や煙玉で隙を作り、エリオの電撃が痺れさせたところをシェリーが解体して仕留める、と言った見事な連携で10階層付近に稀に湧く1ランク上のトカゲの魔物すら倒し切っている。通常なら19階層に生息する、リザードマンの成りそこないのような四つ足の魔物だ。

これにはガーク爺も感心した様子で、

「子供の成長は早いもんだな」

などと、年に似合わぬ斧使用でバツサバツサと魔物を切り倒しながら呟いている。

しかし、その横で見事な脚捌きで魔物を蹴り倒し、棒で打ち据え倒しているアンバーから言わせると、

「この子たちが特別なんだと思うよ、なにせ、あの賢者サマの指導だから」

ということらしい。

「きゃっ！」

「大丈夫か、シエリー！」

「シエリーちゃん！」

「お姉ちゃん、いじめるなー！」

そんな安定した戦いぶりを見せる子供たちではあったのだが、やはり無傷というわけにはいかない。

「はい、ポーション。もう残りが少ないね。休憩がてら貰いに行くことにしようか」

アンバーの提案で一行はポーションの配給場所へと向かう。

配給場所は迷宮の入り口と10階層ごとにある転移陣のそばにあつて、ここからなら10階層が一番近い。

10階層ごとの階層階段の防衛とポーションの配給は、10階層は都市防衛隊が交代していて、配給所にはなぜかテルーテルが陣取っている。

当初、戦えない住人の避難誘導に当たる予定だった都市防衛隊ではあるが、避難を望む住人が想定外に少なかったのだ。避難誘導と火事場泥棒に対するための警備兵を差し引いても人手が余った都市防衛隊が、こうして10階層の警護に名乗り出たというわけだ。

もともと物資を気前よく配るのが好きなテルーテルだが、今配っているのは少し前までは貴重品であったポーションだから、その意識の抜けない彼は貴重品を配る自分も配られる彼らも、今の状況そのものが歴史的な重大事件だと極めて志の高い様子で、

「頑張ってくれたまえ！」「貴君らの奮闘と勇氣に敬意を！」



などと、暑苦しい言葉をかけながらポジション配布を見守っている。

これが、褒められたり敬意を向けられることに慣れていない迷宮都市の人々にやる気を漲らせたり、どさくさ紛れにポジションをネコババしようとする目論む不埒な輩に後ろめたさを感じさせて、戦闘へ誘導させているのだから、テルーテルはなかなかの働きをしていると言えるだろう。

いつもは面倒ばかりのテルーテルがこれほど活躍しているのだから、負けるわけにはいかないと、都市防衛隊のカイト隊長ほか兵士たちも、討伐を免れて階層階段を上って来る強力な魔物に集団で立ち向かっている。

より強力な魔物が出現する20階層の防衛と20階層から30階層の討伐には迷宮討伐軍の2軍が当たっていて、30階層以深の防衛と討伐は迷宮討伐軍の第4、第5部隊とハーゲイたちで対応している。

先ほどヴォイド・エルメラのシール夫妻がお散歩デートと言った様子で通り過ぎてから、30階層が上がって来る魔物はいないから、下では雷雲の中にあるような落雷の巣窟になっているのだろう。実に激しいデートではある。『雷帝』の電撃を「刺激的」の一言で済ませてしまえるのは、人外の防御力と再生力を備えた『隔虚』くらのものだろうから、完全に二人の世界なのだろう。

この階層に湧く魔物では物足りないハーゲイが、先ほどからエルメラたちの後を追って深い階層に討伐に出かけようか、それとも今行くとデートの邪魔になるだろうか、時間を計りかねている。

実際はデートではなく討伐に出かけているのだから、おかしな気遣いは不要であるのだが。

「こんなに深い階層に来ましたのは初めてですけど、ここは随分落ち着いていますのね」

場違いともいえる可憐な声に、転移陣を振り返ってみれば、そこにはポーシヨンの運搬部隊を引き連れたアグウィナス家のご令嬢、キャロラインが立っていた。

彼女の隣には護衛も兼ねているのだろう、ウェイスハルトも共にいて自ら状況の確認を行っている。

「いくらウェイスハルト副將軍と一緒にいても、こんな危険なところに来るもんじゃないぜ？」

物見遊山をしている状況ではないのだと釘を刺すハーゲイに、キャロラインは「こんな状況だからこそ、この目で確認する必要があると判断いたしました」と答える。

どういった状況で、どれほどにポーシヨンを輸送するべきか。

他に必要な物資はないか。

それを確かめるために彼女は直接やってきたのだ。

「助けてくれ！ 応急処置が間に合わん！」

丁度その時、負傷した仲間を担いで駆け込んできた冒険者に、「こちらへ！」とテキパキと指示を出す。

キャロラインは貴族の令嬢ではあるが、迷宮都市で生まれ育ったこの街の住人でもある。生き物を捌いたことは無く、血に慣れているとはいいがたいけれど、ニーレンバーグに一通りの知識と、何よりの知識だけでは役に立たないという事実を学び、兄の務める診療所に何度も足を運んでもいる。

手慣れた治療は施せずとも、重傷者の惨状に臆して目を逸らすような失態をおかしたりしない。

伴なってきた治療の心得のある者が治療を施す様を見ながら、ポ

「シヨンの種類や要望について状況を確認していくキャラライン。その状況に「大したご令嬢様だぜ」とハーゲイは漏らす。

「ああ。逃げてくれという私の頼みを断って、キヤルはここまでやってきたのだ」

そう答えながらキャララインをみつめるウエイスハルトは困ったようでもあり、どこか誇らしくも見えた。

「キヤル、私はこの街を守らねばならない。だからどうか君だけは無事に逃げ延びてくれ」

そんなウエイスハルトの頼みを、キャララインは笑顔で断ったのだ。

「アグウイナス家は、200年前の魔の森の氾濫スタンピートの際に、真つ先に兵を伴ない駆け付けた一族です。わたくしはその血を引くことを誇りに思っております。わたくしにできることは多くはございませんが、この地で皆にポーシオンを届けたいと存じます」

それでも引き下がらないウエイスハルトに向かって、キャララインはとどめの一言を発した。

「ウエイス様はこの街を御守りになられるのでしょうか？ でしたらここが一番安全ですわ！」

「そんな風に言われてしまったら、私が守らざるをえまい」

ハーゲイに事情を話すウエイスハルトは、一見困った風を装っているが、ただのろけているだけだ。困っているのはウエイスハルトではなくて、彼の側近ではなからうか。兄レオンハルトが死闘を繰り広げているのだから、もう少しピシッとしてもらいたい。

そんな風にハーゲイが考えていると、状況の確認を終えたらしい  
キャロラインがウエイスハルトのもとにやってきた。

「ウエイス様、お連れ下さりありがとうございます。おおその  
状況は把握いたしましたわ。わたくし、今から戻ってポーシヨン運  
搬の手配と、お兄様の診療所の受け入れ態勢を拡充してまいります。  
ウエイス様は、どうぞこのまま指揮をお続けくださいまし」

ウエイスハルトより、キャロラインの方が余程しつかりしている  
ようだ。「それでは」とこの場にそぐわぬ美しいお辞儀を披露した  
キャロラインは、ウエイスハルトを放置して、運搬部隊を伴なって  
転移陣へと消えていった。

「……さて、オレも魔物討伐に行くてくるんだぜ」  
結構な危機的状況のはずなのに、ここにいるとどうにも調子が狂  
うとばかりに、ハーゲイは階層階段を下っていった。

栄光と衰退の秘薬（後書き）

ざっくりまとめ：最深部と地上部の温度差ア！

## 創造の魔手

ウェイスハルトを放置して地上に戻ったキャララインは、父ロイスや家令に状況とポーションの消費予測を伝えた。

各階層とも、迷宮から魔物が溢れるという状況のわりには、安定した戦闘が繰り広げられている。もちろん予断は許さない状態であるのだが、一気に魔物が押し寄せて死傷者が大量に発生するという事にはならないだろう。逆に戦闘の長期化が見込まれるから、疲労が蓄積する頃にポーションをまとめて届ける必要があるからそう  
だ。

「ふむ、それでは我々供給側は必要な時に動けるように、休息をとりつつ準備しよう。キヤル、お前も少し休みなさい」

そう言っただけキャララインを労うロイスに、

「わたくしは、お兄様に状況をお話してから休みます」

と、再び街へと出かけて行った。

ロバートが働く診療所には、既に多くの怪我人が押し寄せていた。「お兄様、ポーションは足りていますか？」

「キヤルか。お前の心配なのだろう？ 迷宮だけでなくこちらにも十分なポーションがとどいている。治療にあたる人手の方が足りないくらいです」

そう答えながらも手を止めないロバート。

「魔物の牙を体内に入れたままポーションで傷をふさぐからこんなことになるのですよ！」

と怒りながら患者の腹部を切り開いて、体内の異物を取り出して

いる。

一時の陰気な様子に比べると、随分と生氣に満ちた顔をしている。家督を外されてしまった兄ではあるが、今のロバートを見ているとこれで良かったのではないかとキャララインには思えた。

それにしても、こんな誰でも入れる場所で、体が汚れたままの冒険者を開腹するなど少し前の迷宮都市では考えられぬことではあった。このような治療を施しても、この後でポーションを使用すればなんの問題もなく治すことができるのだからポーションとは便利なものだ。

「全く！ 無知蒙昧な者共が、ポーションに頼りすぎるからこうなるのです！ これでは二度手間だ！ よし、治ったぞ。次の者！」

ロバートは冒険者たちを罵りつつも治療しているのだが、冒険者たちは彼が言うように無知蒙昧なものだから“無知蒙昧”などという難しい言葉は理解していない。

分かったとしても、ロバートは丁寧な口調のわりに口が悪いから、いつものことと受け流すだけなのだが、今日の冒険者は事態の深刻さに、つい愚痴めいた本音を漏らしてしまう。

「だったらよ、若先生が迷宮に来てくれりゃいいんだよ」

今はまだ、迷宮を上つてこの診療所まで治療を受けに来ることができるが、もつと戦況が厳しくなったらここに来るまでもたない者も出てくるだろう。

この貴族然とした青年に迷宮で戦う力などないのだろうが、命を懸けて魔物に対する不安からか、その冒険者はいそいそ一言を漏らしてしまった。

「ふむ、なるほどその方が効率がよさそうだ。そうするとしましよ  
う」

「え？ 若先生！？」

啞然とする冒険者を尻目に、その考えはなかったと言いながら口バートは、治療の機器を鞆に詰め込み始めた。

「お兄様、行かれるならば20階層がよろしいかと。一番負傷者が多いようですわ。お兄様が使われる分のポーションの輸送とこの診療所の後任はわたくしのほうで手配しておきます」

「手間をかけますね、キャル」

そそくさと出ていく兄とその後続く護衛の兵士たち。余計なことを言ってしまったとばかりに、治療を受けた冒険者まで後ろを付いて行っている。

そんな彼らを見送りながらキャロラインは、兄が思う存分治療を行えるように諸事を整えるために指令室のある冒険者ギルドへと向かっていった。

\*\*\*\*\*

永劫とも思える闇を切り裂きながら、レオンハルトたちは進んでいた。

この暗闇の階層で戦い始めて、どれほどの時間がたったのだろうか。

一体これは、何本目の特級リジエ<sup>再生</sup>ネ薬なのだろうか。

倒しても倒しても尽きることない強敵をそれでも倒し続けて、迷宮討伐軍は前へ前へと歩を進める。

どれ程負傷を負おうとも、何度魔力が枯渴しようとも、後ろに続く錬金術師<sup>マリエラ</sup>が作り出す何百本ものポーションによって、彼らは再び戦



線に戻る。

もはや、どこから来たのかさえ分からない、無限とも思える暗闇の世界は、しかし徐々に変化を見せ始めていた。

足元は抉り取られたようにでこぼことしていて、凹凸の縁には柔らかな土がわだかまっている。そんな場所を奥へと進むと、そこに双子の大樹が生えているのが見えた。

遠くから離れて見るそれは、動かず佇んでいれば、その全貌がはつきり見えても大樹に見えたことだろう。

例え、幹と呼べる物がなく、大地から枝が何本も生えた状態だろうとも。

たった一片ほども葉が付いていなくとも。

樹木というよりは、木が反転して根が地上に現れたような、そんな存在であつたけれども、幹を持たず地面から枝を何本も生やすような植物は存在する。その枝が複雑に枝分かれして広がる様子も、葉が茂る枝先に、葉肉を持たず楓のような根元から5つに分かれた葉脈だけが生い茂っている様子も、枯れてしまった樹木のような。

しかし、レオンハルトらが知る樹木と決定的に異なっていたのは、その双樹がうねうねと、何かを掴むように蠢いていることだろう。枝先だけが風に揺られるように震えて動いているのではない。地面から突き出した枝の一本一本が、うねうねと根元から動いている。周囲の魔物を蹴散らして近づいて見たならば、枝先の5本に別れる葉脈までもが蠢いていることが見て取れただろう。

「これが、手というわけか……」

双樹であるということは両手なのだろう。脚を置き去りにし、腹を裂き、この地に両手を残した。

脚の歩くという概念が『歩く火の山』や『多脚の刃獣』と化し、腹からは魔の森スタンビードの氾濫で喰らいつくした人や魔物が溢れ出た。

それではこの『手』は一体どういうものなのか。

レオンハルトの疑問に対する答えはすぐに得られた。

双樹が大きく傾いて、何かを掴み握ねるような仕草を見せると、その方向の地面が抉れ、見る間に一つの土塊が造り上げられたからだ。

「創造の御手というにはおぞましい。『創造の魔手』とでも呼ぶでしょう。」

皆の者！ あれこそがこの階層の親玉だ！ 土くれより魔物を生み出す、命の定めに背きし忌まわしき手だ！

あれさえ打ち倒せば、この魔物どもも最早新たに生まれては来ぬ。

奮い立て！ 迷宮の主は近い！

奮い立て！ 我らが切っ先はもう直ぐ彼奴きやつに届くのだ！

奮い立て、奮い立てとレオンハルトは兵士たちに告げる。

奮い立て、奮い立てとレオンハルトは己に命じる。

「奮い立て！」 「奮い立て！」

ディックが、ニーレンバーグが、レオンハルトにしたがう兵士たちが口々に声を上げる。

「奮い立て！」 「奮い立て！」 「奮い立て！」

倒れても、倒れても、消え去りそうな命の灯を、バラバラにちぎれた四肢を繋ぎ合わせ、ポーシヨンで癒やして何とかここまでやってきた。

「奮い立て！」「奮い立て！」「奮い立て！」「奮い立て！」  
体力も魔力も気力さえ、とつくに限界を超えている。  
特級のリジエネ薬で未来を対価に差し出して、ここまでたどり着いたのだ。

「奮い立て！」と鼓舞する今でも体が軋む。視界は霞み、吐く息は血の味で呼吸さえまならない。

苦しいのだ。辛くて痛くて、何も残っていないのだ。

いつそこで立ち止まり楽になればと思うほどに、身も心も削られて、もはや何も残っていない。

けれどここで立ち止まったら、ここでついでってしまったならば、自らの生きた証さえ残りはしない。

だから、みんな叫ぶのだ。

己を、仲間を叱責し、励まし立ち向かうために。

「奮い立て！」「奮い立て！」「奮い立て！」「奮い立て！」

レオンハルトが剣を振る。幾度も切りつけ魔物を屠ってきた刀身は、欠けて疲労が蓄積し、もう長くはもたないだろう。彼自身の状態を表すようなその剣を、レオンハルトは振りかざす。

兵士たちを、彼に従う部下たちを奮い立たせる金獅子の咆哮は、その喉が潰れ声が枯れ果てかすれても、兵士たち一人一人の心に届く。

ディックは、各部隊長たちは、部下を鼓舞し激励し、扱いなれた自分の武器で何度も何度も突撃する。限界を迎えた彼らの体は、武器を一振りすることに筋が千切れ、筋が裂け、そしてその度、リジエネ薬がその身を癒やす。

魔物の爪が、牙が、彼らを傷つけ何度も何度も吹き飛ばし、体中

の血を流し尽くしても、なお足りないほどに血まみれだ。その何倍もの魔物を屠ってきた彼らの体は、己と魔物の血にまみれ、人とも思えぬ有様だ。

そんな彼らをニーレンバーグは治しつつづける。立ち上がり戦う意志がある者の、前に進んでいこうという意志を、彼は決して終わらせはしない。

どれ程その身が血に染まろうと、どれほどの痛みに苛まれようと、くじけぬ意志があることを、ニーレンバーグは知っているから。

「この場所に、共にあれるこの身に感謝を」  
ジークムントは弓を引く。

この場所は、この地の底は地獄のような場所だと思っ  
けれどここには、この暗闇には眩しいほどの人の意志が満ちてい  
る。

今まで受けた痛みや苦しみは、今ここで受ける苦痛に比べれば兎  
戯のようであると思える。そんな苦難を乗り越えて、進んでいく迷  
宮討伐軍に美しさにも似た感銘を受ける。

なんと、人の強きことよ。なんと己の弱かったことが。  
今ここで、この場所で、共に戦い未来を創れる己の運命に、ジ  
ークムントは深い感謝を捧げる。

自らの両手でマリエラを守り通せる未来よ来れと、真摯なまでに  
祈りを捧げる。

祈りと感謝を込めたジークの矢には『精霊眼』に昂められ、幾多  
の精霊たちが集い来る。無理な使用に『精霊眼』は血を流してはリ  
ジエネ薬の<sup>再生</sup>効果で癒やされる。

再生と破壊を繰り返す肉体と、生誕と死滅を繰り返す魔物たち。

その連鎖に終止符を打つべく、ジークムントの矢は『創造の魔手』に向かつて放たれる。

そして、マリエラは。

「ポーションは、人を癒すものなのに。痛みも苦しみも取り除いてくれるものなのに……」

腕がもげ、脚がちぎれても誰も歩みを止めようとしなない。どれほどの苦痛に苛まれようと、ポーションがあるかぎり、その傷は癒やされ再び戦場へと舞い戻っていく。

血を流し、血を流し、その血に染め上げられた跡を歩いて、彼女はここまでやってきた。

「お嬢ちゃん、地脈の欠片を拾ってきた。これでポーションを作ってくれ」

血まみれの兵士がマリエラにこの階層で得られた地脈の欠片を手渡す。《薬晶化》した薬草や月の魔力はまだ残っているけれど、持つて来た地脈の欠片は使い果たしてすでに無い。

リジエ<sup>再生</sup>ネ薬の継続回復効果があるからこそ持ちこたえている状態だ。

「マリエラ、ポーションを作るんだ。誰も諦めてはいない。マリエラがポーションを作ってくれるから、治すことができるから、皆あんな魔物に立ち向かえる。」

勇気を振り絞ることができる！」

ジークはずっとマリエラのそばにいて、彼女を守り励ましている。

「でも……」

地脈の欠片を受け取るマリエラの手が震える。

「くっ、危ない！」

丁度その時、低空を舞っていた小型のドラゴンが、マリエラたちに向けてブレスを放った。

前に躍り出たジークが幾本も矢を放ってブレスの弾道をそらし、ドラゴンそのものを地に落とす。放たれたブレスはさらに盾戦士によって弾かれて、マリエラに当たることは無かったけれど、ブレスがかすったジークの左半身は焼け焦げぶすぶすと煙を上げている。

「ジーク……！」

叫ぶマリエラ。

「大丈夫だ。再生リジエネ薬が効いている。これくらいすぐに治る。

手を止めるな、マリエラ。ポーションを作ってくれ。

俺たちは諦めてなどいないんだ。リンクスも最後の瞬間まで決して諦めたりしなかった。

俺たちの希望を消さないために、ポーションを作ってくれ」

ジークは落ちたドラゴンを見据え、弓を引きながらマリエラに語り掛ける。

「でも、でも、ジーク……、血が……、煙まで……」

泣きそうなマリエラの声に、ジークムントは一瞬だけ振り返り、にっこり笑ってこう言った。

「マリエラ、こんな時は、頑張れって言ってくれ」

「……ジーク……。わかったよ。頑張れ！ 頑張れジーク！ 頑張  
って……！」

マリエラは地脈の欠片を握る手に力を籠める。

（みんな頑張ってるんだ！ 守られてばかりの私がかくじけてどうするの！）

そんなマリエラに、ラプトルもサラマンダーも、「ギャウギャウ」「ギャウ！」と声援を送る。

《錬成空間》

ポーシヨンしか作れないけれど、他には何もできないけれど、錬金術師を続けて良かった。ポーシヨンを作り続けて良かったんだと、マリエラは思う。

(私にも、みんなの為にできることがある……！)

地脈の欠片はこの階層の魔物から得られた分しかもうなくて、数は残り少ない。一つだって無駄にできない。作りだすポーシヨンの1本1本に祈りを込めて、願いを込めて、できる限りの《命の雫》をとじこめて、マリエラはポーシヨンを作る。

(頑張れ！ 頑張れ！ みんな頑張れ！)

ポーシヨンに込められた想いはきつと届くから。

マリエラの想いのこもったポーシヨンは、迷宮討伐軍の、ジークの傷や魔力を回復させる。

終わりの見えない戦いに強張った心と、痛みに委縮した体に、マリエラの想いは温かく染みわたり、迷宮に赴く前の初心を蘇らせていく。

階層主へと立ち向かう兵士たちはもう、武器を握る手に再び力を籠めなおし、もう一歩前へと踏み出した。

創造の魔手（後書き）

ざっくりまとめ：みんな頑張れ。

次回サブタイトルは「エドガン、モテる」です。



## エドガン、もてる

迷宮討伐軍とジークの苛烈な攻撃に、迷宮第59階層の主、『創造の魔手』は大きく体を震わせた。

ぶるぶると、まるで痙攣するように、空を掴み、大地を掴む。

その手が空を、恐らくはこの階層に満ちる魔力を掴む度、地面は盛り上がり、魔物たちは誕生する。

けれどその造形は、通常の魔物に比べて首が長かったり細かったり、手足の数や長さが違ったりと、明らかに雑なものに変貌していた。

「もう少しだ……!!」

レオンハルトらの踏み込む脚に力が籠る。

数ばかり生み出される奇形の魔物に、そうまでしてこの場を死守しようとする階層主に、もう少しで止めが刺せる。

何度も何度も突き出したこの切っ先が、もう少しで階層主の木の根を止める。

頑張れと背を押す想いがきつと届かせてくれる。

レオンハルトは迷宮討伐軍を率いて魔物たちに守られた階層主へと突撃していった。

\*\*\*\*\*

「急に負傷者が増えましたね、どうしたというのです」

迷宮第20階層で治療に当たっていたロバートは、急に増えだした負傷者に冷静な口調で状況を聞いた。

「変な魔物が急に増えて……、って、いつてえ！」

「痛いですか。ふむ、良かった。生きている証拠です。はい、治りましたよ」

冒険者の傷を確実に、けれど丁寧とはいいがたい手つきでテキパキと治していくロバート。急増する怪我人に対応するためには、多少手荒くなっても仕方ないのだろうが、口から出て来る言葉がどこかの治療技師を思わせる。長く共に治療活動を行ってきたため似て来たのか、それともこういった職種に共通する特徴なのか。

「たっ、助けてえ！」

ロバートがいる場所は迷宮の20階層に設けられた仮設の診療所だ。とはいえ治療に当たっているのはロバートと手伝いを申し出てくれた治癒魔法が使える冒険者数名で、本来ここはポーションの配給場所だ。

配布されたポーションを使い果たし、怪我を負った兵士や冒険者たちが集まって来るのは当然で、中には魔物を引き連れたまま逃げて来る者もいる。通常ならば完全にマナー違反とされる行為だ。

「くっ、またか！ しかもワイバーンだと!？」

20階層を守る迷宮討伐軍の2軍兵は、駆け込んできた冒険者を追う魔物に向かって駆け出していく。2軍兵はCランクの者が多いからBランクのワイバーンは些か手に余る魔物ではあるが、そんなことを言っではいけない。

このポーション配給場所は、階層階段付近が安全でなくなった迷宮において、数少ない安全地帯として守らなければならない。ポーションを配給し、ロバートらにより怪我人の治療も行われている。

いざとなれば転移陣で移動もできる場所だから、なんとしてでも死守しなければ。

20階層付近にはDランク付近の、若手から中堅の冒険者たちが集っている。子供や老人といった非戦闘員層を除けば、迷宮都市の人口はこのレベル帯が最も多い。だから、20階の戦況が覆されれば多数の犠牲者が出るともいえる。

「ギョキョキョキョキャツ」

ワイバーンなど一体だけでもここを守備する兵士にとっては厄介なのに、鳥のように嘶くいななワイバーンに呼び寄せられるかのようにさらに2体が乱立する柱を縫って飛翔してきた。

新たに現れた片方は、他の魔物かあるいは人を喰らったのだろう。体表は明らかに黒ずみ口からは血のような唾液を垂らしている。通常個体より凶暴で厄介な個体だと一目でわかるほどだ。

「ロバート様、ここは危険です。退避ください」

状況は不利だと判断したロバートの護衛が、周りに聞こえぬようにロバートに避難を促す。けれどロバートは静かに首を横に振ると、治療の手を休めずに護衛の兵士に応えた。

「私はね、彼らに、あの冒険者たちに、生きてさえいれば助けてやると約束したのです。」

いや、これは、私自身への約束だ。

もう、誰も救えないのはごめんなのですよ。

これは、迷宮の反撃か、それとも最後のあがきでしょう。まあ、何だろうと構いませんがね。

私はここで見届けます。君たちだけ先に避難するといい」

そんなロバートの様子に、護衛の兵士たちは顔を見合わせたのち、

剣を抜いて、冒険者たちをなぎ倒しているワイバーンに向き直る。

「俺たちも、生きていれば助けて下さいよ」

「頼みます、ロバート先生」

「君たち……」

ロバートは顔をあげて護衛の兵士たちを見る。周囲の冒険者たちを見渡す。

あたりは酷い惨状で、たった3匹のワイバーンに幾人もの冒険者たちが吹き飛ばされている。冒険者の中にはロバートの見知った顔が何人もいた。ポーションによって、ロバートの治療によってスラムから抜け出し冒険者に戻れた人々だ。

誰も彼もが血まみれで、けれど誰も逃げ出さない。

この場所が、死守すべき要地と分かっているのだ。

ワイバーンの一撃で壁にたたきつけられた冒険者は、ロバートが脚を治してやった者ではないか。折角治してやった脚があらぬ方向に曲がっていて、意識もないのか自らが流した血溜まりに倒れ伏している。

びくびくと動いているから死んではいないようだが、ワイバーンが跋扈するあんな場所へロバートは行くことができない。ここまで戻ってきてくれなければ、ロバートにはどうしてやることもできないのだ。

（死ぬな、誰も死ぬな。どうか、誰か、彼らを助けてやってくれ……）

そんなロバートの祈りが届いたのか。

「《我が左腕は焔の座、我が右腕は疾風の座 宿れ 双属性剣！》」  
デュアル・エレメンツ・ソード  
ワイバーンたちは放たれた炎で焼かれ、風の刃でその首を次々に飛ばされていた。

「すごい……」

Aランカーの実力を目にした若い冒険者が思わず声をもらす。その声にこたえるように、皆のピンチに現れた男、エドガンは冒険者たちを振り返り爽やかな笑みを浮かべてみせた。

ヒーローは遅れて登場するもんだぜ！ とばかりにド派手な演出と共に登場するエドガン。

「ヒーローは遅れて登場するもんだぜ！」

口に出して言っていた。なんでわざわざ言うのだろうか。台無しだ。

「ね……、ねえ、あの人、誰？ ちょっとカッコ良くない？」

「うん。ちょっと、ううん、結構かっこいいかも。誰かしら？」

だがしかし、皆の窮地にさっそうと現れた若きAランカー、エドガンは吊り橋効果的なアレで、格好よく見えてしまったらしい。

そう、ここには若手の冒険者たちが多く集まっているのだ。つまり、若い女性冒険者だって多くいる。エドガンはたった今倒したワイバーンに死ぬほど感謝をするべきだ。

「ちょっと？ エドガン先走り過ぎだし？」

「そうですぞ。集団行動は大切ですよ」

後からぞろぞろと出て来るユーリケにグランドル、黒鉄輸送隊のメンバーたち。

「うわっ、エドガン小鼻膨らんでるし？ キモイし？」

「こら、ユーリケ、仮にも隊長に向かってキモイ言うな！」

どうやらエドガンは、女性冒険者たちの黄色い声に気分を良くして鼻をひくひくさせていたらしい。猿か？ 猿か。

ユーリケが引き連れているラプトルたちは、大量の負傷者を積み重ねるように載せていて、現在進行形で、ワイバーンにやられた冒険者たちを回収している。

黒鉄輸送隊の面々は、腕を組み片足でワイバーンを踏みつけて不自然なポーズを決めるエドガンをマルッと無視して、負傷者をロバートの近くにおろしていく。

「良かった、まだ息がある……。怪我人の救助、感謝する」

手早く怪我人を確認しながら、ロバートはエドガン以外の黒鉄輸送隊の面々に感謝を述べた。

「応急処置はしている。我々は先を急ぐため、あとはお任せする」  
治癒魔法使いのフランツが簡単な引継ぎをすませると、負傷者を下ろした黒鉄輸送隊はラプトルを引き連れて下階へ続く階段に向かっ  
つていった。

「さー、次の階層にいきますぞ」

迷宮の中だというのに、いつもと変わらぬ軽装で傘をステッキ代わりに歩いていくグランドル。彼の軽装さと巨大なハンマーを担いで歩くドニーノが対照的だ。

二人の後ろにはヌイとニコが傘の行商人かというほど大量の傘を背負っているから、傘より重い盾を持ってないグランドルは、質より量の使い捨て作戦で盾職として参戦したようだ。

魔法剣士に重量戦士、治癒魔法使いに調教師。遠距離攻撃が少々心もとないが、でんせつのゆうしゃグランドルのパーティーはそれなりにバランスの取れたメンバーと言える。

いや違った。彼らは黒鉄輸送隊だった。隊長の貫禄不足でどうにもでんせつのゆうしゃパーティーに思えてしまう。

「黒鉄輸送隊、迷宮都市に来てたのか……」

「あの人、黒鉄輸送隊のエドガンさんっていうのね」

「新しい隊長さんなの？」

ひそひそとエドガンの査定を行う女性冒険者たち。

彼女らなど興味ないとばかりに背を向けるエドガンは、興味津々で彼女らの声に耳を傾けている。その証拠に耳がぴくぴく動いている。彼女らから背けた顔は実にだらしない表情だ。猿か？ 猿か。

そんなエドガンの猿っぷりに気付いているのかいないのか、自分たちが及びもつかないワイバーンを軽くないなしたエドガンの高い戦闘力や、黙っていれば悪くないルックス、職業や役職を鑑みて、「これは買い」だと定めたらしい。

「あのっ、ありがとうございました」

「アタシは、アーニヤ。後でお礼させてよ」

「抜け駆けズルイ。私はミルケよ」

魔物が出る迷宮の中だから、ほんの短い時間だけれど、女性冒険者たちはエドガンに駆け寄ってお礼を言ったり、名を名乗ったり、手を握って自分を印象付けている。

この迷宮から魔物が溢れる状況を見事打破し、無事に地上に戻れた暁には、エドガンにはこの世の春が待っているのかもしれない。

「ほら、エドガン？ さっさと来るし？」

「ギャウ！ ガウ！」

「わ、こら、ラプトル、噛みつくな。ケツはよせ、ケツは……！」

あくまで、無事に地上に戻れたら、である。

頑張れ、エドガン。

(……ばかばかしい……)

先ほど、真摯な願いを口にしかけたロバートは、エドガンたちの有様に、まったくとんだ茶番だと山積みになされた冒険者たちの治療を黙って再開していた。

貴族然とした振舞いながら、危険な戦場に残り怪我人を分け隔てなく治療していくロバートは、実はエドガン以上にその場にいる冒険者たちの評価を上げていたのだが、本人は全く気付いていない。

そんな近い未来の話さえ、今の彼らには縁遠い。

すべては、無事に地上に戻れたら。

彼らの明日は迷宮を斃した先にこそあるのだ。



エドガン、もてる（後書き）

ざっくりまとめ…まさかの！ 普通モテ！

## 仇

「やっぱりいたな」

「こついった異常湧きはクセづくのですぞ。高位の魔物ゆえ、数は随分少ないようですが。ニコ、ヌイ、傘を。二人とも私のそばを離れないよう気を付けるのですぞ」

黒鉄輸送隊は、なにも出会いを求めるエドガンに付き合っつて迷宮に赴いたわけではない。エドガン自身も今日ばかりは別の目的があるのだ

黒鉄輸送隊の目的地は迷宮第23階層『常夜の湖畔』。

月光と沢を流れる水音に満ちたこの階層は、今日はメイリザードマンたちの咆哮がけたたましく響いている。

メイリザードマンたちは、まるで月光石の光に狂わされたかのように、全身から血を流しながら一体の白い個体に絡みついている。同じ迷宮から生じた魔物同士であるというのに、互いを喰らい合っているのだ。

メイリザードマンの魔石はハラワタのどこかに宿るのだろうか。何体ものメイリザードマンに食らいつかれるのも厭わずに、その白い個体、デス・リザードはメイリザードマンの胴体部分をぞぶりぞぶりと喰らっていた。

「ほんと、おぞましい魔物だし？」

心底忌々し気に吐き捨てるユーリケ。

大半の階層では、通常湧く魔物に混じって1ランク高い魔物が湧

いていたが、デス・リザードはメイルリザードマンより2ランク高位の魔物だ。何匹ものメイルリザードマンに体中喰らい付かれてもまるで気にすることもなく、鎧のようなメイルリザードマンの鱗をまるで柔らかいもののように引き裂いて、おぞましい食事を続けるデス・リザード。強さに歴然とした開きがあることは、その様子からも見て取れる。

Aランクのデス・リザードからすると、Cランクのメイルリザードマンなどいくら喰らえど受肉するには程遠い魔物なのだろう。癒されぬ底なしの飢餓に苛まされるように、無心にメイルリザードマンを喰らいつつけている。

ぐるり。

何の前触れもなく、デス・リザードの首が半周程回転し、頭だけが後ろを振り返った。

にたあ。

四つに裂けたデス・リザードの口元が、笑っているかのように引きつり歪む。メイルリザードマンよりもはるかに上質の餌を見つけたのだ。

人間が7人にラプトルが8体。人間の強さにはらつきはあるけれど、メイルリザードマンとは比べようもない極上の餌。黒鉄輸送隊はデス・リザードの目にそのように映ったのだろう。

メイルリザードマンを体に喰らい付かせたまま、黒鉄輸送隊にむかってくるデス・リザード。細く長い4本の手足をばたつかせながら胴体をつねらせて走り来る様子は、蜥蜴より何か得体のしれない虫を連想させる。

そんな魔物を半眼で見ながら、エドガンがデス・リザードの前へゆっくりと進み出た。

「お前がさ、リンクスを殺ったのと別の個体だってこたあ、分かっ

てるよ。だからこれは仇討じゃねー。ただの八つ当たりだ」

エドガンが双剣に魔力を込める。

リンクスを殺したデス・リザードは、報告を受けた迷宮討伐軍によつてすでに退治されている。今この階層に湧いているデス・リザードは、今回の最深部の討伐によつて新たに湧いた個体で、リンクスたちを襲ったデス・リザードとは別の個体だ。

そんなことは分かっていたけれど、迷宮に潜るのならばと黒鉄輸送隊はこの階層を選んだのだ。

リンクスを失ったあの日、ヌイとニコを除いた黒鉄輸送隊のメンバーで話し合ったのだ。

「リンクスの仇を討とう。迷宮を斃そう」と。

けれど、迷宮討伐軍の第一線で戦えるだけの戦力を有しているのは、ディックとマルロー、エドガンくらいのもので、他の者は単独の戦力としては二軍がせいぜいと言ったところだ。ユーリケはラプトルなどの獣を操ることに特化しているし、フランツは亜人の特徴を備えた外見上、迷宮討伐軍といえど人の集団に属することが難しかった。グランドル、ドニーノは迷宮討伐軍として戦っていくことに限界を感じて黒鉄輸送隊に移籍したのだ。装甲馬車があつてこそ実力を発揮できると言つて良い。

それに長年魔の森を抜け、迷宮都市と帝都を行き来してきた黒鉄輸送隊は、迷宮討伐軍にとつても迷宮都市にとつても重要な輸送隊になつていたので、黒鉄輸送隊の全員が迷宮討伐軍に合流して討伐に参加することが、迷宮都市全体から見て迷宮討伐に寄与しているとはいいがたかつた。

だからディックとマルローだけが迷宮討伐軍にもどつて直接迷宮討伐に参加し、残るメンバーは黒鉄輸送隊として陰から迷宮討伐を支援することで合意した。

ちなみに、既に戦力の上ではマルローを上回っていたエドガンが黒鉄輸送隊に残ったのは、表向きには稀にあらわれる強敵に対するためだったのだが、実際は迷宮討伐軍で浮名を流し過ぎて戻るに戻れなかったという、実にくだらない理由である。身から出た錆びと言っほかない。人の集団において対人関係が良好であるというのは重要なのだ。

そのような理由から輸送隊を続けていた一行であったが、今回の迷宮討伐軍の遠征は事前に連絡を受けていて、今日は万々に備えて迷宮都市で待機していた。

その方に一つが起こったことを、運よくと言うべきかは別として、裏方に徹していた彼らの戦力が必要な事態が起こったのだ。

「自分たちの戦力では20階層付近が関の山だろう。どうせ戦うのなら、リンクスの倒れたこの階層に行こう」

誰ともなくそう言いだして、一行はこの階層を目指したのだ。

何体ものメイクリザードマンを喰らい付かせているデス・リザードの動きは本来のものよりいくらか緩慢で、四つに裂けた口から血混じりの唾液を滴らせつつ迫りくるさまを黒鉄輸送隊の全員が認識していた。

デス・リザードを迎え撃つべくエドガンが双剣に魔力を込める。

「《我が左腕は焰の座、我が右腕は疾風の……》」

「アンカーセットからの、ほい、《シールドバッシュ》。行きましたぞドニーノ」

「おうよ。《メガ・ハンマー》」

ドンからのドゴン。

エドガンが格好良くデス・リザードを倒すより早く、グランドルが傘を開いて柄に付いている持ち手代わりのアンカーを軽く地面に突き刺す。ニコが間髪入れずアンカーをハンマーで地面に打ち込んだ瞬間、飛び込んできたデス・リザードをグランドルのシールドバツシユが跳ね飛ばした。

グランドルの細身ではデス・リザードの衝撃を受けきれないため、盾代わりの傘は斜めにセットして、衝撃を分散させ、かつグランドルが受ける衝撃の大半をアンカーで地面に固定した柄側に逃がしている。デス・リザードを跳ね飛ばした衝撃でボロボロになった傘はヌイが回収し、新しい傘をグランドルに手渡している。ニコがアンカーセット、ヌイがリロード担当らしい。

シールドバツシユで跳ね飛ばされたデス・リザードは、天井にむかって跳ね飛ばされて、落ちてきたところをドニーノのハンマーが頭部をミンチにしている。

それでもまだまだ生きているのか、びくびくと動いているのは、流石高位の魔物と言うべきか。頭部を潰されても生きているとは、一体脳はどこにあるのか。

跳ね飛ばされ、叩き落とされた衝撃などお構いなしに、喰らい付いていたメイルリザードマンがここぞとばかりに喰らい付く<sup>あきこ</sup>に力を籠める。

「<sup>サーフエット・ヒール</sup>《過剰回復》」

フランツが喰らい付くメイルリザードマンごとデス・リザードに特殊な回復魔法をかけると、ドニーノに潰された頭部は潰された形状のまま、メイルリザードマンに喰らい付かれている傷口はメイルリザードマンごと癒着するように回復し、一個の魔物肉の塊が出来上がった。結合し、牙も爪も封じられた魔物の塊は、もはや止め<sup>とど</sup>を待つばかりの、生餌のようにも見える。

「いいぞ、ユーリケ」

フランツに声を掛けられたユーリケは、デス・リザードだった蠢く肉塊を汚物を見るような冷やかな目で見降ろしたあと、自らのひらをナイフで傷つけ滴る自らの血でラプトルの額に何やら模様を描いていった。

「さあ、ラプトルたち。餌の時間だよ？ 《我が仔らよ、狂え

》

「ギャツギャギャギャアアアアアアアアアアアツ！！」

調教師。帝都でも数少ない異能。

辺境の部族にのみ受け継がれるその能力は、その利便性から尊ばれ、同時にその一族はこの特性ゆえ疎まれた。

一族の特徴を備えた孤児、ユーリケが帝都のスラムで生き残れたのも、同時に寄る辺なく獣のようにスラム中をさまざまっていたのも、この能力ゆえだったろう。

フランツに引き取られ、人間らしく暮らした時間はユーリケの人生においてどれほどの長さだったろう。人の時間と獣の時間、ユーリケを構成するのはどちらの時間なのだろうか。

ユーリケによって狂化されたラプトルたちは、肉塊と化したデス・リザードに喰いかかり、その硬い表皮ごと引き裂き喰いちぎっていた。叫び声を上げながら、魔物だった肉片を喰らうラプトルは人に飼いならされたくびきから解放され、獣の性をむき出しにしていた。ひどく残酷で残忍な給餌。しかし獣とは本来このようなものなのだ、そう思わせる美しさがあった。

それは、その様子を笑みをたたえた表情で見つめるユーリケも同様で、「仲間を殺した種族を殺す」という、この救いのない報復行動をひどく原始的で正当なものに思わせた。

「ちよっ……、俺の獲物はー？ えー？」

双属性剣を披露するより早く繰り広げられた連携の取れた攻撃に、完全に仲間外れになったエドガンは中途半端に魔力を込めた双剣を両手にまごまごしていた。

「エドガン、あそこに新手のデス・リザードがおりますぞ！」

「そーそー。ずーっと向こうの方ね？ さっさと行ってくるし？」

「頼りにしてるよ、エドガン」

「うむ、頼んだぞ」

グランドル、ユーリケ、フランツ、ドニーノにいつものごとくあしらわれるエドガン。その実力だけは本物だから、ニコとヌイも「がんばってくださいえ」と目で応援してくれる。

一人でもデス・リザードを倒せてしまおう、我らがAランカー・エドガンは、「仲間が実力を発揮する環境を整えてこそそのリーダーだ」という、グランドル提唱のリーダーシップ論に基づき、皆の手に負えない複数湧いたデス・リザードを間引いたり、こちらに気付いていない遠くのデス・リザードを倒しに行ったりと、討伐数だけはAランカーに相応しい働きを繰り広げることとなった。

モテる男はつらいのだ。たぶん。

\*\*\*\*\*

黒鉄輸送隊が受肉しかけたデス・リザードを着実に葬っていた頃、迷宮の38階層付近ではヴォイド・エルメラ夫妻がお散歩デートよろしく、雷雲渦巻く二人の世界を繰り広げていた。

3階層浅い35階層あたりでは、再度湧き始めた異形相手にハーゲイが破限斬を繰り広げ、倒すたびに宙に向かってサムズアップをかましていた。



冒険者ギルドで若手相手に戦い方のイロハを教えているだけあって、ハーゲイはソロでも安定した戦いぶりだ。安全マージンの取り方やペース配分も完璧なのだろう。次から次へと湧き出て来る異形の魔物を淡々と捌いているのだが、どこことなく元気がない。流石に疲労が蓄積してきたのだろうか。

ずびし！

返事がない。当たり前だ。この階層に人間はハーゲイ以外はいはないのだから。

「……」

ハーゲイの顔からはだんだんと笑顔が失われ、サムズアップを辞めようかというためらいが哀愁漂うその背中から見て取れる。

どうやら心が疲れて来たらしい。

ずばしと破限斬が魔物を切り裂き、倒された魔物は迷宮の魔力と成って霧散する。そのよどみの向こうに佇むハーゲイが、いつものきめポーズもせず次の獲物を探そうとした時。

「これは、静かでいいですね」

「流石のギルマスも、疲れると無駄な動きが無くなるのでしょうか」

「非効率的な言動の無意味さを悟ったのだと思いたいですね」

「おっ、お前たち!？」

ハーゲイのもとに、冒険者ギルドの幹部たち、チーム・ハーゲイのメンバーが駆け付けた。

安定して戦っていたハーゲイは別にピンチのようには見えなかったけれど、彼のアイデンティティーは失われる寸前だったから、ある種のピンチではあったろう。ヒーローよろしく登場した部下たち

にハーゲイは。

ずびし！

とっておきのイイ笑顔でサムズアップをぶちかましていた。

「……これならもう少しゆっくり来てもよかったですね」

「急いで仕事を片付けてばからしい……」

「ギャップがある分暑苦しさも倍増です」

うんざりだと言いたげな幹部たちは、いつもどおりの減らず口を叩きながらもハーゲイの周囲に布陣を形成する。魔物の索敵、牽制、防御を行いながらハーゲイの攻撃力を活かし、長時間の戦闘を可能にする鉄壁の布陣だ。

「いくぜ！ チーム・ハーゲイの戦いはこれからだ！！」

「その名前はやめてください」

「やっぱりお一人で頑張っていただけですか？」

「なんだか不吉なフレーズです」

どこかで聞いたことのあるようなフレーズを叫びながら、テンション高く魔物の群れに挑みかかるハーゲイと、ローテンションながら付いて行くギルドの幹部たち。

彼らの戦いもまた、今迷宮で繰り広げられている数多のドラマの一部であった。

仇（後書き）

ざっくりまとめ・俺たちの戦いはこれからだ！  
（ちゃんと来週も更新あります）

## その道の終

幾人もの冒険者たちが、兵士たちが、普段は戦闘員でさえない農夫や商人、女性や老人、子供たちまで、迷宮都市じゅうの誰もかれもが迷宮に挑んでいた。

皆が強力な魔物を倒せるわけではない。ゴブリンなどの弱い魔物を数人がかりで倒す者も多いけれど、スライム一匹、ゴブリン一匹さえ迷宮の力の一部なのだ。

倒しては生み出され、生み出されては倒されていく魔物たち。

数とは力だ。

200年前の魔の森の氾濫の日、この地を得ようと魔物が総力を挙げて押し寄せてきたように、200年後の今、自分たちの街を、暮らしを、家族を守らんがために、迷宮都市の人々が迷宮へと詰めかけた。

こんな日の訪れを、迷宮の主は予想しただろうか。

仮に迷宮の主に思考する能力があったとしても、足元まで迫った迷宮討伐軍を押し返そうとするように、階層間の移動を解放し魔物や死人を送り出したことで、逆に迷宮都市中の人間が迷宮に雪崩れ込もうなど、想像すらしなかったろう。

200年前、エンダルジア王国の規模からみれば、魔物に向かってくる冒険者たちは少数で、逃げまどう者の背を追い食い殺すのはさぞやたやすかったろう。エンダルジアの王国内は、恒久の平和に呆けて戦い方も忘れた者ばかりだったろうから。

けれど、今は、この迷宮都市は。

子供さえ武器を手に、互いに助け合い連携し合って手向かってく

る。

誰もかれもがあきらめず、その目に強い光を宿して。その力強さに、迷宮は僅かにでも怯んだらうか。

魔物を生み出し続ける『創造の魔手』は時折宙に向かってその手を動かす。遙か上の階層で魔物を創造しているのだらう。その動作の間に生じる隙は、迷宮59階層で戦い続けるレオンハルトらにとつて好機に他ならない。

迷宮に潜った街中の人々が魔物を屠っていくたびに、『創造の魔手』は上階で新たな魔物を生み出していく。その隙を逃さず捉えてレオンハルトら迷宮討伐軍は『創造の魔手』の根元へと進軍していく。

じりじりと、じりじりと。

一歩ずつ、確実に。

2000年にわたる迷宮都市の、シューゼンワールド辺境伯家の迷宮討伐の歩みのように。

傷ついて傷ついて、何度も倒れ、後世に迷宮討伐の悲願を引き継いできた。

膝をつく度、地に伏せる度、何度も何度も仲間や街中の人々に助けられ支えられてきた。

丁度今、この瞬間のように。

決して、決して諦めず、進み続けたその先に。

今この瞬間に。

金獅子將軍レオンハルト・シューゼンワルドの切っ先は、今、『創造の魔手』の核をとらえた。

「……で終わらせる……!!」  
突き刺す剣と共に振り絞られたのは、レオンハルトの願いであり、  
確固たる意志である。

200年にわたる戦いの日々を、流された血を、失われた命を、  
自らの代で終わらせる。迷宮の最深部へと続く階段は、レオンハ  
ルトにとってはただの迷宮の階段ではない。仲間の骸で築かれた、血  
で染まった道なのだ。

「すべてを無意味になどはせぬ！ 我に続きし者たちを、費やされ  
た時間も、何もかも！ 決して、決して!!」

駆け抜けた死人の階層に、迷宮討伐軍の、共に戦い死んでいった  
仲間たちの姿がなかったことに、レオンハルトは誰より安堵したに  
違いない。彼らは今なおレオンハルトと共にあるのだ。レオンハ  
ルトの剣と、迷宮を斃すというその意志と共に。

レオンハルトの切っ先が、彼に続くディックの槍が、隊長たちの  
剣戟が、次々と止むことなく『創造の魔手』に突き立てられる。魔  
物を生み出すことに特化した迷宮の主の両の手は、わなわなと震え  
るように枝を何度も引きつらせながら、それでも空を掴もうと震え  
て動いた。けれど、その手が何かを生み出すことはもはやなく、根  
元から切り倒されたかのように、くたりと倒れて動かなくなった。

雷に打たれた倒木のように、黒変し根元から折れて倒れた『創造  
の魔手』を見ながら、「勝ったのか……」とレオンハルトは自問す  
る。

勝てる見込みも、敵を追い詰める実感も、感じてはいなかった。  
前に進む以外の選択肢がなかったただけだ。

レオンハルトを、未来を信じて、彼に付き従った兵士たちと共に、

必死に剣を振るう以外に道がなかっただけなのだ。

第57階層での『多脚の刃獣』との戦いに向けて、全員の武器や防具を強化していた。アダマントイトやバジリスク、赤竜といった、今ある最強の素材を惜しげもなく使って。もちろん予備の武器もポーションなどの備えも階層主戦を数回こなせるほどの量を準備していた。

万一に備えていつもより十二分に備えてきたのだ。

『多脚の刃獣』を倒した後、下階層から溢れる死人によって、レオンハルトらは進軍する以外の選択肢を失った。第58階層は炎災の賢者が引き受けてくれたおかげで、死人を掻き分け突き進むだけで済んだものの、この第59階層での消耗は思いのほか激しかった。

万全とも思えた備えだったのに、地上に戻る選択肢を失ったレオンハルトらの予備の武器はとうになく、鎧もへこんだりつなぎ目が痛み、外れてしまった部位もある。

荷運びの奴隷やラプトルに持ってこさせた矢や投槍などの消耗品もほとんど底をついていて、ポーションに至っては運んできたものどころか、その材料の地脈の欠片さえ尽き果てている。

それでも。

この場所で、今動いているのは、レオンハルトが率いてきた迷宮討伐軍だった。

「勝ったのだ……」

レオンハルトはこぶしをにぎる。

「我々が、生き残ったのだ……！！」

声高に、勝利を宣言することは無い。ここで終わりでないことを

全員が知っているからだ。レオンハルトの宿願通りすべてを終わらせるためには、この一戦で満足し立ち止まるわけにはいかない。

レオンハルトは彼の兵士を、共に戦った仲間たちを振り返る。

皆疲れ果て、大地に座り込んでいます。その数は、この階層に辿り着いた時よりさらに減ってしまっていて、怪我を負っていない者など誰もいない。

特級のリジエ<sup>再生</sup>ネ薬のお陰で、徐々に回復してはいるが、ポーシヨンや治癒魔法が必要な重傷者もいる。

けれど、誰の目も希望を失ってはいない。ここまで来られたのだ。この階層を攻略できたのだ。次の一步をためらう者は誰もいしなかった。

「ニーレンバーク、無事か」

「ああ、將軍よりはな」

魔物と患者の血で得体のしれない色に染まった格好で、ニーレンバークが現れる。彼も戦っていたのだろう。何気ない様子でポケットに突っ込んだ左手は肘まで酷い傷があり、特級のリジエ<sup>再生</sup>ネ薬の効果で、現在進行形で回復している。

恐らくは見えないところにも傷があり、このように歩いて来るのは辛いだろうに、何事もなかったかのように、いつもの不機嫌そうな様子でやって来る様子に、レオンハルトは感謝にも似た気持ちを覚える。

レオンハルトは將軍で、皆を率いる立場にある。誰よりも心強く皆に頼られ皆を率いていく者だ。けれど、ニーレンバークはレオンハルトによけいな気苦労をかけさずまいと、自らの状態を隠して平穩を装っているのだろう。そんな様子は、他の兵士たちにも見て取れて、レオンハルトは自分が今なお己の脚で立っていられるのは、皆に支えられているからなのだ、尽きた力が腹の底から湧き上が



つてくるのを感じた。

（まだ、やれる。まだ、剣を握れる。迷宮の主は生きているのだ……）

レオンハルトは大きく一つ呼吸をすると、剣の柄を握る手に力を込めてニールンバークに命令を下した。

「まだ戦えそうな兵士を中心に治療を。完了次第、先へ進む」  
「……分かった」

それは非情な命令だった。けれど誰も異論を唱えはしない。他に選択肢がないことを誰もが分かっているからだ。

一旦地上に戻りたくとも、一つ上の階層はきつと死人が蠢いている。

炎災の賢者がその身を犠牲に死人を引き付けて、道を拓いてくれたけれど、一国分の死人とそれを滅ぼした魔物がいるのだ。いくら意識がおぼろげで、つぎはぎの体で能力が劣っていようと、一人の人間が焼き滅ぼせるものではないだろう。

物資は尽きかけ、負傷者は多い。もう一戦を乗り越えられる望みは薄い。けれど、ここで引き返したら、折角ここまで弱らせた迷宮に復活する暇を与えたら、迷宮都市が生き残る可能性はきつとゼロになってしまっただろう。

ニールンバークの指示により、マリエラのもとに僅かばかりの地脈の欠片が集められた。どれもこの階層で倒した魔物から回収したものだ。月の魔力や《薬晶化》した材料も残り少なく、マリエラはニールンバークの注文に従って、重要なものから一つずつ錬成していく。

「マナポーションはこの2本で最後です……」

「それは、君たちが飲みたまえ」

「え……、でも……」

マリエラの膨大な魔力は、度重なるポーション錬成で尽きかけている。魔力切れ寸前で意識が飛びかけている状態だ。それでも、ポーションを作り終えてしまったら自分にできることは無いのだからとマリエラはぎりぎりまでマナポーションを飲まずにいた。

ジークも精霊眼を使う度に魔力を消費していて、あと何本も弓を射れないだろう。けれど、矢の数が残り少ない。剣でマリエラを守るのならば、まだ大丈夫だとマナポーションを飲まずにいた。

「飲みたまえ。君たちの仕事は、これで終わりではないはずだ」

「……はい」

「はい」

この二人を回復させる理由を知る者は、ここにはレオンハルトとニーレンバークのほかは、当事者二人しかない。ジークの精霊眼が復活した日に『木漏れ日』にいたメンバーだけで、理由と云っても「喰われかけたエンダルジアを助けるために、この二人が必要だ」とフレイジージャに聞かされただけだ。

ニーレンバークも、始めは劣化速度の速いマナポーションを作るために錬金術師マリエラを同行させる必要があるのだと思っていたし、ジークに至っては単なる戦力だと思っていた。けれど、こんな迷宮の最深部に至って、それだけではないとニーレンバークは感じていた。

論理的な根拠があるわけではない。けれどこの場所は、今感じているこの感覚は、あの夜『木漏れ日』でエンダルジアを見た、地脈の中にいた感覚にどこか似ていて、あの時“エンダルジアの命は長くない”と直感したように、エンダルジアを救うためには二人の力

が必要なのだとニーレンバーグはそう確信していた。

そのような直感めいた感覚は、レオンハルトも感じているのだろう。

随分数の減ってしまった兵士たちと共に、下層へと続く階層階段を、もはや階段とも呼べない深淵への穴を見つめるレオンハルトも。

「いくぞ」

レオンハルトの号令のもと、今あるポジションや治療魔法だけでは戦線に復帰できない重傷者を岩陰に残し、50名ほどまでに減ってしまった迷宮討伐軍とマリエラ、ジークムントは、静かに下層への階段を下っていった。

その道の終（後書き）

ざっくりまとめ：長かったラスダンも最終局面へ！

最下層（前書き）

微グロ注意

## 最下層

そこは、これまでの暗闇がただの悪夢であったかのような、光あふれる場所だった。

暗く長い夜を瞬時に塗り替える朝の光のような、身の内が癒され清められていくような神々しさと、暗闇に冷え切った体を芯から温めてくれる希望に満ちたぬくもりがその光にはあった。

迷宮の中だというのにその階層に果てはなく、自分が今床だと認識している場所以外は地面さえもあやふやだ。

まるで地脈に来たみたいだと、マリエラはそのように思った。

迷宮が、地下へ地下へと掘り進んでいったのは、ここへたどり着くためだったのだと。

エンダルジア王国の、防衛都市の人々を平らげ、共に攻め込んだ魔物同士が喰らい合い、最後に残った一匹が、ここを目指して王国の大地を喰らい進んだ。

地脈の力を吸い上げて、地下へ、地下へと魔物を生み出しながら。

その経路は迷宮となって、人の進行を阻んできた。

今ようやくその理由がわかった。時間を稼ぐためだったのだろう。

迷宮の主がここへ至るための。

途中、右脚を、左脚を棄て、腹を置き去りにし、両手さえ失って、ようやくここへ至ったのだろう。

今ここにいる迷宮の主は。

ここは、迷宮60階層は、地脈に届く深い場所。

50階層を超える成長した迷宮の魔力が、物理的な距離や次元を超越して、地脈に接続できる場所なのだろう。

迷宮の最深部に辿り着いたレオンハルトらの前に、200年の長きに渡る宿敵たる迷宮の主と、この地脈を統べる精霊・エンダルジアの姿があつた。

迷宮の主とは、迷宮を討伐してきた者ならば相對するだけで、それとわかるものだ、そう言い伝えられてきた。

確かにその通りだと、レオンハルトは迷宮の主を見てそう思った。

最深部へとたどり着こうと進軍を続けるレオンハルトらを、拒絶し続けた迷宮の意思を、眼前の者から感じたからだ。

けれど、このような姿を想像しただろうか。

手もなく脚もなく、脊椎さえも覗かせた頭部と胴体だけの無残な姿で、迷宮の主はエンダルジアに喰らい付いていた。

温かな光を放つエンダルジアは、わずかに人の姿が認識できる程度の輪郭のあやふやな存在で、物理的な深さとは違う、人の測り知れない深層に存在する膨大な地脈の力の一部なのだと、マリエラは己のラインを通じて理解した。マリエラたちが存在する物質の世界と、見えず触れられずともそこに確かに存在する、精霊や魔力や命たち。世界と地脈の関係は、そういった一見異質で隔絶したようにも思える物質とエネルギーが、同時に変換し合いながらも存在している世界のありようそのものだ。

地脈と一体化し、管理者として存在するエンダルジアは、地脈と世界を巡るエネルギー、《命の雫》の流れを調整し、管理する存在なのだろう。彼女はその力を使って、愛した人間を彼らの住まう王国ごと守護し続けてきたのだろう。エンダルジアの瞳である、精霊眼を媒介にして。

けれど、今のエンダルジアは、今にも消えてしまいそうなほどに存在自体が弱々しい。肉眼では迷宮の主に“喰らい付かれて”いるように見えるけれど、ラインを通じてマリエラが感じ、ジークの精霊眼に映る今の状態は、迷宮の主が口を開ければ解放されるというものではない。

地脈の管理者としての力ごと、存在そのものが迷宮の主に取り込まれかけているのだ。

自らの存在ごと取り込まれ、消えかけていようと、人を愛し共に在ることを選んだエンダルジアが、人を滅ぼしこの地を魔物の領地にしようと願う迷宮の主を受け入れることは無いのだろう。

エンダルジアに喰らい付き、地脈にまで侵食し、一体化しつつある迷宮の主の体は、迷宮の主を否定し拒絶するエンダルジアの意識によって、焼かれ、破壊されていた。

ただでさえ四肢をなくした痛々しい体であるというのに、迷宮の主の残された体躯は、血が沸騰し、肌は焼け崩れて炭化し、あるいは沸騰した体液にぼこぼこ膨れ上がっていた。体内で圧力が急激に変動しているのだろう、目玉は飛び出たり破裂して、喰らい付く口の端からはブクブクと血の泡が吹き上がる。

その激しい変貌ぶりに、この迷宮の主が元はどのような魔物であったのか、その面影さえ窺うことは叶わない。

けれど迷宮の主には、一体化した地脈から大いなる力も流れ込んでいる。自らのものとなった地脈の力で迷宮の主の体はどれほど酷



い状態になろうともたちどころに回復し、そして相克のエネルギーによってすぐさま破壊されている。

延々と繰り返される破壊と再生。

その責め苦の果てに、受け入れられぬ悲しみの末に、迷宮の主は何を望んでいるのだろうか。

とりもどさなきや　　。

マリエラは、地脈とつながる太いラインを通じて、迷宮の主の想いを聞いた気がした。

（あのお話と同じだ……。エミリーちゃんたちが読んでいた『エンダルジアの物語』と……）

マリエラは、かつてエミリーたちが『木漏れ日』で読んでいた、『エンダルジアの物語』を思い出していた。

精霊エンダルジアや動物たちと静かに暮らしていたのに、にんげんの狩人がやってきたせいで森を追われた哀れな魔物。

自分たちの居場所を取り戻そうと、狩人の村を襲った魔物たちは、狩人を失ったエンダルジアの悲しみと子供を守ろうとする強い意志によって、魔の森へと追いつかれ、二度とこの地に戻れなくなった。

魔の森は人間の領土となったエンダルジア王国よりずっとずっと広大で、魔物たちが暮らす場所は十分にある。こんな小さな土地にこだわらなくても十分生きていけるのに。

あの物語を聞いた時、マリエラはそんな風に思っていた。

けれど、迷宮の主の姿を見た今は。

（魔物たちが取り戻したかったのは、この土地じゃなくて、エンダルジアと過ごせる場所だったんじゃない……）

魔物を魔物たらしめる物、それはその身に宿る魔石だという。

この世の穢れと魔力が凝り固まって魔石になるとも、穢れた魔力が凝り固まって魔物が生じ、そこに魔石が生ずるのだともいわれているが、穢れとは人から生じるものだと言われる。

人間の悪意が憎悪が嫉妬が恐怖が憤怒が欲望が。

餓え乾き満たされることの無い「穢れ」が凝り固まって生じた魔物は、人が憎くて仕方が無い。

人間さえいなければ、もっと穏やかな生き物のままエンダルジアや森の動物たちと一緒に暮らしていられたのに。

魔物は人と相容れない。

魔物と人が出会ったならば、どちらかが滅びるか隔絶するしか道はない。

エンダルジアは狩人を愛し、人間を選んでしまったのだ。

だからもう、魔物と共にはいられない。

けれど、魔物を滅ぼせなかった。かつての仲間を殺せなかった。

だから、魔物を隔絶した。狩人たちの村から。エンダルジア王国から。

それは、エンダルジアの思いやりでさえあったのだろう。

けれど、哀れな魔物にはそんな想いは伝わらない。捨てられたと、奪われたとそうのように感じたのかもしれない。

とりもどさなきゃ。

狩人の村から締め出されても、魔の森ですつと機会を窺っていたのだろう。ずっと、ずっと、楽しかったであろう微かな思い出だけを種族を超えて引継ぎ共有し続けて。

とりもどさなきゃ、エンダルジアをとりもどさなきゃ。  
。今なおも、狩人の村を襲ったときと同じ感情だけでエンダルジアに喰らい付き、地脈もろとも同化しようとする哀れな魔物。

想像だにしなかった迷宮の主のありさまに、マリエラたちが言葉を失って立ち尽くしていた時、ふつと微睡から目覚めるようにエンダルジアの目が開いた。ジークの精霊眼と同じ、緑色の瞳は左目の一つだけしか開かない。けれどその瞳が開いただけで、冬の枯れ木に若葉が芽吹いたような優しい彩りに満ち溢れるように感じられた。

よく、来てくれました。私の愛しい子供たち。

悠久の時間を生きる精霊エンダルジアにとっては、精霊眼を持つジークも、ラインを通し繋がるマリエラも、レオンハルトや迷宮討伐軍の兵士一人一人も、この地に住まう人間は等しく我が子なのだろう。その慈愛に満ちた微笑みは、全員に分け隔てなく降り注がれていた。

子供たちの成長を喜ぶ母親のような笑みを全員に向けたエンダルジアは、ひどく悲し気に表情を曇らせると、自らに喰らい付く迷宮の主に視線を向けた。

この仔には、もはや……、いいえ、200年前のあの日から、思考と呼べるものは残されていないのです。

スタンビード  
魔の森の氾濫の狂乱の日に、人間と仲間の魔物を喰らい個を超える力を手に入れた代償か、それとも200年もの長きに渡り、再生と破壊を繰り返してきた故なのか。迷宮の主には、「エンダルジアを取り戻したい」という感情の残滓が残っているだけで、この先に、エンダルジアと暮らせる日々が来はしないことを、理解できてはいないのだろう。

手も足も胴もなく、エンダルジアに喰らい付くだけのこの魔物の生れの果て、迷宮の主には、エンダルジアを食い殺し、地脈の主になり替わる以外の未来は残されていない。もし、地脈の主になり替わられたとて、ここまで擦り減り意識の欠片も残らぬものに、果たして耐えられるもののだろうか。

可哀そうなこの仔を、どうか解放してあげて。

エンダルジアは彼女の愛した狩人の血を最も色濃く引き継ぐジークムントと、ここまで彼らを率いて戦ってきたレオンハルトを順に見つめて、彼女の願いを口にした。その願いに答えるように、レオンハルトは力強く頷くと、宿敵たる迷宮の主をじつと見据えた。

「哀れな……。我が宿願たる敵はこのようなものだったのか……」  
恐らくは戦う力さえ持たない、エンダルジアを食い殺す以外の手段を持たない迷宮の主の前に、レオンハルトがぼつりと呟く。

こんな姿になってまで、エンダルジアを取り戻そうとした哀れな魔物に感じているのは、憐憫にも似た感情だろうか。

「ジークムントよ、奴をこの宿業から解き放ち、精霊エンダルジアを救ってくれ」

「はい」

レオンハルトの呼びかけに、ジークムントが応える。

このために、自分は精霊眼を取り戻し、この地にやってきたのだろう。

そんな確信が、この場に居合わせたジークムントにはあった。

「ジーク、これ」

「ありがとう、マリエラ」

マリエラは、木箱に入れられた一本の矢をジークに渡す。  
師匠から「一番最後に使え」と預かってきた物でラプトルに括り付けていたものだ。

きっと、今使うべきものだろう。

金属の矢尻すらない木製の矢は、『木漏れ日』の聖樹から削り出したものだ。

精霊エンダルジアは森の精霊の女王。

恐らくは聖樹の精霊たちの女王なのだろう。

だからこの矢はエンダルジアを傷つけない。

精霊眼を持つジークが使えば、同化しつつある迷宮の主だけを倒すことが可能だろう。

ギリリとジークが弓を引き絞る。

ジークの精霊眼に導かれ精霊たちが集まって来る。

精霊の女王・エンダルジアを助けるために。

(精霊エンダルジアよ、貴女が俺を導いてくれたのか……)

ジークは心の中でエンダルジアに問いかける。ジークがこの迷宮都市に移送されたまさにあの日にマリエラが目覚めたのは、彼女の導きによるものではないのかと。

マリエラに出会えたことだけではない。奴隷として僣<sup>こいつ</sup>僂の商人の息子に連れられ魔の森にやってきたあの日、森の精霊に導かれ命を救われたことも、もしかしたらワイバーンに精霊眼を潰されたあの瞬間に、偶然矢がワイバーンを倒し得たことさえ、ジークにはなにかあずかり知れない神秘的な導きのようにも思えた。

もしも、そうであるのなら。マリエラと出会えたことさえエンダ  
ルジアの、あるいは地脈の意志によるものならば。

（導きに、マリエラと出会えた己の運命に、深い感謝を　　）  
ジークムントは弓を引く。己の持てるだけの魔力と、深い、深い  
感謝を込めて。

その光景を見る者は、まるで虹のようだと、ジークの矢を取り巻  
く光を見て思ったという。

エンダルジアを、森の精霊の女王を助けたいという精霊たちの想  
いと力は、精霊眼の力で増幅されてジークのつがえる矢に集まる。  
人の身に御すことさえ困難な強い力の集積に、度重なる戦いで傷つ  
いたジークの体は限界を超え、関節も筋肉も骨さえ軋むような悲鳴  
を上げる。

（この一矢だけ持ちこたえてくれ……）

修練の日々に鍛え上げられたジークの肉体は彼の願いに見事応え、  
ジークの射は、彼の血に連綿と受け継がれた狩人の正射を見事放つ  
た。

まるで虹色の巨大な彗星のように、光をまとって飛んでいく聖樹  
の矢。

正しく射られたその一射は、精霊たちの力を乗せて必中する。

エンダルジアに喰らい付く、迷宮の主へと。

とりもどさなきや。

もう、いいの。還ってしまっかまわないのよ。みんな、待  
っているのだから。

それは、魔物とエンダルジアの語らいだったのだろうか。

みんな……？

ずっと、寂しかったのね。もう平気、さあ、皆のところに戻りましょう。

ジークの放った精霊の矢から溢れる光は、迷宮の主を包み込むように強く優しくあふれかえり、まばゆいばかりの光の中で、迷宮の主はほろほろと積もった雪が温かなお湯に解けていくように、光の中に消えていった。

みんな……の、ところに、還……れる。

まばゆくて、眩しくて、けれど目をさすような強い輝きではない、ただひたすらにやさしい光が消え失せた後には、迷宮の主は跡形もなく消え失せていた。そして静かな光の只中に、穏やかな光に包まれて、精霊エンダルジアが穏やかに微笑んでいた。

最下層（後書き）

ざっくりまとめ…迷宮の主へ還る



## 迷宮の核

ありがとう、愛しき子らよ……。ああ皆、本当に立派になりましたね。

たくさんたくさんつらい思いをしたというのに、ああ、なんて強く温かい心なのでしょう。

エンダルジアは、ジークを、レオンハルトを、マリエラやディック、ニーレンバーグやこの場所に辿り着いた一人一人の顔をゆつくりと見ていった。全員を慈しむように見回した後、エンダルジアはジークに視線を移す。

その瞳、あの人にそっくりな綺麗な蒼。貴方には特に苦労を掛けましたね。

精霊の、我が目を受け継ぎし愛し子よ。そして、私の愛しい子供たち。貴方がたにこれを託しましょう……。

エンダルジアがジークの方へ手をかざすように伸ばすと、ジークの目の前に黒くくすんだ、鈍い光を放つ珠が浮かび上がった。

「これは……？」

それは、迷宮の核。地脈の管理者の力の結晶でもあります。

ずっと貴方たちを見守っていたのだけれど、私にはもう、力が残されていないの。

だから、力ある精霊に、我が後継足りうる聖樹の精へ渡してください。

今は、魔物の瘴気で穢れてしまっているけれど、いつか浄化できた時、この地を再び守ってくれることでしょう。

愛しい者を見るように、大切な者を見るように、優しく優しくエ  
ンダルジアは微笑みをたたえる。

迷宮の核は地脈の管理者の力の結晶。長く迷宮の主に喰らい付か  
れて存在を削り続けたエンダルジアには、精霊として存在する力さ  
えもはや残されてはいないのだろう。

迷宮が生まれて以来の2000年、迷宮の主に喰らわれながらも耐  
え続け、この日を待ち続けたエンダルジア。

2000年よりはるか昔から、この地を、人々を守り続けたエンダ  
ルジア。

その慈悲に、大恩に報いることもできないまま、我々この地に住  
まう人間は、エンダルジアを失ってしまうのか。我らが母なる精霊  
を。

迷宮の核を手に、ジークムントはレオンハルトを振り返る。

方法は、エンダルジアを救う手立てはたった一つだけ存在するの  
だ。そしてそれは、大きな代償を伴なうもので、その決断はこの地  
で戦い続け、人々を守り続けたシューゼンワルド边境伯家を継ぐレ  
オンハルトにのみ下せるものだ。

ジークムントの視線を受けて、レオンハルトは静かに頷く。

「マリエラよ、2000年の時間を超えて遣わされし錬金術師よ……。  
精霊エンダルジアを救いたまえ。

迷宮の核を糧に、錬金術の至宝、『エリクサー』を今こそ錬成し  
賜え」

エリクサー。

伝説の秘薬。至高の秘薬。

どれ程の怪我也病もたちどころに癒やす錬金術の究極。

その難易度は、誰もたどり着けぬほどに高く、そしてその材料は。

このレオンハルトとジーク、そしてマリエラは、遠征の直前に、  
炎災の賢者・フレイジージャから聞かされていたのだ。

「今のマリエラにはまだ作れない。しかし、もう時間がない。だからマリエラを連れていく。どのみちこいつが居合わせなけりゃ錬成できないんだ。なに、後ちよっとだろうよ。道中でたっぷりポーションをつくりまくれば、恐らく間に合うはずだ」

アグウイナス家が100年以上かけてため込んできた地脈の欠片。その大半は遠征前にすでに特級ポーションや特級のリジエ<sup>再生</sup>ネ薬に錬成していたけれど、まだ材料は残っていた。《薬晶化》した各種ポーションの材料とともに、マナポーションや不足したポーションを、この遠征の最中にも、マリエラは休まず作り続けてきた。

持って来た地脈の欠片がなくなっても、途中で得られた地脈の欠片を使って、何本も、何本も。

一つの街が100年以上かけて生産するような、莫大な量のポーションをたった一人で作ってきたのだ。

その熟練、果てのない研鑽の末に、未だ誰もたどり着けなかった頂へと、錬金術師は至っただろうか。

けれど、錬金術師にその技能が備わっていたとして、材料がなければその伝説のポーションは、エリクサーは錬成できないのだ。

迷宮の核。地脈の管理者の力の結晶。

正しく力ある精霊に渡し、穢れを払えたならば、この迷宮都市はかつてのエンダルジア王国のように魔物を寄せ付けぬ安住の地となるのだろう。

そしてまた、その力を人が得たなら、どれほどの魔力を振るえるだろうか。

エリクサーの材料は、迷宮の核なのだ。それを使うということは、永劫の平和を、絶大な力を手放すことに他ならない。

けれどレオンハルトは僅かも迷う様子を見せず、マリエラにエリクサーの錬成を命じた。

「約束された安寧は墮落を、過ぎたる力は滅びを招く。研鑽なき日々に我々の存続はない。迷宮都市は我ら人間の街だ。我ら人の手で守り抜く」

レオンハルトの決意と共に、エリクサーの材料たる迷宮の核は、ジークの手からマリエラへと渡された。

マリエラの両手の上で、黒く穢れに染まりながらも、消えぬ光を放つ迷宮の核。

それはどんな絶望にも負けぬ人の強さを象徴しているようだ。

「これが迷宮の核……。あ、あの……。私……」

両手のひらの迷宮の核をじっと見つめた後マリエラは、ジークとそしてレオンハルトに向き直る。その顔は、何かを決意したかのような深刻なものだ。

「あの、私……、」

まだエリクサー、作れません……!!」

「え？」

「ええええ!？」

耳を疑うジークとレオンハルト。

そして「どうしよう……」とうなだれるマリエラ。

迷宮の核をどうするか、それについては何度も自問自答を繰り返して、十二分に検討してきたレオンハルトであったけれど、この展開は微塵も想像していなかった。

どうするよ？

いつもクールなレオンハルトが、そんな顔でジークムントを見つめている。

今まで散々、残念な展開に巻き込まれてきたジークと云えど、この土壇場でエリクサーに至れないとは考えだにできなかったろう。

どうしましょう、と疑問に疑問でかえすような表情で、レオンハルトを見返している。

誰も返す言葉を持たないサイレントな状況だというのに、互いの考えが顔に出すぎてよくわかる。

「迷宮の主まで辿り着けたなら、マリエラはエリクサー作れるようになったよ、ヨユーヨユー」とばかりに話していた酔っぱらい賢者の言うことを鵜呑みにしたのが間違いだったか。いつも酔っぱらっては禄でもない言動を繰り返すのに、未来のすべてを見透かすように、肝心の点はちゃんと押さえているようだったから、うっかり信じてしまっていた。

「うう……、師匠の言うことを信じたのが間違いだった……。やっぱり師匠はただのロクデナシだった……」

こんなことなら師匠の言うことなんか鵜呑みにせずに、特級ポーションを作り始めた練習の時から地脈の欠片を大事に使っておくんだったと、困惑げな二人の横で、マリエラもがっくりと頂垂れる。

「うう、もうだめだ、もうおしまいだ。ぜんぶぜんぶ、ししよーのせいだ……」

つい先ほどまで、マリエラの中の師匠は尊い犠牲的な雰囲気で、ただ一人迷宮58階層に残ったカツコイイ勇姿だったのに、いつもの駄目な酔っぱらいにすり替わっていく。

あの瞬間の師匠の評価がプラスに振り切り過ぎたため、その反動は果てしない。

この世のすべてが師匠のせいだといわんばかりのマイナスっぷりだ。ことが事だけに涙がポロリと零れてしまいそうだ。

「ししよーのロクデナシー！ いい加減！ 責任を追及するー！」  
自らの至らなさをさっくり棚に上げて師匠をデイスリ始めるマリエラ。死人に鞭打つ非道っぷりだ。あの師匠にしてこの弟子と言えなくもない。

その時。

「だーれがロクデナシだ。この馬鹿弟子が！」  
「ふえっ！？ 師匠！？」

炎災の賢者・フレイジージャが、この迷宮の最下層に、愛弟子マリエラと迷宮都市の大ピンチに駆け付けた。

「し、ししゅうー、ししゅううー！ ぶつぶじでえー！？」

あうあうと、混乱のあまり半泣きになりながら師匠の無事を喜ぶマリエラ。フレイジージャは服のあちこちが焼け焦げているけれど、大きな怪我は無いらしい。

「これは、炎災の賢者殿。あの大群の中、よくぞご無事で」

まさかあれほどの死人の大群と相對して生き残り、無傷でここまでたどり着けるとは。レオンハルトでさえ、フレイジージャの訪れを驚きつつも喜んでいる。

「あー、はいはい。マリエラはちよつと落ち着こうなー。いやなにね、死人の大半が死蝻化したからさー、何発かブチ込んだら後はポーポーポー勝手に燃えてくれちゃって。おかげで息ができなかったから、ちよーつと上階に避難してたもんで、こっち来るの遅くなっっちゃったんだけどさ」

有り難さが一気に半減する説明だ。確かに炎災の賢者の炎の精霊魔法はすさまじかった。階層を駆け抜けた端まで伝わる爆風に、背筋の寒くなる思いさえた。

けれど物量というのは侮れないものだ。特に痛みを感じぬ死人の群れは、魔力が切れたその隙に雪崩のように押し寄せて呑み込まれてしまうのではないかと思っていたのに。

(死蝻化……延焼したのか……)

数がたくさんいた上に、全員が狭い階層階段めがけて押し寄せたせいで、一部に着いた炎が次から次へと燃え広がって火祭りファイヤー状態だったらしい。

「どうせ師匠のことだから、上の階層から階層階段めがけて風とか送り込んでたんじゃないですか？」

「お、マリエラ鋭いー」

師匠は火魔法が大好きで、水魔法なんかはへたっぴだけれど、炎を煽り立てる風の魔法は結構上手に使えたりする。魔法のセレクトが火力中心なのが師匠らしいが、とにかく燃え盛る死人がきつちりしつかり燃え尽きるように、比較的安全な上階からせつせと酸素供給していたらしい。流石は賢者と言つべきか。いや『炎災』の二つ名は伊達でないというべきか。どちらにせよ、あまり褒める気が湧いてこない。

「無事を祝いたいところであるが、一つ困ったことがあるのだ」

一気に脱力した空気の中で、話を本題に戻すレオンハルトは流石である。

「ああ、マリエラの経験値が足りないんだろ？」

「師匠……、知ってて？」

「ふふ、だから来たんだよ。マリエラにあたしの錬金術の経験を丸ごと譲渡するためにね」

「経験値の……譲渡？」

「ああ。地脈とラインを結んだ時、地脈から連れ戻すために経験値を譲渡したろ？ あれの応用だ。本来だったら肉体にいる間は譲渡できないんだけどね、ここはひどく地脈に近い。ここなら、制限なく全部マリエラに与えてやれる」



にっこり笑ってそういう師匠。

「でっ、でも、そんなことしたら師匠はポーションが……」

ポーションが作れなくなる。それはずっとポーションを作り続け、錬金術に自らの存在意義さえ見出していたマリエラにとっては、耐えがたいことだった。

そんな大変なことをと顔を歪めるマリエラに師匠は。

「いや、もともとポーションつくってなかったし。めんどいからとあっさりと答えた。

(そうだった……、だから師匠は中級しか作れないだった……) 日々、「我こそは偉大なるししょー」とばかりに色んなことを教えてくれるものだから、てっきり錬金術の師匠なのだと思っていたけれど、炎災の賢者・フレイジージャは錬金術に限らずに、なんかマルチに師匠的な人なのだった。

「ハイ、わかりました。よろしくお願いします、師匠」

師匠の突拍子の無さで、少々和んでしまったけれど、今は僅かな時間さえない。こうしている間にもエンダルジアはどんどん存在を薄くして、消えそうになっている。

「うん。じゃあ受け取れ、マリエラ」

迷宮の核を持つマリエラの両手を師匠の両手が包み込み、師匠のおでこがマリエラのおでこにこつんとぶつかる。

《我が研鑽を、我が弟子に 伝えよ、我らが導の先へ》

何度もやられた《転写》みたいに、痛みを伴うものだと思っていたのに、経験値の譲渡はひどく優しく温かいものだった。幼い日、師匠に手を引かれ家へと帰って行くような、穏やかで温かいものに

マリエラは包まれていた。

「完了。あたしがマリエラにやれるものは、これで全部だよ」

「しししょう……」

師匠は優しい人なのだ。酒飲みで、傍若無人で、人様に迷惑をかけてしまうしようなない人だけれど、マリエラのように錬金術しか特技のない子供に全力で愛情を注いでくれるような、そんな素敵な人なのだ。

迷宮の深部で死人の群れを一人で引き受けて、皆に道を示してくれて、本当は恐ろしく危険なはずなのに、さらりと危機を脱してしまふ。そしてこうして、マリエラのピンチには絶妙なタイミングで駆け付けてくれるのだ。

なんでも知っているくせに、家事は何にもできなくて、不器用でおっちょこちょいだったりもする。

だから……。だから、こんなことがあっても、ちっとも不思議ではないのだ。

なんだかひどく納得しながら、マリエラは師匠に向かってこう叫んだ。

「ししよー！ もうちょっとだけ経験値が足りません！……！！」

## 迷宮の核（後書き）

ざっくりまとめ…さすがはししよー。期待通りだ！

そして……、次回は……！ お待たせしました的なアレの登場です  
！

## 錬金術師の頂き

「ええええええ！!?」

炎災の賢者と名高き我らが師匠、フレイジージャが、ピンチを察して完璧なタイミングでかっこよく登場したのに、周りの期待を一身に背負って経験値の譲渡なんてカッコイイことまでしたのに、マリエラはあとほんの少しだけエリクサーに届かなかった。

「ちょ……、なんで？ うっそう!?!」

「嘘じゃありませんよう、師匠！ 師匠が錬金術サボってるから！

うわーん、どうしよう!?!」

「ええええ。経験値あとどん位たんないわけ？」

「えと……、たぶん、特級ポーション1本分？」

あわあわと狼狽えまくる錬金術師の師匠とその弟子。

思わぬ展開の連続に、レオンハルトもジークムントも、ただのギヤラリーと化した迷宮討伐軍の兵士一同も、唾然として成り行きを見守っている。

エンダルジアに至っては、どこか遠い目をしながら静かに存在を消していく始末だ。大変だ。このままではエンダルジアが本当に消え失せてしまう！

「あと1本分？ 薬晶は残ってるな？ じゃあ地脈の欠片か！ よーし、お前ら！ お前らだよ、兵士諸君！ 全員っ！ その場でジャンプしろー!?!?!」

ものすごい剣幕で叫び出す師匠。流星は師匠の貫禄か、それとも

屈強な兵士諸君がひ弱なぼくちゃんだったころ、ガラの悪い冒険者に絡まれた去りし日の記憶が蘇ったのか、その場でどこかの辺境の部族よろしくぴよいんぴよいんとジャンプを始める迷宮討伐軍。そのジャンプに合わせてチャリンチャリンと舞飛ぶ小銭。

カオスである。何とか戦える者ばかりを連れて来たから兵士も小銭も全員元気に跳ね飛んでいるのが何とも言えない。

こんな茶番の為にわざわざ回復させたわけではないというのに。ニレンバーグは眼鏡をぐいと押し上げながら、どこかに地脈の欠片が残っていないものかとポケットを裏返している。愉快なジャンプをしていないのは、素材を拾ったりしないレオンハルトと、さきほど迷宮の主を倒したダメージと魔力の枯渇で意識も朦朧とマリエラのそばでへたり込んでいるジークくらいだ。

マリエラさえも、何かないかと飛び跳ねて、何かの遊びかと思っただのかラプトルとその頭上のサラマンダーも「グギャ」「キャ」と鳴きながらジャンプしている。

そしてこれほどの混迷を生じているにも関わらず、肝心の地脈の欠片は一欠片すら落ちてはこないのだ。この最深部に来る前に、最善を期そうとありったけかき集めてポジションにしたのだから、でてくるはずもないのだが。

こうやって時間を浪費している間にも、エンダルジアはどんどんその存在を消していく。

あと少し、あとほんのちょっとだったのに……。

「あー、どうしようー!!」

本気で泣きそうになりながらマリエラが叫び、へたり込んだジークがおろおるとポケットを漁る。

その時。

『ほんつと、ドジくせえなあ』

「……！？ リンクス？」

マリエラの耳に、リンクスの声が聞こえた気がした。

まさかと、後ろを振り返るマリエラ。くるりと振り向いた反動で、かつてリンクスがマリエラに贈ったペンダントが揺れて、チェーンがぷつりと切れ飛んだ。

コン、ココン。

迷宮の床を、雫型の仕掛け細工のロケットが弾んで転がる。

「ああっ、ペンダントが……！」

慌てて駆け寄り拾い上げたマリエラの手の中で、ずっと開くことがなかった細工仕掛けのロケットが、ぱかりと開いて中から地脈の欠片が転がりだした。

このペンダントは、迷宮都市に来たばかりのころにリンクスが贈ってくれたものだ。複雑な細工仕掛けのペンダントで、マリエラにはどうしても開けることができなかった。

リンクスが地脈の欠片をいたずらに封じ込めたまま、中身が入っていることさえマリエラもジークも忘れてしまっていた。それでもリンクスの形見として、ずっと肌身離さず持っていたものだった。

「リンクス……」

先ほど聞こえたリンクスの声は、幻聴だったのだろうか。

それとも地脈に近いこの場所で、リンクスが奇跡を起こしてくれたのだろうか。

マリエラの手にある地脈の欠片は何も答えてはくれないけれど、

この地脈の欠片は今まで触れてきたどれよりも、懐かしい感じがした。

この欠片が最後のパーツ。

これで、辿り着ける。

「マリエラ、そのペンダントは……」

「うん、ジーク。きっとリンクスが助けてくれたんだよ」

思いもかけぬ展開に、ジャンプを辞めて迷宮討伐軍の兵士が、レオンハルトが、そしてリンクスがもたらしただろう奇跡にジークが目を見張る中、マリエラは迷宮の核をいったんジークに預けると、リンクスがくれた地脈の欠片に力を込めた。

何度も何度も繰り返し返してきた特級ポーションの錬成工程、その総仕上げともいえる錬成だ。

### 《錬成空間》

（特級ポーションを作り始めたばかりの頃は、《錬成空間》を丈夫に作り過ぎて無駄な魔力を使っていたっけ）

マリエラは、師匠が来たばかりの頃を思い出しながら、《錬成空間》を展開する。視界の端で、なぜか師匠が「あたしは分かってたよ」的な表情をしているけれど、今の師匠は無視だ。ぷいと顔を背けて、記憶の中のちょっと美化した師匠である頃の記憶を再生しなおす。

地脈の欠片を《命の雫》に溶かすためには高温高圧が必要だけれど、無理やりぎゅうぎゅうに押し込めればいいというものではない。

地脈の欠片は魔物の体内で形成される生命力の結晶ともいえるもの。だから、魔物の意識の残滓が残っていて、宿していた魔物の漠

然とした生態や習性に特性が左右される。

高い温度で溶けやすいものや、急激な圧力変化を好むもの、温度より圧力をかけて欲しいもの。そんな好みに合わせて《命の雫》に魔力を込めて、環境を整えてやれば驚くほどによく溶ける。

（これは、どんな子かな）

この地脈の欠片は、帝都から迷宮都市にくる最中にリンクスが倒した魔物から手に入れたのだと言っていた。

（リンクスはどんな魔物と、どんな風に戦ったんだろう……）

リンクスを懐かしく思い出しながら地脈の欠片に問いかけるように探っていくマリエラ。

あれからどれだけの特級ポーションを錬成しただろう。数えられないほどたくさん錬成を繰り返し、少しずつではあるけれど、地脈の欠片の個性を探るのもだんだん上手になってきた。

しかも師匠の経験まで引き継いだ今のマリエラの錬金術の熟練度は、後ほんの少しで至高に届くほど高められていた。

ここ最近、量を捌くのに懸命で、地脈の欠片の個性などほぼ無意識に合わせてしまっていたけれど、こうして意識してみると素材の状態が驚くほどによく分かる。もともと薬草の状態や処理の履歴位は分かっていたけれど、今地脈の欠片からは、宿主の生前の記憶すら伝わって来る。

（あ……、これ狼の魔物だ。急に地脈の欠片が、つよい力が体に宿って、抑えきれずに走っていたのね。他の仲間も似たり寄ったりで、もっと荒れ狂った仲間もいて……、それでリンクスたちに襲い掛かって、討たれたんだ）

この地脈の欠片は黒死狼から得られたものだ。人狼にまで進化し



た仲間もいたが、地脈の欠片が身に宿ったのはこの個体だけだった。狼ならばまるで森を駆け抜けるように、温度と圧力を順に急激に上げてやればいいたろう。

（黒死狼って強いけど、地脈の欠片が宿るほどじゃないよね。珍しいな、一体何を食べたのかしら）

“ 走りたい、駆け抜きたい、もっと早く、もっともっと ”

そんな地脈の欠片の想いを《命の雫》の温度や圧力を急激に変化させることで叶えてやりながら、マリエラはさらにその履歴に意識を添わせる。

（あ……、この黒死狼たち、隊商を襲ったんだ……。ひどい。みんな痩せてて、ろくな装備も持ってなくて……。え……、これって……）

マリエラは手元の地脈の欠片から顔を上げ、ジークを見つめる。

この地脈の欠片はリンクスが倒した黒死狼に宿ったもの。そしてこの黒死狼はとある商隊を襲った黒狼が進化したものだった。

地脈の欠片から流れる記憶が、マリエラに襲撃の様子を伝える。

黒狼の群れが隊商に襲い掛かり、哀れな犠牲者を食い殺している間にラプトルにまたがり逃げ出した一人の男。ラプトルを必死に駆り立てているけれど、重たい鎧を纏った男を助けて後ろに乗せているから、追い縋る黒狼に見る間に距離を詰められている。

がぶりと男の左脚に喰らい付き、ふくらはぎの肉を喰いちぎる。

むせ返るほどの血の匂い、口腔を満たす、精霊に愛され力に満ちた人の肉。

（この黒狼が喰らった人肉は、ジークの……）

僂<sup>せむし</sup>の商人の息子に連れられ魔の森を訪れたジークは、黒狼に襲われてその足に深い傷を負った。精霊眼が宿るほどに精霊に愛され、高い能力を持つて生まれたその血肉は、僅かな肉片を喰らった黒狼を黒死狼に進化させ、地脈の欠片を宿らせたのだろう。

人狼にまで進化した個体は、何人もの哀れな借金奴隷たちを食い殺した別の個体だったけれど、世界に満ちる《命の雫》をその身に多く取り込んで、地脈の欠片を生じせしめたのは、ジークの肉を喰らったこの黒死狼だけだった。

そして、その1月ほど後に、魔の森に行く黒鉄輸送隊の手によって人狼と黒死狼は倒され、地脈の欠片はジークの近く、マリエラの手に戻ってきたのだ。今この時に、未来へつなく最後の欠片となるために。

なんて巡りあわせだろう。まるで初めから定められていたような。(ううん、違う。運命だけじゃ、絶対じゃない)

マリエラは、ポーションを作り上げながら今の自分に向き直る。今この場にあるために、自分は魔<sup>スタン</sup>の森の氾濫を生き残り、そして200年後に目覚めたのだと、そう思う。けれどここにいることは、まぎれもない自分の意思だ。飯死の魔法陣を描き上げて、師匠とジークと三人で逃げだすことだっただけなのだ。

けれど、マリエラはここに、迷宮の最深部へとやって来た。

それに……。マリエラはジークをじつと見る。

錬成の途中で視線を向けられたジークは、迷宮の核を両手に持つたままどうしたことかとマリエラを見返している。その姿は、迷宮の主を倒すため限界まで酷使したせいで、立ち上がることも困難な

ほどにボロボロだ。

「ジーク、いつつもボロボロだね」

「ん……？ ああ、すまない、だが、少し休んだらマリエラを守るくらいには回復できる」

「違うよ。ジーク、ずっと頑張ってた。すごくすごく頑張ってきたんだよ」

ジークがどれだけ努力してきたか、マリエラは知っている。

何度も悩んで、何度も悔やんで、それでも立ち止まらずにここまで一緒に来てくれた。

こんなにボロボロになってまで。

「ジークが諦めないで、ずっと頑張ってきたから、だから私もここまで来ることができたんだよ」

師匠の目覚めも導きも、定められた運命をなぞる様ではあったけれど。

ジークの頑張りには、そしてマリエラとジークが共に歩んできたこの道程は、決して定められたものではない。

(運命だけじゃ、きっと足りなかったんだ)

### 《薬効固定》

特級ポーションの完成と共に、マリエラは自らが、己の意志による修練の果てに、錬金術の頂きに辿り着いたことを理解した。

錬金術師の頂き（後書き）

ざっくりまとめ：リンクス ！！！！

地脈の欠片は物質化したエネルギー。リンクスに貰ったペンダントの柄はE || m c ^ 2です。（2巻巻頭コミック。KADOKAWA様HP等でサンプル見れるかと）分かる人はニヤリとしてください。

## エリクサー

今ならば、伝説のポーション、エリクサーを錬成できる。

マリエラは今度こそ自分がエリクサーを錬成するすべを得たと確信した。

ちなみに完成した特級ポーションは、ボロボロになったジークに飲ませている。

精霊眼を最大まで利用して、立ち上がれないほどに疲弊し、恐らく筋もいくつか千切れているだろうに、「俺は大丈夫だから」などと変な遠慮をしだしたので、「えい」とばかりにポーションをジークの口に突っ込んだら、むせながらも飲んでくれた。

(初めて会った日もこんなやり取りしたかもしれない……)

リンクスがくれたペンダントに始まり、昔を思い出してばかりだ。目覚めてからの日々を懐かしく思い返しながら、マリエラは迷宮の核をジークから再び受け取る。

エリクサーの作り方は《ライブラリ》には記されていない。けれど作り方など必要ないのだ。

どうすればいいのか、今のマリエラには理解できる。手にある迷宮の核が教えてくれる。

「始めます」

宣言し、ゆつくりと《錬成空間》を展開するマリエラ。

迷宮の核は純粹で高密度なエネルギーの集合体。そこに迷宮の主

たる魔物の瘴気が浸み込んで、黒く穢れてしまっているのだ。まずはこの穢れを取り払ってしまわなければ。

（穢れを払う……？ 違う、還すんだと思う）

魔物を魔物たらしめる世界の穢れが人から生じる物ならば、それは自分たち人間の一部でもある。ならば還すことができるはずだ。

### 《命の雫》

迷宮の核を閉じ込めた《錬成空間》内に《命の雫》を満たしてやれば、まるで飢え乾いた獣が水を飲み干すよう迷宮の核が《命の雫》を吸い込んで、その飲み込む量に見合わぬほど僅かずつではあるけれど膨張していく。

迷宮の核が《命の雫》を吸収するよりずっと多くの《命の雫》を汲みだしながら、マリエラは圧力と温度を少しずつ下げていく。

少しずつ、少しずつ。

滑らかな線を描くような緻密な錬金術の操作は、迷宮の核を扱う者に相応しい精密で高度なものだ。定められた温度や圧力から少しばかりの逸脱も許されない。

けれどマリエラにはどうということもない。このような作業など、幼い頃から何千回、何万回と繰り返し返してきた。

世界で最も高い山よりもさらに低い圧力と、北の果ての空気より冷たい温度になった時、迷宮の核が突如として真黒に染まった。そしてその次の瞬間には、黒白が反転しかき消すような勢いで迷宮の核は真っ白に変わる。

その後も、十分に《命の雫》を吸って膨張した迷宮の核に、温度や圧力、雰囲気を変えていく。工程の数は星の数ほどで、どれ一つとして間違えることができない。緻密で精密で基礎的な術を無

限に組み合わせた錬金術の技。ただひたすらにポーションを作り続けた者だけが行える、錬金術の頂。

熱い熱い溶岩躍る、火山の火口の奥の奥。

辿り着けない海の亀裂の、潜り沈んだ海溝の底。

深い深い大地の底の、熱く重く押し込められた太古の地点。

そんな世界の果ての果てまで巡り廻るかのように、錬金術師は《錬成空間》を、彼女の世界を変えていく。

その度に迷宮の核は色を変え、大きさを換え、いつしか《錬成空間》の中で浮び漂う液体へとその形を変えていった。

血液の赤、沈む夕日の茜、ひた紅に燃ゆる秋の木々の色。

春の若葉の萌黄、翡翠の球の光る碧、魔の森の深い森の緑色。

夜が近い空の藍、果ての見えない海の青、ジークの瞳の蒼い色。

マリエラの扱う迷宮の核は、まるで雲のように薄く大きく体積が広がったかと思うと、その膨張のベクトルは突如として反転し、急速にその体積を減じて結んだ木の実のようになる。

そこにあると感じられた質量が光と共に消えてなくなり、かと思えばなかったはずの質量が新芽が萌えるかのように増していく。

月の銀色、炎の黄金、蛍の燐光、闇夜の雷光。

淡く、激しく、やさしく、厳しく。色も光も移り行き変転として定まらない。

それはまるで、世界の移ろいゆくさまを早回しで見ているようだ。迷宮の核、もはや地脈の核と言うべきその変貌していくさまは、この地の記憶なのかもしれない。

「ああ、豊かで綺麗だね。この地脈は」

愛弟子の成長を、エリクサーの錬成を見守る師匠・フレイジーは地脈の核のたどる変遷に感嘆の眩きを漏らした。

その声が完了の合図であったかのように、錬金術師マリエラの手の中で、伝説の秘薬エリクサーは今ついに完成した。

「でき……ました」

はあ、と大きく息を吐き、マリエラは錬成空間の中で輝く液体を精霊エンダルジアへと差し出した。

「これが……エリクサー」

「まるで地脈の輝きだ」

レオンハルトやジークが見守る中、精霊エンダルジアはエリクサーを、そしてマリエラやレオンハルト、ジークたち人間一人一人に目を向ける。

ほんとうにいいのですか？ 私を助けてしまえば、エリクサーという稀有な秘薬は消えてなくなる。

例えエリクサーで長らえたとして、衰弱したこの身ではもはや地脈の管理はできません。

もはやただの精霊たる我が身は、現世に顕現する力も持たず、あなた方を見守り照らす僅かな力しか残されていないのです。

エンダルジアの問いかけに、マリエラはレオンハルトを、ディックやニーレンバーク、迷宮討伐軍の兵士たちを、ジークとそして師匠フレイジーを振り返る。みんな、マリエラとエンダルジアに穏やかな顔で頷いている。

「それで、十分なんです。立ち止まったり間違ったりもするけれど、そんな時にほんのちよつと先を照らしてくれるだけで。私たちはき



っと、自分の力で歩いていけるから」

そう言って、マリエラは《錬成空間》ごとエリクサーをエンダルジアへと差し出した。

ありがとう。

エンダルジアがエリクサーに触れた瞬間、マリエラたちのいる迷宮第60階層に優しい光が溢れかえった。優しく温かな光の奔流。

エンダルジアから溢れかえったその光が、マリエラたちの視界を埋め尽くす前に、マリエラはエンダルジアが誰かを見つめ微笑むのを見た。

子供たちを導いてくれて、ありがとう。

エンダルジアのその声を聴いたのは、その感謝を向けられた本人と、エンダルジアの一番近くにいたマリエラだけだったろう。

(誰に……、ジーク？ 違う……)

マリエラがエンダルジアの視線を追うよりも早く、周囲は光に包まれた。

まばゆい光が治まった後、迷宮第60階層は、何もなかった洞窟と化していた。

あれほど近くに感じられた地脈も今は感じられない、暗い、ただの穴の底。

真っ暗な洞窟で、ラプトルの頭上に陣取るサラマンダーだけが、まるで小さな燈火のようにマリエラたちを照らしていた。

「終わった……のか？」

レオンハルトは誰に問うでもなく呟く。急に暗くなった中、唯一  
明るいサラマンダーとラプトルに自然と皆の視線が集まって、急に  
注目されたラプトルは「どうしよう?」とでも言いたげに「ギャウ  
?」と鳴き声を上げる。

その可愛らしい鳴き声に頭上のサラマンダーが鳴いて応じた。

「ギャウウ、カエロウ!」

「サラマンダーが……、しゃべった!?!」

急に人の言葉を発したサラマンダーに驚くマリエラ。

「そうか……、ここは人の領域に、我らの大地に戻ったのだな……」  
200年にわたる宿願が今叶ったのだと理解したレオンハルトは、  
この地まで共に至った兵士たちを振り返ると宣言した。

「帰ろう、諸君! 我らの宿願は今果たされた! この地はすでに  
我らのものだ!

我らの、我らの勝利だ!」

「おおお!」

「帰ろう! 凱旋だ!」

「凱旋だ! 戻ったら祝宴だぞ!」

「酒だ! 酒蔵ごと飲み干すよ!」

「……ししよー、なに混じってんですか」

「ギャウ!」

\*\*\*\*\*

その日から、勝利を祝う祝宴は三日三晩も続けられた。

レオンハルトの勝利を伝える伝令は、直ちに迷宮を駆け上がり迷宮都市が正しく人の領地に戻ったことを街中の人々に伝えていった。

迷宮の主が斃されたことで、迷宮内に新たに魔物が生じること、魔物たちに魔力が供給されることもなくなったけれど、既に充満している魔力については自然に拡散していくのを待つ必要があるようだ。階層ごとに異なる気候を維持する迷宮の機能も魔力の減衰と共に失われていくのだろう。

統率されたように地上を目指していた魔物の群れは、バラバラにもといた階層に戻っていった。これまでは何も食わずとも存在できた魔物たちも、魔力の薄まりと共に存在を維持できなくなるだろうから、受肉できた個体は魔の森の魔物のように餌を喰らって長らえるだろうし、そうでない個体は自然に消滅していくだろう。

迷宮内部の気候の変動に適應できない個体も多いだろうから、数年から長くとも十数年の内にほとんどの魔物は死滅するのではないかと、意見を求められた炎災の賢者は語ったという。

迷宮の深層は、気候の維持だけでなく構造さえ迷宮の主の魔力で支えられていた部分が多かったから、50階層より深い層は地下水の流入や岩盤の崩落によって危険な状態にあるらしい。深層の崩壊の影響が地上に及ばないように、ウェイスハルトら魔導士たちは忙しい日々が続きそうだ。

しばらくは気の抜けない日々が続きそうだが、迷宮の崩壊も魔物の減少も、迷宮内に残る魔力の減衰と共に次第に緩やかに、時間をかけて進行していき、いずれは迷宮都市も魔の森のほりにある他の領地と変わらない、普通の街になるのだろう。

人の領地に戻ったこの街の周辺は、以前のように頻繁に魔物が現れることは無くなったけれど、かつてのエンダルジア王国のように

決して魔物に襲われない安住の地になったわけではない。人が魔物の巣窟にむやみに立ち入らないように、魔物も人の住処から距離を置く。獣どうしに縄張りがあるように、ここが人の領地だと住み分けられるようになったに過ぎない。

脅威と共に貴重な素材や資源をもたらした迷宮が失われたぶん、迷宮都市の人々は、魔の森を切り開いて農地を獲得し、魔の森の魔物から生活の糧を得る必要がこれから高まっていくのだろう。

迷宮の危機が去った今、今までのように帝国から格別の配慮を得ることも敵わなくなるから、この街は今まで以上に自分たちの力で生きていかなばならないのだ。

（望むところだ）

祝いの酒に酔いしれる迷宮都市の人々を、ともに戦ってきた仲間たちを見つめながら、レオンハルトは自信を深める。

この街は、自分たちは、己の力で進んでいけると。

聞けば此度の迷宮討伐には、老人から子供まで街中のほとんどの住人が参加したというではないか。

なんと頼もしい事よ。

なんと誇らしい事よ。

こんな民と共になら、どれほどの苦難であろうと乗り越えていくだろう。

希望に輝く人々を見ながら、レオンハルトは新しい時代の訪れを確かに感じ取っていた。

三日三晩にもわたる祝宴に、人々は酔いしれ共に祝い合った。

怪我人も少ない数ではなかったけれど、治療より酒が先だと祝宴に出ては、ニーレンバーグやロバートに手荒い治療を受けていた。

師匠はシューゼンワルド辺境伯家の酒蔵を本気で空にする勢いで、

じゃぶじゃぶお酒を飲みながら、こともあろうにレオンハルトに、「らから〜、《命の雫》は地脈と命を廻ってるんら〜。らから、ほんつとーに必要な時には、ぜーんぶ整うもんなんらつて〜、昔っからいつてるらろ〜」

などと言つて絡みまくつていて、師匠系のミツチエル君に引きはがされている。

ヴオイドとエルメラのシール夫妻はいつものことだが、人前でいちやつかない派のアンバーさえもディックの無事を人目もはばからず喜んでいたし、なんとあのエドガンまでもが迷宮で助けた女性冒険者たちにキヤーキヤー言われてだらしなく鼻の下を伸ばしていて、黒鉄輸送隊の面々に冷やややかな目で見られている。

いつもは冷たくあしらわれているハーгейまでもがギルドの幹部に囲まれて、何度も酒を酌み交わしているし、キャロラインはウエイスハルトと微笑み合い、エミリーやシェリー、エリオにパロワラ子供たちも、この日はかりは夜更かししても怒られない。

木洩れ日の常連であるガーク爺やゴードンたちドワーフ3人組、メルルさんに薬師たち。みんなみんな楽しそうで、まるで夢の中の光景だ。

「リンクスのお陰だな」

マリエラの隣でジークがつぶやく。

「うん、いいところ、持ってかれちゃったね」

マリエラが見上げるジークは今まで通りリンクスに貰った眼帯をしている。

特級のリジエ<sup>再生</sup>ネ薬の影響は人それぞれだけれど、ジークの場合は精霊眼を中心に影響を受けているらしく、かつての強い力を失ってしまった。エンダルジアが地脈の管理者でなくなったため、ジークの精霊眼を依り代にして街を守ることはもちろんできないのだけ

ど、精霊眼自体も弱くなってしまったらしく、目を開いているだけで精霊に力を与えることは無くなってしまった。

それでも精霊に愛される体質はそのまま、精霊眼を通じて魔力を与えれば、姿を現し矢を強化したりして助けてくれるのだそうだ。もちろん今までのように、地脈と一体化したエンダルジアから無尽蔵に《命の雫》がながれてくるわけではないから、ジークの魔力の範囲でとなる。

今はまだ、精霊眼の制御が難しく、精霊眼を開いているだけでどんどん魔力を消費してしまうから、こうして眼帯をしている。

「リンクス、もう還っちゃったのかな……」

胸元のペンダントを握り閉めながら、ぼつりと呟くマリエラ。リンクスの声が聞こえた気がしたのはあの時の一回だけだった。リンクスに貰ったペンダントは、チエーンを直して再び着けているけれど、複雑な細工ものの鍵はあの時落ちた衝撃で壊れてしまったようで、今ではボタン一つで開閉できるただのロケットになっていた。

その事実が、リンクスがすっかり地脈に還ってしまっただけでこの世のどこにも残っていないのだと、マリエラに告げているような気がした。

「マリエラ、俺がいるから」

「うん。ジーク。ずっと一緒にいようね」

祝宴の夜は、迷宮都市の人々の明日への期待そのものに、夜を徹して行われた。

そして、やがて夜は明ける。

祭りの後の静けさと、酔いの名残を滲ませて。

静かな夜明けだ。まるで街中が騒ぎつかれて寝入ったような。朝もやに煙る路地には人影はなく、夜明けを告げるモルゲナさえも今日は鳴き声を潜めているようだ。

そんな静かな早朝に、『木漏れ日』の裏口が音もなく開かれて、炎災の賢者・フレイジージャが一人家の中から現れた。

エリクサー（後書き）

ざっくりまとめ：エリクサー完成。そして未来は人の手に。



## 賢者

街中が眠り込んだまま、誰も目覚めぬような不思議な夜明けに、家の中から現れた炎の髪を持つ賢者は、来た時と変わらぬ軽装で、聖樹のそばへ歩み寄る。

「イルミナリア、マリエラたちを頼んだよ」

軽く幹に触れたフレイジージャは、それだけ言つと庭を抜け裏門へと進んでいった。一体どこへ行こうというのか。けれど彼女が裏門を開ける前に彼女を呼び止める者があつた。

「……黙つて行つちやうんですか？ 師匠」

「マリエラ……、寝てなかつたのか」  
眠りの唄を歌つたのにな、と苦笑交じりに話し師匠にマリエラは、「師匠の行動なんてお見通しなんです。眠らずの香を焚いたんですよ」

とむくれたまま返事をした。

裏口に立つて動こうとしないマリエラにフレイジージャは歩み寄ると、「成長したな」と笑いかけた。

「ごまかされませんよ、師匠。勝手にいなくならないでつて言ったの……」

「はは、悪いな。マリエラ。しみりしたのは苦手なんだよ」

そんな話をしたのは、迷宮を斃す少し前、水晶窟で師匠と二人夜を過ごした時だった。あの頃から、マリエラには何となく迷宮を斃せたとしても師匠はどこかに行つてしまふのではないのかとそんな予想があつたのだ。

「どうしても、行っちゃうんですか？」

「ああ。あたしにはやらなきゃならないことがあるんだよ」

マリエラは行かないで欲しいとも、どこに行くのかも聞かない。聞いたって答えてくれないことは分かり切っているからだろう。ただ、マリエラの頭を幼い頃のように撫でてくれる師匠にぎゅっと抱き着いて別れの時間を惜しんでいた。

「また……、会えますか？ 師匠」

「うん。マリエラが生きてる間にもう一度会いに来るよ」

師匠はこんな約束を、絶対にやぶったりはしない。できない約束はしない、そんな人だから、きつとまた師匠と会える日が来るのだろう。そう思ってもマリエラは、師匠と別れがたくて師匠の服の裾を握りしめたまま、放すことができなかった。それに、マリエラにはどうしても、師匠に聞いておきたいことがあった。

ずっとずっと聞きたくて、けれど聞くのがどこか怖くて、ずっと口に出せずにいたことだ。けれど今を逃してしまったら、もう一生聞き出すことはできないかもしれない。マリエラは意を決すると顔を上げ、長く胸につかえていた疑問を師匠に向けて問いかけた。

「ねえ、師匠。どうしても、私だっただけですか？ 錬金術のスキルを持った子なら他にもいたのに。錬金術だけじゃなくって、魔法や剣も使える子だっただけにいたのに……」

マリエラがまだ幼かったあの日、どうしても、自分を選んでくれたのか。錬金術のスキルしか持ってない、役に立たない子供だった自分を。

いくら考えても自分が選ばれた理由がわからなくて、聞きたくて、けれど怖くて聞けなかった。今ようやく聞けたのは、この迷宮都市であったジークヤたくさんの人たちが、『木漏れ日』に、マリエラのそばに来てくれたからだ。皆がくれた小さな自信が、マリエラ

に勇気を持たせてくれたのだ。

意を決して問いかけたマリエラに、師匠は優しく微笑むと、昔を懐かしむようにマリエラの頭をなでてこう言った。

「そうだね、マリエラ。お前は錬金術の他は、何にもできやしなかった。それでも、ふてくされたりせずに自分のできることを頑張ってた。まだちっさな子供だっというのにさ。

だからだよ。マリエラ。

錬金術しか持っていない、自分のできることだけをただひたすらにやり続けられるお前だからこそ、錬金術の頂きに、エリクサーに届き得た。

ほかの誰でも駄目だったんだ。

マリエラ、お前だけが届き得たんだ。

だからあたしは、この炎災の賢者・フレイジージャはマリエラ、お前を弟子にした。

それを決して忘れるな。自信を持って、マリエラ。

お前は、あたしに選ばれて、そして自らの努力によって、誰に劣ることのない至高の錬金術師になったんだ」

「しししょう……、しししょう、あじがとう、あじがどうづいばず」

湿っぽいのは嫌だなんて言っていたくせに、どうして師匠は全力でマリエラを泣かせに来るのか。

折角師匠の裏をかいて、こうして別れに立ち会えたのに、師匠の思わぬ攻撃に完敗を喫したマリエラは、うええと声を上げながら師匠にしがみ付いて思わず泣きだしてしまった。

そんなマリエラをあやすように、ぽんぽんと背中をなでてくれる師匠。師匠にとってマリエラは、幾つになっても幼い子供のままなのかもしれない。

そんな師匠にあやされながら、マリエラは消えぬ疑問に思いを馳

せる。

2000年と少し前、たくさんの子供たちの中からマリエラを見出し弟子にして、マリエラの自覚しないうちに錬金術の英才教育を施した師匠。錬金術師には本来必要のないはずの仮死の魔法陣を習得させ、大量の燃料の入るランタンが備えられた空気穴のない地下室付きの小屋を与えた師匠。

当代のアグウィナス家の当主、ロブロイにレインボーフラワーを売りつけて、エンダルジアの王子と美姫の縁談を決定づけたのも、師匠の計らいだったはずだ。エンダルジア王国の栄光と存続を信じて疑わない国民でなく、他国の姫君だったからこそ夢枕に現れた精霊エンダルジアの言を信じ、魔の森スタンビートの氾濫の災厄を逃れることができたのだ。その身に宿ったエンダルジアの血を引く双子らと共に。

そしてこの時代に、マリエラがリンクスを失った悲しみに立ち上がれなくなったその時に、目覚め再びマリエラの元へ現れた。マリエラたちを、迷宮の最奥へ、エンダルジアの元へ導くために。

まるで全てを知っていたようだ。

師匠には高度の鑑定アカシックレコードのスキルがある。世界の記憶にアクセスできるのだから、師匠のすべてを見透かしたような言動自体には、マリエラは疑問をいだいていなかった。「師匠だし」の一言で思考停止する程度には、この超人との付き合いは長い。

けれど、それならば。先を見通す力があるのならば、師匠は何を望むのか。

マリエラにとって大切なのは、師匠が自分に偽りなく愛情を注いでくれた事実で、そこに微塵も疑いはない。マリエラにとってフレ

イジージャは、師であり親である大切な人だ。そんな人の望みが、真の目的が、200年後の今の世界を救うことだけでないことをマリエラは薄々気が付いていた。

師匠にとつては、精霊エンダルジアを救うことも、迷宮都市の人々を救うことも、そのために200年もの昔にマリエラを弟子にしたことさえ、大切な何かを成すための手段に過ぎないのでは。マリエラはそんな風に考えていた。

「し……、師匠。あの、これ……」

何とか泣き止んだマリエラは、裏口のそばに立てかけていた長い筒を師匠に渡す。

「これは？」

「仮死の魔法陣……。いるかなと思って、1枚だけ作っておいたんです」

マリエラが差し出す魔法陣の入った筒を受け取る師匠。

「助かるよ、マリエラ。これを《刻印炎授》で再現するのはちーとばかり大変なんだ」

そう言って笑う師匠を見ながら、マリエラは「やっぱり」と、自分の想像が恐らく当たっているのだらうと実感した。

「じゃあ、達者でな」

師匠はもう一度マリエラを抱きしめた後、まるで酒場にでも出かけるような気軽さで、軽く手を振りマリエラの元を去っていった。

「師匠！ 師匠こそお元気で！ 本当に、本当にありがとございましてー！！」

マリエラが師匠を見送るために裏門に駆け寄ると、師匠の姿は路地のどこにも見えなくて、師匠にぎゅっと抱きしめられた温もりだ

けがマリエラの体に残っていた。

(結局、聞けなかったな……)

一番聞きたかったことは聞くことができたけれど、師匠に関することだけは、マリエラは聞くことはできなかった。きっと尋ねても困ったように笑うだけで教えてくれないのだろうけれど。

「師匠。師匠は、いつから……、いつまで生きなければいけないんですか？」

それがマリエラの二つ目の疑問だ。

炎災の賢者の名前は、古いおとぎ話にもあるのだとマリエラは聞いたことがある。初めは同じ二つ名の別人だと思っていたけれど、もしも師匠であるならば。

一体師匠はいつ生まれ、何度仮死の魔法陣を使って時を超えてきたのだろうか。一体何の目的で。そして師匠の目的は、いつ達成されるのだろうか。

「《命の雫》は地脈と命を廻っている。だから本当に必要な時には、全て整うものなのだ」

迷宮を斃した祝いの席で、師匠はそんなことを言っていた。

それが本当だとすれば、いつか全てが整った時、師匠の目的は叶うのだろうか。

(そんな日が一日も早く来ますように)

マリエラは、この地の深くに流れる地脈に心からそう願った。

## 賢者（後書き）

ざっくりまとめ：師匠の謎は謎のまま……。

と見せかけて、師匠の謎は本編終了後、外伝にて書く予定です。  
本編もうちょっとだけ続きます。

獅子の牙は迷宮に眠る（前書き）

ざっくりまとめ：レオンハルトはノーマルエンドを望む。そして次回……最終回！



## 獅子の牙は迷宮に眠る

帝国中で上演するたび人気を博す演目がある。

『金獅子の牙は迷宮に眠る』と題されたその戯曲は、題名からうかがい知れる通りレオンハルトの迷宮討伐をモチーフにした物語だ。

石化の呪いで床に伏したレオ將軍は、死の淵で精霊の女王に出会う。

地脈の管理者たる精霊の女王は、迷宮の主に力を奪われ食い殺されそうになりながらも、レオ將軍を助けるために奇跡を起こす。

レオ將軍の病床で精霊の女王に祈りを捧げる弟のエイズとその婚約者のキャシー。精霊の女王はキャシーと地脈を結びつけ、錬金術師として誕生させたのだ。

錬金術師の古い家系の令嬢であるキャシーは、伝承し続けてきた知識と精霊の奇跡によって石化の呪いを解くポジションを作りだし、レオ將軍は一命を取り留める。

生還を感謝し、精霊の女王の救出を心に誓うレオ將軍。

精霊の女王の啓示を受けたキャシーが作り出すポジションとレオ將軍率いる軍の活躍によって、迷宮討伐は大きく前進するが、さりとて迷宮も大したもの、あの手この手で行く手を遮る。

レオ將軍の近距離攻撃と、エイズ副將軍の長距離攻撃。二人の兄弟は力を合わせて立ち向かうけれど、ついに力尽きそうになる。

追い詰められたレオ將軍は禁断のポジションを使用する。もちろん、エイズ副將軍や兵士たちもだ。禁断のポジションの効果は素晴らしく、一騎当千の力を得た彼らはなんとか迷宮の主を討伐し、精

霊の女王を解放する。

レオ將軍率いる兵士たちの働きによって、命尽きる前に救い出された精霊の女王であったが、迷宮の主につけられた傷は深く、今にも消えゆかんばかりだ。

そんな精霊の女王を救うべく、迷宮の核の力を精霊の女王に使うレオ將軍。

かくして精霊の女王は生き残り、大地はレオ將軍ら人間の領地になった。

ああ、けれど。

禁断のポーションを使ったレオ將軍たちは、その副作用で一騎当千たるその力を失ってしまう。精霊の女王も長く迷宮の主に蝕まれたせいで、もはや姿を現すことすらかなわない。

演劇の最後は、大地に片膝をついたレオ將軍が、剣を支えに立ち上がるシーンで終わる。

英雄たるレオ將軍を見上げる兵士たちの眼差しと、背後に浮かび上がる魔物の影の対比が彼らの苦難に満ちた未来と、それでも折れぬ意志を観客に伝える。

そして、このようなナレーションで締めくくられるのだ。

『迷宮を斃したレオ將軍らの栄光は、文字通り英雄譚として語られるべきものに違いない。』

けれどその英雄たちは、禁断のポーションの副作用によって、すでにこの世から失われてしまった。

生き残った彼らは、英雄たちの記憶だけを受け継いだ抜け殻で、迷宮すら凌駕した力は残されてはいない。

凡百たる戦士となり果てたレオ將軍と彼の兵士たち。

彼らは過去の証人であり英雄譚の語り部として、後人にこの迷宮の物語を語り継いでいくばかりだ。

獅子の牙は今も迷宮に眠っているのだ』

\*\*\*\*\*

「まあ、だいたいあっているのだがな」

「真実が混在している、という程度では？」

迷宮討伐軍基地の自室で息子からの手紙を手に、『金獅子の牙は迷宮に眠る』について述べるレオンハルトと相槌を打つウエイズハルト。

むろん、二人ともこの戯曲の内容は知っている。

迷宮の討伐以降、忙しい日々が続いてとても帝都に観劇になど行く暇はないのだが、この戯曲は迷宮討伐の関係者にとって重要な意味を持つものだから、忙しい合間を縫ってウエイズハルト自ら監修したのだ。

「それで兄上、手紙にはなんと？」

ウエイズハルトの問いに、レオンハルトは『金獅子の牙は迷宮に眠る』を観た息子からの手紙に再び目を落とす。

「どつやら終わり方が気に入らんらしい。『迷宮を斃された父上は、今なお帝都の誇るべき英雄です』だそうだ」

手放しの息子の賞賛に、少し照れたように笑うレオンハルト。

「真つ直ぐにお育ちだ」  
ウエイスハルトも手紙の内容に笑みを浮かべる。

年若い少年からすれば、この結末に納得はいかないだろう。主人公たる将軍が、ましてや自分の尊敬する父親が、苦難の末に迷宮を斃したのだ。彼は英雄として偉業に見合った称賛を受けるべきだと思うのは当然だろう。

事実、レオンハルトの実力が特級リジエネ薬の副作用で低下していなければ、レオンハルトは皇帝直属の軍に将軍として招聘され、厚く遇されていたことだろう。

レオンハルトがAランクの実力を有していれば、彼の率いる軍隊はBランク程度の実力者集団であっても《獅子咆哮》の効果でAランク程度の集団へと変貌するのだ。帝国においてもBランクの実力者は数多いが、Aランクの数は少ない。

まさに一騎当千の軍隊として、レオンハルト率いる軍隊は、帝国に仇なす敵を倒しつづけたのだろう。

帝国中の賞賛と敵の血をその身に浴び続けながら。文字通り命潰えるその日まで。

「真つ直ぐなだけでは、これからの世は生き残れまい。剣を交えぬ戦いも教えていかねばなるまいな」

レオンハルトは息子からの手紙を折りたたんで封筒にしまうと、大切そうに引き出しに収めた。その表情は厳しい口調と裏腹に穏やかで、口元には笑みさえも浮かべている。

今のレオンハルトは特級リジエネ薬の副作用でBランク程度の実力しかない。Bランクの実力者は数多いから、彼の率いる軍は屈強ではあるのだが、帝国において飛びぬけた軍事力を誇るとはいいが

たくなっていた。

2000年にわたる懸案事項であった迷宮を滅ぼした功績は高く評価され、皇帝により見合った荣誉と褒章を贈られたレオンハルトではあったが、その待遇は戯曲が謡うように既に過去のものである。獅子の牙は滅びた迷宮の奥底で、眠りについてしまったのだ。

その事實は、今まで迷宮に縛り付けられていた抜きんてた戦力が帝都に台頭してくることを恐れた帝都の貴族たちに一定以上の安堵を与えた。

彼らは口でこそレオンハルトらを英雄として褒めそやすけれど、その力が過去のものであり、これからも魔物蠢く魔の森のほとりの領地を帝都の壁として守り続けていくことに、憐憫と愉悦と安堵を感じているわけだ。

「人生における成功の定義は人によって異なるということを、あの師弟によって学んだよ」

帝都の貴族連中の思惑とは裏腹に、レオンハルトは迷宮都市にとどまり続けられる現状にひどく満足していた。もう少し情勢が安定すれば、妻子もここへやって来る。戦うことしか知らなかったレオンハルトに、新しい生活が訪れるのだ。

マリエラたちに出会う前のレオンハルトであったなら、迷宮を斃した後は皇帝に仕える將軍として帝国の敵を薙ぎ払う、栄光と血にまみれた道にこそ己が人生の成功を見たことだろう。

「ウェイスよ、栄光とは、人生における成功とは一体なんだろうな。我らは迷宮を斃すことを悲願とし、2000年に渡って挑み続けてそれを成しえた。なるほど、これは一つの成功と言って良いだろう。けれど、道半ばで命潰えた我が祖らは、共に戦い迷宮を斃すことな

く散っていった同志たちはどうであろうか。彼らは敗者なのだろうか。

彼らにはあきらめなかった。挑み続けた。故に我らは勝利した。それならば、これは散っていった彼らも含めた我々全員の成功であり、彼らもまた、迷宮を斃した英雄の一人たりうるのではないか」

レオンハルトは窓から訓練に励む兵士たちを眺めながらウェイスハルトに語り掛ける。

基地ではディックが特級リジエネ薬の副作用で弱体化した兵士たちと一緒にあって厳しい訓練に励んでいる。ディック自身も特級リジエネ薬の副作用で随分弱くなってしまったと落ち込んでいて、必死で訓練を行っている。

マルローによると、なんでもディックは特級リジエネ薬の副作用のせいで、妻アンバーに喧嘩で負けてしまふのだそうだ。つまみ食いしようと思えばした手はことごとく掴つかまれて避けられないし、怒られると分かっているのに「そこに座りな！」と言う声に逆らえないらしい。

「素早さだけでなく魔力抵抗が下がっているのかもしれない」と、深刻そうに相談されたそうだが、ディックは元からアンバーに上手くあしらわれていて一度だって勝てたためしはないから、そこで弱体化の度合いを測るのはどうかと思うのだが。

程度も深刻さも人それぞれではあるのだけれど、失ったものを一日も早く取り戻そうと、日々訓練に励む兵士たちをウェイスハルトもひとしきり眺めると、レオンハルトに心から同意した。

「はい。兄上。この勝利は迷宮都市の、200年にわたる歴史が成し得た成功でしょう」

この勝利が、成功が、皆で成し得たものならば、2000年にわたり迷宮と対峙し続けた人々は何のために戦ったのか。顔も見たことのない帝都の貴族たちの、形だけの賛辞を得る為ではないはずだ。だから彼らの賛辞など大して価値のないことで、険しく苦しい戦いの果てにこうして穏やかな日々が訪れたことこそが、レオンハルトらにとって最大の褒章だと、兄弟は心からそう思えた。

とはいえ、帝都で上演されている『獅子の牙は迷宮に眠る』では、レオ將軍の最後はとも幸せそうには演出されていない。

物語の主人公たるレオ將軍の手元には、迷宮を斃した瞬間から『過去の栄光』しか残されていないし、劇中でレオ將軍との恋愛さえ予想させた精霊の女王は何の力も貸してはくれない。迷宮の核も使ってしまった。迷宮を斃したことで街は人の領地に戻ったけれど、魔物の影が暗示するように平和が保障されたわけではないのだ。危険が去ったわけではないのに、禁断のポーションの副作用でレオ將軍と兵士たちの戦力さえ低下している。

とてもハッピーエンドとは言えない幕引きだ。

この演劇を観た者は、主人公であるレオ將軍に感情移入した者ほど納得のいかないすつきりしない気分になるだろう。

もつとも、このもやもやとした終わり方こそが、この演劇が長く人気を集める要因になったし、何よりもレオンハルトらの意図するところであつたのだが。

「これで帝都の性悪貴族共もしばらくは静かにしていることだろう」「ええ。この戯曲をうのみにする者はいないでしょうが、監察官の報告もありますし」

迷宮を斃したレオンハルトたちにも、迷宮を失った迷宮都市にも、もはやさしたる価値はない。

そのように帝国の人々に思わせることこそが、この戯曲の真の目的であったのだ。

迷宮という脅威が去った迷宮都市には、幾つも課題が山積していた。

レオンハルトらの功名に、ある者はあわよくば恩恵に与ろうと笑顔で集り、ある者は嫉妬から失脚を願って妨害を企てる。そんな有象無象を相手している暇などありはしない。

迷宮は脅威ではあつたけれど、魔物の素材や薬草など多くの資源の宝庫でもあつたから、それらが枯渇していくのに合わせて、迷宮都市は産業の形態を変えていく必要があるというのは大きな課題の一つだろう。

迷宮都市の周囲に農地を切り開き、帝都との街道を整備して魔物の素材を交易する。

人の領域に戻った迷宮都市には、エンダルジア王国時代のように精霊の絶対の守りがあるわけではないが、魔物の生息域は魔の森の奥の方に移動していて、今までの魔の森の中で野営するような魔物が我が物顔で出現する状態から、魔の森に面した他の村々と同程度にまで危険度はさがっている。

もう、昼でも魔物が農地に現れることはめつたに起こらないだろうから、迷宮都市に必要な食料を生産することも可能になっていくだろう。

魔物の狩場や薬草などの採取場所は、迷宮から魔の森に変わっていく。これも、エンダルジア王国時代の冒険者たちがやってきたことで、格別の旨味は無いが、特段困難な事業でもない。今でも魔の森の周辺の村々では行われていることだ。



大きな変化ではあるからシューゼンワールド辺境伯家の政治手腕の見せ所ではあるのだけれど、レオンハルトにはウエイスハルトをはじめ頼りになる臣下が多い。

迷宮を共に倒した彼らとならば成し遂げられぬ事ではない。

それに、この街には昔と違って錬金術師が何人もいるのだから。

「監察官といえば、錬金術師の話をしたときは傑作だったな」

「ええ、本当に」

レオンハルトとウエイスハルトは、エリクサーを作り上げた錬金術師について聞かされた時の監察官の様子を思い出し、二人して笑いだした。

\*\*\*\*\*

「ところで、これは小耳にはさんだのですが、迷宮の討伐に錬金術師が参加したとか。その者は今どこに？」

不自然な切り出し方をした監察官は、帝都でも珍しい堅物で有名な貴族だった。賄賂など毛嫌いする潔癖なその男を監察官によこしたのは皇帝の温情でもあったのだろう。迷宮を斃したばかりでその価値を値踏みされていた迷宮都市にこの監察官が真っ先に派遣されたおかげで、情勢の不安定な迷宮都市を荒らそうとする胡乱うらんな貴族を牽制けんせいすることができたのだから。

「これはお耳が早い。確かにその錬金術師がいなければ、そしてポーションという奇跡の薬が存在しなければ、我らは迷宮を斃せず、地脈を浄化できなかつたでしょうし、この迷宮都市にこれだけはやく新たな錬金術師を誕生させることもかなわなかつたでしょうな」

監察官の質問に、「新たな錬金術師の誕生」という情報を加えて

応じるレオンハルト。これは伝えなければならない情報だった。

「新たな錬金術師……ですか？」

「そうですね。かの者は迷宮の討伐の後、幾人もの弟子を取りこの地に新たな錬金術師を誕生せしめた。ウエイズ、今何人だったかな？」

「は。たしか今日で78人目だったかと」

78人。このべらぼうな数字を聞いた監察官は、さっと顔色を変えて声を上げた。

「78人ですと！？ そんなに大勢？」

卿はご存知ないのですか。錬金術師は弟子に地脈契約コントラクトさせる時、その経験値を分け与えるのですぞ。

そんなに大勢の契約を行えば、その錬金術師は力を大きくそがれ、二度とエリクサーを作ることが叶わなくなる！」

やはりか。レオンハルトとウエイズハルトは監察官の発言に彼が迷宮都市を訪れた真の目的を理解した。錬金術師マリエラの力を計りエリクサーの秘密を暴こうというのだ。

「ええ、それは確かに惜しい事ではありますが、これは迷宮の討伐の為にこの街の貴族たちと結んだ約定であり、なによりかの錬金術師が望んだことでもあるのでね。」

この街のポーション供給をたった一人に頼るなど、街の運営上致しかねるということもある。

そもそも、エリクサーが作れたとしてその材料がなければ作り様がない。これは迷宮都市にとって有益かつ妥当な選択だと我らは判断している」

「……、エリクサーの材料とは一体？」

エリクサーが作れる高位の錬金術師が、弟子を取りまくってその能力を大きく下げ、もはやエリクサーを作れない、という想定外の事実を前にして、そうであるならば代わりの情報をと切り替える監察官。もともと錬金術師は地脈を離れて錬金術は使えないから、情報収集こそが目的だったのかもしれない。

もちろん、入手可能な材料であれば、であるのだが。

「エリクサーの材料ですか？ それは『迷宮の核』です」

迷宮の核。

そんなもの容易に手に入るものではない。

階層の浅い、若い迷宮を斃しても手には入らず、50階層に近い成長した迷宮は討伐自体が難しい。

そして、それを作成しうる錬金術師の極めて高い熟練度。

エリクサーが得られる条件を満たすなど、どれほど奇跡的な確率か。

あれは奇跡でも偶然でもなくて、地脈が、エンダルジアが導いた必然であったのではなからうか。魔の森の氾濫の惨劇を超え、あの錬金術師が200年後のこの地に目覚めたのは、そして、ジークムントという精霊エンダルジアの血を引く者と出会い命を助けたことでさえ、何ものかの特別な計らいが無ければ成り立たなかったと思わざるを得ない。

もしも、人の身でエリクサーを飲んだならば、その身は人という存在さえも超越し、地脈の管理者として未曾有の力と永遠の生命を得ることが可能かもしれない。しかし、そもそも人という矮小な存在が、地脈の管理などという大それたことを成せるとは、迷宮の主の有様をつぶさに見届けたレオンハルトにはとても思えなかった。

レオンハルトらの、二度とは手に入らないエリクサーという至宝も、至高に至った錬金術師の能力が低下している現状さえもを惜しむでもなく受け入れている様子に、監察官は彼らが一連の奇跡を定められた運命として受け入れているように思えた。

「そう、ですか。かくのごときものでありましたか……」

監察官はその後数日、迷宮都市に滞在し、差しさわりのない視察を行ってから帝国へと帰っていった。

彼は、この迷宮都市が、屈強なる軍勢も至高を極めた錬金術師も、持てるすべてを費やして迷宮を斃し、平凡な街になり替わってしまったと報告をするのだろう。

そして、帝都で上演される演劇は、マリエラや『炎災の賢者』、『隔虚』の存在をうまく隠したまま、迷宮都市の物語を悲劇にも似た英雄譚へと変えていってしまうのだろう。

レオンハルトもマリエラも、迷宮討伐軍の兵士たちも、この迷宮都市が持てるすべてを費やし消費したことを些かも惜しんでなどおらず、200年の長きに渡って望み続けた平穏なる日々を手に入れたことにひどく満足しているのだけだ。

## はじまりの錬金術師

「帝都の貴族共の関心を逸らすのにいささか時間を要してしまつたが、此度の迷宮討伐にこれほどの貢献をしてくれた、お前たちに然るべき褒章を取らせぬわけにはいかぬだろう」

内々の話だからと地下大水道を經由してレオンハルトらの屋敷に招かれたマリエラとジークムント。てつきり、師匠が飲み散らかした酒代を請求されるのかと内心焦っていたマリエラは、逆に何か貰えるのかとほっと胸をなでおろしていた。「胸のつかえが取れた」といった表情だ。もともとマリエラの胸にはつつかえるようなものは無いのだが。

「マリエラ嬢、君はエリクサーを錬成した迷宮都市で、いや、帝国で最高の錬金術師だ。すでに多くの貴族の子弟を弟子にして貰っている手前もある。然るべき爵位が必要だろう」

「え………?」

何をくれるのかとワクワクしていたマリエラだったが、形のないめんどくさくてよくわからないものをやるうとレオンハルトは言い出している。

「もちろん君もだ、ジークムント。精霊眼の秘密は我々しか知らぬこととはいえ、君は正当なエンダルジア王国の後継者。国はすでにないとはいえ、マリエラさんの今後を考えても然るべき立場は必要となるう」

ウェイスハルトもジークの方に話を振っている。こちらは「マリエラとの今後」というジークがピンポイントで食いつく餌をぶら下げていて、なかなかの策士ぶりだ。

レオンハルトらが言うように、マリエラはもう何十人もの弟子に地脈契約コントラクトさせていて、迷宮都市は今、空前の錬金術ブームだ。

これは、ポーシヨンの市販に先立って迷宮都市内の貴族たちを説得するためにフレイジージャが用意したカードでもある。「協力すれば錬金術のスキルを持つ子供を地脈契約アルケミスト・コントラクトの錬金術師にしてやる」と。

錬金術のスキルを持つ者は数多い。実子にスキル保有者がいなくとも、養子をとることはたやすいだろう。

今まで一人しか錬金術師がいなかったのだ。一族の者を錬金術師にできれば、得られる利益は計り知れない。そんな風に考えた貴族は数多くいて、皆こぞって迷宮討伐軍に協力してくれた。その対価として十数名もの貴族の子女や関係者の子供たちが、『木漏れ日』の裏庭で聖樹の精霊イルミナリアに連れられて地脈に潜り、錬金術師として地脈とラインを結んでいた。

もちろん、錬金術師になれたのは貴族の子弟だけではない。街中のポーシヨンを作りまくったマリエラの経験はその程度で無くなりはないし、地脈契約コントラクトの時に還って来れない危険性を考えて、全員地脈の浅い層でしかラインを結んでいないから、契約時に消費するマリエラの経験値も大した量ではない。

ちなみに弟子たちのラインの太さは帝都の錬金術師並みだ。マリエラのラインが異常に太いだけで、普通は地脈の浅い層で細いラインしか結ばないのだそうだ。《ライブラリ》の情報開示設定も帝都標準で、完全に暗記しなくても閲覧できる仕様だし、魔道具の使用も禁止されていない。

ポーシヨンの安定供給を最優先にすべきだという観点から、帝都標準仕様での錬金術師大量育成方針となったわけだ。帝都の標準仕様については、フレイジージャ師匠の破天荒ぶりに、キャロライン

がアグウィナス家にいる帝都の錬金術師達から情報を集めてくれたから間違いはないだろう。

ちなみにマリエラの弟子1号はキャロラインだ。

帝都で演劇『獅子の牙は迷宮に眠る』を見た者や、迷宮都市でも情報に疎い者などは、迷宮討伐軍の情報操作も相まって、アグウィナス家のキャロラインこそが『はじまりの錬金術師』だと思っている。醸し出す雰囲気やオーラがマリエラより余程それらしいから、二人並んで「はじまりの錬金術師と最初の弟子です」と紹介されれば十人中十人がキャロラインを『はじまりの錬金術師』だと思ってしまうし、マリエラに至っては十人中一人くらいは「最初の弟子はどこですか？」とマリエラをスルーしかねない。

キャロラインを表に立たせることは、平民で権力どころか立ち振る舞いも危なっかしいマリエラをフォローするための施策の一つで、キャロラインが自ら望んだことである。

キャロラインの年齢は地脈と契約を結ぶには十七歳と高くはあったのだが、念願の錬金術師になれるという喜びと、ずっと手を握っていたウエイズハルトの呼びかけで、驚くほどあっさりラインを結んで還ってきた。

以来、もともとの知識量とセンスの良さ、勤勉さが相まって、あつという間に中級が作れるようになってしまった。上級までは少々長い道のりだろうけれど、キャロラインならばじきに作れるようになりそうだ。

中級で満足してサボり放題だった、どこぞの飲んだくれ師匠とはえらい違いだ。

貴族の子女たちに遅れはしたものの、迷宮都市の薬師の子供たちも順次、地脈と契約し錬金術師になっている。契約の時期に多少の遅れはあるけれど、親に習って薬師として薬草の勉強をしたり、手

伝ってきた子供たちだから、それくらいのハンデがあつて丁度良いくらいだろう。

一気に増えた弟子たちに、マンツーマンで指導などできるはずがなく、弟子たちの教育は迷宮都市の学校で授業として行われている。教師はマリエラだけでなく、アグウィナス家で新薬の製造に携わっていた帝都の錬金術師たちも招集されている。

座学は彼らでマリエラは実技の担当だ。

ちなみにマリエラの実技講習は、「難しいことを簡単そうにやり、説明が抽象的すぎてわかりにくい」と若干不評ではある。新米師匠、大ピンチである。

「こうなつたら弟子1000人目指そうかなー」

弟子たちの不評を知つてか知らずか、授業の合間に依頼された特級ポーションを作りながらそんなことを言い出すマリエラ。

「これ以上数が増えたら、面倒見切れないだろう？」

もう、既に見れていないけれど、という心の声は口に出さず、マリエラの護衛として学校に同行しているジークが言う。

「うーん、でもさ、《ライブラリ》あるから、勝手に育つんじゃないかな？」

流石、フレイジージャに育てられただけはある。実に放任主義な教育方針だ。弟子たちより先にマリエラに『師匠教育』が必要かもしれない。

お陰様で、マリエラよりも一番弟子のキャララインのほうか余程師匠らしいと尊敬を集めてしまっている。マリエラのことを「師匠」と呼んでくれるのは、『木漏れ日』のちびっこ4人組のうち唯一錬金術のスキルを持っていたエミリーちゃんだけだ。もっともエミリーちゃんも普段は「マリねーちゃん」呼ばわりで、何かお願いがあ



る時だけ「マリしよう」とマリエラの機嫌を取っているだけなのだが。

そんな、貫禄のかの字もないマリエラなので、弟子たちにはあまり尊敬されていない。特に貴族の子女の一部にはマリエラの授業を受けずに帝都から錬金術師を家庭教師として呼び寄せる者もいるほどだ。

そんな状況にもマリエラは、  
「新しいポジションができるかも！ 《ライブラリ》 チェックなくちゃ！」

と何の危機感も持つてはいないのだが、新たな時代を迎えようという迷宮都市で錬金術師たちにおかしな派閥ができるのは歓迎できることではない。

マリエラの身の安全を守るためにジーク以外にも護衛を永続的に付けるにしたって、金銭やら名目やら身分といった面倒なものがたくさん必要になって来るのだ。

そういった事情から、マリエラとジークの今後について、爵位を与えて後見を定める方向で話を勧めようと考えてレオンハルトとウエイズハルトであったのだが。

（よくわからない……）

マリエラには話の内容も意図もサツパリ理解できなかつた。

（伯爵？ 子爵？ 男爵？ どう違うの？ 全部偉い人じゃダメなのかな……）

ひっくるめるのは駄目である。

肉屋と魚屋を間違えたって、「うちにや、それは置いてねえなあ。代わりにこいつはどうだい？ うまいぜ」で済むのだろうが、偉い人ほど身分や肩書にこだわるものだから、爵位を間違えたりしたら

大変なことになってしまっ。

明らかに分かっている顔をしているマリエラを見て、この案ではうまくいかないと感じたジークは、「恐れながら……」とレオンハルトらに再考を促すべく口を開いた。

「身に余るお話、恐縮ではありますが、俺はただの狩人の倅せがれです。浅学の身に爵位など馴染む者ではございません」

「なに、エンダルジア王家とて、元は狩人ではないか。『精霊眼』が宿るほど強く血を引いているのだ。身に余るということはあるまいよ」

ジークの言葉を謙遜と取ったウェイスハルトは大丈夫だと返すのだが。

「ですが、ウェイスハルト様。俺の父も祖父も『精霊眼』は持っておりませんでした。けれど、『精霊眼』の持ち主自体は、この20年間およそ絶えることなく出現していると聞き及んでおります」「つまり？」

「はい。エンダルジアの血を引く者は、恐らく俺以外にもたくさん存在しているかと」

ジークの答えにレオンハルトは思わず天を仰いでしまっ。

長らくエンダルジア王国の血を受け継いでいるのは自分たちシューゼンワルド辺境伯家だけだと信じていたのに、その証たる『精霊眼』は男系継承で自分たちには受け継がれていない。しかもその男系の血筋はこの200年の間に広く拡散しているというのか。

エンダルジア王国時代、随一と謳われた美姫の美貌と狩人の技。スタンピード魔の森の氾濫を生き残り、ひそかに市井に逃がされた王子とその子孫は、伴侶に困ることは無かったらしい。一族大繁栄状態で知らな

い親戚いっばいだ。これにはエンダルジアもっこりだ。

「さりとて、君の腕前と、マリエラ嬢の錬金術師としての腕前はそれだけで家を興すに値しよう」

それでもめげないウエイスハルト。確かに帝都の特級ポーションをつくれる錬金術師は、幾人も弟子と多くの護衛に囲まれて偉そうにふんぞり返っていた。

弟子の数だけは負けていないマリエラだけれど、彼女の能力を考えば、警備も含めて然るべき体制を整える必要があるのかもしれない。

(そうはいつでもな……)

ジークは横に座っているマリエラを見る。すっかりジークにお任せモードのマリエラは、出されたお茶菓子を頬張っている。実に美味しそうな食べっぷりだが、貴族令嬢に相応しい優雅さなどは微塵もない。爵位を貰って身分を得たとして、その暮しにマリエラが馴染めるとはジークにはとても思えなかった。

レオンハルトやウエイスハルトはマリエラのことを、未だに立派な錬金術師だとどこか誤解しているのではないか。そう思ったジークはとっておきの切り札を切ることにした。こんなこともあるつかと用意してきた書類が入った封筒をすつと差し出すジーク。

ウエイスハルトは差し出された封筒を訝し気な表情で受け取ると、中を開いて驚愕の表情を浮かべた。

「なっ、これは……。まさか……。」

「はい。ウエイスハルト様。そのような次第であるのです。ですから我らに貴族としての暮らしが務まるとは思えないのです……。」

……マリエラの賢さは、3なのです」

「ふえっ！？ ジーク？」

ジークの止めの一言に、静まり返るレオンハルトとウエイズハルト。そして危うく茶を吹きかけたマリエラ。

ジークが差し出した封筒に入っていた書類は、二人が迷宮都市に来たばかりの頃に、ジークと見せ合ったマリエラの鑑定紙だった。錬金術師であるというのに、賢さでジークに負けてしまったマリエラはその鑑定紙を寝室のタンスの奥にしまい込み、折を見てこっそり捨てたはずだったのだが……。

「なっ、なんで？ 捨てたはず……」

「……落ちていたから拾っておいた。返す機会を逃していたんだが、思わぬところで役に立ったな！」

にっこりと笑ってみせるジークムント。落ちていたなんて絶対嘘だ。ゴミ箱に入っているのに気が付いて、拾って保管していたに違いない。

「まさか……、あれほどの知識を有する錬金術師が賢さ……」

ウエイズハルトはマリエラの鑑定紙を何度も確認しながらつぶやいている。

一言で賢さと言ってもその能力は様々だ。記憶力、思考力は大きな要素と言えるだろうが、計算能力や空間認識力、文章力など様々な能力と、知識や経験といった蓄積したものまで平均して鑑定紙は賢さのランクを付ける。

多種多様な薬草の効能や処理方法、ポーションの作成方法を習得

しているマリエラの記憶力、知識量は常人の域ではないと、ウエイ  
スハルトは考えていた。マリエラの立ち振る舞いが正体を隠すため  
の演技でないことは、流石に気が付いていたのだが、それでも規格  
外の師匠に育てられたゆえの奔放さであろうと解釈していた。マリ  
エラの庶民的な性格ゆえに賢人然としていないだけで、その賢さは  
恐らくウエイスハルトと同等以上。賢さは下るまいと、そのよう  
に考えていたのだ。

そして、極めて優れた記憶力、知識量であるのにも関わらず、マ  
リエラの賢さがうしかないということは……。

（まさか……、まさか、記憶力や知識量を除けば、見た目通りの賢  
さだというのか……！！）

絶句するウエイスハルト。記憶力と知識量に優れている分、思考  
力に劣るといふなら、言葉の裏を、表情を読み合う貴族同士のやり  
取りなど、到底務まるものではない。愚かな貴族はもちろんいるが、  
幼少からの教育というのは侮れないものなのだ。

マリエラの鑑定紙をこっそり取っておいて、このタイミングでウ  
エイスハルトに示し、にっこり笑ってみせるジークの黒さは貴族に  
なってもやっついていけるのだろうか、慌てたあまり茶を噴きそうにな  
ったマリエラにはとてもではないが無理だろう。

お茶が気管に入ったのか、ちよっぴり涙目になりながらむせてい  
るマリエラの背中をジークはそっとさすりながら、

「どうか、ご高配賜りますよう」

とレオンハルト、ウエイスハルトに頭を下げた。

「ウエイス、幸福の基準は人によって異なるろう……」

鑑定紙を手につつまでも固まっている弟にレオンハルトは話しか

けると、マリエラとジークに二人にとって幸福な環境を整えることを約束するのだった。

\*\*\*\*\*

「すいませーん、ちょっと手を切っちゃって」

「それなら、低級ポーションで」

「ううう、お腹痛い……」

「それも低級ポーションですねー」

「ちよつと肌荒れが……」

「はい。低級ポーション塗るといいですよ」

“とりあえず低級ポーション”的に低級ポーションを勧めまくるマリエラに、

「最近、接客が雑だのう」

とゴードンがちよつかいをかける。

「ええー？ だって、全部低級ポーションで治るんだもん……」

これでも真面目に接客しているのだと抗議するマリエラ。

今日も『木漏れ日』にはたくさんのお客がやってくる。

日常生活でよくある怪我や病気には低級ポーションで十分で、低級ポーション自体は大量に増えた錬金術師が大量に生産しているから、今ではどこでも買うことができる。

上級以上はまだマリエラしか作れないけれど、独占するのはよろしくない、作った分は商人ギルドに納めて、そこから流通して貰っている。特化型の特級ポーションも、商人ギルドのエルメラさんが窓口となって仲介してくれるから、注文した人たちも誰が作ったものなのか知らない人がほとんどだ。

だから『木漏れ日』の商品ラインナップは街のポーシオン屋と変わりはないし、マリエラがはじまりの錬金術師だと一般には知られてはいないのだけれど、「よそより効く気がする」と『木漏れ日』を訪れる客は絶えない。

もともと常連客の大半は、相変わらず陽だまりでお茶をするためにやってきているのだが。

「マリエラ、今日は地竜の肉が手に入ったぞ！」

「おかえり、ジーク。ディック隊長たちとの合同討伐がうまくいったんだね！」

大きな地竜の肉の塊を担いで帰ってきたジークをマリエラが笑顔で迎える。今日は夜の明けきらぬ早朝から地竜討伐に出かけていたのだ。

「お肉たくさん手に入ったし、今日はみんなでバーベキューにしようかな」

マリエラがそう言うと、「酒買ってこい！」だの「ソーセージとかエビも食べたい！」だの「野菜とパンも買ってきとくれ！」だのとゴードンたちドワーフ3人組やメルルさんたち常連組がこぞって買出しに出かけるために立ち上がる。まだ昼時なのだけれど、地竜の肉は高級品だから今日だけは昼から飲んでもいいだろう。

「それじゃ、ゴードンさんはこれお願いね」

素早く必要な材料を計算したアンバーさんが、負担が均等になるように買出しメモを書きつけて、買出し組に渡していく。『木漏れ日』ではお馴染みとなった光景だ。

「シエリーちゃんたちも食べていくでしょ？ ニーレンバーグ先生や、エルメラさんには連絡しておくから」

「ええ！ マリエラ姉様手伝わわ！」

「ほくもー！」

「エミリーも！」

「ほら、エリオとエミリーは先に宿題かたずけるな」

マリエラのお誘いに、宿題そっこのけで手伝いを申し出るエリオとエミリーと、二人をいさめるパロワ。宿題を済ませたシエリーはすでに厨房で肉の塊を捌きにかかっている。

「マリエラさん、わたくしも参加してよろしいかしら？」

「もちろんだよ、キャル様。でもいいの？」

「ええ、マリエラさんが開催する立食パーティーでしたら問題ありませんわ。ウエイス様は寛容な方ですから」

さりげなくのろけを差し挟みつつ、参加を表明するキャロライン。ウエイスハルトとの仲は良好で、結婚秒読みの貴族令嬢なのだが、シューゼンワルド辺境伯家の後見があるとはいえ、庶民宅のバーベキューパーティーに参加していいのだろうか。

ウエイスハルトはキャロラインには大甘で、キャロラインが立食パーティーだと言えば、招待状もないいきなり決まったバーベキューパーティーも立食パーティーになるらしい。

「はい、そこの護衛たち。悪いけど裏庭で会場の設営頼めるかい？」  
「ハイツ」

アンバーさんの仕切りで、『木漏れ日』の護衛の兵士たちが動き出す。迷宮討伐軍から派遣された兵士と、奴隷商レイモンドから雇い入れた奴隷兵だ。

迷宮の討伐に伴い、以前ほど人手が必要なくなった迷宮都市で、奴隷商レイモンドが新しく始めた奴隷解放ビジネスで、冤罪だったり比較的人品が良く強い者を中心に護衛や討伐に派遣してランクを上げさせ、自由の身にするのだそう。犯罪奴隷や終身奴隷は解放された後も10年間稼ぎの半分を元主に支払うから、十分儲けが出るのだそう。



『木漏れ日』に派遣された人は、ジークが元奴隷だと聞くと皆一様に襟を正して真面目に職務に取り組むようになるとかで、レイモンドは格安で『木漏れ日』に兵士を派遣してくれている。もっとも、ジークは彼らに口だけではなく、ニーレンバーグやハーゲイ仕込みの肉体言語でオハナシし、肉で懐柔するという飴と鞭ならぬ肉と肉の教育方針を取っているからかもしれない。流石はジークというベキか。

「マリエラさん、今日は仕事が早く終わりましたので、夫とお爺ちやまと寄らせてもらいました」

「いつも子供たちがお世話になっていきます」

「よう、嬢ちゃん、兄ちゃんも。これも焼いてくんな」

エルメラ・ヴォイド夫妻にガーク爺もやってきた。ガーク爺が焼いてくれともってきてくれたのは、オークキング肉を加工したウインナーで、ただでさえ美味しいオークキング肉が加工肉になって魅力増の逸品だ。

「わああ、コレっ、今人気のなかなか手に入らないやつ！」

ガーク爺のお土産に目を輝かせるマリエラ。やはりマリエラにはオークキング肉がよく似合う。

「早速焼こう！」

迷宮が討伐されて迷宮都市は人の領地になったから、以前のよう  
に街の中で薬草がたくさん作れるということは無くなってしまった。  
『木漏れ日』の裏庭も、薬草はまばらにしかなくて、聖樹の下に  
テールやいすが並べられている。

薬師の何人かが街中でも栽培できる薬草を作ろうと品種改良に取り組んでいるから、いつかこの裏庭が再び薬草で覆われる日も来るのかもしれないけれど、今は大人数で楽しめるパーティー会場になっている。

「おいひいね、ジーク！ エドガンさんたちも、来られればよかったのに」

「ああ、旨いな！ ……そういえば、しばらくエドガンの顔を見てないな」

右手に地竜の肉、左手にオークキング肉のソーセージの両手に肉状態で、幸せいっぱい肉いっぱいのマリエラと、その様子を満足げに見守るジーク。

エドガンたち黒鉄輸送隊は今頃、帝都の空の下だろうか。エドガンの春は未だに続いているようで、しばらく顔を見ていない。

双剣に様々な属性を宿して戦うエドガンは『総属性使い』オルラウンダーなどという、大げさな二つ名が付いているのだそう。けれどこの二つ名は、女性に対する節操オルラウンダーのなさから付いたもので、ジークはマリエラの教育上よくないと、エドガンと距離を置こうかと思案中だ。

目下、ジークの悩みはエドガンの素行くらいのもものだから、迷宮都市も『木漏れ日』もずいぶん平和になったと言える。この場に集った全員が、このひと時を楽しんでいて、肉に酒に会話にと宴は大いに盛り上がる。

そんなマリエラたちの間を、ビヨオと風が吹き抜ける。

風は炭火の炎を巻き上げて、聖樹を揺らして駆けてゆく。

「イルミナリア……？」

精霊はひどく気まぐれなものらしく、聖樹の精霊イルミナリアはここにいるはずなのに、めったに顔を見せてくれない。特に最近は錬金術師の卵たちを連れて地脈に潜りまくっていたから、「1000年分、人の子と話した」とかで、すっかり引きこもりモードである。

今日だって、折角大勢集まったパーティーだというのに、肉の匂いや煙を嫌ってか顔を見せてはくれなかった。

見上げた空には聖樹の梢。

雲一つない抜けるように高い青空を、飾り付けるように聖樹の枝葉が揺れている。

平凡で他愛ない、素晴らしき日々。

唐突にふわりと聖樹の葉が落ちて、マリエラの頭の上に着地する。精霊たちの姿は今は見えないけれど、梢を抜けて降り注ぐ日の光の真ん中で、マリエラはイルミナリアやエンダルジアが、優しく微笑んでいるようなそんな気がした。

## はじまりの錬金術師（後書き）

ざっくりまとめ：生き残り錬金術師は厄介ことには巻き込まれず、たぶん静かに暮らしていける。

思ったよりも賑やかで、楽しい日々かもしれないけれど。

\*\*\*

これにて「生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい」完結となります。

ここまでお付き合いくださいました皆様に、心より御礼申し上げます。

これにて一旦完結といたしますが、外伝は1カ月ほどお休みを頂いた後、GWごろから開始したいと考えています。このページに掲載予定です。

完結に際しまして、お礼と外伝予告を活動報告に掲載しましたので、詳細はそちらをご覧ください。

01・マリエラ、森へ帰る（前書き）

お待ちせしました！ 外伝です。

見切り発車ですがよろしく願います。

## 01・マリエラ、森へ帰る

「ジークのばかぁー！」

魔の森にマリエラの怒号が響く。

いくら中級の魔物除けポーションを使っても、ここは魔の森の中心部に近い深い場所だ。周りに潜んでいるのはBランクの魔物ばかりだし、Aランクの魔物が出て来たっておかしくはない。ここが危険な場所だということは、マリエラにだって分かるのだが、叫び出さずにはいられないほど、怒り心頭の様子である。

「ちょ、マリエラちゃん、声大きい！ 魔物来ちゃうよ、ストップ、ストップ！」

「エドガンはさっさと魔物倒して来るし？ 給料分働いて来るし？」

マリエラを宥めようとするエドガンを、調教師のユーリケが追い立てる。

どうやらユーリケはマリエラの味方らしい。

それもそのはず、マリエラがキュキューと眉毛を釣り上げながらも半泣き状態で怒っているのは、ジークがマリエラに断りもせず、スラーケンを捨ててしまったからだ。

「信じらんない……。あんな人だとは思わなかった……」

「うん。生き物捨てるとかありえないし？」

いくら一緒に暮らしていても、人の物を勝手に捨ててはいけけないのだ。マリエラはジークがゴミにしか見えないものをせつせとため込んでいたって、勝手に捨てるなんてしなかった。なにより、スラーケン合成生物は生き物だ。しかも瓶の中のスライムだから、マリエラの魔

力を与えないと数日で弱って死んでしまうのだ。

ラプトルをこよなく愛するユーリケが100%マリエラの味方に付いたのも、納得のいく話だろう。

だいたい、マリエラの周囲はジークに甘すぎる。『木漏れ日』の聖樹の精霊イルミナリアは友達のマリエラよりもジークのことを優先するし、たまにジークが精霊眼を使うと小さな精霊から大きな精霊まで皆ジークに集まって来る。

サラマンダーなんてマリエラが召喚したのに、ジークに向かって尻尾を振る始末だ。

辛うじてジークよりマリエラの方を好きらしいのはラプトルのクーだけれど、クーの一番は調教師のユーリケだから、マリエラが一番なペットはスラーケンだけだったというのに。

「ジークばかりずるい」という日々のうつ憤も相まって、ジークが空のスライム飼育容器を持ち帰った昨日、マリエラの怒りは大爆発してしまったのだ。

ジークは必死で「これには訳が……」と弁解しようとしていたが、言い訳なんか聞きたくないとマリエラはジークに一方的に怒りまくった挙句、『木漏れ日』を飛び出した。

家出だ。

「実家に帰らせていただきます」というやつだ。

と言つても、飛び出してきた『木漏れ日』はマリエラの家だし、そもそも二人は結婚しているわけではない。

迷宮の討伐から季節は一周廻ったけれど、日々楽しそうにポーションを作っているマリエラと、外堀は埋めて完璧な包囲網を形成する癖に本丸は攻められないヘタレなジークの関係は大して進歩していない。むしろ今回の大げんかが大きな変化と言えるくらいだ。

しかし、微笑ましい喧嘩と侮るなかれ。

マリエラは、普段は残念極まりない女の子だが、二百年前の魔の森シビートの氾濫を生き残り、目覚めた迷宮都市でポーシオンを作りまくって迷宮討伐に大きく貢献し、しまいにはエリクサーまで作ってしまった、やれば超できる子なのである。

勿論、成果に見合った褒章も頂いているから、経済力もばっちりだ。有り余る財力をここで使わずどこで使うとばかりに、マリエラはエドガン率いる黒鉄輸送隊を護衛に雇って「実家に帰る」ために魔の森を進んでいるのだ。

とはいえ、マリエラの実家である師匠と暮らした小屋は魔の森スタンビの氾濫トのときに壊れてすでに無い。

「実家って言ったら、親のいるところだと思っんですよ。錬金術師の親っていったら師匠でしょ？ 師匠の居場所、サラマンダーが分かるって言うんですよー」

「キャウ、シシヨ、ワカル。シシヨ、アッチ」

ちなみに師匠が迷宮都市にいる間に何度も顕現させてもらったせいか、サラマンダーはジークも好きだが師匠のことも好きらしい。気の多いトカゲである。

気が多いと言えば、エドガン違った、エロガン、あれどっちだっけ？ のエドガンであるが、迷宮討伐の日以来、チャラくてチヨロエモノいお買い得物件として迷宮都市で名を馳せてしまったエドガンは、壮大なるモテキの末に、大勢の女性に慰謝料やら養育費やらを請求されて、スカンピンになっている。

黒鉄輸送隊のメンバー曰く、モテ始めたのはこの1年の事なのに、2〜3歳の子供を連れて来る女性や、手を握ったことしかない女性もたくさんいたらしいから、完全にカモにされている。当の本人は



身ぐるみ剥がれる寸前まで、自分はモテているのだと信じて疑わなかったのだけれど。

さすがにこれではいけないと黒鉄輸送隊のメンバーが相談し、マリエラの護衛の対価として金貨と、血縁関係が分かる『血族のポーション』を受け取って状況を整理することで話が付いている。

現在マリエラと黒鉄輸送隊の一行は、ラプトルの頭の上に乗ったサラマンダーの導きによって、道なき道を進んでいる。装甲馬車の通れない獣道だから、盾どころか防具も重くて装備できないグランドルはラプトルに載せた鉄の箱のような物の中に入って半分荷物状態で殿を務めて<sup>しんがり</sup>いるし、危険性を考慮して、戦闘力の低い二人の奴隷、ニコとヌイは迷宮都市で留守番だ。

マリエラは、エドガン、ユーリケ、フランチ、グランドル、ドニールの5人とラプトルに乗って魔の森を進んでいるのである。

「ねえ、サラマンダー。師匠のところ、もうすぐ着くかな？」

昨日の昼頃出発して昨日は魔の森で野宿をした。今日も日が傾いていて来ている。昨日よりずっと深い場所に来ているから、野宿をするのは少々怖い。

「キユ？ キヤウ！」

首を傾げながら、進むべき方向を指し示すサラマンダー。

「そっか、魔の森は魔物の領域だから言葉は通じないんだ……」

迷宮都市ではサラマンダーと言葉が通じていたのに、魔の森では通じない。『師匠の元へ行く』という目的は分かっているから、道案内はしてくれるのだけれど、あとどれくらいで辿り着けるのだろうか。

「地脈は同じなのに、どうして言葉が通じないんだろう?」  
そんなことを考えながら、マリエラがラプトルの背に揺られていると、突如サラマンダーが「キャウキャウ」と騒ぎ始めた。

「着いたのかな?」

ほどなくして一行が辿り着いた場所は、鬱蒼と茂る魔の森の木々が呑み込まれたかのように突然途切れた、薄暗い沼地であった。

雨が降ってもいないのに、周りの空気が重く湿気ている。日が傾きかけているせいか、魔の森の木々に日の光が遮られて水面は黒く底が見えない。

沼の際まで木々が生えていて、沼の周囲には背の高い草が茂っているから、黒い水をたたえた沼は、魔の森の中にぽっかりと開いた穴のようにも思える。

魔物とて水は必要とするものだから、ここは貴重な水場だろうに、周囲は不思議なほどに静まり返っていて、たけり狂った魔物の咆哮も聞こえてこない。

ふと対岸に目をやると、森の中から四本の角を備えた四つ足の魔物が顔を出した。マリエラの目では詳細までは視認できないが、巨大な体、鋭い爪と牙を持つ、とても強大そうな魔物だ。

「下がれ……」

剣を構え、マリエラたちに下がるよう指示するエドガン。

しかし、魔物は沼の水を飲んだ後、こちらを一瞥して静かに森の中へと戻っていった。

「ここは、いわゆる聖域なのかもしれんな」

魔物が去っていった方向を見ながら、治癒魔法使いのフランチが呟く。

「聖域と言つには、空気が淀んでおりますがの」

箱の中からグランドルの声が木霊する。

「何にせよ、魔物が襲つてこないんならいいんじゃないね？」

相変わらず適当なことを言うエドガン。

（嫌な感じのする水だな……）

魔物が飲んでいたくらいだから、毒が含まれているわけでも水が腐っているわけでもない。沼地の周囲はただただ湿気て雨上がりのように空気が重いだけけれど、腐臭や異臭は感じられない。それでも、マリエラにはこの沼が丸ごと汚れているような、そんな気がするのだ。

まだ断定はできないけれど、魔物が襲つてこないなら、ここは魔の森の安全地帯なのだろう。けれど、ここに長居はしなくない。

（師匠はどうしてこんなところに？）

さっさと師匠を探し出そうとサラマンダーを見ると、沼のほとりの一カ所を見つめて「キャウキャウ」とせかすように鳴いている。

「あそこ？ あれって……、祠？」

崩れた岩が折り重なって、苔むして周囲の景色に同化している。

近づいてみるとそれは、どこか人の手が入った様子が見てとれて、ひどく古い時代の祠の跡のようだった。折り重なった岩の下は人が入り込める隙間があつて、土台も岩で作られているのだろう、苔で覆われて遠目からは分からなかったけれど、よく見ると床は大きな岩でできていた。照明の魔法で照らしてみると、祠の奥には地下へと続く石の扉が付いている。

「キャウ！」

「ここに師匠がいるんだね！」

マリエラの下を去る時、師匠は『仮死の魔法陣』を持っていったから、この下の地下室で眠りについているのだろう。

『仮死の魔法陣』は死の危険が無くなれば自然に蘇生するものだから、扉を開けて空気を入れ替えてやれば師匠は目を覚ますに違いない。

「ししよー！ 朝ですよー！」

この下に師匠がいる。そう思っただけでマリエラはなんだか元気が湧いてきて、ふんぬと石の扉を引っ張る。

「ふんぬー、かたいー」

マリエラが真っ赤な顔をして引っ張っても、石の扉はビクともしない。

「手伝うし？」

「手をかそう」

「お助けしますぞ」

「まかせとけ」

「じゃー、俺もー」

「ギャウ！」

ユーリケ、フランツ、グランドル、ドニーノ、おまけのエドガンとなぜかラプトルのクーまで手助けを申し出て、石の扉の出っ張りにロープを巻いて皆で引っ張る。

「ぬー、これでも開かないのー!？」

全員で引いても開かない扉に、いったん引っ張るのを止めて、マリエラがもたれかかった瞬間。

カコン。

石の扉が内側に開いて、マリエラは急に開いた空間に転がるように落ちていった。

どぶん。

開けたのは、沼のほとりの祠の扉だったはずだ。だというのにマリエラは、なぜか水の中にいた。

いやそれも正確ではないのかもしれない。

これが普通の水ならば、マリエラの無駄なお肉が浮力を稼いで水面へ浮かび上がっただろうから。

「がぼがぼ、げほっ」

色気の足りない悲鳴を上げて沈んでいくマリエラ。

まるで底なし沼のように、どんどん深いところへ落ちていく。

落ちてきた場所を見上げれば、はるか遠くになったそれは月明かりのように小さく明るい。

まるで本当の月のようで、マリエラは空から落ちてきたようだ。

周囲を見渡すと、薄暗い中でマリエラ同様落下していく人影が見られる。

扉にもたれかかったのはマリエラだけだったのに、皆も落ちてしまったのだろうか。それとも助けに来てくれたのか。

水を掻いて脱出しようと見事な泳法を披露しているのはエドガンだろうか。けれど、高速で水を掻いているのにまるで逆回しのよう。にどんどんどん水底へ引き込まれていく。

(しししょう……。さむい、冷たいよ……)

まるで現実味のない不思議な場所だというのに、水は身を切るように冷たくて、マリエラは凍える手足を何とか折り曲げ縮こまると、そのまま意識を手放した。



01・マリエラ、森へ帰る（後書き）

おしらくらまじめ…師匠ビジー？

## 02・東南の塔 最上階

「ん……う……」

寒い、冷たい、そして硬い。

服を通して伝わって来るこの感覚は覚えがある。

時々、こんな感じで目が覚めるのだ。今日もいつの間にかベッドから落ちてしまったのだろうか。人間の生存本能はなかなか侮れないもので、ベッドから落ちて冷たい床で寝ている時は、無意識に毛布を手繰り寄せたり、マットの上に丸くなっていたりする。なのに今日はいつもよりひんやりとして寝心地が悪い。掻き寄せた布地はべたりと体に張り付いてマリエラの体温を奪っている。

(うう……毛布……、って、あれ?)

ぱっちりとして、ようやく目を覚ましたマリエラ。

「ええと……。師匠を探して沼のほとりの祠に辿り着いて……。扉を開けたら水に落ちたんだ……」

記憶をたどって状況を思い起こしてみるのだが、どうにもよく分からない。地下に落ちるならわかるのに、どうして水にはまったのか。地下室が水浸しだったのだろうか。だとしたら、今の状況は何なのだろう。

「誰かが助けてくれた……。感じじゃないよね?」

仰向けで倒れていたなら、目覚めると同時に目に入った天井に、「知らない天井だ」といったコメントも残せたのだろうか、マリエラがうつぶせで倒れていたのは、マリエラの胸部よりも平らで硬い石畳だった。



服も髪もびしょ濡れのままでから、誰かが介抱してくれたとは考え難い。じつとりと水を吸って重くまとわり付く衣類を引き摺ってゆるゆると起き上がり、《乾燥》のスキルで乾かすと差し込む日差しに温められた空気が入り込んできて、縮こまっていた体からほとと力が抜けていく。

「あんまり時間が経っていないのかな」

石の床の冷たさに目が覚めたわりに、体は冷え切ってははいないようだ。この場所に倒れ込んでさして時間が経っているとも思えない。

「っていつか、ここ、どこだろう?」

温かな日差しに暖まりながら、体に異常がないことを確認していたマリエラに、つい、と何ものかの影が横切った。

「鳥……? え……!？」

マリエラが倒れていた場所は、マリエラの脚で端から端まで20歩以上あるんじゃないかという広さの円形の部屋で、床も壁も石できていた。落ちてきたはずなのに、頭上にはちゃんとドーム状の天井があつて、代わりに円形の部屋をぐるりと取り囲む壁には一定間隔でスリットのような背の高い窓が8方向についている。窓はマリエラのひざあたりから手を伸ばしても届かないほど高くまで開いていて、幅は肩幅くらいだろうか。格子などははまっておらず、カーテンなども掛かっていない。

部屋を満たす温かな日差しはその窓から差し込んでいて、外の景色は霧か靄もやがかかっているのか不透明だ。今いる場所の安全に気を取られていたマリエラは、天気が悪いのだろう、くらいの印象で気にも留めなかったのだけれど、窓を横切りマリエラに影を落としたのは鳥ではなくて魚だった。

「魚っ!？」

慌てて近くの窓に近づいてみると、天気が悪いと思っていた外は、深い水の中だった。距離感がよく分からないけれど、人間位はありそうな巨大な魚がゆったりと泳いでいる。窓から見上げると水面がどこにあるのか分からないほど深い場所で、光が散乱しているのか水全体が朝か夕方かという程度の明るさを保っている。

「ええー? やっぱり水には落ちたんだ……?」

訳が分からない。いや、水に落ちて、ここに流れ着いたことは想像がつくのだが。

何とはなしに水に満ちた窓の向こうに手を伸ばす。

「ひゃっ、水!？」

窓の、部屋と外の水を隔てる境界に手を伸ばしたマリエラが触れたのは、ガラスではなくて水だった。直立した水面が、マリエラに触れられて石を落とした水面のように揺れている。

「えー? 夢、じゃないよね、冷たいし。えーと、不思議世界?」

ぼちゃこんぼちゃこんと窓の底に手を突っ込んで引き戻すマリエラ。激しく水面を叩くと水しぶきが飛んでくるけれど、水がドバっと部屋に流れ込んでくるようなことは無い。

「困ったなー、私泳げないんだよな」

そういう問題ではないのだろうが。

この部屋にいるのはマリエラだけで、泳げたとしてこんな不思議な世界から抜け出せるのか? というまっとうな意見を述べてくれる人は誰もいない。

ばしゃばしゃばしゃ。

部屋の中に掻きだすと窓の垂直の水面に戻っていく水が面白くて、思わず水面で遊んでしまおうマリエラ。

つい、と魚が寄って来た。

躍る水面に餌だとも思ったのだろうか。

「うわっ、おつきい！」

慌てて横に跳びのくと同時に、マリエラの手があつた場所をかすめていく魚は窓を覆うほどに大きくて、びっくりするほど高速に泳ぎ去っていった。恐らく魔物の一種だろう。

「こわー。これ、泳げても水面までたどりつけないかも……」

あくまで泳げることにこだわるマリエラ。

論点はずれているが、窓から脱出できないという結論だけは間違っていない。

魔物魚が泳ぎ去った後、部屋をぐるっと回って外の様子を見てみると、地面らしきものは遥か下にあるらしく、この部屋は高い塔の最上階であることが分かった。

水の中ではあるけれど、一方向の光が強くて朝日か夕日を思わせる。ここに落ちてさほど時間が経っていないだろうから、その光を夕日と仮定するなら、ここは巨大な建造物の南東の角に位置する塔らしい。

夕日のお陰で水の向こう、西と北に高い建造物が確認できた。この同じ塔かも知れない。南から東の方角は底の方深い緑が垣間見えるから恐らく森なのだろう。緑が樹木の物なのか、水草が密集しているのかはマリエラの目では視認できない。

それでもなんとなく、この塔は、どこかの森に建てられた巨大な

建物の南東の角の塔なのではないかとマリエラは思った。

「こんな大きな建物、魔の森にあつたづけ？」

あつたとして、どうして水に沈んでいるのか。マリエラの問いに答える者は誰もいない。いたとして、このような巨大な建築物、魔の森はおろか迷宮都市にだって無いことはマリエラにだって分かつているのだ。そもそも、ガラスも入っていない窓から水が入っていない不思議仕様だ。

すう、と深呼吸をする。

水分を多く含んだこの場の空気は、祠に着く前に嗅いでいた森と水の匂いがする。ここは、確かにあの祠から繋がる場所なのだ。マリエラは思った。

「ここですじつとしても、お腹が減るだけだよね」

さっきの魔物魚を捕まえられれば良かったのだけれど、マリエラでは餌になるのが関の山だ。もう少し難易度の低い食料を調達せねば、もうすでにお腹は減り始めている。

この部屋にはマリエラ以外誰もいなくて、周囲には何の気配も感じられない。恐らく安全な場所なのだろうけれど、ここに落ちて来る時にエドガンたち黒鉄輸送隊の皆が落ちて来るのを確認したのだ。早く合流した方が賢明だろう。誰か食料を持っているかもしれない。

「階段は1箇所だけか……」

円形の部屋の一方所に下へ続く階段がある。塔の壁に沿うように作られた螺旋階段は、マリエラが両手を広げたよりも幅があるけれど、塔の真ん中が吹き抜けになっていて下まで見下ろせる。塔の内壁に沿って一定間隔でたいまつが燃えていて、足元を照らしてくれるものの、吹き抜けの下は果てしなく遠くて底が見えない。

「いつそのこと、下まで流されてたら楽だったかも」

延々と続く螺旋階段に溜息を一つ付くとマリエラは、

「とりあえず、使えそうなもの探そう……」

と、今いる部屋を物色しはじめた。

「食べれるものはなさそうなんだよね」

室内に水は入ってこないけれど、この部屋は水の匂いがして湿度が高い。壁面には苔や所々に蔦状の植物が生えている。蔦はガラスのない窓を通って部屋の外にも中にも這っていて、外側には水草も生えている。採取は簡単にできるし、陸上の植物も水中の植物もあるけれど、どれも食べられるものではなかった。

手に入りそうなものと言ったらこれらの植物だけで、この部屋には家具もなければ箱の一つも置いてはいない。便利な道具も手に入らない。

「デジスとかだったらよかったのになー」

文句を言いながら蔦を採取し、手の届く範囲の苔や水草と言った薬草を採取するマリエラ。

蔦は『ひも蔦』と呼ばれるよく見かけるもので、細い繊維がより合わさった丈夫で柔らかい蔦植物だ。名前の通り紐として使える植物で、乾燥させると繊維が固くなって丈夫さが増す。つまめるほど細い間はロープ代わりに使えて便利な植物なのだが、握れるほどの太さになると、硬くて手が付けられなくなる。

幸いここは日当たりが良くないから細かいひも蔦ばかりだったから、長いものを選んでいくつか刈り取り、乾燥させて巻いておく。ロープがあると何かと便利だろう。

刈り取ったひも蔦の葉も束ねて乾燥させ蔦で束ねる。この葉は肉厚だが乾かせばスポンジのような多孔質となるから、水を吸わせたリ、保水材として使ったり、あるいはそのまま火を点けると着火剤

としても優秀だ。

あと使えそうなのは、窓から室内にまで入り込んでいるゲブラという水草の実くらいだろうか。

「いよいよの時は、これを食べよう……」

魔物魚に気を付けながら、ゲブラの実を回収していく。粟のように小粒の実が房状についたゲブラの実は油分を多量に含んでいる。本当はもっと浅いところに生えている水草のだが、塔の中は陸上だからここに生えていたのだろうか。

油分を含む水草だから、栄養がないわけではないのだけれど、これを好んで食べるのはカエルの魔物くらいのもので、書物によると生臭くて食べれたものではないらしい。

手近な分を採取して、大きい葉で包んでひも蔦で縛る。

「どうしよう、思った以上に使える物がない……、あ、そうだ！」

武器もなければ魔物除けのポーションも材料が無くて作れない。しかし、マリエラには心強い味方がいるのだ。こんな時こそ来てもらおう。

《来たれ、炎の精霊、サラマンダー！》

マリエラは右手の中指にはめた指輪に魔力を込める。サラマンダーがいてくれれば、松明なんてなくなつて周りを照らしてくれるし、マリエラよりも強そうだ。

そう思っただけだ。

「……来ない」

サラマンダーは来なかった。

「えー。まだ受肉したままなのかな？」

師匠の元へ案内してもらう代わりに、多めの魔力で受肉させたのだ。小さいトカゲの体でも、現出するのは嬉しいらしい。

けれど仮初であつても肉の体がある限り、ほいほいと来たり消えたりはできない。肉の体で歩いて来るか、魔力が切れて還つた後で再び召喚するしかない。

「だつ、大丈夫！ 一人でも平気だもんね。ここは一方通行だし、下りた方が早くみんなと会えるもん！」

意を決したマリエラは、ゲブラの実を包んだ葉っぱと、ひも蔦の葉とロープを肩に背負うと、ちよっぴりへっぴり腰になりながら、薄暗い螺旋階段を下りていった。

< i 3 0 3 5 4 2 — 2 1 0 6 4 >

< i 3 0 3 5 4 5

— 2 1 0 6 4 >

図・東南の塔 最上階

図・東南の塔 螺旋階段

てくてくぐるぐる、てくてくぐるぐる。

どれくらいこの塔を下りただろう。見上げた頭上にも、見下ろす足元にも螺旋階段が続いている。かれこれ数時間は歩いているのではなからうか。

途中で2回、マリエラがいたような部屋があつて、休憩をはさみながらの移動である。そうでなければ、変わらない螺旋階段に目が回って上も下も分からない状態で、転がり落ちてしまったかもしれない。

途中の部屋にも、茸や苔、育ちが悪いながらも薬草などが生えて

いて、採取しながら移動した。残念なことに、香草として使える草はあつたけれど、そのまま食べられそうな植物は手に入らなくて、本格的にお腹が減った。途中の部屋と最初の部屋で違いがあるとすれば、窓が小さくなっていることと、窓の両脇に赤々と松明が燃えていることくらいだ。

窓というよりスリットに近いかもしれない。手を出すことはできるけれど、マリエラの頭は通らない縦に細長い窓が3つセットで並んでいる。それが最初の部屋と同様に8方向。日が昇っていたなら今どちらの方向を向いているのか分かったのだろうが、二つ目の部屋にたどり付いた頃には日はいつの間にか落ちていて、松明の灯つた部屋から除く外の景色は真っ暗で何も見えない。

「インク壺を覗いてるみたい……」  
ガラスのない窓枠だけの窓からは、ひんやりとした空気が流れ込んでくる。

「え？ 風？」  
おかしい。外は水中だったはずだ。どうして風が吹き込んでくるのか。

窓から真っ暗な外へと伸ばしたマリエラの指先は、水に触れることなく外の空気を掴んでいた。

「水がない!？」  
いつの間に水がひいたのだろう。手を伸ばして塔の外壁に触れてみると、しっとりと濡れた水草が手に当たる。やはり先ほどまで水に浸かっていたらしい。

「どうなっているんだろう……」

訳は分からないけれど、この窓は狭すぎて頭を出して外を見るこ



とはできないし、何より外は真つ暗で様子を知ることできない。水は引いても、外はインク壺のようにどろりと深い闇が満ちていて、見通しの効く水の中の方がよほど安全な気持ちさえする。

なんとなく、外の暗闇が恐ろしくなつたマリエラは、触れた外壁の水草を引き抜きながら手を引つ込める。

「あ、これ、ハルノニアスだ。これが生えてるってことは、塔の中は……安全なのかな？」

ハルノニアスは水場の守りとも呼ばれる水草の一種だ。水草の割には、陸上の常緑樹のような硬くしつかりとした葉をもち、岩場などに根を這わして生息する。水場の守りと称されるのは、人や獣が水場にするような川や湖に生息すること、ハルノニアスのそばに水生魔物が寄つて来ない性質による。

最初に目覚めた部屋では、魚の魔物が泳いでいたけれど、ハルノニアスが生えているならこの塔の中は安全なのだろう。もっとも今は水がないから魚も泳いで来られないだろうが。

ちなみにハルノニアスも食べられない。毒ではないが栄養もない。この部屋は安全なのだろうけれど、動けるうちに少しでも先に進んだ方がいいだろう。

そう思って歩き続け、ようやく3つ目の部屋が見えてきた時、マリエラは「ギャウギャウ」と吠えるラプトルの声を聞いた。

「この声、クー!？」

急いで階段を駆け下りるマリエラ。飛び込んだ三つ目の部屋もこれまでの部屋と同様に長い窓の脇に松明が赤々と燃えているだけの

殺風景な石の部屋だったけれど、下階へ続く階段の他に二つの扉が付いていた。

扉は直角方向についているから、最初の部屋から確認できた北と西へ向かう扉なのだろう。北へ向かう扉は半分朽ちていて、上部が欠けて外が見える。きちんと締まらないのか少し開いていて、押せば簡単に開きそうだ。

西の扉はきちんと締まっているけれど、マリエラを何度も助けてくれたラプトルのクーの鳴き声は、こちらの西の扉から聞こえてくるようだ。

下階に向かう下り階段も、今までの薄暗い螺旋階段とは違ってこの部屋同様の明かりが漏れているから、すぐ下にも部屋があるのかもしれない。

「ギャ、ギャ、ギャウー」

クーの声は断末魔というほど切羽詰まったものではないが、助けを求めているように聞こえる。バシバシを尻尾を叩き付ける音も聞こえてくるから、なにものかと戦っているのかもわからない。

(て……敵!?)

助けを求めるクーの鳴き声にマリエラは……………。

## 02・東南の塔 最上階（後書き）

《地脈の囁き》：マリエラの行動を投票で決定します。

5 / 3 13：00時点で感想欄の回答が多いルートに進みます。大筋は変わりませんが、ルートによってエピソードが増えたり減ったりエンディングが変わったりする予定。

- 1・クーの音がする西の扉を開け、扉の外へと飛び出した。
- 2・とりあえず、なんか役に立つものは無いかなと、下の部屋へと降りていった。
- 3・戦えないマリエラにできることは無いのだからと、北の扉の向こうに逃げ出した。

5 / 5 更新予定です。

### 03・東南通路（前書き）

予想を上回るたくさんの投票ありがとうございます！  
圧倒的多数で1のルートへ！

### 03・東南通路

<i304930—803440>

図・東南の塔 上階

「クー！」

螺旋階段を駆け下りたマリエラは、反射的に西の扉を開け外に出た。

外は月も星もない夜のよう真っ暗で、見上げた空には水面どころか月も星も見えはしない。開けた扉から洩れる灯り以外に光はなくて、遠くは全く見えないけれど、そこは防壁の上部のような場所だった。

馬車がギリギリ通れるほどの通路になっているその場所は、塔とおなじく石造りで、落下防止の石壁はマリエラの腰のあたりまでしかない。

この通路とつながっているのは、こちら側はマリエラのいる塔の扉だけで、反対側は見えないがこの扉を閉めてしまえば、クーが戦っている何ものかを足止めすることが可能かもしれない。

「ギャ？ ギャウウ〜！」

扉から洩れた光に、マリエラに気付いたクーが声を上げる。

ずるずると何かを引き摺りながらこちらへと逃げてこようとしているようだ。

「クー、こつち！」

クーの姿は扉の明かりで輪郭がわずかに知れる程度で、クーに絡

みついているものの正体は確認できない。バシバシと尻尾を打ち付け、脚で踏み、時折噛みついては引きはがそうとしているけれど、うねうねと形を変えるそれはクーを呑み込もうと広がりにじり寄って来る。

（魔物？ そんなに強くないみたい。だったら……）

マリエラは、先ほど塔の外壁からちぎったハルノニアスを取り出す。

水生の魔物を遠ざけるこの植物は、プロモミンテラのように魔物が嫌う臭いを出すわけではないが、魔物の穢れた魔力を喰らう性質がある。だから、魔物のいない清らかな場所には生息しない植物で、この水草の葉の間に暮らす小エビや魚にとっては快適な住処となるが、採取する人間にとっては水生魔物と出くわす危険を伴うやや貴重な水草だ。

ハルノニアスを扉の横の松明の中に放り込む。乾燥させているから煙は発生しないけれど、独特の匂いが塔の内部に充満する。

《換気！》

生活魔法にあるまじき魔力量を込めて、ハルノニアスの匂いが充満した空気を、西の扉から外に送る。

ゴウト、吹きすさぶ強い風。

これが風魔法であったなら風の刃が魔物を切り裂いていたのだろうが、マリエラが使えるのは生活魔法で、しかも換気だ。

超強力な換気によって、スカートがめくれるくらいの威力はあるが、攻撃力は無いに等しい。しかし風に含まれるハルノニアスの成分は、クーに絡みつく何かを怯ませる程度の威力はあったらしい。

ぞわり。

クーに絡みついていたものが身を抜いた隙に、クーは魔物を振り切ってマリエラの方へと走って来た。

「入って、クー。早く！」

扉を全開にしてクーを呼ぶマリエラ。

クーの姿が明確になるにつれ、後を追う魔物も部屋の明かりに照らされ、その姿が鮮明になる。光の当たったその色は、真黒な夜とかわらぬ暗黒で、スライムのような不定形の塊が、うねうねと裾をはためかせて這うように迫って来ていた。

「ひい！」

「ぎゃう！」

裾が濡れた紙屑のようにべたりと床に張り付いているけれど、形状はスライムのように見えなくもない。体色は全く透けてはおらず、真黒なその塊に核があるのかは分からない。大型の犬くらいあるその塊の裾の方は、移動するたびにうずうすと脈打つように蠢いている。よく見ると、小さい虫の集合体のような動き方で、細かくちぎれては続く裾に巻き込まれ、呑み込まれている。

ラプトルのクーがそれなりに応戦できていたから、さほど強くはないのだろうが、これはスライムのような可愛らしいものではなくて、恐らくとても良くないものだ。

人一人が通れるほどの扉に、クーが体をねじ込むように飛び込む。速度の落ちたその瞬間にその黒い魔物がクーの尻尾へ飛び掛かる。

「ギャ、ギャウ ！！！」

「ちよ、クー、落ち着いて！」

クーが暴れるものだから、扉を閉めることができずにクーの尻尾に泥のようにこびりついた黒い魔物まで塔の中に入ってきてしまっ

た。

ハルノニアスの匂いは《換気》で外に出してしまっただし、慌てて全部松明にくべてしまったから、再び黒い魔物を怯ませることはできそうにない。

「ギヤギヤ！」

イヤイヤと、クーが尻尾がもげるのではないかというほど激しく尻尾を振った反動で、黒い魔物は弾き飛ばされ、べじやりと扉の上部の壁面にたたきつけられる。

黒い魔物は特にダメージはないようで、すぐにうごうごと蠢いて再びマリエラとクーの方へとにじり寄る。動きが少し緩慢で松明を除けるように動いているのは、灯りが苦手なのか、それとも火を嫌っているのか。

「ぎゃー、こつちきた！」

「ギヤー、ギヤギヤー！」

大口を開けて品のない叫びをあげる一人と一匹。人と獣のはずなのに、動きも表情もリンクしている。種族の壁を越えて、気持ちの一つになったのかもしれない。

魔物を引きはがした際に、クーだけ塔に入れて扉を閉めるつもりだったのに、この作戦は失敗だ。塔の上は止まりだし、下階はどうなっているのかわからない。クーが来た西側の扉の上には黒い魔物が蠢いているから、扉の壊れかけた北へでるか下階へ進むしかないのだが、クーの機動力を考えると外に出た方がいいだろう。

「クー、こつち！」

北の扉を開け放ち、扉の横のたいまつを掴むと、真っ暗な外へと駆け出すマリエラ。クーも後について外に出て、尻尾でボタンと扉を閉める。



黒の魔物は塔の中にいるのだが、北の扉は壊れているから、隙間からうぞうぞと這い出して、あっという間にマリエラたちに迫ってくる。

「グギャグギャギャ」

クーの背にしがみ付いて北へと逃げるマリエラ。塔の上から見た限りでは、北にも西にも同じ塔らしきものが見えた。そこへ逃げ込めば、黒の魔物を今度こそ締め出せるかもしれない。

ラプトルに乗って走っているのに、黒の魔物はどんどん距離を縮めて来る。暗闇の中では動きが早くなるようだ。

外壁の上、塔と塔の真ん中あたりに来たところで、クーが急停止をかける。

「わっぷ、どうしたの、クー!？」

急停止の反動で、クーからずり落ちそうになりながら、手に持った松明で前方を照らしてみると、北の塔に続く通路には、先ほどの個体より倍は大きい黒い魔物がマリエラたちに向かってきていた。

「どうしよう……。後ろからも追ってきてるのに」

「ギャウ……」

前からも後ろからも黒い魔物が迫り来る。

前方から来る大きい個体は速度も速いようで、マリエラが判断を決めかねている間に数メートル先まで迫りくるや、風にあおられた布が広がるようにぶわりと体を広げた黒い魔物は、マリエラとクーを呑み込もうと飛び掛かってきた。

「きゃあ!」

思わず手にした松明を投げつけるマリエラ。

少女らしい叫びをあげるマリエラの危機に呼応するように、松明は一瞬強く燃え上がると、一匹の小さなトカゲの姿を取った。

「グルルル!!」

目を刺すような白い光と高温の炎がサラマンダーからほとばしる。あまりの眩しさに目を閉じたマリエラが、もう一度目を開いた時には前も後ろも黒い魔物は跡形もなく、見慣れたサラマンダーが「キヤウ」と口から小さな煙を吐いていた。

「サラマンダー、助けに来てくれたんだ!」

「ギヤウー!」

マリエラのピンチにさっそうと現れるステキなトカゲ。どこぞの『精霊眼』持ちは一体どこで道草を食っているのだろうか。こんなピンチに表れたなら、マリエラに許してもらえたのかもしれないのに。

「そんな人、知りません」とばかりにマリエラは両手のひらに乗るサイズのサラマンダーを抱き上げると、お礼を言って肩に乗せた。

「サラマンダーがいてくれると心強いよ」

「ギヤウギヤウ」

サラマンダーに話しかけるマリエラと、同意するクー。サラマンダーはマリエラの頬をチロリと舐めると、ぺたりとマリエラの肩にへばりついた。どうやら、ここにいてくれるらしい。

「ほかの魔物が来ないうちに、北の塔に行こう」

今までいた塔は北の扉が壊れていたから、安全とは言えないだろう。あそこには誰もいなかったのだし、このまま北の塔に向かってみよう。

サラマンダーを肩に乗せたマリエラは、松明を拾うとクーを連れて北の塔へと向かっていった。

\*\*\*\*\*

< i 3 0 4 9 7 5 — 8 0 3 4 4 0 >

図・外壁 東南

黒い魔物はもう現れず、北の塔には難なくついた。

この塔の中にも松明が灯っているらしく、明かりの漏れる塔の扉に手をかけると問題なく中へと入れた。

北の塔だと思っていたけれど、入った扉の向かいにも同じような扉が付いていたから、ここは南北の防壁の途中にある塔なのだろう。

塔の造りは先ほどまでいた塔とほとんど同じで、この部屋には北へ続く扉の他に、塔を上る螺旋階段と、下階に続く階段がある。

「黒い魔物、いないよね？」

この塔の扉は二つとも壊れていない。両方の扉に門をかけたマリエラはほっと一息つく。さっきはクーの尻尾にくっ付いて入ってきたけれど、黒い魔物は炎を恐れているようだから、こうして門をかけておけば、窓や出入り口の脇に松明が燃え盛るこの部屋には入ってこないと思う。

ぜひ、そうであってほしい。

けれど下の部屋から黒い魔物が這いずってきたら、螺旋階段の上部から黒い魔物が降ってきたらと想像すると、おちおち休んでもいられない。

「ハルノニアス、探っておいた方がいいよね」

ハルノニアスはあの黒い魔物に効果があった。この塔も、造りは東南の塔と同じだろうから、塔を上がれば採取できるだろう。

「クー、上に行こう」

「ギャウ」

マリエラとクーは塔を登ることにした。

マリエラの脚で一刻ほどかかった距離は、ラプトルのおかげで十分かからずたどり着けた。

塔の途中にある部屋の明かりが見えた頃、クーは急に「ギャウギャウ」と鳴きながらダッシュを始めた。

「ちょ、ちよつと、クー!?!」

振り落とされないよう必死でクーにしがみ付くマリエラ。肩に乗ったサラマンダーだけが余裕そうにロデオを楽しんでいる。

そんな一人と二匹の頭上から、「クー! あと、マリエラ?」と、聞き覚えのある声がした。

「ユーリケ! 無事だったんだ!」

「ギャウー!」

クーとマリエラに飛びつかれそうになり、「うわっ、どつどつ!」と避けつつ一人と一匹をいなすユーリケ。流星の調教師っぷりだ。

「マリエラ、ここはどこだし? あの黒い魔物は?」

再会を喜ぶマリエラとクーを落ち着かせた後、ユーリケはマリエラに尋ねる。

「分からない……。でも、ここどこかに師匠はいると思う」  
うつむきながら答えるマリエラ。

あの沼の祠で、サラマンダーは確かにここを指し示した。その祠からここに来たということは、ここは師匠に関係する場所だと思う。だとしたら、あの黒い魔物は何なのだろう。あの、とても良くない感じのするものは。

あんなものが徘徊している場所なのに、師匠が姿を現さないこともマリエラにはなんだか腑に落ちなかった。

「師匠、なにか困ったことになっているんじゃない？」

ことを詰まらすマリエラ。肩に乗ったサラマンダーはマリエラを慰めるように頬にするりと顔を寄せる。その様子にユーリケは、「分からないってことは分かったし？ とりあえずここは安全そうだから、食事をして今日は休むし？」  
と、提案した。

夕食は、クーの荷物の食料で簡単に済ませた。雨にぬれてもいいように、皮袋の入り口をきつく縛っていたお陰で、硬パンも干し肉も食べられる状態だった。適当な薬草で嵩増しすれば数日は問題ないだろう。

問題なのはクーの食事で、フォレストウルフのような硬い肉でも平気で食べるラプトルの餌は現地調達する予定だったから、途中で倒した魔物肉で今日は問題ないとして、明日からの餌に困る状態だ。

「ギヤウー」

ユーリケやマリエラと一緒に食事ができて嬉しいのか、ご機嫌で魔物肉を頬張るクー。

この肉は固くてまずいことで有名なフォレストウルフの肉なのに、旅先の食糧事情を理解しているのか単に味音痴なのかは分からないが、文句も言わずに食べている。

「こない子が明日からの餌に困るだなんて……。  
「ねえ、ユーリケ。明日からのクーのご飯だけどね」

マリエラはクーの餌について、ユーリケに提案した。

### 03・東南通路（後書き）

《地脈の囁き》：マリエラの行動を投票で決定します。

5/6 13：00時点で感想欄の回答が多いルートに進みます。

当面毎土更新予定。

- 1 ・私たちの干し肉、全部クーにあげようよ！
- 2 ・さつきの黒い魔物を餌にしよう！
- 3 ・泳いでた魔物魚を捕まえられないかな？

04・東の塔（前書き）

3・泳いでた魔物魚を捕まえられないかな？



## 04・東の塔

「昼間泳いでた魚を捕まえられないかな？」

ラプトルは肉食性だが魚肉でも問題ないはずだ。

流石にあの黒い魔物を食べさせるわけにもいかないし、干し肉は塩分が多すぎるうえ、1日で食べつくしてしまうだろう。

「それだ！」

マリエラの提案にユーリケが喰いつく。

「釣るし？」

干し肉とマリエラが途中で採取した香草を軽く煮ただけのスープに、硬パンを浸しながらユーリケがつぶやく。

「釣るって、あの魔物魚を!？」

驚くマリエラに、

「釣りは早朝が勝負だし？」

とユーリケは自信満々に頷いた。

\*\*\*\*\*

翌朝、ユーリケに起こされたマリエラは、窓の外が再び水で満ちていることに気が付いた。ユーリケと二人、クーに騎乗し塔の天辺を目指す。

ラプトルの脚力は流石というべきか、半刻立たずに東の塔の頂上に辿り着いたマリエラたちは、クーの餌を確保するため、魔物魚釣

りを開始した。

「ギャギャーン、ギャツギャツギャーン」

クーが窓から尻尾を外に出す。

ばじゃばじゃ、ふりふり、ご機嫌で尻尾を水中に垂らしている。

クーは魔物を挑発するのが好きらしい。尻尾だけでなく体まで揺らしながら尻尾を餌に魔物魚をおびき寄せる。

「来たつ。クー、今だし！」

「ギャウ！」

ユーリケの合図で尻尾を部屋の中に引き込むクー。同時に窓の正面から横にジャンプする。

バツシャア。

クーの挑発に、塔の窓めがけて真っ直ぐ突っ込んできた魔物魚は、鋭い牙がたくさん生えた口を開けたまま、塔の中へと突っ込んだ。た。

「ぎゃあ！」

念のため、階段の方へ避難していたマリエラはいきなり窓から突っ込んできた巨大な魚に悲鳴を上げる。ギョロリとした目と視線が合った気がして、階段を転がり落ちそうになる。

部屋に突っ込んできた魔物魚は、そのまま宙を飛びながら、反対側の窓から飛び出す軌道にいるから、塔に突っ込むのは稀にあることなのかもしれない。

しかし、今回は。

「たあつ」

魔物魚が対面の窓から飛び出すより早く、ユーリケの鞭が魔物魚

の首と胴を真つ二つに切裂いた。

「ユーリケ、強いんだね！」

首と離れてなおびちびちと撥ねる魔物魚を遠巻きに見ながら、マリエラがユーリケの方へと近づいていく。

「水中戦ならともかく、これくらいはできないと？ 魔の森に出かけるっていうのに、マリエラくらい弱いのは、むしろ珍しいと思うし？」

「うっ……。そんなことは……あるかも」

「まあ、マリエラはポーション作れるし？ 料理もできるし？ この魚、料理してほしいし？」

「うん、任せて！」

マリエラはユーリケの口の悪さに慣れてきたのか、それとも悪気がないのを知っているのか、毒舌も気にせず魔物魚を調理している。

頭を飛ばしても人間の子供位のサイズがある魔物魚の解体は、マリエラとさして身長の変わらないユーリケが済ませてくれて、取り出した魔物魚の肝に毒がないことを確認するとクーに食べさせている。マリエラの口には全く合わなかったのだが、なかなかの珍味なのだそう。マリエラの襟巻と化していたサラマンドーも、いつの間にかやらくーと一緒に肝にかじりついている。

切り分けた魚肉は、今日食べる分は表面だけ、明日の分は芯まで凍らせて、残りは乾燥させて干物に処理してから、朝食分を香草でまぶして炙り焼きにする。

ここにもひも鳶はたくさん生えているから、葉を乾燥させて燃料にすれば、薫焼きくらいの火力になって美味しい炙り焼きが作れる。この魔物魚の身は赤身だから、油の多い腹側の身は肉のようで、朝

食べるには少し脂っこい。だから尾に近い背の部分にたっぷり香草をまぶしてあっさりした味に仕上げている。朝から実に贅沢だ。

硬パンは《錬成空間》に放り込んで《命の雲》をたっぷり沁み込ませた後、軽く焼き直してやれば、ふんわりパンに変化する。これは200年前貧乏生活をしていたマリエラが、安くて硬い乾燥したパンを美味しく食べるために編み出したテクニクだ。《命の雲》の効果で廃棄寸前のパンが焼きたてパン位に美味しくなる優れモノだが、200年前マリエラが食べていた安パンは、バターも卵もほとんど使っていないから、焼きたてでも大して美味しいものではなかった。

けれど、今マリエラが手にしているのは、長期保存のために焼きしめられたパンのうえ、保存食としてバターも卵もたっぷり使われているから、ふかふかにしてみると、迷宮都市一番人気のパン屋で買ったような美味しいパンに変化する。

パンに魚の香草焼き、苦みが少なく歯触りの良い薬草を少し挟んだサンドイッチ。調味料が乏しい割には良い出来に仕上がった。さつきまで魔物魚の肝に齧りついていたサラマンダーが、一口頂戴とばかりに大口を開けてマリエラを見上げている。

「……マリエラと合流出来てよかったし？」

「どうやらユーリケの胃袋を掴むことができたようだ。」

似たような赤身魚のレシピの流用だけれど、《ライブラリ》さまさまだ。

同じものを昼食用に包み、残りの魚肉を使えそうな薬草と一緒にクーに積み込む。こちらの塔に生えている薬草も南東の塔とおおむね同じだったけれど、ゲプラの実の亜種が採取できたのはありがた

かった。こちらはゲプラの実のようにポーションの素材にはならな  
いけれど、きちんと処理さえすれば食用油として利用できる。今夜  
はフライが食べられそうだ。

「食料は確保できたし、他の皆を探しに行くし？」

「うん、そうだね。師匠も何とか探さなくっちゃ……」

ユーリケとマリエラは、ラプトルの背に乗ると途中、ハルノニア  
スや薬草の採取をしながら、外壁通路への扉がある階層へと戻って  
いった。

\*\*\*\*\*

<i305091—803440>

## 図・東の塔 上階

塔の上り下りと魔物魚釣りに調理までしたというのに、外壁通路  
のある部屋には昼前に着くことができた。クーが螺旋階段を半ば飛  
び降りるように下ったからだ。

途中マリエラは何度もラプトルから落ちそうになって、最後には  
ひも鳶の紐でユーリケと結び付けられてしまった。

対するユーリケは、自分の手足が伸びたかのようにラプトルを操  
っていて、落下に近い操縦をクーともども楽しんでいる。

ユーリケはマリエラとさほど変わらない華奢な体で、筋肉だって  
付いているようには見えないのに、この差は一体なんだろう。調教  
スキルの効果なのか、伊達に黒鉄輸送隊にいないということか。

何とか、外壁通路階に辿り着いた時には、マリエラはへ口へ口に  
なっていて、ラプトルからずり落ちるように下りるとその場へた

り込んでしまった。

「マリエラは、少し休んでるといいし？ あー、外、水が満ちてるから扉開かないし。ボクは、ちょっと下の部屋を見て来るし。クーはマリエラを守ってるし？」

部屋にマリエラとクーを部屋の真ん中に残すとユーリケは、南北の扉が開かないことを確認してから、下の階へと降りていった。

部屋に残されたマリエラは、しばらく休憩をした後、外の様子を見ようと窓の方へと寄る。

昨日は、すぐに日が暮れてしまったから高い塔の天辺から見ただけだったけれど、この階はさほど高いわけではない。東の窓から見える森の木々から見積もると、ここは3階か4階くらいの高さだろう。

西の窓を覗いてみると、水で満たされた景色の向こうに、巨大な建物が霞んで見えた。天井はこの階よりも1、2階分は高く、天井は複雑な形状のドーム状になっている。

マリエラが初めて見る様式その建物は、白い壁面に翡翠色の天井で、天井や壁面は曲線を多用した美しい形状をしているようだ。水を介して見るものだから、細かいところまではよく見えないが、水草にまみれたこの外壁や塔にくらべて、あの建物の壁の白さは水草もついていないのではなからうか。

(あからさまに、怪しい……)

魔の森や迷宮に慣れたマリエラから見ても、ここはおかしな世界だ。そこにでーんと佇む巨大な建築物。「ここがゴールですよ」とアピールしているようではないか。

あの建物はドーム状の天井や華美な外観が、神殿か何かのように

思えるから、今いるこの場所は、神殿を取り囲む外壁と言ったところだろうか。

「マリエラ、下は行き止まりだったし？」  
探索を終えたユーリケが戻って来た。

「ユーリケ、あそこに行こう」  
「そのつもりだし。でも、水が引く夜まで動けそうもないし？」

ユーリケの話によると、下の階には南北それぞれに続く扉があるだけで、下の階に下りられる階段はなかったそうだ。

南北の扉の向こうはどちらも廊下になっていて、一定間隔で窓と松明がついている。廊下の窓はこの部屋同様に細長く小さいけれど、松明の炎のおかげで光量に問題はなく十分明るい。絵や調度品が飾ってあるところは貴族のお城のようだけれど、絵画のモチーフは歴代の城主ではなくて、魔物と戦う冒険者や庶民の暮らしを切り取ったものが多かった。おいてある調度品にしてもピンキリで一般家庭の宝物という表現がびつたりな物ばかりらしい。

どちらの廊下も隣の塔まで続いていたけれど、塔の扉は閉ざされていて、隣の塔に入ることはできなかったそうだ。しばらく扉をノックして誰かいないかと呼び掛けてみたけれど、返事はなかったらしい。

「北東の塔の扉を叩いたら、音が変な響き方してたし？ たぶん、浸水してると思うし？」

あの黒い魔物はどこに行ったのか。今いる東の塔に危険はないよ  
うだけれど今は缶詰状態だ。他の仲間は無事なのだろうか。

夜になって水が引けば、外壁上の通路を通って別の塔へ移動できるのだろうか……。

「夜になったら、また黒い魔物が出てくるかもしれない。下階に棚や箱があったから、何か使える物があるかもしれないし、夜まで準備しとくといいし？」で、夜になったら、北と南、どっちへ行くし？」

ユーリケの問いかけにマリエラは……。



#### 04・東の塔（後書き）

《地脈の囁き》 5 / 1 3    1 3 : 0 0 時点で感想欄の回答が多いルートに進みます。

- 1・南の扉から、もといた南東の塔を目指す。
- 2・北の扉から、北東の塔を目指す。
- 3・階下の通路を通って北東の塔を目指す。

マリエラは地脈に囁かれると、彼女らしくない選択肢でも「そんな気がするかも!」と思ってしまう。

マリエラしさより、正解に近そうなルートを選んであげてください。

外伝の分岐について活動報告にまとめたので、ご覧ください。

## 05 東の塔（前書き）

1：8票、2：15票、3：17票）  
5 / 13 12：00時点

です）

ルート分岐の反映は次回更新分です。

## 05 東の塔

「階下の通路を通過して北東の塔を目指そう！」  
「わかったし？」

マリエラの提案にユーリケが頷く。  
そうと決まれば夜までに準備だ。お互いの情報も共有しておいた方がいだろう。

「そう言えばユーリケは、どのあたりで目が覚めたの？」  
「ボクが目覚めたのはココ、たぶん南西の塔だし」  
ユーリケはマリエラが目覚めた南東の塔の西隣で、一人で目覚めたらしい。目が覚めた時、日が沈みかけていたというから、マリエラと同じくらいの時間に気が付いたのだろう。  
マリエラと違って採取を行わず、動きも俊敏なユーリケは、塔を一気に駆け下りて日が沈む前にこの城壁通路のある階に辿り着いた。

「ボクが見てきた感じだと、ここ、たぶん4階だし？」  
今いる場所は南北方向東側の城壁で、外に満ちる水が視界を邪魔して南面も北面も見えない。下をのぞき込みたくても、窓は細長くて頭を出せないから、窓から見えるのは神殿と、反対側に広がる森だけだ。  
けれど日があるうちに4階に辿り着いたユーリケは南西の塔から直角に交わる通路を見て、窓の数からここが4階だと分かったのだという。

「南西の塔の3階は浸水して下りられなかったし、北へ行く扉も東へ行く扉も外は水で開かなかった。出られそうな場所は塔の天辺の

窓くらいだし、最悪朝になったらほかの塔に泳いで行くことも考え  
てたし？」

布巾を広げて真ん中に昼食の包みを置くと、周りを囲むようにコ  
ップや器を6個、長方形の形に置く。長方形の形に添うように、ひ  
も鳶を置いているのは外壁の印なのだろう。左下に置かれたコップ  
がユーリケが辿り着いた、南西の塔だ。

「あの神殿が怪しいのは分かってたけど、塔はだいぶ高いから、塔  
の天辺から神殿に泳いでいくのは息が続かないし。南側の通路から  
神殿へ続く道らしきものが微かに見えたから、行くなら南東の塔だ  
と思ったし？」

南側、東西方向の外壁の中央から、神殿に当たる昼食につつと  
指を動かすユーリケ。そこに道があるのだろう。

そのまま昼食の包みを開けると、今朝と同じサンドイッチを一つ  
取り出す。

「塔の天辺に戻る前に、浸水している3階を調査しよう」と潜ったの  
は、日が沈む直前だったし？」

差し込む光があるうちに下の階を調査しようと、浸水している3  
階にユーリケは潜ったのだそうだ。3階は外周側の壁面が崩れ、そ  
こから水が入ってきているようだった。後はいくつか雑品が入って  
いるらしい木箱が置かれているだけで4階と変わらない部屋には、  
2階に続く階段と北と東に向かう扉がついていた。

ユーリケは魔物魚をおびき寄せないように静かに扉に近づいて開  
かないことを確認した後、2階に続く階段から、2階の様子をのぞ  
き込んだ。

しかし、夕日が落ちてしまっただけで十分な明かりはなく、2階の様子

は確認できなかったのだという。

「日が落ちると同時に、水が消えていったから、調査を打ち切らざるを得なかったし？」

水が引いた、ではなく水が消えたのだそうだ。水の密度が薄くなつて濃霧の中にいるような状態に変わり、気が付けば息ができるようになっていたと。どうということかと壁面に開いた穴から外を見てみれば、壁を伝って黒い魔物が何体もうぞうぞと這い上がってきていたらしい。

鞭で応戦したものの、壁の穴から入り込んで来る数の方が余程多い。何体かに取りつかれたのを必死で振りほどいて何とか4階へ駆け上がった。

4階の部屋は松明がまばらについているだけで薄暗く、下階からは夜より暗い魔物が溢れ出すように湧いて来る。

「上に逃げたつて行き止まりだし、水も無くなっている。だから南東の塔をめざしたし？」

水が引いたから水圧で開かなかった扉が開いたのか、それとも他の要因か。ガラスもないのに水が入ってこない不思議な場所だから水圧だけではないのだろうか、水が引いて開いた扉からユーリケはマリエラのいた南東の塔へ来られた。

マリエラが塔を下り、4階に辿り着いたのは、日が沈み切った後のことだったから、マリエラが4階に着くより先に、ユーリケは南東の塔へ来ていたのだろう。

「あの黒い魔物、取りつかれると何か吸われる感じするし……」

もぐもぐとサンドイッチを咀嚼しながらユーリケが開いた手を握ったり開いたりする。

「吸うって、血とか？ それとも魔力？」

「いや、どちらでもないし？ 何かは分からないけど……、大事なものを吸われた気がするし？」

そう言えばクーも黒い魔物に張り付かれていた。あの黒い魔物は生き物に張り付いて何かを吸収するらしい。

「グギャー」

分かっているのかいないのか、クーも同意するように鳴く。その鳴き方が、「すわれちゃったー」と言っているようで可愛い。慰めたくなつたマリエラは「ちょっとだけだよ？」と干した魚をひと切れ与える。

クーは1日2食で、昼は水しかもらえない。他のラプトルは1日1食なのだけれど、迷宮都市暮らしのクーは人間に合わせて1日2食の癖がついている。なのに今日はおやつまでもらえた。

「ギャー！」

途端に元気を取り戻すクー。この様子を見る限り、大切な物を取られたようには見えないのだが。

「南東の塔は北側の扉が壊れてたから、この東の塔まで移動したし。ん？ クーはボクを追いかけたし？」

「ギャウギャウ」

なるほどそう言うことだったのか、とマリエラは納得する。クーは西側のどこかにいたらしい。移動するユーリケの魔力を感知して追いかけてきたところを黒い魔物に襲われたようだ。

マリエラたちはここへ6人でやって来た。そして塔の数は恐らく6本。それぞれ別の塔に流されたと考えるなら、この東の塔には誰がいたのだろうか？ マリエラたちが移動しているのだ。他のメン

バーがじっとしているとは考え難い。

「どうせ、皆あの神殿を目指すだろうし？　そこで会えるはずだし？」

黒鉄輸送隊の仲間たちの無事を信じて疑わないユーリケは、最後の一口になったサンドイッチをぽいと口に放り込んだ。

\*\*\*\*\*

昼食と情報交換を終えた後、マリエラとユーリケは東の塔の3階を何かないかと物色していた。

「うーん、雑貨とか食器かー」

「こっちは服だし？　武器になりそうなものは特にないし？」

無秩序に並べられた棚や箱には、雑貨や食器、本や洋服などの日常生活で使用するものが整然と入れられていた。下級貴族か商人の家にでもありそうな、華美過ぎずそれなりに質の良い物ばかりだったけれど、食糧も、武器になりそうなものも見つからなかった。

「食器なー。せめてガラスだったらよかったのに」

「ガラス瓶なら、ここにあるし？」

ユーリケが見つつけてきたのは、高級そうな酒瓶が入った箱と、香水瓶が詰められた箱だった。

「うわぁ、お酒。って、あれ？」

これを並べて置いたら師匠がやって来るんじゃないかと、酒瓶を手を取ったマリエラは、酒瓶の中身が酒でなくてただの色水である

ことに気が付く。

「この香水も……」

香水瓶を開けると、花の匂いはするものの、それは貴族やお金持ちの女性が使うようなものではなくて、街の娘が使うような、継続時間の短い物だった。

「この荷物の持ち主は、相当な見栄っ張りだし？」

「うーん、どうなんだろう……」

改めて置かれたものをよく見ると、服は生地も仕立ても良い物だが、何度もつくろわれた跡があり、銀食器もピカピカに磨かれているけれど使い古された品物だと分かった。

どれも品の良い物ばかりで、大切に使われてきたものと分かる。

「なんだか、誰かの過去を覗いているみたい……」

マリエラはなんだか悪いことをしている気分になって、ガラスでできた香水や酒の瓶を必要な分だけ頂くと、4階へと上がっていった。

「マリエラ、何作るし？」

空の酒瓶にひも蔦から作った紐を適当な長さに切って、口から垂らすように入れていくマリエラにユーリケが尋ねる。

「えとね、あの黒い魔物、火が嫌いみたいだからね。念のために作るところかなって。火炎瓶」

「火炎瓶!？」

マリエラの口から飛び出した過激な単語に驚くユーリケ。

「当たらなきゃ意味ないし、森で使って火事になったら困るから、普段は作らないんだけどね。ちょうどゲプラの実も手に入ったし、



「ここなら大丈夫かなって」

マリエラは乾燥させてクーに積んでいた水草、ゲプラの実を取り出すと《錬成空間》内で粉碎する。

#### 《命の雫、抽出、分離》

この工程では溶媒となる水も油も使わない。粉碎したゲプラの実に含まれる油分をいきなり《命の雫》に溶かし出し、残った滓を分離する。ゲプラの実から抽出した油を《錬成空間》から瓶に移し替えると、《命の雫》があつという間に油から抜けて消えていく。ゲプラの油は《命の雫》をたくわえておく力が弱い素材だから、《錬成空間》の中ではゲプラの油と溶け合つて抽出用の溶剤として使えるけれど、《錬成空間》から取り出した途端に分離してゲプラの油だけが瓶に残るのだ。

この段階のゲプラ油には余分な物が含まれていて、黒ずんだ色をしている。用途によってはこの後幾つもの工程を経るのだけれど、火炎瓶に使うならこのままで十分だ。

「ゲプラの油は魔力の感受性が高い素材なの。これを好んで食べるカエルの魔物は強い個体ほど行動範囲が広いから、強い個体に食べられて中の種を遠くに運んでもらえるように、魔物から洩れた魔力を吸収して短時間だけサイズも効果も強くなるんだって」

そうやってマリエラが、瓶の底に指一本分しかないゲプラ油に魔力を込めると、ぼこぼこ気泡を生じながら膨れ上がった。

「こんなふうだね、投げる直前に魔力を込めると、ぱーんとファイヤーなんだって」

乾燥させたひも蔦の葉をぎゅうぎゅう瓶に詰めて蓋をしながらマリエラが説明する。これは、最近ライブラリに加わったレシピだ。迷宮を斃した後、これでもかと弟子を取りまくったおかげでマリエラのライブラリにはこういった新しいレシピがどんどん増えている。中には帝都の錬金術師を教師として招き、教わった秘伝のレシピが増えていたりするからいいのだろうかと思ってしまう。

どうやらライブラリには、その流派に属する錬金術師が新しく覚えたり、開発したレシピが勝手に登録されるものらしい。その閲覧権限は登録者とその師匠が設定可能で、弟子が秘匿したレシピも、師であるマリエラは見たい放題だ。

もちろん、マリエラは一生懸命開発したポジションのレシピを勝手に公開したり錬成して販売し、利権を脅かすような真似はしないし、逆に病や毒を振りまくような非人道的なポジションのレシピは非公開にするつもりだ。今のところ、そんな恐ろしいことを企む弟子はいなくて、危険なポジションといってもこの火炎瓶くらいのもなのだが。

「あとは、魔物除けポーションの代わりにっ」と

そう言っつて、塔の外壁からちぎったハルノニアスを取り出す。

水生の魔物を遠ざけるこの植物は、プロモミンテラのように魔物が嫌う臭いを出すわけではないが、魔物の穢れた魔力を喰らう性質がある。だから、魔物のいない清らかな場所には生息しない植物で、この水草の葉の間に暮らす小エビや魚にとっては快適な住処となるけれど、採取する人間にとっては水生魔物と出くわす危険を伴うやや貴重な水草だ。

《粉碎、ウォーター、命の雫、抽出、残渣分離、濃縮、薬効固定》  
手早くポーションを作り上げる。

マリエラも初めて扱う材料だったが、作り方は下級ポーションとかわらない。錬成している間に《薬晶化》できるようになったから、残りのハルノニアスは《薬晶化》しておく。

ポーション瓶でなく香水瓶に入れているから、長期保存はできないけれど、下級のポーションは劣化が遅いし、数日くらいは問題がない。

「よしつ、完成！ はい、ユーリケの分」

火炎瓶を2本と魔物除けポーションもどきを3本ユーリケに渡す。マリエラも同じ本数取ると、残った6本の火炎瓶をラプトルに積む。マリエラ、ファイヤーな武器をゲットだ。ちよつと師匠に似てきたかもしれない。

「あとは早めに夕食を済ませて、夜に備えますか！」

日が落ちて水が引いたら北の塔に突入するのだ。

塔までは室内の廊下を利用するから黒い魔物は恐らく現れないけれど、北の塔の中はどうなっているか分からない。体力は温存しなくては。

マリエラたちは早めの夕食を済ませ、準備を万端に整えると夜までの間体を休めた。

< i 3 0 6 6 9 5 | 8 0 3 4 4 0 >

05 東の塔（後書き）

今回分岐ありません。

## 06 北東の塔

「じゃあ、開けるし？」

「うん」

日が落ちる前にマリエラとユーリケは3階の通路を通過して北の塔の扉の前にいた。

廊下の窓から外を見る景色は、日が落ち空の色が変わるに従い透明度が増していく。視界がクリアになると光が失われていくのは同時だから、じっと見ていなければ分からないけれど、外の水は風呂の栓を開けて水を流し出すように減るのではなくて、光の消失と共にその存在を消すようだ。

ユーリケが日が完全に落ち切る前、ドアノブが回せるようになり北の塔の扉を開けたから、開いた扉の向こうは霧の中のように水の気配が濃密だ。

「下に行く階段は……ないね」

「西への通路は、扉が壊れてるし？」

この部屋にも東の塔の3階より量は少ないが、いくつか棚や箱が置いてある。こわれた箱から飛び出しているのは女性が好みそうな鮮やかな色合いの衣類や装飾品。手紙や化粧品もあるようだ。どれも濡れて使い物にはならない。

「マリエラはそこにいて。すぐに戻るし？」

西の廊下に続く扉は壊れて扉自体が取れている。ユーリケは素早い動きで西の廊下に駆け出していく。

マリエラとクーが扉から西の廊下を覗くと、薄暗さと霧のように残る水で先がよく見通せないが、先から沈む前の夕日が差し込んでいる。

（よく見えないけど……、廊下途切れてる？　って、あれ？　松明は？）

北の塔に来るまでに通つて来た廊下には松明はあったのに、この部屋にもこの先にも松明は灯っていない。浸水していたのだ。火が消えて当たり前なのだろうが、今までの部屋の松明は燃料を足していないのになんと燃え続けている。だから浸水した場所で灯ついても不思議には感じなかっただろうに。

マリエラはこの部屋と西へ続く廊下に松明が灯っていないことになぜか違和感を覚えた。

ゴウツ。

マリエラの違和感を吹き飛ばすように、廊下の端から火の手が上がる。ユーリケが炎瓶を使ったのだろう。部屋に漂っていた水の気配は消えていて、外はすでに真っ暗だ。きつと、黒い魔物が現れたに違いない。

マリエラはいつでも逃げ出せるように、クーの背中に乗り込む。ラプトルの頭の上に移動したサラマンダーが明かり代わりに部屋を照らしてくれている。

「マリエラ、廊下は駄目だった。途中から外壁ごと崩れてて、どの階からも西にはいけないし？　それに、黒い魔物、すごい数湧いてるし！」

戻って来たユーリケは、するりとクーの背中に乗り込む。二人を

乗せたクーは待つてましたとばかりに階段を駆け上がり、外壁通路階である4階へと駆け上がった。

「うわ、ここも！」

外壁通路に繋がる4階の部屋も、西側の扉は壊れていた。この部屋にも松明は灯っておらず、サラマンダーの明かりだけではとつさに部屋中を見渡せない。けれど、よく見れば西側の扉からは廊下を埋め尽くすほど大量の黒い魔物がうぞうぞと迫ってきている。

全体が黒い軟体状の魔物だから、小さい個体が複数いるのか、巨大な個体なのか区別が付きにくい、とにかく黒い水が押し寄せるような大量ぶりで、すぐに避難しなければあつという間に呑み込まれそうだ。

「ユーリケ、上に!？」

「だめだし! この様子じゃ、上も安全か分からないし!」

「でっ、でも、南側にも魔物がっ!」

クーが器用に前足で扉を開けた先、東の塔へ戻る外壁通路にも黒い魔物が何尾もいた。壁を伝って昇って来たのだろう、西側のように、通路を埋め尽くすほどではないけれど、その数はどんどん増えてきている。

上の階へと逃れるか、もといた東の塔に引き返すか。引き返す通路には魔物がいるけれど、上の階は行き止まりだ。こんな場所に仲間がじつとしているとは考え難い。

「ちっ、こんなに多いとは思わなかったし。こんなところにモタモタしてるアホは、黒鉄輸送隊にはいないと思うし! 火炎瓶使って駆け抜けるし!」

「わかった! 火炎瓶投げるから、炎が上がった瞬間に飛び出そう!」

マリエラは火炎瓶を取り出すと、サラマンダーで火をつけて、えいやつと通路へ放り投げる。火炎瓶はマリエラが投げたにしては上手に飛んで、室内の壁に当たらず扉を数歩出たあたりに落ちて薄く広く炎を上げる。急に上がった火の手に黒い魔物も怯んだのか、マリエラたちが逃げる隙が生じたようだ。

その隙を逃さずユーリケがクーを駆る。人間用の扉をくぐれるように、頭を下げ、低姿勢になったクーが弾丸のように通路へと飛び出す。一歩目で外へ、そのまま助走を付けて炎を飛び越えようと、脚に力を込めたその時。

「！ 上!？」

炎を除けた黒い魔物が塔の壁を登っていたのだろう。頭上から、黒い魔物が降って来た。その魔物はユーリケの鞭で弾かれ、サラマンダーの炎で焼かれて防壁の下へと落ちていったけれど、そのとっさの動きでラプトルの脚は止まってしまい、その隙に頭上からどんどん黒い魔物が落ちて来る。

「わっ、やっ!」

「ちよっ、マリエラ落ち着くし!」

ユーリケは続く魔物を鞭で叩き落とそうとするけれど、ユーリケの背中で火炎瓶を投げようとするマリエラが邪魔でうまく動けない。サラマンダーは黒い魔物を燃やしてくれるけれど、燃やす力はあっても吹き飛ばすことはできないから、燃え盛る塊がマリエラたちの頭上めがけて落ちて来る。

マリエラたちが騎乗していなければ、クーが尻尾で弾き飛ばせるのだろうが、マリエラを乗せたまま空中で1回転したら魔物と一緒に



にマリエラまで吹き飛ばしてしまうだろう。

万事休す。

燃え盛る黒い魔物がマリエラたちの頭上に落ちようとしたその時。

「《ウインド・エッジ》からのー、オレ様っ、登！ 場！ とっつ  
！」

マリエラのピンチに都合よくあらわれるのは、ヒーローたる者の特権ともいえるのだが、黒い魔物を風の刃で吹き飛ばし、塔のちよつと上の方からマリエラたちの前に飛び降りてきたのは、なぜか双剣使いのエドガンだった。

「エドガンさん！？ どこから？」

「こんなところにモタモタしてるアホがいたし」

「ちよっ、ユーリケひどくね！？」

マリエラとユーリケのピンチを、格好よく助けたというのに、この扱い。

ユーリケの塩対応が、ハートブレイクなエドガンの心の傷口にしてみる。

「二人のピンチに塔の壁面駆け下りてきたっていうのにさー。もー、オレ泣いちゃうもんねー」

どうやらエドガンは塔の天辺の窓からここまで、壁面を駆け下りてきてくれたらしい。

所々にでっぱりや窓、蔦や水草が生えているから捕まることはできるのだが、ほとんど落下に近いだろう。なんという身の軽さだろうか。やはり流石はAランカーか。それともただの猿なのか。

「泣いちゃう」などと言いながらエドガンは、降って来る黒い魔物を双剣から繰り出される風の刃で二つに裂いては、壁の下へと落としている。

「とにかく、助かったし？ エドガンも一緒に行くし？」

エドガンがいてくれるなら安心だ。そう思っただけでユウリケの提案にコクコクと頷くマリエラだったが。

「えー、ムリ？ 今からさー、ファイバー・タイム始まんのだから、オレもここで一緒にファイバー、みたいなの？」

「ちよつと、何言ってるか分からないし？」

「大丈夫、ユウリケ。私もわかんない」

エドガンが訳の分からないことを言っている。不思議なのはこの世界だけにして欲しいとマリエラまでもが冷たい視線を送る中、エドガンは二人にいつもの笑顔を向けると、「ま、見たほうが早いか」と剣を握ったまま西の方を指し示した。

月も星もない暗闇の中、塔の明かりは消えていて、南北に続く廊下から洩れる微かな明かりも北の壁には届かない。マリエラの目にはただただ暗闇が広がっている以外、何も視認することはできなかつたけれど、魔力で視力を強化したユウリケの目には、半分近くがえぐり取られるように崩壊した北の防壁周囲に、黒い例の魔物が大量に集まっているのが見て取れた。

そして、えぐれた防壁の向こう側から、夜よりも闇よりもなおも暗い、形を持たない何か防壁の内部に押し寄せようとしていることも。

「な……なに？ あれ……」

「ワカラん」

得体のしれない魔物に、押し寄せて来るさらに得体のしれない何か。

本能が良くないものだと言げるそれらに慄くユーリケと、それらをキリつとした表情で見据えるエドガン。

日々の行いのせいなのか、キメ顔をしてみせるエドガンは真面目なように見えなくて、暗闇以外何も見えないマリエラには、危機感が全く伝わらない。

「あのヤバイ感じのもやもやがだな、もうすぐダーツと流れ込んできて、それをあの黒いスライムもどきがワーツと吸収すると、スライムもどきがハッスルなんだわー。もう、フィーバー、フィーバーなわけだ」

「……エドガンがバカなのはわかったし。で？　なんで一緒にフィーバーするし？」

緊迫感の欠片もないエドガンの説明だが、状況はよくわかった。ただ、何故エドガンが危険なここに残るのは分からない。そんなユーリケの質問にエドガンは、ははつと軽く笑ってこう答えた。

「いやさ、ここで食い止めとかないと、スライムもどき、ハッスルし過ぎて建物の中まで入ってきそうなんだわ。だからさー、オレがここでおびき寄せてる間に、お前ら神殿行って脱出方法見つけてくれよ」

「エドガンさん、それって……」

「やっぱり、バカだし……」

昨夜マリエラたちが安全な塔へと逃げられたのも、夜中安全に眠れたのも、エドガンがここで黒い魔物を引き付け戦ってくれていたからだっただのか。

そんなことはおくびにも出さずに、「じゃー、たのんだわー」と夜の酒場に出かけるような雰囲気です。背を向けるエドガンにユーリケは、

「これ、持ってくし！ あいつらは火に弱いみたいだし！」

と、ラプトルに積んでいた予備の火炎瓶とハルノニアスの魔物除けポーシオン、非常食の入った袋を投げる。

「おっ、サンキューな！」

エドガンは投げられた袋を受け取ると、黒い魔物がひしめき合う西の通路へと走っていった。

「マリエラ、行くし！」

「うん！ …… っと待って。なんだろ、これ？」

マリエラはクーの背中から飛び降りると、足元に転がる小さな石を拾い上げた。茶金地に緑や青紫が混じるまだら模様の小さな珠だ。真球に近い飴玉ほどのその石は、その一つだけで他には見当たらない。とてもその辺に転がっている石には見えない珠をポーチにしまつと、マリエラは再びクーの背中に乗り込んだ。

「んじゃ、も一回火炎瓶たのむし？ ボクの方も渡しとくし」

「よしきた！」

「ギャウ！」

マリエラが一杯火炎瓶を投げ、燃え広がった炎の上をラプトルが進む。サラマンダーが炎から保護してくれているのか、黒い魔物

を遠ざける炎の道はマリエラたちにはちつとも熱くない。

「マリエラのいた、南東の塔まで一気にいくし！」

「うん！ 下への階段あるかもしれないしね！」

エドガンが魔物を引き付けてくれているおかげか、南に行くほど魔物の数はまばらになって、マリエラたちは最後の火炎瓶を使い切る前に南東の塔へ辿り着くことができた。

「これで最後だ！」

南東の塔の扉をくぐる直前にマリエラは追って来る黒い魔物に最後の火炎瓶を投げつける。

「おまけだし！ 《ウィンド》」

マリエラの投げた火炎瓶は、ユーリケの魔法のサポートで見事魔物に命中し、魔物はうねうねとのたうちながら、ゴムが縮みながら燃えるように煙を上げて焼けていった。

最後まで追いかけてきたのはこの一匹だけで、他の魔物は北の方へと向かったらしい。マリエラとユーリケはラプトルから降りると、周囲の確認をしながら燃える魔物の死骸へと近づいていった。

「やっぱり、炎が一番効くみたいだし？」

「うん。よく燃えるね。って、あれ？」

まるで紙が燃えるような速度で燃え尽きた魔物の燃えカスから、小さな石が転がり出る。

「これって、さっきの……」

先ほどの珠は茶金に緑と青紫だったが、今度は象牙のような白地に朱が混じったまだら模様の珠だった。色が異なるだけで、大きさ

も真球に近い形もとても似ている。

「なんだろう、これ……」

マリエラは、消えかけた炎の中からその石を取り出すと、茶金の石と合わせてそつとポーチにしまい込んだ。

エドガンのいる北東の塔あたりに目をやると、時々暗闇の中に光が灯る。

「火炎瓶、使ってくれてるんだ……」

「……エドガンは、しぶといし」

エドガンの事だ。本当に危なくなったら逃げてくるのだろうか、時間を無駄にするわけにはいかない。

マリエラたちは下階への階段を探して、3階へと降りていった。

\*\*\*\*\*

「うわー、すつごいごちゃごちゃしてる!」

「変に落ち着くし?」

マリエラが目覚めた南東の塔の3階は、大きささまざまな箱や棚がこれでもかと並べられた、物置部屋という以外、表現の方法がない部屋だった。

「うーん、下への階段が、分かりやすーく埋もれてるー」

「恣意的だし?」

そして、階下への階段があるだろう場所にデーンとおかれた巨大な箱。マリエラたちの身長を超える大きな箱がこの部屋には幾つか

あつて、その周りにもワイン箱程度の箱が山積みになっている。脚の踏み場もないほどの物量ゆえに、箱を押して動かそうにも動かす場所がないし、壊したくてもユーリケが鞭を振り上げると鞭が他の荷物に絡まってしまふ。

しかも北や西へ続く廊下も荷物でふさがってしまったている。

ユーリケが東の塔から来た時、開かなかったと言っていたが、なるほどこれでは開くはずがない。それでも東の塔へ続く扉前の荷物が一番少なくて、数時間あれば扉を解放できそうだ。

「中身は、空の酒瓶とか？　後は本に、あれ、ポーション瓶がある。こっちは……古着？」

東の塔と違って、ここには庶民の中でも貧しい人々が使うような物資が大量に置かれていた。マリエラが「なんだか見たことがあるな」と思う物が多くある。

火炎瓶は使い切ってしまったから、新しく火炎瓶を作るのに空の酒瓶はありがたい。これだけあれば、思う存分ファイヤーできそう  
だ。

「くっ、このデカイ箱、何でできてるし？　ドニーノなら壊せるのに、ボクたちじゃ無理そうだし。」

開けられそうなのは、さっきいた東の塔への扉だけだし？　まあ、ここが通れば、エドガンのところに行きやすいけど……。

夜が明けたらこの塔で足止めになるし、ここは諦めて西側へ行くし？

ああ、でも火炎瓶がないし。

マリエラ、どうするし？

ユーリケには、体を張って魔物を集めてくれているエドガンを案ずる気持ちがあるのだろう。しっかりしているようでも、黒鉄輸送

隊では最年少。マリエラよりも一つ年若いユーリケは、軽く爪を噛みながら判断に迷っているようだ。

ここは、お姉さんらしくバシッと判断しなくては。

< i306696 | 803440 >



## 06 北東の塔（後書き）

《地脈の囁き》 5 / 27 13 : 00 時点で感想欄の回答が多いルートに進みます。

- 1 . 準備は大事だよ！ 追加の火炎瓶を作ってから西側へ向かおう。
- 2 . まずは、東の塔への扉を解放しよう。エドガンさんが来やすくなるし、差し入れだってできるかも！
- 3 . ここは、少しでも早く西側へ移動するべきだよ！ サラマンダーがいるから平気だよ！

マリエラは地脈に囁かれると、彼女らしくない選択肢でも「そんな気がするかも！」と思ってしまう。

マリエラらしさより、正解に近そうなルートを選んであげてください。

他の分岐を選んだ場合の概要を活動報告にUPしましたので、気になる方はご覧ください。

07・南東の塔（前書き）

圧倒的  
1

「準備は大事だよ！ 追加の火炎瓶を作ってから西側へ向かおう」  
マリエラは、ユーリケの手を取りそう言った。

マリエラだって急いで西に行きたい気持ちはある。けれど気持ちだけでどうにかなるものではない。

ユーリケはマリエラより余程強いけれど、鞭では黒い魔物を倒せないのだ。火炎瓶の切れた今、有効な攻撃手段はサラマンダーだけだ。そのサラマンダーとていつまで魔力が続くか分からない。確実に前に進んでいくために、有効な攻撃手段は確保しておくべきだろう。

マリエラの意図を理解してくれたのか、ユーリケは黙ってうなずくと、ラプトルの手綱を握る。

「大急ぎで行くし？ マリエラ、しつかり掴まってるし？」

「うん、わかったあああああああああ！」

「分かった」と返事をしたマリエラだったが、「ちっともわかってなかったな」と、揺れまくるラプトルの背中であっさり後悔した。

舌を噛まないように途中で口を閉じただけ、偉かったと自分で思う。ユーリケはエドガンにあんなに冷たい態度をとるのに、内心とても心配なのだろうか。それとも西側にいる外の仲間を心配してのことだろうか。

ゲブラの実が生えている階層にたどり着いた頃にはマリエラはへるへるで、とてもではないが採取ができる状態ではなかったから、

採取は全てユーリケがしてくれた。

(これ、私が来る意味なかったんじゃない……。手分けすればよかった……)

お尻をさすっているマリエラの前に、ユーリケがどんどん水草を積み上げる。塔の外壁に生えているゲプラの実をその周辺の薬草ごと片っ端からもいできているから、関係のない薬草の方が多くくらいだ。食べられる水草も混じっているから、乾燥させておいて明日のスープに入れることにしよう。

そんなことをマリエラが考えている間にも、ユーリケはどんどん水草を積み上げる。手が届かない範囲のものは、鞭を使って上手にからめとっているようだ。ユーリケには水草は全部同じに見えているのかもしれない。

「ほら、マリエラ。さっさと火炎瓶を作るし？」

別けるだけでも大変そうな水草の山を横目にユーリケが言う。

鬼だ。日頃ジークに甘やかされっぱなしで、ふやけたマリエラにはいいリハビリだ。

「キャウツファー」

何がお気に召したのか、サラマンダーが楽し気に尻尾を振り振り喜んでいいる。

「うう、やりますよう……」

観念したマリエラは、暴走ラプトルの背中で打ちまくったお尻をさすりつつ、水草の分別と火炎瓶の作製を始めるのだった。

\*\*\*\*\*

ユーリケがむしり取った水草の量はとんでもなかったけれど、マリエラがクールの背中に積み込めるだけの火炎瓶を作り上げるのに、さして時間はかからなかった。

ポーシヨンのレベルから言えば初級か中級かといった低レベルの物で、マリエラならあつという間にできてしまう。大量に積み上げられた雑多な薬草の分別と処理を入れたとしても1刻とかからない。まとめてむしり取られた水草も、まず薬草を《薬晶化》して除き、残った水草やゲプラの実は乾燥条件を変えて風力選別を混ぜながら分ければさほど時間はかからない。

全部を種類ごとに分けるのならば、こうも簡単にはいかなかったのだろうが、必要な物が限られていたからマリエラならば苦も無く分けることができる。

だからゲプラの実を採取して火炎瓶を作り、南東の塔の4階に戻ってくるのに、この南東の塔に辿り着いて数刻とかかかっていないはずなのだ。だというのに。

「え……？ 扉が開かない!？」

「もう、夜が明けてるし!」

ここは時間の流れもおかしいのだろうか。昨夜は普通と変わらないう時間、夜が続いていたはずなのに、外は白み始めて水がすでに満ちていた。

「なにか、条件があるし?」

「考え込むユーリケ。」

「前と違うことと言ったら……、エドガンさん?」

「うん。エドガンがファイヤーダンスでフィーバーしてたくらいだ

し？」

エドガンはいつの間にも時を操る術を得たのか。  
流石はAランカーと言いたいところだが……。

「エドガンが何かしたとか、さすがにそれはあり得ないし」

「だよ。でも、朝になったってことは黒い魔物は出なくなるから、エドガンさんも休めるね」

「！ それだし！」

マリエラの何気ない一言に、ユーリケが反応する。

「朝が来たから黒い魔物がいなくなったんじゃない、黒い魔物をやっつけたから朝になったんだし！」

この世界の夜と黒い魔物は連動していて、魔物を倒し切れない場合は通常通りの時間夜が続いて、朝になれば水が満ちて黒い魔物はいなくなる。初日は黒い魔物の弱点が分からなかったから、エドガンは夜通し戦い続けていたのだろうが、今日はユーリケが弱点を教えて火炎瓶を渡した。

エドガンは属性剣を使えるが魔術師ではないから魔力はさほど高くない。けれど火炎瓶をうまく使えば、効率よく黒い魔物を倒すことも可能だろう。

というのが、ユーリケの推論だった。

「うん、こんな不思議な世界だもん、そんなことがあってもおかしくないよね。でも、だとしたら……、やっぱりエドガンさんが夜を終わらせたってこと？」

「う……。その言い方、エドガンのくせに、なんかムカつくし」

「たしかに、『ふははは、俺様は夜の王だ』とか言い出しそうだね」

夜王エドガン。違う意味で似合っている気がしないでもないが、女性とのトラブルでここへ来た経緯を考えると、夜の王というより夜の奴隷が相応しいかもしれない。

「エドガンにそんなこと言ったら、王どころか『俺は夜の神だー』とか言い出すし？ あいつの性格、ぺらっぺらなんだから、神っていうより紙が相応しいし。ファイヤーで燃え尽きたらいいし？」  
昨夜のエドガンはファイヤーで絶好調だったのかもしれないが、ユーリケの毒舌ぶりもなかなか絶好調だ。マリエラはちよっぴり引きつりながらも愛想笑いを返すしかない。

「あ、あはははは。まあ、でも、火が効果的だったのは間違いないよね。あ……」

「どうしたし？」

火という単語でマリエラは思い出したのだ。

エドガンのいた北東の塔の3階と4階はどちらも松明が灯っていなかったことに。

「ねえ、ユーリケ。この部屋、松明が一定間隔で灯っているじゃない？ それって黒い魔物を寄せ付けない結果になっているんじゃないかな？ 昨日はクーを追いかけて一匹入って来たから、絶対に安全でわけじゃないんだろっけど……」

クーを追いかけてこの部屋に飛び込んできた黒い魔物は、この部屋の中で明らかに動きが鈍くなっていたことを、マリエラは思い出した。

「なるほど……。松明の状態で安全かどうかの判断がある程度付くわけだし？」

「うん、たぶん」

「火……か……」

何か符合めいたものを感じているのは、マリエラだけではないの  
だろう。

ユーリケはしばらく考え込んだ後、「今は、できることをするし」と言葉に出して気持ちを切り替えたようだった。

「とりあえず、3階の北に向かう通路、通れるようにしておくし？」

今いる南東の塔3階の荷物を片付ければ、東の塔を経由してエドガンのいる北東の塔までの通路が確保できるはずだ。この通路は一定間隔で松明が灯っていたから安全な通路として確保しておきたい。

「マリエラ、北東の塔3階の入り口に、火炎瓶を置いておきたいから追加で作って欲しいし？」

「エドガンさんの分だね。でもどうやって知らせよう？」

エドガンにはとことん厳しいユーリケだけれど、やはり仲間は心配なのか。

ユーリケのエドガンを思いやる気持ちに少しうれしくなったマリエラだったが。

「廊下の窓のところに、食べ物を置いておいたら匂いを嗅ぎつけてやって来ると思うし」

「……動物かなにかかな？」

ユーリケはやっぱり安定のユーリケだった。

今度はちゃんと仕事を分担し、クーに乗ったユーリケが薬草を採取に行っている間にマリエラが3階の北の扉前の荷物を移動させ、ユーリケが火炎瓶や食料を届けて行っている間に、マリエラが魔物魚の残りを調理しておく。

この世界は昼夜の時間さえあいまいだから、いつでも食べられる



ように準備しておいた方がいい。

「なんか眠くなっちゃった……」

「体感時間ではたぶん深夜を回っているし。少し食べたら、寝ておいた方がいいし？」

夜は短くなっただけで、その分昼が伸びるのだろうか。

正確な時間が分からないのは、落ち着かない気分させられる。

南東の塔の3階は、ごちゃごちゃと箱がたくさん置いてあって、乱雑で狭苦しい感じがほんの少しだけ懐かしい。マリエラは荷物のくぼみに丸くなる。

ユーリケやクーも落ち着く場所を見つけて眠る準備をしているようだ。

いつの間にかそばに来ていたサラマンダーが、マリエラに寄り添ってくれていて、触れたお腹がぽかぽかと温かい。

マリエラは瞼を閉じると眠りの中に落ちていった。

07・南東の塔（後書き）

今回分岐ありません。

## 08・夢くユーリケ

どこまでも広がる空と、どこまでも広がる大地。

まばらに生える低木と、はるか遠くに見える山々。

無限に続くとも思える、広大な空と大地。

群れからはぐれた獣だろうか、一匹の草食獣が何匹もの肉食獣に貪り食われ、おこぼれを求めて痩せた鳥が空を舞う。

何ものにも縛られることのないその場所は、きつと過酷で残酷で、同時にとても自由に違いない。

幼い日に見たそんな場所。

目蓋に焼き付いたあの場所へ辿り着くため、逃げ出してきたはずだったのに。

「狭い空だし？」

「ギヤウ」

建物がひしめく帝都のスラムから見上げる空はとても狭くて、この場所では空さえ満足に与えられないのかとユーリケは悲しくなる。

ぐう。

「腹減った……。ネズミ、捕まえに行くし？」

「ギユウ……」

初めて調教したラプトルと共に帝都に辿り着く前は、ラプトルさえいればあの場所に辿り着けると信じていたのだ。あの場所が、ど

ここにあるのかさえ知らないというのに。

場所の情報を得るために帝都へやって来たユーリケだったが、乏しい路銀はとうに底をついていた。ラプトルをようやく調教できるかどうかの幼いユーリケに戦う力は乏しく、ラプトルと力を合わせてもまともな仕事は見つからない。

ラプトルと調教師の子供という組み合わせに、「ラプトルを売れ」と強要する者はまだいい方で、ラプトルを無理やり取り上げようとしたり、ユーリケを騙そうとするような大人ばかりが目についた。

ここが帝都ではなくて、どこか森に近い村だったなら、森の動物を捕まえて腹を満たすことができただろう。帝都に辿り着くまでユーリケとラプトルはそうして腹を満たしてきたのだから。

けれど、帝都は人間ばかりがたくさんいて、1日ばかりで近くの森まで出かけても碌な獲物がはいはしない。狩りやすい生き物はみんな狩りつくされてしまったか、遠くの森に逃げてしまったのだ。

帝都で狩れる獲物と言えば、スラムを這いまわる不衛生なネズミばかりだ。

そんなものでは、ユーリケはともかく体の大きいラプトルの腹はちっとも満たされはしなかった。

「ギユウ、ギユウ」

ラプトルがユーリケに顔を摺り寄せせる。

“おなかですいた、森にいこう、ここはイヤな人間ばかりだ”  
そんな気持ち伝わってきて、ユーリケはぎゅっとラプトルを抱きしめる。

「そうだね、ここにはボクたちの求める場所じゃないんだし？」  
けれど、どこへ行けばいいのだろうか。

今はまだ温かく、森に行けば今日明日の食糧には困らないだろう。

けれど、森には雨をしのぐ軒はなく、魔物から身を護る壁もない。それに冬が来たら？

空腹と、先の見えない不安感。

幼いユーリケには、ラプトルに寄り添いスラムの片隅で身を丸めることしかできなかった。

\*\*\*\*\*

いつの間に眠ってしまったのだろう。

「ギャウギャウ」

と、ユーリケを揺り起こすラプトルの鳴き声に目を覚ましてみれば、そこには、嬉しそうな表情のラプトルと、丸々と太った鶏の死骸が転がっていた。

この肉付きの良さは、どう見ても野生の鶏ではないだろう。

食用に飼育された鶏に違いない。

「どうしたし？ これ……」

調教のスキルでラプトルの思考を探ってみれば、どうやら夜明け前に帝都のはずれの農村を襲い、盗んできたようだった。

空腹に任せて何羽も食べてきたのだろう、ラプトルの口元は鶏の血にぬれていて、満腹感が伝わって来る。

「ギャウー！」

“おいしいよ！ 食べて！ 捕まえてきたんだ”

それが悪いことだと分からないこの獣は、空腹の主のために獲物を捕まえてきたのだと、褒めて欲しいと言わんばかりの無垢な様子でユーリケを見つめる。

「なんて……、なんてことを……。ボクが未熟なせいだ……。」  
幼いとはいえ、善悪の分からぬユーリケではない。

ラプトルのような獰猛な獣が主の命なく狩りをおこなう。それがどれほど危険なことか理解していた。いくらユーリケが眠っていても、勝手に他人の家畜を襲うなど、どれほど空腹だったとしても、たとえユーリケを思つての事でも許されることではないのだ。

充分調教された獣ならば、主の許しなく攻撃したり餌を食べたりなどしない。幼く孤独なユーリケの調教は、心を許すあまりに厳しさに欠けていたのかもしれない。

ラプトルの記憶を見る限り、幸い人間は襲っていないらしい。騒ぎに駆け付けた農夫に驚いて、この鶏を啜えて逃げてきたようだ。

(人の肉の味を覚えていないなら、殺されはしなと思うけど……)  
ラプトルが襲った鶏を弁償するお金など、ユーリケが持っているよ  
う筈はない。

捕まれば、ラプトルを手放すしか方法はなくなる。

「いたぞ！ こつちだ！」

逃げようか、そんなことを考えていた丁度その時、犬の吠える声と共に冒険者らしき男たちの叫び声がユーリケの耳に届いた。

「ラプトル！ 逃げるし！」

とっさにラプトルの背に乗りその場を離れようとするユーリケ。

「させるかよ！ 鶏ドロボウ」

男の声と共に、ユーリケに石が投げつけられる。

「ぎゃっ」

男がどれほどの強さの冒険者かは分からない。けれど大人の男が

握りこぶしほどの石を投げつけたのだ。まだ成長しきっていないユ  
ーリケの左肩は、投石を受けてゴキリと嫌な音を立て、ラプトルの  
背から落下する。

「ストライーク！ もういっちょ！」

「ギャウ！」

主を攻撃されて怒ったラプトルが、冒険者へと駆け寄り牙をむく。  
この冒険者はあまり強くはなかったのだろう。ラプトルの速度と噛  
みつこうと開かれた口に対応できず、「うわぁ」と叫んで怯むばか  
りだ。

「だ、だめ……。《やめろ》、ラプトル！」

ここで人間を襲っては、このラプトルは戻れなくなる。主の命令  
なく人間を襲い、その血肉の味を覚え、己が人間より強いことを知  
ってしまったら再調教は難しい。いつかは捕まり殺処分されてしまっ  
たろう。

必死でラプトルを制止したユーリケの思いなど知る由もなく、急  
に動きを止めたラプトルに冒険者は剣の鞘で殴り掛かり、駆け付け  
た仲間が逃れられないように網を投げる。

「コイツっ、驚かせやがって、この！ オラ、どうだ！ オラ、も  
ういっぺん噛みついて見せるや！」

網をかけられ、身動きの取れなくなったラプトルを、冒険者が剣  
の鞘で打ちのめす。

「ギャ、ギャ、ギャッ」

「やめて！ もう、動けないし！ やめて、やめて！」

折れた左肩を抑えながら取りすぎるユーリケの胸元を、冒険者は掴んで持ち上げる。

「なんだ、くそガキ。お前が飼い主か？ この盗人が！」

「ちゃんと謝るし！ ちゃんと弁償するし！ だから、だから……」

「おい、そいつ、調教師のガキじゃねえか？ 売っぱらえばいい金になんぜ？」

「おお？ 薄汚れてて分からなかったが、確かに。鶏泥棒の依頼賃よりよっぽど儲かるな」

「おれ、そういうのを買い取ってくれる奴隷商、知ってんぜ」

逃げなければ。

この冒険者たちは、ユーリケの話を聞く気はないし、このままではラプトルもユーリケもバラバラに売られてしまう。掴まれた手を振りほどこうと必死で暴れるユーリケに、冒険者の拳が振り下ろされる。

「暴れんじゃねえよ」

ガツ、ゴツと容赦なく打ち付けられる男の拳に、着古したユーリケの服は破れそのまま地面に叩きつけられる。男の手から逃れることは叶ったけれど、ひどくぶたれたせいで、ユーリケは起き上がることもままならない。

「おい、こいつ、女じゃねえ？」

「ん？ おお、こいつあ、儲けもんだ。まだガキだが女なら高く売れそうだし！」

ゲラゲラと、男たちの下卑た笑い声が響く。

（汚い、汚い、こいつらは汚い。逃げなきゃ、何とんでも逃げな



くちや……)

ユーリケの霞む視線の先には網をかけられ倒れたラプトル。

「ギャウ……」

こちらも打ち据えられ、怪我をした状態でそれでもユーリケの方を心配そうに見つめている。

ゆっくりと、ラプトルの方へ手を伸ばす。

何度もぶたれ、地面にたたきつけられたユーリケの右手はどこで切ったのか血で濡れている。

延ばされる指先に、意図を悟ったラプトルが体をねじるようにして額をユーリケに突き出す。

冒険者たちはユーリケとラプトルを売る算段で忙しいのだろう。

ユーリケの手がラプトルの額になにやら血文字を書きつけていることに気が付かない。

(できた……)

あとは、《命令》するだけだ。

ユーリケは調教師としてはまだ未熟だけれど、辺境の部族にのみ受け継がれるこの能力は、幼い頃に見たであろうあの景色と共に間違いなくユーリケに受け継がれている。

調教師の血に狂わされたラプトルは、こんな冒険者たちなどたちどころに喰い殺すに違いない。あとは、ユーリケが《命令》すればいい。

《狂え》と、この人間を喰い殺せと。

それを命じてしまったら、ユーリケも、このラプトルも、きっと戻れなくなるのだけれど。

「わ……が、我が仔らよ ……」  
ユーリケの視界が霞む。

人を殺したくはない。ラプトルに、人を喰らわせたくはないのだ。ただ、あの場所に、唯一記憶に残るあの地平線に辿り着きたかっただけなのだ。  
なのに、どうして。

「そこまでしておいた方がいい」

ユーリケが《狂え》と命令する前に、スラムの路地から一人の人影が現れた。

「何だ、てめえ」

「やろうつてのか」

子供のユーリケと異なり相手は大人の男だ。冒険者たちは剣を抜き、現れた男を威嚇する。

「やめておいた方がいい。衛兵を呼んでおいたから、もう直ぐ到着するだろう。こんな子供を不当に奴隷にしようなど、捕まれば君たちが奴隷に墮ちるぞ」

武器も持っているようには見えないのに、剣を抜く冒険者たちに臆すことなく近づいて来る男。何より顔を面で隠し、フードを目深にかぶった男の様子は、ただの市民とは思えない。

その隙の無い様子に冒険者たちは目配せをしあう。どうせブラフだろう。こんなスラムに衛兵が来るはずがない。

けれど、遠くで「衛兵さーん、こっち、こっち」と叫ぶ別の声が

聞こえるではないか。

「おい、行くぞ」

「ちっ、命拾いしたな！」

衛兵が嘘だとしても、他に仲間がいるようだ。騒ぎを大きくされるのは得策ではない。冒険者たちは剣を収めると、そそくさと撤退していった。

「やれやれ、命拾いしたのは彼らの方だというのにね。立てるかい？ ああ、肩をやられているのか。《回復<sup>ポトル</sup>》」

仮面の男はユーリケを助け起こすと、折れた左肩に治癒魔法を使う。

衛兵を呼ぶふりをしていたのはスラムの子供だった様で、仮面の男に駄賃を貰うとすぐに路地へと消えていった。

「……なんで、助けたし？」

訝し気に尋ねるユーリケ。助けてくれ、治癒魔法まで使ってくれた恩人で、なんとなく悪い奴ではない気がするのだが、ユーリケが何をしようとしていたかこの仮面の男は気がついていない。

「ここでラプトルを狂化させては困るからな。君はまだ未熟なようだし。スラムで騒ぎを起こされると、他の住人が迷惑だ。ほら、君のラプトル、随分威嚇してくるじゃないか。さっさと宥めてくれな  
いか」

仮面の男に言われてみれば、ユーリケの怒気にあてられたラプトルは随分と興奮し、助けてくれたはずの男にまで見境なく襲い掛かろうと、フツフツと鼻息荒く牙をむき出しにしている。

「《鎮まれ》、鎮まれ、もう大丈夫。ありがとう、ボクを助けようとしてくれて。ありがとう、もう大丈夫だし……」

「ギユウ……」

ラプトルを宥め、網を外してたくさん頭を撫でてやるユーリケ。ユーリケもラプトルも殴られ打撲を負ってはいたが、仮面の男の簡単な治癒魔法ですぐに回復することができた。

あの冒険者たちは、ラプトルを捕まえて、売り払う事が目的だったから、ラプトルの価値が下がるような傷を負わせてはいないようだ。

「さて、そのラプトルが鶏小屋を襲ったやつで間違いないか？ 君たちをこのまま逃せば、また似たようなことがおこるだろう。ここは大人しく弁償するのが得策だと思うがね」

仮面の男の言うことはもっともだ。けれどユーリケには支払えるものは己かラプトルしかない。頂垂れるしかないユーリケに仮面の男はこう続けた。

「なに、そのラプトルが働けば、すぐに弁済できるだろう。調教が行き届いていないようだから、調教師も一緒に働くことになるだろうが。そのつもりがあるのなら、交渉くらいはしてやろう。同じ少数民族のよしみでね」

仮面の男の計らいにより、ユーリケとラプトルは1月ほど、その農家で働くことになった。帝都のはずれにある畜産農家ではあったが、食肉に加工された家畜の内臓などがもらえたり、家畜を狙って稀に弱い魔物が襲ってきたから、倒した魔物を餌にしてラプトルは飢えることもなくなった。

弁済が終わるころにはラプトルの調教は完了して、もう、ユーリケがいなくても家畜を襲ったりはせず、農家の言うことにも従うよ

うになっっていた。

「ラプトルのこと、よろしくお願いします?」

「ああ、大切に預からせてもらおうよ」

「ギヤウ」

帝都ではラプトルと共に暮らせない。今の自分では十分な餌さえ与えてやれない。

そう理解したユーリケは、是非にと請われたこともあり、その畜産農家にラプトルを預けて一人帝都に戻ることにした。

「やあ、お勤めご苦労だったね、ユーリケ。“勤めを果たした後、行くところが無ければ、くればいい”とは言ったが、本当に来るとは……」

「よろしくお願いするし? フランツ」

スラムに戻ったユーリケは、仮面の男、フランツの下に身を寄せ

る。ユーリケは調教師。獣と共に暮らす分、本能は発達している方だ  
と思う。

(こいつは悪い奴じゃない)

なんとなくそんな気がしたただけけれど、二人の暮らしはそれなりに上手くいったから、ユーリケの勤はそれなりに当たっていたようだ。

## 08・夢うユーリケウ（後書き）

ざっくりまとめ：ユーリケ、ツンケン方言女子だった！

「06 北東の塔」の分岐の結果を活動報告に掲載しています。次回、分岐（2択）あります！

## 09・南東の塔

(……夢？ 随分、リアルだったな)

マリエラが目を覚ました場所は、眠った時と同じ荷物に埋もれた南東の塔の3階の部屋だった。

「……懐かしい夢を見たし。どうして忘れていたんだろ……？」

ユーリケも同時に目が覚めたようで、目をこすりながら体を起こしている。

ユーリケが見たという”懐かしい夢”。

それは、マリエラが先ほど見た夢ではないのだろうか？

なんとなくそんな気がしたマリエラは、話を聞こうと体を起こす。いつの間にか開いていたのか、腰のポーチの蓋が開いていて、中身が幾つか飛び出している。

手ぬぐいにポーション瓶に入れなおした薬晶、調理に使うような小さな折り畳みナイフ。

そんなこまごまとした物と一緒に、茶金の珠がころころと転がっている。

「あれ……？」

白地に朱の珠がない。

何処に転がっていったのだろうかとあたりを探してみたけれど、まるで消えてしまったように見つけることができなかった。

「マリエラ？ どうしたし？」

「う、うん。白の珠がね……」

そこまで言ってマリエラは、ユーリケの顔をまじまじと見る。

白い肌に白い髪。そんな薄い色合いの中、朱色の瞳だけが輝いているさまは、一種異様であるとも見える。マリエラはとてもきれいだと思うのだけれど、その色合いがもたらす印象は野生生物のそれに近い。

これが調教師の色彩だ。

まるで、白地に朱が混じった、あの珠のようではないか。

「……ねえ、ユーリケ。ユーリケが見た夢って、帝都でフランスさんと出会った時の？」

マリエラは確信を得るために、その質問を口にする。

「うん。寝言でも言ってたし？」

ああ、やはり。

ユーリケは「黒い魔物に張り付かれると大切な何かを吸われる気がする」と言っていた。

そして、倒した黒い魔物からはユーリケを思わせる白地に朱色の珠が得られた。

今その珠は無くなって、マリエラはユーリケの過去を夢に見た。

ユーリケ自身が、「忘れていた」という、過去の夢を。

「この珠は、黒い魔物に盗られた記憶だ……」

黒い魔物に張り付かれると、過去の記憶を吸い取られる。盗られた記憶は黒い魔物の中で珠になり、倒すことでマリエラたちの手元に戻る。

珠になった記憶は眠っている間に戻るけれど、ユーリケ本人だけ



でなくそばで眠ったマリエラも見てしまう。

「うーん、こんな世界だから何でもアリなんだろうけど、にわかには信じがたいし?」

マリエラの説明を聞いたユーリケは、複雑そうな顔で茶金の珠を見つめている。

「うん。ゴメンね、勝手に過去を覗いちゃって……。次に珠が手に入ったら、別の部屋で寝ることにするね」

謝るマリエラに、「それは別にいいし? 驚いただけだし。」とユーリケが手を振る。

「でも、だったら、この珠は何で残ってるし? そもそも、これ、誰の珠だし?」

「うーん。色合いからすれば、エドガンさんの珠だと思う。残っている理由は、近くで寝ていなかったから……かなあ?」

色々分かったことはあるけれど、不明な点がまだ多い。

マリエラがユーリケと出会う前、サラマンダーが倒してくれた魔物からは珠が得られなかったのだ。単に珠を持っていなかったのか、それとも珠の入手にも何か条件があるのだろうか。

「とにかく、これからは黒い魔物は積極的に倒していくし! 火炎瓶、たくさん作ってよかったし!」

火炎瓶をぎゅっと握りしめるユーリケ。どうやらファイヤーがお気に召したらしい。

後ろでクーも「ギャウ!」と尻尾を振り上げていて、サラマンダーまで「キャウ!」と口から炎を吹きだしている。

全員やる気満々だ。ここはマリエラが冷静に火炎瓶の残数管理をせねばなるまい。

クールに見えて血気盛んで超毒舌。

今までならそんなユーリケを見て、黒鉄輸送隊の隊員なだけあるなあと思っただろうけれど、今なら少し可愛らしくも見えてしまふ。

「……私も驚いたよ。ユーリケ、女の子だったんだね」

夢で見なければ気付かなかっただろう。

確かにユーリケは細身で華奢だけれど、毒舌と凶暴なラプトルたちを自在に操る様子から、少年だとばかり思っていたのだ。

「ナイシヨだし？」

今では人差し指を立てて口元にあて、ナイシヨという仕草すら可愛らしく映る。

「黒鉄輸送隊のみんなは知っているの？」

「……たぶん？ 一人を除いては？」

ずっと一緒に旅をしているのだ。気が付くのが普通だろう。

いや、普通だったら気が付くはずだ。気が付かないヤツは、目が脳が腐っているに違いない。

「……エドガンさんは？」

「……。クー、ほーら、餌だしー！」

餌だと聞いてカパッと開けたクーの口に、エドガンの記憶の珠を放り込もうとしたユーリケを、マリエラは慌てて止めて何とかエドガンの珠をポーチにしまいなおした。

\*\*\*\*\*

「北の魔物はエドガンに任して、西側に行くし！」  
「うん。まずはユーリケのいた南西の塔だね」

3度目の夜が訪れて、外の水が霧に変わるなりマリエラとユーリケ、そして頭にサラマンダーを乗せたラプトルのクーが4階の南の通路へと飛び出した。

最初の夜に黒い魔物に襲われて、この南東の塔に逃げてきた道だが今はユーリケもマリエラもサラマンダーだつて乗っている。クーは意気揚々と夜の外壁へと駆け出していく。

途中小さな黒い魔物が壁を伝って登つて来るが、飛び越せるものは躲してやり過ぎしていく。魔物を倒せば記憶の珠が手に入るかもしれないけれど、火炎瓶は有限なのだ。いちいち倒していたのではすぐに尽きてしまうだろうし、その度に作り直していたのでは北東の塔で魔物を抑えてくれるエドガンの方がもたないだろう。

南西の塔が近づくにつて、黒い魔物の数が増す。

ユーリケの目覚めた南西の塔は、3階は壁がこわれて黒い魔物が入り込み、4階は松明の灯りがまばらだったといていた。安全地帯とはいいいがたい。

南西の塔の直前にわだかまっていた黒い魔物を火炎瓶でファイヤーすると、予想通り珠が得られた。得られた珠は二つあって、一つはエドガンの物と思しき茶金地で、もう一つは青地に金の物だった。これは誰の物だろう？

その球の色合いにユーリケは心当たりがあったのか、「マリエラ、急ぐし！」と、焼け切らぬ黒の魔物を鞭で叩き飛ばしながら南西の塔4階へとクーを走らせた。

飛び込んだ南西の塔4階は、ユーリケの話した通り松明はまばらで、3階からはマリエラたちに気付いた数匹の黒い魔物で這い出そうと蠢いている。下はもう、黒い魔物の巣窟だろう。

今は火炎瓶があるし、炎からはサラマンダーが守ってくれるから飛び込めないことは無い。

まだ会えていないのは、フランツに、グランドルにドニーノ。行っていない塔はあと2本だから、移動して、行き違ってしまった人がいるのかもしれない。行き違っていなくても、もう2回も夜が過ぎたのだ。エドガンのように魔物を食い止めるような目的が無いならば、移動してしまっただと考えた方が無難だろう。

南西の塔から先に進むには3つのルートがあるだろう。

黒い魔物が行き来する4階の外壁上の通路を通って、西の塔へ行くルート。黒い魔物に遭遇する可能性は高いが、恐らく最短で西の塔に辿り着ける。

西の塔へ行くのならば、いったん3階に下りた後、3階の廊下を通るルートもある。こちらなら室内だし、松明が灯っていれば黒い魔物に出会わず進んでいけるかもしれない。けれど、3階の部屋にはだいたい木箱や棚が置いてあって、この南東の部屋のように扉を塞いでいる場合があるから、必ず入れるとは限らない。だから、西の塔を目指すなら、このルートは無しだろう。

そして最後に、西や北西の塔へは寄らずに2階を目指すルートである。

西や北西の塔に行ったとして、そこに仲間がいるとは限らない。いたとしてもエドガンのように先に進めと言われるかもしれない。けれど火炎瓶を差し入れられれば、戦況はよくなるだろう。

逆に誰もいなかったならば、そこは黒い魔物が渦巻く危険地帯だ。火炎瓶があつたとしても、基本的な身体能力が低いマリエラと、そんなマリエラを引き連れた調教師のユーリケでは逃げられるかも分からない。

「マリエラ、どうするし!？」

ユーリケの焦りが伝わって来る。恐らくさっきの青い球はフランツの物なのだろう。

同時に見つかったエドガンの珠が見えてもいない辺り、今なお北東の塔でフィーバーしているエドガンがほんのちよっぴり可哀そうになる。

「うん。そうだね……」

ここはやはり。マリエラは、心の底から湧き上がるような考えに身を任せるように、進むべき道をユーリケに伝えた。

< i 3 1 2 8 8 6 | 2 1 0 6 4 >

< i 3 1 2 8 8 7 | 2 1 0 6 4 >

## 09・南東の塔（後書き）

《地脈の囁き》 6 / 17 13:00時点で感想欄の回答が多いルートに進みます。

1・西か北西の塔にはフランツさんがいる気がするよ。このまま4階の通路を駆け抜けて西の塔に向かおう。

2・エドガンさんと、もしかしたらフランツさんたちも北で戦ってくれてるんだよ。ここは2階を目指すべきだよ。

そう、これは、ツンケン方言女子のデレを探す旅。  
地脈の囁き、責任重大！！

06話までの分岐結果を活動報告にあげておきますので、気になる方はどうぞ。

10・南西の塔から北西の塔へ（前書き）

1  
でした

## 10・南西の塔から北西の塔へ

「西か北西の塔にはフランツさんがいる気がするよ。このまま4階の通路を駆け抜けて西の塔に向かおう。そして北西の塔を目指すの大丈夫、エドガンさんは強いし、火炎瓶も置いて来たもの。他の仲間を助けた方がきつと喜ぶよ」

ユーリケからほんの少し感じる罪悪感を打ち消すようにマリエラは言う。2個目の記憶の珠が見つかったのだ。エドガンも苦戦しているのだろうが、エドガンでさえ苦戦する状況でほかのメンバーが無事でいられるとも思えない。一刻も早く火炎瓶を届けに行かなければ。

マリエラの提案に、吹っ切れたようにユーリケが頷く。ユーリケが操るクーの脚にはさらに力が入り、素早く北へ続く扉を蹴り開けると、西の塔に向かって駆け出した。

ボンボンと、一定間隔で火炎瓶が火柱を上げ、黒い魔物を焼き尽くす。サラマンダーは炎からマリエラたちを護るだけでなく、炎焼範囲の調整までしてくれているのか、マリエラたちが駆け抜けるより早く黒い魔物は炎に焼かれて消えていく。

珠は全ての魔物がもっているわけではないのか、それとも駆け抜けるのに懸命で拾うことができなかったのか、西の塔に着くまでは新しい球を見つけることはできなかった。

ばん！ と勢いよく西の塔の扉を開けて中に飛び込むと、この部屋には欠けることなく松明が付いていた。恐らく安全なのだろう。

ここならば、誰かが避難しているかもしれない。



「誰かつ、誰かいませんかー!!」

マリエラが声を張り上げる。マリエラの声は西の塔にむなしく木霊するだけで、誰の返事も聞こえては来ない。

「ユーリケ、このまま北西の塔まで行こう。たぶんここには誰もいないし、いたとしてもたぶん安全な場所だから、ここは後でもいいと思う」

「分かったし!」

マリエラとユーリケを乗せたラプトルは再び夜の通路へと駆け出す。

夜の闇より暗い魔物がひしめいている通路へと。

「えい!」

戦闘力が皆無でどんくささも抜きんでているマリエラだけど、魔力量だけは抜けている。込めれるだけ魔力を込めた火炎瓶はユーリケの風魔法の補助を受けて進行方向に向かって飛距離を伸ばし、上げた火柱をサラマンダーがさらに遠くへ引き延ばす。

その炎に呼応するかのように、北の方で火柱が上がる。

エドガンだ。北東の塔の3階通路に届けた火炎瓶に気が付いてくれたのだろう。

恐らくは、窓に置いておいた食べ物の匂いにつられて。

なかなか野性的な男だと、ここは褒めておくべきか。

負けじとマリエラも火炎瓶を放り投げ、高く火柱を立ち上げる。

火事場のような火炎渦巻く通路を駆け抜けるのは、恐ろしいものだと思っていたのに、想像していたよりずっと綺麗だとマリエラは思った。サラマンダーが守ってくれているからなのだろうが、夜だ

というのに明るくて、温かくて、マリエラたちの行く先を力強く後押ししてくれるように感じる。

明るい炎のトンネルを抜け、北西の塔に辿り着く直前、その炎のトンネルはかき消すように消え去った。

東から差し込む優しい光。

「朝だし！　こんなに早く！？　水が満ちる！　扉が閉まってしま  
うし！」

こんなところで締め出されてはたまらない。ユーリケやラプトルのクーはともかくマリエラは泳げないし、炎の精霊たるサラマンダーが水の中で存在できるとはとても思えない。

何匹かの黒い魔物が張り付くのも厭わずに、何とか北西の塔に駆け込んだ時には、外は水が満ちていた。北西の塔4階は北東の塔と同様に東西をつなぐ通路側の扉が取れて無くなっていった。当然、松明も灯っていない。だからほとんど水没していたにも関わらず扉をあけられたのかもしれない。

張り付いていた黒い魔物は水に触れると溶けるように消えてなくなった。スライムのような外観なのに、水の生き物ではないらしい。

どんどん実体化して下から登って来る水に、まだ水に濡れていない頭部にサラマンダーを乗せたマリエラは、「ユーリケ、早く上へ！」と声を上げる。

「分かってるし！」

マリエラたちを乗せたクーは、サラマンダーのピンチを救うべく全速力で塔を駆け上がる。霧は下からどんどん満ちてきて、一定の濃度になると水に変わっていくようだ。

ラプトル陸上競技会などというものがあつたなら、金メダル間違いなしの俊足で、塔の螺旋階段を駆け上がっていくラプトルのクー。流星はかつて、デス・リザードの凶刃を躲しマリエラを助けただけはある。

普段はおちゃらけているけれど、やる時はやるラプトルなのだ。

マリエラたちが北西の塔の中層に辿り着き、その松明が全て灯っていることを確認してようやく、クーは倒れるように走るのを辞めた。

「クー、ありがとう。何度も私たちを助けてくれて」

「クー、偉かったし。お前はほんと、凄い奴だし」

「キャウキャウキャウ」

「ありがとう」なのか「でかした！」なのか。マリエラの頭上からクーの頭上に飛び移ったサラマンダーがぺちぺちとクーの頭を尻尾で叩きながら鳴いている。

マリエラどころか普段は厳しいユーリケにまで褒められて、よほどうれしかったのだらう。フッフと息の整わぬままクーだけれど、尻尾の先を持ち上げて嬉しそうにフリフリしている。デス・リザードにきられた尻尾だが、再生して貰ってこんな所でも役に立った。

「今日のご馳走作るね！ うんと元気の出るやつ」

「ラプトルは調理したもの食べられないし？」

「……ギャウン」

「キャウン」

ユーリケの話ならクーには何となくわかるのか、クーが残念そうに鳴く。

「クー、食べたいみたいよ？」  
「うーん、ちよつとだけだし？ それより、魔力のこもった水をあげるといいし？」

そんな話をしながら夕食の支度をしようと立ち上がったマリエラを、「しっ」と急にユーリケが制した。

マリエラがどうしたのかと周りを見れば、ユーリケだけでなくクーもサラマンダーも、マリエラたちが昇って来た階段の方を凝視している。

まだ息の整わないクーはすぐにでも駆け出せるように、呼吸を落ち着かせようとしているようだ。

あの階段の下は途中まで水没しているはずだ。

黒い魔物は水に溶けたから上って来たとは考え難いし、この部屋にはかけずに松明が灯っている。安全な部屋だと思っていたのに。

ひたひたと、水を滴らせながら歩く足音がマリエラの耳にも聞こえてきた。

水没してから随分時間が経っているはずだ。そんなに長い時間、水の中を移動してきたとでもいうのだろうか、今まさにこの階層へ辿り着こうとしている何者かは。

マリエラの緊張がマックスに達した時、ユーリケが嬉しそうな声を上げた。

「フランツ！」

「……ユーリケ、無事だったか」

どうやら水の中を移動してきたのはフランツだったらしい。緊張していたクーが「ギャフン」とひそめた息を吐きだしている。

緊張がマックスだったマリエラの方が「ギャフン」と言いたいくらいだ。

しかし、びしょ濡れのまま階段を上って来たフランツの言動は、マリエラにはどこか不自然に感じられた。

「ユーリケ、その人は……？」

「マリエラだし？」

「マリエラ……、そうだった。今回の依頼主だったな」

どうやら随分記憶が抜け落ちているらしい。マリエラのこと、今回の依頼主くらいにしか覚えていないようだ。

エドガンと違ってフランツは治癒魔法使いだから、黒い魔物の被害が大きかったのだらう。

「フランツ……。夜になったら一緒にここを離れるし！」

びしょ濡れのフランツを《乾燥》させ、その手を取って説得するユーリケに、フランツは

「それはできない」

と首を振る。

「どうしてだし？ フランツもここを護らなきゃと思っているし？ 治癒魔法使いのフランツには無理だし！ エドガンに任せの方がいいし！」

「この神殿は、我が根源に連なるものだ。守らねばならないと私に流れる血が告げるのだ」

仮面から覗くフランツの瞳。その色は途中で拾った珠に混じっているのと同じ金色で、師匠の瞳とはまた違った、どちらかというと

爬虫類を思わせる濡れた輝きを宿している。その瞳孔は縦に細長い。あの珠がフランツと同じ色を持つのなら、フランツのフードに隠れた髪はきつと青色なのだろう。

ユーリケがどれほど必死に説得しても、フランツは「ここで神殿を守るのだ」の一点張りで、この塔を離れる気はないようだ。

「とりあえず、食事にしよう？ フランツさんもお腹空いてないですか？」

マリエラの提案に、「ありがたい」とフランツは答える。

どうやら譲れないのはこの塔から離れることだけで、夜になるまでは一緒に過ごしてくれるようだ。

「魚か。それならば他にもあるぞ」

「運ぶの手伝うし」

フランツと少しでも一緒に居たいのだろう。フランツが捕まえて塔の最上階においてあるという食料の運搬はユーリケとフランツ、そしてクーに任せて、マリエラは料理を開始した。

ユーリケと一緒に捕まえた魔物魚は、エドガンに差し入れてしまったから残り少ない。

この赤身の魚は濃厚で、料理の仕方によって肉のようにも仕上がるから、んにくに似た香草と持って来た調味料で漬け込んでから炙り焼きにしよう。

ユーリケが火炎瓶の材料と一緒にむしり取った水草に丁度いい物があったはずだ。

《錬成空間》の中で赤身の魔物魚を漬け込みながら、窓から手が届く範囲の薬草を採取する。食べられる水草があれば助かるし、火

炎瓶の材料となるゲプラの実があればさらに有難い。

この階層はゲプラが生息するには深すぎて、残念ながら亜種ばかりだったけれど、食用油が取れるものが手に入った。後は、根っこが食べられるもの。水草にしては丈夫な根っこは繊維ばかりでそのまま食べるとは歯に詰まるが、斜めに切った後、油で揚げるとごぼうのような味になる。水草のサラダは少し苦みがあって味も単調だから、添えるときっとおいしいだろう。

「マリエラ、お腹空いたし」

調味料に漬け込んだ赤身の魚肉をサラマンダーで焙っていると、クーリケたちが帰って来た。遅いと思ったら、水草の採取もしてくれているようで、クーの背中にこれでもかと言うほどの量が積んである。

「……スゴイ量。クーもフランツさんも力持ちなんだねえ」  
思わずそんな間の抜けた台詞が漏れてしまうほどには二人の荷物は多かった。

天井に着くほどの薬草を積み込んだクーもそうだが、巨大な蛇のような魚の魔物を、体に巻き付けるようにして運んできたフランツも相当だ。

「これは鶏肉のような味がするんだ」

魚より蛇に近い魔物らしい。

「鶏肉……。から揚げ……。少ししかない油で揚げるには……」

マリエラは真剣だ。ポーションを作る時のような真剣なまなざしで、蛇の魔物をにらみながら何事かを考えている。

「マリエラ、手伝うし？」

「ありがと、ユーリケ。じゃあ、その蛇の魔物、一口大に切つてくれる？」

二人の少女の野外調理だ。それだけならば微笑ましいはずの光景なのだが、二人の前に横たわるのは彼女らを丸呑みできそうな蛇の魔物。蛇の体に縦にナイフを入れて皮をひん剥く作業はフランスがしてくれたけれど、ピンク色の身をザクザクと容赦なく切っているのはユーリケだ。マリエラは切られた肉を調味料と一緒に《錬成空間》に放り込んで「ちょい《加圧》」した後、イモから採れる粉を《錬成空間》で少ない油が均一になるように噴霧している。

特級ポーシオンにいたるために磨き上げた上級ポーシオン作成のテクニックをフル活用だ。

### 《過熱》

揚げ物は温度が重要だ。もちろんエリクサーさえ作り上げたマリエラだ。肉の声に耳を傾けて、外はサクリ中はジューシー、肉の油一滴逃さず旨味を引き出す温度管理で揚げ物を仕上げる。

こんな高度な錬金術スキルで作られた料理など、ここでしか食べられないだろう。

「美味しいな」

「美味しいし！ フランス、一緒に来れば、毎日こんな料理が食べられるし？」

「……残念だが。……残念だ……」

マリエラの超絶錬金術料理とユーリケのあざとい心理攻撃に、フランスの血の定めさえ揺れている。

とても美味しく楽しいひと時だったけれど、フランスはやはり「ここに残る」の一点張りで一緒に来ると言うてはくれなかった。



その夜は、皆でこの中階で眠ることになった。

マリエラのポーチにはフランツの珠がある。ここで眠ればマリエラもフランツの過去を覗き見てしまうだろう。そう思って、上の階で眠ると言ったマリエラだったが、フランツとユーリケに危ないからと止められてしまった。

フランツに事情は話していない。過去を夢に見るのだと知っているユーリケは、「まだ不確定要素が多いし。確実に記憶が戻る方法を取るべきだと思うし」と言っていた。

「どうやらユーリケは「マリエラがいること」も記憶回復の条件の一つだと考えているらしい。」

窓の外から明るい光が差し込む中、マリエラたちは眠りに就いた。

マリエラを見たフランツの夢は、ユーリケと二人帝都のスラムに開かれた診療所で暮らしていた頃の、何気ない日々の記憶で、質素な診療所の佇まいも、ささやかながら二人で暮らすユーリケとフランツの様子も、どこことなく師匠と暮らした魔の森の小屋を思わせた。

特別なことのない、平凡な日々。

秘密を垣間見なかったことはマリエラに罪悪感を抱かせなかったけれど、フランツの記憶はマリエラに望郷の念を募らせた。

( 師匠をさがさなきゃ…… )

志を新たにしたマリエラのそばで丸まっていたサラマンダーは、キラキラとした金の瞳でマリエラを見つめていた。

\*\*\*\*\*

「マリエラ、西の塔の探索だけど……」

北西の塔で夜を待つ間、ユーリケがマリエラに話しかける。

黒い魔物を多く倒せば、夜は早く明けてその分昼が長くなるようだ。とはいえ、水の中のこの世界では時間の感覚はあいまいで、ここへきて3日目だというのに、まだ数時間しか経っていないような感覚もある。

「フランツと、ついでにエドガンを早く連れ出したいし、あそこは安全そうだから、西の塔の探索はせずに2階を目指したいし」

それはユーリケの偽らざる気持ちだろう。記憶を失いながらもこの塔から動こうとしないフランツを心配し、焦りを感じているのだ。

今までの塔の様子から、西の塔は安全で、上に行けば火炎瓶の材料や薬草、食料が、3階に下りれば瓶や雑貨が手に入るのだろう。フランツに火炎瓶の大半を残しても新しい物を作って補充することができる。もしかしたら、塔の天辺に誰かが避難しているかもしれない。けれど、瓶や薬草を探している間に夜が明けて、1日足止めされてしまう。

西の塔で1日すごすか、西の塔は通り抜け南西の塔から2階を目指すか。

（エドガンさんの珠が二つもあるんだから、エドガンさんの記憶を返しに行くっていう選択肢もあると思うんだけど……）

マリエラは少しだけ迷った後、ユーリケに行き先を告げた。

## 10・南西の塔から北西の塔へ（後書き）

《地脈の囁き》 6 / 24 13 : 00 時点で感想欄の回答が多いルートに進みます。

1・あるだけの火炎瓶をフランツさんのために置いて行って、私たちの分は西の塔で作り返そう。1日無駄になっちゃうけど、その方が安心だと思う。

2・西の塔の探索はあきらめて、2階に急ぐべきだよ。火炎瓶は半分だけ置いて行こう。ゲプラの実はまだあるんだし、瓶はきつとどこかで見つかるよ。

3・エドガンさんの記憶を返しに行かない？ 記憶をなくしたままなんて、可哀そうだよ。

1 1・2 階へ（前書き）

今回は接戦でしたが2になりました！

## 11・2階へ

たぶん、焦っていたんだと思う。

魔物に相対する力がない。それは、ユーリケの鞭や火炎瓶でどうにもならない魔物が現れた場合、逃げるしかないということだ。

マリエラだつて魔の森で暮らしてきたのだ。そんなことは、誰よりも分かつていたから今まで慎重に行動してきたというのに、不気味で数は多いけれど、火炎瓶ファイヤーで倒せてしまふ黒い魔物ばかりだつたから、ここには黒い魔物しか現れないのだと、そう思い込んでいた。

「西の塔の散策は後回しにして、とにかく2階へ急ごう」

北西の塔でマリエラとユーリケがそう話し合ったのは、フランツの記憶がだいぶ抜け落ちてしまつていたからということもある。

マリエラが持っていた記憶の珠の分、フランツは記憶を取り戻したけれど、それは彼がなくした記憶のほんの一部でしかなかったのだから。

けれどそれ以上に。

「フランツ！ その顔……！」

ユーリケの動揺した声にマリエラが振り向くと、ユーリケがフランツの仮面を外しているところだった。降ろされたフードから流れる髪は、記憶の珠と同じ青色ですっきりと切られて後ろに流れている。

離れた場所から顔の細かい造りを見ることはできないが、マリエラが思っていたよりもずつと若い雰囲気、ジークやエドガンと同じ年頃に見えなくもない。

いや、随分と落ち着いた雰囲気だから、非常に落ち着きのないエドガンと並べるとずっと大人びて見えるのだろうか。

けれどマリエラを驚かせたのは、フランツの落ち着いた雰囲気などではなくて、その額や鼻筋を覆う髪と同じ青だった。遠くからでも硬質に思えるその色合いは、鱗なのではなかるうか。

マリエラの視線に気づいたフランツはさつと仮面をつけてフードを被って顔を隠してしまっただけで、いつもは人と変わらない仮面の下から覗く素肌に、青い鱗がほんの少しのぞいて見えていた。

（フランツさんは亜人の特徴がある人だって……。でも、あの顔。鱗、拡大してるんじゃない？）

フランツは、この場所が自分の根源に連なる場所だと言っていた。守らねばならないからここを離れられないのだと。

その根源が亜人の血だとして、それがフランツを蝕んで、ここで黒い魔物と戦わせ、彼の記憶を失わせていく。

（まるで、作り変えられていくみたい……）  
その考えにマリエラは心底ぞつとした。

もし記憶を全て失ってしまったら、フランツはどうなってしまうのだろうか。

もし自分が記憶を失ったなら、それでも自分だと言えるのだろうか。

「ユーリケ、急いごう」

「わかってるし」

フランチに火炎瓶を半分と当面の食料を渡すと、二人の少女は夜の訪れと共に北西の塔を飛び出したのだ。

南へ、南へ、南へ。

火炎瓶で黒い魔物を燃やし尽くしながら、ユーリケはラプトルを南西の塔へと走らせる。

途中、西の塔を通り抜け、南西の塔に飛び込む。

「マリエラ。火炎瓶を！」

「うん！」

火炎瓶の扱いも手慣れたものだ。マリエラたちにはサラマンダーが付いているのだ。マリエラが大量に込めた魔力で立ち上がる火柱も、マリエラたちの髪一筋さえ燃やしたりはしない。

南西の塔の3階に火炎瓶を放り込み、炎に包まれた部屋へと飛び込む。

3階は、ユーリケが話していた通り壁の一部が崩れていて、外から黒い魔物が侵入し放題の状態だった。塔の外から見ていたならば、崩れた壁から炎が噴き出す様が見えただろう。

マリエラの放り込んだ火炎瓶の炎はサラマンダーのお陰かすぐに鎮火して、マリエラたちは呼吸に困ることさえなかったのだけれど、南西の塔3階には魔物どころか木箱や棚らしきものも燃えカスしか残っていない。それと、床に幾つか丸い物。

「また、珠……。煤けてよく見えないけど、これは……」

「マリエラ、確認は後でいいし。2階に急ぐし」

外壁上の通路とここで、いくつめの珠だろうか。確認するのは後

でいい。進めるだけ先に進もう。  
マリエラたちは拾った珠をポーチにしまつと、さらに下の階、2階へと歩みを進めた。

「下への階段は、ないね……」

「そう簡単にはいかないし」

「グギヤア……」

南西の塔2階には北と東に続く扉があるだけで1階に続く階段はなく、神殿を目指すには再び下り階段を探さねばならない。

そうすんなりと進めるとは思っていなかったから、マリエラとユーリケに落胆はなかったけれど、困惑気味にもじもじしているものが約1匹。

「ん？ クー、どうしたし？ ああ、絨毯か。大丈夫だし。汚したって怒る人はいないし」

この塔の2階にはとても高そうな絨毯が敷かれていて、普段室内に入ることもないラプトルのクーはふかふかとした足元の感触に、どうしようかと困惑していたのだ。

「ギヤア！」

踏んでもいいとユーリケに許可をもらったクーは、嬉しそうにその場で絨毯をふみふみしては、ふかふかとした感触を楽しんでいる。

「随分と雰囲気が変わったね」

絨毯だけではなくて、床や扉の材質や作りも3階とは変わっている。古い時代の宮殿か神殿かという感じだろうか。マリエラの知っている一番豪華な建物はシューゼンワルド边境伯家なのだが、それより豪華で重厚な造りのようだ。



「この部屋は豪華だけど何もなし。先に進むし」  
絨毯のふかふか具合を楽しんでいるのはクーだけで、ユーリケは素早く扉に走り寄ると、そっと東に続く扉を開ける。

「マリエラ、部屋があるし……。見える範囲に魔物はいないみたいだけど、明かりはまばらで安全かは分からないし。……北側も同じだし」

両方の扉を開けて続く廊下を確認するユーリケ。3階までは塔と塔を繋ぐだけの廊下だったのに、2階には内壁側に部屋が幾つもあるようだ。

そして、部屋のある内壁側にまばらに灯っている灯り。扉が照らし出されていることから、扉の近くにだけ松明が灯っているのだろう。

廊下にも豪華な絨毯は敷いてあって、濡れているようには見えなからどちらの廊下も水没したりはしないようだ。

「扉のそばに明かりがあるってことは、部屋の中は安全なのかな？」  
「さあ？ でも扉のサイズから、ラプトルに乗ったままでは部屋に入れそうもないし」

ユーリケは最初に開けた東側の扉から東西の廊下に一步踏み出す。北側、つまり左手側には扉が並んでいて、数歩進めば最初の扉を開けられそうだ。

とりあえず扉の向こうを確認しようかと、あたりの様子を伺いつつ進むユーリケ。マリエラとクーも安全だろう南西の塔からユーリケの後に続いて廊下に踏み出す。

右手側は一定間隔で窓が開いていて、外は暗く夜はまだ明けてはいない。ここまで来た様子から、外は黒い魔物で溢れているはずな

のに、南西の塔にもこの廊下にも黒い魔物は影も見えない。

ここは、安全なのかもしれない。

そんな風にマリエラたちが思った時、遠くで何かを叩くような音が聞こえてきた。

コーン、コーン、コーン。

「!! 今の音！ きつとドニーノだし」

外は暗く、廊下の灯りは心もとない。東へ伸びる長い廊下の果ては薄暗がりにかき消されて、南東の塔まで続いているのか、それとも途中に何かあるのか見通すことはできない。

けれどその廊下の向こうから、何か硬い物を叩く規則正しい音が聞こえたのだ。

「行こう！ ユーリケ。出口があるかも！ 夜のうちなら外にも出られるよ！」

二人は並ぶ扉のどれも開けずにラプトルの背に飛び乗ると、全力で音のした東の方に走り出す。

真っ直ぐな、けれど暗くて見通しの悪い廊下を走ると、所々に灯る松明の灯りがぐんぐん後ろに流れて行って、まるで幻の世界のようだ。

この世界は、まるで誰かの悪い夢の世界のようにも思える。

コーン、コーン……………。

進むにつれ大きさを増した打撃音が急に途切れた。

「音が……………！ あの扉の向こうだし！」

長い廊下の終わりは、東西に続く廊下のおよそ半分ほどの距離で訪れた。突き当りでは両開きの大きな扉がマリエラたちを出迎える。他の扉とは違って、ラプトルに騎乗したままで十分通れる高さも幅も十分な、立派な扉だ。

「この辺りから、例の神殿に行く道があるんだったよね？　ってことは、エントランスがあるのかも！」

きつとこの扉の先に下に続く階段があるのだろう。そして、外に、塔と外壁に囲まれた巨大な神殿へ続く道があるに違いない。

もしかしたら、夜が明けてあたりが水で満たされる前に、神殿に辿り着けるかもしれない。

マリエラとユーリケは、焦っていたのだ。

記憶を失い、姿さえ変貌していくフラントツを見て。

そして油断していたのだ。今まで黒い魔物にしか襲われず、それらを火炎瓶で軽くあしらってこられたから。

“ここは安全かもしれない”なんて、記憶を喰われるこんな世界で、あるはずはないのに。

どうして打撃音が途絶えたのか、この扉の両脇に松明は灯っていたのか、廊下の窓から見える空の色は、夜の闇色かそれとも夜明けに白んでいたのか。

そのすべてに意識を割くことさえせずに、マリエラとユーリケは扉を開ける選択をした。

キイ……。

クーの背中にマリエラを残してひらりと降りたユーリケが扉の取っ手に手を掛けると、重厚な佇まいからは予想もできない軽やかさで扉が開いた。

そこは、マリエラたちの予想通り、中央の神殿へ続くエントランスのような場所だった。2階の廊下は扉の向こうで階段に変わり、南東の廊下側から続く階段と踊り場で合流して1階へと下っていく。本来はそういう作りなのだろう。

けれど、マリエラたちの行く先は、階段の合流地点よりずっと手前で立派な大樹によって塞がれていた。

「木……？ まるで壁みたい……」

1階から2階の天井に突き当り、そのまま左右に広がった巨木の周囲にも、天井に届く樹木が幾本も生えていて、階段は途中でふさがれ下に下りることはできない。木々の隙間を通り抜けられれば、外へも行けるのだろうけれど、うねうねと蔦が木々を繋ぐように生えていて、通り抜けられる隙間も見られない。

扉を開けた瞬間に流れ込んできた緑の匂いと巨大な木々は森の中を思わせたけれど、一本の巨木を中心に不自然なまでに密集したこの大木はいびつな生垣のようにも思えた。

「これじゃ、外に行けないし。下に飛び降りることは……」

ユーリケが階段のフロアに脚を踏み入れ、手すりから1階を見下ろす。

「おーい、誰がいるし？」

とりあえず音の主を探してみよう。そう考えたユーリケが声を上げる。

すると、階下の少しはなれた場所から、呼びかけに答える者がいた。

「その声、ユーリケか!？」

「ドニーノ!? 下にいるし?」

「よかった、ドニーノさん、無事だったんだね!」

思わずマリエラも声を上げる。やはり、先ほどの打撃音はドニーノだったのだ。

黒鉄輸送隊で装甲馬車のメンテナンスを行っているドニーノは、ハンマーを武器とし、向かう敵をその剛腕で叩き潰すのだ。スピードのあるタイプではないものの、決して弱いわけではない。

けれど、そのドニーノは、2階にユーリケやマリエラがいることを察知すると、鋭い声でユーリケを制した。

「ユーリケ、今すぐそこを離れる!」

ドニーノの声に、マリエラがいる廊下側へと飛び退るユーリケ。その瞬間。

ぶるり、とマリエラたちの行く手を塞いでいた樹木が身震いをした。巨木の表面を隙なく覆い、周りの木々と繋いでいた蔦がばらりと、まるで結い上げた髪がほどけて流れるように一気に外れて木々の表面が露になる。

「ひっ! 顔!？」

マリエラが、短い悲鳴を上げるより早く、ほどけた蔦がまるで生き物のように蠢いて、ユーリケの居た場所に幾本も叩きつけられ、その反動で絡み合う。

ユーリケの退避が一瞬でも遅かったなら、ユーリケは蔦に絡まれ引きちぎられていたかもしれない。

露になった樹木の幹には、血のように赤い目と、肉を裂いた傷口

のような鼻孔と口が穿たれて、じろりとマリエラとユーリケをねめつけていた。

「こいつ、“首飾り”だし！」

退避した次の一步でマリエラとラプトルのそばまで飛び退ったユーリケが叫ぶ。

“首飾り”。

それは人面樹と呼ばれる人の顔を持つ樹木の魔物の、とある品種に付けられた俗称だ。

樹木に様々な種類があるように、樹木の魔物も多様性に満ちている。

都の学者が付けた正式な名前もあるのだろうが、ユーリケたち冒険者にとっては名称などはどうでもよいのだ。それが、どのような魔物で、どう対処するべきか。それが端的に分かることこそ重要なのだ。

“首飾り”という俗称もこの樹木の魔物の特性を端的に表している。

幹に現れた表情やこの名前が表わすとおり、この樹は最も虚栄に満ちた種族と言われている。この樹の魔物と意思の疎通を行った者はいないから、真意のほどは定かではない。

ただ、一般的な人面樹が時折、醜悪な花や果実を付けてその身を飾るのに対し、この樹だけは花を咲かせることも果実を実らせることも無い。

その身を飾る何ものをも持たないこの樹の表情は、どの人面樹よりも妬みに満ちたように見え、充血した目や生き血をすすった後のような真っ赤な口は、嫉妬に狂った生霊に取りつかれたようにも思

える。

そしてこの樹は、己が身を食い破らせて取り込んだ蔦を手足の如く用いて、通りがかる人や獣を無差別に襲うのだ。その首を触手で釣り上げ、まるでペンダントを掛けるが如く己が身を飾るために。

それ故に、付いた通称が“首飾り”。

根を使って移動することはできないが、蔦は鋼のように固くて攻守に長け、意のままに動かせる。

好戦的で厄介な樹木の魔物である。

「ユーリケ、反対側で落ち合おう。いいか？ 昼だ。ちゃんと昼になつてから来るんだぞ！ 分かったな！？」

ドニーノの姿は確認できない。けれど聞こえてくるのは、ガキン、ゲインという、鈍器同士が打ち合うような硬い音で、階下でもドニーノが“首飾り”と交戦していることが伺える。“首飾り”を引き付けて、ユーリケたちが逃げる隙を作ってくれているのだろう。

「ドニーノ！？ 分かったし！」

ユーリケはドニーノに返事をする、マリエラとクーのそばまで退避する。

“首飾り”はドニーノだけでなくマリエラたちも獲物とみなして、捕捉しようとする蔦を動かす。

「ギヤギヤ！」

その攻撃を軽やかに避けるラプトルのクー。

「早く行け！ そいつの武器は蔦<sup>エモ</sup>だけじゃねえぞ、気を付ける！ こっちも離脱する！」

ドニーノはそれだけ叫ぶと、離脱を始めたようだ。打撃音が少し

ずつ遠ざかっていく。

ドニーノの警告。その意味はすぐに知れた。

捕まらないマリエラたちに、まるで癩癩を起したように“首飾りがぶるぶると体を震わせたのだ。”

ぼだ、ぼだ、ぼだん。

天井いっぱいに広がった“首飾り”の枝葉から、何かが幾つも落ちてきた。

うねうねと、身を擦るその体が、白くつるんとしていたならば、……もちろんそれでも十二分に悲鳴を上げるに値するものではあるのだが、まだ、視覚的には優しかったかもしれない。

遠くから見れば、ふかふかしていると思える者は、その魔物ではない通常種を触ったことがないのだろう。

毛と、棘と、毒。

たくさんある、けれどひどく短い脚に、強靱な歯。

こちらを向いた頭部の黒は、眼なのかただの模様なのか。

判別は付かないけれど、「目が合った」と、マリエラとユーリケはそのように感じた。

「ひゅっ」

思わず息を呑んだのは、マリエラか、それともユーリケか。

脊髄反射のようなスピードでラプトルに飛び乗り全速力で来た道を走らせるユーリケと、こちらに向けて異様な速度で突進してくる、巨大なそれら。

人の頭など一口で喰い千切れそうな巨大なそれらが、扉の向こう



から溢れ出し、床を、壁を、天井を縦横無尽に這い進んでくる。

「iiiiiiiiiiiiいやあああああああ!!!!!!!!!!」 毛虫イ  
イイイイイイイイ!!」

よづやくたどり着いた2階の廊下に、少女たちの絶叫が響いた。

1 1 . 2 階へ (後書き)

ざっくりまとめ： $\text{A} \left( \text{A} ; ; \text{益} ; ; \right) \text{A} \text{カサカサ} \text{A} \left( \text{A} ; ; \text{益} ; ; \right) \text{A} \text{カサカサ} \text{A} \left( \text{A} ; ; \text{益} ; ; \right) \text{A} \text{カサカサ}$

少し分岐を減らして、スピード感上げていこうかなと思います。 $\text{A} \left( \text{A} ; ; \text{益} ; ; \right) \text{A} \text{カサカサ}$

## 12・2階南西廊下

芋虫、毛虫の魔物であるキャタピラーと呼称される魔物も、人面樹など木の魔物であるトレントも、古来より人間の生活と密接に関わってきた魔物である。

勿論種類によるのだが、トレントから採れる木材は、通常のものに比べて硬質かつ難燃性で高級品として取り引きされているし、キャタピラの吐く糸は丈夫だったり、薄くても暖かだったり、伸縮性や通気性に富んでいたりと、高機能な布の素材として重宝されている。

ちなみに迷宮都市で手に入れた、マリエラの下履きもキャタピラの糸から作られていて、マリエラの脚を実際よりもメリハリの利いたシュツとしたものに見せてくれている。実に高機能だ。

ちなみにマリエラは、“キャタピラ”というのは、コロンと丸くどこか愛らしい芋虫が、もっきゅもっきゅと草を食<sup>は</sup>んでは、ぷはあと糸を吐くのだと、なんとなく考えている。

実際、一般市民の衣類に使われるキャタピラは、魔物の中でも比較的扱いやすい種を養殖しているから、その見た目がマリエラの想像よりも5倍ほど巨大で、20倍ほどグロテスクなうえ、食事は草だけでなく生肉だったり、しょっちゅう暴れては「キシヤーキシヤー」と糸を吐き散らかしてそれを採取しているのだという実情に、幼児向け絵本に書き直すくらいのフィルターをかけて見るならば、あっていると言えなくもない。

少なくとも、変な模様があったり、部分的にもっさあと毛や棘が

生えていたりする、見ているだけで体が痒くなってくるような、そんな見た目はしていないし、糸を吐き散らかす代わりに毒毛を飛ばしてきたりもしない。

マリエラとユーリケを乗せたラプトルの、揺れる尻尾を喰いちぎらんと、「ギユイツシャアアアア」と迫って来る大量の毛虫軍団ほど、見た目も攻撃方法も凶悪なものでは決していないのだ。

「マリエラ、火炎瓶！」

ラプトルを右に左に操りながら毒毛を避けるユーリケが泣きそう  
だ。

「うん！」

ラプトルから振り落とされないようにユーリケにしがみ付きながら、火炎瓶を投げるマリエラも泣きそうだ。

「キャウ！」

マリエラの投げた火炎瓶の炎はサラマンダーのおかげで通路いっぱい  
に広がって、毛虫たちを呑み込んでいく。

廊下沿いに幾つも部屋はあるのだけれど、“首飾り”の居た部屋  
までどこものぞかず真っ直ぐ来たのだ。どこかの部屋に飛び込む隙  
はあるけれど、飛び込んだ先が危険な場所ならマリエラたちの命運  
はそこで尽きてしまうだろう。

だから今は、火炎瓶で応戦しつつ、南西の塔まで逃げるしかない。

けれど、黒い魔物をことごとく焼き尽くした頼みの綱の火炎瓶の  
炎は、毛虫たちには足止めにもならないようで、ずおっ、と炎を突  
き抜けてその巨体と物量で炎を消火しながら毛虫たちはマリエラた  
ちに追い縋る。

「うわあ！ 来たし！ 何かつるんとしてるし！」  
「ぎゃああ！ 来たよ！ 何か美味しそうな匂いしてるよ！」

表面を軽くあぶった毛虫が美味しいかは別として、毛虫の棘が燃やされたおかげで、毒棘を飛ばされる危険は減少したから、火炎瓶には一定の効果はあったのだけれど、炎に焼かれることも厭わずに押し寄せる巨大毛虫に、二人の少女は涙目を通り越している。

「なんでっ、なんで燃えないの〜!!！」

「たぶん、水つばいんだし？」

「水っ……、言わないでよ、ユーリケ！」

「聞いてきたのはマリエラだし！」

クーの背中中で混乱しながら悲鳴を上げるマリエラとユーリケ。

ユーリケもやはり女子ということか、それとも単に虫が苦手なのかは分からないが、大量の巨大毛虫にウジヨラモジヨラと追いかけてられて冷静でいられる人間は、戦闘力にかかわらずあまりいないだろうから、順当な反応なのかもしれない。

炎で焙られ毛虫の表面が硬化したのか、先頭の毛虫の動きが鈍くなったのだろう。毛虫たちとの間に、マリエラたちが混乱しているほどの距離が開いたのだけれど、それもつかの間。

ヒュ、トトト。

炎で焙られて速度の落ちた毛虫を踏みつけにして、後方の無傷な毛虫がマリエラたちの背後に迫り毒毛を飛ばす。

「ギャウツ！」

「！クー！」

毒毛の一本がクーの尾に刺さり、クーの速度が見る見る落ちる。この毛虫の毒には体の自由を奪う作用でもあるのだろうか。

「もう少しだけ頑張つて！」

見る間に距離を詰めて来る毛虫たちに向かって火炎瓶を次々に投げつけるマリエラ。南西の塔まであと少しなのだ。毛虫たちに火炎瓶の効果は僅かだけれど、ほんの少しでも進行を遅らせられるならば、塔にたどりつけるかもしれない。

「キャウ！」

マリエラの肩へばりついていたサラマンダーが、クーの頭に飛び移り励ますように鳴いている。

「ギャツ、ギャツ、ギャツ」

短く吐く息に合わせて声を振り絞り、脚をもつれさせながらも、クーが懸命に走っていく。

後ろに続く空間を喰らいつくすように、押し寄せる毛虫たち。その距離がどんどん近づいて来ることが、毛虫を覆う炎の熱気で伝わって来る。

マリエラの外套の裾さえその熱気にあぶられそうだ。脚を絡ませるようにおぼつかなく走るラプトルから振り落とされないように、マリエラはユーリケにしがみついている、もう後ろを振り返る余裕はないけれど、きつと、すぐそこまで迫っているに違いない。

「はっ」

ユーリケの鞭が舞い、数メートル先に迫った扉のノブに絡みつく。南西の塔はもうすぐだ。

そのまま引いて開いた扉の中に、滑り込むように飛び込むクー。

塔の室内に入るなり脚がもつれて、どう、とばかりに倒れ込む。その反動でマリエラもユーリケもラプトルの背から振り落とされて塔の室内に転がり込む。

「きゃあっ」

珍しく女の子らしい悲鳴を上げて、けれどゴロンゴロンと動物の子供か何かのように転がるマリエラと、軽やかに一回転して勢いを殺して体勢を立て直し、扉のノブに絡みついたままの鞭を引いて扉を閉めるユーリケ。

絡みついていた鞭は、意思を持つ生き物のように扉を引き寄せつつもノブから外れてユーリケの手元にもどる。

ツドン、ドン、ドス、ドス、グジャ、グジャ、グジャ、グジャ。

締まった扉の向こう側から響いてくるいくつもの衝突音と、何かが潰れていく音。

「……………うわぁ」

翻った外套を頭からかぶりながら、よろよると立ち上がったマリエラの第一声が、「助かった!」という感嘆の声でなかったのも、致し方ないだろう。

塔の扉は見た目よりはるかに丈夫なのか、それとも何か不思議な力が働いているのかは分からないが、マリエラたちは、押し寄せる毛虫たちから逃れることはできたらしい。あれだけの集団が、全く減速せずに突進してきた勢いがどのような惨劇に変換されたのか、響いて来る音から容易に想像はできるのだろうが、言及はあえてするまい。

「クー!」

「マリエラ、早くポーションを!!」  
扉の向こうの毛虫たちよりクーの方が余程心配だ。

毒毛にやられたクーの尻尾は鱗に覆われていて変色の度合いが分かりにくい。他より赤紫に変色しているように見える。何よりパンパンに腫れあがっていて、とても痛々しい。クー自身、後ろ脚を伸ばした腹で滑り込んだ体勢のまま、ぴくぴくと痙攣を繰り返している。

「ユーリケ、とりあえずこれを飲ませて!!」

マリエラは回復と解毒の効果のあるポーションをユーリケに渡すと、自分はクーの尻尾に解毒のポーションをかけて中和しながら毒毛を洗い流す。

「これ、体の動きを止める類の毒だと思う。この間に合わせの材料で作ったポーションじゃ、緩和するのが精一杯だよ。何日か寝かせれば回復はするんだろうけど……」

今あるポーションはここで採取した薬草から作った類似品で、効果もさほど高くない。毛虫の魔物の毒は獲物を捕らえるための動きを阻害するもので、ある程度は中和できたから心臓が止まってしまふことはないけれど、動けるようになるにはかなりの時間がかかってしまう。

「材料があればいいんだし?」

「うん。でも、上にはないと思う……」

今までいくつかの塔をのぼって採取したけれど、どこも似たような植生だったから、この塔を登っても必要な薬草は手に入らないだろう。

ならば行き先は一つしかない。



「クー、必ず帰って来るから、ここで待ってるし」

「ギョ……」

弱々しく返事をするクー。頭をなでるユーリケの手に気持ちよさそうに目を細めている。

ユーリケとマリエラは、もう一つの扉、北へ続く扉の方へ歩いていった。

「今度は部屋も確認していくし」

「うん。慎重に行こう」

東側の扉は、既に静かになっているが、しばらくは近づかない方がいいだろう。毛虫の魔物が近くにいるかもしれないし、いなかったとして、酷いありさまには違いない。

北側の扉を開けてそろりと廊下に踏み出すマリエラとユーリケ。

「魔物はいないし。一つ目の扉、開けるし」

「うん」

いつでも逃げ出せる体制で、そろりと扉を開けるユーリケ。

「……普通の部屋……だし？」

「ほんとだ。ここ、工房じゃないかな？ 工房の人はどこだろう？」

北側の廊下の最初の部屋は、キャル様の工房で見たことがあるようなガラスや金属の機器が並んだ錬金術の工房のようだった。

部屋の隅には乾燥させた薬草が置いてあるし、棚にも高価な素材が瓶に入れておいてある。机の上には処理途中の薬草が放置されていて、薬草の状態からついさっきまで人がいたようだけれど、ここにはマリエラたち以外誰もいないようだ。

「……偶然にしてはできすぎだし？ でも、これでクーは助かるし？」

「うん。たぶん。ええと、エントの実は……。あった。ルンドの葉柄も、うーん、処理が悪いけどギリギリ行けるかな」

それにしても、材料の処理が酷い。ここには上級や特化型ポーションの材料が置いてあって、上級が作れる錬金術師の工房のように思えるけれど、マリエラの基準から見れば中級ができればいいところではなからうか。

けれど随分と裕福な工房らしく、複雑でピカピカの魔道具が幾つも置いてある。

もつとも、これは上級ポーションが作れる錬金術師の一般的な工房だ。通常の錬金術師は《ライブラリ》に制限などされていないから、能力不足を高価な道具で補ってなるべくランクの高いポーションを作るのだ。

例えば粗悪な上級ポーションだろうと、中級よりは余程高値で売れるのだ。

未だに自分の錬金術師としての熟練度が人並みだという感覚が抜けきらないマリエラだから違和感を覚えているに過ぎない。

「マリエラ、こっちの冷蔵の魔道具の中、ルナマギアが入ってるし！」

「ほんと！？ まだ処理してないやつだ。これならいけるかも」

冷蔵の魔道具の中に未処理のルナマギアが保存されていたおかげで、上級の解毒薬をそれなりの品質で作ることができそうだ。

マリエラは慣れた手つきで《錬成空間》を展開し、あっという間に上級解毒ポーションを作り上げると、クーの待つ南西の塔に駆け戻った。

「お待たせ、クー。はい、ポーションだよ！」

「ギユウ……、ギユ？ ギヤウー！」  
「ちよ、クー、元気になり過ぎだし」

流石はマリエラのポジションというべきか、クーの調子はたちどころに快癒して立ち上がり、べろんべろんとユーリケやマリエラを舐めまくる。

「クー、良かった。でも、どうしてあんな魔物がいたんだろう？」  
マリエラの疑問にユーリケが少し考えた後、答える。

「昼間でも魚の魔物はいたんだし。夜しか現れないのは黒い魔物だけなんじゃ？」

「今までの場所には偶然いなかっただけで、普通の魔物は昼でも活動するってこと？」

塔の窓から外を見ると、とっくに夜は明けていて、魚の魔物が時折ぎよろりとした目でマリエラたちを眺めながら塔の周りを泳ぎ去っていく。

どの魔物魚も細長い窓を通り抜けられないほどに大きいから襲ってこないだけで、大きく発達した顎にギザギザと鋭い歯を生やした獰猛な魚ばかりだ。

「マリエラ、ドニーノが待ってるし。先に進むし」

「ここは安全だけれど、ドニーノと落ち合わなければ。ドニーノは「反対側で落ち合おう」と言っていた。安全な南西の塔2階を指定しなかったのは、何か理由があるのかもしれない。少なくとも落ち合おうと言っていたから、北側の廊下を進めば1階へ行ける違いない。

「うん。でもね」

クーが回復して一息ついたマリエラは、少しばかり思索する。

先ほどの毛虫。じっくり観察はしていないけれど、あれはモジヨ  
ラウスメーヨという毒蛾の幼虫ではないだろうか。だとすれば、と  
あるポーシヨンの素材になるはずなのだ。

攻撃に使えるポーシヨンではないけれど、火炎瓶で倒せない魔物  
がいるのだ。手段は多い方がいい。

毛虫の素材を回収したとして、並ぶ部屋には何があるのか。北側  
の一部屋目には錬金術師の工房があった。あそこの素材は後で回収  
するとして、他の部屋には何があるのだろうか。

（ドニーノさん、いつ合流って言ってたっけ……？ 多少時間が前  
後しても大丈夫、かな？）

ドニーノとの約束はあるけれど、魔物に襲われずに辿り着くこと  
が先決だ。

既に樹と毛虫の魔物には襲われたのだ。この先に他の魔物がいな  
いとも限らない。

マリエラは、今後の方針を相談すべくユーリケに提案した。

## 12・2階南西廊下（後書き）

《地脈の囁き》 7 / 8 13:00時点で感想欄の回答が多いルートに進みます。

1・毛虫の素材だけ回収したら、西側は後回しにして避難用の部屋を確認しながら北へ向かおう。

ドニーノさんのいる「反対側」が北西の塔の場所だったら、西側を全部屋確認してたらきつと夜になっちゃうよ。クーも元気になつたことだし、なるべく早く合流しよう。

2・毛虫の素材を回収したら、ここで休憩してから北へ向かおう。

この先、どこで休めるか分からないもの。西側は後にして、北側をきちんと調べるの。クーも元気になったし、西の塔くらいまでなら夜になる前に辿り着けるよ。

3・もう、毛虫もないと思うし、西の扉の向こうを途中まで調べられないかな？ その後、北側の部屋を一部屋ずつ確認しながら慎重に進むの。たぶん、途中で夜が来ちゃうと思うんだけど、次の朝にはドニーノさんに合流できると思うよ。

13・2階西側(前書き)

接戦でしたが1でした。

「……あそこは、開かずの扉だし？」

「いや、素材がね？」

「今さっき、開かずの間に確定したばかりだし？」

毛虫の魔物の死骸が転がっているはずの東側の扉の前で押し問答を始める二人。

ユーリケのまさかの全力拒否にあったマリエラは、仕方なく一人でそろりと扉に近寄った。

耳を当てて音を聞いても特に何も聞こえない。とはいえ、毛虫の這う音を聞き分けられる人間が一体どれだけいるだろう。

そろりと扉を10センチほど開けて、中に干した魚肉を放り込む。毛虫の魔物が残っていたなら食いついてくるのだろうが、何の動きも感じられない。もう安全なのだろうと中を覗き込んだマリエラは、中の惨状に思わず声を漏らす。

「うわぁ……なんか、魔力がガリガリ削られる感じ……」

もし、なにかがガリガリ削られているならば、それは魔力とは別の正気に関する何かだろう。

生き残った毛虫の魔物は“首飾り”の下へ戻ったのか、扉の向こうに動くものは見当たらなかつたけれど、あたり一面粘液まみれ、毛虫の残骸まみれの状況は、見るものの精神力を音を立てて削っていくような状態らしい。それだけでも堪らないのに、さらに最悪なのが立ち込める臭いで、生臭いような嗅ぎなれない悪臭に、マリエラは込み上げる吐き気を抑えるのに必死だ。

「この臭いだけでもなんとかしないと。この辺りのはぐちゃぐちゃ過ぎて使い物にならないから、とりあえず《乾燥》、《換気》っと」  
マリエラが結構な魔力を込めてあたりの残骸を乾燥させ、換気風の共に吹き飛ばしたおかげで、西側の廊下は視覚的にも嗅覚的にも随分とましな状態になった。

「……マリエラ、さっさと終わらせるし？」

さすがにマリエラを一人で行かせるわけにはいかないと思ったのか、いやいやながらもユーリケが後ろからついてきてくれる。

「ありがと、ユーリケ。えっと、これなら……だめだ。じゃあ、あれは……」

窓から差し込む光のおかげで、毛虫の残骸は見たくない詳細部位まで鮮明に見える。

虫だと思えば悲鳴を上げるマリエラも、素材だと思えば平気なのか、つぶれずに済んだ毛虫の残骸を一つ一つ確認しては「これも使えない」とため息をついている。

「なにを探しているし？」

マリエラ一人に任せていては、時間がかかり過ぎてまた毛虫が戻って来るかもしれないとユーリケが問うと、

「うん、お尻に近いところにある臓器なんだけどね、毛虫の内臓は柔らかいから衝撃でつぶれてぐちゃぐちゃに混ざってて」

とあまり聞きたくない答えが返ってきた。

「……それなら、もう少し向こうで探した方がはやしし？」

ユーリケはなるべく毛虫の死骸を見ないようにしながらマリエラをクールの背に載せると、累々と続く粘液と肉片の終点付近にマリエラを連れて行った。



そんなユーリケの嫌々ながらの協力のおかげで、お目当ての素材を手に入れることができたマリエラは、先ほど解毒ポーシヨンを作った北側の部屋で、もう一つの素材の回収を始めた。

「マリエラ、魔道具を使うし？」

「うん。この送風機が必要なの」

「送風機を使うのに、何で壊すし？」

「この部分を使うんだよ」

微妙に噛み合わない二人の会話。マリエラはいくつもの魔道具から送風機ばかりを集めてきて、しかも魔力を送ると膨らんで風を送ってくれる風船部分をはさみで切り取っているのだから、ユーリケが「使う」の意味を勘違いしても仕方あるまい。

送風の魔道具の風船部分が魔力を流すと膨らむのは、虚勢蛙という蛙の魔物の頬袋が使われているからだ。魔物と言っても弱い部類のこの魔物は、自分を強く見せるため、頬袋を驚くほどに大きく膨らませる。この袋の丈夫さは、パンパンに膨らんだ状態で多少ついても割れないことから明らかだが、この素材の一番の特性は、空気を吸い込まなくても魔力を流せば風の魔法で瞬発的に袋を膨らませてくれるところだ。

急激に膨れて攻撃を跳ね返し、そのまま抜ける空気で逃げ去るといったのが虚勢蛙の生存戦略なのだろう。

この特性を利用したのが送風の魔道具なのだが、魔物と言えど生物の、しかも蛙の皮だから、乾燥させた状態で無限に使えるわけではない。交換しながら使用する消耗品だから、今の迷宮都市では別

の方式が採用されているのだが、なぜかこの工房には古い方式のこの送風の魔道具が置いてあったのだ。もちろん交換用の予備もいくつか置いてある。

マリエラはその送風用の風船部をはさみでチヨキチヨキ切りながら補強用の針金から切り離し、頬袋だけを集めていった。

一旦、乾燥させた後、粉にした頬袋を《命の雫》がこめられた水で煮込んでいく。魔力で風を集めるのは、頬袋の内側に多く分布する細胞で、こうして煮込めば透明で粘りのある状態になって取り出せる。濾過できる程度まで水で薄めてから分離し、そのあと再び濃縮する作業は本来ならばひどく時間がかかるものだけれど、操作としては初歩的なものだ。

「あとはー、さっきの毛虫の……」

「声に出さなくていいし」

ユーリケにちょいちょいダメだしされながら、マリエラは新しいポーションを完成させていった。

\*\*\*\*\*

「ここも錬金術師の工房？」

「どうなってるし？」

ポーションを完成させた後、北側の廊下を進みながら、一定間隔で部屋を確認していくマリエラとユーリケ。

毛虫の素材を回収したら、避難用の部屋を確認しながらなるべく

早くドーナと合流できるように北へ向かうことにしたのだ。

だから、すべての部屋を確認したわけではないのだけれど、開けた部屋はどういうわけかどれも錬金術師の工房だった。

どの部屋も最初に訪れた部屋と同じく、さっきまで人が居たかのような様子で、作業仕掛けの薬草が置いてあったり、稀に食事が湯気を立てていたりする。

けれどもどの部屋にも人影は無いのだ。

そしてもう一つ不思議なことに、ポーションに加工したり《薬晶化》した素材は部屋から持ち出せるのに、処理済の薬草をそのまま部屋から持ち出すと、さらさらと崩れて消えてしまうのだ。

粉にした薬草を練り混ぜただけの煙玉は持ち出せなかつたけれど、成分を抽出して配合しなおした煙玉は、一部工房にあった素材をそのまま混ぜ込んでいても持ち出せた。

食事を頂いた後に部屋から出ても空腹状態に戻ったりはしないから、何らかの形でマリエラたちの『物』に変換しなければ、部屋から持ち出せないルールらしい。

いつでも逃げ込めるようにと開けっ放しにした部屋の扉も、一旦別の部屋に入って出てみると、扉が閉まらないよう嚙ませた荷物を廊下側に押し出して閉まっていたりする。

部屋の中には照明の魔道具があったり、ランプが灯っていたりと部屋によってさまざまな照明がついていて暗いわけではないのだけれど、塔の部屋のように一定間隔で松明が灯っているわけではないから、これらの部屋は魔物が侵入してくるかもしれない。見つからないよう隠れるくらいに考えておいた方がいいだろう。

「なるべく魔物に会わないように慎重に行動しよう」

「それがいいと思うし」

マリエラとユーリケは部屋の中を確認しながら慎重に北へと進んでいった。

そんな二人の前に先ほどと同じ両開きの大きな扉が現れたのは、南西の塔を離れて数時間後のことだった。距離的には西の塔の下あたりだと思われる。

夜になるなりフランツの居る北西の塔を飛び出して南西の塔に辿り着き、西側でドニーノに会って毛虫に追われた。いろいろなことが一気に起こってとても時間が経った気がするけれど、仮眠はとっていないから通常であるならば夜の明けきらぬ頃合いではなからうか。

何時間も前から明るいままの窓の外を見ながら、マリエラはぼんやりと考える。

ドニーノは、何と云っていただろうか。

たしか、「ちゃんと昼になってから」と、そう云っていたはずだ。「ちゃんと昼」とは、夜が縮まって明るくなった後ではなくて、通常の世界での正午頃のことではないのか。

「マリエラ、開けるし?」

ユーリケが扉に手をかけ、最後の確認をしてくる。

その最後の確認に、マリエラは……。

### 13・2階西側（後書き）

前回は時間を問う分岐でしたが、伝わっていないと思われましたので、ファイナルアンサーを設けました。

《地脈の囁き》7/15 13:00時点で感想欄の回答が多いルートに進みます。

結果は16日に更新します。

1・「うん」

ユーリケの最終確認に、考え事をしていたマリエラは思わず返事をしてしまう。

2・「まって！ もう少し時間を空けてから、正午ぐらいに入ろうよ」

3・「まって！ 昼でも魔物はでるんだし、夜になってから暗闇に紛れた方がいいんじゃないかな？」

14 災厄の記憶と飢餓（前書き）

2 になりました。

## 14・災厄の記憶と飢餓

「まって！ もう少し時間を空けてから、お昼ぐらいに入ろうよ」  
扉に手を掛けたユーリケを、慌ててマリエラが制する。

「ドニーノさん、ちゃんと昼に来いって言った。それって、お昼  
くらいのことだと思う」

「そう言えばそんなこと言ってたし」

この扉の先に進んだドニーノの忠告だ。

先ほども、不用意に扉を開けて毛虫の魔物に追いかけられたばかりではないか。

二人は昼頃まで近くの部屋で過ごすことにした。

西の塔に一番近い部屋も、やはり錬金術師の工房だった。

書棚に並ぶ本の装丁や布の張られた椅子から、持ち主の裕福さ  
うかがえる。

極めつけは石の作業台だろう。

錬金術師が使用するスライムの溶解液は、木製の机にかかる  
焦げたような跡を残してへこんでしまう。金属製だと溶ける上に、  
スライムの溶解液がかからなくてもすぐに錆びだらけになってしま  
う。石で作られた作業台は、錬金術師が使用するスライムの溶解液  
や様々な腐食性の素材を扱う上で、一番耐久性がいい。

けれど、一辺が1メートルを超えるような石の板など、石材とし  
ても高級で、個人が所有するにはかなり高価なものになる。マリエ

ラは全て《錬成空間》で作業をしてしまうから、高価な石の作業台など必要ないが、錬金術師のあこがれの品であるともいえる。

マリエラはキャル様の工房においてある物を見たことがあるだけだ。

(それにしても、この作業台の造り……)

作業台の脚には装飾が施されていて、高価な品だと一目でわかるけれど、どうにもしっくりこない。

(石の厚みが一定じゃないんだ……。脚を固めてる石膏？ 漆喰？ みたいなので調節してるのか。それにこのガラスも、気泡が入ってるし少し色が付いてる)

高価な物が並んでいるはずのこの部屋の品々は、どれも迷宮都市のものにくらべて品質が低い。

(ここは、たぶん……)

マリエラは浮かんだ答えを口には出さず、部屋の窓から中庭の様子を眺める。この部屋の細長い窓からは、中庭と神殿の様子が水の向こうに霞んで見える。

ぼつぼつと、窓の向こうを空気の粒のようなものが流れていく。

まるで風のきつい雨の日に雨粒が風に吹き飛ばされながら、窓を流れていくようだ。

幾筋も幾筋も、窓に斜線を引くように流れていつては、途中で合流して大きな粒に変化する。

幾つか合流して大麦の粒くらいに成長したら、ぷくりと窓を離れて泳ぎ出す。

(あれ、魔物の赤ちゃんだ……)

半透明の魔物の稚魚は、水中を濁らせている淀みを喰らっている



のだろうか。窓の外の水はうつすらと濁っていて、半透明の小さな稚魚の行方は知れない。

（本当ならもう直ぐ夜が明ける頃だよ。魔物の稚魚って朝に生まれるものなのかな……？）

そんなことを考えているうちに、うとうとと眠りに落ちそうになるマリエラ。

黒鉄輸送隊で昼夜を問わず魔の森を駆け抜けることに慣れたユーリケならともかく、徹夜で動き回ったマリエラが眠くないはずはない。

「マリエラ、少し休むし。昼になったらちゃんと起こすし」  
「うん……」

マリエラはユーリケに促されるまま部屋の長椅子に横たわる。肩に巻き付いたサラマンダーがぽかぽかと温かい。

長椅子に寝転がり、次々に生まれては泳ぎ去っていく魔物の稚魚の様子を、ぼんやりと眺めているうちに、マリエラはいつしかうとうと眠りに就いていた。

\*\*\*\*\*

深い森の中だった。

木々はこれほど大きかったらうか。

夜はこれほど暗かったのか。

目深にフードを被った一行が、森の中を歩いていた。  
フードと言うよりは、布を巻き付けたというべきか。

森に行く人々の服装は服と呼ぶにはあまりに簡素なものだった。

数は20人ばかりだろうか。遠くで吠える獣の声に、頭上を羽ばたくフクロウの羽音に、一行は身を震わせつつ先へと進む。

月光さえも梢が遮り、獣に比べて愚鈍な人々の動きを茂る草が遮る。

魔物に出くわしたのならば、あらがう術はあるのだろうか。

恐ろしい、恐ろしい夜の森。

夜から、森から、魔物から。人々を守ってくれるのは、先頭を行く人物が掲げるランプだろう。

長く火が消えないように材料を選びすぐり丹念に作られた蠟燭は、それだけで炎の精霊への供物となり得る。

現に、ランプの中で蠟燭の先に灯っているのは、小さな炎の精霊だった。

炎の髪をたなびかせ、ランプの中でちろちろと燃える精霊は、大きさからみて随分若い個体らしい。いつまでも変わり映えのしない森の景色にすっかり飽きて、ふわあと退屈そうにあくびをして、その度に炎は揺らいで消えそうになる。

そんな精霊の様子が見えているのかいないのか、ランプを持つ人物は、炎が揺らぐたびに何やら唱えて、精霊の機嫌を必死でとっているようだ。

つまんない。みんなが辞めとけって言った意味が分かったわ。

文句を言いつつ、炎の精霊はしっしと何かを追い払うように右手

を振る。すると手を振った方向に居た、何匹かの獣が森の中に走り去る。

獣や弱い魔物は炎を怖がる。それは炎に精霊が宿っていて、悪しきものを追い払っているのだとそう信じられている。

この炎の精霊も、文句を言っている割にきつちり仕事はしているようだ。

途中何度か短い休憩をはさみながら、一行は森の奥へと歩き続ける。日が出て姿があらわになると、彼らがひどく痩せこけていて、服とも呼べない布を身に付けていることが分かった。身に付けた武器も金属ではあるけれど、鈍い光を放っていて、とても切れ味が悪そうだ。

彼らは奴隷というわけではないのだろう。

武器も帯びているし、鳥の羽や獣の牙や骨から作られた装飾品まで身に付けている。

これは、とても、とても古い記憶なのだ。

魔法も技術も知識も何もかも発達していない、人々が、精霊の加護に縋って細々と生き延びてきた、そんな古い古い時代の記憶。

途中2人が魔物に喰われ、交戦して重傷を負った1人を置いてきた。

そんな様子をランプの中から見ていた炎の精霊は気まぐれに揺らぐのを止めて、小さく、けれど強い光で彼らを守った。

そうして一行は、ようやく目的地にたどり着いたらしい。

深い森が突如として終わりを告げたそこは、清く美しい湖だった。

そこに流れ込む川もここから流れ出ていく川も見当たらない。大きな水たまりにも思える凷いだ水面は鏡のように周囲の森を映している。

水の出入りは見られないのに、水はとても澄んでいて、水中に沈む倒木の木目さえも数えられそうだ。

そんな湖の中心を、小さな炎の精霊は息を呑んで見つめていた。

なんて、綺麗。

そこにいたのは、この湖を司る、水の精霊なのだろう。中性的な顔立ちに、さらさらと流れる雪解け水のような髪。瞳はこの湖の水底を思わせる淡く優しい薄水色。

その佇まいから、炎の精霊よりもずっと昔に生じた力のある精霊に思われた。

水の精霊に目を奪われて、動けずにいる炎の精霊をランプごと近くの岩に残して、人の一行は湖の近くに設けられた簡素な祭壇を清めて供物をささげ、何やら祭事を行い始めた。

先頭を歩いていたたくさんさんの飾りを付けた者が司祭なのだろう。

何やら祈りの言葉を唱え、何人かが詠唱を引き継ぐ。

後ろに控えていた者は、持って来た荷物の中から、嚴重に封がなされた箱を取り出す。

ふたをしても隙間から黒いもやが溢れ出しているのに、人々は気付かないようだ。

炎の精霊も、水の精霊のことも、見えていないのかもしれない。

司祭が箱を受け取りふたを開けると、中には白変し、あるいは黒

点が浮かび、虫に食われ、腐り果てたいくつもの作物と、呪術布に包まれた両手の平より大きい何かが取められていた。

作物の病魔だ。それと……

炎の精霊は司祭たち一行が危険を冒してここに来た理由を理解した。

「……ジイ……。ヒ……。イ……。……」

黒い靄の囁き声は、司祭たちには聞こえないのだろう。作物を生きたまま腐らせた病魔と、その結果、飢えて死んだ赤子の遺体。その遺体には呪術布で餓死者の怨念を集めて封じ込めているようだ。病魔と人の飢餓の念は混ざり合い、この黒いもやを形作っている。彼らはここへ、自分たちの村を襲った厄災を祓いに赴いたのだ。

恭しいしぐさで、その黒いもやの溢れる箱を準備してきた小さな船に乗せると、湖へと流す司祭に、炎の精霊は心配そうに水の精霊の方を見る。

力のある清らかな水は穢れを寄せ付けない効果があるし、穢れを受け入れ浄化して、正しく世界に還すのならば、受け入れてゆつくりと世界を循環する水の精霊や森の木々や生き物たちにもできるのだけれど、浄化されるまでの期間、彼ら自身が穢れてしまう。

こういった質の悪い穢れを祓うのは炎の精霊たちの領分なのだ。強い業火で焼いて清めて、何もかもを灰に帰す。力を殺いでしまった後で、ゆつくり世界に還せばいい。もちろんこれほどの穢れを清める力など、小さな炎の精霊に備わってはいないのだけれど。

作物の病魔を乗せた小舟は風もないのに湖の中央、水の精霊の居る場所まで運ばれていくと、底に穴が開いたかのように湖の中に沈

んでいった。

「…………ジイ……。モジ……。イ……。ヒ……」

湖に放たれた黒い穢れは、水の中に薄く散り、いつの間にか集まっていた魚たちについはまれて消えて見えなくなっていた。湖に住まう全ての生き物に広く拡散したのだろう。

「我らが村の厄災は払われたり」

「作物は清められたり」

「苦難は去りき」

口々に唱える人々。彼らは炎の精霊が宿ったランプを再び手に取ると、元来た方向へと引き返していった。

ねえ、大丈夫？

ランプのガラスに手を付けて水の精霊を案ずる炎の精霊。

水の精霊の一息で消し飛ばされそうな小さな炎の精霊に、水の精霊は答えなかつたけれど、湖の中に消えていく前に、とても優しい表情で微笑みかけてくれた。

## 15・飢餓の蜘蛛

(今の夢、……一体)

この夢も誰かの記憶なのだと思う。けれど随分古い時代のようだ。マリエラも200年前に生まれた人間だけれど、夢でみた服装はそれよりもっと、ずっと昔のことに思える。

記憶の珠を確認しようかとも思ったけれど、昨日は急いで回収したからいくつあるのか分からないし、煤けたものは色も確認していない。だから今さら確認したって何かがわかるわけではない。

「マリエラ、起きたし？」

マリエラの寝ている間、見張りをしてくれていたのだろう。扉の方にいたユーリケが戻ってきた。

「ごめんね、私だけ寝ちゃって……」

「僕は慣れてるし。マリエラの体力が回復する方が重要だし。そろそろ時間だから、何か食べてから出発するし」

ユーリケはずっと起きて見張りをしてくれていたのだろうか。だとしたら、あの夢を見たのはマリエラだけだということになる。

作り置きサンドイッチを食べた二人の少女は、周囲に十二分に注意を払いながら再びあの扉の前に立った。

毛虫の時のことを思い出し、マリエラはいつでも逃げられるようにクーの背中にしがみ付き、ユーリケがクーに飛び乗れる距離を取っている。

開けた扉から薄暗い廊下に明るい光が差し込んでくる。

「温室……かなにかだし？」

「それにしても、木がバキバキなんだけど」

西の塔の2階は、1階からの吹き抜けで何本もの樹木が茂っているところは、“首飾り”に襲われた南側のエントランスと似た景色だ。けれどその樹木のほとんどが、途中から折れたり倒れているし、よく見ると巨大な蜂の羽だとか、昆虫の脚のようなものが残骸の合間に埋もれている。

吹き抜けになった塔の2階部分は塔の外壁側に沿って半周ほど廊下になっていて、突き当りが下り階段だったのだろうが、完全に崩れ落ちている。廊下の手すりの一本に千切れたロープが絡みついていいるから、ドニーノはロープで下りた後、破損し上がって来られなくなったのだろう。

3階より上では西の塔からさらに北西の塔へ通路が繋がっていたけれど、1、2階はこの西の塔が行き止まりで北西側に繋がってはいないようだ。

壁には大理石だろうか、白く美しい色合いの石材が貼られていて今までの塔の部屋よりずっと明るく見えるけれど、外壁側の広さはこれまでの塔の部屋と変わらない。けれど内壁側は、半円を描くように築かれたガラス張りで倍ほど広く部屋が拡張されている。

マリエラたちの居る2階の中央あたりから上部がドームのような曲線を描く天井になっている。1階部分には水路や噴水も作られていて、樹木の残骸で覆われている様子は廃墟のようで美しい。そこに外を満たす水に拡散した光が降り注ぐ様子は幻想的と言って良い。

室内に生えた植物がごとく樹木の魔物の残骸で、しかもそのすべてが半ばから折れ、あるいは何か鋭い物で抉られたように切り裂かれていなければ、その美しさに二人は見ほれたことだろう。



「ドニーノさんが戦ったのかな？」  
開いた扉の隙間からマリエラとクーも中を覗き込む。

「この倒れ方……ドニーノじゃないし……」  
そう言つと、ユーリケはマリエラに静かにするよう合図を送る。

カリカリカリ、カリ、ポリ、シャリ。  
何か硬くて薄い物を齧るような、小さな音が部屋の中から聞こえて来たのだ。

その音の出所を探るため、ユーリケは少しだけ扉を開いて西の塔へと滑り込む。

カリ、カリ、パキ……。

そのささやかな物音はすぐに途絶え、代わりに聞こえてきた音は

「…………ジイ、…………モ…………イ、ヒ…………」

(この音、…………声!? あの夢の…………)

マリエラは扉の隙間から、音の聞こえてくる方向に目を向ける。

その場所、扉からは死角になっていた西の塔の外壁側の白い壁に、こびりついた汚れのように、黒い物が蠢いていた。

“まるで死んだ蜘蛛のようだ”

そのように、見る者は思っただろう。光沢のない、光さえ喰らいつくすような黒いそれから、形状の詳細を知ることにはできないけれど、楕円の胴らしきものから細長い脚が上下方向に折れ曲がって生えている様子は、蜘蛛の死骸を思わせた。

恐らく幾本も生えていたであろうその脚は、今は3本しか残っていない。その位置が前後左右に均等でないことから、何本かの脚が

もげて失われたのだろう。残った3本のうちの1本も半ばで折れて無くなっていて、まともに残っているのは反対側の2本だけ。

この黒い何かが蜘蛛の魔物であったなら、頭と胸部が一緒になった頭胸部から足が生え、ぷくりと大きな腹部を持つものだけけど、この黒い何かには失われたのかそれとも元から存在しなかったのか、腹部と呼べるものがなく、頭胸部が高さ方向に歪に盛り上がっている。歪な形に見えるのは、その頭胸部が大きく削り取られたり、齧り取られているからだろう。まともな生き物であったなら、たとえ魔物であったとしても生きてるのが不思議な損傷状態である。

その頭胸部の下面、壁面との間からぼろぼろとパンくずのようにこぼれているのは、蜂か何かの羽のようだ。先ほどのパリパリという音は、これを喰らう音だったのか。

そして今、喰らうものをなくしたこの黒い蜘蛛は、西の塔に侵入した温かく、柔らかい肉を見つけて歓喜に身を震わせた。

「ヒモジイ」

黒い蜘蛛がはっきりとそう喋った声を、ユーリケもマリエラも確かに聞いた。

次の瞬間、ユーリケに向かって飛び掛かる黒い蜘蛛。その体長は脚を除いた頭胸部だけでも2メートルはあるだろうか。けれどその跳躍は、片側に2本しかない脚では速度も精度もできるものではない。飛び掛かって来る黒蜘蛛の体の下面側、四本の動物に例えるならば腹側に、大きく切裂かれたような裂け目があり、そこに人間の物を思わせる丸みのある黄色い歯が無数に生えていることに気が付くや、ユーリケは鞭の代わりにポーシヨン瓶を黒蜘蛛へと投げつけた。

「はっ！」

ユーリケが投げたポーション瓶はいともたやすく黒蜘蛛を捉え、当たった衝撃で瓶は割れ中身が黒蜘蛛へと降りかかる。

これは、先ほどマリエラが錬成した毛虫の粘液と虚勢蛙の頬袋から作られたポーション。

空気に触れることでポーションが飛散する速度は加速度的に増加して、飛び散る空気の流れに引き伸ばされるようにポーションは白く細い糸に変わっていく。

四散しながら対象を捕捉する様は、蜘蛛の糸のようではあるけれど、細かく綿か不織布のように面で包み込むさまは、虫の繭を思わせる。

このポーションは捕縛のポーション<sup>バインド</sup>。あの毛虫は毒毛で攻撃する種で糸を吐いたりはいしなないけれど、繭を作る種でもある。繭の元になる体液と虚勢蛙の急激に膨らむ性質を合わせて作られたのがこのポーションで、対人、対魔物を問わずに効力を発揮する使い勝手の良いポーションだ。

めつたに市場に出回らないのは、毛虫の臓器が大層柔らかく壊れやすいため、目的の素材の入手が難しいからだ。

捕縛のポーション<sup>バインド</sup>は黒蜘蛛の腹側の裂け目を塞ぎ、脚をからめつつて自由を奪う。その上にユーリケの鞭が黒蜘蛛に巻き付き、そのまま床へと叩き付ける。

「ヒモジイ、ヒモジイ、ヒモジイ」

くぐもったように響くその声は、本来口がある場所ではなく、黒蜘蛛の腹側、歯の生えた裂け目から聞こえてくるようだ。あの裂け目はこの黒蜘蛛の口なのだ。

「ヒモジイヒモジイヒモジイヒモジイヒモジイヒモジイヒモジイヒモジイヒモジイヒモジイヒモジイ」

壁にたたきつけられた衝撃よりも、その身を苛む飢えが強いのか、黒蜘蛛は口をふさぐ繭を食い破り、身に絡まった鞭さえも喰らおうと巨大な口をつごめかせる。

「こいつっ！」

これを自由にするのはまずい。本能的にそう感じたユーリケがもう一度壁に叩きつけようと、鞭を握る手に力を込めたその時。

「ユーリケ、こつちだ。そいつをここへ投げてくれ！」

「ドニーノ！ 分かったし！」

ユーリケの真下、1階の廊下を抜けて駆け付けたドニーノが、特に大きな倒木へ黒蜘蛛を投げると叫んだ。

その指示に従い、力いっぱい黒蜘蛛を投げつけるユーリケ。

べじやりと潰れるような音を立てて、倒木に激突した黒蜘蛛は、まるでダメージを受けていないかのように、近くにいたドニーノに飛び掛かるうと3本の脚に力を入れる。

「おっと、させるかよ！」

けれど、黒蜘蛛がとびかかるより早く、ドニーノは倒木から作ったのであろう杭を黒蜘蛛に突き刺し、間髪入れず武器であるハンマーを打ち付けて、倒木へ黒蜘蛛を縫い付けた。

再び自由を失った黒蜘蛛は、体を、恐らくその口内を貫通する杭と接する倒木をも喰らおうとするように、ガジガジと底面にある口を動かしている。まるで痛みもダメージも感じてはいない様子だ。

「……こんだけやっても死ねねえのかよ」  
まるで哀れな物を見るように、黒蜘蛛を見下ろすドニーノ。その頭上に、いつの間にもリエラの肩から移動したのか、サラマンダーがぴよいと飛んでぺちよりと落ちる。

「うお、なんだ、コイツ」

ドニーノの頭上から顔を覗き込むように頭を下げたサラマンダーが、ドニーノの目の前でぷはつと小さい炎を吐いた。

「火で焼けつてーのか？」

視線だけ頭にへばりついたサラマンダーに向けて問いかけるドニーノに、サラマンダーは「キャウ」と返事するように鳴く。

「ドニーノさん、これ使つて！ 火炎瓶です」

リエラの投げた火炎瓶を受け取ると、ドニーノは黒蜘蛛へと近づいて、火炎瓶を投げつける。止めとばかりに吐き出されるサラマンダーの炎。

「ヒモジイ……。……。モジ……。ヒ……。ヒモ……。ア、ア、ア……」

黒蜘蛛は小刻みに体を震わせながら、炎の中で燃えていく。

(この黒蜘蛛、夢で見た、作物の病魔と飢餓の念の塊だよね……)

リエラは2階から黒蜘蛛が燃える様子をじっと見つめる。

きつと、遙かな大昔、ある村で作物の病が蔓延し、人々は飢饉に苛まされたのだらう。子供や年寄り、弱い者から死んでいき、人々はその災いを森の奥深くにある精霊の住まう湖で清めた。

あれは、そういう記憶なのだらう。

ならばなぜ、この飢餓の黒蜘蛛はこの場所にいるのか。

その疑問に答えてくれる者はない。ドニーノの頭上にいたサラマ  
ンダーは黒蜘蛛のそばに歩み寄り、いつまでも燃え尽きない黒蜘蛛  
に再び炎を吹きかけて、今度こそ完全な消し炭へと変えていった。

15・飢餓の蜘蛛（後書き）

ぞっくりまとめ…虫戦終了！

## 16・災厄の記憶と疫病

「ワシが目覚めたのは西の塔だな。その日のうちに北西の塔に行つたんだが、フランツの奴がてこでもあそこを動かすとせんから、神殿を目指すことにしたんだ」

ドニーノを紐鳶のロープで引つ張り上げ、無事に合流出来たマリエラとユーリケは、安全だと思われる南西の塔に一旦戻つて食事を取りながら情報の交換を行った。

フランツと別れたドニーノは南西の塔を2階に下りた。自分が目覚めた西の塔を中心に探索しようとしたのだらう。先に北上して西の塔に辿り着き、ロープで1階におりたのは、偶然にも正午頃だったそうだ。

「あんな、なんでも喰つちまう化け物がいるとはな。もうちつと慎重に動くんだつたぜ」

ドニーノの話によると、あの飢えた黒蜘蛛はほかの魔物を見境なく喰らうらしい。ほかの魔物もあの黒蜘蛛が現れると、ドニーノを無視して黒蜘蛛に襲い掛かる。

恐るべきはその食欲で、どれほど魔物を喰らっても体が大きくなる様子も、飢えが満たされる様子もないらしい。

「あいつらが喰らい合つてくれたおかげで、ワシは生き残れたんだがな」

主だった魔物を喰らい尽くし、自身も魔物に喰われて動けなくなるのがちょうどこのくらいの間なのだそうだ。

マリエラたちが見た、脚も体も欠けた姿は、魔物に喰われた成れ



の果てだったらしい。それでもあの黒蜘蛛は死ぬこともなく、あそこで魔物の残骸を喰らい続けて夜を待つのだ。

「逆に夜はやべえ。魔物は活動を止めやがるし、黒蜘蛛が復活する」  
西の塔の1階には噴水が設けられていたけれど、その取水口を伝って軟体状の黒い魔物が湧き出してくるのだそうだ。そしてそれを吸収した黒蜘蛛は喰われた体や折れた手足を補って急速に復活する。復活した黒蜘蛛の速度は速く、その攻撃力は1階に溢れる魔物を一体で全て喰らいつくせるほどで、パワーはあるが速度に劣るドニーノでは分が悪い。何より、どれほど叩きのめし、すり潰してもまるで痛みを感じないようにいつまでも襲い掛かって来るから、とても相手などしてられない。

黒蜘蛛は部屋の扉は開けられるのだが、塔の扉や“首飾り”がいたエントランスの扉を開けることはできないらしい。しかし西の塔1階には扉がないから、西の塔の木や虫の魔物の残骸を喰らいつくした後は、廊下添いの部屋を喰い荒らしていたそうだ。

「“首飾り”も夜の間は眠っているし、あの部屋の扉も開けられねえよ。だから、夜の間“首飾り”の生垣に穴開けて、抜け出すつもりだったんだが硬いのなんの」

マリエラたちが聞いた打撃音は、ドニーノが“首飾り”の生垣を壊そうとしていた音だった。もっとも“首飾り”の表面を覆う蔦は鋼のように強靱で、破壊することもできずにいたそうだが。

夜が終われば“首飾り”は目を覚まし、毛虫の魔物が襲い掛かる。際どいタイミングではあるのだが毛虫と黒蜘蛛を鉢合わせにすれば、喰らい合っている間にどこかの部屋に逃げ込める。

夜が終わってしばらくの間に、木々の魔物は急激に芽吹いて大樹

へと成長し、虫の魔物は卵からかえったり羽化して1階に溢れかえるのだそうだ。そして、魔物たちと黒蜘蛛は喰らい合いを始める。毎日、この再生と捕食を繰り返していたらしい。

「いやあ、久々のまともなメシは旨いな」

そう言いながら、マリエラが調理した魔物肉にかぶり付くドニーノ。

二人の少女はしばらく顔を見合わせたあと、食べ物にシフトしうになった話題を逸らした。

木と虫の魔物ばかりの場所でドニーノが何を食べていたのか。

30代後半らしいが50歳と言われても違和感がないほどおっさん臭く、ワイルドな感じのドニーノだ。いざとなればなんだって食べるのだろうか、そんな話は聞きたくはない。

「ともかくドニーノさんが無事でよかった。あとはグランドルさんが見つければ……」

まだ見つかっていないのはグランドルだけだ。それぞれ別の塔で目覚めたのなら、グランドルは東の塔にいたはずなのだが、一体どこにいるのだろうか。

「グランドルなら、たぶんあそこだ」

ドニーノが下げた道具袋から折り畳み式の望遠鏡を取り出して、窓から西の塔のあたりを示す。

「わ、ほんとだ……」

「外、水だし？ 呼吸できるし？」

マリエラとユーリケが交互に確認した東の塔付近の中庭には、グランドルが乗り込んでいた、ラプトル積載用箱型鎧が水の中に沈ん

でいて、巨大な蛇のような生き物が箱型鎧の周りを取り囲むようにとぐるを巻いていた。

その横を一匹の魔物魚が泳ぎ寄る。

ぐわ、ととぐるを巻いていた蛇の上半身が水を切ってその魚の胴に喰らい付く。

「うわあ、ユーリケ、あれ」

マリエラから望遠鏡を受け取ったユーリケはとぐるを巻いた蛇の上半身を確認して溜息をもらす。

「うん。あれ、ラミアの亜種だし。腕6本とか、結構な上位種だと思うし……」

下半身をグランドルのいる箱鎧に巻き付けたままでもゆうに2階に届くであろうその体長。ラミアとはあれほど巨大な魔物だっただろうか。

「魔物は夜の間には黒い奴らに喰われていなくなるんだが、あのラミアはグランドルのシールドで守られてあそこまでデカくなったみたいだ。未だに巻き付いてるってことは、グランドルは無事なんだろうが……」

「ドニーノ、あいつ殺れそう？」

「一人じゃ、無理だな。動きを止める奴が要る。エドガンがいりやあな」

考え込むユーリケとドニーノ。あのラミアは相当強い魔物らしい。

エドガンがいれば何とかなるらしいのだが、エドガンが北東の塔を離れば守りが手薄になった北側から大量の黒い魔物が押し寄せらるだろう。フランツ一人で持ちこたえられるだろうか。

「蛇なら、助けになりそうなポーションがいくつかあるんだけど……」

マリエラが提案したポーションは、蛇の嫌う臭いを出したり、振動を検知する蛇の器官を狂わせたり、体の熱を奪って動きを鈍くするものだ。

どれも陸上に生息する蛇の魔物用の物だけれど、このラミアは恐らく水陸共に生息可能だし、顔があるから振動だけでなく視力で獲物を識別しているかもしれない。それに上位種だから、どれだけ効果が見込めるかは未知数だ。

何より、材料が少しずつ不足していて、西側では入手できそうもない。

「いずれにせよ、東側に移動しなけりや始まらねえな。日が暮れるまでここで休んで、夜になったら移動すんぞ」

「分かったし」

食べられる時に食べ、眠れる時に眠る。

戦士らしい判断力で、その場に寝転がり眠りに就こうとするドニーノに、マリエラは慌ててポーチの珠を取り出した。

「ドニーノさん、これ。ドニーノさんの記憶の珠だと思うんだけど」  
マリエラが取り出した記憶の珠は、エドガンの物より落ち着いた色合いの、茶色とこげ茶のシックな珠だ。二つほどある。

「記憶の珠？　なんだそりゃ」

マリエラは今までのことを話して聞かせる。記憶を取り戻す条件がまだはつきりとは分かっておらず、皆で固まって眠った方が確実に記憶が戻るだろうこと、その場合、ドニーノの過去をマリエラたちが覗いてしまうことも。

「なるほどな。でもな嬢ちゃんよ、人の記憶なんざ見ねえに越したことはねえんじゃねえか？ 余計なもんをしょい込みまうぜ」  
記憶の珠をマリエラから受け取り、ポケットへしまい込むドニーノ。

「ワシは一人で適当な部屋で休むぜ。なに、記憶ったっていいもんばかりじゃねえんだ。一つや二つ戻らなくてもワシに変わりはねえからな」

彼はそう言うと、北の扉を開けて近くの部屋へと消えていった。

\*\*\*\*\*

(これ、ドニーノさんの？ ……違う、これは、あの夢だ……)  
ユーリケと二人、西の塔で眠りに就いたマリエラは、再びあの森の中にいた。

やあ、ひさしぶり。

飽きもせず、よく来るものよな。

湖の精霊に会うのは、これで何回目だろうか。

ほかの炎の精霊たちは、ランプに宿って森を抜けるこの仕事を退屈だと嫌うけれど、この炎の精霊はそんな風には思わなかった。

いつだって、あの水の精霊に会えると思うと、暗い森をのろのろと進むのだったってあつという間に感じられたし、帰り道は水の精霊の姿を思い出している間に、街へと帰り着いていた。

この頃には人間たちの住む場所は、村と呼ぶには人が多くなり過ぎていた。

どれだけの時間が流れたのか、そんなことは炎の精霊にとっては全く意味のないことだ。

糧が得られなかったり、存在することに飽きてしまえば、この世から消えて地脈に還る。それが精霊というもので、生じること、存在することも、消え去ることも、全てに等しく価値があり、同時に等しく価値がない。

もともと肉の体を持たないものだ。生じやすいし、変じやすいし、消えやすい。その度意識は変わるのだけれど、それは、人間に例えるならば、昨日の食事を覚えていないかと言った程度の事なのだ。

けれど稀に拠り所となる物を見つける精霊も存在する。

例えば聖樹の精霊などは、芽吹いたばかりの聖樹の双葉に宿って共にこの世に存在する。

精霊が宿らなければ聖樹は成長することがなく、聖樹が枯れれば精霊もまた存在を消す。稀に成熟した聖樹の精霊が、聖樹から離れて単独で存在したりもするけれど、それは極めてまれな例で、並の精霊ではありえないことだ。

特に炎の精霊は、移ろいやすく気まぐれで、火という事象の示すが如く、延々と存在し続けるものは数少ない。その少ないわずかな精霊は、燃え尽きることない火山の火口や、地下深くにあるマグマの川に棲むものだから、街の灯火を転々としながら存在を続けるその炎の精霊はとても珍しいものだった。

普段は小さな町の灯火に身を潜めているものだから、炎の精霊自

身気が付いてはいなかったけれど、長い時間、存在し続けて炎の精霊は、以前のような水の精霊の一息で消えて無くなってしまつような儂い存在ではなくなっていた。

だからこうして、人間たちが儀式を行っている間、水の精霊と言葉を交わすことさえできる。

人の街つておもしろいんだ。

精霊にとつて、人も他の動物も2本足で歩くか4本足で歩くか程度の違いしかないから、大人と子供くらいの区別はつくのだけれど個々人を見分けることは難しい。けれどその炎の精霊は、この水の精霊に会うために存在し続けるうちに人の暮らしにも興味を持つようになった。

ついこの間まで簡単に燃やし尽くせるような、隙間だらけの木の家に住んでいたと思つたのに、今は木だけではなくて石や漆喰を塗り固めた家に住んでいて、炎の精霊が宿れる場所はランプやかまど、暖炉のそばしかない。少し離れた山の方では、いつのまにやら鉄を溶かす大きな窯もできていて、最近、炎の精霊たちの間で人気のスポットになっている。

パンを焼く竈に宿つて、ぶにぶにとした生地がふわふわに膨れて美味しそうなパンに焼きあがる過程や、大きなかがり火を人々が囲んで盛り上がる祭りの様子、松明を片手に街を襲う魔物を撃退する戦士たちの戦いぶりを、炎の精霊は楽し気に語る。

そんな炎の精霊の話を、この湖に住まう水の精霊は穏やかな表情で聞いていた。

お前がそれほど愛しく思える者たちならば、私も慈しむことができようよ。

そう微笑んで、水の精霊は人々の運んできた真黒な穢れを湖へと引き寄せる。

『イ……。……。タ……。……。ナイ』

人間の暮らしはとても賑やかで、その変化は目まぐるしいものだ。喜びも、悲しみも、怒りも、苦しみも、今の炎の精霊にとっては感情の変化としか理解できない。季節が移ろいゆくのを眺めるが如く、人々の変遷をただ興味深く見つめていたのだ。

勿論、人間の感情には良くないものもたくさんあった。そういうものは寄り集まって、穢れとして人間たちにも世界にも良くない影響を及ぼすのだ。作物を枯らしたり、天候を狂わせたり、疫病を招いたりもする。

人間たちは穢れが余程濃いか、特別な能力を持った者しか穢れを見ることはできないようで、そういった者が穢れを祓う時には、炎の精霊はいつも力を貸していた。

勿論、力が及ばないことはある。

今日の穢れだってそうだ。

恐ろしい病がはやり、人が血を吐き死んでいった。

血を吐きながら、残される幼い子供を案ずる母親。

死にたくない、震える病人。

いかさまの薬を売る商人や暴利をむさぼる治癒魔法使いに、身ぐるみ剥がれる家族たち。

治癒魔法が病魔さえ回復させると知らぬ人々は、病人の残り少ない体力を治癒魔法で引きずり出して、上辺だけ病人を回復させてはその苦しみを長引かせる。



やがて、いつまでも治まらず猛威を振るう疫病に、人々の不安は怒りに変じて病人へと牙をむく。

生きたまま焼き殺される病人に、病魔の子として、撲殺される幼い子供。

病人を診た治癒魔法師や錬金術師さえ、病魔付きと石撃たれる。

「痛い、痛い、死にたくない」

そんな阿鼻叫喚を、たかが術師が、精霊が、何とかできようはずはないのだ。

穢れを乗せた箱舟は、水の精霊の足元で、湖の中へ沈んでいった。底の見えない深い水底で、ゆっくりと世界に還って行くために。

16・災厄の記憶と疫病（後書き）

ざっくりまとめ・グランドル、ずっと沈んだ。  
。o ブクブク

17・死肉の洞窟（前書き）

微グロ注意

## 17・死肉の洞窟

「こりゃ、随分と片付けのなつてねえ部屋だな」

南東の塔3階、2階への階段を塞ぐ巨大な箱の前でドニーノがハンマーを握る手に力を籠める。

「何とかかなりそうだし？」

「おうよ。破片が飛び散っちゃいけねえ。お前らは4階に上がつてけ」

マリエラたちは南西の塔で夜まで仮眠を取った後、4階の通路を通つてこの南東の塔まで戻ってきた。

ラプトルの背には、マリエラとユーリケの他に火炎瓶やら食料やらが積まれていて、ドニーノが乗り込むスペースは無い。ドニーノは徒歩での移動になる上に、火炎瓶の効果か夜の時間は短いから、南東の塔に戻つて来るだけで外は明るくなつてしまった。

どのみち中央の神殿へ行くには、この南東の塔から2階へ下りる必要があるし、エドガンのいる北東の塔へは3階の廊下を通つて辿り着けるのだ。マリエラが押し黙っているのは、南東の塔に閉じ込められているからでも、時間をロスしているからでもない。

答えが分かりかけているのに、はつきりとは分からない。そんなもどかしさを言葉に表せずにいるのだ。

（さっきの仮眠で、ドニーノさんもユーリケも夢は見えてないって言つてた……）

ドニーノは「過去の夢は見なかったぜ」と言つて記憶の珠を見せ

てくれた。これで、記憶の珠と持ち主が揃っただけでは記憶が戻らないことが証明された。もちろん、その珠がドニーノのものでないという可能性もあるけれど。

(ユーリケも、何の夢も見なかったって……)

ユーリケが夢を見なかったのなら、あの夢は一体誰の記憶で、そしてどうしてマリエラが見たのだろうか。

ドガン、ガシャン。バリ、パリ、パリン。

「うわ、こりゃひでえ」

階下から聞こえてくる破壊音と、ドニーノの声にマリエラの思考は中断される。

「ドニーノ、どうしたし？」

「ユーリケ、どうもこうも、こりゃかたすのが大変だ」

ユーリケに続いて3階に下りたマリエラは、そこに散乱する大量のポーションを見て、「ああ、やっぱり」と、そう思った。

2階への階段を塞いでいた見上げるほどの箱いっぱいに入っていたのだ。どれほどの量かは言つまでもない。箱を破壊した衝撃で、半数以上のポーション瓶が割れて混ざっているけれど、どれも200年前売れ筋だったポーションばかりだ。

「とりあえず、乾かすね。《乾燥》」

マリエラが行使した《乾燥》で、部屋中が浸るほどだったポーションは一気に乾燥してしまう。

「おお、嬢ちゃんやるな」

ドニーノの感嘆の声はお世辞ではない。これだけの量の水分を一

気に乾燥させるだなんて、そうそうできる芸当ではない。

これが、普通の水だったなら、強大な魔力を誇るマリエラであるうと、これも容易く乾かせはしなかっただろう。

（やっぱり、このポーションは……）

ポーションの多くは、魔法で生成した水に《命の雫》を溶かしこんだあと、薬効を抽出することが多い。つまり、ポーションを構成する水分は、元は魔力ということになる。

どうして水を魔法で生成するのか。それは、自分の魔法で生成した方が、その後の工程で働きかけやすいからだ。

例えば、零れた水を乾燥させるのだって、汲んできた水と、魔法で作った水とでは乾かすのにかかる魔力も時間も雲泥の開きがある。

（これは、私の作ったポーションだ）

そう思っこの部屋を見渡すと、周りの箱に詰め込まれた安価な雑貨の数々も見覚えがある。

（これはきつと、お世話になっていた孤児院の……）

マリエラは確信する。この南東の塔は、マリエラの記憶の塔なのだ。

「いたっ」

「マリエラ、ボーっとしてるから。ポーションはたくさんあるし、さっさと治すし」

割れたポーションを片付けるマリエラの手にガラスの欠片が刺さる。

ぷくりと膨らむ血の珠と、ズキズキとした痛みが、この世界が夢でないことを教えてくれる。

答えは、すぐ近くにある。

そんな確信にも似た気持ちで、ポーション瓶をわきに寄せ階下への道を拓いたマリエラたちは、2階へと降り立った。

2階は西側と同じ絨毯張りで作りも東側と同様だった。廊下には部屋が並んでいて、西側の突き当りにはエントランスが、北側の突き当りには吹き抜けの温室のような場所があるのだろう。

「突き当りの扉を空けなければ危なくはないと思うから、私は部屋を回ってポーションを作ろうと思うの」

マリエラの提案で、3人は別れてドニーノは東の塔から1階の様子を調査し、ユーリケはクーに乗って塔を登り火炎瓶と食料の補充を行うことになった。

3人と別れたマリエラは、北側の塔の一番近くにある部屋の扉を開く。

「やっぱり……」

思った通りだ。

そこは、迷宮都市にあるはずのマリエラの工房だった。

「スラーケンは、いないんだ……」

生物だからなのか、ジークが持ち出した後の状態が再現されているのかは分からないけれど、スラーケンの体細胞を使った人工スライムであるスラーケンの飼育容器は空っぽで、容器の底にスラーケンの粘液が溜まっている。

棚には《薬晶化》した様々な薬草が並んでいて、品ぞろえは恐らくどの部屋よりも充実しているだろう。迷宮が倒されて、各種素材

の採取量は減ってきている。完全になくなる前に、ガーク爺やエルメラさんに頼んで可能な限り買いそろえたのだ。

それでも足りないものはある。

「この部屋があるならきつと、キヤル様の工房もあるはず。ねえ、そうでしょう?」

「キヤウ」

マリエラの問いかけに、肩に乗ったサラマンダーが鳴いて答える。炎のようなたてがみをまとったこの蜥蜴はぽかぽかと温かく、共にいてくれるだけで大層心強いのだ。

小さな蜥蜴がくりくりと金の瞳を動かす様子をしばらく眺めた後、マリエラは自分の工房を一旦離れて、他の部屋を探しに行った。

\*\*\*\*\*

ドニーノは、東の塔と南東の塔を繋ぐ廊下にマリエラたちの姿がなく被害が及ばないことを確認してから、そと東の塔の扉に手をかけた。

窓から差し込む光は強く、軟体状の黒い魔物の姿は見えない。代わりに窓の近くを泳ぎ去る魔物魚が廊下に差し込む光に時折影を落とす。

「この時間なら魔物が復活してるはずだ。こつち側も西側と似たようなモンなら黒いヤツは絶対調なんだろうが、鉢合わせさえしなけりゃ魔物どもに気取られてこつちになんか気付かねえはずだ。偵察にゃちよつどいい」



扉の向こうは静かなもので、何の音も聞こえてこない。この近くで戦闘は起こっていないのだろう。

それでも音を立てず慎重に扉を開けたドニーノは、扉の向こうの情景に、

「こりゃあ……、どうなってる？」

と声を漏らす。

扉を開けたその先には、狭く入り組んだ洞窟が続いていた。

西側では吹き抜けになった広いドーム状のフロアだったのに、その広大な面積を埋め尽くしているのは生臭く赤黒い何かで、所々に白い物が見えている。

「こりゃあ、死肉、か？」

触れると赤黒い壁面は、弾力とひやりと冷たい温度を手袋越しに伝えて来る。体温は無いのだから、これは死んだ生き物の肉なのだろう。放した手袋の指先ににちゃりと糸を引く様に赤黒い液体がこびりつく。

「それにしてもひでえ臭いだ」

それは生きたオークやゴブリンどもが放つ不衛生な魔物の臭いと、血と内臓の放つ臭いと、腐った肉の放つ臭いが混ざったような、何とも言えない悪臭だった。

布で口元を覆いマスクの代わりにすると、ドニーノは洞窟の中に脚を踏み入れる。

足場も肉塊でできたその洞窟は、ぐにりと柔らかく足場が良いとは言えないが、所々にある硬い物が支えになって足が沈み込むことは無い。

「骨まであんのか……」

所々から飛び出している白いものは骨なのだろう。暗視魔法を付与したゴーグルのおかげで暗い洞窟の内部が視認できる。

この洞窟を根城にするものたちのためだろう、洞窟のあちこちに血液とはまた別の、燐光を放つ液体がにじんでいるようで、肉眼では十分とは言えないが、暗視魔法の助けがあれば十分な視界が確保できる。洞窟の中を進んでいくと、ところどころで肉の色合いが変わっていて、複数の生き物が混ざり合っているようにも思える。

通路は広い所でもドニーノが立って歩けるくらいで、狭いところになると膝を曲げ、尻を落とさなければ進めないほどに狭い。こんな狭い場所で魔物に出くわしたなら、ハンマーを使うドニーノは十分には戦えないのだろうが、幸い狭い通路は長くは続かず、すぐに何とかハンマーを振り回せる程度の小さい部屋に辿り着く。部屋からはいくつも小道が分かれていたり、上下に穴状の通路が開いていて、この洞窟が縦横無尽に広がっていることが推測できる。

部屋の先には小さな小部屋がいくつかあって、そこからは、洞窟の奥からとは別種の臭気が漂ってくる。

「なんだ、ありゃ。肉が溶けてんのか？」

どろどろの、血肉が溶け混ざったような液溜まりから、ガスが吹き上がるようにごぼりと肉液が盛り上がると、気泡の一部が裂けるように開いて「アー」とも「ギャー」ともつかない叫びをあげる。

産声だ。

ずりずりりと肉液だまりから這い出してきた肉片は見る間に手足を備え、眼を開き、不快な産声を上げながら、ドニーノのことなどまるで目に入らない様子で、洞窟のより深い場所へと這い進んでいった。

「ここは、魔物の苗床か……。あんな生まれ方をするなんざ、聞いたことがねえが。ありゃ。ゴブリンか？」

生まれたばかりのゴブリンの後に続いて洞窟を進むにつれ、ゴブリンの数は増えていった。どの個体もドニーノのことなど洞窟の一部としか認識していない様子で、小さい個体はドニーノの足元をすり抜けて奥へと進んでいく。奥に進むにつれ洞窟は少しずつ広くなり、生まれる魔物もゴブリンに加えてオークや狼のような体の大きい個体が入り混じる。どの魔物も、魔の森や迷宮の浅い層で見かけるような、悪食で繁殖力の強い魔物ばかりだ。

蜘蛛の巣のように張り巡らされた洞窟から、この東の塔の1階の中心だろっ場所に雪崩れ込むように押し寄せる魔物たち。洞窟自体や魔物たちの放つ臭気と進む先から漂ってくる耐え難い悪臭に、口元を覆っていても呼吸が苦しい。ドニーノは魔物たちと悪臭から逃れるように、少し高い場所にある穴へと潜り込んだ。

そこから、ほんの少し清涼な空気の流れを感じたからだ。こういつた洞窟には空気穴があるものだ。

「ぶは、こりゃ、たまらねえな……」

新鮮な空気の流れ込む小部屋で何とか一息ついたドニーノは悪態をつく。

その小部屋には生まれたてのゴブリンさえも通れそうにない細い空気穴が縦に伸びていて、上から下に新鮮な空気が流れ込んでいた。真っ直ぐ階下までつながる空気穴を見下ろすと、魔物たちが向かっている1階の中心部分に繋がっているようだ。

「なんだ、ありゃ」

空気穴は狭く、全景は見えない。

断片的な視界から得られた情報は、構造の詳細も分からない、真黒に塗りつぶされたような巨大な丸いものを魔物が攻撃している様子だった。

真黒な丸い物は、熟れた柘榴のようにはちきれそうに見えた。

空気穴から見えるのはその黒い柘榴の一部分だけで、それが樹木に生っているのか、見えない部分に何があるのかは分からない。

ドニーノから見えたのは、パンパンに張られた表皮にゴブリンや次々に飛びついて喰らい付いている様子で、それは地面に落とした甘い果実に蟻が群がっているようにも見えた。

ぶづり。

何の前触れもなく黒い柘榴の表皮が爆ぜる。

底からこぼれ出たのは熟れた果肉などではなく、真っ黒いネズミのような丸い無数の生き物だ。ネズミの溢れる勢いは、堰き止めた水の決壊するが如くで、先ほどまでは魔物が黒柘榴に群がっていたのに、柘榴がはじけた一瞬の後には、大量のネズミが魔物たちを呑み込んでいた。

「こりゃ、やべえ」

がっしりとした体躯からは想像もつかないほどの俊敏さで、来た道を駆け戻るドニーノ。この洞窟は入り組んでいて、どの通路も全く同じに見えるのだけれど、来た道にはハンマーの尖った先で傷をつけている。肉がえぐり取られたような傷痕にはじつとりと赤黒い液体がにじんでいて、帰り道の目印になっているから、それを頼りに来た道を脱兎の勢いで駆け戻る。

背後から洞窟を反響する音は、魔物たちの咆哮と、ネズミたちの

蠢く音、そして……。

何とか東の塔の洞窟を脱出し、マリエラたちと南東の塔で合流したドニーノの顔色を見たマリエラは、

「ドニーノさん、これ、飲んで」

と一本のポーションを差し出した。

「ふう、嬢ちゃん、ありがとうよ。ようやく一息ついた感じだぜ」  
マリエラから受け取ったポーションの種類を確認することもなく飲み干したドニーノは、一息ついてそう言つと、さつき見た東の塔の様子を話し始めた。

「あそこに居るのは、恐らく得体の知れねえ病魔のたぐいだ」  
ドニーノはその目と耳で確認したのだ。

黒い柘榴から溢れたネズミに触れた魔物たちが、口から、鼻から、眼や耳からだけでなく毛穴という毛穴から血を吹き出しながら倒れる様子を。そしてその亡骸を喰らうネズミの咀嚼音を。

「ドニーノは感染してないし？」

心配そうに聞くユーリケに、

「さつき解毒のポーション飲んでもらったから、大丈夫だよ」  
とマリエラが答える。

この先に何が待ち受けているのか、マリエラには予想がついていないのだ。

この場所が何なのか、先ほどの夢が誰の記憶か、およその察しはついているから。

「病魔に効くポーションなら、あります」

金の瞳を煌かせながら話すマリエラを見たユーリケは、まるでこの先に何が起ころのか分かっているかのようなマリエラの様子に、彼女の師匠フレイジージャの面影を垣間見た気がした。

17・死肉の洞窟（後書き）

ざっくりまとめ：疫病を閉じ込めた魔物の洞窟へGO！

## 18・疫病の柘榴

「さつき、ドニーノさんに飲んでもらったのは、特級解毒ポーションです。どんな病気もたちどころに治癒してくれるし、飲んで数日は感染することありません。これを、魔物の苗床に投入します」

コリコリと白い角を削りながらマリエラは作戦を伝える。

マリエラたちがいる場所は、2階に並ぶ錬金術師の工房の一つ。ユーリケやドニーノにとつては初めて入る場所だけれど、マリエラにとつては何度か入ったことのある場所だ。陳列された高価な材料の中でも最高級品に分類されるのが、マリエラが今削っている白い角、ユニコーンの角だ。

かつてキャロラインの伯父ルイスが贄の一族の秘術を伝える為に講じた手段の中で、唯一アグウィナス家に届いたのが、このユニコーンの角の中に忍ばせる方法だった。

マリエラはその話を聞いた後、実物を見せてもらってどこに仕舞われているか知っていたのだ。そう、ここはキャロラインの工房なのだ。

金やすりで削りだしたユニコーンの角を、ライナス麦から作ったビネガーに加えて溶かしていく。このビネガーは《命の雫》を自然に蓄えられるライナス麦以外の材料を一切使わない純粋なもので、ライナス麦自体、胚芽を除き表面を磨き上げた物を原料にしている。それを《錬成空間》の中に空気と《命の雫》を送り込んで短時間で酢に加工したものだ。

ユニコーンの角を使う特級解毒ポーションは、その製造工程において不純なもの混入を極端に嫌うから、二重に張り巡らせた《錬



《成空間》の中から一度も出さずに錬成を行う必要があるのだ。

「それと、今回はシノギラの根の薬晶を加えて、溶かした地脈の欠片と合わせてっ」と

別行動している間に作った10本と、追加で作った20本。これだけあれば足りるはずだ。

今、死肉の洞窟の内部は、ゴブリンを中心に無数の魔物が生まれ、それより遙かに多く湧き出る黒ネズミを捕食している。黒ネズミを喰らったゴブリンたちは、ネズミのまき散らす疫病によって目鼻口だけでなく毛穴からも血を噴き出し、肉が溶けるように崩れて死んでいく、地獄のような状況だ。

黒ネズミは死んだ魔物や洞窟自体を喰い荒らし、新たな通路が形成されたり喰い残された死肉が癒着して新たな床になったりと地形すら変化しているらしい。

ネズミにだって敵わないマリエラは安全な南東の塔でクーとともに留守番で、完成した特級解毒ポーションは、ユーリケとドニーノが死肉の洞窟に無数に存在している魔物の苗床に投入してくれている。

ポーションが投入された苗床から生じた魔物には、ポーションの効果が続いている間だけが疫病に対する耐性が備わっているから、時間が経つにつれて洞窟内部のバランスは反転し、ネズミは駆逐されていくだろう。

もっとも、魔物1体あたりのポーション量は少ないから、ゴブリンたちが疫病耐性を有していられる時間は半日あるかないかだろうか。あと数時間もするうちにゴブリンもネズミもその数を大きく減らすに違いない。

「あとは、待つだけだね」

「ギャウー」

少しだけ心細そうなマリエラに、大丈夫だと言いたげにラプトルのクーが顔を寄せる。

「ありがと、クー」

今マリエラはクーと二人、いや一人と一匹きりだ。サラマンダーはユーリケの肩に乗って洞窟の方へ行っている。ユーリケの戦力に不安があったのか、自発的にユーリケの肩に乗り移ったのだ。

精霊であるサラマンダーに調教スキルは効かないから、ユーリケはサラマンダーと会話ができるわけではないのだけれど、

「お、こいつ。一緒に行くし？」

と嬉しそうにしていたから、根っから動物が好きなのだろう。

「たぶん、あのポーションで間違っていないはず……」

ユーリケの集めてくれた材料は全て火炎瓶に変えだし、魔物肉の調理も済ませた。

手持無沙汰になったマリエラは、座り込んだクーにもたれかかりながら、二人の帰りを待っていた。

「マリエラ、マリエラ起きるし。そろそろ時間だし」

「え、ユーリケ、私寝ちゃった？」

ユーリケに揺り起こされたマリエラは、目をこすりながら体を起こす。

どうやらあのまま眠ってしまったていたらしい。随分と深く眠り込んでいたようで、魔力もすっかり回復している。

(夢、見なかったな……)

いつの間にかマリエラの肩の定位置に戻ってきていたサラマンダー

ーに、顔を洗えとチロチ口頬を舐められながら、マリエラは身支度を整える。

「今、何時くらい？」

「たぶん正午くらいだろ」

マリエラの質問に、ガブリと魔物肉の塊にかぶり付きながらドニーノが答える。極端に夜の短い生活にマリエラの体内時計はすっかりくるってしまったけれど、もともと旅生活を続けていたドニーノたちの腹時計は大層正確であるらしい。

臭いで吐くだろうからというユーリケのすすめにしたがって、ほんの軽い食事で済ませたマリエラは、ガッツリ食事を済ませたドニーノとユーリケとともに、ポーションの効き目をかくにんすべく、東の塔にある死肉の洞窟へと向かっていった。

\*\*\*\*\*

「よくもまあ、こんだけ上手く行ったもんだ」

ドニーノが驚いたように呟く。

その声を曖昧に笑ってごまかしながら、マリエラは目の前の、熟れ落ちて朽ちかけた柘榴のような塊を見つめる。

あの疫病の夢の話はしていない。ユーリケたちから何の話もでないから、あの夢を見たのはマリエラだけなのだろう。

夢で見た疫病について、マリエラは師匠から聞いたことがあった。

遙かな昔に流行した疫病があったと。

その頃は、まだポーションの技術は未熟で、あの病を癒やすポーションは作られていなかったし、治癒魔法を下手に使うと病人どころか病魔さえ回復させることが知られていなかった。

だから、人々は病を癒やすつもりで治癒魔法を乱用し、いたずらに病人の体力を削り、病の蔓延を招いたのだという。

結局、発症した者とその家族は街から隔離し、発病者の家や持ち物、家畜まで余さず焼却処分された。

隔離と言っても、隔離された病人を看病する者など居はしなかったから、殺されたに等しい扱いだったのだろう。

勿論、病魔に対して何の研究も為されなかったわけではない。疫病を癒やすポーションの研究にはおしみなく金が注がれて、やがて一本のポーションが完成した。

上級解毒ポーションの原型となったこのポーションのおかげで病は沈静化を見ただけで、その頃には街の人口は半分以下に減っていたのだという。

上級解毒ポーションが効いたのだ。特級であればその効果は疑いようがない。しかも今回は、シノギラの根の薬晶を加えている。シノギラは熱帯の森の中に稀に咲く紫色の花で、花弁と特に根に強い抗菌効果を持っている。迷宮の疫病をまき散らす魔物が蠢く亜熱帯の階層でも、シノギラの咲く水辺の水だけは飲んでも問題ないと言われるほどだ。

シノギラの根から抽出した成分は通常では不純物が多いから、ニコーンの角を原料とする特級解毒ポーションに混ぜられるものではないのだけれど、薬効成分以外の不純物を一切含まない薬晶の状態で配合したから、上手く錬成することができた。

これは、この病魔特化型の特級ポーションといっている。

その効果は絶大で、ポーションを投入された苗床から生じたゴブリンたちは疫病に侵されることなく疫病をまき散らす黒いネズミを喰らいつくしていた。途中何体か生き残ったゴブリンの襲撃を受けただけで、所詮はゴブリン。全てドニーノの一撃で、洞窟の一部と変わり果てていた。生き残った魔物の襲撃を予想して、ゴブリンが生じる苗床にしかポーションを投入していないのだから、これも予定通りと言えた。

マリエラたちが辿り着いた最下層では、ネズミに喰われていない様子からポーションの効果が切れたのか、効果を上回る疫病を取り込んだゴブリンの死骸が、幾体も折り重なるように倒れていた。その中央でまるで呼吸をするように腐臭を吹きだしているのは、ドニーノが見たという真つ黒い巨大な柘榴のような塊だった。

黒いネズミが溢れ出た亀裂が、まるで熟れた柘榴が割れるように底面から四方に走って、赤黒い内面を露出している。内側にびっしりと生えた赤黒い繊維状の組織は絨毛なのだろうか。どろりと血膿のような粘液をまとわりつかせて蠢く様子が、これがまだ死滅していないことを物語っている。

呼吸をするように膨れ、腐臭を吐き出す亀裂から、音が聞こえる。死肉でできた洞窟を吹き抜け響く、風音にも似たそれは、マリエラの耳にはこのように聞こえた。

『イタイ、イタイ、シニタクナイ』

「貴方たちの命も体も、この世界には残っていないの。とっくに解

放されているんだよ……」

マリエラは、作製した特級解毒ポーションの蓋をあけると、黒い柘榴の内側へと放り込む。

その瞬間、ビグリとその実を収縮するように、中身を絞り出すように柘榴は体を強張らせ、次の瞬間にはぐだりと中身を失った果実の皮のように萎れて、その場で動かなくなった。

果実が熟れ落ち、腐り、干からびていく様を早送りで見ると、急速にしなび、乾いていく黒柘榴。

『イ……、……イ、シ……ク……イ』

その音は、死肉の洞窟を吹き抜ける風の奏でた音色だろうか。

ドニーノとユリーケが持ってきた火炎瓶を黒柘榴と周りに投げると、サラマンダーの放った火により辺りは炎に吞まれていった。

「サラマンダーが護ってくれるつつつても、このままじゃ蒸し焼きだ。一旦引くぞ」

ドニーノの号令で死肉の洞窟を後にする一同。出口に急ぐマリエラの肩から、サラマンダーだけが燃え尽きていく黒い柘榴を見つめていた。

\*\*\*\*\*

「さて、そろそろ今後の方針ってやつを決めねえとな」

南東の塔2階にいったん戻った一行は、これからの方針について話し合っていた。

グランドルを助けるにせよ、このまま先に進むにせよ中庭に出る必要がある。

単に中庭に出るだけならば、エントランスのある南側で待機して“首飾り”が活動を停止する日暮れに外に出ればいい。

けれど、東側の1階に潜むものを放置したままでは、万一途中で夜が明けたり1階に潜むものがエントランスに入ってきたら対処することができないから、これまでは経路の確保を優先していたにすぎない。

「まだ、1階に魔物か黒いヤツが残ってるかもしれないし」

「おう、そいつは、火が鎮まった後でワシが確認してくるわ。それより問題は、あの蛇女だ。グランドルのこつた。放っておいてもどつってことはねえんだろぅが……。嬢ちゃん、蛇に効きそうなポーションの材料揃ったか？」

ドニーノのといかけにマリエラは首を振る。

「あと一つだけ材料が足りませんが、1階を探索出来たら、きっと手に入りますよ」

「きつと、か……」

ドニーノはちらと東の塔の方角を見る。偵察から帰ったドニーノはおそらく病魔に侵されていたのだろぅ。それを見透かしていたように差し出されたマリエラのポーション。死肉の洞窟に巣くう病魔を倒したのだから、まるで倒し方を知っていたようだ。

だから、まだ到達していない1階へ行けば、最後の材料が手に入るという言葉にも不思議な説得力があった。

「嬢ちゃんよ、決めてくれ」

ドニーノがマリエラに問いかける。

「わし一人じゃ、あのラミアは手に余る。エドガンを呼んでくるか、

ポーションで道をひらくか。なんならグランドルの奴は後回しにしてもいい。

だがな、エドガンも、ポーションもってえのはなしだ。

こつから先は今まで以上に何が起こるかわからねえ。嬢ちゃんが逃げ切るにや、ユーリケとラプトルに乗ってる必要がある。別行動は認めらんねえからな。ポーション作ってエドガンを迎えに行つてたんじゃ、時間がかかりすぎるってもんだ」

ドニーノの提案は全員が生き残る可能性があるものばかりなのだろう。

グランドルを助けるならば、エドガンを頼るのが最も確実なのだろう。仮にもAランクのエドガンの戦力はラミアさえねじ伏せてくれるに違いない。

マリエラのポーションはあくまで蛇の動きを阻害するもの。

結局はドニーノの戦力に頼らざるを得ないのだ。

ただ一つ気がかりなのは、エドガンに助けを求めたら、北の守りが手薄になるということだ。フランツ一人で果たしてどこまで持ちこたえられるのだろうか。

それならば、いつそ先に神殿を目指すというのも手ではないのか。フランツもエドガンも、今はここにいないのだから。

マリエラはユーリケの方に目を向ける。

ユーリケはすこし落ち着かない様子で北の方を向いている。

彼女が心配しているのは、フランツだろうか、それともエドガンなのだろうか。

勿論グランドルを心配していないとは思われないけれど、それ以上の気がかりがあるようにマリエラには思えた。



「ドニーノさん、ユーリケ……」  
マリエラは二人の名前を呼ぶと、今後の方針を話し始めた。

## 18・疫病の柘榴（後書き）

ざっくりまとめ：黒い中ボス、2匹目撃破。

《地脈の囁き》 8 / 1 2    1 3 : 0 0 時点で感想欄の回答が多いルートに進みます。

1・確実にグランドルさんを助けるために、エドガンさんの力を借りよう。

火炎瓶をたくさん置いてきたし、フランツさんならきつと大丈夫だよ。

2・北を守っているエドガンさんは頼れない。

ポーションを使ってグランドルさんを助けよう。

3・とりあえず、神殿を目指さない？

フランツさんもエドガンさんもここにいないわけだし、脱出経路を確保する方が先決だと思っの。

状況が大きく変わればラミアも移動するかもしれないよ。

登場人物紹介等（前書き）

祝4巻＋コミックス1巻同時発売！

を理由にダダをこねて、ユーリケ、エドガン、フランツのキャラデザの公開許可を頂きました！

ox様、ありがとうございます！

ox様のイラストがもっと見たい方はこちらから <http://>

[ousiox.wixsite.com/baallore](http://ousiox.wixsite.com/baallore)

## 登場人物紹介等

### マリエラ

一応主人公にして、一応スゴイ錬金術師。  
本編であったレアリティィーは迷宮都市の錬金術師の増加に伴い色褪せ  
せてしまい、  
彼女自身の面白さも長引く相方不在とシリアス寄りの展開で色あせて  
しまった。

例え天然であろうとも、ボケは一人では成立しないのだ。  
外伝では、師匠の秘密やら世界のからくりに気が付いている様子で、  
火炎瓶やらポーシヨンやらで、黒い中ボスの撃破に主人公らしく貢  
献している。

### ジークムント

マリエラの相方。

なんかやらかしたようで、マリエラに出て行かれる。  
恐らく今頃、「マリエラ」としか喋れない病が発症していると思わ  
れるが、

登場しないので分からない。

そしてさらに恐ろしいことに、不思議ワールドをさ迷うマリエラに、  
全く頼りにされていない何とも不遇なヒーローでもある。

作者さえ登場の機会を逃しそうなので、次回登場する予定。

### ユーリケ

< i 3 2 2 8 3 0 — 2 1 0 6 4 >

外伝の準ヒロインの、男装のツンケン方言女子。

ジーク以外は中高年に囲まれた主人公マリエラに対し、  
周囲にエドガンとフランツという若者がいる、恵まれた(?) 職場

環境にある。

ただし本人は人間不信のラプトルスキー。  
いつかラプトルに乗っていづことも知れぬ故郷に帰りたいたいと思っ  
ている。

彼女の未来がどうなるのか、それは地脈の囁きにかかっている。

## エドガン

< i322829—21064 >

オールラウンダー

総属性使いの二つ名を持つAランカーの、

猿じゃなくてエロガンじゃなくてエドガン。

この不思議ワールドではガンガン記憶を失っている様子。

記憶を失った彼がどうなるのか、

失われた彼の記憶が一体どういうものなのか。

読者に興味が無かろうと、強制的イベントが予定されている。

たぶん……。

## フランツ

< i322831—21064 >

獣人の特性を有する、回復魔法使い。

ユーリケの育ての親だが、種族の特性が見た目は若い。

現段階では、寡黙なうえに「俺の血が」とか言っちゃ中二な人。

彼もまた、絶賛ロスト・メモリー中で、

隠れた本性が今後ボロボロ出てくる予定。

## ドニーノ

ハンマーで敵をどつきまわすおっさん。

30代後半だが50代に見える。

しょっぱなから独断専行して、虫みれの階層で行き詰っていた。

彼が何を食べて生きていたのか想像に難くないが、全く想像したくない。

記憶をいくらか抜かれているようだが、取り戻すのを拒否している。恐らく漢の矜持であろう。作者が考えていないわけではない。

### グランドル

スレンダーな盾紳士。

昼は水没する中庭に、鎧ごと沈んでいた。

しかもラミアに巻き付かれている。

ラミアを守っているのか守られているのか、それとも単なる餌なのか。

その関係性よりも、食事とトイレはどうしているのかが気にかかる。マリエラたちが決死の覚悟でラミアを排除したとして、果たして人前に出てこられる状況なのか！？

紳士の危機である。

### 全体図（18話段階）

< i 3 2 2 8 4 7 — 2 1 0 6 4 >

### 1、2階詳細図（18話段階）

< i 3 2 2 8 4 8 — 2 1 0 6 4 >

19・ジーク立つ(前書き)

2でした！。

最後の材料は一体どこに……！？？

## 19・ジーク立つ

ジークムントは焦っていた。

「マッ、マリエラッ！」

マリエラが家出をしてさして時間も経っていない頃のことだ。

精霊眼を全開にして『木漏れ日』の隅から隅までマリエラを探す様子に、『木漏れ日』の常連になったガーク爺が見かねて声を掛ける。

「どうしたんでえ、兄ちゃんよ」

「マリ……マリエラッ」

「いや、それがよ。カミさんに出て行かれたらしくてよ」

「違うわよ、ゴードンさん。まだジークさんはマリ姉様にプロポーズしていないもの」

大して時間も経っていないのに、早速「マリエラ」としか言葉を話さなくなったジークの替わりにゴードンが説明し、学校帰りのシエリーが残酷な修正を加える。この話の流れに喰い付いたのは、奥様諜報部員のメルルさんだ。

「おや？ そろそろ、プロポーズするつもりじゃなかったかい？

あたしゃ、てつきり失敗してフラれたのかと思ってたよ」

「マッ……！」

流石は情報通。もっとも触れられたくないネタを、絶妙のタイミングで仕込んでくる。

これに顔を青くしたのはジークだ。

迷宮が倒されてから1年。この1年は非常に忙しかったのだ。



迷宮都市に錬金術師が増えたとはいえ、特級ポーションを錬成できる錬金術師はマリエラしかない。彼女の希少性は依然として高いままで、マリエラを取り込もうとする輩が、誘拐を目論んだり、高圧的に出てみたり、友達を装ったり、恋人になろうとしたりと枚挙にいとまがなかった。無論そのすべてはジークが単独で、あるいはシューゼンワルド辺境伯やアグウィナス家の力を借りて阻止し、マリエラを守り切ってみせたのだが、ちょっと過保護過ぎたのかもしれない。

何度か危機的な状態はあったはずなのに、ジークが水面下で防いだおかげで、吊り橋効果によるドキドキ感すら感じなかったマリエラは、親に守られた幼児のような健やかさで、ジークとゼロ距離で爆睡をかますまでに懐いてしまった。

のびのびどころか伸びきっている。

仮死の魔法が発動したのかというレベルの危機感の無さである。

二人の仲は一見睦まじいのだけれど、新婚になってもいないのに、長年連れ添った老夫婦のような穏やかさだ。

ヘタレすぎると言っではいけない。その台詞は、シェリーやエミリーちゃん、メルルさんをはじめとした『木漏れ日』の常連たちが散々言っているのだから。

「このままではマズイ」と危機感を募らせたのか、「そろそろ我慢の限界だ」とちよっぴり本音が漏れたのか、外面では余裕をぶちかましていたジークムントはついに重い腰を上げたのだ。

ジークは迷宮討伐から1年が経過し錬金術師育成の目処や特級ポーションのストックがそれなりに整って、マリエラの周辺が落ち着いて来たこのタイミングで、グダグダの関係を改善すべく一手を講じるつもりだった。

その一手が失敗したのか、その前段階でやらかしたのか、『マリエラ語』しか話さなくなったジークの説明は、諜報部員のメルルさんにも理解することはできないけれど、「ジークムント、フラれる」などと言う情報が迷宮都市をかけめぐるのはジーク的に非常にまずい。何のために、今まで邪魔者を徹底的に排除して外堀を埋めまくって堀にしてきたのか分からないではないか。

「マッ、マッ、マッ、まだ……、まだだ。ちよつと喧嘩しただけだ……」

「あ、しゃべった」

ようやく言葉と恐らく正気を取り戻したジークムントに、アンバーさんが声を掛ける。

「だったら、さっさと追いかけて仲直りしておいで！ 大丈夫、誠心誠意謝れば許してもらえるわよ」

「分かった」

アンバーさんの言葉に力強くうなづくジーク。流石はしよつちゆういらんことをするディック隊長を叱り飛ばしては、平謝りを受け入れている女傑の言うことは重みがある。

「ジーク兄ちゃん、マリ姉ちゃんの場所はわかるの？」

こてんと首を傾げるエミリーちゃんに、ジークは「大丈夫だ。方法はある」と頷くと、裏庭へと向かっていった。

「イルミナリア！ イルミナリア、力を貸してくれ！」

なによ、もう……

精霊眼を無駄遣いして、精霊イルミナリアを呼び出したジークはマリエラの後を追いかけるべく急いで準備を整える。

「ジーク兄ちゃん、行動が遅いよねー」

「ねー。そもそも、濃厚なマリ姉様を家出するほど怒らせるなんて、調子に乗り過ぎなのよ」

「ねー。すぐ彼氏ヅラする男は嫌われるっていうねー」

「ねー」

エミリーとシェリー、二人の少女の聞こえよがしな会話に、「ぐう」と声を漏らしながらも、ジークはようやく『木漏れ日』を出立するのだった。

\*\*\*\*\*

「やつぱりあった……」

死肉の洞窟が鎮火した後、マリエラたちは1階へと進んだ。ほぼ密閉状態で炭化した洞窟を、冷やし、換気しながら進んだ一行が、南東の塔1階に辿り着いたのは正午頃だっただろうか。

炭化した洞窟をラプトルが通れる程度に拡張してくれたドニーノや、暑い洞窟を進んだクーをねぎらうユーリケに休息を促したマリエラは、「この先は安全だろうから」と一人、塔付近の部屋の探索に出て、すぐにこの部屋を見つけたのだ。

『木漏れ日』にあるマリエラの工房があったのだ。ずっと長い時間を過ごし、錬金術を学んだこの部屋も近くにあるに違いないと思っていた。

「スタンピード魔の森の氾濫でいきなりなくなっちゃったから……。懐かしいな」

200年前、師匠と過ごした魔の森の小屋。  
それが、あの頃と変わらぬ様子でそこにあった。

「ここがどういう世界でも、作ったポーションが効果あるのは間違いないし、これだけ錬金術師の工房が並んでるんだもん、使える物は使わなきゃ。……っと、あつたあつた」

流し台の近くにおいてある食料保管庫の上部から、布でぐるぐる巻きにした包みを取り出す。

ひんやりと冷気が漏れ出すそれは、『氷精の口づけ』。

霜が降りた早朝に、木の幹や窓などに張り付いている氷のような植物だ。日に当たると溶けてしまうから、冬の冷え込んだ朝は、毎日、日の出前に起き出して確認して回るのだ。

採取は寒くてつらい作業なのだけれど、この『氷精の口づけ』を冬場に採取し夏場に加工して売れば、なかなか良い収入源になる。

『氷精の口づけ』という名前は、“氷精に口づけられると体の熱を奪われて絶命してしまう”という言い伝えによるもので、熱を奪う性質がある。

半透明の蔓のような地上部は氷のように冷たいのだけれど、採取後に一定の熱を加えると溶けて消えてしまう。

光にも熱にも弱い素材だから、氷と一緒に嚴重に保管しなければならぬが、『氷精の口づけ』の効果を高めた『氷風のポーション』は、半日程度の間部屋の空気を冷やしてくれるポーションとして、夏場によい値段で売れたのだ。

「200年前は冷房の魔道具なんてなかったもんね」

今では冷房の魔道具が部屋を冷やしてくれるから、ほとんど需要が無いけれど、あの頃のマリエラにとっては夏場の重要な収入源だ

った。

「それにしても、寂しい食糧庫だなー」

『氷精の口づけ』を保管していた箱は、200年前でも旧式だった食料保管庫で、氷を入れて食料を冷やす造りになっている。

『氷精の口づけ』にスペースを取られて食料を入れる隙間は少ししかないけれど、そんな隙間も必要ないほど、貧しい食生活だった。師匠がいてくれた頃は、黒焦げの魔物肉やら、どこから貰ってきたオミヤゲだとかでそれほどひどくはなかったけれど、マリエラ一人の生活はとても慎ましいものだった。

「師匠がいた時はもう少し色々入ってた気がするけど、でも変な魔物肉ばかりだったなあ……。それでもね、師匠がいた時は、毎日楽しかったんだよ？」

「キユウ」

マリエラのつぶやきに、襟元のサラマンダーが返事をする。

目まぐるしく過ぎ去った、大切な日々。温かった時間。

( 恩返し、しなくちゃね…… )

マリエラはその言葉を心の中で呟くと、『氷風のポーション』の作製に取り掛かった。

そして、何回目かの夜が来る。

窓の外が暗くなつたのを確認して、エントランスへの扉をくぐるマリエラたち。ここには樹木の魔物、“首飾り”が陣取っている。

根があるため自ら移動はできないが、鋼のように硬質な蔦を自在に操って、人の首をからめとり、その身に飾り付けようとするファ

ツシヨナブルな樹の魔物である。

過剰な装飾を好む人間の多くに見られるように、この“首飾り”も少々趣味が特異なようで、毛虫の魔物も飼っている。珍しいペットだと樹木の魔物の間で有名なのかは分からないが、マリエラたちにはたいそう評判が悪い魔物だ。特に毛虫に追われた経験はユーリケに深いトラウマを残したようで、極力戦わない方向で作戦が調整されていた。

日が落ちた短い時間だけただの植物に戻るこの魔物を起こさないようにそろりそろりと、エントランスの中央に設けられた扉へ歩み寄るマリエラたち。

マリエラたちの背よりも遥かに高い重厚な扉は、押すと音もなく外側へと開いた。

外壁の上を何度も移動しているのだ、外へ出るのは初めてではない。

けれど、重苦しい空気に息苦しさを感じる。肺の腑に満たされる空気が重く湿っているだけではないだろう。

ここは、水の底。

この水の世界のすべてが舞い下り、降り積もる場所なのだ。

水気に満ちた空気に、暗い狂気が入り混じる。

光を反射し魔物を育む水の慈愛は、今は微塵も感じられない。

中庭の中央にそびえたつのは、半球のドーム状の天井が幾つも折り重なったターコイズの建物。光のない今は、ただただ黒く、のしかかって来るように重苦しい。

「あれは、きつと神殿だ」

マリエラは、そう感じた。一体何を祭る神殿なのか。きつとそこに、すべての答えが待っているのだらう。けれどそこへ向かうのは今ではない。

「あつちだ、いくぞ」

神殿を見上げるマリエラに、ドニーノが声を掛ける。

神殿へ続く道を外れ、中庭の東へ。そこでグランドルが身動き取れずにいるはずなのだ。

湿気た重苦しい空気の中を進むにつれて、まるで水底からヘドロが舞い上がるようにあたりに黒い魔物が現れる。

どろどろと流れ込んだ汚泥が巻き上がり、湧き立つように身をもたげる黒い魔物に、マリエラたちは火炎瓶を投げつける。

「雑魚には構ってられねえ、急ぐぞ」

目指す先は、東の塔のたもと。重いハンマーを抱えて走るドニーノにあわせて、ラプトルに騎乗したマリエラとユーリケが黒い魔物を火炎瓶で制しながら進んでいく。

「見えたし！ グランドルの鎧だし！」

「ラミアもいるぞ！ 夜は短い、一気に行く！」

グランドルに近づくと一行をねめつけながら、ゆらりとラミアが顔を上げる。

近くで見るとその大きさに息を呑む。

「シャア、シャアッ。」

威嚇音を響かせるラミアをハンマーを振りかざしたドニーノがけん制し、マリエラたちがポーションをなげつける。ポーションはラミアの熱を奪い、体の動きを阻害するけれど、上位種の動きを完全に防ぐことなどできはしない。

ハンマーを振り上げラミアに殴り掛かるドニーノ。  
その隙にマリエラたちはラミアの尾に、体に氷風のポーションを  
これでもかと投げつける。

何本も惜しげなく投げつけられる氷風のポーションによってラミアの体は熱を奪われ、ドニーノでも攻撃を避けられる程度にラミアの動きを緩慢にしていく。6本もあるラミアの腕の攻撃を躲し、あるいはハンマーで打ち返しながら、ドニーノはラミアを少しずつグランドルの下から引き離していく。

「今だし！ 尾が鎧から離れたし！」

グランドルの箱鎧に巻き付いていたラミアの尾が完全に離れた瞬間に、グランドルの下に駆け寄るユーリケとマリエラ。

二人はラプトルから飛び降りると、半ば凍り付いてなお、ユーリケたちを阻もうとするラミアの尾をユーリケが鞭でいなし、その隙にマリエラがグランドルの箱鎧を外から開けようと駆け寄った。

「グランドルさん！ 早く！」

グランドルをラプトルに乗せて移動させるためのドニーノ特製の箱鎧は、虚弱なグランドルが装備して動かすことはできないけれど、内側からでも外側からでも開けられるよう2箇所開閉口が設けられている。その1箇所、外側の鍵を開けたマリエラはグランドルに助けに来たのだと告げる。

その瞬間。

シャアアアアッ！

「ぐおっ」

中庭を震わすようなラミアの威嚇音に振り返ったマリエラは、ラミアの一撃でドニーノが吹き飛ばされ、尾を捌いていたユーリケに



ラミアの水魔法が襲い掛かるのを見た。

「ユーリケ!!!」

叫ぶマリエラ。

このラミアは水魔法まで使えたのか。

半月状を描いてユーリケめがけて打ち出されたいくつもの水撃は、恐ろしく鋭い水の刃物なのだろう。

思わず身を竦め、ラミアの水の刃を躲したユーリケ。

躲したのではないのだと、ユーリケは次の瞬間、理解した。

ラミアの尾さえも気に留めず、全神経を集中してその場から飛び退るユーリケ。

ユーリケのうしろには、鋭い水の刃を受けてなお、怯む様子さえ見せない、人馬を思わせる黒い影が立っていた。

19・ジーク立つ(後書き)

ぞっくりまとめ:」マリエラッ「ジーク、ヒーロー降格目前。

## 20・水底の刻

マリエラたちが沼地の祠に辿り着き、皆でロープを引っ張って祠の扉を開けようとした時、グランドルは最後尾でロープを括り付けられて重装鎧のまま鎮座ましましていた。

重石代わりだ。

この時、重装鎧を脱いでいたなら、グランドルが中庭の水底に何日も沈んだままになることは無かったのだろうが、動けはしないがなかなか快適な重装鎧の中でのんびり寛いでいたグランドルは、重装鎧のまま一同もろともにこの水の世界に引き込まれてしまった。

「おおお。何事ですぞ？」

重装鎧から水底に沈んでいく一同を眺めるしかないグランドル。

脱出しようと試みるも、水圧のせいなのか、自力で鎧を空けることもできない。

一つ不思議だったのは、この重装鎧、高性能ではあるけれど、視界部分は開口しているし関節部分だって密閉構造になっていないのに、水が入ってこないということだ。

これはどうしたことだろうと冷静に様子を伺っていると、仲間たちは沈む、というより運ばれていくと言った方がいいように同じ方向へ、6本の塔と城壁が取り囲む、見たこともない様式の神殿へと流されていくではないか。

神殿が近づくとつれ一人、また一人と塔の最上階へと運ばれていく仲間たち。

「全員が異なる塔の最上階に運ばれていくようですな。ふむ、私はあの塔ですか」

仲間たちは水に飲まれて意識がないのか、水流に逆らうこともなく塔の上階に開いた窓から塔の中へと消えていく。

「さして複雑な建物でもない様子。これならすぐに合流できますぞ」  
グランドルがそう呟いたその時。

ゴン。

グランドルの重装鎧が塔の窓につつかえた。

「おや？ 入りませんか？」

重装鎧は重いのだ。すいーっと斜めに運ばれて、窓からするりと塔にエントリーするはずが、ゴツンと塔に引っ掛かり、そのままグランドルは塔の外壁をがりがりとしりながら、中庭の一階へと落ちていった。

グランドルが装備していた重装鎧は、黒鉄輸送隊の仲間内から箱鎧などと揶揄されている、一見すると重装兵が纏うような全身金属製の不格好で敵つい鎧である。

しかもサイズがバカでかい。細身のグランドルが二人は入れるほどのサイズで、身長だっただけであっていないし、表も裏も関節部分も全て板金製である。

詳しい者が見たならば、本来動きやすさを考慮して作られるべき関節部分の構造が、特殊であると気付いただろう。

実はこの鎧、着込んだグランドルが動かすことが全く想定されていない。

ラプトルに騎乗させた状態で固定され、ラプトルの動きに合わせて自動で関節が稼働して、バランスを取る高性能さで、一応自分で

脱出することができず造りになってはいるが、グランドルからしてみれば箱詰めにはされているのと変わらない。

どうせ、盾も持てないほど弱いグランドルだ。それなりの装備でも動けなくなるのだから、いつそのことどこから狙われても生き残れるようにと、ドニーノが趣味を全開に作り上げたのがこの重装鎧だ。

グランドルに不便を強いる代物だけれど、その分居住性は考慮されていて、内側はふかふかの内張りがしてあるし、少量ではあるが備蓄食料も内蔵している。物資のやり取りをする小窓まで付いた、鎧型の箱なのだ。

幸いこの中庭には食べられる水草も生えていて、もともと食が細くて菜食中心のグランドルが飢え死にすることは無かったけれど。

「暇ですぞ……」

昼間は水が満ちていて、水圧で鎧から出ることができないし、夜になったら黒い魔物がまとわりついてこれまた外には出られない。幸いグランドルの盾スキルは黒い魔物にも有効なようで、黒い魔物が鎧の隙間から入って来たり、攻撃されたりはしなかったけれど、グランドルがこの場から抜け出すことはできなかった。

そんな彼を慰めてくれたのは、小さな一匹の蛇だった。

「魔物、でしょうな。しかし、何とも愛らしいですな」

一対の胸びれ状の突起を持つ白い蛇で、尾の先やひれ、頭のあたりが薄桃色に色づいたその蛇は、グランドルの細い腕を一周するほどの長さしかない、小さな小さな蛇だった。

生まれてすぐ、偶然紛れ込んだのだろう。

シャア、シャアと小さいながらもグランドルを威嚇する蛇に、携帯の干し肉を裂いて与えると、腹の膨れたその蛇はグランドルの手の中で丸くなって眠ってしまった。

その蛇にグランドルが直接触れたのはその日だけで、翌日には鎧の開口部から出入りできないほどにその蛇は大きくなった。

餌をくれたグランドルを親だと思ったのか、それともグランドルの鎧に巻き付いていれば攻撃を受けないと理解したのか、その蛇はグランドルに巻き付いて離れることなく黒い魔物を喰らうようになった。

朝が来る度、魔物は生まれる。

満ちた水の世界で、水にヘドロが舞い散るように黒い魔物が消えていき、それを生じたばかりの小さな魔物の赤子が喰らって急激に成長していく様を、グランドルは毎日眺めていた。生まれた魔物は、夜に北から雪崩れ込んでくる黒い魔物を喰らい喰らわれ、大半がその夜のうちに死に絶える。

けれどグランドルの盾スキルに護られた蛇だけは黒い魔物に殺されることなく、日に日に成長というよりは進化という方が正確な速度で成長を続けていた。

グランドルの細腕を一周廻るのがやっとだったその尾が、グランドルの鎧に幾重にも巻き付く様になったのは、一体何日目だろうか。稀に開口部からグランドルをのぞき込むその顔が、人のそれをとったのは一体何日目だろうか。

ラムリアが苦も無く倒せていた黒い魔物を蹴散らすように、騎兵団を思わせる黒い魔物が現れたのは、一体何日目だろうか。

ラムリアは日増しに強大に、強い魔物に成長していく。

けれど黒の騎兵団は押し寄せる戦禍のように周りの魔物も黒い魔

物も呑み込んで、夜ごと戦を繰り返す。

まるで滅することを知らぬが如く、まるで引くを知らぬが如く、まるで愚かな人の生む戦禍の如く。黒い戦禍は押し寄せる。

夜が明けて、水が満ちると黒の戦禍は水に溶けるを厭うが如く体を丸めて動きを止めるが、夜が来る度、目覚めてあたりを蹂躪する。戦の歴史が語るが如くその動きは夜を経る度研ぎ澄まされる。どれほどラミアが力を付けても、黒い戦禍を倒すことはできない。

そんな夜が、一体何日繰り返されたらう。

グランドルとラミアの前に、マリエラたちが現れた。

\*\*\*\*\*

ユーリケの背後に現れた黒い影は、まるで逆光に浮かび上がる騎兵の一団のようだとマリエラは思った。

その場に停止していても、時事刻々と形を変えるその様子は、一体の騎兵というより複数の騎兵の集合体の様だ。

騎馬を思わせる複数の脚を持つ影の上に、またがる人のような上半身は、槍のような長物の武器を携えている。

（侵略者……？ まるで、戦争……）

この黒く塗りつぶされた魔物が、過去の災厄の化身であると、マリエラはすでに気が付いている。

飢餓、疫病。そして、恐らくこの騎兵団のような黒い魔物は、過去の戦禍なのだろう。

黒の戦禍の武器がユーリケを襲うより先に、再びラミアの水の刃が黒の戦禍に打ち込まれる。

ラミアの水の刃によって、ザックリと切り裂かれた騎兵団の前列しかし次の瞬間には、続く後ろの列と入れ替わり、いつの間にも増えたのか、まるで何のダメージも受けていないように騎兵団の規模は変わらず槍を構えるのだ。

ラミアを敵と定めたのだろう、騎兵団の一矢乱れぬ槍撃がラミアめがけて繰り出される。

「シャアアツ、シャアツ」

その攻撃をラミアは尾で薙ぎ払おうとするけれど、氷風のポーションで鈍らされた尾は満足に動かず、槍を受ける盾の役しか果たせない。

「マリエラ、今のうちにグランドルを！」

ユーリケの声に我に返ったマリエラは、グランドルの重装鎧の背側に付いた扉を開けて、グランドルに呼びかける。

「グランドルさん、グランドルさん、早く！」

「これは、マリエラさん。すみませんが、ポーションを頂けますかな。ずっとこの体勢でいたもので、体が動きませんのでな」

重装鎧から顔を出したグランドルの声はひどく小さく、細い体はさらに痩せて見える。保存食や水草で長らえていたとはいえ、衰弱しないはずはない。

それでも、グランドルは身動きとれぬ重装鎧の中から状況を把握していたのだろう。その表情はいつになく険しく、マリエラから受け取ったポーションを飲み干すと、傘を片手に重装鎧からするりと抜け出した。

「今行きますぞ」



ラミアの下へと駆け出すグランドル。

ポーションで回復したとはいえ、さらに減った体重が元に戻るわけではない。地を蹴るグランドルの脚には力が入らず、僅かな動きで呼吸は乱れる。

これほど衰弱しているのだ、ラミアと黒い魔物が戦っている隙に、一旦退却するべきだろう。

けれどグランドルは駆け出した。

昼に生まれる通常の魔物は、夜と共に訪れる黒い魔物を襲うけれど、マリエラたち人間の味方というわけではない。それは、“首飾り”や毛虫の魔物にさんざん追いかけられたマリエラたちが良く分かっている。

グランドルとて元迷宮討伐軍の一員で黒鉄輸送隊として長く魔物と相対してきたのだ。魔物は所詮魔物で、相容れることは無いと理解していないはずがない。

けれど、すべてを理解して尚、彼は駆け出したのだ。

ラミアと過ごした数日間、ラミアと交わした視線の中に、理性にも似た、人と通じる何かを見た気がしたからだ。

利害が一致しただけかもしれない。けれどラミアはグランドルを傷つけようとはしなかった。その強大な尾で締め上げたなら、グランドルのスキルが切れたその瞬間に彼の重装鎧はひしゃげて潰せたに違いないのに。

それは、紳士にして『でんせつのゆうしゃ』グランドルを駆り立てるのに十分な理由であった。

「《シールド》」

ラミアに駆け寄るグランドルに黒の騎兵団は隊列を変え、何本かの槍が降り注ぐ。

開いた傘をシールド代わりにして、その槍撃を受け流すけれど、たった一撃受けただけで傘の布地はスタスタに裂け、衝撃でグランドルは弾き飛ばされる。

ラミアのそばへと。

グランドルの盾スキルは強力だけれど、彼自身は軽く非力だ。だから、攻撃を防ぐことはできてもそのエネルギーを返すことはできない。

グランドルは受ける角度を調節して、攻撃で跳ね飛ばされる衝撃さえも利用して、ラミアの前に立ちはだかった。

「上手くいきましたぞ。《アース・ウォール》、《シールド》」

傘はもう使えない。一般市民が採取に向かうような軽装のグランドルは、土魔法で壁を形成し、その上から盾スキルを使って簡易のシールドを築く。

ラミアに止めを刺すはずの黒の戦禍の攻撃は、グランドルの盾スキルによって全て防がれるけれど、魔術師ではないグランドルの土壁は脆く、一度の衝撃で崩れ去る。

土壁の崩れる土煙を目くらましに、黒の戦禍に降り注ぐラミアの水の刃。

切裂かれ、けれど僅かほども怯む様子もなく次の一手を打ち出さんとする黒の戦禍。

グランドルの加勢によって戦況は一時好転したけれど、後どれだけ黒の戦禍の攻撃をしのげるだろう。

「しかたねえ、加勢するぜグランドル。おっと、威嚇すんない、蛇スケよう」

シャアツと短く威嚇するラミアを横目にドニーノがグランドルの横に並び、マリエラとユーリケも周囲に集まる黒い魔物をけん制するように火炎瓶を投げながら、ラミアのそばへと移動する。

ラミアを狙う黒の戦禍の攻撃を、グランドルの土壁と盾スキルが防ぎ、ラミアの水の刃とドニーノのハンマーが反撃する。マリエラとユーリケはどんどん数を増していく、スライム状の黒の魔物に火炎瓶を投げつけて、囲まれないようけん制している。

黒の魔物はよく燃える。

中庭はすでに一面火の海で、そこに浮かび上がる黒の戦禍はまるで進撃してくる軍隊のようだ。

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

耳をつんざく大音響が、中庭に木霊する。

黒の戦禍が吠えたのだ。

それは鬨の声のようであり、獣の咆哮のようでもあった。

びりびりと空気を震わす轟音に身をすくませたマリエラがあたりをみまわしてみると、それまで軟体状であった黒い魔物がぶるぶると震えながらも身を起こし、炎の中から立ち上がっていった。

「ゴ……プリン?」

剣とも棒ともつかない武器を携えて、にちゃあと笑う黒い影。

略奪の快楽に、殺戮の興奮に、蹂躪の愉悦に狂ったその姿は、襲い来るゴプリンの群れのようだとマリエラは思った。

「違うし。あれは、あんなのは、きつと人間だけだし」

マリエラの声をユーリケが否定する。

火炎瓶の炎など、燃料が燃え尽きる短い間しかもたない。勢いの弱まった炎を踏みつけ消し去ってマリエラたちを取り囲む軍勢など、ユーリケ一人で対処できるものではない。

黒の戦禍の攻撃を防ぐグランドルは、魔力も体力もすでに限界に近いのだろう。ドニーノやラミアの受ける傷はどんどん深くなっている、マリエラたちを取り囲む黒い魔物たちの輪はじりじりと狭められていく。

(せめて回復を……)

傷の深いラミアやドニーノにポーションを使おうと振り返ったマリエラは、彼らの少し先にいるはずの黒の戦禍が津波の如く押し寄せるのを見た。

にやり。

真黒で目鼻があるかさえ分からぬそれが、愉悦に顔を歪ませたようにマリエラは思った。

降り注ぐ黒い槍。

視界を埋め尽くす黒の斜線が、グランドルの土壁をたやすく打ち破り、ラミアを、そしてドニーノとグランドルさえつらぬこうとしたその時。

「ウッキー」

空から、なにかが降って来た。



20 水底の刻（後書き）

おしらくらまじめ…ウキー

## 21 猿の降る夜

「ウツキー、ウキキー、《ウキツ》！」

「ええええええ！？」

「……ついに野生に還ったし？」

上空から、正確には北東の塔からおそらく外壁を伝って降ってきたのは、猿……ではなくて人間であったはずのエドガンだった。

「なんで、ウキウキ言ってるの？」

「恐らく、記憶を失い過ぎて、人から猿に戻ったんだし！」

なんとということだろう。記憶を、言葉さえも失ってしまうと、人は猿に戻るのか。それともエドガンだけなのか。

おそらく今もエドガンは、種族分類上は人族なのだろう。少々汚れているけれど、見た目はエドガンで相違ない。少し鼻の下が伸びているのは、猿化が影響しているのではなく、ヤツの視線の先にあるラミアの胸元のせいだろう。

猿と化してもエドガンは、ちゃんと愛用の双剣を手に、左腕に炎、右腕に風を宿した双属性剣デュアル・エレメンツ・ソードで黒の戦禍に切りかかっている。

「エドガン、詠唱の短縮を身に付けるとは、さすがですぞ！」

「いや、驚くのはそこじゃねえだろ」

エドガンが正気であったなら鼻高々に喜びそうなフレーズで驚いて見せるグランドルと、冷静に突っ込むドニーノ。

「ふうむ。詠唱とは言語ではなく唱えたという認識が重要ということですね……」

「そうかもしれないけど、そこでもねーだろおーよおー！ 《メエ・ハンツ》！」

ツッコミながら《メガ・ハンマー》をネイティヴなのか訛っているのか分からない感じで略して発音し、見事発動させるドニーノ。黒鉄輸送隊の装甲馬車のメンテナンスを担当しているだけあって、なかなか器用な様子だが、この詠唱は傍から聞くとなんだか少し恥ずかしい。

本人もこれはいただけなれないと思ったのか、2撃目からはいつも通りの「《メガ・ハンマー》」に言い直している。

「むむつ。これは負けてはいられませんぞ！ 《ウォール・シールド》」

グランドルはグランドルで、土魔法の《アース・ウォール》と盾スキルの《シールド》を合体させて詠唱し、見事土の盾を形成している。ここまでくると、新しい複合技と言っていいかもしれない。流星は、でんせつのゆうしゃ。潜在スペックが半端ない。

人語は全く話していないが、Aランカーの登場は一同にとって心強いものらしい。ひよいひよいと人とは思えぬ跳躍力で黒の戦禍をかく乱しながら、ズバズバと切り裂いていくエドガンに、一同は力を取り戻したようだ。

マリエラに「さっきは攻撃してごめんね」と、ポーシオンを振りかけられて傷の回復したラミアは、水に流してくれたのか、単にそれどころではないのかは分からないが、再び黒の戦禍に挑みかかり、ラミアを襲う攻撃はグランドルが捌いていく。ドニーノとユーリケが迫る歩兵をなぎ倒し、そこへマリエラが火炎瓶を投げ込む。

形成は逆転した。

「ウキッ！」

攻撃の合間を縫ってエドガンがラミアに向かって投げキッスを飛



ばし、ラミアが6本の腕をつねつねと動かしながら本気の威嚇を返す余裕すらある。

「ウツキウキ！」

まさに、気分はうつきつき。

「ご機嫌パーリー状態だ。」

「違うし！ 敵が、黒い魔物が雪崩れ込んでくるし！！！」

流石は調教師。ユーリケはエドガンの猿言語さえ理解できるのか。

ユーリケの指差す先、崩れ去った北の防壁付近に目をやると、夜の闇よりなお黒いものが津波のように盛り上がり、マリエラたちがいる中庭に雪崩れ込もうとしていた。

マリエラやユーリケという二人の少女と黒鉄輸送隊の仲間たちの危機に駆け付けたのか、それとも単に女性的なフォルムのラミアとお知り合いになりたかったのか、エロガンの分かりやすい行動原理など理解したくは無けれど、そのおかげで助かったのは間違いない。けれど、北を守るエドガンの不在によって、この中庭を、恐らくは中央の神殿を目指す黒い魔物は堰を切った洪水のように、雪崩れ込もうとしていた。

「こいつぁ、やべえ」

「一旦引きますぞ！」

「ウキー」

ウツキウキなのはエドガンの鳴き声だけで、エドガンも含め皆の顔は深刻だ。

一同は踵を返して、外壁の南側、エントランスへと走り出す。

けれど押し寄せる波濤から逃れられる者がいるのだろうか。

扉はそこに見えるのに、距離が無限のように感じ、湿気た中庭の

空気さえマリエラたちの動きを阻んでいるように感じる。

これほどの大波の前では、マリエラたちなどちり芥のごとく呑まれ、記憶も存在も散り散りに消し飛んでしまうのではないか。

迫りくる真黒な絶望に、マリエラが塗りつぶされそうになったその時。

「グルオオオオオオッ」

ワイバーンかドラゴンか。

北西の方角から響く咆哮。その方向に招かれたように生じた竜巻に、押し寄せる黒い波濤は呑み込まれ、渦を巻いて遙か上空へと巻き上げられていった。

ゴウゴウと、横殴りの風が吹く。

竜巻の起こした暴風が遠く離れたマリエラたちまで吹きつける。

風は強く、どんどん重さを増していく。

まるで水に呑まれたように、呼吸さえままならない。

竜巻が含む水の気配に誘われるように、濃霧のように大気は湿度を増し、闇に光が差し込んでくる。

「朝だ、水が来るぞ！」

ドニーノはそう叫ぶや、黒の戦禍に腰に差した火炎瓶をありったけ投げつけると、グランドルをひょいと担いで外壁のエントランスへと走り出す。

「急げ、戻るぞ！」

「ギャウ！」

ドニーノの呼びかけに呼応したのは、竜巻を見つめたまま呆けた

様子のユーリケではなく、二人が乗ったラプトルのクーで、マリエラたちを落とさないよう気を付けながらも黒い魔物を蹴散らしながら、エントランスへ駆けていく。

「ウツキー、ウキウキー、《ウキツ》」

最後まで黒の戦禍の足止めをしていたエテコウ違ったエドガンも、止めとばかりに双属性剣デュアル・エレメンツ・ソードを叩き込むと、なぜか壁を駆け上がり、マリエラたちとは反対側の北東の塔へと戻って行った。

夜と朝が入れ替わり、世界が水で満たされる、それはとても短い時間。

満ちる水から逃れるように、外壁のエントランスへ急ぐ一同。

体力の尽きたグランドルは、ドニーノに担がれながらも顔を上げラミアの方に目を向ける。その視線に気が付いたのか、ラミアは黒の戦禍を攻める手を一瞬だけ止めると、去っていくグランドルの方を振り向いた。

グランドルは見た。白く密度を増していく霧の向こうで、ラミアが己を見つめる姿を。

そして、ラミアの注意が削がれた隙に、無防備に逃げ出すグランドルたちを獲物と定めた黒の戦禍が突進してくる様子を。

「いかん、ヤツがきますぞ！」

「くっ、戦ってる時間はねえ、全力で走れ！！」

火炎瓶で焼かれ、エドガンの攻撃で削られたぶん、身軽になったとでも言いたげに、異様な速さで突進してくる黒の戦禍。

痛みも恐れも感じぬものをいかに止めればいいのかだろうか。

「《ウォール》、《ウォール》！ ダメですぞ！」

グランドルの《アース・ウォール》は、《シールド》との複合技だからこそ、黒の戦禍を制止しうる。そして彼の盾スキルは、体から離れた場所では効果を発揮しないのだ。

ただの脆弱な土の壁など、紙の目隠しほどの役しかなさず、黒の戦禍はみるみる距離を縮めて来る。

「泳ぎは苦手なんだがな」

「同じくですぞ」

「ドニーノさん！？ グランドルさん！？」

マリエラたちを逃がすため、黒の戦禍を足止めするために、ドニーノが立ち止まってハンマーを構える。担がれていたグランドルは着地して、黒の戦禍の突進を止めようと、残りの魔力をつぎ込んで《アース・ウォール》を構築し、《シールド》スキルで強化する。

黒の戦禍の衝撃は、すぐに訪れるはずだった。

「何が……？」

「おい、グランドル、ありやあ……」

急に止んだ追撃に、グランドルが土壁の向こうを覗いてみると。

「お……、おお、ラミア……」

この数日を共に過ごし、先ほども共に戦ったラミアが、黒の戦禍に巻き付き締め上げて、その動きを封じていた。

もっとも黒の戦禍もラミアに巻き付かれた程度でその動きを止めたりはしない。

ズクズクとラミアの蛇体を貫いて、黒の槍がラミアを内側から貫き通す。

「シャアツ、シャアアツ」

血を流し、針山のようになりながらも巻き付く力を弱めないラミア。

「なにを、ラミア。やめるのです」

グランドルの言葉はラミアに通じなくとも、案ずる心は届いたのだろうか。

ラミアは顔を上げ、グランドルを見つめると、そのまま上半身をくねらせて、6本の腕で巻き付いた己が体を封じ込めるように抱きしめた。

「シャアアアアアアアアアツ！！！」

天に向かってラミアが叫ぶ。

その声は、蛇の威嚇というよりは、死にゆく乙女の断末魔のようであったと、グランドルは思った。

「ラミア！」

進化した蛇の魔物は時に石化の呪いを持つ。

人を呪って石に変え、飾る種族もいれば喰らう種族もいる。

けれど人を助けるために、己が体を石に変える蛇が存在しただろうか。

「行くぞ、グランドル。水が来る。時間がねえ」

ドニーノは呆然とするグランドルを再び担ぐと、外壁のエントランスに駆け込んだ。

中庭には水が満ち、黒い魔物は溶けるように消えていく。

もつじき優しい光の中で、魔物が新たに生まれるのだろうか。

幾度も繰り返された朝。

グランドルが何度もラミアと見た光景。

外壁に囲まれた中庭に朝日は未だ射し込まず、けれど白んでいく空の光が濃密な霧に反射して、この限られた中庭の世界は、夜の穢れを被うかの如く、一瞬、白く輝くのだ。そして、霧は水に変わって、すべてを呑み込み静かに世界を満たすのだ。

その静かな水の世界の中で、黒の戦禍に巻き付いたまま、石と化したラミアが物言わず佇んでいた。

「感傷に浸ってる暇はねえ、“首飾り”が目を覚ます前に退却するぞ！」

ドニーノの号令でエントランスを離れ廊下へと駆け込むマリエラたち。さきほどからユーリケは押し黙ったままここに在らずといった様子でラプトルの進むに任せている。

何とか南東の塔1階に辿り着いたマリエラたちは、つかの間の安全にようやく深く息を吐いた。

「よかった、グランドルさんが助かって……」

マリエラはグランドルの生還を喜ぶけれど、グランドルの顔色は優れない。

確かにグランドルは助かった。けれど、ポーションで多少回復したものの、衰弱した体は完全とは言えないし、魔物であるラミアが自分を助けるために犠牲になったという事実を消化できずにいる様子だ。

エドガンが肉体的に無事であることは、偶然確認できたけれど、記憶のほとんどを失っているようだった。

それでもエドガンはエドガンというか、なんだか楽しそうだから深刻なイメージは受けられないけれど、言語を忘れて猿化するなど、看過できる状況ではないだろう。

そして。

「あの竜巻……。あれは、フランツだし」

北西の方向を見据えたまま、つぶやくユーリケ。

竜巻を呼ぶように上がった咆哮は、人の放つそれではなかった。

フランツに一体何があったのだろうか。

Aランカーで攻撃力の高いエドガンでさえ、記憶を全て失って、猿のようになっていたのだ。

フランツは一体どうなっているのだろうか。

「二人を放ってはおけない」

少しでも、二人の記憶を取り戻さなければ。

「おう、そうだな。ここは二手に分かれるか。嬢ちゃんとユーリケ、ワシとグランドルであいつらを助けに行くでしょう」

マリエラの提案にドニーノが同意する。

けれどマリエラは知っている。もう、気が付いてしまっている。

二人同時に記憶を取り戻すことなど、できはしないということ。

エドガンか、フランツか。

片方の記憶を取り戻している間に、もう片方はどうなってしまうのだろうか。





## 21・猿の降る夜(後書き)

ざっくりまとめ：ウツキウキのパーリーナイト

からの、《地脈の囁き》9/2 13:00時点で感想欄の回答が多いルートに進みます。

マリエラとユーリケは、どこへ向かえばいいのでしょうか。

1・エドガン

2・フランツ

22・ユーリケの決断（前書き）

圧倒的フランチ。

## 22・ユーリケの決断

「僕一人でもフランスを助けに行くし。……ごめん、マリエラ」

ユーリケが口にしたそれは、提案でも希望でもなく断定だった。気持ちとはつくに定まっていたのだろう。

例え依頼の最中だろうと、フランスを優先するとユーリケは決めたのだ。

「一緒にいくよ、ユーリケ。足手まといかもしれないけど、その分きつと役に立つから」

依頼を全うできないと謝るユーリケの手をマリエラは握る。

「ありがと、マリエラ。でも、これは僕らの問題だし。依頼の途中で、僕の都合でマリエラを危険にさらすわけにはいかないし」

黒鉄輸送隊のメンバーとして、依頼主を巻き込むわけにはいかないと断るユーリケ。

「何言ってるのよ！ ほつとけないよ、友達じゃない！」

危険にならとつくに巻き込まれている。というか、むしろ巻き込んだのはマリエラの方だ。そう思ったままを口にしたマリエラ。けれどユーリケはきよとんとした表情でマリエラを見た。

「……友達？」

「……え？ 違うの？」

もしか友達だと思っていたのはマリエラのほうだけだったのだろうか。

張りつめていた空気が微妙な感じに緩む中で、マリエラはマッハ

で思考を巡らせる。

マリエラはユーリケとフランツの事をほとんど知らない。

迷宮都市で黒鉄輸送隊と出会ってからの短い時間と、この世界で覗いた二人の記憶、それだけだ。

特にフランツの記憶は、ユーリケと帝都で暮らしていた頃の、何気ない日常の様子ばかりで、フランツが一体どういう人物なのか、先ほど咆哮と共に巻き起こった竜巻が、治癒魔法使いであるはずのフランツとどう関係しているのかなど想像もつかないし、そんなフランツをユーリケがどう思っているのかだって、マリエラが勝手に想像しているだけだ。

けれど、良く知る必要などないのかもしれないと、マリエラは思っている。

この不思議な水の世界をユーリケと二人でさ迷った時間は、そう悪いものではなかったのだ。危険さえなかったならば、楽しいとさえ思っただろう。

相手を良く知らなくても、共通点さえなくなっただって、一緒にいるのがなんだか楽しい。そういう相手を“気が合う”というのだと、マリエラは迷宮都市で暮らすようになって知ることができた。

「そういう相手とは1回飯を食べば、もう友達だよ」

師匠はそう言っていたけれど、あれはやはり師匠のオリジナルルールだったのか。

続く沈黙になんとか少し気まづくなっただマリエラが、ちらちらとユーリケの表情を伺うと、ユーリケのほうもなんだか同じ様子ながら、小さい声で「違わないし」と答えてくれた。

「よかったー」

変にユーリケが間をおくものだから、マリエラのちょっぴり恥ずかしい勘違いかと思ってしまうた。

「……よくないし」

ちょっぴり口を尖らせたユーリケが目配せする先に視線を移すと、ドニーノとグランドルのおっさん二人が、ニヨニヨと生暖かい笑顔全開で、二人の少女の友情劇を見物していた。

そんなおっさん二人に、エテコウならぬエドガンを頼んだマリエラたちが、南西の塔3階の入り口に辿り着いたのは、日の落ちる少し前だった。

途中で少し眠って、黒の戦禍に関する記憶を仕入れておきたかったのだけれど、グランドルを回復させるためのポーションや、使い切ってしまった火炎瓶の補充、その他必要になるであろうポーションを材料から集めて作るのに、思ったより時間がかかってしまったのだ。

エドガンの様子もちろん気にはなるのだが、記憶を片っ端から失ったエドガンは、野生が目覚めてしまったようで、肉体的にはむしろ絶好調のようにも見えたから、全員が「なんか大丈夫そう」という意見で一致して、手分けをして採取や食料調達、治療や通路の確保を優先して夜の訪れを待つことにした。

「マリエラ、全速で行くし。しっかり捕まってるし」

「うん、わかった!」

「グギヤ」

夜の訪れとともに南西の塔を4階まで駆け上がり、防壁を通って北西の塔へ向かう。室内の廊下は安全だけれど、天井が低く装飾品も多いからラプトルで駆け抜けるとどうしても速度が落ちてしまう。黒い魔物を蹴散らして進む方が余程早く着くとの判断だったが、今までならば黒い魔物で溢れていたはずの北西の塔の付近はおどろくほどに魔物が少なく、マリエラたちは苦も無く塔へと接近できた。

嫌な予感がする。

進路を阻まれることなく駆けているのに、焦燥感がじりじりと胸を焼く。

マリエラはもう直ぐ到着する北西の塔のその先へと目を向ける。

この景色は何度目だろう。

塔から洩れる松明の灯りが、防壁の輪郭を闇夜にうつすらと描き出している。

その薄暗い防壁に、光さえ呑み込むように蠢いているのは、夜より暗い魔物たち。

防壁の向こう側には潮が満ちて来るように、黒い魔物が押し寄せているのだろう。

大きく崩れた北の防壁の、東側では時折炎が立ち昇る。

エドガンか、それとも駆け付けたドニーノとグランドルが火炎瓶を使ったのかもしれない。

そしてそれに呼応するように、マリエラたちの向かう北西の塔の少し先からは。

「フランツ!!」

ユーリケには、暗闇に浮かび上がるその影が、フランツに見えたのだろうか。

前傾の姿勢から繰り出される拳は、マリエラの目ではとらえられないほど早く、素手で繰り出されているはずの攻撃に、黒い魔物は切り裂かれて霧散していく。ひと時も立ち止まることない二足の脚が生み出す跳躍は、マリエラの知るどの冒険者より高く鋭い。

遠く離れて見ているからこそ見失わずに済むだけで、詳細を視認することも困難な、力強くも俊敏なその動きは、人の域を凌駕しているようにマリエラには思えた。

(……まるで、獣)

ユーリケの声が届いたのだろうか、こちらを振り向いたその顔は隔てる距離に見ることは叶わないけれど、何か得体の知れないものに見つめられたような、そんな気がマリエラにはした。

その背後から、せり上がり、津波のような黒い魔物がフランツを押しつぶそうと襲い掛かる。

「フランツ、危ない!!」

声の限りに叫ぶユーリケ。その声をかき消したのは、黒い魔物を巻き上げ渦巻く竜巻と、その中心で人とは思えぬ咆哮を上げるフランツだった。

「オオオオオ、ガアアアア」

「フランツ! フランツ!」

「危ない! ユーリケ!」

ラプトルから飛び降りてフランツへと駆け寄ろうとするユーリケをマリエラは必至に止める。

「離して、マリエラ! フランツが!!」

ユーリケを止めようと服を掴んだマリエラ。騎手の制御を失った

ラプトルが戸惑うように速度を緩めた瞬間に、フランチを中心にも生じた竜巻が、ラプトルごとマリエラとユーリケを宙へと巻き上げた。

「きやあつ」

竜巻に巻き上げられたマリエラの脚元に広がっていたのは、壊れた北の防壁の外の光景。

果て無き地平のごとく広がる森を真つ二つに切裂くように、神殿へと続く黒い道。

あたり一面を埋め尽くし、壊れた防壁の隙間から神殿へと流れ込もうとする真黒な禍の奔流わさわわだった。

その一部は、竜巻に巻き上げられながらも、身動きの取れないマリエラたちを呑み込もうと生き物のように迫りくる。

禍々しい濁流に呑み込まれそうになった時、マリエラは“怖い”と本能的にそう感じた。

それは魔物を前にした命を奪われるような、恐怖心ではない。

即座に命を奪われるわけではないけれど、じつとりと絡みつき、内側から命を蝕まれるような、死よりもつらい生を強制されるような、そのような恐怖心であった。

マリエラにそのような経験は無いけれど、誰かを楽しませるために、長く生かされながら拷問を受け続ける、そんな定めを前にした囚われ人の心境に近いのかもしれない。

まるで定められた水路のようにこちらへ向かって流れ込んでくるそれは、怒りであり、痛みであり、哀しみであり、苦しみであり、誰かを虐げたいと、呪わしく、狂わしく、願い祈る歪んだ人の心だと、マリエラはそのように感じた。



歪んだ黒い流れがうねる。

黒い魔物の集合体が竜巻にまき上げられ足場を失ったマリエラとユーリケに手を伸ばす。

己に関係のない人間の、不幸は甘くかぐわしい。

それを味わいたいのだと、喜びも悲しみも、その者が心に抱く、その者をその者たらしめる記憶を全てなめ尽くそうと、黒い腕を二人に伸ばす。

「怖い、怖い、怖い。助けて、助けて……ジーク！」  
その時。

世界を変革するように、空が、大地が揺れ動いた。  
始まったばかりに思えた夜は、眩しいほどの光と共に突然に終わりを告げた。

清い水が世界に溢れ、激流が黒い魔物を押し流す。

激しく揺れ動く世界の中で、マリエラとユーリケは、なにかに抱えられたと感じた。

目まぐるしく変貌する状況の中、マリエラが認識できたのは、  
「フランツ……」

とつぶやくユーリケの安堵を含んだ声と、破壊された北の防壁を塞ぐように現れた、7本目の塔だった。

(……遅いよ)

少し憎たらしく思いながらも安堵を覚えたマリエラは、流れ込んでくる誰かの記憶に意識を委ねた。

## 22・ユーリケの決断（後書き）

ざっくりまとめ：マリエラの友達が増えた！  
そしてエドガンの友達は……

## 23・血の記憶

かつては緑豊かな土地だったのだと、村の長老は語った。  
それがどれほど昔の事か、この乾いた土地に最後に生まれ落ちた  
その男には分からなかった。

真つ青な空と乾ききった大地の織りなす果てしもない地平。  
それが男の知る世界のあり様だった。

この前、雨が降ったのは一体いつのことだったろう。  
乾ききった大地に、今日も男は種を蒔く。  
がりがりとした大地を傷つけて、そこに己の血を垂らす。

「サーフェット・ヒール  
異常回復」

細胞を過剰に増殖させる回復魔法で、大地に垂らされた血液は増  
殖し、腐敗し、ごくわずかだけ植物に恵みをもたらす土へと変わる。

蒔かれた種は、文字通り男たちの血潮を糧に成長して、僅かばか  
りの実を結ぶ。

「ここも、もうすぐ砂漠に吞まれる……」  
男たちの血を吸って、緩慢な死を迎えた周囲の大地は、赤い砂漠  
に変貌していた。

この辺りも、じきに砂に変わるのだろう。  
作物のつける実はやせ細り、いくら蒔いても魔力を込めねば芽吹  
くことさえできない。

男たちの一族が、乾いた大地に還るのは最早時間の問題だった。

「いつまでこの土地にしがみ付くのか。この土地は見放され、我ら  
は見捨てられたのだ」

男の言葉に長老たちは力なく首を振るばかり。

「だとすれば、何か我らに咎があり、これは我らの罰なのだろう。  
我らの肉はこの地に芽吹き、我らの命はこの地より湧き出た。こ  
こで朽ちるが我らの定め。すべてはこの地脈を統べる水の精霊の御  
心のまま」

水竜の血を引く男たち一族は、その血ゆえに長命で、その血ゆえ  
に頑強だった。

並の生き物では生きられぬ乾ききった大地を己が血と魔力で潤し  
て、乏しい糧で命を繋いだ。

赤い砂漠は彼らの墓標。

緩やかに、飢えて死に、乾いて赤い砂へと還る、信仰という鎖で  
己をしばりつけた一族たちの最後の地。

かつて男の一族は、この地の地脈を統べる水の精霊を信仰し、そ  
の加護を受けていたという。この地から水の精霊が失せたのが、一  
体いつのことだったのか一族で最も若い男は知らない。

この地と一族を統べた水の精霊が、どこへどうして消えたのか、  
一族の誰も知りはない。いつか戻って来るのだと、信じてこの地  
にしがみ付き、一族は最早絶えるを待つばかりだった。

弱い女性絶えて久しく、男には朽ちかけた老人たちの他に共に  
生きる相手もいなかった。

「赤い砂漠は我らが一族の血の証。ここに還るが我らの望み。

だが若者よ、お前はこの地を旅立つがよい。

末に生まれたお前だけなら、水の精霊さまもお許しになられよう」  
最後の長老の命が大地に還るのを見送った後、男は赤い砂漠を後

にした。

歩いてても、歩いてても、変わることもなく地平は続く。

雲一つない真つ青な空は、話に聞いた海というものよりはるかに青く澄んでいるのだらう。

遮るもののない空の青は、冷酷な太陽の神の衣なのだというおとぎ話を男は思い出していた。

透き通る美しい青い衣の裾を大地が汚してしまうから、太陽の神は怒って大地を焼き尽くすのだと。

この地では死を司る月の女神が太陽よりもはるかに優しい。

凍てつくほどの冷たさで、生という辛苦から解き放ち永久の眠りを与えてくれる。

最早世界に水の精霊の加護はなく、この乾いた大地と冷酷な空が世界のすべてなのだと言が思い始めた頃、遙かな地平は変化を見せた。

山だ。

遙かなる山脈の、山間からは水ではなくて砂が川となって砂漠へと流れ込んでいたけれど、その上空に漂う雲に、男は力を取り戻した。

雲がある。つまり、あの地に雨が降るのだ。

幾日歩いたことだらう。

乾いた岩の山を越え、さりさりと足元で音を立てる乾いた塩の湖を踏み分けて、男は前へと進んでいった。塩の湖は白く乾ききっており、周囲に草木は無かつたけれど、掘ると容易く水が湧き出た。

そのままでは塩辛く、とても飲めるものではなかつたけれど、昼の暑さに蒸発した水は夜に冷やされ真水に変わった。

雲の落とす影を追い、まばらに生える草を、岩陰を走る獣を食らってさ迷う男が、河へとたどり着けたのはまさに奇跡だったろう。

細く土に濁ったその河を遡り、起源をたどり、辿り着いた源流で男は故郷の真実を知った。

源流に棲んでいたのは、一族が待ち焦がれた水の精霊。出会った瞬間に、男にはそれが己が血に刻まれた信仰の対象であるのだと理解した。

「慈愛の主、清浄の君、生命の源たる水の精霊よ、何故我らを見捨てたもうたか。今一度、そのお力にて我らの大地を癒やしたもう」

ようやく見つけた水の精霊に、言葉を尽くしてあの地に戻って欲しいと請う男に、男の故郷を守護していた精霊は遙か昔に消え失せたのだとその精霊は告げた。

水の末裔、我らが末の子。

苦難の末に、よくぞここまでたどり着きましたね。

けれど、私は貴方たちの知る水の精霊ではないのです。

我らは生まれては消え、変転として定まらぬもの。

私はこの水源に生じて、ひと時存在する一個に過ぎません。

その地の過去を伝え聞いてはいないけれど、地脈の変動があったのでしょうか。

大地の寿命に比べれば特段に珍しいことはありません。

地脈の流れが変わったら、精霊は力を失うものだから、水だって枯れてしまうでしょう

「では、我らの水の精霊は一体どこへ行ったのか？ どうすれば戻ってきてくれるのか？」

あの地の精霊は、既に世界に存在しない。

人だつて生まれてやがて死ぬでしょう？ それと違いはないのです。

水の血を引く人の子よ、留まってはなりません。

この地の水もじき枯れる。水を求めて行きなさい。

あの地の精霊がいなくなっても、水の慈愛は尽きぬのだから

一族を緩慢な死へと導いた土地の干ばつ。

そこに一族の咎はなく、あれは罰でも何でもなかったのだ。

地脈の変動、地震や嵐と変わらない、ただの自然災害で大地が枯れただけなのだ。

「ならば、何故我が一族は、あれほどあの地に囚われたのか。捨て去られ忘れ去られて尚、この心のうちを焦がす、この感情は何なのか」

男の旅は終わらない。

これは、血に刻まれた遙かな記憶。

\*\*\*\*\*

「俺には竜人の血が流れているらしい」

目覚めたフランツはマリエラとユーリケにそう語った。

水の精霊を求める男の記憶は、先祖の記憶なのだと話すフランツの顔は、目深にかぶったフードで隠されていてはつきりとは見えな

いけれど、僅かに見える首元まで青い鱗で覆われている。ブーツはつま先が破れて鋭い鉤爪が伸びているし、手だつて装甲の付いた手袋の指先を破つて鱗に覆われた指と鋭い爪が見えている。

恐らくは、フランツとして生きた記憶を失つて、竜人の血が暴走したのだろう。

「不思議なことに、ユーリケと帝都で過ごした記憶は残っていたんだ。だから完全に自我を失うことは無かつたのだと思う」

フランツが忘れなかつた記憶というのは、数日前にユーリケとマリエラがフランツの元を訪れた時に取り戻した記憶だという。一度取り戻した記憶が再び失われることは無いらしい。あの時、北西の塔を訪れなければ、フランツは完全に竜と化していたかもしれない。

竜巻に巻き込まれたマリエラたちを助けてくれたのはフランツで、竜化の影響か水の中でも長く過ごせるフランツが、マリエラとユーリケ、ラプトルのクーまで北西の塔の最上階へと運んでくれたらしい。マリエラの肩にへばりついていたサラマンダーも、外套の中に潜り込んだのか無事な様子でよじよじとラプトルのクーの体によじ登っている。

「フランツ、大丈夫だし？」

フランツの鱗の生えた顔も、鋭い鉤爪もみじんも恐れる様子もなくフランツに寄り添い心配するユーリケ。その様子はいつもの少年然としたものではなくて、年ごろの少女のそれだとマリエラは思った。

「心配させたな、ユーリケ。過去の出来事を一気に思い出したせいだ、少し混乱しているが、もう大丈夫だ」

フランツの記憶の珠はマリエラたちも持つてきていたし、フラン



ツ自身集めてくれていたらしい。すべての記憶が戻ったわけではないのだろうが、以前より姿の変わった今の方が余程フ란ツらしくった。

「その姿、戻らないんでしょうか……」

おずおずと尋ねるマリエラ。

ユーリケは全く気にしていないようだが、人間のサイズを超えてしまった手足や、恐らく輪郭も変わっているであろう顔は、今の帝都や迷宮都市では暮らしにくいものだろう。

「恐らく一時的なものだと思う。記憶に残る先祖の竜人もこのような姿はしていなかったしな。しかし、こちらの方が攻撃力がある。今はこのままでいいだろう」

戻せると話すフ란ツに、マリエラは先ほど見た夢を思い出す。

マリエラが垣間見たフ란ツの記憶は、血に刻まれた先祖の記憶だけではない。

恐らくは先祖返りというやつなのだろう。彼の家族にも、少なくとも口伝される範囲において、顔に鱗を持つ者はフ란ツの家系には現れなかった。

フ란ツの父は彼の治癒魔法の才を愛したが、腹を痛めたはずの母親は彼の姿を『蜥蜴もどき』と疎んじた。

マリエラが覗いた記憶の中には、母の愛を乞う幼い少年が、己の顔を刃物で削り魔法で再生する痛ましい記憶も含まれていた。

サイフエット・ヒール  
異常回復は、ただの治癒魔法ではない。竜人の血に刻まれた特殊なこの治癒魔法は、術者の意思を反映して対象を癒やす。

勿論それは自然な姿ではないから、幼いフ란ツが血を流して得た常人と変わらぬ肌は、彼の強靱な肉体が備える治癒力によって、

数週間もするうちに再び鱗が生えそろうた。

(フ란ツの記憶を、ユーリケは見たのかな……)  
蜥蜴と蔑まれて育った男が、人より獣に愛を注ぐ少女との暮らしに安らぎを得たのは、自然な流れだったのだらう。

フ란ツに寄り添うユーリケの様子は、心配と安堵以外はいつもと同じように見えて、マリエラが覗いてしまったフ란ツの記憶をユーリケが見たのかを推し量ることはできなかった。

(フ란ツの記憶なんて、ユーリケには必要ないのかもしれない)  
必要なことならば、きつと伝えあうのだらう。彼らはそうやって二人で暮らしてきたのだから。そんな経験は、マリエラにだってあるのだ。

「それにしても……」

あの時助けてくれたのは、僅かに正気を取り戻したフ란ツだったのだけれど、そのきっかけになった衝撃と、いきなり訪れた夜明けは一体何だったのだらう。

マリエラはいつまでもイチャコラしているユーリケとフ란ツから視線を逸らすと、窓の方へと歩み寄る。

(たぶん……だけど)

想像はついているのだ。というか、あれから一体何日たったことか。

勿論、ここと現実世界の時間の流れが違うことだって十分に考えられるのだけれど、そんな事は関係ないのだ。理屈で感情がどうにかなるなら、世界はきつとずっと平和で退屈だ。

「あつた、七本目」

北側の東西をつなぐ通路は壁ごと大きく崩れて断絶している。夜になるとそこから黒い魔物が雪崩のように押し寄せるのだが、その崩れ去った外壁の丁度中間あたりに、新しい塔が立っていた。

（今なら、言い訳を聞いてあげなくもないんだからね！）

『木漏れ日』を飛び出した時の激おこぶりは一体どこへ行ったのか。ツンケン女子ユーリケのデレっぷりにあてられたとでも言うのだからか。

二人の世界を醸し出すフラッツとユーリケをちらりと見たマリエラは、7本目の塔に向かって心の中で呟いた。

## 23・血の記憶（後書き）

ざっくくりまとめ・チョロイン　マリエラ、ジークと合流する前に  
始める。

## 24・運の悪い男

ジークムントは運が悪い。

見た目も頭も悪くはないし、戦闘能力もAランク。

性格は、合う合わないが人によってあるものだけれど、驕らず弛まず怠らず、マリエラが堅苦しく感じない程度に清廉で、マリエラが不安を感じない程度に誠実で、マリエラがよそ見をしない程度に魅力的な男であろうと心掛けてきた。

少なくとも本人はそのように思っているし、表面上は狙った通りに振る舞えているのだろう。

だから彼を多少は知っている、という程度の間柄の迷宮都市の私たちは、理想的な好青年だとジークの事を考えている。

肝心のマリエラはと言えば、ジークが己を良く見せようとせつせと取り繕っていることなどお見通しなのだけれど、化粧した顔とすっぴんの顔くらいの認識で、どちらも好意的にとらえている。

つまり、マリエラも含めた周囲の人間からは、ジークムントはかなりの高スペックな男性として認識されているのだ。

そんなジークの一番残念な点を挙げるとすれば、マリエラの事となると若干常識の範囲を逸脱しがちな性格よりも、彼の運の低さがあげられるだろう。

今回マリエラを怒らせてしまったのだって、釈明の余地は十分あるのだ。大変不幸なめぐりあわせが重なって、弁解のタイミングを失ってしまっただけで。

しっかりと説明し、心から謝ればマリエラはきつと許してくれる。そう思っただけでこうして魔の森の奥深くまで追いかけてきたというのに……。

「ここは……、塔!？」

自分は確か魔の森の沼地にいたはずだ。そこにある祠の扉に手をかけた瞬間、まるで地震でも起こったような感覚がした。激しい眩暈に前後不覚になるようなそんな感覚に思わず目を閉じ、そして開いた時にはジークは塔の中にいたのだ。

いくつもある塔の窓からは湿った空気が吹き込んできて、外は星一つ見えない真っ暗闇だったけれど、はるか下方からマリエラの魔力が微かに感じられた。

「!!! マリエラ、すぐに行く!」

丸い塔の内壁に沿って螺旋に続く階段を、半ば飛び降りるように駆け下りるジーク。

「扉が二つ……。どっちだ!？」

扉のある階層、ジークは知らぬことだが4階に、驚くほどの速度で到着したジークは、しかしぐるぐると回る螺旋階段にマリエラのいる方向を見失ってしまった。

「魔力は……、ダメだ。拡散し過ぎて……」

外では魔力によって起こされたのか暴風が吹き荒れていて、特に魔力を使っているでもないマリエラの魔力はかき消されて感知できない。ならば視覚で『精霊眼』を発動しながら適当な窓から外の様子をうかがうと、そこには広い中庭のような場所と、その中央に

そびえる神殿のような建物が見えた。

「!？ ぐっ」

ジークの『精霊眼』が中央にある神殿を捉えるや、ぐぐうつと引きずり出されるように精霊眼を経由して魔力が神殿へと吸い込まれていった。

同時に神殿を中心に、この世界全体に濃い水の気配が急激に高まっていく。

「水!? いかん、閉じ込められる!」

『精霊眼』が映し出した水の満ちるイメージに、ジークはとっさにこの場を離れなければと考える。今いる場所は塔の中、両側に二つの扉がある部屋だ。下に続く階段もあるけれど、この塔にマリエラはいないから、下へ向かう選択肢はない。

右か左か。どちらかの扉の向こうにマリエラがいるに違いない。

窓から吹き込む風はますます水の気配を増していて、一刻の猶予さえジークに与えてはくれない。

「マリエラ! 俺を導いてくれ!!」

ジークは意を決して一方の扉へ駆け寄ると、扉の外、外壁上の通路へと飛び出した。

外は霧というには濃すぎるほどの湿気た空気で満ちていて、呼吸もままならないほどだ。しかもジークのいた塔と隣の塔を繋ぐ壁は崩れてかなり距離がある。反動をつけて飛び移ったとして、今いる4階からむき出しとなった3階の廊下へ飛び移るのが精いっぱいだろう。つまり、一度飛び移ってしまったら、この塔へ戻れるかはわからない。

それでもジークは選択したのだ。  
マリエラに続いていると信じて、この扉を選んだのだ。  
そしてもう、選びなおす時間はない。

「ええい、ままよ！」

と隣の塔へと続く廊下に飛び移り、そのまま廊下を駆け抜ける。

体にまとわりつく空気の重さに、自分の周囲にあるものがどンドン水に近づいていることを理解する。

辿り着いた隣の塔の扉が壊れていたことは、ジークにとって唯一の幸運だったかもしれない。そこに辿り着いた時には辺りは水で満ちていて、もし扉が壊れていなければ水圧で開けることもできなかっただろうから。

何とか塔の中に滑り込んだジークは、空気を求めて上階へと泳ぐ。「ぷは、部屋は浸水しているが、塔の上部は浸水しないのか……」

浸水していないなら、きつとこの塔を上った先にマリエラがいるに違いない。

ジークムントはそのように考えて、そのように己の運を信用して、呼吸を整えることもせず、螺旋階段を駆け上がる。

この先にきつとマリエラがいるはずだ。

なんて言って謝ろう。なんて言って説明しよう。

いや、彼女のことだから、ここまで追ってきたというだけで、温かく俺を迎えてくれるかもしれない。

ああ、きつとそうだ。

きつと、あの笑顔が見れるはず。



「マリエラ、マリエラ、マリエラ……」。

ジークムントは運が悪い。  
少なくとも、周囲の笑いをとれるくらいには。

「ウツキー」

塔を駆け上がったその先で、マリエラではなくウキウキ言ってるエドガンを見つけたジークの表情は、その場に居合わせたグランドルとドニーノに、「この仕事を受けて良かった」と思わせるほどに面白いものだったという。

\*\*\*\*\*

「ウキー？」

「……マリエラ」

「ウツキー、ウキキ！」

「……マリエラ」

猿と化したエドガンと並んでジークも珍獣の仲間入りか。  
一つも記憶を取られていないというのに、あまりのショックに正気を失ってしまったのだろうか。

「マリエラ、俺を導いてくれ」も何も、そんなミラクルなパワーはマリエラにはないし、何より、怒らせて家出中のマリエラがジークを導く理由はないのだ。

ここに『木漏れ日』の常連たちがいたならば、ジークの甘ったれた思考回路を肴にティータイムとしゃれこんだに違いない。

「そんなに気を落とすなって。こっちに来ちまったのは、まあ、残念だったとしか言いようがねえが、夜になりゃあ外に出られるんだ。嬢ちゃんともじきに合流できるさ」

「そうですね。こんな場所まで迎えに来てもらって、喜ばない女性はおりませんぞ」

「ウキ！」

落胆の色を隠せないジークを慰めるグランドルとドニーノ。なかなかの紳士ぶりである。最後の一匹は全く持って邪魔なだけだが。

「マリエラは無事なんですね……」

ようやく顔を上げ、蚊の鳴くような声で尋ねるジークに、グランドルとドニーノは、おお、人語をしゃべったぞ、と心の中で思いながらも、「無事だ。元気にしている」と状況の説明を始めた。

「つまり外に出られるのは夜の間だけで、しかもその時間は短いと」「そういつこった。ユーリケたちとは南東の塔で落ち合う手はずになってる」

「ウキ」

「敵の情報は何？ 黒い粘体以外には？」

「普通の魔物もおりますぞ、昼間に発生・成長するのです。あの黒いとは敵対してるようですね、黒いのに優先して襲い掛かるので

すぞ」

「ウツキ」

「では、問題は黒い魔物の量だけか……」

「いや、黒い魔物の親玉みてえのも何体かいるな。」

めぼしい敵は片付けたんだが、中庭にとんでもねえのがいやがんだ。今は石化したラミアが押さえつけてくれてるんだが、何夜持つかはわからねえ。まあ、ジークが来てくれたんならどうにかなると思うがな」

「ウツキイー」

情報を交換し合うジーク、ドニーノ、グランドルと、いちいち「ウキ」と猿語で絡んでくるエドガン。

いや、もしかしたら会話に参加しているつもりなのかもしれないが、わざわざジークの視線の先に移動しては、顔をのぞき込んでくるから鬱陶しいことこの上ない。

「……エドガンは、記憶を失くしているんだよな？」

「……」

「……」

「ウキウキ！」

黒い魔物に取りつかれると記憶を失うことについては情報を交換済だけれど、エドガンの状態に関してはエドガン以外答えようがない。

ドニーノとグランドルも先の夜の間にこの塔にたどり着いたばかりだ。

ジークと友達であったことを僅かばかりでも覚えてるからなのか、それとも究極の二択に見事敗れて、開けた扉の先にエドガンの

姿を見定めた時のジークの絶望の表情に、全力でからかいて来ているのかは分からないが、先ほどからエドガンはジークばかりにまわりついている。

迷宮の討伐以来、来るもの拒まず去る者追いまくりだったエドガンが唯一まともであったことは、人妻や恋人のいる女性には手を出さないことだったのに、いくら依頼で仕事だとしても、ジークの下からマリエラを連れだしたのだ。これは、万死に値する。

まあ、万死に値すると思っっているのはジーク一人なのだけれど、ジークの友達だというなら、マリエラを説得するなり、ジークに声をかけるなりしてくれてもいいだろう。

いくらジークに非があるとはいえ、喧嘩してから家出実行までわずか数時間の出来事なのだ。申し開きの機会も得られなかったジークは、エドガンとの交友関係を見直そうかと本気で考えていた。

とはいえ、今は何を言っても通じはすまい。

ウキウキと楽しそうなエドガンをちらりと見たジークはため息を一つ吐く。

「まあ、中央の精霊の神殿にたどり着ければ、エドガンもどうにかなるだろう」

ジークの何気ない一言に反応したのは、ドニーノとグランドルだ。  
「精霊の神殿？」

「ここは精霊の世界ということですか？」

「ウキキ？」

「あ、ああ。恐らく水の精霊だろう。精霊眼で神殿を見た瞬間に魔力を随分持っていかれたから、かなり高位の精霊だと思います」

「ウツキー」

さらっと、重要な情報をもらすジークと、ウキウキとシリアスをぶち壊すエドガン。ウキウキと鳴いているのか、ウキウキご機嫌状態なのか。それ共両方なのだろうか。どちらにしてもそろそろ猿の相手も飽きてきた。

グランドルとドニーノは納得がいったとばかりに、「だから水が満ちている間は黒い魔物が来ないのか……」などと話し合っている。

そんな二人と、二人を眺めるジークの視線に入り込もうとろうつくエドガンを遠い目で見ながら、ジークは夜の訪れを今か今かと待っていた。

24・運の悪い男(後書き)

ざっくりまとめ：ジーク、マーフィーの法則発動！

「今のフランツさんは、お魚みたいに泳げるんですか？」

「いや、長時間潜ってはいられるし、水の中でもかなり自由に動けるが、エラ呼吸というわけではないな」

「マリエラ、フランツに何させるつもりだし？」

再び夜が訪れるまでの間に、マリエラたちは水の世界をぼんやりと眺めながらそんな会話をしていた。

飢餓や病魔の厄災を焼き清めたせいだろうか、水の世界は普通の魔物が力を増しているようで、ここへ来た頃よりも随分と大型の魚の魔物が泳いでいるのが見える。

はるか上の方をゆったりと泳いでいるのは鯨の魔物ではなからうか。鯨なんて、マリエラは話に聞いたことしかないけれど。

「あれ、鯨の魔物ですよー？」

「ん？ ああ、そうだな。まだ子供のようだが……。あれは流石に無理だぞ」

「随分でっかい子供だし。10メートルくらいはあるし」

失われたフランツの記憶を幾つも夢に見ていた割には、眠っていた時間はいつもと変わらないようで、マリエラたちは夜が来るまでの時間を少々持て余していた。

つい先ほどまでフランツは、水中での活動特性を生かして新たに生じた塔、北の塔への道を確認しに行ってくれていた。東西の防壁は途中で分断されていて、その中央に北の塔はそびえていたけれど、分断された壁が修復されたりはしていないようで、塔と防壁の間は飛び越えるにはいささか広く隔たったままだった。

つまり、少なくともマリエラたちのいる北西の塔からは、北の塔へはいけないし、当然北東の塔も南側をぐるっと回らなければたどり着けない。

フ란ツ一人ならば、北の塔へ辿り着くことも可能だろうが、水中で呼吸ができるわけではないから、途中で魔物魚に出会うリスクや、辿り着いたとして扉が開かない可能性を考えると、リスクが大きすぎるらしい。

「うーん、だったら、いるのはあれとあれかなー。ドニーノさんいるしあれは作ってもらおうとして、あれは1階に行けば作れたはず…」

「今度は何を企んでるし？」

あれ、あれと物忘れの激しい中年のような言動をするマリエラに首をかしげながらも、ユーリケが「必要なものがあればとって来るし？」と言ってくれる。

「ありがとう！ メインは皆と合流してからになるんだけど、今のうちに紐鳶とゲプラの実、火炎瓶の材料になるやつね、あれをありったけ集めてきて欲しいかな」

「分かったし」

「手伝おう、ユーリケ」

二人してラプトルに乗り込み、採取に出かけるユーリケとフ란ツに、「何か美味しい物を作って待ってるね」と手を振るマリエラ。錬金術を応用したマリエラの料理は、厨房設備の整った『木漏れ日』で作るものより火加減が絶妙で美味しい。体を動かし、常では見られない珍しい景色で味付けされた旅先の料理は、平凡なものですえ味が引き立つものだけけど、料理そのものの味が良いなら餌付け効果は抜群だ。ご飯が美味しいと、それだけでもウキウキと気分



が高揚するものだ。

北東の塔でエドガンがウキウキ言っていた頃、北西の塔にもウキウキな二人が発生だ。

お手軽な二人を見送ったマリエラは、手早く料理の下ごしらえを済ませた後、つまみ食いの隙を伺うサラマンダーを抱き寄せて、その場に寝ころび丸くなった。

「少しだけ、教えて？」

「キユ……」

マリエラの呟きへの答えなのだろうか。サラマンダーが小さく鳴くと一人と一匹は目を閉じた。

\*\*\*\*\*

（ああ、またあの夢だ……。やっぱり見られた）

炎の精霊の灯火に護られて、暗い森に行く夢だ。

前の夢からどれだけ時間が経ったのか。森はさらに深く、木々は一行に覆いかぶさるうとするかのように大きい。

森に行く人々の行く手を遮る手のように、ねじれ曲がった枝付きは夜の暗さも手伝って一層恐ろしいものに感じられる。

何度あの湖へ人々は通ったのか。一行の進む場所は木々の隙間を縫うように細い道ができている。

（この森、こんな感じだったっけ？ 普通の森だと思っていたけど、これじゃまるで……）

まるで見知った森のようだとマリエラが思うより早く、森を行く一行にフォレストウルフが襲い掛かる。

うっとうしい犬っころ！

祭典用のランプに灯った炎の精霊がいらりと揺らめきながらフォレストウルフを追い払おうと手を振るけれど、具現化したわけでもなく、ただ小さな炎に宿っただけのその力は正気を失った魔物の目をくらませ、攻撃を鈍らせるのが精一杯だ。

「フォレストウルフだ！ 陣形を整えよ！ 魔物除けポーションを欠かすな！」

けれど道を行く一行の武器や防具は最初に見た夢の頃とは打って変わってすっかりしたもものになっている。もちろん、迷宮都市の冒険者たちが纏っている物どころか、200年前のエンダルジア王国時代の装備と比べても不格好で、動きを阻害するような鎧だし、武器だっではるかになまくらだ。

それでも中隊規模の軍勢がフォレストウルフ相手に後れを取るようなことは全くなくて、剣と魔法でたちまちのうちにフォレストウルフを駆逐していく。

久しぶりに会えるつてのに、邪魔するんじゃないよ！

あの湖に行くのは随分と久しぶりなのだ。

人の技術も街もますます栄えた。飢饉に備えて食料を備蓄することも、病を癒やすポーションの錬成方法も確立し、人が精霊の力に継ぐことは段々と少なくなってきた。

街には前よりたくさん人間が暮らすようになっていて、炎の精霊から見ると羊の群れのように狭苦しい状態だ。何より不快に感じるのは、人間の数が増えるにつれて、黒い靄のような穢れが街のそこそこで見られるようになったことだ。

人間が汚い言葉とともに吐き出す息とともに、眼から流す悲哀や憤怒の涙とともに汚らわしい黒い靄は街中に吐き出され、炎の精霊には街の空気が霞んで見えた。

それが、怨嗟の言葉であったり、苦渋の涙であることを長く存在し続けてきた炎の精霊は理解していた。穢れが被われず吹き溜まるととても良くないものを招くことを、炎の精霊は理解していた。

だから、街中の灯火を転々としながら穢れの浄化に努めてきたけれど、夜通し煌々と明るく灯火の消えないこの街は、灯火以上にまばゆい金銀財宝が満ちていて、どれほど炎の精霊が街の穢れを抜つても、その黄金の隙間から、そして人々自身から吹き出すように穢れは尽きることを知らなかった。

炎の精霊が浄化するより多くの穢れが湧き出ているのに、この人間の街の穢れは流れ出す先を持った水場のように、一定以上濃くはならない。それが、炎の精霊には気がかりでならなかった。

湖へと急ぐ人々にまとわりつき、そして先導するように、黒い穢れが道の前にも後ろにも漂っているのが、気がかりでならなかった。

深く静謐だったこの森の空気は、深淵へと誘う巨大な魔物の吐く息のように、暗く湿っている。穏やかだったこの森の魔物は、眼を血走らせ炎の精霊の制止も聞かずに人間たちに襲いかかる。

ここはもう、炎の精霊の知っていた森ではないことに気が付いてはいたけれど、この先に何が待っているのか、その目で確かめずにはいられなかった。

暗い森は、ふいに終わりを告げる。

炎の精霊に、真実を伝えるために。

どうして……

月の光の降り注ぐ中、夜の闇より暗い水面が静かにその身を横たえていた。月の光も炎の精霊の放つ灯火さえも呑み込むような漆黒の湖の真ん中に、墨で濡れそぼったような肢体をけだるげに動かして、あの湖の精霊がゆっくりと姿を現した。

この湖は果たしてこんな色をしていただろうか？

最初にここへ来た時は、水中に沈む倒木の木目さえも数えられそうなほど澄んでいたのではなかったか。病の穢れを受け入れた時は……？ あの時水底は見えただろうか。

久しいの。もう、失せてしまったと思うておったぞ

その身が穢れで黒く染まっけていても、その目が黒く淀んでいても、それでもあの湖の精霊はとても美しいと炎の精霊は思った。

消えないよ。消えたりしない。これからだって。ずっと、ずっと。あたしが、あたしが穢れを被うから……

そう言っや、炎の精霊は自分が導いてきた一行を振り返り、今度の『供物』を睨みつける。

その瞬間、一行が携えてきた『供物』の箱に松明の炎が燃え移り、ゴウと激しく燃え上がった。

「うわ、火が！」

「何事だ、早く消せ！」

「しっ、しかし、乾燥していたようで火の勢いが激しく……！」

急に燃え出した『供物』の鎮火に躍起になる人々の耳には、きつと届いていないのだろう。

『タスケテ』『イタイ』『魔物ガア』『ココヲ開ケテエ』  
『供物』が上げる悲鳴が。泣き叫び、口々に助けを求める人々の叫びが。

今度は魔物に襲われたか

うん。森で魔物が大量発生してね。街に雪崩れ込んだんだ。何とか追い払いはしたけど、ずいぶんたくさん人間が死んでしまった

魔物に襲われ亡くなったのは、防壁の外に住む貧しい人ばかりで、輝かしい金銀財宝を持つ人々は強固な防壁の中、屈強な兵士に護られて魔物の被害から逃れることができた。

防壁の内側に入れてくれと、助けてくれと懇願する人々の声は無視されて、魔物に生きたまま喰われる様を、富める者たちは眺めていたのだ。

生まれてからずっと搾取されてきた貧しい者たちの恨みや怒りが、魔物に襲われ喰られる恐怖や嘆きが、その『供物』には収められていた。

お前たちの肉体も魂も、もうこの世界にはいないんだ。そんな辛い気持ちなんて、全部あたしが焼き尽くしてやる。消し炭になつて、何の色も形もないまっさらな状態に戻つて、大気に解けてしまえばいい

吹けば消えそうだったお前が、強うなつたの……

しみじみと語る湖の精霊の声に、炎の精霊は嬉しそうに笑って振り返り、そしてその笑顔を凍り付かせた。

どうして？ どうしてまだ、穢れが流れ込んでいるの？

街から湖へ続く道に延々と漂っていた黒い穢れが、真っ直ぐ湖へと流れ込んでいることに気が付いたからだ。

道が、できたのだよ。

おぬしと出会うはるか前から、人は我の下へ穢れを被いに訪れていた。我はこの森の地脈を統べる精霊なれど、穢れを祓う力など持ち合わせてはおらぬのにな。

何度も何度も通ううち、人共にある概念が生まれたのだろう。

この湖は穢れの還る場所である、とな。

だから、穢れの流れる道ができ、こうしてここへ流れて来るようになったのだろう

静かに語る湖の精霊に、湖を、その身を穢された怒りも悲しみも見受けられない。

ただ、天より落ちる雨水を受け入れるように、降り注ぐ月光を、木々の落とす落葉を受け入れるように、流れ込む穢れを受け入れている。

でも、でも。そんなに穢れをため込んだら

炎の精霊は森の木々の、魔物たちの変貌の理由を理解した。この湖は森の地脈に通じている。流れ込んだ穢れは水脈を通じて森を廻り、木々や動物たちを潤す。森に生き、森を愛する生き物は望んで湖の穢れをその身に宿してくれたのだろう。

たとえ黒く変じようとも、我らの営みに変わりはあるまい。

少々やんちゃになるだけだ

穢れた魔力が凝り固まって魔物が生じるのだという。それは、偽

りなどではない。消化できないほどに穢れをその身に取り込んだ生き物は、その身を魔物に変じるのだ。

穢れとはすなわち人の吐きだす負の感情。

そんなものを取り込み変じてしまった魔物が人を愛するはずはない。

魔物が人を憎むのではない。

人が人を憎んでいるのだ。

人がそこに居なければ、森の営みにさして変わりはないのだと、湖の精霊は炎の精霊を見て笑う。

それでも！ 心の内を焼く感情に苛まされない訳じゃない！

叫ぶ炎の精霊をみて、湖の精霊は優し気に笑う。

最早仕組みは作り変えられた。案ずるな、穢れに狂わされようと、我らのありようは悠久の時の流れの中で見れば、そよ風に水面が揺れる程度のものよ。よほどのことがない限り、我らの平穩は脅かされない。もう行くがよい、炎のよ。この身には、最早汝の炎は眩しすぎる

その言葉を最後に、湖の精霊は湖面へと消えていき、後はどれほど炎の精霊が呼び掛けても、月も写さぬ漆黒の水面が静かに揺蕩うだけだった。

炎の精霊は、自分に投げかけられた眩し気で優し気な優しい夜のようなまなざしと、水面へ消える瞬間に人間たちに向けられた奈落の底のような暗い瞳の色を、忘れることができなかつた。

2023



## 25・黒き湖（後書き）

ザックリまとめ：マリエラ、寝る子は育つ的なアレ。

そして今回は、ヤツの意外な一面が……！！！！

## 26・エドガン(前書き)

エドガン回ですが残酷描写あります。

## 26・エドガン

「あ、やっぱりジークだ」

「マリエラ！ 無事で！」

「ウキー！」

「うん、ユーリケたちが守ってくれたからね」

「そうか……。マリエラ、すまなかった……」

「ウキー」

マリエラとジークは、次の夜、無事に再会を果たした。

フランツのいた北西の塔から南東の塔までは、ラプトルを走らせ、間に合うかどうかの距離で、ラプトルに並走するフランツの脚で、短い夜の間に南東の塔までたどり着けるか心配だったのだけれど、フランツとエドガンという二人の門番を失ったぶん、夜の時間が長くなったようだ。

新たに生じた北の塔のお陰で、雪崩れ込む黒い魔物は減ったのだけれど、昼間に生じる魔物だけでどれだけ持ちこたえられるのだろうか。

そんな懸念はあるのだけれど、ジークとマリエラ、そして黒鉄輸送隊の面々が一堂に会せた現状をしばし喜んでもいいだろう。

もっとも、フランツは手も足も顔まで竜の特徴が表れているし、エドガンに至っては内面の猿ぶりが前面に押し出されている。

「マリエラ、あの、俺」

「ウキキー、ウキ、ウキ」

ようやくの再会だというのに、乱入しまくる猿のお陰で会話が

つとも進まない。マリエラは、もう怒ってはいないのか、あつさりとした対応なのだけれど、マリエラによくやく会えたと感極まっているジークからしてみれば、マリエラの対応は怒りが収まらぬがゆえの塩対応のように感じてしまう。

もつとも、マリエラとジークでは離れて過ごした期間の体感時間が異なっているから、ジークが大げさすぎるだけれど。未だ十分な交流も図れていない二人は、そんな情報交換どころか仲直りさえできてはいない。

とにかくジークとしてはきつちりしつかり弁解をして、マリエラに許してもらいたいのだけれど、さっきからウキウキと二人の間に割り込んでくるエドガンが、驚くほどの的確にジークの邪魔をしてくれる。

「ええい、エドガン！ 邪魔だ！」

ついにキレたジークがエドガンを捕獲しようとするけれど、これはエドガンを喜ばせるだけだった。文字通りウキウキと嬉しそうに逃げ回るエドガンに追うジーク。

「仲良しだねー」

二人を眺めるマリエラの口調は呆れたようにも、ほかのことを考えているようにも見える。

（北東の塔で最後に見た精霊の夢、あれで終わりじゃないはず。中庭にいた黒い戦禍は一体……）

黒い戦禍を抑えて石化したラミアを助けることはできる。

あれは単なる石化だと思っけれど、かつてレオンハルトに作った解呪のポーションも作ってあるのだ。

けれど、どうすれば黒い戦禍を倒せるのかわからない。それに、神殿めがけて夜ごと流れ込んでくる黒い魔物だってそうだ。精霊の

夢から推測するに、神殿めがけて流れ込んでくるあの黒い魔物の群れは人の発する穢れの集合体なのだろう。川の流れのように定まっ  
てしまったそれを変えるだなんて、マリエラどころか、きつと人の  
手に余る。

（たぶん、中央の神殿に駆け込んだらゴールってわけじゃないんだ  
と思う）

一生懸命考えるマリエラを、「まだ怒っているのだ」と勘違いし  
ておろおろと謝罪の隙を伺うジークと、その視線の先に現れたり、  
荷物を奪おうとしてみたり、いたずらの限りを尽くす猿。

「ああ、もう、鬱陶しいし！」

最初に堪忍袋の緒が切れたのは、邪魔をされたジークではなく、  
それを見ていたユーリケだった。

パン！ 高い音を立て、石の床を打ち据えるユーリケの鞭の音  
に、一同は思わず背筋を伸ばす。

「エドガン！ ハウス！」

「ウキッ」

マリエラやジークは急に響いた鞭の音に驚いただけだったけれど、  
エドガンやラプトルへの効果はてきめんで、鞭の音が響くなりピシ  
ッと背筋を伸ばした後、「ハウス」と言われたエドガンはクーの隣  
にお座りしている。

「《調教》スキルが効くんだ……」

「エドガン、お前……」

驚くマリエラと、先ほどまでのいら立ちはどこへやら、目頭を押  
さえるジーク。ここまで猿が前面に出ると、思うところがあるらし  
い。

「エドガン、飲むし」

「ウキイ……？」

《調教》スキルで大人しくなったエドガンの前に、一本のポーションを置くユーリケ。

エドガンはおずおずとポーションを持ち上げると、これは何だろうと匂いを嗅いだり透かして見たりしている。

「飲むし！」

「ウキツ！」

Sir, Yes, Sir!

ユーリケズ ブートキャンプに口答えは許されない。

僅かでも躊躇う様子を見せたなら、鋭い鞭が飛んでくるのだ。

いや、ユーリケは女の子だからYes, Ma'am.か。

もともとエドガンは人語を喋っていないから、なんと返事したかは定かではない。

お猿の割にはよい返事をした後、渡されたポーションをぐいつとあおったエドガンは、あおった反動のままバタンと後ろに倒れて動かなくなった。

「さすがマリエラのポーションはよく効くし」

「ユーリケ、あれは何のポーションだ？」

「即効性の眠りのポーションだし。フランツが塔から動いてくれない場合に備えて、マリエラに作ってもらっていたし」

「え……」

フランツの質問に悪びれる様子もなく答えるユーリケ。状況次第では、フランツがああポーションを飲まされて、眠っている間に北西の塔を連れ出されていたらしい。ユーリケはなかなか容赦がない。悪びれもせず答えるユーリケに、フランツは少々言葉を詰まら

せていた。

「マリエラ、とっととエドガンの記憶戻すし。うっとうしくてかわないし」

「そうだね。エドガンさんにも頑張ってもらわないといけないしね」  
マリエラには、何やら案があるらしい。

「まだ、ざっくりとした案なんだけど……」

マリエラから作戦の概要を聞かされたドニーノ、グランドル、フランツはそれぞれ必要な材料集めに向かった。

「万一にも、エドガンが暴れないように、僕はここで見張りをするし」

ユーリケの言葉に安心したマリエラはエドガンの隣に横になると、

「……………」

ジークがムスっとした表情でマリエラとエドガンの間に割って入って横になった。

「ジーク？」

「……………二人きりは駄目だ」

マリエラの方を向くでなく、もちろんエドガンの方を向くでもなく仰向けのまま、短く反対するジークは、きつと苦虫を噛みつぶしたような表情をしているのだろう。

マリエラとの仲直りを散々エドガンに邪魔されたのに、記憶を取り戻すためとはいえ、エドガンとマリエラを二人で眠らせるのは嫌らしい。分かりやすいやきもちだ。

「ふふつ。じゃあ、ジークも一緒に。はい、眠りのポーション。一口で十分だからね」

そんなジークの様子になんだか心がこそばゆくなったマリエラは、眠りのポジションを一口飲むと、ぽかぽかと温かいサラマNDERをお腹に載せてくすくす笑いながら瞳を閉じた。

ジークを挟んで三人「川」の字で眠るマリエラたちを見ながらユリーケは、「なんだかなー」と頭を掻いていて、ポジションの効果でぐっすり眠り込んだエドガンは、だらしなくよだれを垂らしながら、時折尻を掻いていた。

\*\*\*\*\*

眠りはすぐに訪れた。

柔らかかそうな鳶色の髪の女性の笑顔が、ここがエドガンの過去の記憶なのだとマリエラに教えてくれた。

この人は、なんて優しく温かく微笑むのだろう。  
師匠も幼いマリエラに、やさしい笑顔を見せてくれたけれど、もつとずつと柔らかく、無限の愛情に満ちているようにマリエラには思えた。

エリアーデ。

鳶色の髪と瞳を持つ、エドガンにとって、この世で最も美しく優しい女性。

エドガンが初めて殺めた、彼の母親だった人。

エドガンが十歳に満たない子供の頃だ。

迷宮の低層に潜ったときり、夕餉の時間になっても帰ってこない母



を探しに行つたエドガンは、いつもならば戦えない母でも問題なく採取が行える浅い階層に、人喰いの植物の魔物が湧いたと耳にした。育ち盛りのエドガンに味はともかくお腹いっぱい食べさせるため、母は木の実や食べられる茸を取りによくその階層へ採取に出かけていた。

イモに似た植物が採れるいつもの採取場所に駆け付けたエドガンは、そこで咲き誇る母を見つけた。

何と言う魔物なのか、当時のエドガンには分からなかったが、捕らえた獲物を生かしたまま喰い進み、血肉をすすって花を咲かせる人喰いの植物なのだろう。

植物に内側を喰われた体は、足元から大地に広がる根と、体内に張り巡らされた枝葉によつてしゃんと姿勢が良すぎるほどに支えられていたし、血を失つたその肌は日々の労働による日焼けが嘘のように白く、所々皮膚を破つて咲く真っ赤な大輪の花が、まるで豪華なドレスを着ているように母を美しく飾り立てていた。

その姿は、幼い日のエドガンに美しいものとして映つたことを覚えてる。

そして、その口から吐き出される切り裂くような悲鳴もまた、エドガンは忘れることができない。

「イダイイダイイダイイダイイダイイイイイイ！！」

内側を喰われる痛み、皮膚を突き破り花咲く苦痛に苛まれながら、母はまだ生きていた。

ゴギリ。



鳶色の髪と瞳を持つ彼女は、エドガンにとって、この世で最も美しく優しい女性だった。

\*\*\*\*\*

ホーリス。金の髪と小麦色の肌が悩ましい、快活で愛らしい初恋の人。

迷宮討伐軍で出会った彼女は、その面倒見がよく開放的な性格から入隊したばかりのエドガンとすぐに親しくなった。

エドガンより先輩で強かったホーリスは、双剣が上手く扱えないエドガンを「へたくそ」とからかい、ムキになるエドガンを見て楽しげに笑った。

戦士らしく腕と肩の筋肉が発達した彼女のお気に入り私服はどこか可愛らしさのあるワンピースで、「似合わないんだ」とつつむくホーリスに「似合ってる」と笑いかけると、耳まで真っ赤になつてはにかむとても可愛らしい人だった。

迷宮で戦う度に傷が増え、ワンピースの袖や裾から傷跡が覗くようになってても、ホーリスの愛らしさは変わらないとエドガンは思っていた。

「可愛い」と囁いた時の喜ぶ様子や、照れを隠そうとする言葉や仕草は、お世辞でも何でもなくホーリスをますます可愛らしい女性に見せていた。

彼女が彼女である限り、エドガンにとってホーリスの愛らしさに

変わりはなかった。

そう例え、迷宮で受けた毒で、脚が腐り落ち、足元から頭部に向けて徐々に皮膚が青黒く変色していても。

迷宮都市にはポーションが枯渇していた。一軍の精鋭ならばまだしも、予備兵力に支給されるものではない。薬ではとても癒やせず、ポーションのある帝都まで連れて行ったのでは間に合わない、そんな毒だった。

「顔がさ、変色する前に逝かせてよ。似合ってるって言ってくれたあの服が似合ううちにさ」

ホーリスの願いを叶えたいのに、彼女の心と体を蝕む毒から彼女を救ってあげたいのに、エドガンの手は震えて上手く狙いが定まらない。

「へたくそ」

激痛に耐えていつもの笑顔を向けてくれるホーリスに、エドガンはいつもの顔を返せない。

「可愛いって言うてくれた、あたしそのまま逝けてよかった……」  
そう言い残したホーリス。

何とか彼女の望みをかなえた後、気に入りのワンピースを着せた彼女に、エドガンは「可愛いよ、似合ってるよ」と語りかけた。

ホーリスの小麦色の肌は、照らす夕日に赤く染まって、はにかんで笑っているように見えた。

ホーリス。金の髪と小麦色の肌を持つ彼女は、最後まで快活で愛らしい人だった。





26・エドガン(後書き)

ざっくりまとめ…エドガンの女運、いろんな意味で可哀そつ。

## 27・首飾り

(なんて、酷い記憶……)

こんな記憶なんて、取り戻さない方がエドガンは幸せだったのではないか。

そんな風に思いながら、ゆっくりと起き上がるマリエラの目に飛び込んできたのは、大泣きしながらエドガンを抱擁するジークの姿だった。

「エドガンー！ エドガン、お前、辛かったなああああー！！！」

「うおう、ジーク。オレ、そう言う趣味は……」

「言葉も戻ったんだな！ よかった！ よかったー！！」

「お……、おう……」

一時期過酷な奴隷生活を送っていても、もともとお坊ちゃん育ちなうえ、生来の気質としてジークは感受性が豊かな男だ。命を救ってくれたマリエラを女神だ運命だと傾倒してしまったり、いろいろ面倒くさく思い悩んだり忙しい男なのだ。

黙っていても女性が寄ってくる時期が長すぎたのか、それともマリエラ観察に忙しいのかは分からないが、普段は無口で無表情だから、精神状態もフラットなのだと思われがちだがそうではない。

黙って何かに熱中していても動きがコミカルで面白いイメージのマリエラの近くににいるせいで、相対的に冷静沈着な男に見えるだけだ。実際は、『精霊眼』が発現しただけあるというべきか、彼の精神性はマリエラよりも繊細で豊かだ。



逆にマリエラの方が鈍感で、今まで見たユーリケたちの記憶も炎の精霊のものと思われる過去の災厄の記憶も、すべて記憶の再生として認識していて、悲惨な記憶を痛ましいものと心を痛めても感情移入し過ぎることはない。もともと、高位の錬金術師でもあるマリエラは生命の存在を視覚や聴覚と言った五感だけでなく、《命の雫》のありようで認識しているから、映像だけでは感化されにくいのかもかもしれないが。

過去の記憶を、『他人の過去にあったこと』と切り分けて考えたまえるマリエラと違って、ジークはすっかり感情移入してしまっただようので、さつきから、わんわかわんわが大洪水だ。

マリエラが抱えていたはずのサラマンダーまでジークにつられてしまったのか、エドガンの肩の上って慰めるようにエドガンの頬をぺろりと舐めている。

「ジークよー、ちょっと落ち着けー？」

「だって、だって、エドガン。もしマリエラがあんなめに遭ったなら、俺ならきつと耐えられない……！！」

どうやら、エドガンの記憶の中で非業の最後を遂げた女性たちを全部マリエラに置換してしまったらしい。脳内とはいえ、マリエラをひどい目に合わせ過ぎだ。どうせならピンチになる前に颯爽と助けるところまでセットで妄想頂きたい。

「まあ……仲がいいのはいい事だよな。エドガンさんも、少なくとも人間に戻ったわけだし？」

マリエラが寝ずに番をしてくれたユーリケを振り返りながらそう言つと、ユーリケは軽くうなずいて、“人間に戻った”かどうか確認するようにパアンと鞭を打ち鳴らした。

「エドガン、ジークもその辺にしとくし！」

ユーリケの一声に、ジークは我に返っていそいそと身だしなみを整えマリエラのそばに移動したけれど、エドガンはシャキーンと直立不動で起立したから、まだちょっぴりだけ猿な部分が残っているのかもしれない。

ともかく、作戦を実行できる十分な戦力がようやく揃った。

ジークとエドガン。二人のAランカーが揃ったわけだ。

この二人が揃ったならば、過酷な素材集めが始まらない訳はない。

「よかったよ、これで何とかかなりそうだよ！」

にこにここと笑顔のマリエラは、二人に頼めばなんでも手に入ると思っているフシがある。

「えーと、マリエラちゃん？ オレたちに何をさせるつもりかなー？」

過去にさんざん素材集めに駆り出されたエドガンは、恐る恐るマリエラに聞く。

「今回は雪山じゃないから大丈夫だよ！ まずはね、木材が必要な」

「ニコニコと無邪気な笑顔のマリエラと、ニマニマと邪悪な笑顔のユーリケ。

寒くなければ大丈夫なのか。マリエラの基準がよくわからないが、二人の笑顔を壊すことなど、そんな恐ろしいことがジークとエドガンにできるはずがない。

「マリエラ、まかせておけ！ 俺たちがなんでも手に入れてくるからな」

「ちょ、ジーク、お前、安請け合にし過ぎ……」

「エドガン？ マリエラの依頼を受ける前に俺に一言あっても良かったんじゃないかと思うんだよな」

エドガンの境遇に涙したジークであったが、自分に一言の相談もなくマリエラの家出依頼を受けたことを、まだ根に持っているらしい。

「そういえば、私、ジークに怒ってるんだった」

ジークの不用意な発言に、マリエラが思い出したようにつぶやく。

「ここを脱出できたら、ちゃんとオハナシしようね、ジーク？」

「はい……」

マリエラの方も、こんなところまで迎えに来たジークをそのまま許してはくれないらしい。

「プー、ジーク、墓穴」

「黙れ！ エドガン、行くぞ！」

ジークはマリエラ的笑顔にびくつきながらも、エドガンを捕まえ、南東の塔を出かけて行った。

こうして毎度のことながら、二人の過酷なハンティングが始まった。

\*\*\*\*\*

「うっわ、デカ！ うっわ、キモ！」

ひゅんひゅんと鋼鉄のような蔦が飛び交う中、壁さえも足場に縦横無尽に攻撃を回避しつつ隙を伺うエドガンと、無言のままにビシ

ビシ巨大毛虫を狙撃するジーク。

二人がいるのは南側1、2階の中央にあるエントランス。

そう、「首飾り」の部屋だ。

「首飾り」。トレントなどに代表される樹木の魔物の亜種。

樹木に多くの種類があるように、樹木の魔物の種類も数多く、中には歩行する個体も存在する。

「首飾り」は歩行しないが、寄生させた蔓植物を触手のように自在に操り、鞭のように獲物をからめとってはその身に飾る悪趣味な魔物だ。この蔓は鋼のように硬質で、1本ずつならエドガンならば断ち切れることは可能なのだが、「首飾り」の幹にぐるぐる巻きつけられると、鎧代わりとなって攻撃を阻む。

さらに悪趣味なことに、この個体は枝葉に大量の毛虫を飼っていて、枝からふるい落とされるとたちまち1〜2メートルに成長して襲い掛かって来る。毛虫自体は大して強力な魔物ではないが、生理的に受け付けないビジュアルと、毒の棘のお陰で、エドガンのような軽装の近距離攻撃型はなるべく近づきたくない魔物である。

「首飾り」の木材はとっても丈夫ですごく柔軟性があるから、ぴたりだつてドニーノさんも言ってくれたの」

ドニーノの木材うんちくをそのまま語って、ジークたちを送り出したマリエラ。

そりゃあ、あれだけの大木で、歩きはしなないが動く樹木の魔物なのだ。丈夫だろうし、動くんだから柔軟性もあるだろう。

木材として見たならかなりの高級品だろうけれど、それに見合った討伐難易度の魔物である。

鞭のように繰り出してくる寄生植物の触手も厄介だけれど、この個体は大量の毛虫を使って攻撃してくるのだ。こんな魔物を、一体どうやって倒せばいいのか。

炎で焼き尽くしたり、雷を落としたりすれば討伐自体は難しくない。けれどそれではせつかくの木材まで駄目になってしまう。

「ぎゃっ、ジーク、ちつとは気をつけるよ！ 汁が！ 汁が飛んでくるー！！」

「しかたないだろ！ この殺虫ポーションの特性なんだから！」

マリエラが毛虫対策に持たせてくれた殺虫ポーション『虫爆弾』は、効果を高めるために本来低級ランクの物を特級の基材で配合した、つまりは効果のブースト量だけ特級並みにしたマリエラのアレンジが加わったものだ。

「魔の森は虫もたくさんいたからね、薬草園を守るために殺虫ポーションはいろいろ工夫したんだよ。特級まで威力を高めたのは初めてだけど、効果は絶対あるはずだから！」

殺虫ポーションを渡してきたマリエラの自信を裏付けるように、このポーションはたいそう高い効果を示した。

ボン、ボン、ポボン！ と、ポーションを浸した矢が刺さった毛虫が、端から爆発するほどに。

毛虫が爆発するたびに、黄色い虫の体液が辺りにプシプシとスプラッシュする。

惨劇だ。

巨大な毛虫を一撃で倒すには多少なりと『精霊眼』の力が必要だ

つたろうから、毒矢で仕留められるこのポーションは、魔力消費を抑える上でとても役に立ったのだけれど、製造禁止にしたほうがいい。

少なくとも、遊び半分で虫を殺す子供が手にしようものなら、大喜びで虫爆弾遊びをしてしまいうた。

もっとも魔の森の小屋に暮らしていたマリエラには、虫を爆発させて遊ぶ余裕などみじんもなくて、周囲に飛散した虫の臭いで他の虫を寄せ付けない副次効果が重宝していたのだけれど。

一体どこにそれだけの毛虫を住まわせていたのか、もしか卵から超高速で成長しているのか。次々と毛虫をけしかけてくる“首飾り”と、その毛虫を毒矢で爆発させていくジーク。

“首飾り”の触手や、その周囲に蠢く毛虫の攻撃を躲しきれないドガンも、同じAランカーであるジークの射撃の軌道までは読み切れないらしく、飛び上がった先でべちゃり、着地した先でまたぐちゃりと毛虫の体液をしたたかに浴びている。

「この汁、臭せっ！ 虫汁くせー！ 聞いてんのか、ジークー！！  
まさかわざとじゃねーだろうなー！」

ウキーと怒るエドガンの汚れっぷりを遠目から確認したジークは、ふむとばかりに頷くとエドガンに合図を送った。

「……そろそろ頃合いか？ よし、エドガン、援護する。“首飾り”を仕留めるぞー！」  
「へー!?」

同時に“首飾り”に向けて放たれる何本もの矢。

その矢は恐るべき精度で振り上げられた何本もの蔦に命中し、跳ね上げていく。

「今だエドガン！ “首飾り” はがら空きだぞ！」  
すべての鳶を跳ね上げられた“首飾り” は、ほんの僅かな時間だけ全く無防備な状態になった。

「ナイス、ジーク！ でもよ、毛虫が……っつて、あれ！？」  
そして、どうしたことだろう、毛虫の魔物は近くにいるエドガンを避け、遠くで弓を構えるジークに向かって押し寄せているではないか。

「そうか！ 虫汁の臭いを嫌って……」

「早くしろ、エドガン！ 俺が毛虫を引き付けている間に！」

「！！ わかったぜ、ジーク！！」

ここは俺が引き付ける、だからお前が止めを刺してくれ。  
。   
なんだか友情物語っぽい展開だ。お猿なエドガンが好みそうなセリフでもある。

王道っぽい展開にすっかり調子が上がったエドガンは、わき目もふらずに“首飾り”へと切り込んでいった。

「《我が左腕は疾風しっふうの座、我が右腕は金剛の座 宿れ 双属性剣》  
デュアル・エレメンツ・ソード》」

双剣を地属性で硬化し、風属性で勢いを増して、“首飾り”の幹へと叩きつけるように切り込んでいく。その切れ味は鋼のごとき鳶を断ち切り、その勢いはまるで斧が大樹を削るようだ。

しかし、動物であったなら、肉を切り裂き骨まで絶つただろうその一撃は、“首飾り”という樹木相手には、深手にすらなり得ない。

「浅かったか！！」

せめて痛みがあったのなら、攻撃の手が緩むこともあったのだろう。けれど“首飾り”に痛覚はなく、さらに厄介なことに怒りの感情だけは備わっているようだ。

醜くゆがんだ樹皮の裂け目のような、吊り上がった眼をさらに釣り上げ、醜い口をゆがませて、“首飾り”は幹に巻き付けていた蔓をすべてほどいて、射程距離にいるエドガンに向けて全力で打ち付けようとのけぞるようにその身を逸らした。

「ちいっ！」

ジークによって跳ね上げられた鳶は、すでにエドガンを打ち付け、なるべく軌道を変えている。これらの初撃を避けたとしても、幹を覆っていた鳶がエドガンを逃しはしまい。

網のように広がって行く手を遮る鳶の襲来に、それでも起死回生の一手を探るエドガンは、逃げられぬなら倒すのみだとばかりに、“首飾り”への次の一撃を身構える。

今、“首飾り”は全ての鳶を攻撃に回して、その幹はがら空きなのだ。

今なら、エドガンの双剣は、より深く“首飾り”の幹をえぐるに違いない。

エドガンの一撃が“首飾り”の幹をえぐるのが先か、“首飾り”の鳶がエドガンを叩き伏せ、体中の骨を粉々に打ち砕くのが先か。

ツドム。

決死の瞬間、エドガンの剣戟でも“首飾り”の鳶の打撃音でもない、鈍く強い音が響いた。

エドガンと“首飾り”の生死をかけた緊迫の一瞬は、ジークが放



った精霊の矢によってあっけなく終わりを告げていた。

「……え？ あれ？」

突然の終わりに啞然としながら、幹の上部、目の上にある枝の付け根当たりから矢を生やして動かなくなつた“首飾り”を眺めるエドガン。振り上げられた蔦は、重力に引かれるままにばらばらと枝葉に絡まりつつ落下している。

ジークムントは待っていたのだ。“首飾り”の幹を守る蔦がほどこれる瞬間を。

“首飾り”が幹をのけぞらせ、枝の付け根、普段なら蔦で覆われ枝葉で隠されている弱点、魔石のありかをさらす瞬間を。

どんな魔物であつても、必ず魔石が備わっている。

コンパクトで持ち運びやすく、高値で取引される魔石は、魔物狩りにおける重要な戦利品であると同時に、魔物の力の源で、急所でもある。

魔石を射貫かれた“首飾り”は、ただの一撃で魔物としての生を終え、ただの樹木と化してしまったのだ。

その場所は個体によってまちまちで、種類によっておよそこの辺りという目安は知られているものの、死体を解体しなければ正確なありかは分からないし、魔石を砕いてしまふなど、狩りの成果が半減しかねない行いだから、今回のように素材優先の状況でなければまず考えない芸当ではある。

もちろん、ジークの『精霊眼』だからこそ、魔石のありかを探り当て、ほんの一瞬さらされた急所を射貫くことができたのだけれど。

「なー、ジークゥー？ これって、計画通りってやつかなー？」

「くっ、エドガン、まだ毛虫が残ってるぞ！ 助けてくれ！」  
数メートルの目前まで迫ってきた毛虫を、ビシビシと危なげなく打ち抜き、飛んでくる虫汁まで華麗にかわす余裕がありながら、エドガンの質問には答えないジーク。

毛虫の大軍を相手にピンチを装ってはいるのだけれど、何ぶん演技が下手すぎる。

「止めはさー、まー、いいとしてもよ？ もしかしてもしかすると、虫汁がオレに掛かるように毛虫仕留めてたんじゃね？ なー、ジークうー」

「おっと、危ない！ 毒棘が！」  
ジークの台詞が棒読みだ。

ちなみにジークを襲う毒棘は、弓の一振りで巻き起こった風に払われジークに全く届きはしない。魔力を節約するために『精霊眼』は少しだけしか使っていないが、精霊的な便利機能のお陰で、ジークは余裕の戦いだ。

「お前なんて、お前なんて、虫汁にまみれてマリエラちゃんにふられっちまえー！！！！ 《ウィンド・エッジ》！！！」  
「縁起でもないこというなー！！ もとは、エドガンがマリエラを連れ出したのが悪いんだろ！！ 《ウィンド・ウォール》！！！」

ぎゃあぎゃあ、わあわあ。

男たちの“首飾り”戦より過酷でくだらない争いは、大量の毛虫が全て潰され二人が虫汁にまみれるまで続けられた。

“首飾り”は倒したものの、虫汁まみれで戻った二人は、マリエラとユーリケに臭いと言われて、マリエラが臭い消しのポーシオンを錬成するまで、塔の部屋にも入れてもらえず、二人仲良く廊下に

立たせねることになった。

27・首飾り(後書き)

ざっくりまとめ：ジークとエドガン、仲直り。

## 28・災厄の記憶と戦禍

「こりゃ、思ったよりいい木材だな！ 蔦もあんまりちぎれてねえから十分使えそうだ。」

グランドル、フランツ、すまんが手を貸してくれ。

ユーリケ、この先に加工ができそうな工房があったはずだ。悪いがそこまでラプトルで運んでくれや。

エドガンとジークはお疲れさん。しばらく休んでてくれていい」

“首飾り”の木材の質の良さにドニーノは大喜びで皆に仕事を振り分ける。

ようやく仕事から解放されたエドガンとジークは、「おう」とうめき声のような返事をする。仲良く二人でその場へたり込んでいる。

“首飾り”を切り倒し、粗加工するのは思いのほか重労働だったらしい。

「斧がねえんだからしかたねえだろ」

というドニーノの指示により、双剣とミスリルの長剣で木材加工を行ったエドガンとジークだったが、硬質な材料を間に合わせの道具で加工したのだ。疲労は半端ないだろう。

魔物、特に動物を切り裂くために作られた剣は、木を切るのに適していない。

薄く鋭利に作られた刀身は、硬く分厚い木材にたやすく刃こぼれして簡単になまくらになってしまっし、場合によっては変形したり疲労破壊を起こしてしまう。

だから、ジークもエドガンも、刀身に魔力をまとわせ強化して木材を加工したのだが、木を切り加工するという慣れない動きも長時間の魔力操作もかなり疲れるものだったようで、二人は喧嘩をする気力も残ってはいないようだった。

「ジーク、エドガンさん、食事ここに置いてくから、食べたらずし休んでね」

マリエラは二人の食事を準備すると、ドニーノたちを追いかけるようなそぶりで南東の塔を後にした。

まだ、知るべきことがマリエラにはあるのだ。

「魔の森の小屋の部屋、懐かしいね」

マリエラが夢を見るために選んだ場所は、二百年前、師匠と一緒に住んでいた魔の森の小屋が再現された部屋。ポーションを作るために、一度訪れているから場所も分かるし、経路の安全も確認済みの場所だった。

魔の森の小屋はとても小さくて、工房と台所と居間が兼用で後は寝室だけだった。面積も狭かったから、たんすで仕切ったマリエラと師匠の寝室もここに再現されていた。

「師匠に貰われてすぐの頃は、師匠と一緒に寝てたんだったな」

別々に寝るようになったのは、いくつの頃だったろう。

「暑い」だとか、「自分の部屋が欲しいだろ？」だとか、それらしい理由を言っていたけれど、こんなに狭い部屋を小さなたんすで間仕切ってまで離れて眠る必要があったのか。

「キャウ〜」

まだ眠くないとでも言いたげに、じたばた暴れるサラマンダーに

「逃げちゃだめですよ」と言いながらぎゅっつと抱きしめると、マリエラは懐かしい師匠の寝床に潜り込んで目を閉じた。

\*\*\*\*\*

街が燃えていた。

人が焼けていた。

街が嘆きで満ちていた。

生じたばかりの炎の精霊たちに、人の持つ善悪の判断などはなく、ただただ投じられる燃料に集い、群がり、業火となって街のすべてを呑み込んでいった。

切り殺される人の血が炎のように赤いのだと、その炎の精霊はその時初めて意識した。

泣き叫ぶ人の声と、逃げ惑う人の声と、助けを求める人の声。

それらすべてを聞き流し、あるいは悦楽の表情で受け止めて、断末魔の叫びに変えていくのもまた、同じ人間という種族の剣戟と、軍靴と、高揚した叫び声だった。

人が人を殺していく。

人が人の街を焼いていく。

その悲惨なありさまは、人の歴史に刻まれて長く語り継がれるのかもしれないが、この惨状を眺めるあまたの精霊たちにとっては、人とはそういう生き物なのだ、嵐を見守るようなものにすぎない。失われる命の数にしてみれば、地震や噴火に及ばない。精霊たち

にとっては、蟻の巣が、別種の蟻に襲われるのとさほど変わらぬものに思えるのだ。

ただ、一体の炎の精霊を除いては。

だめだ、だめだ。こんなに死んでは。

怒りが、悲しみが、たくさんの黒い感情が、どんどん流れて行ってしまう……！！

道は、黒い河の流れは既にできてしまっているのだ。

人が穢れや呪いと呼ぶ黒い感情は、人が魔の森と呼ぶ森を越え、あの湖へと流れてしまう。

少ない量であればいい。

穢れは湖に溶け込んで、魔の森全体に広がっていく。そして森の木々に、動物たちに宿るのだ。

魔の森に住まう生き物は、その大半が魔物に変じてしまったけれど、魔物という生き物は気性が荒かったり肉体が強かったりするだけで、産まれ、喰らい、喰らわれ、繁殖し、老いて死ぬという生物の理から離れるものではない。

その一生を通じて、その身に宿した穢れに心身を焦がしながらも清めて、やがて地脈へと還っていくのだ。

人の街が襲われるまでは、人の街と魔の森の均衡はそれなりに保たれていたと炎の精霊は考えていた。人の街で生じた穢れは、なるべく炎で清めていたこともあるけれど、それ以上に魔の森自体が穢れの浄化機構としてうまく機能していたからだ。

けれど、人の街が襲われ、焼き滅ぼされるほどの禍は、どうしたって受け止めきれない。



これは、まずい。この量は許容できない。こんなにたくさん  
の穢れが流れ込んだら、あの湖は、あの精霊は……

人が人を街ごと亡ぼす、戦争と呼ばれる愚かな行為は、多くの精  
霊の目から見れば大がかりではあるものの動物同士の捕食活動に似  
たものに映っていた。けれど、人以外の生き物はこんな怨嗟の声を  
上げたりしない。怒り、恨み、嘆き、悲しみ、すべてを奪おうとす  
る敵を呪って、穢れをまき散らしたりはしないのだ。

いやだ

燃やされた死体から、焼け崩れた家屋から煤のような黒い穢れが  
立ち上る。

いやだ、行かせたくない

命を失い、けれどその事実気づかず街をさ迷う亡霊が、呪いの  
声を上げている。

これ以上、あの湖の精霊を黒く穢したくない……！！

精霊とは、ただそこにあるものだ。

吹く風に、灯る炎にただ宿り、水と共に流れ、土と共に命をはぐ  
くむ。

その有り様に、幸も不幸も、善悪の判断さえも、本来ならば存在  
しない。

豊かな川の流れに大地が潤い、生命溢れる街に明かりが灯っても、  
干ばつで土地が乾き、池が干上がったも、山火事で森が燃えて多  
くの命が失われても。

精霊とは、すべてをありのままに受け入れる存在で、そんな存在だからこそ、何かを強く望むということは、本来であればあり得ない。

もしも何かを強く望んだならば、そのために、何かを犠牲にしたならば、それはもう、ただの精霊事象の具現化ではありえない。

自我を有してしまったならば、街の灯火にただ宿り、揺らめき消えるただの炎に戻るなど、二度とできなくなるだろう。

けれど、その炎の精霊は望んでしまったのだ。

叶えたいと強く願ってしまったのだ。

そして、個として長く存在し続けた、その炎の精霊には、己の願いを叶えるだけの力が備わっていた。

いかせない。ここで全て焼き尽くす

炎であるその身には、それしか方法を持ちえないから。

暴暴ばうばうと炎は街を焼き尽くす。人も家屋も食料も財宝も。

暴暴ばうばうと炎は人を消し炭にする。敵も味方も、生者も死者も。

荒れ狂う炎の勢いに、嵐のような激情に、濁流のように祈りも呪いも人のすべてを呑み込んで、そのまま燃やし焼き尽くし、ただの灰へと変えていく。

燃やせ、燃やせ、焼き尽くせ。一欠けらの呪いも穢れも、あの湖へ行かせるものか……！！

その炎の勢いは多くの炎の精霊までも巻き込んで、大きく強く燃え広がった。

吹き上がる黒い煙、黒い煤。

それさえ逃すまいと火柱が立ち上がり、曇天さえも赤く赤く染め上げた。

轟轟と響いたそれは、人の叫ぶ声だったのか、それとも街の崩れ落ちる音だったのか。

しかし、これほど炎が燃え上がっても、空気の流れを止めることも、川の流れを変えることもできはしない。

炎の清め手の隙を潜り抜けた、黒い穢れ、この惨劇を嘆き悲しみ恨み怒った、行き場のない人々の思いは、水が高きから低きに流れるようにあの湖へと流れていった。

逃がさない、行かせない。だめ、だめだ、嫌なんだ

黒い穢れを追うように、街を呑み込み燃やし尽くした炎は森にまでその裾野を伸ばした。

炎は望んでしまったのだ。

あの、湖の精霊をこれ以上穢したくない、苦しめたくないのだと。

そこには、価値を定める意識があった。

人の生み出す負の感情は、汚らわしくて悪いものだ、その炎の精霊は判断していた。

そこには、優劣を定める思考があった。善悪を定める思想があった。

湖の精霊は大切に、湖の精霊を穢しつくした人間の命は顧みられなかった。

人や獣を炎で焼いて犠牲にしても、湖の精霊を助けたいとそう願う、独善的な感情があった。

今、行くから

会いたいと、自分がそう願っているのだと、炎の精霊は理解した。湖の精霊のために力をふるうことをいとわれない、己の感情のなんであるかを理解した。

だから。

家を燃やし、店を燃やし、道を燃やし、街を燃やした。森を焼き、虫を焼き、獣を焼き、人を焼いた。

赤子も、老人も、男も、女も、生者も、死者も、すべて平らげ地脈へ還した。

そしてようやく、その炎の精霊は、魔の森の湖へとたどり着いた。その万物を分け隔てなく焼き尽くす様相は、炎という事象そのままであったのだけれど。

穢れを焼いて清めるために。これ以上、ここへ来させないために。

これ以上、あなたを穢さないために……！！

真っ暗い湖の畔で炎の精霊はそう叫ぶ。チリチリとまとわりつく穢れを焼き焦がしながら。

本当に、そう思っているのか……？

黒い淵が反転して盛り上がるように、湖面からせり出し浮かび上がった湖の精霊は、夜のような静けさで炎の精霊にそう問うた。

その暗黒の色彩が、間に合わなかったのだと、助けることなどがなわなかったのだと、そう炎の精霊に告げていた。

穢れが我に流れつくのなら、この吹き溜まり穢れた姿こそが、今の我のありのままの姿だ。

ありのままを受け入れ、世界と共にただあることこそ、我ら精霊のありようだろうか？

炎の精霊が思わず息をのむほどに、穢れをその身に引き受けた湖の精霊は黒く染まってしまっているのに、それでも穢れをよこした人間を恨むことも憎むこともしていない。

魔物が人を襲うのは、魔物の中にある人が人を恨む穢れがそうさせているだけだ。

湖の精霊のあまりの変わりように、言葉もなく涙の代わりに眼から火花をばちばちと流す炎の精霊。その様子を黒い瞳はじっと見つめてほんの少しだけ微笑んだ。

君の我を思う気持は温かい。

怒り、悲しみ、苦しみ、悲しみ、千々に乱れ荒れ狂うその心は、まるで炎そのものだ。

ねえ、でも、気が付いているかい？

誰かを思い、誰かのために力をふるう。

それは、まるで、人の心のありようであるよ。

その言葉に炎の精霊は引きつるように息を呑み込んで、絞り出すように言葉を紡いだ。

あたしに心があるっていうんなら、それはあなたがくれたんだ……

焼いた命の分だけ煤のように黒い穢れをまといながらも、パチパチと涙の代わりに火花を散らし、強い感情に心を焦がす炎の精霊の

ありようは、夜の闇をどこまでも照らす灯火のようにも、咲いては散りゆく儂い花のようにも思えて、湖の精霊の目にとても美しいものに映った。

激しく儂く揺らめく炎に手を伸ばすように、湖の精霊は湖面を滑るように炎の精霊に近づく。

おいで

湖の精霊がそう言って、炎の精霊の体に焼かれながらもまとわりついていた黒い穢れを手招いた。

だめ！ これ以上は……

かまわぬよ。どうやらこの私にも、お前の穢れを引き受けてやりたいと思う気持ちがあるようだ

どちらが先には分からないほど自然に二人の精霊は互いに手を伸ばし合い、手のひらが触れ合うほどに重ね合う。二人の精霊の指先が紙一枚ほどの空気を隔てて重ね合わされただけで、しゅうしゅうと湖の精霊の指先は蒸気となって空へ消え、じゅうじゅうと炎の精霊の指先も熱を奪われ減っていく。

どれほど長く存在し、どれほど力ある精霊になつたとしても、水と炎は決して触れ合うことはない。

水が水であり、炎が炎である限り、精霊はその性に縛られる。

それでもあたしは、あなたの穢れを被りたい。どんなことをしたって……

それは、精霊の役割の範疇を超える願いだ

無理だと笑う湖の精霊に、炎の精霊は答えの代わりに名前を乞うた。

ねえ、名前を教えて？ あなたの名前を。

どこにいたって、どんな姿になったって心で繋がっていられるように。

そして、あなたも覚えておいて。

私の名前、私の想いを。

私は、……我が名は、炎の精霊 フレイジージャ

望みに応えて告げられた湖の精霊の名は、澄み切った水をたたえた在りし日の姿のようで、フレイジージャは、湖の精霊のあの日の姿を取り戻したいと、焦がれるほどに願ってしまった。

\*\*\*\*\*

「そうじゃないかとは、思ってたんですよ……」

目覚めたマリエラは独り言のようにぼつりとつぶやいた。

その瞳からは、ぼたぼたと涙がこぼれている。

「ほかの記憶は、大丈夫だったんだけどな……」

あの街は、魔の森からの距離から考えると、今帝都と呼ばれる場所なのだろう。

マリエラは帝都に行ったことはないけれど、先ほど見た戦争が数百年どころではない昔にあったものだということは、なんとなく予想が付いた。

だとしたら、どれだけ長い時間を師匠は生きてきたのだろうか。

その長い、長い時間を思うと、マリエラは胸が締め付けられるほどに悲しくなって、サラマンダーを抱きしめたままぼろぼろと涙をこぼした。

「キュー」

静かに涙をこぼすマリエラを慰めるように、サラマンダーはぺろりと涙をなめてくれた。



28・災厄の記憶、戦禍、  
(後書き)

ざっくりまとめ：師匠の正体、ヤッパリな……。

「武器は専門外なんだが、それなりに使えると思うぜ」

“首飾り”の木材を使ってドーナノが作ってくれたのは、攻城戦にでも使えそうなバリスタだった。これを作るために1晩費やしてしまっただけで、大量の火炎瓶を携えたジークやエドガン、それにフランツ、グランドルが中庭で戦ってくれたおかげでいつもより早く夜が明けたくらいだった。

このままここで戦い続けていけば、いつかは全ての穢れを祓えるのかもしれないけれど、そんな日々を繰り返すわけにもいかないだろう。

「やっぱり、これが一番いい方法だと思う」

そう語ったマリエラの作戦は決め手に欠けるものではあったが、特に強い反発もなく受け入れられた。ほかに代案がなかったこともあるけれど、マリエラが何かを分かった上でこの作戦を提案しているように見えたことが大きかっただろう。

実行に必要な素材を手に入れるために作られたバリスタは、南西の塔の天辺、マリエラが最初に流れ着いた場所に据え付けられた。

大きな窓から外をのぞくと、透明な水に光が射す中、大きな魚がゆったりと横切っていく。なんだかとても気持ちよさそうだな。

「不思議な光景だな。この水は淡水のようだが、あれは海の魚じゃないのか？」

ジークが真つ当かつロマンのないことを言う。

横ではグランドルとドニーノが、あの魚は焼くと旨いだの、この魚はキモを溶かしたソースで食べると絶品だのと、主に食材として魚たちを品評していて、こちらはこちらで風情がない。

「ジークよー、もつとファジーに考えようぜー。ちつさな蛇がボインボインのラミアになるイカした世界だぜ？ 塩味が付いてよーがなかるーが、魚で魔物なんだからオツケーってもんさ。つーか、人魚ちゃんはいねーかなー」

エドガンにとってここはイカした世界らしい。半人型に進化した魔物はラミア1体だけのはずなのだが。

「ボインって最近言わないよね？」

「エドガンはおっさんだし。臭うし」

「まあ、人が猿に退化する世界だからな……」

未だつるりとした直線美を誇る少女二人は棘のある言葉を吐いていて、ファジーなエドガンのファジーな意見に、何だか納得してしまつたジークは、余計な一言を言いながらバリスタに矢、というより話に近い物をセットしながら調整を始めた。

「ちよつとお魚遠くない？」

「おびき寄せるから大丈夫だし。あ！ エドガン、あそこに人魚がいるし！」

わざとなのか天然なのか。マリエラの一言にユーリケが応じる。

「マジで！？ どこどこ〜ってうお！ お約束過ぎんだろー、がぼがぼ」

「ギャウ！」

エドガンは分かつてお約束に乗っているのか、それともたとえ嘘でも人魚と言われて探さずにいられないのか、窓に駆け寄りユーリ

ケの指し示す方向を覗いた瞬間に、ラプトルのクーに押されてザボンと水中に押し出された。

楽しそうに見えたのか、ラプトルのクーまで尻尾を窓の外に出して、お尻フリフリ、尻尾バシャバシャ、グギャグギャグギャと鼻歌交じりで魔物魚を挑発し始める。水流がかき回されて、水中のエドガンはぐるぐる回転しながらじたばたともがいている。

撒き餌だ。実に生きがいい。

もがくエドガンが美味しそうに見えたのか、バツシャーと、数匹の魔物魚がすごい勢いで突進してきた。

「はい、ジーク。よろしく？」

「わかった」

突進してくる魔物魚に向けて、バリスタの照準を合わせるジーク。

黒鉄輸送隊の装甲馬車のメンテナンスを行うドニーノは、手先の器用な男であるし、装甲馬車にはボウガンも備えてあったから、おおよその構造は理解している。“首飾り”の木材を削って組み上げ鳶を弦にしたバリスタは、一見するとそれなりのものに仕上がっていた。

あくまで一見すると、である。

人が持てるサイズではないバリスタは、高さや角度の調節機構や弦を引く機構など、単純ではありながらも細かい機構が組み込まれている。

もちろん、武器職人でもないドニーノがたった1日で作れるものではないから、そういった細かい機構は、ジークのAランカーとしての筋力と、『精霊眼』で補う予定で作られていた。

「結構、癖があるな。だがこの威力なら……」

そんなことをつぶやいたジークであったが、放った話はようやく水流から解放されて塔の中に入ろうと窓枠に手をかけたエドガンの横すれすれを通り抜け、見事迫りくる魔物魚を口腔から尾まで貫通し、無残な肉片に変えた後、さらに先へと飛んでいった。

「『精霊眼』ってのは、ほんっと、デタラメだな」

呆れたように言うドニーノ。こんないい加減なつくりのバリスタでさえ、『精霊眼』を使って射れば、水中射撃も百発百中。水が銚の勢いを殺さないように流れを変え、方向を修正しているのではないかと思っほどだ。

「まあ、まあ。そのおかげで、あれを捕れるのですから、結果オライというべきですよ」

作り甲斐がないと嘆くドニーノをグラランドルがなだめる。

「はあはあ、溺れるかと思った……。ジーク、何もあんなすれすれ打つことなくね!？」

「水も滴るいい男になったな！ エドガン」

さすがにムツとした様子のエドガンを、ジークが笑顔で誉めてサムズアップをかます。ボインも古いがこちらも古い。二人の気が合うのもうなずけるレトロさだ。

「……二人ともその辺にしておけ、来たぞ。魔力を消せ」

いつものじゃれ合いを始めそうになったエドガンとジークは、窓からじつと上方を伺っていたフランスの声で窓へと視線を移した。先ほどの試射でずたずたになり、丸める前のツミレのようになってしまった魔物魚に引き寄せられて、たくさんの魔物魚が群がっている。

撒き餌エドガンはただの前座で、こちらが本番の撒き餌である。ツミレの魚肉ではなくて、それに群がる魔物魚が。

塔からはかなりの距離があるけれど、もともと普通の魚より巨大で数メートルはあるような肉食の魚が何匹も餌に群がり、互いにけん制し合いながら貪る姿は、かなり迫力のある見世物だ。

けれど、そんな魔物魚さえ、餌にしてしまう巨大な影が、無限の水の向こうから急速に迫ってきた。

「デッケー。マジであれ、やんのかよ？」

エドガンが思わず漏らしたのも無理はない。

魔物魚の狂乱に誘われて近づいてきたのは、外洋を航海する船のように巨大な鯨であった。

しかしその姿をよく見ると、図鑑で見かける普通の鯨とはずいぶん異なる姿をしている。

特に特徴的なのは、体の3分の1ほどもある深海魚のように巨大な口だろう。

通常の鯨が海水を濾して微細な生物を摂取するのに対し、この鯨の魔物、グラドエールは海中に存在する魔力を摂取して生存している。巨体を維持するために必要な魔力量は膨大で、それ故に海水中に溶け込む魔力の濃い海域にしか生息できず、また、魔力を持たない普通の魚を襲うことはない。

そうでなければ、世界中の海からは、あらゆる魚が消えてしまっただろう。

ギユウッと腹をへこませるように体全体が縮んだと思うと、ぐんぐんと異様な勢いで一気に潜水してくるグラドエール。巨体からは想像もつかない運動性能だ。そしてその巨大な口は、急な潜水に餌を貪る魔物魚たちが散り散りに逃げるより早く、すべてを呑み込んでしまった。

このグラドエールの恐ろしいところは、この運動性能と何でも喰らい、分解してしまう口である。

急速潜行を可能にするのは皮下に蓄えられた特殊な脂肪層で、グラドエールの魔力によって急激な密度変化を可能とする。浮上するときは膨張して浮力を得、潜水時には鉛のような高密度に変化して、恐るべき速度で潜水してくるのだ。

頭上から、あるいは水底からの急速な接近に気が付いた時にはすでに巨大な口の射程内。グラドエールの口蓋から逃れられる海の生物はそうはいない。

しかも、グラドエールは魔力しか糧にできない魔物だけれど、分解するだけならば生物も植物、つまり木片さえも呑み込むだけで分解してしまうのだ。

グラドエールの巨大な口に見合った飛び出した大きな魚眼が、ギョロリと動く。

次の獲物を見つけたのだ。

ぐあぁと大口を開けて、塔へと突進してくるグラドエール。なんでも分解してしまう、その口が生きて動く様子を視認したのは、ジークたちが初めてかもしれない。

「うげー、キモー！」

思わずエドガンが悲鳴を上げる。

鯨というよりは深海魚のようにがばりと開いた口の中には、さらにいくつも口があった。人間に例えるなら、がばりと開いているのは唇で、口の奥、のどの近くに歯が何列も生えているようなもの。しかも、ギザギザとしたその歯はかみ合わせごとに関節が複数あるようで、それぞれ別個にガジガジと噛み合わさっている。

塔ごとジークたちをかみ砕こうと突進してくるグラドエールの口

先を、虹色の輝きを放つ一本の矢がかすめていく。

『精霊眼』でたっぷりと魔力を込めた精霊の矢だ。

このために、“首飾り”と戦った時も昨夜の戦いでも魔力を温存していたのだ。

精霊の力は魔力とは少し異なるものなのだけれど、グラドエールにとっては甘美な餌であつたらしい。その矢を捉えようと、巨大な口の向く先が矢を追ってずれた瞬間。

ドシュ。と銚のように巨大なバリスタの銚がグラドエールの顎関節あたりに突き刺さった。

オオオオオ。

水を介して塔を揺らすほどのグラドエールの叫びが伝わってくる。

「きゃあっ」

「マリエラ！ 大丈夫か!？」

「あー、マリエラは大丈夫だし。さ、一緒に避難しとくし。ジークはよそ見しないでとっとと仕留めるし?」

マリエラの珍しく可愛らしい悲鳴に、戦闘中にも関わらず、ぐりんと後ろを振り返るジーク。

いいところを見せて点数を稼ぎたいという思惑が透けて見えて情けない。

ジークが迷宮都市でもたっついてる間に、マリエラと友情を深めたユーリケが、マリエラをラプトルの背に乗せ安全な下の階へと避難していく。

相乗りだ。ジークの視線に気付いたユーリケが、意味ありげにニヤリと笑うと、

「ほら、マリエラ、すっかりつかまってるし」



とマリエラに声をかける。

「うん！」

ジークの視線もユーリケの思惑も気が付かないマリエラは、すっかりなかよくなつた女友達の腰に手をまわして、振り落とされないようにぎゅっと抱きついた。

「ぐう……」

うなるジークに笑うユーリケ。

“小僧めが……”

そんな台詞を理性でギリギリ抑え込んだジークの表情は、どう見たって悪役だ。

すつかり、奴隷になる前のジークズに戻ってしまったている。

実際は、少女二人がくつついてラプトルに騎乗している微笑ましい絵づらなのだが、ユーリケが女の子だと気づいていないジークからすると、ちよつと目を離れた隙にマリエラを盗られたようにしか見えない。ユーリケのマリエラとどっこいなスレンダーボディはこんなところで大活躍だ。

ちなみにジェラシーが顔に現れているジークをエドガンが放っておくわけはなく、ものすごく嬉しそうな顔でジークの周りをうるちよろしている。先ほどの仕返しのもりかもしれない。

「ほれほれ、ジーク君。見えないところでこそ頑張るのが男前というものだぞおー」

「黙れ、エドガン。お前に言われたくない」

「二人とも遊ぶな。来るぞ！」

愉快的な会話を続けるジークとエドガンをフランクツが制した瞬間、ドオンと塔を震わせる大音響が突き抜けた。銃を射かけられたグラドエールが塔へと体当たりしてきたのだ。けれど響いたのは音ばかりで、あれほどの巨体の体当たりを受けても塔はピクリとも動かない。

「ほっほ、《シールド》はお任せあれ」

装甲馬車に始まり、傘、土壁から塔の壁面まで、手が触れられる固体ならば、なんでも盾にしてしまうグランドルが余裕の表情で笑う。

「ドニーノ、今のうちに綱を引け！」

「おうよー！」

ドニーノとフランクツは、その剛腕を発揮して、銃に付けられた綱を引き寄せグラドエールが再び距離を取らないように引き寄せる。

「じゃあねえ、やるぞ、ジーク」

「……………すぐに終わらせる！！」

しぶしぶといった様子で銃を掴むエドガンと、ぎらぎらと殺意に満ちた目で銃をバリスタにつがえるジーク。

海の悪魔とさえ言われ、苦戦が予想されていたグラドエールは、体中の関節や急所にジークのバリスタで銃を撃たれ、あっという間に針山のようになって息絶えた。

「ジーク、容赦ねーな……………」

「マリエラ！ 終わったぞおおおおお」

グラドエールを倒すなり、エドガンも獲物もほったらかしてマリエラとユーリケが待つ下の階へと駆け下りていくジーク。

ユーリケが実は女の子だと知ったジークが、マリエラにまで面白い顔をさらしてしまうのは、もうすぐ先のことだろう。

29・捕鯨（後書き）

ざっくり：そつえば、名前が「撒き餌ら」になりかけた錬金術師  
がいましたね。

### 30・野が原

「行くう」

マリエラの一声に、エントランスに集まった一同は頷く。

あと少しで日が沈み、夜の闇と引き換えにマリエラたちの行く手を遮る水はこの世界から消えていく。

この水は、マリエラたちをこの世界に閉じ込め、行く手を阻んでいるのか、それとも黒い魔物からマリエラたちを守っているのか。

それも、この先の中庭を越えて中央の神殿へとたどり着ければ明らかになる。

そしてそのために、石化したラミアが足止めしてくれている、あの戦禍が形を成した魔物を倒さなければならぬだろう。

このエントランスの扉を開ければ、最後の決戦が始まってしまっただ。

最後の決戦……。

迷宮の最下層攻略の時は、迷宮討伐軍の精鋭が階層主に数度挑めるほどの装備を整えて向かったのだった。それに対して、ここには戦える者の数は少ない。

いや、単に数だけで判断するのは早計だろう。迷宮討伐を果たしたレオンハルト率いる軍団さえも、ポーションの登場でその威力を大きく増したのだから。

この戦いには、迷宮討伐に大きく貢献した『精霊眼』の持ち主、

ジークムントもはせ参じたし、一身上の都合によって迷宮討伐軍にはいられなくなつたものの、Aランカーとして成長し、2属性を同時に使う『総属性使い<sup>オルラウンダー</sup>』のエドガンもいるのだから。

竜人化して肉體能力が大きく向上したフランツも、ドニーノやグランドル、ユーリケだつて敵の強さを分析し、十二分に備えさえすれば、黒い魔物ごとき恐れるに足りない。

マリエラは心強い味方を見回す。覚悟を決めた表情の、ジーク、エドガン、フランツ、ドニーノ、グランドル、ユーリケ、クーに樽樽に樽に樽に瓶に樽に樽に瓶に瓶に瓶に瓶。

「……思ったよりもたくさん採れたね」  
「量が多いほどいいだろう」

そう、今から決戦だ。決戦に備えはつきものだ。とはいえ、その備えとやらはラプトルに積み切れないほどの大量の樽や酒瓶で、全員で分担して持っているから、どうにも決戦というより配達に行くような雰囲気醸し出している。

ラプトルのクーが引く荷車など、ドニーノが“首飾り”の残材で作つた幅の狭い二輪の荷台の上に、大量の樽を積載している。側面は荷が落ちないように壁があり、グランドルが乗り込むことで攻撃も防げる簡易の装甲馬車なのだけれど、荷を山積した荷車を操るユーリケは、どうみたって配達の少年にしか見えない。

この荷車を作つたドニーノは、  
「思ったよりも小回りが利くな。帝都の最新式の軸受けにスプリングでもつけて、タイヤも加工してやりゃあ、かなりの速度が出そう  
だぜ」

と、楽しそうに話していた。木材の滑り軸受じゃ、速度がどうのと饒舌に話すのをふんふんと聞き流しながら、『黒鉄お急ぎ便』なんてサービスができるのではとマリエラは想像した。

ともかくにも、大量の樽に大量の瓶だ。

中に詰められた液体は、魔物鯨グランドエールから採取したもの。加工はマリエラが、有り余る魔力にものをいわせて《錬成空間》内で分厚い皮と頭部の中身を一気にミンチにして、煮立て、分離したから、大した手間ではなかったけれど、グランドエールの死体を餌だと寄って来る魔物魚たちをジークとエドガンでけん制しながら、フランツが解体していく作業はかなり骨が折れたし、精製物を入れる樽や瓶を運ぶ作業もかなりの重労働だった。

“首飾り”を倒したことで、外に水が満ちていても移動できる場所が広がったのだけれど、これだけ大量の樽や瓶のほとんどが、南東の塔にあった、つまりは師匠が飲んだ酒の空き瓶や空き樽だろうという事実にも、マリエラは呆れるほかはない。

それとも、これすら意識的にしていたことなのだろうか……

(いけない、集中しなきゃ)

マリエラは雑念を払うように軽く頭を振ると、中庭に続く扉へと歩みをすすめた。

肺まで水で満たされるような水気と世界を覆う夜の闇。

そんなこの世界の夜の訪れも、あの夢を見た後では、この世界のありようを象徴する事象のように思えてしまう。

「はじめるとしよう」

「マリエラも気をつけるし。いくよ、クー！」

「ギャウ！」

フランツとユーリケを荷台に乗せたラプトルが走り出すのを合図

に、マリエラたちもエントランスの入り口からそれぞれ走り出していく。

「おう、パスだ、ジーク！」

「よしこい、ドニーノ！ さあ、エドガン、これは向こうの端っこだ！」

「おうよ！ 任せとけ」

ドニーノがエントランスに置かれた樽や瓶を担ぎ出し、ジークに渡す。渡されたジークはあたりの状況を見渡して、エドガンに運ぶ場所を指示して渡すと、エドガンが樽を担いでエツサホイサとと運んでいく。

傘より重い物の持てないグランドルは扉を抑える係で、もつと戦力にならないマリエラは安全なジークのそばで応援係だ。

あちこちから染み出るように湧き出してくる黒い魔物は、ジークがピシピシと弓で牽制している。たった1射で数匹の魔物を射貫くでたらめぶりは、そばにいるマリエラにいい格好を見せるためにちよっぴり無理をしているのかもしれない。

それから、弓を射るジークと、広い中庭を黒い魔物を避けつつ樽を担いで走り回るエドガンとは運動量に差があり過ぎる。

「ぜえ、はあ。なあ、ジーク、ちよつと代わらね？」

「エドガンは遠距離攻撃できないだろう？ はい、これは向こうで」

「エドガンさん頑張つて！」

「任せとけ！ マリエラちゃん！」

「さすがはエドガンだ！」とたたえつつ、樽を手渡すジーク。一体どの辺が流石なのか、便利さをたたえられているだけではないのかと、エドガンがようやく気が付いたのは、ユーリケたちが北側に樽を置き終えて、残った内容物を樽と樽を繋ぐようにぶちまけながら



帰ってきたところだった。

「グランドルさん、これ、石化を解除する解毒のポーション。念のために解呪も。それから上級ポーションも使ってあげてください」  
「ありがたく。ここまで堪えたあの蛇を、ようやく助けてやれますぞ」

マリエラからラミアの石化を解くポーションを受け取るグランドル。この中庭のグランドルのそばで成長し、共闘さえした蛇の魔物。彼女が黒い戦禍に巻き付いて動きを止めたのは、黒い魔物を亡ぼすために生まれてくるこの地の魔物の性なのかもしれないけれど、短い時間を共に過ごしたグランドルを助ける意図もあったのだと、マリエラもグランドルもそう信じたいに違いない。

中に閉じ込められた黒い戦禍が、マリエラたち人間の存在に気付いて暴れているのだろう。石化したラミアの体は幾筋もひびが入っていて、ギシギシと時折細かく振動する度に、亀裂は広がりを見せていた。

「よく頑張ったのですぞ」

そう言っただけで、グランドルは、準備を終えた一同が黒い戦禍との戦いに備えて身構える中、上級の解毒ポーションをラミアへと振りかける。たったそれだけで、ラミアの肌には血が廻り始め冷たい石の色から人肌と、紅色をした蛇の色へと変わっていった。石化した状態でひび割れていた皮膚は裂傷に変わって、石化が溶けていくのに合わせて血が滲み始めている。

その傷をいやすために、上級ポーションを重ねてかけると、たちどころに皮膚は滑らかな人と蛇のそれに変わって、ラミアは「シャウウ……」と息を吐きだしながら光を取り戻した瞳でグランドルを見つめた。

(やっぱり、解呪のポーションはいらなかった)

石化の解けたラミアがどう動くのか、閉じ込められた黒い戦禍は今にも飛び出してくるだろう。そんな張り詰めた状況の中、マリエラは解呪のポーションが必要なかつた事実にも似た感覚を得ていた。

石化には、単なる状態を変化させるものと、呪いによって石化させるものの2種類がある。単なる状態異常の場合、状態によって上級の解毒のポーションがあれば解くことができる。けれど、呪いによる石化の場合は、解呪のポーションを使うか解呪の儀式を行わなければならぬ。

かつてレオンハルトがバジリスクの呪いを受けた時、命を落としかけたのは、そのどちらもなかったからだ。

幸運にもマリエラの解呪のポーションのおかげで石化の呪いは解かれたが、魔物の領地であったあの頃の迷宮都市では、精霊の力を借りる解呪の儀式は行えなかった。

(ここの精霊が、石化の呪いを放っておくなんて思えないんだよね)

あの湖の精霊が石化の呪いを放っておくとは思えなかったし、何よりここの魔物が“呪い”を使うこと自体、考え難いことだった。

恐らくここに繋がっているのだろう、魔の森の沼地に辿り着いた時、対岸に四つ足の強そうな魔物がいたけれど、マリエラたちを襲うことなく森の中へと消えていった。ここの魔物は、あの沼を、この水の世界と湖の精霊を穢すことはしないのだろう。

その証拠にとでもいうべきか、ジークがつかえた矢に、精霊の力が宿っていることに気が付くや、ラミアは「シャアア」と威嚇するのをやめて、ギリギリと黒の戦禍を締め上げていたとぐるを解いて、

グランドルにやや近い、けれど十二分に距離を置いた場所へと滑るように退避した。

間髪入れず放たれる精霊の矢と上がる咆哮。

「オオオオオ！」とも「ゴオオオオ！」とも聞こえる音は、戦うべき人間を得た黒い戦禍の歓喜の声だったのか。それとも精霊の矢が命中し、その体幹に大穴をうがたれた痛みや怒りによるものなのか。

ぬちよりと崩れるように広がって、そこから棘のように4本の脚が、槍が生え、ゆらゆらとぶるぶると震えるように歩兵や騎兵の形をとっていく黒い戦禍。

(まるであの、悪夢みたいだ……)

あの戦争を見ていた動物たちや精霊たちは、あの光景をこんな風に認識していたのかもしれない。あの戦争を生き残った人は、きつとこんな悪夢を日々夢に見たに違いない。

2082

先ほどまでは石化したラミアの内側に閉じ込められていたことが信じられないほどに広がった黒い戦禍は、そこに湧き上がる黒い魔物を吸収しながら液体のように広がって、たちまちのうちに軍団のごとき規模にまで膨れ上がる。

ジークの放った精霊の矢さえ、それがこの地で優位な水属性のものであるから、さしたるダメージを受けていないようで、えぐり取られた傷口ごと飲み込み癒着し、跡形もない。

その数は街を蹂躞する軍隊のようで、その増殖する速度は得体的れない魔物のようで、その広がり避けられないさまは、迫りむしばむ呪いのようだ。

さらに面倒なことに、抑える者のいない、城壁の崩れた北側から、黒い魔物が土砂崩れのようにマリエラたちへと押し寄せてくる。

こんなもの、どうすれば押しとどめられるのか。  
どうすればこの状況を覆し、戦禍を清め被えるのだろうか。

「よし、今だ。火を放て！」

「おお！」

ジークの合図で、エドガンは双剣に火を宿し、ジークは火矢をつがえて引き絞る。ユーリケやフ란ツ、ドニーノ、グランドルにマリエラまでも、この場所に運び込んだ樽や瓶、そこまでまき散らした液体へと大小さまざまな火魔法を放った。

マリエラだけが生活魔法の着火魔法で、魔法を使うより着火した木片でも投げた方がよっぽど効率が良かったのだけれど、その辺は置いておく。

当の本人は自分のことで精いっぱい、自分の駄目っぷりに気が付いていないし、他のメンバーはそもそもマリエラの火魔法などあてにはしていないのだから、参加することに意義があるのだ。

着火と同時にまき散らされた液体は燃え、その炎は広く樽へと延びていった。

鯨油。

魔物鯨グランドエールから抽出したそれは、灯火として最適な鯨から採れる油だった。

魔道具技術が発達する前、長時間、魔力の供給なしに灯り続けるランタンは、広く使われていて、その燃料の中でも大量に得られる鯨油は人口の多い都市部で広く流通していた。

めらめらと灯火のような明るい光に黒い戦禍は一瞬たじろぐけれど、にやりと笑うように歪に揺らめくと、すぐに炎を踏みしだきつつ、マリエラたちへと進軍を始めた。

灯火など、街を照らす明かりなど、自分たちが壊し燃やしてきた炎の激しさに比べれば何のものでもないというように。

まるで炎は我が統べるものでもいうかのように、周囲を赤く染める炎の中へと迷わず足を踏み入れる、黒い戦禍。そして炎をかくぐるように進路を変えつつ侵攻を止めない黒い魔物たち。

それがただの鯨油であったなら、呑み込まれたのは炎のほうであつたらう。

炎を統べる存在が、侵略者のごとき黒の戦禍であつたなら、消しつくされたのは炎の方であつたかもしれない。

けれど、これはただの油ではない。そんな油であつたなら、マリエラたちは一夜を無駄にしてまで捕獲し精製したりはしない。

グアドエールの鯨油は普通の鯨油より少ない量で長時間燃え、さらに少ない魔力で点火すれば低温で長時間、大きな魔力で点火すれば高温で短時間燃えるという変わった特性を持つため、用途が広く、今でも高値で取引されているのだ。

そして、真に炎を統べるのは。

マリエラは、それまで襟巻よろしく肩に巻き付いていたサラマンダーをむんずとつかむと、黒い戦禍とマリエラたちのあいだ、めらめらと炎をあげて燃え盛る樽が幾つも置かれた場所に向かってぶん投げた。

「キャウウ!？」

この展開は予想していなかったのか、「え? ちょ、ここで!？」とでも言いたげに目も口もぼかんと開けて飛んでいく蜥蜴に向かってマリエラは叫ぶ。

その声に、ありったけの魔力を込めて。彼女と地脈を繋ぐラインを通じて、その先にいる師匠に届けるように。

「へ来たれ！ 炎の精霊、フレイジージャ！！！」

その瞬間、黒の戦禍も黒の魔物も中庭ごと全てを吹き飛ばすような巨大な火柱が中庭全体から立ち上った。

結界で守られるように炎を逃れたマリエラは、ありったけの魔力を失って朦朧とする意識の中で、炎の中に立つ師匠フレイジージャの姿をみつけ、そしてその声を聞いた。

30・野が原（後書き）

ざっくりまとめ・サラマNDERは偽物だった！

### 31・業火

「フアイヤー！」

「第一声がそれとか、止めてください師匠」

とんでもない火力で黒の戦禍も黒い魔物も一瞬で焼き尽くしたフレイジージャの第一声は、マリエラたちの心まで消し炭にしそうなしょうもないものだった。

「いや、スツゴイ火力だったな！ さっすが魔物鯨グランドエール産の高級油は火力が違うな！ それに、マリエラの魔力量。いいわ、あの火力！ その発想はなかったわ」

「ああもう、師匠。朝が来ちゃうから。水が来ちゃうから、さっさと神殿に行きますよ！」

マリエラたちは、師匠が張ったのであろう結界のような空間で守られているから熱さは感じないのだけれど、外は業火渦巻く地獄のような有様だ。

（っっていうか、この結界は一体どうなってるんだろう。）

師匠が昔教えてくれた話じゃ、熱というのは“でんどう”だけでなく“ふくしゃ”によっても伝わるから、直接接触らなくても炎は温かいんだって言ってたけど。

この外が透けて見える結界って、“ふくしゃ”とやらも遮断するのかな。

そう言えば《錬成空間》で錬成する時って、高温に熱しても低温に冷やしてもかざす手が熱くなったり冷たくなったりすることは無いよね。



これも、《錬成空間》の一種？ いやさすがにそれは……)

外では「ギユウウ……」とも、「ギヤアア……」ともつかない叫びをあげて、身を焼く炎に黒い戦禍が身を擦っているのだけれど、マリエラの思考は逸れまくりだ。

(そもそも、なんで師匠、服着てるんだろっ……)

サラマンダーが師匠であることを確信していたマリエラだったが、師匠がマツパで現れる可能性については、小さな蜥蜴が一瞬にしてぴらぴらした衣服をまとった師匠に変わって顕現するまで、全く思い至らなかつたらしい。

師匠をぶん投げたことといい、この師匠にしてこの弟子ありだ。

もつともマツパで現れたとして、師匠の事だから堂々とした様子で変わらぬ台詞を吐いていて、マリエラがあたふたと師匠に服を着せたのだろうが。

顔を隠すふりをして指の間から『精霊眼』でチラ見するジークと、顔も隠さずガン見するエロガンの様子まで想像したところで、師匠がマリエラの長い思考を遮った。

「ていうかさ、いつ気が付いたん？ マリエラの仲良しサラマンダーの姿だつたら騙されると思ってたのにな」

「呼んでないのに来た時からおかしいとは思ってましたよ。ここに着いて最初にサラマンダーを呼んだ時には来なかったし。それに、あれだけ長い間、受肉した状態で顕現するとか、どう考えたっておかしいですよ！」

「あちゃ〜。呼んでたのか〜」。

ここって、水の精霊の領域だからさ、並の炎の精霊じゃ来れない

んだよね。

供物で呼ぶか、このフレイジージャ様くらい特別じゃないと。

あ、サラマンダーは還ってるから安心しな。

あー、あたしも途中で消えるとかすればよかったかなー。

てか、あんまり驚かないのな？」

「そりゃ、師匠ですから。師匠が師匠のくせに中級ポーションしか作れないってわかったときほどは驚きません」

ようやく人の姿に戻って口がきけるとばかりにしゃべりまくる師匠と、そんな師匠を引っ張って中央の水の神殿へと急ぐマリエラ。

「あ、まって、まって。あれ、ちゃんと燃やしとかないと復活するから。」

アイツが正気に戻って水が満ちる前にちゃんと焼かなきゃ。

火多火多ひたひたと、火多火多と来たれ、つてもう来てるか。えーい、《

爆炎招来》、ファイヤー！」

「なんですか、そのいい加減な詠唱は……」

マリエラが頭を抱える中、師匠は再び極大の業火を黒の戦禍にお見舞いすると、大火のなか未だ蠢いていた黒い影は、今度こそ完全に燃え尽きちりと化していった。

（飢餓の時も病魔の時も、師匠は最後まで黒の魔物を燃やしていたな）

ここに来てからのサラマンダーの不自然な行動を思い返しながら、マリエラはその様子を見ていた。

「ほら、さっさと行くぞ、水が来る」

さっきまでマリエラにせかされていたというのに、広場中の黒い

魔物を全て焼き滅ぼした師匠は、ジークたちを振り返ると、おいでおいでと手を振る。

ジークをはじめ他のメンバーはこの展開を予想さえしていなかったよつで、ぽかんと口を開けたまま二人の様子を見守っていたけれど、いつもの師匠のいつもの理不尽ぶりに、ようやく再起動したよつだ。

「えー!? ええー!? フレイジーさん!? いや、だって、さつきまでサラマンダーの……」

「おちつけ、エドガン。いつものことだ」

「え? トカゲって、服……。てかオレ、ほっぺ、ペロリって、あれ……」

「考えたら負けだ。行くぞ」

動き出したはいいのだが、エドガンの狼狽ぶりがすごい。

というか、真っ先に考えるのがトカゲの着衣状態なのは、頭の冴えをむしろ褒めるべきなのだろうか。

「師匠はね、元炎の精霊なんです。今も半分は似たようなものなのかも知れないですけど」

「えーと、えーと、あ、エドガン。そゆこと」

守備範囲外の蜥蜴の姿からドストライクの美女に変化したフレイジーにうろたえるエドガンに、ざっくりと説明するマリエラ。やっぱりエドガンの名前を忘れていたらしいフレイジーは金の瞳をキラキラさせながら名前を世界の記録<sup>アカシックレコード</sup>で検索して、さも今思い出したように返事をしている。

『精霊眼』持ちだというのに師匠の正体に気づかなかったジークは、『精霊眼』で師匠を見たり、かくして普通の目で見たりと何度も見直していて、師匠の正体は全く見抜けていなかったらしい。もつともこちらは、日々の暮らしから迷宮の最深部までやらかし放題

の師匠のおかげで、だいぶ耐性が付いていて、エドガンを連れてマリエラたちの後を追うくらいの余裕はある。

ユーリケたちに至っては、もう、訳が分からないといった様子で、ドニーノは眼鏡をはずして拭いたあと、もう一度フレイジージャを確認しているし、グランドルに至っては現状を理解するのを放棄したようで、自分たちと一緒に炎を逃れたラミアに向かって別れの挨拶をし、「シャー」と威嚇されていた。

「ほっほ、これはつれない。ツンデレというやつですか」

などと笑って言っているけれど、ラミアは一度だつてデレたことはないのだが。いや、いまだに一定の距離を取りながら攻撃して、くことも逃げ去ることもしないから、今がデレた状態なのかもしれないが。

「ギャ、ギャウ！ ギャウ！」

「こ、こら、クー、跳ねるな！」

ラプトルのクーは、自分も人間の姿になれるとでも思ったのか、その場でジャンプを始めてしまい、繋がった荷車まで跳ねて荷台から転がり落ちそうになったユーリケをフランツが抱きとめている。

「危なっ……！」

ラプトルの荷車に載せていたジークのやたらと大きな背負い袋も転がって、落下する寸前のところをジークにナイスキャッチされている。

結界の外はまだ灼熱の地獄だというのに、全員が収拾の付かない混乱ぶりだ。

「さて、そろそろ、謎解きの時間だ」

そんな混沌とした状況を終わらせたのは、この混沌を生み出した

フレイジージャの一言だった。

「まず何から話そうか……。ふふ、マリエラ、そんな顔しなくても、もう、はぐらかしたりしないよ」

一時でも師匠から目を離さないぞと、はっしと目を開けて見つめてくるマリエラに、フレイジージャは苦笑する。

「マリエラ、そんなに目を見開いたら、目玉が乾くぞ……」

ジークがおせっかいな心配をしてしまうくらい、師匠をガン見していたマリエラは、「だって……」と小さくつぶやいて、ほんの少し下を向く。

そんなマリエラに、師匠はぐずる子供を抱き上げるような表情をすると、「ほら」と手を差し出す。差し出された師匠の手を握って、マリエラはようやく瞼をパチパチと瞬いた。

師匠はいつだって、マリエラの危機には駆け付けて助けてくれるのに、自分のことはちっとも話してくれないのだ。その上、ふいにどこかに行ってしまう。ここで再び目を離したら、今度こそ本当に見つけれないところに行ってしまう気がして、マリエラは目を離せなかったのだ。

けれど、フレイジージャはここまで自分を追いかけてきた愛弟子に、真実を伝える気になつたらしく、マリエラの手を握ると、一同を連れて真っ直ぐに中庭の中央にある神殿へと進んでいった。

### 31・業火（後書き）

ざっくりまとめ：変身着衣疑惑にファイヤー！

いつの間にか100万字超えていました。

こんなに長い会い間お付き合いくださった皆様、ありがとうございます！

### 32・魔の森の由来

「昔、人間が国という単位を作るよりもずっと昔、ここは魔の森なんじゃなくて、普通の豊かな森だったんだ」

見上げるほどに巨大な神殿の扉は、フレイジージャが手をかざしただけで音もなく静かに開いた。

入ってすぐの場所は、幅5メートルはあろうかという広い廊下が左右に続いていて、正面、つまり入り口から入って廊下の向かい側には室内であるのに水路と草花で彩られた庭園のような場所が広がっている。

この廊下は庭園の周りを囲むように配置されていて、途中から壁で仕切られた部屋になっているようだ。庭園を隔てた向こうには神殿の入り口と変わらないほどの立派な扉が見えるから、あそこが神殿の中心部分なのだろう。

廊下の天井は普通の家より高いけれど、ホールや集会場の天井くらいで、上の階がありそうだ。高い天井を支えている幾本もの柱はどれも石造りで、赤っぽい部分、黒っぽい部分と上下で色合いが変わっている。そのグラデーシオンはまるで地層のようで、魔の森の足元深くに横たわる大地の記憶のようだなとマリエラは思った。

けれど庭園は吹き抜けになっていて、天井部分は空が描かれているのか見上げると外に出たような気分になる。廊下と庭園とは腰丈くらいの壁で隔たれていて、乗り越えて庭園を横切れば最短で中心部の扉に辿り着けそうだけれど、まるで絵画のような静かな風景に踏み入るところか手を伸ばすこともはばかられる。

本当に、なんて静かな場所だろう。

この水の世界自体、騒がしい場所ではないのだけれど、それでも魔物たちの気配が感じられた。この庭園は花咲き乱れる美しい世界だけれど、葉の一枚、花びらの一片さえそよぐこともなく、小鳥のさえずりも蝶の羽ばたきさえ感じることができない。

土の匂いも、緑の香りも、水の流れる音さえも聞こえてこない庭園は、まるで精巧な模型、立体の図鑑を見ているようだ。

庭園を見つめるマリエラたちに、フレイジージャは「こっちだよ」と声を掛け、すたすと廊下を進んでいった。

「お前たちが辿り着いた沼地はね、あの頃はとても澄んだ美しい湖だったんだよ。それこそこの庭園なんて及びもつかない荘厳な美しさだった。遠くから見ると湖面は鏡のように深い森を映したし、近くで見れば底まで見通せるほど澄んでいた。湖に光の差すさまなると、神々しくてどんな炎もその美しさに己を恥じて、身を潜めたほどだった」

ジークやユーリケたちは、フレイジージャの話す幻想的な美しい光景など、あの陰鬱な沼地からは想像もつかないという表情をしていたけれど、マリエラはその美しい姿を、師匠の夢の中で見て知っていた。

「そこにはこの地脈、つまりは魔の森の地脈を統べる湖の精霊がいた。エンダルジアが迷宮都市付近の地脈の主になるよりずっと昔の話さ。

魔の森も迷宮都市のあたりも同じ地脈なのは知ってるだろ。

なのに、迷宮都市では精霊の言葉が分かって魔の森では分からないのは、おかしいと思わないかい？ 地脈が同じでも場所によって管理者が異なるからなんだ。



まあ、よくある話なんだけどね。

広い範囲を管理するのは精霊にだって大変だし、そもそも、精霊はいい加減だ。

あの頃はもう、この湖の精霊は魔物の側の存在になり果ててしまっていたから、人間の居場所を与えたいというエンダルジアがああたりの管理を引き受けたってわけさ」

フレイジージャの話は帝都の学者が聞けば長年の論争に終止符が打たれるほどの重大な情報なのだけれど、ここに居合わせた者たちにとっては、ピンとこない様子で、観光ツアーの御一行様のようにあたりの様子を珍しそうに見回しながらぞろぞろと後について歩いている。

「そういえば、200年前、魔の森は魔物の領域で、エンダルジア王国は人の領域で、違う領域のはずなのにどっちでもポーシヨンが作れるのが不思議だなんて思ってたんですね……」

錬金術師であるマリエラでさえこの調子だ。

「あー、マリエラ、そんなこと言ってたっけな。“エンダルジア王国の近くだから”って説明したら、なんか納得してたけど。素直な子で助かったよ！」

あははと笑う師匠に、褒められているのかアホの子だと笑われているのか少し複雑な気分になったマリエラは、話をもとに戻そうと「それで？」と続きを促した。

「ここは、完全に独立した湖で、どの川にもつながっていない。実際は、地下水脈が湧き出してる場所なんだけどね。

ほら、採砂場のある辺りから川が地下に潜ってるだろ？ここはそのずっと下流側だ。その水脈が岩にぶつかって一部湧き出してる

場所なんだ。

砂で濾された水だからとても澄んでいるし、地下水脈は豊かで何より精霊が棲んでいる。

だから森に恵みを与えるこの湖は水が枯れることもなかった。

でも、そんなこととは思ってもよらない人間たちからすれば、ここは、とても神秘的な、すべてを清めてくれる場所に見えただろうね」

マリエラは最初の夢を思い出した。まだ未熟な人間たちが飢餓の穢れを被いに來た夢だ。

「だから、ここに穢れを被いにきたんですね？」

マリエラの問いかけに師匠は静かに頷いた。

「飢饉が訪れるたび、病魔に襲われるたび、様々な厄災に苛まれるたびに、人間たちは森を越えてこの湖へ穢れを清めにやってきて、そうして生き延びてきた」

廊下の突き当りにある扉に手を掛けたフレイジージャは、そういうと、ちらと視線を庭園へと向けた。つられて庭園を振り返ったマリエラは、庭園の様子が先ほどとは全く違っていることに気が付いた。

季節どころの話ではない。美しい庭園だったその場所は、先ほどの話から連想するような、深く、薄暗く、けれど荘嚴な雰囲気のある森へと変貌していたのだから。

「さあ、中へ」

フレイジージャにいざなわれるまま、ぐぐった扉の先は、左右の壁が天井までびっしりと本で埋め尽くされた巨大な書庫だった。

広い廊下の真ん中にも所狭しと大きささまざまな本棚が並んでいて、床にもたくさんの本が山積みになっている。

「これは壮観ですな！」

文学に多少の嗜みがありそうなグランドルは口髭を引っ張りながら豊かな蔵書に目を見張り、エロ本以外の本など、広げたら3秒で寝るであろうエドガンは立ち込める紙とインクの匂いに、本を手にすらしていないのに眠そうに大あくびをしている。

ジークは両目で室内を見渡し、少し怪訝そうな表情をマリエラにむけていて、マリエラはなにか気付いているのか、軽く頷き返していた。

「帝都の人間はもう誰もこの湖の事を覚えちゃいないけどね、何度も何度も穢れを被いに来たせいで、道筋が定まってしまったんだ。穢れの流れる道がね。」

だから、帝都あたりで生じた穢れは、最早何もしなくても勝手にここへ流れて来る」

フレイジージャはいくつもの部屋を通り抜けながら話を続ける。扉を抜け、階段を上がり、あるいは下りて。どの部屋も大量の本で埋め尽くされた書庫で、たくさんの本があるということは認識できるのに、どれか一冊を認識しようとするやと文字がぼやけてしまったり、知らない文字に見えたりして、ここにどんな本が収められているのか、マリエラたちは知ることができない。

「ここは、どこよりも美しい湖に違いなかったけれど、穢れを癒やし清める奇跡の湖なんかじゃないのに。」

どンドン、どンドン、流れて溜まって、穢れの吹き溜まりになってしまった。

この森も生き物も、湖を抱くこの地ごと穢れを負って、魔の森になっちゃった」

「では、ここの湖の精霊殿は!？」

魔の森の成り立ちに驚く一同の沈黙を破ったのは、フランツだった。この神殿に入ってから誰よりも落ち着かない様子で、ゆっくりと話しながら歩くフレイジージャに焦れた様子で問いかける。

「問題ないよ。そう、問題はなかったんだよ。」

精霊も、魔物も。穢れがあろうとなかろうと。

知っているだろう？ 雨が降れば大地は潤い、干上がれば命は尽きる。

精霊はただあるがままを受け入れる。

穢れがあればそれを宿してゆつくりと地脈に還していくだけだ。

穢れが溜まり過ぎれば魔物が大量発生し、人里を襲うけれど、それは疫病が流行ったり飢餓が訪れたりするのと、そう変わるものではないんだ。

穢れの持つ思念に呑み込まれて、正気を失ってしまうことになってもね。森の魔物も精霊も、老いた人が忘我の末に生を終えるのと変わらないと、ただただ受け入れるだけなんだよ。

だから、湖の精霊にしてみれば、何の問題もなかったんだよ。」

フレイジージャは立ち止まり、フランツの方をゆつくりと振り返った。

「フランツ、お前の心配も憤りも、それは人間の価値観だ。」

わかるだろう？ 精霊とは本来そういうものなのだから。

でもね、いやだと思ったやつがいたんだ。

“清廉で清浄で穢れなき姿を取り戻したい、正気の貴方と共に在りたい”

そんなことを、願った者がね。」

フレイジージャは両手を広げる。

その姿は炎に照らし出されたように赤く輝いていて、マリエラたちはいつの間にか辺りがみとおせないほどに薄暗くなっていることに気が付いた。

近くの本は照らし出されて微かに浮かび上がっているけれど、今いる場所はどれほどの広さがあるのか。先ほどまで通り抜けて来たはずなのに、果てのない広大な広間にいるような気持ちになる。

「さあ、マリエラ。魔の森のいと深き場所へ辿り着きし我が愛弟子よ。

私が導けるのはここまでだ。

ここが中心。ここが真相。

ここに真理はあるけれど、知識とは己が何を知らぬかさえ分からぬ者には、暗闇で見る本に等しく、何の導も与えはしない。

さあ、答えを示せ。

この場所がどこなのか、この世界が何なのか。

お前が得てきた全てをもって、出口へ続く鍵を差し出せ」

風もないのに広がる髪が、燃える炎を思わせる。

辺りはすでに真っ暗で、フレイジージャ以外、ジークの姿さえマリエラには見ることができない。

爛々と輝く瞳が、その細い瞳孔が、フレイジージャを得体のしれぬ存在のように思わせた。

### 32・魔の森の由来（後書き）

ざっくりまとめ…答え合わせの時間。 師匠「ここ、どこだ？」

### 33・記憶の保管庫

「脅かしたって無駄ですよ」

しかしマリエラは、いつもの調子で師匠に応じる。

「我らの領域も何も、ここは世界の記憶なんでしょう？」  
アカシックレコード

その答えが正しいことを示すように、真つ暗だった部屋には次々と明かりが灯り、ジークたちの姿も、壁面を書物が埋め尽くす部屋の様子も、元通りに見えるようになった。

「マリエラ！？　ここが？」

マリエラの答えに一番に反応したのは、書庫に入ったあたりから怪訝そうにあたりを見渡していたジークだった。彼の『精霊眼』には、周りがただの本の山には見えなかったのだらう。

「うん。たぶんね、ジーク。」

どうやったかは分かりませんが、今の湖の精霊さんがどうなっているのかも分からないですけど、アカシックレコード世界の記憶になら、正気の湖の精霊さんの記憶もあるはずですよ。魔の森の地脈を統べる湖の精霊、リユーロパー ज्याの記憶が」

マリエラがその名を口にした瞬間、どうと風が吹き抜けた。正しく鍵が差し出され、そして扉が開いたのだ。

書棚に収まりきらずにそこに置かれた本がバラバラとめくれ、風の強さにページがちぎれて何枚も舞い飛んでいく。

まるで木々の間を吹き抜ける突風に、木の葉が舞飛び運ばれていくようだ。

予想もしない強い風に、マリエラたちが思わず目を閉じ、そして再び開いた時にはそこは今までいた書庫のような場所ではなくて、深い森の中だった。

マリエラたちのよく知る魔の森の木々は苦痛に身を擦るように幹や枝がねじれ、木々の葉はどこかくすんで薄暗いけれど、この緑は真っ直ぐ光を求めて伸びていて、深い緑に見る者の心が洗われていくようだ。

木々に囲まれるようにマリエラたちの前に広がっているのは、ひどく凪いだ神秘的な湖。

その湖面は先ほどの突風が嘘のように、さざ波さえもたつてはいなくて、周囲の森を映し込んでまるで足の下にも森が広がっているようだ。

深い森に横たわる湖。

それは、今までいた水の世界よりも、魔の森よりもずっと正常な自然の光景だったけれど、マリエラたちの目にはそのどれよりも神秘的な光景に見えた。

「こここそ、私の探し求めた……」

「フ란ツ！」

ふらりと湖に向かって歩き出したフ란ツの腕にユーリケがしがみ付く。手を取られ正気に返ったフ란ツは「ユーリケ、すまん。大丈夫だ」とつぶやいたけれど、その目は湖から、正確にはその中心に立つ人影から離すことができなかった。



「リユーロパージャ。久しぶりだね」

湖の精霊に話しかけるフレイジージャの声は、嬉しそうにも悲しそうにも聞こえる。

マリエラたちに背を向けたフレイジージャがどんな表情をしているのかは、リユーロパージャ以外誰にも見ることはできないけれど、湖のほとりに佇んで手を伸ばすその姿にマリエラは、なんだかとても切ない気持ちになった。

炎のよ、久しいと思うほどの時を私のために使ったか

静かな声だ。岩間を糸のように流れ落ちる滝のような真っ直ぐな髪は湖面にまで広がり水と一体になっていて、男性とも女性ともつかない中性的な顔立ちを一層引き立てている。

全ての穢れを被えたわけではなかったのか、最初に夢で見たような透き通るような色合いではなくて、夜のせせらぎのような黒とも紺とも思える深い色に染まった髪は、リユーロパージャを清らかな水のような無味の物ではなく、どこか生き物然とした温度を与えているようにマリエラには思えた。

落ちていきそうな深い淵を思わせるリユーロパージャの瞳がフレイジージャからマリエラに、そしてジーク、フランツ、エドガンたちを順番に映していく。

人の子と共に、この身の穢れを被ったか。お前は昔から人が好きよな

「うん。あたしの弟子とその仲間だよ。識しっているだろ？ みんなとてもいい子だ」

久方ぶりの逢瀬。

静かな湖畔の、二人の世界。

何人も邪魔することは許されないような、近づくだけで壊れてしまいそうな、繊細なガラス細工のような光景。

そんな、呼吸さえ忘れてしまいそうな空気を、全く読まずに破って割って入ってきたのは、やっぱり我らがエドガンだった。

「ええと、そちらの美しい人は、フレイジージャさんのお姉さんかなにかでしょうか？」

さすがはエロガン。彼にとっての最重要事項は、リユーロパー ज्याの性別とフレイジージャとの関係らしい。

「空気読めよエドガン」

「ホント、サイテーだし」

「人生諦めが肝心ですぞ」

ジークが慌てて止めに入り、ユーリケが氷の視線を送り、格蘭ドルにまで止めを刺される中、フレイジージャはエドガンの方を振り返る。

「精霊には本来性別なんてないよ」

にやりと笑うその表情は、マリエラのよく知る師匠の顔で、そのことにマリエラはなぜかとても安堵した。この笑顔を浮かばせたのが、エドガンの空気を読まない一言ならば、エドガンの猿属性もなかなか役に立つものだ。

「逢瀬の邪魔は心苦しいが、できればご説明頂けまいか。ここが世界カシクレコートの記憶と言われても、非才の身には理解の追いつくものではありません」

場の空気が変わったことを幸いと言葉をつづけたのはフランツだ。その言葉のはしばしに湖の精霊、リユーロパー ज्याに対する敬意の念が込められていて、その手を握るユーリケは不安そうにフランツを見上げている。

「説明と言つてもねー。んー、マリエラ、説明してやんな」

恐らくフレイジージャにしてみれば、フランツたちが何が分からないのかピンと来ていないのだろう。彼女にとっては、ここも人の暮らす世界も等しく当たり前前の世界で、彷徨い人の疑念に想像が及ばないらしい。

対応を丸投げされたマリエラは、あごに人差し指をあてて「んー」と少し考えた後、アカシックレコード世界の記憶について説明を始めた。

「ええと、アカシックレコード世界の記憶というのは、世界のあらゆる情報が記録された場所？ みたいなもので、鑑定スキルはここにアクセスしてるんだって言われてます」

「情報？ では、我々のこの肉体は実在していないのか？」

しどろもどろとしたマリエラの説明にフランツの鋭い質問が飛び、途端にマリエラは「ええと……」と口ごもる。

「あー、正確には、アカシックレコード世界の記憶にあるリユーロパー ज्याの情報を核にして、お前たちの暮らす現実世界に固定化した空間な。だから、その体は本物だし、ここは時間の流れも違ってる」

師匠の追加説明は、さらに分かったような、深く考えるとサツパリ分らないようなものだけれど、「ほら、世界って隔たってるように見えても連続してるから」と言われてしまうと、傾げた首をそのまま前に倒して頷いてしまつ。

「じゃあ、わしらの居たあの塔は？ 見覚えのあるもんが転がってたぜ。大したモンじゃねえけどな、人の記憶を形にすんのはいい趣味とはいえねえぜ」

そう言って苦言を呈したのはドニーノだ。

マリエラたちと合流した時、ドニーノは記憶を覗かれるのを拒んでいたけれど、目覚めた塔を調べて何か気付いていたのかもしれない。

「ドニーノは見た目に寄らずシャイなんだね。ふふ、そんなに睨むもんじゃないよ。」

来客なんて想定してなかったからさ、お前たちがここに居られるようにするには、記憶の塔に送るのが一番確実だったんだよ。

アカシックレコード  
世界の記憶にはあらゆる情報があるけどね、だからってそれら全てが得られるわけじゃない。

異国の言葉で同時に何十人もが話す内容を理解なんてできないだろ？ そんなのただの騒音と変わらない。騒音は慣れてしまえば気にならなくなるもんだ。

そんなうるさい音の中でも、名前を呼ばれたら聞き分けられる。

お前たちが知っている、馴染んだところから繋ぎ合わせて、お前たちがここに居られるようにしたんだよ」

どうやら人数分あったやたらと高い塔にも、マリエラたちとこの世界を繋ぐ役目があったらしい。

「ギャッフ、ガッフ」

言葉の分からないクーだけが、マイペースに湖の水を飲んでいて、それを見たフレイジージャが「お前の記憶は塔にするほどなかったからな、一番苦労したんだよ」と笑う。

「黒い魔物が記憶を盗っていったのは、アカシックレコード世界の記憶の情報を蓄積する性質ゆえということですか……？」

「取り返した記憶は、あたしが夢を通じて返したけどね。まだ戻ってない分も、ちゃんとあるから安心しな」  
理解の早いジークの問いに、記憶は戻るとフレイジージャが答える。

「エドガンの記憶はそのままでもいいし」

「ユーリケ、おま、オレのめくるめく愛のメモリーが失われるとか人類の損失だろ！」

「そのメモリー、フレイ様に見られていいのか？」

「はっ！ ジークお前賢いな！ ……うわ、めっちゃ迷っわー」

ユーリケのいつもの冷たい一言に、エドガンとジークが何やらひそひそ話しているが、フレイジージャはおろかマリエラにまでまきこえた。フレイジージャとリユーロパージャは顔を見合わせて微笑んでいるから、エドガン劇場を楽しんでくれているらしい。

「じゃあ、1階と2階の錬金術師の工房は、もしかして《ライブラリ》ですか？」

マリエラの質問に、フレイジージャが頷く。

「《ライブラリ》も世界アカシックレコードの記憶の一部なんだ。

世界には色んな知識が溢れてて、知りたいことはそれなりに入手できるけれど、全く知らないことは知りようがない。

海の向こうに大陸があることを知らなければ、そこに異なる民族が住み、異なる言葉や文化を持つてることだって想像もつかない。人間が知っていることなんて、世界のほんのちよびつとだけで、自分が何を知らないのかさえ分からないんだからね。

《ライブラリ》はそんな情報の海から錬金術関連の限られたもの

だけ、錬金術スキルを介して閲覧できるものなんだ」

師匠の説明にマリエラはなるほどと頷く。

「つまり、外郭の1、2階は《ライブラリ》、3階以上と塔は私たちの記憶が強く影響していたわけですね。

それで、1、2階に飢餓や疫病の記憶がいたのか……。

師匠、あれが倒れた後もせつせと燃やしてみましたもんね。

あと、たくさん倒すと朝が来て世界に水が来たのって、穢れが減ってリユーロパー ज्याさんが正気に戻ったからなんじゃ？」

マリエラの解説に、師匠がぼかんと口を開けている。

「……マリエラが、賢くなってる……！！！」

絞り出すように吐き出された、師匠の失礼な台詞。さらに大変残念なことに、ユーリケたちだけでなくジークまでもがフレイジージャの発言に同意するようにうんうんと頷いている。

マリエラは「しつれない」と口では言っているけれど、口の端が笑顔の形に上がっていて、かなり嬉しかったのがバレバレだ。

「ふふーん。私だってですね、師匠が迷宮を斃して迷宮都市を助けるためだけに、生きてきたわけじゃないことは気が付いてたんです。！」

迷宮都市を助けてくれたのは、ついだったのか、師匠の目的のための手段の一つだったのかは分からないですけど。

ずっとね、師匠が別れる前に言っていた言葉が気になっていましたよ。“生きてる間にもう一度会える”ってやつ。そっか、《ライブラリ》に錬金術師。そういうことだったのか……。」

マリエラの言葉に師匠は気まずそうに視線を逸らす。

「いいんですよ。本当に死ぬ直前のつもりだったんでしょ？ だったら何の問題もないじゃないですか。でもね、水臭いですよ。話して欲しかったし、他の事だって、もっとたくさんお話したかった。何回も会ってくれてもいいじゃないですか」

「うん、マリエラ、ごめんな」

何のことが分からないといった表情のジークたちを見て、マリエラは笑う。

「ほら、迷宮の最深部で、師匠が私に錬金術の経験値をくれたでしょう？ それと同じことをね、かつての師匠の弟子たちは、皆死ぬ前に師匠にしてきたんだよ。そして私も」

「どうしてそんなことを……」

その答えは一つしかないだろう。

「湖の精霊の穢れを祓うために、ですよね？ 師匠」

そう言ったマリエラの顔は、いつか自分の錬金術の経験を持ち去るフレイジージャを咎める様子は微塵もなく、そのありのままを受け入れる精霊の微笑みのようだった。

33・記憶の保管庫（後書き）

ぞっくりまとめアカシックレコード・世界の記憶の水は飲める。



### 34 炎の道程

かつて、人の心を持ってしまった炎の精霊は、湖の精霊を助けるための方法を必死になって模索した。

けれど、世界と共にただあるだけの肉体を持たない存在は、自ら世界に干渉し変革していく力を持たない。そこに灯った炎を掻き立て焼き尽くせたとしても、穢れに染まった湖の精霊を清めることも、今なお流れ込んでくる穢れを止めることさえできない。

だから、彼女は自らの炎で焼き滅ぼした数多の人間を糧に受肉を果たし、精霊でないものとしてこの世に有限の生を得た。

肉の体を得たフレイジーは、炎と共にただあることはできなくなつたが、供物と引き換えに精霊の力を借りることはできたとし、何より己の意思を心に抱き、己の意思で行動し、世界に干渉する力を得た。

精霊のような生じることと消え去ることもあいまいで無限とも思える存在でなく、生と死が明確に定められた存在になつた代わりに、アカシックレコード精霊として長く世界を見つめた彼女は、世界の記憶という人では到底許容できない情報の奔流さえも受け流し、断片的ではあつたけれど望みをかなえるために必要な手順を知ることができた。

それは、時折ひらりと眼前に舞い落ちた落ち葉に一片の詩が刻まれていたような、偶発的で断片的なものであつたけれど、フレイジーはそれに従いこれまで過ごしてきたのだ。

精霊であつた影響か、人よりはるかに老いにくい肉体であつたけ

れど、今のフレイジージャの命には限りがある。だから、人の世に在る必要のない間は、仮死の眠りで肉体を離れ、この湖の精霊の世界で穢れの浄化に勤めた。

そして為すべきことを得た時だけ目覚めて、人の世に干渉してきたのだ。

例えばエンダルジア王国末期にマリエラを弟子にし育てたり、今の世に再び目覚めてマリエラたちを迷宮の最深部に導いたことも、穢れた地脈を浄化する、その方法に至るために必要なことだったのだろう。

「エリクサーは迷宮の核の穢れを取り除き、作り上げられる至高の秘薬。それに至れたなら、この地脈を浄化する方法も知れると思っただけだ……」

フレイジージャは寂しそうに笑う。アカシックレコード世界の記憶から得られる情報は断片的で、すべてを見通せるわけではないのだ。リユーロページヤを救うという物語を読んでいるようなものだ。ページをめくるごとに書かれた内容を実行しているだけで、物語の顛末は分からないし、ページを進めることさえ自分の意思ではままならない。

「錬金術の経験は、死ぬ前だったらむしろ活用してほしいくらいで今だって、いくらでも協力したいんですけど……」

「すみません。確かにエリクサーは地脈の核の穢れを還して作りましたけど、還した先は地脈なので……」

マリエラの答えも歯切れのいいものではない。穢れを移したただけの話で、浄化したわけではないのだ。

「いや、十分だよ。マリエラたちが来てくれて、黒い魔物を散々焼

き払ってくれたおかげで、溜まっていた穢れはほとんどきれいになくなったんだ。

リユーロパー ज्याとも久しぶりに話げできた。

夜は穢れが、昼は水が邪魔してなかなかここまで来られなかったんだ」

この逢瀬のひと時を私からも礼を言おう。フレイジー ज्याの弟子よ

人間のせいで穢れに染まり、正気さえ失っていたというのに、リユーロパー ज्याは人を恨んだりはないのだろうか。

“人が人を恨むのだ”

夢で見たそんな言葉そのままに、穢れのはれたリユーロパー ज्याはマリエラをフレイジー ज्याの弟子として受け入れている。

「でも、新しい穢れは相変わらず流れ込んでくるんでしょう？」

フレイジー ज्याが助けた精霊は、穢れの吹き溜まりに宿っているのだ。マリエラたちが黒い魔物を倒したおかげで今までの穢れは随分浄化されたとしても、あの湖と共に在る限り、再び穢れてこの世界はこれから幾度も夜の闇に沈むのだろう。

アカシックレコード世界の記憶に記されたリユーロパー ज्याの記憶につながるこの世界では、幾度正気を失っても穢れさえ被えれば正気を取り戻せるだろう。

そうやって、いつか全ての穢れとその根源を被いさり、リユーロパー ज्याを助ける方法を得るために、フレイジー ज्याは今まで長い長い時間を生きてきたのだ。

「リユーロをここから連れ出せるのが、今の時代じゃなかったただけの話だ。」

方法はきつと見つかる。必ずあたしが見つけてみせる。  
そんな顔するなよ、マリエラ。

あたしは長く生きてきて、これからもっと生きられる。

お前の子供や孫たち、その子々孫々にだって会えるかもしれない  
ね。

人と関わり世界の移り変わりを見守っていくのは、とても楽しい  
ものなんだ」

あの精霊が、この地脈に縛られた湖の精霊である限り、助けるこ  
とはかなわない。

少なくとも、今、その方法は存在しない。

それを知っても、フレイジージャはいつもの笑顔で笑ってみせる。

よく知るいつもの師匠の笑い顔なのに、マリエラは胸が痛くてそ  
の顔を見続けることができなかった。

「……さあ、そろそろ帰る時間だよ。

帰りの道案内は、その覗き魔精霊に頼もうじゃないか。

でといで、イルミナリア。燃やすよ？

……なんだい？ 顕現する力もないのか。ジーク、ちょっと魔力  
を分けてやんな」

師匠の視線がジークの背負った荷物に移る。

釣られて一同は、ジークが背負い袋から取り出した大きな瓶に視  
線を移した。

「え？ スラーケン？ っていうか、なんでこんなにでつかくなっ  
てるの！？ あと、その枝なに！？」

「ええと、マリエラ。説明するタイミングを逃したんだが、これに  
は訳がだな……」

ジークの背負い袋の大半を占めていたのは、100倍くらいに膨れ上がったスライムの入った瓶だった。両手のひらに収まりそうな可愛らしい瓶の中のスライム合成生物だったのに、今じゃ樽か風呂桶が必要になりそうだ。

巨大スライム再来だ。こんなサイズの軟体生物など、正直可愛いとは思えない。

そして、核は傷つけていないようだがその上部には二枚の葉を付けた聖樹の枝が突き刺さって、ぴこぴこ揺れている。

驚くマリエラに、『精霊眼』から聖樹の枝に魔力を送りながらジークが言い訳じみた説明を始める。

「スラーケンもイルミナリアも、マリエラの魔力に馴染んでるだろ？ だからこうしてイルミナリアの枝を差したらな……」

私が操って動かすことができるのよ！

「スラーケンが喋った！？ じゃなくて、その声、イルミナリア！？」

ジークの魔力を貰ったおかげか、スラーケンの頭に刺さった枝の先端に、親指サイズのイルミナリアが立っていた。

「ここへもイルミナリアに案内してもらったんだ」

魔の森には聖樹が何本も生えてるからね！ 聖樹ネットワークでマリエラの位置を把握したわけ。すごいでしょ？

「その、な。マリエラには悪いと思ったんだが、迷宮の湖の底から採ってきて欲しいものがあった……」。

イルミナリアと相談して、こうやって採ってきてもらっただが、帰ってきたらスラーケンの体が……」

久しぶりの外にはしゃいじゃってさ、この子。

ちよーつと暴走しちゃって、餌食べ過ぎちゃったんだわー。

クラーケン入ってるから、水の中じゃ結構やるのよね、この子

ぴこぴこ。

スラーケンに刺さった聖樹の枝が自慢げに揺れる。

ちよ、揺らさないでよ、コラ！

などとイルミナリアが怒っているから、えっへんとばかりに枝を揺らしているのはスラーケンの方らしい。イルミナリアの枝が刺さっていると、意思の疎通も図れるのだろうか。

「は!？」

衝撃的なシリアスな空気が緩んだのもつかの間。

聞いたことがないほど低くて不機嫌そうなマリエラの声が辺りに響いた。

その声に宿った怒りの強さに、ジークはもちろんイルミナリアも、スラーケンさえ枝を揺らすのを止めてピシリと動きを止めている。

「なに、勝手なことやってるのかな？ ジークにイルミナリア。

誰に断ってスラーケンを連れ出したのかな？

しかも迷宮？ 食べ過ぎたって、魔物がいたってことでしょ？

そんな危ないところに！

それにスラーケンはさ、核に従属の魔法陣が刻んであるから、私が魔力をあげないと死んじゃうんだよ!？ 知ってるよね!？」

マリエラが、ものすごく怒っている。

ジークが言い訳をしようとちらりと視線をマリエラに向け、キョキョーッと眉毛を吊り上げた激おこの表情に、さっと視線をそらしている。

マリエラの背後で表情が見えていないはずのフレイジージャさえ、なぜか姿勢を正して先ほどまでの会話を一時中断するほどだ。

普段温和なマリエラが怒るとこれほど怖いのか……。

『精霊眼』をもって生まれて、蝶よ花よと育てられたジークは坊やなものだから、パパにだってこれほど怒られたことは無かったのだ。

借金奴隷時代の主人には、めちゃくちゃな目に遭わされたけれど、それとこれとは次元が違う。かつてジークの『精霊眼』を奪ったワイバーンより、今日のマリエラは怖いかもしれない。

「何か言ったら!？」

「お、俺が悪かった!」

ごめんなさい!

ぴこぴこり。

マリエラの一喝で、そろって頭を下げる二人? と一匹、いやー枝か。

「お説教は後でたっぷりするとして……、スラーケン、魔力だよー。お腹空いたよね? この二人には、しばらくご飯と《命の雫》入りのお水抜くからね。

ああ、どうしよう……。こんなに大きくなっちゃって。

こんなサイズじゃ『木漏れ日』で飼えないよ……」

“ご飯抜き”の衝撃に、腰を90度に折り曲げて頭を下げたまま

固まってしまったジークとイルミナリアを無視したまま、マリエラは巨大な瓶越しにスラーケンに魔力を与える。

どちらも地脈から吸い上げたり外食したりと、自分で供給できるのだけれど、マリエラから貰う食事はやはり特別おいしいらしい。

スラーケンは刺さったままの聖樹の枝をぴっこぴここと揺らしまくって喜んでいるから、お腹を空かせていたのだろう。

よく見ると、瓶の底にジークが大事に保管していたマリエラグッズの溶け残りが溜まっているから、魔力の移ったマリエラグッズやポーションを餌にもらっていたのだろうが、魔力はどんどん抜けていくから、とても足りなかったろう。ジークのマリエラグッズはおそらくスラーケンに食べつくされてしまっただろうが、自業自得なのでジークとセットで放置する。

あのね、マリエラ。核は魔力不足で小さいままだから、体はちよん切ればもとに戻るよ

「ちよん切るって、そんなことして大丈夫なの、イルミナリア？」

うん。魔力をちゃんと与えてあげたら、死んだりしないよ！

マリエラの役に立って、“ご飯抜き”を回避したいイルミナリアがせっせと情報を提供する。

「そっかー、良かった」

一度は激怒したけれど、スラーケンは無事で、ちゃんと元にも戻るらしい。

そこまで聞いて、ちょっと安心したマリエラは、ようやく周囲の視線に気付いて現状を思い出した。



「師匠、ごめんなさい。こんな状況なのに……」

「いやー、マリエラもなかなかやるじゃないか！ さすがあたしの弟子だね！」

炎のが人の子は面白いと言うておったが、確かに愉快的時間であった

謝るマリエラに向けられた二人の言葉は、まるで別れのあいさつで、マリエラは己の無力を思い知る。

(リユーロパージャさんが、この地脈に縛られた湖の精霊である限り、助けられないんだ……)

その視界の端に映っているのは、スラーケンの枝の先でマリエラの怒りがそれたとホツとしているイルミナリアだ。

生えている場所を動けない樹木の精霊だというのに、人のペットを勝手に遠隔操作して、聖樹を離れてトラベルだ。

(しつかり叱っておかないと、また勝手にお出かけしかねないな。師匠だって、元炎の精霊なのにいつとも勝手にどっかに行くし。

勝手だし、無責任だし、受肉したり憑依したり、存在自体いい加減だし。

精霊ってそういうものなのかな……って、あれ？)

マリエラは、スラーケンとイルミナリアを見、フレイジージャとリユーロパージャを順に見る。

「リユーロパージャさんて、ここの湖に棲んでいるけど、湖の精霊っていうか、水の精霊さんですよね？」

そうだが？

リユーロパー ज्याの回答に、マリエラは浮かんだ疑問を口にした。

### 34 炎の道程（後書き）

ざっくりまとめ：ジークは坊やなものであるから。

### 35・精霊なるもの

「リユーロパージャさん、精霊やめちゃダメなんですか？」

マリエラは思ったままを口にした。

相手が人間だったなら、「人間やめちゃえば？」なんてとても言えはしないのだけれど、マリエラの師匠フレイジージャは少々規格外ではあるが、人間に近い存在になっているし、精霊としては年若いイルミナリアでさえ聖樹の精霊だというのに、枝を媒介にスライムに憑依してこんなところまでお出かけしている。

そもそも、ジークの先祖は森の精霊の女王エンダルジアで、最後は精霊として地脈の管理者になったけれど、狩人と子供までなしたのだから、狩人と暮らしていた頃は人間に近い存在だったに違いない。

「精霊って、結構いい加減ですよ、存在ってというか、あり方って  
いうか？」

存在が、いい加減……

マリエラの齒に衣着せぬ言い方に、流石のリユーロパージャも絶句している。

たまたまマリエラの周りの精霊が、変り者ぞろいだったただで、精霊全てがそうだとは限らないのだが。

「いや、リユーロパージャさんも、師匠と仲良しだし。

なんで、受肉してこの湖から移動しないのかなって……」

帝都の穢れは、この湖へと流れ込む。そう道ができているから。

リユーロパージャが、この地脈に縛られた湖の精霊である限り、助けることはかなわない。

けれど、リユーロパージャがこの湖を出て行けば……。

「!!! その手があったか!」

だが、私はこの地脈の管理を……

なぜ今まで気づかなかったのかと手を打つフレイジージャに、優等生な回答をするリユーロパージャ。

どうやら精霊全部がいい加減ではないらしい。

「迷宮都市は、今は管理者いませんよ? あと、師匠もスゴイ精霊だったみたいですけど、帝都の地脈を管理してたんですか?」

「うんにゃ。あたし、スゴかったんだけどな、地脈の管理とかメンドイことしてないし。」

帝都はそれっぽいのを人間が埋めて、なんか安定させてるな」

フレイジージャの回答は、おおそマリエラの予想通りだ。一部聞いてはいけない情報が混じっていた気もするけれど、そこは「やっぱり、師匠がそんな大変そうなことするはずないと思ってたんですよ」とスルーする。

「ほら、今時、管理者不在とかよくあるみたいですよ」

む、だが……

地脈の管理を手放すなんて、考えたこともなかったリユーロパージャは、マリエラの提案に思考が追いついていない様子だ。

「リユーロパー ज्याさんが地脈の管理者を止めるとどうなるんですか？ 穢れは魔の森みんな分担してるんですよね？」

湖に流れ込んだ穢れが、わだかまったり流れたり、均等に行き渡らなくなるうな。

穢れの溜まりから魔物が多く湧き出して、スタンピード魔の森の氾濫がおこるやもしれん

「でも、二百年前は、リユーロパー ज्याさんがいたのに魔の森の氾濫スタンピードおこりましたよね？」

穢れが過ぎれば、魔物どもが溢れましょう。

エンダルジアとの因果もあって、抑えの利かぬ量となったのだ

「つまり、管理者がいないと、こまめに穢れが溜まって、ずっと小規模な魔物の群れが発生するということですか？」

そうなるうな

リユーロパー ज्याとマリエラの会話を聞いたジークは、エドガンと小声で会話する。

「それなら、帝都や迷宮都市もじゅうぶん対処できると思うが……。どう思う、エドガン」

「んあ？ ま、いけんじゃね？ 迷宮都市が人の領地になってから、オーク祭りができねえってハーゲイも嘆いてたし、むしろ、いんじやね？」

人間への配慮を見せるリユーロパー ज्याの懸念事項は、今の迷宮都市にとっては新たな祭りの予兆に過ぎない。迷宮都市の人間は、少々たくましくなり過ぎた。

オーク祭りを思い出し、「旨い魔物がくるといいな！」などと楽しそうな表情を浮かべる人間たちに、リユーロパー ज्याは理解でき

ないといった表情で「祭り？」とつぶやき、フレイジージャは「酒だ！」と嬉しそうにする。

「じゃー、穢れは何かなるとして、地脈の管理自体も、この森の精霊たちで分担できますよね？ 迷宮都市もそうしてますもん。

っていつか、イルミナリア。この森にも、たくさん聖樹あるんだよね？

そうやって私を探したって言うてたもんね。

ってことは、イルミナリアみたいな精霊もいっぱいいるよね？」

いるわよ。エンダルジア様ほど強い精霊はいないけど、数だけならいっぱいいるし、地脈にそって生えてるわ。

みんな、のんびり屋だけどね。

根っこが地脈の深いところで繋がってるから、管理者がいなくなったら枯れたくないって頑張って管理するんじゃない？

イルミナリアの答えを聞いて、マリエラはリユーロパージャをじっと見る。

ひどく物言いたげな目だ。

目は口程に物を言うというけれど、「無理してワンオペすることなかったじゃないか」とか、「いなくても大丈夫みたいですよ」とか、「少しは師匠を見習って、いい加減に生きたらどうですか？」とか、口に出せない酷い台詞を視線で伝えているようだ。

「リユーロ、あたしと一緒に行くっ！」

それに対してフレイジージャの説得はシンプルだ。ぎぶぎぶと湖に入ってリユーロパージャにむかって両手を広げる。

フレイ。……私は

真っ直ぐにリユーロパージャと向き合うフレイジージャ。

その視線を避けるように、リユーロパージャは足元の湖を、その先に広がる森を見る。

マリエラたちには見えないけれど、森の中には獣や魔物、この魔の森に溢れるほどの生命たちがいるのだろう。

私は穢れを共に分け合ったこの森と魔物たちを、エンダルジアのように見捨てることはできぬよ

「うん。だったら森に暮らせばいい。大丈夫。あたし、森でも平気だし。でもさ、一人で背負い込むのはやめにしようよ」

リユーロパージャの選択は、かつて人間の狩人に恋をして、人間を選び魔物と隔絶する道を選んだエンダルジアと異なるものだ。長く魔の森で魔物たちと共に穢れに身を浸したゆえに、人に限りなく近づいたフレイジージャただ一人を選ぶことなどできはしない。

けれどその選択を、長くリユーロパージャに寄り添ったフレイジージャは当然なことと受け入れた。

「どうして気付かなかったんだろうね。

こんなに人間に近くなつて、アカシックレコード世界の記憶からたくさんの知識を得て賢者なんて呼ばれてたのに、あたしも根っこは精霊のままだったのかな。

リユーロが一人で穢れを背負い込むのを、何とかしたいって思っていたけど、リユーロが一人で地脈を統べているのは、そういうものだって疑問にも思わなかった。

森に火災が起こったら、そこに生えた樹木は燃えるしかない。それと似たようなものだって。

そういうものだって、思い込んでた。

きつと、この森に棲む精霊たちも同じように考えてるんだろうね。リユーロが地脈を管理して、流れてくる穢れの大半を受け止めて、この森全体で浄化する。



ずっとずっとそうだったから、これからもそうなんだろうって。正気を失うほどの思いを、リユーロはずっとしていたのにさ……」

「ごめんね、とフレイジージャが言葉を紡ぐより早く、リユーロパージャの手がフレイジージャの頬にふれる。

正気を失くしてつらかったのは、我ではなくてお主だろうに

リユーロパージャの手にフレイジージャが手を重ねると、触れた指先から波紋が広がる。人の形をとってはいても、リユーロパージャの体はただの水で、その感触は水そのものなのかもしれない。水面を撫ぜるようにフレイジージャの指先が動いて、ため息のような言葉を紡ぐ。

「ああ、リユーロに触れたいな……。もっと、ちゃんと。

リユーロは人にならなくていい。森の木々と魔物たちと一緒に、ずっと魔の森で暮らしていい。

穢れも地脈も、みんなで分かち合えばいい。

大丈夫、魔物はとても強い生き物で、この森の木々は若木ばかりじゃない。

もう、立派な大森林だ。リユーロが一人で背負い込まなくても、やっていけるに違いないよ」

フレイジージャの金の瞳にリユーロパージャが映って見える。

微笑みかけるその表情は、きらきらときらめく金の瞳のように輝いていて、はるかな昔に人間たちが暗闇を恐れて灯し掲げた燈火のようだ。リユーロパージャは小さな炎の精霊に初めて出会った日を思い出した。

あんなに小さな燈火だったのに、今は深い森の暗い水底に、こう

して光を届けてくれる。

そして、フレイジージャの背後からリユーロパージャを見つめるマリエラたち。

幾度も森を越えてこの湖へとやって来た人間たちと変わらない、けれどずっと遅しく生き抜く力を身に付けた彼ら。

…………… そうだな。助けはもう、必要ないのやもしれぬ

そして湖の精霊リユーロパージャは、己と世界の在り方に終止符を打つ決断をした。

35・精霊なるもの(後書き)

ざっくりまとめ：精霊の働き方改革

### 36・最後の選択

「ほんつとに、こんな材料でいいんですか!？」

仮初の肉体には、過分なほどだ

マリエラは、リユーロパージャから受肉用の材料を聞いて軽く頭を抱えていた。

「そうか？ あたしなんてリユーロを助けるには精霊のままじゃだめだーって思ってたなら、灰の中から産まれたぞ？ ももももーって感じで肉体が出来上がってくから、さすがのあたしも慌てたよ。

どうせならヒラヒラ着たいし、ちやほやされたいじゃないか。まあ、さすがはあたしっていうか、こんないい感じに仕上がったけどな!」

エンダルジア様は、狩人のことを「好き好き好きー」って思ってたなら人間の姿になってたらしいわよ？ まあ、私たちは聖樹に宿ってるから、初めから受肉してるって言えなくもないんだけど

くねくねとセクシーというよりはタコか何かのようなポーズを決めながら、ざっくりとした受肉体験談を語って聞かせるフレイジージャとイルミナリア。非常に貴重な話のはずが、どちらも優劣つけがたいほど残念だ。

特に師匠の“いい感じ”って、一体なんだ。メリハリボディーの美人なだけに、丸太ボディーのマリエラは余計に腹立たしさを感じてしまう。

いい加減な人だと思っていたけれど、師匠は産まれからしていい

加減だった。受肉するに至った経緯は結構シリアスだったはずだが、ヒラヒラを着てちやほやされたいだなんて、己の欲望に正直すぎやしないだろうか。

「やっぱり精霊って存在がいい加減だ……」

マリエラは、師匠という名の不思議生物に冷たい視線を投げかけながら、受肉の準備をするためにリユーロパージャに向き直った。

「ええと、段取りを確認しますね。」

まずは核を作って、そこにリユーロパージャさんの存在と魔力の一部を移し替える。核にさえ適応できれば肉体は結構融通が利いて、今回はスラーケンの膨張しちゃった粘体をちょん切って使う」

うむ、そうだな

うむ、と威厳のある返事をしてみせるリユーロパージャ。

「リユーロは真面目だから受肉の指定も細かいな」

などとフレイジージャは揶揄うけれど、こちらも随分な材料ではある。一気にいつもの雰囲気が変わってしまった中で、真面目に手順を確認しているのはマリエラだけだ。

湖の中心からマリエラたちのいる水辺までやってきたリユーロパージャを前にして、フランツはまたもやソワソワしだしてドニーノとグランドルに押さえられているし、フランツを気にして気もそぞろになってしまったユーリケは、調教スキルが甘くなってしまったのか、ご機嫌で湖の小魚を追いかけたラプトルのクーを連れ戻すのに必死だ。

こんな時こそ頼りにしたいジークはというと、

「フレイ様、おめでとうございます。リユーロ様、俺はマリエラさんとお付き合いさせていただいておりますジークムントと申します」などと満面の営業スマイルで好青年を装って、マリエラの育ての親の伴侶になるかもしれない相手に点数稼ぎを始めているし、その隣ではエドガンが、

「ええと、リユーロさんはフレイさんのハニー？　ハズ？　それとも二人一緒にオレとハグ！？」

といったもの調子で空騒ぎして、微妙にハズしてハブられている。

精霊に性別がないのなら、受肉の際に女性になればエロガンのには問題解決、オールオツケーということらしい。マリエラの耳元で「ニョタイカ、ニョタイカ」と変な鳴き声を上げていて実にうるさい。

ぐだぐだだ。

まるで迷宮都市の学校で、マリエラが受け持つ授業が始まる前のようなだ。

ぱん！　と大きな音が出るように手を打ち鳴らしたマリエラは、收拾がつかなくなりつつある一同に向かって「みんなちゅーもーく！　今から、核の作成はじめます」と、迷宮都市の学校で授業を始める時のように宣言した。

「えーと、リユーロパージャさんは長い間穢れに浸っていたので、核は人間の罪源をちよっぴり入れると合うんじゃないかということなんです。ということ、皆さんの記憶をちよっぴりずつ貰いたいそうです」

「罪源……？　記憶、とは記憶の石の事か？」

マリエラの説明を一番真面目に聞いていたフランツが口を開く。

水の精霊の役に立ちたい本能を抑えられずにいるのかも知れない。

うむ。特にお主の血の記憶は厄介だ。

血に宿り子々孫々に至るまで、水の精霊を求めさせるならば、

その『強欲』さ、我がために差し出すがよい

「はい、……はい。慈悲に感謝いたします」

血の記憶を差し出せば、どこかに辿り着きたいと渴望する衝動を失うことになるのだろう。この身の内から湧き上がり、己を突き動かす感情に。

この感情はとても厄介ではあるけれど、自分の骨格をなすような大切な物ではなからうか。

けれどフランツは、己が血の求める水の精霊と、隣で心配そうに自分を見上げるユーリケを順に見た後、記憶を差し出す覚悟を決めた。

「大丈夫だ、ユーリケ。自分の行き先は、自分の意思で決めて行ける。一緒に、考えてくれるだろう？」

「フランツ、もちろんだし！」

ユーリケはフランツの決めた答えに嬉しそうに頷いたあと、フランツの記憶を奪っていくユーロパー ज्याに感謝とほんの少しの怒りがこもった視線を向けた。

「ボクは何を差し出せばいいし？」

そう怒るな、獣の駆り手よ。小さき体に溢れる『憤怒』、それを少し頂こう。

どれ程人を嫌うっても、人の子は人と生きるもの。

もちっと、人を愛すがよからう

“隣の男だけでなくな”

そう続けようとしたリユーロパー ज्याの言葉を遮るように、ユーリケはあわてて「わかってるし！」と返事をした。

「それでは我々は何をお譲りしましょうかな？」

「余計な講釈はなしにしてくれな」

そう切り出したグランドルとドニーノに、リユーロパー ज्याは

『嫉妬』と『怠惰』を

と短く答えた。

温厚な紳士であるグランドルに『嫉妬』を、黒鉄輸送隊の装甲馬車のメンテナンスを行う勤勉なドニーノに『怠惰』を求めるとはいったいどういうことだろう。

ドニーノの塔は確認していないけれど、グランドルの塔には高価そうな酒瓶や香水瓶に色水や安物の香水が入っていたり、使い古された銀食器や衣類が置かれていたはずだ。そんな品々をみて、ユーリケが「見栄っ張り」だと評していたのをマリエラは覚えている。

解せないといった表情のマリエラの視線に、グランドルはほんの少しだけ困った顔をした。

「我が家は代々、盾戦士の名家でしてな。今も優れた盾スキルを受け継いでおるのでぞ。

しかし、曾祖父の代から虚弱な子しか得られなくなりました。

いくらスキルに優れていても、かような肉体で存分な働きはできません。ぬめものです。

血筋、名誉、体面などくだらぬものと、そう思えるようになるまでに随分時間を要したということですね」

いつもの様子でカイゼル髭を引っ張りながら、ほっほと笑うグラ



ンドル。

「ワシも似たようなもんだ。

器用貧乏って知ってるか？ 一通りのこたあ人並み以上にできたって、一流にやおよばねえ。

あーあ、やられた気分だけ、『怠惰』とはな。

分かつちやいたんだけどよ。必死になって、何かを極められなかつたってことをよ」

ドニーノはガジガジと頭を掻くと、「こんなもんでいいなら持つてってくれや」と言っただけ口を閉ざした。

人生経験のある年長者のトラウマを垣間見るのは、どうにも気まぐくなるものだ。

いきなり重苦しくなった空気をぶち壊すのは、やはり我らのエドガンだろう。

「オレは溢れる愛を贈るぜ！」

うむ、お主からは『色欲』をもらおう

「へ！？ 色欲！？」

「分かりやすいね」

「サイテーだし」

「よかつたな、エドガン！ お前の愛を受け取ってもらえるらしいぞ！」

分かりやすい展開に、納得顔のマリエラと相変わらずキツイコメントを添えるユーリケ。

そして、この場が収まれば後はどうでもいいとばかりに、適当に丸め込みにかかるジーク。

いつも通りの対応だ。実に友達がいがない。  
こづいうところ、若かりし日の悪癖が現れるものである。

そんなジークに対してリユーロパージャは。

ジークとやらには『傲慢』を頂こう

「ごうwまwんw。ジーク、おま、傲慢で。なに様おれ様おつか  
れ様〜てか？」

「黙れ、エロガン」

爆笑するエドガンに、唇をかみしめてうつむくジーク。

マリエラにまで、

「スラーケンを勝手に連れ出すのは良くないと思うな」  
と言われて、何も言えなくなってしまった。

「最後は私だね。私は何をあげればいいですか？」

『暴食』を

「ふえっ!?!」

最後にマリエラならぬマルエラのおほじほん暴食の記憶を差し出すことで人  
の罪源が七つ揃った。

これを核の一部にとリユーロパージャから渡されたのは、手のひ  
らサイズの地脈の欠片だった。迷宮の核ほどではないけれど、この  
湖の底で形作られたという地脈の欠片からは強い力と水の気配が感  
じられた。

その水の気配に強く惹かれているのは、フランツの血の『強欲』の記憶だ。記憶の石はリユーロパージャがマリエラたちの額に触れることで取り出すことができた。

「ここは世界アカシックレコードの記憶だからね。記憶の出し入れは容易なんだよ。記憶を貰うって言っても、黒い魔物がやったみたいに根こそぎ奪うわけじゃない。貰った後も情報としては残るから、生活に差しさわりはしないよ」

フレイジージャが説明したとおり、『暴食』おやじはたの記憶を抜かれてもジークたちが不在の間におやつを貪り食べていた事実をマリエラが忘れることはなかった。

ただ、その時食べたお菓子の詳細がおぼろげだったり、味を忘れてしまっていたり、どんな気持ちでいたのかを後から想像するような、どこか曖昧で他人事のような記憶に変化していた。

無事に戻れた後も、お菓子は食べなくなるのだろうが、心の穴に詰め込むように菓子を食うことはこの先ないのではないか。

マリエラはなんとなく、そのように感じていた。

そう言った感傷は、記憶を提供した全員が感じているのであろう。皆がマリエラの手にある地脈の欠片を静かに見つめる中で、マリエラは地脈の欠片に『強欲』の記憶を近づけていった。

「最初が一番難しいんだけどね、これだけ記憶の方から惹かれてくれば、後はすんなりいくだろう」

フレイジージャの語った通り、フランツの血に受け継がれてきた水の精霊を求める強い欲求は、水の気を持つ地脈の欠片にふれると、

水面に落ちた血の一滴が溶けて拡散するようにあっという間に溶けて混じった。

「次は、『憤怒』」

人よりも獣を好むユーリケの記憶も、相性としては悪くない。誰よりも心を許したフランチの記憶が先に溶け込んでいるのだから、こちらもすんなりと混じり合うことができた。

「思ったよりも順調だね。ここまでくれば、後はぐつと溶けやすくなる」

フレイジージャの話した通り、『嫉妬』『怠惰』『色欲』『傲慢』と人と人とのつながりを辿るように記憶の石は溶け込んでいった。

「最後に私の……。ねえ、師匠。これって、人間の良くない記憶なんでしょう？」

そんなもので核を作って、リユーロパージャさんはだいじょうぶなんですか。

魔の森に残るって言うていたけど、私たち人間の事、大嫌いにならないですか」

最後の『暴食』の記憶を加える前に、マリエラが手を止めフレイジージャに尋ねる。

自分たち人間の穢れのせいで、リユーロパージャは長い間苦しんだのだ。

人間を好きになって欲しいだなんて、とても頼めはしないのだけど、できれば嫌いにならないで欲しい。

「お前たちの記憶なら大丈夫さ。これは罪の記憶だけどね、穢れだけの記憶じゃない。

喜びも、悲しみも、誰かを思いやる心も全部入ってる。

人間のいいところも悪いところもひっくり返った思い出だから、  
うまくいくにちがいないよ」

心配するマリエラに対し、フレイジージャが笑顔で答える。  
自信満々だ。とてもいい笑顔だ。

(不安しかない……)

師匠の曇りのない笑みに、今までならばそういうものかと信じて  
しまったのだろうけれど、迷宮の最深部でエリクサーを錬成し、至  
高の錬金術師となったマリエラは騙されたりしないのだ。

「師匠、そんな感じでエリクサー作れるようになってるって言うて  
たけど、経験値ギリギリ足りなかったですよ？ リンクスがくれ  
た地脈の欠片がなかったらどうなっていたことが……」

「いや、あれはだな、その最後の奇跡込みでだな……」

「知りませーんー。てか、奇跡がなくても大丈夫なようにちゃんと  
したほうがいいと思いますー！」

折角受肉したリューロパージャさんが、人間の敵になっちゃった  
らどうするんですか？

師匠は今、人間に近いんですよ？

リューロパージャさんと熱いバトルでも繰り広げる気ですか！？  
それはそれで、迷宮都市が新たなピンチって感じじゃないですか  
！ダメですからね！」

「べぐ……、べぐの音もでない」

「口でべぐって言うてるし。師匠はほんとにもう」

なんとあのマリエラが、口で師匠を言い負かしている。今までの最大攻撃スキル《ご飯抜き》を上回る攻撃力だ。

これには坊やなジークも、一生マリエラの尻にしかれる覚悟を決めるしかないだろう。もっともこちらは自覚していないだけで、すでにキツチリ座布団状態なのだが。

弟子の言にも一理ある。何か善きものを核に加えるがよからうな

慎重なリューロパージャの一言に、うむと頷いたマリエラは、一体何が相応しいかとしばし思考を巡らせた。

### 36・最後の選択（後書き）

最後の《地脈の囁き》：リユーロパージャの核の最後の材料を決定します。

12/16 13:00時点で感想欄の回答が多いルートに進みます。

エンディングがちよっぴりだけ変わります。

1・一途にリユーロパージャさんのために頑張ってきた師匠の記憶を加えては？

2・ここは現役精霊の出番では？ 聖樹とか結構いい感じじゃないですか？

3・何か人と精霊の絆みたいなものは……。あ！ サラマンダーがくれた指輪はどうですか？

37・受肉（前書き）

3のサラマンダーの指輪が、追い上げました！



### 37・受肉

「善きもの……、善きもの……」

そんなもの、あつたっけ？　ときよろきよるあたりを見渡すマリエラ。

自らを善きものだと信じて疑わないのか、師匠とイルミナリアが半口を開けた笑顔でこつちを見ているが、この二人は良くも悪くも人間に毒されすぎていて、一緒に悪癖なんかも引き継いでしまいかねない。

今の段階でも個性が豊かすぎるメンバーの癖の強い部分を集めているのだ。最後のピースはもつと純粋なものがいいだろう。

「ギヤウー？」

周囲を見回すマリエラの視線にラプトルのクーが反応する。視線が合うと構ってもらえるかもと思うのか、期待に満ちた顔をするのがなんとも可愛らしい。

(言葉は通じなくても、こつというのがいいよね……。あ！)

マリエラは右手にはめた指輪に触れると、

「サラマンダーがくれた指輪はどうですか？　人と精霊の絆みたいなものがないと思うんです」

と、リユーロパージャに聞いてみた。

ふむ、人と精霊の絆というのは良い案だが……。

火と水とでは相性が悪い。その指輪も嫌がつていよう？

言われて指輪に手をかけると、マリエラの右手にはめた指輪は指に食い込んでしまったようにピクリとも動かない。

「ほんとだ、外れない……」

ギューツと指輪を引っ張るマリエラ。

うっかり太ったマルエラ時代も指輪が抜けなくなったのだけれど、今は抜けるどころか 回りもしない。

「あー、じゃあさ、赤竜倒した時の記憶とかどうよ？ マリエラがサラマンダーを呼び出して、ジークが騎乗して戦ったやつ。」

あんときの記憶をちょびっともらっただけなら、構わないだろ？

指輪の機能が損なわれるわけじゃない。これからもひいきにしてもらえるさ」

フレイジージャがそう言うと、サラマンダーも納得したのかようやくすぽんと指輪は抜けた。

くりくりくりんと指先に引っ掛けるようにして、フレイジージャが指輪を回すと指輪の軌跡が炎をまとう。小さな炎をまるで綿でも丸めるように指でこねると、「ほい」とマリエラに手渡した。サラマンダーの記憶とやはらは、おひさま色の小さな飴玉のようで、触ると小さな蜥蜴のお腹のようにふにりと柔らかく頼りない。

小さいくせにぽかぽかと温かいそれからは、マリエラのありったけの想いと魔力と共にジークを守りきったサラマンダーとの絆の強さが確かに感じられた。

皆の罪の記憶にマリエラの『暴食』の記憶を混ぜ込んだ後、『絆』の記憶を加えると、どことなく冷たく感じた核は、熱くも冷たくもない、居心地の良い温度になった。

ああ、いい仕上がりだ。これなら、人ともきつとつまくやれるだろう。感謝する

マリエラから出来上がった核を受け取ったリューロパージャは、感謝の言葉を口にした後くんと口から呑み込んで、核が口腔から喉を通って腹に落ちていくのに合わせるように、頭から崩れて水に還った。

「リューロ……」

リューロパージャの立っていた湖畔には、先ほどの核が落ちていて、フレイジージャはそれを拾うと、先に切り離しておいたスライケンの粘体の上にそつと乗せた。

ブルブルブルと振動を加えた水面が震えるように、核を中心に粘体が揺れ、振動によって沈み込むように核が中へと落ちていく。

粘体の中心まで核が移動すると、今度は水がせりあがるように粘体ごと核が盛り上がって、見る間に形を成し、先ほどまで水面に立っていたリューロパージャの姿をとった。

「リューロ！ ああ、やっと受肉したんだね！」

抱きつくフレイジージャの腕を、リューロパージャが受け止める。もう、水に沈み込むような頼りのない体ではない。

「ああ、フレイ。肉の体というものは、これほどまでに限りがあった不自由で、けれど自由に動けるものなのだな」

リューロパージャがその両手で初めて触れて抱きしめたものが、フレイジージャであったことが、マリエラにはなんだかとても嬉し

かった。

感動的な光景だ。マリエラの瞳がうるりと潤みそうになるほどだ。水の精霊の受肉という神秘的な光景然り、悠久の時の果てにようやく触れ合えた炎と水の精霊然り。

マリエラの瞳に映っているのは、深い森の美しい湖と、そこで抱き合う二人の人影。

これを美しいと言わずして、何を美しいというのだろうか。

バツクに流れる雑音が「ニヨタイカ、ニヨタイカ？」というエロ猿の妄言でさえなければ、本当に完ぺきだったに違いない。

「エドガンさんは『色欲』の記憶を渡したんじゃないんですか？」

「オレのアイデンティティーはそんなことじゃ失われなさい！」

森の湖さえ凍てつきそうなマリエラたちの視線など、気にも留めずにエドガンが答える。流石は氷結の階層やら冬のアーリマン温泉など、いくつもの極寒の地を野郎だけで乗り越えてきた男だ。メントルの防寒仕様が完璧だ。

「エドガンの記憶は『そんなにたくさんいららない』と断られたそうだぞ。エドガンもそろそろ別の所にアイデンティティーを求めたらどうだ？」

対するジークはなんだかまともなことを言っている。

いつものように「さすがはエドガンだ！ ブレないところはモテるだろうな！」などと、適当なことを言ったりしない。

他力本願ではあったが、傲慢さが鳴りを潜めて多少紳士になったらしい。

「で？ で？ リューロパージャさんは、ちゃんとニョタイカしたんだろ？ うな！？」 リューロパージャさん！！！！」

「お、おい、エドガン、ちょっとは空気読め！」

ジークの制止をまるっと無視して、リューロパージャの性別を確認に行ったエドガンを待っていたのは、

「スライムは無性だからな。どちらでもないぞ」

性別にこだわるエドガンをひどく不思議そうに見る、リューロパージャのなんと興味ないお返事だった。

この場合、一体どうふるまうべきか。

分かりやすく思案するエドガンの肩を、ジークがぽん、と叩いて首を振る。

「見苦しい真似はよせ、エドガン」

「ぐはっ」

ジークムント、会心の一撃。

さすがは弓使い。急所狙いの容赦ない一撃だ。

しかし、エドガンの防御力も大したもので、何のこれしきとばかりに反撃にうつる。

「そういうジークさんはどーなんよー？ ええ？

いい歳した男が外堀埋めんに必死とかありえなくね？

お前、弓の名手だろー？ 一発で城を落として見せたらどうよ。

てか、今回もなんでスラーケン連れ出したのか、肝心のところはスルーのままですー？」

「うぐう。そうは言うけどな、『木漏れ日』は周囲の目があり過ぎなんだよ！

そんな中で急に距離感変えるなんて、切っ掛けがなきゃできんだろうが」

「その切っ掛け作り失敗したの、お前じゃん」

双剣使いは手数が多い。いきなりの猛ラッシュにジークは滅多打ちだ！

言葉の激しい殴り合いだが、はたから見ると仲がよさそうにも見える。

(ジークたち、楽しそうだなー)

もにもと手の平サイズに戻ったスラーケンをものにりながら、マリエラが視線を反対側にそらすと、受肉を果たした元精霊コンビがいちゃいちゃとスキンシップを図っているし、その近くではあのクールなユーリケさえも「フランク、大丈夫だし?」「ああ、心配をかけた」などといつもよりも近距離でいい雰囲気になっている。

相手のいないおっさんコンビ、グランドルとドニーノはすっかり帰り支度を整えて、この不思議な世界から何か持ち帰れるものはないかと、辺りを物色し始めている。

「……そろそろ帰ろっか、スラーケン」

ジークではなくスラーケンに帰ろうというマリエラ。

なんだかかっても疲れてしまった。

もともとは、スラーケンを勝手に捨てられたゆえの家出だったはずなのだ。

もちろん勝手に連れ出したのは怒るべきことだろうが、こうして無事だった以上、家出を継続するほどの怒りは最早ない。

師匠を見つける目的も、マリエラに業務計画があったならば二重

丸がついたであろう、想定以上の達成度だ。

「次になんかあったら、今度はジークに出て行ってもらうおう！」

成長実感に自信を深めたマリエラは、むふんと小さな拳を握る。

ちつとも強そうには見えないけれど、意思の強さはうかがえる。

何しろ今の師匠は受肉したてのリューロパージャと二人の世界で、大勢でいる今でさえ大層居心地が悪いのだ。

しばらくは、喧嘩の際はマリエラが師匠のところへ家出するより、ジークを追い出した方がいいだろう。

スラーケンを元居た瓶に戻したマリエラは、「イルミナリア、帰り道の案内よろしくね」と大きな瓶の入った鞆をクーの背中にくくりつけた。

「待ってくれ、マリエラ。言い訳くらいさせてくれ。このままなし崩し的に終わらせたくないんだ」

一人ちゃっちゃと帰り支度をするマリエラにジークが駆け寄る。

なんだかちよっぴり真剣な顔だ。

ジークの外面くらい簡単に見抜けてしまっマリエラだけれど、今回は本当に意を決しているのが感じ取れる。どうやらエドガンと言いついて、何かを決意したらしい。

「なーに、ジーク？ 謝ってもご飯抜きは確定だからね？」

“なし崩しに終わらせたくない”というジークに、こちらもスラーケン連れ出しをなし崩しに許す気はないぞと牽制するマリエラ。

最近分かってきたけれど、ジークは甘やかすと甘えるタイプだ。締めるところは締めなければ。

マリエラの塩対応に「うぐ……」とうめいたジークだけれど、それでもめげずにマリエラの前に膝を付き、ポケットから「そこそこ」と何かを取り出した。

「迷宮の湖の底にある、蒼い石を探してきてもらったんだ。

これを……どうか、受け取って欲しい」

そう言ってジークがマリエラに差し出したのは、ジークの左目と同じ色をした蒼い宝石の付いた指輪だった。

『ジークがついにいきおった……！！！！』

誰も声には出さないけれど、これほど分かりやすいシチュエーションはないだろう。

これには、いちやつき中の元精霊コンビもユーリケたちも、手を止め注目せざるを得ない。

雰囲気も前振りもなしで勢い任せ感はあるけれど、相手がマリエラなのだからこれくらいでちょうどいいのかもしれない。

現に花より団子、色気より食い気と錬金術のマリエラが、指輪を前に面食らった表情をしている。

折角食い気の記憶を失ったのだ。その分、色気が目覚めて欲しいものである。

「え……？ えっと、ジーク、ありがとう？ とってもきれいな指輪だね。

……でも、誕生日でもないのにどうしたの？」

「……！！？」



指輪を手に、きょんとしているマリエラと、その反応に言葉を失うジーク。

そして背後に忍び寄るフレイジージャ。

「知ってつか、ジーク？ 指輪を贈って〜ってその風習ができたのって、百年くらい前だって」

「……！」

フレイジージャが満面の笑みで告げた言葉に、ジークはがっくりと両手をついた。

（百年前……。二百年前から眠り続けていたマリエラは、指輪の意味を知らないのか……。！！）

「そーやってなんとなーく済ませようなんて考えるからだよ、ジークくん！」

大層嬉しそうな様子で茶化しにかかるエドガンが憎たらしい。

「さーて、皆、そろそろ帰るとしましょうか！」

「そうだなー」

「最後まで結構楽しかったし？」

ジークが指輪の意味を説明するより早く、マリエラが撤収の号令をかけ、一同は帰り支度を開始したから、ジーク決死のイベントはただのプレゼント贈呈式になってしまった。

「帰ったら、帰ったら、もう一度ちゃんと言うから……」

ぶつぶつと小声でつぶやくジークをしり目に、指輪の意味を知らないはずのマリエラは、ジークの瞳の色の指輪を左手の薬指にはめると、皆と一緒にいるべき世界へ帰っていった。



37・受肉（後書き）

ざっくりまとめ：次回！ 最終回！！ ……そして。

### 38・人と魔物と精霊と

「精霊の湖がただの湖に変わってからは、魔の森は以前よりほんの少し不安定で、時折魔物が大量発生しましたが、その度人間たちは儲け時だと立ち上がり、人も魔物も変わりなくそれなりに楽しく暮らしていました。」

それからどれだけの時が流れたでしょう。

迷宮都市の城門を今日も一人の少年が飛び出していきます。

『精霊眼』を持つ錬金術師のその少年は、弓を片手に今日も素材採取に励むのです。

父親譲りの狩りの技と母親から受け継いだ錬金術の知識によって、魔の森の奥深くまで潜って貴重な素材を取って来られるその少年の仲間は、小さなサラマンダーと聖樹の小枝に宿った精霊。

少々わんぱくすぎるけれど、少年の冒険は頼もしい仲間たちと一緒に、これから無限に広がっていくのです」

「そ……、それは、アカシックレコード世界の記憶に記された確定された未来ですか！？」

「さて、どうだったかなー？ お酒を飲めば思い出すかもー」

「ジーク、昼間っからダメだよ！ それと……なんで『木漏れ日』にいるんですかねー、師匠？」

精霊の湖の件からさほど日にちも経っていない頃、昼食の支度を済ませたマリエラが食卓を振り返ると、配膳を待つジークや警備兵の中に師匠がしれっと混ざっていた。

『木漏れ日』での昼食は常連さんや警備の人が入れ代わり立ち代わり厨房にやってきて、めいめい適当に取っていくから、人数が増えること自体何の影響もないのだけれど、あまりに自然な交ざりっぷりに、マリエラは思わず二度見してしまっただくらいだ。

ジーク相手に嘘か本当かわからない話を語って聞かせ、昼間っから酒を引き出そうと画策している。

湖の精霊の世界からこちらの世界に戻ってきた後、師匠とリュローパージャはマリエラたちとともに迷宮都市に帰ってはこなかった。

「一人で背負い込もうとは思わぬが、我一人穢れから逃れることなどできないよ。それにこの身はスライムから作られた。どちらかというとと魔物に近い存在だ。人の街にはそぐわない。フレイの弟子と仲間たちよ、縁があつたらまた会おう」

真面目なリュローパージャはそう言うと魔の森の深くへ消えていき、いい加減な師匠は、

「つてことで、マリエラ、おっつー。そのうち遊びに行くからなー」とひらひら手を振りながらリュローパージャと共に去っていったのだ。

「師匠、来るの早すぎ……。リュローパージャさんはどうしたんですか？」

あれほどの仲良しぶりを見せていたのだ。遊びに行くのも来るのももう少し先のことだと踏んでいたのだが、これほど早くにやってくるとは。

「やー、魔の森って酒ないじゃん。あとあたしもリュローも料理できかないからメシがまずくって。リュローはスライムだから何でもいみたくないんだけどさー」

文字通り昼食を餌に師匠に聞いた話によると、受肉を果たしたりユーロパージャは現在、魔の森探索をエンジョイ中なのだから。

魔物に近いリユーロパージャには、ほかの魔物と同様に多少の穢れが流れ込んでくるのだそうだが、その量は以前と比べればごくごくわずかで、核のおかげもあるのだろうがリユーロパージャが人間に近いフレイジージャを攻撃することはないらしい。

けれど、もともと真面目で淡泊な性格のリユーロパージャだ。

食事などは何でもよくて、日がな一日魔の森を彷徨っていたり、あるいは夜の間中、川のせせらぎの音に耳を澄ませるような楽しみ方で、享樂的なフレイジージャが満足できるはずがない。

「リユーロは魔の森に飽きた頃に連れてくるよ」

喧嘩をしたわけではないのだけれど、ずっと一緒にいるわけでもない。

師匠たち二人の距離感が精霊らしいなとマリエラは納得しながら、師匠と一緒に食事を取った。

「んで、その後どうなのよ？」

楽しそうに聞いてくる師匠の様子に、マリエラは自分たちのことを聞かれているのだらうなと思いつつも、あの湖の世界に行った黒鉄輸送隊のメンバーのその後について話して聞かせた。

「どつとつというほど時間がたってないですけどね、ユーリケとフランツさんはユーリケの生まれ故郷を探す旅に行きたいそうです。でも、すぐってわけじゃなくて、情報を集めたり、旅費を貯めてからってことで。今は二人とも仲良くやっていますよ」

グランドルさんは今度帝都に行くときに、久しぶりに実家に顔を出そうと言っていました。ドニーノさんは装甲馬車の技術を磨くために最近はドワーフ街に入り浸りだそうです」

それぞれの記憶を少しずつ差し出した黒鉄輸送隊の面々は、みなどこか己の問題と正面から向き合って、新たな一步を踏み出していた。

それは、いつでもどこでも誰とでも、お気楽お手軽メイククラブなエドガンさえも例外ではない。マリエラの護衛の報酬でもらった、親子関係を証明する『血族のポーション』を使ってたかりに来ていた女性たちを順番に交渉している最中なのだそうだ。

「でもよ、生活に余裕があんなら、だまそうなんて思わないでしょ」  
そう言って、自分を騙した相手にいくばくかの手切れ金を渡しているのが、エドガンらしいともいえる。

「そういえば、エドガンがおかしなことを言っていました」

「へえ、なんて？」

そんなエドガンと頻繁にあっているジークの呟きに師匠が反応する。

「一人でいる間中、ずっと聞こえていた悲鳴が聞こえなくなった……って。それでかな、なんだか女性関係がおとなしくなったような」  
「そりゃ、貰ったかいがあったねえ」

師匠がにやりとそう言ったから、師匠はエドガンに何かして辛い記憶を和らげてあげたのかもしれない。

「で？ お前たちは？」

「……ようやく飯抜きが終わったところです」

ジークの情けない返事にゲラゲラと爆笑するフレイジージャ。

一緒に食事を取っていた警備兵は、このまま話に参加していたら後で稽古が厳しくなるぞと早々に立ち去っているから、ジークの名誉は守られたのだが、状況は全く改善していない。

マリエラはジークからもらった指輪をずっと左の薬指に付けているのだけれど、その意味にジークだけが気づいていないらしい。

「だって……、あんな周りに押された勢いで、なんてさすがの私でも嫌ですよ」

指輪の存在を目ざとく見つけたアンバーさんやメルルさんに捕まったマリエラがそう話していたことは、残念ながらジークは知らないままなのだ。

いくらマリエラが生きてきた200年前になかった風習だったとしても、今の時代で暮らして女性の友人だっている。あの時はとっさにとぼけてみせたけれど、マリエラだって年ごろの娘だ。指輪の意味を知らないはずはないじゃないか。

「まあ、頑張れ！ また来るから、その時は楽しい話を期待してるよ！」

そう言って師匠は、魔の森の深部でしか採れない希少な素材と引き換えに、大量の食糧と酒をお土産に魔の森へと帰っていった。

その夜。

「マリエラ、大事な話があるんだ。屋上に来てくれないか」  
意を決したジークがマリエラを屋上に呼び出した。

『木漏れ日』の常連たちも増えた警備兵たちもいない、それなりに雰囲気のある場所が、屋上だとはいささかお手軽感があるのだけ



ど、ここはリンクスが亡くなった夜に二人で過ごした場所だから「大事な話」とやらをするには悪い選択ではないだろう。

「ジーク？ わぁ、きれい」

呼ばれて屋上上がったマリエラは、普段はシーツだの、マリエラやジークのパンツだのが干してある生活感あふれる屋上が綺麗さっぱり片付けられて、代わりにろうそくが一面に置かれ灯っている様子に感嘆の声を上げた。

ろうそくも『木漏れ日』で売っている魔除けのろうそくなどではなくて、ちゃんとよそのお店で買ってきたおしゃれな感じのろうそくだ。

狭くはない屋上一杯にたくさんのろうそくが灯っている様子は、満天の星のようにも、地脈のなかのようにも思えて、とても幻想的である。

揺らめき光る燈火の真ん中で、マリエラに手を差し伸べるジークムント。

マリエラは招かれるままジークの下に近づいて、伸ばされた手に己の左手をそっと重ねる。

「マリエラ……俺は……」

マリエラの手をとり、片膝を突いて何度も練習したであろう言葉を口にしようとするジーク。

けれど大変残念なことに、師匠の来訪によって活気づいた炎の精

霊が、屋上中の灯火に宿って二人の様子を見ていたし、屋上に届くまでに成長した聖樹の枝からはワクワク顔のイルミナリアがこれまた覗き見をしていたから、ジークのプロポーズがちゃんと成功したのかは分からない。

マリエラの左手にはめられたジークの瞳の色の宝石が、夜空とろろそくの無限の光を映していた。

### 38・人と魔物と精霊と（後書き）

これにて外伝完結です！

ここまで読んでくださった皆様、本当にありがとうございました。

外伝部分は小説6巻として2019/8/1発売です。

なんとコミックス2巻と同時発売！

選ばれなかったルート、よりハッピーになったエンディング、そして迷宮都市のその後を書いた書下ろしと盛りだくさんです。

こちらもよろしく願います！

## 01・帝都デビュー（前書き）

“帝都編”開幕です！

「外伝 生き残り錬金術師と魔の森の深淵」の後の話になります。  
よろしくお願ひします。

## 01・帝都デビル

< i 7 2 5 4 4 0 — 2 1 0 6 4 >

それは、うららかで少しけだるい帝都クアドラの昼過ぎのこと。

依頼のピークが過ぎた冒険者ギルドの受付嬢は、新しく仕入れた噂話に華を咲かせ、新しい依頼を待つ冒険者たちは彼女らの話に耳を傾けながら暇を紛らわせていた。

「知ってる？ あの、『金獅子の牙は迷宮に眠る』の錬金術師が帝都に来るんですって」

「知ってる。迷宮討伐の演劇のモデルになった人でしょ？」

『金獅子の牙は迷宮に眠る』。

それは迷宮都市を舞台にした、迷宮を滅ぼさんとした人々の演劇だ。

かつてエンダルジア王国と呼ばれた場所は、魔の森スタンビードの氾濫と迷宮の発生により200年の長きにわたり帝国の重大リスクの一つだった。その迷宮が金獅子將軍レオンハルトとその弟ウエイスハルト、そして彼らが率いる迷宮討伐軍によってついに滅ぼされた。

もちろん容易な道ではなかった。多くの命が失われ、その討伐のさなかに金獅子將軍レオンハルトでさえも呪い蛇キングバジリスクの王の石化の呪いによって死の淵に瀕したという。

しかし、運命はレオンハルトを見放さなかった。今際いまわの際きわ、レオンハルトの元に、迷宮都市に存在しないはずの錬金術師が現れ、解呪のポーションで彼を救ったのだという。

運命のいたずらか、それともかつてこの地を守り地脈を治めた大精霊エンダルジアの導きか、その錬金術師の實力はすさまじく、たった一人で街を潤すほどのポーションを作り上げ、非力な錬金術師の身でありながら迷宮討伐軍とともに迷宮の最深部に同行し、その討伐を大いに助けたという。

その史実を題材に作られたのが、『金獅子の牙は迷宮に眠る』という演目で、この受付嬢たちも当然観に行っている。

「その錬金術師、すごくない？」

「すごすぎ。作り話を疑うレベル。だいぶん脚色してるんじゃない？ 例えば錬金術師はたくさんいたとかさ」

帝都の冒険者ギルドは広く、受付は複数ある。

冒険者たちは朝あるいは前日のうちに依頼を受けて夕方に達成報告をしに来ることが多いから、今が一番暇な時間で広いギルドの内部は閑散としている。受付も彼女らのいる二つを残して閉まっているし、割のいい仕事からあぶれた冒険者たちが併設された食堂でクダを巻きながら、新しい仕事を持ち込まれるのを待っている。

若い女性の高い声は、閑散とした室内に良く響く。

ギルドの食堂は昼間は酒を提供していないから、聞き耳を立てる冒険者たちの娯楽の一つにちょうどいいのだ。もちろん彼女らが喋る内容は、冒険者あるいは市民たちに知られて困るものではない。

「錬金術師は実はたくさんいた説？ でもそんなに大勢いたなら、もっと早くに討伐されててもよくない？」

「でもねえ、一人だったとしてよ、伝説のポーションが作れる錬金術師が何歳だって話よ。帝都の偉い錬金術師を見てごらんさいよ、みんなお年寄りばかりじゃない。謁見に来る錬金術師って婚約の挨拶

拶をしにくるんじゃないの？」

「あー、たしか貴族令嬢で、シューゼンワールド辺境伯家の次男と婚約したんだっけ。だったら、おばあちゃん……ってわけじゃないわよね。劇では若くて美人だったし」

「『最初の錬金術師』キャシーだっけ？ 役者さんは美人だったけど、実物は分かんないわよ。後家のおばさんが褒美に若い貴族と結婚したのかもしれないしさ」

「悪意のある言い方するわねえ。また、彼氏と別れたワケ？ 八つ当たりするにせよ相手は選ばないと。口は災いの元よ。なにしろ、お貴族様なわけだし。実際、話題作りに『始まりの錬金術師』だっけ？ その名前を利用してただで、本人は大した錬金術師じゃないって可能性もあるでしょ。お貴族様なんだから……っと、そろそろ仕事に戻りましょ」

「……ごほん」

受付の奥から咳払いが一つ聞こえた。

上司の視線を感じた受付嬢は、おしゃべりをやめてすました顔で前を向く。ついでに聞き耳を立てていた冒険者たちも、何も聞いていなかった風に装い居住まいを正す。もっとも冒険者たちの何人かは、受付嬢の一人が今フリーであると聞いて服装や髪を整えながら、ちらちらと視線を送っているのだけだ。

再び訪れた静かで退屈な時間は、しかしほどなく破られた。

きゅー。

元気が有り余った冒険者たちが、バンバンバン開けるせいで蝶番が歪んだ扉が情けない音を立てる。この気の抜けた音は冒険者にあるまじき腕力のなさの現れだ。

ちなみに一番ドアをバンバン開けるのは地方でそこその実力があ

った帝都デビューの冒険者で、夢と希望に胸膨らませ、目をキラッキラに輝かせて元気ハツラツ扉を開け放つ。熟練の冒険者たちやギルドの職員からすれば、「バンバン、うるせーよ」だとか「蝶番が傷むので静かに開けてください」と内心で舌打ちされる、若干迷惑な手合いと言える。

そういう帝都デビューのお上りさんは、暇を持って余した先輩冒険者なんかからちよっぴり意地悪な洗礼を受けるのも、稀によくあることである。受付嬢のおしゃべりが終わって再び暇になった先輩冒険者たちは、面接官よろしく新参者であるなら辛口判定してやろうと視線を扉に投げかけたのだが。

扉を開けて入ってきたのは、お目目はキラキラで、ほっぺを紅潮させ満面の笑みを浮かべた少女だった。

年の頃は十代後半だろうか。

帝都だ！ 都会だ！ 来ちゃったのだ！

そんな心の声が駄々洩れのワケテカとした表情は、間違いなく新参者の冒険者なのだが。

(あーこれはお客さんだな。……だが、後ろの連中は別口か？)

冒険者面接官たちの、少女に対する審査は数秒で依頼主だと判定する。けれどその後ろに続く3人の男たちを見た後、これはどういう一団だろうと面接官一同は少々頭を悩ませた。

そんな視線をもともせず いや、おそらく全く気付くことなく、少女は受付へと歩みを進めた。

「すみません」

「はい、ご依頼でしょうか？」



カウンターを訪れた少女が声をかけ、受付のギルド職員が依頼か  
と応じる。

ちなみに、対応したのは彼氏と別れていない方だ。なぜなら彼氏  
と別れたばかりの受付嬢は、後ろに続く3人の男性ばかりに視線を  
投げかけ、少女を見てすらいなかったのだから。

職務に忠実な受付嬢は、冒険者面接官たちと同様に、少女を依頼  
をしに来た客だと判断したようだ。この判断には冒険者面接官たち  
も全く同意で、持ち込まれたのが美味しい依頼だったなら、自分が  
受注しようと思耳を澄ませている。

何しろこの少女はどこから見ても隙だらけだし、これっぽっちも  
強そうに見えない。やたらとワクワク顔をしているが、それも含め  
て庶民らしさがほとばしっている。この少女が依頼を受けに来た冒  
険者だなんて誰も思わないだろう。

けれど、その日の少女はワクワクと希望に満ちた表情を崩しもせ  
ずに声高らかに答えたのだ。

「違います。冒険者パーティーの登録をお願いします！」

そうなのだ。

ワクワク少女マリエラと、その後続く3人、ジーク、エド  
ガン、そしてあるうことかスランク冒険者、『隔虚』ヴォイドの4  
人は、本日、冒険者パーティー『炎の遣い』として帝都デビューを  
果たしたのだ。

むふー。

言っちゃった、言っちゃったぞと満足そうなマリエラに対し、ギ  
ルドの受付嬢は困惑気な表情でマリエラとその後ろのジークたち3

人を交互に見る。

え、4人組なわけ？ これどついう集団？

そう問いただきたいのだろう。彼氏と別れた受付嬢が熱い視線を送るジークたち3人の男性は、雰囲気や装備から上位の冒険者であると予想がつくし、対して3人を引き連れたマリエラのヒヨコつぶりも見たままなのだ。

貴族の子女であるならば、強い護衛を付けるのも分かるけれど、マリエラはどう見たって庶民、それも田舎から帝都に出てきたばかりのお上りさんなのだから、パーティーを組むと聞いて困惑するのも無理はない。

「ええと？」

「パーティー名は『炎の遣い』です！」

混乱する職員とドヤるマリエラ。パーティー名を聞かれた訳ではないのだが。

もうすでに、言葉は通じているのに会話が成立していない。そこに通訳登場とばかりに、後ろのジークが助け舟をだす。

「マリエラ、俺が代わろう。……職員さん困ってるから、な？」

すいません、彼女は迷宮都市の商業ギルドの職員です。我々の任務の合間になります。帝都の迷宮の植生の調査を行うために臨時でパーティーを組むことになりました」

「そっちのおねーさん、美人だねー。オレ、エドガン。こう見てもアラソカーなんだぜ？」

「エドガン、話がややこしくなるから黙っていたまえ」

「……ああ、なるほど。採取師の方でしたか」

なあーんだという雰囲気、職員だけでなく冒険者ギルド全体に漂った。ちなみにエドガンはでっかい釣り針に引っ掛かり、彼氏と別れた受付嬢に釣り上げられている。さすがだ。勿論エロガンの意味ではあるが。今まで散々女性関係で痛い目にあっただけというのに、学ばないにもほどがある。

エドガンはさておいて、帝都でも迷宮内部に自生している植物や鉱石の採取を専門にする者は少ないながら存在する。例えば採取しやすく処理が必要なものとか、採取に専門知識が必要な資源はそれなりに存在するのだ。迷宮都市のガーク爺などは冒険者としてよりも採取師として有名で、帝都でも知る人ぞ知る存在だ。

とはいえ、普通は並み以上の戦闘力を持つもので、マリエラのように一撃瀕死のよわよわちゃんレッサは珍しいのだが、そこは説明をした男　ジークの説明で納得がいった。

彼は少女が「迷宮都市の商業ギルドの職員」であると言ったし、「任務の合間に」とも言ったのだ。

(この冒険者たちは噂の錬金術師の関係者ね！)

迷宮都市の迷宮は、討伐されてしまったのだ。あれは大いなる災いの種であつたけれど、魔物の素材や様々な資源をもたらす飯の種類でもあつた。討伐された迷宮は徐々に魔物が生じなくなり、同時に内部で採取できた動植物や鉱物も発生しなくなっていく。そして時間をかけてただの穴へと変わっていくのだ。

迷宮の討伐は戯曲になるほど英雄的な冒険譚ではあるけれど、これからも迷宮都市に暮らす人々にとっては、枯渇していく資源とどのように向かい合い、どのように新たな産業を発展させていくのか頭の痛い問題だろう。

帝都の周辺にはどれも階層が深くならないように管理された迷宮がいくつかあって、魔物や迷宮の資源を安定供給している。「迷宮に入りたい」という少女の様子に受付嬢はなるほどそうかと納得がいった。

（きつとこの娘は迷宮調査で派遣されたのね。だいぶ頼りないけど、今の迷宮都市は超が付くほど忙しいって聞くし。今後の方針の参考にするための調査として、新米さんに白羽の矢が当たったのかもしれないわね。

それに後ろの強そうなお兄さん、「任務の合間」とも言っていたわ。この3人はおそらく上級冒険者。きつと皇帝陛下に謁見するっていう噂の錬金術師の護衛任務がメインなんだわ。うふふ、私にはお見通しよ！）

つまり『炎の遣い』とかいう少女＋3人のパーティーは、護衛任務の空き時間を利用した調査用の臨時パーティー。この3人は商業ギルドの偉いさんに、「空いている時間があるなら、ちよつと手伝ってやってくれ」とでも頼まれたに違いない。

勝手にストーリーを脳内で構築したギルド職員は、にこやかに『炎の遣い』のパーティー申請と、帝都近隣の迷宮への探索申請を受理すると登録証を交付した。

「ええと、マリエラさん。お強そうな仲間がいらつしやいますが、迷宮は危険な場所です。十分に注意して採取活動に取り組んでくださいね。採取に関する注意事項はこちらの冊子を確認いただくか、案内人を雇われるといいでしょう」

「はい、ありがとうございます！」

登録料と引き換えに説明冊子と登録証を受け取り、ご機嫌でギル

ドを後にする少女一行を見送った後、受付嬢は思わずおしゃべりを再開する。

「今の、きつと噂の錬金術師の護衛だと思っわ！」

「私もそう思う！ 3人と、特に眼帯の人、イケメンだったよね」

「いや、アナタ、双剣使いの人と約束してなかった？」

「だってえ、眼帯の人、ちっともこっち見てもくれないんだもん」

「まあ、顔は置いといて実力もありそうだし、あの3人がついてくれるなら採取師のお嬢さんも安心ね」

「採取師？ ああ、あの田舎から来ましたって感じの娘。ま、大丈夫でしょ。どうせ護衛の合間におもりを頼まれた系じゃない？ 商業ギルドがねじ込んだとかさ。でも、噂の錬金術師の護衛ならそうそう手も空かないだろうから、無事に戻れるかより迷宮に入る時間が取れるのかの方が心配だと思っわよ。まあ、私には関係ないけどお。……双剣クンは私との時間を取ってくれるみたいだし、ウフ！

聞いた？ Aランクですって！」

「あんたねえ……」

こんな性格だから、美人なのにすぐに別れることになるのよと思しながら、受付嬢は受理した書類を棚にしまった。

冒険者ギルドにたむろする暇を持て余した冒険者たちも、再び仲間と雑談を再開し退屈な昼下がりの時間に戻る。彼らのホットな話題は、謎に包まれた噂の錬金術師だ。貴族らしいが演劇の通り若くて美人なのか、それとも年増のおばさんなのか。受付嬢の噂した通り、若いものものすごい実力の持ち主なんて現実にはあり得ないだろうが、そうであればいいのと思わず想像してしまう。ついでに、ボン、キュ、ボンの美女ならなおのこといい。

受付嬢も冒険者たちも、これっぽちも気付いていない。

先ほど目の前に現れたお上りさん丸出しの少女こそが、まさかの噂の錬金術師、200年の仮死の眠りから覚め、迷宮の深淵でエリクサーの錬成に至った『始まりの錬金術師』であることを。

「ついに、帝都デビューだー！」

「マリエラちゃん、恥ずかしいから声落として……」

少女の声が高らかに、帝都の空にこだましていた。

## 01・帝都デビュー（後書き）

次回より、土曜18:00更新予定です。お楽しみに！  
挿絵はAI画伯。どうすれば神画像を出してくれるのか……。

## 02・煌めく街並み

「バレないものですねー」

「ははは、実際はこんなものだろうね」

冒険者ギルドを後にしたマリエラとヴォイドは顔を見合わせる。

この二人、帝都で噂の錬金術師と、半ば伝説のSランカー『隔虚』  
なのだが、ひよっこ採取師と無名の冒険者としてあっさりチーム登  
録できてしまった。隣のカウンターの受付嬢など、エドガンの  
かざすAランクの冒険者証に目を奪われていたのだから見る目がな  
い。

「真偽判定系のスキル持ちはいなかったようだな」

「まー、そんなレアスキル持ち、普通は冒険者ギルドになんかいね  
えけどな」

心配しすぎだったかと安堵するジークに、軽い調子でエドガンが  
返す。

「いたとしても、嘘はついてないもんね。私、商人ギルド所属の錬  
金術の先生だもん」

”先生”を強調してえへんと胸を張るマリエラ。

マリエラ達が提示した身分証は、迷宮都市発行の本物だ。

マリエラは、迷宮都市に新たにできた学校で錬金術の教鞭をとっ  
ているから身分証は本物なのだ。

「僕の冒険者証も、エルメラと出会ってから取得したものだから本



物だよ」

「迷宮都市で作ったヴォイドの冒険者証も本物だ。取得してからの経年変化によるくたびれ具合も合わせて疑いようがない。」

「超回復力を持つ彼は、その代償に記憶を失ってしまふ。迷宮都市でエルメラと出会ったころの彼は、記憶喪失だったのだ。むしろ彼が『隔虚』だなんて証明する方が大変だろう。」

「その後は日々、主夫業に勤しんで、エルメラと二人の息子を支えている。主夫の忙しさを舐めてはいけない。ランクを上げる暇などないのだから、Bランクでも仕方ない。仕方がないったら仕方がないのだ。」

「とはいえ、帝都ではヴォイドの顔を知る者もいるだろうから、この依頼を受けるにあたってフレイジージャ印の認識阻害の魔法陣付きスカーフで口元を隠している。」

「洗濯しても消えないように特製の染料を使って、洗い替えと予備も含めて5枚も魔法陣を描いたのは、当然ながらマリエラだ。そんな面倒くさいことを師匠がするはずがない。久しぶりの「転写ア！」はやっぱり痛かったけれど、それ以上に魔法陣を描くのが面倒だった。」

「この魔法陣はマリエラのマントにも施してあるが、効果はそう強いものではない。顔を隠していれば気付かれないとか、平凡さに磨きがかかるとか、顔を覚えられづらくなるとかその程度で、知り合いが見れば見間違ふことはない。」

「それにしても、さすがは帝都だね、キラキラ輝いている」

「帝都の空を見上げて、「わぁ」とばかりにマリエラは歓声を上げる。」

「……そうか？」

ジークが見上げる空はあいにくの曇天で、むしろ曇っているのだが。精霊的な何かだろうかと思つて眼帯を外して精霊眼で見ても、人の多い場所にありがちな精霊の少ない空にしか映らなかつた。かつて、絶望とともに見上げたのと変わらない、高い建物に切り取られた狭くてどこか薄暗い帝都の空だ。

マリエラの様子を見る限り、無難な話題で話をそらしたわけではないらしいのだが、マリエラには一体何が視えているのだろうか。

「まだ時間もあるしさ、あっちの方向つてみたいな」

そう言つてマリエラが指さしたのは帝都の中心方向だったが、約束の時間にはまだあるのも確かだ。

「そつちは帝都の中心方向だけ、目的地とは逆方向なんだけど。ま、今のうちに慣れとくのもいいかもな。」

この中央区画だつて安全な場所ばかりじゃない、裏道 言い方は悪いけど、小汚い格好した連中がいるような場所にはマリエラちゃんが行かない方がいい。今まで通つてきた道で、小汚ねえガキと見なかつたら？ 壁とかはないけどさ、はつきりと分かれてんだよ。迷宮都市より広いぶん、そういう場所はたちが悪かつたりもするんだぜ」

エドガンの同意もあつて一行は、行政区画と呼ばれる帝都の中心へと歩みを進めた。

帝都は非常に大きな街だ。端から端まで馬車で1日ではたどり着けないほどで、ざっくりと3層で構成されている。

帝国建国当初の最も古い時代に作られたのが行政区画で、今いる

場所は中央区画というらしい。貴族の屋敷や商店、中流から上流階級が住まう住居もあれば、冒険者や商人のためのギルドもあって、面積としては一番広い。行政区画と中央区画が都内として登録されている区画だが、その外側に広がる畑や牧場、大型の工房、そしていわゆる貧民が暮らす貧民窟も今では帝都の一部と認識され、外縁部などと呼ばれている。

帝都の中央にある行政区画には、皇帝のすまう宮殿や古い家柄の貴族の屋敷、それに文字通り行政にまつわる建物や貴族御用達の学校、国家研究機関などがあり、歴史を感じさせる城壁で囲まれている。

行政区画を囲う城壁は、帝国がまだ一つの地脈分しか領土を持っていない、ただの国であった頃の名残だ。繁栄を謳歌する帝国も、魔物や周辺地域からの侵略の危険にさらされていた時代があったということだろう。今では遺跡のような扱いなのか、崩れて撤去されているところもあって、防壁としての機能は求められていない様子だ。

そんな状態だから、行政区画へと続く門は開かれていて、衛兵はいるものの身分証の提示を求められることもなく、人々が往来していた。マリエラたちがキョロキョロしながら通り過ぎて知らぬ素振りだ。

「わあ、ここすごい」

その中心あたりに高い壁に囲まれた古めかしい建物が建っていた。風格のある門扉には、『イリデッセンス・アカデミー』とある。広々とした敷地と整えられた庭木。開かれた雰囲気その建物は、どうやら高等教育機関、おそらくは研究機関を併設した大学校であるらしい。

今日は休校日なのかそれとも授業中なのか、門は開かれているの

に見張りの一人も立っていないし、生徒らしき姿は見えない。

その門を、マリエラ以上にきよろきよろしながら、一人の少女がのぞき込み、そのまま中へと入っていくのが見えた。

おそらく孤児か貧民か。継ぎの当たった質素な服を着たその少女は、『ヤグーの跳ね橋亭』のエミリーちゃんよりも幼い。もしかしたら片手で年齢が数えられる程の幼女だ。場違いにもほどがあるだろう。

「ねえ、あの子。見つかったら怒られちゃうんじゃないのかな」

門の開かれ具合を見るに、ここは一般人が立ち入ってもいい場所のようだが、誰にでもというわけではないのだと先ほどエドガンに言われたばかりだ。あんな幼い子供が手ひどく追い出されては可哀そうだとマリエラは心配になった。

警備の兵に見つかる前にあの子を連れ出したほうがいい、迷宮都市で教鞭をとるマリエラならば、もし見つかったても教育機関を見学に来たと言いつつ。そう思ったのが大半ではあつたけれど、この場所に対する好奇心が抑えられなかったのも確かだ。

（行政区画って呼ばれてる帝都の中心部分は、昔見たエンダルジア王国みたいにキラキラ輝いてる。特にここは《命の雫》が濃くって虹色に輝いてる！）

他の者には視えないものを口に出すのは良くないことだと知っているから口に出してはいないけれど、マリエラの目にはこの場所が、光り輝く帝都の中心のように視えていたのだ。勘の鋭い者なら、生命力に満ちたいわゆるパワースポットのように感じられたことだろうし、並みの錬金術師であっても筋の良いものならば、明るく温か

い場所だと感じたことだろう。

地脈が豊かな土地というのは、えてしてそう言う印象を与えるものだが、ここはそれが度が過ぎて顕著だった。マリエラが気になるのも仕方がないだろう。

「休講日なのかなあ」

「さあ」

「なんか、オレ眠くなってきちゃったよ」

「ほのかに本の香りがするね」

やはり休講日なのだろうか。奥に向かって駆けていった幼女を除いては人っ子一人見当たらないけれど、広く人を招き入れるような開かれた雰囲気建物を通路越しに覗くと、大きな部屋の中にたくさん机と椅子が並んでいて、部屋の前側には大きな黒板がしつらえられていた。

建物の格式の高さと言い、ここは帝都の最高学府なのかもしれない。

知識のもたらす恩恵を、あまね遍く帝都の万民に。

耳触りのいい理念を謳う帝都のアカデミーは、身分による入学の制限はないと聞く。しかしその授業料は高額で、実際のところは貴族であるとか豪商であるとか、極めてまれなスキルを持った者が奨学金を受けて通う場所だ。

とはいえここで学ぶ生徒たちにとっては、伸びやかに過ごせる場所なのだろう。校舎の間には広々とした庭園があり、トピアリーのように手入れがされた庭木や花々が、学びの間の散策に来訪者を誘っている。そこここに咲き乱れた花が濃密な芳香を放ち、その蜜を

求めたくさんの蝶が飛び交っていて、小鳥のさえずりが耳を楽しませせてくれる。憩いの場所だ。

「あ、いた。お嬢ちゃん、ここは遊び場じゃないよ。見つかったら怒られちゃうよ」

「ひゃっ。ごっ、ゴメンナサイ……」

< i 7 2 6 8 1 0 — 2 1 0 6 4 >

ようやく捕まえた少女も、ここが入ってはいけない場所だと分かっていたのだろう。初めは警戒する様子で体を固くしたのだが、マリエラたちに怒る様子が無いのを見ると、小さな声で「にいちゃんをさがしてるの」と教えてくれた。

「迷子かよ」

「かもしれないな。兄さんというのはここに入っていったのか？」

「……」

「お嬢さん、お名前は？ お兄ちゃんと一緒に来たのかい？」

「……リリア。にいちゃん、ここに入っていったって、トニーがきのう言ってたの」

眼帯とチャラ男は怖いのか、エドガンとジークの問いには答えず、ヴォイドの質問にだけ答える幼女。ヴォイドもスカーフをしているから似たようなものだと思うのだが、パパさんオーラでも出ているのだろうか。

「昨日？ お兄さんはずっと帰ってきていないのかい？」

「うん。せんせいが、行くところがきまったからバイバイだって。でもリリア、にいちゃんにあいたくて……」

リリアちゃんの話から察するに、おそらく孤児の兄妹で、進路の決まった兄を探してここまで来てしまったのだろう。しかし、ここはアカデミーだ。年の離れた兄弟というわけでもなさそうだし、リリアの兄はいないだろう。どこか別の場所と間違えたに違いない。そのように説明しても、リリアが納得する様子はない。

「でもね、トニーが見たつていうの……」

「とりあえず守衛のところまで連れて行って、この辺りにこの子の兄がいそうな場所がないかを聞いてこよう。一度一緒に顔を見せておけば、また紛れ込んだとして無碍な扱いはされまい。だが4人組と記憶に残るのは得策ではない、君たちはここで待っていてくれ」

説明しても納得しないリリアをヴォイドは抱き上げる。さすがは子供が懐くだけあって、実に優しい提案だ。守衛にここに子供はいないと言われればリリアも納得するだろうし、万一再び潜り込んで、強そうな冒険者と知り合いたと認識されれば手ひどく追い出されたりはしないだろう。

ここで待つのも気の利いた提案だ。赤い土壁と緑が織りなすここは素敵な庭園なのだ。休憩するには最適だろう。

ヴォイドが戻って来るまでの間、庭園を満喫することにしたマリエラ。

マリエラを先頭にジーク、エドガンの3人が庭園を散策していると、遠くから二つの声が同時に聞こえた。

こっちだよ。

一つは木々に整えられた小道の先から。

そこで何をしている、ここは立ち入り禁止だ。

もう一つは一行を追うように、後ろから。

同時に聞こえた二つの異なる声。

マリエラが聞こえたのは招くような前者だけで、ジークとエドガンが聞いたのは後方から現れた衛兵のものだけだった。

いざなう声にマリエラは前へと歩を進め、呼び止める声にジークとエドガンは立ち止まって振り返る。

その一瞬。ほんの数歩だけ開いた距離。

たったそれだけだったのに、振り返ったマリエラの背後には赤い土壁が連なっていて、ジークたちの姿はどこにも見えなくなっていた。

「え、なんで？ ジーク、エドガンさん？ ……もしかしてはぐれた？」

綺麗な庭園の様子に、一人で進みすぎてしまったのだろうか。

とはいえ、堀に囲まれた敷地の中だ。じきに合流できるだろう。探してもらうにしても、ここは壁もあるし並木の背も高い。もう少し見通しのいい場所の方が見つけてもらいやすいだろう。

そう思ったマリエラは歩みを進め、並木のアーチをくぐった先で、古い塔を囲むように開けた場所に辿り着いた。



## 02・煌めく街並み（後書き）

「輪環の短編集」も更新してるのでこちらもどうぞ。

<https://ncode.syosetu.com/n980199/>

### 03 光あふれる塔（前書き）

前回までのあらすじ：帝都デビューしたマリエラ、秒で迷う。

### 03・光あふれる塔

（人がいっぱい。あの格好、学者さんかな？）

ついさきほどまでは人の気配などなかったというのに、急に現れたたくさんの人影に、とっさに庭木の影に身を隠すマリエラ。

ここが部外者が立ち入ってよい場所でないことは、一目でわかった。

なぜなら、ここは今まで見た帝都のどこよりも光に満ちていたからだ。中央にそびえる塔は、マリエラの目には虹色に輝く光の噴水のように映った。

ここが帝都の中心だ。きっとそうに違いない。

ならばここにいる人たちは何者なのだろうか。全員が学者のような風体で、塔の様子を固唾を飲んで見守っているように見える。

ということはあの塔で何かが起こっているのだろうか。

塔から溢れる光が一層増した。

おお、と声を漏らす人もいるから、集まっている人の中にはマリエラと似た光景が見える者もいるのだろう。

けれどそうでない者もいたようで、代わり映えのしない光景に飽きて周囲を見渡した一人が、庭木の影に身をひそめるマリエラを見つけてしまった。

「何者だ、どうやってここに入った！」

侵入者を見咎める声に、その場にいた大勢がばつとばかりに反応

し、マリエラを取り囲むように近寄ってくる。不健康そうな顔いろの一団が、奇異なものを視る眼差しでにじり寄ってくる様は、不気味な恐怖心を駆り立てる。

「えっと、あの、すいません。迷っちゃって……」

マリエラのしどろもどろの返答は、当然ながら聞き入れてはもらえない。

逃げたほうがよさそうだと駆け出そうとしたけれど、こんな危機的状况を乗り越えられるほどマリエラの筋肉は彼女の味方になってはくれない。

あつという間に退路を塞がれ捕まりそうになった瞬間、広場の別の方向から思わぬ声が聞こえてきた。

「それは我が家ゆかりの者です。私を訪ねてきたのでしょうか」

少しだけ癖のある高慢そうな声には、その後「ファイヤー！」の幻聴が聞こえそうなほどに聞き覚えがある。思いもよらない声に振り向くと、そこに立っていたのは、なんとキャロラインの兄、ロバート・アグウィナスだった。

「ロバートさん!？」

「ゆかりの者とはな。ではもしか“始まり”の……?」

マリエラの驚きの声を無視してロバートに答えたのは、眼鏡をかけた得体の知れない老人だった。周囲の反応を見る限り、彼がこの集団で一番偉いと思われた。

流石はえらい人たちの中のトップというべきか、冒険者ギルドの受付嬢さえ騙されたというのにマリエラを前にして鋭いところをつ

いてくる。

「まさか。ただの遣いっぱしりですよ」

さらりとしらばっくれるロバート。さすがは悪役経験があるだけあつて、息を吐くような滑らかな嘘だ。

ロバートの返答に「ふむ……」と老人は一瞬だけ考えるそぶりを見せたものの、貴族であるロバートに対して忖度する様子も見せずそんたくに話を続けた。

「ここは只人が踏み入れることは許されぬ禁足地。お主は先代様の形代を輩出したアグウィナス家に連なる者ゆえ特別に見学を許したが。そうでなければ今この時、この場所にいるということは、招かれた者であるのか、咎人であるかのいずれかしかない。

そして招かれた者ならば、資格を持っているはずだ」

侵入はよほど重い罪なのか、それともこの人物はよほど偉い人なのか。

この老人の語る言葉はマリエラには理解できないけれど、貴族であるロバートであろうと覆しようのない決定事項を告げているのだろうと感じられた。つまり、マリエラが助かるためには老人の言う『招かれた者』だと示せなければならぬのだろう。

それを理解したのだろう、あのロバートが苦々し気に「資格なら、ある」と答える。

「ほう、地脈コ、ンタラクトと契約せし錬金術師であるというか。ならば証を」

「私が証明する。なんなら鑑定紙を使ってもいい」

(え……)

ここで、錬金術師が出て来るのか。

思いもかけない展開にマリエラは目を見張る。しかもロバートが鑑定紙を使うとまで言うなどと。

鑑定紙というのは、血液を垂らした者の能力を示してくれる魔法紙だ。

マリエラの場合は錬金術しか適性が無いにもかかわらず魔力値が振り切れているという異常さゆえ、見せない方が望ましい代物だ。

ちなみにマリエラ個人としては、3しかない賢さが少しコンプレックスになっている。賢さ3というのは世間一般では平均より賢い部類になるのだが、マリエラの錬金術師の実力を知る者は「えっ……、3? (察し)」となるので、心情的に見せたくないのだ。

鑑定紙に過剰反応してしまったマリエラであるが、それより注意すべきは「地脈コントリアクトと契約せし錬金術師」というところだろう。確かにこの塔は《命の雫》が異常に濃い場所ではあるがそれと関係あるのだろうか。

「ロバート・アグウィナスよ。ここは神秘の中核ぞ。ゲニウスは気まぐれだ。我らをほんごう翻弄するために部外者を招くこともあるやもしれぬし、そうであるならアグウィナスの名に免じ、罪には問わずにいてやろう。

だが、ゲニウスに招かれるのは錬金術師に限られる。そしてゲニウスが招くのは“始まりの錬金術師”か帝都の錬金術師以外ありえぬ。“始まりの錬金術師”でないというなら、証を立てるは容易娘、今ここで《命の雫》を示すがよい」

「く……」

老人にマリエラを脅すような様子はない。「さもなくば」などと、この先の運命を示唆したりもしない。この老人の言葉には一切の感情も含まれていない様子で、マリエラに向けられた言葉は、雑草か

薬草かをより分けるような単調なものに感じられた。

薬草であるならば見逃すが、雑草であるならその時は……。マリエラが自由な意志と命を持った人間であることは、一切顧みられない。そのような冷淡さをこの老人と、老人を囲む学者たちからマリエラは感じた。

それをロバートも分かっているのだろう。

マリエラを殺させるわけにはいかない。けれど、マリエラが“始まりの錬金術師”だと明かすのもまた……。その苦悩が滲んで見える。

迷宮都市と帝都とは、地脈コンストラクトが異なるのだ。錬金術師が《命の雫》を汲みだせるのは、地脈契約した地脈だけ。迷宮都市の錬金術師であるマリエラが、この帝都で《命の雫》を汲みだせるはずがない。

マリエラの腕を掴もうとした者が、再び拘束しようと、じり、と近づく。

「その者は……！」

ここで捕らえられるよりは、“始まりの錬金術師”だと知られる方がまだましだ。そのように考えたのだろう。ロバートが口を開いたその瞬間。

「《命の雫》」

ちよろちよろちよろり、ぽたぽたり。

ものすこしく微量の《命の雫》が、マリエラの両手から湧き出し

て、指の間を伝って零れ落ちた。普段のマリエラから見れば、考えられない少量だ。節水にもほどがある。

けれどここは帝都で、マリエラが地脈コントラクトと契約した迷宮都市ではないのだ。

「……ハア！！？」

思わずあんぐりと口を開けて、驚愕の声を上げるロバート。態度から、イレギュラーだと公言しているようなものである。

だがロバートの様子をこの場の学者たちは《命の雫》の少なさ故と勘違いしたようだ。

「ふむ……随分と浅いようだ……」

”量産型”マスか」

「だとしても規定量にも満たぬのでは？」

「数世代前より結脈バインディング式典の成功率は100%に近いと聞いておるが「これほど浅いものが招かれた？ やはりゲニウスの悪戯か」

ざわめく学者たち。どうにもバカにされている気がするのだが、少なくとも眼鏡の老人はマリエラに対して興味を無くしてくれられない。

丁度その時、塔から放たれる七色の光がいつそう強く溢れかえった。

「成功だ」

誰かがそう漏らし、ここに部外者であるマリエラがいることを思い出したように口をつぐむ。先ほどまで捕縛すべき罪人のように視られていたのに、今は早くどこかに行ってほしそうな雰囲気だ。



「あ、証は立てられた、これは連れていく。おい、行くぞ。早くしろ！」

おそらく、この光が視えていないのだろう。老人とそれを做うように学者たちの注意が塔へ向けられたのを幸いと、ロバートはマリエラの腕を掴むと未だに状況がつかみきれないマリエラを引っ張って速足で塔の広間を後にした。

見張りのいる門をいくつか抜けると、少し前まで散策していた庭園まで戻ってこられた。どうやらあそこはぐるりと壁に囲まれた、普通では辿りつけない場所らしい。庭園とあの広場の間には壁があり、マリエラが通った道は跡形もない。まるで夢でも見ていたようだ。

庭園の近くではジークとエドガンが、数人の衛兵と口論になっていた。行方不明になったマリエラを探そうとするジークを衛兵たちが「出て行け」と咎め、エドガンが「まあまあ」となだめていたようだ。

「マリエラ！ 無事か？ そちらはロバート殿、これは一体……」

マリエラの姿を認め駆け寄り寄るジーク。

衛兵たちはロバートの顔を見知っているのだろう、マリエラを連れたロバートが「そいつらは我がアグウィナス家ゆかりの者だ」と言つと、「早く出ていくように」とだけ告げて解放してくれた。

「お前たち何を考えている。ここは帝都だぞ、こいつが大事なら目

を離すな！ 貴様も貴様だ、フラフラするな！

……それから、先ほどの件は後で話を聞かせてもらってからな！ 私にはまだ用事がある。お前らはさっさと帰れ、まっすぐにだ！」

マリエラをジークたちに引き渡したロバートは、ようやく肩の荷が下りたとばかりにジークとマリエラに向かって超早口で文句を言うのと、再び学舎の奥へと戻っていった。

「説明は後でするよ、とりあえずヴォイドさんと合流しよう」

迷子の女の子を連れて行ったヴォイドは、そのまま門の外へと案内されてしまったらしい。マリエラたちが門へと戻ると、開かれていたはずの門は閉ざされていて、内側には大きな「立ち入り禁止」の看板までたっていた。

こんなもの、来た時はなかったはずなのに。

やはり、マリエラは何者かに招かれてしまったのだろうか。それはあの老人が口にした“ゲニウス”というものなのだろうか。だとしても、マリエラは招いてくれた何者かに結局会うことはなかったのだが。

「ヴォイドさん、お待たせしました」

先ほどの失踪を警戒してのことだろう、マリエラの肩を抱くようにジークが隣を歩き、エドガンが後ろに続いて通用門を外に出る。

マリエラたちがアカデミーの敷地を出た丁度その時、ヴォイドと一緒にいた女の子、リリアがマリエラたちの後方を見つめてぱつと顔を輝かせた。嬉しそうに駆け出して、閉ざされた門扉を掴んで声を上げ手を振っている。

「にいちやーん！」

どうやら彼女の兄は、本当にあのアカデミーの中にいたらしい。

（良かった、会えたんだ）

そう思ってマリエラが振り返ると、リリアがしがみついた鉄格子の扉の向こう、マリエラたちが出てきた方角に一人の少年の姿が見えた。あれが女の子の兄なのだろう。

不思議なことにマリエラの目に噴水のように映っていた光は消えて、このアカデミーを包む光は辺り一帯と変わらなくなっていた。

リリアの兄も見つかったことだし、ここにはもはや用はない。マリエラはジークたちに向き直る。

「心配かけてごめんなさい、気を抜きすぎだったみたい」

「いや、俺たちこそ迂闊だった」

「何かあったのかな？　だが無事なようで何よりだ」

「そーそー。終わりよければってやつ」

反省するマリエラとジークの様子に何事かあったのだとヴォイドが察し、エドガンが場を和ませつつ、一行は大通りに向かって去っていく。

歩きながらもしばらく警戒していたけれど、特に追われることはないらしい。アカデミーから少し歩いた距離にある大通りは広く、行きかう人のざわめきにマリエラはようやくほっと息を吐いた。先ほどまでの非日常から離れて、日常の世界に帰ってきたように感じられた。

大通りの喧騒にリリアたち兄妹の再会は掻き消され、マリエラた

中には届かない。兄に再会できたのだから、大丈夫だろうとさえ思っただろう。

危機を脱したという安心感と、強まった警戒感からマリエラたち一同は、出会ったばかりの少女の兄があのカデミーにいた違和感に気付くことができなかつたのだ。

「にいちゃん？ ……誰？ 兄ちゃんはどこの？」

「……家族がいるようなのを使ったのかい？」

門扉の鉄格子越しに伸ばされたリリアの手を握ったまま、兄と呼ばれた少年が背後から近づいて来る眼鏡の老人に尋ねる。

「ほかに適合者がおりませんでしたので。ですが、やはりそのお体で間違いなかつたようでございますな」

「にいちゃん？ にいちゃん！ にいちゃん！！」

兄のただならぬ様子にリリアは泣き出し逃げ出そうとするけれど、少年はその手をしっかりと握ったまま、「しーっ」と静かにするよう諭す。

「その子をどうするおつもりで？」

「こんなとこまで尋ねに来てさ、可哀そうじゃん。妹なんでしょ、お兄ちゃんになってあげるだけさ」

「また、お戯れを……」

そう言いつつも老人は、後ろに続く学者の一人に手を上げる。先ほどマリエラを捕らえようとした男だ。男が懐から瓶を取り出して布に含ませると、リリアの口にあてがった。それだけで、リリアはくたたりと動かなくなるけれど、その小さい体は男の身体に隠されて大通りから見えない。

「にい……ちゃん……」

リリアを連れて学舎の最奥へと戻っていく一行。

眩く少女の声は、通りの喧騒に掻き消され、マリエラたちに届くことはなかった。

< i 7 2 6 0 9 5 | 2 1 0 6 4 >

## 04・お留守番の二人

「マリエラ嬢一行は、無事に帝都へ着いたらしい」  
「ま、あのメンツじゃ、危険の方がよけてくだろうけどね。それに、テオレーマだっけ、爆速の馬車まで使ったんだろ？」

迷宮都市のシューゼンワールド辺境伯邸。

その応接室にレオンハルトとフレイジージャが酒杯を傾けていた。正確には、真昼間から酒を飲んでいるのはフレイジージャだけで、レオンハルトの前には紅茶のカップが置かれている。

アカシックレコード  
世界の記憶にアクセスし、未来を見通すかのような言動をする彼女の助言と、炎を操る力を求める者は多い。その全てを厭うように、迷宮が討伐されたのち、何処かへと姿を消した炎災の賢者フレイジージャ。

その住み家は魔の森の深淵にあるとも、精霊たちの集う神秘の場所ともいわれており、精霊の導き無くはその場所へたどり着くことは何人たりともできないという。

……のだが、意外と簡単に呼び出せることは、一部の間で周知の事実だ。

元精霊の性さがなのか、それともただのアル中か、お供え物がかなり効くのだ。

具体的な方法は超がつくほど簡単だ。

『木漏れ日』の酒棚に高いお酒を満載するだけでいい。急ぐ場合は晩酌すればさらにいい。お酒がなくなってしまうと慌てるのか、それとも匂いにつられてくるのか、数日のうちに、フレイジージャが

遊びに来るのだ。

ちなみに、フレイジージャを召喚すると『木漏れ日』の、正確にはジークのお酒は根こそぎなくなる。

帝都から取り寄せたお気に入りの酒だとか、コツコツ小遣いを貯めて買った高い酒だとか、サプライズパーティー用のマリエラが生まれた年……は流石に無理なので、同じ年数寝かせたワインだとか、そういうものに対する配慮も一切ない。いっそのこと燃料用の酒精でもいいんじゃないかと思えるほどだ。

代わりに魔の森の珍しい素材だとか魔物肉なんかを持ってきてくれるのでマリエラとしては不満はないが、ジークがせっせとお酒を集めてもコレクションできるのは空き瓶ばかりだ。

『木漏れ日』の酒棚は今やフレイジージャ召喚用の祭壇だ。おかげでAランク冒険者になって「いい酒でも揃えてみるかな」なんて考え始めたジークの財布は、再び紐が硬く締まることになった。深酒は体に悪いしお腹も出るから、健康的で大変宜しい。

話はそれてしまったが、そんな感じでやってきたフレイジージャは、マリエラ達が帝都に旅立った後も『木漏れ日』の留守番を勝手にしつつ日々飲み歩いていて、レオンハルトらの招待にも快く応じてくれている。

「……」

「何か引つかかるって顔だね」

フレイジージャに促され、レオンハルトが重い口を開いた。

「帝都中枢の思惑が読めんだ。『始まりの錬金術師』が高位の錬金術師であることは誰もが知るところ。たとえポーシオンが作れなくとも迎え入れようとたくらむのも分かる」

ポーションというものは、地脈からくみ上げる《命の雫》の力で人の力をはるかに超えた癒しをもたらす魔法薬だ。その効果の高さと引き換えに、ポーションには制約も多い。

まず、ポーションを錬成できる錬金術師は、地脈と契約しなければ《命の雫》を汲み上げられない。

錬成されたポーションも時間とともに《命の雫》が抜けていき、じきにただの薬草水になってしまう。しかも、その地脈から持ち出せば、《命の雫》が抜けるのはあつという間だ。

「コントラクト」  
地脈契約した錬金術師が、その地脈で錬成し、その地脈で使用することでのみ奇跡の力を発揮する。地産地消型の魔法薬、それがポーションというもので、そんなことは子供でも知っているこの世界の常識だ。

帝都と迷宮都市はそもそも地脈が違うのだ。

迷宮都市の錬金術師は、帝都で《命の雫》を汲み上げることができず、結果ポーションを錬成できない。

それでも、エリクサーの錬成に至った錬金術師の価値は、その知識だけでも計り知れない。帝都の中枢が手駒に加えたいと画策するのも当然だろう。

もつとも、迷宮都市としてもむざむざマリエラを手放すつもりはない。

いまだ迷宮都市において、特級ポーションを作れる錬金術師はマリエラしかないし、何よりマリエラ自身が迷宮都市でのんびり暮らしていくことを望んでいる。レオンハルトからすればマリエラに適当な爵位を与えてシューゼンワルド辺境伯家の寄子にしてしまった方が庇護しやすいのだが、迷宮討伐に多大な貢献をしたマリエラが平凡な暮らしを望むのだから、迷宮都市での暮らしを全力でサ



ポートするつもりでいる。

「皇帝陛下がじきじきに謁見しようってマリエラを呼ぼうとしたのを、シューゼンワルド辺境伯家が阻止してくれたのは知ってるよ」「だが結果として、マリエラを帝都に派遣する羽目になった。不徳の致すところだ」

『始まりの錬金術師』に皇帝陛下に謁見する栄誉を。

表向きは非常に名誉な申し出だったが、マリエラを引き抜く気マンの帝都中枢の申し出を、「婚約のご挨拶も兼ねてウエイズハルトと一番弟子のキャロラインが代理で」というところに落ち着かせたのはシューゼンワルド辺境伯家だからこそできた芸当だったろう。

しかし、妥協案として加えられた「『始まりの錬金術師』が錬成した品を献上する」という条件に、落とし穴があったとは。

迷宮都市では《命の雫》を使わない薬の製造が盛んだったとか？

そんな前振りをされれば、薬だとかレインボーフラワーのような《命の雫》を使わない錬成品を想像するのは当然だ。そもそも、迷宮都市の錬金術師は帝都で使えるポーションを作れない。それが常識なのだから、前振りなどなくともそう考えるだろう。

「あんなものがあるなんて考えやしないだろ。とくに、200年の長きにわたって迷宮都市を治めてきたシューゼンワルド辺境伯家は  
な」

「『レビス』だったか。ポーションの錬成ができるほどの《命の雫》を蓄えた素材が帝都にのみ存在するなど。……ちょうど帝都にいたとはいえ、確認を任せたロバート・アグウィナスには酷なこと

をした」

「そんなもんがもし迷宮都市にあったなら、もっと早くに迷宮を倒せてただろうし、新薬なんて禁忌に手を染めることもなかったらうからね」

献上案を受けた後で、ポーションが錬成できるほどの《命の雫》を蓄えた素材が、帝都にのみ存在すると知らされたのだ。

その名を、『レビス』というらしい。

確認を行ったロバート・アグウィナスの報告書によると、見た目は白い石材だが、確かにポーションを錬成するのに十分な《命の雫》を含有していたという。

それを手にしたロバートが必死の形相で「これは何だ」と問いただしたのは想像に難くない。けれど、サンプルを届けた使者は何も知らされてはおらず、その採取情報あるいは製造方法については全くの不明のままだった。極めて貴重かつ高度な守秘を伴う物質だということ、《命の雫》の含有を確認した後はそれ以上調べることも許されず持ち帰られてしまったらしい。

「ポーション保管に似た魔道具に納められていたと言っていた。帝都の地脈から離れば《命の雫》が抜けてしまっても。その辺りはポーションと似ているな。だから錬金術師がいなければそもそも作れないものなのかもしれない。帝都で開発されたものならば、知られていないのも納得がいく。だがレビスとやらが一体何で、なぜ帝都だけにあるかは今はどうでもいい」

レオンハルトは自らに言い聞かせるように話す。迷宮をついに倒した彼であっても、いや、その苦難ゆえにこそ、迷宮都市では手に入らないものだったのだと納得したいのかもしれない。

「そんなものがあるならば、なぜ『始まりの錬金術師』を強引にでも謁見させない？ 地脈違いの問題を解決できるのに。勅命で宮廷付きの錬金術師に任じれば、我がシューゼンワルド辺境伯家とて断ることは困難。まさか、逃げられぬよう帝都に呼び寄せたところを誘拐でもする算段か？ それはあまりに早計だろう」

レオンハルト、そして今は帝都にいるウェイスハルトが腑に落ちないのはここなのだ。

そもそも帝都には高位の錬金術師が複数存在する。レビスなどという希少な素材を使って『始まりの錬金術師』にポーシオンを作らせなくても、特級ポーシオンだっていくらでも手に入る。だとしたら、『始まりの錬金術師』を帝都に呼ぶことが目的なのか。それともレビスを使わせること自体に何らかの意図があるのだろうか。

「ま、そう悩むことはない。謁見を断られた意趣返し ただの嫌がらせて可能性もある。目的があるんなら、そのうち分かるだろうしね。」

嫌がらせだつてなら今回は、護衛も豪華絢爛だから、問題ない。マリエラも今頃は帝都観光付きの楽しい出張を楽しんでることだろうよ」

「たしかに、ヴォイド殿が護衛に加わったのは意外だったが……。これは賢者殿の仕込みなのだろう？ とすればやはり危険を見越しておられるのでは」

「心配性だねえ。そりゃ危険はあるさ。マリエラは弱っちいし錬金術を除いたら何のとりえもない娘だ。だから幼いあの子が魔の森で暮らせるように知恵を授けた。一人でも稼いで食っていけるように錬金術の弟子にして、迷宮のあるこの街で暮らしていけるように鍛えあげた。」

魔の森の氾濫の夜を越え、迷宮の最奥に同行し討伐を助けたあの子のこれまでが、安全だったとも思ってるのかい？」

「確かに彼女には、少女の身にふさわしからぬ逞しさがあると思うが……」

「帝都行きのことだって、マリエラが行くと決めただ。つまりはね、あの子がなすべきことが帝都にあるということさ。だからあたしらは、あの子が使命を果たせるように手助けしてやればいいんだ」

「マリエラ嬢がなすべきことは一体……？」

「それはあたしにも、たぶんマリエラにもまだわからない。でもね、地脈の深くで契約するということは、そういうことなんだよ」

フレイジージャという女性は、時折こういう物言いをする。なぜそうするのか理由も筋道も分からないのに正しい答えだけを知っているような口ぶりで話をするのだ。そして、こういう場合にフレイジージャが示した道は、たいてい最短で最良に至る道だ。だからこそ、人は彼女を“賢者”と呼ぶのだろう。

「……理解はできぬが納得はした。だが、名を変えるとか変装するとか、もう少し秘密裏に動いた方がよかったのではないか？」

「それこそいらぬ心配だよ。マリエラの凡庸さを舐めちゃいけない。あたしが炎の化身なら、あの子は庶民の化身だね」

「庶民の、化身……」

褒めているのかいないのか。

フレイジージャは、ふふん、とばかりに笑っているから自慢しているのかもしれない。こんなところがあるものだから、“賢者”の前に“炎災”なんて物騒な言葉が付けられるのだろう。

「確かに、マリエラ嬢の平凡さには一定の評価があるが……」

庶民の化身とはあんまりな気がするし、なによりそれは、ノーガード戦法というのではないのか。

「やはり、賢者殿も帝都に行かれてはいかがか」

「やだよ。昔ちよーっと燃やしたのを根に持つてる奴がいるんだ。リユーロにさんざんワリ喰わしといて逆恨みとかねちっこいよね。あ、そろそろリユーロが迎えに来る頃だ。帰るわ」

ちよつと燃やした昔つて、それは、いったいいつの話だろう。

いろいろと問い詰めてみたくなったレオンハルトだったが、帝都行きの話から逃げるようにフレイジージャは席を立ち、お土産の酒を片手に帰っていった。

05・边境伯爵にて（前書き）

前回までのあらすじ：マリエラの帝都デビューは、「始まりの錬金術師」が呼び出された結果だった。

## 05・辺境伯邸にて

帝都におけるマリエラ達の宿泊先は、シューゼンワルド辺境伯の帝都の屋敷だ。

マリエラとしては黒鉄輸送隊が定宿にしている宿屋でもよかったのだが、警備の問題から皇帝陛下謁見の関係者一同は全員ここに宿泊することとなっていた。木を隠すなら林というやつなのだろう。

とはいえ林に例えるならマリエラ達は雑木林で、美しく手入れされた庭木が集うようなこの屋敷は少々どころかかなり落ち着かない。流石は領地も権限も大きい辺境伯というべきか、帝都の屋敷は城かと思紛うほどに広大で立派なものだった。迷宮都市にあった邸宅もものすごく立派だと思っていたのだがこちらはその比ではない。ちなみにマリエラは立ち寄っていないから知らないことだが、領地にある住居は文字通りのお城だ。今はキャララインが滞在し、ちよんごいいからとウエイスハルトの母やレオンハルトの妻から社交やらなにやらマリエラにはよくわからない教育を受けている。キャララインも古い家系の貴族ではあるが、錬金術師の一族と領主の一族とでは、いろいろと勝手が異なるようだ。

( 辺境伯ってすっごい偉いんだ…… )

帝都邸が領地の城に比べれば小さいとはいえ、マリエラは森の小屋育ちの庶民である。

屋敷を前にしたマリエラが、驚きのあまり口をぽかんと開けて固まってしまったのも無理はない。

本当にひらひらのドレスを着た貴族がたくさん集まって、舞踏会を開いていそうなお屋敷なのだ。帝都に建てられた貴族の屋敷とい

うものは権勢を誇るために贅を尽くすものだから、マリエラのリアクションはむしろ大成功と言っていい。

しかし、マリエラがふつかふかのソファ―に居心地が悪そうに座っているのは、この邸宅の豪華さ云々よりも、その向かいに座る人物のせいである。

「長旅ご苦労だったと言いたいたいところだが……。早速やらかしてくれようだな」

苦笑いを見せるウエイスハルトはまだいいのだが、問題は隣に無然とした表情で座る人物だ。

「あれは一体どういうことだ!!!」

ウエイスハルトの前だというのがこの剣幕は、数時間前マリエラを助けてくれたロバートである。帝都の行政区画でマリエラを助けてくれた後、残りの予定をすべてキャンセルして、ここへやってきたらしい。

「あれというのは……」

「《命の雫》だ！　ここは帝都だぞ、なんで出せる！」

分かってはいるけれど、あの時の詳細を知らない一同の手前、念のため聞いてみるマリエラにロバートが間髪入れずにかみついてくる。どうやら誤魔化されてはくれないようだ。

「あー……」

何と言って説明しようか。マリエラがちらちらと様子をつかがう



と、ウエイスハルトばかりではなくジークやエドガン、ヴォイドまでもが「え、できんの？」といぶかし気な表情を浮かべた。

それはそうだ。ここは帝都で、迷宮都市とは地脈が異なるのだ。

異なる地脈では《命の雫》は汲み上げられないし、ポーションも作れない。ほかの地脈で作られたポーションも効果が失われて使い物にならないからこそ、人は他の地脈に易々とは侵略できず、国家間のバランスは比較的穏やかな今の状態に保たれている。

ポーションという人知を超える癒しの魔法薬が人と人との争いに持ち込まれたなら、敵国の錬金術師は真っ先に殺されるだろうし、戦線にしても敵を殺しつくすような凄惨なものになるだろう。

その可能性を師匠に教えられていたからこそ、マリエラも帝都で《命の雫》を汲みだすつもりはなかったし、できれば隠していたかったのだけれども、ばれてしまったなら説明しておいた方がいい。

「これ、迷宮都市の《命の雫》なんです。いつでもどこでも汲めるわけじゃないんです」

汲めちゃうのは確かなのだが、マリエラだって万能というわけではないのだ。

《命の雫》を汲んで見せながらマリエラは説明を始める。ちよろりちよろりと手のひらから零れ落ちる《命の雫》は、床に落ちる前に大気に解けて消えていく。

「迷宮が滅びた迷宮都市の地脈は今不安定な状態にあるんです」

迷宮都市の一带は、もともと地脈が豊かな場所だ。《命の雫》は動物や植物に宿る生命の源のような力だけれど、水や風、大地や炎、その地に存在する森羅万象すべてにあまねく存在し、世界を循環し

ている。

地脈が豊かな場所というのは動植物が豊かなだけでなく、精霊も多く存在する。世界に存在する《命の雫》をエネルギーにして、精霊は存在を強めるのだ。その結果、人間に視認できるような力のある精霊にまで育つこともある。

だからかつてのエンダルジア王国では精霊公園などの場所で精霊の姿を見ることができたのだけれど、迷宮ができてしまうと《命の雫》は迷宮を維持する魔力源に使われてしまうから、精霊の乏しい場所になる。

「今までは迷宮の主が《命の雫》をたくさん食べて魔物とか生み出してたんですね。でも、その迷宮の主が倒されて、しかも迷宮の跡地っていう地脈近くまで続く深くて大きな穴が物理的に開いているわけですよ。なので、そこから時折どっぱーんと《命の雫》が噴き出したりするみたいで。そうなると噴水のへりがなくなっちゃった感じで、溢れて周りに広がっちゃって」

「ふむ、迷宮の討伐にはそのような弊害があるわけか」

顎に手をあて興味深そうに耳を傾けるウェイスハルト。視線で続きを促され、マリエラは話を続ける。

「迷宮都市の地脈は魔の森の地脈と繋がってるから、普段ならそこまで不安定にはならないんですけど、魔の森の地脈の主の方もその……」

魔の森は魔の森で、長く地脈を統べてきた深淵なる水の精霊が、あるうことかどっかの炎の精霊もどきに口説かれて、精霊辞めて駆け落ちしてしまったのだ。

この辺りのことは、マリエラも片棒を担いでいるからゴニョゴニ

ヨと言葉を濁さざるを得ない。それに、あの時はなんとかなるっぽいことを聞いていたのだ。

実際に、魔の森にたくさん棲んでいる精霊たちのおかげで、魔の森シビトの氾濫のような多くの生命に影響があるような災害は、何とかコントロールできています。人間が実感できる弊害など、ある場所の作物だけが大豊作になったり、ある種の動物が出産ラッシュになったり、不定期にちょっとした魔物の襲撃イベントが発生する程度のものだ。

「今、魔の森には聖樹の苗木がどんどん増えていつてるし、迷宮都市でも錬金術師が増えて、みんなでせつせと《命の雫》を汲んでいるから、そういう弊害みたいなものはじきに収まると思うんですが、帝都で《命の雫》が汲めちゃったのはですね」

「つまり？」

「つまり、どぱーつとあふれた《命の雫》が帝都あたりまで来ちゃってるみたいなんです。ここに来るまでに、だいぶ地脈の深いところまで浸透しちゃってて、ここで汲み出せるのは本当にこんなちよろちよろなんですけど」

つまり、マリエラが汲んで見せたのは、溢れて帝都まで流れてきてしまった《命の雫》というわけなのだ。

「それは、ほかの錬金術師でも汲めるものなのか？ その現象はいつごろまで継続する？ 錬成したポーションは帝都でも使えるのか？」

「他の人はたぶん無理です。私、だいぶ深いところで契約したみたいなので、それでだと思えます。期間は、はっきりとはわかりませんが、数か月かそれくらい。1年はもたないと思えます。あと、錬成したポーションですが、帝都の《命の雫》と混じって同化しつつ

あるのか使えるっばいです」

マリエラの説明を聞いて、ウエイスハルトはしばらく思案をしたのちに、大きな問題はなさそうだと判断したらしい。ロバートの方はというと、「まさか、そんな現象が？ いや……それならば……」などとぶつくさ言っているけれど、こちらも納得してくれたようだ。

「だが、《命の雫》が帝都にまで流れてしまつて、迷宮都市は大丈夫なのか？ 後々《命の雫》が枯渇して不作になったりはしないだろうか」

「それは大丈夫です。地脈は深いところで繋がっていますから。地脈の豊かな場所は栄えるって言いますが、栄えている場所というのは《命の雫》の循環が盛んだから逆に地脈も豊かになっていくつて師匠も言っていましたし」

「なるほど、好循環が生まれるわけか」

ウエイスハルトの為政者らしい心配に対して、師匠に聞いた話を返す。

よし、何とか納得してもらえたぞと、内心でガッツポーズをとるマリエラ。

ウエイスハルトなどエライ人とのオハナシは、いつもジークがしてくれるからちょっと緊張していたのだ。ちなみにロバートは『木漏れ日』で師匠にこき使われていた時期もあつて、エライ人にカテゴライズされていない。本人はとっても偉そうにふるまっているが、マリエラ的には弟弟子的な感覚でいる。

これにてマリエラの《命の雫》汲めちゃった問題は解決で、テーブルに並べられたお菓子を食べてもいいかもしれない。きつと帝都の有名店のものだ。なんだかオシャレで美味しそうだ。

そんな風に思った矢先、それまで「なるほど、だから……」などとつぶやいたロバートが、マリエラに向かってばーんとばかりに言い放った。

「一時的なものだというのは理解した。だが、余所の地脈でも《命の雫》が汲めるなどと知られれば一大事だぞ。グランドポーションが作れるなどと噂が立っては、シューゼンワルド辺境伯様の後ろ盾があるうとどうにもならん事態になりうる。今後は十分に気を付けるのだな！」

ロバートは今日も元気で高慢だ。偉そうだとむしろ安心してしまふ。

ヨカッタ、ヨカッタと師匠やキャロラインに「ロバート様は帝都でも元気そうです」と安否確認のお手紙を書きたいくらいなのだが、こういう時にこそ、ロバートはやらかしちゃったりしちゃうのだ。

「グランドポーションって何ですか？」

「……ロバート」

「はっ！ しまっ……」

ロバートは、マリエラを思って釘を刺してくれたのだろう。

けれど彼がぼろっと漏らした「グランドポーション」という単語は、マリエラのような一般人が知らない方がよいものだった。

余計なことに巻き込まれないようにという配慮から、なぜか地雷をばらまいていくスタイル。ポロポロ呪いをこぼしていた頃から進歩が無い人である。

「ファイヤー」

「ヒイツ」

マリエラの眩きにロバートは一瞬首をすくめた後、ジトツとした目で睨んだけれど、マリエラは素知らぬ顔でお菓子を食べた。話はまだまだ続きそうだから、腹ごしらえが必要だ。

05・边境伯邸にて（後書き）

【帝都日誌】命の雫が汲めちゃったことを納得してもらえてよかったです。bymariエラ

## 06 グランドポーション(前書き)

前回までのあらすじ：グランドポーションってなんぞ？



## 06・グランドポーション

「それで、グランドポーションってなんですか？」

ロバートがポロリしちゃった「グランドポーション」という地雷ワード。

それをスルー出来ずに踏んじゃうあたり、マリエラらしいと言えるだろう。

だが、エリクサーまで作れる錬金術師のマリエラが知らない種類のポーションなのだ。興味を持つのも致し方あるまい。

聞き返すマリエラの様子にロバートがしまったという顔をする。相変わらず正直というか脇の甘い男だ。変に勘繰られるよりは教えておいた方がよいと思ったのだろう、ウェイスハルトは小さくため息を吐くと説明してくれた。

「グランドポーションとは、世界中のどこでも使えると言われているポーションだ。我が国が帝国を名乗っているのは、かつては他国だった地脈の異なる領土を併合しているからだ。帝国がこれほどの領土を持つに至った陰に、グランドポーションの存在があつたと言われている。グランドポーションがあれば攻め入る難度を大きく下げられるからな」

「すごい、そんなものが」

それは、錬金術師の常識を覆す存在だ。マリエラは本当にびっくりしたのだが、ウェイスハルトもロバートもその存在には懐疑的な様子だ。

「伝説の域を出ない話だ、そんなものが使われた記録はない」  
「そんなものがあつたのなら、迷宮都市は迷宮の討伐にあれほど苦  
労したりはしませんよ。私も新薬など作りはしなかつたでしょう」  
「言われてみればそうですね」

帝国の歴史は200年前の魔の森スタンビートの氾濫よりずっと古い。本当に  
そんなものがあるのなら、エンダルジア王国滅亡の時に登場しても  
おかしくないではないか。あの時は、まだ他国だつたからなのかも  
しれないが、シューゼンワルド辺境伯領に組み込まれた後も、迷宮  
都市は本当に危機的状況だつたのだ。

ウェイスハルトとロバートの言葉にあっさり同意したマリエラに、  
ロバートが「単純なやつめ」と言いたげな顔をする。

「おとぎ話にすぎない、と一笑に付したところですがね。ここには  
それこそおとぎ話にすぎないエリクサーなどという代物を錬成し  
た錬金術師がいるわけです。……本当に、なぜコレがと未だに信じ  
がたくはありますが。実際に帝都で《命の雫》を汲んで見せたので  
すから、もしやグラントポーションも錬成できるのかと思つた訳で  
す。まさか名前すら知らないとは思いませんでしたが」

ロバートが早口でまくし立てる。マリエラのことを褒めているの  
かけなしているのか、それとも単にいいわけか。いつの間にか丁寧  
な口調に戻っているから、冷静にはなつたようだ。

偉そうではあるのだが、実際にロバートは貴族でエライわけだし、  
言動の割には親切でおせっかいなことが分かつているので、マリエ  
ラは気になっていたことを聞いてみる。

「ところでロバートさんはどうしてあんな場所にいたんですか？  
あのおじいさんが言っていたゲニウスって何ですか？」

「ゲニウスとは帝都を統べる精霊の呼称らしい。炎災の賢者殿は帝都の地脈には主はいないと言っていました……。詳しくは私も知りません。それで私があそこにいたわけはね、レビスについて聞きだすためです！」

ドヤ顔で教えてくれるロバート。なんだから、「光るお茶」ができるようになった時のキャロラインを思い出す。似ていないと思っていたが、案外似た者兄妹なのかもしれない。

「レビス……。《命の雫》をふんだんに含む物質ですよ、それを使って皇帝陛下に献上するポーションを作れっていう、今回の依頼がらみの」

「そう、そのレビスに関する視察です。前はさつさと持ち帰られてるくに話も聞けなかったから確かめに行ったのですよ！」

先に言っておきますが、レビスでグランドポーションは作れません。あれは、まあ、私も知らぬ《命の雫》を大量に含む物質であることは認めざるを得ませんが、それでも含んでいるのは帝都の《命の雫》ですからね」

ふふん、と顔を斜め45度に上げ、「ですが、私には分かっちゃったのです」と自信満々にロバートは続ける。

「先ほど《命の雫》を汲みあげて見せた事象。あれこそがグランドポーションの正体でしょう。」

あの《命の雫》は、迷宮都市のものだが帝都でも使えると言ったでしょう。つまり、帝都でも迷宮都市でも使えるポーションができるはずですよ。それでもって、「どこでも使える」と吹聴すれば事情を知らぬ者は信じます。事実、2か所で使えるだけでも驚愕ものですからね。

つまりは、過去にも地脈の変動の際、別の場所で《命の雫》を汲めた者がいて、そのポジションでもって周辺国への示威行為をしたというのが、このロバートの推測です。

とすれば、今回のレビスを使った件も似たものでしょう。

この国の広大さを見てごらんさい。どれだけの地脈を併合してきたことか。それだけ敵も多かったでしょう。そして、今もってなお、気が抜けないのかもしれない。

グランドポジションとは周辺国家だけでなく、帝国の隅々まで忠誠を誓わせるためのブラフ、演出装置なのですよ。

“かの大迷宮の討伐に貢献した『始まりの錬金術師』に、帝国はどこでもポジションを作らせることができる”と示せば効果は言わずもがな。

迷宮都市に忠誠を誓わせるための儀式の一種に違いありませんね」

インエイション

「ドヤアアア！ とばかりに自らの推論を語って見せるロバート。

想像にしか過ぎないというのに「正体見たり」と言わんばかりだ。逆にウエイスハルトは「それって、ロバートの想像だよな？」と冷めた顔をしている。さすがは賢さの男、冷静にして沈着だ。

かつてロバートは、マリエラは囿か何かで錬金術師ではないと思いつき、マリエラのいる前で「錬金術師はどこだ！」とやらかしたことがあったのだ。優秀な学者だというのに、こういう勘はずこぶる悪い。だからマリエラは、恐らくロバートの見立ては外れているのだろうと思っている。

黒歴史職人ロバート。

そのくせ彼は、核心に近い情報だけはきっちり入手しているのだ。その証拠に、締めとばかりに続けた言葉に、マリエラは吃驚させられたのだから。

ロバートは言ったのだ。

「それよりも、行政区画のあの場所です。あそこには近寄らない方がいいでしょう。あそこは、贄の一族の総本山ですからね」

「贄の一族!？」

まさかその名前がここで出てくるとは。

贄の一族とは、皇帝や重要な任務に就く貴族に、その身に降りかかる災厄を肩代わりさせる形代カタシロと呼ばれる生き人形を作り宛てがう一族だ。

ロバートとキャロラインの伯父ルイスは、その形代カタシロに選ばれたせいで命を落とし、ルイスの《命の雫》を受け入れた二人の父ロイスは長く苦しむこととなった。その対価としてもたらされた贄の一族の知識を使ってロバートが作り上げたのが、新薬と呼ばれるもの形代に加工した奴隷に兵士のダメージを転写する呪術の一種だったのだ。

(あのおじいさん達が贄の一族……)

だが、彼らは錬金術師がどうとか言っではいなかったか。

「贄の一族って、錬金術師なんですか？」

「そんなことも知らないのですか？ 当然でしょう。形代カタシロというのは貴人が受ける怨念、嫉妬や敵意、あらゆる悪意を肩代わりする者です。物理的な攻撃は防ぎようがありますが、形のない害意は普通は防げません。そのくせ悪意、彼らは“穢れ”と呼んでいますが、穢れが蓄積すれば、運命が悪い方向にねじ曲がってしまうんです。

そして形のない穢れを肩代わりするには、適性だけでなく貴人と

の相性が重要です。形代が幼いころからどれだけの時間をかけて肉体を調整することか。だからたとえ皇帝であろうと形代は一人か多くて二人しか持てません。

……無理に作りかえられ、覚えなき悪意を押し付けられた形代カタシロの肉体は、ひどく痛むのですよ。しかし、替わりはいないのです。長持ちさせるために、最高の癒しを与えるのは当然でしょう？」

ロバートが何処かつらそうに話すのは、形代カタシロとなつた伯父ルイスを思つてか、それとも自らが新薬として犠牲にした人々を思つてか。それでも彼は言葉を止めない。口は悪いが、マリエラが知るべき情報だと思つたのだろう。

「彼らは、皇帝専属の錬金術師集団です。帝都の神秘の中心と言ってもいい。

知識を求めて門を叩く錬金術師は多くいますから、今ではだいぶ膨れ上がってイリデッセン学派と呼ばれていますよ。

イリデッセン学派くらいは知っているでしょう？ 何、知らない？ 不勉強ですね。あの場所こそ、帝国最高の錬金学府『イリデッセン・アカデミー』ですよ。まあ、今では帝国最高の錬金術研究機関という位置づけで、研究の幅も広い。このロバートが在籍しているくらいですからね。一般の学生や研究者も多いので、形代なんぞの情報は当然秘せられていますよ。

イリデッセン学派の中でも秘密主義で血族主義、本当の秘術を扱う中枢こそが贄の一族と呼ばれる連中です。秘密はその存在ごと秘されてこそ守られるもの。アカデミーの教授であっても贄の一族の名を知らない連中は多いから、知らなくとも無理はないでしょうが。

ですが錬金術師を名乗るならこれくらいは覚えておきなさい。贄の一族は、この帝国の始祖こそが錬金術師の祖であると言っているのですよ。」

「帝国の始祖が、錬金術師の祖……」

一番最初の錬金術師がどうやって地脈から戻ってきたのか。

錬金術師なら誰だって考えたことがあるだろう。けれど、その最初の一人がこの帝国の始祖だとは。そして、それを提唱するのが、この地に連綿と秘術を繋ぐ贅の一族。

その言葉に、漠然とした不安を掻き立てられたのはマリエラだけではなかっただろう。

「ロバートよ、そう心配を煽るものではない。我がシューゼンワルド辺境伯家が付いているのだ。火中の栗を拾いに行くような真似をしなければ、そう危険が及ぶこともあるまい。………今日、行っただけだが、以後気を付ければよい。

マリエラ嬢、君の仕事は指定された特級ポジションともう一品の自由課題、君が“この帝都に必要と思うポジション”を錬成することだ。陛下との面会は私とキャルの仕事だし、面倒な連中の相手も請け負おう。

せっかく帝都にまで来たのだ。数日もすればキャロラインも来る。帝都での暮らしを楽しむといい」

暗くなってしまった雰囲気を払拭しようとしたのだろう。ウェイスハルトの言葉に、マリエラの表情は少しばかり明るくなった。本当にできた人だ。キャロラインは当たりを引いたと言っている。

そう、ここは憧れの帝都なのだ。美味しいお菓子に珍しい料理、最新の服や靴や鞆に珍しい雑貨、そして見たこともない錬金素材の数々がマリエラを待っているに違いないのだ。

マリエラたちが一足先に帝都入りしたのは、“帝都に必要と思われる錬成品”という自由課題の為に、帝都を知る必要があったから

だが、帝都を知るついでに楽しんじゃってもいいではないか。言わばこれは、観光付きのご褒美出張というやつだ。

護衛だって、ジークにエドガン、さらにはヴォイドと、交替で就くにしても過剰戦力だ。それでも心配そうな顔をするジークに向かって、了承を取り付けるようにウエイスハルトが続ける。

「マリエラ嬢にはもう一人女性の護衛を付ける。男性では立ち入れないところもあるだろうし、24時間護衛をするわけにもいくまい。少々……… 個性的な者ゆえ、屋敷の敷地内での警護に限られるが、能力は保証しよう」

「個性的」の前に開いた間はなんなのか。先ほどとは違う緊張感を感じたのは、ここにいる一同がそれなりの修羅場を潜り抜けてきたからか。

ベルを鳴らし、入ってきたメイドに護衛とやらを呼ぶように伝えるウエイスハルト。喋るだけ喋ったロバートは紅茶を飲みながら満足そうにしているが、護衛が来るまでの短い時間、部屋に漂う緊張感にマリエラは逆に喉が渴いたくらいだ。

そして。

「ナンナなん。よろしくなん!」

「じゅっ、じゅっ、じゅっ、獣人!?!」

ウエイスハルトに呼ばれて部屋に入ってきた女性は、なんと体中が白い毛でおおわれた、二足歩行の猫だった。



## 06・グランドポーション(後書き)

【帝都日誌】ニヤン娘ちゃん、キタコレ！ え？ 贄のなんたらが  
錬金術師がどつとか？ 寝てたからシラネ。 b y エドガン

## 07・ナンナ（前書き）

前回までのあらすじ：帝都にはどこでも使えるグランドポジションなるものがあるらしい。

< i 7 3 6 6 9 6 — 2 1 0 6 4 >

帝国フンワリMAP：マリエラが「こんなかんじかな」と記憶している地図。

通ってきた風景やチラ見した地図、話で聞いた情報から構築されている。意外といい加減なため、時々変化する。

## 07・ナンナ

「ナンナなん。よろしくなん！」

「じゅっ、じゅっ、じゅっ、獣人！！？」

マリエラ、ジーク、エドガンの3人が叫んだのも無理はない。あの冷静なヴォイドでさえも目を見開いて驚いている。エドガンなどは目をこすっているが、先ほどまでの真面目な話の間中、居眠りしていたのではなからうか。

一同が目が覚めるほど驚いたのも無理はない。獣人という種族は、恐ろしく珍しい種族なのだ。基本的に生息している森から出てこないということ、身体能力が恐ろしく高いことくらいしか情報がないし、会ったことがあるという話も聞いたことがない。

そんな獣人ナンナに近づき、ファーストコンタクトを試みたのは、やっぱり我らがエドガンだ。

「なん……だと……」

「ナンじゃないなん、ナンナなん」

「なんなんなんな、なんなんな」

「うなっ」

真面目な話の最中は半分寝ていたくせに、雌ニャン娘の登場に急にアップを始めるエドガン。

恐るべきコミユ力だ。

からかわれたと怒ったナンナの猫パンチを華麗に躲すと、すかさず出された手を取り肉球をぶにぶにしている。

出会ったばかりで即猫パンチを繰り返すナンナに、獣人の戦闘民

族ぶりにおののくべきか、それとも肉球ぶにぶにするエドガンを、実にうらやまけしからんとおののくべきか。

獣人ナンナも相当に素早いのだが、エドガンはいろんな意味で手数之多さで知られたAランク双剣使いだ。相手が雌猫ちゃんならば、最高速度を更新したっておかしくはない。

肉球を触られたナンナの方は、「うなっ」と手を引っ込めて後ろに下がり、フシャーと毛を逆立てる。

ファースト・コンタクトはどうやら失敗したらしい。しつこく追いつがるうとするエドガンをヴォイドがやんわりたしなめる。

「やめたまえ、エドガン。猫は手足を触られるのを嫌うはずだ」

「そーなんすか？ ヴォイドさん。ナンナたん、ごめんねー」

「フーツ！」

人語を喋っているのだが、猫扱いでいいのだろうか。ヴォイドの適応力も高すぎか。

あと、マリエラどころかジークまで触りたそうなのはどっいうことか。狩人なんだから、犬派ではないのか。

「オレ、新しい扉を開きそうだ……」

「エドガンはとっくに開いてるじゃないか」

「それはそれですごいね」

「うなんな」

< i726096 | 21064 >

エドガン、ジーク、ヴォイドと、当然のように交じるナンナの会話に付いていけないマリエラは、目の前の二足歩行する白猫を観察する。

身長はマリエラより少し高いくらい、白い毛並みにブルーの大きな瞳がチャーミングな短毛種だ。手入れの行き届いた毛並みはつやつやしていて、マリエラも触りたくって手がわきわきしてしまう。

速度重視なのか、それとも毛皮が鎧を兼ねているのか、胸部装甲と一体となったような上衣に、しっぽの穴が開いた短パンという快活な格好だ。人間であればボーイッシュな印象を受ける格好なのだが、全身を毛皮で覆われた動物のような見た目のせいか、それともナンナからにじみ出る愛らしさのせいか、似合っていてとても可愛い。

手の指は人間に近い形だし手足の骨格も二足歩行に合わせて変形しているようだ。靴のかかたが高いのは、つま先立ちで歩くからだろう。

顔まで毛でおおわれているせいで猫の印象が強いが、よく観察してみると猫と人間の中間のような造形である。

「獣人は協調性が無さ過ぎて人間のコミュニティに馴染まないのだが、君たちならば大丈夫そうだな。ナンナ、彼女がマリエラだ。屋敷にいる間、彼女の安全は任せたぞ」

ウェイスハルトに紹介されたマリエラを、ナンナはちらりと横目で見た。ナンナのしっぽはぶんぶん振られていて、なんだか機嫌が悪そうだ。

だがそれもイイ。マリエラの目はナンナの尻尾を追いつばなしだ。

ナンナはむしろジークやエドガン、ヴォイドに興味がありそうにしている。性別によるものかと思っただが、ロバートには見向きもしないところを見ると、おそらくナンナにとっては強さが評価対象なのだろう。獣人らしい対応と言えるが、護衛としては少々困るのではないか。マリエラとしては、日当たりのいい場所で丸くなってい

てくれても構わないのだが。そして、ナンナをもふりながらマリエラも一緒に昼寝するのだ。

（はわわわわ。おっきな白猫と日向でお昼寝……）

幸せな妄想にぼわぼわしてしまうマリエラ。先ほどまでの深刻な話は全て過去になっている。

「マリエラ嬢、獣人の特性については追々説明するが、まずはサラマンダーを出してはくれないか。顔を見せるだけでいい」

「え、あ、サラマンダーですか、はい。《来たれ、炎の精霊サラマンダー》」

ウェイスハルトに声をかけられ正気に戻ったマリエラが、言われるままにサラマンダーを呼び出すと、小さなトカゲが手の上に現れ腕を伝ってマリエラの肩まで登った。知らない場所に呼ばれて少し興奮しているらしく、「キャウキャウ」と声を上げる。すると暖炉の炎が歓迎するように大きく揺らめき、薪がパチンと音を立てて爆ぜた。

「なっ、なっ、なっ」

「ナンナ？」

暖炉の炎以上に大きな変化があったのはナンナだ。サラマンダーの姿を見たナンナの瞳孔がキュキュッと窄まりサラマンダーを凝視している。

「守護精霊なん！ よわよわニンゲンに守護精霊がいるなん！」

「守護精霊？」

興奮しきりのナンナ。あつたばかりのマリエラを“よわよわ”扱いとはなかなか失礼なニヤンコなのだが、それには触れずにウエイスハルトが答えてくれる。

「獣人には一人に一体、守護精霊と呼ばれる同じ獣性を持つ精霊がいるらしい。強者ともなればその守護精霊は他者から視認できるほどだとか。彼らの常識からすると、サラマンダーを使役できるマリエラは大変な強者というわけだ」  
「よわよわなんな、つよつよなん……」

相当混乱しているのか、マリエラの周りをぐるぐる回り始めるナンナ。溶けてバターになってしまっそうだ。ナンナは白猫だからコデンスマイルクか何かだろうか。時折ふかふかした毛皮が手に触れて気持ちがいい。ぜひとも撫で繰り回したい。

「ナンナよ、これは守護精霊ではないがマリエラはサラマンダーを使役できるのだ。彼女の戦闘力は低いがサラマンダーは彼女の命令に従う。マリエラの側にいれば守護精霊を使役するヒントが得られるかもしれないぞ。マリエラの言うことをよく聞いて、彼女をきちんと守るといふなら、お前をマリエラが屋敷にいる間の護衛として側にいさせてやるう」

「わかったなん！ ナンナにおまかせなん！」

なんとサラマンダーを餌に白猫娘が釣れてしまった。

だがしかし、ナンナはマリエラの言うことを本当に聞いてくれるのだろうか。現在進行形で軽んじられている気がしないでもないのだが。ここは早いうちに確かめる必要があるだろう。何しろ今のマリエラは、ナンナにお願いされている立場なのだ。

「一緒にいるなら、私のお願ひ聞いてくれなきゃだめなんだよ」

「うなんな！」

それはYesなのかNoなのか。頭をこくと縦に振っているからYesなのだろうが。

「じゃあさ、あとでなでなでもいい？」

「うなんな！」

よし、キタ、契約成立だ！

頷くナンナに思わずガッツポーズを決めるマリエラ。

ウエイスハルトは「ナンナは音にも臭いにも敏感だ。同じ部屋にいれば夜も安心して眠れるだろう」なんて追加の説明をしているのだが、そんなことはどうでもいいのだ。

豪華なお屋敷で、でっかい猫をモフる幸せ。

マリエラの帝都でのQOL生活の質は最高のものが約束されたも同然だ。

やっぱりジークもナンナをモフりたいのか、眼帯を外して精霊眼を出そうとし始めたのだが、いつの間にか背後にいたヴォイドにそっと押さえられていた。

話がややこしくなるのはよろしくないし、ナンナはマリエラの護衛に必要なだ。精霊眼は当分の間、封印しておいてもらいたい。



07・ナンナ（後書き）

【帝都日誌】 獣人とは珍しい。エルメラが見たら喜ぶだろうが、毛皮は静電気が溜まりやすいから懐かれないかもしれないな。byヴ  
オイド

<i533106—21064> <コミカライズ「輪環の魔法薬」  
BC124（5月5日配信予定）はお休みです。

## 08・猫のいる朝（前書き）

前回までのあらすじ：帝国、錬金術師と縁が深そう。あと闇も深そう。だが、そんなことより獣人だ。

## 08・猫のいる朝

シューゼンワルド辺境伯の帝都の屋敷には、豪華絢爛な母屋の他に二つも離れが立っている。

一つは、兵士用の宿舎。

シューゼンワルド辺境伯が迷宮都市から帝都を訪れる際は、迷宮討伐軍を伴うことが多く、彼らの宿泊先として建設されたものだ。隊長クラスも泊るから華美ではないが調度品の質は良いし、武装して動き回することを考慮に入れた広々とした造りで、街の上等な宿屋よりもほど居心地がいい。

2階から上は宿泊用の個室を備えた兵舎のような雰囲気で、大小複数の会議室の他、朝昼晩と旨い料理が食べられる食堂や、魔道具完備でいつでも入れる浴場、十分な広さの訓練場があるのも評価が高いポイントだ。

今回の滞在ではこちらの建物が男性用の宿舎になっていて、ジークたちの部屋もここに用意されている。ウェイスハルトの供として来た兵士十数名がすでに滞在し、調査部隊を中心に帝都での活動を開始している。

もう一つの離れは、数代前の辺境伯が住居として建設したものだ。豪華絢爛な母屋は権勢を示すために必要なものだが、迷宮討伐に明け暮れた辺境伯は落ち着けなかったらしい。豪華な母屋の裏に、こじんまりとした邸宅を増築して暮らしていたとか。

貴族の体面とは面倒なものだと呆れてしまうが、この離れ、その後の辺境伯たちも、時に嫁と折り合いの悪い姑の隔離場所として、時に夫婦喧嘩した時の別居場所として、わりと活躍してきたそうだ。

質実剛健と言った内装のこの離れは、今回は女性用の宿泊施設になっている。

マリエラにあてがわれた部屋は中でも良い部屋で、大きなガラスをはめ込んだ窓からは朝の光が差し込み、すぐその梢に止まった小鳥のさえずりが朝の訪れを告げている。

やたらめつたら広いベッドのど真ん中には、白猫娘のナンナが丸くなっていて、その横に添え物のようにマリエラが寝ていた。

チュンチュンチュン、チュンチュクチュン。

「うーん……」

小鳥の囀りに、マリエラが眠い目をこすりつつ伸びをする。

いわゆる朝チュンというやつだ。

昨夜はお楽しみだったのだ。

マリエラとナンナのお世話係のメイドさんも参加して、ブラッシングという名目でナンナをモフリ倒してやったのだ。おかげで毛だらけになったけれど、一生分もふった気がする。

おかげさまで、我が人生に一片の悔いなしとばかりに眠りについたマリエラだったが、朝は容赦なくやってくるし、起きてこないマリエラとナンナを起こしにシューゼンワルド辺境伯家のエリートメイドはやってきて、あれよあれよという間に支度をされて食堂に送りだされてしまった。一緒になってモフっていたのに元気なことだと感心してしまう。

「マリエラ、今日もモフるといいんな」

「そうしたいのはやまやまんだけど、やることあるし出かけないと」

「んなん。ナンナも行くなん。ずっとお屋敷退屈なん」

毛づくろいはコミュニケーションとして最適だったらしい。お互いの身の上話だとか目的だとかそういう会話は全くしていないのに、マリエラとすっかり仲良くなったナンナは、屋敷の外でもマリエラを守ってくれると言いだした。

それ自体はありがたいのだが、いかんせんナンナは獣人だ。あまりにも目立ちすぎて認識障害の魔法陣でも隠しようがない。せめて一見普通の人間に見えるならやりようはあるのだが。

「マリエラは座って待ってるなん。ナンナが肉を捕ってくるなん」

食堂はそれなりに混んでいて、ジークたちは料理を取り終え席に座って待っていた。ナンナはマリエラに待っているように告げると、「一狩り行ってくる」みたいなノリでカウンターに向かった。

「おはよう、ジーク、エドガンさんにヴォイドさん」

「おはよう、マリエラ。ナンナと随分仲良くなったようだな」

「そりゃーもう。もっふもふにモフったからね」

ジークの問いに、にへらと顔が緩むマリエラ。

対するジークはどこことなく不満顔だ。当然だろう、ちよくちよく

『木漏れ日』<sup>フレイジージャ</sup>にやって来る義母もどきから離れてマリエラと帝都旅行と思つたら、引率<sup>ヴォイド</sup>の先生を付けられた。ここまでは、まだいい。ヴォイドの同行は正直心強いし、何より宿泊は別だろう。そう思っていたのに、なんとということでしょう、宿泊先は超豪華だが男女別だったのだ。

これはもう、旅行じゃなくて合宿だ。

今朝だって、顔見知りの迷宮討伐軍兵士に「朝練しようぜ」なん

て誘われたばっかりだ。

それでもマリエラが寂しがってくれるとか、夜中に会いに来てくれるとかしてくれれば、それはそれでアリだったのに、肝心のマリエラは白くてデカい猫ちゃんとキャツキャウフフで昨夜はさっさと部屋に引き上げたきり会うこともなく、今朝はやたらとツヤツヤしている。

解せぬ。不服だ。ジークの献身は無償ではないのだ。

ちよつとくらいはマリエラのねぎらいが欲しいし、本音を言つと混ざりたい。

だがしかし、獣人はケモノと言えど人なので、さすがにモフらせると言うわけにはいかない。そんなことを臆面もなく口に出せるのは、このメンツでは一人しかいない。

「いいなー。オレもナンナたんとモフいちやしたいぜ」

「エドガン君は、朝からブレれないね」

言葉だけでなく、手をワキワキさせるというある種パーフェクトなエドガンに、冷静にヴォイドがツツコむ。

ナンナを女性として見ているのか、それとも猫の扱いか。勇者なのか愚者なのか。

安定のエドガンのお陰で和やかな空気のなか、ジーク達と合流したマリエラは今日の予定について相談を始めた。

「申し訳ないのだが、義理父に挨拶に行かなくちゃいけないね。

ダンジョンに向かうのは明日以降にしてみらえないか」

「俺はギルドの受付嬢ちゃんとデートなんだ」

ヴォイドとエドガンは、今日は予定があるようだ。あと、エドガ

ンはいつの間に約束を取り付けたのか。なんにせよ、エドガンにしては気が利いている。おかげで今日はマリエラと二人きりで過ごせそうだ。

「じゃあ、俺たちは買い物にでもでかけるか」

さりげなくスマートにマリエラを誘うジーク。

もともと到着した翌日は休みにする予定だったから、それぞれの行動は予定通りだ。帝都観光を楽しみにしているマリエラのために、最新の帝都情報だつてリサーチ済みだ。

しかし誰よりも自由時間を楽しみにしていたマリエラは、先ほどから浮かない様子でジークの提案にも口を閉ざしている。

その視線の先には、朝食の受け取りに並ぶ列に割り込んで、カウンターに向かつて「マリエラと二人分なん、大盛りなん」と大盛の肉を要求するナンナ。兵士も多く並んでいて、ナンナより強い者も多いのだけれど、皆ナンナの常識さを了解しているだろう、注意しないどころかニコニコと順番を譲ってくれている。みんな、猫、大好きか。

「はあ……。並ばないと駄目だよ、ナンナ。それじゃ、変装したつて連れていけない……」

マリエラの口から、ため息とともに呟きが漏れる。

ずっと森で暮らしていたナンナにとって、広大とは言え屋敷の敷地から出られないのはストレスだろう。本人も出かけたがっているし、せつかく帝都にいるのだから、できれば一緒に観光したいとマリエラは思っていたのだ。けれど獣人というのは珍しすぎて、フードや仮面で変装したつて突拍子もない行動をとられたら台無しだ。

思わず零れた声だったのだが、獣人の五感はとても鋭いらしく、ナンナにはマリエラの呟きが聞こえたようだ。

「うなん！ 並ぶなん！」

しゅたつと姿勢を伸ばしたナンナは、ぴゅつと列の最後尾に並びなおした。どうやら、順番に並ぶもの、という決まりは分かっていたようだ。分かっているも守らない。さすがは猫畜生である。

マリエラに言われて並びなおすナンナの様子に、食堂にざわめきが走る。

「……おい、あれホントにナンナだよな？」

「ああ、並べって言ったら勝負を挑んでくる肉体言語のナンナだな」

「ああ、弱肉強食を地で行く猫畜生のナンナだわ、つか獣人ほかにいねーし」

「一緒に来たのってマリエラちゃんだろ？ 迷宮討伐ん時の。一撃瀕死になるから絶対に攻撃が当たらないようにってヴォルフガンゲ隊長が守りまくってた激弱錬金術師の」

「さつきマリエラちゃんの分もって言ってなかったか」

「なんであんな筋肉に見放された娘の肉を、ナンナが取りにいったんだ？」

「最弱すぎてナンナたんが母性に目覚めたとか？ 給餌的な」

「ナンナたんってなんだよ、ナンナたんって……」

「だって、みんながそう呼ぶから……」

ざわざわ、ざわざわ。

あの猫畜生が一体どうして……。

食堂のざわめきは止まらない。あと、やっぱりニャンカス扱いだっただのか。



マリエラが錬金術師であることを知っている何人かが、マタタビ的な薬でもって洗脳したのではないか、いやいや、マタタビ漬けにした中毒猫にマタタビ欲しくば〴〵的なことをしたのではないか、などと話はどンドン飛躍していく。

酷い言われようだ。ひとえにサラマンダーとモフリケーションの賜物なのに。

ちなみに、メイドの女性たちに対してはナンナは比較のおとなしいから、モフリケーションは思いのほか有効なのだが、これは男性諸氏には秘密である。二足歩行の猫という容貌なのに、一目で女の子だと分かるほど、ナンナは可愛い美猫なのだ。

「ナンナたん、今でも十分可愛いけどさ、人間だったらスツゲ美人だろうなー」

「エドガン、お前……」

食堂中の話題をかつさらうナンナを眺めつつエドガンが何気なく呟く。

ジークは呆れているけれど、エドガンみたいな下僕候補がこれ以上増えては、危険が危なくてリスクがデンジャーじゃないか。エドガンは昔ニードルエイプにすら愛を語ったと聞いたことがある。その時は「ふーん」で済ませたけれど、目の前で目撃するとマリエラはちょぴり引きそうになった。

「……ん？」

エドガンの変態加減に流されそうになったけれど、今すっごくいいことを言った気がする。

「エドガンさん、今なんて……」

「え？ ナンナたん、モフカワ」

「その後」

「人間だったらゲキカワ」

「それだ！」

え、どれ？ という顔をする一同を前にして、マリエラはすつくと立ちあがる。

マリエラは思いついちゃったのだ。

この世には、人間を魚人に変えるポーションがある。

ポリモーフ  
変身薬というものだ。

だったら獣人を人間に変えるポーションだってあってもいいはずだ。もつとも、そんな需要は今までなかったようにマリエラのライブラリには作り方は載っていないが、ポリモーフ変身薬のバリエーションは豊かで法則性はシンプルだ。変身を促す『オーロラの氷果』に変身時間を調節する『時騙しの花蜜』、それに変身対象を象徴するような何かがあればいいはずなのだ。

獣人と人間との違い、人間を象徴するもの、それは一体なんだろう。

マリエラは列に並びながら機嫌よく尻尾を振るナンナを見ながら頭を悩ませた。

08・猫のいる朝（後書き）

【帝都日誌】マリエラは猫付き帝都旅行だが、俺の方は合宿だった。  
b y z i e k

09・思わぬ助っ人（前書き）

前回までのあらすじ：ナンナたん、モフカワ。人間だったらゲキカワ。

## 09・思わぬ助っ人

（人化のポーションを作るとして、人間を象徴する物って一体なんだろう）

すでにあるポーションの応用、バリエーション違いと言っても新しいポーションを作るのは簡単ではない。これだと思って錬成しても思わぬ効果を示すこともある。むしろ、その思わぬ効果が新たな発見となつて有益なポーションが生まれてきた歴史さえある。

技術は自然の原理や原則の延長上に発展していくものだが、ポーションだつて同じだ。ただ、その原理や原則が人知の及ばない超常の物なので法則性が見つけにくいのだ。

今回の場合は、魚人の変身薬をベースに、鰓石エラの代わりになる物を見つけないといけない。

人を魚人もどきに変身させるには、素早く泳げる手足のヒレ以上に水中呼吸を可能にする機構が必要で、魚の鰓エラに稀にできる真珠に似た石、鰓石エラが材料になったのだ。では、獣人の見た目を人間のように変えるには、一体何が必要だろうか。

“人間”の特徴を求めて食堂に集つた人々を見渡すマリエラ。ここには、たくさん人間が集まっている。

兵士、兵士、兵士、兵士、兵士、ニャンコ、兵士、兵士、兵士、  
ロバート、兵士、兵士。

（ん？ あれ、ロバートさんじゃない。なんでロバートさんがここで朝食を？ 帝都に住居あるんだよね）

マリエラは視線の先に、一人で朝食をとるロバートを見つけた。  
「なんで？」と首をかしげるマリエラだったが、単に昨夜遅くまで議論が長引き、そのまま泊っていっただけの話だ。

帝都について早々、錬金学府『イリデッセンズ・アカデミー』の儀式に迷い込んでみたり、グランドポーションだとか贄の一族だとか錬金術がらみのパワーワードを聞いたのに、ナンナの登場でサクッと脳みそニヤンコに上書きされたマリエラと違って、ロバートやウェイスハルトはあの後夜遅くまで働いていたのだ。

だがそんなことはどうだっていい。ロバートは錬金術にも造詣が深いのだ。相談相手としては申し分ない。そう思ったマリエラは、果敢にもロバートに突撃をかました。

「ロバートさん、ちょっといいですか？」

「良くありません。見れば分かるでしょう、私は朝食の最中です」

相変わらずツンケンしているロバートだが、マリエラは構わず向かいに座り、それに追従するようにジークがマリエラの隣に、エドガンとヴォイドがロバートの両隣に座った。

しょっぱなから鉄壁の包囲陣だ。何にも悪いことはしていないのに、哀れロバートは速攻で退路を塞がれる。露骨に嫌そーな顔をするロバートに、最初に仲良し攻撃を仕掛けたのはフットワークも口も軽い男、エドガンだ。

「まあまあ、大勢で食った方が旨いっしょ」

「貴様らの皿は空ではないですか」

「もうすぐナンナたんが持ってきてくれるっす」

「私はもう食べ終わりました」

皿にはまだ料理が残っているのに席を立とうとするロバートだが、マリエラも気にせず話を始める。

「実は相談があつてですね」  
「話を聞け」

エドガンのコミュニケーションの高度はいつものことだが、今日はマリエラも押しが強い。押し切られたのか、初めから聞いてくれるつもりがあつたのか、キレつつも再びカップに手を伸ばしたロバートにマリエラは話を続ける。

「人間の原型とか象徴とかつて何だと思えますか？」

「……ホムンクルスでも作るつもりですか？」

「いえ、あの、ナンナを人間ぼくする新しい変身薬ポリモーフを作ろうと思つて」

「……………続けなさい」

最初こそ胡散臭げにしていたロバートだったが、新しいポーションを作るのだと聞いて、興味が湧いてきたようだ。しかもさすがはロバートというべきか、マリエラが何種類かの変身薬ポリモーフの作り方を説明すると、それだけで理解してしまったようだ。頭の良さが半端ない。マリエラもちよつと分けて欲しいくらいだ。

「なるほど、それで人間の原型ですか。では聞きますが、アレはそもそも人ですか？ それとも言葉を喋る獣ですか？」

ようやく順番が来たのか、カウンターで「肉、肉、肉なん、もつとなん」と騒ぐナンナを指さしロバートが問う。

「ナンナは人です」

「ナンナさんは可愛い女の子だぞ」

「エドガンは黙ろつな」

即答するマリエラとエドガン、そしてエドガンを黙らせるジーク。ヴォイドはにこやかに食後の紅茶を楽しんでいる。

ロバートが言うと、獣人差別のように聞こえてくるが彼が言いたいことは、そうではない。

「そう、あれは獣に近い姿をしても根本的には人間です。

人でないものを人間にするというのなら、『ドリーカドモン』であるとか、あるいは『シャムハトの甘美なる神聖』に人間の原型を求めていく必要もあるでしょうが、その原型はすでにあるのです。そうであるなら簡単な話ですよ」

「ええっと、つまり？」

ロバートには簡単だろうが、マリエラには難しいのだ。もう少し分かりやすく話して欲しい。

マリエラが悩んでいる間に、肉料理ばかりが山盛りになった皿を両手にナンナが戻ってきた。そのナンナをちらりと見て、ロバートはちよっぴり意地悪そうに答えを告げた。

「分かりませんか？ 毛ですよ。この毛玉を無くしてしまえば、人間らしく見えるというものです」

「なんな！！？」

ナンナが誤解する言い方は、控えて欲しいものである。

毛を逆立てて「ふしゃー」と威嚇するナンナをなだめるのは大変だったが、揶揄って満足したのか、その後のロバートはかなり有益なアドバイスをくれた。

なんでも獣は人間のように全身から水のような汗をかいたりしないのだそうだ。体温調節がどうか言っていたが、要はその辺りの



機能を付与しつつ、美容脱毛系の効果を与えればいいんじゃないかということだ。

「ならばケンタウロスの鬣たてがみがケルピーの波紋花などが良いでしょう。どちらもやや希少ではあるが、このロバートになら手に入れる伝手はあります」

「なるほど。ありがとう、ロバートさん!! ほら、ナンナもお礼言って」

「うなんな!」

さすがはロバート。確かにそれなら可能性が高そうだ。

手を打って喜ぶマリエラと、毛皮を無くすと脅かされて怒るナンナ。

「もしかしたら一緒に出かけできるかもしれないだよ? ほら、お礼いうの」

「うな!? うな!。ゴロゴロなん!」

喉を鳴らすと「ありがとう」なのか。

しかしポーズがあざとカワイイ。ナンナのゴロニャン攻撃にロバートも一発で撃沈らしい。意外とチョロくて助かる。

「む……むう、仕方ありませんね。すぐに手配しましょう。ですが他の材料は? オーロラの氷果に時騙しの花蜜でしたか、どちらも非常に……」

「大丈夫です、どちらもいっぱい持ってきてるから!」

「いっぱい……。栽培できるようになったオーロラの氷果はともかく、時騙しの花蜜など美容の秘薬ですよ、どれほどの価値が……」

ぶつくさ言いながらも、ロバートはすぐに素材が届くよう手配し

てくれた。どちらも手元にあるようで、1刻ほどで届くという。

「ジーク、ごめんね。今日は今から錬成するよ。ロバートさんも見ていきますか？」

「ふむ、新たなポーションの誕生か。仕方ありませんね、立ち会いましょう」

「あ、ああ……。帝都でどれくらいポーションが作れるか、確認する必要があるだろうしな」

「んじゃ、オレら出かけてくっから」

「僕も失礼するよ」

偉そうにのけぞりながらも興味津々といった様子のロバートと、明らかに盛り下がりをさせるジークを残して、予定のあるヴォイドとエドガンは出かけて行った。

去り際にエドガンが「ドンマイ、ジーク」と肩を叩いて行ったのに、新しいポーションで頭がいつぱいのマリエラは、デートの予定がつぶれてジークの残念そうな様子に気が付くことはなかった。

09・思わぬ助っ人（後書き）

【帝都日誌】猫が飼えなければ作中で飼えばいいじゃない。by 作者

10・獣人人化の変身薬（前書き）

前回までのあらすじ：獣人が珍しいなら人間に変身すればいいじゃない。

## 10・獣人人化の変身薬

「ポーション作るって言っても時騙しの花蜜とオーロラの氷果、あとクラーケンの粘液は薬晶にしちやってるから簡単なんですけどね。《錬成空間、命の雫》、あー、すつごく溜まりが悪いや。溜まるまでの間にお茶でもどうですか」

「……相変わらずデタラメな錬成ですね。それに新しいポーションを作り出そうというのに工房でもないこんな会議室とは。装置や手法にこだわるイリデッセンスの石頭どもに見せてやりたいものです」

会議室の空中に人頭大の《錬成空間》を10個も浮かせて同時に《命の雫》を溜めながら、お茶を飲み始めるマリエラにロバートは苦笑する。新しいポーションを生み出す場所が、工房ではなく借りた会議室と言う時点で、錬金術を特別視するイリデッセンス学派からすれば冒瀆的な行為らしい。

「私、イリなんとかじゃないですし」

じわりじわりと水位の上がっていく《錬成空間》を確認しながら、マリエラがお茶うけのクツキーをぱくりとかじる。

フレイジージャが教えてくれた錬金術は、持たざる者 平たく言えば貧乏庶民の味方だとマリエラは思っている。お高く御大層な装置なんてなくても《錬成空間》でポーション作成どころか料理や洗濯だってこなせてしまうのだ。迷宮の深くに潜る未来を見越してか、それとも単に貧乏なだけだったのかは分からないが、錬金術スキルを使い倒す教育を施してくれたおかげで、貧しい割に生活の質は高かったように思う。

「師匠流……炎災流かな、炎災流の錬金術は庶民の味方なんですよ。あ、《命の雫》溜まった。まずはケンタウロスの鬘たてがみからいこうかな。これはジエムストーン貝の上で燃やした灰を紫系藻の乾燥粉末と一緒に溶かすのか。むー、ジエムストーン貝、持ってないや。なんで貝の上で燃やすんですかね？」

「ジエムストーン貝なら浄化の目的でしょう」

「なるほど。だったら《サラマンドー、来たれー》。これ、燃やしてくれろ？」

「キャウ」

「わ、ちよつと臭いや、ナンナが出ていくわけだね。でも、イケたつばい。ええと、紫系藻の乾燥粉末と混ぜる割合は……こんなもんな。《錬成空間》に入れてー、混ぜ混ぜー。《残渣分離》からの……」

《命の雫》の溜まりの遅さをあらかじめ複数の《錬成空間》に貯めることでフォローしながら、同時進行でテキパキと錬成を行うマリエラ。ロバートはその様子を助言しながら興味深く観察する。

どうやら制限を受けるのは《命の雫》を汲み上げる速度と量だけで、他の錬金術スキルは帝都でも変わらず使えるらしい。問題の《命の雫》も、マリエラの場合は複数の《錬成空間》に汲み上げながら別の作業をするマルチタスクが可能だから、迷宮討伐軍全員分なんて量を作るのでなければ問題はない。本人はやりづらそうにしているが、マリエラの錬金術師としての腕前は帝都も含めロバートの知る誰よりも高い。

もっともイリテッセンス・アカデミーに在籍し、贄の一族と交流のあるロバートでも重鎮たちが錬成するところを見たことはないから、この帝都にマリエラを越える錬金術師がいなとも限らないのだが。

「……あとは《命の雫》入りの水に溶かして、分離、濃縮っと。う

ん、抽出はこれでいいね。ケンタウロスの鬩ってこんな感じかー。後は薬晶化できるかな、溜めといた《命の雫》を使ってー、《薬晶化》。うん、できたできた。深緑色になるのか、キレイー」

薬晶化とは素材の薬効成分を結晶として直接取り出す技術である。ポーシヨンの錬成工程は、それぞれの素材から薬効成分を抽出するのに煩雑な手間と長い時間がかかるのだが、それをたったひと手間で済ませてしまえる非常識な技だ。

錬金術の素材はかさばるし、適切な温度や湿度で管理しないと変質してしまう管理の難しい物も多いが、薬晶にしてしまえばポーシヨン1本分の素材が砂粒ほどの欠片に変わる。非常にコンパクトで持ち運びに便利だし、劣化の速度も大きく下がる。ポーシヨンを作る工程も簡略化され、場所を選ばず短時間で作ってしまえる。それこそ、戦闘の行われる迷宮の中でも錬成が可能になるのだ。

（秘儀や奥義に当たるものだと思うのですが、未だに“キレイー”などとのんきなことを言っているのですか。こんな技を身につけなければ、迷宮の最奥などという危険な場所に行かずに済んだかもしれないというのに……）

薬晶化という技術は、ポーシヨンは工房で時間をかけて錬成するものというパラダイムをシフトするものだ。その素材の何たるかを理解しないと薬晶化できないし、作った錬金術師以外は使えないという制限はあるものの、緊急時における錬金術師の有用性を根底から覆すものなのだ。

だからシューゼンワールド辺境伯家はその存在を隠蔽しよう厳命しているし、マリエラやフレイジージャに対してはやっぱりとしか伝えていないが、迷宮都市の錬金術学校の職員には習得に努めるようにとお達しが出ている。もっともマリエラの「素材のありように

寄り添うんですよ」という意味不明の説明に皆首をかしげるばかりらしいが。

「次はケルピーの波紋花にしよう。これはメルカン油に溶かすのか。メルカン油は保湿剤の材料だからあるんだよね。加熱してシャバシャバにしたところに《命の雫》を溶かして……。あとナニコレ、ミリフィカ・スネイル？ これは違う気がするんだけど、面白そうだから使っちゃおう」

「本当にとんでもないですね。……そうは思わないかな？」

薬晶化の重要性も、自身の錬金術の特異さもまるで気付いていない様子で、ちゃっっちゃかと錬成を進めていくマリエラを横目に、ロバートがジークに話しかける。先ほどから黙って扉の近くに佇んでいるジークが所在なげに見えて、ロバートなりに気を使ったのかもしれない。

「俺には錬金術は分かりませんから」

しかしジークはそう短く答えると、再び黙り込んでしまう。護衛というのはそういうものかもしれないが、この2人は恋人同士ではなかったか。

（腕の立つ冒険者と錬金術師ですか。この組み合わせで本当にうまくいくのでしょうか）

人の心配をするより先に自分の心配をした方がいいのだが、ロバートが余計な心配をしているうちに複数のポーションが完成したらしい。



「できたー！ でも、いきなりナンナに使うわけにはいかないよね」  
「それならテディラットで試したらいいでしょう。あれなら大抵の屋敷で飼っています」

「テディラット？」

テディラットは帝都で残飯処理に飼われている大型のネズミだ。帝都にもスライムを使った残飯、汚物処理はあるのだが、人口が多く、さらには廃棄される食材も多いからスライムだけでは増えすぎてしまう。そこでスライムの前にテディラットに残飯処理をさせるわけだ。

油まみれだろうが塩分が多かるうが、なんでも食べる悪食ながら、臭いが少なく鳴きもせず、小型犬程度と飼いやすいサイズ感で帝都のあちこちで飼われている。ちなみに大量に食べる食事はすべて毛皮に変わるらしく、毛とは思えない剛毛は掃除用のスポンジ代わりに重宝されている。

早速、屋敷で飼っているテディラットを借りて新作ポーシオンを試したところ、ケルピーの波紋花が正解らしく、昼食の前には『人間の<sup>ホリモーフ</sup>変身薬』は完成してしまった。これで明日はナンナも連れて帝都観光に行けるだろう。

ちなみにケンタウロスの鬘を使ったポーシオンは体毛がすべて顔面も含めた頭部に集まって毛玉ボールから体が生えているようになってしまった。柄付きブラシみたいで面白いなと笑っていたらテディラットが窒息しかけて大慌てで毛刈りした。ミリフィカ・スネイルに至っては毛並みが良くなりタワシのような剛毛がつやさらになる程度の変化しかなかった。やっぱりポーシオンの仕組みはよくわからない。

「ロバートさんの読みが見事に当たりましたねえ。これ、ロバートさんの名前で『ライブラリ』に登録しますね」

「はっ!? な……。わた、私は錬金術師どころか錬金術スキルを  
持っていないのですよ」

「うーん、でもこういうのって発案者の名前を載せるものだと思う  
ので。あ、もちろん匿名でも大丈夫なんです。匿名にします?」

「……いや……」

「あ、やっぱり名前が出るのって嫌ですよ、マイナーポーション  
だし」

「誰が嫌なものですか! “いや、構わない”と言ったのです!」

それまで鷹揚に構えていたロバートがいきなりふるふるし始めた。  
目がいつもより開いているし顔もちよっぴり赤いから、怒っている  
のではなからうか。

錬金術史に残るようなスツゴイポーションならいざ知らず、『獣  
人人化の変身薬』<sup>ホリモノフ</sup>みたいなマイナーポーションの発明者として名を  
残すのが嫌なのかと思ったら、そうではないらしいのだが。

「この2本の失敗作も効果の検証が必要でしょう。預かります」

そう言っ、失敗作2種を持ってさっさと部屋を出ていくロバ  
ト。

「あの、素材のお代……」

「そんなもの、受け取れるはずないでしょう!」

やっぱり怒っているんじゃないか。

つんけんしても親切なロバートに甘えすぎて何か失礼でもして  
しまったらどうかと、少し心配になったマリエラだったが、後日、  
アグウィナス家の爺やこと家令の方から極めて丁寧なお礼の手紙つ  
きで、錬金素材の詰め合わせを頂いた。

『貴族言語』とでもいうべき、とっても長くて持つて回った言い回しのお手紙だったが、要約すると、「新しいポーションの誕生に立ち会えただけでなく、その発案者として名を残せたことは、錬金術師の家系に生まれながら錬金術師のスキルを持たないロバート様にとって、望外の喜びでございました」ということらしい。怒らせたのかと心配したら、あれは嬉んでいたらしい。

ロバートが怒っていなくて安心したが、彼が持ち帰り、人間で効果を検証した2種のポーションは安心できない結果になった。

テディラットの頭部に毛を集め、毛玉ブラシみたいに変えたポーションは、毛生え薬になるのではという期待通りに見事頭髪をふさふさにしたのだが、効果時間が過ぎるともとより毛が減るといふ悪魔のような結果をもたらした。

一時の幸福と引き換えに、少しずつ毛髪きぼつを失う悲劇の薬。こんなものが出回ったら大変だから、当然レシピは抹消だ。

そして、ミリフィカ・スネイルを使った、テディラットの毛をつやさらにした変身薬ホリモーフについては、ロバートが検証を重ねた結果思いもよらない結果が得られ、後の世に残ることとなったのだから、マインナーポーションというのは奥が深い物である。

## 10・獣人人化の変身薬（後書き）

【帝都日誌】我がアグウェイナス家の栄光をライブラリに記せるとは。このロバート、感無量です。byロバート

ミリフィカ・スネイルを使った変身薬ホリモーフの詳細は、次週、『輪環の短編集』に掲載です！ ロバートやジークがキレイ可愛く、おさるはポインボ……。マテ来週！

『輪環の短編集』はコチラ

<https://ncode.syosetu.com/n9801gu/>

長らく放置していた『俺の箱』を改訂しました！ 全部削除し、ほぼ全面書き直しています。

明日5/21から1か月くらい毎日更新していきますので、こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

11・ナンナとおでかけ（前書き）

前回までのあらすじ：ナンナの獣人度、さっそく下がる。  
挿絵はMaze・Gure画伯。

## 11・ナンナとおでかけ

< i743988 — 21064 >

「服は？」

「脱がなん、めくらなん！」

「人に声をかけられたら？」

「殴らなん、付いて行かない！」

「欲しいものがある時は？」

「ジークサイフ！」

「ええと、あとは……」

「キョロキョロしなん、ウロチョロしなんな！」

「完璧です！」とパチパチ手を叩くのは、ナンナのお世話係のメイドさんだ。

一体どの辺が完璧なのか。ジークサイフとはこれ如何に。“勝利の財布”への挨拶したつて、お小遣いは有限だ。スリ防止にジークが財布を持つているだけの話だが、そもそもジークはナンナの財布ではない。強いて言うならマリエラの財布だ。紐はきっちりしまっているから、暴飲暴食マルエラ化からマリエラを守ってくれている。

このメイドさん、マリエラの身の回りも取り計らってくれるスーパーメイドさんなのだが、かなりの動物好きなのだろう、ナンナに對してやたらに甘い。ナンナの女王様状態に拍車をかけたのは、間違いないこのメイドさんだ。

そのメイドさんの激甘審査に合格し、ナンナは見事外出許可をもち取った。マリエラとジークもいることだしウェイスハルトもOK

したので大丈夫だと思いたい。うん、たぶんおそらくメイビーパーハップス無問題だ。

ちなみに「私もお供いたします！」と言ったメイドさんの意見は却下された。ウェイスハルトに。いつもは表情が読めないウェイスハルトだが、あの時ばかりはマリエラでもわかった。あの顔は「仕事しろ」の顔だった。

まあ、メイドさんが一緒にお出かけしたくなるのも理解できる。

獣人の時から思っていたが、変身薬を飲んだナンナは、そりゃあもう、びっくりするほどの美少女になってしまったのだ。

「これは……すごいな。別の意味で目立つんじゃないか？」

麗しい令嬢をそれこそ何ダースも見てきたウェイスハルトが思わずうなるほどの愛らしさだ。これは、キャロラインに言いつけるネタができたとマリエラが心のメモ帳に書き止めたのは内緒である。

ウェイスハルトをして賞賛せしめた白猫は、白い毛並みを彷彿させる白い肌と、ブルーの大きなアーモンドの瞳、ふんわりとした銀髪の女の子になっていた。スラリとした体形とナンナらしい悪戯っ子ぽい顔立ちが何ともいえずチャーミングだ。

猫耳と尻尾は消えなかったのだが、それがまた愛らしさを添えている。もっとも、見せては人目を惹きすぎるので、外出に際してはメイド服の長いスカートとホワイトブリムで隠している。

こんなカワイイの化身、世界中に見せびらかしたいのだが、認識障害のスクーフを付ければ目立たなくなるし、連れだしても問題はないだろう。

「エドガンのやつ、ギルドの受付嬢と出かけたことを悔しがるだろ

うな」

ジークまでこんなことを言うので、マリエラはちよっぴり口を尖らせてジークの足を踏んでやった。ぎゅう。するとナンナも面白がって、反対の足を踏んでいた。ぎゅう。

モテモテジークはちよっぴり嬉しそうにしていたから、お出かけの間中、マリエラとナンナの面倒をせつせと見てくれるだろう。財布の口も緩みまくりだ。ジークサイフ、マルエラに栄光あれ。

今日の目的地は、マリエラにとってあこがれの聖地だ。

シューゼンワルド辺境伯邸から真っすぐ行政区画に向かったところ、中央区画の大通りにある、『マダム・ブラン』のチョココレートショップだ。

マダム・ブランは帝都でも有名なチョココレートショップで、帝都南方にある管理型ダンジョン、バハラートから産出される最上級のカカオを使い、最高のパティシエが作り上げたチョココレートはまさに黒い宝石と謳われる。帝都でも『マダム・ブラン』のチョココレートをもらって喜ばない者はいない。マリエラは、このお店のことを薬味草店のメルルさんから聞いていて、絶対にお土産に買って帰ると決めていたのだ。

マダム・ブランのチョココレートの価値を高めているのは、チョココレートそのものの質もちろんあるが、貴族であっても並んだ者しか買えないというレアリティにあるのだろう。しかも一人一箱だ。

とは言え貴族が買う時は使用人を並ばせる。実際に行ってみると行列にはお仕着せなどの制服を着た使用人らしき人達と、なぜか子供がたくさん並んでいた。どうやらこの子供たちは順番待ちの代行をして小銭を稼いでいるらしい。列に並ぶ者の一人が手を挙げると、近くの路地からか出てきて小銭を受け取り入れ替わっていた。子供



らにしても悪くないバイトらしく、利用者がいないかと視線を向けられている。

「なんか見られてて落ち着かないなん」

「あー。代行待ちの子供かな」

マリエラとナンナは認識阻害の魔法陣のお陰で目立たないはずなのだが、感覚の鋭いナンナは気になるのだろうか。

「うなうな。あのほっかむりがジークを見てるなん」

「ほっかむり……」

ナンナの示す方を見ると、帽子を目深にかぶった人物が、確かにジークの方を見ていた。それにしたってほっかむりとは、久しぶりに聞いた気がする。

「俺を？ む、あれは……」

ほっかむりは、どうやらジークの知り合いだったらしい。ジークと視線が合ったほっかむりは思い切ったようにこちらに近づいてくると、帽子を通常的位置に戻してとって顔を見せた。

「やっぱりジークムントだったのね、お久しぶり」

「イヤシスか」

イヤシスと呼ばれた女の人は、サラサラの長い金髪を後ろでゆるくまとめた、綺麗な女の人だった。服装から見てもおそらく治癒魔法使いなのだろう。一見清楚な服装ではあるが体のラインを隠しきれない服装をしている。胸のサイズはアンバーさんには敵わないが、性格ゆえにカラツとした雰囲気アンバーさんと違って、大人の女

性というか、艶めかしい印象の女性だ。

(この人、もしかして……)

もしかしなくてもジークの昔の知り合いだ。会うだろうとは思っていたが、こんなタイプは想定していなかった。迷宮都市にも女性の冒険者はたくさんいるが、こういうタイプは珍しいのではなからうか。なんというか、前線で戦う人ではない気がする。

< i 7 4 3 8 4 1 — 2 1 0 6 4 >

「無事だったのね」

会話をしたそうなイヤシスの様子に、ジークは「すぐに戻る」とマリエラに告げると、適当な子供に向かって片手を上げる。なぜかイヤシスも手を上げていて、それを見た兄妹らしき二人の子供が近づいてきた。

イヤシスは、兄弟とマリエラたちのすぐ後ろに並んでいた代行の子供に硬貨を握らせる。相手が代行の子供であれば、小銭を握らせることで割り込みも出来るらしい。

ジークとイヤシスを交互に見るマリエラには目もくれず、「近くにいい店があるのよ」とジークを連れ出そうとするイヤシス。けれどジークは、会話が聞こえない程度に離れた道の端で立ち止まる。ジークにはこの場を離れるつもりがないらしいと理解したイヤシスは、初めてマリエラたちにちらりと視線を投げた後、ジークに向かって話を始めた。

「心配していたのよ。その……迷宮都市に行ったって聞いて」

「おかげさまで、今は自由に暮らしている。イヤシスだけか、他の

「皆は？」

「『ファントム・シューター夢幻の射手』の皆も今は帝都にいるわ」

ファントム・シューター  
夢幻の射手。

かつて、ジークがリーダーを務めたパーティーの名前であり、その頃のジークの二つ名でもあった。イヤシスはジークの知り合いどころか昔の仲間だったのだ。

（懐かしい。……いや、なんとというかこそばゆいな）

ジーク自身、意外ではあったのだけれど、かつての仲間と再会した以上に、かつての二つ名を聞いて、なんだかそわそわしてしまう。

なかなか、厨二感あふれるネーミングだ。

自分で自分を『ファントム・シューター夢幻の射手』とか言っちゃう時点でたいがいが、それをパーティー名にしているあたり、“俺の！”パーティーだと言っているようなものだ。いうなれば「俺と愉快な下僕たち」だ。むしろその方が、自覚がある分ましだとさえ思う。

エドガン辺りが聞きつけたら、超腹が立つニヤニヤ笑いでいじつて来るのが明白だ。自分でも若気が至りまくりで、墓穴を掘って入りたいと思っているから、マリエラには聞かれたことがあるが、現在に至るまではぐらかしたままである。

そのセンスのひどさは置いておいて、あの頃は、斥候のミツテクール、盾戦士のフセグン、それに治癒魔法使いのイヤシスと4人でパーティーを組んで活動していたのだ。

ジークがワイバーンに精霊眼を奪われるまでは。

「……あなたと別れた後、新しいアタッカーを迎えたの。リヨウ」  
「ダンっていう剣士。今では全員がBランクに上がったわ。今では

名実ともにBランクパーティーね。『ファンタム・シューター夢幻の射手』から名前を借りて、ファンタム・ストライク夢幻の一撃てって名前で活動してる。アルアラージュ迷宮じゃ、ちよっと知れたパーティーなのよ」  
「……そうかよかった」

そのネーミングセンスはどうなんだろう。

『夢幻の一撃』なのか『幻影の攻勢』なのか、それとも『姿を消す突撃』なのだろうか。

(『姿を消す突撃』……は突進してる時点でバレるだろ。それに攻撃が夢幻や幻影じゃダメージにならないんじゃないか……)

イヤシスの話を聞いてジークが真つ先にそんなことを考えてしまったあたり、だいぶマリエラを始めとした『木漏れ日』メンバーに毒されている。シリアスがこぼれ落ちすぎだ。ついでに自分が付けた『ファンタム・シューター夢幻の射手』についても、記憶からすると抜け落ちている。『夢幻の射手』なんていなかったんだ。それでいいじゃないか。黒歴史は封印だ。

割としょうもないことを考えて、ジークは思わずフツツと笑ってしまったのだが、それを見たイヤシスは少なからず動揺を覚えた。

(笑つ……た？ あのジークが、私に……?)

イヤシスに笑いかけたわけではないのだが。

思いもよらないかつての仲間の微笑に、イヤシスの胸は不覚にも高鳴ったのだ。

## 11・ナンナとおでかけ（後書き）

【帝都日誌】『夢幻の射手』なんていなかった。いなかったんだ。  
byジーク

<i743847—21064>©小原彩

ファントム・シューター……シューター……シューター……

「生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい（輪環の魔法薬）」  
は、

B's-LOG COMIC Vol.125（6月5日配信）掲載です。ニコニコ静画他で無料版も読めるよ！

前回の謎の新薬の正体は……！？ 『輪環の短編集』はコチラ

<https://ncode.syosetu.com/n9801gu/>

長らく放置していた『俺の箱』も改定&毎日更新中！ こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

## 12・イヤシスの鐘（前書き）

前回までのあらすじ：『ファンタム・シューター夢幻の射手』ジーク、昔の仲間に出会う。

## 12・イヤシスの鐘

(ジークが私に向かって微笑んで、良かった……ですって？ あの、ジークムントが……？)

別にジークはイヤシスに向かってほぼ笑んだわけではなくて、『ファントム・ストライク夢幻の一撃』という名前に対する脳内ツッコミで思わず笑ってしまっただけだ。半分はジークの黒歴史からできているので失礼なくらいなのだが、イヤシスが感じたジークの変化だけは本物だった。

ジークのかつての傲慢さは、すっかり鳴りを潜めているのだ。昔のジークなら、かつての仲間の安否など気にもとめなかっただろうに……。

それに変化は内面だけではない。

(ジークの装備、一見使い込まれて地味だけど、剣も防具もいい物じゃ……？)

イヤシスはジークの視線が自分の背後、、チョコレートシヨツプの列に向いているのを確認しつつ、素早くジークを値踏みする。

ジークのまとう防具はバジリスク革だし、腰に佩く剣はミスリル製だ。防具は悪目立ちしないように一見して高価なものとは分らないように作られているし、治癒魔法使いのイヤシスには素材までは分からなかったが、これが相当いい品であることは理解できた。

(弓は持っていないのね。眼帯も付けているし精霊眼は治っていないのかしら……)

チョコレートを買に行くのに邪魔だから長弓は持ってきていないだけで、今のジークのメイン武器は弓で、左手の手甲には新たに仕込み弓を付けてきた。精霊眼の力を借りれば、矢に自動追尾機能だつて付けられちゃうくらい、今のジークは夢幻ファンタム・シューターの射手なのだが、イヤシスはそんなことは当然知らない。

イヤシスに分かるのは、目の前のジークの羽振りが思いのほかよさそうだということだ。

(目が合った時は正直面倒くさいと思つただけれど……)

偶然ジークを見かけた時はまさかと思つて凝視してしまつたが、声をかけるつもりなんてなかった。目が合つて、こちらをじつと見返すことさえ予想外だつたのだ。何しろジークは奴隷に落ちたと聞いていた。ジークの性格を思えば、己の境遇を恥じてうつむくのはと、そんな風に考えていた。

(田舎育ちを恥ずかしがつて格好ばかり気にしていたのに)

なのに、今のジークはどうだろう。昔のようなどこか偉そうな様子は微塵もないが、己を恥じているとか自信のなさも感じられない。肌艶も体格も昔よりよく、同世代の仲間よりずっと若く見えるのに、その物腰は柔らかく落ち着いている。装備は地味で昔のような華やかなものではないが使い込まれた質の良い品と言つのはそれだけで品がある。気品さえ感じるくらいだ。

(悪くないわ……。ううん、前よりずっといい。)

迷宮都市では戦える奴隷は悪くない待遇を受けられるって聞いたことがあるわ。こうして自由に動けてるんだもの、今は奴隷って感じじゃなわね。迷宮討伐で手柄を立てて恩赦で解放されたつて所かチョコレートショップしら。こんな場所に並んでるんだもの、金回りだつて悪くないはず)



イヤシスは、ジークと目が合って良かったと思った。近くで見るジークは前よりいい男な上に、ずっと高価な装備を身に付けている。使い込まれた装備品が、今のジークが装備に見合った実力であると示しているように感じられた。

「ねえ、ジーク。あなたの話が聞きたいわ。今までとつても苦勞をしたんでしょ？ 今のあなたを見ればわかる、あなたがたくさんの苦難を乗り越えてきたって。私もね、少しは変わったのよ。今の私たちなら、昔よりずっと分かり合えると思うの。今なら……魅力的で楽しいことだってできるはずだわ。ねえ、今のあなたのことに、私に教えて？」

「今、か。迷宮都市で冒険者をしている。帝都に来たのは依頼のー環だ」

「今日はお休みということかしら。よかったらこの後食事でもどう？ 美味しいお酒を出すお店を知っているのよ。ずいぶん久しぶりに会ったのだし、私たち誤解も多かったと思うの。……私あなたの事ずっと心配していたのよ」

イヤシスは左足をほんの少し横から回すようにして、ジークの方へ一歩踏み出す。こうすることで、前後で重なるようになったスカートのスリットが開いて、ほんの少しだけイヤシスの白い太ももが見えるのだ。こうして上目遣いで見上げれば、イヤシスの整った顔立ちと胸元、太ももをセットで見せつけることができる。

イヤシスの必勝ポーズだ。これをやられて釘付けにならなかつた男はいない。ジークの代わりにスカウトした剣士、リョウウ「ダーン」もこうやって落としたのだ。

しかしジークは、ちらりと視線を寄越しただけで、すぐに視線をもとの位置、チョコレートショップの行列へと戻した。イヤシ

スが詰めた距離はいつの間にか空けられている。ちらりとよこした視線さえ、近づかれたことに反応しただけのようだ。

「せっかくの申し出だが先約がある。それに順番も来たようだ。皆が順調そうで何よりだよ。それだけは少し気になっていたんだ。今日は話せてよかった。じゃあ、達者でな」

それだけ告げると、ジークは話を切り上げてさっさと列へと戻っていった。

(……………昔とは明らかに違うわね)

イヤシスは去っていくジークの背を見ながら思う。

昔のジークムントなら、絶対に喰いついてきたはずなのにと。

かつて一緒にパーティーを組んでいた時のジークムントは、才能以上にプライドが肥大した男だった。自尊心が強いことは冒険者にとってそう悪いことではない。「我こそが強者」という自負が恐ろしい魔物と対峙する気概につながるからだ。

それに田舎者コンプレックスが分かりやすくて育ちのいい、扱いやすい男であった。傲慢で一緒にいて楽しくなくても、自尊心を満足させてやればイヤシスたちは実力以上の収入を得ることができたのだ。

イヤシスは治癒魔法使いだ。直接魔物を倒せるわけではない。回復手段はポーションだってあるし、低級ポーションで済むなら治癒魔法使いを仲間にするより安上がりだ。それを理由にどれほど貢献しても分け前が少ないパーティーはいくらでもあるのだ。

その点、あの頃のパーティーは、ジークとそのサポーターという構図ゆえ、イヤシスも他の仲間と同等で美味しいパーティーだった。

当時のイヤシスには付き合っている相手がいて、ジークに恋愛感情はなかったし、ジークの方もパーティーを仕事仲間と割り切っていたからアプローチしたことはなかったが、あの頃のジークであればイヤシスのこびる仕草や心配したという言葉に機嫌を良くしたことだろう。

なのに、今のジークはイヤシスの甘い言葉には耳もくれずに、かつての仲間の安否を聞いて安心したと言ったのだ。

< i 7 4 3 8 4 2 — 2 1 0 6 4 >

(この男は本当にジークムントなのかしら……)

イヤシスがそう思ったのも無理もない。

目の前の男の右目は眼帯で覆われて、整った顔が損なわれているけれど、かつてより険のない穏やかな表情で、残された左目は優しい色をたたえている。物腰は隙がなく、遠ざかる背中に安心感さえ覚えるではないか。

イヤシスの女の勘が囁くのだ。ジークムントを逃してはいけなないと。

イヤシスはジークの後を追い、代行の少女に代わってチョコレートショップの列に割り込んだ。行列代行の子供に小銭を握らせているから、誰も文句は言わないが褒められた行為ではない。ジークも少し変な表情を浮かべたものの、黙って同行者らしき少女たちの後ろに並ぶ。

ジークの同行者らしき少女が何事か言いたげな顔をしていたけれど、イヤシスがキッと睨むと口を閉ざし、ジークに促されるまま黙

って前を向いていた。

（あの娘たちが今のジークの仲間？ 一人はメイドでもう一人も冒険者には見えないわね。どっちも平凡ですぐに忘れちゃいそう。雇い主が同じ同僚ってところかしら。仲間ってわけじゃなさそうね）

少女たちをもう少し観察したかったけれど、そのままジークの陰に隠れてしまった。順番がもうすぐだからおとなしく列に並んでいるのだろう。

チラとしか見えなかったせいかどちらにも印象に残っていないが、ジーク越しに見えるメイドのお仕着せが上等なものだというのは見て分かる。恐らく上位の貴族家に仕えるメイドだ。そういう者は冒険者なんて相手にしないものだ。もう一人に関しては、凡庸すぎて意識しないと存在すら忘れそうだ。

（休みの日だって言うのに、同僚と買い物？ だったら、私にもチヤンスはあるわね。リヨウが清楚好みだからこんな格好してるけど、こんなことならもう少しお洒落をしておくんだっただわ）

イヤシスには分からない。前に並び背を向けたジークがどれほど温かい視線を少女に向けているのか。イヤシスの善意とは言いがたい視線から守るため、少女を隠している事も。

「お次のお客様」

店員の呼び声に、ジーク達3人とイヤシスが店の中に案内される。どうやらジーク達3人は、店で一番高い詰め合わせを買うらしい。一箱で銀貨3枚の高級品だ。イヤシスの一カ月の食費に相当するよくなチヨコレートを3箱も。代金はまとめてジークが払うらしい。

間違いない。今のジークは装備品に見合った高収入を得ているのだ。

なのに、なぜイヤシスの分も買ってくれないのだろう。ぱっとしない小娘や、メイドの分は買っているのに。もしかして選ぶのを待っているのだろうか。同じ物で構わないのに。

「あのジーク、あの、私……」

イヤシスは、もじもじと上目遣いでジークムントに訴えかける。

昔のジークは金払いが良かったのだ。いい格好しいとも言つ。こづすれば好きなものを選べと言ってくれるはずなのだ。

「ああ、忘れていた」

そう言つて、ジークムントがイヤシスの方を振り返る。

（構わないわ！ マダム・ブランのチョコレートなんて、私も滅多に食べられないもの！）

につこりと満点の笑顔を浮かべたイヤシスに、ジークは財布を開いて小銭を渡す。

「さっきの行列代行の代金、これで足りるよな？」

「え、ええ。ちょうどね……」

小銭をイヤシスに握らせると、あっけにとられたイヤシスをその場に残して、そのまま店を出て行くジークムント。

我にかえったイヤシスが、一番小さいチョコレートの箱を購入して店を出た時には、ジークたちはとくに立ち去った後だった。

「ほ、本当に変わったのね……。でもいいわ！ 堅実なものとてもいい。絶対に、逃がさないんだから！」

マダム・ブランのチョコレートのように、ほろ苦く、甘くとろける戦いのゴングが、イヤシスの中でだけ鳴り響いていた。

## 12・イヤシスの鐘（後書き）

【帝都日誌】ジークが「みんなで食べるといい」ってチョコレート買ってくれた！ 銀貨3枚もする大箱なのに！ でも、「お土産分は預かつとくな」って残りは持っていていかれた。お土産食べたりにのー。byマリエラ

<i743844—21064><ホントだよ？

長らく放置していた『俺の箱』を改定&毎日更新中！ こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

### 13・兄妹との再会（前書き）

前回までのあらすじ：『夢幻の射手』ジーク、かつての仲間ロックオンされる。



### 13・兄妹との再会

マダム・ブランのチョコレートショップに並んでいる時に感じた視線は、ジークの知り合いだったらしい。

「すぐ戻る」

そう言っただけは行列代行の子供を雇うと、イヤシスという女性と列から離れた。とはいえマリエラから姿が見える距離だ。会話の中身は聞こえないけれど、普通に会話しているように見える。少なくとも女性が声を荒げる様子はないし、ジークの様子も変わらない。

マリエラはジークの過去を知っている。昔の仲間とは折り合いが悪かったことも、ジークが自分の過去を恥じていることも。

だから過去を知っている仲間とは、会いたくないだろうと思っただけで、万一出会ってしまったら、奴隷に堕ちたジークのことを悪く言うのではないかと心配していた。帝都に来る前に、ジークは「大丈夫だ、心配するな」と言ってくれたけれど、マリエラに聞かせたくない話になる可能性があると思っただけで距離を取ったのではないか。

もしあのイヤシスという人がジークを侮辱するようなら、走って行って全力で対抗するつもりだ。マリエラは武力の面では弱いけれど、傷つくのは肉体だけではない。むしろ肉体の傷ならば、どんなものでもマリエラならば癒すことができる。でも、心に付いた見えない傷はそうもいかない。ジークに対して暴言を吐くなら許さないとマリエラは身構えていたのだが、ジークの様子を見る限り、剣呑な雰囲気は感じられない。

(大丈夫そう……かな?)

安心すると同時に、「綺麗な人だったな」だとか、「どういう関係だったのかな」だといった、雑念が湧いてきてなんだかソワソワしてしまうのだから思春期というのは厄介だ。

「ねえ、お姉さん、あの人お兄さんの元カノかな」

「にいちゃん、元カノってなあに」

「ええ!? ってあれ、あなた?」

ジークの代わりに並んでくれる少年が、いきなり声をかけてきた。一緒に並ぶ少女の方はどうやら妹らしい。気になっていたことを言葉にされて、驚いてしまったマリエラだったが、この時ようやくこの少女が、昨日、行政区画で兄を探していた少女であることに気がついた。少々ジークに気を取られ過ぎていたらしい。

< i 7 4 4 5 4 0 — 2 1 0 6 4 >

「リリアちゃんだっけ? お兄ちゃん見つかったんだね。よかったね」

「ああ、お姉さんがリリアの言っていた。昨日はリリアがご迷惑をおかけしました。ほらリリア、お姉さんにありがとう言いな」

「? おねーちゃん、ありがとー」

「うんなん」

肝心のリリアちゃんはマリエラのことを覚えていないようで、頭の上に「?」を浮かべながらお礼を言ってくれた。

兄に言わされている感が半端ないが、リリアちゃんと長くいたのはヴォイドだし、子供は未来に生きるものだ。昨日なんて昔の話忘

れていたって仕方がない。

そして、なぜかマリエラへのお礼に応じるナンナ。

ナンナは子供が好きなのか、それとも精神年齢が近いからか、二人はこの一瞬で仲良くなつたようだ。リリアちゃんとの脈絡のない話に「うな」か「うなんな」で答えるという高度なコミュニケーションが成立している。「うなんな」万能すぎないか。

(ジークは大丈夫……だよ。リリアちゃんとナンナは面倒を見合つてくれるし。うん、切り替えていこう)

リリアちゃんはナンナに任せて、マリエラは少年に気になつていたことを聞いてみる。リリアちゃんと出会つたあの場所は『イリデツセンス・アカデミー』。帝国の最高学府、いわゆる大学という場所で、子供に用のある場所ではないのだ。

「昨日の、あそこって大学だよ」

「そうだよ。僕は、ええと……人より早熟なんだって。勉強をさせてもらつてるんだ」

リリアちゃんのお兄ちゃんは13歳くらいの賢そうな少年だ。

マリエラの言いたいことをすぐに理解したらしく、この年で学生なのだと教えてくれた。

仕立ての良さそうな服を着ているが、おそらく平民なのだろう。ロバートからあそこは贄の一族の総本山だと聞いていたから、もしや『形代』に選ばれてしまったのかと心配したのだが、どうやらそうではないらしい。ということは、天才少年か何かだろうか。

「へえ、賢いんだね。そうだ、帝都のこと色々教えてよ。大学とかがあるところが行政区画で、ここは中央区画、城壁の外は外縁部」

て言っんでしょ？ 帝都って、どの建物も明るい屋根で統一されて綺麗だよな」

「この辺りの粘土を焼くとあんな色になるんだよ。地面もほら、赤みがかっているだろ？ ここは本来、農業には向かない荒れた土地なんだ。」

とはいえ帝国が領土を拡大するにつれて帝都には人が集まってきた。その結果、広大な中央区画が出来上がったんだ。

この中央区画はね、複数の民族が集まってできあがったせいで、入り乱れた構造をしている。もちろん庶民の家の隣に貴族の屋敷があるわけじゃないけど、ここは貴族街、ここは商業区画、ここは庶民の住む区画と割り振られているわけじゃなくて、貴族の屋敷がある高級住宅街が中央区画内にあちこち飛び地であるんだよ」

「へえ、すごいね」

少年は、街を褒められたと思ったようだが、すごいのはこの少年だ。行列代行よりガイドか何かをした方が儲かるのではなからうか。少年の話によると、帝国には複数の辺境伯がいて、その邸宅はそれぞれの領地がある方向の城壁沿いにあるらしい。その結果、付近には自然とその地域の特産物や文化が色濃い街が形成され、帝都にいながら幾つもの文化に触れることができるのか。観光するならこういうところがお勧めだと教えてくれた。

「街並みはどこも同じ感じなの？」

人が大勢住んでいるからだろう、迷宮都市と比べると4階建て、5階建ての背の高い建物が多くて空が狭い。それでも開放的に感じられるのは、建物の材質や構造によるものだろうとマリエラは思う。

迷宮都市では魔物が攻めてくることを前提とした石造りの強固な建物ばかりで、街全体が砦のように重苦しい雰囲気だったが、帝都の建物は魔物の襲撃など全く想定していないような素材で、構造も開放的だ。

クリーム色の壁や明るい色合いの屋根に大きい窓、通りに面した店舗のショーウィンドウは何が売っているのか外からわかるほど大きい。レストランやカフェが連なる通りなどは、路上にテーブルや椅子が並べられていて、帝都っ子がお茶を飲んでいてお洒落だ。

ちよつとした植え込みには様々な樹木や色とりどりの花々。魔物の嫌うプロモミンテラとキュルリケの2択しかなかった迷宮都市とは大違いだ。植物を素材になるかならないかの2択で判断するマリエラでさえ、なんの薬効もない草花もいいものだなと思ってしまう。

「この街は安全なんだねえ……」

思わずつぶやいたマリエラに少年が同意するように頷く。

「そうだね。もう何百年もの間、戦火に焼かれたことも魔物に襲われたこともないよ。……ずっと昔に戦火に乗じてめっちゃ焼かれたことはあつたらしいけど。」

それはおいておくとして。この中央区画をぐるりと囲む城壁はね、200年前、つまりはエンダルジア王国を襲った魔の森の氾濫スタンビートの時に建造されたんだ。

栄耀えいようえいが栄華を極めたエンダルジア王国が一夜にして滅びたあの惨劇は、帝国中枢を震えあがらせてね。ほら、帝都の周辺にも、管理型の迷宮がいくつもあるから。

よほど怖かったんだろうね。ものすごいお金と時間をかけて、こんなに大きな街をぐるりと囲ったんだ。そういうと、人間ってすごいなって思うよ。

それでも畑や工房までは囲えない。城壁建造に合わせて区画整理が行われ、住宅は城壁の内側に、畑や大型工房などの生産区画は外側へと移されて、今の構造になったんだよ」

「本当に詳しいね。ガイドとかできそう」

「にいちちゃんすごい」

「うんなん」

3人に賞賛されて少年はにっこり笑う。まだ若いのにほめられ慣れている感じだ。

「帝都のことなら何だって知ってるよ」

なんて言っちゃうのだから、大したものだ。

「じゃあさ、美味しいお店とかも知ってる？ 帝都に来たなら絶対に食べたほうがいいっていうお店！」

これは是非とも仕入れておきたい情報なのだが、食い気味のマリエラの質問に少年は笑って答える。

「そんなのありすぎて困っちゃうよ。」

まあ、チョコレートならこの店は良いチョイスだけだね。

帝都なら何でも売ってるし、なんだって手に入る。好奇心を満たしたいなら教育機関も充実しているし、図書館や美術館、博物館だつてある。辺境伯たちがしっかりしているから帝都は安全で豊かだよ。懸念だった迷宮都市の迷宮も片付いたから刺激が足りなくらいだよ。それでも刺激が欲しいなら、少し離れた場所には管理された迷宮もある。一生楽しく暮らせる最高の街なんだから。お姉さんも、ずっと居たくなくなっちゃうよ」

「すごい。詳しいんだね。でも大丈夫？ 疲れてない？ 勉強し過

ぎは良くないよ」

どうしてそんなことを思ったのか。

血色の良い元気そうな少年なのに、マリエラにはひどく疲れているように感じられて思わず心配を口にしてしまった。

「疲れてる？ 僕が？ ……そう、だね。そうかもしれないね。

でも、がんばらなくちゃ。僕にはさ、叶えなきゃいけないことがあるからね。

……ねえ、お姉さん。お姉さんの叶えたい願いはなあに？」

まだ幼いと言っている少年が語る言葉は、ボーイス・ピー  
・アンビシャス “少年よ、大志を抱きな感じなのに、なぜか切実な響きがするように思える。 “叶えない”ではなく“叶えなきゃ”と言っているせいだろうか。

(私の願い……)

マリエラの視線の先には、ジークがかつての仲間と話をしている。ここは帝都で、今のマリエラには十分なお金があつて欲しい物は手に入る。望めば立場だつて得られるだろう。ジークはマリエラの選択に同意してくれるに違いない。

きつと今のマリエラの前には、かつてよりずっとたくさんの可能性が開けていて、望む未来を選び取れるのだろう。それは分かっているけれど、マリエラは何の迷いもなくこう答えた。

「お土産をたくさん買って、みんなで無事に帰ることかな。手始めにマダム・ブランのチョコレート！ いっちゃん大きい箱を買うの」「えー、真面目に聞いているのにー」

少年が膨れて見せるが、マリエラはこれでもおお真面目だ。まじ

めに見えないというなら、もともとそういう顔なのだ。

「あ、ジークが戻ってきたんな」

ナンナの声がマリエラと少年の会話の終わりを告げる。

「まあいいや。お姉さんまたね。今度は美味しいお店でも案内するよ」

「ナンナちゃん、ばいばい」

兄妹と入れ替わり、ジークとなぜかイヤシスも一緒に列へと戻る。

（だって、どこにいたって私のやることは同じだし。大事なものは毎日ちよつとずつ頑張つて大事にしていくものだと思うし）

言えなかった続く言葉を告げていたなら、何かが変わっていただろうか。

「リリアちゃんと、えつと名前……。てか、今度？」

そつえば名前を聞いていなかったなと思うマリエラ。なのに、また今度とは。

兄弟はパタパタと路地へ駆けていく。

「そのうちまた会えると思うよ！ 僕の名前はロキ。覚えておいてね」

そんな言葉だけを残して。



### 13・兄妹との再会（後書き）

【帝都日誌】リリアちゃんが元気そうで安心したよ。ロキ君、なんか疲れてそうだけど、だいじょうぶかなあ。byマリエラ

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

14・閑話：執務室にて（前書き）

前回までのあらすじ：ジークはかつての仲間と、マリエラはロキと  
出会う。

#### 14・閑話：執務室にて

「こたびの『石』はどうであった」

「前回と変わりのないとのこと。迷宮を一つなだめるのがやっとでしょう」

「そろそろ石が必要な迷宮は？」

「二つございます。アルアラージュとトゥユールですね」

「さんさんと光の降り注ぐ皇帝の執務室。」

「しかしその雰囲気は、その光量とは一転して重苦しい。」

「それもいつものことだ。帝国は広大な国土と長い歴史を持つ国で、皇帝という絶対の権力者がいてもなお、利権は複雑で問題は尽きることが無い。」

「しかも今回は皇帝の権威にかかわる問題だから、皇帝ヨハン・シユトラウス・レッケンバウエル・15世の口から小さくため息がこぼれたのも致し方あるまい。」

< i 7 4 4 5 4 1 — 2 1 0 6 4 >

「また、迷宮を閉じねばならんな」

「はい。ちょうど迷宮都市の一件で迷宮討伐の機運が高まっておりますから、今回は前回ほどの抵抗はないかと」

「前は、ゼントン伯爵の領土にあるバハート迷宮であったか。」

「討伐は順調に進んでおるのか？」

「そうであればよいのですが、迷宮都市を引き合いに言い訳ばかりを続ける始末」

「愚かな。高々10数階層の未だ管理の名残のある迷宮と、50階

層を超える魔窟を比較にすると。この1年で倒せぬ無能はこの帝国に必要な。いや、さて。あそこも国境沿いの領地だったな。我が命に従い1年以内に迷宮を斃すか、この帝国から離脱し独立の道を選ぶかを選ばせてやれ」

「陛下、またそのようなお戯れを……」

どこに領土を減らしたがる皇帝がいるのかと執務官は言いたいのだろうが、彼は皇帝が半分本気であることを理解している。

帝国という名を聞けば、戦火で領土を広げてきたイメージを持つ者も多いが、この帝国に関しては、帝国史の中盤頃に友好国の併合や戦争による領土拡大路線を取った時期は確かにあったものの、それ以上に属国側からの要望で帝国の一領地に編纂するという過程を経た。平たく言えば、自分から帝国に入れてください、と言ってきた領地が多いのだ。

仮にも一国の王に王権を手放す決断をさせた理由としては、まず、中期以降の帝国においては各地域の文化を重視し、各領主に一定の自治権を与えたことと、何よりも帝国の一部となることで得られる恩恵が計り知れなかったことにある。

その最たるものが、“迷宮を管理しうる秘術”であり、もう一つが帝都にて秘蔵されていると噂される、世界のどこでも使用できるグランドポーションである。

グランドポーションの存在は、帝国が保有する強大な軍隊が地脈の縛りなくその能力を発揮できるのだと知らしめるのに十分で、敵国の侵略に対して十分な牽制となる。

そして迷宮を管理できるといふことは、迷宮のリスクを最低限に抑えながら貴重な資源を産出する宝物庫を得るに等しい。

もちろんどんな迷宮でも管理できるわけではない。迷宮都市のよ  
うな、一国を滅ぼしてなおも成長を続けるような強い想いを持つ迷  
宮はとてでもないが制御等できないし、採れる資源の価値が低け  
れば管理対象には選ばれない。

それでも管理迷宮に選ばれば、納める税以上に潤沢な利益が見  
込めるし、選ばれなくても迷宮討伐の援助を貰えるのだから利益は  
大きいというわけだ。

「今の帝国は広すぎる。領土拡大を是としてきた過去の皇帝には困  
ったものだ。始祖たるヨハンはただこの地だけを望んだというのに」

皇帝ヨハンは、この部屋に自分と腹心しかいないのをいいことに  
ため息を吐いた。

「与えられる恩恵は有限で、しかも年々減少している。ゲニウスの  
恩恵なくば成り立たぬなら、相応の規模に縮小するのが身の程とい  
うものであるように……」

皇帝らしからぬ本音を漏らすヨハンは、普段は見せない本心を漏ら  
す皇帝に、まだ幼い声がかけられた。

「迷宮を家畜のように飼いならす前提で、身の程なんてよく言つよ  
「ロキか。どこへ行っていた？」

「どこって？ 僕が帝都以外のどこへ行けるっていうのさ」

ついさきほどまでは、この執務室にはヨハんと腹心の二人しかい  
なかったはずが、いつの間に入ってきたのかロキと呼ばれた少年が  
立っていた。

30代半ばの皇帝と10代前半の少年は、砕けた口の利き方も相まって親子のようにも思えるが、もちろん二人に血の繋がりは無い。皇帝が明るい栗色の髪で、少年が暗い栗色と、髪色の類似性があるのも全くの偶然だ。

皇帝の執務室に無断で立ち入り、横柄な口を利くこの少年を咎めるものは皇帝も含めて誰もいない。先ほどまでは皇帝の近くにいた執務官も、今は二人の会話を邪魔しないよう扉近くまで下がっている。

帝国のトップは皇帝だ。この少年の方が高い地位に就いているわけではないし、そもそも行政権を持ってはいない。

強いて言うならばこの少年は、帝都の大地、そのものだ。

それ故に、この少年を知る者は彼のことをこう呼ぶのだ。「ゲニウス・ロキ」と。

「それで、新しい石で一体どこの迷宮の機嫌を取ろうっていうのさ？」

「……アルアラージュだ」

「へえ。それはちょうどいいね」

ロキの問いに皇帝ヨハンは重い口を開く。隠したとしてどうせすぐに知られることだ。ならば、ロキが何を画策しているか聞いた方が得策だろう。

「迷宮都市の錬金術師を呼び寄せたことといい、一体何を企んでいる？」

「僕がすることなんて、ヨハンの望みを叶えることに決まってるじゃないか」

「方法を聞いているのだがね」

「言えないよ。だって、この国には邪魔をする者がたくさんいるから。本当に面倒くさいよね、人間て」

「だが、我が臣民だ」

「本当にそう思ってる？ この広い帝国の端から端まで全員を？ 形代なんてものを付けなきゃ、まっとうでいることもできないのにな？」

執務机に腰かけたロキが、ヨハンの顔を覗き込む。瞬き一つしないその目は真つ暗だ。

（このような目を、詩人どもは底なしの穴のようだと表すのだろうか）

心の奥底をのぞき込むようなロキの視線を見返しながら、ヨハンはそのようなことを考える。ロキとの付き合いは長いのだ。心のありようを量ることはできても、思考までは読めないことをヨハンは承知している。

（だがこの底のない暗闇は、まるでこの帝都の闇のように思える…）

なぜならば、この少年は『ゲニウス・ロキ』。

この地の精神ともいえる存在なのだから。

「いたずらに我が民を傷つけてくれるなよ」

「もちろんさ！ それが本当にヨハンにとっての民ならね」

年相応の屈託のない笑顔を見せるロキ。けれどその表情は作りもので、瞳は闇をたたえている。

「余はお前に心からそのような表情を浮かべて欲しいと願っておるよ」

ヨハンはこの地の精神ともいえるロキに、帝国の現状を、民の姿を幻視する。ヨハンはこの地に住まう帝国の民全員に、心から笑って欲しいと願っているのだ。そしてその中には、ヨハン自身にも意外なことだが、ロキすらも含まれている。

皇帝ヨハンのその呟きに、ロキは珍しく困ったような顔を見せると、「強欲だなあ」と答えた。

その数日後、帝国評議会よりトウユール迷宮に“管理型迷宮の指定を外す”旨の通達が下された。同時に迷宮討伐の進行が芳しからぬバハラート迷宮に、査察団を派遣するとの通達がなされる。

“管理型迷宮の指定を外す”という通達は、迷宮討伐命令と根本的には同義で、自領の産業の衰退が余儀なくされるということだ。

関連する産業に携わっていた民たちが路頭に迷い、餓えることもあるだろう。領主として唯々諾々と従えるものではない。

けれど、ここは帝国で、帝国評議会の決定は絶対だ。

そしてこの命令は、迷宮討伐しろと言われたのではなく、管理に必要なある物の提供を取りやめるといふものなのだ。領主にとれる方策は迷宮を討伐するか、自力で迷宮を管理するか。迷宮を管理するなどという芸当がただの人間には不可能であることなど、まともな頭の働く者なら誰だって分かることだ。

そんなことも分からない愚かな領主は、ぐずぐずと迷宮討伐を先送りにして状況を悪化させるだろう。だから当然、討伐の進まない



迷宮に対しては、スタンピード魔物の氾濫の危険が無いが、討伐進捗の報告が求められるし、場合によっては査察団も派遣される。これがバハラート迷宮を有するゼントン伯爵領への通達だ。

もし、討伐どころか迷宮の成長が著しいと判断されれば、領主であるゼントン伯爵はその責を問われ、領地を没収の上、爵位を剥奪されることだろう。

だがしかし、金の卵を産む鶏を殺せと言われて、大人しく従う者がいるのだろうか。

実際は金の卵を産む鶏などは幻想で、鶏でなく人など容易に食い殺すコカトリスであると気付くことができようか。

与えられた超常の奇跡によって長らく容易に迷宮を管理してきた領主たちが、どのように判断するかは、間もなく知れることだろう。

#### 14・閑話：執務室にて（後書き）

【帝都日誌】帝国ではね、ある『石』を使って迷宮を手名付けているんだ。どんな石かって？ さあて、どんな石なんだろうね。by  
ロキ

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141fff/>

## 15・夕暮れ時のシンデレラ（前書き）

前回までのあらすじ：帝都にきたマリエラ一行。マリエラはロキと名乗る少年に、ジークはかつての仲間イヤシスと再会する。一方、皇帝の執務室に現れたロキは、「新しい石でどこの迷宮の機嫌を取るのか」と聞くのだった。

## 15・夕暮れ時のシンデレラ

「その角を曲がってまっすぐ行けばお屋敷が見える。私に構わず先に行って！ 走って、ナンナ！」

ハアハアと、息を荒げつつマリエラは叫んだ。

“俺に構わず先に行け”

一度は言ってみたくらいことランキングの上位を占める名言である。だがしかし、そのマリエラを追いかける者はない。強いて言うなら追手は時間で、ついでに言うなら敵はマリエラ自身の運動不足だ。筋肉は裏切らないと言うけれど、マリエラが筋肉を裏切っているのだから少々走ったぐらいで息が切れるのも仕方あるまい。

「うなんな！」

任せるとばかりにナンナは声を上げると、弾丸のように走り始める。

さすがは獣人、人化していてもすばらしい身体能力だ。角を曲がってすぐのところまで誰かと出くわしたらしく、「わっ」という男性の音が聞こえたが、ぶつかった様子はないから上手くかわして屋敷まで駆け込めたのだろう。

「間に合った……かな？」

ゼイゼイと息を切らしたマリエラが、ヨタヨタ歩きで曲がり角に到着した時には、ナンナの姿はすでになかったから何とか間に合ったのだろう。

ボリモーフ  
変身薬が切れる時間に。

ナンナとマリエラ、保護者ジークの初めての帝都散策は、ジークの黒歴史との邂逅に始まり最後はこんな駆け込みエピソードになってしまったが、それを除けばタイムリミットを忘れるくらいに楽しいものだった。

チョコレートショップで買い物を終えたマリエラたちは、帝都で一番賑やかな場所と名高いコロツサル・バザールへと向かった。

コロツサル・バザールは、“無いものはない”と言われるほど大きなバザールで、小さな店や露店が密集した複数の通りからなる。色とりどりの野菜や果物、魚に肉に菓子やパン、いろんな地方の調味料に香辛料。それらを調理する調理器具に食器の類。もちろん洗剤や石鹸、化粧品などの消耗品や雑貨もあれば、家具のような大物もある。服や靴、素材もあればポーシオンもあり武器や防具、果ては魔道具まで扱っている。

どの店も、道にはみ出すように商品を陳列していて、狭い通りを一層狭くしているし、店内は壁が見えないほど商品だらけだ。あまりの商品の多さに頭がくらくらしてきそうだ。

何でもあるが、品ぞろえは専門店には及ばないし、質は高級店ほどよくもない。

一見リーズナブルに見えるけれども、質が悪かったり割高なものも混じっているし、逆にすごい掘り出しものも混じっている。庶民の物欲を大いに掻き立てる場所、それがコロツサル・バザールだ。

当然のことながら、その場で飲み食いできる屋台もたくさんある。その食の豊かなことといったら！

迷宮都市には畜産をする余力などなかったから魔物の肉を常食していて、オークのような二足歩行する魔物でさえ美味しく頂いていた。魔物ではない食用肉なんて貴族御用達の品で、お金を出しても手に入らなかつたのに、なんと帝都では食べるために育成した畜産肉を庶民もみんな食べるのだ。

当然、バザールの屋台にも売っている。おなじみのくし焼きはもちろんのこと、塊で焼いた肉を薄くそいで薄いパン生地にはさんだものとか、パイ生地に詰めたもの、揚げパンかと思いきや中にぎっしり肉のあんが詰まってるものもある。

「てっ、天国!？」

「うなっ。やわらかいなん、いろんな味がするなん」  
「確かに旨いな」

ジークサイフの紐が切れ、マリエラとナンナが我を忘れて買い食いしまくったのは言うまでもない。

「ナンナって、肉と魚、どっちが好きなの？」

「さかなんな」

「私は肉かな。ってうわ、口元すっごい汚れてるよ」

「うなんな」

「ああ、まって。それで拭いたら魔法陣が……」

肉汁で汚れた口元を認識阻害のスカーフで拭くものだから、効果が薄れて人化ナンナの美少女っぷりが気付かれ始めてしまった。衆目を集め始めてようやく我に返ったマリエラは、そろそろ変身薬<sup>ポリモーフ</sup>の効果も切れる頃合いだと気が付いたので。

そこからは、食べたカロリーを消費する勢いでダッシュで帰ってきたのだが、本当にギリギリだった。屋敷に向かってラストスパ―

トをかけるナンナの走りを見る限り、手足は獣人のそれに戻って  
たんじやないか。

マリエラが部屋に戻ると、メイド服からいつもの服に着替えたナ  
ンナが機嫌よさそうにくつろいでいて、脱ぎ散らかしたメイド服を  
貸主のメイドさんが片付けていた。

完全にお猫様と下僕である。メイドさんはナンナを甘やかすぎ  
なのだ。

「楽しかったなん、明日も明日の明日も毎日お出かけするなん」

「そうしたいのはやまやま<sup>ポリモーフ</sup>なだけど、変身薬の材料が足りないの。  
今日見た感じじゃ、売ってなかつたし」

「うなん」

「うっ……。ロバートさんにどこで採れるか聞いてみるよ」

瞳孔を真ん丸に開いたナンナに甘えられるとお願いを聞きちやい  
たくなるマリエラも、たいがい甘やかし過ぎである。

「ロバート様なら、食堂でお見掛けしましたよ」

「なんで食堂に……？　じゃあ、行ってみます。みんなも戻って  
るかもしれないし。ナンナも行く？」

「行かん」

くあーつとあくびをしてソファアの上で丸くなるナンナとメイド  
さんを部屋に残してマリエラは食堂に向かう。

「あら、ナンナさん。靴が片方ありませんが？」

「ヘンシンが解けた時に脱げたなん」

「あらあら」

メイドとナンナのそんな話が聞こえて来る。

ロバートがいるなら変身時間をもう少し延ばせないか、相談してみるのもいいかもしれない。

メイドさんの話通り、食堂にはメモを取りつつ本を読むロバートと、なぜか向かいにエドガンの姿があった。

ロバートは、なんでこんなところで読書しているのだろうか？ いやその前に帰らずずっとここにいたのだろうか？ それも疑問なのだがそれよりも、その向かいに座って魂が抜けたように宙を見つめるエドガンのインパクトがすごい。胸元に何かを大事そうに抱きかかえているが、一体何を抱えているのだろうか。

「マリエラ、どうした？」

「ジーク、あれ……」

食堂の入口で立ち止まっていたマリエラに、合流したジークが声をかける。

「まさか、ロバートさんがエドガンさんに、呪いとかクスリとか……」

「いや、エドガンはあれでもAランクだぞ」

ほぼそと話すマリエラとジークに気付いたロバートが、「聞こえていますよ！ さっさとこいつをどうにかしなさい。先ほどふらりと入って来るなり、ここに座って動かないのです！」と声を上げた。

どうやら、エドガンは戻って来た時からこの調子だったらしい。ロバートの前に座っているのは、知っている人の近くになんとなく



寄って行っちゃっただけだろう。

「どうした、エドガン」

「……オレはさっき、天使に出会った」

「どつやら頭を打つたらしいですね。ポーションをくれてやったらどうです?」

「いや、外傷はなさそうですよ」

エドガンとロバートが合わさると、こつこつ風になるのかと新鮮に思いながらマリエラはエドガンの様子を観察する。心ここにあらずと言った様子で明らかにおかしいが、外傷はないし、状態異常にかかったようにも思えない。

「あ……ありのまま、さっき起こった事を話さずせ」

「はいはい、そういうのいいですから。何を抱えているんですか?

………あ

< i750183 — 21064 > ©小原彩

その証拠に、ジークとマリエラ構ってくれそうな二人が近寄ると、もったい付けつつ天使とやらについて話そうとするのだが、エドガンが大事に抱えている物 片方だけの女性ものの靴を見たマリエラは、それだけで全部を察してしまった。

(そついえばナンナ、角を曲がった時誰かとぶつかりそうになつてたっけ……。人化したナンナ、すっごい可愛いからな)

< i748593 — 21064 >

そしてジークもマリエラの様子から、おおよそのことを察したの

だろう。把握した、とばかりにマリエラへと視線を送った。

「あー、エドガン。ここじゃロバート殿のお邪魔だから向こうにいこうな。話聞くから……」

「やっぱ、持つべきものは親友だな、ジーク。聞いてくれよー、オレはついに！ ついに会ってしまったんだ！！ ああの白銀の髪に湖面のような青い瞳！ 触れそうなほど近くにいたはずなのに、まるで翼があるみたいにふわっといなくなって……。それで後にはこの靴が……！」

ジークがエドガンを連れて席を立ち、代わりにマリエラがロバートの前に座る。

「……何の用です？」

「ケルピーの波紋花の取れる場所を知りたくて」

マリエラがちらつとエドガンの方に視線を向けつつそう言つと、ロバートも理解したらしい。

「……なるほど。ケルピーの波紋花ならばアルアラージュ迷宮で採れますね」

「アルアラージュ。そこって遠いんですか？」

「いや。帝都の北、馬車で半日ほどの距離です。管理型迷宮で別名、薬草窟とも呼ばれていますね。ポーション素材の産地ですから、自由課題の役に立つ素材もあるかもしれません」

そう言つてロバートは手元のメモをマリエラに渡した。よく見るとロバートが読んでいた書物は『帝都管理型迷宮総覧』という書物で、メモにはアルアラージュ迷宮で採れる役に立ちそうな素材の一覧とその採取方法、階層ごとの注意点がまとめられていた。

「管理型迷宮は入口付近で地図が買えると聞きますし、案内人の職に就く者もいるそうです。詳しくはそれらを頼りなさい」

それだけ言うとロバートは、用は済んだとばかりに再び読書に戻ってしまった。

(うーん、なかなか打ち解けないな)

ロバートのツンデレが過ぎる。

渡されたメモはとても分かりやすく書かれていて、案内人の方がお金を出して欲しがりそうな代物だった。どうしてロバートはシューゼンワルド边境伯爵の食堂にいるんだろうと思ったけれど、おそらくマリエラにこれを渡すために、ここで作業してしてくれたのだろう。

(やっぱりキヤル様のお兄さんなんだなあ……)

とつてもいい人で、そしてとつても面白い人だと思ったマリエラは、「助かります、ありがとうございます」とメモのお礼を言った後、ロバートに聞いてみた。

「ところでロバートさん。恋の病に効くポーションってありませんかね？」

「知りませんね。ついでにバカに付けるポーションも知りません。

……だがまあ、早いうちに教えてやった方がいいでしょう」

すっかり獣人に戻ったナンナが「お腹空いたなん」と言って食堂にやってきたけれど、エドガンは見向きもしない。それを見たロバートが可哀想なものを見る目でそんなことを言う。

やっぱりロバートは、口は悪いがいい人だ。

そして肝心なところで抜けている人だということを、マリエラもまたサクッと忘れてしまっていた。

メイヘム・オチキスコード  
不和と騒乱のアルアラージュ

素材を使う側の錬金術師には産地として有名だけれど、素材を採取する冒険者からは、パーティークラッシュヤーとして悪名高い迷宮なのだ。

## 15・夕暮れ時のシンデレラ（後書き）

【帝都日誌】 天使に出会った。彼女のあまりの可愛さに空も顔を赤らめて、彼女の瞳だけが空よりずっと青かった。 by エドガン

【帝都日誌】 このために、ナンナを人化させました。 by 作者

キャロラインが無双する「生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい」輪環の魔法薬」16章後編は、B's LOG COMI C Vol.126（7月5日配信）掲載です！  
6/28に輪環の短編集で、キャロラインのSSを更新予定です。  
キャロラインがなかなか帝都に來ない理由が分かるかも。

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』2章を更新中！

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

16 真夜中のハンプティダンプティー（前書き）

前回までのあらすじ：エドガン、運命の人に出会う。

## 16・真夜中のハンプティダンプティ

「はあ、どこにいったの。マイエンジェル……」

「これは一体どういうことかな。たしかエドガンは冒険者ギルドの受付嬢とデートしたんじゃないか？」

ヴォイドが義実家のシール家で夕食を済ませて宿舎に戻ると、部屋はどんよりとした空気に包まれていた。

「ふむ、エドガンはデートの帰りに偶然出くわした別の女性に一目惚れをし、心ここに在らずというわけか。……エドガン、君は女性に刺されないように気を付けた方がいいかもしれないね。」

ジークの説明を聞いたヴォイドは、いつものことだと認識してくれたようだ。もっとも、ここまで重症なのは少なくともジークは知らないのだけだ。

「それでジークくんの方はどうしたのかな？ 君も随分と浮かない顔をしているようだ」

「俺ですか……」

マリエラでさえ見逃したジークの変化に気付くとは、さすがはヴォイド。並々ならぬ観察眼だ。

「実は街でかつての仲間に偶然会いました。思いのほか普通に会話できたのですが……」

問われるままに話したのは、ジークも気持ちの整理を付けたかっ

たからだろう。

「かつての仲間か。昔の女性ではなくて？ 言い寄られてもしたのかな」

「そういう関係ではありませんでしたが。……そうですね、好意を示されたように思います」

久々に会ったイヤシスに媚びる様子があったことくらい、ジークは気が付いている。というか、あんなに露骨な奴だったろうかと少々驚いたくらいだ。それでも昔なら悪い気はしなかっただろうイヤシスの態度は、今のジークにはひどく白々しいものに感じられ、自分でも驚くほどに心が動くことはなかった。

ジークがモテ自覚発言をしたせいで、お散歩中のエドガンの心は無事帰宅したようだ。口を尖らせてかみついてきた。

「なんだよジーク、俺はマイエンジェルがこの誰かも分からずに悩んでいるって言うのに、お前だけモテ期かよ。マリエラちゃんに言いつけちゃうぞ」

「エドガンのエンジェルとやらは意外と近くにいると思うが……。違うんだ、そういうんじゃないんだよ。今更チャホヤされたくらいで動く心はもっちゃいない。俺が引つかかっているのは、……あいつらは知っていたんだよ。俺が迷宮都市に行ったことも奴隷に堕ちてしまったことも」

「ジーク……。急にブツ込んできたな」

自業自得だと納得できていたはずだ。嫌われていた自覚だってあったのだ。

だとしても。

迷宮都市に送られた奴隷が生きて帰ることはない。それは当時のジークでさえ知っていた常識だ。かつての仲間たちだって、迷宮都



市送りがどういうことか分かっていたはずだ。一時は仲間と呼び合い共に戦った者がそんな状態にあることを、イヤシス達は知っていた。知っていて、それで助けてはくれなかったのだという事実を、ジークはイヤシスに会うことで認識してしまった。

「過去の自分が蒔いた種、辿り着いた結末で、あいつらが悪いわけじゃない。そう理解してはいても、何とも言えない気持ちになってしまった、ただそれだけなんだ。

……ヴォイドさん、エドガン、聞いてくれてありがとう。気持ちの整理が付けられそうだ」

ジークは深く息を吐くと、顔を上げて笑って見せた。

「気にするなと言つても無理かもしれないが、想像力に欠ける人間というものは多いものだ。だからこそ他人ごととして切り捨てて、ひどく残酷になってしまえる。だがね、手を差し伸べてくれる人はいたんだ。君にも僕にも。掴んだその手を離さずに、守り抜くことを考えればいいんじゃないか。大切なものを本当に大切にすることとはひどく難しいことだと思うよ。余計なことなど考えている余裕もないほどにね」

荒涼とした時間の果てにエルメラと出会い、穏やかな日常を手に入れたヴォイドの言葉がジークの心に染み入るようだ。大切な者ならずすでにあり、まさに昨日、イリデッセンス・アカデミーでその手を放しそうになったばかりではないか。今のジークには過ぎた過去の幻影に煩わされる暇はない。帝都は敵地と心得て、迷宮の深淵よりも油断なくマリエラを護らなければ。

ジークはヴォイドの言葉に深くうなづく。

「……ジークもヴォイドさんも羨ましいぜ。ハア、俺のエンジェル

ちゃん」

エドガンが何やらぼやいていたけれど、そこはサクッとスルーしておく。

エドガンの出会ったエンジェルとやらは、ホリモーフ変身薬の生み出した幻影だ。

エドガンが自分で気付かないようならば、意味などないと思ったジークは黙っておくことにした。

< i 7 4 8 5 9 8 — 2 1 0 6 4 >

「査察団だとお。そんなものを寄越すとは、我がゼントン家を疑っているも同義じゃないか！」

赤ら顔をさらに真っ赤に紅潮させて、ゼントン伯爵は声を荒げた。

「はい、そのようでした」

ゼントン伯爵の大声に、小柄な家令は小さな体をいっそう縮こませて答える。

ゼントン家を疑っているも何も、一年も前に受けた命令に着手もせず放置しているのはゼントンだ。

帝国の南の端に位置するゼントン伯爵領は、バハラート迷宮から取れる香辛料を除けば特に特産品もない、元はひどく貧しい領地だった。面積こそ広くても、その大半は枯れてひび割れた不毛の大地だ。元々は小さな湖にへばりつくようにして人々が暮らしていた、国とも呼べない小さな集落だったのだ。

細々と家畜を飼い、帝国と取引をしながら生きながらえていた領地に、転機が訪れたのは今から三代前の話だ。領地と帝国の境あたりに迷宮が見つかったのだ。

不幸なことに迷宮の入り口はゼントン伯爵の領地内にあり、当時の彼らの力だけではとても討伐は叶わなかった。けれど幸いだったことに、その迷宮からは様々な香辛料が豊富に得られた。

帝国に助けを求めた彼らの声は迷宮まるごと受け入れられ、香辛料やカカオ、コーヒー豆を産出する管理型の迷宮として長らく恩恵を受けられたことは、ゼントン伯爵と領民にとって紛れもない幸運であつただろう。

今までの貧しい暮らしは一転し、ひっきりなしに冒険者たちがやってきては魔物を倒し価値ある素材を採取していく。その収益の一部が、領地に自動で転がり込んでくるのだ。今の領主を務めるゼントン伯爵は、生まれた頃から寝ているだけで金が入ってくる生活で、この迷宮が管理型から外される日は来ると想像もしていなかった。

管理型迷宮を持つ領地はたいそう潤うが、同時に管理を外された時に備えて計画を立て、対策を取ることが義務付けられている。だといふのにその義務すら怠って、富は浪費されていた。

(疑っているも何も、この一年間一回だって討伐隊を派遣してないじゃないか。この状況を分かった上での査察団だろうに)

そのような心の内をこの家令は口にはしない。一言でも漏らしたら、ゼントン伯爵が赤い顔をさらに真っ赤にして怒鳴り散らすのが目に見えているからだ。

「まあよいわ。現状の調査ぐらいしておるのだから？ 調査報告書を準備しておけ！」

「それが、調査は一年前から進んでおりませんで」

「何をやっている！！！」

ヤカンならピューと蒸気が吹き出しただろう勢いでゼントンが怒鳴る。

「どうして調査をしとらんのだ！ お前の仕事だろう。どう責任を取るつもりだ。査察団に指摘をされたら、お前の管理不行き届きだ！ お前の責任なんだからな！！！」

「はい。では大急ぎで冒険者を雇い調査させます」

責任、責任と喚き散らすゼントンに、家令はまたかと心の中でため息をつく。

せめて調査ぐらいはと何度も上申したはずだ。それを「いらぬ、余計な金を使うな」の一点張りで却下してきたのはゼントンではないか。どうやら、自分の都合の悪いことは記憶が改ざんされるらしい。そして都合の悪いことは、すべて周りのせいなのだ。

こんな男だから、部下がみんなついていけずに短期間で辞めてゆく。家令などという役職は家に一族ごと仕えるもので、そうそう変わるなどないのだが、ゼントン伯爵家に関しては数年おきに変わってしまう。この家令も、仕えてまだ数年しか経っていない。

問題の多いゼントン伯爵領に赴任してきたこの家令は、飛び切り優秀というわけではないが無能ではなく、何よりも非常に我慢強い男だった。そして当然のことながら、帝都からの紐つきで、バハラート迷宮の現状を帝都に伝えているのはこの男なのだが、ゼントン伯爵はそのことにも気がついていないようだ。

(最悪の状況だけは避けなければ……。内々に調べさせた情報によると、迷宮は成長を始めてしまっている。我々の手に負えなくなる前に討伐しなければ、いずれ魔物が溢れ出し、領地の民は甚大な被害を受けてしまう)

欲に目がくらみ迷宮を甘く見ていたゼントン伯爵のせいで、バハラート迷宮は成長し、既に手に負えない状態になりつつあった。

ゼントン伯爵領の領民にとって幸いであったのは、この真つ当な男が家令を務めていたことだろう。しかしそれ以上に不幸であったのは、領主であるゼントンがどうしようもない愚か者であったことだ。

(調査団という初歩の初歩ではあるけれど、ようやく討伐の足がかりがつかめた。魔物の氾濫<sup>スタンビート</sup>だけは起こさせるわけにはいかない、急ぎ冒険者の手配をしなければ)

部屋を出て行くこととする家令の耳に、イライラと部屋を動き回るゼントンのつぶやきが届いた。

「<sup>ロコス・オラ・カーマイン</sup>緋色の宝珠さえあれば……」

緋色の宝珠。

皇帝より管理型迷宮に与えられる、迷宮の成長を止め管理を可能にせしめる宝玉だ。

この秘宝のおかげで、人々を食らわんとする迷宮は無限に資源が得られる鉱山へと変貌する。しかし緋色の宝珠は希少な物で、管理型から外されたバハラート迷宮へは与えられない。緋色の宝珠がなければ迷宮の管理ができないことは、さすがのゼントンも理解して

いるのだろう。

(ゼントン伯爵が、迷宮の危険を理解して討伐を決意してくだされば……)

家令のそんな願いはゼントンの一言で打ち碎かれることとなる。

「新しい緋色の宝珠はアルアラージュ迷宮に運ばれると聞いたぞ」

この男は、一体何を言っているのだろうか。

家令の不安は、的中することになる。

「おい、調査のために冒険者を何組か雇うのだろう。その中で使えるやつを一組連れて来い」

「……何を依頼されるおつもりで？」

家令の質問にゼントン伯爵は、「そんなこともわからぬのか」と小馬鹿にするような調子で答えた。

「決まっておろう。アルアラージュ迷宮に行ってもらうのだ。いや、端からアルアラージュ迷宮に詳しい連中を雇った方が確実だな、早急に手配しろ」

緋色の宝珠がもたらされるアルアラージュ迷宮に冒険者を派遣して、一体何をさせるつもりなのか。それは聞かずとも明白だった。

< i 7 5 2 5 8 2 — 2 1 0 6 4 >

## 16・真夜中のハンプティダンプティー（後書き）

【帝都日誌】エドガンはともかく、ジークたちの進展の遅さが気になるね。byヴォイド

<i750185—21064><2巻に出てきた盗賊コンビ、元気に社会復帰中。

「生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい（輪環の魔法薬）」  
16章後編は、B・S・LOG COMIC Vol.126（7月5日配信）掲載です！

輪環の短編集で、キャララインのSSを更新しています。  
キャララインがなかなか帝都に來ない理由が分かるかも。

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

17・依頼（前書き）

前回までのあらすじ：マリエラー行、陰謀渦巻くアルアラージュ迷宮へ



## 17・依頼

「うわうれうわうれうわ〜」  
「うう〜な〜ん〜ぬわあ〜」

カタカタと小刻みに揺れる馬車の中で、マリエラとナンナが声を震わせて遊んでいる。

こんな暢気な芸当ができるのも、これが帝国でも有数の速度と快適性を誇る『テオレーマ』の馬車だからだろう。そして、こんなごく近所迷惑なことができてるのは、貸し切りにしているからだ。

「はあ〜や〜い〜ん〜んなあ〜」

見る間に流れていく景色にナンナはご満悦である。

迷宮都市から帝都に来る時にもこの馬車にはお世話になったけれど、本当に驚くべき速度だ。そしてこれだけの速度にも関わらずたいした揺れを感じないのは、よほどいいサスペンションを使っているのだろう。黒鉄輸送隊の馬車も、最近はドワーフの技術を取り入れて改良を重ねているがこうはいかない。テオレーマの商人、ニクス・ユーグランスはエルフだからエルフの魔術が使われているのかもしれない。

「よりによってアルアラージュかあ……」

楽しそうにしているのはマリエラとナンナだけで、向かいの座席に座ったエドガンが、ぐはあ、とばかりにため息を吐いた。マリエラの隣に座るジークも浮かない顔だ。

「アルアラージュ迷宮ってそんなに危ないの？ 案内人がいれば大丈夫なんだよね？」

アルアラージュ迷宮に行きたいと告げた時、いい顔をされなかったのは確かだが、準備さえすれば問題ないという結論になったのではなかったか。

すごく強い魔物でもいるのかとマリエラが不安になって聞いてみると、ジークから思わぬ答えが返ってきた。

「あそこは『メイヘム・オディスコード不和と騒乱のアルアラージュ』と呼ばれていて、いわゆるパーティークラッシュャーな迷宮なんだ」

パーティークラッシュャーとはこれ如何に。

冴えない男だらけのパーティーに突如舞い降りた女性メンバーとかそういう系の話だろうか。

「……えっと？」

頭の上に「？」を浮かべるマリエラに、エドガンはさらに詳しい話をしてくれた。

アルアラージュ迷宮は、帝都近郊にある立地と様々な錬金術素材が採れるという特徴から、帝国に欠かすことのできない管理型の迷宮だ。

管理型迷宮の常として、発生する魔物は大して強いものではないが、非常に厭らしい畏がたくさんあるという。

「仲間を見捨てる<sup>と</sup>得する<sup>みたい</sup>な畏が結構あるんだよ。んで、迷宮じゃ死なないんだけど、仲間割れしてパーティーとしては再起不能になったり、色恋絡んだパーティーだったら別れる確率結構高い

んだ。アルアラージュ失恋とか言って。オレも何回別れたことか」  
「まあ、エドガンはアルアラージュ関係なく失恋してるけどな」  
「ジークよう、それ言っちゃう？ てか、一緒に潜るんだったらお前らが一番危ないんだぞ。マリエラちゃんに嫌われたらどうするつもりだよ」

「ぐっ……。お、俺たちの絆が……」

「絆が試されてるーなんて軽い考えで潜った連中が、何人後悔してることか。あの迷宮は仲たがいのプロだぞ、プロ！ 凄腕の別れさせ屋みたいなものだ」

アルアラージュ迷宮、なんて恐ろしい迷宮なんだ。

マリエラはガクブルしながら話を聞く。

「まあまあ。だが、アルアラージュの素材は大量に出回っているの  
だろう？ だったらそこで活動している者たちも大勢いるということになる。うまく切り抜ける方法があるということだ。案内人を雇うのだからその辺りはうまく避けてくれるだろう」

「ううっなあ〜ん〜なあ〜」

現実的な案を出してくれたのは、さすがのヴォイド先生だ。ちなみに猫畜生のナンナは未だに窓にへばりつきながら一人でナンナン言っている。

「ナンナさんは大丈夫そうだけど……。アルアラージュはフツはソロで潜るか、仲良くない割り切った連中と契約して潜るんすよ。欲しいもの、ケルピーの波紋花だっけ、それって30階層くらいだっけ？ それくらいなら、オレらだったらソロでもイけるだろうけど……」

「その場で加工しちゃうないと駄目なやつなんで」

「ううっなあ〜ん〜なあ〜」

錬金術素材の中には、採取して時間がたつと変質してしまい使い物にならない物がいくつもある。ケルピーの波紋花もその一つだ。つまり、錬金術師を連れて迷宮に潜るか、ある程度の錬金術が使える戦士が採取する必要があるわけだが、このケルピーの波紋花の場合、ケルピーと戦闘しながら採取、加工しないと効率が悪すぎて満足な量が採取できない。つまり、複数人での採取が望ましいわけだ。

仲間割れの迷宮で複数人での共同作業が必要な素材とは。どうりで希少で値段も高いはずだ。

「まあ、最近じゃほとんどの罫は調査が終わってるらしいから、案内がいれば最悪のことにはなんないだろうし、ジークとマリエラちゃんなら、意外と平気かなとも思っけどさ」

ぼり、と頭を掻きつつエドガンが照れたように言葉を切る。

「オレ、ジークと喧嘩したくねーんだよ。……友達マブダチだからさ」

ぼそつと漏らしたエドガンだったが。

「え？」

「え!？」

ジークの口から洩れた疑問符付きの言葉に、エドガンは「嘘だろ」みたいな表情になった。

「もう少しで着きますよ」

話を聞いていたのか偶然か、非常にいいタイミングで御者席にいたニクス・ユーグランスがのぞき窓をノックして声をかけてきた。

「最終確認をしたいのですが、そちらに行かせてもらっても？」

「はい、どうぞ」

ジークが返事をする、ニクスは走っている馬車の外側をすわりと移動して、乗車席へと入室してきた。

この馬車の持ち主である『テオレーマ』という商会は、帝都で知らぬ者なきオークションハウスだ。マリエラたちに馴染みのある所なら、迷宮の階層主の素材など希少で値段の付けられない物をこの高速馬車で運搬し売却してくれていた。

帝都中の珍品名品希少品を運びまくっているのだから、このニクスというエルフの青年が相当に腕が立つことは言わずもがなではあるのだが、彼個人の武勇以上に、この馬車に刻まれた樹木と天秤のテオレーマのエンブレムは有名だ。

非常に高価な貴重品を少人数で運ぶのだから、どれほど腕が立つと襲われ、商品を奪われることは起こりうる。けれど、オークションハウス・テオレーマの創立以来、襲撃に対する報復が行われなかったことは一度もないのだ。一切の証拠を残さずに 例えば魔の森の真ん中で御者も護衛も皆殺しにして荷を奪い、襲撃の痕跡ごと隠滅したうえで荷をどこかに隠したとしても、襲撃者と荷物の方はあり得ないほどの早さで見つけ出されて報復が行われる。

“テオレーマの天秤は傾かない”と囁かれるようになった頃には、このエンブレムを持つ馬車に手を出す者はいなくなつた。つまりこ

の馬車で運ばれているマリエラたちは、帝国で一番安全なドライブの最中なのだ。

「運んで頂けてとても助かりました」

「いえこちらこそ、依頼を受けていただいて助かっております。それにしても獣人ですか。私も長くこの仕事をしていますですが運ぶのは初めてですよ。それで具体的な依頼の内容なのですが……」

ジークとにこやかに挨拶を交わしつつ、ニクスが依頼について話し始める。

『始まりの錬金術師』マリエラや、獣人であるナンナのレアリティーはとんでもなく高いのだが、ドナドナされちゃうわけではない値段が張る上、手の空いている時に限られるが、輸送を請け負うこともある。中には腕を見込まれて、かなり難易度の高い依頼が転がり込んでくることもある。

運んでももらえればラッキーくらいの気持ちでテオレーマに問い合わせたところ、ちょうどニクスの方にアルアラージュ迷路がらみの依頼が入っていたというのだ。

しかも腕が立ち信用のおける冒険者が必要な内容だったものだから、これ幸いと逆に依頼を持ち掛けられたというわけだ。

「本日はこちらが手配した宿でお休み頂いて、明日からアルアラージュ迷路に潜っていただきます。25階層までは転移陣で移動できますが、そこから目的の33階層までは踏破いただくことになりま。最短距離で6時間というところでしょうか。そちらの目的の、30階層での採取活動と合わせて1泊2日と言ったところですね。必要な荷物は宿に手配させていますので、到着後確認ください」

ニクスの依頼を受けたおかげで宿泊先から荷物の準備、情報収集

に至るまで、至れり尽くせりのおまかせらしくパツクである。とはいえ、テオレーマに持ち込まれる依頼だ。一筋縄でいくはずがない。

「肝心の案内人は？」

「明日の朝の顔合わせになります。当初のCランクパーティーが急きよ変更になりました……。アルアラージュ迷宮を中心に活動しているBランクパーティーが受けることになったそうですよ」

「ほっ」

案内人が急に変更になるなんて、始まる前から騒乱の臭いのする話ではある。

「こちらは、Bランクのヴォイドさん率いるパーティーとしてお伝えしていますので」

にっこりと笑って見せるニクス。Aランクが2人いるパーティーだと知らないあたり、こちらも不和は標準装備だ。メイヘム・オディスコード不和と騒乱のアルアラージュ攻略は、すでに始まっていると言っている。ちなみにニクスにはヴォイドの正体を伝えていない。Aランクが二人もいれば十分な依頼なのだろう。

「守秘契約については？」

「もちろん、皆さま『炎の遣い』の情報も含めて、迷宮内で起こったことは決して漏らさないよう契約魔法にて誓約してからお引き合わせいたします」

ヴォイドの質問にも丁寧に答えるニクス。視線がちらりとナンナに向いていたから、獣人の情報を漏らされては困ると認識したのかもしれない。

「うなっ、街が見えてきたなん！」

ナンナの声に窓の外を見てみると、赤みがかった土壁に囲まれた街並みが見えてきた。帝都に比べれば華やかさに欠けるのは、実用的なシンプルな建物が多からだろうか。それともアルアラージュ迷宮を『不和と騒乱』の迷宮だと聞いたせいで、街中が殺伐とした雰囲気を感じられるのだろうか。

検問に備えて御者台に戻ろうとするニクスに、ジークは思い出したように聞いてみる。明日会うという案内役のパーティーについて、詳しく聞いていなかったことを思い出したのだ。

「そういえば、案内役のパーティーは何という名前なんですか？」

Bランクパーティーなんて星の数ほどいるものだ。帝都で活動してもいないジークたちが知っているはずもないのだが。

「ああ。なんでも『ファントム・ストライク夢幻の一撃』というそうですよ」

ニクスが言い残したパーティー名は、つい先日、聞いたばかりのものだった。



## 17・依頼（後書き）

【帝都日誌】黒歴史が助走を付けて追いかけて来るんだが。byジーク

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

18 不和の種（前書き）

前回までのあらすじ：アルアラージュ迷宮の案内人、まさかのファントムナントカ。

## 18・不和の種

「おいおいまじかよ」

「ジ、ジーク？　なのか？？」

「ミツテクールにフセグン、……久しぶりだな。そしてあんたがリヨウ・ダーンか」

聞き覚えのあるパーティー名だと思ったら、アルアラージュ迷宮の案内役『ファントム・ストライク夢幻の一撃』は、やはりジークのかつての仲間たちだった。

「おい、イヤシス。こいつは？」

「この人はジークムント。昔の……パーティーリーダーよ。ジーク、彼はリヨウ・ダーン。『ファントム・ストライク夢幻の一撃』のリーダーをしてもらってるわ」

思いがけない再会に驚いたジークだったが、イヤシスの反応を見る限り、彼らとしても本当に想定外だったのだろう。ジークと面識のないリヨウ・ダーンを除く3人は、かつてジークを見捨てた負い目があるのだろうか、ばつが悪いような落ち着かない様子だ。

「……ジークさんのお知り合いでしたか。皆さんに向かっていただけののは『不和と騒乱』と名高いアルアラージュ迷宮。仕事と割り切れる間柄の方が望ましいと言われています。一緒に潜っていたくのが難しいようでしたら、『ファントム・ストライク夢幻の一撃』の皆さまには違約金なしで依頼を破棄いただいても構いません。勿論手付け金はそのままお納めください」

ニクスの提案に、ミツテクールとフセゲン、イヤシスは顔を見合  
わせる。

手付金だけタダでくれるという破格すぎる提案なのだが“案内人の代わりはいるが『炎の遣い』の代わりはない”と言われたも同意だからか、リーダーであるリヨウウ「ダーンは一人渋い顔だが口を出さず、仲間の反応を窺っている。

どうやら今のリーダーはワンマンではないらしい。かつてのリーダー、ナントカシューターさんなら一言二言ゴネていただろうに。

「オ、オデは……やるぜ」

「オイラもだ」

「……わかったわ」

フセゲンとミツテクールが参加を表明し、イヤシスも二人の意思に賛同する。

逆に心配そうにしているのはマリエラたちだ。

「ジーク、大丈夫？」

「おい、ジーク。気が乗らないなら俺たちから断ったっていいんだぜ？」

「同意見だ。違約金なんて気にする必要はない」  
「うなんな」

マリエラ、エドガン、ヴォイドにニヤンコ。パーティーを組んだばかりだというのにみんななんて優しいのだろう。ニヤンコだけは、周りに合わせて頷いているだけに見えなくもないが。

「みんな、ありがとう。俺は大丈夫だ。……今、大丈夫になったよ。アルアラージュ迷宮の『不和と騒乱』なんて、俺たちには、きつと何の障害にもならない」

「それでは、こちらを。アルアラージュ迷宮33階層までお願いします」

依頼を受ける意志、いや、過去と向き合う決意を新たにしたジーク。

その様子に頷くと、ニクスは小さな箱に納められた何かをヴォイドに渡した。これをアルアラージュ迷宮33階層まで運ぶことが、今回『炎の遣い』がニクスから受けた依頼なのだ。

ヴォイドが受け取った箱をしまう様子を『ファントム・ストライク夢幻の一撃』たちの視線が追っていたのは気のせいだろうか。

こうして、ジークの今と昔の仲間たちによる不和と騒乱のアルアラージュ迷宮攻略が始まった。メイヘム・オヂェスコード

管理型の迷宮というものは、入場料が必要らしい。

価格は一人銀貨1枚 安い食堂なら10食はお腹いっぱい食べられる値段となかなかの値段であるが、事前に冒険者ギルドで登録しておけば割引が効く。

迷宮都市の迷宮はラプトルくらいなら連れ込めたけれど、アルアラージュ迷宮はトラップが多く狭い場所も多いから騎獣の連れ込みはできない代わりに、1名なら荷運び人ポーターを無料で連れていけた。

マリエラたち『炎の遣い』のポーターはナンナだ。目深にかぶったフードと全身を覆うローブを着こんでいれば、迷宮の入口を通過する程度の短い時間なら獣人だとバレることはない。予備も含めて3、4日分の食料やポーション、そしてジークの弓矢を詰めたでっかい荷物を背負っているが、さすがは獣人の身体能力と言うべきか、

まるでふかふかの羽根布団でも背負っているような軽やかさで「魔物なんな、なんなんな」と魔物の臭いにご機嫌に鼻をひくつかせている。

迷宮に入つてすぐの転移陣を使えば25階層まではあつという間だ。勿論、それだけのショートカットが可能な転移陣は無料ではなく、こちらは1回なんと銀貨10枚。しかも1回で5人までしか運べないから、『炎の遣い』と『夢幻の一撃』ファントム・ストライクで片道銀貨20枚の大盤振る舞いだ。それだけのコストを回収するのは簡単ではないし、25階層ともなればそれなりに強い魔物が出る。当然ながら転移した先の25階層は閑散としていた。

「それにしても獣人とは珍しいわね」

「うなんな」

< i 7 5 2 7 9 9 — 2 1 0 6 4 >

どことなく気まずい一行の格好の話のネタになったのは、獣人ナンの存在だ。

壁面がうつすらと光る洞窟を延々と進みながら、イヤシスがナンナに声をかける。イヤシスとしてはジークに向かって話しかけたつもりなのだが、猫語を翻訳してくれたのは紳士代表エドガンだ。

「まーな。べつに捕まるようなコトはねーんだけどな、目立ちすぎるってーのは問題だろ？ ナンナたん、可愛いし」

「うなうな」

「確かに可愛いわね。……後で触らせてもらっても？」

「んなん」

イヤシスが伸ばした手をナンナの尻尾がぱしんと叩く。

すげない態度ではあるが、イヤシスはなんだか嬉しそうに払われた手をさすっている。

ここは不和と騒乱のアルアラージュだが、ネコとならいくらでもメイヘム・オディスコード和解できそうだ。

「おい、そろそろトラップ多発地帯だぜ。オイラの踏んだとおりについて来てくれ」

「だ、大丈夫だ。き、危険な場所にはオデがマーク付けておくから。でも他にも面倒な罫があるから、き、気を付けてくれな」

おしゃべりで注意力が落ち掛けた一行に、先頭を行く斥候のミツテクールが注意を促す。危険な箇所には、フセグンがインクで印をつけてくれるらしい。

ナンナが「うんなな」言っている間に、最初の難関に辿り着いたようだ。

ちなみに一行は斥候のミツテクールを先頭にリョウウダーンとエドガンが時折出てくる魔物の露払いに先行している。それなりの魔物と接敵すれば続く盾戦士のフセグンが引きつける陣形に移るのだが、今のところはエドガンたちだけで問題なく片付いているから、ニヤンコを構う余裕があるわけだ。

フセグンの後にはイヤシスが続き、その後をナンナ、ジークがマリエラの前後を固め、最後はヴォイドという構成だ。

さすがは冒険者というか、ジークたちはもちろんのこと、鎧を着たフセグンも同じ女性のイヤシスも余裕な表情で歩いているのだが、マリエラだけは付いて行くのでいっぱいいで、すでに息が切れ始めている。

逆に元氣一杯なのは獣人ナンナだ。

「なんなんなん、なんなんなん」

危険地帯と呼ばれた辺りは、大きな石が散らばる河原のような足元になっていて、危険な罠がある場所にはフセグンがインクで印を付けている。それは平らな石だったり、逆に石の細かな砂地であったり、思わず踏みたくなるような歩きやすそうな場所ばかりだ。

ちなみにさすがは迷宮と言うべきか、付けた印はしばらくすると消えてしまつて分からなくなるらしい。だから記憶だよりで、アルアラージュ迷宮を熟知したパーティーはそれだけで食べていける。

前に行く人と同じ場所を飛んで移動するのが面白いのか、そんな場所をナンナは数歩分も飛び越してピョンコラサツサと進んでいくのだが、それで困つたのはマリエラだ。ゆっくりと一歩一歩安全な場所を示してくれなければ、マリエラについていけないわけがないではないか。危険な罠には印があるが、無印の軽微な罠もたくさんあるのだ。

「ちよつ、まつて、ナンナ。ここつて安全？ え？ え？ え！！！！？」

ブシュー！！

見事に印のついていない罠を踏み抜いてしまうマリエラ。途端に周囲の石の隙間から、得体のしれないガスが噴き出す。

「マリエラ、あぶない！！」

「なんな！！」

一撃瀕死のマリエラを守るべく、とつさにジークとナンナが飛び出したおかげで、マリエラがガスを浴びることはなかったけれど、マリエラを庇つた二人はガスを吸ってしまったらしい。ケホケホ、



クシュンと咳やくしゃみをする二人。

「きゃあ！ ジーク、待っていて、今回復するわ！」

「ジーク！ ナンナ！ 大丈夫！！？ って、わあ！」

ジークがガスを浴びたのを見て、マリエラより先に声を上げたのはイヤシスだ。素早く駆け寄ってきたイヤシスは、マリエラを押しつけてジークの側に寄ろうとするが、イヤシスの手がマリエラにかかるより先に、反射的に動いたジークの手がマリエラを引き寄せる。

「良かった、なんともない……みたいだな。俺は大丈夫だ。マリエラ、気分は？ 大丈夫か？」

「う、うん。ありがとう、私は大丈夫だよ」

「うなうな！ うなんな！」

「え？ ちょ、ちよっと、回復は？」

いつもよりなんだか積極的なジークの様子に面食らうマリエラと、自分の無事をアピールするニヤンコ。せっかく駆けつけたのに粗雑に扱われたイヤシスは、露骨に不機嫌そうな顔をしている。

「そうか、マリエラが無事でよかった。マリエラ大好き……！！？」

「へ、ジーク！！？」

「うな？」

「ハア！？」

いきなりノロケ始めるジークにあっけにとられる一同。

「あゝ、そりゃ、シークレット・ウィスパ内緒の告白って畏だなあ。全く運がいいのか悪いのか」

思わぬトラブルの発生に、戻ってきたミツテクールが教えてくれる。

なんでも、ちよっぴり素直になってポロつと本音が漏れてしまうガスらしい。肉体的には何のダメージもない代わりに治癒魔法やポーションでの解毒は不可能。一定時間が経てば解けるからそれまで黙っているほかないとか。

「ここにはしばらくクツセー屁が止まらなくなったり、足の裏が痒くなったり、髪が抜けちまつたり、30歳も老けちまつたりっていう、一時的におかしなことになる罨がたくさんあるんだ。そんなじやラッキーなだけだよ、このポロつと出ちまう本音のが厄介でさ。パーティー組んで一緒に活動しても腹中ではさ……ホラ、分かんだろ？　それがポロつと出ちまつて大ゲンカつてことが割とあるんだわ」

それは、印をつけておくべき重大な罨ではないのだろうか。

久方ぶりの再会だというのにジークと話そうとしなかったミツテクールの顔は、どこか愉悦の色がにじんで見える。ジークが今の仲間に対して暴言を吐くのではないか、そんな風に思っているのではないか。そのような邪推をしまいそうな表情だ。

現にこのガスを吸ってから、ジークはしゃべりたくて仕方がないのだ。それを証明するように、ジークの隣ではナンナが「うなうなうなんなうなんな」と一人で鳴きまくっているではないか。

その薄暗い思惑に気が付いているジークは一言もしゃべるまいと必死で口を閉ざすのだけれど、状況を分かっているのかいないのか、マリエラがジークの手を取り謝罪する。

「ジーク、ごめんね。私が鈍くさいせいで……」

「吸ったのがマリエラじゃなくてよかった。気にするな……ら、結婚してくれ……って、違うつ、いや違わないけど……」

「……ジーク？」

「なんな？ なんなんなんなんな」

マリエラに申し訳なさそうに謝られたら、フォローしない訳にはいかないだろう。そもそもマリエラは悪くないのだ。強いて言うなら、マリエラがトラップを踏まないように先導しなかったナンナが悪い。

だからここまででは不可抗力というやつなのだが、ジークのこんな面白い状況をエドガンが放っておくわけはなかった。

「うつひょー、ジーク、お前オモシレーことなってるな！ なあ、なあ！ オレは？ 俺のことはー！！？」

「黙れ、エドガン！ お前なんか友達だー！！」

「うはっ……。やだ、ちよっとテレちやう」

「うなんな」

「ははは、これは面白いね。じゃあ、僕のこととは？」

「ヴォイドさんまで、やめてくださいよ。……尊敬してます。夫婦円満の秘訣教えてください」

「うん、君は毎日これを吸った方がいいんじゃないかな」

「うなうな」

「ナンナ、お前は黙っている！ だいたいお前だけずるいぞ、この

猫め、人語を喋れ！！！！」

「ニヤントム・シユーター夢幻の射手」

「あああ！！ どこでそれを！！！！」

ガスのお陰で漏れてしまったジークの本音は、最後のナンナに対するもの以外は悪口でもなんでもなかった。ナンナはほぼ猫なので、これも悪口かは微妙だが。ちなみにナンナは「うなんな」言うだけの猫畜生なので、ジークの暴言も漏れた本音もどちらもノーダメージだ。それでもしれっと仕返しをしてくるあたり、悪いネコちゃん

ぶりである。

「ファントム、なあに、ナンナ？」

「お出かけなんな、聞こえたなんな」

「よし、ナンナ。なんつでも好きなもの買ってやる！ だから黙るうな？」

「ジーク？」

「うなんなー」

どうやらナンナの耳にはチョコレートショップでのジークとイヤシスの会話が聞こえていたらしい。まさかこんなところでブツ込んでくるとは。

ジークサイフの約束を取り付け、再び猫語に戻るナンナ。猫畜生の呼び名はだてではない。

「……ちっ」

ジークが今の仲間と仲良くやっているのが面白くないのか、ミツテクルは小さく舌打ちをすると列の先頭へと戻っていく。様子を見ていたフセグンも何か理解のできないものを見る目でジークを見ていた。

そして、取り残されたイヤシスは。

（なんなの、あの娘……。ジークが結婚してくれですって？）

ただ一人、マリエラを睨みつけるイヤシスの胸中には、確かに不和の種が芽生えていた。

18・不和の種（後書き）

【帝都日誌】ニヤントム・シューターなんな。 by ナンナ

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

## 19・公平の二律背反(前書き)

前回までのあらすじ：ジーク、畏にはまって好感度が上がる。

## 19・公平の二律背反

「こっからは避けて通れねえ畏が出てくる。メイヘム・オチィスコード不和と騒乱のアルアラ  
ージユの本番ってわけだ」

斥候のミツテクールがそう言ったのは、迷宮の第27階層のこと  
だった。

シークレット・ウイスポー  
内緒の告白にジークとナンナがかかった以降は、順調に攻略が進  
んでいた。

理由は簡単。畏がある場所は、ジークがマリエラを背負って運ん  
でいるからだ。

フリーダム・クイーン、ナンナとは言えば、徐々に増えてくる魔  
物に興奮したのか、しょっちゅう荷物をほっぽり出して参戦するも  
のだから、今ではヴォイドが荷物持ちをやっている。Sランカーが  
荷物持ちとは戦闘力の無駄遣いにもほどがある。

途中、それなりの魔物も出てきたが、ほとんどナンナとエドガン  
で倒してしまった。

「なんな！ 鳥なん！ ジャンプなん！」

「よし来た！」

鳥の魔物が来た時でさえ、ナンナをエドガンが敵の近くまで投げ  
飛ばすコンビネーションで倒してしまうのだから、荷物に忍ばせた  
弓をジークが使う必要もない。

「うへえ、獣人すげえな」

「こ、これで、Bランクなのか？」

「……くそ」

「この獣人が『炎の遣い』の秘密兵器……」

ムーンサルトキックだかサマーソルトキックだかを決めて、華麗な着地を決めるナンナに、『ファントム・ストライク夢幻の一撃』の注目と勘違いが集まる。なんだか気持ちのいい戦闘と、これまた気分のいい視線に、ミツテクール、フセグン、リヨウダーン、イヤシスに向かってドヤ顔を見せる猫畜生。

実際は、ナンナが楽しく狩れるようにエドガンがフォローしているのだが、そんなことには『ファントム・ストライク夢幻の一撃』もナンナ自身も気付かないから、ナンナの戦力に頼るパーティーとして認識されてしまったようだ。

そして、重要人物なはずのマリエラは、ほとんど忘れさられている。

(私って完全にお荷物……?)

荷物を背負うヴオイドとマリエラを背負うジークを見比べながら、そう思わないでもなかったが、実際荷物のように運ばれているので文句は言えまい。

どうせ背負われるなら背負子でも持つてくるんだつたとポジティブに考えながら、迷宮をズンズン進んできたわけだが、それもここまで。

ついに避けては通れない難関に辿り着いてしまったらしい。

「ここはよ、フェアネス・ジレンマ公平の二律背反って呼ばれてる場所だ。ここからはこんな分岐が嫌って程続いている」



夢幻の一撃の面々は皆浮かぬ表情になった。ここから先はあまり進みたくないらしい。

分岐の片方は、薄紫のモヤがかかった断崖のような場所を、緩やかに下る道が延々と続いている。薄暗くて陰鬱な場所ではあるが見通しは悪くなく、魔物はいないように見える。ただただ長い道を歩かされる、そんなコースだ。

対してもう片方は、一人一人がやっと通れるほどの狭さで足場の悪そうな道が百メートルほど続いている。その先はすれ違えるほどの広さになるが、天井を見ると何かが落ちてきそうな気配がある。

「それぞれにどついう罠があるんだ？ 説明してくれないか、ミツテクール」

ジークに丁寧に頼まれて少し気分が良くなったのか、ミツテクールが説明を始める。

「見ての通り、こっちの狭いほうは近道だ。今日中に目的地に着きたきゃこつちを通るほかねえ。けどこの道を無事に通れんのは一人だけだ。あそこの狭くなつてるとこの天井、見えるだろ？ あそこを誰か通り抜けようとすると、上から扉が落ちてきて後ろに続く連中は通り抜けられなくなる。全員が通り抜けたきゃ、先頭のやつが扉を支える必要があるんだが……」

もったい付けけるように言葉を切るミツテクール。ここに罠があるというのだろう。

「支えると、電撃が流れんだよ。それも結構な強さのヤツがさ」「さ、先に言つとくが、オデは支えんからな」

話に割り込んできたのは夢幻の一撃の盾戦士フセグンだ。

がっしりとした体格に金属鎧、大きな盾を持ったフセグンはいかにもパーティの盾役と言わんばかりの外見をしているが、その実、酷く臆病な男だ。

ジークと組んでいた時は、大きな盾に隠れることが役割だったよ  
うなものだ。弱気は魔獣に見抜かれる。斥候のミツテクルが連れ  
てきた魔物は、高確率でフセグンにターゲットを移し、フセグンが  
盾の陰で怯えている間にジークが矢で射殺すパターンが多かった。

< i 7 5 2 8 0 0 — 2 1 0 6 4 >

「そつちを通りてえんなら、オ、オメらの誰かが支えたらいい。ぜ、  
前衛だつて痛えもんは痛えんだ。死なねえからつて、なんでもかん  
でもオデに押し付けんでくれや」

顔を赤くしてそう主張するフセグンを見て、今のリーダーである  
リヨウ＝ダーンが「ちっ」と舌打ちしているところを見ると、今も  
打たれ弱さは変わっていないらしい。しかし、リヨウ＝ダーンは弱  
気なフセグンにいらだつ様子を見せながらも、フセグンに同意する  
発言をした。

「俺たちは案内だ。向かつて来る魔物は当然排除するが、扉を支え  
る仕事はそちらで頼む。扉は重いわけではない。子供でも支えられ  
る重さだ」

「大丈夫よ、急いで通れば死ぬほどじゃないし、ちゃんと私が回復  
するから。でもほら、私も回復つて仕事があるから遠慮させてもら  
うわね」

リヨウ＝ダーンに続いてイヤシスも拒否する。皆、本気で嫌そう  
だ。どうやらこの扉から流れる電撃は、よほど激しい痛みを伴うら  
しい。

「ちなみに、そちらの遠回りを選ぶとどうなるんだ？」  
「なんな？」

今日中に33階層を目指すなら、遠回りの選択肢はないのだが、念のためか単なる好奇心かエドガンが尋ねる。

「……そっちは、あの紫の霧のせいで、全員痛い思いをするんだ。まあ、電撃ほどじゃねえ。爪の隙間に針を刺されるくらいかな。それが道を抜けるまでずっと続く」

「ハア、性格の悪い迷宮だぜ」  
「うなんな」

全員で何とか我慢できる程度の痛みを共有するか、誰か一人が苦痛を背負うか。その選択を迫るのが、この公平の二律背反フェアネス・ジレンマと呼ばれる罠なのだろう。しかも痛みを共有する道は長く時間がかかり、誰か一人に痛みを押し付けたほうが早く進めるときている。

「言つとくけどよ、近道の方を一人で抜けたら、1時間は扉が閉まって開かねえからな。一人ずつつてのは使えねえぜ。仲間が残っている状態で扉を支えきれなくなっても同じだ。残された連中は遠回りしなきゃらんねえ」

この罠があるからソロで潜った方が効率がいいと言われるわけか。ただし、誰かが通った後は1時間も誰も通れなくなるわけだから、他に進みたい者がいたならいい迷惑だ。自己中心的なソロ冒険者が何人もいるなら、この街の雰囲気が悪さもつなずける。

さあどうする？ 一体誰が犠牲になる？

ファントム・ストライク  
夢幻の一撃の面々が試すような視線を向けてくるのだけでも。

「なるほど、ここは僕の出番だね。ナンナくん、荷物を頼むよ」  
「うなんな！」

これまで黙って話を聞いていたヴォイドが躊躇する様子もなく先に進むと、天井から落ちてきた扉を片手で受け止めた。

バリバリバリバリイッ。

途端にヴォイドの肉体を電撃が打ち据える。

「お、おい、マジか！？」

「ヒッ、ヒイイッ」

「は、早く潜り抜ける！ 気を失って扉が閉まったら事だぞ！」

「かつ、回復を！ 癒<sup>ヒール</sup>しの光を！」

ファントム・ストライク  
夢幻の一撃の4人が慌てて扉を潜り抜けた後を、マリエラたちが付いて行く。扉を支えるヴォイドの肉体に、電流が流れ続けているのだらう。その表情に変わりはないが、全身が小刻みに痙攣し、髪はパチパチと音を立てて逆立っている。

「ヴォイドさん、大丈夫ですか！！？」

全員が通り抜けた後、十分に余裕をもって扉を放したヴォイドにマリエラが声をかけ、ジークやエドガンも側に駆け寄った。

「問題ないよ。僕の妻を誰だと思っているんだい？」

明らかに電撃を受けたはずなのに、何事もなかったように言って

のけるヴォイド。

「僕の妻」という発言力の重みがすごい。というかエルメラさんはそんなにノーコンなのだろうか。それとも夫婦喧嘩の時なのか。どちらにしても、さすがは伝説のSランカー『隔虚』だ。これには賞賛の眼差しを送らざるを得ない。

いや、エルメラの祖母も『雷帝』だったというから、超常の回復力もないというのに先代雷帝を妻としたガーク爺がすごいのか。どちらにしても尊敬すべき人々だ。

「これが、夫婦円満の秘訣……………」

シークレットウィスパー

「違うと思うぞ、ジーク。まだ内緒の告白の影響が残ってんのか？」  
「うんなー」

ジークの呟きにエドガンがツッコみ、ナンナが毎度のように鳴く。目がキラキラしているから、これは感心している鳴き方だろう。

マリエラが差し出すポジションを断り、「さあ、先を急ごう」と言うヴォイドに夢幻の一撃の盾戦士フセグンが化け物でも見るかのような視線を送っていた。

「い……………いだぐ、ねえのか……………？」

「痛みが無いわけではないよ。だが、この程度なら耐えられる。僕は刺激には慣れているからね」

「そ、そんなごと……………」

痛みがあるというのなら、今の状態が続くはずはないとフセグンは思う。

フェアネス・ジレンマ

この公平の二律背反と呼ばれる罫は、この一か所だけではない。

もっと浅い階層から29階層まで嫌と言うほど続いているし、階層が深くなるほどに支える痛みは増していく。

格好をつけたのかも知れないが、一番最初の関門で扉を支える役をヴォイドは買って出てしまった。だから、この先の関門もヴォイドが支えて当然だと他の全員が考える。

痛みがあるのはヴォイドばかりで、他の全員は痛みを感じず近道を通っていける。そんなことを繰り返すうちに、割を喰った人間は絶対に不満を抱くのだ。

どうして俺ばかりが、と。

（オデたちは、そうだった……。オ、オデはもう、絶対に、一人で扉を支えたりしねえ……）

ファントム・ストライク  
夢幻の一撃がアルアラージュ迷宮で活動し始めた最初の頃は、この扉を支えるのはパーティーの壁役であるフセグンの役割だったのだ。

電撃が身体を貫いた時の痛みをフセグンは忘れられない。シールドのスキルによってダメージ自体は軽減されるが、電撃の作用と痛みは軽減されないらしく、体は激しく震え、痙攣する全身に立っているのも困難になった。気力を振り絞り、目を見開いて大声を上げるが、すぐに声も出なくなる。何とか全員が扉を抜けた後、その場に倒れ込み、無様に地面に膝をつくのも毎度のことだった。

その度を感じる“またか”と言わんばかりの仲間の視線。

畏の苦痛と屈辱感にパーティーを抜ける決意で抵抗し、持ち回りで扉を支えたのはたった1回きりだった。ファントム・ストライク夢幻の一撃のメンバーは、たった一度扉を支えただけで、遠回りの道を選ぶようになった。勿論その道だつて傷みを伴うもので、途中何度「フセグンが扉を支えてくれれば、すぐなのによ」と恨み言を言われたことか。

(ジ、ジークはこいつらにいい顔して取り入ってるだけなんだ。もうすぐ化けの皮がはがれる。あのヴォイドとか言うのんが音を上げりゃ、次かその次に支えることになる。そ、そしたら昔みてーに、「お前が支える！」とか怒鳴るにちがいない。な、仲良しごっこもそれで終いだ。だって、ジークは昔……。オデの背中を蹴ったじゃないか)

フセグンは、眉間にしわをぎゅっと寄せると、何度も何度も反芻した苦い記憶を思い出した。

## 19・公平の二律背反（後書き）

【帝都日誌】ヴォイドさん、マジパネエ!!!! byエドガン

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中!

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>



## 20・背中の軌跡（前書き）

前回までのあらすじ：公平の二律背反でヴォイドがカッコイイところを見せる。

## 20・背中 の軌跡

あいつらはみんな、魔物の一番近くで攻撃を受ける恐ろしさを知らねんだ。

盾戦士だろうとなんだだろうと、痛いものは痛いし、怖いものは怖い。大きな盾と分厚い鎧。そんなもの、魔物の恐ろしさの前には紙切れと変わりがない。ミツテクールが連れてきた魔物を前に持ちこたえているだけでも、すごいことなのだ、フセグンは今も昔も考えている。

だというのに、あの日ジークムントは「先陣を切って進め」と言ってきたのだ。

たしか、どこかの迷宮の分岐の多い狭い場所で、どこから魔物が飛び出してくるか分からないのに、ミツテクールが連れて来るより効率がいいとかそんな理由だったと思う。

どこから魔物が飛び出してきたても対処できるように、慎重に慎重を期して進んでいたから、歩みが遅いのは仕方がないことだ。さっさと進みたいのなら、斥候のミツテクールが先行し安全を確認するべきだ。フセグンに先行させる判断をしたのはジークだというのに、警戒しながら進んでいたフセグンの背中をあるうことがジークは「さっさと進め」と言っただけで足蹴にしたのだ。

(そ、そうだ。ここでゆっくり進めば……)

フェアネス・シレンマ

公平の二律背反の痛みは盾スキルでは軽減されない。しかもここは29階層、電撃の痛みはフセグンだって仲間3人が通り抜ける短い時間で何度も気を失ったほどだ。今はさらに5人増えているし、

通り抜けるのに時間がかかればきつとヴォイドも耐えられまい。幸いジークたちはフセグンの後ろを歩いている。ヴォイドが手を放してしまえば、ジークたちの誰かに扉を支える役目が回る。

そう考えたフセグンは、大きな盾がつかえたフリをしてその場で足を止めたのだけれど。

「邪魔なんな」

「ふがつ！」

まさかの駄ネコキツクに背を押され、フセグンは公平フェアネス・ジレンマの二律背反の通路で突っ伏してしまったではないか。

「立ち止まるのが悪いなんな」

「ナンナたん、正論。さー、ジーク、マリエラちゃん抱えてダツシユだ。ヴォイドさんが待つてる」

「すまんフセグン、先に行く」

「え？ え？」

状況が呑み込めていないのはマリエラだけで、『炎の遣い』の一同はフセグンがわざと立ち止まったことに気が付いていたらしい。フセグンが慌てて立ち上がるより早く獣人コンビ……違った獣人とエドガンの二人が疾風のごとく駆け抜け、その後をマリエラをひよいと担いだジークが続く。

「まっ、待って、オデ……」

慌てて立ち上がったフセグンの眼に映ったのは、ゆっくりと降りていく扉と、扉を支えるのをやめたヴォイドの、フセグンなど見えていないかのような虚うつろのような眼差しだった。

案内役が一人減っても問題ない。この扉が開かなくなったら、1時間待つか遠回りすればいいだけだ。

ヴォイドがそう言っているように思えてフセグンはひどく慌てる。ジークたちも、夢幻の一撃のメンバーストームファントム・ストライクもフセグンを待ってはくれないだろう。攻撃力が低く臆病なフセグンにとって、それは絶対に避けたいシチュエーションだった。

「待つで、置いてかんでくでえ……」

懇願の声を上げて起き上がり、必死で走るフセグン。けれど重い鎧と生来の鈍足ゆえに、出口にはまだ届かないのに扉が降りきってしまいそうだ。

「あ……！！」

もう駄目だと思ったその時、泣きそうになりながら扉へと伸ばしたフセグンの手を、何者かが掴んで引く張った。

閉まりかけていた扉を再び持ち上げ片手で扉を支えた男が、もう片方の手をフセグンに差し伸べてくれたのだ。

「あ、っ、あ、っ、あ、じがど……」

一体誰が自分のために扉を支え、手を差し伸べてくれたのだろうか。リーダーのリョウウ＝ダーンか、ミツテクルだろうか。感謝の気持ちを胸に仰ぎ見た相手は何と。

「ジ、ジーク……！？」

「っ……。結構痛いな、この扉。うちのナンナがすまなかったな」

どうしてジークが。横暴で偉そうで、さっさと行けと味方の背を

足蹴にするようなやつだったのに。

驚愕のあまりその場に固まってしまったフセグンにできたのは、さっとジークから視線をそらしてこれまで幾度となく自分に言い聞かせてきた言葉をブツブツと口ごもることだけだった。

「ジークはひどいやつだ。守る価値のないやつなんだ。だから、だから……」

だから、なんだというのだろうか。何年も前の出来事を一体いつまで引きずるつもりか。

背中に付いた靴跡なんて、とっくの昔に消えているのに。フセグンの頭上にサツと影が横切った。

「ヒッ」

翼竜の翼の影が通り過ぎた気がして肩をすくめるフセグン。しかし、翼竜かと思った影は、フセグンを見捨てて扉を下したヴォイドだった。

「だから？ だから、見捨てて逃げても構わないのかな？ その大盾は君だけではなくパーティー全員を護る物のはずなのに」

その暗い瞳は心の闇を見透かすようだ。

（あ……あの時、オデが、ワイバーンから逃げなかったら……）

あの日、ワイバーンを前にしてフセグンがほんの数秒だけでも持ちこたえることができたなら、ジークムントは精霊眼を失わず、人生を狂わすこともなかったかもしれない。

その自責の念から逃れるために、自分を正当化するために、フセ

グンはジークが悪いと言いついて聞かせていたに過ぎない。

しかし選ばなかった選択肢、“もしも”を叶える手段などない。今足元を支えているのは、積み重ねてきた現実と、成せなかった事実なのだ。

フセグンの足元に落ちる影がヴォイドのものだと分かってても、フセグンはその影から逃れるようにヴォイドが歩み去るのを大きな盾に隠れてやり過ぎすしかなかった。

フェアネス・シレンマ  
公平の二律背反を抜けた先、アルアラージュ迷宮30階層に入った。すぐの草原は、魔物の出ないセーフティゾーンになっていた。

アルアラージュ迷宮30階層は自然豊かな階層で、この迷宮随一の採取スポットとなっている。

この階層はとても広くて、入口付近は木々もまばらで小川の流れる森林だ。ろくな薬草もない代わりに魔物も出ない安全地帯だが、奥に行くほど木々や湿地が増えていき、それに伴い薬草も多く見つけるが魔物も多く出るようになる。

「予定より早いペースで進んでいる。ここで予定の時刻まで休憩にしたい。我々は案内役。護衛ではないから出発の刻限までは別行動で構わんな？」

「ああ、構わないよ」

もとよりここで休憩の予定だったが、ファントム・ストライク『夢幻の一撃』のリーダー、リヨウ・ダーンはヴォイドに一方的に別行動を告げると、仲間たちとともに離れた場所に腰を下ろした。

見ればミツテクールが小さな鍋と加熱の魔導具を取り出して固形

スープを湯で溶かし、干し肉とこの辺りで採れた草を刻んで自分たちの分だけ昼食を作る様子だ。

「お昼ごはん楽しみだねー」

ファントム・ストライク

『夢幻の一撃』との距離感は今更だ。努めて明るく振舞って食料袋を開けたマリエラだったが。

「えっ、お昼ごはんって、コレ……?」

「うなんなあー」

思わず漏れた落胆の声に何か不都合でもあったのかとゾークが袋を確認すると、中に入っていたのは冒険者御用達の保存食、カチカチの硬パンと塩の塊のような干し肉、動物のフンにも見える固形スーパだった。腐らないよう乾燥させているから軽くて持ち運びしやすいが、量は少なく味はひどくて、お腹も心も満たされない、まさに栄養補給と言った感じの食料だ。

他にもチーズやドライフルーツも入ってましてましな部類にはいるから、文句を言うわけにもいかないが、保存食に慣れないマリエラからしてみればがっかりする見た目には違いない。何より、こちらの食料袋には使い捨ての器はあるが鍋はなく、加熱の魔導具も入っていない。湯が沸かせないのなら干し肉や硬パンを浸して柔らかくすることもできないではないか。

(こつこつ地味な嫌がらせはミツテクールだな……)

離れた場所で料理をするミツテクールを遠目に見ながら、ゾークはマリエラたちに対して申し訳ない気分になる。クレームが来ないギリギリを攻めたり、相手のちよつとしたミスを誇張して自分の評価を稼ぐきらいがミツテクールにはあったのだ。

今回はわざわざ別行動を取っているから、「お前らに食わずメシはない」と言うことだろう。リヨウウーダーンを始め『夢幻の一撃』

ファントム・ストライク

の面々はこちらをちらちら意識しているから、それなりの昼食をとる様子を見せつけようとしているのかもしれない。

(嫌がらせは俺だけにしてほしいな)

食料を見てがっかりしていたマリエラを思い出し、ジークの気持ちには沈み込む。今だって、マリエラがミツテクールが作る鍋の方を見ているではないか。お腹を空かせて指でも啜え始めたら、可哀そうで見えていられない。帝都でちょっと食べ過ぎていたから、ちょうどいいとかそういう話ではないのだ。

アルアラージュ迷宮最大の危機が来てしまったぞ、と思い始めたジークであったが。

「なるほど」

「え？」

ミツテクール達をガン見していたマリエラは「分かったぞ」とでも言いたげな顔をしているではないか。

これは、いつものやらかし顔だ。こういう時のマリエラは自分一人が分かっちゃってる状態で、周囲が「よく分かんないんですけど」みたいなことを平気でやらかしたりするのだ。

「マリエラ、向こうからあまり見えないようにな」

何をするつもりかは不明だが、とりあえず釘をさすジーク。

「うん、任せて！ じゃじゃーん。ロバートさん特製30階層攻略マップ」

「ばらばーん！ とばかりにマリエラが鞆から取り出したのは、ロバートがわざわざ調べて持たせてくれたアルアラージュ迷宮30



階層で採れる素材とおおよその位置を記した地図だった。

マリエラたちの目的でもある『ケルピーの波紋花』はここ30階層の端で採れるのだが、そこまでの地図に加えてこの階層で採れる素材がかなり詳細に書き込まれている。

なんだなんだと集まってきた『炎の遣い』の一同に、欲しい素材と採れる場所を割り振ると、マリエラはマントで隠すように《錬成空間》を展開し干し肉と硬パンのカチコチコンビを取り出す。

「硬パンは蒸気にした《命の雫》でフンワリと、干し肉は切ってから塩抜きしたほうがいいよね……。うわ切れない、石みたい」

「マリエラ、手伝う」

「ありがとジーク。干し肉切ってくれる？」

ジークが切ってくれた干し肉を《錬成空間》に放り込み、流水を使って短時間で塩抜きをする。その後は《命の雫》を込めた水で少し加圧しながら戻せばスープも取れて一石二鳥。そうこうする間に、ヴォイドにエドガン、ナンナの3人が食材を見つけて戻ってきた。高ランク冒険者と半野生動物だ。短い間だというのに食べられる素材を大量に抱えている。

「パンは切るかい？」

「はい。薄めに切って、削ったチーズと干し肉、ドライフルーツを載せようかと」

「それならハチミツかけようぜ！ ちょうど見つけてきたんだ」

「ナンナがみつけたんな」

「ナンナお手柄！」

「この辺の薬草は一口サイズに切ればいいのか？」

「うん、これとこれはね、干し肉の塩抜きをした水で下茹ですれば苦みがとれて美味しいの」

「この茸も入れるといい。いったん乾燥させた方がうまみが増すんだがね」

「わあさすがはヴォイドさん！ んじゃ《乾燥》からのー」

「ナンナ、果物取ってきたんなー」

「これは冷やしてジュースがよくないか？」

「《粉碎、抽出》、はい、ジュース。氷欲しいね」

「パンを軽く炙りたいんだが」

「んじゃ、火と氷はオレが。《炎と氷で、宿れ、デュアル・エレメンツ・ソード双属性剣》っと」

「こっちの果実と木の実は？」

「その果実、油がとれるの。で野菜とかとグリルしようかと」

< i755300 — 21064 >

和気あいあい。まるでピクニックにでも来たようだ。

迷宮の中とは思えない具沢山スープが出来上がる頃には、干し肉とドライフルーツの載ったトトロチーズのオープンサンドが2種に色鮮やかなグリル野菜、冷えっ冷えの果実ジュースが出来上がっていた。

「おいしーっ」

「うなんな〜」

野菜多めにも関わらず、マリエラどころか駄ネコも大満足の出来栄えに『炎の遣い』の結末はますます高まったように思える。

この結果に不満なのは『ファンタム・ストライク夢幻の一撃』の面々だろう。

「オイオイオイ、どうなってんだよ。あの上げ膳据え膳坊ちゃんがよ」

「う、うまそう、だな……」

「いやあああ！ ジークが料理してるうー」

ミツテクール、フセグンにイヤシスの3人が小さな悲鳴を上げたのは、ろくな道具もないというのにあの携帯食をあつという間に料理に変えたマリエラの錬金術クッキングよりも、ジークが積極的に料理を手伝っていたことだった。

昔は料理をするどころか、自分の分を器によそう事すらしなかったのに……。

ジークのあまりの変貌ぶりに、なんであんな料理が出来ちゃってるのかに誰も注目していない。

“男子、三日会わざれば刮目して見よ”というけれど、まるで別人ではないか。

ジークに夢中な3人に対して、リヨウ＝ダーンが漏らした一言だけは、ジークに向けてのものではなかった。

「ちっ、……役立たずが」

「あゝ？」

役立たず。そののしられたミツテクールが言葉の主を睨みつけるも、リヨウ＝ダーンは素知らぬ顔で塩辛いスープでふやかした硬パンを口に運んだあと、再び口を開いた。

「不仲になれば隙が生まれる。その隙をついて、という話だったろうが」

「うるせーよ」

「ちょ、ちよつとやめてよ二人とも」

イヤシスの仲裁に一旦は口を閉ざすリヨウ＝ダーンとミツテクール。向けるべき矛先が互いでないことくらい二人とも理解している。

もう、アルアラージュ迷宮の30階層まで来てしまったのだ。

これは困ったことになった。

そう思ったのは誰であったか。

シックレット・ウイスパー内緒の告白の罫にわざと印を付けなかったフセグンか、フェアネス公平の二律背反を最も多く通るルートをわざと選んだミツテクルか。それとも、それらすべてを知っているはずの、リーダーのリョウウダーンか。

ジークがマリエラに尽くすたびに、嫉妬のこもった視線を向けるイヤシスもまた、そう思ったに違いあるまい。

ファントム・ストライク夢幻の一撃の4人は、誰とはなしに視線を交え、小さく頷き合っていた。

彼らの目的を果たすためには、行くしかあるまい。

向かう先は31階層、『ラストレブリカ愛欲の複製品』と呼ばれるモンスターームだ。

## 20・背中の軌跡（後書き）

【帝都日誌】大盾がもたもたしててうざいなん、蹴っ飛ばしたらこけたんなー。byナンナ

ウエイスハルト@日誌確認中：えっ、他所の人、蹴ったのか！？

<i760095—21064>

お兄ちゃんのSSも、「輪環の短編集」で更新していますので、よろしければそちらもどうぞ！

兄弟が大活躍な「生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい」輪環の魔法薬」は、

B・S・LOG COMIC Vol.127（8月5日配信）掲載予定です。

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定＆更新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

## 21・愛欲の複製品（前書き）

前回までのあらすじ：アルアラージュ迷宮の二つの罫で結束が固まる『炎の遣い』を見て、『ファントム・ストライク夢幻の一撃』が焦りだす。

## 21・愛欲の複製品

「この部屋を抜けると早いんだが……」

< i 7 5 5 3 0 1 — 2 1 0 6 4 >

31階層は石壁が続く迷路の階層だった。時折鏡のように磨かれた石壁が現れて、薄暗い景観の中で映し出される己の姿に、敵が現れたのかと身構えてしまう。

分岐が多く、不意に現れる部屋のような場所にはパペットやゴレムと言った人を模造した魔物が現れる迷路の階層の途中で、ミツテクールは『炎の遣い』に判断をゆだねた。

「モンスタールームか何かだろうか？」

「いくんな！」

「ナンナたん、ちょっと黙ろっかー」

「うんなー」

いつの間にか仲良くなったナンナとエドガンのコントは置いておくとして、ヴォイドの質問に対してミツテクールは部屋の中央を指さしながらうなずく。

「部屋の真ん中に水晶があんだろ？ あれに近づくとドッペルゲンガーが現れる。普通、ドッペルっつーのは自分の姿をしているもんだが、ここで現れるのは知ってる奴の姿と能力を持つてんだ。同時に現れんのは部屋に入った人間の数だけだが、切っても切っても新しく湧いてキリがねえ」

部屋は細長い造りで、出口まで駆け抜けるまでに戦闘は避けられそうもない。

「敵はあの水晶から現れる。だから水晶近くで防衛しつつ出口を目指す、と言うのがこの部屋の攻略法だな」

ミツテクールによると、3人程度が水晶の近くに待機して、少数ずつ通り抜けるのがよさそうだ。

「ふむ、なるほど。ディフェンスは僕とジーク、エドガンで受けもとう。一度に全員が入って抑えきれなくなってもいけない。部屋に入る人数はディフェンスの3人とあと1、2人がいいだろう。そして最初に水晶に近づく者だが、ジーク、頼めるかな」

「分かりました」

「ナンナなにするなん？」

「ナンナはマリエラを守りながらあの出口を目指すんだ。ミツテクールが向こうについて、安全を確認してからだよ、分かったかい？」  
「うんなな」

ヴォイドの采配によって、作戦は決まった。それも、ミツテクールたちの理想に近い展開だ。

（あの獣人がディフェンスに入らなかつたのは誤算だが、概ね計画通りだ。あの獣人、腕は立つけどオツムの方はイマイチっぽいな。いくらでもやりようがある）

ミツテクールはジークを見てニヤリと笑う。

この愛欲ラストレブリカの複製品と呼ばれる部屋について、伝えていないことがあるのだ。



(どいつもこいつも、情報だとか、便利さだとか、そう言うモンを安く見積もりすぎだと思っぜ)

特に一緒にパーティーを組んでいた頃のジークはろくでもなかったとミツテクールは思い出す。

上げ膳据え膳当たり前、お世話されて当たり前の世界知らずのお坊ちゃまで、いかにも自分は特別だと思っついそうな尊大な態度に随分イライラさせられたものだ。

素材の質も相場も分かつちゃいなかったから、おかげで美味しい思いもさせてもらったが、それもまあ情報料と言っやつだ。ビビって大盾の陰で縮こまつてるだけのフセグンや、そのフセグンに遠くから回復魔法を飛ばすだけのイヤシスが同等の取り分を貰っているのだ。斥候の仕事だけでなく、情報収集に冒険の準備から途中の飯の支度、帰ってからの売却まで請け負う自分に多少のインセンティブがあるのは当然だ。

自分の仕事は他の誰より大変だ。ミツテクールは本気でそう考えている。

(世の中さ、結局賢く立ち回れるヤツが成功するんだぜ、ジーク。誰のおかげで、Bランクになれたと思っっている？”って、昔言っただよな。あんときゃ確かにオイラは弱くてダメエには利用価値があった。でもよ、今じゃオイラも名実ともにBランク。対してダメエは大事な『精霊眼』を失ったまんまだ。だからせつせとメシ炊きを手伝ってみたりお荷物な女を運んだり、下働きをやってるんだろ？ そんなダメエにゃ価値はねえよ。

オイラだつて流石に良心が痛まねえわけじゃねーが、長いもんには巻かれるっついうだろ？ ……悪く思わねえでくれよな)

ミツテクールはちらりと視線をヴォイドに移す。今回の依頼主、

エルフのニクス・ユーグランズが渡した荷物は今もヴォイドが持っているはずだ。

「行くぞ」

「おう！」

「ナンナ、絶対にマリエラから離れては駄目だよ」

「うなんな！」

ジーク、エドガン、ヴォイドの3人が部屋に飛び込み水晶の近くに走っていく。

すると水晶が怪しい光を放ち、光の中から3人の人影が現れた。

「マ……マリエラ？」

「うわお、エンジェルちゃんかよ！」

「……やはり君か」

水晶が形作った人影は、マリエラ、人化したナンナ、そして雷帝エルシーことエルメラの3人だった。

ラストレプリカ 愛欲の複製品。それは、水晶に近づいた者の心を覗き、愛する者の姿のドッペルゲンガーを作り出すトラップだ。それも、理想に近い姿で。

己と戦うことはできても、倒しても倒しても生じ、襲って来る愛する者を攻撃して平気でいられる者は少ない。この部屋の攻略法は、別の仲間のドッペルを相手にすることだ。

しかし、それは同時に、仲間内に不和が生じる原因ともなる。

マリエラの姿をしたドッペルは、ぼんやりとした様子で自らの手を見る。その手にいつも調理で使われている包丁が握られているこ

とを確認した次の瞬間、マリエラ・ドツペルは包丁を握りしめ、ジークに向かって飛び込んできた。

「しっかりしろ、ジーク！ …… ってオイ！」

ジークにはマリエラが自分を攻撃するなんて、思いもよらなかつたのだろう。飛び込んできたマリエラ・ドツペルを包丁の切っ先ごと受け入れようとしたジークの前にエドガンが飛び込み、マリエラ・ドツペルの包丁を跳ね上げる。

そして返す刀でそのままマリエラ・ドツペルを切り倒そうと、振り下ろした切っ先は、なんとジークのミスリルの刃で防がれてしまった。

「あつ、スマン……」

マリエラ・ドツペルを庇う。それはジークにとっても反射的な行動だったのだろう。

これこそが、ラストレプリカ愛欲の複製品の悪辣な点なのだ。

例え偽物であったとしても、愛する者をこの手で倒すことは難しい。だからと言って、仲間が代わりに倒したなら、その仲間に対してぬぐい切れないわだかまりが残るのだ。

現に、ジークが庇ったマリエラ・ドツペルは怯えた表情を浮かべ、助けを請うような眼差しをジークに向けているではないか。こんな姿のマリエラ・ドツペルを、ジークにはとても殺せはしないし、エドガンに倒されるのを見て平静でいられるだろうか。

「今だ、いくぞ」

ジークたちの苦境を見て合図を下した小さな声は、ファントム・ストライク 夢幻の一撃の  
リョウウ・ダーンだ。

その合図を皮切りに、ファントム・ストライク 夢幻の一撃の全員が、ラストレプリカ 愛欲の複製品の部屋  
へと飛び込んだ。

「あなたもおいで、近くで見るといい！」

「えっ!?!」

「うなん?」

一度に大量のドツペルが生じないように、部屋には1、2人ずつ  
入るといふ予定ではなかったか。ファントム・ストライク 夢幻の一撃の最後尾を行くイヤシ  
スはマリエラの腕を掴むと力任せに部屋へと連れ込み、部屋の中  
央、ジークの近くまで引つ張っていく。

その表情はマリエラ・ドツペルの姿を確認した瞬間から醜く歪み、  
まるで雌オーガのようだ。ナンナの手前か、直接攻撃はしてこない  
が、マリエラがドツペルと間違えられて攻撃されればいいくらいの  
ことは考えていそうだ。

状況を分かっているナンナもマリエラにくつついて、一緒に入  
ってしまったから、水晶の周囲には新たに6体もの人影が浮かび上  
がるうとしていた。

「しっかりしろよ、ジーク！」

そんな状況にも関わらず、マリエラ・ドツペルを守るように動い  
てしまうジークにエドガンが叫ぶ。

「よく見る、ジーク。そいつはマリエラちゃんじゃねえ! あの娘  
は……」

どこか言いづらそうに眉をひそめたエドガンは、刻々と姿を取り

つつある新たな脅威に決意したように言い放った。

「マリエラちゃんは、そんなにスタイル良くないだろ!!!!!!!!!!」  
「なに!?!」

「ハア!?!?!」

エドガンのツツコミに、同時に叫んだジークとマリエラ。

言われてよく見てみれば、マリエラ・ドッペルは実物よりちょっと美人で、スタイルがいい。つくべき場所だけマルエラ・ミックスという、いいとこどりの花マルエラだ。

ドッペルは愛する人が“理想の姿”で現れるのだ。ジークにとつての理想のマリエラは、癒しと慈しみの具現化なのかもしれない。だから、まあ、実物よりちょっと多めに盛っちゃっていても仕方あるまい。

「……ジーク、サイテー」

「うなんなー」

「マツ、マリエラ!?!」

マリエラの冷たい声にようやく我に返ったジークムント。

こうしてジト目で睨んでくるマリエラを前にすると、マリエラ・ドッペルなんてマリエラの真似をしているだけの偽物だ。略するならマネエラじゃないか。

「エドガン、マネエラを頼む」

「おっけー。んじゃ、ジークは俺のエンジェルちゃんを頼んだぜ」

ちなみに、エドガンのエンジェルちゃんことナンナ・人化バージョンは、出会い頭に一瞬であったただけなので、細部がだいぶわやわやだった。そっくりなのは顔だけで、あとはよくあるメイド服を着

た人間の女性と言っやつだ。動きだけはなかなか俊敏だったけれども、エドガンはこれをナンナだと認識していないから、強さは一般人の域をでない。

つまり、マネエラもエンジェルちゃんもどきも、そうだと認識しなければ何の障害にもならないのだ。さらに幸運なことに新しく湧いた6体の内4体は、非力なマネエラとエンジェルちゃんだ。

「どうやら水晶が読み取れるのは近くにいる3人だけらしいな」

そうと分かれば攻略の糸口も見えてくる。マネエラやエンジェルちゃんが何人増えようと物の数ではない。

それよりも厄介なのは。

バリバリバリバライイイイッツツツ！！！！

雷鳴をとどろかせ、紫電をまとつてヴォイドと対する、『雷帝』エルシーの影トッペルだろう。

「ジーク、エドガン。調子は戻ったようだね。妻の影たちは僕が引き受けるから、マネエラとナンナを連れて出口に向かうといい」  
「ですが、3人ですよ!？」

ヴォイドに容赦なく雷撃を浴びせかけるエルシー・トリオ。

迷宮都市でも上位の攻撃力を誇るエルシーが3体だなんて、さすがのヴォイドでも厳しいのではないか。ヘタをすればアルアラージユ迷宮が壊れかねない。

「問題ない、行きたまえ。誰より早くこの部屋を出るんだ」

エルシー・トリオが一斉に雷撃を放つが、ヴォイドはすばやく身をかわし、距離をとる。手の内は読めているということだろうか。

「エドガン、倒さず出口に向かうぞ」

「おうよ！」

ジークは本物のマリエラの前に駆け寄ると、ひょいと抱き上げ出口に走る。エドガンはマリエラを突き飛ばした後、エンジェルもどきをいなしながらジークに続く。

「ちょっと、引つ張らないでよ！」

「いやんな」

ナンナはよくわかっていないのだろう、自分の分身を蹴散らしながらイヤシスを引つ張ってついて来る。

ジークに抱えられたマリエラの目は、3人のエルシーに襲われるヴォイドの戦いぶりを捉えていた。

チカチカと目を焼く雷光が眩しいばかりで、ヴォイドめがけて落とされる雷撃も同時に繰り出される攻撃もすべて躲しているようだ。そしてヴォイドが躲わした雷撃は、のろのろとマリエラたちの後を追いかけるマネエラや、エドガンやナンナに蹴り飛ばされて倒れていたエンジェルもどきに落ちてている。

「あれって同士討ち………？」

ヴォイドはエルシー・ドツペルを誘導し、他のドツペルたちに攻撃させているのだろう。

ジークやエドガンの心情までも配慮したあまりに見事な立ち回りに、時折後ろを振り返るジークやエドガンからも「スゲー」と感嘆

の声が上がる。

Aランクのジークやエドガンでさえも見惚れる身のこなしなのだ。  
ファントム・ストライク  
夢幻の一撃のミツテクール、フセゲン、リヨウ＝ダーンの3人も、  
思わず足を止めてヴォイドの戦闘に見惚れていた。

そして、エルメラ・ドツペルを除くドツペルがすべて倒され、水晶が新たな愛欲ラストレプリカの複製品を生み出そうと妖しい光を放ち始めたその瞬間、部屋にいるものの位置関係は様変わりし、水晶に一番近い人間はミツテクール、フセゲン、リヨウ＝ダーンの3人になっていた。

「はっ、しまっ」

「ど、ど、どうしょ」

「くっ、お前ら走れ！」

気付いた3人が慌てふためき、リヨウ＝ダーンが脱出の合図を出す。すが時すでに遅し。

「さよなら、模造品たち。君たちは実に退屈だったよ」

ヴォイドはひどく無機質な声で別れを告げると、その拳に初めて薄く《虚ろなる隔たり》を纏わせた。リヨウ＝ダーン達3人は、脱出に慌てるあまり見てはおらず、ナンナに引きずられるように連れ出されるイヤシスの視界にも入っていないその瞬間に、ヴォイドの拳は3人のエルシー・ドツペルたちをまとめて打ち据えた。

水晶の光が生んだ幻影は、間違いなく物質として存在していたけれど、その実エネルギーの塊に近いものだったのか、ヴォイドの拳の《虚ろなる隔たり》に触れたエルシー・ドツペルたちは、ザザッとノイズが走ったように形を変えて、次の瞬間には虚ろな世界に



吞まれて消えてしまっていた。

いま、このモンスタールームにいるのは9名の冒険者たちと形を整えつつある9体のドッペル。そしてその形を定める水晶に最も近い位置にいるのは、ミツテクル、フセゲン、リョウウダーンの3人だ。

「ち、ちくしょう!!」

「わああああ!!」

「くそっ!!」

3人が叫び声をあげた時、水晶の周りから3人に向かって駆け出してきたのは、なんと9人のイヤシス・ドッペルたちだった。

## 21・愛欲の複製品（後書き）

【帝都日誌】『ラストレブリカ愛欲の複製品』、恐ろしい罫だった。マリエラちゃん  
は起こってたけど、オレくらいじゃなければ見分けつかないくら  
いの微々たる差だったことは言わないでおこう。byエドガン

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更  
新中！

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

## 22・最後の分岐（前書き）

前回までのあらすじ：ファンタム・ストライク夢幻の一撃、イヤシスの逆ハーパーティーだ  
った。

## 22・最後の分岐

「  
……」  
「  
……」  
「  
……」  
「  
……」

恐ろしく気まずい雰囲気、ファントム・ストライク夢幻の一撃の4人の間に流れていた。  
ミツテクール、フセグン、リヨウ・ダーンのラストレプリカ愛欲の複製品が、3  
人ともイヤシスの姿を取って現れたのだ。ちなみに3体は胸が、3  
体は尻が、残る3体はスリットからのぞく太ももが実物よりも艶め  
かしいというおまけつきだ。

イヤシスは治癒魔法使いなので、戦闘力は高くない。全員がモン  
スタールームから逃げ出すこと自体は簡単で、出口まで追いかけて  
きたイヤシス軍団は、ジーク、エドガン、ナンナの3人がサクッと  
退治してくれた。

マリエラたち『炎の遣い』からすれば、危機は去ったわけなのだ  
が、『ファントム・ストライク夢幻の一撃』は、絶賛解散の危機の最中である。

まあ、あれだ。  
ファントム・ストライク『夢幻の一撃』は、イヤシスの逆ハーレムパーティーだったという  
わけだ。勿論3人とも自分だけが付き合っていると思っただろう  
うことは、男性3人がイヤシスに向けた責めるような視線から明ら  
かだ。

修羅場が始まりそうな雰囲気ではあるが、さすがに『ファントム・ストライク夢幻の一撃』  
もいい大人の集団なわけで、依頼の最中、しかも迷宮の真ん中で喧

嘩をおっぱじめたりはしていない。

ただ、あまりに重苦しい雰囲気故に、「なんで指示を無視して全員でモンスタールームに入ってきたのか」と問い詰めることも躊躇してしまっただ。

(まあ、聞かなくても分かるがな……)

助けを求めるような視線を送って来るイヤシスに、ジークは内心ため息を吐いた。

『ファンタム・ストライク夢幻の一撃』がジークたちを畏にはめようとしたことよりも、この期に及んでジークに助けを求めようとするイヤシスの心根に、ジークは心底うんざりしたのだ。

シークレット・ウイスキーバー内緒の告白や公平の二律背反の畏にかかる度に回復をしようと駆け付けてくれたけれど、「フェアネス・シレンマポーションがあるから」と断って正解だったとさえ思ってしまう。

(イヤシスって、こんな顔してたっけ……)

夢から覚めた心持ちと言うのはこういう事を言うのだろうか。

冒険者になつてすぐの頃、田舎の村から帝都に出てきたジークムントは、その煌びやかな様子に圧倒された。どこもかしこも人間だらけで、建物は高く空を切り取っている。夜空が暗い代わりに夜でも街は明るくて、鳥や虫の鳴き声の代わりに人々のさざめきと音楽が、木々や土の香りの代わりに多様な料理と人の臭いが充満していた。

精霊眼を持つて生まれ、外見にも才能にも恵まれたジークを、両親も村の人々も特別な子供として扱ったことが、彼の自尊心を必要以上に肥大化させてしまったのかもしれない。

田舎者だと侮られ、服装を笑われる。そんなからかいにも似た些

末なこと、まだ多感であったジークムントは、劣等感を覚えてしまった。

冒険者と言うのは汚れるし、ダメージだつて負う職業だ。破れた服を繕うことも、洗っても落ちない狩りの汚れも村では当たり前だったのに、帝都の大通りを行きかう人々のオシャレな服装を見てしまえば、そこにいることさえも居たたまれないほど恥ずかしく感じたのだ。

そんな中出会った、いかにも都会の女と言った様子のイヤシスに、ジークが憧れにも似た気持ちを抱いたのは不思議ではあるまい。

美人でお洒落で社交的。活動の拠点を帝都から離れた村々に移してからは、彼女の垢抜けた外見は一層人目を惹きつけた。

ジークが魔物を倒せば褒めてくれ、魔物におびえるフセグンを元気づけ、ミツテクルの段取りの良さに感謝する。『ファントム・シューター夢幻の射手』がうまく回っているのはイヤシスのお陰だとさえ思っていたのに。

（ああ……、なんだ。イヤシスは、自分の立場を確保するために、そう振舞っていただけなんだ）

その考えはストンと音がしそうなほどに、ジークの中に落ち付いた。

チヨコレートショップで再会した時は、昔と変わらないセンスの良い女性に思えたのに、いったん腑に落ちてしまえば、そこにいたのは、年相応、能力相応のどこか疲れた女性だった。

（『ファントム・ストライク夢幻の一撃』の戦闘力は高くない。この殺傷力の低いアルアラージュ迷宮だから何とかBランクになれたんだろう。パーティーがばらばらにならないように振舞った結果なのかもしれない）

とはいえ、『ファントム・ストライク夢幻の一撃』の問題行為と痴話喧嘩は別物だ。しかし、『炎の遣い』の一行は問題行為を問いただすことなく先に進むよう促した。

エルシー・ドッペルなんてイレギュラーが発生してしまったが、あの部屋に現れるのは愛しい人の模造品なのだ。『ファントム・ストライク夢幻の一撃』というパーティーは解散の危機に瀕しているが、本来は殺傷力の高い罫ではない。『ファントム・ストライク夢幻の一撃』はジークたちの不和を誘ったに過ぎないのだ。少なくとも、今のところは。

そして目的の33階層は、もうすぐそこまで来ている。

<i755302—21064>

「……………ここが最後の関門さ」

あまりに沈黙が重いから、たった1階層進むのものすごい時間がかかったように感じてしまったが、ミツテクールが最後の関門と言った場所には、二つの扉がそびえ立っていた。

「わっかりやすいボス部屋だなー」

「うなんなー」

「それで扉が二つある理由は？」

エドガンとナンナが半口を開けて扉を見上げている横で、ヴォイドがミツテクールに尋ねる。

「どつちにも同種のボスができる。ただし、片方の強さを100とするともう片方は50の弱い个体だ。全員が片方に入るとそこには200の強さのボスが出てくる」

「分かれて入った方が攻略はしやすいわけか。どちらに強い個体が出るかは分かっているのかい？」

最後まで分断を選択させるとは、このダンジョンらしくはあるが、本当に人数を分けさせるだけなのだろうか。

「人数だ。お前たち『炎の遣い』と俺たち『ファントム・ストライク夢幻の一撃』が分かれて入れば、俺たちの方に弱い個体が出てくる。だが、嫌とは言えない。俺たちはこの戦いで絆を取り戻す必要がある」

最後のヴォイドの質問には、リーダーのリョウウ<sup>二</sup>ダーンが答えた。その答えを額面通りに捉えるならば、弱い方なら彼らだけでも十分討伐できるのだろう。

けれど、ここは不和と騒乱のアルアラージュメイヘム・オチィスコード迷宮だ。ジークの過去と現在の仲間と共に、この最下層である33階層まで辿り着いたが、『ファントム・ストライク夢幻の一撃』の面々は、その間に何度も不穏な動きを見せてきた。

彼らの動機は、すでに予想がついている。

(俺を嫌っているのなら、それでもいいんだ……)

ジークは拳を握りしめる。

イヤシスと、おそらくはミッテクルとフセグンも、かつてジークが犯罪奴隷に落とされて迷宮都市に運ばれたことを知っていた。知っていて助けなかった。

迷宮都市に運ばれた奴隷がどのような運命をたどるか知らないはずがなかったのに。

知っていて、彼らはジークを見殺しにしたのだ。



帝都のチヨコレートショップでイヤシスに偶然再会し、その事実に気付いた時はひどく落ち込んでしまったけれど、アルアラージュ迷宮の最深部に辿り着いた今では、彼らがどんな人間なのか自分がどう思われているのか、ジークは理解できてしまっていた。そしてそんなことすら気付かなかった、かつての自分の愚かさも。

この迷宮は人間の弱さや醜さを突きつけてくる。それは己の未熟な部分で、普段取り繕っているよりも自分がしょうもない人間だったという証左だ。

このアルアラージュ迷宮で、以前の自分であれば赤面しそうな恥ずかしい部分をさらしてしまっただけけれど、今の仲間は笑って絆が深まるだけで終わった。……理想のマリエラに関しては、ちよつと拗ねられてしまったけれど、膨れた実際のマリエラの方が何倍も可愛らしく感じられたのだから、本当に自分はどうしようもないなと思ってしまう。

「ジーク、このままでいいの？」

じつと考え込むジークの手を、マリエラがそつと握る。

柔らかく、温かい手だ。この手に何度助けられてきたことが。

立ち止まるたびに何度でもこの手が差し伸べられてきたからこそ、ジークムントは今ここに在ることができているのだ。

自分を見捨てたものであっても、一度は仲間であったのだ。

救いの手を差し伸べられる恩恵を、幸運を。

ただの一度だけであっても、かつての仲間差し伸べられたなら。

ジークは意を決したように一歩踏み出すと、かつての仲間たちに向かって口を開いた。

「全員で同じ部屋に入らないか？」

まるで支えとするかのように一回りも若い少女マリエラの手を握り、懇願するかのような表情でそんな提案をするジークムントに、『夢幻の射手シューター』のリーダーだった男の面影はない。

傲慢さは影をひそめ、まるで別人のようにも思える。

精霊眼という宝石のような美しい瞳のあった場所は眼帯に隠されて見えないけれど、残された蒼い左目は真つすぐ自分たちを見つめていた。

まるで、彼らの企みをすべて見通しているように。

ジークの真摯な態度に、ミツテクールとフセグンの心が揺れなかったわけではない。けれど彼らが心のさざ波に気付くよりも早く、イヤシスがジークの提案に返答を返した。

「折角の提案だけれど、私たちはこれからも『ファントム・ストライク夢幻の一撃』としてやっていかなきゃならないのよ。そうでしょう？ リヨウ、ミツテクール、フセグン」

「ああ、そうだな」

「おう」

「うん」

イヤシスは、ジークとマリエラの繋がれた手に忌々し気な視線を投げた後、仲間たちに声をかけ、片方の扉の前へと歩いて行った。

ここが最後の分岐点。

全33階層からなる不和と騒乱のアルアラージュメイテム・オディスコード迷宮の最後の分

岐であると同時に、この場所へとたどり着いたジークとかつての仲間たちの運命の分かれ道だ。

嫌われていても構わない。恨む気持ちもすでにない。ただ、最後の  
一線だけは越えずにいてくれたなら。

騒乱の果てに願いに変わったジークのかつての仲間に対する想いは、最後の分岐に裂かれて消えた。

## 22・最後の分岐（後書き）

【帝都日誌】道は分かたれてしまいました。すべて俺の不徳の致すところでは。byジーク

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

### 23・欺瞞の分岐点（前書き）

前回までのあらすじ：ジークのかつての仲間たちは、誘いを断り異なる扉へと消えていった。

## 23・欺瞞の分岐点

二つの扉が同時に開き、それぞれのパーティーを呑み込んだ後、重苦しい音を立てて閉ざされた。

進んだ先に開けた部屋は、この階層のほとんどが費やされているのではと思えるほどに広大で、立ち込める空気は人々の仄暗い感情を煮詰めたように薄暗く重い。

この部屋の雰囲気<sup>メイヘム・オヂェスコート</sup>が重苦しく感じられるのは、これまで繰り返して与えられてきた不和と騒乱の畏<sup>メイヘム・オヂェスコート</sup>が残した傷跡に心が悲鳴を上げているからだろうか。

それとも、この部屋の中心に不和と騒乱のアルアラージュ迷宮の間を凝縮したような黒く巨大な物体が待ち受けているからか。

ボツと小さい音がして、部屋を支配する闇の塊に、二つの赤い光が宿る。

最後の関門、黒く巨大な物体　アビサルゴーレムの眼だ。光を反射することなく不気味に光る瞳の紅は、猜疑か嫉妬か、それとも怒りだろうか。

厳かな黒色の岩石から作られた全身には、暗黒を感じさせるエネルギーが充満しており、まるで地獄から生まれたかのような恐ろしい存在感を漂わせている。

鋭くとがった両腕は、触れるものの肉体を裂き、離別の悲しみを与えるだろう。同時に堅固な外殻は、どんな攻撃にも耐えうる強靭さを持っているように見えた。

姑息な畏ばかりが目立つこの迷宮で、純粹な武力の結晶のような

ゴーレムが待ち受けているなど、少々意外にも思えるが、それでもここは迷宮、人の命を喰らう場所だ。この場所に辿り着くまでに、信頼を失い絆の壊れたパーティーにとって、このアビサルゴーレムは与しやすい相手ではないだろう。冒険者たちを押さえつけるような圧迫感のある魔力は、全員がBランクのパーティーであっても苦戦するに違いあるまい。

< i755568—21064 >

「この世の条理の通じぬ相手。」

混沌が形を成した命亡き巨人。

それでも、ジークたちに倒せぬ相手ではなかった。

「……ただの傀儡か」

最後の試練に偽りの生命体を選ぶなど、このアルアライジユ迷宮らしい。

そんな風にふと考えて、ジークの口元が思わず緩んだ。

これの強さを100とするならば、ファントム・ストライク『夢幻の一撃』のところに現れた50の個体はたかが知れている。少々の苦戦はするだろうが、『ファントム・ストライク夢幻の一撃』ならば問題なく倒せるだろう。

少なくとも、もう一度会うことは叶う。

そのように少しだけジークが安堵した瞬間に、微かな期待をあざ笑うかの如く思いがけない、いや、事前に想定していた中で、最悪ともいえる異変が起こった。

アビサルゴーレムの全身から発せられる魔力が、大きく跳ね上が

ったのだ。

「ほ、ほんとに、やるのか？」

「しかたねえだろ、そうする以外、方法がねえんだ」

「いいんだな。やるぞ」

「ええ。行きましょう」

同時刻。別の扉からアビサルゴーレムのいる部屋に入った『ファンタム・ストライク夢幻の一撃』の4人。フセグン、ミツテクール、リヨウ「ダーンそしてイヤシスの4人は、アビサルゴーレムを目前にして踵を返すと、もといた控えの間へと戻っていた。

敵を前にした逃亡。卑怯者の所業。

そのような負け犬の選択をした者にこそ開ける道が、この不和とメイヘム・オー・ディスコード騒乱のアルアラージュには用意されていた。

控えの間に戻ったイヤシスは、ジークたちの入って行った扉を見つめる。どちらかが全滅するまではもはや開くことのない扉の向こうからは、自分たちが対面したのとは比較にならない強力な魔力が漂ってくる。

この控えの間の名は『欺瞞の分岐点』。

扉の片方に100、もう片方に50の力を持つアビサルゴーレムが待つ選択の場所。片方に全員が進めば強さが200になるため、戦力を分けることが望ましいが、適切にメンバーを割り振ればいいだけだと思うのは、この迷宮を理解していない証拠だろう。



その証拠に、イヤシスたちが戻った控えの間には、先ほどまではなかった小さな扉　第3の選択肢が現れているではないか。

『欺瞞の分岐点』では、片方のパーティーだけはこの控えの間に逃げ帰ることが許される。そして逃げ帰った者たちの罪を押し付けられるがごとく、もう片方のアビサルゴーレムの強さは500にまで跳ね上がるのだ。

この第3の扉の向こうはアビサルゴーレムの部屋を迂回できる抜け道がある。正々堂々戦う者に災いを、仲間を見捨て、逃げ帰った者に抜け道を与える。

これこそが不和と騒乱のアルアラージュ最後の関門、『欺瞞の分岐点』だ。

「早く向こう側へ抜けるわよ。そこそこ強いパーティーみたいだけど、Bランクじゃ強化ゴーレムに長くはもたないわ」

この抜け道が開いているのは、裏切られた仲間たちがアビサルゴーレムと戦っている間だけ。戦闘が終わってしまったえば第3の扉は消え失せて、再び『欺瞞の分岐点』の挑戦者へと戻されてしまう。そうなれば、全員でアビサルゴーレムを倒すか再び誰かを犠牲にするほか、進む道はなくなる。

これは仕方がないことだ。

言い訳じみた感情を胸に抱きながら、イヤシスたち4人は逃げ出すように抜け道を走り抜けた。

オオオオオオオオオオオオ！！！！

裏切りに憤怒の叫びを上げるように、失望に嘆きの声を上げるように。

アビサルゴーレムは大地が震動するような叫びを放った。

いや、叫んでいると感じたのは、ジークたち裏切られた人間で、だからこそその音を叫びと感じただけかもしれない。

今のアビサルゴーレムには、先ほどとは桁違いの魔力が流れ込んでいる。そのエネルギーがあまりに膨大である故に、コアと呼ぶべき動力機構が軋んで叫びに似た不協和音を響かせているのだろう。

なぜならこのアビサルゴーレムには命もなければ意思もない。『欺瞞の分岐点』の理に従って、自分たちの仲間であった者たちの選択に従っているだけなのだ。

赦されざる選択をした者たちの想いの淀みは如何ほどか。

アビサルゴーレムの全身から迸る魔力は、周囲の空気を揺らし、一層邪悪な気配を放つ。叫び声のようなその音は、まるで深淵から湧き出るように不気味な響きで、まるで悪意の塊が作り出したかのような存在感を持っている。

「……やっぱ、こうなったか。気にすんなよ、ジーク」

「大丈夫だ、エドガン。少し……残念なだけだから」

この『欺瞞の分岐点』のからくりを、ファンタム・ストライク夢幻の一撃は説明しなかったけれど、ジークたちが知らなかったわけではない。

裏切りを確定させる選択肢を選ばせないために、ジークは彼らに「全員で同じ部屋に入らないか」と提案したのだ。

けれどその提案が受け入れられることはなかった。伸ばした手は払いのけられてしまった。

彼らは罪を犯すことを選んで、ジークムントを再び見殺しにしたのだ。

その事実を認識してはいたけれど、怒りも悲しみも不思議なほどに湧いてはこなかった。それはきっと、心配そうな表情ですつとそばにいてくれた、この少女のお陰だろう。

「ジークは大丈夫。絶対に大丈夫。ここまで私を守ってくれた。だから魔力は十分残ってる。私も……ジークを助けられるよ」

誰よりも非力なはずのマリエラが、ジークには誰より強く頼もしく思えてしまう。彼女がいてくれさえすれば、どんな困難だって乗り越えられる気がするのだ。

「《来たれ 炎の精霊、サラマンダー》！！」

マリエラが取り出した魔法陣にありつただけの魔力を注ぐと、魔法陣は淀んだ空気を浄化するかのように大きな炎の渦となって燃え上がり、あとには馬ほどもある炎のラプトルが現れた。

「ううんなあっ！」

見事な姿で顕現を果たしたサラマンダーに、ナンナが驚愕の叫びを上げる。

仮初の肉体とは言えマリエラの想いと魔法陣によって現出したサラマンダーの力は、かつて火山の階層でジークを赤竜からも燃え盛る溶岩からも守って見せた恐るべきものだ。

そしてその炎の精霊の力を限界以上に引き出す加護を、ジークムントは授かっている。

ジークは眼帯を外すと、精霊眼でサラマンダーを観た。

普段見せている左目の蒼も青い空のようで美しいけれど、この右目の翠みどりのきらめきは森の生命そのものようだ。精霊の女王が託した森の至宝が、彼に力を貸したいと望む炎の精霊に更なる力を与える。

「マリエラを守るか？」

「ギャウツ！ デキル！」

「ふなっ！ 喋ったなん！ なっ、ナンナも、ナンナもマリエラ守るなん！」

サラマンダーが返事をすると、マリエラを囲むように炎が走り結界を張る。精霊眼でよく見れば、小さな炎の精霊たちが互いに手を取り合って、ダンスを踊っているようだ。これほど近くで燃えているのに、触れてもちっとも熱くない。彼らは役目をきちんと理解しているのだ。

燃え移りも火傷もしない炎の結界を、不思議そうにチヨイチヨイと触りながら、ナンナはマリエラを庇える位置で身構える。精霊に同族意識でもあるのか、それとも本来のマリエラの護衛という仕事を思い出したのか、マリエラを守る気満々である。

これならば、問題はないだろう。

「いつてらっしやい、ジーク。気をつけて」

「ああ。行ってくる」

ジークはサラマンダー・ラプトルに騎乗すると、マリエラに渡された弓矢を受け取り、アビサルゴーレムの方へ駆けだした。

## 23・欺瞞の分岐点（後書き）

【帝都日誌】デバン、キタ！ ガンバッタ！ by サラマンドー

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

## 24・扉の先で（前書き）

！？  
前回までのあらすじ：『炎の遣い』、裏切られちゃってピンチ到来

## 24・扉の先で

「まだ戦闘が続いているな……」

「も、もしかして、た、倒してまうんじゃねえのか」

「今更ビビってんのかよ、フセグン。そしたら困るのはオイラたちだぞ」

抜け道を通ってアビサルゴーレムの部屋の出口にたどり着いた『ファントム・ストライク夢幻の一撃』の一行は、ジークたちがアビサルゴーレムと対峙している部屋の様子を窺いながら、そんな話をしていた。

アビサルゴーレムは敵を殲滅すると活動を停止する。戦闘が終われば扉は通行可能となる。入り口も出口も、相対した冒険者たちが勝とうが負けようがだ。そして、アビサルゴーレムが反応するのは入口から侵入した者だけだ。出口から侵入した者たちは、攻撃されはしないのだ。

裏切者たちに、彼らのせいで落命した者たちの死に顔を見せつける為なのか、それとも裏切りに加えて死体を漁る罪まで背負わせるためか。

アルアラージュ迷宮らしい計らいというべきか。

この迷宮の深部から帰還した者の多くは、命は奪われることが無くとも、人として大切な物を奪われてしまうのだろう。

「も、もしも、扉が開いた時、だ、誰かが生きていたら、どうするんだ？」

フセグンの気弱そうな問いに、リヨウ＝ダーンは「決まっているだろう」と吐き捨てる。

「俺たちの本当の依頼は、あいつらが運んでいる赤い石の奪取だ。こいつを伯爵様に届ければ、一生遊んで暮らせるだけの金がもらえる。もうこんな胸糞悪い迷宮で稼ぐ必要もなくなるんだ」

「そうだよな。あいつらには再構築するって言ったが、……このパーティーは終いにしたほうがいいだろうしな。報酬を山分けして、サヨナラといこうや」

リヨウ＝ダーンの言葉にミツテクールが同意する。男性3人がイヤシスの方を気にしているのは、彼女こそがこの『ファンタム・ストライク夢幻の一撃』の不和の種だったからだろう。少なくともミツテクールにはイヤシスを他の二人と共有し、パーティーを続けるつもりは最早なかった。

「思ったよりも、大ごとだったな……」

長くこのパーティーで斥候を務めたミツテクールが、ぼつりとつぶやいた。

赤い石が一体どういうものなのか、ミツテクール達は知らされていない。だが、提示された報酬の額から、大変な代物であることは理解していた。

こんな仕事、できれば断ってしまいたかったが、リーダーのリヨウ＝ダーンが受けてしまった後だった。依頼主は貴族だ。今更断る方がリスクが高い。

それに、現状に対する不満もあった。

「オイラたちには才能が無え。これで冒険者は、店じまいだ」



かつてジークムントと言う男と同じパーティーにいたから分かる。ジークは傲慢で、鼻持ちならない男だった。パーティーで狩りに行く時は、ミツテクルはいつも魔物をおびき寄せる餌のような役割で、「オイラは釣り餌じゃねえんだぞ」と何度不満に思ったか知れない。それでもどんな魔物に追われても、不思議と死の恐怖は感じなかった。

自分に実力があるからだと思っていた。けれど、ジークの前まで逃げきれば、絶対に倒してくれると信じていたのだと、戦闘の続くボス部屋の扉を見つめる今になって気が付いた。

自分たちが見捨てたジークが、奴隷にまで落ちて迷宮都市に行つた事はイヤシスから聞いていた。その話を聞いた時は、「ふーん、じゃあ死ぬな」としか思わなかった。薄暗い優越感を感じさえしただろう。

どこか遠くの国で起こつた知らない人の話を聞いているような感覚で、知っている人間に対する想いは微塵も感じなかった。かつては共に戦つた相手が、一体どんな辛い目にあつて、どれほどの痛みを感じてきたのか、そんな想像力はミツテクルにはなかったのだ。そして、再びジークを裏切つて、ボス部屋の先で待つ今もまた。

「ジ、ジークの精霊眼があつたら、ボ、ボスも倒せたんじゃない……？」

けっして外さない必中の弓。

才能と聞いて真つ先にフセグンが思い浮かべたものはそれだ。ワイバーン戦の失態で失われてしまったけれど、新しくリーダーになつたりヨウ＝ダーンも含めて自分たちには無いものだ。

イケメンでモテることも含めて妬ましく、嫌な奴だと思つていただけだから精霊眼を失つたジークを見捨てた時は気分が良かった。

……初めてジークに勝てた気がした。

弱った仲間を見捨てただけで自分たちは何も得ていないというのに。

自分たちもまた、掛け替えのないものを失ったことに、フセグン達はすぐに気づいた。

何しろ今までは自分たちの未熟さを、全てジークの精霊眼がカバーしてくれていたのだ。

「……あつたらなんて、あるはずが、ないじゃない」

ぼつりと言い放つイヤシスもまた、扉を見つめ、ジークのことを考えていた。

『ファントム・シューター』に誰よりこだわっていたのはイヤシスだ。

凡庸な治癒魔法士の待遇は、不遇であることが多い。ポジションと比較して、回復1回いくら、解毒1回いくらと値決めするパーティーもあるのだ。

田舎者のジークはそんなことも知らなかったのだろうが、他のメンバーと等しい待遇をくれるこのパーティーは都合が良かったし、何よりイヤシスを女としてではなく仲間として遇し、意見を聞き入れさえするジークの態度は、『ジークに仲間と認められた治癒魔法使い』という地位をイヤシスに与え一目置かれさえしていたのだ。

その地位を保つために、イヤシスはリョウウ「ダーン」というアタッカーを勧誘し、Bランクに上がるまで苦勞を重ねてきた。

ずっと努力してきたのだ。実年齢以上に若い見た目といっそう洗練された振る舞い、治癒魔法使いとしての価値はずっと増したはずなのに。

(なによ、なんなのよ、あんな小娘にかまけて。どうして……私を見ないのよ)

昔のジークが商売女や軽い付き合いの恋人たちに見せていた、あの表情なら我慢ができた。自分が今でも特別なのだと思い込めただろうから。けれど、アルアラージュ迷宮でジークがマリエラに向ける表情を見てしまえば、否が応でも分かってしまう。

だから。

「もう、引き返すことなんてできないわ。もし、あの扉を開いて出て来る者がいたなら。その時は、……リヨウ？」

「……承知している」

< i 7 5 6 0 3 0 — 2 1 0 6 4 >

ただ一人、じつと扉を見つめるリヨウ＝ダーンが、イヤシスの声に応じた。

ジークとの面識はこの仕事が初めてだが、彼も『ファントム・シューター夢幻の射手』の関係者だ。リヨウ＝ダーンもまた、このパーティーに入った頃を思い出していた。

イヤシスに誘われてジークの後任として『ファントム・ストライク夢幻の一撃』に入った頃は、もっと希望に満ちていた。

『ファントム・シューター夢幻の射手』のことは知っていた。

新進気鋭のＢランクパーティー。そこから誘いを受けた時は、可能性が広がる予感がしたというのに、待っていたのはＢランクパーティーとは名ばかりの、発言と実力に釣り合いの取れない者たちの

集まりだった。

臆病で満足に敵を引き付けられない盾戦士、多少小器用ではあるが自分を良く見せることに余念のない斥候、ご意見番よろしく采配を振るうがポーションでも代わりが務まる程度の治癒魔法使い。

『ファントム・シューター夢幻の射手』は、たった一人を示す名前で、このパーティーの名ではないことに気付くのはすぐだった。

しかし、名前を『ファントム・ストライク夢幻の一撃』に改めても、過去の栄光にすぎらうとするパーティーにリヨウ・ダーンが在籍を続けたのは、彼から見れば実力の伴わない者たちが、ことあることに自分と“ジークムント”を比較したからだ。

今からすれば、下らないプライド、無駄な時間だったと思う。こんな連中はさっさと見捨てていれば、別の道が開けただろう。けれど自分の才能を信じて疑わなかった若き日のリヨウ・ダーンはイヤシスたちに安くみられることが我慢ならなかったのだ。実力を示し、見返してやろうと考えるうち、時間だけが過ぎてしまった。

『ファントム・ストライク夢幻の一撃』で過ごした時間は全く無駄とは言えないだろう。地道に頑張ってきたおかげで、彼らは皆成長し、Bランクになったのだから。

けれど、ここが限界だ。

それも、罾の位置を知り尽くしていれば危険が少ないアルアラージュ迷宮でしか、『ファントム・ストライク夢幻の一撃』は稼げない。冒険者としての能力は、もつじき盛りを過ぎるだろう。そうなれば、行く当てのない閉塞感に心がすり減っていくだけの日々が待っているだけだ。

田舎に帰って酒場でも開こうか。

安直な夢には全く足りない蓄えを眺めながらそんなことを考えていた時、貴族の使いだという男から、この仕事を持ち掛けられた。まっとうな仕事でないことはすぐに分かった。けれど報酬は破格で、引退仕事には持つてこいだっただ。アルアラージュ迷宮という箱庭で変わり映えのしない作業のような仕事を繰り返してきた彼らには、怪しい仕事の下調べをするという、当たり前のことすら考えが及ばなかった。あやふやな所があるのもまた、報酬の内、位に思っていた。

赤い石を運ぶというパーティーに案内役として同行し、彼らに不和をばらまいて生じた隙について赤い石をすり替える。

人殺しをする覚悟はなかった。コソ泥程度の仕事だと思っていたのだ。

迷宮の最奥に運ばれる“赤い石”をすり替えることで一体何が起ころるか、そんなことを想像することもなかった。

その赤い石を運ぶパーティーに“ジークムント”がいたのには驚いた。

初めて会ったジークムントは話に聞いていたよりも強者の貴禄が備わっていたし、人格者であるように見えた。弓が得意なはずなのに、剣で打ち合ったとしても勝てるイメージをリョウウ「ダーン」は持てなかった。

そんな自分にも、ジークに対してどこか手心を加えるような夢幻ファンタム・ストライクの一撃の仲間にも苛立ちを感じていた。

「Bランクパーティーが強化されたアビサルゴーレムに勝てる見込みは万に一つもない。

アルアラージュ迷宮の陰湿な罠に相争って隙を見せていたなら、

その隙に乗じて赤い石を奪うだけで済んだのに、この選択をさせたのは彼奴自身だ」

リヨウ＝ダーンは誰にともなくそうつぶやく。

これは、きつとチャンスなのだ。

下らない冒険者生活と、そんな日々にすり減ってしまったプライドを取り戻すための。

「万が一にも奴らが生きてあの扉から出てきたなら。その時は、…  
…ジークムントは、俺が殺す」

リヨウ＝ダーンは低い声で、しかしはつきりと言い放つ。

その決意を聞いた『ファンタム・ストライク夢幻の一撃』の3人は、過去を懐かしむ時間はとうに過ぎ去ってしまった事を、今更ながらに理解した。

オオオオオオオオオオオオオオ!!!

空間が鳴動するように、アビサルゴーレムの咆哮が暗い部屋を震わせた。

そのただ中に向かって、ジークムントはサラマンダー・ラプトルを走らせる。

ヴォイドとエドガンの二人によって、戦闘はすでに始まっている。このアルアラージュ迷宮で、どれほどの不和と騒乱が生まれたことだろう。冒険者たちの怨嗟の重みを示すかの如く、アビサルゴーレムは巨大で悪意を振りまくようにジークたち『炎の遣い』の行く手を遮る。

この巨大な悪意の傀儡は厄介だ。

岩のような黒い巨体は痛みを感じず、分厚い手足はいくら剣で打ち据えようと僅かに欠けるだけで切り落とすことはできない。並みの剣では、すぐに刃がかけて駄目になってしまっただろう。

ゴーレムの急所と言われる『真理』の文字が記された額の部分は、角のついた兜で覆われていて、このままでは攻撃することもかなわない。

そして、巨体に似合わぬ鋭い攻撃。頭上より遙か上から振り落とされる重量物の剣戟は、一撃で鉄のように硬い迷宮の地形を変えるほどの衝撃だ。切るといふよりは叩き潰すような衝撃に、人間の肉体など触れるだけでミンチになってしまっただろう。

それほどの攻撃であるというのに、やすやすと受け止めるヴォイドだ。

魔力も含めたこの世のエネルギーというものは、保存されるのが世界の理だというのに、それを超越する現象だ。まるでアビスルゴーレムの巨体が紙でできた張りぼてであるかのようにさえ感じられてしまう。

その手の先に広がる、白と黒が織りなすモザイクのような空間、一目で脳の異常を疑うようなこの世ならざる《虚ろなる隔たり》が衝撃を呑み込んでいるのだ。

ヴォイドが注意を惹きつけている間にアビスルゴーレムの足元へ駆け寄ったエドガンが、関節部分の最も脆い部分に両手の双剣を寸分の狂いなく打ち付ける。

「我が左腕は焔の座、我が右腕は氷雪の座。宿れ、双属性剣！」

同時に2属性を操るエドガンの攻撃に、アビサルゴーレムの関節は急激に加熱され、そして直ちに冷やされる。同時に一点に加わる剣戟の衝撃。鉋物の疲労を招く連撃に、アビサルゴーレムの関節部分は脆化を免れない。

目にも留まらぬエドガンの猛追に、ついにアビサルゴーレムはバランスを崩し、ぐらりと大きく後方へと体勢を崩した。

「ジーク、今だ！ やっちまえ」  
「任せる！」

エドガンの声に、ジークが応じる。  
狙うべきは、わずか1点。

仰け反ったアビサルゴーレムの目元から、弱点の額に繋がる糸のごとき線が、今、繋がったのだ。

ほんの一瞬のチャンス。実現可能な射出地点も限られている。  
こうしている間にもアビサルゴーレムの体勢は刻々と変化して、  
射出地点は一時たりとも定まらない。

たとえ A ランクの冒険者といえども、人間の身体能力ではとても間に合わない瞬時の移動を可能にしたのは、マリエラが呼び出したサラマンダーだ。

「ギャウウウウツ」

エドガンの声に呼応するように、ジークの乗ったサラマンダーが赤き疾風と化して駆け抜ける。その速度は、生物の限界を凌駕する。この一瞬のために膨大な魔力を注ぎ込まれて創り出された、精霊だからこそ成し得た速さだ。



そしてその騎手が持つのは、手に馴染んだ一対の弓矢。

帝都の街中で振るうには向かないせいで、長らくしまっていたけれど、やはり弓こそがジークの手にはしっくりとくる。

そして彼のために顕現したサラマンダーは、まさに人馬一体の動きを見せる。

願い、望み、積み重ね、仲間に想いを託される。

その最善の先に、開かれない道はない。

ヒュウツ。

放たれた矢は、まるでジークの理想を叶えるように、最高の軌跡を描いた。

かつて自分を裏切った仲間に手を差し伸べようとしたジーク。その手を払われてもなお仲間と共にアビスルゴーレムに立ち向かうジーク。

そんな彼を精霊達が愛さないはずがないのだ。

精霊眼の力を借りて放たれた矢は、精霊たちの光に包まれアビスルゴーレムの額に刻まれた『真理』の文字を見事消し去った。

## 24・扉の先で（後書き）

【帝都日誌】パンもゴーレムもこんがり焼ける、オレの双剣、マジサイキョー！。

<i771122—21064>byエドガン

今月のSSもレオ様兄弟+ガーク爺が大活躍！

「輪環の短編集」で更新していますので、よろしければそちらもどうぞ！

「生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい（輪環の魔法薬）」は、

B・S・LOG COMIC Vol.128（9月5日配信）掲載予定です。

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』、2章完結しました。

まだまだ続くよ！こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

## 25・テオレーマ(前書き)

前回までのあらすじ：『炎の遣い』、強化版アビサルゴーレムを楽々クリア

## 25・テオレーマ

微かに伝わる地響きが消え、戦闘の残響さえも消え去って、ボス部屋の先の部屋は異様なほど静かに感じられた。

「ジーク、変わってたな……」  
「や、優しくなってた」

静寂に耐えかねたミツテクルの呟きをフセグンが拾う。

いや、耐えかねたのは静寂ではなく、自分たちの選んだ結果、犯した罪の重さだろうか。

久方ぶりに再会したジークは前と変わらないどころか、アルアラ―ジユ迷宮の罫を乗り越え、新たな仲間と絆を深めてしまったのだ。ジークは変わった。成長したのだ。ミツテクル達の悪意などものともしない強さを身に付けていた。

けれど、それを言って今更どうなるというのだろう。

このアルアラ―ジユ迷宮は管理型迷宮だけあって魔物の強さは総じて低い。けれど、裏切りの末に生まれたあのゴーレムだけは別格で、Aランカーが率いるパーティーでも勝つことは難しいと言われている。

『欺瞞の分岐点』に挑む前、ジークは自分たちに「全員で同じ部屋に入らないか」と聞いてきた。あの時は、この罫のことを知っているのかと思っただが、知っているなら分かれて部屋に入るはずがない。強化されたアビスルゴーレムは、いくら連携がとれていようが名前も聞いたことが無いBランカーが率いるパーティーの実力で倒せる

敵ではないのだ。

それでも、ミツテクールにはジークが自分たちの裏切りを分かった上で、最後のチャンスを与えてくれたように思えてならない。

それを断つたのは自分たちだ。自分たちは再びジークを見捨てたのだ。

「……女の趣味とか、変わりすぎだろ」

「あ、あれはあれで、可愛いと思うな。なにより、い、いい子そうだ」

鉛を呑み込んだような胸のつかえを振り払うようにミツテクールが軽口を言うと、フセグンが少しだけ笑い、離れた場所から睨みつけてくるイヤシスに気付いて慌てて口を閉ざした。

(イヤシスも、思うところがあったんだろうな……)

ジークは仕事と恋愛は分けて考えるタイプだったのだろう。女性関係にはだらしのないイメージだったのに、イヤシスに手を出している様子はなかった。それをパーティー唯一の女性であるイヤシスはどう感じていたのだろうか。少なくともミツテクールには、イヤシスがジークに憧れていたように思われた。

そしてミツテクール達は、イヤシスに“あのジークが仲間と認められた女”というプレミアム感を感じていたのかもしれない。イヤシスがアプローチをかけてきたときは、内心小躍りして喜んだのだが、まさか全員に手を出していたとは。貢いだ品を返せとは言わないが、なんだか損をした気になってくる。

イヤシスは顔もスタイルも良い女だが、自分たちが3股をかける女にかまけている間に、ジークは随分純情そうな小娘に入れあげて

いるのだから分らないものだ。

あのジークが入れあげている小娘が一体どんな者なのか道中気にはしていたが、驚異的に平凡で驚愕するほど鈍くさいこと以外、ジークのガードが固すぎて分らないままだった。

「ふん！ ジークが優しくなったですって？ それだけ落ちぶれたってことでしょう。あんな小娘しか選べない時点でお察しよ！」

「戦えないのに迷宮の奥まで付いてきたんだ。奴を信賴しているんだろうさ。しかも好いた女だ、そんな女と共に死ねるなら、冒険者としては悪くない最後だろう」

「そう？ じゃあ。リヨウは私と死んでくれるの？ ミツテクール、フセグンは!？」

あからさまに嫉妬を滲ませるイヤシスに応じたのは、意外なことにリヨウ＝ダーンだ。本当にこの迷宮は不和と騒乱の坩堝だ。

「……手順を確認するぞ」

イヤシスの恪気とミツテクール達の感傷に終止符を打つがごとく、リヨウ＝ダーンが声をあげた。

「探すのは赤い石だけだ。他の遺品はまとめて迷宮の豎穴にでも放り込め。持っていくなよ、足が付いたら厄介だからな。勝負がついて扉が開けば、こちらからならアビサルゴーレムを起こさずに入れる。さっさと手に入れてずらかるぞ。いいか、赤石の依頼主はあのテオレーマだ。報復を避けるためには、俺たちも行方不明になったと思わせなければいかん。」

……だからあいつらには、生きていてもらっては困るんだ」

リヨウ＝ダーンの最後の一言に、3人は生唾を呑み込む。「生き

ていてくれたなら」そんな望を抱くことは許されないとわれたからだ。

「心配するな、万が一、生きていた場合……ジークムントは、俺が殺る」

低く押し殺したりヨウダーンの声に、四人は顔を見合わせて互いに頷き合う。

その時だ。

「やはり、そうでしたか」

『ファントム・ストライク夢幻の一撃』が通ってきた抜け道の方から、冷たく突き放すような声が聞こえた。

「誰だ！」

不意にかけられた声に、『ファントム・ストライク夢幻の一撃』の四人が身構える。

「ご挨拶ですね、依頼主の顔を忘れるなんて。今朝会ったばかりではないですか。ですが、あなた達にとって依頼主は他にいるのでしょうか。教えていただけませんか？ あなたたちの依頼主が誰なのかを」

尾行には十分気を付けていたはずだ。目撃者を作らないよう、気配のない道を選んできた。道中、他のパーティーに出会わなかったことから、ミツテクルの気配察知や魔力探査は十分機能していたはずだ。だというのに、声が聞こえた今でさえ、気配も魔力も感じない。それが、逆に薄気味悪い。

四人が通ってきた抜け道の向こうから現れたのは、今回の依頼主、

『テオレーマ』のニクス・ユーグランズだった。

「謀られたか！ ミツテ、フセグン、やるぞ」

「じゃあねえ！」

「オ、オウ！」

リヨウ「ダーンの号令に、ミツテクールとフセグンが同意し、それぞれの武器を構えた。

エルフというのは美しい種族だ。

すらりとした体躯からは威圧的な雰囲気は感じられないし、強さより優美な印象を見る者に与える。軽装鎧を身にまとっているとは言え、そんなエルフがただ一人。

尾けられていたことに気付くこともできなかったのに、力でねじ伏せられるだろうと暴力に訴える選択をしてしまったのは、彼らが弱者である故だろう。

3人でかかればなんとかなるなどと、どうして思ってしまったのだろう。

ニクスというエルフは、このアルアラージュ迷宮の最深部まで、たった一人で来たというのに。

ニクス・ユーグランズは、テオレーマの天秤の担い手なのに。

< i 7 5 6 0 3 1 — 2 1 0 6 4 >

「《風よ、切り裂け》」

「かはっ」

無駄をすべて削ぎ落したひどく短い詠唱の後、喉から血を流し、



声にならない声をあげたのは、一番後ろで補助魔法の詠唱を始めたイヤシスだった。

刹那ニクスから放たれた風の刃によって、イヤシスの喉は深々と切り裂かれ、大量の血とともにカヒューカヒューと空気が漏れ出し  
ている。

ニクスはイヤシスが治癒魔法使いであると認めて、真っ先にその詠唱を妨害したのだ。そこに、人間を攻撃する躊躇や女性に対する配慮は一片も見られない。

「貴様あつ」

「ウワアアア」

ニクスの冷徹な攻撃にリョウウ「ダウン」が憤り、盾を構えたフセグンが叫びと共に突進する。

突進と同時にフセグンがすっぱり隠れられそうな大盾から猛獣の角のような切っ先が飛び出す。角を生やしたこの盾は、臆病な彼の精一杯の虚勢であり、同時に攻撃手段でもある。重量感のあるその肉体が盾と共に衝突すれば、盾から生えた鋭利な牙が敵の肉体に深々と突き刺さり、大ダメージを与えるのだ。

けれどそれも当たればの話だ。

柳のようなたおやかな肢体を持つニクスは、風に吹かれて柳の葉が揺れる如く、フセグンの突進をふわりと躲すと、埃でも払うかのような手つきで肩に触れ、囁くように呪文を唱えた。

「《ネビュラス・パラライズ》」

「ぐあ、あ、あ……」

麻痺と意識低下をもたらす状態異常呪文、ネビュラス・パラライズを受けたフセグンは、前後不覚の状態でその場に立ち尽くす。

これで二人。

あつけないほど簡単に仲間がやられたからといって、逃亡に転ずるミツテクールとリヨウ・ダーンではない。顔も名前も企みも、全て知られてしまっているのだ。目の前に立ちふさがるエルフを倒す以外に、彼らの生き残る道が無いことぐらい理解していた。立ち尽くすフセグンを死角に使い、決死の攻撃を仕掛ける。

「シイッ！」

ミツテクールが投げつけた煙玉から、即効性の麻痺毒を持つ煙幕が噴き出す。フセグンも巻き込まれるが、すでに麻痺しているのだ、大差はない。視界が塞がれると同時に、息を止めたリヨウ・ダーンが切っ先の狙いを定めて飛び込んでいく。この連携には慣れている。相手の動きは麻痺毒で鈍っているはずだ。煙幕の中でも彼はニクスの姿を捉え、鋭い剣先を突き刺せる。

ニクス・ユー・グランズが彼より少し強い程度であれば、その通りになっただろう。

しかし冒険者にはランクという概念があるのだ。

人間をランク分けする、差別と格差を助長するこの制度が存在するのは、同じ人とは思えない戦闘力の差が存在することの証左だ。

樹木と天秤のエンブレムを背負い、少数で貴重品を運搬する『テオレーマ』のニクスの戦闘力が、Bランクから抜け出る芽もないリヨウ・ダーンらの手に負えるはずが無いだろう。

「いない!?!?」

リヨウ＝ダーンの必殺の剣が、煙の中で空を切る。

「グアッ」

替わりに叫び声をあげたのは、煙幕から飛び出す敵に備えてナイフを構えていたミツテクールだ。

いつの間に移動したのか、ニクスはリヨウ＝ダーンの左後方にいたミツテクールの背後に立っていた。同時に崩れ落ちるミツテクール。

この場には、もうリヨウ＝ダーンしか残っていない。

「う、うわあっ！」

勝てない。

絶望に染まったりリヨウ＝ダーンの思考が、彼に逃避を選ばせる。ニクスが背後に移動したおかげで、出口につながるルートは空いている。足に力を入れ、逃亡の一步を踏み出そうとしたリヨウ＝ダーンはそのまま前につんのめり、冷たい迷宮の床面を舐めた。

（いったい何が!?)

混乱と共に、リヨウ＝ダーンの踵かかとに鋭い痛みが走る。

振り向いた彼の目には、革のブーツごと腱を切られた両足が映っていた。

「いやー。まさか二度もジークさんを裏切るとは」

発言とは裏腹に、ニクス・ユーグランズは面倒な仕事が付いたような爽やかな笑顔で言った。

『ファントム・ストライク夢幻の一撃』は捕縛され、最低限の治療を施された後、数珠つなぎに繋がれている。

「俺たちが、大人しく話すとも思っているのか」

虚勢か、それとも交渉を図ろうというのか。ギリリと歯噛みをするリヨウ＝ダーンの言葉にニクスはつまらなそうな視線を向けた。

「あなた達に選択肢があるとも思っているのですか？ 正直になるポーシオンならば、いくらでも存在する。多少後遺症が残るようですが、犯した罪を考えるなら当然でしょう。ああ、逃げないことをお勧めしますよ。今度は足ごと切り飛ばします。傷口で歩くのは随分と痛いでしょうからね」

「私たちは伯爵さまに頼まれたのよ！ そ、そんな暴虐、許されるはずが……」

「どうせゼントン伯爵あたりでしょう。あ、返事は結構。しかるべき場で証言していただきますので。だいたい、我が『テオレーマ』が使い走りをするのですよ。こちらの依頼主を誰だと思っているのです？」

ニクスの言葉に、自分たちの運命をようやく悟ったのか、四人は顔を青くする。

「な、何でも話すわ、話します。私たちは知らなかったのよ！ 騙されたの！ だからお願い。見逃してちょうだい！」

憐れみを誘うように懇願するイヤシス。体をよじって自慢の太ももを晒すことも忘れない。そんな様子にニクスは心底嫌そうな表情を浮かべて、吐き捨てるように続けた。

「卑しいなあ。ジークさんはどうしてこんな奴らを助けようとしたのか。全員で同じ部屋に入ろうと提案された時、それを受ければよかったんだ。まあ私としては、あなた達が断ってくれたおかげで、早々に仕事を終えることができたわけですが」

「さ、最初からわかっていたのね……」

ニクス・ユーグランズは、最初からイヤシス達が荷物を奪う目的で案内の仕事を受けたことに気付いていたのだ。この依頼が来た時点で妨害は予想できたし、当初手配していた案内人が直前で都合がつかなくなった時点で確定したも同じだった。

しかし証拠がなかった。長く続いたこの帝国は複雑で、様々な利権や陰謀が絡み合っている。特にこのアルアラージュでは。

案内人の変更などあからさまな工作だったのに、結局その線から誰の差し金であるか証拠を掴むことができなかった。

だからこそ決定的な罪を犯すまで、イヤシスたちは泳がされていたのだ。

このアルアラージュ迷宮の最深部、『欺瞞の分岐点』で仲間を裏切って引き返す選択は、迷宮法に定められた明確な罪なのだから。

「あなただつて裏切ったんじゃない。私たちがこうすると分かっている、ジークたちを行かせたんだわ。だったら同罪よ！ あなたが彼らを見殺しにしたのよ！」

罪の意識から逃れたいのか、単なる他罰的なエゴイストなのか。キイキイと煩く囀るイヤシスにニクスは会話をする気も失せてくる。

喉を潰しておきますか。

そんな考えが脳裏をよぎったその時、彼の鋭い感覚が人の気配を捕らえ、風の刃をイヤシスにくれてやる代わりにとどめの一言を話させた。

「本当に愚かだな。あの人たちがこの程度の敵を倒せないはずがないでしょう。このテオレーマが助力を求めた人たちですよ」

「な……。まさか……」

イヤシス達がニクスの視線に振り向くと、そこには怪我一つない様子のジーク達『炎の遣い』がアビサルゴーレムの部屋から出てくるところだった。

## 25・テオレーマ(後書き)

【帝都日誌】ニクスというエルフ、なかなかやるみたいだね。by  
ヴォイド

ちよつぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更  
新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141fff/>

## 26 赤の荒野（前書き）

前回までのあらすじ：ジークを裏切った『ファンタム・ストライク夢幻の一撃』、ニクスに  
ボコられる。



## 26 赤の荒野

「ニクスさん。……予定通り、ですね」

捕縛された『ファントム・ストライク夢幻の一撃』を見て、ジークは残念そうにつぶやいた。

ジーク達『ム・ストライク炎の遣い』がニクスに頼まれた本当の仕事は、『ファントム夢幻の一撃』に馬脚を露わさせることだった。

荷物を手に入れるためにどこかで裏切るだろうことは、初めから分かっていたのだ。

このアルアラージュ迷宮は、管理型迷宮だ。

管理型迷宮に共通することではあるが、まるで主が眠っているかのように殺傷力が低く、たちの悪い罠こそ数多くあるが、即死するような罠は存在しない。だから、最深部に到達するだけならニクス一人でも問題はなかった。

しかし、『ファントム・ストライク夢幻の一撃』に罪を犯させ、捕まえるとなると話は別だ。最大の難関は、パワーアップしたアビサルゴーレムで、これはさすがのニクスでも単独撃破は難しい。帝国の各地で活動しているテオレーマの仲間を招集しようにも、今回の依頼には時間的に間に合わなかった。

どうしようかと悩んでいたところに、『炎の遣い』からの問い合わせが舞い込んできたというわけだ。

アビサルゴーレムの強さや特性、弱点についてはニクスから『炎の遣い』に事前に伝えてあったのだ。ジークの射撃をサポートする

ためにマリエラが召喚したサラマンダーがスピードタイプであったのも、ニクスの事前情報によるものだ。

地面に転がるイヤシスは、自分を見下ろすジークムントにすぎるような視線を向け、そして、その双眸に蒼と翠が揃っているのを認め、絶望にも似た叫びを上げた。

「精霊眼！ 治っていたなんて」

精霊眼を取り戻していたなら、裏切りはしなかったとでも言いたいのだろうか。

精霊眼はジークムントの能力の一つでしかないというのに。

「ねえ、ジーク。私は何も知らなかったの、誤解なの。でも信じてた、分かったたの、貴方なら無事に出て来るって。それに今回のことで分かったの。私には貴方が必要だった」

じり、と這い寄ろうとするイヤシスに応えず、ジークは黙って背を向ける。かつての仲間のこんな様子を見たくないと思ったのだろう。

たとえ自分を見捨てようと、見捨てたくはなかったのに。差し伸べた手を振り払ったのは他でもないイヤシスだ。

ジークたちは傷一つないから、イヤシスたちの犯した罪は殺人未遂程度のものだ。ニクスの依頼が絡んでいないなら、ジークたちが望めば罰金刑程度に減刑も可能だろう。

だが今回は、罪自体より狙った品物と依頼主が悪すぎる。夢幻のストライク一撃の真の依頼主に関する情報を提供し、証人となる見返りに、今回の罪自体は減刑されても、依頼主からの報復が無いとはとても思えない。

「犯罪奴隷に堕ちたとしても、罪を償い、成果を認められれば、再び自由も得られるよ」

それでも希望は捨てないで欲しいと、ジークは言葉を返した。

それがどれほど険しい道か、得難い可能性であることかジークムントは知っている。それでも、今、自由の身でここにいる。未来はあると伝えたかった。

けれど、拒絶されたイヤシスは、キツとジークの背中を睨みつけると、吐き捨てるように暴言を放った。

「なによ、あんたなんか奴隷のくせに！ 誰かの情けで解放されただけのくせに！」

ああ、こういう女だったな。

投げつけられた言葉に、ジークはひどく残念な気分になる。

自分の思い通りにならないときに、ちくりと嫌なことを言う。そうして人を自分の思い通りに操ろうとするのだ。華やかな雰囲気と人当たりの良さで人を惹きつけ、上手く周りを褒めたり自分の弱さを見せたりしながら、相手の心に入り込み、つい手を差し伸べたくなる関係性を築き上げる。本人に自覚なんてないだろう、ただの処世術、動物の赤子が愛らしいのと何ら変わりはない。

だれより弱つちい癖に人に頼るのがへたくそで、そのくせ心が折れそうなき必ず手を差し伸べてくれる、誰かさんとは正対だ。

そんな風に思えたのは、その誰かさん　　マリエラが今、側にい

てくるからだろう。

ジークにとっては側にいてくれるだけで充分心強かったのだが、それまで静かにしていたマリエラが堰を切ったように口を開いた。

「ジークに酷いこと言わないで！ 何も知らないくせに！ ジークがどれだけ頑張ったか知らないくせに！ ジークは濡れ衣だったんだ！ それでも自分が悪かったんだって、あ、あなたたちに見捨てられたのだから、自分が悪かったんだって、そう言っただけで、ずっとずっと頑張っただけ……。ジークは、自分の力で自由を得たんだ！ あなたたちに会って分かった。ジークはちつとも悪くなかった。そうやって、ジークが都合よく動くようにしていたんでしょ。それで、怪我をして、精霊眼がなくなって、いらなくなっただけで、見捨てたんだ。それまで、さんざん利用してたのに！ それでもジークは立ち直ったの！ ずっと私の側にいて、何度も私を守ってくれたの！ ジークはとっても強い人だよ。すごく立派で大事な人なの。ジークのことを侮辱しないで！！」

顔を真っ赤にして、目に涙を浮かべながら叫ぶマリエラの大きな声に驚いたのは、イヤシスよりもむしろジークだ。

マリエラは多少の不遇や理不尽も仕方がないと受け流し、小さな幸せを大切にしながら静かに暮らすことを望むような凡庸な少女なのだ。誰かと敵対することも、面と向かって強く反論することもない、そういう人だと思っていたのに。

傷つき疲れ果ててしまった時に、側にそっと寄り添ってくれる、それだけで十分だとジークは思っていたけれど、今のマリエラはジークのために必死になって戦おうとしてくれている。

「マリエラちゃん、その辺で……」

大きな声を出したはいいが、この後どうしていいか分からないの  
だろう。顔を赤くして涙をこぼすまいとぐっところえてプルプルし  
ているマリエラを、エドガンがなだめにかかる。

「でないとき、……ホレ、あっちの方がダメージ深刻」  
「うなんな」

エドガンが示した先は、いきなりの反論に口をパクパクさせてい  
るイヤシスではなくて、顔を真っ赤にして照れているジークだった。  
ヴォイドやエドガン、ついでにナンナは、ウサギが肉食獣にウサ  
キックで反撃したのを見たような顔で、マリエラとジークをニヤニ  
ヤ見ている。

「……アリガト、マリエラ。俺、平気だから」  
「あ……、うん。なんか、勢いで……」

薄暗くて湿っぽいアルアラージュ迷路とは思えないポワポワとし  
た雰囲気を醸し出す二人。これには『ファンタム・ストライク夢幻の一撃』のメンバーも、  
白けた顔で黙るしかなく、ただ一人収まりの付かないイヤシスだけ  
が、最後の負け惜しみを言おうとマリエラを睨みつけていた。

「何よ、こんな小娘！　こんな……こん……え？」

この平凡な小娘が傷つくような言葉を。そう思って初めてマリエ  
ラを注意深く観察したイヤシスは、“平凡だ”と言う以外、マリエ  
ラがどんな顔をしているのか認識出来ないことに気付いた。  
ずっと存在感が薄く感じられて気にも留めていなかったけれど、  
これは一体どういうことが。

(認識阻害？　どうして、ただの錬金術師が……？)

マリエラの隣でデレデレと照れているジークムント。奴隷に墮ちて迷宮都市へ連れていかれたはずなのに、精霊眼を取り戻し今ここに立っている。彼が迷宮都市に送られたのは、迷宮が討伐されるより1年も前だ。

誰がジークを助けたのか、誰に助けられたのか。

可能性ならいくらでもある。迷宮討伐軍に拾われ従軍と引き換えに癒してもらったのかもしれない。けれど、今目の前にいて、認識障害で顔を隠したこの錬金術師は一体……。

「《ネビユラス・パラライズ》」

「ひうつ」

イヤシスが答えに辿り着くより先に、ニクス・ユーグランズの麻痺の魔法がイヤシスたちの意識を刈り取った。

今にも「違うの」だとか「聞いてくれ」だのと騒ぎだしそうな『ファントム・ストライク夢幻の一撃』の様子に、埒が明かないと考えたのだから。

「さて、静かになったところで、目的地はすぐそこです。彼らの捕縛で依頼させていただいた仕事は完了ですが、せっかくなので一緒にしませんか？ ああ、彼らは放っておいても大丈夫。しばらく目を覚ましませんし、道中胡乱つらんな輩は片付けてありますから」

ニクス・ユーグランズが示した先は、このアルアラージュ迷宮の最深部、空の祭壇があるだけの行き止まりの部屋だった。

「これが迷宮を管理できると言う宝珠……」

ニクスが懐から取り出した赤い石を、一同は見つめる。  
『炎の遣い』が運んでいたのは偽物で、本物はニクスが持って後から付いて来ていたのだから、イヤシス達は浮かばれない。

「地鎮のオーブって言うんでしたっけ」

「いいえ、ロコス・オブ・カーマイン 緋色の宝珠といいます」

マリエラが口にした『地鎮のオーブ』という単語は、ヴォイドの息子達が持ってきた物語『忘れん坊ブラック』シリーズに出てきたアイテムの名前だ。

ブラックとサンダーという分かりやすいキャラクターが活躍する冒険譚だが、ディテールがどうにもこころにも本物臭い。著者はエルメラの父、ガロルドだから、『隔虚』ヴォイドの活躍を何らかの形で孫たちに伝えようとしているのかもしれない。

（『地鎮のオーブ』って絶対、ロコス・オブ・カーマイン 緋色の宝珠のことだよ……）

ということとは、ヴォイドはこの赤い石を運ぶ仕事を受けたことがあったのだろうか。

「ほう、これが」

“初めて見た”という顔で、興味深そうにロコス・オブ・カーマイン 緋色の宝珠を観察するヴォイドの様子から真実は測りえないが、この人は“忘れん坊”だからあてにならない。

そのうち今日の話も『忘れん坊ブラック』陰謀の罫編『なんてタイトルで描かれるかもしれない。途中でサンダーもどきが3人も出てきたことだし。そうしたら、マリエラも物語に登場するのだろうか。楽しみだ。』

(でも、お話に描かれるよりも、ヴォイドさんの記憶に、思い出に残る方が嬉しいよね)

きつと、エルメラだってそう思っているに違いない。今日の戦闘で、ヴォイドは何かを忘れた様子は見受けられないけれど、全てを覚えたまま迷宮都市に帰って、土産話をしてあげて欲しいとマリエラは思った。

「この緋色の宝珠ロコス・オラ・カーマインを迷宮の祭壇に捧げると、一定期間、迷宮は活動を止め、生まれる魔物も弱体化するそうです。もつとも使えるのは、この程度の浅い迷宮だけで、迷宮都市にあるような大物は言うことを聞いてくれないそうですが」

帝国の管理型迷宮と呼ばれる場所は、長らくそのようにして管理されてきたのだと、祭壇の前にニクスは語る。

迷宮がどのようなものなのか、マリエラ達は知っている。その迷宮を大人しくさせるといふことは、この緋色の宝珠ロコス・オラ・カーマインはご褒美っぽいものなのだろうか。例えば師匠に与えるお酒みたいに。泥酔しちゃって、しばらくは大人しくなる的なアイテムだとか。

「ご褒美をもらったにしては、このアルアラージュ迷宮は意地悪な迷宮だったけれど。」

真紅の光を放つ石は、《命の雫》より濃厚な力を備えているようにマリエラには感じられた。

あまりに興味津々といった様子で、マリエラが石を見ていたからだろう。

「手にとってご覧になりますか？」



ニクスがそう言って、ロコス・オブ・カーマイン 緋色の宝珠をマリエラに差し出してくれた。

これほど珍しいものに触れて確かめられるとは。得難いチャンスに錬金術師の血が騒ぐ。

しかし、マリエラがロコス・オブ・カーマイン 緋色の宝珠を受け取ったその瞬間、マリエラの視界は波打つような朱色に染まった。

< i 7 5 6 0 3 2 — 2 1 0 6 4 >

赤、オレンジそして青。

穏やかな曲線でシンプルに塗り分けられた世界。

視界いっぱい広がる景観は、まるで抽象画のようだ。

それが絵画でもなんでもなくて、実在する世界の景色であることは、頬を撫でる乾いた風と肌を焼く日差しが告げていた。

乾いてひび割れた赤い大地、オレンジの波紋を描く砂の海。一点の曇りなくひたすらに青い空は美しいけれど、それは降る雨が一滴もこの世界に存在しない証拠だ。

「ここは本来、農業には向かない荒れた土地なんだ」

そんな話をしてくれたのは、一体誰だったろうか。

どうしてかは分からない。急がなければと思っていた。

昼の暑さをしのげる場所、夜の寒さを凌げる場所、何よりも命をつなぐ水があり、食料を、緑を育める土のある場所。

渴望するのはそのような場所で、それを求めて自分達はずっと旅をしてきた。

それでも、もう限界だ。

昨日、最後の老人が死に、今朝は一番幼い子供が死んだ。家畜な  
んてとうにない。

彼らの残した死肉を食らってこの身は何とか長らえているけれど、  
それももう限界なのだ。

凡庸な我が身を呪う。

一族の者たちは、自分を信じてついてきてくれたというのに、彼  
らに生きる場所を与えられない無力さを嘆く。

旅立たなければ、とても生きては行けなかった。

けれどこの旅路に、一体、果てはあるのだろうか。

果てしなく広がる赤と青。

鮮烈に美しく、無慈悲な世界のただ中で、彼は一つの声を聞いた。

その声は初めて聞いたはずなのに、どこかで出会った誰かの声を  
マリエラに思い出させた。

ねえ、叶えたい願いはなあに？

その声は、確かにそう言ったのだ。

「マリエラ、どうした？ 大丈夫か」

ジークの声にマリエラが我に返ると、そこは先ほどまでいたアル  
アラージュ迷宮の祭壇だった。  
どうやら白昼夢を見ていたらしい。

あれは一体、何だったのだろうか。

手に持つロコス・オブ・カーマインの宝珠を見つめても、もう何も起こりはしない。相  
変わらずすごい力は感じるけれど、これが何かも結局分からないま  
まだ。

ロコス・オブ・カーマインの宝珠をニクスに返すと、マリエラは黙ってジークの隣に並  
ぶ。

ニクスがロコス・オブ・カーマインの宝珠を祭壇の上に乗せると、どういつからくりか  
物質として確かに存在していたロコス・オブ・カーマインの宝珠は水のように粘性の低い  
液体に変わって祭壇に染み込み、跡形もなく消えてしまった。

同時に迷宮中に立ちこめている突き刺すような空気は和らいで、  
……しかし、落ち着かない悪意に満ちた雰囲気はほんの少しだけ増  
したように思えた。

それ以外は、特段何の変化もない。どうやらこれで終わりのよう  
だ。

儀式も何も必要のない、リーズナブルなものである。

「お疲れ様でした。『ファントム・ストライク夢幻の一撃』の面々は私が連れて戻りますの  
で、ここで解散と致します。『炎の遣い』の皆さんは、当初の目的  
通り採取に移っていたらだいて結構です」

「……なるべく、お手柔らかにお願いします。彼らは最後まで、直  
接の攻撃はしてきませんでした」

「善処しましょう」

ジークの言葉に少しだけ微笑むと、ニクス・ユーグランズはその  
まま祭壇の間から立ち去っていった。

ニクスが立ち去ってからもしばらくの間、ジークムントはニクス  
の向かう先、かつての仲間達の方角を、マリエラはロコス・オラ・カーマイン緋色の宝珠が納  
められた祭壇をじっと見ていた。

## 26・赤の荒野（後書き）

【帝都日誌】あの赤い荒野の記憶は一体……。byマリエラ

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

## 27・ケルピートの波紋花（前書き）

前回までのあらすじ：マリエラたち『炎の遣い』は依頼を果たし、  
ロゴス・オブ・カーマイン 緋色の宝珠は無事、アルアラージュ迷宮の最深部に納められた。そ  
こでマリエラは赤の荒野の幻を見る。

## 27・ケルピーの波紋花

「なんなー」

ケルピーが生息する30階層の湖沼を前に、ナンナは明らかに盛り下がっていた。

ナンナのテンション爆下がりに困ったのはエドガンだ。

かつての仲間の一件でジークは暗さに磨きがかかっているし、マリエラはマリエラで緋色ロコス・オラ・カーマインの宝珠を手にとってから何か考え込んでいる様子だ。ヴォイドは元から口数が少ないので、頼みの綱はこのニャンコだったのに。

エドガンはしんみりした雰囲気が好きだ。例えカラ元気でもいいからバカなことをやって笑っていたいし、仲間にも笑っていてほしい。落ち込んでいるのがしよもない内容なら、いじって笑いに変えるのだが、今回のジークの一件をいじれるほど空気が読めない訳でもなかった。

(やべー、どうすっかな)

困ったときのネコ頼みであったのに、頼りのナンナは水の前には無力らしい。

< i 7 7 5 9 2 3 | 2 1 0 6 4 >

「水やなんー」

湖沼の周りの地面は浅い水たまりだらけだ。

ナンナ以外の四人は撥水加工を施したブーツを履いているから気にせず歩いていられるが、ナンナは靴を嫌ってサンダル履きだ。初めこそ水を弾いていた毛皮も今では水を吸ってペシャンとなっていて、気持ちが悪そうだ。

毛皮がベツチヨリでテンションサゲサゲなナンナにどんよりジーク、考え込んでるマリエラにマイペースに寡黙なヴォイド。

(ダメダメじゃん、コレ)

この空気の悪さ、エドガンの的には、アルアラージュ迷宮に入ってきた以来の危機的状況だ。

それを打破する妙案も、残念ながら浮かばない。こうなれば、エドガンに考え付くアイデアは一つしかない。

「聴け、競馬の始まりのファンファーレを！」  
ヒヒイイイイイイ。

エドガンは『牝馬のホイッスル』を思いっきり吹き鳴らした。この『牝馬のホイッスル』、雌馬の鳴き声に似た音を出す笛で、馬系の魔物を誘い出すアイテムとして冒険者向けの雑貨屋などで売っている。もちろんこんな風に肺活量に任せて吹き鳴らすものではない。

「うわっ」

「きゃっ」

「うなんな」

「そんなに思いっきり吹いたら、たくさん寄ってきてしまうよ」



いきなり響いた大音量にどんより組は思わず耳をふさぐ。ヴォイドの冷静な解説通り、広い湖沼のそこから馬のいななきが聞こえてきた。

< i775922—21064 >

ヒヒーン、ブルルル、ヒヒヒン。

「おー、キタキタ！ 命を懸けた勝負の時！ ここでしか味わえない熱狂と感動！ さあ、一緒に駆け抜けろ！」

無駄にテンションの高いエドガン。

湖沼のあちこちからよきよきよきと馬の頭が生えてくるのはなかなかシユールな景観だ。

“落ち込んでる間もないくらい忙しけりゃいんじゃない？”という、結末はネコのみぞ知る作的作戦だったが、どうやらナンナの気は引けたらしい。

「ウマんな！」

そうだ。ウマだ。

10頭以上いるだろうケルピーが、水を切って近づいて来るのだ。

紫の肌を持つ馬の頭部に続き、首から前足にかけてがあらわになる。紫というあり得ない色合いだから不健康そうな馬ではあるが、普通の馬より少し大きく肉付きはいい。たっぷりとした黒のたてがみが、水に濡れて首筋にピタリと張り付いていて髪の毛のようだ。所々に絡まっているのは水草だろうか。ザバザバと言う水音と共に沼地の生臭い臭気が漂ってくるから、飼いならそうという気にはならない。

バシヤン。

大きな水音を立てて、一匹のケルピーが跳ねた。

水しぶぎと同時に見えたのは、魚の形をしたケルピーの下半身だ。馬の上半身に魚の下半身とはバランスが悪すぎる。ケルピーって上半身が重いんじゃないのか。馬の頭は大きいし。

こんな体で陸地で走るのは大変そうだし、引き摺る尻尾が痛そうだ。しかし、水中でうまくバランスがとれるのだろうか。走りたいのか泳ぎたいのかどっちか選べなかったのか。

ツツコミどころは満載なのが、ナンナのハートはつかめたらしい。

「サカナん！」

そうだ。サカナなのだ。猫好きなサカナだよ。

雑なコメントを口走るナンナに、このチャンス逃すまいとエドガンが話をふる。

「馬と魚が合わさるとー？」

「ウマカナ？」

「いやケルピーだから！」

「ふふっ」

マリエラが思わず漏らした笑い声に、エドガンが内心ガッツポーズをとる。マリエラの笑いの沸点が低くて良かった。ネコ様に感謝だ。

「ケルピーって魚屋と肉屋、どっちに並ぶんだろうっなー？」

「旨いんにゃ!？」

「どーだろーなー。いっぱい倒せば、肉落とすやつもいるかもなー」  
「エドガン、適当なこと言うなよ。『ケルピーの波紋花』は倒さず  
攻撃させるんだぞ」

「ははっ、そうだったなジーク。んじゃ、威嚇ヨロシク！ ヴォイ  
ドさんはマリエラちゃん、守っててくださいね！」  
「分かった」

ジークの気分も少し上向いたようで、ケルピーを掠める位置に何  
本か弓を打ち込む。

ヒヒヒヒイン！

攻撃されたと思ったケルピーの周りに水が集まって、こぶし大の  
水球をいくつも形作った。

「いいかー、ナンナたん！ 水球がこの草に当たるように打たせる  
んだ。ハイハイー！」

大げさな動きでケルピーの注意を惹きつけながら、水辺に密集し  
て生えている葦あしの茂みに水球を誘導するエドガン。

ばしゃしゃしゃしゃ、と当たった水球が弾けて葦の茂みを揺らす。  
葦は花の盛りのようで、先にほうきのように広がる赤く小さな花を  
つけているのだが、ケルピーの水球が当たった株の蕾つぼみは徐々に花の  
色を変え、本来の花とは大きく異なる青く丸い花弁を持つ小花を穂  
先に咲かせた。

これが『ケルピーの波紋花』だ。ケルピーの魔力を受けた水で育  
った、特殊な葦の花である。

外から与えられた魔力で咲いた花ならば、魔力が切れれば枯れる  
のは必定。

短い命を散らして水面に落ちた花弁は、小さな波紋を残して水に溶けて消えてしまう。

マリエラは花びらが落ちる前の房を、急いでナイフで切り取ると手早く乾燥させていく。乾燥させずにおいておくと、青い液体に変わって使えなくなるので、採取には錬金術師が必須なのだ。

ケルピーの波紋花から作られた除毛のポーションを塗ることで、永久脱毛が可能になるらしく、嫁入り前の貴族令嬢に人気なのだとか。採取が手間であることと、美容用途の素材の常で、購入するとなかなかにお高い。

ロバートがケルピーの波紋花を持っていたのは、キャロラインの為に用意していたのかもしれない。だからたっぷり採取して、お返しするつもりである。

「なはははは。陸に上がったサカナんな」

何頭か上陸したケルピーを見て、なぜかナンナが爆笑している。

笑いのツボがどこにあるかはよくわからないが、魚の尻尾を引き摺って陸を歩く姿がおかしかったのだらう。ゲラゲラ笑いながら殴りかかって水の中に追い返している。

バシャシャッ！

「ぶなんっ」

調子にのって水の中に入ったナンナの足元を、ケルピーがすくつてナンナが見事にすっころぶ。水辺の生き物を水中に引きずり込む魔獣だから、水の流れを操るくらいはお手の物らしい。

「ナンナたん、大丈夫かよ」

「なー……」

「……え？ エンジエ……いやまさか」

頭からびしょぬれになってしまったナンナに手を差し伸べたエドガンは、反対の手で目をゴシゴシこすった。

（ケルピーって幻覚攻撃もするんだっけ???)

目の前にいるのは、全身をブルブルシビビと振るわせて、助けようと手を差し伸べたエドガンに水滴をぶっかけて来る白猫だ。その毛皮も沼地の泥で汚れて薄汚れ感まである悪戯ニヤンコちゃんであるはずなのに。

（いやー、ははは。オレもアルアラージュ迷宮の魔力にやられたのかな？ まさかナンナたんがエンジェルちゃんに見えるなんて……）

< i775924 — 21064 >

「うーなんな！」

「うわぶっ。毛が！」

ぶるるるっ！

体を震わせて水滴を吹き飛ばすナンナと、思いっきりひっかぶるエドガン。

エドガンは水を被ってしまったが、余計な幻想は吹き飛ばされてしまったらしい。

「サカナンな、やるなんな！」

「お、おうよ！」

再び戦線に戻ったエドガンとナンナは、十数頭もいるケルピーが

水球を打ちまくるのを、ひよいひよいと避けつつ誘導したり、陸に上がって来るのを蹴散らしたりと八面六臂の大活躍を見せた。水球を避けても葦にぶつかつた飛沫が飛んでくるから、気付けば全員びしょぬれだ。

ずぶぬれになると、なんだか楽しくなってくるのはマイナスイオンのなアレなのか。ケルピーの波紋花が十分な量集まる頃には、全員が笑顔になっていた。

「びしょぬれになっちゃったよ。《乾燥》。ナンナもおいで」

「うなんな」

「錬金術スキルは応用がきくんだな」

「これも手のかかる師匠のお陰なんですよ、ヴォイドさん」

「へっくしゅ。マリエラちゃん、オレもオレもー。パンツの中までびっしょびしょ」

「エドガン……」

「なんだよう、ジーク」

「……ありがとう。気を使ってくれたんだろ？」

ジークがそっけない素振りでこんなことを言うものだから、エドガンは一瞬面くらってしまったけれど、いつものように笑って答えた。

「気にすんなって！ 俺たち友達だろ？」

「え？」

「え！？」

「うなんな？」

こうして『炎の遣い』一行のアルアラージュ迷宮攻略は目標過達で終わりを告げた。

メイヘム・オチィスコード

不和と騒乱のアルアラージュなどと呼ばれた場所だが、『炎の遣い』の絆はむしろ深まった。

ついでにナンナとの仲も深まったのだが、エドガンだけは一目ぼれしたエンジェルちゃんが擬人化ナンナであることに、未だ気が付いていない。

## 27・ケルピアの波紋花（後書き）

【帝都日誌】びしょぬれエンジェルたん（幻）、可愛すぎ。byエドガン

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141fff/>



## 28・閑話：泥濘の夢 前編

水を求めただけだった。

温かな泥濘は日に日に密度を増していき、乾季の訪れをその魚に告げていた。

広々とした水の世界を自在に動き回り、生命を謳歌できるのは、雨の降るほんのわずかな期間だけ。そんな世界に適応したその魚は、水の軛くわだけでなく、その種としての限界すらも逸脱する存在となった。

あまりに長い時間を生きたからか。それとも、濁った泥濘に身を浸しすぎたからだろうか。

原因が何であったかなど、その魚にとっては何ら意味を持たないことだ。

仲間より強い体、強靱な生命力。

それらを得られたことはその魚にとっては僥倖で、酷い乾季が続いた年に多くの仲間が渴くがままに死んでいく中、ただ一匹だけ生き残ったその魚は、水を求めて深く、深く、大地を掘り進んでいった。

その魚にあったのは水を求める魚としての本能だ。

幸い腹には卵がある。水場に辿り着けたなら子孫は再び栄えるだろう。

やがてわずかばかりの湿り気も帯びなくなった泥土は、岩の硬さになった。それを突き破った先には圧縮された砂の層。岩を破った

額は裂け、砂は容赦なく鱗を剥いだ。

それでも、魚は進むことを止めない。この地中の奥深くに確かに豊かな水の気配が感じられるのだ。そこに辿り着けたなら腹に抱えたたくさんの卵は孵り、命は繋がれるに違いない。

乾いた大地に埋もれて死ぬか、水源に辿り着いて死ぬか。

それは、魚にとって選択ですらなかつただろう。

硬く乾いた大地を掘り進む。鱗は禿げ、エラもヒレも千切れ、肉がかけ、骨が折れても、魚は止まることを知らない。

そうして命が尽きる前、辿り着いた場所は、水源と呼ぶにはあまりに恵み深い場所だった。

魚が水だと思っていたものはまるで命そのもので、それが脈々と流れる大地の奥深い場所で魚は自らが一段高い存在へと変貌していることを悟った。

この場所に至ったモノが、ただの魚であつたなら、我欲なく周囲一帯を潤す調停者 地脈の主となつただろう。けれどその魚はすでに魔物と呼ばれる穢れた存在で、腹に抱えた卵のために全てを犠牲にできる存在だった。

魚は歓喜しただろう。

産んだ卵はたちまち孵化し、魚の進んできた穴を、上へ上へと遡上していく。

生まれた稚魚は乾いた大地でも死ぬことはなく、肺を得、手足を得、乾きに強い体へと進化していく。

魚は歓喜しただろう。

産んでも産んでも卵は減らず、魚の仔らは繁栄していく。

いつしか、魚の進んだ道は、稚魚の巣として広がりを見せ、自然に生えた植生は人間という餌を呼び込み始めた。

もうこの地には、降らない雨を待ちながら、乾いて死にゆく仔らはいないのだ。

けれど一体いつ頃だろう、あの忌まわしい赤い宝珠が持ち込まれたのは。

あの宝珠は魚が続べている地脈より、深い場所から来たものだ。宝珠の力は魚のそのの根源で、それ故、魚は抗えない。

眠れ、この世は夢うつつ。

宝珠の囁くような命令に、魚の意識は遠くなる。

それが根源グラウンドの声ならば、魚は摂理と受け止めたろう。

けれど魚には分かるのだ。宝珠に穢れが混じっていると。

それは忌み喰らうべき人間の意識で、魚の望みも根源グラウンドもねじまげで、人間どもの良いように書き換えるようなものだった。

眠れ、この世は夢うつつ。

暗く淀んだ泥濘に、今日も魚は夢を見る。

己が意志を封じられ、稚魚を喰われる忌み夢を。

「御身より出でたるロコス・オフ・カーマイン緋色の宝珠、無事、アルアラージュ迷宮に納まりましてございます」

贄の一族の報告を、皇帝ヨハンⅡシュトラウス・レッケンバウエル15世は玉座にて無言で聞いていた。

儀礼的な報告だからではない。これは皇帝に向けての報告ではないからだ。

「ふうん、そう」

代わりにさして興味もなさそうに答えたのは、皇帝の側の床に腰かけた少年、ゲニウス・ロキだ。贄の一族の報告者が「御身より出でたる」と述べたように、ロコス・オラ・カーマイン緋色の宝珠はロキよりもたらされたものなのだ。

「ねえ、この茶番、一体いつまで続けるつもり？ 僕の知らないところで用途を決められるっていうのに、こんなこと何の意味もないだろう」

「そう言うな、ロキよ。これは感謝を忘れぬための儀式なのだ」

つまらなそうな様子のロキを、皇帝ヨハンがたしなめる。

「感謝ねえ。それすら形骸化してるように見えるけど」

もつとも、ロキの返事は辛辣だ。皇帝にこんな返しができるのは、帝国広しと言えどこのロキくらいのもものだろう。

「それよりさ、今回も争奪戦があったよね。仕掛けたのはバハラト？ それとも今回あぶれたトウユール？ その顛末が聞きたいな」

まるで物語をせがむ子供の様に、ワクワクした表情を浮かべて見せるロキに、ヨハンは「知っているのではないのか？」と問うてみ

る。

「知っていたら聞かないさ。僕の眼耳が届くのはこの帝都の内側だけ。しかもどこでもってわけじゃない。それこそ君たちのほうが知っているだろうに」

確かにロキの言う通り、彼のことは彼以上に理解している。この帝国が興った頃から研究し続けてきたのだ。もう、何も知らぬはずはない。

そうと分かっても、疑念を払しょくしきることはできない。

このロキという少年は、見た目通りの存在ではないのだから。

とはいえ、帝国にとっては無二の重要人物だ。しかも緋色の宝珠ロコス・オブ・カーマインの出所でもある。事の顛末を聞かせることはむしろ義務だと言っている。いい。

「バハラートだ。宝珠の奪取を命じられた冒険者パーティーは、しくじったばかりか仲間割れを起こして壊滅状態だそうぞ。おかげで知っている情報を洗いざらい証言し、バハラート側から付けていた線と綺麗につながったと聞いている」

宝珠の奪取を命じられたパーティーファントム・ストライク、イヤシスたち夢幻の攻撃の信頼はすでにかたがたで、個別に部屋に閉じ込めて「アイツはこう言っていたぞ」とありがちなカマかけをするだけで、我も我もと情報を吐き出した。

イヤシスたちが接触したのは、バハラート迷宮の領主、ゼントン伯爵の遣いの者で、当然依頼主の名前は伏せられていたけれど、緋色ロコの宝珠を取り上げられた領主が愚かな行為に走るのはよくあることだ。当然、領内に内通者を忍び込ませているから、そちら側から

との情報と合わせて、ゼントン伯爵を捕縛するのに十分な証拠をそろえることができた。

「しかし、アルアラージュ迷路とは、たちの悪い迷路だな。かような依頼を安易に受ける愚かなパーティーとはいえ、長く共に戦った者たちであつたらうに。皆、己が身を助けたために仲間を売ることに躊躇が無かつたと聞くぞ」

管理型迷路はどこも歪な所が多いが、中でもアルアラージュ迷路は性格が悪い。うんざりしたような皇帝の様子にロキはくすくすと楽しそうに笑う。

「仕方ないよ。折角迷路の主になれたのに、根源の意思グラントに従わされて、我が身のような迷路を浅ましい人間どもに集られているんだ。それも、まがい物の意思にさ。これから搾取され続けるアルアラージュに比べれば、バハライトは幸せかもしれないね」

ロキは玉座の前に跪き、頭を垂れたまま動かない贅の一族をちらと見た後、謁見の間を後にする。彼の進んだ方角は、バハライトのある方だ。

帝都が見渡せる高い宮殿の窓からさえ、遠いバハライト迷路は影も見えない。

けれど遠くの空に向かって、ロキは明るい声を上げた。

「そろそろ赤い石の残滓も完全に消えてなくなるころあいだ。今頃、歓喜の叫びをあげているだろうね。おはよう、哀れな魚。泥濘の夢から覚める時間だ！」

ロキには分かっていたのだろうか、それともただの偶然か。

いずれにせよ、彼が人間の守護者でないことは確かではないか。

彼が言葉を発した瞬間、遙か遠くバハライト迷宮のあるゼントン伯爵領の大地は鳴動を始めた。

「なぜだ！ なぜ、バレた!？」

「なぜと申されましても……」

「!?!? 貴様か!? 貴様が裏切ったのか!？」

赤ら顔をさらに真っ赤に紅潮させて、今日も今日とてゼントンが叫ぶ。

そんなに頭に血が上ったら、血管がプツンして倒れるんじゃないかと心配してしまうほどだ。

いつもならうんざりするような叫び声も、もうすぐ聞き納めだと思えば聞き流せてしまえるものだと、家令はわめき散らすゼントンの様子を面白くさえ感じながら眺めていた。

「まさか、旦那様」

気づいておられなかったのですか？ と肝心な部分は心の中で返事する家令。彼は正直者なのだ。嘘を吐いたりなどしない。言葉足らずなだけである。

「ロコス・オブ・カーマイン 緋色の宝珠は貴重な物ですからして。よほどの腕利きが運んだのでございましょう」

「そんなことは分かっておる！ どうしてロコス・オブ・カーマイン 緋色の宝珠奪取の嫌疑が

かけられているのかと聞いておるのだ！！　ワシが依頼主であることは当然隠しておったのだろうか！？」

嫌疑どころかガチガチに証拠を押しえられて、帝都の正規軍が向かってきているところだろう。今のゼントン伯爵にできることと言ったら、大人しくお縄につくことくらいではないか。

殊勝な態度で反省しバハラート迷宮の討伐をお願いすれば、少なくとも領民は助かるだろう。その代わり、討伐にかかった戦費としてゼントン伯爵がため込んだ財産は洗いざらい接收され、迷宮管理不行き届きで貴族の位すら剥奪されてしまうだろうが。

そんな提案をしたところで、ゼントンが従うはずもない。持てるだけの財を持って逃げでもしたら領民が不憫だ。どう誘導したものかと思案する家令に構わずゼントンがブチ切れ続ける。

「だいたい、どうして正規軍なんてものが出張って来るのだ！　戦争でもするつもりか！？」

そりゃアンタ、あれだけ迷宮を放っておいたのだ。そろそろ、魔物<sup>スタンビード</sup>の氾濫の一つも起こるだろう。正規軍の派兵はその対応を兼ねてのことで、むしろ涙を流して歓迎すべきだ。

そこまで考えたところで家令は、これはゼントンに状況を理解させるまたとないチャンスではないかと思いついた。魔物<sup>スタンビード</sup>の氾濫の恐ろしさはエンダルジア王国の滅亡譚で謳われる通り。さすがのゼントンも、状況を理解してくれるのではなからうかと。

「それは、旦那様。まもなくバハラート迷宮で発生するであろう魔物<sup>スタンビード</sup>の氾濫を警戒してのございましょう」



これでドヤ！ 「なananんと、スタンビート魔物の氾濫とな！？」とか言って正規軍にひれ伏す気持ちになっただろう。そう思った家令であったのだが……。

家令は善良で忍耐強く、ゼントン伯爵のような瞬間給湯器型拡声器に付けるにはうつつつけの人材だったが、そう言ったある種の鈍感が災いしてか、飛び切り優秀というわけではないのだ。だからしばしばゼントンに対して読み違いを起こしたりする。そして、ピューと湯気が出るほど頭に血の上ったゼントンが、まっとうな判断を下すはずはないのだ。

「バハラートでスタンビート魔物の氾濫が起こる！？ それは好都合ではないか！ エンダルジア王国でさえ滅んだスタンビート魔物の氾濫を治めたとなれば、あの若き皇帝もワシに一目を置いて正規軍を引き下げるに違いあるまい！」

一体全体、どこをどのような経路で思考すればそのような結論に辿り着くのか。

思わずぼかんと開いた家令の口が塞がるより早く、ゼントンは驚きの瞬発力と持ち前の大声で、命令を下してしまった。

「兵を集めよ！ 冒険者もだ！ 金に糸目は付けぬ。帝都中から腕利きを集めるのだ。歴史に名を残したい者よ集え！ 伝説に謳われる冒険が始まると告げよ！ このゼントンがバハラートのスタンビート魔物の氾濫を平らげるぞ……！！」

うまい具合にちょっとだけカツコイイ口上を述べ、自分に酔ったゼントンを止められる者にはいない。口が開いたまんまの家令など論外だ。

そうして、帝都中 是間に合わなかったので、周囲から適当な

冒険者をかき集め、自領の兵士をそれこそ門番まで招集し、ゼント  
ン伯爵は一大討伐隊を組んでしまったのだった。

28・閑話・泥濘の夢 前編（後書き）

【帝都日誌】最初から迷宮を討伐するという思考になぜ至らなかったのでしょうか……。by家令

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141fff/>

29・閑話・泥濘の夢 後編 (前書き)

前回までのあらすじ・ゼントン、伝説を目指す。

29・閑話：泥濘の夢 後編

雨だ！ 待ち望んだ恵みの雨だ！

久方ぶりの覚醒を、魚はそうのように感じていた。

赤い石がもたらす抗えない眠りは、随分薄くなっただけではいたが、それでもわずかながらのまどろみと、人を喰らうなという自制心にも似た拘束を魚にもたらししていた。しかし、それもこれまでだ。

赤い石の軛くひきから、魚は今、解き放たれたのだ。

我が仔らよ！ 沸き立つように溢れ輝きらつて地に満ちよ！

それは、長らく意識と自由を奪い続けた束縛からの脱却で、抑圧され続けた本能の解放は、まさに歓喜と呼ぶべき感情だった。

水だ、水だ、命の水だ！ 喰らえ、喰らえ、餌ならば、我が巣穴にいくらでもいる！

魚の歓喜に呼応するように、バハラート迷宮のそこに茶色く濁った泥水が湧きたち、高価な香辛料を目当てに迷宮に潜っていた冒険者たちを、香辛料もろともに呑み込んでいく。

泥水の中には蛇とも魚ともつかない生き物が、幾万、いや幾億という数蠢うごいている。それらは小さな、けれど剃刀の様に鋭い歯を突き立てて、泥水に呑まれた哀れな犠牲者に喰らいつき、あつという間に骨も残さず食い尽くしていく。

おかしい、おかしい！ 餌が足りない！

いつもなら、魚の巣穴を傍若無人に踏み荒らす人間たちが今日は少ない。

長らく眠り続けていた魚は、とても腹が減っていたのだ。それは、人を喰らわぬように課せられていた魔物たちも同様だ。全く喰らわなかったわけではないが、赤い石の制約はあまりに重く、彼らはずっと飢え続けていたのだ。

どこだ、餌は。人間は！ 餌餌餌餌エサエサエサエサエサエ  
エエエエエエエエ！

まさに、ちょうどその時だ。

バハラート迷宮の入口に、ゼントン伯爵と彼に率いられた人間たちがやってきた。

「我が勇猛なる兵士たちよ！ おそれを知らぬ冒険者たちよ！ 今こそ歴史に名を残す時！ 迷宮の伝説を書き換える時だ！ かのエングルジア王国を滅ぼした迷宮さえ滅ぼすことができたのだ。奴らにできてこのゼントンが率いるつわものどもに、やれぬことはあり得ない！」

ゼントンがでっぷりとした腹を重い鎧に押し込めて、意気揚々と演説を垂れる。家令に命じたのと文句が似ているあたり、気に入ったフレーズなのだろう。

対して集まった兵士たちは集合を命じられただけの兵士や、金に釣られた冒険者ばかりだ。すぐに来いとかき集められたから、事前説明か何かだろうと、大して準備もしないまま何事かと耳を傾けている。

彼らの前方は迷宮の入口。巨大な砂岩が縦に真っ二つに割れた隙間の向こうにあるそれは、いつもは乾き、砂がさらさら舞い落ちる

ような場所なのに、今はじっとりと湿って固まり、むわりとした湿気た空気を吐き出している。

まるで、乾季の終わりに初めて降った雨のような。宵闇に忍び寄る肉食獣の呼気のような。

集った兵士や冒険者の内、勘の良い者は、迷宮から噴き出すただならぬ空気に異変を察知しただろう。ごく少数の切れ者が、ゼントン伯爵の演説中にも関わらず脱兎の勢いで走り出し、一步遅れた腕の立つ者が武器を手に身構え、そして、それら聴衆の変化にすら気付かないゼントンが気持ちよく演説を続けたその時。

「見よ！ このバハラートの迷宮を！ 我らの雄姿におののき震えておるではないか！ いざ行かん……」

ミイツケタ。

ドツと、砂交じりの泥水がバハラート迷宮から噴き出して、迷宮の入口に集った者たちを呑み込んだ。

バハラート迷宮の魔物の氾濫スタンピードのいきさつは、家令と生き残った冒険者たちから正規軍へと伝わった。

ゼントンが大勢の兵士や冒険者を引き連れて迷宮前に集結したことが、魔物の氾濫スタンピードの誘発に繋がったのだろうというのが、大方の見方だ。

幸いというべきか、バハラート迷宮は集った人間をあらかじめ迷宮の奥へと引きずり込むと、魔物の氾濫スタンピードは一定の収束を見たから、迷

宮周囲に住む一般の市民に犠牲者はなかった。

そもそも、管理型迷宮から外された時点で、討伐の計画を立て実行に移していたなら、魔物の氾濫は起こらなかつた。すべての咎は、管理を怠ったゼントン伯爵にあるのだが、彼はバハラート迷宮に喰われてしまつて、もはや責任を取ることができない。

「ハイ、……ハイ。そのよう。ハイ……。誠に申し訳ございません、ハイ。ゼントン伯爵のご子息ですか？　今はお二人とも帝都に……。ええ、奥様も」

代わりに大忙しなのは家令だ。かれは、帝都側の人間なのだが、事態を收拾できる者が他にいないし、事情を知っている者ばかりでもない。家令は当面、米つきバツタの様にペコペコと頭を下げ、働きアリの様にセコセコ働き続けるだろう。

「あ、う、それでこの領地の今後はいかように……？」

おずおずと尋ねる家令に正規軍の將軍は、帝国評議会の決定事項を伝えた。ゼントン伯爵の犯罪、ロコス・オラ・カーマイン、緋色の宝珠奪取の証拠が揃つた時点で、バハラートの今後は決まっていたのだ。

「そうですか。討伐対象迷宮として、正規軍の管理下に入ると。あ、奥様とご子息たちは爵位を剥奪、財産も没収。こちらは、迷宮討伐の資金に当てられると。あ、う、もしよろしければ、今回の被害者家族への見舞金も……。あ、ハイ。リストは控えてございます。よろしいと。ありがとうございます、ありがとうございます」

家令の腐心と正規軍の適切な処置で、突入前に全滅という前代未聞の不祥事に終わったゼントン伯爵の暴走も、なんとか一旦の収束を見た。



数週間ほどたった後、帝国全土にバハライト迷宮が討伐対象迷宮になった旨の通達がなされた。かつての迷宮都市と同じく、バハライトでは冒険者たちはいくつかの優遇措置が受けられる。迷宮都市より迷宮の難易度が低く、帝都からの便もいいことから、多くの冒険者が押し寄せることだろう。勿論、深部の討伐は困難を極めるだろうから、迷宮討伐軍や迷宮都市の精鋭冒険者にも召集がかかるかもしれない。

そして、ファントム・ストライク夢幻の一撃は。

「バハライトが討伐迷宮に指定されたそうよ！今のねらい目はあそこね！」

ニクスに捕らえられ、ロコス・オブ・カスマイン緋色の宝珠奪取の依頼主に付いて洗いざらい吐かされたあとも、なぜか解散せずにいた。

アルアラージュ迷宮のお陰か、それとも事の重大性に気が付いたのか、ファントム・ストライク夢幻の一撃の結束力は波打ち際に建てられた砂山のように脆く、減刑を求めて我先にと争うように情報を喋りまくった。

端から裏切られる前提で依頼を受けたジークたちに、ファントム・ストライク夢幻の一撃を訴える意志はなく、むしろ減刑を望むくらいだったから、彼らが受けた罰はアルアラージュ迷宮への立ち入り禁止と案内人の依頼を破棄したペナルティーくらいものだ。

とはいえアルアラージュ迷宮はその性質上、案内依頼のペナルティーは他よりもかなり高く設定されている。蓄えを大きく減らした

3人にのんびり暮らす余裕はなかったし、ベテランと言った年齢の冒険者を迎え入れるパーティーも簡単には見つからなかった。

結果として未だに一緒に行動しているわけだ。

「バハライト？ オイオイ、本気かよ、イヤシス。また一から情報集めなんて御免だぜ」

「あなたに他に何の取り柄があるっていうのよ、ミツテクール。情報なら売ってるわ。一から勉強しなおして！」

「お、おで、水っぱい所は盾が錆びるし」

「別にトウユールでもいいのよ？ でもあそこの魔物の攻撃はものすごく痛いらしいわ。フセグン、あなたに受けられるの？ 盾が錆びるって言うなら油でも塗ればいいじゃない！」

「……俺は田舎に戻るつもりなのだが」

「リヨウまで！ あなたの田舎、弓が使えないと役に立たないんじゃないかなかったかしら？ だから、あんなにジークに固執していたのよね？ また赤毛の案山子剣士に戻るつもり？」

「「「イヤシス、おまえ……」」」

吹っ切れたのかブチ切れたのか、何かが切れちゃったままもとに戻らなくなっただイヤシスは、今までかぶっていた猫、いやそんな可愛いものではないから虎か何かだろうか、を脱ぎ捨てて、言いたい放題言いながら、新天地<sup>バハライト</sup>行きの提案をしていた。

「あのジークが迷宮都市で生まれ変わったのよ！？ 私たちだってやれるに違いないでしょう！」

ぐう~~~~~。

言われっぱなしの男性陣が「ぐう」の音を漏らすより先に、誰かさんのお腹が「ぐう」の音を漏らした。

「へ?」「え?」「は?」  
「ちよつ、私じゃないわよ!?!」

息を吐くようにナチュラルに嘘を吐いているが、音の出所はイヤシスの腹だ。

アルアラージュ迷宮で3股がばれて以来、食事をおごってもらえなくなったからか、それともダイエットでも始めたのか、お腹を空かしているらしい。

「くくつ。……しゃあねえな! あのくそつたれなお坊ちゃんが変われたんだ。オイラに出来ねえはずはねえしな!」

「オ、オデ。痛いよりは我慢できる……とおもつ。いや、我慢……する。して見せるよ」

「ふん。俺の剣の腕が田舎で錆びさせるにはもったいない代物だつてことを、お前らに分からせてやる!」

「でも、湿気てるから剣は錆びるかもしれないねえぜ?」

「あ……油ぬればいいんじゃないかな?」

「……うるさいぞ」

「とりあえず、激励会を兼ねて食事にいきましょう」

「」「割り勘な」「」

長年行動を共にした気安さで、再び仲間らしい空気を取り戻す面々。

しかし、彼らがちよつぱり足りない残念パーティーなのは相変わらずで、バハラートが事の発端となったことには気づいていない。

ついでに言つと、畏さえ熟知していれば生命の危険が少ないアルアラージュ迷宮に慣れた彼らの実力はランク以上に低いから、彼らの困難は約束されたも同然だ。

頑張れ、夢幻の一撃！

ファントム・ストライク

君たちの攻撃が、「え、攻撃したの？ 夢か幻かと思っちゃった」  
みたいなことになるかならないかは、君たちの成長と頑張りにかか  
っている！

迷宮都市を始め各地から迷宮討伐の専門家が集結する討伐指定迷  
宮バハラートでの、彼らの冒険は始まったばかりだ。

29・閑話・泥濘の夢 後編 (後書き)

【帝都日誌】ゼントン伯爵は悪い意味で歴史に名を残したな。by  
ウェイスハルト

「輪環の短編集」で更新していますので、よろしければそちらもど  
うぞ！

<i776278-21064>

ジークのへそチラシーンが見られる、

「生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい (輪環の魔法薬)」  
は、

B・S・LOG COMIC Vol.129 (10月5日配信)  
掲載予定です。

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更  
新中！

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

### 30・閑話：無垢なるウィルオウイスプ（前書き）

前回までのあらすじ：アルアラージュ迷宮での依頼完了。マリエラはケルピーの波紋花と不思議な記憶を手に入れた！あと、管理型迷宮バハラートは野良迷宮に退化した。

### 30・閑話：無垢なるウィルオウイスプ

「そう簡単には出会えないか」

アルアラージュ迷宮から帝都に戻った日の夜に、ジークたちにあてがわれた辺境伯邸の一室で、ヴォイドは青い炎の灯る小瓶を見つめていた。

手の平に収まる程度の小瓶はきっちり封がされていて、空気の入る隙間はないし、中に燃料も入っていないのに、中に灯った青い炎は、消えることなく淡い光を放っている。

「それは……精霊の一種ですか？」

大変大人しそうではあるが、ファイヤー！ な気配を感じたジークムントの質問に、ヴォイドは、「『無垢なるウィルオウイスプ』というらしい」と答えた。

これはヴォイドを“真実に導く鍵”だ。

帝都は伝説の S ランク 冒険者『隔虚』にとって捨て去った過去の場所。

エルメラと出会った時に所持していた手帳によれば、ここには人知を超える防御と回復の代償に記憶を失う彼を、利用する者しかない場所だったはずだ。

この街で起こったすべてをヴォイドは覚えていない。

エルメラに出会う前、彼が所持していたたった1冊の手帳には、

起こった出来事が箇条書きで記されているばかりで、たった1行にまとめられた事柄の中に、どれほどの出来事があったのか、推し量ることはできない。

古く、ボロボロの悲しい手帳。

エルメラのヴォイドへの最初の贈り物は新しい手帳で、そこには穏やかで他愛なく、時々刺激的な幸福の記録がいくつも記されている。けれど、新しい手帳がどれほど増えても、悲しい手帳が捨て去られることはない。

例え覚えていなくとも、辛く悲しい記録もまた、『隔虚』と呼ばれた男の一部なのだ。

ヴォイドに『隔虚』として生きるつもりはないけれど、家族が危険にさらされたなら彼は迷わずその力を振るうだろう。ヴォイドはまごうことなく『隔虚』であり、彼が『隔虚』である限り、あの手帳は失われてはならないものだ。

さりとて、シール家の婿としての暮らしに満足しているヴォイドにとって、帝都はわざわざ近寄りたい場所ではなかった。

それでも今回、彼が帝都に来たのには、それなりの理由があった。

ヴォイドには、どうしても得たいものがあり、それを得るには彼にとっての真実を紐解く必要があったのだ。

マリエラの護衛を受けたのは、護衛の依頼が“真実に導く鍵”の対価であると同時に、それこそが近道だと教えられたからだ。

話は少し遡る。マリエラたちが帝都に出立する少し前、ヴォイドは魔の森を奥へ奥へと、ただ一人進んでいた。



魔の森という場所は、迷宮と違って 生命力に満ち満ちた場所だと感じる。 空には魔鳥が行き交い、茂みの奥から大型の獣がヴォイドを食らわんと狙っている。身を隠す木々はいくらでもあるけれど、その何本かはトレントと呼ばれる樹木の魔物で、背を預けようものならばこれ幸いと枝を伸ばし柔らかな人の肉を抉るのだろう。

喉の渴きを潤すために覗き込む水面には水棲の魔物が顔を出し、空腹を満たす果実やキノコの類でさえも毒を孕んで油断がならない。魔の森の深淵は、咲き誇る花でさえ人を害する敵なのだ。

けれど魔の森の深淵に近づくほどに緑は濃く、木の実や花々は色鮮やかで生命は輝きに満ちている。 魔物というのは魔の森に生きる住人であり、生を謳歌しているのだと感じる。そんな人の理とはかけ離れた世界の中に、ヴォイドの目指す場所があった。

家のように姿を変えた、齡千年は超えようかという立派な古木。これが、炎災の賢者と謳われたフレイジージャの今の住まいだ。この場所にたどり着くまでに、何度魔物に襲われたかわからない。ヴォイドだから無傷でたどり着けはしたが、彼でさえ疲労を感じているのだ。 やすやすと人がたどり着ける場所ではない。ましてや住居を構え暮らすなど。

一体どうやってたらこんな場所で生活できるのか。 いや、そもそもなぜこんな場所で暮らしているのか。

その答えは、中へと通されてすぐに理解ができた。

「よく来たね」

そう言って歓迎してくれたフレイジージャの隣には、底なしの湖が人の形を取ったような存在が佇んでいた。スライムのような半透明の体から人でないことは一目でわかったし、マリエラから事前に話は聞いていた。

彼女は、古来よりこの魔の森の地脈を統べていた、偉大な大精霊であるという。

(これはまた……。これほどの存在であったとは。なるほど、魔物が近寄らないのも道理か)

ヴォイドは珍しく肌が粟立つのを感じる。

目の前の存在は、おそらく精霊であったことを棄てたせいで、大きく力を失っているのだろう。それでも感じる圧倒的な力。穢れを孕み、暗く淀んだこの大いなる存在は、今なお魔の森の化身のようにも感じられる。

底なしの湖のような瞳には、ヴォイドに対する敵意はないが、人を愛し慈しむ光も見えない。

戦士として身に沁みついた癖のようなものだろうか、リユーロパージャを前にしたヴォイドは、知らずと身構えたのだろう。相手の力量を押し量り、万一敵対したとして勝てるだろうかと活路を想定するのは、戦うことが身についた者にとってごくごく自然なことだから。

圧倒的な暗き存在と己という構図。これにはどこか覚えのある。

ふと、ヴォイドはそのように感じた。

「わざわざこんな所まで来なくても、『木漏れ日』で待ってりゃそのうち行くのに」

フレイジージャの声に、はっとヴォイドは我に返る。

「教えを請うのに、ご足労いただくわけにはいきません」

「真面目だねえ」

ヴォイドは湖の精霊に会いに来たわけではない。彼は炎災の賢者に教えを請いにやってきたのだ。

こちらは湖の精霊とは打って変わって人間好きで、礼節と誠意をもって接すれば、人に対するような交渉も可能だ。特に誠意は大事だと、娘婿的存在のジークムントからアドバイスをもらってきている。

誠意、すなわち手土産だ。具体的には一つしかない。

ヴォイドは背負った荷物から、瓶をいくつも取り出すとテーブルの上と並べていく。

酒を並べながらも緊張を解かないヴォイドとは裏腹に、興味なさげにぼんやりしていたリユーロパージャもようやくヴォイドが取り出した瓶の一つに目を向けた。

「お土産です。どうぞご笑納ください」

「真面目なのはいいことだね！ 年代ものの蒸留酒ばかりじゃないか。いいセンスしてるね。最近リエラは水みたいにうつついのはっかり酒棚に並べるんだ。どれどれこっちは……なんだ、ただの水か」

「フレイ、それはリエラの魔力水ではないか。我への土産だな。はよう、よこせ。はよう、はよう。こらテーブル、止まらぬか」

のっこののっこののっこの。

ヴォイドが手土産を並べ終わると、なんとテーブルが歩き出した。

切り株を粗く加工したようなテーブルだと思ったら、まだ生きて  
いるらしい。

足代わりに生えた根っこを動かして、奥の部屋へと歩いていく。

テーブルの移動に触発されたのか、ヴォイドやフレイジージャが  
座っていた椅子も、ひょこりと立ち上がって動き出すものだから、  
ヴォイドが尻の下から逃げないように思わず踏ん張ると、今度は足  
元の絨毯が「そんなに踏みつけないで」とばかりに足の下から逃げ  
出した。ふかふかした絨毯だと思ったら、苔かなにかでこちらも生  
きているらしい。フレイジージャやリユーロパージャは、慣れてい  
るのか椅子に運ばれるままだ。

さすがは元精霊たちの住み処だ。子供たちが大喜びしそうな家具  
たちである。

「こら、お前ら元に戻りな。 でないと燃やすよ」

ふんわりとして座り心地の良いこの椅子は、ちょうどいい大きさ  
の茸の魔物が精霊か。

フレイジージャの声に茸の椅子は動くのをやめ、テーブルも「燃  
やされてはかなわない」と慌てて元の位置へと戻ったけれど、載っ  
ていた酒瓶はどこかにしまわれた後で、代わりに木製のコップに入  
った飲み物が載っていた。

「ふむ、それは人が飲んでも大丈夫なものじゃな。 ちと酸味が疲れ  
がとぶ。 気が利くの」

リユーロパージャが飲み物を運んできたテーブルを褒めてやると、  
テーブルが嬉しそうに震えてコップが倒れそうになる。慌ててヴォ  
イドがコップを受け取り一口飲むと、「ウッ」と顔をしかめるほど

に酸っぱいが、ここまで歩いた疲れた吹き飛ばのように体が軽くなるのが感じられた。

慌てた様子で羽の生えた八チミツの瓶が飛んできたから、八チミツを入れる前に出されたらしい。このテーブルはちよつとあわてんぼうなのかもしれない。

「それで？ こんな場所までやってきて、何かあたしに聞きたいことがあつてきたんだろ？」

フレイジージャの言葉にヴォイドは頷く。

誰に聞いてもきつと答えが得られはしない、いや、口に出すこと自体、周囲の者を傷つけてしまうだろう疑問。炎災の賢者と呼ばれるフレイジージャならば知っているのではないか。その一縷の望みにかけて、妻エルメラさえも迷宮都市に残して、ヴォイドは単身ここまでやってきたのだ。

「炎災の賢者よ、お教えいただきたい。僕は、老いて死ねるのでしょうか」

< i 7 8 3 2 4 6 — 2 1 0 6 4 >

愛する妻エルメラと可愛い子供たち、尊敬すべき義家族たち。彼らと共に生き、そして共に老いて死んでいく。

それがヴォイド・シールとして暮らす、この男の望みなのだ。

老いて死ぬ。

むろん、魔物のはびこる世界だ。不慮の事故や病で天寿を全うせず亡くなることも少なくはない。それでも、そういったことも含めて、周囲にいる人々と共に老いて死んでいく。それは普通の人間ならば、ごくごく当たり前の、いや逃れることすらできない摂理だ。

けれど、この『隔虚』と呼ばれる男は、どれほどの傷も直ちに癒す能力の持ち主だ。記憶を失うことでさえ脳の変化と考えるなら、代償ではなく修復と考えられなくもない。そしてその超回復が老化にまで影響を及ぼすのならば……。

「僕は恐ろしいのです。」

これほど愛した人々を、何冊もの手帳に綴った幸福の記憶をいつか失い、それでもなお生きなければならぬ日が来るのが。

その時は、この幸福な記憶もそれを失った苦しみも、全てを忘れてしまうのかもしれない。今の暮らしを新たな手帳の最初のページにただ一行、“妻子とともに幸せに暮らす”と書き添えて、何も感じず再び放浪の生を送るのかもしれない。

けれど、そんな日々は許せない。エルメラや子供たち、お義祖父さんや義実家かぞくと共に築き培ってきたこの日々は、たった一行にまとめて良いものではない。

僕は、エルメラと共に生き、子らに未来を託して死んでいきたい」

誠実で、謙虚で、人として在るべき正しい願い。

けれどヴォイドの悲痛な告白に対する答えは、彼が予想した通り冷徹なものだった。

「……難しいだろうね」

「フレイよ、はつきりと言ってやるがよからう。これから一度も戦うことなく、病にかかることも怪我をすることなく、老いて眠るように死ぬのでない限り、お主の身体はお主を生かすだろうと。」

こやつは、老いて死ぬ時の心の臓が止まる衝撃で、体が今の状態にまで回復することさえ起こりうる。変に期待を持たせ、穏やかに一生を全うできたと思った瞬間、今の姿に立ち返る衝撃を考えてみよ」

「リユーロ、こういうのはさ、段階的に伝えるものなんだよ……」

やはりそうだったか。

予想していた答えではある。そうでないなら、こんな魔の森の奥深くまで出向いたりはしないだろう。

「いえ、予想はしていましたから。では、ただ死ぬだけならばどうでしょう。方法は、ありますか？」

ヴォイドの瞳に人間らしい光が宿るのは家族の話をする一瞬だけで、それ以外はただひたすらに暗く虚ろだ。誰もがうらやむ力を持つていながら、まるでこの男は家族以外の何もかもを持ちえていないようにも思える。

いや、事実その通りなのだろう。人は過去を積み重ね、己と言う形を得るものだ。エルメラと出会う前の一切を持たないこの男は、違和感のないふるまいをしているだけで、その内実はひどく空虚なのだろう。

だからこそ、唯一の大切なものを無くした瞬間、全てを捨てる覚悟ができる。

「そう、結論を急ぐことはないだろう」

どこか寂し気にフレイジージャが答え、「そうなの」とリユーロパージャが同意する。

けれど、痛ましげに言葉を選ぶフレイジージャに対し、人より魔物に近いリユーロパージャに人の感情をおもんぱかるといふ思考はない。だから続けた言葉に、ヴォイドはどういうことかと首を傾げた。

「そもそも、それほど捨ててしまいたいものを何ゆえ手に入れたの

だ？」

「手に入れた？ この《虚ろなる隔たり》を？」

一体どういふことなのか。この力は、生まれ持ったものではないのか。後天的に、何らかの方法で手に入れたものだというのか。一体、何のために？

「普通に怪我で死ねない時点で、分かるうものを。それは人の領域を逸脱した力だ。人が生まれながらに持てるような力ではあるまいて。もちろん、お主が人として生まれたのならだ。少なくとも努力や鍛錬で身につく類ではない。ほれ、なんと叫びたか。精霊の眼を持つ男、あれと同じ類に見える」

「この力は、何ものかから与えられたと……？」

ヴォイドすら思いもよらない言葉に、リユーロパージャは「違うのか？」と小首をかしげてフレイジージャを見た。アカシックレコード世界の記憶を覗いてみると言うのだろう。

「ああ、悪いんだけど、あたしじゃそこまでは視えないんだ。特にリユーロを助けて以来、ずっと不自由になってる」

フレイジージャが世界アカシックレコードの記憶を覗き見られたのは、彼女が己の存在すらもかなくなり捨ててリユーロパージャを救いたいと願ったからだ。その願いが叶った今となっては、本当に限られた情報しか得ることができなくなっている。

「でもまあ、リユーロの言ってることは正しいと思うよ。過去にその力を必要とする何かがあって、あんたはその力を手に入れた。その使命を果たした後なのか、それともこれから必要となるのかは分からないけど、なすべきことを果たした後なら、手放す方法もある



んじゃないかな。まずは、力を手にしたいきさつを知るべきだろうね」

フレイジージャの話にヴォイドは顔を曇らせる。

過去の自分を知るために、手帳は何度も読み解いているし、帝都にいる義父に頼んで『隔虚』の足跡を調べてもしている。けれど出てくるのは子供たちが喜ぶような、ちょっとした冒険譚ばかりで真実はようとして知れないのだ。

「それを知れるやつはいるよ。……細かくてうるさいやつだけだ。」

アカシックレコード

世界の記憶には司書がいるんだ。普通に会うのは難しいけど、…

…そうだね、マリエラと一緒に帝都へ行くといい。そうすればそのうちに会えるだろう。

ついでにあの子を守ってやってくれ。なに、少し助けるだけで事足りる。そうすれば護衛の対価にこれをやるう。司書のやつはさ、文明にかぶれているくせに、炎を嫌ってやがるんだ。火事になるとか、消し炭になるとかって言うて。この『無垢なるウィルオウイスプ』は聞き分けのいいヤツだから、何でも燃やしたりしない。これならやつも欲しがってあんたを書庫に通すかもしれない」

「今回、護衛を引き受けてくださったのは、フレイ様が手をまわしてくださったのですね」

帝都のどこかにヴォイドの知りたい情報を持つ“司書”と呼ばれる人物がいて、その交渉材料となるこの青い炎をフレイジージャから受け取った。青い炎の対価として今回の護衛を引き受けたのだと話したヴォイドに、ジークはそう言うことだったのかと納得をする。真の望みは伝えていないし、ジークもヴォイドが望む情報が何か

を聞いたりはしない。

ただ、「俺にできることがあれば、何でも言ってください」と、協力を約束した。

「ありがと。その時が来たらお願いするかもしれないね。事前に話していた通り、途中、所用で離れるかもしれないが、危機には必ず駆け付けるから」

すこし申し訳なさそうなそぶりを見せるヴォイド。

マリエラの護衛と言いつつ、自由行動が多くなることを気にしているのだろうが、ジークとしてはむしろ安心したくらいだ。

帝都に行く直前に、フレイジージャからヴォイドが護衛に加わったと聞いた時は、どれほどの困難が待ち受けているのだろうかと身を固くしたからだ。ヴォイド自身の用事であるなら、マリエラもさほど危険ではないのかもしれない。

フレイジージャが言っていた「少し助けるだけで事足りる」が若干気がかりではあるけれど、Sランカーの全力が必要な事態にはならないと思う。たぶん。

「ちなみにその“司書”という方はどこにいるんですか？」

「義父殿にも探してもらっているのだが、分からないんだ。炎災の賢者殿は、“そのうち会えるから”の一点張りで詳細は不明なままだね。なにか心当たりがないかい？」

「司書……。すみません、心当たりは……。お力になれず申し訳ないです」

フレイジージャがそう言うならば、おそらく探して会える相手ではない。だが、あの賢者はほんの少しだけ抜けていて、最後の詰めが甘かったりする。

(ヴォイドさんには、さんざんお世話になっているんだ。お前、勝手に消えてくれるなよ)

“司書”とやらに会う前に瓶の中の炎が消えないように、ジークは精霊眼をちらりと出して『無垢なるウィルオウイスプ』に少しだけ魔力を注ぐ。

ジークに魔力を分けてもらって、純真で素直な青い炎はヴォイドの手の中で、嬉しそうにパチパチと光を放った。

### 30・閑話：無垢なるウィルオウイスプ（後書き）

【帝都日誌】司書というからには、図書館にでもいるんだろっか？  
いや、フレイ様がらみでそんなに分かりやすいはずはないか……。  
byジーク

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定＆更  
新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

### 31 ざわつく食堂

ざわざわざわ、ざわざわざわ。

辺境伯邸の食堂は、再び喧噪に包まれていた。

原因は、例のごとく獣人のナンナである。

迷宮から帰ってきた『炎の遣い』一行が、ナンナと仲良くなって  
いたのだ。猫好きには見過ごせない話題だろう。どうやら迷宮討伐  
軍には猫好きが多いらしい。

「ぜ、全員と仲良くなっているだと……」

「一体、何があつたんだ」

「あいつら、アルアラージュ迷宮に行ってきたらしいぞ」

「あのアルアラージュ迷宮か？」

「つてことはあれか？ パーティー崩壊の危機を、ナンナたんが救  
つたつてことか」

「ネコと和解せよ。……俺と和解して？」

「ネコは救いの肉球なり。……ぶにりてえ」

「いやまさか、あのナンナだぞ。周りが喧嘩しようとして、笑って煽  
つてきそつじゃないか」

「じゃあ、あれだ。あそこのマッシュルームの横穴でキノコパーテ  
ィーやつたんだ！」

「陶醉の果てに、ネコの姿を見たってやつか……」

「ネコを崇めよ……」

「ネコを崇めよ……」

にゃんこの動向が噂になるとは帝都は未だ平和らしい。

あと、マッシュルームの横穴つてなんだ。使用禁止のやばいキノ

「こじゃないのか。」

「肉が逃げるんなー」

「こっやって、両端を持って、がぶって」

「がぶー。……逃げるんなー」

今日の昼食メニューは、具材の主張が激しめのサンドウィッチだ。具材がでっかいおかげで、気合を入れてがぶりとやらねば、間の具材が後ろに逃げる。

兵士の腹を満たす食堂のメニューは昼食からがつつりで、サンドイッチと言っても軽食感さはほどなく、フライドフィッシュサンドにチキンカツサンド、ローストビーフサンドのような腹にたまるものばかりである。

辺境伯家の料理人が腕を振るうだけあって、フライドフィッシュサンドはサンドになっても衣はサクサク、噛むと魚肉がホロリと口の中で解けるし、タルタルソースとの相性は抜群。新鮮なレタスや甘いトマトが味を引き立てる。

庶民に馴染み深いチキンカツサンドも鶏肉はジューシーで、野菜を煮込んだトマトベースのソースがうまみを引き立てているし、ローストビーフサンドに至っては肉とソースの見事さもさることながら、クリーミーな食感の野菜やピリツと辛みの効いた小さな蕪、ハーブやスプラウトと言った、なんだかおしゃれな野菜がたくさん挟んであってめちゃくちゃに美味しい。

「があぶうー。うみゃいなん、うみゃいなん」

大口開けてサンドウィッチを頬張るナンナ。そして、やっぱり反対側からはみ出る具材。

「ヨワヨワ人間なんな、料理うみゃいなん、すごいなん」

何を言っているのかわかりにくいが、「弱い人間だが、料理が上手いのですごいやつだ」と褒めているらしい。

ちなみに料理長も猫好きらしく、ナンナには玉ねぎ抜きメニューを出してくれている。獣人はタフだから少量ならば問題ないらしいが、大量に食べてしまうと調子を悪くするのだとか。生なら気付いて食べないが、ソースや肉汁が絡むと口にしてしまうらしいので、周りが気を付けてあげている。

この職場、ちょっとナンナに甘すぎだ。

マリエラが「料理長に“おいしかった、ありがとう”って言えば、もっと美味しいものを作ってくれるよ」と教えたら、料理長を見かけるたびに「リヨリリチョー、うまうまんな、ゴロゴロ」とか言うようになった。おかげで厳しい外見の料理長は、前にもましてデレデレだ。

マリエラの指導のお陰で、ナンナのメイドたちへの態度も少し柔らかくなってきた。ナンナに快適な環境を整えてくれる彼女らも、結構スゴイと認識しはじめているらしい。

感謝の気持ちは大切だ。この調子で「強い」以外の「スゴイ」を育んでいってほしい。

「それにしても、ナンナはみんなに人気だし、人間の料理も好きなのに、どうして今まで獣人と交流がなかったの？」

「うなんな？」

この「うなんな」は、「獣人と人間の交流なんて難しいことはわからんな」ということだろうか。便利ワードを理解したマリエラが質問を変えてみる。

「どうしてナンナは帝都に来たの？」

「んな？　んなな……。なん！　ナンナたちのナワバリに迷宮ができたなん」

しばらく首を傾げた後に、「うなんな」以外の声が上がった。

今度は答えがあるらしい。しかし、思い出したとばかりに続けた言葉は、適当な言動とは裏腹に割と深刻なものだった。

「迷宮ができた？　それって大丈夫なの、獣人たちで討伐できるの？」

「うなんな。強い守護精霊がいる戦士がやつつけてるなん、なんな、戦士少ないなんな、うなん、迷宮の中だと守護精霊、弱いなん。んな、苦戦してるなん。うなん、うな、うなんな」

「えっと……」

うなうな、なんなと身振り手振りで説明してくれるナンナ。可愛いのはいいのだが、今一つ理解が追いつかない。エドガンが「そっかそっかー」と言っているけれど、たぶん適当に相槌を打っているだけでヤツも分かっているに違いないだろう。ナンナの身振り手振りで散った毛を吸ったのか、時折「ぶえくしゅっ」とくしゃみをしている。唾が飛んでちよっときぢゃない。

マリエラが困ったな、と思っっていると思わぬ助け舟が入った。

「詳細は私から説明しよう」

「ウエイスハルト様」

なんと、ちょうどいいタイミングで現れたのは、いつでもどこでも忙しい、みんなの頭脳、ウエイスハルトだ。

もうすぐキャロラインが帝都につくから、今日は屋敷で仕事をしているらしい。



合理的な彼は、普段は食堂で兵士たちとの懇親を兼ねつつ食事を摂るか、食堂の食事を運ばせて仕事しながら食べるのだという。ウエイスハルトがこの食堂を利用するおかげで、料理長は本館ではなく食堂で腕を振るうことが多く、みんなおいしい食事でありつけている。

この話題、やっぱり取り扱い注意なのだろう。マリエラたち4人とナンナは、会議室へ移動した後、ナンナの事情とやらを聞かされた。

「まずは皆、無事にアルアラージュ迷宮より帰還したようで何よりだ」

「うなんな」

「獣人には一人に一体、守護精霊と呼ばれる同じ獣性を持つ精霊がおり、強者ともなればその守護精霊は他者から視認できることにについては以前話したと思うが」

「うなうな」

「……ナンナ、ちょっと黙ってくれるかな」

「うなんな」

ナンナの相槌に困ったウエイスハルトがそばにいた兵士に合図をすると、しばらくして白身魚のカルパッチョが運ばれてきた。生食できるほど鮮度の高い海の魚は帝都でも貴重で、食堂で見たことのないメニューなのだが。貴重なカルパッチョの皿がウエイスハルトではなくナンナの前に置かれると、ナンナの瞳孔はキュツと細まり黙って夢中で食べた。

どうやら対ナンナ用の秘密兵器らしい。ウエイスハルトもナンナを甘やかしすぎである。“邪魔をしたら魚がもらえる”と覚えたらどうするつもりだ。もう、味を占めちゃってるかもしれないが。

ナンナが静かになったところで再開された話によると、獣人には一人に一体の守護精霊が憑いていて、守護精霊の力が強ければ一体化により強力な力を発揮できるらしい。これがナンナの言う”戦士”というやつなのだろう。

しかし、戦士の数は減少し、今では一体化どころか姿も見えない守護精霊ばかり。弱体化が著しいのだとか。

そんな中、縄張り内で迷宮が発生したのだ。

迷宮は精霊の力の源である《命の雫》を喰らってしまうから、迷宮内で精霊は力が発揮できない。守護精霊もその類にもれず、迷宮攻略は難航しているそうだ。

「獣人の縄張りは魔の森の南西端と隣接していてね。地竜クラスはさらに現れるらしい。

獣人は極端に強さを貴ぶ種族だから、人間と交流するより魔の森から流れてくる魔物と戦う方がよほど重要だと考える。むしろ弱い人間との交流をどうやら恥ずべきことと認識していたようだ。縄張りへの侵入者は許さないし、向こうから接触してくることもなかった。

だが討伐できない迷宮の出現で、事情が変わったらしい。武器や防具を交易したいと獣人の使者が領地を接する南方の边境伯、ハイリツヒ・ヘルツヴァイデ殿の元へ来たんだ。使者と言っても彼らはプライドが高い。助力を求めるとは思えぬ態度だったというが、幸いハイリツヒ殿は剛腕な上、どうぶ……博愛主義でね。ククッ、秀逸な逸話が幾つもあるが、それはまた別の席で話すでしょう」

笑いながら動物好きと言いかけるウェイスハルト。ナンナのために鮮魚を用意しているというのも十二分に動物好きの面白い逸話じゃないのか。

面白話は気になるが、使者に出されたのは獣人の中でも地位の低い、弱い者たちだったという。人間側からしてみれば、ナンナのような親しみの持てる外見の者たちだ。犬もいれば猫もいる。兎やリス、鳥までいたらしいから、多くの人間のモフリ欲求を刺激したとかしないとか。

しかし、性格が揃いも揃って難ありだった。食堂でも「猫畜生」の誉れ高いナンナであるが、みんなそんな感じだったのだろう。

上下関係をはっきりさせる的な肉体言語によるご挨拶から始めて、全員見事に返り討ち。その後も結構失礼で偉そうな態度をぶちかましたわけだが、大の動物好きのヘルツヴァイデ边境伯が援助に乗り出すに至ったらしい。本当にかわいいは正義が過ぎる。

< i 7 8 3 2 7 0 — 2 1 0 6 4 >

「ハインリツヒ殿とて南方を守護する边境伯。単に博愛精神からのみ援助を始めたわけでは……ない」

（断言する前、ちょっと間があった……！）

（間があった）

（カワイイかなー）

（わからんでもない……）

（うみゃうみゃ）

心の中で突っ込みながら、まじめに聞いている4人と懸命に食べているニャンコ。ウエイスハルトの話は続く。

「先も言ったが、獣人の領地は魔の森の南西端と面しているのだ。獣人たちが好んで魔物と相対してくれているおかげで、南方の均衡は保たれていると言ってもいい。故に獣人たちの弱体化は看過できない問題なのだ。」

そこで、援助の一環として獣人の末端にいる 弱い者たちを預かり、鍛える中で弱体化の原因を探ろうとしたわけだ。多くは南方伯領にいるが、多角的なアプローチが効率よかろうと、ナンナは迷宮討伐軍で預かることとなった」

弱肉強食、力が正義のバトルジャンキーは迷宮討伐軍と相性がよかろうと、シューゼンワルド辺境伯家に紹介されたナンナだったが、余りにも文化というか常識が違い過ぎてその辺の教育をしているうちに迷宮が討伐されてしまったのだとか。

「なるほど……。ナンナがこちらに来たってことは、ヘルツヴァイデ辺境伯は犬派だったのか！ 情報漏洩の可能性からわざわざ会議室で話したわけですね」

キリリ。半分寝ていたことを隠すようにエドガンが言う。微妙に話を理解していない。

「違う。いや、情報漏洩という点はあるか……。獣人の危機を知れば、除隊して助けに行こうと考える兵士がいそいでな」

大丈夫か、迷宮討伐軍。もふもふ大好きすぎないか。

あとヘルツヴァイデ辺境伯は犬派じゃないのか。だったら小動物派だろうか。博愛主義というくらいだからモフけりやなんでもいいのだろうか。

もはや恰好が付いていないのに、ウェイスハルトは「うむ」と頷き話を続けた。

「精霊と相性の良い君たちとナンナが仲良くなったのは幸いだ。君たちと行動を共にすれば、ナンナも守護精霊を顕現できるようになるかもしれん」

それは、ナンナを鍛えてやれと言うことだろうか。精霊眼持ちのジークと精霊にやたらと縁のあるマリエラは確かにトレーナーとしては最適だ。ナンナは戦力として頼りになるし、マリエラ達もやぶさかではないのだが。

ナンナに優しい視線を向けるウエイスハルトと、空になった皿を舐めるナンナを見てマリエラは思わず尋ねる。

「こんなに甘やかして、ナンナ、ちゃんと野生に帰れるんですか？」

「……………」

「うんなな」

応えてくれないウエイスハルトの代わりに、カルパッチョを平らげたナンナが返事をした。

だからそれは、YesなのかNoなのか。それとも「ごちそうさま」なのか。

マリエラ達はどうすればナンナを強くできるか頭を悩ませるのだった。

### 31.ぞわつく食堂（後書き）

【帝都日誌】南方伯の領地にもふ……獣人が大勢いるなど、口外禁止の機密事項だ。byウエイスハルト

ニコニコカドカワ祭り2023で生き残り錬金が半額セール中です！

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

32 ナンナの守護精霊(前書き)

前回までのあらすじ：獣人の縄張りに迷宮ができたんなー。困ったなん。

### 32・ナンナの守護精霊

どうすればナンナを強化できるのか。

この場合、ナンナ単体の戦闘力というよりは、守護精霊とやらの強化だろうか。

頭を悩ますマリエラ達をよそに、お腹がいっぱいになったナンナは近くのソファアで丸くなると、プープーと鼻息をたててお昼寝を始めた。

「守護精霊が一人に一体いるというなら、弱すぎて見えないだけなのだろう」

久しぶりに口を開いたジークが割とまともなことを言う。

ちよつと出番が欲しかったのかもしれない。

そんなあなたに精霊眼。

眼帯をずらし貴重な加護の魔眼でナンナをちらりと見てやれば…

「あ、いた。これじゃね？」

「かつ、かわいいっ。手、ふといっ」

「白い……子猫か？ 耳が丸いようだが」

白い子猫ちゃんがナンナの背中に香箱座りで丸くなり、一緒になつて昼寝していた。

なんて凶悪な外見だろう。白いお餅の二段重ねとは、かわいいが過ぎていいる。透けているから触れないだろうが、触れるならばモフとモフの狭間に指を突っ込みたい。ここを絶対領域と言わずして、どこを絶対領域というのかと声高に主張したい魔の領域だ。



ナンナと守護精霊の可愛らしさは置いておくとして、こうして一緒にいるのだから、おそらく契約に類する絆はできている。だったら、育ててやればいいではないか。

「うーん。この子猫ちゃんを育ててあげればいいのかな」

「じゃね？ このチビ、透けちゃってんじゃん」

「精霊眼を通じて魔力を分けているんだが、いつも力を貸してくれる精霊に比べて、力の通りが悪い気がするな」

エドガンが言う通り、子猫精霊は薄くてすぐに消えそうだ。本当に儚い存在らしい。

「ふむ。森にいた時から守護精霊には優劣があったということ、環境的な要因ではないのかもしいね。守護精霊は獣人に力を与えるというが、逆もあるのではないかな」

「なるほどですね、ヴォイドさん。サラマンダーには魔力をあげて来てもらってますし。……いつもは」

ふと、暖炉を見てみれば呼んでないのにサラマンダーが灯っていた。ジークが精霊眼を出したので、これ幸いと勝手に出てきてしまったらしい。

「ねえ、サラマンダー。この子はどうしたら強くなれるかな？」

折角出てきてくれたのでマリエラが尋ねてみると、一生懸命考えているのかサラマンダーの灯った薪がパチパチ弾け、もくもく煙を出した後、かわいい声で教えてくれた。

「キャウウ……。ナカヨシ！」

「どうやら、ナンナと子猫を仲良くさせればいらしい。サラマンダーは、口をパクツと開けて目を細め、「イイコト言っちゃったー」みたいな顔をしている。」

サラマンダーの笑顔を見ながら、思い出したようにマリエラが漏らした。

「そっか。……じゃあ、名前を付けてあげればいいんじゃないかな」「名前？」

「うん。 師匠が昔言ってたんだ。 精霊みたいに肉体を持たない者にとって、名前はとっても大事だって。 この子はまだ名前をもらってない気がする」

「ナンナたん、チビの存在自体に気づいてないみたいだしなー」

「何かのタイミングで姿を見せてやって、名前をつけさせてやるというわけか」

存在を認識させて名前を与え、時折精霊眼で姿を現させながら一緒に過ごせば、絆が深まるんじゃないかというわけだ。 精霊眼に頼りすぎるといけないから、使うときはこっそりとが原則だけれど、これなら何とかなるかもしれない。

あとは、どうやって自然に二人を引き合わせようか。

グースカ寝こけるナンナと子猫を眺めつつ、一同が頭を悩ませていたその時、バーンと扉を開き懐かしい人物が駆け込んできた。

「話は聞かせてもらいましたわ！」

「わわ、キャル様！？」

「うなんなっ！？」

ウェイスハルトの婚約者にしてロバートの妹、そしてマリエラの親友兼一番弟子のキャロラインだ。

人類は滅亡する！ 的な勢いで会議室に飛び込んできたキャロラインは、マリエラへの挨拶などすっ飛ばしてナンナの方に駆け寄ると「可愛い！」と黄色い声を上げていた。旅装束のままの様子を見る限り、先ほど着いたばかりらしい。開けっ放しの扉を見ると、苦笑いのウエイスハルトが覗いていたから、ウエイスへの挨拶もそこそこにこちらへ走ってきたらしい。

「うなっ、にやんだってー！」

キャロラインは真正銘かよわい貴族令嬢なのに、ナンナは完全に気おされていて、どこで覚えたのかお決まりの返しをしながら助けを求めるようにマリエラを見ている。

助けてあげたいマリエラだったが、「うふふふふ、フワモフですわ！」とナンナを撫で練り回すキャロラインは獲物を狙う猛禽類みたいな目をしていたから、マリエラもまた、困ったように扉の向こうのウエイスハルトを探すしかない。しかしウエイスハルトは忙しいのか諦めたのか、すでに仕事に戻った後だった。

「ああ、本当に猫獣人に会えるなんて！ 可愛いですわ、可愛いですわ！ それにこちらの小さい子、これは猫の精霊ですか？ あなたの守護精霊さんですよね！」

「！ うなっ！ ナンナの守護精霊……な……ん？」

……………ちみつこい  
なん」

キャロラインのおかげで、自分の守護精霊を認識できたナンナだったが、喜んだのもつかの間、自分の守護精霊が小さな子猫の姿をしているのを見て、急激にテンションを下げってしまった。

「弱そうなん……」

「そんなこと。とつてもとつても可愛いですわ」

「なんな」

弱肉強食の獣人にとって、弱そうだということは価値が低いことなのだろう。キャロラインのとりなしにもナンナはしょぼくれたまま、がっかりと肩を落としている。それを見た子猫精霊は悲しそうな顔をして隠れるように体を小さくしてしまう。

「ナンナ、せつかく会えたのに、そんなこと言ったらかわいそうだよ。この子、きつとナンナを助けようと思って出て来てくれたんだよ。」

それにこれから育ってもつと強くなるかもしれない。仲良くなったら精霊は力を発揮できるんだよ。仲良くなれるように名前を付けてあげたらどうかかな」

「強くなるんな？」

「きつとなるよ」

「ええ、強くなりますわ」

マリエラとキャロラインの言葉に、少しだけ元気を取り戻したナンナ。ペタンとしていた尻尾も少しだけ持ち上がっている。ナンナにがっかりされてシオシオと小さく消えそうになっていた子猫精霊も、頑張ると言わんばかりに口を開けた。声は聞こえないけれど、どうやら鳴いているらしい。

けれど、ナンナに見つからないようにジークが精霊眼を隠したせいで、子猫精霊はますます薄く消えかけている。

「ああ、もう消えちゃいそう。ほら、ナンナ。早く名前をつけてあげて」

「うな……うなん。うな！ ガウウ！ ガウウにするなん！」

ナンナに名前をもらって嬉しかったのだろう。子猫精霊は尻尾をピンピンに立てて「がうう」と鳴くように口を開けた。

名前を付けると言うマリエラの見立ては、どうやら正しかったらしい。消えかけだったガウウの姿はほんの少しだけ濃さを増す。ガウウの様子にナンナも嬉しくなったのだろう。しっぽが機嫌よさそうにプルプルしている。

「ねえナンナ、ガウウってどういう意味？」

「強そうな名前なん。ガブガブしちゃうなん」

そうか、ガブガブしちゃうのか。

ナンナがガブガブと口にすると子猫もアウアウと小さな口を動かしている。いっしょにガブガブしちゃうっているらしい。

「可愛いが過ぎますわ……」

「うん、知ってる」

そしてそんな様子にキャロラインが悶絶していた。

急に乱入してきたせいで挨拶がおざなりになっていたが、キャロラインはつい先ほど帝都に到着したらしい。道中の馬車でナンナの話聞いて、会えることをそれはそれは楽しみにしていたとか。到着するなりウエイズハルトへの挨拶もそこに走ってきたと言うからよっぽどだ。

政略結婚が常である貴族ではあるが、ウエイズハルトとは恋愛結婚ではなかったか。ウエイズハルトとキャロラインの温度差はもと

もとあつたように思うが、余りにもナンナの優先順位が高すぎだ。ウエイスハルトが若干気の毒に思えるほどだが、彼は彼でナンナのために新鮮な海の幸を準備するほどだから似た者カップルなのかもしれない。

キャロラインが「ウエイス様の歡心を買うなんてこの泥棒猫め！」なんて言い出す展開にならなかっただけ良かったとしよう。

「マリエラさん、いいえお師匠様。お久しぶりです」

貴族令嬢のキャロラインに丁寧な挨拶をされるのは恐縮してしまふのだが、キャロラインの手はナンナをモフリ続けているのでわりと色々台無しだ。

「キヤル様こそ、無事に到着できて良かったです。道中、襲われたりしなかったですか？」

「迷宮討伐軍の第4部隊が護衛について下さいましたもの。なんの問題もございませんわ。」

ウエイス様のご実家ではお義母様もお義姉様もとてもよくして下さい、快適に過ごさせていだいたのですけれど、わたくし、マリエラさんと早くお話したくて。

馬車ってあんなに早いですのね！ 馬車を引くラプトルさんたちには無理をさせてしまいましたかしら？ 予定よりずいぶん早くついてしまつて。

ああ、本当にお話したいことがたくさんありますの。

私もマリエラさん一番弟子として、皇帝陛下に献上する自由課題のポジションをいくつか考えてみましたのよ」

キャロラインのお喋りが止まらない。慣れない環境でやはり気を張っていたのか、それともモフモフ冷めやらぬ感じなのか。

マリエラとしても、久しぶりにキャロラインと会つたのだ。今日

は部屋に引っ込んで、二人でたくさんお喋りをしよう。ついでにナンナも道連れだ。

ジークたちと別れて客室へと去っていくキャロラインとマリエラ、そしてキャロラインとマリエラに両脇を固められ連行されていくナンナ。子猫精霊ガウウも後ろをトコトコと付いていったけれど、助けるようにナンナが一声鳴いた時には、その姿は消えて見えなくなっていた。

「うなんな」

相棒が頼りになるまで育つには、もっと仲良くなる必要があるらしい。

### 32・ナンナの守護精霊（後書き）

【帝都日誌】こんなにモフモフなナンナさんがいらっしやるなら、もっと早くに帝都入りしましたのに。ウェイスハルト様ったら、秘密になさってひどいですわ。by キャロライン

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>



33 オークションハウス『テオレーマ』(前書き)

前回までのあらすじ・ニャン・コロニャンコロをゲットする。

### 33・オークションハウス『テオレーマ』

キャロラインの帝都入りから数日。  
食堂はやっぱりざわざわ騒めいていた。

「号外！ 猫が猫を連れている件について！」

「もう知ってるよ。情報おせーな」

「猫が猫を飼うとはこれ如何に」

「弱肉強食、力が全てのナンナたんだぞ、ペットなんて飼う柄かよ」

「はっ！ 逆転の発想か。飼われているのはむしろナンナたんのほうでは……」

「最近、家猫感が増したと思っていたが、まさかあんなチビネコに！？」

「だいぶ野生を忘れてきているのは否めないが……。もっと大事な存在だろ、アレ」

「ごくり。まさか、あれは例の……」

「ま……まさか、ナンナたんの……子供！？」

「何言ってるんだ、お前」

「父親はオレ」

「いや、父親はオレ」

「ヤメロ、気持ち悪いから」

「父親はエドガン」

「ヤメロ、シャレにならんから」

「でも、ずいぶん貢いでんじゃね？ エドガン」

「いや、金ないらしいよ、アイツ」

「貢いでるってーなら、副將軍閣下の方が……」

「専用鮮魚とかあるよな」

「センヨーセンギョ？ 何ぞ、ソレ」

「あるんだよ、我がままニャンコを黙らせる禁断の鮮魚が……」

「なんだ、ただの餌付けか」

「金貨袋で黙らせる系か」

「奥様怒るんじゃない？ まだ婚約段階だけど」

「いやあー。あそこは奥様の方が……」

キャロラインが帝都入りしたからと言って、侵入者がやってくるとか、近衛騎士団が襲ってくるとか、帝国警備隊がいちゃもんをつけてくるなんてことは一切なくて、兵士たちは割と暇を持て余しているのだ。

そんな中、ニャンコがコニャンコを連れてニャンココニャンコニャンコと歩いていけば、噂にならないはずがない。

ちなみに子猫精霊ガウウの姿が見えるのは、ほとんどがジークの精霊眼ビーム（仮）によるものだが、ごくごくまれに精霊眼なしでもちらりと姿を見せているから、名前を付ける作戦は効果があったのだろう。

今日も今日とてナンナの背後に立ったジークがちらつと眼帯をずらして精霊眼で見れば、ガウウがナンナ皿のお肉をあむあむと食べていた。

「ガウウ、もっと食べて早く強くなるんな」

他の者がナンナの皿に手を伸ばそうものなら流血沙汰は間違いなのに、ガウウにとっても優しいナンナ。それが分かるのか、ガウウも嬉しそうに尻尾をぴびぴと振っている。ちなみにガウウは実体がないから、いくら食べても肉は減らない。しかし、食べられた後の肉は鮮度が落ちるといって、美味しさが半減しているから何かを食べてはいるのだろう。

そしてそんな様子を見た食堂中の猫好きも、でれでれとまなじり

を下げています。ここ数日は猫と子猫の様子を見ようとみんなが時間を合わせて食堂に来るので、マリエラ達がいつも使っているテーブルを除いて食堂はいつも満席だ。

人口密度の高い食堂に、さらなる猫好きがやってきた。

「マリエラさん、ナンナちゃん、そして皆さまごきげんよう。わたくし、なんとかすべての用事を片付けましたわ！」

マリエラ一番、ナンナは二番、ジーク以下はまとめちゃう、今やシューゼンワールド边境伯邸きつての猫好きを誇るキャロラインだ。

ウェイスハルトとの結婚は確定事項なのだからと、本館に部屋を用意されたにもかかわらず、「まだ婚約者にすぎませんから」と表面上は丁寧な固辞し、マリエラの隣の部屋を分捕ったのは、そこにナンナがいるからだろう。

しばらくシューゼンワールド边境伯の城に滞在していたキャロラインだが、美人でおっとりした性格にも関わらずしっかり者で賢い彼女は義実家に大層気に入られたらしい。この帝都邸で一番身分の高い女性であることもあってすでに若奥様扱いで、義実家から連れてきた侍女長の助けを得ながら家事諸々の采配を任されている。

しかも外向けには『最初の錬金術師』として名も売れているものだから、まだ婚約段階だというのに招待状やら贈り物やらがこの数日ひっきりなしだ。

その対応やら、边境伯家の使用人一同との顔合わせ、屋敷のこまごまとした状態の把握と到着早々ものすごく忙しくしていたキャロラインが、多忙な仕事の合間にふらふらとやってきては、ナンナでエナジーチャージしていくものだから、マリエラとナンナもこの数日は屋敷に待機状態で、外出と言えば、『マダム・ブラン』のチョコレートショップにチョコレートを買いに行ったくらいだ。

ちなみにマリエラは知らないことだが、バハライト迷宮が管理型迷宮から外れ、野良迷宮としてハツチャケたおかげで力カオや香辛料などの価格は軒並み上昇中だ。まだ原料在庫が残っている『マダム・ブラン』も数量限定商品が増えてきている。

遠出できないマリエラは日々せっせと通って、結構な数のチョコレートを確認できたが、このチョコレートにプレミアがつくのは後の話だ。手に入らないと思うと、同じチョコでも倍美味しく感じるもので、マリエラとしてはこれはこれでウヒヒではある。

話はそれだが、その大忙しなキャロラインにようやく時間ができたのだ。

「さあ、“帝都に必要なポジション”の参考とするためにも、オークションに参りましょう！」

しかし錬金術師としての本分も忘れてはいない。というか、皇帝陛下の謁見のためにわざわざ帝都にやってきたのだ。ニャンコを愛でる為ではない。

“帝都に必要なポジション”とかいう面倒な自由課題をやっつけるためにも珍しい素材チェックは必要だ。

今日は、オークションハウス『テオレーマ』にて、珍しい素材を扱うオークションが開かれるのだ。

帝都北部中央区画の外壁近くを馬車で進む。

大通りに立ち並ぶ建物群の中で、ひときわ目を引く建物があった。まるで美術館を思わせるような豪華な外観を誇るその建物こそ、『テオレーマ』のオークションハウスだ。

白亜の壁に、高いアーチが連なるファサード。柱や装飾には、緻密な彫刻が施され、それぞれに独特の表情を浮かべている。玄関は玄関で、幅広い階段に大理石の柱と金属の手すりが並び、その上部には、彫刻家の手によって作られた、優美なモチーフが刻まれている。

いつもなら庶民代表マリエラには不釣り合いな場所だろう。

だがしかし、今日の『テオレーマ』は一味違う。なんといっても扱うものが錬金術の素材なのだ。レアな品を手に入れた貴族も少なからずいるけれど、客の大半は錬金術師だ。ドレスを着た貴族女性が香水の香りを纏うように、錬金術師の大半が薬草の臭いを漂わせている。

金系銀系の縁取りのある豪華なローブを纏ってはいるが、どこか同族臭のする老人が、弟子をぞろぞろと連れて入っていく。

「キャル様、キャル様。集団の前に行くほど薬草臭いですよ。豪華なローブが台無しじゃないですか」

「しいつ。マリエラさん、お静かに。“こんなにたくさん薬草を処理してきました”というアピールなのですわ。マリエラさんは、ポーションの作成をほとんど《錬成空間》内で、しかも一人で済ませてしまわれますから、服が汚れるなんてありえないのでしょうか。あの方たちは、実はわざわざ染み込ませているとお兄様にお聞きしましたわ」

なんと、薬草臭い爺さんは薬草汁をこぼしちゃうへたっぴさんじゃなく、偉いさんなのだそうだ。耄碌して手がプルプルしても錬成を続ける錬金オタクかと思ったマリエラは、ほわわとサイレントに驚きの声を上げる。

薬草臭い錬金術師集団が何組もいるおかげで、格式高さはものすごく和らいだのだが、いろんな薬草臭が混ざりに混ざって不思議な臭気が漂っている。あと平均年齢の高い集団だから、加齢臭も混じっていると思う。おかげで深い森の奥で、未知の生き物が繁殖するような不気味な匂いというか、一周回って大自然っぽい臭いというか。

マリエラとキャロラインにはギリギリセーフな臭いだったが、嗅覚の鋭いナンナにはアウトだったようだ。「お出かけするなん！」と言ってきかなかったから連れてきたのに、馬車から出る前にギブアップして、エドガンをお守に馬車でドライブに出かけてしまった。

「それにしても残念ですわ。エドガンさんの前でナンナさんにポリモーフ薬を飲んでいただこうと思っていましたのに」

「まあまあ。またの機会にとっておきましょうよ」

馬車から出なかったナンナは獣人のままポリモーフ薬を飲んでいないから、エドガンは愛しのエンジェルちゃんが側にいるとは知らずに、ナンナの御守りで馬車に揺れられて時間を潰している。

今日、エドガンが見たナンナのベストショットは、漂う薬草臭に「うなっ」と半口開けて固まった顔だろう。なかなか間抜け可愛い感じだったが、さすがのエドガンもアレでは恋に落ちないだろう。獣人もフレームン現象ってあるんだな、と役に立たないうちくが増えたくらいだ。

「エドガンさんにはぜひサプライズな感じで教えて差し上げたいですわね！ できればご自分でお気づきになって欲しいですけども…… まあ、あの方は、アルカディウス工房のフラメル師ですわ。あっ、あの方はオルビュス工房のクロード師！」

再び話が錬金術師たちに戻った。マリエラは一人も分からないが、

どうやら有名どころが来ているらしい。

「こんなにバレバレなのにどうして仮面を付けるのかなあ」

「何を落札したかで取り組んでいる依頼ですとか研究の内容が分か  
りますもの。ここで知ったことは公然の秘密にしましょう、という  
お約束なのですわ。さあ、私たちも参りましょう」

「そんなルール、役に立つんですかねえ……」

新しいポーションの開発なんて早い者勝ちだろうにそんなルール  
役に立つのかと思つたら、マリエラたちにはものすごく役に立った。  
何しろ、キャロラインとマリエラが馬車から降り立つや、ざわりと  
どよめきが起こって周りの錬金術師がはばかりことなくガン見して  
きたのだ。

< i 7 8 5 7 9 8 — 2 1 0 6 4 >

(うわあ……。めちゃくちや見られてる)

そりゃあ、そうだろう。

錬金術師が絶えたはずの迷宮都市に突如現れ、エリクサーを錬成  
したと言われる錬金術師だ。ギルド職員の間でさえ噂話に上るのに、  
帝都の錬金術師たちが気にならないはずがない。

学びと研鑽に労を費やす者たちの猜疑と嫉妬と好奇心に満ち満ち  
た視線、視線、視線、視線。

ジークやヴォイドが護衛に当たっていても、“仮面付けたら知ら  
んぷり”のお約束が無ければ取り囲まれて、前に進めなかったに違  
いない。

そんな中を、キャロラインは堂々と進んでいく。浴びせかけられ



る視線など、注がれるライトの明かりのように意にも介さない様子だ。

逆に後ろに続くマリエラは、あまりの視線に右手と右足が同時に出るありさまだ。おかげで左右にギクシャク揺れているが、皆が見ているのは残念ながらキャララインだけだ。

誰しもが、キャララインこそが『始まりの錬金術師』だと思っているのだ。

マリエラを守るためにシューゼンワールド辺境伯家もキャラライン自身もそう誤認させるよう仕向けてきたし、マリエラのマントには帝都に来る前、認識障害の魔法陣が追加されている。それらの効果ももちろんあるが、これほどの視線の中で10人中一人もマリエラを意識しないのは、持って生まれた華々しさの違いだろう。

マリエラの庶民オーラは帝都でも健在で、“エリクサーとか作っちゃったスツゴイ錬金術師オーラ”よりはるかに強烈にシヨミンシヨミンと輝いている。

キャララインをデコレーション・ケーキだとすれば、マリエラは横に置かれたフォークの下のナプキンほどに目立っていない。蚊帳の外ならぬ皿の外だ。ちゃっかり仮面を付けてはいるが、もしかしたら仮面さえいらなかったかもしれない。

華やかな内装のオークションハウスを進む一行。

豪華な装飾が施された大広間は、薬草臭と熱気でムンムンしていた。ここまで来れば、キャララインたちのことを気にする者は稀である。皆、目当ての希少素材を手に入れるため、オークションの開幕を今か今かと待ちかねているのだ。



### 34・オークション(前書き)

前回までのあらすじ：マリエラ、キャロラインとオークションに行く。

### 34・オークション

<i790534—21064>

「皆様、本日のオークションは、ポーションの素材を取り扱うものとなります。今回は、本オークションハウス初公開の珍しい素材も多数出品されております。どうぞ奮ってご参加ください！」

中央の壇にオークションの司会者が昇り開始の挨拶を告げた。司会者の言葉に続いて、会場のドアが開き、素材が会場に持ち込まれる。

「それでは、最初の出品をご紹介します！ こちらは、魔の森の湿地帯に棲む伝説の大亀、シユクラスの甲羅です。防御力の向上を促す堅牢のポーションの素材ですが、このサイズ、齢は100歳を超える大物です！ 齢と共に効能が上がることは、錬金術師の皆様ならご存じのことと存じますが、これだけの出物、そうそうはございません！ まずは、金貨10枚からの開始とさせていただきます」

「金貨11！」

「12！」

「12と大銀貨5！」

「13！」

「13出ました！ 他にございませんか？ それでは金貨13枚で8番の方の落札でございます」

司会者の言葉に、オークションが始まった。金貨10枚なんて裕福な家の1年の収入くらい金額なのに、入札は次々と上がりな

なかの値段で落札される。

マリエラの隣に座ったジークも驚いた様子で、マリエラを見て口をパクパクしている。

「続きましては、定番のユニコーンの角でございます。帝国国立飼育園の認定印の刻まれた正規品。角の主は齡3歳、成人を迎えたばかりの初回採取品となっております！」

マリエラたち招待客の手元には、あらかじめオークションの目録が送られていて、何が出展されるかは分かっているのだが、次々と持ち込まれる珍しい品の数々を眺めているだけでもとても楽しい。

（これがオークションかぁ。それにしてもお金つてあるところにはあるんだなぁ）

初めて見るオークションと、珍しい素材の数々にマリエラはワクワクして来る。とはいえ出品される品の多くは、マリエラの知っているものばかりだ。人が手に入れにくいたくさんの素材を、師匠がマリエラに与えてくれた証拠だ。

そして、今回出品された品のいくつかも、師匠が持ってきてくれたものでもある。例えば先ほど高値で売れたシユクラス亀の甲羅とか。

ちなみに貰った時には中身があった。ひっくり返した亀を船代わりに地下大水道をザッパーンと遡ってきたのを見て、誰が高級品だと思っただろうか。

亀とは言え肉は肉。傷んではもつたいないとお鍋にして食べたのだけれど、こんなに高値で売れるなら、肉も食べずに持つてくればよかった。確かに肌はプルプルになったが、泥くさくて味は今一つだったし。

食べ終わった殻がこの値段とは、そりゃあ、ジークも口をパクパクさせるはずだ。

「そして今回の目玉商品！ 聖樹の根でございます！」

聖樹の素材は宿る精霊の同意なく採取は不可能であることは周知のとおり！ 慈悲の落葉、寵愛の小枝と言われますが、今回出品されましたのは、まさかの根！

聖樹の根元を採取のために掘り起こすなど、宿る精霊が怒り必須の所業のはず。なのに一体どうやって手に入れたのか！？ しかし正真正銘、聖樹の根でございます！

地虫や粘体の忌避効能はもちろんのこと、足、特に足裏に関する病に絶大な効果を発揮いたします！」

「うおおおお！」

会場から興奮の声が湧き上がり、マリエラはビクツツと思わず縮こまる。

もちろんこの聖樹の根っこもマリエラの出品だ。『木漏れ日』の地下室から地下大水道に続く道に聖樹の根っこが飛び出して邪魔だったので、イルミナリアと交渉し切らせてもらったのだ。聖樹の精霊イルミナリアとしても、「なんかスースーするし、ちよつと痒かった」らしく、「あー、そこそこ。もちよつと右も。それは土の中に戻して」みたいなノリで手入れをした残骸だ。『木漏れ日』で保管するには多すぎたので、旅費の足しにならないかと師匠のお土産と合わせて『テオレーマ』のニクスに相談したら、「そ、そんなレアな品を！？」と目を向いて驚かれ出品する流れになった。

ちなみに「足裏に関する病」とは、じくじくして痒くなっちゃうアレである。臭いし歩くと痛いし、人にもうつって迷惑なのに治りにくい困った病だ。

「錬金術師もそうですが、貴族の中でも水虫にお悩みの方は多いらしいですわ。聖樹の根を使ったポーションで治療すれば、一回で完治どころか二度とはかからないとさえ言われておりますから、最高の治療薬としての人気はもちろん、お守り代わりに根を身に付けたいと望む方も多くいらっしやいますの」

キャロラインがこそつと説明してくれた。

イルミナリアのいらぬ根っこはびっくりするほど高値で売れた。これは、イルミナリアにもお土産を奮発しなければ。でも聖樹の精霊って、一体何が喜ぶんだらう。

「こちらがユニコーンの角に月の魔力水晶、邪妖精の鱗粉に春妖精のフェアリーダスト、レイスの涙に不死者の虫歯、フォレスト・ジユエルにアマラントスの花卉になります。その他、事前注文いただいた品はこちらに。この度は、大量の落札と希少な品々の出品、誠にありがとうございました」

オークションの終了後、落札した商品の引き渡しのためマリエラたちは個室へと通された。

にこやかに応対してくれているのは、すっかり顔見知りになったエルフのニクス・ユーグランズだ。

「随分買えたみたいだな」

「待ちすぎてのびちゃったなん〜。うなん〜」

清算と商品の引き渡しのために案内された個室には、馬車ドライブから戻ったエドガンとナンナが一足先にくつろいでいた。特にナンナはぐでぐでだ。猫は待たせると伸びるのか。

ソファーから半分ずり落ちていたナンナが、そのままズルリと床に落ちたあと、落札商品を運んできたワゴンに近づいて来た。

「クンカクンカ。食べれるなん？」

「ちよつと無理かな」

「なんな〜」

ユニコーンの角をカミカミするのは防げたが、代わりに品物を入れるための木箱の中に入られてしまった。そろつと近づいてきたエドガンが、蓋を締めようとして猫パンチを喰らっている。ナンナは爪を出してはいないし、それをわかった上でエドガンも猫パンチを喰らっているから随分仲が良くなったものだ。

「別の箱をお持ちしますね」

「すいません。箱代お支払いしますので」

「これほどたくさん落札いただいたのですから、これくらいサービスさせてください」

新しい箱を取りに一旦退出するニクス。

素材は《薬晶化》してしまえばコンパクトに持ち運べるのだが、人前で目立つことをするわけにもいくまい。それにしても、思いのほかが大漁だ。オークションに出品した品が思わぬ高値で売れたので、めぼしい品々を片っ端から落札したが、それでもおつりが金貨で来たくらいだ。

「思ったよりたくさん買えましたね、キャル様」

「本当に。お兄様に言付かった品もすべてそろいましたし、ユニコーンの角や月の魔力水晶など、相場より安かったではありませんか？」



今回は、師匠のお土産の魔の森素材や聖樹の根っこに人が集まったおかげで、ユニコーンの角に月の魔力水晶といった流通量の少ない定番の品が比較的安く手に入った。大変不本意ではあるが、師匠へのお土産のお酒もたっぷり用意せねばなるまい。

「それにしてもお兄様、不死者の虫歯が欲しいだなんて何の研究をしたらっしやるのかしら？」

「さあ？」

こんな催しだからロバートも来るものだと思っていたら、マリエラたちが参加すると知るや、正確には聖樹の根っこの出品者がマリエラだと知るや、欲しい物のリストをキャララインに渡して、「この額で入手できるなら落札してきてくれ」と不参加を表明した。

一番欲しかったらしい聖樹の根っこは、当然マリエラから直接譲り受けている。キャララインは知らない様子なので黙っているが、マリエラとしては不死者の虫歯の用途より、ロバートの足の裏が心配だ。

「ところでマリエラさん、自由課題の“帝都に必要なポーション”ですけれど、目星はついていらっしやいますの？」

「うーん。帝都って夜も明るいですし、寝ずに働く人の為の『不眠のポーション』とか、アルアラージュ迷宮に潜った時に思ったんですけど、トイレとか困るじゃないですか。だから不要な水分を汗に変えてくれる通称『霧の中の貴婦人』とか……」

「『不眠のポーション』は帝都にも作れる錬金術師がおりますわね」「マリエラ、どうして『霧の中の貴婦人』という名前なんだ？」

「それはね、ジーク。汗かきすぎると体温が下がって良くないじゃない、だから、掻いた汗がすぐ蒸発するからなんだよ。体もちよつとあつたかくなるの」

「霞むほどの蒸気が出るわけか。それは、……………臭うんじゃないや

ないか？」

「そうなんだよねー。だから、汗のにおいを花の香りに変えるポーションと合わせて飲むんだって」

「それで『霧の中の貴婦人』か。臭いが良くて悪くても、魔物が寄ってきそうだな」

「使えないよねー」

「もつと皇帝陛下のお役に立つようなポーションはございません？」

「老化を防いで若さを保てる『不老のポーション』とか、万一攻撃された時に一時だけ体を鉄のように硬くして攻撃を防ぐ『鉄人化ポーション』とか。あとは、死んだあと1時間だけ活動できる『遺言の刻限』とかも考えたんですが、どれも割と深刻な副作用があるんですよね」

「副作用ですか。毒と咎められかねない物を献上するわけにもいきませんものね」

残念ながら、マリエラの現時点の最有力候補は花の香りのおしっこを全身の毛穴から噴き出させる『霧の中の貴婦人』なのだ。微妙過ぎて困ってしまう。

ちなみにキャロラインの腹案は、ガザ蟲というキモチワルイ蟲の解毒液を使った解毒ポーションだ。低級ながら即効性は高いのだが、原料を知る一部貴族の間では蟲汁ポーションとして悪名が高く、これまたとても献上できない。

他の意見は無いものかと部屋を見渡してみると、ヴォイドは周囲の警戒をしに出掛けたきり戻っていないし、ナンナでいじりに飽きたエドガンは時折「へくしっ」とくしゃみをしながら部屋の隅で居眠りをしている。借りたい猫の手、ナンナはと言うと箱の中で丸くなっている。よほど箱が居心地がいいのか、いつの間にかガウウも出てきて寄り添うように眠っていた。

その耳がぴくぴく動いてガウウとナンナが同時に顔を扉に向けると、ノックと共にニクスが部屋へと戻ってきた。

「お待たせいたしました。新しい箱と……。それは精霊ですか？」  
「ガウウなん！」

シューゼンワールド辺境伯の兵士たちにカワイイカワイイ言われ過ぎて、自覚が出来ているのだろう。ナンナは、猫が子猫を連れてるなんて可愛いが過ぎるだろうと言わんばかりにガウウを紹介したのだけれど、ニクスは皆のように目を細める代わりに眉間にしわを寄せ、渋い顔でガウウを見ていた。

「うなんな？」

どうしたというのだろう。これまたあざと可愛く首をかしげるナンナと、困惑気な保護者達一向。

「帝都では、精霊を連れ歩かない方がいい。少なくとも誰に見られるともしれない場所で、姿を現すべきではない。……帝都には精霊を攫う連中がいるのです」

そういえば、帝都ではあまり精霊を見ない。

湧いては消えるたくさんの精霊をすべて捕まえるなんてできるはずがない。

捕まえるからいけないのか、それとも、いないからこそ捕まえる必要があるのか。これほど《命の雫》に光り輝いている街なのに、あまりに精霊の姿が少ない違和感に気付いて、マリエラはどうにも落ち着かない気分になった。



### 34・オークション（後書き）

【帝都日誌】聖樹の根っこを買う人、みんな「高度な政治的取引に使うのだっ」って言うのなんで？ by マリエラ

<i789546—21064> ©小原彩

あれ？ ジークがカツコイイ……。

不憫系ヒーローいじり過ぎて、そっぴいイケメン設定だったなと再確認しました。原作者なのに（笑）

ジークがカツコイイ「生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい（輪環の魔法薬）」は

B・S・LOG COMIC Vol.131（12月5日配信）  
掲載です！

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141fff/>

### 35・フェイレーン・イリスティア（前書き）

前回までのあらすじ：マリエラたちは、帝都では精霊が攫われると  
いう情報を聞く。

### 35・フェイレーン・イリステリア

マリエラたちが商品の引き渡しをしていたころ、ヴォイドは一人、オークションハウスの警戒に当たっていた。

夕刻に始まったオークションが終わる頃には日はとっぷりと暮れていて、空には薄い三日月が昇っている。とはいえ、帝都の夜は明るい。街中、所狭しと立ち並ぶ建物の窓には明かりが灯り、主要な通りを街灯が照らしている。

魔物が出るなどと言う話も、とんと聞かない場所なのだ。日の光に弱い素材の劣化を防ぐためという理由で、こんな時間にオークションを開催できる時点で安全に慣れた場所なのだろう。

(来客とその警備を見る限り、退屈な連中ばかりだったが)

特段問題になりそうな者がいなかったにもかかわらず、ヴォイドが違和感を覚えたのは、オークションの最中に妙な視線を感じたからだ。その視線は小動物か何かに見られているような弱いもので、しかも会場のあちこちから感じられた。視線の元を探って辺りを見ても、そこには警備員すら存在しない。

このオークションハウスにはそこに大きめの観葉植物が置いてあって小さな陰には事欠かないが、ヴォイドの眼を潜って人が隠れるには不十分なものばかりだ。

(まずは退路の確保だろうね)

帝都の施設の大抵はそうなのだが、ここにも来客者全員の馬車を止められるスペースはない。だから、馬車は乗客を降ろした後は、

一旦屋敷に戻ったり、近くを周回したりと御者が適当に時間を潰しているのだが、ナンナとエドガンが中途半端な時間に戻ってきたおかげで、1台だけではあるがオークションハウス横の通用門近くに馬車を付けられている。万一襲撃されたとしても、マリエラとキャロラインを連れて無事に戻るのはたやすいだろう。

(部屋からの通路はこちらと、ふむ、こちらでもいけるか)

オークションハウスは、正面から広いエントランス、オークションが行われるホールと続き両サイドにクロークや休憩室、商談に使う会議室と言った来客用の部屋が並ぶ。ホール後方から裏手にかけては商品を保管する倉庫などがあるのだろう。こちらは立ち入り禁止で来客者側のエリアと行き来できる数少ない扉は厳重に警備されている。一見すると一つの建物だが、開放的な来客向けエリアと堅牢な倉庫エリアは別の敷地と言っているほど完璧に分けられている。その認識で見れば、来客エリアにはいくつか移動ルートがあり、正面エントランスを通らなくとも外に出られる。

(ふむ、裏庭か。庭園と呼ぶには随分と木々が深い)

建物の裏手に出ると林のような場所に出た。

帝都において緑の濃い場所はあまりない。『テオレーマ』にはニクスその他にも何人がエルフを見かけた。オークションハウスの中にも植物が多く置かれていたが、森を生活の場所と定める彼らにとって、こういう場所が必要なのもしれない。

うつそつと茂る小さな緑地は月の光も街の明かりも寄せ付けず、いささか暗い。

(そういえば明かりを持っていたな)



この程度の小さな茂み、明かりがなくともヴォイドには問題などないのだが、なんとなく思い出して懐の小瓶 『無垢なるウィルオウイスプ』という瓶に詰められた青い炎を取り出す。

小さな青い光は、ようやく出番だと張り切ってくれたのか、そのサイズとは裏腹に茂みの隅々までいきわたって輪郭を明確にする。瓶の中で燃えているはずなのに、握る手の平に伝わる熱はほんのりと温かいという程度だ。ちょっとした明かりにも暖を取るにも都合がいい。便利な炎だなと見つめていると、暗がりの先から声が響いた。

「随分と聞き分けのいい炎じゃの」

鈴を転がしたような、可憐な声だ。

次いで緑地の奥から、その声に相応しい長い金の髪を持つ、美しい少女が現れた。

一見すると十代前半の幼さの残る少女。けれど、この少女は見た目通りの者ではないと、ヴォイドは瞬時に察した。

< i 7 9 0 5 3 5 | 2 1 0 6 4 >

「君が“司書”かな？」

「ほう、珍しい炎を連れていらっしゃると思ったら、そうか、おぬしは炎災の知り合いか」

マリエラと一緒に帝都へ行くといい。そうすればそのうちに会えるだろう。

かつて炎災の賢者がそう語ったことを思い出す。ということとは、先ほど感じた妙な視線もこの“司書”なのだろうか。

「オークションの間、僕の仲間を熱心に見ていたのは君かな？」  
「ほう、わらわの視線に気づいたか。」

なに、聖樹の根などというふざけた品が持ち込まれたと聞いての。真偽を確かめに来たまでじゃ。

じゃが、炎災の弟子に聖樹の女王の末裔、森の仔におぬしのような者までいるとは。よくまあ、珍妙な者共が集いに集ったものよとあきれておったのじゃ」

軽くカマをかけたつもりだったが、先ほどヴォイドが感じた視線は”司書”のものだったと、あっさりと認めた。

「……なるほど。君が『テオレーマ』の『信頼』か。”司書”がいるのだからなんでもお見通しというわけか」

“『テオレーマ』に手を出すな”

それは帝国の常識だ。樹木と天秤のエンブレムに刃を向けた者は、一人も目撃者がいなくとも、どこへ逃げおおせようと、必ず見つかり報復を受ける。

どれほど大きな組織なのか、どこまで間者を送り込んでいるのかと、噂は数多くあったが、”司書”がいたなら納得がいく。

この少女”アカシックレコード司書”とは世界の記憶の管理者だ。この世のすべてが記された世界の記憶にアクセスできるなら、『テオレーマ』にあだなす者を知ることくらいいたやすいだろう。

ヴォイドの言葉に”司書”は「なんでも見れるわけじゃない」とどこかの賢者のようなセリフとともに肩をすくめてみせる。

「それに“司書”は止めてくれんか。かようなたいした存在ではな

い。

わらわの仕事は世界の記憶を勝手に覗いて世界の秩序を乱す愚か者に注意を促す程度のものじゃ。その代わりに多少の閲覧は許されているだけじゃ。

ハイエルフゆえ並みのエルフより長く生きてはおるが、これでもまだ人の理の中におる。

……化け物どもと並べてくれるな」

「それでは何とお呼びしようか？」

ヴォイドの問いかけに、“司書”はじっとヴォイドを見た後、うむ、と小さくうなずいて応えた。

「わらわはフェイレーン・イリステリア。ふむ、おぬし、わらわを探して帝都に來たのか。よいぞ、おぬしと友誼を結んでやろう。ほれ、友誼の証にその灯をよすががよい。炎災の思いどおりは癩に障るが、その鬼火には見どころがある。このところ勝手に燃える炎ばかりで辟易しておったのだ」

なんとも一方的な申し出ではあるが、ヴォイドはこのために魔の森を渡り、マリエラたちの護衛を引き受けたのだ。確かに炎災の賢者フレイジージャの語った通り、『無垢なるウィルオウイスプ』はヴォイドを“真実に導く鍵”になつてくれた。

彼女なら、ヴォイドの過去も彼の望みを叶えるための方法も、全てを教えてくれるのだろう。

もつとも、素直に教えてくれればだが。

『無垢なるウィルオウイスプ』を渡すと、フェイレーンは瓶の蓋を開け、どこからか取り出した燭台のような器へと中身を空けた。

「かような瓶に閉じ込められて窮屈じゃったろう。今日からこの座がおぬしの席じゃ。ほうれ、魔力を進ぜよう。おぬしらの好む木気の魔力ぞ、うまかろう。これからも進ぜるゆえ、わらわの周りを照らしてたもれ。じゃが、照らすだけじゃ。どこかの阿呆のように何もかもを燃やしてくれるなよ。むしろ何も燃やさぬが尊き精霊のありようであるうぞ」

フエイレーンの言葉に応じるように、青い炎は器の上で大きく膨れ、丸い火の玉となって浮かび上がった。

(言葉を交わせるのか。どこか精霊を崇めるような響きがあるな)

ヴォイドも『無垢なるウィルオウイスプ』に話しかけたことはあったが、ただ炎が炎として揺らめくばかりで、応答じみた反応はなかった。

人の理の中にいると自称しているが、この少女も十分規格外な存在らしい。

見た目は全然違うけれど、鷹揚な態度というか雰囲気は、どこかの大酒のみの賢者を彷彿とさせて、ヴォイドは“これは高くつきそうだ”と内心でため息を吐いた。

これが、『テオレーマ』のハイエルフ、フエイレーン・イリステリアとの出会いであり、『隔虚』ヴォイドが穏やかな日々と別れを告げる始まりだった。

『炎の遣い』がガツチガチに警戒していたからか、それとも司書こ

とハイエルフ、フェイレーン・イリスティアのいるオークション・ハウス『テオレーマ』とことを構えるつもりが無かっただけか、マリエラたちは何事もなくシューゼンワルド辺境伯邸へと帰還した。

大量の錬金術素材にキャツキャツしている女子二人の歓声を聞きつけて、ウエイスハルトが顔を出したが、キャロラインが蟲入りの瓶を持っているのを見て静かにフェードアウトしていった。

この婚約者カップルの仲は少々心配だが、屋敷に入ってしまったえば警備の面では安心だ。

献上するポーシオンをどうするかで盛り上がる錬金女子二人と別れたジークたち警備男子3人は、自室で自由時間と相成った。

「ヴォイドさん、例の”司書”と会えたんですか！？ それで、情報……」

「それがね、“おぬしは仲良くない者のことが分かるのか？ 親交を深めるのが先じゃろう”と言われてね。『無垢なるウィルオウイスプ』だけ取られてしまったよ」

懐に入れておくと暖かかったのだけね、と気に入りの防寒具をとられたような様子でヴォイドはジークたちにオークションハウスで起こったことを話して聞かせた。

『テオレーマ』のハイエルフ、フェイレーンはヴォイドから『無垢なるウィルオウイスプ』を受け取ると、「お仲間が帰るようじゃぞ、用ができたら呼ぶからの！」とヴォイドの求める情報を何も語らず去ってしまったという。どうやらこれからSランカーをこき使うつもりらしい。

マリエラ達はマリエラ達で、“帝都には精霊をさらう連中がいる”と注意を促されただけで、それが誰なのかは分からずじまいだ。

「フーかき、誰がさらってんのか分かんなら、とつくに捕まってるはずだろ？ 今は分かってないだけで、そのうち捕まるんじゃない？」

気楽なエドガンに、ジークは「それはどうかな」と難色を示す。

「フェイレーンとやらは世界アカシックレコードの記憶を見れるんだぞ、情報を得るのに何らかの条件があるとしても、何の目星も付いていないとは考えられないんじゃないか？」

「えー。じゃあ、知ってて放置してんの？ 『テオレーマ』は手え出されてねーから？ エルフって精霊と仲良しなイメージあるけど、精霊が攫われようとするでもいいって立ち位置なわけ？」

「いや。フェイレーンからは精霊を貴ぶ様子があった。もちろん、どの精霊でも、というわけではないようだが、精霊を良き隣人としているんじゃないかな。少なくとも精霊が理不尽に攫われて、平気という間柄ではなさそうだったよ。」

そうすると、うかつに手を出せない相手ということもありうるね。何しろ攫われるのは精霊だ。奪われた荷を取り戻すならそれが物証になるが、精霊の多くは姿すらないし、人ではないからその言葉は証言にならない」

ぶー垂れるエドガンにヴォイドが示した可能性は、一番避けたいものである。例えば貴族がかかわっているなら、証拠もなしに、というわけにはいかない。

とりあえず、ジークは自分たちにできることを整理する。

「ニクスさんがわざわざ忠告してくれたんだ。人の目のある所で精霊を呼ぶのは控えるべきだな。俺も精霊眼を使うのは控える。マリエラのサラマンダーは言って聞かせればわかるだろうが、問題は…」

…」

「ああ、ナンナたんはしばらく屋敷でお留守番だな。しゃあねえ、オレが遊んでやっかー」

「エドガンとヴォイドさんは、明日はキャロライン様の護衛があるだろう。外縁部の大規模工房に見学に行くとかいう」

「そーだったあ！ ジーク、ナンナたんを頼んだ」

「俺が言っただけかなあ。マリエラもナンナには甘いしな」

「最近、変に知恵をつけてきたからな、ナンナたん……」

「まったく困った子猫ちゃんだね」

“力は正義”の獣人理論に付け加え、”カワイイは正義”を覚えてしまった猫畜生があの手この手でこねる様子を思い浮かべて、一同はため息をつくのだった。

### 35・フェイレーン・イリスティア（後書き）

【帝都日誌】司書がハイエルフとは。エルメラほどではないが刺激的な展開だね。byヴオイド

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141fff/>



### 36・ロボットの研究テーマ(前書き)

前回までのあらすじ：帝都では精霊が攫われるらしい。そしてヴォイドは探していた司書ことハイエルフのフェイレーンに出会う。

### 36・ロバートの研究テーマ

「おにーたま、おとと、いきまちよ」

妹、キャララインに関する一番古い記憶は、本の向こうからのぞき込んで構ってくれと強請るそんな姿だ。

丸いおでこにぱっちりとした大きな瞳の妹は、小動物のような愛らしい見た目とは裏腹になかなか頑固な上に、幼さゆえに論理の通じない相手であった。

平たく言うなら、お願いを聞いてやるまで居座って、邪険にすれば泣き出すのだ。

誰か代わりにと周囲を見渡せば、大人たちは皆ニコニコと遠巻きに眺めている。どうやら本に齧りついてばかりのロバートを、妹を使つて外に連れ出そうという魂胆らしい。

「キヤル、おととじゃなくて、お外です」  
「おとと」

はぁ、と小さくため息を吐くロバートと、本から視線を離れた兄にこぼれるような笑顔を見せるキャラライン。

仕方がない。少し遊んでやれば満足するだろう。

読書の邪魔をされるのは不愉快ではあるのだが、外の空気を吸えば頭が冴えてかえってはかどることもある。

ロバートが本を置いて立ち上がると、開いたその手をすちゃっとキャララインが握る。ぷにぷにしたギモーヴのような手だと思いな



「……幸せそうですね、キヤル」

「うふふ」

「うなんな」

その「うふふ」と「うなんな」は何なのか。

人間サイズのでっかい猫の毛皮に指を沈ませ、満足そうな笑顔を浮かべるキヤロラインと、これまた「まんざらでもない」みたいな顔をするナンナ。

キヤロラインがモフっているのがただの猫なら問題はない。しかしナンナは人語を解する獣人、ヒトでもあるのだ。年頃の少女が同世代の少女を昼間っから愛でるといいうのは、問題があるのではないか。しかも、ここには婚約者のウエイスハルトも同席しているのだ。ここは兄として「はしたない」と諫めるべきではなからうか。

（相思相愛の間柄、特にウエイスハルト殿がキヤルを気に入っていたと思っていたのですが、想い人が駄猫にうつつを抜かしているのはまずいのでは……）

キヤロラインが帝都入りしたのは最近のことだ。それまでは義実家で義母や義姉に囲まれ花嫁修業をしていたはずで、家格の違いも相まってさぞや苦労しただろうし、ようやくウエイスハルトの下へ来られたのだから、これまでの会えない時間を埋めるように思いを深め合っているのだろうと思っていたのに。

縮まったはずの二人の間に、ニヤンコが挟まっているのはなぜなのか。

（ああ、そんな笑顔でネコを撫でて。ウエイスハルト殿が気を悪くされるのでは……）

ヒヤリ。

ウェイスハルトの方から漂う冷気にロバートに緊張が走る。

(やはり、キャルが駄猫にうつつをぬかしているから……)

チラリ。

ロバートが恐る恐るウェイスハルトの様子を窺うと。

ニヤニヤニヤ！

ウェイスハルトはウェイスハルトで、氷魔法で小さな蝶を作りだし、守護精霊ガウウを釣って微笑んでいた。

(似たもの同士　！！)

氷の蝶を追いかけたガウウは、そのままナンナに突っ込んでいく。実体はないはずなのに、ナンナにぶつかってガウウは跳ね飛ばされてころりんと転がり、びっくりした表情でびびりと体を震わせた。

(……かわいいじゃないですか)

これは鉄面皮のロバートも思わずうなる可愛さだ。ほっこりして肩の力が抜けたロバートがふと顔を上げて見ると、ウェイスハルトとキャロラインが互いに顔を見合わせて、とても柔らかく微笑みあっていた。

(どうやら、キャルの手はこれからはウェイスハルト様がひいて歩いて下さるようだ。私も自分の道を専念すべきですね)

兄として肩の荷が下りたような、繋がれる二人の手の間に毛玉が

挟まってそれで心配なような。

少なくとも錬金術家との繋がりのためとはいえ、20歳も年上の相手との政略結婚が白紙になってよかったと、ロバートは心から思った。

郷愁にも似た感傷に浸るのも悪くはないが、ロバートはそのために辺境伯の帝都邸を訪れたわけではない。

……というか、キャロラインには悪いのだが、妹の顔を見に来たわけではないのだ。

「今日は、マリエラ……さんに用があつてきたのですが」

呼び捨てにすべきか敬称をつけるべきかはたまた「姉弟子」あたりが妥当だろうか。少し迷った末にさん付けにして、ロバートは来訪の目的を伝えた。

「え？ 解呪のポーションですか。ロバートさん、なにやらかしたんですか？」

「失敬な」

「お兄様……」

「キヤルまでなんですか、その目は。研究の一環で必要になっただけです」

ロバートがわざわざマリエラを訪ねてきた用件は、ポーションの錬成依頼だった。

帝都では金さえ出せばポーションなどいくらでも手に入るのだが、解呪ポーションとなると些か外聞が悪いのだ。迷宮に潜っているならいざ知らず、貴族が求めると呪われるような何ごとかがあったの

ではと勘繰られる。

特にロバートなど前科があるから、キャロラインにまで疑いの眼差しを向けられる始末だ。

「ロバート様は何の研究をなさっているのですか？」

「……あつ」

場の空気を紛らわそうと気を使ったのだろう、ジークが振った話題にキャロラインが小さく声を上げる。

「君たちに理解できるとは思いませんが。よろしいでしょう、簡単に説明してあげます。私の研究テーマは『神秘的エネルギー相互変換の阻害要因とその除去方法の確立』と言いまして……」

(ジーク……)

(すまん……)

研究者なんて人種にとって、研究テーマというのは地雷の話題なのだ。

嬉々として聞きなれない専門用語をガンガン混ぜつつ話すロバート。一生懸命話しているが、理解してもらおう気はおそくない。

それでも話の内容から推測するに、ロバートは魔力や呪いといったエネルギーを変換する方法を模索しているのだろう。ロバートは語らなかつたが、最終的な目的は魔力や呪いを《命の雫》に還元することなのだと思う。

錬金術師のいない迷宮都市で赤と黒の新薬に手を染めたロバートらしいテーマだ。

「まだ初期もいいところですが、従属の魔法陣を刻んだスライムに

魔力の代わりに餌として呪いを摂取させ、成長させることには成功しました。しかし狂暴化してしまいましてね。通常状態に戻す方法を検討しているのです」

「それで解呪ポーションですか。でもそれって、魔物として強くなつたってことじゃないんですか？ もしかして、魔物を解呪したら普通の動物に戻ったりするんですか？」

穢れを大量に喰らい力を蓄えた魔物は、より凶悪な魔物に変わる。ロバートの研究が上手くいけば、魔物を普通の動物に戻せるのではなからうかと思つたのだが。

「残念ながらそれは無理でしょう。呪いと穢れは似て非なる物ですから解呪で穢れは扱えません。よしんば穢れを扱えたとして、魔物は肉体的に変貌してしまっている。これは不可逆な変化でどうにかなる物ではない。」

被検体のスライムも、呪いに振り回されているだけで、別種に変化したわけではありません。ほとんど水分からなる肉体を魔力で維持する原始的な生物ですから、感受性が高いのです。ですがそれ故に呪いのような物でも少々工夫をすれば餌として取り込める」

饒舌に語ってくれるロバートだけれど、マリエラの頭では分からな過ぎて寝てしまいそうだ。キャロラインは「公務がありますので」と話が始まる前に脱出してしまっている。

マリエラより賢いジークでさえも、能面のような表情で首をカクカク揺らすばかりだ。はやく話を切り上げよう。

「よくわかりませんが、分かりました。解呪ポーションは今日中に作っておきます。でもあまりスライムをいじめないでくださいね。飼うと結構可愛いんですよ、うちのスラーケンとか特に」



クラーケンとの『瓶の中の合成生物』<sup>スライム</sup>ことスラーケンは、マリエラが魔力をあげると嬉しそうによいによいと動くのだ。主であるマリエラの魔力無しでは干からびて死んでしまうから、当然帝都にも連れてきている。数日間家を空ける時は、マリエラの作ったポーションを与えれば大丈夫だが、もしかしたらポーションに含まれる《命の雫》も摂取しているのかもしれない。

そんなことを考えながら、マリエラは、なんとなくロバートの研究にはスライムより精霊の方が向いているのではないかと思った。もつとも穢れを受けた生物である魔物に対して、肉体のない精霊は穢れや呪いに影響されやすいだろうから、弱い精霊なら穢れや呪いに触れた瞬間に消えてしまうのかもしれないが。

マリエラは、魔の森の深淵で、黒く淀んで正気さえ失っていたりユーロパージャを思い出す。

（魔の森に流れ込んでいた穢れ、あれって帝都から流れ込んでたんだよね。人が運んできてたのは、帝国ができるよりずっとずっと昔、帝都が小さな集落だったころだろうけど。穢れを運んできた人たち、あれって、贄の一族だったのかな……）

ロバートは、マリエラの知る魔の森と帝国の古い記憶を知らない。そしてアカデミーなどとは無縁に育ったマリエラも、アカデミーで研究するには予算が必要で、予算を貰うためにはテーマを承認してもらふ必要があることを知らない。ロバートがこの研究に取り組んでいるということは、彼が所属するイリデックス・アカデミー、その中枢を担う贄の一族が、ロバートの研究を有益だと見做しているということだと分からないのだ。

帝国が、贄の一族が抱える闇はあまりに暗くて、マリエラにもロバートにも、未だ見通すことはできずにいた。

### 36・ロバートの研究テーマ（後書き）

【帝都日誌】 キャル様、精霊もないし戦闘力も低いのに、ナンナを転がせるモフリスキルがスゴイ。byマリエラ

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141fff/>

### 37 工房見学（前書き）

前回までのあらすじ：ロボットの研究テーマ『神秘的エネルギー相  
互変換の阻害要因とその除去方法の確立』

### 37・工房見学

帝都には驚くほど沢山の人間が住んでいる。

その暮らしを支えているのは、大量に生産される食料であり物品だ。帝都では貴族や富豪向けの高級品だけでなく、庶民向けの品々も種類が豊富で、しかも価格は品質から見ても驚くほどに安い。大量の安価な品々を支えているのは、外縁部に建造されている大規模工房である。

迷宮都市でも石鹼や殺虫団子の大規模工房をキャロラインが運営しているが、帝都の規模は比べるべくもない。数も種類もはるかに大きく、何より生産コストが比較にならない。迷宮資源に頼れないこれからの迷宮都市の産業をどのように盛り立てていくか、そのヒントをつかむため、キャロラインは積極的に帝都で視察を行う予定だ。

今日は最初の視察ということもあり、帝都で最も大きいポーシオン工房に来ていた。ここでは低級ポーシオンや魔物除けポーシオンといったスタンダードなポーシオンを製造している。

擦り傷、切り傷、手荒れに肌荒れ、日常生活で生じる様々なトラブルをだいたいカバーできる低級ポーシオンは、冒険者だけでなく一般市民にとっても必需品でその流通量は膨大だ。

「エー、薬草は魔物の領域に近い方が生育が早いですから、当工房では魔の森に近いヘザーデル村に直営の薬草畑を設け、栽培を行っております。エー、薬草は乾燥させれば重さが五分の程度に減りますし、劣化も抑えられます。採取後ただちに乾燥させた薬草を帝都に輸送することで、エー、安定した品質のポーシオン製造を可

能にしています」

「エー」を3回挟みながら「最初の錬金術師」キャララインを案内してくれたのは、この大規模工房で一番エライ工房長だ。何かとんでもない質問が飛んでくるのではないかと、緊張した様子で施設を案内している。

工房長に先んじて扉を開けて押さえたり、見学者用のロープや手袋を用意したりと走り回っているのは、案内係の女性だという。案内専門の人員もいるし、工房には見学者用の通路に加え、低級ポーションの作り方が図示された案内板まであるから、結構な頻度で工房の見学がある様子だ。帝都に名だたる大工房というわけである。

見学者用の通路から、キュルリケやブロモミンテラといった馴染み深い薬草が、牧草の束のように乾燥し四角く成形された状態で倉庫に運び込まれてくる様子が見える。薬草は一旦倉庫で品質を確認した後、材料として供給されるらしい。

「エー、今日は、エー低級ポーションの製造工程をご覧いただきませう。工程自体は簡単なものではございますが、我が工房では、エー、1日に最大、エー、1万本の製造が可能です」

「エー」4回。1万本とはすごい数字だ。マリエラでも無理な量だろう。とんでもなく魔力の多い錬金術師がいるのだろうか。

そう思ったキャララインだったが、案内された最初の部屋にあったのは、見上げるほどに大きい魔道具とそれにつながる何本かの運送装置で、錬金術師は一人もいなかった。

「エー、こちらの魔道具の中には円盤状の破碎歯が入っておりまして、薬草を磨り潰すことができます。出口には、エー、ふるい分け

る装置が付いていますので、エー、所定のサイズより大きい薬草をこちらのラインを通して再び粉碎機に戻されます。エー、薬草の破砕寸法を揃えることで、エー、無駄のない薬効抽出が可能になります」

ゴゴゴゴゴ、ガガガガガ。

説明の音がよく聞き取れないほど工房の中は魔道具の作動音でうるさく、魔道具の密閉が悪いのか薬草の粉が舞っている。魔道具の様子を見ているドワーフの技師はマスクとゴーグルを着用し、吸わないようにしているようだ。ちなみに「エー」は5回であった。

「エー、昔は風車で薬草を挽いておりましたが、エー、魔道具の発展により設備はコンパクト化でき、天候によらず安定生産できるようにになりました。エー、次が抽出の工程です」

「エー」3回。そう言って案内された部屋にも大きな水槽の魔道具があつたが、こちらにはちゃんと錬金術師らしき人々がいた。しかし、大勢で一つの巨大な装置に張り付いて、一組は《錬成空間》を張り続け、もう一組はずっと《命の雫》を汲み上げ続けている。水槽は一回ごとに出し入れをするバッチ式ではなく流しながら連続して生成していくタイプのようで、薬草粉を自動投入しながら中の機械羽がかき混ぜて、薬液を抽出しながら次の工程に送るようだ。

< i 7 9 4 6 3 8 | 2 1 0 6 4 >

「《錬成空間》」「《錬成空間》」「《錬成空間》」「《錬成空間》

《「《錬成空間》」

「《命の雫》」「《命の雫》」「《命の雫》」「《命の雫》」「《命の雫》」

命の雫》「

「これは……」

「エー、こちらが抽出工程です。10人で班を作り、エー、1班が槽の表面に薄く錬成空間を貼り、もう1班で《命の雲》の汲み上げに専念することで、エー、これだけのサイズの抽出容量を確保することに成功しました。エー、ここからここまでの水槽で抽出を行い、こちらで分離します。薬草粉は軽いですから二段階の浮上分離工程のあとこちらのフィルターを通りまして、ろ過されたポーションがこちらの魔道具で瓶詰めされて出て参ります」

4「エー」。案内された次の工程では、説明通り運送装置コンベアの上にポーション瓶に詰められた下級ポーションが流れていた。それを運送装置横に並んだ工員たちが封をして箱に詰め、別の錬金術師の集団が《薬効固定》をかけている。

「当工房では錬金術師の魔力が切れないように、エー、一定時間で持ち場を錬金工程から非錬金工程、薬草の検品やポーションの瓶詰といった魔力を必要としない作業ですね、こういったものにオートーションしています。こうした効率的な錬金術師の運用と最新の魔道具設備によって、エー、当工房ではポーションの大量生産を達成しております」

一通りの説明を終え、額の汗を拭きながらも自慢げな表情を見せる工房長。慣れてきたのか「エー」は2回。

それはさておき、確かにこれはすごい設備だ。

これならば、汎用性の高いポーションを大量に製造することも可能だろう。なにより、未熟な錬金術師でも安定した製品を作ることができる。

この大工房には10人一組の班が何十とあるらしい。つまり何百人もの錬金術師もどきが働いているわけだ。一人ではまともにポ-



シヨンも作れない、レベルの低い錬金術師を雇えば費用も安く抑えられるだろう。

錬金術というスキルは持っている者が非常に多いけれど、習熟するのに大量の経験を要する。ポーションを作るには材料がいるから、一人前の錬金術師になるには材料費だけでもとんでもなくかかるのだ。マリエラのように魔の森の中に住んでタダで薬草取り放題な環境でもなければ、中級ポーションすらまともに作れるようになれない。

それは多くの者が錬金術師として食べて行けないということだ。しかしこの工房ではたくさんいる錬金術スキル持ちを活用して、大量に安くポーションを生産している。働く錬金術師たちも、生きていくには困るまい。

「帝都ではこういった方式で、ポーション以外の日用品や、加工食品や紙製品など、様々な品を大規模に製造していますのね？」

「エエ、エエ。安価に出回る製品だけではございませんで、細々とした商いを行う個人店を除きまして、大抵の製品は大なり小なり工房で作られてございますね。エー、なんでしたか、ご婦人に人気のチョコレートショップ……ああ、マダム・ブランでしたかな。ああいった、高級店も店舗とは別に専門の工房を構えておりますな。なんでも、酷く手間暇がかかる菓子だそうでした、エエ、エエ」

マリエラも料理から石鹸など日用雑貨の製造、果ては洗濯から風呂上がりの髪の毛の乾燥に至るまで錬金術を使い倒しているから、帝都でも錬金術が活用されていること自体には驚きはない。帝都の発展ぶりを思えば、やはりと思わなくもない。戦えない者も働ける場所が多いのは単純にいいことだとも思う。

大規模工房の仕事は給料が良いわけではないし、単調で面白味に欠けるから人気のある職種ではないが、錬金術師であれば雇ってもらえるし安定した仕事ではある。だから帝都では子供に錬金術のスキルがあれば、とりあえず錬金術師にするのだと言う。

しかし、この工房のありようと工房長の話に、キャロラインは強い違和感を覚えた。

（せっかく錬金術師になれたというのに、これでは上達が見込めませんわ。誰でも低級ポーションや必要な品が買えるというのは素晴らしいことですけれど、彼らの師匠はこの状況を嘆かないのでしょうか）

錬金術師になる　、コントラクト地脈と契約するには師匠の存在が不可欠だ。ずっと錬金術師にあこがれていたキャロラインは、聖樹の精霊イルミナリアに導かれて地脈へ至り、マリエラの導きで再びこの世に生を得たあの体験を、昨日のことにように覚えている。地脈という場所で大いなるものに触れた感覚、そして、世界へと呼び戻してくれる師の暖かさ。あの瞬間、キャロラインはマリエラがずっとずっと積み上げ培ってきた大切なものを譲られたのだと理解したのだ。意志を継ぎ、使命を継ぐ後継者となるために、師の一部を譲られたのだとそう感じた。

だからこそ、この状況が理解できない。

あれほど大切なものを譲られておいて、どうしてこの錬金術師達は、己の技を磨くこともせず、ただ日常の糧を得ることで満足しているのだろうか。そして、そういう者がこれほど多くいるというのに、彼らの師匠は彼らを錬金術師にしたのだろうか。

それにもう一つ、工房での様子を見て、どういふことかと驚いた

こともあった。

「工房長さま、質問があるのですけれど。錬金術師にするには師匠が必要なではありませんか？ 地脈と契約して戻ってくる時に師匠は錬金術の経験を消耗してしまいます。せっかく錬金術師にしていたのに、師匠は何もおっしやらないのでしょうか。」

それと、こちらは疑問なのですけれども、他の方が汲んだ《命の雫》を別の方の《錬成空間》に封じ込めるのはできないはずではありませんの？」

《命の雫》は《錬成空間》から出すと大気に解けて消えてしまう。そして、《命の雫》を閉じ込める《錬成空間》は同一人物の者でないといけないのだ。

例えばマリエラが《命の雫》をジャバジャバ汲んでも、キャロラインの《錬成空間》でそれを受け止めることはできない。『地脈の欠片』を装置を使って溶かすときに、複数が《錬成空間》を張ることはあるが、それはあくまで補助の目的。メインの《錬成空間》が破れないように上側から添えるだけだ。

なのにこの工房では、魔道具の水槽沿いに複数人で一つの《錬成空間》を構築していた。あれは、いったいどういうカラクリなのか。キャロラインの質問に、工房長は「ああ！」とばかりに声を上げる。予想された質問だったようだ。

「ここにいる工員たちは、皆、<sup>マス</sup>量産型錬金術師ですから」  
「<sup>マス</sup>量産型とは……？」

「名前の通り、大量に、まとめて<sup>バインディング</sup>結脈式典でラインを得た錬金術師達です。エー、いちおうラインも錬金術スキルを持っていますから、便宜上、錬金術師と呼んでいます。きちんとした師弟関係を持つ<sup>ユニーク</sup>錬金術師とは別物とだけ思ってくださいね。」

「エー、複数で錬成できるのも量産型錬金術師だからです。結脈式典<sup>シグ</sup>でラインを得とりますから、ラインやら何やらも規格化されているわけですね。もちろん式典の時期と場所によって相性なんかはありますから、その辺りは班編成で考慮します。それから、エー、均等に《錬成空間》を張れたりするのは魔道具の調整機構あつてのことですね。」

「エー、なんでしたら、魔道具に詳しい者を呼びましょうか？」

「結脈式典<sup>バインディンク</sup>でラインを得た、規格化された量産型の、錬金術師……？」

初めて聞く情報にキャロラインは驚きを隠せない。その様子に、何か不興を買うようなことを言ってしまったと勘違いしたのだろう、工房長は焦ったように説明を続ける。

「エー、エー、もちろん帝都には、特級ポーションを錬成できる著名な錬金術工房もございます。エー、名のある錬金術師に師事できた錬金術師の皆様は、きちんとした、エー、地脈契約を締結の上、修練に励まれて、エー、次代の錬金術師を目指されております。」

当工房の工員たちを仮にも錬金術師と申ししたのは、エー、あくまで例えと申しますか、所詮、量産型<sup>マス</sup>は量産型。名ばかりの、エー、見習いとも呼べない者ばかりです。エー、汲み出せる《命の雫》の量をご覧になれば分かる通り、錬金術師の皆様とは、エー、契約する深さが違いますので、ハイ」

8回も「エー」を挟みながら釈明をする工場長。

「どうやら、マリエラやキャロラインのような師匠によって地脈契約<sup>クリントラクト</sup>を果たした錬金術師達は、量産型錬金術師と同じ錬金術師として見てはいないらしい。」

その気持ちはわからなくはないのだが、量産型錬金術師というも

のは、いったいどうやってラインを得たというのだろうか。

### 37・工房見学（後書き）

【帝都日誌】バインディング 結脈式典でラインを得た、マス 量産型錬金術師？ それって一体…… by キャロライン

イケメン眼鏡とイケメン眼鏡親父が勢ぞろいする

「生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい（輪環の魔法薬）」  
19章前編は、

B's-LOG COMIC Vol.131（12月5日配信）  
掲載予定です。

本日、ヴォイドの帝都義実家訪問SS更新しています。  
よろしければ、輪環の短編集をどうぞ。

<https://ncode.syosetu.com/n9801gu/>

ちよつぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

38・孤児院にて（前書き）

前回までのあらすじ：キャロラインは視察先で量産型錬金術師の存在を知る。

### 38・孤児院にて

キャロラインが大規模ポーション工房を視察していたちようどその頃、マリエラとジークは孤児院を訪問していた。

ちなみにナンナは留守番だ。正確にはお腹いっぱい食べさせて寝ている間にこそつと出てきた。猫好きメイドさんが「お任せください！」とガッツポーズをしていたから、起きても相手をしてくれるだろう。

「マリエラ、帝都でも孤児院に支援するのかわ？」

「うん、ジーク。寄付だけだけどね。ほら、オークションで結構お金入ったでしょ？ お土産代には多すぎるから」

「確かに馬車数台分の酒が買えるな」

マリエラ達が孤児院を訪問したのは、“帝都に必要なポーション”という自由課題のネタ探しの意味合いもあったが、自らも孤児院だったマリエラは迷宮都市でも孤児院に一定の支援を行っていて、その一環で寄付をしにやってきたのだ。特に今はオークションの売り上げで懐が温かい。師匠に馬車数台分の酒をプレゼントするより、寄付する方が有益だ。

迷宮都市に来てすぐの頃は、孤児院の子供たちが採取したアプリオレを買い取る程度だったが、迷宮が討伐されてからは魔の森の浅い場所に薬草畑を作り、そこでいくつかの薬草を育てる事業を支援している。

迷宮が討伐されて迷宮都市は人の領域になったから、城壁の内側では薬草の育ちが悪くなっている。錬金術師の大量増加も相まって、



将来的に薬草不足が予想されるのだ。そこで、シューゼンワルド辺境伯家が農地や畜産面積の拡大と合わせて薬草畑の開墾政策を打ち出した。

マリエラは、その計画に一部出資し、かつ魔の森における薬草畑の管理に関する技術指導をする代わり、孤児院の子供達でも採取ができる一番安全な場所をもらったというわけだ。

ちなみにマリエラが200年前住んでいた魔の森の小屋の跡地は少し離れた場所にあつて、魔の森になれていない非戦闘職がたどり着ける場所ではないから、今もマリエラ専用薬草園として利用している。

薬草畑と言っても孤児院向けの畑には難しい種類は植えていない。魔の森の中にあるなら、根っこから引き抜かない限り放っておけば勝手に生えるようなものばかりで管理は楽だ。子供たちが採取した薬草は『木漏れ日』でも買い取るが、主としてマリエラが先生をしている錬金術学校で教材として使っている。

「お金だけ渡すのは簡単ですけど、それじゃ孤児院の子供たちは金額分の食事や物資を得られるだけです。ですが自分たちで薬草を育て、採取してお金を得れば、食事や物資に加えて生きるための方法を身に付けることができると思うんです」

子供たちが採取できるようなありふれた薬草は単価も安いし、それだけで生活が成り立つほどの収入にはならない。しかし、学びのきっかけとしては悪くないだろう。

マリエラの考えに孤児院の先生方はもちろんレオンハルトやウエイスハルトも共感してくれたから、教材として一定価格で買い取るルールであるとか警備兵の巡回など、諸々のサポートを取り付けることができた。

運営が始まったばかりでまだ様子見の段階だけれど、需要と供給が落ち着いて孤児院が安定した収入を得られるようになれば畑ごと寄付するつもりでいる。

「帝都に必要なポーション」かあ。迷宮都市なら力になれそんなこと、なんとなくわかるんだけどな」

「何かヒントが見つければラッキー、見つからなくても寄付が目的なんだからそれでいいんじゃないか」

「そうだね。私みたいな平民目線だからこそ分かることもあるかもだし」

薬草畑のことを考えながら、孤児院に向かう道中、そんな話をするマリエラとジーク。帝都に幾つもあるなかで、ここがシューゼンワルド辺境伯家から一番近い孤児院だ。寄付金の他にも焼き菓子をつつぱり焼いて持ってきた。たくさん焼いてきたから足りると思うがここには何人くらいの孤児が住んでいるのだろう。

「こんにちはー」

「だれー？」

「おきゃくさんー」

孤児院の門をくぐると、中庭で十数人の子供たちが遊んでいた。

建物は古いが温かみのある雰囲気、ピカピカとはいかないが庭も建物もそれなりに掃除がされている。遊んでいる子供たちも質素な身なりではあるが清潔で、痩せてもおらず肌艶もいい。

迷宮都市でも孤児は将来の戦力や労働力として保護されていたけれど、ここはさらに恵まれているように思えた。

「あ、チョコレートのおねーちゃんだ」

「あれ、あなたは確か、リリアちゃん？」

マリエラたちに声をかけてくれたのは、『マダムブラン』のチョコレートショップで会った兄妹のリリアちゃんだった。リリアちゃんはこの孤児院の子だったらしい。今度はマリエラのことを覚えていてくれて嬉しいが、チョコレートとセットとは。

(しまった、チョコレートも持ってくるんだった)

キラキラしたリリアちゃんの目に”チョコレート”と書いてある気がして、内心焦るマリエラ。

腹持ちする焼き菓子がいいだろうと大量に作って持ってきたが、チョコレートは持ってきていない。

猫にチョコレートは毒なのだ。マリエラが菓子を作ると、ナンナが「なんな？」と寄ってきて目にもとまらぬ速さでつまみ食いをするものだから、チョコレートなんて入れられないし、買ったためたお土産のチョコレートも鍵のかかる箱に封印してある。

チョコレートが欠片も入っていない焼き菓子を申し訳なく思ったマリエラだったが、手荷物の大きなカゴから甘い匂いが漂うの感じ、リリアちゃんが「いい匂い」と顔をほころばせる。菓子なら何でもいいらしい。

「これはお土産だよ。先生はいる？」

「せんせいはいないけど、おてつだいのおねーさんはいるよ。おねーさん。おきやくさん」

「おきやくさん」「おかしくれるって」「たべたーい」

いつのまにかわらわらと寄ってきた子供達が、マリエラとジーク

を取り囲む。

モテモテだ。モテ期というやつだろうか。前にもこんなことがあった気がする。あの時は確かクッキーを渡した瞬間にモテ期が去っていったのだったか。

子供たちの騒ぎっぷりに慌てて出てきたのは、マリエラと変わらないくらいの年頃の女の子だった。なんでも孤児院の卒業生で、仕事が休みの日によく手伝いに来るらしい。

「今日はいにく式典で、院長とか先生は不在なんス。あつ、でも寄付はちゃんと渡しますので！ みんなもほら、見えますから。大丈夫ですよ、大丈夫！ ああ、いい匂いスね。バターたっぷり MADレー又っスか。しゅごい、じゅるっ」

なんだか頼りない感じたが、お菓子があれば結構幸せというタイプっぽいので、寄付金を猫ババしたりはしないだろう。袋に入れた寄付金を渡した時でなく、MADレー又を渡した時に「ありがとうございます、ありがとうございます」と言っていたくらいだ。

寄付金の入った袋が小さかったからか、それともマリエラの見た目に大した金額が入っていないと思ったからか、中身を確認せずにしまっていたが袋の中には金貨である。開けたらびっくりするに違いない。名前も聞かずに受け取ったことを後で院長先生あたりに叱られるんじゃないか。

「帝都の孤児院は国からの援助とかあってですね、みんな不自由なく暮らせてるんすが、こういう甘いお菓子はちょっとムリってか。

お兄さんの方は冒険者ですか？ いいなー、稼げるんでしょ？

美味しいもの食べ放題だし、観劇とか楽しいトコ行き放題じゃん。

あーしもそういう才能欲しかったんすけど、あいにくなんもなくて、でも、大規模工房に就職できて、毎日石鹸作ってるんす。でも薄給

で。今月、お芝居見過ぎてちょっとピンチで。休みの日とかこ  
手伝えば、御飯食べさせてもらえるんで、節約、節約う、みたいな  
それに今日みたく運がよければこんなお菓子も。ふあゝ、うまつ。  
これ、バターも卵もたっぷりでしゅんごい贅沢うゝ」

留守を任されているはずなのに、真っ先にマドレーヌをバクバク  
食べ始めるお姉さん。たくさん焼いては来たが、そんなに食べてい  
きわたるのかと思ったら、「ここにいることあと10人くらいしか  
いませんから、足りるっす」とのことだ。

「こんなに大きな孤児院なの？」

建物のサイズから50人くらいいるかと思っただが、その半分くら  
いしかないらしい。

マリエラの様子に来客者に孤児院の現状を説明せねばと思ったの  
か、手伝いのお姉さんは食べながらも孤児院の現状らしきものを語  
ってくれる。

「あーしが生まれる前くらいから？ 魔物も出なくて孤児も少ない  
んすよー。なんか、正しい皇帝陛下が即位されてるからとか、先生  
言ってたな」

「正しい皇帝？」

「うん、なんかそうらしいっす。間違った皇帝が即位すると、魔物  
は出るし、作物は枯れるしでなんか大変って。しらんけど」

とても興味深い話だが、詳しくは知らないらしい。別に興味もな  
さそうだ。あと、お姉さんは食べるばかりでマドレーヌを配ってく  
れない。子供たちの圧がすごいので、話を聞きながらマリエラとジ  
ークが子供たちにマドレーヌを配っていく。

「はい、どうぞ」「ありがとう」

「ほら、たくさんあるから」「わたしにも」

「はい、次の人」「うなんな」

「うなんな？ …… ナンナ!？」

配っている最中に変な声が聞こえたと思ったら、なんと、ポリモーフ薬と認識阻害の魔法陣付きスカーフではつちり外出仕様に変身したナンナが、子供たちに混じってマドレーヌをばくついていた。

「ナンナ、どうやってここに!」

「甘い匂いを追って来たんな」

「メイドさんは!？」

「ナンナにかかればイチコロなん!」

ドヤアアア!

ナンナ渾身のドヤ顔が少しむかつく。

あと、メイドさん。あれだけ「お任せください!」と豪語しておいてこれか。時間的に見て、まったく止められなかったんじゃないか。

もともと、気が付けば近くにいてびっくりするほど隠密行動に長けていたけれど、シューゼンワルド辺境伯家のスカーパーメイドの監視をすり抜けてくるとは、認識阻害の魔法陣付きスカーフのおかげで隠密行動に磨きがかかっているらしい。獣人の姿はまずいということも理解して、ポリモーフ薬で人化し服も着替えているあたり、いろいろ学んでいるようだ。猫のくせに。

「ナンナ、マリエラ守るなん」

「今は私よりガウウを守らなきゃダメなんだよ?」

「うなんな」

ちゃんと説明したはずなのに、ついてきてしまつとは。

分かっているのかわからないのか、いつもの便利な返事のおかげで判別はできないけれど、来てしまったなら仕方ない。

「いい、ナンナ。絶対に、ぜーったいにガウウを出したら駄目だからね!」

「うなんな!」

返事だけはいいナンナの様子に、「トラブルの予感しかないな」とマリエラとジークは遠い目になった。

### 38・孤児院にて（後書き）

【帝都日誌】駄ネコに孤児院訪問デートを邪魔された。byジーク

<i794699—21064>

眼鏡ファミリー勢ぞろいな「生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい」輪環の魔法薬」

は、B・S・LOG COMIC Vol.131（12月5日配信）掲載です。

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>



### 39・結脈式典(前書き)

前回までのあらすじ：キャロラインが大規模工房で量産型錬金術師なる存在に疑問を感じていた頃、マリエラは孤児院へ。そこにおいてきたはずのナンナも合流する。

「えつと、あと10人くらいいるっていう子供たちはどこですか？」  
「あ、あーしが渡しときます。大丈夫ツス。みんなが食べないよう  
に隠しとくツス」

この孤児院にはあと10人くらいいると聞いたばかりだ。その子  
たちにマドレーヌを配らなければと思つたら、手伝いのお姉さんが  
手を出してきた。

……本当に大丈夫だろうか。このお姉さんが一番危ない気がする。  
寄付金をネコババする悪人ではなさそうだが、マドレーヌに関して  
は”なかったこと”にされそうだ。「お腹の中にしまったんスー」  
とか言いながら。

「えつと……、ここにはいないんですか？」

バインディング  
「結脈式典スよ。先生たちと一緒に」

マドレーヌを守ろうと抵抗を試みたマリエラだったが、「結脈式  
ンク  
典」という初めて聞く単語に頭を傾げた隙に、お菓子に餓えた狼な  
らぬお姉さんにサクツと奪われてしまった。まだマドレーヌが数十  
個入った籠を抱えたお姉さんは「大丈夫ツス、大丈夫ツス。奥にし  
まってくるツス」と言つて中へと入つていったきり、なかなか戻っ  
てこない。隠れてつまみ食いをしているに違いあるまい。

マドレーヌの運命はさておいて、「結脈式典」バインディングとは何だろう。

「ジーク、結脈式典バインディングって知ってる？」

「いや、初めて聞いた。俺も帝都で育つたわけではないからな」

初めて聞いた単語に頭を傾げるマリエラとジーク。

子供たちの半数はマドレーヌとお姉さんを追って孤児院の奥へ、残る半数はナンナと遊んでいるからほかに聞けそうな人もいない。

お菓子も配り終えたし寄付金も渡した。とりあえずナンナを連れて帰ろうかと思った矢先、孤児院の入口の方から声がした。

「バインディング結脈式典っていうのはね、錬金術スキルを持つ子供にまとめてラインを結ばせる儀式だよ」

思わぬところから得られた答えにマリエラが振り返ると、そこにはロキ少年が立っていた。

「にいちゃん！ リリアにあいにきてくれたの？」

「やあ、リリア。会いたかったよ」

大好きな兄の姿を認め、駆け寄るリリアちゃん。ロキはにこやかに答えるけれど、遊ぼうと手を引くリリアの頭をなでてあやしつつも、マリエラとの会話を続けた。

「知らない？ 帝都にしかない式典だけど、結構有名なんだけどな。この式典のおかげで、錬金術スキルを持つほとんどの子供がラインを結ぶことができる。会場は開かれていて見学は自由だよ、気になるなら見に行ってみる？」

「ほとんどの子供がラインを？」

また、「帝都にしかない」か。しかも、ほとんどの子供が地脈契約できるなど、にわかには信じがたい内容だ。

錬金術スキルは持つ者が多い非常に非常にありふれたスキルだが、ポーションを作るには《命の雫》が必要で、《命の雫》を汲みだすには

地脈コントフラクトと契約してラインを結ばなければならぬ。そしてその契約には師匠の存在が不可欠だ。地脈契約の際に師匠は自らの経験の一部を弟子に委譲するから無限に弟子を持つことはできないし、錬金術師であっても未熟な者は儀式自体が執り行えない。

結果、適性がある者はたくさんいるが、錬金術師になれるものは一握りしかないのが実情だ。マリエラの弟子の数がおかしいだけで、普通は弟子なんて10人いれば多いほうで帝都中の錬金術師が持てるだけ弟子を持って、錬金術スキルを持つほとんどの子供を錬金術師にすることなんてできっこない。

そんな不可能を可能にする式典が、帝都ではありふれたもので、しかも見学自由とは。

レビスバインディングと言い、この結脈式典バインディングといい、帝都には錬金術の常識を超えるものがどれほどあるのだろうか。

知らずに済ますわけにもいくまい。

マリエラはロキに案内を頼むと、結脈式典バインディングとやらを見学することにした。

ロキに連れられて出向いた先は、外壁近くの建物だった。門扉のすぐ近くに小さな講堂のような建物が建っていて、どうやらここが会場らしい。建物と壁で仕切られた敷地の奥には塔が見える。リリアちゃんと初めて会った帝都中心の塔とどこか似た塔だ。あの場所ほどではないが、ここも他よりいくらか《命の雫》の気配が濃い。

そして、入り口の看板には『イリデッセンズ第4アタノール』の文字。贅の一族が中枢を担う錬金学派、イリデッセンズ学派の施設に間違いない。

「アタノールかあ……」

思わず漏らしたマリエラに、ジークが「アタノールとはどういう意味だ？」と尋ねる。

「アタノールって“炉”って意味だったと思う。錬金術もね、昔からずっと同じやり方じゃなくて、だんだん進歩してるんだよ。今では《錬成空間》の中で温度上げたり抽出したり、それこそ熟練度次第でなんでもできちゃうんだけど、昔は《錬成空間》の替わりに『哲学者の卵』って呼ばれる容器を使ったり、温度を上げるのに専用の炉を使ってたんだって。その炉の名前が『アタノール』だったはず」

「つまりこは”4番目の炉”なのか？」

「そうなるね」

「うなんな」

神妙な顔のマリエラとジークを見て、これまた神妙な顔で相槌を打つナンナ。

うなうな頷いているけれど、何もわかってないに違いない。とはいえ、マリエラ達だってまだ何もわかっていないのだ。

「もう始まつてるから静かにね」

先導するロキについて中をのぞくと、孤児院の先生らしき人達が見守る中で何やら儀式が行われていた。

講堂の床は石畳で、大きな円形の魔法陣が描かれている。なかなか複雑な魔法陣だ。これほどの魔法陣を見たのは、師匠に転写された以外では初めてだ。簡単な魔法陣ならポジションなどに刻まれているけれど、これだけ複雑なものが現在も使われているとは驚き

だ。しかも、何度も使えるようにだろう、石畳に彫り込んである。  
魔法陣の中央には十人足らずの子供たちが、手にポーション瓶を  
持って座っている。

「才ある子らよ、アストラルポーションを飲み旅立ちの準備を始め  
なさい」

「はい、導師さま」

部屋の奥、一段高くなった場所に立つ老人が厳かに語り掛けると、  
子供たちは手に持ったポーションを飲み干し、たちまちくたりと意  
識を失っていく。

子供たちの眠る魔法陣の外周部には、魔法陣に繋がるように等間  
隔で小さな円形の陣が描かれていて、5人の老人が座っている。老  
人たちも別のポーションを飲んだのか、意識はないようだ。

「さあ、子らよ。なにも恐れることはありません。そこに広がるは  
大いなる大地。この帝都の大いなる礎いしずえ。この地に生まれしヨハンの  
民よ、その名を大地に刻みつけ、大地の慈悲をいただくのです」

< i8000752—21064 >

導師さまと呼ばれた老人が語り掛けると、子供たちの《命の雲》  
が薄くなるのをマリエラは感じた。おそらく肉体を離れて地脈へ潜  
っていったのだろう。

「あれが結脈バインディング式だよ。

周囲の老人は大規模工房を退職する人たちなんだ。もう錬金術は  
必要ないから、今まで働いて培った経験を子供たちに与えることで、  
最後の勤めを果たしてるんだ。まあ、立候補すれば退職金が上乘せ

されるからってというのが大きいらしいけど。

あそこにいる立派な衣のお爺さんは、メトナル中宇の導師。ここの責任者だね。メトナル中宇っていうのは、このアタノールとかバインディング結脈式典を取り仕切る人たちの組織の名前。イリデッセンスにはいろんな組織があるんだよ。

で、真ん中にいる子供たちが新しく錬金術師になる子供たち。目覚める頃にはラインが得られてる」

儀式を邪魔しないように、小声で説明してくれるロキ。

マリエラは講堂中を見渡してみる。ここはコントラクト地脈契約する場所のはずなのに、精霊の姿を全く見ない。

「精霊はいないの？」

地脈から戻るときは、あの魔法陣を通じて周囲の老人たちが子供たちを呼び戻すのだろう。けれど精霊もなしにどうやって地脈に潜ったのか。先ほど飲んでいた、アストラルポーションとやらの効果だろうか。

マリエラの疑問を見透かしたようにロキが答える。

「バインディング結脈式典はコントラクト地脈契約と違って精霊は必要ないんだ。代わりにアストラルポーションを使う。量産型は深く潜る必要はないからね、ポーションで充分なのさ。彼らの多くは将来、大規模工房で働くからね。ライブラリだって必要がない」

「それって、錬金術師なの？」

それじゃ《命の雫》はちよろちよろしか汲めないし、ライブラリが見れないならポーションの作り方も分からないじゃないか。

「高度なポーシオンを作るのが錬金術師だというなら違っただろっね。もちろん、昔ながらの地脈契約コントラクトもあるよ。精霊に連れられて地脈に潜り、師の導きで地上に戻る。そうやって生まれた錬金術師は『ユニーク』って呼ばれてる。街中でポーシオンの専門店を構えたり、工房を持つて上級や特級のポーシオンや、お客さんの要望に合わせたいろんな珍しいポーシオンを作るのはそういう錬金術師たちだ。錬金術師って言ったらユニークのことだし、結脈式典バインディングで生まれた錬金術師は大量生産マスなんて呼ばれて、錬金術師として見られないことが多いね」

やっぱり量産型マスというのはマリエラの思う錬金術師とは別物らしい。ならば彼らは何なのか。何のための結脈式典バインディングなのだろう。首をかしげるマリエラにロキが話を続ける。

「でもね、帝都で一番必要なポーシオンは低級なんだ。普通に暮らして大怪我なんてそうしょっちゅうするもんじゃないからね。ちょっとした大怪我だって中級があれば事足りる。そして、たくさんいる帝都の市民に低級ポーシオンを安く提供するには、錬金術師ユークだけじゃ全然数が足りないんだ。

それにたくさん人間が生きていくには、ポーシオン以外にもたくさん物資が必要でしょ。それを製造するのに、錬金術というものはとても役に立つ。錬金術スキルっていうのは、ポーシオンを作る以外にも汎用性が高いし、錬金術スキル自体、持っている人が多い。

でもさ、今までの地脈契約コントラクトじゃ、錬金術スキルを持った子全員にラインを結ばせることはできない。

師匠を得ることができて錬金術師として身を立てられるのなんて、ほんの一握りの“恵まれた”者だけだ。この帝都で“恵まれた”っていうのはさ、運がいいっていうんじゃない。親が錬金術師だったとか、金持ちで子供を師匠に付けられたとか、生まれながらに家柄



とか財産とかを持つてることさ。

恵まれた人しか地脈の恩恵にあずかれないんじゃ、金持ちがどんどん金持ちになっていくだけで、帝都全体で見ればどんどん貧しくなってしまう」

200年前のエンダルジア王国でも、特級や上級ポーションを作る錬金術師は少なかったなとマリエラは思いだす。マリエラは上級ポーションを作れたけれど、どこの店でも門前払いで置いてくれるところなんてなく、安値で買ったたかれるだけだった。

「この子たちは親のない孤児で何も持つてはいないけど、親がいたって似たような子供はいくらでもいる。家柄も財産もなく、戦う力もなければ特段賢くもない。災害だとか、それこそ魔物の氾濫スタンレイドだとか、そういうのが起こったらすぐに死んじやう、そういう人ばかりなんだ。だってそれが民衆つてもんでしょ。

そしてそんな民衆がそこそこ幸せに生きていくには、お金がいる。仕事が必要なんだ。

食べ物や温かな寢床、ちょっととしたポーションだとか、清潔を保つたり娯楽を楽しめる少しの余裕。恵まれた人からすれば些細なものかもしれないけど、そんなものを手に入れるのだって、ここに居る子供たちみたいなたざる者には難しいことだよ。

だけど、こうやってすごく浅いものだけドラインを結ぶことができれば、この帝都になら仕事がある。特別な才能もない、身一つしかもっていない彼らも働いて、帰る場所を持つことができる」

ここまで一気に話したロキは、マリエラをじっと見つめながら問いかけた。

まるでこの国の思想、錬金術の在り方について、裁定を仰ぐようにするかのよつに。

「……ねえ、すじじいだと思わない？」

「おじいちゃん」

ロキの言葉に、マリエラは心から同意した。

39・結脈式典(後書き)

【帝都日誌】アストラルポジションって初めて聞いた。 byマリ  
エラ

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

#### 40・紐と猫（前書き）

前回までのあらすじ：マリエラ、ロキの案内で結脈式典を見学する。

## 40・紐と猫

「……ねえ、すごいことだと思わない？」

「思ひよ」

ロキの言葉に、マリエラは心から同意した。

同じころ、ポーシヨンの大規模工場でキャロラインが、マス量産型錬金術師に対していただいたのとは、まったく別の想いだった。

マリエラは孤児なのだ。それも錬金術以外はなんの適性も持たない、“恵まれない”子供だった。

200年前の孤児の扱いなんてひどいもので、引き取り手が見つかったからと言って子供として愛され育てられるわけではない。子供であっても働き手として引き取られるのだ。それでも才能を認められて引き取られた子は、才能に見合った仕事を通じて生き方を学んでいけた。孤児院はいつだって人手不足で、子供に教育や礼儀作法といったものは何も教えてもらえなかった。

マリエラは赤子の時に孤児院に捨てられ、そのまま育ててもらったけれど、いつまでも孤児院にいられるわけではない。このまま誰にも引き取られなかったら、どのように仕事を求めればいいのか、どううかと恐ろしく感じていた。

マリエラがなんとか暮らしていったのは、師匠に出会えたおかげだ。師匠は生きるすべだけでなく、愛情さえもたっぷり注いでくれた。

スタンビード魔の森の氾濫の夜を越え、迷宮の深淵からも生還し、今ここにこ  
うしていられるのは、幼かったあの日に師匠に出会えたからに他な

らない。

師匠に出会えなかったなら、どんな人生を歩んでいたか……。考  
えることすら恐ろしいとマリエラは思う。

けれども、今の帝都ならば。

たとえ師匠に出会えなくても、マリエラだって生きていけたかも  
しれない。

孤児院に手伝いに来ていた少女を思い出す。冒険者になれるよう  
な才能はなくて石鹸工房で働いていると言いながら、マドレーヌを  
パクパク食べていた彼女。薄給だと愚痴っていた彼女は、それでも  
生活に苦勞している様子はなかった。芝居を見過ぎて金欠だから、  
タダ飯を食べに来たのだと語り、明るく屈託なく人生を楽しんでい  
るように思えた。

彼女もまた、マリエラと同じく持たざる民衆の一人だと思う。こ  
の帝都には、そういう普通の人々が笑って暮らせる仕組みがあるの  
だ。

それは、理想郷と言っていていいほど素晴らしいことだとマリエラに  
は思えた。

「本当に、すごいことだと思う」

「お姉さんにそう言ってもらえると、どうしてだろう、すごくうれ  
しい。なんでだろう、……僕の最初の友達に少し似ているからかも  
しれないね」

マリエラの心からの賛辞に、ロキはひどく嬉しそうな顔をする。

ロキの話を聞くうちに、子供たちが意識を取り戻し始めた。子供  
たちの魂が肉体に戻ってきたのだ。地脈に接した精神が帰還するこ

とで、《命の雫》を見ることのできるマリエラの目にはあたりは瞬明るく輝いて見える。

新しい錬金術師達の誕生だ。

帝都でユニークと呼ばれる錬金術師と縁もゆかりもない彼らは、錬金術師として生計を立てることはないのだろう。けれど、今日得たラインによって彼らは将来仕事を得、生きていくことができる。それは、200年前を知るマリエラからすれば、とてもとても素晴らしいことだ。この輝きは、彼らの将来を祝福する光のようにも思える。

なのに。

錬金術スキルしか持たない凡人が、職を得て食うに困らず暮らしている、こんな素晴らしい仕組み　マス量産型錬金術師と結脈式典ハインディングというものを、帝都に来るまで聞いたことが無かったのは一体どうしてなのだろう。

作り方さえわかれば他の地脈でもアストラルポーションは作れるだろうし、魔法陣だって複製は可能だ。帝都でなければならぬ理由は、今見た限りでは見当たらないのに。

そして何よりも。マリエラの目に映る輝きが、地脈の色とは異なるどこかくすんだ光のように見えるのは、いったいどういうことなのだろう。

「まずは再誕おめでとございます。今日皆さんは、錬金術師の末席に加わることとなりました」

目覚めた子供たちに向かって導師が話を始めた。学校の集会なんかで先生が話す、眠くて長ったらしいアレだ。

このシチュエーションはマズすぎる。この先の展開が読めてしまったマリエラは慌ててナンナを振り返る。

「うなんな」

時すでに遅し。見た目はメイド服の美少女なのに、ナンナがその場で溶けだした。溶けるといっているのは比喩であって、実際にはその場にへたり込んで丸くなる途中なのだが、猫はともかく年頃の娘さんがやっつてはダメな仕草である。エドガンがこの場にいれば悩殺待たなしな、いろんな意味でアウトな状況だ。

<i800753—21064>

「よし、帰ろう」

マリエラはサクツと決断を下す。疑問はあれど見るべきものはすでに見たのだ。おかしな一団だと目を付けられる前に、この場をさっさと退散しよう。

「うなんな」

しかしナンナは、このままここで昼寝をするのだと言いたげだ。全く困ったネコちゃんである。

だがしかし。そんなナンナに秘密兵器。

ロキという第三者がいる前ではなるべく使いたくはなかったが、言って聞く猫畜生ではないのだ。ここは、実力行使に移るしかない。



「はいつ、ジーク。お願い」  
「分かった」

マリエラは腰に巻いていた飾りひもを外すと、ジークへと手渡す。ベルトをお洒落に飾るためのちよっと凝った紐で、先っぽにはふさふさのフリンジが付いたお気に入りの品である。

ジークは飾りひもを受け取ると、両手で持ってナンナに見せつけたあと。

鞭のように振るうでも、ナンナを縛るでもなく、フリフリと振り始めた。

「うななっ!？」

ジークの手により、まるで生き物のように動き出す飾り紐。そのしなやかな胴体は生きた蛇のようだし、端っこのフリンジはひらひらと舞う蝶のごとくだ。

猛獣をしつける鞭ではないが、ジークの振るう紐にナンナの瞳は釘付けで、その心はすっかり縛り付けられている。

ヒョッ。

急に振られた飾り紐に、座りかけていたナンナはすっかり立ち上がり、本能の赴くままにフリンジに飛び掛かろうとするけれど、そこはAランク冒険者の腕の見せ所。ナンナが跳躍するより先に、すぐ目の前に紐を動かしてその動きをけん制する。

遠目から見れば、疲れて座り込みそうになったメイドさんが慌てて立ち上がったようにしか見えないだろう。

すごいぞジーク。今までの影の薄さが嘘のようだ。

「帰るぞ、ナンナ。続きはエドガンにやってもらえ」

実はこれ、エドガンがナンナと遊ぶために編み出した手法なのだ。考案したのはジークだけれど、紐を操るのはエドガンの方が上手い。さすがは双剣使いというべきか両手を使って意のままに紐を操るから、ナンナが大興奮なのだ。

ちなみに、ナンナがさつさと飽きる日もあれば、長時間遊ぶ羽目になる日もある。獣人ナンナの遊びに付き合うのは疲れるので、ジークとしてはエドガンに押し付けたいところである。

「うなんな！ うなんな！」

「\*\*\*\*\*！ \*\*\*\*\*！」

案の定、もっともつと言わんばかりに「うなうな」言い出すナンナ。よっぽど興奮したのか、よく見ると、足元にガウウが現れ一緒になって鳴いているではないか。

「ちよつ、ナンナ！ 出てる！ 出てる！」

「うなんな！」

マリエラが慌てて指摘するも、騒がしくしてしまったらしい。

「そこの方、見学ならばお静かに」

導師に注意されてしまったではないか。会場中の視線を浴びてマリエラは大慌てで謝る。

「すつ、すみません。ほら、ナンナ、帰るよ！ ロキ君、今日はあ

りがとう。またね！ この娘はちょっと……、ほら、アレな感じだから、気にしないで！」

「今日の駄賃だ。妹に会いに来たのに邪魔をしたな。何かうまい物でも食べてくれ」

「うなんな」

案内をしてくれたロキに別れを告げて、逃げるように帰っていくマリエラ達。少し呆気にとられた様子のロキを、ナンナに奇行に驚いたのだと認識した様子だ。マリエラ達に目を向けた人たちも、ナンナにだけ注目してくれればいいのだが。

元凶の半透明の白猫はマリエラの後をトコトコと付いて行ったあと、しばらくしてフツと消えてしまった。

騒がしかった外野の様子に、一瞬視線が集まったものの、ほとんどの者は白猫の精霊には気づかずじまいで、「さて、みなさん」と話を再開した導師の方に向き直る。

残されたロキ少年はというと、ジークの渡したチップをしばらく眺めた後、「そうか、仲の良い兄妹なら、もっと気にかけるべきなのか」とつぶやいた。

ロキにとって想定外だったのは、ジークがロキの妹リリアを気にかけたことだった。幼いリリアには結脈式典バインディングの見学なんて退屈だらうし、騒がれても面倒だ。だから当然の判断として孤児院に残してきたが、離れて暮らす兄が妹に会いに来たなら、あっさりおいて移動したのは不自然だったかもしれない。

（あのお兄さん、意外といいやつなんだな。幸い今回は小遣い稼ぎと思ってくれたみたいだけど、今度はもつと気をつけなくちゃ。それにしても、いっつもお姉さんと一緒にいるな。一番仲がいいって

ことか。お姉さんにとっても特別みたいだし。ふふ、そうか……)

小銭を無造作にポケットに入れ、『イリデッセンス第4アタノール』を後にするロキ。彼の向かう先は当然ながら孤児院ではない。

「お姉さんたちを案内した後にまた来るから」という言葉を信じて兄の来訪を待つリリアのことなど、彼の脳裏にはもはやない。

(でもその前に……)

ロキは『イリデッセンス第4アタノール』を立ち去る前に、講堂の奥へちらりと視線を投げかける。

(野心的な老人が、余計なことをしなきゃいいんだけどね)

ロキが向けた視線の先、講堂には去りゆく者たちを追う視線が一つ。

「みなさんが、帝都の臣民として立派に成長し」

眠そうな顔をした子供たちを前に、お決まりの長つたらしい話を続ける導師の目は、目の前の子供たちではなく子猫精霊を連れて去るマリエラ達を凝視していた。

#### 40・紐と猫（後書き）

【帝都日誌】シキテン、たいくつなんな。紐でもつとあそぶんな。  
by ナンナ

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

41・幻境(クシクトベル)のハイツェル・ヴィンケルマン(前書き)

前回までのあらすじ：マリエラはロキから帝都の豊かさの秘密を聞き、その思想に賛同する。

#### 41・幻境（クシクトベル）のハイツェル・ヴィンケルマン

「以上、『神秘的エネルギー相互変換の阻害要因とその除去方法の確立 第7報』不定形魔力生物における呪術系統魔力摂取の可能性」についてロバート・アグウィナスが報告致しました」

パチパチパチパチ。

おざなりな拍手の後で質疑応答が始まる。

とはいえ、ロバートの発表に質問をしてくれるのは、座長を除けば隣の研究室のソレン・アルドリッチぐらいなものだ。

ここはイリデッセンス・アカデミーの大会議室。月例の研究報告会が開かれている。

アカデミーの研究員は、職格に応じて年数回の研究成果の報告が求められる。ロバートの場合は年3回だが、優秀かつ熱心な彼はその倍のペースで報告している。

イリデッセンス・アカデミーにおける研究分野は幅広く、錬金術に限らない。それでも主流は錬金術、次いで薬草学や魔物の生態学など素材に関するものが多い。ロバートは魔物の生態学の分野で登録しているが内容は呪術に偏っているから、残念なことにとんどの者は興味がないのだ。

ソレン・アルドリッチが質問をしてくれるのは、普段から親交があるからだ。

研究室が隣でニッチな研究をしている者同士、意気投合したのがきっかけだ。

「ロバートお疲れ。さっきの報告だけどき、あんなに細かく強度を調整した解呪ポーションなんて随分と腕のいい錬金術師と知り合いなんだね。妹さんの絡みかな？」

報告会が終わった後の会議室。そこには議論を続けたい者たちが自然と残りグループを作る。

そんな集団とは無縁とばかりに退出しようとするロバートに、ソレンが声をかけてきた。

痩せぎすというよりは華奢という表現がぴつたりな瘦身に、後ろで一つにまとめたボサボサの長い髪。ぶかぶかの白衣が少し薄汚れているのは、ソレンの専門が魔法生物だからだろう。獣人人化の変<sup>ボリ</sup>身薬を開発した時、ロバートが持ってきたミリフィカ・スネイルもソレンが飼育したものだ。

眼鏡とそばかすばかりが目につく地味な人物だが、よく見れば顔立ちは悪くない。身なりに気を使えば女性が放っておかなさそうだ。

「まあ、そんなところだ」

ただの研究者同士として知り合ったソレンだが、話を聞いてみると、アグウイナス家と古くから親交のあるアルドリツチ家の出だと言うから、知った時は声を出して驚いたものだ。

アルドリツチ家は帝都の錬金術師の家柄で、ソレンの兄、ステファンがキャロラインの元婚約者だったと言えば、付き合いの深さがあるかがえるだろう。

「帝都の錬金術師にそんな伝手があるんだ。兄さんが聞いたらまたぶつぶつ言いそうだな」



「兄君、ステファン殿には妹の件で多大なご迷惑をかけた」  
「ああ、そういうのいいって。兄さんはマザコンでフケ専だから婚約が白紙になってむしろほっとしてるんだから。それよりさっきの報告だけど……」

ロバートがソレンを知らなかった理由は、母親が違つ兄弟 庶子だからだ。もちろん裏も取つてある。

相続権はなく家族として紹介もされないあたりから、ソレンの立ち位置が複雑であることは想像できるが、本人はどこ吹く風だ。研究さえできれば幸せ、というタイプの人間で、アルドリツチ家からすれば僅かな、けれどソレンからすれば十分な仕送りのお陰でアカデミーで研究できると喜んでいる。

こつこつ人物だからだろうか、義母のあたりは強いようだが兄弟仲はいいらしい。

「マザコンでフケ専」などと、ずいぶんな言われようのかつての義理弟候補に同情しつつも、ソレンと研究の話題に戻ろうとした矢先、珍しく二人目の質問者が現れた。

「良いですか？ 先ほどの報告で少々話を伺いたい」

「貴殿は確かヴィンケルマン殿」

「ご存じとは光栄だ。どうぞ気さくにハイツェルと」

「先々代皇帝の遠縁で帝都でも有数の古い家柄のヴィンケルマン殿をお名前と呼ぶなどと、そんな無礼は致しかねます」

ハイツェル・ヴィンケルマン。

ロバートの研究に予算を付けてくれている、贅の一族の幻境派クシクトベルの  
研究員だったと記憶している。

（イリデッセンス・アカデミーは開かれた学術・研究機関ですが、

その中枢は贄の一族が担っている。贄の一族の起こりは古く、帝国の黎明期にさかのぼるとか)

ロバートはハイツェルの来歴を思い出す。

贄の一族は常に皇帝の影に存在し、この国の発展と共に知識と技術を発展させてきた。その知識の一部を求める者に与え、優秀な人材を育成する機関がイリデッセンス・アカデミーだ。アカデミーに在籍する者の多くは贄の一族とは関係のない者たちだが、教授はもちろん研究員として身を立てる者の多くは贄の一族に組み込まれていく。

長い帝国の歴史を映すように、巨大で複雑に成長した組織。けれど、その全容は杳ようとして知れず、その活動は多岐にわたる。

(昔は形代カタシロ 総じて“厄”と呼ばれるような人の悪意や不運、穢れを肩代わりする生き人形を作る連中だと思っていました。とんでもない。贄の一族という名前も、中枢を担う一部の者たちを指すものか、全体をさすものなのか……。組織の範囲も名称も不確かなのに、帝国の中枢を担っているのですから。いくつか派閥の呼称は分かってきましたが、本当に得体がしれない……)

ロバートが調べた派閥の名称は3つだ。

まず、天翳シヤマン・エクと呼ばれる、形代カタシロの製作、管理を行う集団。皇帝に近い位置にいることから、おそらくトップ集団なのだろう。

次に中宇メトナル、量産型錬金術師を誕生させる結脈式典バインディングとそれを執り行うアタノールの管理を行う集団。

そして、このハイツェルが所属する幻境クシクトベルだ。

(保守的で血族主義が強い天翳シヤマン・エタトナルや中宇メトナルに比べて、幻境クシクトベルは部外者に寛

容で、私のような錬金術以外の研究にも予算を付けてくれる。それはありがたいのですが、彼らの目的が“帝国の繁栄と未来のための活動”というのが胡散臭くはあるのですよね。耳当たりの良いお題目が聞こえるだけでその活動内容も不明ですし」

出方を窺うようなロバートの態度を気にもせず、ハイツェルは友人のようなフランクな態度で話を続ける。

「家柄の古さというなら、吾輩程度の家柄、この帝都には掃いて捨てるほどありますぞ。そんなものに価値を見出すなら皇帝こそ新参者ということになる。シュトラウス君とでも呼びますかな」

「ご冗談を、それこそ恐れ多いことです。それでご質問とは？」

皇帝を「シュトラウス君」呼ばわりとは、このハイツェル、ずいぶんときわどい発言をする男だ。しかも家柄が古いということはどこで誰と繋がっているか分からないということでもある。

（失言を誘うつもりですか？ 何にせよ距離を取るべき人物ですね）

君子危うきに近寄らず。煙のないところに火は立たないのだ。こんなに煙たい人物と関わって、ファイヤーされてはかなわない。今にも「ファイヤー！」というご機嫌ボイスが聞こえてきそうだ。

そう考えたロバートは、ようやく始まった報告内容への質問に、丁寧に回答していく。

「なるほど、なるほど、実に興味深い。その研究、もっと予算を割くべきですな。吾輩、上に知り合いがいますな。ロバート君さえ良ければ進言しなくもないですぞ」

回答を聞き終えたハイツェルが微妙に上から目線な提案をしてき

た。

肝心な理論のところを理解しているように思えなかったから、ヘツドハンティングが目的だったのかもしれない。上とやらが誰かは知らないが、ロバートは伯父ルイス・アグウィナスを先帝の形代カタシロとして供した縁で、天翳シヤマン・エウのトップに伝手がある。それを知つてのことなのだろうか。

（おそらく知らないのでしょうね。実に面倒臭い御仁です。……いや、私としたことが。これは貴族としては良くない傾向ですね）

ロジック 理論に従う研究と違って、人間同士のやり取りは互いの思惑が絡む分、面倒くさくて鬱陶しい。しかし、そうも言っていられないのが貴族という人種なのだ。最近のロバートは、どこかの姉弟子だとか、隣にいるソレンだとか、ある種シンプルな極致にいる人間に感化されていたようだ。

この場を切り上げる良いネタは無かるうかと視線を窓に向けて見ると、うまい具合にちょうど雨が降り出したようだ。

ロバートは笑顔の仮面をかぶりなおすと、流れるような美しい所作で礼をする。

「ありがたい申し出ですが、まだ若輩の身ゆえ、歴史あるアカデミーに相応しい内容ではございません。有意義な議論をまだまだ続けたくはありますが、どうやら雨が降り出したようだ。研究室の窓を開けたままでしてね。これにてお暇を。ソレン、待たせたな。行く」

ハイツェルが話に割って入ったせいで帰るタイミングを逃しただけで、ソレンはロバートを待っていたわけではないと思うが、ここに居るとは好都合だ。ロバートは取ってつけたようにソレンに声を

かけると、ハイツェルの話を打ち切った。

「……それは残念。そちらは？」

「ソレン・アルドリッチと申します。隣の研究室で魔法生物の飼育に関する研究をしています」

「アルドリッチ……。ああ、君が。家名を名乗ることを許されたのか」

ソレンに対し、ハイツェルがぶしつけな視線と台詞を送ったのは、話を打ち切られたせいではないだろう。セリフから察するに、ソレンが誰かを知っていたのだろう。庶子だと侮っていたから平然と話に割って入り、ソレンを無視してロバートと話していたのではないか。

皇帝を愚弄するような発言をしていたのもリベラルを装っていただけで、ハイツェルはおそらく筋金入りの家柄至上主義者だ。

アカデミーは学術研鑽の場で、その扉は身分の貴賤なく開かれるというのに。

（家柄だのなんだのと、くだらない男ですね。質問の内容も、くだらないものでしたし）

そんなふうと考えて、ロバートは思わず笑いそうになる。

何しろ脳裏に浮かんだロバートの知る最も偉大な錬金術師は、庶民の権化マリエラなのだ。馬の骨より路傍の石、いや街中で売っている饅頭と呼ぶ方がしっくりくるシヨミンがエリクサーを錬成したと知ったら、ハイツェル・ヴィンケルマンはどんな顔をするだろうか。

思わず笑みをこぼしてしまったロバートに、ハイツェルが不審そ

うに見る。

「ああ、失敬。私が錬金術師であれば、雨でぬれても書類どころか服ごと乾燥できたのに、と思いまして」

「はっはっは、それは面白い冗談ですな。そんなことをしたら、服も髪もガサガサで、肌は老人のように萎びましようぞ！」

(……そうなんですか?)

かーんーそーうつ！

間の抜けた幻聴が聞こえる気がする。

服を着たまま丸ごと乾燥、どこかの錬金術師がしょっちゅうやっているのだが、帝都では冗談になるのだろうか。

最近では、どこかの錬金術師どこかロバートの妹までやっているのだが。昔より艶ピカして見えるのは婚約者ができたせいか、それとも師匠に習って命の雫風呂なんてふざけたものに入っているせいか。

今度はロバートが不審顔になる番だ。

何はともあれ、ハイツェルは笑いながら去っていった。さすがはマリエラ。意外なところで役に立つ。

(それにしても、<sup>クシクトベル</sup>幻境。一体何をしているのか、少し興味が湧いてきました)

最近のロバートの興味は、レビスという《命の雫》を大量に含んだ物質や、マリエラたちがアルアラージュ迷宮の深部に運んだという<sup>ロコス・オプ・カーマイン</sup>緋色の宝珠だった。あれらの出所は、<sup>シヤマン・エケ</sup>贄の一族の天翳たるうと目星をつけている。

レビスについてはかなり強引な手段を使って錬成の最終段階に立ち会えたのに、帝都に着いて早々迷い込んできたマリエラを助けるために、肝心なところを見逃してしまった。それ以来、めぼしい情報は何も得られないままだ。

「楽しそうだね、ロバート」

ハイツェル・ヴィンケルマンと別れ、研究室に向かうロバートにソレンが声をかける。ハイツェルに対する仰々しい態度から、ロバートの心情を察したのだろう、ソレンも心なしか楽しそうだ。

「分かりますか。少し行き詰っていたのですが、アプローチを変えるのも手かと思いましたがね」

「研究の話だよね？」

「探求の話ですよ」

贄の一族の様々な派閥の思惑が絡み合うイリデックス・アカデミーは、草木が複雑に生い茂った藪のようだ。

つついて出てくるのは蛇かそれとも……。

ロバートの探求は終わらない。

## 41・幻境(クシクトベル)のハイツェル・ヴィンケルマン(後書き)

【帝都日誌】先日ご報告しました通り、贄の一族の構成について…  
…(中略)…しばらくは幻境クシクトベルの動向を探りたく…(以下略) b  
Yロバート

お知らせ 「超ラノベFES 2024」で「生き残り錬金術師」  
がお安くなってます！

「輪環の魔法薬」で明日、クリスマス感のカケラもないSS更新で  
す。男子会(?)が気になる方はどうぞ！

<https://ncode.syosetu.com/n9801gu/>

ちよつぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更  
新中！

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>



## 42・緊急会議（前書き）

前回までのあらすじ：贄の一族の派閥、クシクトベル幻境がロバートに接近してきた。

## 42・緊急会議

「見つけた！ オレ、ついに見つけちゃったんだよ！！」

「何を？」

「決まってるだろ、運命のマイ・ハニーだよ！」

「エドガンはいつでも運命感じてるな」

女性に会うたび運命を感じる男、エドガンのいつもの台詞にジークが適当に相槌を打つ。

そんなにしよっちゅう運命を感じられるなら、預言者が占い師にでもなったらどうか。高い確率で予言が当たれば、信者ができてすぐモテるのではないか。もっとも、エドガンの感じる運命が本物ならば、とつくに伴侶を見つけているだろうが。

「それで、何だった？」

「だーかーらー、エンジェルちゃんだよ。やっぱりあの娘、この屋敷で働いてたんだ。オレ、見ちゃったんだよ。女子が泊まってる離れに入つてくところ。遠くからだったけど、あれは間違いないね！」

……やばい。ついにエドガンがナンナの正体に感づきはじめた。

ジークはテンション爆上げのエドガンに「待て」を伝えて自室からとっておきの酒を持ってくると、備え付けのグラスに注いでエドガンに渡す。

シューゼンワールド边境伯家にあてがわれた個室にはグラスはあるが酒はない。部屋にあれば非番であろうとなかろうと飲んじゃう連中ばかりなのだ。護衛任務で滞在しているのだから当然だろう。し

かし、子供の合宿でもないから、持ち込みまでは禁止されない。

マリエラが銀貨3枚もするチョコレートの大箱を部屋に持ち込んでいるように、ジークだって銀貨3枚程度のお高い酒を部屋に持ち込んでいたりする。10年以上寝かせた良い酒が、帝都では銀貨数枚で手に入るのだ。しかも、ここなら部屋に置いておいても神出鬼没で現れるフレイジージャに飲み干されることもない。マリエラの護衛があるから深酒はしないが、ジークの密かな楽しみである。

「なんだよ、ジーク。最近お前、優しいな」

「そういつの、いいから」

「テレんなよー。オレを酔わせてどうすんの？ なんつってー」

「まあ、飲め飲め」

ドバドバドバ。

ロツクでちびちび飲む酒を、お茶か何かのように注ぐジーク。

ちなみに時刻は昼を過ぎたころ。真昼間だが問題はない。エドガンを酔わせて、いろいろ白状させるのだ。

ジークの優しさは、下心と後ろめたさと、ちょっとばかりの友情からできている。

キャロラインが「エドガンさんには、意中の女性の正体にご自分で気づいていただきたいんですの！」なんて盛り上がるものだからみんな隠していたことを、ジークはちよつとだけ申し訳なく思っている。

エンジェルちゃんの正体がナンナで、ポリモーフ変身薬によって短い時間だけ変身できるのだと知れば、さすがのエドガンだってショックを受けるに違いないし、何よりみんなして黙っていたこと自体、裏切りじゃないかと思ってしまう。

エドガンのことだから、エンジェルちゃんがナンナだと知れば、

すぐに別の女性に目移りするだろうと思っていたし、正直面白がっていた気持ちもある。しかし今回は、エドガンの本気度がいつもと違う気がするのだ。

「で？ その、意中の女性がシューゼンワールド边境伯家のメイドかもしれないって？」

「そうなら。ジークとマリエラちゃんが出かけた少し後かな、離れからでてきたんらよ。オレもキャロライン嬢の護衛に出かけるところで遠くからちらっと見ただけだったけど、間違いねーって」

なんと迂闊なニヤンコだろうか。ばっちり見られているではないか。

(いつそ、正直に話した方がいいんじゃないか。早い方が傷は浅い……)

ジークは賢さ4の頭脳をフル回転して、一生懸命考える。

エンジェルちゃんがナンナだと分かったとして、二人がうまく行く可能性はあるのだろうか。

(二人……。ふたり?)

『うなんな』と鳴くナンナの姿を幻視するジーク。ジークの中ではほぼ猫なのだ。

ナンナはマリエラに次いでエドガンと仲が良い様子だが、それは女性としてよりは良くて子供、悪くてペットという感じに思える。少なくとも女性として認識しているようにはとても見えない。

……まあ、ニードルエイプのナターシャちゃんの件もあるから、エドガンのストライクゾーンはジークには計り知れないが、あの時は男ばかりの雪山でジークも含めてまともじゃなかった。麗しい女

性がいくらでもいる帝都ではさすがに人間に絞られるだろう。

「オレさ、女の口はみんな笑ってほしいって思うんら。笑顔でいてくれるんなら、そばにいるのはオレじゃなくても構わねーのら。でもさ、あの娘だけは、オレが笑顔にしてやりたいんら……」

速攻で酔っ払い、本音をジャバジャバ駄々漏らすエドガン。

それを聞いたジークはというと、割といい感じの本音なのに、エドガンに遊んでもらって『うなははは！』と爆笑する猫畜生の姿を幻視してしまう。

「くっ……」

なってるよ！ エドガンに紐でじゃらして遊んでもらって、めっちゃ笑顔になってるよ！

そう教えてやりたいところだが、当然言えるはずもない。エドガンとナンナの間には男女のしっとり感はからきしで、カラリと晴れた青空のようだ。

ジークとエドガンの付き合いはそれなりに長い。エドガンが幼少期のトラウマ 笑顔の美しかった母親が魔物植物の苗床になって絶叫の果てに亡くなってしまった反動で、過剰なまでに女性に笑顔を求めるようになってしまった経緯だっけ知ってるのだ。

エドガンは女性にだらしない浪費家で、不幸そうな女性は放っておけずに出しては騙される仕方のない奴だけねど、優しく根の良いやつなのだ。

(俺には言えない……)

これはもう、第三者であるジークの口から真実を伝えて終わりに

していいことじゃない。

そう思ったジークは、エドガンのグラスに酒を注ぎまくってつぶした後、マリエラに相談すべく立ち上がった。

「マリエラ、ここにいたのか」

「《ウォーター》、《命の雫》あと《加熱》。あ、ジーク、お風呂入る？ もうすぐ終わるからちよっと待ってね」

ママを訪ねて……じゃなかった、マリエラ訪ねて三千里。いや、割とあっさり見つかったマリエラは、清掃中の札のかかった男性宿舍の大風呂でお湯はり作業の途中だった。

バイトである。シューゼンワルド辺境伯帝都邸で使う大量の水を生活魔法で賄うことで、マリエラには特別手当のおやつが出るのだ。もっとも、お客様であるマリエラは、こんな作業をしなくてもおやつを出してもらえるのだが。

師匠のスパルタ教育のお陰で魔力だけは人一倍あるマリエラは、その大半を日々錬金術で使い切る生活をしていた。

しかし、帝都に来てからというもののポーションをほとんど作っていない。《命の雫》を汲むのに迷宮都市の何倍もの魔力が必要だが、それでも汲める量がちよるちよるだから、作れるポーション量が限られていて、魔力が余ってしようがないのだ。

そんな時、「帝都は水代が高いらしく、男性宿舍の大風呂の湯が汚い」という話を聞きつけ、この仕事を買って出たわけだが、水を汲む魔石代が浮いたとか、お風呂が気持ちよくなったとか、筋肉の色つやや良くなってムキムキがムチムチで風呂が前より暑苦しいと好評だ。いや、最後のは苦情だったかもしれないが。

「マリエラのお陰で、毎日綺麗な湯につかれるとみんな喜んでいたよ」

「この辺り、水が出にくいからね。いい感じで魔力が減るよ」

生活魔法の《ウォーター》は、飲用できる綺麗な水を作り出す魔法だ。

一般的には手に持った器にジワリと水が湧き出して、気が付けば水位が上がっている程度の効果で、攻撃に使えるものではない。しかし便利なことには変わらないので、魔導具化され帝都のような大きな街では各家にあって当然くらいの位置づけだ。

魔導具にせよ生活魔法にせよ当たり前になりすぎて、どういう仕組みで水が出て来るのか考えることもないほどだが、この《ウォーター》、無から水が生成されるわけではない。

「《ウォーター》って、空気の中にも水があって、それを集めてるんだって師匠が言ってたっけ。集めた分は、近くの井戸とか川とか地下水脈とか、空の上の雨雲とか、そういうところから持って来ってる。だから、水の少ない乾いた土地だと効率が悪いって聞いた」

その理屈だと水分の流れに沿って風が吹きそうではあるが、水だけが集まってくるのは魔法と呼ばれるゆえんだろっか。

「……効率が悪いようには見えないが」

ムキムキの兵士が十数人は入れる浴槽の上に浮かぶ、巨大な《錬成空間》を見上げながらジークが呟く。ジークからしてみれば、《ウォーター》の仕組み以前にこちらの方がよっぽどファンタスティックだ。

効率云々言うのであれば、こんな重量物を浮かせるよりも浴槽に

直接貯めたほうがいいだろうに。

「ごうごうの楽しいのか、寄って来るんだよね。お風呂もちよっと綺麗になるし。精霊眼で見てみて」

ジークが眼帯を外すのに合わせて、マリエラは《錬成空間》を解いて《命の雫》を溶け込ませたお湯を浴槽にザーツと落とす。

すると高さの割にはたくさんの水しぶきが飛び散り、もわわあつと湯気が浴室一杯に広がっていく。浴槽いっぱい広がって渦を巻く水の音、水面に跳ねる水しぶきの音がサラサラ、シャラシャラ賑やかで、照明の光を反射するようにお湯にも湯気にも小さな光が嬉しそつにキラキラ光る。

「生まれたばかりの水の精霊と、火の精霊が少しだな」

言葉どころか声も持たない微弱な精霊は精霊眼に映されてようやく光の反射程度に目視できるほどか弱いものだ。しかし、流れ落ちるお湯と、もうもうと立ち昇る湯気にぐるぐるかき回されてとても楽しそつに思える。

サー……。

「一杯目は精霊に。そうすれば洗い残しの汚れなんかも綺麗にしてくれるし、残ってくれれば心地いいお風呂になるんだけど。あー、皆いっちゃった」

浴槽からお湯がなくなり、湯気が治まるにつれ、精霊たちも消えて行く。

ほとんどの精霊は、目に見えないから気付かないだけで、いつの間にか現れて、気が付けば消えている。姿と呼べる形を持っている



のはごくごく稀な存在だ。

それでも、楽しくて心地いい場所にはいくらかとどまるものもいて、存在する時間が長くなるにつれ、意思や力を持つ存在へと成長していくのだが、帝都はどうにも精霊がいつきにくいように感じる。一度サラマンダーに理由を聞いてみたけれど、ぽかんと半口を開けた状態で「そうなの？」とばかりに首をかしげていたから、理由は分からないままだ。

「お湯と一緒に流れていったが……。どこに行ったんだらう？」

「うーん、リユーロさんのところか？ あれ、魔力のこもった綺麗な水だし」

「水脈が繋がってるのか？」

「それは分かんないけど。穢れは魔の森の奥まで流れていくでしょう？ だったら綺麗なのも届くかなって。……うん、ちょっとやってみよう。ししよーがおせわになってまーすって。多分、お世話になってるはずだから」

お供えなのかお歳暮か。なんにせよこう言うのは気持ちが大変だ。届くかどうかは定かでないが、師匠が世話になっているのは間違いないからう。

マリエラがたっぷり魔力と出来る限りの《命の雫》を込めて作った水は、いつもより3割増しで渦を巻いて流れていった。

「素敵！ 最高！ カンペキですわあーっ！！」

「ええ、本当に！ なんて可愛らしいのー！！」

「馬子……いや猫子ニヤンかな？ にも衣装ですわね」

（うんなな）

大興奮の猫好きメイドと、一緒に喜ぶキャロライン。そして、二人の興奮ぶりにちよつと引きつつ同意するマリエラと完全に蚊帳の外、いや背景と化すジーク。

ジークから話を聞いたマリエラが、お風呂のお湯はりの後、緊急会議を開いた結果、事態は大きく動くこととなった。

この部屋にいる4人目の女性、ナンナはというと、ポリマーフ変身薬で変身後、普段の猫畜生ぶりが嘘のように可愛らしく着飾っている。心持ちぐつたりしているのはキャロラインとメイドにもみくちやにされたせいだが、声がほとんど聞こえないのは襟に縫い込まれた魔法陣の効果である。

消音効果のある魔法陣で、本来は靴底などに刻んで足音を消すのに使われるのだが、今回はナンナの声を消すのに利用した。ナンナには演技どころか黙っていることなんてできない。会つなり「うんな、うんな」言つて、正体がばれるのが関の山だ。

「それでは、設定を復習しますわよ。ナンナさんは、今からナンシーさんです。ナンシーさん！」

(うんな)

はい、と手をあげて見せるナンナ。ここまでは大丈夫そうだ。

「ナンシーさんは、訳あってシューゼンワールド辺境伯家でお預かりしているお嬢さんで、かなり遠い地域の出身です。こちらの言葉が少し不自由なので、それを恥ずかしくて小声になってしまう、可愛らしい方です」

(うんな)

可愛らしいと言われて、くねり、と体をくねらすナンナ。ここも

何となくわかっているらしい。あざとカワイイ仕草であるが、これは猫バージョンでやった方が破壊力が高そうだ。

「今日は、エドガンさんが帝都を案内してくれます。きっと、美味しいものをたくさんごちそうしてくれるでしょう」

（うなんな！）

美味しいものと聞いて、尻尾と耳が立ちそうになるナンナ。それを止めるようにキャロラインが「ただし！」と鋭く声をあげる。

「エドガンさんに、ナンナさんだとバレたらそこでお出かけは終了です。美味しいものも食べられません。だから、声も耳も尻尾も、もちろんガウウも出してはいけませんよ」

（うなんな！）

< i 8 0 3 8 3 5 | 2 1 0 6 4 >

（すごい、ちゃんと会話が成り立ってる……）

こくこく頷くナンナとキャロラインのやり取りを見ながらマリエラは感心する。

元からナンナは、ほぼ「うなんな」で会話を済ませる傾向があったが、声が出なくても成立するとは思わなかった。これならしゃべらなくても何とかかなるかもしれない。

ナンナだと分かっていたいけば、猫の姿を幻視できるほどにナンナなのだが、今は超の付く美少女だ。ナンナのイメージとは程遠い服だつて着せているから、言われなければ気付くまい。

「ああでも、同意する時の意思表示くらいできた方がいいかしら……」

何もしゃべらず頷くばかりの相手と一緒にいるのは気疲れだろう。キャララインが、「こういう時、どうしたらいいかしら？」と聞くものだから、エドガン候補の“すべての女性を笑顔に”という公約を思い出したマリエラは、

「笑えばいいと思うよ」

とどっかの少年主人公のようにナンナにアドバイスしておいた。

につかー。

「うっ。なんて無垢な」

「尊いですわね」

「ナンナ、怖い子」

マリエラのアドバイスに従って、特大の笑顔を浮かべたナンナは、とんでもなく可愛かった。

マリエラ達女性陣でさえ、その輝きに目がくらみそうになるほどだ。

これならエドガンはイチコロだろう。

「さあ、時間ですわ。ナンナさん、エドガンさんと楽しんでいらして！」

（うなんな！）

そうなのだ。

ジークが招集した緊急会議の結果、エドガンは素性を隠した人化ナンナと帝都でデートすることとなったのだ。



## 42・緊急会議（後書き）

### 【帝都日誌】

<i803838—21064>

<来年は！ エンジェルちゃんと帝都デートだーっ！！ b  
yエドガン

エドガンのウザ顔が拝める「生き残り錬金術師は街で静かに暮らし  
たい」輪環の魔法薬」は、

B's-LOG COMIC Vol.132（1月5日配信）掲  
載です。

皆様にとって2024年が素敵な物語に出会える良い1年になりま  
すように！

2024年の更新は1月13日からです。マリエラたちの帝都での  
騒動をお楽しみください。

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更  
新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

[https://ncode.syosetu.com/n314  
1ff/](https://ncode.syosetu.com/n3141ff/)

### 43・帝都dデート（前書き）

前回までのあらすじ・・・エドガン、愛しのエンジェルちゃんデートするじやない。

### 43・帝都deデート

「本当にこのコースで大丈夫なん？ こう言っちゃなんだけど、マリエラちゃんじゃないんだぜ？」

「大丈夫だエドガン。ほとんど喋らないって言っただろ？ 話し言葉に不自由するぐらい遠くから来たんだ。テーブルマナーなんかも勉強中で、本人はそれを恥ずかしがつてる。だからこれぐらいカジュアルな方が気を使わなくて楽しめるさ。高い店に連れて行くのもいいけど、緊張してろくに味わえないんじゃない意味がないだろ？」

ジークが考えマリエラとキャロラインが決定したデートコースに、不満の声を上げるエドガンとそれっぽい理由をつけて丸め込むジーク。

嘘は言っていないけれど本当のことも言っていない、悪い大人の交渉術だ。嘘は吐いていないから、こういうのは意外とばれない。

ナンナ改めナンシーとデートできると聞いたエドガンは、デート費用と称して装備でも新調するのとかという大金をウエイズハルトに借金しようとしたり、舞踏会に行くようなスーツを貸衣装屋に借りに行ったり、前が見えなくなるほど大きなバラの花束を注文しようとしたりして大変だった。

エドガンの奇行を全部阻止したジークの評価が、戦闘だけでなく内務もできるやつとしてシューゼンワルド辺境伯家で上がったほどだ。

エドガンはデート費用や諸々の準備の代わりに、シューゼンワル



ド边境伯家に大量に届いたというサーカスチケットを貰ったのだが、その時の、「え、これでいいの？」みたいな表情の面白かったこと。ちなみに、こういったサーカスやら演劇やら展覧会のタダ券は、後援している貴族の屋敷にしょっちゅう届くものらしい。特に今回は庶民向けのサーカスだから、貴族用のVIP席チケットの他に屋敷で働く家人用の一般席のチケットがたくさん届けられたのだとか。

サーカスならナンナも楽しめるに違いない。絶対喜ぶからとチケットを渡されたエドガンは「オペラ好きとかじゃなくてよかった。気が合うかも」と、高まる期待にデートの前日はあまりにソワソワしすぎて、護衛の任務を外されたくらいだ。

「き……来た、本当に来た。あの子だ。マイエンジェル、ナンシーちゃん……」。

ジーク、本当にありがとうな。ナンシーちゃんに繋ぎをつけてくれて。もつべきものは親友だ」

「うっ……うん……。じゃあ、頑張つて、な？」

ナンナと入れ替わるように、建物の裏手に逃げるように去っていくジーク。

いつものふざけた含みのない、心からの感謝の言葉にジークの良心がキリリと痛む。

せめてもの救いは、キャロラインたちが非常に良い仕事をしたおかげで今日の人化したナンナが非常に可愛いことだろう。今日という日がエドガンにとって良い思い出になればいい。そう願わずにはいられない。

「初めまして、ナンシーさん。オレ、エドガンて言います。今日はオレの誘いを受けてくれて本当にどうもありがとう」

にこり。(うなんな)

「グハアッ」

マリエラ仕込みの“笑えばいいと思うよ”攻撃に、ハートを射抜かれてしまったエドガンは、バクバク鳴る心臓を抑える。

「ナンナの方を心配してたけど、初っ端からこんな感じでエドガンさん、大丈夫かな？」

建物の陰から様子をつかっていたマリエラが、戻ってきたジークに尋ねる。

「……いろいろ心配だな」

ナンナがボ口を出すのが早いか、それともエドガンがキョン死にするのが先か。ないとは思うが、万一気付かず帰って来ても、その時は変身薬ホリモーフの時間切れという残酷な未来が待っている。

ナンナにこれ以上変身薬ホリモーフを与えずに、“エンジェルちゃんなんかいなかったんや”と煙に巻くことも考えた。しかし、そのためにナンナを屋敷に閉じ込めるわけにもいかないし、帝都にそこそこ慣れしてしまったナンナが獣人姿のままでも歩くとも限らない。そうならば衆目を集めるのは必然で、本来目的であるマリエラの安全がおろそかになってしまう。

だから、エドガンに正体を気づかせる作戦になったのだ。

ジークとしてはエドガンがなるべくダメージの少ない方向で、ナンシーの正体に気付いてくれるよう祈るしかない。

ちなみにナンナの尻尾はスカートの中に隠れているが、猫耳は頭の上に出たままだ。ホワイトブリムに軽い認識障害を掛けてはいるが、「変な髪飾りを付けてるな」くらいは思うレベルだ。ここが一番の気付きポイントだと思うのだけれど……。

「か、カワイイ髪飾りですね！ とてもよく似合ってる」

「……………（うなんな）」

ダメな様子だ。恋は盲目が過ぎている。

「さてジーク探偵行きますか」

「そうだなマリエラ探偵、気配遮断の魔法陣の準備はいいか？」

「はいどうぞ、であります」

「うむ、ありがとう」

そして、危なっかしいエドガンとナンナを二人きりで行かせるはずはない。万々に備えてジークとマリエラが遠くで見守る予定でいる。二人の探偵ごっこへのたくそさはさておいて、スニーキングミッション開始だ。

「目的地は公園だね？ サーカスもそこで開かれてるの？」

「アメジスト・アイル・ガーデンだな。噴水や水路が整備された庭園で、ピンクや紫色の花壇が遠目にアメジストの島のように見えるらしい。最近整備された帝都でも有名なデートスポットで中に併設されたカフェでは若い女性に人気のスイーツが楽しめるそうだ。一番人気はラズベリー・ローズ。繊細なローズ風味の生地にはラズベリーのコンポートが挟まったタルトだそうだ」

「へえ、美味しそう。ジーク、詳しいね」

「ついでに俺たちも食べようか」  
「うん！」

詳しいのは当然だ。マリエラと行くために、せつせとリサーチしていたのだから。

ジークの努力の結晶はエドガンのために活用されてしまったのだが、エドガンたちの監視というおまけ付きだがマリエラと二人で行くのは違いない。むしろスニーキングミッションのドキドキ感が相まって、ちよっぴり刺激的でさえある。

一同がアメジスト・アイル・ガーデンに着く前に、刺激的な匂いが漂い、威勢のいい掛け声が聞こえてくる。

「さあさあ、そこのお二人さん！ 帝都でも最高の刺激を手に入れるチャンスだぜ！ 今日はいつもとより運のいい日だ！ 振る舞い酒が付いてるぜ。さあ、買った買った！ 早い者勝ちだ」

スパイシーな香辛料とジューシーな肉の油の臭い。軽快な呼び込みの元はブリトリーヤタコス、ケサディーヤを売る屋台だ。

「辛いものが好きなら、この屋台のホットソースを試してみな！ ほんとうに辛いぜ！ 苦手な奴も安心しな、マイルドソースも負けちゃいねえ！」

「うち自慢のメニューは、チキンとアボカドのクリーミーなブリトリー！ パリパリのトルティーヤに、フレッシュな野菜やジューシーなチキンがたっぷりだあ。一遍食べたなら病みつきだあ！」

「辛いのに飽きたら、フレッシュなバーガーはどうだい！？ サツクサクのフライもたまんねえ！」

多くの人々が屋台に集まって、ビール片手に肉汁滴る料理にかぶ

り付いている。

なんでもどこかの貴族家でおめでたいことがあつたらしく、ビールが樽ごと振舞われたとか。料理を頼めば1杯無料とくれば、賑わうのも当然だろう。

ブリトーには、ジューシーな鶏肉や豚肉、アボカド、トマト、レタスなどの新鮮な野菜がたっぷり詰まれているし、タコスには、スパイシーなビーフが乗っている。そして、ケサディーヤは美味しそうなサルサソースの下からチーズがとろりととろけているではないか。

呼び込みをする男は、掛け声にも負けないいい笑顔で、つられて購入した人々も料理を手に持ち、幸せそうに食べ歩いている。

この辺りは南方料理の屋台が有名なのだ。多少毛色の違う店も交じってはいるが、味はもちろんのこと、素手で食べられる手軽さがナンナにもぴったりだ。通りにはテーブルや椅子も置かれているから、気軽にランチが楽しめる。

「……………（うなんなあー）」

「どうかした、ナンシーさん。旨そうだね、食べようか」

「コクコク（うなんなあー!）」

声が出ても出なくてもいつもとさして変化のないナンナが、見事に釣れたようだ。

ナンナはカトラリーを上手く使えないのだ。最近は少し上達したけれど、基本的にはナイフで切ってナイフで食べるワイルドさだから、レストランなどに入られると一発でばれてしまう。だから食事はこういった露店で済ませるのがベストで、ナンナが確実に釣れるいい匂いのする通りをデートコースに盛り込んでいる。

(計画通りだね。もぐもぐ)  
(そうだな。むしゃむしゃ)

ついでにマリエラとジークも腹ごしらえだ。マリエラはチキンとアボカドのクリーミーなブリトーにトロピカルなフルーツジュースを、ジークはホットソースがたっぷりかかった肉たっぷりタコスとアイステイーダ。タコスをがぶりといったあと、振る舞い酒だと渡されたビールをじっと眺めていたが、エドガンたちはともかくマリエラの護衛もあるから飲みたいのを我慢したのだろう。スパイシーな料理ばかりだから、飲みたくなるのもよくわかる。

逆に我慢する必要のないエドガンとナンナは貰ったビールを「ぷはあ」とうまそうにやっている。

「……………(うなっ)」

「あれ、どした？ あ、もしかして辛いのが駄目だった？」

「コクコク(うなんな)」

「そっかあ。じゃあ、それ、オレ食うよ。あそこのバーガーならいけるかな」

「じーっ(うなんな)」

「あっちの、肉串も食べる？」

「コクコク(うなんな)」

「いーよ、いーよ、どんどん食べな」

最初は右手と右足が同時に出るほど緊張していたというのに、薄いアルコールを飲んだおかげかいい感じにエドガンの緊張がほぐれたようだ。エドガンの料理を一口もらったり、逆にナンナがいらぬいものをエドガンに食べさせたりと、なんだか仲良くやっていて、本当にデートしているようだ。

ナンナが最初の料理を食べられなかったのは、辛かったからではなくて玉ねぎがはみ出すほど入っていたからだ。

猫とはいえ獣人だから多少食べたくらいでは中毒症状が出たりしないが、体に合うものでもないらしく、嫌いな食材として食べようとしなない。だから、それほど注意する必要はないのだが、細かく刻んで濃い味付けがしてあると、そのまま食べてしまったりもするから、シューゼンワルド辺境伯家では、ナンナの食事はちゃんと配慮されている。

今日は外食だから心配したが、肉串の間に挟まっていたネギも、バーガーの付け合わせの山盛りオニオンフライも残して肉ばかり食べている。いつものナンナなら、「猫だから」で済むが、美少女姿での好き嫌いは少々お行儀が悪く感じるものだ。ここでエドガンが「ナンナっぽいな」と思ってくればよかったが、「野菜嫌いなのか」。いいよ、いいよ、オレ食べるから」とナンナの残した野菜を食べてあげている。

普段のナンナもおニャンコさま待遇で皆にちやほやされているが、今日はそれ以上の好待遇だ。ご機嫌なナンナはとて面白い笑顔で料理を楽しんでいる。

< i 8 1 5 2 9 9 — 2 1 0 6 4 >

( いい感じじゃない？ )

( そうだな )

( あ、移動始めた。むぐむぐ、ごくん。それにしてもスゴイ人混みだね )

( タダ酒があるからな )

( なんかナンナを見てる人が多い気がするけど…… )

( 今日は認識障害を付けてないからな。まあ、エドガンが付いているんだ。変なちょっかいをかける男はいないだろう )

人化したナンナは美少女で、エドガンも顔立ち良いの好青年だ。どちらも“黙っていれば”が付くけれど、遠目には人目を惹くカッブルに見える。

エドガンはデレデレだけれど、ナンナとのデートを楽しみつつも、隙なくガードしていることを見る者が見れば分かるだろうから、余計な邪魔は入るまい。

実際、ナンナの美貌につられてフラフラ近づいてきた若者は、不意に振り返ったエドガンのひと睨みで視線をそらして退散している。

さすがはエドガン。Aランカーは伊達じゃない。

その信頼と安心感が、ジークとマリエラの判断を鈍らせていた。



### 43・帝都deデート（後書き）

【帝都日誌】 『南方料理の屋台通り』

店舗数が多く幅

広い層のニーズを満たすが、全体的に味は辛め。人が多いため騒がしく落ち着かないが、その分、同行者との距離が近づきやすい。価格面もリーズナブルで高評価』 byジーク

本年もよろしくお願いいたします。

ストックが尽きてきましたので、しばらく隔週更新となります。

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』と交互に更新予定。

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141fff/>

#### 44・帝都date その2（前書き）

前回までのあらすじ：エドガン、人化したナンナとデートする。

#### 44・帝都deデート その2

「プイプイプイプイ」

「プププププ」

「いっけー！」

「……………！！！！（うなんなー）！！！！」

「キューイー！」

腹ごしらえを済ませたエドガンとナンナは、ジークー押しのレストラン、アメジスト・アイル・ガーデンを素通りして併設するサーカス会場前の催し物に盛り上がっていた。

エドガンたちが着いた時には、ちょうど午前の公演が終わったばかりで次の開幕まで時間があつたが、そこはサーカス。テントの周りにはピエロが菓子や花を配って客引きをしたり、小動物レースが催されていたりする。

ナンナたちが小動物レースに食いついたおかげで、マリエラが楽しみにしていたカフェのタルト、ラズベリー・ローズは食べられずじまいだったが、ピエロに貰ったクッキーは珍しい味わいでなかなかにおいしい。クッキーをポリポリしつつの観戦もなかなかに悪くない。

「くっそー！ また負けたー！！」

「……………！！（うなんなー！！）」

デート代を増やそうなんて考えたエドガンがぼろ負けしているのは、プイプイ可愛いげっ歯類がしのぎを削るモルモル・レースである。プイプイ。

今日のレースは大荒れだ。

それもそのはず、猫獣人のナンナがモル・レーサーを威圧しまくっているからだ。

ピエロに貰った菓子を食べながらだから静かではあるけれど、瞳孔は真ん丸に開いて眼もぱっちり開いてキョロキョロしている。

お陰でただでさえ前後方向に加えて上下方向の無駄な動きの多いモル・レーサーたちが、今日はジャンプと同時に180度ターンしてレーンを逆走してみたり、無駄にポップコーンジャンプを繰り返したりと大変な状況だ。レーンを移動してしまった俊足モルにお尻をこずかれ、長毛モルが「プイイ！ プイイ！」と鳴きながらトツコトツコとゴールを目指す様子は思わず笑ってしまいそうだ。

観客は盛り上がりだが、予想外の連続にレースは完全に運任せな展開になっている。

こんなレースで勝てるのは、強運の持ち主であるマリエラくらいだろう。いつもはビリで『頑張ったで賞』枠のおっとり系長毛種がまさかの1位で、何も知らずカワイイからと一点張りしたマリエラの賞金がステキなことになっている。

ちなみに当然ながら薄幸なジークの買ったモルはビリだったのだが、掛け金自体たいしたことがないから損害は知れている。

(どうしよ、ジーク。すつごく勝っちゃった！)

(……ヨカッタナ。それはそうとこのレース、ガウウがかき乱してないか?)

(えっ、気付かなかったけど……。姿、出てないよね?)

姿は見せていないけれど、モル・レーサーがおかしな動きをするたびに、ジークの眼には白い影が微かに見える気がする。これ以上ナンナを興奮させるのはよろしくない。ナンナはただでさえぱっちりした目を見開いてキョロキョロしていて可愛さに磨きがかかっていて、なんだか注目を集めているように思える。

（気付け、エドガン！）

ジークの想いが通じたのか、いや、財布を覗きこむエドガンはおしおと萎れていたから軍資金が尽きただけのようだが、エドガンはもう1勝負したそうなナンナを連れてサーカスのテントへ入っていった。よかった、これなら一安心だ。

ちなみにマリエラの方はというと。

「プイヨー」

「よしよし、わぁ、もちもちー」

「ブルルルル」

「あ、食べてる時は触るなって？ ごめんねー」

「プププププイプイ」

「あ、みんな、待って待って！」

払戻金でモルふれあい券とモル餌を爆買いし、一番になったおつとり長毛種を始め大量のモルを侍らせていた。餌担当のモルたちが集まってきてマリエラの餌をひったくっている。

<i 815025—21064 >

俺もモルを触りたい。こいつら絶対もちもちだ。

モルに伸びそうになる右手を、ジークは左手でぐっと抑える。葛藤の末に僅差で友情がモフ欲に勝ったようだ。

「……マリエラ、エドガンたちを見失うからサーカステントに移動しよう」

モフ欲に負けたマリエラをせかして、ジークたちもサーカステントに入ってしまった。

「帝都の紳士淑女の皆さま、ようこそ、驚異と夢の場所へ！ ここは現実と幻想が交錯し、奇跡が日常となる場所でございます！」

羽の付いたシルクハットにごてごてと飾りのついた赤の燕尾服を着た団長が、サーカスの始まりの口上を述べる。

「精霊たちの空中乱舞！ 南方の獣使いの魔獣ショー！ 火を噴きます竜人に、失われた魔術による瞬間移動！ 人知を超えた感動のひと時を心行くまでお楽しみください！！ まずは当一座にお越しく下さいました皆さまに、精霊の祝福を！」

団長がステッキを頭上高く上げると、先に付けられた玉から虹色の光が噴き出して、天幕をキラキラ輝く星が舞い、テントは「わあーっ」と歓声に包まれる。

「これが精霊の祝福？ そんな感じはしないけど」  
「おそらく、魔術と魔導具による演出だろう」

観客たちは歓声を上げているが、精霊たちの空中乱舞は軽業師の

曲芸だし、魔獣ショーは魔物ではない普通の獣だ。火を噴く竜人に至ってはリザードマンの皮を被った人間が、口から吹いたアルコールに着火しているだけだ。

普段から精霊やら魔物やら、世界の不思議まみれなマリエラたちからしてみれば、作り物もいいところだけれど、そういうものだと思ってみれば演出としては悪くない。というか、マリエラなどここに何しに来たのかすっかり忘れて楽しむほど、よくできたショーである。

「さて、続きましては、世紀の大魔術でございます！ この魔法陣が刻まれたる柱の中に入りますれば、あちらからこちら、こちらからあちらに瞬時に移動が思いのまま！ これぞ失われし転移陣！ 本日、この時、失われし超魔術が蘇るのであります！ さあさあさあ！ ここにおられるお客様の中で、この世紀の瞬間に立ち会い転移の被験者となる勇氣ある方はおられますかな！？」

はい！

思わず上がりそうになったマリエラの手を、ジークがすちゃっと取り押さえる。

マリエラは警護対象で超重要人物なのだ。変な視線はナンナに対するものばかりで、「ここに始まりの錬金術師がいますよー！」と喧伝したくなるほどスルーされているのだが、こんな場所で目立たせるわけにはいかない。

薄暗い観客席にパツとスポットライトが当たる。観客の一人が選ばれたようだ。

「では、そこのお嬢さん！」

「……………！（うなんなー）」

なんとパフォーマーとして当てられたのは、ナンナだった。

ジークなら躊躇なくマリエラの腕を押さえられるが、絶賛片恋中のエドガンにはナンナの腕を押さえるなんて出来なかったらしい。

手伝いのピエロに手を引かれ、軽やかな足取りでステージに上がっていくナンナ。

ウキウキとした足取りだ。白い靴下の残像のように、その足元にガウウの白い影が見える気がする。

(……なんだ、視線？ どこから？)

ナンナに集まるたくさんの視線。その中に、不穏なものが混じっている気がして、ジークは鋭くあたりを見渡す。けれど客席は薄暗く、天幕の上はステージを照らすまばゆい光で目がくらんでよく見えない。

「ナンシーちゃん、頑張れー」

「これはこれはお美しいお嬢さん。お名前はナンシーさんとおっしゃるのですね。観客の皆さま、美しく勇気あるお嬢さんに拍手を！」  
「……………！(うーんなん！)」

声援を送るエドガンも、ステージでニヤハハと手を振るナンナも不穏な視線には気が付いていない様子だ。

(なんだ、あのピエロ。どこを見て……………)

ジークはナンナをステージにいざなうピエロが、ナンナの足元にちらりと視線を落とした気がした。

「ではお嬢さん、こちらに」



燕尾服の団長が示すそれっぽい魔法陣の上にナンナが立つと、上からこれまたそれっぽい模様が描かれた円柱がナンナの上と転移先に降りて来る。遠くから見れば石柱に見えるが、揺れ方からして張りぼてだ。

「あの魔法陣、何の意味もないっぽいけど、瞬間移動なんてできるのかな？」

「いや、デタラメだと思うぞ。ああいうのは床が抜けるようになっていて、床下を通って反対側に行くんだ」

「なーんだ」

ジークにタネをばらされてガツカリするマリエラ。

この手のものは、タネも仕掛けもあるものだ。だからこそ、それを知られないように関係者だけでパフォーマンスを行うものだが、どうして観客をステージへと上げたのか。

ドウロロロロロロ。

石柱が降りきり、ドラムロールが鳴り響く。

「開け、転移の門！ 時空を司る神秘の扉よ！ シルヴァナリア・ゾルゲリオン、アルカノマンタ・フルビオーサ……」

団長が高らかに唱える呪文に合わせて、ステージが赤や紫、緑や黄色のとりどりのライトで照らし出され、石柱の周りには白い煙がもくもくと立ち昇る。

「はええ、スツゴイ……」

ここに師匠がいたならば、ゲラゲラ大爆笑しただろうデタラメさ

だ。その弟子であるマリエラにもデタラメだと分かるのだが、演者が真剣なものだから、よくもまあ何の意味もないのにそれっぽい呪文を考えたものだと一周回って感心してしまう。

「ゼノクラスタ・ダルヴァナクト！」

団長のなっがい呪文がようやく終わった。

どの辺が“瞬間”なのか、抜け道を通る時間は十分あるじゃないかと問い詰めたいが、観客は皆雰囲気にもまれたのか、術の成否をかたずをのんで見守っている。

ズズズ、ともつたいを付けてナンナが入った石柱が上がると、当然ながらそちらは空で、次いで上がった移動先に、呆けたようにナンナがへたり込んでいた。

「成功です!!! 皆さま、勇敢なお嬢さんに盛大な拍手を!!!」  
「わー!」「わー!」「わー!」「きゃー!」「ブラボー!」

喝采の拍手の中、ピエロに手を借りて立ち上がるナンナ。よろよろとステージを降りたナンナの足取りは、明らかに重たい。

「ジーク、ナンナの様子、変じゃない？」

「ああ……。ふらついている」

エドガンもナンナの異常に気付いたのだろう。

ステージ下まで駆け寄ると、ナンナを支えるように通路を抜け、何事か話しながら天幕の外へと歩いて行った。

一体何があったのか。少なくとも、こっそり後を付けている場合ではあるまい。

外のベンチで休むナンナとエドガンにマリエラとジークが駆け寄る。

「エドガンさん、ナン……ナンシーどうかした？」

「大丈夫か？」

「ジーク、マリエラちゃん。来てたのか。ナンシーちゃんの具合が変なんだ。息が苦しうだから外に連れてきたんだけど、どんどんひどくなって……」

ナンナの瞳は充血していて焦点が定まらず、ハツハと息も苦しうだ。

とりあえず、ナンナの正体に気付いていないエドガンには少し離れていて欲しい。

「エドガン、水を貰ってきてくれないか？」

「あ、ああ、分かった！」

マリエラの意図を汲んだジークの機転でエドガンが離れた隙に、マリエラは素早くナンナを診察する。

「なんだろ、中毒？ 酔っぱらってようにも見える。ナンナ、これ、毒消しポーション。飲んでみて」

幸い基本的なポーションは常に持ち歩くようにしている。毒を盛られる可能性を見越して、キャロラインが即効性の毒に良く効く素材を仕入れてくれていたのだ。蟲だけだ。

これならば、ちよつとした中毒や酩酊くらいすぐに回復するだろう。

症状を見たマリエラが携帯していた解毒ポーションを飲ませると、ナンナの症状はすぐに落ち着いたようだった。

しかし体調の戻ったナンナは、消音の魔法陣があっても伝わるほどの必死さでマリエラにすぎるように叫んだ。

（ガウウが！ ガウウがいなくなったなん！）

#### 44・帝都deデート その2（後書き）

【帝都日誌】モルをプニプニでもちもちしたい……などと言っている場合じゃなかった。byジーク

「生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい（輪環の魔法薬）」  
B・S・LOG COMIC Vol.133（2月5日配信）は  
ジヤのポジティブさがさく裂！

<i815037—21064>©小原彩

ジヤのシーンを見てこう思ったのは私だけではないはず。（選んだ時点ではこれだけ化けるとはマリエラも思ってたんですけど）今のジーク見て、自分が選ばれる可能性あったと思えるジヤの自己肯定感の高さ、リスペクト。このコマで、ちょっとだけジヤを好きになったよ。七分のズボン履いてることかちょっと可愛いしね！

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

#### 45・思わぬ助力（前書き）

前回までのあらすじ：一見順調そうなエドガンとナンナのデート。  
しかしサーカスで……。

## 45・思わぬ助力

(ガウウが！ ガウウがいなくなったなん！ 助けに行くなん！)  
「ええっ！？ ちょっと待って、落ち着いて！」

解毒ポーションで体調が戻るや、走りだそうとするナンナをマリエラは抱き着くようにして何とか止めた。同時に服から漂う微かな臭いに気が付いた。

(放すんなー！)

獣人の脱兎の勢いを鈍くささに定評のあるマリエラが止められたのは、今世紀最大の奇跡が起こったわけではない。

守護精霊を失ったナンナは、明らかに弱っているのだ。暴れてもしがみついたマリエラの重みでその場でへたり込んでしまうほどだ。ちなみに今のマリエラは、マルエラではなくマリエラだ。体重は標準状態であることを申し添えたい。

ガウウでも側にいるだけでナンナに力を与えていたのだと分かる。

「居場所、わかるの？」

(……………うな)

マリエラに止められて少し冷静になったナンナは、ガウウの居場所が分かるのかという質問にコテンと首をかしげて返した。どうやら分からないらしい。

(まほーにゃ、さっきのまほーでいなくなったなん！ ばーんで、もくもくーで、ぐるぐるになったなん！ その時なん！)

「うーん……」

魔法とは先ほどのサーカスのショーのことだろう。言いたいことは分かるのだけれど、この腑に落ちない感じは何なのか。

「マリエラちゃん、解毒ポーションって……。何か合わないものでも食べちゃったかな。味が濃かったから気付かず食べちゃったとか、これ、さっき貰ったクッキーだけど……」

「そういえば……」

心配し、クッキーを差し出すエドガンの言葉に、マリエラははっとなって割って中身を確かめる。

「やっぱり。これ玉ねぎ入ってる……」

もしやと思ったマリエラは、先ほど感じたナンナの服の匂いをもう一度かぐ。

「スンスン……シダーやミントの香りが混ざったみたいなの臭い。多分猫酔いの木かなんかだ。そう言えばお昼にお酒も飲んでたよね。それにさっきの症状……」

昼食に振る舞われたアルコールに、公園で配られた玉ねぎ入りのクッキー。そしてあの煙幕はおそらく猫酔いの木の粉末が混ざっていたのだろう。単体では大した害はなくても、積み重なれば猫獣人であるナンナの体調を崩すことは可能だ。

(初めからガウウが狙われてたんだ……)



帝都邸の誰かか、それとも街に出かけているときにガウウを見られてしまったか。

後者であっても、ナンナはシューゼンワールド辺境伯家のお仕着せを着て出かけているのだ。ナンナは人気者だから、使用人や兵士の噂は絶えない。家を特定できたなら、情報を集めるのはたやすかつたろう。

エドガンがこれっぽっちも気付いていないから、大丈夫だと過信していた。

サーカスのタダ券からして罠だったのかもしれない。お酒も玉ねぎもマタタビも、人間にはさして害はないのだから、手当たり次第に振舞ってナンナが罠にかかるのを根気強く待っていたのか……。入念すぎる気はするが、そもそも、守護精霊なんて実体のない存在、何の準備もなしに捕まえられるはずはない。

わああああ。パチパチパチ。

サーカスの天幕から聞こえる音楽は盛り上がりを見せ、歓声が漏れ聞こえてくる。多くの観客にとっては夢のようなひと時が終わりを迎えたのだろう。

けれど、ナンナにとって悪夢に違いあるまい。泥沼にからめとられてゆくように、少しずつ、少しずつ魔の手が忍びよるような気持ち悪さを感じてしまう。

「とにかく探しに行こう。エドガンさん、ナン……シーは、その、大事なものをさっきのショーの途中で取られちゃったみたいなんです。盗んだ相手は、たぶん突発的な犯行じゃない。気を付けてください」

「うわ、マジか。ナンシーちゃん、心配すんなって。オレが取り戻して見せるから！」

本当は、エドガンにナンナの正体を告げたほうがいいのだろうが、シヨックのあまり判断が鈍る可能性がある。何より事態は一刻を争う。

大切なものの正体を伏せたまま、マリエラたちはサーカステントの裏側へと急ぐ。

団長か、補助役のピエロを押さえられればガウウを取り戻せるかもしれない。

そう思ったマリエラだったが、駆け付けたサーカステントの裏で見えたものは、縛られ昏倒しているサーカス団員と思われる男と、彼を囲み困惑気な表情を浮かべるサーカスの面々だった。

ガウウを連れ去った連中は、ナンナが不調の内に何の痕跡も残さず逃げおおせた後だったのだ。

「ほう、ニクスの奴がわざわざ忠告してやったというのに、まんまと守護精霊を取られたか。どうせサーカスの連中も成り代わられた被害者で、犯人の行方はようとして知れず、というところかの」

弱り目に祟り目とはこのことか。

鵜の目鷹の目魚の目つるめ……後半はいい加減だがとにかく手段を選ばず探した結果、マリエラは痛い視線を受けている。

とんだまぬけじゃの、と言いたげな目だ。

目は口ほどにものを言うとはまさにこんな感じかな、と思いつながらマリエラは十代前半に見える少女の暴言に「返す言葉もございません」とうなだれる。

初対面だというのに暴言全開のこの少女の名は、フェイレーン・イリステリア。

師匠フレイジージャが『司書』と呼ぶハイエルフだ。

< i 8 1 7 8 3 9 — 2 1 0 6 4 >

フェイレーンに指摘された通り、サーカスの控えテントで倒れていた男性はピエロ役の団員だった。ガウウを攫った連中に成り代わられていたのだろう。当然というべきか、サーカスからは何の手掛かりも得られなかった。

困り果てたマリエラたちが思い出したのが、テオレーマにいますという『司書』だった。

ヴオイドが会うのに苦労したと聞いていたから門前払いも覚悟して藁をもつかむ気持ちで来たのだが、流石は『司書』というべきか、マリエラたちの来訪を知っていたかのようにすんなり会うことができました。

ただし、部屋に呼ばれたのはマリエラだけ。

理由を聞けば、余計な縁えにしは作りたくないのだという。

会った時は幼い見た目に驚いたものの、フェイレーンという人物が、師匠同様、見た目通りの存在でなく、かつ、これまた師匠同様にろくでもない部類の存在であることは一目でわかった。

なのでマリエラは平身低頭、おりこうさんに畏まりつつ事情を話したのだけだ。

「あのう、それでガウウの居場所は……」

「知らぬ。ちらと見かけたばかりの森の仔の片割れの居場所など、分かるはずがなかるうに」

「でも、帝都で精霊を攫っている人の目星は付いてるんですよね？」  
「確証はないし、簡単に手だし出来る相手でもないぞ。じゃが安心せい。組織が大きいということは、末端は狙いやすくもあるものじや」

ニクスが警告してくれた時点で予想していたが、精霊を攫わせているのは権力者か何かなのдарう。それでもガウウを放つてはおけない。何とか秘密裏に助け出さなければ。

「……分かりました。十分気を付けますので、場所を教えてくださいませんか？」

「だから知らんと言うとるじやろうに」

意を決し、キリリとした表情で聞いたのに、本当にガウウの居場所を知らないらしい。だったらどうしてマリエラがこの部屋へ呼ばれたのか。

「ええ……。アカシックレコード世界の記憶の司書なんですよ？ ちょちよつと調べるとかできないんですか」

「できるわけが無かるう。これまでもこれからも縁交わることのない者の何もかもを知るなぞ、この世の存在には無理じゃ。だいたいの守護精霊の居場所は、半身たる森の仔が一番知れるが道理じゃ。もっともそれが出来るなら、おめおめと半身を奪われたりはすまいし、ここへも来ておらぬじやろうがの」

そう言えば、ヴォイドも「親交を深めるのが先」と言われたと聞く。おそらくだが、何らかの縁が結ばれた者のことしか分からないのかもしれない。そう考えれば、この部屋にマリエラだけ呼ばれた

理由もフェイレーンはむやみに縁を結びたくないのだろうと理解できる。では、どうしてナンナでなくマリエラなのか。

(こう言うってことは、ナンナは気付いてないだけで、ガウウと繋がってるんだ)

マリエラは、かつて《命の雫》と同化してキャロラインを探し出したことを思い出す。

ここが迷宮都市なら同じ方法でガウウを探せたかもしれない。しかし、ここは帝都。魔の森の地脈と契約したマリエラには《命の雫》をたどって探すことはできない。

(でも、ナンナなら……?)

「何か気付いたようじゃの」

「肉のしがらみから解き放たれれば、ナンナはガウウを見つけ出せますか?」

「たやすいじゃろつな」

だったら問題は一つだけだ。

「ナンナの精神を肉体から解き放つ方法……」

キャロラインを探した時は、師匠が導いてくれた。けれどここに師匠はいないし、今回はマリエラ自身だけでなくナンナを導かなければいけない。

そんな芸当、とてもではないがマリエラにはできない。サラマンダーにでも願えばいいのだろうか。“混ぜるな危険”的な方向で、トラブルの予感しかないのだが。

悩むマリエラにフェイレーンがニヤリと笑った。

「何を悩む。お主は錬金術師だろう？ この街では、それを叶えるポーションがあるではないか。そのために、お主をここに呼んだのじゃ」

「それって、まさか……」

フェイレーンの言わんとする内容に、マリエラは思わずくぐりと息をのんだ。

## 45・思わぬ助力（後書き）

【帝都日誌】司書が金髪のじゃロリだった。byマリエラ

4月1日にコミックス3巻発売らしいで

すよ。by作者

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

#### 46・アストラルポジション(前書き)

前回までのあらすじ：ガウウを盗られたマリエラ、金髪のじゃロリエルフを頼る。



## 46・アストラルポジション

「それって、まさかアストラルポジション？」

マリエラがその名を口にしたポジションは、バインディング結脈式典の際に子供たちが地脈に潜るきっかけとするポジションだ。

バインディング結脈式典に精霊は介在しない。代わりにこのアストラルポジションを使って子供たちは肉体を離れ、アフカン導者の声に導かれて地脈の浅いところで契約を結ぶ。

確かにアストラルポジションを飲めば、ナンナは肉体を離れてガウウを探しに行けるだろう。しかし。

「私のライブラリにアストラルポジションの作り方はないんですが……」

師から弟子、またその弟子へと連綿と継がれる集合知である『ライブラリ』は、錬金術師全員が同じものを共有するわけではない。伝えられない禁呪もあれば、中には金にも代えがたい秘伝もあるのだ。

アストラルポジションはイリデッセンス学派の秘伝のポジションだと思う。それをこっそり盗み見るなどと……。

しかし、フェイレーンは承知の上で話を誘導している気がする。ということ、何か手立てがあるのだろうか。

「本当に？ この大地のうわべに根付く者にとってはそうであろうが、お主はすでに見たはずだ。お前たちがライブラリと呼ぶものが、一体何の一部なのか、知識と情報の根幹を」

やっぱりか。やったらできちゃう系なのか。

確かにマリエラはかつて魔の森の深淵で、ライブラリの正体を知った。あれは世界の記憶の一部だった。アカシックレコードおそらくは世界の根幹のよ  
うな場所にあつて、そこは地脈と繋がっている。だから地脈と契約し、帰還時に師から経験値とともに先達の知識を得る鍵、あるいは筋道のようなものを得られるのだとマリエラは考えている。

「大半の錬金術師と地脈の繋がりは浅い。だから与えられた末枝のごとき経路からしか書庫に辿り着くことができぬ。真つ暗な中、手元の書を掴むようなものじゃな。」

じゃがお主の繋がりは深く、しかも書庫のありようを知っておる。あそこはの、人には過ぎた場所故に身動きもままならぬだけじゃ。お主は書庫の鍵を譲り受けたと思うておるうが、鍵などそもそもかかっておらぬ。書架のありかを教えられたにすぎぬのじゃ。だからすぐ隣の書架を覗けば望みの知識は手に入る」

帝都は広いし、ガウウは守護精霊だ。実体のないガウウを探す手立ては他にはないだろう。あつたとして、それを探している間にガウウがどうなってしまうのか。それを考えれば他に手はないだろう。

「……わかりました。やってみます。《ライブラリ》」

意を決してマリエラは目を閉じライブラリを開く。

思い描くのは、何冊もの本が並んだ書架のイメージ。マリエラはそのすぐ前に立っている。書架はとても大きくて、さまざまな本がたくさん収められているけれど、いつも使うのは錬成方法や素材の処理方法について書かれた数冊だけで、それがマリエラの目の前に並べられているのだ。

書架はとても大きいし、マリエラは書架のすぐ近くにいたので、たくさんの本があると分かっていても、目の前の本しか見えないし、他にどんな本が収められているのかもわからない。たまに料理のレシピが知りたいとか、石鹸などを造りたいとか考えると、いつもの本の隣にその本が置かれていたりする。そういう場所だ。

(……となりの書架か)

隣の書架を見るためには、数歩下がらなければならぬ。けれどこの場所では体の自由が利かないのだ。ただ、目の前にあるこの本の、この箇所が読みたいな、と思えばいつの間にかその本の目的のページが開かれているという感じだ。

マリエラはこの場所を書架だと認識しているが、人によってはレシピの描かれた紙が浮かんでいる場所だという人もいるし、文字が宙に浮かんでいるという人もいる。そして、共通しているのは体の自由が利かず、いくつかある知識の中から目的のものが得られるだけの場所だということだ。

そういう場所だと認識していたから、動けるなんて考えもしなかったけれど。

( 師匠を探して辿り着いた水の神殿…… )

魔の森の深淵と呼ばれる場所、湖の精霊の精神が宿る神殿がライブラリだというならば、ここは動ける場所なのだ。

とん。

マリエラの身体が一步後ろにさがる。

(……暗い。でも、隣にも、うっん、ずっと奥まで書架が続いているのが分かる……)

目的のレシピはすぐ隣の書架にある。そんなことも分かるのだけ  
れど。

「……暗くて見えません」

ぱちりと目を開けば先ほどいた部屋で、自由を取り戻したマリエ  
ラの前には面白い物でも見るようにフェイレーンがこちらを見てい  
た。

フェイレーンの言う通り、他の流派が蓄えた錬金術の知識にも触  
れることはできそうだ。けれど真つ暗な中ではどれがその本か分か  
らないし、読むこともできそうにない。

これは困った。これではアストラルポーションも作れそうにない。

「ぶつ、くくく……。お主、お主！ お主は真面目で善良じゃのう  
！」

困り顔のマリエラを見て、フェイレーンが大きな声で笑い始めた。  
こっちは困っているというのに、ちょっと失礼ではないか。

むう。口には出さずちょぴりむくれたマリエラを見て、フェイは  
さらに大笑いしながらバシバシ叩く。柳のように華奢な手指でスナ  
ップを利かせるのはやめて欲しい、痛いじゃないか。

< i 8 1 5 2 3 4 — 2 1 0 6 4 >

「良い、良いぞ！ 炎災の弟子にしては良識がある。暗くて見えぬ  
と言ったの、それはお主に後ろ暗い気持ちがあるからじゃ。致し方  
ないと思いつつも、他所の秘伝を盗み見ることに罪悪感を覚えたの

じやる。結構、結構！　ぬしがそのような心根の持ち主で、安心してわ」

「ええー、試したんですか？」

あまりにもあけすけに笑うので、マリエラも思わずむくれてしま

う。

「お主の人となりを見極めたと言つて欲しいの。あれは門外不出の秘薬というわけではない。伝手さえあれば手に入る程度の代物じゃから、製法をちよいと覗いたとて、さほどの影響がある物ではない。しかも状況が状況じゃ。仲間のためと覗き見ることに良心の呵責を感じぬ者は多かるうよ。それに暗くて見えなかったとして、お主にも炎の伝手があるうに。呼べば明かりを灯すことも出来たるう。まあ、行儀の悪い炎であれば貴重な書を燃やしてもうたかもしれないがの」

「あ……」

暗いならサラマンダーを呼べばよかつたのか。

それは考えつかなくかつたが、マリエラが呼んだサラマンダーは自由奔放が過ぎるから、フェイレーンの言う通りライブラリに納められた書を燃やしてしまったかもしれない。そうなつたら大惨事だったから気付かなくてよかつたのか。そんなことを考えるマリエラにフェイレーンが言う。

「深淵近き人の子よ、お主の善性に免じてわらわが手を貸してやるう」

鷹揚にほほ笑むフェイレーン。その手にはいつの間にか青い炎が

宿った燭台を持っている。神秘的な光景だ。なんだかとっても気高くてスゴイ存在が救いをもたらしてくれる感じがする。しかし、そういう存在にマリエラは大層縁があるのだ。

「……何が目的なんですか。対価は？」

この手の存在の手助けは、基本的に高くつくことをマリエラは知っている。師匠なら大抵のお願いはお酒で解決が付くけれど、それで済むのはマリエラが迷宮討伐に貢献し、リユーロパージャを助けたからだ。むしろそのためにマリエラは育てられたと言っている。

注いでくれた愛情だけは、無償のものだったと信じているが。

「チツ、これだから奇跡慣れした者は」

ほらやっぱり。

「我らエルフは精霊と共に生きるを是とするもの。私欲のために精霊を捕らえ消費するなど言語道断。我らとてきやつらの手足の一つでも潰しておきたいのじゃ。」

……信じておらん顔じゃの。

安心するがよい。今のお主に用はないわ。かように気にするのであれば、今回はただの先行投資と心得よ。

いずれお主は根源に　　グランドに至る。その時のための縁結びと心得よ」

グランド、根源。

それは、この世界のどこでも使えるというグランド・ポーシヨンに關係するものではないか。

マリエラは確信に近い気持ちでフェイレーンの言葉を聞いていた。

(グランド・ポーションなんて面倒ごとの匂いしかしないよね。っていうか、グランドって場所なの？ そんな場所、絶対行きたくないんだけど……)

迷宮都市と違って帝都は安全で豊かな街だ。放置すれば滅ぶとか、大切な人が危険にさらされるわけではないのに、誰が好んでそんな場所に行くだろうか。

少なくとも、マリエラは一撃瀕死の貧弱さだ。そんな場所、絶対に行きたくない。

「分かりました、お願いします。でも、そんな所、行かないと思いますよ」

「至らばよし、至らねばなおよし。まずはライブラリに至るがよろう」

フェイレーンに促されるまま、マリエラは再び目を閉じライブラリを開く。

(あ、青い光？ 炎……ウィルオ・ウイスプ？)

真っ暗なライブラリの中、フェイレーンが持っていたよりずっとずっと小さい、けれど同じ青い炎がマリエラの手元を照らす。その手には、アストラルポーションのレシピがあった。

「アマラントスの花弁、邪妖精の鱗粉、レイスの涙、ベラドンナの根、オルロリディアンダの種……」

幸いというべきか、必要な材料の内、3つ　アマラントスの花弁、邪妖精の鱗粉、レイスの涙はオークションで入手して、薬晶化して携帯している。

「ベラドンナの根、オルロリディアンダの種、あとはルナマギアがあれば……」

「それならば、わらわの薬草園にあるぞ。ルナマギアもちょうど入手したものがあある」

「それなら……。ナンナ、待ってて。すぐ作るから！」

ここからが錬金術師マリエラの本領発揮だ。

「アマラントスの花弁、邪妖精の鱗粉、レイスの涙……。オークシヨンで安かったから買ったけど、不吉三点セットの出番がさっそく来るなんて」

アマラントスの花弁は冥界に咲く花とも言われ、不死者の蠢く墓地などに咲く。そういった場所にはレイスも発生するものだし、アマラントスの花畑には邪妖精も棲みついたりする。古戦場や見捨てられた墓場が産地の、名付けて不吉三点セットだ。

迷宮都市では迷宮討伐で手いっぱいでは不死者に構っている場合ではなかったから、死者は迷宮に喰われるか、残された者たちに炎で送ってもらえる2択だった。だから生死と隣り合わせな場所の割に不死者には縁遠く、この三点セットは手に入らないから買っておいたのが役に立った。

スケルトンの骨は迷宮都市でも手に入るから、レイスの涙も手に入りそうだが、迷宮のレイスは乾いているのかそれとも辛抱強いのか、いくらどつきまわしてもちつとも泣いてくれないらしい。

ちなみに入手方法は、なかなか暴力的だ。レイスは霊体だが、



聖水をかけたり魔力を帯びた武器なら多少はダメージが入るらしく、それでぺちぺち泣くまで叩くらしい。レイスに思わず同情してしまふ。涙は大切にに使わせてもらおう。

そんなことを考えながらマリエラは、ベラドンナの根っこの皮をむき、オルロリディアンダの種を割って胚芽を取り出す。

ルナマギアの抽出なんて慣れたもので、《命の雫》がちよびちよびしか汲めないことを除けば、他の作業と同時進行で進めてしまえる。

「さすがじゃの。これは、薬晶か。実物は初めて見る。綺麗なものじゃの」

フェイレーンの言葉は掛け値なしの誉め言葉なのだろう。マリエラの錬成はあまり人に見せない方が良いのだろうが、この司書に隠し事など無理だろう。フェイレーンが見たいということで、足りない素材を持ってきてもらったの錬成だ。

皮をむいたベラドンナの根っことオルロリディアンダの胚芽に《命の雫》を数滴加えてすりつぶし、《錬成空間》の中で圧搾する。

「本来ならその十倍の量は必要じゃろ？」

「どちらも植物で伸びたい感じの素材だから、圧搾する時に逃げ道みたいなを作ってあげれば、こう、にゅって出てきます」

「何を言うとするのか、よくわからんの」

うん、よく言われる。主に、錬金術学校の生徒から。

いつもなら、何とか理解してもらえるように考えるのだが、フェイレーンは生徒ではないからスルーしつつ錬成を続ける。

にゅつと出てきた汁を《命の雫》を加えた油に溶かし、抽出済のルナマギア溶液に加える。本当は温度を上げたり下げたりしながら不吉三点セットを先に加えるのだが、薬晶にしまっているのであとからポイと加えるだけで簡単に溶けてくれる。

「《薬効固定》つと。はい、できた」

「ずいぶん簡単に作りよる。……イリデッセンスの連中が見たら、泣くか怒るかしそうじゃの」

「え、でもこれ中級ですし」

「炎災の弟子に言うだけ無駄じゃったか。ほれ、さっさと行ってこい。精霊は儂い。いつまでも変わらずあると思つなよ」

師匠とどういう知り合いなのだろう。

ものすごく気になるが、フェイレーンの不穏なセリフの方がもっと気になる。

マリエラは、できたばかりのアストララルポーションを握りしめ、ナンナたちの待つ控室へと急いだ。

#### 46・アストラルポーション（後書き）

【帝都日誌】 アストラルポーション作れるようになりました。b  
yマリエラ

リンクス !!!

コミカライズ「生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい」輪環  
の魔法薬」は、

B's-LOG COMIC Vol.134 3月5日配信です。

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更  
新中！

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

#### 47・エーレンヒル静寂園（前書き）

前回までのあらすじ：マリエラ、アストラルポーションを作る

## 47・エーレンヒル静寂園

帝都の外縁部に、エーレンヒル静寂園と呼ばれる小高い丘がある。この丘は丸ごと霊園で、地下には自然窟を利用した巨大な共同納骨堂カタコがある。帝都の埋葬地として長らく利用されてきた場所で、収容量を超えた今では公園として開放されているけれど、霊園らしい寂しげな雰囲気を訪れる者は少ない。

そのエーレンヒル静寂園の納骨堂の更に地下に地下室があることは、ごく限られた者しか知らない。

霊園の地下の秘密の空間。こういう場所でやることなんて、たいがいがるくでもないことと相場が決まっている。

邪教の集会だとか、禁断の儀式だとか、犯罪めいた研究だとか。

今、この秘密の場所に集った者たちの服装を見るに、ここで行われているのは3つ目だろうか。とすれば、悪の研究員たちに囲まれている白く透き通った猫は、哀れな被検体だろう。

「獣の形の精霊とは珍しい」

「獣人の守護精霊というものですぞ」

「よく捕らえられたな。獣人なんぞ南方の森から出てこんものだろうに。少なくとも食い詰めた冒険者にやれる仕事ではなからう」

先ほど届けられたばかりの白い子猫の精霊　ガウウについて、  
仮面のようなマスクを付けた研究員たちがひそひそと噂する。

「新たな精霊は久しぶりだな。わしがこの研究を始めた頃はそれなりの数が存在していたが、最近はほとんどみない」

「精霊も攫さらわれると知って逃げてしまったのでしような。この守護精霊の貴重さがわかりただけだということのもの」

今の帝都にいる精霊など、名のある錬金術家と縁のある精霊だとか、ドワーフの工房の炉に棲みついた精霊だとか聖樹の精霊などの手を出しにくいものばかりだ。

「貴殿がこれを？」

「そうですね！」

真新しいマスクをつけた男　　ハイツェル・ヴィンケルマンがふふんと自慢げに胸を張る。ここに居る研究員たちは互いの素性が隠せ仕事上の実用性もある防毒マスクをつけている。口元にフィルター代わりの薬草を詰めたマスクは獣の顔にも似た形のだが、こうしてのけぞって見せると高い鼻にも見えてくる。つまり、この男、鼻高々と言っわけだ。

（こいつが精霊を手土産に参入してきた新参者か。こんな仕事だっというのに、ずいぶんと自己顕示欲が強いようだな。なるべく関わり合いになりたくないものだ）

消極的とも思える研究者の懸念は、自分たちの仕事がハイリスク・ハイリターンであることを理解してのものだ。

彼らは幻境派クシククトヘルの研究員。それも役目を与えられていても情報はあまり与えられていない、いざとなったら切り捨てられる末端よりちよっと上くらいの研究員だ。それでも大勢いる構成員のほとんどが、

これまでのハイツェルのような金を出すだけの『出資者』で、幻境クシクトベルの秘密を知らされていないことを思えば、秘密の一部を知る彼らは選ばれし正規の構成員と言っている。

自らを幻境派クシクトベルと言ってはばからないハイツェルだったが、今までクシクトベルはなんちゃって構成員に過ぎず、この日ようやく正式に幻境派クシクトベルになれたわけだ。

この守護精霊の捕縛にハイツェルは少ない金貨を投じたのだ。ちなみに、獣人の守護精霊の情報やそれを悟られずに捕縛する人員の手配は、ただ金を出しただけで手に入るようなものでないことを、ハイツェルは理解していない。だから、金銭ごときと引き換えに守護精霊を手配した彼の“後援者”の思惑など、金銭的な謝礼以外に思いもよらないのだが、それでも投じた金額を考えれば、これを足掛かりに確たる成果を上げねばと気をはやるのも仕方あるまい。ハイツェルの所属する組織クシクトベル、幻境クシクトベルでは結果こそが力を持つ。ここで成果を積み上げていけば、資産はあれど子爵でしかないヴィンケルマン家が帝都の中枢を担う日も遠くあるまい。

（由緒あるヴィンケルマン家の吾輩が、末端に甘んじ早や……はて、どれくらいでしたかな。まあ、吾輩も随分投資してきたのですから、そろそろ見合った成果が欲しいところ。しかし、流石は吾輩。運が良い。被検体が手に入ったタイミングで、よい情報を仕入れられるとは！）

ふっふーんと、一人にやけつつ、自分に成功をもたらしてくれる予定のコネコチャンを覗き見るハイツェル。

ガウウの捕らえられた檻は底に魔法陣が刻まれていて、守護精霊を拘束し、姿を可視化する機能があるらしい。のぞき込む男たちに、牙を見せてウウウと唸り声をあげている。

「随分と反抗的ですねあ」

「所詮はけだもの。一鞭くれてやれば大人しくなる。我らの目的には従順さも必要なのだ。おい、黒き血フラットディーヴァインのイバラをここへ」

まずは痛みで服従させようというのだろう、持ち出されたのは黒く干からびたイバラだった。

フラットディーヴァイン  
黒き血のイバラ。

罪人に対する刑罰の一つに手足を縛った状態でイバラを体中に巻き付けるものがある。巻きつけられるイバラの棘には痒みをもたらす毒があり、巻きつけられた罪人は、耐え難い痒みゆえに体を棘が傷つけるのも厭わずにそこらじゅうを転げまわる。そうして罪人の苦痛と血を吸ったイバラは、罪人の罪と穢れが重いほど黒く黒く変色し、善なる精霊を傷つける呪具となる。

ウウウ……。

フラットディーヴァイン  
黒き血のイバラがどのようなものか分かるのだろう、檻に閉じ込められたガウウは唸りながらも後ずさる。

子猫のような見た目の通り、まだ幼い精霊なのだ。そんな稚い存在いとけなを、この男たちはイバラの鞭で打とうというのか。

ハイツェルはこの子猫精霊がちょっぴり可哀そうになる。

「なんだか可哀そうですぞ」

「新参者は黙っておれ。今の平穏は仮初のもの。ほころびはすでに見えていると俺は聞いた。崩壊は遠くない未来に必ず訪れるのだと滅びは看過できない。滅亡を甘受するわけにはいかない。例えばどのような罪を重ねようとも。今を生きる民たちと、未来に生まれる民たちと、そしてこの帝都の礎となった民たちのために、我ら幻境クシクトヘルは役割を与えられているのだ。



案ずるな、きつくは打たん。久々の精霊だ、早々に消えてもらっては困るからな」

両手を挙げて鷹揚に語ったのは、若い研究員だろうか。

意識高い系なのか、狂信的なのか。フラッデーヴァイン黒き血のイバラを見つめる目がギラギラしてちよつと怖い。

「ふうむ、なるほど。ところで帝都の一体何がどのように崩壊するのです?」

「むう、それは……。……。それはな、我らがごとき末端の知る必要はないのだ!」

意識高い系研究員に偉そうにされて少しムツとしたハイツェルだったが、彼はドヤ顔の割にはこの研究の最終目的を知らないようだ。

(この程度の情報でよくもまあ、あれだけ威張れるものですぞ。これだから下っ端は。まあ、永年万年下っ端らしくて結構結構。吾輩のような尊い家柄の出でもなければ知らぬのも道理。偉大なる帝国より広い心で赦して進ぜるのですぞ)

ふっふーん。吾輩実は知ってるもんね。教えてもらっちゃったもんね。

そんな感じで少々気分が良くなるハイツェル。そんな彼はさておいて、古参の研究員が作業開始を告げた。

「始めよう」

「未来のために」

「帝都のために」

(そして、吾輩の出世のために!)

若干一名、不純分子も混じっているが、ここに集った者たちは高い志の下、邪法も辞さない者たちらしい。

まるで物でも見るような男たちの冷たい視線に、幼いガウウは震えながらも果敢に牙を剥き続けた。

「あれ、エドガンさんは？」

「認識障害のスカーフを取りに行ってもらっている」

アストラルポーションを完成させたマリエラが控室に戻ると、そこにエドガンの姿は無かった。

精霊と言うのは実体がない。いたこともいなくなったことも証明しづらい存在だから、精霊誘拐は現行犯でも犯行を立証しづらい。だから、人知れず取り返すのが良かろうと認識障害のスカーフを取りに戻ってもらったのだが、そのお使いにエドガンを使ったのは、今はまだナンナの正体を知らせない方がいいだろうというジークナりの判断だ。

「ありがとう、ジーク。エドガンさんには悪いけど、ガウウを取り戻すのが先だもんね」

そう言うところマリエラは、ナンナの首元から消音の魔法陣が縫い込まれた飾り襟を外してやる。

「うな、うなな。ガウウ、ガウウは見つかったなん？ ナンナが大事にしないから、ガウウは帰ってこないなんな？」

今のナンナには、声さえ元気がなく獣人らしいパワフルさが感じられない。ガウウのことが心配なのはもちろんだけれど、こんなナ

ナンナは見えていられない。

「マリエラは作ったばかりのアストラルポーションをナンナに渡して説明をする。」

「これを飲むと、ガウウのところに行けるなん？」

「うん。体を離れて意識　心だけで動けるようになるんだよ。そうすれば、感覚がずっと鋭くなって、ガウウがどこにいるかきつとわかる。でも、同時にいろんなことがあやふやになって帰って来れなくなるかもしれない。心だけガウウのところに行けてもガウウは取り戻せない。場所を確認だけしたら、一旦戻って、迎えに行かないといけないの」

「むつかしいなん」

「大丈夫、私もいつしよに行くよ。ガウウの場所が分かったら、ナンナが戻ってこれるように。ガウウをちゃんと取り戻せるように、私の声を忘れず聞いてね」

「うなんな」

いつもの便利な猫語だが、この「うなんな」は理解ができた。

「ジーク、お願い。手を握っていて。私がちゃんと帰ってこられるように」

「もちろんだ」

今、この部屋にはマリエラとナンナ、そしてジークしかいない。行くなら今しかないだろう。

マリエラとナンナは手をつなぐとアストラルポーションを飲み干す。

同時にぐらりと視界が揺れる。幼い頃イルミナリアに連れられて

地脈に潜った時とも、キャロラインを探すため師匠の助けを借りた時とも違う不快な感覚。

(なに、これ。心がどろりと溶けて、体から零れ落ちてしまつみた  
い)

立っているはずなのに、仰向けに倒れていく気がして思わず伸ばした手を、大きくて温かな手が握ってくれた。

(ジーク……)

大丈夫、大丈夫だ。ジークが握っていてくれるなら、必ずここへ帰ってこれる。

(行こう、ナンナ。ガウウを探しに)

マリエラがそう思った瞬間、蕩けるようにぼやけていた景色が、流星のように流れ始めた。

#### 47・エーレンヒル静寂園（後書き）

【帝都日誌】「はっ、ガウウがイタイイタイなんな！！！」 by  
ナンナ

リンクス！！！！

コミカライズ「生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい」輪環  
の魔法薬」は、

B's-LOG COMIC Vol.134 にて更新されてい  
ます。

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更  
新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

[https://ncode.syosetu.com/n314  
1ff/](https://ncode.syosetu.com/n3141ff/)

#### 48・ゲニウスの思惑（前書き）

前回までのあらすじ：コネコチャン、いじめちゃったのですぞ。

## 48・ゲニウスの思惑

走っている。まるで、風のように。

帝都の硬い石畳をまるで羽がなせるような軽やかさで蹴り、つむじ風よりも速く、速く。

風が草葉の隙間を吹き抜けていくように、人々の合間を抜け、石畳の目地のように複雑に張り巡らされた帝都の路地を、たった一つの場所をめがけて進む、進む。

ああ、なんて自由なのだろう。大地を駆ける獣というのは、こんなにのびやかなものなのか。

今なら分かる、行くべき場所が。今なら聞こえる、求める声。奪われようと、隔たれようと、繋がっているのだ。片割れに、半身に。

ガウウ、ガウウ、待ってるなん！

まるで自分が一匹の白い獣になったような錯覚にとらわれていたマリエラは、ガウウを求めるナンナの声に自分が何者なのかを思い出した。

いけない、ナンナに引っ張られてた。

肉体を持たない精神体というものは厄介だ。こうしてナンナにくっついていてだけで、たやすく吞まれそうになる。自己というものは肉体という器があって初めて成り立つものなのだろう。今のマリエラは自分というものを保つのがとても難しいのだ。

ナンナの方はというと、肉体の軛くびきから解放されたとたん、伸びたゴムが縮むようにガウウの方に引き寄せられている状態だ。やはり守護精霊と獣人との間には半身と言ってもいいほどの絆があるのだろう。

< i 8 3 0 1 8 5 — 2 1 0 6 4 >

ここは……？

落ち着いてくると、今のマリエラは大きな白猫に騎乗したような状態だとわかる。ナンナは輪郭さえあやふやな獣のような状態だが、マリエラは自分が自分であることを認識できているからだろうか、手も足も、いつもの自分を認識できるし、今どこにいるのかくらいも理解できた。

来た道を振り返れば、帝都は濃密な《命の雫》の気配に、生身で見るとよりはるかに煌めいて見えた。

いつの間に越えたのか、背後に見えるのは帝都の中央区画を囲む外壁。ここは外縁部なのだろう、《命の雫》の煌めきはずっと薄い。が、所々噴水のように湧き出す場所が確認できる。あれはキャル様が見学したという大規模工房だろうか。たくさんマッの量産型錬金術師が《命の雫》を汲み上げているからあれほど輝いているのだろう。

肉体から遠ざかるほど景色はどんどん色あせ、貧しくなっていく。そう、“貧しい”という表現がこの景色には相応しい。家々が立ち並び物質的に豊かでも、土地が持つ《命の雫》が薄いのだ。

“ここは本来、農業には向かない荒れた土地”

そんな話を聞いた覚えがある。この話をしてくれたのは、一体誰だったろう。



貧しいモノクロームの世界の中で、マリエラは世界の輪郭をおぼるげに知覚する。

ナンナが向かっていく先は、外縁部が見下ろせる小高い丘だ。たちまち頂上に辿り着けば、ずいぶん広い公園だ。古いモニュメントのようなものや、建物も幾つか建っている。

古い建物、石柱が並んで。でも芝生は手入れされていて、建物も。人が今も出入りして……。……礼拝堂？ 慰霊碑？

実体のないナンナとマリエラを止める者はいないし、おそらく誰にも見えてはいない。ナンナが礼拝堂の裏を進むと古い墓地が広がっていて、自分のある人の者だろうか小さな家のような霊廟が立ち並んでいる。今では参る者は少ないのだろう、人気のないこの場所を周囲の木々が隠すように生い茂っている。

この場所を目指して一目散に走ってきたナンナだったが、ここで道を見失ってしまったようだ。あたりをうろつろ、ぐるぐると回っている。

ガウウ！ ガウウ！ ガウウ！ ガウウ！

ナンナに意識はあるのだろうか。ガウウを求めるその声は、名前の響きも相まって獣の叫び声のようだ。

たぶん、地下にいるんだ。この地下に……。

ナンナには地面の中に潜るといふ発想はないのだろう。しかし、マリエラは違う。その先に抗いがたい光に満ちた温かい場所があることを知っている。

そこまで行くのは危険だけれど、大地の薄皮をめくった先くらい、容易に覗けてしまうのだ。

地下の様子を確認しようと思意識を向けたその瞬間。

うわっ、な、なに……！！？

地の底にわだかまる、真っ黒な何かにマリエラは身の毛がよだつ  
のを感じた。

真っ暗なのではない。真っ黒なのだ。

その漆黒の何かに質感はなく、立体なのか平面なのかもわからない。  
い。

落ちてしまいそうな、引きずり込まれてしまいそうな、そんな黒。  
それが帝都一帯の、しかも地脈よりずっと浅い位置に広がっていた。  
何よりどうしようもなく恐ろしく感じたのは、そこに意思のよう  
なものを感じたからだろう。

見られている。

あの漆黒か、それともそれに紛れる何かか。得体の知れない何者  
かがマリエラを認識している。

怖い、怖い、怖い、助けて。

あまりの恐ろしさにマリエラは縋りつくように両手を強く握ると、  
次の瞬間、ナンナとマリエラはオークションハウス『テオレーマ』  
の床にへたり込んだ状態で目を覚ました。右手はジーク、左手はナ  
ンナの手をぎゅっと握りしめている。

「な……ん、な？」

「戻って、こられた……？」

本能的に身を守ろうとしたからだろう。精霊に導かれるのとは違って、アストラルポジションは夢を見ているのに近いというか、なんだか“浅い”感じがする。悪夢でも落下するとか衝撃的なシーンで目を覚ますのはまああることで、それに近い現象ではないか。

こんなもので、果たして地脈まで行けるのか。あの漆黒は何なのか。そしてマリエラを見ていたモノは……。

疑問は尽きることはないけれど、ガウウの居場所はおおよそ知れた。

隠し扉の場所は不明だが、当初の目的は達成できたのだ。

帝都の地下にわだかまる漆黒の正体は気になるが、今はガウウ救出が先決だ。

マリエラは一息つくとガウウの居場所をジークに告げた。

「ジーク、外縁部にお墓がある丘があつて、その地下にガウウはいる」

子供部屋というよりは神殿と呼んだ方がふさわしい部屋で、その部屋の主である少年は重い目蓋をゆっくり開いた。

床はマロンマリナスと言うのだろうか、大地を思わせる茶色の大理石で舗装され、磨き上げられた表面に、いくつも灯るろうそくの明かりが映って儼かな雰囲気醸し出している。

壁面も大理石だが、豊穡の祈りが込められているのだろう、複雑で美しい植物の文様の彫金で飾られている。

座る椅子は翡翠やターコイズで飾り付けられ、皇帝の玉座より価値があるかもしれない。

しかし、いくら高価な部屋だと言っても、人が住むのに適しているとは言い難い。子供の部屋にはなおさらだ。

分厚い大理石の床も宝石の玉座も、使う者の体温を吸い取るばかりだし、柔らかな敷物一つない場所など、本来くつろげる場所ではない。この部屋を暖めるものは天井からつるされた巨大なシャンデリアに灯る百を超えるろうそくだけだが、そのわずかな熱量さえ高い天井へと昇って、住む者を温めてはくれないのだ。

住人の生命活動を鈍らせるようなそんな部屋。

けれど、この部屋の主　ゲニウス・ロキにとってはそれすらも都合が良かった。

この仮初の肉体が僅かだけ長く持つからだ。

気分が悪いね。

ロキがそんな気持ちになったのは、肉体が冷え切っているせいではない。

ついさきほどまで視ていた光景に、腹立たしさを感じたのだ。

無垢な幼獣の鳴き声は、いたぶる者には聞こえないだろうが、ロキの耳には今も遙か遠くに聞こえてくる。

人間が人間を虐げ犠牲にすることに、特に思うことはない。

彼にとって、人間とは『ヨハン』かそれ以外かの2種類しかないないし、そもそも人間とはそういう生き物だと認識している。

例えるなら蟻や蜂のようなものだ。外敵の襲来に際し捨て身で攻撃　つまりは、死ぬことを役割付けられた個体がいるように、人

間という集団にも集団のために死ぬ役目の者がいるだけで、生きるために獲物を食うような生命の営みの一環に過ぎないとロキは認識している。

だから、そこまではいい。

勝手に喰らい合えばいいのだ。

この帝都を支える因習も同じだ。歪められてしまったとは言え『ヨハン』との契約の延長であるのだから、ロキにはどうすることもできない。

しかし、精霊を、あんな稚<sup>いとけな</sup>い存在を、物のように消費し犠牲にする行いを必要だからと容認できるほどには、ロキは人間を好いてはいない。

本当に忌まわしい。

ロキは年齢にそぐわぬ表情で、不快気に眉を顰める。

この帝都にはあんな場所がいくつもあって、それを命じている者は別の安全な場所にいる。精霊を崇めるエルフがいくつ潰しても、この帝都に代わりの人間はうじゃうじゃいるからキリがないのだ。

甘露に集る蟻のようにどこからともなく湧き出る様子も厭らしいが、何より人間が忌まわしいのは、人間たちのためなら犠牲を他の生き物に強いることを当然だと考えているところだろう。

本当にヨハンの民とはとても思えない。ヨハンの願いは美しかった。ヨハンの……ああ、なんだっけ。どうして僕はヨハンに惹かれたのだっけ……。なんでもいい。もう、なんでも。これが本性、この醜さこそが人間の真実だ。

契約など、結ぶのではなかった。ああ、か弱き者の鳴く声が

耳に障る……

狡猾で強欲な人間どもが我が身のみでは飽き足らず、幼い精霊を物のように消費する様は、腹に据えかねる。けれど、あれらもヨハンの民ならロキに手を出すことはできない。

だが、今回は。幼い精霊を助けようと動く者たちがいる。

ロキは先ほど視た光景を思い出し、服に付いた埃を振り払うように、軽く身を震わせる。

あの娘　マリエラは、かつてヨハンの民の多くを燃やした炎の精霊の弟子だけれど、同時に帝国の民である。それならばヨハンの民だ。ならば手を差し伸べてもいいし、あるいは。

ヨハンの民を助けるならば、契約からは反しまい。ふふふ、あの娘を招いてよかった。

ロキは先ほど地の底から見た光景を思い出す。精神体となってナインナと共に帝都を駆け抜けていった姿を。

あんなにはつきりしているなんて。あんなに強く護られているなんて。

あの娘なら、きつと至いたつてくれるはず。ならば今は力を貸そう。大切にしているがいい。絆を深めていくがいい。仲間たちを愛するがいい。

そうすれば、君こそが……。

ロキは、冷たい石の床に左手を付くと、再び目蓋を閉じる。見る者がいたならば、床の冷たさを確かめているような、そのよくな動きだ。

しかし、ちょうど同時刻、外縁部にある丘の上の霊廟で、臺石にカモフラージュされた隠し扉が誰に気付かれることもなく静かに開いた。

#### 48・ゲニウスの思惑（後書き）

【帝都日誌】帝都の底の黒いやつ、あれって地脈……じゃないよね？  
すごく浅いし。byマリエラ

<i830192—21064>

自己肯定感鬼つよなジャ株が個人的には爆上がり中。

七分丈のズボンもちよつと可愛い。

（ただし、長年塩漬けにしていた小型株が最近の株高でようやく±ゼロになった的な感じ）

<i828401—21064>

帯もカツコイイ！コミックス「生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい 輪環の魔法薬 3巻」は4月1日発売です！

ちよつぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>



#### 49・豪運と失策（前書き）

前回までのあらすじ：マリエラ、ナンナの居場所を見つける。

## 49・豪運と失策

(アストラルポーションの影響かな……)

帝都外縁部にあるイーレンヒル静寂園に向かう馬車の中、マリエラはシートにくたりと体を預けた。

「大丈夫か、マリエラ？」

「うんなん？」

「うん、ちょっとくらくらするだけ……」

心配そうなジークの様子に大丈夫だと答えたマリエラだったが、実際は先ほど視ていた《命の雫》の輪郭と普段見る世界が二重に見えていた。

狭い馬車には手を伸ばせば触れられる位置に天井があるのに、見えないはずの天井の向こうに《命の雫》が舞い散り帝都の建物に当たってはじける。恐ろしいと感じたからか、それとも今のマリエラの限界なのか先ほど見た地下の漆黒は幸いにも見えなくて、《命の雫》でいつもより光り輝く帝都の景色が流れていく。

まだ外縁部の所々に、フアアアツと細かな霧のように舞い上がっている場所がある。薄く広く《命の雫》が溢れる場所はどこかの大規模工房で、ポーションを作っているのだろう。

ああそうか、とマリエラは思う。

この帝都には《命の雫》を汲める錬金術師が大量にいる。一人一

人が汲める《命の雫》の量はとても少ないけれど、大勢の錬金術師が《命の雫》を汲み上げるお陰で、帝都は《命の雫》に満ち溢れているのだ。

マリエラが錬成する時だってそうだ。たくさん《命の雫》を汲み上げるけれど、その全てがポーションに込められるわけではない。むしろポーションに込められるより漏れて大気に解ける方がずっと多い。特にマリエラはお風呂に入れたりそのまま飲んだり、《命の雫》をばらまきまくっているくらいだ。

そうやって、地脈からくみ上げた《命の雫》がその土地に広がって、その地とそこに住む生命を豊かに潤す。

水に例えるなら水脈があるだけではだめなのだ。水を汲み上げ大地を潤し草木を茂らせることで、たくさん水を地表に蓄えることができる。その循環の果てに、大地は動物の暮らせる豊かなものへと変わっていく。地脈だって同じだ。地脈の豊かな場所は動植物が豊かだけれど、そこに人が棲み営みを繰り返すことで、光輝くほどの繁栄につながっていく。

200年前のエンダルジア王国は、マリエラの眼に光り輝いて見えたけれど、あれは精霊の加護だけではなくて、多くの生命が暮らし《命の雫》に満ちていたゆえの輝きだった。

(まるでポンプみたい)

錬金術師が《命の雫》を汲み上げることで、その地は《命の雫》の循環が促進されて一層豊かに輝いていく。この帝都のように。

(ポーションとか錬金術はきつとおまけで、《命の雫》を汲み上げるからこそが……)

だとしたら、外縁部と中央区画を隔てるあたりに見えた、《命の雫》を噴水のように高く吹きだしていた場所は何なのか。

あそこは確かアタノール。バインディング 結脈式典が行われていた場所だ。

アタノールとは錬金術で使う炉だ。《命の雫》が噴き出しているも不思議ではないけれど、あそこで一体何を錬成しているのだろう。

「皆さん、もうすぐエーレンヒル静寂園です」

何か大切なことに気付きそうになったのに、御者席から顔を覗かせたテオレーマのエルフ、ニクスの声で、マリエラは我に返る。

フェイレーンがニクスを同行させてくれたのだ。ガウウ奪還の強力な助っ人だ。

しばらく馬車で揺られたおかげか、二重に見えていた世界はいつも通りの色彩を取り戻していた。

窓から見るエーレンヒル静寂園は緑豊かで、建物ばかりの帝都のなかでひどく穏やかな場所に思える。

けれど、おそらくその地下には……。

「入口がどこかまでは分からなかったんですが……」

「場所が特定できただけでもお手柄ですよ、マリエラさん。」

我々も幾つかアジトを潰してきましたが、それらは末端の、誘拐の依頼を受けた冒険者崩れの拠点ばかりでした。ここはより中枢に近い。ここに居る連中ならば、精霊を攫う目的も知っているかもしれません。

それにしてもこの認識阻害の魔法陣はすごいですね。これなら気がねなく突入できます」

エルフのニクスは女性と見紛う美しい顔立ちをしているのだが、認識障害のスカーフをずらした笑みが凶悪そうに見えたのはどうしてだろう。中身は迷宮都市にゴロゴロいる冒険者たちと変わらない気がする。顔面詐欺だ。ナチュラル認識障害野郎だ。

「だな。ナンシーちゃんの大事なもんを盗みやがった連中だ、容赦はしないぜ」

こくこく。(うなんな)

ニクスに対してエドガンは、認識を阻害され過ぎではないか。再びサイレント・モードに戻ったとはいえ、ナンナはやる気満々でナンナっぱさが溢れているのに。

「エドガン、落ち着け。油断は禁物だぞ。あと、隠密行動なんだから気をつける」

二人をたしなめるジークはジークで、認識障害のスカーフを眼帯代わりに右目を隠すように顔に巻き付けている。精霊眼という名札並みに明確な特徴を隠すためなのだろうが、右手で顔を隠してうつむきがちに話すのはやめて欲しい。なんだか“右目がうずいちゃう”人みたいだ。夢幻の射手の再来か。

何にせよ、皆やる気も準備も万端だ。

あとは、入口を探すだけ。

意気込んだマリエラたちがエーレンヒル静寂園に着いてみると。

「……開いていますね」

「地下に続く階段があるな」

立ち並ぶ霊廟の一つの扉が開いており、中に安置された石の棺も蓋が大きくずれていた。

棺の底はぼつかり空いて地下深くへと階段が続いている。

「ここ……だと思う」

(うなんな)

「閉めんの忘れたのか？ 案外うっかりさんだな」

流石に閉め忘れなんてないと思うが、ここがガウウのいる場所へ続く入口なのは間違いない。

「ま、ラッキー、ラッキー。まあ、畏つてこともあるかもだから、気を引き締めて行こうぜ！」

エドガンはポジティブすぎる気がするが、ラッキーなのはその通りだ。

この場所を見る限り、開いていなければ入口だと気付かないほど巧妙な造りになっている。

マリエラたちはエドガンを先頭に、秘密の通路へと足を踏み入れた。

<i834050—21064>

「ふむ。やはり、何かを食べる様子はないな」

ガウウが捕らえられた檻は、研究員たちが入れた『餌』で汚れて

いた。

牙を剥く姿が生意気だからと黒き血のイバラブラッディローアインで打たれたガウウは今にも消えてしまいそうなほど弱り切っている。

ガウウの衰弱に慌てた研究員たちが、何か餌をと適当に放り込んだのだ。

子猫の姿から弱く儂い存在だと分かりそうなものだが、ここに居る連中は自称崇高な目的のために視野狭窄に陥っているのだろうか。入れられた餌にしても、普通の肉や果物から魔石、はては自分たちの血液まで闇のお子さまランチ……、いや、闇鍋ひっくり返しちやうたような状態だ。きちやない。

「急いで強化が必要だ」

「だが何も食べんぞ、どうするつもりだ」

当然そんなものをガウウが食べるはずがない。

今にも力尽きそうな状態で檻の隅にうずくまるガウウを見て、やりすぎたと焦る研究員たちをみて、ハイツエルが上から目線で口を開く。

「ご案じめさるな。吾輩には探究の果てに天啓のごとく得られた新たなアプローチがありますぞ。これこそが、この幻境クシクトベルを新たな境地へと導く魔法の鍵となりますよう！」

「……新たな手法？ どういうものだ」

新参者のハイツエルの話に耳を貸したのは、実験をする前に貴重な被検体を失うわけにはいかないという焦りからか、それとも、全ての失態を新参者にかぶせるつもりか。

ともかく、普段なら取り合ってもらえないハイツエルの意見は幸か不幸か届いてしまった。

「ズバリ、ズーパーリ、呪いを使うのですぞ。私の頭脳に宿りしは、まさに古の魔術の秘訣。問題はこれによって粉々に砕かれ、その破片が奇跡へと変貌すると、最新の研究にあるのです！」

「具体的に話せ」

「実はかくかくしかじかで……」

怒られつつもハイツェルが話した内容は、ロバートがアカデミーで発表したばかりのものだった。ロバートの研究報告にせつせと質問していたのは、ロバートの研究が精霊の強化に使えるのではと考えたからで、それをサクッとパクったわけだ。

「呪いか。その研究なら聞いたことがある。確か、アグウイナスの英才の研究だったか。なるほどあれは精霊関連だったか。ならば壺を使うか」

「どの壺だ、<sup>えや</sup>壊病みの壺か？」

「いや、怨嗟の壺を。ちょうど作りたてのものがある」

運がいいのか悪いのか、ハイツェルに対しては訝し気な態度の研究員たちも、案の出所がロバートだと気づくや態度を軟化させてしまった。学園では微妙な立場のロバートだが、その実力は評価されていたらしい。しかしそれは“アイツ、なんか賢いらしい”という漠然としたもので、その内容まで把握していないからツメが甘いと言わざるを得ない。

別室から運ばれてきた『怨嗟の壺』。その底は泥で汚れ、嚴重に封をした口元は赤黒い汚れがこびりついている。

ぴっちり封をされているというのに、腐った内容物の臭いが漂ってきそうな壺に、ブブブと黒い羽虫が集っている。運んできた男が汚らしい物を扱うように手を振れば、羽虫と共に、もわ、と



黒い靄が立ち昇る。この壺に込められた呪いは、目視できるほど穢れている。

生きた人間が抱く中でも最も激しい憎悪、生々しい悪意、そして明確な殺意から作られたこの壺は、クシクトベル幻境の資金源の一つだ。この場所は、普段は『怨嗟の壺』を作り出す工房でもある。精霊が手に入りづらい昨今、ここに居る研究員たちはこの壺を作り出すことで組織に貢献しているのだ。

ポーシヨンがふんだんにある帝都では、他人を密かに害するのに、毒より呪いの方が勝手がよく、この手の呪いは高値で取り引きされている。

ヴウウ……。

怨嗟の壺が放つ穢れが分かるのだろう。ガウウは声なき声でうなりながら、狭い檻の隅っこに体を寄せる。こんなもの、実体を持たない精霊にとって、猛毒に他ならない。

壺を持った研究員がガウウの檻に近寄って、上から怨嗟の壺を傾ける。

その口からは、液体とも気体ともつかないねっとりとした黒い瘴気が溢れ、ガウウを包み込むように広がった。

ギャン！

（あっ！）

ガウウが声なき悲鳴を上げた瞬間、ハイツェルもまた心の中で声を上げた。

彼は大切なことに、たった今、気付いてしまったのだ。

「それで次はどうする？」

「つ、次は解呪ですな。解呪ポーションなら、それここに……」

先ほどまでの饒舌さはどこへやら、急に元気をなくしたハイツェルは用意していた解毒ポーションを近くの台に置くと、他の研究者に気付かれないように、そろりそろりと後ずさる。

「ふむ……。で、どうやって飲ませる？」

「かけるのか？ む、あやつどこへ消えた？」

ハイツェル・ヴィンケルマンの最大の長所は、家柄や資産家であること以上に、ものすごく運がいいことだろう。知性を含めたありとあらゆるパラメーターを運に極振りしたと言っている。そしてその運の良さは、周囲に迷惑をかける方向で発揮されることが多い。

研究者がガウウにかけた解呪ポーションは、呪いの瘴気を晴らすことなくびちゃびちゃと檻の床を濡らすだけだった。

「ヴヴヴヴヴ……」

地下室を震わせるように響く獣の唸り声。

それまでは声さえ出せない弱々しい存在だったのに、肉体を持たない精霊に呪いで力を与えると、ハイツェルの見立ては正しかったと言える。そして、自らの失態に気付くや、脱兎の勢いで非常口の一つに駆け込んで、そのままトンズラした判断も。

肉体を持たない精霊が解呪ポーションを飲めるはずがないではないか。ロバートの研究は、対象が肉体を持つスライムだから成立した手法なのだ。

冷静に考えれば当然のことなのだが、ガウウの弱りっぷりに慌てたのか、ハイツエルがあまりに堂々と出来ると言い放ったせいか、ここに居る者たちはつい思考を放棄してしまった。末端の下っ端研究員らしい失態だと言えなくもない。

ミシミシミシッ、パァーンッ。

檻がきしむ音がしたかと思うと、精霊を捕らえる魔法陣が描かれた底板がはじけ飛ぶ。

「うっ……、うわあああ！」

「逃げろっ……。はやっ……。えあああ！」

地下室に、ハイツエル・ヴィンケルマンを除く研究員たちの叫び声が響いた。

#### 49・豪運と失策（後書き）

【帝都日誌】なんか大事なことに気付いた気がするんだけど、……  
ナンダツケ？ by マリエラ

< i 8 2 8 4 0 1 — 2 1 0 6 4 >

コミックス「生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい 輪環の魔法薬 3巻」4月1日発売しました！

書下ろしは、若かりし日のガーク爺とあの人……！！！！

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

50・怨嗟の壺（前書き）

前回までのあらすじ：ガウウ、  
闇落ち！

## 50・怨嗟の壺

「……………何かあったようですね」

地下へ続く階段の先頭に行くニクスが、マリエラたちに注意を促した。けれど最初に異変に気が付いたのは、ニクスではなくナンナだった。

「……………ナンシーちゃん、大丈夫かい？」

エドガンが心配そうに声をかけたナンナは、自分を抱きかかえるようにしてブルブルと体を震わせている。

(ガウウ、ガウウが……………。怒ってるなん？ 泣いてるなん？ ……  
なんな、ガウウが真っ赤で、真っ黒で……………)

ナンナには、ガウウに何が起こっているのか分かるのだろう。  
震えるナンナをマリエラが隣で支え、二人の前後をエドガンとジークが守る。

地下へと続く階段には照明の魔導具が灯っていて誰かいるのは明らかなのに、見張りの姿も物音さえなくやけに静かだ。

長く細い階段は途中から緩やかなスロープに変わった。人間が造るには非効率な長く細い通路はかつて迷宮だった名残だろうか。歪に曲がった通路を進んだ先で、先頭に行くニクスとエドガンに緊張が走った。

微かな血の臭いと、のたうつような人の気配。

マリエラが気付くほどの異常事態に、ニクスとエドガンが大胆に歩みを速める。

「おい、大丈夫か？ ……こいつ、逃げてきたのか？」

這いずりながら逃げてきたのだろう、うつぶせに倒れた男の側に双剣を構えたままエドガンが近寄る。エドガンの問いに答える様子はないが、時折激しい痛みに襲われたようにビクビクと動くところから、まだ生きてはいるようだ。

「大丈夫ですか？ ……わわっ」

倒れた男の側にしゃがんだマリエラは、状態を見ようと手を伸ばした瞬間に、何かに引っ張られるようにバランスを崩して後ろに尻もちをついてしまった。

「大丈夫か、マリエラ。 ……マリエラ？」

「 ……え、あ。うん、大丈夫。ちよつとバランス崩しちゃって。この人、多分、呪われてるね。触れたらダメだよ、これは感染する呪いだと思う」

「呪い…。バジリスクの石化みたいなの？」

一瞬呆けたのちに返事をしたマリエラに、エドガンがさらに質問を投げかける。

魔物が与える呪いと言えば、石化だとか体の一部が魔物のそれに変わるだとか、姿が変わるものをまず連想する。あるいは能力が制限されるデバフ系、記憶を失うようなものもある。

しかし、そこに倒れた男の姿にその手の変化は見られない。強いて言うなら口からは苦痛の代わりに一筋の鮮血を垂らし、助けを求

めるように伸ばされた両手に爪がないことだろうか。二枚貝が開くようにすべての爪が付け根を起点に跳ね上がっている。

「魔物の呪いじゃないと思う」

男の状態を見ながら答えるマリエラ。彼女の見立てを肯定するよ  
うにニクスが口を開く。

「これは魔物ではありません。本当に、マリエラさんが触れなくて  
良かった。」

この爪を見てください。これは拷問の痕だ。声を上げないのは喉  
が潰されているからでしょう。この症状には心当たりがあります。  
オークションで扱ったことがある、これはおそらく怨嗟の壺の呪い  
です」

「怨嗟の壺？」

「商品として作り出された呪いです。ああ、マリエラさん。すぐに  
死ぬわけではありませんから、解呪のポーションは……2本お持ち  
ですか。それは取っておいてください。この方は大丈夫です」

現在進行形で痛いですが、死ぬわけじゃありませんから。

”大丈夫”の後に続く言葉は口に出さず、腰のポーチから解呪の  
ポーションを取り出すマリエラをニクスが制する。

リンクスを失って以降、主だったポーションを持ち歩くようにな  
ったマリエラだったが、解呪のポーションを持っていたのは偶然だ。  
ロバートに頼まれて作った余りをそのまま持っていただけで、本  
数は2本しかない。ならばとっておくべきだ。すぐ先の扉の向こう  
に、呪いの原因がいるのだから。

「想定外のトラブルが起こった様子。ですが、怨嗟の壺だけなら対



応のしようがあります。……怨嗟の壺だけならね」

ニクスがそう言葉を区切ったのは、扉の向こうから猛獣のような唸り声が洩れ聞こえたからだろう。

ヴヴ、ウルルルル……。

薄く開かれたままの扉から、猛獣の唸り声と黒い霧もやが漂ってくる。

(ガウウ！)

駆けだそうとするナンナを必死に抑えるマリエラ。この時ばかりはマリエラに止められるほどにナンナが弱体化していて幸いだったかもしれない。

「ジークさん、弓はもってきていますか？　では、壺の破壊をお願いします。これくらいの壺がどこかにあるはずだ。それを探して壊した後、中身に解呪ポーションをかければいい」

そして、怨嗟の壺について知っているニクスが同行していることは、何より幸運だったろう。

ニクスの作戦に従って、扉へと進む一同。

彼らの足元、呪われた男に触れようとしたマリエラが尻もちをついた石の床にだけ、肥沃な土塊が落ちていたことに気付く者はいなかった。

扉を開けると同時に、動きの素早いニクスとエドガンが部屋に飛

び込み左右に展開する。万一どちらかがやられても、もう片方が対処できるようにとの算段だ。

駆け込んだ内部は、これまでの通路とは打って変わった広い空間だった。

中央に置かれた大きな石のテーブルを、周囲の石柱に取り付けられた照明が煌々と照らしているが、その明かりだけでは広い地下室全てを照らすにはとても足りない。

不規則に並ぶ石柱が長い影を落とすその部屋は、青白い光に照らされた岩肌のじつとりと湿ったような質感と、長く伸びる柱の影が作り出す影絵でまるで牢獄のように思えて息苦しい。

思わず息を止めなくなったのは、テーブルの周りに複数の人影が倒れ伏しているからか。テーブルの上には壊れた檻らしき残骸と割れたポーション瓶、その横に人間の頭が入る程度の壺が転がっている。

あれが『怨嗟の壺』だろう。

ヒュッ。ガシャン。

扉の位置から壺の存在を認めると同時に、ジークが左腕に取り付けた仕込み短弓で“怨嗟の壺”を射抜いて壊す。壊れた壺から溢れ出したのは、真っ黒な腐汁とゴロリと転がる南瓜サイズの塊。

「目を合わせないように！」

ニクスの声にマリエラは思わず目をぎゅっとなつぶる。

壺に納められていたのは、人間の生首だ。

ゴロリと半周転がってこちらを向いた二つの眼孔から、無いはず

の視線を感じて背筋がぞつと寒くなる。

離れていても顔をしかめたくなる悪臭にも関わず、一匹の蟲も湧いていないのは、そこに封じられていたものが蟲さえ忌避する災いだからか。

「ほらよつと！」

間髪入れずエドガンが投げつけたポーション瓶が、壺の中身に当たって割れて解呪のポーションが降りかかる。

見た目に分かる変化はない。その理由を、薄く目を開いたマリエラの言葉が証明する。

「そこにはいません！ でも、消えてない！」

その声に反応するように、生首の口がカパリと開いて、黒い腐汁がどろりと零れた。

ウルルルル……。

「ひつ、いいい……」

「ああつ、イギ……」

「……つつつ……」

怨嗟の壺への攻撃に怒ったのか、それとも無差別に人を攻撃する怨嗟の呪いの性質か、地下室に獣の唸り声が響き、同時に倒れていた研究員たちが激しい痛みに襲われたように体を痙攣させた。

パキ、ポキ、ペキ。

誰も触れていないのに、彼らの指が軽い音をたててあらぬ方向に曲がっていく。

かすれた悲鳴の代わりに口から吐き出された白い破片は、おそら

く彼らの歯だろう。

その表情から、激痛に襲われているに違いない。けれど悲鳴はない。上げられないのだ。

怨嗟の壺。

そう呼ばれる壺に込められた首は、重罪を犯した犯罪者のものだ。生首の生前の姿をマリエラが視てしまったのは、それが呪いの素材だからか。

(うっ、なんて酷い……)

生首の生前の姿は、弱い女性や子供を狙って惨殺し、犯罪奴隷に墮とされた男だった。

犯罪者が犯罪奴隷に墮とされるのは被害者への賠償目的でもある。対魔物の肉壁や鉾山と言った危険度の高い仕事に就かせる事で罪の償いになるし、誰もやりたがらない仕事をさせる奴隷は相応の値段がつく。

しかし、それが償いであると言われて、家族を惨殺された遺族が納得できるだろうか。

やり場のない恨みと怒りと悲しみに囚われた遺族たちを人目に付かない地下室に集め、体の自由を奪った犯人を与えてやればどうなるか。

声が出ないのはおそらく最初の処置だろう。痛みを訴える叫びがなければ、荒事とは遠い者にどれほどの苦痛を与えているのか推し量ることは難しい。

憎しみに駆られ、暴力がどれほどの痛みを与えているか理解できない遺族の復讐はさぞや苛烈で執拗だったろう。満足するまで浴びるほどのポーシヨンが使われたかもしれない。

罪のない弱者を虐げたとはいえ、私刑の末に死んだ犯罪者は、懺悔の念を抱いただろうか？

否。そんな感情を抱けるのなら、これほどの罪を犯しはしない。死の寸前に犯罪者が抱いた感情は、私刑に興じる遺族と同じ、恨みと怒りに他なるまい。

復讐を、報復を、この身に刻まれた以上の痛みを、自分以外のあらゆる者に。

そんな独善的な負の感情の内に死んだ者の首を、流した血と共に漬け込んで熟成させれば、犯罪者の穢れと被害者家族の怨嗟がないまぜになつた呪いを生み出すことができる。

それが『怨嗟の壺』。

周囲に無差別な痛みをもたらす、リーズナブルな商品化された呪いの壺だ。

呪いに変じて日が浅く質も悪い呪いだから、媒体なくして存在できるようなものではない。だから本来であれば壺を壊し、生首に解呪のポーションをかけた時点で呪いは消える。

しかし、今に限っては、霊体のまま顕現しうる存在に取り付き、力を得てしまったようだ。

チカ、チカと、照明の魔導具が点滅する。

グルルルル……。

何処からともなく響く獣の唸り声。

乱立する柱の影がマリエラたちを取り囲むようにぐるぐる渦を巻くような錯覚を感じる。

複数の照明に照らされて一本の柱から複数伸びる影が交錯し、ま

るで夜の森に来たみたいだ。

グルルルル……。

薄暗いモノクロームの森を渡るように周囲を回る巨大な獣の姿。

< i 8 3 4 1 4 6 — 2 1 0 6 4 >

（成長してる？ でもあの獣の影はガウウだ。怨嗟の呪いと一体化しちゃってるんだ）

マリエラたちを取り囲むようにぐるぐる回り、隙あらば襲い掛かろうとする獣の影はとても大きく、子猫だったガウウのものではないが、そう判断できたのはロバートから研究の話を聞いていたからだろう。

何の前触れもなく、呪われた獣が近くにいたニクスめがけて飛び掛かる。

「おっと。足音がないというのは存外やりにくい」

ガウウの攻撃をひらりと躲したニクスだったが、すれ違いざまに放った剣戟は空を切るだけでガウウに当たることはない。影に溶け込むように消え、今度はエドガンめがけて飛び掛かるガウウ。

エドガンとニクスなら避けるのは可能だが、このままではらちが明かない。

解呪のポーションはまだ1本残っているが、実体のないガウウに飲ませる事は不可能だ。時間をかけすぎターゲットがマリエラやナナに移れば、二人に避けることはできないだろう。

「仕方ありません。魔法を使って弱らせましょう」

刀身に風魔法を纏わせたニクスを危険と見做したのか、今まで以上に大きく膨れ上がった獣の影が飛び掛かる。その影を呪いごと吹き飛ばすほどの風がニクスの刀身に渦巻き、ガウウめがけて振り抜かれようとしたその時。

（ダメなんなー！！！）

我が身の危険も顧みず、ニクスとガウウの間へとナンナが飛び出した。

## 50・怨嗟の壺（後書き）

【帝都日誌】何もないところで転ぶほど、マリエラはどんくさくなかったはずだが……。byジーク

<i828401—21064>

コミックス「生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい 輪環の魔法薬 3巻」発売中です。

「え……ここで終わるん？」ってところで終わって、続きが気になりすぎますよ。

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらにも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>



## 51・猫と子猫の絆(前書き)

前回までのあらすじ：ガウウ、呪いパワーで闇落ちパワーアップ

## 51・猫と子猫の絆

< i 8 4 1 7 2 9 — 2 1 0 6 4 >

(ダメなんなー!!!)

とびだすな、ガウウはきゆうに、とまれない。

標語よろしくガウウを庇うように飛び出すナンナ。

ガウウは一瞬ギョツとした表情を浮かべたものの、速度が乗りすぎていたのか軌道を変えられずに突っ込んできた。代わりにニクスは構えた刃を納めてガウウを躲し、駆け出すナンナに気付いたエドガンが、ふわりとナンナを抱きかかえガウウの凶刃から守る。

「つと、あぶねーだろ、ナンナたん! ……あ」

「え?」

「あ!」

(うなんな?)

そして流れる気まずい空気。

視線を彷徨わせるエドガン、ジーク、マリエラの3人に対して、一人でシリアス戦闘を継続していたニクスが「どうしましたか?」と訝し気な様子だ。

「……ええと、気付いてたんだな。いつから?」

もじもじもじ、ピシュピシュピュン。

ガウウの足元めがけて弓を放って牽制しつつも、もじもじ質問す

るジーク。

「昼メシ食ってるくらいから？ 動きとか、まんまだし。ちなみに、お前らが付けてきてんのも気付いてた……」

もじもじもじ、ひらひらひらり。

エドガンはエドガンで、ガウウの攻撃をひらりひらりと躲しながらも気まずそうに視線を逸らす。ナンナをお姫様抱っこしているせいで、なんだか浮かれたダンスを踊っているようだ。マリエラは高確率でお米様抱かつがれるつこなのに、猫畜生との扱いの差は何なのか。

「あのお、なんかゴメンナサイ。言い出す機会を逃しちゃって……」

もじもじもじ、コポコポコポリ。

キャロラインやメイドさんたちとキャッキヤと楽しんでました、なんて言えないマリエラも、気まずさをごまかすようにちっちゃい《錬成空間》をそこら中に作っては、ちびりちびりと《命の雫》を汲んでいる。

ガウウの攻撃をいなしたり躲す二人に対して、こちらは完全に不要な行動だ。気まずい時の手遊び感覚で《命の雫》を無駄汲みしている。

「気付いてたなら言ってくれば……」

「ナンナたんがおめかしして来てくれたのはホントだし、楽しかったしさ」

「エドガン、お前いいやつだな」

「お、おう」

ピシユピシユ、ひらひら、グルルルル。離れたところでコポコポ、ぼたん。

気まずさが紛れてむしろいいぐらいの感覚で、ガウウの攻撃をいなしまくり、避けまくるジークとエドガン。そして、もはや何をしに来たのか分からないマリエラ。

今一つ分かっていないらしいナンナはと言うと、うなんな？ とばかりに首をかしげてマリエラを見ている。

「えーと、もう、声を出してもいいってことだよ」

マリエラがそう声をかけると、ナンナはスカーフを外して、「うなんな」と答えた。

そんなマリエラとナンナはともかくとして、ジークとエドガンの動きは流石なもので、すでにガウウの動きは見切ったとばかりに牽制しまくっている。おかげでドツジボールなら高確率で顔面で受けるほどのマリエラの動体視力でもガウウの姿を捉えられている。

（今のガウウの姿、なんだか魔の森の深淵で見たリユーロパージャさんみたい……）

偉大なる大精霊ならばこんな呪いは受け止められるのだろうか、まだ幼い獣の精霊は与えられた力と呪いに振り回されているのだろう。

攻撃が当たらないどころか動きさえ自由にならない苛立ちに、ガウウがいつそう黒く濁ってヴヴヴ、とうなり声を上げる。その声に呼応するように倒れた研究者たちの身体がわなないで、パキポキと骨の折れる軽い音と共に、指先があらぬ方向へと捻じ曲がる。

「そろそろカタをつけたほうが良いようですが」

一人シリアス世界に取り残されてしまったニクスが、困ったように声をかけてきた。

これまでマリエラたちに付き合っただウウとの鬼ごっこに付き合ってくれていたから、クールな見た目に反して優しい人なのだろう。少なくとも仲間には。

確かに遊ぶはこの辺にして、ガウウを浄化しなければいけない。

「呪いを解くのって、解呪のポーションか精霊に払ってもらわなければならないんですね」

実体の無いガウウの場合、解呪のポーションは無理だから、精霊に浄化してもらわうほかない。

それすなわち「ファイヤー！」だ。

ここに師匠はいないけれど、マリエラならサラマンダーを呼ぶことができるし、ジークの精霊眼で強化して、地獄の業火で焼却ファイヤーだってできなくもない。

（たぶんそれだと、オーバーキルしちやいそう。サラマンダーさんに呪いだけ焼却するような器用なこと、できないと思うし）

呼び出したのがマリエラの場合は特に。

キャウー！ オレサマ、オマエ、マルカジリ！

なんだか変なセリフつきで、何かの肉の丸焼きにかぶりつくサラマンダーの姿が思い浮かぶ。うん、失敗する予感しかない。

（うん、焼くのは最終手段。それに今のガウウ、洗ったら綺麗になりそうなんだよね。こんなの流したら怒られるかもだけど、今更な気もするし）

なんとなくではあるが、それがいい気がしてきたマリエラ。  
向き不向きはあるのだろうが、火属性でなくなっただって呪いの浄化は  
できるはずだ。

「あのさ、ちょっとだけガウウを足止めできないかな？」

「何か策が？」

「とりあえず洗ってみようかなーって。ってことで、ジーク、手伝  
ってね。エドガンさんは、はいこれ」

「ぼーい。マリエラは腰から外したある物をくるくる丸めてエドガ  
ンに投げる。」

へたくそな投擲のせいでだいぶ手前で失速したそれを、ひよいと  
キャッチしたエドガンは、「よし来た、任せとけ！」と頼もしい返  
事とともにお姫様抱っこしていたナンナを降ろしてガウウの方へと  
一歩踏み出す。

そして。

「ほうーれ、ほれ、こっちだ！」

すちゃっ。ひよひよーい。

マリエラから受け取った飾り紐を操り始めた。

グルッ、グルルルッ！

「うな、うななっ！」

同時に反応するガウウとナンナ。見事な食いつきぶりである。

「そりゃそりゃそりゃー」

グルルッ！ ルルル！！

「うなっ！　ななっ！！！」

まるで生きているように、踊り狂う紐先のフリンジに、ガウウもナンナも釘付けだ。俊敏に動けるガウウはひよひよひよひよいと動きまくっているのだが、身体能力が下がっているナンナの方は、幸か不幸か目で追うのが精いっぱい、ウズウズするけど飛び出せないもどかしい動きになっている。

「ナンナは大人しくしとこうね」

「うなんな！？」

マリエラに諭されて、「そうだった！」とばかりに背筋を正すところを見れば、未だに割とシリアスな状況であることを一様理解しているようだ。

「ほい、ほいつ。ほほほいつ。はっはー、どうだ、どうだー」

ガウツ、ガウツ！　ガウ、ガウ、ガウツ！！

「うななん、うななん！　うなははは！！」

「……楽しそうですね」

ナハハハハーと響くナンナの笑い声。

ニクスが呆れた声を上げるくらいには、場が和んできたその時。

「いくよー！　小さな水の精霊さんたち、ガウウを綺麗に洗ってあげてー！」

どばしゃあーん！！

マリエラの掛け声が、だいぶ後ろから聞こえたな、とエドガンが

思つと同時に、頭上から大量の水が降ってきた。

「ぎゃー、じぼじぼじぼ」

「にぎゃー!」

!!!!!!

エドガンがガウウを紐でじやらしている間に、マリエラは頭上に《錬成空間》を展開し、中にたつぷりの水を作り出ししていたのだ。水の精霊がたくさん集まってくれるように、先ほど汲みまくっていた《命の雫》も混ぜ込んでいるし、ジークの精霊眼による精霊ブースト付きの精霊水だ。

しかし、込められた《命の雫》や精霊眼効果以上に水の精霊がわんさか集まっているのは、「かけるぞ、かけちゃうぞ。すっごくザパーっといっっちゃうぞ!」みたいなワクワクする雰囲気のせいだろう。

ヤンチャな小さな精霊が、お風呂にお湯を張る時よりもずっとたくさん集まっていて、呪いもついでに地下室の埃や汚れもみくちやにして、キヤアキヤアと更に地下へと流れていった。

その直撃を受けたガウウはというと。

「随分と縮んだな」

「うーん、まだちょっと薄汚れてるね」

マリエラの作戦は半分功を奏したのだろう。ガウウは毛がペシヤツた分を加味しても、いつもよりちょっと大きいかな、位のサイズまで縮んで、真っ黒だった色も灰色くらいに薄まっていた。

「うな、うなな? ガウウ、ガウウ! ナンナなん!」



ギニャー……！！！！

ナンナの声に我に返ったガウウが、狂乱めいた表情を浮かべてナンナめがけて飛び掛かる。

初めてお風呂に入れた動物が、パニックになって飼い主の頭めがけて這い上るあれだ。危ないと叫ぶ間もなければ、エドガンでさえナンナを庇う暇もない。

そんなガウウを、ナンナは両手を広げて受け止める。

「大丈夫、大丈夫なん。ガウウはナンナの守護精霊なん、ナンナがガウウを守るなん！」

ナンナがガウウを抱きしめた瞬間、ガウウはナンナの中に消えるように溶け込み、人間の少女だったナンナの姿はまるで魔法が溶けたかのように白い毛皮に覆われた獣人のそれに変わっていった。

「ポーションの効き目が切れた？ いや、これは……」

ナンナの変化に気付いたジークは、マリエラを背後に庇いつつ警戒の色を浮かべる。

めき、めき、めき。

毛皮に覆われていても人間と変わらなかつたナンナの手足はまるで猛獣のように太くなり、何より人間を思わせた頭部は鋭い牙を覗かせた獣のそれに変わっていた。

「獣化、するのですか……」

エルフは寿命が長いというがニクスも初めて見たのだろう、驚いた表情を浮かべながら、獣の攻撃に備えて剣を握る手に力がこもる。

「ナンナたん……」

一番近くにいるエドガンも、どうしたらよいのか分からない様子だ。もちろん、マリエラだってナンナが今どんな状態なのか分からない。

「ナンナ、ナンナ、しっかりして！」

獣化したナンナが先ほどまでのガウウの様に襲ってきたら、戦わない訳にはいかない。そんな恐れを抱きつつ、ナンナが正気に戻るよう名を呼んだのだけれど。

（うなんなー。なんか体が痛いんなー）

尻尾をくると足の間に挟んでうずくまり、手先をぺるぺる舐めだすナンナ。何か言いたそうにこちらに向かって鳴くような様子を見せるが、なぜか声は聞こえない。

「あ、呪い！ 怨嗟の壺の呪いが残ってるんだ！ ニクスさん、呪いのポーシオン。まだ残ってますよね？」

「え？ あ、はい。ここに……」

「オレが飲ますよ。ナンナたん、ほらこれ飲んで！」

（うなんなあー）

守護精霊と一体化して、でっかい猫と化してしまったナンナに呪いのポーシオンを与えると、今度こそ怨嗟の呪いは消え去ったようだった。

体の痛みが取れたナンナは機嫌よさそうに「うなんな」と鳴くと、毛皮の水を振り払うようにブルブルと体を震わせる。

「うわっ」

「わぷっ」

「おっと」

「もー、ナンナ！」

「うなんな！」

飛び散る水滴にマリエラたちが顔を背け、再びナンナに視線を向けた時には、ナンナは元の獣人の姿に戻っていて、ナンナの足元から顔を覗かせた小さな子猫の精霊が、まるでお礼を言うようにご機嫌そうに鳴いていた。

## 51・猫と子猫の絆（後書き）

【帝都日誌】……さすがに気づくよね。仕草がまんまなんだもん。  
byエドガン

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

## 52・荒野の記憶（前書き）

前回までのあらすじ：ナンナ、ガウウを取り戻す。エドガンは一目ぼれの相手がナンナだと気づく。

## 52・荒野の記憶

マリエラたちが秘密の通路を地上へと戻ると、空と街が夕暮れに染まって温かな色合いに変わっていた。

地下にいた研究員や見張り達の呪いはガウウの呪いが解けると同時に解呪されたが、呪いに起因する負傷　爪の剥離や指の骨折、声帯の負傷は残ったままだ。彼らのことはニクスたちテオレーマに任せてある。

そういう約束だったこともあるし、彼らを捕まえたとして精霊に実体も人権もない以上、誘拐事件として罪に問うことは難しい。だったら“倒れているところを偶然見つけた”ニクスたちが“保護するついでに何があつたかイロイロ話を聞く”のが一番だろう。

人を呪わば穴二つとはよく言ったもので、ガウウをひどい目にあわせた連中は、すでにかなり痛い目を見ている。あそこにいたのは末端の実行犯で、大した情報はもっていないのだろうし、ニクス達の情報収集に素直に協力することを祈るばかりだ。

帝都にはポーシオンがいくらかでもあるし、ニクス達エルフはマリエラだつて知らないポーシオンを持っているだろうから。

「それにしても、とんだ一日だったなあ」

ふはーとため息を吐くエドガン。

その隣には人化のポーシオンを飲みなおし、美少女姿になったナンナが立っている。

遠足……違ったデートはおうちに帰るまで。いや、大人のデートはおうちに帰らない日もあったりするが、ともかく今日はエドガン

愛しのエンジェルちゃんとのデートだったのだ。最後までくらはは美少女姿で締めくくべきだろう。

「いっばいっばい、ありがとなん」

「いってことよ」

「楽しかったなん」

「そっか。なら良かった」

「また行くなんな！」

「おー。今度は魚でも食うか」

「うなんな！」

< i 8 4 1 7 4 3 — 2 1 0 6 4 >

無邪気な笑顔でくるくる回るナンナとそのすぐ横を歩くエドガン。ナンナは相変わらずの様子だが、愛しのエンジェルちゃんの正体を知ったエドガンは、いつもナンナと過ごす距離感で歩いている。

エドガンの恋は終わったのか、それとも少しは進展したのか。後ろを歩くジークにはエドガンの心境は分からないけれど、ナンナと歩くエドガンが優しい笑顔を浮かべていたのが嬉しかった。

そしてジークの隣を歩くマリエラは。

( 倒れていた見張りに触ろうとしたあの時、誰かが後ろに引っ張ってくれた。たぶん、私が呪われないように。 あれは…… )

地下の実験室に入る直前、倒れていた見張りの男にマリエラは触れようとした。はたからは、バランスを崩して偶然尻もちをついたように見えただろうが、実際は誰かがマントを引っ張って助けてくれたのだ。

その姿を見たものはいない。

Aランカーのジークやエドガン、ランクは不明ながらも鋭い感覚を持つニクスにさえも気付かれなかった何者か。その正体にマリエラは気が付いている。

なぜならあの時、はたから見れば一瞬に思えた短い時間に、その者の記憶の断片が流れ込んできたからだ。

（あれは、アルアラージュ迷宮の最深部で、ロコス・オウ・カーマイン緋色の宝珠に触れた時と同じ……）

マリエラはその時見た記憶を思い出す。

古い、古い時代の、この大地で起きた記憶を。

黒い。暗い。寒く、冷たい。

これは今、目の前に迫り来る絶望の色だ。

この腕の中で温もりを失っていく、我が子の命のぬくもりだ。

己に残るわずかな熱をすべて与えられればと、抱く子をぎゅっと抱きしめる。

周りには付いて来てくれた者たちが、身を寄せ合って凍てつく寒さに耐えている。

ここは、およそ人の生きられる場所ではない。

昼間、太陽は容赦なく枯れた大地に灼熱の炎を注ぎ込み、歩きたびに火の中を踏むような感覚がした。どこまでも広がる砂漠の中に



強烈な輝きが満ちる世界。

灼熱にゆらぐ視界の中で、陽炎のような存在に出会えたことは僥倖だった。

導かれるまま小さな水場にたどり着き、地面を湿らす程度の泥水とわずかばかりのナツメヤシの実で何とか命は繋げたけれど、それもつかの間。夜の訪れと共に気温は急激に下がり、今は冷気が骨を刺すようだ。

見上げた空には月が高く昇り、星々がダイヤモンドのように輝いている。

荒涼たる砂丘は、月光に照らされ、まるで銀の海のように。残酷なまでの厳しさとは裏腹に、この世界はあまりに美しい。

この世界の中では人間などちっぽけなものだけれど、それでも力があつたならこんな場所までくることはなかった。死にゆく我が子を腕に抱き、細る民の命を背負う彼の慙愧の念は、あまりにも耐えがたい。

緑豊かな森林は強大な獣が棲み付き、安全な草原は力ある者が国を奪った。

戦う力も秀でた知恵も持たない者は、強者に蹂躪され、搾取されるのが理だ。

隷属し、尊厳さえも搾取されつつ短い生を生きながらえるか、魔物に喰らわれ死に果てるか。

生まれ育った国は奪われ、屈辱に耐えて生きる道を選んだけれど、強まるばかりの搾取の前に力無き彼らが生き続けることはかなわなかった。

父が死んだ。母が死んだ。姉が、兄が、妹が死んだ。だから生き残った者を連れ、荒野へと逃げてきた。

それでも持たざる者がたどり着けるのは、生きてもいかれぬ荒れた大地だ。

ここに至る旅路の中で、妻が死に、何人も子が死んだ。付いてきてくれた者たちも一体何人死んだらう。

それでも残されたものがある。

腕に抱くこの幼い命は未だ潰えてはいない。

彼を長と慕い、付いてきてくれた一族の者たち。

ここで身を寄せ合って夜明けを待つ彼らもまた。

求めるものは、たった一つだというのに。

ぐつと奥歯を噛みしめたあと、最後の可能性に賭けるため、口を開いた。

「いるかい？」

声と共に白い霧が口元で舞う。

この残酷で美しい世界では、朝を迎えるより先に、皆の命の灯が飢えと寒さで消えてしまっただらう。

覚悟は決まったかい？

呼びかけに、闇の中から声が応じた。

その声に、離れた場所で身を休めていた弟、デイランがピクリと体を動かしたけれど、他の者は頭を垂れて眠ったままだ。彼を見て言葉を交わすことができるのは、限られた者だけなのかもしれない。

「私はこの砂漠の砂粒のようにちっぽけな存在だ。何も持たず、何も成すことはできなかった。それでも、力ある者に踏みつけられるくらいなら、ここにいる皆を支える砂になりたい」

他者のための自己犠牲。

それは純粹で美しい感情だった。

その善意と愛情は、まるで砂漠に一筋の清流をもたらすように、乾ききった大地に棲まう存在にとって、降り注ぐ月光より暖かく、灼熱の太陽よりも輝いて見えた。

だからこそ、乾いた大地に棲む『彼』は、初めて見る美しい花に思わず手を伸ばすように、救いの手を差し伸べたのだろう。

この枯れた地に地脈はない。この地では君の願いはかなわな  
い。

だから、僕は君を根源<sup>グラウンド</sup>へと連れてゆく。

大丈夫。君が自分を失わなければ、君が帰る場所を見失わなければ、きつと戻ってこられる。

そうすれば、君の願いはかなえられる。

さあ、行こう。ヨハン

「ああ。私を連れて行ってくれ。この荒れた大地の精霊、偉大なる  
ゲニウス・ロキよ」

それが約束。

太古の契約。

もはや形を留めていない、美しくも儂い人の夢。

差し込む夕日が複雑な窓の格子の影を落として、磨き上げられた

茶色の大理石マロンマリナスの床をさらに美しく装飾する。立ち並ぶ太い柱はどれも大理石の一枚岩だ。これほど大きな大理石はもはや取りつくされていて、広大な帝国のどこを探しても手に入れることはできないだろう。

これほどの建材が惜しげもなく使われていることから、この場所を捧げられた者の地位の高さと、この建物が長い歴史を誇る帝都でも最古に近い建築物であることがうかがえる。

そんな荘厳な神殿の中央、翡翠やターコイズで飾り付けられた玉座の上で、少年はゆっくりと目蓋を開いた。

「……懐かしい夢を見た」

ここは彼の神殿だ。

その証拠に、彼がまどろみから目を覚ましたことを察した女官たちが、彼の世話をするために音もなく入室して来る。

時刻はちょうど夕食時だ。祭壇を思わせる大理石のテーブルの上には皇帝の晩餐にも引けを取らないご馳走が所狭しと並べられ、彼の手を拭き清めるために湯気を上げる蒸しタオルを女官の一人が捧げ持つ。

「ゲニウス・ロキ様、晩餐の支度が整いましてございます」

面倒なことだと少年　ロキは思う。

どれほど豪華な美食であろうと、何十万回と食べれば飽きてしまふのも仕方あるまい。けれど、食べなければこんな子供の肉体は衰えすぐに動かなくなってしまう。

肉体が減びた先に待っているのは、ロキにとって死でも解放でもない。新たな肉体として哀れな生贄が捧げられるだけのことだ。それは本意ではない。

投げやりな気持ちになって視線を落とした床の上に、窓から差し込む光に雲が差し、大理石の模様を一層複雑なものにする。

（雲、雲か。ずっと忘れていたけれど、ここが荒地だったあの頃は、空には一欠片の雲さえなかった）

あの日のことを夢に見たせいだろう。

ロキがただの荒地地の精霊であった頃、この地は人の住めない荒れた土地だった。

今、帝都の臣民があつた空を見上げたならば、「雲一つない晴天だ」と喜びさえするだろうが、一欠けらの雲もないということは、大地も空も乾ききり、僅かな水もないということなのに。

命の乏しい過酷な大地。『彼』、ロキはそんな荒地地の精霊だった。

彼の知る美しいものなど星空くらいのもので、そんな乏しい存在であることに疑問も不満も感じてはいなかったけれど、あの日、自らの命を顧みず、荒地に一族の者の生きられる場所を求めたヨハンという青年は、ロキの目に星空よりも美しいものに映った。

荒野の精霊に人の生きられる場所を与えることはできない。

ロキは荒野そのもので、そのことに不満も不足も感じてはいなかった。

けれどヨハンの願いを叶えたいと願ったあの時、ロキは初めて己が乏しい存在であることを自覚した。

例えば空つぽの宝箱が、中に宝石を納めたいと望むように。

例えば干上がった湖が、雨を請い水で満たされたいと望むように。

荒野の精霊もまた、己の持たざることを認識することで、ヨハンがこの地に住んだなら、どれほど豊かな存在になれるだろうと望んでしまった。

この地には、地脈すらないというのに。

あの日、ヨハンの願いをかなえるために、ロキは手を差し伸べてヨハンと共にグランドへ至った。  
その結果が、今のこの帝都だ。

「どうか、ロキさま、一口だけでもお召し上がりください」

懇願するような女官の声に、ロキは思索を巡らせるのを止め食卓へと目を向ける。テーブルいっぱいにご馳走が並べられているのは、ロキが飽食を好むからではない。食事に興味を持たない彼にどうか栄養を取らせようという苦肉の策だ。

(そう言えば、あの日彼らは未熟なナツメヤシの硬い実を、旨いと食べていたな……)

食卓には十分熟して乾燥し、つやつやと黒光りするナツメヤシの実も置いてある。こつてりと濃厚な甘さを思い出したロキが、ナツメヤシの実を取ろうと伸ばして手を見て、女官が「ヒュツ」と鋭く息を呑んだ。

「……ロキさま。僭越ながら給仕をさせていただきます」  
「放っておいてくれ。右手はまだ健在だ」

ロキが伸ばした左腕は、肘の半ばまで茶褐色に変色し、その手からは手の平の半分と指が3本失われていた。

（少し力を使ったただけだというのに、随分と劣化が早い。この肉体もいつまでもつか……）

ロキが座っていた玉座の脇、チリー一つなかった大理石の床の上には、左手が変じた土塊が落ちている。

女官が息を呑んだのは、この変容が予想よりはるかに速かったからで、この変貌自体は見慣れたものなのだろう。

女官は静かに土塊に近づくと、刷毛でそれを銀のトレイに移し替える。

まるで宝石でも乗せたように恭しく捧げ持たれて運び出されていく土塊。

出所を知らなければ肥沃な土に見えるその中には、砂粒の様に小さな紅の宝珠が混じっていた。

## 52・荒野の記憶（後書き）

【帝都日誌】記憶で見たロキって、多分……。どうして助けてくれるんだろっ？ byマリエラ

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>



### 53・顛末と思惑と（前書き）

前回までのあらすじ：ナンナとエドガン、仲良く帰宅。一方マリエ  
ラは、荒野の記憶を見ていた。

### 53・顛末と思惑と

後日、テオレーマのニクスから精霊誘拐事件の顛末が伝えられた。

報告を受けたのはジークとマリエラの二人だけだ。肝心のナンナはガウウが研究員たちを襲ったことで仕返し済みという認識らしく、いつもの便利な「うなんな」の一言を残して日向ぼっこに行ってしまった。エドガンもナンナをまねして「うなんな」と消えてしまったが、こちらは報告書を書くのが嫌で逃げたのだろう。

報告書が必要と聞いて「がんばってメモを取るぞ！」と意気込むマリエラのノートには、「えーれんひる静？円 地下 ナゾの研究施設 お墓のところが入り口 閉め忘れ？」などと書いてある。かなりダメな感じのメモだ。あまり役には立たなさそうだ。

ジークは自分が書くしかない、と、報告書作成を視野に入れつつ、ニクスの報告に耳を傾ける。

「精霊には実体がないため、犯行自体を立証できません。それが精霊誘拐事件の難しいところですよ。罪と定義されないのですから、裁かれないどころか捜査すらされず、実行犯の末端が切り捨てられて終わり。これまでは、力を削ぐこともかなわなかった。

しかし今回の施設からは違法な呪物 『怨嗟の壺』を製造していた証拠が見つかりましたので、その線からいろいろと洗い出せました。

捕まえられた者たちは断片的な情報しか与えられていない下っ端でしたが、 magari なりにも構成員。新しい情報も手に入りましたし、『怨嗟の壺』という資金源の一つを潰せたのは大きい」

ガウウ誘拐を立証することは不可能だが、“エーレンヒル静寂園を散策していたら隠し扉が開いていて、人が倒れてた。助けに入ったら『怨嗟の壺』の製造拠点だった。違法だ、たいへん、衛兵さん！”、という筋書きで彼らを衛兵に引き渡したわけだ。

治療のためにエルフ秘伝のポーション（ただの自白ポーション）を与えたら、副作用でいろんな情報が手に入っちゃったりしたのだが、不可抗力みたいなものだ。あくまで人道的な救助活動だったのだ。ニクスが罪に問われるリスクはゼロ。完全勝利というやつだ。

「我々エルフは精霊と共に生きること信条としています。我らの里がある森は地脈が豊かで精霊も多い。何度精霊を連れ去られたとか。精霊誘拐を防いでも、押さえられるのは誘拐の実行犯、精霊を捕らえる魔法陣を与えられただけの食い詰めた冒険者や犯罪者ばかりで、肝心の雇い主は推測の域を出なかった。しかし今回のことですよやく幻境派クシクトベルの仕業だと確証が得られました」

「幻境派クシクトベル……。贅の一族の一派ですね」

また贅の一族か。

報告を聞くジークの表情が曇る。

贅の一族だとか、幻境派クシクトベルだとか、イリデッセンス派だとか様々な名で呼称しているが、ジークから見れば彼らは皆、帝都の錬金術師だ。帝都の錬金術師達を巨大な商会に例えるなら部署が違つようなものだエラと認識している。そんな彼らと帝都に呼ばれた“始まりマリの錬金術師”が、無関係でいられるだろうか。

ジークがちらりとマリエラの方を見ると、「幻境派クシクトベル? なにそれ？」

みたいな顔をしている。完全に他人事だ。対象が人間の社会や組織になると、マリエラはとたんに興味を無くしてしまう。

「贄の一族の組織形態は特殊で、役割や目的を同じくする人間が身分や所属を越えて集まり、派閥を形成しています。幻境派クシクトベル自体は反社会的な組織というわけではない。彼らは贄の一族の中でも革新的な思想の一派で、経済界をはじめとして富裕層の構成員が多い。構成員から集めた資金で、帝国の発展のために様々な技術や研究に援助しています。

もつとも資金源は寄付金だけでなく『怨嗟の壺』のような非合法に稼いだ資金もあったようですな」

「なるほど、非合法的な資金の向かう先がああ精霊を使った実験ですか。しかし、一体何の目的で……」

「彼らの目的は“帝都を滅びから救う”という妄言にも等しいものです。軽く尋問した限りですが、今回捕まえた連中は、帝都の崩壊はすでに始まっているのだと本気で信じていましたよ。その滅びとは何かも、回避する手段についても、知らされていないようですが、そのために精霊を手懐け強化する方法を模索していると」

ノートに”ヒゴーホー ヒゴーホー 帝都救う”と落書きを増やしていたマリエラが、ニクスの言葉に顔を上げる。

「精霊を手懐けるって、あんな方法で精霊と仲良くなれるはずなのにな……」

メモは謎だがちゃんと聞いてはいたらしい。

「全くです。幻境派クシクトベルの構成員は、現状の治世に不満を抱えている者

が多いようだ。現状に否定的で、社会構造や価値観に疑問を抱く者に、終末論者が多いのはよくあることでしょう」

「終末論者ですか。連中は精霊を強化して何をさせようというのでしょうか？」

ジークは精霊眼を隠す眼帯に触れる。この精霊眼ならば、彼らの目的の一つである精霊の強化などたやすくできてしまうからだ。

「順当に考えるなら終末の回避や救済なのでしょうが……。私には構成員を先導するためのお題目の様に思えます。そもそもこれだけ発展した都市が滅びたりするでしょうか」

ニクスは、帝都の崩壊うんぬんは終末論者を幻境派クシクトベルに抱き込むためのお題目だと考えているようだ。

しかし、マリエラは。

（あの時見た誰かの記憶、ゲニウス・ロキと呼ばれた大地の精霊……。あれが帝都の始まりだとしたら……）

アストラルポーションで肉体を離れている時に見た、帝都の底にある黒いものをマリエラは思い出す。この帝都の根幹が、あんなものに根差しているなら……。

情報はあまりに断片的過ぎて、答えに辿り着くことはできない。けれど、大地の底にわだかまる漆黒が、帝都の未来の様に思えてマリエラは言い知れぬ不安を覚えた。

一方その頃、エーレンヒル静寂園の地下室を一足先に逃げ出した  
ハイツェル・ヴィンケルマンは、とある料理屋の個室にいた。

常連客だけで成り立っているようなメニューも看板もない料理屋  
で、提供される料理や酒の値段は敷居の高さを裏切らない。

こういつた店の店主はだいたい貴族の愛人や縁故者だ。貴族の  
別邸が集う帝都にはこのような店は数多い。単純に愛人を困うのに  
使われるだけでなく、秘密の会合をする場として重宝されるからだ。

「ご無事で何よりでございます」

そう言っ頭を垂れた密会の相手は、メトナル 中宇派のアフカン 導者グレイゴリ・  
ヴアルガス。『イリデッセンス第4アタノール』の管理バ者にして結  
脈インディング式典を取り仕切るアフカン 導者だ。

メトナル 中宇派は結脈インディング式典を管轄する派閥だ。メトナル 中宇派には8人のアフカン 導者がい  
て、8基ある小アタノールをそれぞれ管理している。

クシクトベル 幻境派とメトナル 中宇派。アフカン 貴族とアフカン 導者。

人目を忍ぶにふさわしい、そぐわない組み合わせである。

「折角ヴアルガス殿に用立てていただいた精霊だったが……。研究  
員の一人が功を焦りおって……な？」

< i 8 5 0 6 2 3 — 2 1 0 6 4 >

グレイゴリの顔色を窺いつつ、しどろもどろと言いつくすハイ  
ツェル。

貴族と言えど、ハイツェルはクシクトベル 幻境派の中では下っ端も下っ端。組  
織の一員と言つよりは出資者に近い立場だった。その彼を後援し守  
護精霊という手土産を与えたのはこのグレイゴリだ。

守護精霊を捕らえるのだからハイツェルは金を出しただけで、守護精霊の情報も、精霊捕縛に長けた連中を仲介したのもグレイゴリだ。

グレイゴリのおかげで本当の意味で幻境クシクトベルの構成員、秘密を知る者の一人になれたというのに、自分のうっかりのせいでエーレンヒル静寂園地下の施設自体は壊滅、途中で逃げ出した自分だけが無事だなどと言えるわけがない。これから幻境クシクトベルで立場を築いていくには、グレイゴリの協力は必要だ。

（ほつ、アフカン 導者殿は気付いておられない様子。まあ、名前も顔も隠しておいたわけだし、吾輩以外は牢の中。バレることはないですな！）

グレイゴリの沈黙を都合よく解釈するハイツェル。

「呪いを使おうと言い出した者がおりましてな。それで『怨嗟の壺』が持ち出されました。吾輩、それはよろしくないと意見したのですが、新参者ゆえ聞き入れてもらえず。吾輩とて探求者の端くれ。信念に反する実験に少し距離を置こうと離れたところ、何やら禍々しい力を感じて退避した結果、難を逃れたわけですな。

なんでもあの場にいた者たちは護衛に至るまで呪われたとか。偶然通りがかった市民に発見されたおかげで命は助かったようですが、『怨嗟の壺』がばれてお縄とか。まあ、末端とは言え彼らとて誉れクシクトベル高き幻境の一員。余計な情報を漏らすほど愚かではありませんまい」

言ったもの勝ちだと言わんばかりに、見たように嘘と希望的観測を並べるハイツェル。

グレイゴリはハイツェルの話を聞き流しながらも、一つの単語を抜き出した。

「なるほど。それにしても“禍々しい力”ですか。何か、啓示のよ

うなものを感じられたのですか？」

「そうですねー」

感じたのは嘘ではない。啓示というより「あ、ヤッベ」というやつなのだが。

その様子を見ながらグレイゴリは考える。

(なんでも霊園からの出入り口が開いていたと聞く……。一人だけ災いを免れたこともしかり、やはりヴィンケルマン家の血を引くだけあって、こやつには資格があるのやも知れぬ)

どう見たって無能な男、ハイツェル・ヴィンケルマンをアッカン導者グレイゴリ・ヴァルガスが後援する理由。

それはハイツェルが、長い帝国史において二代だけ皇帝を輩出したヴィンケルマン家の血を引くからだ。

「やはりあなた様はヴィンケルマン家の血、皇帝の資質をお持ちなのですか」

「おっと、その話はここまでですぞう。壁にミミアリー天井メアリーと申すでしょう。ここは我がヴィンケルマン家が懇意にしているレストランですが、どこに間諜が潜んでいるやもしれませんぞ。なはははは」

口ではとんでもないと止めているが、だらしなく目じりを下げて笑うハイツェル。

彼にとって、皇帝を輩出した血筋だというのは何物にも代えがたい自慢なのだ。実にチヨロイ男である。

ハイツェルの自尊心をくすぐるようにグレイゴリは言う。

「現皇帝ヨハンⅡシュトラウス・レッケンバウエル・15世陛下は



15代つづく皇帝の血筋であらせられますが、帝国の皇帝は正しくは世襲ではございません。それを世に知らしめたのが『奇跡帝』陛下とそのお子さまである『偽帝』陛下であると私は考えております」

二百数十年ほど前に、ヴィンケルマン家から輩出された皇帝ヨハン・ハイイツ・ヴィンケルマン。『奇跡帝』と呼ばれる彼はものすごい幸運の持ち主だった。それこそ物語。それもコメディの主人公のような幸運の末に皇帝の座に就いたのだが、本人どこるか帝都中の幸運を使い切ったのだろう、彼の一族の幸運は長くは続かなかった。

『奇跡帝』の後を継いだ息子、ヨハン・ハイインリツヒ・ヴィンケルマンは皇帝の資格を持たない『偽帝』だったのだ。『偽帝』が帝位についていた間、帝都周辺では作物が実らず、迷宮からは秩序が失われ、帝国は大いに荒廃したという。

そのため、『偽帝』は私欲のために皇帝を騙り、国を乱した大罪人として歴史に名を残している。

当然ヴィンケルマン家は取りつぶされ、今は“一族郎党”のくくりから外れるほど血の薄い傍系が子爵として家名を残すだけだが、それでも完全に途絶えていないところは幸運な血筋ゆえだろうか。

ハイツエルは血と共に『奇跡帝』の幸運も受け継いだのか、間違えて投資した林檎農園でポーシヨンの材料になる新品種が開発されて大儲け、などと言うミラクルが連続し、今では優雅で裕福な『皇帝の末裔』らしい財を築き上げている。

財を成した者が次に求める物は、名誉と権力と決まっている。

クシクトベル

幻境派に食い込みたいのもその一環で、グレイゴリがそれらをちらつかせただけで、わんさか賄賂を差し出してきた。

グレイゴリの目的に、金はいくらあっても困らない。けれどそれはハイツェルという金銭以外では役に立たない者に目を付けた理由の一つに過ぎない。

（皇帝の血筋という資格だけでは足りぬのだ。大切なのは『偽帝』が示した事実。皇帝の實の息子であつても『偽帝』が帝位につけば国は乱れる、つまり国を安定させる何者かが存在し、皇帝を選んでいるということだ。

その基準が一体何のなのかは分からぬが、選定者が変われば基準も改まるう。

今はレッケンバウエル家が代々帝位を継いでいるが、『奇跡帝』の血を引くこの男にも資格がないとは言い切れまい。現に、エーレンヒル静寂園からただ一人、無事に戻ってきた。

新たな選定者、新たな基準さえそろえば……）

考え込むグレイゴリの前にハイツェルが造りの良い菓子箱をそつと置く。グレイゴリも何度か受け取っている箱で今回は失態の火消しの意味もあるのだろう、いつもより二回りほど大きい。中は二段になっていて、上の段には宝石のようなチョコレートが、下の段には金貨が詰まっているはずだ。

「それでアフカン導者殿、また精霊をお願いしたいのですが。もう一度あの精霊でも構いませんか？」

「そつお急ぎめさるな。一度失敗した精霊を狙うのは得策ではない。護りが厚くなつておりますからな。何事にも十分な調べと備えが肝要。今回は幻境クシクトベルとしては手痛い失態でしたが、失うばかりという事でもない」

グレイゴリは今回の精霊奪還にかかわつた者たちについて、あら

かた調べ上げている。

（迷宮都市から来た冒険者たち……。皇帝に招かれた『始まりの錬金術師』の護衛だろうが、『精霊眼』持ちとはな。これは使えるやもしれぬ）

何事にも十分に調べ備えることが肝要なのだ。入念な準備のお陰で、グレイゴリは幻境派でありながら、中宇派メトナルの導者アフカンにまで上り詰めたし、誰の指示か悟られることなくシューゼンワールド辺境伯の客人である獣人の守護精霊を捕らえることだってできた。

自分ならば大いなる目的さえも、達成できるに違いあるまい。

刻一刻と滅びは近づいている。

滅亡の先の再生のために、彼ら幻境派クシクトベルは存在している。

グレイゴリは、導者アフカンらしい威かさで語り掛ける。

「ハイツェル・ヴィンケルマン殿、目を閉じ想像するのです。

滅びの先、帝国の再誕の朝、新たな選定者により選ばれるその様を――」

未来を夢想し、軽薄な笑みを浮かべるハイツェル・ヴィンケルマン。

しかし、グレイゴリ・ヴァルガスはハイツェルではない、どこか遠くを見つめていた。

### 53・顛末と思惑と（後書き）

【帝都日誌】ジークの報告書はよくできていた。部下に欲しい。b  
yウエイスハルト

<i850629—21064>

「原作では”火”じゃ焼け残りそうだから「炎」にしとこ”って理由で「献炎」にしたけど、「けんえん」ってルビ入ると変かも。

「けんか献火」なら「献花」っぽくてこっちのがいいな」という原作者の都合でしれっとディック隊長のセリフが変わったコミカライズ第2章後編は、B・S・LOG COMIC Vol.137（6月5日配信）掲載です。

ちなみにこのシーンの離別の丘、小説5巻の表紙の場所なんですよ。

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、「俺の箱」を改定&更新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141ff/>

#### 54 ガウウとナンナとエドガンと（前書き）

前回までのあらすじ・帝都の闇っぽい人たち、ジークの精霊眼に気  
付く。

## 54・ガウウとナンナとエドガンと

「ガウウ、来るなん！」

ナンナに呼ばれたガウウが「うなんな」とばかりに口を開いてナンナの方へと飛び掛かり、その顔を嬉しそうにぺろぺろ舐める。

「うなん、うななん、うなははは！ って、ちがうんなー。あの時みたいに獣化するなん。もう一回なん」

とてとて、ぴょーん。ぺろぺろぺろぺろ。

「うなん、うななん、うなははは！」

(ニャンコとコニャンコがニャンニャンコしてる……)

(混ざりたい……)

(チツプはどこに払えばいいですか?)

こんなニャンココニャンコニャンコな光景が無料どころか給料もらって見られるとは、シューゼンワールド辺境伯帝都邸はパラダイスか何かか。

この事実が世間に知れたら、お金を払ってでも働きたいと就職希望者が殺到するに違いない。今もパラダイスと化した中庭を見下ろす窓辺には、大勢のメイドや兵士が集まっていて、今にもおひねりが飛んできそうなあり様だ。

彼らに「サボるな、働け」と叱責すべきウェイスハルトまでもが、仕事の合間の息抜きにしているくらいだ。

そんな帝都邸宅を淹つば並みのヒーリングスポットに変えているナンナであるが、別に癒しのアルファ波をばらまくためにニャンニャンコしているわけではない。

「獣化できないんなー」

ナンナとガウウが揃って耳も尻尾もぺしゃんと垂らして、“しょぼんな”する。可哀そうだがこれまた可愛い。

ガウウを助けに行つた時、ナンナは呪いの残渣ごとガウウを取り込み、その姿を獣のそれに変えた。後日聞いた話によると、あの状態は獣化と呼ばれ、獣人の最終戦闘形態だという。獣化した獣人の戦闘力は獣人よりも獣よりも高くなるらしい。

「獣化できるのは、伝説の戦士だけなんな。すつごく強いなん。エライんな〜。だからナンナもエライんな〜」

獣化が出来るようになったと有頂天になったナンナは、フスーフスーと鼻の穴を膨らまし、ちよつと殴つてやりたくなるほどのドヤ顔だったのだけれど、獣化できたのはあの時だけだった。

「おじいのおじいのおじいのお……うんなな、昔の戦士は獣化できなかったらしいなん。なんな、今は誰もできんなな。守護精霊も見えない獣人ばっかなん。獣化できたら、迷宮だつてイチコロなんな」

ガウウの前にちよこんと座つてオハナシを始めるナンナ。

食べるか遊ぶか日向で寝るかのニャンコ生活に忘れていたが、そう言えば、獣人の縄張りに迷宮ができたが、獣人が弱体化していて攻略が難航していたのだったか。

「獣化して迷宮やつついたら、みんなびっくりするなんな。ナンナのことすごいって褒めるなん。強くてエライナンナには、子分一杯できるなん、ご馳走一杯食べれるなん。だからガウウ、もっと強くならなきゃダメなんな！」

ガウウに強くなる必要性を語って聞かせるナンナ。  
実に猫畜生らしい、即物的な発想だ。

対してガウウはキョトンと首を傾げた後、ナンナの尻尾を追いかけてピヨコピヨコ動き回ってしまう。

「ガウウ、聞くなん！」

ちよこちよこぴよこぴよこ。

「ガウウ、もう一回獣化するなん！」

ぴよんぴよん、スカスカ。

ガウウはナンナといられるだけで嬉しそうではあるのだが、ナンナの方は何度ニヤンニヤンコ……もとい特訓しても進展しない状況に痺れを切らしたのだろう。

「ガウウっ！！」

ぴゃっ、とてててて。

ナンナがメツとガウウを叱ると、ガウウはしょぼんと頂垂れてスーッと姿を消してしまった。

「うなんなっ！ うなんなっ！」

姿を消したガウウに、ご立腹な様子でナンナは毛を逆立てる。



一体どうしたものだろう。これって、言って変わるものじゃないしなあ。

ギャラリーがホンワカしながら見守る中で、ナンナが獣化できない理由になんとなく気付いちゃったマリエラは、どう伝えればいいものか悩ましく考えていた。

< i 8 5 6 1 5 6 — 2 1 0 6 4 >

勝手に人化ポーション飲ませちゃうAI画伯。このシーンはケモナンナとケモガウウのもふもふ合戦なので、脳内でモフ変換お願いします。

そして、愛しのエンジェルちゃんがナンナだと気づいてしまったエドガンはというと。

何を思ったか、キャロラインとマリエラに相談を持ち掛けていた。

「最近、ナンナといると、なんてゆーか呼吸が苦しいんすよ」

「まあまあ!」

「おお」

「喉も詰まるっつーか違和感があるし」

「まああ!」

「ほほ」

「目が潤むっつーか、今もホラ、目え、赤いっしょ。涙も出てる」

「ええ、そうですわね?」

「ふむ、ふむ?」

「前から、なーんかナンナさんの側に寄るとくしゃみ出るなーって思ってたんスけど、これって……」

「ああ……」

「はい……」

キャロラインとマリエラはどうしたものかと顔を見合わせたあと、鼻水をすすり上げながら痒そうに目をこするエドガンに、彼の患っている病名を告げた。

「猫アレルギーですね」

「あ……、やっぱり？ アレルギーを治すポーシオンって……」  
「ないですね。症状を癒すポーシオンならあるんですが」

マリエラがちよちよと作って差し出したポーシオンを飲むと、エドガンの目のかゆみも鼻水もまるで水で洗い流したかのようになくなつた。

世の中には、「目玉取り外して洗いたい！」「鼻から喉を交換したい！」と願うアレルギー患者は多いから、これだけでも素晴らしい効果なのだが、残念ながらマリエラのポーシオンでもアレルギー自体を治すことはできないのだ。

「あ~~~~、どーすつか~~~~」

迷宮都市きつての錬金術師達が首をそろえて治せないと言つただ。エドガンの猫アレルギーが治ることはないのだろう。

一難去つてまた一難。まさかの強敵の出現に、さしものエドガンも頭を抱えてしまう。

これには、エドガンの恋の行方に盛り上がっていたキャロライン

たちもかける言葉が無い。

ガウウの一件で、悪乗りしすぎたと反省していたところにこれだ。

(あー、マジで参ったわー)

鼻水でぼんやりしていた頭は、今はポーションのお陰でスッキリしているのに、エドガンの考えはぐるぐる回ってまとまらない。

(エンジェルちゃんがナンナたんだったとか。ナンナたんは嫌いじゃねーけど、エンジェルちゃんほどじゃねーし。そもそもナンナたん、ガキっつーか、ニヤンコだし。そんでもって、オレ、猫アレルギーらしーし)

ナンナの事は嫌いじゃない。一緒にいると楽しいし、困っているなら手伝ってやりたいと思っている。ナンナが頼むなら獣人の縄張りにできた迷宮と一緒に討伐したってかまわない。けれども同時にこうも思っているのだ。

(オレ、猫アレルギーって聞いて、ほつとしちまったんだよな…)

うなんなっ、うなんなっ。

遠くからナンナがガウウと特訓する声が聞こえる。

どうやら獣化はうまくいっていないらしい。

「うまくいかねえもんだな……」

ぼつりとつぶやいたエドガンは、聞こえた声に背を向けて帝都に出るべく門へと向かい、そこに一人の人影を見止めた。

「なんだよ、ジーク」  
「……いや。うまい酒を出す店があるって聞いて下調べに行こうかと。一緒にどうだ？」  
「ジークの選ぶ店、ハズレ率高けーんだよなー。おごりならいくー」  
「ああ。そのつもりだ」  
「ヤダ、オトコマエ」

マリエラはほとんど酒を飲まないから、下調べと言うのは口実だ。ジークはエドガンを心配し、ここで待つていてくれたのだろう。ジークらしい、実に不器用なお誘いである。ちなみに選んだ店にハズレが多いのは本当だ。これもまた、運の低いジークらしくて笑えてくる。

こんな友人がいて嬉しい。

そんな気持ちはおくびにも出さないけれど、エドガンとジークは二人で帝都の街へと消えて行った。

## 54・ガウウとナンナとエドガンと（後書き）

【帝都日誌】そう言えばエドガンのやつ、アルアラージュでもくし  
やみしてたな……。byジーク

ちよっぴりダークな異世界転生ストーリー、『俺の箱』を改定&更  
新中！

こちらも応援よろしくお願いします。

<https://ncode.syosetu.com/n3141fff/>

---

この作品の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<https://ncode.syosetu.com/n4764du/>

---

生き残り錬金術師は街で静かに暮らしたい

2024年6月23日18時31分発行